K-ON！ ～黒一点～

ロスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｋ－ＯＮ！　～黒一点～

【Ｎコード】
Ｎ７４８２Ｌ

【作者名】
ロスト

【あらすじ】
けいおん！の二次作品です。
拙い文書ですが、よろしくお願いします。
なるべく更新は早くやっていきたいです。

第一話（前書き）

原作キャラ出てません…
次話、出ると思います。

第一話

まだ肌寒い三月。
俺達はとある高校に向かって歩いてた。

「……」

「ハァ…」

「……」

「ふぅ…」

「……」

「ああぁ…」

「…なぁ」

「…なんだよ？」

「さっきから、ハァだのふぅだの、うるせぇんだけど」

俺は隣りを歩く自称俺の親友『影宮　修司』に向かって言う。

「しかたねぇだろ！
緊張してんだからよ！
心臓が『これでもかっ！』っていうくらいバクバクしてんだよ！
だから緊張してんだよ！ビビってんだよ！」

（…何言ってんだコイツ？）

「…落ち着けよ
日本語がおかしくなってんぞ
あと急にテンションあげんな…
非常にウザいから」

「ウザいとか言うなよ！傷つくだろ！！

……はぁ

つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？
今日が何の日か分かってますか？」

「高校の合格発表の日」

「そうだよ！なのになんでお前はそんなに冷静なんだよ！
フツー緊張するもんでしょうが！」

「そりぁお前、緊張したって結果は変わんねぇし…何より俺は自信があるしな」

「うわッ！ＭＵ・ＫＡ・ＴＳＵ・ＫＵ！
お前のその自信を粉々に粉砕してやりてェ～！」

「お前には一生無理だ

あとお前の『ムカつく』の言い方のほうがムカつく

おら、さっさっと行くぞ」

「ハァ～　あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。
多くの中学生達が歓喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。

だから普通は修司のように緊張するんだろうが、（まぁコイツの緊張の程は些か異常だが…）
何故だか俺には自信があった。

別に俺はすこぶる勉強が出来る訳ではないのだが、合格しているという自信がある。

いや、本当何故だか分からんが…

そんなことを考えてたら高校に着いた。

「やべ～っ　着いちまったよ～
ヤバいよ～」

（何がヤバいんだ…）

流石に合格発表の日とあって学生が多い。
おそらく合格したんだろう、友達同士抱き合って喜んでいる者、嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で電話している者などがそこにはいた。

（…しかし）

「やっぱ女子が多いな…」

そうなのだ。
あの歓喜の輪のほとんどが女子である。
男子の姿もちらほら見えるが、圧倒的に女子の割合が多い。

【私立桜ヶ丘高校】

これが俺達が受験した高校名だ。

元々女子高だったが、少子化問題やら何やらで（はっきりとした理由は忘れた）今年度から共学になった。

「なぁ　咲也君
お願いがあるんだが…」

「あン　何だよ」

「俺の変わりに合否を見てきてくれッ！」

「はぁ？何でだよ？」

「極度の緊張により足が動きません…」

「お前どんだけビビってんだよ…

バカなこと言ってないで行くぞ」

ガシッ！

ズリズリ…

「うおッ！離せ！」

バカなことを言っているアホの襟首を掴んで無理矢理、合格発表が行われている掲示板に連れて行く。

…引きずっていると言った方が正しいか。

―――――――

パッ

ドゴォ！

「うべしッ！！」

掲示板に着いたので今まで引きずっていた修司（アホ）を離す。

「何すんだテメェ！！
後頭部強打したじゃねェか！！」

「うるせェな―…

ここまで運んでやったんだ、感謝されこそ恨まれる筋合いはねェぞ

いや…
ここまで連れてきてやったんだお前は俺にもう一生、頭があがらない筈だな。

分かったんなら、俺に感謝という名の金をよこせ」

「なんで俺がお前に金やんなきゃなんねェんだよ！！
逆に慰謝料としてお前がよこせッ！！」

「さて俺の名前はっと…」

「スルーされたァ！！」

何やらアホがうるさいのを無視し、自分の合否を確かめることに。

（え～っと……）

「おっ　あったあった」

掲示板には俺の名前
『桐島　咲也』の名があった。

「やっぱ受かってたな」

俺が思っていた通り、見事に合格していた。

「…で？お前はどうだったんだ？」

「…まだ見てない…」

「早くしろよ」

「…怖いっす…」

（このビビりめ…）

「頼むよ～一生のお願いだッ！

俺の変わりに見てくれ！！」

「一生のお願いこれで何回目だよ…

土下座でもしたら見てやっても…」

ガバッ

「お願いします」

その場で土下座するアホ。こいつにはプライドはないのか…

「わかったよ…見るから、土下座やめろ
俺がハズい」

「サンキュー…流石、親友だ…「そんな風に思ってんのお前だけだから」…ひどッ！！」

さて、コイツは受かってんのかね…

修司の名前を探す…

名前を探す…

探す…

探す…

探す…

……

ポンッ

「…修司」

修司の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

「ど、どうだった…？」

「…非常に言いづらいんだが……お前は…」

「…な、なに…？」

「…残念ながら……受かってた……」

……

「…そっかぁ…やっぱダメだったか…

まぁ仕方がないよね…

これも運命さ……って受かってんのかよ！！！！」

「おおー見事なノリツッコミだな」

「なんでそんな紛らわしいことすんだよッ！！！
てゆうか『残念ながら』ってなんだ！！」

「そんなの決まってんじゃん。

楽しいから」

「お前最低だな！！」

「まぁ落ち着け
良かったじゃねェか無事合格出来て」

「ぐッ…まぁね…

そっか合格したんだ俺……良かった……良かったよ～！
咲也く～ん！！」

バッ！

急にアホが俺に抱き付こうとしやがった。

なので俺は…

ドゴォン！！！！

「ぶバァ！！！」

渾身の蹴りを放ってやった。

「気持ちわりィ事してんじゃねェよ…アホが」

男に抱き付かれる趣味はねェぞ。

さて、そろそろ退散するか。何やら今の一件で目立ってしまったようだ。周囲の視線が痛いです。

気絶しているアホの襟首を掴みその場を後にした。

第二話（前書き）

原作キャラ登場です。

第二話

「おいしいねぇ～憂」

「うん！
あっ　お姉ちゃんほっぺたにソースついてるよ？」

「えっ？どこ～」

「動かないで拭いてあげる」

「んっ」

「はいっ　もう動いていいよ」

「ありがとう憂～」

「どういたしまして」

「……」

「どうしたの？サッくん？食べないの？
食べないなら私が食べちゃうぞ～」

「ダメだよお姉ちゃん
それは咲也さんの分なんだから」

「分かってるよ～冗談冗談♪」

「もう、お姉ちゃんたら～」

「……」

そう言って互いの顔を見つめて笑い合う姉妹。

……何故このような状況になっているのかというと、数時間前に溯らなければならない。

―――――――

あの後、気絶したままの修司をそこら辺に放置し、家に帰り両親に合格の報告をすると、お祝いに夕食を食べに行く事になった。

両親おススメのパスタ専門店に着き、注文を頼み両親と何気ない話をしてると…

カランッ　カランッ

「いらっしゃいませ」

一組の家族が入ってきた。俺と同い年くらいの女の子二人と、その二人の父親と母親の四人家族。

その家族は俺達の隣の席に座る。

その間に注文した料理が運ばれてきた。

「コホンッ
え〜それじゃ　咲也が桜ヶ丘高校に合格したことを祝して…」

「えっ!?　桜ヶ丘?」

親父が水が入ったコップを高々と上げ、俺の合格を祝おうとした時
（ハズいから、親父やめろ…）
隣の席に座っていた女の子の一人が声をあげた。

「ど、どうしたの？
お姉ちゃん…？」

「あっ　えっとね…何か『桜ヶ丘高校合格』っていう声が聞こえたから…」

「ええ　うちの子が桜ヶ丘に合格したんだけど
それがどうかしたの？」

と俺の母親が『お姉ちゃん』と呼ばれた女の子に優しい口調で問いかける。

「え、え～と…」

「うちの娘も桜ヶ丘に合格したんですよ」

言い淀んでいた女の子の変わりに彼女の母親が助け船を出した。

「ほぉ～そうなんですか～
こりゃお互いめでたいですね」

「いやっ～　全くですね～」

俺の親父がそう返したら、向こうの父親が返してきた。

「「ハッハッハッハッ」」

そして何故か笑い合う。

……その後、意気投合した俺の両親と女の子達の両親が談笑を始め、結果その輪に入れない俺と女の子二人が取り残されるハメに…

「ねぇねぇ」

「あン？」

「君も桜ヶ丘に受かったんだね～

私と一緒だね♪」

「…ああ」

すると『お姉ちゃん』と呼ばれていた女の子が俺に話しかけてきた。

…なにが嬉しいのだろうかニコニコしてる。

「あの～こっちの席でお話しませんか？
お父さん達盛り上がってますし、そっちの方が話しやすいと思いますから」

おそらく妹だろう
彼女がそんなことを言ってきた。

…確かに隣同士とはいえ、通路を挟んでるからお互い身を乗り出して話している。
別に俺はどうでもいいんだが、これでは店に迷惑だな…

「わかった」

俺はそう告げると料理を持って彼女達のいる席へと移動した。

俺達の会話聞いていたのだろうか、俺が席を立つとほぼ同時に彼女達の両親が席を立ち俺達の席に移動してきた。

「ゴメンなさいね？　手間をかけさせちゃって…」

と彼女達の母親が申し訳なさそうに言ってきた。

「いえ　別に…」

一緒の席に座ればいいんだろうが、生憎このテーブルは四人がけなのだ。誰かが動くしかないだろう。

俺が彼女達の席に行くと…

「エヘヘ～」

「…何がそんなに嬉しいんだ？」

「だって同じ高校に通う人に会えたんだよ～嬉しいよ♪」

「そういうもんか？」

「そういうもんだよ♪」

ふむ…よくわからん。

「それじゃあ自己紹介します！
平沢　唯です！よろしくね～」

バッと元気良く手をあげ、自己紹介する平沢。

「私は妹の憂です
よろしくお願いします」

ペコリと礼儀良く頭を下げる平沢妹。

何だろう？
姉の方は天然な感じがし、妹の方は礼儀正しい感じがする…

（姉妹逆なんじゃねェのか…？）

そう思ったが口に出さずにいた
流石に会ったばかりの人に言うのは気が引けるからな。

「俺は桐島　咲也だ」

「じゃあ　サッくんだネ！」

「ハァッ！なんじゃそりゃ！！」

「何って『咲也』だから『サッくん』だよ？」

「いやっ
んなこと聞いてねェよ…
なんでいきなりアダ名つけてんだよ」

「えっ？だから『咲也』だから…」

「いやっ　だからな…」

「あははは…」

平沢妹よ苦笑いしてないで何とかしてくれ…

お前の姉だろ…

――――――――

…で現在に至る。

「お姉ちゃんまたソースついてるよ?」

「えっ　ドコ?」

そう言って口元に手の甲をあてる平沢

「あっ　手が汚れちゃうよ…」

「手についちゃった…」

「も~だから言ったのに…
お姉ちゃん手、だして

拭いてあげるから」

ハンカチを出しながら、姉の手を拭こうとする妹。

「ううん　いいよ～洗ってくるから

ちょ～と失礼しますよ」

手を洗いに席を立つ平沢。

そうなると残るのは俺と平沢妹になる。
そこで俺は思っていた疑問を妹に聞いてみることに。

「しかし…大変だなお前も」

「えっ　何がですか？」

「何がって…姉貴のことだよ
いつもあんな感じなのか？子供っぽいつうか天然つうか」

「ああ～そうですね
あんな感じです」

そう言って苦笑いを浮かべる平沢妹。

「でも…」

「ん？」

「私はそんなお姉ちゃんの世話をするのが大好きなんです」

（本当に姉が好きなんだな…）

そう思わせる様な笑顔を浮かべる平沢妹。

「それにお姉ちゃん可愛いんですよ～
休みの日なんかですね…」

（ん？　あれ？）

今度はうっとりとした顔つきで姉の話をし始める。

「それでですね～…」

「……」

…それから平沢が戻ってくるまで妹による姉自慢が続いた…

―――――――

料理も食べ終え平沢姉妹と談笑（と言っても終始平沢が喋り、俺と妹が相づちを打っていたが…）してると…

「そろそろ帰るか」

「そうね　結構話こんじゃったわね」

ウチの両親のそんな声が聞えた。

「そろそろお開きみたいだな」

「そうだね～あっ！そうだ！
ねぇ　サッくん」

「サッくん言うな…
何だよ？」

「メアド教えて？」

「あっ　私もいいですか？」

ケータイを出しながらそう言ってくる二人。

「別にいいけど」

特に断る理由もなかったので、俺もケータイを取り出し赤外線通信の準備をする。

「それじゃあいくよ～
そりゃぁー！」

（掛け声いらねェだろ…）

「次は私ですね……えいっ」

送られてきた二人のメアドをアド帳に登録する。

「ハイッ次！　サッくんの番だよ！
さぁ！さぁ！さぁ！」

「何だよそのテンション…
つうかサッくん言うな」

愚痴りながらも俺も二人に自分のメアドを送る。

「おっ　きたきた♪
えっーと…『サッくん』っと…
よし！バッチリだ！」

「バッチリじゃねェよ」

「ふぇ？なにが？」

「お前アド帳に『サッくん』って登録したろ？」

「うん♪」

満面の笑みで肯定しやがった。

「ヤメロ」

「えっ～なんで～！？」

「ハズいからだよ！
『桐島』か『咲也』にしろ！」

「いいじゃんケチっ」

プクッと頬を膨らませて怒る平沢。

まぁ全然怖くねェし、本気で怒っちゃいないんだろうけど…

「ケチで結構……それから妹」

「ハ、ハイッ！」

「お前もだぞ」

「あははは…」

（登録しようとしたな…）

流石姉妹というかなんというか…

「はぁ…」

思わずため息が出てしまう。

「ため息ついてたら、幸せが逃げちゃうよ？」

「誰せいだ…誰の…」

「？」

お前だよッ！！

とツッコミたいのを我慢する。

ここでツッコんだら

なんだか藪蛇な気がするからな…

―――――――

「ありがとうございました」

会計を済せ店の外に出る。

「あっ～　楽しかったね！　憂！」

「そうだねお姉ちゃん」

「何か疲れた…」

今日は合格祝いの筈なのに何故疲れるんだろ…？

心地良い疲れではなく、ドッと疲れた…

「それじゃ我々はこれで失礼します」

「今日はとても楽しかったです
ありがとうございました」

「いえいえ　こちらの方も楽しませていただきました」

「ええ　本当に」

俺の両親と平沢家の両親が別れの挨拶をしていると…

「じゃあ　今度は学校で会おうね♪」

「ああ…そうだな
また　学校でな」

「家にも遊びに来てくださいね咲也さん」

「あーうん　考えとくわ」

「はい　待ってますね」

『待ってますね』って言われても男が年頃の女の家にそう簡単に行けないと思うんだけどな。

「じゃあね～バイバイ！サッくん！」

「おやすみなさい　咲也さん」

手をぶんぶんと振り、車に乗り込む姉。
ペコリと頭を下げる、姉の後を追う妹。

（やっぱ姉妹逆じゃねェかな？

…って！）

「サッくん言うな！！」

が時既に遅し、平沢家の車は発進しており遠く小さくなっていた。

「いい友達が出来たな
なぁ　サッくん？」

「本当にね　サッくん？」

「アンタ達まで言うじゃねェ！！」

…数日間俺は両親から『サッくん』と呼ばれ続けることになった…

第二話（後書き）

平沢姉妹の両親は良くいる親みたいにしました。
多分もう出ません。

第三話（前書き）

和登場です。

…あと入学式当日です。

第三話

平沢姉妹との出会いから三日後に行われた中学の卒業式も無事に終わり、さらに数日後…

桜の季節の四月某日。

「…よしっ」

俺は鏡の前で自分の姿を確認する。
中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映っていた。

まだ着慣れない高校の制服だが、まぁ其の内慣れるだろう。

「…しかし相変わらずの不機嫌面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。
顔というよりは『目』だな。
俺はツリ目なのだ、さらに『笑う』ということをあまりしないので、それにより常に不機嫌そうな顔になってしまう。

「えーっと、ヘヤピンどこだっけ?

…あぁ　あった」

この不機嫌そうな顔を少しでも何とかしようと、（前髪で印象が変わるらしいから）前髪の半分をヘヤピンで止めるが…

「やっぱあんま変わんねェな…」

中学途中からこの髪型をしているが、効果は余りなかった…周囲の反応が良かったのがせめてもの救いだな。

「まぁ…今更か…

さてっ　そろそろ行くか。」

中学時代から愛用しているヘッドフォンを首に掛け、鞄を取り肩に掛け部屋を出る。

―今日は高校の入学式だ―

―――――――

ヘッドフォンから流れる俺の好きなミュージシャンの音楽を聞きながら通学路を歩く。

途中でコンビニに寄り、コーヒーを買い、店を出ると…

タッタッタッタッ

「ん？」

足音か…？

音がする方に視線を向けると…

「平沢？」

視線の先には平沢がこちらに向かって走ってきていた。
そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行った。

「何やってんだ？あいつ…？

…まぁ　いっか」

特に気にする事なく俺はコーヒーを飲みながら歩き出した。

（時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのかねェ
…んな修司みてェな奴、早々いねェわな。）

この考えが甘かった事に気付くのは数十分後の事だとは、俺まだこの時知らなかった…

―――――――――

学校に近付くにつれ、段々と学生の数が増えていく。

（女子ばっかじゃねェか…）

今年度から共学になったとはいえやはりそこは元女子高。

俺の周りの桜ヶ丘の制服を着た奴等は全員女子。

（くそっ！なんでこんな時に限ってあのアホ（修司）はいねェんだよ！

後で蹴ってやる！

ものスゲー居心地わりィ…）

修司に悪態をつきながら居心地の悪さを感じ、歩いていると校門に着いた。

そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物―平沢は、ぼーっと突っ立って校舎を眺めていた。

周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去って行く。

あんな場所（校門のど真ん中）に立っていられたら邪魔なので声を掛ける事にした。

「おい　平沢」

「ん？　あっ！サッくん！！」

声掛けるとこちらを向き、途端笑顔になる平沢。

しかしこいつはまだ俺の事を…

「サッくん言うな！」

「いいじゃん～♪可愛いから♪」

「んなもんはいらん！
」

「いやいや　あったほうがいいよ　だってサッくん不機嫌そうな顔してるもん」

こいつは…人が気にしてる事をズバッと言うな…

「この顔は生まれつきだ……それよりお前、校舎見上げて何してたんだ？」

これ以上この話題をすると俺の気持ちが沈むので話を変える事に…

「いやっ～恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって…」

「ん？どういう事だ？」

「朝起きて時計みたときね、『遅刻だぁ！』って思って急いで学校に向かったんだ。」

「……」

「んで　学校に着いて時間確認したら、『あれっ！？　見間違えた

ぁ～！』って思ってぼーっとしてたんだぁ。
いやっ～お恥ずかしい。」

「……」

そう言って頭をかく平沢。

（マジかよ…ビンゴじゃん）

俺が思っていた事と一緒だとは…恐ろしい奴め…

「どうしたの？サッくん？」

俺が黙ったままだったので、顔を覗き込んでそう尋ねる平沢。

「俺の考えが甘かったんだなっと実感してたところだ」

「えっ？どーゆこと？」

「気にすんな　コッチの話だ」

「う、うん」

「クラス分け、もう発表されてんだろ？
さっさと見に行こうぜ」

「うん！　そうだね♪」

腑に落ちない表情していた平沢を促し足を動かそうとした時…

「唯～」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

「あっ！和ちゃん♪」

『和ちゃん』と呼ばれた―平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた―女生徒が俺達に向かって歩いて来た。

「友達か？」

「うん！　そうだよ！」

「珍しいわね　唯が私より先に学校に来るなんて」

「いやっ～ははは…
ま、まぁねぇ～」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないんだな。
冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

「ねぇ　唯、この人は？」

『和ちゃん』が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。
そりゃ当然の疑問だよな。友達の横に見知らぬ人物が居れば。

（自己紹介しとくか…？）

この不機嫌面だ。怪しまれるまえに、自己紹介するため声を発しようとしたが、それは疑問を投げ掛けてきた本人によって遮られる事に…

「もしかして、あなたが『サッくん』？」

「はぁ！？」

何で俺の事知ってんだ！？
その眼鏡には人の個人情報がわかる最先端技術でも搭載してんのか！？

つうかサッくんって言うんじゃねぇよ！！

「うん！そうだよ、この人がサッくんです」

「だからサッくん言うな！

つうか何でアンタ、俺の事知ってんだ？」

「あぁゴメンなさい　唯から聞いてね
『新しい友達が出来たんだ』って」

（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そう思い、平沢に視線を向けると…

「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。
…何が嬉しいだか…

「じゃあ自己紹介するわね
真鍋　和です　唯とは幼馴染みなの」

「私達ずっと一緒なんだよ」

幼馴染みか、俺と修司みたいなもんか。
…いや　あのアホと一緒にされたら可哀相だな。

「俺の事は平沢から聞いてると思うが一応…

桐島　咲也だ

間違っても『サッくん』などと呼ばないように」

「ふふっ
ええ、わかったわ
よろしくね」

「あぁ　こちらこそ」

「…サッくん可愛いのに…」

とか言う声が聞こえたが無視だ。

…何故なら

「そして俺が咲也の親友の影宮　修司！
ヨロシク！！」

朝からテンションの高いアホが出現したからだ。

「「わっ！！」」

急に出てきたアホに驚く平沢と真鍋。

コイツは必要な時には出てこず、全く必要ない時に出て来るな…

「お前どっから湧いて出てきた？」

「ヒドいな～人を虫みたいに～」

「えっ？　違ったのか？」

「違ェよ！！　霊長類ヒト科に属してますよ！！つうか、真顔で言うなァ！！」

「そうなのか？
俺はてっきり　アホ類クズ科だと…」

「んなもんねェよ！！
なんだよ　アホ類クズ科って！！」

「『カゲミヤ　シュウジ』
アホ類クズ科に属する四本足の虫。
通常はヒトの姿をしてるが、食事時や睡眠時に本来の姿である全長三メートルの大型の虫になる。泣き声が非常に特徴的で『グヒャヒャヒャ』と鳴く。
アホ類クズ科に属している生物は地球上で只一匹で、『カゲミヤ

シュウジ』のみである…

気ィつけろよ地球上でお前しかいないんだから、世界中の研究者がお前を狙ってるぞ

一人で夜道とか歩くなよ」

「狙われねェよ！！
だから人だってんだよォ！！！
よくそんな説明思い付いたな！！！」

「デケェ声出すな、うるせェしウザい」

「そうさせたのお前でしょうが！！
楽しいか！？こんなことして楽しいのか！？」

「非常に」

「最悪だァ！！！コイツ！！！」

そう言って頭を抱える地球上只一匹の生物。

…あぁ楽しいなぁ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛い…

それに…

「「……」」

平沢と真鍋がポカンとている。

「…えーっとその人は？」

と真鍋。

「コイツは一応俺の友達?だ」

「一応ってなんだよ…そして何故、疑問系だ…」

未だに頭を抱えている修司が先ほどとは真逆のテンションで呟くように俺に言ってきた。

(そっちのほうが面白いからな…)

そんな事を思ったが口に出さなかった。
また突っかかってきたらメンドイし。

「あっ　そうなんだ～
私は平沢　唯だよ」

「真鍋　和です」

修司に自己紹介をする二人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

「影宮　修司です！
咲也とは親友やってます！」

満面の笑みで同じ人物に本日二度目の自己紹介という快挙を成し遂げた。

「うん！よろしくね修司君！」

「よろしく」

「ヨロシク～唯ちゃん、和ちゃん～」

さっきはあんなにヘコんでたというのにすぐさま元のテンションに戻る。…切り替え早ェな

「修司君は、サッくんとはいつからの付き合いなの？」

よりによって修司のまえで『サッくん』って呼びやがった…

「俺と咲也は幼稚園からの幼馴染みなんだよ」

「へ～そうなんだ
私と和ちゃんも幼馴染みなんだよ」

「そうなのか～」

（あれ？　気付いてない？）

呑気に平沢と会話をする修司。
コイツがアホで良かった…

しかし、いくらコイツがアホでも何度も平沢が放つ、俺へのブロックワードを聞けば気付いてしまう。
それをさせないために平沢にクギを刺さねばならない。

「おい平さ…「サッくんって照れ屋だよね～『サッくん』て言った

ら怒るんだよ」

……遅かった…

しかも『サッくん』を強調するような内容だ…

更に、二回言いやがった……

「サッくん？」

「うんっ『咲也』だから『サッくん』」

「サッくん……サッくん……クッ……フッフッ……

……アッハッハハハハハハハ！！！

何？お前、唯ちゃんから『サッくん』……ハッハッ！！……って

呼ばれてんの！？

アッハッハハハハハハハハ！！！！」

腹を抱えながら俺に指をさし、大笑いする修司。

「？」

平沢は状況が分かってない様子。

「はぁ…」

そんな平沢を見てため息をつく真鍋。

「……」

そして黙ったままの俺。

「アッハッハハハハハハ！！！！」

さて、そろそろ黙らせるか……

グッ

体の重心を少し落とし…

「腹肉（フランシェ）…」

そして左足を軸足にし、右足を振りぬく！

「シュート！！！！！」

ドゴォン！！

「あぶらッ！！！」

修司の腹に某海賊漫画の金髪コック並みの蹴りをいれる。

…そこまで威力はねェけどな。

三メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる修司。

「え～～～～っ！！？」

絶叫する平沢と

「やり過ぎなんじゃないの？」

冷静な真鍋。

「いや、原型をとどめているだけマシだな
それにこれくらいじゃアイツは死なん
…ほらいい加減クラス分け見に行こうぜ」

「そうね…行くわよ、唯」

吹っ飛んだ修司の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『そうね』ってなかなかいい性格してんな、真鍋は…

「えっ！？修司君どうすんの！？」

「ほっとけ　自業自得だ」

「う、うん…」

修司をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

第四話（前書き）

アニメ一話です。

長くなってしまいました…

第四話

俺達が高校に入学し、はや数週間…
桜も葉桜になり四月も残り一週間になろうとしていた。

「ちくしょう～焼きそばパン売り切れかよ…」

「焼きそばパンがなかったくらいで、メソメソすんなよ
…ほら気ィ抜いてると元の姿に戻っちまうぞ」

「もういいっうの、そのネタ…」

俺達は昼食を調達するため購買に行き、教室に戻っていた。

ちなみに俺と修司、平沢と真鍋は同じクラスになり、平沢と修司は大いに喜んでいた。

そして、その日の夜に平沢妹からメールが来た。その内容は『お姉ちゃんのこと、よろしくお願いします』という何とも平沢妹らしいメールだった。

「あっそうだ　なぁ咲也？」

「あン？　なんだよ？」

「お前何か部活入った？」

「部活？　…いや入ってねェけど？　なんでそんなこと聞くんだよ」

「いやね、和ちゃんがさぁ　『部活やってないとニートだ』っていうからさ」

なんじゃそりゃ…

部活やってないだけでニートって…

「じゃあそう言う真鍋は何か部活やんのか？」

「和ちゃんは生徒会に入るってよ」

生徒会か…何か真鍋にぴったりだな。

「お前は？部活やんのか？」

「俺はバイトやるよ
やりたい部活もないしね～
バイトやってたらニートじゃないだろ？」

まぁ働くわけだからな。

しかし部活ねェ…
俺も特にやりたい部活ないしな…
中学時代も何も部活やってなかったし。
高校生になったわけだから何かやるべきなんだろうか？

そんなことを考えていたら…

「軽音部入れば？」

修司が言ってきた。

「軽音部？そんなもんがあんのか？」

「あぁ、あるぜ
さっきポスター見たし
何かギタリスト募集してみたいだし…
ちょうどいいじゃん、お前入れば？
ギター弾けるしさ
更にめちゃ上手いし」

「ふむ…軽音部か…
けど別に俺、バンド組みたいわけじゃねェしなぁ…」

確かに俺はギターが弾ける。
…がバンドにはそんなに興味はないのだ。
家でギター弾いてるだけで十分楽しいしな。

「そうなの？
…俺からしたら、一人でギターやってるより、バンド組んでギター弾いてるほうが楽しそうだけどな…」

「…まぁ　考えとくよ」

「そうしなよ　じゃなきゃ和ちゃんからニート呼ばわりされるぜ？」

「それは嫌だな…」

そんな会話をしていたら教室に着いた。

―――――――――

ガラッ

「あっ　あの二人に聞いてみたら？」

俺達が教室に入ると真鍋の声が聞こえてきた。

「ねぇねぇサッくん、修司くん」

「な、な、なんだい？ゆ、唯ちゃん」

「サッくんって言うんじゃねェつうの…」

コイツはまだ俺のことをそんな風に呼びやがる…

ちなみに修司は『サッくん』と聞いた途端ビクッと体が反応し、冷や汗を流していた。

あの時の俺の蹴りがトラウマになってるらしい。

…いい気味だ。

「えっとね軽音部って何かな？」

「「軽音部？」」

先ほどまで俺達が軽音部の話をしていたので声が揃ってしまった。

「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだぁ」

「何するのか分かんねェのに入部すんなよ…

てか軽音部っていったら…」

「ギター弾いたり、ベース弾いたりして、バンドとか組んだりするところだよ、唯ちゃん」

俺の言葉を引き継ぎ修司がそう言う。

「えっ　ギター…？　バンド…？」

そんな単語がでてくるとは思わなかったみたいな顔をする平沢。

「えぇ～！！そうなの！？

私、軽い音楽って書くからてっきり簡単なことしかとやらないと思ったのに…」

「簡単なことってなんだよ？」

「口笛とか…」

「なんだその　やる気のない部活」

「和ちゃんにも言われた…」

口笛をする部活ってなんだよ…
部員がひたすら口笛を吹くのか？
…シュールだな…

「じゃあ　何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

「ん～っ　ん？……カ、カスタネット…」

「…すごく似合うわ…」

「同感だ…」

「唯ちゃんらしいな…」

キーン　コーン　カーン　コーン…

昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。

「あーっ！やべェ！まだメシ食ってねェ！」

「忘れてたな…」

平沢の話を聞いていたら昼休みが終わってしまった。

「急いで食うぞ！！咲也！！」

「あ、あぁ…」

「どーしよー…和ちゃん～…」

「どうしようって言われても…」

それから教師が来るまでの間、俺と修司は必死にパンを食い、平沢は真鍋に泣き付いていた…

―――――――――

放課後になり帰りの支度をしていると…

「すまない…咲也…」

「あン？」

「今日は一緒に帰れないんだ…」

何言ってんだこのアホは？

「えっ？理由を言えって？

あぁ　そうだったね…俺したことが忘れてしまってたよ…

実は今日…」

んなこと聞いてねェよ。

「この後バイトの面接があるんだ…だから今日は一緒に帰れないんだ…」

涙を流す演技しながらそんなことを言ってくるアホ。

「そうか　じゃ」

「おいッ！　なんだよその淡泊な反応は！」

「もっとも正しい反応だろ？」

「もっと何かあんだろ？　これからバイトの面接という名の戦場に赴く、親友に対して激励の言葉をかけるとかさ～」

「落ちてしまえ　あと親友じゃねェから」

「ヒデェ！！」

「おら　さっさと行けよ　時間ねェんだろ？

まぁ　面接に行っても受かるとは思えんがな」

「～～～～ッ！！

ちくしょう～っ！！！

覚えてろよ～！！！」

と三流悪役が使いそうな台詞を残し走り去って行くアホ。

さてと　うるさい奴もいなくなったし…帰るか。

鞄を取り、ヘッドフォンを首に掛け、教室から出ようとしたら…

「あの～サッくん…」

「あン？」

平沢に呼び止められた。

「あのね…サッくんにお願いがあるの…」

「サッくん言うな
……何だよ？」

「えっとね……軽音部の部室に一緒に来てもらえませんか！？」

今まで俯いていた顔を上げそんなことを言う平沢。

「なんで？」

…まぁ理由は想像つくけどな。

「それは～　軽音部に辞めますって言いたいんだけど…一人じゃ心細いし、軽音部に怖い人がいたら恐いし…」

…やっぱりな…

「何で俺なんだよ？
真鍋に頼めばいいじゃねェか？」

「…和ちゃん、生徒会があるからって断られちゃった…
お願いだよ～！サッくんしか頼れる人いないんだよ～！」

そう言って俺に泣きながら抱き付いてくる平沢。

「おいッ！コラッ！離れろ！！
てか何で俺が一緒に行かにゃならんのだ！！」

「やだっ！一緒に行ってくれなきゃ離さないッ！！」

「喧しいッ！　いいから離せ！！」

早いとこ、この状況をなんとかしなければならない。なぜなら、周囲からの視線が痛いからだ。

俺に泣きながら抱き付く平沢。
その平沢を引き剥がそうとする俺。

更に平沢が「見捨てないで～」だの、「一人はイヤだ～」なんて言うもんだから…

「桐島君、平沢さんに何したのかしら？」

「平沢さんかわいそ…泣いてるよ…」

という、俺がまるで悪人の様な誤解をあたえてしまっている…

これ以上「離せ」「イヤだ」の押問答を続けるわけにもいかず…

「…わかったよ…　一緒に行ってやるよ…」

俺が折れるしかないのだ…

「本当に！？」

先ほどまでの泣顔が嘘の様に途端に笑顔になる。

（嘘泣きだったんじゃねェだろうな…）

…いやコイツがそんな器用なことできないか…

とりあえず周囲の視線から逃れるために俺は平沢に返事もせずに歩き出した。

「あっ　待ってよ～」

（待てねェっての…）

――――――――――

軽音部の部室がある音楽室へと俺達は向かっているのだが…

「…おい　早くしろよ」

「だ、だって～」

俺の後ろを歩いている平沢に早く歩くように促すが、平沢のスピードは一向にあがらない。

軽音部に行って『辞める』と言わなければいけないネガティブな気持ちと…

「しかし…何だよ　この通りは…　『宇宙人同好会』　『ホラー研究会』　『オカルト研究会』　『妖怪倶楽部』…何でこんなに似たようなクラブがあんだ？

つうかどれも一緒なんじゃねェのか？」

この恐怖のクラブがある（怖くねェけど）廊下を通らなくてはいけない故に平沢の歩みはなかなかあがらない訳だ…

……

「はぁ…」

「やっとここまで来たか…」

教室から数分でかかる道程を倍以上の時間をかけ、上がっていけば音楽室がある階段の下に辿り着いた。

「あら？　平沢さん　桐島君」

すると階段から一人の教師が降りてきた。

音楽教師の山中先生だ。俺達のクラスの授業を受け持っているので、何度か面識がある。

「あっ　先生～」

「ども」

「軽音部に行くの？」

「はい…」

「桐島君も？」

「俺はコイツの付き添いッス」

「そう　それじゃ部活、頑張ってね」

そう言って去って行く、山中先生。

「なぁ　なんで先生はお前が軽音部に行くって知ってんだ？」

「軽音部の入部届け、山中先生に出したから…」

「ふ～ん」

（じゃあ山中先生が顧問なのか…
音楽教師やってんだから楽器や演奏に詳しい筈だから当然か…）

そんな事を思いながら俺達は階段を上がっていった。
相変わらず平沢の歩みは遅いままだったが…

そして遂に辿り着いた音楽室。

「ほら　行けよ」

「う、うん…」

中々音楽室に入ろうとしないので、平沢を促す。…すると

「あわわわわ…ど、どうしよう～」

急に平沢が怯えだした。

「…何がだよ」

俺の言葉にも聞く耳を持たず『どうしよう～』『あわわわわ…』を

繰り返している。

「はぁ…」

ため息が漏れる。

恐らく軽音部に対して、変な想像をしてしまったんだろう。
こうなったら何を言っても無駄だと悟り、平沢がコッチの世界に帰ってくるまで待つことにした。

…と

ポンッ

「ひぃっ!?」

「あン?」

「うちの部の前で何やってるの?」

と俺と平沢の肩に手を置き、第三者の声が聞えた。
振り返ると、平沢と同じくらいの髪の長さをし、カチューシャをし

た女生徒が立っていた。

驚いた平沢は俺の後ろに隠れてしまった。

するとカチューシャ（名前を知らないので仮名）は俺の顔を見ると…

「もしかして　あなたが入部希望の平沢　唯さん?」

「違ェよ」

と間違った事を言ってきたので…

「平沢　唯はコイツだ」

俺の後ろに隠れていた平沢をカチューシャの前に突き出した。

「わっ！」

「あっ　天然でテンポ悪くて使えないドジっ娘！」

（ヒデェ言われよう…
つうかコイツら面識あるんだ…）

「じゃあ　あなたが平沢　唯さん？」

「ハ、ハイッ！」

するとカチューシャは平沢の手を取り

「色々誤解してゴメン！！　ギターがすっごく上手いんだよね！？
来てくれるの待ってたよ～！！」

と平沢の手を嬉しそうにブンブンと振った。

（何か誤解されてねェか…？）

何故だか知らんがカチューシャの中では平沢はギターが凄く上手い人物になっているようだ。

するとカチューシャが俺の方を向き…

「君は…？」

「俺はコイツの…」

『付き添いだ』と言おうとしたが…

「入部希望者！？
やったー！！　四人目だけじゃなく五人目もゲットだぁ！！」

と今度は俺の手を取りブンブンと振ってきた。

「いやっ…ちが「ありがとう！！！！」…話聞けよ…」

よほど嬉しいのかカチューシャには俺の言葉は聞こえていないようだ。

そしてそのまま…

バンッ

「みんなーっ！！　入部希望者が来たぞー！！
しかも二人！！！！」

俺と平沢の手を取り音楽室（正確には準備室）に入っていった。

「本当か！　二人も！？」

そこには黒髪のロングの女生徒と…

「まあ！」

眉毛が特徴的な女生徒がいた。

「ようこそ！軽音部へ！！」

「歓迎いたしますわ～っ！！」

歓迎されてしまった…

「よしっ　ムギお茶の準備だ！！」

「はい～っ」

「さぁ　座って」

『ムギ』と呼ばれた女の子がお茶の準備をしてる間に、黒髪ロング（名前を知らないのでこちらも仮名）が俺達のために椅子を引き、座るように言ってきた。

立ったままでもいいんだが、その好意を無駄には出来ず、座ることに。

椅子に座ると…

「（ど、どうしようサッくん…辞めるって言いづらい…）」

小声で話かけてきた。

「（どうしようもなにも言うしかないだろ…）」

確かにこれだけ喜ばれちゃ言いづらいだろうが、本来の目的は『入部』ではなく『退部』なのだ。
俺に至っては完全に巻き込まれてしまい、入部希望者という誤解をされている。
まずはその誤解を解かなければ…

そんな考え事をしていると…

コトッ…

「どうぞ　召し上がって」

目の前に高級そうな紅茶とケーキが運ばれてきた。

（なんでこんなに高級そうなもんが軽音部にあるんだ?）

これ食っちゃいかんだろう、俺達は入部希望者じゃないんだから…

…が隣に座ってる天然娘は…

「おいしぃ～」

それはそれは幸せそうな顔でケーキを頬張っていた…

「はぁ…」

本日二度目のため息。

するとカチューシャが…

「食べないの？」

と聞いて…

「もしかして甘いもの苦手だったかしら…？」

と『ムギ』が申し訳なさそうな顔をしていた…

そんな顔されたら食べないわけにもいかず…

「いや　ちょっと考え事してただけだ…

じゃあ…」

と一口ケーキを食べる。

「…うまっ」

思わず声が出てしまった。
そんじょそこら辺のケーキ屋より遥かに美味い。
ケーキなど余り食べない俺でもそんなことが判るような一品だった。

「そうだろ～　ムギの用意するケーキは美味いんだぜ！」

「いえ　そんな…」

何故か威張るカチューシャと、謙遜する『ムギ』。

「平沢さんと…えっと…」

黒髪ロングが俺の方を見て困った顔をしていた。

「…桐島だ」

「えっ？」

「俺の名前…桐島だ」

「あっ…うんっ」

俺の名前が分からなかったんだろうから教えると、黒髪ロングはどこかホッとしたような顔をした。

「平沢さんと桐島君はどんな音楽やりたいの？」

改めて黒髪ロングが聞いてきた。

「えっ！？」

「あ～っと…」

平沢は今まで食べていたケーキから目を離し驚いた声を出した。

（コイツ、ケーキに夢中で今の状況忘れてたな…

それに、言うとしたらこのタイミングか…）

俺が先に誤解を解き、その流れに平沢が『退部』を言いやすい状況にするか…

この三人には、悪いが俺達が入部希望者ではないことを告げなければな。このままいったらズルズルと入部しかねん。

特に平沢。

俺の場合はカチューシャが勝手に勘違いをして、あまつさえ俺の話を聞かなかったのだ。

「それについてなんだがな」

「ん？」

「俺は入部希望者じゃねェぞ」

ピシッと空気が凍った。

「「「えェェ！！！」」」

そして解凍。

「俺はコイツの付き添いだ」

とポンッと平沢の頭に手を置く。

「なっ…　そんな！
『入部希望』って言ったじゃん！」

いち早く解凍が解けた、カチューシャが俺に言ってもいないことを言ってきた。

「一言も言ってねェよ
お前が勝手に勘違いしたんだろうが　それに俺は『付き添い』って言おうとしたが、お前が話を聞かなかったんだろ？」

なので正論で返す。

「…そうなのか、律？」

と黒髪ロングがカチューシャに確認をとる。

「……そういや、言ってなかった…」

「律ッ！！」

と黒髪ロングがカチューシャに怒鳴る。

…びっくりした、おとなしそうな娘だと思ったらデカイ声だせるんだな…

「いや～……てゆうか、紛らわしいわぁ！！」

ビシッと俺に指を差すカチューシャ。

「あぁ？　なにがだよ？」

「この時期に放課後の音楽室の前で立ってたら入部希望者だと思うじゃん！！」

…なんだ逆ギレか？
ここは冷静にだな。

「確かにそうだな…」

「そうだろ！？　だから入部き「…だが」ぼう…ん？」

「入部希望者かどうか、ちゃんと確認すればいいじゃねェか」

「ぐっ…」

「だがお前はそれをせずに勝手に俺を入部希望者にした」

「…うっ」

「故にお前に逆ギレされる理由はない訳だ」

「…桐島君の言う通りだな　律が悪い」

黒髪ロングが判定を下す。

「反論があれば聞くが？」

「うっ……アリマセン…」

勝者決定。俺。

「ゴメンなさい…私達が勝手に勘違いして…」

「…いやっ　別にいいんだけどな…解決したし」

『ムギ』がまたもや申し訳なさそうな顔をする。

何だろうな正論を言ったのにこの罪悪感…

「で、でも平沢さんは入部希望者なんだよね？」

「ハ、ハイッ！」

カチューシャが平沢に確認をとる。

「じゃあ　平沢さんは入部希望者で、桐島君はその付き添いでいいんだよね？」

黒髪ロングが俺に確認をとってきた。

「あぁ　そうだ」

それは真実なので頷く。

「じゃあ改めて…平沢さん　どんな音楽やりたいの？」

カチューシャからの質問。

「えっ～と…」

「（今度はお前の番だそ…）」

小声で平沢に『退部』のことを促す。

「（う、うんっ！）」

「どんなバンドが好きか？…好きなギタリストは？」

そういやギターが凄く上手いってことになってたな…

「えっと……じっ、じっ、じっ…」

「ジミ・ヘンドリックス！？」

「おお～！」

「い、いえ！　じっ、じっ、じっ…」

「ジミー・ペイジ！？」

「おお～っ！」

「ちがっ　じっ、じっ、じっ…」

「ジェフ・ベック!!?」

『実は…』って言いたいんだな…
黒髪ロングよ、お前も話聞けよ…
さっきから平沢が答えようとするまえに、黒髪ロングが先に見当違いの答えを出してしまっている。

「そっかぁ！　ジェフ・ベックか!!」

「どなた?」

「ロックギタリストには二種類しかいない　『ジェフ・ベックとジェフ・ベック以外だ』って言われている　常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリスト!」

「まぁ」

詳しいな…黒髪ロング…

「流石ッ！　渋いね～平沢さん♪」

「あっ、あは…あはははは…」

…いかん　平沢のＨＰがガンガン削られていく…

「平沢さんみたいな人が入ってくれて良かったな～」

「一週間以内にあと一人集まらなかったら廃部になるところだったんです」

…なに？　廃部？

「本当にありがとうッ！！」

平沢の手を取り頭を下げるカチューシャ。

しかし廃部か…

だから俺と平沢が来た時、あんなにもてなされたんだな。（主にケーキ）

「（どうしよう…サッくん…ますます言いづらいよ…）」

「（う、う～ん…）」

またもや俺に小声で話しかける。

確かに言いづらい。

つまり平沢が『入部』すれば軽音部は『存続』、『退部』すれば『廃部』だ…

そして平沢は『退部』を言いにきたんだ…

まさか軽音部がそんな状況にたたされてるなんてな…

「（でも…ちゃんと言わなきゃ！！）」

「（…お、おう）」

すると平沢は急に立ち上がり…

「あのッ！！」

「「「ん？」」」

「あのッ！　申し訳ないんですけど！　実は『入部するの辞めさせて下さい』って言いにきたんです！！」

ついに言った！

…そして

ピシッ

再び凍り付く空気。

「…え？」

と誰かがこぼした。

「ギターは弾けないし…もっと違う楽器をやるんだと思って…」

（口笛とかな…）

「…じ、じゃあ何なら出来るの？」

と『ムギ』。
それに対し、平沢は…

「カスタ…ハ、ハーモニカッ！！」

と言い放ちやがった。

（絶対カスタネットって言おうとしたな…）

「あっ　ハーモニカならあるよ！　吹いて見せ…」
「ゴメンなさい！吹けません！！」

ハーモニカを出してきたカチューシャに対して綺麗に頭を下げる平沢。

（見栄はんなよ…）

「でも　うちの部に入ろうと思ったってことは、音楽には興味あるってことよね？」

「他に入りたい部とかあるの？」

「う、ううん　特には…」

それを聞いた三人は何やらアイコンタクトをする。

おそらく平沢を引き止めようという意思の確認だろう。

「本当にごめんなさい…じゃあ行こう…サッくん…」

「いや…このまま終わりそうじゃねェぞ…」

「えっ？」

すると…

「あぁ！　ちょっと待って！」

「もう一杯お茶いかが？」

「ほらな…」

「でも…」

「クッキーとマドレーヌもあるの！！」

「うん」

（うおっ！　物でつりやがった！）

「じゃあ少しだけ…」

そう言って席に座る平沢。
餌づけられたな…

「ほらほら　桐島も座れよ～！
ムギの美味しいお菓子だぞ～！」

「沢山食べてね♪」

何故俺まで引き止める？
それに俺は餌づけされんぞ。

「サッくんも食べようよ～」

お前が誘ってどうする！！
あと　サッくん言うな！！

「はぁ…」
本日三目のため息。

（もうどうにでもなれ…）
そもそもこれは、平沢の問題なのだ、俺には関係ない…

そう思い、再び席に着く。

どこからかクッキーとマドレーヌを出し、早速堪能する平沢。
ちなみに俺は紅茶を飲んでいる。

「おいしぃ～♪

ハッ！　す、すみません！こんなにご馳走なるつもりじゃ…」

「良いの良いの」

「毎日こうやって、一緒にお菓子を食べましょう」

「それ　軽音部じゃなく…」
「何か趣旨が変わってきて…」

ガスッ！

「…ッ！」
「うっ！」

俺と黒髪ロングがそんな発言をしたら、カチューシャが机の下で、思いっきり足を踏みやがった。

「～～ッ！！」
痛みに悶える黒髪ロング。

「テメェ…！」
怒りが湧いてきた俺。
怒気のこもった瞳でカチューシャを睨む。

「ひ、ひ、ひ、平沢、さん　ほ、他にはどんなものが、す、す、好き…？」

カチューシャは全く俺の方を見ようとはしないが、動揺しているのが分かる。
そんな中でも必死に平沢に話しかける。

「美味しいものならなんでも～」

「…家では休みの日とか何して過ごしてんの？」

「ゴロゴロ…かなっ？」

……そういや以前、平沢妹が『休みの日にゴロゴロしてるお姉ちゃん、可愛いんですよ～』とか言ってたな…

少し想像してみる…

「……」

…どこがだ？

そんな俺と平沢妹の感覚の違いを疑問に思いながらも軽音部員と平沢の会話は続く。

「好きなものとかある？」

「あっ　可愛いものが好き…かなぁ」

「苦手なものは？」

「暑いのも寒いのも苦手なんだぁ～　冬は炬燵に籠りっぱなしだし～
夏は床の上を転がってばかりいるの～」

「「「……」」」

…流石天然、軽音部に引き込もうと糸口を探して、質問をしていた
三人を見事に黙らせた。

「あっ　あの…じゃあ…」

質問が終わったので席を立つ平沢。

「あぁ！！行かないで！！お願いィ！！！
ゴロゴロしてるだけで良いから～！」

「もっと美味しいお菓子持ってきますから！！」

カチューシャと『ムギ』がなんとか平沢を引き止めようと躍起になる。

（無理もないか、平沢が入部しなかったら廃部だもんな）

すると…

「…あ　ゴメンなさい…
軽い気持で入部するなんて書いたから…

期待させるだけさせて…
なんて謝ったらいいかぁ～～」

「なっ！！」

突然平沢が泣き出した！！

俺を一緒に軽音部に連れて行こうとした時は『泣く』というよりは『喚く』だったが、今回はマジ泣きだ！

「ちょっ！お、おいっ！　泣くなって！」

こんな風にマジ泣きされたら流石に焦る。

「私達こそ…ゴメンなさい…」

「無理に引き止めて悪かったな…」

「ゴメンな…」

と三人は罪悪感を感じたのか次々に謝ってきた。…が

「ふぇ～～んっ！！」

泣きやまない平沢。

三人はどうしたらいいか互いの顔を見ている。
そこで俺はある案が閃いた。

「おい　お前ら…集合！」

「えっ？」

「何だ？」

「いいから　早く集まれ」

そう言うと俺の周りに集る三人。

「お前ら軽音部だろ？　何か演奏、出来るよな？」

「そりゃ　やれるけど…でもどうすんだよ？」

カチューシャが尋ねてきたので…

「泣いてる奴には音楽を聞かせろ
音楽ってのは人を安心させたり、心を引き付ける効果があるからな…

子守歌なんかがいい例だ」

これは俺の持論だが、俺はそう思っている。

「……確かにそうだな…　やろう！！　律、ムギ！！」

「ええっ！！」

「ヨッシャ！いっちょやるかっ！！」

そう言うと、黒髪ロングはベースを、『ムギ』はキーボードに、カチューシャはドラムに座った。

「おい　平沢」

「グスッ　サッくん…？」

名前を呼ぶと涙でグシャグシャの顔を俺に向けた。

「今から軽音部の奴等が演奏するってさ　」

俺がそう告げると…

「えっ！　演奏してくれるの？」

あれ？　泣きやんだ？

…まぁ　いいや結果オーライだ。

―――――――――

俺と平沢は長椅子に座り三人による演奏が始まるのを待っていた。

そして三人が目配せをして…

「1，2，3，4」

カチューシャのカウントで演奏が始った…

♪～～♪♪♪～

曲目は『翼をください』合唱とかでよく歌われる楽曲だ。

～～♪♪　♪～～♪

…ふと気になって隣に座る平沢を見て見ると…

「……」

三人の演奏に完全に聞き入っているようだ。

…いや　これは感動しているな…

三人の演奏は心を引き付ける『ナニか』があるみたいだ。

～♪♪♪～♪♪♪～

…そして演奏終了。

「わぁ～！　わぁ～！」

平沢は立ち上がり拍手喝采。

俺は座ったままで拍手を送った。

「えへへ～どうだった？」

カチューシャが少し照れながら俺達に感想を求めてきた。

「なんていうか…！
すごく言葉にしにくいんだけど…」

「うんっ！」

「あんまり　うまくないですねッ！！！」

興奮した感じでバッサリと言う平沢…
…流石だな。

（バッサリだー！！）

カチューシャのそんな心の声が聞えた気がした…

「でも　なんだかすっごく楽しそうでした！

私この部に入部します！！」

余り驚きはなかった。

演奏を聞いてた時の平沢の表情を見たら、何となくそんな気がしていた。

プニッ

グニッ

夢じゃないことを確かめるため互いの頬を抓る、カチューシャと黒髪ロング。

そして

「バイザーイ！！」

「ありがとう！！」

「これから一緒にがんばろう！！」

「うんっ！！」

飛び跳ねたり、手を取ったりして、喜び合う面々。

（さて、そろそろ失礼するか…）

そう思い、踵を返し歩き出そうとしたら…

ガシッ！　ガシッ！

「あン？」

「逃がさへんで～」

「待って！サッくん！」

平沢とカチューシャに両肩を掴まれた。

「何故、関西弁だ
それからサッくん言うな
なんだよ　俺の用は済んだぞ」

そもそも音楽室までの付き添いなんだから、音楽室に着いた時に俺のミッションは終了していた筈だ。

「サッくん！一緒に軽音部入ろうよっ！」

「……」

…やはりか　そんな気が薄々してはいたんだかな…

「そうだ！そうだ！一緒にやろうよ！！
今なら『副部長』のポジションが空いてるよん！」

…いらねェし、まったく魅力を感じない…

「……お前等はなんで俺を誘うんだ？
平沢が入部したんだ、廃部することはなくなったからいいじゃねェか」

その疑問をぶつけると…

「人数増えた方が、演奏の幅が広がるからな！

…あと部費も増えるし…」

聞えてんぞカチューシャ…

そっちが本音だろ…

「私、サッくんと一緒にやりたいな！」

「…なんで？」

「サッくんと一緒にやったら絶対に楽しいからっ！！」

と満面の笑みの平沢。
俺と一緒にやったら楽しいって…そんな保証ねェぞ…

「澪とムギも入って欲しいよな～？」

黒髪ロングと『ムギ』に聞く、カチューシャ

ぶっちゃけ、俺を入部させようとしてんの、お前等だけなんだから、
そんな訳…

「ええっ　もちろん！！」

「元々桐島君は入部希望者だと思ってたしな
断る理由はないよ」

あれ？
歓迎ムードだ…

「ほらほら～二人もこう言ってんだからさ～」

「そうだよ～サッくん！」

「……」

…軽音部か
そういや修司が…

『一人でギターやってるより、バンド組んでギター弾いてるほうが
楽しそうだけどな…』

…そんな事言ってたな。

「ねぇねぇ　サッくん～」

平沢が、駄々をこねる子供の様に、俺の手を取り左右に揺らす。

「はぁ…」

本日四度目のため息。

「…わかったよ」

「えっ？」

「わかったって言ったんだ」

「本当に？」

「ああ」

部活か…高校生になったんだ、やってみてもいいだろ。

「「やったーっ！」」

「これで本当に五人目獲得だな！」

「はいっ！」

「……」

俺が入部するだけで、こんなに喜ぶ、彼女達。

なんつぅか…悪い気はしない。

…照れくさいけどな。

「じゃあ　軽音部活動開始記念に、写真撮ろう！」

「あっ　私のカメラ…」

鞄からカメラを取り出し、それを構えるカチューシャ。

黒髪ロングのカメラなんだろう、そんな声が聞えた。

「いっくよーんっ！」

カシャ！

写真には、額から上しか写ってないカチューシャ。

若干、驚き顔の黒髪ロング。

笑顔でピースする『ムギ』

少し戸惑いながらも両手でピースする平沢。

やはり不機嫌面の俺が写っていた。

「あ…でも私、全然楽器出来ないし…
あっ！マネージャーとかどうかな!?」

「いや…運動部じゃないんだし…」

「そうだ！」

二人の会話から何やら思い付いたらしい『ムギ』が、こんな提案を俺と平沢にしてきた。

「この機会に平沢さんと桐島君、ギターを始めたらどうかしら？」

「で、でも…すごく難しそうな…」

「大丈夫だよ　私達も分かるところは教えてあげるし」

「そうだね！　さっきの演奏聞いてたら私にも出来るかもって思えてきた！」

「…それはよかった」

何気に失礼な事を言う天然娘に若干怒り気味なカチューシャ。

それにしてもコイツ等の中じゃ俺も平沢同様、何も楽器が出来ない奴になっている様だ。

「俺、ギター弾けるぞ」

「「「「えっ？」」」」

四人が一斉に声を揃えこちらを向く。

「ギター弾けるの桐島君？」

「まぁ　趣味程度だけどな」

「そうなんだ～
早く言えよ～！」

「聞かれてねェし」

「人は見かけによらないね！」

どういう意味だコラ平沢。

……

こうして軽音部を『退部』する筈だった平沢は『入部』し、その付き添いだった俺も軽音部に入部することになった…

第五話（前書き）

次の日の朝の出来事です。

第五話

朝、学校に行く準備をする。
制服を着て寝癖を直し、ピンで前髪を止め、鏡で確認をする。
そしてやはり不機嫌面だと思う。

鞄を取り、ヘッドフォンを首に掛けそして…

ギタースタンドに立て掛けてある二本のギター、エレキとアコギを見る。

「こっち、持ってくか…」

とエレキを手に取り専用のギターケースに入れる。

それを背に担ぎ、部屋を出る。

……

学校への道をヘッドフォンから流れる音楽を聞きながら歩いていると、コンビニから修司が出てきた。

修司は俺に気付き、手を上げ何か言ってるが…

「……」

それを華麗に無視する俺。

すると修司は俺の隣りに並び…

「――ッ！　――ッ！」

と何か叫んでくる。

このまま無視しても良いのだが、修司の叫びが近所迷惑になりそうなので、仕方なくヘッドフォンをハズす。

「無視しないでくれますかッ！？」

「無視した訳じゃねェよ…
お前の存在を俺の視界に入れたくなかっただけだ」

「それを無視って言うんだよッ！！」

…朝から騒々しい奴だ…

……

「あれっ？」

「あ？」

「なに背負ってんの？」

と修司が俺の背にあるギターケースを指差し、そんなことを言ってきた。

「…見て分からんか？」

「ん～っ……

あっ！わかった！！

バズーカだなッ！！」

うん、アホだ。
そして今日も絶好調だな。

「どこに朝からバズーカを携帯し、登校する学生がいる？」

「ここ」

俺を指差す。

ドゴッ！

「蹴るぞ」

「モ、モウケッテマスヨネ…」

足にローキックを加え、しゃがみ込んでその痛みに悶えるアホ。

「いや冗談だって…！

バズーカがそんなに薄くないもんね～

本当はわかってるよ、その中身はズバリ…」

さぁ　どんな答えが飛び出てくるか…？

「スノーボード「違う」だァ～って、あれ？」

余程、自信があったのか俺の『違う』発言にキョトンとするアホ。

…ていうかどんな風に考えたら俺がスノーボードを持っていることになる？

「えッ！違うの！
……自信あったんだけどな～」

…やっぱ自信あったのか…

「その自信はどこから来るんだよ…？」

「そりゃ　咲也と俺の友情からさ！！」

ビッとサムズアップする。

「……」

スタスタ…

それを無視して歩き出す。

「待てよッ！
何で無視すんだよ！！」

「無視した訳じゃねェよ…
お前の存在を俺の視界に入れたくなかっただけだ」

「それを無視って言うんだよッ！！
って　このやり取りさっきやったよなァッ！？」

あぁもう、うるせェな…

何故、俺の朝の貴重な時間をコイツのために浪費しなければならんのだ…
これ以上無駄な時間を費やさないために…

「…ギターだ」

「ん？」

「だからギターだよ　この中身は」

答えを教えてやることにした。

……

「なぁ～んだ　ギターか！
それならそうと早く言えよなぁ～」

「ソウダナワルカッタ」

反論してやってもいいんだが、それによるコイツとのやり取りが非常にメンドいので、俺の否を認めることに。

「でも何でギター持ってんだ？」

…やはり聞いてくるか…

「…軽音部に入部したからだよ」

「えっ！そうなの！？」

と驚き俺の顔を凝視してくる。

コイツには言いたくなかった…

何故なら…

「ふぅ～ん、そっかそっかぁ～♪」

とニヤニヤして言ってきやがった。

コイツの中では昨日の『軽音部に入れば?』と言う発言を受けて俺が、軽音部に入部したと思っているんだろう…

「昨日、俺の助言のおかげだな!!」

案の定だった。

だから言いたくなかったんだ…

…俺が言わなくとも平沢が言いそうだけどな…

……その後、修司の言葉を適当に受け流し（反論したらメンドいから）学校に着いた。

あっ　最後の言葉はきっちり反論させてもらった。

「親友の言うことは聞くもんだろ？」

「俺達、親友じゃねェから」

「なにィ！？」

――――――――――

学校に着き、俺は教室には行かず軽音部の部室である音楽準備室に

向かっていた。

ギターを置くためである。
教室にはそれぞれ個人用のロッカーがあるのだがとてもギターが入るような大きさではない。

教室に置いておくと周囲の視線に晒されそうなので、部室に置くことにした。

部室に辿り着きドアを開けようとノブに手を触れるが…

ガチッ

「ん？　あれ？」

ドアが開かない…

「…鍵かかってんのか」

部室には鍵がかかっており、中に入れない。

戸締まりはしっかりしているようだ。

…そりゃそうか。
部室にはドラムセットやキーボードがあるんだ。
毎日持って帰れないからな…

「…さてどうする？」

このまま突っ立ってる訳にもいかないので職員室に鍵を取りに行くか？

メンドくせェな…

「…いっそドアを蹴破るか？」

などと物騒なことを考えたら…

「えっ？」

と声が聞えた。

「あン？」

振り返れば…

「……」

少し驚いた顔をした黒髪ロングの女生徒―秋山　澪―が立っていた。

「け、蹴破るって…」

どうやら俺の『蹴破る』発言が聞かれていたらしい…

…だから驚いていたのか

「いや　んなことしねェよ冗談だ」

「そ、そう…　冗談か」

冗談だとわかったらしいホッとした顔になる。

…そうだコイツなら

「なぁ　秋山」

「え？な、何？」

「部室の鍵、持ってたりしてねェか？

中に入りてェんだが、鍵かかってるからな」

おそらく秋山もベースを置きに来たんだと思いう。

じゃなきゃ、わざわざ朝から部室には来ないだろう。

「…桐島君もギターを置きに？」

「あぁ」

『桐島君も』と言うことは、俺の読みは当たりだったようだな。

秋山は制服のポケットから鍵を取り出し…

「待ってて　いま開けるから…」

そう言い、鍵を鍵穴に入れ、ロックを解く。

ガチャリと音がし、ドアが開いた。

「…サンキュ」

俺は秋山に小さく礼を言い先に部室に入り、その後ろを秋山がついて来た。

「「……」」

俺は背負っていたギターケースを降ろし、なるべくネックに負担が掛からないようにギター全体を壁に立て掛ける。

本当はギタースタンドがあればいいんだが…

今度持ってくるか。

それにしても…

「「……」」

（会話がねェな）

俺と秋山は部室に入ってから、全く会話がない。

昨日は普通に俺とも話してたんだがな…

何か話、フってみるか。

「なぁ」

「な、何？」

「ギターアンプってあんのか？」

「う、うん　三つあるよ」

「あっ　そう」

「……」

会話終了。

（続かねェ…）

何故なんだ？
俺が悪いのか？

…いや　もしかしたら性格の問題かもな。

人見知りとかだったら納得だ。
昨日は親しい奴等（カチューシャと『ムギ』）がいたから普通に話せたが、今はいない。

更に俺は男だ。
人見知りな女が男に話すのは困難だろう。

すると…

「あ、あの…」

「あン？」

秋山が話かけてきた。

「き、桐島君って利き腕はどっち？」

「利き腕？

…俺は右利きだけど」

「あっ　そうなんだ…」

「……」

会話終了。

…いや待てよ？

コイツ昨日、ベースを…

「お前レフティか？」

「えっ？　あ…う、うん　そうなんだ」

「なるほどな…だから利き腕か」

「うん　左利きの人少ないから…
だから桐島君はどうなのかなって思って…」

「生憎さっきも言ったが、俺は右利きだ」

「…そ、そうだよね…」

何かへこんでねェか？
これも俺が悪いのか？

「はぁ…」

これ以上は無理だな。
目的は達成されたんだ。

（さっさっと教室に行くか…）

そう思い歩き出そうとしたその時…

「澪〜？」

と部室のドアから声が聞えた。

「律？」

見るとそこにはカチューシャ　―田井中　律―がいた。

「どうしたんだ？律」

「いや　なかなか澪が教室に来ないから、何かあったのかなと思って…ってサクじゃん！
何してんの？」

そうだ。
コイツに秋山の事聞いてみるか。

「おい　田中」

「田中じゃなくて！
田井中！　田井中　律！

てか『律』で良いって言ってんじゃん」

昨日、俺と平沢は改めて自己紹介をし、その時に田井中が俺の事を『サク』と呼びだした。
それを聞いた平沢が『サッくんのほうが良い』なんて事言い出しやがり、『ムギ』が『サッくん』と呼ぼうとしたのを俺が全力で阻止したということがあった。

その折りに平沢と田井中が『名前で呼べ』と言ってきたがスルーし

てやった。

俺の中では平沢は『平沢』、田井中は『カチューシャ…』もとい『田井中』と決まっていたので変える気は更々ないのだ。

「細かい事気にすんな
それよりちょっと来い」

「結構重要なんだけどな…」

手招きすると愚痴りながらも俺のそばに来た田井中に秋山に聞えないように小声で話す。

「（秋山ってもしかすると人見知りとかするか？）」

「ん？なんでそんな事……

あ～なるほどなぁ

だから教室来るの遅かったのか」

合点がついたのだろう。
納得する田井中。
話が早くて助かる。
田井中は俺と同じ小声で…

「（あぁ　するよ
更に今なら人見知りだけじゃなく、恥ずかしがり屋、寂しがり屋、
怖いものはダメ、負けず嫌いという四点セット付きだ）」

「（…んだよ『今ならお買い得』みてェな言い方は…）」

なるほど、そんな性格してたんじゃ昨日今日会った奴とは会話は無理だな。

チラッと秋山を見てみると…

「…？」

『何の話をしてるんだ』と言わんばかりの表情をしていた。

「（それに…）」

「（あっ？）」

「（サクが不機嫌そうな顔してるから話かけづらかったんじゃないのか？）」

若干ニヤけながらそんな事を言ってくる。

「（この顔は生まれつきだ！）」

小声で怒鳴るという器用な事をする俺。

「生まれつきだとしてもそんな顔してたら相手に誤解されるよ？

という事で笑ってみましょう～

さぁ　笑えっ！」

そう言って背伸びして（俺とコイツでは身長差がある）俺の頬に手を伸ばし無理矢理笑わせようと引っ張る。

グニッ

「テメェ…　何しやがる」

「律ッ？」

「笑顔の練習だよん♪」

んなことを笑顔で言ってくる田井中。
そして急に俺の頬を引っ張り出した田井中に困惑の声をあげる秋山。

とりあえずやられっぱなしは性に合わないので反撃に出る事に。

グイッ

「テメェこそ少しは女らしくしたらどうだ？

…この口調とかな」

そう言い田井中の頬を引っ張る俺。

「桐島君ッ？」

「にゃにお～う！
この口悪男！」

「カチューシャ」

「ツリ目」

「がさつ」

「サッくん」

「サッくん言うな！」

お互いの頬を引っ張り合いながら口論?する俺達。

…と

「…クスッ　あはは！」

笑い声が聞えてきた。

「あはははっ！」

「あぁ？」

「…澪？」

「ご、ゴメン…
なんだか二人がおかしくって
…あははっ！」

目に涙を浮かべながら俺達を見て笑う秋山。
…ツボに入ったようだ。

（なんだよ…笑えんじゃんか）

今日初めて秋山の笑顔を見た。
それを見て安心する俺。

「…クスッ
全くサクのせいで滞に笑われたじゃないか～」

同じく笑いながらそんな事を言う田井中。

（…いや　先に仕掛けたのお前だろ）

そう思ったが口に出さなかった。
せっかく秋山が笑ってんだそれはヤボだな。

…もしかしたら田井中はこうなる事がわかって、俺にあんな事をしたんだろうか？
だとしたら大したもんだな。

「ほらっ澪！
いつまで笑ってんだよ
教室行こうぜ？
もう用事は済んだんだろ？」

「クスッ　あぁ　そうだな

桐島君も行こう？
じゃないとＨＲに遅れるしな」

「あ、あぁ」

どうやら先程の一件で俺に対しての態度が変わったようだ。

うむ　良かった。

これから同じ部活をしていくんだギクシャクしたままじゃメンドいからな。

「ほらっ　行くぞサク！」

「早く　桐島君！」

「…あぁ」

部室のドアで俺を呼ぶ二人。
それに小さく返事をし、俺達は部室を出て教室へと向った。

第六話（前書き）

アニメ二話です。

二話の内容を全部やると長いので、何話かに分けます。

第六話

「唯」

「あっ　和ちゃん」

「一緒に帰ろう」

「ゴメン～　今日どうしても部活に行かなきゃいけないんだー」

「そうなんだ…
それじゃあ仕方ないね」

「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ～」

「えっ？」

「…ギターやれよ…」

平沢と真鍋の会話が聞こえ、平沢が珍回答をするもんだから思わず

ポツリとツッコんでしまった。

「さ～く～や～くんっ♪
一緒にか～えろ♪」

「ヤダ」

「即答ッ！？」

そして変なリズムを口ずさみ、修司が俺のそばにやって来た。

「んな冷たい事言うなよ～　帰りゲーセン寄って帰ろうぜ！」

「ヤダ」

「またも即答ッ！？」

コイツは一々良いリアクションをするな…
それがコイツの唯一の良いところだな。

「何でだよ～　何か理由（わけ）でもあんの？」

「…朝言ったろうが
『軽音部に入った』って…
だから今から部活がある
これが理由だ」

「えっ？……あっ！！」

どうやら思い出したらしい。
つうか『俺の助言のおかげ』なんて言って喜んでたのは誰だ…

「えっ？じゃあ何？
これからは部活がある日は一緒に帰れないの…？」

「そうなるな」

「……」

まるで『この世は終わり』みたいな表情をする。
なんだ、お前はそんなに俺と帰りたいのか？
それは非常に…

（気持ちわりぃな…）

つうか…

「お前バイトはどうしたんだよ？
面接があったんだろ？」

「……落ちた…」

「ふ～ん」

「…もうちょっと興味持とうよ…
聞いてきたのお前なんだし…

てゆうか、お前が『落ちろ』なんて言うから落ちたんだぞッ！！

責任とれやッ！！」

「…面接に落ちたのはお前のせいであって俺は関係ないあと　うるさい」

「～～～～ッ！
咲也のバカァ！
このっ……こ、この……バ～カ！」

子供のような悪口を発しながら、またもや走り去って行く。
最後何も思い付かなかったらしい。

「修司君どうしたの？」

「何か泣いてたわよ？」

平沢と真鍋がやってきて俺に尋ねてくる。
…つうかアイツ泣いてたのか。

「気にするな　いつものことだ」

「そう　なら良いけど」

と真鍋。

『いつものこと』で通じてしまう。

このクラスでは、俺と修司のやり取りは最早軽い名物になってしまっている。

…全然嬉しくねェけどな。

「サッくん！部活行こう！」

「…あぁ　あとサッくん言うな」

一向に直らない…いや直す気のない『サッくん』発言にツッコミをいれ、鞄を取り席を立つ。

「じゃあ和ちゃんまたね」

「じゃあな」

「うん　またね唯、咲也」

真鍋に別れを告げ、部活に行くために教室を出る。
向かうは軽音部室。

――――――――――

「～～～～♪」

今にもハナ唄でも歌い出しそうなくらい上機嫌の平沢。

「ふんふんふ～ん♪」

あっ　本当に歌った。

「えらい上機嫌だな」

俺がそう言うと、前を歩いていた平沢がくるりっと俺に向き…

「だって部活すごく楽しみにしてたんだもん！」

（昨日嫌がってたじゃねェか）

まぁ昨日と今日じゃ状況が違うけどな。

すると平沢が…

「私ね、幼稚園のときも、小学生のときも、中学生になっても、ずっとぼーっと生きてきたんだ」

「……」

「でもね…高校生になって初めてやりたい事が見つかったんだぁ

だからね、私すっごく楽しみなの！」

そう言って花が咲いたかのような笑顔を見せる。

俺も小、中と何もやってこなかったが、ギターがあった。
ギターを弾いている時はとても楽しく満足していた。

…が平沢は俺のギターのように、打ちこめるものがなかったんだろう。

だから『部活』という初めてやりたい事が出来て嬉しいんだろうな。

「…そっか　なら…
その『やりたい事が』『夢中になれるもの』になるといいな」

気がつけば、何とも俺らしくない言葉が出ていた。

「うんっ！！」

（まぁ　いいか…）

力強く頷き笑う平沢を見たらそんな風に思った。

――――――――――

ガチャ

「こんにちは～」

「……」

挨拶をして（俺はしてねェけど）音楽準備室に入る。

中には俺達以外の三人が既にいた。

「ようっ！」

「こんにちは」

「いらっしゃい～」

と三人から挨拶が返ってくる。

「唯ちゃん、咲也君
紅茶は熱いのと冷たいの、どっちが良い？」

と『ムギ』―琴吹　紬―が聞いてきた。

…ん？　紅茶？
何故そんな事を聞くんだ？

そんな疑問を思っていると…

「私、熱いの！」

平沢が疑問に思う事なく答え、席に着く。

席には田井中と秋山が座っており、二人の前にはティーカップが置いてあった。

喫茶店かここは？

「咲也君はどっち？」

「あぁ？」

「熱いのが好きか、冷たいのが好きか」

何も答えなかった俺に再度、琴吹が聞いてくる。琴吹の醸し出すおっとりとした雰囲気に感化されたのか…

「…熱いの」

と答えてしまった。

「じゃあ　ちょっと待っててね？」

「……」

「なぁーにしてんだよ？　早く座れよ？」

田井中が何時まで経っても立ったままの俺にむかい座るように促す。

…がその前にどうしても聞いておきたいことがある。

「なぁ　秋山」

秋山に。

「えっ　何？」

自分に話がフラれるとは思わなかったんだろう。少し驚く。
が、そんなもんお構いなしに問いかける。

「ここは軽音部だよな？」

「あーっ、うん…
そうなんだけど…」

俺の言いたい事がわかったんだろう、苦笑いを浮かべ肯定する。

「はぁ…」

ため息が漏れる。
あと何回ため息が出るだろうかと思いながら席に着く。

……

「ねぇねぇ　何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやろうと思ったの？」

席に着き琴吹が淹れる紅茶を待ってると平沢が秋山に質問をする。

「だってギターは…
は、恥ずかしい…」

「恥ずかしい！？」

「ギターってバンドの中心って感じで、先頭に立って演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集るだろ？
…自分がその立場になるって考えただけで…」

ボフンッ！

「澪ちゃん！！」

頭から煙を出し、倒れる秋山。

「おぉー人間火山」

「何言ってんだよ…

それより言った通りだろ？」

俺がそんな事を言ったら田井中にツッコまれた。

「何が？」

「これが、澪の持つスキルの一つ『恥ずかしがり屋』だ」

そういやそんな事言ってたな。

にしても…

「繊細過ぎやしねェか？　想像しただけで、アレって…」

「そうなんだよな～
少しでも直ってくれると良いんだけどな～」

どうやら田井中は秋山の繊細さが心配らしい。
…意外と友達想いなとこあんだな…

「お待たせ～唯ちゃん　咲也君、お茶が入りましたよー」

俺と平沢の前に紅茶が置かれる。
すると平沢は今度は琴吹に…

「ムギちゃんはキーボードうまいよね
キーボード歴長いの？」

「私　四歳の頃からピアノを習ってたの
コンクールで賞をもらったこともあるのよ」

「へっ！？　へぇーすごいねぇ！」

確かにスゲェ。
コンクールで賞をとるくらいの実力を持ってるなんてな。
この軽音部で実力は、頭一つ出てるかも…

「さぁ　いただきましょう」

気がつけば目の前に、ケーキやらクッキーが並べられていた。

…だからここ軽音部だよな？
てか良いのかよ、学校でこんなことして…

「疑問に思ってたんだけど…」

平沢、やっとお前も気付いたか…
そりゃそうだ。
目の前にこんだけのもんが並んだらいくらなんでも気付くか…

「この部室ってやけに物がそろってるよね～
ティーカップとか」

って…

「そっちかよッ！！」

「えっ！！　サッくんどうしたの！？」

「ブッ！！
びっくりしたぁ！！

急に大きな声出すなよ！！
驚くだろっ！

澪なんか固まっちまったぞ！」

「……」

「どうしたの？　咲也君？」

忘れてた…平沢は天然だった…
俺と着眼点が違うんだコイツは…
おかげで修司ばりの声を出してしまった…

そのせいで田井中は飲んでいた紅茶を吹き出し、秋山に至っては固まってしまった。

「いや…わりィ…
やはり俺の考えは甘かったんだと再び実感してしまって声をあげてしまった…

わりィな田井中、秋山」

「？…よくわかんないけど
まぁ　今度から気をつけろよ」

「だ、大丈夫…少し驚いただけだから…」

「悪かったな…
さぁ優雅な会話を続けてくれ…俺はもう黙っとく」

もういいさ…
俺が疑問に思った事を言っても同じことになりそうだ…

その後俺は彼女達の会話を紅茶を飲みながら受け流していた…

第七話（前書き）

アニメ二話その二です。

まだ終わりません…

第七話

「サッくんは？」

「……あン？」

「サッくんはなんでギター初めたの？」

どうやら俺が会話を受け流していたら何故俺がギターを初めたのかという話になっていたようだ。

…俺がギターを弾き初めたきっかけか…

「…憧れ、かな」

「「「「憧れ？」」」」

四人の声が揃う。

…チームワーク良いなお前等。

「…好きなバンドがいてな、その人達の影響を受けたのがきっかけだな」

今から九年前か…一組のバンドがデビューした。
当時七歳だった俺は音楽番組で歌う彼等から何故か目が離せなかった。

それから二年後、親戚からアコギを貰い当時ヒットしていた彼等の曲を真似てみた。

…が弾ける筈もなく
無論まだ初心者だった俺は、その曲を弾きたい一心で親に頼んでギターの教育本を買ってもらい独学でギターを覚えていった。

そして、そのバンドのスコアブックを手に入れ、拙い手つきながらもギターを奏でた。

とても他人に聴かせるようなもんじゃなかったが、弾き終えたときはとても嬉しく、楽しかったのを覚えている。

それからはギターにのめりこんでいった。

「…そのバンドのギタリストがカッコよくてな
その人みたいにギターが弾けたらと思ったから…それが理由だ」

「「「「そうなんだ～」」」」

またも声が揃う四人。
…だからチームワーク良いなお前等は…打ち合わせしてんのか？

「その気持ちわかるよ
私と律も同じ理由でバンドを組もうと思ったんだ」

「そうだったな～

私がドラムで澪がベース、高校に入ってムギがキーボードで軽音部に入部してくれて、後はギター……ってあぁッ！！」

しみじみと昔を思い出すかのように語ってた田井中が急に叫ぶ。

「んだよ…急にデケェ声出すなよ…
うるせェなぁ
驚くだろうが」

「いやサクには言われたくないんだけど…」

まぁ　確かにそうかもな…

「どうしたの？　りっちゃん？」

と平沢。
すると田井中は壁に立て掛けていた俺のギターを指差し…

「あのギターってサクのだろ？
何か弾いてみせてよ」

「あ、私も聴きたい～」

「私も！　私も～！」

「私も聴きたいな…」

「…別にかまわねェけど」

そもそも弾くために持ってきたんだから断る理由はない。

俺は席から立ち上がりギターへと向い、ケースからギターを取り出した。

…実はこのギター、好きなギタリストがよく使うギターと同じモデルだったりする。

【テレキャスター】

と呼ばれるギターで色はブラック。

楽器店で見つけ、一目惚れし（ギタリストと同じモデルだったというのもあるが）購入したものである。

「はい　これ」

「……」

琴吹がギターアンプを軽々と持ってきた。

女には結構重いと思うんだがな…

コイツは結構、怪力…いや、力持ちなんだろうか？

…まぁ　いいや。

ギターのジャックにシールドを差し込み、チューナーでチューニングを済せ、チューナーをシールドからハズし、アンプにシールド差

し込む。
アンプのボリュームが下がっているか確認し、電源を入れ、ボリュームを上げる。

（さて　やるか…）

そう思いギター構えると…

カシャ

と機械音が聞えた。
音のした方に視線を向けると…

「エヘヘ」

平沢がケータイのカメラを向け、俺を撮っていた。

「…何やってんだお前？」

「サッくん撮ってんの♪」

「…何故？
あとサッくん言うな」

「サッくん、ギター似合ってるから憂にも見せてあげようと思って♪」

「……」

『ハイッ！目線こっちに！』…なんてこと言いながらガンガン撮りまくる。

『勝手なことしてんじゃねェよ』とか『ヤメロ』とか『一枚につき諭吉一枚だ』や『妹想いの良い姉だ』などのツッコミが浮かんだが（最後のはどうなんだ？）言わずにいた。

何言っても無駄な気がするし…

変わりに口から出たのは…

「はぁ…」

ため息だった。

…つうかお前らも苦笑いしてねェでとめろや。

そんな願いが通じたのか否か田井中が平沢に…

「唯、もういいか？」

「うん　満足満足～
さぁサッくん！どうぞ～！」

（やりづれェよ…）

…がやらない訳にもいかず再びギターを構える。

……

～～♪　♪♪♪～

好きなバンドの曲を奏でながら、オリジナルを要所要所に織り交ぜる。

途中…

「カッコいいーっ！！」

「おお～っ！！」

「うまい…っ！」

「上手～！」

などの声が聞こえたが無視。
今はギターを弾く事に集中する。

♪♪♪～～♪♪

……

…ジャァー…ン

一、二分ほど弾き、音の余韻を残す弦を指で触れ止める。

「「「「……」」」」

（…誰かスタープ〇チナでも発動したのか？）

そんな事を思ってしまうくらいに時が止まったかのように動かない四人。

そして…

時は再び動きだす…

「「「「すっごーい！！」」」」

三度声が揃う四人。

…絶対打ち合わせしてんだろ。

「すごいよサッくん！！

カッコよかった！！

やっぱり人は見かけによらないね～」

「流石、私が見込んだ男だ！」

「桐島君こんなにギター上手かったんだ！」

「うんっ！　凄いわ！」

「あ、ありがとよ…」

四人が口々に感想を言ってくる。
そんな四人の迫力に吃りながらも礼を言う俺。

（平沢…だからどうゆう意味だ？

…それから田井中、いつ俺はお前に見込まれた？）

そんな疑問を思いながらもギターを置き、俺のギター演奏披露会は

幕を閉じた。

……

その後再び席に着きお茶を楽しむ俺達（俺は楽しんじゃいねェが…）

「そういえば平沢さん？
もうギターは買ったの？」

「『唯』でいいよ！」

「えっ？」

「私すでに澪ちゃんのこと『澪ちゃん』って呼んでるし♪
あとサッくんのことも『サッくん』ってよ「ヤメロ」…ぶぅ～！」

恐ろしいことを口走る平沢に間髪入れずに阻止する。

未だにぶぅぶぅ（文字通り）言ってる平沢を尻目に秋山が…

「…ゆ、唯…」

とスキルを発動させ、恥ずかしそうに平沢の名を呼ぶ。
それを聞いた平沢が何故かときめいていた。

すると秋山は俺の方をチラッと見て…

「…サ、サッく「ヤメイ」…」

今度は秋山の口から飛び出しそうになるブロックワードをこれまた阻止する。

「なんで止めるんだよ〜
せっかく面白い…コホンッ！
良いものが見られると思ったのに〜」

と田井中。

お前言い直したところで内容ほぼ一緒だぞ…

「『サッくん』はヤメロ秋山
…別に今のままでかまわん」

「で、でも他人行儀な感じがするからやっぱり名前で…」

「だとしても『サッくん』はよせ」

「じゃあ…『咲也』で…」

「…あぁ」

別に『サッくん』じゃなかったら良いのでそれで了承する。

名字のままで良いんだがな…

「じゃあこれを機にサクも私達のことを名前で呼ぶとしよう！」

「その内な」

「「「ぶぅ！」」」

田井中の提案をあっさり受け流す。

田井中と平沢と何故か琴吹がぶぅぶぅ（文字通り）言ってるが無視。

「で？平沢、ギターは？」

この話題を変えるため先程の秋山の質問を平沢にする。

「ん？　ギター？……あっ～そっか

忘れてた！
私ギターやるんだっけ！」

「「忘れんなよ」」

見事に声が重なる俺と田井中。

「軽音部は喫茶店じゃないぞ？」

この現状で言っても説得力ねェぞ秋山。

「ギターってどれくらいするの？　値段」

「う～ん…安いのは一万円代からあるけど、あんまり安すぎるのもよくないからな
五万円くらいがいいかも…
ねぇ桐し…咲也？」

「…あぁ　そうだな」

俺に確認をとる秋山。
間違ってないので頷いておく。

言い慣れないなら『桐島君』で良いんだがな…

「えっ！　五万…？
私のお小遣い十ヵ月分…」

「高いのは十万円以上するのもあるよ？」

「ねぇ　りっちゃん…」

「ん？　何？」

「部費で落ちませんか？♪」

平沢が田井中（部長らしい）に極上な笑顔で懇願する。

それに対し、田井中は…

「落ちません♪」

負けじとこちらも極上の笑みでズバリと返す。

「…ねぇサッくん…？」

「あン？　つうかサッくん言うな」

「サッくんのギターはいくらしたの？」

「…確か…八万だったか？」

「ほぇ～！　よくそんなに高いギター買えたね！？」

確かにこの前まで中学生だった俺が何故そんな高価なギターを買えたのか？

その答えは

小遣いとお年玉、更にはたまに修司の親の仕事（このことについてはその内）の手伝いをし、コツコツと金を貯め二年前に購入したのだ。

「とにかく楽器がないと何も始まらないしな…」

秋山が楽器がない事を危惧する。

それを聞いた俺は…

（カスタネットでいいんじゃね…？）

とか思ったのは秘密だ。流石にそれはな…

「よーしっ！今度の休みにギター見に行こうぜ？

ギターに詳しい奴もいるしな！」

そう言い俺の顔を見る田井中。
…なんだ俺も行くのか？
その確認のために声を出す。

「俺も「おーッ！！」……」

だがそれは妙に張り切る田井中の掛け声によって阻まれる…

「おーっ！」

「うんっ」

「あはっ！」

更に便乗する琴吹。
頷く秋山。
笑う（何故？）平沢。

そして…

「はぁ…」

ため息を吐く俺。

どうやら決定項らしい…

……

（最近ため息が増えたな…）

そんな事を思い、部活初日は終った。

第七話（後書き）

咲也のギターの腕はプロ並ではありません。

猫娘よりも上手いぐらいです。

第八話（前書き）

アニメ二話その三です。

まだ終わりません…

第八話

休日の街を歩く。

平沢のギターを購入するために、軽音部員と待ち合わせの場所に向かうためである。

ぶらぶらと歩いていると待ち合わせ場所に近付き、そこには俺以外の四人の姿があった。

「ーっ！　ーっ！」

おそらく平沢であろう人物が俺に気付き何かを叫び、手を振っている。

まだ俺と彼女達との距離はあるので何を言ってるのか分からない。

「…いっ！　…んっ！」

近付くにふれ段々と何を言ってるのか聞き取れてくる。

「おーいっ！　サッくん！」

「……」

その言葉を聞いた瞬間、Ｏ（オー）が二つ並ぶ某機動戦士の切り札ヨロシク通常の三倍のスピード（紅く発光したり残像を残したり粒子化はしてない）で彼女達の元に急ぐ。

「おーいっ！　サッ「ヤメロッ！！」…わっ！」

叫び続ける平沢に近付き、叱責する。

「サッくん言うな！！しかも街中で！！更に叫ぶな！！」

「珍しい…サクがここまで声をあげるなんて…」

「それほどイヤだったんだな…」

「あぁ　そうだよ」

田井中と秋山の会話が聞え、それに答える俺。

「まぁまぁ…それにしても遅いよサッくん！」

ビシッと俺に指差す。

「あぁん？」

『まぁまぁ』だと？
そんな四文字で俺の渾身の想いを受け流すんじゃねェぞ…
更には俺を遅刻者呼ばわりか…

「どこがだよ定時じゃねェか？」

なのでそう返す。
すると平沢は…

「私達より遅く来たから」

「……」

なんてなこと言い張りやがった…

なんだ？
時間通りに来たってェのにお前等より遅く来たら遅刻者なのか？

何だろうなこの気持ち？

なんとも言い表しづらい感情が浮かび上がる。

怒りに近いんだが決して怒りではない…

（どっか修司通らねェかな…
この気持ちを発散させるために蹴り飛ばしてェんだが…）

そんな事を思いキョロキョロと見渡す。

「どうしたの？咲也君？」

そんな俺を見て、琴吹が聞いてきた。

「いや、やっぱ必要な時に現れねェ奴だと思っただけだ」

「？」

「なんでもねェよ　気にすんな」

俺の言った事に理解出来ず、頭にクエスチョンマークを浮かべる。

…理解出来る訳ねェけど…

「はぁ…」

とりあえずため息でストレス？発散。

「唯だって今さっき来たばっかりだろ？」

…何？

秋山のそんな声が聞え、平沢は…

「いや～あはは　そうなんだけどね～」

ポリポリと頭を掻きながら答える。

（修司通らねェか…）

再びそう思ったのは言うまでもない。

――――――――――

その後、ため息という名のストレス発散方法でなんとか気持ちを立て直し、楽器店に向かうため俺達は商店街を歩いていた。

ちなみに女性陣は横一列で歩いており、黒一点の俺は二、三歩後ろで歩いている。

「お金は大丈夫だった？」

「うん　お母さんに無理言って五万円前借りさせてもらったんだ」

（五万か…そこそこ良いのが買えるな…いや待てよ…
…チューナーと家庭用の小さなアンプとピック、代えの弦、ギタースタンドもいるか…

それら諸々ギターに必要なもんを含めると…）

琴吹と平沢の会話が聞え、俺がそんな事を考えていると…

「ちょっと見るだけ～」

平沢の声が聞え…

（何がだ？）

そう思い、思考の海から生還すると…

とある洋服店に突入する天然娘。

呆れながらも付いて行く部長。

笑顔で洋服店に足を運ぶキーボード奏者。

その場に残るレフティベーシスト。

こんな状況だった。

「なぁ　秋山？」

「何…咲也？」

「帰っていいか？」

「ゴメンそれだけは勘弁して…」

「はぁ…」

高校に入学して何度目になるか分からないため息をつく。

とりあえず突っ立ってる訳にもいかないので…

「アイツ等の事頼むわ、俺はそこの本屋にいるから」

「え？行かないの？」

平沢達の事を秋山に一任し、本屋に向かおうと足を向けたらそう言われた。

「あそこは女モンの服を扱う店だ
俺が行ったら奇異の目で見られる…そんなのゴメンだからな」

「そういうもんなんだ…」

「そういうもんなんだ」

「わかった　すぐに連れてくるから」

「…あいよ」

そう返事し、秋山は平沢達の後を追い、俺は…

（すぐには無理だな…）

んな事を思いながら、本屋に向った。

……

本屋で新刊のチェックをし、音楽雑誌とサッカー雑誌を立ち読みしていたら…

「お待たせ咲也…」

申し訳なさそうな顔をした秋山がやって来た。

「あぁ　大丈夫だ　思い通り」

パタンと雑誌を閉じながら答える。

「さぁ　行こうぜ」

「うん…」

俺の『思い通り』発言に若干へこんでいる秋山を促し本屋から出る。

今度こそ楽器店へ……が、その後も平沢と田井中、便乗する琴吹に振り回され、雑貨店、デパ地下、ゲーセン等々……最終的には秋山も楽しんでいた。

「はぁ…」

そしてため息の俺。

（帰ろっかな…）

本気でそんな事を思いながらも休憩のため、喫茶店に入店する俺達。

……

「はぁ～疲れた～」

「へへ～　買っちった～」

「楽しかったですね～」

口々に言う面々。
更に…

「次ドコ行こっか〜？」

平沢が目的地は一つしかないのにそんなこと言いやがる。
なので…

「「楽器だ　楽器」」

と、俺と秋山の声が重なる。それを聞いた平沢は…

「あっそうか　何か忘れてると思ってたら…ギターだ」

「おい」

流石にツッコまざるを得ない。

…紆余曲折ありながらもようやく本来の目的地に向かうことに…

―――――――

【１０ＧＩＡ】

という楽器店に来ている。
この店はここいら一帯の楽器店の中でも群を抜く品揃えなので俺もよく利用する。

「すごーい！
ギターがいっぱい！」

様々なギターが並ぶ店内を見て平沢が驚愕の声をあげる。

「ん？」

ツインネックのギターを見て悩む平沢を無視し、俺は平沢が扱えそうなギターを探すことに。

（平沢は女で初心者、更には天然……これ関係ねェか……となるとギターは軽くネックは細いのが良いな…）

それを考慮し、探しているとあるギターが目に止まる。

【ストラトキャスター】

と呼ばれるギターである。

（これならイケるな…）

値段を見る。

《現品限り！四万二千円！！》

（この値段なら大丈夫だな…試し弾きするかな…）

そう思い店員を呼ぼうとした時に…

「咲也」

秋山に呼ばれた。

「あン？」

「ちょっと来てくれ、唯が…」

平沢がどうかしたのか？
展示してあるギターでもぶっ壊したか？

（そりァ、一大事だな…）

そんな平沢なら有り得そうな事を思いながら秋山のあとを付いて行くと、平沢がとあるギターの前で座り込んでいた。

「んだよ？
ギターでもぶっ壊したか？」

「そんな事、真顔で言うなよ…
そうじゃなくて唯がこのギターから離れないんだ」

と田井中が指差したのは…

【ギブソン・レスポール】

「……」

（こりゃまた…）

「唯ちゃんに、このギターはどうなの？」

琴吹が俺に尋ねてくる、それに対し俺は…

「別に悪い訳じゃねェけど…このギターは重いしネックも太いからクセがあるぞ
…それに値段見てみろ」

「ん？　おぉっ！！
二十五万円！？」

「あっ！本当だ！！」

（気付けや…）

「これは流石に手がでないや…」

ションボリした様子で呟く平沢。

「俺が選んだギターだったら五万以内で買えるぞ？」

「ん～…　やっぱこれがいいなぁ…」

まぁ俺が選んで無理矢理押し付けるより、自分で選んだギターの方が愛着が湧くからな…

「…そう言えば、私も今のベースが欲しくて悩んで、悩んで…手に入れたんだっけ」

「私も中古のドラムセット値切って、値切って…」

「店員さん泣いてたぞ」

「どうしてもあのドラムが欲しかったんだよ～」

秋山と田井中が悩んでいる平沢を見て自分達がベースとドラムを購入した時を思い出したらしい。

てか店員に迷惑かけんなよ。

「あの～『値切る』って？」

そんな二人の会話が聞えたらしい琴吹が『値切る』に疑問をもった。

「…知らねェのお前？」

「欲しい物を手に入れるために努力と根性でまけさせる事だよ♪」

「すごいですね！！
何か憧れます！！」

何故か『値切る』に目を輝かせ興奮した様子の琴吹。

そういやコイツ『お嬢様』らしいな（何故か平沢が自慢してきた）
高級そうなティーセットや紅茶は全部コイツの自前らしい。

だから『値切る』なんて『お嬢様』がやらない事に興味を示したんだろうか…？

「…よしっ！みんなでバイトしよ！」

「バイト？」

「うん！　唯のギターを買うために！」

ギターから目を離さない平沢を見兼ねたのか、田井中による突然のバイト発言。

それに直ぐ様反応する琴吹。

「えぇっ！！　そ、そんな悪いよ～！」

「これも軽音部の活動の一貫だって！」

「りっちゃん…」

「私やってみたいです！」

「ムギちゃん…」

「ヨッシャー！やるぞーっ！」

これもやっぱり俺もやるんだろうな…

が一応確認のため…

「俺も「オーッ！！」……はぁ…」

またしても田井中ボイスにかき消された。

このパターン多いな…

「…どんなバイトするんだろ…？」

「…さぁな…」

秋山がポツリと零した言葉に、これまたポツリと返す。

（二十万貯めなきゃならんから結構かかるな…）

平沢がギターを手に入れるのはまだ先のようだ…

第九話（前書き）

アニメ二話その四です。

バイト編です。

第九話

「バイト？」

「うんっ！ギター買うために！
軽音部のみんなも協力してくれるんだ♪」

「えぇっ！？
みんなを巻き込んで！？」

「うんっ♪」

「じゃあ…咲也も？」

「？…そうだよ、サッくんも♪」

「そうなんだ…」

『意外』とでも言いたげな表情で俺を見る真鍋。

「…ンだよ」

不機嫌面を更に不機嫌にし、こんな顔をさせた張本人を見る。

「いや…意外だなって思って」

言いやがったよ…
そして更に…

「咲也ってなんだか凄くめんどくさがりな感じがしたから…」

「失礼だな、お前…」

『凄く』って…
そりゃ確かに多少はそうだがそこまで言われる筋合いはねェぞ。

「こうなったのは、成行き上仕方なくだ…
俺の意思じゃねェ」

「クスッ　そうなんだ」

可笑しそうに笑う真鍋。
…何なんだよ。

「サッくんは素直じゃないからね♪」

「そうなんだよね～咲也は」

と、平沢と……

「…お前誰だ？」

「ＳＨＵＵＪＩ・ＫＡＧＥＭＩＹＡ！！
お前の親友のッ！！」

「何故、エセ外国人だ
あと親友じゃねェ」

「……」

…ん？　黙った…？
いつもなら騒音問題レベルの声で反論してくるのに…

「ふぅ～」

と息を吐き『やれやれ』と手を上げ首を左右に動かす修司。
…何だコイツ？

「こうゆうところが素直じゃないんだよな～

良いかい？
唯ちゃん、和ちゃん
コイツはあんな事言ってるけど、照れくさいだけなんだよ」

「……」

「うんうん」

「若干そんな気はするわね」

「でしょ？　つまり咲也は…」

そこで俺を指差し…

「ツンデレなん…」
「口（ブーシェ）！！」

ドゴッ！！

「ダバァア！！」

身の毛もよだつ事を言うその口に蹴りを入れる。コイツなんて言いやがった？

「誰がツンデレだァ？
あァ？一度でも俺がデレた事あンのかコラッ？」

口を押え悶え苦しむアホにすごみを利かせる。
するとアホは…

「…ツ、ツンデレじゃ、なくて、ヤンデレ…」

ドゴッ！

「……」

減らず口を言うアホにトドメをさす。

その顔は何故か『やってやったぜ』みたいな達成感のある表情。

…変態なのかコイツ？

「修司君が死んじゃった～！！」

「このくらいじゃ修司は死なないわよ」

慌てる平沢とやはりどこか冷静な真鍋。

ちなみに真鍋の言う通りだな。

「ところでサッくん？」

「あン？　サッくん言うな」

『ところで』か…
哀れだな修司。
全然そんな風に思わねェけど。

「『ヤンデレ』って何？」

「『ヤングデフレーション』の略だ」

知っても何も得する事はないので適当に教える。
つうか『ヤンデレは何？』ってことは『ツンデレ』は知ってんだな…

「え？どーゆ意味？」

「気にすんな　気にしたら負けだ」

「何によ…」

真鍋のそんな声が聞えたが無視だ。

さて、部活行こう。

――――――――――

「何のバイトが良いかなぁ～？」

俺達はバイトを探すため求人雑誌を見ている。
流石にこの日はお茶会はないようだ。（目の前に紅茶はあるが）

「ティシュを配るのは？」

「それで良いんじゃね？
ラクそうだし」

「ファーストフードはどうですか？」

「それで良いんじゃね？
あっ、でも接客メンドくせェな…」

「真面目に考えろよ…」

田井中が呆れた様に言ってくる。

「大いに真面目だ」

「どこがだぁ！」

「やっぱりサッくんはめんどくさがりだね～」

そんな会話を続けながらもバイトを探す。
コンビニや宅急便、ファミレスのウェイトレス（ウェイター）等の意見が出るが…

ボフンッ！

「「澪ちゃん!?」」

秋山の人間火山が噴火し却下。（人見知り&怖いものは×スキル発動のため）

が、秋山は立ち上がり…

「私っ!!何でもやるよっ!!」

おそらくこのままではダメだと思ったんだろう。
自分を鼓舞するかのように決意を叫ぶ。
それを聞いた田井中がクスリッと笑ったのを見逃さなかった。

（自分から進んでチャレンジする秋山の姿が嬉しかったんだろな…）

すると田井中が求人雑誌の一部分を指差し…

「これなんてどう？」

それを覗き込む俺達。

「「「交通量調査？」」」

俺と田井中以外の三人の声が揃う。
…やっぱチームワーク良いな…

「歩いてる人や車の数を数えるんだよ
カウンターを持って」

カチカチとカウンターを押す真似をする田井中。

それを聞いた平沢が…

「あっ　野鳥の会!?」

双眼鏡を覗き込む真似をする。

「違ェよ」

天然を披露する平沢にアッサリとツッコむ俺。

そんな天然娘を無視し話は続く。

「これなら澪も出来るしょ!」

「本当ですね～！」

「うんっ」

「これで良いだろ？
唯、サク」

「ＯＫ！」

「良いんじゃね？」

俺達のバイトは『交通量調査』に決定。

―――――――――

「ほいっ」

週末の休日。

集合場所に集った俺達は田井中から（予めスタッフから預かっていたらしい）カウンターを受け取る。

ちなみに俺は平沢よりも早く来た。
またあんな事になるのはゴメンだからだ。

「二人ずつ一時間ごとに交替だから」

田井中から説明を受けるが俺には疑問があった。

「なぁ　田井中」

「ん？何？」

「『二人ずつ』っうけど一人余るぞ？」

今この場にいるのは、俺に平沢に田井中、秋山、琴吹の五人だ。
どう計算しても一人余ってしまう。

が、その疑問はすぐに解決にむかう事に…

「あぁその事なんだけど、サクはあの人達と一緒にだってさ」

田井中が指差すその先に視線を辿ると…

「「「……」」」

如何にも『ガリ勉です』といったようなドンヨリとした風貌の男三人の大学生（多分）

「…あれはキツいぞ…」

俺にあの中に混ざれと？
…地獄だ……

「仕方ないって！
八人募集してその四人が男と女なんだからさ！
必然的にこうなるよ！」

そうなんだろうが…
あれは…

「はぁ…」

決まっている事なので今更変更は無理。
なので最早俺の代名詞（非常にイヤな）のため息がでる。

……

「じゃあ　サッくん！
頑張ってね～！」

「生きてろよ～！」

「咲也、頑張って」

「また　お昼に～」

「……」

それぞれ言いたい事を言って持ち場に向う彼女達。

『このまま帰ってしまうか？』という邪念を引っ込め、重たい足を引きずりながら地獄に向う。

……

「……」

ブォンッ！

カチッ

「……」

ブーンッ…

カチッ

「……」

パラリラ～

カチッ

（…地獄だ）

案の定だった。
今、俺と大学生（眼鏡）がバイトに励んでいるわけだが…

「「……」」

俺達の間には一切の会話なし。
更に何故かドンヨリとした空気を醸し出すのでコッチの気分が滅入る。

音楽でも聞いて気分を紛らわしたいのだが、生憎と今日はヘッドフォンを持ってきてない。

そして暇である。

通り過ぎる車やバイクをただひたすら数えるバイト。
話相手でもいりゃいいんだが相手はこの大学生（眼鏡）。
とてもじゃないが無理だ。

チラッと大学生（眼鏡）を見る…

「……」

（眼鏡とったら眼が『3』みてェだな…）

そんな事を思いながら時間は過ぎていく…

……

「それじゃあ食事休憩です」

スタッフがそう告げ、午前のバイト時間が終わる。

「はぁ…」

地獄第一部から解放され、息（ため息なのか疲れなのかわからん）を吐いていると…

ブブブッ　ブブブッ

俺のケータイが震えた。
ケータイを取り出し確認すると平沢からのメールが届いていた。
『お昼ご飯を食べるから公園に来て』という内容だったので返信をせずに公園に向うことに。

……

公園に着くとレジャーシートの上に座っている軽音部の面々。

（ピクニックかよ…）

そう思わせるかの様な光景だ。
あの輪の中に行くのは躊躇うが、腹が減ってはなんぞやという事で
足を進める。

「あっ！　サッくん！」

（元気いいなお前…
あとサッくん言うな…）

「お疲れ様、咲也君
はい　紅茶どうぞ～」

「…あぁ」

（お前はいつも紅茶を常備してんのか？）

んな事を思い、琴吹から紅茶を受け取りレジャーシートに座る。（足はレジャーシートの外で靴は穿いたまま）

「よしっ！全員揃ったな！
んじゃ食べよう～」

どうやら俺を待っていたらしい。
俺が座ったのを確認し部長から食事の許可が下りる。

別に待ってなくても良いんだがな…

レジャーシートの上には様々な種類のサンドイッチ。その一つを手に取り口に運ぶ。

（…うめェ）

すると平沢が…

「サッくん美味しい？」

俺に感想を求めてきた。
ここで『不味い』とか言ったら面白そうだが、んな事言ったら非難の眼で見られそうなので普通に答える事に。

「あぁ」

「そうでしょう、そうでしょう～♪」

何故か威張る平沢。

「お前が作ったのか？」

「ううん　憂が」

「違ェのかよ」

じゃあ何で威張るんだよ…

「『憂』って？」

俺達の会話を聞いていた秋山の質問。

「コイツの妹」

「エヘンッ！」

その問いに平沢に指差し答える。

だから何で威張る？

「へぇ～唯って妹いたんだ～」

「うんっ　そうだよ」

（礼儀正しいシスコン気味の妹がな）

「咲也は会った事あるんだ？」

先程の質問に俺が答えたので秋山がそう尋ねてくる。

「あぁ」

「どんな娘なの？」

「…会ってみたら分かる」

平沢と仲良くしてれば近々会えるだろと思い、琴吹の質問を受け流す。

…一言で済むんだがな。

『礼儀正しいシスコン気味の妹』

……

食事も食べ終わり、琴吹が持ってきたデザートを満喫し（主に俺以外の四人）時間が迫ってきたので地獄第二部に向う。

……

ブーンッ…

カチッ

パラリラ～

カチッ

ブォンッ！

カチッ

「「……」」

（やっぱ地獄だ…）

精神的に苦痛を感じながら地獄第二部を乗り越え、バイト一日目が終了した…

（…明日もあるんだよな）

このバイトは明日もあり、地獄第三部と第四部がある。

「はぁ…」

思わずため息。

その後平沢達と合流し、五人が別れるバス停まで行く。

「一日目終了〜！」

田井中の活発な声が辺りに響く。

「じゃあ私は駅へ行くから」

「私と澪はバス」

「唯と咲也は歩いて帰るんだっけ？」

「うんっ」

「……」

「明日も…」

「うんっ　お菓子よろしく〜」

「…『頑張りましょう』って言おうとしたんだけど…」

「エへへ～」

「……」

「…大丈夫かサク？」

一言も何も発しない俺に田井中が声を掛ける。

「…そう思うんなら代われ…」

「それは却下」

「はぁ…」

叶う事のない願いを部長に懇願するがあえなく失敗。
故にため息。

「じゃあね～」

「おうっ！」

「バイバイ！」

「また明日～！」

「帰ろう　サッくん？」

「…あぁ　あとサッくん言うな…」

軽音部員と別れの挨拶を済せ（してねェけど…）途中まで帰り道が
一緒の平沢と歩き出す。

「あっ」

が、数十歩、歩いたところで平沢が止まる。
くるりっと田井中と秋山、琴吹の方を向き…

「みんなぁー！

本当にありがとね！
私ギター買ったら毎日練習するねー！」

それを聞いて笑みを浮かべる三人。

そして…

「サッくんもありがとうっ！！

私、サッくんみたいにギター弾ける様に頑張るよ！！」

満面の笑みで俺に言う平沢。

「……」

（んな事言われたら、明日も頑張るしかねェな…）

ガラにもなく、そんな事を思った。

―――――――――

バイト二日目。

今日もバイトに励む。
昨日はあんな事を思ったが、やはり地獄だったりする。

「「……」」

そして相変わらずの沈黙。

別に喋る気は全くないのでかまわねぇんだが。

今日はヘッドフォンを持ってきてるので音楽を聞きながらバイトをこなす。

……

何とか地獄第三部、第四部を耐えきり…

「二日間お疲れ様」

「「「「お世話になりました」」」」

「……」

ようやく交通量調査のバイトが終った。

昨日と同じくバス停まで行き…

「はい」

と平沢に二日間で稼いだ金を渡す。

「一日八千円か～」

「お母さんに前借りした五万円と合わせても、まだ全然足りないわね」

「あと何回かバイトするか」

「そうですね」

「全額合わせて四万、プラス平沢の五万で九万……あと十六万か…一気に二十万近く稼げるバイトねェかな…」

「そんなバイトないってゆうかそれ、もうバイトじゃないよ」

「いやわかんねェぞ？俺達が気付いてないだけで、そこら辺にゴロゴロ転がってたりして

な」

「例えば？」

「ンなもん知るか」

「言い出したのサクじゃん…」

「…あの…」

俺達がそんな会話をしていたら、今まで黙ってた平沢が口を開く。

「…やっぱりこれ、いいよ」

「「「えっ？」」」

「バイト代はみんな、自分のために使って」

そう言って先程渡したバイト代を俺達に返す。

「唯ちゃん…」

「私、サッくんが選んでくれたギターを買うよ」

「唯…」

「……」

「一日でも早く練習して、みんなと一緒に演奏したいもん」

そう言って笑う平沢。

『早く一緒に演奏がしたい』か…

そのために自分が欲しがってたギターを諦め、俺が勧めるギターを買うと言う平沢。

確かに平沢がギターを手に入れなければこの五人での演奏は無理だ。

最悪、カスタネットという最終手段はあるが…

…それは置いといて。

（まぁ　平沢がそれで良いってんなら、良いんだがな…

……あれ？

……じゃあ週末地獄祭りは無駄に…？

…いや　金を稼いだんだ、無駄じゃねェハズだ……）

「みんな、ありがとう～
じゃあ帰るね」

「うん」

「また明日」

「じゃあね～」

そんな事を思っていると、別れの挨拶が聞こえてきた。

「サッくん帰ろ？」

「ん？……あぁ…」

俺の顔を覗き込み、帰りを促す平沢。
それによって思考の海から帰還し曖昧に返事を返す。

「じゃあね～」

昨日と同じく平沢と歩き出し、これまた昨日と同じく数十歩、歩いた地点で平沢が…

「ジャカジャ～ン♪」

急にエアギター（結構なノリ）を始めた…

（ヤメロ平沢、ハズい…）

更には…

「サッくんのマネっ！！」

「ヤメんかっ！」

こんな事言い出しやがった。

今のは俺の真似なのか？
お前の眼にはそんな風に映ったのか？
…だとしたら金輪際お前の前じゃギターは弾かん。

「ジャン、ジャーン♪」

「……」

スタスタ…

未だにエアギターを披露する平沢を放置して歩き出す。
そんな羞恥プレイを耐えきるほどのハートは持ち得てないからな。

その後、歩き出した俺に気付いた平沢が急いで駆け寄ってきた…

―――――――――

明けて月曜日の放課後。

俺達は再び【１０ＧＩＡ】を訪れていた。

「あっ…」

俺が選んだギターを見るために店内を歩き、とあるギターの前を通り過ぎると平沢が声を漏らした。

「あン？」

振り返ると平沢が例のレスポールを凝視していた。

「あっ…　エヘヘ…」

俺達の視線に気付き、曖昧に笑みを浮かべる。

「よっぽど欲しいんだな…」

「ヨッシャ！やっぱまたバイトを…」

「あっ…　ちょっと待ってて？」

「あぁ？」

秋山の言葉に田井中が再びバイトをするかと意気込んでた時に琴吹が何かを思い付いた様子で店員の所に歩いて行った。

店員と接触し話し出す琴吹。

「…何やってんだアイツ？」

「さぁ…？

……あれ？なんだか店員さん、慌てだしたぞ？」

「笑顔でサラッと毒でも吐いたか？」

「いやいやいや、サクじゃないんだから」

「お前失礼だな」

田井中とそんな会話をしていると店員と話していた琴吹が戻ってきた。

「このギター五万円で売ってくれるって♪」

「「「「……」」」」

「えっ!?マジで!?」

「何!?何やったの!?」

「「……」」

琴吹の口から告げられた『五万円価格宣言』に驚愕の声をあげる田井中と平沢。
そして絶句状態の俺と秋山。

「このお店、実はうちの系列のお店で」

「…マジかよ…」

「そ、そうなんだ…

ムギちゃん、ありがとう！

残りはちゃんと返すから！」

（…お前は何者だ？琴吹…）

そんな事を思わせる様な出来事だった。

平沢は感激の表情でギターの前に座り込む。

「よかったな～唯」

「うんっ！」

「これでやっと楽器が揃ったな」

「そうですね～」

「よしっ！唯！
家に帰ったらしっかり練習するように！」

「まかせといて！
りっちゃん隊員！！」

互いにビシッと敬礼する田井中と平沢。

…お前等どこの軍人だ。
てゆうかギターの教育本持ってんのか？

「あと…サク隊員！！」

「…なんだよ
つうか誰が隊員だ」

敬礼していた手をそのまま指差しに変え、俺に向ける。

「唯にしっかりギターを教えること！！

部長命令だ！！」

「よろしくお願いします！
サッくん師匠！」

「誰が師匠だ」

平沢にギターを教えるのはやはり俺のようだ。

この天然娘にギターが弾けんのかねェ…

「はぁ…」

そんな一抹の不安を感じながら、ようやく平沢はギターを入手することが出来た。

第十話（前書き）

やっとアニメ二話終了です。

長かった…

第十話

「桐島」

「あン？」

「ちょっといいか？」

放課後になり修司に絡まれるまえに、さっさっと部活にエスケープしようとしたら、担任に呼ばれた。

「…なんスか？」

無視するという手もあったが返事をしてしまったし、何より後々メンドーな事になりそうなので、渋々担任に近付く。

「あぁ　お前に用事があってな
このあと職員室まで来てくれ」

「用事？」

「大した用じゃない
すぐに終わるさ」

「はぁ…わかりました」

職員室に行かにゃならんほどの用事だから断る訳にもいかず頷く。

「サッくん！部活行こう！」

俺と担任が話していると平沢がいつもの如くブロックワードを放ちながら近付いてきた。

「サッくん言うな

…先行ってろ、少し用事が出来た」

「えっ　そうなんだ…

…わかった　じゃあ早く来てね？」

俺がそう告げると少し残念そうに答える。

「すまんな平沢　少し桐島を借りるぞ？」

（俺は平沢のモンじゃねェっうの）

「はい　どうぞどうぞ」

ダチョウの名が付くベテランお笑いトリオの鉄板ネタの様な仕草で担任に答える平沢。

「じゃあねサッくん！
また後で～！」

「…あぁ」

平沢はヒラヒラ～と手を振り、ヒョコヒョコ～とした足取りで部活に向う。

「モテモテだな？桐島」

「何アホな事言ってんスか」

担任の戯言を受け流し職員室へと歩きだした。

――――――――――

「用事と言うのはコレの事だ」

職員室に着くと担任が早速用件を切り出し、一枚の紙を出してきた。

その紙にはクラスの生徒ひとりひとりの名前と住所、電話番号が載っていた。

「なんスか？コレ？」

「生徒名簿だ」

「ふーん…で？」

「…お前は教師に対しても余り態度が変わらないんだな…」

「まぁ『誰にでも平等に　とあるアホには制裁を』が座右の銘ッスから」

「そうか…まぁ良い」

良いんだな…
ちなみに『とあるアホ』とは修司の事である。

「ここ、見てみろ」

「ん？……あれ？」

担任が指差した箇所を見る。
そこには俺の名前、住所と電話番号が載ってあるのだが違和感を感じた。

「…住所間違ってねェか…？」

違和感の正体、それは住所の微妙な間違いだ。

「やっぱりそうか…」

「やっぱり？」

「今年入学した生徒全員に学校から挨拶の手紙みたいなものを送ったんだがな、桐島の分だけ送り返されてきてな、
それでお前に確認しに来てもらったって訳だ」

なるほどな…
それが職員室に呼んだ理由か。
教室で用件を言わなかったのは個人情報やら何やらがあるからだろうな。

……

「…じゃあこの住所で間違いはないな？」

「うす」

あの後、担任に住所の間違い部分を指摘し、それをパソコンに打ち直す作業を行った。

そして最終確認をとり…

「よしっ　悪かったな時間を取らせて」

「いや別に…
じゃあ行っても良いッスか？」

「あぁ　良いぞ
部活、頑張れよ」

「…へい」

軽音部の実態（半ばお茶会倶楽部）を知らない担任からの激励を受け、職員室を後にし軽音部に向うことに。

―――――――――

音楽室がある階段をダラダラと上っていると…

♪～チャチャチャ～ンチャラ♪　チャチャチャチャラララ～ン♪♪

（…チ○ルメラ？）

何故か屋台のラーメンを食べたくなる様な音が軽音部室から流れてきた。

（なんだ？お茶会の次はラーメン品評会でもすんのか…？」

有り得なさそうで有り得そうな事を考えながらも階段を上がりドアノブに手をかけ中に入る。

――――――――

ガチャ

「律っ！！謝れっ！！」

「ゴメンッ！！ほんの出来心だったんだ～…

ゴメンね唯…」

「唯ちゃん、お菓子お菓子♪」

「そんなもので機嫌がなおる訳…」

ハグハグ…

「なおったぁ!?」

「……何やってんだお前等?」

「咲也!?」

何やら俺の存在に気付かずにコントを繰り広げてる部員に疑問をぶつける。

すると、いち早く俺の存在に気付いた秋山が声をあげる。

「あっ　サッくんだ！」

「こんにちは、咲也君
今、紅茶淹れますね～」

「おーっす」

次々と挨拶をしてくる。
それに返事をせずに何があったのかを秋山に尋ねる。

「…で？何があったんだ？」

「いや　律が唯のギターの…」

……

「ふーん」

秋山からの説明によると、平沢のギターお披露目会を行っていると田井中が平沢のギターのフィルムを剥してしまったらしい。

それによって落ち込んだ平沢に秋山が謝るように田井中に促す…

というところで俺が参上した訳だ。

（フィルムね…そんぐらいで一々騒ぐことかよ…
てゆうか…）

「平沢」

「もふっ？」

未だにクッキーを小動物の様にハグハグ食ってる平沢に話しかける。

「お前、ケータイのモニタのフィルムも剥してねェんじゃね？」

「すごい！！
なんでわかったの！？」

「やっぱりか…」

「私もそんな気してたよ…」

どうやら秋山とは平沢に対する感覚が似ているらしいな。

「そうだよね…
やっぱりギターって弾くものだよね…

ただ大事にしてるだけじゃギターもかわいそうだよね！

ありがとう　りっちゃん　私やる気でてきた！」

「ギター買った時にやる気だせよ」

クッキー片手にやる気をだす平沢にツッコむ。

「そ、そうか？
唯がギターを練習するきっかけになればと思ったんだ！
流石　わた…「せいっ！」　うっ！！」

調子にのる田井中に秋山の肘鉄が炸裂。
的確に人体のツボをついたらしい、中々痛そうだ。

「じゃあ練習するか！

唯はまずギターを弾けるようにならないとな…

咲也」

「あン？」

「唯にギター、教えてやってくれないか？」

悶える田井中を無視し、秋山から平沢にギターレッスンを頼まれる。

そういや部長（悶え中）からも頼まれてたな…

「…あぁ」

「よろしくお願いします！
サッくん師匠！！」

「だから誰が師匠だ」

平沢がギターを弾けなければ五人での演奏は無理なので教える事に。

（軽音部に入部して初めて部活らしいことするな…）

ちなみに未だに悶える田井中を琴吹が介抱していた。

……

平沢にギターを教えるために、自分のギターを取り出す。

「えーっとまず…

簡単なコードから教えるか」

「はいっ！」

敬礼する平沢。

お前の中じゃ流行ってんのか？

「んじゃ　まず…
『Ｅｍ』の押さえ方だ
中指で５弦２フレット、薬指で４弦２フレットを押さえてストロークしてみろ」

「？？」

「あの…咲也」

「あン？」

「唯に『フレット』とか『ストローク』とか言っても、まだ分かんないと思うんだ」

「……」

そうだった…
コイツはコードどころかギター用語を全く知らないんだ…

「はぁ…」

まずはそこから教えにゃならんのか…
当たり前ちゃあ当たり前なんだが…

「いいか？『フレット』っうのはな…」

それから平沢に必要最低限の用語を教える事に…

……

「よしっ　バッチリだ！」

「…そうかい」

意外と物覚えが良いのか知らんが、平沢はすんなりと覚えたらしい。
何やら御満悦だ。

対する俺は人にギターを教えるという行為を、この十六年間やった事がないので少々疲れた…

「はぁ…」

ため息で気分を一新。

「さて、じゃあ改めてさっき言った『Ｅｍ』を押さえてみろ覚えてるか？」

「ううん」

（…だよな）

「はぁ…」

ため息で気分を一新。

「中指で５弦２フレット…」

……

ジャカジャカ

「こう？」

「…あぁ　そうだ」

「エヘヘ～
何かカッコいいね～！」

『Ｅｍ』を弾いて喜ぶ。
そんな姿を見て『教えがいがあるな』なんてな事を……
……思わねェ。

どうやら俺は『教える』というのが苦手らしい。
こんな欠点を、まさか平沢に教えられるとはな…

「サッくん師匠、次は？」

「…あぁ？
……『Ａｍ』いっとくか…」

「了解！」

部員の中じゃ俺がギター経験者なので俺が教えるしかない。
…まぁ秋山も出来そうだけど。

とにかく、平沢がウキウキした表情をしてくるのでそれを切り捨てる訳にもいかず…

「…人差し指で2弦1フレット、中指で4弦2フレット、薬指で3弦2フレットを押さえろ

んで、6弦は使わず残りの弦をストロークしてみろ…」

教えていく事に。

（俺の他にギター弾ける奴が入部したら、そいつに平沢を任せよう）

そんな事を思いながらギターレッスンは続く…

……

「ギターの弦って怖いよね～
細くて堅いから指切っちゃいそう」

ギターの練習が一段落ついたので（初歩中の初歩を教えただけ）休憩していると平沢が突然そんな事を言い出した。

ちなみに俺は気分転換のためにギターを軽く弾いている。

「そうだぜー
気をつけないと指がスパーッと切れて、血がドバーッと…」
「キャーーッ！！！」

平沢の疑問を聞き田井中が何か言ってると、秋山が耳を押さえしゃがみ込み、スキルを発動させた。

「澪ちゃんが悲鳴を…？」

「い、痛い話はダメなんだ…」

「あちゃー、やっぱりか…」

「分かってんならすんなよ」

「テヘッ☆」

「…アホ」

「なっ！？」

『アホとは何だ!!この万年不機嫌顔!!』とか言ってるが無視。
再びギターを弾く。

「みんな～お茶が入りましたよ～」

琴吹の言葉を聞き、とりあえずギターを置き席に向う。
…俺も随分と感化されてしまったみたいだ。

「唯ちゃん、ギターの練習はどう?」

席に座ると琴吹が平沢に問い掛ける。

「サッくん師匠のおかげで絶好調だよ!」

「誰が師匠だ　あとサッくん言うな」

「しつこいな、サクも
もう『サッくん』でいいじゃん」

「うるせェ　そこは譲れねェんだよ」

直す気なんぞ更々ない平沢の『サッくん』
それに対して田井中が『諦めろ』みたいな視線と共に言ってくるが
そこは一切譲れない。

ここで折れてしまったら『サッくん祭り』が催しされそうだ。

…なんだ？『サッくん祭り』って？

「でもコードを覚えなきゃいけないから大変なんだ～」

「あっ　じゃあコレ使ってよ」

そう言うと秋山が鞄から一冊の本を取り出した。

【サルでもわかるギターコード】

「思い切ったタイトルつけてんな…」

じゃあ何か？
この本使って理解出来なかったらサル以下か？

是非とも修司に貸してやりたいものだな。

「ありがとう～澪ちゃん」

パラパラと本をめくる平沢。

「あれっ澪？　こんな本持ってたっけ？」

「唯のために買ったんだ」

「流石だな　もうお前が部長で良いんじゃねェか？」

「コラッ！　部長は私だぞ！」

俺達がそんな話をしていると…

ボフンッ！

平沢が人間火山と化した。

「唯ちゃんどうしたの？」

「ま、まずは…楽譜の読み方から教えて下さい…」

「そこから！？」

「はぁ…」

前途多難だ…

……

休憩も終わり再びギターの練習を開始しようとした時…

「私もサッくんみたいにしてみたいな…」

「あン？」

平沢がギターを弾く俺の姿を見てそんな事を言ってきた。

「…アンプ使いてェのか？」

「うん」

今までの練習はアンプは使わずに行っていた。
エレキだからな…アンプを使ってみたくなったんだろうか？

「…別に良いけど」

「本当っ！？」

「…あぁ」

平沢にアンプを使わすためボリュームを下げ、シールドを抜こうと
すると…

「唯ちゃん　はい　これ」

またしても琴吹が、軽々とアンプを持ってきた。

（だからお前何者だよ）

「よしっ！　いいぞ唯」

俺が『琴吹とは何か？』を考えていると田井中が準備を終えたらしい。

ジャラーン♪

部室に鳴り響くエレキの音色。

「カッコいい～！！」

「やっとスタートだな…」

「私達の軽音部…」

「ええっ！」

「……」

感慨深けに語る三人…

『スタート』か…
『ゴール』はあるんだろうか？
いや……そんな事考えるのはヤボだな。

「夢は武道館ライブ！！」

「「「えぇ！？」」」

「卒業までに！！」

「無理だろ」

「コラッ！そこっ！
盛り上がってるのに水を注さない！」

♪～チャチャチャ～ンチャラ♪　チャチャチャチャララ～ン♪♪

「「「「……」」」」

と平沢がチャ〇メラを弾きだした。

エレキの音色でチャル〇ラか…

…シュールだな…

「ゴメンまだこれしか弾けない…

アンプで音を鳴らすのはもう少ししてからだね～」

そう言いシールドを抜こうとアンプに近付く平沢。

「あっ！！唯、危ないっ！！」

その瞬間、俺は首に掛けていたヘッドフォンを耳に装着し音楽を流す。

そして…

ーーーーッ！！

騒音が鳴り止んだのを確認し、ヘッドフォンをハズす。

「…アンプのボリューム下げる前にコード抜くと、そうなちゃうんだよ…」

「…は、早く言って…」

「…サクだけ、ズルイ…」

何とでも言え。

自分の身は自分で守らねェとな。

第十一話（前書き）

中間テスト編です。

なんとか一話で収まった…

第十一話

静寂が空間を支配する。

カリカリ…

その中でただ一点、シャーペンが踊る音を奏でる。

本日五月下旬。

高校生になり初めての中間テスト真っ最中。

テストなので席を出席番号順に座り直す（入学して一週間で席替え済み）

俺の名前は『き』から始まる、必然的に俺の前は同じ『き』か『か』で名前が始まる奴が座る。

そして俺の前に座るのは…

『か』の影宮　修司である。

答案用紙から顔を上げ、『か』を見てみると…

「……」

『さっぱり』という様なオーラを背中から…いや、存在全体から醸し出していた。

そして…

ボフンッ！

影宮火山の噴火である。

……

「「……」」

テスト終了後俺と真鍋の前には真っ白になった平沢と『か』。

「テスト…ダメだったの？」

そんな二人を見て真鍋が問い掛ける。

「…うん」

「…さっぱりだ」

「やっぱりか」

「「……」」

その一言を答え気力を尽くしてしまったかの様に再び黙り込む。

「咲也は？　テストどうだったの？」

「…まずまず、だな
お前は？」

「私も、まずまずかしらね」

そう言う奴ほど良い点取るだよな…

俺も言ってるが本当に『まずまず』なのだ。
勉強が出来る方じゃねェしな、赤点取ってなきゃそれで良いし。

その後、平沢と『か』は放課後になっても真っ白だった。

―――――――――

テスト返却日。

「安藤」

「はい」

「井上」

「ハイ」

教師から名前を呼ばれ次々とテストが返ってくる。

そして『か』の順番がくる。

「影宮」

「ハヒィ！」

（声裏返ってんぞ）

『か』は緊張した面持ちプラス手と足が一緒にでるという動作で教師の元に向う。

そしてテストを貰い…

「……」

真っ白になった。

どうやら赤点らしいな。

千鳥足の様な足取りで席に向い着席し眼を瞑り活動停止。

（死んだか？）

そう思わせる様にピクリとも動かない『か』。

「桐島」

教師に呼ばれたので心の中で『か』に合掌し、テストを貰いに席を立つ。

（まずまず…だな）

赤点じゃなかったので特に落ち込む事なく席に戻る。

「平沢」

「ハ、ハイッ！」

『か』と同じような動作でテストを貰いにいく平沢。

「……」

真っ白に。

「真鍋」

「はい」

キビキビとした動作で教師の元に行きテストを貰い、満足げな表情

で席戻る。

（伊達に眼鏡はかけてねェな…）

そんな関係ない事を思い一喜一憂なテスト返却は終了した。

……

「おい平沢　部活行くぞ」

いつもは平沢が俺に言ってくる台詞を俺が平沢に言う。

理由は言わずともなんだが。

「あっ…　サッくん…」

「サッくん言うな
…おら　行くぞ」

「うん　そうだね…」

「はぁ…」

赤点だったんだろうな。
『か』ほど重症ではないが元気のない平沢を促しなんとか部活へ向う。

―――――――――

「やっとテストから解放された～」

「高校になって急に難しくなって、大変だったわ」

「そうだな……そして　もっと大変そうなやつがここに…」

そう言ってドンヨリしたオーラを出す平沢を見る三人。

「そんなにテスト悪かったのか？」

秋山がおそるおそる尋ねる。

「…ふっふっふっふっ…」

「おっと…ついに壊れたか」

物悲しい笑みを浮かべ真夜中なら秋山が卒倒しそうな声を漏らす平沢。

「クラスで二人…追試だそうです…」

「「「うわぁ…」」」

答案用紙を見せやはり物悲しそうな笑みで伝える。（ちなみに１２点）

「ん？　二人？

……という事は…？」

「違ェよ」

田井中が『二人』に疑問を持ち、俺を見てくる。
それを瞬時に否定する。

「だよな～サクじゃないか！
じゃあ誰？もう一人？」

「お前がこれから生きていく中で全く必要ない人物だ
だから知る必要はねェ」

「そんな事言われると逆に気になるな…」

「気にすんな　気にしたら負けだ」

「何に？」

「だ、大丈夫よ！今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

「そうそう！
ちょっと頑張れば追試なんて余裕だって！」

いつか真鍋と交わした会話を田井中と再現していると琴吹と秋山がドンヨリ娘を励ましてた。

「勉強は全くしてなかったけど…」

「あはは…」

「励ましの言葉返せ！」

「アホだ…」

琴吹と秋山の激励を自業自得な理由で返す。

…アホだ。

……

「何で勉強しなかったのさ」

とりあえず全員席に座り、幾分元気になった平沢に我が部長が切り出した。

「いや～…しようと思ったんだけれど…

なんか試験勉強中ってさ勉強以外の事に集中できたりしない？」

「あ～　それはあるな
部屋の掃除はかどったりな」

「勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなちゃって
結局全然勉強できなかったの～」

「つうことは…少しは上達したのか？」

「うんっ！おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！」

『どうだっ！！』とも言わん限りの堂々とした表情でＶサインをつくり威張る。

心境複雑だ…
コードを覚えた事は良いんだが、テストは散々だからな…

まぁ　いいか…
困るの俺じゃねェし。

「その集中力を少しでも勉強に回せば…」

秋山がポツリと呟いた。

結局その後、平沢が覚えたコードを俺が確認し、雑談等を交わして部活終了となった。

（いつになったら本格的に練習すんだろうな…）

―――――――――

そして別の日

「サク」

「あン？」

「ＢＧＭお願い」

「はぁ？」

「ＢＧＭだよ　ＢＧＭ

サクの奏でるギターを聞きながらお茶を楽しむ…

優雅だと思わない？」

「思わねェよ」

「ぶぅぶぅ～」

ガチャ

「あっ！　今日はようかん～♪」

ぶぅぶぅと（文字通り）文句を言ってる田井中を無視してると、職員室に呼ばれていた平沢がやって来た。

「追試の人は合格点取るまで部活動禁止だって」

「ふーん」

と誰か。

そして間が空き…

「「「えぇっ！！」」」

「……」

呑気に羊羹を食べながら爆弾を落とした天然娘に絶叫する俺以外の三人。

「結構厳しいんだな…」

ズズッ…

「そしたらここにいるのもマズいんじゃ…」

ズズッ…

「大丈夫だよ～
お菓子食べに来てるだけだし」

ズズッ…

「そっかぁ！それなら安心だー……って、なんでやねんっ！！」

平沢にチョークスリーパーをかける田井中。

「ギブ…ギブ…」

ズズッ…

「てゆうか咲也は何でそんなに落ち着いてるんだ？
お茶まで飲んでるし…」

「あン？」

平沢の爆弾投下にも慌てずお茶を啜っていた俺に秋山が少し呆れた様に聞いてくる。

何故落ち着いてるかって、そりゃ…

「…ある程度予想してたからな」

「予想？」

と琴吹。

「あぁ…

…赤点取ったら追試があるから呑気に部活やってる場合じゃねェし

『学生の本分は学業』なんてどっかのお偉いさんの名言があるくらいだからな」

「なるほど～！
すごいわ！咲也君！」

尊敬の眼差しとでも言うんだろうか？
そんな瞳で俺を見てくる琴吹。

「…ありがとよ」

とりあえず礼を言う。

「だとしても落ち着きすぎだよ」

「じゃあ、お前の中で盛大に慌てふためく俺でも想像しとけ」

「それは咲也のキャラじゃないし…」

「じゃあ　止めとけ
…あと、田井中」
「ん？」
「平沢、死ぬぞ」
「えっ？　わっ！？
唯ーっ！！！」
未だにチョークスリーパーをかけられていた平沢は顔面蒼白だ。

……

「追試はいつあるの？」

天国への階段を一歩一歩上ってた平沢を引きずり降ろし、落ち着いたところで琴吹の質問。

ちなみに田井中は秋山に殴られていた。

「一週間後だよ」

「一週間後か…」

「そんだけあれば毎日ここに来ても大丈夫だよね♪」

平沢爆弾再び投下。

「アホかお前…」

「一週間しかないのっ！！」

俺の呆れ声と田井中の怒鳴り声が爆弾を投下した本人に向う。

「そ、そうだよね！
一週間しかないんだよね！
私、がんばる！！」

事の重大さに気付いたのか知らんが理解はしたようだ。

「「「はぁ…」」」

三人のため息。
どうやら平沢に関わるとため息が増えるらしい。

――――――――――

追試まであと六日

ジャカジャカ…

「……」

平沢は部活には来ずに勉強中（多分）

なので今まで部活の多くの時間を平沢のギターレッスンに費やしていたため暇になる。

残りの三人は平沢を心配しながらもお茶会を。

俺はそれには参加せずにギターをアンプを繋ぎ、更にヘッドフォン

も繋ぎ（田井中にＢＧＭ扱いされたくねェから）音を奏でる。
ただ音を出しているのではなく、この空いた時間を利用して作曲をしている。
おそらく軽音部が初ライブをするのは秋にある学園祭だろう。
やるんだったらコピーではなくオリジナルの方が面白いからだ。
トントン
誰かが俺の肩を叩く。
ヘッドフォンをハズし振り返ると…
「咲也君　お茶いかが？」
ニッコリ笑う琴吹だった。

（少し休憩するか…）

「あぁ」

そう思い返事をし、ギターを置いて席へ。

五日後に平沢が『ある事』を頼みに部室にやって来るまで『作曲』
&『お茶』を繰り返していった…

――――――――――

追試まであと一日と迫った五日後。

「…という訳で澪ちゃん助けて～！！」

平沢が『ある事』…救済を求めてやって来た。

「えっ！？　勉強をしてきたんじゃないの…？」

「出来なかった～…」

「「「えぇっ！」」」

「……」

三人の声が揃う。
良いチームワークだな。

「これも予想してた…？」

「……半々な」

琴吹が俺に聞いてくる。

ギターに眼が眩んでテストで赤点だったんだから今回も……いや流石に追試は……とか思っていたのでそう答える。

やっぱギターなのか今回も？

「…よしっ　今晩特訓だ！」

「本当！？」

「澪に教えてもらえば確実に合格点取れるぞ～」

「ふーん　成績良いんだな秋山」

「いや　そんな…」

俺の発言にポリポリと頬をかき、恥ずかしそうに照れる秋山。

「うまいんだぜ？

一夜漬け教えるの！」

「うぉーい！！

普通に教えるよっ！！」

一夜漬けの術を教えるのが上手いって事はスゲェと思うけどな…

「どこで唯ちゃんの勉強をするの？」

「あっ　ウチで良いよ

今日は両親いないし気兼ねしないで良いから」

「じゃあ唯の家で特訓するか」

「そうだな～

そういえば唯ん家行くの初めてだな」

俺は行く気は元からないから部室に残り作曲の続きをやるか…

その意志を伝えようと口を開こうとした時…

「…お　『バンッ！！』……ンだよ！だからこのパターン多いな！」

急に部室のドアが勢いよく開いた。
それにより俺の意志が伝わらず多少イラつきながらもドアを見る。
そこには…

「……」

「修司君？」

切羽詰まった表情の
『か』…修司が立っていた。

「えっ？　誰？」

田井中が疑問の声をあげる。
そりゃそうだ、コイツの…いや　コイツ等の人生で全く必要ない奴
が部室のドアを開け、そこにいるんだからな。

「……た」

「あぁ？」

「助けて～！！
サクえもんっ！！」

国民的な猫型ロボットの様な名を叫び、その同居人の眼鏡少年みたいな声を出し、俺に駆け寄ってきた。

とりあえず…

「……」

ドゴッ！

「ぎゃあっ！！」

無言で蹴っておく。

「なにすんじゃワレッ！！」

「おおスマン、ついつい蹴ってしまった」

「そんな理由で蹴んなッ！！
あと本気で悪いと思ってんのかッ！？」

「全く」

「そこは全力で思えッ！！」

「うるせェな…落ち着けよ
平沢以外がポカンとしてんぞ」

「「「……」」」

急に現われて俺に蹴られ、叫びをあげながら俺と話す修司にポカンとする三人。

といち早く呪縛から解けた田井中が…

「…だから誰？」

「影宮　修司君
サッくんの親友なんだよ♪」

「親友じゃねェ」

「んな冷たい事言うなよ～」

「黙れ変態」

「誰が変態じゃァ！！」

「ん」

「違ェよッ！！」

自分の事だと分かってないアホに指差し親切に教えてやる。

……

「初めまして　琴吹　紬です」

丁寧にお辞儀をする。

「部長の田井中　律！」

何故か威張る。

「あ、秋山　澪です…」

スキル発動。

「こりゃ御丁寧に…

俺は影宮　修司です

以後ヨロシク～

紬ちゃん、律ちゃん、澪ちゃん」

馴々しい奴だな…

アホの身分を明すために互いに自己紹介をする。
とりあえずアホに目的を聞くか…

「で？　何しに来たんだよ？」

「おぉ、そうだった…
助けてくれサクえもん」

「誰がサクえもんだ」

「ヤバいんだって追試！！
全く勉強できねェんだ！！」

「知らんがな」

「ヒデェな！！」

どうやらコイツも平沢同様、追試の勉強が出来なかったらしい。
そこで何故か俺に助けを求めてきたみたいだ。

「修司君もなんだね…」

「唯ちゃんもか…」

うんうんと共感する二人。

「じゃあ修司が赤点を取ったもう一人？」

田井中が以前平沢が言っていた『追試二人』発言を思い出し俺に尋ねてくる。

「…あぁそうだ」

もう隠す必要もないので頷く。

「ヘルプ　ミー　咲也！」

「しかたねェな…」

鞄から一枚の紙を取り出し、ある三文字を書く。
それを修司に渡す。

「ナニコレ？」

「退学届だ　これに必要事項を記入し、提出しろ
そしたらもう勉強に悩む事はなくなる」

「流石だな咲也！！
サンキュー！！」

バタンッ

俺手製の退学届を持ち部室から出ていく。

「咲也…」

「すぐに戻って来る」

本気で退学しそうな勢いで部室から出ていった修司に秋山が心配そうに俺の名を呼ぶ。

バンッ!!

「って退学するかァッ!!」

「ほらな?」

「う、うん…」

見事なノリツッコミを披露し部室に戻って来るアホ。

やっぱ楽しいな…

その後、平沢達女性陣は平沢家へ、俺とアホは影宮家に向かいそれぞれ勉強を教える事に。

その折りに平沢から『一緒に勉強しよう』と誘われたが断った。

――――――――――

「ただいま」

「ども」

「おかえり修司
あらっ！咲也君？
いらっしゃい～」

修司の家に着き、そこで働いていた修司の母親に挨拶をする。

実は影宮家はケーキ屋だったりする。
夫婦二人に店員一人という小さな店だが近所の評判は中々上々で人気がある。

俺も中学時代、何回か店の手伝いをした事があり僅かな給料を貰い、ギターを買うことが出来た。

ちなみに琴吹が持ってくるケーキより味は劣るが…まぁあのケーキは一流のパティシエが作っているらしいから仕方がないだろう。

……

修司の部屋に行き追試勉強を開始することに。

「さてっ！！頑張るか！！」

「勝手に頑張ってくれ」

「手伝ってよッ！！」

「あのなぁ　何やれってんだよ？
俺は勉強できる方じゃねェぞ？」

「だとしてもだ！
お前は赤点取ってないんだから対策とか教えてくれよ」

「ンなもん知らねェよ
カンでやっとけカンで」

「お前何しに来たんだよ…」

「テメェが俺に助けを求めてきたんだろうが

はぁ…

とりあえず追試の範囲を教えろ、分かるとこなら教えてやる…」

「さっすがぁ～！　心の友よ～」

「どこのガキ大将だお前…」

この後何とか四苦八苦しながらも俺は修司に勉強を教え、修司は火

山を噴火しながらも問題を解いていった。

――――――――――

スタスタ…

モグモグ…

ボーッ…

「……」

本日は平沢とついでに修司の追試当日。

そんな中で落ち着きなく部室内を歩き回る秋山。

呑気に菓子を食う田井中。
そして…

「おい琴吹…お茶零れてんぞ」

「えっ？　あっ！！」

ボーッとするあまりお茶が湯飲みの許容範囲を盛大に越え溢れ出している。
それを慌てて拭き取る琴吹。

「はぁ…」

緊張しすぎだ…
田井中は別として。

―――――――――

そして追試の結果発表当日。

「今日返却だよね…
合格点とれてるかな…唯」

「あれだけ勉強したから大丈夫のはず…」

「……」

ズズッ…

心配そうに呟く秋山と『大丈夫』と言ってながらどこか心配そうな琴吹。

余り心配してなさそうに音楽雑誌を読む田井中。

落ち着いてお茶を啜る俺。

と…

ガチャ…

部室のドアが弱々しく開き…

「……」

どこか呆然とした平沢が入ってきた。

「ど、どうだった!?」

すぐさま秋山が平沢に結果を聞く。

「どうしよう澪ちゃん…」

「え……またダメだった…?」

（また…勉強会行きか?）

俺がそんな風に思っていると平沢がテスト用紙を出し…

「ひゃ、ひゃ、百点取っちゃった…」

「極端な子っ！！」

「……」

マジかよ…１２点だった奴が秋山に勉強を教わった途端に満点取りやがった…

秋山の教え方が良かったのか、単に平沢がスゲェのか良くわかんねェ…

「でも良かったぁ
とりあえずこれで一安心だな」

「そうだね！」

「みんなのおかげだよ！
本当にありがとう～！」

「いや～～
それほどでも～」

「お前は何もしていないっ！！」

「テヘッ☆」

「…アホ」

「なんだとー！」

平沢が無事追試を突破したので練習を始めることに。

俺はおもむろにギターを取り出していると、ふと思い出した。

「…そういやお前、追試勉強中もギターいじってたのか？」

「うんっ　そうだよ
そのせいで勉強出来なかったんだけどね」

「やっぱりか…

じゃあ中間の時よりもコード覚えたのか？」

「バッチリさぁ！」

「あんまり誉められる事じゃないんだけど…

じゃあそのコード弾いてみてよ」

「エへへ～どんとこいだよ！
『X』でも『Y』でも何でもごじゃれ！」

「「「「ん？」」」」

平沢が発した摩訶不思議な単語に首をひねる俺達。

「じ、じゃあ…
『C』『Am7』『Bm7』『G7』って弾いてみて」

「ほいほい～」

平沢の発言を疑問視しながらも四つのコードを弾いてみよと言う秋山。

それに軽い返事をしコードを弾こうとギターを構えるが…

「……」

ピタリと動きが止まる。

「…どうしたの？」

すると…

「忘れた…」

平沢爆弾Ｍｋ３投下。

「ずっと『X』とか『Y』とか勉強してたから…」

「また、一からぁ！？

…咲也ぁ～」

秋山が助けを求める様に俺を見るが…

「今日限りで軽音部を辞めさせていただきます」

「まてまてまてまてっ！！！

気持ちは分かるけどちょっと待てっ！！」

必死に引き止める田井中。

全部忘れただと？
俺が教えた事が全部、水の泡じゃねェか…
そんな事も言いたくなってくるわ。

♪～チャチャチャ～ンチャラ♪　チャチャチャララ～ン♪♪

「「「「はぁ…」」」」

平沢が唯一覚えていたらしいチャルメ〇を弾く。
それによりため息。

やっぱ平沢に関わるとため息が増えるらしい。

「…また教えるしかねェのか…」

俺の呟きが部室に溶けていった…

ちなみにどうでもいいが修司はギリギリ追試をパスしたらしい。

第十二話（前書き）

久々にあのキャラが登場です。

第十二話

部活も終わり自宅に着く。
玄関を開けようとノブを回すが…

ガギッ！

「あぁ？」

鍵がかかっていた。

いつもなら誰か在宅し、無条件で開いているのだが今日は何故か鍵がかかっていた。

「……」

とりあえず鞄から自宅の鍵を取り出し解錠。

自宅に上がり、リビングに行くとテーブルの上に何やら置き手紙が

あった。

『咲也へ

悪いんだけど今日の晩ご飯はお弁当でも買って下さい。

私も貴教さんも用事で夜遅くまで帰れません。

お金は置いておきます。

母より』

らしい。

それで鍵かかかっていたんだな。

謎が解けたので自室のある二階へと向った。

……

自室と着き、制服を着替えてダラダラしていると…

「もう六時か…」

気がつけば結構な時間が経っていた。

（メシでも買いに行くか…）

多少メンドくさいと思いながら母親が置いていった金を手に取り自宅を後に。

――――――――――

街中を弁当屋を目指して歩く。

夕方の時間帯なので買い物をしている主婦などが多く溢れている。

その中で見知った人物を見つけた。

「あっ」

どうやら向こうも気付いたらしい俺の方にやってきた。

「お久しぶりです」

見知った人物それは平沢だった。

「咲也さん」

妹の方の。

俺と平沢妹はあの日のパスタ料理店から会ってはいなかった。
メールでは何度もやり取りをしてはいたが、こうして会うのは実質
三か月ぶりぐらいになる。

「あぁ　久しぶりだな
元気だったか？
…つってもメールじゃ何回も会ってるがな」

「クスッ　そうですね
でも会うのは久しぶりなのでやっぱり『久しぶり』です」

「…そうゆうもんか」

「はいっ」

そう言って笑う平沢妹。

（笑った顔は平沢そっくりだな　いや…）

笑顔だけじゃなくコイツは平沢そっくりな気がする。

勿論性格ではなくだ。

平沢妹は短いポニーテールをしているがそれを解いたら平沢と瓜二つだと思う。

流石姉妹だな。

「咲也さんは何してたんですか？」

俺がよくわからん『平沢姉妹瓜二つ論』を頭の中で提唱していると平沢妹が尋ねてきた。

「あン？　俺か？

それは俺の台詞でもあるんだがな

まぁいい…晩メシを買いに行ってたとこだ」

「晩ご飯をですか？」

「あぁ　今日は両親がいねェからな」

「そうなんですか…」

そう言ってなにやら考え込む。

そして…

「あの　もし良かったら家で晩ご飯食べませんか？」

こんな仰天提案をしてきた。

「はぁっ？　メシ？」

「はいっ　私、今日いつもより多めに食材買っちゃったんでどうしようかと思ってたんです

だから、どうですか？」

首を傾げる平沢妹。

どうですかってお前…

平沢家に行けってか？

どういう風に考えたらそんな結論に辿り着くんだよ？

つうかお前が晩メシの買い出ししてんのか？

そもそも男を年頃の女の家に招待するか？

いや…そういやコイツあの日、家に遊びに来い的な事言ってたな…

俺が平沢妹に対する疑問を並べていると…

「あ、あの迷惑でしたら良いんです！
私が勝手に言い出したことですから…」

黙ったままの俺を見て急に慌てだし、最後にはションボリしだした。

（イカン…このパターンは…）

そう思い周囲をグルッと見渡す。

そこには噂好きの主婦や仕事帰りのスーツ野郎、どこぞやの学生グループ、その他諸々が俺達を見ていた。

更には…

「見て！奥さん！あの人、女の子いじめてない！？」

「こ、これは…イケませんね…」

「おいおい、あのにーちゃん見てみろよ、あんな可愛い子泣かしてんぞ」

「最低だなアイツ…」

というとんでもない誤解をあたえていた。
更にはハタから見れば俺が平沢妹を泣かしている状況に見えるらしい。

不機嫌面の男にションボリした女…
そりゃあそういう風に見えるかもしれんが…

（つうか最後の奴等そっちの勝手な解釈で人を最低呼ばわりか…？）

そう思い発言者のいる学生グループをギロリと睨む。

「ヒィッ！！」

「ヤベェ！コッチ見た！！」

「おいッ！逃げるぞッ！！」

一目散に逃げ出す。
それにより更にどよめきがはしる。
そんなこの状況をなんとかするには…

「…わかった　行く…」

俺が折れるしかないのだ。

「えっ？良いんですか？」

「…あぁ」

ションボリ顔から一変、少し嬉しそうな表情をする。

この状況から早く立ち去りたいので…

「おら　行くぞ…」

そう告げて早々に歩き出す。

「あっ　はいっ！」

歩き出した俺に駆け寄ってくる平沢妹。

…流石姉妹だな、あの日平沢が俺を軽音部に連れて行こうとした時と似たような状況を作り出した…流石姉妹だな。

『流石姉妹』を連発しながら俺達は夕暮れの街を平沢家へ歩きだした。

―――――――――

「ただいま～」

「……」

平沢家到着。

その道中に平沢妹から様々なＮＥＷＳを聞いた。

一つ。
今日は両親不在との事。

一つ。
平沢家の家事の殆どをコイツがこなしている事。

一つ。
追試勉強時、激励にやってきた真鍋を含めた女六人が何故か俺の話題で盛り上がった事。

一つ。

やっぱりシスコン気味だった事。

追試勉強時に俺のどんな話題で盛り上がったか聞いてみたが苦笑いを浮かべたまま答えは出てこなかった。

なので家にいるであろう平沢に聞いてみようと思った。

「おかえり～憂」

妹が帰還を知らせると奥から姉がパタパタと参上した。

「ただいま、お姉ちゃん」

「あれっ？　サッくん？
どうしたの？」

妹の横にいる俺に気付き疑問の声をあげる。

「偶然会ってね
咲也さんのご両親が今日いないっていうから。
晩ご飯に招待したの」

「おぉ～そうだったんだ～
ナイス！憂！」

「えっ？　あ、ありがとう」

何故かサムズアップする姉に少し困惑しながらも礼を言う妹。

何がナイスだ？

という疑問よりも俺は平沢が着ているＴシャツに眼がいく。

正確にはそこに書かれている文字にだ。

【ドリカム】

まぁそこは良いだろう。問題はその下にある文字だ。

【ＤＲＥＡＭ　ＣＵＳＴＯＭ】

「パチもんじゃねェか…」

ボーカルとベースの人気ミュージシャンのユニット名ではない。

コイツは分かって着てんのか？
部屋着だから良いのかもしれんが…

「えっ？　サッくん何か言った？」

「サッくん言うな

…何でもないお前が良いんならそれで良い」

「？」

「あはははは…」

俺の言葉の意味が分からずクエスチョンマークを浮かべる平沢。

妹の方は俺の呟きが聞えたらしい。

聡明だな。

「まぁ　いいや

上がってよサッくん！」

「どうぞ咲也さん」

「…あぁ　邪魔します」

ここまで来たからには引き返す事も出来ず平沢家に足を踏み入れる。

……

「それじゃあ　すぐに晩ご飯の準備するね」

「は〜いっ」

「…何か手伝うか？」

「いえ　大丈夫です
咲也さんはゆっくりしててください」

「…そうかい」

晩メシに招待され何もしないのは気が引けるので手伝おうかと思ったがやんわり否定された。

「ねぇねぇ　サッくん！」

「あン？」

「コード教えて！」

何故かテンションが高い平沢がそう言ってくる。
床に座っている平沢を見るとその横にレスポールと秋山が購入したサルコード（長いので省略）があった。

どうやらコードを覚えていたらしい…ていうかそりゃそうだろ。
この前の追試勉強で覚えたコードを全てデリートしやがったんだからな。

部活以外の時間でも覚えてもらわにゃ俺が報われん。

「…分かった　とりあえず今まで覚えたコードを弾いてみろ」

「了解！」

敬礼。
…だからお前の中じゃ流行ってんのか？

……

「これが『Dm』だっけ？」

「違ェよ　そりゃ『F』だ
つうかそっちの方がムズいのに何でアッサリやってんだよ…」

「あっ　こうだ！」

「『B7』だからなそれ」

平沢にコードを教えていると『あの事を』聞き出そうと天然娘に切り出した。

「なぁ」

「なに～？」

「妹から聞いたんだがよ

追試の勉強会の時、俺の話で盛り上がったらしいが何の話したんだ？」

おそらくコイツならアッサリと口を割るだろう。

「あぁ～それはね～」

案の定、話し出そうとした時…

「ご飯出来たよ～」

刺客が現れた。
狙ってんのか妹よ。

「おっ　ゴ・ハ・ン～
今日は何～？」

「ハンバーグだよ」

「ハンバーグ！？
やったネ！サッくん！」

「何がだ」

（『あの事』については食事中にでも聞き出すか…）

そう思いギターレッスンを中断し晩メシを食べることに…

…が

「おいしいよ～憂」

「ありがとうお姉ちゃん
あっ　ほっぺたにソースついてるよ？」

「……」

「えっ　ドコ？」

「動かないで拭いてあげるから」

「んっ」

「はい　もう動いていいよ」

「ありがとう～憂」

「どういたしまして」

「……」

「あれ？　どうしたのサッくん？食べないの？
食べないなら私が食べちゃうぞ～」

「ダメだよお姉ちゃん

それは咲也さんの分なんだから」

「分かってるよ～
冗談♪冗談♪」

「もう～お姉ちゃんったら」

そう言って互いを見て笑い合う姉妹。

「……」

あれ？　デジャヴ？

どこか見覚えのある光景を目の当たりにしながら食事時間は過ぎていった。

（…うめェ）

ちなみに平沢妹が作った晩メシはことごとく美味かった。

――――――――――

「それじゃあ　また明日、学校でねサッくん」

「また　いらしてくださいね咲也さん」

「あぁ」

晩メシの後、平沢姉妹と談笑（ほぼ一方的に平沢が喋り、俺と妹が相づちを打っていた）し、それから少しギター練習をしておいとまする事に。

談笑部分もデジャヴだった気がした。

「それじゃあな」

「バイバ～イ！」

「おやすみなさい」

平沢姉妹と挨拶を交わし夜の帳を歩き出した。

「…あっ　聞き出すの忘れた…」

（まぁ良いか、いつか田井中辺りから吐き出させるか…）

そう思い再び歩きだした。

第十二話（後書き）

中間テスト編は咲也が平沢家に行かなかったので、この話を入れました。

第十三話（前書き）

合宿編突入です。

長くなるのかな…今回も…

第十三話

「♪おっそうじ～おそうじ～たのしいなぁ～♪

…って楽しかねェわっ」

「どやかましい黙れ、お前の顔面で床でも喜びながら拭いてろ」

「んなことするかァ！！」

いきなり自分でボケで自分でツッコむというある意味高等テクを披露したアホに喜びそうな提案をする。

本日太陽が照りつける七月中旬。

俺と修司は放課後に二人だけでとある空き教室を掃除中。

理由は簡単、今日は週に一度の掃除当番。
そしてこの場所が俺達の班の掃除区域だからだ。

だが…俺達二人しかいない。

通常一班四人体制なのだが都合悪く、二人病欠なのだ。

「はぁ…」

ため息だって出たくなる。

何が悲しくてこのアホと二人で掃除なんぞしなけれゃならん。

（サボるかな…）

「なぁ　サクッチよ…
ダルくね？つうかサボらね？」

どうやら修司も同じ事を考えていたらしい（嬉しくねェけど）

「誰がサクッチだ

…そうだなサボるか」

「だな　こんな空き教室掃除してもしなくても同じだしな～

よしっ　行こうぜ！」

「…あぁ」

珍しく意見が一致したので実行に移そうとした時…

「桐島君、影宮君、ちゃんと掃除やってる？」

教室のドアから我が校の音楽教師、山中教諭が顔を覗かせた。

「あれ？先生何でここにいんの？」

「……」

「あなた達の担任の先生がね
『アイツらは真面目にやってないと思うので、ちょっと見て来てくれませんか？』
って言われたからよ
私もコッチに用事があったからね、そのついでに」

「ぐっ…」

「…あの野郎」

つうか人を派遣しねェで自分で確認しに来いや。

「それで真面目にやってたの？」

『今からサボろうとしてた』なんて事は言えず…

「「もち　やってました」」

そう答えるしかないのだ…

てゆうか修司とかぶった…

最悪だ…

「そう　それじゃキチンと最後までやってね
私も手伝うから」

「え〝っ!?　先生もやんの?」

「えぇ　あなた達二人だけじゃ時間がかかりそうだから
…何か不都合でもあるの?」

「…いや〜ないっす!!
先生が手伝ってくれたら百人力だぜ!!
なぁ咲也?」

俺にフるなよ…

「はぁ…そうだな」

「それじゃあ早く終わらせましょ
桐島君は部活があるんだから尚更ね」

「はぁ…」

結局、逃げ出す事も叶わず俺達はせっせと掃除をするはめになった。

―――――――――

「咲也君」

「あン？」

掃除終了後、修司と別れ部活のために音楽準備室を目指し歩いていると、後ろから琴吹に声を掛けられた。

「咲也君も今から部室に行くの？」

「あぁ　つうかお前もか？」

「そうなの　今日掃除当番で遅れちゃって咲也君は？」

「俺も同じ理由だ」

「そうなんだ～」

琴吹と本当にたわいもない話しをしていると気が付けば部室の目の前に来ていた。

「…先ドーゾ」

「ありがとう～」

必要のないレディーファーストを発揮し部室に入る。

――――――――――

ガチャ

「ごめんなさい　遅れちゃって～」

「……」

詫びをして入る琴吹と無言入室の俺。

すると、どうだろう中の様子は…

「……」

「うぉぉ…」

「…痛そう～」

怒ってますという風に腕を組み仁王立の秋山と正座をし、頭を押さえる田井中、同じく正座をして田井中を見る平沢がいた。

そんな状況を見て隣りにいるお嬢様は…

「えっと…マドレーヌ食べる?」

「何でだよ…」

……

「ふーん　合宿ねェ…」

全員着席し、琴吹が人数分のマドレーヌと紅茶を用意すると秋山が喋りだした。

なんでも軽音部の強化合宿を提案したが天然娘と部長が、

合宿＝遊び＝気分ＭＡＸ

になり全く話を聞かず、更には秋にある学園祭に向けての合宿だと説いたが、

初めての高校の学園祭＋高まる期待＝話が脱線

になり違う意味での火山が噴火したらしい。

ちなみに噴火の影響をモロに受けたのが部長だ。

「ムギと咲也はどう思う？
いくら慌てずやっていこうって言っても、もう三ヶ月にもなるのに一度も合わせたことないなんて」

「まぁまぁまぁまぁまぁまぁ…」

「六回…」

「数えんな」

琴吹の『まぁ』を一々数えた暇な初心者ギタリストに紅茶を飲みながらツッコむ。
…確かに多いけどな。

と『まぁ』発言者が…

「行きましょう！！
みんなでお泊まり行くの夢だったの～！！」

何やら、えらく興奮した様子で賛成一票を投じる。

その『みんな』は俺も含まれてんのか？

「そうなんだ～」

「じゃあ海にする？
それとも山にする？」

「だから！！バンドの強化合宿って言ってるだろ！！」

「冗談だって～」

「まったく！！

はぁ…

咲也はどう思う？合宿」

「ふむ…」

ここで部長に怒り、ため息で何とか気持ちを整理した（気持ちはよく分かる）秋山が俺に意見を聞いてくる。

そこで少し考え込む。

「…確かに秋山の言う通りだ
軽音部が始動して未だに合わせたことがないというのは、ハッキリ言って危機感を覚えた方が良いと思う」

「うんうん　咲也の言う通りだ」

「おぉ…サクが真面目なことを…」

「あぁん？」
「律」

「ゴメンナサイ…」

失礼な事を言ってくる奴を俺と秋山で黙らせる。

「ここいらで学園祭にむけて一遍ビシッと気持ちを固めた方が良い」

「サッくんが真面目な…「あぁん？」「唯」…ゴメンナサイ…」

失礼な（以下同文）

「平沢もある程度はギターを弾ける様になったんだ、合宿ってのは悪くはないと思う」

「流石咲也だな！　その通りだよ！」

俺の意見に感動する秋山。

苦労してんなお前…

俺もだけど。

「という訳で軽音部で夏休みに強化合宿を行います！いいですね！」

「私は元々賛成だから～」

「もちろん私もＯＫだぜ！」

「私も私も～」

次々に賛成してくる三人。

平沢と田井中は本当に理解してんのか怪しいが…

それから一つ、言っておかなければならない事があったな。

「まぁ　頑張ってくれ
俺は不参加だ」

「「「「……」」」」

ザ・ワー〇ド

（時が止まったな…）

「…ハッ！

えっ？何言ってんの？」

「何がだ？」

「合宿だよ！合宿！

何で不参加なんだよ！」

ス○ンド能力（使えねェケド）を解くと田井中が身を乗り出し俺に尋問してくる。

「じゃあ問題だ

…平沢　唯クン」

「はいっ　何でしょう？」

「俺とお前等四人の違いは何だ？」

「え～っと……あっ！
ＤＮＡ！」

「そりゃそうだ
てか全人類がそうだ
正解だが不正解」

「えぇ～　違うんだ…」

『ＤＮＡ』って知ってたんだな。

これはバカにしすぎか…

「琴吹　紬クン」

「え～っと……性別？」

「正解だ　後で田井中に何かおごってもらえ」

「なんで私なんだよ！

じゃなくて…それが理由？」

「そうだ」

これが合宿不参加の理由だ。

何泊するのかしらんが一泊でもするのなら俺は行けん。

「え～っ　なんで～？」

平沢が疑問の声をあげる。
分からんのかコイツは？

「…いいか　合宿っつうことは泊まんだろ？
修学旅行みたいに大勢じゃねェんだ
若い少人数の男女が監理者もなしに泊まれるか」

理解していない様子の田井中と平沢に説明をする。

と、ここで…

「でも…」

「あン？」

黙っていた秋山が口を開いた。

「それじゃあ咲也の練習はどうするんだ？」

「そりゃあ　お前らが合宿から帰ってきてから合わせる」

「それじゃあ合宿をする意味がないよ
これはバンドの強化合宿なんだから
咲也も参加しないとダメだよ」

「……」

確かにそうなんだが…

あれ？　おかしいな？

俺ん中じゃ秋山は俺の意見に賛同してくれると思ったんだが…

まさかの裏切りだ。

「そうだよサッくん！」

「サッくん言うな」

「私達はこの五人で『桜高軽音部』なんだから！
サッくんも行かなきゃダメ！」

相変わらず禁句禁止令をスルーして俺を指差しそう言う平沢。

「私は『みんな』で行きたいの
だから咲也君も一緒にね？」

「……」

「そうだそうだ　澪と唯とムギの言う通りだ！
てゆうか部長権限でサクを強制的に連れて行くからな！」

ンな権限、是非ともドブ川にでも流してくれ。

「「「「ジー…」」」」

俺が口を開くのを待つ様に、八つの瞳が俺を凝視してくる。

ヤメロ穴が開く…

「はぁ…」

確かに秋山の言い分は正論だ。
何より合宿を強く勧めたのは俺だし。

それに…

『この五人で桜高軽音部』

そんな事言われちゃあな…

「…分かったよ　行きゃあいいんだろ…」

白旗を振り降参…

敗者決定、俺。

「うんっ」

「やったー！」

「よかった～」

「こうしてサクは合宿に参加することになったのだった」

「なんでナレーション口調なんだよ…」

最近の女子の情操教育はユルいのか？

それとも俺の考えが古いのか？

「はぁ…」

やっぱため息増えたな…

……

「でもさ、スタジオ付きの旅館とかあるの？」

俺の合宿参加問題が解決した途端、部長の口から別の問題が発生した。

軽音部の合宿なんだ、楽器の音を出しても問題なく合宿できる場所なんて限られてくる。

ましてや俺達は学生。

スタジオ付きの場所なんて借りる金は無いに等しい。

「私、お金ないよ？」

「ちなみに俺もねェぞ」

「そ、それは…」

宿泊費まで考えていなかったんだろうな。
秋山が口ごもる。

「最悪、山ん中で野宿でもするか？
近所迷惑にはならねェし」

「えぇ～　ヤダよ～」

「山の中でやったらアンプの電源とかどうするだよ？」

「ンなもん知るか」

「だから言い出したのサクじゃん…」

「ム、ムギ？」

「はいっ？」

俺が野宿を提案していると秋山が琴吹に何やら話しかけていた。

「別荘とか…」

「ありますよ」

「「「「あるんかい」」」」

秋山が望み薄で琴吹に尋ねるとアッサリと返事が返ってきた。

それにより声が揃う俺達。（今回は俺も参加）

（だからお前何者だっつうの）

琴吹の寛大な心で無事に合宿場所を確保する事が出来た。

――――――――

時は流れ夏休み真っ直中の八月上旬。

現在時刻午後九時。

晩メシを食べ終え、明日に控えた合宿の準備を済せ、自室でサッカー雑誌を読んでいると…

コン、ガチャ

「咲也入るぞ」

「もう入ってんじゃねェか…

あとノックしてから入るまで早ェよ」

殆ど意味を成さないノックをして親父がやってきた。

「そう細かい事を気にするな
気にしたら　負けだ」

「何にだよ…
で？　なんの用だ？」

「あぁ　新作がやっと出来たんだ
読んで感想を聞かせてくれないか？」

そう言って厚さ２ｃｍは在ろうかという紙束を差し出してきた。

俺の親父の職業は小説家だったりする。
そこそこ人気があるらしいが良く知らん。

まぁこの職業で家族三人養っているので売れてはいるんだろうが…

そして差し出してきた紙束が半年前から執筆していた新作小説。

親父は新作が出来たらまず俺に読ませて感想を求めてくる。
何故、俺に読ませるかというと、『身近にいて贔屓目なしで、痛いところを突いてくるから参考になる』らしい。

「…いつまでに読み終えりゃあいいんだ？」

「明日の朝ぐらいまで」

「…無理に決まってんだろうが」

現在時刻午後九時数分。

今から厚さ２ｃｍ程の小説を俺に読ませ朝に感想を聞かせろだと？

そりゃあなんだ？
完徹しろってか？

「アンタも知ってんだろ、明日は部活の合宿があんだよ」

「だから朝ぐらいまでに読んで感想を聞かせてくれ」

「……帰ってからな」

「そいつは無理だ
締切は明日の昼だからな」

「なんでンなギリギリにあげてんだよ！」

「それが作家の性だ」

「……」

なに堂々と言ってんだよ…

「じゃあ頼むな」

バタン…

そんな言葉と新作を残し小説家は去っていった…

「…焼いちまうか？」

新作を手に取り、呟いてみるが、流石にそんな事は出来ず…

「はぁ…」

（完徹だな、こりゃ…）

そんな事を思いながら、ため息と共にベッドにダイブし小説を読んでいくことに…

第十四話（前書き）

合宿編その二です。

今回も長くなりそうな予感が…

第十四話

翌日。

襲いくる睡魔という名の悪魔と格闘しながらも荷物を持ち、待ち合わせの駅前へと歩く。

結局完徹を行い驚異的なスピードで小説を読破し、朝　爽やかな様子でコーヒーを飲んでいた親父に感想と小説を顔面に投げ付け仮眠をとった。

が、一時間程の仮眠では俺の体は満足せず未だに睡眠を求めてくる、更には多少寝過ごしバタバタと家を出てきた。

歩きながら眠るなど、雪の街に住む某苺好きの青髪眠り姫の様に器用な真似は出来ず、若干ふらつきながらも、なんとか目的地付近に辿り着く。

「あっ　お～いサク～！」

既に来ていた三人の内の一人、田井中がどうやら俺に気付いたらしい、手を上げ俺の名を呼ぶ。

いつかの平沢みたいに叫ぶまではいかないが、声を張り上げているので目立っている。

アイツ個人だけなら大いにかまわんが、俺を巻き添えにしようとしてるので足早に近付く。

「…デケェ声で呼ぶな…聞こえてる…」

「なぁーんだよ～せっかくこんな美少女が……って、どうしたんだよ？　不機嫌顔がいつにも増して不機嫌顔だ」

「それに目の下のクマがすごいぞ？」

「もしかして寝不足？」

「…あぁ　そうだ…」

完徹により俺の眼にはクマができ、通常の不機嫌面がグレードアップしていた。（鏡を見てショック）

「はっは～ん
そうかそうか、サクはそんなに合宿が楽しみだったのか～」

「…違ェよ…とある人物が俺をこんな状態にしたんだ…」

「とある人物？」

「…秋山のとこで言うと父親だ…」

「普通に父親って言いなよ…」

「…まぁそこは最早どうでもいい…

…つうか平沢は…？」

「唯ちゃんは、まだ来てないわ」

まだ来てねェって…

ぶっちゃけ俺がここに着いたのは時間ギリギリだ。

その俺より遅ェつう事は遅刻か？

「唯に電話してみるよ」

秋山が平沢に電話をかける。
それを見守る俺達。
すると…

「…おはよう…」

ポツリと秋山が電話口に挨拶をした。

「はぁ…」

寝ていたらしい。
遅刻確定。

こういうやつだよな平沢は…

「唯…なんだって？」

結果は分かっているが一応という感じで田井中が秋山に尋ねる。

「寝てたみたい…今から行くって…」

「そっか…」

「「はぁ…」」

二人のため息がかぶる。

うん　流石が平沢だ。
期待を裏切らんな。

「そういえば咲也君？」

「…あン…？」

「左手に持ってるのってギター？」

琴吹が俺が左手に持っている荷物…ギターケースを見て尋ねてくる。

「あれっ？　サクってギター、二本持ってんの？」

田井中の疑問はもっともだ。
俺は背中にテレキャスが入ったケースを背負い、右手には着替えなどが入ったボストンバッグ、そして左には親戚から貰った名も無きアコギが入ったケースを持っている。

「…あぁ　これはアコギだ…」

「へぇ　咲也ってアコギも持ってたんだ」

「…あぁ　合宿で使うと思って持ってきた…」

『使うと思う』よりは『使う』だろう。
俺が作曲した曲は、エレキが平沢　アコギは俺という風に想定して作ったからだ。

まぁ合宿でこの曲の練習をすればの話だがな…

「これでティータイムの時により優雅なＢＧＭが…」
「やらんぞ」

何故かＢＧＭにこだわる田井中に即時にツッコむ。
そんなにＢＧＭにこだわるのかお前は？

……

平沢を置いて出発するわけにもいかず駄弁りながら（俺は半分寝てた）遅刻者を待っていると…

「ご、ごめ～ん！！」

ガラガラとキャリーバッグを引きずりながら平沢参上。

「遅いぞ　唯」

「ゴメンね！寝過ごしちゃった！
わっ！どうしたのサッくん！？
すごいクマだよ！？」

「…お前こそ、その頭どうした」

秋山の言葉に謝り、俺の顔を見て仰天する平沢。
それには答えず平沢の髪型を見てそう返す。

「唯ちゃん、寝癖がついてるわよ」

「…寝癖レベルじゃねェだろ…大爆発だ…」

「そんな頭でここまで来たのか？」

「うん　だって急いでたから」

「だからってちゃんと直してからにしなよ

…ちょっと待ってて」

そう言うと鞄から櫛を取り出し爆発娘の頭に櫛を通す秋山。

一分もしない内にいつも通りの髪型に。

「ありがとう～澪ちゃん」

「よしっ！じゃあ全員揃ったし合宿に出発だ～！」

「「おーっ！」」

「ちゃんと練習出来るのかな…？」

「……」

田井中の号令に拳を突き上げる平沢と琴吹、不安を漏らす秋山、意識が飛びそうな俺。

いよいよ軽音部の合宿がスタートした。

――――――――――

琴吹家の別荘に向かうため電車に揺られ、バスに乗り、少し歩くと
目の前には…

「で、で、でけぇーっ！！」

それはそれは立派な豪邸がありました。

「本当はもっと広い所に泊まりたかったんだけど…
一番小さい所しか借りられなかったの」

「「「「……」」」」

これで一番小せェだと？
もっとデカイ別荘があんのか？

（琴吹家っていったい…）

改めて琴吹の凄さを実感した瞬間だった。

……

「おーっ！！」

「わぁーっ！！ひろーい！！」

別荘の中に入ると驚愕と歓喜の声をだす田井中と平沢。

気持ちは分かる。

俺達の様な庶民ではまず体験出来ない空間がそこにはあった。

リゾートホテルの様な（行った事ねェけど）広い室内。

高価（おそらく）な家具。

有名な画家が描いたであろう絵画（よく分からん）

割ったら洒落にならん額（多分）の壺。

冷蔵庫には高級な（推測）食材。

そして目の前には見渡す限りの海（間違っても池じゃない）

プライベートビーチだな（自信有り）

こんなモンが揃ってりゃあ誰だって声をあげるだろう。

「いつもなるべく普通にしたいって言ってるんだけど、中々分かってくれなくて…」

普通ねェ…
お嬢様だからそういうのに憧れがあんのか？
そういや『バイト』や『値切る』に興味持ってたし、この合宿みたいに『泊まる』ことが夢だって言ってたな。
そんな普通の事がコイツの夢なんだろうか？

『値切る』は普通かどうか怪しいが…

まぁ　いっか。

「スタジオあるんだろ？
ドコにあるんだ？」

とりあえずスタジオがなけりゃ意味がないので琴吹に尋ねる。

「あっ　コッチあるわ　ついて来て」

そう言って歩き出す琴吹の後ろを俺と秋山がついていく。

平沢と田井中はどっか行った。

……

ガチャ

「どうぞ」

「…わぁ」

「…へぇ」

中に入ると立派なスタジオと軽音部室にあるのよりもグレードが高いアンプとドラムセットがあった。

それにより感嘆する秋山と俺。

「しばらく使ってないから、ちゃんと動くか心配だけど」

琴吹のその言葉を聞き、背負っていたテレキャスを取り出しアンプに繋ぎ、軽く弾いてみる。

♪♪~♪

「…ふむ」

「うんっ　大丈夫そう！」

俺が出した音を聞き秋山がＯＫをだす。

「あれ？　唯と律は？」

「途中でいなくなっちゃったけど」

「大方、別荘内でも探検してんだろ」

「しょうがないな～」

そう言っておもむろに鞄からラジカセを取り出す。

「なぁに？」

「あぁ　コレ？」

秋山がラジカセの再生ボタンを押す。
するとそこからライブ音源が流れてきた。

♪♪♪～～♪♪

スタジオ内にラジカセからのライブ音源が鳴り響く。

「……」

「…昔の軽音部の学園祭でのライブ…

この前、部室で見つけたんだ」

「上手…」

「……」

確かに上手い。
ラジカセからの音源でここまで上手いと感じるんだ、実際にその場にいたらきっとライブ会場は盛り上がるに違いない。
それほどの演奏技術を昔の軽音部は持っていたんだな…

「…私達より相当上手い」

「…うん」

「……」

「なんか…聞いてたら負けたくないなって…」

「それで合宿って言い出したのね」

「うん」

「……」

なるほどね…

『バンドの強化合宿』っ言ってたが、コッチが本音だった訳か。

『強化合宿』の方も本音なんだろうが、きっかけは一つのカセットテープだったんだな。

負けず嫌いスキル発動か…

♪♪~♪♪♪

誰一人喋らずスタジオ内にしばらくライブ音源が流れ、それを聞いてると…

「でも…」

琴吹が口を開いた。

「負けないと思う」

その言葉を聞き視線を向ける。
そこには瞳に強い決意を灯した琴吹の姿。

「私達なら」

「ムギ…」

「ね？　咲也君？」

と、ニッコリ笑って俺に同意を求めてくる。

「…それはこれからの頑張りようだ

このままで終わるか、その演奏に追いつき追い越せるか…

まぁ　現状じゃ無理だな」

「もうっ、そこは

『あぁ　もちろんだ！　俺達ならやれるぜ！がんばろう！！』

って言うところなのに」

俺はそんな熱血キャラじゃねェぞ…

「生憎と俺は現実主義者でね　正論を言ったまでだ」

「そうなんだけど～…」

おっ　珍しく、つうか初めて琴吹が拗ねた。

貴重だ。

「私達ならやれるんだろ？　だったらこの合宿で力つけて、学園祭を成功させねェとな」

「そうよねっ！！」

うおっ　一変して今度は燃えだした。

「よしっ！　じゃあ唯と律を呼んで練習しよう！」

秋山も燃えだし早速練習を開始しよう意気込むが、その炎を鎮火してしまう様な出来事がおきる。

バンッ！

「よーしっ！遊ぶぞー！！」

「オーイエーッ！！」

いきなり水着姿の田井中と平沢が突入してきた。

更にはこれから練習するなど知らない我が部長から『遊ぶ』宣言のおまけつき。

「練習は！？」

「先行ってるから、三人共急いでね～♪」

秋山の言葉に聞く耳をもたずそのまま去って行った。

「いや…だから、練習…」

「部長交代したほうがいいんじゃねェの？」

「あはは…」

つうか何でアイツが部長なんだ？
秋山の方が適任だと思うんだがな。

そんな部長から『お～い　は～や～く～』なんて声が聞えた。

「ちょっと待ってて～

澪ちゃん、咲也君行こう？」

「えっ　ムギ、行くつもり？」

「お前さっき燃えてたじゃねェか」

「せっかくだし少しくらいなら、ね？」

「で、でも…私は…」

先程の炎はどこへやら、すっかり燃え尽くしてしまったみたいだ。

コイツの場合はあとで練習しそうだから良いんだが、田井中と平沢はな…

（うーむ…）

どうせ今から練習だと言っても気持ちが遊びに向いているから練習しなさそうだし、無理矢理やらせても身がはいらないだろう。

だったら二、三時間くらい遊ばせその後に練習したほうが良さそうだな…

俺がそんな練習計画プランを立てていると…

「ム～ギ～、サ～ク～行くぞ～」

部長の『海へＧＯ！』命令が聞えた。

秋山の名を呼ばなかったのは何か作戦がありそうだ。

「は～いっ！

じゃあ待ってるから」

そう言ってスタジオから出ていく琴吹。

必然的に俺と秋山の二人きりに。

「咲也…」

「…琴吹はともかく平沢と田井中は、ああなっちまったらもう練習は無理だ」

「うん…」

「だから今は遊ばせといて、後で練習だ

…じゃ、そういうことで俺は惰眠をむさぼる」

「えっ？　あっ…咲也…」

練習計画プランを実行するため、スタジオから出ていく。

と、スタジオから出ると琴吹、田井中、平沢の三人衆がいた。

つうか平沢と田井中…少しは恥じらいとかねェのか？

水着のままだし…

「…お前ら何やってんだ？　先行ったんじゃねェの？」

「澪ちゃん待ってんの♪」

「…アイツ来んのか？」

「まぁ見てなって♪」

「あぁ？」

田井中の言葉に疑問を持ちながらコッソリと中にいる秋山の様子を伺う。
と…

「……ぅ」

急に涙目になり…

「わたしもいく～～っ！」

その場で荷物を漁り出した。

「な？」

「なるほどね…」

一人になった寂しさからスキルを発動させた。

流石、秋山の事を熟知してんなお前は。

「まぁ　楽しんでくれ
俺は寝とくから」

「あれ？サッくん、海に行かないの？」

「サッくん言うな

行かねェよ、水着持ってきてねェし、何より眠い」

「電車とバスであんなに寝てたのに？」

琴吹の言う通り俺は電車、バス共に爆睡していた。
それでもまだ寝たりないらしい、たまに睡魔が襲ってくる。

「お前は何しに来てるんだぁー！！」

「そりゃ俺の台詞だ」

俺が言いたい事を言ってくる田井中にツッコむ。

「ここに来た目的を忘れんじゃねェぞ

琴吹、部屋教えてくれ

じゃ　オヤスミ」

「あっ　サッくん～」

平沢が何か言ってるがスルーし、俺の体とこのあとの練習のため睡魔を退治することに。

第十五話（前書き）

合宿編その三です。

次で終われるかな…？

第十五話

陽の光が顔に当り、眩しさを感じながら眼を開く。

「……」

見慣れない天井……ではなく琴吹にあてがわれた個室の寝る前に見た天井だ。

「……」

ベッドから体を起こし、窓を見る。

「…がっつり夕方じゃねェか…」

窓から見た景色は、空をオレンジ色に染め上げ水平線に太陽が沈む頃だった。

（寝過ぎたか…？）

そんな事を思いながら何となしにベランダに出てみる。

するとビーチの波打ち際に人影が四つ見えた。

（アイツらまだ遊んでたのか…）

今が夕方だから軽く四、五時間経ってんな…

早くも計画プラン崩壊。

「はぁ…」

俺もこんな時間まで寝てしまったのでアイツらの事どうこう言えんがな…

とりあえず俺一人でも遅れを取り戻そうとスタジオに行くため踵を返す。

「あーっ！！練習ーっ！！！！」

…と、秋山の叫び声がここまで聞えた。

「忘れてたんかい」

遊ぶことを渋っていた秋山自身から飛び出た発言に思わずツッコんでしまった。

「はぁ…」

ため息一つ。

当初の目的通り、スタジオに歩いていった。

――――――――

スタジオに着き、ギターケースからアコギを取り出し、チューニングを済せ、楽譜を取り出し弾いてみる。

♪♪♪～♪

俺が作ったオリジナルの曲を奏でる。

（歌詞考えねェとな…）

この曲には歌詞はおろかタイトルすらない。

歌詞は俺が書くべきなんだろうな。
作曲をしたのは初めてじゃないがそれは全部、俺個人が楽しむために作ったものであり、歌詞はいらなかった。
しかしこの曲は軽音部として演奏するものであり、おそらく学園祭（人前）で発表するだろうから、やっぱり歌詞が必要だ。

（さて、どうするか…）

アコギを弾くのを止め、歌詞を考えてみるが、全く浮かばない。

……

（うーむ…）

どれくらい悩んだろうか？
時間の経過が分からなくなるくらい考えたが、さっぱりだ。

「…保留だな」

学園祭まで、まだ時間はあるしとりあえずは『保留』という結論に達した時…

ガチャ

「あっ　発見！」

平沢（着替え済み）が登場した。

「りっちゃん隊員！発見いたしました！」

「おぉ～　よくやったぞ！　唯隊員！」

「ハッ！　ありがとうございます！」

「この結果に怠らず、これからも今以上に精進するように！」

「了解です！」

「うむ！」

互いに敬礼。

「…満足したか？」

平沢の後に続き田井中（こちらも着替え済み）がやってきて、コントを始めたので一通り終ったところで話しかける。

「サッくんここにいたんだ～探したよ」

「部屋に行ったらいないからさ、別荘中を探し回ったぞで、何やってたんだ？」

「何って練習だ
…つうか秋山と琴吹はどうした？
今から練習するんだろ？」

「いや、今から晩ご飯のお時間です」

「だからサッくん探してたんだよ」

…何？
今から晩メシ？

時間を確認するためポケットからケータイを取り出す。

【ＰＭ７：００】

「……」

びっくりだ。

俺がスタジオに来たのは六時ぐらいだったはずだ、つまりギターを弾いていた時間を差し引いても五十分ぐらいは唸っていたことになる。

「…時間が経つのは早ェな」

「「？」」

「…メシ食ったら練習だな」

スタスタ…

「あっ　待って～サッくん～」

「勝手に行くなよ～」

独り言の様に二言呟き、晩メシを食べるためにスタジオから出ていく。

……

「じゃ～ん！」

「どうだ！」

平沢と田井中を引き連れリビングに着くと目の前には…

「…カレーか」

キャンプなど定番の料理　Ｔｈｅカレーだ。

「すごいだろ～！」

「作ったのは私とムギだ」

「だと思った…」

さも自分が作ったと威張る田井中にエプロンをした秋山やってきた。

先程俺を探しに来たのはあの二人だったので秋山と琴吹が用意をしているんだと思ったが、予想通りだった。

「それじゃあ　いただきましょう」

「お腹空いちゃった～
早く食べよう～」

いつの間にか現れた琴吹と、これまたいつの間にか席に着いている

平沢の提案により早速晩メシを食べることに。

「「「「いただきます」」」」

「…ます」

「おいしいよ！澪ちゃん、ムギちゃん！」

「そ、そう？そう言われると嬉しいな」

「一生懸命作ったかいがあったね澪ちゃん」

「まぁ　私の手にかかればこんなもんさ！」

「お前は何もしてねェだろ」

「むっ？　何を言うか、食器を並べたのは私だ！」

「そして、テーブルを拭いたのは私！」

「それぐらいしかしてないだろ
大変だったのは私達だぞ」

「そいつはご苦労
心の中で拍手を送ろう」

「クスッ　ありがとう咲也君」

ワイワイガヤガヤと賑やかな食卓だ。

たまにはこんなのも悪くないと思いながら夕餉の時間は過ぎていった…

……

食事も終わり合宿最大の目的、練習を行うため再びスタジオに来ているが…

「はぁ～お腹いっぱい…」

「あぁ～床が冷たくて気持ちいい…」

床に寝そべる田井中と平沢。

「こうやって眼を閉じると、なんか波に流されてる感じがするよね～…」

「…あ、ホントだ…」

「実際に波に流してやろうか？」

「…それは勘弁して～…」

「…ゆらゆら～…」

「はぁ…」

スタジオに移動してからずっとこんな感じだ。
今にも安らかな眠りにつきそうだな。

「おやすみなさい…」

「オヤスミ…」

あ、寝るなコイツら…

「始めるぞー！」

「二人とも起きてー」

「「……」」

秋山と琴吹の言葉も聞く耳ナシ。

「水でもぶっかけたろうか」

「それはかわいそうよ」

「じゃあ　どうすんだよ？　コイツら起きねェぞ」

「ムギ、咲也ちょっと退いてて」

ドスンッ！

秋山の宣言通りその場から離れ、発言者が寝そべる二人の頭上にアンプを置く。

そしてベースに手をかけ…

ズーンッ！！

ベース特有の低音を鳴り響かせる。

「「うぅぅ…」」

嫌がる様に身をよじる。

「おら起きろ　練習始めんぞ

五秒以内に起きなければお前らの耳元で特大の高音を鳴らす

…5」

「「うぅ…」」

「…4」

「「う…」」

「3
2
1」

「「起きます…」」

「チッ」

「…何で舌打ちしたんだよ…」

ようやく天然とカチューシャを起き上がらせ、練習を始めようとするが…

「なぁ　今日はヤメにしようぜ～」

部長爆弾発言。

「お前何言ってんだ…

練習もやらねェで何しに来てんだよ」

「『強化合宿』だって言っただろ！」

「そりゃそうだけどさ…」

「…そういえば律？」

ここで秋山が何かを思い付いたらしくニヤリと笑う。

「最近ちょっと太ったんじゃないか？」

「えっ！？」

「特に～お腹のところとか～」

「えぇっ！！」

「最近ドラム叩いてないからなのかな～？」

「ーーーーッ！！」

ドドドドドッ！！

ドラム連打。

「流石だ　よくやった」

「どういたしまして」

互いにサムズアップ。

これにて問題解決。

…かと思いきや。

「もう、ギター持てない…」

「えぇ！！」

今度はコイツの番だ。

「だってこのギター重いんだもん～」

「だから軽いやつにしておけって言ったのに」

「やっぱストラトの方が良かったな」

「誰だ～！　このギター買うって言ったの！！」

「「お前だ」」

結局…

「そろそろ床、暖まってきたね…」

「そうだな…」

元通りに。

俺はもう諦めアンプにギターとヘッドフォンを繋ぎ自主練中。

今やっている曲は主に琴吹と俺で作ったオリジナル。

コッチの曲は俺もエレキで演奏する。
学園祭でどっちの曲をやるのかまだ分からない。
故に両方練習しなければならないわけだ。

ちなみにこの曲もタイトルもなけりゃ歌詞もない。

まぁ　誰かに任せよう。
俺はもう一つの歌詞で一杯一杯だ…

……

しばらく自主練を続けていると…

バッ

「うおっ！！」

「サッくん！外行こう！」

急に平沢がヘッドフォンを取り、こんな事を告げてきた。

「はぁあ？　何言ってんだよ？練習はどうした？」

「コレが終わったらするよ

ほらっ！行こう！」

「『コレ』ってなんだ
…っておいっ！引っぱんな！」

「はやくはやく～」

平沢がいきなり俺の手を取り歩き出す。
なんとかしようと周りを見渡すが、誰もいない。

（アイツらドコ行った？）

グイグイと平沢（何故かレスポールを持っている）に引っ張られ、
渋々外に向かうはめに。

―――――――――

黒の中に点々と星が、神々しい光を放つ月が浮かぶ夏の夜空。

そんな風景の下に俺達は集まっていた。

その中で座ってモグモグとスイカを頬張る秋山の隣りにいき…

「なぁ　いったい何すんだ?」

おそらく理由を知っているであろうから疑問を尋ねる。

「さぁ…律と唯とムギが急に外に行こうって言うから」

知らなかった。

「何考え付いたんだか…」

「これが終わったら本当に練習するからなー」

秋山が何やらゴソゴソと準備をする田井中と琴吹に呼び掛ける。

「分かってるって♪」

そう言うと琴吹に目配せをする。

「うんっ！」

どうやら準備が終わったらしい。

すると平沢が俺達の前に立ち。

「「せーの！」」

その合図と共に…

バンッ！

ギターを構える平沢の後ろに大量の噴出花火が上がった…

「ぁ…」

「……」

「それじゃあ最後の曲！いっくぜー！！」

そんな言葉を放ちギターをかき鳴らす。

「……」

その光景は…なんだか幻想的だ。

楽しそうに笑いながらギターを鳴らす平沢。

その後ろで噴出花火が辺りを照らしだす。

更に…

ヒュ〜…ドンッ！

打ち上げ花火が舞い上がり、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫などの色とりどりな花を夜空に咲かせる。

（虹みてェ…）

そんな光景に思わず見とれてしまった…

そして…
一分程の幻想的な時間が…終る…

「オーイエーッ！オーイエーッ！
…ってあれ？もう終わり？」

「予算がな～」

「いつか、また」

「そうだな！
武道館公演で派手にババババァーンっと」

「武道館？」

「おいおい～目標はそこだって決めただろ？

…な！澪！サク！」

「え…」

「……」

俺と同じく見とれてたんだろう、急に田井中にフラれ惚けた声をだす。

（武道館か…）

脳裏に部室にあるホワイトボードに書かれている文字が浮かんできた。

【めざせ武道館！！】

いつの日だったか、田井中がホワイトボードにデカデカと目標を書き込んだ。

それを嬉しそうに俺達に見せる田井中。

賛同する秋山。

笑顔の琴吹。

ケーキを食べ、話を聞いてない平沢。

そんな平沢に呆れる俺。

『いつか武道館で』

それがこの軽音部の目標。

「じゃあその時はピンクがいい！」

「小学生かよ…」

「え～だって可愛くない？」

「ガキっぽいだろ～」

「私もピンクはちょっと…」

「え～そうかな～？」

「咲也」

「あン？」

「それ、取って」

そう言って俺の横にある物を指差す。
その先にあるのは…ラジカセ。
ラジカセを取り秋山に渡す。

「ん」

「ありがとう」

俺に礼を言うとおもむろに立ち上がり、再生ボタンを押す。

♪♪♪～♪

ラジカセから例のライブ音源が流れる。

「武道館めざすならまず、これくらい出来る様にならないとな」

「うわっ　うまいな～
誰が演奏してるんだ？」

「昔の軽音部らしいぜ
つうことは俺達の先輩だな」

「先輩か…私達も負けてられないな！」

「そうね！」

「…あれ？でもこの曲…」

俺の答えに田井中が意気込み琴吹が再び燃えだし、平沢が何かに気

付き声をだした瞬間…

『お前らが来るのを待っていた…』

なんともこの場に似つかない悪魔な声がラジカセから聞え…

『ーーーッ!!!!!!』

子供が聞いたら間違いなく泣き出すであろう大気を震わす断末魔の叫びが響き渡った。

「…ンだよ今の」

「これって…」

「テープがB面に変わったのね…」

「なんだ…ん?」

「聞えない聞えない聞えない聞えない…」

「もう遅せェつうの」

断末魔の叫びを一番近い位置（持っていたラジカセから流れたので必然的にそうなる）で聞いていた秋山がしゃがみ込み耳を塞いでスキルを発動させた。

「ニヤッ」

そんな秋山を見てわざわざ声にだしてニヤリとする田井中。

「…お前何するつもりだ？」

「ちょ～っとね～♪」

俺の言葉を曖昧に返し、嬉々と秋山に近付く。

（どうなっても知らねェぞ…）

藪蛇はゴメンなので傍観することに。

「聞えない聞えない聞えない…」

「ふじつぼ…」

「キャーッ！！」

「膝の皿屋敷…」

「イヤだ〜！イヤ〜！イヤだよ〜……ぅぅぅ…」

「あ〜あ…」

田井中のよくわからん呪いの囁きによって俺達に背を向け、遂に泣き出してしまった。

「りっちゃん！」

「やり過ぎだよ〜！」

「…あ、ゴメン…

…悪かったな〜澪！」

「そう思うんなら土下座だな」

「ど、土下座!?」

「日本の文化を象徴するために大和魂を見せろ」

「いや、今日本の文化関係ないじゃん」

「修司なら喜んでするぞ」

「えっ!?そうなの?」

「土下座がアイツにとっての快楽らしい」

「マジで!?」

「マジマジ」

「澪ちゃん大丈夫だから」

「オバケなんかじゃないわ」

いつの間にか話が『修司土下座快楽論』に変わり、俺と田井中が論議を交わしていると、平沢と琴吹が俺が見てきた中で最大級のスキルを発動している秋山を慰める。

「そうそう！いるのは不機嫌顔のサクだよ！」

「ンだとコラッ」

失礼な事を発する（事実だが）カチューシャに頭でもはたいてやろ

うかと思ったら…

「…ほんとぉ…？」

秋山がこちらを向いた。

「「キュルルルリ～ン！」」

秋山の泣き顔プラス潤んだ瞳を見てときめく平沢と田井中。

琴吹も若干頬が赤い。

俺は咄嗟に顔を背けた。

なんか色々やべぇ気がした…

「「萌え萌え～キュン！」」

これが今のこの二人の心境らしい。

「はぁ…」

――――――――――

「ゴメンな～澪～」

「ぶぅ～」

「……」

♪~♪

あの後、泣きやんだ秋山と昇天しかけてる三人を促しスタジオに行き、練習再開と思いギターを弾く前の癖で、軽く弾いていると…

♪~♪

俺のギターからではない所から同じ音が聞えた。

「ん?」

どこからだと思い視線を巡らせると…

「エヘヘ～　サッくんのマネ～」

「……」

平沢だった。

今コイツなんて言った？

俺の真似？

平沢には今弾いたコードは教えてない、てゆうか俺自身毎回適当にやっているので早々真似出来るモンじゃない。

（キセキの〇代の一人か？）

某バスケ漫画の一人みたいな凄い事をやってのけた平沢を見る。

「ん？どうしたの？」

「いや…」

自覚なしか…

（流石天然…）

偶然かと思い、再びギターを弾こうかと構えるがその動作が止まる様な出来事が起こった。

「唯ちゃん、でも本当にさっきの曲…」

「うんっ！見てて～

えーっと…」

♪♪♪～～♪

「うそ…」

「……」

平沢がギターを弾く。
そこは別に問題はない。
…その弾いてる曲が問題だ。

アイツが奏でている曲は先程外で流した昔の軽音部のギターパート。

スピードなどは遅いが、それでも音程を間違える事なく弾いている。

（コイツまさか…）

「はいっ！どう？」

「すごい！完璧～」

「エヘヘ～

どうだったサッくん師匠？」

「……」

「サッくん？」

「咲也君？」

平沢が感想を求めてくるが俺はある可能性を考えていた。

その可能性を確かめるために口を開く。

「…琴吹」

「はい？」

「今から適当にキーボードを軽く弾いてみろんで平沢」

「なに？」

「琴吹が弾いた音をギターで再現してみろ」

「？…わかった」

「なにするんだ咲也？」

「実験だ」

「実験？」

「あぁ…琴吹、頼む」

「う、うん」

♪♪♪～

キーボードから音、そしてそれを…

♪♪♪～

見事に再現。

「咲也…」

「あぁ…アイツ…」

秋山が俺と同じ考えに達したらしい驚愕の表情をして俺の名を呼ぶ。

「おぉ～すげ～な～唯！全く同じだ！」

「エヘヘ～ありがとう～」

「ゆ、唯ちゃん！今から出す音、当ててみて！」

「う、うん　わかった」

琴吹も気付いたか…

興奮した様子で平沢に提案する（田井中は気付いてないらしい）

♪

「これは？」

「ラ」

♪

「じゃあこれは？」

「ソ」

♪

「…これは？」

「ミ」

「……」

「どうだ琴吹？」

惚ける琴吹に問い掛ける。

琴吹の答えによって俺が平沢に感じてる可能性が確信になるだろう。

「全問正解…」

「えっ？　唯、お前…」

確信になった。

そして田井中も気付いた様だ。

「「「「ジー…」」」」

「なに？なに？どうしたのみんな？」

俺達が一斉に平沢を見る。

一人分かってない平沢がキョロキョロと俺達を見る。

さて、理解してもらうか。

「お前、『絶対音感』持ってんな」

「えぇっ！？『絶対音感』！！

…ってなに？」

理解出来なかった。

「知らんのかいっ！！」

「はぁ…」

部長渾身のツッコミ。

しかし『絶対音感』を持ってんのなら納得がいく。

俺の真似やギターパートのコピー、これらを一度聞いただけで音程を間違えず再現するなんて『キ〇キの世代の一人』か『写〇眼を持つコピー忍者』か『絶対音感』を持っている以外有り得ないからな。

「…っていうのなんだよ『絶対音感』は」

「へぇ～そうなんだ～

すごいね澪ちゃん！色々知ってるんだ～！」

「いや、すごいのは唯の方なんだけど…」

まぁ本人が余り理解してないので宝の持ち腐れな気がする。

第十六話（前書き）

合宿編終了です。

ふぅ～…

第十六話

「よしっ　練習だ！」

平沢の『絶対音感』が判明し、その凄さについて説明をしたが一向に理解せず、そこで部長からやっとこの言葉がでた。

長かったな…
本当に…

「じゃあ　とりあえず『コッチ』の曲からやるぞ」

そう言って俺が取り出したのは、琴吹と作った曲の楽譜（この曲をAとし、もう一つをBとしよう）

「おぉ！？なんだそりゃ！」

「あぁ？」

何言ってんだコイツ？

「私と咲也君で作った曲よ」

「すごいっ！いつ作ったの！？」

「いつって…お前らが呑気に菓子食ってる時だ」

「あれってＢＧＭじゃ「違ェよ」…あらっ？」

どうやらこのカチューシャは曲作りの音をＢＧＭだと思っていたらしい。

そんなに好きかＢＧＭ。

「気付けよな…」

秋山がボソッと呟いたのをしっかり聞き取った。

……

楽譜のコピーを四人に渡し、早速練習に取り掛かる。

まずはパート別に練習することになったのだが…

「サッくん、さっぱり分かりません」

「だろうな」

ようやくギターが弾ける様になったが、楽譜のほうは相変わらずなので俺は平沢に付きっきりで教える事に。

自主練やっといて良かった…

……

一時間程練習したところで一度合わせてみることに。

ちなみに平沢は四苦八苦しながら楽譜の読み方を覚えた…とは言い辛いが、自分のパートを順調に奏でていった。

やはり物覚えが良いらしいな…つうか天才なんじゃねェのか？

『絶対音感』といい、この物覚えの良さといい、もしかして将来化けるかもな。

「それじゃあいくぞ～準備はいいか？」

「うんっ！」

「バッチリだよ！」

「なんか緊張するな…」

「…いつでも」

「よしっ！じゃあ…」

スッと田井中がスティックを掲げる、その合図でそれぞれ楽器を構える。

「ワンツースリーフォーワンツースリー」

田井中のカウントで軽音部初の音合わせが始まった。

♪♪♪♪〜〜♪♪♪♪♪♪♪〜♪〜♪♪〜

…………

ジャーァン……

「「「「……」」」」

音合わせが終った。

だが誰一人として喋らない。

多分…興奮と言うか感動みたいな感覚が体を駆け巡っているんだろう。

俺もその一人だから喋らない…いや、喋れない。

はっきり言って未だにバンドには余り興味はなかった。

…が、こうしてバンド演奏を体感すると…面白い。

今までは俺のギターだけだったが、そこに秋山の上手いベース、琴吹の安定したキーボード、少々走り気味だが力強い田井中のドラム、初心者で途中何度か止まってしまったりしたが、それでもちゃんと弾けていた平沢のギター。

この四重奏が加わることで、俺が随分狭い世界で満足していた事に気付かされた。

まぁ、演奏自体は課題アリだが、そこはこれから練習していけば良いだろう。

てゆうか初の音合わせでここまでやれた事は十分合格点だと思う。

「～～～っ！

すごい！すごい！すご～いっ！！」

平沢がその場でピョンピョン飛び跳ねる。

気持ちは分からんでもないが、飛び跳ねる事によりギターに繋がってるシールドが俺の足にガンガン当たってる。

地味に痛ェ…

「すごいよ！私、感動しちゃった！」

「私も感動しちゃった！」

「これだよ！あの時感じた感覚は！」

「あの時っていつだよ？」

「中学生の時、澪と一緒にライブＤＶＤ見てさ、感動して『これしかない！』って思って、私達がバンドを組むきっかけになったんだ！」

そういや秋山がそんな事言ってたな…

その秋山を見てみると…

「……」

放心状態真っ最中。

目の前で手を振ってみるが、意味ナシ。

今度は手を叩くが、意味ナシ。

カシャ

平沢が何故かケータイのカメラで撮影するが、意味ナシ。

これは本当に意味ねェな。

「……っ」

と、ようやく放心状態から帰ってきた。

「すごいっ！！」

「うッ…」

放心世界から戻ってきた第一声が三文字の大声だったので、隣りにいた俺がダメージを受ける。

耳がキーンだ…

「すごいよ!!私、感動したよ!!」

「澪ちゃん、私と一緒だね～」

「だから言ったじゃないか　『コレ』だってさ」

「うんっ！」

余程感動したのかテンションが高い。

その代償が俺の耳キーンなんだがな…

「ヨッシャ！じゃあ間違ったとこを確認してもう一回やるか！」

「うんっ　そうだな！」

「サッくん、ここの部分なんだけど…ってどうしたの？耳押さえて？」

「…いや、なんでもねェ…」

秋山のせいで耳キーンだとは言えない。
何やら本人は非常にやる気をだしていらっしゃるので、俺の発言によりテンション下がるかもしれんからな。
それはなんだか心苦しい。

「…で、どこだ？」

「ここ、この部分」

「あぁ…そこはな…」

「クスッ」

琴吹が小さく笑ったのを見逃さなかったがスルーだ。

おそらく俺が耳を押さえていた理由が分かっているんだろう。

そして、それを何でもなかった事にしたことも。

……

「そろそろ終わろうか？」

「そうだな～流石に疲れたよ～」

現在時刻午後十時ジャスト。

曲Ａの課題部分をなんとか修正し（それでもまだ課題アリだが）区切りがついたのでここで練習を終了することに。

（結局コッチはしなかったな）

そう思い、曲Ｂの楽譜を取り出す。

「サッくん、それなぁに？」

「あン？」

平沢が俺が持っている楽譜に気付き、問い掛けてきた。

「…コレはもう一つの楽譜だ　あとサッくん言うな」

「もう一つ？」

「あぁ」

「へ～、もう一曲あったんだ～」

「それもサクとムギが作ったのか？」

田井中乱入。

「いや、これは俺が作った」

「元々咲也君が作っていたのを見て、私も作ってみたの」

琴吹参戦。

「そうなんだ～」

「でも咲也もムギもすごいよな、作曲が出来るなんて」

秋山参入。

「ううん　すごいのは咲也君よ
私の曲作りを手伝ってくれたから」

「「「おぉ～」」」

「…なんだよ？」

何故か尊敬な眼差しで俺を見てくる三人。

琴吹はニコニコしてるし…

なんなんだよ…

「あれだな、サクはスーパーマンだな！」

は？

「作曲も出来て、ギターも上手いしな」

それはプロのミュージシャンもやってんぞ。

「私の師匠だもん！」

師匠になった覚えはねェぞ。
そして何故威張る？

「音楽に対して真摯よね」

そりゃこれに対しちゃあ不真面目にはやってねェが…

てか何でそんなに誉める？
買い被り過ぎだ…

「はぁ…俺の事はどうでもいいんだよ
それより学園祭じゃ、どっちの曲やんだよ？」

「そんな照れなくてもいいのに～」

「素直じゃないからね～　サッくんは～」

「黙れ貴様等」

「「ゴメンナサイ…」」

有りもしない事を言ってくる天然とカチューシャを睨んで黙らせる。

悲しいかなこういう時、不機嫌面＆ツリ眼は便利だ。

…自己嫌悪…

「両方の曲やらない？」

俺が自己嫌悪に陥ってると、秋山がそんな事を言ってきた。

「でもサクが作った曲は練習してないぜ？」

「そのための合宿だろ？

明日は咲也が作った曲を練習しよう」

「遊ぶ時間がなくなる…」

「だからお前は何しに来てんだよ」

「そりゃもちろん、遊びに！」

「……」

パチッとウインクとサムズアップをし、堂々と言い張る部長。

そしてその背後に般若のオーラを纏った秋山の姿が。

「りーつーぅ！！」

「じょ、冗談だって！！れ、練習しに来てるよ！！」

本当に冗談かどうか怪しいが、般若オーラに当てられて、冷や汗をかきながら必死に弁解する。

「ムギちゃん、動かないで…」

「あはは…」

平沢も田井中と同じ事を考えていたらしい、琴吹の後ろに隠れていた。

結局明日、朝から曲Ｂの練習をすることになり、本日の練習は終了した。

―――――――――

カポーン…

「……」

只今入浴中。

俺は別荘内の内風呂に、女性陣はなんと露天風呂に。

恐ろしき琴吹家…

別荘がこんだけ豪華ならアイツの本宅はどんだけだ？

（借金執事の三〇院家並か？
蛙侵略者の西〇家並か？）

口からお湯を吐き出すマーライオンを眺めながら考えてしまった。

……

風呂上がり、火照った体を外で冷まし、喉が渇きを訴えてきたので冷蔵庫を目指す。

「あっ」

その途中バッタリと見覚えのない奴に出会った。

「「誰だ？」」

バッチリと同じ疑問を口にする。

「ん？…ん～…もしかして…サク？」

「もしかしなくてもだ」

「なぁんだ！サクか！普段前髪止めてるから分かんなかったよ～」

笑う謎の人物。

だから誰なんだお前？

まてよ…コイツ、俺の事を『サク』って言ったな？

そんな風に呼ぶのは一人だけだ…

だとしたら…

「お前…田井中か？」

「ん？そうだよ　分かんなかった？」

そう言って長い前髪をあげる。

あのデコは田井中だな。

「お前、前髪長げェよ」

「そういうサクだってピンしてないから印象違うぞ？」

不機嫌顔に磨きがかかってる」

「…知ってる」

俺と田井中は互いに風呂上がりのため、いつもしているピンとカチューシャをハズしている。

それゆえに分からなかった。

俺はともかく、コイツは変貌するな…

ちなみにその後平沢と秋山、琴吹に…

「「「誰？」」」

同じ反応をされ、少しへコんだ。

――――――――

草木も眠る丑三つ時。

「……」

与えられた個室で、俺はまだ起きていた。
正確には眠れなかった。

どこぞやの小説家のせいで完徹をし、行きの交通機関&別荘に着いてから爆睡したせいで全く眠気がこない。

「はぁ…」

（このまま朝まで起きとくか？）

こんな案が浮かんだが即刻抹消。

そんなことをしたら明日（今日）の練習に支障が発生するだろう。

ではどうするか？

羊を数えたら眠れるなど言うが俺の中では実績率０％なので却下。

（…歌詞でも考えるか…）

保留にしていた歌詞を考えることに。

…が、そう簡単に思い付かず、気分転換のためカーテンを閉めてない窓から夜空を見る。

「……」

その時思い出したのは、あの時の花火。

夜空に色とりどりな花が咲いては散っていった。

その風景を見て『虹』みたいだと思った。

（…虹…梅雨…雨……カッパ……パスタ……たこ焼き……

……キリギリス……スイカ……

……影宮　修司＝アホ……グッジョブ……）

後半何故か、しりとりになりアホに行き着いたところで俺の意識はブラックアウトしていった…

――――――――――

翌朝。

爽やかな目覚め…とはいかず普通に起床し、またもや秋山と琴吹が用意した朝食（平沢と田井中が『どうだ！』と言ってきたが適当に受け流す）を食べ、スタジオへ。

……

現在時刻午前九時。

練習を始める前に田井中と平沢からこんな提案が…

「練習をするのは大いに結構……だが！！」

「やっぱり遊びたいです！！」

「今日は朝から練習だって言ったじゃないか！」

「でもでも今日の夕方には帰っちゃうんだよ？」

「そうだぜ～澪！

こんなリゾート地、中々来れないんだから楽しまなきゃ損だ！」

「昨日十分満喫してたんじゃねェのかよ」

「甘いよサッくん！
昨日楽しんだから、今日もだよ！」

「どんな理屈だそれ」

「それに～澪だって遊びたいだろ？」

「そ、それは…」

図星かい。

「じゃあ、こういうのはどう？」

今まで成り行きを見ていた琴吹からの発案。

「今からお昼まで練習をして、それから帰るまでの時間をみんなで遊ぶのはどうかしら？」

「あっ、それいいよムギちゃん！」

「賛成賛成～！」

それじゃあ遊ぶ時間の方が長くねェか？

「どうかな？澪ちゃん、咲也君？」

「う、う～ん……咲也はどう思う？」

「……」

何故俺にフる？

…まぁいい。

琴吹の提案じゃ遊ぶ時間の方が長いが、練習の後に楽しみがあれば平沢と田井中もやる気をだすだろう。

秋山も内心は遊びたそうだしな…

昼までの練習で曲Ｂを土台ぐらいまで演奏できりゃ良いだろう。

後は部活でAと合わせて練習していけば…

「…良いんじゃねェの？」

「「やったー！」」

「但し」

「「ん？」」

「今からの練習は真面目に取組むこと
それが出来なきゃ午後からも練習だ」

「もちろん練習はちゃんとやるよ！

よしっ唯！やるぞー！」

「おーっ！！」

「これでいいか？琴吹、秋山」

「えぇ」

「うん　それでいいよ」

やっぱり秋山も遊びたかったようだ。
どことなく嬉しそうな表情だ。

……

昨日と同じく楽譜のコピーを渡し、パート別練習。

「サッくん、さっぱりです」

「想定内だ」

やはり楽譜がさっぱりな平沢を指導する。

あぁ…言い忘れた事があったな。

「平沢」

「なにかな？」

「この曲はお前がリードギターだからな」

「えっ！私が！？」

「あぁ　だからミスしないように頑張れ」

「サッくんじゃなくて私…」

そう呟いて顔を伏せる。

なんだ？なにが起こった？
まさか泣くんじゃねェだろうな…

いや泣く理由ねェだろ。

と…

「私、がんばるっ！！」

「うッ…」

急に顔を上げ決意を叫ぶ。

故に耳キーンだ…

「…そうかい…」

「よーしっ！燃えてきた〜！」

やる気がでるのは、かまわんが急に叫ぶな…

お前も秋山も…

耳キーンだ…

………………

♪♪♪〜〜〜♪♪♪♪〜〜♪♪♪♪♪♪♪〜〜〜♪〜♪〜

俺のアコギ。

平沢のエレキ。

秋山のベース。

琴吹のキーボード。

田井中のドラム。

この五重奏が音を奏でる。

例のよって一時間程練習をし、合わせてみる。

昨日の曲Aをやったせいか割りとスムーズに進んでいく。

♪♪～～♪♪♪♪～～♪♪♪♪…

そして演奏終了。

「…良かったんじゃないか？」

「…完璧とは言えないけどな」

「でも上出来だったと思うわ」

「まぁ、こんなもんだろ！唯のギターだってちゃんと弾けてたしな！」

「エヘヘ～そうかな？

でも難しいんだ～ここの部分とか」

そう言ってコードを押さえるが…

ピキッ

「はうっ！！」

見事に指がつる。

馴れないと良くそうなるんだよな。
俺も初めはそうだった…

「…ふっ、あはは！」

しみじみと昔を懐かしんでると急に平沢が笑いだした。
なんだ、痛みで壊れたか？

「ど、どうしたんだ？唯？」

「痛みの臨界点が突破し、壊れたか…」

「しみじみと言うなって…」

「唯ちゃん、大丈夫？」

「あはは！うん　大丈夫だよ！」

そう言って笑いながら、俺を見る。

そして…

「ありがとう！サッくん！」

「は？」

急に礼を言われた。

「こうやってみんなで演奏して私、本当に楽しいんだ！

サッくん、言ってくれたよね？

『やりたい事が夢中になれるものになればいいな』って…私ね、夢中になってる！」

「……」

「こんな風に指がつったり、コードを覚えたり、みんなで合宿して練習したり…

ギターが弾けなきゃこんなに楽しくて夢中になれなかったよ

サッくんが私にギターの弾き方を教えたり楽譜の読み方を教えてくれたからみんなで演奏が出来た…

今まで部活をやってこなかった私がこんなに夢中になれてるのはサッくんのおかげだよ！

…だから、ありがとう！！」

俺に満面の笑みを見せる。

…あの日、俺と平沢の部活初日。

部室に行く途中の廊下で俺が平沢に言った『言葉』。

…ぶっちゃけ、平沢が言うまで忘れてたが…

コイツはその『言葉』を覚えていた。

『やりたい事が夢中になれるものになればいい』

…これは俺にも当てはまるのかもな…

ギターが俺にとっての『やりたい事』であり、『夢中になれるもの』だ。

だから同じギターをやる平沢に、この『言葉』を言ったのかもな…

「…別に、礼を言われるモンじゃねェよ…」

「おやおや～サクが照れてる～」

「うるせェ　照れてねェよ」

「わかったわかった♪
そういう事にしといてあげるよん♪」

ニヤニヤ笑う田井中。

この発言者が修司だったら、顔の原型がなくなるぐらい全力で蹴り飛ばすのにな…

「さっさっと練習すんぞ！時間がなくなる！」

「クスッ　そうだな！
咲也の作った曲を昨日ぐらいのものにしなきゃな！」

「そうねっ！」

「サクが照れてる貴重なものが見れたしな～
練習再開だ！」

「だから、照れてねェっつうの」

「はいはい♪」

「テメェ…」

「サッくん！練習しよう！」

「だからやるっつてんだろが…

あとサッくん言うな」

「あはは♪」

「なに笑ってんだよ…」

その後、居心地の悪さを感じながら練習を終え、無理矢理平沢と田井中に海に連れ出され、軽音部の合宿は幕を閉じた。

色んな収穫があった合宿だったと思う。

第十七話（前書き）

ＴＨＥ・顧問編です。

寝不足だ…眠い…

第十七話

「　　」

「…ッ」

その言葉を聞き、俺が驚愕の声をあげるまでこうなった状況を説明しよう。

――――――――――

ミーン…　ミーン…

「アチィ…」

「九月なのに何でこんなに暑いかね…」

「知るかよ…残暑だろ…」

「残暑が厳しいザンショね～」

「この世から消えろ」

「消滅勧告ッ！？」

本日九月中旬。

『どうした？』と地球に問い掛けたくなる様な暑さが続く。

夏休みが終了し、二学期が始まり、学園祭に向け盛り上がる筈の我が桜ヶ丘高校は、この暑さのせいでイマイチ盛り上がりに欠けていた。

俺は暑さが苦手なので（寒いのも苦手）参ってるなかで、アホが下らんギャグを言うもんだから『消滅勧告』を発する。

「なんだよ、お前が参ってるから涼しくなるようにサブいギャグ言ってやったつうのに」

「…そんなもんで涼しくなるんだったら、世の中冷房いらずだ…」

「おっ　エコだね～
エコロジーだね～」

「アチィ…」

ちなみに今の時間帯は放課後。

本来なら部活に行ってるが、俺達は夏休みの課題をほぼ適当に書き込み提出し、見事に担任から説教をくらいやり直しを命ぜられていたために部活を遅刻中。

そして職員室からの帰りの廊下をダラダラと牛歩しているところだ。

「どーするよ?咲也君　この課題?」

「どうするもなにも、殺るしかねェだろ…」

「字が違う!字が違う!」

言葉のニュアンスを間違える程、暑さに参ってるらしい…

その時…

ガラッ

俺達の行き先にある教室のドアが開き、とある人物が出てきた。

「あっ　咲也、修司」

「おっ　和ちゃん！」

「…アチィ」

涼しい顔をした真鍋だ。

「何でこんなところから、和ちゃんが出てくんだ？」

「何でって、ここ生徒会室よ？」

「なヌ！？」

そう言われ、教室名が書かれているプレートを見上げる。

【生徒会室】

「わぁ～お…」

「ここにあったんだな…生徒会室…」

「入学して五ヵ月経ってるわよね…」

真鍋が呆れ声と共に俺達を見てくる。

仕方ねェだろ…生徒会なんてそんな堅苦しい空間、用もなけりゃ行かねェし。

場所なんて知らなくて当然だ。

「てゆうか咲也、なんて格好してるの？」

「…あン…？」

俺を爪先から頭のてっぺんまで見て、やはり呆れたような感じで言ってくる。

只今の格好。

夏用の制服。

ズボン。
脛ぐらいまで捲り上げ。

シャツ。
ボタン全開。
中に着ているTシャツを露出。

右手。
安物扇子。

左手。
やり直しを要求された課題。

桐島　咲也。
現在で出来限りのクールビズ。

「…何か問題でも？」

「ちゃんと着なさいよ制服」

「…クールビズだ」

「やり過ぎよ…」

だったらこの暑さをなんとかしてくれ。
地球に気温を下げるように懇願してくれ。

ちなみに修司は普通に制服を着用している。

アホのくせに…

「まぁ　良いわ
今から軽音部に行こうとしてたから…咲也、ちょっと時間良いかしら？」

「…別にかまわねェが、何だよ？」

「軽音部について重要な話があるの」

「重要な話？」

「えぇ　だから中で…」

「？」

そう言ってチラッと修司を見る。

あぁ…邪魔なんだなコイツ。

軽音部について重要な話だから部外者の耳に入っちゃイカンしな。

「修司、ハウス」

「俺は犬か」

「んじゃお前ん家の近くの公園で一人でカバディでもしてろ」

「何でそんな寂しい事しなきゃいけねェんだよ！
つかハタから見たら変人だ！」

「だからだよ」

「誰が変人じゃ！！」

「よしもう黙れ
飴やるからさっさっとゴーホームしろ」

「いらんッ！！」

「邪魔」

「ついに単語のみか…

分かったよ、帰りゃあいいんだろ！」

「分かってんならさっさっと実行に移せ」

「～～～ッ！

バカバカバカバカバァ～カッ！！」

その言葉を残し、半分泣きながら奴は去って行った。
邪魔者は去ったな…
さて…

「じゃ　お話と参りましょうか」

「普通に出来ないの？
あれじゃあ修司が可哀相よ」

「あれで内心喜んでんだよ」

「そうは見えないけどね…」

―――――――――

軽音部の重要な話を聞くために初めて生徒会室に足を踏み入れる。

真鍋以外は誰もいなかったらしい。

普通の教室とあんま変わらんな…

「単刀直入に言うわね」

俺が適当な席に座ったのを見計らって真鍋が切り出した。

「あぁ」

「軽音部は部として認められてないわ」

―――――――――

「はぁっ！？」

こういう事である。

コイツなんて言った？

軽音部が部として認められてない？

なんでだ？

「どういう事だよ？

部員四人揃ったら部として認められるんじゃねェのかよ？」

確か誰かがそう言ってた筈だ。
だから平沢が入部した事によって廃部は免れた。
それに俺も入部したから五人だ。
既定人数が足りないってことはない筈だ。

「うん　そうなんだけどね…」

「つかなんで、お前がこの事知ってんだ？」

いくら生徒会の一員だとしても、真鍋はまだ一年だ。
こういう事は三年とか生徒会長が斡旋するもんじゃねェのか？
そして何故、軽音部が部として認められてない事を知っているのか。
生徒会には何でも情報が入ってくんのか？

ここにはヴェ〇ダがあんのか？

「あぁそれはね、軽音部の誰かが学園祭のステージを借りるために職員室に来たみたいなの」

「誰か？誰だよ？」

「それは分からないけど…そこで部として認められてない事が分かったみたい

それで生徒会にも連絡がきて、ちょうど私しかいなかったから私が取り合ったの」

「なるほどね…」

納得だ。

ヴ〇ーダじゃなかったか。

「で？結局原因はなんなんだ？」

「部活申請用紙が出てないからだと思うわ」

「部活申請用紙？」

「えぇ、コレよ」

そう言って棚から一冊のファイルを取り出し、俺に渡す。

「……」

それをパラパラとめくっていく。

そのファイルの中には、『クラブ活動申請書』という紙が何枚もあった。

『茶道部』『演劇部』『吹奏楽部』『合唱部』『美術部』…ｅｔｃ．

様々な部活の用紙があるが『軽音部』のものは見当たらなかった。

「…ねェな」

「それが提出されてないと人数が集まっても部としては活動出来ないの」

「…じゃあ何か？今まで俺達は勝手に準備室を使ってたって事か？」

「そうなるわね…」

よくもまぁ、あんだけ私物（ティーセット等）を持ち込んで何も言

われなかったもんだ。

「申請用紙は生徒会からその部の部長に渡した筈なんだけど…」

「あぁ？」

今、聞き捨てならん言葉があったな。

『部長に渡した』

軽音部の部長は田井中だ。

アイツ出してねェのか…？

「軽音部の部長って誰なの？」

『デコだ』と口を開こうとした時…

バンッ！

「たのもーっ！！」

「部長は私っ！！」

生徒会室のドアが勢いよく開き、何故かポーズをキメる平沢と同じくポーズをキメめ、タイミング良く部長を名乗る田井中と…

「失礼します」

正しい入室作法の琴吹が入ってきた。

「あれだ」

「あぁ…」

田井中を指差す俺。
苦笑いの真鍋。

そういや真鍋と田井中と琴吹と秋山は平沢の追試勉強会で会ったんだったな（平沢妹情報）

「あれ？和ちゃん？」

「それにサクもいるし」

「あっ　本当だ～

サッくんに和ちゃん、なんでここにいるの？」

（俺はともかく真鍋は当然だろ）

が、その考えは甘かった…

「なんでって…生徒会に入ってるからだけど？」

「えっ！？

すごいね！流石、和ちゃんだよ！」

「生徒会に入ったって言った筈なんだけど…」

「あれ？そうだっけ？」

「……」

そうだったな…

天然なんだよコイツ…

忘れるんだよコイツ…

「お前ら本当に幼馴染みか…」

田井中がポツリとツッコんだのを心の中で同意した。

「咲也君はどうしてここに？」

「…あン？」

俺が田井中の発言に心の中で同意し拍手を送ろうかとしていると琴吹に話しかけられた。

「ま、まさかサク…生徒会に引き抜きをされてたんじゃ…！」

「えぇっ！？だ、ダメだよ和ちゃん！サッくんは軽音部なんだから、いくら和ちゃんの頼みでも、それは聞けないよ～！」

「なんの話？」

「知るか、俺に聞くな」

……

「さっき咲也にも説明したんだけど、部活申請用紙が提出されてないから軽音部は部として認められてないの」

訳の分からん誤解をしている平沢と田井中をほっといて琴吹に何故、生徒会に来たか尋ねると、軽音部問題（長いのでこれで統一）が琴吹達の耳に入り真相を確かめるために生徒会にきたらしい。

あと、秋山は部室でスキルを発動中らしいので置いてきたとのこと。

ちなみに俺がここにいる理由は説明済み。

「「「部活申請用紙？」」」

真鍋の言葉を聞き、未だに何か言ってた平沢と田井中が本題に戻り、琴吹と三人で声を揃える。

「そんな話は聞いてないぞー！」

「聞いてないじゃねェよ
お前に生徒会が渡した筈だ
どこやった？」

「…いや～そんなもの、貰った記憶が…」

「貰ってるだろう！！」

「おぉ…秋山…」

すっとぼけた事を言うカチューシャにスキルを発動し終えたのか知らんが、どす黒い怒りのオーラを纏った秋山登場しツッコむ。

あれが純粋の怒りだったら間違いなく、スーパーサ○ヤ人になっていただろう。

「ん～……あっ！！思い出した！そういえば部室の机の中に、入れっぱなしだ！」

「やっぱりお前のせいかぁぁっ！！」

「イダダダッ！！ゴメンナサイ！！」

秋山のツッコミにより考え込んでは思い出す。

それによりスーパー○イヤ人にはなりきれなかった秋山の怒り火山が噴火し、田井中の頬を引っ張る。

「澪ちゃん、りっちゃんにも悪気があった訳じゃないし…」

「そりゃそうだ、これで悪気があったら、ある意味大物だ
素晴らしいな　褒めたたえてやろう」

「ムギは甘いんだ！
咲也も訳の分からん事言わない！」

「とばっちりかよ…」

「まぁまぁまぁまぁまぁまぁ…」

「六回っ！？」

「それ好きだなお前」

「イダダダ…」

「…しょうがないわね」

俺達がギャアギャアと騒いで（主に秋山）いると真鍋の声が聞えた。

「私がなんとかしてあげるわ」

「「「「本当っ！？」」」」

「……」

真鍋の鶴の一声で喧騒が止み、有望な様子で真鍋を見る四人。

（流石、眼鏡かけてるだけはあるな…）

俺が『眼鏡＝秀才』を思っていると、真鍋が申請用紙を取り出し、必要事項を記入していく。

「軽音部っと…部員は五人……で、顧問は？」

「「「「顧問？」」」」

「ん？」

「あんた達…」

用紙から顔を上げ、そんな事を言う真鍋。

首を傾げる四人。

それを見て、呆れる真鍋。

そして疑問を持つ俺。

「…ちょっと待てよ、軽音部の顧問って山中先生じゃねェのか？」

「「「「「えっ？」」」」」

「はっ？」

俺が疑問をぶつけると五人揃って、俺を見てくる。

そんなリアクションを見て声を漏らす。

すると…

「山中先生は確か、吹奏楽部の顧問じゃなかったかしら？」

何？

「てゆうか軽音部には顧問はいないけど…」

なんだと？

「……」

真鍋と秋山の言葉に絶句する。

あの人、顧問じゃなかったのか…

平沢が入部届を山中先生に出したと言ってたし、俺も同一人物に入部届を出した。

それにちょいちょい部室に顔を出すから、てっきりそうなんだと思っていたが、違うのか…

「サッくんはなんで先生が顧問だと思ったの？」

「サッくん言うな

…なんとなくだ」

言えん…

早トチりだったとは…

言えん…

「とにかく顧問がいないと、申請用紙は提出出来ないわ」

「じゃあ、さわ子先生に頼んでみようぜ♪」

「お前…ンな楽観的に言うなよ」

「そもそもの原因は律だろ」

「でも先生って吹奏楽部の顧問やってるんだよね？引き受けてくれるのかな？」

平沢の疑問も最もだ。
吹奏楽部と軽音部の顧問の掛け持ちなんて簡単に了承してはくれないだろう。

ましてやコッチは少人数の弱小部だ。
吹奏楽部が何人いるのか知らんが、間違いなくウチよりも多いだろうし、コンクールで賞とか取ってそうな（推測）強豪の吹奏楽部と廃部寸前だった軽音部。

軽音部の顧問をやるメリットなんてねェしな。

「とりあえず、山中先生に聞いてみましょう？」

「そうだな…他に頼れそうな先生いないし…」

「俺達の担任は？」

「あの先生はオカルト部の顧問よ」

「和ちゃん何でも知ってるね～」

「自己紹介の時言ってたじゃない…」

「「あれ？そうだっけ？」」

「聞いときなさいよ…」

そんな人生で何の役にも立たなさそうな情報、一々覚えてねェよ。

てかオカルト部って…

「じゃあさわ子先生に会いに行こうぜ～」

話がまとまった?ところで田井中が声をだし、生徒会室を後にし職員室に向かう事に。

第十八話（前書き）

顧問編その二です。

第十八話

職員室。

「いないね、さわ子先生」

真鍋に別れを告げ、職員室に来たのは良いが目的の人物はいなかった。

代わりに…

「なぁ」

「ん？どうしたんだお前ら？」

担任がいたので話しかけてみる。

「山中先生知らねェッスか？」

「山中先生？…さっき出て行ったけどな…
先生に何か用か？」

「まぁ　ちょっと…」

わざわざ理由を言う必要がないので曖昧に返事をする。

理由を言ったらメンドーな事になりかねん。

が、隣にいた天然が…

「軽音部の顧問を頼もうと思いまして」

言いやがったよ…

「顧問？…お前ら顧問、いなかったのか？」

「はい」

答えんな…

「顧問もいないで今まで勝手に音楽室を使ってたのか？」

ほら…メンドーな事になってきた…

「で、でも！練習はちゃんとしてましたし、他の部には迷惑かけてない…と思います…」

秋山が必死にフォローするが、自信がないのか最後はしりつぼみになっていった。

それを聞いた担任が…

「ふむ、なら良いか」

「良いのかよ」

適当だなこの担任。

そのおかげで面倒事を回避出来たんだけど…

とりあえず担任がいてもしょうがないので山中先生を捜索するために職員室を出ていこうとしたら…

「桐島」

「あン？」

担任に呼び止められた。

「やり直しの課題、ちゃんとやってこいよ」

「殺るっつうの」

「字が違うぞ」

「俺より修司に言った方が良いんじゃないッスか？」

「それもそうだな…」

「サッく～ん　いくよ～」

「サッくん言うなっての…
じゃ　課題はちゃんとやるんで」

「当然だ
あと制服はちゃんと着ろ」

職員室のドアで四人が待っているので、話を切り上げ歩きだす。

担任が何か言ってたがスルー。

……

「さっきまで先生いたんだけどね～」

職員室から出て、俺達にとって鍵となる人物を捜索してると平沢がそんな事を言う。

「お前、職員室行ったのか？」

「うん　ギターの練習してたら弦で指切っちゃって　ホラ」

そう言って左手の人差し指を見せてくる。
そこには絆創膏が貼られていた。
ギター初心者は指先が柔らかいからな…
ギターやってくうちに硬くなるまで何回かまた指切るだろうな…

「でね　ちょうど先生が来て、職員室で絆創膏貼ってくれたの」

「ふ〜ん」

と、俺と平沢が会話をしていると…

「あっ　いた！あそこ！」

秋山の声が聞えその視線の先を辿ると、生徒と話をしている山中先

生の姿。

「よしっ！サク！」

「あン？」

「それ貸して？」

『それ』…俺の左手にある課題を指差す。

「なにすんだ？」

疑問に思いながらも田井中に渡す。

「サンキュー！ちょっと借りるよ～」

「そのままお前が課題をやってもかまわんぞ」

「それは遠慮しとくよ」

そう言って数枚ある課題を二つに分け、クルクルっと筒状にし、それを双眼鏡の様に眼に当てる。

「りっちゃん、どうしたの？」

「さぁな」

琴吹が疑問に思ったらしく俺に聞いてくるが、俺にもさっぱりだ。

山中　さわ子。

我が校の音楽教師である。

その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で、生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。

更に楽器の腕前や歌声も素晴らしく、ファンクラブが存在するほどの人気がある」

「あの…さっきから何を言ってるの？」

「……」

いきなり双眼鏡の様にした課題を眼に当て、何をしだすかと思えば…

ナレーション口調（特技らしい）で山中先生を褒めちぎりだした。
それが聞えた山中先生から最もな疑問がでる。

「「「「先生っ！！」」」」

「はいっ！」

ここで俺以外の四人が声を合わせる。
それにより驚きながらも返事をする山中先生。
そして部長から本題を切り出す。

「軽音部の顧問になってください！」

「まだ、顧問いなかったんだ…」

「先生しか頼める人がいないんです」

「お願いします」

「……ごめんなさい
なってあげたいのは山々だけど…私、吹奏楽部の顧問しているから、
かけもちはちょっと…」

困った様に表情でそう告げる。

やっぱそうなるわな。

「そんな～…」

「本当にごめんなさいね」

「（田井中…ゴー）」

「（ラジャー）」

田井中に小声で合図を出し…

今まで声をかけてきた男は数知れず…」

「だ、だからおだてても無理です！」

「…チッ」

よいしょして勢いで顧問にさせようと目論んだが、あえなく失敗。

「時間なら取らせません！」

「練習も自分達でやりますから！」

「ここに名前書いて、ハンコ押すだけ！
ねぇ簡単でしょう～」

ピラッと部活申請用紙を出し、山中先生の前に突き出す。

「やらないだったら俺が勝手に先生のハンコを偽造して、筆跡も真似して書くぞ？」

「何言ってるの…桐島君？そんな事出来る訳ないじゃない…」

「チッ」

軽く脅してみたがアッサリと受け流された。

その後も押問答が続くが一切に進展なし。

（本当に偽造するか？）

犯罪じみた事を考えてると山中先生をジーっと見ていた平沢が、この事態を急転させる言葉を放つ。

「先生はここの卒業生ですよね？」

「え？えぇ…」

「さっき、昔の軽音部のアルバム見てたんですけど…」

「え”っ！？」

（ん？）

急に顔色が変わった…？

「…ア、アルバムはどこにあるの…？」

「ほぇ？部室ですけど…」

平沢のその言葉を聞き…

「そう…」

ダッ！

脱兎の如く走り出した。

「「えっ！？」」

「「先生！？」」

急に走り出した山中先生に驚きの声をあげる俺以外の軽音部の面々。

そりゃそうだろな。

しかしあの反応…何かあるな。

「どうしたんだろ先生？」

「てゆうかドコに行ったんだ？」

「…部室だろな」

「「「「部室？」」」」

平沢と田井中の疑問に答える。

そして重なる声。

ナイスチームワークだ。

「咲也、分かるのか？」

「考えてもみろ…
平沢が『部室でアルバムを見た』っと言った瞬間、あきらかに態度が変わった」

「そういえば…咲也君の言う通り…」

「山中先生おかしかったな…」

「そしてこの学校の『卒業生』…つうことは部室に見られたくない『何か』があるんじゃねェの？」

「…もしかして」

と田井中がポケットから何かを取り出す。

「…写真？」

と琴吹。

それはヘビメタメイクをした女性が写っている写真。

「りっちゃん、持ってきたんだ」

「どうしたんだ律？その写真」

「これが昔の軽音部の写真だよ

さっき唯と見てたんだ」

「私この写真とさわ子先生見て、似てるな～って思ったんだよ」

「じゃあまさか…この人が？」

「先生だろうな…
これで決まりだな

ソレが見られたくない『何か』だ」

琴吹の問いに答える。

つまりこの派手メイクが過去の『山中　さわ子』

そしてそれを隠そうと脱兎の勢いで部室に走っていったってとこか。

「とりあえず先生を追おう！」

「そうだな！行くぞ！」

秋山の言葉に田井中が頷き、四人は走っていった。

「……」

そして俺はこんな暑い日に走る気など更々ないため、パタパタと扇子を扇ぎながらダラダラと歩きだした。

……

♪♪♪～♪♪♪～♪♪

階段を上っていると、何やら超絶ギター音が聞こえてきた。

（平沢…じゃねェな）

アイツがこんな超絶ギターを弾ける訳がない。

（じゃあ…先生か？）

あの写真を見る限り音楽をやっていたみたいだしな。

（正に軽音部の顧問にもってこいだ）

そんな事を思い、未だにギター音が鳴り続ける部室に着き、開きっぱなしのドアから中の様子を伺うと…

「歯ギター！？」

「あぁ…私のギター…」

♪♪♪♪ー♪…

「オメェら！！音楽室好きに使いすぎなんだよ！！！」

「「「「ゴ、ゴメンなさい！！」」」」

「……」

なんだこの状況？

先程と一変し、目付きとキャラが変わった山中先生がそこに。

何故かキャラ変わりした先生が歯ギターを披露したかと思えば正論を叫び、それを聞いた平沢達が土下座し謝る。

「大体なぁ！！

……はっ！」

と、ここで素に戻り、正座をしている平沢達と、ドアで静観している俺を見て…

「今の…見た？」

「「「「…うん」」」」

「…バッチリと」

俺達の答えを聞いたその瞬間…

ガクッ

「……ううう……先生になったら、おしとやかキャラで通すって決めてたのに…

…あれはもう、八年も前のこと…」

「いきなり語りだした！」

「聞いてねェよ…」

膝から崩れ落ちて嘆いたかと思えば、遠い眼をして過去を語りだした。

……

「…所詮そんなものよね…」

「…自業自得じゃね？」

学生時代に好きな男を振り向かせようとヘビメタを始めたが、やり過ぎて引かれた…大まかに言うとこんな過去だった。

「…先生…」

過去話を聞いて一同呆然としている中で唯一、話を聞き入っていた平沢が声を漏らす。

てか何でそんなに熱心に聞いてんだよ…

「いいの…慰めの言葉なんて…」

ポン

「先生…顔を上げて」

「りっちゃん…」

田井中が黄昏る先生の肩に手を置き慰める……かと思えば…

「みんなにバラされたくなかったら顧問やって下さい」

脅した。

「…ちなみにさっきの一件、ケータイの動画に収めてあるんで…意味分かりますよね？」

そして俺はそれに便乗し、おもむろにケータイを取り出し畳み掛ける。

「み、澪ちゃん…サッくんが黒いよ…」

「う、うん…何だか後ろに黒いオーラが見える…」

そんなに会話が聞えたが無視だ。
今はこの人に首を縦に振ってもらわなければ。

「「さぁ　どうする？」」

田井中と共に最後通告を送る。

「わ、分かったわ…やります…」

山中砦陥落。

……

♪♪♪♪♪♪～～♪♪♪♪♪♪～♪♪…

無事に（？）顧問が決まり学園祭へ向け、曲を聞いてもらう事に。

今やってる曲は『A』の方だ。

ちなみに俺がケータイで撮った動画というのは嘘だ。

それを聞いた先生が心底ホッとしていたのが印象的だった。

♪♪♪…

「って感じのオリジナルなんですけど…」

「どうですか！？顧問として！」

「う～ん…いいんじゃない？よく練習したみたいね」

御褒めの言葉を頂いた。

それを聞いて喜ぶ平沢達。

合宿から帰ってきて、夏休み中にも集まり、練習したからな。

上達してなきゃおかしいだろ。

…けど一つ問題がある。

「けど…ボーカルはいないの？」

「あっ！？」

そう…ボーカルがいない。

つうか秋山…気付かなかったのかよ…

「じゃあ…まさか歌詞もまだ…とか？」

「え、えっと…」

「それでよく学園祭のステージに出ようなんて考えたわね…」

体を震わせながら怒り寸前の様子で言葉を放つ。

そして…

「音楽室占領して今まで何やってたの!?
ここはお茶を飲む場所じゃないのよ!!」

怒り火山噴火。

「サッくん〜…」

「何で俺の後ろに隠れんだよ…」

「だって〜…」

怒気に当てられ縮こまる四人。
秋山なんか半泣きだ。
更に平沢は俺の後ろに隠れてしまった。

「はぁ…」

ため息をついていると…

「田井中さん!!桐島君!!」

「ハ、ハイッ!」
「あン?」

何故か名指しをされた。

「『部長』と『副部長』なんだから、あなた達がしっかりしなきゃダメでしょ！！」

ん？誰がなんだって？

「す、すみません～…」

「おい、ちょっと待て…

俺は副部長なのか？」

そんな役割を受け持った覚えがないのでとりあえず琴吹に聞いてみ

る。

「…あっ…それは…さっき申請用紙に副部長の名前が必要で…りっちゃんが咲也君の名前を…」

「テメェ何してんだよ」

人の意見も聞かず、勝手な事をしたカチューシャを睨む。

「いやっ　だ、だってさ！ふ、副部長の名前が必要なんて、し、知らなかったし…

そ、それがないと申請出来ないし…」

シドロモドロになり冷や汗を流しながら答えるカチューシャ。

「だとしてもだ
何で俺だ?秋山か琴吹の方が適任だろうが」

平沢の名を出さなかったのは言うまでもない。

「サ、サクの方が適任かな~って…

それに入部した時言ったじゃん!!
『副部長のポジション空いてる』って!!」

「あぁん!?逆ギレかテメェ!」

確かにそんな事言ってた気がするが、そんなもん了承して入部してねェぞ。

「サッくん、りっちゃん、喧嘩はダメだよ～…」

「そ、そうよ　落ち着いて？」

俺達の少々険悪な様子に平沢と琴吹が仲裁に入る。

秋山に至ってはオロオロして涙腺決壊寸前だ。

「と・に・か・く！！！」

「「「「ひぃ！！」」」」

「…うるせェ…」

忘れ去られていた山中火山が再度噴火し、今日一番の声をだす。

耳キーンを防ぐために耳を押さえる。

「歌詞をちゃんと考えて、ボーカルを決めなさい！！

大体ねぇ！！」

まだ何か言い足りないらしいズカズカと近付いてくる。

その恐怖におののき更に体を縮こませる四人。

秋山は…あっもうダメだな…

平沢は…

「ぅ〜…」

俺の後ろに隠れ、グイグイと背中を押してくる。
犠牲になれってか。

「先生っ！！」

「あぁん！？」

と、ここで勇敢な勇者（琴吹）が武器（ケーキ）を持ち、立ち向かった。
つうか良くこの暑い日に持ってきたな…腐るぞ？

「ケ、ケーキ…いかがですか…？」

その効果は…

「いただきますっ！！」

てきめんだった。

「もう訳分かんねェ…」

カオスだ…

第十八話（後書き）

…おかしいなぁ

今回で顧問編終わる筈だったのに…

第十九話（前書き）

その三です。

お、終わらない…

第十九話

「「「出来た！？」」」

「あ、あぁ…」

翌日。

琴吹のケーキで何とかその場は収まり、秋山が曲Ａの歌詞を書いてくることになり部活は終った。

副部長の件に関しては田井中が珍しく素直に謝ってきたので渋々だが俺がやることに。

副部長がいないと部活申請用紙が提出出来ないので苦渋の決断だった。

「見せて♪見せて♪」

「えっ！？もう？」

「いや　もうって」

「私もみたいな」

「で、でもやっぱり恥ずかしい…」

で今、何をしてるかと言うと、秋山が曲Ａの歌詞を書いてきたので、その発表会。

部室には部員全員と顧問が秋山の歌詞を確認するため集まっていた。

つうか一日で書いたのか…

スゲェな…

「大丈夫だよ～笑ったりしないし～」

「そうそう～」

「でも…あぁっ！待て！」

「待てない！持ってきたってことは見せるってことだろ？」

「澪ちゃんお願い」

「ちょ～っとだけ、こそ～っと私に～」

「あっ　ずりぃ！見るなら私が先だろ～？」

「え～　何で～？」

「何故なら！私が部長だから！」

「むっ　ならば！私は澪ちゃんの心の友だから！」

「じゃあ私は澪ちゃんの心の友その2だから～」

「こしゃくな！私なんか澪の心の故郷だぞ！」

「いつからそうなった？」

「あっ　田舎のおばあちゃん元気かな～？」

「いや　今関係ないから」

「あっ　去年、年賀状出したっけ～？」

「話をそらすな～！」

「早くしろよ」

バッ

「あっ！？咲也！」

中々歌詞を見せようとしないので秋山の後ろから歌詞が書いてあろうルーズリーフを取り上げる。

「ずるい～サッくん！
私が最初に見るのに～」

「そうだ！卑怯者！」

「うるせェ　どうせ見るんだから早いも遅いも関係ない
…それにあれ見てみろ」

「あれ？」

俺が指差した先には…

「……」

ピクピクして今にも噴火しそうな顧問の姿。

「昨日の二の舞はごめんだ」

「あっ！待って咲也！」

秋山がまったをかけるが無視し、歌詞を見る。

その内容は…

「……」

「どうしたサク？」

「…感想は個々に任せる…」

そう言いってルーズリーフを先生に渡す。

「どれどれ…」

そしてそれを俺と秋山以外が覗き込む。

「「「「……」」」」

凝視。

「「うおお…体が……かゆっ…！！」」

そう言いって全身をかきまくる部長と顧問。

まぁあれだ…秋山が書いてきた歌詞はメルヘンティックな内容だった。

『ふわふわ』や『マシュマロ』や『うさちゃん』『くまちゃん』など…

この歌詞を載せて曲Ａを学園祭で演奏すんのか…

正直ない…かなぁ…

「わ、私としてはいい感じに書けたと思うんだけど…」

秋山の声が聞え、視線を向けると…

「やっぱりダメかなぁ…」

やべっ…泣く寸前だ。

「ダ、ダメって言うか…」

「そうそう！ちょいイメージと違ったって言うか…」

「よくこんな恥ず「シャラップ！」…なんで英語だ」

秋山のイメージと全く異なったのでその思いを口にだそうとしたら、
何故か田井中に英語で『黙れ！』と言われた。

そして小声で…

「（何言うつもりだったんだよ？）」

「（よくこんな恥ずかしい歌詞思いついたなと）」

「（そりゃあ私も思ったけどさストレートに言うなよ）」

「（心配すんな、ちゃんとオブラートに包む）」

「（サクの場合、オブラートからはみだしそうだな…）」

「（失礼だなお前）」

俺と田井中がヒソヒソと話ていると、今まで黙ってた平沢が口を開いた…

「すごくいい…」

「マジでっ！？」

「……」

キラキラと周りに星を飛ばしうっとりとした顔つきで褒めたたえる。

「私はすごく好きだよ！この歌詞！」

「ほ、本当？」

「うんっ！」

「「……」」

平沢との感覚の違いを感じ絶句する俺と田井中。

「ム、ムギはどう思う？」

「無駄だ、田井中…」

「えっ？…って超うっとりしてる！？」

黙っていた琴吹に意見を求めるが、そこには平沢同様…いや、それ以上の星を飛ばしうっとりしてる琴吹が。

分からん…コイツらの感性が分からん…

「ま、まさか…ムギも気に入ったの？」

「はいっ」

「正直こういうのアリ？」

「うんっ」

「…本当に？」

「ＹＥＳ」

「なんで英語だ」

「マジで？」

「どんとこいです」

（ん？）

俺はここで違和感を感じ取った。

それは琴吹の視線。

田井中の質疑には答えているがまるで田井中の方を見ていない。

視線の先には…

「すごいね澪ちゃん！こんないい歌詞書けるなんて！」

「あ、ありがとう、唯」

手を取り相変わらず褒めちぎる平沢と照れながらも嬉しそうな秋山の姿。

その二人から視線を戻すと…

「ぽー…」

「ム、ムギ！？」

『超』を越え『激』うっとりしてる琴吹。

「本人同士がいいなら、いいんじゃないでしょうか！」

「えっ　何言ってんの…？」

「……」

コイツ…そっちの方に属性あんのか？

（お前…何者だよ、本当に…）

琴吹の謎がより深まった。

「どうしよう…サク…

このままじゃこの歌詞に決まっちゃうよ…」

「…後一人、絶対的な権力を持つ人物がいるぞ」

「…あっ　そうか！」

『部長』の田井中や『副部長』の俺よりこの部のなかで権力がある人物。
それは…

「さわちゃん！」

「さわちゃんっ！？」

顧問の山中　さわ子だ。

この人はあの反応を見る限り、俺と田井中と同じ『この歌詞どうだろう』党だ。

教師であり顧問なのだから『反対』に票を入れればその一票の価値は十票ぐらいあるだろう……多分。

「さわちゃんはこの歌詞ないと思うよね！？」

「えっ　そ、そうね…」

「だよね！」

「…よしっ」

小さくガッツポーズ。

「……まてよ？」

「ん？」

賛成派三人、反対派三人になり、反対派の一人の一票はそれ以上の価値があるので（持論）秋山には悪いが残念ながらこの歌詞は否決となり閉廷になる筈だったが、何やら山中教諭が考えだした。

そして…

「わ、私も～この曲～好きかも～♪」

「あれぇ！？」

「……」

何を思ったが知らんが、急に態度をキャピキャピし、賛成に。

これでは賛成四、反対二に…

しかも一以上の価値があるので（多分）もう抗えない…

つうか…

「…アンタいくつだ」

「二十三よ！何か悪い！？」

「……別に」

「なによ！？その間は！」

「別に」

……

結局…

「それじゃあ　もうこの歌詞でいくか…」

「はぁ…」

「「わーいっ！」」

「良かったね澪ちゃん！」

「あ、うんっ」

『この歌詞どうだろう』党は『好きですこの歌詞』党の前に敗北を喫することに…

二名ほど怪しいがな…

「そういえば…」

「あぁ？」

「咲也が作った曲の歌詞はどうするんだ？」

「「「あっ」」」

「……」

「桐島君が作った曲？」

ここで『好きですこの歌詞』党の党首からの疑問が。

…まだ言ってなかったな…

「…それなら出来てる」

「えっ！そうなの咲也！？」

「咲也君いつの間に書いてたの？」

「合宿中から」

「じゃあ早く出来てたんだ」

「いや　三日前に」

「遅いわ！！」

部長会心のツッコミ。

仕方ねェだろうが、全然全くちっとも歌詞が浮かばなかったんだからよ。

一日で書いてきた秋山にやらせるべき…いや、二曲ともメルヘンになる…

それは避けたい…

「サッくん！見せて♪見せて～♪」

「サッくん言うな」

「ちょ、ちょっと待って！」

「どうしたさわちゃん？」

「えっ　もう一曲あるの？」

「うんっ　そうだよ！サッくんが作った曲が！」

「昨日演奏した曲と咲也君が作った曲の二曲やろうと思いまして」

「それを早く言いなさいよね…」

呆れた様に言う山中教諭。

そりゃそうだろうな、言ってねェし。

まぁ昨日は言うタイミングなかったし。

「じゃあ今からその曲やってみて」

「「了解！」」

平沢、田井中両隊員、敬礼。

「はぁ…」

……

それは曲Ｂの演奏準備中に問題が発生した…

「ボーカルどうすんだ？」

俺の一声で。

「どうするって咲也しかいないだろ？」

「はぁ？」

なんだと？

「何で俺なんだよ？」

「何でって…」

「歌詞知ってるのはサクしかいないじゃん」

そうなんだが…

歌うの好きじゃねェし…

（誰が他の奴に…）

そう思い周りを見渡す。

「サッくんの歌声聞きたいな～♪」

キラキラした表情の平沢と…

「私も～」

ニコニコした表情の琴吹。

更には…

「ジー…」

ジロジロと視線で訴えてくる田井中と…

「…ぁ」

チラチラとこっちを見てくる秋山。

「……」

逃げ場なし…

「はぁ…やりゃあいいんだろ…」

俺しか歌詞知ってる奴いねェしな…

出来たその日に言えば良かった…

「後の祭だ…」

……

「……」

「「「「「♪」」」」」

しかし、なんだこの状況…

目の前には五人観客が。

平沢の『サッくんの歌声聞いてみたいな～♪』発言により、演奏をする前に俺の歌詞を知る必要がある事が判明し、アコギで弾語りするはめに…

「はぁ…」

ため息をついても状況は変わらんのでやるしかねェか…

♪♪♪～～♪♪♪…

「『……

……

……』」

♪♪♪…

終了。

「「「「「おぉ〜」」」」」

パチパチパチパチッ！！

拍手喝采を頂きました。

「歌うまいね！サッくん！」

「やっぱりスーパーマンだな！」

「本当ね　それになんだか物語みたいな歌詞だったわね」

「あっ　それ私も思いました！
すごいな咲也は！
こんな歌詞書けるなんて！」

「うんっ　そうね！」

「…ありがとよ…」

等々感想を貰った。

俺が書いた歌詞は山中先生が言っていたように物語的な内容だ。

とある虹を探して旅をする男の物語。

合宿時の『虹』を見て書いて歌詞。

親父の職業が小説家だからか知らんが、こんな内容になってしまっ

た。

遺伝かね…

つうか秋山もスゲェと思うぞ。

平沢を筆頭に全員満足したようなので改めて全員で演奏することに。

♪♪♪～♪♪♪…

俺のボーカル付きで…

……

「じゃあ澪がボーカルってことで」

曲Ｂの演奏が終わり、山中先生から昨日の曲Ａ同様、御褒めの言葉を頂き俺が…

「あっちの曲のボーカルどうすんだよ？俺はやらんぞ」

と発言をしたことにより再び問題発生。

秋山が…

「えっ！咲也やらないの！？」

「当たり前だ」

と酷く仰天していたがそこは全力で肯定した。

あんな恥ずかしい歌詞歌えるか…

歌った日にはマジで死ねる。

で、田井中のこの言葉だ。

「え？」

鳩が豆鉄砲食らった様な表情の秋山。

「わ、私は無理だよっ！」

「なんで？」

「だ、だって……こんな恥ずかしい歌詞なんか歌えないよお！！」

「おい作者！」

「『恥ずかしい』っていう自覚はあったんだなお前」

いい感じに書けたんじゃねェのかよ…

クイクイ…

「あン？」

誰かに制服を引っ張られ振り返ると…

「♪」

キラキラした平沢が。

「…なんだよ」

「私が歌う！」

「だそうだ田井中」

何やら顧問と話してる部長に告げる。

「えっ　なにが？」

「ボーカル　コイツがやるってよ」

ポンと平沢の頭に手を置く。

「りっちゃん！私やりたい！」

「うぉっ！輝いてる！」

「澪ちゃん！ムギちゃん！、いいかな！？」

「う、うん是非」

「私はキーボードで精一杯だから」

「やったよサッくん！」

「知らんがな」

コイツ秋山の歌詞、えらい気に入ってたからな。

そんなに歌いたかったのか…

やっぱ分からんなコイツの感性…

「それじゃあちょっと歌ってみようか」

「ラジャーっ！！」

過去最大級の敬礼。

今度は平沢がレスポールで弾語りをする事に。
それを見守る俺達五人。

つうか出来んのかアイツ？

「『♪君を見てるといつもハート「ちょっとちょっと！」…えっ？」

「ギター弾きながら歌わないと～」

「あっ　そっか！忘れてたぁ～」

「おいおい…」

「はぁ…」

無理だった。
しかもギター弾く事を忘れるというサプライズ付きで。

（流石天然…）

「えーっと…」

気を取り直し再度チャレンジ。

♪♪♪♪…

ギターは弾けてる。

♪♪♪…

が…

「歌えよッ！！」

今度は歌を忘却するサプライズ。

故にツッコんでしまった。

「サクが全力でツッコんだぞ…」

「珍しいな…」

恐ろしき天然め…

……

「ギターを弾きながら、歌を歌えない…」

「咲也君」

「あン？」

「唯ちゃんに教えてあげて？師匠だし」

「師匠じゃねェっつうの…却下だ」

弾語りが出来ず落ち込む平沢を見た琴吹がそんな提案してくるが却下だ。

「俺より適任者がいる」

「適任者？」

「ん」

そう言って指差す先には…

「しょうがないわね～
先生が特訓してあげる」

見兼ねた山中教諭が平沢に指導を提案しているところだ。

「先生っ」

「じゃあまず歯ギターの練習から「それはいいです」

「あっでもサッくん師匠が「教えてもらえ」…えっ？」

「俺が教えるより経験豊富な先生の方が効率がいい」

「サッくん…」

「つうことで先生頼むわ」

「私はかまわないけど…」

「……」

複雑な表情の平沢。

コイツは俺に悪いとか思ってんのかねェ…

別に良いんだがな…

「はぁ…平沢」

「…なに？」

「今から先生が『師匠二号だ』だ」

「「「えっ？」」」

「お前には師匠が二人いる…
こんな事中々ないぞ」

「師匠が二人…」

「そうだ…しかも師匠二号から今なら菓子が貰えるぞ」

「えっ私が？」

「いやいやサク…いくらなんでもそれは…」

「先生お願いします！」

「のってきたーっ！？」

流石は平沢だ。
菓子に釣られたな。
俺が師匠なのはこの際致し方ない。

「じゃあ振り落とされないようについてきなさいよ！！」

「ラジャーっ！！」

バタンッ

二人は熱血スポーツ漫画の様なノリで部室から去っていった。

「つうことだから俺はやらん」

「……」

「ん？」

琴吹に答えを示したがうんともすんとも言わないので琴吹を見てみると…

「ぽー…」

「……」

またもやトリップしていた。

「ねぇ咲也…」

「あン？」

「ムギ、どうしたんだ…？」

秋山が琴吹の異変に気付き俺に問い掛ける。

コイツはさっき平沢との絡みを見ていた琴吹を知らんからな…

まぁ平沢の相手が本人だったから知るはずねェんだが…

「……」

なんて答えるべきか…

どストレートにいくか？

いや、確信持てねェし…

ほぼそうなんだと思うんだが…

（うーむ…）

俺が結論を悩んでいると…

「ムギーっ！さわ子先生の事好きなのか～？」

「バカっ！」

「…アホ」

中々答えなかった俺を見限ったのか知らんが、秋山が田井中に聞いたんだろう。

その疑問を聞いて答えを導き出した田井中がどストレートに琴吹に投げ込む。

秋山が急いでピッチャーの口を塞ぐが時既に遅し…

「えっ？」

「えっ？」

「…あぁいえ…
ただ女の子同士っていいなって」

「えっ？まさか…」

「なぁんだ～良かった～」

「えぇっ！良いのかよ！」

「……」

（イカンこの話の内容は…俺が聞いて良いものではない…）

そう判断した俺はゆっくりと部室から姿を消した…

第二十話（前書き）

その四です。

唯の台詞が読みにくくなってしまってます…
仕様とはいえすみません。

第二十話

次の日の放課後。

「『類似』と『疑似』ってどう違うんだろうな？」

「…『類似』がマ〇オで『疑似』がル〇ージみたいなもんだ」

「えっ！？兄弟なの！？」

どうでも良い疑問を持ってきた修司を適当にあしらっていると…

「サッくん」

平沢が話かけてきた。

「あン？　つうかサッくん言うな」

「えっとね今日部活いけないんだ」

てっきりいつもの様に『部活行こう』と言ってくるもんだと思っていたが真反対な言葉が出てきた。

「何か用事でもあんのかよ？」

「うん　今日からさわ子先生の家で特訓があるんだ」

「ふーん」

わざわざ家に招いてまでやるか…

余程の気合いのいれようだなあの人。

「だからみんなに言っといてくれないかな？」

「あぁ…分かった」

「ありがとう～♪

じゃあサッくん、修司君、また明日♪」

「バイバイ～唯ちゃん」

そう告げて、ヒラヒラと手を振り教室から出ていった。

「なぁ」

「あン？」

と、平沢に手を振っていた修司が話かける。

「唯ちゃんの特訓ってなんだ？」

「ガ〇ャピンとム〇クの声色を真似る特訓だ」

「マジでッ！？」

「嘘だ」

「嘘かいッ！！」

相変わらず騒音でツッコんでくる。

そんな地球に優しくない物体をあしらい部活に行くために席を立つ。

――――――――――

「そっか　唯はこれないのか」

「あぁ」

「唯ちゃんの特訓はいつまでかかるの？」

「さぁな　本人達が満足するまでじゃねェの」

部室に行き、既に来ていた三人に平沢が特訓のため部活には参加出来ない旨を伝える。

「まぁ平沢のことは先生に任せて俺達は…」

「ティータイムだ♪」

「練習だろっ！」

「はぁ…」

部長が戯言を言い、それを秋山がツッコむ。
そして俺のため息。

学園祭まで余り時間がねェっうのに何言ってんだこのカチューシャは…

「…で、お前は何やってんだ？」

「えっ？」

そして淡々とティータイムの準備をする琴吹。

「ム、ムギまで…」

「だって今日はケーキ持って来ちゃったから早めに食べないと悪くなっちゃうし、ね？」

そう言ってケーキが入ってあろう箱を掲げる。

『ね？』って言われてもな…いや、確かにそうなんだがな…

今日も残暑が厳しいし腐るかもしれんが…

てか持ってくんなよ…

「おっケーキ♪」

「ケーキ…」

秋山がケーキの誘惑に負けかけている。

陥落寸前だ。

「食べようぜ澪、サク

じゃないとせっかくムギが持って来てくれたケーキがダメになるぞ～？」

「…じ、じゃあ…これ食べたら練習するからな！」

「はぁ…」

陥落。

「咲也君もどうぞ」

琴吹がニコニコしながら俺の前にケーキが乗ってる皿を出してくる。

「はぁ…さっさっと食って練習すんぞ…」

「分かってるよ♪練習前の息抜きだ♪」

「練習前に息抜きしてどうすんだよ…」

最早何を言っても無駄な気がしたので渋々席に着き、ケーキを食す事に。

しかしあれだな、さっきまで渋ってたというのに…

「♪♪」

秋山の奴、一口食った途端幸せそうな表情になるな。

（女は甘い物が好きなど言うが、やっぱそうなのかねェ…）

そんな事を思いながらティータイムは終わり、約束通り練習に励み部活は終った。

そして…

―――――――

学園祭まで後四日と迫ったとある夜の事…

ある重大問題が生じた…

……

それは自室にてサッカー雑誌を読んでいるときだった…

ブブブッ　ブブブッ

「ん？」

突然ケータイが震えた。

読んでいた雑誌を閉じ、未だに震えるケータイを手に取り、誰からだと思いディスプレイ画面を見る。

そこには…

【平沢　憂】

の文字が。

平沢姉妹からはちょくちょくメールが来るので特に疑問を持たずケータイを開きメールを確認する。

【件名：無題】

（ん？）

疑問を持たなかったが、持ってしまった。

いつもなら妹は（姉もだが）件名に何かしらタイトルがあるのだが、それがない。

「……」

些か不思議に思いながらも本分を確認する。

これが問題だった…

『お姉ちゃんが喉を枯らせて帰ってきたんですが、大丈夫なんでしょうか？

学園祭ではお姉ちゃんがボーカルをすると言っていたので…』

「はぁあ！？」

重大問題発生。

声が枯れただと？

何をしたらそんな事になるんだ？

件名がなかったのは急ぎだったからか…

とりあえず詳しい状況を知るために、妹には返事のメールを打たず姉のケータイに電話する。

プルルルル…プルルルル…

「……」

プルルルル…プルルルル…

（でねェ…）

何故か全く電話に出ないのでメールで『デロ』と打診し再度チャレンジ。

プルルルル…プルルルル…

「……」

プルルルル…プルルルル…

「出ろやッ！」

変化がないので多少イラつき、ケータイをベッドに投げ付けようかとしたがグッと堪え、この状況を打開する策として妹の方に電話する。

プルルルル…プル…

「『はい　もしもし』」

「……」

繋がった…ナイスだ妹。

「『もしもし？咲也さん？』」

電話が繋がった事に軽く感動を覚えて黙っていると、平沢妹から再度声が。

「あぁ…わりィ…少し感動してな」

「『えっ？感動？』」

「気にすんなコッチの話だ」

「『？…そうですか…分かりました』」

まだ疑問気味だが納得したようだ。

感動したことを分かってもらおうとも共感してもらおうとも思わないので全然良いんだがな。

「電話した用件はお前の姉の事だ」

「『あっ　メール見てくれたんですね』」

「あぁ　で、どんな状態なんだ？」

「『それが…お姉ちゃん、すごく声がガラガラで…』」

「…原因はなんなんだ？カゼか？」

「『それが…特訓をやり過ぎたって言ってましたけど…』」

「はぁ？」

特訓のやり過ぎで声が枯れたのか？

どんだけやってんだよ…

つうか先生も一緒に特訓に付き合ってた筈なのに何故このような事態になったんだ？

「『あの、咲也さん』」

「あン？」

「『お姉ちゃんに代わりましょうか？本人に聞いた方が分かりやすいと思いますから』」

そんな平沢妹の提案。

そうだな実際に声を聞いてみなけりゃどの程度か分からんしな。

もしかしたら一日で直るぐらいのもんかもしれねェし。

「…そうしてくれ、つうか元々、お前の姉貴のケータイにかけるつもりだったんだが、繋がらなかったからお前に電話したんだ」

「『そうだったんですか…
お姉ちゃん、お風呂に入ってたからケータイに出れなかったんだと思います
もう上がってますからちょっと待ってて下さい』」

「あぁ」

そう言うと少し間が空き『コンコン』とノック音がケータイから聞

え…

「『お姉ちゃん入るよ？』」

どうやら平沢姉の部屋に行ったようだ。

「『……』」

「『……』」

「『……』」

よく聞こえんが平沢と話をしているらしい。

そして…

「『もしもし？サックン？』」

「誰だ」

思わずそんなことを言ってしまうくらいの濁声が俺の耳に入ってきた。

「『唯だよ』」

「……」

濁声の正体は平沢だった。

俺の脳が平沢だと感知出来ないぐらいのしゃがれた声だ。

（これは…想像以上だ…）

こんな声じゃ一日や二日じゃ回復不可能なんじゃないのか？

「『ごめ〜ん〜ね〜お〜風〜呂〜入〜って〜て〜電〜話〜に〜出〜れ〜な〜か〜った〜ん〜だ〜

メ〜ール〜と〜着〜信〜がき〜て〜た〜か〜ら〜、今〜か〜ら〜電〜話〜しよ〜う〜と〜思〜った〜ら〜ちょう〜ど憂〜がき〜た〜か〜ら〜よ〜か〜った〜よ〜〜』」

「…いや、ンな事よりお前、その声…」

「『特〜訓〜や〜り〜過〜ぎち〜ゃった〜☆』」

「アホかお前」

なにが『やり過ぎちゃった☆』だ。

スキルアップのための特訓で喉潰すなよ…

「はぁ…」

ため息一つ。

「…分かった、妹に代われ」

「『え〜っ　も〜う〜ち〜ょっと〜話〜そ〜う〜よ〜』」

「良いから代われ」

「『ぶぅ～分〝か〝った〝よ〝…

は〝い〝っ憂〝』」

平沢の声の具合を確認するだけで良かったので長話をする気はナシだ。

…それにあんまり話すと平沢の声が悪化しそうだ。

「『はい　代わりました』」

先程から俺の鼓膜を刺激し続けていたしゃがれボイスから一転、クリーンな声に。

「声の状態は分かった

これ以上悪化させないように、のど飴でもやっとけ」

「『分かりました　あの…学園祭はどうするんですか？このままお姉ちゃんをボーカルにですか？」

「それは明日考える　間に合えばこのままいくが、無理ならボーカル交代だ」

「『そうですか…　じゃあ私、頑張ってお姉ちゃんの声直します！』」

「あ、あぁ…」

急に意気込む平沢妹。
その勢いにやや驚く俺。

『直します！』って…
どうやってだよ…
そりゃあ直ったら万々歳だが…無理だろう…

「まぁ頑張ってくれ…」

「『はいっ！』」

「じゃあな…切るぞ」

「おやすみなさい、咲也さん」

ピッ

「はぁ…」

電話を終え、ため息が。

エラい事になったもんだ。

明日平沢の声が正常に戻らなければボーカル交代だな。

歌う気など更々ない俺と、満々だった平沢を除くとなると…

（琴吹…）

は無理か。

キーボードで精一杯だって言ってたしな。

（田井中…）

同じ理由で無理そうだ。

そもそもアイツは『この歌詞どうだろう』党だ。

歌わないだろうな。

（残りは秋山か…）

妥当だろう。
拒否ってたがもうコイツしかいない。
何より歌詞書いてきた本人だし、歌詞覚えてんだろう。

俺の中で勝手にボーカルが秋山に代わり、納得したところで風呂に入るため自室から出ていった。

――――――――

「『イルカ』と『シャチ』ってどう違うんだろうな？」

「…『イルカ』がア○パンマンで『シャチ』がバイ○ンマンみたいなもんだ」

「えっ！？ライバル関係なの！？」

翌日の朝。
またもやどうでも良い疑問を持ってきた修司を適当にあしらっていると…

「唯どうしたの！？その声！？」

真鍋のそんな声が聞え、視線を向けると…

「エ〝へへ～特〝訓でち〝ょっとね〝」

登校してきた平沢に真鍋が驚愕の声をあげる。

平沢の声は昨日と変わらずの濁声だ。

「でもね〝憂〝のお〝かげでだいぶよ〝くな〝ったんだよ〝」

昨日と変らずと思ったが…よくよく平沢の声を聞くと、確かに昨日よりマシになっている。

（何やったんだ妹…？）

「…大変だ咲也」

俺が平沢妹が行った治療法を考えていると平沢と真鍋の会話を聞いていたらしい修司が真剣な表情で呟く。

「…なんだよ」

「唯ちゃんが……声変わりした…」

「……」

アホだコイツ。
真剣な表情で何を言うかと思えば…
どう聞いても声が枯れてるだけだろうが。
アホだコイツ。

「サ〝ッくん〝、修〝司君お〝はよ〝う〝～」

平沢が俺達に気付き挨拶をしてきた。
それを聞いたアホが…

「唯ちゃん！声変わりしたのか！？」

「ほぇ〝？」

「このアホは気にすんな
…声、直らなかったな」

「う〝ん　憂〝が頑〝張ってくれ〝たん〝だけどね〝…
これ〝じゃあ〝ボーカル〝は〝無〝理だね…」

余程秋山の歌詞を歌いたかったのか少しシュンとする。
自業自得とはいえ、なんだかな…

「…次の機会だな」

「次〝っていつあ〝る〝のかな〝？」

「そうだな…新歓の時だろうな」

「じゃあ〝まだ先〟だね〝…

ま〝ぁい〝いや！今〝は三〝日後の学園〝祭に向〝けて頑〝張るよ〝！」

そう言って笑う平沢。

切替えが早いのか深く考えてないのか分からんが、落ち込んでないなら良いか。

「…そうだな」

―――――――――

「えっと…ボーカルは唯と咲也で、曲目は『ふわふわ時間（タイム）』と『虹の風景』っと」

放課後、部活に行こうかとしたら山中教諭が教室にやってきて平沢を連れていった。

特訓は平沢曰く、昨日の時点で終わってた筈なので何故かと聞いてみると。

平沢の声を直す『秘策』があるらしい…

「ＯＫ！じゃあ出演時間決まったら、また連絡するね」

今は真鍋が部室に来ており軽音部が学園祭でやる曲目などを聞いている。

「わざわざ来てもらってありがとう～」

「これも生徒会の仕事だから

…でも咲也はともかく、本当に唯で大丈夫なの？」

「先週から放課後さわちゃんの家で特訓してるからな～」

「多分間に合うんじゃないかと」

「いや、そういうことじゃなくて…」

そう言って真鍋が俺を見る。

「……」

《言ってないの？唯の事？》

《あぁ、先生曰く『秘策』があるらしいからな…
それに賭けている》

《大丈夫なの？その『秘策』は？》

《さぁな》

俺と真鍋がアイコンタクトを交わして（この間僅か一秒）いると…

ガチャ

「待たせたわね…完璧よ！」

部室のドアが開きそこには山中先生と平沢が立っていた。

そして自信ありげな表情と共にサムズアップする。

（上手くいったのか？『秘策』は？」

「さぁ　唯ちゃん見せてあげなさい！」

その言葉を受け平沢が、持っていたレスポールを弾きだす…

♪♪♪♪♪♪～…

「「「おぉ～！」」」

「すげぇ！」

「上達している！」

「自信に満ちあふれた表情！」

「……」

…確かに上達はしているが今は問題はそこじゃない…この後だ。

♪♪♪…

「…すぅ」

平沢が前奏を弾き終え、口を開く。

…さぁ　どうだ？

「『♪君〝を見〝てる〝とい〝つも〝ハート〝ＤＯ〝Ｋ〝Ｉ☆Ｄ〝ＯＫＩ〝…』」

「「「えぇっ！？」」」

「はぁ…」

「……」

全く変ってなかった。

その平沢の声を聞いて芸人の様にズッコケる三人と、ため息を吐く真鍋、無言で額を押さえる俺。

「テヘッ☆練習させすぎちゃった☆」

「声〝枯れ〝ち〝ゃった〝☆」

「かわい娘ぶってもダメだぁ！！」

『ドンマイ♪』みたいな軽いノリで言ってくる二人に田井中がツッコむ。

『秘策』って何だったんだよ…

そもそもこんな短時間で直る訳がねェよな…

「そんな…じゃあボーカルは？」

「変更するなら今日中よ？」

「えっ！？そうなのか！？」

琴吹が危惧し、真鍋がそう言う…てかそんな事（ボーカル変更）まで報告すんのかよ、細けェな生徒会。

すると田井中が懇願するように俺を見る。

「サクっ！か「却下だ」…まだ何も言ってないじゃん！」

「俺が平沢の分もボーカルやれって言うんだろう？
お断りだ」

「そんな！？じゃあどうするんだよ～！」

「一人いるじゃねェか」

そう言って俺が指差す先には…

「えぇっ！？」

エラく仰天した秋山が。

「そうね～澪ちゃんなら歌詞、覚えてるだろうし」

「歌詞作った本人だしな～」

「頑張ってね！澪ちゃん！」

「ハスキ〝ー唯〝から〝もお〝願〝い〝～」

「ハスキーって、犬みたいだなお前」

「わ〝ん〝わ〝ん〝♪」

俺が昨晩に思い描いた通りになり、そんな会話をしていると秋山が…

ボフンッ！

パタンッ…

「うおおおい！！」

「澪ちゃん！！」

「死んだか？」

「そんなこと言わないの」

スキルを発動させ人間火山を噴火したあと臨界点を突破したのか気

絶してしまったみたいだ。

紆余曲折を経て曲A…『ふわふわ時間』のボーカルは秋山に決まった。

ちなみに顧問に『秘訣』とは何かと聞いてみたら、スッと『のど飴』を取り出し俺にアホ呼ばわりされるという場面があった。

第二十一話（前書き）

学園祭編突入です。

相変わらず唯の台詞が読みにくいです…
ごめんなさい当分この状態が続きます…

第二十一話

「いらっしゃいませ！！」

「…ませ」

「美味しい焼きそばはいかがですか～！」

「…すか」

「コラッ咲也！」

「あん？」

「なんだそのやる気のない声は！？」

「やる気ねェからだよ」

「出せよ！出してよ！出しなさいよ！」

「何で三段活用だ…」

本日十月上旬。

ついに学園祭…桜高祭の日がやってきた。

三日前まで残暑だったのが嘘の様に過ごしやすい季節になり、制服も男女共に夏服から冬服のブレザーに変わり、冬の季節に向かっていく。

ふと窓から外を見下ろせば、『たこ焼き』や『お好み焼き』、『クレープ』等の食べ物の露店があれば、『アクセサリー』、『占い』、

『ジャンボスゴロク』等々の遊びの露店が校門から校舎までの道を埋めつくし、更には学園祭なので一般人や他校の生徒が溢れ返っている。

校舎の中も同様に人で溢れ、教室を使って『オバケ屋敷』に『メイド喫茶』、一年のクラス限定で『執事喫茶』等がやっている。

そんな盛り上がりをみせる桜高祭で俺は何をしているかというと…

「そこのお二人さん！焼きそばいかがですか～」

「…か」

客の呼び込みを修司と共にやっている。

学園祭は軽音部の事だけではなく、自分のクラスの出し物も参加しなければならない。

我がクラス1年3組は俺が知らぬ間に『焼きそば屋』になっていた。

…まぁ出し物決めの時、意識を夢の国に飛ばしていたので勝手に決まった訳なんだが。

教室の半分を調理スペースにし、半分を食事が出来る場所にしてある。

調理は主に女子がやり、人数の少ない…たった12人の男子はウェイターや教室の外で呼び込みをする。

中には調理の出来る野郎がいるので女子の手伝いをしている奴もいる。

俺達はそんなスキルを持ってないので呼び込み部隊に左遷されたのだ。

「絶品の焼きそばがあるよ～！一つとは言わず二個三個…いやっ四個、まさかの五つどうかな！」

「…そんなに買ってどうすんだよ」

「ソコッ！横やりを入れない！」

「はぁ…」

メガホンを片手に声をだし張り切る修司に、メガホンで肩を叩き教室の壁を背もたれにし、廊下に座り込んでやる気が全くゼロの俺。

軽音部のライブが俺の中で大部分を占めているので、クラスの奴等には悪いが全く気合いが入らない。

…がコイツは生き生きとしている。

それは何故か？

その答えはコレだ…

「今なら大人気の焼きそばパンもあるよ！」

『焼きそばパン』
これが修司の活力になっていた。
メニューを決める際、焼きそば屋なので焼きそばしかないのだがそれでは物足りないという意見が女子から上がり、そこに光明の一手を投じたのが修司だった。

『じゃあ焼きそばパンは？』

この一言がきっかけで生まれたメニュー。
これが大人気商品となり1年3組の焼きそば屋は大好評だ。
自分が発案したメニューが人気になれば自然とやる気もでるものだ。

「らっしゃい！らっしゃい！らっしゃい！らっしゃい！」

俺からしてみればやる気をだしすぎてウザイんだがな。
更には手製の…

【焼きそばパンはこの私、影宮　修司が考えました】

なんていうふざけた文字が書いてあるタスキをしているので俺の神経を逆撫でする。

「いらっしゃいませ！…ん？あれは…」

「あぁ？」

相変わらずうるさい修司の張り切りボイスを受け流す。

…が、その後の疑問に興味を持ち視線を向ける。

「あれは…」

「澪ちゃんだな」

腰まである黒髪をなびかせ、早足でこっちに向かってくる秋山の姿が。

「あっ　咲也」

秋山が俺に気付き声を掛けてくる。

「…よう　何してんだ？」

「それはこっちの台詞なんだけど…」

そう言って未だにダルそうに座っている俺を見下ろす。

「…見て分からんか？客を呼び込んでんだよ」

「そうには見えないけど…」

「まぁどうでもいい
…で、何か用か？焼きそばでも買いに来たか？」

「いや、唯と咲也を…」

「『大好評』の焼きそばパンを買いに来てくれたのかな？かな？」

秋山の言葉を遮り、大好評を強調してアホがそんなことを言う。

「焼きそばパン？」

「コレコレ～♪コレだよ♪」

そう言って秋山にタスキを見せつける。

それを見た秋山が…

「あっ　これの事なんだ…3組に美味しい焼きそばパンがあるってクラスでも話題になってた…

影宮君が考えたんだ…」

「ムフフ～ン♪そうなのですよ！」

「何が『ムフフ』だ…アホ」

「おやおや～嫉妬かな～？咲也君？」

「あぁ？」

ニヤニヤとしながら非常にムカつく事を言ってくる。

そして…

「男の嫉妬は見苦しいＺＥ☆　サ・ク・ヤ・ク・ン♪」

イラッ

「それより澪ちゃん！
食べてみてよ！絶品だぜ！」

「えっと…私は唯と咲也を…」

俺に背を向け秋山に焼きそばパンを勧める。
俺はスッと立ち上がり、そんなアホのケツを…

ドゴォン！

持てる全ての力で蹴りあげる。

「ぎゃあッ！！」

「キャアッ！！」

蹴りの衝撃で推定一メートルは垂直に上がり奇声を発するアホ。

その光景を目の当たりにし悲鳴をあげる秋山。

『キャアッ』って…

これまたイメージと違う声だすな…

ドスンッ！

「ぎゃあああーッ！！」

ゴロゴロゴロゴロ…

一秒程の空中浮遊を楽しみ、落下してケツを押さえながら廊下を転がり回る。

「ケ、ケツが割れたッ！！」

「安心しろ元からだ」

「四つに割れたッ！！」

「安心しろ元からだ…お前限定で」

「ンな訳あるかッ！！」

「で秋山、なんの用だ？」

「無視すんじゃねェぞテメェ…！」

アホが何か喚いているが華麗にスルーし、少しスッキリしたので当初の目的を秋山に尋ねる。

「影宮君、ほっといていいの？」

「オールＯＫ問題ナシだ」

「そ、そう…」

とりあえずケツを押さえてうずくまる物体を無視し話を聞く。

「唯と咲也…っていうか、みんなを探してたんだ」

「…何でだ?」

「何でって…部室行ったら誰もいないし、今日、本番だろ?目一杯練習しときたいからだよ」

「まぁ、そりゃそうなんだがな…」

秋山の気持ちも分かる。
俺だって練習はしときたい。

だが…

『い〝ら〝っしゃい〜安い〝よ〜』

「今の声…」

「俺と平沢は朝イチはクラスの当番だからな」

またもや俺の知らぬ間に当番が決まり俺達は今抜け出せない状態にある。

更にはどっかの誰かが発案したメニューのせいで大盛況なので交代が出来るか怪しい。

俺の役割はラクなので、いざとなったらサボろうとは思ってはいるが。

「そうなんだ…」

「まぁ　交代できたら平沢連れて練習しにいく
…つうことで今は無理だ」

「…うん　分かったよ…じゃあまた後で」

「…ちょい待て」

「えっ　なに？」

渋々納得して去って行こうとする秋山を引き止める。

「焼きそば買ってけ」

「別に買いに来た訳じゃないんだけど…」

「気にすんな　気にしたら負けだ」

「はぁ…じゃあ買ってくよ」

ため息を吐き教室に入っていく。

もしもの時の保険だ。

俺が仕事をしたという事実があればサボった時にクラスの奴等から非難されにくいだろう。

…たった一人じゃ足りんかもだけど。

その後焼きそば片手に秋山は去って行った。
去り際に…

『終わったらちゃんと部室に来るんだぞ』

と若干寂しそうに言っていた。
あぁ…寂しいんだなアイツ。
つうか自分のクラスの事をほっといて良いのかよ…

……

「いらっしゃい！いらっしゃい！」

「……」

モグモグ…

一時間程経ち、復活した（俺に対し何かブツブツ文句を言っていたが）アホと呼び込みをしていると…

「ちゃんとやってる？」

今度は真鍋がやって来た。

真鍋は生徒会の仕事があるのでクラスの仕事はパスらしい。

羨ましい奴め…

「オッス和ちゃん！」

「…よう」

「…何やってるの？」

「見て分からんか？」

「修司は分かるけど、咲也は焼きそば食べてるしか見えないわよ」

つい先ほど平沢が作ったという焼きそばをクラスの女子が俺達に持ってきた。

この大フィーバーの立役者の修司にお礼だそうだ。

ちなみに俺はオマケらしい。

極めて心外だ。

そして修司は狂喜乱舞して焼きそばを速攻で食いつくし、俺は相変わらず座り込んで焼きそばを堪能していた。

この焼きそば、平沢が作ったらしいが普通に美味だ。

『出来た妹とダメな姉』

この法則に当てはめると、平沢はデフォルトで料理が出来ないと思っていたが、そうでもないみたいだ。

「やることねぇんだよ」

「仕事しなさいよ」

「そーだそーだ！
俺ばっか働かせやがって！」

「お前が勝手に張り切ってんだろうが」

「まぁ俺のおかげでこんなに賑わってんだから自然と張り切ちゃうんだよな～こ・れ・が☆」

ウザイ…非常にウザイぞコイツ…

しかしコレを利用するか…

「…そうだなお前のおかげだな」

「まぁね～」

「……？」

「お前がいなきゃここまで繁盛しなかったろうな」

「いやいやそんな～」

「すごい奴だよ、お前は」

「あんまり褒めんなよ～照れちゃうじゃないか～」

「サイコーだ」

「死んじゃう死んじゃう！照れ過ぎて死んじゃうよ～！」

「そんなお前に頼みがある」

「おうッ！なんだ！？」

「ここを任せていいか？」

「へっ？何で？」

「俺は今から軽音部の練習に行きてェんだ
…だがご覧の通り俺は『呼び込み』という名の束縛にあって動けない…

現に今、座り込んでしまっているだろ？」

「あっ！？本当だ！！だから座ってたのか…」

「俺は修司…お前を信頼してるんだ…」

「咲也…」

「だからお前にここを任せたい」

「…分かった、行けよ！
お前の分まで俺が声を張り上げてやる！」

「そうか…悪ィな」

「いいさ…さぁ行け！
俺の声がまだ生きている間に！

いらっしゃいませッ！！！」

素晴らしいアホだなコイツ。
ちょっと褒めただけでこの有様だ。
単純って素晴らしい。

「…じゃ　そういう事で」

立ち上がり、俺達のやり取りを見ていた真鍋に軽く手を上げ去ろうとしたが…

ガシッ

「待ちなさい」

肩を掴まれ、引き止められた。

「なんだよ…」

「練習しに行くのはいいわ
そのために私が来たんだから」

「ん？どういう事だ？」

「この盛況ぶりでしょ？
唯と咲也が抜け出せないじゃないかって思ってね」

「……」

どうやら真鍋は俺と平沢のために様子を見に来たようだ。

気配り上手というか、世話好きというか…

（流石、眼鏡だな）

「けど、ちゃんとクラスのみんなに言わなきゃダメよ」

「じゃあお前が言っといてくれ」

「ダメよ」

「はぁ…分かったよ…」

そう言って俺は教室に足を向け、中に入って行った。

「いらっしゃいませッ！！！」

アホの声を聞きながら。

……

教室の中に入るとその盛況ぶりがよく分かる。

食事スペースは殆ど埋まり、調理スペースには注文を待つ客が行列を成していた。

そんな中で焼きそばを作っている平沢を見つけ、真鍋と共に近付く。

「唯」

「あ〝っ　和〝ちゃん、サッくん〝！」

俺達の声に気付き笑顔を見せる。

平沢の声はまだ濁声だが、三日前に比べるとかなり良くなっている。

それでもボーカルは無理だがな。

「サッくん言うな」

「その声大丈夫なの？」

「大丈　夫だよ～多　分」

「自信ねェのかよ」

「今日が初ステージでしょ？三時からだっけ？」

「そう〝だっけ？」

そう言って俺を見てくる。

「そうだ…」

覚えとけよ。
軽音部の初ライブだっつうに…

「まだ結構時間あるし、練習しておきたいんじゃないの？」

「う〝ん　この〝担当終わ〝ったらする〝つもりだよ」

「いつ終わるんだよ？」

「分〝かんない」

「はぁ…」

分かんねェって…

確かにこの盛況ぶりだしいつ交代出来るか知らんが、このまま練習なしで本番に挑むのは些か不安だ。

俺はともかく平沢がだ。

「じゃあもうそっちに行っても良いわよ
誰か他の人に頼んでみるから」

俺がため息を吐いていると真鍋がこんな提案をする。

「え〝っ　でも…」

「良いって良いって」

「和〝ちゃん…」

更には…

「唯」

躊躇う平沢にクラスメイトの女子が声をかける。

「行っておいでよ」

「頑張ってね！」

「初ライブ成功させなきゃ！」

「後は任せて」

「み〝んな…」

平沢の背を押すように口々に告げる。

あ、忘れてた。

俺も許可もらわねェと…

「なぁ　俺も行って良いか？」

「うん　良いよ」

「桐島君がいないと全員で練習出来ないからね」

アッサリと許可が下りた。

渋られるかと思ったんだがな…いらぬ心配だったか。

が…

「桐島君あんまり役に立ってないからね♪」

「……」

笑顔でサラッと毒を吐かれた。

そりゃあアホみたいに張り切ってねェし、客を呼び込んだのは秋山一人だが…

（もうちょい言い方があんだろ…）

事実なので言い返せないのが悔しい。

「あ〝りがとうっ！み〝んな！

行〝こうサッくん！」

「…あぁ」

感激の様子でクラスメイトに礼を言い、着けていたエプロンをハズし、俺を促す平沢。

それをややヘコんで返す。

「和〝ちゃん！本〝当にありがとうっ！」

「ううん、良いわよ
それよりライブ、期待してるわ」

「う〝んっ！任〝せといてよ！」

「…じゃあな…」

最後に真鍋に挨拶を告げ、俺達は教室から出て行った。

「いらっしゃいませッ！！！」

教室から出ると未だにアホが声を張り上げていた。

第二十二話（前書き）

学園祭編その二です。

ちょっとオリジナルがあります。

第二十二話

俺達は部室に直行…ではなく、ひとまず田井中達に会いに向かっていた。

田井中達のクラスは『オバケ屋敷』をやっているらしい。
以前、田井中は学園祭で『メイド喫茶』をやりたがってたらしいから（秋山談）てっきりそうなんだと思ったがどうやら路線変更したみたいだ。

大方、秋山辺りに全力で反対されたんだろうな…

「り〝っちゃん、オバケ屋敷〟してるんだ…」

ここで、俺の隣りを歩いていた平沢が桜高祭のパンフレットを見て、ポツリと呟く。

そして…

「サッくん〝！」

「サッくん言うな」

パンフレットから顔を上げ、キラキラとした眼で俺を見てくる。

「オバケ屋〝敷一緒に行こう〝よ！」

「今行ってんじゃねェか」

「そうじゃな〝くて～一緒〝に入ろうよ！」

「……」

そんな事を言ってくる。

そういえばコイツ、オバケ屋敷やりたいとか言ってたらしいな（これまた秋山談）

結果、我がクラスは焼きそば屋になってるが、出し物を決める際、提案してねェのか？

その時俺は夢の国の住人になっていたので詳細は分からない。

「ね〜ぇね〜ぇサッくん〜」

平沢が俺の手を取り左右に揺らしてくる。

「却下」

「え〝ーっ！？」

俺が出した答えに驚愕の表情をして絶叫する。

「デケェ声出すなよ…

せっかく直りかけてる喉が悪化すんぞ」

「な〝んでーっ！？」

「無視か…」

俺の忠告虚しくボリュームを下げずに理由を聞いてくる。

「はぁ…」

とりあえずため息。

「あのな…俺達は本番の練習のために抜け出したんだぞ…遊ぶためじゃねェんだ」

「そう〝なんだけど～…

でもでもせ〝っかくの学園〝祭なんだし楽しまなきゃ」

「じゃあ一人で入れよ」

「一人〝じゃつま〝んないよ」

「じゃあ止めとけ」

「や〝だっ！！」

「はぁ…」

本当にコイツはガキっぽいな…

……

田井中達のクラス…1年2組は俺達のクラスの隣なのだが、オバケ屋敷をやっているのは空き教室なので少々時間がかかり、その間平沢のわがままをずっと聞くハメに…

そのわがままを適当にあしらっていると目的地に着いた。

「り〝っちゃん！」

机を教室の前に出し席に着いて受付をしている田井中を見つけ平沢が声を掛ける。

「おう唯、サク」

「澪〝ちゃん達は？」

「まだ声直んないな～」

「う〝ん…ち〝ょっとイガイガする～」

「これでもだいぶマシになったんだがな」

「そうだな～　あっ！」

ここで田井中が何か閃いたらしい。
手をポンと叩く。

（くだらねェ事考えついたんじゃねェだろうな…）

「『ごっつあんです！』って言ってみてよ？」

ビンゴ。

「くだらねェ…」

田井中の考えが案の定だったので俺がポツリと漏らすと…

「ごっつあんです！」

「……」

やんなよ…

「おぉ～お相撲さん、お相撲さん♪」

「稽古は本場所のごとく！本場所は稽古のごとくッス！」

「……」

スタスタ…

「相撲は国技じゃないッス！格闘技ッス！」

「相撲に勝って勝負に負けるとは、こういうことかいなっ！」

「あ～ドスコイ！ドスコイ！」

「ドスコイ！ドスコイ！」

「ドスコイ！…ってあれ？サクは？」

「あ〝れ？サッくん〝？」

田井中と平沢が俺を探してキョロキョロと見渡す。

平沢が何故か本格的に関取の真似をしだした時点で俺は二人から距離をとった。

その理由は周囲にからの痛い視線を浴びたくないからだ。

アイツらのせいでかなり客が引いている…

知り合いだと思われたくねェ…

「あ〝っ！サッくん〝～」

が、俺の思いとは裏腹に天然が俺を見つけニコニコしながら手を振る。

それにより自然と周囲の視線が俺に向く。

（ヤメロ…生き地獄だ…）

「お〜いっサッく〜ん〜」

更に俺を呼ぶ天然。

どうするこの状況…

1．このまま空気と化す。

2．突如記憶喪失になり自分探しの旅にでる。

3．ＮＰＣになる。

「……」

どれも無理だ…

自分で考えといてなんだが不可能だろ。

そもそも何だよ『ＮＰＣ』って…

死後の世界で天使と戦う戦線がいる世界に行けってか…

我ながらアホらしい事を考えたな…

「どう〝したの〝サッくん？」

俺が自分自身に呆れていると遂に平沢が目の前にやって来て、俺の顔を覗き込む。

「…別に」

「な〝んでこんな所にいる〝の？」

「…別に」

「？…じゃあ〝コッチコッチ〝♪」

そう言いって俺の手を引く平沢。

平沢が俺の所に来た時点で全ての選択肢は消滅し、第四の選択肢…
強制連行が実行された…

…もう、どうにでもなれ…

「何やってたんだサク？」

「周りを見てみろ…」

「ん?…おぉ…なるほど…」

状況を理解していない田井中に周囲を見る様に促すと、視線に気付き納得した。

「え?な〝にな〝に?」

「唯、周りを見てみろ」

「へ〝?…おぉ…」

同じく理解していなかった平沢に田井中が俺と同じ質問をすると流石に理解したようだ。

「はぁ…で、秋山達は？」

とりあえずさっさっと立ち去りたいので田井中に用件を告げる。

「ムギはこの中だけど、澪は部室にいるんじゃないかな？」

「ん？なんで琴吹までいんだよ？お前らクラス違うだろ？」

確か琴吹は1組だった筈だ、その琴吹が田井中達の出し物に参加してるのはおかしい。

「あぁそれは、私達のクラスは1組と合同なんだ
だから空き教室使って広くやってんの」

「ふーん」

なるほど。

そういや空き教室二つ使ってるしな。

片方の教室の後方出入り口ともう一方の教室の前方出入り口を黒の幕で作ってある通路にしてそれぞれを繋いでいる。

二つのクラス合同だから出来る荒技だな。

「お前と琴吹はいつ交代なんだ?」

「あと少しだな～だからサクと唯は先に行っててよ」

「…分かった」

という事らしいので俺は秋山がいるであろう部室に向かおうと踵を返したとき…

グイッ

と誰かが俺の腕を掴み、引き止める。

「…なんだよ」

引き止めた相手の予想がつきつつ振り返ると…

「……」

やはり平沢だった。

そして無言でオバケ屋敷を指差す。

「……」

グイッ

そして俺は平沢の腕を取りオバケ屋敷を指差していた方角を音楽室に向けて再び踵を返す。

グイッ

また掴まれる。

「……」

振り返る。

ビシッ

オバケ屋敷を指差す平沢。

「……」

グイッ

それを再び音楽室に向ける俺。
そして踵を返す。

グイッ

「……」

エンドレス。

「なにやってんの？」

俺と平沢のエンドレスを見ていた田井中が問い掛ける。

「聞〝いてより〝っちゃんっ！！」

「うぉ！な、なんだよ…」

そんな田井中に平沢が詰め寄る。
その勢いに驚きながらも返事をする。

「サッくんが私〝ど一緒にオバケ屋〝敷入ってくれないんだよ～！」

「へっ？」

「…なんだ」

田井中が呆れた様な視線をぶつけてくる。

「入ってやればいいじゃん」

「そんな事してる暇ねェだろうが…
俺はさっさっと練習してェんだよ」

「……」

「それに入るんなら平沢一人で…「ちょいサク」…あン？」

「これ見てご覧」

「あぁ？」

田井中が指差す『コレ』＝『平沢』を見てみると…

「…ぅ」

涙腺が決壊寸前だ。

何で泣くんだよ…

「♪泣～かせた、泣かせ～た、サ～クが泣かせ～た♪」

「～うぅ…」

「……」

いやいや待て待て…
俺が悪いのか？そうなのか？

何でだよ…正論言っただけじゃねェか…

…あぁ…この先の展開が手に取るように分かる。

その1。
周囲の視線が更に痛くなる。

『ジロジロ』

その2。
平沢の涙腺が限界になる。

「うぅ～グスッ…」

その3。
田井中が便乗し場を悪化させる。

「かわいそうに唯…
この不機嫌顔の男のせいで…こんな悲しい思いをしなきゃいけないなんて…」

その4。
それにより周囲の視線が鋭利な刃物になり俺を貫く。

グサグサッ

その5。
敗北宣言。

「イッショニハイリマス…」

「…い〝いの？サッく〝ん…？」

「…アァ」

「や〝ったーっ！！」

泣き顔から一変、眼を光線が出て周囲を焼き尽くすんじゃねェかというくらい輝かせ、ピョンピョンと飛び跳ねる。

「よかったな～唯！」

「う〝んっ！」

「はぁ…」

ズルイ…女ってズルイ…

……

「い〝ってきまぁ～す♪」

「……」

「楽しんでこいよ～♪」

こんな事をする予定ではなかったのだが、こうするしかもう手立てが皆無だったので平沢と共にオバケ屋敷に。

平沢は余程嬉しいのかニコニコしてかなりテンションが高い。

反対に俺はガタ落ちだ…

「……行くぞ…」

「うん　ぅっ！！」

さっさっと済ませるために平沢を促し中に入る。

―――――――

一歩中に踏み入れば先程までの喧騒が途切れ、暗く音が殆どない世界に。

（しっかり作り込んでんな…）

「雰囲〝気出てる〝ね…サッくん…」

平沢も同様の事を思ったらしい、先程のテンションが見る影もない。

突っ立てても仕方がないので歩を進める。

普段の教室にはない壁で仕切られた通路を平沢を先頭に歩いていると…

バンッ！

「ひぃ！」

「……」

突然片隅に置いてあったロッカーが開き、中から…

「ヨホホホ！！」

バイオリン片手に海賊漫画の紳士なガイコツ音楽家のコスプレが現れた。

「パクリじゃねェか」

「違いますインスパイアです」

「いや、まんまそのものだ」

「びっくり〝した…」

何故か俺とコスプレ野郎が普通に会話をしていると平沢の声が聞え、
それを聞いたコスプレ野郎が平沢に向き…

「そちらのお嬢さん」

「ハ、ハイ〝ッ！」

「実に麗しい！！

んビューーーーティフォー！！」

あっ、実際に聞くとウザイなこのテンション。

「私、美人に目がないんです！！
ガイコツだから目はないんですけども！！」

「い、いえ…そんな美人だな〝んて…」

コスプレ野郎の言葉を聞き、若干嬉しそうな平沢。

（まさか言うつもりじゃねェだろうな…）

「もしよろしければ…」

俺の危惧が現実になろうとしている。

「パンツ見せ…「せいっ！」…ぐはっ！！」

不埒な発言をするコスプレ野郎に左足で腹に蹴りを放つ。

「え〝っ！？サッくん〝！？」

「そこまでパクんな」

「イ、インスパイア…です…」

「セクハラ野郎が」

「て、手厳しい…骨身にしみました…ガイコツなだけに…」

それが奴の最期の言葉だった。

コイツ、今まで通ってきた女性客全員に言ったんだろうか…
だとしたら完全な犯罪行為だな。

「ダメだよサ〝ッくん、修司〝君以外の人を蹴っちゃ」

修司以外って…じゃあアイツは蹴ってもいいんだな…

「何言ってやがる　女の敵を滅したまでだ」

「え?でも私〝のこと美人だって言ってくれ〝たよ?」

「……」

どうやら平沢にはコスプレ野郎のセクハラ発言は聞こえてなかったようだ。

コイツにそんな耐性があるとは思えんし、聞こえてパニクったら色々メンドだから結果オーライ。

「このガイ〝コツさん、気絶しちゃってる〟よ？」

「おかしいな…利き足じゃねェ方で蹴ったんだがな」

相手が見知らぬ奴だったので悶えさせる程度で済ませる筈だったんだが…

「…まぁいいか」

「ガイコツ〝さんどうするの？」

「放置しとけ　そんなナリだ、そのままにしといても問題なく馴染む」

「そ〝っか」

平沢が納得したところで再び平沢を先頭に歩き出す。

ブ〇ック出現ポイントから数十歩地点で…

バンッ！

「ひぃ！」
「……」

今度は壁の隠しドアが開き…

「おい鬼〇郎！」

目玉のオ〇ジ出現。

「誰が鬼〇郎だ」

しかし…この目玉の〇ヤジ…首から下は白いぴっちりタイツで覆われ、上は発砲スチロールかなんかで作ってある目玉を被っており、

見た目は完璧なんだが…
いかんせんサイズが平沢の身長と余り変わらんので非常に気色悪い。
更には…

「おい鬼太〇！」

これしか台詞がない。

「「……」」

「おい〇太郎！……ふぅ～…」

ガチャ…

俺達に何かをするでもなく『仕事をやり終えたぜ』みたいな息を吐き、隠し扉に戻っていった…

「何なんだよこのオバケ屋敷は…」

「今〝のはあんまり怖くな〝かったね…」

……

コスプレの屋敷かと思いながらも進んで行くと、そこからはちゃんとしたオバケ屋敷だった。

五人のゾンビが現れ一斉にコッチに向かって来たり、突然足を誰かに掴まれたり、奇声や笑い声が聞こえたり、壁から手が突破ってき

たり、首無しランナーが軽快な足取りで『目指せ世界新！』とほざきながら走り去って行ったりと様々な仕掛があった。

俺は全く驚かなかったが、平沢がことごとくビビり現在…

「…離れろよ」

「だってだって～…」

「歩きにくい」

俺の左腕にしがみつき完全に腰が引けている。

更には体重をかけてくるもんだから歩きにくいたらありゃしない。

そんな平沢を引きずりつつ進んで行くと真っ暗な通路に辿り着いた。

今までの道は足元に間接照明がポツポツあったが、ここは全くの光

がない闇だ。

「サッくん〜…」

ギュ！

「痛ェよ…」

この雰囲気に呑まれ更にしがみついてくる。

と…

『お前らが来るのを待っていた…』

聞き覚えがある声が流れてきた。
そして…

『ーーーッ！！！！！！！』

「ヒィィッ！！」
「…ッ！」

合宿時に秋山を恐怖に陥れたデスボイスが響き渡った。
それにより今日イチの悲鳴をあげる平沢と、その悲鳴をド真横で聞き、耳キーン状態（特に左耳）になる俺。
…これを仕掛けたのは田井中だな…
ちなみにこの殺人ボイスは軽音部時代の山中教諭らしい（琴吹談）

「び、び、びっくり〝した…」

「…お前の声にびっくりだ…」

これでお終いかと思いきや遂にラスボスが現れた。

ポン…

「ひぃ！」

「あン？」

暗闇の中、誰かに肩を掴まれた。

振り向くとそこには…

「う〜ら〜め〜し〜や〜…」

「ヒァァッ！！」
「…ッ！！」

顔だけにライトが当り、三角巾をし、顔の半分を焼爛れた特殊メイクをした謎の人物が。

つうか…

「耳が…」

平沢の今日イチ以上の悲鳴で俺の耳がキーンを越えグワァーンとなる。

「大丈夫？唯ちゃん、咲也君？」

ガクブル状態の平沢と耳を押さえる俺にこんな状態にした奴から気遣う声が。

この声…

「…琴吹か？」

「うんっ　分からなかったでしょ？」

その正体は琴吹だった。

「ム、ムギち〝ゃん〜…」

「ゴメンね唯ちゃん驚かせちゃって」

「だ、大丈〝夫だよ〜…」

「…どこかだ」

完璧な強がりだ。
声震えてるし、泣いてるし。

「しかし…スゲェメイクだな」

よくこんな特殊メイクを施したものだな。
本場のオバケ屋敷も真っ青なくらい完璧なメイクだ。
最早ハリウッドレベルだ。

「クラスにメイクが得意な娘がいてその娘がやってくれたの♪」

「……」

誰だよそいつ…
高一にしてこのレベル…
将来本当にハリウッドいくのか？

「でも咲也君、全然驚かなかったね？ちょっと残念…」

「サッくん今〝までも全然驚かな〟かったんだよ」

「まぁな…修司曰く鋼のハートらしい」

俺は緊張や驚くことは余程のことがない限りしないみたいだ。

そういえば受験本番の時それを聞いた修司が…

『お前何者だ！鋼のハートの持ち主か！？ちなみに俺は薄っぺらい氷のハートだ！』

（『すぐ溶けて消えるな…常にギリギリで人生送ってんな』）

なんてことを言っていた記憶がある。

「ムギちゃんはも〝うすぐ交代なんだよね？」

「うん　唯ちゃん達の分で最後よ」

「じゃあ練〝習いこうよ！」

「うんっ！澪ちゃんを待たせたままじゃ悪いから着替えてくるね」

俺が昔の出来事を思い出してると平沢と琴吹の会話が聞こた。

そして琴吹は何やら達成感を抱えながら暗闇へと消えていった。

「じゃあ行くか…」

「う〝んっ」

「つうか離れろよ」

「まだ怖〝い…」

「はぁ…」

平沢を引きずりながら、ゴールを目指し歩き出した。

――――――――――

ガラッ

「眩〝しい～」

「……」

琴吹がラスボスだったのでその後はすぐに出口に着いた。
そして扉を開き外に出る。
今まで暗闇にいたので光の眩しさを感じ眼を細める。

「お疲れさん、どうだった?」

すると目の前に田井中の姿が。
どうやら受付業務は交代になったらしい。

「怖かった〝けど楽しかったよ〜」

「ツッコミどころ満載だ」

「そりゃよかった！
唯の叫びが聞こえたからな～作りがいがあったよ」

「あ〝～ひどいよ、り〝っちゃん！」

「事実だろ～
…しかしお二人さん♪」

田井中が俺達を見てニヤニヤする。

イヤな予感が…

「ラブラブだね～♪」

「へ？…あっ！ち、違〝うよ！り〝っちゃん！」

ビンゴだ…

平沢は外に出ても俺の左腕にしがみついたままだったので田井中にからかわれる。

それに気付いた平沢が俺の腕を放し、恥ずかしそうに弁解する。

珍しいな、コイツのこんな反応…

「またまた～照れてなくていいわよん♪」

「だから〝、そ〝の、えっと…」

「はぁ…」

ため息を吐き出す。

なんかドッと疲れたな…

これが本番に影響しなきゃいいが…

第二十二話（後書き）

ムギは一年時クラスが分からなかったので、勝手に1組にしました。

間違ってたらご指摘を。

第二十三話（前書き）

学園祭編その三です。

第二十三話

あれから着替えが終った琴吹と合流し未だにじゃれる平沢と田井中を促し、いざ部室へ。

……

女性陣が和気あいあいと話し、その前を俺が歩いていく。

階段を上りきり扉を開けようとドアノブに手をかけようとした瞬間…

「待って咲也君」

「あン？」

琴吹ＳＴＯＰがかかった。

「なんだよ？」

「歌声、聞えない？」

「……」

「そういえば…聞こえるな」

「この〝声、澪〝ちゃん？」

そう言うと平沢が部室の扉の小窓に顔を近付ける。

それに見習い田井中、琴吹も続く。

俺はコイツらより背が高いので空いている上方のスペースから中を覗く。

♪♪…

中には秋山が一人で『ふわふわ時間』…『ふわふわ』の歌を歌っていた。

…つうかあれからずっとここにいて歌ってのか？

「ずっと…練習してたんだろうな…」

「うん…」

みたいだ。

なんつうか不器用かもな秋山は。

部室に行ったら誰もいないから俺達を探し、いけないと分かったら一人で練習。

悪くはないんだが、やり過ぎて平沢みたいに声が潰れたら本末転倒だ。

平沢も言ってたが、せっかくの学園祭だ、あちこち見て回って時間を潰せは良いものの、それをせずひたすら…かどうか知らんが一人で練習していたみたいだしな…

もうちょい器用にやれないのかねェ…

ま、良いけどな。

「…おら、いつまでも覗いてないで中に入るぞ」

「そうね　澪ちゃん頑張ってるから私達も練習しなきゃね」

「うしっ！では…」

「突〝入〜！」

平沢の合図で扉を勢いよく開き中に入る。

（普通に開けることは出来ねェのか…）

――――――――――

バンッ！

「待たせたな澪っ！！」

「ッ！！」

「一人にしてごめんなさい」

「私〝も練習〝するよ～」

「…当たり前だ」

部室に突入…もとい、入ると、急に入ってきた俺達に驚く秋山。
そんな秋山に口々と告げる俺達（俺は平沢にだが）…そんな俺達を見て秋山が…

「みんな……お、遅いぞっ」

口ではこんな事を言ってるが、表情は嬉しそうだ。

…不器用だな。

「いや～ゴメンゴメン！
唯とサクが面白いもの見せてくれたから遅れちった～」

「「面白いもの？」」

「あわ〝わわ〝～りっちゃん！」

「……」

まだ引っ張るかそのネタ…

秋山と琴吹は揃って首を傾げるし、平沢は焦って田井中の口を塞ごうとするが、ノラリクラリと躱される。

「はぁ…」

とりあえず事態を収拾するためにギタースタンドに立て掛けてあったテレキャスを取り、それをアンプに繋ぎ…

「なんなんだ律?」

「面白いものって?」

スッとピックを持った右手を軽く上げ…

「実は〜…」

「スト〝ップ！ストップ！り〝っちゃん！」

勢いよく弦を目掛け振り降ろす。

ジャァァァン！！

「「「「わっ！」」」」

俺が出した音に驚き、一斉にコッチを向く。

「練習始めるぞ」

「照れなさんな照れなさんな♪」

「練・習・始・め・る・ぞ」

「ハイ…」

戯言を言ってくるカチューシャをギロリっと睨み沈黙させ従順させる。

「お前らもボーっと突っ立てないで準備しろ」

「…咲也君なんだが副部長の風格が出てきたね」

「…律より、よっぽど部長らしな」

「私〝の師匠〝1号ですから」

秋山達が何やらブツブツ言ってるが華麗にスルーだ。

……

♪♪♪♪♪…

「よーしっ　まぁまぁなんじゃない？」

「うんっ　バッチリだった」

「澪〝ちゃん　大丈〝夫そう？」

「え？…う、うん…」

「今の感じでいきましょ♪」

「……」

とりあえず『ふわふわ』…『ＦＦ』を秋山のボーカル付きで演奏し平沢が秋山にそう尋ねるが、頷いてはいるものの、思いっきり不安そうだ。

保険を懸けといた方が良いかもな…

今は俺達しかいないから歌えたが、秋山の性格を考えると本番でスキルを発動して歌えなくなってしまう可能性がある。

いきなり平沢の代役をするはめになったんだ、現在の秋山は不安や緊張が入り交じった精神状態だろう。

「そういえばさ」

「えっ？なに？」

秋山が田井中と話をしているのを見計らって平沢に話しかける。

「平沢」

「な〝に？サッくん」

「サッくん言うな
…今から軽く『ＦＦ』歌ってみろ」

「エ〝フエフ？」

「……『ふわふわ時間』だ」

『ふわふわ時間』と口に出すのは抵抗があるので俺の中で勝手に『ＦＦ』と変換する。
某人気ゲームのようになるが、それはそれでかまわん。

「分〝かったよ…すぅ…」

『ＦＦ』に特に疑問を持たず軽く息を吸い口を開く。

「『♪君〝を見〝てる「あぁ、もう良い…」……えっ？も〝ういいの？」

一抹の希望を平沢に託したが、ダメだった。

声は直りかけてるが、それでもまだ本調子じゃない。

「はぁ…」

（どうするか…）

「大〝丈夫だよサッくん」

俺が、平沢も無理なら田井中か琴吹に（俺という選択肢はハナからない）代わりの保険をっと考えていると、平沢が突然そんな事を告げてくる。

「あぁ？」

「澪〝ちゃんなら大丈夫」

「……」

俺の考えを見抜いたらしい…

コイツ…天然のくせに鋭いな。

「さっきも〝一人で練習してたん〝だもん
だから〝信じてあげよう？」

そう言いって田井中と話す秋山を見る平沢。

つられて俺も見る。

そこには琴吹も加わり三人で楽しそうに話す秋山の姿。

「…そうだな」

「それ〝に…」

「あン？」

「も〝しダメだったらサッくんが歌〝えばいいよ！」

「俺に死ねと？」

「ほぇ　〝？」

あの歌詞を歌えば俺は息絶えるだろう。
まだ死にたくないのでそれはゴメンだ。

「『君　〟を見てる　〝といつもハート…」

俺が歌うと天に召されそうな歌詞を口ずさむ平沢。
そんなに好きか…
だったら…

「…平沢、コーラスやるか？」

「え〝っ？いい〝の？」

「…あぁ」

ボーカルは無理でもコーラスなら何とか…なるかも。

『ＦＦ』のボーカル決めの時、一番に名乗り出たし、かなり気に入ってるんだろう。

その感性が良く分からんが…

この学園祭のために喉を枯らせてまで特訓に励んだんだ、コーラスぐらいやらせても良いだろう。

「わ〝ーいっ！」

「分かってるとは思うが、全編歌うなよ？
Bメロの一部とサビだけだからな」

「分〝かってるよサッくん師〝匠！
…でもBメ〝ロってなに？」

「…分かってねェじゃん」

今さっき『分かった』って言ったよな…

「はぁ…」

理解してない天然に楽譜を取り出し説明する。

……

「じゃあ次は『虹の風景』をやるかっ」

「そうだな」

田井中と琴吹と雑談したおかげか分からんが、多少はリラックスした様子の秋山。

次は俺がボーカルなのでテレキャスをからアコギに代え、マイクスタンドの前に移動しようとしたら…

ガチャ

「みんないるわね～♪」

部室の扉が開き、上機嫌な様子の山中教諭がやってきた。

「先〝生〜　どうしたん〝ですか?」

「不本意ながらも軽音部の顧問になったことだし、何か手伝うことないかと思って…」

右手持っていた紙袋を漁り…

「衣装作って来ましたーっ♪」

中から平沢達のもの思われる服を取り出した。

「ノリノリだぁ!!」

「頭のネジぶっ飛んでんな…」

完全に俺達のまえではキャラが変わり（他の奴がいると猫をかぶる）
以前のような、おしとやかな人物はいなくなっている。

なんか二重人格みてェ…

つうかアホっぽいな…

「いや…先生　気持ちはありがたいんだけど…」

「え？」

田井中が指差す先に…

「あ、あ、あんな服、着て歌うの？
大勢の前で…？」

「…あ～ぁ…」

「ちょっとタイミング悪かったかな…」

せっかく秋山がリラックスして見た目いつも通りだったのに、ネジぶっ飛び顧問が提示した衣装のせいでガクブル状態に。

秋山をこんな状態にした衣装とは、ゴスロリファッションとでも言うんだろうか？
よく分からんが、フリルとレースをあしらった洋服が黒を基調にしたものが三着、白を基調にしたものが一着…こんなだった。

「う～ん　これはお気に召さなかったかぁ…」

コクコク！

必死に頷く秋山。

「それじゃ私の昔の衣装はどう？」

「……」

今度は…何だろうなコレ？

アフリカの民族が付けていそうな仮面にファーらしくものと、カラカラうるさい飾りがあしらわれている謎の物体を出してきた。

額には『岩』の文字…あぁ、ＲＯＣＫね…

なんつうか…一言で言うと『ワケ分からん』だ。

…こんなもんを付けて昔、人前に立ってたのか…

やっぱぶっ飛んでんな。

「あー！やっぱりさっきの服、着たくなってきたーっ！！」

そんな事言いたくなるわなそりゃ…

「ストップ！さわちゃん！」

見兼ねた田井中が割って入ってくる。

「こんな衣装、澪じゃなくても恥ずかしいよ～」

「だ、だよな！！」

「サクもそう思うよな？」

知るかよ。
これはお前らの衣装だろうが。
なんで俺に聞くんだよ…

「…そもそも俺には衣装はないからノーコメントで」

「大丈夫よ　ちゃんと咲也くんの分もあるから」

なんだと…？

そう言いって紙袋から取り出したのは…

「じゃ～んっ！」

「さわちゃん…それ…」

「……」

「…メイド服…」

出てきたのは、秋山が述べた通り…メイド服。

どっからどう見ても…メイド服。

まごうことなく…メイド服。

間違いなく…メイド服。

執事の相棒的な存在が着る…メイド服

おはようからオヤスミまで…メイド服（？）

ＭＥＩＤＯＦＵＫＵ・

「……」

「咲也くん？」

クルッ…

「サク？」

スタスタ…

「咲也？」

ガシッ

「咲也君？」

グッ！

「サ　゙ッくん？」

グォッ！！

「「「「「わぁーっ！！」」」」」

顧問に背を向け準備室に置いてあるオルガンに向いその椅子を右手で持ち上げ、振りかぶる。

「ストップ！ストップ！」

「ま、待て咲也！」

「落ち着いて！」

「どうどう！サッく゛ん！」

そんな俺を見て必死に止めてくる部員達。

「ちょっ！？待って待って咲也くん！冗談よっ！！」

「蹴リデナイダケマシダトオモエ」

「ヤバい！なんか口調が機械的だ！」

「アンタミタイナヤツガイルカラ世界中ガ平和ニナラナイ」

「いや！それ関係ないから！」

「来世ハモットマシナ人生ヲオクレ」

「「「「「うわーっ！！」」」」」

……

「じ、じゃあ本番…頑張ってね…」

バタン…

「……」

「「「「はぁ…」」」」

何とか落ち着いたあと、こんな事態を招いた顧問に日本における屈辱的な謝り方…土下座をさせ俺の本当の衣装（黒のジャケット、ズボン、黒のシャツに髑髏がちりばめられた銀のネクタイ、白のブーツ）と平沢達の衣装を置いてそそくさと退散していった。

場を掻き乱すだけ掻き乱しやがって…

「はぁ…」

ストレス発散のために修司を蹴ってこようかな？

「とりあえず、練習再開しましょ？」

「そうだ！練習だ！

…何もなかった、何もなかったんだ…」

「サッくん落〝ち着〝いた？」

「…サッくんって言わなきゃもっと落ち着く」

「それ〝はダメ」

「はぁ…」

「結局この衣装着るんだな…」

俺のため息と秋山の諦めにも似た呟きが嵐の去った部室に消えていった…

第二十四話（前書き）

学園祭編その四です。

多分次話で終わる…かも…

第二十四話

『虹の風景』の練習を終え、軽音部初ライブの時間が迫ってきたので、ステージがある講堂にアンプ等を運ぶことに。

「じゃあこれ、講堂まで運んどいて」

そう言って平沢にアンプを渡す田井中。

「ほ～い　ぅ…う　ぅっ」

「あー　重いから気をつけてね」

「…あ　ぇれ？そういえ　ぇば澪ちゃんは？」

「あぁ…　澪には他の事やってもらってる」

「…さっき何か、フラフラと出ていったな」

「そんな状態だから、危なっかしくて機材を運ばせられん！」

「そう〝なんだ～」

確かにあんな状態なら無理だな。
誤ってアンプをぶつけたり、落としたりして壊れたら堪ったもんじゃねェし。

「じゃあ行〝ってくる～」

「気をつけろよ～」

平沢がアンプの重さに負けながらもフラフラと歩いていった。

「……」

なんか、アンプ落としてごめんなさい的なオチが待ってそうな予感が…

「アンプ落としてごめんなさい…みたいなオチがありそうな予感が…」

田井中も同等の事を思ったらしい。
平沢が降りていった階段を見て呟いた。

「サク」

「あン？」

「唯が心配だからついていって」

「…つうかお前がついて行きゃいいじゃねェか」

「私はドラムを持って行かなきゃいけないし…自分の物は自分で、だろ？」

「…了解」

理にかなっているので部長の提案に頷く。

俺が使うアンプを持ち上げ平沢の後を追おうとすると…

「あぁ、ちょい待ち」

「あン？」

「澪のアンプも持っていって」

「…別にかまわねェけど、平沢がアンプ落としそうになったらどうすんだよ？」

秋山のアンプを持つと両手が塞がる。
故に有事際にフォローが出来ない。

「大丈夫！まだ口が残ってる！」

「……」

ビッと俺にサムズアップして三刀流剣士の真似事をしろというびっくりな提案をする。

「アホ」

「そんな真顔で言わなくても…冗談じゃん」

「はぁ…とりあえず何とかする　平沢が落とさないように祈っとけ」

そう言って左手に秋山のアンプを持ち上げ歩き出す。

「おっ！流石！やっぱり男は力があるな～」

「…そうかい」

田井中の感心の声を背に受け、平沢を追うため部室を出る。

―――――――――

階段を一階まで下りて賑わう廊下に出る。
平沢を探そうと周りを見渡せば、講堂への道をフラフラしながらスローペースで歩く物体を発見。

早々に目的の人物を見つけたので近付き声を掛けようとすると…

ストン…

「重〃い…」

と呟きアンプを廊下に置き…

「イ〃タタタ…」

トントン

と腰を叩き唸る平沢。

（老人かお前は）

俺はアンプを二個持って同じ道程を歩いて来たが、体に不調は感じられない。

…が平沢にとってはかなりの重労働らしい。

「歳〝を取ったな～…」

「老人かお前は…」

「ん？あ〝っ　サッくん」

高一の女子が言うとは思えない台詞を放つもんだから思わずツッコんでしまった。

そのツッコミが聞こえた平沢が腰を押さえながら振り向く。

「おぉ～　すごいねサッくんっ
二個も持ってるなんて、重くない？」

「…重ェけど、お前みたいにフラフラする程のもんじゃねェ」

「流石男の子だね～
私なんか手と腰が痛いよ～」

「……」

そう言いって俺に真っ赤になった手を見せてくる。

たったあんだけの距離でこの有様…

非力だなコイツ…

そういえば合宿の時も重くてギターが持てないとか言ってたな。

男と女でこうも違いがあるものなんだなと納得しかけた時に、その思いを覆す人物が現れた。

「♪フンフ～ン♪シャランラ～シャランラ～♪」

スタスタ…

「「……」」

ポップで軽快かつ陽気なリズムを口ずさみ田井中が持って行く筈のドラムの一部…最も重量があるバスドラムを爽やかな顔で軽々しく持って俺達の横を通り過ぎる琴吹。

それを見て絶句する俺達。

…つうかアイツいつ帰ってきた？

琴吹は俺達より先に講堂にキーボードを置きに出陣した筈なのに、何故か俺達が下りてきた階段から現れた。

「ムギち〝ゃんすごい…汗〝一つかかずに…」

「あれは例外だ…」

ますます深まる琴吹の謎。

――――――――――

とりあえず部長の言付け通り平沢がドジを踏まないかチェックしながら目的地を目指し、無事にオチをつけることなく講堂に着く。

ここに着くまで平沢を何度か休憩をし、時間がかかったがアンプが

無事なので問題ナシ。

その後残りのドラムセットを田井中と、またもやいつの間にか部室に戻っていた琴吹が持ってきて作業終了。

出番までの時間がまだあるので部室にて待機する事に。

「ふぅ～　終〝った～…」

「お疲れさん♪」

「体力ねェなお前」

部室に着いた途端にへたりこむ平沢にねぎらいの言葉をかける田井中。

そんな平沢を見て言葉を放つ。

と…

「三人共〜お茶が入ったわよ〜」

こんな日でもマイペースにティータイムの準備をしていた琴吹の声を聞いた途端…

「わ〝ぁ〜いっ！！流〝石ムギちゃん☆」

瞬時に立ち上がりテーブルに駆けて行った。

「はぁ…」

最早癖に成りつつあるため息を吐き、田井中と共にテーブルに向か

う。

……

「りっちゃんと澪ちゃんって幼馴染みなんだよね？」

席に着き紅茶を飲んでると、突然平沢による質問が。

「そうだよー」

「いつから一緒なの？」

「そりゃもう幼稚園からずっと一緒……あれ？小学校からだっけ？」

「幼馴〝染み違うんかい」

「平沢が的を得たツッコミを…」

珍しいな…

「ムッ　どうい〝う意味かな？」

「別に…　深い意味はねェよ」

「そっか！なら〝いいや！」

納得するの早ェな。

「澪〝ちゃんって小さい頃から恥ずかしがり屋さんだったの〝？」

「そうだぞー　私が『綺麗な髪だねー』って言ったり、『左利きなんだー』って言って、クラスのみんなに『澪ちゃんすごいよー左利きなんだってー』って言い回ったら、顔真っ赤にして恥ずかしがってたもんな～」

「いやっ　それ〝りっちゃんのせいじゃん！！」

「……」

ケラケラと笑いながら秋山の武勇伝を語る田井中。

それに対してまたもや的を得たツッコミを披露する平沢。

ふむ…なんか変なモンでも食ったか？

ガチャ

と部室の扉が開く音が聞え、その瞬間、俺は立ち上がりいつでも蹴りが放てるよう身構える。

「えっ？な、何？咲也」

「いや…　アホな顧問かと思ってな」

部室に入ってきたのは今の今まで話題の中心だった秋山の姿。

顧問だったら威嚇の蹴りを放ってたところだ。

「よっぽどメイド服がいやだったんだな…」
「当たり前だ」

田井中の言葉を即座に回答し再び席に着く。

少し驚いていた秋山も席に着き用意されていた紅茶に手を伸ばす。

「おっ　なんか落ち着いてんな」

田井中の言う通り、見た目はいつも通りの秋山。

（この短時間で何か心境の変化があったのか？）

「あんなにボーカルするの嫌がってたのに」

「そんな子供じゃないんだし、いつまでも動揺していられないわよ」

「……」

そう言って右手でティーカップを持ち、左手でソーサーを持って紅茶を飲もうと持ち上げる。

コイツ左利きだよな？

逆じゃね？

と…

ガチャガチャガチャガチャ

「「「めちゃめちゃ動揺してるし…」」」

「はぁ…」

緊張してると分かりやすく、ティーカップとソーサーを割れるんじゃねェの？というくらいガッチャガッチャさせる。

しかもコイツ…動揺し過ぎて自分の利き腕が分からなくなってやがる…

やっぱ保険いるな…

「もうすぐ本番なのに、そんな調子でどうするんだよ？」

「……もうヤダ……」

「あぁ？」

田井中の言葉にゆっくりと紅茶を置き顔をふせ、ポツリと言葉を漏らす。

「律！私とボーカル代わって！！」

顔を上げ遂に白旗を振った。

「…そしたらドラムどうするんだよ？」

「私がやるから！」

「んじゃベースどうするんだよ！」

「それも私がやるから！！」

「おーやってもらおうか！！逆に見てみたいわ！！」

「はぁ…　とりあえず落ち着けお前ら」

「咲也！！」

「…なんだよ」

「お願い！！私の分も歌って！！」

「死んでもヤダ」

「そんなこと言わずにお願い！！」

必死な形相で俺に詰め寄り、最終的には肩を掴んで前後に揺らしてくる秋山。

「ちょ…ヤメ…」

結構な力で揺らしてくるもんだから一人ジェットコースター状態になり脳が揺れる。

普段の秋山じゃ考えられん行動だ…

それほど切羽詰まってんのか…

「…ごめんね澪〝ちゃん私のせいで…」

シェイクされる俺の頭部がその言葉を聞き取れた時、ピタリと止まりブレていた視界が元に戻った。

「…私〝がこんな声にならな〝かったら…澪ちゃんが歌〝うことなかったのに…」

「唯…」

「やっぱ私〝がボーカルするよ！」

「いやいやいやいや…」

「ゴ、ゴメン唯！そんなつもりじゃなかったから…」

そして少し静まる空気。

…が、どんな空気になろうと、今の俺にとっては果てしなくどうでもいい。

グラグラする…
気持ちわりぃ…

つうか秋山…平沢に謝る前に、俺に謝罪しろや…

「…大丈夫？咲也君？」

「…脳細胞が何個か死滅したかもな…」

唯一、琴吹が身を案じてくる。

『紅茶飲む？』と勧めてくるが丁重かつ丁寧に断った。

…今飲んだら……色々ヤヴァイ…

「あっそうだ！ＭＣ考えておかなきゃ！」

「ＭＣってな〝に？」

「自己紹介とか…ほらっコンサートなんかで曲と曲の間に喋ったりするじゃん？」

「あ〝～っ　ある〝ある～」

「二曲やるんだからさ、やってみようぜ～！」

「……」

おそらく田井中はこの空気を払拭するために、そんな事を言い出したんだろう…

それともう一つ…

「澪はどんなのがいい？」

「えっ…そんなのいいよ…」

「いいじゃんいいじゃん、せっかくなんだしさ～」

秋山を励ますため。

こういう気遣うところは部長らしいな…

…だが、その気遣いの範囲をもう少し広げられないか？

ここにいるぞ？秋山以上に参ってる人物が…

「みなさ～ん！こんにちは～！」

あぁ…田井中レーダーに俺は反応しなかったようだ…

立ち上がり、ＭＣの練習始めやがったよ…

「今日は私達、軽音部のライブにようこそ～！」

「「イエーイ！イエーイ！」」

「…うるせェ…　脳に響く…」

「じゃあメンバー紹介をします！

ギター＆コーラス！

休みの日にはいつもゴロゴロ！甘いものなら私に任せろ！のんびり妖精…平沢　唯！！」

「ジャジャアーン！ギュッイーンッ！！」

エアギター（全力）

「キーボード！

お菓子の目利きはお手の物！しっとりノリノリ天然系お嬢様…琴吹

紬！！」

「ポロポロポロポロロロ～ン♪」

エアキーボード（ノリノリ）

「ベース&ボーカル！

怖い話と痛い話が超苦手！軽音部のドン！デンジャラスクイーン…

秋山　澪！！」

ガンッ！！

「あいたっ！！」

「誰がデンジャラスだ！」

「ほら…そんな感じが…」

殴られる（自業自得）

「ギター&ボーカル！

年中不機嫌顔だけどあなどるなかれ！目つきの悪さとギターの腕は一級品！軽音部黒一点！副部長…桐島　咲也！！」

「…けなしてんじゃねェかテメェ…」

睨む（その目つきの悪さで）

「最後に私！！」

そしてスルーされる。

「ドラム！

容姿端麗、頭脳明晰！爽やか笑顔で幸せ運ぶみんなのアイドル！部長…田井中　律！！」

ゴンッ！！

「あいたっ！！」

「自分だけ持ち上げ過ぎだろ！」

再び秋山に殴られる（ナイス）

「「あはははははっ！！」」

それを見ていた平沢と琴吹が笑う。

そして…

「クスッ　ははははっ！あはははははっ！」

秋山も笑う。

「……」

田井中のおかげで和やかな空気に。

まぁ　いいか…

一人ジェットコースターの件は流れても。

ここで秋山に謝罪を求めたら、空気読めねェ奴だし…

「…たまには部長らしいこともすんだな、お前」

「『たまには』とはなんだっ　日頃から部長らしいじゃないか私は」

「日頃は平沢と同レベルだ」

「それってどう反応していいの？」

「お好きなように」

和やかな空気が流れるなか、軽音部…桜高軽音部の初ライブまで、
あと一時間と迫っていた。

第二十五話（前書き）

学園祭編ファイナルです。

そして初ライブ。

※今回はオリジナル歌詞が登場します。

そういうのが苦手な方はスルーを。

第二十五話

平沢のケータイに真鍋から出番が近付いていると連絡が入り、講堂に向かうことに。

平沢はギターを背負い、秋山はベースを、俺はエレキを背に、アコギを右手に持ち、田井中と琴吹は全員分の衣装を持って部室から出ていった。

――――――――――

ガチャ…

講堂に着き、裏口から中に入る。

今は、桜高祭のパンフレットによると演劇部による劇が始まったばかりらしいので邪魔にならぬよう、ゆっくりと裏口の扉を開ける。

「（人がいっぱいいるな～）」

「（今って演劇部がやってるんだよな？）」

「（うん、そうよ　ね？咲也君？）」

「…あぁ」

中に入ると倉庫のようなスペースに出り、そこには演劇部員と思われる奴等が華やかな衣装を身に纏い所狭しといた。

そんな演劇部員を見て田井中が小声で言葉を出す。

別にここは倉庫スペースなので余程のデカい声を出さない限り、通常のトーンでかまわないと思うが、雰囲気がそうさせてるんだろう。

その雰囲気に呑まれた秋山が小声で確認をするために琴吹に話しかけ、更に琴吹が俺に最終確認をとる（俺がパンフレットを持っているため）

そしてこの会話に参加しなかった平沢は…

「……」

ジッとステージの方を見据えて何やら考え込んでいた。

（初ライブで緊張しだしたか？）

今まで緊張の欠片も見せなかったが、この場に来て実感が湧いたみたいだ。

「な〝んの劇やってるんだろ〝う…？」

「……」

違った…

そうだったなコイツとは着眼点が違うんだ…

勉強不足だった…

「みんな」

「あっ　和〝ちゃん」

俺が『天然娘　平沢　唯』についての勉強不足を嘆いてると真鍋がやってきた。

「軽音部はこの後の合唱部の次だから準備あるんだったら、今のうちに済ませといて」

「衣装はどこで着替えたらいいんだ？」

田井中が持っていた紙袋を見せながら真鍋に問う。

「あそこに更衣室があるから　そこで」

そう言って真鍋が指差す先には一つの扉が。

『一つ』しかない…

更に良く見てみると…

【女子更衣室】

と紙に書かれて扉に貼られていた。

「おい　真鍋」

「なに？」

「俺はどこで着替えりゃ良いんだよ？」

「サクはその辺でいいじゃない？男なんだし」

「こんな言葉知ってるか？『男女差別』」

「いや　冗談だって♪」

「はぁ…」

冗談かどうか怪しいな…
マジトーンだったし…

「えっと…男子は、その…」

俺の質問に真鍋が何やらバツが悪そうに言い淀む。

「なんだよ？」

「…とりあえず唯達は更衣室で着替えてて」

「分〝かったよ♪じゃあ後でね〝サッくん♪」

「サッくん言うな」

「はい　咲也君の衣装」

「覗くなよ～」

「な、何言ってるんだよ律っ！」

俺にそう告げると平沢達女性陣は更衣室へ、俺は…

「それじゃあ…咲也は私についてきて」

そう言うと真鍋は踵を返し、何故か講堂から出ていった。

「……」

その行動に疑問を持ちながらも後を追う。

―――――――――

真鍋の後を追い講堂から出ると、少し離れた人気のない場所に連行された。

その場所には、木と木の間をブルーシートで囲んであるスペースが。

つまりここが…

「これが男子の更衣室なの…」

「……」

だそうだ。

女子との差がありすぎんだろう…

そりゃあこの学校は元女子校だから男子の更衣室はないにしても、もうちょいマシなモンは用意出来ねェのかよ…

例えばテントとか…

「…こんな言葉知ってるか？『男女差別』」

「ゴメン…これはあんまりだから生徒会でも言ってみたんだけど、『経費削減』だって…」

「はぁ…」

これは日本の不景気の影響でも受けたか？

誰だよ今の生徒会長…

「…もう別にこれでかまわん…」

「そ、そう？咲也が良いなら良いんだけど…」

良くはねェよ。

…だがコイツに文句を言っても仕方がない。

練習に行くために俺と平沢を手引きしてくれたし、生徒会でも意見したみたいだしな。

「じゃあ　着替えてくる…」

「う、うん」

ブルーシートをめくり、中に進入。

「……」

更衣室…と呼ぶのはどうかと思うが、中には誰もおらず真っ青な空間が。
四方はブルーシートで囲まれてるので良いといえば良いのだが…

「…上、ガラ空きじゃねェか…」

ただ単に四方を囲んでいるだけなので見上げれば、白い雲と青空が…
雨が降ったらどうすんだよ…
更に足元は母なる大地、土の色…

「…なんか敷いとけや…」

グチグチ文句を呟いても、この状況は変わらんので渋々着替える。

（やっぱ真鍋に文句言っとくべきだったな…）

そんな事を思いながらブレザーを脱ぐ。

――――――――

青空更衣室で着替え終わり、再び倉庫スペースへ。

そこでは依然として演劇部の劇が行われており、台詞が聞こえてくる。

更に合唱部と思わしき団体が待機していた。

その連中の邪魔にならぬように、まだ姿を見せない平沢達を待つために隅に移動し、壁にもたれる。

……

眼をつぶり、腕を組みながら…ぶっちゃけ半分寝かけてたら…

「サッく〝ん」

平沢の濁声が聞こえ、覚醒する。

「エ〝へへ〜　どうかな?」

「……」

眼を開くと白を基調にした衣装に着替えた平沢が立っており、俺に感想を求めてくる。

「…普通」

「ガーンっ！」

似合ってはいるが、そう答えるとなんか田井中辺りが調子にのりそうなので、是とも否ともとれる答えを提示する。

「サッくんはカッコいぃい…じゃなくて…普ぅ通だーっ！」

「ありがとよ」

「うぅ…」

そんな俺の感想に平沢が対抗してきたが、あっけらかんと返す。

そしてションボリする平沢。

「唯、無駄だって…サクにそんなこと期待しちゃ」

「唯ちゃん似合ってるわ」

そこに黒を基調にした衣装を纏った田井中と琴吹が現われた。

「失礼だなお前」

「じゃあ褒めろよ～」

「普通」

「ですよね…」

「で、秋山は？まだ着替えてんのか？」

ラスト一人が見当たらない。
女の着替えは長いらしいのでそう尋ねるが…

「いや　全員着替え終わったよ」

「…ンじゃあ何してんだよ？」

「あんなことしてる」

田井中の指差す先には女子更衣室。
その扉から秋山が顔だけ出し、キョロキョロしてる。

「…何してんだアイツ？」

「澪ちゃん、恥ずかしいって」

俺の疑問に琴吹が答える。

…どうでもいいがかなり挙動不信だ。
怪しい奴に間違われんぞ。

「澪〝ちゃ〜ん！はや〝く〜！」

「コッチコッチ♪」

「お〜い！澪〜！」

「…あんまデケェ声出すな」

平沢達が騒ぐもんだから周りの連中がチラチラ見てくる。
コイツらといると、こういう視線を浴びる機会が多いな…

「……」

ヒョコヒョコ…

平沢達の声を受け、秋山が更衣室から出てコッチにヒョコヒョコと向かってくる。

「ち、ちょっと律…

やっぱこんな格好で出なきゃいけない…？」

「うぷぷ　よく似合ってますわよ澪ちゅわん☆」

「からかってやんなっつうの…」

Uターンすんぞ…

「すっごく可　愛いよ！澪ちゃん！」

「ゆ、唯…そんなこと言わないで…恥ずかしいよ…」

「本当に似合ってわ～澪ちゃん　ねぇ咲也君？」

「普通」

「ぅ…」

ラスト一着の黒の衣装を纏う秋山に平沢が感激の様子で褒めるが、
それは秋山とっては逆効果らしい。

…そして俺の発言に若干落ち込む。

問題。

褒めたら止めて欲しそうに恥ずかしがる秋山　澪。
けなしたら間違いなく落ち込むでしょう。

では、その中間は？

答え。

落ち込む。

なんやねん。

―――――――

『以上　合唱部でした

次は軽音楽部です

準備がありますのでしばらくお待ち下さい』

演劇部と合唱部のステージが終わり、いよいよ軽音部の出番が。

アナウンスのその言葉を受け、部員全員と学園祭実行委員で機材を幕が下りているステージに運ぶ。

ドラムとキーボード、アンプ、三つのマイクスタンドを設置し、最後に俺の立ち位置の右後ろにアコギをギタースタンドに置き、準備完了。

実行委員は退散し、ステージ上には俺達軽音部のみが。

「うわ～っ！人〝がいっぱい〝いるよぉ～！」

「ほんとだぁ～」

平沢と琴吹がステージ端から幕をめくり観客席をチェックする。

「サ〝ッくんサッくん！！すごい〝よ！！」

「分かったから落ち着け…　あとサッくん言うな」

スゲェテンション高けェよコイツ…

眼がオバケ屋敷の時同様、光線が出そうなくらいに輝いてる…

「今こそ！練習の成果を見せる時だぜ！！」

「う〝んっ！」

「はいっ！」

どうやら俺も含め全員、眼に見える緊張はしてないようだ。

それ以上に期待と興奮が勝ってるんだろう。

「さ、咲也…」

コイツ以外は。

「あン？」

「さ、咲也は緊張しないのか？ボーカルやるんだし…」

「鋼のハートだからな」

「え、えっ？なにそれ…」

「…要は全く緊張しねェってことだ」

「そ、そうなんだ…　私も欲しいな…」

「…なら鍛えろ」

「澪、サク」

と田井中が俺達を呼ぶ。

「ほら　手、だして」

見ると田井中、平沢、琴吹が円陣を作り、その中央にそれぞれ手を重ねていた。

その意図を理解し、俺達は近付き手を出し、重ねる。

「おっ　素直だな～サク」

「うるせェ…ヤメるぞ…」

「ゴメンゴメン♪

コホンっ！

いよいよ私達、桜高軽音部初ライブ！」

『お待たせしました

軽音楽部によるバンド演奏です』

「いくぞっ！！みんなーっ！！」

「「おーっ！！」」

「お、おー…」

「……」

田井中が拳を振り上げ、平沢と琴吹もそれに続く。

秋山は躊躇いがちに軽く拳を上げ、俺は無言で四人を見る。

（さて、どうなるか…）

……

それぞれの立ち位置…観客席から見て、左後ろにキーボードの琴吹、右後ろにドラムの田井中、その前に田井中に被らぬようにギターの平沢が、同じく琴吹に被らぬようにギターの俺が立ち、そしてドセンターにベースの秋山が立ち、楽器を構える。

各々の準備が終わったのを見計らって、ステージの裾にいる真鍋に俺が合図を出し、そして…

ゴウン…

そんな機械音がして幕がゆっくりと上がる。

パチパチパチ…

その瞬間に観客席から拍手が起きる。

『可愛い～』

『何組の娘？』

『あっ　男の子がいる』

『格好いい～』

『一年生だよね？』

『イヤッホーイッ！咲也～！！』

なんて声が聞こえるが無視。

『咲也～！！咲也～！！』

無視。

『咲也～！！あっ　アイツ、あのギターの男子、俺の親友です！』

うるせェな、あのアホ…

なんで隣にいる見知らぬ奴に紹介してんだよ…

ここまで聞こえる…

「はぁ…」

ため息を吐いて、田井中のカウントを待つが一向に聞えない。

（スティックが折れたか？）

そんな中々起こり得ない事を思いながら、田井中の方に振り向こうと体を左に向ける…その途中に…

「……ッ」

体を小刻みに震わせ、ギュッと眼を閉じている秋山の姿が…

（マズい…コイツ…）

俺が数時間前に危惧していた事が起こってしまった。

あまりの緊張で遂にスキルを発動してしまい、今にも泣き出しそうだ。

こんな状態では歌はもちろん、ベースを弾くのは無理だ。

「澪…」

田井中達も異変に気付き秋山を見る。

事前の打ち合わせでは秋山が田井中に合図を出して始まるのだが、

これじゃあ…

『どうしたんだ？』

『始まらないね？』

『トラブルか～？』

『なんか真ん中の娘、震えてない？』

『咲也～！！俺は…俺はここにいるぞぉーっ！！』

「……ぅ」

更にはこんな声が聞こえてきて、秋山を更に追い詰める。

そして修司、お前黙れ。

ザワザワ…

ライブが始まらずザワつく講堂。

そこで俺は…

ジャァァァン！！

「サッく゛ん…」

「咲也君…」

「サク…」

「…さ…く…や…」

俺が突然、音を鳴らした事によりザワめきが収まり、この講堂内の全ての人物からの視線を受ける。

♪♪～♪…

そんな視線にかまわず即興でギターを奏でる。

場をつなぐために…

♪♪～♪♪…

そしてチラッと平沢に眼をやる。

《なんとかして秋山を励ませ》

そう平沢にアイコンタクトを送る。

アイツは秋山のことを『信じよう』と言った。
ならば今、その言葉に託すしかない。

♪～♪…

「澪〝ちゃん」

俺のアイコンタクトが通じたかどうか分からんが平沢が口を開く。

「み〝んな、澪ちゃんが頑〝張って練習してたの知ってるから！」

「そうだよ澪」

「澪ちゃん」

「絶対大丈〝夫だよ！がんばろう！」

「…唯…律…ムギ…」

♪♪♪…

そして…

「ありがとう、みんな…もう大丈夫っ」

その声が聞こえ秋山を見てみると、先程の弱々しい姿はなく、凛とした表情でベースを構える姿が。

♪♪~♪…

「ありがとう…咲也」

♪～…ジャァーン…

その言葉を受け、二分程やっていた俺の即興演奏は終わり…

「律」
「よしっ」

未だに余韻を残すギター音をバックに…

「ワンツースリーフォーワンツースリー」

田井中のカウントが聞こえて、俺はすかさず余韻を止め『ＦＦ』の前奏を弾きだす。

♪♪♪♪♪♪～

俺のパートの後に秋山のベースが…

♪♪♪♪♪♪～

そして平沢、琴吹、田井中が加わり、五重奏になる。

♪♪♪♪♪～♪♪♪…

前奏を弾き終え、秋山のボーカルが始まる…

「『♪君を見てるといつもハートＤＯＫＩ☆ＤＯＫＩ
揺れる思いはマシュマロみたいに…

……

…とっておきのくまちゃん出したし
今夜は大丈夫かな?♪』」

♪♪♪♪♪

田井中、秋山、琴吹、平沢と続き…最後に俺のギターソロ。

♪♪♪♪～～♪♪

「『♪もう少し勇気…

……

…ふわふわタイム♪」』

♪♪♪…

秋山が歌い終わり、『ＦＦ』の終わりが近付くと、俺と秋山、平沢は後ろを振り向き田井中を見る。
琴吹も視線を田井中に向ける。

ダダンッ！ダダンッ！

田井中が勢いよくドラムを二回叩き、スティック掲げ、その合図で…

ジャァァァン…

演奏が終わる。

「……」

ギターの余韻を残しつつ、観客席に振り向くと…

ワァーーッ！！！

パチパチパチパチッ！！！

歓声と拍手の波が俺達を飲み込んだ。

「ふぅ…」

ため息ではなく演奏が上手くいったことで安堵の息を吐く。

ふと部員を見渡すと、それぞれ満足と興奮が入り交じったような表情で笑い、秋山は…

「『み、みんな…ありがとぉーっ！』」

パチパチパチパチッ！！！

精一杯の感謝を観客に。

しかしな…

（いや…別に良いんだけどよ…なんかライブ終了の雰囲気に…なってねェか？）

秋山が全身全霊で挨拶するもんだから観客が『終った』みたいな雰囲気を醸し出している。

『サイコーだったぜっ!!今日はこんないい演奏を聞かせてくれてありがとぉーーーっ!!』

ほら　良い例が。

『ゴホッ!ゴホッ!』

そしてむせるし…

なにがしてェんだよあのアホは…

「『みなさ～ん！今日は私達のライブに来てくれてありがと～っ！』」

とここで田井中がどこから取り出したのか知らんがマイクを持ちMCを始めた。

それにより『あ、まだあったんだ』みたいな雰囲気に。

このあと歌うの俺だぞ…

やり辛ェよ…

「『ここでメンバー紹介を！！

ギター&コーラス！

平沢…ユーイ！』」

田井中が平沢を紹介し始めた時点で、テレキャスからアコギに持ち代える。

そして軽く弾いていると…

「『ギター&ボーカル！

副部長！桐島…サークーヤー！』』

と紹介され、軽く頭を下げておく。

『ヒャッホーイ！！サークーヤーッ！！』

…もう黙れって…つうか帰ってくれ…

迷惑だ…

その後、最後に部長の紹介が終わり…

「『それじゃあ次の曲…って言っても最後の曲なんですけど…まぁいいや！

この曲を聞いてください！

『虹の風景』！！』」

なんかグダグダだ…

だからやり辛ェての…

「はぁ…」

「ワーンツースリーフォー」

俺のやり辛さを知らんドラマーが勝手にカウントを取り、始まってしまった。

（あぁ…やり辛ェ…）

♪♪♪♪~♪

もう始まってしまったのでどうする事も出来ず、口を開く。

「『♪『それは違う』大人達が示すものに納得出来ない

『それも違う』子供達が示すものに納得出来ない

この心のわだかまりはどうすればいい？

その足で探しに行くべきだ！

僕が探しているのは七つの色
幻想？夢？物語？
言わせたい奴には言わせとけ
これが始まりの光♪』」

♪♪♪♪♪～♪

「『♪『あれは違う』男達が見つけたものに納得出来ない
『どれも違う』鳥達が運んできたものに納得出来ない

この抱える悩みはどうすればいい？
そのために歩き出したんだろ？

わだかまりも悩みも増えていく
希望？人生？家族？
これが後悔というやつか

光が消えゆく闇の中♪』」

♪♪♪♪♪~♪

ここで平沢のギターソロ。

♪♪~♪♪♪

「『♪抜け出せぬ闇の中を惰性に進む

『それ』も『あれ』も『どれ』も見てきた全てが違うんだ

そろそろくたばる寸前

ほら見ろ　雨だって降ってきた

そんな雨が光となり僕に降り注ぐ♪』」

♪♪♪♪♪~

「『♪僕が探していたのは七色の橋

雨？空？光？
見上げれば天に架かる虹の風景
あぁここが歩みを止める場所なんだな

わだかまりも悩みも消えていく
後悔？葛藤？闇？
そんなものは布石だった
今はこの風景が全てさ♪』」

♪♪♪♪♪～♪…

ジャァァァン…

やり辛さはあったが、歌いだした途端にそれは霧散し、代わりに生まれたのは演奏…バンドに対する高揚感。

この場に立ち、改めてバンド演奏の良さを実感した。

…とはいうもの、やっぱボーカルよりギターに専念してる方が良いけどな。

ワァーーッ！！！

パチパチパチパチパチッ！！！

『ＦＦ』同様、割れんばかりの歓声と拍手。

『カッチョイイーッ！！咲也ーッ！！』

そして俺だけに与えるアホの声。

「はぁ…」

平沢達にも言えよ…

『唯ちゃーんッ!!澪ちゃーんッ!!律ちゃーんッ!!紬ちゃーんッ!!サイコーだぁーッ!!』

あっ　言った。

『和ちゃんもサイコーだぁーッ!!』

いや、真鍋関係ねェし。

「あ〝りがとう〜　修司君〜♪」

「いや～　盛り上げてくれるな～　修司は～」

「ありがとうございま～す♪」

「やっぱり、恥ずかしいな…」

「はぁ…」

なんか最後はアホに持ってかれた気が…

後で蹴っとくか…

「よしっ　挨拶だ」

田井中のその言葉を受け、俺達は前を向き…

「ありがとうございましたぁ！！！」

「「「ありがとうございました！！」」」

「……」

観客に頭を下げる。

パチパチパチパチッ！！！

そんな拍手喝采の中、退場しようと足を動かした瞬間…

軽音部の歴史に残るであろう事件は起きた…

「キャッ！！」

ビダンッ！！

「澪！？」

「「澪ちゃん！？」」

「あぁ？」

俺はギタースタンドに立て掛けあったテレキャスを取ろうと後ろを向いていたので、何事かと思い、音の発生源を見てみると…

「イタタタ…」

何故か盛大にズッコケてる秋山の姿が。
そして起き上がろうと四つん這いになるが…

（その格好ヤバいんじゃねェか…）

そう思った瞬間…

ガバッ！

「うぉッ」

急に視界がゼロに。

「咲也君！み、見ちゃダメ！」

どうやら琴吹が手で、後ろから俺の視界を塞いだらしい。

秋山の衣装はドレスなのだ。

四つん這い等になったら隠れているもんが見えてしまう。

それを俺に見せない様に咄嗟の行動みたいだ。

現に琴吹自身、焦りがあるらしく声が上擦っている。

更に…

ギュウ！

「イデデデッ！」

力加減が制御不可らしい。

俺の眼球を圧迫してくる。

「おいっ！琴吹！つうか誰でも良いからさっさっと幕、下ろしてもらえ！」

でなければ失明する。

「の、和ぢゃん！」

「ま、幕下ろしてください！」

ゴウン…

平沢の声と真鍋の焦り声が聞こえ、機械音がして幕が下りてきたのが分かる。

…が、いかんせん幕が下りるスピードは遅い。

つまりその間、俺の眼球は圧迫され続ける。

（イデデデッ…）

今現在秋山がどんな状態か知らんが、琴吹が手を退けないということは好ましくないということだろう。

「イヤアァァァッ！！！！」

秋山が今世紀最大の悲鳴を。

「眼…潰れる…」

こうして秋山は初ライブにて、ある意味活躍し、ステージの幕が下りきったと同時に軽音部初ライブの幕も閉じた。

――――――――

「みんな　昨日はお疲れさん！」

明けて月曜の放課後。

部員全員と顧問は部室に集まっていた。

「唯は初ライブにしてはなかなかのものだったよ♪」

「いや～照れますな～

ねぇねぇ、サッくん」

「あン？」

濁声が完治した平沢が田井中の言葉に分かりやすく照れ、俺に話しかける。

「サッくんはどう思った？私の演奏？」

「…良かったんじゃね？」

「ほんとぉ！？」

「…あぁ」

平沢の演奏は完璧だった。

ぶっちゃけコイツはそれまで練習じゃあ出来てはいたものの、決して１００％ではなかった。

だが昨日の本番では二曲とも完璧に、中でも『虹の風景』のギターソロは群を抜いていた。

本番に強いタイプか…コイツ…

『物覚えの良さ』『絶対音感』『本番に強い』…本当に天才かもな…

「わぁ～いっ！」

「上手だったわ　唯ちゃんのギター♪」

「ムギちゃんも上手だったよ♪」

「じゃあ次のライブじゃ是非、歯ギターを…」
「あっ　それはいいです」

歯ギターにこだわるな、この顧問…

「あっ！これ見て！」

そう言って田井中が取り出したのは一枚の紙。

そこには…

【澪ちゃんファンクラブ】

「…秋山にファンクラブ？」

「イエース！できたらしいぜ！」

「わぁ～　すごいっ！」

「おぉ～」

「唯ちゃんもファンクラブを作るために歯ギターを…」

「あっ　それはいいです」

「じゃあ　咲也くん…」

「ＮＯサンキュー」

「え〜っ…」

『え〜っ』じゃねェよ。

「まぁ…当の本人は再起不能だけどな…」

田井中の言葉に秋山を見るが…

「…ブツブツ…」

部室の隅で何やらブツブツ呟き、中間テスト時の平沢以上にドンヨリし、真っ白になっていた。

秋山　澪。

トラウマを抱える。

そして…

季節は冬に移りゆく…

第二十六話（前書き）

クリスマス編前編です。

チラッとあのキャラが登場しています。

第二十六話

街ゆく人々は笑顔で溢れ、吐き出す白い息は寒空に昇り、雪を思わせる。

見渡せば、家族連れ、カップル、友人グループ、家路を急ぐサラリーマン…

街はまるで星を表すかの様にキラキラと装飾され輝く。

あちこちから聖なる夜の歌が流れ、今日という日を特別なものに。

本日十二月二十四日。

現在時刻午後五時三十分。

「あぁ〜　ママ〜みてみて！」

俗にいうとクリスマス・イヴ当日。

こんな日に俺は何をしているかというと…

「サンタさんがいるよ～！」

サンタになっていた…

――――――――――

「じゃんじゃじゃあーん♪」

十二月二十二日。

二学期の終業式を終え、部室で俺以外の四人がまったりとお茶を楽しみ、俺はアコギで曲作りに没頭していると（この音がＢＧＭになり、まったりしていたらしい）田井中の上機嫌なボイスが聞こえた。

曲作りの手を休め、ボイス発生源を見る。

「クリスマス会のチラシを作ったよ～♪」

「……」

よし　関係ねェ。

再び曲作りに専念する。

今回は三曲を作曲中。

内二つは既に歌詞があり、まずはその二つの歌詞に曲をつけている。

♪♪…

「……」

しかし…この歌詞…相変わらず…秋山チックが出てんな…

十二月の頭に秋山が書いて来た二つの歌詞…

【カレーのちライス】

【私の恋はホッチキス】

「……」

…タイトルだけでびっくりだ…

まぁ…そこは深く追及しなかった。

やっとこさ『桜高祭の悪夢』から立ち直ったみたいだったし、なんか言ったら負のマイナス連鎖で再び真っ白になりかねん。

♪♪～♪…

ちなみに残りの一曲の歌詞は、俺がする予定。

本当なら秋山にやってもらおうかと思ったが、歴代の歌詞（ＦＦ、カレー、わた恋）が少し…というか結構、俺にとっては抵抗があり、これでは現軽音部の曲の殆どが秋山チックになってしまう…

それを避けるため、得意ではないが俺が書くことにした。

また悩むんだろうな…

♪♪～♪…

「サクもいいよな？」

「あン？」

作曲に没頭していると田井中が俺を呼ぶ。

座っていた長椅子から田井中達がまったりしているテーブルに振り向く。

「…何がだ？」

「なにって、クリスマス会のことだよ」

そう言ってピラッと手製のチラシを見せてくる。

「…よく見えん」

俺と田井中達は四メートルぐらい離れているので、デカい文字は見えるが細かい文字はミミズにしか見えない。

「しょうがないな～」

「あっ　待って、りっちゃん」

「ん？」

田井中が席を立ち、俺の元に来ようとするのを平沢が待ったをかける。

「それ貸して？」

「なにするんだ？」

「サッくんに届けるの」

「「「？」」」

「折り曲げていい？」

「いいけど…」

平沢の発言に全員が？を浮かべ、受け取ったチラシを折り曲げ、何

やら工作しだした。

「よしっ！」

出来上がったのは…

「紙ヒコーキ？」

秋山の言う通り、空飛ぶ飛行物体『紙ヒコーキ』。

「あっ　それを咲也君に飛ばして届けるのね♪」

「ピンポーン！大正解♪」

「……」

いや普通に届けろよ。
つうか俺が貰いに行った方が早ェんじゃね？

「よ～しっ…とうっ！」

ヒュー…

平沢が放った紙ヒコーキは大きな放物線を描き…

トン…

ポテ…

「「「「「……」」」」」

俺がいる長椅子を大きく越え、部室の扉に当りそのまま自由落下。

スクッ

テクテク…

ヒョイ

テクテク…

「サッくん　お届け物です」

「…随分遠回りな配達物だな」

あえなく失敗した紙ヒコーキを平沢が回収し、漸く俺の元に。

…普通にやっときゃこんな無駄な労力を使わねェで済んだのにな…

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き、ヒコーキ形態からトランスフォームし内容を確認。

【軽音部クリスマス会

日時：12月24日
場所：ムギの家
会費：1，000円

※全員絶対参加のこと!!】

「ふーん」

「みなみに場所は唯の家に変更になったから、間違えてムギの家に行くなよ～」

「私の家はいつも何かしらの予定が入っていて都合が悪いの…」

「ていうか咲也はムギの家知らないだろ」

「料理なら任せてねサッくん！憂が作ってくれるから！」

『お前が作るんじゃねェのか』とか『この会費は何に使うんだ』とか『何かしらの予定ってなんだ』とか『曲作り手伝えよ』等のツッコミが浮かんだが、それを言うよりも俺が既に参加ＯＫみたいな空気になってるので、その空気を破壊するとしよう。

「あっ　そうだ！あれやろうよ！プレゼント交換！」

「やろうやろう～♪」

「やろうやろう～♪」

「澪～　変なもの持ってくるなよ～」

「それはお前だろ！

小学校の時だって…」

「…大いに盛り上がってるとこ悪いんだけどな…」

俺が空間破壊の呪文を唱えようとしたら…

「ダメだぞサク」

田井中に阻止された。

―――――――――

現在時刻午後五時三十二分。

「すみません」

「ハイッ！いらっしゃいませ！」

「……」

今日何人目か分からん客がやってきた。

「サンタさんとトナカイちゃんだぁ～！」

親子らしく幼い女の子が俺達を見て眼を輝かせる。

「ケーキを一つ頂きたいんですけど」

「『ショート』『チョコ』『レアチーズ』がありますが、どれにいたしましょう？」

「えーっと…」

「あたしチョコがいい～」

「クスッ　じゃあチョコで」

「ありがとうございます！」

母親の注文を受けチョコケーキが入ってる箱を紙袋に入れる。

「…お待たせしました
…2，０００円になります」

「じゃあ5，０００円から」

母親から金を貰い釣銭を渡すため、金が入ってる小型の金庫を開ける。

「…3，０００円のお返しです」

「…サンタさん」

ケーキを買ったので立ち去るかと思いきや女の子が俺に話しかけてきた。

「あん？」

「（コラッ！）」

「…な、なんだ…い？」

「あのね、あたしね…あんまり、いいこじゃなかったけど…サンタさんきてくれる？」

「……」

（どう答えりゃあ良いんだ…）

この世の汚れなど全く知らない純粋無垢でつぶらな瞳で凝視してくる。

「…あーっと…それは…だな…」

「大丈夫だよ♪」

俺が言い淀んでいると、トナカイが助け船を出航させる。

「君みたいな可愛い娘は、サンタさんはほっとかないよ♪」

取りようによってはロリコン発言だな。

とんだ泥船だ。

「ほんとぉ？」

「本当だよ♪なぁサンタさん？」

「…あぁ」

「（愛想良くッ！）」

「…も、もちろん…だ、よ…」

「わぁーいっ！」

満面の笑みを浮かべる。

「すみません、ありがとうございます
ゆいちゃん行こう？」

（ゆいちゃん？）

「うん！バイバイ！サンタさん！トナカイちゃん！」

「バイバ～イゆいちゃん！」

「…バイバイ…」

俺達に笑顔を浮かべ親子は去って行った…

「はぁ…」

ため息だって出たくなる。

疲れる…

「全く〜　毎年言ってんだろ?『接客の時ぐらい愛想良くしろ』って」

「うるせェな…　毎年言ってんだろが　『だったら裏方に回せ』って」

「じゃあ　お前ケーキ作れんの?」

「無理に決まってんだろ
アホかお前」

「なんで!?今の俺が悪いのか!?」

―――――――――

「あぁ？」

「サクのことだから『俺は不参加だ』とか言うんだろ～？」

「りっちゃん、サッくんのマネ上手いね！」

「いや～っ　ありがとう…じゃなくて、唯！サクはクリスマス会参加しない気だぞ！」

「えっ！？そうなのサッくん！？」

「あぁ」

この部長…お見通しってか…

…だからコイツこのチラシに『全員絶対参加』なんて書いたんだな。

「え～っ！なんでなんで！？」

俺の発言に心底仰天する平沢。

「…咲也来れないのか？」

秋山の声が聞こえ、見てみると何やら落ち込んだ様子だ。

「……咲也君……」

今度は琴吹が。

…かなり落ち込んでらっしゃる。

「だいたい、サクは協調性が欠けているッ！」

俺に対し、ビシッと指差してくる。

「あぁ？どこがだよ？」

「合宿の時だって最初、渋ってたじゃないか～」

「あれは人としてのモラルを主張したまでだ
最終的には行ったじゃねェか」

「異議アリ！それは結果論に過ぎません！」

なんで裁判風だ…

「裁判長！発言の許可を！」

「え？私、裁判長なの？」

ここで何故かエラい落ち込んでいた琴吹が秋山裁判長に挙手し発言を求める。

「は、発言を許可します」

「咲也君はクリスマス会に参加出来ない理由は何なのでしょうか？」

「異議アリ！私も知りたいです！」

「異議ねェじゃん」

自分の立ち位置がピンとこない平沢が矛盾した提案をする。

つうかなんだよ、このノリ…

「えーっと、桐島　咲也被告人は答えなさい」

「誰が被告人だ」

なんか秋山もノってきてる…

「いいから、答えるっ

部長命令だ！」

「さ、裁判長命令」

「じゃあ私は裁判長のお友達命令～」

琴吹よ、それはただの一般人だ…

「私はなんにしようかな～？」

知るか。

「はぁ…」

なんかカオスになってきた…

―――――――

現在時刻午後六時十五分。

「……」

カチカチ…

「サンタがケータイいじんなよ　印象悪ィぞ？」

「…だったらトナカイが喋んな」

「喋るトナカイだっているんですぅ～
青っ鼻のぉ～」

「それは悪〇の実の能力者だからだ」

「まぁな」

なんで『どや顔』すんだよ…

意味分からん…

「あの～　すいません」

このタイミングでトナカイがする『どや顔』に不気味さを抱いていると再び客の声が。

「いらっしゃいませ～

…愛想良くだぞ？」

「…やれたらな」

「やれよッ！？」

若干メンドーだと思いながらケータイを閉じ、ポッケに仕舞い、客に向き直る。

「えーっと…」

中学生だと思われるその客は、黒髪にツインテールの小柄な女子だった。

そのチビンテール（見た目で命名）はケーキが入った箱が積み重なっている、長テーブルの上にあるメニュー表（三種類のケーキしかない）を見て悩んでいる。

「じゃあ、このショートケーキを一つ」

「へいっ！毎度アリ！」

「……」

なんで江戸っ子スタイルだ？

トナカイの江戸っ子スタイルに疑問を持ちながらも、チビンテールが指定したケーキを紙袋に入れていると…

「お嬢ちゃん、これからデートかい？」

「えっ！？」

「…アホ」

何言ってんだ、このアホトナカイは…

愛想良くやり過ぎだ…

チビンテールの眼が点になってんじゃねェか…

「い、いえっ！違います！友達とです！」

「とか言って実は～？」

「あのっ、だから…」

若干頬を紅く染め、必死に弁解するがその行為が裏目に出り、トナカイが何故か更に詰め寄り、チビンテールを困惑させる。

「邪魔」

ドガッ！

「うべしっ！！」

なのでアホトナカイの横腹を蹴って傍迷惑な行為を止めさせる。

「えっ！？」

それを見ていたチビンテールから驚きの声が。

「サンタが蹴るんじゃねェよッ！！」

「左足だ」

「そうなんだ♪じゃあいいや♪

って納得するかァ！！」

「黙れ　客を困らせるお前が悪い」

「コミニケーションとってただけじゃん！」

「『コミュニケーション』な」

「勉強になります～♪

…じゃねェよッ！！」

「おら　ケーキだ」

「愛想ゼロかッ！！」

俺達のやり取りを呆けた表情で見ているチビンテールにケーキを渡す。

「あ、はい…」

代金を貰い、釣銭を渡したら…

『梓～っ！』

そんな声がチビンテール後方から聞こえ見てみると、数人の女子グループがコッチに手を振っていた。

「お前の友達か？」

「あ、はい」

「じゃあ、さっさっと行ってやれ…」

「はいっ、ありがとうございました！」

その言葉はケーキを売った事に対してか暴走トナカイから救った事に対してか分からんが、俺にペコリと頭を下げケーキを手に持ち、ツインテールをなびかせ友人達の元に駆けて行った。

「メリークリスマス！！良いお年を！！」

「…どっちかにしろ」

あのチビンテールと再び相目見えるとは、この時は思いもしなかった…

―――――――――

「「「「手伝い？」」」」

「…あぁ」

カオスな裁判の末、俺が何故その日、クリスマス会に参加出来ないのかを白状する（なんか屈辱的だった）

二十四日と二十五日は全国のケーキ扱い店が慌ただしくなる。

修司の家…

【ｋＡＧｅＭＩｙＡ】

も例外ではなくクリスマスケーキの発注や店に来る客が通常の倍に増え、従業員三人では、とても手が回らない状態になる。

そこで影宮家の両親と仲が良い桐島家の両親が立ち上がり、救いの手を差し延べ、毎年恒例行事に発展した。

両親だけ手伝いに行けば良いのだが、猫の手も借りたい忙しさらしく、俺も毎年駆り出される。

修司の両親にはギターを買うために少ない額ながらも金を頂いたので、無下に断る事は出来ない

という旨を平沢達に伝える。

「そうなんだ…それじゃあ、咲也が参加出来ないのは仕方ないな…」

「そうね…　先約だし…」

「てゆうか修司の家ってケーキ店だったんだな～…」

「今度行ってみよう…」

秋山と琴吹は納得したようだが、田井中は修司の家がケーキ屋だったことにしみじみとし、平沢は至っては何故か秋山達と同じトーン

でターゲットを捕捉し、行く気だ。

「…つうことで、俺は参加不可だ」

正当な理由なので、これにて閉廷…かと思ったら平沢が…

「でも、サッくん」

「サッくん言うな」

「お店の手伝いが終わったら来れるよね♪」

「……」

余程俺に参加して欲しいのか、笑顔でこんな提案をする。

…そりゃあ、終わったら行けるかもしれんが、忙しくて毎年終わりが見えない状態だしな…

「良いこと言った！唯！
そうだよ、終わったらサク来れるじゃん！」

「…いつ終われるか分からんぞ？」

「それでも約束ぐらいはして欲しいよ
こういうみんなで集まる時には咲也も来て欲しいし」

「…もしかしたら、もれなく修司がついてくるぞ？」

「大勢いたほうが楽しいわ♪」

「あっ！じゃあ和ちゃん誘おうよ～」

「そうだな！和には世話になってるし」

「そのお礼もしなきゃね♪」

「じゃあクリスマス会は私、律、唯、ムギ、和に憂ちゃん、それに咲也と影宮君の八人だな」

あれ？俺の参加が決まってる？

しかも修司も？

「楽しみだわ～クリスマス会♪」

かなり嬉しそうな表情の琴吹。

よっぽど楽しみなんだろ、だからコイツは俺が参加出来ないと知った時あんなに落ち込んでたんだな。

「絶対に来てねサッくん！憂もサッくんに会いたがってたから！」

まぁ平沢妹とは、晩メシをご馳走になってから会ってねェし…電話はしたけど…

「はぁ…」

合宿の時といい、今回の時といい、なんか丸め込まれるな…

「…行けたらな」

「絶対だよ！」

「はぁ…　行けたらな」

―――――――――

現在時刻午後六時四十六分。

「はぁ…」

吐き出す息が白い…

「さみぃ…」

この寒空の下、サンタのコスプレをしてひたすら客を待つ。

…今年も例年通り店内で接客をするもんだと思っていたが、その考えが一刀両断された。

『お前達も高校生にランクアップしたんだから思い切って、外…否ッ！

人がわんさか溢れる駅前でケーキを売ってみよう～☆

えっ　何故？

ノンノンノン

それを聞くのはヤボだぜ、サクッち♪』

という影宮父（３８）のアホな命令で俺と修司は駅前で、出張【ｋＡＧｅＭＩｙＡ】店をオープン（ちゃんと駅や街に許可済み）させていた。

つうか、店が忙しいのに俺達を出張させて良いのかよ…

そして…

『あっ　そうだわ！

クリスマスなんだからやっぱりサンタとトナカイよね～

ということで…はいっ

サンタとトナカイの衣装よ☆

えっ　何故？

ノンノンノン

それを聞くのはヤボじゃないかしら、咲也君♪』

という影宮母（３８）の突発的な発案により、駅のトイレで着替え、俺はサンタに、修司はトナカイの衣装を纏い、ケーキを販売していた。

ちなみにこの衣装、影宮母の手作りである。

どうやら突発的ではなかったらしい…

じゃなきゃこんな良く出来た手製の衣装は直ぐに用意出来ん。

こんなもん作る暇があれば、ケーキ作れや…

「客、来なくなったな…」

トナカイ＝修司がボヤく。

この出張店をオープンしたのは確か午後四時ぐらい。

六時ぐらいまでの二時間は結構客が来たが、チビンテールを最後に客足が途絶えた。

「…時間が時間だからな、もう来ねェんじゃね？」

「う～ん…　そうかもな」

と…

ブブブッ　ブブブッ

俺のケータイが震え、取り出しディスプレイを確認。

【平沢　唯】

「平沢か…」

「ん？唯ちゃんから？」

「あぁ…」

修司と共に内容を確認。

【件名：早く～】

【本文：サッくん早くおいでよ～

みんな待ってるよ～】

画像が添付してあるのでダウンロードして、見ると…

「…被ってる」

「おっ！唯ちゃんサンタかぁ～」

サンタのコスプレをした平沢が満面の笑みでVサインをしている画像だった。

「つうか俺にもメール送らないのかな…」

修司にはクリスマス会の事を一応伝えてある。
それを聞いた修司は狂喜乱舞していた。

「…人徳じゃね？」

「にゃにおッ！」

と…

♪～

「あっ！キタぁ！！」

修司のケータイが鳴り、意気揚揚と取り出して確認する。

「…って！メルマガかいッ！！」

流石だなコイツ。
期待を裏切らん男だ。

「…よしッ　行くぞ咲也！」

「あぁ？　どこに？」

「決まってんだろ！唯ちゃん家…クリスマスパーティー会場にだ！」

「…まだ店終わってねェぞ？」

「どうせもう誰も来ねェよ」

「アッチの店は？」

「向こうは歴戦の猛者が揃ってるんだぜ？
大丈夫だって♪」

まぁ…　俺達を出張させたんだしな…

「そうと決まれば灯台下暗し！」

「『善は急げ』な」

「そうとも言う！」

「そうしか言わねェよ」

「さっさっと片付けて、レッル…あ、舌噛んだ…レッツゴー！！」

「……」

絶好調だな…

「咲也手伝え！迅速に行動！」

急にウザイな…

……

出張店を乗せて来たリヤカーに再び、長テーブル、小型金庫、余ったケーキと紙袋と俺を搭載し片付け終了。

「…ってなんでお前乗ってんの!?」

「あン？　俺サンタだろ？お前トナカイ…
何か問題でも？」

「俺が引けってかッ!?」

「迅速に行動だろ？」

「グッ…　分かったよッ!!」

トナカイがリヤカーを引こうとするが、ある事を忘れていた。

「ちょい待てトナカイ」

「何？」

「着替えさせろ」

サンタの状態ままで平沢の家まで行きたくねェ…

『サッくんサンタだ～！』

とか言われかねん…

それは勘弁願いたいし、街中をサンタで移動したらハズい。

ケーキを販売してる時は俺の他にも店のキャンペーンでサンタがいたが、

『トナカイが引くリヤカーに乗るサンタ』

こんな映像は俺の人生にはいらん。

「ダメだ」

「はぁ？」

「クリスマスなんだから大丈夫だ！」

「お前は快感かもしれんが俺は生き地獄だ」

「そんな性癖持ってねェっつうの…

それによ、この格好で行ったら唯ちゃん達喜ぶぞ！

スプラッシュプレゼントだ！」

「『サプライズ』な」

「そうとも言う！じゃあレッツゴー！！」

ガラガラ…

「おいッ！ちょっと待て！」

「迅速に行動だろ？」

現在時刻午後七時二分。

平沢家に向け出発。

第二十七話（前書き）

クリスマス編後編です。

前回、『前編』なんてつけたから…

二話で収まって良かった…

第二十七話

ガラガラ…

「ゼェ…　ゼェ…」

「……」

「ゼェ…　な、なぁ…」

「…あン？」

「…か、代わってくんない？」

「円周率、全部言えたらな」

「ゼェ…　無理…」

「……」

只今、平沢家に向け疾走中…だったが、トナカイの体力がレッドゾーンに突入したため、失速中。

俺は相変わらずサンタの格好でリヤカーに乗っている。

サンタの格好のままで移動したら、注目の的かと思いきや、意外に視線は感じなかった。

クリスマスだから『あ、サンタだ』『ふーん』ぐらいの反応しかないという嬉しい誤算だった。

今は住宅街にいるのだが、何処の家もクリスマスパーティーをしているんだろう、たまに楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

故に歩いている人は全くいない。

「…せ、せめて…降りてくれ…

このスピードじゃあ…時間がかかる…」

「はぁ…　しょうがねェな…」

確かにこんなノロマなトナカイタクシーじゃ、時間がかかる。

（歩いた方が早ェな）

「よっ…」

そう判断し、リヤカーから飛び降り…

スタスタ…

歩いて行った。

「ゼェ…　か、代わってはくれないんだな…」

―――――――――

俺の脳にインプットされてある曖昧な平沢家への地図を頼りに歩くと、見覚えがある建物が見えてきた。

俺が平沢妹に連れられて来たのは確か半年前だった筈。

…よく辿り着けたもんだな。

ガラガラ…

「ハァ…　ハァ…
ここ？唯ちゃん家？」

俺よりだいぶ後方でリヤカーを引いていたトナカイが追い付いてきた。

「あぁ…（多分）」

内心そう思いながら表札を確認し、『平沢』の文字があり確信を得る。

「よしっ」

と、トナカイがリヤカーをその場に放置し、おもむろに玄関に向い…

ピンポーン

躊躇いもなしにインターホンを押す。

…迅速に行動し過ぎだ。

「『は～い』」

とインターホンから平沢妹と思わしき声と…

「『あっ！　サッくんかな!?』」

「『思ってたより早く来たな～』」

平沢と田井中らしき声が漏れてきた。

「宅配便です」

「…なんでだよ」

何故かトナカイが宅配業者を装い答える。

「『あっ　はい　ちょっと待ってて下さい』」

そして疑わず素直に返事する平沢妹と…

「『なぁーんだ…　宅配便かぁ…』」

「『じゃあ次、ムギの番な』」

平沢のかなりガッカリした声と琴吹に何かを命ずる田井中の声が漏れてきた。

「…自分でやっといてなんだけど、俺って気付かれないのは悲しいものがあるな…」

「じゃあするなよ」

「サボタージュだよ

いきなり俺達が来たら驚くだろ？」

「お前の恐ろしい間違え方に驚きだ」

サプライズをどう間違えたらサボタージュになるんだよ…

コイツ今日は本当に絶好調だな…

ガチャ

「お待たせしました」

俺がアホの絶好調ぶりに呆れていると玄関が開き、平沢妹が出てきた。

御丁寧に印鑑を持って…

すると…

「メリークリスマス！唯ちゃん！」

アホが玄関口に立ち、ご機嫌な様子で片手を上げ言葉を放つ。

「えっ！？」

「ん？」

そのアホを見て硬直する平沢妹と、初めて会う人物に疑問符を掲げるアホ。

「あれ？唯ちゃん、髪型変えたんだ～」

おっと…　コイツ気付いてねェ…

平沢姉妹は似ているが、気付ける範疇だぞ…

「はぁ…　おい修「どうしたの憂?」…」

アホの間違いを正そうとしたら妹の声を聞き付けた平沢がやって来たらしい。

「あれれ?唯ちゃんが二人…?」

玄関口にトナカイが仁王立ちしているので中の様子が伺えない。

更に…

「なんだなんだ?」

「どうかしたの?」

田井中、琴吹…

「憂？」

真鍋…

「宅配便じゃあ…」

秋山…

「ねぇ　このシャンパン開けて良い……ってトナカイ？」

山中顧問が…

つうかなんでアンタがいるんだ？

『……』

「あ、あれ？みなさん？」

アホを凝視する七人とそんな反応を見て戸惑うトナカイ。

彼女達からは俺の姿はトナカイが邪魔で見えてないみたいだし、何やら面白い展開になってきそうなのでこのまま傍観に徹する事にしよう。

「えーっと…誰？」

田井中が疑問の声をあげる。

アホは全身にトナカイの衣装を纏い、角が付いたニット帽を装備し、鼻には丸い真っ赤なつけっ鼻が装着しているのでパッと見、誰だか分からん。

「いやいや、誰って俺は…」

「…変質者？」

と、誰かが零し…

『えぇっ！？』

「はぁッ！？」

騒動まで3秒前。

3

0　　1　　2

「えぇっ！？」

「へ、変質者！？」

「憂！こっちに！」

「あっ　は、はい！」

「ちょっ！まっ！和ちゃん俺は…」

「澪！警察に電話！」

「う、うんっ　１１９…」

「澪ちゃん落ち着いて！それは救急よ！
１１７押して！」

「ムギちゃん違うよ！それは…何だっけ？」

「ムギも唯も落ち着け！警察は…何だっけ？」

「り、律！は、早く思い出して！」

「いやっ！だから俺は…」

「警察は１１０よ！」

「和ちゃん！？待って待って！俺は…」

「１１８…あっ！間違えた！」

「お、落ち着いて澪ちゃん！私がするよ！」

「大丈夫！？お姉ちゃん！？」

「えーっと…何だっけ？」

「１１７よ！唯ちゃん！」

「いや、違うぞ紬ちゃん！それは…確か…」

「あっ！思い出した！１１７は時報だ！」

「そっち思い出してどうするんだよ律！」

「みんな落ち着きなさい！」

「さわちゃん！」

「私が警察に電話するわ！１１０っと…」

「だぁーっ！ストップ！ストップ！先生！俺だよ！俺！」

「……」

面白い展開にはなったが、警察沙汰は勘弁だな…

そろそろ止めるか…

スッとトナカイの背後に立ち…

「サンタキック」

ドゴッ！

「ぎょはッ！！」

ビダンッ！！

『わぁっ！！』

『きゃっ！！』

その腰を蹴り、トナカイ俯せに倒し踏み付ける。

俺の視界を遮っていた茶色の毛がなくなり、目の前には唖然と驚愕と警戒の表情の面々が。

「こ、今度は何～…」

「サンタクロース？」

秋山が怯え、真鍋が怪訝な表情で見てくる。

「サッくんっ！！」

と、いち早く俺に気付いた平沢が声をあげる。

サンタ帽を被っていたため秋山と真鍋は気付きにくかったようだ。

「咲也さん！」

「咲也君！」

「その不機嫌顔は正しくサク！」

「…お前の判断基準はそこか？」

それはそれでショックだ。

「…じゃあ、このトナカイは…」

「…ガッツリ踏んでるよ…どう見ても踏み付けてるよ…咲也…」

と、山中顧問が俺に踏み付けられてる状態のトナカイを見て言葉を漏らす。

「修司？」

「「「「えっ！？」」」」

「修司…さん？」

「やっぱり影宮君だったのね～」

真鍋が放った衝撃発言に驚き、一斉に地に伏せるトナカイを見る女子軽音部員。

聞き覚えのない名前にコテンっと首を傾げる平沢妹。

変質者が修司だと気付きかけながらも警察に電話しようとした顧問。

つうかアンタ教師だろうが…

アッサリと生徒を警察に突き出そうとするなよ…

――――――――――

「腰、痛ェ～…」

「大丈夫ですか？　湿布ありますけど…」

「…ンな奴に湿布やらんで良いぞ
湿布が可哀相だ…」

「どういう意味だよ！」

「豚に真珠」

「俺は豚じゃねェ！トナカイだ！」

「ツッコミどころ、そこじゃねェだろ…」

「あはは…」

『聖なる夜の変質者事件』の後、変質者が修司だと判明して全員安堵の息を吐いて納得し、納得された修司はかなり落胆するなか二度目となる平沢家に足を踏み入れた。

ちなみに俺の姿を見た平沢が…

『サッくんサンタだ～』

と俺の読み通りのリアクションをして…

『ハイッ！目線こっちに！』

とガンガン写真を撮ってきた。

「美味しい～♪」

「本当、美味しい」

「和ちゃんそれ、何ケーキ？」

「レアチーズよ　食べる？」

「うんっ！　あ～ん…」

「しょうがないわね～」

「なんか和、母親みたいだな～」

「本当ね～♪」

「うん　そうだな」

で現在、リビングに通され、売れ残ったケーキを（ショートが二個、チョコが二個、レアチーズが三個）を全員に振る舞い、修司は腰の痛みを訴え、平沢妹が心配し、その心配は皆無だと俺がたしなめている。

ちなみに何故、『チーズケーキ』ではなく『レアチーズケーキ』かと言うと…

『『レア』だからな、貴重な感じがそそるだろ？

という訳で数量限定でレアチーズケーキを作りました～☆

日本人は限定に弱いからな！

売れちゃうよ～コレは！

ハッハッハッハッ～！！』

という影宮父（３８）精神年齢（１３）の高笑いの提案によりレアチーズに。

…結果、売れたのは売れたが、売れ残りの数が一番多いな…

「よーしっ！全員揃ったところで、一芸披露の続きだ～！」

「…一芸？」
「披露？」

ここでいきなり田井中が拳を突き上げそんな発言をする。
その発言の中にあった単語に俺と修司が引っ掛かる。

「一人一芸！それがこのクリスマス会のルール！」

「…傍迷惑なルール作んなよ」

「ノリが悪いな～サクは～
さわちゃん以外全員やったんだぞ」

「私は大トリよ！」

「知らんがな」

最悪のタイミングで来てしまった様だ…
エスケープしてェな…

「さっきはムギまでやったから……じゃあ修司！」

「へ？ワタシアルカ？」

「…どこの中国人だお前」

未だにトナカイの衣装のままでいる修司（俺は既に私服に着替え済み）が腰に負担がかからないように、俯せの状態で自分の顔を指差し、中国人になる。

「う〜ん…　一芸かぁ…」

（いっぱい持ってんだろ）

デカい声出したり、奇声出したり、悲鳴出したり、本来の姿の虫になったり…

「お前、今失礼な事考えなかったか？」

「…その反対の反対な事を考えた」

「ふーん、ならいいや」

「反対の反対って…つまり咲也は失礼な事考えてたって事なのに…」

「それに気付かない修司は、ある意味すごいな…」

秋山と田井中の会話が俺の耳に届いたが…

「じゃあ…一芸いきます！」

俺の隣にいるアホには聞こえず、一芸を披露する。

「腰の痛みに耐えながらも必死に立ち上がろうとするトナカイ」

『……』

そう言い奴は、俯せ状態から四つん這いになり…

「よっ…」

プルプルプルプル…

「ぐっ…ぬぬぬ…」

四肢を震えさせ、何とも表現しずらい形相で立ち上がろうとする。

その姿、正に痛々しい。

ポン…

「…もういいわ、十分よ影宮君…

見てると痛々しいから…」

見兼ねた山中顧問が修司の肩に手を置き止める。

「ありがとよ先生…
その言葉で俺は報われた…」

ガクッ…

『もうこの世に未練がない』みたいな表情で膝を折り、再び俯せになる。

このまま成仏して、消えるんじゃねェの？

「じゃあ修司のコントが終ったところで、次はサク！」

「わぁーっ♪」

「わぁーっ♪」

「……」

「コントじゃないよ…　律ちゃん…」

田井中が俺を指名し、平沢と琴吹が拍手し歓声をあげる。

一芸なんてねェぞ…

『ジー』

「……」

全員が期待の眼差しで見てくる。

（どうすりゃあ良いんだ…）

「では！桐島　咲也によるモノマネで～す！」

「はぁ？」

エスケープを考えていると、成仏しかけてたトナカイが急に俺にムチャ振りを吹っ掛けてきた。

「サッくんのモノマネ～♪」

「おぉ～　貴重だ～」

「咲也がモノマネするなんて…」

「考えられないわね…」

「楽しみ～♪」

「咲也さんのモノマネ…」

「カメラはバッチリよ！」

「……」

なんかハードルが上がった…

事の原因のトナカイをギロリっと睨む。

「そんな怖い顔すんなって…　マジで怖いから…

安心しろよ、策は考えてある！」

ビッとサムズアップし、どこからともなく取り出したマスクを俺に付け…

「……」

更に、トナカイの角をハズしたニット帽を深く被せ、俺のツリ眼以外が隠れる。

『ぁ……』

「完成！『リアル犯罪者』！」

ドゴォン！！

……

「じゃあ気を取り直して…

最後は私ね！」

アホを蹴りで沈め、幾分スッキリしたところで山中顧問が立ち上がり、大トリを務める。

「えいっ！」

バチンッ！

「…何やってんだよアンタ」

おもむろに服をめくり、腹を出したかと思えば、思いっきり掌で腹を叩いた。

腹芸か？

「もみじ～♪」

『うわぁ…』

「……」

手を放すとそこには、真っ赤な手の跡が残りそれを『どうよ？』みたいな顔で笑う。

それを見て全員が引く。

「綺麗で優しいさわ子先生はどこに…」

「これがあの人の本性だ…」

秋山の悲愴な呟きが微妙になった空気に混ざり、散っていった…

――――――――――

ガチャ…

「さぶっ…」

外に出ると身を切るような凍て付く風が俺を襲う。

スタスタ…

そんな寒気の中、両手をズボンのポッケに突っ込み歩き出す。

外に出た理由は道端に放置したままのリヤカーを平沢家の敷地内に移動させるためだ。

あのまま放置しといたら通行の邪魔になるだろうし…

「…あった」

何より売上金が入った小型金庫をそのままリヤカーに積みっぱなしだったのでそれを取りに外に出た。

「ふぅ…」

小型金庫が盗難されてなく安堵の息を吐き、リヤカーを平沢家の敷地内に移動し終える。

と…

ガチャ

「う～　寒いね～憂」

「うん…　大丈夫？お姉ちゃん？」

玄関が開き、平沢姉妹が寒さに震えながら出てきた。

「あっ　いたいた～　サッくん」

「…何してんだお前ら？」

「咲也さんが急にいなくなったから、お姉ちゃんが探しに行こうって」

「サッくん、こっそり帰ちゃったかと思ったから」

「…違ェよ、コレを移動させてただけだ」

両手はポッケで暖をとっているので顎でリヤカーを指し示す。

「そうなんだ、良かった～」

「…帰るにしても、あのアホを置いては帰らん」

ほっといたら何しだすか分かったもんじゃねェし、ストッパーが必要だ。

「サッくんと修司君って本当に仲良しだよね～♪」

「はぁ？どこがだよ？」

「えっ？だっていつも一緒にいるし」

アイツが勝手について来るだけだ。

「今日だって修司君の家お店、手伝ってたし」

アイツの両親に借りがあるからだ。

「いくらサッくんに蹴られても、あんまり怒らないで笑ってるし」

それはアイツが変態だからだ。

「ね？仲良しだよ♪」

「はぁ…」

そう言ってニコニコ笑う平沢を見てため息が。

あのアホとは、幼稚園、小、中、高と神の悪戯でずっと一緒だったがそんな風に言われたのは初めてだ…

アホが聞いてたら小躍りして喜びそうだな…

本当にあのアホとは腐れ縁以外何物でもないな…

「あっ！？」

と、ここで急に平沢妹が空を見上げ声をあげる。

「雪っ！」

「あっ　本当だ～」

「……」

平沢妹の声に冬の夜空を見上げれば、チラチラと白い雪が舞い降り

てきていた。

「ホワイトクリスマスだね♪」

「さぶっ…」

「もーっ　サッくん、風情がないよ～」

「…寒ィモンは寒ィんだよ」

暑さに続き、寒さもダメな俺にとっては雪は天敵だ。

「お姉ちゃん、私にホワイトクリスマス、プレゼントしてくれたことあったよね？」

「え？……ん～？」

平沢妹がニコニコして姉に問い掛けるが、当の本人は忘却の彼方に大遠投してしまったようだ。

「昔、子供の時、お姉ちゃんがあの木に雪を降らせてくれたんだよ」

あの木＝玄関先にある木を指差すが…

「う～ん？あっ！……ん？」

相変わらず唸る。

一度検索にヒットし、何かを思い出したらしいが、目的のものでは

なく再び悩む。

妹がここまで言ってんだから思い出してやれよ…

つうか…

「…雪降らせたって、どうやってだ？」

問題。

ガキの平沢はどのように天候棒を駆使し、雪を降らせたのか？

「それはですね、クッションの中身の綿を使って、あの木に雪を降らせたんです♪」

答え。

今でもやりそうなことだった。

「私、嬉しかったな～
お姉ちゃんが私のお願い事を叶えてくれたんだって」

昔に綿の雪が積もった木を見ながら、平沢妹がその当時を思い出しながら本当に嬉しそうに笑う。

「……」

改めて思う…

コイツは、本当に姉が好きなんだな…

そしてその姉も…

「う〜ん…　そんなことあったような…」

「あの後、お姉ちゃん、お母さんに沢山叱られてたんだよ？」

「う〜…　思い出せない…

…でも、憂が喜んでくれたんならいいやっ♪」

妹のことを大事に思っているんだろう。

でなきゃ、雪を降らすなんて事はしないだろうしな。

「ありがとう、お姉ちゃん♪」

「ううん　良いよ♪

…思い出せないけど…」

「クスッ　あははははっ！」

「あははははっ！」

お互いを見合って笑う姉妹。

「フッ…」

何故だろうな…

この二人を見てたら口角が上がってしまった。

（寒さでおかしくなっちまったかねェ…）

そう思い、未だに降り続く雪を見上げる。

「……」

「…み、見た？憂？」

「…うん、見た…」

俺が夜空を見上げていると、何やら姉妹の会話が聞こえ、視線を感じる。

「…ンだよ？」

視線の原因を探るが姉妹は二人して、眼を見開き、口が半開き状態…ポカンとしていた。

「…が……た」

「あン？」

ポカン平沢が小さく口を動かし何かを呟く。

「サッくんが笑ったぁ！！」

「……」

見られていたか…

迂闊だった…

「初めて見たよ！サッくんが笑った顔！」

「私も初めて見ました！」

テンションがグイグイ上がった平沢姉妹が俺に詰め寄る。

「もう一回笑って？カメラで撮るから！」

「ヤダ」

「お願い～　サッくん～」

「…ンな甘えた声出しても、絶対にやらん」

「わ、私も、もう一度見たいです…」

「……」

お前もか、妹…

「あっ！そうだ！みんなに言わなきゃ！」

「絶対に言うな！」

修司と田井中と山中顧問の黄金トライアングルに絶対に弄られる…

「じゃあ笑って♪」

「断固拒否」

「ほらほら～　ニコニコ♪」

「お前が笑ってその連鎖反応で…なんて事は起こらねェぞ」

「憂は笑ってるよ？」

「♪」

「はぁ…」

本日十二月二十四日。

現在時刻午後八時四十七分。

俗にいうとクリスマス・イヴ当日。

俺の人生で最も騒がしく最も賑やかで、最も印象深いクリスマス・

イヴとなった…

第二十八話（前書き）

初詣にＧＯです。

激眠い…

第二十八話

ブブブッ　ブブブッ…

枕元に置いてある文明の最先端を走る機器…ケータイが震える。

ブブブッ　ブブブッ…

「……」

そんな些細な音で覚醒してしまった。

ブブブッ　ブブ…

が…俺が手を下すまでもなくケータイは沈黙し、再び部屋に静寂が訪れる。

まどろみに身を任せ、意識を夢の国にワープしかけたら…

ブブブッ　ブブブッ

再び軽い地震が発生する。

「…ンだよ…」

震源地である枕元に手を伸ばし、ケータイを手に取る。

【田井中　律】

「……」

ディスプレイ画面には部長の名が。

ピッ

ケータイを開き通話状態にし、耳に当てる。

「『あけおめ～！サク！』」

「…この電話は、契約者様の都合により、五秒後に自動的に通話不可となり、一週間は音信不通になります…

五…四…三…「『ストーップ　』」……」

俺の睡眠を妨げる部長のモーニングコールを退けようと留守番機能

風に告げてみるが、それは失敗に終った。

「…ンだよ…　つうか今何時だと思ってんだよ…」

「『何時って今１１時だよ？』」

「……」

その言葉を受け、部屋にある壁掛け時計を見る。

長針が１２に、短針が１１を指し、カーテンの隙間から陽の光が漏れている。

「……で？何の用だ…」

「『サクはこんな時間まで寝てたの？』」

「…それが目的か？…だったら答えはＹＥＳだ…

…じゃあな」

「『待った待った！気になったから聞いただけだって』」

「…じゃあ、さっさっと用件言えよ…」

「『軽音部のみんなで、初詣にいくことになったから♪』」

「……」

本日一月一日。

所謂、元旦。

午前十一時に部長から初詣の誘いを受ける。

「…つうか初詣、もう済ましたし…」

大晦日から元旦になる瞬間…年越しの瞬間、俺はとある神社にいた。
中学時代の友人プラス修司で大晦日の夜に神社に集まり、年越しを迎えた。

ついでに言うと、その後は友人の一人の家に行き、朝まで駄弁ったり、雑談を交わしていたら気が付けば朝になり、初日の出を拝みながら家路に就いた。

我が家に着き、風呂に入り、少しテレビの特番を見て、ベッドにダイブしたのが確か午前九時。

…睡眠時間、二時間。

「『いいじゃん二回行っても♪
という訳で今から『薦鳴神社』に集合！』」
「…今からかよ…　コッチは寝起きだぞ…」
お前のせいでな…
「『みんなにはもう連絡してるから
じゃあ、早く来いよ～』」
「…俺の話、聞いてたか？」

ブッ

ツー…　ツー…

「……」

切りやがった…

「はぁ…ぁ…」

ため息と欠伸が混ざったものをし、二度寝という邪念を振り払いベッドから渋々這い出る。

…行かなかったら非難のメールが届き、最悪の元旦になりそうだ…

―――――――――

着替えを済ませ、自宅を出る。

「……」

寒気と眠気のダブルパンチでノックアウト寸前になりながらも足を動かし、フラフラと神社を目指す。

……

「憂ちゃんくれ」

境内の入口付近に到着すると、正月早々物騒な人さらい計画の一端が聞こえきた。

その犯行声明が聞こえた方に視線を巡らせると、平沢、秋山、田井中、琴吹の姿が。

「…どういう会話したら、そんな言葉が出るんだよ…」

「あっ、サッくん～」

一人で神社で参っても意味がないので、近付き声を発する。

「あけましておめでとうございます、咲也君」

「……あぁ」

「眠そうだな咲也」

「…眠そうじゃなくて眠ィんだよ…」

「サクも唯みたいに年末年始は食っちゃ寝してたんだろ～」

「…コイツと一緒にすんな…」

「ヒド～い！」

田井中の発言に眠気まなこで平沢をみるが、心外だとも言いそうな様子で驚く。

「でもさ唯？それだけ食っちゃ寝してたら、太っちゃうんじゃないか？」

「私いくら食べても体重増えないんだ～」

「「ええっ！？」」

どうやら平沢の年末年始の過ごしかたの話をしていたらしい、その平沢の、のほほんとした発言に琴吹と秋山が…

「そんなわけ「ないでしょ！」…えっ？」

思いっきり反応する。

特に琴吹なんか秋山の言葉を遮るぐらい過剰な反応だ。

太りやすい体質か？コイツ？

「ム、ムギちゃんまで…」

「…ンなことより…」

「体重は女の子にとって死活問題なの！咲也君！」

「…へーへー　ワルカッタヨ…」

「真剣に謝ってないだろサク…」

俺がどうでもよさそうに事を片付けようとしたら、琴吹が詰め寄ってくるが、体重云々より気になる事が一つ。

「…なんでお前だけ晴れ着なんだ…？」

俺の視線の先には新年から気合いが入ってる秋山が。

「それは…昨日、律が着ていくのって聞くから…
てっきり律も着てくるのかと…」

「聞いただけ♪」

「なっ！？」

「……」

確信犯だろお前…

「着替えに帰る！」

「…じゃあ俺は睡眠のため一旦帰る…」

「コラコラっ」

歩き出した秋山に伴い俺も行動を開始したが部長に肩を掴まれた。

「サクは戻って来る気ないだろ？」

「……」

そりゃあな。

寝て起きたら夕方でしたみたいなオチになってるだろうし。

そんなオチになったら最早動く気すらない。

「そのままでいいじゃん
かわいいよ？」

「そ、そう？」

平沢の言葉に歩き始めていた足を止め、若干嬉しそうに振り向く秋山。

「そうだよ～♪」

秋山に近付き、手を取り笑う平沢。

「じゃあ…このままでいようかな？」

「うん！それがいいよ♪」

そして秋山も笑う。

「…で、何、眼を輝かせてんだよお前は…」

「今年も、いいものを見せてもらいました～」

そんな二人を見て恍惚の表情の琴吹。

「ムギも相変わらずだな…」

「…行くんならさっさっと行くぞ…
そして俺を解放しろ…」

「サクも相変わらずだな…」

田井中が何か言ってるが見事にスルーし、境内進入。

――――――――――

チャリン…

ガラガラガラッ！！

「……」

本日二回目の参拝中。

神社の最奥にある賽銭箱に五円を投げ込み（平沢は『より、ご縁がありますように』など言って十円を投入していた）鐘を鳴し（田井中が『より、ご縁がありますように』など言って盛大に鳴らした）合掌して願い事をする。

「みんな　何お願いしたの？」

田井中の問い掛けに…

「私は家内安全を」

「体重減りますように」

「美味しいものがたくさん食べれますように～」

「…この世から夏と冬が消滅しろ」

「…みんな軽音部のこと祈ろうぜ…

あと…サクは何で命令なんだよ…」

俺達の答えを聞いて呆れる部長。

コイツが部長らしいこと言ったぞ…

「じゃあもう一回な」

そんな部長の提案でやり直し。

「もっとご縁がありますように十五円にしよう」

「…金増やしたら良いってもんじゃねェぞ…」

「う〜ん…　じゃあ一円にしとくよ」

「……」

それもどうだろうな…

「あっ!?サッくん!一円がないよ!」

「…知るかよ…」

「仕方ない…　ここは五円玉で」

「いや…唯　何でもいいから早くしろ…」

田井中が平沢を催促する。

まぁ、後ろ詰まってるしな…

ヒュー…

チャリン…

ガラガラガラッ！！

「演奏が上手くなりますように」

「みんなと楽しく過ごせますように」

「部員が増えますように」

「……」

「ムギちゃんの持ってくるケーキをもっとたくさん食べられますように」

ゴンッ！

田井中の右ストレートが平沢の頭上に落下。

「ギターが上手くなりますように…」

「よしっ！」

……

「サッくんは何をお願いしたの？」

「サッくん言うな」

昼メシを食べるため境内で出店している露店を目指して歩いていると平沢が俺に問い掛ける。

「…男子部員が入部しろ」

「だからなんで命令なんだよ…」

「男子部員？」

俺の言葉に田井中が呆れ、平沢が首を傾げる。

「あ、そっか、男子部員は咲也一人だもんな」

「『そっか』ってなんだよ…」

今の今まで気付かなかったのか秋山よ？

「サクって違和感なく馴染んでるよな～」

違和感あったらあったで嫌だが、全くないってのはどうよ？

「じゃあ修司君に入部を勧めたらどうかしら？」

「…アイツが入部したら俺は辞める」

「サッくんが辞めちゃうのはイヤだから…」

「修司が入部するのはナシで」

哀れ…　影宮　修司。

お前がいない所で勝手に話が進み、拒否られたぞ。

いい気味だ。

……

改めて露店を目指し歩を進めていると…

ピタッ…

全員が足を止めた。

「「「「「「……」」」」」」

そして全員がある一点を凝視する。

視線の先には、おみくじが引ける場所があるのだが、俺達はそこでおみくじを引こうとしている人物を見ていた。

「さわちゃん…」

平沢が言う通り、その人物は山中顧問だった。

別にあの人が神社にいても何も問題ない。

問題はその行動だ。

「さわ子先生…必死に祈ってるな…」

秋山が述べる通り、中々おみくじを引かず、精神統一をするかの如く、眼を瞑り合掌している。

スゲェ怪しい…

「あっ　おみくじを引き出した…」

琴吹の呟き通り、開眼しおみくじを引き、出てきた棒に書かれた番

号の引き出しをワクワクしながら開ける。

「結果、よくなかったのかな…？」

平沢が再度呟いた通り、おみくじの内容を見た途端、教師がやっちゃイカン表情をする。

更に近くでおみくじを引いていたカップルを睨む。

「…完全に族（やから）じゃねェか…」

そして…

「あ…　引き直した…」

納得いかなかったらしく、再度おみくじを手に取りかなりの勢いで振り出す。

何やってんだよ…あの人…

「はぁ…」

ため息を吐き、何も見なかった事にして歩き出そうとしたら…

「みんなの分のおみくじ引いてきたよ♪」

「なんで勝手に引いてくるんだよ！」

「……」

いつの間にか姿を消していたカチューシャがおみくじを五枚持って現れた。

本当、何やってんだコイツ…

「はいっ　一枚づつ取ってね～」

「まったく…」

「私はコレ♪」

「サッくん、先どーぞ」

「…あン？何でだよ？」

「残り物には福があるからね」

「……」

こだわるなコイツは…

賽銭の時も何やらこだわってたし…

「……」

福があるか知らんが、とりあえず先に引き、最後に平沢が引く。

「大吉だ！」

「私も～！」

「わぁ～いっ！大吉だぁ！！」

秋山、琴吹が立て続けにヒットを飛ばし、平沢もそれに続く。

どうやら残り物には福があったらしい、その場でピョンピョン飛び跳ねる。

「サッくんは!?どうだったの!?」

「……」

かなりテンションが高い平沢が何故か俺の手を取り聞いてくる。

無言で右手に持っていたおみくじを平沢の顔面に突き付ける。

「…ん?あっ!すごーいっ!サッくんも大吉だぁ!」

誰の陰謀かどんな奇跡か知らんが俺まで大吉が当選した。

この流れでいくと部長も大吉かと思いきや…

「……凶」

見事にオチをつけてくれた。

「返せっ！！」

「ええい　見苦しい！！」

「唯！交換して！」

「え～っ　ヤダよ～」

「じゃあムギ！」

「私もちょっと…」

「サク！」

「ん」

「流石サク！副部長のだけはある……ってレシートじゃんか！」

俺達が騒いで（主に田井中だけ）いると…

「…ッ！！」

バッ！

「澪ちゃん？」

突然、秋山が後ろを振り向いた。

「どうしたんだ澪？」

「今…誰かに見られてたような気がして…」

その言葉を受け、秋山の視線の先を追うがそこには参拝客がわらわらと溢れているだけで特に怪しい奴の姿は見当たらない。

「…お前だけ晴れ着だから、目立ってるんじゃねェの？」

「そ、そんなこと言わないでよ…

なんか恥ずかしくなってきた…」

この時は全く気にも止めなかったが…

これが重大な事件に…そこまで大袈裟ではないが、ある出来事に発展するとは思いもしなかった…

第二十八話（後書き）

作中に出てきた『薦鳴神社』という名は完全捏造です。

第二十九話（前書き）

今回の話は原作では唯達が二年生の話ですが、アニメでは勝手に一年生の時だと判断し（二期で梓が全く知らなかったので）この時期に入れました。

作者の独断なのでその辺は大目に見てやって下さい。

第二十九話

時は流れ、本日二月中旬。

「すまんなお前達、手伝ってもらって
これで最後だ」

週一回の掃除当番を終え、部活に向かおうとしたら担任に呼び止められ、ある手伝いを命ぜられた。

職員室にある大量の書類やら使う機会が滅多にない辞書等々をほぼ物置と化している資料室に運ぶため人手が必要。

そこで白羽の矢が突き刺さったのは俺達の班だった。

わざわざ担任が俺達の班の掃除区域にやってきて、勧誘をしたがその途端に修司はマッハで逃げ出し、残された俺と二人の女子（名前忘れた）が渋々手伝うハメに。

俺も逃げ出したかったが女子二人だけに手伝わせるのは心苦しいのでこんな状況に。

「…悪いと思ってんなら一人でやれよ」

「こんな量は一人じゃ無理だろ？」

「……」

つうかこの担任…

他の教師から人望が皆無なのか？

何故わざわざ俺達に手伝わせる？

「まぁそんな不機嫌な顔するな、ジュースでもおごってやるから」

「……」

カッカッカッっと笑いながら、人のコンプレックスをグサグサ刺してくる。

（いつか蹴ってやる…）

教師蹴ったら停学か退学になりそうだから、俺達の卒業式当日だな…

―――――――――

胸に決意を灯し、資料室を後にして、部室への階段を上ろうと一段目に足をかけたら…

「…さ、咲也…」

弱々しい声で誰かが俺の名を呼ぶ。

「あン？」

後ろを振り返るがそこには誰もおらず、空耳かと思い改めて階段を上がろうとしたが…

「…咲也…　コッチ…」

（コッチってドッチだよ）

再び名を呼ぶ声がしたので振り向くとそこには、物陰に潜む秋山の姿があった。

「…何やってんだお前？」

十人中十人は現在の秋山の状態を見て、そう言うであろう質問を隠れんぼ大将に問う。

「…ちょっと…」

「あぁ？」

何やら訳ありな様子でそう答え、チョイチョイっと手招きする。

「……」

このまま去ってもいいが、秋山の瞳が『ヘルプ』と訴えているので、その手招きに従う。

「…で？なんだよ？
つうか部活はどうした？」

この時間ならとっくに部活は始まっている筈なのだが、サボったり掃除当番がない限り遅刻などしない秋山が今、俺の前にいるのはおかしい。

「そ、それどころじゃないんだ…」

「？」

それどころじゃねェって…

軽音部の事以上に大事な事があんのか？

つうか良く見たらコイツ…

「……ぅ」

怯えてねェか？

体を小刻みに震わせ、少し涙ぐみ、さっきからしきりに辺りをキョロキョロ見渡している。

そんな様子にどうしたのかと疑問を投げ掛けようとしたら、秋山が口を開いた。

「き、今日一日中、学校で誰かに見られてるような気がするんだ…」

「誰か？…誰だよ？」

「それが分からないから怖いんだよ…
みんなに相談しても、真面目に心配してくれないし…」

薄情な奴等だな…

「…だから、頼れるのは咲也しかいないんだ」

「…って言われてもな」

どうしろっつうんだよ…

この学校内全ての人物から『お前が犯人か?』っと聞き回れと?

それは随分骨が折れる作業だ…

「…自意識過剰っつうことで納得しとけ」

「本当に誰かに見られてるんだって！」

「その誰かが分かんなきゃ、どうしようもねェぞ」

♪～

別に秋山の言うことを疑う訳じゃないが、特定の人物が見当たらなければ対処のしようがない。

♪～

「……」

…つうかさっきから聞こえる、このメロディーはなんだ?

「…ぅ…な、なに?この音…?」

眼に見えない誰かの視線とこのメロディーが相乗効果になり、秋山が更に怯える。

♪~

「…近付いて来てんな」

「さ、咲也ぁ…」

あまりの恐怖に秋山が俺の背に隠れる。

♪～

「……」

そしてついに、そのメロディーの正体が姿を現した…

「♪担任から逃げてやったぜ～♪　咲也はきっと怒ってる～♪

でもでも～…」

「「……」」

「そんなの関係ねェ！

そんなの関係ねェ！

はいっ！　オッパッ…」

ドゴォン！！

「ピィィィッ！！」

その正体はアホ。

メロディーは流行がとっくに過ぎ去っている海パン芸人のネタを口ずさんだ音だった。

「誰じゃあ！わしを蹴り飛ばした奴……あ、あらら？」

俺を見て硬直するアホ。

「こ、これはこれは……ご機嫌よう……桐島さんチの咲也君…」

「ご機嫌よう……　影宮さんチのゴキブリ君」

「あはは…　怒ってる？」

「……」

グリグリ…

「痛い痛いッ！俺をゴキブリみたいに、もしくはタバコの火を消すみたいに踏み付けないでッ！」

「テメェ…よくも逃げやがったな…」

グリグリ…

「ＳＯＳ！ＳＯＳ！内臓破裂寸前ッ！」

「さ、咲也やり過ぎだって！」

アホの救難信号を受け、見兼ねた秋山が止めに入る。

「チッ…」

あまりにも秋山が必死なので渋々足を退ける。

……

「では、澪ちゃんが感じている視線は今日に限ったことではないと

？」

「うん…　冬休みが終わってから徐々に視線を感じて…
今日なんか一段と誰かに見られてるんだ…」

「……」

とりあえずこのアホにも協力してもらおうと、秋山のストーカー問題を話した。

コイツが犯人ではないかと思ったが、アホだがそんなことはしない奴なので（確信は持てんが）その考えは抹消…いや、ぼんやり頭の片隅に残しとくか…

「ふむむむ…」

そしてコイツはどこからともなく取り出した伊達眼鏡を装着し、見

た目はアホ、頭脳もアホの迷探偵になっていた。
自身は名探偵と自負していたが…

「あい、分かった」

「…何がだ」

「謎は全て解けた」

「えっ！？本当！？」

迷探偵のその言葉に秋山が希望を見出す。

「今から調査する」

「はぁ…」

「お前アホだろ」

謎解けてねェじゃん。

秋山なんかため息吐いたぞ。

「この名探偵、江戸川　修司に任せときな」

「…名字変わってんぞ」

「では、行って参ります」

「おう、逝ってこい」

「なんか引っ掛かるけど…
まぁいいや！アディオス！」

タッタッタッ…

迷探偵は調査のため俺達の前から立ち去った…

つうかアイツ、何をどう探すんだろうな…

まぁ　良いか…

「…じゃあ、万事解決したところで部活に行くか」

グイッ

踵を返した途端に秋山が俺の肩を掴む。

「…なんだよ？」

「まだ何も解決してないじゃないか…」

「あの迷探偵に任せとけよ」

「…影宮君じゃあ、あんまり期待出来ないっていうか…」

同感だ。

「はぁ…」

ため息を吐き、この事態を迷探偵より確実に解決出来そうな組織を秋山に告げる。

「…生徒会に相談したらどうだ？」

「あ…そっか　生徒会…」

まるで、今気付きましたみたいな表情をする秋山。

コイツ…たまに抜けてるとこあるよな…

―――――――――

所変わって生徒会室前。

そこに俺と秋山は来ていた。

本来なら秋山一人で来させるつもりだったが、あまりにも視線に怯え、怖がるもんだから、乗りかかった船という事で俺も帯同する事に。

コンコンコン…

秋山が生徒会室の扉をノックし…

『どうぞ』

中から返事が聞こえたので扉を開き生徒会室の中に入る。

ガチャ

「失礼します」

「……」

「澪？咲也？」

中には真鍋が一人で何やら書類を記入していた。

つうか他の生徒会の連中はどうした？

見たことねェぞ…

「どうかしたの？」

「どうもしねェよ」

「じゃあ何しに来たの…」

「俺が用があるんじゃなく、コイツが生徒会に用がある」

そう言って親指で秋山を指し示す。

「澪が？」

「の、和…　相談したい事があるんだけど…」

一歩前に踏み出し、真鍋に告げる秋山。

「実は…ここ数日っていうか、冬休みが終った頃から誰かに見られてる感じがするんだ」

「誰かに見られてる感じがする？」

その発言を受け、顎に手を当て深刻そうな顔つきになる真鍋。

「気のせいっことは？」

「…その線の考えが吉だ」

「気のせいじゃないと思う…」

「余り考えたくないけど、ストーカーの類かしら…」

「…その線の考えだったら凶だ」

「う～ん…　学内に不審者がいるとは考えにくいけど…」

（一人いるけどな）

今頃、迷走して迷調査している迷探偵が。

「何か心当たりはないの？」

「ううん…　特になにも…」

「そう…　咲也は？」

「あン？」

「第三者から見て、何かおかしな事がなかった？」

「……」

おかしな事ね…

そういえば平沢が…

『サッくん！昨日、アイス食べたら当りが出たんだよ！すごいでしょ！』

とか誇らしげに自慢してきたな…

全く関係ねェな。

「…そういえば」

と、秋山が何かを思い出したらしく口を開く。

「…初詣の時も同じ様な視線を感じたんだ」

「「初詣？」」

秋山の発言を聞き、真鍋と声が揃う。

「ほら、咲也も一緒にいたから覚えてるだろ？
『誰に見られてた気がした』って私が…」

「……」

そんな事あったような…なかったような…
つうかあの時は、睡魔が襲いかかってきてたから記憶が曖昧だ。

「…覚えてんのはお前だけ晴れ着だった事ぐらいだ」

「…それは覚えてなくていいよ…」

「…もしかしたら犯人は身近にいるのかも」

「ん？」
「え？」

ここで真鍋が思案顔になり推理する。

「澪だけ晴れ着だったのよね？」

「う、うん」

「晴れ着姿なんて滅多に見れるものじゃないし、犯人はその姿の澪をジッと見ていた…
で、その視線を学校でも感じるということは…」

「…同一犯が学内にいるってか？」

「うん　あくまで仮定だけど、その可能性が高いわ」

流石だな…

どこかの迷探偵より名探偵だ。

眼鏡かけてるし…

「とりあえず生徒会でも調べてみるわ」

「うぅ…　和…」

「何泣いてるのよ…」

犯人が身近にいると聞き、恐怖の涙…かと思えば…

「うぅ…　普通の反応してくれたのが嬉しくって…」

歓喜の涙だった…

「軽音部でどんな扱い受けてるの…」

「…おもしろおかしく、かつ苦労…だな」

「はぁ…」

俺の言葉を受け真鍋がため息を吐いたその時…

ガチャ

生徒会室の扉が開き…

「真鍋さん、いるかしら?」

赤のリボン…その色から察するに三年の女生徒が入ってきた。

ちなみに女子はリボンの色で学年が区別出来るようにされている。

一年は青、二年は緑、三年は赤という風になり、三年が卒業したら

新入生は赤のリボンとなり一周するしくみになっている。

そして男子はネクタイピンの色で学年が区別される。

「先輩」

「あら?」

真鍋から『先輩』と呼ばれたその人物は、俺を見て…

「…ぉ、お客さん？」

（ん？）

次に秋山を見る。

その瞬間、刹那だが僅かに驚いた様な顔をしたのを俺は見逃さなかった。

「……」

「どうしたんですか？」

「引き継ぎの資料、持って来たんだけど」

「すいません、わざわざ」

「ううん　良いのよ」

「……」

普通に真鍋と会話してるな…

怪しい感じがしたんだが…

気のせいか？

「どうしたんだ咲也？

あの人のことジッと見て」

「…秋山」

「なに？」

「…あの先輩のこと、知ってるか？」

「ううん　知らないけど」

秋山は知らない。
俺も知らない。

…だが、アッチは秋山のことを知っている素振りを見せた…

変に考え過ぎか？

「和、この人は？」

真鍋に、この人物のことを尋ねようとしたら、先に秋山が口を開いた。

グッジョブだ、秋山。

「生徒会長の、曽我部　恵さんよ」

「元生徒会長だけどね
よろしく、秋山さん」

「あ、はいっ」

「……」

やっぱり秋山のことを知っていたか…

秋山は元生徒会長を『知らない』と言った。
ということは『初めて会う』ということになる。
なのに向こうは秋山を知っていた。

元生徒会長だからといって全校生徒の顔と名前を覚えているとは考えられん。

（まだ結論は早いか…）

「桐島君もよろしくね」

「……ども」

俺のことまで知ってる？

秋山と俺の共通点は、共に軽音部所属ということ。

だったら、つじつまが合う。

桜高祭である意味、大活躍した秋山と共にステージにいたんだ。

講堂に生徒会長としていてもおかしくない。

…そこで俺達を知った…のか？

「やっぱり軽音部の人は、私のこと知らないかぁ…」

「ああっ！！す、すいませんっ！！」

「……」

少し、鎌を掛けてみるか…

「俺達は先輩のこと知らなかったんッスけど、先輩は俺達のこと知ってたんスね？」

「さ、咲也っ」

俺の発言を聞き、秋山が少し慌てる。

いや…　お前のリアクションが見たいんじゃねェんだって…

「え、えぇ…　桜高祭で軽音部のステージ見て…

ほらっ！秋山さんはボーカルしてて格好よかったし、桐島君は最初、一人でギター弾いてお客さんの注目を集めてたでしょ？

それで二人のことを覚えてたのよ」

「…そうスか」

多少怪しいところがあったな…

この人は…　白か黒か…

第三十話（前書き）

曽我部イベントその二です。

第三十話

「はい　お茶どうぞ」

「ありがとうございます」

「…ども」

とりあえず元生徒会長に真鍋が秋山のストーカー問題を相談し、対策を練ることに。

「このお茶は軽音部みたいに良いお茶じゃないけど」

「そんな、おかまいなく」

「……」

今度は軽音部の内部事情を知ってるか…

つうか元生徒会長なのにティータイムのことを放置しといて良いのか？

「それにしてもストーカーなんて…　由々しき問題ね…」

「……」

ズズッ…

「真鍋さん　後で風紀委員にこの事伝えてもらえる？」

「分かりました」

ズズッ…

「あ、あのっ！　そこまでしてもらわなくても…」

ズズッ…

「良いのよ　うちの学校の生徒が困ってるんだから、何か力になりたいの」

ズズッ…

「…うちの部長に聞かせたいなぁ」

「全くだな…

…すんません、おかわり」

出されたお茶を啜りながら、元生徒会長を観察したが特に怪しい素振りはない。

気が付けばお茶を飲み干していたので、とりあえずもう一杯頂く。

「咲也、少しは遠慮しなよ」

「ううん良いのよ　綺麗に飲み干してくれて、私も淹れ甲斐があるから」

そう言って湯飲みを取り、お茶を淹れに少し離れた机に置いてある急須に向う。

「……」

「どうしたの咲也？
さっきからずっと曽我部先輩を見て」

俺の訝しげな態度に真鍋が問い掛けてくる。

「…お前言ったよな？

犯人は身近にいるかもしれねェって」

「それはまだ仮定の話……まさか、曽我部先輩を疑ってるの？」

「えっ！？」

俺の問い掛けに聡明に理解し、若干驚きながら俺を見る真鍋。

そして真鍋の言葉を聞き、驚く秋山。

「…おかしな点が幾つかある

俺と秋山のことを知っていた」

「でもそれは、私達のライブを見たからって…」

「だとしたら何故、生徒会室に来た時に秋山を見て驚いた顔をしたんだ？」

「え？先輩が？」

「あぁ…　一瞬だったけどな、確かに見た」

「私達がいたから驚いたんじゃないの？」

「いや…　俺を見た時はそんな顔しなかったお前を見た時だけだ」

「……」

「軽音部でティータイムしてるのを知ってたしな」

「あっ　それは私も思った
曽我部先輩、教えてないのに何で知ってるんだろうって…」

「…真鍋、お前が何故ティータイムのことを知ってるか尋ねてみろ
俺が聞くより、お前の方が警戒しないだろう」

「気が進まないけど…
分かったわ」

「わ、私は？どうしたらいいの？」

「お前は自然体でいろ」

「り、了解」

現時点で不自然だ…

「はいっ　どうぞ」

お茶を淹れていた元生徒会長が戻り、再び俺の前に湯飲みを置く。

「…ども」

小さく礼を言い、チラッと真鍋を見て合図を送る。

「……」

それに小さく頷き、真鍋が口を開く。

「そういえば先輩は、軽音部でお茶会してることを知ってたんです

ね」

真鍋のその問い掛けに…

「えっ！？」

ビクッと体が反応し、明らかに動揺してるのが分かる。

「あ…えっと…　ま、真鍋さんが前に教えてくれたんじゃない！」

「私、言ってないですよ？」

間髪を入れずに真鍋が答える。

ボロが出だしたな…

「そ、そうだったかしら…

でも軽音部っていろんな意味で有名だしね！」

「「……」」

慌てた様子で答える元生徒会長を見て真鍋と秋山が少しポカンとする。

「…先輩」

「な、何かしら？桐島君」

完全に怪しいので、俺が畳み掛ける。

「元旦の昼ぐらいに、薦鳴神社にいましたよね？」

「えっ！？なんでそれを…あっ！」

慌てて口を塞ぐが、時既に遅しだ。

「田井中…軽音部の部長なんスけど、ソイツが俺達のことをジッと見ていた先輩を見たって言ってたんで」

これは嘘だが、さっきの反応を見る限り間違いなく神社にいた筈だ。

「……えっと…あっ！　よ、用事を思い出したから、そろそろ私、行くわね」

この場から逃げ出すように、そう告げて踵を返し歩き出した瞬間…

ヒュー…

カチャ…

スカートのポッケから何かを落とした。

「先輩　何か落としましたよ」

「えっ？」

落とした物を拾おうと真鍋がしゃがみ、俺と秋山がそれを見ようと立ち上がる。

「…秋山　澪ファンクラブ会員証…？」

真鍋が拾い上げたそれは、テレフォンカードのようなものに、秋山の姿が印刷され、真鍋が告げた文字が書かれてあった。

「あっ！」

バッ！

「はやッ…」

それを真鍋の手から残像が見えぬ程のスピードで奪う。

「さっき廊下で拾ったのよっ！」

「でも、先輩の名前書いてありましたけど…」

「そ、それは…」

「……」

そういえば秋山にファンクラブが設立されてたな。
際立った動きが全くなかったのですっかり忘却してた。

「…こ、ここは私が何か言って場を落ち着かせなきゃ…」

秋山がそんな事を呟いているのが聞こえた。

…出来んのか？不自然ガールよ。

「じ、実は会長がストーカーの犯人だったりして～」

「…不自然だ」

思いっきり棒読みだし、笑顔も引きつっている…

カチャ…

と、会員証が落ちる音が聞こえ…

「悪気はなかったの！！」

犯人が崩れ落ちた。

「「えぇっ!?」」

「……」

やっぱこの人が犯人だったか。

そして犯人は犯行の動機を自白しだした。

「もうすぐ私、卒業でしょ?今みたいに秋山さんに会えなくなちゃうのかなって思ったら…いてもたってもいられなくなって…」

「はぁ…」

だからってストーカーはダメだろ。

卒業間近の三年がそんな事やってたって学園にバレたら卒業どころか進学と就職も危うい。

おまけに元生徒会長だし。

「はぁ…」

再度ため息を吐いてると…

スタスタ…

「ん？」
「澪？」

呆然としていた秋山が、しゃがみ込んで顔を覆ってる先輩に歩み寄り、その横に座る。

「いいんです　顔を上げて下さい」

「えっ？」

「そこまで言ってもらえて私も嬉しいですし…
恥ずかしいですけど」

「秋山さん…」

顔を上げ感激の様子で秋山を見る先輩。

…あの二人の周囲に星が飛んでる…

「…真鍋、あの二人を見てどう思う？」

「え？どうって？」

「いや、何も思わねェんならそれで良い」

（琴吹が見たら喜びそうな光景だ…）

「？……あっ」

迷探偵より先に犯人が分かり、今頃迷探偵は何をしているんだろうかと漠然と考えていたら、真鍋が再び会員証を拾い上げる。

「…会員ナンバー1番…」

「あっ　私、ファンクラブの会長でもあるの」

「えぇっ！？」

「ダブル会長…」

じゃあこの人がファンクラブの創立者か…

つうか、開き直ってねェか？この人？

……

「あ、握手良いですか？」

「は、はい…」

「先輩…」

「……」

ズズッ…

現在、全員が席に着き、ストーカー犯…曽我部先輩が完全に秋山ファンの顔になり握手を求め、秋山が左手をおずおずと差し出し、そんな先輩の様子に真鍋が若干ショック気味に名を呟き、俺は黙々と茶を啜っていた（三杯目）

「あぁ…私、幸せ…」

「……」

ズズッ…

秋山と握手し、恍惚の表情を浮かべる先輩。

（何が嬉しいんだか…）

「あっ　そうそう、桐島君」

「…なんスか？」

秋山と握手をしたままの先輩が茶を啜っていた俺に話しかける。

…手、離してやれよ…

秋山の顔が真っ赤になってんぞ…

ズズッ…

「桐島君にもファンがいるの知ってるかしら?」

「ッ!…ゴホッゴホッ!」

「「えぇっ!?」」

先輩が放った爆弾発言にむせ、秋山と真鍋が驚愕の声を出す。

「大丈夫?桐島君?」

アンタが爆弾投下するから窒息寸前だ…

「咲也にファンって…
それは澪みたいにファンクラブが存在するって事ですか?」

「ううん　そこまでじゃないみたい
二、三年生中心にファンがいるみたいよ
桜高祭で桐島君のギターを弾いてる姿が、ファンの人達みんなの印象に残ったみたいなの」

「ゴホッ…　なんでだよ…」

あの場には俺を含め五人いた。
その中で何故俺オンリーだ?
ギター弾いてたなら平沢だって弾いてたぞ。

「なんで二、三年生中心にファンがいるんですか?」

いつの間にか先輩の握手から解放された秋山が問う。

「あ、それはね秋山さん♪」

スゲェ嬉しそうな顔…

「ほら、この学校って元女子高でしょ？

男の子は一年生しかいないから、みんな興味があるんだと思うわ」

「……」

この学校の上級生はアマゾン・〇リーの住人か…

「はぁ…」

厄介なことにならなきゃ良いがな…

―――――――――

「へ～…　それじゃあ生徒会長が犯人だったのか」

「『元』生徒会長な」

秋山のストーカー問題が解決したので長居は無用ということで（結構な時間いた気がするが）部室に行き、そこでティータイムを満喫していた薄情者三人に、事の全てを俺と秋山で説明した。

「澪ちゃんのファンクラブの人が犯人だったんだね～」

「澪ちゃん人気者だからね～」

クッキーをパクつく平沢と俺と秋山の紅茶を淹れる琴吹が、ほのぼのと言ってくる。

コイツらに掛かると、明日地球が滅ぶとなっても『大変だね～』の一言で終わりそうだな。

「ふ〜ん…　そっかそっか…　生徒会長がね〜…」

田井中が飲んでいた紅茶をおもむろに置き、立ち上がって部室の扉に向かう。

「あれ？りっちゃん、どこ行くの？」

「ん〜？」

平沢の問い掛けに扉のドアノブに手をかけたままの田井中が振り向く。

「これをネタに軽音部の部費アップをお願いしようかと…」

「やめい」

その瞬間、俺の隣にいた秋山が瞬時に移動し、悪知恵を働かせる田

井中の襟首を掴む。

「…つうか、もう生徒会長じゃねェんだから部費アップが出来るような権限を持ってねェだろ」

「でも『生徒会長』っていう肩書きがあるだから、それを利用して…」

「だったら無きにしも非ずだな…」

「だから止めろって！

咲也も納得しない！」

別に納得した訳じゃねェけどな。

……

「でも、咲也君にもファンがいるなんて、すごいわね～」

「サッくん、すごいよね～」

本当に先輩の元に揺さぶり行こうとする田井中を席に着かせ、相も変わらずまったりとティータイムを満喫していると（俺は全くだが）唐突に琴吹がそんな事を言い出し、平沢がニコニコと称賛する。

このほのぼのコンビに掛かると、目が眩む程の大金を手に入れても『すごいね～』ぐらいの一言で済みそうだな。

琴吹なんか特に。

「はぁ…　嬉しくねェけどな…」

「えっ？なんで？　サッくんにファンがいるんだよ？」

「いらねェよそんなの…面倒だ」

「うわぁ…　ヒドいなサク」

俺の発言に田井中がジト眼で見てくる。

「…なんとでも言え」

「不機嫌顔」

「ンだと　テメェ」

「なんとでも言えっていったじゃ～ん」

口を尖らせ文句を言ってくる。

それは別だ。後…

「サッくん」

これもな。

「サッくん言うなっつてんだろうが」

「私がサッくんのファンになります！」

「はぁ？」

俺の禁止令を無視し、急に何を言い出すんだこの天然は？

つうか俺の話聞いてたか？

ファンなんかいらねェと確かに言ったぞ。

「ということでファンからのお願いがあります」

「…認めてねェよ」

「サッくん、笑って？」

「……」

人の話は無視するし、勝手にファンになるし、あまつさえ笑えだと？
どんだけ傍若無人だお前は…

「あっ　そうだよ！唯から聞いてたんだ！
サクが笑ったって！」

「…お前、言ったのか？」

田井中の嬉しくない報告に平沢を見ると…

「うん♪」

満面かつ純粋な笑顔で首を縦に振る。

「……」

『うん』じゃあねェよ…
何してくれてんだお前…

『絶対に言うな』

凍える寒空の下で確かに言った筈だぞ。
右の耳から入った情報を左の耳に受け流してんのか？

「私も見たいな～咲也君の笑顔～♪」

「サッくんの笑顔、かわいいんだよ～♪」

「ほほ～ぅ」

「……」

秋山以外の三人娘が期待の眼差しでガン見してくる。
田井中に至っては獲物を見つけたハンターのようだ。

「サッくん！ニコニコ～♪」

「ニコニコ～♪」

だからその連鎖は起んねェっての。

「サクサク」

揚げ物の衣を食ったような擬音で呼ぶな。

「ほらほら、ファンサービスしなきゃダメだぞ～」

「だから認めてねェっつうの…」

「ファンサービス…」

と、今まで黙っていた秋山がポツリと呟いたのを俺の耳がキャッチした。

「どうした？」

これ幸いと話の話題を逸すため、秋山に問う。

「会長のやってた事はちょっとあれだけど…

何か私にしてあげられることがないかなぁと思って…」

「……」

寛大な心の持ち主だなコイツ…

ストーカーされといてよくもまぁ…

「あるじゃん！！」

「うわっ！！びっくりした！！」

秋山のモンゴルの草原並の雄大で壮大で遠大で寛大な心に尊敬していると、平沢が俺が敷いたレールに見事に乗ってきた。

よしっ　諸悪の根源が脱線し秋山に向かったので安心だ。

「澪ちゃんにしか出来ないことが！」

「私にしか出来ないこと？」

「うんっ！」

「……」

（秋山にしか出来ねェこと？）

秋山＝スキル発動…？

秋山＝左利き…レフティ…＝ベース…

ベース…

こんな答えに辿り着いた。

っつうことは…

「…演奏か？」

「サッくん大正解♪」

平沢が満面の笑みで頷いた。

第三十一話（前書き）

曽我部イベント最終回です。

第三十一話

翌日。

「すまん…　咲也…」

放課後の教室。

「あン？」

作戦名『第一回ファンサービス大作戦』（部長が命名）を実行するため、平沢が真鍋に協力を仰ぎ、了承されるのを待っていると修司が何やら落ち込んだ表情で俺の席にやってきた。

「…なんだよ？」

「…俺の手には負えなかった…」

「だから何がだ？」

「…こんなことで挫けちゃいけないとは、思っちゃいるんだがな…」

「……」

「…壁にぶち当たっちまったぜ…　そう、難解という壁にな…」

「さっさっと用件言え」

ドガッ！

「ヘブンッ！」

普通にイラついたので現実の壁＝教室の壁にぶち当たる勢いで蹴り込む。

「グゥ…　なにすんだよっ！　哀愁を漂わせる哀れな人物を演じて

やったのに！」

「そんなこと頼んだ覚えはねェ」

演じなくても元からお前は哀れだし。

「さっさっと用件言えよ」

「はいはい…せっかちだなお前は…　そんなんだから、いつも不機嫌な顔……あぁっ！ごめんなさい！！謝るから無言で足を上げないで！！」

「最後通告だ…　早く言わねェと記憶喪失にするぞ…」

お前の空っぽの頭部を全力で蹴ってな…

「分かった分かった！

澪ちゃんの事だよ！」

「あぁ？」

漸く話出したので足を下ろし、席に着くとそんな事を言ってきた。

「俺が名探偵になって澪ちゃんのストーカー犯を探してたじゃん？」

「…そんな事やってたな…」

すっかり忘れてた。

…あぁ、合点がついた、そういう事か。

「お前のどうしようもない頭脳をフル回転したが、結果アホだからさっぱり分からなかった…っつう事か？」

「チョイチョイ引っ掛かるとこあったけど…

その通りだ…」

「ふーん」

「ふーんってお前ッ！

今こうしてる間にも澪ちゃんは困ってんだぞッ！

なのになんだ！その態度はッ！！」

俺を指差し、今にも噛み付かんばかりに非難してくる。

コイツには、事件は解決した事を説明してない（そもそも捜査していた事を綺麗に忘却していたから説明のしようがなかった）とはいえ、こんな風に非難されると素直に申し訳なく……なんて思わねェ。

逆に腹が立ってくるが、一応コイツも迷探偵となり秋山のために迷走したらしいので、怒りをグッと抑える。

「落ち着け…　その件なら解決した」

「大体お前は！……って、ありゃ？そーなの？」

若干怒りフェイスから一変し、通常のアホフェイスに変わる。

つうか、何を言おうとしたんだコイツは？

「あぁ…　だからそんなに興奮するな　ウザいから」

「傷つくから止めろよ！そんな事言うの！」

「はいはい」

「四文字で流すなッ！！」

「うるさい黙れ静まれ喧しい口を閉じろ息をするなアホ」

「えーっと…　クソッ！
何文字か分からん！」

アホが頭を抱えて蹲る。

やっぱアホだ、コイツ。

……

「そいつはびっくりな犯人だな…」

蹲るモニュメントを放置するとクラスの連中に迷惑がかかるので、事件の顛末を語ったところ、腕を組みしみじみと言葉を漏らす修司。

「あ」

そうだコイツに手伝わせるか。

「おい」

「ん？」

「お前、この後暇か？」

「おっ　何だ？今日は部活ないのか♪だったらさぁ、久々にバッティングセンター行こうぜ♪今ならホームランを連発…」

「いや普通にある」

「ぇ……」

どうやら俺の発言を遊びの誘いだと思ったらしく、かなり嬉しそうな表情になるが、部活があると分かった瞬間、絶望の表情になる。

そんなに俺と遊びたいのか…

一人でカバディでもやってろ。

「そ、そんな…　せっかく久し振りに咲也と青春出来ると思ったのに…」

うなだれる。

「ンなこと、どうだって良いんだよ」

「良くないッ！お前が軽音部に入ってから俺は放課後は毎日暇…「サッくん隊員」…唯ちゃんタイミング悪いよッ！」

『ＮＯ～！！』とほざき、再び頭を抱えて蹲る。

修司からしたらバッドタイミングかもしれんが、俺からしたらグッドタイミングで（暇という確認が取れたので）真鍋に作戦の一部を説明していた平沢がトコトコとやってきた。

「あれ？修司君どうしたの？」

「気にすんな　定期的な発作みたいなもんだ」

「えぇっ！？修司君、病気なの！？」

「……」

真に受けんなよ…

「…良いんだよそのアホは、ほっといたら直ぐに治る」

「そうなんだ～　良かった～」

胸に手を当てホッとする平沢。

純粋っつうか…
天然っつうか…

いつか詐欺に合うんじゃねェのかコイツは？

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き、真鍋に協力を得られたか確認する。

「…で？首尾はどうだった？」

「しゅび？」

「……」

俺の発言の意味がさっぱりらしく、コテンっと首を傾げる。

「…結果はどうだった？」

分かりやすく言い直す。
これで通じなかったら日本人かどうか疑うぞ…

「うんっ！バッチリだよ！」

良かった…通じた…

「曽我部先輩を講堂に連れて行って、何をするの？」

俺が安堵していると、平沢から作戦の一部を聞いた真鍋が俺に問い掛けてくるが…

「ダメだよ和ちゃん♪
それは言えません♪」

ニコニコとしながら平沢が腕をクロスさせ、バツ印を作り真鍋の疑問を制止する。

別に真鍋には言っても良いと思うが…

『和には詳しく説明したらダメだぞ！もしかしたら和から先輩に伝わちゃうかも知れないからな！』

という部長命令が発令されたので真鍋には作戦の一部だけを平沢が説明した。

真鍋がうっかり口を滑るとは全く思えんのだがな…

「…まぁ　あんまり詮索してやんな
別にお礼参りとかじゃねェから」

「そんなことは思ってないけど…
とりあえず唯から連絡がきたら先輩を講堂に連れて行けば良いのね？」

「うんっ　そうだよ♪」

「分かったわ」

「…じゃあ行くか」

「ラジャー♪」

真鍋が納得したようなので敬礼する平沢と…

ガシッ

「うぉッ！」

ズリズリ…

ブツブツ何か呟いていた修司の襟首を掴み部室に向け歩き出す。

「ちょッ！何すんの！？」

「暇なんだろ？手伝え」

「何を！？」

「青春を」

「ヨッシャ！バッチこーいッ！」

ダッダッダッ…

俺の言葉を聞いた途端に引きずられていた状態から飛び上がり『ヒャッホーイ』と奇声を発しながらどこかに走り去って行った。

「修司君どこに行っちゃったの？」

「あの世じゃねェの？」

「えぇっ！？修司君死んじゃうの！？」

「……」

だから真に受けんなよ…

――――――――――

「どこが青春だよ…」

「うるせェな　口より手を動かせアホ」

「うるさくないだろ～

アホでもねェし」

「自覚なかったのか…」

暴走して彼方に駆けて行ったアホをケータイで呼び出し確保した後…

「修司、それここに置いて」

「あいよ～　律ちゃん」

三人で部室に向い、既に来ていた田井中と秋山、琴吹に修司を連れて来た意味を説明し、作戦実行に移った。

平沢が提案した作戦とは、曽我部先輩に俺達の演奏をサプライズで送るというもの（ボーカルは秋山）

せっかくなので講堂でやろうということになったが、アンプ三個にドラムセットとキーボードを講堂に運び込まなければいけなくなり、平沢が非力でアンプをスローペースで運ぶし、ドラムセットも一度には運べず時間がかかる（キーボードは琴吹が軽快かつポップな音を口ずさみながら軽々と運べるので問題ナシ）

そこで修司に手伝わせ、作業の効率をアップさせた。

俺がギターと自分の分と平沢の分のアンプを持ち、修司が秋山の分のアンプとドラムセットの一部を持ち、秋山がベースとドラムセットの一部を、田井中が残りのドラムセットを、平沢は自分のギターのみを持ち、琴吹がやっぱり軽々とキーボードを運び込んで…

「よしっ　終了〜！」

田井中の号令により作業終了。

……

「サクッチ」

「誰がサクッチだ」

平沢が真鍋に連絡をし、到着を待っていると手持ちぶさた状態を遺

憾無く発揮していた修司が話し掛けてきた。

「俺は何をすればいいんだ?」

「帰って良いぞ」

「アッサリかッ」

「…じゃあ、講堂の外で教師が来ねェか見張ってろ」

実は講堂を無断で使用している。

本来なら教師と生徒会に許可を貰らわなければイカンのだが、生憎とたった一人のためのライブなので許可が下りる可能性は極めて低い。

で、結局『直ぐ終わるから勝手に使って良いだろ』という俺の提案により無断使用に。

その折りに平沢達から『怒られない?』という意見が出たが、『見つかったら顧問から許可を貰っているという事にしておく』という山中顧問を犠牲にすることでとりあえず納得させた。

「そうだな　先生に見つかるとヤバいしな～
修司、頼む！」

田井中が修司に手を合わせ懇願する。

（修司にその行為はもったいねェな…）

とか思ったが口には出さなかった。

「ここで断っちゃあ男が廃るってもんだッ！

任せときな！みんなの安全はこの影宮家の長男が守るぜ！」

そう言って奴はステージから飛び降り、外に向かって駆けて行った。

「お前、アイツの扱い分かってんな」

「え？」

我が部長が俺の発言にキョトンとする。

「あのアホは単純だからな、煽てられたり懇願されると直ぐに行動に移す
その利点を上手くついたな」

「いや、そんなつもりじゃないんだけどな…」

……

修司が外に見張りに向かって数分後。

「あっ　来た！来たよ！」

幕が下りているステージから顔だけ出して様子を伺っていた平沢が

声を出す。

「全員持ち場に！」

その言葉を受けた田井中が作戦指揮官のような素振りで発令する。

俺以外の四人が学園祭の時と同じ立ち位置に行き、それぞれの楽器を構える。

俺はテレキャスを持ったままステージ横に移動し、幕を上げる準備をする。

「軽音部に講堂に来るように言われましたけど…何なんでしょうね？」

「お礼参りとか…」

「まさか、そんな…」

「サク」

「……」

真鍋と先輩の会話が聞こえ、それを合図に田井中が俺を見る。

そして『昇』と書かれてあるボタンを押す。

ゴウン…

幕が上がっていくのを確認し、立ち位置に戻る。

「曽我部先輩、御卒業…」

「「「「おめでとうございます」」」」

「……」

観客席には驚きフェイスの真鍋と先輩が。
その二人の姿を視界に捉えた秋山がマイクを使い先輩に祝辞を送る。

「あの…　私達、桜高軽音部がお祝いの意味をこめて演奏をさせて頂きます
聞いて下さいっ！」

「「「ふわふわ時間！」」」

「ワン・ツー　ワンツースリーフォー」

♪♪♪♪♪～

田井中のカウントから俺がギターを弾き、秋山、平沢、琴吹、田井中が加わり五重奏に。

……

ジャァァァン…

『ＦＦ』の演奏を終え、先輩の反応を伺う。

「……」

「…トリップしてんな」

頬を紅く染め、感激した様子でぽけーっとしていた。

「先輩　先輩！演奏、終わってますよ！」

トリップ先から戻る気配が皆無な様子の先輩を真鍋が肩を揺らし帰還命令。

「はっ」

そして無事に帰還。

「む、無断で講堂を使用するなんて、どういうことですか！！」

「えぇっ！？」

そして俺達を指差し、まさかのこの言葉。

「サッくん～…　怒られちゃったよ～…」

「…あの人のためにやったつうのに、こんな結果か？」

「先輩、嬉しそうな顔してたんだけどね…」

「やっぱ無断はマズかったかぁ…」

平沢が俺に弱々しく振り向き、俺が愚痴り、琴吹が若干嘆きボイスを発し、田井中が後の祭りをワッショイしていると…

「…というのは建前で」

「いらねェよ、そんな建前」

紛らわしいことすんなよ…

「ありがとうみんな
こんな贈り物、始めてよ♪」

満面の笑みで俺達に礼を言ってきた。

「笑ったぁ～！」

「良かったぁ～」

「うんっ」

「予想通りだなっ」

「お前、愚痴ってたじゃねェか」

「サクもだろ～」

俺達が各々、言葉を発していると…

「記念に…」

先輩が俺達に近付き、何かを取り出し…

「サイン下さいっ！」

「ヒィッ！」

「……」

サイン色紙とペンを秋山に差し出してきた。

「めぐみへ　みおたんよりって書いて♪」

みおたんって…

「聡明な先輩のイメージが…」

真鍋が悲愴感たっぷりに呟くと同時に、ガラリと先輩に対するイメージが崩れた瞬間だった。

サインを書くことを渋っていた秋山だったが田井中の『ファンサービスしなきゃな～♪』というニヤつき発言プラス先輩の期待の眼差しを一身に受け、恥ずかしながらサインを書き、それを受け取った先輩が今にもスキップしそうな喜びで胸に抱え、『第一回ファンサービス大作戦』は成功の内に終了した。

（つうか『第一回』って事は『第二回』があんのか？）

そんなことを思い、外で見張っていた修司を呼び戻し、真鍋と先輩以外の全員が機材を持ち外に出た瞬間…

「き、桐島君…」

「あン？」

聞き覚えが全くない声が俺を呼び、振り返ると…

カシャ

タッタッタッタッ…

「……」

シャッター音と光が俺を襲った。

「何だ？今の？」

修司が疑問の声を出す。

「咲也君の知り合い？」

「いやいやムギ　そんな感じじゃなかったぞ」

「先輩さっきの人って…」

「もしかしたら桐島君のファン…かしら」

「なにィ!?咲也にファン!?」

「さっきの人　赤いリボンしてたな…」

「えっ　澪ちゃん見えたの?」

「うん　顔はカメラで隠れてたけど、確かにリボンは赤だった」

「咲也のファンは上級生にいるって先輩、言ってましたよね?」

「えぇ　だからさっきの人は桐島君のファンに間違いないと思うんだけど…」

「でもでも　サッくんのファンなら、なんで逃げちゃったんだろ?」

「それはあれだな　サクは不機嫌な顔してるから思わず逃げちゃっ

たんじゃないか？」

「咲也君のファンならそのこと知ってるんじゃあ…　あっ　ごめんなさい！別に咲也君がいつも不機嫌だってことじゃなく…」

「別に謝ることじゃないよ紬ちゃん

コイツは年中不機嫌面なんだしさぁ♪」

「いいのか、そんな事言って？サクに蹴られるぞ？」

「あぁっ！？しまったぁ！？

な、なぁーんちゃって♪

ジョークだよ～　サクッチ♪」

「……」

「ありゃ？」

「サッくん？」

「サク？」

「咲也？」

「咲也君？」

「咲也？」

「桐島君？」

「どうしたんだよ黙りこくって？

…うぉッ！！」

「どうしたの修司君？」

「怒ってる…」

『えっ！？』

「お怒りじゃあーッ！！

桐島　咲也様がお怒りじゃあーッ！！」

「まぁ　いきなりカメラで撮られたら怒るよな～」

「律ちゃん…　ほのぼのしてる場合じゃナッサブルよ…」

「えっ？」

「ヴァナタは知らないと思うけど、ヴァターシは咲也ボーイと付き合いが長いから、マジで怒った咲也ボーイはかなり…いえ、激しく怖いのよッ！」

「なんでおカマ口調？」

「そういえば咲也…」

「いつもと雰囲気違うな…」

「桐島君から黒いオーラが出てるわね…」

「……」

ザッ…

「待て待て待て待て待て待て待て待て待てッ！」

「九回…」

「いやいやッ　数えてる場合じゃないって唯ちゃん！」

「さ、咲也君、落ち着いて？部室に行ったら美味しいお菓子があるから」

「えっ？本当かぁ！？ムギ？」

「なんで律が反応するんだよ

ムギ、咲也はお菓子にはつられないと思うぞ？」

「みんな落ち着きすぎだッ！！」

「修司が落ち着きなさいよ」

「甘いッ！和ちゃんッ！」

「サッくん」

「唯ちゃん！近付いたら危なーいッ！」

ポンポン

「落ち着いてサッくん」

「…あン？」

「怒っちゃダメだよ♪」

「……」

勝手に俺をカメラに撮り、逃走していった奴に激しく怒りが湧き起こり、カメラを取り上げて破壊しようと行動を開始した途端に平沢

が背伸びして俺の頭をポンポンと撫でて笑ってくる。

「はぁ…　サッくん言うな…」

「いいじゃ～ん　可愛いし♪」

「…どこがだ…」

平沢の笑顔を見たら、なんか毒気を抜かれた…

解毒剤の効力があるらしいな、コイツの笑顔は…

「マジで…　咲也の怒りが消え去った…」

「クスッ　唯は昔からそうなの」

「どういうことだ和？」

「あの悪気のない笑顔を見ると、何故か許しちゃうのよ」

「「「わかるわぁ…」」」

何か修司達が騒いでいるが全く聞こえん。

「サッくん　部室行こ？
ムギちゃんが美味しいお菓子を用意してるんだって～♪」

頬に両手を当て、迫り来る幸福に期待の表情をする平沢。

「…別に菓子いらねェし」

「じゃあサッくんの分ちょうだい♪」

「…かまわねェけど」

「わぁーいっ♪」

これが俺達が高校一年の最後のデカい出来事だった。

そして…

季節は巡り、再びの春。

第三十二話（前書き）

二年生スタートです。

第三十二話

曽我部先輩…三年生の卒業式から一ヵ月後の朝。

ピピピッ　ピピピッ

「……」

ピピピッ　ピピピッ

ガシッ

目覚ましの音で覚醒し、腕を伸ばしその音を排除する。

「……」

ベッドから起き上がり軽く体を伸ばす。

その後リビングに向い、朝メシを食べ終え再び自室に戻り、制服に着替えて鏡を見る。

そしてやっぱり不機嫌面だと思い、若干ヘコむ。

「はぁ…」

もう癖になりかけてしまっているため息を吐き、寝癖を直して前髪をヘヤピンで止め、ヘッドフォンを首に掛け、テレキャスをギターケースに入れてそれを背負い、鞄を持って自室を出る。

本日四月上旬。

今日から高校二年生。

――――――――――

ハラリと桜の花びらが舞い降りる通学路を、ヘッドフォンから流れる音楽を聞きながらダラダラ歩く。

「……」

ふと周りを見ると、緑のリボンの上級生…三年の女子が友人と喋りながら登校する姿や、見覚えがあったか、なかったか定かではない俺と同じ青のネクタイピンをしている男子がスタスタと歩く姿。

そして、赤のリボンの制服をつけた新入生の女子が友人と笑みを浮かべながら登校する姿と、どことなく緊張の面持ちで通学路を突き進む新入生の男子の姿が。

トントン

と、誰かが俺の肩を叩く。

（修司だったらそのまま一回転して歩き出すか…）

アホの対処法を考えながらヘッドフォンを首に移動させながら振り向くと…

「おはよ～　サッくん♪

「おはようございます、咲也さん」

ニコニコと笑う平沢と、礼儀正しくペコリと頭を下げる妹がいた。

修司ではなかったので半回転で済ませ、平沢姉妹に向き直る。

「…よう」

「サッくん　憂が高校生になりました～」

「…知ってる」

妹の肩に手を置き、俺に告げてくるが、それは既に確認済みだった

りする。

三学期の終業式から三日後の昼ぐらいに平沢妹から、桜ヶ丘高校に合格したというメールがきた。

なので平沢妹が姉と同じ制服を着ていようが別段驚くような事ではない。

「あれ？知ってたんだ」

「私が咲也さんにメール送ったから」

「そうなんだ～　憂が桜ヶ丘に行くことになったって、サッくんを驚かせようかと思って黙ったんだけどな～」

「…驚かねェと思うぞ」

妹はシスコン気味だから姉と同じ高校に行くだろうと思ってたしな。

つうか桜ヶ丘を受験したいと、いつかのメールで書かれてたから知ってたし。

平沢妹の学力は全く知らんが、間違いなく姉よりは上だろうし、そ

んな姉が桜ヶ丘に受かってんだから天変地異が起きるぐらいの災厄が発生しなければ問題なく受験は突破出来るだろうと思ってたから平沢妹から合格メールがきた時も、特に驚くこともなく祝辞のメールを返信した。

「咲也さん」

「あン？」

と、ここで平沢妹が、改めて俺に向き直り…

「これからの高校生活、姉共々よろしくお願いします」

深々と頭を下げる。

「……」

コイツ、本当にこの前まで中学生だったのか？

親の教育が良かったのか、姉の反面教師…とまでは言わんが、本当に良く出来た妹だ。

「よろしくね～　サッくん♪」

「はぁ…」

ニコニコ笑いながらそんなことを言う平沢を見て、思わずため息が。

もう完全に癖だな…

――――――――――

仲睦まじい姉妹の会話を背中で聞きながら歩いていると校門に着いた。

「オッス　三人共」

「おはよう」

俺達が校門に着いた途端、ちょうど田井中と秋山も校門にやってきた。

「おはよ～　りっちゃん、澪ちゃん♪」

「おはようございます」

更に…

「みんな～　おはよう」

小走りで琴吹が登場。

「……」

さて、これで軽音部員全員と平沢妹が揃った訳だが、何やら視線を感じる。

おそらく、女子五人の中に男子が一人混じっている光景が異様なんだろうな。

三年と二年からの視線は殆ど感じないが、新入生の連中からジロジロと感じる。

曽我部先輩が『軽音部はいろんな意味で有名』と言っていたので二、三年は俺が軽音部の黒一点だと知っているかもしれないから殆ど視線を感じないが、それを知らない新入生の連中はガン見してくる。

（修司が現れたらこの視線も消え去ると思うが…）

いかんせんあのアホは必要じゃない時に現われ、必要の時には狙ってるかのように現われない。

「はぁ…」

ため息を吐き…

ギロリ

ガン見する新入生を睨む。

「ヒィっ！」

「怖いね…　あの先輩」

「早く行こうぜ…」

「……」

去っては行ったが…

ヤベェ…悪印象を植え付けちまった…

…まぁ、良いか。

アッチが俺をジロジロ見るのが悪ィんだし。

「どうしたんですか咲也さん？　周りを見渡して」

「…別に　視線を排除しただけだ」

「え？」

俺の言葉の意味が分からずコテンと首を傾げる平沢妹。

『お前の同級生に恐怖を与えた』とは言えんな…

「それにしても憂ちゃん、制服似合ってるな～」

「初々しいわね～」

（『憂』だけにか？）

「そ、そうかなぁ」

田井中と琴吹の言葉に若干照れる平沢妹。

「あっ　お姉ちゃん、襟」

「ほぇ？」

姉の襟首に手を伸ばし何かを取る妹。

「クリーニングのタグ、付きっぱなしだよ」

「あっ　本当だぁ」

「それに…」

今度は鞄から櫛を取り出し…

「ここんとこ寝癖ってるよ」

姉の襟足付近を櫛で梳く。

「時間がなかったんだよ～」

「明日からもうちょっと早く起きようね」

「うん」

「……」

『母親と娘』

そんな言葉が頭に浮かんでしまうような光景だ

『姉と妹』を越え、遂に親子になってしまった…

「お前ら姉と妹、交代した方が良いんじゃないか～？」

「…母親と娘の方がしっくりくるぞ」

「あぁ～…　納得」

――――――――――

田井中が納得し母親が娘の寝癖を直した後、クラス割りを確認するために掲示板に赴く。

「憂ちゃんは昨日入学式だったのよね？」

「はい　そうです」

「何組だったの？」

「二組です」

「おっ　私と澪のクラスだったんだぜ、二組は」

琴吹と秋山の質問に平沢妹が答え、それを聞いた田井中が何故か威張ってると掲示板に到着。

「えーっと……あっ！あった、二年二組かぁ～」

「私もだ！」

「本当！？私も二組！」

平沢、田井中、琴吹が二組になり喜び合っている横で俺と秋山は掲示板を見上げていた。

「…おっ　あった」

「咲也、何組？」

「三組」

「そ、そっか…」

俺の発言を受け、その後チラッと歓喜している平沢達を見てヘコむ秋山。

（コイツ、新しいクラスに知り合いがいねェのか？）

そう思い、秋山が見ていた一組のクラスの名前が書かれている掲示板を見る。

秋山　澪
真鍋　和　・・・～・・・

真鍋いんじゃん。

「じゃあもしかして♪
澪ちゃんとサッくんも？♪」

平沢が嬉しそうに俺と秋山に聞いてくるが…

「……一組」

声小せェな。

平沢達と同じクラスになれなかった悲しみで、未だに掲示板を見ながら無表情でポツリと呟く。

「「「あ…」」」

そんな秋山の様子に平沢と田井中と琴吹が『しまった』みたいな表情で視線をあらゆる方角に彷徨わせる。

「な、なにその眼は？」

ポンッ

「寂しくてなったらいつでも遊びに来ていいんだよ…」

田井中が秋山の肩に手を置き、泣き真似をしながらそんなことを言う。

「私は小学生かっ！

ふんっ！律こそ私と離れて大丈夫か？
もう宿題見せてやれないぞ？」

「……」

思い切り強がってんな…

「へっへーん！！平気だよ～ん！コッチにはムギがいるもんね～！」

「くっ」

平沢は当てにはされてねェんだな。

そりゃそうか、毎回テスト赤点ギリギリだったし。

「サッくんは何組？」

「三組」

「ぇ……」

平沢の問い掛けにアッサリと答えた瞬間、バックに雷が落ちる。

「え…サッくん…一緒のクラスじゃないの？」

「あぁ」

「そんなぁ～　サッくんが別のクラスなんてぇ～」

かなり落ち込む。

つうか半泣き状態だ…

「お、お姉ちゃん…」

そんな平沢を見て母親が……もとい、妹が少しアタフタする。

「うぅ…」

「どうすんだよサク？唯、泣きそうだぞ？」

「…知らねェよ」

これは全く悪くねェだろ俺は…

「ヒドいなサクは～　ファンが悲しんでるのにそんなこと言うのか？」

「認めてねェっつうの」

非公認だ。

「はぁ…」

このまま泣き出されたら堪ったもんじゃないので最終兵器を投入することに。

「琴吹」

「なに？咲也君」

「平沢に菓子を与えとけ」

泣いてる子供には菓子やっときゃ機嫌直るだろ。

「いやいや、今回は流石に…」

「はい　唯ちゃん、マドレーヌよ」

「ムギ…　どこから出したんだ？」

うん　それは俺も思った。

ハグハグ…

「美味しい～♪」

「なおったぁー！？」

「…やっぱ平沢には菓子だな」

「あはは…」

キーンコーンカーンコーン…

俺の発言に平沢妹が苦笑いを浮かべた途端、チャイムが鳴る。

「あっ　それじゃあ失礼します」

平沢妹がペコリと俺達に挨拶し、踵を返すが…

「あの…　律さん、紬さん」

「ん？」

「なに？」

再び振り向き、田井中と琴吹の名を呼び…

「お姉ちゃんのこと、よろしくお願いします」

深々と頭を下げる。

…だからお前は本当にこの前まで中学生だったのか？

「じゃあ、また」

俺の疑問を知るよしもない平沢妹が頭を上げ、自分のクラスに駆けて行った。

「またね～　憂～」

「ええ娘じゃのう～　あの娘は～」

「…どこのバアさんだ、お前は」

「それじゃあ私達も行きましょ？」

「う、うん　そうだな」

俺達も自分のクラスに向かおうと足を動かしたが、俺は最後に三組のクラス割りの掲示板を見る。

影宮　修司
桐島　咲也

「はぁ…」

また一緒かよ…
つうか進級出来たんだなアイツ…

―――――――――

「あれ？二組って二階だっけ？」

二階への階段に差し迫った途端にマドレーヌで笑顔になった平沢が疑問の声を出す。

「えぇ」

「いかにも上級生って感じだよな～！」

（秋山に対する当て付けか…？）

秋山のクラスだけ何故か一階ある。
他の二年のクラスは全て二階にあるのだが…
これが所謂、学校七不思議……ンな訳ねェか。

「じゃあな～　一階二年一組の秋山さ～ん」

「うるさいっ！」

「…完全に当て付けだろお前…」

「休み時間にまた」

「二階のどの辺かな～？」

……

「澪ちゃん大丈夫かなぁ…？」

階段を上ってる最中に平沢が秋山を心配する。

「…大丈夫なんじゃねェの？真鍋が一緒だし」

「えっ？和ちゃんが？」

「……」

お前ら幼馴染みだろうが…
知っとけよ…

「和が一緒なら安心だな♪」

「そうね♪」

「うぅ…　和ちゃんとも離れちゃったぁ…」

「琴吹、菓子の用意」

……

「バイバイ…　サッくん…」

「……」

現在、二年二組の前。

田井中と琴吹は既に教室に入っているが、平沢は俺の制服の裾を掴んで離さない。

「バイバイっつてんだから…離せよ」

「だってぇ～…」

「はぁ…」

さっきからずっとこの調子だ。

二組の教室に辿り着いた途端に拘束された。

「あのな…　今生の別れじゃねェんだよ

つうか縁起でもねェこと言わせんな」

「サッくんが勝手に言ったよ?」

「いやっ、そうなんだがよ…」

どうするかと額に手を当て考える…

そして…この言葉を口にして激しく後悔する。

「…一つだけ言うこと聞いてやるから離…あっ」

今、俺…何言った?

しまった…

マズい…

ヤベェ…

「ほんとぉ!!」

「……」

輝いてる…

眼が輝いてる…

「じゃあサッくん♪」

言うぞ…

絶対コイツ言うぞ…

「笑って♪」

ほらな…

「…却下」

「ダメだよサッくん♪私聞いたもん『一つだけ言うこと聞く』って♪」

「……それ以外ならな…」

「じゃあ離さないもん」

「くっ…」

―――――――――

ガチャ…

「よう咲也！また一緒のクラスだな！」

「……」

「唯ちゃんと和ちゃんとは別々になっちまったが、お前と一緒ならどんな困難だろうが逆境だろうが乗り越えていけるぜ！」

「……」

「ワ～ッショイ！ワ～ッショイ！……ってどったのお前？なんかゲンナリしてない？」

「…良かったなアホ…

…こんな精神状態じゃなきゃお前を地の果てまで蹴り飛ばしてるところだ…」

「？？」

断腸、苦渋の決断で平沢の望みを叶えてやった…

笑えと言って笑えるものじゃないので、平沢の指導の元、無理矢理笑顔を作った…

更にそれをケータイのカメラで撮りやがった…

『宝物～♪』とかいってスゲェ喜んでいたが、俺にとっては負の遺産だ…

「はぁ…」

それを誰かに見せたら軽音部を辞めると釘を打ってあるが…

激しく後悔だ…

「はぁ…」

「そうか…そんなに俺と一緒のクラスが嫌か……って、な～んでやね～ん☆」

「さっきからウゼェんだよテメェ」

ドゴォン！

「ウベハッ！！」

あまりにもアホがウザイのでこんな精神状態で蹴ってやった。

「き、近年稀にみるナイスな…蹴り…だったぜ…」

最期は俺にサムズアップして気絶した。

やっぱ変態でアホだコイツ。

「ふぅ…」

少しスッキリしたな。

第三十三話（前書き）

勧誘開始です。

第三十三話

翌日の昼休み。

二年の教室がある二階の廊下は昼メシを調達しようと購買に向かう連中や、違うクラスに弁当を持って移動する奴の姿があり、特に変わらぬなんの変哲もない日常。

が…

一ヶ月前まで俺達がいた一階に降りると…

「バスケしませんか～？」

「茶道部、楽しいですよ～」

「オカルト系よろしく～」

「卓球に興味ありませんか？」

大勢の人で廊下が埋まっていた。

「テニス部どうですか？」

「演劇やりましょう！」

「剣道楽しいですよ～」

今、この廊下は新入生勧誘の戦場の場になっていた。

様々な部活の部員が武器を（チラシやプラカード）手に取り、戦力増大のため必死に勧誘をしている。

中には自身の軍の軍服を身に纏い（ユニホーム）その軍の特色の兵器を（竹刀やバスケボール）持ち出しアピールする軍人（運動部）

かたや、一般人を装い（文化部）巧妙な手腕で自身の軍に入隊させようとする軍人（ただ単にチラシを配っているだけ）

勿論、我が軍も（軽音部）入隊する人材を得るために、この戦線に参戦すべく乗り込んで行くが…

「わぁ～　もう人で一杯だ～」

「やっぱり大きい部は、手際が違うわね～」

「ほのぼの言ってる場合か…」

完全にスタートダッシュに出遅れていた…

そもそも何故、見事な程に出遅れたかと言うと、現時間帯は昼休み。この時間の大半の出来事は昼メシを食う事だ。

例に漏れず、俺も昼メシのパンを（登校中にコンビニで購入）五分で済ませ、アホが…

『食うの早ェな～　ならば！その記録を抜いてやる！』

と、ぬかしていたが華麗にスルーし、昨日の部活で決まった新入生勧誘プラン（秋山が軽音部のチラシを作り、それを配布する）を実行に移そうと行動を開始しようとしたが、他の四人が中々昼メシを食べ終わらず、結果、時間をロスしてしまった。

「軽音部だからって甘く見んなよーっ！」

「関係ねェだろ、それ」

他の部活が手際良く勧誘活動をしている光景に部長が息巻く。

「甘いなサク！私達は五人しかいないんだぞ！
だから他の部からしたら私達は眼中にないんだ！」

「…被害妄想だろ」

「それぐらいの気持ちで勧誘するぞってことなの！
ということで…澪！チラシは！」

…まぁ　張り切ってるから良いんだけど。

「一応作って来たけど…」

そう言って一枚のチラシを秋山が取り出し、それを部長の田井中と
副部長の俺が確認する。

「う〜ん…　なんか普通」

「地味だな」

「ガーンっ！」

俺と田井中の反応にショックを受ける秋山。

そんな秋山が作ったチラシとは…

『バンドやりませんか』

その文字とマイク、ドラム、キーボード、ひょうたんっぽいギターかベースの区別がつかないイラストが描かれていた。

しかも文字とイラスト共にサイズが小さいので、かなり地味なチラシだ。

「ズバリ！売りがない！」

「確かに…」

文字とイラストだけだし。

つうか『軽音部』のチラシだとは分かりにくいな、これじゃあ…

「でも軽音部の売りって？」

「う～ん…　そうだな…」

琴吹の疑問に田井中が考える。

そして導き出した答えが…

「例えば、お茶とお菓子はおかわり自由！食っちゃ寝食っちゃ寝の

軽音部！」

「あぁ～！　それいいかも～！」

「良くない！」

「はぁ…」

それじゃあ只のニートだ…

「じゃあ他に何かあるかぁ？このままだとインパクトがないぞ！」

（インパクトねェ…　ゲリラライブでもするか？）

そんな事を考えていたら…

「なければ付けるまでよ！」

「あっ　さわちゃん」

「アンタ…いつからいた？」

いつの間にか現れた山中顧問がそんな提案をしてくる。

ロクなことじゃねェ気がしてならんな…

――――――――――

「軽音部でーす…」

「明日、新歓ライブがありま～す　是非来てくださいニャ～」

「興味のある人は放課後、音楽準備室にどうぞ～ワンワンワンワン」

「美味しいお菓子もいっぱいあるよ～～コケェ～」

「……」

やっぱりな…

ロクな事じゃねェ…

山中顧問が言う『インパクト』とは見た目らしい。
そこで、演劇部から借りた五体の動物の着ぐるみを俺達に渡してきた。

平沢と琴吹は嬉々とそれを着用し、田井中と秋山は少々渋りながらも着用した。

そして俺は断固拒否を示したが…

『それじゃあ咲也くんは、私の昔の衣装着る?』

と言って顧問が学園祭時に、秋山に提示した『訳分からん』衣装を取り出してきたが瞬時に拒否し…

『じゃあ、この着ぐるみか私の衣装、どっちかを選びなさい』

と、究極の二者択一を迫られたので、かなり渋々に着ぐるみを選んだ。

その着ぐるみとは…

「…何故、狼だ…」

狼だった。

平沢＝鶏。
秋山＝馬。
田井中＝犬。
琴吹＝猫。
俺＝狼。

ここにブレーメンの音楽隊もびっくりな、桜ヶ丘の勧誘隊が誕生した。

「軽音部よろしく～コケコッコ～」

現在、校舎内では勝ち目が薄いと部長が判断したので職員室でチラシをコピーし、中庭に場を移して新入生を勧誘中。

「狼ってサクのイメージにピッタリじゃん」

「はぁ？どこがだ？」

犬部長がそんなことを言う。

「一匹狼」

「……」

それは何か？
一人で勧誘をしろってか？

「何考えてるか知らないけど、言葉のあやだぞ？」

「…そういう事にしといてやる」

犬の着ぐるみ着てるから田井中の表情が分からんので、真偽の程は不明だ…

つうかこの犬の表情…なんか人を馬鹿にしたような顔して若干腹立つ…

「ほら咲也君も『気軽にお越し下さいガォーッ』って言わなきゃ♪」

「お前…楽しそうだな」

猫が、かなりワクワクオーラをまき散らしながら俺に告げてくる。

「だってバイトみたいで楽しいもの♪」

「ムギちゃんバイト好きだね～」

「はぁ…」

……

「ねぇねぇ澪ちゃん…」

「な、なに？」

「これって逆効果なんじゃ…」

「私も今思ってた…」

チラシを配布し始めて数分後、インパクトの効果が如実に表れ始め

た。

「私達…避けられないか？」

「…つうか怯えさせてるな」

「軽音部でーす♪」

悪い方に。

こんな奇抜な軍団がチラシ配ってたら変な宗教団体だ…

ある意味インパクトだがな…

そしてこんな状況にもかかわらず猫は相変わらず楽しそうだ…

と…

「あっ！」

鶏が何かに気付き走り出そうとする。

「おい鶏　何処行くんだ」

「憂がいたから声かけてくるよ　サッくんも行く？」

「…結構」

鶏の発言に視線を巡らせると、友人と喋りながら歩く平沢妹の姿が。

「ん～…分かったよ…

憂～」

俺の発言に若干ションボリしながらも妹に鶏が駆け寄る。

…あの後ろ姿、不気味だな…

「「キャーーッ！」」

が、そんな不気味な鶏がいきなり走ってきたもんだから、平沢妹と友人が悲鳴を上げて校舎に逃げて行った。

哀れ鶏。

「あれ…なに？」

「さぁ…」

哀れな鶏を見て俺達をスルーしようしていた新入生女子二人が歩を止め、最もな意見を漏らす。

「軽音部です　興味があったら放課後、三階の音楽準備室に是非」

チャンスとばかりに馬がツインテールをした新入生にチラシを渡す。

（コイツどっかで見たような…）

「は、はぁ…」

チラシを受け取るツインテール。

「梓、行くよ？」

「う、うん」

軽く俺達に頭を下げ二人は去って行った。

（気のせいか…）

「どうしたんだ咲也？」

去って行くツインテールの姿を見ていると、馬が問い掛ける。

「…いや、何でもねェ」

――――――――――

昼休みが終わりに近付いてきたので勧誘を終了し部室へ。

「はぁ…　はぁ…」

「辛いばかりで…　あんまり受け取ってもらえなかったね…」

「明日のライブで取り返すしかない…！」

「そうね～♪」

「お前元気だな…」

着ぐるみなんか着て勧誘するもんだから、体力が消耗し全員が疲れを感じるなか、ただ一人、琴吹だけが何故がピンピンしていた。

更に琴吹の謎が深まった…

「あの～　この服も作って来たんだけど～」

イラッ

俺達に間違ったインパクトを提案し、勧誘活動を全く手伝わなかった顧問が何食わぬ顔してメイド服と執事服を差し出してくる。

そんな顧問に軽く怒りが湧いてくる。

「さぁ午後の授業始まるぞぉ」

顧問の言葉を無視する田井中。
どうやらコイツも怒りが湧いたらしい。
言葉の中に『怒』を感じる。

――――――――――

「おいアホ」

「アホじゃねェよ！賢いわぁ！」

午後の授業をぼんやりと受け流し放課後になった瞬間、俺の前に座っていたアホに話し掛ける。

「お前暇だろ？」

「決定済みか…

そうですよ～どうせ暇ですよ～お前が遊んでくれないからな～」

「ちょっと手伝え」

「手伝い？何の？」

「勧誘」

「勧誘？」

「今から部室に行ってある物をとって来るから、お前は下駄箱で待ってろ」

スタスタ…

「もうちょっと詳しく…って、無視すんなッ！」

アホに用件を伝えたので部室に向け歩き出す。

――――――――――

ガチャ

階段を上りきり部室の扉を開けたら…

「いらっしゃいませ～」

「……」

何故かメイド服を着た平沢が満面の笑みで出迎えてきた。

「…何やってんだよお前…」

「どうかなサッくん？似合う？」

その場でクルリと緩やかにターンし俺に感想を求めてくる。

「…だから何やってんだ…」

「さわちゃんすごいよね～　こんな服作れるなんて～」

「……」

話が噛み合わん…

「おっ　サク」

「はいっ　咲也君の執事服」

すると準備室にある小さな物置部屋から同じくメイド服を着た田井中と琴吹が出てきた。

そして俺に執事服を差し出す。

「…何やってんだよお前ら…」

会話が成り立つのを期待しながら口を開く。

「いや～　せっかくさわちゃんが作ってきたんだし～」

「軽音部に見学しに来た人をメイド服でもてなそうと思ったの♪」

「……」

田井中…お前怒ってたんじゃねェのか？

琴吹…相変わらず楽しそうだな。

「はぁ…」

ため息を吐いてると…

ガチャ

「いらっしゃいませ～」

「ゆ、唯！？」

秋山がやってきて平沢を見て驚愕する。

そして次に田井中と琴吹を見て…

「り、律!?ムギまで!?」

更に驚愕する。

「えっ?何やってるの?」

「メイド喫茶だ!」

「…軽音部だろうが」

秋山が驚愕の表情をしたまま疑問を放ち、それを田井中が腰に手を当て威張る。

「はぁ…　おい秋山」

「な、なに?」

とりあえずため息を吐き、当初の目的を果たすために秋山に話し掛ける。

「チラシまだあるか？」

「うん　あるけど…」

「何するんだサク？

放課後は部室で見学者を待つんだぞ？」

田井中はそう言うが、見学者が来るとは余り思えない。

昼休みで間違ったインパクトを発動してしまったせいで殆ど軽音部のことを宣伝出来なかった。

昨日の部活で昼休みは勧誘、放課後は見学者を部室で待つと決まっていたが、昼休みの惨事を目の当たりにし、俺だけでも再びチラシ配りを実行しようと考えついた。

「…お前らは部室で見学者が来るのを待ってろ
俺は外回りしてくる」

「…着ねェよ」

「え〜っ　サッくんこの服着ないの〜？」

平沢が執事服を指差しそんなことを言ってくるが拒否る。
コイツは昨日、俺の悪夢を目撃しているので、これ以上俺のプライドが傷つく失態を晒せるか。

「…この場はお前らに任せる
つうことでチラシくれ」

「分かったよ　はい」

秋山が鞄から大量に余ったチラシを取り出し渡してくる。

「まぁ　サクみたいな不機嫌顔の男がいたら新入生が驚くもんな～だったら私のような美少女がいた方がいいしな」

『うんうん』っと失礼なことを言いながら納得するカチューシャ。

何か皮肉ってやろうかとしたが、それにより時間がロスするのは御免こうむるのでさっさっと部室から退散する。

「じゃあな…」

「いってらっしゃいませ～ご主人様♪」

（メイド喫茶じゃねェっつうの…）

平沢の言葉に心でツッコむ。

「軽音部をよろしく～」

「…今、部室で茶と菓子を用意してます」

俺の言い付け通り下駄箱で待機していた修司と合流し大量のチラシを二つに分け、中庭ではなく校舎から校門までの道で勧誘をしているが…

「なぁ咲也」

「あン？」

「お前、一部の新入生から避けられてねェか？」

「…みたいだな」

昨日の朝に視線を排除するため、新入生の睨んでしまったのか失敗だった。

一部の新入生の間で変な噂でも広まってしまったのか、修司からのチラシは受け取るが、俺からのチラシ受け取り率が低い。

「なんかやっちゃったの？」

「…昨日の朝、一年が俺の事をジロジロ見てきやがるから睨んだ」

「何やってんのお前！？」

俺の発言に修司が信じられないという顔をする。

「あのなぁ　お客様は神様だぞ？
そんなことしちゃイカンだろ」

客じゃねェだろ…

「仕方ない、俺が接客の基本を教えてやる！」

接客してどうすんだ…
勧誘しろ…

「まず！爽やかスマイル！」

笑顔が気持ち悪ィな。

「そして腹から声出して挨拶！いらっしゃいませェッ！！」

黙れ。

「後は～えーっと……そんぐらいだな」

二つだけか。

「…とにかくチラシを捌くぞ」

「イエッサー！」

俺は主に一年の男子に配り（男子部員が入部してほしいため）修司は自称爽やかな笑顔を浮かべ見当違いの言葉を発してチラシを配る。

（人選間違えたな…）

第三十四話（前書き）

勧誘活動その２です。

第三十四話

一時間程の勧誘活動をした結果…

「ヨッシャーァ！配り終わったぁー！」

「ふぅ…」

何とかチラシを全て捌ききる事に成功した（無理矢理渡した感があったが）

「よしっ咲也！打ち上げ行くか！」

「勝手にやってろ」

「ＯＫ～　コホンッ

え～皆さんの努力のおかげで、無事に全てのチラシを配ることが出来ました！

では、この素晴らしい結果にカンパ～イ……ってコラッ！」

「……」

とことんアホだコイツ…

「一人じゃつまらんから共に打ち上げに行こうではないか咲也！」

そんなことを言って肩を組んでこようとするが、瞬時に地面を十回以上蹴り、『六〇・剃』を発動…なんてことは出来ねェがヒョイっとかわす。

「っととと…なぁーんで避けるんだよ？」

「…肩を組む理由がさっぱりだからだ」

「達成感を分かち合うためだ！」

「……」

腕を組み堂々と言い張る。

「じゃあな…」

スタスタ…

「待てって！　何処行くんだよ？」

別に達成感の欠片もないし、何より平沢達の様子が気になるので校舎に向け歩き出したら、アホが引き止める。

「部室」

「え？なんで？」

「…お前アホか？部活があるから行くんだよ
お前アホか？」

「なんで二回も言うんだよッ！

…って、え？部活あんの？」

まるで今日は部活があるとは思わなかったみたいな、アホな表情をするアホ。

「当り前だろうがアホ」

「だからいちいちアホ言うなッ！ていうか打ち上げはッ！？」

「だから勝手にやってろ」

「お前！俺にチラシ配りを手伝わせといてそりゃねェぞ！

更に部活だぁ！？

見ろ咲也！この空を！」

そう言って晴天に指差す。
とりあえずチラッと見てやる。

「『青』い空！そして今の季節は『春』！
ズバリ俺はお前と青春がしたい！」

知らねェよ。

「ぶっちゃけ言うとお前と遊ぶ機会が減っちゃって寂しいので、たまには相手してやって下さい！」

「…今してやってんだろうが」

「そうじゃなくてだな…
ゲーセンとか行って遊ぼうって話！」

「…いつかな」

「いつかっていつ？」

「お前の人生の終焉時」

「死んどるわぁ！！」

うるせェな…
さっさっと部室に行きてェってのに…

仕方ない…

「はぁ…」

ズボンのポッケから財布を取り出し、中からとある物を出しアホに

差し出す。

「何これ？」

「商店街の福引券
…それが手伝ってもらった礼だ」

「福引券がかよ…」

いかにも納得してませんという表情をする。

「それでハワイ旅行でも当てろ
そしたら相手をしてやらんこともねェぞ」

「ハワイ旅行なんて滅多に当らないつうの…てか、ハワイ旅行が福引であんのか？」

「ある」

「何、その自信？」

それは実際に福引でハワイ旅行を当てた奴を知ってるからだ。
…いや、正確には『当てた』ではなく『交換した』だな。

クリスマス会の時に田井中が琴吹の秘話を語った。

クリスマスプレゼントを購入するために商店街に行き、そこで福引をしていた琴吹を発見。

そこで琴吹が強運を発揮し一等のハワイ旅行が当たったが、何故か四等の人生ゲームに交換してもらった…という内容。

つまり、琴吹がハワイ旅行を人生ゲームに交換してので、未だにハワイ旅行は福引で当てられるチャンスがある…はず…多分…

「とにかくそれやるからさっさっと帰れ」

「ん～……分かった…帰るでやんす」

やんす？

「約束だぞ！ハワイ旅行が当たったら俺と青春を放火するんだぞ！」

『謳歌』な。

つうかお前の中じゃ…

『ハワイ旅行＜青春』

なのか？

「それじゃあ早速福引を引いてくるんで、じゃあな」

「…あぁ」

「待ってろよ青春ッ！」

ダッダッダッ…

土煙を巻き上げ、周囲の視線を一身に浴びながら青春大好き野郎（16…一ヶ月後には17）は去って行った。

「はぁ…」

なんかメンドーな約束してしまった…

――――――――――

ため息を大量生産しながら校舎に入り、部室への道のりを歩く。

ドッドッドッ…

「ん？」

その途中の階段を上っていると何やら地響きが聞こえてきた。

「……ァ…」

「あン？」

更には何やら叫び声も聞こえてきた。

「……」

そんな妙な怪奇現象に疑問を持ちながらも止まっていた歩みを動かす。

そして二階に辿り着いたと同時に怪奇現象の正体が判明した。

ドッドッドッドッ！

「イヤァァァッ！」

「はぁ？」

何故か部室へと続く階段から嬉々とした表情の山中顧問と泣く寸前…いやもう泣いている秋山が悲鳴を上げて猛スピードで降りてきた。しかも山中顧問が右手に秋山の襟首を左手にメイド服をそれぞれ掴んで…

「イヤァァァッ！…あっ！咲也っ！！」

「……」

暴走特急が二階に辿り着き、そのままのスピードで直角カーブを披露し一階へ突き進む。

その途中二階にいた俺とすれ違う瞬間、バッチリと暴走特急の乗客と眼が合う。

「咲也ぁ！！助けてぇぇぇぇ……」

ドッドッドッ…

「……」

乗客が俺に助けを求めるが、暴走特急が猛スピードで駆けて行くので、救助に行くと自分の身が危ういと判断。
故に見捨てるという決断に。

つうか…

（あの顧問…何やってんだ…）

俺達の前では素の姿だが、他の奴がいたら仮の姿になることを徹底してる筈なのに、あんな暴走を見せて良いのかよ…

「な、何…？今の…？」

「さ、さぁ…？」

「この上って…」

「確か音楽室だったと思うけど…」

「音楽室…」

ほら見ろ…

今の光景を目撃していた一年が呆然としてんぞ…

更に音楽室＝軽音部にあらぬ誤解を招きかけてる…

「はぁ…」

暴走特急が下っていった階段を見て乗客に対して心の中で合掌し、
改めて部室に向かおうとしたが…

ジー…

何やら視線を背後から感じる。

「……」

（また『昨日の朝の件』絡みか…？』

厄介な事をしてしまったと思いながら振り向く。

「ぁ……」

そこには先程、呆然としていた一年の女子二人の姿。

…つうかコイツら昼に馬（秋山）がチラシを渡した一年じゃねェか。

ジー…

「……」

その一年のツインテールをした女子が未だに見てくる。

「…なんだよ」

ジロジロ見られるのは気分が良いものじゃないので声を発する。

「あっ!?す、すみません!!つい…」

つい？

そんなに不機嫌面が珍しいのか？

…自己嫌悪…

「あ、あの…」

「……あン？」

自己嫌悪に陥ってると、ツインテールがおずおずと声を出す。

「あの…間違ってたらごめんなさい

クリスマスの時に駅前でサンタの格好してケーキを売ってませんでしたか？」

「……」

何故知っている？

「私、ケーキを買ったのでそれで…」

どうやらコイツとは会ったことがあるらしい。

だから昼にコイツを見た時に見覚えがあると思ったんだな。

（あぁ…思い出した…）

あの時のチビンテールか…

俺はうろ覚えだったっつうのにコイツは覚えてたんだな…

「…確かにケーキ売ってたが」

「あっ　やっぱり」

「……」

「……」

…で？だから何なんだ？

会話ストップしたぞ…

ここは俺が何とかすべきなんだろうか？

先輩だし…

「はぁ…」

意味もなくため息を吐き…

「お前ら部活見学してんのか？」

当たり障りのない話題を提供。

「は、はい」

「だったら軽音部覗いていかねェか？」

「軽音部ですか？」

「昼に馬がチラシ渡したろ？あの奇抜な連中がいる部活だ」

「あぁ～…」

苦笑いを浮かべるチビンテール。
ちゃんと軽音部の本性を言っとかなければイカンだろ。
来る者拒まずだが、軽音部には曲者がいるからな…

天然のギタリストと未だに何故アイツが部長なのか理解出来ないドラマーと、謎が多いキーボード奏者、スキル満載のレフティベーシスト、更にはぶっ飛んだ思考の持ち主の顧問…

俺は不機嫌面以外普通…

…自己嫌悪…

「あの～私達これからジャズ研に行くので…」

再びの自己嫌悪真っ最中に今まで放置していたもう一人の女子が申し訳なさそうに口を開いた。

「あン？…あぁ…そうか、まぁ無理にとは言わねェが暇があったら軽音部でも覗いてやれ」

「あ～…はい　分かりました
じゃあ失礼します
行くよ　梓？」

「う、うん　失礼します」

ペコリと頭を下げ、二人はジャズ研に見学しに行った…

「はぁ…」

あの反応を見る限り軽音部に見学に来る可能性は望み薄だな…

そりゃそうか、昼の間違ったインパクトに先程の暴走特急…

こんな音楽とは掛け離れた意味不明なものを見せつけられたら俺だったら軽音部なんて見向きもしねェし…

つうか…そんな状況を作り出したのって全部顧問じゃあねェか…

「はぁ…」

癖（もう認める）のため息を吐き…

（男子部員が入部したら良いんだがな…）

そんな希望を望みながら部室へ。

――――――――――

部室前に到着し扉のドアノブに手をかけ中に入る。

ガチャ

「大体その格好は何よ！」

「私に言うな～っ！」

「……」

え？修羅場？

状況説明。

何故か部室に真鍋の姿があり田井中（メイド服着用）を壁際に追いやり田井中（やっぱりメイド服着用）を指差し文句を言い、それに田井中（どう見てもメイド服着用）が反論？している。

「あっ　おかえり～サッく～ん」

「こんにちは咲也さん」

「りっちゃんたら…」

「サクぅ～！お助け～！」

「全く！咲也もしっかりしなさいよっ」

「ねぇ憂　あの人は？」

「……」

え？カオス？

状況説明Ｐａｒｔ２

相変わらずメイド服着用の平沢が席に着き俺にヒラヒラと手を振ってくる。

何故か紅茶を運んでいる平沢妹が俺に挨拶。

田井中と真鍋のやり取りを見て頬に手を当て、恍惚の表情をする琴

吹（ＴＨＥ・メイド服）

琴吹をトリップさせた張本人が俺に救助を求める。

もう一人の張本人が腰に手を当て、何故か俺にも文句を告げてくる。

最後に…誰だお前？

リボンの色から察するに一年の女子が俺を見て、平沢妹に問い掛ける。

つうかコイツ…癖毛だな。

（モジャ団子と命名しよう）

そんな風に思ってしまう程、髪留めをしているところがかなりの癖毛だ。

とりあえず先の問題は…

「…何がだ？」

真鍋だな。

「律にも言ったんだけど、講堂の使用申請書を生徒会に提出してないのよ」

「はぁ…　お前な…」

額に手を当てため息を吐き、ダメ部長を見る。

「いや～ははは…　すっかり忘れてたよ…」

頭を掻きながら忘却発言。

実は『第一回ファンサービス大作戦』の時に無断で講堂を使用したのが生徒会にバレてしまった。
曽我部先輩と生徒会のホープの真鍋が何とか他の生徒会の連中を説得してくれたので厳重注意で済んだのだが、その矢先で講堂使用申請書を提出してないのは、かなりヤバい…と思う。

…まぁ『ファンサービス大作戦』の時、講堂を勝手に使用すると言

い出したのは俺だし…余り田井中を責める事は出来ん…が、やっぱりな…

「咲也も軽音部の副部長なんだからしっかりしなきゃダメじゃない」

「そうだな…」

「サクが素直に…」

「平沢、お前が謝っとけ」

「ごめんなさい和ちゃん！」

「あっ　やっぱサクだな」

「はぁ…」

真鍋が深々とため息を吐いた。

第三十五話（前書き）

勧誘活動その３です

第三十五話

「結局…見学に来たのは、憂ちゃんと…えーっと…佐々木さんだけか…」

「鈴木さんだろ　鈴木　純さん」

「咲也君がチラシを全部配ってくれたのに二人しか来なかったね…」

「…そうだな」

「どうして二人しか来なかったのかなぁ？」

「つうか二人の内、一人はお前の身内じゃねェか…」

現在ジャージ姿の女子四人と制服姿の男一人が反省会中。

――――――――――

講堂使用申請書は真鍋が手腕を巧みに発揮し何とかしてくれたらしい。

『今度からはちゃんと提出しなさいよ』

という台詞を残し真鍋は去って行った…

アイツがいなかったら今頃軽音部は廃部になってたかもな…

（同じ眼鏡でもこうも差が出るか…）

つい山中顧問と比べてしまう。

「…で、お前らは見学か？」

部室にいるという事はそうなんだろうと思い、平沢妹に尋ねる。

「はい　そうです

あっ　純ちゃん、この人が副部長の桐島　咲也さん」

と、平沢妹がテーブルに着いていたモジャ団子に俺を紹介する。

「どうもです」

「…あぁ」

「ねぇねぇサッくん」

何故かモジャ団子と共にテーブルでまったりとケーキをパクついていた平沢が話し掛ける。

「あン？　つうかサッくん言うな」

「チラシ配りの『首尾』はどうだった？」

「……」

『首尾』を強調し若干どや顔をする平沢。

―――――――――

キュキュキュ…

【平沢のどや顔が佐々木だか鈴木だか斉藤の癇に触ってしまった】

【咲也】

―――――――――

それは何だ?
二ヵ月前に分からなかった単語が分かり『どうだ』って事か?
とりあえず…

「『七転び八起き』しながらも全部チラシを捌いた」

と返してみる。

問題。

この言葉を聞いた平沢はどんなリアクションをするか?

1. 『七転び八起き』だけオウム返し。
2. 知ったかぶる。

3．妹が助け船を出航させる。

答え。

「ななころびやおき？」

1…と見せかけて…

「『何度失敗してもめげずに、その度に立ち直ること』だよお姉ちゃん♪」

3…からの…

「あぁ～　し、知ってたけどね！」

2…というか全部だった。

「って、すごいねサッくん!!全部配ったんだ!?」

「…あぁ」

急に立ち上がりかなり驚愕する平沢メイド。

つうかお前が食ってるそのケーキは見学者用のケーキじゃねェのか?

なんで堂々と堪能してんだよ…

「流石サク!澪もチラシを作った甲斐があったな~」

「すごい!咲也君!あんなにたくさん残ってたのに、全部配りきるなんて!」

田井中がサムズアップし、琴吹が両手をポンと合わせて俺を称賛してくる。

（俺一人でやったんじゃねェんだけどな…）

まぁ、あのアホのことはスルーして良いか。

「なんか、すごい人みたいだね」

「うんっ！お姉ちゃんのギターの先生なんだよ！」

「へ～そうなんだ～

でも…機嫌悪そうだけど…」

「ち、違うよ純ちゃん！咲也さんは…」

「……」

バッチリ聞こえてんぞモジャ団子…
しっかりフォローしろよ平沢妹…

―――――――――

キュキュキュ…

【サクがやっぱり不機嫌顔だから】
【部長　りつ】

―――――――――

「あれ？そういえば澪さんは？」

秋山の姿が見つからず部室を見渡す平沢妹。

「…秋山ならそこだ」

そう言って部室の扉を指差す。

「……ぅぅ」

そこには顔を紅潮させ恥ずかしそうに扉から顔を出している秋山の姿が。

どうやら暴走特急の餌食になったらしい。

実は秋山が扉から顔を出した瞬間からアイツの存在を感知していたが、とりあえず放置しておいた。

後…

「……」

ジー…

さっきからジッと平沢妹とモジャ団子を、何を考えているのか知らんが観察している暴走特急山中の存在も感知していたが、触らぬ神に祟りなしということで放置していた。

「あの人は？」

「秋山　澪さん　とっても恥ずかしがり屋さんなの」

モジャ団子の質問に平沢妹が答える。

…普通、こういう部員紹介は部長がするんじゃねェのか？

「ん？何やってんだよ澪」

「お前が何やってんだよ」

そんな部長は俺の定位置（勝手に英断）の長いイスに寝そべり音楽雑誌を読んでいた。
故にこのツッコミ。

「だって恥ずかしいし…　笑うもん…」

ガキかアイツは…

「笑いませんよ、似合ってますし」

大人だなお前。

「えっ　ほ、本当？」

「はいっ」

平沢妹の言葉を受け、嬉しそうな顔でヒョコヒョコと部室に入ってきた。

「「可愛い～…」」

そんな秋山のメイド姿と仕草を見て、平沢妹とモジャ団子が思わず声を出す。

「澪ちゃん…」

「おい」

そして琴吹トリップの時間。

―――――――――

キュキュキュ…

【軽音部と全く関係ないメイド服なんて着るから】

【澪】

――――――――――

「さわちゃん、さっきから何してるの？」

「え？…って、うわぁ！！さわちゃん！？いつの間に！？」

「さっきからずっといたぞ」

平沢の疑問に田井中がやっと、ガン見していた顧問の存在に驚愕し

ながら気付く。

「さっきって、いつからいたんだ？」

「秋山が扉から顔を出した時から」

「それがいつだよ…」

「あの～…　この人は？」

俺と田井中が会話していると、モジャ団子から当然の疑問が。

「山中　さわ子先生…　軽音部の顧問…」

平沢妹が戸惑いながらも、視線を送る人物の正体を明かす。

「あなた達…」

「「は、はいっ！」」

「着てみな～い♪」

「「結構です」」

「……」

メイド服を二着取り出しでアホみたいなことを告げる。

…なんで計六着も作ってんだよ…

「あっ！咲也くん！」

「あン？」

今度は俺に視線をぶつけてくる。

「なんで制服着てるの！？ダメじゃない！執事服着なきゃ！メイドに執事はデフォルトなのよ！」

「……」

あぁ…ツッコミどころ満載だ…

まず…何故怒られにゃならん？

『ダメじゃない』って、学校で制服着たらアウトか？

デフォルトって…だからここは軽音部だろうが…

「はぁ…」

「サッくん」

こんな顧問で軽音部の行く道が真っ暗だと思い、ため息を吐いてると、平沢メイドがトコトコとやってきた。

「はいっ！執事ふ「着ねェぞ」…ぶぅぶぅ～！」

平沢が頬を膨らましてぶぅぶぅ（文字通り）言ってるが、絶対に着ねェぞ。

――――――――――

キュキュキュ…

【サッくんが執事服を着なかったから】

【ゆい☆】

――――――――――

『せっかくだから演奏見てもらえば？』

という暴走特急山中が漸く顧問らしい意見を提案した。

しかしその顧問は…

『ちょっと準備があるから』

なんて事を言って部室から出て行った…

（準備ってなんだよ？）

そんな疑問を持ちながらもテレキャスを構えるが…

「澪ちゃん、サッくん、ストラップが肩に…」

イラッ…

「うん…私も…」

イライラッ…

「裾が邪魔…」

イライライラッ…

「袖が～…あっ　大丈夫か…」

プチッ

「だったら着替えてこいッ！テメェらッ！」

「「「「ご、ごめんなさいっ！！」」」」

ピューッ！

バタンッ！

メイド服なんて着るから楽器が弾けない四人（琴吹は関係なさそうだったが）

そんな様子に俺の頭の中で何かが弾ける（決してＳＥ〇Ｄではない）

そして脱兎の如く物置部屋に駆け込む四人。

「はぁ…」

なんか頭が痛くなってきた…

「や、や、やっぱり機嫌悪いんじゃあ…」

「い、今のはお姉ちゃん達がね…」

額を手で押さえているとモジャ団子と平沢妹の会話が聞こえてきた。

―――――――――

キュキュキュ…

【咲也君が怒っちゃった…から？】

【紬】

―――――――――

「結局ジャージになりました～♪」

「なんでだよ…」

琴吹の発言にもう頭痛がしてくる…

物置部屋から着替えて出てきた四人は何故かジャージだった…

何故制服じゃねェんだよ…

つうか…

「おーいっ！行くぞーっ！」

「あいよ～」

ダッダッダッ…

「とうっ！」

ダンッ！

「次！ムギだぞ！」

「はいっ！」

「何してんだ！」

ガンッ！

「あだっ！」

「「……」」

「はぁ…」

平沢が腰を曲げ、そこに田井中が華麗に飛び越える（所謂、跳び箱）
そして琴吹が嬉々と田井中に続こうとするが、秋山が田井中に拳を
急降下させる。

そんな光景を見て呆然とする平沢妹とモジャ団子。

マジで何してんだ…

……

「じゃあ始めるぞ～」

「うんっ」

やっと演奏が始まるかと思いきや…

「あっ　ちょっと待って」

「ンだよ…」

秋山がＳＴＯＰをかける。

「ボーカルどうするんだ？」

こんな疑問を投げ掛けるが…

「平沢だろ…」

「お任せあれ！」

そもそもこのバンドのボーカルは平沢…だと思う。

学園祭の時はピンチヒッターで秋山が登板したが、立候補していた

のは平沢なのだから元来はコイツがボーカルだ。

俺の場合は歌詞を覚えていたのは俺だけだったので成り行き上仕方なくボーカルをやったが、今回は新曲三曲を既に全員に提示しているので、明日の新歓ライブで俺がボーカルをする心配はなくなった。

「お姉ちゃんボーカルなんだ～」

「うん　そうだよ～」

平沢妹の眼が輝いてる…

「じゃあ唯がボーカルってことで…改めていくぞ～」

やっと始まるな…

「ワン・ツー　ワンツースリーフォー」

♪♪♪～♪

……

「なんか、ちゃんと演奏見せてあげられなくってごめんね～」

やり慣れた『ＦＦ』を演奏したのだが…

演奏は問題なかったが、ボーカルが問題だった…

早い話、歌詞を忘却しまくって思い出そうとしたらギターを弾いてる手が止まるという出来事が発生した。

ギターは俺がフォローしたが歌詞が要所要所しか歌えないまま終了してしまい、何ともグダグダな感じに…

「いつもは真面目にやってるから」

「そうかなぁ？」

「そうだろう！」

（そうとも言いきれんぞ…）

「とにかく明日、ライブで四曲やるから聞きに来て♪」

「是非！清き一票を！」

「選挙じゃねェっつうの…」

「は、はぁ…」

あっ　ダメだなこりゃ…

視線を逸し、微妙な表情をするモジャ団子。

「じ、じゃあ行こっか？」

そんな様子のモジャ団子を見て平沢妹が『やっちまったぜ！』みたいな表情…ではなく少し焦りながら言葉を放つ。

「お姉ちゃん、先に帰ってるね？」

「ほいほ～い」

「それじゃあ、みなさん失礼します」

「失礼します」

バタン…

――――――――――

「よ～しっ　全員書いたな」

で、反省会ということで各自がホワイトボードに『何故、軽音部の勧誘が失敗したのか』を議題にして意見を書いていた。

「えーっと…サクと唯の意見はナシと…」

キュキュキュ…

ホワイトボードに書かれている五つの意見を見て、部長が俺と平沢の意見に大きくバツ印を書く。

「あぁ～…　そんなぁ～…」

「…だったらお前のもだろうが」

田井中からホワイトボード用のマジックを取り上げ…

キュキュキュ…

塗りつぶす。

「あぁー！なにすんだよーっ！」

田井中が何か喚いているが無視し、琴吹の意見を見る。

「……」

まぁ、これはお前らが原因なのだが…モジャ団子がビビっていたので俺にも非があるということで…

キュキュキュ…

三角に。

「良かった～　バツじゃなくて～」

琴吹の安堵の声を背中で聞きながら、秋山の意見を…

キュキュキュ…

文句なしで二重丸。

「やった　二重丸だ」

何故か秋山から喜びの声が聞こえた。

「さて」

全員の採点が終わり、平沢達に向き直る。

「この中では秋山の意見が最も的を得ているが…」

「あれ？なんでサクが仕切ってるんだ？さっきまで私がやってたのに…」

田井中がブツブツ文句を言ってくるが華麗にスルー。

「これだけが原因じゃねェ」

マジックでトントンとホワイトボードを軽く叩く。

「はいっ！サッくん先生」

「誰か先生だ」

平沢が挙手して質問をする。

「他の原因は何ですか？」

「…良い質問だ平沢クン」

とりあえず教師スタイルを敢行。

「まず、昼に意味不明の着ぐるみを着たことにより、チラシが余り受け取られず十分な宣伝が出来なかった」

「は～い　質問がありま～す」

「…なんだ？田井中クン」

「それはサク先生が放課後に全部配ったんだから、宣伝出来たんじゃないんですか～」

「…確かに宣伝出来たと思うが、浸透しなければ意味がない…何より昼の宣伝で思いっきり引かれてたしな…放課後のチラシ配りで挽回出来たとは思えん」

「そうだな…　実際に見学に来たのは、憂ちゃんと鈴木さんだけだったし…」

「一人は平沢の身内だしな…」

「でも、着ぐるみは楽しかったわ♪」

「またやりたいよね～♪」

秋山が顎に手をかけそう呟くが、琴吹と平沢はズレた発言をしている。

「…とりあえず勧誘の失敗は『着ぐるみ』と『メイド服』だ

この二点の共通点は…」

キュキュキュ…

ホワイトボードに…

【顧問】

と書く。

「さわちゃん？」

「確かになぁ～　着ぐるみとメイド服を用意したのはさわちゃんだし……って、じゃあさわちゃんが原因？」

「大部分はな…」

昼休みに間違ったインパクトを提案してり、暴走特急を披露したり、平沢妹とモジャ団子にメイド服を着させようとしたり等々…

勧誘失敗の起因はあの人だと思うが、俺と秋山以外の三人は結構ノ

リノリでメイド服を着てたから、ひとえに顧問だけが原因じゃない。

と…

ガチャ

「みんないるわね」

その顧問が部室にやってきた。

――――――――――

「ムギちゃん、どう？ちゃんと撮れてる？」

「ちゃんと映ってます～」

「咲也くん、照明大丈夫？」

「必要か？これは？」

「被写体を綺麗に映すには、光の加減が命なのよ」

「はぁ…バッチリデス…」

「じゃあ唯ちゃん、私が合図を出したらナレーションをお願いね？」

「了解です！」

「よしっ！じゃあムギちゃん、録画ボタンを押して」

「えーっと…録画ボタン…」

「…これだ」

「あっ　これなんだ～　ありがとう咲也君♪

…はいっ！押しました！」

「5…4…3…2…」

『準備がある』

そう言って部室から去った山中顧問が持って来たのは、ビデオカメラだった（生徒会から借りたらしい）

これで軽音部の紹介ビデオを作ろうと張り切っていたが、あの議論の後だったので全員が疑心だった。

…が、眼鏡を外し、ヘビメタ時代の目付きで四人を脅すという暴挙に走り、現在に至る。

俺だけ帰ろうかとしたが、この五人だけでやらせると些か不安があるので渋々やるハメに。

「新入生のみなさん、御入学おめでとうございます！」

平沢が山中顧問が書いてきたナレーションを読み上げる。

「ほら！いつまで恥ずかしがってるの！！」

「イヤですよ～…こんな格好～…」

「ブツブツ言わない！！」

そして山中顧問が被写体の秋山を無理矢理カメラに映る位置に押し込む。

「私達のクラブは現在、五人しかおらず廃部の危機を迎えています！」

「はぁ…」

ため息も出るわ…そりゃあ…

「私達と一緒に熱い青春を過ごしませんか！？」

だって…

「この軽音部で！！」

秋山の格好はどう見たって軽音部と全く関係ない、ナース服だし…

「カット！カット！カァーーーットォ！！」

見兼ねた部長が止めに入る。

「一体何部の紹介なんだよ！軽音部の欠片もないじゃないか！」

「つうかなんで、秋山をコスプレさせんだよ…」

「そうだよ！澪がナース服を着る意味が分かんないって！」

「じゃあ…もっと露出を増やした方が…」

「ひぃ！！」

「エロ親父を自重しろ！！」

「お前も恍惚すんなよ…」

「澪ちゃん…」

「ムギーッ！帰って来ーい！」

本日三度目の琴吹トリップの時間。

「全く…軽音部の紹介ビデオを作るって、さわちゃんにしてはまともな案を持ってきたと思ったらこれか…」

「失礼な！私はいつでも真面目よ！」

「だからたちが悪いんだよ！」

「アンタの個人的な趣味に俺達を巻き込むな…」

「私がコスプレさせるのが好きみたいに言わないでよ」

「あれ？でもさわちゃん、クリスマス以来みんなに服着せるの癖になっちゃったって言ってたよ？」

「そ、そうだったかしら～…　あはははは～」

平沢の発言に俺から視線を逸し、白を切る。

「はぁ…」

こんなんで大丈夫か…？

軽音部…

第三十六話（前書き）

新歓ライブです。

※今回はオリジナル歌詞が登場しますので、そういうのが苦手な方はスルーして下さい。

第三十六話

「てーへんだぁ！てーへんだぁ！」

翌日。
教室に着いた途端にアホが奇声を放ちながら、駆け寄ってきた。

「……」

バキッ！

「ぶぼっ！！」

とりあえず一蹴り。

「何故蹴るッ！？」

「反射的に？」

「何故疑問ッ！？」

そっちをツッコムか…

「何故反射的ッ！？」

あ　こっちもツッコんだ。

「…で？朝から奇声をあげてなんだよ？」

自分の席に着き、そう尋ねる。

「おっと…そうだった…
てーへんなんだよ！」

「底辺？…確かにお前は地球上の全生物の中で、最も下のランクに属しているが…それがどうかしたのか？」

「真顔でヒドい事言うなよ…」

「事実だろうが」

「だから真顔で言うなッ！！」

「うるせェな…　用があるんならさっさっと話せアホ」

「耐えろ…耐えるんだ…
コイツはこういう奴なんだ…心頭滅却心頭滅却心頭滅却…」

「……」

合掌してブツブツと呪文を唱えるアホ。

…とりあえず好きなようにさせるか。
ちゃちゃを入れたら騒ぎ出しそうだし…

「…よしっ！」

「終ったか？」

「はい、拙者の濁った邪悪な部分が濁流で流され、とても清々しい気分です」

「……」

心頭滅却しただけなのに、人格が改変している…

つうか『濁流』って…

濁ったところに濁流を流したら濁ったままだぞ…

「それで本題なのですが、大変なのです」

「……」

「昨日、咲也殿から頂いた福引券
これが当りました」

「はぁ？」

当たったのか…あれが…

待てよ…じゃあ…あんなに奇声を出してたってことは…ハワイ旅行が当たったのか？

ヤベェな…『青』の『春』をしなきゃいけなくなるぞ…

「その賞品が…」

悟りを開祖した人格破綻者が、俺の前の自分の席にある鞄から『青』の『春』を実行しなければいけなくなる引き金を取り出した…と思ったら…

「こちらです」

「…ポケットティッシュ？」

ハワイ旅行とはかけ離れたポケットティッシュだった。

…だよな…ハワイ旅行なんてそう簡単に当らねェよな。

「否ァァ！！」

「うぉ…」

『青』の『春』をしなくて済み、安堵していると急に人格破綻者が叫びをあげる。

完全に油断していたので若干驚いた…

「よく見てみろ！」

「…キャラ戻ったな、お前」

「ポケットティッシュ『詰め合わせ』だぁ！！」

「……」

だから何だよ…

「拙者の人生で一度も福引で賞品が当たったことがなかったが、今回！見事に当たったでござる！！」

ござる？

「…それが大変な事か？」

「それもあるがもう一つ！

咲也と青春チャンスを逃してしまったでやんすよ…」

「……」

『ござる』か『やんす』どっちかに統一しろよ。

「そいつは良かったな」

「良くねェよぉ…青春がぁ…俺達の青春がぁ…」

泣き崩れる。

「…だったら救済チャンスをやろう」

「…マジで…？」

「あぁ」

「へいカモン！」

急にテンション上げんな…ウザイ…

「駅で『青春１８きっぷ』が売ってある」

「なんとも心ときめく響きだな」

「それがあったら青春し放題だ」

「マジで！？」

「但し、１８にならねェとその切符は使用不可だ」

「くそぉ！！今すぐじゃねェのかッ！！」

「…それでも良いなら買ってこい」

「買う買う買う！！」

「……」

首を高速で上下に動かし、悪徳商法の餌食に…

『青春１８きっぷ』はそんなもんじゃねェのに…

お前も平沢も…本当に将来、詐欺にあうぞ…

―――――――――

ジャァァァン…

「よーしっ　リハーサル終了～」

今日は新歓ライブ当日。

新歓…新入生歓迎会は六限の時間を使って行われるので、新歓に参加する部活は五限を使って準備をする。

二、三年の帰宅部の連中は五限は自習になり、六限は…まぁ、帰る

か、校内をぶらつくか……ぶっちゃけ、勝手しろという投げやりな命令が学園から発令中。

「ねぇねぇ　サッくん、澪ちゃん」

で、俺達は新歓前の最後のリハーサルを部室でやり、リハーサルが終った途端に平沢が口を開く。

「あン？つうかサッくん言うな」
「なに？」

「ボーカル全部、私でいいの？」

「…良いも何も、そもそもボーカルはお前だろうが」

テレキャスをギターケースに入れながら、平沢の疑問に答える。

「でもでも、サッくんも澪ちゃんも歌上手だし、ボーカルやらないのかなぁって思って」

「う～ん…そうだなぁ…
今日のライブじゃあ四曲やるんだし、澪とサクも一曲ずつやったほうが良いんじゃないか？」

田井中がそんな提案してくるが…

「ヤダ！」
「却下」

即座に切り捨てる。

「二人共、否定するの早いな…」

「絶対イヤッ！！」

「澪ちゃん…」

秋山が眼を瞑り、拳を握ってかなりの拒否反応を起こす。

そんな秋山の様子に琴吹が声を漏らす。

「でもさ澪、学園祭のライブで評判良かったし…」

「ヤダァ！！」

「あんなアクシデントもう起こらないって」

「アホ…地雷踏むな…」

「へ？」

「ッ！ヤダァ！！」

『アクシデント』とは『桜高祭の悪夢』である。
俺は琴吹によって失明寸前…視界がゼロになっていたので、状況を全く理解してないが、学園祭が終った後の秋山が灰になりかけていたので、よほどのトラウマだったのだろう。
そして、そのトラウマ地雷を田井中がポチッと踏んでしまった。
故に耳を塞いで『言葉受け付けません』状態になる秋山。

「あっ！しまっ「ヤダッ！！」…へ？」

「でも、澪ちゃ「ヤダッ！！」…」

「澪ちゃ「ヤダッ！！」…」

「はぁ「ヤダッ！！」…」

どんだけ拒否るんだ…
俺達が言葉を発しようとする度に拒否しやがる。
ため息ぐらい吐かせろ…

…いや、別にため息吐きたい訳じゃねェんだが…

「…はぁ…」

とりあえず小さくため息を吐いてると…

「ラーメンだけじゃ？」
「ヤダッ！」

「餃子もつかなきゃ？」
「ヤダッ！」

平沢が秋山で遊びだし、琴吹も便乗する。

「影宮　修司の存在が？」
「ヤダッ！！」

「…よし」

とりあえず俺も便乗。

「すごい拒否反応だなおい…

ていうかサクは何が『よし』なんだ?」

期待通りのリアクションが返ってきた結果に対してだ。

「こんな様子じゃ澪はボーカルは無理だな

サクは?」

「さっき言ったろ…それが答えだ」

「一曲ぐらいやっても良いと思うんだけどな~」

「サッくんが歌ったら一年生にファンが出来るかも知れないよ?」

「…じゃあ尚更歌う気はねェな」

後一年したら完全にファンは消え去るっつうのに、増殖なんてさせてたまるか。

「んじゃあ…サクも歌わないってことで…」

「唯ちゃん頑張ってね♪」

「ん～…　サッくんと澪ちゃんが歌わないのは残念「ヤダッ！！」わぁっ！」

「お前…まだやってたのか…」

ボーカルをしないで済んだのに、未だにスキル発動中の秋山。

「澪ーっ！ボーカルやらないで「ヤダッ！！」……サク、どうしましょう？」

知らねェよ…
お前が一番、秋山の扱いを熟知してんだからお前が何とかしろよ…

「はぁ…　ほっとけ…時間が解決すんだろ…」

「それもそうだな…じゃあみんな！機材を講堂に運ぶぞ！」

「了解しました！りっちゃん隊員！」

「イエッサ～♪りっちゃん隊員♪」

「ヤダッ！！」

「もういいっつうの…」

――――――――――

「うわっ…人でいっぱい…」

「サクの言う通りだったな…」

「五分で元どおりだ…」

幕が下りているステージから顔を出し観客席を確認する秋山を見て、俺と田井中がポツリと漏らす。

俺達が機材を運び込もうとガチャガチャしていたら、スキルを発動していた秋山が通常モードに移行した。

秋山の最後の拒否発言から僅か五分の出来事だった。

「律ぅ〜…　人がいっぱいだぁ〜…」

「そりゃ新入生歓迎会だからな〜」

「…一年が全員参加してんだから当たり前だ」

「で、でも咲也…学園祭の時より、たくさん人がいる…」

観客席を指差し、そんなことを言う。

「サッくんサッくん」

「サッくん言うな」

「澪ちゃんの言う通りだよ　見て見て」

秋山の言葉を受け幕をめくり、観客席を見ていた平沢が俺に振り向き、チョイチョイっと手招きする。

「……」

とりあえずその手招きに従い、平沢の頭上からチラッと観客席の様子を伺う。

「ふーん…」

確かに学園祭の時より人が沢山いる。

席に座っている奴や、後ろで立ち見の連中、二階にも一年が溢れていた。

「ね？」

「…まぁな」

平沢が俺を見上げて確認してくる。

学園祭の時は講堂に来るのは自由だったが、新歓は強制参加っぽかったし（俺達が一年の時に経験済み）

だからこんなに満員御礼状態になってんだな…

「ど、ど、どうしよう～…」

「いつも通りにやれば良いだけよ、澪ちゃん」

「で、で、でも…」

「結局ボーカルじゃなくても緊張するんだな…」

「はぁ…」

難儀な性格だ…

「みんな準備は良い？」

「和ちゃん♪」

と、ここで真鍋と…

「制服もアリね…いや、でも…」

俺達をジロジロ観察しながら山中顧問がステージにやってきた。

「…なにがアリなんだ…」

ちなみに昨日の『軽音部紹介ビデオ』は、俺と田井中が…

『こんなものを新入生が見たら、間違いなく入部してこない』

と、全く同じ言葉を同時に発して、白紙になった。

山中顧問が何やら反論していたが、華麗にスルーして昨日の部活はお開きに。

「えーっと…軽音部は四曲やるのよね？」

真鍋が手に持っていた資料をパラパラとめくり、そう問い掛けてくる。

「あぁ」

「『ふわふわ時間』に『カレーのちライス』、『桜の木』と『わたしの恋はホッチキス』…この四曲だよ！」

「そ、そう…」

平沢が曲目を何故か威風堂堂と真鍋に発表する。

「相変わらず澪のセンスは独特だよな～」

「そ、そうかな？」

「咲也君のは物語みたいよね」

「…悪ィかよ…」

「ううん　私はこういう物語みたいな歌詞、好きよ」

「そいつはありがとよ…」

『次は軽音楽部による、クラブ紹介とバンド演奏です』

琴吹の称賛に軽く礼を言ってると、ナレーションが流れてきた。

「みんな…最後にひとつだけ言っておく事があるわ…」

「さわちゃん…」

「……」

山中顧問が激励の言葉を…

「制服も意外といい！！」

かける事はなく、ビッとサムズアップしてこの期に及んでそんなことを言いやがる。

「早く舞台袖に下がってください」

「真鍋、連行しろ」

「ヒド～い！りっちゃん、咲也くん～！」

「先生、行きましょう

澪、あんまり緊張しないでリラックスよ」

「うん　ありがとう和」

俺の言葉を受けた真鍋が顧問の背を押して退散していくが、最後に真鍋から秋山へメッセージが送られた。

（同じ眼鏡でもこうも差が出るか…）

そんな事を思わずにはいられなかった…

―――――――――

ゴウン…

機械音がし、ゆっくりと幕が上がっていく。

パチパチパチ…

そして新入生から拍手が起き…

「『どうも～軽音部です！新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます！』」

平沢がＭＣを始める。

「『えーっと…じゃあ早速聞いてください！

ふわふわ時間！』」

ＭＣ短けェな…

まぁ、後でもう一回ＭＣがあるから丁度良いのかもな…

「ワン・ツー　ワンツースリーフォー」

♪♪♪♪～

……

「『♪あぁ　カミサマどうして好きになるほど…』」

「……」

しかしコイツ…

昨日の平沢妹とモジャ団子に演奏を聞かせた時は、歌詞を忘却しまくってたのに…

「『♪Ｄｒｅａｍ　ｎｉｇｈｔ
せつないの…』」

そんな事を忘れさせるかの様に、生き生きと歌う平沢。

やっと『ＦＦ』を歌えたんだから、その相乗効果があるのかもしれねェな…

ギターも絶好調だし…

（本当に本番になったら化けるな…コイツは…）

……

「『カレーのちライス！』」

「ワン・ツー　ワンツースリーフォー！」

♪♪♪♪～

「『♪キミにときめき
恋かもねアワアワ…』」

『ＦＦ』が終わり、拍手喝采の中、間髪を入れずに『カレー』を演奏する。

「『♪ハングリー精神
とめらんないクラクラ…』」

この曲は俺が土台を作り、琴吹が仕上げた合作。

新曲三曲の中で最も疾走感があり、それ故に難易度が高く、中々上手くいかなかったが…

練習の努力が実り、この本番で会場を盛り上げる。

立ち上がってリズムを取ったり、手拍子をする新入生が多々見られる。

そんな風に盛り上げてくれると、俺達としても喜ばしい事だ。

……

「『♪ピリリ　ピリリ
ピリリ
Ｏｈ・・・　Ｎｏ　Ｎｏ　Ｎｏ
Ｎｏ　Ｎｏ　Ｎｏ・・・！
カレーＣＨＯＰＰｉＬｉ
ライスＴＡＰＰＵＬｉ』」

♪♪♪♪♪♪～

ダダンッ！！

琴吹のキーボードソロが気分を高揚させ、最後に田井中がドラムを力強く叩き、演奏終了。

ワァーーッ！

パチパチパチッ！！

新入生からスタンディングオベーション、拍手喝采が起こるなか、俺はテレキャスからアコギに持ち替え、舞台袖から真鍋が持ってきたイスに座る。

次は俺が作詞作曲した『桜の木』というバラード。

前作『虹の風景』同様かなり歌詞に時間が手間取った。

すんなりと歌詞を書いてきた秋山はマジでスゲェと思う。

…内容はアレだけど…

「『それじゃあ、次の曲を聞いて下さい

桜の木』」

平沢がそう言いチラッと俺を見る。

その合図でアコギを弾く…

♪♪♪♪～

そして平沢が口を開き、歌い出す…

「『♪今からもう何十年前でしょうか？
あなたが私の前を無邪気な笑顔でランドセルを担いで駆けていったのは…
そんなあなたの姿に私は満開の花を咲かせます
舞い上がって、風に乗り、大空に桜の花をちりばめましょう
あなたが見てくれてますように…』」
♪♪♪♪…
「『♪今からもう何年前でしょうか？
あなたの無邪気な笑顔が私の前を通らなくなったのは…
そんなあなたに想いをはせ、満開の花を咲かせます

舞い上がって、風に乗り、大空に桜の花をちりばめましょう
あなたの姿が見たいから…』」

♪♪♪♪…

「『♪夏は木陰を作り、秋には落ち葉となり、冬には寂れ、春にはまた…』」

♪♪♪…

「『♪舞い上がって、風に乗り、大空に桜の花をちりばめましょう
出会いの季節のこの春に再びあなたと会え、私は…
舞い上がって、風に乗り、大空に桜の花をちりばめましょう
あなたの家族が見れて幸せです』」

♪♪♪♪～…

……

「『みなさ～ん盛り上がってますか～？』」

ワァーーッ！！

「『エヘヘ～　ありがとうございます！』」

ラスト一曲の前に平沢のＭＣ再び。

最後の曲は平沢がリードギターだったりする。

本来なら俺がリードギターをやり平沢にアコギを貸して演奏する筈だったが、何故か平沢が『やりたい』と言い、ボーカルとリードを兼任は難しいので、『止めておけ』と言ったが、『経験も大事じゃないか？』という秋山の意見を汲んでやらせてみることに…

「『私、最初『軽音部』って聞いて、軽い音楽だと思ってたんですよ～』」

「……」

身を削ったＭＣするな…

「『それでカスタネットが出来ればいいかな～なんて軽い気持ちで入部しました～！』」

「……」

ガンガン削るな…

「『なので！みなさんもそんな感じで気軽に入部して下さい！』」

ＭＣが終わり、この曲で俺はアコギを使用するので構えるが…

「『あっでも　カスタネットって実は難しいってさわちゃん先生が言ってました！』」

「……」

平沢ＭＣ再び…

つうかカスタネットの情報、今いらねェよ…

「『さわちゃんっていうのは、音楽の先生のあだ名…』」

ダダダンッ！！

「コミックバンドか！！」

「ごめんゴメン」

「はぁ…」

ダラダラと中々終わらない平沢のＭＣに田井中がドラムを叩き、渾身のツッコミ。

「『じゃあ最後の曲…

わたしの恋はホッチキス！』」

♪♪♪♪…

いよいよラスト一曲が始まった。

「……」

俺はアコギを弾きながら、平沢が奏でるギターに耳を傾ける。

♪♪♪…

（ちゃんと弾けてるな…）

『私恋』の出だしのリフは難しいのだが、完璧に弾けていた。

（つうか…コイツ…）

そのことに集中し過ぎてねぇか？

（歌…忘れてるんじゃ…）

そう思った瞬間…

ジー…

視線を感じた。

その視線発生源を探す（僅か０．１秒）

《咲也！》

発生元は秋山だった。
器用なことに、ベースを弾きながらアイコンタクトをしてきた。

《唯が歌を！！》

《分かってる…お前が歌え》

《えぇっ！？》

《歌詞覚えてんだろ？》

《そ、そんな！？》

《何のために目の前にマイクがあるんだよ？》

《コーラスのためだよ！》

《とにかく歌っとけ、平沢が歌うまでで良いから》

《ぅぅ～》

《副部長命令だ》

《りょ、了解…》

この間、僅か1秒。

「あっ　歌詞忘れたぁ～!?」

リフを弾き終えた平沢がそんなことを言っていたが、秋山との会議の結果、対処法があるのでそれを実行に移す。

「『♪…んでなんだろ
気になる夜…』」

会議の結果通り、秋山が若干恥ずかしそうに歌を歌い…

♪♪♪…

歌詞を忘却してしまい動きが止まってしまった平沢の代りに、俺が急遽アコギで平沢のギターパートを奏でる。

「澪ちゃん…　サッくん…」

フォローした俺達を感謝の様子で平沢が見てくるが…

《早く歌えっ》

《さっさっとギター弾け》

アイコンタクトで平沢にそう告げる秋山と俺。

「『♪もしかして
気まぐれかもしれない
それなのに枚数だけ
増えてゆくよ…』」

「ふぅ…」

漸く歌とギターを奏でだしたので、安堵の声を吐き自分のギターパートに戻る。

「『♪はじまりだけは
軽いノリで
しらないうちにあつくなって
もう針がなんだか通らない
ララ☆また明日』」

♪♪♪♪♪……

♪♪……

……

――――――――

「う～ん…誰も来ないな…」

「ライブうまくいったと思ったのになぁ…」

「やっぱり軽音部って人気ないのかな…」

「何やってんだアイツら…」

「入部希望者が来るのを待ってるんだと思うけど…」

「はぁ…」

無事に…少しアクシデントはあったものの、大成功で新歓ライブは終った。

現在、部室へと引き上げ、俺は定位置の長イスに座りライブが終った心地良い疲労感を満喫していたが、田井中と平沢と秋山は部室の扉にへばり付き、入部希望者を待っていた。

「あの～みなさん　そんな眼で見てたら、来るものも来ないんじゃ…？」

人数分の茶と和菓子（かなり高級そう）を用意している琴吹から最もな意見が。

「…とりあえずお前ら、コッチ来い
完全に怪しいぞ」

「そうそう、お茶にしましょ？」

俺と琴吹の意見を聞いた三人は…

「「「はぁ…」」」

と、ため息を吐き、ズリズリとやってきた。

……

ズズッ…

「こうなったら、憂ちゃんを捕まえてくるしかないか」

「虫じゃないんだぞ…」

「…だったら平沢を餌にしろ
間違いなく釣れるぞ」

「魚でもないって…」

「あっ　魚と言ったらさぁ…」

全員席に着き、茶を啜っていると、田井中が平沢妹を入部させようと企むが秋山にツッコまれ、更には俺にもツッコミが飛んできて、それを聞いた平沢が何かを言おうとした瞬間…

ガチャ…

「あの～…」

部室の扉が開き、とある人物が入ってきた。

「……」

（アイツ…）

その人物は、チビンテールだった…

「はい？」

全員がチビンテールに注目するなか、平沢が応答する。

「入部希望…なんですけど…」

「え…？今なんと？」

「入部希望…」

「「「「「……」」」」」

『入部希望』

その言葉を聞いて、互いに顔を見合わせる俺達。

「入部希望者が来た…」

秋山が少し呆然としながら。

「軽音部に♪♪」

琴吹がかなり嬉しそうに。

「サッくん！！入部希望者が来たよ！！」

テンションがかなり高い平沢が俺の手を取り、ブンブンと左右に揺

らす。

「分かったから落ち着け…」

そんな平沢をたしなめる俺。

「確保ーーッ!!」

田井中がハンターに転職し、獲物を捕らえようと飛び掛かる。

「キャアアアーッ!!」

そんなハンター襲ってきたもんだから、チビンテールが悲鳴をあげる。

あっ　逃げるかもなコイツ…

第三十六話（後書き）

『ふでぺん　～ボールペン～』は今回は出しませんでした。

唯が歌ったオリジナルの歌詞は、唯のイメージとは違うと思いますが、咲也が作ったので勘弁して下さい…

第三十七話（前書き）

梓編スタートです。

第三十七話

田井中がスティックを掲げ、それを交互に鳴しカウントを取る。

「ワンツスリーフォー！」

ダダダダダンッ！！

スティックを勢いよく、スネアに打ち落とし…

♪～

♪♪～

秋山のベース…

琴吹のキーボード…

♪♪♪～

平沢と俺のエレキギターがそれに続き、一つの曲を奏でる。

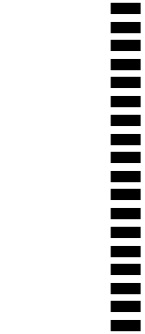
「……ぁ」

目の前にはたった一人の観客の姿。

「……」

そのツインテールが特徴の後輩は、泣き顔のまま俺達の演奏をジッと見つめている…

（さて…どうなるか…）



ハンターが獲物を捕らえたまま離さないので、俺と秋山が（ほぼ俺が）力ずくで引き剥がし…

「ようこそ！軽音部へ！」

何食わぬ顔でそんなことをハンターが堂々と言いやがる…

「は、はぁ…」

そんなハンターを見てチビンテールが呆けた声を出し、一歩後ろにさがる。

「はぁ…」

いきなり田井中がぶっ飛んだ行動に出るもんだから、思わずため息が漏れる。

警戒されてんじゃねェか…

「ほら！こっちこっち♪座って♪」

呆けているチビンテールの手を取り平沢が、かなり嬉しそうに席に誘導する。

「……」

入部希望者が来て嬉しいのは分かるけどよ…

ハンターのせいで警戒してんだからそう素直に…

「はい！」

「……」

頷いたよコイツ…

しかも満面の笑みで…

「ほらほらサク！退いた退いた！」

「あぁ？」

秋山はチビンテールが訪問した時に立っており、琴吹はチビンテールのために茶の準備をしている。

ハンターを引き剥がした後、再び席に着いていた俺にハンター田井中が手を左右に動かし、退けと言う。

「新入部員様が座るんだからお退きなさい！」

「…四つ空いてんじゃねェか」

「部長命令！」

「はぁ…」

なんか田井中のテンションが異常であり、これ以上反論したら藪蛇が飛び出しそうなので渋々立ち上がり、定位置の長イスに向かう。

「あのっ　私は別に…」

「いいから♪いいから♪座って♪」

チビンテールが遠慮するが、部長のこの言葉。

「大変だな咲也…」

「お前の幼馴染みのせいでな…」

「…ごめん…」

本当に申し訳なく謝る秋山。

「はぁ…」

（別にお前が悪ィ訳じゃねェんだがな…まぁ良いか…連帯責任っつうことで）

そう思い、長イスに座る。

「じゃあここ座って～」

平沢が椅子を引きチビンテールを促す。

「はい」

着席する。

「……」

さっまで平沢が座ってたところに…

「あの天然…」

俺が退いた意味ねェじゃん…

なんで自分が座ってた椅子を引くんだよ…

流れ的に俺が座ってたとこだろうが…

「お茶どうぞ♪」

「ありがとうございます」

「お名前は何ていうの？」

「あ…中野です」

俺が軽い憤りを感じてると茶を淹れ終え、チビンテールに差し出した琴吹が質問。

それを皮切りに…

「パートは何やってんの？」

「あ…えっと…」

「好きな食べ物は？」

「誕生日は？」

「血液型は？」

「中学校どこだった？」

「えっと…あの…」

平沢、田井中が加わり、マシンガンの様に質問をバンバン撃ってくる。

「……」

お前らの援護射撃はいらねェぞ…

「落ち着けお前ら」

……

「えっと…一年二組の中野　梓といいます」

秋山の鶴の一声で何とかマシンガンをぶっ放していた三人を落ち着かせ、チビンテール―中野　梓―が、改めて自己紹介を始める。

「私は部長の田井中　律！」

「琴吹　紬です」

「秋山　澪、よろしくな」

「平沢　唯だよ♪」

「…桐島　咲也」

「サッくんは軽音部の副部長さんです！」

それに伴い俺達も自己紹介を（平沢が何故か威張って俺を補足する）

…つうか秋山はコイツには人見知りしねェんだな。

同性だからか？

年下だからか？

…謎だ…

「よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる。

最近の年下の奴はやけに礼儀正しいな。

平沢妹しかり、モジャ団子しかり、コイツしかり…

「ねぇねぇ梓ちゃん」

「はい」

「二組ってことは『平沢　憂』って知ってる？」

『良い国だな日本』と思っていると平沢からこんな質問が。

「はいっ知ってます

あの、同じ名字ってことは姉妹ですか？」

「うんっ　憂は私の妹なんだ～♪」

「…見た目は似てるが、中身は似つかねェがな」

「えっ？サッくんどういう意味？」

キョトンとした表情をする平沢。

「…別に、深い意味はねェから気にすんな」

「気にしたら負けだね！サッくん！」

「あぁ…あとサッくん言うな」

「気にしたら負けだよ！サッくん！」

「…気にするわ」

「唯はサクの発言を気にした方がいいぞ…」

「気にしたら負けだよ！りっちゃん！」

「少しは気にしろよ、唯…」

「気にしたら負けだよ！澪ちゃん！」

「……」

お前…そのフレーズ気に入ったのか？

「ごめんね？騒がしくって」

「いえ　みなさん仲が良いんですね

バンドってチームワークが大切だから…だから新歓であんなに良い演奏が出来たんですね！」

キラキラ☆

「……」

平沢のフレーズを浴びなかった琴吹が、大してそんな風に思ってないが一応という感じに告げ、それを良い様に捉え眼を花火の様に輝かせる。

興奮したらしい。

座っていた席から立ち上がる程に…

（せめて座っといてくれ…）

じゃねェと俺が退いた意味が皆無だ…

「うぉぉ…　眩しい…」

「おい中野…だったか？」

中野だったと思う奴が放った花火に眼を眩ませる田井中を完全無視し、気になる点をぶつける。

「はい　そうです」

「ダメだよサッくん　人の名前はすぐに覚えなきゃ」

無視。

「そうだ！これを機にサクは私達のことを名前で呼ぼうぜ！」

無視。

「りっちゃん隊員！サッくん隊員が無視します！」

「もしかして…私達の名前を知らないのかもな…よしっ！ならば自己紹介だ！」

「咲也は私達の名前知ってるだろ、ていうかさっきしたじゃないか…」

秋山が対応しだしたので…

「なんか楽器出来んのか？」

と問う。

「はい　ギターを少し…」

「私の名前は…おっ　唯とサクもギターなんだぜ」

なんか食い付いてきたな…

「よろしくお願いします　唯先輩、それと「唯先輩…」…え？」

「唯先輩…先輩…先輩…」

「はぁ…」

中野が放った『先輩』発言にトリップする天然娘。

コイツは今まで部活をしてこなかったから『先輩』なんて呼ばれたことがなかったんだろうな…

俺もしてこなかったが…そんなに『先輩』が嬉しいか？

「あの…唯先輩どうしたんですか？」

「多分、嬉しすぎて…」

「別世界に飛んでいったんだろ」

中野の疑問に秋山と俺が答えを提示する。

「はぁ…そうですか…」

「お～いっ　帰って来～いっ」

「唯ちゃ～ん」

田井中と琴吹の帰還命令虚しく…

「先輩…唯先輩…」

「ほっとけ…」

別世界の住人になってしまった。

「あの、咲也先輩もよろしくお願いします」

「…あぁ」

別世界の住人を放置し、中野が俺にペコリと頭を下げる。

「はっ…！梓ちゃん！！」

「は、はいっ！」

「おかえり唯ちゃん♪」

「ムギ…」

やっと帰還した平沢に琴吹がニコニコしながら、まさかの出迎え。

そんな琴吹に秋山が思わず声を漏らす。

「サッくんのことは『サッくん』でいいよ♪」

「ヤメロ」

「もしくは『サク』でいいぞ♪」

「え、えっと…」

困惑した表情で俺を見る。

「はぁ…　コイツの発言以外なら好きに呼べ」

コイツとは勿論平沢だ。

余程のパンチが効いた衝撃な呼び方じゃなければ何でも良いし。

つうか『桐島先輩』で良くねェか？

「じゃあ…律先輩が言ってた『サク先輩』で良いですか？」

「…あぁ」

「やったぁ！私の勝ち～♪」

「いいなぁ…りっちゃん…」

田井中と平沢が良く分からん勝負をしていたがスルー。

「あの～梓ちゃん？」

「はい　なんですか紬先輩？」

「それなんだけどね？」

「…どれだよ」

「『紬先輩』じゃなくて、『ムギ』って呼んで欲しいな～って思って私、軽音部のみんなから『ムギ』って呼ばれてるから～」

「……」

こだわるところか？それは？

つうか軽音部のみんなって…俺はそんな風に呼んでねェぞ…

「先輩ですから呼び捨ては…」

「じゃあ『ムギちゃん』で！」

「そ、それも…」

「落ち着けお前…」

「『ムギ先輩』で良いんじゃないか？」

と秋山が妥当な提案を。

「はい　じゃあムギ先輩、よろしくお願いします」

「うん！よろしくね梓ちゃん！」

かなり嬉しそうな琴吹の次に中野が田井中と秋山の方を向き…

「律先輩と澪先輩もよろしくお願いします」

「おう！よろしくな梓！」

ペコリと頭を下げ、田井中は普通に返すが…

「澪先輩…先輩…」

「お前もかい」

平沢と同等の症状に陥る秋山。

故にツッコまざるを得ない。

……

「とりあえず、なんか弾いてみせて～」

別世界の住人をなんとか田井中が帰還させ、ひと通り挨拶が終ったところで、俺が…

『どのくらいギター弾けるんだ?』

という発言を聞いた平沢が、実践あるのみというとで自分のアンプに繋いだレスポールを中野に渡す。

「まだ初心者なので下手ですけど…」

そう言ってストラップを肩にかけるが…

「重っ…」

なんて声が俺の耳に届いた。

ただでさえコイツは小柄な体型とツインテールなんだし…ツインテール関係ねェか…それに女だ。

そんな言葉が漏れるのは仕方ない。

「…重いんなら、俺のテレキャス使うか？」

「い、いえっ！大丈夫です！」

まさか自分の『重っ…』発言が聞こえていたとはなんて…みたいな表情してアタフタする中野。

「唯ちゃんのギターより咲也君のギターの方が軽いの？」

「いや　あんまり変らん」

「じゃあなんでそんなこと言ったんだよ…」

「ていうか唯は、よく重たいギターでやれてたな？」

「だって澪ちゃん、ギー太だもん♪」

「「「「「？」」」」」

平沢の奇想天外摩訶不思議な単語に中野を含めた五人がクエスチョンマークを掲げる。

「…じゃあ演奏どうぞ」

平沢がよく分からん事を言うのは、今に始まった事じゃないのでと

りあえずスルーして、俺が中野にそう促す。

「もしかしたら聞き苦しいところがあるかもですけど…」

「大丈夫！私が教えてあげるから！」

「お　早くも先輩風吹かせてるな」

「……未だに俺に教わってる奴が何言うか…」

「そんなこと言ってやるなってサク…」

俺がポツリと呟いたのが田井中には聞こえていたらしい。

「そ、それじゃあ…」

中野がレスポールを構え…

ジャラァ～ン…

軽くストロークし…

♪♪♪♪～…

レスポールを弾きだす…

「「「「「……」」」」」

「ほぉ…」

何が『初心者』で『聞き苦しい』だ。

平沢より断然に上手く、スムーズにコードチェンジが出来て滑らかに弾けてんじゃねェか。

思わず感心する程に。

「私より断然うまい…」

そんな中野のギターの腕を目の当たりした平沢がポツリと呟いた…

哀れだなお前…

ジャァァ…ン…

「「「「「……」」」」」

「あ、あれ？」

弾き終えた中野が呆然としている四人を見て、何を思ったか知らんが…

「ごめんなさい！」

急に謝りだした。

「あン？なにがだ？」

「その…やっぱり聞き苦しかったですよね…」

「…お前それマジで言ってたら嫌味にしか聞こねェぞ…」

「え？」

「自分を過少評価し過ぎだっつうこと…かなりギターうめェじゃん…」

「そんなことは…だってライブでのサク先輩と唯先輩のギターよりかは…」

「そんなことないよ梓」

「うん！すごく上手よ！」

「そ、そうですか？」

秋山と琴吹の発言に若干嬉しそうな表情をする中野。

「いや～凄い新人が入って来たな～

ていうかサクが褒めるなんて中々ないんだぜ？」

「そうなんですか？」

「ンなことねェよ…」

「いつも不機嫌な顔してるサクが褒めるなんて、それはそれは珍しい…

あっ　そうだ…サクは機嫌悪そうにしてるけどさ、これが普通だから安心しなよ♪」

「ンだと　テメェ」

「だって言っとかないと勘違いされるじゃん」

「チッ…」

正論なので言い返せないのが悔しい…

「良かった…」

それはどっちの事に対してだ？

ギターを褒められた事か？

俺の不機嫌面に対して……自己嫌悪…

「ま、まだまだ…だねっ！！」

「「「えぇっ！？」」」

「…あン？」

自己嫌悪に陥ってると今まで黙ってた平沢が腕を組みそんなことを言いやがる。

「（ちょっ唯！いつまで見栄張ってるんだよ）」

「（だ、だってりっちゃん…私、先輩だもん）」

「（『だもん』じゃねェよ…正直に言っとかねェと、後々困んのはお前だぞ）」

「（でもでもサッくん…気にしたら負けなんだよ…）」

「（いや　意味分かんねェから）」

「唯ちゃん…梓ちゃんが…」

俺達が小声で話していると、琴吹が何やら少し焦った様に呼び掛ける。

中野を見る。

「わぁっ♪♪」

アイタタタタ…

眼が輝いて…いや顔が…いや存在そのものから憧れの人発見オーラが出ている…

「私、もう一度唯先輩のギターが聞きたいです！」

そして…

「サク先輩のギターも聞きたいです！」

「……」

オーラを出しながら俺にも告げてくる…

「え～っと…あの～…ラ、ライブでギックリ腰になったからまた今度ね！」

「「唯…苦しいぞ…」」

秋山と田井中がダブルツッコミ。

「私は今は無理だけど…」

グイッ

「引っ張んな…」

「サッくんがやってくれるよ！」

自称ギックリ腰の平沢が俺の腕を掴み、中野の前に連れ出す。

「わぁ～♪お願い出来ますか？サク先輩！」

かなり期待の眼差しで見てくる…

「…あぁ」

「ありがとうございます！じゃあ…」

そう言ってレスポールを俺に渡そうとするが、途中でその行動が止まる。

「あの、自分のギターの方が良いですか？」

「いや…別にレスポールでかまわねェ」

「そうですか　…じゃあお願いします！」

ストラップを肩から外し、俺に渡してくる。

「……」

平沢のレスポールを受け取り、ストラップを掛け、構える。

「ギー太がサッくんの手に…」

だから何言ってんだ？

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き…

♪♪♪♪～…

適当にギターを奏でる。

「わぁ～♪やっぱり上手いです！」

「改めて思うけど咲也って…」

「うん　上手よね～」

「ＢＧＭに最適だな～」

「ギー太がはしゃいでる！」

さっきからチョイチョイ何言ってんだギックリ平沢…

ジャァァ～ン…

終了。

パチパチパチッ！

「すごいですサク先輩！！やっぱりサク先輩のギターはすごく上手いです！」

「…ありがとよ」

テンションがグイグイ上がった中野が拍手をし、感激の様子で迫ってくる。

そんな勢いに若干押されながらも、とりあえず礼を言う。

「クスッ　完全に咲也は梓の憧れになったな」

秋山がそんなことを言っていたのをしっかり俺の耳がキャッチした。

……

「軽音部に入部してくれるってことでいいんだよね？」

「はい！新歓ライブのみなさんの演奏を聞いて感動しました！これからよろしくお願いします！」

田井中の言葉に中野がそう返し、深々と頭を下げる。

「うぅ…眩し過ぎて直視出来ません」

「お前ちょっと黙ってろ…」

「ひどいやサッくん！」

平沢ぷくっと頬を膨らませて文句を言ってくるがスルー。

「これ、入部届です」

「確かに受け取ったから、明日からよろしくね！」

「はい！」

中野が部長の田井中に入部届を提出し、正式に軽音部への入部が決まった。

「それじゃあ、律先輩、サク先輩、唯先輩、澪先輩、ムギ先輩、失礼します」

ガチャ…バタン…

最後に俺達に頭を下げ鞄を手に取り、ある意味旋風を起した後輩は部室から去って行った。

「また明日～梓ちゃん♪」

「なんか後輩が出来ると、先輩って感じがするよな」

「…現にお前、トリップしてたもんな」

「あ、あれはつい…」

「でも澪ちゃんの気持ちも分かるわ
『ムギ先輩』って言われて嬉しかったもの♪」

「いいもんだよな～先輩って言われるのってさ」

「…そうか？」

「サクは相変わらずだな…」

「ねぇねぇ…みんな…」

中野が去った部室の扉を見ながら会話していると、平沢の弱々しいボイスが聞こえてきた。

「私…どうしよう！」

「「練習しとけ」」

秋山と田井中のダブルツッコミ（本日二回目）

「サッくん…今から練習したら、梓ちゃんぐらいになれるかな？」

「無理」

「切り捨てられたぁ～！」

見栄なんて張るからだ。

正に後悔先に立たずだな。

第三十八話（前書き）

梓編その二です。

眠ッ…

第三十八話

モグモグ…

「ほぇ～みゃあにゅうにゅうぷひんまみゅうみゃますんらら」

「…すまん、今は平成だから古代修司語は理解不能だ
だから日本語に変換してくれないか？」

翌日の昼休み。

修司と共に昼メシのパンを食して、俺がとある事を言った瞬間にアホが解読不可能の暗号を告げてくる。

「ゴクン…平成関係なくね？てか古代修司語ってッ！！」

「…良いからなんっつったんだよ」

「『おめでとう』と言ったんだよ」

「……」

随分はしょったな…

さっきの暗号がそんな五文字だったとは到底思えん…

「良かったじゃん！新入部員が入部してさ！」

「…まぁな」

俺が告げた『とある事』とは軽音部に新入部員…中野が入部したという内容。

コイツには勧誘を手伝ってもらったので一応伝えておこうという修司に対しては本当に珍しい俺の親切心が働いたのだが…暗号で返してきやがった。

「これも俺のおかげだな！さぁ咲也！俺を崇めろ！敬え！称えろ！」

「…カス」

「カスゥッ！？」

「調子にのるな…チラシ配りの成果は、ほぼ皆無だ」

「じゃあなんで新入部員の…えーっと…梓ちゃんだっけ？その娘が軽音部に入部したんだよ？」

「俺達の新歓でのライブが感動したんだとさ…故にお前が誇れるようなことじゃねェ」

「少しは親友をねぎらえよな～」

「親友じゃねェ」

「『親しい』『友』と書いて親友なのッ！俺達はッ！」

「『阿』と『呆』と書いてアホだテメェは」

「『好き』と『敵』と『手』と書いてライバルでもあるんだぞッ！

俺達はッ！」

いつからそうなったんだよ…

「もしくは『強い』『敵』と書いてライ……」

「……」

アホが何か言ってるが、そんな事よりも少々気になる点があった。

それは昨日の中野が俺達に対する態度。

アイツは新歓ライブで感激して軽音部に入部したらしいが…これが気になる。

つまり、ライブ時の軽音部の姿しか知らず、通常の部活時の軽音部の実態は知らない。

昨日はその実態を知らぬまま去って行ったが…まぁ、平沢と田井中が少し実態の片鱗を垣間見せてはいたが…

「あっ　そういえばさ～お前って……」

「……」

そして今日から中野は軽音部で部活開始。

…なんだろうな…軽音部の実態を知った中野が戸惑ってる姿が浮かんでくる…

アイツは俺達をかなり評価してたみたいだし…

実態確認＝評価暴落。

という事は…

評価暴落＝失望＝退部。

「…無きにしも非ず」

「何が？」

「…別に」

「ふーん…って、俺の話聞いてましたか？」

「全然」

「即答ッ！？」

「…なんかほざいてたのか？」

「言ってたわいッ！

仕方ない…もう一度だけ言ってやる」

「いや結構だ」

ガバッ

「言わせてください」

「……」

昼休みの教室で急に土下座するアホ。

一年の時、一緒のクラスだった連中は『あ　またやってる』みたいな空気を醸し出しているが、違うクラスだった連中からは『え!?何事!?』みたいな空気が…

「…さっさっと話せ」

そんな奇異な空気を俺にも当ててくるので、早く用件を伝えろと命令を出す。

「すまねェ…恩に着る」

「…さっさっと話せ」

「恩と言えばさ、『鶴の恩返し』っあんじゃん?
…もし本当に鶴が恩返ししに来たらどうする?」

「…さっさっと…」

「ん？」

「話せッ」

ドゴォン！！

「ブベッ！！」

「…誰が鶴の恩返しを話せって言った？」

「……おぉ…スマン…スワン…」

「あぁン？」

「あぁ…ごめんなさい…本当に…はい」

……

モグモグ…

「ゴクン…お前、男子部員が入部してほしいって言ってたけどさ、そっちの方はどうなん？」

蹴っ飛ばしてやったっつうのに…もうピンピンしてやがる…

しかも普通に食べかけのパン食ってるし…

「…さぁな、新歓が終った昨日か今日ぐらいに中野以外の新入部員が来なきゃ、可能性はほぼゼロだ」

「いや～分かんねェぞ？一年前のお前と唯ちゃんはまだこの時期に部活には入ってなかったんだから、同じような奴が……って、あぁッ！！」

「…ンだよ…うるせェな…」

「今…思い出したんだけど…お前に軽音部へ入部を勧めたのって…ミーじゃんか…」

何故英語？

「クッ！まさかユーと放課後、遊べない原因はミーにあったなんて！ショックッ！！」

頭を抱える微外国人。

「……」

（そういえば…俺が軽音部に入部したきっかけは…コイツと平沢だったな…）

平沢の付き添いで部室に行ったんだった…

（奇妙なきっかけだな…軽音部に入部したのは）

修司が手につけてない焼きそばパンの袋を開封しながら、そんなことを思った。

「って、なんでサラッと人のパン略奪してんだよッ！！」

――――――――――

ガチャ

放課後になり、部室の扉…

「ん？どうしたんだ桐島？」

ではなく、職員室の扉を開く。

そこでデスクワークを淡々黙々と作業していた二年三組の担任（一年の時と同じ担任）が職員室に入室してきた俺に気付き声を掛けてきた。

「…コピー機借りに来たんスけど」

「なんだ、また軽音部のチラシをコピーするのか？」

「…いや別の」

（軽音部に関する物だけど）

「そうか、壊さないなら幾らでも勝手に使って良いぞ」

「壊した弁償金はアンタの少ない給料から引かれるから問題ねェな…」

スタスタ…

「なんて事言うんだお前は…」

担任が何やら嘆いていたが無視し目的のコピー機に向かう。

「ん？」

「咲也？」

コピー機向かうとそこには先客がおり、何やらガンガンとコピーしていた。

「どうしたの？部活は？」

眼鏡をかけた平沢の幼馴染み兼保護者プラス生徒会のホープの真鍋が、この時間帯に職員室にいる俺に疑問の視線と共にそう尋ねてくる。

「…これをコピーしに来た」

鞄から五枚の紙を取り出してピラッと真鍋に見せる。

「楽譜？」

「あぁ…新入部員が入部したからな、ソイツにも楽譜を渡しとかねェとな…」

「中野　梓ちゃんだっけ？」

なんで知ってんだ？

やっぱ生徒会にはヴェー○が存在すんのか？

…って、そうか…

「平沢と秋山から聞いたのか？」

コイツは平沢の保護者（幼馴染み）だし、軽音部員以外だったら、いの一番に報告するだろう…いや平沢妹とどっこいどっこいか…

まぁ　良い。

それに秋山とは一緒のクラスだしな。

なんか最近秋山と仲良くやってるらしいし（何故かそんな情報が秋山本人から俺にメールでお知らせされた）

「うん　唯から昨日の夜に電話がきたし、澪は今日の朝に教えてもらったわ」

ビンゴ。

「そういえば…二人共なんだか興奮してたわね…」

「興奮？」

「唯は小さくて可愛い娘だって、澪はギターがすごく上手い娘が入部してきたって言ってね」

「…やっぱ平沢は着眼点が違うな…」

「それは私も思ったわ…」

「「はぁ…」」

共に重なるため息。

「あ、コピー機使うんでしょ？」

「あぁ」

「じゃあ少し待って、もうすぐで終わるから」

「…何をコピーしてんだ？」

大して興味も湧かないが暇になりそうだったので、コピーされた紙を見ながら暇潰しをする話題を提供する。

「生徒会関連の資料よ」

「…生徒会に渦巻く黒い部分をＰＴＡに内部告発するための資料か」

「違うわよ…」

真鍋が呆れたように俺に告げてくる。

「まぁ、どうでも良いんだがな…」

「…咲也って興味がないことには興味ないでしょ？」

「…興味がねェから興味がねェんだよ」

「はぁ…それもそうね…」

……

ウィーン…ガー…

真鍋が生徒会関連の資料をコピーし終わり、俺が楽譜をコピーしていると…

「でも…大丈夫なの？」

「あン？」

大量の書類を胸に抱えた真鍋が少し心配そうに告げてくる。

「梓ちゃんの事よ」

「……」

「軽音部ってライブになったらすごいけど…いつもは…その…」

「…ダラダラとお茶会やミーティングという名の雑談ばかり…か？」

真鍋が俺から視線を外して言い淀んでいたが、別に本当の事なので

俺が軽音部の実態を告げる。

「うん…唯が言ってたんだけど、梓ちゃんが入部したきっかけって新歓のライブを見たからなんでしょ？」

「そうらしいぜ…更に俺達のことを評価してたしな」

ピー

コピーが全て終ったので楽譜とコピーされた楽譜を取り、鞄に入れる。

「そうなんだ…咲也達のことを評価してるのに…普段の軽音部の姿を知ったら…辞めちゃうんじゃないの？」

「……」

どこか自分自身の問題のように若干表情を曇らせ、そう告げてくる。

「…それは俺も危惧しているとこだ」

「だったら、普段から…とまでは言わないけど、今まで以上は練習とかした方が良いんじゃないの？」

「俺はそのつもりだが…部長や天然娘とぶっ飛んだ顧問が中々な…」

琴吹は真面目な方だが便乗したり流されやすい。
秋山はあの四人の中じゃ一番まともだが、いかんせんどこか抜けてるところがある。

「…まぁこれは、練習するための布石だ」

そう言って楽譜が入ってる鞄をポンと叩く。

「楽譜が？」

修司や平沢だったら『鞄が？』と言いそうだが、流石は真鍋だな。

「あぁ…後輩が練習してたらアイツらだって先輩としてやらなきゃイカン自覚が生まれるだろ」

…多分だけどな…

「…咲也ってちゃんと先輩してるのね」

意外そうな表情で俺を見てきやがったよコイツ…

「…せっかく後輩が出来てアイツらは喜んでいるんだから、自分達の失態で退部されたらかなり落ち込みそうだし…そんな後味の悪い雰囲気の中で部活をやるなんてゴメンだ」

「ちょっと意外かも」

「あぁ？」

つうか『意外』って言いやがった…

「咲也が軽音部…唯達や梓ちゃんのために行動するなんてね」

「……」

失礼だ…生徒会員のくせに…

「はぁ…そんなんじゃねェよ
さっき言ったろうが、後味の悪い雰囲気はゴメンだって」

「クスッ　そうね」

何笑ってんだよコイツは…

……

ガチャ

バタン…

「さっき…」

「あン？」

用が済んだので真鍋と共に職員室から退散して扉を閉めた途端、真鍋が口を開いた。

「咲也はちゃんと先輩してるって言ったけど…」

お前が意外そうな顔で言ったな。

「唯にも先輩としての自覚を持って欲しいのよね…」

「……」

「ほら、あの娘って子供みたいなところがあるでしょ？」

「…確かにな」

「幼稚園の時も小学生の時も中学生の時もずっと私に頼りっきりだったの」

「……」

「でも、高校生になって軽音部に入部して…憂も言ってたんだけどね、唯は少し変ったわ」

「ん？」

「ギターを始めて生き生きしてるし、咲也や澪、律やムギと友達になって本当に楽しそうにしてる」

そこに修司は加わらないんだな。

「それは私も嬉しいの…ちょっと寂しい気持ちもあるんだけどね」

そう言って苦笑いを浮かべる。

「でも、そのままじゃ唯は成長しないんじゃないかって思ったの」

「……」

「後輩が出来たんだし…これをきっかけにして…ゆっくり少しで良いから成長してほしいのよね

…じゃないとあの娘の将来が心配なの…」

「……」

確かにな。

あの天然とガキっぽさだ…マジで将来、詐欺とか様々なトラブルを

巻き起こしたり巻き込まれたりしそうだ。

気が付けば良い意味でも悪い意味でも世界中から注目される人物になってたりして。

…それはそれで面白そうだな。

「…まぁ、それは平沢自身の問題だしな」

「うん…私がどうこう言う事じゃないんだけど…小さい頃から知ってるから、どうしてもね」

コイツ…本当に平沢の保護者みたいだな…

（母親二号だな）

ちなみに一号は実の母親を差し置いてその娘の平沢妹だ。

と…

「良いこと言うな～和ちゃん…俺、感動しちゃったよ…」

「「……」」

必要じゃない時に現れる奴が、いつの間にか盗聴していた。

「咲也、これが親友ってもんだよ」

「「……」」

「正にベストフレンド！」

「じゃあな真鍋」

「えぇ　咲也」

スタスタ…

「…二人共…無視しないで…」

ガチャ

「ん？何やってるんだ影宮？」

「先生…親友ってなんでしょうね…？」

「？」

第三十八話（後書き）

梓…全く出てこず…

次話は出てきます。

第三十九話（前書き）

梓編その三です。

第三十九話

真鍋と別れ部室に向かう。

その道中、鞄から一枚の楽譜を取り出して眺める。

「……」

（先ずは中野にひと通り曲を覚えてもらうか…
その後でアイツのギターパートなり細いところを詰める…かな）

中野が加入したことによりバンド内にギターが三人になる。
平沢がボーカルギターで俺がリード、中野がそれを支えるオブリだったり、共にツインリードなんかも良いかもしれない。

（まぁ　曲によりけりだな）

スリーギターは演奏技術が難しいが、バッチリと決まれば今まで以上の音が奏でられるだろう。

中野は昨日のギターを聞いた限り、間違いなく平沢より技術は上だ。

平沢は『絶対音感』を駆使して演奏中にズレを修正出来れば良いんだが…アイツ自身、良く分かってねェしな…

俺は…まぁ、なんとかしよう。

（…たまにベースを弾くか？秋山とツインベースか…俺が六弦ベースを使ってみたりとか…
…つうかベース持ってねェし…）

あれやこれやと様々な演奏法を考えていたら、部室の扉が目の前に。

ジャラァァ～ン…

と、部室の中からギターの音色が聞こえてきた。

（…真面目に練習やりだしたのか？）

俺と真鍋の危惧はいらぬ心配だったらしい。
漸く『軽音部』の正しい姿に…

……

ガチャ

「うるさぁーいっ！！」

「ひぃっ！」

「……」

…になっていることはなく、中では相も変らずのまったりとしたティータイムを満喫中。

そして何故かギターを構えている中野に怒鳴るぶっ飛び顧問。

「はぁ…」

ため息を吐き、額に手を当てる。

（何やってんだよ…あの人は…）

「さ、さわちゃんのアホーッ！！」

「だって、静かにお茶したかったんだもん…」

「言い方ってもんがあるだろっ」

「…静かに茶が飲みたかったら部室に来ないで喫茶店でも行ったらどうスか？」

「あっ　サッくん♪」

「…サッくん言うな」

部室の中に歩を進め、顧問に軽く皮肉を告げると、俺の存在に気付いた平沢がニコニコしながらブロックワードを放つ。

「だって喫茶店より、ムギちゃんが淹れる紅茶の方が美味しいもん…あとタダだし…」

最後にボソッと『タダ程うまいものはない』発言をするぶっ飛び顧問。

…しっかり聞こえてんぞ…

「はぁ…」

ため息一つ。

「…つうかお前ら、後輩が率先して練習始めようとしてんのに、なんで優雅に紅茶を楽しんでんだよ」

「あっ　サッくんも優雅に紅茶飲む？」

「……」

俺の発言をどう捉えたらそんなびっくりな言葉が出るんだよ…つうかサッくん言うな…

「咲也君、紅茶用意するね♪」

「…あのなぁ…「…ぅぅ」…あン？」

琴吹が爛々と紅茶を準備しようするが、そういう事じゃないと否定しようとしたら小さく嗚咽らしき声が聞こえ、振り向くと…

「…ぅ」

小さな体を更に縮こませ、座り込んで膝で顔を覆ってる中野の姿が。

「あ、梓ちゃん！紅茶どうかしら！？」

「そうそう！ムギちゃんの淹れる紅茶は美味しいんだよ～！」

「さわちゃんのせいだぞっ！」

「だ、だって～…」

「……」

中野のこんな状態を見て騒ぎだす一同。

（…マジで辞めるかも）

と…

スクッ

スタスタ…

（秋山…？）

今まで静観していた秋山が立ち上がり、体を震わせている後輩の元に。

「ごめんな　あの先生ちょっと変なの」

そう言って中野の頭を優しく撫でる。

「……」

ここにもいたな…母親が…

「ヒドいわ澪ちゃん…変って…」

「…事実だろ…つうか『かなり』変だ」

「ヒ、ヒドいわ…咲也くん…」

「事実だろうが」

「ガーンっ！！」

崩れ落ちる。

「気にしないでね、梓ちゃん」

「さぁ、ケーキ食べようよ～」

「ティータイムがウチの売りだから！」

「…そんなもんを売りにすんな」

「ほかの部じゃあやってないんだから、ウチの売りなの！」

「…ほかの部がやってねェのは当然だ」

「じゃあサクは他に思い付くのかよ～？」

「バンド」

「た、確かに…それは軽音部ならではだ…」

部長が俺の発言を聞いた途端、バックに雷を落とし一歩さがり衝撃を受ける。

…なんで気付かねェんだよお前…

「……ぅぅぅ…」

「梓？」

「…ぅぅ…」

今まで以上に体を震わせ、何やら黒いオーラを発する中野。

そんな中野に秋山が声を掛けるが意味ナシ。

「あ、梓ちゃん？」

「…こりゃあ　キレてんな」

「え？」

俺の言葉を聞いた琴吹が俺の方を向いた瞬間…

「こんなんじゃダメですーっ！！」

手を上下にパタパタさせ中野火山噴火。

「うわっ！キレた！！」

「…ほらな」

「う、うん…」

（つうか…軽音部の実態が判明したな…）

「みなさんやる気が感じられないです！」

「え…いや～新歓終った後だし…」

「そんなの関係ありません！」

「全くだ…お前より部長らしいな」

「音楽室を私物化するのも良くないと思います！」

「全くだ…正確には準備室だけどな」

「ティーセットは全部撤去すべきです！」

「全くだ…感心するなコイツ」

「それだけは勘弁して～！！」

「なんで先生が言うんですかーっ！！」

「…アホ」

「サクはさっきからチョイチョイ…」

「…ンだよ？」

「いや…どっちの「サク先輩！！」…うわっ！びっくりした！」

「あン？」

田井中が何か言おうとしたら中野火山がスネークインしてきた…俺に向かって…

「サク先輩もそう思いますよね！？」

「…あぁ」

コイツの言い分は正しいので頷いてやる。

「サクぅ～裏切り者～！」

カチューシャが俺に手を伸ばし、なんか言ってるが…

「……」

毎度お馴染みスルー。

「サク先輩もこう言ってるんですから！！」

『あぁ』しか言ってねェけどな。

「ちょ…ちょっと梓…落ち着いて…」

「言わせとけ…秋山」

「え？」

オロオロしだした秋山がなんとか中野火山を休眠させようとするが、それを俺が制する。

「な…なんで…咲也？」

「…変に内に溜め込むより、言いたいことは言わせた方が良い…つうかアイツが言ってることは正論だし」

「確かにそうだけど…」

「時間が経ったたら治まる…んで疲れて寝るだろ」

「いや寝ないから」

秋山が左手をブンブンと動かし高速否定する。

俺と秋山の会話を聞いてない（聞こえない）部長が…

「まぁ、とにかく落ち着いて…」

苦笑いを浮かべながら休眠させようと奮闘する。

が…

「これが落ち着いていられますかーっ！！」

失敗に終わる。

「ていうか…なんで梓は律だけに言ってるんだろう…？」

「…本能的にアイツから『ダメ』を感じ取ったんじゃねェの？」

秋山の疑問に答えたその時…

「サク先輩もサク先輩です！！」

「あぁ？」

何故か俺にもマグマが飛来してきた。

「サク先輩は軽音部の副部長なんですから、みなさんのやる気を引き起こしてください！！」

「……」

なんでそれを俺に言う？

部長はあのカチューシャ…あぁ…無駄だと悟ったのか…

つうかお前さっき、俺に『私の味方ですよね?』みてェな顔してたじゃねェか…

「サク…お前の犠牲は無駄にはしない…」

「勝手に咲也を死なせるな」

ゴンッ!

「あだっ!」

なんか田井中が秋山に殴られている光景を視界の端に捉えながら、目の前の火山に向き直る。

「おい、中野火山」

「火山じゃないです私!!」

「…背後から怪しい奴が迫ってるから気をつけろ」

「えっ？」

ギュッ

「梓ちゃん、いー子いー子」

俺の言葉通り、中野の背後から平沢が接近し、後ろから中野を抱き締め頭を撫でる。

さっきから平沢はコソコソと中野の隙を伺っていたのは知ってたが、とりあえず放置していた…

で…何やってんだコイツは？

「そんなこと治まるはず…」

「ほわぁ～♪」

「おさまったーっ！？」

「……」

平沢に抱き締められた途端に火山が休火山に変わり至福の表情になる中野。
そして秋山の仰天。
やっぱ平沢は常に解毒剤を常備しているらしい。

「う～　梓ちゃん、抱き心地が素晴らしい～」

「ほわぁ～♪」

「サッく～ん、梓ちゃん欲しい～」

「何言ってんだお前？」

「一家に一台は欲しいよ～可愛いし～」

「だから何言ってんだ？
つうか『台』って…」

「ぽ～…」

「ムギッ！？」

「はぁ…」

カオスだ…

……

「取り乱してすいませんでした…！」

平沢から解放された中野が腰を９０度に曲げ、深々と頭を下げ謝罪する。

「ううん　全然気にしてないから～」

「えっ！？少しは気にしてほしいんですけど…」

平沢が投下した爆弾に顔を上げ、それはそれは驚く中野休火山。

「はぁ…」

とため息を吐いてると…

「サク先輩も…すいませんでした…」

「……」

かなり恐縮して俺に深々と頭を下げる中野休火山。

「…謝る事じゃねェと思うぞ…お前が言った事は正しい」

「うん、そうだな
咲也の言う通り、梓の言う事も一理あるよ」

秋山が俺の意見に賛成一票を投じる。

…いや『一理』じゃなく、『オール』なんだがな…

「サク先輩…澪先輩…」

「私達も、もっとやる気を出していかないと！」

『私達も』ってそれは俺も含まれるのか？
だとしたら心外だ…
俺は常に十分あるぞ…

「分かりましたねっ！」

クルッと何故か紅茶を片手に持っている平沢、田井中、琴吹、顧問に向かって叱咤する秋山。

「「「「はーい…」」」」

それをションボリとして頷く。

つうか部長と顧問…お前らが本来言うべき台詞だぞ…

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き…

「…中野休火山」

「だから火山じゃないです…」

中野にはやらせる事があるのでそう呼び掛ける。

「あっ　じゃあさ『活火山梓』っどうだ？」

「『活火山』っ聞いたらお腹空いてきちゃった…」

「どうして唯ちゃん？」

「『活火山』って『カツカレー』に似てない？」

「おぉ～そういえばそうね～」

「カツカレーか…今日の晩ご飯はカツカレーが食べたくなってきたな～
聡に今日の晩ご飯を電話してみるか…」

「……」

しまった…まさか俺せいで、田井中と平沢と琴吹が暴走するとは…

つうか誰だよ『聡』って…

「あの…みなさん…」

「ほっとけ…気にし出したらキリがねェ…」

中野が何かを発しようするが、俺が制する。

と…

ピ～ンポンパ～ンポン…

『山中先生　山中先生　至急職員室までお戻り下さい…繰り返します　山中…』

ユルい校内放送を告げる音が部室…校内に鳴り響き、その内容を聞いた当事者は…

「しまった！今日は職員会議があるんだった！」

エラく仰天していた。

「さわ子先生、早く行った方が良いんじゃないですか？」

「そうね…」

秋山の言葉を受け、未だに持っていた紅茶をテーブルに置き…

「じゃあ、みんな　また明日ね」

『練習頑張って』じゃねェんだ…

「あっ」

扉のドアノブに手にかけた顧問が振り向き…

「梓ちゃん　『ねこ耳』と『うさ耳』どっちが良い？」

「え？」

「さっさっと立ち去れ」

ドンッ

バタン！

よからぬ事を口走るアホ顧問の背を押して部室から退散させ扉を閉める。

「さわ子先生…何するつもりだろう…」

「はぁ…」

秋山のポツリと呟いた疑問と、俺のため息が同時に漏れた…

第四十話（前書き）

梓編その四です。

第四十話

「みんな！忘れてるかもしれないが、ウチは軽音部だから！」

「いや…忘れてないから」

「お前…アホか？」

顧問を部室から追い払った後、カチューシャ部長から『驚愕仰天衝撃』という爆弾が投下された。

そんな爆弾発言を秋山と俺が『何言ってんだ？』という表現を搭載したミサイルで打ち落とす。

「では、梓が加わった新生軽音部！始動！」

俺達のミサイル攻撃なんのその…みたいな感じで拳を高々と上げ…

「「ラジャー！」」

平沢と琴吹も拳を振り上げる。

「……」

そこは敬礼じゃねェんだな…

「はぁ…」

まぁ、良い…

練習する気になったらしいし…

「ラ、ラジャ…」

「梓…しなくて良いから…」

田井中隊長（隊員から勝手に昇進）を筆頭にその後、忠実な部下が拳を上げるもんだから、中野がおずおずと『敬礼』するが、秋山が制する。

なんかコイツ…田井中達に毒されてねェか…？

「はぁ…」

完璧に癖のため息を吐く。

「…中野」

「は、はいっ！」

「とりあえず…お前はまず、俺達の曲を覚えてもらう」

そう告げて鞄からコピーした五枚の楽譜を取り出して中野に渡す。

「はいっ！」

キラキラ☆

「……」

楽譜を受け取った瞬間、眼を輝かせ星を飛ばしてくる。
余程『練習』が嬉しいらしい…

「咲也、楽譜コピーしてきたんだ」

「…あぁ　必要だしな」

「そうだな、梓は昨日入部したばかりだから、いきなり梓のパートを決めるんじゃなくて、まずは私達の曲がどういうものなのかを覚えた方が効率が良いな」

「…そういう事だ…それで良いか？」

秋山の意見は俺の考えとほぼ同じなのでそれに頷き、中野に確認を

とる。

「はい、私もその方がやりやすいです。」

コクリと頷く。

「あのさ、サク」

「あン？」

と、号令はしたものの何をすれば良いんだろう？状態だった田井中が話し掛けてくる。

「サクと唯と梓…ギターが三人になったけどさ、誰がリードギターやるんだ？」

そんな田井中から疑問が。

…俺の中では勝手に自己完結していたので、言うのを忘れてたな…

「それはサク先輩が良いんじゃないですか？」

俺が口を開こうとしたら、中野が先に口を開いた。

「私も～…やりたいなぁ～…」

「あっ　いえ、別に唯先輩でも良いと思うんですけど、新歓じゃ唯先輩はボーカルギターでサク先輩はリードギターだったので」

平沢が両手の人差し指をチョンチョンと突き合わせながら何気に俺を見てくるが、俺が答える前にまたしても中野が答える。

「…このバンドのボーカルはお前だが、別にお前がリードをやったってかまわねェ」

「ほんとぉ！？サッくん！？」

「あぁ…つうかサッくん言うな」

「でも咲也君」

「あン？」

今度は琴吹が。

「唯ちゃんがボーカルしながらリードギターをするのは難しいって咲也君が…」

「それはあくまで平沢が『ボーカル』だった時だ、仮に秋山が『ボーカル』だった場合、平沢と中野がリード、俺がオブリだったりメロディラインを弾いたりとか…まぁ、曲によりけりだな…」

「えっ！？私がボーカル！？」

俺の発言の中にあった『秋山がボーカル』に敏感に反応し、驚いた表情をする秋山。

…だから『仮に』だっつうの…

まぁ…一概に『全くない』とは言えんが…

「そうですね…ボーカルギター以外の二人がバッキングを分担したり…例えば一人がコードカッティングをやったり、もう1人はパワーコードによるリフ…なんていうやり方もありますね」

中野が付け足す…つうかお前…絶対初心者じゃねェだろ…

「うんうん！なるほど！」

「…お前理解してねェな」

平沢が腕を組みコクコクと頷くが…怪しい…

「まぁ、とにかく誰がどのパートをするのかを決めるかは、唯と梓の演奏を聞いた方が良いんじゃないか？」

田井中がそんなことを言うが…

「…なんで俺は含まれてねェんだよ？」

「え？だってサクはどのパートでも出来るだろ？だったら聞くだけ無駄」

「……」

『無駄』だと？

「……」

腹が立ってくるが…

「はぁぁぁ…」

せっかく練習をやり出したんだ…俺の個人的な怒りでぶち壊すのは頂けない…

なのでゆっくりと溜め込んだ怒りとストレスを吐き出す…

「…ごめん…咲也…」

秋山が小さく謝ってくる…

「…お前の幼馴染みをしっかり教育し直しとけ…」

「…それは…もう無理かも…」

「はぁぁぁ…」

怒りとストレスを再び吐き出す…

……

「あ、梓ちゃんから先どうぞ…！」

若干怒りとストレスは残ってるものの（残った分は修司にぶちまけよう）なんとか治まり、頃合を見計らっていた平沢が少し焦りながら言葉を放つ。

コイツ…昨日中野に見栄張ったからな…

「それじゃあ私から…」

そう言ってギタースタンドに立て掛けてあった中野の赤いギターを取る。

「…じゃじゃ馬か…」

「あっはい、そうです」

俺がポツリと呟いたのが聞こえたらしい…中野がクルッと振り向く。

「サッくん、どこにもじゃじゃ馬なんていないよ?」

「…中野のギターの事だ…」

「えぇっ!?梓ちゃんのギターって「違ェぞ」」

大方、『馬なの?』的な発言をしようとしたんだろうな…

「梓のギターの別名が『じゃじゃ馬』なんだよ

『ムスタング』だよな?そのギター」

と、秋山。

「はい　そうです
私、手が小さいのでネック太いと、うまくコードが押さえられなんです」

自分の右手を見て、苦笑いする新入ギタリスト。

「……」

自分の左手を見て、落ち込むレフティベーシスト。

「あ、あの…澪先輩？」

「あぁ、澪は自分の手が大きいことに落ち込んでるだけだから気にしない♪気にしない♪」

「うるさいっ！」

「ご、ごめんなさい！澪先輩！」

「どうでも良いから早くしろよ…」

「咲也には分からないんだっ！私だって…」

「…ヘーヘーワルカッタヨ…」

「大丈夫よ澪ちゃん！私、澪ちゃんの手は細くて長くて綺麗だから好きよ！」

「私もだよ澪ちゃん！」

「ムギ…唯…」

「……」

だから早くしろよ…

……

♪♪♪♪♪♪…

五分くらい経ち、漸くコントが終ったので改めて中野のギターを聞くことに。

「すごい、梓ちゃん」

「やっぱり上手いな」

「サクとどっちが上手いんだ？」

「どっちでも良いだろ…そんなの…」

「…やっぱり…う、うまい…」

ジャラ～ァ…ン…

中野演奏終了。

「んじゃあ、次は唯の番…」

「無駄だ、アイツは…」

「へ？…って、唯…」

俺の発言に田井中が視線を巡らせ、平沢を発見するが…

「ギ、ギックリ腰が…」

腰を押え、急にギックリ腰が再発したらしい。

「（いい加減にしろよ唯）」

「（中野に正体をさらけ出すしかねェぞ…）」

「（でもでも、りっちゃん、サッくん、私…先輩だもん）」

「（デジャヴか！）」

「はぁ…」

昨日と同じ状態になり逃げようとする平沢に思わずため息が…

「あの～唯先輩の番ですけど…？」

と、中野が未だに自称ギックリ腰の平沢に告げてくる。

「うぅ〜…」

何やら悩むギックリ平沢。

葛藤があるらしい…

と…

ガッ！

「サッくん！ギター教えてください！」

短い葛藤を終えた平沢が俺の両肩を掴んで懇願してくる。

「はぁ…」

「えっ？唯先輩？」

平沢の発言に中野がコテンっと首を傾け、キョトンとする。

「あのさ梓、唯はまだギター始めて一年なんだ」

「えっ！？そうなんですか！？」

「…うん…」

田井中の発言に『マジで』みたいな顔する中野と俺の両肩を掴んだまま小さく肯定する平沢…つうか離せ…

「でも…ギター歴一年で、あんなに良い演奏が出来るのはすごいと思います」

「いや～まぁね～」

分かりやすく照れる。

「調子にのるな」

ビスッ

「あいたっ」

そんな平沢に田井中から手刀が軽く落下…

「つうか…いい加減離れろよ…」

「反省中の意味を込めているので、まだ離れないッス！」

「…意味分かんねェから」

「ほら『反省中』って言って片手を机とかに置いてるのってあるでしょ？アレの両手とサッくんの両肩バージョンだよ♪」

「……」

ニコニコしながら何言ってんだ…

「…良いから離れろ」

ポイッ

「あ～れ～……」

平沢の両手を掴み軽くポイッと動かすと、クルクル回り…

ギュッ

「梓ちゃ～ん♪」

「ひゃあっ！！」

何故か中野に抱き付く。

「はぁ…」

（もう完全に…軽音部の醜態を晒したな…）

……

♪♪♪♪…

「あ、そこはミュートした方が…」

結局、俺と中野で平沢のギターレッスンを行なうことに。
ちなみに中野は『師匠三号』らしい…

それを聞いた中野がクエスチョンマークを出していたが、説明がメンドーなのでスルーしてやった。

「後、さっきのフレーズはビブラートきかせると良いかも…」

「……」

『俺と中野が』とは言っても殆ど…いや、全て中野が平沢にギターレッスンを行っている。

（楽になったな…）

俺はギターを教えるのは苦手なので、こうして中野が平沢にレッスンをしてくれるのは非常に有り難い。

（さて…次なる一手を打っとくか…）

そう思い、ギタースタンドに立て掛けてあるテレキャスを取り、ストラップを肩に掛けアンプにシールドとヘッドフォンを繋ぐ。

と…

「ミュート？ビブラート？なにそれ？」

「ほぇっ！？」

「……」

平沢爆弾投下。

教えた筈だぞ…それ…

「……」

ギッギッギッ…

そんな爆弾投下機・平沢を見て中野が、首の関節が錆びれたかの様にゆっくりと俺と隣にいる秋山に振り向き、投下機を指差す。

「こんなんでも一年間やってきたんだ…」

「俺達は一年間奇跡を目撃してきたんだな…」

ベースを構えながら申し訳なさそうな秋山と、テレキャスを構え、ヘッドフォンを首にかけてしみじみと俺が答える。

「ミュートもビブラートも知らずにどうやって…」

♪♪♪…

「あれ？ちゃんとミュート出来てる…」

平沢が再びギターを弾くと手本のようなミュートが…

「あ、さっきのが『ミュート』って言うんだぁ」

「無意識かよ…」

天才の片鱗を垣間見たな…

「唯はゲーム買っても説明書読まないタイプなんだよ…」

「納得です」

（納得されたぞ…良いのか？先輩…）

と思いながらヘッドフォンを耳に移動させアンプのボリュームを調整する。

遂に中野が軽音部の実態を知ってしまったが、今のところ『眼に見えた』動揺は、火山噴火ぐらいだろう。

まぁ…俺が部室に来るまで何があったか知らんが…

『後輩が練習をしている姿を見て、先輩の自覚が生まれる』

これには当てはまらなかったが結果的に『今日』は練習になったから良いが…これがいつまで保つか…間違っても毎日は続かないだろう…

では全員がきちんと練習するにはどうすれば良いか？

それは新曲を作って提示する事。

実際に今までの五曲はちゃんと真面目に練習出来ていたしな。

（とりあえずは中野が『辞める』なんて言い出す前に完成させとか

ねェとな…）

そう思いギターを奏で、五線譜に音符を書いていく。

しかし…

『私…分からなくって…』

時間は余り、残されてなかったようだ……

第四十一話（前書き）

梓編その五です。

一日にもう一話…ちょっと疲れたかも…

第四十一話

「それじゃあ、これでＨＲは終わる」

「……」

担任の催眠術を聞いている様なフリをして受け流していると、どうやらＨＲが終ったらしい。

その証拠に教室は開放感で埋め尽くされ、この後の予定を話す連中や掃除に向かう連中や、さっさっと教室から退散する奴の姿が見られる。

「……」

俺も部活に行くために鞄を手に取り、ヘッドフォンを首にかけて席から立ち上がる。

と…

「なぁ　咲也…」

先程、席替えを行い俺と席が離れて嘆いていた修司が何やら思案顔で俺の元にやってきた。

「梓ちゃんってさ……もしかして…クリスマスの時にケーキ買いに来た、ツインテールした娘か？」

「…そうだが…」

「やっぱりかッ！！」

うるせェ…

「……なんで分かったんだよ…？」

「実はさぁ～、昼休みに俺だけ寂しく購買に行ったじゃん？」

「……」

「お前はコンビニで既にパン買って来てたから『一人寂しく』行った訳よ？」

「……」

「あれ？ツッコミがこない…」

「……」

「ん？ん～…まぁ　良いか…で、一階に降りた時にツインテールした娘とすれ違ったんだよ」

「……」

「『この娘…どこかで見覚えあるな～』っとか思ったんだけど、まぁそん時の俺は空腹絶頂だったから深く考えなかった訳よ」

「……」

「で、先程の席替えでお前と席が離れてショックを『ビビビッ！』と受けてたら…思い出したんだよ…」

「……」

「『あの娘！クリスマスの時にケーキ買いに来た娘だぁッ！！』ってな☆」

「……で？何で、それだけで中野だって分かったんだよ…？」

「ほら、あの時さ『梓～』って名前呼ばれてたじゃん？それで」

「……」

…良くそんな事、覚えてたな…

…つうかその記憶力を駆使すれば、テストで良い点取れんじゃねェの…？

「いや～あの娘が梓ちゃんなんだな～」

『うんうん』っと腕を組みコクコクと頷いて何やら納得してる修司を放置し…

スタスタ…

と、教室から出ていった…

「ん～…なんかアイツ…ピリピリしてる？」

―――――――――

階段を上りきり部室の扉を開け、中に入る。

ガチャ

「ん～♪梓ちゃん可愛い～♪」

「にゃ～って言ってみて、にゃ～って」

「に、にゃぁ～…」

「「「「あはぁ～♪」」」」

「……」

中に入ると何故か、ねこ耳を装着した中野が平沢に抱き付かれ、更に田井中の意味不明な命令を中野が実行し、それを見た平沢、田井中、琴吹、顧問がトリップする。

「あだ名は『あずにゃん』で決まりだね！」

「えっ！？」

そして平沢が奇抜なあだ名を命名。

「……」

そんな光景にため息を吐くわけでもなくツッコむわけでもなく、軽く一瞥して無言で鞄を置き、部室に置いてあったテレキャスを取り、アンプにヘッドフォンと共に繋ぎ、鞄から一枚の紙を取り出して定位置の長イスに座る。

「あっ　咲也…」

アンプのボリュームを調整しているとテーブルで雑誌を読んでいた秋山の声が。

「おっ　サク　来てたんなら声かけろよな～」

「咲也君　紅茶淹れるね～」

「…いや…良い…」

「え？そ、そう？」

「……」

琴吹の少々戸惑った声が聞こえてきたが、それには返答せずにヘッドフォンを首から耳に移動させ、ギターを奏でようとしたら…

「サッくん！！サッくん！！」

ハイテンションの平沢が中野の手を握って、ニコニコしながら中野と共に俺が座っている長イスの前にやってくる。

「あずにゃん！可愛いでしょ～♪」

「ちょっ！ゆ、唯先輩！」

そう言って早速命名したあだ名を呼び、中野を抱き締める。

「そのねこ耳は私が梓ちゃんのためを思って選別した逸品なのよ！」

「いや…いりません…」

「……」

山中顧問の誇る様な声を背に受け、チラッと中野を一瞥し、視線を書きかけの楽譜に移す。

「あれ？サッくん？」

「……ぁ」

「なんだなんだ？最近なんだかリアクション薄いな～サク」

「……」

今度は田井中が俺の前に。

「り、律」

「んぁ？」

「さ、咲也は今から曲作りするんだからさ、邪魔しないでやろう、な？」

「別に邪魔してる訳じゃないんだけど…」

「良いからコッチに来い　唯も」

「う、うん」

視線の先には五線譜、そして視野の端に映っていた平沢と中野と田井中の足が消える。

「あの…良いんですか？」

「ん？なにがだ？」

「その…練習しないで…こんな事してて…」

「梓の言う通りだ　咲也しか部活らしい事してないじゃないか」

「う～ん…　そうだな…よしっ！」

「練習するんですね！？」

「その前にティータイムだ！ムギ！よろしく！」

「…えっ？ごめんなさい…ぼーっとしてて…」

「ムギちゃん大丈夫？」

「うん　大丈夫よ唯ちゃん」

「練習は……」

中野の願望にも似た呟きを最後に、俺はヘッドフォンから流れるテレキャスの音に集中していった…

中野が軽音部に入部して今日で一週間。

結局…練習をしたのはあの日のみだった。

初めは…だらける秋山以外の部員に叱咤でもしてやろうかとしたが…言うだけ無駄だと悟り、俺だけ淡々と作曲を続けていった。

今までもティータイムをしたり雑談を交わしたりしていたので、それは別に構わない。

が、後輩が出来てからというもの『それ』に拍車がかかった。

秋山が何度か練習をさせようとし、それに触発された琴吹は練習をしようとしていたが、平沢と田井中は完全に中野いじりに夢中になり…一向に練習をしないまま一週間。

中野の表情が曇っていくには十分な時間だった。

……

「はぁ～っ　楽しかったぁ～♪」

「……」

そして今日も練習をしないまま…平沢のお気楽な声が部室に響き…

部活は終った…

「練習もしてないのに、疲れました…」

「ねぇねぇあずにゃん♪」

「は、はい」

「ウチの近くに、美味しいアイス屋さんがあるんだよ～」

「みんなで行きましょ～♪」

「先輩が奢ってあげる！」

「んじゃ唯～私も奢ってな～」

「りっちゃんは私の後輩じゃないからダメ～」

「……」

スタスタ…

「あっ…さ、咲也は行かないのか？」

帰る準備を終え、扉に歩き出したら秋山が少し躊躇しながらも俺を呼ぶ。

「…あぁ…」

それに振り返ることなく答える。

「え～　サッくんも行こうよ～」

「…行かねェよ…」

ガチャ

「あっ　サッくん…」

バタン…

―――――――――

時は過ぎ、五月中旬。

三時間目の授業が終わり、ぼーっと窓から（席が窓際）外を眺めていると…

ブブブッ　ブブブッ

ケータイが震え、ズボンのポッケから取り出しディスプレイ画面を確認。

【秋山　澪】

「……」

ケータイを開き、メールの内容を確認。

【件名：集合】
【本文：放課後になったら全員すぐに部室に集合すること！
緊張会議をします！】

「……」

どうやら一斉送信したようだ。

パタンとケータイを閉じ、再び外を眺める。

……

放課後になり、秋山のメール通りにＨＲが終った瞬間に席を立ち、
教室から出て部室に向う。

「……」

階段を上っている途中、ふと、窓から外を見る。
そこには下校している連中が多く溢れ…その中に…ギターケースを背負ったツインテールを見つけた。

（こりゃあ…いよいよ…かもな）

そう思い、階段を上りきり部室の扉を開ける。

ガチャ

「遅いぞサク！副部長が遅刻するなんてダメじゃないか！」

「律、少し黙ってろ」

部室には既に部員が揃ってあり、田井中が俺を指差し非難してくるが…

「……」

特にリアクションもせずに長イスに座る。

「ありゃ？サク？」

「サッくん…？」

「じゃあ、全員揃ったから…」

秋山がチラッと俺を見て、その後口を開くが…

「待って澪ちゃん、まだ梓ちゃんが来てないけど…」

琴吹がおずおずと挙手し、そう告げる。

「いや、梓が来る前に、みんなに話があるから」

「え？あずにゃん抜きで？」

「それが緊張会議か？」

「うん」

平沢と田井中の発言に真剣な表情でコクリと頷き、口を開く。

「新入部員が入ったのにいつまでも、まったりダラダラしてたらマズいと思うんだよな」

「そ、そうなの？」

「……」

平沢が若干驚き、声を出す。

「このままじゃ梓…辞めてしまうかも知れないぞ！」

「な、なんだってぇ！？」

「あ、あずにゃんがいなくなるのはヤダぁ～！」

「……もう手遅れかもな」

「「「「え？」」」」

俺の発言に全員が一斉に振り向き、秋山が声を発する。

「ど、どういうこと…咲也…手遅れって…？」

「…そのままの意味だ」

「咲也君…それってつまり…」

「…このままの現状だったら、中野は軽音部を辞める」

「「「「ッ！！」」」」

『辞める』

文字にしたら三文字、口に出すと一秒にも満たないこの言葉に、全員が息を呑み、驚愕の表情をする。

「な、なんでそんなこと言い切れるんだよっ！！」

「りっちゃん！」

田井中が座っていた席から立ち上がり、俺を見て喚く。
それを琴吹が田井中の腕を掴んで落ち着かせようとする。

「律！落ち着つけ！」

「サッくん…なんであずにゃんが…」

平沢がジッと悲愴の瞳で俺を見つめてくる。

「…お前ら、アイツが日に日に表情が曇っていってたのを知ってるか？」

「そ、それは…でも…だからって梓が辞めるって決まった訳じゃないじゃん…」

「…じゃあ田井中…なんで中野がさっき、ギターケースを背負って帰っていったんだ？」

「え…？梓が…？」

「それ…本当なの咲也君？」

「…あぁ」

「でもでも、今日は用事があったから…あずにゃん帰っちゃったんじゃ…」

「…『ギターケースを背負って』って言ったろうが…つまり部活には来る気はあったっつうことだ」

「「「「……」」」」

絶句する四人。

「……だ…」

「…唯？」

「ヤダよっ！！あずにゃんが辞めちゃうのは…絶対にヤダァッ！！」

「唯ちゃん…」

平沢が立ち上がりギュッと両拳を握り、涙ぐんだ眼をして、癇癪を起した子供のように大声で叫けぶ。

「……」

『ほら、あの娘って子供みたいなところがあるでしょ？』

そんな平沢を見て、真鍋の言葉が脳裏によぎる。

「…サク」

「……」

「…サクはさ、梓が辞めちゃうかもしれないって分かってたから…その…梓のためにずっと黙々と曲作りしてたのか？」

「……」

「だとしたら…ごめん…」

「律…」

「サクは梓のために頑張ってたのに…私達は…お茶を楽しんだり、ダラダラしちゃったりしてさ…本当にごめん」

「……」

「私も…ごめんなさい…最近…咲也君があんまり喋らないから…その…怒ってるのかなって思ってたのに…」

「……」

「…私も感じてたんだ…咲也が余り、最近の軽音部の事を良く思ってないこと…だから…ごめん咲也」

「……」

「ごめ〝んなさぁ〜い〝っ！ヒック…わ、私〝…あずに〝ゃんもサッくん〝も…ヒック…いなくなるのは…ヤダよぉ〜っ！」

「……」

「いやいや唯、サクは軽音部を辞めるなんて言ってないから」

田井中、琴吹、秋山が申し訳ないという表情をして俺に謝罪してくる。

平沢に至っては涙腺が決壊し、涙を流しながら子供みたいに謝ってくる。

そして何故か俺が退部するみたいな事言ってくる始末。

「…はぁ…」

と、小さくため息を吐き出す。

「…お前ら、謝る相手は俺じゃねェだろ」

「でも…やっぱり咲也君にも…」

「…良いんだよ俺は…それより、このままだったら中野は軽音部を辞めちまうっていう話だ」

「そ、そうだよっ！！どうしよう澪！？」

「え、えっと、えっと…」

「サッくん〝辞め〟ないでぇ～っ！」

「…だから俺のことじゃねェだろうが…つうか辞めねェよ…」

なんで中野から俺にインターチェンジしてんだ…

「ほんとぉ…？」

「あぁ…だからそのクシャクシャの顔、どうにかしろ…」

平沢の顔は涙で大洪水警報発令状態になっている。

「唯ちゃん、顔を洗った方が良いわよ」

「うん…」

と呟き、トコトコと部室にある水道に向かうが…

クルッ

ジー…

「…ンだよ」

いきなり振り向き大洪水の顔のまま俺を凝視してくる。

「サッくん…いなくなったらヤダよ?」

「はぁ…」

まだ言うかコイツは…

つうか…だからなんで俺が退部する意向になってんだよ…

「唯、咲也は辞めないって」

「だから顔、早く洗え」

「うん…」

キュッ…

シャァア…

バシャバシャ…

キュッ！

「復活！！」

「はぁ…」

なんか疲れる…

……

平沢が良く分からん復活劇を遂げたところで、全員に楽譜を配る。

「咲也…曲出来たんだ」

「あぁ…　お前らがアイツに軽音部に残って欲しいなら…その曲を練習するぞ」

「何言ってんだよサク」

「私達は梓ちゃんに辞めて欲くないわ」

「それは、咲也も同じだろ？」

三者三様に意見を延べ、六つの瞳で俺を見てくる。
…その瞳には強い決意と少しの危機感が灯っていた。

「…まぁな」

「よしっ！なら今から梓を呼んで軽音部全員で練習…「待て」…ん？」

田井中が意気込み、ケータイを取り出して中野に連絡を取ろうとするが、俺が制する。

「…アイツ自身の意思で軽音部に来なきゃ意味がねェ」

「そうだな…梓は今日、帰っちゃった訳だし…それって、葛藤があるからだろうし…」

「葛藤？」

秋山の言葉に琴吹が首を傾ける。

「…梓が軽音部でやっていくかどうか…」

「ギターケース持ってたんだから、少なくとも今日は部活に顔出すつもりだったみたいだし…まだ軽音部を辞めるっていう事じゃないしな！何より退部届を受け取ってない！ていうか受け取らない！」

（…いや、受け取ってやれよ…そこは）

田井中の言葉にそう思った。

部活が嫌になったんだから退部する訳だし、無理矢理引き止めても仕方ねェだろう…

まぁ…まだ中野が退部すると決まった訳じゃねェんだが…

「ねぇ…サッくん…」

と、今まで黙ったままジッと楽譜を凝視していた平沢が小さく俺を呼ぶ。

「あン？」

「この曲…！」

楽譜から視線を俺に移し、驚愕した瞳と表情で見つめてきた。

第四十一話（後書き）

今回、咲也が無言で『怒』をみせました。

作者が梓編でチャレンジしたかった事だったりします。

第四十二話（前書き）

梓編完結です。

第四十二話

中野が軽音部に姿を出さなくなって…今日で二日目。

その間、軽音部はだらける事なく練習に励んでいた。

♪♪♪♪～…

だが…今日も中野は現われなかった…

――――――――

その日の夜。

ブブブッ　ブブブッ

「ん？」

自室にてテレキャスの弦を交換し終え、アコギの弦を交換しようとギタースタンドに立て掛けてあるアコギに手を伸した瞬間、机に置いてあったケータイが地震を発生させる。

「……」

アコギに伸ばしていた手をケータイに進路変更し、手に取る。

【アホ】

ディスプレイ画面にはその二文字が。

「……」

ケータイを開き通話状態にし、耳に当てる。

「『♪ハッピバースデートゥミー♪ハッピバースデートゥミー♪ハッピバースデーディア修司～♪ハッピバース…』」

ピッ

「……」

奇妙なバースデイソングを心地良く熱唱するディスプレイ画面に表示された通りの奴からの電話を打ち切る。

ブブブッ！ブブブッ！

「ンだよ…」

アコギの弦を交換しようと再び手を伸したら、心なしか先程より激しくケータイが震える。

ピッ

「『切るなァッ！！』」

「…喧しい」

ケータイからの騒音ボイスが俺の鼓膜を刺激する。

「『なんで切るんだよッ！！びっくりしたわッ！！』」

「…ボリューム下げろ、さもなければお前の鼓膜を破壊する程の金切り音を発動するぞ」

「『おっそろしい事を通常トーンで言うなよッ！！』」

「…忠告を無視したのでお前の鼓膜を破壊します」

「『ごめんなさい』」

「チッ…」

「『なんで舌打ちするんだよテメェッ！！』」

「…忠告を無視したのでお前の鼓膜を破壊します」

「『ごめんなさい』」

「チッ…」

「『なんで舌打ちするんだよテメェッ！！ってエンドレスッ！！』」

「…で？」

「『うわっムカつく…まぁ良いや』」

良いんだな…

「『今日は俺の誕生日じゃん？』」

その発言に壁掛け時計の横にあるカレンダーに視線を移す。

「……」

確か、そうだったな…

…つうかコイツの誕生日を覚えてた自分にショックだ…

「『別にお前が誕生日を祝ってくれないからっていってヘコんでねェから…安心…しろ…』」

「そうか」

「『淡泊かい…まぁ良い…誕生日といえばケーキじゃん？』」

「…あぁ」

「『今、自分の誕生日ケーキを買いに街に繰り出してたんだけど…』」

「ちょい待て」

「『ん？』」

コイツの発言の中に疑問点があったぞ…

「…なんでケーキ買いに行ってんだよ？お前の家…ケーキ屋じゃねェか…」

「『あぁ～うん…そうなんだけどな…父さんがさぁ『作るの面倒い』って…』」

「……」

哀れ…影宮　修司…

我が親に見放されるとは…

「『って、良いんだよッ！俺の悲しい家庭事情の事はッ！』」

良いのか…？

結構大事な…いや、良いか、コイツだし。

「『本題は梓ちゃんだよ』」

「あぁ？」

急に電話口から真剣な声と軽音部のある意味、話題になっている後輩の名前が聞こえきた。

「『俺が買いに行ったケーキ屋の近くにライブハウスがあるんだよ』」

「……」

「『そのライブハウスに梓ちゃん一人が入って行くのを見たんだよ…何やら固い表情してな』」

「…固い表情…」

「『具体的に言うと…ラーメン食べて替玉しようとしたけど、あまりのウマさにスープを飲み干してしまって替玉が出来なくてショック…みたいな?』」

「逆に分かりにくいわ」

「『そうか?だったら…』」

「例えはもう良い…で?中野はライブハウスに入ったきりのままか?」

「『んにゃ　俺も梓ちゃんの表情が気になったから長期戦覚悟で物陰に潜んで梓ちゃんが出てくるの待ってたのさ』」

刑事かお前は…

「『しかし俺の覚悟とは原宿に…』」

「『裏腹』な」

「『裏腹に十分ぐらいで出てきたんだよな…やっぱり固い表情して具体的に言うと…ラーメン食べて替玉しようとしたけど、その店は替玉をしてなくてショック…みたいな？』」

「……」

もうツッコまねェぞ…

「『そんな表情してたからさ、咲也に報告しといた方が良いかなぁ～とか思ったから、お前に電話した訳』」

「…そうか…」

「『イエス　つうかなんで梓ちゃん、あんな表情してたんだろうな？』」

「……さぁな」

「『…ひょっとして軽音部でなんかトラブル発生中？』」

「…例えそうだとしても…お前が気にする事じゃねェよ…」

「『ヘーヘーどうせ俺は部外者だよ～』」

「…でも」

「『ん？』」

「…サンキュ…」

「『……ヤベェ……かなりキュンときた…』」

「死ねカスアホクズ虫野郎、生まれた事を後悔しろ」

「『ちょ！ちょ！ちょっ！！そんな暴言の乱れ打ちは勘弁…』」

ピッ

あのアホに礼など言った事を激しく後悔しながら電話を一方的に打ち切る。

（しかし…固い表情でライブハウスに…ねェ…）

修司から伝えられた三つのキーワード…

『中野』
『固い表情』
『ライブハウス』

この二日間軽音部に姿を現さなかった中野がライブハウスに行っていた…

ライブハウスに出演するインディーズバンドを見て勉強をしていたのか…はたまた、好きなバンドがいるので見に行っていたのか…

それとも…外バンでも組みにいったのか…

その真相は闇だが…

ライブハウスに入っていく時も出てきた時も『固い表情』をしていたという事は…その表情が晴れるような『もの』が得られなかったという事だろう。

（まぁ…アイツ自身が、どうしたいのか…だな）

軽音部を辞め『る』のか…辞め『ない』のか…

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き、アコギの弦を交換する。

（つうか…）

修司の奴…本当に中野のこと…覚えてたんだな…

（将来はストーカーだな）

犯罪の世界に爪先を突っ込んだ修司に心の中で合掌しながら、アコギの弦を交換していった。

――――――――――

翌日の放課後。

♪♪♪♪…

今日も練習に励む。

ジャァァァン…

「「「「……」」」」

三日前に俺が提出した曲は完璧な仕上がりになっていた。

しかし、疾走感があるその曲が完璧に演奏し終ったというのに、平沢、秋山、田井中、琴吹の表情は曇っていた。

「…はぁ…」

今日で中野が軽音部に姿を現さなくなって三日目。

流石に四人の気持ちは折れかかっていた…

「…少し休憩するか？」

テレキャスに繋いであるアンプのゲインを調節しながら四人に問い掛ける。

「そうだな！よしっ！休憩タ～イム！」

俺の問い掛けに田井中がこの雰囲気を払拭するように明るく反応するが…

「うん…そうだな…」

「じゃあ…お茶淹れるね…」

「はぁ…」

（お通夜か…）

そんなツッコミが思い浮かぶかのような暗い表情のままの秋山と琴吹。

「ねぇ…サッくん…」

「あン？」

同じく、暗い表情の平沢が弱々しく俺を呼ぶ。

「あずにゃん…もう来ないのかな…？」

「……」

『ＹＥＳ』か『ＮＯ』か…

簡単には答えられない疑問を平沢が問い掛けてくる。

『来る』等という絶対的な確信があるわけでもない言葉を口にする

ことも出来ず…

『来ない』等という可能性がゼロではない言葉を口にすることも出来ず…

「…さぁな」

という曖昧な返答を。

「……」

そんな俺の曖昧な言葉に更に暗い表情になる平沢…

と…

ガチャ…

部室の扉が弱々しく開き…

「「梓！」」
「梓ちゃん！」
「あずにゃん！」
「……」

「……」

『固い表情』の中野が三日ぶりに部室にやってきた。
しかし…その背には『じゃじゃ馬』の姿はなかった…

（…退部しに来たのか？）

そんなことを思っていると中野が口を開いた。

「私…分からなくって…」

「あずにゃん…？」

顔を俯かせポツリと呟く。

「…どうして…軽音部に入ろうと…思ったのか…」

「……」

俯いてるその顔から、一粒の雫が…

「…ヒック…どうして…新歓ライブの…ヒック…演奏に…私…」

「梓…」

その一粒の雫が二粒、三粒と徐々に増え、頬に二つの川を作る…

「あんなに…感動…ヒック…したのか…しばらく…ヒック…一緒にいてみれば…きっと…ヒック…分かると思って…やってきたけど…」

「梓ちゃん…」

その川をせき止めるかのように、何度も何度も手で遮るが…溢れてくる感情は止まらない…

「けど…ヒック…やっぱり…ヒック…分からなくって…私…どうしたら…ヒック…良いか…」

「梓…」

その小さな体を震わせ、俺達に自分の心情を告げる…

「…おい中野」

「ヒック…は…はい…」

顔を俯かせ未だに川をせき止めようと、手で顔を覆ってる中野がそのままの状態で俺の呼び掛けに弱々しく答える。

「『どうしたら良いのか分からない』なら、『どうすべきか』を考えろ」

「え…」

手を退け、俺を見てくる。

「…お前はこのまま軽音部に『いたい』のか『いたくない』のか…」

コイツはライブハウスで『固い表情』で出入りした…つまりは自分の抱える『悩み』と『わだかまり』の答えを探しに行ってたんだろう。

しかし…修司曰く『十分』で出てきた。

探していた答えはここにはないと直ぐに判断したんだと思う。

そして軽音部にやってきて『俺達』に悩みを打ち明けたということは…少なくともまだ軽音部に未練があるんだとも思う。

そして自分自身…『迷い』があるんだとも。

「私は…」

「…あずにゃん」

平沢が口を開き、中野の名を呼ぶ。

「私は…私達はあずにゃんと一緒にいたいよ？

あずにゃんだけじゃなくて、サッくんも澪ちゃんもりっちゃんもムギちゃんとも一緒にバンドをやっていきたい」

「…唯…先輩」

「だって私達は…この六人で『桜高軽音部』なんだもん」

「梓がどうしたいのか…迷ってるなら、私達がその答えを見つける手伝いをしてあげる」

「…澪先輩」

「梓は私達のライブを見て感動したんだろ？だったら演奏を聞かせてやる！」

「…律先輩」

「梓ちゃん、私ね？『ムギ先輩』って呼ばれて嬉しかったのだから…今度は私達が梓ちゃんを喜ばせたいな」

「…ムギ…先輩」

「…お前がどうしたいのかは…俺達の演奏を聞いて考えろ」

「…サク…先輩…」

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

カッ！カッ！

田井中がスティックを掲げ、それを交互に鳴しカウントを取る。

「ワンツスリーフォー！」

ダダダダンッ！！

スティックを勢いよく、スネアに打ち落とし…

♪～

琴吹のキーボード…

♪♪～

秋山のベース…

♪♪♪～

平沢と俺のエレキギターがそれに続き、一つの曲を奏でる。

「……ぁ」

目の前にはたった一人の観客の姿。

「……」

そのツインテールが特徴の後輩は、泣き顔のまま俺達の演奏をジッと見つめている…

（さて…どうなるか…）

♪♪♪♪…

平沢と秋山の前にはそれぞれマイクがある。
…つまりはツインボーカル。

別に誰かが言った訳ではなく、秋山が練習の時に自然と歌い出した
…そして平沢も…

♪♪♪♪…

前奏が終わり秋山が口を開く。

「『♪いま私の願いごとがかなうならば
翼がほしい』」

平沢が…

「『♪この背中に鳥のように
白い翼つけて下さい』」

そして二人が…

「『♪この大空に翼をひろげ
飛んで行きたいよ
悲しみのない自由な空へ
翼はためかせ行きたい』」

――――――――――

『サッくん！この曲って『翼をください』だよね！？』

『えっ？あっ！本当だ！サク、これって…』

『一年前に私達が唯のために演奏した曲…』

『じゃあ、咲也君…今度は梓ちゃんのために？』

『…さぁな』

――――――――――

「『♪翼はためかせ行きたい』」

♪♪♪♪…

……

「『♪…悲しみのない自由な空へ
翼はためかせ行きたい』」

♪♪♪♪♪…

ジャァァァン…

さしずめ『ＲＯＣＫ・Ｖｅｒ．』とでも言ったところか…

そんな『翼をください』の演奏が終った…

「……」

目の前の観客はどこか呆然としていた。

「梓」

「…っ！は、はいっ」

そんな後輩に秋山が名を呼ぶ。

「私はこう思うんだ

私はこのメンバーと演奏するのが楽しいんだ」

「え…？」

「きっと、それは…みんなもそうで

だから良い演奏になるんだと思う」

「…！」

秋山の言葉を受け、どこか悩みが晴れたような表情になる中野。

なので…

「…答え、出たか？」

と、俺が問い掛ける。

その問い掛けに…

「…は、はいっ！私、やっぱり先輩方と演奏したいです！！」

ゴシゴシと雫を拭い、満面の笑みで軽音部を辞め『ない』という意思を俺達に伝える。

「あ～っ！良かったぁ～！あずにゃんが辞めないでくれて～！」

感極まった平沢が思わず中野に抱き付く。

「唯先輩…」

「まぁ、これからもお茶飲んだり、ダラダラすることもあると思うけど、それもやっぱり必要な時間なんだよ
咲也もそれは認めてやってくれないか？」

「……」

前半は中野に告げ、後半は俺の方を振り向いてそう告げてくる秋山。

「…認めるも何も…俺は入部して半年ぐらいで諦めてんだよ」

「じゃあ咲也君！ティーセットは片付けなくて良いのね！？」

琴吹が期待の眼差しで俺をガン見…つうか穴が開くんじゃねェの？
というくらうの視線をぶつけてくる。

「…あぁ」

「良かったぁ～」

そんな琴吹が心底安堵する。
なんだお前は？
茶を淹れることに幸せを感じてんのか？

「あぁ、そうだ！
…はいっ梓！」

『琴吹が如何なる時に幸せを感じるのか？』という議題の元に脳内会議をしていたら、田井中が何やら鞄から取り出し中野に渡してい

た。

「これって…！」

「梓の分の楽譜！」

「……」

どうやら『翼をください　ＲＯＣＫ・Ｖｅｒ.』の楽譜を渡したらしい。

「律が持ってたのか」

「だって部長ですもの♪」

「梓ちゃん、その楽譜、良く見てみて？」

「え？はい…」

琴吹の発言を受けた中野が視線を楽譜に落とす（未だに平沢は抱き付いたまま）

「！これっ…！」

何かに気付いた瞬間、勢いよく顔を上げ驚いた表情をする（未だに平沢は抱き付いたまま）

（いい加減離れろよ…）

「私のパートが書いてある…！」

「そうだよあずにゃん！この曲はサッくんが作ってくれてね？ちゃんとあずにゃんのパートもあるんだよ♪」

やっと中野から離れた平沢がニコニコしながらそう告げる。

「サク先輩…！」

「…あン？」

「…ッ！ありがとうございますっ！！」

深々と頭を下げ、俺に感謝の意を伝えてくる。

「…別に」

「おやおや～サクぅ♪照れてますかにゃ～♪」

「サッく～ん♪照れちゃったぁ～♪」

カチューシャと天然がかなりニヤつきながら戯言を言ってくるので…

「黙れ」

ギロッ

「「ご、ごめんなさい…」」

睨んで粛正させる。

「クスッ…あはは…」

何やら小さく笑い声が聞こえてきたのでその発生源を探し、直ぐに見つける。

「あははははっ！」

「…何笑ってんだよお前」

俺の視線の先には眼に涙を浮かべた後輩の姿が。

「す、すみません　何だか、サク先輩と唯先輩と律先輩がおかしくって…あははははっ！」

「……」

別に笑うのはかまわんが…
…コイツらと一緒にすんな…

「ならば！『リツユイサク』というトリオを結成するか！」

「おぉ～！グッドアイディアだよりっちゃん！」

「何言ってるんだよ律」

「りっちゃん！私も交ぜて！」

「よしっ！だったら梓もだ！」

「えっ？私もですか？」

「おいで～あずにゃ～ん♪」

「『リツユイサクムギアズ』の旗揚げだ！」

「わ、私だけ仲間外れはヤダ！」

「澪先輩…」

「はぁ…」

何やら意味不明な劇団を旗揚げしようとしている面々を見てため息が…

と…

ガチャ

「みんな！いるわね！」

何故かテンションが高い顧問がやってきた…

「さわちゃんどうしたの？」

「えぇ…実は…じゃあ～ん！梓ちゃんにメイド服を作ってきましたぁ！」

「「「「「「……」」」」」」

アホだ…この人…

―――――――――

「それじゃあ、唯先輩、サク先輩、私はコッチなので」

ぶっ飛んだ思考の持ち主の顧問を俺が追い出し、中野に俺のテレキャスを貸し、『翼をください　ＲＯＣＫ・Ｖｅｒ.』の中野のパートを練習したり等し下校時間になったので部活を終了して帰路に着く。

帰り道が途中まで一緒の平沢と中野を先頭にし、その後ろを俺がダラダラと歩いていると中野が立ち止まる。

「あずにゃん♪また明日～♪」

「…じゃあな」

「はい　また明日です

それじゃあ」

ニコニコと手を振る平沢とヘッドフォンを耳から首に移動させる俺。
そんな俺達を見て中野が軽く頭を下げ帰り道を歩いて行った。

「あっ　あずにゃんの後ろ姿、可愛いな～♪」

「…何言ってんだお前…」

理解不能の発言をする平沢に一言ツッコミを入れ歩き出す。

「あ～んっ　待ってよ～サッく～んっ」

「…サッくん言うな」

……

「ねぇねぇサッくん」

「…お前俺の発言聞いてたか？」

俺の隣に追い付きトコトコと歩いていた平沢がお馴染みのタブーを発してくる。

「あのね…」

そしていつもの如くスルー。

「ありがとう♪」

「はぁ？」

立ち止まり笑みを浮かべながらそんなことを言ってきた。

「サッくんがいなかったら今頃あずにゃん、軽音部を辞めてたかもしれないから」

「……」

―――――――――

『じゃあ平沢…まずはこの『大丈夫だよ』…あン？』

『私、自分でやってみるよ』

『…出来んのか？今までの曲は全部、俺に教わってたのに』

『でも…やりたいの

だって私…『先輩』だもん』

「さっきまであずにゃんと一緒に帰れてたのも、サッくんのおかげ」

「……」

『…『先輩』ねェ…』

『うん！あずにゃんのためにも私、頑張るよ！』

『…そうかい』

『サッくんに頼ってばっかりじゃ『後輩』に笑われちゃうからね！』

（呆れるんじゃねェの？）

『よーし！やるぞー！』

――――――――――

「私が初めてサッくんに頼らないで、ギターを弾けて…それを聞いたあずにゃんが軽音部に残ってくれたから」

「……」

「だから…サッくん！ありがとう！」

夕陽を背に背負い、満面の笑みを浮かべて俺に感謝を伝える平沢。

（ふーん…コイツ…）

「…だったら、もう俺がお前にギターを教えなくて済むって事だな」

「えっ！？それはヤダよ～！サッくん、これからもご指導よろすくおねげぇしますだぁ～」

「…だったら『後輩』に教えてもらえ」

そう告げて止まっていた歩みを動かし、ポッケからケータイを取り出し…

カチカチ…

とある人物にメールを送る。

「いや～だって私『先輩』なので…それはちょっと～」

「…お前より中野の方が先輩らしいかもな」

「えぇ～！？あずにゃんは『後輩』で、私が『先輩』だよ～」

「…逆の方がしっくりくる」

「ガーンっ！ヒドいよサッくん！」

夕暮れの帰り道をそんな会話をしながら、俺達は歩いていった…

【送信宛：真鍋　和】

【件名：無題】

【本文：平沢は、少しは成長してるみてェだぞ】

第四十二話（後書き）

『翼をください』は『ふわふわ時間』に収録されてるものですが、あれは四人が歌ってますが、作中のは唯と澪のツインボーカルにしました。

第四十三話（前書き）

オリジナルの話です。

咲也の日常…ていうかある一日です。

第四十三話

「…ゃ　…ゃ」

「……」

僅かに聞こえる誰かの声が、俺の脳が感知し、意識が急速に覚醒に向かっていく…

「咲也、起きなさい」

「……」

閉じていた眼を開き、ぼやける視界で俺を夢の世界から強制送還させた人物を確認する。

「……」

「やっと起きた？もうお昼よ」

その人物は、少し呆れた表情をしてベッドの上にいる俺を覗き込んでいた。

「しかし…良く眠れるわね～　こんなに暑いのに」

シャ！

ガラ

「……ッ！」

そう言って熱の籠ってる自室のカーテンと窓を開け、空気の入れ替えを行うが、照り付ける太陽の光が俺に直撃。

故に完全に目が覚めた。

「……」

起き上がり、軽く体を伸ばしていると…

「じゃあ、早く下に降りて来なさいね？お昼ご飯食べるから」

そう告げて桐島家の紅一点の我が母親は俺の自室から去っていった。

本日七月下旬。
現在時刻午後十二時ジャスト。

学校が夏休みに突入してはや一週間。

何故こんな季節があるのかさっぱり理解不能の夏の季節。

「…アチィ…」

俺は夏休みに突入してから部活がある日以外は目覚ましいなど一切使用せずに気ままに起き、眠気が足音を立ててやったきたら寝ると

いう自堕落な生活を送っていた。

ミーン…　ミーン…

「……」

外から聞こえる夏特有の蝉の音を、若干耳鳴りだと思いながら自室から出ていく。

……

ガチャ

顔を洗い、歯を磨き、鏡を見て相変わらずの不機嫌面に気落ちし、昼メシを食べるためにリビングに向い、その扉を開く。

「よう…咲也、起きたか…」

そこにはテーブルで新聞を広げ、何やら思案顔の親父と…

「貴教さん、新聞片付けて、じゃないとお昼ご飯が置けないわ」

先程、俺を覚醒させたお袋がキッチンから昼メシと思われる物体をトレイに乗せ、やってきた。

「おぉ、すまん」

「…またそうめんかよ…」

ガサガサと新聞を片付ける親父を尻目にお袋か持っている物体を見てポツリと漏らす。

「仕方ないでしょ　知り合いとか親戚から沢山送られてくるんだから」

俺の発言が聞こえたらしいお袋が愚痴りながらテーブルに三日連続、同じ昼メシのそうめんを置く。

「…そうめんか…そうめん…そうめん…そうめん…」

「何ブツブツ言ってんだよ…」

「今書いてる小説が、行き詰まってるんですってそのネタに使うんじゃないかしら？」

「…あっそ」

どうでも良いので、席を引き座る。

「はいはい　悩むのは後にして、食べますよ」

未だに顎に手を当て、そうめんを凝視してブツブツ呟いている親父にお袋がパンパンっと手を叩き、そう促す。

「…ん、そうだな」

「じゃあ…」

「「いただきます」」

「……す」

……

現在時刻午後十二時三十分。

「咲也」

「…あン？」

昼メシのそうめんを食べ終えて席を立った瞬間、親父が話し掛けてきた。

「少しお前の知恵を借りたい」

「…あぁ？」

「さっき、夏希が言ってただろ？俺は今、苦しんでるんだ」

「…だったら病院行け」

「俺は病気じゃないぞ」

「はぁ…　仕事手伝えってか？」

「あぁ…中々どうにも筆が進まないんだ…」

「…ダリィから明日な…」

「ダルいのは不規則な生活してるからでしょ？」

昼メシの後片付け真っ最中のお袋がサラッと痛いとこを突いてくる。

「…だったらアンタが知恵を貸してやればいいじゃねェか」

「あら？私より咲也の方が適任だと思うけど？」

「あぁ？」

「『虹の風景』と『桜の木』…だったけ？」

は？

「咲也が作ったその曲の歌詞を見たら、私なんか全然ダメよ」

「……」

…なんで俺が書いた歌詞を知ってやがる…？

…学園祭に来ていたのか？

いや…それはねェ…

学園祭に来ていたんだとしたら、俺に報告がある筈だし、仮に学園祭に来て軽音部のライブを見ていたとしても『桜の木』を知ってるのはおかしい…

あの曲は新歓でしかやってねェし…

つうか『見た』つったな…

「なんでその曲を知ってんだよ…？」

謎と理由が知りたいのでお袋に問い掛ける。

「あぁそれはね？この前、咲也の部屋を掃除した時に見たからよ」

「……」

またもや疑問が…

何故俺の部屋に保管してある二つの曲を『見る』事が出来た？

漁ったのか…？

「そんな訝しげな顔しないの
只でさえアンタは機嫌悪そうな顔してるんだから」

「……」

悪かったな…

「別に咲也の部屋をいじったりしてないわよ

机の上に楽譜みたいなのがあったから、ちょっと見ただけよ」

「……」

ちょっと見ただけなのに内容が分かったような口振りだったけどな…

まぁ、良いか…別に見られて困るようなもんじゃねェし…

「とりあえず、咲也」

「あン？」

今まで黙っていた親父が腕を組みながら口を開く。

「バイト代出すから、手伝ってくれないか？」

「…人にものを頼む態度じゃねェな」

「良いから手伝ってあげなさい」

ビシッ

いきなりお袋が俺の後頭部に軽く手刀を落としてきやがった。

「…何しやがる…」

「親孝行だと思って手伝いなさい」

「はぁ…」

なんかこれ以上…お袋とのやり取りが面倒いので…

「やりゃあ良いんだろ…」

渋々手伝うことに…

―――――――――

現在時刻午後一時。

一度自室に戻り、寝巻から私服に着替え、親父の仕事場である書斎に行く。

ガチャ

「おう、来たか」

中では一台のパソコンの前で、またもや新聞を広げている親父の姿が。

「…何やってんだよ」

「『名前』を探してるんだ」

「はぁ？」

新聞から誰の名前を探してんだ…

「『新聞から誰の名前を探してるんだよ』みたいな顔してるな？」

「…その通りだ」

人の表情から思考を読み取るな…

「名前を探してると言ってもな、これに載ってる誰かのじゃないぞ」

「ん？」

「今、執筆してる小説で使うための人物の名前を新聞から探してるんだ

実在する名前をそのまま使う事はイカンからな
だから漢字や文字を繋ぎ合わせて新しい名前を作ってるんだ」

「…それには新聞が一番効率が良いからか？」

「その通りだ」

だから昼メシの時も新聞広げて唸ってのか…

「…で？俺は何をすれば良いんだ？」

突っ立ったままでいても仕方がないので、クーラーが持てるその力を最大限発揮しているエリア（クーラーの近く）に行き、座布団を取り畳の上に座る。

「お前も名前作りを手伝ってくれ」

「…そんな事で行き詰まってんのか？」

「あぁ」

「……」

小説の内容とか展開じゃねェのかよ…

登場人物の名前で行き詰まってんのかよ…

「『登場人物の名前で行き詰まってるのかよ』みたいな顔をしてるな？」

「……」

だから人の表情で思考を読み取るな…

「仕方がないだろ？　今回は登場人物が多いものを書いてるんだから」

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き…

「…アナグラムで作ったらどうだ?」

と、提案する。

「おぉ～　そうだな

流石は俺の息子だ」

感心した様子で手をポンと叩き、何気に自分も称賛する親父。

「えーっと…『きりしま　たかのり』をアナグラム…」

カタカタとキーボードでパソコンに自分の名前を打ち込む親父。

「『のりかま　りきたし』ってどうだ？」

「…アンタがそれで納得なら良いんじゃねェの」

「よしっ　採用」

良いんだな…

「次は『きりしま　なつき』をアナグラムすると…」

今度はお袋の名前をパソコンに打ち込むアナグラムする。

「『きなし　きりまつ』っどうだ？」

「…どうでも良いんじゃねェの」

「採用だな　流石は俺の妻、最高な名前を提供してくれたな」

のろけんな…

「次は咲也だな」

「……」

「えーっと…『きりしま　さくや』だから……『くりやき　まさし』で良いな」

「『くりやき』って…」

なんか投げやりじゃねェか…？

「つうか…何人の名前が必要なんだよ？」

「３６」

「……」

パソコン画面を見ながらサラッと爆弾を投下する親父。

「なんでそんなに多いんだよ…」

「今回は現代学園が舞台だからな、主人公が通うクラス全員がちゃんと物語にからんでくるんだよ

だからクラス全員分の名前が必要なわけだ」

「はぁ…」

どんな小説作ってんだよ…アンタは…

―――――――――

現在時刻午後五時二十分。

ブブブッ　ブブブッ

四苦八苦しながら何とか三十六人分の名前を親父と共に編み出し、疲労感が襲ってきたので冷房が効いている自室に行き、サッカー雑誌片手にベッドで横になっていると、机の上にある日々進化を遂げる最先端機器のケータイが震える。

【カス】

「……」

ディスプレイ画面には先程『じやうみ　げしゅか』と意味不明な物体に変換させた奴の名が。

【件名：ゲットだぜ！】

【本文：見よ咲也！このビッグなクワガタを！】

画像が添付してあったのでダウンロードしてみる。

「……」

そこには満面の笑みを浮かべたアホと、その右手には、さほどデカくないクワガタが。

カチカチ

とりあえず適当に返信を打ち、ケータイを閉じて読みかけのサッカー雑誌の続きを読む。

―――――――――

現在時刻午後七時十五分。

『ボランチの桜井がボールを持つ』

「……」

『その桜井が大きく前線の高橋にロングフィード！』

「……」

『あぁ～っ…！オフサイドですね』

『ＤＦの裏を抜け出そうとしたんでしょうが、相手もそれを分かってたみたいですね
ラインコントロールをしっかりしてましたね』

俺の視線の先にはリビングにある液晶テレビ。

「……」

そのテレビからはサッカー日本代表の試合が放送され、実況と解説が白熱する試合を視聴者に伝えていた。

ガチャ

「おっ　どっちが勝ってるんだ？」

「…まだ試合が始まったばかりだ…」

「そうか」

リビングにやってきた親父の問い掛けに視線をテレビから外さないまま答える。

「はい　晩ご飯出来たわよ」

「おぉ～　鰻か～」

「今日は『土用の丑の日』だからね」

親父とお袋の会話が聞こえ、視線をテレビからテーブルに移動させると、そこには確かに鰻の蒲焼きが皿の上に鎮座していた。

「咲也は夏が苦手なんだから、鰻食べて体力つけなきゃね？」

「……」

笑みを浮かべながらお袋がそんなことを言ってくる。

……

「そういえば咲也」

「…あン？」

鰻を食べながら試合をチラチラ見ていると親父が口を開く。

「今年も部活の合宿があるのか？」

「……」

そういえば…今年もやんのか合宿？

二日前の部活じゃそんな事言ってなかったけどな…

つうか…あったとしたらやっぱ俺も参加しねェとダメなんだろうか…

「…さぁな」

とりあえず合宿をするかどうか分からないのでそう答える。

「ふむ、そうか…もし合宿に行くんだったら八月七日は空けといてくれよ?その日は野球の試合があるんだからな」

「…あぁ…」

親父がなんか言っていたみたいだが、試合に動きがありそうなのでテレビに意識がいっており、余り聞いてなかったが、とりあえず返事だけはしとく。

『川崎がオーバーラップ!その川崎に大宮が絶妙なスルーパスを送る!』

『チャンスですよ!これは!』

『川崎がクロスを入れる!』

「あっ」

「おっ」

「……」

『相手に弾かれる！…が、その先にいる市原に！』

『撃てぇ！』

『市原のシュート！！』

『ヨッシャーッ！！』

『ゴールッ！！市原の豪快のミドルがゴールネットを揺らしたぁ！日本先制っ！！』

「おぉ～入った入った～」

「久し振りじゃないからしら？この人がゴール決めるの？」

「…この前の代表戦でもゴールしたぞ」

「あれ？そうだったかしら？」

「はぁ…」

首を傾けるお袋にため息が漏れる…

―――――――――

現在時刻午後九時三十分。

試合はあの一点を守りきった日本が勝利を収めて終了。

試合を見終わったので自室に戻ると、ケータイのランプがチカチカ点灯していた。

「……」

ケータイを開き、メールを確認。

【件名：コラァ！！】

【本文：『友人が出来て良かったな』ってなんだぁ！！俺はクワガタと友情を育むために…】

パタン

何やら長々と書いていたので最初の数行だけ読んでアホからのメールとケータイを閉じる。

そしてアコギを手に取り、軽く奏でる。

♪♪♪…

（合宿…やるのか？…そして俺も行くのか…？）

アコギを弾きながらそんなことを思い、夜は更けていった…

第四十三話（後書き）

この話はとある方からリクエストがあったので作ってみました。

『アナグラム』…使っちゃった…

第四十四話（前書き）

合宿編スタートです。

第四十四話

遂に…この日がやってきた。

「……」

財布の中身を確認。
…問題ナシ。

「…よし」

軽く意気込み財布をズボンのポッケに突っ込み、ケータイを取り、同じくポッケに突っ込み自室を出る。

本日八月三日。
現在時刻午前十一時ジャスト。

―――――――――

ガチャ

ジリジリ…

ミーン…　ミーン…

「……」

自宅を出て瞬間に全包囲から熱気と蝉の鳴き声が怒涛に襲ってくる。

１８０。回転して避暑地に駆けこむという邪心がニョキニョキと芽を出したが、『我慢』という鋭利な刀でスパッと切り落とし…

「……」

ザッ

一歩踏み出す…が…

ジワジワ！ジリジリ！

ミーン！ミーン！

先程よりも一回り激しくなった（気のせい）太陽光が俺を焼き付け、蝉が嘲笑うかのような（そんな風に感じる）大合唱が鳴り響く。

そんな状況にUターンして人類が発明した『冷房』という素晴らしい発明品がフル稼働している我が家に向かうという邪な考えが、先程切り落とした芽に伝達され、『逃避』という栄養分を与え、再びニョキニョキと発達するが…

「……」

『我慢』と『待望』の二刀流で微塵切りにし、サッと炒めて修司に食べさせ悶絶させるという荒技を脳内で発動し…

「……」

スタスタ…

陽炎が揺らめくアスファルトを歩き出す…

――――――――――

「……」

目的地に向け、ただひたすらに無言に寡黙に黙々と歩いて行く。

すると…

バシンッ！

「ッ！」

急に背中に衝撃と軽い痛みが襲ってきた。

「オッス！サク♪」

「……」

軽い怒りを感じながら振り向くと、帽子をかぶり、片手を上げて何やら上機嫌な田井中が。

とりあえず…

ズビシッ！

「あだっ！」

帽子の上から軽く手刀を落とす。

「なにすんだよ～」

「…そりゃあ俺の台詞だ…
いきなり背中を殴りやがって…」

「殴ってないよ、こう…バチンッてやっただけ」

自分の右手の掌を中々の勢いでスマッシュしながらそんなことを言ってきやがる。

「ていうか女に手を上げるなんて…ヒドいわッ！」

「……」

両拳を口元に持っていき、どうやったのか知らんが若干眼を潤ませる。

「…蹴りでないだけマシだと思え…」

「そういうことじゃなくて、男が女を叩くな～ってこと」

どうやったのか知らんが、潤んだ瞳からカラッカラの瞳になり、口を尖らせ文句を言ってくる。

「…こんな言葉知ってるか？『男女平等』」

「はいはい　分かった分かった」

「……」

イラッとする言動をサラッと言いやがって…

「…じゃあな…」

思えば…M〇．３のドルドルの能力が余り使えない、イン〇ルダウ

ンＬｖ４焦熱地獄ばりの熱の中でコイツの相手をしてる場合じゃねぇんだ…

とある場所に行き、ある物を入手しなければならないので踵を返し、歩き出そうとしたら…

「待った」

ガシッ！

「…ンだよ…」

肩…ではなく、何故か腕を掴まれた。

「今から遊ぼうぜ♪」

「…ヤダ…」

「私さぁ今、暇なんだよだから遊ぼう♪」

無視すんな…このカチューシャ…はしてねェな…帽子部長で良いか…

「…遊ぶんだったら、秋山と二人で灼熱の炎天下の下で全力疾走でもして遊んでろ…」

「いやいや、そんな事しないから…ていうか澪は夏期講習に行ってるから遊べないし」

「…んじゃあ…平沢と一緒に灼熱の炎天下の下で日光浴でもしてろ…」

「やらないってそんなこと…」

「…つうか俺は今から用事があんだよ…」

「用事？」

未だに掴んでいた俺の腕を解放し、帽子部長がキョトンとする。

「…ＣＤ買いに行くんだよ…この暑さの中な…」

今日は俺が好きなミュージシャンの新曲発売日。

二ヵ月程前に、そのミュージシャンの公式ホームページを覗いたら…

『待望の新曲リリース決定！』

の文字がデカデカとあり、ファンである俺としては早々に新曲を入手し、青〇ジのヒエヒエの能力ばりに冷えた（大袈裟）自室で快適に新曲を聞きたいのだが…それを邪魔するな…

「どのミュージシャンのＣＤ…って、もしかしてサクが好きな二人組ロックバンドのＣＤ？」

「…あぁ…」

理解が早くて助かる…

「じゃあ私も行こっと♪」

「…秋山と一緒に炎天下の下でババ抜きでもやって友情でも深めとけ…」

「だから澪は夏期講習だってていうかなんで外でトランプしなきゃいけないんだよ…しかも二人だけでババ抜きって…」

「…だったら…琴吹か中野と一緒に…」

「はいはい、良いから行くぞ～」

スタスタ…

「…軽く受け流すな…」

アッサリと俺の提案を受け流し、田井中がスタスタと歩いていく…

「ほらぁ　サクっ　は～や～く～」

数十歩先にいる田井中がクルッと振り向き、チョイチョイっと手招きして俺を急かす。

「はぁ…」

こんな炎天下の下で、ただ突っ立ったままでは俺の体力が悪戯に激しく消耗するので、ため息を吐いて田井中の元にダラダラと歩き出す…

―――――――――

田井中と共に『１０ＧＩＡ』へ。

「涼しい…」

「……」

中に入ると冷気の波が俺達を襲い、火照った体を冷やしてくれる。

内心『快適だ』と思いながら、地下の楽器専門エリアには向かわず、一階のＣＤやＤＶＤが置いてあるエリアに足を運ぶ。

「…あった」

新譜があるコーナーに向い、目的の物を手に取ってレジで精算しようと移動を開始したら…

「……」

田井中が何かを手に取り凝視している姿が。

「『ザ・フー』か…」

「うわっ！びっくりしたっ！」

背後から近付き、田井中が持っていた物…ライブＤＶＤのパッケージに書かれてあるバンド名を読み上げると…それはそれは驚く部長。

「気配消して近付くなよ～
あぁ～びっくりしたぁ…」

俺はアサシンか…

「お前がそれに見とれてたんだろうが…」

「だって、『ザ・フー』の昔のライブＤＶＤがあったらさ…」

そう言って再び視線をＤＶＤに落とす。

「私さ…」

「あン？」

「『キース・ムーン』に憧れてるんだ…」

「……」

ＤＶＤを見ながら微笑みを浮かべ、ポツリと漏らす。

「…それは『技術』にか？それとも『パフォーマンス』にか？」

「そりゃあ、もちろん『技術』にだよ

って、あれ？サクって『ザ・フー』知ってんの？」

ＤＶＤから視線を俺に移動させ疑問を投げかけてくる。

「…そりゃあそのバンドは有名だからな」

「へ〜　じゃあさ、『キース・ムーン』のこともご存じだと？」

「…『ザ・フー』の初期のドラマーだろ？
演奏技術の方も有名だし…酒癖が悪い、楽器破壊、爆薬でメンバーのギタリストに聴力障害を負わせた等々…ある意味『そっち』の方『でも』有名だからな」

「ははは…『そっち』でも有名だもんな」

ポリポリと頬をかき、苦笑いを浮かべる帽子部長。

「…で？それ買うのか？」

「う〜ん…　どうするか…

あっ！サクが買ってくれるか！」

悩み出したと思ったら、急に至極当然な感じで意味不明なことを言ってくる。

「…アホか」

「真顔で言うなって…」

その後、五分ぐらい部長は悩み…結局購入することになり、俺はＣＤを、田井中はＤＶＤを入手し店から出る。

……

「…アチィ…」

店から出ると再びの熱波が襲ってくる。

「これからどうする？」

「…帰る…」

「お腹すかない？」

「…帰ってから食う…」

「んじゃ、ハンバーガーでも食べにいこう♪」

スタスタ…

「……」

（帰るか…）

勝手に歩いて行く帽子部長を見事にスルーし、一歩踏み出すが…

「サク～！行くぞ～！」

「……」

帽子部長が振り向き、中々のデカトーンボイスで俺の名を呼びやがる…

「はぁ…」

ため息一つを吐き、渋々ダラダラズリズリと発言者の元へ…

――――――――――

「サク、暑そうな顔してるな？
不機嫌顔がレベルアップしてるぞ？」

「……」

いつもなら反論するが、この暑さのせいでそんな気力も失せる…

つうか…

「…お前、暑くねェのかよ…？」

「暑いけどさ、サクが異常なんじゃない？」

「…こんな熱を放つ太陽が元凶だ…そりゃあイカロスだって落下するな…」

「え？なんの話？」

「…ギリシャ神話…」

「ふ～ん」

どうでも良いように反応するが、俺自身もギリシャ神話なんてどうでも良い。

と…

「サクサク、あれ見ろ」

いつの間にかハンバーガーショップに辿り着いていたらしく…その二階の窓際を田井中が揚げ物を食った時の擬音で俺を呼び、指差していた。

「…あン？」

その指のライン先には…

「平沢妹…？と…中野…？」

何やら楽しげに会話しながらハンバーガーを食している、出来た妹

とツインテールの姿が。

「なんか、おもしろそうなツーショットだな」

「…どこがだよ」

至って普通じゃねェか…
おもしろ要素ゼロだ…

「よしっ！行ってみようぜ～♪」

「……」

何故かウキウキしている田井中と本当にどうでも良い俺が、ハンバーガーショップに入室するために歩き出し、その扉に近付くと…

「待ったサク」

「…あぁ？」

何故かここにきて田井中ＳＴＯＰが。

「梓達にバレないようにコッソリ近付こう」

「……」

真顔で何言ってんだコイツ…

「…何故？」

「もしかしたら梓が私達の悪口を言ってるかもしれないからな」

私『達』って、俺を含むな…

お前限定にしとけ…

「ここは『先輩』として『後輩』を指導しなきゃいけない！」

つうか悪口を言ってるのは決定項なんだな。

「ということで変装するぞサク」

もう勝手にしろ…

……

カランッ…

「いらっしゃいませ～☆」

「……」

「…じゃあサク、私は梓達の近くの席を確保するから…」

「……」

「…サクはバーガーを買ったら、自然に私がいる席に来ること…絶対に梓と憂ちゃんにバレるなよ？」

「……」

「…じゃあ健闘を祈る」

最後に奴は敬礼をし、去っていった…

「はぁ…」

今の俺達…俺の首から上は怪しかったりする…

頭にはさっきまで田井中隊長がかぶっていた帽子を深々とかぶり、

前髪を止めていたピンは奴に没収され…そんな状態で帽子なんかかぶるもんだから、目付きが鋭い野郎になっていた…

一方、俺をこんな状態に変身…変装させた隊長は、帽子を取ることにより前髪が目元まで下り、その前髪を先程没収した俺のピンで緩く止めてパッと見、誰か分からん奴に…

「はぁ…」

再びため息を吐き…

「いらっしゃいませ☆
店内でお召し上がりですか?」

「…はい」

ハンバーガーを買うことに…

「ご注文をどうぞ☆」

「…ハンバーガーセット二つ」

「ハンバーガーセットをお二つですね☆
セットの飲み物をお選び下さい☆」

「…コーラと紅茶で」

「紅茶の方はホットとクールがございますが、どちらにいたしましょう？」

「…ホットで」

「ホットですね☆

ご一緒にポテトもいかがですか？」

「……」

セット頼んだのにそれ言うか…デフォルトなのか？

つうか、なんだその眼は？
めっちゃ輝いてんぞ…

「…結構デス」

「かしこまりました☆
合計６４０円になります☆」

「……」

「1，０００円お預かりします☆
３６０円とレシートのお返しになります☆」

「……」

「こちら、商品になります☆
ありがとうございました～☆」

ハンバーガーセット二つを受け取り、田井中を探す…がすぐに発見。
奴は中野と平沢妹の真後ろの席に陣取っていた…

「……」

「（サンキュ～
梓と憂ちゃんにはバレてないか？）」

「…多分な」

「（小声！）」

「はぁ…」

俺とお前の温度差を感じろよ…
コッチは全然ノリ気じゃねェっつうのに…

ちなみに田井中は中野と背合わせで座っており、普通にしてたら後輩コンビには気付かれない。

俺は田井中の真向かいに座り、田井中と中野がブラインドになりギリギリ…恐らく平沢妹には気付かれてない…と思う。

つうか別にバレても良いんだが…

「熱っ」

と、田井中に渡した紅茶がトラップを発動させた。

「（なんで紅茶がホットなんだよ～！）」

「（…お前が俺に昼メシ代をおごらせるからだ）」

「（だからって地味な嫌がらせしないでよ…）」

「（良いから黙って食え…）」

「（ぶぅぶぅ～）」

何やらぶうぶう（文字通り）言ってるが華麗にスルーしてハンバーガーを口に運ぶ。

「ところで今日、唯先輩は？何してるの？」

「家にいるよ」

ジャンクフードを食ってると中野と平沢妹の会話が耳に流れ込んできた。

「お姉ちゃん、暑いの苦手だから…冷房も嫌いだし」

「ダレてる姿が目に浮かぶなぁ…」

「最近は一日中グッタリしてるよ」

「だらしないな～」

「（だらしないってさ～サク♪）」

ポテトを一本取りながら、部長が笑みを浮かべながらの発言。

「（平沢のことだろうが…）」

「（だってさっきまでダルそうに歩いてたじゃ～ん♪）」

「でもゴロゴロしてるお姉ちゃん、可愛いよ～♪」

「そ、そうかな…？」

「……」

田井中と中野の肩越しには、頬に両手を当て、うっとりする平沢妹が見える…

「（憂ちゃんてさ、本当、唯のことが好きだよな）」

「（…シスコンだからな）」

そう言ってコーラに手を伸ばす。

「私、澪先輩みたいなお姉ちゃんだったら欲しいな～」

「澪さん、優しくて格好いいもんね」

「（お前の幼馴染みが大絶賛だな…）」

「（むぅ～なんでだよ～）」

ホット紅茶を口に含みながらリスみたいに頬を膨らませる絶賛されなかった部長。

「咲也さんは？」

「サク先輩は…いつも機嫌悪そうにしてて、ぶっきらぼう…」

「（おっ　梓がサクの悪口を！？）」

「……」

「…なんだけど、ギターは上手いんだよね！
後、軽音部の曲の作曲したのって全部サク先輩なんだって！
すごいな～サク先輩って♪」

「咲也さんって優しいとこあるよね

お姉ちゃん達が一年生の時の学園祭直前で、お姉ちゃんが喉を枯らせちゃった時があったの」

「え？唯先輩が？」

「うん　お姉ちゃん、ボーカルやる予定だったのにあんな声になっちゃって…そしたら咲也さんが電話してきて心配してくれたの」

（いや、あれは平沢の声の状態を確かめるためにしただけだ…）

「私さ…軽音部で辞めようか迷ってた時があったんだけど、サク先輩が作ってくれた曲と澪先輩の言葉を聞いて『やっぱり先輩達と一緒に演奏がしたい』って思えたんだ」

「（なんでサクと澪がこんなに褒められるんだよ）」

「（…知るか）」

部長がホット紅茶を啜りながらジト眼で俺を見てくる。

「（だったらコッチからせめてやる！）」

「（…何をだ…）」

「（すぅ…）」

俺のツッコミをスルーし、紅茶で喉を潤した後…

「じゃあ律さんがお姉ちゃんだったら？」

部長の口から飛び出たのは平沢妹の声色を真似たボイスだった…つうか激似だ…

「う～ん…　あの人はいい加減で大雑把だからパス…かな」

まさかそのパスした本人からの質問だとは夢にも思わない中野が、毒を吐く。

「梓ちゃん…」

「ん？なに？」

「私…何も言ってないよ？」

「え？でもさっき…」

「ほぉ～…誰が大雑把だって？」

「えっ？」

後輩に毒を吐かれた先輩が中野の方に振り向き、そして毒を吐いた中野も振り向く。

「り、律先輩！？」

よく分かったな…
一瞬で変装を見破るとは…

「あっ　咲也さん」

「って、えぇっ!?サク先輩まで!?」

「……」

俺も見破られたか…

……

「こんにちは、律さん、咲也さん」

「やっほ～　外から見えたから来ちゃった～」

「痛いですぅ～…律先輩…～ごめんなさい～…ごめんなさい～…」

「……」

田井中が毒を吐いた後輩に制裁を与えるため平沢妹達の席に移動し、
田井中が中野の横に座り、逃げない様にガッチリと中野の頭を腕で

ホールドし、こめかみ付近を拳でグリグリと鈍い痛みを与えている光景を平沢妹の横に座っている俺が、ポテト片手に暇なので見ていた。

ちなみに変装を解除済み。

「サク先輩～…助けてください～…」

中野が俺に救助を懇願するが…

「明日になったらな…」

「えぇっ～！」

切り捨てる。

「あの～律さん、そろそろ…」

見兼ねた平沢妹が罰を後輩に執行中の田井中におずおずと発言する。

「仕方がない…憂ちゃんに免じて許してやろう」

「…あ、ありがとうございます…」

中野無事に?解放。

「あっ　そういえば…」

解放された中野に少しホッとした様子の平沢妹が何かを思い出した様に口を開いた。

「今度、軽音部で合宿行くんですよね?お姉ちゃんが言ってました」

「あぁ?」

合宿？
初耳だぞ…

「う、憂っ！！」

「憂ちゃんシーッ！！」

「ほぇ？」

平沢妹の発言を聞いた田井中と中野がアタフタしながらチラチラと俺を見てくる。

「…おい部長」

「は、はいっ！」

「…合宿やるなんて聞いてねェぞ」

「いや～…ははは…だってサクには言ってないもん、なぁ梓？」

「わ、私にフらないでくださいっ」

「……」

どうやら俺の知らぬところで勝手に合宿プランが制定したらしい…

「…俺抜きで合宿に行くのは大いに結構だが「違うって」…あン？」

田井中スネークイン。

「もちろんサクも参加するんだぞ」

「…じゃあなんで、俺に伝わってねェんだよ」

「それは～…サク先輩は素直に合宿に参加しないだろうから、勝手に決めちゃえって先輩方が…」

「おい」

その先輩方の一人にツッコむ。

「だって一年前の合宿の時さ、サクは中々頷かなかったじゃん
だったから勝手に決めて、合宿に行く一日前ぐらいにサクに伝えて
逃げ場をなくそう～って唯が」

「律先輩ですよ　言い出したの」

「でも唯だって同じこと思ってたみたいだぞ？」

「そうなんですか？」

「うん…と、いうことでサクは合宿に参加すること！もうこれは決
定済みです！」

「……」

指ではなくポテトで俺を差し示し、そんなことを告げてくる。

「はぁ…」

ため息一つ。

「…いつ行くんだ？」

「え？」

「…合宿だ、いつ行くんだ？」

「サク！合宿に参加するんだな！？」

田井中が有望な様子で身を乗り出し、俺に迫ってくる。

「別に行かねェで済むならそれで良いんだが…」

「ダメダメ！やったぁ！サクの参加決定だぁ～！」

「良かった…」

テンションがグイグイ上昇した田井中と、安堵の息と共に中野がポツリと呟く。

「良かったね梓ちゃん」

「う、うんっ」

「…で？日程はどうなってんだよ？つうかどこでやるんだよ？」

「合宿するところはムギの別荘でなんか一年前に合宿したところとはまた別の別荘らしいぜ？」

何個別荘を所有してんだ…アイツは…

「んで行く日は…七、八、九の三日間！」

「四日後…しかも二泊三日かよ…」

長ェな…つうか…

（八月七日ってなんか予定があったような…）

その後…軽く雑談を交わして店を出て、平沢妹から家に来ないかと誘われたが早く帰って新曲を聴きたいのでズバッと断り（少し平沢妹がヘコんでいた）、平沢妹と田井中と中野は平沢家に、俺は自宅にそれぞれ足を向けた。

第四十五話（前書き）

合宿編その二です。

第四十五話

相変わらず太陽の照り付けが激しい八月七日。

この日は軽音部の合宿当日なのだが…

カキーンッ！

「修司ッ！！」

「ＯＫッ！！…オ～ライ～…オ～ライ…」

「……」

俺は…草野球真っ最中だった…

そもそも俺は何故、こんな灼熱の炎天下の元、白球を打ったり、投げたり…

「スゥーパァーッ！！キャァーッチィ！！」

パシッ！

「スリーアウト！チェンジ！」

あのアホが奇妙な叫びをあげ、落下してきた白球を捕った様なスポーツに参加しなければならないのか？

それは俺が、親父と修司の親父が創設した草野球チームのメンバーだからだ…

「見た見た咲也？俺の素晴らしいスーパーキャッチ！！」

「…フライを捕ったぐらいで騒ぐな…ウザい」

「お前の何気ない言葉が、時として心を傷つける凶器になる事を知ってるか？」

「大丈夫だ…心を抉る凶器に変貌するのは、お前らアホ親子限定だ…」

「まさかの親子限定凶器ッ！？」

事の発端は、たまに親父が参加している近所の会合。

そこで『何故か』親父や修司の親父の様な家で仕事をしてる連中や会社でデスクワークばかりしている連中…

ＶＳ

建築土木、工場勤務等、力仕事が主な連中の口論になったらしい…

『どちらの仕事の方が大変なのか決着を』

こんなくだらないテーマの元、『何故か』野球でケリをつける事になったらしい…

「修司ー！サクッチー！おもしろコントしてないで早く戻れーッ！」

「あいよーッ！」

「…コント扱いすんな…あの野郎」

そして本日は軽音部の合宿当日でもある…

つまりはダブルブッキング。

俺があの日、サッカーの試合に夢中になってしまい親父の発言に生返事をしたことにより…望んでもいない親父達のくだらない勝負に巻き込まれてしまった…

軽音部の合宿と望まない草野球。

どちらが優先かなど、天秤にかけるまでもなく軽音部なので、草野球をボイコットしようかとしたが…

「さぁ　みなさんッ！！気合い入れていきましょうッ！！俺達の最後の攻撃だぁッ！！」

『おーっ！！』

「…ダル…」

今し方、かなりのハイテンションでチームを鼓舞した修司の親父が、本当に…本当にウザいぐらいに俺を引き止めるので、かなり渋々参加することに…

「じゃあ貴教さんッ！！いってこいッ！！」

「おう！」

そして軽音部員には俺は遅れて合宿に参加する旨を伝えた。しかし…平沢がかなり喚いたりしていたが、伝家の宝刀の琴吹の菓子と中野が諭すという先輩の面目丸潰れを遺憾無く発揮し、何とか納得させた（俺は殆ど何もしてない）

ということで現在、完全に巻き込まれて草野球真っ最中…

「…つうかなんで野球なんだよ」

「それはだなサクッチ」

「サクッチ言うな」

座って、スポーツドリンク片手に愚痴っていると、アホの親父が俺の元に。

「古来から男の決着をつけるには…野球と決まっているからだ」

「……」

打席に向かう我が親父の背を見ながら何言ってんだこのケーキ屋は…

「おじさーんッ！一発デカいの頼むぜーッ！」

「……」

そしてそのアホ息子…なんでお前は張り切ってんだよ…

そもそも俺とお前は関係ねェんだぞ…

「はぁ…」

カキーンッ！

ため息を吐いていると軽快なバッティング音が聞こえた。

「よしッ！！」

「貴教さんッ！走れッ！」

どうやら親父がヒットをかましたらしい。

タッタッタッタッ…

「……」

親父、一塁に全力疾走。
そしてセーフ。

「よしッ！次は俺だなッ！」

「父さんッ！ファイトッ！」

「合点承知だ我が息子ッ！！本当は娘が欲しかったけどなッ！！」

「それはゴメンッ！！」

「……」

お前ら…地球上で一番ウザい親子だろうな…

「修司…親の生き様…しっかりと見届けろよッ！」

死地に赴くのかアンタ…？

「ヤベェ…目頭が熱くなってきた…」

アホばっかだ…

……

「スリーストライク！バッターアウト！」

「と、父さん…」

「ダセェ…」

影宮　修（おさむ）…完封される…

「…スマン…」

バットをズリズリと引きずりながら、テンションがた落ちのケーキ屋が三文字で心情を表す。

「クソォッ!!咲也!次はお前の打席だッ!!相手のピッチャーにトラウマを植え付ける様なバッティングを披露してやれッ!!」

「黙れ…」

バットを手に取り、騒音を発するアホに一言ツッコミを入れて打席に。

「……」

打席に入り、バットを構える。

ピッチャーが振りかぶって…一球目を…

ビュッ！

「……」

スパンッ！

「ストライク！」

見送る。

「咲也ーッ！お前は…中学時代、『和製イ〇ロー』の異名を持ってたじゃないかーッ！軽くヒネリつぶしてやれーッ！」

「……」

そんな異名持ってねェよ。

つうかイチ〇ーは日本人だ。

『和製〇チロー』の意味が分からん…

「はぁ…」

ため息を吐き、再び構える。

ピッチャーが二球目を…

ビュッ！

「……」

スパンッ！

「ストライク！」

見送る。

「サクッチィッ！！ブチかませぇーッ！！」

「イエーイッ！！」

「……」

黙れアホ親子。

「……」

再び構え…

ビュッ！

三球目を…

カキーンッ！

打つ。

……

俺が打った白球はセンター前ヒットになり、現在一塁に俺、二塁に親父が…そして次の打者は…

「影宮　修司ッ！！参るッ！！」

アホ。

ちなみに俺達のチームは2‐0で負けていたりする。
そして今は最終回の裏、俺達の攻撃。

つまりもし、アイツがホームランを打ったら逆転して俺達の勝ちで試合終了。

それではアイツがヒーローになるが、俺としては早く終わらせたいのでそうなることを切に祈る。

「蛙の子は蛙ってことを証明してやんよッ！」

「…アホめ…」

あのケーキ屋のアホ倅…予告ホームランしながら何言ってんだ…？

自分の親父の二の舞をしてどうすんだ…

つうか意味分かってんのか…いや…分かってねェだろうな…

「さぁ…こいやッ！！」

ピッチャー振りかぶって…一球目を…

ヒュッ…！

投げ、それを…

「うぉおおりゃぁぁあッ！！！」

カキーンッ！

修司のフルスイングが白球を天高く舞い上げ…

（こりゃあ…）

そしてそのまま…

―――――――――

「それじゃあ気をつけね」

「…あぁ」

あの白球はスポッとライトのグローブに収まりアウト、そして次の打者がピッチャーゴロを発動してゲームセット。

結果2‐0で負け。

まぁ…どうでも良いんだけどな。

で、意気消沈した親父と共に自宅に戻り、風呂に入って、前日用意していた鞄を右に、左にアコギが入ったギターケースを背にはテレキャスが入ったギターケースを背負って、玄関で草野球に全く興味

が皆無だったお袋に見送られ駅に向かう。

―――――――――

現在時刻午後五時半。

駅に着き、構内に入って切符を買おうとしたら…

「咲也くん？」

「あン？」

背後から名を呼ばれ、振り返るとそこには…

「どうしてここにいるの？合宿に行ってるんじゃ…？」

麦わら帽子をかぶった海賊王を目指すゴム人間…ではなく、麦わら帽子をかぶっり、キャリーバッグを持った山中顧問がキョトンとした表情で立っていた。

「どうしてって…俺は用事があったから今から合宿地に行くんだが…そう言うアンタは何してんスか？」

「私も今からみんなのとこに行くところなんだけど…そっか、咲也くんも今から行くのね」

「あぁ…」

つうかなんでこの人は、今から行くんだ？

ていうか…参加するんだな…

「じゃあ一緒に行きましょ？」

「良いッスけど…」

―――――――――

ガタンゴトン…
ガタンゴトン…

「実はね…」

「…あン？」

あらかじめ琴吹から聞いていた別荘がある土地へ向かう電車に顧問と共に乗り込み、草野球の疲れが睡魔になって襲ってきて、電車の揺れが更に俺を夢の世界に手招きしてくるので、意識を半分飛ばしかけたら顧問が口を開いた。

「最初は合宿に行く気なかったのよ」

「…じゃあなんで今、電車に乗ってんスか？」

「だって～唯ちゃんとりっちゃんがバーベキューしたり、海水浴するなんて言うから～」

「……」

アイツら…
遊ぶ気満々か…

「でも教師としてそれにつられて、ノコノコとついていったら悔しいじゃない？」

「……」

「だから、遅れて合流しようと思ったのよ」

「…どんな理屈だ…」

つうか…

「…琴吹の別荘がある土地の住所、知ってたんスか…？」

「ううん　さっきも言ったけど、合宿に行く気なかったから知らなかったわ」

知らな『かった』？
過去形？

「でもムギちゃんの家に電話して教えてもらったわ♪
私が桜ヶ丘の教師で軽音部の顧問って言ったらアッサリと♪」

「……」

満面の笑みでさりげなく、教師の権力を発動したことを生徒に言うな…

「でもすごいわね～ムギちゃんの家って」

「あぁ？」

「咲也くん知ってる？ムギちゃんの家には本物の執事がいるのよ」

「……」

マジで？

「電話に出た相手が執事の人だったのよ
流石に驚いたわ…」

「…どんだけブルジョワだ…アイツは…」

初めて聞いたぞ…
日本に執事が存在してるって…
しかも結構身近に…

ガタンゴトン…
ガタンゴトン…

―――――――――

電話に揺られること二時間。

現在時刻午後八時。

見知らぬ土地に降り立つ。

「えーっと…今からバスに乗るんだけど…」

「…もうねェな…」

駅前のバス停にある運行表を見て結果を報告。

この後はバスに乗り、とあるところまで行き、少し歩くと目的地なんだが…

悲しいかな、本日のバスの運行は終了していた。

「…どうする？タクシーで行くか？」

「そうね…　それしかないかなぁ…
でもタクシーだったら出費がかさむのよね～…」

「…さっさっと乗ってくれませんか？」

「って！もうタクシー捕まえてるし！？」

顧問が思案顔で金銭を嘆いて間に、バス停のすぐ横にいたタクシーを俺が迅速に確保していた。

―――――――――

タクシーのトランクにギター二本と俺と顧問のバッグを搭載し、後

部座席に乗り込み琴吹家の別荘の住所を運転手に伝え、夜の見知らぬ土地をタクシーを走らせる。

ブロロ…

「お腹すいたわね…」

「…もう八時過ぎてるしな…」

「唯ちゃん達はバーベキューしたんだろな～良いな～」

「……」

アンタの目標はそれなんだな…
軽音部の顧問なのに…

と…

ブブブッ　ブブブッ

「ん？」

ポッケに入れてあるケータイが震える。

【平沢　唯】

ディスプレイ画面には天然娘の名が。

「誰？」

「…平沢」

「唯ちゃんから？」

「あぁ…」

顧問の問い掛けに短く答え、ケータイを開き通話状態に。

「『あっ！もしもし？サッくん？』」

「違う」

「『え？でもでも声はサッくんだよ？』」

「俺はそんな名前じゃねェ…」

「『あっ！サッくんだ♪』」

「……」

だからサッくん言うな…

「『まだ来れないの？』」

「…今向かってる」

「『本当に!?今ドコ!?』」

「どこって…」

平沢の発言にタクシーの窓から外を見るが、生憎とここは見知らぬ土地。
故にさっぱりだ。

「さぁな…」

「『駅には着いたの?』」

「あぁ…」

「『じゃあバスに乗ったらすぐだね♪』」

残念だったな、バスではなくタクシーだ。

「『…唯～今から肝試しするぞ～…』」

すると電話口から田井中の声が聞こえてきた…つうか…

「…肝試し？」

「『うん！今からみんなで肝試しするんだぁ～♪』」

随分と楽しそうなボイスだなおい。

「『サッくん、早く来てね？』」

「…行けたらな」

「『じゃあ待ってるから♪バイバ～イ♪』」

ブッ

ツーツー…

「……」

待ってるって…

今から肝試しするんじゃねェのか？

まぁ、どうでも良いか。

「今からみんな肝試しするの？」

俺がケータイを閉じると顧問から質問が。

「らしい…」

「ふーん…そっかぁ…」

「……」

なんか企んでんな…

―――――――――

バタンッ

ブロロロ…

あれから数十分後。
目的地付近に着いたので、タクシーから荷物と共に降りる。

「咲也くん、今から私達も肝試しに参加するわよ！」

「はぁ？」

やっぱ企んでたな…

「みんなを驚かせてあげましょ？」

「いや、俺はさっさっと別荘に行って休みてェんだが…」

「恐らく、みんなはこの辺りの森で肝試しをすると思うから…」

「……」

スルーすんなよ。

そしてその推測はあってんのか？

「で、別荘はアッチだから…
よしっ！コッチの森を行くわよ！」

なんで生き生きしてんだよ。

――――――――――

ザッ…ザッ…

「「……」」

会話もなく暗闇の森の中を顧問を先頭に歩く。

既にこんな状態が二十分ぐらい経っている。

『通常』の道では、とっくに別荘に着いている筈。

『通常』ならばな…

ザッ…　ザッ…

しかし…我々は…あえて、いばらの道を突き進んでいた…

そして平沢達の声も姿も一向に確認出来る気配すらない。

確認出来るのは、目の前の顧問の存在と、薄暗い周囲にある木、たまに木々の隙間から見える月、虫の鳴き声と我々の足音ぐらい…

「ねぇ…咲也くん…」

今、この瞬間に確認出来るものが一つ増えた。

「……」

それは顧問の少し焦った声…

「もしかして…私達…」

今、この瞬間に確認出来るものが一つ消えた。

「……」

それは我々の足音…

「迷っちゃった…かな?」

振り返った顧問の表情は青ざめ、夜風が涼しいのに、冷や汗をかいていた…

第四十六話（前書き）

合宿編その三です。

第四十六話

現在時刻午後八時四十分。

「ここどこよ～…」

「はぁ…」

只今、人生初の遭難体験中。

顧問の『迷った』発言から俺達は、月明かりを頼りにあちらこちらと漆黒の森の中を彷徨っていた。

「どうしてこんな目に遭わなきゃいけないのよ…」

「アンタのせいだろうが…」

「うぅ…ごめんなさい…」

そもそもの誤りは、俺がこの顧問と共に鬱蒼と木々や草が生い茂る森に足を踏み入れてしまった事だ。

俺一人だけでも普通の道を行ってれば、今頃別荘で草野球の疲労を癒している予定なんだが…

「はぁ…」

完全に後の祭りだ…

（今日はどうやら厄日らしい…）

やりたくもない草野球をしたり、現在進行形で望んでもない遭難を体験したり…

「あっ！咲也くん！」

『タイムマシンで生返事をしてしまったあの日に戻りたい』と叶いもしない願いを思っていると、へたりこんでいた顧問が声をあげる。

「あン？」

「電話よ！電話して助けてもらうのよ！」

「……」

そう言って顧問が自分のケータイを取り出し、開くが…

「嘘…圏外…」

希望の表情から一変、絶望の表情に。

「さ、咲也くんのケータイは！？」

「…生憎とアンタと同じだ」

ポッケからケータイを取り出し、ディスプレイ画面を絶望先生に見せる。

「そんな…」

ケータイが何故か圏外だということは、実は知っていた。
時刻を確認するためにさっきからチョイチョイ見てたし。

「…つうか…誰に電話するつもりだったんスか？」

「ムギちゃんに…」

「なんでだよ…」

「なんでって…ムギちゃんならこの辺の地理に詳しいと思ったからよ」

「…この辺に別荘を持ってたとしても、だからってアイツがこんな森を熟知してるとは、到底思えんがな…」

琴吹がこの付近の森でハンターにでも転職して狩りでもして森を熟知してなければ無理だ。

…つうか普通にこんな森を熟知している訳がない。

更に言うと俺達の現在位置が不明だし、救助を求めるにしても連絡手段がない。

「はぁ…」

とりあえずため息を一つ。

「…おら、さっさっと行くぞ」

「そうね…」

絶望先生を促し、生還するために止まっていた足を動かす。

……

現在時刻午後九時。

「咲也くん…ちょっと待って…歩くの早いわ…」

「…アンタが遅ェんだ」

「だって私、大きな鞄持ってるのよ」

「…コッチはギター二本持ってんだよ」

鞄も含めた総重量は間違いなくアンタの荷物より上だ。

と…

「…ずさ……手を……ぎら……か…」

「…い……です…」

どこからか声が聞こえてきた。

「咲也くん…聞こえた?」

「なんとか…」

絶望先生も聞こえたらしい。
疲労と絶望の表情から少しだけ希望の面持ちになり俺に問い掛ける。

「コッチから聞こえたわよね?」

「あぁ…」

「行くわよ咲也くん！
もしかしたらみんなかも！」

「……」

声が聞こえたと思わしき方角に顧問が…

ザッザッザッ！

草をなぎ倒し、走っていった…

「……」

そんな顧問が作った獣道を俺が後から楽々と歩いていく。

……

しばらく山中顧問特製の獣道を突き進んでいると…

「おっ…」

前方に道らしい道と山中顧問の背が見えてきた。
そして、足音と共にゆらゆら揺らめく光も。

「……」

どうやら先程の声の人物が歩いてきてる様だ。
あの光は恐らく懐中電灯の類だろう。

そして…その人物の正体が判明する。

「こ、高校生にもなって肝試しもないよな～…」

「あの、澪先輩…手が痛いんですけど…」

「…アイツら…」

その人物は秋山と中野。
どうやら肝試しの最中らしい。

つまりは…

「やっと…やっと合流出来たぁ～…」

追い付いた顧問の言葉通りだ。

「ふぅ…」

漸く遭難から生還出来て、安堵と疲労の息を吐いていると…

「ま、全く肝試しなんて、律も子供みたいな事考えるよな～…」

「あの、手が痛いです…」

「は、早く終わらせて咲也が来るのを待たなきゃな～…」

「先輩…手が痛いです…」

スタスタ…

そんな会話をしながら（ほぼ秋山の独り言みたいだったが）二人は俺達の前を通過していった。

「まぁ…当然と言えば当然なんだが…」

今し方通っていった横の森に俺達がいるなんて思わねェだろうし。

「ま、待って！澪ちゃん、梓ちゃん！」

すると山中顧問が…

ガサガサガサッ！

と、盛大に草を掻き分け秋山と中野が通っていった道に…

「あっ　おい…」

俺の制止も虚しく出ていった。

（急に出ていったら秋山がスキル発動するんじゃねェの？）

「キャアアアアアッ！！！」

ほらな。

「はぁ…」

いつまでも森の中に突っ立っていても仕方がないのでため息を吐き…

ガサガサ…

と、控え目に音をたて出ていく。

「先生！？どうしたんですか？」

「ようやく会えたぁ～…」

「どうしてここに？」

「後から合流して、みんなを驚かせようと思ったんだけど…咲也くんと一緒に道に迷ってぇ～…」

「え？サク先輩と？」

道に出ると中野が地面にへたりこんでいる顧問を介抱しており…

「アンタのおかげで、危うく明日の新聞一面を飾るとこだったぞ…」

「サク先輩！」

その二人に近付くと中野が俺に気付き、驚いた表情をする。

「あれ～さわちゃん？」

「どうしてこんなところにいるんですか?」

すると後ろから懐中電灯片手の平沢と琴吹がやってきた。

「あっ…」

「眩しいから直に照らすな…」

懐中電灯の光を顧問に当てていた平沢が、その光を俺に向け驚愕の表情をする。

「サッくんッ!!」

「…サッくん言うな」

「いつ来たの!? なんで別荘じゃなくてここにいるの!? どうしてケータイがつながらなかったの!? いつ来たの!?」

「……」

相変わらず俺に光をぶつけたままで質問のマシンガンをぶっ放してくる…

つうか同じ質問二回あったぞ…

「唯ちゃん落ち着いて」

琴吹が微笑みながら武装解除を命ずる。

「唯ちゃん…私と咲也くんじゃ随分反応が違うわね…」

「まぁ…唯先輩ですから…」

「ねぇねぇサッくん♪肝試ししようよ♪」

「りっちゃんが色々仕掛けをしてるんですって♪」

平沢と琴吹がニコニコしながらそう告げてくるが、そんなことより気になる点が一つ。

「つうか…アレほっといて良いのか？」

そう告げて真っ白になっている秋山を指差す。

「澪ちゃん！？」

「澪先輩！？」

すぐさま琴吹と中野が白い秋山に駆け寄る。

「先輩！澪先輩！気を確かに！」

「澪ちゃん！大丈夫だから！澪ちゃん！」

「ねぇサッくん、何があったの？
私達、澪ちゃんのすごい悲鳴が聞こえたから急いで来たんだけど」

「この暗闇で突然この人が現れたからな…」

「だって…やっとみんなに会えて嬉しかったんだもん…」

気持ちは分かるが…
その代償に秋山の魂が抜けかけてんぞ…

いや…もう抜けてんなアレは…

――――――――――

「「……」」

琴吹と中野が、秋山の魂を現世に呼び戻し、なんとか秋山は復活を果たしたが、とても肝試しが出来る状態ではないので、このまま肝試しは中止して漸く琴吹家の別荘に着いたのだが…

「「……」」

俺と顧問は絶句していた。

「これがムギちゃんの別荘…？」

「…去年よりデケェじゃねェか…」

俺達の視線の先には別荘があり、それを見て絶句。

顧問は初めて見る琴吹家の別荘に。

俺は去年より豪華になってある別荘に。

「サッくんすごいでしょ！」

「なんで唯先輩が威張るんですか」

全くだ。

「ごめんなさい咲也君…」

「あぁ？」

何故か急に琴吹が謝ってくる。

「去年言ってた別荘は今年もダメだったの…
多少狭いけど我慢してね」

「……」

狭い？これでか？
外見しか見てねェが…

「…十分だろ…」

いや…十分過ぎる…

「ムギちゃん！私と結婚しない！？」

「え？」

突然何言ってんだぶっ飛び顧問。

「あっ　咲也」

「あン？」

戸惑っている琴吹に平沢と中野が何か言ってると、中野に手を引かれここまで戻ってきた秋山が俺を呼ぶ。

「新しい歌詞が出来たんだ、後で見てくれないか？」

「かまわねェが…つうか今日、練習したのか？」

「いや…咲也が来てないから練習は無理だって律が…」

「はぁ…」

確かに全員揃ってねェとバンド練習は無理だが…
個々では出来るだろうが…

まぁ実際、練習はやってねェとは思ったが…それが現実になると…
なんだかな…

……

「お前、黒くなったな…」

別荘の中に入ると判明した事が一つ。

「私、焼けやすい体質みたいなんです…」

それは、中野が『キセ〇の世代』のエースばりの肌色に変化していた事（外は暗かったから気付かなかった）

「あずにゃん、すごく楽しそうに遊んでたもんね～」

「あ、遊んでないもん！」

「でも梓ちゃん、唯ちゃんとりっちゃんと一緒にビーチボールで遊んで楽しそうだったわ～」

「ち、違うもん！あれは律先輩が無理矢理誘っただけだもん！」

「……」

平沢と琴吹の言葉に手を上下にパタパタさせ反論する中野モン。

（デ○モンかよ…）

「……」

我ながら意味不明な事を考えてしまったな…

（つうか…田井中はどうした？）

全く姿どころか影すら見当たらない。

「ねぇそれより、お風呂に入りたいんだけど」

「そ、それより…」

顧問に一刀両断される中野モン。

「あっ　私も入る～♪」

「それじゃあ大浴場がありますから、案内しますね」

「ねぇムギ　その前に咲也を部屋に案内した方が良いんじゃないか？」

「あっ　そうね　」

秋山の言葉に琴吹がポンと両手を叩き、俺に向って言葉を告げる。

「咲也君、部屋に案内するね？」

「あぁ…」

「先生、少し待っててください」

「えぇ、大丈夫よ」

「じゃあ…」

琴吹が歩きだそうとした瞬間…

バンッ！

「「「「「わぁっ！？」」」」」

「……」

突然、別荘の玄関が勢いよく開き…

「みんなっ！なんで勝手に戻ってるんだよ～！」

軽音部現部長の田井中が、何故か右手にコンニャクがぶら下がっている木の枝を持って登場した。

「あっ　律…」

「りっちゃんのこと忘れてたよ…」

「忘れるなぁ！」

平沢の発言に渾身のツッコミをする部長。

（つうか…お前らチョイチョイ田井中の名前を口にしてたっつうのに、忘れてたのか…）

「私ずっと森の中で待ってたんだぞ！」

「すみません律先輩！サク先輩と先生が来たから…」

「へ？…あっ、サク」

「……」

キョロキョロと視線を動かし、俺を見つけて若干キョトンとする。

「それにさわちゃんまで…サクは良いとして…なんでさわちゃんがここにいるんだ？」

「それは、私が顧問だからよ」

（海水浴とバーベキューにつられたからだろうが…）

腰に手を当て堂々としている山中顧問に心でツッコむ。

「ごめんね…りっちゃん」

「う～ん…まぁ　良いけどさ、サクが来たわけだし」

「さわ子先生もだろ」

「つうか…今まで何やってたんだよお前…」

「肝試しを盛り上げるために色々仕掛けを用意してたんだよ、なのにいつまで経っても誰も来ないからさ、別荘に戻ってみたら中から話声が聞こえるし」

前半は得意げな表情だったが、後半からは口を尖らせ文句になる。

「ねぇりっちゃん、どんな仕掛けを用意してたの？」

と、平沢。

「それはだな～私が隠れている近くに澪達が通ったら、こうやって…」

田井中が右手に持っていたコンニャクつきの木の枝を巧みに操り…

ベチッ

秋山の顔面にぶつける…

「み、澪先輩…」

「なんで実践すんだ…アイツは…」

秋山火山が噴火するぞ…

「コンニャクを顔にぶつけて驚かそうと思ったんだよな～」

ケラケラ笑っているが、それが秋山火山噴火のスイッチだったらしい。

「りぃ～つぅ～っ！！」

ガンッ！

「あでっ！」

「はぁ…」

どうでも良いから早く部屋に案内してくれ…

第四十七話（前書き）

合宿編その四です。

第四十七話

「エへへ～♪　あずにゃ～ん♪」

ギュッ

「唯先輩…いい加減にしてください…」

「うんっ！わかった！」

「だったら離れてください…」

「ヤダ～♪」

「うぅ…誰か助けてください…」

中野が救助を求めて周囲に視線を向けるが…

サッ　サッ　サッ　サッ　サッ

「なんでみなさん顔を背けるんですか！」

「だって…な？」

田井中がポリポリと頬をかきながら秋山にパス。

「うん…今は梓のおかげで落ち着いてるし…」

「…解決策が見つかるまで耐えろ」

「だったらサク先輩でも良いじゃないですか！」

「…それはモラル的にパスだ」

「うぅ…ヒドいです…」

現在時刻午後七時三十分。

「あずにゃん♪可愛い♪」

とある事件が発生中。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

昨夜、秋山火山が噴火した後、俺は琴吹に部屋へ案内され、その後女性陣は別荘内の大浴場に行き、俺はもう一つの大浴場で入浴を済ませた。

つうか…別荘内に大浴場があるのは驚きだが、まさかもう一つの大浴場があるとは…

執事がいたり…去年の別荘では露天風呂があったり…そもそも豪華な別荘を二個以上所有していたり…

普段はそんな素振りを全く見せないので、忘れがちだが琴吹はかなりのブルジョワだと改めて認識した。

閑話休題。

入浴の後、俺と顧問のために秋山と田井中が遅めの晩メシを用意してくれていた（田井中が料理のスキルを持っていたのは驚いた）

その晩メシを食べた後、草野球と遭難で疲労ピークだった俺は早々に夢の世界へ旅立った。

ちなみにバーベキューはしなかったみたいだ。
なんでも、俺がいつ合流するか分からなかったので、俺抜きでやるのは悪いという理由らしい。

そして現在八月八日。

「……」

覚醒した俺は洗面所で顔を洗い、歯を磨いた後リビングに向かうと…

「おはよ～サッくん♪」

「おはよう咲也」

「おはようございますサク先輩」

「ハヨ～サク…って言っても、もう昼だけどな」

「咲也君、よく眠れた？」

「昨日は結構歩き回ったから疲れてたのね」

リビングには現在別荘にいる、全ての人物が集合しており、口々にそう告げてくる。

とりあえず…

「あぁ…」

この二文字で全ての会話に返答をする。

「サッくん」

「あン？つうかサッくん言うな」

「今からご飯食べるから、ここに座んなさいな」

平沢がもう何回目になるか分からない俺のブロックワードをスルーして、自分の横の椅子をポンポン叩き俺を促す。

「……」

別に断る理由もないので着席。

「それじゃあ頂きましょう～」

『いただきます』

「……す」

俺が席についたのを見計らった琴吹の発言が合図になり、食材を提供した地球に心より感謝し、一斉にテーブル中央に鎮座している物体に箸を伸す一同。

つうか…

「そうめん…」

テーブル中央に鎮座している白い麺の名称を思わずポツリと呟いてしまう。

「あれ？サッくん食べないの？」

「もしかして、そうめん苦手だったかしら…？」

麺つゆに白の束を投入している平沢が行動を起こさなかった俺に疑問をぶつけ、琴吹が若干シュンとする。

「いや…そういうことじゃねェが…」

「じゃあ早く食べろよ　じゃないと澪が全部食べちゃうわよん♪」

「一人でこんな量を食べきれる訳ないじゃないか」

「美味しいわね、このそうめん」

「このそうめんは名産地のものですから～」

「ねぇねぇサッくん、そうめんの名産地ってどこかな?」

「知るか…」

「奈良県や兵庫県が有名だったと思いますよ」

「おぉ～流石あずにゃんだね♪」

「……」

いや…どうでも良くねェか？

（つうか親父はそうめんを小説に使ったんだろうか…これもどうでも良いな…）

そんなことを思いつつ、箸をテーブル中央に伸す。

……

「よしっ！じゃあ練習するか！」

「はい！」

「……」

昼メシを食べ終えた瞬間に部長から思いもしない発言が…いや、正

しいんだが、てっきり『遊ぶぞ！』的な発言が飛び出るもんだと思ってたから…フリーズし部長を凝視してしまう。

「ん？なんだサク？」

「お前…本物か？」

「失礼だな！私は部長なんだから当然の事を言ったまでだ！」

「昨日と今日の午前中にあれだけ遊んだんだから、練習するのは当然だ」

「澪シーッ！！」

「はぁ…」

どうやら俺が爆睡していた午前中からエンジョイしていたらしい…

「…だからお前は昨日より黒くなってんだな」

「え！？そうですか？」

「あずにゃん、はしゃいでたもんね～」

「はしゃいでないもん！」

「梓が一番楽しそうだったぞ～」

「そんなことないもん！」

「どうでも良いからさっさっと行くぞ…」

「そうだな」

「じゃあスタジオに案内するね？」

「あぁ…」

俺の発言に秋山が頷き、琴吹が案内役をかってでる。

「じゃあ私はお昼寝でもしてわね～」

おい顧問。
アンタは何しに来てんだ。

――――――――――

琴吹にあてがわれた部屋に戻り、テレキャスとアコギを取り、スタジオへ。

ガチャ

「ほぉ…」

スタジオに入ると、まず視界に入ったのは去年以上にグレードアップしたアンプとドラムセットだった。
故に思わず感嘆してしまう。

「サク先輩！」

すると先にスタジオ入りしていた中野が俺の元に。

「すごいですよね！あのアンプ！」

「確かにな…」

「私あんなアンプ使ったことないです！」

キラキラ☆

「……」

眼が『これでもか』と言うくらい輝きを放って俺を見てくる。

つまり早く練習しようということだろうな…

「咲也」

「あン？」

今度は秋山が接近。

「これ、昨日言ってた新曲の歌詞なんだ」

そう言ってピラッと一枚のルーズリーフを差し出してくる。

「……」

それを手に取り内容を確認。

『ふでぺん～ボールペン～』

タイトルを見た瞬間『え？どっち？』という疑問が湧いたが『秋山だからな』という理由で納得。

「ど、どうかな？」

「……」

期待と少し恥ずかしそうな表情で俺の返答を待っている…

「まぁ…うん…良い…と思う…」

「そう？良かった～私としては結構いい感じに書けたから、咲也に

そう言われると嬉しいよ♪」

「あっそ…」

内容は相変わらずの秋山チック全開だったので、俺の中の暗黙のルールである『秋山の歌詞には特に否定はしない』を発動させると、満面の笑みでかなり喜ぶ。

「じゃあ今からこの曲を練習しよう！」

そう意気込んで自分のベースの元に行くレフティベーシスト…

「あの、サク先輩」

「あン？」

「『ふわふわ時間』と『カレーのちライス』と『わたしの恋はホッチキス』って澪先輩が作詞したんですよね？」

「あぁ…」

「私もあの歌詞を昨日見せてもらったんですけど…なんて言うか…澪先輩が書く歌詞って独創的ですよね…」

「そんな歌詞が好きな奴もいるがな…」

「唯先輩ですね…」

「あぁ…」

そんな『好きですこの歌詞』党の一人を見る。

「ギー太～出番だよ～」

なにやらレスポールに話しかけていた…

……

♪…

練習前にテレキャスをチューナーでチューニングしていると…

「ねぇねぇサッくん、あずにゃん」

「サッくん言うな」
「なんですか？」

「前から思ってたんだけど、それなぁに？」

そう言って俺のテレキャスに繋がってあるシールドの先のチューナーと、中野のムスタングのヘッドの先についてあるチューナーを指差してくる、Tシャツに『パラダイス』と書かれた文字をなんの違和感なく着こなしている天然娘。

「何って、チューナーですけど」

「へ～、チューナーって言うんだぁ～」

「……」

平沢爆弾投下。

「えっ!?知らないんですか?」

「うん　サッくん師匠からはなにも」

そう言って俺を見てくるパラダイス平沢とブラック中野。

「確かにそれは教えてねェけど…じゃあお前、今までどうやってチューニングしてたんだよ…」

パラダイス平沢にはギター各所の名称と用途と用語、コードと進行表、ＴＡＢ譜の読み方等は教えたが…
チューニングは教えてなかった…つうか今まで当たり前にギターを弾いていたから疑問さえ湧かなかった…

「え～っとね…こうやって適当に…」

レスポールのペグを軽くいじり…

「ほら」

ジャラァァ…ン

するとどうだろう…絶対音感を駆使してチューニングを済ませ、多分合っていると思う音色がレスポールから。

「えぇっ!?サク先輩!ゆ、唯先輩ってまさか…」

「ほぇ？」

ブラック中野がかなり驚愕の表情で俺を見てくる。

「絶対音感の持ち主だ…」

「……」

ブラック中野絶句。

「絶対音感ってそんなにすごいの？」

「去年、秋山が説明したろうが…」

「忘れちゃった～♪」

「唯先輩って…すごいのかすごくないのか分からない人ですね…」

「…人はそれを『天然』と呼ぶ」

「納得です」

「え？なにが？」

「気にすんな…」

「気にしたら負けだね！サッくん！」

「……」

もう良いっつうの…それ…

……

♪♪♪♪♪…

チューニングを済ませ練習開始。

今演奏している曲は先程秋山が提出した『ふでボール』（勝手に短縮）

この曲は作曲は琴吹がやり、俺は今回ノータッチ。

本当ならば秋の桜高祭のライブで演奏する新曲二曲を俺が作曲する手筈だったが、中野が加わったバージョンの『虹の風景』『桜の木』『ＦＦ』『カレー』『私恋』の作成で中々新曲まで手が回らなかったので、新曲の内の一曲は琴吹が作曲、秋山が作詞ということになった。

♪♪♪…ジャァァァ…ン

「う～ん…サク」

「あン？」

『ふでボール』を演奏し終えると田井中が思案顔で俺を呼ぶ。

「この曲だったらサクはアコギの方が良いんじゃない？」

「そうだな…この曲はエレキ三本より俺がアコギでやった方が纏まるかもな…」

田井中の意見は俺も感じていたのでテレキャスからアコギに持ち代える。

「じゃあこのままサク先輩がリードですか？」

「いや、咲也がアコギを弾くんなら梓がリードをやった方が良いかもな」

「それか少し曲調を変えてみましょうか？」

「…いや、とりあえず俺がアコギで一回やってみる」

「よしっ！じゃあもう一回やるぞ～！」

「おーっ！！」

（パラダイス…お前理解してんのか？）

「ワン・ツー　ワンツースリー！」

♪♪♪♪…

……

現在時刻午後五時三十分。

「ふぅ…疲れたな～…」

「お昼からずっとやってからね～」

結果として『ふでボール』では俺はアコギで演奏することになった。
それから俺が五曲の手直しの合間をぬって作曲した、もう一つの新曲を演奏したが、これはまだ歌詞がなかったりする。

「う～…歌い過ぎて喉が痛い～…」

「大丈夫ですか唯先輩？」

「あずにゃん分が足りないよ～」

「なんですかそれ…」

それから学園祭でやる予定の既存の二曲を練習し…

「咲也、そろそろ練習終わろうか？」

「そうだな…平沢が喉を若干痛めてるみてェだし…

去年みたいになったらコトだ…」

「じゃあ今日の練習お～わり！」

田井中の活発なボイスで合宿二日目にして初の練習は終了。

ガチャ

「あら？練習終ったのね」

「あっ　さわちゃん」

各自が楽器の後片付けをしていると、練習中に全く姿を現さなかった山中顧問が狙ったかの様にスタジオに参上した。

「さわちゃん、今まで何してたの？」

「ずっと昼寝してたのか？」

「失礼ね　みんなのために準備してたのよ」

平沢と田井中の発言に心外そうな表情をする。

「……ちょっとはお昼寝したけど…」

「……」

ボソッと呟いてるがしっかり俺には聞こえぞ…

「先生、準備ってなんですか？」

「いい質問ねムギちゃん！」

そう言って琴吹にビッとサムズアップする。

「みんな、ついてきなさい」

―――――――――

山中顧問に連れられ別荘の外に。
そこには…

「わぁ～♪すご～いっ！」

パラダイス平沢が歓喜の声をあげてしまうほどの…

「さぁみんな！今からバーベキューをするわよーっ！！」

見事なバーベキューセットが出来上がっていた。

「先生が言ってた準備ってこれの事だったんですね」

「そうよ　みんなが練習してる間に食材とかを買いに行ってたの」

中野の質問に希望していたバーベキューを自分で準備したことを暴露する。

しかし良く見ると…

「…準備っつっても全く出来てねェじゃん」

肉や野菜は買ってきたそのままの状態であり、更にはバーベキューの要の火は炭にすら着火してない。

「仕方ないじゃない～全部一人で用意したんだからそこまで手が回らなかったのよ～」

「はぁ…」

まぁ確かにな…

「それじゃあみんなで手分けしてやるか！」

「はい！」

「おっ！澪と梓がやる気に！」

「りっちゃん！私達も負けてられないね！」

「私も頑張るわ！」

「じゃあ頑張ってくれ…」

「コラコラ　サクも手伝うんだよ」

「チッ…」

「舌打ちしないで、ほら野菜切るの手伝え」

「サッくん！共に頑張ろうではないか！」

「サッくん言うな」

この時は『まだ』良かったんだ…

しかし…約一時間後に事件が発生する…

第四十八話（前書き）

合宿編その五です。

第四十八話

ザクザク…

「……」

一年戦争でジ○ン軍が開発した量産型ＭＳの名称みたいな擬音を発しながら黙々と野菜を切っていく。

ザクザク…

「なぁ…サク…」

「あン？」

俺の横で同じく野菜を切っていた田井中が濁音がついたら量産型ＭＳの名称になってしまう田井中専用の呼び方で呼びかけてくる。

「さっきから何してんの？」

「…見て分からんか？」

「いや…分るんだけさ…」

「…じゃあいらん質問すんな」

「そういう訳にもいかないんだよな～…」

「…ンだよ」

「サクさ…なんで切った野菜、全部ボロボロになってんの？」

「……」

田井中の発言に量産型ＭＳの生産を止め、目の前にある原型から遠ざかった姿になってある野菜達を見る。

「サッくん」

「サッくん言うな」

すると、田井中の横で野菜を亡き者に…切っていたパラダイス平沢がブロックワードを口にしながらヒョコっと俺と田井中の間に現れる。

「サッくんって、もしかして料理苦手なの？」

「……」

「あっ　黙った」

「サッくん？」

パラダイス平沢の発言につい口を閉じてしまう。
イカン…このままでは肯定になってしまう…

「ふぅ～ん♪サクは料理が出来ないんだな～♪」

「サッくんの知られざる弱点が明らかに！」

しかし時既に遅し。

田井中がニヤついている表情と、平沢がどこからか取り出したメモ帳にサラサラと何やら書き込んでいる光景が視界の端に映る。

「…だったらお前らはどうなんだ」

やられっぱなしは非常に癪なので反撃の火蓋を切る。

「ふっふっふっ…愚問だなサク！昨日の夜、さわちゃんの分と一緒に晩ご飯を用意したのは誰だったかな？」

「…秋山」

「と私だ！つまり私は料理が出来るんだよん♪」

「……」

確かに昨日の俺と顧問の晩メシで、このカチューシャは料理のスキルを発揮してたな…

「ふっふっふっ…愚問だよサッくん！私はほとんど憂に料理を作ってもらってるから、あまり料理は得意じゃないよ！」

「……」

「唯！それは威張って言うことじゃないぞ！」

何故か堂々と胸を張り、おもしろ発言をするパラダイスに部長が右手を突き出して俺の心情を代弁してくれる。

（しかし…コイツは去年の学園祭じゃあ、焼きそば作ってなかったか？

…あぁ…あれは焼くだけで良かったのか…）

「…本当、愚問だったな」

「ヒド～い！サッくん！」

いや、事実だろ…

「でも唯の切った野菜はサクより断然マシだな」

パラダイスの切った玉ネギと俺が切った玉ネギを見比べて、カチューシャがそんなことを言ってきやがる。

「……」

まぁ…確かに一概に否定は出来ない。

パラダイス平沢の玉ネギはギリギリ輪切りの形状を保っているが、俺のは無惨にも痛ましい姿に変貌している。

「う〜ん…　じゃあサクは澪達の方を手伝ってよ」

「…お前がコレやれっつったんじゃねェか」

「だってさ〜まさかサクが野菜切るのが出来ないなんて思わなかったし
それにコレ以上やったら野菜が全部ダメになる」

「……」

このカチューシャ…腹が立つこと言いやがって…

「りっちゃん、そんなこと言っちゃダメだよ
サッくんだって一生懸命やってるんだから」

「おい」

俺をダメな子みたいに言うんじゃねェぞパラダイス…

「はぁ…」

相変わらずのため息を吐く。

「秋山と中野の手伝いやりゃいいんだろう…」

そもそも俺は望んでＭＳの生産…もとい、野菜を切ってる訳じゃない。
故に放棄できるなら喜んで放棄したいので部長の意見に乗っかっとく。

「うんっ　じゃあそういうことで、澪達の方ヨロシク～」

「ここは私とりっちゃんに任せるといいさ～」

「……」

部長とパラダイスのボイスを背に受け、部長の命令通り素直に足を秋山達のいる別のテーブル…

ガサガサ…

には行かず、テーブルの上に置いてある山中顧問が買ってきたスーパーの袋を漁り、中から缶ジュースを一本取り出して、いざ秋山達の元へ…

スタスタ…

には行かず、そのまま秋山達がいるテーブルの後ろをスルーして別荘内に入ろうとしたら…

「どこ行くんだ咲也?」

おにぎり製作班の秋山に見事にロックオンされた…

「律と唯と一緒に野菜切ってたんじゃないのか？」

「…それはクビになった
だから今からのんびりしようかと思ってな」

ジュースを軽く掲げ、これからの行動指針をおにぎり製作班の秋山に告げる。

「もう、そう言って堂々とサボろうとしない！
ほら、私達と一緒におにぎり作ろう」

「そうですよサク先輩
『働かざる者食うべからず』です」

どこか呆れた様な秋山と遠回しに『サボったら食わせない』と言ってくる中野。

「…『働かざる者ドンと構えろ』と言うことわざがある」

「いや、ないです」

「咲也、そんなことわざ捏造してないで早くコッチに来なよ」

中野が右手をブンブンと高速否定し、秋山がチョイチョイと俺を手招きする。

「はぁ…」

（全く…嫌なことわざがあったもんだ…）

そう思い、秋山の隣に立つ。

……

グッ　グッ…

「……」

語尾に『フ』がついたらジオ○軍が開発したミミズ型の電撃鞭を持つ白兵戦に強い某ＭＳの名称みたいな擬音を発しながら黙々とおにぎりを握る。

グッ　グッ…

「ねぇ…咲也…」

すると中野の作ったおにぎりよりも自分の作ったおにぎりの方がデカいことに嘆いていた秋山が遠慮がちに俺を呼ぶ。

「…あン？」

「あのさ…えっと…」

「…言いたいことがあんなら早く言え」

「う、うん　怒らないでね？」

「あぁ…」

「どうして咲也の作ったおにぎりは…そんなに丸くなってるんだ？」

「……」

その発言に目の前の皿の上にある、中野と秋山のおにぎりと俺が生み出した白の塊を見比べる。

「……」

中野…綺麗な三角形の形状。

秋山…大きさは中野より一回り程デカいが、やはり綺麗な三角形の形状。

俺…大きさは若干秋山よりデカく、形状は何故か円形になり、更にいびつになっている。

「……」

「いやっ！別にこれでもいいよ！わぁ～　すごいな咲也の作ったおにぎりは～！
なんだか咲也らしさが出てるな～！」

「そ、そうですね！サク先輩らしさが出てますよね！」

「……」

黙ったままの俺が落ち込んでると思ったらしく、二人が何やらアタフタしながら必死にフォローしてくる…

しかしな…

「おにぎりだから別に丸くなっても良いんだよ！なぁ梓！」

「はい！おむすびじゃないからこれで良いんですよ！」

お前らの必死のフォローが逆に痛ェんだよ…

……

結局、おにぎり班から自主退職しジュース片手にぼーっと傍観する。

ちなみに山中顧問は火を起こしており…

『私ってばロックだから、こんな火力じゃ全然ダメよっ！』

みたいに意味不明な発言をしながら、炭より自分が燃えてる様子を見て若干引いた。

そして…

ジー…

「……」

先程から視線をガンガン感じる。

まぁ…思い当たる人物は一名程いるんだが…

「はぁ…」

ため息を吐いて視線の発生源に振り向く。

「え～い♪え～い♪」

そこにはポワポワとしたオーラを纏い、ご機嫌な様子で串をフェンシングみたいに俺に向い、軽く突き出してきている琴吹が。

「…何やってんだよ」

ひとまず、最もな疑問を口に出す。

「咲也君、一緒にやりましょ♪」

「…フェンシングの真似事をか？」

「ううん　お野菜とお肉を串に刺すのを♪」

「……」

……

食材分割班、おにぎり製作班をたらい回しされ、行き着いた先は…

「♪♪～」

ご機嫌なおっとりお嬢様が管轄する、食材ぶっ刺し班だった…

ズッ　ズッ…

「……」

語尾に『ゴッグ』がついたら〇オン軍が開発した水陸両用ＭＳの名称になる擬音を発しながら黙々と肉と野菜をバランス良く突き刺していく。

「……」

ズッ　ズッ…

「わぁ～咲也君上手～♪」

ご機嫌お嬢様が俺の作業を見て褒めたたえる。

…つうかバカにしてねェか？

これぐらいの作業だったら流石に人並みに出来るっつうの…

野菜切りとおにぎりは普段は全くしてねェから出来なかっただけで、
こんな単純作業だったら赤子の手を捻るぐらい簡単で容易いわ…

「いいから口より手を動かせ…」

「よしきたぁ～♪」

「はぁ…」

たまにコイツ…フリーダムになるよな（自由の剣のＭＳの意味ではなく）

「♪～♪」

「何が楽しいんだよお前は…」

ハミングしながら嬉々と作業する琴吹についツッコんでしまう。

「う～ん…それはみんなが楽しそうにしてるからかな？」

「はぁ？」

「だって、見て咲也君」

そう言って涙を流しながら玉ネギと格闘するパラダイス平沢とカチューシャ田井中を指差す。

「ほら、唯ちゃんとりっちゃんも楽しそうにやってるし…」

「…そうか？」

辛そうだぞ…

「澪ちゃんと梓ちゃんも嬉しそう♪」

「まぁ…アッチはな…」

仲良さげに米を三角形に変形させるレフティ秋山とブラック中野。

「それに先生も♪」

「……」

あれは…どうだ?
段々と目付きが鋭くなって火力を調節してるしか見えねェが…

「だから楽しいの♪」

「ふーん…」

ぶっちゃけ良く分からんが…まぁいいか別に。

「私、本当に軽音部に入って良かったなぁ～って思うの」

「あン？」

脈絡なく突然何を言い出すんだ…

「だってね？軽音部に入部しなかったら、咲也君に唯ちゃん、澪ちゃんとりっちゃん、それに梓ちゃんと先生、和ちゃんと憂ちゃんとも出会えなかったかもしれないし…」

はぶられたな…修司…

「こんな風にみんなで楽しくて合宿なんて出来なかっただろうから

…」

「……」

「だから私、軽音部に入部して本当に幸せなの♪」

そう告げて俺にニコッと笑いかける。

『軽音部に入部して本当に幸せ』ねェ…

普通ならそんなこと感じないと思うが、去年の合宿時にコイツは『普通』にしたいと言っていた。

こんな些細な光景に幸せを感じるんなら、よっぽどその『普通』に憧れていたんだろう。

ならばもし軽音部に入部してなかったら?

…まぁ、そんなifを考えたって仕方ねェか…

つうか…

「…お前、なんで軽音部に入ったんだ?」

「え?」

実は前から疑問に思っていた。
秋山と田井中は以前ライブＤＶＤを見てバンドを組むきっかけになったと言ってたし、平沢は『軽い音楽と書くから自分でも出来る！』と言う衝撃的な発想で軽音部に。
中野は俺達の演奏に感動し、俺は平沢の付き添いから成り行きと修司の発言で入部したが、琴吹の場合は入部の経緯がさっぱりだ。

コイツはバンドよりクラシックのイメージが強いから『何故軽音部に？』という疑問が俺の中にあった。

「単純な興味本位だ…
深い意味はねェし、答えたくなかったから別にかまわん…」

「クスッ　ううん大丈夫♪」

小さく笑い、口を開く。

「私ね、最初は合唱部を見学しようと思って音楽室に行ったの」

合唱部？何故？

「そしたらそこに澪ちゃんとりっちゃんがいて、りっちゃんが私を勧誘してくれたの『軽音部に入りませんか？』って言ってきて」

「…それでか？」

「それもあるんだけど、その後の澪ちゃんとりっちゃんのやり取りがおかしくって、『なんだか楽しそうだな～』って思ったから私、軽音部に入部したの♪」

「……」

随分と浅い動機だな…

つうか秋山と田井中は何をやったんだ？

謎だ…

――――――――――

現在時刻午後七時ジャスト。

全ての準備が終わり、バーベキューを開始して約一時間。

遂に事件が起きる…

「サッく～ん～♪」

「あン？」

カチューシャから俺が手を加えたおかげで、ほぼ残骸と化した野菜と肉がぶっ刺さった物体を渡され、椅子に座って食していると何やらニコニコしたパラダイス平沢がトコトコとやってきた。

「はい、これ♪美味しいよ～♪」

そう言って渡してきたのは、高級そうなグラスに入ったリンゴジュース。

「……」

「澪ちゃんにもあげよ～っと♪」

とりあえず無言で受け取り、パラダイス平沢は秋山がいる方角にトコトコと歩いていく。

（なんでアイツ…顔が赤くなってんだ？）

そんな疑問を思い、一口リンゴジュースを飲んでみるが…

「……ん？」

違和感が口内を駆け巡る。
味はリンゴなんだが…余計なものが混入している…
これは…

「酒…か？」

恐らくこれはアルコールの類だろう…
つうか何故、酒をパラダイス平沢は俺に渡して……ん？

「アイツ…ジュースと間違えたのか？」

パラダイスは『美味しい』と言っていた。
更に赤ら顔…

いやいや、いくらなんでも天然だと言ってもチューハイとジュースを間違えて飲まねェだろ…

例え飲んだとしても俺みたいに違和感を感じる筈だし…

「あれ？ねぇりっちゃん、私が買ってきたチューハイ知らない？」

「いや、知らないけど」

「おかしいわね～　一本なくなってるのよね～」

「……」

犯人知ってます。

その犯人を確保するために立ち上がり、秋山に接触した犯人の元へ。

「澪ちゃ～ん♪はいジュースだよ～♪」

「ありがとう唯」

「…ちょい待て」

「咲也？」

「サッく～ん～♪」

パラダイス犯人が秋山に酒を渡したところで俺が介入する。

「秋山…それ酒だ」

「えっ!?お酒!?」

「あぁ…」

「えっ!?えっ!?なんで唯がお酒を!?」

グラスを持ってない右手を左右にフラフラさせ、軽くパニクる秋山。

「…多分、ジュースと間違えたんじゃねェの？

パッケージ似てるし…」

「確かに似てるけど…だからって飲んだ瞬間分るんじゃあ…」

「俺もそう思ったが、平沢だしな…」

「そうだな…唯だし…」

「「はぁ…」」

平沢という天然生物なら納得だと互いにため息が。

と…

「サッ～くんっ！」

ギュッ

「おい…」

「唯！？」

突然パラダイス平沢が俺に抱き付いてきやがった…

そして秋山が驚愕の声をあげる。

「離れろ…」

「エへへ～♪」

俺の発言に聞く耳持たず。

つうかお前酔ってんだろ…
赤ら顔だし眼はトロンっとしてるし…

山中顧問が『一本なくなってる』と言ってたから、コイツは一本飲んだ……まてよ？
俺と秋山にも渡してきたっつうことは、一本どころか半分も飲んでねェ筈。

「澪ちゃん♪やっぱりサッくんだね～♪」

「え？何が？」

なのにこんな意味不明な発言する程酔ってやがる…しかもチューハイで…

どんだけ酒に虚弱だお前は…

「とりあえず離れろ…」

「ヤダ～♪」

イラッ

「さ、咲也！お、押さえて押さえて！」

軽くイラついたのが表情に出たらしい、秋山が軽くオドオドしながら『どうどう』としてくる。

すると…

「澪先輩　お肉焼けました…よ…」

「はぁ…」

タイミング悪く中野が肉と野菜を乗せた皿を（これまた高級そうな）持って俺達の元にやってきた。

そして俺とパラダイスの状態を見て、眼を見開きびっくり仰天する。

「す、す、すみません！お、お、お、お邪魔しました！あの！では！これで失礼するです！はい！」

「梓！落ち着いて！」

顔を真っ赤に染め上げ、かなりテンパりながらギクシャクとした動作で立ち去ろうとする。

そんな中野に秋山が手を取るが…

「み、み、澪先輩も行きましょう！ゆ、唯先輩とサク先輩の邪魔しちゃダメです！」

「え！？ちょっと！？梓！？」

逆に秋山の手を取りグイグイと引っ張いていく。

「律先輩とムギ先輩と先生にも邪魔させません！」

「……」

なんだその使命感は？

つうか変な誤解すんなよ…

「あずにゃん…？」

「へ？な、なんでしょう！？」

ここで未だに俺に抱き付いてままのパラダイスが中野の存在に気付いたらしく、ジッと中野を凝視する。

「あずにゃ〜ん♪」

「ニャアッ!?」

俺から中野にターゲットを変更して思いっきり抱き付く。

つか『ニャア』って…

「ねぇ、咲也…」

「あン?」

漸くパラダイスから解放され安堵しながら、ニャカ野が持ってきた肉に手を伸ばしたら、秋山が思案顔で俺を呼ぶ。

モグモグ…

「これって…マズいんじゃないか?」

「いや、うめェぞ」

「お肉じゃなくて…唯のことだよ」

「まぁ…ニャカ野に任せとけ」

「そうじゃなくて！さわ子先生にバレたらマズいっていうことぉ！」

中々俺に用件が伝わらず、遂に声を張り上げる秋山。

「…とりあえずボリューム下げろ」

「ご、ごめん…」

恥ずかしそうに頬を紅く染めシュンとする。

「…で？何がマズいんだ？」

「唯がお酒飲んだことだよ
高校生が飲酒なんて、学校にバレたら一大事になっちゃうよ…」

「……」

そうか…言われてみれば結構重大な事件が勃発してるな…

つまり平沢（未成年）が飲酒した事実が学園に伝わったら、平沢は停学。
そして所属している軽音部は活動停止。
最悪、学園祭出場停止の可能性だって無きにしも非ず。

そしてこの場には、学園からの使い魔がいる…

ピンチだ…

「ヤベェな…」

「うん　だからさわ子先生にバレないように、唯をなんとかしなきゃいけないんだけど…」

「あずにゃ～ん♪」

「や、止めてください！サク先輩に悪いです！」

「あんな状態だし…」

「つうか中野はまだ誤解してんのか…」

「梓には後で言っとくよ…」

「早急に頼む…」

しかし…どうするか…

あの人はあんなでも教師だし。

俺らにはフレンドリーだが…流石に飲酒は厳しいな…

「なぁにじゃれてんだよ梓」

「り、律先輩助けてください！」

すると部長が登場し中野が救難信号を送ると…

「りっちゃ～ん～♪」

「うわっ！？なんだよ、いきなり！？」

何故か今度は部長にパラダイスが抱き付く。

「りっちゃん…唯ちゃん…」

「うっとりするな～！」

「ムギちゃ～ん～♪」

次は琴吹にターゲット変更。

「は～い♪唯ちゃん♪」

普通に受け入れる…

「…なんだ？アイツも酔ってんのか？」

「ムギは素面だと思うけど…」

俺の言葉に秋山が自信なさげに答える。

すると…

「何か楽しそうなことしてるわね～」

一番来てほしくない人物が一歩一歩着実に足を動かし、俺達の元にやってきた…

「さ～わ～ちゃ～ん♪」

そして相変わらずパラダイスがターゲット変更して思いっきり山中顧問に抱き付くが、もはやどうでも良い。

それよりパラダイスの態度を見て、顧問がどんな反応するか…

「あら？どうかしたの唯ちゃん？」

「……」

普通だな…しかしバレるのも時間の問題…

「唯、どうしたんだ？なんか酔っ払いみたいだぞ？」

「り、律…」

「はぁ…」

なんでお前は核心を簡単に…

「お酒？…唯ちゃん、まさか私のお酒飲んだの？」

マズい…

「ち、違います！えっと…唯は！…お、お酒なんか全然飲んでません！！」

「お前なぁ…」

秋山が発言に思わず手を額に当ててしまう。

フォローのつもりで言ったんだろうが、逆に怪しさ満点だ…

「澪…逆に怪しいって…」

「えっ!?あれ?ど、どうしよう咲也!?」

「はぁ…」

自爆すんなよ…

……

とりあえず田井中、琴吹、中野、顧問にパラダイス平沢が何故このような状態になったのかを俺が説明。

ちなみに中野には秋山がちゃんと誤解を解いてくれたらしい。

「…つう訳だから平沢は自ら酒を飲んだんじゃねェってことだ」

「そうなんですさわ子先生、だから…」

「大丈夫よ澪ちゃん」

「え？」

「わざわざこんなこと、学校に報告なんてしないわよ
それに私は軽音部の顧問なんだから、あなた達の味方よ」

「さわ子先生…」

「……」

どうやら俺と秋山の危惧はいらぬ心配だったらしい。
初めてこの人が顧問で良かったとマジで心から思ったりした。

「まぁ、何はともあれ一件落着だな！」

「…『一件』だけな
まだもう一件残ってる…」

田井中がこの事件に幕を下ろそうとするが、そうは問屋が許さない。
この事態の元凶がまだ…

「おぉ～♪ホタテだぁ～♪」

あんな状態だし…

「状況は飲み込めましたけど…唯先輩、どうするんですか？」

「そうだよな～…
さわちゃん、どうしたら良い？」

「そうね…酔いを覚ますには時間が経つのを待つか…
何か衝撃的な事を起こすか…」

（衝撃的ね…修司を蹴る…普通だな…）

必要な時には絶対に現れない奴の協力を得ようとするが、衝撃的ではないので却下。

「あぁ！そうだ！サク！」

「あン？」

「笑顔だよ！サクの笑顔を見せれば唯の酔いが覚めるって！」

「……」

何言ってんだこのカチューシャは？

アホらしい…

そんなもんで解決できるんなら、是非とも法律で制定してもらいたいものだ。

全く…くだらねェ…

「咲也の笑顔…」

「ちょっと見たい…かも」

「サク先輩の…」

「そういえば咲也くんの笑顔なんて見たことないわね…良いんじゃない？その作戦！」

「おい」

なんで賛同してんだよ…

「さぁサク！」

「やらねェぞ」

「そう言わずにさ、唯のため「みんな～♪」って唯？」

すると俺にとってはタイミング良くパラダイス平沢がスネークインしてきた。

「平沢　唯！一発芸をやります！」

「え？唯先輩？」

「突然なんだ…」

スネークインしてきたと思ったら急に敬礼して、一発芸だ？

「ではいきます！カスタネット！」

カスタネット？

「うん♪たん♪うん♪たん♪…」

「……」

左手に持ってるのは…あれはホタテの貝殻か？
それを右手で叩き、何やらリズムを取ってんのか、酔ってんのか不明だが体をゆらゆらしている…

「うん♪たん♪うん♪たん♪はいっ！みんなも一緒に！」

『えぇっ！？』

「……」

恐ろしい…実に恐ろしい命令をしてきやがる…

「ちょっ！待て唯！」

「わ、私達は遠慮するよ！」

「う、うん♪た…」

「ムギ先輩！？」

「すんなよ…」

「唯ちゃん！私達のことは良いから楽しんでて！」

「わかった…サッくん！あずにゃん！一緒にやろうよ！」

「なぁ！？」

「矛盾すんな…」

……

「エヘヘ～♪　あずにゃ～ん♪」

ギュッ

「唯先輩…いい加減にしてください…」

「うんっ！わかった！」

「だったら離れてください…」

「ヤダ〜♪」

「うぅ…誰か助けてください…」

中野が救助を求めて周囲に視線を向けるが…

サッ　サッ　サッ　サッ　サッ

「なんでみなさん顔を背けるんですか！」

「だって…な？」

田井中がポリポリと頬をかきながら秋山にパス。

「うん…今は梓のおかげで落ち着いてるし…」

「…解決策が見つかるまで耐えろ」

「だったらサク先輩でも良いじゃないですか！」

「…それはモラル的にパスだ」

「うぅ…ヒドいです…」

現在時刻午後七時三十分。

「あずにゃん♪可愛い♪」

とりあえず脳内が本当にパラダイスになった奴を中野に強制的に押しつけ、迫りくるカスタネット地獄から難を逃れた。

「でも…唯ちゃん、どうしたら…」

「う〜ん…やっぱりサク「却下」ぶぅぶぅ〜」

「時間が経つのを待つしかないわね〜」

「…それまで中野の精神が持つか？」

チラッと中野を確認すると…

「……ぅ」

ゲッソリしていた。

「澪〜なんか良い案ないか？」

「そうだな…」

田井中の言葉に顎に指をかけ思案顔になる秋山。

すると…

「そうだ…」

閃いたらしく、おもむろにケータイを取り出す。

「どうしたの澪ちゃん？」

「和に電話してみる」

「……っ」

「なるほど…」

琴吹の問いかけに答えた秋山の回答に納得。
真鍋はパラダイスの保護者（幼馴染み）だし、もしかしたらこの状況を打開出来る策があるかも知れない。

つうか…

「……」

なんで田井中は若干ふてくされてんだ？

「あっ　もしもし？和？…うん、私…」

「…なんだよ…」

「あぁ？なんか言ったか？」

「別に…」

真鍋に電話する秋山。
それを見て何やらポツリと呟く田井中。
そして俺の質問に素っ気無い反応をする。
意味不明だ。

……

「…分かった、やってみるよ…うん、じゃあまた」

どうやら真鍋との会議が終了したらしい、パタンとケータイを閉じて俺達に向き直す。

ちなみに田井中は何故かふてくされたままだ。

「…で？真鍋は何だって？」

田井中の態度には多少疑問を持つが、今はパラダイスをなんとかするのが優先だ。

「うん、『子守歌』を聞かせたらどうだって、和が」

「はぁあ？」

秋山が…いや真鍋が放った衝撃発言に思わず、すっとんきょうな声をあげてしまった…

子守歌？
何故？

（これは真鍋流のボケなのか？
だとしたら分りにくいな…）

と、そんなことを思っていると…

「♪ね～んねん～ころ～り～よ～おこ～ろ～り～よ～♪」

「いつの間に…」

気が付けば琴吹が中野に抱き付いたままのパラダイス…平沢にゆっくりと背をさすり、真鍋考案の子守歌を実行に移していた…

そして、その効果は…

「すぅ…すぅ…」

寝たよアイツ…

「すごいわね真鍋さん…」

「いや、平沢もスゲェと思うスよ…」

「確かにね」

苦笑いを浮かべる山中顧問。

まぁ、これで本当に一件落着…

「さすが和だな」

「……」

「律？」

…になるのか？

それとも一難去ってまた一難…か？

第四十九話（前書き）

合宿編完結です。

第四十九話

あの後、眠ってしまった平沢を山中顧問が別荘内に運び、残った俺達はバーベキューの後片付けをして別荘内に。
リビングで琴吹が淹れた紅茶を片手に俺はテレビに、女性陣は和気あいあいと談笑と、それぞれ思い思いに時間を過ごした。
ちなみに田井中は普通の態度に戻っていた。

閑話休題。

時計の長針が十二に、短針が九を指したところで、入浴して部屋に行き…

「う～ん…」

部屋にある机の上にある白紙のルーズリーフの前で俺は唸っていた。
その理由は至極簡単。

「…思い付かん」

新曲の歌詞が全く思い付かないのだ…

……

シャーペンをクルクル回したり、意味もなく部屋を歩き回ったりしたが、歌詞が浮かんでくる気配はさっぱり皆無。

悩み過ぎて知恵熱が出てきそうだ…

「はぁ…」

ため息を吐き、何となしにケータイで時刻を確認して愕然とする。

【ＰＭ１１：３１】

「マジかよ…」

どんだけ唸って悩んでんだ俺は…

（いっそ秋山にまる投げする…）

という思考を脳内でメラ◯ラの能力で炎上網を発動させて燃やし尽くし…

「はぁ…」

再びため息を吐き、気分転換をはかるために何か飲み物を入手しようと部屋から出ていく。

……

この時間帯にもなれば全員ドリームワールドにいるらしく、廊下は全ての光を闇が吸入し、薄暗く音がしない世界にその姿を変えてい

た。

「……」

ふと窓から外を見上げれば、夏の夜空に無数の星々が乳白色に淡く煌めき、天の川を形成していた。

そんな世界を冷蔵庫があるキッチンに向け歩く。

『キャベツうめぇ～…！』

「……」

とある部屋を通過しようとしたら、室内から意味不明な声が聞こえてきたが『気にした負け』精神でスルーして目的地を目指す。

「ん？」

すると闇の中に光を放つ場所が俺の視界が捉える。

その場所とは別荘内にあるスタジオ。

「……」

『誰かいるのか?』『電気の消し忘れか?』という二つの疑問が浮かんできたので、忍び足でスタジオに近付き、その小窓から中の様子を伺う。

「……」

そして絶句。

スタジオには二つの人影があり、その二人が抱き合って床に倒れこんでいた。

ズバリ平沢と中野だ…

平沢が満面の笑みで中野に頬擦りし、対する中野は満更でもない表情をしていた…

『……ぁ』

と、ここで中野とバッチリ視線がぶつかる。

ペコリ

『邪魔して悪かった』
『続きをどうぞ』
という意味を込めて一礼し、その場を立ち去ろうとしたら…

バンッ！

「サク先輩！！」

勢いよくスタジオの扉が開き、満更顔から一変し、慌てた表情の後輩が出てきた。

「…寝てる奴がいるからボリューム下げろ」

「あっ　すみません…」

「じゃあな…」

「ま、待ってください！」

「いや、何も言うな…それもまた然りだ…」

「何がですか！？」

「…お前らが良いなら別に良いんじゃねェの？」

「ち、ち、違います！サク先輩は勘違いしてます！」

「世界は広いからな…それもまた然りだ…」

「だから！サク先輩！」

「琴吹の名言を借りるなら『本人同士が良いなら良い』だ…心に刻んどけ」

「違いますーっ！私は唯先輩にギターを…」

「あんまりああいうのは自粛しとけよ…　特に琴吹の前じゃな…暴走しかねん…」

「話を聞いてくださーいっ！！」

顔を真っ赤に染め上げ両手とツインテールを上下にパタパタさせる平沢のパートナー。

と…

「どうしたのあずにゃん？急に飛び出して」

スタジオからヒョコっとパートナーが現れた。

「あっ　サッくん♪」

「…よう」

平沢が俺を見てニコニコしながら禁句を口にするが、それにツッコむことなく対応する。

「唯先輩からもサク先輩に言ってください！」

「ほぇ？なにを？」

「私達がさっきまで何をしていたかをです！」

「あずにゃん、あんまり大きな声出したらみんな起きちゃうよ？」

「そんなことより言ってくださいぃ！！」

「う、うん…」

中野の勢いに押された平沢が俺に向き、口を開く。

「えっとね…私が難しくて出来ないって言ったら、あずにゃんが『ゆっくりでいいよ』って言ってくれてね…そしたら上手くいって…すごく気持ちよかったんだぁ～♪」

「ニャアァ!?」

「……」

ペコリ

平沢の恍惚感満載の発言に…

『末永くお幸せに』

『今度からは周囲に注意を配れ』

という意味を込めて二人に一礼。

「唯先輩！何言ってるんですか！」

「え？だから気持ち良かった…」

「違いますぅ！！」

「さて、寝るか…」

「サク先輩も何事もなかったみたいに立ち去ろうとしないでください！」

「あずにゃん、シーだよ？」

「少し黙っててください！」

「えぇ！？あずにゃ～ん…」

「お前、伴侶にむかってそりゃねェぞ…」

「だーかーらーっ！！」

……

「まぁ、分ってたけどな…」

「ヒドいです…サク先輩…」

あまりにも中野が必死に俺を引き止めるのでスタジオ内に入り、この場所で何があったのかを説明を受けた。

夜中に眼が覚めた中野は俺と同様にスタジオに光が灯っているのを発見し、中を覗くと『ふでボール』の楽譜を見てギターの練習をしている平沢を発見。

そこで中野が平沢の練習に付き合い、リフの手本を見せるがそれでも上手くいかないのでスローペースで弾いたら良いというアドバイスを送ったところ、見事に成功。
感極まった平沢が中野に抱き付き、その場面を俺が目撃。

と説明を受けたが、大方そんなとこだろうとハナから思っていた。

「分かってたんなら最初からそう言ってくださいよ…私一人が慌て

てバカみたいじゃないですか！」

ぷくっと頬を膨らませ、ジト眼で俺を見てくる中野。

「…お前が晩メシの時に、俺と平沢を訳分らん誤解するのが悪ィ」

「…要するに仕返しですか？」

「…そう捉えてかまわん」

「もう…疲れました…」

本当に疲労感たっぷりにそう告げてうなだれる。

「…つうかお前、酔いは覚めたのかよ？」

「ほぇ？」

俺の問い掛けにコテンッと首を傾げる、『ラッキースター』と書かれたTシャツをなんの違和感もなく着こなす平沢。

「さっきあずにゃんにも聞かれたんだけど、よく覚えてないんだよ…」

「はぁ？」

「唯先輩お酒を飲んじゃた事、全然覚えてないみたいなんです」

「……」

たった少量のアルコールを摂取して酔っ払いになった事など、忘却の彼方に大遠投したか…

「気が付いたら布団で寝てて、それからお風呂に入って、眠たくないから練習しようとしたら、あずにゃんが来たの」

「ふーん」

自分の身に起きた出来事を忘れ、それからの行動を説明するが…どうでも良い。

「ねぇ私、みんなに迷惑かけちゃったかな…？」

「…カスタ「いえ！全然迷惑なんてかけてないですよ！」…」

若干落ち込んだ様子のラッキースター平沢からの質問に『カスタネット地獄を俺達にやらせようとした』と口に出そうとしたが、中野がそれを遮る。

「そっかぁ♪良かったぁ～♪」

「はい！」

「……」

ラッキースター平沢に過ぎた事を後悔させないためか…
やっぱコイツの方が先輩らしいな…

「ねぇねぇ、サッくん」

「あン？つうかサッくん言うな」

「…サク先輩も諦めないなぁ…」

もはやデフォルトになりつつある俺とラッキースターのやり取りに
中野がボソッと呟くが…しっかり聞こえてんぞ。
つうかお前自身はそのあだ名で納得してんのか？

「サッくんはまだ起きてたの？」

「あぁ…」

「何してたんですか？」

ラッキースター平沢とブラック中野のダブルクエスチョンに特に捻りを加えずに普通に答える。

「…歌詞考えてた」

「サク先輩が作った新曲の歌詞ですか？」

「あぁ…」

「わぁ～♪見せて見せて～♪」

ラッキースター平沢が両手を差し出し、爛々とした表情で提出しろと言うが…

「…まだ出来てねェよ」

「そうなんだ～…ガックリ…」

俺の発言を聞いた瞬間、そのままのポーズで頭を下げ落ち込む。

「あっ　そうだ！」

しかし次の瞬間には立ち直る。

忙しいなコイツ…

「みんなで考えればいいんだよ！」

「…詞をか？」

「うん♪」

「それ、おもしろいかもです！」

「でしょでしょ～」

「……」

確かにな…

三人寄れば文殊の知恵なんていう言葉があるし…

現在この場には三人いるが一人は天然だしな。

「サッくんの悩みはみんなの悩みだよ！」

「え？なんですかそれ？」

「……」

『お前の物は俺の物』みたいなジャイアニズムを発動させんなよ…

―――――――

合宿最終日の八月九日。

現在時刻午前九時ジャスト。

「……」

俺の前には…

「がんばるぞーっ！」

本日は『アイデンティティー』と書かれてTシャツの平沢。

「…自分を愛しちゃおう…他人を可愛がっちゃおう…」

ブツブツと思案顔で何やら呟いてる秋山。

「澪～？何言ってんだ～？」

そんな秋山にツッコむソファーの上であぐらをかく田井中。

「なんだかワクワクするね♪梓ちゃん♪」

何故かワクワクさんになって隣に座っている中野にパスする琴吹。

「私はちょっと緊張します…」

若干固くなってピシッと四肢を揃えて座る中野。

スタジオ内には、アイデンティティー平沢の呼び掛けの元、歌詞を考える精鋭（？）が勢揃いしていた。

「はぁ…」

些か不安な人材にため息を吐き、精鋭達が座っているソファーの前に、スタジオ内にあったホワイトボードを移動させ…

「…それじゃあ、各自思い付いた奴から言ってけ」

『第一回みんな歌詞を考えよ～う』（平沢命名）を始める。

「はい！」

俺が宣誓の言葉を吐いた瞬間に、いの一番に勢いよく挙手する人物が…

「秋山クン…」

とりあえずホワイトボード専用のペンで自信たっぷりに左手を高々と上げた秋山を指し示す。

「『一緒に泳ごう白鳥さん』ってどうかな?」

「……」

出鼻くじかれた…

『どうかな?』ってそりゃ俺が聞きてェよ…

とりあえず…

キュ　キュ…

ホワイトボードに書き込む…

「はぁ…　次」

「はい!」

「……」

またお前か…

「『わたしに見せてほしいな　その羽を　ねぇ孔雀さん』はどうかな？」

「……」

なんで嬉しそうに生き生きと言える？

キュ　キュ…

「次…」

「は～い♪」

「琴吹クン…」

もっとも思考が読めんお嬢様をペンで指す。

「能ある鷹は爪隠す！」

「……」

なんだその鳥類シリーズは？
まぁ…マシ…か？

キュ　キュ…

「爪…そうだ！はい！サク先生！」

「田井中クン…」

誰が先生だ。

「爪が冷たい！」

「ダジャレですか？」

「……」

もうツッコまねェぞ…

キュ　キュ…

「はい！サッくん先生！」

「平沢クン…」

「皿がさらわれた！」

「もう！真面目に考えてくださいよ！」

キュ　キュ…

「あずにゃんのいけずぅ～…」

「そう言う梓はなんか考えてるのかよ～」

「そ、それは…」

「今から五秒以内に言うこと！」

「えぇっ！？」

「五～…」

「ご、ご、ご…」

「四〜三〜二〜一…」

「ご、五臓六腑に染み渡るっ！！」

「……」

ここにきて一番の問題作が飛び出たな…

「あずにゃん、それはないよ〜」

「だ、だって！律先輩が急かすから！」

「むむっ！私のせいにするのか〜！」

キュ　キュ…

「だってそうじゃないですか！って、サク先輩も書かないでくださいよ！」

「はい！咲也！」

「秋山クン…」

「『あなたの心の地図にマークを　わたしは翼で飛んでいくわ』これ、良い感じだと思うんだ♪」

「ソウダナ…」

キュ　キュ…

「サク…やけくそになってないか？」

「次、田井中クン…」

「えっ？指名された…」

「頑張ってりっちゃん！」

「ファイトだよりっちゃん！」

「え〜っと…『自分を許そう　他人も許そう』」

キュ　キュ…

「それ、さっき私が考えてたのじゃないか」

「それにアレンジを加えたんだよ」

「澪ちゃん、他になにかない？」

『好きですこの歌詞』党の平沢議院が何故か党首にキラーパス。

「うん　まだあるよ
『綿菓子よりあまいメロディー』『飛んでいっちゃえ　キミのもとへ　わたしのぴゅあぴゅあはーと』とか」

「すご〜い澪ちゃん！」

「ありがとうムギ♪」

「はぁ…」

カオス到来だ…

……

その後…

『ダイエットのリバウンドには気をつけましょう』ｂｙ琴吹。

『レッドカード一発退場！』ｂｙ田井中。

『しかしギリギリセーフ！』ｂｙ平沢。

『ピックを掴む』ｂｙ中野。

『イチゴを食べたらいつでも夢の国へ飛んでいっちゃうの』ｂｙ秋山。

等のカオスなフレーズが飛び交い、これ以上は『危険』と判断した俺が強制的に終了させ…

♪♪♪♪…

只今練習中。

そして…

……

現在時刻午後十二時ジャスト。

「さ～てと！練習終ったことだし…」

「あそぼ～っ♪」

カチューシャとアイデンティティーが高らかにまさかの『遊ぶ』宣言。

「何言ってんだお前ら…」

「サクこそ何言ってるんだ？」

いやいや…真顔でお前こそ何言ってんだ…

「今まで散々遊んだじゃないか！」

「そうですよ！特に初日なんか一日中だったじゃないですか！」

「つうか…今から遊んだら合宿の大半の時間は、遊びに費やされてんぞ」

初日は先程中野が言った通り、一日中エンジョイしてたらしいし、
二日目は約五時間の練習。
最終日は九時から十時までカオスを満喫し、それから約二時間の練習。

三日間での練習時間トータル七時間。

他の部活の合宿だったら、三日もあればこれ以上の時間で練習してるとこだ。

「でもでも今日の夕方には帰っちゃうんだよ？」

アイデンティティー平沢の反撃。

それを皮切りに…

「そうだぜ～澪！サク！梓！

こんなリゾート地、中々来れないんだから楽しまなきゃ損だ！」

部長参戦。

「今まで十分満喫してたんじゃねェのかよ…」

「甘いよサッくん！

今までも楽しんだから、今日もだよ！」

「どんな理屈だそれ…」

つうかこれ…デジャブだ…

去年もあったぞこんなやり取り…

「はぁ…　埒が明かん…」

「咲也、梓」

「あン？」

「はい？」

すると秋山がチョイチョイと手招きし、俺と中野を呼ぶ。

「……」

とりあえずそれに従う。

「（多数決で決めよう）」

カチューシャとアイデンティティーに聞こえないように小声でそんな提案を。

「（多数決ですか？）」

「（うん　私と咲也と梓は練習をするに手を上げる）」

「（…平沢と田井中は当然反対に手を上げる…か？）」

「（うん　その通り）」

「（でも、ムギ先輩は？）」

「（大丈夫　ムギなら私達に賛成してくれるよ）」

そうか？アイツ結構フリーダムだし…

つうか仮に琴吹が反対派に賛同しても、それじゃ三対三になるだけだぞ？

そこんとこどうするか考えてんのかお前？

「なぁにコソコソしてんだよ？」

「まさかお昼ご飯の話し合い！？」

相変わらずズレてんなアイデンティティー平沢。

「コホンッ！それじゃあ今から多数決を取ります」

「……」

もはやツッコむまい…

例え秋山がノープランだったとしても…

「私は練習をする」

「「遊ぶっ！」」

「練習が良いです」

「…右に同じ」

これで練習派が三人。
反対派が二人。

そして…

「遊びたいで～す♪」

「「まさかの裏切り！？」」

琴吹がにこやかに反対派に賛成し、秋山と中野が声を揃えて驚愕する。

「あ…でもこの場合どうするんだろう…」

「はぁ…」

秋山の言葉にツッコミではなくため息を吐く。

やっぱ抜けてるとこあるなコイツ…

「へっへ～ん！そりゃあ遊ぶに決まってるだろ～！」

「なんでだよ…」

なんか色々疲れてきたので疲労感を漂わせながら、自信満々に告げる田井中に問い掛ける。

「だって私は部長だぞ！この場合は部長がいる方の意見を汲むもんだ！」

「よっ！りっちゃん部長！」

「そ、そう言うなら咲也だって副部長だぞ！」

「澪先輩…それは弱いです…」

「……」

俺の代弁を感謝する中野。

――――――――――

結局午後からは海で遊ぶ方針になり、昼メシのＴＨＥそうめんを食った後、女性陣は着替えやら準備のために一旦部屋に。

俺は部屋でカオスなフレーズをなんとか歌詞に変換しようとしたが、平沢と田井中、ついでに琴吹が口を揃えて『ダメ！』と言ってくるので渋々参加するハメに…

「はぁ…」

と、高校生になってから何度目かも分からないため息を吐き、リビングを通過してダラダラとビーチに向かおうとしたら…

「咲也く…ん…」

「あン？」

リビングのソファーでグッタリと横になっていた山中顧問が弱々しく俺を呼ぶ。

「今から…何するの…？」

「…遊ぶらしいッス」

実はこの人、二日酔いで参ってるみたいだ。

昼メシの特も一切白い麺に手をつけず、ソファーでグッタリしてた。

「そう…じゃあ…帰る時は教えてね…それまで私…ここで横になってるから…」

「……」

アンタ何しに来てんだよ…マジで…

――――――――――

ビーチに…いや、外に出ると、ジリジリと宇宙に存在する灼熱の星からのプレゼントが俺を焼き付け、気力と体力を奪っていく。

「アチィ…」

そんなプレゼントに少しでも抗おうとビーチパラソルの下に逃避して座り込む。

「……」

ドサッ

『オゾン層よ、もっと膜を厚くして紫外線をカットしろ』と内心地球に愚痴りながらそのまま後ろに倒れこんで、仰向けになる。

そして…睡魔が手招きしてきたので、その誘惑に見事に乗っかりドリームワールドに旅立つ。

……

「…く…せ…ぱ…」

「さ…や…」

「…く……ん…」

三人の人物の声が僅かに聞こえドリームワールドから生還する。

「……」

眼を開けば、ツインテールの後輩が俺を覗き込んでいた。

「あ、起きましたか？」

「……」

「咲也、ケータイが震えてるぞ」

ついで秋山の声が聞こえ、俺のポッケに存在しているケータイが、白〇げのグラ〇ラの能力によって発生した地震ばりに（かなり大袈裟）震えていた。

「咲也君、早く取らないと…」

ラストの琴吹の声でポッケに手を伸ばし、ケータイを取り出す。

【影宮さんチのゴキブリ君】

こんな文字がディスプレイ画面に。

ピッ

「『俺ヒマ』」
「マッサージ…」

「『え？なんだいきなり？…はっはぁ～ん、しりとりだな！ではでは…時差ボケ！』」
「刑事…」

「『じ…地味！』」
「三十路…」

「『じ…事故！』」
「工事…」

「『じ…人生！』」
「意地…」

「『じ…じ…人面魚！』」
「用事…」

「『じ…じ…ジュース！』」
「スジ…」

「『じ…じ…じ…実家！！」
「火事…」

「『じ…じ…じ…じ…重力！！』」
「クジ…」

「『『じ』攻めヤメロォッ！！
そしてすぐに返すなァッ！！』」

「ボリューム下げろ…
つうかお前の負けで良いな…」

「『まだまだ！じ…じ…そうだ！
地震雷火事親父！

どーだ！『じ』返しだ！』」
「十字…」

「『ノオォォォォッ！！まさかの『じ』返し返し！！』」

うるせェな…
頭を抱えて悶えるアホの姿が眼に浮かぶ…

「『クソッ！しりとりはヤメッ！なんか問題出してくれ！』」

「お前の氏名を全部ローマ字に変換しろ…」

「『ほいほい…ちょっと待ってろよ……出来た！』」

「その中のｋとａとｓとｕを使ってお前に馴染み深いある文字を作れ…」

「『えーっと…』」

「答えは『カス』だ…」

「『早ェよ答えッ！てか誰がカスだッ！』」

「ｍとｓとｕとｉを使ってお前に馴染み深い文字を作れ…
ちなみに答えは『虫』だ…」

「『えーっと…って、答え言っちゃったよこの人！
てか誰が虫だァ！！
せめて霊長類に…』」

ピッ

これ以上は俺の鼓膜に非常に優しくないので一方的に通話をシャットアウト。

「……」

更に再びアホからの電話がかかってきたら非常にウザいので、ケータイの電源をダウンさせ、パタンとケータイを閉じる。

「はぁ…」

アホのせいで不愉快な寝起きになってしまったので、ため息でストレスを逃がして体を起こすと…

「今の電話、影宮君から？」

水着姿の秋山が俺を見て、問い掛けてくる。

「あぁ…つうか良く分かったな…」

「だって咲也とあんなやり取りするのって影宮君ぐらいしかいないからなぁ」

『あはは…』と苦笑いを浮かべる。

どうやら修司の騒音ボイスが漏れていたらしい。

メジャーになったもんだな修司…アホのくせに…

「あの～誰ですか？その影宮さんって？」

すると俺の横で体育座りをしている水着姿の中野からのクエスチョン。

「影宮　修司君って言ってね　咲也君の親友なの♪」

「親友じゃねェ」

同じく水着姿の琴吹がニコニコしながらアホの正体を明かすが、即座に否定する。

「へ～そうなんですか～」

無視か…虫だけに…

うわ…くだらねェ…

「梓は影宮君と会ったことないんだっけ？」

「はい」

「いや…お前アイツと遭遇してんぞ…」

「え？いつですか？」

俺の発言にキョトンとする。

「…去年のクリスマス・イヴん時お前、俺達のケーキ買いに来たろ？」

「はい…あっ！まさかあの時のトナカイの人が…？」

「修司だ…」

「あぁ…あの人が…」

水平線を見つめながら苦笑いする。

まぁ…あのトナカイが意味不明な自称コミュニケーションをコイツにしてきたからな…
その反応も頷ける。

「去年って…咲也と梓は会ってたのか？」

すると秋山が少し驚きながら俺達を見てくる。

「はい　去年は友達とクリスマスパーティーをしようと駅前に集まってたら、ケーキを販売してるお店があったんです」

店と呼ぶべきもんでもねェがな。

「そのお店でケーキを買おうとしたら…」

「そこに咲也君と修司君がいたのね？」

「そうです」

「そうなんだ　なんか不思議だな」

「あぁ？」

秋山の発言の意味がさっぱりなので疑問が浮かぶ。

「だってその時会った咲也と梓が、今こうして同じ軽音部にいることって…なんか不思議だよ」

「……」

「そうですね　私が今年の春に廊下でサク先輩と会った時、すごくびっくりしましたよ」

「……」

コッチはあんまり覚えてなかったけどな。

「ホント不思議ね～」

「そういえばさ　私達が唯の家でクリスマスパーティーをしてたら、咲也と影宮君が来て、影宮君がちょっとおもしろかったな」

「うんうん♪ちょっとした騒動になっちゃったのよね♪」

「なんですか？聞きたいです！」

「…警察沙汰になっただけだ」

「えっ！？警察！？」

「あの時はびっくりしたけど…」

「今思い起こせば良い思い出だったわね♪」

「「あはははっ！」」

秋山と琴吹が互いを見合って笑う。
良かったな修司…笑い取れて…アホのくせに…

「お～いっ！」
「みんな～！」

するとキャッキャッとビーチボールでエンジョイしていた水着姿の田井中と平沢が俺達がいるパラソルに駆け寄ってくる。

「あっ　サッくん起きたんだ♪」

「私達がビーチに着いたらサクが寝てるからびっくりしたぞ」

「ンでだよ…」

「暑さにやられて倒れてるのかと思ったから」

「……」

そんな虚弱体質じゃねェぞ俺は…
確かにこの暑さには参ってるが…

「ねぇねぇサッくん」

「サッくん言うな」

「水着は？」

ビーチボールを胸に抱えた平沢が俺の姿を見て首を傾げる。

「持ってきてねェよ…」

そもそも泳ぐつもりなんて更々ねェし…

ちなみに今の俺の格好は下は茶色のハーフパンツとサンダル（サンダルは別荘にあったものを勝手に拝借）上は黒のTシャツ（決してパラダイスやラッキースターやアイデンティティーなど書かれてない）

「え～っ　一緒に泳ごうと思ったのに～」

「だったらコイツと泳いでろ…」

そう言って中野を親指でグイッと指差す。

「じゃあ、あずにゃん行こ～」

「私はいいですよ、ここにいますから」

「へ～♪梓ってもしかしてカナヅチ？」

田井中が『ウププ』といやらしい笑みを浮かべ挑発。

結果…

「そんなことありません！やってやるです！」

ガバッと立ち上がり、安い挑発に乗せられる…

「行きますよ！唯先輩！」

「ラジャー！あずにゃん先輩！」

ズンズンと足音を立てながら海へ向かう中野。
そんな中野に敬礼しトコトコとついていく平沢。

やっぱ先輩後輩逆だな…

「ところでさ澪？」

「何？」

「サクがいるから水着恥ずかしいって言って上着羽織ってたのに、大丈夫なのか？」

「へ？」

田井中の発言にすっとんきょうな声をあげ、ゆっくりと俺を見てくる秋山。

「……」

「ンだよ…」

すると見る見る顔が紅く上気していき…

「バ、バカ律っ！」

田井中をターゲットに火山を噴火する。

「律が言わなきゃ咲也の前でも平気だったのに！！」

「いや～ん♪怒っちゃいやよ澪ちゅわ～ん♪」

「りぃーつぅ！！」

「キャーキャー♪」

ドッドッドッ…

「……」

火に油を…いや、マグマに油を注いだ田井中が秋山を更に激昂させる。

そして逃げ出す田井中とハンター秋山が砂埃を巻き上げ獲物を追う。

いつか言った灼熱の炎天下の下で全力疾走が実現した瞬間だった。

「仲が良いね～澪ちゃんとりっちゃん♪」

「ケンカする程仲が良いっつうしな…」

琴吹の言葉には正にこの言葉がピッタリだろう。

その後…なんとか落ち着いた秋山と、タンコブを作った田井中が帰還し、悠々と泳いでいた平沢が中野を連れて再びパラソルに戻ってきて…

『みんなで写真撮ろうよ♪』

という平沢の発言で秋山のカメラで部員全員で写真を撮り（俺は渋々）帰る時間になったのでリビングでダウンしている山中顧問を半ば強引に復活させ…

「じゃあ帰るか！」

「さらば！我が別荘！」

「唯先輩の別荘じゃないでしょ」

「咲也くん…ゴメン…肩かして…」

「はぁ…　どんだけ飲んだらそんな状態になるんだよ…」

「先生、鞄持ちます」

「ムギ、手伝うよ」

軽音部の合宿は幕を閉じた…

後日、秋山から焼増しされた写真を渡され、見てみると…

満面の笑みで両手でVサインする田井中。

同じく満面の笑みでVサイン…ではなく手を振る琴吹。

若干恥ずかしそうだが、笑顔の秋山。

ニコニコしながら中野に抱き付く平沢。

そんな平沢に満更でもなさそうに笑う中野。

腕を組んでやっぱり不機嫌面の俺。

そんな桜高軽音部の面々が写っていた。

余談だが、この写真を見た山中顧問が、自分がいないと拗ねていた。

第五十話（前書き）

軽音部の危機編です。

→これであってるかな？

第五十話

「フンフン～♪」

「……」

「フ～ン～フン～♪」

「……」

「フンフン～？フフン？」

「……」

「フンフンフ～♪フン♪フン♪フン♪…ヘイッ！ヘイッ！フン♪～
フンフン！ヘイッ！ヘイッ！フ…」

「ウザい」

ドゴッ！！

「ヌグベェッ！！」

本日九月中旬。

合宿と夏休みが終わり、二学期が始まってはや二週間。

ミーン…　ミーン…

外では夏の風物詩の蝉がまだまだ蹶起盛んに残暑見舞いを送り届け…

ジリジリ…

灼熱の天体が季節外れの気温を観測する。

「イダダダ…」

そして、現在の時間帯は放課後であり週一の掃除の時間でもある。

掃除区域の我が教室をダラダラと適当にこなしていると、突然アホがハミングしながら箒を駆使してゴミやちりを掃く。

百歩譲ってハミングは許すが、何故か調子に乗って箒をギター代わりにし、更に調子の乗ったアホは右の拳を突き上げながら叫ぶ。

この厳しい残暑とアホの行為があいまって俺をイラつかせるので蹴飛ばす。

「何するかな～お前は～」

「……」

だがしかしケロッとしてやがる…

その内全く効かなくなり、遂には快楽を感じる様に……うわ…気持ちわりィ…

「何考えてんだ？」

「別に…」

「！…そうかそうか…なるほどな～」

「あぁ？」

何やらアホな事を思ったらしく、腕を組んで『うんうん』と頷く。

「あれだろ？つまり咲也は俺の箏ギターが羨ましかったんだろ？」

「……」

「分かってるって！みなまで言うな！」

ポンポンと俺の肩を軽く叩いてくる。

「ほらよ！箏貸してやるから、思う存分かき鳴しちゃいな！」

「……」

「さぁさぁ！みなさんご注目！今から桐島　咲也による演奏が始まるよ！
実はコイツ…な、なんと軽音部に所属しているギタリストです！
つ・ま・り☆
本家本元正真正銘の箒ギターが聴けちゃいます！」

「……」

「それでは早速…まぁ慌てなさんな、まずは意気込みから聞いてみましょ～」

「……」

グッ…

「では意気込みをどうぞ！」

バギャッ！！

――――――――――

ツッコミどころ満載だったアホの茶番劇に右足に溢れんばかりの力を込め、渾身の蹴りを放った後に同じ班の女子二人と共にさっさっと掃除を済ませた。

その後、気絶したアホを教室内のゴミ箱に頭から突っ込み部活に向かう。

ちなみに女子二人はアホの惨事に一切リアクションしなかった。

「あ、咲也」

すると一階への階段から真鍋が上がってきて、今まさに二階から三階に行こうとしていた俺を見上げてくる。

「今から部活？」

「あぁ…じゃあな…」

「待って」

「あン？」

別段コイツに用事がある訳でもないので、質問を淡泊に返答し階段の一段落目に足をかけて部室に直行しようとしたが、行く手を遮られた。

「部室に行くんでしょ？私も行く予定だったからちょうど良かった」

「…何しに？」

1. 茶か？
2. 菓子か？
3. それとも軽音部に対する重要な用件が勃発したのでそれを伝えにか？

「これを律に渡しに」

そう告げ、スカートのポッケから綺麗な四角に折り畳まれた一枚の用紙を取り出し、ガサガサと広げて俺に見せつける。

「講堂…はぁ…」

『3』大当たり。

その用紙のタイトルは『講堂使用届』

しかしタイトルの最初の二文字で合点がつき思わず天を仰ぎため息が。

「…つまりは学園祭で軽音部が使う講堂の使用許可を…」

「まだ生徒会に出してないの…」

俺の言葉を引き継いだ真鍋が眼を閉じ、今にもため息を吐きそうに部室に向かう理由を告げる。

「はぁ…」

あ、ため息吐いた。

「たく…アイツは…」

「まぁ律も悪いんだけど、咲也も咲也よ」

「あぁ？」

「副部長でしょ　軽音部の」

「俺は副部長になりたくてなったんじゃねェよ…
便宜上仕方なくだ」

副部長のポジションがなければ部活申請が出来なかった訳だし。
つうか部長が勝手に俺を副部長に仕立て上げやがったし。

「理由はどうあれ咲也は副部長なんだから」

「…じゃあお前にやる　副部長のポジション」

「いらないわよ…
ていうか私は軽音部員じゃないし」

「だったら入部しろ
平沢が喜ぶ…」

「無茶言わないの」

無茶じゃねェと思うが…

「とにかく…　律に渡しといてね」

俺に講堂使用届を差し出してくるが…

「お前から部長に渡しとけ…」

「それじゃあ二度手間じゃない…」

俺から部長に渡したら…
『サクが悪い！』
『私は悪くない！』

等々責任を擦り付けてきそうだし。
それは非常に面倒だ。

「…最初から部室に行くつもりだったんだろ？
じゃあ問題ナシだ…」

「はぁ…　もう…」

スタスタと階段を上って行く俺の背後からため息と足音が聞こえてきた。

「そう言えば…唯は大丈夫だったの？」

俺の横に追いついた真鍋が思い出したかの様に口を開いた。

「あン？」

「合宿の時、唯がお酒飲んじゃたんでしょ？
澪から電話がかかってきて驚いたわ」

「あぁ…アレか…四時間ぐらい寝たらケロッとしてたぞ」

「そう…良かった…」

本当に心底安心したかの様な表情をしホッと安堵の息と言葉を漏らす。

（流石は平沢の保護者）

そう思ったのは仕方ないだろう。

あぁ…そういえば疑問があったんだったな…

「つうか…なんで子守歌なんだよ？」

これが疑問。

最初は真鍋のボケかと思ったが、蓋を開ければびっくり。

効果抜群だったし。

「特に理由はないんだけど…なんとなくかしらね」

「……」

ポーカフェイスで意外な理由を語るな…

……

ガチャ

真鍋と共に部室に辿り着き、俺が扉を開く。

「はい！私、頑張ります！」

「…何を？」

部室の中では何故か山中顧問以外全員が床に座り込んでオルガンを観賞していた。
そして部長に肩を組まれている中野の意気込みについ口を開いてしまう。

「ヤッホ～サッくん♪」

（山びこ？）

「ハロ～サク～」

（英語？）

「いらっしゃいませ～咲也君♪」

（店？）

「お疲れ様です　サク先輩」

（ねぎらい？）

「…あ、咲也…」

（瀕死？）

「随分と遅い出勤ね～咲也くん」

（会社？）

俺の入室に気付いた面々に、とりあえず内心で疑問を思い…

「…何してんだ？」

部室に足を踏み入れ鞄を置き、定位置の長イスに座わって背もたれに肘をおき上半身をオルガンを絶賛観賞中の秋山以外の五人に向けて尋ねる。

「去年の軽音部のライブを見てるんだ～」

真っ先に反応した平沢がニコッとしながら俺を見てくる。

よくよく見るとオルガンではなく、その椅子の上に置いてあるノートパソコンに映し出された映像を見ているようだ。

「去年のライブ映像…撮ってたのか…」

「それは生徒会で部活動の記録として撮ってあったの」

俺の疑問に背後から真鍋が答えてくれた。

「和ちゃん♪あれ？いつからいたの？」

「咲也と一緒にいたわよ…」

「……」

まさか幼馴染みからそんな発言されるとはな…

「それで澪、どうしたの？」

床に両手をつきガックリとして瀕死状態の秋山に真鍋がクエスチョンマークを浮かべる。

「いや…去年のライブ…思い出して…」

「あぁ～…」

床に視線を落としたままの秋山。
苦笑いの真鍋。

「あ…」

（講堂の件…田井中に問詰めねェと…）

真鍋がここに来た要件を思い出し…

「おい…」

部長に向け、口を開くがすぐに閉じてしまう。
何故なら…

「……」

その田井中が秋山と真鍋をどこか複雑な表情で見ていたから…

（そういえばコイツ…合宿中にもこんな態度とってたな…）

あの時は確か秋山が酔っ払いに変身した平沢をどうしたら良いか、

真鍋に解決策を相談していた時だったはず。

「あっ　あずにゃん！この後サッくんが歌うんだよ！」

「えっ！サク先輩ってボーカルやったんですか！？」

「そうだよ　サッくんってね歌上手いんだ～」

「この時は唯ちゃん、声を枯らしちゃったから、澪ちゃんと咲也君が歌ったの～」

「そういえば憂が言ってました
唯先輩が学園祭直前で声を枯らせちゃったって」

「うぅ…めんぼくないッス…」

秋山と真鍋…そして田井中のこの態度…

（コイツ…）

確信は得られないが可能性は大だろ。

「はぁ…」

もし俺の考えが『そう』ならば、口を出す事じゃないだろう。
アイツ『ら』の問題だし。
…部に支障を来たす事がないかぎりはな…
そもそも俺はお人好しでもなければ、おせっかいでもない。

「…おい部長」

とりあえずは講堂の件を部長に告げようと再び口を開く。

「……」

「…おい」

「……」

「律先輩、サク先輩が呼んでますけど…」

何やら会話をしている秋山と真鍋を、未だに例の表情で見ている田井中が俺の呼び掛けに答えないので、中野が中継してくれる。

「…え？なんか言った？」

「サク先輩が呼んでますけど…」

「あぁ…」

漸く反応を示した田井中が中野の言葉に…

「なぁんだサク？」

「……」

二カッとした笑みを浮かべ俺を見てくる。
しかしその笑みはどこかぎこちなく、咄嗟に『笑顔』という仮面をつけた様だった…

（はぁ…）

内心でため息を吐くという新たな技を発揮して要件を告げる。

「お前、講堂使用届…出してねェだろ？」

「え？講堂使用届…あっ　忘れてた～！」

俺の発言に僅かではあるが、いつも通りの部長になる。

まぁ…その内容はアレだが…

「学園祭の分、出してないでしょ？」

真鍋が秋山との会話を打ち切り、田井中に講堂使用届を渡す。

「いや～忙しくってね～」

「…ただ単に忘れてただけだろうが」

「うっ…」

図星だったようだ。
言葉に詰まるカチューシャ。

「去年もこんな事あったな…律」

秋山が般若のオーラを纏いながらの発言。

「…ちなみに今年の新歓の時もな」

「そういえばそうだったな…律」

般若のオーラが不気味な笑みを浮かべる。

「サクぅ～…余計なことを～…」

「…事実を言ったまでだ」

田井中が恨めかしく俺を見てくるが、問答無用に切り捨てる。

そして…

ガンッ！

「あだっ！！」

般若からの隕石落下。

（完全に元通りになったみてェだな…）

頭を押さえて悶える田井中を見て、そんなことを思った。

「じゃあ書類、後で生徒会室に持ってきてね」

「あ、悪いな　待たせちゃって」

「ううん　いいわよ」

「和ちゃん、お茶いかが？」

秋山が真鍋に部長の失態を詫び、学園祭のライブ映像を見ていた琴吹が、いつの間にか紅茶の準備をしながら真鍋に問う。

「ゴメン　まだ生徒会の仕事があるからすぐに戻らなきゃ」

「じゃあまたの機会ね」

「うん　その時に」

「……」

しかし紅茶の準備を止めない琴吹…
真鍋はいらねェっってんぞ…
テイクアウトさせる気かお前…

「はい♪咲也君♪」

「……」

俺にかい…

とりあえず受け取る。

「じゃあさ和ちゃん　たまには帰りにお茶しようよ～」

床に座って最前列でライブ映像を見ていた平沢がピョンッと立ち上がって真鍋を誘う。

「分かった　後でメールする」

「うん♪」

平沢との約束を取り付けホープは…

ガチャ

去っていった。

「あ、サク先輩のボーカル見逃しちゃいました」

「…ンなもん見ねェで良い」

もはや誰も見てないノートパソコンに視線を向けようとした瞬間…

「あぁぁぁぁぁっ！！」

「…ッ！」

俺の近く（長イス）にいた秋山が突然大声を発するもんだから、久々に耳キーンに陥る…

「急にどうした澪？」

「誰かパソコン閉じて！この後は…！」

「何かあるんですか？」

「……」

耳を押さえながら思考を巡らせると…ピーンっときた。
退場する際に『桜高祭の悪夢』が発生するんだったな…

だからコイツは慌ててるんだな…
つうか映像に残ってんのか？

「え？え？何があるんですか？」

唯一理解してない中野が、あちらこちらに視線を向ける。

「じゅあ実際に見たら良いんじゃない？」

「さわ子先生！？」

今まで優雅にティータイムを満喫していた山中顧問がカチャリとテ

ィーカップをソーサーに置き、キラリッと眼鏡を煌めかせながらアホなことを…

「な、何言ってるんですか!!咲也だっているのに!!って咲也!」

「…ンだよ…」

あんまり騒ぐな…コッチは耳キーンなんだよ…
お前のせいでな…

「さ、さ、さ、咲也!み、み、見るなぁ!!」

「…見ねェ「大丈夫よ澪ちゃん」…」

顔を茹蛸の様に真っっっっ赤に染め上げた秋山がワタワタしながらかなり慌てふためく。
そんな秋山に見る意思はないと告げて、事態が収まるまで部室の外で待機しようかと思い、行動を起こそうとしたら顧問がスネークインしてきた。

「流石に咲也くんには見せないから♪」

「全然大丈夫じゃないですから！！」

ギター侍？波〇陽区？
懐しいネタするな…

「ということで…唯ちゃん、りっちゃん、ムギちゃん！」

何が『ということ』なのか理解不能の山中顧問がパチンッと指を鳴らす。

「「「ラジャー！」」」

その合図で天然、部長、お嬢様が敬礼し…

「ちょっ！やめろ！離せ～！」

天然と部長が秋山の両腕を掴みズリズリとノートパソコンに手が届かない場所まで引きずる。

「咲也君♪」

「……」

そして最後の一人が、何が楽しいのかニコニコしながら俺に近付き…

「え～い♪」

ピタッ

何とも気の抜ける掛け声と共に両手で俺の視界をゼロに。

今回は力加減バッチリだ。

…そうじゃなくて…いや…だから…俺が退散したら良いだけの事だ

ろうが…

違う…前提が間違ってる…
そもそも見せてやんなよ…
もはや軽いイジメだ…

「じゃあ梓ちゃん、ご覧なさい」

「は、はい…」

「止めろ梓！呪われるぞ～！」

「『イヤアァァァッ！！！！』」

耳キーンから治りつつある俺の鼓膜がノートパソコンからの秋山の悲鳴を捉えた。

ということは…

「み、見ちゃいました…」

「遅かった…」

視界がゼロなので状況は分からんが、中野の恥ずかしそうなボイスと秋山の悲愴が漂うボイスで『桜高祭の悪夢』がしっかりと中野に目撃されたようだ。

「…咲也は…見てないよな…？」

「見てねェよ…」

「大丈夫よ澪ちゃん！私がしっかりガードしてたから！」

「…うん…ありがとうムギ…」

♪ジャガジャン！

「悲しみの澪ちゃん斬りっ！」

♪ジャン！

「おっ　懐しいネタだな～唯」

「…勝手に俺のアコギ使うな」

「サッくんごめんなさい斬りっ！」

♪ジャン！

この時はまだ…歯車は噛み合っていた…

第五十一話（前書き）

軽音部の危機編その二です。

第五十一話

「じゃあ梓が書記でサクが書記長な！」

「え？私…？まぁ良いですけど…」

「書記長ってなんだよ…」

「書記する人の中で一番偉い人！」

いるか？そのポジション？

『桜高祭の悪夢』を目撃した中野と、体験者の秋山が落ち着いたのを見計らい、ホープ真鍋が持ってきた『講堂使用届』を書くために、部員一同プラス顧問でテーブルを囲む。

俺は山中顧問の隣に準備室の物置部屋にあった予備の椅子（琴吹曰く、お客様用）を引っ張り出し陣取る。

「りっちゃん、私はなに係？」

平沢が俺と中野が任命された事に触発されたらしく、部長に尋ねる。

「唯はサクのファン係」

「うわぁ～い！やった「いらん」…ガーンッ！！」

そんな役職は必要ナシ。
故に即座に切り捨てる。

「なんて可哀相なことを…唯、お前はこの不機嫌顔の男に捨てられたんだ…」

「私を捨てないでーっ！サッくーんっ！」

「……」

スルー。

「えっと…使用者は軽音部…」

「先生、紅茶のおかわりどうですか？」

「いただくわ」

「ねぇ咲也、左利きってやっぱり変かな？」

「知るか…」

「うわぁ…全員無視…」

「なんだかむなしいね…りっちゃん…」

やっと気付いたか。

「あの名称って…？」

書記が仕事をこなしているとピタッとペンを止めて顔を上げる。

「バンド名で良いんじゃない？」

その質問に虚無の世界から現実世界に帰還したカチューシャが、テーブルの中央に鎮座するクッキーに手を伸ばしながら答える。

「あ、はい」

（バンド名なんてあったか？）

部長がサラッと解決したが、このバンドに名前なんて確かなかった筈。

『桜高軽音部』は違う。

これは桜ヶ丘高校の軽音部という意味だ。

じゃあバンド名は？

「バンド名ってなんでしたっけ？」

「…決めてねェな」

「…結成してどのくらいですか？」

「…一年以上だな」

「その間ずっと…」

「…無名のバンドだったな」

バンド名と知名度共に…いや、この学校内じゃそこそこ有名らしいな（曽我部先輩曰く）

「いい機会だから今決めるか」

「はいは～い！サッくん書記長！」

「…平沢クン」

このスタイル、恒例になってきたな…

「平沢　唯とズッコケシスターズ＆スマイルブラザー！」
「却下」

「早いよサッくん…」

「いーやサクが正しい！スマイルブラザーは良いとしても…」

良くねェぞ。

「それから前はバツ！
私らはオマケか！」

「はい！咲也！」

「秋山クン…」

別に挙手制じゃねェぞ。
そしてみなぎる自信はなんだ？

「ぴゅあ☆ぴゅあとかどうかな？」
「却下」

「えぇっ！？」

そこまで驚くか…
どんだけ自信あったんだお前…

「も～…　ネタは良いから真面目に考えようぜ～…」

「うぅ…割りと本気なのに…」

「本気でそれかよ！！」

「ほら　人のセンスは色々ですから」

「…だとしてもコイツらのはねェだろ」

「「ガーンッ!!」」

「容赦ないなサク…」

「…だったら今出た二つで決めるか？」

「ナシで」

「「ガーンッ!!」」

……

結局バンド名は一旦保留にし、学園祭まで時間がないので練習をすることに。

「……」

ギタースタンドに立て掛けてあったテレキャスを取り、ストラップを肩にかけてシールドをアンプに繋ごうとしたら…

「ねぇねぇサッくん」

「サッくん言うな」

平沢がレスポールを両手に抱えてトコトコとやってきた。

「最近ギー太の調子が悪いみたいなの…」

「……」

レスポールのボディを優しく撫でながら『調子が悪い』と言う。

「…具体的にどうわりぃんだ？」

「んとね、音の調子が悪いの」

「貸してみろ…」

「ほい」

再びテレキャスをギタースタンドに置き、レスポールを受け取る。

「……」

一目見た瞬間に大きな原因が判明。

てっきりピックアップやジャック、もしくはシールドか電気系統の異常かと思ったが…

「弦が死んでるな…」

レスポールの六弦全てが錆に覆われており、ご臨終されていた。

「……」

レスポールを一旦長イスに立て掛け、ヘッド側からネックやフレットの状態を見る。

「完璧に反ってんな…」

こんな状態じゃ音の調子が悪いのも当然。

「サッくん…目付き怖いよ…」

仕方ねェだろうが良く見ねェと判断がムズいんだからよ…

「サク先輩、分かるんですか？」

「完璧じゃねェがな…」

「すごいですっ！」

あんまりデケェ声出すな…キーンが再発する…

「梓ちゃん、何がすごいの？」

「唯先輩のギターのネックは、見た目は僅かに順反りになってて…極端にネックが反ってたら私にも分るんですけど…」

「咲也がやったみたいな反りの状態を確認するやり方は難しいんだよ」

「はい！だからサク先輩はすごいんですっ！」

だからデケェ声出すなっつうの…

「すご～い！咲也君！」

「流石は私が見込んだ男だな！」

いつだよ？いつお前に見込まれたんだ？

「ボディも汚れてるな…唯、メンテナンスしてないのか？」

いつの間にか俺の周りにワラワラと集まっていた部員が平沢のレスポールの状態を見ていた俺を称賛し、秋山が指紋や手垢で汚れているボディを見て平沢に問い掛けるが…

爆弾落下しそうだ…

「ほぇ？メンテナンス？」

『え？』

「……」

ヒュ～…ドォンッ！！

平沢爆弾落下。

「…首傾げてる場合じゃねェぞ
教えたろうが、メンテナンスのやり方」

弦の交換、弦高の調整、ペグのチェックとトルク調整、フレットのチェック、ガリやノイズの対策等々…

「忘れた！」

「……」

腰に手をあて胸を張り、堂々と残念な報告を。

まぁ…そうだろうとは薄々思っちゃいたがな…

「何堂々と言ってるんですか！せっかく良いギターなのに、これじゃあ宝の持ち腐れじゃないですか！」

「うぇぇ…あずにゃん…」

「大事にしないとダメですよ！」

「だ、大事にしてるもん！」

中野の勢いに押されていた残念な先輩が反撃の一手を放つ。

「一緒に寝たりとか、服着せたりとか…」

「大事にするベクトルが違います！」

「お前アホか」

「サッく～ん…」

「いや、まぁ…唯のフォローは出来ないけど、真顔でピシャリと言ってやるなよサク」

じゃあ何か？
褒めろとでも？
つうか添い寝なんかするからギターが痛むんじゃねェの？

「唯、とにかくちゃんとメンテナンスした方が良いぞ」

「唯ちゃん！私も手伝うから！」

（え？どうやって？）

琴吹がグッと拳を握り締めてやる気の様子に、疑問が湧く。

出来るのかお前？

「咲也君！まず何をしたら良いかしら！」

「……」

ヒュー…　ドォオンッ！！

琴吹爆弾落下。

「…素人がむやみにいじらねェ方が良い」

「で、でも…」

「ムギ先輩の気持ちだけ受け取っときます」

「じゃあ…応援するね！」

勝手にやってろ…

―――――――――

平沢がメンテナンスを俺に頼んできたが専門の人に頼んだ方が良いと説き、それを聞いた平沢が言葉の意味を履き違えたらしく山中顧問に懇願するが『楽器店の人に頼んだ方が適切』と、俺と同意見の発言をし、部活を切り上げて一路『１０ＧＩＡ』に…

「はいは～い到着～」

辿り着く。

「じゃあ私、ここで待ってるから…」

「あン？」

店内に足を踏み入れようとした瞬間に秋山が歩みを止める。

「なんでですか？」

「だって私、左利きだから…右利き用の楽器見ても悲しくなるだけだし…」

「……」

ドンヨリとしたオーラを纏いながらレフティの苦難を告げる。

「あっ！でもほら！澪！」

すると田井中が店頭にあるポスターを指差し…

「なんかレフティフェアやってるよ？」

「え！？」

そのポスターには…

【期間限定！レフティフェア開催中！】

の文字と左利き用のギターのイラストがデカデカと描かれていた。

「ホントだ…」

「近ッ…」

そのポスターに詰め寄るレフティ。

しかし…『そんなに近付いたら見えねェだろ』というくらい詰め寄る。

何かツッコもうかとしたが言うだけ無駄だと悟り、喉元まで出かかっていたツッコミを飲むこむ。

「律っ！早く行こうっ！」

「は～いはい　分かったよ～」

先程のドンヨリはどこえやら、キラキラと眼を輝かせ田井中を促す秋山。
そんな秋山の態度に若干呆れながらも笑顔を浮かべる田井中。

「……」

そして二人はいち早く店内へ。

「どうしたのサッくん？」

「あン？」

睦まじい様子で店内に入っていった二人の背を見ていると、平沢が

俺の顔を覗き込んで首を傾げる。

「…いや別に」

「気にしたら負けだね！」

「アァ、ソウソウ」

「サク先輩、投げやりですね…」

「私達も行きましょ？」

琴吹の発言をきっかけに俺達も秋山と田井中を追うように店内へ。

……

「こ、ここは天国ですか！？」

「違ェよ」

楽器専門の地下に降りると、店内の一角でレフティフェアが絶賛開催中であり、その祭りの前でレフティベーシストが恍惚の表情で座り込んでいた。

「まぁまぁサク、そう言ってやるなって」

「澪ちゃんにとっては幸せなのね」

「左利きは少ないですから」

「へ～そうなんだ～」

「店員さん！ここにあるの全部ください！」

「何言ってんだお前」

「だからそう言ってやるなって」

ヘブンに来たことにより、普段の秋山からでは想像も出来ない程に興奮しており、先程のポスターではツッコまなったが、いかんせんあまりにも普段とのギャップが激しいので、ツッコまざるを得ない。

そんな俺に田井中が苦笑いを浮かべながらやんわりと庇護する。

「…とりあえず、お前は先にギターのメンテを頼んでこい」

「あっ　私も付き合います」

秋山のヘブンに付き合っていても仕方がないので、当初の目的である平沢のレスポールをメンテナンスすることを持ち主に促す。

そして中野が小さく手を上げ帯同をする。

平沢一人だと幾分不安なので、優秀な助手がいた方が賢明だな。

「サッくんも行こうよ～」

何故か俺にも帯同を求めてくるが…

「断る」

スバッと一刀両断する。

「な、なんとぉ！断られた！」

「じゃあ…頼んだぞ中野」

「はい！分かりました！」

なんか平沢が大袈裟なリアクションをしていたがスルーし、俺はやることがあるので…

スタスタ…

と店内を歩き出す。

「あ～ん…サッく～ん」

「ほら行きますよ」

「はぁ～…サッくん冷たいな～」

「まぁ少しぶっきらぼうなトコはありますよね」

「でもでも、そういうトコがカッコいいんだよね～」

「…あの～唯先輩ってもしかして…」

「ん？なぁに？」

「いえ、何でもありません」

「気にしたら負けだね！あずにゃん！」

「そう…なのかな…」

「？　まぁいいや！行くよ～あずにゃん」

「あっ　はい！」

……

向かった先にはピックや弦、シールド、チューナー、エフェクター等々、ギターに必要な備品が売ってあるエリア。

「……」

平沢のために色々と購入…もとい、購入して『もらう』ためにメンテナンスに必要なものを物色する。

「え…っと…」

まずは弦。

（こっちの方が無難か…）

そう思い、スーパー・ライト・ゲージのセットを手に取る。

その後はフレットの研摩クリーム、スイッチ類やジャック等の電気系統のガリやノイズのための接点復活剤のスプレー。
専用のクロスとフィンガー・イーズ等々メンテナンスに必要なものを取っていく。

「……」

そしてある程度揃ったので、部長を捜すために再び店内を歩き出す…が…

「りっちゃん見て見て～」

「おっ　マラカスか～」

「これを学園祭の演奏で取り入れたらどうかしら？」

「もう曲は出来てるから無理だよ
てか、誰がやるんだ…」

「……」

距離にして数十歩のところに部長とオマケに琴吹を発見。
琴吹がシャカシャカとマラカスを鳴らし、フリーダムな発言をしているところに…

「…おい部長」

両手に必要物資を持った俺が介入。

「んあ？なんだサク？」

「…コレ、部費で落とせ」

そう言って両手を少し前に突き出す。

「多いな～…」

「それ、全部唯ちゃんに？」

「あぁ…で？どうなんだ？」

琴吹の疑問に短く返し、両手の物を凝視している田井中に問い掛ける。

「結果から言うと…落ちません♪」

「……」

極上の笑みを浮かべ、コテンッと首を傾げながら拒否しやがった…

「ンでだよ…」

「だってさ～それって個人用だろ？部費は軽音部全員で使うためのものしか使えないので…落ちません♪」

「…じゃあ自腹切れってか？」

結構な額になること必死だぞ…

「唯のためなら仕方ないじゃん」

だったら部費で落とせや…

「ここはファンサービスってことでヨロシク！」

だからアイツが俺のファンなのは了承してねェっつうの…

「はぁ…」

ため息を吐く。

「この頑固カチューシャが…」

「にゃんだと～っ！」

部長に軽く毒をぶつけて精算するべくレジに足を向ける。

「この年中不機嫌顔男ーッ！！」

スルー

「お、お客様、店内ではお静かに…」

「あ…ごめんなさい…」

ざまぁみろ。

……

「いらっしゃいませ」

「……」

部長が店員に注意を受けてるのを背に聞いているとレジに着いたので商品を置く。

ピッ　ピッ…

店員が商品を精算し…

「合計で9，823円になります」

「……」

ほらな…こんな額になるんだよ…
そんな高額をバイトをしてない俺に払えるわけがない…ことはないんだが…

「……」

財布を取り出し中身を確認。

そこには、どこに視線を向けているのか分からない諭吉が一枚…
バッチリと俺を見ている英世が三枚…

「1万円お預かりします」

「…はぁ…」

コレを入手しなければ平沢のレスポールは再びメンテナンスが必要

になってしまい、その度に中々高額なメンテナンス料を支払わなければならない…
アイツがそんな金を持ってるとは思えないので、渋々…俺の諭吉には犠牲になってもらう…

諭吉を店員に差し出した瞬間、心なしか諭吉が、まるで俺の心情を代弁するかのように…泣いていた…まぁそんなことありえねぇんだがな…

「177円とレシートのお返しです」

「……」

諭吉が細かい小銭になって俺の手元に帰ってきた…

さらば諭吉…

……

諭吉の死に若干気落ちしながら部長の元に戻ると…

「紬お嬢様！」

「これはこれは紬お嬢様！」

「あ、どうも～」

「今日はどのようなご用件で？」

「友達の付き添いです」

「それはそれは！」

何故かペコペコと頭を下げる店員に四方を囲まれいる琴吹と…

「ギー太～♪」

満面の笑みで新品同様に様変わりしたレスポールに頬擦りする平沢が。

どうやらメンテナンスが終ったらしい。

「あ、サク先輩」

「…ありゃなんだ？」

呆れながら平沢を見ていた中野が俺に気付き、視線を俺に向けてくる。

そんな中野にヨイショされている琴吹を顎で指して尋ねる。

「ここってムギんチの系列の楽器店だろ？だからだよ」

「あぁ…」

中野ではなく田井中の回答に納得。

そういやそうだったな…

「いや～ムギがいてくれて助かったよ～」

「あン？」

「唯先輩がメンテナンスにお金がかかること知らなかったんです」

「しかも唯はお金持ってないなんて言うし」

「それでどうしようかと思ったら…」

「店員さんがサービスでタダにしてくれたんだよ…ムギを見てな…」

「あぁ…」

再び納得。

「サッくん！ギー太がピカピカになったよ！いいでしょ～♪」

「…ソイツハヨカッタナ」

平沢がレスポールを我が子を自慢するかの様に見せつけてくる。

「なぁ唯」

「なぁに？」

「前から思ってたんだけどさ、『ギー太』ってそのギターの名前か？」

「うん♪そうだよ♪」

「名前つけてたんですね…」

「……」

チョイチョイ平沢が『ギー太』と言っていたが、大方ギターの名前だろうと思っていたので別に驚くじゃないが…
コイツぐらいだろうな…自分の楽器に名前なんてつけてるのは…

「はぁ…」

とりあえずため息を吐き…

「…平沢」

「なぁにサッくん？」

「サッくん言うな」

無駄だとは思いながらも禁句に注意をして先程、諭吉が犠牲になって入手したブツを平沢に袋ごと渡す。

「サク先輩、なんですかそれ？」

「…メンテナンス道具一式」

「えっ？」

俺の発言に平沢が袋を覗き込む。

「サッくんが買ってくれたの…？」

「あぁ…」

「あ、ありがとう！！サッくん！！」

袋をギュッと抱えて少し感動しながら俺に感謝してくる。

「クスッ　サク先輩が買ってくれたんですから、これからはちゃんとこまめにメンテナンスしてくださいね？」

「うんうん！絶対するよ！」

「良かったな～唯」

「うん！ホントにありがとうサッくん！」

「……」

実は自腹額をコイツに求めようかと思ってたんだが…

「エへへ～♪」

言えねェ…
あんなに嬉しそうにしてるから…
言えねェ…

「ちなみにサクよ」

「…あン？」

「いくらしたの？」

「…諭吉が天に召されて、小銭となって帰ってきた…」

「あ～…それはご愁傷様で…」

お前が部費で落としてくれたら俺の諭吉は死なずにすんだんだがな…

……

「それじゃあそろそろ帰りますか」

「「は～い」」

「そうですね」

「……」

やるべき事は終ったので帰路につく。

「…て、あれ？澪先輩は？」

「…まだ天国だな」

そう言って未だにずっとレフティフェアを満喫している秋山を見る。

「その言い方じゃ誤解を招きますよ…」

「えぇっ！？み、み、澪ちゃん！？」

「ほら…」

「大丈夫よ唯ちゃん、咲也君の言葉のあやだから」

「よかった～　もうサッくん！」

「……」

琴吹の言葉に胸に手を当て安堵した後、ぷくっと頬を膨らませ、俺を迫力ゼロの表情で見る。

いや、俺は悪くねェだろ。
勝手に勘違いと真に受けるお前がわりィ。

「…ワルカッタワルカッタ」

「軽いですねサク先輩…」

「んじゃあ澪を呼んでくるから、ちょっと待ってて」

田井中が秋山を呼びに颯爽と歩き出す。

「澪～ほら、帰るぞ～」
「ヤダ」

「ガキかアイツ…」

「仕方ないんじゃないかしら？澪ちゃん、すごく嬉しそうだったし」

「だとしてもだ…」

「みんな待ってんだって」

「ヤダ」

「澪ちゃんが子供みたいな反応を…」

「…お前が言うか？」

「同感です」

「え？どういう意味？」

「も〜う…　澪ちゃ〜ん」

「うわっ！ちょっ！律！」

中々カーニバルから抜け出さない秋山を田井中が襟首を掴んで無理矢理立ち上がらせ、半ば強引に俺達の元に引きずってくる…

「はいは〜い帰りまちょうね〜」

「ヤダぁ〜！」

無理矢理引きずる田井中。
なんとか抵抗して祭りに戻ろうとする秋山。

お互いに逆方向に進もうとするもんだから結果として…

ドサッ

どちらかがバランスを崩してしまう。

「あっ…」

「「澪ちゃん！」」

「澪先輩！」

「……」

バランスを崩してしりもちをついてしまった秋山に、平沢と琴吹と中野が声を上げる。

ギシ…

この時…歯車が少し軋む音がした…

「な、何やってんだよ～澪～」

田井中が軽い言葉をかけるが…

「もう良いよっ！！」

「え…？」

立ち上がり少々デカい声を上げる秋山。

「はぁ…」

少しばかり雲行きと雰囲気が悪くなってきたので…

「おい、お前ら」

「えっ…」

「…咲也…」

「さっさっと店から出るぞ」

あの二人が口論でも始めたら店にも客にも迷惑になりかねんので、店に出るように促す。

「…おら、お前らも行くぞ」

少し呆然としていた三人にもそう促し、俺は先にエスカレーターへと歩いて行く…

「う、うん…」

俺の背に届いたそれは誰の言葉だったか…

―――――――――

現在時刻午後六時。

「よかった～　ギー太がキレイになって～」

「名前つけてたんだな…それ…」

「…チョイチョイ言ってたろ、コイツあれに…」

「そうだな…」

店から出ると開口一番に平沢が口を開く。
その内容に若干呆れる秋山。

「澪ちゃん！サッくん！ソレとかアレじゃなくてギー太だよ！」

「あぁ…ゴメン唯」

「……」

どうでも良いだろうが…

「この後どうする？」

「う～ん、そうだな～よしっ！お茶でも飲んでくか！」

「またお茶ですか…」

琴吹の質問に田井中が答えるが中野が少々ゲンナリする。

「俺は帰るぞ…」

「ノリが悪いな～サクは」

「……」

コイツは見た目いつも通りだが…内心は何考えてるやら…
秋山とは一度も顔を合わせないし…

「あっゴメン　私この後、和ちゃんと約束あるんだぁ～」

平沢のこの発言が…歯車を更に軋ませる原因に…

「えっ！和も来るの！？私も行って良い！？」

「…澪…？」

「……」

その言葉にいち早く反応した秋山に田井中が小さく名を漏らしたのを聞き逃さなかった…

「あ、そっかぁ澪ちゃん、和ちゃんと同じクラスだもんね～いいよ♪」

「ホント！？」

嬉しそうな表情の秋山。

「……」

例の表情の田井中。

「はぁ…」

そしてため息の俺。

「あ、みんなも来る？」

「ううん、唯ちゃんと澪ちゃんとで楽しんできて」

「私達のことは気にしないでください」

「う〜ん…そっかぁ　サッくんとりっちゃんは？」

「帰るっつったろ…」

「…いい…」

視線を落とし、小さく声を出す田井中…

「それじゃあみんな、バイバ〜イ」

「また明日な」

「バイバ〜イ唯ちゃん、澪ちゃん」

「また明日です」

「…じゃあ…」

「……」

元気良く手を振る平沢。

軽く左手を上げる秋山。

ニコニコと手を振る琴吹。

ペコリと頭を下げる中野。

両手を制服のポッケに突っ込み、ふてくされたような態度で小さく声を出す田井中。

ヘッドフォンを首から耳に移動しながら、この態度の田井中に一抹の不安を覚える俺。

「じゃあ行こっか？澪ちゃん」

「うん　そうだな」

そして二人は俺達に背を向けて夕暮れの街中に歩き出した。

「…俺は帰るぞ」

田井中の態度の原因は確信に変わったが、俺には関係ないので平沢と秋山が歩いていった方向とは逆に歩き出そうとしたら…

「待てサク」

「あン？」

何故か田井中に引き止められる。

「ムギ、梓」

「なぁに？」

「はい？」

「今からあの二人を追うぞ」

「「え？」」

「……」

真顔で何言い出すんだ…

「もちろんサクもな」

「パス」

「ダメ」

「あぁ？」

「よしっ！じゃあ行くぞ」

勝手に納得して歩き出す部長。

「あ、待ってりっちゃん！」

「律先輩！」

「……」

歩いていく部長を追う琴吹と中野。

（帰るか…）

それに付き合う義務もないのでヘッドフォンから音楽を流そうとしたら…

「サ～ク～ッ！行くぞ～ッ！」

「咲也君！早く早く！」

「ちょっと！律先輩！ムギ先輩！大きな声出さないでくださいよ！

恥ずかしいじゃないですか！」

「……」

田井中と琴吹がデカい声で俺を呼び、それを中野が注意するが…お前の声もデケェぞ…

「はぁ…」

ため息を吐き、渋々足を田井中達に向ける。

ギシッ…ギシッ…ギシッ…

歯車は回り続ける…

ギシッ…ギシッ…ギシッ…

鈍い音をあげながら…

第五十二話（前書き）

軽音部の危機編その三です。

第五十二話

現在時刻午後六時三十分。

ズズッ…

「美味しい～♪」

「そうですね」

ズズッ…

「ムギ先輩のも美味しそうですね」

「あ、じゃあ食べてみる？」

ズズッ…

「い、いえ！そういうつもりで言ったんじゃ…」

「はい　梓ちゃん　あ～ん」

ズズッ…

「は、恥ずかしいですよ…」

「あ～ん♪」

ズズッ…

「あ…あ～ん…」

パクッ

「美味しい？」

「は、はい…すごく美味しいです…」

ズズッ…

「コラコラ、君達」

ズズッ…

「楽しんでる場合じゃないって
そしてサクっ」

「あン？」

「呑気に紅茶飲んでる場合か！」

「…コーヒーだ」

「どっちでも良いの！
それよりあの二人を見てみろ！」

田井中が指差す先には…

「澪ちゃんと唯ちゃんと和ちゃん？」

「『二人』って言ったろ…
唯はひとまず置いとけ」

「澪先輩と和先輩ですか？」

ズズッ…

「そう！ってサクは人の話を聞く！」

ズビシッ！

田井中が俺の後頭部に手刀を落とす。

そもそも何故…
田井中、琴吹、中野、俺という中々珍しい組合せで俺はコーヒーを、
三人はそれぞれケーキと紅茶を楽しまなければならない？
…いや俺は微塵も楽しんじゃねェが…

「何しやがるテメェ…」

「てゆうか三人共…顔隠せ」

シカトすんな…

「どうしてですか？」

「澪達にバレちゃうじゃないか」

「……」

田井中の突発的な判断で平沢達の後を追って辿り着いたのはとある喫茶店。

その喫茶店に平沢達は入店したのを確認し、少し時間をおいて俺達も潜入。

店内では既に真鍋が来ていたらしく、平沢と秋山とで何やら談笑しており、その隙を突いて某潜入ゲームの蛇の如く、鮮やかに平沢達に気付かれずに席に着く。

ちなみに俺達がいるテーブルと平沢達がいるテーブルは対角線にあり、観察するにはベストポジョンになってたりする。

…まぁ俺にとっては限り無くどうでも良い。

「こう？りっちゃん？」

「そうそう　さっすがムギ！」

喫茶店のメニュー表で眼から下を隠す琴吹にサムズアップする田井中。

「ほらっ　梓とサクも！」

そして自分も琴吹同様にメニュー表で顔を隠しながら俺と中野に命令を下す。

「なんでこんなコソコソと…」

愚痴りながらも根が真面目らしく実行に移す中野と…

「……」

抵抗するのも面倒になってきた俺も渋々命令通りにするが…

「あっ！ダメだ！サクは顔全体隠さないと、眼が怖い！」

イラッ

俺を見ながら驚愕の表情をするカチューシャ。

…命令に従ってやったっつうのに…

とりあえず…

「……」

コーヒーと共に運ばれてきた三つの角砂糖の一つを手に取り…

「りっちゃん、そんなこと言ったらダメよ」

「いや～ついつい～」

左手の人差し指の上に置き…

グッ…

親指に力を込め…

ビュッ！！

対象に向けて解き放つ。

ベジッ！

「いたッ！！」

俺の左手から放たれた弾丸という名に変化した角砂糖は隣に座っているカチューシャのデコに見事命中。

我ながらナイスコントロール。

「いったいな～！なにすんだよ～！！」

メニュー表から手を離してデコを押さえ、若干涙ぐみながら文句を言ってくる。

「…自業自得だ」

「そうですね、律先輩が悪いです」

コーヒーを啜る俺と律義にメニュー表で顔を隠しながら器用にケーキを食べる中野の発言。

「梓～！お前はサクの味方するのか！？」

「味方も何も、律先輩が悪いじゃないですか」

「サクは私に暴力ふったんだぞ～！」

「…どこが暴力だ…」

「立派な暴力だ！」

「りっちゃん、あんまり騒いだら澪ちゃん達に気付かれちゃうわ」

「むぅ…」

何気にこの状況を楽しんでいる琴吹のおかげで渋々といった感じで部長が口を閉じて再びメニュー表で顔を隠し…

「ちぇ…なんか良い雰囲気だな、あの二人」

笑顔を浮かべて談笑する秋山と真鍋を見る。

…つうか平沢は幸せそうな顔して食ってんな…

「なんか探偵さんみたいで楽しいね～♪」

「「「……」」」

相変わらずのフリーダムな琴吹の発言に、思わず言葉を失くしてしまう俺達。

「はぁ…」

ため息一つ。

「つうかお前さ…」

右手で頬杖を突き、左手でケータイをいじりながら（もはや顔を隠すつもりはナシ）田井中に問い掛ける。

「なに？」

そして視線を俺に向けてくる田井中。

「…何がしてェんだよ？」

「え？」

「…こんな遠回りしてねェで、不安なら直接アイツに聞けば良いじゃねェか」

「「？」」

視線をケータイに向けたままの俺の言葉の意味が分からない琴吹と中野は揃って首を傾げるが…

「……」

その意味を理解したであろう田井中は視線を俺から『アイツ』…秋

山に向け黙り込む。

「…私は…別に…不安とかじゃ…」

いつもの活発感は影を潜め、ボソボソと俺に聞こえるくらいのボリュームで呟く。

「まぁ…どうでも良いんだかな」

「どうでも良いって…そんな言い方ないじゃん…」

再び視線を俺に向けては少しだけジト眼で見てくる。

「…つうか別にアイツらが仲良さげにしてたって良いじゃねェか」

「そうなんだけどさ…なぁんかなぁ…」

「はぁ…」

…コイツ…完璧に秋山と真鍋の仲に対して…

「よしっ！突撃！」

「はぁ？」
「「え？」」

突然立ち上がって談笑している秋山と真鍋、至福の表情でケーキをパクつく平沢の元に部長が突入していく。
そんな部長の行動に、声を出す俺と未だにクエスチョンマークを浮かべていた琴吹と中野。

「お二人さ～ん！！仲良いッスねぇ～！！」

「あのアホ…」

店内に響く部長の声に呆れてしまう。
…天の邪鬼か…いや、不器用かアイツは…

「……」

ズズッ…

とりあえずコーヒーを啜る。

「澪先輩、驚いてますね…」

中野の発言にある意味修羅場になりそうな戦況を見てみる。

戦場では突然現れた田井中に驚愕する秋山と真鍋。
さほど驚いてない平沢（恐らく田井中よりケーキに夢中なんだろう）

俺達と戦場は少しばかり距離があるので会話は聞こえないが、秋山が戸惑っているのは分かる。

まぁ…急に現れたら対処のしようがねェよな…

そして田井中が何か言ったらしく秋山と真鍋、軽く風景になっていた平沢が俺達の方を向く。

「あっ！バレちゃいました…」

「…困るようなことじゃねェだろ」

やっぱり律義に顔を隠していた中野が、見つかった瞬間にビクッと肩を揺らし俺に報告するが…どうでも良い。

「探偵さんってこんな緊張感持ってやってたのね…」

「……」

ズレてる…コイツ平沢と同じくらいズレてる…

「あ、咲也君」

「…あン？」

「唯ちゃんが手を振ってる♪」

見ると平沢が何が嬉しいのかニコニコしながら俺達に手を振っており…

「ヤッホ～♪」

負けじとこちらも琴吹がやり返す。

「ムギ先輩…楽しそうですね…」

「ほっとけ…」

「ていうか律先輩、いきなりどうしたんでしょうね？」

「……」

ズズッ…

「咲也君は何か知ってるような感じだったけど…」

いつの間にかほのぼの同士とのコントを終えていた琴吹がジッと俺を見る。

「そういえば…」

つられて中野も。

「……」

別に黙っておくことじゃないので口を開く。

「例えば…中野…」

「え？はい？」

「…今から二秒以内にお前のダチを答えろ」

「え？」

「二…一…」

「う、憂と純です！」

俺の質問の意図が分からずキョトンとしていた表情から、カウントダウンにより慌てた表情になり『咄嗟』に平沢妹と聞き覚えがあったようななかったような人物の名を出す。

「…んじゃその二人がお前がいるにもかかわらず、他の誰かと楽しく遊んだり会話してたらどうだ？」

「どうって…別にどうもしませんけど…」

「あぁ～そういうことね咲也君♪」

どうやら琴吹は全てを理解したらしく、両手をポンッと叩き、俺に告げる。

「…そういうことだ」

ズズッ…

「二人だけで勝手に解決しないでくださいよ～…」

頬を膨らませ、自分だけ理解出来ない状況に若干拗ねる中野。

「クスッ　じゃあ梓ちゃん　極端な話なんだけどね？」

そんな中野に琴吹が小さく笑い、人差し指を立たせ説明を始める。

「もし憂ちゃんが一週間ぐらい梓ちゃんと全然遊ばないで、代わりに憂ちゃんが他の誰かと遊んでたりしてたらどんな気持ちになる？」

本当に極端だな…

「どんな気持ち…」

少し考え込む。

「…なんか嫌な気持ち…ですかね」

「うん　つまり…」

「…それが今の田井中だ」

「あぁ…そういうことですか」

琴吹から俺が引き継ぎ、出した答えに胸のつっかえが取れ、納得したような表情になっては頷く。

つまり田井中は秋山が真鍋と仲良くなるのが面白くなく『焼きもち』や『嫉妬』の類を感じているんだと思う。

たから合宿時に秋山が真鍋に電話したり、今日の放課後等、秋山の口から真鍋の名前が出る度にあんな態度をとっていたんだろう。

「律先輩も可愛いトコありますね～」

「そうね～　焼きもち妬くなんてね～」

「……」

中野と琴吹が互いを見てクスクス笑うが…

（可愛いトコね…そんなもんで収まりゃ良いがな…）

こんなことを思ったりした。

「あ、そうだ…サク先輩」

「…あン？」

「さっきの質問なんですけど、なんで二秒以内に言わなきゃイケなかったんですか？」

「あ、それは私も思ったわ　どうして咲也君？」

「…お前ともっとも仲が良いダチを言わせるためだ」

そう言ってコーヒーに手を伸ばすが…

「……」

飲み干した後だった…

「一番の友達…」

「梓ちゃんにとってはその二人が親友なのね♪」

「あはは…なんか恥ずかしいですね」

視線をテーブルの上にあるケーキに移し、若干頬を紅く染めて、はにかみながら笑う。

『咄嗟』に名前が出てくるということは、その人物が自身にとって一番印象や影響を受けた人物だということ。

中野には『友達』というキーワードで『咄嗟』に答えたので平沢妹と聞き覚えがあったような、なかったような人物がコイツにとっての『親友』になるはず。

「それじゃあ…咲也君の親友は？」

「……」

琴吹の質問に俺の脳内メモリーがとある映像を映し出す…

『はいっ！さくや！』

『ん？』

『へへっ！ぼくたちのゆーじょーのしるしだ！』

『かげみやとおれの？』

『うんっ！』

「……」

うわぁ…最悪…
なんであのアホが思い付いたんだ…
しかも幼少期の…

「サク先輩、どうしたんでしょうか？額に手を当てて落ち込んでますけど…」

「クスッ　どうしたんだろうね♪」

……

部長が突撃して約十分。

俺がこの場にいる理由が全くないことを、現実逃避していたら分かったので…

「俺は帰るぞ…」

鞄とテレキャスが入ったギターケースとアコギが入ったギターケースを手に取って席を立つ。

「えっ!?帰っちゃうんですか!?」

「…帰っちゃうんです」

「もう少しお話しましょ？」

「明日になったらな…
つうか…そもそも俺は帰るつもりだったんだよ」

部長の発案がなきゃな…

「じゃあなご両人…」

「あ、はい　お疲れ様でした」

「またね　咲也君」

軽く頭を下げる中野と手を振る琴吹を視界の端で確認し、コーヒー代だけ支払うためにレジを目指す。

「なぁ～澪！」

「ちょっと律…」

「何？なぁんかヤなの？」

「そうじゃないけど…」

「和ちゃん、コレ美味しいよ～♪」

「そ、そうなんだ…」

なるべく戦場を回避しながら店内を歩いていたら、その戦場から会話が聞こえてくる。

田井中が一方的に秋山に詰め寄り、平沢はマイペースに、この状況に戸惑う真鍋の声が…

まぁ、あの聡明な真鍋のことだ、田井中の様子に疑問を持っては理解するだろう…

火の粉が飛んでくるのは勘弁願いたいな…

しかし…

ギギギッ！ギギギッ！

歯車は…

ギギギッ！ギギギッ！

もう…限界間近だったことに…

ギギギッ！ギギギッ！

気付けなかった…

第五十三話

軽音部の危機編その四です。

（前書き）

第五十三話

ギギギッ！ギギギッ！

回る回る…

ギギギッ！ギギギッ！

今日も悲鳴をあげながら歯車は回る…

ギギギッ！ギギギッ！

その悲鳴が鳴り止むまで…後……二十分……

時は少し流れて九月下旬。
現在時刻午後十二時三十二分。

ガサガサ…

四時間目の授業を睡眠授業でこなして昼休み。
登校中にコンビニで買った菓子パンが入った袋を鞄から出して漁る。

ガチャ

「さ～く～や～♪」

すると教室の扉が開き、何やら上機嫌な修司が現れた…

「うふふのふ～♪」

気持ちの悪い笑みを浮かべながら俺の机の前の椅子を引き、反転させて俺の対面に座る。

「…何気味の悪い笑みを浮かべてんだよ」

「気味の悪いは余計だ」

「事実だ」

「相変わらずヒドいこと言うねお前は」

機嫌が良いらしくいつもの騒音ボイスではなく、有り難いことに通常ボイスだ。

「そんなことよりさ、見ろよコレ☆」

そう言って右手に持っていた袋からはみ出していた棒状の物体を掴み…

「ぺんぺけぺ～んッ！！」

何ともマヌケな掛け声とともに、まるで伝説の剣を手に入れたかのように高々と掲げる。

つうかうるさい…

せっかく通常ボイスだったのに…

「…なんだそれ」

「一日三個限定！幻のゴールデンチョコパン！」

「……」

自慢げに告げるが…

幻？目の前にあんじゃねェか。

ゴールデン？どこが？

「いつもは三年が先に買っちまうんだけど、遂に手に入れたぜ！」

「ふーん」

特に興味もないので適当に相づちを打ち、カレーパンの包装を開け

て食べる。

「いや～コッソリ授業を抜け出したかいがあったよ！やったァーッ！」

あぁ…だからお前、授業が終わって二分ぐらいで戻ってきたんだな…

そしてだからうるさい。

「しかしな咲也…」

「ンだよ…うるせェな…」

「うるさくないでしょうがッ！」

現在進行形でうるせェよ…

「このパンはな、人気商品なんだよ」

「ふーん」

「つまりはだ、コレを欲しがる連中は全学年通して結構いるんだよ」

「ふーん」

「俺がコレを手に入れて喜んでいたらさ、ガックリと肩を落としていた女の子がいてな…ありゃあ一年だ…
可哀相に…このパンが欲しかったんだろう…」

「ふーん」

「そんな姿を見たら…素直に喜べない俺がいたんだよ…」

さっき『やったァ！』っつってバンザイしながら喜んでたよな？

「そんな時に『歓喜の裏側で誰かが泣く運命（さだめ）』っていう歌が俺の頭で流れたんだよ…」

「……」

「正にその通りだよな…」

「…何が言いてェんだよお前は」

「ん？ミ○チルさんって深い歌を歌うなぁ～って」

「……」

それが言いたかったのか…
てっきりその一年に幻かなんか知らんがそのパンを譲ってやったが、
断られたみたいな事かと思ったんだが…

終着点そこかよ…

「…その歌詞の続き知ってるか？」

「ん～っと…なんだっけ？」

「『それが僕でも後悔はしない』

…つまりお前がその一年にパンを譲ってやったら、お前は後悔せずに清々しい気分になって、お前の株が上がってたのにな」

「うわぁ…しまったぁ～…盲点だった…

あ、『悔やんだって後の祭り』っていう歌詞もあったな…

やっぱ深い！ミスチ○さんは！」

「……」

やっぱそこに行き着くんだな。

「ではさっそく…」

修司が、ガサガサとパンの包装を開けて大口でかぶりつこうとしたら…

「ねぇ桐島」

「あン？」
「んが？」

短髪をしたクラスの女子に呼ばれた。
そして何故か大口を開いたまま食べる動作を止めた修司も反応する…

…かなりのアホ面だ…

「お客さん来てるよ」

「客？」
「んが？」

ソイツが（名前忘れた）教室の前方の扉を指差す。
そこには…

「んがががん？」

「日本語喋れ…」

「ん…紬ちゃん？」

そわそわと落ち着かない様子の琴吹の姿があり、俺と視線がぶつかるとニコッとしながら軽く手を振ってくる。

「桐島を呼んでほしいって頼まれたからさ」

「……」

まるで短髪女子の言葉が聞こえたみたいにタイミング良く手を振っていた琴吹がチョイチョイっと小さく手招きしてくる。

「……」

とりあえず立ち上がって、琴吹の元へ足を向ける。

「あっ　影宮　それってゴールデンチョコパンじゃん」

「良いでしょ良いでしょ～☆春子ちゃん」

「それ食べてる人見たの二回目」

（最初誰だったんだよ…）

ささやかな疑問を持ちながらも数十歩足を動かすと琴吹がいる教室の扉に着く。

「ゴメンね？急に」

「別に…」

目じりを下げて少しだけ首を傾げる琴吹。
教室の壁に寄り掛かりながらの俺。

「なんだか他のクラスって緊張しちゃうね♪」

「…そうか？」

だからさっきキョドってたのか…

「…で？なんの用だ？」

「あ、うん　りっちゃんがね、今から学園祭まではお昼休みも練習するから咲也君にも伝えといてって…」

「はぁ？」

また突発的に何を言い出すんだアイツは…

琴吹自身も戸惑いがあるらしいく、語尾が小さくなる。

「つうか…その発案者はどうした？」

コイツと田井中とオマケに平沢は同じクラス。
しかし、琴吹『だけ』しかいない状況と『伝える』に疑問を持ってたので二組の方角を見ながら尋ねる。

「りっちゃんなら澪ちゃんと梓ちゃんを呼びに行っちゃったけど…」

「……」

わざわざ呼びに…か。
メールで伝えりゃコトは早ェのに…
そんなに気に食わねェか…アイツらの仲が…

中野はついでみたいなもんだろうな…

「…チッ…」

小さく舌打ちを打ち…

「はぁ…」

ため息を。

「……昼メシどうすんだよ……」

「私はもう食べたわ！」

独り言だったんだがコイツの耳には聞こえたらしい。
何故か両拳を握り締めては興奮する。

「りっちゃんが授業中にコッソリとお弁当食べてるのを見て、私も真似しちゃったぁ♪」

「……」

「アレって早弁っていうのよね？なんだか悪いことしてるみたいでドキドキしたわ～♪」

「……」

疲れる…なんか…

ツッコミどころ満載だし…

悪いことなんだよ、このご時世に早弁なんかする奴いたんだな、カチューシャに感化されんな、

なんで楽しそうだ…

あぁ…疲れる…

「はぁ…」

ため息が出るのも仕方ない…

「…唯一お前らの中で平沢だけがまだメシ食ってんだな…？」

「うん　唯ちゃんは今一生懸命にお弁当食べてるわ」

だからお前しかいない…と。

「はぁ…　とりあえず今から練習すんだな」

「うん」

「…じゃあ先に部室に行っとくから、お前は平沢が食べ終わったのを見計らって連れて来い…」

「じゃあ唯ちゃんにそう伝えとくね？」

「あぁ…」

「すぐに行くから～」

クルリッと方向転換して琴吹は二組へ、俺は教室内へ。

「クッ…この俺をてこずらせるとは…

やるではないか！ゴールデンチョコパンッ！
だが負けんぞ！ゴールデンチョコパンッ！」

「…おい」

自分の席に戻ると平沢がギターに話しかけるみたいにパンに話しかけている痛い奴に声を発する。

「おうサクッチ」

「サクッチ言うな」

「紬ちゃんとの対談終了かい？」

「あぁ…」

「じゃあランチタイムの続きといこうではないか！」

「…一人でやってろ」

そう命令して袋からコロッケパンを取って踵を返す。

「ちょちょちょっ！どこ行くんだよ？」

「…部室」

半身を修司に向けて答えてやる。

「なんで？」

「…今から練習があるんだとよ」

「今から！？どんだけスパルタで気合い入ってんのよお宅らは！？」

「…そういうことでもねェかもな」

「ん？」

「部長の嫉妬心からの欲望だろ…」

「律ちゃん?嫉妬?欲望?理解不能なんだけど」

「お前の頭脳じゃ理解出来なくて当然だ…」

「クラァッ!!暴言吐くなッ!!」

スタスタ…

「そして無視すんなーッ!!って、咲也とのランチタイムが潰れたァァァァッ!!」

――――――――――

ギギギッ!ギギギッ!

十二時四十七分。

ガチャ

「……」

部室に着き、扉を開くがまだ誰も来ていないらしくシンっと静まり返っていた。

「……」

右手に持っていたコロッケパンを定位置の長イスに置き、さっさっと練習を始められるように部室に置いてあったテレキャスをアンプに繋いだ状態にし、アンプの電源の落として再びテレキャスをギタースタンドに。

「……」

そして長イスに腰掛け、足を組んでコロッケパンの包装を開けて一口食べる。

と…

ガチャ

「あっ　サク先輩」

中野が参上する。

モグモグ…

ガチャ

「うぅ～…　全部食べきれなかった～…」

「唯ちゃん、タルトあるんだけど食べる？」

「食べる食べる～！
あっ！サッくん♪あずにゃん♪」

モグモグ…

「あの、今から練習するんじゃないんですか？」

「大丈夫だよ～　りっちゃんと澪ちゃんがまだ来てないから～」

「すぐに来ると思いますけど…」

ガチャ

「お～すっ！みんな来てるな～！」

「……」

「ほら」

「りっちゃん…空気読んでよ…」

「あはは…」

モグモグ…

中野が参上したと思いきや、立て続けに平沢と琴吹が現れる。
そして平沢にとってはタイミング悪く片手を上げていつも以上に活発な田井中と…

「……」

どこか機嫌が悪そうな秋山がやってきた…

……

ギギギッ！ギギギッ！

十二時五十分。

「……」

コロッケパンを食べ終え、長イスに座ったまま組んだ足の上に肘をおいて頬杖をつき、平沢達が演奏の準備をしているのを眺める。

「いや～今年の学園祭は澪、どんな風に盛り上げてくれんのかなぁ～！」

そんな光景の中、田井中だけは秋山の側で…

「去年はパンチラだったし～
今年は…ヘソ出しとかかなぁ～」

「……」

「…はぁ…」

秋山の制服の裾を引っ張ったりしてちょっかいを出すが、秋山はベースを持って一切リアクションせずに機嫌が悪そうにしている。
そんな二人を見て小さくため息を漏らす。

「あっ　サクがいるから澪、恥ずかしいかぁ～」

「……」

「でもさ、その恥ずかしがりを克服しなきゃダメだぞ～澪ちゃ～ん♪」

ギギギッ！ギギギッ！

五十一分二十秒。

俺だけだろうな…
不穏な空気が流れているのを感じてるのは…

平沢と琴吹と中野は背を向けて、未だに演奏の準備に取り掛かっているから『いつもの』田井中と秋山だと思ってんだろう…

琴吹と中野は田井中が焼きもちを妬いていることを知っているが、この前の様子じゃあ、さほど気にかけてない…

…だからこの後の出来事に驚いたんだな…

「練習するんだろっ！！」

堪忍袋の緒が切れたのか突然、秋山が田井中に怒鳴りつける。

「え…？」
「澪先輩…？」
「澪ちゃん…？」

「……」

その声に準備をしていた手を止めて振り返っては驚く三人。
そんな中でも俺は特に驚きもせずに成り行きを傍観する。

「…するよ～♪」

一瞬息を詰まらせた田井中だが、すぐさま仮面のような笑顔を貼り付ける。

「だったら…」

「ていっ！」

「わぁっ！」

「たこ焼き～♪」

「はぁ？」

「へへへ～　ポニテー！」

「ちょっ…」

「三つ編み～♪」

「ちょっ！やめろって！」

秋山の髪をいじる田井中。

そんな田井中の手をはたき、軽く睨みつける秋山。

ギギギッ！ギギ…

四十秒…

「何なんだよさっきから！練習しないんだったら教室に戻るぞ！」

ギギギッ…

四十五秒…

「ふーん　戻れば？」

「はぁ？」

ギギ…

五十秒…

「悪かったよ　せっかくの『和』との楽しいランチタイムを『邪魔』してさ」

「…チッ…」

現在時刻午後十二時五十二分。

ギギ…ガギッ！！

悲鳴をあげながらもダマシダマシなんとか回っていた歯車が…止まった…

「はぁ！？そんなこと言ってないだろっ！！」

「フンッ！どうだかっ！！」

先程以上の剣幕で田井中に怒鳴りつける。
それに仮面をハズした田井中が同じくらいの音量で怒鳴り返す。
…俺の目の前で…

「え？な、なに？どうしたんだろう…」

「澪先輩…？律先輩…？」

漸くコトの異常に気付いた平沢が睨み合っている秋山と田井中を見ては戸惑った声を出し、先輩の口論に中野はオロオロと。

「そ、そうだ！お茶にしない？ね？お茶にしよう？き、今日は美味しいタルト持ってきたの、だから…ね？」

この険悪な雰囲気を払拭しようと琴吹が俺達一人一人の顔を見ながら奮起し提案するが…

「だいたい！！なんで和が出てくるんだよっ！！関係ないだろっ！！」

「あーはいはい！！私が悪かったよっ！！だから早く教室に戻ればいいじゃんっ！！」

一切二人の耳には届かず、ますますヒートアップしていく。

「……」

こんな状況にもかかわらず、俺はどこか他人事のように頬杖をつきながら成り行きを見ていると…

「…サッくん…」

秋山と田井中の口論が部室内に響き渡っているのに、この平沢の小さな声は不思議と俺の耳に届いた…

「……」

呼ばれたので平沢に視線を向けると…

「…ぅ」

『なんとかしてほしい』『あの二人をとめて』…
そんな瞳で俺をジッと見据えてくる…

「…チッ…」

小さく舌打ちを打ち…

「律は勝手過ぎるっ!!」

「澪だってヤダヤダってわがままばっかり言ってさっ!!」

もはやガキのケンカのように互いの不満をぶちまけてる二人…正直アホらしい…

別に平沢の頼みを了承した訳じゃない…

ただ…うるさい…

「……」

組んでいた足を解き…

ダァンッ！！

「「ッ！！」」

思い切り右足を床に叩き落とす。
その音にガキ二人はビクッと肩を震わせ…

「「……」」

おそるおそるという感じで俺に視線を向ける。

「はぁ…！」

『わざと』この場にいる全員に聞こえるように息を吐き…

「ヤメだ」

『え…？』

立ち上がりテレキャスに向かいながらの俺の発言に全員が声を出す…

「……」

全員の視線を一身に受けるが別段気にならないので、テレキャスとアンプからシールドを抜き…

「……」

そのまま扉に向う…

「えっ？サッくん！？」

「ちょっ！どこ行くんだよサク！れ、練習は！？」

「はぁ？練習？」

扉のドアノブに手をかけた瞬間に平沢と田井中の焦ったような声が聞こえ、田井中の発言に『疑問』を感じたので振り返る。

「…ッ！」

振り返えり田井中に視線をぶつけると、蛇に睨まれた蛙のように体を硬直させる。

…自分でも分かる…

…いつもの不機嫌面が本当に不機嫌になってることぐらい…

「…練習出来んのか？こんな状態で」

「…そ、それは…」

「…学園祭が近ェから昼休み使って練習するのは別にかまわねェけどな、ハナから練習する気あったのか？」

「……」

「…お前の『私情』で俺達集めて、勝手に秋山と口論して…そういうのは『ここ』でするな」

「……」

「練習は放課後だ…」

そう告げて…

ガチャ

「あ…咲也っ！」

扉を開き…

「ッ！サクッ！」

バタン…

部室から出ていった…

……

部室から出ると…

「あ…」

「……」

扉に耳を当て、盗聴している…

「あはは～…き、奇遇ね～咲也くん♪」

山中顧問が…

「何やってんスか…」

扉の小窓に姿が映らないように姿勢を低くし、俺に見つかったことにより冷や汗をかきながら苦笑いする顧問に目的を問う。

「ふぅ…」

と、観念したかのように息を吐き口を開く。

「とりあえず移動しながら話すわ
ここで話してたらみんなに気付かれちゃうし」

「……」

「咲也くんもあんなこと言った手前で、まだこんなところにいるのがバレちゃったら恥ずかしいでしょ？」

別に恥ずかくはねェが…
つうかやっぱ盗聴してたなアンタ…

「じゃあ行くわよ」

山中顧問が床に置いてあった何かしらの紙束を両手で持ち階段を下りていく。

「……」

とりあえずそれについていく。

「五時間目に音楽の授業があるから音楽室で準備してたの」

顧問の右斜め後ろで階段を下りていると口を開いた。

「そしたら急に澪ちゃんの大きな声が準備室から聞こえきてね、何かあったのかな～って思ったから様子を伺ってたのよ」

「…盗聴の間違いだろ」

「人聞きの悪いこと言うわね～　様子を伺ってたの」

「…はいはい」

階段を下りて二階に辿り着く。
廊下には昼休みの喧騒が。

「で、咲也くん」

「あン？」

山中顧問は一階には向かわず踊り場に立ち止まり、俺に振り返って…

「これからどうするの？軽音部…っていうか、りっちゃんと澪ちゃんのこと」

現在の軽音部の『爆弾』の処理を問い掛ける。

「…知るかよそんなの」

「あら？随分と冷たいわね～」

「つうかコレはアイツらの問題だ…俺が口出すことじゃねェ…」

「う〜ん…　確かにそうなんだけどね〜
でも学園祭が近いこの時期にこういうのはマズいわよ」

「…その根拠は？」

「経験と…女のカンってやつね♪」

「……」

パチッとウインクしながら前半は信じられるが、後半は怪しいことを…

「りっちゃんと澪ちゃんの問題…それは確かにそうよ
二人だけで解決したらそれが一番
…だけどね？さっきも言ったけどもうすぐ学園祭なんだから、バンド内に不協和音が流れたままじゃライブは成功しない」

「……」

今までは笑顔を浮かべながらの発言だったが、一変して真顔になる。

「早くなんとかしないと…」

「……」

「手遅れになっちゃうわ」

「……」

「だから、咲也くん
あなたが手助けをしてあげなさい」

「はぁ？」

なんでそうなる？
意味不明、理解不能…

「咲也くん自身は気付いてないかもだけど、咲也くんってカリスマ性とか誰かのために行動する思想とか場をまとめる力とかがあると

思うの」

「ンなもんあるかよ…」

「実績ならあるじゃない、去年の学園祭でのライブで澪ちゃんのために時間かせぎしたり、梓ちゃんのために曲を作ったんでしょ？唯ちゃんから聞いたわ」

「……」

「まぁ、とにかく！咲也くんは軽音部の黒一点！困ってる女の子を助けてあげなきゃ！それが男ってもんよ！」

「…その根拠は？」

「経験とやっぱり女のカン♪」

ニコッと笑いながら…

「頑張りなさい！副部長！」

バシンッ！

「いって…」

激励と共に俺の背を叩いてくる。

「じゃあまた放課後ね」

俺に闘魂注入した右手をヒラヒラと振りながら階段を下りていく。

「はぁ…」

（何をどう頑張りゃ良いんだよ…）

――――――――――

「ムギちゃん、悪いんだけど紅茶のおかわり貰える？」

「あ、はい…」

「…だからここは喫茶店じゃねェっつうの」

「前も言ったでしょ？ムギちゃんの淹れる紅茶が美味しいの」

「あっそ…」

歯車が止まって数時間。
現在放課後。

『……』

「はぁ…」

いつもは和やかな雰囲気に包まれている軽音部室は、それはそれは重苦しい空間に変貌していた…

理由は一つ。
昼休みの事件のせいだ。

まぁ…あんなコトがあって張り切って練習する気にはならねェよな…

…もしかしたら俺が雰囲気を悪くした原因の一端かもしれねェが…

「はぁ…」

長イスに座ってアコギを片手に持ってはいるが、とても弾けるような雰囲気じゃない。

しかし…

「う～ん　やっぱり美味しい～♪」

この顧問はお構いなしにティータイムを楽しんでいやがる…

ある意味大物だ…

あの平沢でさえ琴吹が用意した『美味しいタルト』に手をつけてないというのに…

「律先輩…来ませんね…」

中野が田井中の席を見ながらポツリと漏らす。

実は部長、無断欠席。

…秋山はちゃんと来てるが…

顔を合わせづらいのか、はたまた何か用事が出来たのか…

同じクラスの平沢と琴吹に尋ねてみたら、ＨＲが終わったら早々と教室から去っていったらしい。

「どうするの？咲也くん」

「あぁ？」

一人だけでティータイムを満喫していた山中顧問が俺に何かを問い

掛ける。

「部長のりっちゃんが不在なんだから、副部長の咲也くんが今日の部活はどうするか決めなきゃ」

「……」

副部長…ね。

「はぁ…」

とりあえずため息を。

「…部長がいねぇんじゃバンド練習は無理だ」

「うん…そうだな…」

特定の人物に言ったわけではなかったが秋山が弱々しく反応する。

「…つうことで、個々の練習だ」

「うん…そうだな…」

（オウムかお前は…）

先程と全く同じ反応の秋山に内心ツッコミを。

「…平沢と中野は俺とギターの練習」

「う、うん」
「はい…」

「…秋山はこの前出来た新曲の練習しとけ、難しいっつってたろ」

「うん…そうだな…」

（だから…オウムか…）

「琴吹は…「待って…」…あン？」

琴吹に指示を出そうとしたら俺と顧問以外の共通ボイスである弱々しい声で遮られた。

「待ってよう…待っていようよ…りっちゃんが来るの…」

「ムギちゃん…」

「ムギ先輩…」

「咲也君…お願い、りっちゃんが来るまで…」

「……」

俯かせていた顔を上げ、どこか意地が籠った瞳で俺を見ては懇願する琴吹…

「サッくん…」
「サク先輩…」
「……」

そして俺の判断を待つかのように平沢と中野と秋山が俺を……いや違うな、秋山は田井中のドラムセットを見ていた…

「分かった…」

今は練習よりも田井中の問題が先だと判断し、琴吹の意見を汲んでやることに…

「ありがとう咲也君！」

座っていた席から立ち上がって頭を下げる琴吹……

……しかし…下校時間になっても田井中は…

「…バカ律…」

現れなかった…

―――――――

「「「……」」」

夕暮れの帰り道を平沢は中野の隣に並び、俺はその数歩後ろを歩く。

いつもならば平沢と中野が会話して平沢が俺にも話をフってくるが、俺は音楽を聞いているので全く話を聞いておらず、平沢がむくれて中野が笑うかツッコミを。

俺はスルーするという光景が今年の春から続いていたが、今日はそんな光景はなかった…

「…なんだか…」

「あずにゃん？」

「……」

すると急に中野が歩みを止め顔を俯かせて何かを呟く。
隣を歩いていた平沢が数歩進んで振り返り、俺は中野が止まった瞬間に足を止める。

「…なんだか…このままだったら…みなさんが…バラバラになりそうで……怖いです…」

「あずにゃん…」

「……」

俺は中野の後ろにいるので表情は分からない。
…が、僅かに両肩が震えてるのは分かる…

もしかしたら泣いてんのかもな…

ギュッ

「唯…先輩…」

するとそんな中野に平沢が抱き締める。
いつもようなスキンシップではなく…

「大丈夫だよあずにゃん、私達はバラバラになんかならないよ」

「は、はい…」

「……」

「りっちゃんは…今日は用事があって来れなかっただけで、明日になったらいつも通りの軽音部になってるから」

「…っ…はい…はい…」

「……」

「だから大丈夫だよ！
うんっ！大丈夫！…大丈夫…大丈夫…」

「……」

夕陽の逆光のせいで平沢の表情は伺えない…
『大丈夫』
その言葉は平沢が自分自身に言い聞かせてる気がした…

……

「それじゃあ、唯先輩、サク先輩…また明日です…」

「バイバイあずにゃん♪」

「…じゃあな…」

中野の帰り道の分岐点に着いたので瞳が赤くなっている後輩と別れる。

「失礼します…」

俺達に頭を下げて帰り道を進んで行く…

「ねぇ…サッくん…」

「…あン？」

去っていく元気のない後輩の背を見ながら中野の前ではカラ元気だった平沢が急に弱々しくなり禁句で俺を呼ぶが、今日だけはスルーしてやる。

「あずにゃんには…大丈夫って言っちゃったけど…」

「お前自身も不安…か？」

「うん…で、でもね？私が弱音言っちゃったら…あ、あずにゃん…
不安になっちゃうから…だから…」

瞳に涙をためて無理に笑おうとする…

ポン…

「あ…」

そんな平沢の頭に手を置く。

「ガラじゃねェんだよ…」

「グスッ…え？」

「誰のために何かをするなんて俺のガラじゃねェ…」

「サッくん…？」

「…とりあえず涙を引っ込めろ、ハタから見たら俺がお前を泣かしてるように見える可能性が大だ」

「グスッ…エへへ♪サッくん、機嫌悪そうな顔してるもんね♪」

「……」

涙を手で拭い笑顔を浮かべながらカチンッとくることを言ってくるが…

まぁ…今は許してやる。

――――――――――

その日の夜。

自室にて。

「……」

ケータイを開き、アド帳からとある人物の名前を眺め…

「はぁ…」

ピッ

プルルル…

『だから、咲也くん
あなたが手助けをしてあげなさい』

俺はお人好しでも…

プルルル…

『咲也君…お願い、りっちゃんが来るまで…』

おせっかいでも…

プルルル…

『…なんだか…このままだったら…みなさんが…バラバラになりそうで……怖いです…』

プルルル…

ましてやボランティア精神なんて…

『うん…で、でもね？私が弱音言っちゃったら…あ、あずにゃん…不安になっちゃうから…だから…』

持ってねェんだよ…

プルル…

「『もしもし？』」

第五十四話（前書き）

軽音部の危機編完結です。

第五十四話

「『もしもし？』」

「…俺だ」

「『そんな風に言ったらどこかの詐欺みたいだぞ咲也』」

俺のケータイがつないだ先の人物はどこか呆れたような…

「『ていうか、咲也から電話がかかってくるなんて珍しい…初めてだよな』」

それでいてどこか緊張していた…

「まぁ…今まではお前に連絡する理由がなかったからな」

「『あはは…そうだな

咲也って意味もなく行動を起こさないからね』」

「…いや、意味もなく修司を蹴りたくなる衝動は度々起きる」

「『クスッ　それは影宮君が可哀相だよ』」

「…さて、じゃあ本題に入るぞ」

「『……うん…』」

俺は別にコイツと世間話をするためにケータイを開いた訳じゃない。
軽音部の『副部長』として…空中分解寸前のバンドを…なんとかするため。
『救う』なんて大層なものはしないし出来ない。
それをやるのはケータイの先で、どんな表情や思考で俺からの電話を取ったのか分からない
『秋山　澪』自身だ…

「簡潔に言うぞ…」

「『……うん』」

「…田井中と一度話し合え」

「『え…？』」

俺の発言の意味が分からないのか、それとも意外だったのか…
恐らく後者だろう…

「『話し合う…？』」

「…てっきり田井中と仲直りしろとでも言うと思ったか？」

「『うん…だって…』」

「…『それ』を第三者の俺が言っても仕方がねェし、第一にコレはお前と田井中の問題だ」

「『……』」

「…俺が変に催促したら、こじれる可能性がある」

「『……』」

「…コトの根源は田井中の嫉妬にも似たもんが原因だし、お前に非はねェと俺は思っちゃいるが、今日の昼休みみてェなのは正直お前も悪い」

「『…それは私も思ってた…
咲也が部室から出ていった後…すごく後悔したから…』」

「……」

「『それは律も同じだと思うんだ…
律、なんだか悲しそうな顔してたから…』」

「……」

もしかしたら…誰も悪くねェのかもな…

『偶然』に秋山と田井中が別のクラスになり、『偶然』に秋山のク

ラスに真鍋がいた。
そして寂しがり屋の秋山は『必然』に真鍋との仲が深まる。
田井中は別に真鍋のことを嫌ってはいないと思う。
ただ…些細な原因で均衡を保っていた『何か』が田井中の中で崩れて、徐々に不快になってしまい今日の昼休みに爆発した。

「はぁ…」

コップの許容範囲限界に水を入れ『偶然』一滴の雫がコップに落ちてしまい表面張力を破った水が溢れたり、完成間近のドミノに『偶然』風が吹きドミノが倒れていってしまう…

全ては『偶然』という悪魔が引き起こした惨劇。

「…今日の帰り道でな、中野が泣いてたぞ」

「『え?梓…が?』」

「俺達がバラバラになりそうで怖いってな…」

「『……梓……』」

「平沢が気丈に先輩として中野を励ましていたが…中野と別れた後、アイツも…な」

「『……唯……』」

「琴吹だってそうだ…放課後のアイツの言葉を聞いたろ…」

「『…ッ…ムギ……』」

「平沢も琴吹も中野も…『いつも通り』の軽音部になることを待ってんだ…
お前と田井中の『いつも通り』を待ってんだ…」

「『…ぅ…グスッ…私…』」

「……」

電話口の向こうからは秋山のすすり泣く声が聞こえくる…

「…だから田井中と話し合え」

「『うんっ…うんっ…私…私も律とこのまま…なんて…絶対にヤダッ…みんなと一緒に…バンドがやりたいよ…咲也ぁ…』」

「だったら…」

だったら溢れる水を拭いて絶対に雫が落ちない場所に移動させたら良い。
倒れていくドミノの先を封じて、またやり直せば良い。

方法なんてどうでも良い。
やり方なんて人それぞれ。
例え遠回りしようが近道しようが…その過程がどんなに困難でも、行く先に光があればそれで良い…

「『…ッ…グスッ…明日…律とちゃんと話し合うよ…そしてまたみんなで部室に集まって…』」

「……」

「『…ッ…グスッ…れ、練習しよう！学園祭が近いんだから！精一杯練習しよう！…グスッ…そして…絶対にライブを成功させよう！絶対の絶対だよ咲也！』」

涙ながらの悲壮な決意。

涙声なんて俺に聞かせるのも恥ずかしい筈の秋山が聞かせた、精一杯の決意と軽音部への想い…

「…そうだな」

「『ありがとう咲也…私…もしかしたら誰かに背中を押されるのを待ってたのかもしれない…』」

「……」

「『だから、ありがとう咲也』」

その言葉にはもう涙は含まれてはいなかった。

「…『副部長』として言っただけだ、つうかお前の行動がどうなるかにかかってんだ…礼なんか言ってねェでそっちのコト考えとけ…」

「『クスッ　咲也ってホント相変わらずだな』」

「うるせェ…じゃあな、切るぞ」

「『うん　おやすみ』」

「…まだ寝ねェっつうの」

「『挨拶なんだけど…』」

「あっそ…」

「『うん　だからおやすみ咲也』」

「あぁ…」

ピッ

秋山との通話を終えてケータイをベッドの枕元に放り投げる。

「……」

ドサッ

ついで俺もベッドに倒れこみ、ガラにもないことをしたせいか気を張っていたのか、疲労感が波のように押し寄せ…

「……」

不覚にも意識を飛ばしてしまった…

――――――――

翌朝。

「……」

異変を感じ取ったので自然と覚醒する。

「さぶっ…」

昨日までの残暑はどこへやら、冬の凍える冷気とまではいかないが肌寒い。

「……」

ノソリと起き上がりカーテンを開けて外の風景を見ると、辺り一面の雪化粧…なんてことはなく曇天な空が広がっていた。

いきなり到来…
その季節の名は『秋』

―――――――――

「えーっと…コッチかなぁ？」

「唯ちゃん、ちょっと地図貸して？」

「ほい、どうぞ」

「今、私達がいる場所は…」

「ここですね」

「さぶっ…」

「え？あずにゃんがなにかダジャレ言ったの？」

「…この季節にしては異常の寒さに文句言ったんだ…」

「あっ　そうなんだ～」

「でも、そこまで異常ですか？」

「確かに肌寒いけど…」

「サッくんって寒いのも苦手だもんね～」

「サッくん言うな…」

現在俺達は住宅街にて軽い迷子になっていた…

それは何故か？

この場にいる平沢、琴吹、中野と俺が誰も行ったことのない田井中家に向かっているからだ…

「ムギ先輩、分かりましたか？」

「うん　この道をまっすぐ行って、つきあたりを右に行ってしばら

く進んだらりっちゃんの家に着くわ」

「おぉ～さすがムギちゃん！」

「最初から唯先輩じゃなくてムギ先輩に任せれば良かったですね」

「…同感だ…」

「ヒ、ヒドいよあずにゃん、サッくん…！」

そしてもう一つの『何故か？』
田井中家に部活をしないでわざわざ向かっているのか？

ぶっちゃけに言うとあのデコは風邪を引いたらしい。
ということで平沢と琴吹と中野は見舞いのために、俺はデコの元に『先行』した秋山がどういう風に行動したかを知るために。
ちなみに見舞いなんて名目は俺の中には存在しない…まぁ、僅かにあるが…

『先行』とあった通り、この季節と同じ名を持つ秋山は昼休みに二組へ行ったらしい。
…恐らく田井中に会いに行ったんだろう…

そこで平沢と琴吹から風邪で病欠している事実を聞き、放課後にな

り平沢に田井中家への地図を渡した秋山は一目散に田井中家へ。
ちなみに俺と中野は部室で聞いた。

「あった～！」

「さぶっ…」

そして漸く住宅街の迷路の中に存在する部長の家に辿り着いた。
表札には確かに『田井中』の文字が。

「ねぇねぇ？私がピンポン押していいかな？」

「別にかまいませんけど…」

「よしっ！」

「……」

やっぱガキだコイツ…

その行為になんの楽しみがあるのか、中野から許可が下りると右手の拳を引いてガッツポーズをかます。

「では、平沢　唯！いきます！」

「頑張って唯ちゃん！」

「……」

良いからさっさっとしろよ…

コッチはさみィんだよ…

♪ピンポ～ン

平沢の右人差し指が押したボタンが来客を告げる音を鳴らし…

ガチャ

「はい？」

家の中から…誰だお前？

明らかに俺達より年下の中学生っぽい野郎が玄関の扉を開けて…

「……」

「「「「……」」」」

吟味するかの如く俺達の顔を一人一人見ては…

そぉ～…

ゆっくりと玄関の扉を閉めようとしやがる…

なので…

ガシッ！

「…待てやコラ」

バンッ！

「うわぁっ！」

扉を掴み、無理矢理開ける。
そして驚く見知らぬ野郎。

「何やってるんですか！？サク先輩！」

そんな俺の行動に中野がプンスカしながら詰め寄ってくる。

「何って…コイツが俺達を対応しねェでエスケープしようとするから当然の対策をとったまでだ」

「堂々と言わないでくださいよ！もう少しやり方があるでしょう！」

「この世は弱肉強食だ…弱ェ奴から滅ぶんだ…」

「意味分かりません！それは今言わなきゃイケないんですか！？」

「知るか」

「サク先輩が言ったんじゃないですかーッ！」

「えーっと、家族の方ですか？」

「あ、はい」

「私達りっちゃんの友達で、お見舞いに来ました！」

「あ、ねぇちゃんの…じゃあ上がってください」

「「おじゃましま～す♪」」

どうやら俺が中野の相手をしてる間に話がまとまったらしい。
平沢と琴吹が吸い込まれるように家に入っていった。

「…おいニャカ野」

「ニャカ野じゃにゃいです！」

『にゃい』っつったぞお前今…

「…アイツら先に行っちまったぞ」

「えっ！？」

俺の発言にニャカ野が玄関を見る。
つられて俺も見る。

と…

「あの～…上がってください」

失礼な対応をとった野郎がどこか戸惑いながら俺達を見ていた。

「あっ！ごめんなさい！お邪魔します！」

「……」

「はい　どうぞ」

とりあえず許可を得たので田井中家に進入。

「…お前のせいでいらん時間を使った」

「私のせいじゃないもん！」

両腕とツインテールをパタパタと…

……

「ねぇねぇ？」

「は、はい」

「澪ちゃんってもう来てる？」

靴を脱ぎ家に上がると平沢が失礼野郎（名前を知らないので仮名）に秋山の行方を尋ねる。

「ねぇちゃんの部屋にいると思いますけど…」

そう言って二階への階段を見上げる失礼野郎。

つうか『ねぇちゃん』？

じゃあコイツは田井中の弟か…って、アイツに弟いたのか…

「じゃあ私達も行きましょ？」

「そうですね」

「レッツゴー！」

「唯先輩、静かにしてください」

「りっちゃんが寝てるかもしれないから」

「あっ！（ゴメンなしゃい）」

「……」

拳を振り上げていた平沢が中野と琴吹の注意を受け、振り上げていた拳を口に当て、そこまで静かにする必要性は皆無なトーンになる。

「あ～…部屋分かりますか？」

ポリポリと頬をかく失礼野郎の質問に…

「分かりません！」

「なんで胸張れるんだお前は…」

平沢が見事に白旗を振る。

「じゃあ案内しますんでついてきてください」

我が物顔の（当然）失礼野郎の後を平沢と琴吹とニャカ野…中野がついていくが…

「……」

俺はその場に立ち止まる。

「あれ？サッくん行かないの？」

「行かねェよ…」

動かない俺に気付いた平沢が振り返っては首を傾げるが、そんな平沢に拒否の態度をとる。

普段は勝気で活発で男勝りな部長だが仮にもアイツは女。
しかも病気で寝込んでいるのに大勢で押しかけるのはいただけないだろう。

「お前らだけで行ってこい…俺はここで待ってる」

「う～ん…分かったよ」

「少し待っててね？咲也君」

「サク先輩、勝手に帰っちゃったりしちゃダメですよ？」

「……」

お前の中じゃ俺は何なんだ…

「…良いからさっさっと行け」

右手を邪魔者を追い払うかのようにシッシッとする。

……

チラッ　チラッ

「……」

チラッ　チラッ

「……」

平沢達が部長の部屋に行き、一分もしない内に部屋に案内していた失礼野郎が戻ってきた。

チラッ　チラッ

「……」

そしてソイツにリビングに通された俺は勝手にソファーに座り、失礼野郎はリビングにあるデカい液晶テレビにＰとＳのハード機バー

ジョン3をつないで何やら格ゲーをしている。
俺はたまにそのゲームをみたりケータイをいじったりしているのだが…

チラッ　チラッ

「……」

さっきからチラチラッと俺を見てくる失礼野郎。
まぁ、そんなよそ見なんてしてるから…

「…おい」

「は、はい！何でしょう！？」

「…負けるぞお前」

「えっ？」

俺の指差す先には液晶テレビに映し出された格ゲー。
そこには失礼野郎がプレイしていたキャラが相手にボッコボコにされていた…
そりゃあもうボッコボコに…

「あぁッ!?」

それに気付いた失礼野郎がコントローラーを駆使し反撃にでるが…

『K，O!!』

「あぁ…負けた…」

時既に遅し。
そしてうなだれる。

「弱…」

そんな失礼野郎を見て思わずポツリと漏らしたこの言葉は失礼野郎に聞こえたらしくアッチもポツリと…

「…そっちのせいじゃんか…」

「ンだとテメェ…」

口を尖らせ俺に責任転嫁してくるが、それはお門違いってやつだ。

「あぁッ！ゴメンなさいッ！」

「…お前が俺をチラチラ見るから自爆したんだろうが」

「だって気になるし…」

「あぁ？」

「あの、桐島　咲也さんですよね？」

急に俺に向き直ったと思いきや自己紹介もしてないのに何故か俺のフルネームを口にする。

「…なんで知ってんだよ」

なのでもっともな質問を。

「えっと、ねぇちゃんから聞かされてて
前髪をピンで止めて、不機嫌顔な男が軽音部の副部長だって…
そしたら本当にその通りの人が来たから気になって…」

「……」

その発言を受けソファーから立ち上がり…

バシッ！

「いたッ！」

本当に失礼野郎の頭をはたく。

「何すんだよ～…」

「…テメェが失礼この上ないことをほざきやがるから当然の制裁をプレゼントしたまでだ」

「言ったのはねぇちゃんだよ～…」

「…口に出したのはテメェだ」

「理不尽だよそれ！」

なんか喚いているがスルーし、『K，O』の文字が画面いっぱいに映し出されているテレビを見る。

「ちょうどいい…」

「えっ？」

「対戦しろ…弟」

「対戦？」

「お前の姉貴のせいで俺のストレスは溜まる一方なんだ…だから発散させろ」

「別に良いけどさ…俺、このゲーム結構やり込んでるから…」

そう言って俺の分のコントローラーを取り出し…

「強いよ？」

そのコントローラーを俺に投げながらニヤリと笑う。
その笑みは姉そっくりだった…

……

ボコッ！

「うッ…」
「……」

ベキッ！

「あッ…！」
「……」

ドゴォンッ！！

「あぁッ！！」
「…また俺の勝ち」

俺のキャラが腕を組みながら平伏す田井中弟のキャラを見下す。

結果これで１３戦１０勝３負。

「にいちゃん、強過ぎ…」

「…お前が弱ェんだろ」

「そんなことは…だってねぇちゃんとなら勝てるのに…」

「お前ら姉弟がザコなんだろ…」

「ガーンッ！」

コントローラーを手放しては床に手をつきうなだれる。

同じ田井中の名を持つコイツを潰したことにより多少スッキリした。

と…

「咲也」

「あン？」

リビングの入口から田井中の部屋にいる筈の秋山が現れた。

「あれ？聡どうしたんだ？」

秋山が絶望感満載でうなだれている田井中弟を見ては疑問符を浮かべるが…

「聡？」

逆コッチが疑問を持ってしまった…

「田井中　聡だよ　律の弟の…咲也、知らなかったのか？」

「いやコイツが田井中の弟だっつうのは知ってたが…名前までは」

「ていうか聡に何やったんだ？」

「上には上がいるっつうことを教えただけだ…」

「？」

意味が分からず首を傾げる秋山を無視し、立ち上がり用件を問う。

「…で？なんの用だ？」

「あ、うん、律が咲也を呼んできてって」

「はぁ？」

笑顔を浮かべながらの秋山の発言にまた疑問が…

「律が咲也に言いたいことがあるんだって」

「……」

「だから、ほら早く咲也」

そう言って俺の背に回りこんでグイグイっと押してくる。

「分かったから押すな…」

「うん」

グイグイ…

いや…だから押すな…

……

二階に上り秋山に連れられて田井中の部屋と思わしきところに辿り着く。

「（咲也君）」
「（サク先輩）」

その部屋の前では琴吹と中野が小声で俺を呼び、手招きしていた。
…つうか平沢はどうした？

「…お前ら田井中の部屋にいたんじゃねェのか？」

「（そうなんですけど）」

「（りっちゃんが咲也君とお話がしたいっていうから）」

「……」

「（咲也、律が待ってる）」

琴吹と中野が笑みを浮かべ、秋山が催促する。

「はぁ…」

ため息を吐いて秋山の横を通り過ぎる瞬間に…

「（律とは、ちゃんと仲直り出来たよ）」

部屋に着いてからは俺以外の誰もが小声だったが、その声は更に小さかった…

「（そうか…）」

だが…確かに俺には聞こえた…

……

コンコン…

ガチャ…

ノックをして返事を待たずに部屋の扉を開けて中に。
部屋の中はカーテンが閉めてあり薄暗く、聞こえてくるのは…

「すぅ…すぅ…」

誰かの寝息。

「……」

視線を巡らせるとベッドには二つの人影…

「何でだよ…」

その内の一つの人影…平沢がベッドの傍らで至福の表情でドリームワールドに旅立っている姿が…
寝息は田井中が立てているものかと思いきや、先程姿がなかった平沢だった…
故に思わず呆れたようなツッコミが…

「あはは…澪がさ、私を寝かしつけようとしたんだけど、なんでか唯が寝ちゃったんだ」

俺の言葉に反応した田井中がデコに乗せてある濡れタオルが落ちないように手で押さえながら上半身を起こし、苦笑いを浮かべて平沢がこうなってしまった理由を述べる。

俺と視線を合わせないように…

「やっぱガキだコイツ…」

「そう…だな…」

「……」

「……」

田井中が歯切れが悪い返事をした後に訪れる静寂…

「…はぁ…」

小さくため息を吐き、田井中が喋り出すのを待つ。
俺はそうでもないが、コイツにとっては気まずいんだろうな…
俺とは半ばケンカ別れしたまんまだし…

しかし俺を呼んだのはコイツなので俺から喋ることはしない。

「「……」」

「すぅ…すぅ…」

聞こえてくるのは平沢の寝息のみ。
そのおかげで、まるで時が止まってしまったかのような錯覚に陥らずにすむ。

「…なぁ…サク…」

「あン？」

意を決したのか、田井中が口を開いた…

「サク！」

俺に視線をぶつけて…

そして…

「ゴメンッ！」

頭を下げて謝罪を…
その拍子にデコにあった濡れタオルが床に落ちる。

「……」

頭を下げたまま動かない田井中の近くに行き…

「おい…」

「…ッ！」

特になんの変哲もないその言葉にビクッと肩を揺らす…
その光景に内心呆れながら床に落ちたタオルを拾うために平沢の隣に座る。

「顔上げろ…」

「…怒ってない？」

「別に…」

「…ん…」

ゆっくりと顔を上げる…
そして顔を上げきった瞬間に…

ベチッ！

「あぷっ！」

拾った濡れタオルを田井中の顔面にぶつける。

「なにすんだよ～…」

流石は姉弟だな…
同じリアクションしやがった。

「…お前がつまらねぇことで俺を呼ぶからだ」

「つまらないって…私は結構気にしたんだぞ…」

「…それがつまんねぇんだよ」

「だって澪がさ、『咲也はもしかしたら怒ってるかもしれない』って言うから…」

「……」

激似だな秋山の声色…

つうかアイツ…余計なことしやがって…

自分が仲直りしたから次は俺ってか…

「はぁ…」

全く…

「…別に怒っちゃいねェし、そんなことを一々気にすんな『部長』」

わざと『部長』を強調させる。

「…部長…か…」

「……」

「ははは！そっかぁ～なぁんかウジウジ悩んでた自分がバカみたいだな～」

ドサッとベッドに倒れ込み天井を見ながら『いつも通り』の笑顔の田井中。

「なぁ、サク」

「あン？」

「私さ、澪と和が仲良くしてるの見て、なんていうか…おもしろくなかったんだ…」

「……」

「今までは私がいたから澪が…って感じに友達とか出来てたんだよ」

「……」

「でも…そんな澪が私ナシで和と仲良くなって…」

「悔しかった…と？」

「ん～…悔しいっていうよりも…なんだろうな…」

「…『寂しい』じゃねェの？」

「寂しい…寂しいか…うん、そうなのかも…」

「はぁ…お前もガキっぽいな」

「失礼なっ　私は大人の女ザマスわよっ」

「まぁ…別にそれでも良いんじゃねェの？」

「え？」

ザマスなんて言って若干ふざけた顔だったのが俺の言葉で素に戻る。

「人っつうのは成長すんだ…」

「……」

「けど…その過程でつまずくことなんて多々ある…」

「……」

「それが今のお前らみてェなもんだ…」

「ら？」

「お前と秋山…」

「澪も？」

「あぁ…」

『うんっ…うんっ…私…私も律とこのまま…なんて…絶対にヤダッ…みんなと一緒に…バンドがやりたいよ…咲也ぁ…』

「…つまずいて、足りない部分は互いに補って…成長する」

「そうやって私達は大人になっていくのかな？」

「…多分な」

あくまで俺の持論だがな…

「う～ん…難しいことは分からん！」

頭をガジガジとかき、コイツらしい答えを出す。

「私は今が楽しかったらそれで良いし！」

「そうかい…」

「だから早く風邪なんか治してやるぜ！」

そう言って俺に右拳を突き出してくる。

「だからさこれからもヨロシク頼むよ『副部長』！」

その拳に…

「…了解…『部長』」

コツン…

俺の左拳を軽く当てる…

カチッ…カラカラカラカラ…

それは止まっていた歯車を再び動き始める合図でもあり瞬間だった…

「すぅ…すぅ…ゴホッ…」

―――――――――

翌日。

「そう　澪と律、仲直りしたんだ…良かった」

この日は週一の掃除当番でダラダラと教室のゴミ箱に溜まったゴミを捨てに行った帰りに、『偶然』に生徒会室に入ろうとしていた真鍋と出会った。
どうやら平沢から秋山と田井中が不仲になったのを耳に入れたらしく、どのような経緯でそうなったのかを説明したところ…
その聡明を発揮し全て理解してくれた。

そしてあの日、田井中が喫茶店にて秋山の元へ突入した際に田井中が焼きもちを妬いてることが分かったみたいだ。

だが、自分が口をはさむと悪化しそうなので敢えて何もしなかった

みたいだ。

…その代償は俺の苦労なんだかな…

「私も原因の一端だったから責任感じてたのよ」

「……」

「もし、軽音部が大変なことになったらどうしようかと思ってたんだけど…」

実際になったぞ…

「本当に良かったわ」

「はぁ…」

「何ため息ついてるの？」

「マジで疲れたんだよ…今回の一件は…
どっかの誰かさんが手伝ってくれりゃあ多少は楽に解決出来たんだがな」

軽く皮肉って真鍋を見る。

「あはは…それは悪かったわ
今度ジュースでも奢るから、それで許して？」

「……」

ジュース一本…果たしてそれは今回の事件に奔走した俺に分相応なのか？

…否…断じて否…

なので高価な物を要求しようしたら…

ガチャ

「真鍋さん」

生徒会の扉が開き、中から緑のリボンをしている三年の女子が現れた。

「はい　なんですか？会長」

（会長…？）

どうやらこの人が現桜ヶ丘高校の生徒で一番偉い人物らしい（今知った）

「じゃあ咲也、私これから生徒会の仕事があるから」

そう言って真鍋が俺と別れようとしたが…

「待って、あなた確か軽音部の人よね？」

何故か会長に引き止めれた。

……

場を移動して生徒会室内に理由がさっぱりなのに連れて来られた…

「…俺になんか用があるんスか？」

「あなたにって訳じゃないんだけど、軽音部に用があるのよ」

なんか嫌な予感が…

「軽音部だけ講堂使用届が出てないのよ」

その言葉に…

「えぇっ!?」

俺の隣に立っていた真鍋は驚き…

「はぁ…」

俺は予感的中してしまい額に手を当て、ため息を…

「咲也!まだ出してなかったの!?」

「…みてェだな」

「悠長に言ってる場合じゃないわよ!使用届の提出期間は昨日までよ!」

「はぁ？」

なんだと…

…マジで？

とりあえず今日中に出したら良いと思ってたんだが…

ピンチだ…

「それって…今日出したら受け付けねェとか？」

「会長…」

希望を真鍋に聞き、それを生徒会長に伝達するが…

「規則は規則だからね」

「……」

なんともマニュアル通りの返答しやがった…

「あの、そこをなんとかお願いします！軽音部の部長は風邪を引いて欠席してたんです！だから提出が出来なかったんです！」

「……」

すると真鍋が生徒会長に頭を下げて俺達のために懇願してくれるが…

「でも、その場合は副部長がなんとするものじゃないかしら？」

「…チッ…」

今度は痛いところを突いてきやがった…

この堅物が…

「そ、それは…」

真鍋が頭を上げながら言い淀む。

なので…

「…部長とか副部長とかの前に軽音部にはトラブルがあったんだよ」

「咲也…」

俺がピンチヒッターを。

「トラブル？それって使用届が出せない程のものなの？」

「あぁ…　軽音部そのものがなくなる程のな」

「…それは言い過ぎなんじゃ…」

真鍋が今は必要ないツッコミをしてくるのでスルー。

「…つうか人間誰しも忘れてたり失敗したりするもんだアンタだってそうだろ？」

「まぁ…確かにね…」

「今回のことはトラブルとあいまってこんなことになっちまったんだ…」

「あの、次からはちゃんと期間内に提出させますので、今日まで待ってくれませんか？」

「……」

俺と真鍋の発言を受けた会長が思案顔になり…

「…分かりました　今回だけ特別に今日一杯まで待ちましょう」

ふぅっと息を吐き、やれやれっといった感じに提出期間の引き延ばし許可を。

「ありがとうございます！会長！」

「…ども」

深々と頭を下げる真鍋。
対して俺は軽く頭を下げる。

……

なんとか今日一杯まで待ってくれたことに安堵しながら部室に向う。

「…なんでお前までついてくんだよ」

俺の隣で階段を上がる真鍋の存在を不思議に思い問い掛ける。

「心配だからよ…ちゃんとこの眼で見ないと…」

「…あっそ」

「次からはフォロー出来ないわよ？分かってる咲也？」

「大丈夫だ…次に軽音部が講堂を使うのは来年の新歓の時だし、そんときゃお前が生徒会長になってんだろ…」

「あのね…」

するとここにきて、後数段上ったら部室に着くというところで…

『律！講堂使用届の提出期間って昨日までじゃなかったか！？』

『あぁぁっ！忘れてたぁ！』

部室から秋山と田井中の叫びが聞こえ、その内容を聞いた俺達は…

「「はぁ…」」

顔を見合わせてはため息を…

「ついてきて正解だったわね…」

「苦労かけるな…」

「本当よ…ジュースの件はナシで良いかしら？」

「どうぞ…」

ガチャ

軽い疲労感を覚えながら部室の扉を開く。
するとどうだろう中の様子は…

「ど、どうするんですか！？」

「私達、学園祭で講堂使えなくなっちゃうの～！？」

「とりあえずみんな、紅茶でも飲んで一度落ち着きましょ？」

「ムギ！落ち着いてる場合じゃないって！」

「さ、さわちゃん！どうしたらいいんだ！？」

「そうねぇ…生徒会に直談判するしかないじゃないかしら？」

部室内では部員一同（琴吹以外）がパニックになっていた。

「それなら大丈夫よ」

『えっ？』

そんな空間を落ち着かせようと真鍋が一歩前に踏み出す。

「講堂使用届は私と咲也とで生徒会長にお願いして、今日一杯まで待ってくれるように頼んできたから」

「……」

真鍋が笑顔を見せながら先程会長と取り付けた約束をパニックルームメイトに伝えると…

「の、和～ッ！」

「サッく～んッ！」

田井中は真鍋に、平沢は俺にそれぞれ感激の面持ちで飛び掛かってきた。

「ちょ、ちょっと律…」

「あ、あんた～ホンマにエエ人や～澪をヨロシク頼んます～そしてこれからは私の面倒も見てくだせぇ～」

「おい！」

田井中に抱き付かれ若干恥ずかしそうな真鍋。
どこの方言なのか分からない言葉を使う田井中。
そんな田井中にツッコむ秋山。

「サッくん…避けんといてくださいよ…」

「普通避けるだろうが…」

「感謝の気持ちの表われなのに～」

「だったら中野にやってろ…」

「あずにゃ～ん♪」

「ニャアァッ！？」

平沢が俺に飛び掛かってきたがあえなく失敗し、俺の発言を有言実行する。

「なんだか賑やかね～♪」

「騒がしいの間違いだろ…」

琴吹がニコニコしながら中々カオスチックな光景に…コイツうっとりしてやがる…

「はぁ…」

ため息一つを吐いて長イスに向かっては座る。

と…

「お疲れ様、咲也くん」

ねぎらいの言葉と共に山中顧問が俺にティーカップを差し出してきた。

「……」

それを無言で受け取る。

「うまくやったみたいね？咲也くん」

未だにカオスチックな光景を作り出している連中を見て山中顧問が微笑む。

「……」

そこには『いつも通り』の賑やかで騒がしくもあり誰しもが笑顔の光景が…

「別に俺は何も…」

「も～うそんなに謙遜しないで良いじゃない」

別に謙遜はしてねェよ…

「けど、それが咲也くんらしさなのよね～
よっ！カッコいい！男前！」

うるせェ…

……

講堂使用届を今日中まで待ってもらうことには成功したが、善は急げということで使用届に必要な最後のピースである保留していたバンド名を決めようとしたのだが…

「ねぇ？やっぱ『ぴゅあ☆ぴゅあ』良くない？」

「…良くねぇよ」

「『握り拳』は！」

「演歌かっ！」

「『靴の裏のガム』とかどう？」

「…お前思いつきで喋ってんだろ」

「じゃあ『タンスの角に薬指』は？」

「だからなんでそんな変な…薬指!?器用だなおい!!」

「はぁ…」

「ムギ～なんか良いのない?」

「ん～…『充電期間』とかどう?」

「縁起わりーっ!」

「じゃあさ『ポップコーン☆ハネムーン』とかは?」

「だーかーらーなんでそんな甘々のばっかなんだよ!」

「あっ!『ロケットエンピツ』って良くない?」

「「お前はちょっと黙っとけ」」

「ガーンッ!ぶ、部長と副部長から言われた…」

出るわ出るわ…
まともとは言いがたい意見が…
主に平沢と秋山から…

「あの～…みなさん…」

「あン？」
「なぁに？あずにゃん」

書記をしていた中野がおそるおそると発言する。

「早く決めないと…先生が…」

「え？」
「さわちゃんがなんだ？」
「さわ子先生？」

中野の発言の中にあった人物を見る…

「♪」

そこには微笑みを浮かべた山中顧問が…

嵐の前の静けさというやつか…

そしてすぐに嵐はやってきた…

「まどろっこしいーッ！！」

『うわぁっ！』

『キャアッ！』

「…ッ！」

中々決まらない俺達に業を煮やしたのか突然奇声を発しながらテーブルの上（中野の近く）にあった使用届を奪い取る。

そして山中顧問の横に座っていた俺は耳キーンに…

「ゆっくりお茶もできやしない！こんなの適当に決めれば良いのよ

！…よしっ！」

『あぁっ！』
「耳が…」

どうやら勝手に決めたらしいが…それよりも耳が…

「あなた達のバンド名はこれよ！」

そう言って勝手に決めた張本人がテーブルの上に講堂使用届を置く。

『……』

それを部員全員で覗き込む…

「……」

そして俺は絶句…

（ナシだろコレは…）

だがしかし、そんな俺の思いとは裏腹に…

「まぁ良いっか！」

「そうだな！」

「はい！」

「うん♪」

「私達のバンド名はこれで決まりだね～♪」

「おい」

なんで納得してんだお前らは…
こんな軽音部の実態を全面に押し出したバンド名はありえねェっての…

「…俺は反対だ」

なのでその意思を伝える。

「え～　良いじゃんコレで～」

「ていうか今の流れだとサクも頷かなきゃダメだろ」

そんな流れはせき止めてやる…

「じゃあ多数決を取ろう」

おかしなこと言うな秋山よ…
絶対に俺の不利じゃねェか…

「このバンド名に賛成の人」

『は～い』

無意味な多数決の結果、賛成に俺以外のこの場にいる全員が手を上げる。
そう…『全員』が…

「なんでお前まで参加してんだよ…」

「別に良いじゃない　それにこのバンド名はなんだか軽音部らしいから」

俺の視線の先には小さく右手を上げてる真鍋が。
そして講堂使用届を手に取り…

「それじゃあ　コレを会長に提出してくるから」

何言ってんだお前？

「うん♪ヨロシクね和ちゃん♪」

「ちょい待てや真鍋」

「咲也、往生際が悪いぞ」

「そうですよサク先輩、もう決まったことなんですから」

「うるせェ　俺はＮＯと言える日本人なんだ」

「全く～男らしくないぞ～サク」

「ていうか真鍋さん、もう行っちゃったわよ？咲也くん」

「はぁ？」

視線をさっきまで真鍋が立っていた場所に向けるが…いつの間にかいなくなってやがる…

「咲也君、紅茶でも飲んで落ち着いて」

「……」

落ち着けるかよ…

―――――――――

「会長　軽音部の講堂使用届です」

「ありがとう真鍋さん

えーっと…記入漏れはないわね…」

「はい」

「ん？ねぇ真鍋さん　この名称のところに書いてあるのって…」

「それは軽音部のバンド名です」

「これがバンド名？」

「はい　軽音部の全員が納得してそれになりました……咲也は納得してなかったけど……」

「え？何か言った？」

「い、いえ！なんでもないです！」

「そう？」

「は、はい」

「まぁ…軽音部が納得してるんならこれでかまわないわ」

「それじゃあ、よろしくお願いします」

「分かったわ…それにしても、ホント変わったバンド名ね」

「そうですか?私は好きですよ、この…

【放課後ティータイム】

ってバンド名」

第五十五話（前書き）

学園祭直前編前編です。

第五十五話

現在…

「……」

モグモグ…

ソファーに座って肉まんを食してる俺と…

「お前なァ…勝手に人のブツを食うんじゃねェよ…」

同じくソファーに座ってはガサガサとコンビニの袋を漁りながら文句を言う修司と…

「えっと…お水と…あとは…冷えピタ？…は憂が用意するから…え～っと…」

俺達の前で右往左往してはブツブツ呟いている中野と…

「梓ちゃん、お姉ちゃんを着替えさせるから手伝って～」

姉の部屋に行っていた平沢妹がテクテクとリビングにやってきては
若干オロオロしながら中野にヘルプを求める…

「あ、うんっ！」

（阿吽？）

「阿吽？」

「……」

最悪だ…アホと思考がかぶった…

「サク先輩！影宮先輩！」

「…あン？」

「うん？…はっ！これが阿吽の呼吸か！」

「唯先輩に薬を飲ませるためのお水を用意していてください！」

「…その薬は？」

「へ？あっ！？う、憂！風邪薬どこ～！」

「薬箱の中にあるので咲也さん、修司さん、申し訳ないんですけど用意してくれませんか！？」

「かまわねェけど…その薬箱はど「ありがとうございます！梓ちゃん！」…どこに「うん！」……聞けやお前ら」

ドタドタドタッ…

「薬箱ってどこにあるんだい？咲也」

「俺が聞きてェよ…」

平沢家は開けてはならないパンドラの箱を開けてしまいパニックに陥ったかのように…大袈裟だな…とにかくドタバタしていた…

「勝手に唯ちゃんと憂ちゃんの家を漁るのは気が引けるよな～…」

「お前ならイケるだろ…ストーカー予備軍だし」

「いつからそうなったッ！？」

主に中野と平沢妹がだけど…

――――――――――

さかのぼること数時間前…

本日、納得がいかないバンド名が決まった日から、二日が過ぎた九月最後の週の月曜日。

只今の時間帯、放課後。

キュキュキュ…

「…と…よしっ！」

「…『よしっ』じゃねェよ」

部室にあるホワイトボードに田井中が書き込んだ文字にやっぱり納得がいかないのでツッコむ。

「まだ言ってんのかサクは～」

「…たりめェだ…つうか逆に問うぞ…」

座っていた長イスから立ち上がり、田井中が持っていたペンを奪い去り…

「…お前らは何でコレに疑問を持たねェんだよ」

ホワイトボードに傷がつくかつかないかギリギリの力加減で田井中が書いた【放課後ティータイム】というある意味前衛的なバンド名をペンで叩く。

「何でって…」

それに真っ先に反応した秋山が俺の隣に立っていた田井中に視線を移し…

「ティータイムがウチのウリだし～」

次に田井中がそのウリのティータイムをニコニコしながら準備している琴吹に視線をぶつけ…

「和ちゃんも言ってたけど私達らしいバンド名だから～♪ね？梓ちゃん」

「まぁ、私達らしいといえばそうですね」

「……」

中野がムスタングを構えながらの発言に絶句する。

お前…入部した際にティータイムに苦言を呈してたよな…

すっかり毒されやがって…

「はぁ…」

「もう決まったことなんだから諦めろサク♪」

二カッと笑いながら部長が俺の肩にポンっと手を置いてくる。

確かに決まったことだ。

真鍋がこのバンド名に反対する人間が一人いるというのに、さっさっと生徒会に講堂使用届を提出してしまった今では、もはや俺の抵抗など無に等しい…

だからといって納得はしたくない。

納得したら負けだ。

「……」

じゃあどうする？

…妥協に妥協を重ねて俺自身をごまかすしかないだろう…

「唯？どうした？」

「……ほぇ？なにが？澪ちゃん」

「いや…なんか様子がおかしかったから…」

「う～ん…なんか朝からポーッとするんだよね～…」

「…お前がボーッとしてんのはいつものことだろうが」

「違うよサッくん　ボーッじゃなくてポーッだよ」

（どう違うんだ…）

【放課後ティータイム】の文字を凝視していると秋山と平沢の会話が聞こえてきて、平沢の発言に引っ掛かるところがあったのでバンド名を見ながらツッコみ、返ってきた言葉に内心で疑問を思いながら…

「……」

キュキュキュ…

「唯はサクが何気なくけなしたことに気付くべきだと思うぞ…」

「え？なにが？」

脳内会議の結果、俺が妥協出来るバンド名が制定されたので【放課後ティータイム】の下に書き込む。

【ＨＴＴ】

「……」

まぁ…これならなんとか…

「えいちてぃーてぃー？」

平沢が俺が書いた文字に気付いたらしく舌足らずな感じで発音する。

「あぁ～省略したんですね」

「あぁ…」

「ソレだったら咲也は納得？」

「……あぁ…」

かなり…かなり譲歩して妥協して渋々な…

「じゃあ改めて…私達のバンド名は【放課後ティータイム】だ！」

「…改まってねェぞ」

部長の堂々発言に頭が痛くなってくる…

「【ＨＴＴ】だ…」

「も～しつこいな、サクは！」

「はぁ…」

しつこくねェだろうが…
何で俺の意見は通らねェんだ…
間口は針穴より小せェのか？

……

結局…バンド名は【放課後ティータイム】通称【ＨＴＴ】と話は纏まった（完全に納得はしてない）

「さてと、ムギの紅茶で英気を養ったことだし…」

「……」

「練習だーっ！」

部長曰く『英気を養った』らしく約十五分という珍しい短時間で軽音部のウリであるティータイムを（これまた部長曰く）を済ませる。
ちなみに俺は紅茶一杯飲んだだけ。

「梓にとっては軽音部での初ライブだな」

「はい！私すごく楽しみです！」

「……」

秋山の言葉に本当に楽しみな様子で頷く中野。

そんな後輩の様子に俺以外の部員と顧問が笑みを浮かべる。

「…ん？」

顧問？

「アンタいつからいた…」

「え?…って、さわちゃん!?」

「いつからって、さっきからいたわよ?」

「それがいつだよ…」

優雅にティーカップを口に運びながら何言ってんだ…

どうやらこの人は神出鬼没のライセンスを某借金執事同様に持っているらしい…

「りっちゃん、練習の前に大切なことがあるでしょう?」

「大切なこと?」

「ゴホッ…それってなぁに?」

「それはね唯ちゃん…」

ティーカップをテーブルに置き、立ち上がった顧問は…

「♪♪～」

御満悦な様子に何故か物置部屋に行き…

「嫌な予感しかしねェな…」

「うん…私も…」

俺の予感に秋山が同意した瞬間に…

「ステージ衣装を選ぶに決まってるじゃな～い♪」

「……」

物置部屋からハイテンションな顧問が大量の衣装がかけられたハンガーラックを押しながら出てきた…

「ていうかさわちゃんさ、次も制服で良いじゃん」

「つまらないからダメ！！」

「はぁ…」

もう完全に頭痛がするので長イスに座り、傍観に徹することに…

しかし…

「あの…サク先輩…」

「…あン？」

それを許してはくれないようだ…

「衣装って…なんですか？」

「被服だ…」

「いや、それは分かってますけど…衣装着て演奏するんですか？」

「…みたいですね」

「あの中から選んで…ですか？」

「…みたいですね」

「あの衣装って…先生が作ったんですか？」

「…みたいですね」

「はぁ、そうなんですか…」

「…みたいですね」

「意味分かりません…」

「…つうかお前…さっさっと衣装選ばねェと、あんなの着せられるぞ…」

「あんなの？」

俺が指差す先には嬉々と衣装を選別する山中顧問と…

「ゴホッ…ねぇねぇ澪ちゃん、コレはどうかな？」

「ウェイトレスなんてヤダよ…」

「じゃあ澪ちゃん、チャイナ服は？」

「もっとヤダッ！！」

平沢と琴吹が選んだ衣装に拒絶反応を起こす秋山と…

「りっちゃん、水着なんてどうかしら♪」

「そんなの着るかーっ！！」

田井中にやっぱり嬉々と水着を提示するぶっ飛び顧問の姿が…

「選んできます！」

そんな光景を目の当たりにし、危機感を感じたらしい中野が一歩踏み出すが…

「サク先輩は選ばないんですか？」

踏み出した右足を軸にキレイな回れ右をして再び俺の正面に振り向いては質問をしてくる。

「…俺は制服でやる」

なので問題ナシ。

「先輩一人だけ制服だったら浮きますよ？」

「…あんな衣装を着るよりマシだ」

「だとしても…あ！じゃあ私がサク先輩でも着れる衣装を探してきますね！」

「……」

何故気合い満々に…

衣装なんて着ねェつうの…

「ん―っと…」

「お、あずにゃんやる気だね～♪　ゴホッ」

「ちゃんとしたのを選ばないとイケませんから」

「じゃあ私も手伝うよ～♪　ゴホッ」

「まともなのを選んでくださいよ？サク先輩も着るんですから」

「はっ！」

「ンだよ…」

中野と一緒にハンガーラックを漁っていた平沢が俺を凝視する。

「ん～…」

「……」

そしてカメラマンのように右手の人差し指と親指及び左手の人差し指と親指で四角を作り、片目をつぶってその枠に俺を入れて唸る…どうやら俺をモデルにしているみたいだ…

「ゴホッ　サッくん！これなんかどうかな？」

「……」

そして吟味した結果、選んだ衣装は…

「執事服か…これはサク専用だな」

「それを咲也が着るとしても私達はどうするんだ？」

着ねェつうの。

「大丈夫よ！ちゃんとメイド服もあるから！」

「でもこの前メイド服で演奏しようとしたけど、上手く楽器が弾けなかったわ…」

「いつ着たんですか…先輩方…」

「確かにそうだったな～　じゃあメイド服はナシで」

「え～っ　じゃあサッくんの執事服は～？」

俺のじゃねェぞ。

「咲也が執事服で私達だけ別の衣装だったら違和感があるからな」

「ぶぅ～…」

「……」

俺がなんの意見も出さずに却下になった…
…まぁ、どうせ俺の意見なんて通らねェから結果オーライ。

「あっ　みなさん　これなんてどうですか？」

すると中野がハンガーラックからとある衣装を取り出す。

「…浴衣…何故？」

その衣装とはズバリ浴衣…
この肌寒い季節には致命的な布の薄さだ…

「これだったらサク先輩も着れますよね？」

中野が浴衣を体に当てて、俺に意見を求めて…

「わぁ～♪かわいい♪ねぇねぇ着てみていい！？」

「良いですけど…」

「じゃあ着てくるね～♪」

「……」

…くるが興奮した平沢により妨害される…

何故だろうな…

俺は意見を言うことを許されないのか？

このままじゃ……なぶり殺しだ…

……

ガチャ

「エヘヘ～♪どうかな～？」

物置部屋で着替えていた平沢が浴衣に着替えて出てきた。
そしてニコニコしながら俺達に感想を求めてくる。

「わぁ♪唯ちゃんかわいい♪」

「お、似合ってる似合ってる、コレだったら澪も着れるしょ？」

「まぁアレなら…」

「動きやすそうですしね」

「さすが私ね！良い仕事するわ～！」

口々に感想を言う面々。

「ゴホッ　サッくん！サッくん！どうかな？似合う？」

「……」

唯一何も言わなかった俺の前に来て、その場でクルリっとターンをして期待の眼差しで俺を見てくる。

「…普通」

「ガ、ガーンッ！」

別に俺に感想を求めねェでも、アイツらが言ってんだから良いじゃねェか…

「だから言ってんだろ唯、サクにそんなの求めたって無駄だって」

「失礼だなお前…」

「じゃあ気のきいた言葉をかけてやれよ」

「普通…」

「はい　以上サクからのコメントでした」

どこのキャスターだお前は…

すると…

「むぅ～！」

平沢が頬を膨らませながら俺を見据えてくる。

「みんな！ゴホッ　練習しよう！」

「え？いきなりどうしたんですか？」

「サッくんが褒めてくれないから怒ったもん！
だから練習するッス！」

「……」

どうやら拗ねたらしい。
プンスカしながらトコトコとレスポールに向かう平沢。

「あ～あ　唯怒っちゃったぞサク」

「…練習する気になったから良いじゃねェか」

「はい　以上サクからのコメントでした」

だからどこのキャスターだお前…

……

♪♪♪…

なるほどな…
中野が言う通り、一人だけ違う服だと確かに浮く。

♪♪♪♪…

平沢は未だに浴衣を着用している。
俺達は当然制服。

♪♪♪♪♪…

浴衣一人で制服五人…
かなりアンバランスだ。

♪♪♪♪♪♪…

つうかそんな布が薄い生地でこの季節を謳歌してると…

「…ッ！ゴホッ！ゴホッ！」

「「唯！？」」
「「唯ちゃん！？」」
「唯先輩！？」
「アホめ…」

風邪引くだろうな…

……

「大丈夫？唯ちゃん…」

「…大丈夫だよムギちゃん…ゴホッ！ゴホッ！」

「…どこがだアホ」

練習中に平沢が倒れるようにしゃがみ込み盛大な咳をした。
練習を中止し、平沢を長イスに横たわせてそれを全員で覗き込む。

「熱はないみたいだけど…無理は禁物ね…」

今し方平沢の熱を測った体温計（琴吹と中野が保健室で借りてきた）を見ながら顧問が呟く。

「…つうかお前、朝から体調悪かったんじゃねェのか?」

ボーッと?ポーッと?するっつってたし。
チョイチョイ咳してたし。

「…そこまで悪くなかったよ…憂には休んだほうがいいって言われ

たけど…」

「従っとけやそれは…」

「…でもでも…学園祭が近いから休めないよ…」

「唯、その気持ちは嬉しいけど、それで本格的に風邪を引いたら本末転倒だよ」

「…ぅぅ…ごめんなさい…」

秋山の発言にシュンと落ち込む。

「とにかく今日はもう解散だな」

「そうね、唯ちゃんが風邪をこじらせたら大ごとよ」

「まだ熱は出てねェみてェだしな…」

「風邪は引き始めが肝心って言いますしね…」

「確かに…」

部長が平沢の体調を考慮して今日の部活はここまでに。
そして顧問が体温計をぷらぷらさせながらもっともなことを口にする。
中野が平沢を心配な面持ちで見つめながらの発言に俺が同意する。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「……」

仮に浴衣ではなく制服だったらこんな事にはならなかったかもな…

「サクが褒めてやらないから…」

「コイツが変な意地張るからだ…」

平沢の風邪が悪化した原因は俺にあるみたいな言いかたするが…
俺は悪くねェ…と思うが…いや…一応俺が悪いの…かも…いやしかし…

「はぁ…」

「ゴホッ！ゴホッ！」

―――――――――

いつもより早い時間帯の帰り道を俺と平沢と中野で帰っているのだが…

「ゴホッ！ゴホッ！ぅ～…」

「唯先輩…大丈夫ですか？」

「…大丈夫だよ～あずにゃん…」

「そんなフラフラの状態で言っても説得力ねェぞ…」

平沢の足取りはおぼつない程にフラフラしており、中野が平沢を支えていなければ倒れてしまいそうだ…

「……」

俺は自分の鞄をアコギの入ったギターケースと共に右手に持ち、平沢の鞄とレスポール入りのギターケースと共に左手に、そしてテレキャス入りのギターケースを背に背負い、一見したら武装兵器を全身に装備したような姿になっていた…

「はぁ…はぁ…ッ！ゴホッ！！ゴホッ！！」

「唯先輩！？」

すると平沢が盛大な咳をしだす…
こりゃ本格的に風邪引いたか…？

「…中野、一旦平沢を座らせたほうが良い」

「あ、はい！」

幸いにも目の前にはバス停があるので、そこにある椅子に平沢を座らせる。

「……」

ネックに負担がかかるのであまりやりたくないが、やむを得ずギター三本ともに椅子に立て掛け、鞄を無造作に地面に置き、全武装解除完了。
そして平沢の表情を見る。

「はぁ…はぁ…」

「……」

顔全体が紅く染め上がり、呼吸が荒い…

平沢自身が平気だからと言うから歩かせてはきたが、完全に裏目に出たな…

悪化してしまった…

「唯先輩、少し失礼します」

そう言って中野が平沢の前髪を上げる…

「…ぅぅ…あずにゃん…おでこは…勘弁してくだせぇ…」

「わがまま言わないでください」

「デコがなんだ…？」

「女の子っておでこを出すのがイヤな人がいるんですよ」

「部長は全開だぞ…」

「律先輩はおでこ出してないと落ち着かないみたいですよ？合宿の時に言ってました」

「まぁ、年がら年中さらけ出してるしな…」

「…あずにゃん…ゴホッ！恥ずかしいんですけど…サッくんがいるからなおさらですたい…」

（何故博多弁？）

「あ、すみません　じゃあ…」

後輩によってさらけ出された平沢のデコに中野が手を当てる。

「…ぁぁいい…」

「変な声出さないでください…」

「…だってあずにゃんの…手が冷たくて…気持ちいいんだもん…ゴホッ！」

「唯先輩、熱がありますね…」

「こんだけ真っ赤になってたらあるだろ…」

しかし…どうするか…

熱が出だしたのならば早めに平沢を休ませた方が得策だが…

「はぁ…はぁ…」

「唯先輩…」

平沢をこれ以上歩かせる訳にはいかない…
俺が平沢を背におぶさるか？

「……」

それは最終手段だ…
ぶっちゃけそんなのはハズい…

中野は無理だな…平沢と体格差があるし、仮に中野がやったとしても中野の『じゃじゃ馬』と鞄を俺が持つことなる。
これ以上は流石に持てない…

「サク先輩、唯先輩を早く休ませたいんですけど…移動どうしましょうか…？」

「……」

中野が俺にこの状況の打破を求めてくる。

「タクシー捕まえるか…」

タクシーならば全員と荷物を持って移動出来るし平沢にかかる負担も少ない。
俺の財布への負担は痛いが…

「お願い出来ますか？私は唯先輩を診てますので…」

「あぁ…」

と返事をしたのは良いものの…

……

「…通らねェ…」

どうやら今日は厄日らしい…
俺の意見は通らねェし、平沢はダウンするし、五分ぐらい待ってもタクシーは全く通らねェし…

（踏んだり蹴ったりだ…）

「うぅ…ゴホッ！ゴホッ！…はぁ…はぁ…」

「ゆ、唯先輩…大丈夫ですか？」

背中から平沢の苦しそうな声と中野の心配する声が聞こえてくる…

（仕方ねェ…最終手段を…）

もはやハズいとか言ってられる状態じゃない。
平沢をこれ以上苦しめる訳にもいかないし、肺炎にでもなったらシスコンの平沢妹が失神しそうだ…

「……」

恥とプライドを捨てて平沢に向き直った瞬間…

「あれれ?咲也と梓ちゃんと唯ちゃん?こんなところでなんばしよっとね?」

自転車に跨がった必要な時に現れない奴が、初めて現れた…

…つうか何故博多弁?

「…おいアホ」

「名前で呼べ!名前で!通称で呼ぶな!って、誰が通称アホだ!」

「うるせェ…自分で言ったんだろうが…」

「クッ…さすが我が親友だぜ、痛いとこを突いてくるな…」

『親友』にツッコミたいがそんなことをしている場合じゃないので堪える。

「おい、それ貸せ」

そう告げて修司が跨がっている自転車を指差す。

「ん？なぜ？」

「…平沢を家まで送り届ける」

「唯ちゃんを？」

修司が隣に座っている中野にもたれ掛かって苦悶の表情を浮かべている平沢に視線を向ける。

「ゆ、唯ちゃん!?どったの!?」

「あの、あんまり大きな声出さないでください
唯先輩の体に障ります」

「おぉ…ソーリー…」

「状況理解したな…平沢を早いとこ家で休ませてェから、ソレよこせ」

「分かった、そういうことならウェルカムだ」

自転車から降りて、カゴに入っていた袋を取る修司。

「…平沢、立てるか?」

「…ぅ…ん…」

俺の言葉に弱々しく反応するが、とてもじゃないが立てる状態ではない…

「……」

なので平沢の右腕を俺の首に回させ…

「…中野、手伝え」

「はい！」

中野に平沢の体を支えてもらい、半ば平沢を引きずるように自転車に向う…

「咲也、お前先に自転車に座れ」

「あぁ…」

修司の命令に従うのは非常に癪だが、事は急を要するのでサドルに座る。

「唯ちゃん、荷台に座れるかい？」

「…修司…君…？なんだか久しぶり…だね…」

「そうだね二年じゃクラスが別になっち「ンなことどうでも良いからさっさっと座らせろ」…ヒドッ」

「唯先輩、しっかりサク先輩に掴まってください」

四苦八苦していた平沢がなんとか荷台に座り、中野の言葉を聞いてか、反射的なのか、俺の腰を抱き締めるかのように両手を回してきた…

「それじゃあサク先輩は先に唯先輩の家に向かってください」

「俺達は歩いて唯ちゃんの家に行くぜ」

「あぁ…」

ペダルを踏んで自転車を漕ごうとしたが、言い忘れてことがあった…

「…おい修司」

「んあ？」

「…俺と平沢のギターと鞄、持ってこいよ」

「モチのロンだ」

「もしギターを少しでもぶつけたり、落としたりしてみろ…」

「ど、どうなんの？」

「もれなくお前の家を燃やす…」

「放火予告!?」

「……」

シャアアアア…

「恐ろしい事言いやがって…だが任せな!お前と唯ちゃんのギターは俺が守って見せるぜッ!」

「サク先輩はもう行っちゃいましたけど…」

「なヌ!?」

「とりあえず私達も行きましょう」

「そうだね…　あ!そうだ!」

「なんですか？」

「自己紹介だよ自己紹介
…って言っても俺達実は初対面じゃないんだよね～」

「去年のクリスマス・イヴの時にサク先輩と一緒にケーキ売ってた人ですよね？」

「おや？よく分かったね？」

「サク先輩から聞きましたから…」

「あ、そうなんだ
まぁ、とりあえず自己紹介しとこうか　俺は影宮　修司」

「中野　梓です」

「ヨロシクね～梓ちゃん」

「よろしくお願いします　影宮先輩」

―――――――

シャアアア…

「……」

平沢家に向けて驀進中。

「はぁ…はぁ…エヘヘ♪サッくんの背中だぁ…」

「黙って掴まってろ…落ちるぞ…」

「…ぅ…ん…」

ギュッ

背中から伝わる平沢の体温は明らかに高く感じる…
それほど風邪はヒドいらしい…

「……」

ペダルを踏む足に力を込め、一目散に平沢家への道を突き進む。
平沢家には去年のクリスマスパーティー以来だが過去に二回も行ってるので道に迷うことなく…

キッ

「ふぅ…」

辿り着く。

「…おい平沢、着いたぞ」

「…ぅ…ん…ありがとう…サッくん…」

平沢を先に荷台から降ろし、すぐさま俺も自転車から降りてふらつく平沢を支える。

「…家に誰かいんのか？」

「…多分…ゴホッ！…憂が…」

その言葉を聞き…

♪ピンポ～ン

インターホンを押す。

「『は～い』」

インターホンから平沢妹の声が。
在宅していてくれて良かった…

「俺だ…」

「『え？…あっ、咲也さんですか？』」

よく分かったな…

「…ひとまず玄関まで来い　お前の姉貴が瀕死だ」

「『えっ！？お、お姉ちゃん！？す、すぐに行きますっ！！』」

「……」

言い方マズッたか？
声だけでかなり平沢妹が慌てふためいているのが分かる…

ガチャ！

「お姉ちゃん！？」

玄関の扉が勢いよく開き、中から心配と驚愕が入り交じった表情の平沢妹が。

「…ぅ～ぃ…ゴホッ！」

「お姉ちゃん！大丈夫！？しっかりして！お姉ちゃん！！」

「……」

とりあえず落ち着け…

―――――――

あの後、俺が平沢を部屋まで運び、平沢妹が姉の看病のためにあれやこれやと家中を徘徊していると、中野と修司がやってきた。

修司は一度しか来たことがない平沢家への道を覚えていたらしい…アホのくせに…

とりあえず平沢の看病は同性の中野と平沢妹に任せ、俺は修司がコンビニで買った肉まんを強奪して疲労を癒し、修司は別の肉まんを。ちなみに修司は小腹が減ったのでコンビニに行き食料を調達した帰りに俺達と遭遇したらしい。

「薬箱ってこれか…」

薬箱の居場所は平沢妹に聞き、中から風邪薬を取り出して修司が用意した水で寝間着に着替えた平沢に風邪薬を投与し…

「なんとか落ち着いたな～　疲れた～」

「お前、疲れるようなことしてねェだろうが…」

現在に至る。

「咲也さん」

するとリビングに姉の看病をしていた平沢妹と中野がやってきた。

「お姉ちゃん、薬が効いたみたいで眠りました」

「そうか…」

「まだ油断は禁物なんですけどね…」

そう簡単に治らないのが風邪だからな…

果たして学園祭まで間に合うか…

「はぁ…」

とりあえず疲労が混ざった、ため息を吐いて…

「じゃあ俺とアホは帰るぞ…」

「名前でお願いします」

ソファーから立ち上がって軽く体を伸ばしながら帰還する意図を伝える。

「はい、咲也さん　梓ちゃん　修司さん、ありがとうございました」

俺達に深々と頭を下げる平沢妹。

本当礼儀正しいなコイツ…

「ねぇ…憂」

「なぁに?梓ちゃん」

すると中野が思案顔をしながら平沢妹を呼び、それに反応した平沢妹が顔を上げる。

「私、もう少しだけいて良いかな?その…唯先輩のこと心配だから…」

「……」

ポリポリと頬をかきながら若干恥ずかしそうに言う中野に…

「うん!ありがとう梓ちゃん!お姉ちゃんも喜ぶよ~」

平沢妹が中野の手を取り、姉ソックリの笑顔で歓迎する。

「…じゃあ俺とアホは帰るぞ」

俺達がいても何も出来ないし、かえって邪魔になりそうなので再度同じ言葉を平沢妹にぶつける。

「あ、はい！今日は本当にありがとうございました！」

「また明日です先輩」

「憂ちゃん、梓ちゃん、あんまり根をつめすぎちゃイカンよ？ほどほどにね」

「「はい」」

「じゃあな…」

俺と修司は平沢家の玄関に向けて歩きだした…

学園祭まで…あと五日…

第五十六話（前書き）

学園祭直前編後編です。

第五十六話

明けて翌日火曜日の昼休み。

「ぐぬぬぬ…！」

「ちょぉぉぁいいいいさぁぁぁっ！！」

「……」

昼メシのパン類を腹に納め、俺の前の席で修司とクラスの男子が、俺が食べきれなかった焼きそばパンを賭けて腕相撲で勝負しているのを頬杖をつきながら傍観していると…

「お～いっ！サク～っ！」

教室内に鳴り響くのは、放課後になったら必ず出会うデコの活発なボイス…

「ん？サクって誰だ？」

「桐島クンのことだよ　僕は去年、田井中さんと同じクラスだったから、秋山さんと桐島クンのことを話してるの聞こえて、その時に田井中さんがそう呼んでるのを聞いたよ」

「へ～　桐島って田井中から『サク』って呼ばれてんのか～」

「そういえば軽音部で唯一お前だけだよな？男って」

「羨ましい…ハーレムじゃねぇか…」

「でもさ？俺達もハーレムっちゃハーレムじゃね？」

「それはただクラスに男子が十二人しかいねぇだけだろ…」

「十二人か…少ないな…」

「でもさ…こんな少人数だから、俺達の結束はダイヤモンドのように固い…それすなわち…俺達はもう家族のようなもんじゃないか！」

『おう！そうだな！家族だ！』

「……」

ついで聞こえてきたのは修司と確か…西野だったと思う奴の勝負をギャラリーとして近くで見ていた我がクラスの男子全員の戯言。

今、思った…このクラスの男子は西野と水本と俺以外はアホだ…

「サクっ～！！」

反応を示さない俺に部長が声のボリュームを上げる…

「ほら！兄さん！呼ばれてるぞ！」

誰が兄さんだ…

つうか俺はお前らの家族じゃねェ…

「はぁ…」

ため息を吐いて、席から立ち上がり、ダラダラと田井中の元に歩き始めようとしたが…

「…おい、水本」

「ん？何かな？」

チビで童顔の水本に伝言を頼む。

「アイツらのどちらかが勝ったら…」

「焼きそばパンあげるんだよね？任せといて！」

「いや…無条件で西野にやっとけ」

「えぇっ！？なんでかな！？」

「…奇声あげながら唸ってるアホが非常に腹立つからだ」

「そんな理由で…？」

「つうことで…頼んだ…」

スタスタ…

「あっ！ちょっと！桐島クン！？」

チビ本が喚いているが華麗にスルーし、教室の扉にいる田井中の元へ。

「オッス！サクっ！」

「お前…ボリューム下げること知らねェのか…」

「サクが最初に呼んだ時に反応しないからだろ
ていうか恥ずかしかった…」

「じゃあすんなよ…」

「うん…すまんかった」

若干頬を紅く染めてこうべを垂れる我が部長。

「じゃあな…」

そんな田井中に軽く片手を上げて颯爽と教室に戻…

「待〜て待てっ」

ガシッ

…ることは叶わなかった。

「ンだよ…」

「なんで戻ろうとするんだよ」

振り返り際に俺の肩を掴んでいた田井中の手を軽くはたき、頬の赤みが取れた田井中に向き直る。

「私のような『美少女』がわざわざサクのクラスに来てやったっていうのに、なんでそんな淡泊に戻ろうとするかな～」

「……」

「そこで黙られると辛いんだけど…」

そうさせたのはお前だ。

「じゃあ何の用だよ…」

「今から憂ちゃんのクラスに行くぞ」

何故決定項？
何故平沢妹のクラスに？
何故俺を？

田井中の発言によって俺の中に三つの疑問が湧き上がった。

「…何しに行くんだよ？」

その疑問の一つをぶつけてみる。
『決定項』は『コイツだから』という理由で納得出来るが、残り二つはそうはいかない。

「憂ちゃんに唯の様子を聞くため」

「……」

理に叶ってはいるな…

一時間目が終った頃合に琴吹から平沢は病欠しているというメールが届いた。
昨日の様子だと当然といえば当然だ。
あんなに苦悶していたし、いくら平沢妹が迅速に処置…はしてなかったような…オロオロしてたし…

まぁ…そうだとしてもいくら平沢妹が真摯に看病をしても、昨日の平沢の様子から察するに一日や二日程度じゃ治らないだろう…

「…何で俺も行くんだ？」

二つ目の疑問を視線と共にぶつける。

「副部長だし、唯がサクのファンだし、サクだし…あとは…そうだな～…サクだから！」

「……」

指を一本一本折り曲げながら理由を述べていくが…
親指は百歩譲って納得してやる。
…が、人差し指、中指、薬指は頷けんぞ。

つうか中指と薬指の内容は一緒だ…

「ていうか！唯のこと心配じゃないのかよ？」

「…心配して病気が治るんだったら世の中から医者という職業はなくなるだろうな」

「うわぁ…ひねくれた考えしてるな…」

「…心配して日常に支障を来す可能性があるなら、そういう考えもあるっつうことだ」

「じゃあ唯のことを心配する考えもサクの中にはあると？」

「…限りなく低い可能性で」

「その可能性を上げなさいっ！」

未だに四本の指を折り曲げたまま、残った小指でビシッと俺を指差

してくる。

「とにかく！行くぞ！」

指を全て開き、俺の右腕を掴んで…

「離せ…歩きにくい」

ズンズンと廊下を闊歩しながら進んでいく。

「私の中じゃサクが逃げる可能性があるから却下」

「その可能性を下げろ…」

「その言葉を聞いて一段と上がった」

何でだよ…

「つうか…琴吹は？」

３６０。視線を巡らせても、あのホンワカお嬢様の姿が見当たらないので、未だに俺の右腕を掴んで闊歩中のカチューシャに問い掛ける。

「『ごめんなさい…私ちょっと用事があるから…』って言ってケータイ片手にどっか行っちゃったよ」

「……」

お前は一々声色を真似しねェと気がすまねぇのか？

いや、似てるけどよ…

……

どうやら秋山も誘うらしくひとまず、一階にある二年一組を目指すために階段を降りていると…

「あっ　律、咲也」

「澪！ちょうど良かった！」

「え？」

「今から憂ちゃんに唯の様子を聞きに行くから、澪も誘おうと思ってたからさ」

「そうなんだ　私も同じ理由で憂ちゃんに会いに行く途中だったんだ」

「……」

階段を上ろうとしていた秋山と、下りてきた俺達とが遭遇した。

しかし…何故コイツは…

「…秋山」

「何？咲也」

「…何でお前、二階に上がろうとしてんだ？妹のクラスに行くにはそのまま行けば良いじゃねェか…」

コイツのクラスは一階にあり、平沢妹のクラスは一年なので一階にある。
そのまま直行すれば良いものを何故か階段を上がってきていた。

「そ、それは…」

俺からプイッと視線をハズし、ポソポソと話し始める。

「…だって…一人だと…恥ずかしいし…だから…みんなを誘って…それに…唯のことが心配だし…だけど…一人だと恥ずかしいし…だから…」

「澪！澪！ループしてるぞ！」

「……」

久しぶりに見たな…秋山がスキル発動したの…

「クスッ　んじゃあ一緒に行こうぜ」

「うん！」

田井中が笑みを浮かべながら秋山を促し、それに笑みを浮かべて同意する。

「……」

『秋山　澪』
恥ずかしがり屋、人見知り、寂しがり屋等々…

『田井中　律』
少し猪突猛進、少し我田引水…かと思えば場の雰囲気を和ませたり…

一見して反りが合わなそうな二人だが、現実は俺の目の前で笑い合うような仲。

「サク？何ボーッとしてんだ？」

「も、もしかして咲也も風邪引いたんじゃ！？」

「違ェよ…」

バンドで重要な『リズム隊』を担当する縁の下の力持ち。
そして琴吹曰く現軽音部を立ち上げた二人…

「おら、さっさっと行くぞ…」

「あれ～？サクは唯のことは心配じゃないんじゃなかったっけ～？」

「その可能性が少しは上がった…」

「…ははは♪そっか！」

「え？何の話？」

恐らく軽音部のことを一番大事に想っているコイツらが平沢のことを心配してるなら、その部員でもありバンド仲間の俺も……多少は心配しないとイケないような気がした…

……

ガチャ

「ヤッホ～　憂ちゃ～んと梓～」

「いきなり入って行くな！」

「……」

スタスタ…

「って咲也も！？ま、待ってよ！」

秋山を伴い三人編成になった俺達は平沢妹とついでに中野が在籍してある一年二組へと辿り着いた。
そして田井中が俺のクラスでの失態からなのか、いきなり教室の扉を開け、軽いノリで進入する。

そんな田井中に秋山が戒めるが別段どうでも良いので俺は無言で進入。
背後から秋山の声が聞こえたがスルー。

「律先輩？サク先輩？」

「澪さん？」

「「どうしたんですか？」」

窓際の机に中野と平沢妹の姿を確認。
そんな後輩コンビが突撃の来訪者である俺達に揃って首を傾げる。

「いきなりごめんな～
憂ちゃんに唯の様子を聞きにきたんだ」

ジー…

「……」

「唯先輩の体調はまだ良くないっぽいです…」

「はい…まだ熱が下がらなくて…」

ジー…

「……」

「そうか…」

「まったく！学園祭まであと四日しかないのに、風邪引くなんて…たるんでる証拠だ！」

ジー…

「……」

「お前がうつしたんだろ」

「え？私？」

ジー…

「……」

「そうですよ！時期的に考えても！」

「あの～咲也さん？」

「…あン？」

「どうかしたんですか？さっきからしきりに周りを気にしてますけど」

平沢妹の言う通り、俺はこの教室に足を踏み入れた瞬間から周囲に神経を働かせていた。

ジー…

「……」

その原因は今も感じる誰かの視線を感じるからだ。

始めは今年の始業式の日にやってしまった『アレ』がまだ尾を引いているのかと思ったがそうじゃないらしい。

ジー…

この視線にはそういう『恐怖』等のものは含まれてなく、いきなり先輩が突入してきたことによる『驚愕』の類でもない。

なんというか…『興味』『善意』『好意』『興奮』等の類が混ざったような視線…

「あ、あのっ！」

俺が視線を分析していると背後から男の声…

「……」

振り返るとそこには…

「あ、あの…！」
「おぉ…本物…！」

ガッチガチに緊張した一年男子とどこか興奮した同じく一年男子が…

果たしてコイツらが声をかけた人物は、俺か秋山か田井中…それとも中野なのか、はたまた平沢妹なのか…

「き、き、き、桐島先輩ですよね！？」

俺でした。

「…あぁ？誰だテメェら」

「コ～ラコラ！初対面の後輩になんていう口の聞き方するんだよ」

「いえ！大丈夫ッス！それが桐島先輩ですから！」

田井中が俺に注意するが、それを興奮した野郎が制する。

…そしてガッチガチ野郎の口からとんでもない爆弾が放たれる…

「あのっ！僕達！桐島先輩のファンなんです！」

「……」

ファン？ふぁん？ファンタジー？幻想？

いやいや…現実逃避してる場合じゃねェぞ…

「咲也に…ファン…」

秋山の驚愕したボイスが聞こえてくる。

とりあえず…

「おい…」

「「はい！」」

「…テメェら何ほざいてやがる」

「俺達！新歓の時に桐島先輩がギター弾いてる姿見て、マジでカッケーっと思いました！」

「はい！それから僕達、桐島先輩のファンになりました！」

「……」

あいたたた…
間違いであってほしいと思ったが…
真実じゃねェか…

「あの！学園祭の軽音部のライブ！絶対見にいくッス！」

「応援してますので頑張ってください！」

「……」

「「失礼します！」」

勝手に言いたいことだけ言いやがって…最後に深々と『俺に』頭を下げて奴らは退散していった…

「いや～…嵐のような一時だったな～…」

「咲也にファンがいるのは知ってたけど…」

「え!?サク先輩にファンがいるんですか!?」

「そうだぞ～梓!サクには三年生にファンがいるんだ!」

「そうだったんですか…驚きました…」

「あ、澪さんにもファンの人がいるんですよね?お姉ちゃんが言ってました」

「うっ!忘れようとしてたのに…」

「はぁ…」

なんということだ…
三年が卒業したらファンなんてものは消え去るというのに…
まさかの増大…

「「はぁ……」」

そして秋山とため息がかぶる…

「まぁ、とりあえず唯はまだ治りそうにないんだよね？」

「はい…」

当初の目的である平沢妹に姉の体調の程を尋ねる部長。

「…最悪、本番は平沢抜きでやるかもな…」

なんとか先程の出来事を記憶から抹消したいのでその話題で塗りつぶす。

「そんな!?唯先輩抜きだなんて!」

俺のその言葉に中野が真っ先に反応する。

「『最悪』っつったろ…」

「でも…」

「…そういう可能性が少しでもある内は覚悟を決めとけ」

別にハナから平沢抜きで本番をやると決まっている訳じゃない。
…ただ昨日の平沢の様子と学園祭までの期間を考えると、そういう可能性だって無きにしも非ず。

だったら今のうちに腹を括っておいた方が有事の際に対処のしよう

がある。

「嫌です…」

「あン？」

「嫌ですっ！」

だが…このツインテールの後輩はそれを正面から砕く勢いで俺を見つめる。

「唯先輩がいないで本番なんて…そんなの嫌です！」

「梓ちゃん…」

「……」

「だって…私はちゃんと六人でステージに立ちたいんだもん…」

どうやら『桜高祭』というのは、すんなりと俺達にはライブをやらせないみたいだな。

去年は平沢が喉を潰し、秋山が軽いトラウマを。
今年はまたしても平沢に災難が降りかかる。
少し前まではバンドが空中分解寸前だったし…

軽音部って疫病神にでもとり憑かれてんじゃねェの？マジで…

「梓」

「はい…」

すると秋山が…

「梓の気持ちは分かる、でも…咲也の言うことも分かってやれないか？」

「でも…私は…」

「あくまで万が一に備えてだから」

「サクも本心は梓と同じだって　な？サク」

田井中がどこか懇願するかのように俺を見る。

「まぁ…な…」

ここは部長の提案に乗っかっとく。

こんなきっかけで、また歯車が止まったらそれこそ本当に『最悪の災厄』だ…

「はい…分かりました…」

俯いていた顔を上げての発言。

一応は納得したらしい。

「あの！みなさん！」

すると俺達のやり取りを固唾を呑んで見守っていた平沢妹がこんな提案をあげる。

「わ、私がなんとかしてお姉ちゃんを連れてきますっ！」

「どうやってだ…」

特効薬でも持ってんのかお前…

「風邪はちゃんと治さないとこじらせちゃうよ？」

「だ、大丈夫です！！」

「「？」」

田井中のもっともな発言に平沢妹が放ったこの言葉に思わず顔を見合わせる俺と秋山。

何する気だ…？

――――――――――

翌日水曜日。
学園祭まであと三日。
現在放課後。

「今日も唯ちゃん、お休みだったね…」

「そうだな…　あと三日かぁ…」

「唯…」

「……」

琴吹がキーボードの電源を入れながら平沢の不在を告げ、田井中がドラムセットに座ってスティックをクルクル回しながら学園祭までのタイムリミットを。
秋山がベースのストラップを肩にかけながら平沢の名を。

「サク先輩…」

「あン？」

長イスに座ってアコギのチューニングを行なっていると中野が若干悲愴な感じで話しかけてくる。

「昨日は納得しましたけど…やっぱり…」

「……」

「唯先輩抜きで本番は迎えたくないです…」

「……」

悲愴感を漂わせてはいるが、その瞳には悲壮な決意が灯っている。

「…それは『最悪』『あくまで』『万が一』っつったろ？」

「そうですけど…」

「はぁ…」

中々に頑固だなコイツ…
まぁそのぐらい『想い』があるんだろうな…

すると…

ガチャ

「やっほ〜」

部室の扉が開き、ケロっとした表情の平沢がギターケースを背負ってやってきた。

「唯！」
「先輩！」

すぐさま秋山と中野が平沢に駆け寄る。

「唯ちゃん、もう風邪は大丈夫なの？」

「え？あ、風邪…風邪か…
ゴホッ！ゴホッ！ゲフンッ！！」

「……」

琴吹の気遣いに平沢がわざとらしい咳をする。

つうか…アイツ何やってんだ？

『真似事』なんかして…

「わざとらしいですよ…」

「まぁ　それなら大丈夫ってことか」

「そうね～♪」

「ていうか治ったんなら朝からちゃんと来いよ～　みんな心配してたんだぞ」

「えっ？あ～…そ、それは…そう！授業が終わる頃に急に良くなったの～」

「サボりたかっただけだろ～」

『あははは♪』

そして生まれる歓喜の輪。

「……」

そんな輪の中に入らず傍観する俺と…

「咲也くんは気付いてるみたいね」

山中顧問…つうか…

「…アンタいつからそこに？」

座っていた長イスから上半身をテーブルで雑誌を見ている山中顧問に向けて尋ねる。

「さっきよ」

「あっそ…」

この人はやっぱ神出鬼没のライセンスを持っているようだ…

「それでさっきの質問なんだけど、どうなの？」

「見た目は瓜二つだが…中身は違うな…」

「その通り！…まぁ、あの娘なりに必死なのね」

「だからって…本人じゃねェ『アイツ』が来てどうすんだ…
ぬか喜びじゃねェか…」

「そんなこと言わないの
軽音部のために必死にやってるんだから」

「はぁ…」

「咲也君！咲也君！練習しましょ！？」

「全員揃ったんですから！」

「……」

琴吹と中野が興奮した様子で俺の元にやってきた。

「そうそう！咲…サッくん！練習しまし…しよう！」

そして『平沢』が言葉に詰まりながら…つうかボロが出だしてんぞ…

「どうしたんだ唯？」

「やっぱりまだ風邪が…」

そんな『平沢』に田井中が疑問を投げ掛け、秋山が心配の面持ちに

なる。

「だ、大丈夫だよ！心配しないで律さん、澪さん！
ほら！練習しようよ梓ちゃん、紬さん！」

「はぁ…」

もう完全にボロが出た…
いくら『アイツ』でも完璧なコピーは無理だったようだな…

「澪さん？」
「律さん？」
「紬さん？」
「梓ちゃん？」

『平沢』に普段とは違う呼ばれ方をされた四人が自分の名前を口に出しながら疑問符を浮かべる。

「あっ！？」

そんな反応をされた『平沢』が口に手を当て、冷や汗をかく。

そして…

「もう唯ちゃんのフリはいいんじゃない？」

『え？』

「……」

見かねたのか、それとも他に理由があるのか、急に顧問が立ち上がる。

「さわちゃん！？いたのかよ！？」

「さっきからいたらしいぞ…」

「マジで！？」

顧問の存在に気付かなかった田井中が仰天のリアクションをし、俺の報告を聞いたら更に仰天する。

「みんなをごまかせても、私と咲也くんには通じないわよ…」

「え？先生何を…？」

首を傾げる琴吹。

「あなたは唯ちゃんじゃなくて…」

顧問がゆっくりとした動作で右人差し指を『平沢』に指差す。

「憂ちゃんでしょ！！」

「うるせェ…」

そう言って『平沢』の正体を暴くが…
もう少し静かに出来ねェのか…

「「「「憂ちゃん!?」」」」

「え!?憂!?」

「ナ、ナンノコトヤラサッパリ!」

「……」

俺を含めた十二の視線に当てられ、ワタワタと手を振りながら否定する『平沢妹』

「お前…とっくにバレてんぞ」

「ナ、ナンノコトデショウカ咲也サン」

『咲也さん』っつってんぞ…

「じゃあ私のあだ名、言ってみて！」

「あ、あ、あずさ二号！！」

『あっ！ニセモノだっ！！』

「はぁ…」

……

「ごめんなさい…お姉ちゃんを看病したんですけど…やっぱりまだ治らなくて…」

「…それでお前が代わりにってか？」

「はい…」

平沢に成り代わっていた平沢妹が白状し、何故かティータイムに…
【放課後ティータイム】だからか？

「それにしてもよく似てたな　全く気付かなかった」

確かに秋山の言う通り俺も初見じゃ気付かないくらいに激似だった。
短いポニーを解いて、平沢の髪型にするとマジで本人そのものだ。

「ていうかサクとさわちゃんはなんで憂ちゃんだと分かったんだ？」

「…声」

「声で咲也君は分かったの？」

「あぁ…」

雰囲気とかも違ってたがな…

「すごいな咲也」

「じゃあさわちゃんは？」

「憂ちゃんの方が唯ちゃんよりも胸のサイズが大きいから」

「…ッ！？」

顧問のセクハラ発言に平沢妹が咄嗟に胸を腕で覆い、一瞬にして顔を真っ赤にする。

「サクがいるのにそんな発言するなーっ！！」

「もう♪照れちゃって♪かわいい♪」

「はぁ…」

アンタ本当に大学卒業した大人か？
そして本当に教師なのか？
アホにしか思えん…

……

「梓ちゃん…ごめんね…」

琴吹の菓子でなんとか場を落ち着かせたら、急に平沢妹が謝罪の言葉を口にする。

「昨日の梓ちゃん見てたら…いてもたってもいられなくて…」

「憂…」

「……」

コイツのこの行動は軽音部のためでもあり中野のためでもあったのか…

「咲也さんもごめんなさい…」

「……」

そういうちゃんとした理由があるんなら…

まぁ、仕方ねェ…かな…

「別に…お前なりに必死だったんだろ…」

「はい…」

「正直こういうのはアレだが…その心意気は買ってやる…」

「咲也さん…」

感激の表情になり俺を見てくる平沢妹…

「咲也君カッコいい～…」

と、琴吹。何故？

「はぁ…」

とりあえずため息一つ。

と…

ガチャ

「やっほ〜…」

「うぉっ!?激しくデジャブっ!」

まるでモノマネ番組で本人登場のように、今度こそ本物がやってきた。

「先輩!」

そして真っ先に駆け寄る中野。
…飼い猫が主人の元に行くみてェな光景だ…

「あぁ〜　あずにゃ〜ん♪」

そんな主人が飼い猫に抱き付こうとするが…

フラ…

「唯先輩!?」

バタッ…

「「唯!?」」
「「唯ちゃん!?」」
「お姉ちゃん!?」
「…チッ…」

中野に抱き付こうと一歩踏み出した瞬間に体がふらつき、そのまま倒れ込んでしまった…

……

「うぅ…」

「唯ちゃん…」

「……」

倒れてしまった平沢を俺と顧問で長イス運び、琴吹が平沢の額に濡れタオルを置く。

「唯！熱全然下がってないじゃないか！ちゃんと家で安静にしてなきゃダメだろ！」

秋山が平沢の熱を測った体温計を見ては少々怒り気味で言葉を放つ。

「…あんまデケェ声出すな…自業自得とはいえ病人だ…」

「あ、ごめん…」

「ううん…サッくんの言う通り…私が悪いんだからいいよ…澪ちゃん…」

「唯…」

「……」

全く熱が下がってねェか…
それはつまり、体調は二日前のまま平行線ということ。
…いよいよ平沢抜きで本番の可能性が高くなってきたな…

「やっぱりダメだね…私抜きで本番のほうがいいかも…」

平沢も自分の体調に自信がないらしく弱音を吐く…

「あずにゃん…サッくん…ギターは任せたよ…」

平沢が告げたその言葉…
俺はともかく中野にとっては…

「嫌です…」

『最悪』『あくまで』『万が一』に当てはまり、辛い言葉…

「え…？あずにゃん…？」

「梓…」

「みんなで出れないのなら辞退した方がマシです！」

「……」

その言葉に含まれるのは軽音部に対する中野の『想い』と誰一人として欠けることを拒む『思い』…

「…どうすんだ？平沢」

「え…？」

「コイツ…中々頑固だ」

「サク先輩…」

「…お前が風邪、治さねェとマジで辞退しかねん」

「咲也…」

「コイツにとっては、学園祭のライブが初ステージ…」

「サク…」

「俺達にとっては六人での初ライブ…」

「咲也君…」

「…そこにお前がいねェと味気ねェんじゃねェか？」

「咲也さん…」

「…だから残り三日でさっさっと風邪治せ」

「…サッくん…」

熱で真っ赤になっている顔で俺を見て…

「あずにゃん…」

中野…

「澪ちゃん…」

秋山…

「りっちゃん…」

田井中…

「ムギちゃん…」

琴吹…

「憂…」

平沢妹…

「さわちゃん…」

山中顧問…

それぞれ一人一人の顔を見て…

「私！絶対に本番までに風邪を治すよ！そしたら六人で学園祭のステージに立つ！」

「唯先輩…！」

上半身を起こし、両拳を握り締めて『弱音』ではなく『決意』を告

げる。

「サッくん！あずにゃん！澪ちゃん！りっちゃん！ムギちゃん！私、頑張るよ！」

「…言ったからには治せよお前」

「はい！絶対に全員でステージに立ちましょう！」

「うん！諦めるな唯！」

「唯はやれば出来る子だ！」

「その意気よ唯ちゃん！」

目指すは

『全員でライブを』

それが今の軽音部の目標…

第五十七話（前書き）

桜高祭前編です。

第五十七話

スタスタ…

「……」

右手には重量を感じさせる黒のギターケースを持ち…

スタスタ…

「……」

憧れのミュージシャンと同じモデルのギターが入った黒のギターケースを背に背負って、ダラダラと枯れ葉舞い踊る通学路を歩く。

いつもは左肩にかけている筈の鞄だが今日は必要ない。

『六人でライブを』

本日は平沢の『決意の約束』が果たされる十月上旬。

つまりは、桜ヶ丘高校学園祭…『桜高祭』当日。

シャアアア…

「……」

いきなり背後から車輪の回転する音が聞こえ、俺の横を通り過ぎる。

キッ！

「Ｇｒａｚｉｅ！咲也！」

「……」

そして数メートル先で車輪の音は鳴り止み、音を発生させていた人物が振り返っては満面の笑みでイタリア語で『ありがとう』と言ってきやがる。
つうか発音良いな…

「……」

スタスタ…

朝からこのアホの相手をしていたら非常に面倒であると同時に疲労感がやってくる。
『本番』の前にそんなことはあってはならないので、未だに満面の笑みをしているアホを視界に入れないように無言で通り過ぎる。

「コラッ！サクッチ！朝の挨拶してんのに無視するとは何事だッ！！」

だがしかし、いくら完璧にスルーしても耳に入ってくる騒音は何とも無視出来ない。

「…黙れ」

バキッ！

「いってェッ！！」

なのでスネを蹴っておく。

「なにすんだよッ！」

「…テメェが朝からうるせェからだ」

「朝の挨拶しただけだろうがッ！」

「…確かにアレは挨拶だが、出会い頭に言うべき言葉じゃねェ」

「え？Ｇｒａｚｉｅが？」

「……」

だから何で発音良いんだ…

「じゃあどういう意味だ？」

「…自分で調べろ」

スタスタ…

再び歩きだす。

「待てって！」

そして修司が自転車から降りて、押しながら俺の横に並ぶ。

「つうかお前、何でソレに乗ってんだよ…」

車輪の音と自転車に乗っている修司を見た瞬間に疑問が湧いたが、『面倒』と『疲労感』という理由からスルーしていたが、横に並ばれ自転車を押している光景が嫌でも視界に入る…
更に言うと普段はコイツ、徒歩で登校しているのに何故今日に限って自転車通学しているのか少しだけ気になる。
なので尋ねてみる。

「だってさ、荷物が多いんだもん」

「……」

確かに自転車のカゴには紙袋が二つ、荷台にはデカい紙袋がくくり付けられていた。

「…何持ってきてんだ？」

「衣装だよ衣装　男子のウェイターと女子のウェイトレスの」

「衣装？」

「イエース」

その発音は普通なんだな。

「俺達のクラスって喫茶店やるだろ？」

「あぁ…」

俺達のクラスの二年三組の出し物は喫茶店をするようだ（去年同様出し物決めの際、意識が夢の国に飛んでいってたのでつい最近まで知らなかった）

喫茶店といってもメイド喫茶とかではなく、至って普通の喫茶店らしい。

他のクラスがメイド喫茶や執事喫茶をやるので、『ならば普通ので

勝負』がコンセプト…らしい。

「お前は寝てたから知らねェと思うけど、俺が衣装用意することになっちまったんだな～」

「ふーん」

コイツが自転車と共に現れた謎が解けたので、あとはどうでも良いので適当に相づちを打つ。

「ほら、俺の母さんって衣装とか作るのプロ並じゃん？去年のクリスマスの時にサンタとトナカイの衣装で実績あるからさ～ついつい立候補しちゃったんだな～☆」

「ふーん」

「ちゃんと咲也の分もあるからさ、共に頑張ろうじゃないかッ！」

「ヤダ」

「即答！？」

そんな興味の欠片もないもんに精を出せるか。
大事なのは…

「まぁ、お前は軽音部のライブの方が大切なのは分かるけどよ…」

「……」

「少しぐらいは親友と青春を楽しもうっていう気持ちはねェのかよ～…寂しいよ～…」

「死ね」

「うわぁッ！？びっくりな発言するなッ！！びっくり箱かお前ッ！！」

「……」

（ウゼェ…　）

やっぱ相手にするんじゃなかった…

「はぁ…」

疲れた…

――――――――――

現在時刻午前十一時四十五分。

「……」

クラスの喫茶店を適当にこなして交代になったのでとりあえず部室を目指し階段を上がる。

ちなみに今回の盛況の程はそこそこだ。
喫茶店なんて王道だし、他にも似たような出し物があるので去年の『焼きそば屋』に比べれば客足は大したものじゃない。
故にすんなりと交代出来た。

『マ、マジで!?ムギ!?』

「ん?」

階段を上りきり部室の扉に近付くと、中から田井中の驚愕の声が漏れてきた。

ガチャ

そんな声に疑問を持ちながら扉を開ける。

「あっ!咲也!」

部室では驚愕の表情をした秋山、田井中、中野と、ニコニコとした

笑みの琴吹が。
そして秋山が俺の存在に気付き、驚愕の表情のままで俺を見る。

「ンだよ…」

「ム、ムギが！ア、アン！」

「気持ちは分かるが落ち着け！澪！」

「だから何なんだ…」

落ち着きがない秋山。
コイツも落ち着きがないが秋山程じゃない田井中。
何故こんな状態なのかさっぱりな俺。

「あの…」

そんな俺の様子に中野がゆっくりと口を開く。

「ムギ先輩がアンプを持ってきてくれたんです」

「…アンプ？」

アンプ（小さいが）なら既に軽音部が所有しているのに何故？

という疑問を持ちつつニコニコしながら俺達を見ている琴吹に視線を向ける。

「あのね、今年の合宿で行った別荘にあったアンプを持ってきたの♪」

いや…だから何故だ？

つうかあのグレードが高いアンプを持ってきたのか…

「学園祭ってみんなで盛り上げるお祭だし、私、去年お化け屋敷をしてすっごく楽しかったの」

琴吹が部室の窓から外の風景を見る。
そこには様々なクラスの出し物が校庭に所狭しとあり、接客している生徒も溢れ返っている老若男女の客も皆笑顔だ…

「でも、それ以上に軽音部の初ステージがね、とっても楽しくて、私達の演奏を聞いてくれたみんなの笑顔がすごく印象に残ってて…」

「ムギ…」

未だ外を見ている琴吹に秋山がポツリと呟く。

「来年もこれ以上に楽しめてまたみんなの笑顔が見れたら良いな～って思ったの、だから少しでも多くの人が笑顔になれたらなって思ったから♪」

「……」

振り返る琴吹。
そこにはいつも以上の笑みが…

つまりは、より良い機材で俺達の演奏を聞かせたいってことか…

「それに…」

「え…？」

琴吹が中野を見る。
そんな中野も琴吹を見る。

「梓ちゃん、あの時すっごく嬉しそうだったから♪」

「ぁ…」

「そういえば梓、別荘のスタジオにある機材を見て、眼を輝かせてたもんな」

「……」

秋山の言葉に蘇る記憶。

『サク先輩！すごいですよね！あのアンプ！私あんなアンプ使ったことないです！』

キラキラ☆

確かに…スゲェ喜んでたコイツ…

「あっ　じゃあさムギ、この前言ってた用事って…」

田井中がどこか納得した様子で琴吹に問い掛ける。

「うん！別荘にあるアンプを移動させてもらえるように頼んでみたの♪」

「結果成功か…」

「うん♪」

まぁ…お嬢様の頼みなら琴吹家の人間は断れねェよな…

「あ、ありがとうございます！ムギ先輩！」

「ありがとうムギ！」

「さっすがムギだな！」

「何がだ…」

「ううん、いいわよ♪私も楽しいから～♪」

部室に流れるは和やかな空気。

…だがこの空気の中には平沢の姿はない…

――――――――――

現在時刻午後十二時四十五分。

講堂にドラムセットとキーボードを運び終え、出番があるまで部室にて待機中。

ちなみに講堂の倉庫スペースに別荘にあった三つのギターアンプとベースアンプが本当にあり、見るものを圧倒させるかの如く鎮座されていた。

『どうやって持ってきたんだろうか』という疑問が生まれたが敢えてそれを口に出さずに心に仕舞った。

琴吹の謎は今に始まったことじゃねェし…

「唯先輩…来ませんね…」

「……」

まるで平沢の姿を確認するのようにジッと窓から外を眺めていた中野が呟く。

「大丈夫よ梓ちゃん、唯ちゃんはきっと来るわ」

「唯からもメールきたろ？『絶対間に合わせる』って」

「だから唯を信じよう　梓」

琴吹と田井中と秋山が気持ちが沈んでいる中野に口々に声をかけるが…

（お前らがそんなんじゃ説得力ねェぞ…）

その励ましの言葉とは裏腹に表情は晴れてはなかった…

「はぁ…」

一時間前の和やかさはどこへいったのか、現在の部室の雰囲気はあ

と三十分後には本番というのに、些か不安な気持ちにさせてしまうような空気だ…

と…

ガチャ

「「「「ッ！」」」」

「……」

部室の扉が開き、一斉に秋山達が扉を見る。

俺もチラッと扉を見て…

「どうしたの？」

「…空気読めお前」

やってきた真鍋にツッコむ。
てっきり平沢かと思ったが期待を裏切り真鍋だ…
秋山達も平沢かと思ったらしく…

「「「「はぁ…」」」」

と、ため息をついていた。

「…何しに来たんだ」

「最終確認しに来たの」

そう言って手に持っていた書類にペンを走らせる。

「予定通り十三時十五分から軽音部のステージだから　十分前には講堂に」

「分かった…」

淡々と言葉を並べる真鍋に秋山が短めに返事をする。

「軽音部は四曲演奏予定で、出演者は…」

真鍋が書類から顔を上げ、秋山、琴吹、俺、中野、田井中の順に視線を巡らせ…

「出演者全員準備完了…っと」

再び書類にペンを走らせる。

「和…唯がまだ…」

田井中が真鍋に言葉を発するが…

「なるほど、『準備完了』か…」

「咲也君？」

真鍋は『全員揃ってる』とは言わなかった。
それはつまり…

「…お前、平沢が間に合うって分かってんな？」

『え？』

当然といえば当然だろうが俺の発言の意味が分からないであろう真鍋以外の全員が俺を見る。

「うん、唯って昔から夢中な事があるとそれに一直線なの」

「……」

「軽音部に夢中になってる唯は、それだけしか見えないわ」

『サッくん、言ってくれたよね？

『やりたい事が夢中になれるものになればいいな』って…私ね、夢中になってる！』

「……」

脳裏に浮かぶのは去年の合宿最終日での平沢の笑顔と言葉…

「きっと風邪のことなんか忘れちゃうわ　だから…」

ガチャ

その瞬間、部室の扉が開き…

「うぃーす」

「はぁ…」

今の流れ的に今度こそ平沢かと思いきや…

「さ、さわ子先生…」

紙袋片手に軽いノリでやってきた顧問だった…

「空気読めよさわちゃん！」

「えっ？」

恐らくこの場にいる全員の心境であろう言葉を田井中が先程俺が真鍋にツッコんだ十倍ぐらいのテンションで全力ツッコミを。

「ていうか今まで何やってたんだよ　みんな大変だったのに！」

「あら？もちろんボーッと過ごしていたわけじゃないわよ」

「じゃ何やってたんだよ…」

「ふっふっふっ…それはね咲也くん…」

俺の言葉を受けた顧問が不気味な笑顔を見せ、持っていた紙袋を漁り…

「この浴衣を防寒バージョンに改良していたのです！」

取り出したのは平沢の風邪を悪化させる原因の一つになった浴衣…すっかり忘れてた…あれ衣装だった…

「防寒って、見た目変わりませんよ…」

「ところがどっこい！梓ちゃん！」

（うわぁ…死語言ったぞ…」

「生地が厚くなって、袖も長袖にしたわ！」

そう言って何故か俺に黒を基調とした浴衣を差し出してきた…

「……」

とりあえずそれを受け取り触ってみる…

「どうですかサク先輩？」

「分からん…」

「えぇっ！？」

俺は改良前の浴衣には手も触れてないのでこれの生地が厚くなってるかどうかさっぱりだ。

「ん…」

「あ、はい…」

なので経験者である中野に渡す。

「あっ　確かに厚くなってますね」

「ちなみにそれは咲也くんのね」

「……」

やっぱ着ねェとイカンのか…

「そして…これが澪ちゃん達の分ね」

顧問が紙袋から四つの浴衣を取り出して、それぞれに渡す。

秋山には薄紫を、田井中には黄色を、琴吹には緑を、中野には群青を基調とした浴衣を。

「唯ちゃんにはピンクを渡してあるわ」

「あぁ？」
「えっ？」
「さわちゃん？」
「さわ子先生？」
「唯先輩…に？」

『渡してある』

その言葉が意味するのは…平沢に会ったということ…

そして…

「失礼しま～す…」

開きっぱなしの扉から…

（やっときたか…）

ピンクの浴衣に身を包んだ平沢がおずおずと部室に入って来た…

声を聞く限り平沢妹ではないな。

「唯っ！！」

「唯ちゃん！！」

「来てたんなら真っ先にここに来いっ！！」

「全くだ…」

「…ゅ…い……い…」

田井中と琴吹が待望の様子で平沢の名を呼び、秋山が嬉しくも怒りが混ざった声で叱責し、俺がそれに激しく同意する。
そして中野が声を震わせながら小さく小さく声を出す。

「ご、ごめんね…　みんなを驚かせようと思って」

「そんなサプライズいらねェよ…」

「そうよ唯、みんな心配してたんだから」

「エへへ…ごめんなさい」

俺と真鍋の発言に少しバツが悪そうに微笑んでは、ペコリと頭を下

げる。

「あっ！そうだ！ねぇねぇサッくん」

「サッくん言うな」

「なんか久しぶりに見た気がするな　唯と咲也のこのやり取り」

「うん♪私もそう思った～♪」

うるせェよお前ら…

「似合う？似合う？」

「……」

平沢が俺の前で満面の笑みで二回ターンをかましてはそう問い掛けてくる。

「サク、今度はちゃんと褒めてやれよ？」

「普通」

「ガーンッ！」

「言ったそばから何言ってんだーっ！」

落ち込む平沢。
怒鳴る田井中。
どこ吹く風で受け流すの俺。

「…つうかお前」

「…ほぇ？」

「…俺にそんなもん求めるより、アッチを何とかしとけ」

「え？」

俺が指差す先には…

「……ぅ…」

「あずにゃん？」

必死に涙と格闘中の中野の姿…

「ちゃんと埋め合わせしろよ？」

「そうだぞ唯、梓が一番心配してたんだからな」

「えっ！？そうなの！？」

秋山と田井中の言葉を受けた平沢は…

「ごめんね！あずにゃ～ん！」

「ニャアッ！？」

何故か中野に抱き付く…

どうやらあれが平沢なりの埋め合わせらしい…

「離れてくださいよ～！」

「ごめんねあずにゃん…」

「え…？」

「私、精一杯演奏やるよ」

「唯先輩…」

「みんなと一緒に…」

「当たり前です…みなさん本当に心配してたんですから…」

「うん…」

「なんだあの雰囲気…」

百合の花が見えるぞ…アイツらの周囲に…

「まぁ良いじゃん！唯が来たんだし！」

「…琴吹があんなことになってんのにか？」

「ぽー…」

「ムギーっ！？」

まぁ、何とか一件落着。
これで全員で本番を……ん？
今…何時だ…？

「……」

ケータイを取り出し時刻を確認…

【ＰＭ１：０３】

「ヤベェ…」

「ん？どうしたサク？」

首を傾げる田井中にケータイを突きつけて事の重大さを理解してもらう。

「も、もうすぐ十分前じゃん！！」

『えぇっ！？』

部室に鳴り響く田井中の声に俺以外の全員が驚愕の声をあげる。

「みんな！急いで講堂へ移動して！」

流石の真鍋も焦っているらしくいつもの冷静さはなかった。

「……」

俺がテレキャスとアコギが入ったギターケースを取った瞬間に平沢から爆弾投下…

「あれ！？ねぇ！？ギー太は！？」

「…はぁ？」

「部室に置いていったよね！？」

「あっ！？憂ちゃんが持って帰ったぞ！」

「あぁぁっ！！そうだったーっ！！」

「…アホ　何で気付かねェんだ」

「ど、ど、ど、どうしようサッくん！？」

平沢が俺に泣き付きながら手を取ってブンブンと左右に振ってくる。

「……」

そんな平沢の行為をスルーして考え、時間が迫ってるなかで俺が下した結論は…

「…お前、俺のテレキャス使え」

「えっ？」

我が身を犠牲にすること。
アコギの方が良い気もしたが、いかんせんコイツはエレキしかやったことがない。
アコギとエレキでは若干勝手が違うのでぶっつけ本番では不安満載だ。
だったら俺のテレキャスを貸した方がマシだ。

「それじゃあ咲也君はどうするの？」

「…アコギでやる」

「そんな！無茶ですよ！」

いや無茶じゃねェぞ。

元々、四曲中二曲はアコギでやるし。
まぁ…一曲目と四曲目のギターソロは変更を余儀ないが…

「ダメだよサッくん！私がギー太取りに帰るから！！」

「はぁ！？」

何言ってんだ時間がねェのに。

「行ってきますっ！！」

「ちょっと唯！」
「おいッ　平沢ッ」

俺と真鍋の引き止めも虚しく…

タッタッタッ…

駆けていった…

「みんな！とにかく移動しなさい！」

「でもさわ子先生！唯が…！」

「分かってるわ　でも軽音部のライブを見るために集まってくれた人達もいるの
そんな人達のためにもステージに立たなきゃダメよ」

「…行くぞお前ら」

「咲也…」

「で、でも唯先輩が…六人でライブが…」

「……」

中野の『想い』…
それは重々承知だ…
…ならば…

「中野…」

「は、はい…」

「提案がある…」

「はい…」

「…どう考えたって平沢はライブには間に合わん」

「……」

「だが…全部の曲じゃねェ…」

「…え？」

「平沢を三曲目か四曲目に間に合わせるようにする…それで良いなら講堂に行くぞ…」

中野の返事を待たずに俺は歩き出し、ケータイを取り出す。

「は、はい！それで良いです！」

「よしっ！じゃあ行くぞ！澪！ムギ！」

「うん！」
「はい！」

「先生、私達も行きましょう」

「えぇ」

背後から聞こえるのは部員と顧問と真鍋の声と足音。

そんなＢＧＭを聞きつつ、講堂に向かいながらケータイでとある奴と連絡をとる。

プルルル…プル…

「『あいよ！』」

「お前今どこだ？』

「『え？なんだ？俺に会いたくなったか？』」

「くだらねェことほざいてねェでさっさっと答えろ」

「『くだらねェとはヒドい…まぁいいや、今講堂にいるぜ』」

「じゃあお前、今からチャリに乗って平沢を家まで送ってこい」

「『え？唯ちゃん、また体調悪いのか？』」

「違げェよ　ギター忘れやがったから今取りに帰ってんだ」

「『今って！あと十分ぐらいしたら軽音部のライブ始まるぞ！？』」

「だからテメェが平沢を送れっつってんだろうが」

「『お、おう！よし分かった！今から唯ちゃんと合流する！』」

「あぁ」

「『咲也、ジュース一本奢れよ？』」

「ヤダ」

「『よしッ！じゃあ早速…ってヤダッ！？そこは頷くべきところだろうがッ！！』」

「黙れ　さっさっと行けアホが」

「『だぁれがア…』」

ピッ

用件を伝えたし、マジで時間がないのでアホとの通話を打ち切る。

さて…どうなるか…

第五十七話（後書き）

後編も同時に更新してますので良かったら続けてご覧ください。

第五十八話（前書き）

桜高祭後編です。

第五十八話

『これより　軽音楽部【放課後ティータイム】によるライブを開始します』

講堂内にナレーションが響き…

ゴウンッ…

機械音がし、ゆっくりと幕が上がる…

ザワザワ…

幕が上がりきり、ステージ上にいる俺達の全貌を見た観客からざわめきが起こる。

その理由は分かる…

『山中先生がいる～！』

誰かが発した通り、観客から見て、ステージ左後ろにキーボードの琴吹、右後ろにドラムの田井中、その前にギターの中野、左隣にギター&『ボーカル』の俺、その左隣にベース&『ボーカル』の秋山…そして秋山の左隣にして琴吹の前には…

「♪」

「はぁ…」

どや顔の山中顧問がギターを構えていた…

全員衣装の改良版浴衣に着替え（俺は渋々）何とか幕が下りたステージ裏に着いたのは本番が始まる二分前。

しかし問題が発生。
それはボーカル。
平沢がギターを取りに帰ってる現在、ボーカルが不在になり誰がやるのかを検討した結果（議論時間約三十秒）白羽の矢がグサリっと突き刺さったのは俺と秋山。

俺達は共に去年の学園祭でボーカルをやった経験がある。
こんな理由で納得する俺と秋山ではなく断固拒否の姿勢を貫いていたが…

『お願いします！サク先輩、澪先輩！』

『咲也君と澪ちゃんしかいないの…』

中野と琴吹が頭を下げ…

『部長命令だ！澪！サク！』

こんな時に限って部長命令を発令する田井中…

『もうすぐ幕が上がるわ！』

遠回しに『お前らやれ』と言ってくる真鍋…

そんな光景に秋山が…

『わ、分かった…』

と、白旗を振り…

『お願い！咲也も一緒にボーカルやって！』

『……』

『私だけだったら緊張しちゃうよ…』

『はぁ…　やりゃあ良いんだろうが…』

なきくずしに俺も陥落させられ、秋山は一曲目と三曲目を、俺は二曲目を歌うはめに…

「ワン・ツー！」

ドドドッドドンッ！

田井中がカウントのあとにドラムを勢いよく叩き鳴らす…

そしてもう一つの問題が発生する（開演一分前）

中野が加入したことにより六人編成になった俺達のバンド。
この本番に向けてずっと六人バージョンで練習してきたが、今は平沢がいないので五人でやろうとしたが、いきなり五人でやるのに俺以外の四人が不安らしくパニックに陥っていたが…

『仕方がないわね、私が唯ちゃんのパートをやってあげる』

と、顧問がエレキギター片手にステージ横から颯爽と現れた。

『先生！』

『さわ子先生、そのギターどうしたんですか？』

『ジャズ研から一本借りてきたの』

『…アンタ、平沢のパート分かんのか？』

『愚問よ咲也くん、私はちゃんと部室であなた達の演奏を聞いてたのよ』

『ムギのお茶飲んでただけなんじゃなかったのか…』

『失礼ね、りっちゃん！ちゃんと聞いてました！だから唯ちゃんのパートはだいたい分かるわよ』

『アバウトですね…』

『長年音楽に親しんできた私の『耳』を信じなさい』

ということで何とか無事に（？）二つの問題が解決した瞬間に…

『これより　軽音楽部【放課後ティータイム】によるライブを開始します』

『『ＨＴＴ』だっつうの…』

『サク、しつこい』

やっぱり俺の意見など意味をなさなかったバンド名が講堂内に響き、ゆっくりと幕が上がり始めた…

そして秋山が口を開き一曲目を歌う…

「『♪Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏｎ，ｔ　ｓａｙ〝Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｌａｚｙ〟だって本当はｃｒａｚｙ白鳥たちはそう見えないとこでバタ足するんです…』」

この曲は今年の合宿最終日にアイデンティティー平沢の呼び掛けに賛同した勇者達から飛び出たあのカオスなフレーズを、俺が四苦八苦しながらまともな歌詞に変換した。

あのカオスなフレーズをここまでのものにした自分を褒めてやりた

くなるな…

♪♪♪～♪

「……」

つうか、修司は平沢と合流出来たんだろうか…

―――――――――

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

「はぁ…はぁ…」

やっとの思いで人がたくさんいる校門までの道を抜けて膝に手を置

いて少し休憩。

（着替えくればよかった…）

浴衣のまま飛び出してきちゃったからすんごく走りにくいよ…
しかもこの浴衣…裾が短いから慌てて走ってたら…その…み、見えちゃう…

「はぁ…はぁ…よ～しっ！」

あんまり休憩なんてしてられないよね。
早くギー太取りに行かなきゃ！
みんなと約束したんだもん！
絶対に全員でライブをするって！

「行くぞ～！」

自分に喝を入れて再び走り出そうとしたら…

「おーいっ！唯ちゃーんっ！」

「え？」

後ろから誰かが私を呼ぶ声が聞こえてきたから、振り返ってみると…

「修司君？」

自転車に乗った修司君が猛スピードで私のところにやってきていた。

あれ？何で修司君、自転車に乗ってるんだろう？

「良かった～！うまく唯ちゃんと合流できて！」

自転車を私の前で止まらせた修司君が笑顔を浮かべる。

「ほぇ？どういうこと？」

「唯ちゃん、今からギター取りに家まで帰るんだろ？」

「えっ！？なんで知ってるの！？」

「咲也から聞いてね　で、俺に唯ちゃんを家まで送ってやれってさ」

「サッくん…」

修司君から聞いた内容に思わずサッくんが今いると思う講堂に視線を向けてしまう…

サッくんって本当に優しいな…

だから私は…私は…

「唯ちゃん、とりあえず後ろに乗って！」

「あ、うん！」

修司君の声にハッとした私は、急いで自転車の荷台に座り、修司君の両肩にしっかりと手を置く。

「よっしゃあッ！行くぜッ！唸れ！俺の右足アーンド左足ッ！」

シャアアアア！

「わぁっ！」

修司君が勢いよく自転車のペダルを踏んだ途端に猛スピードで周りの景色が流れだした。
すんごく早くよ！これならなんとかライブに間に合う！

「待っててねみんな！」

―――――――――

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「『♪行き先地図上マークして
近道あればそれが王道
はしょれる翼もあれば上等』」

♪♪♪

「『♪ヤバ爪割れた
グルーで補修した
それだけでなんか達成感
大事なのは自分
かわいがること
自分を愛さなきゃ他人(ひと)も愛せない』」

「……」

なんだろうな…

なんか漠然とした予感なんだが…

（平沢は…）

間に合う気がした…

「『♪Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏｎ’ｔ　ｓａｙ〝Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｌａｚｙ〟
だって本当はｃｒａｚｙ
能ある鷹はそう見えないとこにピック隠すんです…』」

―――――――――

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

シャアアア…

「はぁ…！はぁ…！」

「だ、大丈夫？修司君」

「大丈夫…だぜ…」

走り始めてどれくらい経ったかな？
よく分からないけど、修司君の息が荒くなってきた…

わ、私が重いのかな…？
でもでも私っていくら食べても体重増えないから太ったってことはないと思うけど…

「修司君、無理しないでね？」

「唯ちゃん…」

「でも急いで！」

「どっちッ！？」

―――――――

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「『♪ヤバ　まさかＲｅｄ　Ｐｏｉｎｔ！？
いや　ギリクリア！
それだけでなんて全能感
大事なのは自分認めてくこと
自分を許さなきゃ他人（ひと）も許せない』」

♪♪

「『♪Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏｎ’ｔ　ｓａｙ〝Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｌａｚｙ〟
だって本当はｃｒａｚｙ
白鳥たちはそう
見えないとこでバタ足するんです
本能に従順忠実
翻弄も重々承知
前途洋々だし…
だからたまに休憩しちゃうんです』」

♪♪♪…

ダダンッ！

最後に田井中がドラムで締めて一曲目の『Ｄｏｎ’ｔ　ｓａｙ　ｌａｚｙ』は終わる…

ワァァァッ！！
パチパチパチッ！！

その瞬間に観客席から歓声と拍手喝采が送られてくる。

「……」

秋山達が頭を下げているのを視界の端で確認し、テレキャスからアコギに持ち替える。

そして、俺の目の前にあるマイクスタンドの近くに立ち…

ジャラァァン…

アコギを六弦から一弦にかけてゆっくりとストロークし…

「……」

振り返って田井中を見る。
そして…

「ワーンツースリーフォー」

田井中がカウントをとり…

♪～
琴吹のキーボード…
♪～
秋山のベース…
♪♪♪～

俺と中野と顧問のギターが続き、六重奏になる。

「『♪『それは違う』大人達が示すものに納得出来ない
『それも違う』子供達が示すものに納得出来ない

この心のわだかまりはどうすればいい？
その足で探しに行くべきだ！

僕が探しているのは七つの色
幻想？夢？物語？
言わせたい奴には言わせとけ
これが始まりの光』」

俺が歌い、一年ぶりに披露するのは『虹の風景』

本来なら平沢が歌うはずだったのだがな…

――――――――――

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

キッ！

「と、到着…はぁ…！はぁ…！」

「ありがとう！修司君！」

私が走っていたらこんなに早く着けなかった。
修司君にお礼を言って急いで家の中に飛び込む。

ガチャ

「あっ！あったぁ～」

私の部屋に行くと、ベッドの近くにギー太を発見！

「ごめんね～ギー太～」

ギターケースからギー太を出してあげて、置いてけぼりにしてしまったことを謝る。

「よいしょ！」

そしてギー太を背負って再び修司君の元に急ぐ！

「いや～さすがの俺も疲れたぜ～
ちょっち休憩「修司君！」はやッ！？」

――――――――――

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「『♪僕が探していたのは七色の橋
雨？空？光？
見上げれば天に架かる虹の風景
あぁここが歩みを止める場所なんだな

わだかまりも悩みも消えていく
後悔？葛藤？闇？
そんなものは布石だった
今はこの風景が全てさ』」

♪♪♪～…

ジャァァ…ン…

ワァァァッ！！
パチパチパチッ！！

「……」

二曲終ったが平沢はまだ現れない…

「咲也…」

「あン？」

秋山がマイクに声を拾われないように俺に話しかける。

「どうしよう…唯がまだ来ない…」

「分かってる…」

「な、なんとかして時間稼ぐ？」

「無理だっつっうの…　ライブには時間が決まってんだ」

「うん…そうだったな…」

「…とにかく、次の曲中に平沢が来るを祈ってろ」

「うん…」

秋山がマイクスタンドに近付く。

「ワン・ツー・スリー！」

俺達の会話が終ったのを見計らった田井中のカウント…

♪♪♪…

そして秋山が歌うのは『ふでボール』

「『♪ふでペン　ＦＵ　ＦＵ

ふるえる　ＦＵ　ＦＵ
はじめてキミへのＧＲＥＥＴＩＮＧ　ＣＡＲＤ
ときめき　ＰＡＳＳＩＯＮ
あふれて　ＡＣＴＩＯＮ
はみだしちゃうかもね
…』」

「……」

まだかよ…アイツは…

――――――――――

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

カンカンカン…

「クソッ！踏切りかよ！こっちは急いでんのに！」

ギー太を迎えて再び学校を目指していたんだけど…
踏切りに引っ掛かちゃった…

（そういえば…）

カンカンカンっと鳴る遮断機の音を聞いてると、ふと入学式の時を思い出す…

あの時もこんな風に急いでたっけ…
寝坊だと思って急いで学校に着いたら、全然時間には余裕があって、私の見間違いだったんだよね…
そしたらサッくんがやってきて、和ちゃん、修司君が来て…
思えば私の高校生活のスタートってなんだかとても楽しかった気がした…

でも不安もあった…
高校生になったんだから何かしなきゃいけないけど、何をすればいいのか分からなくって…このまま大人なっちゃうのかなって思った…

（でも…でもね！私は！）

もし、あの頃の私に出会えるならこう言いたい…

（大丈夫だよ！心配しないで！）

すぐに見つかるから！
私にも出来ることが！
夢中になれることが！
大切な場所が！
大切で大好きなみんなが！

（優しい澪ちゃん…）

『唯、ほっぺにクリームついてるぞ？』

『ほぇ？澪ちゃん拭いて～♪』

『もう、小学生かお前は』

『そんなことを言いながらも拭いてあげる澪なのでした～』

『う、うるさいっ』

（楽しませてくれるりっちゃん…）

『唯～』

『なぁに？』

『ヒゲッ！』

『ぷふっ！！あはは♪なにそれ～りっちゃ～ん！』

『髪を使ってまさかのヒゲだっ！』

『何やってるんですか…』

『梓！ヒゲ！』

『あずにゃん！ヒゲ！』

『いや、どうしろと…？』

（いつもぽわぽわなムギちゃん…）

『ん～…』

『どうしたのムギちゃん？』

『あ、唯ちゃん　これなんだけど…』

『あっ！それって合宿の写真だよね？』

『うん、そうなの…
私っていつも写真撮ったらぽわーっとした顔になっちゃうから…』

『ムギちゃんは、ぽわぽわがいいんだよ～♪』

『そうかな？』

『うん！ぽわぽわだよ！』

『ぽわぽわね！』

『お前ら、何意味不明な会話してんだ…』

『サッくん！ムギちゃんってぽわぽわだよね？』

『知るか…なんだそのオノマトペは…』

（可愛いあずにゃん…）

『あ～ずにゃん♪』

『ちょっ！唯先輩！いきなり抱き付かないでください！』

『だってあずにゃんが可愛いんだもん♪』

『な、なんですかそれ…』

『可愛いよあずにゃん♪』

『～ッ！～ッ！』

『唯、梓が真っ赤になってるぞ…』

『まるで恥ずかしがる澪みたいにな～』

『律～！！』

『あずにゃん？』

『れ、練習しますよ！練習！』

『あ～ん…　あずにゃんのいけずぅ～…』

（ぶっきらぼうだけど、本当は優しいサッくん…）

『ねぇねぇサッくん』

『サッくん言うな』

『こ、この、コード難しいよ…』

『バレー・コードか…つうかお前出来てたろうが…』

『え？』

『無意識か…』

『ねぇねぇいつ～？』

『忘れてんなら教えたって意味ねェ…』

『そげなこと言わずに～…』

『誰だお前…　つうかギターは練習して上手くなるもんだ、だからバレー・コードを練習しとけ』

『本番とかで失敗したらどうしよう…』

『そんときゃ俺がフォローしてやる…』

『サッくん…♪』

『優しいね咲也君♪』

『うるせェ…』

そんな大好きなみんながいる講堂に早く…！

「唯ちゃん！ゼェ…つ、着いたぞ！」

「ほぇ…？」

いつの間にか目の前には『桜高祭』と書かれている大きなゲートが…

「あ、ありがとう！修司君！ここで…」

「そのまま乗ってろ！」

『ここでいいよ』って言おうとしたら修司君が更にスピードをあげて…

「講堂前まで突っ走る！」

「えぇ～っ！？」

ひ、人！人がたくさんいるよ！？
ぶつかっちゃうよ！？

「せいッ！せいッ！せいッ！」

「す、すごい…」

器用に避けてスイスイと進んで行く…

「唯ーっ！」

「和ちゃん！！」

「ゼェ…ゼェ…せいッ！」

見えてきた講堂の前にいる和ちゃんが大きく手を振っている。

そして…

キキッ！！

「ゼェ…ゼェ…ゼェ…ミッション…コンプリート…」

ついに…ついに辿り着いた…

「唯！」

「和ちゃん！みんなは！？もう終わっちゃった！？」

「大丈夫よ、まだ終わってないわ
今は三曲目の途中よ」

「よ、よかった～」

なんとか間に合ったことに思わず腰を抜かしそうになっちゃったけど…

「ほら、早く行きなさい　『軽音部』のところに」

「うん！」

そんなことしてる場合じゃないから、和ちゃんの言う通り講堂の扉を開けようとしたけど、その前に…

「修司君！本当に本当にありがとうね！」

私のために頑張ってくれた修司君にちゃんとお礼言わなきゃ。

「はぁ…！はぁ…！いいよ別に、礼なら咲也にも言ってあげな、ア

イツから連絡がなかったら俺はなんにもしなかったからさ！」

「うん！分かったよ！でも、本当にありがとう修司君！」

「あいよ！」

修司君が私に片手を上げたのを見て…

（ありがとう、和ちゃん、修司君…）

ガチャ

講堂の扉を開いて中に入っていった…

「『♪キミの笑顔想像していいとこ見せたくなるよ
情熱をにぎりしめ振り向かせなきゃ…』」

「……ぁ」

講堂の中にはたくさんの人達がいて、立ち上がってリズムをとったり、手拍子とかをして軽音部のライブを聞いていた。

そして…ステージの上にいるみんな…

（澪ちゃん…ボーカルやってくれたんだ…）

ベースを弾きながら『ふでペン～ボールペン』を歌う澪ちゃん…

（あれ？サッくんの前にもマイクがある…）

サッくんもボーカルやってくれたんだ…

アコギっていうんだっけ？それを弾いているサッくんを見てると…

「…あっ…」

サッくんと眼が合ってアコギを弾いてる手を一瞬だけ止めて、私に手招きしてくれた…

「…うん…」

私はゆっくり一歩一歩着実にステージに歩いて行く…

「お姉ちゃん！頑張って～！」

（憂、ありがとう…いつもいつも本当にありがとう…！）

憂の声が聞こえたけど、どこにいるのか分からない…
だから心の中で感謝をして…

バッ！

右手を大きく上げる。
憂に『ちゃんと聞こえたよ』って、みんなに『私はここだよ』って伝えるために…

「『♪夢を見せてクルクルとね字が舞い躍る
がんばれふでペン
ここまできたから
かなり本気よ☆』」

♪♪♪♪～

私がステージ前に着くと、ちょうど曲が…

♪♪…ダダンッ！

終った…

―――――――――

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

（なんともマヌケ面だ…）

そう思うのも仕方ない。
三曲目の『ふでボール』の佳境時に平沢がやってきて、それに気付いた俺がギターを弾いている手を一瞬だけ止め『早く来い』という意味を込めて手招きした。

すると平沢は俺達をジッと見つめたまま足を進めだし、途中で自分の存在を強調するかのように高々と右の拳を振り上げ、俺達がいるステージの前までやってきては、ポカンっとした表情で見上げてくる。

「唯」

「早く来いよ」

「あ、うん…」

秋山に名を呼ばれ、田井中の『全員でライブをやるぞ』という意味

の言葉を受けた平沢はステージに上がろうとするが…

ズルン…

「うぅ…上れましぇん…」

「はぁ…」

運動音痴だコイツ…このくらいの段差も上れねェのか…

「おい…」

「ふ、ふぁい…？」

何故か半泣き状態になっている平沢に…

「アッチの階段で上ってこい…」

俺が指差す先にはステージの端にある小さな階段。

「う、うん…」

トコトコと俺の指令通りに階段に向い、漸くステージ上に平沢が…

「唯先輩」

「唯ちゃん」

そして平沢が中野と琴吹に半泣きの笑顔を見せて…

「さわちゃん…」

平沢の代役をやっていた山中顧問に体を向ける…

「ありがとう…」

その言葉を聞いた顧問は…

「じゃあ後頑張りなさい！」

そんな言葉を告げて踵を返し颯爽とステージ脇にはけていった…

「……」

その背中に『漢（おとこ）』を感じたのは俺だけじゃねェだろうな…

「みんな、本当にごめんなさい…」

顧問の背中に漢を感じていると平沢の申し訳なさそうな声が聞こえてきた…

見るとそこには、瞳に涙を溜めた平沢が…

「よく考えたら…い〝つもいつも〝…ご迷惑を…こんな大〝事な時に…」

「……」

堪えきれなくなったらしい…
大粒の涙を流しながら俺達に謝ってくる…

「唯ちゃん、涙を拭いて」

「ム、ムギち〝ゃん…」

琴吹がハンカチで平沢の頬と目元を優しく拭う…

「唯先輩、泣いてる暇なんてないですよ」

「あ、あずに〝ゃん…」

中野が笑顔を浮かべ、優しく諭す…

「唯、迷惑だなんて思ってないよ
それが唯の長所だから」

「み、澪〝ちゃん…」

秋山が慈愛の眼差しで平沢を見る…

「迷惑だと思っても、私達を頼れよ?
サクも言ってたぞ『足りない部分は互いに補なえ』ってさ!」

「り、り〝っちゃん…」

田井中がいつもの二カッとした笑顔を浮かべる…

「サッくん〃…」

「……」

そして瞳に涙を浮かべたままの平沢が俺を見てくる…

「はぁ…」

ため息を吐いて…

「ギタリストがギター忘れるなんて前代未聞だ…」

「……ぅ…」

「…まぁ、そのことも風邪のことも、全部不可抗力で片付けてやる」

「サッくん…！」

「…だからギター構えて、涙を止めて、ラスト一曲歌え」

「…うん！」

「…お前が一番気に入ってる歌だろ」

「うんっ！うんっ！ありがとう！ありがとうサッくんっ！」

涙を拭って見せる笑顔。

「「唯！」」
「唯ちゃん！」
「唯先輩！」

それは…『夢中』になってる時の笑顔だった…

「私っ！歌うよっ！」

ワァァァッ！！

今まで静かに俺達を見守っていた観客から今日一番の大きな歓声が。

『お姉ちゃ～んっ！梓ちゃ～んっ！』

『唯ーっ澪ーっ律ーっムギーっ』

『咲也ーッ！！』

その中で一際デカい声が、平沢妹、真鍋、修司の順に聞こえてくる…

「憂～っ！」

「う、憂…」

「和…恥ずかしいよ…」

「あはは…和…」

「和ちゃ～ん♪」

「はぁ…」

……

「『改めまして放課後ティータイムです』」

漸く全員が揃い平沢がＭＣを始めるが…

「ＨＴＴな…」

「サク先輩、もう良いじゃないですか」

「良くねェよ…」

これは絶対に妥協は出来ねェ。

「『目標は武道館とか言って、私達の軽音部は始まりました
ギターを買うためにみんなでバイトしたり、毎日部室でたくさん喋
ったり、ムギちゃんの別荘で合宿したり、入部してくれる一年生を
捜したり…
わき目も振らずに練習に打ち込んできた～なんてとても言えないけ
ど…
でもここが私達にとっての武道館です！！」

ワァァァッ！！

「……」

（『私達にとっての武道館』か…）

まぁ、今の俺達にとっては『この場所』で演奏出来るぐらいがちょうどいいのかもな…

平沢なんてギター初心者だったのに…

「『聞いてください！ふわふわタイム！』」

「ワンツースリーフォーワンツースリー！！」

田井中のカウントから…

♪♪♪…

俺がリフを弾き…

♪♪♪♪♪…

そのあとに、平沢、中野、琴吹、秋山、田井中と続き『六人でライブ』を達する。

「『♪キミを見てるといつもハートＤＯＫＩ☆ＤＯＫＩ
揺れる思いはマシュマロみたいにふわ☆ふわ
いつもがんばる
キミの横顔
ずっと見てても気づかないよね
夢の中なら二人の距離
縮められるのにな

あぁ　カミサマお願い
二人だけのＤｒｅａｍ　Ｔｉｍｅください☆
お気に入りのうさちゃん抱いて
今夜もオヤスミ♪』」

「……」

そんなギター初心者のアイツが本当に上手くなったもんだ…

『んじゃあ　まず…
『Ｅｍ』の押さえ方だ
中指で5弦2フレット、薬指で4弦2フレットを押さえてストロークしてみろ』

『？？』

『あの…咲也』

『あン？』

『唯に『フレット』とか『ストローク』とか言っても、まだ分かんないと思うんだ』

『……』

こんな感じだったアイツが…

「『♪ふとした仕草に今日もハートＺＵＫＩ★ＺＵＫＩ
さりげな笑顔を深読みしすぎてｏｖｅｒ　ｈｅａｔ！
いつか目にした
キミのマジ顔
瞳閉じても
浮かんでくるよ
夢でいいから
二人だけの
Ｓｗｅｅｔ　ｔｉｍｅ欲しいの

あぁ　カミサマどうして
好きになるほど
Ｄｒｅａｍ　ｎｉｇｈｔせつないの
とっておきのくまちゃん出したし
今夜は大丈夫かな？』」

バンドの『華』であるボーカルとギターをこなす程に成長した平沢を見ると、感慨深いものがあるな…

……

「『♪あぁ　カミサマお願い

一度だけのＭｉｒａｃｌｅ　Ｔｉｍｅください！
もしすんなり話せれば
その後は…
どうにかなるよね』」

♪♪♪♪♪♪～

ダダンッ！ダダンッ！

ジャラァァ…ン…

「ふぅ…」

ラスト一曲の『ＦＦ』を終え、達成感と心地良い疲労感を感じていると…

♪♪～

「あン？」

突然キーボードの音色が聞こえ、振り返ると…

「♪♪」

「ムギちゃん…」

「……」

笑みを浮かべた琴吹がキーボードを弾きながら俺達の顔を見てくる。

そして…

ダンダンダンッ！

「りっちゃん…」

「……」

田井中がドラムを再び叩きだし…

♪♪♪…

「澪ちゃん…」

「……」

秋山も再びベースを弾き…

♪♪♪…

「あずにゃん…」

「……」

中野も『じゃじゃ馬』をかき鳴らす…

そんな四人が俺と平沢に視線をぶつけ…

「サッくん！」

「…サッくん言うな」

♪♪♪♪…

平沢が笑って禁句を発しながらレスポールを弾き、俺が愚痴りながらテレキャスでギターソロを弾きだす…

♪♪♪♪♪♪…

再び重なった俺達の音に…

ワァァァッ！！

観客は歓声と共に湧き起こる。

そして…平沢がマイクと観客に向かって…

「もう一回っ！！」

ワァァァッ！！

「『♪あぁ　カミサマお願い
二人だけのＤｒｅａｍ　Ｔｉｍｅください☆
お気に入りのうさちゃん抱いて
今夜もオヤスミ♪』」

♪♪♪♪♪♪……――――――――――

ピッ

ガコンッ

「……」

自販機から炭酸のジュースを取り出し、それを振りながら歩き出す。

現在時刻午後六時ジャスト。

軽音部のライブも無事に終わり、その後は部室にてダラダラ過ごすというなんとも俺達らしい行動をしたあと、真鍋から『後夜祭』なるものがあるという情報を聞きつけた平沢と田井中の提案で後夜祭に参加することに。

俺はさっさっと帰りたかったが…

後夜祭といってもただ校庭のど真ん中にキャンプファイヤーとでもいうんだろうか？
まぁとにかくデカい焚き火を囲むというものだ。
ちなみに後夜祭は参加できるのは生徒は元より、教師と学校関係者のみ。

「……」

歩いていると校庭の一角に平沢、秋山、田井中、琴吹、中野、平沢妹、真鍋とついでにアホの姿を発見。

「あっ！サッく～ん♪」

平沢が相変わらずのブロックワードを放ちながら、何が楽しいのかニコニコして俺に手を振ってくる。

「はぁ…」

そんな平沢にため息を吐いて近付く。

「サッくん♪」

「…サッくん言うな」

「どこ行ってたの咲也君？」

「…コレを入手しに」

そう告げて琴吹に炭酸ジュースを見せる。

「おっ！ジュース！」

そしてそれにいち早く反応する修司。

「修司…」

「なんざんしょ？」

「…やる」

修司に向けて軽く炭酸ジュースを放り投げる。

だが…

つるん

ゴスッ！

「のぉぉぉ…！！」

「うわぁ…痛たそ…」

右手で掴もうとしたらしいが、上手くキャッチ出来ずそのまま額に直撃し悶える。

そして田井中が表情を歪ませる。

「だ、大丈夫ですか？修司さん」

そんなアホに平沢妹が心配するが…

「…心配なんてしねェで良いぞ　アホだから」

俺が制する。

「どんな理由だッ！」

「…な？」

「あはは…」

「影宮君って丈夫だな…」

「みたいですね…」

「修司だからね…」

秋山と中野がコイツのタフさに驚愕し、真鍋がその言葉では万物を納得させることは困難な言葉を発する。

「いって〜…」

落ちていたジュースを拾い、缶についていた砂などを落とし、プルタブを開けると…

プシャーッ！

「ぎぃやぁぁぁッ！！」

中身が間欠泉のように勢いよく飛び出てはアホの両眼に直撃する。

「眼がッ！眼がッ！」

ゴロゴロゴロゴロ…

「……」

バキッ！！

「ウベッ！！」

手で眼を押さえながら地を転がるアホがウザいので蹴っておく。

「いやいや、ヒドいなサク！」

「…これが日常だ」

「意味分かんないって…」

「眼が痛いよ～…」

「修司君、洗い流したほうが良いと思うけど…」

「紬ちゃん、そうしたいのは山々なんだけどさ、痛くて眼が開かないんだがや…」

（何故名古屋弁？）

「仕方ないわね　私が水道のところまで連れて行くわ」

真鍋がアホに救いの手を差し延べる。

「ほら　行くわよ修司」

「待っちょくれ和ちゃん…視界ゼロなんだ…」

「修司君！鬼さんこちら手の鳴るほうへだよ！」

「なるほど！つまりは和ちゃんの足音を頼りに進めばいいんだな！」

「……」

平沢の期待出来ない提案にアホがあっさり乗って歩き出す…

「いや…すごいな修司…」

「真鍋の後を全く狂わずついていくな…」

流石はストーカー予備軍…

♪♪♪～

すると誰かのケータイが鳴り…

「あっ！純ちゃんからだ～」

「純から？」

鳴ったのは平沢妹のらしく、中野が反応を示す。

「もしもし？うん、今？校庭にいるよ～　うん梓ちゃんも一緒だよ

うん、うん、分かった迎えに行くね」

通話を終えた平沢妹がケータイを閉じる。

「純、なんて？」

「今どこ～だって　それで今から純ちゃん迎えに行ってくるね」

「あっ　私も行こうか？」

「ううん　梓ちゃん疲れてるでしょ？ここで待ってて」

「あ…うん、分かった」

「じゃあお姉ちゃん　純ちゃん迎えに行ってくるね？」

「ほいほ～い」

真鍋と修司に続いて平沢妹も去っていき、残ったのは軽音部員のみ…

『……』

パチッバチッ

誰も喋らず聞こえてくるのは炭がはぜる音のみ…

「ねぇねぇみんな…」

すると平沢が口を開いた…

「私、すっごく楽しかったな～♪　今日のライブ～♪」

「……」

炎を見ながら満面の笑みを浮かべる平沢…

「私も～♪去年以上に楽しかったわ～♪」

「私も、すごく楽しかったな　梓はどうだったんだ？」

「最後にムギ先輩がキーボードを鳴らしたのには驚きましたけど、すごく楽しめました！」

「大成功だったよな！なぁサク！」

「…平沢とかいう奴がギター忘れたけどな」

「うっ！すみましぇん…」

「もう良いじゃないか咲也」

「…来年もこんなことがあったら困るから今の内に言っとくんだよ」

「来年かぁ～想像できないな～　澪がまた違うクラスになってたりして～」

「そ、そんなこと言うなよ！」

「大丈夫よ！澪ちゃん！三年生になったらみんな一緒のクラスになるから！」

「…根拠ねェだろそれ」

「でもでも、それってすごく楽しそうなクラスだよね！私とサッくんと澪ちゃんとりっちゃんとムギちゃんと和ちゃんとあずにゃんがいるクラスって！」

「えっ！私も入ってるんですか！？」

（つうか修司はぶられたな）

「当たり前だよ～」

「無理ですよ」

「さわちゃんに頼めば何とかなるかもな…」

「なるわけないだろ」

「…つうかあの人はただの音楽教師じゃねェか」

「でも咲也君、来年になったら先生も出世してるかも！」

「…ねェな」

「サッくんスバっと斬ったね」

未来なんて分かんねェし、あれこれ詮索しても仕方ねェ。
別に田井中の言葉を借りるわけじゃないが『今が楽しかったらそれで良い』だ。

つうか来年っつったら最後の学園祭ライブになるのか…

「……」

「サッくん？」

「…あン？」

「どうしたの？」

「別に…気にすんな」

「気にしたら「負けだ」…言わせてよ～」

『ぷっ！あはははは♪』

秋山と田井中と琴吹と中野が揃って笑いだす。

「ぶふっ！！あはははっ♪」

そして平沢も笑いだす。

「……」

俺はそんな彼女らの笑顔を見て夜空を見上げる。

（来年の学園祭ライブで中野以外の俺達は、実質ラストライブ…）

その時アイツらは今みたいに笑っているんだろうか？
俺はどうなんだろうか？

「はぁ…」

まぁ、なるようにしかならないな…

来年の俺達がどうしてるなんていう答えは…

『私…ここにいるみんなと一緒にバンドをやってこれて…最高です！』

『バンドってすごく楽しいです！今もすっごく楽しいです！』

『えっと…中野　梓です…よろしくお願いします』

『え～みなさん、今日は軽音部のライブを聴いてくださいましてありがとうございます。えっと、私からは以上です』

『…言いたい事や伝えたい事は音楽に乗せて伝えるっつう手法があるが、時には伝わったのが言葉だけで、本質は伝わってない場合がある…』

『もっと演奏していたいんだけど…時間がきちゃいました…』

来年にしか分からない…

第五十八話（後書き）

一期終了～！…じゃないか、まだ番外編があった…

第五十九話（前書き）

冬のある日編です。

第五十九話

「はぁ…」

吐き出す息が…白い…

こんな季節だ。
そりゃあ当然なんだろうが…

「……」

その当然は『外にいるなら』のことであって、今現在、俺は室内にいる。
更に言うと音楽準備室。所謂軽音部室。

本日十二月中旬金曜日。

室内にいるというのにこの寒さ…

（去年以上に異常だ…）

冷気を含んだ風が窓にぶつかり、ガタガタと音を鳴らす。
そんな風がどこからか僅かな隙間を見つけては進入し、すき間風を部室内にプレゼントしてくれる…
故に寒い…

白と黒のチェック柄のマフラーと学園指定のコートではなく私物のファーつき黒ジャケットを着込み、両手をそのジャケットのポッケに突っ込んで暖をとって長イスに片膝立てて、鞄を枕代わりにして仰向けに寝転ぶ。

「……」

身動ぎせず、なんの思考も巡らせずにボーッと天井を眺める。
そんな俺の耳に聞こえてくるのは吹きすさぶ風の音と…

「りっちゃん、寒くない？」

「御寒うございますわよね～」

「ございますわ～あっ」

「ん？」

「そいっ！」

「ぎゃあああ～っ！」

「りっちゃんのほっぺた暖か～い♪」

「こ、こしゃくな～！ていっ！」

「うひゃああ～っ！」

「唯のほっぺたあったけ～♪」

「……」

平沢と田井中のコントのような会話のみ。
声は聞こえてこないが秋山と琴吹と中野もちゃんと部室にいる。

「……」

まぁ、とにかく平沢と田井中のはしゃぐ声と風が窓を軋ませる音が相乗効果になり俺に眠気という睡魔を発生させる…

抵抗する術も理由も特にないので、まどろみに身を任せて瞼を閉じること数十秒。

いきなり襲ってきた衝撃に睡魔は彼方へ飛んでいき一気に意識が覚醒する。

ピト。

「ッ！」

突然、俺の両頬に痛みにも似た冷たさが…

ガバッ！

ゴンッ！

「イタッ！」

「…ッ！」

そんな衝撃に珍しく驚き、勢いよく身体を起こせば再びの衝撃がやってきた。

「うぅぅ～…」

「何しやがるテメェ…」

俺の目の前には額に手を当てうずくまり、悶える平沢が。
そして俺の額には鈍痛が駆け巡る。
どうやら平沢と額同士をぶつけたらしい…

「痛いよ～…　サッく～ん…」

「そりゃあ俺の台詞だ…」

涙ぐみながら俺が悪いみたいに言いやがって…

「何やってるんだ二人とも」

秋山が苦笑いを浮かべながら呆れたような声で未だに悶えている俺達に告げてくる。

「サッくんのほっぺたはあったかいかな～って思って試したら…」

「そんなことするからバチが当たったんですよ」

「……」

中野の言い分は理解出来るが…
俺は完璧に被害者だ。
バチが当たるんなら平沢だけで十分だろう…

「はぁ…」

白いため息をついて立ち上がる。

「さみぃんなら他の方法で暖をとれ…」

俺を暖房器具にするな。

「はい、唯ちゃん、あったかい紅茶よ」

「ありがとう～ムギちゃん♪」

俺の発言を受けたからかどうか不明だが、琴吹が迅速に紅茶を淹れ平沢に渡す。

「ていうかサクは着込み過ぎだろ」

田井中が立ち上がった俺を爪先から頭のてっぺんまで見ては少々呆れる。

「さみぃんだから当然の対策をしてるだけだ…」

「だからって私物の服着るなよな～
私達なんてスカートなんだぞ」

「だったらジャージでもはけ…」

「いや～それは女子としてどうなのかと思う」

「……」

田井中のそんな発言に口を閉ざして、つい部長を凝視してしまう。

「な、なんだよ…？」

俺の視線に当てられた部長が戸惑う。

「いや…お前から『女子として』なんて言葉が出るなんてな…」

「なぁ！？失礼だなサク！私だって乙女なんだぞ～！」

いやまぁ…確かに失言だったと思うが、普段のコイツの言葉遣いや態度を見てるとな…

「私だってな！恋とかに悩んでり…っ！」

「……」

俺に噛み付いてきたと思えば急に口に手を当て、黙り込む。

そして心なしか頬が紅くなってる気がする。

「律？」

「律先輩、もしかして…す、好きな人がいたり…」

「えっ！？そうなのりっちゃん！！」

「冬なのにりっちゃんに春が来たわね～♪」

そんな田井中の様子に秋山が首を傾げ、中野がモジモジしながらの発言に平沢が眼を輝かせ、琴吹がうまいことを言う…

「ち、違ぁ～う！」

「り、律…そ、そ、そんな人いるのか…？」

「誰！？りっちゃん誰！？」

「私、応援するね！りっちゃんの恋！」

「はぁ…」

きっかけは俺らしいが、カチューシャの恋愛事情なんて興味ないので、かじかむ両手の指を何とか動かし、テレキャスでも弾こうとしたら…

「も、もしかして…サク先輩…ですか…？」

「「「「えぇっ！？」」」」

「……」

ヒュー……ドガァンッ！！！

中野爆弾、部室内に投下。

「そ、そうなのりっちゃん？」

琴吹がチラチラと俺を見ながら田井中に問い掛ける。

「だから違うってぇ！！そもそもなんでサクなんだよ！？不機嫌男じゃないか！」

「ンだとコラ」

聞き捨てならねェな…

「り、律が咲也を…」

「…お前も真に受けんな」

「り、りっちゃん！サ、サッくんはダメッス！」

「だーかーらーっ！！そんなんじゃないってばーっ！！」

顔を真っ赤に染め上げまるでドラムを叩くかの如くテーブルをダンダンと叩き、校内中に響くぐらいのボイスをあげる。

「うるせェな…デケェ声出すな…」

「な、なんで咲也は冷静なんだ？」

「…興味ねェから」

「そ、それは律が可哀相だよ…」

なんでカチューシャの相手が俺と決まってんだ…

「…唯先輩のダメって……私の考え過ぎかな……？」

―――――――

結局、田井中の発言は『咄嗟』に出た俺への反論だったらしい。
『咄嗟』ということはそれに達する『何か』がアイツの中にあると思うが…まぁ、どうでも良い。
で、とりあえずは場は落ち着き…

「憂に貰ったブークロちゃん、あったかいんだ～♪」

「全く～よく出来た娘だよな～」

「澪先輩、猫の飼い方って分かりますか？」

「猫？…飼ったことないから分からないけど…」

「「……」」

少し練習をしてから帰路の道を辿る。

途中までは部員全員が一緒の帰り道。

すっかり普段通りになった田井中が平沢妹を褒めたたえ、ニャカ野が秋山に自分の分身の飼い方を問い掛け、特に話す話題がない俺と琴吹が黙々と歩いていると…

「ねぇねぇ、みんな～」

平沢が歩みを止めて俺達に振り返る。

「こんなに寒いんだから、明日ウチで鍋しない？あったかあったか鍋だよ～」

この平沢の提案に…

「「「「「……」」」」」

黙り込む俺達。

「あれ？」

そんな反応をされた平沢がコテンっと首を傾げる。

「ごめんなさい…私、用事があって…」

「私もな～、弟を映画に連れていってやるって約束したんだよな～…」

「私もちょっと、家から出られそうにないです…」

「え～っ…」

始めに琴吹が無理だと言い、ついで田井中と中野が続く。

「サッくんと澪ちゃんは？」

三人に断られた平沢が希望の眼差しで俺と秋山を見るが…

「私もちょっと、新しい歌詞書きたいし…」

「……用事がある」

「そ、そんな～…」

その希望を粉々に粉砕してやる。

「妹と一緒にやってろ…」

「う～ん…仕方ない、憂とギー太の三人で楽しむよ…」

「……」

当たり前のように言い放った平沢に言葉を失う…

『三人』って…レスポールを人間として扱ってんのかお前は…

「はぁ…」

より白くなった息が寒空に昇っていくのを見ながら、改めて『平沢唯』の天然を確認した冬の帰り道…

―――――――――

【ＳＩＤＥ　田井中　律】

「はぁ…」

ベッドに寝転び、サクみたいなため息をつく。

ていうかサクのせいで恥ずかしい目にあった…

「なんかムカつく…」

なのでケータイを手に取り、サクに『今日も相変わらずの不機嫌顔だったな～』っという内容のメールを送り…

「はぁ…」

再びため息をついて、私がこんなにモヤモヤした気持ちになってしまっている原因を鞄から取り出す。

「白い吐息弾ませて駆けてくきみを見てると…切り揃えた髪が、とても似合ってる…でも前髪を下ろしたきみの姿も見てみたい…」

三日前に郵便受けに入ってた一枚の紙。
その内容を口に出してみる。

やっぱりこれって…

「ラブレター…ッ！」

顔が熱を帯びていくのが分かる。
別にそういうのに興味がないわけじゃないけど…
いざ、自分がそういうことになると…なんかモヤモヤする…

「ていうか…誰から？」

この紙には差出人なんて書かれてないし、筆跡もパソコンで打ったみたいに機械的だから誰からのなんて分からない。
私が仲の良い男子といったら…

「サク…」

真っ先に浮かんでくるのは軽音部の黒一点にして副部長の桐島　咲也。

…だけど、今日の反応を見るとその可能性はない…かな～？
ていうかサクがこんな内容書くなんて想像出来ないし。
サクは不機嫌顔だけどカッコいい部類だと思う。
澪みたいにファンがいるし。

「でもな～…サクをそんな風に見たことないし…」

サクに恋愛感情なんて持ったことないし、そんな風には見れない。
持っているのは『友情』と『仲間』。
それはサクも一緒だと思う…う～ん多分…
…まぁ、これからサクに恋愛感情を抱くなんていう可能性がないなんて……分からない…けど…

ブブブッ…ブブブッ…

「ん？」

そんな時、ケータイが震えたので開いて内容を確認したら…

「あはは…！」

サクからの返信に笑ってしまった。

【件名：無題】
【本文：黙れ】

たったこれだけの文字。
これは本当にサクらしいな～なんて思って笑みが零れてしまう。
サクとはこういう付き合いが良いし、なにより楽しい。

澪はもちろん、サクも唯もムギも梓も私にとっての大事な『友達』と『仲間』だから、今はそんなことを気にするより『軽音部』を楽しみたい。

「でもな～…やっぱ気になる…」

ゴロゴロとベッドを転がっていると…

『ねぇちゃーん！ごはーん！』

一階から聡の声が聞こえてきたから…

「分かった～！」

返事をして…ラ、ラブレター…を鞄にしまい、部屋を出ていった。

「あ、修司もいたか…」

いやいや有り得ないって。

―――――――

翌日。
休日の土曜日。

「……」

マフラーを鼻頭まで上げ、ヘッドフォンから流れる俺の好きなミュージシャンの曲を聴きながら商店街を目的もなくダラダラとブラブラと歩く。

そう、目的もなく…

昨日、平沢には『用事がある』と言ったが実はそんなものはない。
ただ…ここ最近、平沢家や田井中家に行ってしまっている…

年頃の娘がいる（部長も含め）家に、幾ら知り合いだからといってホイホイと足を運んでいいものじゃないだろう。
まぁ、俺の考えが古いのかもしれんが、一概に間違いではない筈だ。

家にこもっていても暇なだけなので商店街を歩く。

（暇だ…）

しかし目的もないので何をしてもいいか見当もつかない…

「……」

歩みを止めて、ケータイを開き、アド帳から中学時代の友人にでも暇つぶしにメールでも送ろうとしたが…

「はぁ…」

ため息を吐いてケータイをしまう。
なんかそんなことをしても虚しい気がした。
修司にメールを送るなんて論外。
絶対に面倒なことになること受け合いだ…

なので…

……

以前思ったことを実行するために『１０ＧＩＡ』へ。

「それでは、こちらでよろしいですか？」

「はい…」

以前思ったこと。
それは…

「では弾き終わりましたら、連絡をください」

「はい…」

ベースを弾いてみること。
中野が加入した際に秋山とツインベースも良いかもしれんと思ったので、『１０ＧＩＡ』でベースの試し弾きをすることに。

店に展示していたとあるベースを店員に試し弾きの意を告げ、試弾室に案内され、ストラップを肩にかけて、アンプにベースをつなぎ…

♪♪♪♪…

適当にベース特有の低音を奏でてみる。
ちなみに俺が弾いてるのはポピュラーな四弦ベース。
本当は六弦ベースが良かったが、生憎と見当たらなかった。

……

「……」

弾き始めて数分。
ピックではなくフィンガースタイルで弾いていた右手をピタリっと

止める。

（違うな…）

なんというか…『違う』『違和感』がある。

例えるなら…『色』。

俺には俺の『色』があり、平沢にも『色』がある。

同様に秋山、田井中、琴吹、中野にもそれぞれ『特長』な『特徴』の『特色』の『色』がある。

それらが混ざりあって『ＨＴＴ』にしか出せない鮮やかな『色』になっているが、俺がベースを弾くことによりその『色』が荒んでしまう気がした…

「はぁ…」

（それに…）

ベースは秋山の専売特許だ。

他人の畑に土足で足を踏み入れてはイケないし、秋山自身もされたくないだろう。

「ナシだな…」

ガチャ…

ベースの試し弾きを終わせることを店員に知らせるために試弾室から出ていった…

……

「はぁ…」

店から出て、今にも雪が舞い降りてきそうな曇天を見上げる。

（休日って…こんなにつまんなかったか…？）

街を歩く人々は楽しそうにしているが、俺はそんな気分にはなれない…

「……」

ノスタルジックとでも表現するんだろうか…
なんとも言い表し難いものが俺の胸中に去来する…

「はぁ…」

人生で一番ため息を吐いた日と制定しても過言ではないため息をついていると…

ブブブッ…ブブブッ…

「…ん？」

ズボンのポッケが震え、ディスプレイを確認すると…

【平沢　唯】

「……」

そんな天然からのメールを確認したら絶句してしてしまった…

【件名：ねぇねぇ】
【本文：マシュマロ豆乳鍋とチョコカレー鍋
どっちがたべてみたい？】

こんなびっくりなメールを寄越されてきたらどう対処したら良いんだ…

（スルーだな…）

そう決めてケータイをポッケにしまい、軽音部員全員に一斉送信していたので、他の奴が解決するだろうと思い、休日で賑わう商店街を歩き出す。

――――――――――

「いらしゃいませ～♪」

「……」

あの後、書店やゲーセンを巡っていると再び平沢から『今、みんなでマックスバーガーにいるからサッくんもおいでよ～』とう内容のメールが届き、小腹が減っているという理由でバーガーショップに行ったのは良いが…

「ご注文をどうぞ～♪」

何故琴吹が接客している？
しかも笑顔二割増しで…

「ホットコーヒーを一つ…」

「ホットコーヒーをお一つですね～？かしこまりました～♪」

とりあえずは邪魔しちゃ悪いだろうからさっさっと注文することに。

「はい咲也君♪ホットコーヒーです♪」

「…素が出てんぞ」

「あ、ごめんなさい！お客様♪ホットコーヒーです♪」

「……」

大して変わらん気がするが…まぁ、良いか…

代金を払い、ホットコーヒーを入手したので席に着こうとしたら…

「サッく～ん♪コッチコッチ～♪」

「はぁ…」

平沢が満面の笑みでタブーを口にし、手招きしてくれる。

「…いい加減にその呼び方止めろ」

無駄だと分かってはいるが言わずにはいれないので一抹の希望を言葉に託す。

「ヤダよ～サッくんはサッくんだもん♪」

「はぁ…」

やっぱり無駄でした。

「諦めろサク」

「唯にそう呼ばれて長いんだからさ」

四人掛けのテーブルに座っている田井中と秋山が苦笑いをしながら…

「お姉ちゃん、気に入っちゃうと一直線ですから♪」

「笑って言うこと、それって？」

この場に何故平沢妹がいるのかと思ったが、恐らく姉と一緒にいたんであろうと内心納得し、そんな平沢妹がニコニコしながらの発言

に中野がツッコむ。

「……」

四人掛けのテーブルには平沢妹と中野と田井中と秋山が座っており、平沢が近くから持ってきたと思う椅子に座るという荒技を披露しているので、俺は横の二人掛けのテーブルに座る。

「あっ！私もそっちに座ろ～っと♪」

平沢がハンバーガーセットが乗っているトレイを持って俺の対面に座る。

「エヘヘ～♪」

「……」

そして何故か笑う。

「そういえば、咲也は何してたんだ？」

「あぁ？」

コーヒーを口に運ぼうとしたら、秋山からの質問飛んできた。

「澪ちゃんは海に行ってたんだって～」

「海？…お前今の季節知ってんのか？」

（海水浴でもエンジョイしたのか？）

「環境を変えて歌詞を考えたいから、海に行ったんだよ
海水浴に行った訳じゃないからな」

「……」

思考を読まれたか…中々鋭いな。

「あずにゃんは純ちゃんから子猫を預かってたんだって～」

「誰だよソイツ…」

聞き覚えがあった気がするが…

「私と梓ちゃんの友達です　今年の春に軽音部を一緒に見学したんですけど…覚えてませんか？」

「……」

平沢妹の発言に巡る思考。

（…あぁ、モジャ団子か…）

「サク先輩、変なこと考えませんでしたか？」

「考えてません…」

決して『変なこと』ではない。
『変なあだ名』だ。

「ムギちゃんはアルバイト始めたんだって～」

「さっき体験した…」

いつもとあまり変わらない対応されたが…

「りっちゃんは…」

「弟と映画だろ…」

「え!?なんで分かったの!?」

「昨日言ったろ～聞いてなかったのか唯～」

「あれ～?そうだっけ～?」

「全く、相変わらずだな唯は」

「……」

コーヒーを飲みながら、ふと思う。

先程まで感じていたノスタルジックな気持ちはいつの間にか失せ…

「そういえば律?」

「なんだよ?」

「この間、郵便受けに入れといた歌詞、どうかな?」

「へ?歌詞?」

「うん！頑張ってパソコンとか使ってみたんだけど～」

代わりに胸中に表れたのは確かな『楽』という感情…

「じゃあ…あれは澪が…？」

「え？うん！」

どうやら俺はコイツらといると楽らしい…

自然体というかなんというか…

「あれ書いたの澪だったのか～！」

「郵便受けに入れとくって言っただろ」

「今時そんな古風なことするんじゃねぇえ～！」

まぁ死んでもそんなこと口に出さねェけど…

「サッくん」

「…あン？つうかサッくん言うな」

「なんか楽しいね♪」

「……」

ニッコリ笑う平沢。
表面上は感銘せずにコーヒーをたしなむ俺。

「ちょっ！律！止めろって～！」

「私のっ！私は～っ！」

幼馴染みの肩を掴んで揺らす田井中と抵抗する秋山。

「お待たせ～♪」

「あっ　紬さん」

「バイト終わったんですか？」

「うん！五時までだから～♪」

ニコニコしながらバーガーショップの制服から私服に着替えた琴吹を迎える後輩コンビ。

「……」

窓から空を見上げれば相変わらずの寒空の曇天。
しかし、俺達の周りはいつもの和やかな空気と暖かさ。

本日十二月中旬土曜日。

（たまにはこんな日も悪くねェかもな…）

なんてことを思った冬のある日…

「それでサッくんはなにしてたの？」

「ブラブラしてた…」

『えっ！？』

第六十話（前書き）

ライブハウス編です。

第六十話

「なぁ、桐島」

「あン？」

「お前、俺達のバンドでギター弾かないか？」

これは『あくまで』俺の持論であり所論。

バンドを組み、自分達の音楽を奏でている者には少なからず、一度はやってみたい事があると思う。

『♪♪♪♪…』

「……」

それはライブ。
俺は…まぁ、学祭と新歓でそれは経験済み。
だが…

『♪♪♪♪…』

「……」

全身全霊で歌を歌うボーカル。
銀のドクロマークが特長の黒のテレキャスをかき鳴らすギタリスト。
この二人に湧き上がる約三万人というオーディエンス。
自室のテレビから流れる俺の好きな二人組ロックバンドのライブＤＶＤ。
それを見ていると、いつかは自分こんな風にデカい会場で…なんて大それたことは思わないが、近い気持ちはある。

（『見る』じゃなく『演る』で講堂以外の場所でいつか…）

こんな妄想じみた願いがまさか…叶うとはな…

―――――――

相変わらず外の凍える冷気をすき間風が部室内に運んでくれる十二月二十一日。

「ふんすっ！」

「……」

部室の扉を開けるなり視界一杯が黒くなり、平沢の気合いが入ってはいるが、どこか気の抜ける声が聞こえてきた。

「…邪魔」

「あ～れ～」

軽くイラッとしながら俺の視界を塞いでいた何かを払いのけ、まるでのれんを潜るかのように部室に進入する。
そして平沢がクルッと一回転半し、俺の後ろをトコトコとついてくる。

「まいど～♪」

「……」

先程の俺の行動を見た琴吹が居酒屋の女将な様子で出迎える…
…のっけから平沢と琴吹のツインアタックに疲れを感じる…

「はぁ…」

ため息で気分一新。

「サク！ビックニュースだ！ビックニュース！」

「あぁ？」

するとテーブルで相変わらずのティータイムをしていたらしい部長が立ち上がり報告をしてきた。

「ライブハウスで演奏するぞ！」

「…ライブハウス？」

その言葉に思わず鞄を置いていた動作を止め、気概な部長を見る。

「そう！私と澪の中学ん時の友達がさぁ、一緒に出ないかって誘ってくれたんだ～」

「サッくん！これだよこれ～♪」

平沢が手に持っていた一枚のチラシを差し出してくる…つうかさっき、俺の視界を塞いだのはコレか…

「…サッくん言うな」

デフォルトなキャッチボールを平沢と交わし（ほぼ俺の一方通行）チラシを受け取り、内容を確認。

まず眼に入るのは『大晦日ライブ』と紙面の半分を占める文字。
そして『出場バンド募集』の広告文字。
後は軽く眼を通す。

「大晦日にやんのか…」

（後…十日か…）

「私と唯とムギは賛成なんだけど、澪と梓は反対なんだってさ」

「だって…大勢の前に出るのは…恥ずかしいもん…」

「……」

チラシから視線をテーブルにいる秋山に移すと、二の句が告げない程スキルを発動していた。

「秋山の反対理由は分かったが…お前は？」

次に中野に視線を向ける。

「このライブ当日まで、あと十日しかないですし…何も準備してませんから…」

「……」

確かにその通りだが…

「…十日もありゃ十分だ」

「え？」

中野が意外な表情をして俺に顔を向ける。

「さ、咲也は賛成なのか？」

「あぁ…」

「サッくんっ！」
「咲也君！」
「さっすがサク！」

秋山のおそるおそるの質問に頷いた途端に一気にテンションが上がる三人衆。

ちょうど昨日、他の場所でやってみてェと思ってたとこだ。
いい機会だし、なにより…

「…武道館目指すんなら、通るべき道なんじゃねェか？」

「武道館…」

現軽音部仮最終到達地点である舞台の名称を秋山が思案顔になり呟く。

「そうだよ澪ちゃん！武道館への第一歩だよ！」

「あの、そんな目標があったんですか？」

「梓ちゃんは知らないんだっけ？」

「はい、初耳です」

「そんな梓に教えてやろう！私達の目標は卒業までに武道館公演をすることなのだー！」

「なのだ～！」

田井中が拳を突き上げ、負けじと平沢が両拳を高々と上げる。

「…卒業までは無理だ」

「ダメだよサッくん、悲観的になっちゃ」

現実主義者と言え。

常にホロ〇ロの実のゴースト攻撃をくらってる訳じゃねェ。

「分かった…」

すると顔を俯かせていた秋山がスッと顔を上げ…

「わ、私！やってみる！」

「よぉし！その意気だ澪！」

「…で？お前どうすんだ？」

秋山の参加が決まったので、残り一人の反対派に問い掛ける。

「私も…参加します」

小さく右手を上げ参加表明をする中野。

「サク先輩の言う通り、十日もあれば準備出来ますし…」

そこで一旦言葉を切り、俺達を見渡す。

「先輩達の夢、私も叶えたいから…です」

「……」

最後には恥ずかしそうに、それでいてどこか嬉しそうにはにかむ。

「あずにゃ～ん♪」

「ニャッ！？抱き付かないで下さいよ唯先輩！」

「嬉しかったんだも～ん♪」

「お前はニャカ野に抱き付けたらなんでも良いんだろう…」

「エヘヘ～♪」

「……」

否定しねェんだな…

「ニャカ野じゃないです！」

「……」

最近猫化してきてるが、自覚ナシか…

「よーし！やるからには優勝だぜ！」

「優勝とかあるの？」

「ねェよ…」

「ていうか、そういうのじゃないと思います」

「澪ちゃん！頑張ろうね！」

「う、うん！唯もな！」

初のライブハウス参戦が滞りながらも決まったので…

――――――――――

「ここですね」

「なんだか…不気味な雰囲気だね、サッくん…」

部活を切り上げ（一切練習してないが）申し込みをするために、一路ライブハウスに向う。

そして辿り着いた途端に何やら二の足を踏む平沢と…

「お疲れ様でした」

腰を直角に折り曲げて手本のような礼をし、退散しようとする秋山…

「逃げるな」

そしてそれを捕まえる部長。

「ライブハウスっつうのはこういうもんだ…」

秋山と平沢が躊躇する気持ちは分かる。
ライブハウスは防音上の理由から地下にあるものが殆ど故に、必然と喧騒から切り離される。
そして周囲にはそのライブハウスに出演したバンドが独自のステッカーや、宣伝チラシを貼ってあり、地下とあいまって物々しい雰囲気を漂わせている。

「大丈夫ですよ唯先輩、澪先輩、これがライブハウスの門構えですから」

「梓ちゃんはライブハウスに来たことあるの？」

ライブハウスの概念を知っている口振りの中野に琴吹が食い付く。

「はい、片手で数える程度ですけど」

「……」

そういえばコイツ、春にライブハウスに行ってたんだったな…

「サッくんもあるの？」

「サッくん言うな…最近は来れてなかったが、昔はな…」

高校に入学して軽音部に入部してからは色々忙しかった…訳じゃないが、諸々の事情で中々足を運べなかった。

「よし…！じゃあ行くぞ～！」

「……」

意気込む田井中。
別にそれはかまわない。
だが…俺の右肩に乗せたこの手はなんだ?

「ンだよ…」

「サクからどうぞ」

「……」

コイツも内心緊張してんのか…

「はぁ…」

ため息をつき…

ガチャ

重厚そうな防音扉を開けてさっさっと進入していく。

「さすがサッくん！頼りになるね～！」

「うんうん♪」

「いや～…一切の躊躇ナシか…」

「鋼のハートを持ってるからな、咲也は…」

「なんですかそれ？」

背後からなんか聞こえるがスルー。

「……」

この時間帯だ。

まだバンドはいないらしい（今日はライブが行われるのか定かじゃないのでいないのかもしれない）

「……」

中を見渡していても仕方がないので、受付カウンターに歩を進める。

「サク先輩、行動が早いですね…」

「サクは勇者か…」

「サッくんは副部長だよ?りっちゃん」

またもや背後からなにか聞こえがスルー。

「…すんません」

カウンターには人影がなかったので奥に向い、呼び掛けると…

「は〜い…はいっ　いらっしゃい」

妙齢な女性スタッフが駆け足でやってきた。

「…大晦日にあるライブに参加申し込みに来たんスけど」

そう告げて部長を手招きする。
コイツの友人の誘いらしいので、田井中が対応しなければ…つうか部長のコイツがやらねェでなんで俺がやってんだ…

「あ、あの！放課後…ティータイムです！」

手招きの意図を理解し、カウンターにやってきた田井中が緊張しながらの発言に俺が苦言を呈する。

「…ＨＴＴな」

「い、今言うことじゃないって…！」

せっかくの初ライブハウス参戦に抜かりなど以ての外だ。
しかし…やっぱり俺の意見など通らないようだ…

「『放課後ティータイム』ね、話は聞いてるわ、『ラヴ・クライシス』のマキちゃんの紹介ね」

「はぁ…」

女性スタッフの笑顔の発言にため息が…
どうやら田井中はその友人にバンド名を言ったらしいな…

「（ねぇねぇ　りっちゃん、サッくん、私達のバンド名って、ちょっとホワワンとしすぎかなぁ？）」

他バンドの名前に衝撃を受けたらしい平沢が小声で俺達に話しかける。

「（私もそう思った…）」

「（だから『ＨＴＴ』だっつってんだろうが…）」

今更気付くな…

バンド名の変更が出来るチャンスなので女性スタッフに口を開こうとしたら…

「『放課後ティータイム』ってなんだか　かわいいバンド名ね」

「……」

まさかの肯定発言に開いた口が塞がらない…

「わぁ～♪ほめられたぁ～♪」

ちょっと黙ってろ天然。

「…あの」

「ん？なにかな？」

だがしかし、引き下がる訳にはいかない、故に開いた口から嘆を発する。

「…俺達のバンド名は『ＨＴＴ』なんで」

「違うよサッくん『放課後ティータイム』だよ？」

口を閉ざせ天然。

「すみません　コレだけバンド名に納得してないので」

部長が苦笑いを浮かべながら主に俺の顔を指差す。
なんだ不機嫌面とでも言いてェのか？

「クスッ　確かに男の子にはちょっと違和感あるかもね」

「…かなりッス」

「そう…」

女性スタッフが平沢と田井中、後方で成り行きを見守っていた秋山と琴吹、中野に視線を巡らせ…

「このバンドには男の子はキミだけなのよね？」

「はい！サッくんだけです！」

なんでお前が答えんだ…

「だったら女の子の意見を汲んであげなきゃ
据膳食わぬは男の恥よ♪」

「……」

ウインクをしながらの発言に絶句。

使い方あってるかソレ…

つうか、どごぞやの顧問みたいなこと言いやがって…

「はぁ…」

……

「ドラムの田井中　律ちゃんに…」

「はいっ」

「ギターの桐島　咲也くんに…」

「…うす…」

「ギター&ボーカルの平沢　唯ちゃんに…」

「はいっ！」

「ベースの秋山　澪ちゃんに…」

「は、は、は、はい！」

「キーボードの琴吹　紬ちゃんに…」

「はい！」

「ギターの中野　梓ちゃんね」

「は、はい！」

結局渋々今回だけバンド名に妥協した後、メンバーのポジションを確認するために各自答え、それを女性スタッフがスラスラと書類にペンを走らせる。

「ＯＫ！じゃあ次は当日の動きの確認ね」

女性スタッフが紙を一枚めくり、その内容を告げていく。

「えっと…当日出演者は十三時入り、十五時からミーティング、客入れが十六時、開演は十七時ね」

「あ～…　は、はいッ！」

ツラツラと述べていく言葉に田井中が冷や汗を流しながら返答するが、恐らく覚えきれてないので…

「……」

ケータイを取り出し、簡潔にメモする。
この場合は秋山辺りがしっかりしていると思うが…

「これがライブのチケットか～」

「入場料払わないと入れないんだね～」

「唯ちゃん！記念撮影～♪」

「あ、私が撮ります」

こんな感じにチケットに群がり、興味津津なのでやむを得ず俺がこなす。

「あと、当日の持ち込み機材だけど、基本何を持ってくるかの事前

申告が必要だから注意してね」

「は、は、はいっ！」

「はぁ…」

絶対に覚えきれてねェな…

……

当日の動きの説明を受けたあと、楽屋等ライブハウスの裏側を案内され（その度に平沢が大はしゃぎし、ハズかったので距離を置いた）

最後に案内された先は…

「ここがステージよ」

「……」

様々なバンドが演奏を行なうその場に足を踏み入れ、歓喜席に身体を向ける。

「……」

今は無人のそのスペースだが、当日になったら大勢の客が入るんだろう…

学祭や新歓はあくまで学校行事の一貫だが、今回は違う。

ガチンコだ。

他のバンドも集まる客も、皆音楽に精通した連中だろう…

（それはそれでおもしれェ）

恐れおののく必要なんて全くねェし、何よりそんなものは俺の中には存在しない。

それは平沢も田井中も琴吹も中野も同様らしい。

「すっげー！ライブハウスって感じだよな～！」

「ねぇねぇ！ミラーボールもあるよ～」

「ここで演奏するんですね」

「ドキドキするわね」

…平沢はただ楽観的なだけか…

あぁ…そういえばもう一人、極度にあがる奴がいたな…

ボフンッ！

「ここで演奏…ここでライブ…ブツブツ…」

「はぁ…」

久しぶりに人間火山を噴火させた秋山が頭から煙を噴き出しながらブツブツ言っとる…

「クスッ　なんだかキミ達のバンドって個性的ね」

「…類を見ないバンドなんで」

「ふふっ　確かに見たことないわ」

「……」

それは褒めてんのか？
けなしてんのか？

―――――――――

ライブの参加申し込みが済んだので帰路に着くその途中に平沢が口を開いた。

「りっちゃん部長、当日は何時までにライブハウスに行けば良かったけ？」

「え？え～っと…十五時だったような…」

「はぁ…」

やっぱな…覚えてねェよコイツ…

「ようなって…随分曖昧だな」

秋山が田井中に視線を向ける。

「だって、覚えきれなかったし…」

「えっ!?律先輩覚えてないんですか!?」

「あんなに一杯覚えられるかよー!」

「それじゃあ明確な時間は分からないのか律?」

「おう!」

「威張るな!」

「でも、どうしよう…時間が分からないんじゃ当日遅刻しちゃうわ…」

「もう一回戻って聞く?」

「入りは十三時だ…」

平沢がUターンしよう足を止めた瞬間に俺が正しい入り時間を告げ、ケータイを取り出し、メモした内容を確認していく。

「十五時からミーティング、客入れが十六時、開演は十七時…だ」

ケータイを閉じる。

「サク、メモしてたのか？」

田井中が驚愕の表情で俺をガン見してくる。

「お前だけじゃ不安だし、他の連中は話聞いてねェし…」

「「「「うっ！すみませんでした…」」」」

深々と俺に頭を下げるアリのようにチケットに群がっていた奴ら。

「助かったよサク～」

「やっぱりサッくんは頼りになるよ～」

「うん♪ホントよね～♪」

「ありがとうございます！サク先輩！」

「やれやれ、律も咲也のそういうとこ見習わなきゃな？」

「澪もサクの度胸を見習ったほうが良いぞ～」

「サッくん！ナイス！」

「サッくん言うな…」

ライブハウスライブ、本番まであと十日。

第六十話（後書き）

アニメでは、ガールズバンドライブとなってますが、変更しました。

第六十一話（前書き）

ライブハウス編後半です。

第六十一話

琴吹がキーボードの鍵盤の端から端まで指を滑らせて勢いよく弾いていく。

その『つむぎ出した』演奏に触発されたのか田井中が力強く、かつリズミカルにドラムを叩き『旋律』を生み出す。

――――――――

「……」

「フフ～ン♪」

翌日十二月二十二日。

昼休みになり、購買から帰ってきた修司が俺の机の目の前にやってきては、それはそれは気味の悪い笑顔を浮かべる。

そして…

スッ

「……」

右手の掌を差し出してきた。
まるで何かを寄越せという風に…

「お前、あと三年で御陀仏だ…」

「手相を見るなッ！てかあと三年ってッ！？具体的に言うなッ！いや、具体的ってなんだよッ！？」

「……」

知るかよ…テメェが言ったんだろ…

「つうかビックリなこと言うなよッ！やっぱりビックリ箱かお前はッ！？」

後ろに二、三歩後退して、のけ反りながらこんなことを言う。
…毎度の事ではあるが、コイツはリアクションは良い。
…だが、その騒音を抑えることは不可能なのか？

「チケットだよ！チケットプリーズ！」

「…チケット？」

「とぼけんなよ～　軽音部って大晦日にライブハウスに出演するんだろ？
さっき唯ちゃんが和ちゃんに、その事を大々的に言いながらライブのチケットを渡してんのを見たんだからな！」

「……」

出たな…ストーカースキル。

実は昨日、ライブハウスを去る際に女性スタッフ（川上という名ら

しい）から知り合いに渡す分だけチケットを無料でくれるという好意的な出来事があった。
俺は貰う必要など更々なかったが、平沢が真鍋と妹と、その友人のモジャ団子と顧問の分プラス一枚のチケットをいつの間にか貰っていた。
そのチケットを俺に渡してきたのが昨日の帰り道。
まぁ暗に修司の分なんだろう。

平沢曰く『友達は大切に』だそうだ。
それに『何故？』と返すと『修司君だけはぶくのは可哀相』と返ってきた。

『その割りにはチョイチョイ修司をはぶいてるぞお前は』とか思ったのは当然であり仕方ないだろう。

ということでチケットを一枚持ってはいる。

そしてそれを財布から取り出し修司に見せつけるかのように机上に置く。

「…これのことか？」

「それそれ～☆やっぱり持ってたな～　く～だ～さ～い～な☆」

「……」

「なんで黙るッ!?コミニケーションとろうぜッ!?」

コミュニケーションな。

「…欲しいか?」

「当たり前じゃないか~!咲也の勇姿を見たいからな~」

「仕方ねェ…譲ってやる…」

「ヒャッホーイッ!」

「…五千円になります」

「まさかの売り付けッ!?」

「ったりめェだ…資本主義ナメんな」

「クッ！難しいこと言って足元見やがって！」

「いらねェんなら西野か水本に…」
「払います」

「……」

深々と頭を下げては財布から五千円札を震える手で取り出す…

「クッ…さらば…愛しの…愛しの…樋口ちゃん…グス…う…」

「……」

泣いてる…マジで泣いてる…
痛々しいな…

「タダでやる…」

ハナから金を巻き上げつもりは毛頭…あわよくばあったが、あまりにも痛々しいので譲歩してやる。

「ッ！ありがとう！ありがとう咲也！持つべきものは親友だよ！」

「親友じゃねェ」

「だからビックリ箱かッ！お前はッ！？」

あぁ…うるせェ…

―――――――――

放課後。部室にて。

「曲目は四曲か…『ホッチキス』に『ふでペン』『カレー』『ふわふわ』でいいよね」

「うんっ♪」

「……」

部長の提案にケーキをパクついていた平沢が頷き、アッサリ曲目決定。

――――――――――

二十三日。

「明日から冬休みだな」

「そうね～♪」

秋山がベースをいじりながらの発言に琴吹が紅茶を淹れながら同意。

「今年もクリスマス会やろうぜ～！」

「いいね～♪またウチでやろうよ～♪」

「あの…私、クリスマスには予定が…」

「彼氏ですよ奥さん」

「若い子はいいわねぇ」

「違いますっ！家族と過ごすんですっ！」

平沢と田井中が巷の主婦みたいなやり取りに中野が全否定を。

「咲也は今年も影宮君の手伝い？」

「あぁ…」

そんな平沢達のコントを長イスに座り、アコギ片手に聞きたい訳じゃなかったが、耳に入ってしまったので処理していたら、目の前に秋山がやってきては質問を。

「あ、じゃあじゃあ！サッくんとあずにゃんも参加出来るように年末パーティーしようよ！」

「唯！それだ！」

「年末なら大丈夫です」

「空いてはいるが…」

「「よし決定！！」」

『いるが…』っつってんだろうが。
なんで人の意見を最後まで聞こうとする能力がねェんだ…

ハイタッチをする天然とカチューシャに…

「はぁ…」

ため息が…

―――――――――

二十四日。

「いらしゃいませ～☆」

「……ませ」

「愛想良くやれよッ！」

―――――――――

二十五日。

「いらしゃいませ…」

「覇気がないけど…まぁ合格！」

「チッ」

「なんで舌打ちしたッ！？」

―――――――――

二十六日。

「ねぇねぇみんな、ライブの衣装どうしよっか？」

「一年目の学園祭で着たやつにするか？」

「でも、梓ちゃんの分がないわ…」

「あずにゃんの分もさわちゃんが作ってくれるよ～」

「えぇ～…」

「私服で良いだろうが…」

「でもさサク、私服だとバラバラになっちゃうぞ？」

それが何か問題でも？

「制服で良いんじゃないか？」

この秋山の意見に…

『じゃあそれで！』
「……」

アッサリ決まる。
なんか無駄な話し合いが多い気が…

―――――――――

二十七日。

♪♪♪♪…

練習。

―――――――――

二十八日。

「ねぇ咲也」

「あン？」

「新しい歌詞出来たんだ…み、見てくれないか？」

そう言って頬を若干紅く染めながら一枚のルーズリーフを差し出してくる。

つうか何でお前は、いの一番に俺に見せる？
作曲なら琴吹もやんのに…
まぁ良いけど…

【ぴゅあぴゅあはーと】

「……」

ごちそうさま。
相変わらずの秋山チックなタイトルと歌詞に満腹だ…

「ど、どう…？」

「…イインジャネェノ」

「ホント!?私もこの歌詞好きなんだよ！」

暗黙のルールである『秋山の歌詞には特に否定はしない』を発動させると、一気にテンションが上がるレフティ。

「年明け辺りから曲作りを始める…完成は早くて二月、遅くて春ぐらいだ…」

「うんっ！分かったっ！」

本番もそのぐらいのテンションでやったらどうだお前？

「咲也君！私も手伝うね！」

「あぁ…」

「サッくん！私は何をしたらいいかな？」

「阿波踊りでもやってろ…」

「阿波踊り…あずにゃん、踊り方知ってる？」

「知りませんよ…」

―――――――――

二十九日。

「サッくん師匠」

「…サッくん言うな、師匠言うな」

「おぉ～サクが二段ツッコミを！」

スルー。

「ギー太の弦を張り替えてくれませんか！」

「威張るな…つうか自分でやれよ」

学園祭前に改めて教えたろうが。

「だって～…私がやると時間がかかるんだも～ん…」

「まずは挑戦しろ…それでダメだったらやってやる」

「そうですよ唯先輩、自分のギターなんですからまずは自分でやるべきです」

「うぅ…ほ～い…」

俺と中野の発言に哀愁を帯びながら納得し…

「ギー太～いまから弦を交換するからね～痛くないよ～」

自分のギターケースから俺がこの前諭吉を犠牲にして購入してやった、換えの弦とニッパーを取り出し弦を切ろうとするが…

「唯先輩！ペグ緩めてから切ってください！弦が飛んできて危ないですよ！」

「おぉっ　そっかぁ！」

「はぁ…」

前途多難…

しかもアイツのギターはレスポールだ。
俺のテレキャスや例えば…ストラトキャスターみたいに弦交換が容易ではないので…

「む、難しい…」

悪戦苦闘四苦八苦…
つうか、手つきが危なっかしい…

「はぁ…」

「サク先輩…見てられません…」

「手伝ってやれ…」

「はい…」

ギター始めてのもうすぐ二年だっつうのに…

―――――――――

三十日。

♪♪♪♪…

本番前日最後の練習。

そして…いよいよ…

―――――――――

本日十二月三十一日。

年の瀬も年の瀬。

多くの人間はこの日、大晦日というのが一般的であり、のんびりするかこの月の別称のように師走になって忙しくなるかだろう。

俺はのんびりと過ごしたい。

しかし…今日はそうもいかない。

何故なら初のライブハウス本番当日だからだ。

全員一旦学校前に制服で集合し、ライブハウスへと向う。

そして…

「よしっ！みんな！行くぞ！」

目の前には重厚そうな防音扉。

それを前に田井中が意気込み…

ガチャ…

「よろしくお願いしま～す」

今回は臆することなく進入する。

が…

『うっ…！』

「あン？」

前言撤回。
今回も臆した。

俺はコイツらの最後尾にいるので中の様子は伺えない。
しかし身長はコイツらよりも高いので平沢達のすき間を縫うように中を見る。

（なるほど…）

そして納得。
ロビーには今回のライブに参加すると思われる四組の連中の姿が。
カジュアルな服装の三人組女性バンド（恐らく）
ゴスロリとでも言うんだろうか？そんな格好の二人組女性（バンドっぽくない）
まるでどこかの宗教団体に属していそうな全員がオレンジのパーカーを着ている女性三人と男性一人のバンド（多分）
そして、もっとも異彩を放ち、なおかつ眼を引く女性三人バンド（確信あり）
ちなみにこの人らは、スーパーサ〇ヤ人のように髪を立たせ真っ赤に染めた人と、髪の三分の一を刈り上げ、残りの三分の二を緑に染めた人と、俺と似たような髪型だが色は紫、右眼から頬にかけて紅い蝙蝠のような（恐らく簡易な入墨だろう）ものをいれている人。
こんな連中に一斉に視線をぶつけられたら、そりゃあ田井中達はビビるだろう。

「みんな！楽しいライブだったな！」

一番こういう連中が苦手そうな秋山が、脳内で勝手にライブを終了させて踵を返し、帰ろうとする。

…どうやらあまりの光景にビビりの臨界点を突破したらしい。

「帰んなっつうの…」

ガシッ

そんな秋山のベースが入っているケースを掴み、俺が行く手を阻む。

「む、む、無理！無理だよ咲也！私無理！」

涙ぐんで両手と頭を左右にブンブンさせ全力で逃げようとする。

「落ち着け…あんな格好してるが、大概は常識ある奴等だ」

これは嘘ではない。
中学時代に何回かあんな連中のライブを見たことあるが、ＭＣなどを聞いているとそういう確信が得られた。
見た目はアレだが、それがその連中の音楽の道なんだろう。

すると…

「おはよ〜ッす」
「おはよ」
「よろしく〜」
「ども〜」

それぞれのグループのリーダー格が口を開き、陽気に挨拶をしてきた。

「ちゃんと挨拶してくれた〜！」

そんな見た目のギャップの陽気さに平沢が思わず頬を緩ませる。

「論より証拠だ…」

「ぅ、うん…確かに…」

まだ若干ビビってはいるが、落ち着いてきたみたいだな。

そして、まるでそれを見計らったようにオレンジ軍団の一人が俺達に駆け寄ってきた。

「りっちゃん！澪ちゃんも久しぶり！」

「あ～！マキちゃん！」

「……」

どうやら田井中と秋山の知り合いらしい。

「みんな　紹介するね」

田井中が一歩前に踏み出し、俺達を見据えて口を開く。

「こちら『ラヴ・クライシス』のドラムのマキちゃん！今回ライブに誘ってくれた！」

「よろしく！」

「……」

コイツが今回のきっかけを与えた奴か…

その後互いに自己紹介を。

田井中が勝手に俺を紹介するだろうと思い、自己紹介を交わす『ＨＴＴ』とオレンジ軍団…もとい『ラヴ・クライシス』の会話を適当に受け流していると…

「んで、最後にギターのサク」

「律先輩、フルネームで言わないと…」

「桐島　サッくんだよ♪」

「…違ェよ」

「桐島　咲也　私達のバンドのリーダーみたいな「部長は私だっ！」
…律は部長で咲也はリーダーだろ」

「いつからそうなった…」

友人と会って緊張がほぐれたらしい秋山が変な解釈をするので、思わず声に出してしまう…

「あっ！桜高祭で黒い浴衣着てギター弾いてた人ですよね？」

「あぁ？」

何故かオレンジ軍団の一人が眼を輝かせ俺を見てくる。

「うちのギターのヒトミ　桐島君だっけ？」

田井中と秋山の友人が俺に確認をとってくるが…

「あ、呼び方はサッくんで「黙れお前」…はぅ！」

平沢が恐ろしいことを口走るので軽く手刀を頭部におみまいする。

「…で？なんだ？」

「あ、うん　ヒトミって桐島君のギターに憧れてるんだよね」

「桜高祭でギター弾いてる姿、すっごくカッコよかったです！」

「……」

なんか、嫌な予感が…

「私！ファンになりました！」

「……」

あいたたた…
気力を失うようなこと言うな…

「サッくんは私のギターの師匠なんですよ♪」

そして何故お前が嬉しそうなんだ…

「ちなみにアヤは澪ちゃんのファンなんだよね？」

「私も桜高祭でベース弾いてる澪さん見てファンになりました！カッコよかったです！」

「あ、ありがとう…」

恐らくコイツはベーシストなんだろ。
そして戸惑う秋山…
気持ちは分かる…

「咲也君と澪ちゃんって校外でも人気なのね～♪」

お前もちょっと黙ってろ…

「それで最後の一人が…「桐島？」…え？」

「…あン？」

若干気落ちしているとオレンジ軍団の最後のメンバーである男がいきなり俺の名を呼び…

「桐島！久しぶりだな！」

「……」

トンボの眼のようなデカいサングラスをとり、驚愕の表現の後にすぐに笑顔を浮かべるが…誰だ？

「サクの知り合い？」

「知らん」

「俺だよ俺！小学生ん時に桐島と影宮と一緒によく遊んだ…大野充だよ！」

『大野　充』

その名前に脳内検索をかけ……ヒットした。

「あぁ…お前ね」

「随分とアッサリだな…」

確かにコイツとは、修司と共につるんだ記憶がある。
小学五年の夏に親の都合で引っ越したんだったな…多分。

「六年ぶりだな」

「あぁ…」

「驚いたよ　桐島がここにいるなんて」

「あぁ…」

「相変わらず淡泊だな桐島…」

「…うるせェ」

「影宮は?元気か?」

「…死んだんじゃねェの？」

「コラコラ！修司生きてるだろ！」

田井中が会心のツッコミをいれる。

「ははは！ホント相変わらずだよなお前って」

「……」

何が楽しいんだか…

「あの～サッくんの小学生の時のこと知ってるんですか？」

「あぁ　知ってるよ」

平沢が大野の回答に眼を輝かせる…
絶対に教えろっつうぞ…

「わぁ～♪教えてくれませんか！？」

ほらな…

だが、そう簡単に口を割らせるか…

「おい、少しでも喋ってみろ…蹴るぞ」

「ッ！」

軽く凄みを利かせ大野に告げると、ビクッと肩を揺らせ硬直する。

「ご、ごめんね　俺って桐島の蹴りにトラウマあるんだよ…」

「は、はひ…」

どんよりオーラを纏い出した大野に当てられたのか、平沢がなんともマヌケな声を発する。

「えっと…じゃあ改めて紹介するね！」

ドラム担当だったと思う奴が少し戸惑いながらどんよりオーラの大野を指差す。

「キーボードのミツル！桐島君と知り合いだったなんて驚いたよ」

キーボードか…
つまり『ラヴ・クライシス』はギター、ベース、ドラム、キーボードのフォーピースバンドか。

「……」

しかし今思ったが…
今回の参加バンドって男は俺と大野だけかよ…
なんだ近年の日本の男女比率は女に偏ってきてんのか？

「はぁ…」

ため息を吐く。

「それじゃまた後で」

「うん」

そう告げて大野を引きずりながら『ラヴ・クライシス』は去っていった…

「サッくんの小学生の話、聞きたかったな～…」

「…ンなもん聞くだけ無駄だ」

「ていうかサク先輩本人から聞けば…」

「サクが話すと思うか～？」

「ないですね」

「……」

きっぱり言うな中野よ。
まぁ、その通りなんだけど…

――――――――――

それはまるで深海の深き『澪のように』ベースの低音を波に乗せ、この会場に響き渡せる秋山。

じゃじゃ馬がその波に飲まれないようにしっかりと手綱の代わりにピックを持ち『梓の花を開かせる』かの如くゆっくりと、それでい

て丁寧に音色を聞かせる中野。

―――――――――

あの後、雑談等を交わしながらゆったりとしていたら、ミーティングの時間になった。

主にそこでは各バンドの曲目や曲順、リハの時間、出番等々…細かい注意点を確認した。

で、俺達の出番は…

「サッくんサッくん！私達二番目だよ！」

「知ってる…一々騒ぐな…」

コイツはライブハウスに来てからというもの、本当に落ち着きがない…

変に緊張するよか良いんだろうけど…

「みんな～♪お茶にしましょ～♪」

「ムギ！？持って来てたのかティーセット！？」

「うん♪」

「……」

逆にコイツはのんびりし過ぎ…

「二番目かぁ…最後は注目されるし、だからって最初も注目される…三番目ぐらいが良かったな…」

「あの…澪先輩、どの順番でも注目されると思いますよ？」

「うぅ…梓、そんなこと言わないで…緊張してきた…」

「……」

そしてアイツはガチガチになり過ぎ…

一抹の不安を覚えた午後十三時四十分。

……

「……」

平沢がバックステージパスを貰ってまたもや騒いでいたり、セッティングシートを書く際に秋山が『ピンクの照明が良い！』という断固たる決意をしたり、田井中が『自分にピンスポを！』この発言に中野が『みんなにも当ててもらいましょうよ！』という内心自分にも発言をくり出したり、平沢が『ギー太にもね！』と琴の『私のキーボードにも！』という、もはや軽いカオスになってきたので俺がさっさっと書き終えたら、全員からブーイングが発生した。
しかしそんなものに屈する俺ではないので、完全スルー。

そして現在。
俺は壁に寄り掛かりながらこれから始まるリハーサルを眺めていた。

平沢達はステージ近くにいるが、なんか平沢がはっちゃけそうなので敢えて距離を置いた。

「ねぇねぇ！お菓子も売ってるよ～！」

「はぁ…」

始まった…
リハーサルではなく平沢のワンマンショーが…

「あっ！りっちゃん！ＣＤが売ってるよ～！」

「いや…唯…」

「わ～！私達売るものないね～澪ちゃん！」

「ゆ、唯…」

「あっ！あずにゃん！私達もこれに映るのかな～！」

「あ、あぅ…」

「うは～！すごいねムギちゃん！」

「あはは…」

「見て見てサッくん！あれ？サッくん？どこ～？」

「……もう黙れアイツ」

ガキだ…
眼に付く全てのものに興味津津のガキだ…

「……」

とりあえず部長に視線をぶつける。

「ん？」

それに気付いた部長が俺に振り向く。

「……」

そして未だに騒いでる平沢を指差し、次にロビーへの出口を指差し…まぁ早い話が平沢を連れ出せという意図を伝える。

「唯～ちょっと移動するぞ～」

「ほぇ？なんで？」

「あ～はいはいはいはい…」

どうやら田井中達は恥ずかしかったらしい。

俺の意図を理解した田井中が平沢の肩を掴んで無理矢理ロビーにつ

れていき、その後ろを秋山達が足早についていく。

「はぁ…」

ため息を一つ吐いて、『ラヴ・クライシス』のリハーサルを集中して見ることに。

……

♪♪♪♪…

ジャァァ…ン…

「……」

リハが終わり、『ＨＴＴ』と比べて『遜色ない』が第一印象。
しかしそこは経験の差なんだろう。
演奏が安定して、ブレを感じない。

俺達は言わば未完成のパズルみたいなもんだ。

「……」

全てのピースが揃えば鮮やかな『色』になるが、気を抜けばそれはバラバラになってしまう。
常に『色』を表現するには経験が必要となってくる。
まぁ…俺達は本番になったらピースはがっちり合うんだが、普段はからっきしだ…

「桐島」

ステージから大野が降りて俺の前にやってくる。

「どうだった？俺達の演奏？」

「まずまず…」

「ははは！手厳しいな～」

「…が、経験はお前らの方が上だ」

「そうかな？桐島達の演奏聞いたことないからなんとも言えないな～」

「……」

「ていうかもうすぐ桐島達のリハーサルだろ？他のメンバーはどうした？」

「ロビーにいんだろ…」

恐らくそうだろうと思い、ロビーに向うと…

「……」

そこに展開してある威容で異様な光景に絶句。

「へぇ～　じゃあ結構色んなコンテストに出てるんだ」

「なかなか入賞できないんだけどね」

「でも、絶対プロになりたいから」

「そうだよね　諦めたら終わりだもん」

「ずっと音楽やってきたいし」

「すごい…」

「……」

なんでお前らは対談してんだ…

ロビーには軽音部員と他の参加バンドが各々片手にティーカップを

持ち、音楽を語っていた。

「おい…何やってんだ…？」

「あ、咲也」

状況把握のため一番身近にいた秋山に問い掛ける。

「勉強…かな」

「…勉強？」

「うん」

一度頷き、何やら音楽を熱弁している派手な髪と格好をした三人組バンド（デスバンバンジーというバンド名らしい）と、それを真剣に聞いている平沢、田井中、琴吹、中野を見て再び声を発する。

「なんか、私達とは意気込みが違うっていうか…真剣にバンドをやってるんだなって」

「……」

「あっ!?私達だって真剣にやってる!」

黙った俺が不快感を感じたとでも思ったのか秋山がワタワタしながら必死に弁解をする。
別にただ口を閉ざしただけなんだが…

つうか知ってるし、お前らが真剣だってことぐらい。

学園祭で一緒に演奏してたら、言葉にしなくても伝わってくる。

「まぁ…意気込みが違うっつうのは同感だな」

「うん、私達は今回初めてで、とにかくやってみようっていう気持ちで参加したけど…」

「…あの人達は違ェ、常にオーディションのつもりだろうな」

さっき『プロになりたい』とか言ってたし。

「こんな経験や話が聞けたのって、律や唯や咲也、ムギに梓のおかげかも」

「あン？」

「最初は参加するのはイヤだったけど、今は参加して良かったって思うよ」

「……」

「みんな、いつもちょっとずつ新しいドアを開いてくれる」

「お前だけじゃ経験出来なかったドアを…か？」

「うん！やっぱり私は音楽が好きなんだよ！それを実感出来た！」

「……」

力強く頷いて改めて自分の音楽を確認し、笑う秋山。

音楽っつうのは不思議なもんだ。
最初は怖がっていた秋山だが、今はその原因となった因子と共に同じテーブルを囲って笑ってる。

世界でチャリティーライブを行なうミュージシャンがいるが、こういうことなんだろうな…

「まぁ、感傷に浸るのはかまわんが…現実のドアもちゃんと見ろよ…？」

「え？」

「…もうすぐ俺達のリハの時間だ」

「しまったぁ！まったりし過ぎた！」

「はぁ…」

やっぱ抜けてるとこあるなコイツ…

……

まったりとティータイムを満喫していた平沢達四人を促し、リハのためステージに立ったのは良いが…

「サ、サッくん！ギー太から音がでないよ～！？」

「ジャックにシールド差してねェからだろ…」

「な、なにしたらいいかな！？」

「セッティングだ唯！」

「だからシールド差せって…」

「そ、そうね！セッティングね！」

「誰に言ってるんですか！？」

「背後霊じゃねェの…」

「ヒィッ！は、背後霊っ！？」

「はぁ…」

俺以外の部員はパニックに陥っていた…
まぁ、俺達のリハを他のバンドが見てるし、いつもと環境が違うし…
気持ちは分からんでもないが…落ち着け…

「『じゃあ、お願いします』」

川上スタッフが拡声器で、未だにパニック真っ最中のステージ上の俺達に告げる。

「じゅ…準備オーケー？」

若干緊張気味の田井中がスティックを構える。

「いぃーっす！」

平沢がやっとレスポールにシールドを差し込む。

「はい！」

じゃじゃ馬が暴れないようにしっかり構える中野。

「だいじょ～ぶ！」

キーボードを優しく撫でたあと、何故か力こぶ作る動作をする琴吹。

「う…うん…」

先程の笑顔をどこへやら、完全に雰囲気に呑まれてベースを構える秋山。

「はぁ…」

そんな部員達に激不安を覚えながらテレキャスの一フレット部分に差してあったピックを取る俺。

「じゃ…じゃあ、えーっと…四曲目『ふわふわ時間』ワンコーラスいきます！」

各々の確認を（俺はため息だったが）取り終えた田井中がスティックを掲げ…

カッ！カッ！カッ！

（ん？カウントの声…）

いつもの『ワン・ツー』がない…
リハで緊張し過ぎた…
本番になったらどうすんだ…

（はぁ…）

しかし、カウントが始まったので…

♪♪♪♪…

なんとか前奏を弾く。
そして…

♪♪♪♪…

全員が続き、いざ平沢のボーカルと思いきや…

「わぁ～っ♪」

（アホ…）

俺達の演奏が始まった途端に照明が落ち、ミラーボールがその役割を果たす。
そんなミラーボールに平沢が見とれ、ボーカルを忘れやがった…
つうか器用だな、ギター弾きながらミラーボールに見とれるなんて…

「平沢…！」

「んぁ？」

「唯！ボーカル…！」

「あっ！？し、しまっ…」

俺と田井中の言葉に急ぎ、マイクに近付くが…それが災いをもたら

すとはな…

「うっ！？」

「おいッ」

マイクに鼻頭を思いっきりぶつけ、しゃがみ込む平沢。

「だっ、大丈夫…うわっ！」

「あっ！澪先輩！」

平沢に駆け寄ろうとした秋山が自分のシールドにつまずいて転び、
中野が瞬時に駆け寄る。

「唯ちゃん！澪ちゃん！…あっ！」

そして琴吹も秋山の二の舞をする。

「ん…！落ち着けみんな！」

「……」

惨事というのは一瞬であり、立っているのは俺と、ドラムから立ち上がった田井中だけだ…

『未完成』

この文字が頭を過ぎる…

「はぁ…」

額に手を当て、ため息を吐いたあと…

「お前、鼻血出てんぞ…」

「うぅ…サッくん…」

小さい怪我を負った平沢の前に膝を折り、中腰になる。

「良いかお前ら…とにかく落ち着け、いつも通りにやりゃあ良いんだ」

平沢は平気そうなので怪我の処置は琴吹に任せ、立ち上がって、自失喪失気味な部員に言葉をかける。

「そ、そうだ！いつも通りに…」

「お前も落ち着け…」

「へ？」

拳を握る田井中にも言葉を。

「…カウントの時、声がなかった」

「あっ！？ゴメン！」

「気ィ張っちまう気持ちは分かるが…」

改めて部員を見回し…

「落ち着け」

今、コイツらに必要なことを告げる。

「サッくん…」
「咲也…」
「サク…」
「咲也君…」

「サク先輩…」

すると…

「落ち着いて！」

「もう一回最初からでいいよー」

「大丈夫！大丈夫！」

「頑張れー！」

俺達のリハを見ていた他バンドからの声援が…

大野からも…

「ドンマイ！ドンマイ！」

『気にするな』という風な笑みを浮かべながら声を送ってくる。

「よし…もう一回やるぞ…やれるな？」

俺の言うだけ無駄な質問に…

『うん！』

全員が力強く頷き、立ち上がる。

「……」

今は未完成のパズルだが、本番になったら…

――――――――――

がっちりと当てはまるのが俺達。

♪♪♪♪♪♪♪…

このバンドのボーカルである平沢が『唯一無二の歌声』と相棒のレスポールと共に響かせる。

そして、全てのピースが当てはまり、出来上がった音と色を俺が『咲き誇る鮮やかな音色』としてテレキャスに乗せて奏でていく。

♪♪♪♪♪♪♪…

ライブハウスはかなりの盛り上がりをみせている。

観客全員がリズムに合せ、身体を揺らし、まるで今にも地震が起きそうだ。

そんな観客の中には真鍋と平沢妹とモジャ団子、どうでも良い修司と奇抜な格好をした顧問が後ろにいる。

「『♪ふとした仕草に今日もハートＺＵＫＩ☆ＺＵＫＩ…』」

平沢の生き生きとしたボーカルとギター。
俺のリードギター。
中野のサイドギター。
琴吹の見事なキーボード。
秋山の縁の下のベース。
田井中の力強いドラム。

♪♪♪♪♪♪…

これが俺達『ＨＴＴ』の『音』と『色』であり、『音色』だ…

「『♪さりげな笑顔を深読みしすぎて　ｏｖｅｒ　ｈｅａｔ！…』」

――――――――――

「……」

軽音部初のライブハウスでのライブを終え、外で近くの店の壁に寄り掛かり、ホットコーヒーを飲みながら…

「お姉ちゃん！すごい良かったよ！」

「ありがとう～憂～♪」

「本当、みんな頑張ってたわね、カッコ良かったわよ」

「ありがとう！和ちゃん♪」

「梓もカッコ良かったよ～ね？憂」

「うん♪」

「あ、ありがとう…純、憂」

「何照れてんの～」

「て、照れてないもん！」

「さわちゃん、なんだよその格好…」

「昔の衣装よ、ライブハウスっていったらそれ相当の格好しなきゃ～！」

「さわ子先生はやり過ぎな気が…」

「あはは…」

平沢達の会話と大晦日の夜の喧騒をＢＧＭに毎度の心地良い疲れを満喫していたら…

「なぁ、桐島」

「あン？」

「お前、俺達のバンドでギター弾かないか？」

突然オレンジ軍団の一人である大野が俺の前に現れ、勧誘をしてくる。

「いやッ！別に今のバンド抜けて俺達のバンドに来いって訳じゃなくて…」

「…掛け持ちしろってか？」

「あぁ、どうかな？今日お前のギター聴いて、お前とバンドやりたいって思ったからさ」

「……」

「桐島のギターってかなり上手いんだよ！だからさ…」

その後も何かを言おうとしたんだろうが、俺が放った言葉に黙り込む。

「くだらねェこと言うな…」

「…え？」

「俺は…アイツら以外の連中とバンドをやるなんて、そんな気はねェ」

「……」

「つうか…掛け持ちなんて、バンドのバランスが崩れる」

持論だがな。

「ふぅ…」

すると大野が息を吐き…

「いや～…ダメ元だったんだけど、こうもバッサリ断られるとヘコむな～…」

苦笑いを浮かべ、ポリポリと頭をかく。

「まぁ、桐島には桐島の、俺には俺のバンドがある…かな」

「今いるメンバーでやっとけよ…」

「そうだな！桐島ナシでも十分良い演奏やれてるし！」

「なんか腹立つな…」

「サッく～ん！」

すると平沢の声が聞こえてきた…デカい声で…

「呼ばれてんぞ」

「分かってる…」

「んじゃあな桐島、今度は対バンでもしようぜ！」

「いつかな…」

曖昧に返事をして、軽音部員と真鍋と平沢妹とモジャ団子と顧問が俺の方を向いて待っているので…

ズズッ…

ホットコーヒーを啜りながら歩いていった…

「なんの話してたの？」

「…お前には関係ねェ話」

「そんなこと言われたら気になるよ～」

「唯ちゃん、気にしたら負けよ！」

「ムギ…」

「…そういうことだ」

「う～ん…そっかぁ！」

「納得するんかい！」

「じゃあ今から、唯ちゃんと憂ちゃんの家で年越しね！」

「さわちゃん来るんだ…」

「何か言った？」

「いや、別に…」

「…俺も参加すんのか？」

「当たり前だよサッくん！サッくんいないとつまんないよ！」

「…何故？」

打ち上げと称した年越しパーティーに渋々参加するはめに…

「はぁ…」

また平沢家に行くのか…

「あんれ～？咲也～？みんな～？っかしいな～？どこいった？」

「影宮？」

「ん？誰だ？」

「俺だよ！俺！」

「おぉ～…誰？」

「大野　充だよ…」

「あっ！？ミツルッチ！？おひさ～だな！」

「そうだな…」

「…ん？」

「どうしたのサッくん？」

「いや…なんか忘れてるような…」

第六十一話（後書き）

一期完全完結は次話です。

第六十二話（前書き）

一期完結です。

第六十二話

ガチャ…

「さぶっ…」

自宅の玄関の扉を開け、一歩外に踏み出す。

そして開口一番がこれだ…

現在時刻午後九時三分。

ライブハウスでのライブを無事に済ませ、平沢家にて年越しをするために、テレキャスとアコギを置き、制服から私服に着替えるために一旦自宅に帰る。

「さびィ…」

で、一時間程ダラダラと過ごし、年明けまであと約三時間となった

ところで自宅を出、凍える夜道をジリジリと歩き出す…

「……」

ジャケットのポッケに両手を突っ込み、マフラーを鼻頭まで上げ、ヘッドフォンを耳当て代わりにして、この冷気にせめてもの抵抗として好きなミュージシャンの夏歌を流して気持ち暖まろうとしたが…

「なるわけねェ…」

気持ちの問題など言われたらそれまでだが、生憎と俺は現実主義者なので現実の寒さをしっかり身に染みさせ…

「はぁ…」

白いため息を一つ吐き、平沢家への道のりを歩いていく…

―――――――――

「……」

目の前には三階建ての平沢家。

その前に立ち止まって、ふと考える。

（やはり…気まま…じゃねェが、すんなりと家に入って良いものなのか…）

距離感というのは大切だと思う。

親しき仲にも礼儀あり。

まぁ…アイツらと親しいかどうかはあやふやだが…

少なくとも全く知らぬ仲ではない。

「……」

確かに『楽』だとは感じるが…
前提として俺は『男』でアイツらは『女』…
年頃の娘の家に男が…な…

だからこの前、平沢の誘いを断り、ぶらついた訳だし…

今更だが、女グループの中に男一人。
おかしいだろ…
つうか、部活以外で付き合う理由あるか？
いや…あるかもだが…

「さびィ…」

このまま着地点が見えない自問自答をしていると風邪を引きそうだ…
平沢家には入らず、影宮家にでも奇襲を仕掛けようと踵を返した瞬間…

「サク先輩？」

「…あン？」

名を呼ばれた方角に視線を向ければ、月明りと街灯に照らされた後輩の姿…

「どうしたんですか？」

「…あぁ？」

「あ、いえ、どこかに行くのかなっと思って…」

「…お前、今来たのか？」

「はい、お風呂とか入ってたので」

「ふーん…」

自分で聞いといてアレだが、興味ねェな…

「あの、入らないんですか？」

平沢家の主に二階部分を指差し、コテンっと首を傾げる。

「例え話だ…」

「え？」

「…とあるチーターの群の中に一匹だけライオンがいたらどう思う？…浮くか？決別か？」

「決別って…」

「深い意味はねェ…」

「あの…サク先輩って、たまに意味が分からないこと言いますよね」

お前はたまに猫になるがな。

「良いから答えろ…」

「えっ…と…そうですね…」

時間にして五秒程思案顔になり…

「変…ですね」

「……」

俺に視線を向けて、はっきりと口に出す。

なるほど…やはりそうか…

おかしいよな…変だよな…

「でも…」

「…あン？」

「同じネコ科の動物なので仲良くはなるんじゃないですかね？」

「……」

この発言に言葉を失う。

不特定多数の人間の思考ならば、中野の前者の答えに辿り着くだろう。

しかしコイツは更にもう一歩上の答えを出して、少し笑う…

人の考えは十人十色だが…
そんな答えを出すとはな…
イノベ〇ターにでもなったのかお前は？

いや…

（ニャカ野だからか…）

納得。

「サク先輩、この質問に何か意味があるんですか？」

「…深い意味はねェっつったろ」

「意味はあるんですね？」

「…距離感は大切っつう意味」

「ん…？ますます分かりません…」

「俺が分かってりゃあ、良いんだよ…」

「質問しておいてヒドくないですか？ソレ…」

「うるせェ…」

「えぇ！？」

「…中入るぞ」

「あ、はい…」

まぁ…現実的に考えるとチーターとライオンが仲良くなる可能性は低い…つうかゼロに近いかもしれんが…

♪ピンポーン

「『は～い』」

「あ、憂の声…」

「俺だ…」

「名前言わないと分からないんじゃあ…」

「『あっ　咲也さん』」

「あれ!?なんで!?」

「実証済みだ…」

そばにいるぐらいは…良いだろ…

……

「そいっ!」

「「……」」

平沢妹に出迎えられ平沢家二階のリビングに案内された途端に…

「何やってるんですか…唯先輩…」

「歌舞伎の舞台は男しか上れねェぞ…」

身体を半身にして左掌を俺達に突き出し、右手を上に上げ、右足を地から離して重心を前に寄らせ、さながら歌舞伎役者のようなポーズで俺と中野を出迎える平沢。

「そいっ！」

「「……」」

再び掛け声を…
何がしてェんだコイツ…

とりあえず…

「……」

スッ

無言でチョキを出してみる。

「はぅ！負けたぁ～！」

「ジャンケンしてどうすんだ…」

床に崩れ落ちた平沢に、既に来ていた秋山がコタツで暖まりながら呆れたような声でツッコむ。

「違うよサッくん」

「サッくん言うな」

「おっ！今年最後かもしれないサクと唯のやり取りだ」

同じくコタツで暖をとっている田井中の発言を…

「…何が違ェんだ」

絶対に来年も行なうスルーで受け流す。

「これだよこれ」

立ち上がった平沢が三度目の正直と言わんばかりに左掌を俺と中野に見せる。
いや、正確にはそこに描かれているものを。

「…温泉？」
「温泉ですか？」

波状の縦線三本を半円が囲っている、正しく温泉マークがそこにはあった。

「だから言ったろ、それじゃ温泉だ～って」

「ありゃ？やっぱりそうなのかな？」

「ティーカップも書いたらどう？」

「おぉ！さすがムギちゃん！」

「……」

なんの話をしてるんだ…お前らは？

「憂～　マジック取って～」

「はい、お姉ちゃん」

「ありがとう～　え～っと…」

「あの、何を書いてるんですか？」

「ティーカップだよ～あずにゃん」

「いえ、そういうことじゃなくて…」

平沢に向けた中野の質問に、掌に何やら書き込みながら答えるが、どうにも的外れな答えを返してくる。

「ロゴマークを書いてるんだよ唯は」

「…ロゴマーク？」

秋山が真意を語ってくれたが、まだ疑問が残る。

「私達のロゴマークだ！」

「唯ちゃん、今日のライブハウスで色々影響受けたみたいなの～♪」

「……」

まったりとコタツを堪能中の琴吹がそんなことを言う。
影響受けたからロゴマーク？
他のバンドから音楽ではなく、そこに影響受けたのかコイツ…

「できた！じゃぁーん！」

平沢が全員に見えるようにゆっくりクルクル回りだす…
アホな子だな…

「おぉ～っ！」

「へぇ～良いんじゃないか？」

「うん♪私達にピッタリ♪」

三者三様に納得するコタツ部隊の面々。

「どうどう？サッくん、あずにゃん？」

回転を俺達の前で止め、ロゴマークと思わしきものの感想を求めてくる。

「可愛くて良いですね」

「でしょでしょ～♪」

ニッコリ笑って納得する中野と…

「ナシ」

先程の温泉マークのしたに下半月と取っ手を付き足し、見事な湯気が立っているティーカップの出来上がり。
それを見て二文字で一刀両断する俺。

「えぇ～っ　可愛いよね？あずにゃん」

「はい」

「…そもそも俺は、ロゴマーク云々よりもバンド名に納得してねぇんだっつうの」

「まだ言ってんのかサクは？器の小さい不機嫌顔だな全く！」

「…デコが広くてずぼらなお前に言われたくねぇな」

売り言葉に買い言葉。

「にゃにお～っ！！」

そして怒る部長。
しかしコタツから出る気はないらしい。

「律！暴れるな！」

その場でジタバタする。

「それじゃあサッくんが書いてみてよ～」

一刀両断されたのが気に入らなかったのか、平沢が頬を膨らましマジックを差し出してくる。

「はい、咲也さん」

そして平沢妹が紙をズイッと取り出す。

なんだお前らのそのコンビネーションは…

「……」

無言で両方受け取り、コタツ部隊の面々が占拠しているテーブルの上に紙を置き…

キュ…キュ…キュ…

「……」

「また単純だな」

「ていうかこれじゃただの文字ですね」

「シンプルだな咲也」

「私が書いたロゴマークのほうが断然いいね！」

「あはは…」

俺が書いた『ＨＴＴ』の文字に口々に文句を言ってきやがる（平沢妹は苦笑いだが）

「うるせェな…シンプルイズベストだ」

「咲也君」

「あン？」

すると唯一何も言わなかった琴吹がジッと『ＨＴＴ』を見たあと…

「ちょっと貸して？」

俺が持っているマジックを指差す。

「ん」

「ありがとう～」

受け取ったマジックでスラスラと『ＨＴＴ』の周囲を囲うようにデカい星を書き足す。

「かんせ～い♪」

『おぉ～』

「……」

星を付け足すだけでこうも印象が変わるとは…

自分にガッカリだ…

「サッくんとムギちゃんの共作だね♪」

「うん♪」

「そういえば軽音部の曲もサク先輩とムギ先輩の共作がありますね」

「『ふわふわ』と『カレー』だよな！澪が書いてきた新作の歌詞もサクとムギが作曲するんだろ？」

「うん！澪ちゃんがあんな良い歌詞を書いてきてくれたから頑張らなきゃ！」

「ムギ…そんなに言われると恥ずかしいよ…」

（つうか琴吹は秋山のあの歌詞に共感してんだな…）

「サッくん！私も手伝うよ！」

「手伝わねェで良いから、やっさいもっさいでも踊ってろ…」

「やっさいもっさい…？ねぇ　さわちゃん　やっさいもっさいってなに？」

「確か…千葉県木更津市の代表的な踊りだったと思うわ」

「へぇ～そうなんだ～」

「アンタ普通に会話に紛れ込んできたな…」

さっきまで影も形もなかったのに…

「さわちゃん!?ホント神出鬼没だなっ!」

「わっ!さわちゃん!?」

「…お前が話し掛けたよな?」

なのに何故驚く?

無意識だったんだな…

「なんでサク先輩は普通に対応してるんですか…」

「咲也は鋼のハートを持ってるからな…」

「咲也君ってお化け屋敷でも驚かなかったもんね～」

「そうなんですか～」

「……」

つうか中野…
お前は何故ネコ耳を……いや、違う…
あれはトラ耳だ…

まぁ、どっちでも良いんだが…
なんでそれを装着している…？

「フフ～ン♪」

「……」

顧問の仕業か…

……

現在時刻午後十一時五十八分。

「あっ　またババだ…」

「へっへ～ん！甘いな唯！」

「ていうか唯、自分がババ持ってること言っちゃダメだろ」

「……」

年明けまであと二分。
そんな中で女性陣はババ抜き真っ最中。
俺はそれには参加せずに、平沢の横に座り、コタツとみかんを堪能

しながらボーッとテレビを鑑賞中。

「『さぁ、今年も残すところあと一分を切りました』」

テレビから聞こえてきたレポーターの声に一同それぞれ手を止める。

「あ、いよいよだな～」

「ふぁ～…なんだか眠たくなっちゃった…」

平沢がゴシゴシと眼をこする。

「あと一分したら寝ろ…」

「うん……すぅ…」

「寝んなよ…」

そのまま後ろにゆっくりと倒れ込み寝息を立てる。
一分と一秒を聞き間違えたのかお前は…

つうか…

「くか～…」
「すぴ～…」
「すぅ…」

「はぁ…」

なんで顧問、琴吹、トラ野は一斉に寝だすんだ…
連鎖反応か…？

「澪、今年はどんな年だった？」

「たくさん楽しいことがあったよ　みんなのおかげで」

「そっか」

「律、ありがとう」

「えっ？」

「……」

突然秋山に礼を言われた田井中が…

「あ…よ、よせやい！気持ちわりぃ！」

「え…き、気持ちわりぃって…」

照れ隠しに暴言を吐いてるのを小耳に入れていたら、異変に気付いた。

「すぅ…すぅ…」

「離せよ…」

平沢が両腕でガッチリと俺の左手をホールドしてきやがった…

「離せっつうの…」

何とか平沢を解放しようと試みるが…

「エへへ…」

どんな夢を見てるのかは知らんが、何やら嬉しそうに笑う。

「はぁ…」

無理矢理退けることは可能だが、それだと平沢が起きそうだ。
それはなんだが心苦しいので渋々諦める…

「おーい、みんな！もうすぐ年明けだぞ～って寝てるし！」

「今さっき寝たぞ…」

「ちょっ！肝心な時に寝てどうすんだよーっ！」

田井中がもっともな意見を言った瞬間に…

ゴーン…

除夜の鐘が鳴り…

「『明けましておめでとうございま～す！』」

「あ、年明けた…」

「グダグタなスタート切ったな…」

「けどさ咲也、それも軽音部だよな」

「…グダグタがか？」

「決まるところで決まらないっていうか」

「部長がコイツだからな…」

「関係ないだろ～！」

カチューシャがなんか言ってるが…

「……」

今年初のスルー。

――――――――

現在時刻午前零時十五分。

年が明けてはや十五分が経過。

「……」

「すぅ…すぅ…」

「くか～…」

この十五分間の間に秋山と田井中も寝息を立て始め、これにより平沢家のリビングでは俺以外の人物全員が意識を夢の国に飛ばしていた…

「はぁ…」

なんで普通に自然に寝るんだよコイツらは…

男がいるっつうのに…

平沢なんか相変わらず俺の左手にしがみついたままだし…

「はぁ…」

この現状に新年になり二回目のため息を吐いていると…

「ぁ…」

「ん？」

思わず声が漏れてしまった感じの本当に小さな声量が耳に入った。

「咲也さん、まだ起きてたんですね」

リビングの入口には短いポニーを解き、寝間着姿の今まで姿を消していた平沢妹が軟らかな笑みを浮かべ…

「んしょ…」

数枚の毛布と小さな掛け声と共にトコトコとやってきた。

「……」

雑然と寝ている連中一人一人に毛布をかけ、最後に…

「咲也さん、どうぞ」

ニッコリ笑いながら俺に毛布を差し出してくる。
それを右手で受け取り左手が制御不能状態になっている原因を何とかしてもらおうと口を開く。

「なぁ…」

「はい？」

「…コレ何とかしろ」

未だに俺の左手をガッチリとホールドしたまま、スヤスヤ眠るコイツの姉を右手で指差す。

「クスッ　お姉ちゃん♪」

笑ってんなっつうの…

「…起こして良いか？」

「あの…」

俺の問い掛けには答えず、おずおずとビックリな発言をしてくる。

「…出来ればもう少しだけ、お姉ちゃんをそのままにしてあげてくれませんか？」

「はぁ？」

意味不明なことを…

「お姉ちゃん、すごく幸せそうなんです」

だからなんだ…

「お姉ちゃんは…その…咲也さんのことが…大好きなんです」

「……」

「あっ！いえっ！好きと言ってもそういうことじゃなくてですね！いつも私に咲也さんのことを楽しそうに話してくれるから…」

「……」

「だから…あの…えっと…本当に咲也さんのことが好きなんだなって思って…」

「…要は俺に懐いてるっつうことか？」

「はい、それに近いと思います」

「はぁ…」

犬か猫か動物かコイツは…

「ギー太と同じくらい大好きだって言ってました♪」

「……」

レスポールと同等…
うわぁ…嬉しくねェ…

「はぁ…」

ため息を吐いて、安らかに眠る平沢を見てみる…

「すぅ…すぅ…エへへ…」

「……」

至福な表情しやがって…

しかし…なんか毒気が抜かれるな…

「…分かった、あと少しだけな…」

「はい！ありがとうございます！」

まるで自分のことのように姉と同じ、至福な表情で頭を下げる…

「それじゃあ私は寝ますね」

「あぁ…」

「おやすみなさい咲也さん」

「あぁ…」

最後にペコリと頭を下げ、平沢妹は自室に去っていき…

「……」

俺は年明けの特番をしているテレビに視線を向ける…
左手に僅かな重さとぬくもりを感じながら…

――――――――

「…きて……くん…」

身体を揺らされる感覚と途切れ途切れに聞こえる誰かの声に意識が覚醒へと向かっていく…

「……」

「おはよう！サッくん♪」

瞼を開ければ、寝癖全開で満面の笑みの平沢が俺を覗き込んでいた…

いつの間にか寝てしまっていたらしい…

「ンだよ…」

横向きで寝ていた体制を仰向けに変え、寝起きのかすれた声を出す…

「みんな！起きて～！」

スルーすんな…

「ん…ん？なんだ…？」

「唯…？」

「ここどこ…？」

「今何時ですか…？」

平沢の目覚しボイスにより、次々と覚醒していく…

「初日の出見に行こう！初日の出！」

初日の出…？
どうでも良い…？

「ん…眠いからいいや…」

「…俺もパス…なんか身体痛ェし…」

左手なんか麻痺してる…

「変な体勢で寝たからじゃないですか？」

お前は変な物を頭に装着したままだぞ。

「もう！りっちゃん！サッくん！こんな時に寝てどうするの！」

「いや、お前が言うか…」

「全くだ…」

秋山の意見に激しく同意。

――――――――――

「さわちゃん置いてきちゃったけど大丈夫かなぁ？」

「憂ちゃんもいるし大丈夫だろ」

平沢の手を引く秋山。

「さびィ…ねみィ…だりィ…」

「新年早々から参ってるなサク」

愚痴る俺に田井中が苦笑い。

「寒いですねムギ先輩」

「うん、なまらしばれるねぇ～」

未だに頭にトラ耳を装着したトラ野と道産子になる琴吹。

結局、平沢の提案通りに初日の出を見に行くことになった。

初日の出を拝むために平沢家付近の高台に登り…

「帰って良いか…」

「ダメだよサッくん！」

「トリプルパンチ食らってんだよコッチは…」

「もう少しで初日の出が見れるから、我慢しましょ？咲也君」

待つこと約五分…

「おっ！出てきたぞ！」

山の頂上から太陽の光がゆっくりと漏れてきた…

「うわぁ…」

「きれい…」

「でしょでしょ～♪ここ穴場なんだ～♪」

中野と琴吹が漏らした感激の言葉に平沢が誇らしげに胸を張る。

「…眩しい…引っ込め…」

「風情ってものを知らないのか！」

「思ったことを口にしたまでだ…」

「だったらきれいとか言いなよ」

秋山の意見に再び灼熱の星を見るが…

「…眩しい…」

「やっぱりサクだな…」

田井中がため息を吐きながら呆れていると…

「ねぇねぇみんな」

平沢が一歩前に踏み出し、俺達に向き直る。

「今年の抱負は？」

「……」

その質問に去年の出来事を思い返す。

二月。

『もうすぐ私、卒業でしょ？今みたいに秋山さんに会えなくなちゃうのかなって思ったら…いてもたってもいられなくなって…』

曽我部前生徒会長、秋山にストーカー事件。

四月。

『えっと…一年二組の中野　梓といいます』

中野、軽音部に入部。

八月。

『ここどこよ～…』

『はぁ…』

顧問と共に人生初の遭難体験。

「そうだな～私は、とにかく楽しむだな！」

「私は～…みんなといつも笑っていたいかな～」

「私は、もっと演奏が上手くなるようにだな」

「新入部員が入部して欲しいですね」

九月。

『悪かったよ　せっかくの『和』との楽しいランチタイムを『邪魔』してさ』

『はぁ！？そんなこと言ってないだろっ！！』

軽音部空中分解寸前。

十月。

『よく考えたら…い〝つもいつも〟…ご迷惑を…こんな大〝事な時に…』

平沢、学園祭前に風邪を引き、更に当日にギターを忘れる。

十二月。

『♪さりげな笑顔を深読みしすぎて　ｏｖｅｒ　ｈｅａｔ！…』

初のライブハウス出演。

「……」

実に濃い一年だったな…

「サッくんの抱負は？」

「サッくん言うな…」

「おっ！今年初のやり取りだな！」

黙れカチューシャ。

「去年は騒がしかったから…今年は穏やかに…」

「じゃあ毎日お茶だね！」

「ダメですよそんなの！」

「それで、唯の抱負は？」

秋山のこの質問に…

「私は…」

笑顔を浮かべ…

「みんなとずっとバンドがしたいな♪」

はっきりと風に乗せ、俺達に告げる。

『……』

平沢の言葉に俺達はそれぞれ顔を見合わせる。
そして…

「そうだな！うん！」

「私も賛成～♪」

「うん、私も！」

「私もです！」

「……」

田井中、琴吹、秋山、中野が微笑んで小さく手を上げる。

「サクもだっ…ろ！」

「さみぃから止めろ…」

何のリアクションを示さなかった俺に田井中が無理矢理ポッケに突っ込んでいた左手を天に掲げる。

「エヘヘ～♪」

平沢がそんな俺達を満足そうに眺めたあと…

「よっ…」

初日の出に振り向き…

「けいおん！！大好きーっ！！」

まるで街中に響かせるように自分が『夢中』になっているものを腹の底から全力で叫ぶ…

「……」

（穏やかに過ごしてェのに、いきなり…）

「大好きーっ！！」

まぁ…良いか。

本日一月一日。
現在時刻午前五時五十七分。

「ところでさ～梓」

「なんですか律先輩？」

「頭のそれ、いつまで付けてんだ？」

「へ？ニャッ！？」

「やっぱニャカ野だな…」

「梓、気付かなかったのか？」

「梓ちゃん、似合ってるわ～♪」

「あずに〝ゃん可愛〝い〝よ～」

「声枯らすまで叫ぶなよ…」

俺の人生でもっとも印象深い年が始まった…

第六十二話（後書き）

これにて一期完全完結です。

オリジナルを二話程挟み、二期に突入したいと思います。

第六十三話（前書き）

バレンタインです。

第六十三話

本日二月十三日。

♪♪♪…

「……」

二月中に完成を目指している『ＰＰ』（ぴゅあぴゅあはーと）の作曲を長イスに座り、アコギでこなしていると突如として…

『ベルギー王室!?』

「…あぁ？」

部室内に見事に響き渡った四人のハーモニーにアコギを弾いていた手を休め、チラリとテーブルでティータイムをしている部員達を伺う。

「うん♪そこの御用達っていうチョコレートを貰えることになったの♪」

『おぉ～』

「……」

そこにはニコニコと笑う琴吹に身を乗り出した平沢達が感嘆している光景が。

しかし…ベルギー王室御用達のものを入手出来る琴吹家…

（…世界的に有名な家なのか？）

その実態は謎だ…

「明日はバレンタインだから持ってくるね♪」

「わぁ～い！さすがムギちゃん！」

「そういえば明日バレンタインかぁ…」

「……」

平沢が爛々とした表情で嬉々とし、田井中が頬杖をつきながら視線を空に向ける。

コイツらのハーモニーの原因が判明し、とりわけどうでも良い内容にチェンジをし始めたので…

♪♪♪…

アコギを再び奏でだし、傍らに置いてあった五線譜に視線を戻す。

「バレンタインかぁ～今年も憂に作ってもらお～っと」

「毎年憂ちゃんに作ってもらってるのか？」

「そうだよ～　あっ！澪ちゃんの分も作ってもらえるように頼んでみよっか？」

「澪だけにか？」

「いや、いいよ　そんなの憂ちゃんに迷惑だろうし」

「そう？美味しいよ、憂の作ったチョコ～♪」

「無視された…ていうかホントに出来た娘だよな～憂ちゃんって」

「いや～デヘヘヘ～」

「なんで唯先輩が照れるんですか」

♪♪♪…

「はい、咲也君」

「…あン？」

黙々と五線譜と六弦に意識を交互に行ったり来たりしていたら、琴吹の声が。

「今日も寒いから♪」

「……」

そう言って差し出してきた湯気が立っている紅茶を受け取る。

「そういえばさぁサク」

「あン？」

適度な温度の紅茶を一口飲むと田井中がおもむろに口を開いた。

「チョコいるか？」

「いらん」

バッサリ。

「だよな、そんな反応すると思った」

「……」

俺の反応が分かっていたかの様に告げて紅茶に手を伸ばし、口に含む田井中。

「そういえば去年ってサッくんにチョコあげてなかったね」

「え？そうなんですか？」

「うん、去年の今頃って…」

「ちょっとしたイベントがあったんだよな～？澪？」

「う、うん…」

平沢の言葉の後を継いだ田井中が口元になだらかな弧を描く。
そして秋山がその当時のことを思い出しているのか意気消沈気味に頷く。

イベントとは、曽我部先輩が秋山にストーカー事件のことを指す。

つうかあの時は、なんかバタバタしてたのでバレンタインなんてすっかり忘却してたな…

まぁ…ハナからバレンタインなんて興味ねェんだけど。

「…つうかお前ら、いつまで雑談してんだ」

「そ、そうですよ！練習しましょうよ！練習！」

俺の言葉にハッとした様子の中野が勢いよく立ち上がっては、主に平沢と田井中に告げるが…

「えぇ～　良いじゃんか今日は～」

「寒いもんね～」

すんなりと動かないのがこの二人。

「はぁ…」

とりあえずあの二人のことは秋山と中野の黒髪コンビに任せ…

「咲也君、どこまで作曲出来た？」

「…一応土台は出来てる、今から細部を詰めるぞ」

「ラジャ～♪」

俺と琴吹は『ＰＰ』の作曲作業に移行する。

「ほら律、唯、だらけてないで練習するぞ」

「はい、立ってください」

「あずにゃん、澪ちゃん、私達はそれどころじゃないのです」

「そうそう」

「それどころじゃないって、何があるんだ？」

「それはズバリ！サッくんにチョコをプレゼントするための会議な

のです！」

「そうそう」

「律先輩はさっきサク先輩に断られたじゃないですか」

「むっ！随分と生意気なことを言うようになったな梓ーっ！」

「ニャアッ！」

「咲也にチョコ…」

「そうだよ～♪サッくんにチョコ♪やっぱり手作りがいいのかな？」

「へ？あ、うん　その方が良いんじゃないか？」

「う～ん…憂に手伝ってもらうか～」

♪♪♪…

「咲也君モテモテ♪」

「…ちょっと黙ろうかお前」

ニャカ野にチョークスリーパーをかける田井中と、すっかり平沢のペースに感化された秋山を見て…

「はぁ…」

ため息が…

―――――――――

翌日。

二月十四日。

「さぁてサクッチ」

「サクッチ言うな」

「突然ですがここで…影宮ク～イズッ！！」

アホがピンッと左手の人差し指を立てて右手の拳を高々に掲げる。

「……」

あぁ…登校中にこのアホと出会ったのが運の尽きだったな…
非常にウザいのが始まった…

「今日はなんの日でしょ～か？」

「バレンタイン…」

「ブッブ～ッ！正解はバレンタインでした～！って、正解ッ！？」

「……」

「クソッ！せっかくの影宮クイズが無駄になっちまったッ！咲也だったら間違えると思ったのにッ！」

「…アホ」

「だぁれがアホだァッ！！」

「うるせェ…」

バキッ！

「ウグッ！…す、すねを蹴るな…」

……

学校に辿り着き、玄関にある自分の下駄箱を開けようと手にかけたら…

「ストップ、咲也」

「あン？」

「第一関門だ」

「はぁ？」

マジな顔して何を言い出すんだこのアホは…

「バレンタイン…それは男にとっての聖戦であり、あることを決める儀式でもある…」

いよいよ語り出したぞ…

「……」

ツッコんでいたら面倒なので、遠い眼をしながら語り出したアホを放置し、下駄箱から上履きを取り出し…

「あること…それは勝ち組と負け組を決めることだ！そしてこの下駄箱にチョコが入っていれば！俺達は晴れて勝ち組のなのだッ！」

スタスタ…

背後から聞こえる力説を完全スルーし、教室に向けて歩き出す。

「ということで！第一関門オープンッ！」

ガチャ

―――――――――

現在の時間帯、放課後。

「ううう…」

「……」

放課後の教室にはアホのすすり泣くボイスが響く。

結局第一関門の下駄箱然り、曰くの第二関門の机の中…共に収穫はなかったようだ。

更に昼メシを食べ終えた後…

『さぁて…散歩でもしてこようかな～』

『あぁ？』

『食後の運動ってやつだよ』

『……』

『別に知り合いの女の子から声かけられたいから、校内一周する訳じゃねェからな！』

なんて意気込んで教室から出ていった後に、エライテンションが下がって戻ってきた。

「……」

まぁ、あのアホの惨劇はいつものことなのでさっさっと部活に行こうと、ヘッドフォンを首にかけ、立ち上がった瞬間に…

「咲也〜…」

いつの間にか泣きながらアホが俺の横に現れた…
さっきまで自分の机で泣いたっつうのに…

「ンだよ…負け組」

「だぁれが負け組だッ！」

泣き顔から一変、いつものアホ面になる。

「思えば去年も俺達はチョコ貰えなかったな…つうかチョコ貰ってないのはお前も一緒だろうがッ！なのになんで勝ち組なオーラが出てんだよッ！」

「……」

ンなもん出してねェよ。

「あぁ！あれか！このあと軽音部のみんなからチョコ貰えるんだな！なるほどな！お前は既に勝ち組だったんだなッ！」

「…黙れ」

バキッ！

「ベラヒッ！」

グダグタとうるさいし、非常にウザいので解決策として顎を蹴り抜く。

「……」

見事に気絶し小刻みに痙攣したあと、ピタリと生命活動を停止したアホを尻目に今度こそ部活に向かうため歩き出した。

「し、死んでねェぞ…」

――――――――――

「……」

目の前のテーブルには一枚の皿が。

「おいひぃ～♪」

「さすがにベルギー王室御用達だよな～♪」

「チョコがすぐにとけるな♪」

「こんな美味しいチョコ、今まで食べたことないです～♪」

その上にある一辺が約一センチの正四角形のチョコを食べた途端に口々と頬を緩ませ、至福な表情になる平沢、田井中、秋山、中野。

部室に着いた途端にいきなり平沢が俺の腕を掴んでいつもは顧問が座っている椅子に俺を座らせた。
そしてそれが合図となり、琴吹がどこからともなく昨日言っていた、ベルギー王室御用達のチョコを出してきた。
どうやら俺を待っていたらしい。

「あずにゃん、ほっぺた押さえないと落ちちゃうよ～」

「そんな、大袈裟ですよ」

「えいっ！」

「いやいやムギ…」

「咲也は食べないのか？」

平沢が頬を押さえながらの発言に中野が苦笑いをし、琴吹がそれに素早く反応し田井中が呆れる。
そんな光景に笑みを浮かべたままの秋山が一向にチョコを食べようとしない俺に顔を向ける。

「咲也君…チョコ嫌いだったかしら…？」

「…！」

そんな風に思ったらしい琴吹がショボリする。そして何故か平沢がビクッと肩を揺らしたのを視界に収めながら口を開く。

「そうじゃねェが…」

ただ単に食べる機会を失ったというか…そもそもあまり興味ないというか…

「このチョコ美味しいよ～サッくん♪♪」

「サッくん言うな」

そしていつも以上にニコニコしている平沢がブロックワード発言。

「だまされたと思って食べてみろって」

「……」

田井中の発言に少し腰を椅子から浮かせ、ベルギー王室御用達のチョコを一つ取り…

『ジー…』

「……」

十の瞳に視線をぶつけられ、若干の気まずさを感じながら…チョコを口に含む。

「美味しいでしょ～♪♪」

「『普通』っていう感想はナシだからな」

平沢が『美味すぎて頬が落ちる』とでも言いたげに自分の頬を押さえながら至福の表情をし、田井中がジッと俺を見据えてくる。

「……」

そして数秒で食べ終わり口を開く…

「中の中…」

「普通って意味じゃん！」

「あはは…」

部長、渾身のツッコミ。

琴吹、苦笑い。

「あの…ちょっと良いかな…」

すると秋山がおずおずと左手を小さく上げ、頬を染めだす。

「どうしたの澪ちゃん？」

食い意地が張っている平沢が小さく『もう一個～』など言いながら、チョコに手を伸ばし、秋山に問い掛けるという三つのことを一度に行なう。

「えっ…と、今日ってバレンタインだから…みんなに…チョコクッキー作ってきたんだ…」

「おっ！澪がサプライズ！」

かなり恥ずかしそうにそう告げたあと、立ち上がって長イスの近く

に置いてある自分の鞄を持ってくる。

「えっと…はい、ムギ」

「ありがとう～澪ちゃん♪」

「はい、梓」

「ありがとうございます！」

「律」

「サンキュー！」

「唯」

「わぁ～っ♪澪ちゃんの手作り～♪ありがとね♪」

鞄の中から青色にラッピングされピンクのリボンで綺麗に包まれている掌サイズのクッキーが入ってると思わしき物体を取り出し、一人一人に渡していく。

「さ、咲也…」

「……」

そして俺の隣に来ては顔から火が出そうなくらいフェイスを真っ赤に染め上がる。

「ど、ど、ど、どうぞ！」

かなり吃りながらも震える手で俺にクッキーを差し出してきた。

「…ん」

そんな秋山に内心『恥ずかしいならやらなきゃ良いんじゃね？』とか思いながら受け取る。

「べ、別に！そんなんじゃないからな！昨日唯があんなこと言うから私も作ってきただけで！その…ひ、日頃の感謝の気持ちだから…えっと…だから…その……」

「はぁ…」

急に俺にツンデレみたいな反応したと思いきや、後半は尻つぼみになり、思わずため息を吐いていると…

ボフンッ！

「澪先輩！」
「澪ちゃん！」

人間火山を噴火させ、膝から崩れ落ちる。

「あぁ～…澪は今まで男子にチョコなんてあげたことなかったからな～」

「秋山は相変わらずか…」

田井中がポリポリと頬をかき、俺が貰ったクッキーをポンポンと軽く上に投げながらの発言。

「おいひぃ～♪♪」

そしてマイペースにさっそく秋山からプレゼントされたクッキーをリスみたいに頬張る平沢。

「「はぁ…」」

そんな平沢を見て、俺と田井中がため息を漏らす…

「あ…」

修司の予言、当たった…

――――――――――

「あずにゃん、また明日ね～♪」

「…さぶっ…」

「はい、それじゃあ失礼します」

部活が終わり、薄暗い帰り道を平沢と中野と共に今日も帰る。
そして中野と別れる分岐点に着き、そこでツインテールの後輩と別れる。

「さびぃ…」

相変わらずの凍て付く冷気に内心憤慨しながら、ホットコーヒーでも買おうと、未だに中野に手を振っている平沢（中野は背を向けてさっさっと歩き出している）を置いて近くにある自販機に歩き出す。

「あ～ん、待って～サッく～ん」

そして平沢が何故か両手を前に突き出してトコトコと後をついてくる。

ピッ

ガコンッ！

「……」

ホットコーヒーを取るため自販機の取り出し口に手を伸ばし、適度

な暖かさに包まれているコーヒー缶を取り、そこに向けていた視線を上に向けると…

「ね、ねぇサッくん…」

「…あン？」

本当に珍しく、秋山みたいに頬を紅く染めた平沢の姿が…

「え、えっとね…私も作ってきたの…」

「何を…？」

「チョコっす…」

若干いつもよりぎこちない動作で鞄を漁り…

「エへへ…」

赤にラッピングされた板チョコサイズの物を取り出し、やっぱりぎこちなく笑う…

「サ…サッくんのために、つ…作って参りますた…」

「……」

ますた？

「う…受け取って…くらはいっ！」

バッと上半身を折り、同じくバッと『ソレ』を俺に差し出してくる。

「……」

右手に持っていたアコギが入ってるギターケースを一旦、地面に置き…

「…サンキュ…」

平沢に聞こえるが聞こえないかくらいの音量で『ソレ』を受け取る。

「…ぁ…」

顔を上げ、自分の両手にあった『ソレ』が今は俺の右手にあることを確認した平沢が…

「うん…エヘヘ♪」

視線をあちこちに彷徨わせながら照れ笑いを浮かべる。

「…コレ、お前が作ったのか？」

「う、うん！そうだよ！私の手作り！」

若干頬の赤みが取れた平沢が彷徨わせていた視線とVサインを俺に向ける。

「…妹は少しも関与してねェんだな？」

「え～っと…　ちょこっとだけ…」

「……」

「はっ！チョコだけにちょこっと！」

「このさみィ中で更に気温が落ちること言うな…」

鞄に平沢から貰ったチョコを秋山からのクッキーの隣に置き、ファスナーを閉め、ギターケースを掴んで…

「帰るぞ…」

「うん♪サッくん♪」

平沢が俺の隣に並び、薄暗い道を歩き始める…

「ホントは澪ちゃんみたいにみんなにもあげたかったんだけど…」

「……」

ホットコーヒーのプルタブを片手で開けようとしたら平沢がまっすぐ前を向いてまま告げ始めた。

「何回も何回も失敗しちゃって…やっと出来たのが一人分だったんだぁ…」

「……」

「みんなには悪いんだけど…絶対にサッくんにチョコをプレゼントしたかったから…」

そこで俺に向き…

「だから、これは私とサッくんだけの秘密だよ?」

「……」

「絶対に他の人に言ったらダメだよ?」

両人差し指を口元に持っていき、重ねてバツ印を作る。

「……」

スッ

「ほぇ？」

そんなバツ印の手前に未開封のホットコーヒーを持っていく。

「別に言う気なんてねェよ…」

「サッくん…♪」

「まぁ…一応の約束として『コレ』やる」

「コーヒー？」

「…契約物とホワイトデーだ」

「え～っ　ホワイトデーのお返しがコーヒーなの～」

とか言いながらちゃっかりホットコーヒーを両手で受け取る。

「やるだけ良いだろうが…」

「う～ん…　あっ！そうだ！」

ホットコーヒーを両掌で転がしていた平沢が脳内に電球を光らせる。

「私…」

チラチラと寒空から雪が舞い降りる今年のバレンタインデー。

「サッくんの家に行ってみたいな～♪」

「……は？」

今年は手作りクッキーとチョコを入手。

どうやら俺は勝ち組らしい…

第六十四話（前書き）

卒業式＆ホワイトデー＆夢です。

第六十四話

ヒュ…

「……」

パシッ…

ヒュ…

「じゃあ二年三組、三年三組の卒業生に花をつけてやってくれ」

校舎の壁にもたれながら桜の造花を右手の手首のスナップを駆使し、軽く天に向けて放っていると、俺のクラスの担任から命令が下った…

「……」

その命令に従うために背を壁から離し…

パシッ…

落下してきた造花が潰れないよう、加減して掴み…

「桐島～急げ～」

「……」

担任の催促に促されるまま、卒業生の三年と在校生の二年が入り交じっている講堂前に足を進める…

本日三月一日。

私立桜ヶ丘高等学校、第八十四回卒業証書授与式当日。

「おめでとうございます…」

「ありがとう」

事前に出席番号で割り振られていた卒業生の制服に造花をつけて、決まりごとである祝辞を述べる。

在校生の二年が桜の造花をこうして卒業生につけるのは学校創設時からの伝統らしい（朝のＨＲで担任が語っていた）

で、その伝統を重んじり俺達が卒業生を社会の荒波に送り出す最後の仕上げをし…

「…ん…」

知り合いの先輩など全くいないので、さっさっと教室に戻ろうと踵を返したら、ある光景が眼に止まった。

「会長、卒業おめでとうございます」

「ふふっ　私はもう会長じゃないわよ真鍋さん」

「あ、そうですね　じゃあ改めて…楠木先輩、卒業おめでとうございます」

「ありがとう、真鍋新会長さん」

「新会長…ですか」

「えぇ　私の後任はあなたでしょ？色々と大変だと思うけど、頑張ってね」

「はい！」

「……」

視線の先には微笑み合う真鍋と生徒会長…いや、元生徒会長の姿。

最後に元会長が真鍋の肩を激励するかの如く軽く叩き、講堂に向けて歩いていった。

「…たかられてる…」

だがしかし颯爽と歩いていったは良いが、講堂入口手前で元会長は後輩に蝿のようにたかられ身動き出来ない状態に。

「生徒会のみんなに人望があったから、楠木先輩は」

俺の独り言が聞こえたのか、はたまた存在に気付いたのか真鍋が語尾に『曽我部先輩もだったけど』と付け足し、俺の横にゆったりと歩いてきた。

「型にはまったようで少し融通の利かないような人だけど…」

「……」

そこで一旦口を閉じ、笑顔で後輩の対応をしている元会長を見て…

「あんなに慕われてるわ」

自分自身のことのように誇らしげに笑う真鍋。

「ふーん…」

そんな真鍋にまだ吐息が白くなる季節なので制服のポッケに両手を突っ込みながら適当に相づちを打つ。

「興味ない？」

「あるかねェかなら…ねェな…」

「でしょうね…」

俺の返答に分かりきったようにため息を吐きながら呆れる。

すると…

サァァァ…

突然の風が木々の枝を揺らし、地面に落ちていた枯れ葉を舞い上げる…

「春一番ね…」

その春一番により乱れた髪を手櫛で整えながら真鍋が講堂を見る。

「……」

つられて俺も視線を講堂に向ける。

そこには既に前会長の姿はなく、桜の造花をつけた卒業生と保護者が談笑しながら講堂に入っていく光景が。

「私達も来年、あんな風に花をつけて卒業していくのね…」

「…気が早くねェか？あと一年あるっつうの…」

「そうね　少し感傷的になってるのかも…」

「まぁ、俺達の卒業式には修司が抱腹絶倒なことしてくれんだろ…」

俺はクスリッともしねェがな。

つうかこれはアイツは三年に進級と卒業が出来ることを前提の話だ。

「そんなことされたら困るわよ」

「…思い出になるぞ」

「いりません　そんな思い出」

哀れ…影宮　修司…

お前の存在理由を全否定されたぞ…良かったな。

「さて…帰って寝るか…」

「まだいなきゃダメよ」

「春眠暁を覚えずだ…覚えとけ」

「だからって帰って良い理由にはならないわよ咲也」

肌寒く、春の陽気はまだ訪れず桜の蕾が春一番にて揺れるこの日の卒業式…

…もうすぐ新学期……の前に…

――――――――――

まるで水中に浮かんでいるような錯覚を覚える。
周囲を見渡せど小さな灯一つない闇の世界。

そこに…俺の『意識』はあった…

「……」

身体を動かそうにも、その身体はない…

そして直感する…これは『夢』だと…

誰がどういう理由でこんな闇の『夢』を見せているのか知らんが、抗うのも面倒なのでこのままでいてやろう。

すると…

『……』

（あれは…）

突然目の前に映像が映し出され、そこに映っている人物に内心で思う…

（俺…）

そこには園服を着て一人で黙々と砂場で砂山を創作している幼い俺が…

どうやらコレは…

『なーなー　ひとりでなにやってるの？』

『だれ？』

『ぼくのなまえは…』

場所は幼稚園の砂場。
そこで俺は…

『かげみや　しゅうじです！』

初めて修司と会ったんだったな…

（…にしてもアホな面してんな…）

ヘラっと笑いながら幼い俺の近くに来るチビ修司。

『おまえは？なまえは？』

『お』と『な』を入れ替えても同じ質問になることを拙い口調で問い掛けるアホっぽい奴。

『…きりしま　さくや』

『さくや』

『……』

よしっ　ナイススルーだチビ俺。

『なーなーさくやー　なにやってるの？』

スルーされたことなどお構いなしにチビ俺の横に座り、ヘラヘラ笑う。

『やま…つくってる』

『じゃーぼくもてつだう！』

俺は見逃さなかった、チビ修司のこの発言を聞いてチビ俺が…

『…はぁ…』

と小さくため息をついたことを…
どうやらこの時にアホの特性に感付いたらしい…

『はい』

するとチビ俺が傍らに置いてあった小さなプラスチック製のバケツを両手で持ち、アホに差し出す。

『みず、もってきて』

『みず？』

『やまをかたくするから』

『おー！なるへそ！わかったよ！』

バケツを受け取ったアホが立ち上がって水道に向けて駆けていく。

『……』

その間チビ俺は淡々黙々と砂山を形成していく。

『んしょ…んしょ…』

するとアホがバケツに水に並々と入れ、時々水を零しながらおぼつかない足取りでチビ俺の元に戻ってきたが…

『うわぁっ！』

『あ…』

バタッ！

バシャッ！

何もないところでつまずき盛大にズッコケ、水を辺り一面にぶちまける。

『う…ううう…』

瞳が徐々に潤んでそのまま泣…

『ぅいっくしょん！』

かねェのかよ。
クシャミかよ。

『大丈夫？』

砂山を形成していたチビ俺がその手を休め、事故現場に近付く。

『さくや…』

『バケツ』

『えぇー！』

自分ではなくまさかのバケツに心配したチビ俺にチビ修司が仰天する。

…これが俺と修司のファーストコンタクトだった…

（ん？）

すると映像に波紋が広がり違う場面に切り替わった。

『はいっ！さくや！』

『ん？』

『へへっ！ぼくたちのゆーじょーのしるしだ！』

『かげみやとおれの？』

『うんっ！』

映った映像は修司の家の近くにある夕暮れの公園。

そのブランコの前でチビ俺とチビ修司はいた…

『あめが？』

『うんっ！』

『いただきます』

『あー！？ゆーじょーのしるしたべちゃったー！』

あぁ…こんなこともあったな…

これは確か…初めて修司の家に遊びに行った時だ…

（またか…）

そしてそこで映像は消え再び波紋が広がり、また違う映像が映し出された…

――――――――

卒業式が終わり二週間。

本日三月十四日。

♪ピンポ～ン。

「ん？」

休日の昼下がり、リビングにてのんびりと過ごしていると来客を告げる音が鳴った。

「……」

幸か不幸かこの日は朝から両親は不在。
故に俺が来客の対応をしなければならない。
実に面倒だ…

「はい…」

ダルそうな声とダルそうな態度を全面に出しながら玄関の扉を開ける。

「「「こんにちは～♪」」」

「「こ、こんにちは…」」

「……」

開いた扉の先にある五つの人影に言葉を失う…

ニコニコしながら両手を振る平沢を筆頭に田井中と琴吹がそれに続き、数歩後ろには秋山と中野が気まずいそうにそこに立っていた…

「サッくん！来ちゃいました！」

「テへ♪」

「……」

堂々と胸を張る平沢と小さく舌を出す田井中にため息が出そうになるがそこは辛くも強い精神力で持ち堪え…

「…何故？」

と、問い掛ける。
この二文字には二つの意味が含まれている。
『何故』お前らここにいる？
『何故』お前らが我が家の場所を知ってる？

「ほぇ？なにが？」

「……」

伝わらなかったようだ…
平沢が首を傾げる。

「はぁ…」

あ、ため息が…

「何故お前らがここにいる…」

仕方ないので順を追って説明を求む。

「え？なんでって…」

「サクの家に行ったことないから遊びにきたんだけど」

そういう事じゃねェんだよ…

「唯ちゃんがね、今日はホワイトデーだから咲也君の家に遊びに行こうって♪」

「……」

琴吹の発言に平沢に視線をぶつける。

「エヘヘ～♪」

かなり嬉しそうな表情してやがる…

つまりは、バレンタインに平沢がホワイトデーは俺の家に行きたいと言っていた。
それを見事に実行したわけか…
お供の者を連れ添って…

「何故お前らは俺んチを知ってる…？」

渋々だが納得したので、次の『何故』の意味を質問。

「修司君に教えてもらったんだ～♪」

「……」

あのムシ野郎…
個人情報保護法っつうのを知らんのか…

「はぁ…」

もはや俺の強靱な精神力はどこにいったのか、ため息がつい漏れてしまう…

「あ…も、もしかして迷惑だったかな…？」

「……」

平沢が申し訳なさそうに表情を歪ませる。

本来ならば門前払いするところだ。
しかし…チョコを貰った手前もある、更に今日はホワイトデー。
…渋々折れなきゃイカンのだろうな…

「おもしれェもんなんて全くねェぞ…」

「だ、大丈夫だよ！みんなでいたら楽しいから！」

「サクの部屋って興味あるし～」

「うんうん♪」

俺の部屋に来ること前提なのか？

「上がるんなら上れ…」

「…ぁ…サッくん♪」

「サッくん言うな」

一気に表情が晴れた平沢が相変わらずの禁句を放ってくる。

「んじゃあ…」

田井中が平沢と琴吹にそれぞれ目配せをし…

「「「おじゃましま～す♪」」」

男の家に、情操教育なんていうものを知らないみたいな軽い足取りでなんの躊躇も見せずに我が家にする進入する三人衆。

「…で？お前らどうすんだ？」

「「え？」」

後方で成り行きを見守っていた秋山と中野に尋ねてみる。

「…上がるんならさっさっとしろ」

「め、迷惑じゃないですか？連絡もしないでいきなり押し掛けたわけですし…」

「別に…ホワイトデーだからな…」

「え？どういうことですか？」

「さぁな…」

「意地悪です、サク先輩」

そんなことを言ってはいるが口角は上がってるぞ中野。

「うるせェな…入らねェんならドア閉めるぞ…」

「あっ！入ります！行きましょう澪先輩！」

「えっ！？あ、ちょっと梓！？」

所存不明状態な秋山の腕を掴んで半ば強引に連れてくる…

ラッセル車かお前は…

―――――――――

映った映像。
場所はどこかの部屋。
そして…

『……』

先程より少し成長し、小学校低学年と思われる俺がジッとある物を見ていた…

ガチャ…

『あぁ咲也クン、ここにいたんだね』

ゆっくりと扉を開いて入ってきた眼鏡をかけた細身な男性。
ここ数年は会ってないが…
この人のことは良く知ってる…

『僕の家に来たらずっとそれを見てるね』

優しそうな笑みを浮かべたその人は膝を折り、俺の横に座り込む…

この人物の名は…『桐島　晃教』

親父と年齢が一つ下の弟であり、所謂俺の叔父。

『そんなに『ソレ』に興味があるかい？』

叔父の問い掛けに『ソレ』を見たまま俺が小さく頷く…

『そうか…』

そんな反応を見た叔父が顎に手をあて、数秒瞑想にふける…

そして…

『よしっ！だったら咲也クンにあげよう』

『え…？』

顎に当てていた右手を左掌に落とし、パチンッと音を立てて鳴らしては二カッと笑う。

そんな叔父の言葉の意味が分からずキョトンとする俺。

『僕はもう弾く機会もないだろうし、ただこうして部屋の隅に飾られてるんじゃコイツは可哀相だ』

部屋の光に当てられ、その茶色のボディが鈍く光る。
叔父が『コイツ』と呼んだ『ソレ』を優しく撫でる…

『だから、咲也クンみたいに興味がある人の手に渡ったほうがコイツも幸せだよ』

『コイツ』を撫でていた左掌を俺の頭に乗せ、優しく撫でてくる…

『キミならコイツを任せられる』

『……』

『コイツはね、僕の手に渡る前は僕のお祖父ちゃん…咲也クンにとってはひいお祖父ちゃんが持ってたんだよ』

『え？』

（……）

『その前は別の誰か…そのまた前は別の誰か…そうやってコイツは色んな人の手に渡り、今はここにいる…』

『……』

（……）

『咲也クンもその誰かを担ってくれるかい？いつか誰かにコイツを渡してくれるかい？』

『おれがずっと持ってちゃダメなのか？』

『もしかしたらの話だよ、ダメじゃないんだけどねどうもコイツは一箇所に止どまるのが苦手みたいだ』

『ふーん…』

『それで良いなら、キミにコイツをあげよう』

『じゃあ　もらう』

『ははは　随分と淡泊に育ったもんだ兄さんの息子は』

笑顔を浮かべて叔父は立ち上がり『コイツ』を取り…

『じゃあ咲也クンにプレゼントだ』

埃や汚れが一切見当たらないが年季を感じる『ソレ』…『アコースティックギター』を俺に差し出した…

これが俺とアコギの出会いだった…

そして…

（波紋…）

再び映像は変わる…

―――――――――

「……」

現在、自室は中々のカオスに見舞われていた…

「りっちゃん隊長！」

「どうした唯隊員！」

「サッくん隊員の小学校と中学校の卒業アルバムを見つけました！」

「おぉ！よくやった唯隊員！」

「ありがとうございます！」

平沢が勝手に本棚から二冊の卒業アルバムを取り出し、背筋を伸ばし田井中と綺麗な敬礼をする連中とか…

「わぁ～♪ここが咲也君の部屋なのね～♪」

「なんだか…緊張しますね」

「うん♪私も～♪」

「とてもそうには見えませんけど…」

キョロキョロと部屋を見渡す先輩とちょこんと座りそんな先輩を見る後輩とか…

「……」

ひたすら無言で正座をして、石像のように全く動かない奴とか…

「はぁ…」

ひとまずは…

「勝手に見てんじゃねェよ…」

寄り添うようにベッドに座って小学校の卒業アルバムを見ている平沢と田井中に注意を。

「良いじゃん別に、減るもんじゃないし」

「そういう問題じゃねェっつうの…持ち主の許可ナシに見るな」

「サク〜ぅ見せて〜ぇ」

甘えた声を出し、懇願してくるが…

「ヤダ」

一刀両断。

「唯、サクのクラス分かったか？」

「ううんまだ」

「……」

腹立つなコイツ…
華麗にスルーしやがった…

「ねぇサッくん」

「サッくん言うな」

「小学校の時何組だったの？」

お前もスルーすんなよ…

「あ、いた！」

そして琴吹…お前はいつの間に参加してんだ…

「どこですか？」

お前もか…中野…

「ほら、ここに咲也君が」

「あっ！ホントだ～！」

「むぅ…笑ってないな…しかし、小学生の頃から不機嫌顔だったん

だなサクは」

不機嫌面は生まれつきだっつったろうが…

「でもあどけなさはありますね」

でもってなんだおい。

「サッくん可愛い～♪写真撮っとこ～」

「あ、私も～」

平沢と田井中がケータイを取り出し、パシャパシャと俺の小学六年（１２歳）当時の写真を瞬間を保存する装置で撮影していく。

「エへへ～♪保存保存っと♪」

「……」

何が嬉しいのか満面の笑みでケータイをいじる平沢。

「見て見て～コッチの咲也君♪」

すると琴吹が中学校の卒業アルバムのクラス写真のページを開いて平沢達に見せつける…つうか行動早ェなお前…

「中学生のサッくんは今とあんまり変んないね？」

「そりゃそうだ…二年ぐらい前だし…」

「そしてやっぱり笑ってないな」

小学校の卒業アルバムを閉じて傍らに置き、中学の卒業アルバムを見て口を尖らせる田井中。

「サク先輩って写真写り良いですよね」

中野が感心したかのようにそんなことを言ってくる。

「あずにゃんもそう思う？私も思ってたんだよね～」

「…普通だろ」

「そんなことないよ～　私なんか小学校のはニヤけてて、中学校のは緊張し過ぎに写ってるだよ～」

ンなこと言われても知ねェよ…

「私もサクと一緒でさあ、写真写りは良いって言われるよ　なぁ澪？」

卒業アルバムから視線を秋山に向ける田井中。

俺達も一斉に秋山に視線を向けるが…

「……」

「澪？」

まるで悟りを開祖した僧侶のように一切反応を示さない秋山。

「澪ちゃ～ん？」

そんな秋山に平沢がトコトコと近付き、目の前で手を振るが…反応ナシ。

「……」

パチンッ！

ついで俺が目の前で思い切り手を叩くが…反応ナシ。

どうやらこれは…

「コイツ、気絶してんな…」

『えっ！？』

俺の放った爆弾に平沢と琴吹と中野が驚愕の表情と声をあげるなか、

唯一コイツだけは…

「ん～…澪にはハードルが高過ぎたか…」

「どういうこと？りっちゃん」

琴吹の質問に田井中が『つまり…』と冒頭に置き解説を始めた。

「澪は極度の人見知り」

「うんうん」

「そしてここはサクの部屋」

「はい」

「みんな、思い出してみよう、バレンタインの日に澪がサクにクッキーを渡したらどうなったかを」

「サッくんにクッキーあげたら倒れちゃったね」

「その通〜り！いくらサクが相手でも緊張はしてしまうもの！」

「お前誰だよ…」

クイクイっと眼鏡をあげる動作をしながら解析する田井中に思わずツッコんでしまう。

「クッキーを渡すだけであんなことになったのに、サクの部屋になんか来てみろ、オーバーヒートしてしまったのだよワトソン君！」

「誰がワトソン君だ…」

最後に決めポーズと言わんばかりに俺を指差してくる…

「理由は分かりましたけど…澪先輩を早く起こしてあげましょうよ」

「ほっといて良いよ、その内勝手に帰ってくるから」

「…随分投げやりだな」

「澪のことは熟知してるから大丈夫だって♪」

「そうだね～それじゃ続き見よ～っと」

「唯ちゃん、この咲也君カッコいいね～♪」

「おぉ～！リレーのアンカーだね！」

「私にも見して～」

「……」

まぁ幼馴染みのアイツが言うんだから心配する必要はねぇんだろうが…

全くその素振りを見せねぇのはどうよ？

「もう！みなさん薄情ですよ！」

「…マイペースっつっとけ」

「サク先輩もです！」

「落ち着け…あとで猫じゃらしやるから…」

「私猫じゃないもん！」

両手とツインテールをパタパタと…猫じゃん。

……

結局…秋山は始終気絶を続け、平沢達は（中野も）俺の卒業アルバムを見て盛り上がり、俺は飛んできた質問に答えたり相づちを打っていた…

そして時刻が午後五時（小学生か）になったので平沢達は帰路に着くために玄関に向う。

ちなみに秋山は『帰る』という単語を聞いて途端に意識を取り戻した。

…これがスイッチだったらしい…

「サッくん、今日はありがとうね！」

「貴重な体験だったな～♪」

「私…何しに来たんだろう…」

「咲也君♪すっごく楽しかったわ♪」

「お邪魔しましたサク先輩」

「あぁ…」

ニッコリ笑う平沢。
身体を伸ばす田井中。
顔を俯かせる秋山。
眼を輝かせる琴吹。
頭を下げる中野。

「またくるね～サッく～ん！」

「じゃあな～サク～！」

「バイバイ…咲也…」

「また学校で～♪」

「失礼します」

「……」

各々それぞれ手を振りながら夕陽が眩しい帰り道を歩いていく…

彼女達の姿が見えなくなった瞬間…

「はぁぁぁ…」

盛大なため息が…いや疲労からくるものか？

まぁ…どちらにせよ言えるのは…

「疲れた…」

（晩メシまで寝るか…）

そう思い…

ガチャ…

玄関の扉を…ゆっくりと閉めた…

――――――――――

（……）

ザァー…

その場面は雨が降っていた…

そこに…

パシャ…パシャ…

雨によって濡れた地面に水を弾く二つの足音が…

『……』

『はぁ…』

足音の正体は中学の学ランを着て、傘を差している俺と修司…

どうやらこれは中学生の俺達らしい…

『……』

『ふぅ…』

『……』

『はぁぁ…』

『なぁ…』

『なに…？』

『…さっきから、はぁだのふぅだのうるせェんだけど』

『緊張してんだよッ！心臓がドキンちゃんなんだよッ！やべェんだよッ！つうかなんでお前はそんなに冷静なんだよッ！』

『知るか…』

『今日はなんの日かご存じですかねッ！？』

『桜ヶ丘の受験日…』

『そうだよッ！受験日だよッ！』

この日は桜ヶ丘の受験当日のようだ…
確かに…あの日は雨が降ってたな…

『そんな大事な日なのに、どうしてお前は冷静でいられるんだよッ！？』

『だから知らねェっつうの…あと黙れ』

『お前何者だ！鋼のハートの持ち主か！？ちなみに俺は薄っぺらい氷のハートだ！』

何故か堂々と言い放つアホに当時の俺は…

（すぐ溶けて消えるな…常にギリギリで人生送ってんな）

こんなことを思った筈だ…

『おい修司…』

『なんだよ!?』

『足元気をつけろよ…』

『咲也…心配してくれてんのか…』

『雨で滑りやすくなってるからな…』

『……』

『…お、下水道工事でマンホールが軽く開いてんぞ、誤って落ちんなよ?』

『テメェゼッテェわざとだろッ!』

『何が…?』

『滑るとか落ちるとかッ！受験生には禁句だッ！つうかテメェも受験生だろうッ！』

『あ、着いた…』

『無視すんなーッ！』

一旦立ち止まって桜ヶ丘高校の全貌を見た俺は…

『……』

特に緊張することなく進んで行く…

そして校門をくぐろうとした時に…

『それでは、いってらっしゃいませ紬お嬢様』

『はい、頑張ってきます！』

（琴吹…）

校門の側に停止していた黒の高級車からセーラ服に身を包んだ琴吹が傘を差しながら降りてきた…

そして運転席に座っている初老の男性と二言交わし…

『よぉし！』

気合いを入れて校門をくぐっていく…

しかし…当時の俺は琴吹とは知り合いでもなければ存在すら知らなかったので…

『……』

意にも介さず黙々と受験会場目指し、歩いていく…

『律、昨日ちゃんと眠れたか～？』

『澪は眠れなかったんだな…眼が充血してるぞ…』

『……』

（秋山…田井中…）

途中で傘を差して歩いている秋山と田井中を見向きもせずに…通過する…

『唯、緊張しないの？』

『大丈夫だよ和ちゃん！掌に『カボチャ』って書いて飲み込んだら緊張しないって隣のおばあちゃんが言ってたから…ほらっ！おっきく書いてきた！』

（平沢…真鍋…）

『それって『人』って字じゃなかったかしら?』

『あれ?そうだっけ?』

『ていうかそれ、消したほうが良いわよ?カンニングだと思われちゃうから』

『……』

『唯?』

『どうしよう…和ちゃん…』

『ど、どうしたの?』

『油性のマジックで書いちゃった…』

『何やってるのよ…』

右掌に『カボ』左掌に『チャ』っと油性マジックでデカデカと書いたことに絶望している平沢と呆れている真鍋のすぐ横を俺が…

『……』

一切興味も湧かず、やはり黙々と歩いていく…

（しかし…俺は…入学前にコイツらとニアミスしていたのか…）

そういえば中野とも入学前に会ったな…

不思議なもんだ…

この時は全くの他人だった俺達が今は同じ部活に属し、バンドを結成している…

何故俺がこんな『夢』を見ているのか…それとも誰かに見せられているのか不明だが…
こうやって客観的に第三者の立場で自分の人生を見直すと面白いものはあるな。

（だが…夢はもう…終わりだ…）

そろそろ起きるか…現実の俺は…腹が減って…きた…だ…ろ…う…

し…な……

―――――――――

「……」

眼が覚める。

「ん…」

寝ていたベッドから起き上がりボーッとする。

なんか夢を見ていた気がしたが…

「忘れた…」

忘れるっつうことは大した夢じゃなかったんだろう…

つうか…

「片付けろや…」

机の上に無造作に置かれてある二冊の卒業アルバムを愚痴りながら本棚に仕舞い、もう両親が帰っているだろうから、晩メシを食べようと身体を扉に向ける。

「……」

しかし、その途中のテレキャスの横にあるアコギに何故か眼が止まる…

「夢で…アコギに対してなんかあったような…」

部屋の光に当てられ鈍く光る茶色のボディに触れる…

と…

『咲也ー！ご飯よー！』

一階からお袋の声が聞こえてきたので…

「まぁ…その内思い出すだろ…」

ボディに触れていた右手でドアノブを掴み…

ガチャ…

部屋から出ていった…

サァァァ…

窓の外では緩やかな風が吹く…

季節は巡り…高校生活三度目にして最後の春は……すぐそこまで…
きていた…

第六十四話（後書き）

次話から二期に突入します。

第六十五話（前書き）

二期突入です。

第六十五話

『不思議』

世の中にはこんな言葉がある。

何故そうなのか、知ろうとしても分からない事柄。

…まぁこんな意味の単語だ。

類義語で『不可思議』なんていうものもある。

「……」

さて…何が言いたいかと言うと…

「遅刻…」

こういうこと。

ベッドの上で胡座をかく俺の右手には長針が六に、短針が九と十の

間に、秒針が惰性に動き、時を刻む物体が乗っている。
言うなれば目覚時計だ。
つまり現在時刻午前九時三十分。
更に言うと、本日四月上旬。

昨日で春休みが終わり、今日から新学期。

この時間ならば既に始業式は済んでいるか、その真っ最中。
…なのに俺はまだ自室のベッドの上に堂々といる…

これが不思議なのだ。

春、夏、冬にある長期休暇や休日の日、もしくはその休日に予定や部活がある日以外は基本俺は目覚しなど設定せずに気ままに起きる自堕落な生活をしているが…

「おかしい…」

昨日で春休みは終わるという事実は無論知っていた。
なので昨夜、目覚しを通常通り学校がある起床時刻にセットした筈なのだが…今日に限ってそれが発動しなかった…

アラームが鳴った途端に無意識に止めたという可能性は少ない…
今までそんな事例はなかったからだ。
例えもしそうだとしても、新学期が始まる本日に息子が起きてこないことを不審に思う筈の両親が起こしに来なかった。

「……」

まぁ、あれこれ思考を巡らせても仕方がない。
起こった事は起こった事とし受け止め、不思議は不可思議だから不思議ということで処理しよう。

「ん…」

そう自己完結し、軽く身体を伸ばし…

ガチャ…バタン…

朝食を食べるために自室を出る。

……

「……」

歯を磨き、顔を洗い、鏡に映った不機嫌面にため息を吐く。
そしてリビングに向かうといつもはいる筈の紅一点の姿はなく、閑散としていた。

とりあえずトースターに食パンを一枚ぶち込み、書斎に向かってみる。

「いねェし…」

書斎には小説家の姿はなく、もぬけの殻。

ポリポリと寝癖がついている頭をかきながら、再びリビングに戻り、タイミング良く焼けた食パンをかじりながらテレビを点けようとテーブルの上にあるリモコンに手を伸したら…

「ん…？」

その傍らには一枚の紙切れ。
そこに書かれてある文字に眼を通す。

【咲也へ

私と貴教さんは朝から用事があるので出かけます

今日から学校なので遅刻しないように

母より】

「……」

残念だったなお袋。
抜群に遅刻してるぞ。

つうか…

「これで不思議の一つは…解決したな…」

そう呟き、食パンを冷蔵庫にあった缶コーヒーで流し込み…

「着替えるか…」

人間（俺だけかもしれんが）ここまで遅刻してると、もはや達観するものだ。

慌てることはなく、逆にダラダラとした動作で制服に着替えるために自室へ。

……

黒の靴下と灰色の制服のズボンを履く。

「……」

茶色の無地のTシャツを着、その上に制服の白のシャツを重ね、ボ

タンを三つだけ止め、シャツをズボンに入れずに朱色と黒の斜線が交互に刺繍されたネクタイを緩く絞め、青のネクタイピンを差す。

「ねむ…」

紺のブレザーを着て、ボタンを一切止めずそのままにしておく。

これが俺の制服スタイル。
有り体に言うと着崩し。
まぁ、田井中と同じようなスタイルだ。

「……」

寝癖を直し、前髪をピンで止め…ヘッドフォンを首にかけ、最後にケータイと財布を手に取り…準備完了。

いつもは持っていく鞄とテレキャスとアコギは置いていく。
部長曰く今日は部活はナシらしいし、始業式とＨＲだけで昼には学校は終わるので必要ナシ。

「…ぁ…」

そして小さく欠伸をして手ぶらで自室から出ていく。

ちなみにこの時の時刻は午前十時十分だったりする。

――――――――

外は日本が誇る春の花である桜が満開かつ鮮やかに咲き誇っている。

「……」

そんな通学路をヘッドフォンから流れるミュージックに意気揚揚と、

しかし歩調は相変わらずのダラダラと。

そんな時…

ザァァァ…

「ッ！」

突然一陣の風が桜の花びらを纏いながら俺の背後から襲いかかってきた。
まるで早く行けと言わんばかりに…

「何だっつうんだ…」

軽く愚痴りながら、制服や髪についた桜の花びらを払い落とし…

（はぁ…）

内心でため息を吐きながら少し歩調をあげる。

―――――――――

「十時半…」

校舎にあるデカい時計を見上げては呟く。

流石にこんな時間だ。

朝や下校時には生徒が溢れてる校庭には人っ子一人としていない。

（ま、当然か…）

始業式の日に遅刻するなんて偉業は恐らく俺ぐらいだろう…

「はぁ…」

誰が何と言おうとも完全に癖になってしまったため息をつき…

スタスタ…

自分のクラスを確認するために掲示板に足を向ける。

「ん…？」

掲示板が見えてくると同時に一つの人影を掲示板の前で発見。

どうやらアレは用務員のじいさんだ。

そのじいさんが今まさに掲示板に貼ってあるクラス割りを剥そうとしている。

「ヤベェ…」

俺はまだ確認してないので駆け足で掲示板に向う。

「すんません…」

「…ん？はぁい？」

「…俺、まだ見てないんで少し待ってくれねェスか？」

「おやおや？遅刻かい？」

「まぁ…」

「そうかい…じゃあ早く確認しなさい」

「ども…」

じいさんが笑みを浮かべながら作業を中断してくれた。
そんなじいさんに軽く礼を言い、三年のクラス割りが貼ってある掲示板を見上げ俺の名を捜す。

「……」

三年一組……該当ナシ。

「……」

三年二組……該当アリ。

「つうか…このクラス…」

二組のクラスメート。
その連中に絶句しそうになる…

1・藍澤　梨乃
2・秋山　澪
3・飯田　慶子
4・伊庭　亮
5・青梅　隆志
6・太田　潮
7・尾栗　聖一
8・影宮　修司
9・菊地　多恵
10・木下　しずか
11・桐島　咲也
12・小磯　つかさ
13・琴吹　紬

１４・佐伯　三花
１５・佐々木　曜子
１６・佐藤　アカネ
１７・柴矢　俊美
１８・島　ちずる
１９・田井中　律
２０・鷹崎　亜魅夜
２１・瀧　エリ
２２・立花　姫子
２３・近田　春子
２４・中島　信代
２５・西野　卓
２６・野島　ちか
２７・林原　吉宏
２８・平沢　唯
２９・松本　美冬
３０・真鍋　和
３１・水本　星都
３２・宮本　アキヨ
３３・村雨　流緒
３４・柳　信行
３５・矢野　浩太郎
３６・若王子　いちご

「……」

絶句してしまった…

知ってる奴はチラホラと。
全く知らない奴もチラホラと。

まぁ…そこは良い…

問題は…何故…

「アイツらが全員集合してやがる…」

神の所行か悪魔の悪戯か、軽音部員と生徒会長と進級してしまった
アホ…
とにかく何にしてもこんなミラクル早々起きねェぞ…

「君…もう良いかい？」

「…あ？…あぁ…」

あまりの惨状に呆然としていると、じいさんが俺の肩を軽く叩き、
柔らかな笑顔を見せる。

「どんなクラスだったかい？」

用が済んだので、この場から立ち去ろうとしたら、じいさんが俺が見ていた掲示板を見上げながらそんなことを聞いてくる。

「まぁ…騒がしいっつうか…賑やかっつうか…」

答える義務はないのかもしれんが、作業を中断してくれたし、年寄りだし…

こんな理由をこじつけ、身体と視線は校舎に向けて返答をする。

「そうかい…それは楽しそうなクラスだ」

「……」

俺は未だに校舎を見ているのでじいさんの表情は分からない…
だが…その言葉に含まれてる何かを感じ取り、今もあの笑顔を浮かべてるんだと思った…

「君は見たところ…三年生だね？」

「あぁ…」

「だったら…最後の一年だ」

「……」

「精一杯…楽しみなさい」

背中で受けたその言葉に…

「あぁ…」

短く返答し…

ザッ…ザッ…

振り返ることもなく校舎に歩いていった…

「明日からは…遅刻せんようにの」

じいさんがそんなことを言っていたなんて…俺は知らない。

―――――――――

教師に見つからないよう細心の注意を払いながら目的地である三年二組を目指す。

「……」

そして辿り着く。
教室のプレートを確認すると…

【3―2】

確かに俺が最後の高校生活を過ごす場であることを確認し、扉の小窓からチラッと中を伺ってみる…

『では次に…影宮君』

『イエッサーッ！』

「……」

再び絶句。

教卓にて教鞭を振っている人物に…だ。

「何で…顧問が…」

俺のクラスの担任はまさかの予想外の人物…桜高の音楽教師であり軽音部の顧問でもある…『山中　さわ子』その人だった…

「つうか…あの人…出世したのか…」

担任を任せられる程に…
しかも三年の…って…

「なるほどな…」

この瞬間、合点がついた。
あくまで臆測だが、あの人が職権乱用したせいで平沢達と同じクラスになったんだな…

「はぁ…」

とりあえずため息をつき、再度教室を伺う…

『初めましての人は初めまして！そうじゃない人はこんにちは！みんなの影宮　修司です！』

「……」

どうやら今は始業式が終わり、ＨＲの時間らしい。

で、順次に自己紹介をしてるようだ…つうか三年になってやることか？

そしてアイツは相変わらずアホだ。

『影宮ー！『みんなの』ってなんだよー！』

『そりゃあ言葉通りさ西野！』

『『桐島の』の間違いじゃねぇのかー！』

『む！それもそうだな…』

西野がアホにちゃちゃを入れる。
それによって教室中にクスクスと小さな笑いが起こる。
そして思案顔になるアホ…死ねば良いのに…

『じゃあ改めて…』

『でも影宮クン？』

『なんだよ水本！今から華麗な自己紹介をしようとしたのに！』

『いや、その桐島クンはまだ来てないからさ』

『む！そういえば咲也はまだ来ねェな』

『う〜ん…サッくんどうしたんだろう?』

『サクのことだから今頃…』

『な、なに?りっちゃん?』

『部室で寝てたりしてなー!』

「……」

ケラケラと笑う田井中に感化されたのか再び教室中にクスクスと小さな笑いが起こる…

あのデコめ…カチューシャへし折ってやろうか…

『はいはい、みんな静かにしなさい』

顧問兼担任がパンパンと手を叩き笑いの渦中になりそうな教室を静める。

『さく…ゴホン！桐島君なら後で私が連絡を入れておきますから、続きをしますよ』

『そういえば俺の自己紹介の途中だった！こうしちゃおれん！改めて…影宮　修司です！逆から読んだら、じうゅし　やみげか　です！』

アイツどうやって発音した？

『一年間楽しく青春を過ごしましょう！ヨロシク！』

最後に右拳を高々と上げ、着席する。

『では次、菊地さん』

『はい』

そんなアホに拍手を送るまでもなく淡々と作業を進める担任。

すると…

『…ぁ…』

「……」

教室の入口にもっとも近い席に座っていた…

『…咲也』

真鍋と視線がぶつかってしまった…

『えっ！サッくん！？』

「はぁ…」

わざとじゃねぇんだろうが…恨むぞ真鍋…

ちょうど木下とかいう奴の自己紹介が終わり、担任が口を開こうとしたまさにその一瞬に真鍋が声を出した。
それは正にエアーポケット。
空白の一瞬。
その一瞬に真鍋が抜群のタイミングで俺の名を呼ぶもんだから、教室中にそれは響いた。
そして平沢が真っ先に反応する。

『和ちゃん！サッくんがいるの！？』

『えっと…それは…』

平沢の勢いに負けたのか珍しくクールな真鍋が戸惑う。
そして…

『廊下にいるわ…』

「おい」

アッサリばらしてくれんな。

しかし…どうするか…
このままここにいたら、まず見つかる…

（だったら…逃げ…だな）

ということで実行に移そうとしたが、時既に遅し…

ガチャ

教室の扉が開き…

「何やってるの？さく…桐島君」

「……」

笑顔だが『呆れ』が混ざった表情の顧問兼担任に見つかった…

「はぁ…」

とりあえずため息を吐く。

「来てたんなら早く教室に入りなさい」

『怒ってます』ということをアピールするかの如く、腰に手を当てる。

「自己紹介真っ最中だったからな…入る機会がなかった」

「そう…じゃあちょうど良いわ」

「あン？」

「今から咲也くんの自己紹介の番だから、ヨロシクね♪」

「……」

とびきりな笑顔で…しまったな…墓穴掘った…

つうか…

「素が出てんぞ…」

「はっ！ゴホンッ！じゃ、じゃあ桐島君、自己紹介ヨロシクね」

猫をかぶった顧問兼担任が踵を返し教室に戻る…

「はぁ…」

それに渋々ついていく…

「サッく～ん♪」

「よっ！サク！」

「ヒャッホーイッ！サクッチーッ！」

教室に入ると自然と集まるクラスメートの視線。

そんななかで平沢が笑顔でブンブンと手を振り、田井中が口元に両手でメガホンを作り、別の名前になる呼び方をし、アホがバンザイをする…

そして良く見ると…

「♪♪」

「…ぁ……」

「はは…」

ニコニコと小さく手を振る琴吹と、はにかみながら笑う秋山と、苦笑いをする真鍋が…

「それじゃあ桐島君」

「あン？」

「自分の席で自己紹介してね♪」

「……」

なんか悪意を感じる笑顔だな…

とりあえず唯一空席の席に向い…

「……」

着席。

「ってコラーッ！」

「うるせェ…」

アホが後ろを向き、騒音を発する。

「自己紹介しろよッ！」

「どうぞ…」

「影宮　修司です…ってちゃうわボケッ！ウチはもうやったわッ！次はお前の番やねん！」

「じゃあお前がやってくれ…」

「了解！コイツの名は桐島　咲也だ！ヨロシクな！って俺がやっちまったーッ！」

頭を抱えるアホ。

「…これで良いか？」

顧問兼担任に確認と『これ以上やったらアホが更に騒ぐぞ』という意味を込めた視線をぶつける。

「はぁ…分かりました、もうそれで良いわ…」

軽いため息をつき『では次に小磯さん』と指示を出す。

とりあえずは俺の勝利。

―――――――――

「咲也、どうして遅刻したんだ？」

「寝坊したのか～？お約束なのか～？」

「サッくん♪同じクラスだね～♪」

「唯ちゃん、朝からずっとこんな感じなの♪咲也君と一緒のクラスになれたのが嬉しいのね♪」

「……」

クラス全員の自己紹介が終わり、三年の心得えみたいなものを顧問兼担任が話し、放課後になった。

そして秋山達が一斉に俺の席にやって来ては口々に色々言うが…俺は聖徳太子ではないので一斉に全てのことを一回で理解不能だ…

ちなみに真鍋は生徒会長になったことでこの時期は忙しいらしく、

放課後になった瞬間に生徒会室に向い、修司はあのまま寝てしまっている。

「つうか…いい加減離せよ…」

そして平沢はかなり嬉しそうな表情で俺の左手を握り、上下左右に振り回す…
肩を脱臼しそうだ…

「嬉しいんだもん♪」

「…感想聞いてんじゃねェんだよ」

「まぁ、良いじゃないか咲也」

「私達やサクと一緒のクラスになったのが分かった瞬間に、唯は飛び跳ねて喜んでたんだぞ？」

「でも咲也君ったら遅刻しちゃうから…だから唯ちゃんの喜びが今、爆発中なの♪」

「はぁ…」

その代償が俺の左肩脱臼の危機だぞ…

無理矢理にでも止めようとしたら…

「あ…」

「あン？」

ピタリと止まった。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「ちょいと失礼するよ～」

相変わらずの禁句とスルーをかまし、平沢がおもむろに俺の襟首に手伸ばし…

「ゲ～ット！」

人差し指と親指で何かを掴み、俺達に見せてきた。

「桜…？」

俺の発言通り、平沢の掌にあるのは一枚の桜の花びら。

「うん　サッくんについてたよ」

「……」

恐らく…登校中に突風に襲われた時についたんだろう。
全部払い落としたと思ったが、一枚しぶとく残ってたか…

「で、始業式の帰りに拾ったこれと合わせたら…」

平沢が一枚の花びらを俺の机に置き、ブレザーのポッケを漁る。

「ていうか何拾ってるんだよお前は…」

「ガキだな…」

田井中が平沢を見ながら苦笑いをし、俺が呆れていると…

「じゃあん！花びら六枚！」

「……」

ポッケから取り出した物は…五枚の花びらがついた桜の花…
それに先程の一枚の花びらを乗せる…

「私にサッくんにあずにゃんに澪ちゃんにムギちゃんにりっちゃん
！なんだか私達みたいだね～♪」

『……』

出来た六枚桜を一つずつ指差しては、花が咲いたように笑う…
そんな平沢に初日の出を拝んだ時同様に顔を見合わせる俺達…

「天然っつうか…」

「さすがと言うか…」

「唯らしいって言うか…」

「こんな素敵なこと出来るのは、やっぱり唯ちゃんね」

一枚の花びらが飛んでいかないように悪戦苦闘しながら自分のプライベート帳に、押し花の要領で挟み込もうとしている平沢を見ながら、俺はしみじみと、秋山は微笑みながら、田井中はうっすら笑いながら、琴吹は慈愛の眼差しで…

「よっしゃー！明後日の新歓に向けて練習するかー！」

すると突然、平沢の行動に気持ちが高まったのか部長が高々と宣言するが…

「…お前今日練習ねェっつったじゃねェか、ギター持ってきてねェぞ」

「私もベース持ってきてないよ」

「私も～ギー太は今頃家で日向ぼっこしてるよ」

「私もキーボード持ってきてないわ」

「あっ…そっか」

俺達は楽器は持ってきてないので練習は無理だ。

部室にあるのは田井中のドラムだけだ（琴吹は長期休暇の度にキーボードを軽々と持って帰っている）

「んじゃさ、練習は出来ないけど、部室に行こうぜ」

「…何でだ」

「理由なんてない！あえて言うなら私達が軽音部だからだ！」

「カッコいい～！りっちゃん部長！」

「部室には予備の紅茶も置いてあるしね♪」

「そんなのがあったのかムギ？」

「うん！今日みたいな非常事態のために用意してたの澪ちゃん！」

「そいつは用意周到なことだな…」

「あずにゃんに連絡しよ～っと」

「そういうわけで、部室にレッツゴー！」

田井中が拳を突き上げ、教室から出ていく…

「ゴ～♪」

それに琴吹が小さく拳を上げながら続き…

「クスッ　まったく」

秋山が微笑みながら…

「あずにゃんも今から部室に来るって！だから私達も早く行こうよサッくん！」

ケータイを仕舞い駆け出す準備完了の平沢が俺を見つめ…

「…サッくん言うなっつってんだろ」

そんな平沢の横を通り過ぎる俺…

「みんな～！お待ちくだせぇ～！」

「急げ～！唯～！」

「唯ちゃん早く～！」

「こ、転ぶなよ唯！」

「本当に騒がしいな…」

高校生活最後の春…
それは賑やかなスタートだった…

第六十五話（後書き）

クラスメートの『ミカ』と『いちご』の名字が分からなかったので適当につけました。
変更するかもです。

オリキャラの名前を提供してくださった、とあるお二人様にこの場を借りて改めて感謝します。

ありがとうございました！

第六十六話（前書き）

勧誘直前です。

第六十六話

「それで？どうして昨日は遅刻したの？」

翌日。
今日は遅刻せずにいつも通りに学校に着き、通常通りの授業を行い、放課後になったら顧問兼担任に職員室に呼び出しをくらった。
どうやら昨日、遅刻した理由を報告しなければならないらしいが、それよりも気になる点がある…

「寝坊…つうかアンタに確認してェことがあんだけど」

「理由は寝坊ね…確認したいこと？」

滑らかに出席簿にペンを動かしていた手を止め、顔を再び俺に向けてくる。

「二組の連中だ…厳密に言うと平沢達」

「あぁ、そういうことね」

俺が言いたいことが分かったらしく、頬を緩ませ小さく笑う。
昨日はあくまで臆測だったが、気になるものは気になる。
なのでその真相を知るために、腕を組みながら自分の席に座っている顧問兼担任を見下ろす。

「そうよ、私がみんな一緒のクラスにしてあげたの」

「……」

何食わぬ表情でサラッと爆弾発言…

「それ、思い切り職権濫用だろ…」

「良いじゃない別に～　ていうか、昨日もりっちゃんに言われたわ」

「そりゃ言うだろ…こんなあからさまに仕組まれたクラス分け…」

疑問を持たねェ方がおかしい…

「私って初めての担任でしょ？やっぱり少し不安とかあるのよ、だから…」

「…それもだ」

「え？」

何か言葉を並べようとしたが、俺が指差し制したことでそれは失敗に終わる。

「…アンタが担任になるのは百歩譲って納得してやる」

「何で上から目線なのよ、あとその言い方傷つくわね～」

年不相応に両頬を膨らましふてくされたような態度をみせるが…

「だがな…」

そんなことよりも、もう一つ気になる点があるのでスルーして話を進める。

「何故アンタが三年の担任なんだ…？」

大体初めて担任をするのならばまずは一年とか二年だと思う。
そこで経験を積んで三年…というのなら頷けるが、生憎この人は初だ。
三年は受験や就職、生徒の卒業後の道を示すという大切な役目があるのだが…
出来るのかこの人に？

「それはそういう風な人事発表があったからよ」

「おかしいんじゃねェか？この学校…」

「どういう意味よー」

俺の発言が癇に触れたのか、ジト眼になって眉をしかめる。

「別に…」

だが、正論を言ったまでなので、そんな視線を受ける筋合いはない。
なので当たり障りのない返答を。

「もう、本当に咲也くんはきかん坊ね～」

「……」

どこがだよ…

「それとさっきの続きなんだけど…」

「あぁ？」

「ほら、私が初めての担任で少し不安って話」

「あぁ…」

「そういうことだから、少しでも見知った顔があれば気持ち楽なの」

「…本音は？」

「名前覚えなきゃいけない子が減るし♪」

…そんな理由で職権濫用かよ。
笑顔を浮かべながら本日二度目の爆弾投下に…

「はぁ…」

やっぱりなため息が…

「まぁ、高校最後の年にみんなと一緒のクラスにしてあげたんだから、精一杯楽しみなさいね咲也くん」

「……」

「じゃあ、もう行って良いわよ、今から新入生を勧誘するんでしょ？」

「あぁ…」

「部室に秘密兵器を人数分置いといたから、それ使ってビシバシ勧誘しなさい！」

「……」

『秘密兵器』と『人数分』この二つの言葉に不安を覚えつつ…

ガチャ

職員室を退室し、鞄を取りに一路教室を目指す。

……

『精一杯楽しめ』

またこの言葉。

顧問兼担任、昨日のじいさん…それと…

『咲也も明日からいよいよ三年生か』

『早いわね、この前高校に入学したと思ったのに』

『いいか咲也、最後なんだから精一杯楽しめよ』

『高校を卒業したらあっという間よ、今しかない時間を大切にしなさいね』

おととしの晩メシ場での両親との一コマ。
大人達が言う『精一杯楽しめ』
これは自分達が経験したからこそ言える何気なくも重い言葉。
そして裏を返せば『後悔するな』ということ。

「……」

確かに最後だ。
三年に進級してから、高校生活と軽音部の終わりの始まりのカウントダウンの時計が動きだした。

『精一杯』やって『後悔』するなら仕方がない…なんて最初から決めていたら、その通りになる。

だったらとりあえずは『楽にいこう』だ。

「つうか…難しく考え過ぎ…」

ガチャ

全くその通りだ。
何故なら…

「和ちゃん！これカッコよくない！？」

「どうかしらね…」

教室の扉を開けた途端に見つけたのは…

「うぉっ！カッコいいよ！」

エアギターを構え、右手で円を描きながらブンブン腕を回す平沢と…

「ギター持ってないから分からないわよ」

そんな平沢を見て苦笑いする真鍋…

「……」

こんなお気楽で何も考えてないような天然娘を見たら、先程まで脳を巡っていた考えがアホらしくなる。

「あ、咲也」

「お、サッくん♪」

「……」

教室の入口で平沢が独自に編み出したと思うパフォーマンスを静観していると、まず真鍋が俺に気付き、次に平沢が未だに腕をブンブン回し『ふんすっ　ふんすっ』と荒く呼吸しながら気付く。

「お前、何やってんだ…」

教室は既に平沢と真鍋、そして足を踏み入れた俺しかいない。
つまり秋山達は既に部室だと推測できる。
しかし…コイツは教室にいた。

「ふんすっ　ふんすっ」

腕を回しながら…

「おっととと…サッくん待ってたの」

「はぁ？」

回していた腕を止め、遠心力に負け、若干よろめきながらさも当然のように言い切る平沢に『何言ってんだ？』みたいな表情をする俺。

「『部活行こう』って言いたかったから♪」

「……」

そういえば…一年の時は毎回ニコニコしながら言ってきてたな…
そして今もニコニコしながら…

「みんなは先に部室に行ってるよ」

「いや、聞いてねェし…」

まぁ、良いか…
こんなこと言うためにわざわざ教室に残って…
まぁ、今更コイツの行動を理解しようとするのは中々困難…
不思議は不可思議だから不思議理論で処理しよう…

「平沢はどうでも良いとして…」

「ガーン！」

「…お前は何してんだ？」

ＨＲが終わったら真っ先に教室から出て、生徒室に向かった筈なのだが、何故かここにいる真鍋に問い掛ける。

「私は机の中に忘れ物をしたから取りにきたの」

そう言って右手に持っていたケータイを見せてくる。

「そしたら唯がいて、さっきみたいなのをやってたから…」

「……」

何やってんだ本当にコイツは…

見つかったのが真鍋で良かったな。

お前のことを知らない奴が見たら、間違いなく痛い子に思われてた筈だ…

「サッくん！これカッコいいよね！？新歓でやる必殺技だよ！」

「……」

そしてまた腕を回しだす…

「必殺技とかどうでも良いっつうの…」

「ガーン！」

「…つうかウィンドミルは止めといたほうが良い」

「うぃんどみる？」

必殺技をバッサリと一刀両断され少し落ち込んでいた平沢だったが、

聞き覚えがない言葉に興味を持ったのかコテンっと首を傾げる。

「…お前がさっきまでやってたアレだ」

「うぃんどみるって言うの？」

「正確にはウィンドミル奏法…見た目は派手で歓喜も沸くが、リスクがあるぞ…」

「「リスク？」」

どうやら真鍋も興味を持ったらしい、平沢と声が重なる。

「回していた腕がネックに当たって怪我したり、ピックが誤ってボディを引っ掻いてキズになったりな…」

そういえば田井中が好きな『ザ・フー』のギタリストが良くやってたな…

ちなみに『ピート・タウンゼント』という名だったと思う。

田井中憧れの『キース・ムーン』の仕掛けた爆薬のせいで難聴になった可哀相なギタリストだ。

「それは恐ろしい…ギー太にキズがつくなんて…まさに必殺技だね」

「……」

真顔で上手いこと言ったつもりか？
どっちかっつうと諸刃の剣じゃねェか？

「それじゃ私は生徒会室に戻るわね」

頃合を見計らっていたのか、真鍋がケータイをポッケにしまいながら俺達に告げてくる。

「うん、私達は新歓ライブの練習してから帰るよ」

「…勧誘もだ」

「あ、そっか～」

「はぁ…」

天然節を炸裂させ、頬をかきながら笑う。
そんな平沢にため息をつく…

「新入部員、入ると良いわね」

「まぁこのままでもいいけどね～」

「…お前、それがどういう意味か分かってんのか？」

「ほぇ？」

本当に分かってないらしく、キョトンとした表情で首を傾げる。

「新入部員が入らないと唯達が卒業したら、来年梓ちゃん一人になっちゃうわよ？」

「…ぁ…」

「…最悪、規定人数が足りなくて…廃部」

俺と平沢、秋山、田井中、琴吹は三年。
そして中野は二年。
今年、新入部員が入部しないと必然的に来年は中野一人になる。
部活の活動が認められる人数は四人。
俺達が卒業した後、もしくは今回の勧誘に失敗し三人以上の入部希望者がこなければ…軽音部は再び廃部になるだろう…

「本当だ…」

「……」

そのことをやっと理解したらしい平沢がキョトン顔のままポツリと呟いた。

「もう、しっかりしなさいよ　咲也もね」

「あぁ？」

真鍋が平沢に呆れたように言ったあと何故か俺にも似たような声質で告げてくる。

「昨日の遅刻よ　だから今まで山中先生に呼び出されてたんでしょ？」

「昨日は怪奇現象が起こった故の不可抗力だ…」

俺は悪くない。

「はぁ…　とにかく三年生になったんだから二人共しっかりしなさいよ？」

失礼な…俺をコイツと一緒にすんな…

「じゃあね唯、咲也」

「あ…うん、ばいばい」

言いたいことを言うだけ言って小さく手を振る真鍋に、少し呆然としていた平沢が気付き、同じく小さく手を振る。

「……」

俺は失礼なことを言われたのでささやかな抵抗で無言を突き通す。

ガチャ

しかしそんなことを知るよしもない真鍋はアッサリと教室から去っていった…

まぁ…普段から同じような態度をとっているので気にも止めなかったんだろうな…

「そっかぁ…来年あずにゃん一人になっちゃうんだ…」

平沢が真鍋に振っていた手を止め、俺に向き直り、こんなことを言ってきた。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「あずにゃんのためにも今日の勧誘頑張らなきゃね！」

「そうだな…一人でも入部したら…先が繋がる可能性が出てくる」

「うん！よぉ～し！このういどみーるで新入部員を入部させるぞ～！」

「…ウィンドミルな」

さっき言えてたのに何で間違える？
つうか…新歓でやるつもりなんだな…

「ふんすっ　ふんすっ」

「はぁ…」

幸先不安だ…

――――――――――

ガチャ！

「やっほ〜！」

「……」

元気ハツラツな平沢が勢い良く部室の扉を開け、その後ろを俺が続く。

「唯、咲也…」

（ん？）

部室には俺達以外の四人が揃い、テーブルを囲んでいた。
そう、文字通り囲んでいる。
そして秋山が難しい表情で振り向いた。

「どうしたの澪ちゃん？」

平沢が鞄を置き、トコトコとテーブルに近付き…

「おぉ～！こ、これは！」

何やら興奮したボイスを上げる。

「……」

とりあえず俺も鞄を置き、ダラダラとテーブルに近付き…

「何故…？」

そこにあった六つの物体に思わず顔をしかめる…

「私が最初に部室に来たんですけど…」

俺と平沢の正反対な反応に戸惑いながら中野がおずおずと口を開いた。

「テーブルの上に既にありました…」

「ていうか、これ絶対さわちゃんだな」

「今回は梓の分が増えてる…」

「これが秘密兵器かよ…」

テーブルの上にある六つの見覚えがある物体。
その正体は…去年の勧誘で間違ったインパクトを遺憾なく発揮し、新入生をドン引きさせた、鶏、馬、犬、猫、狼、そして初見の豚の着ぐるみの頭部。
それがテーブルの上に生首のように異彩を放ちながら鎮座していた…

「秘密兵器？」

当然だろうが、俺の発言の意味が分からなかったらしい全員が俺を見る。
そして秋山が代表して質問を。

「さっき顧問が部室に新入部員勧誘のための秘密兵器を人数分置いといたっつってた…」

「じゃあこれが秘密兵器ですか？」

「らしいな…」

やっぱあの人、ぶっ飛んだ思考してんな…

去年はコレのせいでビラ配り失敗したっつのに…

「今年もこれ着て勧誘しろっていうさわちゃんからのメッセージだな」

田井中が犬の頭部を持ち上げながら呆れた表情になる。

「そんなメッセージ破り捨てとけ…」

「そうだな～　失敗するのが眼見えてるし」

「私、平沢　唯だコケェ～♪」

「琴吹　紬だニャ～♪」

「って、唯とムギは何やってるんだ！」

鶏と頭部と猫の頭部をそれぞれかぶり、ノリノリな様子な平沢と琴吹に秋山が渾身のツッコミを。

「ほっとけアイツらは…」

「それよりもコレ着て勧誘するんですか…？」

「ナシナシ　去年の二の舞になるからな、なぁサク」

中野が不安の面持ちで主に俺と部長に聞いてくる。
だがそんなことを聞くだけ無駄という感じに田井中がヒラヒラと手を振り…

「つうか…中野は去年ドン引きだったしな」

「あぁ…そういえば馬の着ぐるみからチラシを貰いました」

「あ、それ私…」

「え!?澪先輩だったんですか!?」

小さく手を上げる秋山に中野が驚愕する。

「とにかく、他の部はもう勧誘始めてる筈だ…俺達もさっさっと行

くぞ」

「よし！軽音部！新入部員を獲得するために出陣じゃー！」

部長が拳を高々と掲げ、決意表明をし…

「「おーっ！」」

それに元気良く反応する、未だに鶏と猫を装着している平沢と琴吹…

「おら…さっさっとそれ取って行くぞ」

「え？着ないの？」

「着ねェよ…」

鶏の頭部をかぶっているので平沢の表情は不明だが、恐らくまたキョトンとしてんだろうな…

「せっかくさわちゃんが用意してくれたんだよ？」

「だから、着ぐるみ着たら去年みたいになるって」

「私はイヤだからな、着ぐるみ着るの」

「でも澪ちゃん、バイト感覚でやったら楽しいわ♪」

「そりゃお前だけだ…実際やったらあちぃし動きにくいだけだ」

「さぁ、あずにゃん！共に着ようではないか！」

「嫌ですぅ！」

賛成派は二人に反対派四人。
どう考えても俺達のほうが勝っている。

だがしかし…このままいけば良かったんだが…

――――――――

「軽音部で～すコケェ～！」

「よろしくお願いしますニャ～♪」

「きょ、興味のある人は三階音楽準備室まで…ヒ…ヒヒーン…」

「お、美味しいお菓子とお茶もあります…ブ、ブヒ…ブヒ…」

「是非軽音部をヨロシクお願いしま～すワンワンワン…」

「…ガオ…」

とある事情のせいで渋々着てしまった…

今年は新人の豚が加入し、一年ぶりに集結…桜ヶ丘の勧誘隊。

現在…『精一杯』に『後悔』中…

第六十七話（前書き）

勧誘編です。

第六十七話

「着てんじゃんサク」

「…お前もな」

軽音部の勧誘ビラ片手に犬科の狼と同じ犬科の文字通り犬が、相変わらずの人を小馬鹿にしたようなふざけた表情で振り向く。

「仕方ないだろ…私だって着たくて着てるんじゃないし…」

犬がこうべを垂らし、くぐもった声が聞こえてくる。

「はぁ…　去年の惨事を目の当りにしたっつうのに…」

次に続く言葉は『何故こうなった…』だ。

部長の田井中と副部長の俺は望んでこんな着ぐるみなんて着ていな

い。

だが、着てしまっている…

事の顛末はこうだ…

――――――――――

『あずにゃんも着ようよ～』

『嫌です！』

『新入部員、入ってほしくないの？』

『入ってほしいですよ、でも…だからって着ぐるみで勧誘なんて…』

『あずにゃん、私はね、あずにゃんに寂しい思いをしてほしくないよ…』

『え？』

このタイミングで鶏の頭部を取り、バイク野郎がバイクから降りてヘルメットを取った後の決めポーズのようにそれを小脇に抱える。そしてあらわになった平沢の表情は第三者の俺が見ても、バレバレの演技かかった曇った表情だ。

『来年になったらあずにゃんは一人…ぅぅ…想像しただけで…な、涙が…』

『唯先輩…』

そんなバレバレな演技なのに、何故か中野が流されかけている…

『だから…だから！これを着て一緒に勧誘しようよ！あずにゃんのために！』

『わ…分りました…先輩がそこまで言うなら…』

『おい』

差し出された豚の着ぐるみの頭部を受け取ってしまった中野…

なんだかんだで先輩を断れない根の真面目が仇になり、更に『あずにゃんのため』が決め手だったらしい…

『梓が陥落…マズいぞサク！このままじゃ…！』

『まだ秋山がいる…』

田井中が冷や汗を流しながら俺の肩を掴み軽く揺らしてくる。

そんな手を鬱陶しそうに振り払った後に秋山を見るが…

『サウナスーツみたいでダイエット効果が～』

『ダイエット…』

『澪ーっ！』

『陥落…』

琴吹の戦法により、催眠術にかかったかのようにおぼつかない足取りで馬の着ぐるみに向う姿が…

なんとか田井中が秋山を正気に戻させようと手を伸ばすが、掴むのは空気のみ。

――――――――

そして残った俺達は渋々に犬と狼の着ぐるみをそれぞれ纏った…

「二対四…完璧に私達の負けだったな…」

「部長の威厳がねェな…お前…」

「サクも副部長の威厳がなかったくせにー！」

犬が再び俺に振り向く。

「コッチ見んな…その顔腹立つ」

「は～いはいっ　悪かったよーだ！」

『素顔は不機嫌顔なくせに』とかブツブツ言ってたが、一々反応してはらちが明かないのでスルーし…

「はいよ！軽音部だコケェ～コケコケェ～！」

「新入部員募集中で～すニャンニャン♪」

「気軽に見学に来てください…ヒヒーン…」

「よ、よろしくお願いします！ブッ…ブヒ…！」

「今なら特製ケーキが待ってるよ～ワンワンワ～ン…」

「はぁ…」

平沢が妹に薦められ作ってきた意味不明なイラスト満載のビラを配っていく。

「って…やっぱり誰も受け取らね～…」

しかし、こんな奇抜な勧誘隊に近付く連中などほぼ皆無。
なので手元のビラは一向に枚数を減すことはない…

「サッくんの気合いが足りないんだよ～！」

「あぁ？」

「『軽音部ヨロシク！ガオー！』って言わなきゃ咲也君！」

「……」

ノリノリな鶏と猫が俺の態度が悪いみたいに非難してきやがった…

つうか良く見たら、鶏と猫の表情も腹立つな…

特に眼が…

「はぁ…」

なんとかストレスをため息で逃がし…

『軽音部で～す！』

「……す…」

ビラ配りに専念するが…

――――――――――

「誰も来ないね…」

「ったりメェだろうがっ」

一時間程粘ってみたが変化の兆し全く見えないので部室に戻る。

そして猫の頭部を取った琴吹の一言に若干イラッときたので狼の頭部を放り投げるように取り、琴吹と平沢に指差す。

「去年もこれで失敗したろうが！学習能力がねェのかお前らは！」

「「ご、ごめんなさーい！」」

お互いに抱きつながら必死に頭を下げる失敗の起因原。

「珍しいですね…サク先輩があんなに声を荒げるの…」

「よっぽど着ぐるみが嫌だったんだな～」

「ダイエット効果なかった…」

平沢と琴吹に説教していると中野と田井中の会話が聞こえきたが…
秋山はマジで信じてたのか？

「はぁ…」

ふがいない連中に頭が痛くなってくる…

「とにかく、このままじゃ来年は廃部かぁ？」

田井中が視線を天井に向け、このままの現状では有り得そうなことを言う。

「あずにゃんが一人になっちゃう…」

「梓が一人…」

「あン？」

平沢の発言に何やら難しい表情で考え込む秋山に疑問が湧く。

「ヒッ！　わ～っ！梓～っ！」

そして何を考えたのか知らんが部室の端に駆けていき蹲る。

「廃部なんてダメッス！！」

「自分もそう思いまッス！！」

「私もです！」

だがそんな秋山を華麗にスルーし、今後の方針を決める俺達。

「りっちゃん部長！」

「咲也君副部長！」

「「「何か良い案はないですか！？」」」

平沢と琴吹と中野が拳を握り締め、俺と田井中を要望の瞳と表情で見つめてくる。

「う～ん…」

「ふむ…」

三人の視線を一身で受けた俺と田井中が揃って腕を組み思考を巡らせる。

去年の勧誘の大きな失敗の原因は、先程までやっていた着ぐるみと平沢達女性陣のメイド服で見学に来た新入生（平沢妹とモジャ団子）

を迎え撃つ…もとい、もてなすことだった。
その二つとも山中顧問が関与していた。
そして今回も『秘密兵器』など称した果ての失敗。
まぁ…新入生がドン引きしていたのを見る限り『兵器』としての役割は果たしてしまったが…

とにかく、やはりもう一度ビラ配りをするのが一番。

「そうだな…部員が増えれば部費も増えるしな」

田井中が金のことを考え始めた…

「ブヒブヒ」

「お前ちょっと黙ってろ…思考が鈍る」

「ガーン！あ、あずにゃ～ん…！サッくんが冷たいよ～…」

「唯先輩が悪いですよ」

「ガーン！」

平沢が二重の衝撃をくらい琴吹に慰められている光景をよそに再び思考の海へダイブ…

しかし…ビラ配りは他の部の連中もやっていた…
それでは軽音部に眼が止まる可能性は低い…

軽音部『らしさ』を出すには…やはりライブ（決してティータイムではない）
しかしライブは明日に新歓があるし、野外ゲリラライブは間違いなく生徒会から断罪を食らう…

これは軽音部のデメリットだ。
まぁ…軽音部だけではなくジャズ研や吹奏楽部等々…音を主としている部活全体に言えることだが……ん？

「あ…」

「サク、何か思い付いたのか？」

「サッくん副部長！」

「「副部長！」」

その音を扱っている部活はどうやって勧誘をしている？
いや…他の部もだ。

だったら…

「…おい琴吹、中野」

「「はい！」」

「確か…体験入部っつうのがあったよな？」

だったら他の部がどのように部員を勧誘してるか実際に学べは良い。
そういう事が可能か琴吹と中野に確認を取る。
何故コイツらかというと、平沢と田井中は言わずとも知らんだろうし、望み薄だ。
仮に返答してきても信憑性に欠ける。

その点この二人は信頼出来る。
中野に至っては去年体験済みだろう。
一番手っ取り早いのは秋山だが、未だに蹲ってるし。

「うん、体験入部はどの部活でもやってるわ」

「私の友達に体験入部してその部活に入部した娘がいます」

「よし…」

決まりだ。

「なるほど！体験入部してその部の勧誘方法をパクるんだな？」

「…学ぶと言え」

部費のことを考えていた田井中がポンと手を打ち人聞きの悪いことを言うのですぐさま訂正。

「良いかお前ら…いまから二手に分れるぞ」

「え？なんで？」

確認出来る範囲で本日二度目のキョトン顔の平沢に説明するために口を開く。

「…そのほうが合理的かつ効率的だからだ、一つの班は体験入部へ、もう一つの班は制服に着替えてビラ配り」

「ふむふむ」

「……」

理解してんのかコイツ？

「そうですね、時間もあまり残ってないですから」

「一時間無駄にしたからな…」

『秘密兵器』のせいで。

「んじゃ体験入部とビラ配り班に分けるか、私達は六人だから三人で一つの班な」

田井中がホワイトボードに『スパイ班』と『ビラ配り班』と書き込む。

名称変わったぞ…

「はいはい！私、体験入部やりたい！」

一番に反応した平沢が、小さくジャンプしながら手を上げる。

「唯と私はスパイ…っと」

随分と不安人材なスパイだな…

「…つうかお前は立候補もしねェで決めんのか」

「だって私は部長ですもの♪」

「あっそ…」

「あと一人…誰かやりたい人～？」

専用マジック片手に田井中が俺と琴吹と中野を一人一人見てくる。

「私はビラ配りをやりた～い♪」

「…俺も」

自分で提案しといてなんだが、体験入部なんて面倒だ。

だったらビラ配りに奮闘したい。

「ムギとサクはビラ配りっと…梓は？」

「私はどっちでも良いですよ」

「あずにゃんはスパイで！」

「止めてくださいよその呼び方」

「え？もうすぐ一年経つのに？」

「そっちじゃないですぅ！」

「……」

そっちじゃないってあだ名のほうは納得してんだな…

「決まり！スパイ班は私と唯と梓で！ビラ配り班はサクとムギと澪で！」

マジックに蓋をしながら田井中が気合い十分にそう宣言する。

「澪ちゃんには聞かなくて良いの？」

そんな田井中を見ながら琴吹が部室の端で蹲っている秋山をチラリと見る。

「良いって良いって　どうせ澪はビラ配りをやるって言うだろうしさ」

「人見知りだからなアイツ…」

「そういうこと」

俺の言葉に全員が納得したようだ。

『うんうん』と小さく頷く。

「よーしっ！部員獲得大作戦を実行だぜ！」

「「おーっ！」」

田井中が放った、スパイでは有り得ない声高らかな作戦実行合図に、
琴吹と中野が拳を振り上げ…

「ブヒーッ！」

豚鼻をしながら叫ぶ平沢と…

「はぁ…」

些か不安なスパイ班にため息を漏らす俺…

そして…

「あ、梓！」

「え？は、はい！」

ようやくどっかの世界から帰還した秋山が立ち上がり、俺達の方を向き（主に中野に）…

「大丈夫だからな！絶対に来年一人にしないから！」

「え？あ、は、はい！ありがとう…ございます？」

どっかの世界でどんな結論に到達したのか不明な答えに中野が戸惑う。

「サッくんや」

「サッくん言うな」

「他の部がどうやって勧誘してるか見てくるから期待しててね！」

「……」

気合い十分なのは良いんだが…

「…ミイラとりがミイラになるなよ」

「ほぇ？」

「唯なら有り得るな」

「え？え？」

「まぁ…とにかく行ってこい…」

「ラジャー！」

俺と田井中の皮肉じみた発言にクエスチョンマークを浮かべるが、
頭の切り替え早くビシッと敬礼する。

「スパイ班！行動を開始するぞー！」

「…俺達も制服に着替えてビラ配りに行くぞ」

「よしきた～！」

グッと拳を握る琴吹と…

「え？何？今から何するんだ？律、咲也」

只一名状況が把握出来てない奴が…

「はぁ…」

コッチも些か不安だ…

――――――――――

「良かった～　まだ新入生のみんないるね」

「うん、そうだな」

「……」

これからの勧誘方面の意図がさっぱりだった秋山に琴吹が説明をし、もう二度と日の目を見ることはない『秘密兵器』を物置部屋に放置し、制服に着替えて再び校庭に繰り出す。

そこには先程よりも少しだけ人数が減った新入生と同じく人数が減った他の部活がビラ配りをし、必死に勧誘していた。

「それじゃあ私達も…「ちょい待て」…咲也？」

早速ビラ配りを開始しようと両手で持っていた平沢手製の意味不明なイラスト満載のビラが重なった束から左手で一枚引き抜こうとした秋山に俺が待ったをかける。

「渡すのは一年と二年だけで良い…三年には渡すな」

「え？」

「三年生は来年はいないから？」

秋山が本日初めてのキョトン顔をし、琴吹が聡明に頭を回転させ、俺が言いたかったことを告げる。

今この場にいる新入生の一年は部活に興味があるからいるということ。
その中にはチラホラと興味津津な二年の姿も見受けられる。
故に入部の可能性だ高いのはこの二つ学年の連中。
たまに三年の姿も発見出来るが、ただの暇つぶしか、何となくだろ

う。
三年は今更部活に入部しようなんて物好きはいない…と思う。

「…三年に入部されても来年いねェんじゃ意味がねェ」

「それは梓のために？」

秋山が何故か口元に緩やかな弧を描き、微笑みながら左手で一枚のビラを差し出しくる。

「さぁな…」

そのビラをかっぱらうように右手で秋山の左手から奪うと、ちょうどタイミング良く歩いてきた一年の男子に無理矢理渡す。

「クスッ　咲也は素直じゃないな」

「こういうところが咲也君らしいね～」

背後から聞こえる微笑みから声に出して笑った秋山と、絶対にニコニコしてる琴吹に…

（うるせェな…）

内心で軽く毒づきながら、ビラ配りを開始する。

……

時間にして約三十分か。

その間、着ぐるみで行なったビラ配りが本当に愚かに思える程、着実にビラは一年と二年中心に配られていた。

去年ならば男子に入部してほしく、野郎中心に配っていたが、今回は男女関係なく配る。

今年も男子だけなど言ってられん。

来年のためにも…軽音部の廃部を免れるためにも…

（まだ残ってんな…）

順調に配ってはいるが左手にあるビラの束はまだまだ厚みを保っていた。
つうか平沢はどんだけの枚数をコピーしやがったんだ…

「ん？軽音部…？」

すると興味を含んだ感じの男子の声が聞こえてきた。

「……」

食らい付いてきたその男子を確認しようと視線をチラッとそっちに向ける。

「梨乃、軽音部だぞ軽音部」

「ふぇ！う、うん、そうだねっ」

「梨乃、落ち着いて」

一人だけかと思いきや、そこにはビラを隣りにいるオドオドした女子に見せる男子と、一見真面目そうな男子の計三人が。

しかし…その三人組は良く見ると俺達と共通したある物を身に着けていた。

（三年じゃねェか…）

男子二人は俺と同じ青のネクタイピンを、オドオドした女子は秋山と琴吹と同じ青のリボンを。

これが意味するのは三年だということ。

（三年には渡すなっつったのに…）

渡したのは秋山と琴吹のどっかだと思い、二人の表情を探ってみると…

「…ぁ…」

秋山ではない。
人見知りのスキルを発動させ視線を忙しなく泳がせている。

「♪」

あ、犯人コイツだ。
相変わらずニコニコした笑顔を浮かべている。
何より三人組の近くにいるし…

「はぁ…」

まぁ、間違って渡したんだろう。

わざとやるとは思えん。
ということで三年には興味ないのでビラ配りを再開しようとしたが…

「梨乃、桐島だぞ桐島」

「ふぇぇっ!?」

「梨乃、落ち着いて」

「……」

男子の一人が俺を指差した途端にオドオド女子がまるでスキルを発動した秋山のように両手をブンブンとし、なんかそそっかしい動きになる。

つうかコイツら誰だ?
何故俺のことを知ってる?

「おい…」

「ん？」
「ひゃい！？」
「はい？」

疑問解決のために口を開いたら三者三様な反応が返ってきた。
特にオドオド女子なんかビクッと身体を揺らすオマケ付きで。

「…何で俺のことを知ってる？…つうか誰だお前ら…」

「あ～その答えは一言で済むんだけどな…その前にコッチから質問良いか？」

「あぁ？」

苦笑いを浮かべながら頬をかき、コッチが質問してんのに逆にアッチが質問するというなんとも不思議な事態になる。

「それじゃあ質問なんだけど、俺達は桐島と会ったことがある」

「それは秋山さんと琴吹さんにも言えるんだけどね」

「え…？」

真面目そうな奴の放った言葉にスキル発動中だった秋山が本日二度目のキョトン顔になる。

「私は分かったわ～♪」

そしてニコニコしながら小さく手を上げる琴吹。

「つうかお前の質問なんかどうでも良いんだよ…さっさっとコッチの質問に答えるか立ち去れ…」

俺達は勧誘で忙しく、遊びに付き合ってる暇はない。

つまりは退散を願っている。

「ひっ！ご、ご、ごめんなさいっ！す、すみませんっ！」

オドオド女子がまたもやビクッと身体を揺らした後、瞬時に真面目そうな男子の背に隠れてしまった。

「ちょっと咲也、そんな言い方ないだろ」

「正論言ったまでだ…今は時間が惜しいんだよ」

「だからって…」

「まぁまぁ秋山さん」

秋山が俺に詰め寄ってくるがそれをノラリクラリと躱していると真面目そうな男子が突如としてスネークインしてきた。

「勧誘の邪魔をしたのは僕達だし」

「あぁ、悪かった、でも梨乃を責めないでやってくれ」

もう一人の男子がポンポンと真面目男子の背に隠れているオドオド女子の頭に手を置く。

「ぅぅ～す、すみません…」

「はぁ…」

何か大袈裟になってしまったことにため息がつい漏れてしまう。

「じゃあ自己紹介だな、俺は鷹崎　亜魅夜」

「僕は村雨　流緒」

「あ、藍澤　梨乃ですっ！はいっ！」

「で、俺達は桐島と秋山さんと琴吹さんと同じクラスだから知ってたんだ」

『一言で言うとクラスメイトな』と朗らかに笑う。
つまりコイツらは三年二組の奴らなのか。
しかし…いたか？こんな奴ら？
まぁ…俺の興味レーダーが反応しなかったからその存在を感知しなかったんだろう。

「それじゃあ俺達はこれで帰るかな、梨乃がバーガー奢ってくれるって言うし」

「ふぇ!?言ってないよ～っ！」

「あはは　じゃあ桐島君、秋山さん、琴吹さん、明日の新歓ライブ頑張ってね」

「あ、ありがとう…」

「また明日～♪」

「……」

背を向け、去っていく自称二組の三人組に秋山は類は友を呼ぶ状態で人見知りスキルを飛切りに発揮し、琴吹は相変わらずのニコニコで小さく手を振り、俺はなんとなくビラを団扇代わりにし扇ぐ。

「なぁ…アイツらのこと知ってたか？」

「藍澤さんのことは…席が私の前だし…ムギは知ってたんだな？」

「うん！新しいクラスのみんなのこと早く覚えたくて頑張ったの！」

「ふーん…どうでも良い…」

「ショボ～ン…」

「そういう素直さはいらないって咲也…」

――――――――――

更に三十分の時が過ぎ、成果が出たので部室に戻ることに。

「随分余っちゃったね」

「…秘密兵器ん時より前進してんだからマシだ」

「そうだな、後は律達に期待しよう」

「そうね～」

余ったビラを片手に部室への階段を上がり、目前に扉が迫ったのでドアノブに手をかけ、体験入部班への少しの期待感を覚えながら開ける。

ガチャ

「「「いらっしゃいませ！」」」

「……」

中には田井中の言うところのスパイ班がテーブルの上に無造作に置かれてある他の部のビラを眺めていた。
ジャージ姿で…

「って　お前らかよ…」

三年を示す青ジャージの田井中が落胆したトーンで告げてくる。
どうやら俺達を見学者と思ったらしい。

「悪かったな…」

「全くだ！よりによって不機嫌顔のサクだもん！」

「……」

腹立つなコイツ本当に…

「私達はいっぱいビラ配ってきたの～♪」

「そっちはどうだった？」

俺の心中で発生した憤りを脳内で修司を蹴ることにより発散させていると、琴吹と秋山が余ったビラをテーブルに置きながらスパイ班の成果を聞くが…

「特に成果ナシ…」

「どの部もやってることは私達とあまり変わりませんでした…」

「でも、体験入部者と見学者はたくさんいたよ、なんで軽音部には誰もこないんだろね…」

「……」

田井中が右手をヒラヒラとさせ、赤ジャージの中野と青ジャージの平沢が揃って首を傾げながら嘆く。

「あ！でもでもサッくん、発見があったよ！」

「サッくん言うな」

「柔道部は楽しそうでした！」

「はぁ？」

眼を輝かせながら何を言ってんだコイツ？

「唯先輩は柔道部でミイラとりがミイラになっちゃいました」

「柔道部の精神論を聞いたら『私！柔道部に入ろうかな！？』なぁんて言い出してさ～」

「何やってんだお前…」

田井中が特技である他人の声色の真似で、俺が鳴らした警鐘を平沢が彼方にぶっ飛ばした瞬間を見事に再現する。

「エへへ～　ついつい～」

「もうっ　三年生になったんだからしっかりしろよな唯」

「うっ！和ちゃんと同じことをまさか澪ちゃんからもくるとは…」

「何言ってるんですか…」

秋山の軽い辛辣な言葉に胸を押さえながらテーブルに突っ伏す平沢に中野が盛大に呆れる。

と…

ガチャ

部室の扉が開いた。

『いらっしゃいませ！』

「……」

今度こそ見学者かと思い俺と突っ伏していた平沢を含めた全員で一斉に視線を扉に向ける。

「さわちゃんかよ…」

「期待して損した…」

「何よー　ていうか何気にヒドいわね咲也くん…」

現実とはそう簡単に事を進ませてはくれないようだ。
やってきたのは勧誘時期には疫病神に変化し、『秘密兵器』を提供しやがった山中顧問。

「アンタのせいで一時間マジで無駄にしたんだ…愚痴ぐらい言わせろ…」

「そうだぞさわちゃん！なんだよあの着ぐるみ！」

「え？やっぱりインパクトが必要でしょ？」

「いりません！そんなの！」

「澪先輩の言う通りです！全然ビラを受け取ってくれませんでしたよ！」

「私は楽しかったな～！」

「私も～♪」

「あぁん？」

「「ご、ごめんなさーい！」」

口々に疫病神に文句を言うなか、天然とお嬢様は懲りてないのか顔を見合わせてニコニコするので、ギロリと睨んで粛正する。

「ん～…そんなに不評だったか～…だったら明日の新歓ライブで名誉挽回しなきゃね～」

「……」

「何着て歌う？オススメはやっぱり去年も着たメイド服よ！咲也くんにはもちろん執事服！去年着てくれなかったから今年は着てもらうわよ！」

満面の笑みで背後に隠してあったメイド服と執事服を俺達に突き出し、やっぱり疫病神だと思わせる口振りに…

「「「制服で良いです！」」」

「…着るわけねェだろ」

平沢と琴吹以外で一刀両断する。

「私、着てみたいな～！」

「私も～♪」

「あぁん？」

「「「ご、ごめんなさーい！」」」

戯言をほざく奴らに粛正を。

「じゃあミニスカフリルメイドは？」

「「「制服で！」」」

「はぁ…」

俺達にバッサリ斬られた筈なのにケロッとしている疫病神にため息をついていると…

ガチャ

『いらっしゃいませ！』

「……」

再び扉が開き、ビラ配り班、疫病神に続き三度目の正直とばかりに視線を向けるが…

「和かよぉ…」

「空気読まねェなお前…」

「何？衣装合わせ中？ていうか何で咲也にそんなこと言われなきゃならないのよ…」

見学者？入部希望者？
俺達が望んでいる者ではなく、今年度から生徒会長に出世した真鍋がやってきた。

「どうしたの和ちゃん？」

「あ、うん、明日の新歓ライブについて軽く打ち合わせに」

平沢から投げ掛けられた疑問に、胸に抱えていた書類を一枚めくる真鍋。

「…つうか部長」

「ん？なんだ副部長？」

「…講堂使用届け、生徒会に提出したのか？」

一年の部活申請用紙に始まり、去年の新歓と学園祭でカチューシャはことごとく講堂使用届けを出し忘れているので今回はどうなのかと思ったが…

「へっへ～ん！ちゃんと提出したぜ！しかも和に！」

「……」

杞憂に終わった。
なるほどコイツは成長してるんだな…

「今日のＨＲが終わった時に提出してきたけど、もっと早く提出してね？律」

「うっ！澪～！和がいじめる～！」

「自業自得だ」

「ガーン！」

「……」

前言撤回…
やっぱり田井中は田井中だ…

「はぁ…」

とにかくビラ配りはやるだけやったし、体験入部も無駄じゃない筈だ。

明日の新歓で…

「演奏する曲目は…」

「『わたしの恋はホッチキス』と…あずにゃんパス！」

「え？えっと…『ふでペン～ボールペン～』と…」

「梓ちゃん！パス！」

「え？じゃあムギ先輩にパスです」

「『いちごパフェが止まらない』と…澪ちゃんにパ～ス！」

「えーっと…最後に『ふわふわ時間』「だな！」…なんで律がかぶせてくるんだよ」

「……」

『精一杯』やるだけだ。

第六十八話（前書き）

勧誘編その二です。

新歓ライブでもあります。

第六十八話

♪♪～♪…

「……」

「♪ふ～でぺ～ンＦＵＦＵ～」

♪♪～

「♪む～りか～もＦＵＦＵ～」

♪♪～

「♪くじけ～そうになるけれど～」

決して今は新歓ライブ真っ最中ではない。
場所は本番三十分前の部室。
機材を講堂に運び終え、出番まで部室にて待機中に、暇を持て余した俺は長イスに座り、アコギをチューニングがてら、取り留めのな

い曲をスローペースで弾いていると、いつの間にか平沢が俺の横にちょこんと座り、『ふでボール』を口ずさみだした。

「♪手～書きがＭＩＳＳＩＯＮ～」

♪♪～

「♪あ～ついわＴＥＮＳＩＯＮ～」

別に最初から『ふでボール』を弾いていたわけではない。
だが、平沢がやじろべえのように左右にフラフラと身体を揺らし、パチパチと小さな手拍子をし、リズムを刻み出したので、スローペースで取り留めのない曲調だったものを変更、脳と身体が覚えてる『ふでボール』の原曲に近いものに。

「♪い～んさ～つじゃつまらな～い～」

しかし、奏でているのはあくまで『原曲に近い曲』
そしてスローペースで弾いているので『ふでボール』とは異なる曲調になっている。

だが、そんなことなどお構いなしに平沢は完璧に合わせてきた。

「♪ハネるとこトメるとこドキドキまるで恋だね～
これからも～ヨロシクね一言そえて～」

本来なら音程がズレ、合わせるのは困難なのだが、そこはコイツの持つ『絶対音感』ですんなりと解決。

まぁ…無意識なんだろうな…

「♪はしゃぐ文字はピカピカにね～ほら磨きかけ～
まっすぐキミの～心まで～届けばいいな～
走る軌跡キラキラだね～そう乾くまで～
待っててふでペン～ごめんねボールペンは～おやすみしてて～」

♪♪～

「かなり本気よ～」

♪ジャッジャン！

無理矢理にアレンジした結果出来た曲。
言うなれば『ふでボール　歌謡曲Ｖｅｒ．』を何故か平沢と二人で生み出した本日。

新入部員を獲得する最大の山場でありチャンスである新歓ライブ当日だ。

「イエーイ！ご静聴ありがとうございました～！」

「……」

そんな大事な日…しかも本番まで三十分と迫っているさなか…
俺は何をやってんだ…

「わぁ～♪唯ちゃんと咲也君のコンビネーションバッチリ～♪」

「ホント！？ムギちゃん！？」

「うん！なんかこう…ほわわ～んって感じで暖かい気持ちになったもの～」

「エヘヘ～♪サッくん、褒められやんしたよ～♪」

「……」

本当に嬉しそうな笑顔で横に座っている俺に向き、モジモジし出す…
このまま放置したら某海賊漫画のトナカイ船医の感情と動作が一致しない、あのダンスのようになりそうだ…

「唯と咲也だけっていうのは斬新だったよ」

「はい！アレンジを加えて演奏するのっておもしろいですね！」

「名付けて…『ユイ&サク』って感じだな」

そして口々に感想を言ってくる面々。
コイツら、新歓の曲順や要点のチェックしてたと思いきや…ちゃっかり聴いてやがったな…

「はぁ…」

ため息一つ吐き、アコギと共に身体を伸ばしながら長イスからゆっくり立ち上がる。

「…『ユイ&サッくん』のほうがいいかも…」

何か平沢が思案顔になり真剣にブツブツと理解不能なことを言ってるのを華麗にスルーし、俺達を笑顔で見ていた秋山達を見回す。

「今回の新歓は去年とは訳が違ェぞ…」

「分かってるよ、梓のためにも…」

「澪先輩…」

「来年の軽音部のため…」

笑顔から一変、引き締まった表情になった秋山が中野に視線を向け、琴吹が両手を身体の前で重ねて何かに祈るように眼を閉じて聖歌を歌うように…

「これからの私達のためにも」

そして田井中が部長らしく、なおかつ軽音部の一員らしくニッと笑い、空気を和ませつつも、これからのライブにかける『想い』を言葉に乗せる。

「おぉ～！みんな気合い入ってるね～！」

「何言ってるんだよ唯、当たり前だろ」

「……」

平沢が長イスからの立ち上がって感心し、田井中が否応なしで言葉を並べている光景を尻目に、俺はアコギをギターケースに仕舞い、テレキャスが入っているギターケースを手に取る。

「だってさ…この新歓は私達にとって…」

田井中の口から次に出てくる言葉が分かる…なので…

「もうすぐ時間だ…行くぞ」

「ぁ…っと…サクの言う通りだな！」

それを遮るように違う言葉を並べる…

「そ、そうですねライブの時間ですね！」

中野がケータイを開き、時刻を確認したのを聞いて…

「……」

ガチャ

俺は一足早く、部室から出ていく…

「あれ？サッくん？どうしたんだろ？」

「……よっしゃ！このライブにかけようぜ！梓のためと軽音部のためと部費のために！」

「りっちゃん？」

「っ…部費は余計だって」

「澪ちゃん？」

「…ふぁ…ふぁいと！おー！」

「ムギちゃん？」

階段を下りる背後から三人分の足音が聞こえてくる…

平沢はまだ気付いてないみたいだ…

「咲也、律、ムギ」

「あン？」

「ん～？」

「どうしたの？」

「絶対に…！新入部員を…！」

「澪、分かってるよ」

「みんな、気持ちは一緒だから」

「…さっさっと行くぞ」

「あ…う、うんっ！」

気付いてないならそれもアリだ…

「どうしたのかな～みんな？ねぇ、あずにゃん」

「え、えっと…」

「あずにゃん？」

「……」

「……ぁ……」

そのほうが結果として良いんなら、教える必要性なんてこの際ナシだ…

「…そっか…今日の新歓ライブは…私達にとって…さい「唯先輩！」…あずにゃん…」

「行きましょ？サク先輩達はもう行っちゃいましたよ」

「……う…うん！そうだね！」

「はい！」

「任せといてよあずにゃん！私、この日のために必殺技開発したんだから！」

「必殺技…ですか？」

「うん！ういんどぶれーかーだよ！」

ブンブン！

「それはスポーツウェアですよ…ウィンドミルですか？」

「そうそう！それそれ～！」

「クスッ　期待してます」

「あずにゃんは大船に乗った気持ちでいたらいいさ～」

「すみません　それは不安です」

「えぇ～！あずにゃんのいけずぅ～」

『最後』の新歓ライブだってことは…

―――――――――――

「『新入生の皆さん　ご入学おめでとうございます！軽音部です！』」

「……」

新歓の本番を迎えたステージ上には、俺達軽音部がそれぞれ楽器を構えている。
講堂には卒業した前三年の色を引き継いだ緑のリボンとネクタイピンをした一年で溢れ返っていた。

「『私達は『放課後ティータイム』というバンドをやってて、毎日お茶とかしてるんですけど』」

（ＨＴＴだっつっうの）

平沢のＭＣに声に出さず内心でツッコミをする。

（しかし…増えたな…男子…）

俺達を見ている一年の連中を見ていて気付いたこと。
それは男女比率。
俺達の代から共学になった桜ヶ丘は年々男子の入学数が増えているみたいだ。
三年は少なく、二年はそれよりも一クラス平均三人程増え、一年は女子と大差ないぐらいに。
…それでもまだ女子のほうが多い…と思うが…

「『みんなで音楽やるのって、とっても楽しいです！よかったらぜひ軽音部へ！』」

パチパチパチパチッ！

「……」

所々ツッコミポイントがあった平沢のＭＣが終わり、拍手が鳴り響く。
どうやら第一印象は良かったようだ。

「ワン・ツー・スリー！」

田井中がスティックを掲げ、そしてカウントの後に…

♪♪♪♪…

一曲目である『私恋』を平沢のリフを支えるように俺のアコギと、中野のムスタングが。

♪♪♪…

秋山と田井中のリズム隊が。

♪♪♪…

琴吹のやわらかなタッチで指を鍵盤を滑らせ。

♪♪♪…

それらが混ざり合い、一つの『色』となり講堂に解き放つ…

「『♪なんでなんだろう気になる夜キミへの　この想い便せんにね
書いてみるよ…』」

……

♪♪♪…

ダダンッ！ダダンッ！
ジャァーン！ジャァーン！

（コイツ、マジでやりやがった…）

最後の曲である『ＦＦ』の後奏に突入した際に俺はテレキャスをかき鳴らし、次いで中野と秋山も続き、田井中は激しくスネアを叩き、琴吹は鍵盤を何度も押す。
講堂内が今日一番の盛り上がりをみせてヒートアップしていくなか、平沢が『待ってました』と言わんばかりにレスポールを改めて構えて、風車のように腕を回し出し、ウィンドミル奏法をやり出した。

ジャァーン！ジャァーン！

右手のピックがレスポールの弦に当たる度に鳴るその音色は、確かに一年連中を魅了していた。

（本番になったら化けるな…コイツはマジで…）

度々思い、感じる。
平沢という奴は普段はボーッとした天然なのだが、いざ一つの事に集中し、やり始めると別人のように変わる。
その変化も一年や二年の時と比べ、格段にレベルアップしている。

「……」

成長してるんだな…

ジャァーン！ジャァーン！

確かな手応えと、実感した成長を感じ…

ジャァー…ン…！

最後の新歓ライブは…

ワァーーッ！！

パチパチパチパチッ！！

一年連中からの鳴り止まぬ歓声と拍手喝采で…

「『ありがとうございました！軽音部でした！』」

幕を閉じた…

――――――――――

ライブが終わって約一時間。

俺達は入学希望者を待つために部室に戻っていた。

テーブルの上には琴吹が用意した高級そうな菓子やケーキ。

つまりいつでもウェルカム状態なのだが…

「誰も来ませんねぇ…」

「はぁ…」

中野がポツリと漏らした言葉が今の現状を物語っていた…
去年だったらライブが終わって三十分ぐらいで中野が軽音部の扉を叩いたが、今年は誰も扉を叩こうとはしない。

「まぁ、まだ時間あるし」

「そうですよね」

何故だ…？
今年は去年のような惨事は起こしてないのに何故誰も来ない…？
ライブは完璧だった。
逆にアラを探そうにも出てこない、非の打ち所がない程の完璧な演奏だった。
ビラ配りだって昨日はだいぶ捌いた。
なのに…何故…？

（もう一押し…するか…）

結果が出なければ求めるのみ。
色々悩むより行動を。

そう判断した俺はネガティブになりかけていた頭を軽く振り、長イスに寝そべっていた身体を起こし、鞄から余っていたビラを取り出す。

「サッくん、どうしたの？」

ビラを持って立ち上がった俺に疑問を感じたらしく、両手で両頬に頬杖をついていた平沢が視線を俺に向けてくる。

「…ビラ配りしてくる」

「あ、だったら私達も行くよ」

両頬から両手をテーブルに移動させ、勢い良く立ち上がるが…

「いや…お前らは部室に残ってろ…」

「へ？」

ビラの束を団扇代わりにして扇ぎながら制する。

「入部希望者が来た時、部室に誰もいないのはマズい…だからお前らは残ってろ…」

要点を簡潔に伝え、反論やその他諸々の意見を聞いてる時間がもったいないので…

ガチャ…バタンッ

足早に部室から退散する。

「行っちゃった…サッくん」

「あの…私達も手伝ったほうが良いんじゃないですか？」

「大丈夫だって、こういうのはサクに任せとけ」

「でも…」

「梓、咲也は口には出さないけど、梓のためにやってるんだよ」

「え…？」

「私もね、昨日のビラ配りの時の咲也君の態度見てたらそう思うの」

「……」

「だから、今咲也を手伝っちゃダメだと思うんだ、私は」

「サク先輩…」

「あずにゃん、サッくんのためにもここで入部希望者を待ってよ？」

「…はい、そうですね」

「ていうか何で唯が最後持ってくんだよ～！」

「りっちゃんや…この世は弱肉強食なんだよ！」

「にゃにお～！こしゃくな～！」

「やれやれ、こんなに騒がしかったら入部希望者が来ても帰っちゃうかもな」

「そうね～」

「……」

―――――――――――

部室から下駄箱に直行…ではなく寄り道を。

ガチャ

「……」

「Ｚｚｚ…」

スタスタ…

ガンッ！

ガシャンッ！

ゴンッ！

「ギャアァァァッ！！」

寄り道先である我が教室の扉を開け、案の定そこには昼休みから自分の席で眠りこけているアホ。

そのアホの椅子を蹴り、倒した後に思い切り後頭部を強打し、床をのたうち回る。

「誰じゃあッ!?俺の頭脳欲しさに寝込を襲った奴はッ!」

「…世界中捜してもそんな奴はいねェっつうの」

「お前か咲也この野郎ッ!何しやがんだよッ!」

「爽やかに起こしてやったっつうのにそんな態度取るかお前は…甚だ残念だ」

「どこに爽やか要素があったッ!?」

「…お前の後頭部強打」

「そんなわけあるかッ！」

「ンな事どうでも良いんだよ…」

「うわッ！びっくりしたッ！やっぱりびっくり箱がテメェはッ！」

「……」

寝起きでよくもまぁ、こんなに騒音を発生出来るな…
つうかうるせェ…

「とにかく行くぞ…」

「いや、行くったってどこに…」

ガシッ

ズルズル…

「およよよッ！？引きずんな！引きずんな！」

のたうち回るパフォーマンスのまま床に座り込んだままだったアホの襟首をガッチリ掴み、問答無用で教室から出て廊下を突き進む。

「イデデデッ！ケツが！ケツが燃える！」

「……」

「イテェっつうのッ！ケツがマッチ棒に変化すんぞッ！」

「…やったな」

「良くねェよッ！？」

『このびっくり箱め』などほざいているがものの見事にスルーし、目的地である校庭を目指す。

―――――――――

「ケツイテェ…ゼッテェ猿のように真っ赤になってんぜ…」

「…口より手ェ動かせ」

「今日なんかヒドいよお前!?」

修司と共に校庭に行ったのは良いが…

「受け取らねェな…」

「無視すんなやコラッ！」

人数こそ少ないが確かに一年連中はいる。
だが…軽音部のビラを受け取ろうとする奴はほぼ皆無。

つまり、軽音部には興味ナシ。

ここにいる連中は『どっちも』躍起になってんのかもな…
新歓が終わり、めぼしい部活に向かった一年はここにはいない。
いるのは、迷っているか悩んでいる連中だろう。

そして俺達を含めた、良い意味では『努力』悪い意味では『悪足掻き』な勧誘をしている部活の連中ばかり…

「はぁ…」

マジでこのままじゃヤバい…
来年…

「なぁ咲也」

「…あン？」

「整いました」

「はぁ？」

「現在のビラの状況とダイエットを始めて一週間と解く」

「…その心は？」

「どちらもなかなか減らない！」

「……」

どや顔でサムズアップするアホに…

ドガッ！

「うげぶッ！」

どや顔から苦悶の表情になるような制裁をプレゼントしてやる。

「…口より手ェ動かせっつったろうが」

「…なんだよ…お前がなんか難しい顔してたから…和ませようと…頭をフル回転したのに…」

「…ありがた迷惑」

「ヒドいぜ…親友…」

「はぁ…」

腹を押さえて蹲っている物体から、視線を過ぎ行く一年に向けてため息をつく。

ザッ

そして踵を返し、一歩踏み出す。

「ちょいと…やっこさん?どこ行くの?」

「…気分転換に、なんか飲み物買ってくる」

「あ、なら俺のもヨロ～」

「ふざけんな」

「止めろよッ！言葉の暴力ッ！」

「ウザいアホカスムシ」

「グハァ…影宮　修司…ここに散る…」

「……」

忙しいなコイツ…
蹲ってると思いきや急に立ち上がるし、かと思ったら地面に大の字で倒れるし…

「やっぱアホだ…」

「だぁれがアホじゃあッ！」

「……」

また立ち上がった…
ここまでくると本当にウザい…

―――――――――

ピッ

ガシャン！

「……」

ビラの束を自販機の横に置き、コーヒーと炭酸ジュースを購入する。

「……」

右手で炭酸ジュースを振りながら、ビラを取り、アホの元に戻ろうと、ビラに手を伸ばした瞬間…

ザァァァッ！

「ッ！」

突如として突風が吹きすさぶ。
それにより…

「マジかよ…」

何も押さえる物がなかったビラの束は空中に舞い上がり、四方八方

に乱雑し散乱する…

「腹立つ…」

まるで、ビラ配りなど無駄だと嘲笑うかのような桜を纏った突風に怒りを覚える。

「はぁ…」

しかし、だからといって、投げ出すわけにはいかず、ため息でなんとか怒りを押さえ込み、散らばったビラを回収するために腰を下ろす。

「……」

一人黙々と作業を始めようとしたら…

「よいしょ…」

誰の声が聞えた…

「ふぅ…今日は風が強いですね…」

「……」

集めたビラを笑顔で俺に差し出す誰かは…

「どうぞ」

平沢の妹であり、通称【出来た妹】の…

「咲也さん」

平沢　憂だった…

第六十九話（前書き）

勧誘編完結です。

第六十九話

「これで全部ですね」

突風により四散したビラを平沢妹と共に回収し、自身が集めたビラを整然と四方を揃え、姉譲りの笑顔を浮かべて賞状でも渡すように両手で差し出してくる。

「……」

それを無言で受け取り、俺が回収したビラの上に重ねる。
そしてこの事態を糾明するために閉じていた口を開く。

「お前…何してんだ？」

「え？」

言葉足らずだった。

意図が理解出来なかったように、やはり姉譲りのキョトン顔でコテンっと首を傾げる。

「…何でここにいるんだ？」

今度は詳しくはっきりと言葉を発声。

「あ、それは…」

意図を理解したらしく微笑んで実に簡単な理由を告げてきた。

「偶然近くを通ったら咲也さんがいたので、声を掛けようとしたんです」

「……」

で、俺が桜吹雪と紙吹雪の猛威の被害を被る場面を目撃した…と。

「あの、咲也さん」

「あン？」

ビラを回収する際に自販機の横に置いてあった二つの飲料を取ろうと身体を自販機に向けたが、再び平沢妹に向き直す。

「軽音部の勧誘はどうですか？」

その発言に再び突風で吹き飛ばないように皺が出来るくらいに力強く右手で掴んでいたビラの束の厚さをこれみよがしに見せつける。

「…絶好調だ」

「うわぁ～！そうなんですか～！」

自分自身のことのように花が咲いたかのように満面の笑みで喜ぶが、次に俺の口からもたらせる言葉で花はしぼんでしまう。

「マイナス方向でな…」

「え…それって…」

「…誰も受け取らねェっつうこと」

「ぁ…」

さっきまで満開だった笑顔が見る見るしぼみ、曇った表情になる平沢妹。

「はぁ…」

サァァァ…

軽音部の勧誘が原因不明な程悪い意味で絶好調な現状にため息を漏らしていると、再び桜を纏った風が穏やかではあるが俺達に吹き付ける。

先程の一件のせいでこんな些細な風でも俺の神経を逆撫でしていく…はためく制服と揺れる髪が鬱陶しい…

サァァァ…

「何が…いけないんでしょうか…」

「……」

俺達の周囲を舞い踊る桜…
そんななかで揺れ動く短いポニーとなびく制服を気にするでもなく、普段は中々見せることはない、どこか物悲しい表情で呟く…

「さぁな…それが分かりゃあ苦労はしねェよ…」

「はい…」

「つうか…」

「…はい？」

「…何でお前がそんな顔してんだよ」

「え…？ど、どんな顔してます？」

「ラーメン屋で替え玉しようとしたが、不幸にもその店は替え玉をやってなかった…だから落ち込む…みたいな」

「クスッ　あははっ　なんですかそれ～」

「……」

一変し、口元に手を当ておかしそうに笑う。

あの物悲しそうな表情は、恐らく姉と中野の事を心配故…だったんだろう。

感受性が高いというかなんというか…

他人のことを思いやる心が備わってんだなコイツには…

「まぁ…とにかく、なんとか新入部員を獲得しねェと…」

「そうですね、お姉ちゃん達が卒業しちゃったら…来年、梓ちゃん一人になっちゃいますから」

「…このビラが原因じゃねェだろうな」

「え？」

右手にあるビラの束から一枚抜き取り平沢妹に見せつける。

「あ、お姉ちゃんが描いたビラ」

「こんな奇抜で風変わりで意味不明なイラストが載ってるからな…
見た奴引くぞ…」

たまに平沢が部室のホワイトボードに様々なイラストを描いてるが、
いかんせん画才がないのかいつも意味不明なイラストになっている。
そしてこのビラに遺憾なく反映していた…

「あはは…確かに独創的ですよね」

「……」

苦笑いで済ませるか…
流石はシスコン…

「あ、あの！」

「あン？」

しかしそこは出来た妹。

「お姉ちゃんは頑張ってこのビラ作ってて！た、確かに独創的でちょっとだけ…あの…へ、変ですけど…！でも新入部員に入部して欲しいって言って…！だから…その…えっとぉ～…」

両手を握り、必死にフォローする。

「はぁ…」

俺が悪いのかこれは？
限り無く正論だと思うが…
その正論はコイツとってはそうじゃねェんだな…

「はぁ…」

再びため息をついて、未だに熱弁を振るってる平沢妹の暴走を止めるため、前々から思っていた疑問をぶつけることに。

「お前さ…」

「最近だったらあんまりアイス食べたいって言わなくなったし…って、はい？」

「……」

何の話題になってたんだ？

「…部活とかやらねェのか？」

とりあえずアイスの話題はスルーし、こんな疑問をかぶせる。

「え？部活ですか？」

「別にお前に軽音部に入部しろとか、よこしまな考えはねェ…興味本位だ…」

本当にこれは興味本位。

てっきりコイツは姉のいる軽音部に入部するものだと最初は少しだけ思っていた時期があった。

…それは去年の今頃。
軽音部にモジャ団子と共に見学にきた時。

結果としてモジャ団子は軽音部には入部せずに、その代わりのように中野が入部した。
しかしコイツは入部するとも何とも言ってない。

まぁ…暗にモジャ団子の付き添いだったんだろうが…

「…えっと…すみません、私、家の家事をしなくちゃいけないですし…それに…」

「……」

つらつら考えて、少しだけ顔を俯かせ、申し訳なさそうに言葉を並べる。

「お姉ちゃんのお世話をしなくちゃいけませんので」

「……」

言葉を切って、顔を上げて至高な様子で俺を見上げてくる。

つうか…世話って…

アイツ今年で十八だよな？

何やってんだ…お前ら姉妹は…

「ですから、部活をやる時間がないので…」

納得。

後者は納得出来んが、それ以外なら頷ける。

私生活に支障を来すなら部活は無理だな。

「なるほど…そういうことか…」

「はい…すみません…」

「何で謝んだよ…」

「いえ、私が軽音部の力になれないから…」

「……」

「だから、申し訳なくって…」

「はぁ…　くだらねェこと言ってんな」

「え？」

「軽音部を気にかけてくれてんじゃねェか…」

「咲也さん…」

「それで十分だ…」

あんな物悲しい表情をして、軽音部のために悩んでいる。
そして力になれないと嘆く。
それだけで十分だろ…

「咲也さん…私…」

十分なのだが、コイツはそれ以上な…十二分過ぎる程のことを口する…

「今は無理ですけど…」

「あン？」

「来年、梓ちゃんが一人だったら、私！軽音部に入部します！」

「……」

それは俺達軽音部が望んだ言葉。

そして俺がどんな回答をするのか待つように、決意が籠った瞳でジッと俺に視線をハズさずに見上げて見つめる平沢妹。

「…良いのか？」

「はい」

迷うことなく頷く。

「……」

そんな平沢妹に左手に持ったままだった一枚のビラを差し出す。

「あの…？」

「…入部届だ」

「え？」

「…今は無理っつったなお前」

「あ、はい」

「だったらコレが予約用紙みてェなもんだ…」

サァァァ…

吹き抜ける風…
それによりビラはユラユラと揺れるが…

「はい！ありがとうございます！」

しっかりと両手で掴み、俺の手から平沢妹の手に渡る未来の入部届…

「お姉ちゃんが作ったビラだから大切にしなきゃ」

「……」

風に飛ばされないように胸に抱えて幸せそうに笑う。
こんなビラでも姉が作ったからという理由で大事にする姿は、何というか…レスポールを大事に扱う姉そっくりだ…

「やっぱ姉妹だな、お前ら…」

「え？」

「個人的に感想だ、気にすんな…」

「あ、はい」

「…じゃあ俺は行くぞ」

そう告げて二本の飲料を取り、平沢妹の横を通り過ぎる。

「咲也さん！勧誘頑張ってください！」

背に受けた平沢妹からの激励に…

「……」

言葉で返答せずに、右手を軽く上げてビラの束ごと左右に小さく振ってそれに答える。

――――――――――

炭酸ジュースを振り、修司の元に足を進めながら思考を巡らせる。

（とりあえずは…先が見えたか…）

来年という条件こそあったが、一応部員の獲得に成功した。
しかし…それでも中野と平沢妹の二人となっただけ。
俺達三年が去った後の軽音部の廃部が免れたわけじゃない。

（せめて後一人ぐらい…）

誰か一人が入部し、中野と平沢妹と合わせて三人になり、来年一人入部してくれれば万事ＯＫなのだが…

「おッ、お帰りこの野郎」

「…ビラは？誰か受け取ったか？」

「ぜ～んぜん　全くダメだぎゃ」

現実は厳しいな…
修司が持っているビラの束は一向にその数を減らしていない。

「これ以上は時間の無駄かもな…」

「だな、他の部の奴等もそう思ったんじゃねェの？さっきから引き上げていってんぜ」

確かに。
修司の言う通り勧誘をしている部の連中は俺がここから離れる前に比べ、一年連中と共に姿を減らしていた。

「はぁ…　潮時だな…」

「んじゃ、我々も退散するか～」

特に疲れることをしてない筈なのに、疲労感を漂わせながら修司がビラの束を俺に渡してくる。

「サクッチは部室に戻るんだろ？」

「あぁ…後サクッチ言うな」

「本当はこの後お前と遊びたかったんだが…俺は大人になったからな、仕方ないという理由で納得してやるよ」

「……」

なんか腹立つ言いかたしやがるな…

「修司」

「なんだい親友？」

腹立たしい気持ちと親友発言を何とかスルーし、炭酸ジュースを差し出す。

「おッ！ジュースじゃないか～！」

「…トラップを仕掛けてるが、半年前と同じ轍を踏むなよ」

「ん？トラップ？半年前？」

頭にクエスチョンマークを浮かべた修司の手に確実に炭酸ジュースが渡ったのを見届けてから俺は踵を返し、校舎に歩いていく。

「バイバイぐらい言えよな～　全く最近の若者は…」

プシュ！

プシャァァァ！

「ギャアァァァッ！スプラッァシューッ！眼がーッ！眼がーッ！」

先程の平沢妹の激励とは全く性質が違うアホの断末魔の叫びを聞き…

（期待を裏切らねェ奴…）

こんなことを思い、コーヒーを啜りながら部室を目指す。

――――――――――

後一段階段を上がったら部室に着くという正にその瞬間に…

ガチャ

自動的に扉が開き、中から…

「あ、サク先輩」

未来の軽音部を担うツインテールの後輩が姿を表し階段を上がってきた俺に視線を向ける。

「どうでした？勧誘は？」

「絶好調だ…」

平沢妹にやった通りに、またビラの束を見せつける。

「本当ですか！？」

もとよりビラの厚さなんて知らないんだろう…

口元を綻ばせツインテールを揺らしながら、一歩俺に近付いてくる。

「マイナスな意味でな…」

「え？」

しかしその一言で首を傾げ、やっぱりと言えばやっぱりな疑問を投げ掛けてきた。

「どういう意味ですか？」

「…ビラを受け取ったのは一人っつう意味」

「……」

あ、呆れてんなコイツ…

「もう！サク先輩！」

そしてツインテールと両手を上下にパタパタさせながら火山噴火。

「紛らわしいこと言わないでくださいよ！期待しちゃったじゃないですかぁ！」

頬を膨らませ、プンスカしながら俺に詰め寄ってくる。

「…期待して良いんじゃねェの？」

「え？」

「…ビラを受け取ったのは一人っつったろ」

「たった一人じゃないですか…」

火山は休眠し、呆れているのか、落ち込んでいるのか分からないがシュンと肩を落とす。

「…その一人が光明だ」

「え…？それって…」

「さぁな…後は自分で考えろ…」

言っても良いんだろうが、いかんせん今すぐではない。
結果としてアイツは入部するんだろうがそれは来年の話。
それにアイツ自身が中野に告げるかもしれねェし。

「やっぱりサク先輩は意地悪です」

『光明』発言が効いたんだろうか、相変わらず頬を膨らませているが、どこか嬉しそうな表情で俺を見てくる。

「つうか…アレなんだよ…？」

実は先程からチラチラ視界に入る、ある物体が気になって仕方なかったりする。
なのでその物体を指差し中野に問い掛ける。

「私もさっき気付いたんですけど、唯先輩が部室を入りやすくしたって言って何か置いてましたけど…」

「逆効果だろ…コレ…」

「ですよね…」

『ある物体』とか『コレ』とは部室の扉の前に堂々と置かれている緑色の生物…蛙を模した置物。

その蛙が片手を上げ、どっかの洋菓子店のマスコットキャラのぺ○ちゃんみたいな表情で鎮座している。

ご丁寧に『軽音部へようこそ』という文字とビラにも描かれてある平沢妹曰く、独創的なイラストが描かれた段ボールの看板を首に掛けている。

こんなもんが部室前にあったら入部希望者が来た時、不審に思うこと間違いなしだ…

つうかどこでこんな物を入手したんだアイツは…

「片付けちゃいましょう」

中野が自分の背丈の二分の一ぐらいの蛙の置物を持って部室に突入する。

ガチャ

「あれ～？あずにゃん？トイレ行ったんじゃないの？」

「なぁ！？」

扉を開けた途端に平沢の、のんびりボイスが聞こえ、その内容に中野がチラチラとまだ部室の外にいる俺を見ながら頬に赤みが差す。

まぁ…男にそういうのは聞かれたくねェよな…

「そ、そんなことはどうでも良いんです！」

「あっ！ケロー！ダメだよあずにゃん、ちゃんと部室前に置いとかなくっちゃ」

「ダメなのはお前の思考だ…」

部室の扉の後ろにいた俺が、的を得たツッコミを入れながら中野を避けて中に進入する。

「サッくん♪お帰り～♪」

「咲也、どうだった？」

平沢がニコニコしてタブーを発しながら俺を迎え入れ、秋山が席から立ち上がる。

「絶好調だ…」

「えっ！？ホントっ！？」

「悪い意味で…」

「それってつまり…」

「…さっぱりだ」

多くの人間はこういう風に答えると、まずは喜び、そしてうなだれるか呆れるのが普通らしい。
現に秋山はうなだれてるし。

「普通に答えろよサク、変に期待するだろ～…」

田井中がテーブルに突っ伏しながら非難の視線を俺に与える。

「こっちの結果はこの通り散々だったが…そっちは？」

テーブルに近付き、その上にドンッと雑にビラの束を置き、入部希望者が来たかどうか尋ねる。

「誰も来てないわ…」

「おかしいなぁ誰もこないなんて、部室入りやすくしといたのに」

琴吹がションボリしながらそう答え、平沢が中野が持っている蛙の置物を見る。

「あのな…あんなもん部室の前に置くな」

「そうですよ、逆効果ですから唯先輩、片付けてください」

「えぇーっ!?良いと思ったのに～!」

「良くねェっつうの…」

「でもでもサッくん!かわいいよね?」

「…邪魔なだけ」

「はぅ！あずにゃ～ん…」

「片付けてください」

「うぅ…サッくんもあずにゃんも意地悪だよ～…」

「それはサク先輩だけです」

「あぁ？」

「まぁ、とにかくサクと梓もこっち来て座れよ」

「紅茶淹れるね～」

「ムギちゃん、私のぶんも～」

「唯はまずアレを片付けなさい」

「ぶぅ～！ケチケチ～」

秋山の発言に口を尖らせながらトコトコと中野に近付く平沢。

「はぁ…」

結局…下校時間ギリギリまで待ってみたが、入部希望者どころか見学者も現れなかった…

――――――――――

翌日の放課後。

「……」

平沢達四人を先に部室に行かせ、俺は単身とある部を目指し、ヘッドフォンから流れる音楽を聴きながら校内を歩いていた。

「ここ…か…」

空き教室が並ぶ校舎のある一角。
そこのネームプレートを見上げて求めていた部室であることを裏付ける。

【ジャズ研究部】

手書きで書かれたその文字は実にシンプルだ。

♪…♪…♪…

「……」

しかしそのシンプルさとは裏腹に部室の中からは途切れ途切れだが様々な楽器音が流れていた。

「……」

ヘッドフォンを耳から首に移動し、部室の窓からチラッと中の様子を伺う。

そこには軽音部の部員数を遥かに凌ぐジャズ研部員達がギターやベース、サックス、トランペット、トロンボーンやクラリネット等々、ジャズに必要な多種多様の楽器を奏でている姿が見られ、中でも眼を引いたのは二年が一年にギターを教えてる姿。

「……」

そもそも何故、俺がこんなことをしているのか？

それは軽音部のように音を主体としている他の部は、新入部員を獲得出来たのかという実地調査と銘打った、田井中曰くのスパイ活動。

そして白羽の矢が立ったのは軽音部とスタイルが似ているジャズ研。

「がっつり入部してんな…」

見る限りでは新入部員の数は約五人。

いかにして入部させたのか気になるが、ただ眺めているだけでは何も得られない。

「どうするか…」

思い切って突入して単刀直入に聞くか？
そんな傍若無人なことは出来んな…
それに俺が軽音部員だと知れたら軽音部のイメージがた落ち、イコール入部希望者は遠ざかる…

「はぁ…」

（無駄足だったか…）

意味のないことをしてしまったと内心で嘆き、部室に向かおうとヘッドフォンを耳に移動しようした瞬間に…

「あの、どうしたんですか？」

「あぁ？」

背後から誰か（声からすると恐らく女）に声を掛けられヘッドフォンを移動させようとした動作を止めて振り返る。

「あ、やっぱり咲也先輩」

「……」

俺とほぼ接点がない意外な人物がギターケース…いや、ネックの長さからしてベースが入ってあろうケースを背負って俺を見ていた。

「こんにちは咲也先輩」

その人物はペコリと小さくお辞儀をする。

コイツ…名前は確か…

「佐々木…だったか」

「いえ、鈴木です、鈴木　純」

苦笑いを浮かべるコイツは中野と平沢妹の友人であり、かつて軽音部に見学に来た通称モジャ団子。
そんな奴が何故ここにいる？

「咲也先輩は部室の前で何してたんですか？」

俺がしたかった質問を先にコイツにされ、欺瞞しようかと思ったが、する必要もないので正直に答える。

「…スパイ」

「え？スパイ！？」

間違ったことは言ってない。

「ウチの部をスパイって…何かあったんですか？」

「…ウチの部？」

サラリと放った言葉に思わず眉をしかめてオウム返しを。

「あ、はい、私ジャズ研に入ってるんですよ」

「……」

「あ～…梓から聞いてませんでしたか？」

ポリポリと頬をかいていた指を、そのまま自分に指差すモジャ団子…もとい、鈴木にほんの些細だが怒りが湧いた。

つまりコイツは去年、軽音部には入部せずにジャズ研に入部した…と。

確かに去年の勧誘は惨事を生み、コイツには悪い印象を残したが、だからってよりによって同じ音楽を扱うジャズ研にいくか…

まぁ…誰がどの部に入部するのはフリーダムだが…何だかな…

「あの～咲也先輩」

「あぁ？」

「ジャズ研をスパイって、どうしてですか？」

興味津津というオーラを醸し出しながら聞いてくるので渋々口を開く。

「お前らのとこは新入部員入ってんだろ？軽音部はさっぱりだからな…」

「あぁ～　そういうことですか～」

合点がついたらしい。
ポンと手を叩く。

「…お前らはどうやって勧誘した？わいろでもやったのか？」

良い機会が訪れたんだ。
コイツはジャズ研部員というなら勧誘のノウハウを聞き出すために
改めて鈴木に向き直る。

「そんなの送ってませんよ～…」

「…分かってる」

「あ、そうですか…えーっと、どうやってと言われても普通にビラ
配ったり、見学に来た新入生に演奏を聴かせたりとかですけど」

「ビラ配りは軽音部でもやってんだがな…」

演奏を聴かせるなら新歓でやった。
何も特別なことをしている訳じゃない…か。

「あの、これは私の個人的な意見なんですけど」

「あぁ？」

鈴木がピンッと人差し指を立てておもむろに口を開いた。

「今日、梓にも言ったんですけど、軽音部って六人が結束して見えて外から入りにくいんじゃないでしょうか」

「……」

その発言に思わず言葉を失う。

もしそれが原因ならば、どうしようもない。
バンドはチームワーク…鈴木の言葉を借りるなら『結束』が大事。
つまり俺達は既に完成してしまった一つのグループ。
そこに悪い言いかたをするなら『イレギュラー』が入り込んだら、

招くのは崩壊。
あくまで例えで悪い言いかたならばだが…

「…そこを突かれると、お手上げだ」

「でもネガティブに考えるより、こんな風にポジティブに考えたほうが良くないですか？」

「まぁな…」

要は考え方か…
ポジティブに考えると、俺達は外部から見ると纏まりがあるバンド。
…ライブ限定でだが…

「…参考になった、そこを踏まえて何とかしてみる」

「はい！スパイをやったかいがありましたね」

微笑みを浮かべて俺をまっすぐに見てくる鈴木に…

「そうだな…」

と、小さく答えて踵を返す。
そして歩き出そうとしたら…

「あ、咲也先輩」

何故か呼び止められた。

「あン？」

「今って軽音部のビラ、持ってます？」

「あぁ？」

「憂が来年梓が一人になるから軽音部に入部するって言ってビラを見せてきたんですよ」

「……」

「でも先輩達が卒業したら梓と憂だけだったら二人だけになので…」

「…お前が来年に入部するってか？」

「はい！その通りです！」

まさかの入部希望者発見…
しかも平沢妹と同じ条件付きで。

「そうしてくれるのは有り難いんだが…ジャズ研どうすんだ？」

掛け持ちは厳しいぞ。
出来んのかよコイツ…

「大丈夫です！なんとかします！」

「…マジでやれんのか？」

「はい！梓と憂だけじゃ心配ですからね」

そうか？
しっかりした二人だと思うが…

「分かった…」

熱意に押されたというか、友達想いというか…
そこまで言うならコイツにも託すか…軽音部の未来を…

「ん…」

鞄からビラを一枚取り出し、鈴木に渡す。

「任せてください！来年になったら新入部員を獲得してみせますから！」

「ぶっちゃけ不安だ…」

「ヒドいですー！私は出来る子なんですよー！」

どっかのツインテールみたいに両手をパタパタさせる。

…一応コイツもツインテールか…

「まぁ…期待しねェで期待しとく」

「大いに期待しといてください」

「…じゃあ俺は行くぞ」

胸を張る鈴木にやっぱり不安を覚えながら改めて踵を返す。

「咲也先輩！」

しかし再度呼び止められた…

――――――――

鈴木と別れ部室に向かうため階段を上がっていく。

そして踊り場を回り、最後の階段を上りきった先に…

「中野…？」

部室のドアノブに手をかけジッとしている中野がいた。

「……」

そんな中野に疑問を感じながら声を掛けてみる。

「…何やってんだ？」

「あ、サク先輩…」

それに気付いた中野がどこか戸惑った表情で首を小さく動かして俺に向ける。

「ちょっと…」

「あぁ？」

何がちょっとなのか尋ねようとしたが、それは出来なかった。
何故なら部室から聞こえてきた平沢の声に聞き入ってしまったから。

『今はこのままでいいよ』

「「……」」

『こうやってみんなと部室に集まって…あ、今はあずにゃんとサッくんはいないけど』

俺達の間に会話はなく、ただ黙って平沢の言葉に耳を傾け続ける…

『お茶飲んで、練習して、演奏して…ずっと六人で』

「「……」」

ずっと六人で…か…

それもアリかもしれない。
現に隣にいる中野は感動したような表情でいるし。
来年に向けて入部希望者は条件付きだが獲得出来た。
これ以上の高望みはいらんだろう…

「サク先輩…」

「あン？」

中野がドアノブから手を離し、ゆっくりとした動作で俺に振り向く。

「先輩達が私のために…特にサク先輩は必死に勧誘をしてくれて嬉しかったんです…」

「……」

「でも、さっきの唯先輩の言葉聞いて…それも良いかなって思っちゃいました…」

「あぁ…」

「私…！もし来年…！一人になっても頑張るので…！だから…」

今まで視線を下げて、俯かせていた顔を上げて少しだけ涙が溜まった瞳で俺を見つめ、最後の言葉を。

「私…！今年はみなさんとやっていきたいです！本当にサク先輩には申し訳ないんですけど…でもそう思っちゃたんです…！」

「……」

中野自身、胸中に去来する感情の正体が分からないんだろう。
だから『思っちゃいました』なんて言う。

「…良いんじゃねェの？」

「え…？」

その感情の正体は喜怒哀楽の内のどれか。
間違っても『怒』と『哀』ではない。
そして涙はうれし泣きというやつだろう。

「…お前自身が後悔せずに納得なら、俺の口からは何も言えねェ」

「サク先輩…」

『そうだな、あと一年で何とかしようぜ！』

部室から田井中の声が聞こえてきた。

「…部長もこう言ってる」

「律先輩…」

「今年は六人でやる…それで良いんだな？」

「…はい！私、後悔なんてしません！」

手の甲で涙を拭い、はっきりとした口調と、真剣な表情で今年の軽音部の道を伝える。

「よし…ならアイツらにも伝えてやれ」

「はい！」

ドアノブに手をかけ…

ガチャ

今度こそ俺達は部室内に足を踏み入れた。

「「はむ…　ぶーっ！」」

俺達が部室に入ってます眼にしたのは軽音部の真骨頂であるティータイムをしている四人と雑誌を読んでいる山中顧問。

そして俺達の存在を確認した平沢と田井中が食べていたケーキを噴き出す。

マナーがなってねェな…

「ご、ごめん！ごめん！すぐビラ配りに行くから！」

どうやら俺と中野に勧誘しないでだらけてると思われたらしい。
平沢が素早く立ち上がり、一目散に扉に駆けていく。

「さぁ行こうか！サッくん！」

俺の横を通り過ぎる際に、俺の腕をとって半ば強引にビラ配りに行こうとする平沢。

「…もうその必要はねェみてェだぞ」

「ほぇ？」

そんな平沢を制し、中野に視線を向け、平沢も中野に視線を向ける。

「ムギ先輩、私、ミルクティーください」

「梓ちゃん？」

首を傾げる琴吹にお構いなしに、先程俺に述べた決意を口にし出す。

「私、今年まではこの六人だけでやりたくなりました」

「あずにゃん…！」

中野の決意を聞いた面々に笑顔が宿り、納得したかのように頷く。

「わぁ～！あずにゃん！」

未だに俺の腕を掴んでいた平沢が感激のあまり中野に抱き付こうと、両手を広げて準備完了。

「唯先輩、これからはもっと厳しくいきますからね」

「えっ？」

「はい、ギター出して」

「へっ！？」

しかしスタートは切れずにまさかの中野のスパルタ発言に冷や汗を流す。

「……」

俺はそんな光景を横で流しながら、テーブルに近付き、顧問の横に

余っていた椅子に座る。

「おっ　珍しいなサクがコッチに座るなんて」

「…アッチに座ってたら平沢に助けを求められそうだからだ」

「クスッ　確かに唯なら咲也に言いそうだよな」

「『助けてサッく～ん』ってな！」

「りっちゃん上手～♪」

「サッくん言うな…後お前も褒めてんじゃねェっつうの」

「ねぇ咲也くん」

「ンだよ…」

「咲也くんが何かしたの？梓ちゃんに？」

「してねェよ…」

顧問が中野と平沢を見ながらの発言に即刻否定する。

「何かしたんなら平沢の方だ…」

「え？どういうこと咲也？」

「さてな…」

「「「？」」」

本日四月上旬。
新学期が始まり四日。

「助けてサッく～ん！」

「あ、やっぱりサクに助けを求めた」

「ヘルプ～っ！」

「知らん」

「はぅ！や、やっぱ新入部員カモーンっ！！」

桜ヶ丘高校軽音楽部部員数六名。

未来の部員二名。

現在あまり好ましくないが、ゆったりと活動中。

『咲也先輩！』

『…今度はなんだ』

『これは梓にも言ってないんですけど…』

『あぁ？』

『軽音部は絆が固いんだなって思います』

『はぁ？』

『だって先輩は梓のためにわざわざジャズ研の部室まで来て、諜報活動してるじゃないですか』

『諜報活動…つうかお前、何気に恥ずかしいこと口走るな』

『え？ヒ、ヒドいですーっ！』

第七十話（前書き）

掃除編です。

第七十話

「よっ…と！」

ズボッ！

グラ…

「さわちゃん、これだろ？」

野菜でも引き抜いたように『それ』を発掘し、田井中が顧問に渡そうと俺達に振り向いた。

ガシャァン！ガラガラ…

「律！？」

「「りっちゃん！？」

「あーぁ…」

しかしその途端に頭上から幾重にも重なった歴史の物体が田井中の頭上に降り注ぎ、小さな小山の出来上がり。
当然、田井中はそれに巻き込まれ…

「う…うぷ…」

唯一に難を逃れた片手だけが小山のてっぺんからのぞかせ、指を小さく動かす。

その光景はさながら、某海賊漫画の知的な考古学者が、能力を発動させ、一輪の花を咲かせたようだ。

このような事態の道筋を判明するには少々時間を巻き戻す必要がある。

――――――――――

キーンコーンカーンコーン…

校舎内に鳴り響く無機質なチャイム音。
それが意味するのは、始まりか終わり。
この場合は後者の意味を持ち、即ち六時間目の終業のチャイム。

その後に教室にやってきたであろう担任のＨＲを、五時間目で発揮した睡眠授業のまま突入し、放課後になった。

ユサユサ…

誰かに小さく身体を揺すられ、覚醒の一途を辿った俺は机に突っ伏していた体制から上体をゆっくりと起こし、眠気まなこのまま辺りを見渡す。

「やっと起きた」

まず一番に視界が捉えたのは、黒板でせっせと六時間目の授業の名残である英文を黒板消しで消去している琴吹の後ろ姿。

「んーっ！終わったー！」

ついで田井中が両腕を上方に伸ばし、開放感を味わっている光景。

「五時間目が始まってからずっと寝てたな」

そして左隣を見れば秋山が呆れた様子で腰に手を当てている姿。
どうやら秋山が俺を起こしたらしい。

「…眠てェ時は逆らわねェことだ」

「全く、唯も咲也も」

「あぁ？」

凝り固まった上半身をほぐし、首を左右に動かして小さく骨が鳴ったのと秋山が嘆息をついたのはほぼ同時だった。

「唯、起きて」

「すぅ…すぅ…」

首を動かし、教室内を見れば、平沢が至福な表情で机に上半身を折り、小さく寝息を立て、その丸まった背に真鍋が保護者を彷彿とさせる仕草で揺すっている光景が。

「二人だけだよ、起こしても中々起きないのは」

「……」

視線を戻せばやっぱり呆れていた秋山。
そんな秋山の小言チックを受け流し、鞄からヘッドフォンを取り出して首に掛け、ファスナーを閉めた鞄を取って立ち上がる。

「あんまり寝てばかりいたら内申に響いちゃうぞ」

「大丈夫だ、一年も二年もこれで通ってきた…」

「進級と進学とじゃ訳が違うって」

呆れているのか憤慨しているのか分からない複雑な表情で立ち上がった俺に述べてくる。

「…ゼンショシマス」

「もう…！」

これで話は終わりと言わんばかりにヒラヒラと手を振り、そんな気は更々ないがこれ以上反論したら面倒なので引き下がる。

（つうか進学するかどうかなんてまだ分んねェっつうの…まぁ、内申なら就職もそうなんだろうが…）

「ムギー　行こうぜ」

「まだ日誌届けたりしなきゃいけないから、先行ってて」

不意に聞こえてきた田井中と琴吹の会話に…

「あれ？ムギ今日　日直だっけ？」

俺の説得を諦めたっぽい秋山が身体を琴吹に向け、首を傾げる。

「ううん　ホントは唯ちゃんなんだけど…お昼休みからずっとあのままなの」

「何度も起こしてるんだけど…はぁ…」

眉をハの字に下げた琴吹が指差す先には、相変わらず眠りこけている平沢とこれまた相変わらず背を揺する真鍋という先程と変化がない一コマ。

「昼休みからって…呆れてものが言えねェな」

「それを咲也が言っても説得力ないからな」

秋山がジト眼で視線を寄越すが華麗にスルー。

「ほら唯、起きて」

「甘いザマス和！もっと激しくやっておやり！」

「お前誰だよ…」

一歩一歩平沢に向う田井中が、どこぞやの貴族に扮するのでポツリと一応ツッコんでおく。

「おい唯っ　起きろーっ！」

ニセ貴族がかなりの勢いで平沢の背を揺すり、何とか夢の国から現

世に連れ戻そうと奮闘する。

「大丈夫だよ～…憂～…今日は日曜だから～…」

「うわぁ！なんてポジティブシンキング！」

その甲斐あってか夢の国の出口まで来たのも束の間、Uターンし、来た道を戻ってしまった。

「ていうか律ちゃんを憂ちゃんと間違うなんて、どんだけ～！」

「ん～…どうしようかサク？」

「知らねェよ…」

万策尽きたのか田井中が平沢の背をポンポンと軽く叩きながら振り向く。

「そんな冷たいこと言わずにさ、唯はサクのファンなんだか「あぁん？」ごめんなさい」

ニヤつきながら戯言発言をするカチューシャに視線で制裁を与えると、九十度に腰を折り、深々と頭を下げる。

「俺はお前の親友だぜ」

「…ソイツが気を引くことでも言ってみろ」

「唯が気を引くもの…」

とりあえずは何となしにこんな提案をすれば、カチューシャが顎に手を当て、眼を閉じて思考を巡らせだした。

「はっ」
「あっ」
「おっ」

「あっ」

そして数秒後、田井中が何か思い付いたらしく、小さく声をあげ、同じく案が浮かんだ様子の琴吹と秋山と真鍋も小さな声をあげる。

「「唯、ケーキだぞ」」
「唯ちゃん、ケーキよ」
「唯、ケーキよ」

「咲也！俺だぜ！」

平沢が興味を示す物は四人共、甘美な菓子だと思ったようだ。

（なるほど）

これには俺も内心で納得し頷ける。

「う〜ん…」

やはり平沢は平沢である。
如何なる手を使おうが寝言を言うに止どまっていたのに、ケーキという洋菓子効果で遂に、夢の国の入口の門をくぐり、むくりと上体を起こした。

『おぉ〜』

いつの間にか平沢を起床させるのが注目の的になっており、起きた平沢に残っていたクラスメイトの連中から感嘆な声が漏れた。

「起きた？もう放課後よ」

「…ん〜…」

「唯？」

真鍋の言葉には答えずに、ぼけっとしたマヌケ面で教室内を見渡す平沢。

「ない…　ウソつき…」

「はぁ…」

自分を誘った物がこの世界にはないと理解した平沢は再び机に突っ伏し、寝息を立てだした。

そんなに寝たいかコイツは…

「くっ！ダメか！ならば奥の手を使うまで！」

諦めきれない部長がグッと拳を握り、『最初から使え』というツッコミを入れたくなるようなことを言う。

そんな俺の心中を知らない田井中が、囁くように平沢に告げた言葉は…

「唯、サクだぞ～」

「はぁ？」

こんな意味不明なこと。

「何言ってんだ…」

「唯といえばケーキ、だがそれは失敗に終わってしまった…しかし！サクならきっと反応する！」

「アホらしい…つうか根拠ねェのに、何が奥の手だ…」

「でも唯って咲也に懐いてるから、それが根拠なんじゃないの？」

「それならお前もだろ…」

いつか平沢妹が言っていた。

平沢が俺に懐いてると。

それは真鍋も感じていたらしくサラッと至極当然に言ってきた。
しかし付き合いが長い真鍋の方が懐き度合は高いと思うが…つうか懐くって…

「ん…　サッくん…？」

「……」

おいおい…起きたよコイツ…

「サッく…ん…エへへ…すぅ…」

「…いや、意味分んねェし」

俺を数秒ジッと凝視したかと思えば、ヘラっと笑いまたもや机に突っ伏す。

何なんだコイツは…

「さしずめ咲也は唯ちゃんの一瞬目覚ましってとこだな…じゃあ今度からお前を目覚まし野郎と呼んでやるよ！」

「あっちゃ～　サクでも効果はケーキは一緒だったか～」

もうお手上げとばかりに田井中がシンボルのデコに手を当て、天を仰ぐ。

つうか俺を食いもんと一瞬にすんな。

「唯ちゃん、なかなか起きないね」

「もうほっとけ…」

これ以上は付き合いきれないのでヘッドフォンを耳に移動させ、教室を出ようと踵を返す。

「田井中さん、桐島君、ちょっと良いかしら？」

今まさに一歩踏み出そうとした瞬間に、教卓で何やら作業をしていた山中担任が猫をかぶった状態でやってきた。
用事があるみたいなのでヘッドフォンを首に下げる。

「先生、さよなら」

「はい、さよなら立花さん」

「なんですかー先生ー」

擦れ違いざまに立花とかいうクラスメイトと挨拶を交わし、田井中がわざとらしい謙譲語を使う。

「あなた達、前に貸した着ぐるみそろそろ返してくれない？演劇部で使うみたいなの」

「着ぐるみ…秘密兵器か？」

思い当たるのは勧誘で間違ったインパクトを遺憾なく発揮し、新入生をドン引きに陥れた忌々しい動物達のことを言ってると思う。

「そうよ、それ」

「律、まだ返してなかったのか？」

「あぁ　あれならこの間、新入部員の勧誘に使った後にサクが」

「あまりにも腹立つんで…」

「部室の物置に」

「ぶち込んで…」

「「そのまま」」

別に手元に台本があるわけでもなく、事前に打ち合わせしたわけでもないが、何故かピッタリと部長と息が合う。

「返せよ」

そんな俺達に秋山が実にシンプルな物言いで的確なツッコミをしてきた。

「コラッ！サクッチ！借りた物は早く返しなさい！」

「じゃあ今から部室に行くわよ」

「でも先生、唯ちゃんがまだ…」

「その内起きるだろ…つうか真鍋がいる」

遠回しに『お前が起こせ』という意味を含んだ言葉を真鍋にかけ、反論は受けつけないので早々に教室から退散する。

「私はこれから生徒会があるから無理よ…って人の話聞いてないわね…」

「言うだけ言ってさっさっと逃げたなサクめ」

「仕方ない、唯には置き手紙していこう」

「そうね～」

「それじゃあ行くわよ」

「じゃあ私、生徒会に行くね」

「うん、また明日」

「じゃあな～和～」

「バイバイ和ちゃん」

「んじゃ、私達も部室行くか～」

「ラジャ～♪」

スタスタ…

「なんでみんな…俺を無視するかな…」

「お前がうるせぇからじゃん」

「な、なにーッ!?」

「星都、帰ろうぜ」

「で、でもさ卓…良いの?影宮クン固まっちゃったけど?」

「良いんだよ、普段の影宮に対する桐島の対応を見てたらこれが最善だ」

「そうかな?」

「そうなんだ、帰るぞ」

「う、うん」

「待てやーッ！！西野アーンド水本ーッ！！」

「うわっ！？影宮クンが復活したっ！」

「マジかよ！ダッシュだダッシュ！」

「ていうか僕関係ないよ～！」

「ワリィ子はいねェかーッ！」

「意味分かんねぇってアイツ！」

「だから僕は関係ないって～！」

ドドドドド…

「すぅ…むにゃ…けいおんぶた…」

―――――――――

時は戻り現在。

「ゴホゴホッ！う～…ヒドい目にあった…」

「りっちゃん大丈夫？怪我してない？」

「なんとかな…あぁ～ビックリした」

「日頃の行いが悪いから、バチが当たったんじゃないか？」

「…自分の人生振り返って懺悔しとけ」

「少しはムギみたいに私を心配したらどうかな！？君達は！」

「すごい量の荷物だな」

「よくもまぁ、こんだけ溜め込んだもんだ…」

「ムギ〜！澪とサクがいじめるよ〜！」

「あはは…」

あの後、生き埋めになった田井中を迅速に救助し、顧問は着ぐるみを回収して恐らく演劇部に返却するために部室から出ていった。
そして全身埃まみれになった田井中はブレザーを脱ぎ、部室の窓を全開にし新鮮な空気を浴びながら呻き、それを俺と秋山とで軽く毒づき、田井中が琴吹に泣き付く。

と…

ガチャ

部室の扉が開き…

「お疲れ様です」

ひょこっと中野がやってきた。

「律先輩!?どうしたんですか!?」

一歩部室に足を踏み入れ、全身埃まみれになっている哀れな部長を見た中野が眼を見開く。

「梓…聞いてくれるか?私の身に起こった事件を…!」

「は、はいっ」

埃部長の演技かかった三文芝居に素直に頷き、ビシッと四肢を揃える。

「実は…「生き埋めになっただけだ」ってサク～ぅ!」

もっとも言いたかった重点を俺にアッサリと言われたものだから熱烈に弾劾してくる。

「なんで先に言うんだよ～！」

「どうせ誇張して武勇伝みたいに語ろうとしたんだろうが…」

「うっ…」

「図星だったな律」

「一言で終わる出来事だ…それを言ってやったんだから感謝しろ」

「なんでだよ～！ていうか一言じゃ済まされない結構な大惨事だったんだぞ！」

「まぁ本来それを言うべき相手はとうにお前に興味ねェみてェだかな…」

「へ？」

ポカンとする田井中に親切に事故現場を覗いている奴を指差す。

「うわ～…すごい量の荷物と埃ですね…」

「物置の掃除なんてやってなかったからな」

「何か荷物があると、とりあえずって倉庫代わりにしていたからね」

「あ、梓…それにムギまで…」

自分に関心があった筈の二人が秋山と共に現場検証を行っている光景に田井中がガックリと肩を落とす。

ガチャ

「おはよ～」

うなだれた田井中が『私の扱いヒドい…』と呟いた時に再び扉が開き、あからさまに寝起きの平沢が、この時間帯で言うことじゃない挨拶と、寝癖と共にやってきた。

「お前やっと起きたか…」

「びっくりだね、起きたら誰もいないんだもん」

「ちなみに私達は何度も起こしたからな」

俺が呆れたように言葉を漏らし、平沢が小さな欠伸をしながら眠気が残る瞳をゴシゴシとかき、秋山が文句を言われないように先に制する。

「あれ?りっちゃんどうしたの?それになんで物置が散らかってるの?」

「早い話が私が生き埋めになったんだよ…」

「ほぇ？」

「……」

ふてくされてんなコイツ。

その証拠に小さく頬が膨らんでる。

「サッくん先輩、なにがあったんだい？」

「ジェンガが倒壊したんだ…後サッくん言うな」

「ジェンガ？」

「咲也、それじゃ説明になってないよ」

じゃあお前が説明してやれ。

……

「ということで大掃除をします！」

秋山が何があったのかを平沢と中野に説明し終えた途端にいきなり意気込んでそんなことを言い出した。

そんな秋山の意気込みとは裏腹に…

「そこ、あからさまに嫌な顔しなーい」

かなり面倒そうな表情をする平沢と田井中。

「咲也も嫌そうな態度とらなーい」

もちろん掃除なんて面倒なことを率先してやる俺ではなく、長イスに深く腰掛けていると、秋山からの緩やかなツッコミが飛来してきた。

「嫌そうじゃねェよ…嫌なんだ」

「それでもやるの」

「ついでに言うとダリィしやる気がねェ…」

「私もやる気でな～い」

「私も～」

同じ穴のムジナ状態になり、平沢が俺の横に寄り掛かるように座り込み、平沢の横に田井中が続く。

「離れろ暑苦しい…」

「ぶぅぶぅ～サッくんのケチ～」

何がだ…

「そこまでやりたくないか」

そんな俺達の様子に秋山がため息をついて、腰に手を当てる。

「だって…」

渋々といった感じで俺から離れた平沢がゆっくりと立ち上がった。
気付けば田井中も立ち上がっていた。

そして二人は肩を組み、自分達の心境を窓から外に向かって叫びだした。

「「三度の飯より掃除が嫌いだ！」」

「意味が分からん！」

「はぁ…」

今日は秋山が渾身のツッコミを連発する日のようだ、なんてことをぼんやり思いながら重たい腰を上げて、既に片付け作業を行っている琴吹と中野の方に足を向ける。

「サク先輩、やる気になりましたか？」

「なってねェよ…」

そこで一旦区切り、ため息を吐いて再び口を開く。

「…だがさっさっと片付けねェと練習が出来ん」

「そうですね、じゃあちゃっちゃとやっちゃいましょう」

「やっちゃいましょうっつってもな…」

視線を物置部屋に向ける。

先代の軽音部の歴史物がこうも大量に所狭しと乱雑にあったら、元からなかったやる気が更に萎えてしまうものだ。

「よいしょ」

「……」

琴吹が何故かあった大型の水槽を（その中にも段ボールや様々な荷物が入っている）汗一つかかずに物置部屋から軽々と持ってきた光景に、もう一段階やる気が削れる。

「はぁ…マジでダリィ…」

しかし、やらねば終わりそうにないので、ブレザーを脱ぎ、ネクタイをハズし、それを乱暴に長イスに投げてダラダラとした足取りで物置部屋に突入していく。

「ほら、咲也もやりだしたぞ」

「しゃーねー私達も真面目にやるか」

「そうだね、早く終わらしてムギちゃんのケーキ食べよう」

「魅力的な発言サンキュー」

「まぁ、やる気になったんなら良いか」

中には大量の段ボールがあり、手始めに近くにあった一つを開けてみる。

「古…」

思わず口に出してしまう程に中の物に歴史を感じる。
ラジカセに、大量のカセットテープ、色あせたメトロノーム、所々ビニールテープで補強してあるシールドに、割れてしまってるピックの山々、発行日が今より八年程前の音楽雑誌、現在では中々お目にかかれない八ｃｍのＣＤ等々…

つまりここにあるのは昔の軽音部の部員が残して卒業した古びた機材。

「使えねェんじゃどうしようもねェけどな…」

後輩達に残したのか、ただ単にもって帰るのが面倒だったのか、そこの真偽は闇だ。
もし仮に前者ならば、何とも心優しい先輩達だが、いかんせん全てのものが古びて使えない。

（ワリィがこれは処分だな…）

容姿や名前も知らない先輩達に内心で陳謝しながら二つ程段ボールを重ねて物置部屋から一旦退室する。

「それにしても何だこのぬいぐるみの山は」

「あ！その大きいのも二百円で取れたんだよ！」

「聞いてねーし、ほれ持ってけ」

「ぶーっ！」

物置部屋の出入り口には手前に置いてあった荷物が散乱していた。
手前にあるということは最近の物。
つまり現軽音部の荷物なんだが…

「…なんでこんなに私物があんだよ」

持っていた段ボールを床に置き、散らばってある荷物を見渡す。
大量のぬいぐるみに、大量の少女漫画、何故かあるバドミントン一式に、輪投げや小さなクリスマスツリー。
挙句の果てには平沢がどっから入手したのか不明な、あの蛙の置物

まであった…

「なんでボーリングのピンが…」

普段は下ろしてる腰まである髪をポニーテールにした秋山が、一本だけあったボーリングのピンを手に取り、クエスチョンマークを浮かべる。

「後九本足りないね」

「そういう事じゃねェだろうが…」

真顔でびっくり発言をする琴吹に、未開封だった段ボールを開けながらさり気なくツッコんでおく。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「一つ差し上げよう〜」

「あぁ？」

段ボールの中身をチェックしていると頭上から平沢のボイスが聞こえ、作業を中断して顔を上げる。

「ほい、どうぞ」

「……」

目の前にはレモンに人面が刺繍された奇抜なぬいぐるみが一つ。
よくよく見ると同じぬいぐるみが平沢の胸に二つ抱えられていた。

「いらねェよ…そんな気持ちワリィ奴」

「え？かわいいよ？」

「どこがだ…」

「まぁそう言わずに」

更にズイッと人面レモンを近付ける。

「…いらねェっつってんだろ」

「チェ～…せっかくサッくんとお揃いになるのにな～…」

とか言ってトコトコとどこかに向う平沢。

「……」

アイツの感性は本当に分からん。
あんな人面レモンを…かわいいなんて…

……

紆余曲折ありながらなんとか掃除を終え、秋山達はティータイムを。

「……」

俺は疲労困憊で長イスに寝そべる。

男だからとかいう理由でこき使いやがって…

「見て見て～！」

すると自分の非力をまざまざと見せつけて作業の殆どを俺に任せて、本人は元気ハツラツな平沢が、物置部屋から重厚なケースを両手で持ち、やっぱり非力な様子でフラフラと出てきた。

「なんか発見したよ」

「おっ　高そうなケースっ！金目のもんがはいってないかなぁ～」

真っ先に反応した田井中が素早く席から立ち上がり、平沢と共に長イスにやってきた。

「サク、ちょっとどいて」

「……」

部長の命令にダラダラと起き上がり、先程の掃除で見つけた壊れているアンプに座る。

「ありゃ？随分素直だな？」

「うるせェな…退いてやったんだから感謝の一つでも表わせ…」

「なんで上から目線なんだよ」

退きたくはなかったが、疲労困憊な中で田井中や平沢とのやり取りが非常に面倒だから、すんなり退いてやる。

「りっちゃん、早く開けようよ」

「そうだな、オープンっ」

長イスに置いた重厚なケースが田井中の手により開けられた。
俺はアンプに座りながらそれを見て、秋山と琴吹と中野も気になるらしく長イスの周りに集まった。

「ギターだ」

平沢がもたらしたその言葉に遠目から眺めていた俺はアンプから立ち上がった。

「ＳＧ…」

ケースの中にあったギターはチェリーカラーの…

【ギブソン・ＳＧ】

と呼ばれるロックギター。

「サッくん知ってるの？」

「…お前のレスポールと因果関係にあるギターだ」

「ほぇ？」

「そういえばレスポールの売上が落ちたからギブソン社がＳＧを作ったんですよね？」

「あぁ…だが、そのモデルチェンジがレス・ポール本人が気に食わなかったから契約を打ち切られた…言うなればレスポールになれな

かったレスポールだ」

フェンダー社のテレキャスターのほうがデザインが良いという理由で、ギブソン社のレスポールが売上不信に陥り、それに対抗しようと生み出されたのこのギター。

平沢とレスポールと俺のテレキャス…
そして誰かのＳＧ…

様々な原因が噛み合ったギターがまさか、一同に介するとはな…

「さすが詳しいな咲也と梓は」

「うんうん、私なんか全然分からなかった～」

秋山と琴吹の称賛の声が聞こえてきた。

「もっとおもしろいもの期待したのにな」

「つまんな～い」

田井中と平沢の落胆した声が聞こえてきた。

そしてテーブルに戻る二人。

「少しは興味持てよ…」

「そうですよ！軽音部なんですから！」

しかし当の本人達は馬耳東風でケーキを食べ始め、そんな奴らに内心でため息を吐いていると…

ガチャ

「あら、懐かしいわね」

「先生」

演劇部に着ぐるみを返却していたと思わしき山中顧問が戻ってきた開口一番がこれだ。

「ここにあったのかぁ」

中野が持つＳＧを見て懐かしむように眼を細める。

まさかこの人が持ち主か…？

「え？これ先生のですか？」

「それはあんまり使ってなかったけどね」

ビンゴ。

そして納得。

軽音部時代にメタルを演っていたこの人だ。

ＳＧはもってこいだったわけだな。

「先生ってひょっとして軽音部だったんですか？」

しかしそれを知らない中野が期待な眼差しで山中顧問に視線を向ける。

「そうよ、言ってなかったけ？」

「やっぱりそうだったんですね！学園祭の時、演奏うまいなぁって思ってたんです！」

「まあね、ブランクはあったけど今の唯ちゃんよりはうまいかな」

「わぁ～！」

「……」

中野のテンションがグイグイ上昇し眼が輝いていく。

真実を知らないのは残酷だな…

「サク先輩とはどうなんですか？」

「そうね～」

中野からいきなり飛び出た俺との対比の質問に顧問が俺ではなく、
スタンドに立て掛けてある二本のギター。
テレキャスとアコギを見ながら思案顔になる。

「咲也くんは一年生の頃からうまかったし、今もドンドンうまくなってるから…」

「から？」

「まぁ、私とどっこいどっこいかな？」

「……」

そうは言っても実際この人のほうが間違いなく上だ。
去年の学園祭で急遽平沢の代役を務め、完璧にこなした。
一度も俺達と合わせたことなどなかった人がだ…

それは長年培ってきた音楽センスがあればのこと。
そして一年の時に聴いた早弾きやタッピングなどのギターテク。
俺にはあんなことはまだ出来ない。

「今度教えてください！」

「良いわよ～」

気が付けばいつの間にか中野が顧問に指導を頼んでいた。
しかし平沢により、中野の期待は綺麗に霧散していく。

「ちなみにこれが軽音部時代のさわちゃんです」

どこから取り出したのか平沢がメタルなメイクと派手な髪型と衣装を着た、山中顧問が写っている写真を中野に見せつけた。

「やっぱりいいです」

「何でよー！」

「…大概の奴はそう思うだろ」

「せっかく梓ちゃんなら歯ギターをやってくれると思ったのに～…」

「…断って正解だ中野」

「はい、そうですね」

「容赦ないな、サクと梓」

田井中がケーキを食べながら苦笑いを浮かべる。

……

「お店で売って、部費の足しにでもしてちょうだい」

「おぉ～っ！さわちゃんふとっぱら～！」

私物は全員持って帰ることになり（私物の殆どは平沢と田井中だった）ＳＧは山中顧問のものなので持って帰れと促したが、『もう弾く時間がない』という本音四割と『カビくさっ』と小さく呟いた本音六割でＳＧは売りに出すことに。

「先生、これ良いギターなんじゃないですか？」

中野が重厚なケースに収められたＳＧを指差す。

「お父さんの友達から貰ったギターなんだけど、これだけ保存状態が悪いともうダメなんじゃないかしら」

「…弦張り替えたり、要所要所のパーツ取り替えたりしてメンテしたら、まだ生きてんじゃねェか？」

これだけの重厚なケースにしまわれていたんだ。
ＳＧ本体にはキズや埃や汚れなんて見当たらなかった。
まぁ…ＳＧは皮膚が薄いので内部にカビが生えてる可能性は無きにしも非ずだが。

「例え、弾けるように直っても、私じゃ弾ける時間がとれないし、ただ飾っておくのは可哀相よ」

「……」

『僕はもう弾く機会もないだろうし、ただこうして部屋の隅に飾られてるんじゃコイツは可哀相だ』

ふと脳裏に浮かぶ誰かの言葉に、何故かアコギを見てしまう…

「それに、もしも売れるのなら他の誰かに使ってもらった方がこのギターも幸せよ」

「……」

ケースを撫で、微笑んで言う顧問にもう何も言えない。

「んじゃ、このケーキ食べたら楽器屋に行くか」

「…行くんならさっさっと行くぞ」

「まぁまぁ咲也君、紅茶よ♪」

「はぁ…」

「サッくん♪レモ助だよ～♪」

「いらねェっつうの…つうか何だよその名前…」

結局、ティータイムが終わるのを待ち、漸く楽器店へ。

「って…練習してねェし…」

第七十話（後書き）

どうでもいい情報なんですけど、作中に登場した西野　卓と水本星都は小学校からの友達です。

第七十一話（前書き）

掃除編その二です

第七十一話

「別に買うのはかまわねェけどよ…」

「うん？」

「…正確なサイズが分かんねェぞ」

「そうだな…じゃあ測ろう」

「…どうやって？」

「それはメジャーとか使って」

「…それはどこに？」

「あ…」

「はぁ…」

（見切り発車かよ…）

ティータイムが終わり、漸く楽器店に行くかと思いきや、そうはいかなかった。

足場の踏み場もなかったくらいに軽音部の歴史が散乱していた物置部屋は、本来の姿であるゆとり満載小部屋に様変わりを遂げた。

「とりあえず、勘で買うか…」

「随分アバウトだな」

「…仕方ねェだろ、手元に測るもんねェんだし」

「まぁ、そうだけど…」

その空間で俺と秋山は、ある物を見ながら会話をしていた。

それはまだ使える機材や、過去の軽音部の証。

片付けたと言っても、それはすべてではなく、当然まだまだ現役続行出来る様々な機材があり、それらをきちんと整理しなければなら

ない。
更に過去の先輩達の演奏が録音されたカセットテープや、今後の曲作りの参考となる資料等々…簡単に処分出来ない物が多々あり、それらを総じてまとめて収納しておく必要がある。

そこで秋山が、棚を購入しようと俺に持ち掛けた。
それは大いに共感出来るが、いかんせんどのくらいのサイズの棚を入手すれば良いか分からない。

とりあえずは臆測で購入すると勝手に自己完結し、物置部屋から出ようと踵を返す。

「澪先輩、サク先輩、律先輩が呼んでますよ」

中野が物置部屋の出入り口から顔を覗かせ、都合良く俺の行動と合致する報告をしてきたので、まだ片付けの疲労が残るのでダラダラとした動作で部屋から退散を。

「二人共何やってたんだ？」

「ま、まさか！？サッくんと澪ちゃんだけでこっそりとお菓子食べてたの！？」

長イスの周りには平沢と田井中と琴吹の姿があり、平沢の真剣な問い掛けをスルーし、田井中に俺の後ろにいた秋山が口を開いた。

「棚を買おうかって咲也と話してたんだ」

「棚？」

そんな言葉が飛び出してくるとは思わなかったらしい田井中が首を小さく傾げた。

「うん、一つあると色々整理出来ると思うんだ」

「…そういうのがねェと、また散らかる可能性があるからな」

「そうですね」

俺と中野は揃って平沢と田井中に『お前らがやりそう』という含み

視線を向ける。

「な、なんで私とりっちゃんを見るんでしょうか…？」

「ゆ、唯…！眼を合わせるなよ…石になるぞ…！」

メデューサか俺らは。

「顔を背けてる時点で自覚あるんじゃないですか」

「それは違うよ、サッくんとあずにゃんのオーラが輝いてたから、眩しかったんだよ～！」

「意味分かりません」

平沢の素晴らしい言い訳をよそに、俺は未だに顔を背けてる部長に棚に関する重要発言を。

「…部費で買えるだろ？」

「くはーっ！眩しいーって、え？なんか言った？」

「……」

絶好調にコント真っ直中に俺がスネークインしたものだから、眼をパチパチとしばたかせる。
故に『ちゃん聞いとけ』と内心小さく憤慨しながら…

「ふぅ…」

ため息ではなくただの吐息で何とか怒りを沈下させ、再度用件を告げる。

「…部費で棚買えるだろ、つうか買え」

「最後命令になったぞ…」

「律、どうなんだ？」

「ん～…あんまり高過ぎるとアレだけど…」

「…せいぜい四千ぐらいだ」

「ん、だったらオッケー！」

腕を組んで唸っていた部長が二カッと笑いながらサムズアップ。
そして秋山が告げた、ある言葉に今までニコニコしながら静観していた琴吹が眼を輝かせだした。

「それじゃあ楽器店に行く前に、ホームセンターに寄ろうか」

「ホームセンター…！」

「ムギちゃん？」

「行きましょう！ホームセンター！一度行きたいと思ってたの！」

「行くっつってんだろ…」

「ムギ～　ホームセンター初めて？」

「うん！早く行きましょう！」

「クスッ　そうだな」

拳を握り締め、爛々と至福な表情をする琴吹に秋山が小さく笑う。

どうやらこのお嬢様はホームセンターにただならぬ興味があるらしい。

「……」

確か二年前…一年の時に合宿に行った際に琴吹は言っていた。

『なるべく普通にしたい』

こんな些細な小さな希望の夢。

その普通な夢を見つける度にコイツは喜んでいる。

バイト然り、合宿然り、クリスマスパーティー然り。

「よーしっ！行くぞーっ！」

「「おぉー！」」

「ムギ先輩、何だか楽しそうですね」

「唯も楽しそうだけどな」

「…アイツの場合は年がら年中だ」

「「あぁ～確かに」」

「ほぇ？なにか言った？」

「別に…」

「気にしたら負けだね！サッくん！」」

「サッくん言うな」

今は絶えない笑顔でニコニコしている平沢だが、数十分後には…

――――――――――

「うぅ～…お～も～い～…」

苦悶の表情になっていた。

実は部室を出る際に小さな抗争が勃発した。

ＳＧは誰が運ぶのか？

この問題に直面した俺達は万事解決を目指すため六ヵ国協議ならぬ、六人協議を執り行った。

やれ『サクが持てばいい』だの『男女平等という素晴らしいものがある』だの『咲也はいつも二本ギターを持ってるから、さすがにもう一本は無理だろ』だの『律先輩が持てば良いじゃないですか？鞄しか荷物ないんですし』だの『ムギちゃん、紅茶飲みたいな～』だの『うん♪淹れるね～♪』等々…議論は平行線のまま一向に進まず、時間だけが流れていった。

そこで『ジャンケンで決めるか』という部長の発言により協議は幕を降ろした。

「ヒドい～！私ばっかリ～！」

で、結局平沢の一発負け。

協議に無駄な時間を使ってしまったので街は茜色に染まっている。そんな風景に場違いな平沢のボイスが辺りに響き、数歩先を歩いていた俺達は振り返る。

「ジャンケン三連敗はお前の責任だろ～」

「唯ちゃん頑張って～」

ＳＧ本体の重量と頑丈なケースの重量に完全に屈した平沢は、フラフラと亀みたいなスローペースで歩いているので必然的に俺達より遅れてしまう。

「今日は鞄も重いんだよぉ～…」

「それも自分の責任だ」

私物でパンパンに張った平沢の鞄が、いかにその量が多いか物語っている。

「サッく～ん持ってよ～…」

「公平な民主主義に乗っ取った結果だ…その頼みは無理だな」

「サッく～ん…」

やっとの思いで俺達の元に辿り着いた平沢がＳＧを地面にゆっくり置きながら俺を要望な瞳で見上げてくるが、バッサリと一刀両断する。

「唯ちゃんご苦労様、そろそろ時間よ」

「本当！？」

見兼ねたのか、琴吹がケータイで時間を確認する。
確かに交代の時間は決まっていたが…まだ早ェんじゃね？
まぁ…三連敗してるからなコイツ…

「今度は絶対負けない！」

「ふふふっ　返り討ちにしてくれよう」

「してくれよう～♪」

「何だか子供みたいですね」

拳を握り締め意気込む先輩に中野が苦笑いを浮かべるが、自分も拳を握っている。

「サッくん！澪ちゃん！やるよ～！」

「はいはい」

「もうお前が持っとけよ…」

「ヤダよ～重いんだもん」

「やるぞー！最初はグー！ジャンケン…」

―――――――――

「サッくん」

「あン？」

「重くないの？」

「別に…」

「さすが男の子だね～♪」

「…お前が非力なんだよ」

「そうかな？毎日ギー太で鍛えてるんだけどな～」

「…変な扱い方すんなよ」

結果として今度は俺の一発負け。
テレキャスとアコギとＳＧというバリエーション豊かな楽器で身を固めた俺は普通に歩く。
その横を身軽になった平沢がトコトコと歩き、どうでも良い他愛のない会話をしていると…

「到着〜！」

ホームセンターに辿り着いた。

「ふーん…そこそこだな…」

自動ドアをくぐり、この時間帯だからだろうか。
店内は老若男女の客で賑わっていた。

「ここがホームセンター…！便利グッズがいっぱいあるのよね！？」

「……」

ガキが遊園地ではしゃぐように琴吹が正にそれになりかけている…

「大小様々な電球とか七色のビニールテープとか！」

「ま、まぁそうだけど…」

かなり興奮した面持ちで俺達に振り返った琴吹に秋山が若干引きながら何とか返答を。

「私ちょっと色々見てくるね！」

キラキラと眼を輝かせ、ズンズンと闊歩しながら琴吹は店内にその姿を消した…

「ムギちゃん行っちゃったぁ…」

「よっぽど楽しみだったんだな～」

「アイツと俺らじゃ、見てる世界が違ェのかもな…」

「それじゃあ私達は家具売り場に行こっか」

「そうですね」

口々に意見を述べた後、この場に来た目的を達するために、家具売り場を目指す。

「サッくん、こっちだよこっち！」

その道中に平沢が先頭に立って俺を手招きしだしたので、とりあえずそれに従って辿り着いた先は…

「見て見て～！すごいネジ！」

「はぁ…」

現在全く必要とされてないネジや工具売り場。
俺が求めているのは家具売り場。
故にため息。

「サッくんサッくん！これ全部ネジなんだよ！キレイだよね～♪」

「はぁ…」

ネジ一本を手に取り、まるで宝石でも見るかのような仕草でライトにかざす平沢に再度ため息を吐き、家具売り場を目指すために踵を返す。

「ふぉっ！？なんかカッコいいのがあるよサッくん…ってあれ？いない…」

「あんまりはしゃがないでくださいよ…恥ずかしいじゃないですか…」

「ねぇねぇあずにゃん、サッくん知らない？さっきまでいたんだけど…」

「さぁ？知りませんけど、多分家具売り場に行ったんじゃないですか？」

「そっかぁ…一言ぐらい声掛けても良いのになぁ…」

「……」

……

見上げる先にはサンプルの棚が展示してあるスペース。
その中で予算の四千以内であり、なおかつ物置部屋にフィットする逸品を探す。

「首イテェ…」

見上げ過ぎたらしい。
ＳＧを床に置き、軽く首をマッサージ中に…

「咲也」

「あン？」

今までどこにいたのか秋山が小走りで参上した。

「良いのあった？」

「まぁ…何とかな…」

そう言って指差し先にあるのは、四段の白いカラーボックス。

「…あれならいけるだろ」

「うん、値段も予算以内だな、あ…でもサイズは？」

「勘」

「やっぱり勘なんだ…」

「…他に手立てねェから勘で十分」

「まぁ、咲也の勘を信じてこれにするか、明日の放課後に学校に届けてもらおうよ」

「そうだな…」

部長が行う筈の行動を秋山がやっているのに内心でため息をついて、販売カードを一枚取り、秋山と共にレジに向う。

「あ、さわ子先生に許可とらないと」

「…別にいらねェだろ、あの人なら二つ返事で了承しそうだし」

「でも一応電話してみるよ」

「あっそ…」

几帳面だなコイツは…
ＳＧを俺達に押し付けるような人にわざわざ連絡など…

……

「はい、じゃあ失礼します」

「サク、学校の住所って分かる？」

「生徒手帳に書いてんじゃねェの…」

「あ、そっか、さっすがサク～♪伊達に不機嫌顔じゃないな～♪」

「…お前はその付け足しが余計なんだよズボラ女」

「何だとーっ！」

「はいはいケンカしない」

レジに向う途中にライト付きヘルメットをかぶっていた田井中を発見し、すぐさま連行。

そして部費で棚を購入した後、秋山は山中顧問に連絡を入れ、田井中は店に宅配を頼むために専門用紙に書き込むためのペンを取った。

「澪～」

「ケンカ両成敗…って引っ付くな」

「…俺は被害者だ」

先に吹っ掛けてきたのはお前の腰にしがみついてるカチューシャだ。俺はそれに反論という正当防衛を実行しただけ。

「はぁ…　そんなことより、律」

「そんなことよりって…」

「…そこは激しく同意してやる」

田井中を引き離した秋山のため息混じりの発言に、思わず逆に泰然してしまった俺達。

「さわ子先生、部室に置いても良いって」

俺達の様子に気にすることもなく、先程の電話で得た情報を伝える秋山。

「…じゃあ、明日の放課後に学校に届けてもらおう」

田井中が改まってペンを取り、用紙に書き込んでいく。
どうやら達観したらしい。

「あれ？ねぇ、咲也」

「ンだよ…」

「唯達は？」

「知らん…」

「そこら辺にいるだろ」

秋山が辺りを見渡しながらの質問に、俺はギター全てを降ろして近くにあった椅子に座りながら短く返答し、その横で田井中が専門用紙にペンを走らせながら答える。

「あ、ムギが来た」

「お待たせ～♪」

すると琴吹がニコニコしながら小走りで登場した。

「うわっ！？どんだけ買ってんだよ！」

「…お前そんなに何買ったんだよ」

オマケとして田井中が飛び上がる程の大量の購入品を両手に軽々と持って。

「えっとね…壁に開いた穴をきれいに補修できるペンに～♪」

「そんなのあんのかよ…」

ガサガサと袋を漁り、相変わらずに嬉しそうな表情で俺達に入手した品々を見せてくる琴吹。

「古雑誌を簡単にまとめるテープに～♪」

「嬉しそうだな～ムギ」

「蛇口を磨くとピカピカになるスポンジでしょ～♪」

「あ、それ欲しいかも…」

「ケーキを正確に八等分できるケーキカッターとか…色々♪」

最後に傘のような形をしたカッターを取り出して、立ち上がる。
主に紹介したい物は終わったようだ。

「ホームセンターってすっごく楽しい所ね～♪また来ちゃいそう～♪」

「気が済むまで何回も通ってろ…」

普通に憧れてるか知らんが、少々落ち着いたらどうだ…

「後は唯と梓か」

「仕方ない、部長が直々に電話してやろう！」

「偉そうに…」

「サクよりかは偉いんですー」

「あぁ？」

「咲也は一々ケンカ腰になるなって！律も吹っ掛けるな！」

「冗談だよ～コミュニケーション♪コミュニケーション♪」

「…俺は結構マジなんだけど」

「えっ！？」

――――――――――

あの後、部長が平沢のケータイに連絡を入れ、一緒にペットコーナーで観賞していた中野を連れて戻ってきた。

そしてホームセンターを出た後に再びジャンケンをし…

『チッ…』

『またサク先輩ですか』

『おーほっほっほ～♪私に勝とうなんて百年早いザマスわよ♪』

『よし…歯ァ食いしばれ』

『だからヤメロって！二人とも！』

『ムギちゃん、いっぱい買ったんだね～』

『うん！色々目移りしちゃって～』

またもや俺の一発負けを喫し、田井中に軽くイラッとしながら足を進める。

数分歩いたところで軽音部御用達の１０ＧＩＡに到着。

「すんません…」

「はい」

「このギターを売りたいんスけど…」

カウンターにSGを置き、店員に目的を告げる。

「買い取りですね、それでは査定させていただきますので、店内でお待ちください」

「はい…」

ケースを開けた店員が渋い顔をしなかったので、第一関門である見た目はクリアしたらしな。

まぁ…顧問曰くあまり使ってなかったらしいし、あんな重厚なケースに守られてたんだ、キズや塗料の剥れはほぼないだろう。

「……」

店員の言葉通り店内で待機するために、ギターの備品が置いてあるエリアに向かう。

ちなみに他の奴等は思い思いに行動していた。

「あ…ほわぁ～！」

琴吹は店内にもかかわらず購入した便利グッズ（磨くとピカピカになるスポンジ）でスプーンを磨いたり…

「りっちゃんや、これおもしろいよ♪」

ミョ～ン…♪

「おほっ♪私にもやらせて～」

テルミンで遊ぶ平沢と田井中とか…

「うちのバンド、これだけ人数いたらどんな音になるんですかね？」

「そうだな、このくらい部員がいると良いな」

「部員…」

「梓？」

バンドの宣伝チラシを見ている秋山と中野とか…
まぁ、そんな連中に交ざる気は全くないので足早に歩を進める。

「やっぱ高ェな…」

目の前にあるエフェクターの値段を見てこうべを垂らす。

四万ジャスト。

頑張れば何とかいけるがその決断が出来ない。

一介の高校生がポンと出せる値段ではない。

しかしこの【ワーミー・ペダル】があったら俺のテレキャスは進化を遂げる。

ペダルとあるように音の高さをペダルで変化させることが出来る。
元の音の高さを2オクターブ上から6オクターブ下まで変化させることが可能。
アイディア次第で色んな使い方が出来る画期的なエフェクター。

こんな素晴らしいアイテムならば欲しいのが人間のさが。

しかし金がない。

「はぁ…」

と、ため息をついていると…

「査定をお待ちのお客様、査定が終了しました」

店員の声が聞こえてきたのでカウンターに向う。

「お待たせしました、こちらのギターですが…」

カウンターには俺が最後に着き、それを確認した店員がサラッと結果を伝え始めた。

「五十万円で買い取らせていただきます」

『……』

店員が営業スマイルと共に放った衝撃は確かに俺達の胸を、頭を貫いた…

『ご、ご、ごぢゅうまんえんっ！？』

「マジで…？」

諭吉が五十人も列をなして軽音部にやってきた。

第七十二話（前書き）

掃除編完結です。

第七十二話

絶句。

今、俺達の心境を表すのにこれ程適切な表現はないだろう。
全身を駆け巡り、支配しているものは衝撃発言故の動揺ではなく、
声帯を振るわせて声を発することが出来ない状態だ。

「みんな？」

訂正。

『俺達』ではなく衝撃を食らっても絶句どころか動揺する素振りすら、みせない奴が一名いた。

「咲也君？」

「…あ？」

「どうしたの？」

そりゃあコッチの台詞だ。
お前がどうした。

何故そんなつぶらな瞳で俺を覗き込める？

ＳＧの売買価格がとんでもない額になったというのに琴吹だけはその呪縛にかからなかったらしい。

いや…コイツはブルジョワだ。
諭吉五十人という市民…高校生が中々お目にかかれない大金を提示してきたにもかかわらずこの態度…
もしかしたら金銭感覚が俺達とは違うのかもな…

「あ、あの…」

琴吹以外が絶句している光景にサラッと爆弾を投下した店員が戸惑いの声をあげ、とりあえずといった感じに厚さ一ｃｍ（臆測）の茶封筒を差し出してきた。

「では、こちらが買い取り金額になります、紬お嬢様」

「ありがとうございます♪」

「おい」

にこやかにそれを受け取る琴吹。
それに二文字でツッコむ俺と…

「はっ！…って、おめーは躊躇なさすぎだ！」

絶句状態から帰還した田井中が渾身のツッコミをかます。

「ごちそうさまでした！よーし！」

「…よしじゃねェよ、どこ行く気だ」

「待て待て」

あまりの金額に綺麗なお辞儀をして軍隊並の回れ右で現実逃避をしだした秋山の肩を田井中が掴み、ベースケースの一部を俺が掴みそれを阻止する。

「だ、だ、だ…だって～…ご、ご、ご…ごひゃくまん…！り、律、さ、咲也…ご、ごせんまん…！」

「落ち着け、ケタが変わってる」

「……」

どんだけテンパってんだコイツ…

「あずにゃん…」

「はい…すごい値段になりましたね…」

「五十万円って…家が買えちゃうね…」

「そうですね…」

「買えねェよ」

どうやら中野も思考回路がショートしているらしい。
平沢のビックリ発言に頷きやがった。

「…あの」

「はい？」

「…このＳＧになんでそんな大金がつくんスか？」

「もしかしてムギに気を遣って…？」

ひとまずは、この場がカオスになりかけている原因を造ったＳＧの買い取り価格の理由を俺と田井中が尋ねる。
田井中は琴吹をチラチラ見ながら密語のように。

「いえ、それは関係ありませんよ」

「と言うと…？」

俺の先を促す発言に店員は人差し指が立て、少々得意顔になり、語り始めた…

「はい、このモデルのギターは１９６０年代初めに生まれたギターでして、当初は材料や形が定まっておらず…」

『……』

「ふむ…」

「様々な使用のマイナーチェンジを繰り返しつつ、現在の形になったと言われています」

『……』

「ふーん…」

「お客様にお持ち頂いたこのギターはフィンガーボードにハカランダという今となっては貴重な木が使われていまして、これが高い値段の一つの要因になっております」

『……』

「ハカランダ…？」

「残念なことにこのギターはテイルピースが交換されております」

『……』

「…オリジナルなら更に値が張るんスか？」

「はい、パーツ全てがフルオリジナルでしたらそうなります」

『……』

「…そりゃ残念だ」

「しかし少し値段が落ちたとはいえ、ストップテイルピースの方が演奏性に優れており、こちらの方を好むお客様も多く、それほどマイナスにはなりません」

『……』

「なるほどな…」

「しかも、このギターは長いことしまわれていたそうで、あまり傷やフレットの減りがなく、年代ものにしては大変コンディションが良いので、この金額で買い取らせていただきます」

『……』

「…だとよ、分かったか？」

「ううん…全然…」

営業スマイルで最後を締めた店員の長い説明が終わり、再び絶句状態に陥った連中に（今回は琴吹も）視線はＳＧに向けたまま尋ねるが、一報に平沢から返事が返ってきた。

「サッくんは？」

「まぁな…」

理解出来なかったのはハカランダとかいう木だけだ。

後は概ね理解可能。

「…一言で言えばヴィンテージギターだっつうこと」

「ほぇ～…」

分かってねェな…

「と、とにかく貴重なギターなんです」

営業スマイルから苦笑いに変った店員から改めて部長が震える手で五十万を受け取り、俺達は落ち着くために一路、バーガーショップを目指す。

俺はもう帰りてェんだが…

―――――――――

「おっきなお金が入ったから、スペシャルバーガーにしようかな～

？」

「…何買うかはお前の自由だが、あの金から落ちねェぞ」

「あ、そっかぁ」

バーガーショップのカウンターで唸る平沢を放置して、先に物資を入手した秋山達が座っている四人掛けテーブルの横の二人掛けテーブルにコーヒーとポテトを乗せ、席に座る。

「エヘヘ～買っちゃったよ～　サッくん♪」

「あっそ…　つうかサッくん言うな」

何が嬉しいのか平沢がニコニコしながら、カロリーがかなり高そうなバーガーセットを持って、当然のように俺の前に座る。

「お前そんなもん食えんのかよ…この後晩メシだろ」

「大丈夫だよ、憂の作る料理はおいしいから～♪」

「理由になってねェっつうの…」

「あ、サッくん、一口食べる？」

「いらん」

何を思ったのか、バーガーをズイッと差し出してきた平沢を一瞥し、ポテトを一本口に放り込む。

「あの…良いんでしょうか？みんなで貰っちゃって…」

その瞬間にジュースを飲んでいた中野がストローから口を放し、おずおずと俺達を見渡した。

「仕方ないだろ～　さわちゃんが部費にしろって言ったんだからさ」

「ブヒブヒ」

「顧問の言うことは従っとかねェとな…俺達は生徒な訳だし」

「普段はそんな素振りみせないのに、こんな時は素直だな咲也」

「……」

ズズッ…

秋山が身体を捻ってわざわざ振り向いて判然と告げるが、悪びれもせずに今度はコーヒーを啜る。

「でも…」

「ほれっ！」

それでも渋る中野に田井中が茶封筒から八人の諭吉を取り出して突

き付ける。

「五十万だから一人八万！」

「八万…円…」

「あーあ…」

残りの二万はこの際スルーして、目の前の諭吉の姿に中野がグルグルと眼を回しだした。

「私、欲しいエフェクターがあったんですよね～」

「だろう～？」

「あずにゃん陥落」

「バカッ！そんな大金見せびらかすな！」

「ほれほれ～澪も八万だぞ～」

「うっ…」

正論をかざす秋山だったが、金の魅了には敵わなかったらしく、言葉に詰まる。

「八万かぁ…八万あったら…マルチベースアンプシミュレーターに新しいアンプ…」

「澪ちゃん陥落」

遂にはどこか恍惚の表情でうわごとのように呟きだした。

「私はツインペダルに、やっぱりフロアタムも欲しいな～」

「りっちゃん陥落」

「アイツは元からだ…」

田井中も自分の欲望をはっきりと口に出すが、平沢の陥落発言は今更だ。

（しかし八万あったらワーミー・ペダルが買えるな…もしかしたらワウ・ペダルもいける…）

「私は～…」

俺が欲望をつらつらと考えていると、平沢がバーガーを食べていた動作を止め、数秒考える。
そして導き出された答えは…

「ああん～♪もっと～♪」

「……」

何を想像したのか、だらしなく口を半開きにし、意味不明な艶めかしい声をあげる。
それを目の前で目撃した俺は激しく引く…

「「「「ふふ…ふふふふ…」」」」

そして辺りに漂う邪悪な笑い声と陰湿なオーラ。

「あの？みんな？」

唯一邪な考えがなかったらしい琴吹がキョロキョロと平沢達を眺める。

「ねぇ咲也君、みんなどうしちゃったの？」

状況についていけない琴吹が振り返って、未だに平沢に引いてた俺に問い掛ける。

「人間の欲望が溢れ出た結果だ…」

「え？」

「まぁ…察してやれ」

「う、うん」

最後のポテトを口に投入して琴吹の質問をピシャリと強制的に終了し、席を立つ。

「あ、帰るの？」

「あぁ…こんな湿度が上がったとこにいたくねェし」

「？」

首を傾げる琴吹をスルーし、鞄とテレキャスとアコギを取って、出口に向かって歩きだす。

「あ、また明日ね咲也君」

背後から聞えた声に、軽く左手を上げ、店から出る。

「ありがとうございました～☆」

――――――――――

翌日。

「今日は無視しないでくれてありがとう」

「はぁ？」

放課後、やりたくもない空き教室の掃除を適当にこなしていると、箒片手に修司が深々と頭を下げてきた。

「昨日、何が悪いのか、みんなして俺を無視したよな？」

「つうか…お前って、一緒のクラスだったか？」

「ヒャッホーイッ！ビックリ箱な咲也に天誅ーッ！！」

どういう経緯でそんな鬼の形相になるのか不明だが、箒をまるで大剣のように俺に振り落としてきた。

「……」

甘んじてその攻撃を受ける俺ではないので、一歩後ろに下がり…

スカッ

「なにッ!?避けられたッ!?」

無防備な顎を問答無用で蹴り込む。

バキッ!

「かッ…!」

決して比喩ではなく、本当に気持ち悪い動きで地に伏せ、白眼をむいて気絶したアホを見下ろす。

「何なんだコイツ…」

「おい桐島」

「あン?」

「あんまり暴れんなよ、埃が舞うだろ」

振り向くと、呆れ顔全開の西野と塵取りを持った水本が。

「…俺は悪くねェだろ」

「影宮はお前のしもべだろ?リードでも繋いでろって」

「しもべよりかは下衆だろ…コイツ」

「高校生の日常会話じゃないよ!それは!」

ゴミをすくっていた水本が的を得たツッコミをしてくれる。

「で?どうすんだこれ?」

「ほっとけ…その内ナメクジのように地を這ってゴミ箱に行くだろ」

「そうだな」

「納得しちゃうの卓!?ていうか影宮クンの扱いヒド過ぎないかな？」

「デフォルトだ…」

「デフォルトだな」

「えぇ～…」

「しっかり…聞こえてんぞ…テメェら…」

――――――――――

しぶとく呻くアホにトドメをさし、部室に向う。

「あら、咲也くん」

すると角を曲がった途端に、出席簿を胸に抱えた山中顧問と鉢合わせた。

「掃除はキチンとやったの？」

「デカいゴミが残ってるが…勝手に消える」

「何それ？」

キョトンとした表情の顧問をスルーし、横を通り過ぎ、階段を上がる。

「無視することないじゃな～い」

そして、その後ろを口を尖らせながら顧問がついてくる。

「…なんだ？何の用があんだ？」

「どうしてそんなにぞんざいに扱うかしらね～」

それはアンタの普段の態度から導き出された結果だ。

「私は軽音部の顧問なんだから、部室に行くのは当然でしょ？」

「…その当然に琴吹の茶が含まれてんだろ」

「まぁ～ね～♪」

「はぁ…」

『キャハッ♪』とか似合わない痛い発言をする顧問にため息をついて、止まっていた歩みを再開する。

「でも、今日はそれだけじゃないわよ」

「あン？」

「棚が届いたみたいだからそれの確認と…」

次に発せられる言葉に思わず歩みを止めてしまった。

「私のギターがいくらで売れたかを聞きにね」

「……」

ピタ…

「咲也くん？」

やはりきたか…この質問…

正直に五十万と答えたら全額くれる可能性はまずないだろう。
俺も秋山も田井中も中野も欲しい物がある（平沢はどうでも良い）
それを入手するにはあの金が必要。

「そういえば咲也くんは知ってるのよね？いくらになったの？」

さて…素直に答えるわけにはいかない。
ならばどうする？
簡単だ…

「二万」

アッサリと嘘を吐けば良い。

「やっぱりそんなもんかぁ～」

持ち前の鋼のハートをフル活用し、不審な素振りを一切みせずに告げたので、まさか五十万など思わない顧問が疑いもせずに納得した

かのように頷く。

これで平沢達がボロを出さなければ四十八万は俺らの懐に収まる。

危ない橋を渡っているのは重々承知だが、俺はエフェクターが欲しい。

「……」

そして目の前には部室の扉。

ガチャ

それをいつも通りに開けて中に入る。

「やっほ～」

「……」

『ヒッ！』

部室では各々が様々な作業を勤しんでおり、顧問の、のんびりとした声を聞いた途端に全員が肩を揺らし、小さく悲鳴を上げる。
全員ＳＧの買い取り価格を聞かれるのを恐れているようだ。
その証拠に誰一人として顧問に視線を向けようとしない。

「棚が届いたんでしょ？」

そんな様子に気付かない顧問は軽やかなステップで物置部屋に向う。

「……」

俺はいつも通りに長イスに座る。
そして何となくアコギを取る。

「あら、良い感じじゃない　うんうん…ん？どうしたの？人が声かけてるのに」

一向に口を開こうとしない部員の様子に漸く顧問が疑問を持ったらしい。

《いつも通り騒いどけ、バレるぞ》

そこで俺は、事を円滑に進めるために、こんなことを部員全員に視線で命ずる。

《ラジャー》

それに真っ先に反応した田井中が小さく頷いて顧問に向き直る。
そして俺は近くにいた平沢に…

《援護にいけ》

《ラジャー、サッくん隊員》

急造で対山中顧問撃墜部隊（頼りない）を結成させ、それをぶつける。

「うっほう！さわちゃん！なんだ来てたんだ！聞こえなかった！」

「そう？」

「そうそう！なぁ唯？」

「うんうん！レモ助とギー太を遊ばせてたから気付かなかったよ～！」

どんな言い訳だ…

「そういえばさっき咲也くんから聞いたんだけど、私のギター二万で売れたんでしょ？」

『へっ！？』

チームワーク抜群にすっとんきょうな声をあげた部員達が、一斉に長イスで我関せずにアコギのチューニングをしている俺を見てくる。

「……」

そんな連中にゆっくりと視線を向け…

《二万で売れたことにした、だから合わせろ》

アイコンタクトを送る。

《さ、咲也～！？》

《勇者かサク！？》

《それは欲張り過ぎではありませんか～！？》

このような返事が返ってきたが、これ以上は顧問にバレると直感し、視線を逸す。

「そ、そうなんだよ～二万でさ～」

「り、律…！？」
「律先輩…！？」

どうやら田井中もあの魅力的な諭吉五十人には勝てなかったようだ。
ポリポリと頭をかきながら、顧問に立ち向かう。
そんな真の勇者に秋山と中野が泡を食う。

「な、なんか五十年以上前のギターらしいよ」

「そんなに古かったんだ！」

何とかそれらしい理由をつけようと田井中が躍起になり、更にそれを援護しようと平沢が…

「あれーっ？てーことは、さわちゃん五十代でいらっしゃる？」

「アホめ…」

それは援護ではなく地雷だ…

「どこにこんなピチピチした五十代がいるかっ！！」

「すみません！」

「ごめんなさい！ごめんなさい～！」

傍迷惑な地雷の被害を受けた中野と秋山が全力で謝罪する。

つうか…

「自分でピチピチとか言うなよ…死語だぞ…」

「何か言ったー？」

「別に…」

どうやら地獄耳らしい。
俺がポツリと呟いた本音に少し目付きが鋭くなった顧問がこっちを見るが、アッサリと受け流す。

「お父さんの友達に貰ったって言ったでしょ！」

「そうでした～」

「ゴホン　そういえば古いの押しつけずに新しいの買ってよ！って思ったわねー」

気を取り直すかのように小さく咳払いをし、のほほんと告げるこの言葉。

（ヴィンテージっつう言葉知らねェで良かった…）

密かにこんなことを思ったりした。

さて、このままいけば万事が上手くいき、四十八万は晴れて俺達の

ものだった…
このままいけばな…

「それじゃとりあえず買取証明書ちょうだい」

これが計画を破綻させた原因だった…

「はひ？」
「あぁ？」

「証明書よ、少額でも部費に計上しておくから当然でしょ？」

しまった…
失念していた…
部費の足しにするのだから、その証拠となる物が必要となる…
この場合は買取証明書だ…

「りっちゃん、咲也くん、あなた達まさか貰ってこなかったの？」

「え、いや…あの…」

顧問の咎めるような視線に耐えきれなくなかった田井中が、恐る恐るブレザーのポッケから一枚の紙切れ…二万ではなく五十万と掲載させてある証明書を取り出す。

「なんだ、あるんじゃない」

（チッ…）

万事休す…
思わず脳内で修司に苦虫を大量に食わせて悶絶させてしまう。
こんなくだらない想像が出来る俺は、まだ余裕があるのかもしれない。

《サク～！助けて～！》

この余裕が功を奏したのか、振り返りアイコンタクトを送ってきた

冷や汗を大量にかいてるの田井中に…

《抹消しろ、隠滅しろ》

《ど、どうやって？》

《喰え》

《ラ、ラジャー》

こんな命令を。

極限まで追い込まれた人間は、もはやただの操り人形であり、何をするのか分からない生物に変化する。

なので田井中は普段ならば絶対に拒否する筈の命令に素直に従う。

つうか、よくよく考えれば俺も追い込まれていたのかもしれない…

こんなアホみたいな提案するなど…

「あむっ！」

「ちょっ…！」

そんな今更気付いた、俺の判断間違いなど知るよしもない田井中が

証拠隠滅を図るため、モシャモシャとヤギのように食べ始めた。

「さすが…勇者…」

そんな田井中の勇姿を激励するかの如く、平沢達四人が俺の前で『喰～え！喰～え！』と音頭を取り始めた。
どうやら四人共々やけになっているらしい…

「何やってんのよ！早く出しなさい！」

「やらっ！」

「出しなさーい！」

「れっらいやらっ！」

顧問と孤軍奮闘する田井中。
このまま拮抗するかと思ったが、顧問が眼鏡を取ったことで事態はあっけなく終焉する。

「だ・し・な・さ・い」

「ヒィィィッ！」

「はぁ…」

……

地面に膝と額をつけ、かいがいしく頭を下げる、平沢、秋山、田井中、琴吹、中野。

俺は相変わらず長イスに座ったまま腕を組んでいた。

「うそっ！！五十万にもなったの！？すごいじゃない！」

顧問の伝家の宝刀である、軽音部時代の目付きを発動し、田井中の口から吐き出された買取証明書を見て驚愕する。

「結構貴重なものらしくって…」

土下座したままの琴吹が真実を語る。

「ごめんなせぇ！隠すつもりはなかったんじゃが、あまりの金額の多さにオラ、気が動転してしもうて～！でも元凶はサクじゃから罰を与えるんならサクにやってくだせぇ～！」

「…俺を黒幕に仕立てあげんなテメェ」

「実際そうだろ！サクがさわちゃんに二万なんて最初に言うから、ややこしくなったんだろ！」

「アホか…正直に五十万なんて言ってみろ、この人が全額くれるなんて思うか？」

「それはないな」

「りっちゃーん！咲也くーん！」

「ヒィ！ごめんなせぇ！」

「チッ…」

底冷えするかのような顧問の低音ボイスで田井中は再び土下座し、俺は舌打ちをして、外の風景を眺める。

「じゃあ咲也くんが言った二万円を部費として計上しておくから、その棚買ったことにしておきなさい」

「あぁ？」

勝ち誇ったような表情で納得いかないことを言う顧問に異論を唱える。

「…あの棚せいぜい四千ぐらいだぞ、つうかＳＧ売った金を部費の足しにしろっつったのアンタだろが」

「確かに言ったけど、五十万なんて大金を学校が了承しないわよ」

「…じゃあ個人的にくれ」

「すごいこと言うわね咲也くん…」

思い切り呆れた表情をされた。
まぁ、当然か。

「最初から正直に言えば全部あげたのになー」

「それは絶対ウソだー！」

やっぱり勝ち誇ったような表情で言い張る顧問に頭を上げた田井中が嘆く。

「全く、律と咲也がいけないんだぞ、変に隠そうとするから」

「そうですよ、私はキチンと話した方が良いですって言ってたのに」

「どの口が言うか！」

秋山と中野の辛辣な発言に田井中が喚く。

「…つうかお前らだって、エフェクターが欲しいだの言ってたろうが、一肌脱いでやったっつうのにそんなこと言うか？失望だな…」

「そこまで言いますか…」

「私は別に…そこまで欲しいとは思ってなかったし…」

「あぁ？」

頬をかきながら視線を彼方に逸す秋山に、代わりに田井中の頭でもはたこうと少し腰を浮かせたが…

「さわちゃん！」

急に右手を挙手した平沢の行動にそれは阻まれた。

「最後にお願いがあります！その札束でほっぺを…ほっぺを殴ってください！」

「……」

何を言い出すんだコイツは…

ペチッ…

「あん♪幸せ…♪」

顧問が茶封筒から諭吉十人を取り出し、それで平沢の頬をゆっくり

と打つとどうだろうか。
それはそれは至福な表情になる平沢…

「お前は良いよな、平和で…」

「はぁ……」

思考がズレまくり、感覚感性が全く理解不能の平沢に深いため息が…

――――――――

「う～ん…やっぱりアンプが一番無難かなぁ…」

「私はエフェクターの方が良いような気がしますけど…」

「…アンプもエフェクターも田井中と琴吹が使えねェだろ」

「そうだな、みんなで使えるものじゃないしな」

夕暮れの学校の敷地内を歩く俺達。
あの後、顧問から好きなものを一つだけ買ってやるという椀飯振る舞いチックな発言があった。
で、何を買うかという議論を帰りがてら、やっていたが進展ナシ。

すると…

「グリップを握る時、力を入れ過ぎないで～」

「ぁ…」

「っと…」

不意に聞こえてきたどっかの部活の練習風景に、立ち止まる中野。
俺は中野の後ろを歩いていたのでぶつかりそうになるが、何とか避けることに成功する。

「急に止まんなよ…」

「あ、すみません…」

「…ん…？」

チラッと俺を見て、謝罪をしたかと思えば、どこかおかしな様子で視線をある場所に向ける中野。

「……」

そんな中野に疑問を持ちながら視線の先を追うと…

「ボールは身体全体で打つの、手だけで打つと手首とか肘を痛めるよ、いい？」

『はーい！』

そこにはテニス部が後輩に指導している光景が。
別にただの練習風景なんだが…

「どこの部も新入部員が入って本格的に活動開始だな～」

「うん」

「ですね…」

「あずにゃん？」

（コイツ…）

赤のジャージの二年が緑のジャージの一年に指導しているのをジッと見つめる中野。
その瞳に映るのは何なのか…
そして今、俺達のたった一人の後輩は何を考えてるのか…

「……」

少しだけ…分かった…

――――――――――

中野と別れ、平沢が俺の横に来てトコトコ歩く。

そして平沢がおもむろに口を開いた。

「ねぇサッくん」

「…それ止めろ」

「私、思ったんだぁ…」

やっぱりスルーするか…

「…何を」

とりあえず視線は前を向いたまま平沢を促す。

「あずにゃん、やっぱり後輩が欲しいんじゃないかな?」

俺の横を歩くコイツは、たまに物事の核心を突く。
そして今言ったことは俺も感じていたこと。

「多分…そうだろうな」

今年は六人で良い、後悔はしないとは言っていたものの、そこはやはり人間。
テニス部の光景を見た中野は、もしかしたら閉じ込めていた想いがこぼれてしまったのかもしれない…

『後輩が欲しい』

というちっぽけであり、広大な願望。
それを叶えてやるのはひとえに先輩である俺達の役目なんだろうが…

「あずにゃんが来てくれた時、すごく嬉しかったもんね」

「少しはな…」

「サッくん、すごく喜んでたよ？」

「そりゃお前だ…」

「あれ？」

今からまたビラ配りなどの勧誘をしても手後れだ。
既に新学期が始まって二週間。
一年の時の俺や平沢みたいにまだ部活に入らず悩んでるやつなんて早々いないだろう。

一応、平沢妹と鈴木は入部予定があるが、いかんせんそれは来年の話だし、何よりアイツらは中野にとっての後輩ではない。

「はぁ…」

少しばかりのやるせない思いに格闘していると…

「おおっ！良いこと思いついた！」

何かを閃いたらしく、立ち止まり、ポンと手を叩く平沢。

「…何思い付いたんだ？」

「エヘヘ～♪それはね～♪」

平沢が立ち止まったので俺も立ち止まり、少し後ろにいる平沢に問い掛けると、嬉しそうに笑い…

「♪も～しも～しか～めよ～か～めさ～んよ～」

「……」

『うさぎとかめ』を口ずさみながらスキップで俺を追い越す。
俺はそんな平沢の姿を眼で追いかける…

「♪せ～かいのう～ちにお～まえほど　あ～ゆみののろい～ものは
～ない～っと…」

そこで歌は終わり、さっきまで後ろにいた平沢が今は数歩先にいる。
そして夕陽を背負った平沢が俺に振り向いた。

「秘密♪」

「あぁ？」

夕陽の逆光に照らされる平沢の表情は確認できないのだが、何故か

満面の笑みを浮かべているのが分かった…

「明日になったら教えてあげる♪」

「…いや、今言えよ」

「ヤダ～♪どうしても知りたければ私を捕まえてみなさ～い♪」

そんなことを言ってスキップをして先に進むが…

「やるわけねェし…」

明日になれば自ずから判明するみたいだし、そんな恥ずかしい行為をする俺ではないので、普通に歩く。

「サッく～ん！追ってきてよ～！」

すると平沢が足早に戻ってきた。
そんな油断大敵な奴の襟首を軽く掴む。

「…約束通り教えろ」

「はっ！し、しまった～！」

何とか逃れようとジタバタするが、リードで繋がれた犬状態なので、
中々にこの手は離れない。

「チェ～…実は…」

観念したのか、上目遣いで俺を見つめてくる。

「昨日、ホームセンターに行った時にあずにゃんがね…」

――――――――――

平沢が提案した中野のための『ある者？』を『入部？』させるため、翌日の部活は中野には休みと伝え、俺達三年と顧問はホームセンターにて『それ』と必要な物を購入した。

『唯、これで梓は喜ぶのか？』

『バッチリだよりっちゃん！』

『お前のバッチリは当てにならねェからな…』

『ヒドいよ～サッく～ん』

『結構高い買い物したわ～　でも水槽買わなくて良かったの？』

『水槽はこの前掃除した時にありましたから、なぁムギ？』

『うん♪あ、でも水温計やポンプとか必要なものがまだあるわ』

『それじゃあそれも買いましょ』

『…随分と気前が良いな』

『梓ちゃんのためだからね！……もしかしたら感謝してネコ耳とかつけてくれそうだし……』

『アホだこの人…』

『さわちゃん…』

『あずにゃんの喜ぶ姿が眼に浮かぶよ～』

『うん♪私も～♪』

『喜ぶのかな？梓…』

で、学校に帰ってきた俺達は総出で部室の一部を『コイツ』のための専用部屋を準備し…

『出来た～♪』

平沢が歓喜の声をあげて作業終了し、この日はお開きに。

そして翌日。

満を持して中野が部室にやってくるのを今か今かと待っていた平沢がそわそわとしていると…

ガチャ

「こんにちは」

「あずにゃん！」

やってきた中野の手を平沢が引っ張る。

「わっ！唯先輩！？」

「あずにゃん！あずにゃんに見せたいものがあるんだよ～♪」

「え？見せたいもの？」

とりあえず俺と秋山と田井中はその様子を長イスに座り、遠目から眺める。

「どう思う？」

「…平沢の自爆に一票」

「唯の勘違いに一票」

「私も澪の意見に一票っていうか、サクのも一緒か」

田井中が中野に視線を向けたまま意見を聞いてくるので思ったことを口にする。
そして遂に平沢と妙に嬉しそうな琴吹によって、昨日入手した『奴』のベールが剥れた。

「あの、何ですか？これ？」

「新入部員の『トンちゃん』だよ～♪」

「先生に頼んで買ってもらったの♪梓ちゃんの後輩よ、よろしくね♪」

「へー…」

これが中野の感想。

昨日、俺達が入手したのはズバリ亀。
品種は『スッポンモドキ』という、スッポンでもなければただの亀でもないなんか惜しい奴。

平沢曰く、ホームセンターで中野がこの亀をエラく気に入っていたので是非とも中野の後輩としてプレゼントしてやろうというのが二日前の帰り道で平沢が閃いたことだった。

ぶっちゃけ半信半疑だったが、中野と共にいた当事者の平沢が言うのならばということで俺達は渋々納得し、この亀を軽音部に入部？させた。

ちなみに名前の由来は『鼻が豚みたいでかわいい』という平沢の安直な発想に『トンちゃん』と名付けられた。

まぁ、俺からしたらそこは、どうでも良かったりする。

「あれ？あずにゃん？」

「おいおい　なんかリアクション薄くね？」

「うん」

「…当然なんじゃねェの？部室に行ったらそこには何故か亀がいて、しかも新入部員で後輩なんて」

「だよな～…よっと…」

俺の発言に同意した田井中が長イスから立ち上がる。

「梓がこの亀が好きだって言ったのは唯だぞ」

「だってあずにゃん、欲しそうにジッと見つめていたんだもん」

この出来事は平沢の先走った結果だったと分かったのは、この後の中野の発言だった。

「見つめていたのは唯先輩でしょう?私はただ変な顔だなって見ていただけです」

「へ?」

「当ったな…俺達の予想」

「うん、嬉しくないけど…」

秋山が長イスの背もたれに思い切りもたれる。
そんな秋山を放置して俺は立ち上がる。

「やっちまったな…唯」

「うぅ…」

「唯ちゃん…」

自分の勘違いだと判明した瞬間に膝から崩れ落ちる平沢。

「でも、何で急にこんなことしたんですか？」

「いやー…」

「梓、後輩いなくて寂しいかなって思って…」

「だから、新入部員は入ってこなかったけど、せめてって思って…」

「先輩…」

田井中がバツが悪そうに頭をかき、秋山が長イスから立ち上がって、琴吹が崩れ落ちた平沢を介抱しながらのそれぞれの発言に中野が部室の一角でフヨフヨと水槽の中で浮かんでいる亀に身体を向ける。

「平沢の勘違いとはいえ…少しだけでも喜んでやれ」

「サク先輩…」

中野の横を通り過ぎ、平沢の横に立ち、改めて亀を見る俺。

「コイツ、お前が喜ぶっつって昨日からうるせェんだ…」

「ブヒ…ブヒ…」

うなだれる平沢の頭を軽く二回ポンポンと叩くと小さな鳴き声が。

「クスッ…」

そんな俺達を見渡した中野は小さく笑い、鞄をテーブルに置き、水槽に近付く。

「もう、こんな早とちりで飼われたら迷惑だよね」

亀にそう告げてカチッと小さく水槽を叩くと…

「あっ！」

「頷いた～！」

「偶然だろ…」

「かわいい～♪」

中野が小さく声をあげ、琴吹が口に手をやり少し驚き、俺が訝しげに眼を細め、平沢が復活する。

「大丈夫、これから私がちゃんと面倒みるからね」

「いやいや、私もちゃんとするし～♪」

「無理でしょ？唯先輩には」

「そんなことないも～ん」

「ニャッ！？何で抱き付くんですか～！？」

「はぁ…何とか落着したか…」

「そうね～♪あ、咲也君、あれ」

「あン？」

琴吹が俺の背後を指差すので振り返ると…

カシャ

秋山がカメラを向けていた。

「何撮ってんだお前…」

「記念だよ、新入部員入部記念の」

「亀だろ…」

「はっ！亀だけにカメラ！」

「「……」」

「そ、そんな冷たい眼で私を見るな～！ムギ～澪とサクが～！」

もうすぐ葉桜になる四月下旬。

軽音部に待望の新入部員?が入部?

「そういや…」

「うん？」

「棚…サイズどうだったんだ？」

「ピッタリだったよ、咲也の勘ってすごいのかもな」

「んじゃ…そのすごい勘で新曲でも作るか…」

「そこは才能って言って良いんじゃないか？」

「そんな大層なもんじゃねェよ…」

「クスッ　そっか」

「……」

何笑ってんだ…

第七十三話（前書き）

田井中　律とドラムです。

第七十三話

特に何のおもしろエピソードもなく、部屋で黙々と新曲を創作していたり、俺のケータイのアドレスを修司から教えてもらったから登録よろしくメールが大野から送信されて来たり、取り留めのない内容のメールが平沢から毎日来たり…

まぁ、早い話が今年のゴールデンウィークは例年の長期休暇通り、自堕落に過ぎた。

…ある一日はある奴とゲーセンで遊んだが…

とりあえずそんなゴールデンウィークが終わった次の日。

五月上旬。

「準備は良いですか？」

おっさんと呼ぶにふさわしいカメラマンが右手を上げて合図を送る。

「はい、お願いします」

それに山中担任が一度、我が三年二組を見渡した後、猫かぶりモードで小さく頭を下げる。

突き抜けるような碧が広がる五月晴れの本日。

俺達は五時間目の授業を利用し、卒業アルバムに載せるクラス写真をこれから撮ろうとしていた。

「サッくん、笑顔だよ笑顔」

雛壇のように背の順で三段に整列させられた俺達。

俺は三段目のカメラマンから見て左から四番目の位置に陣取っている。

ちなみに右隣は琴吹で左隣は修司だったりする。

そして二段目の端っこにいる平沢が振り向いてきた。

「前向いとけ…」

「唯、もうすぐ写真撮るから」

「ほ～い」

俺と平沢の横にいる真鍋の軽い間然により、カメラに向き直る。

「これって笑った方が点数高ェかな？」

「何のだよ…」

「ほら、ポイントカードみたいなもん
家電買ったら今ならポイント五倍ってあんじゃん？」

「……」

「それに習って、今なら写真撮る時に笑ったら、テストの点数が倍になる！とかねェかな？」

「…お前一生口開くな」

「なぜッ！？」

素晴らしい思考を持っているアホに特命を下し、カメラではなく、その後ろに見える山々の風景に視線を向ける。

「はい、撮りまーす」

カメラマンのその掛け声のすぐ後に…

カシャ

シャッター音が青空に響いた。

――――――――――

放課後。

♪…♪…

「……」

部室にて俺はアンプにテレキャスとヘッドフォンを繋ぎ、長イスに座って作曲を。

「トンちゃん…か、かわええ…♪」

「うん♪あれ？澪ちゃん怖いの？」

「こ、怖くはないけど、かわいいと思う境地にはまだ…」

「唯先輩、飼う以上はちゃんと世話もしないとダメですからね」

平沢達は新入部員（？）の亀に夢中に。

特に平沢なんか一番ハマッてる。

中野ためとか言いつつ、もしかしたら自分のためなんじゃねェだろうな…

♪…

とりあえずそんな思考を断ち切り、漸くＡメロのリードＴＡＢ譜の土台が出来たので、左手でＢｍコードを押さえて右手に持ったピックを弦に当てたら…

バァンッ！

「ん…？」

部室の扉が勢いよく開き、そこにいた顔を俯かせて、何故か片手にノートパソコンを持っている人物に全員の眼が向けられる。

「律？どうしたんだ？ていうかゆっくり開けろよ、びっくりするじゃないか」

もっともな意見を言う秋山の言葉には耳を傾けず、顔を俯かせたまま部室に足を踏み入れ、長イスの前…俺の横で立ち止まる。

（何だコイツ？）

様子がおかしい田井中に眉をしかめて、ヘッドフォンを首に移動するが、この後すぐに後悔した。

「ヤダぁーっ！！」

「ッ！」

顔を上げて突然叫んだカチューシャのボイスに、お久し振りの耳キーン状態に。

ヘッドフォンしたままだったらならなかったかも…

「うるせェなテメェ…」

「大丈夫ですか？サク先輩」

「どうしたの？りっちゃん」

耳の中で反響する金切り声に耐えながら、少々かすれたような声でカチューシャに今出来る精一杯の文句を言い、亀に夢中になっていた中野と平沢が俺と田井中それぞれに視線をくれる。

そして何故か、えぐえぐと泣き真似をしだしたカチューシャから爆弾発言が。

「ドラムやだぁーっ！！」

「…はぁ？」

ドラマーたる奴の口から発せられた爆弾に全員のリアクションを俺が代弁する。

「お前何言い出すんだ…」

「そうだぞ律、急にドラムやだって…」

徐々に消えゆく反響に反比例して渦のようにグルグルと『呆れ』と『怒り』が非常に僅かではあるが俺の胸中に発生する。

「すまん！イヤだとは言い過ぎた、だが！これを見よ！」

泣き真似から一変し、いつもの田井中に。
そして俺の横に持っていたノートパソコン置き、それを起動させ、鞄から一枚のＤＶＤを取り出しセット。

「今年の新歓ライブがＤＶＤにコピー出来たから和が貸してくれたんだよ」

「だからりっちゃん、和ちゃんと一緒に生徒会室に行ったんだね」

平沢がポンと手を叩く。

「でだ、それを確認したんだけど…」

田井中がカチカチとマウスを操る。
平沢達はノートパソコンの画面を確認するために田井中の後ろに移動する。
俺はテレキャスを持ったまま立ち上がって最後尾で確認。

「…これが何なんだ」

映っているのは確かに今年の新歓ライブの観客席からの映像。
場面はちょうど『いちごパフェが止まらない』通称『パフェ』の演奏が終わり、拍手喝采が起こってるシーン。

「ドラムんとよく見てみろ」

「あン？」

そんなことを言うのでドラムを見る。
厳密にいえば田井中をだ。

「りっちゃん暗っ！」

「…デコは輝いてるけどな」

「あ、ホントだ！おでこ明るい！」

「うるせーっ」

平沢が画面の田井中を指差す。

ステージ上の俺達はライトが当たり表情まで確認出来るが、田井中だけはデコにしかライトが当たっておらず、何だか無人でドラムを叩いているようだ。

「座ってるからライトが当たってないんだな」

「それに隅っこですからね」

「真正面から映すと、確かにドラムだけ見えないね」

秋山、中野、琴吹が食い入るように映像を見た後、口々にこのような現象の原因を解く。

「それだけじゃないんだよ」

ノートパソコンからＤＶＤを取り出し、違うＤＶＤに交換する田井中。

「去年の新歓も！」

「……」

「去年の学園祭も！」

「……」

「一昨年の学園祭も！」

次々に交換していく度に映る映像には全て、田井中のデコしか光ってなかった。
どうやら生徒会室で俺達のライブを全部確認したらしい。

「見事に映ってないな…」

「そうね…」

「あの…律先輩、それで？」

部室の隅で蹲り、再び泣き真似を始めたカチューシャに中野が尋ねる。

「他の楽器やりたい…」

「はぁ！？」
「はぁ…」

ポツリと呟いたカチューシャに秋山と俺は揃って同じような言葉を。
しかし秋山は驚愕であり俺は『怒り』より『呆れ』が勝った。

「たまにはかえっこしてみようぜ、楽器♪」

立ち上がってウインクをするカチューシャに…

（くだらねェ…）

こんな正当なことを思い、テレキャスからシールドを抜いてスタンドに立て掛け、ヘッドフォンをアンプの上に置いてテーブルに向う。

田井中は自分がライトに当たらないからドラムを一時拒否。
つまりは他の楽器をやるというただの好奇心。

そんな理由だったら呆れるのが道理だろう。
もし…仮にドラムに飽きた、もうやりたくない等ほざいてたら…また歯車が狂ってたかもな。

その点は、こんなくだらない理由で良かった。

「……」

普段は中野が座ってる椅子に座り、フヨフヨと遊泳している亀を一瞥してから頬杖をつく。

「全く、律は…」

完全に呆れたような表情で秋山がテーブルやってきては自分の椅子に座る。
どうやら心境は俺と同じらしい。

「ねぇ咲也」

「あン？」

「もしかして…怒ってる？」

平沢のレスポールを借りて拙い手つきで弾いている田井中と、それを教えている平沢と中野をぼんやり眺めていると秋山が俺の機嫌を伺ってきた。

「怒ってねェが…呆れてる」

視線は田井中達に向けたまま、本音を返答。

「良かった…」

「あぁ？」

てっきり同意するものかと思っていたが、安堵の息を漏らした秋山に思わず首を動かす。

「咲也って音楽に対しては真面目だからさ、律があんなこと言って怒ってるんじゃないかって思ってたんだよ」

「……」

秋山の表情は胸のつっかえが取れたような、それでいてどこか安心したような…そんな顔だった。

「つうか…俺が普段は不真面目みてェな言いかたすんな」

失礼だ。

「だって授業中は寝てばかりいるじゃないか
初めて咲也と同じクラスになったけど、普段からあんな態度だったらそう思うのは当然だ」

「……」

『和も一年の頃から変わってないって言ってたぞ』と最後に付け足し、紅茶を飲む秋山に、グゥの音も出ない。

「……アイツは昔からあんな感じなのか？」

この話題はジリジリと崖に追い込まれるように俺にとって不利なので、視線を田井中達に戻し、違う話題を。

「そうだな、昔から落ち着きがないっていうか、飽きっぽいっていうか…良く言えばコージー・パウエルみたいな感じだったよ」

「コージー・パウエルもキース・ムーンもまともな死に方してねェけどな…」

「うっ…」

今度は秋山がグゥの音が出ない。

キース・ムーンはアルコール依存症の治療の為の薬を過剰摂取してしまい急死。
コージー・パウエルはシートベルトをせずにケータイで会話をしながら高速道路を爆走、かなりのスピードだったようで中央分離帯に衝突し事故死。

ただ言えるのはどちらも後生にその名を轟かせる偉大かつ、伝説な

ドラマーだということ。

「でも…律はドラムだけはずっとやってたんだ」

「……」

その飽きっぽさを発揮し、平沢のギターを数分で止めた田井中が今度は琴吹のキーボードを弄り始めた。

そんな田井中を見ながら秋山が微笑む。

「だから、明日になったらドラムが良いって言うよ」

「……」

微笑んだままの秋山が俺に振り向く。

田井中は秋山を、秋山は田井中を。

コイツらリズム隊はそれぞれお互いを信頼し、理解し、たまに喧嘩し、そうやって歩んできたんだろう。

じゃなければ秋山はそんな確信めいた事は言わないだろう。
それは田井中を熟知しているからこそ。
そして…

「りっちゃん部長、ベースはやらないの？」

「ベースはやらな～い！」

「ほぇ？なんで？」

「あー…あれだよ…」

「何ですか？」

「…とにかく！ベースはいいんだってっ」

「律…」

「ふーん…」

秋山を理解し熟知しているからこそベースには手を出さない。
チラッと秋山を見ては照れたように笑う田井中。
そしてそれを紛らわすかのように…

「サクのアコギも弾いてみたいな～」

アコギを指差しながら、俺を見てくる。

「却下…」

「え～っ！良いじゃ～ん～」

「はぁ…」

口を尖らせる田井中に、やっぱり呆れる俺。

まさかそれに同意するかの如く、後ろにいる亀が頷いたなんて俺は…俺達は知るよしもない。

―――――――――

夕暮れの帰り道。

「う～ん…」

「どうしたんでしょうか？唯先輩」

「…知るかよ」

いつもならば中野の横には平沢がいるのだが、今日は珍しく俺がいた。

そして平沢は本来の俺の位置…即ち二、三歩後ろで何やら唸っていた。

「何か考えてんだろ…」

「みたい…ですね」

腕を組んでトコトコと歩く平沢に俺達はチラッと振り返る。

「ねぇ…サッくん、あずにゃん」

「サッくん言うな」
「はい？」

すると考えがまとまったのか、平沢が立ち止まり呼び掛けるので、俺達も立ち止まる。

「りっちゃんがドラムやらなかったら、私がやろうかな」

「え？何でですか？」

「……」

真剣な表情でこんなことを言う。

「いや、りっちゃんなんか悩んでるんだよ」

「ただの気の迷いだろ…明日になったらドラムが良いっつうぞ、アイツ」

秋山曰くだが。

「そうですよ、それに先輩、ドラム叩けるんですか？」

「ううん」

「…未だに俺達にギター教わってる奴が無謀なチャレンジすんな」

「でもでもサッくん、りっちゃんだけ後ろで、ライトが当らなくて寂しいんだよ」

「あながち間違いじゃねェかもだが…」

「まぁ、律先輩だけライトが当たってないのは可哀相ですけど…」

「でしょ？りっちゃんの悩みは軽音部の悩みなんだよ」

お前の抱えるそのジャイアニズムは何なんだ…

「ほっとけ…つうか下手に干渉しねェほうが得策だ」

「唯先輩は考え過ぎなんですよ」

そう告げて俺達は踵を返して歩き出す。
アイツの事を親身なって考えるのは結構だが、空回りなオチになりそうだ…
特に平沢の場合は…

「あ～ん！待ってよ～！」

―――――――――

ガチャ

「……」

翌日の放課後。
三年になり、平沢達と同じクラスになってからというもの部室には一緒に来ていたが、今日は一人で扉を開ける。

「いねェ…か…」

中にはツインテールの姿はなく、相変わらずのんびり遊泳している亀のみが。

平沢と秋山と琴吹は掃除当番。
田井中も一緒の班なのだが、古文の課題を忘れたとかで職員室に呼び出されている。

「ふぅ…」

何となく息を小さく吐いて、鞄を長イスに放り投げ、テレキャスを取り、アンプに繋ぐ。

♪…♪…

チューナーでチューニングを済ませた後に…

ジャラ～ン…♪

テレキャスの特長である高い音色を部室に響かせる。
そして…

♪♪♪…

好きなミュージシャンの曲を思い切り奏でる。

月をモチーフとしたこの曲。

疾走感があり、ライブではかなり盛り上がる鉄板だ。

♪♪♪…

スコアブックで練習したサビを弾き、最後に弦がはち切れるんじゃないかと思うぐらいにチョーキングをして演奏を終える。

パチパチ。

「さすが、うまいな」

「あン？」

突如聞えた拍手と聞き覚えがある声に、音の余韻を残すテレキャスの弦に軽く指を当て、部室の扉に振り返る。

「いやー参ったよ、追加の課題出されちってさー」

そこには田井中。
そして鞄から二本のスティックを取り出し、長イスに鞄を置いてドラムの椅子に座る。

「あれ？梓は？」

「まだ来てねェんじゃねェの…つうか平沢達はどうした？」

「…あ！そっか私、掃除当番だっけ…」

「はぁ…」

本当に忘れていたらしく、眼を見開く。

「まぁ良いっか、それより…サク」

「あン？」

後で秋山から隕石が飛来しそうなのだが、それをアッサリと受け流し、スティックを構える田井中。

「セッション、しようぜ」

「…セッション？」

「おう！何か今さぁ、無性にドラム叩きたいんだよな！」

耐えきれないのか小さくスネアとシンバルを叩き、二カッと笑う。

…なるほど、秋山の予言はズバリだな。

「昨日…ドラムにケチつけたのは誰だ」

「あはは…私です…」

バツが悪そうに視線を泳がせ、スティックで頭をかく。

「まぁ…お前がドラムをやる気になってんなら付き合ってやる」

「それなんだよなぁ…」

テレキャスに視線を落としたが、田井中が感傷的にそう呟くので顔を上げる。

「昨日の夜にザ・フーのライブＤＶＤで、キース・ムーンがガンガンドラム叩いてるのを観ててさ…何ていうか…こう…」

「…原点回帰？」

「そう！それ！そんな感じ！」

上手く言葉が出なかった田井中に助言をすると、笑顔でビシッとスティックを俺に向ける。

「唯のギターとムギのキーボードを触ったけどさ、やっぱり私にはドラムがしっくりくるんだよ」

「……」

「初めてスティック握ってドラム叩いた時、力入れ過ぎて手にマメが出来たんだよ」

視線を落とし、右手の掌を左手の指でなぞり、そのままの状態で俺に問い掛けてきた。

「サク、ギターって弾いてる内に弦押さえてる方の指先が硬くなるんだろ？」

「あぁ…」

左手の指先を見つめながら答える。

九才から始めたギター。
そして今の俺は十八歳。
ほぼ毎日…九年間ギターを触ってきたから俺の左手の指先の皮膚は

厚くなっている。

「そういうのって私はドラムを、サクはギターをやってきた証拠なんだよな…」

「証拠っつうより証の方が響きが良い…」

「あはは！そうだな！」

声に出して笑い、その笑顔でドラムを見つめて口を開く。

「例えライトが当んなくても、影になってても…それでも良いんだ！」

「……」

「私さ、ここでみんなの背中見ながら、みんなの音聴きながら、キース・ムーンみたいにガンガンドラム叩くの…大好きだっ！」

本当に、本当に嬉しそうな満面の笑顔を俺に向ける。
その笑顔は…田井中は根っからのドラマーであり、『ＨＴＴ』のドラマーであることを再認識させるのに十分なものだった…

「セッション…すんだろ？」

「おう！あ、曲どうする？ふわふわ？カレー？」

「お前は思うままに適当に叩いてろ…俺が合わせる」

「ん～…分かった！準備オッケーか副部長？」

クルッとスティックを一回転させ、俺に確認をとる。

「良いぞ…部長」

それに小さく頷き、田井中に向き直る。

「よしっ！ワン！ツー！」

♪♪♪♪…

≡≡≡≡≡≡≡≡≡

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

部室から流れるドラムとエレキギターの音に私達は耳を傾けていた。

「りっちゃんと咲也君だけなのに、何だかとても良い音ね♪」

ムギが言った言葉は唯も梓も私も思ったこと。

律が来ないまま掃除が終わって部室に行ったら、梓が少し開いた扉から中を伺っていた。

『どうしたんだ?』と私が言うと『サク先輩と律先輩が…』そう返して扉から梓が身体をズラした。

何でこんなコソコソしないといけないのか?と思いながら、私は隙間から中を見た。

そこには咲也がギターを持って腕を組んでる姿。

『例えライトが当んなくても、影になってても…それでも良いんだ!』

そして律の声。

そんな律の声は私を笑顔にするのに時間はかからなかった。

『私さ、ここでみんなの背中見ながら、みんなの音聴きながら、キース・ムーンみたいにガンガンドラム叩くの…大好きだっ!』

「やっぱりな」

思った通りだ。
律は飽きっぽいし、落ち着かない。
でも…ドラムだけは投げ出したことはなかった。
私と一緒にＤＶＤ観て、『バンドやろうよ！バンド！私ドラムな！』
私の肩を揺すって興奮した律の顔は今でも覚えてる。

「ねぇ、あずにゃん、キール・ホーイって誰？」

「キース・ムーンだ」

私に、のしかかって部室内を見ている唯が、全然違うことを言うのですぐに訂正する。
ていうか重いな…せめてギターを下ろしてくれないかな…

「律が憧れてるドラマーだよ」

「あぁ、『変人』とか『壊し屋』とか言われた人ですね
爆竹仕掛けて家を廃墟にしたことがあるとか…」

「おぉ～！随分とやんちゃなんだね～」

「やんちゃって…」

そんなかわいいものじゃないと思うけどな唯。

『ん～…分かった！準備オッケーか副部長？』

『良いぞ…部長』

律の言葉に咲也らしく短めに答える。

♪♪♪♪…

そして始まった律と咲也の…頼れる二人の部長と副部長による演奏。

ドラムとエレキギターだけなのに、自然と私達は眼を閉じて聞き入ってしまう。

この位置からは律の姿は確認出来ないけど、律はきっと笑ってる。

咲也は相変わらずの…アレだけど…

少しくらい笑っても良いのにな…って私は何考えてるんだ…

「やっぱりドラムはりっちゃんだよね」

咲也に聞かれたら怒りそうな考えを頭を振って消していたら、突然唯が。

「昨日サッくんに言われたんだ、下手に干渉するなって」

「サク先輩の言う通りでしたね」

「うん！演奏を始める時、振り返るとりっちゃんが元気な顔でスティック叩いて合図してくれるでしょ？そしたらなんか…やるぞーっ！て気になるんだぁ」

「私も♪りっちゃんのドラム聴いてたら…ふわ～ってなる♪」

「何か…かわいい人だな…ムギ先輩」

「そうだな、放課後ティータイムのドラムは律だよ」

『うん！』

私が言ったことにみんなが頷いてくれた。
それはみんなが律をドラマーとして認めてる…はちょっと大袈裟か…

何だろ…律＝ドラム。
うん、こんな感じ。

「あ、演奏終わりましたね」

「そうだね～　じゃあ私達も中に入ろっか？サッくんパワーが足りなくなってきたし」

「何んですかソレ…」

「あ、私ね、新しい曲が出来たの」

「本当かムギ？」

「うん♪昨日りっちゃんがキーボードを触ってくれたから～♪」

「そんなんで出来るんだ…」

すごいなムギ…

「どんな曲なんですか！？」

「早く聴きた～い！」

「歌詞はまだないんだけど…とりあえず中に入りましょ？」

「よしっ！突入～！」

バンッ！

「サッく～ん♪」

「普通に開けろ…後サッくん言うな」

「クスッ　やれやれ」

唯が咲也に抱き付こうとしたけど、アッサリと避けられた。
そんな光景がおもしろくって小さく笑う。

「澪」

「ん？」

「やっぱりドラムだよな～♪」

やっぱり律は笑っていて、唯はまた咲也に抱き付こうとしてるけど失敗の連続。
ムギはキーボードの準備をしていて、梓はそれを手伝っている。

「だと思ったよ、律がドラム以外なんて考えられないからな」

「だよな～」

「あ、そうだ、ムギが新曲出来たんだって」

「マジでムギ！？」

「うん♪タイトルは決まってるの♪」

「タイトルっつうことは…歌詞も決まってんのか？」

「ううん♪」

「そうかい…」

「ムギちゃん、なんてタイトル！？」

いつもは咲也が座ってる長イスに唯が座り、その横に私が座り、横

に律、最後に梓が座る。

「勝手に…まぁ、良い…」

座れなかった咲也はギターをスタンドに置いて、その近くで腕を組む。

「タイトルは『Ｈｏｎｅｙ　ｓｗｅｅｔ　ｔｅａ　ｔｉｍｅ』っていうの」

「おぉ～！美味しそう～♪」

「アホめ…」

「ヒドい…サッくん…」

「ムギ！聴かして！」

律の急かすような言葉に、ムギがゆっくりと鍵盤に指を乗せる。

♪♪♪♪…

歌詞がないからムギが鼻歌をしながらキーボードを奏でていく…

♪♪♪…

（はちみつ色の午後が過ぎてく…Ｈｏｎｅｙ　ｓｗｅｅｔ　ｔｅａ　ｔｉｍｅ…）

どんどん浮かんでくる歌詞。
この曲…私好きだな…

♪♪♪♪…

第七十三話（後書き）

咲也と律が演奏した曲は、律のイメージソングの『Ｇｉｒｌｙ　Ｓｔｏｒｍ　疾走　Ｓｔｉｃｋ』をイメージしてください。

第七十四話（前書き）

修学旅行編です。

第七十四話

修学旅行。

小学校、中学校、高等学校でそれぞれ行われる学校行事の一環。
教職員の引率により生徒が団体行動で宿泊を伴う見学、研修のための旅行。

心得として、文化、経済、産業、歴史の見聞を広め、公衆道徳を守る態度を高める…なんて堅苦しい事が旅行のしおりに長々と書かれてるが、この世に生を受けて十八年。
一端の常識ぐらいは身についてる。

「咲也!咲也!Ｍｒ．フジだぞ!Ｍｒ．フジ!」

「修司君、『Ｍｔ．』じゃないかしら?」

「どっちでも良いじゃ～ん紬ちゃん!同じMがつくんだし!」

「サッくん!サッくん!富士山だよ!綺麗だね～!」

「唯!写真!写真撮ろうぜ～!」

「少しは落ち着け！お前ら！」

「何言ってんだよ澪！修学旅行だぞ！いやが上にもテンションが上がるってもんだろ！」

「サッくん！一緒に写真撮ろ！…あれ？」

「どうしたの？唯ちゃん」

「ん…カメラがない…まぁ、いいっか！ケータイで～おや？憂からメールが来てる」

「あれがミス・フジヤマか～！デケェな～！いつか俺も…いやいや、さすがにそれはな…だが！いつかは！」

「ねぇ卓、影宮クンに色々ツッコミたいところがあるんだけど、どうしようか？」

「無視しとけ、体力もたねぇぞ」

「憂がね、カメラを家に忘れてるから、みんなに借りてだって」

「よし！ならば私のカメラを貸してやろ～」

「ははぁ～！ありがとうございます！りっちゃん殿！」

「和～…唯だけじゃなくて律もいるんですけど～…」

旅行のしおり三頁。
注意事項。

・新幹線、ホテル、観光地では一般のお客さんもいるので、静かに落ち着いて桜ヶ丘生徒として恥じない行動をすること。
それに思い切り反してる奴、現在三人。
公衆道徳を身につけることを是非とも推進したいものだ、コイツらに。

修学旅行とは校外学習。

しかしそんな事を真に受けてる奴なんていないだろう。
もちろん俺もその一人。
だからといって別段、さっきから騒がしい平沢や田井中、修司のようにテンションが上がってるわけではない。
いつも通りのローテンション。

しかし…あまりにも例の三人がうるさいのでテンションは下降を辿っている…

本日五月十四日金曜日。
現在時刻午前十時四十分。

修学旅行当日。

京都へ向う新幹線で俺はゲンナリ中…

「サッくん！写真撮るよ～！」

新幹線の内部は二人掛けシートと三人掛けシートがあり、平沢と秋山、田井中と琴吹でそれぞれ二人掛けシートに座っており、平沢と秋山が座ってるシートを田井中と琴吹の方に回転させて向かい合っている。

一方の俺は通路を挟んだ三人掛けシートに、窓側から西野、水本、俺という風に着席。

修司はその後ろの席で、鷹崎、春雨だが村雨だが忘れたがソイツと共に座って…いや、殆ど俺の背もたれに腕を乗せて身を乗り出している。
つまり、非常にウザい。

そして平沢が手鏡で身だしなみをチェックしながら写真を撮るなど言ってきた。

「勝手に撮ってろ…」

「はい！サッくんコッチ来て！」

俺とのテンションの差が激しい平沢が有無を言わさずに、俺の手を取る。

「咲也、諦めろ…今の唯と律には何言っても無駄だ…」

暗に『早く終わらせた方が懸命』と告げてくる秋山。
その手には田井中のデジカメを持っていた。
どうやら渋々カメラマンをやるらしい。

「はぁ…」

グイグイと引っ張る平沢に抵抗していたが、確かにその通りだと思い、秋山同様に渋々立ち上がる。

「ちょっとそこ！用もないのに立ち上がらないの！」

そこは正論であり、教師であり、担任だ。
俺達の行動に気付いた山中担任がビシッと一喝する。

「だとよ、止めとけ…つうか俺は写真撮ると魂が抜けるんだ」

「お前は明治時代の人間かっ」

田井中が担任の喝に臆することなく、流れる風景に背を向けてポーズをとりながらツッコム。

「さわちゃんも一緒に撮ろうよ～！」

「撮りません！早く席に戻りなさい！」

なんて否定をしていたが…

「じゃあいくぞ、はいチーズ」

カシャ

「アンタ何やってんだよ…」

「うぅ…流されちゃった…」

秋山の掛け声に、ドセンターで満面の笑みで写真に写る担任。
そしてうなだれる。

「今度は澪ちゃんも撮りましょ♪」

「いや、私はいいよ」

「いいから、記念だって」

「修司君、撮って～」

「俺は一緒に撮らないでカメラマンなんだ…」

「りっちゃんのカメラで撮ったら、私のケータイでも撮ってね」

早く終わらせたいのか、琴吹の誘いに秋山がやんわり断るが、田井中が無理矢理フレームに写る位置に誘導させ、平沢が修司にデジカメとケータイを渡す。

「１２－１０は？」

『にー！』

「……」

カシャ

「…アンタ職業は？」

「教師よ…また流されちゃった…」

再び満面の笑みで写真に写った担任が後悔しながら自分の席に戻っていく。
背中に哀愁を漂わせながら…

「今の時間って二時間目が終わった頃だよね？」

「多分な…」

平沢がニンマリして自分のケータイで撮った写真を見ながら席に座った俺に確認をしてくる。

「じゃあ憂に送ろっと、あ、あずにゃんにトンちゃんのお世話を頼

まなきゃ」

「はぁ…」

カチカチとケータイを弄る平沢を横目で見ながらこの修学旅行の先を案ずる。
合宿とはまた違う環境にテンションうなぎ登りな平沢と田井中。
そして今回は修司もいる。
絶対に疲れる…この修学旅行は…

「「はぁ…」」

そんな未来の予感にため息をつくと、後ろから似たようなため息が聞こえてきた。

「ん…？」

些か気になったので、少し腰を浮かせ、後ろに振り向く。

「あ…やぁ、桐島君…」

薄く笑う春雨だが村雨とバッチリと眼が合った。

「何だが桐島君の周りは賑やかだね…」

「…お前は何だか参ってんな」

「ははは…言いにくいんだけど…隣の席が影宮君だから…ちょっと…」

「…はっきり言って良いぞ、アイツがうるせェって」

「いや…まぁ…うん…」

どうやらコイツは騒音発生生物が苦手らしい。

チラッと、田井中と何やら富士山について討論をしている修司を見ては、苦笑いを浮かべる。

「とりあえず、図太い神経でも編み出せ…隣のソイツみてェに」

そう言って窓からの陽の光を浴びてグースカ寝ている鷹崎に視線を向ける。

「そうだね…見習うよ…」

「咲也〜！律ちゃんがおかしなこと言うんだぜ
富士山の頂上には一年中雪があるっつうんだ」

「万年雪っていうのがあるのをサクは知ってるよな？」

「澪ちゃん、紅茶飲む？」

「うん、ていうか持ってきたんだなムギ…」

「あずにゃんと憂にそ～しん！」

「「はぁ…」」

やっぱりうるさい面々に再びため息がかぶる…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「梓ちゃん」

二時間目の数学の授業が終わり、机の上にあった教科書とノートと筆記用具を片付けていると、憂が私の机にやってきた。

「お姉ちゃんからメール来たよ」

「唯先輩から？」

「うん、ほら」

憂がケータイを開いて見せてくるから私はそれを覗き込む。
そしてそこに書かれている文字を読み上げる。

「今、富士山の中、新幹線が見えるよ…何これ？」

有り得ない日本語に思わず憂を見つめる。
新幹線と富士山が逆なんじゃないかな？
ていうか絶対に逆だよ…

「あとね、一緒にこんな写真も送られてきたよ」

憂はこの文脈に疑問を持たないのかな？
気にする素振りをみせないで、カチカチとケータイを操作してまた見せてくれた。

「ぁ…」

そこには修学旅行に行ってる先輩達と先生がいた。

真ん中に先生が満面の笑みでVサイン。
その両横で澪先輩が何故か恥ずかしそうに、でも笑って。
ムギ先輩がかわいらしい笑顔で。
その三人の後ろで唯先輩と律先輩が肩を組んで笑ってて、唯先輩がサク先輩の腕を取って、無理矢理フレームに入れていて、サク先輩はやっぱり笑ってない。
その代わり何だか疲れた顔をしていた。

そんな先輩達を見て何だか…変な気持ちに…なんだろうこれ…？

「お姉ちゃんすごく楽しそうだね♪良かった♪」

とりあえずこの気持ちは後回しにして、ニコニコ笑う憂に一応注意をしておこう。

「憂がそんなんだから唯先輩がだらけるんだよ」

「え？」

「憂は唯先輩に甘いってこと」

普段からちゃんと練習してたら唯先輩のギターの腕は上達するのに…
いつも部室でお菓子食べてだらけて…
たまに私に抱き付いたり…

せっかくレスポールと『絶対音感』を持ってるのに、これじゃあ宝の持ち腐れだよ…

でもライブ…ステージに立ったら、唯先輩は別人みたいになるんだよね…
なんでかな？

「私ってお姉ちゃんに甘いのかな？」

「百人中百人は甘いって言うと思うよ」

「でもお姉ちゃんのお世話を焼くのは楽しいから♪」

「はぁ…」

ニコニコと当たり前に答える憂にサク先輩みたいなため息が…

憂って唯先輩が本当に好きなんだな…

唯先輩が風邪引いた時だって自分に風邪うつしてもらうなんて言ってたし。

「そういえばさ」

「なぁに？」

「なんでサク先輩は疲れた顔してるんだろうね」

これ以上、憂に唯先輩の話をすると何だか私が疲れそうだから、さっき気になったことに話題を代える。

「咲也さんに何か大変な事があったのかな？」

「多分、唯先輩と律先輩が原因かも…」

唯先輩と律先輩がサク先輩を振り回してそう…

「それか修学旅行が楽しみで昨日の夜全然眠れなかったから、今になって眠くなってきたとかね」

「純ちゃん」

いきなり会話に入ってきた純は、私の前の席に勝手に座って人差し指を立てて語り始めた。

「咲也先輩って見掛けによらず子供っぽいとこがあって…
『明日修学旅行だ！楽しみだな～！』
みたいな感じでそのまま朝を迎えて今に至る！」

「ないない、絶対ないよそんなの」

「咲也さんは落ち着いてて大人な人だよ」

「だよね　自分で言ってても違和感感じたもん」

じゃあ言わなきゃ良いのに…
あれ?純ってサク先輩と話したことあるのかな?
咲也先輩って言ったし…

「でも、見掛けによらないっていうのはホントだよ」

「「え?」」

「咲也先輩って見た目は何だかちょっと怖いっていうか…怒ってるみたいな顔してるから性格もそのままなのかなって思ってたけど…」

私と憂は口を挟むことなく、純の話を聞いていた。
サク先輩が軽音部以外の人からどんな風に思われてるか気になるから。

「話したらさ、良い人だよね咲也先輩って！」

ホッと胸を撫で下ろす。

確かにサク先輩は…つり目で少し目付きが怖くて、いつもブスッとしてて…

こんなこと言ったらサク先輩は怒りそうだけど…

優しい人なんだ。

「純ちゃんは咲也さんといつ話したの？」

「ん～…新歓が終わった次の日
そこでアレをもらったよ」

「あぁ、アレ♪」

「そう、アレ♪」

私のために『翼をください』を演奏してくれたり、率先してビラを

配ってくれたり…
それだけじゃない、澪先輩から聞いたんだけど、律先輩と澪先輩が喧嘩した時に話し合うように澪先輩に電話したのもサク先輩。
唯先輩が去年の学園祭ライブに間に合うようにしたのもサク先輩。
まぁ…頑張ったのは影宮先輩みたいだけど…

いつかムギ先輩がサク先輩のケーキだけサイズを大きくした…これは違うかな？
でも何かムギ先輩の機嫌がすごい良かったからサク先輩が何かしたんだろうな。

作詞作曲も出来るし、ギターもうまいし。
教えるのは苦手とか言ってたけど、そんなことないと思う。
唯先輩とたまに私に教える時は、まず自分が手本を見せてそれから的確に教えてくれる。

そう考えたらサク先輩って完璧な人？

「梓？」
「梓ちゃん？」

あ…でも料理がダメだった。
勉強はどうなんだろ？
スポーツは？

「梓ってば！」

「ふぇ？」

「どうしたの？何か考え事？」

純に肩を揺すられ、自分が深く考えていたと思い知る。

「う、ううん！何でもない！さっきの授業で分かんないとこがあったから！」

憂の質問に首を横に振る。
サク先輩のこと考えてたなんて言ったら絶対に純にからかわれる…

「そういえば！純はジャズ研の先輩からメールきた？」

「え？うん」

またしても話題を代える。
ちょっと強引だったかなって思ったけど、純がケータイを取り出したので安堵の息を小さく吐き出す。

「ほら、部長から」

「一年の事、頼むね」

「ちゃんとしてる…」

憂がその文字を読み上げると、ウチの部長は今頃何してるんだろうと思う。

ブブブッ…

「ん？」

するとタイミング良く私のケータイが震える。

（律先輩かな？）

小さな期待を抱えてケータイを開くと…

「唯先輩だ」

「お姉ちゃんから？」

律先輩からじゃなかったけど、メールの内容は純のそれと似て非なるものだった。

「トンちゃんのエサよろしくね…カッコわるい…」

トンちゃんは私の後輩らしいから、純のそれと一緒といえば、そうなんだけど…

誇れないよ…唯先輩…

「はぁ…」

あ、またサク先輩みたいなため息が…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

現在時刻午前十一時十分。

「着いたーっ！」

「京都だよ！りっちゃん！サッくん！」

「少しテンション下げろ…うるせェ…」

あの後もワイワイガヤガヤと騒ぎながら修学旅行に心踊らせていた三人衆。
とりあえず俺は騒音対策として音楽を聴きながらまどろむ事約四十分。
新幹線は京都駅のホームにその車体を滑り込ませた。

「京都といえば…はい！水本君！」

「え？いきなり連想ゲームが始まったの？」

「答えられなかった奴は罰として、今乗ってきた新幹線に乗って新大阪に行くこと！」

「お前一人で勝手に行けアホ…」

「コラ！サクッチ！野蛮な発言を控えなさい！ここは京都だがや！」

（京都関係ねェし、名古屋弁だし）

ホームに溢れていた桜ヶ丘高校三学年の生徒がゾロゾロと移動を始めたので、未だに何やら名古屋弁で喚いてるアホを無視して、ボストンバック取って歩き出す。

「待つんやでサク！」

「あン？」

しかし田井中が変な関西弁で行く手を阻む。

「唯！澪！ムギ！サク！京都に来たからには関西弁でしか喋っちゃいけないゲームやで！」

「……」

コッチも始まったぞ…愉快なゲームが…

「おもしろそ～♪サッくんやで！」

おもしろ要素の欠片も見当たらないが、上手く見つけた平沢がニコニコしながら俺を指差す。

「意味が分かんねェし…語尾にそんなもん付けたら関西弁になるわけじゃねェぞ」

「そうなんだ～やで～」

「……」

学習能力はコイツの頭にはないのか？
つうかそれを関西弁と言うなら、関西人に怒られるぞ。

「澪～今からどうするんやったかなやで～」

「はぁ…　今から改札を通ってクラスごとに整列だ」

「なるほど～やで～」

「サッくんやで～唯やで～」

「うるせェ…コイツら…」

「普段とな、環境がちゃうから、唯ちゃんもりっちゃんも、元気いっぱいやね～♪」

「何でお前は完璧なんだよ…」

お前出身関西か？

平沢と田井中みたいにエセ関西弁ではなく、流暢な関西弁を喋る琴吹に脱帽する。

……

「全員揃ってるかしら？班長はちゃんと確認してね」

改札を通って一旦整列。

生徒の点呼やこの後の行動を伝えている山中担任の言葉を全力で受け流す。

「咲也よ、俺はお前に文句を言いたいぞ」

隣にいた修司が突如として俺の方を向いてきた。

「ンだよ…くだらねェことだったら後で蹴るぞ」

「くだらんことないぜッ！」

「コラ！私語は慎みなさい！」

「はい…しゅいません…」

いつも通りの騒音を発するもんだから、山中担任の眼が光り、喝が飛来してくる。

それが直撃したアホが身を縮こませ、トーンダウン。

「（お前さ、青春１８キップは青春し放題の魅力的なキップっつったよな？）」

「…言ったか？」

「（言ったよ！しかも十八にならねェと買えないともな！）」

そんな必死な形相から逃れるべく、記憶を思い返す。
時期はいつだったか忘れたが…そんなことを言ったような気がする…
言ってなくてもどうでも良いんだが。

「…で？」

「（今日は俺の誕生日だ　つまり俺は晴れて十八になったわけ）」

「…で？」

「（だからさっき、窓口行って青春１８キップを買おうかと駅員に聞いたら…驚いたぞ！）」

お前の行動の素早さに驚きだ。
この短時間でよくもまぁ…
しかも買おうとしたらしいし…
つうかこの時期は販売してねェんじゃねェの？

「（なんだよ！アレってただの乗り放題キップじゃん！しかも年齢関係ねェし！）」

「そんな分かりきった事をグダグダグダグダ…お前って人の器が極小だな…いや、そもそもお前は虫だったな…」

「それじゃあ二組、今からバスに移動するので整列して歩いてね」

「違ェよッ！アイアムヒューマンッ！そして器は海のように広大だッ！」

二組が移動を始めたので駅の床に座っていた体制から立ち上がり、駅の外に待機中のバスに歩みを進める。

「ちょっ…！誰か…！足がジーンとしてるんで立てません…！ヘルプ！ＳＯＳ！」

何か聞こえるが華麗にスルー。

「サッくん…やで♪」

「言いにくいなら止めろ…」

いつの間にか俺の横にいた平沢がニコニコしながらトコトコ歩き、ガラガラとキャリーバックを引く。

「始まるね♪修学旅行が♪」

「…お前楽しそうだな」

「だってだって♪修学旅行なんだよ♪」

「小学と中学で行ってんだろ…」

「小学校の時も中学校の時も楽しかったけど、高校生のが一番楽しみだよ♪」

「ふーん…」

「だって、和ちゃんとりっちゃんと澪ちゃんとムギちゃんと…」

駅構内から一歩外に出ると、五台のバスが待ち構えていた。
その内の『2』と書いてあるバスに向かう。

「あと…サッくんもいるし…」

「…あ？何か言ったか？」

「う、ううん！なんでもないよ！あ、ないやで～」

平沢が何か言ったらしいがそれは俺の耳には届かなかった。
そして何かを取り繕うようにエセ関西弁を復活させる。

「おぉ～！なんか変なのがあるぞ～！」

背後から聞こえた田井中の張り切りボイスに俺と平沢は揃って足を止め、振り返る。
そこには秋山と琴吹の姿も。

「りっちゃん関西弁忘れてるやで～」

「おっと…そりゃあすまんかったやで～」

「…関西弁じゃなくて京都弁喋っとけ」

あまりにも『やで』がうるさいので変更を求める。

「ウチは田井中　律どすえ～」

「平沢　唯どすえ～」

「……」

しまった…よりうるさい…

「ほら、遊んでないでバスに乗るぞ」

そんな平沢達に秋山がそう促すが、元々ガキっぽい平沢とノリだしたら厄介な田井中が聞くはずなく…

「りっちゃん、あれなんどすえ?」

「ウチには分からんどすえ～」

京都タワーを指差し、談笑し始める。

「全く…先が思いやられるよ」

「…それも旅の醍醐味だろ」

「他人事だと思って…」

秋山がジト眼で俺を見るが、そんな視線はいらないのでスルーを。

「ねぇムギちゃんどすえ？」

「なぁに？」

「あれって何かな？あ、どすえ」

「…もう目茶苦茶じゃねェか」

「律は飽きっぽいからすぐに止めると思うけど、唯はずっとやりそうだな…」

うなだれる秋山を放置して平沢が指差す先の京都タワーに視線を向ける。

「あれはなー　京都タワーゆうて、中は展望台にもなってん」

だから何でお前は流暢なんだよ…

「あのタワーの形は、京都市内の町家の瓦葺きを波に見立て、海のない京都の街を照らす灯台をイメージしたものなんやって♪」

そして何故詳しい…

「へ～そうなんだどすえ～」

「よぉし！いっちょ記念撮影するか！」

京都タワーをバックに田井中がケータイを取り出す。
つうかもう飽きたらしい。
標準語に戻ってる。

「ほらほら、澪とサクも」

「早く早く～どすえ」

「はよ～はよ～♪」

手招きする三人に俺と秋山は一度顔を見合わせる。
そして『早く終わらせよう』という共通意識を確認し、渋々平沢達に向かう。

「コラーッ！早く乗りなさーい！」

「さわちゃんも一緒に撮ろうぜ～！」

「どすえ～」

「そんな時間ないでしょ！みんなもうバスに乗ってるんだから！」

否定している山中担任だが…

カシャ

「…アンタ矛盾してんぞ」

「うぅ…だって私も楽しみたいんだもん…」

職務と個人との狭間で葛藤があるらしい。

『早く乗りなさい…』と覇気なさげにバスに向かう担任に内心で合掌。

「んじゃ、私達も行くか」

「せやな～♪」

「本当に先が思いやられる…」

「サッくんやで～♪あずにゃんのお土産は京都で買ったピックがいいと思うんどすえ～♪」

「色々ツッコミ所があるが一つにしといてやる…何故ピックだ」

「それでギター弾いたら京都っぽい音がするからでんがな」

「しねェよ」

つうか『でんがな』ってなんだ…

まぁ…何はともあれ、いよいよ本格的に修学旅行の幕が上がった。

二泊三日。

一体どうなることやら…

「ふぃ～…やっと痺れが治まった…って、あれ？バスが動きだしてるッ！？ストーップ！！ストーップ！！置いてかないでーッ！！」

第七十四話（後書き）

三年組と二年組は同時進行します。

咲也が誰と班になったか等は次話で。

第七十五話（前書き）

修学旅行編その二です。

第七十五話

それは、修学旅行の班決めでの出来事。

『じゃあ、今から修学旅行の班を決めてね』

この時間帯は五時間目。
しかし俺は堂々と机に突っ伏して惰眠を貪っていた。
それ故に山中担任が何を伝えたのか聞いてないし、理解してない。

『なぁ和　サクって一年の時からあんなだったのか？』

『そうね…　午後の授業の大半は寝てたわ』

『咲也君って寝不足なのね～』

『いやムギ、そういうことじゃないと思うぞ』

『ホント…　一年の頃から変わってないわね咲也は…』

こんな会話が発生していたなんて、やっぱり俺は聞いてないし、知らない。

そんな俺に降り掛かる二つの声。

『サッくん！一緒の班になろう！』
『サクッチ！一緒の班になろうぜ！』

片方は天然娘の声。
片方はアホの声。

その二つの声とドンッと机に手を置く衝撃音に意識は覚醒し、ムクリと身体を起こす。

『……』

眠気まなこで視線を巡らせると、教室内は何やらワクワクと期待に満ちた空気が充満していた。

とりあえず何故か目の前にいる平沢と修司を無視し状況を把握する。

『和、私達と一緒の班になろうぜ』

『ごめん　私はもう他の娘と約束しちゃったから』

『えっ？和、一緒の班じゃないの？』

『四人で一つの班って決まりだし…』

『それじゃあ…咲也君は一緒の班にはなれないから、私達は唯ちゃんとりっちゃんと澪ちゃんで班を組む？』

『う～ん…　本当は和とサクも一緒が良いんだけど…　仕方ないか～』

『ごめんね　私は軽音部で回った方が楽しいと思ったから』

『和ちゃん…』

『和も憂ちゃんも…　唯の周りは良い娘ばかりだな～…』

『だから澪、大変だと思うけど唯のことよろしくね』

『うん　分かった』

真鍋が秋山の肩に手を置く。
そして秋山達の会話と黒板に書かれてある『修学旅行』の文字に…

『修学旅行…か…』

そうだったと思う。
中学の時は二年の十一月に行ったが、桜ヶ丘は三年の五月に行くんだった。
まぁ…十一月に行ったら受験に支障するからな…

『唯ちゃん…　悪いけど咲也は俺と一緒の班になるんだ』

『ダメ！サッくんは私達と一緒だよ！』

（コイツらは何をしてんだ？）

状況を理解したので次なる疑問である、俺の机の前で向き合って見えない火花を散らしてる平沢と修司をぼんやり眺める。

『いくら唯ちゃんでもこれだけは譲れないぜ』

『むぅ！私だって譲れないよ！』

『……』

どうやらコイツらは俺と一緒の班になりたくて火花を散らしてるらしい。

何とも幼稚な理由だ…

『俺と咲也は一心同体！』

『サッくんは私の師匠！』

『俺達は幼馴染みで親友！』

『私達は同じギターやってるもん！』

当の本人を差し置いて勝手に進む議論。
そんな果てしない水掛け論に終止符を打ったのは、眼鏡の生徒会長だった。

『唯』

『和ちゃん！和ちゃんもサッくんと一緒がいいよね！？』

『少し落ち着いて、咲也は一緒の班にはなれないわよ』

『え！？な、なんで！？』

そんな言葉が飛び出るとは思わなかった平沢が眼を見開き背後に稲妻を落雷させる。

『男子と女子は別々になるって決まりだし…』

『そんな～…』

稲妻を発生する程のあまりの衝撃を受けてる平沢に真鍋が苦笑いを浮かべ、チラッと俺を見る。

『はぁ…』

つまり俺からも平沢に言えということだ。
そんな真鍋の視線にため息で返し、寝起きの脳で思考し、平沢を納得させる言葉を探す。

『お前…秋山達と一緒の班なんだろ？それで良いじゃねェか…』

『けど…やっぱりサッくんも一緒がいいよ…』

顔を伏せて、床を見つめる平沢。
かなり落ち込んでいると察する。

しかしコレはルールなので俺にはどうすることも出来ない。
なのでお手上げだ。

『気持ちは分かるけどさ、これぱっかりはしょうがないって』

『咲也と違う班になってもクラスは一緒なんだから』

『唯ちゃん、夜になったら枕投げして遊びましょ？』

何とか平沢を元気づけようと、田井中と秋山が声を励まして説得する。
そして琴吹はどこかズレてる。

『でも…』

『唯…』

『はぁ…』

それでも顔を上げない平沢に真鍋が困り果て、俺がため息を吐いていると、修司からこんな提案がもたらされた。

『じゃあこうしよう』

『あン？』

『唯ちゃん達の班と俺達の班は一緒に行動すればいいんだよ』

『ちょい待てアホ…』

『アホはいらん！』

『俺達って…俺はお前と一緒の班になってんのか？』

『正確にはこれからなる！そうしねェと唯ちゃんが可哀相だろ？』

『……』

激しく珍しい修司の正論に思わず言葉に詰まる。
平沢が可哀相かどうかはアレだが、落ち込んでいるコイツを見ると些かではあるが心苦しい。
だったら俺が苦渋で修司と同じ班になるか？
…いや待て早まるな、まだ道はある筈だ。

『…いいの？修司君？』

『おうともよ！なんたって俺は影宮家の長男だぞ！』

『唯はそれなら納得？』

『うん！だってサッくんと一緒に回れるもん！』

光明の光を掴んだ平沢が顔を上げ、眼が輝き始めた。
修司は胸を張り、意味不明な自慢を。
真鍋はやっぱり保護者のようだ。

そんな三人が繰り広げた会話に道は消滅し、どうやら俺は修司と共の班にならなければいけないらしい…

それはキツい。
小学校と中学校の修学旅行はどちらも修司と同じ班だったが、普段の倍ぐらいのテンションになるからウザいことこの上ない。
しかし俺が拒否れば平沢はまた落ち込む。
何だ？俺の選択肢は始めから修司と同じ班しかないのか？

『はぁ…』

仕方ない…渋々納得するか…

何故、平沢が俺と一緒が良いのか理解に苦しむが…いや、まぁ…懐いてるんだからか…

とにかくごねられるのは勘弁願いたいので、かなり渋々了承してやる。

『…俺とお前の他に後誰がいんだよ？』

『お！つうことは俺と一緒の班になるんだな？』

『じゃねェとコイツがごねるだろうが…』

未だにキラキラと眼を輝かせている平沢に視線を向ける。

『サッくん！いっぱい思い出作ろうね！』

『さっきまでヘコんでた奴の台詞かよ…』

『エへへ～♪』

『何ていうかさ、唯って本当にサクが好きだよな』

『ね～♪唯ちゃん嬉しそう♪』

『その代わり咲也は疲れた顔してるけどな』

『唯って昔から好きなことに対しては一直線なの』

『チーム修司には俺とお前の他に西野と水本を加えたぜ！』

『勝手に気味ワリィ名称つけんな…』

『気味ワリィだとッ！それは俺に対する宣戦布告と受け取ったッ！』

やっぱり喧しいアホを視界から排除し、成り行きを見守っていた西野と水本に先程の修司の提案に納得か問いただす。

『お前ら…良いのかよ』

『ん？別にかまわないぞ』

『僕も卓も中学校の修学旅行で京都に行ってるから違うこととしてみたかったしね』

『影宮と一緒なのは嫌だけど』

『あはは…』

『しっかり聞こえたぞテメェ！』

西野に向かって猛進するアホをどうでも良さげに見送った後に再び平沢を見る。

『楽しみだな～♪』

『はぁ…　浮き沈みが激しいなコイツ…』

『それほど咲也と一緒が嬉しいんだよ唯は』

秋山が微笑んで言う。

『無事に班も決まったし、自由行動の見学地を決めるか～』

『うん♪こういう風に決めてる時が楽しいね♪』

『分かるよその気持ち　色んな観光地を想像するのっておもしろいよな』

『そんな澪にオススメスポットは、京都にある魔界と繋がってる古井戸と～♪』

『ヒッ！や、やめろよ律！』

『そういえば和ちゃんも一緒の班なんだよね？』

『お前…当たり前のように言うけどな…』

『ほぇ？』

『私は違う班よ』

『え…？の、和ちゃん…』

再び背後に落雷が。

というわけで…

平沢・秋山・田井中・琴吹

俺・修司・西野・水本

という班になり、行動は共にすることに。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

コツコツコツ…

辺りに三人分の足音が響く。

私達の足音がこんなに大きく聞こえるのは周りに誰もいないから。

「静かだね…」

と純が呟く。

いつもは賑わっている筈のお昼休みの廊下はシンッと静まり返っていた。

これが私達のクラスがある二階だったら、薄気味悪さを感じるんだろうけど、私達が今いる場所は三階だからそんなものは感じない。

だって…

「そりゃそうだよ　だって三年生は修学旅行に行ってるんだから」

こんな理由があるから。

何故、私達が三階にいるかというと、忘れ物を取りに来たから。
詳しくは唯先輩のお弁当箱を取りに。

四時間目の授業が終わり、純のお昼ご飯を買うために私と憂は、購買で純の買い物に付き合っていたら憂のケータイに唯先輩からメールが届いた。
その内容は『教室に昨日のお弁当箱を忘れたから家に持って帰って』という唯先輩らしい内容だった。

そこで今度は私と純が憂に付き合い軽音部の先輩達のクラスの三年二組を目指していた。

ガチャ

「ごめんくださいー」

憂が三年二組の扉をゆっくり開ける。

私と純はその後ろから覗き込む。

「静か…」

今度は私がポツリと呟く。

教室の中は廊下と同じで静まり返っていた。

当たり前なんだけど…

「本当に入って良いのかな?」

「大丈夫だよ　ちゃんと理由があるんだから」

「お姉ちゃんのお弁当箱を取りに来ただけだし」

純と憂の言葉を聞いて『そうだね』と返して中に入る。

「唯先輩の席ってどこかな？」

初めて先輩達のクラスに来たから普段、先輩達がどの席にいるかなんて全然分からない。

「あ、座席表があるよ」

「純…行動が早いよ」

「あはは…」

いつの間にか純が教卓にいて、そこにあった座席表を眺めていた。

「えーっと…唯先輩は窓際の一番後ろの席」

「あ、あったぁ♪」

暖かそうな陽が当る窓際の一番後ろの机。
その机の鞄掛けにお弁当袋がぶら下がっていた。
それに憂が何故か嬉しそうに駆け寄っているのを見ながら私は教室を見渡す。

「ここが先輩達の教室なんだ…」

今は静まり返ってるけど普段は騒がしい…賑わってるんだろうな…
だって部室でいつも賑わってる先輩達だもん。
その殆どは唯先輩と律先輩だけど…

「先輩達…」

あれ?また…この気持ち…
何なんだろう…胸を締め付けられるような…
切ない?何で?

「ちなみに梓がいる列の一番後ろが咲也先輩の席で…」

「え…？」

純の言葉にハッとして、後ろを振り向く。
何で私がこんな気持ちになっているのか分からない。
そんな気持ちを紛らわすために何となくサク先輩の席に向かう。

「ここがサク先輩の席なんだ…」

教室の後ろの出入り口から三つ数えた列の一番後ろの机に、胸に当てていた右手を何となく机に置く。

ヒンヤリと冷たい感覚が伝わってきて、昨日から誰も使ってないことが分かる。

「ん？なんだろう？」

ふと視線を下げれば、机の中から何かはみ出してる。
勝手にサク先輩の机の中を見るのは悪いんだけど…気になる。

「ごめんなさいサク先輩…」

罪悪感を感じながら腰を落とし、中を見る。

「教科書…とノート？サク先輩って持って帰ってないんだ」

ギッシリと詰まっているたくさんの教科書とノートに少しだけ呆れる。
どうやらサク先輩は予習復習をしてないみたい。

「そしてここが澪先輩の席…っと」

ガタッと椅子が引く音と純の声が聞こえたから、はみ出ていた教科書を中にしまって立ち上がる。

「何かカッコ良くなった気分♪」

「純って澪先輩のファン？」

澪先輩の席に嬉しそうに座ってる純の横に行ってそう尋ねる。
澪先輩とサク先輩にはファンがいるって聞くし、純もそうなのかな？

「ファンっていうか純粋にベーシストとして憧れるんだ」

「澪先輩ってベースうまいもんね」

「うん！後さ、レフティっていうのもカッコいいんだよね！」

購買で買ったゴールデンチョコパンという貴重なパンを左利きでベースみたいに弾く純。

「澪先輩が聞いたら喜ぶよきっと」

「良いな〜　梓は」

「え？」

「だって澪先輩みたいなカッコいい先輩と一緒に部活出来てさ〜」

「エヘヘ　良いでしょ？」

純はジャズ研でベースを弾いてる。
だから同じベーシストの澪先輩に憧れを抱いてるんだ。
そんな澪先輩を良く言われて自然と頬が緩んでしまう。

「あ、ねぇ　律先輩とムギ先輩の席は？」

せっかく先輩達の教室にいるからまだ分からない律先輩とムギ先輩の席も知りたいな。

「確か…ムギ先輩はあそこで…」

指差す先は、澪先輩の席から斜め左後ろの席。
二つ隣の列の後ろから二番目の机がムギ先輩の席なんだ。

「で、律先輩はあそこ」

指をそのまま前に移動させる。
律先輩の席はムギ先輩の席の列の右隣の一番前だった。

「他の軽音部の先輩は後ろの方なのに律先輩だけ前にあるんだね」

「それは律先輩が騒がしいからじゃないかな？」

教卓の前にいたら先生も眼を光らせて注意することが出来るし。

「梓って何気にヒドいこと言うね…」

「え？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「へっくしゅんっ！」

「大丈夫？りっちゃん」

「風邪引いたの？」

現在時刻午後一時二分。

駅からバスに乗り、趣がある料亭で昼メシを済ませた後、第一の観光地である黄金の寺を目指す車内で、田井中が盛大にクシャミをかましてくれた。

そんな田井中に平沢と琴吹が声をかける

「いや…風邪じゃないんだけど…」

「誰かが律の噂してるとか」

「…それか陰口を叩いてるとかな」

琴吹の横に座ってる秋山が平沢から貰った飴を転がしながら、隣にいる修司にうんざりしながら俺が、それぞれ部長に告げる。

「噂もヤダけど、陰口はもっとヤダな…」

「…お前に恨みがある奴が何かやってんのかもな」

「恨みって…　こんな美少女を誰が恨むっていうのかしら～」

今にも似合わない高笑いを始めそうな田井中に…

スッ…

と、小さく右手を上げる俺。

「え！？サクは私を恨んでるのか！？」

「サッくん　タケノコの山だよ～」

「お前脈絡ねェな…」

一つ袋に入ったチョコ菓子を俺に手渡す平沢。
とりあえずそれを受け取り、開封し口に放り投げる。

「おッ！咲也！咲也！咲也！咲也！」

「うるせェ…」

風景を見ていた修司が何かを発見したらしく興奮しながら名を連呼してくる。
つうか、あのまま京都駅で置き去りにしてれば良かったのに…
コイツが乗車してないことに水本が気付きやがって…

「あれ見てみろよッ！」

「ボリューム下げろ…」

ちょうどバスが赤信号で停車したので、風景は流れない。
あまりにもコイツが喧しいので指差す先を見る。

「大文字焼きかよ…」

山にデカデカと刻まれてる『大』の文字に興味は持てん。
散々メディアで見てるし、今更見ても何の感想も浮かばない。

「お前って冷めてるね　こんな風景滅多に見れないつうのに」

「…お前があそこで奇声を発しながら、大の字で飛び跳ねてたら興味持ってやる」

「マジで!?やってみようかな…って、やるか～い☆」

「もう黙れ…」

緩やかな平手を俺の左肩にするアホに心からの願いを。

「私も見た～い！」

平沢立ち上がる。
しかし…

ドサッ

「あ、お菓子落としちゃった」

「もうっ　小学生かお前は」

「はぁ…」

膝の上に菓子を置いていたので立ち上がったら必然的に重力に従い落下する。
そんな平沢に秋山がそんなことを言いながら散らばった菓子を拾い、俺はやっぱりなため息が…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あれ？憂は？」

「あ、唯先輩の席に座ってる」

憂の姿を探して教室内を見渡したら、唯先輩の席で嬉しそうに座ってる憂が。

「お姉ちゃんの机だ…♪」

本来なら唯先輩が座ってるのに今は憂が座ってる。

何か変な感じだなって思ったり。

「そんなにお姉ちゃんが好きで寂しくないの？」

「え？」

「だって明後日まで帰ってこないんだよ？先輩達」

これは純にとっては何気ない質問だったんだろうけど、憂にとっては重大な問題だったみたい。

だって憂が…

「あ…そっか…お姉ちゃん…帰ってこないんだ…」

「えっ！？」

「今気付いたの！？」

憂が…

「ぅ…ぅ…」

「「憂！？」」

泣き出しちゃった～！！

「ぅぅ…ぅ…ヒック…ぅ…」

「あわわっ！」

「ご、ごめん！私が悪かったから！だから泣かないで！」

いつもしっかりしてる憂が子供みたいにしゃっくり混じりに泣き出すから私と純は大慌て。

「…ヒック…純ちゃんは…悪く…ないよ…」

「だって憂、泣いてるし…」

「…泣いて…ヒック…ないよ…」

「「いやいや」」

瞳に大粒の涙を溜めてそんなこと言うけど…
全然説得力ないよ…

「…ぅ…お姉ちゃん…帰ってこないんだ…」

「どうしよう梓…」

「どうしようって言われても…」

こんな状態の憂に純が助けを求めてくるけど、どうしたら良いかなんて分からない…

ど、どうしたら良いんですか唯センパ～イッ！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ん？」

「あン？」

現在時刻午後一時十三分。

バスは金閣寺に到着し、その境内を俺はダラダラと平沢はトコトコと歩き、『ショートケーキの苺は最初に食べる派？それとも最後派？』とか『関西人ってお好み焼きを食べる時にご飯も食べるのかな？』等々…激しくどうでも良い質問をしてくるので、適当に相づちを打ち受け流してると突如として平沢が立ち止まった。

「…何してんだ？」

「今…あずにゃんが私を呼んだ気がした…」

「はぁ？」

空を見上げる平沢につられ、俺も見上げるが白い雲と青い空が広がってるだけだ。

「意味分かんねェ…」

「う～ん…気のせいだったのかな？」

「…つうか中野がお前に何の用があんだよ」

「それは私達がいなくて寂しいから呼ばれたんだよ！そして…」

「あっそ…」

何やら想像の世界で創造しだしたので、止まっていた足を動かす。

「あ！待ってよ～！」

「おーいっ！唯ーっ！金閣寺が見えたぞーっ！」

すると前方を歩いていた田井中が振り返って大きく手を振る。
もちろんそれに反応する平沢は…

「え！？どこどこ～！」

先程の僅かな物憂いな表情から脱兎の如く境内を突き進む。

「全く　律も唯も落ち着きがないな」

「まぁまぁ澪ちゃん」

「……」

俺の近くにいた秋山が眉をしかめるが琴吹がなだめる。
とりあえず俺達三人はのんびりと歩を進め、見学の順路を抜けると…

「うわぁ～♪」

「すごいなぁ　ピカピカだ」

「ふーん…」

開けた道の先には、太陽の光に照らされキラキラと黄金に輝いてる金閣が。

「昔の奴は何でこんなことしたんだろうな…もったいねェ」

「どうしてそういう風な感想なんだよ…
綺麗とかあるだろ？」

秋山が一度俺を見た後、再び金閣に視線を戻し、口を開く。

「金閣が池に映って綺麗じゃないか」

「池…濁ってんぞ」

「ほ、ほら！屋根の上に鳳凰がいるぞ！中国じゃめでたい鳥なんだって」

「…ここは日本だ」

「ムギ…咲也に伝わらない…」

「あはは…」

ああ言えばこう言う的なやり取りの末に秋山はうなだれ、俺は我関せずに金閣を眺める。

「ねぇねぇ　りっちゃん」

「ん～？」

「あれって本当に金で出来てるの？…じゃなくて出来てるん？」

（まだやってたのか…）

とっくに終わってると思っていた関西弁ゲームを平沢が思い出したかのように復活させる。

「そうだぜ！けどな、少しぐらい持って帰ろうなんて思うなよ～」

「あれ？りっちゃん関西弁は？」

「私もう止めてるよ？」

「えぇ！？」

「……」

いるよな…自分から始めたくせに勝手に終わらせてる奴…

「咲也！金閣寺って昔燃えちゃったんだ！」

「だから何だよ…」

「やっぱり伝わらない…」

急に勢いづいたかと思えばシュンと肩を落とす秋山。
よほど俺に金閣寺の良さを知ってもらいたいらしい。

「ねぇねぇサッくん」

「サッくん言うな」

「金閣寺って燃えちゃったの？」

俺ではなく平沢が興味を持ったみたいだ。
俺の制服の袖をチョンチョンと引っ張る。

「多分な…つうかよく知らん」

「寝てばっかりいるから、分かんなくなるんだぞサク」

「…じゃあお前、分かんのかよ？」

「え…っと…昔にこう…ボッと燃えたんだよ」

「…ンなガキでも言いそうな答えすんな」

「良いんだよ！要は燃えたってことが分かったら！」

開き直るカチューシャにため息をつきそうになるが、俺達の会話に見兼ねたのか、琴吹が流暢な関西弁で説明しだした。

「金閣寺ってなー　昭和二十五年に燃やされてもうて、今あるんは新しく建てられたもんなんやってー」

「だとよ…」

「さすがムギ…関西弁も完璧だー…」

博識と完璧な関西弁を披露した琴吹に部長がえぐえぐと泣き出す。

「あ、そういえば鹿がいないね？」

「いるわけないだろ　唯が言ってるのは奈良じゃないか？」

「あ、そっか　じゃあ舞子さんは？」

「知らねェよ…　そこら辺にいんじゃねェの？」

「う～ん…　舞子さ～ん？」

辺りを見回す平沢に秋山達は苦笑いを浮かべ、俺は呆れる。

なんつうか…純粋な奴だ…

その後、境内にある茶屋にて…

「ほ～　では飲んでみるかな～」

「聞いた話だとね　お茶会とかで抹茶をいただく時には、お菓子を先に食べてからお茶を飲むんですって」

ズズッ…

「苦…」

「その方が、抹茶の苦味が引き立つからしいの」

「へ～」

「へ～じゃないだろ、律も少しはそういう上品な作法を勉強したらどうだ？」

ズズッ…

「こんな苦ェもん飲む意味が分からん…」

「そうだよりっちゃん　意地汚いよ、卑しいよ、お粗末だよ」

「お前が言うな！ていうかサクはさっきから文句ばっかり言うなー！」

「…文句じゃねェよ、苦言だ」

「また咲也は…」

「咲也君、今からでもお菓子食べてみない？」

「…苦味が引き立つんだろ？お断りだ」

「じゃあ私に頂戴？」

「ん…」

「ありがとうサッくん♪」

「梓がいないだけで、これじゃあいつもの放課後だな」

「楽しいから良いじゃない澪ちゃん♪」

「うん　まぁね」

抹茶を堪能した後ぶらぶらと境内を散策し、時間になったのでバスに戻る。

「ねぇねぇサッくん！次はどこかな？」

「…清水寺だろ」

「おぉ～！きよ～みず～♪」

「でら～でら～♪」

「…意味不明な歌を歌うな」

身体を左右に揺らしリズムをとりながら即興の歌を作る平沢と田井中に一言ツッコミ、ヘッドフォンを耳に当てる。

修学旅行一日目、次なる目的地は清水寺。

第七十五話（後書き）

実際に金閣寺に向かう途中に大文字焼きがあるのかどうかはスルーしてください。

ぶっちゃけ京都の地理は全く分かりませんので。

第七十六話（前書き）

修学旅行編その三です。

第七十六話

現在時刻午後二時五分。

「ダリィ…　何でこんな坂を登らねェといけねェんだよ…」

「仕方ないだろ　この道を行かなきゃ清水寺には行けないんだから」

「だったらせめて歩きやすい道にしろよ…　なんだこの石畳」

「これも観光風情の一部なんだから、愚痴ばっかり言ってないで少しはそういうのを楽しみなよ」

「楽しむ要素が見つからねェ…」

「はぁ…」

隣を歩く秋山が肩を落とし、悲愴なため息をつく。

バスが清水寺に辿り着いたのは約五分前。

俺達は清水寺を目指し、歩いているのだが、その参道は坂になっていた。

嬉しくないオマケとして歩きにくい石畳と清水寺まで約一キロというプレゼント付き。

故に愚痴りたくなるのは必然だ。

「りっちゃん！八ツ橋の試食があるよ～！」

「お～！　うまそうだな～！」

「アイツら元気だな…」

「ていうか、そそっかしいな律と唯」

「いただきま～す」

「んじゃあ私はチョコの方を食～べよ」

参道の両側には参拝客をターゲットにした様々な名産・特産品を扱

う土産店や飲食店が軒を連ねている。
そんな参道の思惑に見事に引っ掛かっている平沢と田井中は、さっきから試食品を食べ歩きしていた。

「サッくんや　おひとついかが？」

平沢がトコトコと俺の前に来ては、爪楊枝に刺さった一口サイズの生八ツ橋を差し出してくる。

「…試食とかしてねェで、さっさっと行くぞ」

目の前にある生八ツ橋を一瞥し、『いらん』と視線で訴える。

「はむっ…　こんなにいっぱいお店があったらどこでお土産買ったらいいか迷っちゃうね～♪」

俺に拒否されたが特にヘコむことはなく、持っていた試食品を至福の表情で食べては辺りを見回す。

「ンなもん適当で良いんだよ…　どこの店も似たようなもん売ってるし」

「そうだね～♪はむっ」

「……」

いつの間に入手していたんだろうか。
さっきまで持ってなかった違う試食品を頬張る。

「…満足したか？」

「うん♪」

「…じゃあ行くぞ」

「あ！木刀売ってるよ～」

何故木刀に興味津津なのか不明だ。
トコトコと、ある店に行き店頭に置いてあった木刀を手に取る。

「ふんすっ！」

「……」

「カッコいい～！でも重いや」

一振りして満足したのか、飽きたのか、元の位置に戻して俺の元に駆け寄る。

「ギー太の方が重かった！」

「あっそ…」

どうでも良い報告を真顔でしてくる平沢に疲労を感じながら、止まっていた歩みを再開しようとしたが…

「きゃっ！」

背後から聞えた小さな悲鳴に足は止まり、平沢と共に振り返る。

「っと…大丈夫か？澪？」

「律…　う、うん、ありがとう…」

そこには今まさにコケかけていた秋山に田井中が背後から抱き締めてるような光景が。

「私にそそっかしいとか言っといて澪がコケてどうするんだよ」

「し、仕方ないだろ…　ローファーが石畳に引っ掛かったんだから…というか、聞こえてたんだな」

「そりゃあね　澪のことなら分かるよ」

「律…」

未だに後ろから抱き付いている田井中の言葉に恥ずかしそうに頬を赤らめる秋山。
どうやらコケかけた秋山を田井中が咄嗟に助けたらしい。

一見したら美しい友情のワンシーンなのだが、コイツにはそうは見えなかったらしい。

「ぽ～…」

「ムギちゃん？」

「はぁ…」

田井中と秋山をうっとりとした恍惚な表情で見つめる人物一人。
ご無沙汰の琴吹スキル発動。

「いや～　私が助けたから良かったな」

「うん　ありがとう…」

「じゃないとパンチラするところだったな～！」

「なぁっ！？な、な、な、な…」

「良かった良かった！」

「な、なんてこと言うんだー！」

ゴンッ！

「あいたっ！」

秋山が更に真っ赤になった顔でケラケラと笑いながら卑猥な発言をする田井中の脳天に隕石を飛来させ衝突。
さっきまでの美しい友情シーンが台無しに。

「ぽ～…」

「サッくん、ムギちゃんどうしちゃったのかな？」

しかし台無しになったのも琴吹にとってはまだまだ範疇らしく、両頬に両手を当てるオプションが追加されトリップ中。
そんな琴吹に平沢が首を傾げ、俺に問う。

「幸せ感じてんだよ…」

「ほぇ？」

意味が理解出来なかった平沢が左に傾けていた頭を右に傾けたのを確認し、とりあえず琴吹を正気に戻すために…

パチンッ

「ふわっ…」

猫だましの要領で琴吹の顔の前で手を叩く。
すると小さく声をだし、パチパチと眼をしばたたかせる。

「りっちゃんと澪ちゃんのおかげで修学旅行の良い思い出が出来ました～♪」

「…どうでも良いがＴＰＯをわきまえろ」

こんな人が多い場所でスキル発動するな。
道行く人々に近くにいる俺達…俺に不審な視線が突き刺さりそうだ。

「ん？ん～？ムギちゃん、りっちゃんと澪ちゃんがどうしたの？」

「ううん♪何でもないの♪」

「？」

やはり意味が理解出来ない平沢と通常のスマイル二割増しの琴吹を放置して、さっさっと行こうとしたが、またもや足が止まる出来事が発生する。

「お～とっとぉ～」

「……」

「やば～い！こ～け～る～！」

アホが台詞を一本調子で棒読みしながらわざとらしく俺の横に接近。

「うわ～！倒れる～！」

ゴンッ！

「ぶッ！」

そして器用に俺をチラチラと見ながら受身もとらずに俯せに参道に倒れ、重力に従うままに地面と激突。

アホとは常々思ってはいたが…ここまでとはな…

「グォォ…！顔面強打…」

主に鼻を押さえて唸る。

アホだ。

「テメェ！助けろよッ！」

もはや意味が分からない。

勝手に自分から地面に突っ込んだのに立ち上がって俺に噛み付いてくる。

しかもその理由も意味が分からない。

「俺がコケそうになってんのに何を傍観してんだよッ！」

「…日本語喋れ」

「全編日本語でお届けしたぞ俺はッ！」

「うるせェな…　何がしてェんだ」

「さっきの律ちゃんと澪ちゃん見たろ！あれこそ友情じゃねェか！なのにお前ときたらなんか冷めた眼で俺を見やがってッ！」

「……」

「俺はお前に助けてほしかったのッ！友情パワーを見たかったのッ！お前のせいで顔痛いわッ！どうしてくれんだよッ！」

ガミガミガミガミうるさい…
頼んでもいないのに勝手に顔面強打したくせに非難してきやがる。
あまつさえ俺を悪者扱いしてくる始末。

「サイテーだッ！見損なったぞッ！」

「おい…」

「おッ！友情パワー見せて…」

バキッ！

「うべッ！！」

そんな身に覚えもない難癖をつけられ黙っている程、俺は人間出来てないので問答無用全身全霊でアホに思い切り蹴りをお見舞いしてやる。

ゴロゴロと参道を下っていくアホ。

後方にいた西野と水本の付近で止まったのを確認し、漸く清水寺への歩みを再開する。

「あ、待って～！サッく～ん！」

「ほら、私達も行くぞ」

「イテテテ…　はいよ～」

「澪ちゃん！りっちゃん！ありがとね！」

「「え？何が？」」

ぶっ飛んだアホに気にする素振りをみせないで軽音部員が俺の後をついてくる気配がする。
修司はある意味スターだな。
誰一人として修司の方を見向きもしない。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「縁結びの神社があるんだって」

「ふーん…」

「一緒に…えっと…みんなで行かない？」

俺の横に来た平沢がほんのり頬を紅潮させながらそんなことを言う。

さて…ここで拒否したらどうなるか…

何やらさっきから俺の反応を確認するためにチラチラと上目遣いで見てくるし…

やっぱりコイツも年頃の女子ということか。

そういうのに興味があるらしい。

かくいう俺はさっぱりなんだが。

「あ、あのね！別に嫌なら…」

中々口を開かない俺に焦ったのか若干シュンとしながら手をブンブンとする。

拒否したらしたでヘコむだろうし、かといって承諾するのもな…しかし…

「はぁ…」

何かグルグル思考するのは疲れる…
なので手っ取り早い方法で…

「…別にかまわねェよ」

「え？」

俺が折れる方法に。

「一度で聞き取れ…行くっつってんだ…」

「ホント！？」

「あぁ…」

「うわぁ～い！やった～っ！」

よほど嬉しいらしく、その場でピョンピョンと飛び跳ねり、俺に抱

き付こうとするがアッサリ躱す。

「避けないでよ～」

「俺は中野じゃねェんだ…　故に避けるのは当然」

『ぶぅぶぅ』と口を尖らせながら先を行く俺についてくる平沢。
その数歩後ろには秋山と田井中と琴吹。
そしてその後方三メートル付近には…

「イッテェ～…　全身がイテェよ…」

「そういえば知ってるか？影宮」

「んぁ？なにを？」

「この坂は三年坂って言われててな、コケたら三年後には死ぬっていわれてるぞ」

「え…？マジで…？」

「マジで」

「ちょッ！うわッ！やべェ！！俺さっきやっちまったぞッ！」

「お前、三年後には…」

「言うなーッ！誕生日が命日になるとか言うなーッ！」

「大丈夫だよ影宮クン　迷信みたいなものだし
それに卓が言ってるのは石段のことだよ」

「そ、そーなのか？」

（何でバラすんだよ…）

水本のお人好しにこんなことを思わざるを得ない。
このまま流してたらおもしろいのに。

とりあえず後方三人組はスルーして、歩くこと約十分。

「金閣寺もそうだったが、人多過ぎだろ…」

「また咲也は愚痴ばっかり…」

清水寺に辿り着いたが、周りを見渡せど、人、人、人…
人口密度が高過ぎだ…

「はぁ…」

そんな人間がワラワラと溢れる光景にため息を吐いて、三重塔を見ていた平沢が『五重塔があるよ～』と言っているのを『違うって』と田井中がバッサリと訂正しているのを尻目に、足早に境内に突入する。

「ねぇサッくん！あれ？いない」

「咲也君ならもう行っちゃったけど…」

「なに！サクだけ抜け駆けとは卑怯な！追うぞー！」

「ラジャー！りっちゃん隊長！」

「ゴ～♪ゴ～♪」

「おい走るな！ってムギまでー！」

……

「良いか？せーので見るぞ」

「うん！」

田井中の声に平沢が力強く頷く。

『見るぞ』とは清水の舞台から下を覗くわけではない。
俺達の手にはそれぞれ小さな紙が握られていた。
その正体はズバリおみくじ。

「せーの！」

一足早く境内に突入した俺に、後ろから平沢達が追い付き、その後人込みを何とか避けながら定番の清水の舞台を観光。

『うわー！高いなー！』

『清水の舞台から飛び降りる気っつうが…この高さだったら死ぬんじゃねェの？』

『だから咲也は着眼点が違うだろ』

『清水の舞台は釘を使わないで組まれた懸崖造なんだって～』

『ムギちゃん詳しいね～』

『ほほぅ…　ちょっと揺らしてみるか』

『止めろバカッ！』

『昔は本当に飛び降りた人もいるんですって』

『…そいつアホだろ』

『和ちゃんが見たら眼鏡落ちちゃうね』

『唯、それはツッコんでほしいのか？』

『ほぇ？なにが？りっちゃん』

『いや、別に…』

『天然発言か…』

そして平沢待望の縁結び神社に到着し、早く行きたいのかワクワクした平沢が俺の腕を引っ張り無理矢理に中に突撃。

中は他校の修学旅行生や桜ヶ丘の生徒で溢れ返っていた。

そんな人込みにうんざりしながら、全員おみくじを手に取って…

「あっ　大吉～♪」

「ムギも？私も大吉だ」

「サッくん！大吉！大吉だよ！」

「テンション上げんな、耳元で叫ぶな…」

琴吹、秋山、平沢は見事に大吉を引き当てたようだ。

平沢なんかテンションがグイグイ上昇し、俺の手を取ってピョンピョン飛び跳ねてる。

「サッくんは！？なに吉！？」

「……」

吉限定な問い掛けをする平沢に『凶だったらどうすんだ』というツッコミを飲み込み、平沢の目の前におみくじを突き付ける。

「わぁ～い！サッくんも大吉だ～！」

「だから叫ぶな…」

耳キーンになる…

「律は？どうだったんだ？」

秋山が一言も発しない田井中に問い掛ける。
その返ってきた返事に内心でサムズアップを。

「凶…」

「律…」
「「りっちゃん…」」

「な、何だよ～！そんな哀れな眼で私を見るな～！」

（しかし…俺達四人が大吉で田井中だけ凶…どっかで見た光景だな…）

「エヘヘ～♪大吉♪大吉～♪サッくんも大吉～♪」

ニコニコと嬉しそうに財布におみくじをしまう平沢を見ながらそんなことを思った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「えー…つまり清水寺は征夷大将軍の坂上　田村麻呂が鹿狩りの殺生を戒められ、清水山に仏殿を建てたのが寺の起こりであり、７９８年に清水寺と名付けられた」

五時間目の授業は歴史。
歴史の先生が黒板にスラスラと書いていく文字を要点だけ抜粋してノートに書き写していく。

「（中野さん）」

すると隣の席の娘が小さく私を呼び、私は顔をそっちに向ける。

「（はい　鈴木さんから）」

「（ありがとう）」

渡されたのは二つに折られた紙。
それを受け取り先生にバレないように内容を確認。

【良かったね　憂が泣きやんで】

「クスッ…」

純からの手紙の内容に小さく笑ってしまった。

チラッと憂を見ると、黙々とノートをとっていた。

（いつも通りの憂だ）

あの後、純の提案で今日は憂の家に泊まりにいくことになった。

憂と唯先輩の両親はしょっちゅう家を空けるって前に唯先輩から聞いている。

今日は唯先輩もいないから必然的に憂一人になっちゃうから、寂しくないように私と純が泊まる。

それを聞いた憂は初めは遠慮してたけど、純のゴリ押しで納得させた。

けどそれじゃあ忍びないから放課後にジャズ研の練習を手伝うことに。

私は他の部がどんな練習をしてるか気になったから快く了承した。

「（ごめん　これ純に）」

返事を書いた手紙を隣の娘に渡す。
しばらくすると、また純から手紙が来た。

【憂の家に泊まりに行くんだから何かお土産持っていこうよ】

シャーペンを手に取り…

【そうだね　どんなのにしよっか?】

と返事を書いてまた隣の娘に渡す。

【う～ん…　憂が喜びそうなのって何かな?】

【純の方が付き合い長いんだから、悩まれると困るよ】

【じゃあヌイグルミとか?】

【子供っぽくないかな?】

【じゃあ服とかアクセ?】

【あんまり高い物だと、返って憂が困りそう】

【さっきから私だけ考えてばっかりで梓も考えてよ】

【食べ物とかは？】

【それ良いね！憂も喜びそう！】

文面から純の賛成の意思がひしひしと伝わってくる。
もう何回目か分からない返事を書こうとしたけど…

「いいかー　ここ重要だから良く覚えとけよー」

先生がチョークでトントンと軽く黒板を叩きながら振り返ったので、
手紙を咄嗟に掌で隠す。

「ちなみに、この太宰府天満宮と共に天神信仰の中心となっているのが、今、三年生が修学旅行で行ってる京都にある北野天満宮だ」

（先輩達、今頃何してるのかな？）

そんなことを思って先生が黒板に向いたので、純に手紙の返事を書く。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

現在時刻午後五時ジャスト。

「きたの…てんまんぐう？」

清水寺から本日最後の観光地である北野天満宮に着き、境内の手前にある看板を見ては平沢が舌足らずな感じに首を傾げる。

「ここって有名な所なのか？」

「さぁ　知らな～い」

平沢と田井中を先頭に境内を突き進む。
すると前方に北野天満宮のパンフレットを片手に境内を見渡す真鍋グループ（班の連中全員秀才っぽい）に遭遇。

「和ちゃん♪」

「どう？楽しんでる？」

「うん！清水寺で大吉引いたよ～」

「そうなんだ　それは良かったわね」

「……」

平沢が自慢気におみくじを真鍋に見せて、褒められてる姿に、さながら親子のようだと思った。

「なぁ和　この神社って有名なのか？」

田井中が秀才かつ博識な真鍋に自分では分からなかった疑問をぶつける。

「この神社は私達にとって打って付けなの」

「どういうこと？和ちゃん」

「ここの神様は学問の御利益で知られてるの」

「ふーん…」

「福岡の太宰府天満宮みたいに受験生には有名な神様が奉られてるのよ」

「ふーん…」

「咲也は興味ないって感じね」

「……」

苦笑いを浮かべる真鍋の言葉は、正にその通りなので特に反論も異論も唱える必要がないので口を閉ざし、面倒そうにダラダラと目的もなく勝手に歩きだす。

「金閣寺でも清水寺でも咲也はこんなんなんだよ」

「あんな風に勝手に歩いてく咲也が眼に浮かぶわ」

何か俺が問題児みたいな内容を秋山と真鍋からの会話から汲み取れたが、振り返るのも最早ダルいので足を動かし、突き進む。

「おや？サッくん、りっちゃん」

「なんだ～？」

「サッくん言うな」

気が付けば境内のあちこちに牛の石像があり、それに軽い疑問を感じてると平沢が相変わらずの禁句を発するので仕方なく足を止める。

「牛がいるよ　なんだろうね？」

「そういえばあっちにもあったぞ　沢山いるんだな、何でだ？」

「…この神社の特徴なんじゃねェの」

平沢と田井中が揃って首を傾げる。
俺はどうでも良さそうに適当に答える。

「咲也が言ったことはあながち間違いじゃないわ」

「あン？」

後方からやってきた真鍋が眼鏡たるゆえんの秀才を遺憾なく発揮して、近くにある牛の石像を指差す。

「この御宮のあちこちにいる牛の頭を撫でるとね、頭が良くなるって言われてるの」

「だとよ…　お前のためにあるもんだな」

「悔しいが…正解だよチクショウ！」

真鍋の説明を聞いた後にいつの間にか俺の横にいた修司（毎回テスト赤点かギリギリ）に視線を向ける。

「和ちゃん、それはこの神社にある全部の牛を撫でたら効果倍増かい？」

「さぁ？やる価値はあるんじゃない？でも…「よっしゃあ！行ってくるぜーッ！」…バチが当たりそうだから程々にした方が良いって言いたかったんだけど…」

説明を最後まで聞かず一目散に駆けていく修司に、真鍋が少し困っ

た表情をする。

「…例えどんなバチが当たってもアイツなら喜ぶから大丈夫だ」

「そんなことはないと思うけど…」

「…つうかその説明はアイツより、平沢と田井中に言った方が良いんじゃねェ？」

「え？」

キョトンとする真鍋に俺がある一点を指差す。

「良いベコだぁ～　立派なベコだぁ～」

「撫でてあげるから賢くしてねぇ～」

そこには牛を全力で撫でる田井中と平沢。
しかも頭だけでは飽き足りず、牛全体を撫でていた。

「あれもバチが当たりそうね…」

その言葉通り、この後天罰を下す人物が一歩一歩着実に近付いていた。

「コラァ！ゆ…平沢さん！田井中さん！」

その人物は山中担任。
牛を全力で撫でていた二人を名指しで一喝する。

「もうっ！何やってるのっ！」

「「すいませ～ん…」」

「あ、あのっ！き、桐島君！」

「あン？」

山中担任にコッテリ絞られている平沢と田井中を傍観していると誰かに呼ばれた。

「あ、あ、あのっ！」

そこには確か真鍋と同グループである…藍澤だったと思う奴が俺を見上げていた。

「ンだよ…」

「は、はいっ！あ、あの、アミ君と流緒君知りませんか？」

「…あ？誰？」

聞き覚えが全くない名前が飛び出したもんだから逆に聞き返す。

「あ、えっと…鷹崎君と村雨君でふっ！か、噛んじゃった…」

「……」

何かオロオロとオドオドと忙しい奴だ。

「知らねェよ…　地球上のどっかにいんじゃねェの」

とりあえず聞かれた質問に超適当に答える。

「は、はいっ！そ、そうですねっ！」

「……」

疑問に思わないんだな。

「「……」」

そして止まる会話。
何だ？この何とも言えない空気は…
居心地悪いったらありゃしない…

「サク～！絵馬を書きに行くぞ～！」

「ブヒブヒ～！」

「それは豚よ～　唯ちゃん」

担任から解放された田井中が声を張り上げ俺の名前を呼ぶ。
これ幸いと藍澤に軽く言葉を掛けそちらに向かう。

「…じゃあな」

「は、はいっ！また明日ですっ！」

明日会うのか？
まぁ良い。

「藍澤さんと何してたんだ？」

「あぁ？鷹崎と春雨の所在聞かれた…」

秋山が尋ねるので嘘偽りなく正直に答える。

「そっか、藍澤さんっていつも鷹崎君と村雨君と一緒にいるからな」

「ふーん…」

「ちなみに村雨君だからな　春雨じゃないぞ」

「どっちでも良いじゃねェか…　細けェなお前」

「良くないだろ…」

……

少し先を進むと本殿があり、そこには桜ヶ丘の生徒の他に一般人もいた。

売場でアルバイトらしき巫女から絵馬を一枚購入し、それぞれ願い事を書いていく。

「澪ちゃんは何のお願い事書いたの？」

一番に書き終えた琴吹が隣にいる秋山に問い掛ける。

「私は志望校合格って書いたよ　ムギは？」

「私も同じで、志望校に受かりますようにって」

この二人は大学に進学する気らしいな…
つうかもう進路決めてんのか…
俺はまだ進学するか就職するか決めてねェな…

「りっちゃんは？」

「私はツインペダルとフロアタムが手に入りますように！」

「クリスマスプレゼントをお願いするんじゃないんだぞ
ていうかこの神社は学問の御利益だって和が言ってたじゃないか」

「良いじゃん別に～　神様には違いないんだからさ～」

田井中は我が欲望か…

「唯ちゃんは？」

「生涯満腹！」

「唯らしいな…」

「唯も学問と関係ないし…」

平沢は我が根源を統べる食か…

「咲也君は？」

「何でも良いだろ…」

「ずるいぞー！サクだけ見せないなんてー！」

「ん～と…軽…」

「…勝手に見んな」

平沢が絵馬を覗き込もうとするので、絵馬を結びに踵を返す。

「ちょい待ちサク」

「…見せねェぞ」

「いや、それじゃなくて　もう一枚、絵馬を買ったんだよ」

田井中がおもむろに何も書かれてないまっさらな絵馬を一枚取り出した。

「これに私達の目標を書いて…っと」

そしてその絵馬に五文字の『目標』と自分の名前を書き、俺達一人一人を見る。

「せっかくだからさ、こういうのも良いだろ？」

「うん！素敵～！」

「この目標は学問の神様でも叶えてほしいな」

「りっちゃん、部長みたいだね！」

「部長なんだよ私は！ほら、一人一人名前を書いてけ」

田井中がまず俺に渡してくる。

「部長の私の次は副部長のサクだろ？」

「……」

関係ないと思ったがこの場合ではそれは野暮だと直感し、田井中の名前の下に俺の名前を書き込み、近くにいた平沢に渡す。

「ひらさわ…ゆ…いっと！ほい！澪ちゃん！」

「うん」

秋山がその下に名前を書く。

「はい、ムギ」

「ありがとう～」

最後に琴吹が名前を書き込むが…

「梓ちゃんの名前どうしようか？」

「そうだな…　じゃあみんなで分けて書くか！」

ここにはツインテールの後輩はいないので、何故か中野のフルネームはばらして一人一人分担することに。
そこは部長の田井中が書けば良いんじゃないだろうか？

「よし！はい、サク」

『中』を田井中が。

「ん…」

『里』を俺が。

「はいよ！澪ちゃん！」

『予』を平沢が。

「はい、ムギ」

『木』を秋山が。

「出来た～♪」

『辛』を琴吹が書き込む。
最後に田井中があることを付け足し、作業終了。

「んじゃあ結ぼうぜ～」

計六枚の絵馬を結び、俺達はそれを眺める。

「あれ？サッくんの絵馬が見当たらないよ？」

「咲也は一番上に結んでたな」

「意地が悪いことするなよな～　見えないじゃん」

「…見せねェための措置だ」

「咲也君、何て書いたの？」

「さて…修司が天罰を食らってるか確認するか…」

スタスタ…

「あ～！サッくん逃げた～！」

「追うぞ唯！」

「やれやれ…」

「クスッ♪」

【志望校に受かりますように　琴吹　紬】

【志望校合格　秋山　澪】

【ツインペダルとフロアタムが手に入りますように　田井中　律】

【生涯満腹　平沢　唯】

【来年度以降　軽音部存続　桐島　咲也】

【武道館進出

田井中　律
桐島　咲也
平沢　唯
秋山　澪
琴吹　紬
中野　梓

by. 放課後ティータイム】

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

コンコン…

水槽を小さく叩くとトンちゃんが私の方に小さな体ごと向いてくれた。

「エサだよ」

かわいいなと思いながらムギ先輩が自宅から持ってきてくれたエサを十粒ぐらいあげる。
あんまりあげ過ぎたらいけないって飼育本に書いてあったし。

授業が終わって放課後。

この時間はジャズ研の手伝いをするんだけど、私はトンちゃんにエサをあげるためとムスタングを取りに部室に来ていた。

「誰もいない…」

水槽から眼を離してグルッと部室を見渡す。
いつも話し声が絶えない部室は眠たくなるほど静か。

律先輩のドラムとムギ先輩のキーボード。
そして常にそこにある筈の五つのギタースタンドは四つ空いてる。

「……」

唯先輩のレスポールも…
サク先輩のテレキャスターとアコギも…
澪先輩のベースもない…
あるのは私の紅いムスタングだけ…

「いない…」

またこの胸を締め付けられるような気持ちになるけど…分かってしまった…

私は…

「寂しい…んだ…」

あまり練習しないでお菓子や喋ってばかりで…
でも曲を合わせたらスゴい演奏になる先輩達…

『梓ちゃん！』

『はい？』

『あのね、梓ちゃんにぴったりなティーカップを見つけたの～』

『ティーカップですか？』

『うん！はい、これ』

『猫…』

『取っ手が猫の尻尾になっててね、かわいいの～♪』

『あ、ありがとうございます…』

ムギ先輩も…

『しっかしアレだな～』

『何ですか？』

『梓は二年生になっても成長しないな～♪』

『なぁ！？律先輩には言われたくありません！』

『私は身長のことを言っただけだぜ～♪』

『胸見てたじゃないですかー！』

律先輩も…

『今日の新歓ライブで梓と唯と咲也のギターの絡みもバッチリだったな』

『本当ですか！？』

『うん、ベース弾きながらいい感じだなって思ったよ』

『わぁ～♪ありがとうございます！』

澪先輩も…

『唯先輩、今のところちゃんと音が出てませんよ？』

『ほぇ？そうなの？』

『はい、ちょっとおかしかったです』

『ん～…　それはあずにゃん分が足りないからだよ～！』

『ニャッ！抱き付かないでくださいよ～！』

唯先輩も…

『サク先輩』

『あン？』

『ここのコードなんですけど、指がキツいので省略コードで弾いて良いですか？』

『あぁ…　別にかまわねェよ
つうかお前…』

『はい？』

『自分の頭触ってみろ…』

『へ？ニャッ！？何でネコ耳が！？』

『…さっき顧問が神業テクで付けてったぞ』

『教えてくださいよ～！』

『いや…気に入ってんのかと』

『そんなことないもん！』

サク先輩もいない…

修学旅行に行ってるから先輩達も…

先生も…

たまに顔を出してくれる和先輩も…

もしかしたら来年、新入部員が入部しないでこのまま…

「ダメダメ！弱気になっちゃ！」

ネガティブな頭を左右に振ってそんな考えを失くす。

でも一度考えて、気付いてしまったから中々それは私の中から消えない。

でもそんな私に…

「梓ちゃん？」

憂が綺麗に消してくれたんだ…

「憂…？ジャズ研の部室に行ってたんじゃ…」

「梓ちゃんが中々こないから、どうしたのかなって思って」

「あ、そ…そうなんだ　ごめん、今から行くよ」

そそくさとムスタングをギターケースにしまう。

「大丈夫だよ、梓ちゃん」

「え…？」

不意に聞えた憂の声に手は止まり、顔を憂に向ける。

「来年は絶対に新入部員が入部するよ」

「憂…？」

「だから、大丈夫だよ」

唯先輩そっくりに…いや、『憂』自身の笑顔が私の時を止めた。

憂はもしかしたら気付いてたのかも…

私の心境に…

（かなわないな…）

だから憂はこの言葉を私にかけてくれた。

笑顔をくれた。

そんな憂の優しさにちょっぴり恥ずかしくて、でも嬉しくて。

「それに、ちゃんと咲也さんとの約束は守るよ」

「え？サク先輩の約束？」

「うん！でもまだ言えないよ？」

「そんなこと言うと気になるんですけど」

「クスッ　秘密♪行こう？純ちゃんが待ってるよ」

「あ！待って憂！サク先輩との約束って何なの～！」

先輩達がいなくて寂しいなんて思っちゃいけないよね。
私には…かけがえのない友達がいるんだから。

第七十七話（前書き）

修学旅行編その四です。

第七十七話

「ダメダメだ」

「あはは…」

憂と一緒にジャズ研の部室に行ったのは良かったんだけど、純がベースを教室に忘れたから慌てて部室から飛び出していった。

そんな純に私は呆れたように、憂は苦笑いで見送る。

「何で自分の楽器を忘れられるかな」

「でもお姉ちゃんもたまにギー太を家に忘れそうになることあるよ」

「そこを引き合いに出されても…」

ていうか実際に去年の学園祭で唯先輩はレスポールを忘れてるし…

ガチャ

「「ん？」」

すると部室の扉が開く音がしたから私と憂は一緒に振り返る。

「「あ…」」

そこには緑色のリボンをした女の子が二人。
多分ジャズ研の一年生なんだろう。

その一年生が私達を見て戸惑ったような小さな声をあげた。
当然だよね。部室に行ったら見知らぬ人がいるんだもん。
でも戸惑ってるのは彼女達だけじゃなくて…

「あ…え…えーっと…」

私もどうしたら良いか分からない。

（こんな時、サク先輩なら眉一つ動かさないで堂々としてるんだろうな…って！）

今そんなこと考えてる場合じゃないよ！
どうしよう…！
どうしよう…！

「ごめんなさい　私達、純ちゃんの友達で」

さすが憂。
慌ててる私を落ち着かせるように私の両肩に手を置いて助け船を出してくれた。

「あっ！もしかしたら軽音部の梓先輩ですか！？」

「え？」

憂の言葉を聞いて安心したのか一年生が私達に駆け寄ってそんなことを言ってきた。

「純先輩に言われてたんですよ！
軽音部にすっごいギターがうまい先輩が三人いるって！」

「……」

三人ということは唯先輩とサク先輩と私…
そんなことを言われると何だか照れちゃうな…

「エヘヘ…♪お姉ちゃんが褒められた…♪」

チラッと横にいる憂を見ると自分のことのように嬉しがってた。
私も唯先輩とサク先輩が褒められて嬉しいけど、やっぱり憂は唯先輩が大好きなんだな。

「だからその先輩にギター教えてもらえって」

「私達、ジャズ研に入部してからギター始めたんですけど、中々うまく弾けなくて」

「そうなんだ…」

この流れだったら、私がこの娘達にギターレッスンする流れだ。

ジャズ研の練習を手伝うことになってるから構わないけど…

ちょっと照れくさいかな…

梓先輩って呼ばれたし…

ガチャ

「あ、ちょうど良かった」

「純ちゃん」

純がベースを背負って部室に戻ってきた。

「「おはようございます」」

「おはよう　この二人ウチの一年なんだ」

「じゃあやっぱり純の後輩なんだね」

「うん　梓、ちょっとギター教えてあげてよ」

「うん、良いけど…」

「「よろしくお願いします！梓先輩！」」

「あ、うん、よろしく…」

「梓、照れてる？」

「ち、違うもん！」

とか言ったけど図星だったり…
だって梓先輩って…

そういえば私が初めて唯先輩と澪先輩を『先輩』って呼んだら、何だか嬉しそうだったけ。

唯先輩、澪先輩、その気持ちが今分かりました。

「じゃあ、まずどれぐらい弾けるか見たいから、適当にギターを弾いてくれるかな？」

「「はい！」」

ちゃんと約束は守らなきゃいけないから、気持ちを入れ替えて私は背負っていたムスタングを取り出して、彼女達はそれぞれ水色と黒のストラトキャスターを取り出す。

「前から思ってたんだけど、梓って何でそのギター選んだの？」

「え？」

純がアンプを持ってきながらそんな質問をするから、私はキョトンとしてしまう。

「いや、ただなんとなくそう思ったの」

「私は手がちっちゃいからネックが太いとコードが押さえられない

んだよ」

「ふーん、そうなんだ」

「純ちゃんは？どうしてそのベースを選んだの？」

憂が一年生達の近くにアンプを置いて、机の上にある白いベースに視線を向ける。

「私は梓みたいな理由はないんだけど、形がかわいくてさ、だから頑張ってお金貯めて買ったんだ」

「純のベースは一目惚れなんだ」

「うん　こんな理由で楽器選んじゃいけないのかな？」

「そんなことないよ　直感って大事だし、その方が愛着湧くもん」

「お姉ちゃんのギー太も一目惚れだったんだよ？」

「そうなんだっ」

これにはビックリ。
だから唯先輩はあの重いレスポール使ってるんだな。
だからいつもギー太ギー太って大事にしてるんだ。
まぁ…度が過ぎるっていうか、ベクトルが違うっていうか…

「そういえば、咲也先輩の黒いギターってカッコいいよね！」

「あぁテレキャスター？確かにサク先輩にピッタリだよね」

「咲也さんのギターはどんな理由で選んだんだろうね？」

「う～ん…咲也先輩のことだから…
『店長、色んなギターを試したが俺にはこのギターしかねぇ…売ってくれ…』
みたいなハードボイルドにギター選んだとか？」

「それサク先輩じゃないよ…」

まるっきり別人だよそれじゃ…
純にはサク先輩はそういう風に映ってるのかな？
それは…嫌だな…

「冗談だよ冗談♪それよりギター教えてあげなよ」

「あ、ごめんね！」

すっかり話し込んじゃったせいで一年生達を置いてけぼりにしちゃった。
しっかりしなきゃ！
私は『先輩』なんだから！

「いえ、大丈夫です」

「音楽の話で盛り上がる先輩達ってさすがだなって感心しました！」

「そ、そう？」

そう言ってくれるのは有り難いけど、だからっておろそかにしちゃいけないよね。

「じゃあ、適当にギター弾いてみて」

「「はい！」」

頑張ろう！
私もサク先輩みたいにギターを教えられる先輩になるんだから！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

北野天満宮で未来への願いを望んだ後、バスはホテルに到着。

各班に割り当てられた和室にて主に西野と水本と（何故か修司は枕を念入りに確認していた）雑談をした後に晩メシである中々豪勢な食事を頂戴。

そして順次に班ごとに入浴を済ませ…

「お前さ～…」

「前髪、ピンで止めとけって」

「あン？」

「…風呂上がりにするかよ」

「いやまぁ、そうなんだけどさ～
パッと見、誰か分んかねェっての」

風呂場から部屋へ戻る帰り道の廊下で、髪が乾いてない頭をタオルで荒々しく拭きながら修司がそんな発言をする。

ホテル内は体操着であるジャージ着用を義務付けられている。
そんなジャージを着崩している俺が修司に視線を向ける。

「お前こそさっさっと髪乾かせよ…　何かその動作がウザい」

「なんでだよッ！？この流れるような手さばきのどこにそんなビックリ発言が飛び出る要素を発見したッ！？」

「……」

スタスタ…

「なんでッ！？なぁなんで黙って先を急ぐんだよッ！？」

相変わらずの地球に優しくない騒音発生生物を歩くスピードを上げることでスルーして、喉が渇いたので売店がある一階ロビーに向かう。

……

「……」

思わず立ち止まる。

売店の近くには三台の自販機があり、その一つの前で一人の人物が

腰に手を当て喉を鳴らしながら、牛乳を飲んでいた。
しかも瓶で。

「ぷはーっ！」

そして仕事終わりの大人の一杯のようなリアクションをする光景を目の当たりにしたら自然と足が止まり、訝しげな態度をとってしまうのはこの世の理だ。

「ん～…？あ、サクか」

そしてその人物が俺の方に身体を向ける。

田井中だ。
アイツも風呂上がりらしく普段のカチューシャはなく、前髪を下ろしていた。

「お前…おっさんみてェなリアクションすんな」

「風呂上がりの一杯は格別に美味いから自然とこうなるの」

「あっそ…」

どうでも良さげに返答し、田井中の横を通り過ぎ、ペットボトルの茶を購入する。

「ていうかさ～」

「あン？」

「サクってピンがなかったら別人みたいだな一瞬分かんなかったよ」

「…その台詞、そっくりそのまま返す」

ほぼ毎日顔を合わせているが、俺も一瞬誰だか分からなかった。見慣れてない田井中の姿に、別人な印象を受ける。

「そういえばさ、覚えるか？」

「あン？」

「二年前の合宿で私もサクも揃って『誰だ？』って言ったんだよな～』

「覚えてねェ…」

ペットボトルのキャップを開けて一口含み、再びキャップを閉めて、田井中の問い掛けに答える。

「懐かしいな～　あれからもうすぐ二年も経つんだな～…」

昔を懐かしんでいるのか、どこか遠い眼をしながら物思いに更ける田井中。

「何感傷的になってんだ…」

「別にそんなんじゃないけどさ…ただ…」

「……」

「…いや！やっぱ何でもない！」

コイツは何を言おうとしたのか、何を伝えようとしたのか、それは不明だ。
だが…懐かしんでいる節を考えれば、恐らくコイツは先の未来を…軽音部の未来を考えていたのかもしれない。

確信はない。ただ、そう思わせる何かを感じとった。

「そんなことより今から私達の部屋に行くぞ～！ムギがあの手この手でセレブを目指すボードゲームを持ってきたんだ！こうゆうゲームって人数多い方が楽しいからな！」

息継ぎをせずに一気に捲し立てると俺の背後に回り込んでグイグイと押しだす。

「押すな…」

「こうでもしなきゃサクは素直に行かないだろー」

「素直以前に行く気ねェよ…」

「は～いはいっ　さっさっと行くぞー」

「聞けや…」

様々な漫画やドラマでは修学旅行の夜に男子が女子の部屋に遊びに行くのが何やら恒例になりつつある昨今だが、そんなもんに乗じる俺ではないので拒否の姿勢を見せるがそんなことお構いなしに部長はグイグイと押してくる。

「あのな…お前と平沢や琴吹はとにかく、秋山がキョドんだろ」

「大丈夫！澪も大歓迎するって！毎日一緒にいるんだから今更だよ！」

「…情操教育って知ってるか？」

「サクってそういうとこだわるよな？合宿の時もそうだったけど」

「普通だろうが…」

「だからそれも今更だって」

「はぁ…」

今更。

確かに今更なんだろうが、そこを易々と乗り越えてはいけないと思う。

別にここで完全に拒否すれば軋轢が生まれるわけじゃないが、親しき仲にも礼儀あり…

ガラッ

「みんなー！サクを連れてきたぞー！」

なんだが、気が付けば田井中達の部屋と思われる部屋に辿り着いてしまった。
そして田井中が仰々しく襖を開ける。

「え？サッくん！？」
「咲也？」
「咲也君？」

部屋の中には小動物のように菓子を頬張る平沢と、櫛で髪をすいている秋山とケータイをいじる琴吹が。

「ムギ！人生当てもんゲームやるぞ！準備だ！」

「は～い」

素早くキャリーバックからボードゲームを取り出す琴吹。

「サッくん！負けないよ～！」

いち早く状況を飲み込んで意気込む平沢。
そして一番懸念していた秋山はというと…

「咲也、こんなとこにいて大丈夫なのか?先生に見つかったらマズいんじゃ…」

「……」

違う心配をしていた。

あれ?おかしい…
俺の計算では秋山が慌てふためき、場は騒然となり俺が退散という結果になると思っていたが…

何やら違うウェルカムな空気が…

「な?澪も大歓迎するって言ったろ?」

「はぁ…」

田井中がウインクして俺の肩をポンと叩くので、ため息が漏れる。
どうやら俺という存在はコイツらには普通に受け入れ可能のようだ。
それはまぁ、下手に拒否されるより良いんだろうが、少しは違和感を感じてほしいものだ。

「でもアレだね～　サッくんとりっちゃんって普段してるピンとカチューシャがないと別人さんみたいだね」

「私は律は見慣れてるけど咲也はあんまりだからな、一瞬誰だか分からなかったよ」

「私も～♪こういうのってお泊まりしなきゃ発見出来ないね～♪」

「合宿ん時に見てんだろ…」

「そういえば二年前の合宿で初めてサッくんがピンしてないの見て、本当に分かんなかったよ～」

「まぁそういう思い出話はゲームしながらしようぜ～」

「じゃあ、お菓子とお茶も必要だね！」

「唯はさっき散々食べてたじゃないか」

「……」

違和感ナシ。
やはり俺の考えは古いんだろうか…

「ほ～れ、ボーッと立ってないて座れよサク」

「サッくん　勝負だよ！」

「ていうか咲也はちゃんとジャージ着なよ」

「でもそういうところが咲也君らしいね～」

「はぁ…」

約八畳の部屋の中央にはボードゲームが。
それを囲うように座る面々が俺に手招きを。
そんな連中にため息をついて平沢と秋山の間に空いている一人分のスペースに座る。

「よしっ！第三回人生の勝ち組は誰だゲーム！スタート！」

「お～！」

「嫌なタイトルつけるなよ」

「サッくん　ため息ばっかりついてたら幸せが逃げちゃうよ？」

「うるせェ…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ガチャ

「こんばんは」

「いらっしゃ～い梓ちゃん」

「もうご飯の準備出来てるよ～」

平沢家の門を叩くとエプロン姿の憂と私服姿の純が出迎えてくれた。

「純、自分が手伝ったみたいに言うけどそんなことないでしょ？」

「エヘヘ、バレたか」

「バレバレだよ」

ポリポリと頬をかく純に内心で呆れながら、憂にお土産を差し出す。

「これ、お母さんが持っていけって」

「わぁ～　ありがとう～」

嬉しそうに受け取る憂にホッとしてると、純が神妙な面持ちで憂の両手にあるお土産を覗き込む。

「な、中身は…？」

「お寿司だけど…？」

そういえば純は何を持ってきたんだろう？
五時間目の手紙交換で『食べ物』って決まったけど…

「ドーナツ遠のいた～…！」

「？」

「別に勝ち負けじゃないのに…」

うなだれる純に首を傾げる憂。
そんな純の心境が理解出来る私は小さく呟く。

「梓ちゃん、上がって」

「うん　お邪魔します」

憂に促されるままに靴を脱いで、うなだれる純に一言『行くよ』と声をかけて、リビングがある二階に向かう。

「わぁ～　すごいね」

「ね、私も最初見た時は驚いたよ」

リビングのテーブルには所狭しと豪華な料理が並んでいた。

綺麗なキツネ色のトンカツにエビフライにからあげ。
彩り鮮やかなサラダ。
綺麗に巻かれたダシ巻き玉子。
新鮮そうな刺身。
湯気が立ってる揚げダシ豆腐。
見るも美味しそうなしょうが焼き。
他にもミートスパゲッティや小籠包にカツオのたたき、ステーキまである。

こんなにも美味しそうな料理があると圧倒され、自然とお腹がすいてきちゃう。

「今日は三人だから、ちょっと多めに作ったの」

ちょっと多め？
ちょっとじゃないと思うよ憂…

「あ、あと足りなかったら、ちらし寿司とピザもあるから」

「「足りる！十分足りるから！」」

けどこんなにたくさんの料理があったら、私が持ってきたお寿司はいらなかったな…
ていうかお土産に食べ物っていうのが間違いだったかも…

「それじゃあ食べよ？」

「「うん」」

お泊まりセットが入ってる鞄をソファーの上に置いて、テーブルの近くに座る。

「いただきます」

「「いただきます」」

……

すごいと思う。
憂の手料理って初めて食べたけど、普通にお店が開けるんじゃないかって思える程の絶品だった。
確かに憂の料理は美味しかったけど…

「どういう食べ方してるの？」

すごいと思う。純の食べ方が。
純の持ってきたパーティー用のスーパーオールパックドーナツを食後のデザートとして食べたんだけど、さすがにあの量を食べきった後だから、三人ともお腹一杯。
けど純は味を確かめたかったみたいで、全部のドーナツを一つ一つかじってた。

「梓～　後は食べて良いよ～」

そう言って床に寝転がる純。
食べた後にそんなことしてたら豚になっちゃうよ？

「もうお腹一杯なんだから入るわけないでしょ」

「甘いものは別腹だよ」

「うっ…」

そう言われると食べたくなってくるのが不思議。

純の食べかけの（全部）チョコがコーティングされたドーナツを一口食べると…

「甘い…」

口いっぱいに広がるチョコの甘さとドーナツのふわふわ感。

さすが有名なドーナツ店だけのことはある。

ブブブ…ブブブ…

するとソファーの上に置いてあった憂のケータイが振える。

「憂ー　ケータイ鳴ってるよー」

「あ、うん！」

キッチンで洗い物をしている憂に呼び掛けると、パタパタと憂がやってきてはケータイを手に取る。

「あっ　お姉ちゃんからだ♪」

「どれどれ？」

憂と一緒にケータイを覗き込むと、どこか見覚えのある男の人の横顔が写っていた。

「誰？その人？」

「うわっ！純！」

さっきまで寝転がっていたのにいきなり私と憂の間に顔を出すからビックリする。

「そんなに驚かなくってもいいじゃん」

「ごめん、いきなりだったから」

口を尖らせる純に一言謝って再び憂のケータイに視線を向ける。

「う～ん…　何か見覚えがある人なんだけど…」

「梓も？私もなんだよね…　私達が知らない唯先輩の知り合いじゃない？」

「何でそんな人を憂のケータイに送るの？」

「さぁ？」

「はぁ…」

「あっ！」

サク先輩みたいなため息をついていると憂が何かに気付いたらしく、声をあげる。

「この人、咲也さんだよ！」

「「えっ！？」」

サク先輩！？この人が！？

…言われてみれば、確かにサク先輩だ…

普段は前髪にピンをしてるから、とったとこなんて見たことなかったから全然気付かなかった…

「憂、良く分ったね？」

と、純が言う。

「お姉ちゃんが写真撮る男の人って咲也さんかなって思って良く見たら咲也さんだったから」

憂の観察眼がすごいのか唯先輩への想いがすごいのか…とにかく憂はすごい。

ていうか憂より長く接する機会が多い私が気付けなかったのは少しショックだったり…

「梓は気付けなかったの？」

何で純は痛いとこをついてくるかな…

「だ、だってピンをハズしたサク先輩は見たことなかったし…」

「でも軽音部で合宿してるんでしょ？その時見れるんじゃないの？」

「見てないよ…」

だって去年の合宿は初日はサク先輩は早く寝ちゃったし、二日目の深夜にスタジオで唯先輩と会ったけどその時はピンしてたし、最終日の海に行った時も海に入らないでパラソルの下で『暑い』の一点張りで全然動かなかったからピンがハズれることはなかったし…

「でもピンがあるのとないのじゃこんなに違うんだね咲也先輩って」

「あ、でも律さんもカチューシャしてなかったら一瞬分んないね」

「え？憂って律先輩のそんな姿、見たことあるの？」

私は合宿であるけど、憂はいつ？
って思ったけど…

「見たことあるっていうか、今見たよ」

「え？」

今だった。

「ほら、ここに小さく律さんが写ってるよ」

「あ、ホントだ」

確かにサク先輩の横に思案顔な律先輩が小さく写ってた。
やっぱり憂は観察眼が良いみたい。

「う～ん…　咲也先輩もそうだけど律先輩も印象変わるね」

「でも律さんってカチューシャがなくてもカッコいいね」

「そうだね」

「梓も髪解いてみたら？イメチェンで？」

「ヤダよ　そう言う純がやってみれば？」

「私は勘弁して…　普段はマシなんだけど、雨の日は爆発するんだから…」

純って癖毛っぽいからね。
憂はどうなんだろう？

「憂は？髪型変えてみるのは？」

私がそう言うと憂はおもむろにポニーテールを解き、前髪をいじって私達に向き直った。

「じゃ～ん♪」

「「唯先輩！？」」

そこには唯先輩そっくりな憂が。
唯先輩のピンチヒッターをしたことがある憂だけど、いくら何でも姉妹だからって似過ぎだよ…

「すごいね憂…」

「エヘヘ～♪ありがと～♪」

「あ、その笑い方も唯先輩にそっくり…」

「あずにゃんもありがと～♪」

「うわっ！そんな呼び方されるとホントに唯先輩がいるみたいだから止めて～！」

「憂、お昼休みはウキウキウォッチングのテレビに出れるんじゃない？ほら、素人がそっくりさんで出演してるじゃん？」

「あれって有名人のそっくりさんだから出れるんだよ？素人が素人のそっくりさんって言っても、誰もピンとこないよ…」

「あっ、そっか」

「もう…」

でもこの時間に唯先輩達といるサク先輩は何してるのかな？

恋バナ？

いやいや…絶対に有り得ない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

やはりそこは生まれ持った何かが持っている者が優位なのか、それともこれが運命なのか。

「…おい大貧民」

「何？貧民」

「…そろそろ俺は戻るぞ？」

「ダメ！もう一回やるぞ！」

結果として…

大富豪・琴吹
富豪・秋山
平民・平沢
貧民・俺
大貧民・田井中

となり、計三回ともに公平なルールに乗っ取って行なったがこの結果は揺るがなかった。

俺はゲームだから割り切っていたが、部長がそうはいかなかった。
負ける度に『もう一回！』と懇願するが、その想いとは裏腹に結果は伴わなかった。

「律、わがまま言うな
もうすぐ消灯なんだから今ので最後だ」

「ちぇ～…　分ったよ～…」

秋山の言葉に渋々納得したのか『ぶぅぶぅ』と言いながら立ち上がる。
そして俺も部屋に戻るために立ち上がる。

「あ、サッくん」

「サッくん言うな」

「明日の自由行動も楽しみだね～♪」

「ンなこと言うために引き止めんな…」

「むぅ～！ヒドいよサッくん　私はすっごく楽しみなのに～」

「へーへーワルカッタ…」

「出た、サクの真剣に謝らない戦法」

頬を膨らます平沢に適当に返し、戸を開けようと手にかけるがそれを邪魔せんとするかの如く…

ヒュン…バスッ

「ぷへっ…」

平沢の顔面に白い物体が飛来し、それをモロに受けた平沢はそのまま何故か俺の方に倒れ込む。

「……」

このまま避ければ平沢は間違いなく顔面強打になるので、仕方なく両肩を掴んでそれを阻止し、犯人を捜すために飛来物…枕が飛んできた方角に視線を向けると…

「♪♪」

「何で笑顔なんだよお前…」

見事な投球フォームでニコニコしている琴吹が。

コイツがやったのか？
つうかコイツだろ。
背後に布団が収納してある押入があるし。
襖が全開だし。

「先生ー、琴吹さんが投げましたー」

田井中により裏付けがとれた。
しかし自分が事の犯人だとバレようがお構いなしに…

「えっ！ムギ！ちょ…」

バスッ

いきなり琴吹が平沢に枕を投球したことに状況が飲み込めず放心していた秋山の顔面にクリーンヒット。

「枕投げだね！ムギちゃん！」

未だに俺に支えられたままの平沢が息を吹き返し、瞳を輝かせ傍らにあった枕を取り、田井中に向けて放つ。

「甘いぞ唯！すでにここは戦場なのだよ！」

アッサリと避けた田井中が今度は俺に向い投げる。

「…暴れんのは勝手だが俺を巻き込むな」

それを軽々と避けた俺は、大貧民曰くの戦場に身を置くほど戯けではないので早々に退散を決め込む。

「あ！サッくんが敵前逃亡だ～！」

「撃て撃てー！サクを逃がすなー！」

「待て待て～♪咲也君～♪」

（付き合いきれん…）

飛び交う柔らかい銃弾を全弾回避し、廊下に出るが…

「チッ…」

教師面した（当たり前）山中担任を廊下に確認。

現在時刻午後十時半。

消灯時間になっているので、各部屋を見回っているようだ。

初の担任&修学旅行生の監視で気が立っているあの人を相手にするのは得策ではない。

更に俺は今正に、女子の部屋から撤退中。

ここで鉢合わせたら厄介なこと間違ない。

そこからは俺の行動は素早かった。

1・再び戦場に舞い戻る。

「サク！やる気になったかー！」

2・押入の中にある布団を全て部屋に散乱させる。

「咲也？何してるんだ…ぶっ！」

「はい！澪ちゃんゲームオーバー！」

3・某猫型ロボの住処ヨロシクみたいに中に進入し、襖を閉める。

「油断は禁物よ～　りっちゃん！」

「ぶっ！な…なんて重い球を…許さん！くらえムギー！」

4・息を殺し、迫り来る惨事に備える。

バスッ！

『あ…さわちゃん…』

『さ、さわちゃんもする？枕投げ　ここは戦場だし…』

『し・ま・せ・んーっ！もう消灯時間なのよ！早く寝なさーいっ！』

『すみません！ごめんなさい！』

バシッ！

過ぎ行く山中担任の気配と荒々しく部屋の戸が閉まる音を聞いて…

5・ミッションコンプリート。

「去ったか…」

襖を開けて畳に両足をつける。

「ずるぞサク！自分だけ逃げるなんて！」

「そうだよ～！私達さわちゃんに怒られちゃったよ～！」

「知るかよ…　自業自得だ」

田井中と平沢が非難してくるが俺のせいではないので受け流す。

「まぁ良い…　ムギ！まだ戦いは終わっちゃいないぜ！」

「何言ってるんだよ！今さっきさわ子先生に怒られた「よしきた～！」ムギまで！？咲也～…」

普段ならば琴吹は秋山側なのだが、その琴吹がやる気になっている。

つうか事の発端はコイツだ。

平沢は言うまでもなく両手に枕を構え臨戦態勢。

そんな四面楚歌な窮地に陥った秋山が俺に助けを求めるが…

「じゃあ俺は帰る…」

「待って咲也～！」

バッサリと斬り捨てる。

「この私が逃がすと思ってるのかー！」

（どのお前だ…）

田井中が枕を全力投球するがそれをアッサリと避ける。
しかし避けた前方から間髪を入れず枕が飛来し…

バスッ

「……」

「やったぁ～！サッくんを討ち取ったなり～！」

顔面に小さな衝撃が走る。
まさかあの平沢にやられるとは…不覚…

「今だー！サクに集中攻撃ー！」

「え～い♪」

機を逃さんばかりに田井中と琴吹から二発続け様に食らう。

「ちょっ！咲也にそんなことするなって！怒っちゃうんじゃないか！？」

「大丈夫♪大丈夫♪これはゲームなんだぜ？こんなことでサクは怒んないよ」

「……」

足元に落ちてある三つの枕をゆっくりとした動作で拾い、背を向けている田井中、互いに接戦を繰り広げている平沢と琴吹に目掛け…

ブォン！

バスッ！バスッ！バスッ！

「アイタッ！」
「きゃっ！」
「うおっ…！」

枕が風を起こし、音が鳴るぐらいの勢いでそれぞれに命中させる。

「俺はさっきから帰るっつってんだ…　それをテメェらはことごとく邪魔しやがって…」

「おぉ～！サッくんがやる気に！」

「ていうか咲也君、怒ってるんじゃないかな？」

「だから言っただろ！」

「へっへーん！こいサク！返り討ちにしてくれよう！」

「律もあおるなー！」

「はい！澪ちゃんの枕！今からまた戦場になるよ！」

「いや唯…！」

「澪ちゃん！背中を見せたらダメよ！」

「ムギ…！？」

「…散れ」

「咲也ー！？」

ヒュン！ブォン！
バスッ！バシッ！
ボスッ！ベシッ！
ブンッ！ドスッ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

すごいと思う。

「寝ちゃった」

「よく寝てるよね～」

憂と純と一緒にお風呂に入って、一緒にテレビを観てたら純が大きな欠伸をした。

眠たくなったみたいだから憂の部屋に行ったら、純が憂のベッドでスヤスヤと寝息を立て始めた。

図々しいというかなんというか、とにかく純はすごいと思う。

「じゃあ私達も寝よっか？」

「まだ眠たくないよ」

「じゃあお布団でお話しよっか」

「うん、そうだね」

憂にそう返事をして、床に敷いてある二組の布団の一つに入り込む。
本来ならもう一組は純が使う筈だったんだろうな。

「あ～あ…良いな修学旅行…」

自然と口に出るこの言葉。
修学旅行って楽しいもん。
今頃先輩達、枕投げしてたりして。
合宿の時もやってたもん。
律先輩が唯先輩に枕を投げたのをきっかけにムギ先輩が乗っかって、私と澪先輩が止めようとするんだけど、結局私達も遊んじゃったんだよね。
唯先輩と律先輩がサク先輩を不意打ちするって言った時は本気で慌てて、止めたったけ。

懐かしいな…
そういえば今年もやるのかな合宿？
先輩達は受験生だからしないか…

「ね、梓ちゃん」

「ん？」

「明日どっか遊びに行こうよ」

「え？」

「行きたいとこ、どこかない？」

私が『良いな』なんて言ったから気を使ってくれたのかな？
だとしたら申し訳ないけど、憂のことだから『そんなことないよ』
って言うんだろうな。

「んっと…動物園…かな」

だから素直に従っとく。

って動物園って、子供っぽいかな？

「あ！私も行きたい」

「ホント？」

「うん」

微笑む憂を見て、ホッとする。
良かった、頷いてくれて。

ブブブ…　ブブブ…

すると枕元に置いてあった憂のケータイが振える。

「お姉ちゃんからだ♪」

「見して」

憂と一緒にケータイのディスプレイを覗き込むと、そこには意味不明な言葉が…

「しゃれこうべ…？」

「何これ…？」

「さ、さぁ…？」

唯先輩は一体何を伝えたかったんだろう？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……」

現在時刻午後十一時。

戦場を生き抜いた俺は、漸く部屋に戻ることが出来た。

即ち敵を完膚無き迄に叩き潰し、勝者となった。

つうか…我ながらなんてガキっぽいことを…

本気とまではいかんが、軽く息が上がる程に熱中してしまった…

ブブブ…　ブブブ…

「ん？」

ジャージのズボンのポッケに入れていたケータイが振える。
それを取り出して、内容を確認。

【送信主：平沢　唯】

【件名：無題】
【本文：しゃれこうべ】

「……」

意味を理解しようとも出来ない。
なのでゆっくりとケータイを閉じ、見なかったことにする。

「はぁ…」

とりあえず過ぎたことを悔やんでも仕方ないので、疲れた身体を休めるために早々に布団に入り込もうと決意し、目の前の俺達の部屋の戸を開ける。

ガラッ

「ヒャッハーッ!!影宮　修司ッ!!向うとこ敵ナシだーッ!!」

「ハッ!まだ星都がやられただけじゃねぇか!勝負はこれからだ!」

「……」

しまった…失念していた…

この深夜に向かう時間帯は修司のテンションがハイになるんだった…

つうかコイツらもやってんぞ…枕投げ…

いや…そんな生易しいもんじゃない…
言うなれば…命の取合いだ。
現に水本が気絶してるし。

「おぉッ!!サクッチッ!!やっと帰ってきたかッ!!さぁやるぞッ!!魔苦羅投げをッ!!」

「影宮でも桐島でもかかってこい!まとめて相手してやる!」

「その言葉を言ったこと激しく後悔させちゃるッ!!ヒャッハーッ!!」

「うるせェ…」

修学旅行初日の夜…

「西野ッ!!と見せかけてサクッチーッ!!」

「うるせェんだよテメェ」

バキッ！

「うべッ！！」

「おっ！蹴りもありなのか？」

「ねェよッ！！魔苦羅使えやッ！！」

「俺は寝てェんだ…　邪魔すんな」

「だったら俺達を潰してからにしなッ！！ヒャッハーッ！！」

「頭痛ェ…」

安息が出来るのはまだまだ先のようだ…

「ヒャッハーッ！！」

「だからうるせェんだよテメェは」

バキッ！

第七十八話（前書き）

復活しました。

活動報告の方にも書いたのですが改めて…
沢山の励ましの感想、本当にありがとうございました。
おかげで体調はバッチリです。

復活記念として、一気に三話を更新しました。

では…

修学旅行編その五です。

第七十八話

「なんつうかさ～！この夜でもない朝でもない時間って、妙にテンション上がるよな～！」

「…上がんねぇよ…」

「そりゃあお前さん、おかしいぜ！」

「…お前がな…」

現在ド深夜。

多くの人々は睡眠という休息で身体を癒し、活動エネルギーを溜めている最中だが、俺と修司は抜群に起きていた。

修司と西野の抗争の中、俺は何とか寝ようと試みたが、いかんせんテンション最高潮の修司とそれに当たられた西野がうるさい。

そんな状況下で眠れる筈はなく、気が付けばこんな時間になっていた。

ちなみに西野は修司に敗れた後、そのまま寝息を立て始め、水本は俺がこの部屋に戻ってきたままの状態（気絶）で放置。

一応この二人が寝ているので、その配慮として部屋の電気は消している。

「見てみろよ咲也！この京都の夜景！ビバ！素晴らしいじゃないか！」

「……」

そんな暗闇の部屋の中、修司は窓から夜景を堪能。
俺は自分の布団にくるまり、睡魔に身をゆだね…

「起きろ咲也！寝たら死ぬぞ！まぁここは雪山じゃねェが、何となくだ！」

「…お前マジで…ウゼェ…」

俺が寝ようとする度に起こされる。
『起きていた』は語弊がある。正しくは『起こされていた』だ。

午前一時頃までは、身体を揺さぶられる度に蹴りをぶち込んでいたが、テンションがハイになっているためか、痛みを感じる素振りを見せずケロッとしていた。

それ故、疲労するのは俺だけになり、アホは元気ハツラツという泥沼に陥ったのが現状である。

「なぁなぁトランプやらね？月明りの元で優雅なカードゲーム…セレブリティだな！」

「…一人でトランプタワーでも…作ってろ…」

「言ったな言っちゃったな！もっかい言うぞ？言ったな言っちゃったな！やるぞ俺！マジでやるぞ！よし咲也もやろう！」

乱暴に言葉を並べ、乱暴に掛け布団を剥ぎ取り、横たわっていた俺の腕を乱暴に掴み、乱暴に立ち上がらせる。

「……」

限界だった。
俺なりに耐えていた。
寝ている西野と水本を考慮し、ずっと耐えていた。
いつかは報われるとひたすらに耐えていた。
だが…もう限界だ…

「…おい…」

「んぁ～?やっぱりＵＮＯするか?持ってきてねェけどな!ヒャッハーッ!」

秋山が見たら悲鳴をあげそうな何かに取り憑かれたかのようにユラリと立ち上がり、フィーバー中の奴を見据える。

そして奴の左頬をロックオンし、渾身の力で…

ヒュ…

右足上段蹴りを見舞う。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ぺち

「…ん…」

私の左頬に何かが触れた感覚で目が覚める。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

バキッ！！

「ぶへェッ！！」

俺の右足が確かに奴の左頬を捉えた感覚に憂さが晴れる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ちょっと…純…」

それは純の足だった。

寝相悪過ぎだよ…
どうやったらベッドから私と憂の間に移動出来るの…

辺りは暗く、まだ陽が昇ってないということが分かり、何となくケータイに手を伸ばす。

「まだ四時…　ふわぁ…」

時刻を確認したらまだまだ寝れる時間だったから、私は再び眼を閉じて眠りについた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ちょいと…暴れん坊過ぎた…な…」

それが奴の最期の言葉だった。
どうやら自覚はあったらしい。
しかしどうやったらあんなテンションになれるんだろうか…
激しく謎だ…

漸くこの時間帯の正しい静寂が訪れ、後何時間睡眠が可能か確認するためケータイに手を伸ばす。

「四時…　最悪…」

時刻を確認すると、朝食の七時まで三時間しかないことに絶望を覚えながら、布団に入り込み眠りについた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「…ん…」

今度は自然と目が覚めた。
けど違和感を感じる。

横を見る。憂がいない。
少し視線を上げる。
いつの間にか純が元の位置に戻っていてスヤスヤと寝ている。

確かに憂がいなくて純がベッドに戻ってるのは違和感を感じるけど、

そうじゃない。

暗いんだ。まだ辺りが。

「何で…？」

ケータイで時間を見るけど、そこにはＡＭ七時って表示されてて、この時間ならとっくに陽は昇ってるはずなのに…

「んしょ…」

布団から立ち上がって、ロールスクリーンを開ければその原因が分かった。

「雨…」

曇空からザァーザァーと大粒の雨が降り注いでいた。

暗いわけだよ…

こんなにどしゃ降りじゃ太陽も見れないや…

「あずさぁ…？」

「純、おはよう」

振り返ると純が眼をこすりながら身体を起こしていた。
ていうか…

「頭すごいよ？」

「へ…？うわっ！」

寝起きで少しボーッとしていた純だけど頭に手を当てた瞬間に一気に目が覚めたみたい。
純の髪が何だか小さなアフロみたいになってる。

「もしかして雨降ってる？」

「え？うん」

純に外が見えるように少し身体をずらす。
ベッドから降りた純が私の横に来て、すごく嫌そうな顔をする。

「うわぁ…　髪が爆発するわけだよ…」

「純って癖毛なんだね」

「うん…　だから雨は天敵なんだよ…」

ザァー…　ザァー…

降り注ぐ雨を私と純は、『朝ご飯の準備が出来たよ』と憂が呼びに来るまでただただ眺めていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

寝不足だ…

まだまだ寝ていたかったが腹はどうしても減る。
なので朝食を食うためにフラフラと大広間に向かう。

「おはよう咲也」

不意に背後からかけられた声に歩みは止まり、面倒そうに振り返る。

「どうしたの!?クマがすごいわよ?」

そこには眼を見開き若干驚いた表情の真鍋が。
顔を洗った時に鏡に映った相変わらずの不機嫌面とクマに肩を落としたが、やはり他の奴から見てもクマがヒドいらしい。

「眠れなかったの?」

「そうじゃねェとこんなもん出来ねェだろ…」

「そ、そうね…」

「眠…」

「でもどうして眠れなかったの？何かあったの？」

「俺と同室に『奴』がいるからな…」

「あぁ…　それは大変だったわね…」

名前は出してないが修司だと通じたらしく、小さく頷き、まるで同情するような眼で俺を見てくる。

そんな眼で見んな…

俺が哀れみてェじゃねェか…

「あっ　サッくん！和ちゃん！」

すると真鍋の背後から平沢がトコトコと参上。

「二人ともおはよ～」

「おはよう唯」

「……」

「うおっ！サッくんどうしたの？」

平沢が自分の眼を指差す。
つまりクマの事を言いたいんだろう。

「察しろ…」

「ほぇ？」

「そんなことより…」

あまりこの話題には触れてほしくないので、ジャージのズボンのポッケからケータイを取り出し、昨夜の暗号のような内容のメールを送信主に解説願う。

「…これ、どういう意味だ?」

『しゃれこうべ』

確か本質は風雨にさらされて肉が落ち、白骨になった頭蓋骨だったと思う。
しかしそんな不気味な言葉を扱う奴じゃないだろコイツは。
果たしてどんな意図で、コレを俺に送信してきたのか…

「私にも昨日の夜に届いたわ　唯、どういう意味なの?」

真鍋が俺のケータイを見ての発言。
知り合いという知り合い全員に送ったわけじゃねェだろうな…

「あ、それね～　おもしろいんだよ～♪」

「……」

ハードル上げたぞ…
そんなに鉄板なネタなのか？
つうかそもそもネタなのか？

「昨日寝る時に、りっちゃんがいきなり『しゃれこうべ』って言ったんだよ」

「「……」」

「でね？それを聞いたら何だかおかしくって♪ムギちゃんなんかブタ鼻鳴らしちゃったんだよ♪」

「「……」」

分からん分からん。
ニコニコしながらその当時の出来事を身振り手振りで俺と真鍋に伝えようとしてるが、さっぱりだ。
あの真鍋でさえ対応に困っている。
俺と同じように口を噤んだままだ。

「…そうなんだ、良かったわね」

「うん♪」

「はぁ…」

苦渋だったのか、真鍋の笑顔がどこか固いのは気のせいじゃないだろう。

「とにかく朝食に行きましょ？そろそろ時間になるわ」

「そだね」

「……」

歩き出す二人。
その数歩後ろを俺がダラダラと歩く。
そして突如として…

「♪ごはんはすごいよ
ないと困るよ
むしろごはんがおかずだよ～」

平沢が陽気なリズムで白米をフューチャーした謎ソングを口ずさむ。

「♪関西人ならやっぱりお好み焼き&ごはん～」

「…お前何だよソレ」

「ごはんはおかずだよ！」

「ンなドヤ顔で堂々…　だからソレが何なんだっつうの」

「新曲だよ！」

「…ナシ」

ただ一言、そう告げて立ち止まっていた平沢と真鍋の横を通り過ぎる。

「えぇ～　和ちゃんはどう思う？」

「独創的…かな？」

……

朝食を済ませ、部屋に戻り、制服に着替える。
そして少し時間を適当に潰し、財布とケータイをズボンとブレザーに忍ばせ、部屋を出る。

本日五月十五日土曜日。
現在時刻午前八時三十分。

修学旅行二日目は自由行動日。
別名『勝手に散策してこい』

チュンチュン…

「今日は自由行動です
班ごとにちゃんと予定した見学コースを回るように」

ホテルの玄関で小鳥の囀りと山中担任の長々とした注意点をあらぬ方向を向いて受け流す。
そして二組がゾロゾロと移動を始めたので、その流れに乗じようと、第一歩を踏み出す。

「咲也くん、ちょっと良いかしら？」

「あン？」

しかしその流れの断ち切ってくれたのは、猫かぶりモードから通常モードに移行した山中顧問。

「影宮君の姿が見えないんだけど」

「…あのアホなら部屋で天井を眺めてる」

「どういうこと？」

「…つまり体調不良っつうこと」

「え！そうなの！？」

体調不良と言ったが、決して嘘ではない。
あのアホは朝から身動き出来ない程の痛みを全身に襲われている。

それは何故か？

答えとして、昨晩の枕投げ合戦による筋肉痛及び、俺が放った蹴りが今になって効いてきたらしい。

テンション最高潮から通常に戻ったことにより、アドレナリンの作

用が消えたんだろう。
以上の点で奴は本日の自由行動はリタイア。
いっそのこと、そのまま修学旅行をリタイアしてほしいものだ。
という事を山中顧問に報告する。

「あなた達何やってるのよ…」

「…言っとくが俺は悪くねぇ、被害者だ」

「はぁ…分かったわ、影宮君は今日の自由行動には参加しないのね？」

「…あぁ」

「サクーっ！行くぞーっ！」

「サッくーんっ！はーやーくーっ！」

何ともデカいボイスに嫌気を感じるので振り返ることはしない。

振り返えらずとも、誰が呼んでるか分かるし。

「ほら、唯ちゃんとりっちゃんが呼んでるわよ」

視線で『早く行ってやれ』と訴えてくる。
俺を引き止めたのはアンタだよな？

「はぁ…」

とりあえず、ため息一つ吐き、踵を返す。
俺の視線の先には、満面の笑顔で両手を振る平沢。
両手でメガホンを作り、未だにデカい声で俺を呼ぶ田井中。
微笑んでこっちを見る秋山。
ニコニコしながら小さく手招きをする琴吹。

「……」

そんな軽音部員に向け、今度こそ第一歩を踏み出す。

「さてと…私は恋愛成就の神社を回りまくるわよー！」

（仕事しろよ…）

山中顧問の活気漲る宣言に思わずこんなことを思った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「はぁ…」

これで今日何回目のため息かな？

そんなことも分からなくなるくらいにため息をしている。

私がこんなに、それこそサク先輩みたいなため息をついてるのは全部…

ザァー…ザァー…

リビングの窓から見える雨のせい。
昨日の夜に動物園に行こうって憂と話してたのに、こんなどしゃ降りの雨じゃ中止に。
楽しみにしてたんだけどな…

「ねぇ純、何かすることない？」

「うん…」

「どっか行きたいところとか」

「うん…」

「ゲームとかでも良いよ」

「うん…」

動物園が中止になって退屈になったから、純にやりたいことを尋ねるけど、憂の部屋から持ってきた漫画に没頭してる純は生返事ばっ

かり。

「ねぇ憂、これの六巻ってある？」

「えっ　どうだったかな？」

「友達んチでそれやってると、友達失くすと思う」

家に遊びに来たのに漫画やゲームばっかりしてる人って結構いるんだよね。
で、結局そのまま時間が流れて気が付いたら帰る時間だったってやつ。

「仕方ないじゃん、読み始めたら夢中になったんだもん」

「じゃあ家に帰ったら読みなよ」

「その時はもう飽きてるかも」

いるよね。こういう人も。
その時だけ夢中になってて、でも本質はそこまでじゃないやつ。

「確か、お姉ちゃんの本棚にあった気がするけど」

「あれ？何で唯先輩の部屋に？この漫画って憂のじゃないの？」

私がそう質問すると、何とも唯先輩らしい答えが憂から返ってきた。

「ううん　この漫画はお姉ちゃんのなの
私の部屋で読んでて、そしたらお姉ちゃん寝ちゃったりして、気が付いたら私の部屋に置いてあったの」

「それって自分の部屋に持って帰るのが面倒だったんじゃないかな…」

憂のベッドで漫画を読む唯先輩だけど寝てしまい、憂に促されて自室に戻る。
そして漫画は憂の部屋に置きっぱなし。

こんな感じの画がすんなり浮かんできた。

ひとまず、純がどうしても気になるって言うから、私達は唯先輩の部屋に行くことに。

ガチャ

憂が唯先輩の部屋の扉を開けて、中に入る。
私と純もその後に続く。

「あっ！これがギー太ね！へえ～近くで見るとカッコいいね」

憂は本棚で漫画を探して純はギタースタンドに置いてある唯先輩のレスポールを眺める。
私はぐるりと部屋を見渡す。

「ぁ…」

そして部屋の壁にあるコクル板の多目的スペースにある写真を見つける。

そこには去年の合宿で撮った写真や、学園祭終わりで部室で撮った写真。

その他にも様々な写真があるけど、私は一枚の写真に釘付けだった。

「懐かしいな…」

その写真には軽音部の全員が写っていた。

確かこの写真は私が先輩達の『翼をください』を聞いて、軽音部でやっていく決意をした次の日、澪先輩のフィルムカメラで撮ったんだったけ…

長イスの中央に私が座り、その右隣に律先輩、左隣にムギ先輩。

後ろに澪先輩と唯先輩とサク先輩が立っている。

私とサク先輩以外は全員眼をつぶってる。

けどちゃんと眼は開いてる。

矛盾してるけど、違うよ。

だって私とサク先輩以外は瞼にマジックで眼を描いてるもん。

私の入部記念の写真。

後で聞いたんだけど、律先輩曰くこれは家族写真をイメージしたみたい。

だからってマジックで瞼に眼を描く理由が分からない…
そしてムギ先輩が持ってる赤ちゃんの人形はどこから持ってきたんだろう…

ちなみにサク先輩もマジックで眼を描かせるつもりだったけど、サク先輩は断固として首を縦に振らなかったらしい。
だから先輩達の中でサク先輩だけ普通に写ってる。

「純ちゃん、はい」

「ありがとう…ってこれ七巻だよ？
私が欲しいのは六巻だよ」

「あれ？でも六巻なかったよ」

憂と純の会話に写真から視線をハズす。
向けた視線の先には一冊飛ばして七巻を読むか読むまいか悩んでる純に苦笑いの憂。

「やっぱダメだ！本屋さん行こう！本屋さん！」

「まだどしゃ降りだよ？」

唯先輩の部屋の窓から外を見るけど相変わらずの雨模様。
行けないことはないけど…

「え～…」

落胆したように肩を落とすと、そのまま唯先輩のベッドに倒れ込む純。

「何か一気に退屈になった…」

「だからさっきから何かしようって言ってるのに…」

ブブブ…　ブブブ…

「ん？」

私が呆れたようにそう言うと、私のケータイが震える。

「あっ　唯先輩だ」

「お姉ちゃんから？」

「うん」

ケータイを開いて憂と一緒にメールを確認する。

「あずにゃんたちは何してるのー？」

「お猿さんがいっぱいいるね
お姉ちゃん達、楽しそ～♪」

そんな文字と、画像が添付されたメール。

律先輩とムギ先輩が楽しそうにVサインしてて、澪先輩が猿にちょっと怯えてる。

何故かサク先輩に群がる猿にサク先輩が鬱陶しそうな顔してて、唯先輩が笑顔でそれを見てる。

そんな画像。

先輩達楽しそうだな…

こっちは雨が降ってて気分が滅入ってるから、何だか悔しい。

「やっぱりどっか遊びに行こう！」

「でもまだどしゃ降りだよ？」

憂がさっき私が純に言ったことを言うけど…

「傘差したら大丈夫だよ！」

このまま家に籠って時間が過ぎるのはヤダし、何より悔しいもん。

だから憂にそう言って、純に視線を向けると…

「すぅ…　すぅ…」

「寝付き良すぎ！？」

純はスヤスヤと寝てた。

順応性高いな…純は…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

現在時刻午前十時十分。

「ありがとう～」

平沢が写真を撮った水本からケータイを受け取る。

俺達は今、観光名所の嵐山にいる。
しかし嵐山に行くために利用したタクシーを降りた俺達を待ち受けていたのは平沢と田井中の勝手な既決だった…

『…嵐山って何があるんだ？』

『有名なのは桂川に架かる渡月橋とか、四季折々の風景ね～』

『橋か…』

『また興味なさそうだな咲也』

『…そんなことより、アレをほっといて良いのか？』

『え？』

『わっ　すっげぇ！モンキーパークだって！ほら唯！』

『えっ？お猿？お猿がいるの！？』

『…猿も有名なのか？』

『それはあんまり…かな』

『いよっしっ！モンキーパークに行くぞーっ！』

『ウッキッキ～！』

『ちょっと待て！何で京都に来てまでお猿なんだよー！勝手に行くなー！律ー！唯ー！』

『咲也君、私達も行きましょ？』

『はぁ…』

ということで、有名な渡月橋を軽々しくスルーの勢いで渡り、猿の楽園に。

そこにはうんざりするほどの猿の群が生息しており…

『ほい、サッくん』

『あン？』

『お猿さんのエサだよ～♪』

『間違っても自分で食べるなよ～サク♪』

『…後で修司にやるか』

『いやいや…さすがの修司もそれは可哀相だって』

『きゃっ！』

『怖がらなくても大丈夫だよムギちゃん』

『あ、澪の背後に…』

『な、なな、何!?』

『いや別に…』

『な、なんだよ律!?』

『ただ猿がいるだけじゃねェか…』

『ヒッ!た、助けて!咲也!』

猿にエサを与え、平沢の提案で中野にこの現状を伝えることになり、今に至る。

「…つうか何で猿は俺に纏わりつくんだよ」

特に何かをした覚えはないが、何故かさっきから猿共が俺の足元にワラワラと集まってくる。
たまに足にしがみつく奴もいる。
実に鬱陶しい…

「サッくんが好きなんだね〜　お猿達は〜」

「嬉しくてねェっつうの…」

ブブブ…　ブブブ…

群がる猿共を足で踏まないようにあしらっていると平沢のケータイが小さな地震を発生させる。

「あっ！あずにゃんからだ～！」

どうやら中野からしい、平沢がニコニコしながらケータイを開く。

「こっちは雨が降ってます…だって」

ケータイのディスプレイ画面を俺に見せつける。

そこには窓辺に中野と平沢妹の姿。

画面右下には鈴木のドアップ。そんな画像が。

どうやら鈴木が撮ったらしい。

そして窓の外から雨が降っている風景がはっきりと見て取れる。
つうか…

「…何でお前の妹と鈴木が中野と一緒にいんだよ?」

雨が降ってる中、わざわざ遊んでんのか?

「それはね、ウチにあずにゃんと純ちゃんが昨日から泊まってるからだよ」

「ふーん…」

「お父さんとお母さんは昨日と今日はいないし、憂が一人になっちゃうから…」

「…だからコイツらが泊まりに来てんのか」

「うん!あずにゃんと純ちゃんには感謝だね
憂が一人になっちゃうから心配だったけど、良かったよ♪」

「……」

満面の笑みを俺に見せる平沢。
その笑顔は妹を想う確かな姉の笑み。
だからコイツは度々妹にメールを送ってたのか…
妹の様子を気遣うために…か。

「地元じゃ雨が降ってるんだな～」

「京都はこんなに晴れてるのにね～」

田井中と琴吹が平沢のケータイを覗き込みながら感想を。

「雨か…」

「あン？」

すると秋山がポツリとこぼす。
雨に何か引っ掛かるところがあったのか？

「雨…　五月雨…何か良い歌詞が浮かんできそうだ」

「あっそ…」

猿に囲まれた状態でブツブツと『五粒目は小鳥のミニティアラ』とか『九粒目は葉っぱとダンス』とか呟いてるシュールな光景にため息が出そうだ…

「あ、澪ちゃんもお猿に好かれてるね～　いっぱい集まってきたよ～」

「え？う、うわっ！咲也！助けて！」

「はぁ…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

バシャ！バシャ！

「はぁ…！はぁ…！」

雨が傘を弾く独特な音。
足を踏み出す度に地面の水が小さく宙を舞う。
私達は今、学校に向けて走っていた。
大事な…！大切な事をすっかり忘れちゃってた！

純の提案でバッティングセンターに行くことになった私達。
純の読んでた漫画が野球漫画だったから影響されたみたい。
でも私も純も野球なんてあまりしたことないから、全然バッドにボールが当たらない。

でも憂は違った。
憂も始めは全然だったけど、隣の打席の親子のアドバイスを聞いた憂は、見事にカキーンという壮快な音を鳴らした。
しかもホームラン。

そういう飲み込みの早さってホント唯先輩にそっくり…

そして憂が貰ったホームラン賞の亀のおっきなヌイグルミを見て…

『梓ちゃん？』

『どうしたの？』

『トンちゃん…　忘れてた…』

唯先輩からトンちゃんのお世話よろしくねって頼まれてたのに！

昨日のエサやりからずっとそのままだよ！

急いでバッティングセンターから出て、雨の中を私達は走る。

学校に辿り着き、守衛の人に事情を説明して、部室の鍵を貰う。

ガチャ

「はぁ…　はぁ…」

息をきらせながら部室の扉を開けると、そこは昨日と変わらない光景。
つまりトンちゃんも元気に水槽の中を泳いでいた。

「良かった…」

安堵の息を漏らし、トンちゃんにエサを上げるため、水槽に近付く。

「ごめんね、トンちゃん」

エサをあげると、水面に近付いてパクパクと食べるトンちゃん。

「この子がトンちゃんなんだね」

「うん」

憂が微笑みながらトンちゃんを見つめる。
昨日、憂は部室に来たけど、すぐに私と一緒に出て行ったからトンちゃんを見るのは初めてなんだね。

「確かにかわいいかも」

「かわいい？」

「うん！お姉ちゃんいつも言ってるよ
あずにゃんと同じくらいかわいいって♪」

「私と同じ…」

唯先輩とムギ先輩はトンちゃんのことを確かにかわいいって言ってるけど…

正直トンちゃんと比べられても微妙です…
唯先輩…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

現在時刻午後四時三分。

「サクサク！あれなんだ？」

「知るかよ…」

「サッくん！あれは？」

「だから知らねェっつうの…」

「じゃあ、そろそろ時間だしホテルに戻ろうか」

秋山がケータイで時間を確認し、俺達を見渡す。

「帰りは電車にしましょ？」

「そうだな」

「よーし！なら駅はこっちだ！私についてこーい！」

「ラジャー！りっちゃん部長！」

「……」

周囲の趣ある建造物をあちらこちら指差していた田井中が、その指を適当な方角に指差し歩いていく。
そんな適当っぷりに些か不安を覚えながらついていく俺達…いや俺。

モンキーパークで猿と戯れ、嵐山で粋なお好み焼き屋で、ソレを堪能したのちに、次なる観光地である銀閣寺に。

『ねぇねぇサッくん』

『サッくん言うな』

『銀閣寺っていうけど全然銀じゃないね？』

『…造った奴が見栄張ったんじゃねェの』

『金閣寺に対抗してか？だったら納得だな～』

『そんなわけないだろ』

『銀閣寺ってな～　金閣寺と対に挙げられるもんやから、金と対して銀って名付けたみたいなんやって～
元々銀色じゃなかったみたいなんよ～』

『おぉ～　さすがムギちゃん』

『しかも完璧な関西弁！』

『お前は何で金閣寺と銀閣寺の説明限定で関西弁になるんだよ…』

銀閣寺を俺は適当に観光し、ダラダラと周囲を散策。

『サッくん！サッくん！甘味処だって！入ろ？』

『…勝手にどうぞ』

『はいはい　サクも入るぞ～』

『…お前の耳は飾りか？』

『澪ちゃんも行こう～♪』

『わっ！ムギ！押すなってっ』

『う～む…　桐島には女難がありそうだな』

『桐島クンが聞いたら怒りそうだから言わない方が良いよ？』

そして…ハプニングが発生…

「あれ？」

先頭を闊歩していた田井中が立ち止まり、苦い表情をする。

「律…　もしかして迷ったのか？」

「もしかしなくても迷ってんだろ…」

「ま、迷ってないって…」

「…じゃあお前、ここどこだよ？」

「じゅ、住宅地…」

「…こんな住宅地に駅あんのか？線路通ってんのか？だとしたら騒音で心頭苛立つ筈の住民なのに、随分と心が広い連中が住んでんだな…それともアレか？ここいらの家は防音対策してんのか？そんな金があるなら引っ越した方がマシだと思うがな」

「サク…　クマが出来てるからいつも以上に目付きが…眼が怖い…」

「…迷ったんだろ?はっきり言え」

「はい…　迷いました…」

「……」

バシッ

「アイタッ!女を叩くなよー」

この事態を招いてくれた田井中のデコを軽くはたき、現状把握のため周囲をグルリと見渡す。

「はぁ…」

ため息だって出たくなる。

周囲にあるのは、家、家、家…

見事に住宅街だ…

しかも京都特有な入り組んだ地形…
全方周囲に小道や通道。
どこをどう行けばこの迷路のような住宅街から脱出できるか皆目見当も付かない…

「サッくん！犬がいるよ～　かわいい～♪」

「あのな…　お前呑気か…」

こんな状況下にも関わらず飼い犬とはしゃぐ平沢に完全に呆れる。

修学旅行二日目。
自由行動終盤で、人生二度目のまさかの遭難…とまではいかんが迷子真っ最中…

第七十九話（前書き）

修学旅行編その六です。

第七十九話

「雨、全然止まないね…」

「せっかくの休日なのにね」

「うん…」

部室の窓から外を眺めるけど、相変わらずの雨模様。
雨が降る中部室に来て、トンちゃんのことは良かったけど…
何だか腑に落ちないなぁ…

ザァー…ザァー…

部室内は静か。
私と憂は雨を眺めてるし、純は何故か部室にあった漫画の六巻を読んでる。

「いつまで降るんだろ…　早く止まないかな…」

私の願望にも似た言葉に反応したのは、黙々と漫画を読んでいた純だった。

「じゃあ三人でセッションでもしようか」

「え？」

純のその言葉を聞いて窓から純に視線を移す。
読んでいた漫画から顔を上げた純と視線がぶつかる。

「雨だし、結構大きな音出しても大丈夫なんじゃない？」

二カッと笑って『どう？』っと聞いてる。
その提案を聞いた私は…

「それおもしろいかも！」

「でしょ？」

「うん！」

セッション。
この前、律先輩とサク先輩がやってたセッション。
ドラムとギターだけの二重奏だったけど、心踊るような、心地良い曲を奏でていた。

だから純のこの提案は私にとっては嬉しかった。
だって私も…同じギタリストとしてサク先輩みたいな音を、演奏を奏でたいって想ってたから。

「でも、私に出来るかな…？」

私と純は意気込んでたけど、憂は不安そうな顔をしていた。
だから私はそんな憂の手を取って、不安を取り除くように言葉を告げる。

「大丈夫だよ　憂なら出来るよ」

「梓ちゃん…」

「そうそう！それに簡単なのにするから」

「純ちゃん…」

座っていた席から立ち上がって純が笑う。

「オルガンなら弾けるんじゃないかな？」

私はオルガンを指差す。

本当はキーボードとかの方が良いかもだけど、さすがにムギ先輩のキーボードを勝手に使っちゃいけないよね。

「あっ！小さい頃に弾いたことあるよ！」

「やってみよ！やってみようっ！」

憂の手を握ったまま、私は憂の瞳を見る。
『どうかな?』っていう意味で見つめる。

「うん!」

決まり!
笑って頷いた憂に私も笑顔になる。

「純!ジャズ研にギター置いてあったりしない?」

「あるんだよそれが!ちょっと待ってて!」

部室の扉を開けて、純が駆けていく。
自然と部室に残るのは私と憂。

「ね、梓ちゃん」

「ん？」

憂に呼ばれ、振り向く。
そこには笑顔の憂。

「私ね？お姉ちゃんみたいに、うまくギター弾けないし、律さんみたいにドラムも出来ないし、澪さんみたいにベースも弾けない」

「……」

一見聞けば、自信がないように聞える憂の言葉。
でも、それは違うんだ。

「紬さんみたいにキーボードも出来ない」

だって憂は笑ってる。

笑いながら私に語ってくれてる。

「でもね？純ちゃんの言葉聞いて、私もやってみたいって思ったの」

「……」

「もしかしたら…咲也さんってこういうことを見越してたのかな？」

「え？」

今まで黙って聞いてたけど、そんなことを言われたら、つい口を開いてしまった。

「サク先輩が何？」

「言ったのは私だけど、咲也さんも、もしかしたらって」

あれ？会話が噛み合わない…
そういえば…昨日もサク先輩がどうとか…

う～ん…　憂に問い詰めたいけど…
それは何か出来ない…

明後日サク先輩に学校で聞いてみようかな？
でもサク先輩だったらはぐらかしそう…

ガチャ

「梓～　ギター持ってきたよ～」

部室の扉が開き、自分のベースと私が使うギターを持った純が戻ってきた。

「あ、うん」

ギターを受け取るため純に近付く。
その途中に憂の様子を伺うけど、ニコニコしてるから、やっぱりサク先輩のことを聞き出すのは無理みたい。

……

♪…

私はジャズ研から借りた青いストラトキャスターをアンプに繋ぎ、チューニングを兼ねて二、三回六弦から一弦までストロークをする。

♪…

純は澪先輩のベースアンプを繋ぎ、チューニング。
ちなみに澪先輩のアンプを使うって私が言ったら、純はすごく嬉しそうだった。

♪…

憂はオルガンで軽く音を鳴らす。

その後、三人で音合わせをして準備完了。

「純」

私が確認を取るように純を見る。
その純が小さく頷いて、カウントを。

「一、二、三、四…」

♪♪♪…

曲は『むすんでひらいて』

簡単な曲を探して、この前掃除した物置部屋を見ていたら、見つけた楽譜。

その楽譜にはギター、ベース、ドラムのそれぞれのパートが載っていた。

多分…昔の軽音部の人達が作ったんだと思う。

先生かな？
いや、先生はこんなゆったりとした曲はやらないかな。
だって軽音部時代はヘビメタ路線だったみたいだし…

♪♪♪…

私のギターに憂のオルガン、純のベース。

雨の音は聞えない。
部室に流れるのは私達の演奏。
律先輩とサク先輩のあのセッション程のレベルじゃないけど、確かな楽しさを私は感じていた。

♪♪♪…

あぁ…

♪♪♪…

やっぱり…

♪♪♪…

音楽って楽しい…

♪♪♪…

ギター弾くのって…

♪♪♪…

すっごく楽しいな…！

♪♪…♪…

「出来たー♪」

「うん！憂のオルガンも純のベースもばっちりだった！」

「梓のギターもね」

「エヘヘ…　ありがとう」

純の言葉に照れていたら、暗かった部室が明るくなった。
それは…

「あ…」
「雨が…」
「止んだ…」

曇空だった天気が一変して、綺麗な茜色の夕陽が雲の途切れから覗かせた。

「わぁ～…」

「綺麗だね…」

「うん…」

私達は窓に駆け寄って空を眺める。
窓についてる雨粒が夕陽に反射して、キラキラと虹色に輝く。

とても…すごく幻想的で綺麗だな…

「ね？写真撮ろ？」

憂が私達に振り向く。

「うん！」
「そうだね！」

当然否定する理由はないから私と純は頷く。

憂がケータイを取り出し、私達は憂に近付いて並ぶ。

「ほら梓、もっと寄って」

「あ、うん」

「良い？じゃあいくよ」

憂がスッとケータイを掲げる。
私達はレンズに顔を向ける。

「はい　チーズ！」

カシャ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

現在時刻午後四時四十四分。

『四』が三つ並ぶ不幸なこの時間。
俺達は相変わらず迷っていた。

さて…道に迷ったらどうするべきか？

手っ取り早い方法として人に聞くのが一番だろう。

ということで、この事態の元凶であるカチューシャがそこら辺を歩いていた、ばあさんに駅への道を尋ねる。

「あ、あの！ちょっとすんまへん！」

「へぇ？」

「ここから駅へはどう行けばよろしい…どすか？」

何故か京都弁っぽい方言で聞く。

「普通に標準語で話せよ…
何で無理に京都弁使うんだ…」

「まぁ…　律なりに必死なんだよ…」

田井中のチャレンジを俺達は数メートル後方で見守っていた。
秋山曰く田井中は『必死』らしい。
その根性を是非とも普段の部活で常に見せてほしい。

「あ…」

俺の隣で同じく田井中を見守っていた平沢が、小さく声をだす。
何か妙案でも浮かんだかと、全く期待しないで視線はチャレンジャーに向けたまま、聴覚は平沢に意識する。

「憂からメールだぁ～」

「……」

期待しないで正解だった。
見知らぬ土地で絶賛迷ってるというのに、コイツは相変わらずの呑気。
ニコニコしながらケータイを取り出す平沢にやっぱり呆れると…

「サッくん♪」

「ソレ止めろ」

チョンチョンとブレザーの裾を引っ張りブロックワードを放つので渋々首を動かし平沢を見る。

「憂達、楽しそうだよ♪」

俺が見たのは笑顔の平沢と、ケータイに写ってる妹と中野と鈴木の画像。

センターにギターを持ってる中野。
その両隣に平沢妹とベースを持ってる鈴木。

その三人はそれぞれ笑顔だ。

そしてその画像と共に『お姉ちゃんへ　良いでしょ?』という本文が。

「コイツら…セッションでもしたのか?」

「そうじゃないかな?あずにゃん、ギター持ってるし」

だとしたら、この三人は来年の…俺達が卒業した後の姿というわけか…

平沢妹と鈴木の中野への想いを聞いて渡した勧誘のビラという入部届。

それはやはり間違いではなかったかと、確信を得た瞬間でもあり、『終わり』を意識している自分に気付いた瞬間だった。

「……」

まぁ、そんなまだまだ先のことを考えても仕方ないので、今はその思考を消去し、現状打破を考えよう。

「唯、サク」

田井中に呼ばれる。

田井中の近くには秋山と琴吹と、ついでに西野と水本の姿が。

どうやら色々考えてる内に、チャレンジを終えたらしい。

「…駅への道は分かったのか？」

「バッチリ！バッチリ！こっちだ！ついてこーい！」

自信満々にＶサインを俺に向けて意気揚揚と進んで行くカチューシャに、感じているこの小さな不安は拭えないままだ。

……

現在時刻午後四時五十四分。

「迷った…」

「なんてこった…」

「はぁ…」

肩を落とす田井中に平沢がポンポンと肩を優しく叩き無言で慰める。
秋山が更に悪化した窮地に不安そうに嘆く。
俺は予感が当たったことにため息を。
琴吹は地図を見ながら眉間に皺を寄せる。
西野と水本はキョロキョロと辺りを見回す。
田井中の後をついて行った結果がこのざまだ…
十分を無駄にした…

「ここがどこか分かれば良いんだけど…」

「現在位置が分かんねェのはイテェな…」

「そうだな…　それが分からないと地図見ても意味ないし…」

とりあえず、うなだれる田井中は平沢に任せ、俺と琴吹と秋山は地図を囲む。
しかし秋山の言う通り、俺達が現在何処にいるか、それが分からなければ幾ら地図があったとしても、ただの紙切れ同然だ…

「ＧＰＳは…？誰かのケータイについてないか…？」

秋山が画期的な閃きを思い付き、グルリと俺達を見るが、誰一人として首肯しなかった。

「あ、そうだ　ねぇ桐島クン」

「あン？」

すると水本がポンと手を叩き、こんな提案を。

「影宮クンに連絡取ってみたらどうかな？」

「そういやアイツ、ホテルにいるんだったな」

「あのアホに連絡してどうすんだ…
種子島に行ってアイツを外部に装着した人工衛星でも打ち上げて、
宇宙から俺達の位置でも確認してもらうってか？」

「いや…そんな人力のＧＰＳをしてもらおうなんて思ってないよ…

しかも外部って…」

「ていうか影宮に連絡しても望み薄だと思うぞ」

「…アイツの特技はリアクションぐらいだからな」

「そこまで言われる影宮クンって大物だよね…」

「ある意味な…　そこは否定しねェでやる」

仮にアイツに連絡しても、人間性を考慮すれば、とてもじゃないがＳＯＳなんて送れたもんじゃない。
事をデカくして警察沙汰になる可能性は無きにしも非ず。

「あ！それだよサッくん！」

「あぁ？」

田井中を慰めていた平沢が希望を見出した如く、ビシッと俺に指差

した後、おもむろにケータイを取り出し、誰かに連絡を取り始めた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「じゃあ憂、学校に七巻持ってきてね？」

「うん　分かった」

バスのタラップに足を掛けて振り返る純に私と憂は見送る。

セッションをした後、学校を出てバス停に向かった。

お泊まりは今日まで。
明日は日曜日で休日。
唯先輩達は明日の午前中には帰ってくるみたいだから、憂も寂しくないから今日までなんだけど、今日の夜は憂一人になっちゃうんじゃないかと思ったけど、この後に憂のお父さんとお母さんが帰ってくるとのこと。
だったら安心して、私と純は帰路につく。

「漫画に夢中になって乗り過ごさないようにね」

バスの座席に座って既に漫画を読んでる純に忠告をするけど、視線は漫画に向けられたままで、返ってきたのは片手を小さく上げるサインだった。

「大丈夫かな？」

そんな純に不安を覚えてると、ピーッという音でバスの扉は閉まり、バスは遠ざかっていった。

「梓ちゃん、昨日と今日は楽しかったね」

トンちゃんの十倍はある亀のヌイグルミを持った憂が笑う。

「うん、楽しかった」

先輩達も修学旅行で楽しんでるみたいだけど、私達も負けず劣らずに楽しかった。
特にセッションが。
やっぱり音楽は楽しいって再認識できたもん。

ピピピッ　ピピピッ

「「ん？」」

突然聞えた電子音に少しびっくりしてると、それは私のケータイからの着信音だとすぐに理解し、ポケットから取り出す。

「唯先輩だ！」

「お姉ちゃんから？」

「うん！」

ディスプレイ画面には『唯センパイ』の文字。

今まではメールだったから少しワクワクしながら、通話状態にして耳に当てる。

「もしもし？」

「『あっ　あずにゃん？私達、今迷子になってるんだよ～』」

「あ…　はあ…」

迷子？

いきなりそんなことを言われてもどうしたら良いか分からず、戸惑った声をあげる。

「『梓に電話してどうすんだよ！』」

今度は澪先輩の声が聞えた。

「『あ、そっか…　じゃあ憂に…』」

「『一緒だアホ…』」

今度はサク先輩の…
何が起こってるの？

「『ぶぅ～！ヒドいよサッくん…あ！和ちゃんだ！』」

ブッ！ツー…　ツー…

「切れちゃった…」

耳からケータイを放し、唯先輩からの意味不明な電話に少し呆然とする。

「お姉ちゃん何だって？」

「何かよく分かんないけど、迷子になってるみたい…」

憂に知り得た情報を有りのままを伝える。

「迷子？」

コテンっと首を傾げる憂。
そりゃそうだよね。
いきなりそんなことを言われても困るよね。
ていうか私も困るんですけど唯先輩…

「唯先輩、私にどうしてほしかったのかな？」

「でも迷子になってるって…　お姉ちゃん達大丈夫かな？」

「大丈夫だよ　唯先輩の周りにはしっかりした人がいるんだし」

サク先輩とか澪先輩とかムギ先輩とか。

律先輩は…すみません、講堂使用届を出し忘れるところとか考えると、そのカテゴリーに入りません…
みんなを纏める力はあると思いますけど…

「そうだね」

「うん、何か和先輩も近くにいるみたいだし」

「和ちゃんがいるなら安心だね」

「和ちゃん？」

憂って和先輩のことを唯先輩みたいに呼ぶんだ。

「えっ？あっ！？ううん！和さんもいるから安心だよ！」

「そ、そうだね…」

あれ？何で慌てて言い直したんだろう？
それに何か恥ずかしそう…

「じゃあ私も帰るね？」

とりあえず、恥ずかしがってる憂は置いといて、私は小さく手を振る。

「う、うん！また学校で！」

「うん、バイバイ憂」

「バイバイ梓ちゃん」

まだほんのり頬が紅い憂に別れを告げて、私は後ろに振り返り、薄暗い帰り道を歩きだした。

（明後日には先輩達が帰ってくるから、練習出来なかった分を取り戻さなきゃ）

先輩達との部活を楽しみにしてる私。
やっぱりちょっと寂しかったんだと思った土曜日の帰り道。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ぶぅ～！ヒドいよサッくん」

リスのように頬を膨らます平沢。

誰に電話したかと思えば、まさかの中野。
その点を秋山に注意されたと思いきや今度は妹に電話をすると言い出す始末。
故に非難される謂れは全くないし正論を吐いた俺にぶぅぶぅ言うのはお門違いだ。

「唯～！澪～！咲也～！」

救世主現わる。
閑静な住宅街に響くそれは俺達にとって光明の光だった。

「あ！和ちゃんだ！」

「和！」

「……」

名を呼ばれた平沢と秋山と俺はその方向に振り向く。
そこは生徒会長率いる秀才グループが。

「助かったー！のーどーかー！」

今の今まで落ち込んでいた田井中が真鍋に駆け寄る。
まぁ、その気持ちは分かるがここは住宅街なので少し声のボリュームを下げろ。

「和ちゃんがいたら百人力だよ！」

「うん！良かった～」

「…眼鏡してるからな」

「それは関係ないって咲也」

ひとまずは安堵する俺達。
しかし…俺は何故気付けなかったのか…
真鍋が放った爆弾に自分の思慮の浅さを恨んだ…

「ねぇ、駅へはどう行けば良いのかしら？」

「は？」

ヒューッ…ドガァンッ！！

真鍋爆弾、京都の住宅街に投下。

被害。

呆気にとられる俺達とまるで芸人のようにずっこけ、ヘッドスライディングをかます田井中。

「…それは俺達が聞きてェよ…」

「え？それって…」

いち早く立ち直った俺の発言に真鍋が首を傾げる。

「私達も迷ってるんだ…」

「そうなんだ…」

期待感を爆撃された秋山がガックリと肩を落とす。

よくよく考えればおかしな点がある。

ここは観光地とは程遠い地元にもある閑静な住宅街。
そこ真鍋達の班がいるならば、俺達と同じ状況に陥ったと考えられる。

どうして簡単に安堵してしまったんだ俺は…

「はぁ……」

「ため息ばっかりついてたら幸せが逃げちゃうよ？」

「現時点で不幸だから良いんだよ…
それより田井中を介抱してやれ…」

「あ、りっちゃん！大丈夫ですかー！」

平沢にずっこけたままの田井中を指差し、三人寄れば文殊の知恵ということで真鍋を含めて脱出会議を練る。

「…真鍋、お前現在位置分かるか？」

「うん、おおよそだけど…」

広げた地図のとある所を指差す真鍋。
それを俺と秋山と琴吹が覗き込む。

「私達がいるのはここだと思うわ」

「近くの駅がこの位置だから…」

「北に向かえば良いのね」

「…だがその東西南北が分かんねェぞ」

「それなら大丈夫、北はあっちだから」

と、真鍋が指差すので俺達はその方角にある道を進むことに。

「いや～　さすがは澪とサクとムギと和だな～」

「ね～　頼りになるよ～」

田井中と平沢が何か言ってるが、とりあえずスルーし歩きだす。

……

現在時刻午後五時十二分。

「おい生徒会長…　見覚えがあるぞこの家」

「あれ？おかしいわね…」

この救世主はどうやら方向オンチらしい。

真鍋を先頭に歩くこと数十分。

俺達は元いた場所に戻ってしまっていた…

「もう一度地図確認してみるわ」

「現在位置が分かってんのに何で迷うんだ…」

再び地図を広げる真鍋に絶大な不安を感じるので、俺も共に確認する。

カァー　カァー

「しゃれこうべ…」

カァー　カァー

「ぅ…くく…」

「しゃれ…こうべ…」

「そうだ…　アミ君達に連絡すれば良いんです！」

「藍澤さん、それって…」

「はぅ！ケータイの電池が切れてました～…」

「まぁ…ドンマイ」

カァー　カァー

「くく…あは…ははは…」

「しゃれこうべ…」

「ぷっ　くくく…」

「澪？」

カァー　カァー

「しゃ…」

「あはははは！あっはははっはは！」

「澪ちゃん今頃ツボに入ったね」

「澪ちゃん、あんまり大きな声で笑わらないほうが…」

カァー　カァー

「……」

あぁ…腹立つ…
何だこのカオスは…

夕暮れのカラスの鳴き声。
田井中の『しゃれこうべ』発言。
それに大爆笑する秋山。
そんな秋山に戸惑う真鍋。
冷静に解析する平沢。
近所迷惑を危惧する琴吹。
鷹崎に連絡を取ろうとするが意味を成さないケータイにうなだれる藍澤。
何かを言おうとした水本。
藍澤を軽く励ます西野。

コイツらは駅へ向かう目的意識が薄れてんのか…

「はぁ……」

冷静でいなければならない…
正直内心憤慨してるが、ここで爆発させる訳にはいかない。
なのでいつもより長いため息を吐いて気分を何とか平常心に戻す。
そして改めて地図を見る。

「……」

大体、地図があって現在位置が分かってんなら進むべき道はおのずと分かる筈だ。

「おい…　ホテルに帰りてェ奴はついてこい」

カオスな連中にそう告げてスタスタと地図片手に住宅街を歩いてく。

「あ！待って～サッく～ん！」

「ほら澪、いつまで笑ってんだよ」

「咲也が道を分かったらしいわ」

「行きましょ」

「り、律の…せい…だろ…」

用水路を渡った先を左に、雑貨屋を右に、高架線をくぐり、そのままっすぐに行くと大通りに。

「あぁ！おっきな道に出たよサッくん！」

「分かってるからちょっと黙ってろ…　あとサッくん言うな」

「そこは譲れないんだなサク」

四車線の道路を右にまっすぐ、ぶつかった交差点の左に…

「りっちゃん隊長！」

「お…おぉー！駅だーっ！」

「ふぅ…」

そこに駅がある…っと。

「すごい！さすが咲也！」

「サッくん天才！」

「いや～！さすがは私が見込んだ男だ！」

「良かった～　何とか時間内にホテルに戻れそうね～」

「うん　六時までに戻らないといけなかったから、本当に良かったわ」

何とか駅に辿り着くことができ、俺を含めた十一人が胸を撫で下ろす。
平沢なんか俺の腕を掴んでピョンピョン飛び跳ねる程の喜びよう。

止めろ…肩を脱臼する…

「じゃあホテルに帰りましょ」

真鍋が生徒会長らしく俺達を纏める。
そんな真鍋に地図を返却し、一目散に駅構内に進入する俺。

「お腹空いたね～」

「お前離れろよ…」

相変わらず腕を掴んでる平沢を引き連れて…っていい加減離せ…

……

現在時刻午後六時三十分。

「よう…今朝方ぶりだな咲也…」

無事にホテルに辿り着き、部屋で寛ぐのも束の間大広間で少し早めの晩メシに。
班ごとに割り振りられた場所に座り、割烹料理をつついていると満身創痍チックな修司が足取り重くやってきた。

「…俺はさっき会ったけどな」

西野と水本と共に部屋に戻ると、そこには自由行動に出発する時に見たままから全く変わってない修司の姿。

『全身がイテェ…！』と布団の上で仰向けの状態で呻いていたそのままだった。

「だろうな、お前ら帰ってきた時、俺は爆睡してたもん」

「…そのまま永眠しねェで良かったな」

「全くだぜ…　全身の痛みはなんとか和らいだけど、まだまだイテェよ」

『どっこいしょ』っと年寄り染みた仕草で俺の対面に座る修司。心なしか若干老けた気がする。

「楽しかったか？自由行動？」

グツグツと小鉢の上で煮えたぎる湯葉を口に運びながらそんなことを聞いてくる。

「…お前がいなかったからな、格別だった」

「よしっ　相変わらずの咲也にこの煮えに煮えた湯葉を顔面にぶつけてやろうかっ」

「…その瞬間にまた全身苦痛を味わうと思え」

「冗談だよ冗～談　親友にそんなことする俺じゃねェよ」

「…お前に親友なんていたのか？」

「目の前で魚食ってるアンタだよッ！」

何故かその瞬間に一気に生気を取り戻し、相変わらずの騒音を発生させる。

「喧しい…　ちゃんとお前に土産があるから落ち着け」

「マジで！？」

爛々と喜ぶ修司を尻目にブレザーのポッケから、モンキーパークで平沢に貰った猿のエサである落花生を取り出し、軽く投げる。

「ん？落花生？」

両手で受け取り、まじまじと観察する。

「嵐山で有名な落花生だとよ…　何でも新陳代謝を活発にする代物らしい」

「へー」

俺の嘘に疑うことなく落花生を割り、中身を…

パク

「モグモグ…　普通のピーナッツだな～」

食った。

まぁ害はないだろう。

そんな修司に西野と水本が必死に笑いを堪えているのがとても印象的だ。

「桐島」

「あン？」

すると、俺の隣でメシをがっついていた鷹崎が不意に話掛けてくる。

「梨乃がお前を褒めてたぜ」

「はぁ？」

「桐島君のおかげで駅に着いたってな
しかも眼を輝かせてだ」

「ふーん…」

「うわぁ…　興味なさそうな返事するな…」

「…実際その通りだし、どちらかというと今はコイツに興味ある」

「ん？俺？なんだよサクッチ！照れちゃうぜ～！」

クネクネと実に気味の悪い動きを目撃し、猿のエサを食べたコイツの観測に一気に興味が失せる。

「ふふっ！あははっ！あっはははははっ！」

突如として大広間に響く秋山の笑い声。
この大広間に集っている三年全員の『何事？』という意味が含まれた視線を一身に受けても止まらない秋山の笑い声。

「澪ちゃんどうしたんだ？」

「…大方、平沢か田井中が何かしたんじゃねェの」

「ほぉ…　しっかしあの澪ちゃんが大爆笑とはな…　修学旅行とは人を変えるもんだな～」

「…お前はその内、猿に変わるかもな」

「へ？なんで？」

修司の問い掛けには答えず、漬物をボリボリと食う。

「笑いが…！あはは！止まらない…！あはははは…！」

……

現在時刻午後七時二分。

修学旅行の最後の晩餐を平らげた後、再びホテルを出発。

実は最後の観光があったりする。

観光ではなく単なる買い物なんだが…

「あずにゃんにお土産買ってあげなきゃね～」

「そうだな　一人で留守番だし」

「だったら、何か京都らしいものが良いんじゃない？」

「そうだな～…　京都らしいもの…」

「…悩む程のものか？」

俺達が宿泊しているホテルの目の前には地下へ続く階段があり、そこを降りると地下街に着く。

修学旅行最後のイベントとしてそこで買い物をする手筈になっており、学園の思惑通りに俺達は現在ショッピング中。

「京都といえば、コレかな？」

「…ソレを貰っても嬉しくねェと思うぞ」

平沢が手にしたのは、やけにリアルに作られている京人形のレプリカ。

「コレかしら～」

「とりあえずその刀置け…」

新選組の法被と模造刀を軽々しく扱う琴吹に命ずる。

「唯もムギも甘いな！梓にはコレやがなー！」

「…お前のが一番ねェからな」

自分の身長サイズの京都タワー（ビニール製）を俺に見せつける田井中に正論を。

「八ツ橋だろ、そんなの貰ったって梓が迷惑するぞ」

秋山が生八ツ橋の箱を指差す。

「…まぁ、それが無難だろ」

「そだね～　あずにゃんの分と家族の分と隣のおばあちゃんの分だね」

「ねぇみんな」

とりあえず十個入りの生八ツ橋を二つ、親父とお袋の分を手に取っ

た瞬間に琴吹が俺達に手招きする。

「どうしたんだムギ？」

「うん、せっかくだから軽音部のみんなでお揃いのもの買わない？」

田井中が琴吹に尋ねると返ってきたのはそんな提案。

「あ！ムギちゃん！それいいね！」

「…揃いのものっつうけど、何にすんだ？」

「そうね…」

『う～ん…』っと思案顔になりグルリと店内を見回す琴吹。
そして逸品を見つけたらしく、ある物を指差す。

「コレ！コレなんてどうかしら？」

「良いんじゃないか？」

「うんうん！コレにしようよ～！ね？サッくん」

「コレか…」

「微妙な顔するなってサク」

琴吹が指差した『ソレ』は正直頷けない。
しかし、どうせ俺が拒否しても他の奴等はお構いなしに買わせるんだろうな…

「はぁ…　コレにすんだな？」

「うん♪」

抵抗するだけ無駄だと直感し、琴吹に最終確認をする。

「じゃあサクが納得したところで、誰がどれを選ぶか決めようぜ～」

納得してねェけどな…

渋々『ソレ』と生八ツ橋を購入し、まだ店内で色々商品を物色してる平沢達を放置し、店を出る。

♪♪♪…

「…ギター？」

俺の耳が捉えたのは地下街に響くアコギの音色と歌声。

聞こえる方向に足を向けて少し歩いて行くと…

「♪♪～♪」

「……」

女性のストリートミュージシャンがアコギを弾きながら歌を響かせていた。
その歌は恐らくオリジナルだろう。

眼を閉じて歌う。
たまにコードを確認するかのようにアコギに視線を向けては、また眼を閉じる。

「……」

俺はただジッとそのストリートミュージシャンを見ていた。
別に見取れていたり、歌に聴き入ってるわけじゃない。
リアルを…現実を目の当たりにしていた…

『夢は武道館』

そんな高い目標を掲げている俺達。

「サッくんここにいたんだ、捜したよ～」

「おっ！ストリートミュージシャンかぁ～！サクはこれを聴いてたんだな？」

「……」

「咲也君？」

「……」

「澪？」

恐らく秋山も感じたのかもしれない。

ストリートミュージシャンが見せる厳しい現実を。

音楽をやって成功する奴なんか、ほんの一握り。

それでも諦めきれないから、こうやって路上で歌う。奏でる。

そしてまた夢に挑む。

敗れても、負けても、挫けても…

それでも夢を叶えようと必死に努力する。

その結果が実れば万々歳だ。

しかしそれでもダメだったら？
考えたくもない…

『……』

気が付けば全員黙っていた。
俺は現実を。
それは秋山も恐らくだろう。
平沢と田井中と琴吹は一体…

「何となく分ったよ、澪とサクが黙った理由」

「私も…」

口を開く田井中と琴吹。
平沢は依然として黙ったまま。

「現実を見据えろっていうことかもしれないけどさ、だからって私

は諦めたりしたくないな」

「うん、私も諦めたりしたくないし、ないがしろになんかしたくない」

田井中と秋山が。

「難しいのは分かってるけど…　簡単じゃないってことも分かってる…
でも音楽って…バンドって本当に楽しいから、放課後ティータイムで武道館のステージに立ちたい」

琴吹が。

「夢っつうのは叶ったら夢じゃねェのかもな…」

「じゃあサクは武道館ライブの夢が叶ったらどうするんだ?」

「違う夢を望む…　例えばドームライブとか」

それが叶ったら次の夢へ…
その繰り返しで音楽をやっていく……だがそれこそ夢で厳しい現実だ。

俺達はまだまだ未熟だ。

ライブだって講堂以外じゃライブハウスの一回きり。

「なんかみんな難しいこと言ってるな～…」

今まで黙っていた平沢が眉を八の字にして呟く。

「私はね…」

平沢の言葉。
それを俺達は一言たりとも聞き逃すに聞いていた。

「みんなでず～っとバンドやっていけたらいいって思ってるよ」

「唯…」

「ギー太を弾いたり、みんなでおしゃべりしたり…」

「唯ちゃん…」

「みんなでライブしたり…　あ、そのステージが武道館だったらいいね～♪」

「唯…」

「あとあと、やっぱりお菓子とお茶！これは欠かせないね！」

「……」

最後のは余計だったな…

しかしコイツのニコニコとしながらの言葉に、何だかリアルとか夢とか考えてた自分がアホらしく感じる。

自分の好きな音楽を…ギターを弾けていたらそれで良いのかもな。
場所なんてついでみたいなもんだし。

「あぁ～　なんだかギー太が恋しくなってきたよ～」

「クスッ　私もベースが弾きたくなってきたな」

「キーボード弾きた～い♪」

「私もドラムをガンガン叩きたくなっちゃったよ」

「サッくんもギター弾きたい？」

口々に己の楽器に焦がれる中、何も言わなかった俺の前にヒョコッと平沢がやってきては、ジッと見つめてくる。

「そうだな…」

「だよね♪よぉし！明日帰ったら目一杯ギー太とじゃれるぞー」

俺の答えに満足した平沢はニッコリと満面の笑みを見せた後、拳を掲げる。

「…はしゃぎ過ぎてレスポールを傷つけんなよ」

「大丈夫だよ～　ウチのギー太は強い子ですから！」

「その自信はどっからくるんだよ～唯」

「とにかくもうすぐ時間だからホテルに戻るぞ」

「は～い♪」

俺達はストリートミュージシャンに背を向けて歩きだす。

背後から聴こえるその歌の内容は、夢に向かっていく応援歌だった…

……

翌日。

五月十六日日曜日。

この日は修学旅行最終日。

観光も何もなく帰るだけ。

ホテルで朝食を済ませ、バスに乗り込み京都駅へ。

そこから新幹線で帰還。

午前中には地元に到着し、駅で現地解散。

平沢と他愛もない会話をしながら自宅に戻り、両親に八ツ橋を差し出す。

自室に行き、私服に着替え、少しアコギを弾いたら何となくベッドにダイブ。

そしてそのまま寝てしまい、起きたら夜七時。

晩メシを食べ、入浴を済して、修学旅行の疲労がまだ残ってるのか睡魔がやってきてノックダウン。

そして…

「今日から通常授業か…　ダリィ…」

朝陽が昇る。

第八十話（前書き）

修学旅行編完結です。

第八十話

本日五月十七日月曜日。

キーンコーンカーンコーン…

ゆさゆさ…

誰かに身体を揺さぶられる感覚に意識を強制的に覚醒させられる。

「……」

「おはよう咲也君♪」

ムクリと机から上半身を気怠そうに起こし、寝起きで思考が上手く回らない頭を酷使し、声がした方に視線を向けると喜怒哀楽の『喜』と『楽』を表してる琴吹が。

「昨日まで修学旅行で疲れてるのは分かるけど、朝からずっと寝て

るってのはいかがなもんかと思うぞ私は」

「ていうか良くそんなに寝てられるな」

目の前には田井中、右には秋山が喜怒哀楽の四文字だけでは表現出来ない『呆』と『戒』な感じで仁王立ちしていた。

「朝からずっとじゃねェ…　昼メシの時には起きた…」

「そういうこっちゃないって　良く堂々と寝てられるなってこと」

『さわちゃんも呆れてたぞ？』と語尾に付け足した田井中を横目に立ち上がり、軽く身体を伸ばす。

「じゃあ咲也君も起きたから、部室に行きましょ～」

「そうだな、早く行かないと唯が梓を連れて来ちゃうからな」

「…あぁ？」

鞄を取って軽く首を動かしてると秋山の発言に疑問を持つ。
そういえば…放課後になったら、いの一番に『部活行こう』と言ってくる平沢の姿がない。

「…平沢と中野が何だって？」

「唯は梓を迎えに行ってるんだよ」

「『あずにゃん分が足りない～』って言って放課後になった途端に二年の教室にダッシュしていったんだな～これが」

相変わらずの他人の声色の真似るのが上手い田井中が、肩をすかして首を左右に振って『やれやれ』と外国人気取りなリアクションを。

「中野はアイツの栄養素か…」

だとしたら一年の時は良く活動していたものだ。

「ちなみに『サッくん分は満点！』って唯ちゃん言ってた～♪」

「似てねェ…」

平沢の声色を真似たらしいが、琴吹の声そのままだ。

「甘い甘いムギ！『サッくん分は満点！』だ！」

「上手～　りっちゃん！

コホンッ『サッくん分は満点！』」

「まだまだだなムギ」

「う～ん…　何かコツとかあるの？」

「そうだな…　『サッくん』のところを腹から言ってみるとか？」

「……」

何か段々話の雲行きが怪しくなってきたので、ヘッドフォンを首に掛けて足早に教室からエスケープ。

「『サッくん』」

「違う違う『サッくん』」

「『サッくん』」

「『サッくん』」

「なぁ律、ムギ…」

「ん？」

「なぁに？」

「咲也もう行っちゃったけど…」

「なにぃ！起こしてやったのにそんなことをするか！待てーっサクー！」

「起こしたのはムギだけどな」

「『サッくん』…う～ん難しい…」

「いやムギ、もう良いから…」

―――――――――

部室に着き、その数秒後に田井中と秋山と琴吹がなだれ込んできた。

何故か口を尖らせて文句を言ってくる田井中を適当にあしらい、定位置である長イスに座る。

何となく首を動かし後ろをみれば…

「ふんふ～ん♪シャランラシャランラ～♪」

ハミングしながら嬉々な様子でティータイムの準備をする琴吹。

…練習する気ねェな…

「……」

「はっ！澪の後ろに京妖怪の百鬼夜行がゾロゾロと～！」

「ヒッ！や、止めろバカッ！」

「アイタッ！」

フヨフヨと水槽の中で浮き沈みしてる亀を恐る恐る観察してる秋山の背後から田井中が脅すが、その代償として隕石が飛来し衝突。

…練習する気ゼロかお前ら…

「咲也君、今日のおやつは八ツ橋よ～♪」

「あっそ…」

だから何なんだ…

ガチャ！

それを俺に報告する意図が分からない琴吹に頭を悩ませていると、
若干荒々しく部室の扉が開く。

「みんなー！あずにゃん連れてきたよー！」

「ちょっ！唯先輩、危ないですからいきなり抱き付かないでくださいよ～！」

そこには平沢と中野の先輩後輩コンビ。
掴んでた中野の腕を放し、抱き枕のように抱き締めてる平沢。
更に頬擦りをするオマケつき。
かなりご満悦らしい。

「…とりあえずお前はもうちょい扉をゆっくり開けろ」

「だってだってあずにゃんなんだよサッくん？」

「…意味分かんねェから」

「ムギ聞いたか？あれが本物のサッくんだ」

「うん！さすが唯ちゃんね！」

「唯が言ってるんだから、さすがも何もあったもんじゃないってムギ」

「ほぇ？なんのこと？」

「…気にすんな」

「気にしたら負けだね！サッくん！」

「…それが問題なんだよ
金輪際禁止」

「へ？なにが？」

「唯ちゃん、気にしたらダメよ」

「気にしたら負けだね！ムギちゃん！」

「おーい、そろそろコント終了しろよ～」

「ほら梓も呆れてるぞ」

と秋山が言うものだから視線を中野が立っている扉付近に向ける。

「……」

「あずにゃん？」

どこか呆然とした中野。
その様子は呆れではなく、茫然な感じだ。
そんな中野に平沢が声を掛けるが反応ナシ。

「…おいニャカ野」

「ぁ…　ニャカ野じゃにゃいもん！」

これには反応するんだな。
つうか『にゃい』っつったぞコイツ…

「どうしたんだ梓？ぼーっとして」

「体調でも悪いの？」

秋山と琴吹が心痛な面持ちで俺にツインテールと両手を上下にパタパタする中野の様子を伺う。

パタパタしてるとこ見るとそれはないと思うが…

「あ、いえ…それはないです…　ただ…」

俺達一人一人の顔とスタンドに立て掛けてあるテレキャスとアコギ、レスポールとベースを見て、一度閉じた口を開く。

「先輩達、帰ってきたんだなぁって思って…」

恥ずかしそうにはにかむ中野に俺達は一斉に顔を見合わせる。
つまりコイツは…

「寂しかった…と？」

「ち、違うもん！そんなんじゃないもん！せ、先輩達がいないから…その…は、張り合いがないっていうか！一人じゃ練習出来ないから…ゴニョゴニョ…」

俺の一言に必死に否定するが、まぁビンゴだろ。
言い訳が思い付かなくなった後半は何かボソボソ言ってるところとか正にビンゴだ。

「あ～ん！ごめんね～！あずにゃ～ん！」

「そうかそうか～　梓は私達がいなくて寂しかったのか～愛いやつ愛いやつ♪」

「だから抱き付かないでくださいよ～唯先輩！律先輩も頭撫でないでくださ～い！」

「梓ちゃんかわいい～♪」

「ムギ先輩まで～！」

平沢、田井中、琴吹により揉みくちゃにされる中野。
常人の俺と秋山はそれを後方で静観する。

「ちょっと意外だったかも」

「あン？」

長イスに座ったままボロボロ（そこまでヒドくはない）になっていく中野をぼんやり眺めていると秋山が俺の側に来ては微笑む。

「梓が寂しがるなんて」

「…本人全否定だがな」

「クスッ　そうだな
まぁでも、それが梓だし」

「…猫だしな」

「違うって…」

「ニャーッ！助けてくださーい！澪先輩！サク先輩！」

思い切り鳴いてるけどな…

……

とりあえずＳＯＳ信号を受け取った俺と秋山でニャカ野を救出し、
ティータイムに。
練習はしないんだな…

「あ、美味しいですね八ツ橋」

「でしょでしょ～　私があずにゃんのためを想って選んだんだよ！」

「…既製品だから全部一緒だ」

「元も子もないこと言わないでよ～　サッく～ん」

無駄に胸を張る平沢に普段は顧問が座ってる席に座り、緑茶を右手に生八ツ橋を左手に持った俺が緑茶を飲む寸前にツッコむ。

「梓へのお土産は八ツ橋だけじゃないんだぜ？」

「え？」

田井中がニヤリと口元を怪しく湾曲させ、若干へコんでいた平沢に目配せをする。

「はい！あずにゃん！」

ゴソゴソとブレザーのポッケを漁り、取り出した『ソレ』を中野に手渡す。

「『ぶ』？お土産ですか？」

「そう！」

受け取った『ソレ』に首を傾げる中野。
まぁ、そりゃそうだろう。

「それで…私がこれっ」

「『ん』？」

『ソレ』の正体が分からず、首を傾げたまま困惑する。
このまま放置したらおもしろそうだ。

「なぁんかサクが邪悪なこと考えてそうだから種明かしとまいりますか！」

「ンだとコラ」

田井中の発言は実に的確なのだが、体裁を繕うために一応否定の態度をとる。

「それじゃあ…」

秋山が俺達を見回し、準備を伺う。
各々頷き（俺は頷いてない）『ソレ』を一斉にテーブルの上に…

『せー…の！』
「……」

置く。

「あっ！これって…」

テーブルの上にある五つのキーホルダーに中野が何かに気付き、探るように一つ一つを見る。

このキーホルダーは京都の地下街で琴吹の提案した軽音部の印。

あの時、俺があまり乗り気じゃなかったのは形状にある。

ひらがなのキーホルダー。

何だかガキっぽいし、何より俺が持つには違和感全開だ。

なので苦肉の策として俺のキーホルダーは記号にさせてもらった。

平沢は『ん』
秋山は『い』
田井中は『け』
琴吹は『お』
俺は『！』
中野は『ぶ』

つまりこの文字を並び変えると…

「『おけぶいん！』桶を愛する部員のことだ！」

「そうなのかい！？りっちゃん隊長！」

「違うだろっ！」

「『いぶおんけ！』東北地方に生息する妖怪の名前だ！」

「ヒィー！恐ろしやー！」

「…お前さっき京妖怪とか言ってたくせに東北になるんだな」

「クッ…！痛いとこをついてくるな～！じゃあ次は…」

カチューシャの戯言に近い遊びに秋山と俺とでツッコんでいると、
キーホルダーを見つめていた中野がゆっくりと口を開く。

「『けいおんぶ！』」

「梓ちゃん正解♪」

どこか嬉しそうに表情を緩ませて、ジッとキーホルダーを見つめる。

「練習…しましょうか？」

「そうだな！ドラム叩きたかったし！」

「ギー太ー！寂しかったかい？」

「私もキーボードに名前つけようかな？」

「それは止めた方が良いかもですね」

「……」

テーブルの上にキーホルダーを『けいおんぶ！』と並べ席を立っていく田井中、平沢、琴吹、中野。

てっきり練習をしないと思っていたが珍しくやる気になっているので少し唖然としたがすぐさま平常心になり、俺も席を立つ。

「あ、咲也ちょっと良いか？」

「あン？」

しかし何故か秋山に呼び止められた。

なので仕方なくその場に立ち尽くす。

「新しい歌詞が出来たんだ　見てくれないか？」

「かまわねェが…」

だから何でお前は俺に真っ先に歌詞を見せるんだ？

「はい」

鞄から一枚のルーズリーフを取り出して俺に差し出す。

「……」

それを無言で受け取り、歌詞に視線を這わす。

【五月雨２０ラブ】

「……」

まぁタイトルは歴代の中で一番マシだな…

【Ｒａｉｎｄｒｏｐｓ　降り出す雨
なんてキレイなの
ソーダ水みたいにね
街のあくびを止めるの
３粒数えて大粒のをおでこでキャッチ
雨は私に話しかけるよ】

「どうかな？」

「歴代で一番良いかもな…」

「ホント！？」

「あぁ…」

「そっか♪一番か♪」

所々秋山チックがちりばめられているが、『FF』や『カレー』に比べればかなり俺にとってマシになってる。

「梓達が雨が降ってるって教えてくれたから書けたんだ」

「…お前、昨日家に帰ってから書いたのか？」

「え？うん」

「……」

いやスゲェなコイツ…

「サッく～ん！澪ちゃ～ん！始めるよ～！」

振り返ると四人が楽器を構えてスタンバイＯＫな状態に。

「とりあえず作曲は後でやる…」

「うん」

頷いた秋山と共に平沢達に歩み寄る。
俺はテレキャスを、秋山はベースを構える。

「いくぞ！ワン！ツー！スリー！」

♪♪♪♪♪♪…

久し振りに六人の…『ＨＴＴ』の演奏が鳴り響く部室。

『あのサク先輩』

『あン？』

それは普段と同じ、変わりない演奏と光景だった。

『憂が言ってたんですけど、サク先輩との約束ってなんですか？』

『…妹がその答えを言ったのか？』

『いえ、だからサク先輩に聞いてるんです』

『…じゃあ言えねェな』

『えー…』

『まぁ、その内分かる…』

『それっていつですか？』

『…それよりお前、頭触ってみろ』

『へ？ニャッ！？ネコ耳！？』

『うんうん！やっぱり梓ちゃんにはネコ耳よね！』

『さわちゃんいつからいたんだよ！』

『え？さっきからだけど？』

『アンタ何者だ…』

第八十話（後書き）

今までのシリーズものだったら修学旅行が一番長いじゃないでしょうか。

同時進行したからだな…

第八十一話（前書き）

雨の一日です。

第八十一話

ピッ！ピッ！ピーッ！

試合終了のホイッスル。
その瞬間、歴史が変わった。

『終わったァーッ！！』

『試合終了ッ！！三対一！勝ちました！デンマークに勝って決勝トーナメント進出ッ！！』

自室のテレビでは快挙を成し遂げた二十三人がピッチ上で歓喜の輪を築き、喜びを爆発させている映像が映しだされていた。

そんな彼らの試合を固唾を呑んでずっと見ていた俺は小さく息を吐き、肩の力を抜きベッドに倒れ込む。

「……」

自身の体重でベッドのスプリングが軋む音と実況と解説の興奮した声が熱中していた脳に響き、段々と瞼が下りてくる。

【２０１０　ＦＩＦＡ　南アフリカＷ杯】

四年に一度のサッカーの祭典。

日本はグループリーグ、二勝一敗で決勝トーナメントに駒を進めた。
自国開催のホームでも決勝トーナメント進出したが、アウェーでは初めてなので日本サッカーの歴史は変わった。

そう、アウェーなのだ。

つまり海外で開催し試合をしているので、日本と時差がある。
故に現在時刻は午前五時二十三分。
いくら試合開始時刻の午前三時まで睡眠をとって起きたとて、眠くなるのは必至だ。

なので…

―――――――――

「遅刻…」

寝過ごすのも必至だ。

お袋に文字通り叩き起こされたのが午前八時。
この次点で遅刻ギリギリ。

しかし新学期当日に遅刻をした実績がある俺は、今回も特に慌てることなどしない。
逆に朝メシをゆっくり堪能するぐらいダラダラしていた。

そして自室にてテレキャスのギターケースにビニールを巻く作業等をし、自宅を出たのが十時。

「はぁ…」

別に遅刻してしまったため息をついてる訳ではなく、断続することなく曇天から降り注ぐ水滴に嫌気を感じるからだ。

本日六月十日木曜日。

本格的に梅雨の季節到来。

……

ザァー…ザァー…

「……」

雨が傘に当り弾ける独自音と踏み出す度に小さな水飛沫が拡散する。

そんな雨の通学路を淡々と突き進む。

いつも持っている筈のアコギは右手にはなく、背にあるテレキャスがこの時期の味を表す。

テレキャスのギターケースにはビニールが巻かれてあるので防水は出来ているが、アコギはそうはいかない。

アコギ程に水分が天敵なギターはないじゃないだろうか。

まぁ、それはギターやベース、木で製作されている楽器全般にいえるが…

とにかく、アコギは雨が降った日は持ち歩かないようにしている。

「今だったら…　二時間目が終わった頃か…」

ダラダラと通学していると目の前には桜高。
その校舎にあるデカい時計に視線を向け、やっぱりダラダラと校舎に向けて歩く。

……

「スカートめくれても平気だし転んでも…」
「良いから脱ぎなさい！」

一階から二階への階段を上っていると、何やら平沢らしき声と山中顧問らしき声が聞こえてきた。

（何をやってんだ？）

会話の内容に疑問を感じるが無粋だと直感し、そのまま足を進める。
しかし二階に到着し、被服室の前での光景に唖然と絶句してしまう。

「ほら！脱ぎなさい！」

「いや～ん～！さわちゃ～ん～！やめて～！」

「ちょっ！？ちょっと！？へ、変な声出さないでよ！私が襲ってるみたいじゃない！」

「乙女になんてことを～！」

「ゆ、唯ちゃん！」

「あ、サク」

「……」

何故か分からないがスカートの下にジャージを穿いてる平沢に迫る顧問。

そんな二人を苦笑いに近い何ともいえない表情で傍観している田井中と秋山

琴吹はトリップしてる…

そして田井中が階段を上りきった俺に気付く。

「あ、サッくん♪やっと来たね～」

クネクネと身体を揺らし、顧問からの迫撃を躱していた平沢がヒラヒラと手を振ってくるが、そんなことより事情を知らない俺からすると顧問の行動に疑念を抱く。

「あ…　咲也くん…」

「……」

顧問が青い顔をして俺に振り向く。

なので…

ペコリ。

『末永くお幸せに』という意味の一礼をし、三階への階段を上がる。

「ちょっ！ちょっと待って咲也くん！」

一段目に足を掛けたとこで顧問の手が俺の肩を掴み引き止めにかかる。

「…それもアリなんじゃね？」

「違うわよ！咲也くんは勘違いしてるの！」

「だが、いくら恋愛に飢えてるからって生徒はな…」

「だから違うのよ！」

「しかも、こんな往来な場所で…　アンタ教師なんだからそこら辺はわきまえろよ」

「そうじゃないの～！唯ちゃんが制服渇いたのにまだジャージ穿いてたから！それで脱がそうと…」

「いや～ん♪さわちゃんのエッチ～♪」

「唯ちゃん！」

「まぁ…お幸せに」

小さく会釈して三階へ上っていく。

「ちょっ！咲也く～ん！誤解なの～！」

背後から必死なボイスが聞こえるがスルー。

まぁ、そんなんじゃないとは分かっちゃいるが、遅刻したことに色々言われるのが面倒だから、あのよう対応したんだがな。

「サクにかかれば、さわちゃんも形無しだな」

「ぽー…」

「ムギ？ねぇ律、ムギが…」

「あ～…　とりあえず肩を揺すってあげなさい」

「待って～　サッく～ん！」

「ち、違うのよみんな！誤解だからね？」

――――――――――

「へぇ～　朝そんなことがあったんですか」

放課後。
部室にて中野が専用のティーカップ片手に主に長イスに座ってテレキャスのチューニングをしている俺とまったりと紅茶を堪能している平沢を見る。

『そんなこと』とは俺が遅刻した理由と平沢が何故ジャージを穿いたのかだ。

平沢曰く、レスポールを雨の脅威から守るべく身を挺して奮起したが、代りに自分がずぶ濡れになったとの天然行動を真顔で暴露してきた。

で、制服を部室で乾かしてる間にジャージを着用し、制服が乾いたのでそれに着替え、まだジャージを穿いてる平沢に顧問が注意をしているところを俺が目撃した。

ちなみに顧問が執拗に誤解だと喚いてくるので、頷いてやったが、そんなことだろうと思っていた。

「咲也はちゃんとビニール巻いてきたんだな」

「…当たり前だろうが
こんな雨の日に何の対策もしねェでギター持ち歩くのは平沢ぐらいだ」

「うっ…！」

嬉々と紅茶を呑んでいた平沢が表情を曇らせて胸を押さえる。

俺の発言はアイツにとっては痛烈な矢だったようだ。

「そういえば梓ちゃんはギターケースに何かかぶせてるね？」

俺にわざわざ紅茶を運んできた軽音部の給仕である琴吹が、長イスの後ろに立て掛けられてある中野のギターケースを見て首を傾げる。

「あれはギターケース専用のレインコートです」

「え！そんなのあるの？サッくん知ってた？」

「…いや、初めて見た」

「あれ？サク先輩が知らないなんて珍しいですね」

「俺は広辞苑じゃねェぞ…」

眼を丸くする中野に一言そう告げて紅茶を口に含む。

「まぁ、あんまりお店じゃ見掛けないかもですからね」

「んじゃあ梓はどこで買ったんだ？」

と田井中の質問に少々気になったので、身体を捻りテーブルで絶賛ティータイム中の面々を見る。

「ネット通販です　色々便利で他にも…」

専用のティーカップを置き、傍らに置いてあった鞄を漁りだす中野。

「あのレインコートは３０００円するんですけど、ネットだったらイチキュッパだったんです
オマケにギター用の乾燥剤も付いてきたんです」

『ほら』というように俺達に乾燥剤を見せた後、再び鞄を漁る。

「それからこれもネットで買ったんですけど…
ほら！壁にくっつくギターハンガー
吸盤が肉球の形してててかわいいんです」

『……』

「あ！これが指を大きく開くようになる強化グッズで」

『……』

「他には寝ている間にリズム感が養えるＣＤなんてものもあるんです」

『……』

某猫型ロボの四次元ポケットのように次々に鞄から道具を取り出す中野に言葉が出ない…というか呆れる。

まだ何かを出そうとする中野を止めたのは秋山だった。

「梓…」

「はい？」

「それ…　みんな役に立ったのか？」

「え…？」

ポカンとして眼をしばたたかせる。
そして徐々に頬が赤味を帯びていく。

「ぁ…えっと…そ、そろそろ練習しましょう！雨も降ってますからね！」

「…ごまかしたなお前」

「うっ…！ほ、ほら！唯先輩、いつまでお茶呑んでるんですか？」

取り繕うように練習しようと席から立ち上がるが俺の放った的確な矢は中野に直撃。
一瞬怯んだが何とか立て直し、平沢の手を取る。
つうか雨、関係ねェし。

……

「…平沢」

「ふぁい？」

各自練習前のチューニングを行ってるさなか、まだ口にケーキを含んでいる平沢にレスポールを指差す。

「…こうも雨が降ってる日はネックが水分吸って曲がるからオクターブチューニングが狂ってねェか確認しとけ」

「おくたーぶちゅーにんぐ？」

「はぁ…」

キョトンと首を傾げる平沢に額を押さえてため息を。
教えた筈なんだが…

「分かりませんみてェな顔してんなお前…」

「分かりません！」

「威張んな」

「エへへ～　何だっけ～？」

何故ニコニコするのか不明だが、そこには触れずに説明するために口を開く。

「…ギターは計算で導き出された基準に基づいてスケールが決められて、ブリッジやフレットが配置されてんだ」

「ふむふむ」

「だが、ナットやブリッジ部で弦は固定されてるから振動ができない部分がある
そこを留意した上で、ブリッジの調整を行うのがオクターブ調整だ」

「ふむ…？」

「…オクターブ調整がされてねェとハイポジションになるほど音程に狂いが生じる」

「……」

プシュー…

「唯先輩！？」

理解出来ず脳がオーバーヒートを起こしたらしい。

頭から煙を出し、膝から崩れ落ちる。

「…とりあえず中野」

「はい？」

「…レスポールのオクターブチューニングやっといてやれ」

「はい、分かりました」

本来なら平沢自身にやらせた方が今後のためになるんだろうが、いかんせんオーバーヒートしてしまい一時的に機能が停止しているので仕方なく中野に託す。

「ところで何の曲やる？ホッチキス？虹？」

田井中がスティックで肩を叩きながら俺達を見回す。

「あんまりやってない曲はどう？」

「そうだな、だとしたら…」

琴吹の提案に秋山が頷き、あまり演奏してない楽曲を検索する。
俺は思い当たる曲が約三曲あるので、自分の鞄から三枚の楽譜を取り出す。

「…この三曲だろ」

田井中達に見せつけるかのように楽譜を差し出す。

「『ぴゅあぴゅあはーと』に『Ｈｏｎｅｙ　ｓｗｅｅｔ　ｔｅａｔｉｍｅ』と『五月雨２０ラブ』か」

「確かにこの三曲はあんまりしてないな」

「じゃあ今日はこの三曲を練習しよ～♪」

「おーっ！！」

「おぉ…唯」

「いきなりデカい声出すな…」

早くも復活した平沢が拳を突き上げる。
近くにいた俺は耳キーン状態に陥りそうだったが、ギリギリのライン手前で何とかセーフ。

その後、レスポールのオクターブチューニングを終えた中野が平沢にレスポールを渡し、ムスタングを構える。

「ワン、ツー、スリー！」

♪♪…

田井中のカウントで、冒頭のリフ部分である秋山のベースが重低音を鳴り響かせ、田井中の軽快なドラムが。

♪♪♪♪…

リズム隊の後にギターの俺と平沢と中野、キーボードの琴吹が音色を奏でる。

♪♪♪♪♪♪…

そして秋山がマイクに向い歌いだす。

「『♪Ｒａｉｎｄｒｏｐｓ　降り出す雨
なんてキレイなの
ソーダ水みたいにね
街のあくびを止めるの』」

ＨＴＴのボーカルは言わずとも平沢なのだが、まだ歌詞とリズムを覚えきれてないらしく、仕方なく今は秋山がボーカルを務めている。

「『♪3粒数えて大粒のをおでこでキャッチ
雨は私に話しかけるよ

きっと5粒目はね小鳥のミニティアラ
そうね7粒目は電線のペンダントトップ

8粒まつげに9粒目は葉っぱとダンス
恋しちゃったのかな
10粒目じゃまだわからないの

20ラブ　まだ淡い
夢は水彩画でも
虹を描く筆は
この胸にあるよ』」

♪♪♪♪♪♪…

外は雨模様。
曲も雨模様。

この時期だからこそピッタリなこの曲。
こういうのを風情があるというんだろうか？

まぁ…どうでも良いか…

「『♪Ｔｅａｒｄｒｏｐｓ　こぼさないで
みんな傘がないの……』」

……

『五月雨』『Ｈｏｎｅｙ　ｓｗｅｅｔ』『ＰＰ』を練習し、本日の部活は終了なんだが…

「雨やまねぇなー…」

「梅雨明けはまだまだ先…か」

「天気予報じゃ明日も雨だって言ってたわ…」

依然として外は大粒の雨が降っている。
しかも段々と雨脚が強くなっている。
そんな雨を田井中と俺がゲンナリと見つめ、琴吹がキーボードを片付けながら窓から曇天を見上げる。

「この雨じゃあベースは部室に置いといた方が良いな」

秋山がケースにしまったベースを壁に立て掛ける。
そして俺の横にいた平沢が何を思ったのか、トコトコと秋山に向い…

「しどいよ澪ちゃん！」

「うわっ！な、な、何が？」

「かわいそうにエリザベス…
君は捨てられちゃうんだよ…」

「雨に濡れるのがヤだから置いてくだけだ！あと勝手に名前つけるな！」

平沢の迷惑な命名により秋山のベースに名前がついてしまったが、
他人事なのでどうでも良い。

「唯とサクもギター置いてけば？」

「その方が良いですよ
私はレインコートがあるから平気ですけど、唯先輩とサク先輩はないですし…」

「確かにな…」

改めて雨のご機嫌を伺うが、変わらずのバケツをひっくり返したような激しい雨。
更に風も挨拶に来たようだ。
ガタガタと窓を揺らす。

「う～ん…どうしよっか？サッくん」

「置いていった方がギターのためだ…　つうかサッくん言うな」

いくら注意しても無駄なのは分かってるので、言うだけ言ってテレキャスをケースにしまい、長イスに横たわらせる。

「そうだね、ギー太のためだもん！」

ギターケースにしまい、我が子に語りかけるようにレスポールをジッと見つめる平沢から何とも迷惑な発言が飛び出る。

「いいギー太？知らない人に声かけられても、ついて行ったらダメだよ？」

ツッコミどころ満載だがここではない、次だ…

「あとね？ギー太は男の子なんだからちゃんとエリザベスとギー子を守ってあげるんだよ？」

「はぁ？」

ニコニコしながら何を言ってんだ？
つうかギー子って何だ？

まさか…

「…おい」

「なぁに？サッくん♪」

「お前もしかして…俺のテレキャスに名前つけたか？」

「うん♪」

「……」

『うん』じゃねェよ…

何を勝手に名前つけてんだ…
しかも安直なネーミングセンス…
更には名前の感じからして女だし…

「ギー太とギー子…　相性バッチリだね～♪」

「…秋山のベースは良いとしても、俺のテレキャスは取り消せ」

「いや、私も納得してないんだけど」

「サク先輩はギターだからギー子…
澪先輩はベースだからエリザベス…
…それじゃあ私のはムスタングだから……むったん…」

「ぴったりな名前だと思うわ梓ちゃん♪」

「ニャッ！ひ、人の心の中を読まないでください！」

「梓ちゃん、声に出してたよ？」

「え！？」

「…お前のネーミングセンスもどうかと思うがな」

「うわわわっ！忘れてくださいサク先輩！」

「ギー太♪エリザベス♪ギー子♪」

「だから私のベースに名前つけるなって！」

「お～い　早いとこ帰った方が良いと思うんですけど～」

「じゃあな…」

「忘れてくださいサク先輩！」

「あ、待って～サッく～ん」

「はぁ…　全く唯は…」

「とか言いながら澪もエリザベスが気になるっと」

「ち、違うぞ！」

「澪ちゃんのエリザベスも良い名前だと思う～♪」

「うぅ…ムギ…」

―――――――――

学校を出て秋山と田井中と琴吹と別れ、帰り道を平沢と中野とで歩く。

「すごい雨ですね」

「風も強くなってきてるし…　軽い台風だな」

ザァー…ザァー…

傘から伝わる振動で如何に雨が強いか。
水たまりがどんなに出来ているか。

そんな降り頻る雨の帰り道を俺と中野はフラフラと千鳥足な平沢を見守りつつ歩く。

「うぅ～…　ギー太～…　心配だよ～…」

レスポールが手元にない故に不安らしい。
レスポールはコイツにとっての精神安定剤かっつうの。

「ギターを大事にするのは良いんですけど、何もそこまで…」

「だってあずにゃん、ギー太なんだもん」

「…意味分かんねェから」

「サッくんはギー子がいなくて心配じゃないの？」

「だから名前つけんな

…部室には鍵がかかってんだ、心配する要素がねェよ」

振り返って傘を両手で持ってる平沢に真っ当な意見をぶつける。

「そうなんだけど～…　やっぱり心配だよ～…」

「どうしてそんなにギターが大切なんですか？」

俺も中野も。
当然秋山も田井中も琴吹も楽器は大切に大事に扱っている。
しかし平沢はその大事のベクトルが違う。
だから中野の質問は俺達のそれと違う平沢に疑問を抱くのは分かる。

「あずにゃんもギター大事だよね？」

「はい、当然です」

「サッくんもだよね？」

「あぁ…」

雨が降る中、俺達は立ち止まる。

「私もそうだよ　ギー太がすっごく大事」

「…それは知ってるが、お前のは度が過ぎてんだ」

「だって、ギー太は大切な私のギー太なんだもん」

「だからそれが意味分かんねェっつうの…」

至極当然に言い切る平沢にため息交じりで言葉を吐く。

「まぁ、唯先輩らしいですけどね」

「こんな風に雨が降ってる日なんかは、一緒にいられて楽しいんだぁ～♪」

「……」

笑顔を俺達に向ける平沢。
その笑顔から本当にレスポールを大切にしているのが分かる。
だからって…

「私がちゃんと弾けなかったりしたらギー太に申し訳ないって思うと、いっそう練習に気合いが入るよ！」

そのモチベーションで練習するのは如何と思う。

「はぁ…」

やっぱりコイツは天然でガキっぽい。
…だが、まっすぐに向かう姿勢は称賛に値出来る。

「…お前がレスポールを大事にしてんのは分ったから、さっさっと帰るぞ」

いつまでもこんな雨風に晒されるのは耐えがたいのでいち早く足を

動かし歩いていく。

「そだね～　行くよ～あずにゃん」

「あ、はい」

雨が傘に当る独特な音。
パシャパシャと俺の背後から聞こえる二人分の足音。

「♪あ～めあめ　ふ～れふ～れ　かあさんが～」

そして平沢の『あめふり』独唱。
伴奏は俺達の水飛沫交じりのドラムのような足音と、傘が雨を弾くベースのような低音。
雨自身の音がリフのようなギターを表し、過ぎ行く車や通行人の話し声が音色豊かなキーボード。

「♪じゃのめで　お～むかい　う～れしいな～」

そんな自然の演奏の中を歌う平沢。
何気に首を動かし、後ろを見ると…

「♪」
「クスッ」

「……」

満面の笑みを浮かべる平沢と小さく笑う中野と眼が合う。
そんな二人に軽く一瞥し、再び前を向く。

「♪ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラ～ン」

（たまには…こんな雨の日も悪くねェか…）

なんてガラにもないことを思った梅雨の季節の帰り道。

「♪ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラ～ン～」

第八十一話（後書き）

本当はデンマーク戦があったのは6月25日なんですが、諸事情により変更しました。
まぁ…どうでも良い情報なんですが…

ちなみに本作は裏設定として…

1年、2008年～2009年。

2年、2009年～2010年。

3年、2010年～2011年。

になってます。

これもどうでも良いですね…

第八十二話（前書き）

軽音部主催の秋山　澪によるお茶会編です。

第八十二話

『第一回ファンサービス大作戦』が終わった翌週。

２００９年２月１６日。

『サッくん部活行こ！』

放課後になった瞬間に鞄を持った平沢が俺の机に笑みを浮かべながらトコトコとやってきた。

『…お前ソレ止めろっつってんだろ』

机の横に下げていた鞄からヘッドフォンを取り出しながら軽く嘆息をつく。

『ほぇ？それって？』

首を傾げる平沢に仕方なく口を開く。

『…お前流の俺の呼び方だ』

ヘッドフォンを首に掛けて鞄を取って席から立ち上がる。

『『サッくん』のこと?』

『あぁ…』

『いいじゃん『サッくん』ってかわいいし~』

『どこがだ…』

つうか俺にそんなものは一切必要ねェ。

『でもでも、もうすぐ『サッくん』って呼び出して一年経つから今更変えられないよ』

『時間の問題じゃねぇんだよ　お前の問題だ』

『えぇ～』

『心外だ』とも言いそうな表情で口を尖せ、俺の近くで何故か迷探偵の必須アイテムである伊達メガネをかけて、どや顔をしている修司に平沢が意見を求める。

『修司君もそう思うよね？』

『おっと唯ちゃん、その質問は俺にとってはヤフーだぜ
何故なら俺は入学式の日にそれにまつわる事で痛いめにあってるからな
だからヤフーなんだよ』

『タブーな』

伊達メガネをクイッと上げながら何やらカッコつけてるが、それが決まらないのがコイツ。
何を検索する気なんだろうか…

『…つうか何でお前はメガネしてんだ』

『ふっ…　愚問だな咲也…』

『あぁ？』

見てるとどこか腹が立ってくるナルシストチックな雰囲気な笑みを浮かべる。

『今年はズバリ！メガネ男子が流行る！』

『……』

ビシッと俺に指を差しながら堂々と言い切る。

『あ！それ知ってる！メガネをかけた男の子だよね？』

『イエース　つまり俺は流行の最先端にいるんだよ唯ちゃん』

『…いねェよ』

確か二、三年前から既にそんなもの存在してんぞ。

『じゃあ和ちゃんはメガネ女子だね！』

『何の話？』

何か俺達に用があるのか、真鍋が俺の机に近付くが、平沢のズレた言語に首を傾げて俺を見てくる。

『さぁな…』

説明するのは大変面倒なので軽く左手を上げて否の態度をとる。

『そう…　それより咲也』

『あン？』

さほど気にはならなかったらしい。
一言で修司曰くの最先端流行をバッサリと斬り捨て、俺に身体を向ける。

『この後ちょっと良いかしら？』

『あぁ？』

『なにかあるの和ちゃん？』

『うん、私も詳しくは聞いてないんだけど、曽我部先輩が咲也に用事があるみたいなの』

平沢の問い掛けに真鍋が少し眉を下げて答える。

『…あの人は俺に何の用があるんだよ?』

『さぁ…?とにかく私と一緒に生徒会室まで来てくれない?』

『っつってもな…』

今から普通に部活があるし。
更に今日から春をイメージした新曲を作る予定にしてるので、時間が惜しい。

『唯、悪いんだけど咲也を少し借りて良いかしら?』

『うん、良いよ
その代わり早くサッくんを返してね?』

『クスッ　分かったわ』

『……』

何を本人そっちのけで勝手に話進めてんだ。
しかも俺を物みたいに貸し借りに言いやがって。

『それじゃあサッくん、私は先に部室に行ってるね？』

『はぁ…　あぁ…』

どうやら平沢と真鍋の勝手な会議の結果、張本人の意見も聞かずに俺は真鍋と共に生徒会室に連行されるようだ。
故にため息で渋々頷く。

『…ちゃんと練習しとけよ』

『もちろん！ムギちゃんのティラミス食べたらちゃんとするよ♪』

『前提がおかしいっつうの…』

ティータイムのことは正直入部してから半年程で諦めてはいるが、
度外視しないのもどうかと思う。
仮に新学期に軽音部に新入部員が入部した事を念頭に置くと、何とかしなくてはいけないんだろうが…

『サクッチ、何か悩みかい？この名探偵　江戸川　修司になんなりと言ってみな！』

『…バミューダトライアングルの謎でも究明してこい迷探偵』

『ナニソレ？いや！これもまた推理だな！澪ちゃんのストーカー犯を見つけられなかった汚名を挽回してやる！』

『…それは頼もしいな』

『汚名挽回してどうするのよ…』

『あ、りっちゃんにサッくんの分食べないように言っとくね』

何とかしなくてはいけないんだろうが、出来そうにねェな…

―――――――――

『資料が必要だ』とかぬかしながら迷探偵は図書室に行き、平沢はよほどティータイムが楽しみなのかスキップをしそうな機嫌で部室に向かった。

『説教でもされるんじゃねェだろうな…』

『説教？』

『…あの人のために許可ナシに講堂使ったろ』

『アレは私と曽我部先輩が生徒会から軽音部を庇護したから、それはないと思うわよ』

『だったら何の用だ…』

『まぁ、直接本人から聞くのが一番ね』

そんな二人と教室で別れ、俺と真鍋は空気が冷えている廊下を生徒会室に向けて歩を進めていた。

『……』

進めていたのだが突然真鍋が足を止め、窓から外を眺めだした。

『おい…何してんだ』

『あ、ごめん…ちょっとね…』

『？』

一度は俺に顔を向けたかと思いきや再び外を眺めだした真鍋に疑問が湧き、とりあえず俺も外を見てみる。

そこにはグラウンドがあり、どこの運動部か知らんが、緑色のジャージの二年と青色のジャージの一年がちらほらとジョギングをしている光景が。

『何だか、グラウンドが寂しいわね…』

少なくとも約四ヶ月前までは赤色のジャージの三年が一年と二年に交じって活気ある部活をしていた記憶がある。

しかし現在のグラウンドは閑古鳥の鳴き声が響きそうに閑散としている。

『三年が引退したからだろ…しかも学祭が終わった頃に』

『それでも後輩の様子を見るために引退してもグラウンドに姿はあったんだけどね…』

『…時期が時期だからな』

『そうね…』

確か二月中旬のこの時期、三年は受験や就職活動が一区切りついて自由登校になってる筈であり、学校にはいないだろう。
なのでグラウンドが物寂しげに感じるのは仕方がない。

（ん？）

だとしたら何故、曽我部先輩は学校にいる？
留年でもしたのか？
その報告のために呼び出されたのか？

…いや…それはないだろう…

『ごめん、何かグラウンドが気になったから』

『行きましょ』と一言告げて歩いていく真鍋の後ろ姿。

『……』

グラウンドの風景を見て何を感じ、思ったのか知るよしもないし興味もない俺は、その後を黙ってついていく。

……

ガチャ

『失礼します』

『……』

辿り着いた生徒会室。

その扉を真鍋が開け、俺は無言で入室。

室内は人気がなく、この時期ならではの早い夕陽が窓から差し込んでいた。

『曽我部先輩、咲也を連れてきました』

『渋々な…』

人気がないと思っていたが、夕陽と同じオレンジ色の腰まである長い髪が特徴の後ろ姿が窓辺にあった。

『曽我部先輩？』

俺達に背を向けたまま何の反応を示さない元生徒会に真鍋が再度声を掛けるが微塵とも動かない。

『…何してんスか？』

貴重な部活の時間を割いて生徒会室に来てやったというのにスルーする元生徒会に軽く憤りを感じた俺は、赤いリボンの先輩に近付き様子を伺う。

『あぁ…　秋山さんのサイン…♪』

『……』

思わず一歩後退する。

何をしているのかと思えば秋山に書いてもらった『めぐみへ　みおたんより』のサイン色紙を恍惚感満載な表情で見つめていた。

そんな人が生徒会室の一角にいたらドン引きするのは当然の反応だろう。

『アンタ、先週からずっとそんなことしてたんじゃねェだろうな…』

『へ…？わっ！き、桐島君！？真鍋さん！？』

漸く俺達の存在に気付いたらしい秋山ファンクラブ会長が驚きながら、色紙を背に隠し…

『コホン…　いらっしゃい桐島君　お茶淹れましょうか？』

『いらねェッス』

体裁を取り繕うかのように小さく咳をし、微笑んでそんなことを言ってくる。

こんな風に姿勢良く微笑んでいたら、気立てが良い生徒会長なんだが…

『先輩、さっきから何を見てたんですか？』

『え、えーっとね…　コレ…』

『あ、澪のサイン…』

『秋山さんの字って丸っぽくてかわいいなぁ～って思ってて…しかも『めぐみへ』なんて書いてくれて嬉しかったの～♪』

『そ、そうですか…』

『はぁ…』

その実態は秋山の重度のファンなのだから驚きだ。
正に人は見掛けによらず。

『…で？俺を呼んだ理由は何なんスか？』

さっさっと用件を済ませたいので、適当に近くにあった椅子を引いて座る。

『それはね、桐島君に…っていうか軽音部に改めてお礼が言いたくてね』

『礼？』

先程までの恍惚な表情から一変して、生徒会長でもなくファンクラブ会長でもない『曽我部　恵』自身の笑顔を浮かべる。

『うん、私はもうすぐ卒業でしょ？だから秋山さんと会う機会がな

くなっちゃうからあんな事しちゃったのに、秋山さんは許してくれた…』

『先輩…』

『……』

言葉を紡ぐ度に僅かに揺れるオレンジ色の髪と夕陽が溶け合うように薄く煌めく。

そんな先輩が語り物のように胸に手を当て、瞳を閉じて口にする言葉。

『それだけでも嬉しかったのに、軽音部が私のために演奏をしてくれてすごく感動して夢心地だったの』

『……』

『だから…卒業前に素敵な思い出の贈り物をくれて、ありがとう』

音楽とは人の心に響くもの。語りかけるもの。問い掛けるもの。考えさせられるもの。人を繋ぐもの。

音楽が持つそんな力をバンドを組んで一年も経たない俺達が確実に、
目の前で満面の笑みを浮かべる人にそれを発揮出来たんだと思った
瞬間だった。

『別に…つうか先輩に演奏をしてやろうっつったのは平沢だ
俺は何もしてねェ』

『ううん、桐島君が講堂を使おうって言ったんでしょ？広い講堂を
独占出来たみたいで、何だか子供みたいにワクワクしたわ』

『…だったら俺だけに言わねェで、それこそ秋山に言ってやりゃあ
良いじゃねェッスか』

『本当はそうしたかったんだけど…改めて秋山さんを目の前にした
ら恥ずかしくって…』

知らねェよそんなの。
じゃあ何か？
俺は軽音部代表で呼ばれたのか？
だったら部長呼べよ…

『咲也、曽我部先輩からのお礼、素直に受け取ったら？』

『はぁ…』

感謝されるのはすこぶる付きで喜ばしいが、代役っつうのが今一つ納得出来んが、恐らく自由登校にもかかわらず軽音部に礼を言うために登校してくれたんだろう。

『まぁ…そう言ってくれるんなら俺達もやったかいがあったってもんなんで…どもです』

ならば納得しても良いか。

『桐島君のそういうところが魅力なのかもね』

『はぁ？』

満面の笑みからどこか悪戯な笑みに見えるのは気のせいじゃない筈

だ。

『良く言えばクールで、悪く言えばツンデレみたいなところに桐島君のファンは惹かれるんじゃないかしら？』

『…アンタに少しでも感嘆していた俺がアホだった』

『まぁまぁ、それより真鍋さん』

『あ、はい』

『はぁ…』

ため息が一番の解決策かもしれん。

『まぁまぁ』何ていう四文字で俺の心情を流しやがるが、先輩の意識は真鍋に向いているので何を言っても無駄だと判断する。

なのでため息でストレスを発散し、ぼんやりと真鍋と先輩に視線を向ける。

『私の後任は楠木さんだけど、実はまだ決まってない事が一つある

の』

（誰だよソイツ…）

『それを真鍋さんに引き継いでほしいの』

『え？何ですか？』

『それはね…』

凛とした声で真鍋にそう言い、スカートのポッケから一枚のカードを取り出して真鍋に差し出す。

『ファンクラブ会長の引き継ぎヨロシクね♪』

『え…？』

『……』

何を渡してんだ…

いつの間にか真鍋の名前が記入された秋山のファンクラブ会員証を微笑んで渡す元ダブル会長。

『あの…私が…ですか?』

『こんなこと頼めるのって真鍋さんしかいないからお願いできない?』

『あ…えっ…と…』

簡単に了承することが出来ない真鍋が困った表情をして、助けを求めるように俺に視線をくれるが…

『…曽我部先輩からの頼み、素直に受け取ったらどうだ?』

数分前に真鍋が放った言葉を受け売りする。

『そういうことだから真鍋さん、よろしくね♪』

『い、いりません…』

『あ、それから軽音部のライブ、見にくるわね』

『…秋山目的ッスか？』

『それもあるけど…』

あんのかよ…

『ちゃんと軽音部の演奏も聴きにね』

『そりゃどうも…』

『それじゃあ、用件は済んだから…』

『あの！ファンクラブの件がまだ…！』

『真鍋さん、ヨロシク♪』

『い・り・ま・せ・ん！』

『んじゃ…俺は部活に行くぞ』

『あっ！ちょっと！咲也！』

珍しく慌てている真鍋の声に振り返ることなく、俺は生徒会室を去っていった。

――――――――――

「結局、断りきれなくて私が澪のファンクラブ会長になったけど、今まで何も会長としてやってこなかったわ…」

「…別に良いんじゃねェの？」

つうかどうでも良いとハッキリ言える。

本日２０１０年６月２１日月曜日。

授業が終わり部活に行こうしたら山中担任に行く手を阻まれた。

何の用かと思えば…

『三年生になって二回も遅刻なんて、気が緩んでる証拠！罰として生徒会室の掃除を手伝いなさい！』

最後に俺にビシッと指差す。

当然素直に応じる俺ではないのでスルーしようとしたが、一学期の内申点を握ってるのは誰だ？みたいに脅してきやがった。

『さわちゃん、それはこの前のサクに対する仕返しか？』

『さぁ～ね～♪』

『この人が女と教師じゃなかったら蹴ってんだがな…』

『咲也…真顔で何言ってるんだ…』

『ムギちゃん、今日のおやつは？』

『チーズケーキよ♪』

流石にそこを突かれたら抵抗出来ないので、渋々真鍋と共に生徒会室に赴き、何故か役員が誰もいない室内を二人で掃除。

そしてそのさなか、真鍋が曽我部先輩から押し付けられた秋山のファンクラブ会長の会員証を見つけた。

つうか一年以上も生徒会室に放置してたなお前…

「やっぱり良くないわ…
せっかく曽我部先輩が創ったファンクラブをないがしろにするのは」

自身の名前が記入された会員証を見つめながら、現生徒会長が意気込みだした。
そして顔を上げて隣で適当に掃除をしているフリをしている俺に口を開く。

「咲也、軽音部にお願いがあるんだけど」

「ンだよ…」

今までの流れからして予想はつくが、一応確認のために顔を向ける。

「ファンクラブの娘達のために軽音部でお茶会を開いてもらえないかな？」

やっぱな。予想通り。

「…それは俺個人だけじゃ判断出来ねェし、何より秋山に聞け」

「そうね、だったら早く掃除を終わらせて部室に行きましょ」

そう言っては、テキパキと身体を動かして掃除をしていく真鍋。

「ファンクラブ…ねェ…」

「そういえば咲也にもファンがいるのよね？これを機にそっちの方も何かする？」

「しねェっつうの…」

やってたまるか。

そもそもファンの存在なんて俺自身忘れかけてたのにわざわざ思い出させやがって…

「はぁ…」

にしても…掃除早ェな…

俺いらねェんじゃ…

第八十二話（後書き）

久々登場、曽我部先輩。

懐かしい…

第八十三話（前書き）

軽音部主催の秋山　澪によるお茶会編その二です。

第八十三話

「…何だアイツら？」

「入部希望者とか？」

「そんな風には見えねェな…」

生徒会室の掃除を終え（主に真鍋一人が奮闘）生徒会長とファンクラブ会長の二つの肩書を持っているダブル会長と共に部室に向かったが良いが、部室の扉にへばり付いて小窓から室内を覗いてる女子二人を発見。

そんな怪しげな人影に俺と真鍋は階下の踊り場で眉を顰めていた。

「軽音部に用事があるのかしら？」

「さぁな…」

否定とも肯定ともいえない曖昧な返答をして、部室までの残り数段

の階段を上がり、『見える？』『見えないよ～…』など言ってる女子二人の背後に俺と真鍋は近付いた。

「あなた達、何覗いてるの？」

「「う、うわっ！」」

決して俺達は気配を消していたわけではない。
普通に近付いて真鍋が声を掛けただけなのだが、部室内を覗くことに夢中になっていたらしい女子二人はそれに驚き、扉を開けながら前方に倒れ込む。

「和ちゃん♪サッくん♪」

突然コントのように人が倒れ込んできたので部員達は騒然とするかと思いきや、顔こそ向けるが、まったりとティータイムを持続中。
平沢なんかフォークを口に突っ込んだままやおらかに手を振ってくる。

「和、咲也、この娘達は？」

「ていうか何でコケてるんだ？まさかサク…「何考えてるか知らんが、何もしてねェぞ」…ですわよね～」

サスペンスドラマの刑事役みたいな渋い顔をして席から立ち上がっては俺を見る田井中に、正論を吐き長イスに座る。

「それでこの娘達は？」

優雅にティーカップを傾ける顧問が未だに床に突っ伏している女子二人に視線を向ける。

「…俺達が部室に着いたら既に覗いていた怪しい奴等だ」

「違います！桐島先輩！」

「私達、決して怪しい者ではありません！」

やっと立ち上がった緑のリボンの一年女子が、長イスに座ってる俺に言葉をぶつける。

「…十二分に怪しかったっつうの」

「あれ？サッくんのこと知ってるんだね？」

確かに平沢の言う通りだと思う。
俺はコイツらとは知り合いでもなければ顔見知りでもない。
しかしコイツら何故か俺の名前を知っている。

「はい！だって軽音部の澪先輩と桐島先輩は有名ですから！」

「お二人ともファンがいますから！そして私達は澪先輩ファンクラブの者です！」

「……」

何とも嬉しくない報告を、やたらと声を張って堂々と振る舞う一年に内心でため息をついて額に手を当てる。

「おぉ～　さすがサッくんと澪ちゃんだ～」

「なるへそ～　澪とサクは軽音部の二枚看板だな～」

「うぅ…　そのことは、もう忘れようとしてたのに…」

「大丈夫ですか？澪先輩」

俺は長イスでこうべを垂れているので秋山がどんな状態か分からないが、声質からして心境は俺と同じだろう…

「もしかして澪ちゃんの髪にシールが付いているのを見に？」

「…シール？」

うなだれていようが状況を理解しようと勝手に耳は機能するので、何とか気持ちと身体を立て直し、疑問な事を言った琴吹に顔を向ける。

「うん、澪ちゃんの髪にこんなシールがずっと付いてたの」

そう言って右手を俺に見せる琴吹に、眼を細めてそこにあるシールを観察する。

「焼きそばパン…？」

【焼きそばパン　マヨネーズ入り　２０％ー　￥１８０】

こんなシールが琴吹の右手にあった。

「何でそんなもん髪に付けてんだよ…」

新たなファションか？

「それは私が知りたいよ…　うぅ…恥ずかしい…」

両手が顔を覆ってうなだれる秋山を見てはファンクラブの一年が…

「やっぱり付けてたんだ～♪」

「他の会員の言う通りだったね♪」

キャッキャッと嬉しそうに声を上げて、ペコリと頭を下げる。

「ありがとうございました！」

「私達、すっごく満足です！」

「意味分からん…」

どこに満足するような要素があったのかさっぱりだ。
『部活頑張ってください！』という軽音部の実態を知らないであろう台詞を残して秋山ファンの二人は部室から去っていった。

（しかし…）

真鍋が部室に来た理由は秋山にファンサービスをしてもらうための懇願なのだが、当の本人はそのファンクラブの仕打ちに白旗を振っている状態になっている。

《どうすんだ？》

なので扉の前で成り行きを静観していた真鍋にアイコンタクトを送信。

《タダでさえファンの存在に参ってる秋山が素直に協力すんのか？》

《確かに難しいと思うけど、話だけでも…》

正直そこまでファンクラブ会長の責務を真っ当しようとするコイツの姿勢は理解出来ない。
そもそも曽我部先輩に無理矢理押し付けられたっつうのに…

「そういえば和はどうしたんだ？」

「ムギちゃんのチーズケーキ食べにきたの？」

田井中の質問と平沢のズレた発言に俺からテーブルで絶賛ティータイム中の部員に身体を向ける真鍋。

「ちょっとみんなにお願いがあるの」

「お願い？」

「うん」

秋山のオウム返しに頷き、中野がたまに俺が座る椅子を自身の隣に持ってくる。
そこに真鍋は座り、全員を見回したのちに口を開く。

「実は…さっき咲也にも話したんだけど、軽音部でお茶会を開いてほしいの」

『お茶会？』

事前にその理由を知ってる俺と提案者の真鍋以外の六人が揃って打ち合わせでもしたようにピッタリと声を揃える。

「お茶会って…何の？」

「…お前の」

と秋山。

「え？」

「…お前のファンクラブのための集いだ」

長イスに座ったまま顔だけテーブルの方に向け、意図が分からない秋山にはっきり簡潔に告げる。

「え…？えぇっ！？ちょっ！ちょっと待ってっ！！」

あまりの事態に思考がついていかないのか、かなり戸惑いながら席から立ち上がる。

「澪、気が進まないのは分かるけど、協力してくれないかしら？」

そんな秋山に真鍋が少し困ったような表情で見上げる。

「ねぇ真鍋さん、何でいきなりそんなことを？」

「それは…」

山中顧問の的を得た攻撃に真鍋が先程生徒会室で一年以上放置していた自分の名が刻まれたファンクラブ会長の証をスカートのポッケから取り出し、テーブルに置く。

「私が澪のファンクラブ会長だからです」

『えぇっ!?』

「うるせェな…」

誰も予想し得なかった真鍋の告白にまたもや六人の声が重なるが、一人一人の声量がデカいので修司一人分ぐらいにうるさい。

「何で和ちゃんが澪ちゃんのファンクラブ会長になってるの!?」

「もしかして曽我部先輩から引き継いだのか！？」

平沢と田井中のお騒がせコンビが真鍋に詰め寄る。

「…引き継いだっつうか、あの人から無理矢理押し付けられたんだよ」

「まぁ、私が断りきれなかったんだけどね…」

その場面の目撃者の俺はしみじみと、真鍋は苦笑いを浮かべる。

「あの～…曽我部先輩って誰ですか？」

すると専用のティーカップを置いた中野がおずおずと片手を小さく上げる。

「あれ？梓は知らないんだっけ？」

「当り前だろが…アレは俺達が一年の珍事だ
コイツはまだ入学してねェだろ」

「あ、そっか」

田井中の疑問に正論をぶつけると納得したかのようにポンと両手を叩くカチューシャ。

「そんなあずにゃんに教えてしんぜよう～」

「は、はあ…」

「曽我部先輩は澪ちゃんのファンクラブ会長だった人だよ～」

「…生徒会長でもあり、ファンクラブ創設者っつう特異な人だ」

「それは少し違うと思うぞ咲也」

幾分落ち着いたらしい秋山が席に座っては、俺を見る。

「あれは確か…そう…二年前の二月の事だった…」

「お前誰だよ…」

いきなり雰囲気作りのために少し視線を宙に漂わせて、何やら語り始めた田井中。

「あの日の澪は『誰かに見られてる気がする』って怖がってたから、見兼ねた私が『生徒会に相談してみれば?』ってアドバイスしたんだ」

「……」

もはや特技ではなく一つの『芸』といっても過言ではない田井中の声色の真似に口を閉ざす。

さて、これは口を挟むべきだろうか…

それとも誰かに期待すべきか…

「そうだったんですか～」

「妄想も大概にしとけよ」

誰かに期待すべきで正解だったな。
事実と異なり、自分の美談のように語るカチューシャに秋山から鋭いツッコミが飛来。

「信じるなよ梓、律の話は全部嘘なんだからな」

「えっ？」

「良いじゃんちょっとくらい～」

「ダメだ」

「律先輩の話は嘘なんですか？」

「…大嘘だ」

「うっ…！何だろう…サクに言われると心が痛い…！」

知らねェよ。

「それは咲也だからだ」

「どういうことですか？澪先輩」

「律が生徒会に相談してみればって、あれを言ったの咲也なんだよ」

「えっ　そうなんですか！」

「ンだよ…」

眼を見開き、意外そうな表情で見つめる中野。

「いえ、やっぱりサク先輩は優しいなぁって思って」

「そうだよあずにゃん、サッくんは優しいんだよ～」

「……」

色々とツッコミたいが、それにより俺にとっての被害が拡大しそうなので、持ち前の鋼のハートを駆使し耐える。

結局その後、秋山が曽我部先輩の事を有りのままに中野に伝え、中野が納得したところで真鍋が改めて俺達を見回す。

「結局、今まで私は曽我部先輩の意思を受け継ぐことが出来ないまま時間だけが経った…」

「和ちゃん…」

「……」

ファンクラブ会員証に刻まれた自分の名を指でなぞりながら、どこか物憂いな表情で呟く真鍋に平沢が感受性を発揮する。

「せっかく曽我部先輩が私に頼んで卒業していったのに何も出来ずに申し訳なくて…
だから責務を果たさなきゃって思ったの」

「和…」

「これは私のわがままみたいなものなんだけど、軽音部でお茶会を開いてもらいたいの」

「……」

「もちろん、澪は気が進まないって分かってるけど、私は…」

真鍋の想い。
どうやらそれは軽音部に伝わったらしい。
何かを言おうとした真鍋を遮るように…

「分かったよ！和ちゃん！」

平沢が手を上げて了承しだした。

「私達も協力するよ！ね？みんな？」

「そうだな！いつも和には助けてもらってるからな！」

「今度は私達が和ちゃんに恩返しする番ね！」

「はい！私も協力します！」

平沢、田井中、琴吹、中野がそれぞれ気概な様子で賛成に一票を投じる。

これで何のリアクションを示してない部員は俺と秋山。

ぶっちゃけそんなことをする意味は俺の中で理解不能だったが、考え方を変えれば軽音部にメリットがあるんじゃないかと思えてきた。

「澪とサクは？」

「わ、私は…　その、やっぱり恥ずかしいけど…

和が先輩の想いに応えたいって分かるから…
良いよ…や、やろう…！」

「澪…！ありがとう」

「おほ～　珍しいな～澪が自分からやるとか言い出すなんて～」

「サッくんは？」

相変わらずタブーを遺憾無く発揮しながら平沢が問い掛けてくるので、今し方思い付いた事は確固たるものではないが、無きにしも非ずなので…

「…別にかまわねェ」

賛成に一票。

「ありゃ？これまた珍しいな、サクが反対しないなんて」

「私も咲也君は反対かなぁって思ってた」

田井中と琴吹…いや、この場にいる全員の視線を感じるので渋々口を開く。

「…利点があるからだ」

「利点…ですか？」

「あぁ…　ファンクラブの集いをやるなら少なくとも軽音部に興味があるっつうことだ」

「うんうん」

腕を組んで頷く平沢。

「つうことは、その場で演奏すれば軽音部のアピールになる…」

「サク先輩…それって…」

「…来年の新入部員へのプラスになる」

つまり秋山のファンクラブを開催しそこで演奏すれば軽音部のアピールになる。
ただでさえ大々的にアピール出来るのは新歓と学園祭だけなのだからこういう軽音部主催のイベントは良いきっかけになる。

「そだね～　もしかしたら軽音部に入部したいって人がいるかも」

『さすがサッくん！』とビシッと俺にサムズアップしてくる平沢をスルーし、真鍋を見る。

「…お前はファンクラブ会長として、俺は軽音部のメリットととしてやる
一石二鳥だろ」

「そうね　その方がお互いに楽しめそうだし」

「やっぱりサク先輩って優しいですね」

「まぁ、あんな理由がないと素直に参加しないサクらしいけどな～」

「クスッ　ね～♪」

何かガヤが言ってるが、立ち向かったら藪蛇が飛び出そうなのでスルー。

「あ、そういえば咲也は何もしないのか？」

「あン？」

頷いたものの、まだまだファンクラブに抵抗があるのか若干声に覇気がない秋山が思い出したかのようにそんなことを言う。

「そうだよサクにもファンがいるんだから何かすれば良いじゃん」

「やるわけねぇだろ…
大体俺はそんな存在認めてねぇんだよ」

「はいはい！私はサッくんもしてほしい！」

「…どんなにせがまれてもやらねェからな
あとサッくん言うな」

「ぶぅぶぅ～！サッくんのケチ～！」

「…ケチで結構」

頬を膨らまし不平を漏らす平沢を軽くあしらい、ホワイトボードに向かう。

「…とりあえず秋山のファンクラブの集いをやるのは決まったから、具体的に何をするのか決めるぞ」

「そうだな！では今から第二回ファンサービス大作戦の内容を決めるぞー！」

『おーっ！』

田井中が俺の隣に並び高らかに宣言し、拳を突き上げる。
それに俺以外の全員が続く。

「澪ちゃん！衣装は私に任せてね！」

「制服でやるのでいりません！」

「…アンタは何もしねェで良いから茶でも呑んどけ」

「ヒドい咲也くん！もしかして仕返し？」

「さぁな…」

「あ、お茶会の中身はみんなに任せて良いかしら？私は当日の会場を押さえたり、告知したりするから」

「うん、任せといて和ちゃん！」

「んじゃあ書記長のサク、書記よろしく」

「…書記は中野じゃなかったか？」

「まぁ良いじゃん、細かいことは」

「はぁ…」

（別にかまわねェから良いけどな…）

内心でそう思い、ホワイトボードに描かれてある平沢と田井中の落書きを消し、『必須項目』と専用マジックで書き、『演奏』と書き込む。

「…じゃあ、意見がある奴は挙手しろ」

振り返るといつの間にか俺の周りに平沢達が椅子を持ってきては座っていたので、恒例の教師スタイルになる。

「はい！サッくん先生！」

「平沢クン」

「美味しいお菓子をいっぱい集めてそれをみんなで食べる！」

「常日頃お前らがやってんだろ…　却下」

「えぇ～　ケチケチ～」

「はぁ…」

前途多難な気が…

第八十四話（前書き）

軽音部主催の秋山　澪によるお茶会編完結です。

第八十四話

「はい！」

「平沢クン」

「澪ちゃんが入場する時のＢＧＭは必要かと！」

「…いるか？」

「いるよ～　ねぇ澪ちゃん？」

「いや、私に聞かれても」

「何言ってんだよ　澪が主役なんだからバンバン意見…「しゅ、主役…」…あ、しまった」

「はぁ…」

真鍋は早速、会場と日時を決めるために部室から退散し、山中顧問

はやたら『衣装！衣装！』とうるさいので俺が部室から有無を言わさずに摘み出した。

「澪先輩、大丈夫ですよ」

「紅茶飲んで気分を落ち着かせて」

スキルを発動させ小刻み震える秋山を介抱する中野と琴吹を一瞥した後、ホワイトボードに向き、そこに書かれてある内容を確認。

・グッズ配布（簡易的なもの）
・ケーキ（琴吹が用意）
・キャンドルサービス
・質問コーナー
・スライドショー（部長が用意）
・写真撮影
・演奏（必須）

「大体決まったね」

「まぁな…」

平沢が席からピョコンと立ち上がり俺の隣でホワイトボードを見る。

正直俺は軽音部の最大のアピールである演奏が出来ればそれで良いので、ファンサービスの内容は薄いもので十分だったりする。

つうかケーキとかキャンドルサービスとか必要か？

「もう他にないかな？」

「あ、だったら私、ポスター作ってきます！」

「私はおっきなケーキ持ってきます！」

「ムギはそこまでしなくて良いって！」

「まぁまぁ、せっかくの晴れ舞台なんだからさ～
そうだ！澪が入場する時にレッドカーペットひこうぜ～！」

「そんなもん必要ねェし、どっから調達すんだ…」

「う〜ん…　じゃあ花束贈呈と両親への手紙！あと生まれた時の体重にしたテディベアをファンにプレゼント！」

「ちょっと待て律！それじゃあ披露宴みたいじゃないか！」

「あ！じゃあ澪ちゃん一発芸！」

「唯ちゃん、それってどんなことするの？」

「え〜っと…　鼻メガネ？」

「何ですかそれ…」

キュキュキュ…

「絶対にしない！それと咲也も書くなー！」

その後、概ね内容が固まったので何を演奏するかを決め、その曲を練習して本日の部活はお開きに。

―――――――

翌日。二十二日火曜日。

「なぁ、サクッチよ」

「…それ止めろっつってんだろ」

「んじゃあＭｙ　Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ」

「……」

何で発音完璧なんだよ…

「…Ｎｏ　Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ」

「軽音部でなんかオモシロイベントすんのか？唯ちゃん達がやたらと盛り上がってるけど…って！ノーサンキュー！？」

昼休みの教室で俺の机の前に勝手に自分の椅子を持ってきて焼きそばパンをご満悦な表情で頬張っていた修司が平沢の机に集まって昼メシを食してる、机の持ち主と秋山と田井中と琴吹と真鍋を指差した後、盛大にのけ反って特技のリアクションをする。

「…確かにイベントはするが、それをアホなお前みたいなアホに言ったところで何の得も利益も生まれんので意味はねェから言わんその空っぽの頭で理解出来たかアホ？」

「計三回アホ言ったなテメェ！」

「…いや内心でも二回ぐらい言ってるから計五回だ」

「おっと、そいつはすまねェ…　あれ？なんで俺は謝ったんだ？」

焼きそばパンを口に突っ込んだまま首を傾げるというマヌケな存在になったアホをスルーし、チラッと平沢達を一瞥する。

「楽しみだね～♪澪ちゃんのお茶会♪」

「私はあんまり…」

「そういえばムギ？ケーキ用意出来たのか？」

「うん！バッチリよ！」

「だったらケーキカットしようよ！」

「だから披露宴じゃないって！」

「でも、そういうことをした方がファンの娘達も喜ぶんじゃない？」

「和～…」

肩を落とす秋山。
やはりまだ抵抗があるようだ。
まぁ、俺も同じ立場ならきっとそうなるだろう。
他人事で本当に良かった。

「あ、そうそう、お茶会の日時は今週の金曜日の放課後
場所は音楽室に決まったから」

結構大事な事を思い出したかのように言うんじゃねェよ真鍋…

「披露宴？なんだ？澪ちゃん結婚すんのか？」

「しねェよアホ」

「だからアホ言うなッ！」

「うるせェな…　鼻メガネでもかけて奇声をあげてろ」

「鼻メガネ？はっは～ん！つまり俺に名探偵になれということか！」

違げェよ。

「どんな難解でも解いてやる！さぁ咲也よ！」

『へいカモン！』と両手で手招きする迷探偵。

「ブラックホールの発生理由でも解いとけ…」

「う～ん…難題がカモンしてきな…」

『フラットホイールなら知ってんだがな～…』とかほざきながら焼きそばパンを頬張る迷探偵をスルーし、俺は黙々と登校中に買った菓子パンを食べていく。

……

そして放課後。

「ポスター作ってきました！」

俺達が部室に行くと、既に来ていた中野がテーブルに一枚の紙を置く。

「わぁ～！すご～い梓ちゃん！」

琴吹が感嘆するのも頷ける。
中野が作ってきたポスターとは、実に精巧に作られていた。
どセンターにティーカップを据え、それをハートで囲んでいる。
上には【秋山　澪ファンクラブお茶会】のデカい文字。
そして所々に軽音部を表す音符が飛び跳ねている。

「…良く出来てんな」

「エへへ…そ、そうですか？」

「あずにゃん、どうやって作ったの？」

何やら俺の発言に照れ笑いを浮かべていた中野に平沢が何故か頭を

撫でながら言う。

「それはですね、パソコンを使ってです」

「へ～梓ってパソコン使えるのか」

「私もチャレンジしたことあるけど難しいんだよな」

「少しだけですけど
…あの唯先輩、そろそろ止めてください」

田井中と秋山の質問に答えた中野だったが、平沢の行為が嫌らしくそう言う。

「あずにゃんを褒めてるんだよ～」

「それは嬉しいんですけど、頭を撫でないでください」

「だってあずにゃんかわいいもん♪ねぇサッくん♪」

「……」

このタイミングで俺にフるな…

「そんなことより練習すんぞ…」

何かを答えれば嫌な予感がしたので、振り返ってギタースタンドに立て掛けてあるテレキャスに向かう。

「逃げたなサクめ」

「咲也君にかわいいって言ってほしかったね？梓ちゃん」

「ニャッ！？そ、そんなことないもん！」

「大丈夫！私はあずにゃんのこと想ってるから！」

「唯先輩！？」

「咲也と唯と梓…　三角関係…　トライアングルラブ…　何か良い歌詞が浮かびそうだ！」

「澪先輩まで～！」

背後から聞こえる様々な声と悲鳴を受け流しながらストラップを肩に掛け、アンプにシールドを繋ぎ準備完了。

「…おい、遊んでねぇで練習するぞ」

「そ、そうですね練習しましょう！」

「照れとる照れとる♪梓が照れとる♪」

「律センパーイッ！」

「いやん♪こわーい♪」

「ねぇねぇ澪ちゃん　私とサッくんとあずにゃんは三角関係なの？」

「いや、例えだよ」

「だよね～　良かったぁ～」

「唯ちゃん…？」

―――――――――

翌日。二十三日水曜日。

「澪ちゃんファンのために大盤振る舞い！」

そう言って、平沢と琴吹がテーブルに様々な物を置いていく。

「澪ちゃん鉛筆に…」

「…使うか？今時の高校生が」

「まぁ、シャーペンが主流ですからね」

「澪ちゃん消しゴムに…」

「これは使いますね」

「まぁな…」

「澪ちゃんティッシュに…」

「何で箱とポケットタイプの二種類あんだよ…」

「ですね…」

「澪ちゃんチョコに澪ちゃん栓抜きに澪ちゃんお箸…」

「栓抜きは使いますかね？」

「…父親が瓶ビールを使うためにいるんじゃねェの」

「澪ちゃん孫の手っと」

「変なものまで作るなっ！」

「確かにですね」

平沢と琴吹が作ってきたらしいグッズを俺と中野で品評をしていると、耐えきれなかったのか秋山が渾身のツッコミをかます。

「つうか何でこんな顔のシール張ってんだよ…」

手元にあったポケットティッシュを一つ手に取り、まじまじと眺める。

「だって普通のものやっても仕方ないじゃん
これは澪のお茶会なんだからさ」

「そうじゃねェっつうの…
何でこんな眼と口が半開きの変な顔のシールなんだよ」

田井中が意図を履き違えてるので、ポケットティッシュを見せつけるように渡す。

どのグッズも秋山の顔が写ったシールが張ってあるが、いかんせんその顔は決め顔ではなく変顔だったりする。

「咲也に変な顔って言われた…」

ガックリとうなだれる秋山をスルーし、田井中に了見を問う。

「…いくら簡易的っつってもこれはねェんじゃねェのか?」

「確かに澪の写真を撮ったのは私だ
だが!こういう普段は見れない澪の方がファンは喜ぶ!」

「そういうもんなんですかね?」

「さぁな…」

中野が俺に問い掛けるが、俺自身も理解不能だ。

「サッくんの時はどんなグッズを作ろっか？」

「やらねェっつってんだろが…」

「咲也君ピックなんてどうかしら？」

「いいね～！ムギちゃん！」

「はぁ…」

人の意見を一切聞こうとしねェなコイツら…

と…

ガチャ

部室の扉が開き…

「澪ちゃんいる！？」

「「さわちゃん」」

興奮した様子の山中顧問がやってきた。
手に何かを持って…

「な、なんですか…」

そんな顧問の様子に怪しさを感じ取ったのか秋山がジリジリと後退していく。

「ふふふっ♪じゃあん！澪ちゃんのために新しくメイド服を作って

きましたー♪」

「ヒッ！」

「よし、帰れ」

「ガーン！ヒドいわ咲也くん！」

――――――――――

翌日。二十四日木曜日。

『えぇっ！！』

「……」

放課後の部室に響く平沢達女性陣の叫び。

ファンクラブの集いでやる曲を練習していると部室に真鍋がやってきた。

「曽我部先輩来れないんですか！？」

「うん…　明日は大学のサークルの旅行があるからって手紙が…」

真鍋が告げたその内容。
曽我部先輩が来れないとのこと。

そもそも今回の一連の出来事は曽我部先輩のためにやろうとしたのが始まり。
もちろん曽我部先輩にも参加してもらおうと画策していたのだが…

「それじゃ意味ないですね…」

中野の言う通りだ。
しかし俺にとっては軽音部をアピールするという目的があるので、中止だけは避けたいところだ。

「日程ずらす？」

と琴吹が眉を八の字に下げて俺達に問う。

「つうか…あの人ナシでやったらわりぃのか？」

「ダメです！曽我部先輩がいないと意味ありません！」

「あずにゃん？」

俺がテレキャスをギタースタンドに置きながらの発言に何故か中野が声を荒げる。

「…何でお前が気概になってんだ」

「あ、すみません…
ただ、話を聞く限り曽我部先輩は澪先輩の…軽音部の演奏で感動したって…」

「…確かにそうだったな」

ムスタングを持っている中野の横を通り過ぎて長イスに座る。

「だからまた、曽我部先輩にも軽音部の演奏やファンクラブの楽しさをって思って…」

「梓…」

あの時、コイツはまだ桜高に入学していないが、その当時の事を知って見て感じるように話す中野を秋山が見つめる。

「梓ちゃん、曽我部先輩に、もう告知したんだったら、わざわざ日程まで変える必要はないって言われたの」

「そんな…」

真鍋の優しさを含めた言葉に中野が気落ちして息を吐く。

「曽我部先輩の望みはファンクラブを継続させて盛り上げることだからって」

『……』

「お茶会でファンクラブの現役会員達が楽しんでくれれば、それで満足だからって…」

「なんか大人な発言だね…」

「女子大生だもんね」

平沢が感じた事をポツリと漏らし、琴吹がその答えを告げる。

「元々何か大人っぽい人だったからな、曽我部先輩って」

「年齢的にもそうだろ…
俺達の二コ上だから今二十歳だ

そう感じるのも当然なんじゃねェのか」

田井中が顎に手を当てての物言いに長イスにもたれ掛かりながら俺が言う。

「私も…」

「あン？」

すると秋山がベースと左手を見つめながら小さく口を開いた。

「私達も…卒業したら、そんな風に大人になっちゃうのかな…」

「「澪ちゃん…」」

「……」

大人になる云々はともかく、少なくとも中野以外の俺達三年は後八ヵ月で卒業だ。

「今、それを考えても仕方ねェだろ…」

「サッくん…」

「…とにかく、明日やるんだな」

「うん、それが曽我部先輩の望みだから」

真鍋の返答に小さく息を吐き長イスから立ち上がる。

「…だったら明日の進行とかを確認した方が良いんじゃねェのか？」

「そうだね！ねぇねぇ私は何したらいいかな？」

「唯と律はお茶会の司会をお願い」

「よぉし唯！私達の腕の見せどころだぜ！」

「だね！りっちゃん！」

「咲也とムギと梓ちゃんは裏方をお願い
私は進行を確認したり、ファンの娘達を整理するわ」

「うん！任せて！」

「はい！」

「お前元気になったな…」

「曽我部先輩が来れないのは残念ですけど、でもちゃんとやらなきゃですから！」

「ふーん…」

「澪は緊張とかするかもしれないけど、リラックスして明日に望んでね？」

「う、うん　分かった」

一通りの流れを確認し、曲を練習。
そしてやらなくても良い真鍋を交えてのティータイムをして部活終了。

――――――――

翌日。二十五日金曜日。

「見て見て～サッくん♪」

「サッくん言うな」

「じゃ～ん！憂特製澪ちゃんクッキーだよ♪」

朝。学校に登校中に平沢姉妹とバッタリ鉢合わせし、平沢が鞄から

緑色の包装紙に綺麗にラッピングされたものを取り出しニコニコ笑う。

「お姉ちゃんと梓ちゃんから澪さんのお茶会をするって聞いて、私も何か力になれないかなって思ってクッキーを焼きました」

「お前ホントに出来た奴だな…」

「ね～♪さすが憂♪」

「エヘヘ…　ありがとうございます」

俺と平沢の称賛に若干頬を紅くし、照れたように笑う平沢妹。

「そういえば咲也さんはお茶会とかしないんですか？」

「お前らそういうとこ姉妹だよな…」

「え？」

姉妹揃って同じようなこと言うなっつうの…

「憂も期待してるんだからサッくんもお茶会開こうよ～」

「何回も言わせんな…
絶対しねェから」

「ぶぅ！サッくんのケチ！憂にサッくんクッキー焼いてもらえなくなるよ？」

「私はいつでも構いませんよ？」

「はぁ…」

別に妹にクッキー焼いてもらおうなんて微塵も思わねェし、お前も少し期待した眼で俺を見んな…

―――――――

そして迎えた放課後。

いつものまったりとした部活の時間に俺達軽音部と真鍋と山中顧問は音楽室にて【第二回ファンサービス大作戦】の開会宣言を待っていた。

まぁ、俺はさほど待っちゃいねェが。

「たくさん集まりましたね～」

「うん！こんなに澪ちゃんのファンがいるのね～♪」

「つうか何で女子ばっかなんだよ…」

俺と琴吹と中野と真鍋は音楽室のステージ袖で集まっている秋山のファンを眺めていた。

しかしその全員が女子だったりする。

「澪って同性からの支持が高いから女子ばかりなんだと思うわ」

「あ、純も澪先輩カッコいいって言ってましたよ」

「…そういうもんなのか？」

「でも男子がいるより女子だけの方が澪もリラックス出来るから良いんじゃないかしら？
澪が平気な男子って咲也と修司ぐらいだから」

「おい、俺をあの虫野郎と一緒の扱いすんな」

「虫って…」

「そろそろ時間ですね」

俺がやってはならない間違いした真鍋に訂正を求めていると中野がケータイで時刻を確認し、琴吹に目配せをする。

「（唯ちゃん、りっちゃん、お願いします）」

琴吹が反対の位置の部室と繋がっている物置部屋で待機している平沢と田井中に伝わらないと思う小声で合図を送る。

「はいどーも！」

「どーもどーも！」

しかし伝わったらしく、若手芸人のように手を叩きながらステージ中央に設置されてあるマイクスタンドに向う田井中と平沢。

（いや、何で伝わったんだよ…）

軽い疑問を考えていたが、どうでも良いという答えに行き着いたので、司会を務める平沢と田井中に視線を向ける。

「『えー　本日は秋山　澪ファンクラブお茶会にお集まりいただき、誠にありがとうございまーす！

僭越ながら、司会を務めさせていただきます
わたくし田井中　律と！』」

「『平沢　唯でーす！』」

「「『よろしくお願いしまーす！』」」

ワァーッ！
パチパチパチパチッ！

二人の息の合った挨拶に、秋山ファンから歓声と拍手が起こる。
それに気を良くしたのか何やらショートコントを始めた平沢と田井中。

「なんか、知ってる顔もちらほらと…えっ！？佐々木さんも会員だったの！？」

「あ？誰？」

大して面白くないショートコントを観察していると真鍋が驚愕しだ

したので視線を司会者からファンの連中に移す。

「ほらあの娘」

真鍋が指差す先には見覚えがない緑色の髪と緩いツイン三つ編みをした女子の姿。

「…アイツが何なんだ？」

「何って、私達と一緒のクラスの娘じゃない」

「…そうなんだな」

「もしかして咲也ってクラスメイトのこと、まだ覚えてないの？」

「…必要あるか？」

「あるわよ…　ていうか佐々木さんは一年の時も一緒だったのに…」

「私は全員覚えてるわ咲也君！」

「あっそ…」

「ショボ～ン…」

「もう！サク先輩！」

落胆した琴吹に代わって中野がプンスカしながら俺に詰め寄ってくるがお馴染みのスルー。

「『では、只今より秋山　澪ファンクラブお茶会の開催です！』」

「『本日の主役の入場！秋山　ミーオー！』」

俺達が軽く揉めていると、どうやらショートコントが終わったらしく平沢が音楽室の扉に手を向け、秋山を呼び込む。

俺への叱責を諦めた中野が物置部屋にあったラジカセの再生ボタン

を押し、ＢＧＭを流す。

♪～

「何でこの曲なんだよ…」

流れだしたのは結婚行進曲。
これじゃあマジで披露宴だ…

「用意したのはさわ子先生だけど…」

琴吹の発言を受け物置部屋で様子を伺っている山中顧問に視線を向けると、何を思ったのかウインクしながら俺達にサムズアップしてきた。

「キャーッ！秋山さーん！」
「澪センパーイ！」
「カッコいいー！」

予め音楽室の外で待機させていた秋山が威風堂堂と…いや、真反対の顔を俯かせながら力無くトボトボと入場してきた。
しかしそんな秋山に巻き起こる黄色い歓声。

そして平沢と田井中が袖に捌けたステージに辿り着いた秋山が意を決したのか俯かせていた顔を上げ、喋りだした。

「『本日はお忙しい中、お集ま…うぐっ！』」

「噛んだ！」
「でもそこがまたかわいい！」

「ファンの人って何でもアリなんですかね…」

「らしいな…」

緊張して思い切り噛む秋山の姿に湧きあがるファン。
そんな連中に俺と中野は軽く呆れる。

「『お、おおおつまりいたっ　いたがきっ！』」

「また噛んだ！」

「やっぱりかわいい～♪」

「あぁ…！澪ちゃん落ち着いて…！」

「やっぱり緊張してるみたいね澪」

またしても盛大に噛んだ秋山に琴吹は若干狼狽し、真鍋は冷静に分析する。

「『…いたがき…たいすけ？』」

『あはははは！！』

「……」

誰か教えてほしい。
今のどこにファンが大爆笑するほどの笑いの要素があったのかを。

「『それではスピーチはこの辺にして、ケーキ入刀に移ります』」

この平沢の合図でステージ袖から俺が出ていき、秋山の前にあるマイクスタンドを回収する。

「あ！桐島先輩！」
「ホントだー！」
「カッコいいー！」

マイクスタンドを持って平沢と田井中と顧問が待機中の物置部屋に移動する。

「おぉ～！サッくんが人気者に！」

「澪のファンの中にはサクのファンもいるらしいな」

「空耳だろ…」

「でも確かに咲也くんに声援送ってたわよ？」

「幻聴だ…」

「そこまで否定するか…」

田井中が何か言ってるが盛大に無視し、マイクスタンドを適当な位置に置き、琴吹がニコニコしながら秋山が隠れる程のビックサイズのケーキを持ってきている光景を見る。

「『さぁ　澪ちゃんどうぞ！初めての共同作業です！』」

「いやっ！誰との！？」

いくらテンパっていてもツッコミは健在らしく、もっともなことを平沢にツッコむ秋山。

「『お相手はあずにゃんこと、中野　梓ちゃんです！』」

「えぇーっ！？私ですかっ！？」

聞いてなかったのか、聞かされてなかったのか、いきなり名指しで平沢に指名された中野が俺達に聞こえる程の声量で驚く。

「…出てこねェぞアイツ」

「どうしたのかな？あずにゃん」

しかし中野は中々ステージに出てこようとしない。
よくよくアッチサイドの様子を伺うと、中野が右手を左右にブンブンと高速否定していた。

「梓ちゃん、嫌がってるわね」

「そりゃそうだろ…
いきなり指名されて、ケーキ入刀なんて訳分からん事させられようとしてんだから」

「しょうがないな梓は」

田井中がため息混じりにそう言うと、平沢に目配せをし、それを受け取った平沢がマイクを使って口を開いた。

「『予定変更して、サッくんこと、桐島　サッくんが澪ちゃんと一緒にケーキ入刀をします！』」

「おいコラ」

何でそうなるんだ。
しかも名前が直ってねェぞ。

「澪先輩と桐島先輩が！？」
「すごーい！」

何故湧きあがるお前らは。

「ほらほらサク、ファンのご所望だ！」

「ファイト！サッくん！」

「おいッ　押すなッ」

唖然としている中で田井中と平沢がグイグイと俺の背を押す。
いきなりだったので抵抗出来る筈はなく…

「さ、咲也…」

「桐島センパーイ！」
「キャーッ！澪先輩とツーショット！」

呆気なくステージに参上してしまい、もうこうなったら後には引けないので仕方なく秋山の元に歩を進める。

「…おい、さっさっと済ませるぞ」

「う、うん！」

特大のケーキの横にあったナイフを片手で取り、秋山が俺の手におっかなびっくりに手を添え、ケーキにナイフをぶっ刺す。

「『さぁさぁみなさん！軽音部の二枚看板！秋山　澪と桐島　咲也によるケーキ入刀です！』」

「『今がシャッターチャンスです！カメラをお持ちの方は是非！』」

田井中と平沢の腹の立つ司会っぷりを聞いた秋山のファン達が歓声と共に一斉にケータイのカメラとデジカメのシャッターをきる。

「…俺達は客寄せパンダかっつうの」

「耐えろ咲也…　私だって耐えてるんだから…」

「あのカチューシャと天然とツインテールめ…
覚えてろよ…」

「怖いって！何する気だ！」

……

思いがけないハプニングという悪夢に憔悴し、僅かな怒りを胸に秘めて次なるプログラムであるケーキと紅茶のサービス及び、秋山からのキャンドルサービスをステージ袖から山中顧問と共に眺める。

「お疲れ様、咲也くん」

「全くだ…」

「う～ん…　ストレス溜まってる？」

「抜群に…」

「だったら…」

ポンと俺の肩を叩きながら山中顧問がサムズアップしてこんな提案を。

「演奏する時に歯ギターを…「やらねェぞ」…ぶぅぶぅ！」

何を言い出すかと思えばアホらしいことを…
そんなに歯ギターをプッシュする意味が分からん。

「『では、みなさんのテーブルのキャンドルに火が灯ったところで特別企画に移りたいと思いまーす！』」

紅茶とケーキを給仕していた琴吹とツインテールがそそくさとステージ袖に移動し、真鍋が音楽室の明りを落とし、天然が椅子をステージセンターに置き、そこにケーキ入刀とキャンドルサービスで精

神を削られゲンナリした秋山が着席したのを見計らったカチューシャが高らかに宣言する。

「『題して！秋山　澪への百の質問コーナー！
あ、ちなみに質問に一つ答える度にテーブルのキャンドルを一つずつ消していってくーださーい！』」

「それって百物語？」

「知らねェ…　もうどうでも良い…」

「随分と投げやりになっちゃったわね咲也くん」

ファンクラブだか、百物語だか知らんが俺は演奏出来ればそれで良いので、興味なさげに物置部屋の壁に寄り掛かり眼を閉じる。

……

決して寝ていた訳ではない。

しかしうたたねはしていた。
なので眼を開けるとプログラムは進んでいた。

「サッくん起きた？」

「…今スライドショーか？」

「うん、なんか色々思い出すね…」

「……」

俺の近くにいた平沢がプロジェクターからスクリーンに映しだされる写真を見るのでつられて俺もスクリーンに視線を向ける。

そこには俺達が一年の頃の部室での一コマ。
ベースを構える秋山が写っていて、その後ろの長イスでテレキャスを構えた俺にレスポールを持った平沢にギターを教えてる写真だったり、合宿時の写真。
二年の学園祭ライブが終わった直後の部室での写真だったり、今年の初日の出を見に行った写真だったり。

「懐かしいねサッくん」

「まぁな…」

微笑む平沢に小さく頷く俺。

「『いよいよ、お茶会も終わりに近付いて参りました』」

田井中の司会にやっと本業の出番だと思い、傍らにあるテレキャスに身体を向ける。

「『それではフィナーレは私達、放課後ティータイムの演奏で…「ちょっと待って！」…ん？』」

「澪ちゃん？」

「あン？」

田井中の司会を遮った秋山が座っていた椅子から立ち上がった。

「あ、あの！みなさんに聞いてほしいものがあります！私…　口じゃ上手くこの気持ちを伝えられそうにないから…詩を作ってきました！」

「わぁ～！サッくん！澪ちゃんがサプライズプレゼントを用意してましたよ！」

「それはまぁ、良いんだがな…　詩って…」

秋山の詩ということは、作詞に反映されてるあんな内容の詩な気がする…
だとしたら大事故になるんじゃないだろうか…

「【ときめきシュガー】」

「おいおい…」

そんな俺の不安な気持ちを知る由もない秋山がスカートのポッケか

ら四つ折りにした紙を取り出し、タイトルを読みあげるが、もう事故の予感が…

「大切なあなたにカラメルソース
グラニュー糖にブラウンシュガー」

あ、ダメだこれ。

「メープル　はちみつ　和三盆」

いくら秋山のファンだからといっても、この詩に歓声をあげられないようだ。
どんどん戸惑った表情に変わっていく秋山ファン会員。

「あなたのためにカラメルソース
私のハートもカラメルソース」

この詩のどこに秋山が伝えたい気持ちがあるんだろうか。

「ちょっぴり焦げついちゃっても　あなたの火加減でおいしくなるの！」

どうやら終わりらしく、得意顔で紙から顔を上げる。

しかし、どうリアクションして良いか分からない会員の姿がそこにあるだけ。

案の定大事故発生。

「ねぇサッくん、澪ちゃん詩っておいしそうだったね～♪」

「お前も大概ズレてるよな…」

「ほぇ？」

忘れてた…

コイツは【好きですこの歌詞党】党首の一番の理解者だった…

「とりあえず、この何とも言えない空気を払拭するために早く演奏した方が良いんじゃない？」

「そうだな…」

確かに顧問の言う通りだと思い、改めてテレキャスに身体を向ける。

「『それでは気を取り直して演奏を聴いてください！作詞秋山　澪、作曲桐島　咲也＆琴吹　紬による曲！【ぴゅあぴゅあはーと】でーす！』」

田井中も早々に何とかしなければマズいと感じたようだ。

『気を取り直して』なんて言ってるし。

……

秋山ファンから見て右後ろに田井中、左後ろに琴吹。

その前に俺と中野。

センターのボーカルマイクの前に秋山、その横のコーラスマイクの

前に平沢が。
それぞれ楽器を構えてステージに立つ。

「ワン！ツー！スリー！」

♪♪♪♪…

田井中のカウントで始まる演奏。

この【ＰＰ】は去年の暮れに秋山が作詞したものを俺と琴吹に託した楽曲。
今年の新歓前には出来上がっていたが、新歓ライブでは春休みに秋山と琴吹で創作した【パフェ】に新歓での出番を奪われ、漸く本日に陽の目を浴びた。

♪♪♪♪♪♪♪～…

そして前奏が終わり、本日の主役の秋山がボーカルとして歌いだす。

「『♪～♪～♪～』」

♪♪♪♪♪♪…

―――――――

２００９年１０月３日。

現在時刻午後六時三十三分。

『ナゥキン！マィチォペン！』

残念ながら視力が回復してしまったアホが、どういう口の動きをしたらそんな発音になるか分からない奇声と不気味な動きをしながら校庭の真ん中にある、キャンプファイヤーの周りを回る。

あの後、修司を介抱した真鍋が戻り、その一分後ぐらいに平沢妹がモジャ団子を連れて戻ってきた。

そして学園祭実行委員の連中が学校の校内放送を使ってノリの良い曲を流し始めた。

それにより後夜祭は小さなダンスパーティーに早変わり。

平沢が一緒に踊ろうと誘ってきたが、バッサリと断り、落胆した平沢は琴吹と共に焚火の周りを小粋なステップで回る。

恥ずかしがる秋山を田井中が無理矢理誘い、中野と平沢妹とモジャ団子の一年トリオも適当なステップを踏んで楽しそうに踊る。

ちなみに修司は一人だったりする。

そんな桜高生が楽しそうに踊る光景を俺と真鍋は離れて静観していた。

『そういえば…』

『あ？』

焚火の炭がはぜる音とノリの良い曲を聴きながら、ボーッとしていると真鍋が何かを思い出したように口を開いた。

『曽我部先輩、いなかったわね』

『…あの人、今日来るっつってたのか？』

『ううん、でも軽音部の演奏を見に来るって言ってたから、てっきり来てるんだと思ったけど…』

『…何か予定があったんじゃねェのか？あの人、大学生だろ』

『かもしれないわね』

お互い焚火に視線を向けたままの会話はそこで途切れる。

別に沈黙が苦ではないが、何となく話題を提供。

『…来年の学園祭には来るんじゃねェの？秋山目当てで』

『クスッ　そうかも』

小さく笑った真鍋が焚火から視線を俺に移す。

『咲也はもう進路とか決めてる？』

『進路？さっぱりだが…』

『私は一応大学に進学しようと思うの』

『ふーん…』

『興味ないって顔ね？』

『…その通りだ』

『はぁ…　今からでも進路のこと考えていた方が良いわよ？漠然にも進学するのか就職するのか』

『…それを俺に言う前に平沢に言っとけアイツ絶対何も考えてねェぞ』

『そうね…　唯は昔から私の後をついてきたから、私と同じ大学に行くなんて言い出しそう』

『じゃあ大学に落ちるなアイツ…』

『そういうこと言わないの』

しかし、進路ねェ…

今はまだ『二年だから』とか言ってられねェのかもな…

仮に進学するとしたら、来年の今頃は勉強漬けになるんだろうか…？

『面倒だな…』

『何が？』

『別に…』

―――――――――

「はぁ…」

【ＰＰ】の演奏が終わり、ファンクラブの集い最後のイベントである、秋山との集合写真を俺と中野と真鍋は離れて静観。

「はぁ…」

顔が完全に引きつっている秋山の周りには満面の笑みのファンクラブ会員。
そんな会員達のケータイやデジカメで平沢と田井中と琴吹と山中顧問が次々とシャッターをきっている。

「はぁ…」

「どうしたんですか？サク先輩」

さっきから自然と漏れるため息を連発している俺に隣で秋山の悲境を見守っていた中野が首を傾げる。

「どうしたもこうしたもねェよ…
俺の目的は軽音部のアピールだっつうのに…
秋山ファンの連中は完全に秋山に意識いってんじゃねェか…」

確かに、これは秋山のファンの集いではあるが、軽音部が主催しているのを考慮して少しは演奏の方に関心を持ってほしかった。

【ＰＰ】が終わった後に待っていたのは秋山に送る歓声と声援。

たまにちらほらと演奏の感想もあったがほんの一握りだった。

つまり俺の目的は成就しなかった…

「確かにそれは残念ですけど、お茶会が成功したから良いじゃないですか！」

（そもそも俺はそこには興味ねェ…）

とか言ったら、また中野火山が噴火しそうなので口を噤み、笑顔で告げた中野を一瞥し、パシャパシャとシャッターがきられる度にゲンナリしていく哀れなレフティに視線を向ける。

「ホント、成功して良かったわ」

真鍋が進行表を胸に抱えて、やっぱり哀れなレフティを見ながらの

発言。

「この盛り上がり、曽我部先輩にも見せたかったな…」

「和先輩…」

「……」

これが真鍋の本音なんだろう。

『曽我部先輩の望みはファンクラブを継続させて盛り上げること』なんて言っていたが、本心ではこの場にいてほしかったんだろう。

「そうだ！」

すると中野が何か名案を閃いたらしくケータイを取り出し、カメラを秋山達に向ける。

「…写メか？」

「はい！」

「でも、そんなの撮ってどうするの？」

「送ってあげるんです！曽我部先輩に！」

「えっ？でもケータイのアドレス知らないわよ？」

「アドレスは生徒会で調べてください」

「…随分と横暴だなお前」

「横暴じゃないです！
生徒会なら曽我部先輩のアドレスぐらい分かると思ってです！」

「そうかい…」

「そうなんです！」

「うん、じゃあ生徒会で調べてみるわ」

「はい！お願いします！」

そして中野がケータイのカメラのシャッターを…

カシャ

―――――――――

「恵、ケータイ鳴ってるよ」

「あ、うん、ありがとう」

カチャ
ピッピッ…

「…ぁ…」

【件名：曽我部先輩へ】
【本文：突然のメール失礼します。真鍋　和です。
先輩に報告したいことがあってメールを送りました。
お茶会は無事に成功し、現役ファンクラブ会員達も楽しみ盛り上がりました。
今度は先輩も是非いらしてください。
きっと楽しいお茶会になりますよ。
添付してある写真は、澪と現役ファンクラブ会員達の集合写真です。
PS．今度の学園祭ライブ、見に来てください。
by．軽音部一同】

「クスッ　秋山さん、顔引きつってる♪　うん、去年は行けなかったから今年は行かなくちゃね」

『曽我部先輩、御卒業…おめでとうございます！』

「また…」

『あの…　私達、桜高軽音部がお祝いの意味をこめて演奏をさせて頂きます！　聴いて下さいっ！　【ふわふわ時間】』

「素敵な贈り物、もらっちゃった♪」

第八十五話（前書き）

将来の道　前編です。

第八十五話

俺達が三年に進級し、はや三ヵ月。
曇天続きだった空も雲一つない快晴に変り、一学期も残り二週間になろうとしていた。

「ちくしょう～…　焼きそばパン売り切れかよ…」

「…焼きそばパンがなかったくらいでメソメソすんなおら、気ィ抜いてると元の姿に戻っちまうぞ」

「随分と懐かしいネタぶっこんできたな…」

俺達は昼食を調達するため購買に行き、教室に戻っていた。

本来なら俺は行く必要は皆無なのだが、サッカーW杯の決勝戦をたっぷり鑑観（深夜にホイッスルが鳴った）し、例に漏れず遅刻ギリギリに起床。
流石に三回目の遅刻はマズいと判断し、登校中のコンビニショッピングを諦めてその時間を登校にあてがい、何とか予鈴に間に合わせた。

余談だが、【第二回ファンサービス大作戦】が事故がありながらも幕を下ろした次の日の夜に、真鍋のケータイに曽我部先輩からメールの返信がきたらしい。
その内容は『学園祭は必ず行きます、秋山さんの姿を見たいから』という何とも曽我部先輩らしいメールだった。

「あ、そうだ　なぁ咲也？」

「あン？」

「お前進路決めた？」

「進路？…いや決めてねェけど…
なんでンなこと聞くんだよ？」

「いやね、和ちゃんがさぁ、さっき唯ちゃんに『早く進路決めないと本当にニートになる』って言ってたからさ」

恐ろしいぐらいの正論だ…
しかし、それはこの時期にまだ進路を決めてない奴ら全員を敵に回すような発言だな。

「…じゃあ、そう言う真鍋はもう進路決めてんのか？」

「和ちゃんは国立の大学に進学予定ってよ」

大学か…しかも国立。
メガネは伊達じゃないってか。

「つうかお前は？進学…は無理だとして就職か…」

「話フっといて勝手に納得すんなよ！」

「お前のあるだけ無駄なその知識でギリギリ桜高に受かってんだ…
進学とか無理だろ」

「まぁ確かに俺は進学はしねェで就職予定だが…
一つ言っておこう…　無駄な知識ってなんだッ！

ふぅ…スッキリしたところで俺の就職先を教えて…」

しかし進路ねェ…
俺は特にやりたい仕事もなければ学びたい事柄もない。
没頭出来るのはギターを含めた音楽。
だったからコレでメシを食っていくか？

現状無理だな…
いくら俺達軽音部の目標が【武道館】だとしても、それがイコール、ミュージシャンという職業にはならない。

あくまで武道館『で』ライブをするのが目標。

第一に音楽で成功出来る奴なんて、ほんの一握りだ。
田井中は『卒業までに武道館ライブ！』なんて言ってたが…

「ちょいとやっこさん、聞いてたか？俺の話？」

熱弁を語っていたらしい修司が言ってくる。

「いや全く全然これっぽっちも」

「聞きなさいよアナタッ！

…と今までの俺だったら言うだろうが、あいにくと今の俺は将来に向けて頑張ってるので大人なのだよ咲也君」

「…あ？何か言ったか？」

「聞きなさいよアナタッ！」

早速言ってんじゃねェか。

「…で？何だよ？」

「仕方ないもう一回言ってやる」

別に聞きたくねェけど。

「俺はもう就職先が決まってるんだがや」

何故か名古屋弁でどや顔をしているアホの発言に足を止め、訝しげに眉を顰める。

「決まってるって…
お前この不景気の世の中に卒業も出来るか分からんお前のようなアホを雇う職場があんのか？」

「色々ツッコミたいけど今は飲み込もう
あるんだよ実際に」

あるか？
いや待て…一つの可能性が浮かび上がってきた。
まさか…

「…家業継ぐ気か？」

「ピンポンピンポン☆大正解～☆」

「……」

灯台下暗し。
その道がコイツにはあったな。

なるほど。あの店はそこそこ繁盛してるからコイツの親父からしたら、アホ息子であるコイツが継いでくれたら万々歳。

「だから俺はもう進路はバッチリなのだよ！」

「……」

俺に指差しをした後に無駄に胸を張って高笑いをしだしたアホの横を通り過ぎる。

正直焦った。

真鍋はいつか大学に進学すると言っていたし、頭脳明晰なアイツだから大学という進路には別段驚きはなかった。

しかし…

「マツヨロシヨ、サクヤ」

エセ中国人に成り済まし、俺の後を追って来るコイツも、もう進路…将来を決めている。

認めたくはないがコイツとの付き合いは長い。

互いの事を残念ながら大体分かってしまう俺達だから、てっきりコ

イツは……
ストーカーか芸人になるものと思っていたが…
まさかの家業だ。失望するな。

「お前今、失礼なこと考えなかったか？」

「考えた」

「そうかい、ならいいや！って良くねェぞッ！」

しかし焦ったのは事実。
まさかコイツに先を越されるとは…

（他にまだ進路決めてねェ奴は…）

いるな。二人程。
一人は修司伝いの真鍋の発言により決定だろ。
一人は何となくだ。

秋山と琴吹は修学旅行で北野天満宮にて絵馬に進学云々の願い事を

書いていたことを考慮すると、ズバリ平沢と田井中はまだ決めてない筈だ。

（つまり俺達は同類か…）

そんな同類は嫌なので早々に進路を決めねェとな。

そんな決意を胸に秘め終えたら、目の前には教室の扉。

ガチャ

それを開けると…

「あ、あの二人に聞いてみたら？」

俺達が教室に入ると真鍋の声が聞こえてきた。

そちらに視線を向けると弁当をつついていた平沢が一枚の紙を持ち、トコトコと接近してきた。

「ねぇねぇサッくん、修司くん」

「なんだい？唯ちゃん」

「サッくんって言うんじゃねェつうの…」

コイツはまだ俺のことをそんな風に呼びやがる。
もう修正は効かないのかもしれんが言わずにはいれない。

「えっとね二人共、もう進路調査表って提出した？」

「「進路？」」

先ほどまで俺達が進路について話をしていたので最悪なことにアホと声が揃ってしまった。

「私ね、志望校どこにしようか迷ってるんだよねぇ～♪」

「とてもそうには見えねェけどな…」

正に『お気楽』というフレーズがピッタリな程にニコニコしてる。
つうかやっぱりコイツも進路決めてなかったな。

「俺は就職って決めてるぜ唯ちゃん！」

「へぇ～修司君は就職すんだ」

一応感心したかのように修司に二つ頷くと平沢が何故か期待の籠った瞳を俺に向けてくる。

「サッくんは？」

「まだ出してねェし、決めてもねェ…」

「ホント！？やった～！私とサッくんは仲間だね～♪」

何がコイツの中でそんなに嬉しいのか、俺の手を取ってはピョンピョンと飛び跳ねる平沢。

「喜んでる場合じゃないでしょ唯」

俺達の会話を聞いていた真鍋が腰に手を当て乱入してきた。

「でもでも、サッくんもまだだったから仲間だもん」

「そういう問題じゃないでしょ　みんなとっくに提出してるのに」

まぁ、真鍋の言いたいことは分かる。
平沢の右手にある進路調査表は六月二十五日に配られたもの。
そして提出期間は七月五日まで。

本日七月七日水曜日。

七夕の今日は提出期間から二日過ぎていた。

「咲也もよ」

「…俺はコイツみてェに喜んでねェだろ」

未だに右手を掴んでいた平沢の左手を解放させ、その手で平沢の頭を軽くはたくと『ブヒッ』と鳴く。

「ていうか唯ちゃん、なんか書いてんじゃん」

すると修司が持ち前のストーカースキルを発揮させ、目敏く平沢の進路調査表を指差す。

「あ、これは冗談で書いたんだよ」

そう言った俺と修司にピラッと進路調査表を見せてくるので、第一志望欄に書かれてある三文字を確認する。

【ニート】

「何書いてんだお前…」

「ダ、ダメだッ！唯ちゃん！それはイカンぜよッ！」

俺は抜群に呆れとアホを混ぜた視線を平沢に思い切り衝突させ、修司は溢れんばかりのエネルギーという騒音を浴びせる。

「だから冗談だよ～
ちゃんと消しゴムで消え…」

「唯？」

俺の机の上に進路調査表を置き、ケーキの形をした平沢専用の消しゴムで二、三度【ニート】の上を往復させるが、段々と血の気が引いていき顔面蒼白になっていくニート志望。

「ど…ど…どうしよう…」

「…ボールペンで書いたなんて言うなよ」

「その通りです…」

アホだコイツ。

こんなもんに天然スキル発動すんなよ。

「もう、この娘は…」

「同感だ…」

「唯ちゃんらしいな…」

真鍋がため息交じりにこぼし、俺は同情の視線を送り、修司は苦笑いを浮かべる。

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン…

すると昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。

「あーッ！やべェ！まだメシ食ってねェ！」

「忘れてたな…」

購買が思ったより混雑して中々パンが買えなかったのと、平沢の進路話を聞いていたら昼休みが終わってしまった。

「急いで食うぞッ！咲也ッ！」

「あぁ…」

「ど～しよ～…　和ちゃ～ん…」

「修正ペン貸してあげるから泣かないの」

それから四時間目の校外学習に赴いていた秋山と田井中と琴吹と山中担任が戻って来るまでの間、俺と修司は必死にパンを食い、平沢は真鍋から借りた修正ペンを乾かすのに躍起になっていた。

―――――――――

「和ちゃんって第一志望、国立だっけ？」

「うん、無謀な気もするど頑張って目指してみようかなって」

「じゃあ、私もそこにする～」

「軽っ！？」

放課後の教室で平沢と真鍋のやり取りが自然に俺の耳に入ってくるが、何とかシャットダウンし、机の上にある白紙の進路調査表を眺める。

「やっぱりサクもまだだったか」

「あぁ？」

進路調査表に人影と、頭上からの聞き覚え満載の声に顔を上げると軽音部部長の姿。
そして部長は前の机の椅子に座り、俺の机に頬杖をつく。

「私と唯とサクはまだコレ提出してない仲間だな」

「…是非とも脱退してェ組合だな」

「事実だろ～　澪とムギは西女大に進路決めてるし、和は国立修司は就職するって言ってたし」

そう言って平沢の机に視線を向ける田井中。
つられて俺をそちらに視線を移す。

そこには『和ちゃんと一緒がいい～』『そんな子供みたいな理由で選ばないでちゃんと考えなさい』と真鍋に抱き付く平沢に保護者スキルを発揮させる真鍋。
『唯はまだ提出してなかったのか』『りっちゃんと咲也君もまだみたいよ』と呆れる秋山と俺達を見る琴吹な光景が。

「え！りっちゃんもまだなの！？」

琴吹の報告を聞いていたのか平沢が真鍋から離れて眼をキラキラと輝かせる。

「あったりまえだぜ！こんな紙切れなんかで私の未来を決められてたまるかっての！どーだ参ったか！」

「「何がだ」」

そうといえばそうだが、大袈裟に言い放って、俺の進路調査表を手に取りヒラヒラと揺らす田井中に俺と秋山のダブルツッコミ。

「とにかく律も唯も咲也も、もう提出期間が過ぎてるんだから早く提出した方が良いぞ」

「…先がまだ分かんねェのに、はいそうですかって簡単に頷けるかよ」

先程の田井中言い分は大袈裟だが、一概に間違いではない。
この第一志望から第三志望まで書く欄がある紙切れ一枚で、木の枝のように無数にある進むべき道が一気に三つまで減少してしまう。
なので事は慎重にやらねばならない。

まぁ、これはあくまで【進路調査】であり、決定項ではないのだが、万全を期することに抜かりはないだろう。

「咲也は進学したいのか就職したいのかもまだ決めてないのか？」

この秋山の問い掛けに無言で首を縦に動かし、ヒラヒラとさせていた田井中から進路調査表を奪い返し鞄に乱暴にぶち込む。

「私達は仲間だね！りっちゃん！サッくん！」

「おう！リツユイサクの旗揚げだ！」

「一緒にすんな…」

平沢の元へ向かい、外に向かって平沢と共に若者の主張を叫び始めた田井中の背に一言否定の言葉を吐き、立ち上がってヘッドフォンを首に掛ける。

「あ、部室行くの咲也君？」

「あぁ…」

「ここは日本だー！英語なんて必要なーい！」

「必要なーい！…って、待ってよサッく～ん！私達も一緒に行くよ～！」

田井中と肩を組んで叫んでいた平沢が振り向いたが、スルーして一歩足を踏み出した瞬間に…

ピンポンパンポン…

『三年二組の桐島君、田井中さん、平沢さん、至急職員室に来なさい繰り返します…』

山中担任から校内放送で呼び出された。

「さわちゃんからだ、何だろうね？」

「…十中八九、進路の件だろ」

『はて？』と首を傾げる平沢に、まず間違いではないであろう事を告げて…

「ぐぅ…ぐぅ…」

ドゴッ！

「うおッ！？」

余裕の表情で惰眠を貪っていた修司に腹が立ってきたので、椅子を蹴り大したリアクションをしなかったので職員室に向かうために教室を去る。

本音を言えば職員室になど行かずスルーして部室に直行したかったが、事が事だけに足を目的地の職員室に変更する。

「だから待ってってばー！サッくーん！」

廊下中に響く背後からの平沢のボイスに渋々立ち止まり、振り返る。

「…デカい声出すな」

「待ってくれないサッくんが悪いッス」

「…俺はさっさっと用を済ませてェんだよ」

「そうだね、その気持ち分かるよ」

真顔で頷く平沢がこのあと放つ言葉は容易に想像出来る。

（琴吹の菓子関係だな）

「早くムギちゃんのおやつ食べたいもんね！」

ほらな。

「はぁ…」

当って嬉しくない問題を解いてしまった事と進路にため息を吐いて、
またしてもさっさっと歩き出す。

「だから待ってってばー！」

（だからデカい声出すな…）

つうか田井中はどうした？
まぁ良いか。

―――――――――

「うへー…　面倒くせー…」

「良いから早く行けって
唯と咲也はもう行っちゃったぞ」

「はいはい、分ったよ～…」

「全く律は…」

「…ぁ…」

「どうしたのムギ？」

「うん…　もし私達が大学に進学したら…
咲也君と離れちゃうって思って…」

「あ、そっか…　女子大だもんな…」

「それを考えたら、寂しいなって思って…」

「咲也はどんな進路を選ぶんだろうな…」

「それは咲也自身が決めることね」

「とりあえず部室行きましょ？あ、和ちゃんもどう？美味しいケーキと紅茶があるの♪」

「そう？じゃあ、お邪魔するわ」

「それじゃあ行こっか、梓ももう来てるだろうし」

「うん！レッツゴー！」

「「ムギ…」」

第八十五話（後書き）

今回はアニメ二期の第八話に当る話なんですが、この話の冒頭は一期一話と同じシーンがありますので、コッチもそこに当る第四話の途中までをやってみました。

ちなみに作中に出てきた『西女大』は完全に捏造です。

唯達が受験した大学名が分かんなかったので。

第八十六話（前書き）

将来の道　後編です。

第八十六話

思う。悩む。考える。
そしてトータルで思考する。

今の俺にとって『進学』と『就職』のどちらに駒を動かすべきか。

『就職』の利点として、第一に浮かぶのが給料。
与えられた分の労働をすれば、それ相当に金を手に入れられる。
それが自分の好きな、若しくはやりがいがある仕事、即ち天職に就けるならば実に魅力的な道である。
しかし、昨今の日本の経済状勢（不景気）を見る限り、そういった天職には中々就けないのが現状。
更に俺にはこれといってやりたい仕事はない。

「今日のおやつは何かなぁ～？」

「唯ってそればっかり考えてるな」

「りっちゃんもじゃん」

「失敬な！私は部長として軽音部の活動をあれこれ考えてるんだぞー！」

「それってサッくんだよ
この前のお茶会の時に、『軽音部のアピールだぁー！』って言ってたもん」

「む！唯のくせに生意気だぞ～！うりうり～！」

「キャ～ッ♪助けて～サッく～ん♪」

「……」

『進学』はどうだ？

高校では学べないワンランク上の環境に身を置くことにより、人生に必要な様々な資格や専門的な知識を手に入れられることが出来る。
更に『大卒』という肩書がつくことにより、より有望な企業や会社に就職することが可能に。

反面、それにかかる授業料が高く、必ずしも卒業出来る訳ではない。
しかし将来に有利なのは変らない。

「と〜ちゃく！」

「あれ？サッく〜ん！どこ行くの〜！」

思い、悩み、考え、トータルで思考した結果、したい仕事もない俺にとっては『進学』こそが進むべき道なのかもしれない。
それに大学でやりたい仕事を探すという、就職を選ばなかった先延ばしな理由にもなる。

この考えで大学に進学する奴だっているご時世。
下手にやりたくもない仕事に就職し、後悔をするのならば、進学という道を選んでいた方が、あくまで持論だが得策だろう。

「おーいサクー！」

「カムバッ〜ク！サッく〜ん！」

「……ん？」

つらつらと思考を巡らせていると、背後から田井中と平沢が俺を呼ぶ声が聞え、足を止めて振り返る。

どうやら思考の海に深く潜り過ぎたようだ。
水面に顔を上げれば一年の教室がズラリと並び、放課後故に部活に行こうとしている生徒や帰宅しようとしている生徒がちらほらと。

つまり目的地である職員室を通り過ぎてしまった。
そんな自分の小さな失態に内心で舌打ちし、踵を返し職員室の入口で俺を見ている平沢と田井中の元へ。

「どうしたの？」

「考え事でもしてたのか？」

「まぁな…」

「もしかしてムギちゃんのおやつの事を…！」

「呑気だなお前…」

認めたくはないが俺達三人は進路調査表を提出してない同類だ。
そしてその進路に俺は今の今まで悩み、やっと『進学』という答えを出したのに、その進路の件に大して問題視していない平沢にため

息が漏れそうだ。

「まぁ、とりあえず中に入ろうぜ～」

「はぁ…」

コイツもコイツで呑気だ。
進路の事など深く考えてない飄々とした素振りで職員室の扉を開ける田井中に、つい、ため息が。

ガチャ

「「失礼しま～す」」

「……」

平沢と田井中が声を揃えて、俺は無言入室。
室内は桜高の職員他に、何かしらの用事があるんであろう三年から一年の生徒少数の姿。
そんな連中に関心も持たずに、入口に一番近い机で書類を眺めている山中担任に近付く。

「さわちゃん」

「ぁ…」

平沢が声を掛けると山中担任は小さく声を出し、キィっと椅子を鳴らして俺達に身体を向ける。

「どうして私があなた達を呼んだか分かる？」

メガネをクイッと上げながら俺達三人を一人一人見る。
無論、そんな理由はすぐに分かるので、平沢が的外れな事を口走る前に俺が口を開く。

「…進路だろ」

「そう、提出期間は五日までなのに、三年生でまだ提出してないのは、唯ちゃんとりっちゃんと咲也くんだけなのよ？」

暗に『どういう事？』と聞いてくる。
そんな教師らしい態度の山中担任に我が部長が言う。

「決まってない！」

「…堂々と言ってんじゃねェよ」

「そう言う咲也くんもまだなんでしょ？」

「…進学っつうのは決めた」

「あれ？サッくんいつの間に？」

「さっき」

首を傾げる平沢にアッサリと答え、少し考える。
コイツは『志望校を迷ってる』と言った。
つまり進学をするということ。

しかしまだ決めていなくてこの場にいる。
それは何故決めてないのか？
何故決められないのか？

「咲也くんは進学ね
りっちゃんは？」

「私は進学って決めてるけど」

「志望校が決まらないの？」

「いや、私も澪とムギと同じところにしようかなって思ってるけどさ、そしたら…」

「あ！だったら私もそこにする！」

「って唯が言い出しそう…ていうか言ったし」

「…お前、そんな理由で出してなかったのか？」

「まぁ…ね」

俺の問い掛けにポリポリと頬をかきながら、バツが悪そうに視線を逸す。

コイツはコイツなりに平沢の事を考えていたようだ。

平沢のガキっぽい性格を考えると誰かが、なら自分も。

そりゃこれからの自分の人生の根底を築くであろう大学選びは重要。

しかし、平沢みたいに誰かが行くから自分も的な、他人任せな選び方はどうかと思う。

そこには自分の意思というものは存在しないんじゃないんだろうか。

そうならないため…という訳ではないが、選ぶんだったらきちんと考えて、その結果で一緒の大学を受験するなら良いが、簡単な理由で選ぶのは正直アレだ。

「唯ちゃん、そんな理由で決めないの」

「だってみんなと一緒がいいんだもん」

「まぁ、その気持ちは分かるけど…」

「…分かんのかよ」

頷き同意する担任に思わずツッコむ。

「うん！決めたよ、さわちゃん！」

グッと両拳を握り締める平沢の意見に、今までの俺が考えていた理論を見事にぶっこわしてくれる。

「私！澪ちゃん達と同じ大学に行きます！」

「はぁ…」

所詮は他人事であり、平沢が決めた道なのだから、何も異論も反論も告げる気はしないが、どうもな…

「それって西女大？」

「うん！りっちゃんも行くんでしょ？」

「そうだけどさ、良いのか？そんな簡単に決めて？」

「うん！楽しい大学生活を送りたいからね！」

はっきりとそう告げた平沢に山中担任が『唯ちゃんとりっちゃんの第一志望は西女大…っと』と、手元にあった何かの書類に書き込む。

「エヘヘ～♪」

「「……」」

そして進路が簡単に決まったからなのか、田井中達と同じ大学に行けるのことが嬉しいのか、ニコニコしている平沢を俺と田井中は黙って見ていた。

「咲也くんはどの大学を受験するのか、まだ決めてないのね？」

「あン？…あぁ…」

―――――――

『出来れば早く決めなさいね？』という山中担任の言葉を受け、俺達は職員室から退散。

今は平沢が機嫌良さげに前を歩き、俺と田井中はその二、三歩後ろを歩き、部室に向かっている最中。

「なぁ、サク」

「あン？」

視線は平沢の後ろ姿を見たまま田井中が口を開き、俺もまた視線は田井中に向けずに前を向けたまま反応する。

「良いのかなって」

「平沢の…か？」

「うん　あんなに簡単に決めちゃってさ」

「…つうかお前は何で秋山達と同じ大学を選んだんだ？」

「私は、大した理由はないけど、前々から西女大って決めてたからなそしたら澪とムギも一緒だろ？こりゃあ唯も…なんて思ってたら…」

「案の定か…」

「うん…」

たまに見せる田井中の『らしくない』『らしさ』

『今年は六人で軽音部としてやっていく』と平沢の宣言に一番に賛同したのはコイツ。

細かいところで気が回るのは実はコイツだったりする。

故に部長であり、バンドの縁の下の力持ちであるドラマーだったり。

そんな責任感を感じる役職にいる田井中だからこそ、平沢のアッサリとした大学選びに素直に頷けないんだろう。

「いや、唯と一緒の大学は私も嬉しいんだぞ？」

「……」

「軽音部のみんなと一緒の大学は楽しそうだし、唯の気持ちも分かるけど…」

そこで言葉を切り、平沢の後ろ姿を見つめていた視線を俺に向けた。

「そしたら、私達が西女大に行ったらサクと離れ離れになるからさ…なんて言うか…唯ってサクのこと大好きじゃん？」

「懐くって言え…」

「まぁまぁ照れなさんな♪」

先程の若干のシリアスチックな雰囲気は何処へやら。
いつもの田井中になり、肘で俺の腕を突いてくる。

「はぁ…で？それが何だよ？」

鬱陶しいので突いてくる肘を振り払い、ため息を吐いて脱線した話を戻す。

「あ、うん、サクと離れて唯は良いのかなって」

正式名称【西羽田女子大学】
通称【西女大】
そう『女子大』
平沢、田井中、秋山、琴吹がこの大学に進学するのならば、俺は必然的に別の道を歩むことになる。

「良いも何も、そういうもんだろ…卒業して、決めた進路をいくっつうのは」

「サクって現実的だよな」

「…そういう主義で十八年間生きてきてんだよ」

今更変更は不可だ。

……

ガチャ

「ただいま帰りました！澪ちゃん隊員！」

「え？何の部隊だ？」

「りっちゃん隊長の～」

「ちなみに今のメンバーは、唯とサクと新入りの澪だ！」

「りっちゃん隊長！私、志願します！」

「よしっ！歓迎するぞ！ムギ隊員！」

「やったぁ～♪」

「何が嬉しいんですかムギ先輩？」

「あずにゃんと和ちゃんも歓迎するよ～」

「遠慮しとくわ」
「私もです」

「意味分からん…」

部室に辿り着くと、平沢が全力でティータイム中だった秋山達に敬礼する。
そんな平沢達が醸すカオスな雰囲気に飲まれる訳にはいかないので、スタンドに立て掛けてあるアコギを取り、定位置の長イスに腰を下ろしチューニングを開始する。

「それで、どうだったの？」

「ほぇ？なにが？」

「進路のことだよ、律も唯も咲也も進路決まったのか？」

席に着いた平沢と田井中を見計らって何故か部室にいる真鍋がそう尋ねるが、意図が理解出来ない故に首を傾げる平沢に秋山が詳しく説明する。

「うん！バッチリだよ！」

満面の笑みで秋山にVサインを送る平沢。
そして次に田井中に視線を向ける秋山。

「律は？」

「私も決まった…けどなぁ…」

「どうしたの？」

歯切れが悪い田井中の返答に俺に紅茶を運んできた琴吹がそう尋ねる。

「……」

俺はその理由を知ってるし、何より干渉しようなんて全く思わないので、琴吹から受け取った紅茶を一口も口に含むことなく横に置き、チューニングを続けていく。

「私は西女大に決まった…ていうか、もう決めてたんだけどな」

「じゃあ律も私とムギと同じだな」

「フッフッフッ…」

「な、なんだよ唯…」

不気味な笑みで小さく笑い始めた平沢に秋山がスキル発動手前に追い込まれる。

「澪ちゃん！私も西女大なのだよ！」

「えっ？そうなのかっ？」

「うん！」

「わぁ～♪唯ちゃんとりっちゃんも一緒の大学受験するのね～♪」

「そだよ～♪大学でも一緒だよムギちゃん♪」

最早、既に大学に受かったかのように喜び合う平沢と琴吹。
秋山は笑顔でその光景を見、田井中は紅茶を啜る。
真鍋は『まぁ、澪達が一緒なら大丈夫ね』と言い、やっぱり保護者だと思わせる発言をする。
そして、ツインテールの後輩が何気なしに放った言葉が、浮かれている平沢にぶち当たる。

「じゃあ、サク先輩とみなさんは違う大学を受験するんですね」

「え…？」

時が止まったかのようにピタリと琴吹と手を取り合ってた動作を止め、キョトンとした表情になる平沢。

「やっぱりそうなっちゃうと寂しいな…」

「うん、女子大だから仕方ないんだけどね…」

「まぁ、別に一生別れる訳じゃないんだからさ、なぁサク？」

そんな平沢の様子に気付かない秋山と琴吹が若干肩を落とすが、田井中がそう励まし、俺に話をフってくる。

「…そりゃそうだ」

と、チューニングを続けながら普通に返答する。
そして…

「サ、サッくんっ！」

「あン？つうかサッくん言うな」

焦った表情の平沢が長イス、即ち俺の目の前にダッシュでやってきてはオロオロとしだす。

「私達と同じ大学受験しないの！？」

「…お前らが受験する大学名は？」

「へ？西女大…あっ！女子大だぁ！？」

「今気付いたんですか！？」

深く考えずに簡単に受験大学を選んだツケが今、回ってきたことに
平沢が泡を食う。
それに中野が驚愕する。

「…つうことで、俺はその大学を受験しねェし出来ねェ」

「ぁ…ぅぅ…」

平沢に向けていた視線をアコギに戻し、ペグを調整していく。

「ど、ど、どーしよっ！？」

「唯、とりあえず落ち着いて」

「だって和ちゃん！サッくんと違う大学になっちゃったんだよ！？」

「だからちゃんと考えて志望校を選びなさいって言ったでしょ」

「と、とにかく！さわちゃんに保留って言ってくるー！」

極限に焦った平沢の頭脳が導き出した現状の策を実行しに、バタバタと足音を立て扉に向かう。

「待て」

「え？」

しかしそれを俺が止める。

平沢自身、制止がかかるとは思わなかったらしく、ドアノブに手を掛けた体勢で相変わらずの狼狽の様子で振り返る。

「…お前があの大学を選んだ理由は何だ？」

「それは、みんなと一緒がいいから…」

「…褒められる理由じゃねェが、そういうちゃんとした理由があんなら変える必要があんのか？」

「で、でもでも…　そこにはサッくんがいないし…
私はみんなと一緒にいたいんだもん…」

「……」

修学旅行最後の夜。
あの京都の地下街でストリートミュージシャンを見ていた俺達に平沢はこう言った。

『私は、みんなでず～っとバンドやっていけたらいいって思ってるよ』

それは良い。
バンドというものは長くやっていくもの。
でなければ、より良い音楽なんて生まれないし、目標を武道館としているなら経験や練習、演奏を積み重ねるのが好ましい。
だからバンドをやっていくのは賛成だ。

しかし、今の平沢が言っているのは単なる我侭。

それは、はっきり言って甘いと思う。

バンドは別として、ずっと一緒なんていれる筈はないし、何より（自分で言うものアレだが）俺に依存でもされたら困る。

距離感は大切。
何にしても、だ。

「唯、気持ちは分かるけどさ、こればっかりはどうしようもないって」

「りっちゃん…」

そこは部長である田井中だ。
秋山と琴吹はどうしたら良いか分からないように佇んでいるし、中野は俺と平沢を交互に見ては曖昧模糊にしている。
真鍋は平沢に諭したあと黙ってる。

しかし田井中は予め予想していたのだから口を動かし言える言葉がある。

「私だってサクと一緒の大学に行けたら良いって思うけどさ、そういうのって難しいんだよ」

「律先輩…」

「…何もかも上手くいかねぇのが現実だ」

「咲也君…」

「それに西女大を受験するのを止めたら…私達と一緒いることが出来なくなる…それは寂しい…」

「律…「と、澪が言ってた」って私!?」

「……」

（さて、どうなる?）

部長の田井中と副部長の俺の言葉に黙り込み、ドアノブに掛けていた手を離し、視線を床に向けて考えて込んでいる平沢に視線を向けた後、アコギのチューニングをしようとしたが既に終わっていた。

――――――――――

「はぁ…」

「……」

「はぁ…」

「……」

「はぁ…」

さっきからため息を連発しているのは俺ではなく、帰り道をトボトボと力なく俺の隣を歩く平沢から発生している。

結果として、平沢は頷いた。

その頷きは、山中担任に保留を言い渡すために『行ってきます！』の合図ではなく、『分かった』の合図。

つまり平沢は受験大学を変更せずに西女大を受験することになったのだが…

『それじゃ唯先輩、サク先輩、失礼します』

『あぁ…』

『はぁ…』

『元気ないですね唯先輩』

『…自業自得だろ』

『少しは唯先輩を励ましたりしないんですか？』

『お前がやれよ…』

『散々やりましたよ
でも唯先輩、全然反応してくれないんですもん』

『はぁ…』

『こんな感じに、ため息ばっかりです』

『…重症だなコイツ』

『とにかく唯先輩を元気づけてくださいね？』

『『はぁ…』』

『ため息かぶせないでくださいよ～！』

すっかり意気消沈してしまった平沢。
頷いたものの納得はしてないんだろう。

平沢がこんな状態に陥ってしまったので部活は練習せずにお開きに。
ちなみに落ち込んでいても平沢はちゃっかりとティータイムには参加していた。

「はぁ…」

「お前、ため息ばっか吐くな…　俺の気が滅入る…」

「ごめんね…でも…はぁ…」

そんなに俺と一緒が良いんだろうか？
…分からん女心は…

「ぁ…」

「あン？」

すると不意に立ち止まる平沢。
俺は数歩進んで立ち止まり振り返る。

「ねぇねぇサッくん…」

「サッくん言うな」

「あれ…」

「アレ？」

平沢が指差す先には商店街の一角にある笹。
それには色とりどりの短冊が吊されてあり、見事な笹飾りを施されていた。

「ちょっと行ってみよ？」

「あぁ…」

素直に頷く俺ではないが、余りにも平沢が落ち込んでいるので、中野の頼み聞くわけではないが、少しでもテンションが上がればと思い、共に笹に向かう。

「おぉ～！綺麗だねサッくん！」

「……」

おいおい、もうテンション上がったぞ…

「そっかぁ、今日って七夕だったね」

「だからどうしたって感じだがな…」

「もう！風情がないよサッくん！」

完璧に治ったな…

「あ、短冊にお願い事が書けるんだって！書こうよ！」

笹の近くには『ご自由にお取りください』の文字が書かれた紙と数十枚の短冊とペン。
どうやら商店街連中の粋な計いらしい。

「ほい、サッくん」

すっかり元通りになった平沢から差し出された一枚の青い短冊を受け取る。

「…修司に対するの悪口と愚痴を書けってか？」

「違うよ～　ちゃんとお願い事書かなきゃ」

「つってもな…」

そんなもんねぇし。
軽音部に対する個人的な願いは北野天満宮の絵馬に書いたし、同じ事を書いたらアッチの効果が薄れそうだ。

「出来た♪」

『修司の作るケーキがまさかの空前の大ヒットになり、その売上金の八割が俺の懐に納まれ』と本気で書こうとしたら、平沢から歓喜の声があがる。

「…何書いたんだ？」

「エへへ～♪これだよ♪」

数分前まではなかった笑顔で赤い短冊をズイッと差し出す。
それを受け取り願い事を確認。

【とにかく一生懸命がんばる！】

こんな漠然とした文字が。

「…何をどう頑張るんだ？」

「色々だよ　バンドも受験も…」

俺に短冊を預けたまま、笹を見上げる平沢。

「サッくんと一緒にいられる時間が限られちゃったから、その思い出作りとか…」

「……」

「もっとギー太をうまく弾けるようになるとか…」

「……」

「みんなで武道館進出とか…」

「……」

「ムギちゃんの美味しいお菓子をいっぱい食べられるようになるとか…」

「おい」

黙って聞いていたが最後のはそうもいかずツッコんでしまう。
それは修司のハイテンションぐらい必要ねェぞ。

「とにかく色々なの！」

「ふーん…」

まぁ、かなり漠然と、それでいて強欲な願いだが、それはそれで良いんじゃないだろうか。

こんな紙切れで願いが叶うなんて思わないが、何もしないよりはマシだしな。

「サッくんは？書いた？」

「いや…」

平沢に自身の短冊を渡し、白紙（青い紙だが）を渡す。

「じゃあ私がもう一つのお願い事を書くよ」

そう言ってペン片手にスラスラと何かを書いていく。

そして書き上げた願い事は…

―――――――

二日後。九日金曜日。

ガチャ

「あら？咲也くん」

放課後になり掃除当番を適当に済ませ、普段向かう部室ではなく、職員室に足を運ぶ。
そして扉を開けた瞬間に自身の席で何やら書類を書いていた山中担任が俺に気付く。

「どうしたの？」

「…志望校が決まったんでそれの報告に」

そう告げて左手に持っていた進路調査表を差し出す。

「早いわね」

「…適当に選んでねェからな」

これは重要だ。
自分の学力でいける大学を先ず自分で調べ、その結果を両親と話し合って決めた大学。

「緑大ね」

「あぁ…」

正式名称【緑ヶ丘大学】
通称【緑大(りょくだい)】

『ヶ丘』とあるが、別に桜ヶ丘高校となんの関わりはない。

まぁ、特に学びたいものがないからこの大学にしたんだが…

ちなみに場所は西女大が地元から三駅程の場所に対し、緑大は鈍行で一時間程の都会にあったりする。

「うん、咲也くんの学力なら多分いけるわね」

「多分言うな」

アンタそれでも教師か。

「だって咲也くん、殆どの授業寝てるでしょ？
けどテストは赤点ナシ
今からちゃんと勉強したら合格間違いナシなんだけどな～」

「…それは、来週からの期末で結果出せってことか？」

「そこまでじゃないけど、この期末で進学する生徒の判断をするから、頑張った方がお得なのよ♪」

「…つうかそれを生徒に言って言いのかよ」

中々の重要機密だと思うが…
そして俺の発言を聞いた山中担任は…

「あっ！」

どうやらマズかったらしい『しまったっ！』という風に口を両手で塞ぐが、時既に遅しだ。

「…得な情報が手に入ったところで俺は部活に行くんで」

用事を済ませる筈だったが、思いがけない収穫があったので早々に職員室から退散を決め込む。

「ちょっ！ちょっと待ってー！咲…桐島くーん！」

周囲を気にして咄嗟に猫をかぶった山中担任の声が背後から聞こえるが完全スルーし、職員室の外に置いてあったアコギが入ったギターケースを取り、部室に向けて歩き出す。

（しかし…）

と、思う。
二日前に平沢が書いた二枚の短冊。
一枚は良いがもう一枚はナシだ。

（今日辺りに回収に行くか…）

そんなことを思い、階段を上がる。

【とにかく一生懸命がんばる！】

【サッくんが笑顔を見せますように】

第八十六話（後書き）

実は律は既に進路を決めていました。
前編はそんな素振りは一切見せなかったのに、やりますな律殿。

律って普段は唯と騒いでるけど、実はちゃんと考えてる娘なんです。

だからこそ部長が務まり、咲也も『何故コイツが部長?』と思わなくなりました。
如実に疑問に感じてるのは一年合宿のスタジオで澪とムギと咲也でラジカセを聴いてる時に唯と共に突入した時ですね。

さて、これで唯、澪、律、紬は西羽田女子大学へ。

咲也は緑ヶ丘大学へ。

和は国立の大学へ。

修司は家業のケーキ職人の道へ。

とりあえず次話は『ユイアズ』ですね。
がんばろー。

第八十七話（前書き）

演芸大会編です。

第八十七話

「はいど〜も！僕はレスコールのギー太でぇ〜す！」

「どうも〜♪私はベースのエリザベスで〜す♪」

「そして！私がテレマスターのギー子です！」

「コラコラ、ギー子ちゃん」

「何かなギー太君？」

「テレマスターじゃなくてテレキョスターでしょ〜が〜」

「違うわよギー太君
テレキャスターよ」

「「さすがエリザベス！」」

本日七月十二日月曜日。

レスポール＝平沢。
テレキャス＝田井中。
ベース＝琴吹。

前代未聞の楽器による漫才トリオが、ここ、私立桜ヶ丘高等学校音楽準備室兼軽音楽部室にて誕生。

「咲也」

「あン？」

それぞれの役割であるレスポールとテレキャスとベースのスタンドの前に腰を下ろしてアテレコをしている平沢、田井中、琴吹。

「ていうかさ唯」

「ほい？」

「『レスコール』じゃなくて『レスポール』だからな」

「はっ！そっか！ごめんねギー太～」

「あ！じゃあそれをネタにしたらどうかな？」

「さすがムギ！」

「冴えてるねムギちゃん！」

こんなシュールな光景に真っ先にツッコむであろう中野はまだ来てない。

そもそも何故、コイツらがこんな事をしているかは不明だし知りたくもない。

まぁ、中野が来るまでの暇つぶしだろう。

「この前のお茶会で私が読んだ詩があっただろう？」

「……あぁ…」

そして、そんなシュールな光景を俺と秋山は我関せずな感じで完全眼中の範囲外としていた。

平沢と田井中の漫才は今更だし、たまに琴吹が加わるのも今更だ。
そんな長イスに座ってケータイで作詞をしていた俺に秋山がやってきて、大事故の原因である詩の事を意味深に尋ねてきた。

「アレを歌詞に書き起こしてみたんだ」

「……」

『はい』と何やら自信ありげにルーズリーフを差し出すので、嫌な予感がしながら受け取り、それに視線を落とす。

つうか毎度毎度の事だが何故俺に、いの一番に感想を求めに来るんだお前は。

【ときめきシュガー】

（おいおい…）

タイトルからして甘ったるそうな…
どうせ歌詞も…

【大切なあなたにカラメルソース】

「……」

【あなたのためにカラメルソース
わたしのハートもカラメルソース】

「……」

【I'm　恋のパティシエ
甘さ控えめなあなたに自家製のソースかけちゃおう♪】

イカン…
【FF】【カレー】【ふでボール】【PP】【パフェ】は、暗黙のルールである『秋山の歌詞には特に否定はしない』で自分自身を何とか騙していたが、流石にこれには通用しない…

「どうかな?私的には『計量スプーンはないから　わたしのさじ加

滅でおいしくするの』ってとこが好きなんだ♪」

ルーズリーフの一部分を左手で指差しながら、眼をキラキラと輝かせる秋山。

「ふぅ…」

と、息を吐き、秋山を絶望させる『ナシ』という断罪の一言を吐こうと僅かに口を開いた瞬間…

ガチャ

「やっほ〜」

右手を上げ、左手にデジカメを携えた山中顧問が軽い体裁の笑顔満載で部室の扉を開いた。

「やっほ〜さわちゃん」

「…何でデジカメ持ってんだ？」

平沢がレスポールの前から立ち上がり顧問を迎え入れ、秋山に断罪の言葉を吐こうとした俺は、それよりも左手にある物に注目がいった。

「もちろん、写真を撮るためよ」

「…何のために？」

「それはね、卒アルに軽音部を載せるために」

……

「だから唯先輩とサク先輩が、澪先輩達と離れて撮影してるんですね」

「うん！さわちゃん、高さこんぐらい？」

「もうちょっと上げて、咲也くんは少し左に移動して」

「…つうか普通に撮りゃいいじゃねェか」

「ダメよ　それじゃインパクトが足りないわ！
これこそが軽音部らしいじゃない！」

「「どこが？」」

キッパリと言い放った山中顧問に俺と中野が思わず声を重ねる。

あの後、山中顧問の指示の元、俺達は隣の音楽室に移動して平沢はティーカップを持ち、俺はソーサーを右手に。
秋山と田井中と琴吹はステージで寄り添うように指示されたポーズで固まっている。

「サク～！代ってくれ～！
この格好結構キツい～！」

「ヤダ」

卒業アルバムに軽音部の活動写真を載せるための写真撮影は大いに結構なんだが、何故か遠近法で撮影することに。

平沢の持つティーカップに秋山と田井中と琴吹が入っているように見せ、俺の持つソーサーにうっかり出てしまった秋山の足が乗っかるという写真を撮りたいらしい。

「唯ちゃん、息を吹きかけるように唇を突き出して」

「ふんすっ！」

「出し過ぎ　もうちょっと加減して…うん良いわ
ムギちゃんはそれに驚いてる顔して」

「わぁ～っ！風が～っ！」

「演技派ですねムギ先輩」

「澪ちゃんは咲也くんの持つソーサーに足を乗せたいから、唯ちゃ

んからの吐息に逃げ出したみたいなポーズ頂戴」

「え？え…っと…こ、こうですか？」

「バッチリよ！りっちゃんは…何かアイテムが欲しいわね…」

「そこまでこだわる必要があんのかよ…」

「あるわよ　だって二年分の卒アルには軽音部の写真が載ってないのよ？久々に載るんだから他の部と違うのにしたいじゃない」

「あっそ…」

「そうだ！りっちゃんにはシンバルを持ってもらうわ！ということで梓ちゃん！」

「は、はい！」

「物置部屋にドラムの予備のシンバルがあるから一枚持ってきて！」

「梓～！早くしてくれ～！キ～ツ～イ～！」

「わ、分かりました！」

「咲也くんはそのままの位置で動いちゃダメよ！」

「張り切ってんな…」

「卒業アルバムだよサッくん
一生残る大切な思い出だもん、さわちゃんも張り切るよ～」

俺達が音楽室に移動したのと同時に掃除当番で遅れていた中野が部室に来たらしい。
部室に誰もいない事に疑問を抱いた中野は音楽室から聞こえる声（主に顧問の）を聞き取り、音楽室にやってきた。
そこで撮影準備をしていた俺達に更に疑問を抱いた中野は近くいた俺に事情を求め納得した。

「どうぞ！律先輩」

「よ…っと…
さわちゃん、どうしたら良いんだ？」

「両手で持って頭上に掲げて」

「これで良い？」

「オッケー！」

そこで三脚を装備したデジカメの液晶画面を覗き、何やら微調整しだす山中顧問。

「唯ちゃん、もうちょいカップ右」

「こう？」

「ん、良いわ」

「さわちゃん！早く！キツいって！」

「はいはい、じゃあ唯ちゃん以外は視線を唯ちゃんに向けて」

「ややこしいな…」

「文句言わないの咲也くん」

「はぁ…」

ため息一つ吐き、顔は正面に向いたまま指示通りに視線を平沢に向ける。

（せめて楽器ぐらい周りに配置出来ねェのか？）

楽器がなけりゃ軽音部じゃねェだろ。
これじゃ茶道部に間違われんぞ。

「何か咲也くんの機嫌悪そうな顔が妙にマッチしてて良い感じよ～！」

「喧嘩売ってんのか？」

「どうどうサッくん」

「サッくん言うな」

もちろん、『楽器を配置しろ』とか不機嫌面云々を言ったところで、熱中しているこの顧問が聞くはずはないので渋々その思いを口には出さす、ジッと静止する。

「いくわよ～！はい、ポーズ！」

その声と…

カシャ！

シャッターがきられる音と…

「ぁ…」

中野の消え入りそうな小さな小さな声が放課後の音楽室に確かに響いた。

……

「琴吹」

「なぁに？」

ある意味、軽音部史上歴史に残るであろう卒業アルバムに載せる撮影が終わり、部室に戻ってきた俺達。
練習はせずにやっぱりなティータイムをする一同を尻目にせっせと給仕をする琴吹に話し掛ける。

「…この歌詞、お前が曲をつけてくれねェか？つうかつけろ」

頼みから命令に変り、先程秋山から授かった例の歌詞のコピーを差し出す。

「これって、新曲？」

受け取り首を傾げる琴吹。

「あぁ…　秋山が書いてきた」

「すごいね澪ちゃんって♪今週期末テストがあるのに新曲書けるなんて♪」

「そこはどうでも良い…
とにかく俺じゃ手に負えねェし、荷が重い」

決して嘘ではない。
しかし琴吹に頼んだのはそれだけの理由ではない。

二か月前程から俺は一人で『ある曲』を製作していた。
曲は完璧に出来上がったのだが、いかんせん詞の方がさっぱり出来ない。

漠然と、しかし明確な、そんな矛盾した詞の内容は既に頭の中に存在しているが、いざそれを歌詞にしようとも中々にペンが走らない。

過去の【虹の風景】【桜の木】の作詞にも手間取ったが、これはそれ以上に難しく頭を悩ませる。

そういう点では五月、七月と【五月雨】と【ときめきシュガー】…もとい、【トキガー】の二作品を書いてきた秋山は尊敬に値する。

とにかく、俺は自分の作詞の方に集中したいので琴吹にこの歌詞の作曲を依頼する。

「うん、分かった♪頑張るわ♪」

「あぁ…」

交渉が万事上手くいったので、フヨフヨと水槽の中を快適そうに浮遊する亀を一瞥し、定位置である長イスに着席しケータイを取り出し作詞の続きを開始する。

「そういえば、みんな」

部室に置ける自身の席に座って恍惚な表情で紅茶を優雅に嗜んでい

た山中顧問が、思い出したかのように口を開いた。

「もうすぐ期末テストだけど、ちゃんと勉強してるの？」

この態度とは裏腹な教師らしい言動に…

「「「はい」」」

と、至極当然に頷く秋山と琴吹と中野。

「「♪すぅ～…♪すぅ～…」」

吹けもしない口笛を吹きながら視線をあらぬ方角に逸す平沢と田井中。

「……」

カチカチ…

そしてどうでも良さげに泰然自若と騒がずにケータイをいじる俺。

「その様子じゃしてないわね唯ちゃん、りっちゃん」

「きょ、今日からしようと思ってたんだよ～　なぁ？唯」

「うんうん！私達は出来る子だもん！」

あからさまな二人の態度に親がガキに怒るような声質で問い掛けると、図星をつかれた二人は、それこそガキのような言い訳をする。

「咲也くんは？ちゃんとしてるの？」

「人事は尽くしてる…」

嘘ではない。

進学と決めた以上、ほんの僅かで細やかだが勉学には力を入れてたりする。

まぁ、かと言って普段の生活態度（授業中の睡眠）を改める気は今のところ更々ねェが。

「あんまりうるさく言わないけど、受験生ってことを忘れないでよ？」

「「は～い」」

「……」

担任の顔だったそうはいかんのだろうが、幸いにここは部室で今は顧問の顔なので緩く釘を刺す言葉に平沢と田井中は小さく手を上げて、俺は相変わらずケータイをいじる。

「ムギちゃん、お菓子どんどん出してね！」

「ラジャー♪」

「あんまり食べると太りますよ？」

「大丈夫さ、あずにゃん！私はいくら食べても太らないから！」

「「羨ましい…」」

特異体質な平沢の発言に秋山と琴吹がガックリとうなだれる。

「でも何でそんなにお菓子をどんどん出せ～なんて言うんだ？」

と、田井中。

「だって明日から部室来れなくなるから、今の内に食べておかなきゃいけないんだよ私は」

「なんですかそれ…」

そう、明日から桜高は期末テスト前期間に突入するので、その間は部室の使用並びに部活動は全面的に禁止されてたりする。

「それはダメよ」

「はぁ？」

カチャリとカップをソーサーに置いて、そんなことを言う顧問にケータイをいじっていた手を思わず止めてしまった。

「…アンタ何言ってんだ」

「だって来週までお茶とお菓子が食べれないんでしょ？だからダメよそんなの」

「……」

いや、だから何言ってんだ？

「先生…それって期間中も部室を…ってことですか？」

秋山の恐る恐るな質問に、問い掛けられた人物はこう言った。

「そうよ」

と。しかも『何か問題でも』みたいな表情のオマケ付き。
この人は本当に教員免許取得してんのか？

「そんなの無理だって」

「…規則で決まってんだろ」

田井中と俺の発言は誰が聞いても正当だと感じる筈だ。
しかしこの人は、真っ向から反論してきた。

「それがどうしたの？」

「いや、だからテスト前だから部活動は禁止…」

「そんな規則と私、どっちが大事なの？」

「「そりゃ規則だろ」」

真顔と俺と田井中に問い掛けるが、言うまでもなくとも後者。
やっぱこの人、頭のネジがズレてんな…

と…

ブブブッ…　ブブブッ…

「うん？誰かしら？」

思考ズレ顧問のケータイが震え、一応仕事中な筈なのにそれを全く感じさせない当然な動作で、ポケッからケータイを取り出しディスプレイ画面を確認する。

「ゲッ…！」

『？』

それを見た後、教師にあるまじき声をあげ『ちょっとしつれ～い』とか言って部室から出ていった。

「どうしたのかな？さわちゃん」

「何か気まずそうにしてたね」

「…そういう相手からの電話だったんだろ」

「というと、誰でしょうか？」

「はっは～ん　彼氏だな」

「根拠ないだろ律」

「そういう可能性もゼロじゃないってことだよ」

「そういえばさわちゃん、恋人欲しいって言ってたもんね～」

「…修学旅行中に恋愛成就の神社とか周りまくるともな」

「何か必死ですね」

「梓…何気にヒドいこと言ったな…」

「え？」

「澪の言う通りだ　ヒドいわ梓！」

「え？えぇ？」

「あずにゃん…」

「何でそんな悲しい眼をするんですか！？」

♪…♪…♪…

「ムギ先輩は何で悲しげな音をキーボードから出すんですか！？」

「…お前、後で顧問に土下座しとけよ」

「そ、そこまでー！？」

――――――――――

数分経ち、顧問は何事もなかったかのように戻ってきたので俺達は敢えて何も触れずに練習を開始。
そして一時間みっちりと練習をし、部活終了。

ちなみに中野は土下座はしなかった。

「でね～　この前、憂にお使い頼まれたんだけど、お醤油を買うつもりが間違えてお砂糖買っちゃったんだよね～」

「ふーん…」

カチカチ…

中野と別れた帰り道。
何が嬉しいのかニコニコしながら色々と話してくるが、俺はケータイでの歌詞作りに必死なので適当に相槌を打っていた。

「サッくん、ケータイ見ながら歩くと危ないよ？」

「ふーん…」

「さっきから何やってるの？」

「ふーん…」

「こそ～…」

「…見んじゃねェよ」

俺の手にあるケータイを覗き込もうとするが、パタンとケータイを閉じてそれを阻止する。

「ぶぅ！ケチ～！」

「…プライバシーの侵害だ」

「私はしょっちゅう憂にケータイ見せてるよ？」

「知らねェよ…」

俺にとっては果てしなくどうでも良い情報を提供してくれた平沢を置き去りにするかの如く歩き出す。

しかしそれは背後から聞えた声により断念せざるをえない。

「あらぁ？ゆいちゃん？」

「ほぇ？あ！おばあちゃ～ん♪」

何かしらのイベントが発生したようなので、ケータイ片手に振り返ると、中野より小柄で琴吹並に気の良さそうなばあさんがそこにいた。

「今帰り？」

「うん！ただいま～」

「おかえり」

「……」

平沢と知り合いらしいそのばあさんと会話が弾んでいるので、完全に蚊帳の外の俺は邪魔しちゃイカンの精神で、自宅に帰還するために一歩足を踏み出す。

「あ、おばあちゃん！紹介するね
私と同じ軽音部の桐島　サッくん！」
「違ェよ」

しかしそれは、平沢によりまたもや断念せざるをえない。
しかも当然のようにタブーで紹介しやがるもんなので、条件反射でつい反応してしまった。

「ゆいちゃんがお世話になってます」

「…ども」

流石に初対面の年寄りをぞんざいに扱うことは出来ないので、ゆったりとした口調で小さく頭を下げるばあさんに、俺も小さく頭を下げる。

「あぁ、そう、あなたがサッくんさんねぇ」

「…はい？」

頭を上げて俺の顔を見た後に微笑みながら、俺のことを知っているような口振りに疑問を抱く。

つうかサッくんさんって…

「ゆいちゃんからいつも聞いてます
サッくんさんがいるから、毎日が楽しいって」

「……」

微笑みと、ゆっくりな口調でそう告げるばあさんの言葉に視線を平沢に移す。

「エへへ…」

何やら照れたような笑顔で、ポリポリと頬をかく平沢。

「ゆいちゃんの…えっと…何だったかしら？それ？」

「ギー太だよ！」

「そうそう、ギー太」

「ギターのギー太だよ！」

「高校に入ってからずっとよねぇ
ゆいちゃん、ホントに頑張ってるのね
偉いねぇ～」

「エヘヘ…　ありがとう～…」

またもや照れたように笑う平沢。

「そうそう、ちょうど良かった
ゆいちゃんに話があったのよ」

するとばあさんが小脇に抱えていた小さな鞄を漁り始めた。

つうか俺はまだこの場にいねェとダメ…

「お菓子かなぁ？サッくん」

「どこまでも食い意地はってんなお前…」

らしい。何だ？ツッコミ要員か俺は？

「これなんだけどね」

鞄から一枚の紙を取り出して平沢に渡すばあさん。
少々内容が気になるので俺も平沢の背後から確認する。

「演芸大会…？」

首を傾げる平沢。

その用紙には『第三十二回　演芸大会のお知らせ』の文字と雑記な

文字が。

「毎年やってるんだけど、今年は出場者が少ないんですって」

「そうなんだ…」

「……」

「ゆいちゃん、出てみない？」

「えっ！私？」

いきなり飛び出た出場要請に平沢が眼を見開く。

「若い人が出ると商店街の人達も喜ぶと思うのよ」

そこでばあさんが平沢を見た後に俺を見る。

何だ？出ろってか？

「ギターのギー太弾いてるゆいちゃん、私もみてみたいし」

『どうかしら？』と言ってくる平沢が少し悩み唸った後に俺に相談を持ち掛ける。

「（どうしよっか？）」

「（お前が決めろよ…）」

「（んー…　じゃあ出る）」

「（決断早ェな…　つうか出るにしても期末の次の日だぞ？）」

「（えっ！嘘！？）」

小声での作戦会議の終了の合図は、平沢の見落としだった。

用紙には『日時　七月十七日土曜日』としっかり記載されてある。

期末テストは十五日と十六日の二日間で行われる。
仮に平沢が演芸大会に出場するならば、それの練習プラス期末の勉強もしなくてはいけない。

今日は十二日、期末は十五日、演芸大会は十七日。

中々のハードスケジュールになるので正直辞退した方が懸命なのだが…

「おばあちゃん…」

「うん？」

「私、出るよ」

「……」

何か思うところがあるんだろう。
志望校を選んだ時のような軽い感じではなく、真剣な表情でそう告げた平沢に、俺からの助言は必要ない。

「ホントに？」

「うん！私、出るよ！」

「あらぁ　ありがとうね、ゆいちゃん」

「よぉし！そうと決まれば頑張るぞー！」

（コイツ一人でか…）

何だろうな…
この胸中に去来する些かな不安は…
誰かフォロー役が必要なんじゃないだろうか…

第八十七話（後書き）

演芸大会とかいっておきながら、主役はさわ子になってしまった…

第八十八話（前書き）

演芸大会その二です。

第八十八話

本日七月十三日火曜日。
現在時刻午前七時四十三分。

珍しい事もあるもんだ、と思う。
そう思うのは何故か？
それは俺の隣を歩く人物所以だ。

「……」
「♪」

珍しい事もあるもんだ、と思う。

今日から期末テスト前期間故に部活動は禁止。
それ故、普段持ち歩いているテレキャスとアコギの入ったギターケースはなく自室にある。
鞄を肩に掛けてヘッドフォンから流れる音楽を聴きながら悠々と登校中に肩を軽く叩かれた。

『誰だ？』と思い振り返ると、そこにいた人物を見て『珍しい事もあるもんだ』と思った。

平沢？
確かに有り得るが、有り得るからこそ『珍しい』なんて思わない。

平沢妹？
姉と同等の理由により違う。

真鍋？
平沢姉妹と同じ登下道で俺とも途中まで同じらしいが、過去に実例がないので違う。
まぁ、それこそ真鍋がいたら『珍しい』なんて思うかもだが、今は置いておこう。

中野？
これも有り得るが、有り得るからこそナシ。

秋山？
そもそも俺が今歩いてる場所で出会う筈がない。
アイツは俺と平沢と琴吹と中野と早々と別れるので、この場にいたらおかしい。

田井中？
コイツも秋山と同じ場所で別れるので違う。

鈴木？
ねェだろ。

修司？
朝からコイツと登校は勘弁してほしい。

「あれ？ねぇ咲也君」

「あン？」

ならば誰だ？ということになる。
知り合いと呼べる奴等（西野と水本はどうやって登下校しているのか知らん）をピックアップし、まだ出てないのは琴吹と山中顧問。
そして俺の隣で絶えない笑顔で歩いていた人物が、足を止めて俺を呼ぶ。
『咲也君』と。
このように呼ぶのは、まだ出てない琴吹と山中顧問。
しかし山中顧問は確か、車で学校に来ている筈なので、有り得ない。

「あれって、さわ子先生じゃないかしら？」

「ん？」

様々な観点の理由から『珍しい事もあるもんだ』と思った人物は、軽音部の給仕係の…もとい、キーボーディストの琴吹だったりする。

コイツとは平沢と中野と途中まで登下道が同じなので、共に登校することは有り得るが、過去に例がなかったので『珍しい』なんて思う。

そして立ち止まった琴吹が指差す先のライン上には、最後まで悩ませた（全く悩んじゃいない）山中顧問が。

「何してるのかな？」

「…誰かを待ってんじゃねェのか？」

向かい側の歩道の傍らに自身の赤い軽自動車を停車させ、車から降り立った顧問は、しきりに腕時計で時刻を確認しながら辺りをキョロキョロと見回す。

そんな素振りをしているのは、大抵は待ち人を待ってる状態だろう。

「…おら、さっさっと行くぞ」

あの人が誰を待とうが、何をしようが俺には存外関係ないので琴吹にそう促す。

「あ、誰か来た！」

「はぁ…」

しかし琴吹は一歩も動かずに観察を続け、その結果として次なるイベントが発生してしまった。

同じ赤い軽の車（車種は違う）が山中顧問の前で停車し、運転手と何やら会話を始めた。

「そういえば、昨日の先生の電話の相手って、あの人なのかな？」

「だとしても俺達には関係ねェだろ…」

「う～ん…　そうね、あんまり詮索しちゃいけないのかも」

「つうことだ…」

どうやら琴吹が納得したらしいので、止まっていた足を動かし、通学路を歩みだす。

「あ、待って～！咲也君！」

背後から琴吹が走ってくる足音が聞えるが特にスピードを落とすことなく歩いていく。

「久し振り、さわ子」

「久し振りじゃないわよ
学校に電話してこないでって言ってるでしょ」

「だからそれは悪かったって
それで、考えてくれた？」

「う～ん…」

「結婚のこと　みんな喜ぶと思うんだけど」

こんな会話がなされていたなんて、俺と琴吹は知る由もなかった。

――――――――――

「今年の夏って、そんなに暑くないね～」

「…そうだな、嬉しい限りだ」

桜高に着き、上履きに履き替え、普段だったらギターを置きに一旦部室に向かうが今日は必要ないので、琴吹と他愛もない会話をしながら三年二組を目指す。

「咲也君、夏と言えば？」

「暑い」

「そうだけど、もっとみんなで楽しむもの～」

（何で連想ゲームが始まってんだよ）

「正解は～…」

（そして早くも答え言うし）

「合宿でしたぁ～♪
今年も行きたいね～♪」

（ムズいんじゃねェの？
俺らは受験生だし…）

本当に他愛もない会話（ほぼ琴吹の一方的）を淡々とこなしていると教室に辿り着く。

ガチャ

「あ、おはよう、咲也、ムギ」

「おはよ～♪サッくん♪ムギちゃん♪」

「おはよ～♪」

「サッくん言うな」

「てか珍しいツーショットだな」

教室に入ると平沢の机に集まっていた秋山が挨拶をし席に着いていた平沢も。

そして田井中が俺も思ったことを意見する。

「そうだ、サクムギ」

「…ユニット名みてェに呼ぶな」

「まぁまぁ、それよりコレなんだけど…」

四文字でアッサリと俺のツッコミを流し、平沢の机の上にあった一枚の用紙をピラッと俺と琴吹に見せる田井中。

「演芸大会…？」

そこに記載されてあるデカい文字を琴吹が読んでは首を傾げる。
どうやら昨日のばあさんが持っていた演芸大会を知らせるチラシらしい。

とりあえず俺は自分の机に鞄を置いて、平沢の机に近付く。

「唯が演芸大会に出場するって言ってるんだ」

秋山が平沢からの報告を俺と琴吹にしてくるが、俺は昨日その場面にいたので『ふーん…』と返す。

「相変わらずの反応だなサク」

「…知ってるから驚きようもねェっつうの」

「咲也は知ってたんだな」

「あぁ…」

琴吹は『おもしろそう♪』と言ってニコニコしている。
だから田井中と秋山は俺に色々言う前に大して驚いてない琴吹にツッコんだ方が良いんじゃないだろうか。

「唯、出場するのは良いけど、期末の翌日だぞ？」

やはり誰しもそこが引っ掛かるらしく、秋山が眉を顰める。

「うん　だから、みんな勉強しなくちゃいけないから私だけで出るよ」

「「お前もだろ」」

とても常に赤点ギリギリの奴が言う台詞ではないので秋山と共に指

摘する。

「でも唯ちゃん一人で大丈夫？」

「ていうか何で辞退しないんだよ」

田井中の発言はもっともだ。
それに対して平沢は演芸大会のチラシを見ながら口を開いた。

「お隣のおばあちゃんを喜ばせたいんだよ」

「おばあちゃんって？」

「…コイツの知り合い」

「だからそれが誰やねん」

琴吹がまたもや首を傾げるので簡潔に答えてやったが、田井中が軽

く平手打ちを俺の腕にしてくる。

「小さい頃から私と憂がお世話になっててね、恩返ししようかと」

「……」

昨日の平沢とばあさんの会話や柔軟な雰囲気から深い縁がありそうな気はしていた。
だからコイツはハードスケジュールの中、恩返しをしたいと言ったんだろう。

「優勝商品は温泉旅行なんだよ
おばあちゃんは私と憂で行きなさいって言ってたけど…」

「…それを恩返しの品でプレゼントすんのか？」

「うん！」

満面の笑顔で頷く平沢。

「そっか、じゃあ私達は何も言えないな」

「そうね、唯ちゃん頑張ってね！」

「ありがとうムギちゃん！」

「…つうか優勝できんのかよ？」

恩返しの前提は優勝をしなければならない。
どんな連中が参加するのか知らんが、普通のことをしてもまず、優勝は無理だろう。

「大丈夫だよサッくん！私にしか出来ない事があるから！」

「唯しか出来ない事？…サクをサッくんと呼ぶ事か？」

「お前のカチューシャ折るぞ」

「何でだよ！」

そんなに大事なのか、トレードマークのカチューシャを押さえる田井中。

「サッくんのことをそう呼べる権利は私しかないのかぁ～♪」

「はぁ…」

何故かニコニコしながら俺を見つめる平沢に、もうツッコミ気力が失せる。

故にため息が…

「それで？何するんだ？」

有り難いことに秋山が脱線し、俺に突撃してきた平沢特急を本来のレールに乗せてくれた。

「ギー太で弾き語りをしようかなぁ～って」

「へぇ～　唯のソロかぁ」

田井中が感心したように頷くが、俺は一つの懸念を覚える。

ソロということは恐らく【ＨＴＴ】の曲、まだ未完成の【トキガー】を除いた計十二曲の内のどれかの曲を演奏するんだろう。

これが問題だ。

言わずとも【ＨＴＴ】の曲はバンドとして俺が、琴吹が製作している。

「お前、弾き語りっつってるが…

ＨＴＴの曲でやるのか？」

「そだよ～」

「咲也はまだ放課後ティータイムって言ってないんだな」

「まぁ、仕方ないって澪

サクだからな」

秋山と田井中が何か言ってるが盛大にスルー。

「…ソロでやれるようにアレンジ出来んのか？」

とてもコイツがそんなことが出来るとは思えない。
幾ら【絶対音感】という、ミュージシャンにとって羨ましい能力を有していようが、それを使いこなしていないのだから意味はない。
【絶対音感】を駆使して作曲やアレンジが可能ならば、こんな懸念は抱かないし言わない。

「……」

俺の問い掛けにキョトンとした表情になること約数秒。

「……あ、どうしよう…」

「考えてなかったんだな…」

「はぁ…」

流石平沢だ。

冷や汗をかきながら眼をしばたたかせる。

そんな天然に秋山がため息混じりに息を吐き、俺は完全にため息を。

「唯ちゃん、私が手伝うわ」

『う～ん…』と打開策を見出だそうと唸る平沢に琴吹が申し出るが…

「ううん、大丈夫だよムギちゃん」

「え？」

それを微笑んでやんわりと退ける平沢。

「私一人で頑張るって決めたし、みんなに迷惑かけられないよ」

「唯ちゃん…」

「短冊にも、とにかく一生懸命がんばるって書いたからね！」

「……」

漠然にして強欲な願い事。
それを実行しようとしている平沢に手助けは必要ない…のかもしれない。

「まぁ、お前がそう言うなら、やってみろ…」

「うん！私がんばるよ！」

両拳を握り締め、肩に力を入れて意気込む平沢に秋山と田井中と琴

吹は笑顔を浮かべる。

「ほ～　唯ちゃん演芸大会出るんだね」

『わっ！』

「急に乱入すんなアホ」

「だぁれがアホじゃいッ！」

今の今までどこにいたのか突然修司が俺の肩に馴々しく手を置きスネークインしてきた。
そして突如涌き出できたコイツに、俺以外の一同が驚愕する。

「修司、いつからいたんだよ？」

「ふっ、愚問だな律ちゃん」

何故かそこで一旦溜める。

「さっきからいたぜ！」

「そうなんだ…」

ビシッと田井中に指差すが、どうしたらいいのから分からない田井中は、とりあえず無難な返事をする。

「思えばもうこんな時期なんだと思っちまうな」

「あぁ？」

俺の肩から手を離し、腕組みながら『うんうん』と頷きながら感慨深けに語る修司。

「この演芸大会の場所って、俺んチの前の公園で毎年やってんだよ」

「影宮君の家の近くなんだ」

「そうなんだよ澪ちゃん、だから影宮家にとって演芸大会は夏の風月詩になってんだ」

「風物詩な」

「でもサッくん、風月詩の方がカッコいいよ～！」

ズレた発言すんなお前。

「そうだ！サクえもん！」

「黙れ」

「そうはいかねぇな！俺と一緒に演芸大会に出場しＮＡＩＫＡ？」

「黙れ」

「まぁサクッチなら拒否すると思ったけど、黙れは予想外だったぜ…」

『ふぅ～』っと額から流れてない汗を拭う真似をしながらケータイを取り出す。

「しゃーない、充と共に参加するか～」

何でアイツがお前と共に出場するのが決まった口振りなんだよ…というツッコミを飲み込み、話がまとまったので机に戻り、突っ伏す。

「って、咲也は堂々と寝ない！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

現在時刻午後六時三分。

今日は期末テスト前期間だから部活はお休み。
家に帰ってテスト勉強をしてたらお母さんにお使いを頼まれた。
あんまり根つめて勉強しても疲れるだけだから、息抜きついでで私は自転車に跨がった。

「あ…」

お使いの帰り道。
夏の夕陽がキラキラと川に反射して綺麗に光るその河川敷に、よく知ってる人を見つけたのでブレーキをかけて止まる。

♪♪~…

聴こえてくるその音は、アコギの音でもなく、エレキギターの音でもなかった。
ううん、確かにエレキギターから流れる音なんだけど、正確にはアンプに繋いでない状態のエレキギターの独特な音。

「よいしょ…」

私は自転車から降りて、押しながら河川敷でギターを弾いてるその人に近付く。

「唯先輩」

「ん？あ、あずにゃん！」

声を掛けると唯先輩はギターを弾いてた手を休めて、キラキラと輝く水面に負けないくらいの笑顔を私に向けてくれた。

「こんなところで練習ですか？」

「テスト前は部室使えない規則だし、ウチだと憂の邪魔になるかなぁって」

「そうですか」

自転車のスタンドを立てて唯先輩が座ってる階段に私も座る。

「あずにゃんはお使い？」

「はい」

「そっかぁ～」

♪～

止まっていた手を動かし、ギターを弾きだす…っていっても六弦から一弦までストロークしているだけなんだけど…

♪♪♪…

「「……」」

唯先輩のギターの音色と夕陽の風景を聴きながら、見ながら今日の

体育の時間での憂と純との会話を思い出す。

『この時期に演芸大会に出るの？唯先輩が？』

『うん』

『それって澪先輩とか咲也先輩も出るの？』

『ううん、お姉ちゃん一人で』

『明後日テストだよ？余裕だね、憂のお姉ちゃん』

『お世話になってる、お隣のおばあちゃんが推薦してくれてお姉ちゃん、張り切ってるの』

『そうなんだ…』

『そういえば、演芸大会の優勝商品って確か温泉旅行じゃなかったけ？』

『そうなの純？』

『うん、ウチのお母さんが言ってた』

『それを恩返しでプレゼントするってお姉ちゃん言ってたよ』

『なるほどね、鶴の恩返しかぁ』

『それは違うと思うよ…』

明後日は期末テストなのに唯先輩は練習してる。

一人で。

先輩達のことだから一緒に出場するって言いそうだけど…サク先輩は怪しいけど…とにかく、唯先輩は断わったんだろうなぁ…

先輩達は受験生だから今後のテストが重要になってくる筈。

「あの、先輩」

「うん？」

だから私は言ったんだ。
力になれればと思って言ったんだ。

「演芸大会、出るんですよね？一人で？」

「うん、だから今どんな曲をやろうか考え中」

「大丈夫ですか？テスト勉強もしなくちゃいけないんですよ？」

「がんばるよ～」

この言葉を言ったんだ。

「分かりました」

「ほぇ？」

「私も一緒に出ます！」

と、決意の言葉を言ったんだ。

「あずにゃん、いいの？」

唯先輩が驚いた顔をしてる。

そりゃそうだよね。一人で出場するって決めてたとこに私がそう言ったんだから。

「はい、私、普段から一応勉強してるのでテストは大丈夫です」

多分だけど…

「ですから「あずにゃ～ん！」ニャッ！」

いきなり唯先輩が抱き付くから猫みたいな声あげちゃった…

だからサク先輩に『ニャカ野』なんて言われるんだなぁ…

「ありがとう～！実はちょっと不安だったんだよ～！」

「と、とにかく曲決めて練習しましょう」

抱き付く唯先輩をゆっくりと離しながら、先ずはやらなきゃいけない事を言う。

「そうだね！なんの曲にしよっか？」

「ところで唯先輩」

「うん？」

「放課後ティータイムの曲をやるんですよね？」

「そだよ～　なんにする？やっぱり『ふわふわ時間』かなぁ？」

「その前に、曲のアレンジとか出来たりしますか？」

「ううん」

「え…」

「それ、サッくんにも言われたぁ
でもなんとかなるよ～」

「ならないですよ…」

「あ！ねぇねぇ、あずにゃんってそういうの出来る？」

「え…っと…」

「あずにゃん？」

「む…」

「む？」

「無理かも…です…」

「え…」

カァ～　カァ～

まるで私達をバカにするみたいに、カラスの鳴き声が河川敷に鳴り響いた…

「むぅ～！やってやるもん！」

「おぉ！あずにゃんが叫んだ！青春だね～」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

溯ること約二時間前。
現在時刻午後四時一分。

「みんな…」

場所は軽音部御用達（？）のバーガーショップ【マックスバーガー】
その店内の一角は何故か物々しい雰囲気に包まれていた。
まるで首脳会議のように。
まぁ、実際の首脳会議がどういうものか知らんが。

会議参加者は俺と田井中と秋山と琴吹。
平沢は放課後になると『早速練習だー！』っと意気込んで颯爽と帰っていった。
俺もさっさっと帰ろうとしたが、部長に引き止められ今に至る。

「正直に答えろよ？」

秋山と琴吹は背筋を伸ばし田井中からの本題をどこか緊張した様子で待ち、俺は頬杖をついて目の前にあったポテトを一本摘む。

ちなみに今回は平沢と中野がいないので普通に四人掛けのテーブルに着いてる。

「ぶっちゃけ…」

誰かが唾を飲み込む。
俺が頼んだアイスコーヒーの紙コップから滲み出た水滴が、重力に従ってトレイに落ち、敷いてある新作バーガーが印刷されてある紙にシミをつくる。
そして、遂に田井中が口を開いた。

「唯一人だと不安な人は挙手！」

バッ！バッ！
スッ…

この発言に秋山と田井中は瞬時に手を上げ、俺も小さく手を上げる。

「だよな、私もそう思ってた」

そして田井中は両肘をついて顔の前で組んでいた手を離し、手をあげる。

「…で？だから何なんだよ？」

「唯は『頑張る』って言ってたけどさ、やっぱり私達も一緒に出ないか？」

「私もそれ思ってたの
唯ちゃん一人で大丈夫かなって」

どうやら琴吹は共に参加に賛成らしい。
そして田井中が秋山と俺に。

「澪とサクは？」

「まぁ、唯が失敗しそうで心配だから、私は出ても良いけど…」

すると、どんどん顔が紅潮していき…

ボフンッ！

「澪ちゃん！大丈夫！？」

頭から煙を吐いてスキルを発動させる。
どうやら大勢の観客の前で演奏している光景を想像したらしい。

「ライブん時は平気なのに何でだよ…」

「ベースに集中してるからじゃない？それよりサクは？」

田井中の問い掛けに考える。
確かに手助けは必要ないとは思った。
しかし、よくよく考えると不安がありまくりだ。

演奏曲のアレンジや初めてのソロに、テスト勉強と練習に追われる

日々。

とても平沢一人で乗り切れられそうな波じゃない。
昨日も思ったが、せめて誰かフォロー役が必要だ。

「やっても良いが…」

「良いが？」

「…素直に平沢が受け入れるか？」

「確かにな、唯は私達に遠慮して一人で出るって言ったんだし」

いつの間にか、スキルを発動し終えた秋山が思案顔になり俺の意見に同意する。

「う～ん…　じゃあどうする？」

「とりあえず私達も一緒に出場ってことにして、明日、唯ちゃんに言ってみよ？」

「まぁ、それが今のところの案だろ…」

田井中の意見を求める声に琴吹が現状での策を提案し俺が頷く。

しかし…

――――――――――

翌日。十四日水曜日。

「梓が一緒に？」

「そう！」

俺達の心配は杞憂に終わる。

登校し教室に着くと既に来ていた平沢と秋山と田井中と琴吹。

そして俺が来たのを見計らってか、平沢が『重大発表があります！』と言い出した。

それは中野が演芸大会に平沢と共に出場するという内容。

それを聞いた秋山が聞き直し、平沢が肯定する。

「やっぱ、私達も参加するかって話してたんだけどな」

田井中が言う。

「二人のユニットも良いわね♪」

「デヘヘ～♪そっかなぁ♪」

「何で照れてんだよ…」

「だって私は、褒められて伸びる娘ですから～」

初耳だぞ…

「はぁ…」

とりあえずため息一つ吐く。

中野が共に参加ということは、つまりフォロー役が決まったということ。

しっかりしたアイツなら申し分ないだろう。

「…そういや、中野もテストあんだろ？そこんとこどうなんだ？」

「なんか、あずにゃんは普段から勉強してるからテスト大丈夫なんだって～」

「…何だ？自慢してんのかアイツは」

「咲也は梓のそういうとこを見習ったらどうだ？」

「…頭下げろってか？ごめんだな」

「いや、そこまで言ってないから」

「まぁ、とにかく、今回は梓に任せるか～！」

「梓ちゃん、頼もしいもんね～」

「軽音部の次期部長だからな
律より頼もしいよ」

「な、なんだとーっ！」

「あ、ねぇサッくん」

「サッくん言うな」

口々に中野に対する期待を口にしていた面々。
しかし、平沢の思いがけない発言に再び不安を感じることになる。

「曲のアレンジって難しいんだね～
あずにゃんも出来ないって言ってたよ～」

「あ？」
「え？」
「へ？」
「ん？」

チュンチュン…

まるで平沢の脳内を表わすかのように陽気な小鳥の囀りが聞えてきた…

「何を呑気に言ってんだテメェは」

「いひゃいよひゃっくん！」

「サク！気持ちは分かるが唯のホッペを引っ張るなぁー！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

現在時刻午後六時二十分。

「こうかなぁ？」

♪…♪…♪…

「それじゃただ、スローペースで弾いてるだけですね」

放課後になり、私は唯先輩の…先輩達の教室に向かって唯先輩を連れ出して、まずは図書室で一時間みっちり勉強した。
そしてその後に昨日の河川敷に移動して、持ってきていたムスタングの『むったん』を取り出して練習を開始しようとしたら、微笑みを浮かべた優しそうなおばあちゃんがやってきた。

そのおばあちゃんこそ、憂と唯先輩がお世話になっているおばあちゃんで、差入れに肉じゃがコロッケを持ってきてくれた。

『あ、おばあちゃん！一緒に出場してくれる中野　あずにゃん！』

『初めまして、中野　梓です』

『あらあら、そうなの』

『あずにゃんは同じ軽音部の後輩なの！』

『そうなのねぇ
あずにゃんさん、無理しないでねぇ』

『は、はいっ』

『あずにゃんさん』って呼ばれた時はちょっと驚いたけど、すごく優しいおばあちゃん。
私達に差入れを渡して『頑張ってね』と言って去っていった。
私と唯先輩は貰った肉じゃがコロッケを食べて練習開始！

『とりあえず何の曲をベースにするか決めましょう』

『そういえば演芸大会ってお年寄りが多いって修司君が言ってたよ』

『じゃあ演歌？』

『ふわふわタ～アア～イム！』

『その歌い方は…』

『コブシを回す練習だよ』

『『ふわふわ』の演歌バージョンですか…』

『あれ？ダメかな？』

『あんまり慣れない歌い方は喉を痛めるかもですね』

『じゃあ…どうしよっか？』

『まずはアレンジをしましょう』

『出来るの？あずにゃん』

『なせば成る　為さねば成らぬ何事も　成らぬは人の為さぬなりけり…です！やる前にダメとか決めてたらいけませんから、チャレンジするんです！』

『おぉーっ！あずにゃんカッコいいーっ！意味はよく分かんなかったけど！』

『そ、そうですか…』

唯先輩と一緒に放課後ティータイムの曲を片っ端からアレンジにチャレンジしたけど、私も唯先輩もスローペースになったり、原曲から懸け離れた曲になるだけで、一向に進展がない…

「難しいね…」

「そうですね…」

思えば今までは、澪先輩が作詞してムギ先輩とサク先輩が作曲したのを私は練習してきた。

それは軽音部に入部する前も同じ。
お父さんとお母さんが演奏するジャズを聴いて練習しただけ。
だから私は曲を作るということが出来ない。

（来年は私が一人になるのに、こんなんじゃ…）

「ッ！」

ダメ！そんなこと考えたら！

ブンブンと頭を振る。

先ずは目先の事を考えなきゃ。

「唯先輩、やっぱりムギ先輩かサク先輩に手伝ってもらった方が良いんじゃないでしょうか？」

「ダメだよ　みんなに迷惑かけられないもん」

「そうですけど、このままじゃ時間が過ぎるだけです」

唯先輩の気持ちは分かるから、できれば私だって頼りたくない。
でも後三日で演芸大会本番。
とにかく時間が足りない。

「私もしたくないですけど、少しだけムギ先輩かサク先輩に助言を貰うくらいかは…」

「う～ん…」

私の言葉を聞いて腕を組んで悩む唯先輩。

「分かったよ」

そして納得したみたい。

この後、私はてっきり唯先輩がケータイでムギ先輩かサク先輩に連絡するんだと思ってた。

「じゃあ行こっか？」

「へ？どこにですか？」

「それはね…」

でも、それは違った。

――――――――――

唯先輩に連れてこられたのは二階建ての一軒家。

今年の三月に訪れたことがある家。

「じゃあ押すよ？あずにゃん」

「は、はい…」

唯先輩がインターホンを…

♪ピンポ〜ン

押しちゃった…

表札に【桐島】と書いてある家のインターホンを…

第八十八話（後書き）

梓って作詞作曲は慣れてないんだと思います。

だから番外編『訪問！』のラストで『ふわふわ時間』をほぼそのまま演奏してたし。

まぁ憂に合わせただけなのかもしれませんね。

第八十九話（前書き）

演芸大会完結です。

第八十九話

「……」

現在、俺の自室では中々に奇妙な光景が展開されていた。

茶色の、やや癖がある髪の平沢とかいう女子。
特徴として前髪を黄色い二本のピンで止めてある。

黒の、降ろしたら腰まであるであろう髪の中野とかいう女子。
特徴としてツインテールの髪型。

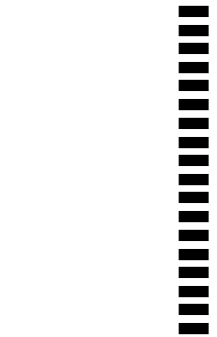
コイツらの共通点は軽音部所属にしてギタリスト。
そして、三日後に開催される演芸大会に出場するということ。

そんな二人が、古来より伝わる日本の作法の一つである、土下座をしている。

誰に？

椅子に腰掛け、シャーペン片手に土下座コンビをローテンションで眺めている、俺に。

さて、事の顛末はこうだ。



現在時刻午後六時三十七分。

珍しい事もあるもんだ、と思う。
そう思うのは何故か？
それは現在の俺が集中していること所以だ。

「……」

珍しい事もあるもんだ、と思う。

明日から期末テストが実地されるため、机に向かい教科書と厚意で勝手にくれた秋山と琴吹と真鍋のノートのコピーを参考にしながらテスト勉強をこなす。

これが珍しい事。

確かに過去にもテスト前は勉強していたが、そこまでじゃなかった。

しかし、今回は帰宅してから他の事など脇目も振らずテスト勉強に集中していた。

流石に気付かぬ内に俺の中に受験生としての立場が生まれていたらしい。

別に一昨日の山中顧問の言葉を受けたからではない。

それ以前に微々たるものだが進学と決めた以上、勉学はしていたし。

微々たるものだが。

「……」

そして、その時は訪れた。

正に今、真鍋コピーノートを参考にしながら、意味不明な漢文を解読しようと自身のノートにシャーペンを置いた。

「ん？」

刹那、僅かに聞えた音にシャーペンが止まり、同時に集中力も霧散する。

その音は来客を告げる音。

つまり誰か我が家に訪問したということ。

「ふぅ…」

訪問者はお袋が対処するだろうから特に気に止めず、集中していたことによる軽い疲労感が身体を駆け巡る対処を行う。
息を吐いて椅子の背もたれに体重を預けてリラックスすること約三分。

コンコン　ガチャ

「咲也、入るわよ」

「…もう入ってんじゃねェか」

ノックの後に間髪を入れず扉を開け放ったお袋に気怠そうに一言。
アンタも親父も…ノックの意味知ってんのか？

「お友達が来てるわよ」

「あぁ？」

訪問者の対応をしていたであろう、お袋がそんなことを報告する。
何故かニヤけながら…

「平沢　唯ちゃんだったかしら？久し振りに会ったけど、可愛らしい娘ね」

ん？

「後もう一人、ツインテールをした女の子も一緒よ
あの娘も礼儀正しくて可愛らしい娘ね」

んん？

「ほら、何ボーッとしてるのよ
玄関に待たせてあるから早く行きなさい」

予期せぬ来訪者に思考がストップしている中、お袋が急かすように

告げてくるので、何とか思考の歯車を動かしながら自室を出て、玄関に向かう。

「……」

（何故アイツらウチに来るんだ？）

階段を下りながら思考する…が、一つの仮定といか答えにすぐに辿り着く。

今日の朝。教室にて平沢の呑気な発言。

『曲のアレンジって難しいんだね～
あずにゃんも出来ないって言ってたよ～』

そして平沢と中野がウチに来た。
ならば自然と答えは絞られる。

「はぁ…」

（『そう』ならばそれで協力してやらねェとな…）

こんな小さな決意を秘めて、玄関に到着。

「あ、サク先輩…」

「エヘヘ…や、やっほ～…」

そこにはお袋の言った通り平沢と中野がどこか気まずそうにソワソワしながら立っていた。

「…とりあえず上がれ」

「「えっ？」」

俺の第一声が意外だったのか平沢と中野がキョトンな表情をする。

「…上がんねェなら追い返すぞ」

「あ、ううん！上がるよ！おじゃまします！」

「お、おじゃまします！」

ワタワタと慌てた動作でローファーを脱ぐ平沢と中野。
身体を揺らす度に鞄に付けてある平沢の『ぶ』と中野の『ん』のキーホルダー。
その二つのキーホルダーを一瞥して、背を向けて歩きだす。

■■■■■■■■■■■■■■■

で、現在。

『何故連絡をしてこなかったのか』という疑問が浮かんだが、抹消した。
どうせ平沢だし、中野は流されたんだろう。
入部当初はティータイムに苦言を呈していたが、今となっては完全

に馴染んでしまってるし。
挙句の果てには、専用のティーカップまで違和感なく使いこなす始末。

まぁ、別に良いんだがな。

閑話休題。

平沢と中野を自室に招待した途端に、事前に打ち合わせでもしたのか…

『サッくん』
『サク先輩』

『あン？』

『『曲のアレンジをするのに力を貸してください！』』

と、土下座をしてきた。

それを見た俺は『やっぱりな』と内心で思った。

「あぁ…分かった」

なので俺は別に断わることもなく、頷いた。

「え…いいの？サッくん？」

顔を上げた平沢の表情はやっぱりキョトン顔で、それは中野も同じだ。

「…だから分かったっつってんだろ」

「で、でもでも…私は一人でがんばるって言っちゃったのに…」

「あ、あの…サク先輩かムギ先輩に助言を貰おうって言ったのは私で、唯先輩は乗り気じゃなかったんです…だから…」

珍しい事もあるもんだ、と思う。

呑気で能天気な平沢が、自分の発言に責任を感じ、いつものようなニコニコした笑顔は影を潜め、シュンと肩を落とす。

根が真面目な中野が、俺か琴吹に協力を仰ぐように平沢にほのめかし、その事をやや後悔を感じさせる物言いで、普段の先輩にも堂々とした態度は何処へやら、借りてきた猫のようにおとなしい。

俺は俺で、すんなりと家に上げて自室に入れるような人間じゃないのに、目の前には平沢と中野がいる。

「お前の決意は分かっちゃいるがな、出来ねェことは出来ねェで良い…」

「サッくん…」

「…実際、中野が一緒に出場してくれるっつった時は、嬉しかったんじゃねェのか？」

俺はどういった経緯で中野が平沢と共に出場することになったか知らない。

だが、一点だけ分かる。

平沢が、中野が協力してくれたと俺達に報告してきた時の表情。

嬉しそうな笑顔だった。

「うん…うん！嬉しかったよ！」

「唯先輩…」

「…一人じゃ出来ねェことは、誰かに頼っても良いんじゃねェのか？」

だから俺は、頭を下げてきたコイツらに協力する。
いつか田井中にも言った言葉。

『つまずいて、足りない部分は互いに補って、成長する』

まぁ、あくまで持論だが、あながち間違いでもない筈だ。

最初は一人だった平沢が今は中野がいる。

それでも悩めるコイツらが俺に頼ってきた。

断わる理由があるか？と、問われたら、答えは『ＮＯ』だ。

「あずにゃん」

「あ、はい」

「良かったよ、サッくんに相談して」

「そうですね、私達だけでしたら空回りしてたかもしれませんね」

どんな風に曲のアレンジ作業をしていたのか分からんが、苦労はしたらしい。
微笑んで互いを見合う平沢と中野から、そんなことを感じ取った。

「…頼るっつったが、ギターのメンテとかオクターブチューニングとかは、自分でやれよ」

「そうですね、じゃないと唯先輩のためにはなりませんから」

「うぇぇ～…　そんなハッキリとぉ～…」

漸く本来の平沢と中野の調子に戻ったので、早速本題である曲のアレンジに取り掛かるために、机の引き出しを開け、中にある計十二曲分の楽譜を取り出し、立ち上がって平沢と中野の前に置く。

「…ＨＴＴの曲からやるっつってたな？」

「サッくん、放課後ティータイムだよ？」

「今は良いじゃないですか」

中野が正にその通りな発言に感謝しながら楽譜を眺める。

【ふわふわ時間】
【虹の風景】
【カレーのちライス】
【わたしの恋はホッチキス】
【桜の木】
【翼をください　ＲＯＣＫ　Ｖｅｒ.】
【ふでぺん　～ボールペン～】
【Ｄｏｎ't　ｓａｙ　”ｌａｚｙ„】
【ぴゅあぴゅあはーと】
【いちごパフェが止まらない】
【Ｈｏｎｅｙ　ｓｗｅｅｔ　ｔｅａ　ｔｉｍｅ】

【五月雨２０ラブ】

「こうやって楽譜で見ると、いっぱいありますね」

「こうやって楽譜で見ると、疑問なタイトルが目立つな…」

「それも今は良いじゃないですか」

良くはないが、今は何の曲のアレンジをするのかが最優先事項なので、つらつらと思考を巡らせる。

「ねぇ、あずにゃん」

「はい？」

「私達のユニット名、なんにしよっか？」

「今決めるのはそこじゃないですよ
せっかくサク先輩が協力してくれてるのに」

「でもでも、出場するのは私達だけだから放課後ティータイムじゃないんだよ？」

「まぁ、そうですけど…」

「ね？じゃあ決めよ～」

「は、はい」

（やっぱり流れやすいな、コイツ…）

どんどん平沢のペースに飲まれていく中野を一瞥した後、考える。

修司曰く、演芸大会の観客は年寄りが半数以上を占めるらしい。

優勝を狙うなら年寄りに好印象の、それなりの曲のアレンジが必要。

「『先輩後輩』とか？」

「それ、ことさら強調されるのも…」

「う〜ん…『唯とあずにゃん』とか？」

「あっ、『ゆいあず』ってどうですか？」

「おぉ！いいね〜！『ゆいあず』！」

「……」

となれば、アップテンポではなくスローテンポが好ましい。
だからといってバラードではなく、例えるなら演歌調や民謡調に。
ん？民謡調？

（ある…確か…）

民謡調というワードが引っ掛かり、検索をした結果、探し当てたその曲の楽譜を一枚手に取り視線を這わす。

「サッくんや、私達のユニット名は『ゆいあず』に決まりました！」

「…ンなこと、どうだって良い」

「ガーン！」

「そんなことより…」

「うぅ…あずにゃん…サッくんがぁ～…」

「どの曲か決まったんですか？」

「はう！あずにゃんまで冷たいよ～…」

俺と中野にぞんざいに扱われたことにダメージを受け、うなだれる平沢をスルーして、中野に一枚の楽譜を手渡す。

「…その曲を今からアレンジするぞ」

「はい！早くやらなきゃいけませんね」

「…まぁ、一時間ぐらいあれば基盤は出来る」

「え！？そんなに早くですか！？」

「基盤はな…それには、アイツの協力が不可欠だ」

そう言って未だにうなだれている平沢に視線を向ける。

「唯先輩の？」

「ほぇ？なに？」

「とにかく時間がねェ…」

引き出しから五線譜を取り出し、右手でシャーペンをクルクルとペン回しの要領で回しながら、左手でギタースタンドに立て掛けてあ

るアコギのネックを掴む。

「…始めるぞ」

「はいっ！」

「おーっ！…って、私は何をすればいいの？」

「…お前が持ってる能力でアレンジが時短出来る」

「もしかして…！」

「ん？ん～…ん？」

中野が合点がついたように平沢を見つめ、その当人は理解出来ずにクエスチョンマークをあちこちに飛来させる。

「ねぇねぇ、サッくん、あずにゃん、何なの？」

「それはですね…」

中野が平沢に答えを教えるさなか、俺はベッドに腰掛けてアコギのチューニングをしていく。

「絶対音感です」

「絶対音感？」

――――――――――

翌日。十五日木曜日。

現在時刻午前十時十二分。

「……」

三年二組の教室は静寂に包まれていた。
カリカリとシャーペンが走る音と時折聞こえる誰かの咳や呼吸の音。

本日、桜高期末テスト当日。

「（やっべェ…　さっぱり分かんねェ…）」

こんな小さな嘆きボイスが、出席番号順に並び変えた俺の席の二つ前からさっきから聞こえてくる。

その嘆きボイスを垂らしてるのは修司。
コイツがどんな成績になろうが俺には全く関係ないので、ひたすら数学の問題を解いていく。

――――――――

翌日。十六日金曜日。

現在時刻午前十時十三分。

今日も今日とて期末テスト。

「……」

日本史の穴埋め問題を解いているとそれは聞こえた。

「（ははは…　日本人なのに日本史が分かんねェや…
諦めって時には肝心だよな?咲也?）」

何故俺にメッセージを送る?

「はぁ…」

小さくため息を吐き、何となしに答案用紙から顔を上げて二つ前の机にてテストと攻防を繰り広げている修司の後頭部を見る。

ボフンッ！

人間火山を噴火させ、そのまま上半身を机に倒す。
どうやら攻防の攻に、防戦一方だった修司はテストに敗れたようだ。

まぁ、どうでも良い。

カリカリとシャーペンが走る音。
誰かの咳や呼吸の音。
そして静寂な教室。

（明日が本番か…）

こんなことを、たまに思いながら時間は確実に過ぎていく。

そして…

――――――――――

翌日。十七日土曜日

現在時刻午後三時ジャスト。

「……何で今日から気温が上がってんだよ…」

「何でって…夏だからじゃない？」

演芸大会当日に、まさかの夏特有のキツい日差しと、まさかの夏特有の厳しい気温に、演芸大会の舞台である修司の家の近くの小さな公園に設けられた安っぽい長イスに座って独り言のように愚痴っていると、隣に座る真鍋が『夏』という正当な理由で返答してきやがった。

「…昨日までは、こんなに暑くなかったじゃねェか…」

「そうだけど、そんなに暑い？」

夏が苦手な俺が参ってるというのに、この生徒会長は涼しい顔だ。

「咲也君は夏が苦手だもんね♪」

「そういえば冬もダメって言ってたわね？」

前列の長イスに座る秋山と田井中と琴吹。
そこに座る琴吹が振り返って笑顔ながらに、後列に座る山中顧問が俺の弱点をプラスさせる。

平沢と中野の勇姿を一目みようと、この場には俺・秋山・田井中・琴吹・真鍋・平沢妹・山中顧問が勢揃い。
鈴木は平沢妹曰く、ジャズ研の練習があり、不参加らしい。

そして修司の言う通り、俺ら以外の観客は年寄りばっかだ。
ちなみに、ばあさんは最前列に座って楽しそうに舞台を眺めてたりする。

「大丈夫ですか？咲也さん」

「大丈夫だ！」

「何で律が言うんだよ」

「…あちぃ…」

「咲也君、日傘あるけど使う？」

「ぷっ！ムギ～！サクには似合わないって～！」

「使わねェが…　お前の発言が腹立つんでカチューシャよこせ…へし折ってやる」

「律も咲也も止めなさいって」

「唯と梓の出番ってこの次の次だったけ？」

「はい、お姉ちゃんと梓ちゃんは十四番です
今は十二番の人ですね」

「とか言ってる間に終わったわよ」

本気でカチューシャをへし折ろうと前列に座る田井中の頭部に手を伸ばした瞬間、山中顧問の声が聞こえたので、渋々手を引っ込める。

「『ありがとうございました～』」

視線を舞台に向けるとエントリーナンバー十二番の三味線を弾いていた老婦人がマイク越しの司会者の在り来たりな賛辞に、一礼して袖に捌けていく姿が。

「『続きまして十三番、『かげみやおおの』のお二人です』」

この司会者のごく普通な紹介に…

「「「えっ！」」」

真鍋と平沢妹と山中顧問が反応を示した。

「ちょっと咲也」

「あン？」

『マジで参加したんだな』と思っていると、真鍋が俺に顔を向ける。

「修司、参加してたの？」

「…残念ながらな」

秋山と田井中と琴吹はアイツが参加することを知っており大してリアクションを起こさなかったが、知らなかった真鍋と平沢妹と山中顧問は俺に質問を浴びせてくる。

「影宮君何するの？」

「知らん」

「お二人って言ってましたけど、もう一人の方は咲也さんの知り合いですか？」

「多分な」

そんな質問を適当に受け流していると、舞台上に一本のマイクスタンドが設置された。
そして…奴等が現われた。

「どーも！」

テンションが高い、何処から仕入れたのか真っ白のスーツと赤い蝶ネクタイ姿の修司が手を叩きながら颯爽と。

「ど、どーも…」

同じく真っ白のスーツと赤い蝶ネクタイ姿の大野が、修司とは対照的な低いテンションで恥ずかしそうにトボトボと。

「なぁ、サク」

「あ？」

「修司と一緒にいるあの人って、マキちゃん達のバンドの…バンド名何だっけ？」

「『ラヴ・クライシス』」

友人のバンド名を忘れた田井中に秋山が若干呆れながら答える。

「そうそう『ラヴ・クライシス』のメンバーの一人だよな？」

「確か咲也君の友達って」

「あぁ…　どんな理由であのアホと一緒に参加したのか知らねェが、恥かいて終わるなアイツ」

現に舞台上の大野は逃げ出したそうにしてる。

「『まぁ、僕達のことなんて、みなさんは全然知らないと思うんで、せめて！名前だけでも覚えていただきたい！』」

よくもまぁ、堂々と喋れるなアイツ。

「『僕の名前は影宮　修司！』」

「『ぼ、僕の名前は大野　充です…』」

「『どうぞ！よろしくお願いしまーす！』」

頭を下げる修司と大野に、ちらほらと疎らに拍手が起こる。

つうか漫才する気かよ…

「『いや～それにしても充君』」

「『な、何かな？影宮君』」

「『今年の暑は夏いですな～』」

「『な、夏は暑いの間違いだろー』」

（うわ…くだらねェ…）

どうやら俺の感想は演芸大会側も同様らしく…

カーン

終了を告げる鐘の音一つが鳴った。
そりゃもう盛大に。

「え！ちょっ！早くね！？」

「いや正しいと思うぞ俺は…」

「『『かげみやおおの』のお二人でした～』」

「待て待てッ！まだ色即是空のネタがこの後にあるっつうのッ！」

「止めてくれ影宮！これ以上の恥の上塗は！あと、それを言うなら抱腹絶倒だから！」

演芸大会側に文句を言うアホに大野が哀れだと感じずにはいられない。

『離せッ！充ッ！俺はまだ…！』とかほざきながら、大野に襟首を掴まれズルズルと引きずられながら、完成度の低い漫才師は捌けていった。

「何がしたかったのかしら…」

「やっぱ恥をかいたな…」

真鍋は修司に、俺は大野に、それぞれ誰しもが思った感想を口に出す。

「まぁ、影宮君のは見なかったことにして…」

「さわちゃんヒドいな…」

「次はお姉ちゃんと梓ちゃんですね」

「頼むから変なことするなよ、唯…」

「大丈夫よ澪ちゃん、梓ちゃんが一緒だから」

「…お前の姉貴が遠回しにけなされたぞ」

「あはは…」

「あ！いや！違うんだ憂ちゃん！私は…」

苦笑いを浮かべる平沢妹に根源の秋山が必死に言い訳を開始すると…

「『続きまして十四番、『ゆいあず』のお二人です』」

司会者が平沢と中野を紹介した。
大会運営者が二つのアンプとマイクスタンドを舞台上に設置し、捌ける。

「そういえば、結局曲はどうしたんだろうな？」

「唯も梓もアレンジが出来ないって言ってたからな」

「……」

田井中と秋山の疑問に俺は口を挟むことなく、夏の日差しの元、舞台を眺めていた。

そして、そこにレスポールを持った人物とムスタングを持った人物が現れた途端に、先程の漫才師とは比べ物にならない拍手が起こる。

そんな拍手の中、顧問が用意した紅を基調とした和服姿で髪型をアップにし、団子にしている平沢と、ツインテールではなくポニーテールにしている中野がマイクに向けて口を開く。

「『こんにちは～！桜ヶ丘高校三年の平沢　唯です！』」

「『二年、中野　梓です！』」

「『二人合わせて…』」

そして何故か互いに背合わせになりキメポーズを決める。

「『ゆい！』」

「『あず！』」

「『で～す！』」

必要ないと思うが上手くキメポーズが決まったことに御満悦な平沢と、緊張してるのか表情が硬い中野がギターをかき鳴らす。

「唯はいつもどおりだな」

「梓ちゃん顔強張ってる」

「私の方が緊張する…」

「……」

普段通りの平沢に安堵する田井中。
緊張感が漂う中野に苦笑いを浮かべる琴吹。
何故そんな気持ちになるか理解出来ない秋山。
ただ無言で舞台上を眺める俺。

「『最初は演歌やろうと思って、コブシを回す練習をしてたんですよ～
こうやって腕を回して～』」

「『そ、そのコブシじゃな～い！』」

まるで先程、華々しく散った前座の漫才師の如く、アイツらより幾

分正面な漫才を始める平沢と中野。

「梓がツッコんでる…」

「これは唯の提案で仕込んできたな～」

「はぁ…」

秋山曰くの『変なこと』を始めた二人にため息一つ。

「『私の方が先輩なんですが、あずにゃんの方がちゃっかりしてるんですよ～』」

「『それを言うなら、しっかりだ～！』」

確かにアイツらよりマシな漫才…といって良いのか疑問だが、年寄りから笑い声が聞こえてくる。

「『それじゃあ、あずにゃん、いきますか』」

「『いきましょう』」

「『あれ～？何やるんだっけ？』」

「『いい加減にしなさい』」

（良いから、早くやれよ）

中々始めない二人に、こんなことを思わずにはいれない。

そして漸く、平沢がピックを持った右手を上げ、演奏が始まる。

「『では！』ふでぺん　～ボールペン～　ゆいあずバージョン』です！」

中野に目配せをし、カウントを取る平沢に、中野がピックを弦に添える。

「へぇ～『ふでぺん』をやるんだな」

「ちゃんとアレンジ出来てるのかな？」

「大丈夫だと思うけど…
うぅ…不安になってきたぁ…」

「……」

田井中と秋山と琴吹。
更には真鍋にも平沢妹にも山中顧問にも俺がアレンジの基盤を築いたことを言ってない。
言う必要はないし言うつもりもない。

『それで、アレンジする曲は『ふでぺん』です』

『それと絶対音感と何の関係があるの？』

『…アレンジする曲はお前が前に歌ってある』

『え？いつ？』

『…今年の新歓直前の部室で、俺が適当にアコギ弾いてたら、お前が歌い出しただろ』

『ん～っと…あ！うんうん！歌った！』

『…あの時の曲でお前らは演芸大会で演奏しろ』

『でもでも、あんまり覚えてないよ？』

『…だからお前の絶対音感を駆使して楽譜を俺が書いていく』

『ほぇ？』

『…とにかく、今から俺が弾く音を『ドレミ』の音階で言っていけ』

『よく分かんないけど、がってんだぁ！』

『…中野は五線譜に書き留めとけ』

『はい！』

記憶を探り起こし出来上がったドレミだけの楽譜に俺が仕上げの作業をして基盤の完成。

俺がやったのはあくまで基盤。

本当は平沢と中野のそれぞれのパート別までやりたかったが、平沢と中野にここまでで良いと言われた。

最後は二人でやりたいんだろうと直感し俺の手助けはここまでになった。

なので、どのように完成したのか俺は聴いてない。

そして平沢と中野による演奏が始まった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

♪♪…

唯と梓がギターで前奏を奏でる。
アレンジしているから、聴き覚えがない曲。

なんていうか、演歌じゃなくて…民謡調とか音頭みたいな独特な音色。

（そっか）

お年寄りが多いから、こんな曲調にしたんだな。

私がその意図を理解したのと唯が歌いだしたのは、ほぼ同時だった。

「『♪ふ～でペンＦＵＦＵ～
ふ～るえるＦＵＦＵ～
は～じめてキ～ミへのＧＲＥＥＴＩＮＧ　ＣＡＲＤ～』」

あれ？この曲、どこかで聴いたことある…

「なぁ澪、ムギ、この曲、聴き覚えないか？」

それは律も同じみたいで、私とムギに確認をしてきた。

「私も同じこと思ってた
確か、最近聴いた気がするんだけど…」

「澪ちゃんも？私も最近聴いた気がするの」

「う～ん…　まぁ、とりあえず今は唯と梓の舞台を見ようぜ
その内思い出すかもしれないしさ」

「そうね～」

「うん」

と、頷いたけど気になるな。

律もムギも私も最近聴いたことがある。
いつだったかな？

「『♪と～きめ～きＰＡＳＳＩＯＮ～
あ～ふれ～てＡＣＴＩＯＮ～
は～みだしちゃうか～もね～』」

だんだん思い出してきたぞ。
確か、今年の四月に唯が歌ってたんだ。
えーっと…部室で。

「ギター…」

唯だけじゃなかった。
隣に誰かいてギターを弾いてた。
場所は部室だから軽音部。
ギターを弾くのは唯と梓と咲也…

「咲也…」

「『♪キミの笑顔想像し～て　いいとこ見せたくなるよ～
情熱をにぎりしめ　振り向かせなきゃ～』」

「あっ」

思い出した！
今年の新歓の前に部室で唯と咲也が演奏した曲だ！

じゃあ、アレンジが出来ないって言ってた唯と梓が、ちゃんとしたアレンジ曲を演奏出来てるのって、もしかしたら…

（咲也が手伝ったから？）

そんなことを思って、つい後ろの席に座ってる咲也に顔だけ振り返る。

「……」

「ぁ…」

咲也は…言ったら怒られるから言わないけど、相変わらずの機嫌が悪そうな顔で唯と梓の演奏を…ううん、唯と梓をジッと見ていた。

（そうだな、律の言った通り、唯と梓の舞台を見なきゃ）

咲也が何かしたのか気になるけど、今は唯と梓だ。
だから私は前を向く。

（後で聞いてみよう）

「『♪愛をこめてスラスラとね　さぁ書き出そう～
受け取ったキミに～しあわせが～つながるように～
夢を～見せてクルクルとね字が舞い踊る～
がんば～れ　ふでぺ～ン
こ～こまでき～たか～ら～
かなり本気よ～☆』」

♪♪～♪♪～……

―――――――――

現在時刻午後五時五十四分。

「咲也～…　おで、ショックだぁ～…」

「何でなまってんだよ…」

「唯ちゃんと梓ちゃんの漫才の方がウケるってどげんこつ～…」

「何で博多弁になってんだよ…」

「せっかくテスト勉強もしないで充と一緒にネタ作ったのに～…」

「…つうか大野はどこいった？」

「アイツなら帰ったよ
『恥かいた』って言い残して」

「そりゃ正論だ」

演芸大会が終わった公園は、祭りの後の寂しさみたいに物悲しい雰囲気になっていた。

夕暮れに伸びる私達の影。
その先には唯と梓とおばあちゃんの姿。

結局、唯と梓は優勝出来なかった。
優勝したのはその後に尺八を披露した人。

何でダメだったんだろ?
贔屓目ナシでも良かったと思ったのに…

私達は唯と梓が参加賞のタオルをおばあちゃんに渡しているのを離れて見ていた。

「来年はやっぱりお前と出たいと感じました」

「…誰に感想言ってんだ?」

「アンタだよッ！」

「うるせェな…　黙っとけ」

「ヒドッ！けッ！来年は西野か水本と出てやるからなッ！」

「勝手にしろ」

どうやら影宮君と会話が終わったみたいだから、ケータイを取り出している咲也に話し掛ける。

「咲也」

「あン？」

聞きたかったことがある。
だから私は咲也に近付いて質問をした。

「もしかしてなんだけど、唯と梓のあの曲、作ったのは咲也？」

私のこの質問に…

「さぁな…」

と、視線をケータイに落とし曖昧な返事をする。

あぁ…やっぱりだ。

咲也がこんな態度を取るのは肯定みたいなもので、素直じゃない証拠。

「クスッ」

だから、そんな咲也についつい笑ってしまった。

「…何笑ってんだよ」

「ううん、何でもないよ」

「はぁ…」

咲也のことだから、私が気付いた事に気付いたんだろうな。
でも、それを言わないでため息をつく。

（私も言わないでおこう）

言ったら絶対に律が、からかいそうだしな。

「サク先輩」

「ンだよ…」

でも、私が言わなくてもそういう美談は他の人から漏れちゃったりする。

それは、一足先に私達のところに戻ってきた梓だったり。

「曲のアレンジ、手伝ってくれてありがとうございました」

「……」

頭を下げる梓に咲也が何か微妙な顔をしてる。

あんな表情をするなんて珍しいな。

「なぁんだ、やっぱりサクが一枚噛んでたのか～」

「律、気付いてたのか？」

「さっきムギと話してて思い出したんだよ」

「うん！あの曲は咲也君と唯ちゃんが演奏してたぁ～って♪」

「そういう澪も気付いたんだな」

「え、あ、うん」

「全く、カッコいいことするよな～♪」

やっぱり律が咲也をからかいだした。
肘で咲也の腕を突っ突く。

「俺は基盤を手伝っただけで、仕上げたのは平沢と中野だ…」

「でも、サッくんが手伝ってくれなかったら、どうしようもなかったよ
ねぇ？あずにゃん」

「はい！」

いつの間にいたのか気付かなかった唯の言葉に梓が笑顔で頷く。

「別に謙遜しなくても良いのに」

さわ子先生の言う通りだと思うけど、それが咲也なんだよな。

「よッ！憎いね～！青大将～！」

「青大将って蛇のことよ？」

「あれ？そーだっけ？」

間違いを言う影宮君も、それを指摘する和も笑顔で。

「梓ちゃん、カッコ良かったよ」

「そ、そっかな？ありがとう憂」

笑顔の憂ちゃんも。

その言葉に照れ笑いを浮かべる梓も笑顔で。

「澪、来年は『リツミオ』で出ないか？」

「『ミオムギ』が良いな」

「わぁ～♪澪ちゃんと一緒ね～♪」

「だったら衣装は任せてね♪」

「「いりません」」

とか言って私と律は顔を見合って笑い出して。
ムギもさわ子先生も笑顔で。

「じゃあ来年は『ユイサク』で決まりだね！」

「…決まってねェよ」

サムズアップする唯も笑顔で。
でもやっぱり咲也だけ笑ってない。

夕暮れの小さな公園で伸びる私達の影の中心には、咲也の影。

それはまるで、咲也を中心にして私達を繋ぐ輪みたいで、何だか幻想的だと思ったんだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

結果は振るわなかったが、ばあさんが喜んでいるので良かったんじゃないかと思う。

「あの、サク先輩」

「あン？」

「難しいんですね、曲を作るのって」

俺と中野の視線の先には夕陽に照らされて談笑する平沢達。
そんな光景を俺達は離れて見ていた。

「ギターもそうですけど、サク先輩には色々学ぶとこがありますから、これからも色々教えてください」

「何改まってんだよ…」

「何かサク先輩に言わなきゃいけないなって思って…
先輩達が卒業したら、私が曲作りしなくちゃいけないから…」

「……」

中野の視線の先には、平沢と秋山と田井中と琴吹。

「…お前だけじゃねェかもしれねェぞ」

「え？」

俺の視線の先には平沢妹。

「それって…」

「まぁ、深く考えるな…

ちなみに曲の方は及第点だ」

「何かついでみたいな言い方しますね？」

視線を中野に向けると、ガキっぽく小さく頬を膨らませていた。

「…精進しろっつう意味」

「そんなことをついでみたいに言わないでくださいよ」

「そいつは悪かったな…」

そう言って平沢達の元に歩き出す。

「クスッ　そうですよ、悪いです♪」

そして俺の後ろを中野が笑顔を浮かべてついてくる。

本日七月十七日土曜日。

高校生活最後の一学期に起きたイベントはこれにて全て閉幕……かと思いきや。

『実はさわ子…結婚するんだ』

『あ～ぁ…　唯とサクがこの暑さでダメダメになっちゃったな』

まだまだイベントはありそうだ。

第九十話（前書き）

猛暑とＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ編です。

第九十話

２００４年３月１日。

ふと振り返れば、私が三年間通った母校の桜高の校舎。
その校門には『私立桜ヶ丘女子高等学校　第七十八回卒業証書授与式』の看板が立て掛けられ、卒業したことを改めて実感する。

『卒業しちゃったねー…
何も実感ないけど』

けど紀実はそんなことは感じてないみたい。
帰り道を歩く度に紀実のポニーテールがユラユラと揺れながらの言葉に、私は、小さく笑う。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

ミ～ン…　ミ～ン…

聞こえてくるのは蝉なのかヒグラシなのか分からない夏特有の耳障りな大合唱。

「あずにゃ～ん…あぢゅいよ～…」

「私も暑いんですから、抱き付かないでくださいよ…」

聞こえてくるのは平沢の弱々しいボイスと中野のうんざりしたボイスのネガティブハーモニー。

「でも確かに今日は特に暑いよな
髪が長いと首が蒸れるよ」

「そんなときは～…」

「な、なんだよ…」

「髪をくくれば良いのだ！」

「ちょっ！律！」

「ほ～れ、動くな」

「もう…」

「はい！でーきた！」

「ツインテール…？梓みたいだな…」

「うーん、やっぱり似合わな…」

キュッ

「お前がやったんだろ」

「…み、澪さん…　首を絞めないで…　く、苦しい…」

次いで聞こえてくるのは田井中の悶絶する苦悶ボイスと秋山の般若オーラの不気味な雰囲気。

「咲也君、大丈夫？」

そして琴吹が、長イスに仰向けに横たわり、クールビズな格好で安物扇子で顔を覆ってる俺に気遣いボイスをかける。

「……」

しかし、俺はピクリとも反応を示さない。

というか、示せない。

本日七月十九日月曜日。

日本列島に熱波襲来に伴い、気温が上昇する度に俺の活動気力が反比例し、下降の一途をスタスタと辿っていく。

「私達がこんなにうだってるのに、夏が嫌いな咲也にとっては地獄だな」

「澪ちゃ～ん…　私も夏ダメ～…
夏なんてなくなればいいのに～…」

「とか言って、どうせ冬になったら逆のこと言うんだろう？」

「そんなこと言わないよ～　りっちゃん隊長～」

「いや、今のだらけてる唯見てると、簡単に想像できるぞ」

猛暑と呼べる本日。
放課後の部室は俺にとってはサウナにいるようなものだ。

そんな猛暑の対策として、いつかの残暑が厳しい日に行ったクールビズスタイルをもって立ち向かったが、結果言わずとも敗戦。

更に部室は防音効果が施されているからか、熱が逃げずに停滞している。
部室の窓を全て全開にしちゃいるが、効果はあまり感じられない。

この暑さから逃げようと、せめてもの抵抗で長イスに横たわり安物扇子で、ひたすら扇いでいたが、生ぬるい風が顔に直撃するだけで一向に涼を得られない。

果てに体力を消耗し、扇子を扇ぐのが億劫になり、俺は物言わぬ生ける屍状態に陥ってしまった。

「咲也君？」

「……」

なので、再度琴吹が呼び掛けてもピクリとも反応を示せない。

「どうしたんですか？ムギ先輩」

「咲也君が全然動かないんだけど…」

『えっ！？』

別に動かないんじゃなく、動きたくないだけだ。
しかしこんな俺の状態に軽音部員達に不安が過ぎったようだ。

「サッくん大丈夫？」

「本格的にマズいのかサク？」

「脱水症状とかなってたり…」

『えっ！？』

『なってねェよ…』という言葉を秋山にぶつけようとも、最早口を開くのも億劫だ。

「ム、ムギ！紅茶だ！サクに早く飲ませろ！」

「う、うん！」

「ちょっと待て！スポーツドリンクを飲ませた方が良い！」

「私、買ってきます！」

「サッくん死なないでー！」

「……」

俺の顔には死者の打覆いのように扇子が。
故に視界は遮られているが、平沢達の慌てたような声とドタバタとした慌ただしい足音で状況は把握出来る。

本音を言ったら動きたくないし口も開きたくない。
しかし、事が何やら大事になりかけているので怠惰な動作で…

「…うるせェから静かにしろ…」

ムクリと長イスから起き上がり、かなり気怠そうに警鐘の鐘を鳴らす（特に平沢と田井中に）

「サッくん！良かったぁー！」

勝手な勘違いで勝手に感極まっている平沢が『生還したよー！』とか言いながら、俺に抱き付こうとする。

「…あちぃから近寄んな…」

「ブヒッ」

しかしそれを扇子を持ってない左手一本で、平沢の頭部を押さえて阻止する。

「ホントに心配したのにヒドいよ～」

「…だからって抱き付こうとすんな…
やるんなら中野にやっとけ…」

「あずにゃ～ん！」

「ニャッ！？だから暑いって言ってるじゃないですかぁー！」

スポーツドリンクを買いに行こうとして、扉付近に突っ立っていた

中野に平沢が瞬時に抱き付く暑苦しい光景から眼を背けると琴吹と視線が衝突する。

「咲也君、大丈夫なの？」

「…大丈夫じゃねェが、運動もしてねェのに脱水症状を起こす程、やわな身体じゃねェ…」

「にしては、声に元気がないぞ？」

「…こんな猛暑の中、元気が有り余ってる奴がいたら見てみてェな…」

団扇でパタパタと自分を扇ぐ田井中の発言に覇気なさげに答え、扇子を扇ぎながら窓に近付いて微風を浴びる。

「…ん？」

すると、何となしに水槽の中をフヨフヨと遊泳している亀に視線を

向けると奇妙な現象を目の当たりにする。

「…おい…」

視線を亀に向けたまま特定人物ではなく、誰でも良いので部室内に呼び掛けると秋山が反応した。

「どうしたんだ?」

「…亀が羽衣を纏ってんぞ…」

「「「羽衣?」」」

実際に見たままを報告すると秋山と田井中と琴吹が水槽に近付き、まじまじと観察開始。

「ホントだ、トンちゃんが…」

「えっ？トンちゃんがどうかしたんですか？」

秋山の言葉に未だに平沢と戯れていた中野が心配そうな表情で早足のスピードで水槽に近付く。

「あぅ～…　あぢゅいよ～…」

「…自業自得だろ…」

「サッくん、扇いで～」

「ヤダ」

中野に遅れること数秒。

『ぶぅぶぅ』と（文字通り）口を尖らせながら平沢もトコトコとやってきた。

「トンちゃんに、何かついてますね…」

亀の身に起こった奇妙な現象とは、例えるなら本当に羽衣を纏ったような姿に。

亀の甲羅や四肢に白っぽい薄い膜が引っ付いてあり、フヨフヨと遊泳する度に羽衣（仮）がユラユラと揺れ動く。

「なんだこれ？日焼けでもしたのか？」

「んなわけないだろ」

的外れな事を言う田井中に秋山がツッコむ。

「脱皮したのね」

『脱皮！？』

「……」

琴吹の思いがけない発言に一斉に顔を琴吹に向ける平沢達。
俺は羽衣の正体が判明したので、後はどうでも良さげに長イスに座って深く腰を沈める。

■■■■■■■■■■■■■■■

『大学生って何やるのか見当もつかないわね…』

『さわ子はやること決まってるのに、何言ってんの』

私の前を歩いていた紀実がニヤニヤした顔で私に振り向く。

『な、何よ　その顔…』

『風間って人が大学行くから、さわ子も行くんでしょ？』

『うっ…』

思わず言葉に詰まる。
私が大学進学を選んだ理由は他校の風間君がその大学に行くから。
だって、出会いがない女子高でせっかく好きになった人と出会えたのに、告白もしないでサヨナラなんて嫌じゃない。

『ホント、さわ子って恋に一直線だよね』

『初恋の人がワイルドな女が好きだからって理由でアコギ壊してフライングVを手に取ったぐらいだし』

紀実に同意するみたいに隣を歩いていた彩が付け足す。

『良いじゃない別に
そのおかげでＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬを結成したんだから』

『自分で言うなって　ね？あやめ』

三対一の立場に私を追い込もうと紀実が私の隣を歩いていたあやめに、そう顔を向ける。

『ひっく…　ひっく…』

『あやめ？』

でも、あやめはそれどころじゃなかったみたい。
ポロポロと涙を流していた。

『よしよし、良く我慢してたよ』

彩があやめに近付いて、慰めるように頭を優しく撫でる。

『ごめんね…　泣くつもりじゃなかったんだけど…』

『そっか、そりゃ泣けないわよね』

私は理解した。

軽音部には後輩の娘達がいる。
私達はその娘達に憧れみたいな印象を持たれてたから、いつもドラムを激しく叩くようなあやめが、泣くなんて弱い部分を見せたくなかったのね。

『あやめ、泣いてる暇なんてないわよ?』

涙を流すあやめに、紀実が明るい声でそう言う。

『そうよ　私達大学生になるんだから』

私も励ますようにあやめの肩を叩きながら。
最後に彩が…

『大人になるってこと
それにいつまでも泣いてたら後輩に笑われちゃうよ?』

私と紀実と彩の励ましの言葉が効いたみたい。

溜まった涙を拭いながら、あやめが顔を上げた。

『うん…！』

その表情はとても豊かで、私達も自然と笑顔になるような笑顔だった。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

亀の羽衣の正体が脱皮だと分かり、後はどうでも良いのだが、聴覚の機能をＯＦＦには出来ないので否応無しに情報は入ってくる。

琴吹によると亀は爬虫類なので脱皮をするらしい。

初耳だ。

病気ではないと分かり、胸を撫で下ろす平沢達（特に中野）だったが別の問題が浮上した。

『あの、澪先輩』

『うん？』

『飼育本に書いてあるんですけど、成長させるためには今より大きな水槽が必要らしいです』

『そうか　脱皮してるってことは、成長してるんだな』

『トンちゃんは大きくなりたがってるんだね～』

『だったらこれより大きい水槽がウチに余ってるわ』

『そうなんですか？』

『…あちぃ…』

『…ンだよ…』

『ていうかサク』

『少しは会話に交ざれよ』

『…入る余地がねェ…』

『サッくん、トンちゃんが成長するんだって』

『…知ってる…　亀のために琴吹んチの水槽持ってくるんだろ…』

『サク先輩　亀じゃなくてトンちゃんです』

『…ハイハイ…』

『それで、どうやってムギの家から学校に持ってくる?』

秋山の言葉が問題に。
現在、亀の水槽は中々にデカい。
しかしこれよりもデカい水槽が必要になり、それを琴吹が提供してくれるのは良いが、どうやって持ってくるか。

とても手に持って、移動出来る品物ではない。
あまつさえ琴吹は電車通学。
つまり桜高から琴吹家は距離があるということ。

しかしそれを解決出来る人物がいることを部長が思い付く。
それは俺達三年のクラス担任であり、軽音部の顧問でもある、あの人。

『そういえば、さわちゃんって車持ってたよな？』

『あっ、そうでしたね』

山中顧問は車通勤なので車を所有している。
なので山中顧問に琴吹家から桜高まで水槽を運んでもらおうと利用…もとい、頼もうと、早速…

『では、サッくん隊員
行って参ります！』

『私達の身にもしものことがあったら…後は頼んだ』

平沢と田井中が敬礼して、俺のリアクションを期待していたが、この猛暑に体力と精神を削られている俺は、視線も向けずに長イスに座っていた体勢から再び仰向けに横たわり、『さっさっと行け』と

いう意味を込めて扇子をヒラヒラと上下に動かす。
『ぶぅぶぅ』と（文字通り）口を尖らせながら平沢と田井中が職員室に向かったのが今から約五分前。

「それにしてもホントに暑いよな」

「そうですね　サク先輩があんな調子じゃ練習も出来ませんし」

「…仕方ねェだろ…　ギター弾ける気力が湧かん…」

「ギターとベースって体力使いそうだもんね」

「そうだな　でも一番体力使うのはドラムだよ」

「律先輩も練習しなさそうですね」

「…おいニャカ野…」

「ニャカ野じゃないです！」

「…『も』って俺を平沢と田井中のだらけ組の一員にすんな…」

「そんなつもりはありませんけど、今のサク先輩はダラダラしてますから」

「…太陽が悪ィ…」

「何言ってるんだ咲也」

「…おい誰か太陽ぶっ壊してこい…」

「無理に決まってるだろ」

「…じゃあ水ぶっかけてこい…」

「だから無理だって」

「…行け…琴吹…」

「え？」

「…副部長命令…」

「澪先輩！ムギ先輩！サク先輩がおかしくなっちゃいました！」

「よっぽどツラいんだろうな…
いつもの咲也じゃない…」

「あはは…」

俺自身もおかしなことを言ってると理解している。
完全に猛暑に敗北した瞬間だ…

その後、俺は再び生ける屍状態に陥り、秋山と琴吹と中野が俺に色々と言葉を掛けるが、反応する筈もなくスルーしていると…

ガチャ

「「ただいまー」」

平沢と田井中が無事に帰還した。

「おかえり～♪」

「さわ子先生、なんだって？」

「水槽、運んでくれるって聞き入れてくれましたか？」

とりあえず視線を平沢に向けると『それが…』と前置きし、口を開いた。

「さわちゃん、さっき帰っちゃったって」

「「「えっ！」」」

「……」

この平沢の結果報告に秋山と琴吹と中野は驚愕し、俺は珍しい事もあるもんだ、と思う。

三度のメシより琴吹の茶と菓子が好きそうなあの人が、俺達に何も言わずにさっさっと帰るとは。

「何か用事があるんだってさ」

「そっか、だったら仕方ないな」

田井中の発言に秋山が頷いた。

「とりあえずトンちゃんは今すぐ成長するってわけじゃないから、水槽は後回しな」

この部長らしい田井中が俺達を見回して確認を取り、平沢と秋山と琴吹と中野は頷く。
俺はそもそも亀のことより我が身の方が大事なので特に反応を示さなかった。

「コラコラ、サク」

「…あン…？」

「何か反応しろって」

「…サンセイ…」

「うわぁ、投げやりな返事…」

異論を唱えると厄介なことに発展しそなので渋々口を動かすと、失礼な反応をする田井中。

私達は立ち止まる。
私達はお互いの顔を見る。

河口　紀実ことクリスティーナ。
ギター&コーラス担当。

日野原　彩ことデラ。

ベース担当。

江藤　あやめことジェーン。
ドラム担当。

そして私。山中　さわ子こととキャサリン。
ボーカル&ギター担当。

私達が立ち止まったこの場所は、帰り道が一緒の私達四人がここで別れる場所。

こんな風に制服着て、喋りながら桜高から帰るなんて、今まで当たり前だったことが明日からは無くなる。

私達は今日、卒業したから。

『私達…』

『ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬは…』

『永遠に…』

紀実が笑顔で口を開き、彩とあやめが続く。
そして最後に私が…

『不滅だぁーッ！！』

ライブのＭＣみたいに思い切り叫ぶ。
近所迷惑なんて言われても今日は許してほしい。
だって今日は、当たり前が当たり前だった日なんだから。

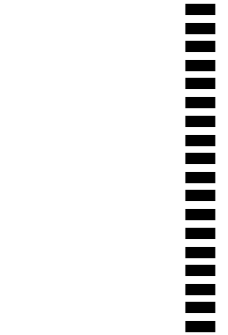
『あっはははっ！』
『ふふっ！』
『あはは！』
『ははははっ！』

私達は笑った。ひたすら笑った。

みんな、目尻に溜まった涙をごまかすために笑った。

近所迷惑なんて言われても今日は許してほしい。

だって、卒業しちゃったんだから…



結局、俺が練習も出来ない程に暑さに参ってるので、この日の部活は早めに終了。

「サッくん…　あぢゅいよ…」

「…身をもって体験中だ…」

「あ～ぁ…　唯とサクがこの暑さでダメダメになっちゃったな」

日差しがかなり厳しい帰り道。
俺と平沢はダラッダラッとうんざりしながら歩いていると、田井中が苦笑いを浮かべる。

そしてこの普段より早めの帰宅が、ある出来事に遭遇するハメになるとは、誰が思っただろうか。
誰も思わなかった筈だ。

「あれ？」

「どうしたの？澪ちゃん」

「あそこにいるのって、さわ子先生じゃないか？」

立ち止まった秋山の指差す数十メートル先には、辺りをキョロキョロと挙動不審に見回す山中顧問の姿が。

ここから、高校生活最後の一学期のラストを飾るイベントが、ゆっくりと幕を開いた。

第九十話（後書き）

補足。

さわ子の年齢は公式には２５～２６と曖昧な設定になっており、原作最終回では『五年経ったら私、三十路になっちゃうわね…』と言ってますから、本作では、

一年　二十三歳
二年　二十四歳
三年　二十五歳

にしました。

ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの紀実は軽音部時代は黒のポニーテールになってます。

デラとジェーンの本名が分からなかったので、勝手に名前をつけました。

第九十一話（前書き）

猛暑とＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ編その二です。

第九十一話

「サク、そこにいると見つかるからお前もコッチこい」

「…見つかったらわりィのかよ…」

「何やってるのかしら？先生」

「いつも帰ってくのと違う方向だな」

「おぉ！澪ちゃん探偵みたい」

「よーし　尾けるぞ」

このジワジワと熱気漂う酷暑な猛暑の帰り道の道端で俺達は何をやってんだろうな、と思う。

秋山が山中顧問を発見した途端に何を思ったのか、天然とカチューシャとレフティとお嬢様とツインテールは、ほとりに整然と連なっている一本の街路樹に身を隠した。

そんな怪しい奴等の仲間だと道行く人々に思われたくない俺は、宇

宙に存在する炎の星からの嬉しくないプレゼントをサンサンと浴びているとカチューシャに手招きされた。

素直に従う俺ではないが、いかんせんプレゼント内容が非常に厳しいので、木陰に逃避。

そしてカチューシャ部長が尾行など言い出した。

「ちょっ…！良いんですか？そんなことして、もしバレたら」

「…無駄な抵抗だ…」

「へ？」

正論を吐くツインテールに興味津津な様子で意気込む人物を指差す。

「左に曲がったわ　さぁ早く！」

「ムギ先輩がノリノリだー！」

「はぁ…」

身を屈めて真っ先に忍び足で進んでいく琴吹に、ため息一つ。

そんな琴吹に田井中が続き、流されるように秋山と中野が順次に。

俺は差当たりそれに付き合う義務も責務も見当たらないので踵を返し、別ルートで帰路に着く。

「サッくん！私達も行くよ！」

「…『達』って俺を含むな…
…後サッくん言うな…」

が、しかし。平沢にアコギを持ってない左手をガッチリとホールドされ、行く手を遮られた。
なのでその手を振りほどく。

「早く早く！みんな行っちゃうよ！」

「…おい…」

再び、が、しかし。
振りほどかなくとも自然と手は離れた。
その理由は平沢が俺の背後にテッテケテーと回り込み、背をグイグイと力任せに押してきやがるからだ。

「行くんならお前らで行け…　俺は帰る」

「ダメ」

「…断わる」

「サッくんいなきゃダメ」

この酷暑な猛暑の中、意固地な平沢に抵抗する気力がどんどん失われていく。
その結果…

「よ～し　ターゲット確認」

商店街まで連れてこられてしまった。

呆気なく平沢に連行され、先を進んでいた田井中達と合流。
そして俺達はまたもや、山中顧問に見つからないようにビルの柱に身を隠す。

ちなみに尾行されてるとは露程も知らないであろうターゲットは、とある店の前で立ち止まり、しきりに腕時計に視線を落としては誰かを待つように佇んでいた。

「…こんなことに意味があんのか？」

「でもでも、こういうのってなんかワクワクするよね～♪」

「うんうん♪探偵さんみたい♪」

そんな答えを期待して言った訳じゃないが、平沢と琴吹は嬉々と答える。

まぁ、平沢がズレた発言をするのは今更だし、琴吹も興味のストライクゾーンが太平洋のように広いのも今更なのでスルー。

「でもさわ子先生、何をやってるんだろうな？」

「…誰か待ってんだろ」

あまりにも自然に秋山が質問するもんだから思わず当たり障りのない返答したが、お前こそ何をやってるんだ。

何故普通に尾行に付き合ってんだよお前。

あと…

「あっ　何か周りを気にしてますよ」

お前もだ中野。

幾ら流されやすい体質だからって少しは疑問に思わないんだろうか。

「ねぇ、サッくん」

「サッくん言うな」

「さわちゃん、誰を待ってるのかな？」

「知らねェよンなこと…」

「そういえば…」

すると田井中が何か心当たりがあるらしく、眼を細めて思案に暮れる。

「先週、軽音部の卒アル写真を撮り終えたあと、さわちゃん　なんか怪しげに電話とったよな」

「……」

そういえば、そんなことあったな。

興味が薄かったのですっかり忘却していた。

「先週といったら…」

すると、今度は琴吹が『むむむ…』と唸りながら顎に手を当て思案顔に。

「私と咲也君が一緒に登校した時も先生、誰かを待ってたわ」

そういえば、そんなことあったな。
興味が薄かったのですっかり忘却していた。

「なるへそ　先週のさわちゃんの行動を考えると…」

「すごぉい！りっちゃん本物の探偵さんみたい！」

「あ、じゃあ牛乳とアンパン買わなきゃ！」

「何でですか？」

「だってあずにゃん、張り込みっていったら牛乳とアンパンは必要だよ」

「…ドラマに影響されんな」

「ていうかそんなに長く、さわ子先生を見張るのか？」

秋山の疑問に『しねェよ』とバッサリ答えると、琴吹に尊敬な眼差しで凝視されていた探偵気取りが推理結果を告げる。

「やっぱり彼氏だな」

「安直な推理だな…」

「何を言うかっ　あのさわちゃんを見てみろ！」

推理がけなされたことが心外だったのか、やや膨れっ面のデコ探偵が柱から半身を出し、ビシッと勢いよくターゲットを指差す。

「見ろ！あの挙動不審な動き！そして、先週の電話にムギの目撃談！どう考えたって彼氏だ！恋人だ！」

息継ぎもせずに一息で一気に捲し立てる。
結果息切れを起こし、肩で息をする程に。

「ホントだ～　さわちゃんキョロキョロしてる」

「まさか先生にホントに恋人がいるんでしょうか？」

「でも、ずっと独り身で寂しいって言ってた気が…」

デコ探偵の一応筋が通ってる推理に平沢と中野と琴吹が柱から半身を出し、ターゲットを観察しだす。

「どーだ！サク！」

「…まぁ、お前の推理が合っていようがいまいが、顧問に恋人がいようがいまいが、俺にとっては果てしなくどうでも良い」

「うわぁーん！ミーオー！私の苦労が水の泡だー！」

全ての事柄を無関心という刃で一刀両断すると、何故か秋山に泣き付く田井中。

「まぁ、先生にも色々あるんじゃないかな」

一応慰めるように田井中の頭を撫でながら、どこか無常な悟りで呟くように言う秋山に平沢達がピクリと反応する。

「澪ちゃん、色々って？」

先陣きって平沢が顔をターゲットから秋山に向けて問い掛ける。

「えっ!?ち、違う!私は何もないぞっ!」

まさか自分の発言がこんな展開になるなんて思わなかった秋山は、
顔を徐々に朱色に染めながらワタワタと慌てふためきながら必死に
弁解開始。

「確かに澪は美人だしな
女子だけじゃなくて男子にも憧れるやつはいてもおかしくはない」

「そうですね」

「な、何でそういう話になる!?」

「澪ちゃん、おめでとう~」

「勝手に話を進めるなっ!」

「ジーッ」

「ムギも見つめるなっ！」

女子というのは自分のではなく、他人の色恋沙汰が大好物な生き物らしい。

井戸端会議ならぬ道端会議にて当初の目的を忘れ、ガールズトークを始める平沢達（秋山に根掘り葉掘り聞き出してるようだ）

「……」

無論、そんなもんに参加する俺ではないので、今がチャンスとばかりにこの場からエスケープしようかと足を動かす。

「で、サクはどうなんだ？」

「お、お答えをどうぞ！」

「あぁ？」

三度目の、が、しかし。
その途端に再び平沢にガッチリと左手をホールドされ、マイクの要領でスッと右拳を差し出された。

「…質問の意味が分からん」

とりあえずホールドを解除して右拳を平沢に押し返し、田井中に視線を向ける。

「サクから見た澪の印象だよ
男子にも澪に憧れるヤツとか、好意を抱いてるヤツがいるかもしれないからな
実地調査として身近な男子はサクだからな」

「と、ということでサッくん、お答えをどうぞ！」

「……」

いや、だから意味分かんねェし。

何でそんなもんに答えねェといかん。

なので、否定の態度を取ろうとしたが…

「ンだよテメェら…」

平沢と田井中は勿論のこと、琴吹と中野まで興味津津な様子で視線をプレゼントしてくれる。

（アホらしい…）

と、思いながら四つの視線を回避するために顔を背ける。

「～ッ！」

しかし、その先には茹蛸状態の秋山が。

どうする？この状況？

後方、左右共に興味津津な視線の矢がグサグサと俺に突き刺さり、前方にはスキル発動寸前だが、俺からの答えに期待してる感じな秋山が。

こういう状況は窮地と呼ぶんだろうが、生憎と俺は修司曰くの鋼のハートの持ち主。

なので、てんで動揺もせずに…

「普通」

と、答える。

「はぁ…やっぱりサクだよな」

「良かった…　咲也に嫌われてなかった…」

「ホッ…」

「唯ちゃん？」

「ほぇ？」

「…ううん、何でもない」

「唯先輩…うーん…」

安堵の息を吐いたり、呆れたり、首を傾げたり、胸を撫で下ろしたりな様々な反応をする面々を横目に半ば忘れかけられていたターゲットの様子を伺うと…

「…残念だったな田井中」

「え？まさか！やっぱり澪の…！」

「「えっ！？」」

「違ェっつうの…
お前の推理はハズレだ」

傍迷惑な勘違いをしている田井中と眼を見開く平沢と秋山に親指でクイッとターゲットを見ろという仕草をする。

「あっ　先生が誰かと話してますね」

平沢達のガールズワールドに巻き込まれている時に、山中顧問の待ち人が現れたようだ。

「あれ？女の人だね」

平沢の言う通り、その待ち人は金髪のボーイッシュなショートカットの女性。
つまり、田井中の自信ありげな推理はハズレ。

「先生の相手が女の人…」

「いやムギ、深読みしなくて良いから」

「さて…」

その金髪女性は山中顧問と二、三言葉を交わした後に共に歩き出した。

親しげな様子から察するに待ち人は、あの人で間違いないだろう。

ここまで尾行した理由は山中顧問の『相手は誰だ?』が根底で、その謎が解けたので踵を返す。

「ストップ!サッくん!」

「…だから何だよ」

本日四度目の、が、しかし。

本日三回目になる平沢による俺の左手ホールドにより、やっぱり行く手を遮られる。

とりあえずホールドを解除する。

「帰っちゃダメだよ」

「だからなんでだ…」

「ドラマだったらここから犯人を追跡する場面だよ?クライマックスなんだよ?」

「…これはドラマじゃなくてリアルだ」

「ていうか、まだ追いかけるんですか?」

「当たり前だろ　ここまで来たら徹底的に調査してやる!」

「もう良いじゃないか
さわ子先生の相手が分かったんだから」

「でも澪ちゃん、さわちゃんの相手の人のこと、詳しく知りたくない?」

「いや、私は別に…」

「……」

チャンス到来。
平沢は秋山と会話中。
田井中は中野と会話中。
琴吹はターゲットを見失わないようにジッとあの二人の後ろ姿を見つめている。

誰も俺がゆっくり後退していることに気付いてない。

そして、木を隠すには森の要領で夕暮れが近付くにつれ賑わいをみせる商店街の人波に紛れ込みエスケープ成功。

「とにかく！さわちゃんを追うぞ！」

「りっちゃん！先生達は道路を渡ったわ！」

「ムギ先輩が夢中だー！」

「やっぱり行くんだな…」

「よぉし！行くよ～！サッくん…って、あれ？」

「どうしたんですか？」

「サッくんがいなくなっちゃったぁー！」

「咲也君、迷子になっちゃったのかな？」

「咲也に限ってそれはないだろ」

「むぅ…　逃げたなサクめぇ」

「うぇぇ～…　カムバーック！サッくーーんっ！！」

――――――――――

ここ最近、こんな事を思う回数が多い。
それは『珍しい事もあるもんだ』と思うこと。

平沢達と別れ、夕暮れになり、幾分気温が下がったいつも帰り道をダラダラと牛歩していると…

『咲也』

と、声を掛けられた。
立ち止まりノソリと首を動かし後方を見ると、そこには眼鏡の生徒会長こと真鍋が片手を上げながら涼しい顔で歩いてきた。

『一人？』

『…俺の周りに背後霊や自縛霊の姿が見えるか？』

『見えないわ　つまり一人ってことね』

『あぁ…』

『だったら普通に言いなさいよ』

『……善処する』

『何よ、その間は…』

ここで思った。

『珍しいわね？いつもなら唯と梓ちゃんと帰ってるのに』

珍しい事もあるもんだ、と。
真鍋のそれと俺のこれは意味合いが違う。
真鍋は平沢と中野がいない事に。
俺は隣を歩く真鍋に。

『…アイツらなら、探偵になって事件を追及中だ』

『また分からないことを言うわね』

『分かんなくて良い…
俺もお前も関係ねェことだし』

『そうなの？』

『あぁ…』

この事例は一週間前に登校中に琴吹と遭遇時と同じだ。
相違点は今が下校時で隣を歩く人物が眼鏡を掛けてるだけ…もとい、真鍋だということ。

コイツと共に帰るなんてことが発生した故に『珍しい事もあるもんだ』と思う。

そして『明日テストが返ってくる』だの『もうすぐ夏休み』だの『結局、演芸大会での修司は何だったのか』だの、他愛のない会話をしていると…

「あ、そういえば」

突如として、真鍋がこんな話題を提供してきた。
それは…

「律に今月の部長会議、ちゃんと出席するように言っといてくれない？」

『部長会議』

その名の通り、桜高の全部活の部長達と生徒会とで行われる月イチの会議。

会議内容は…ぶっちゃけよく知らんが、大筋に部費の計上や備品の設置の合否。
部の利益になるための提案の合否等々。

まぁ、とどのつまり生徒会の部長バージョンだと思う。

「…アイツまた出てねェのか？」

『また』ということは、軽音部の部長にしてドラマーの田井中は度々部長会議に出席してなかったりする。

講堂使用申請届や部活申請用紙を提出しない実績の持ち主だ、月イチの部長会議をすっぽかすなど容易いことだ。

「うん、先月の部長会議で、大事なことを言ったから今月のは出てもらいたいわね」

「…大事なこと？」

真鍋がサラリと言ったワードを思わず復唱する。

田井中が部長会議を忘れる度に秋山が口が酸っぱくなるほど『出ろ』と言ってるが、田井中は『分かった分かった』の生返事。

俺は部長会議は、さほど重要じゃないので出なくても良いものと勝手に判断しており、特に何も言わなかった。

本日五度目の、が、しかし。

今回ばかりは、秋山に加勢せねばならんだろう。

「…なんだよ、その大事なことって？」

「えっと、桜高の教室や部室にもクーラーを配備することになったから、欲しいクラブは申請してっていうことよ」

「……」

思わず足が止まり、立ちすくむ。

数歩、歩いて立ち止まり振り返ったコイツは何と言った？

いや、聞き直さなくてもしっかり脳内メモリーにインプットした。

「どうしたの？」

「…クーラー配備されんのか？」

「え、うん　申請してくれたらだけど」

「……」

出たな、この単語…

『申請』

部活『申請』用紙。
講堂使用『申請』届。

幾度となく軽音部に立ち塞がった大きな壁。
やはり今回も立ち塞がる…つうか、あのデコのせいで、今日の部活は思う存分サウナを満喫したのか…

「アイツ…」

普通に腹立つ。
本日六度目の、が、しかし。

俺にも落度はある。
現に今の今まで部長会議など軽視していたし。
だが…やはり腹立つ。

「ふぅ……」

とりあえずストレスをなんとか吐き出し気持ちを平常心に戻し、首を傾げている真鍋に問う。

「…クーラーの配備は今からでも間に合うか？」

「そうね…　申請は先月いっぱいだったから…
明後日の部長会議で他の部から合意が得られれば大丈夫だと思うわ」

「よし…」

可能性はゼロじゃないことに安堵し、『田井中を是が非でも部長会議に出席させてやる』という決意を胸に秘めて、止まっていた歩みを再開する。

「なんか顔が怖いわよ…」

「生まれつきだ…」

「いや、いつものじゃなくて…　まぁ良いわ…」

しかし明日にならずとも、意外な形でその時は訪れることに。

――――――――――

現在時刻午後六時四十四分。

ブブブッ…　ブブブッ…

「ん？」

制服から私服に着替え、冷房の効いた自室で快適に歌詞作りをしていると、机の上に置いてあるケータイが小さな地震を発生させる。

「平沢…か」

【平沢　唯】

妹の方ではなく、姉の方の名がディスプレイ画面に表示され、勝手に帰ったことに文句を言われそうだと思いながらケータイを開き通話状態にし、耳に当てる。

「『しどいよっ！サッくんっ！』」

「ッ！」

やはり文句だったが、開口一番のデカボイスに右耳がキーンに…

とりあえず左耳にケータイを移動させる。

「お前の仕打ちの方がヒデェぞ…」

「『サッくんっ　勝手に帰っちゃうんだもんっ！』」

「分かったからボリューム下げろ…　うるせェ…」

「『ぶぅ…！』」

言うことは聞いてくれたらしく、ぶぅぶぅ（文字通り）と言いながら鼓膜に優しい音量までボリュームを下げる。

「…で？何の用だ？」

「『あ、んとね…』」

どうやらさほど、ご立腹ではなかったらしい。

若しくは開口一番のデカボイスで満足したのか、はたまた単にのんびりな性格所以か。
まぁ、いずれかの内のどれかに当てはまるだろう。
とにかく、いつもの平沢トーンで要件を告げだした。

「『今から来て』」

「…何処に？」

「『え～っとねぇ…』」

電話口からゴソゴソとした雑音が聞こえてくる。
そして待つこと数十秒。

「『こいちゃんに！』」

「はぁ？」

誰？誰んチだ？

つうかお前はどこにいるんだよ？

「『あっははは！確かにここはそうだけど、それじゃあ副部長さんに伝わらないって』」

「『あっ　そっかぁ』」

「……」

誰だ？

明らかに平沢の声ではない別の女性の声が聞こえ、眉を顰める。

「『もしもし？サッくん？』」

「サッくん言うな」

ひとまず謎の声は置いといて、平沢からの情報に集中する。

―――――――

その結果。とある住宅街を歩く俺。

平沢からの情報によると、あの後尾行して辿り着いたのはファミレス。

そこで平沢達も突入し、山中顧問と金髪女性の様子を伺っていた。

山中顧問は気付かず去っていったが金髪女性の方に気付かれ拘束。

何でもその人は山中顧問の同級生。

つまり桜高の卒業生にして軽音部のＯＧらしい

そして本題として現軽音部の俺達に頼みがあるので、その頼みを聞くためには軽音部員全員が必要。

何故か（ここ重要）住宅街のおでん屋の屋台にいるのから来てくれとのこと。

これが平沢と言葉足らずの平沢をフォローするために途中で電話を代った中野からの情報。

「マジでいるし…」

そして辿り着いたおでん屋の屋台。

のれんには店の名前の【おでん屋　こいちゃん】のデカい文字が。

そしてその、のれんの下に覗く桜高のスクールバックと五人分の足と誰かの足。
まぁ、ＯＧの人だろう。

「はぁ…」

面倒だと思いながらのれんをくぐる。

「いらっしゃい」

景気が良さげな中年のおっさん店主に迎えられ、座っていた計十二個の瞳が一斉に俺を捉える。

「サッくん♪」

「よ、サク」

「咲也」

「咲也君」

「お疲れ様ですサク先輩」

平沢達の前にはオレンジジュース。
プラス琴吹の皿には何故かガンモドキが乗ってあるシュールな光景と制服姿の女子高生が屋台のおでん屋にいるという、かなり不釣合いな光景に一瞬唖然とするが、気を取り直して口を開く。

「へぇ、キミが副部長さん？」

本日七度目の、が、しかし。
俺が口を開く前にＯＧと思われる人が俺をまじまじと見ながら先に口を開いた。
何故か平沢のレスポールを構えながら。

「…そうッスけど、アンタが軽音部のＯＧの人？」

「そ、名前は河口　紀実」

『ヨロシク』と笑顔を浮かべる河口ＯＧに『…ども』っと短く返答

し、空いていた平沢の隣に座る。

「ふーん…　なんか変な感じ」

「…何がッスか？」

未だにまじまじと俺を見ていた河口ＯＧがレスポールをいじりながら、小さく笑う。

「だって、私やさわ子の代は女子高だったからね
それが二年前に共学になったって聞いて、男の子が桜高にいるのがなんか変な感じでね」

「…悪かったッスね
俺だって好き好んで桜高を受験したわけじゃねェんで」

『なぁ、咲也よ　お前は高校どこにいくか決めたか？』

『周岡』

『なんでそんな通学がわざわざ電車乗って通学しねェと通学出来ない高校を選ぶんだよッ！』

『お前のキレ所どこだよ…　あとウザいから通学を三回言うな』

『ウザい言うなッ！』

思い浮かぶのは中学時代のアホとの会話。
あのアホのせいで俺は桜高を受験した。

結果として軽音部で音楽をやれてるから今となっては結果オーライなんだが…

「あ、気を悪くしたんならごめんね」

「…いや、別に」

「サッくんはなんで桜高を受験したの？」

苦笑いを浮かべる河口ＯＧに軽く手を上げると、気になったのか平沢がオレンジジュースをチビチビと飲みながら質問してきた。

「別になんだって良いだろ…　それより…」

その質問をアッサリ受け流し、河口ＯＧに確かめたいことがあるので質問を。

「…アンタは山中顧問の同級生で軽音部ＯＧっつうことは、顧問と同じバンドを？」

「そうよ　ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬのギター担当
愛称はクリスティーナ」

別に愛称の情報はいらない…つうか、クリスティーナって…

【ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ】
山中顧問の軽音部時代に組んでいたヘビメタバンド。
そしてそのギタリストが俺達に頼み事。

なんだろな…　嫌な予感しかしない…

「あの…　それで話っていうのは？」

すると河口ＯＧの隣に座っていた秋山がおずおずと本題を切り出した。

「あ、そうだね　副部長さんも来たことだし」

そこでコップに並々と注がれたビールを一口含み、コトンとコップを置いたのを合図に本題を告げだした。

「うん、大したことじゃないんだけどね…」

『ん？』

愁いを含んだ瞳と、物憂いな雰囲気を醸し出す河口ＯＧに俺達は疑

問を抱く。

そして告げられる…

「実はさわ子…結婚するんだ」

衝撃発言な…

『えええええっ!?』

「嘘だろ?」

「あれ?分かった?」

嘘を。

「…仮にあの人が結婚するんなら、普段の生活態度が有頂天になってる筈だが、そんな素振り見せてねェし、隠せる程器用な人じゃねェから」

実際に最近じゃ猫かぶりが曖昧な時がちらほら見受けられる時がある。

「あらら、さわ子に辛口ね副部長さん」

「すごい！サッくん！…はっ！あずにゃん！」

「な、なんですか？」

「今日は探偵がたくさんいるよ！」

「は、はあ…」

感動する平沢が中野にそう言うが、いかんせん先程の嘘の後遺症が残ってる中野は曖昧な返事をするばかり。

「まぁ、冗談はここまでにして本題は…」

「心臓に悪い冗談は止めてください…」

胸を押さえる田井中に『ゴメン　ゴメン』と謝罪しながら、今度こそ本題を語る河口ＯＧ。

「軽音部の同期だった娘が結婚することになって二次会で私達に演奏してほしいって言うの」

レスポールをいじりながら話す河口ＯＧを平沢達は真摯に、俺は勝手に頼んだ大根を食べながら聞く。

「でも、さわ子だけが乗り気じゃなくってさ」

「さわちゃんが軽音部にいたことは、教師になってから封印された過去だからなー」

「みたいね」

レスポールを弾いていた手を止めてため息を吐く。

「そこであなた達に頼みたいことは…」

「顧問の説得…ッスか？」

「そう、その通り
さすが副部長さん、聡明だね」

「…ども」

言葉を遮るように俺が言うと、パチッとウインクしながら称讃された。

「私達が先生の説得ですか？」

と、琴吹。

「私や後の二人のメンバーが散々さわ子を説得したんだけどさ、効果ないんだよね
ていうか逆効果になりつつある」

「さわちゃん、強情なとこあるからなー」

田井中の発言に無理矢理衣装を押し付ける山中顧問の絵を想像する…

「……」

正に強情だ。

「今のさわ子と接してるあなた達だったら、説得できるんじゃないかって思ってね」

『どうかな?』と俺達を見回す河口ＯＧに俺達は部長の田井中に視線を送る。

「えっと…　やってみようとは思いますけど、自信ないなぁー…」

「最初から弱気でどうするのよ部長さん」

「いやだって、付き合いが長い紀実さん達が無理だったのに私達が…」

「うーん…　じゃあもし説得できなかったら」

「で、できなかったら？」

感じた嫌な予感が実現しそうだ…
それは秋山も同様らしく、冷や汗を一粒流しながら復唱する。

「特訓が待ってると思いなさい！」

『ええっ！？』
「理不尽…」

予感が的中してしまい、思わずうなだれる。

つうか、なんでそんな面倒なこと頼まれて、失敗したら俺達が苦行

しなきゃなんねぇんだよ…

「はぁ…」

「ため息吐くと幸せが逃げるよ？副部長さん」

アンタのせいだろ…

……

『じゃ、さわ子の説得ヨロシクね』と言う置き台詞を残し、ほろ酔い機嫌の河口ＯＧは去っていった。

「どうしよっか？」

「どうするもこうするも、引き受けた以上はやるしかないだろ」

おでん屋からの帰り道、トコトコと歩く平沢の漠然とした質問に秋山が答える。

「でも、できますかね？」

「とりあえず、明日さわちゃんに聞いてみようぜ」

「そうね～」

話がまとまったらしいので、もう一つの本題を先頭を歩いていた俺が立ち止まり振り返って告げる。

「どうしたのサッくん？」

「サッくん言うな　…おい田井中」

「ん？」

「お前、明後日の部長会議に絶対に出ろよ」

「あ、そうだよ律　明後日部長会議じゃないか」

「あー…　そうだっけ？」

やはり忘却していたらしく、視線を宙に泳がせては首を傾げる田井中。

「…忘れてんなら今覚えとけ
明後日・二十一日・水曜日・放課後・生徒会室・部長会議がある」

「なんでそんな一個一個区切るんだよ？」

「…お前が忘れねェように重点的に言ってやってんだ」

「ど、どうしたんだよサク？なぁんか怖い雰囲気出てるぞ？」

冷や汗をかき始めた田井中と傍観してる平沢達に、真鍋からの有り難いプレゼントを田井中の失態で逃したことを特に強調して話す。

するとどうだろ。

「りっちゃ～ん」
「律せんぱ～い」
「りっちゃん…」

平沢と中野は責めるような、琴吹は半ば楽しそうに演技かかった悲しげな視線を田井中にぶつける。

「い、いや！仕方ないじゃん！忘れてたんだから！」

「私はいつも言ってたよな？ちゃんと出ろって」

「み、澪…？」

般若オーラを纏った秋山がダラダラと冷や汗をかく田井中にジリジリと近付く。

「ゆ、唯！助けて！」

「私！クーラーが欲しい！」

「あ、梓！」

「クーラーがあったらサク先輩がギター弾けるようになるので、クーラーを配備してください」

「ム、ムギ！」

「ごめんねりっちゃん…」

「サ、サク！」

「…お前、どんな手を使ってでも絶対にクーラーを部室に設置しろよ」

四面楚歌な田井中に般若の怒りの鉄槌が落ちる。

「この…　バカ律ーっ！」

ゴンッ！

「いったぁーっ！」

夏の夜の住宅街にて、田井中の悲痛な近所迷惑な叫びが鳴り響いた。

第九十一話（後書き）

今年中に後一回更新出来るかな？

第九十二話（前書き）

猛暑とＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ編その三です。

第九十二話

翌日。二十日火曜日。
放課後の時間帯。

「失礼しま～す」
「失礼します」
「……」

先週の期末テストの結果に一喜一憂するクラスメイトを余所に、俺達三年の軽音部員は、とある会議を行った。

その内容は、昨夜の河口ＯＧの依頼である山中顧問の説得を試みるために俺と平沢と琴吹が一旦山中顧問に話してみるというものと、来たる二十一日の部長会議で円滑にクーラーを配備させるために、田井中を特訓する必要があるので秋山と中野とで会議のリハーサルを行うというもの。

そして一度部室に行き、秋山と中野に田井中の特訓を任せ、俺達は職員室の扉を開いた。

「さわちゃ～ん…いないね？」

平沢が顧問の机に眼を向けるが、そこに座ってる筈の人物の姿はなく、整頓された机があるだけだ。

「あ、唯ちゃん　あそこ」

と、琴吹が指差す先には職員室の中央付近。
そこに山中顧問の姿があるのだが…

「すいません、もう一枚良いですか？」

「これが最後にしてね？他の先生の邪魔になるから」

「「「は～い」」」

俺達の前では、はっちゃけた性格（素の性格）で接してるが、よくよく考えるとあの人は人気者の教師。

おしとやかで物腰が柔らかい教師を演じているので、それは全学年

の生徒に好印象を与えていた。
現に俺達の視線の先には、一年の女子三人と共に写真を撮っている山中顧問の姿が。

「さわちゃん、やっぱり人気があるんだね」

「忘れがちだけどな…」

「どうしよう…　何だか言いづらくなっちゃったね」

確かに。
俺達が行おうとしているのは、あの人の教師『として』の体裁を崩すかもしれない行為。
ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ『として』の自分を封印して教鞭を振るっているあの人の邪魔をするのは些か心苦しい。
メンバーが説得しても首を縦に振らなかった程、今の立場が大事なんだろ。

「サッくん副部長、私達はどうすれば？」

「サッくん言うな」

相変わらずの平沢のタブー発言にため息を吐いて、改めて山中顧問を見るが、笑顔で一年女子の対応をまだしていた。

「…引くしかねェだろ」

「うん　それが良いと思うわ」

声に出さずとも平沢も琴吹と同意見らしくコクリと頷く。

冷房が効いて快適なこの空間から退却するのは、かなり後ろ髪を引かれるが、いつまでもここで突っ立ってるわけにもいかないので、熱気漂う廊下に俺達はUターン。

――――――――――

「そっか、だったら仕方ないな」

暑さにやられた俺と平沢は部室に着いた途端にダウン。
俺は長イスの背もたれに寄り掛かり、扇子で扇ぎながら、琴吹の秋山達への報告に耳を傾けていた。
で、先程の声は、それを聞き終えた秋山のものだ。
ちなみに平沢は俺の隣に『あぢゅい～…』と気の抜ける声をあげながら座っている。

「そうですね　先生の立場を考えたら無理強いはできませんからね」

ペットボトル入りのミネラルウォーターをコップに注ぎながら中野が言う。
そして二つのコップを持って中野が長イスにやってきた。

「はい、唯先輩、サク先輩　お水ですよ」

「…ん…」
「まあ！ありがとう～！あずにゃ～ん♪」

何とも気の利く後輩からの差入れに俺は緩やかに手を伸ばし、平沢はよほど嬉しかったのか恒例のスキンシップを発動させる。

「わっ！あぶなっ！」

しかし平沢が抱き付いたことにより平沢の分のコップの水が零れそうになるが、何とか堪える。

「あずにゃ～ん♪」

「うぅ…　暑いですよぉ…」

「はぁ…」

頬擦りをする平沢にゲンナリする中野の暑苦しい光景にため息をついて水を一気に全部飲み干し、立ち上がる。

「…で？対策は打てたのか…？」

空になったコップをニコニコしながら手を差し出す給仕係に渡して扇子を扇ぎながらテーブルで暑そうに団扇を扇いでいる田井中に問う。

「バッチリ♪バッチリ♪クーラーは手にしたも同然だぜ！」

自信ありげに俺にサムズアップをかます部長に、扇子を閉じてそれで指す。

「…ンな自信がありながら明日コケたらタダじゃおかねェぞ…」

「だからそんな怖い雰囲気出すなって…　ホントに怖いよ…」

「…俺にとっては死活問題なんだよ…」

「まぁ、任せとけ！部長の本気をみせてやるぜ！」

常日頃から部長の本気を出してほしいが、それは期待するだけ無駄だと判断し、閉じた扇子を開く。

「クーラーも大事だけど、さわ子先生の方も大事だぞどうしようか？紀実さんになんて言う？」

「…有りのままを言うしかねェだろ…事実、俺達は何も出来なかったんだしな…」

秋山の危惧も分かる。
何故なら特訓なるものがあるらしいからだ。
つうかやっぱ納得出来ねェな。
俺達に懇願してきたのはアッチだというのに、失敗したら苦行を実行。
人に事を頼んでおいて、そんな理不尽なことがあるかっつうの。

「そういえば、説得出来なかったら特訓があるって言ってましたね」

「おぉ！そんなことがっ！」

「忘れてたのかっ？」

平沢の天然スキルに田井中が語尾を強くツッコむ漫才を尻目に俺達の会話は続く。

「特訓っていったい何をするのかな？」

「ＯＧの特訓っていったら大抵キツい練習のことだろ」

「でも私達、運動部じゃないし」

「…だからこそじゃねェの…」

「と、言いますと？」

「…文化部だからこそ、運動部並の練習とかな…」

「この暑い中でそれは嫌ですね…」

それは誰しもが勘弁してほしいらしく、ガックリと肩を落とし、うなだれる俺以外の面々。

「とにかく、部活が終わったら紀実さんに連絡するか」

「そうだな」

田井中の言葉に秋山が頷き、穴があったら大変困るので念入りに部長会議のリハーサルを行うために、平沢達はいつもの席に着き、俺は定位置の長イスに座りそれを眺める。

――――――――――

「ゴメン　お待たせ」

部活が終わり、田井中がケータイで河口ＯＧに連絡を入れて（昨日、メアドと電話番号を田井中に渡したらしい）俺達はバーガーショップに移動。

四人掛けのテーブルに秋山と田井中と琴吹と中野が、隣の四人掛けのテーブルに俺と平沢が座り、注文した品物をつついていると河口ＯＧがやってきた。

「それで、さわ子の説得どうだった？」

平沢の隣に座った河口ＯＧは世間話もナシに早速本題を聞いてくる。

そして真実を告げると…

「そっか」

と、小さく笑う。

「すいません」

「ふふっ　今のさわ子も好かれてるんだ」

平謝りする秋山を咎めることなく口元を緩めたまま視線を俺達に向

ける。

「あ、あの…　それで特訓っていうのは？」

聞きたくないが聞かずにはいれない田井中が意を決して口を開くが、その返答に俺以外の面々は眼を丸くする。

「あぁ…　あれ冗談♪」

『えっ！？』

「…その笑顔が怪しいんッスけど」

「ヒドこと言うね副部長さん

まぁ、特訓って言うのは冗談だけど協力してほしいのよ」

特訓から協力にレベルダウンしたことに安心したのか秋山が息を吐きながら口を開く。

「協力っていうのは？」

「さわ子が出れないんじゃギターの数が足りないの」

「……」

何だろうな…
また嫌な予感がする…

「だからあなた達の中から二人、ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの演奏を手伝ってもらいたいの」

「……」

おかしなことを言う…
だから理不尽だっつうの。
そりゃ確かに説得には失敗したが、そもそも前提がおかしい。

勝手に頼んでコッチがよろめいたらすかさず、次の提案をぶつけてきやがる。

つうか、もう一つおかしい点がある。

「…何で二人なんだよ？一人じゃねェのか？」

ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの正式人数は知らんが、昨夜の『後の二人のメンバー』発言を聞けば四人体制のヘビメタバンドだと仮定出来る。

なので協力者を仰ぐなら一人が正しい筈だ。

「あぁ、それは…」

そこで言葉を切り、ゆっくりとした動作でスッと右手を指差した。

「キミのギターの腕を買ってるからよ」

その指先の先にいるのは…

「さすがサッくん！」

俺だったりする。
あとサッくん言うな。

「いや、意味分かんねェし…　つうか何で知ってる？」

暗に『俺のギターの程を聴いたことあるのか』と告げ、その答えを口元に笑みを浮かべたままの河口ＯＧが言う。

「去年の大晦日、あなた達ライブハウスに出演したでしょ」

「……」

疑問ではなく確信な言葉に思わす訝しげな態度を取らざるを得ない。

何故知ってる？
あの時この人がライブハウスにいたのか？
それとも山中顧問が伝えた？

「あの、どうしてそれを…？」

誰も口走ってない情報を知っている河口ＯＧに疑問を抱いている中野がおずおずと視線を向ける。

「あのライブハウスにマネージャーがいたでしょ？」

「あ、はい」

今度は確信ではなく疑問の言葉に中野がきっちりと頷く。

「あの娘も私達と同期の娘なのよ　つまり軽音部ＯＧ」

「えぇっ！そうだったんですか！？」

思いがけない真実に田井中が驚愕する。

他の連中も同様らしく、ポカンとしている。

「サッくん…」

「サッくん言うな」

「どんな人だっけ？」

しかしコイツは別の意味でポカンとしていた。
頭をかきながら『デヘヘ～』と笑う平沢に『あとで秋山辺りに聞いとけ』と一蹴し、河口ＯＧの言葉に耳を傾ける。

「じゃあ、あの人もＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬのメンバーだったんですか？」

「ううん、陽子は別のバンド　私達の代の軽音部は結構人数いたからね」

琴吹の質問に首を小さく横に振り、何気に衝撃発言を発する。

別のバンドを組める程人数がいたのか…　当時の軽音部には…

「それで陽子からあなた達の演奏の感想を聞いたの
副部長さんのギターの感想もね」

「……」

つまり、その人から暴露されたのか…

「ギターを二人募集したのは、さわ子の分と個人的に副部長さんの
ギターの腕に興味があるから」

「…そんな理由で俺を参加させようとしねェでもらいてェんスけど」

「あら？ギター弾くのに理由なんていらないと思うけど」

「そうかもしれねェが、時と場合による…」

「良いじゃんサク　部長命令でやりなさい」

何が部長命令だ。
常日頃から部長の本気を出さない田井中の命令を聞くわけがない。
そして、なので俺がＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬに参加する理由にはならない。

「それでもう一人、そっちのツインテールの娘もギターなんだよね？」

「あ、はい」

「あの、私もです！」

「クスッ　分かってるよ
副部長さんともう一人、どっちかギター弾いてもらいたいんだけど」

「おい」

勝手に俺が参加したのを了承したかのように話を進めるな。

「じゃあ唯先輩で」

「え！いいの？あずにゃん？」

「はい」

「やったよサッくん♪一緒にがんばろうね♪」

「……」

だから俺が既に演奏するかのように話を進めるなっつうの。

なので『断わる』という刃を振り落とそうと大きく振りかぶる。

「じゃあ話が纏まったところで…」

「纏まってねェよ」

振りかぶったが、それは河口ＯＧが鞄から取り出したあるものにより敢え無くゆっくりと下ろす。

「はいコレ　二次会で演奏する曲の楽譜」

俺と平沢に差し出したのは楽譜。
とりあえずそれを受け取り、楽譜に視線を落とす。

「ラヴ…」

平沢が呟いたのは楽譜に書かれてあるタイトル。
それよりも俺はＴＡＢ譜に眼がいく。

（おいおい…）

見る限り俺の楽譜はサイドギターパートだが、その内容がとんでもなく難しいものになっている。

流石はヘビメタといったところか。
ギターの重厚な音を求めるために作られている。
俺がこんなに焦りではないが、軽い危惧の念を抱いているので平沢の分の楽譜を奪うように取り上げる。

「どうしたんだい？サッくんや」

「お前の楽譜の確認だ…」

平沢の分は同じサイドギターだが多少は俺のよりも簡単に。

「それはさわ子のパートだけど、少しいじって優しくしてるから貴女でも大丈夫よ」

「へぇ～　そうなんですか～」

「……」

今に理解したわけじゃないが、やっぱ呑気だなコイツ。
簡単に優しくされてるとはいえ平沢には難しいんじゃないだろうか。

「…って…」

何で俺は演奏する流れに乗っかてんだ。

「披露宴は今週の土曜日
あまり時間がないかもしれないけど、頑張ってね」

「はい！サッくんと一緒にがんばります！」

「唯先輩、サク先輩、頑張ってくださいね」

「クーラーは私に任せて唯とサクはそっちに専念しろよ」

「頑張ってね！私、応援してるわ！」

「今度は唯と咲也か」

「あっ！サッくん『ゆいさく』だよ！」

俺も中野のことを言えないのかもしれない…

流されてる…
思い切り流されてる…
この流れに逆らおうとするが、周りの連中が水嵩を増やして更に流れを早くする。
なので…

「はぁぁ……」

長いため息が出るのは仕方がないと思う。
そう思わなければやってられない…

「だからため息ついてると幸せ逃げるよ?副部長さん」

だから…だからアンタのせいだろが…

―――――――

「バイバイ、サッくん♪」

「サッくん言うなっつうの」

結局勢いが激しい流れに逆らえず、俺は平沢と共に渋々参加することになった。

平沢は平沢で終始一貫して機嫌が抜群に良かったりする。

そして絶えない笑顔の平沢と別れる分岐点で、タブー発言の平沢に一言ツッコミ、踵を返そうとしたら…

「お姉ちゃん、咲也さん」

「ん～？あ、う～い～♪」

振り返ると、制服ではなく私服姿の平沢妹が俺達に向かい歩いてきていた。

「お買い物いってたの？」

「うん　今日はオムライスだよ」

「オムライス！やったねサッくん！」

「何がだよ…」

やっぱり思うこと。
『珍しい事もあるもんだ』

昨日は真鍋、今日は平沢妹。
明日は修司か？
だとしたら最悪だ…

「そうだっ　サッくん」

「サッくん言うな」

すると平沢が何かを閃いたらしくポンと手を叩く。

「今日ウチで晩ご飯食べない？」

「あ、大歓迎ですよ」

ニコニコと笑う平沢。
そっくりに笑う妹。
そんな姉妹に誘いに…

「断わる」

今度こそバッサリと刃を振り落とす。
つうか簡単に男を誘うんじゃねェよ。
妹も妹でそこに疑問を持つべきだ。

「えぇ～　なんで～」

「…歌詞作らないねェといけねェから」

これは建前で本音は先程の通りに俺が男だからだ。

特別な理由がない限り俺は平沢家は勿論のこと、他の連中の家には足を運ばない。

「ぶぅ～」

「お姉ちゃん、無理に誘ったら咲也さんが困るから」

口を尖らせる姉に妹が諭す。

だからその役割は逆だろうが。

「う～ん…　そだね」

「うん　じゃあ咲也さん、失礼します」

「あぁ…」

ペコリと礼儀正しく頭を下げる平沢妹と『また明日ね～』と手を振る平沢に短く返答し、夕陽に向かって仲睦まじげに歩いていく姉妹の後ろ姿を見つめる。

「……」

【Ｕ＆Ｉ】

まさか平沢からこんなものが俺達軽音部に贈られるなんて俺は知る由もなかった。

今はただ、目の前のＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの件があるので、これはまだまだ先の物語。

厳密にいうならば、約二か月後のことだ。

その時に、これが俺達に贈られることになる。

第九十二話（後書き）

補足。

川上さんの名前が分からなかったので勝手につけました。

ただ今２０１０年１２月３１日午後１０時４０分。

年明けまであと、１時間２０分と迫ったこの時間に後書きを書いてます。

今年は本作を執筆を開始したり、プライベートで中々の出来事があった一年でした。

来年も色々とお願いします。

みなさんにとって２０１１年が飛躍の年になりますように。

ロスト

第九十三話（前書き）

猛暑とＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ編完結です。

第九十三話

翌日。二十一日水曜日。

「チッ　指がつる…」

「すごいですよね　サイドギターでこの難易度」

「そんぐらいの音が必要なんだろ…　ヘビメタには」

『またかよ地球』と問い掛けてしまいそうなぐらいの相変わらずの猛暑。

そんな酷暑なサウナ（部室）の中でクールビズスタイルでテレキャスを弾く俺の横で譜面台に置いてある披露宴の二次会で演奏予定の【ラヴ】の楽譜を見ながら中野が感嘆なような息を吐く。

激しい水流に飲まれてしまった以上、事に向き合わなければならず何とか気力を振り絞ってテレキャス片手に練習しているが、いかんせん今の俺の技術ではすんなりと弾けず、この猛暑と相俟って思わずテレキャスを手放しそうになる。

「う〜ん…　難しいなぁ…」

「一度、スローテンポで弾いてみたらどうだ?その方が全体を掴めるだろうし」

「うん　やってみる」

「……」

しかし、俺と同様に暑さに弱い平沢が秋山のアドバイスに頷いているのを見せられたら投げ出すわけにはいかない。
…少しばかり男の意地みたいなものがあるが…

♪♪♪…

なので暑さにへばりながらも、圧倒されるコードチェンジに苦戦しながらも必死に練習していく。

「クスッ」

「ん?どうしたんだ梓?」

「へ？」

「いや、何か機嫌良さそうだから」

「え？そうですか？」

「うん　梓ちゃん、咲也君と唯ちゃん見て嬉しそう♪」

「嬉しそう…　そうですね
唯先輩はあんな風に真剣にギターの練習して、サク先輩は何だかんだ言ってちゃんと練習して…
やっぱりこういうのって軽音部らしいですから」

「そうだな　咲也は音楽に対しては真面目だから」

「唯ちゃんも真摯に練習してるね」

「はい」

♪♪♪♪…

……

とりあえずの休憩で俺は長イスに横たわり琴吹から貰った濡れタオルで額を冷やす。

「あぢゅい～…」

「さっきまでそんな素振り見せなかったじゃないですか」

「だって集中してたんだもん…」

「咲也もさっきまで黙々と練習してたのに、今は見る影もないな」

「だってサッくんも集中してたんだもん…」

「…お前が答えんな…」

「でもクーラーが部室に設置されたら解決ね♪」

先程から一人の人物の姿が見当たらないのは当たり前。

今日はある意味俺が待望んだ部長会議当日。

当然、それには我が軽音部部長の田井中が出席している筈であり、今頃他の部長相手に孤軍奮闘をしているだろう。

「りっちゃんがクーラーゲットしてくれなきゃ、私は…私はーっ！」

「…うるせェ…」

「ぶぅ！ノリ悪いよサッくん」

「…サッくん言うな…」

普段ならばノってくるであろう田井中はいないので、平沢が俺に期待するように手を伸ばしてくるが、鬱陶しいので短めに反応する。

すると…

ガチャ…

「……」

「りっちゃん隊長！」

部室の扉が弱々しく開き、そこにはどこか呆然とした田井中の姿が。

（…しくったか？）

ムクリと起き上がり、額から落下してきた濡れタオルをキャッチし、最近よく当たる嫌な予感がしたのでネガティブ思考になる。

「どうだったの？りっちゃん」

「……」

「ダ、ダメだったのか？」

「……」

「律先輩？」

「……」

「りっちゃん隊長！どうだったんですかー！」

「……」

「お前何か喋れよ…」

呆然としたままの田井中に平沢が肩を掴んで軽く揺らすがそれでも反応を示さない。
なので、俺がそう促すと漸く口を開いた。

「……って」

「あぁ？」

「…いって」

「痛い？どこか痛いの？りっちゃん隊長」

確かにそう聞こえたがそうじゃないと思うので、平沢のその発言はスルー。

そして遂に田井中が俺達に聞こえるように声量を上げて結果を告げる。

「良いって！部室にクーラー設置してくれるって！」

『……』

かなり嬉しそうな表情で報告してくる田井中に俺達は顔を見合わせる。

それは俺達にとって待ち望んだ待望の言葉だった。

ここ最近のよく当たる嫌な予感がハズれた事とサウナ地獄から抜け出せる事が嬉しく…

「よし…」

と、小さくガッツポーズをとってしまう。

「やったぁー！」

「どーだーっ！部長の本気をみたかーっ！」

「やったわね澪ちゃん！」

「うん！これでまともな練習が出来るよ」

「やりましたねサク先輩！」

「あぁ…　希望が見えた」

田井中に抱き付く平沢。
両拳を高々と掲げる田井中。
パチパチと拍手する琴吹。

頷き笑顔を浮かべる秋山。
ツインテールを上下に揺らしながら俺に近付く中野。
扇子で扇ぐ俺。
各自、喜びを精一杯表わす光景が生まれた瞬間だった。

「でも、よく他の部が納得したよな」

確かに秋山の言う通りだ。
クーラーの議題が出たのは先月。
それを今更欲しいと言ったところで、おこがましいと相手にされないのが世の中だったりする。
だからこそ田井中に秋山と中野とで特訓させたが、それでも可能性は五分五分。
そんな可能性を見事に引き寄せた田井中はやはり部長といったところか。

「それがさ」

「あン？」

抱き付いている平沢を暑そうにしながらも引き離さない田井中が一間置いて喋り出す。

「私も渋られるかなぁって思ってたんだけど、案外すんなりとクーラーをゲット出来たんだよ」

「どういうことですか？」

「私が軽音部にクーラーを買ってくださいって提案したらさ、どの部からも反論とかなかったんだよ」

「え？そうなの？」

「うん」

首を傾げる琴吹に田井中が首を縦に振る。

「…じゃあお前の手腕が光った訳じゃねェのか」

「まぁ、確かにそうだけど　運も実力の内ってな！」

ビシッと俺にサムズアップする田井中に『やはり部長』を前言撤回を発動。
ただの運じゃねェか…

「まぁ…　クーラーが部室に設置されるんなら理由はどうだって良い」

「むぅ！もうちょい私を労ったらどうだよ？」

「…ヨクヤッタ…」

「出たな、サクの投げやりな返事～！」

『心から労れよ～！』とか言って口を尖らせる田井中をスルーし、気力が泉のように湧いてきたのでテレキャスのストラップを肩に掛ける。

「りっちゃん！クーラーっていつ部室につくの？」

「そうだな　確か和が来週ぐらいって言ってた」

「え～…　今すぐじゃないの～？」

「当たり前だろ～　クーラーを設置するための工事とか必要なんだし」

「軽音部にクーラーがつくことになったから良いじゃないですか」

「そだね～」

「軽っ！」

「ほら唯　咲也は練習してるぞ」

「よぉし！ギー太の出番だー！ギー子とサッくんには負けないぞー」

「だから勝手に名前つけんな…　あとサッくん言うな」

「ムギ　頑張った私にご褒美をくれ」

「うん！チョコフラッペをりっちゃんに～♪」

「やったー♪」

「そんなの用意してたんですか？」

「律は調子に乗り過ぎ」

「とか言って、実は澪も欲しいんだろ～？」

「ち、違う！」

「ムギちゃん！私も欲しい！」

「お前はまず練習だ…」

「うぇぇ～…　サッくん先輩厳しいッス…」

目先の事に目がくらむよりかは、本番まで時間がないので目先を修正して練習に打ち込んでほしいと思わずにはいれない猛暑な本日。

「……」

♪♪…

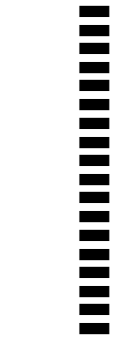
まぁ…　少しくらいは余裕があった方が良いかもしれないとも思った酷暑な本日。

「うま～♪」

「う～…　りっちゃ～ん！ちょっとちょうだ～い！」

「はぁ…」

我慢出来ずにトコトコと至福な表情で琴吹からの褒美を口に運ぶ田井中に進軍していく平沢に、やっぱ前言撤回だと思った熱気漂う夏の本日。



２００７年４月。

『まさかお前が、教師になって帰ってくるなんてな』

『あはは…　まさか堀込先生がまだ桜高にいるなんて思いませんでした…』

コツコツと二人分の足音が廊下に響く。
一つは教師として桜高に戻ってきた私で、もう一つは私の隣を歩く堀込先生。

『それはどういう意味だ山中？
まるでおれがいたら迷惑みたいな言い方だな？』

『い、いえ！先生のような素晴らしい方と一緒に仕事が出来るなんて嬉しく思ってます！』

実は私がまだ桜高に生徒として通っていた時に、堀込先生には目を付けられていた。

理由はＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ。

ヘビメタバンドだから必然的に音が大きくなって部室から音が漏れたりとか、学園祭のライブで過激なパフォーマンスをしたりとか、ライブのメイクがやり過ぎとか、学園祭を盛り上げようと度々問題を起こしたりとか…

そんなこんなで教師になった今でも頭が上がらなかったり…

『全く…　教師になったんだから少しは丸くなったんだろうな？』

『大丈夫です！教師はおしとやかで物腰柔らかいキャラでいきますから！』

『つまり本質はそのままか…』

呆れたようにため息を吐く堀込先生に、ずっと気になってた事を聞こうと視線を先生に向ける。

『あの、軽音部って今どうなってますか?』

今の私は二十二歳。
卒業した四年間で軽音部がどうなったか、私は知りたかった。

『ん?軽音部か…　確か今、三年の部員が四人いるだけだったと思うぞ』

『えっ!三年生だけなんですか!?』

『あぁ　お前達が卒業した次の年度の一年が今の軽音部だ』

つまりそれって…下手したら来年度は軽音部は廃部じゃない…
どうしよう…

『ほら、着いたぞ』

（とりあえず今は、軽音部の事は後回しね）

そう決めて目の前の木製の扉を、そして頭上にある『職員室』の文字が書かれてあるネームプレートを見る。

『ゴホンッ！ようこそ山中先生　桜ヶ丘女子高等学校へ』

『はい』

改まって私を『先生』と呼んだ堀込先生が何だかおかしかったけど、教師としての自覚がそれを上回り姿勢を正す。

そして…

ガチャ

堀込先生が職員室の扉を開いた。

光陰矢の如しとはよく言ったもので、気が付けば一学期の終業式が昨日執り行こなわれ一学期は幕を閉じ、夏休みの幕が開いた（ちなみにこの日に平沢からとある提案があった）

そして本日本番当日の七月二十四日土曜日。
現在時刻午後二時ジャスト。
本番まで二時間と迫った時間。

♪！♪！♪！♪！

現在俺達は本番のリハーサルを行っていた。

河口ＯＧに連れてこられたのは隣町のライブハウス。
実はここが二次会の会場だったりする。

ライブハウスといっても以前俺達が出演した地元のライブハウスのような演奏目的に造られたものではなく、今回のようにちょっとしたパーティーも出来るようにバーがあったりな仕様になっていた。

勿論、ちゃんライブハウスとしての機能も出来る。

『じゃあ紹介するわね
ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬのベース担当の日野原　彩』

『よろしく』

『ドラマ担当の江藤　あやめ』

『よろしくね』

『で、こっちが現桜高の軽音部でバックアップで協力してくれるわ』

『平沢　唯です！』

『…桐島　咲也ッス』

ライブハウスには既にＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの残りのメンバーが来ており簡潔に挨拶を交わした後に、リハーサル開始。

ちなみに河口ＯＧ達は式場には行かず、この二次会場で改めて同期の人を祝うらしい。

ジャァー…ン…

演奏の終了を告げるドラマーのシンバルをスティックで叩き付ける高く鋭い音でリハーサルが終了した。

「うん　良いんじゃない？副部長さんは見込み通りで、貴女はリフがたどたどしいからそこを修正ね」

「は、はい！」

「……」

テキパキと指示を出して河口ＯＧはギターをスタンドに置いてベーシストとドラマーと何やら会議を始めた。

（しかし…）

流石は先輩だ。

通常、バンドに別の『色』が入ったら中々マッチしないものなのだが、初めてのリハーサルで演奏した時に俺達に合わせてきた。

いや…合わせさせられたが正しいか。

パレットにある色でキャンバスに描いていく。
その色は今は三色のみであり、そこに別のパレットから二色の色をキャンバスに描いていく。

その二色が三色に上手く馴染めるかはキャンバスのステージで奏でられる音色の一つ一つによる。

そして現実に上手く馴染んだ。
三色が基本の三原色なのだから、二色がいくら異彩を放とうとも三原色には敵わない。

だから俺と平沢は上手く演奏出来たのではなく、そこに合わせさせられた。

「サッくん」

まだまだ深い音楽の世界にぐるぐると思考を巡らせると平沢が楽譜を持ってトコトコとやってきた。

「ここ、難しいんだよ」

平沢が指差したのは先程もしくじったリフ部分。

幾ら優しくされてるとはいえ平沢にとっては、やはり困難だったようだ。

「練習だな…」

「うん　本番まで後二時間ぐらいだから、目一杯練習だぁー！」

意気込んで拳を掲げる平沢に、練習に付き合おうと失敗したリフ部分を弾くためにコードを確認しピックを弦に当てた瞬間…

「じゃあ、準備に取り掛かろっか？」

会議をしていた河口ＯＧが俺と平沢に振り向いた。
…嫌な予感がする笑顔とともに…

「でもまだ本番まで二時間もありますよ？」

「…つうか何の準備をすんだよ？」

「後二時間しかないの
メイクって時間がかかるからね」

「……」

ほらみろ。
当たるんだよ最近のよく。

だが、それは…

「勿論貴女達もね！」

『えっ！？』

平沢とステージ下から俺達を眺めていた秋山達に言ったことであり、
俺には関係…

「副部長さんはどんなメイクにしようかな～？」

抜群に火中だったりする。

ふざけんな。

なんで俺がそんなことしねェといけねェんだ。

そんな戯けたことを俺がするはずもないので『い、いえ！私達は結構です！』と必死に拒否ってる秋山と田井中と中野に（琴吹は嬉しそう）河口ＯＧの意識がいっている隙にゆっくりとエスケープ。

「あれ？サッくん、どこ行くの？」

「アホ…　気付くな…」

「逃げたらダメよ副部長さん♪」

「断わる」

「物事をキッパリと断れるのは男らしいけど、逃げ出すのは男らしくないわね」

「…そこは価値観の違いだ　俺はＮＯと言える日本人なんだよ」

「そう、じゃあ連行ね」

「話聞いてたかアンタ？」

「男なら女々しいこと言わないの」

「言ってねェし…」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

２００７年６月。

『えー、緊急職員会議を開いたのは、先立っての理事会で決まった事項をみなさんの耳に入れておいてほしく、今日、このような場所を設けさせていただきました』

私が音楽教師として桜高に戻ってはや二か月。
順風満帆とまでは言わないけど、大きな失敗もなく今日まで過ごしてきた。

でも、今の職員室の雰囲気と私達の前に立ち、淡々と物事を進めていく理事長と校長から告げられる衝撃発言は私の教師人生にとって大きな歴史…かな？

『単刀直入に言いますと、我が桜ヶ丘女子校は来年度から男子生徒を受け入れ、共学として学園体制になりました』

大して驚きはなかった。

だって噂があちこちと飛び回っていたし、私を含めた新人教師歓迎会の席で、お酒に酔った校長が口を滑らせていたから。

『約八十年の女子高としての伝統を変えてしまうのは大変忍びないのですが、近年の少子化や地域の活性化のため、このような決断に至った事を、どうか御理解していただきたいと思ってます』

（共学かぁ…）

私が卒業したこの学校が変ってしまうのは少し寂しいけど、それよりも……羨ましいじゃない！

だって男の子が入学してくるんなら恋が！愛が生まれるじゃない！

恋愛し放題！青春の証！

なのに私の代は女子高で大して恋愛も出来なかった…

結局、風間君にはフラれちゃったし…

「はぁ…」

ホント、羨ましいわね…

『えー、つきましては、名称の方も【私立桜ヶ丘女子高等学校】から【私立桜ヶ丘高等学校】に変更となります』

現在時刻午後四時三十分。

「あ～ん！ギ～太～っ！」

「泣くなっ　余計に顔怖いっ」

「え？私、割と好きなんだけど」

「ムギ先輩はやり過ぎです！」

「あ～ちょっと部長さん、貴女これで口から火を吹いてもらいたいんだけど」

「えぇっ？っと…あぁ…それは…無理です～っ！」

見事にエスケープに失敗し、俺達は楽屋に連れてこられた。

そこで渡された衣装に着替えビジュアルバンドのようなメイクを施された。

俺はかなり渋ったが河口ＯＧとの口撃戦争の末に敗れてしまい渡された黒のブーツと黒のダメージジーンズと黒のシャツと黒のトレン

チコートに着替え、全身をブラックで纏める。

そして仕上げとして、ワックスとスプレーで髪を、鋭さを一切抑えなかったスパイキーヘアにされ、左目の下に十字架のようなものを紅くペイントされてしまった…

「はぁぁ……」

まさか自分がこんな姿にされようとは夢にも思わなかったので深々とため息をついて、さっきからカーテンの向こうから阿鼻叫喚な叫びが聞こえるので…

「おい」

「あ、なに咲也?」

「…カーテン開けて良いか?」

「うん、大丈夫」

「うわぁ～ん！サッく～ん！ギ～太がぁ～！」

「だから顔怖いから泣くなって唯っ」

「部長さん、火を吹けない？」

「無理ですぅ～！」

「あ、なら私やります！」

「止めてくださいムギ先輩！」

（何やってんだ…）

あっちの連中も着替え終わったらしいので、状況確認を図るため俺と平沢達を仕切っていたカーテンを開ける。

「……」

そして絶句。

『……』

向こうも絶句。

俺が絶句した理由は、平沢達の衣装と髪型にある。

やれ鉄製の肩パットだの、紫色のロングコートだの、肩口が刃物で斬ったようなジャケットだの、刺のついた首輪をしてたりだの…髪型も全体的にスプレーでアップにしてたり等々…

通常では絶対にしないであろう格好をした平沢達がいたら訝しげな態度で口を噤のは必至だ。

「うんうん、さすが副部長さん　元が良いからメイクも映えるね」

「…嬉しくない賛辞をアリガトウゴザイマス」

「あ、そうそう副部長さんのテレキャスもレスポールみたいにちょっといじって良いかな？」

「…何で？」

「レスポールとテレキャスは、そのままだったらインパクトに欠けるからね」

「もう勝手にしてくれ…」

やはり顧問と同じ時を過ごした人だ。
意味不明な理由をこじつけるので相手にするのが面倒になったので適当にあしらう。

「サッくん…」

「あン？」

すると未だに絶句していた平沢達が作動し始めた。

「カッコいいー！」

「……」

瞳をこれでもかという程キラキラと輝かせながら平沢が俺の周囲を衛星のように公転しだす。

「サッくんすっごくカッコいいよ！」

「はぁ…」

「そうだ！写真！写真撮ろうよ！」

『はい！目線こっちに！』とケータイのカメラでガンガンシャッターをきる平沢に俺は反応するのも面倒なので…

「はぁぁ……」

マリアナ海溝並の深いため息を吐く。

「カッコいいー！サッくんカッコいい！」

「確かに見違えるほどだよなサクのヤツ」

「うん　普段の咲也もカッコいいけど、今の咲也も…」

「おや？澪ちゅわん？」

「なっ！？そ、そんなんじゃないぞっ！」

「私はなんにも言ってないけどな～♪」

「り、律ーっ！」

「でも澪先輩の気持ちも分かりますね」

「うんうん♪咲也君カッコいいもの♪」

「サッくんサッくん！一緒に写真撮ろうよ！」

「撮らねェよ…」

「はいはいはい　そういうのは後にしてね
もうすぐ本番だから移動するよ」

河口ＯＧが三回手を叩き注目を集め、俺はケータイで時間を確認すると確かに本番十分前なので、ギタースタンドに立て掛けられてあるテレキャスに視線を向ける。

「髑髏…」

見慣れた筈のテレキャスが河口ＯＧの毒牙にかかり、ボディに金の髑髏のステッカーが貼られ、さながら俺の好きなミュージシャンのギタリストの愛用ギターように変貌を遂げていた。

「そうだった～！ギ～太がぁ～！」

テレキャスの横にある平沢のレスポールは六個のペグ全てに黒い角

のような訳分からんものが装着され、ヘッドが蜘蛛のようなスタイルに。
そしてボディには黒い湾曲したステッカーが貼られ、ストラップが鎖にチェンジされていた。
レスポールを我が子のように溺愛している平沢にとって、グレれしまったレスポールに泣きたくなるんだろう。

「…さっさっと行くぞ」

「…ぁ…」

幸い…というか当たり前に俺達のギターに貼られてあるステッカーは、跡も残さない専用ステッカーなのでこのライブが終われば綺麗に元通りになるので、瞳を潤ませる平沢の頭にポンと手を置いて、先をいく河口ＯＧの後を追う。

「う、うん！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　山中　さわ子】

軽音部同期のミホコと新郎の佳祐さんに『演奏出来なくてゴメン』と謝り、陽子と一緒に軽音部の思い出話に花を咲かせる。

「でも紀実達、三人で演奏するのかしら？」

「ふふっ　まぁ、そこは楽しみにしときなさいよ」

「え？」

何か含みがある笑みを浮かべた陽子に首を傾げていると…

「『では、ここで新婦と共に青春時代を歩まれた、ご友人方のバンド　ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬによるライブを始めます』」

会場内の照明がステージ以外落ちて、司会者がマイクを使ってＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬを紹介する。

パチパチパチパチ

「『なお本日は特別編成での登場です』」

「ん？」

特別編成という言葉に引っ掛かり思わず拍手をしていた手を止める。

「あっ…　ちょっと、あの子達…！」

ステージ上に現れたのは紀実と彩とあやめ。
後…唯ちゃんと咲也くんと澪ちゃんにりっちゃんにムギちゃんに梓ちゃん！？

「ちょっと陽子っ　これどういうことなのっ？」

多分事情を知ってる筈の陽子の肩に手を置いて、チューニングをしている唯ちゃん達を指差す。

「紀実がね、さわ子が出ないからあの娘達に協力してもらったんだって」

「聞いてないわよ…」

「だって言ってないものその方がさわ子が驚くからって」

私を驚かせてどうするのよ…
今日の主役はミホコと佳祐さんなのよ…！

それにしても唯ちゃん達の格好もアリね…
今度の学園祭ライブで、似たような…って違う！
今はそんなことじゃなくて…！

「『てめぇら今日は飛ばしてくぜーっ！』」

『おーっ！』

私が頭を抱えていると紀実の『らしい』声が聞こえてきた。

ステージに顔を向けると、唯ちゃんは多分紀実にいじられたレスポールを構えて澪ちゃん達はマラカスを持ってスタンバイ。

咲也くんは…うわっ　嫌そうな顔してるわね…

黒いテレキャスを構える咲也くんからネガティブなオーラがひしひしと伝わってくる。

そして…

カッカッカッ

♪♪♪♪…

あやめのカウントで【ラヴ】のかなりハラハラするイントロが始まったけど…

「うっ　唯ちゃん…」

「『あ〜っ　間違った…』」

「何やってるんですか
もう！」

「『ゴメンね、あずにゃん』」

「私にじゃなくて、みなさんに謝ってくださいよ！」

「『おっ！すいません！もう一度最初から～』」

しくじってしまった唯ちゃんに思わず体勢を崩してしまう。
すると…

「ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬっていうからどんなバンドかと思ったけど、結構かわいいね」

（か、かわいい！？）

「でも、ほら　あの男のヤツはカッコいいじゃん」

「あ、ホントね～」

（確かに咲也くんは似合ってる「頑張れー　ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ～　応援してるよー」って、頑張れ！？応援！？）

周囲から聞こえてきた有り得ない声援に私は眼鏡に手を伸ばす。

（違う…　ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬはこんなんじゃない…！
もっとお互い魂をぶつけ合う激しさこそがＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの真骨頂…！）

指が眼鏡のフレームに触れる。

（いやダメ！私はもう教師）

だけど自制する。
今ここで私がステージに上がってどうするの！

（あの時の魂は、あの時に置いてきたの！）

私のために頑張ってるみんなに悪い…
それに桜高の新聞部の子達がわざわざ隣町まで取材に来てるのに、
私がステージに上がったら今まで演じてきた、おしとやかで物腰柔
らかいキャラが崩れてしまう…！

「『いや～　ごめんなさい　失敗失敗』」

（違う…　違うのよ唯ちゃん…　ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬは…）

「『えー　お聞き苦しくてすいません』」

（私の追い続けたＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬは…）

「『一生懸命やりますので…』」

（私は…　私は…！私の…！）

「『どうぞ皆さん…』」

（ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬはっ！）

私は…決めた…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「はぁ…」

ギネス記録達成したんじゃないだろうかというくらい、ため息のオンパレードだ。

意を決してＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬのライブに参加したが、蓋を開ければ懸念していた平沢のリフの失敗。

更にはステージサイドにいる秋山達が持っているマラカスが滑稽に感じる。

当然この場にいる山中顧問は何か頭を抱えたり、眼鏡を取ろうと葛藤してるし。

そして平沢の何か気の抜けるＭＣ（？）

こんな状況に立たされればため息だって連発する。

「『一生懸命やりますので、どうか皆さん…』」

とりあえずはステージに立っている以上、役目を遂行しなければならないので、平沢のＭＣ（？）が終わりそうなので、ピックを弦に当てた瞬間…

フッ…

「ん？」

突如として照明が消えた。

「えっ　な、なに…　どうしたの？」

コツコツ…

薄暗くなったライブハウスに聞こえるのは平沢や場内にいる連中の戸惑った声と、誰かの足音。

（主役の登場…か）

薄暗い場内で確かに一歩一歩着実にステージに向かってくる人影の正体が俺には分かり肩の力を抜く。

「平沢」

「サッくん、く、暗くなっちゃったよ？」

俺の呼び掛けに平沢が若干怯えながら振り返る。

「分かってる…　合図だ」

「合図？」

「…俺達の御役御免のな」

意図がさっぱりらしく首を傾げる平沢にステージに向かってくる人影を指差す。

コツコツ…　バッ！スタッ…

（いや、誰が裏で操作してんだよ）

その人影がステージに向けてジャンプをかまし、腰と膝を曲げて衝撃を逃がして見事に着地した瞬間に再びステージに照明が灯る。

それは誰かが狙ったかのようなタイミングで。

「さわちゃん！」

そう、ステージに現れたのは葛藤をしていた山中顧問。

その山中顧問の出現に河口ＯＧやベーシストとドラマーが小さく笑ったのを俺は見逃さなかった。

「唯ちゃん…　ギター貸しなさい」

「は、はい！」

ユラリと立ち上がった山中顧問の命令に、おっかなびっくりしながら平沢がレスポールを渡す。

♪♪♪♪！

そして山中顧問が超絶テクでレスポールを弾きだす…つうか、何が『私とどっこいどっこいかな？』だ。

物置部屋を掃除中に発掘したＳＧに、経緯は忘れたがこれは山中顧問の発言。

俺とどっちがギターが上手いのか？

中野の質問にそう答えた顧問だったが、その時も俺はこの人の方が上だと思った。

現に今、そのテクを見せられ今の俺には無理だと、この人の方が上

だと確信する。

…ィイィィー…ン…

最後はチョーキングで締めて、山中顧問がマイクに向かって想いのたけを叫ぶ。そう叫ぶ。

「『てめぇらＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬはこんなぬるっちい音楽じゃねぇ！』」

（キャラ崩壊してるし…）

まぁ、これがＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬの山中顧問なんだろうが、変り過ぎで若干引く。

「『今、本物ってえのを見せてやるっ！』」

バッと眼鏡を取り、頭を振ると纏めていた髪が降りる。

『本物』というならばこの四人がＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬなので俺は必要ナシ。

山中顧問にレスポールを渡した平沢は既に琴吹と中野の所に退却しているので俺も秋山と田井中の所に移動する。

「『いくぜ！クリスティーナっ！』」

「オーケー！」

「『デラっ！』」

「『あぁ！』」

「『ジェーンっ！』」

「『任せて！』」

それぞれに目配せをし、最後に…

「『桐島　咲也！いや…ロイドっ！』」
「誰だよ」

何故か俺にビシッと指差して聞き覚えが全くない呼ばれ方をしてきやがった。

「『てめぇも加われっ！』」

ヤダ。

「ほらサク　さわちゃんからご指名だ！」

「咲也！」

ヤダ。

「咲也君！」

「サク先輩！」

何でお前らはそんなに楽しそうに笑ってんだよ…

「サッくん！」

「はぁ…」

どうせ俺がやらねェといけねェんだろ…
何かライブハウスの空気がそんな感じだ。

仕方なくギネス記録更新のため息を吐いて、先程まで立っていた立ち位置に戻る。

「『この歌を聴いて、てめぇらの魂を震わせろっ！』」

（だから誰だよアンタ）

どっかのロックスターでも憑依したかのようにキャラがまるで違う山中顧問にそう思っていると…

「ワン・ツー！」

カウントが始まったので気持ちを切り替えて難易度が高いサイドギターに集中する。

♪♪♪♪♪！

「『♪～！　♪～！』」

♪♪♪♪♪！

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

２００８年４月。

私が教師になって一年。

桜高は共学になり校内に少ないけど男子生徒がちらほらと見掛ける光景に少しだけ違和感を感じてる今日この頃。

入学式が終わって一週間経った日のお昼休み。

職員室で五時間目の授業である音楽の一年三組の分の用意をしていると、確か二組の田井中さんと秋山さんがやってきた。

『先生』

『どうしたの？』

『軽音部を見学したいんですけど、音楽室に行けば良いんですか？』

田井中さんの質問に、顔にはださないけど小さく笑う。

嬉しかった。

軽音部に興味を持ってくれてる娘が二人もいたから。

『そうよ　でも…』

現実とは時に非情だったりする。

だって…

『軽音部は廃部しちゃったの』

『えっ　廃部した？』

『正確には廃部寸前ね
昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって今月中に四人、入学しないと廃部になっちゃうの』

結局、新年部員は入部しないでそのまま軽音部は廃部寸前。

この娘達が軽音部を復活させてくれたら良いんだけど…

『先生～』

と、他の生徒に呼ばれたので振り返ると、確か三組の平沢さんが立っていた。
次は音楽の授業だから多分、私を呼びに来たんだろう。

『ごめんね　次、音楽の授業あるから』

『あ、はい』

うなだれる田井中さんと大してショックを受けてない秋山さんにそう告げて立ち上がる。

『廃部なら仕方ないな

私は文芸部に…』

『待て澪　誰もいないってことは、今入部すれば私が部長？ふふふ、悪くないね～』

『だから私は文芸部に…』

バサッ

『あっ　ご、ごめんなさい！』

『大丈夫？』

『アイツ、テンポ悪いな…プリントを落としたぞ
あ、痛そ～…　机に頭ぶつけた』

『確かに痛そうだけど、離せよ　私は文芸部に入部するんだ』

『テンポ悪くて使えないドジっ娘だな』

『聞いてるか律？私の話』

ここにいる三人とまだ見ぬ二人で軽音部を復活させるなんて、私は想像もしてなかった。

「はぁ…」

「元気出せってさわちゃん」

「そうだよ　さわちゃんカッコよかったよ」

無事に…いや山中顧問にとっては傷を負った二次会ライブが終了した駅への帰り道。
新聞部（そんな部活があったなんて知らなかった）が取材に来ていたので本性がバレた事に山中顧問は肩を落とす。
それを田井中と平沢が励ますように肩を優しく叩く。

「…つうか自業自得だろ」

「そうだよ　さわちゃんが勝手にキレちゃうんだもん」

「仕方ないでしょ…　スイッチ入っちゃったんだから…」

田井中の言葉に反論するが、覇気が全くない。

「いっそのこと軽音部時代のこと、ぶっちゃけちゃえば？」

「ダメよ…　教育っていうのはちょっとの隙が大変な事態を招くのよこんな過去がバレたら…桜高は魑魅魍魎な学校に変っちゃうわ」

「それは飛躍のし過ぎだと思います」

「…もうバレてんのにそんな心配する必要ねェと思うがな」

「うぅ…」

「追討ちをかけるなよ咲也」

更に肩を落とす山中顧問だったが、達観したのかガバっと顔を上げる。

「終わった事を悔やんでも仕方ないわね！」

「さわちゃんが復活した！」

「そう考えなきゃやってらんないわよ！」

「何かヤケになった気がするんですけど…」

「…自分で納得してんだから、そこは触れてやるな」

両手を上げて叫ぶ山中顧問に中野が言うが、せっかく復活したんだから余計な事を言うなと釘を刺す。

「あ…」

すると琴吹が何かを思い出したかのように一歩前に出て、山中顧問に告げる。

「あの先生」

「なに？」

それは俺だけかもしれんが、完全に忘却していた事だった。

――――――――――

七月二十八日水曜日。

今は夏休み真っ直中なのだが、俺達は部室に集まっていた。

それは何故か？

「天国だ～♪」

「涼し～い♪」

両手を上げて風を一身に受ける平沢と琴吹。

タダの風ではなく冷風だ。

今日は軽音部に待望のクーラー設置日。

それと相俟って部活の日でもある。

まぁ…田井中がクーラーが設置される日を部活にしたんだが。

「これで咲也と唯も練習出来るな」

「まぁな…」

秋山の言葉に必要なくなった扇子でトントンと肩を叩きながら頷く。

「トンちゃんの水槽も大きくなりましたしね」

俺が忘却していた事と琴吹が山中顧問に告げた事は、亀の水槽を琴吹家から持って来る事。

その頼みを受け入れた山中顧問の協力もあり無事に新たなる水槽は部室に運ばれた。

ちなみにその住人である亀は夏休み中は中野が預かっており、亀がこの水槽で泳ぐことになるのは二学期からになる。

「クーラーも設置したし、トンちゃんの水槽も大きくなったし、一件落着だな！」

「…そうでもねェぞ」

腕を組んでうんうんと頷く田井中にテーブルに突っ伏している山中顧問を指差す。

復活は遂げたものの傷は随分と深かったらしい。

「うぅ…」

「はぁ…」

せっかくクーラーが設置されて快適空間になったというのに、顧問のどんよりオーラがそれを邪魔する。

すると…

ガチャ

「あの～　山中先生いますか？」

「へ？」

……

「はい、チーズ」

カシャ

「「ありがとうございました～」」

扉を開いたのは一年の女子三人組。

どうやら新聞部によって本性を明かされたが、ロックの顧問も変ら

ず人気者みたいだ。
写真を撮り終わった顧問はその事実が信じられないように呆然としていた。

「結局どのさわちゃんでも人気あるんだね」

「…まぁ、コレで本当に一件落着だな」

「んじゃ練習するかー！」

踊り場で写真を撮っていた顧問を伺っていたが解決したので田井中の号令のもと、俺達は楽器を手に取る。

しかし…

「う…」

「どうしたんですか？唯先輩」

「わ、私、クーラー…苦手だった…」

衝撃事実発覚。
床に両手と両膝をつけてグッタリとする平沢。

おい…　待てよ…

「そういえば、憂が唯先輩はクーラー苦手って言ってました…」

「もう唯！そんなこと忘れるなよ！」

「ちょ…　ぐ、具合が…」

「大丈夫？唯ちゃん」

「はぁ…　クーラーきるか」

「おい待てよ」

立ち上がった田井中に俺が制止をかける。

「…せっかくのクーラーをきる気か？」

「しょうがないだろ？唯がクーラー苦手っていってるんだから」

そうだが…
じゃあ逆戻りになんのか？
サウナに戻るのか？

「ご、ごめんね…サッくん…私のせいで…」

「……」

「で、でも…サッくんがまた…あの格好してくれたら…がんばれるよ…」
「クーラーきれ田井中」

「即答だったなサク…」

結局、軽音部のクーラーはただのオブジェとなり、俺は必要なくなったと思った扇子で涼を得るためにひらすら仰ぐハメに…
こうして一学期最後のイベントは幕を閉じ、舞台は夏休みへ。

「はぁ…」

あ、ギネス記録更新…

第九十三話（後書き）

新年明けましておめでとうございます。
２０１１年もよろしくお願いします。

第九十四話（前書き）

最後の合宿、ロックフェスティバル編です。

第九十四話

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

ちょっと時間を戻して、今日は七月二十三日金曜日。

カッ…

おぉ…

カッ…

おぉ…

カッカッ

カッカッカッ

おぉ～！

カッカッカッ

おぉーっ！

さわちゃんが黒板に書いていく文字を見ていたら、ワクワクしてきたー！

『ふんすっ！』

『どうしたの唯？』

グッと気合いを入れたら私の前の席の和ちゃんがコッチを向いた。

『だって和ちゃん、夏休みだよ！夏休み！』

さわちゃんが書いた『夏休み』…じゃなかった『夏季休暇』の文字を指差す。

あ、『夏季』って見てたらかき氷食べたくなっちゃった。

柿もいいよね～

おぉ！そういえば冬になったら、おばあちゃんが干柿くれるんだよ～甘くておいしいんだよね～

『だから嬉しそうな顔してるんだ』

『うん！夏休みはいっぱい遊ぶんだぁ～』

『遊ぶのは良いけど、唯も西女大を受験するんだからちゃんと勉強しなさいよ？』

『……あ』

『忘れてたのね…』

ホントに忘れてた…

そっか私、受験生なんだよね。

（受験かぁ…）

私の席の隣の姫子ちゃんの横の横の席のサッくんを見ると、隣の席の修司君とお話してた。

『夏休み、そうそれは……しまった、なにも思い付かねェ…』

『…見切り発車で喋んな』

『まぁ、とにかくだ
高校生活最後の夏休み
思い出作ろうＺＥ☆』

『お前正気か？』

『どういう意味だよ！』

『…理性や感情、または意識が正常である状態』

『正気の意味聞いてんじゃねェよッ！まぁ、勉強になったからアリガトウと言っておこう』

『そうかよ…』

『でだ、花火とかしようぜ～　なんか河川敷で縁日もあるらしいし～』

『…そんなことしてる暇はねェ
つうか何が悲しくてお前とそんなことしねェといけねェんだ』

『そりゃお前、俺達は幼馴染みで親友だからだ』

『違ェ』
『即答ッ！？』

サッくんは緑ヶ丘大学を受験するって言ってた。
それって卒業したらサッくんとは一緒にいられなくなっちゃう…

『うぅ…』

『今度はどうしたの？』

『和ちゃ～ん…　卒業したらサッくんと離れ離れになっちゃうよ～…』

『何で今その話題になったのよ…』

『ヤダなぁ～…』

『咲也と思い出作るって決めたんでしょ？だったら、この夏休みで思い出作ったらどう？』

ぐで～っと机に身体を倒していた私は和ちゃんのその言葉を聞いてガバッと起き上がる。

『そうだよね！だから夏休みってあるんだよね！』

『いや、そのためにあるんじゃないけど…』

『あ！そうだ！』

『はぁ…　全くこの娘は…』

私は良い事を思い付いたからケータイを取り出してあずにゃんにメールを…

『そーしん！』

あ、そういえば明日、紀実さん達と私とサッくんとで演奏するんだった。

ちょこっと忘れてた。
ドンマイドンマイ。

『はい静かにしてね
明日からの夏休み、皆さん有意義に過ごしてくださいね
但し三年生の皆さんは夏期講習もありますので、あまり羽目をハズさないでほどほどにしてください』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『えーっと…』

ＨＲ中にケータイが震えて先生に見つからないように誰からのメールを確認したら唯先輩だった。

さすがに内容を確認することが出来なかったから、ＨＲが終わって放課後になった今、ケータイを開いて操作していく。

【あずにゃん！今年も合宿するよね？賛成だったら写メ送ってね！】

『え？』

唯先輩からのメールを確認したら思わず首を小さく傾げてしまった。

だって、てっきり私は今年の合宿はしないって思ってたのにこんなメールがきたから。

でも先輩達は受験生なのに合宿しても良いのかな？

軽音部のことを考えてくれてるのは嬉しいけど…いや、唯先輩のことだから合宿は遊ぶことになってるんだろうなぁ…

ていうか何で写メを送らなきゃいけないんだろう？

『梓ちゃん』

『ニャッ！？』

私が色々考えていたら突然、憂の声が聞こえてビクッと肩を揺らす。

び、びっくりしたぁ…

『どうしたの？考え事？』

『う、うん　ちょっと…』

とりあえず憂の意見を参考にしようと思って唯先輩からのメールを憂に見せる。

『へぇ～　今年も合宿するんだね～』

『みたいなんだけど、先輩達は受験生でしょ？良いのかなぁって…』

そりゃあ合宿するのは賛成なんだけど、やっぱりそこがポイントなんだよね。
それに澪先輩やサク先輩が頷いたとは思えない。
何かこのメールは唯先輩の独断な気がしてきたぞぉ…

『良いんじゃないかな？』

『えっ？』

メールをジッと見ていたらそんな言葉が聞こえてきたから視線を憂に移すと、憂は微笑んでいた。

『受験生なんだよ？夏は受験勉強を追い込む時期っていうのに、合宿にうつつを抜かしてて良いの？』

『確かにお姉ちゃん達は受験生で勉強も大変だけど、だからこそこういう息抜きも必要なんだと思うよ』

『……』

そうだよね。

勉強漬けの毎日だったら気が滅入っちゃうかもね。

だからといって本来練習する筈の合宿で息抜きはどうかと思うけど…

『うん　そうだよね』

『うん♪じゃあお姉ちゃんに写真送ろ?』

何で写メを送らなきゃいけないのか分からないけど唯先輩だからって理由で納得して、私は立ち上がって憂にケータイを渡す。

『撮るよ~?』

『う、うん』

賛成って分かるように私は右手を小さく上げる。
ていうかちょっと恥ずかしい…

『はい、チーズ』

カシャ

『と、撮れた？』

『うん　純ちゃんもバッチリ写ってるよ』

え？純？

憂から渡されたケータイを見ると、何故か私の背後に通りすがった純がカメラ目線でＶサインをしていた。

『ホントだね　バッチリだ』

私の肩に手を置いて純がケータイを覗き込む。

『どうして純が写り込んでるの？』

とりあえず唯先輩に『私は賛成です』という本文と今さっき撮った写真を添付したメールを返信して純に振り返る。

『何か楽しそうだったからさ
もしかしてマズかった？』

『別にそんなことはないけど』

多分。

『それで何してたの？』

『お姉ちゃんが梓ちゃんに写メを送ってってメールがきたから、その写真を撮ってたんだよ』

『え？もしかして軽音部絡みだったりとか…？』

『そうだけど…』

と、私が頷くと純は冷や汗をかきながら慌てだした。

『うわわわっ！梓っ！今の唯先輩に送っちゃダメだよっ！？』

『もう送っちゃったよ？』

『えーっ！？み、澪先輩に私が変な娘って思われちゃったらどうしよう…』

『大丈夫だよ純ちゃん』

『うん　そんなこと思われないと思うよ』

『うぅ…　そっかなぁ…』

ガックリとうなだれる純に憂が慰めているのを見ながら、ふと考える。

（せっかく合宿するんだから、タメになる事したいな）

う～ん…　何か良い案はないかな？

『ねぇねぇ、今年の夏もお祭行こうよ？』

『もちろん！浴衣着たいもん』

聞こえてきたクラスメイトの会話に私は閃いた。

（お祭…　そうだっ！）

夏フェス！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

クーラーはまだか？と愚痴りたくなる程の相変わらずの猛暑。

どこに行こうともこの暑さは変らず、それは廊下も当然だ。

『あちぃ…』

『あんまり暑いって言ってたら身体に良くないぞ咲也』

『…だったら太陽ぶっ壊わしてこいっつってんだろ…』

『だから無理だって』

一学期最後のＨＲが終わり、安物扇子で扇ぎながら部室に向かう。
すると、その途中で先頭を歩いていた平沢が突如として立ち止まった。

『どうしたの？唯ちゃん』

問い掛けた琴吹に反応した平沢は何故か得意顔で俺達に振り返り、
こう言った。

『合宿をしよう！』

と。

脈絡なく言い放った平沢への反応は、見事に真っ二つに分かれた。

『『は？』』

いきなりの提案に当たり前な反応を示した俺と秋山。

『『さんせ～い！』』

疑うことを知らないのか、疑う必要を感じないのか、高々と手を上げる田井中と琴吹。

『ちょっと待てお前ら！
私達受験生なんだぞ？
受験勉強しなきゃいけないだろ』

『でもでも澪ちゃん、夏休みなんだよ？』

『いや、だから…』

平沢の理由になってないまさかの切り返しに秋山が押される。
しかし負けられない秋山は（決して勝敗ではないと思う）切り札を平沢に叩き付ける。

『そもそも、そういうことは梓にも聞いてみないと』

奥の手のチビンテールの存在をハッキリと得意顔の平沢にぶつける。
そう『得意顔』の平沢に。

『ふんすっ！』

得意顔の理由が判明する。
平沢は既に中野を味方につけていた。
その証拠として平沢が俺と秋山に、これ見よがしな態度でケータイに映されている中野の画像を見せつける。

小さなケータイのディスプレイ画面には賛成の意を伝えるために小さく右手を挙手している中野がいた。

ちなみにカメラ目線をよこしている鈴木も中野の背後にいるが…何でいるんだよ?変な奴だ。

『メールして、あずにゃんにも聞いといたんだよ』

『五対一だな』

『……』

意見も反論も異論も口に出してない俺は、田井中によるといつの間にやら賛成になっていた。

思い返せば、一年時の合宿は丸め込まれ、二年時の合宿は知らぬ間に勝手に計画が進められ、そして今年はびっくりなことに一言も発さずにして俺の合宿参加が決まりそうだ。

『おーし!今年も合宿やるぞーっ!』

『『おーっ！』』
『お、おー…』
『……』

決定してしまった。
元気ハツラツに拳を掲げる田井中の号令に平沢と琴吹が続き、敗北を喫した秋山が力なく拳を上げる。

『…あちぃ…』

俺はそんな光景を扇子で扇ぎながら他人事のように眺めていた。

まぁ、合宿をやるにしろ、やらないにしろ、どっちでも良かったりする。
確かに俺達は受験生で受験勉強は大事だろうが、夏休み全てをそれに注ぐつもりは毛頭ない。
意図は違うだろうが、先程のＨＲで山中担任が『ほどほどにしてください』っと言っていたし。

『さて…』

拳を高々と掲げていた田井中がその拳をゆっくりと下ろしながら漸く俺に意見を求めてきた。

『サクはもちろん賛成だろ？』

しかし、それは既に決まったかのような口振りだった。

『さんせーい！』

更に平沢がその答えをやっぱり俺の意見も聞かずに扇子を持ってない左手を掴んで無理矢理手を上げる。

『よし！サクも澪も賛成ってことで…合宿やるぞーっ！』

『『おーっ』』
『お、おー…』
『はぁ…』

再び宣誓の拳を突き上げる面々にため息を吐いて、漸く口を開く。

『別に合宿をするのはかまわねェが…』

『り、りっちゃん！』

『つ、ついにサクが素直になったぞー！』

聞けよ人の話。

何を互いに抱き付きながらアルプスに住む少女の親友が車椅子から立ち上がった瞬間みたいな感動を感じてんだ。

『…今は明日の本番の事を考えとけよ　特にお前』

閉じた扇子で平沢を指す。

『……大丈夫だよ～♪』

その間はなんだ。

『…とにかく、さっさっと部室行って練習すんぞ』

『ラジャー！サッくん隊員！』

『じゃあ私達はムギの美味しいかき氷でも食べるか～』

『さすがに、ソレは持ってきてないだろ』

『ううん　氷はあるわよ♪』

『えっ！？』

『ムギちゃんホントっ！？』

『…お前は過剰な反応すんな』

『でも、かき氷機持ってくるの忘れちゃった♪』

『ぶ～…』

『なんだよムギ～…　期待したじゃんか～…』

『お前も落胆した顔すんなよ…』

『えっ？し、してないぞ私はっ！』

『まぁいいや！合宿できることになったし～♪』

『お、おいサク！ムギのお菓子が大好きな唯が『まぁいいや』って…』

『…この暑さにやれたか…』

『お前らヒドいこと言ってるぞ』

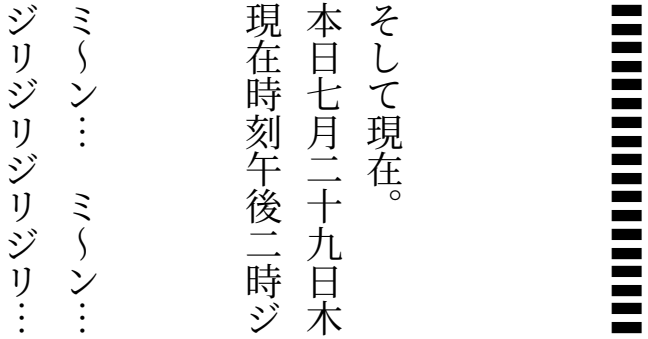
『あはは…』

『ね～♪サッくん♪』

『あぁ？』

『エへへ～♪』

『『『？』』』



そして現在。
本日七月二十九日木曜日。
現在時刻午後二時ジャスト。

ミ～ン…　ミ～ン…
ジリジリジリジリ…

「…あちィ…」

「あんまり暑いって言ってたら身体に良くないぞ咲也」

「…だったら太陽ぶっ壊してこいっつってんだろ…」

「だから無理だって」

「この前も澪とサクは、そんな会話してた気がするんだけど」

平沢の衝撃体質が発覚した翌日。
セミの大合唱に嫌気を感じつつ、日差しがキツい地獄のような陽炎が揺らめくアスファルトの道を俺達は歩いていた。

何も自らこんな地獄に身を投じたわけではなく、あってほしくない理由があるからだ。

昨日の部活で合宿の話題になり、打ち合わせをしようという議題になった。
せっかくのクーラーが使用禁止になった事と酷暑で気力が急降下し萎えた俺は、長イスに横たわりノックダウンしていたので話を全く聞いてなかった。
そして平沢自身から平沢家にて打ち合わせを行う手筈になったと聞かされた時は後悔したものだ。

無論、すんなりと平沢家に行く俺ではないので、ボイコットをしようと画策していたが、それを予想していた田井中が秋山を連れ添って我が家の玄関の扉を叩いたのは今から約十分前。

『オッス♪サク♪』

『こ、こ、こ、こ、こ、こんにちは…！』

『……』

玄関で満面の笑顔で片手を上げる田井中と鶏のような鳴き声を発声してスキルを発動している秋山を見た時は思わずうなだれた。

刺客が来訪してしまった以上、ボイコットはゴミ箱行きになり、かなり渋々に靴を履いた。

つうか…

「…何で平沢んチで打ち合わせなんだ…」

「さぁ？唯がその方が良いって言うから決まったんだけど、言われてみれば何でだろうな？」

「多分、家から出たくないんじゃないかな？この暑さだし」

「「あぁ、納得」」

秋山の推理は疑う余地がないので俺と田井中は天然のくせにズル賢い平沢の行動に感得する。

その後、『今年の合宿地はまたムギの別荘が良いよな～』『遊ぶんじゃなくて練習するんだからな』と会話するカチューシャドラマーとレフティベーシストの数歩後ろをダラッダラッと俺が牛歩していると、気が付けば平沢家に到着。

本来ならば躊躇する俺だが、そろそろ日差しに負けそうなので、いち早くインターフォンをプッシュ。

♪ピンポ～ン

「『は～い？』」

「…俺だ…」

「いやいやサク　名前言わなきゃ誰だか分かんないだろ」

「…過去に二回程実績がある…」

「『あ、咲也さん♪』」

「「えっ!?すごいな憂ちゃんっ!」」

「『澪さんと律さんも一緒ですか?』」

「…あぁ…」

「『じゃあちょっと待っててください　今から玄関に行きますので』」

この暑さで俺の記憶が狂ってなければ、平沢家に足を運んだのは確か…これで五回目だ。

「はぁ…」

様々な理由を付けて拒否っていたが、結果五回も来てしまっている。

ガチャ

「いらっしゃい　咲也さん、澪さん、律さん」

「やっほ～　憂ちゃん」

「こんにちは　憂ちゃん」

「梓ちゃんと紬さんはもう来てますから、どうぞ上がってください」

「「お邪魔しまーす」」

情操教育だの、俺の考えが古いだの、親しき仲にも礼儀ありだの…

一定のラインを引いている筈なのだが、俺はここにいる。

（俺が変ってきてんのか？）

冗談。アホらしい。何考えてんだ。

現状維持で十分。

俺がここにいるのは軽音部の付き合い故。

どうやら俺の脳は暑さにやられたようだ。

「咲也さん？」

「……あン？」

「どうしたんですか？」

「……別に」

「外は暑いので、中に入ってください　冷たい麦茶を用意しますね」

短いポニーテールを揺らしながら微笑む平沢妹に『あぁ…』と短く返答し人生で五回目の平沢家に足を踏み入れた。

……

「去年と一昨年は海行ったから、今年は山かな！」

「え～っ　今年も海がいい～」

「川で魚捕ってバーベキューしたりできるぞ唯」

「ほぅ…　おいしそうだねぇ～」

「だろ～」

「遊ぶ気満々ですね…」

平沢妹により通された二階のリビングには平沢と琴吹と中野が雑談を交わしていた。

そこに俺と秋山と田井中が合流したことにより、早速打ち合わせ開始。

しかし、俺は『どうせ遊び呆けるんだろ』と悟り、リビングにあったPとSのハード機バージョン2を勝手にプレイ中。

ちなみにソフトは格ゲー。

平沢曰く春子とかいう奴に借りたらしいが…誰だソイツ？

「ところで、梓はどこが良い？」

視線と意識は液晶に映る、俺の両手にあるコントローラーで自由自在に操作するキャラにいってるが、背中で打ち合わせの内容を聞いているという実に器用なことをしている俺。
故に秋山が中野に意見を求める声もしっかり聞いている。

「あの提案があるんですけど…」

「はい　どうぞあずにゃん」

「山は山でも野外フェスに行きませんか？」

ピクッ

中野の提案に一瞬コントローラーの指が止まる。

「…夏フェスか？」

「あ、はい　そうです」

【ＲＯＣＫ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ】
【ＦＵＪＩ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ】
【ａｐ　ｂａｎｋ　ｆｅｓ】

有名な野外フェスで俺が真っ先に思い付くのはこの三つのフェス。

ちなみに有名な都市型フェスで【ＳＵＭＭＥＲ　ＳＯＮＩＣ】というものもある。

日本にはこの他にも大小様々なフェスが開催されるが、興味はあれど一度も行ったことはない。

なので、今年の合宿が夏フェスに行くのであれば実に有意義な時間が過ごせそうだ。

「夏フェスって何？」

「色んなバンドが大きな野外の会場で演奏するんだ
何万人もの人が集まるんだぜ」

初めて聞いたワードの平沢クエスチョンに田井中が答える。

「私、夏フェスって一度行ってみたいと思ってたんだ！」

「私もです！プロのバンドの演奏を聴くのも勉強になると思うんです！」

「そんなにすごいの？夏フェスって？」

「夏フェスに参加しなかったら夏がきた気がしねぇって言う奴がいるぐらいだからな…
下手したら日本の夏の風物詩になるかもな」

興奮した様子の秋山と中野に興味が湧いたのか琴吹の質問に今度は俺が格ゲーをしながら答える。

「んじゃ決定だな」

「…行くのか？」

「おう！私も行きたいし」

「ふーん…」

嬉しいことに今年の合宿は夏フェスに参加することに決まり、俺はゲームの電源を落とし、平沢達に振り返る。

するとその瞬間、俺は確かに見た。

まるでこの家の住人の如く、至極当然な感じに自然な振る舞いでリビングにやってきて田井中と平沢妹の間のスペースに腰を下ろした……山中顧問を…

「サッくんも、もちろん賛成だよね？」

「あぁ…　俺も夏フェスには興味あるからなあとサッくん言うな」

「へぇ～　珍しくサクが乗り気だな」

「…じゃあ否定してやろうか？」

「いやいや、それは困るから…」

とりあえず勝手に麦茶を飲んでいる山中顧問をスルーする。
つうか何で誰も気付かねェんだよ…

「あ、でもチケットとかどうすんの？今からでも取れんのか？」

「あー…」

「難しいだろうな…　年々有名になってるやつなら尚更だ」

田井中の投げ掛けに中野が見切り発車発言だったと理解するのに時間はいらなかった。
なので俺が現実を突き付ける。

「…例えチケットが取れたとしても、料金や交通費、宿泊代がかか

る」

「そうだよな…　結構お金が必要になるな…」

興奮が覚めたのか秋山が思案顔になり、アレコレと模索し始める。

「じゃあみんなでバイトしようよ！」

「…そんなことしてたら、それこそチケットが取れなくなるぞ」

平沢が光明の光を照らし出すが、俺がその光を遮る。

しかし、再び光が照らされる…

「仕方ないわね～　今回は特別よ？」

自然と馴染んでいた山中顧問の手によって。

そう文字通り『手によって』だ。

左手には七枚のチケットがあり、ヒラヒラと嫌らしく揺らしていた。

『おぉーっ！』

そのチケットに釘付けになり、歓声を上げる俺以外の軽音部員。

だからそっちじゃなくてこの人の存在に驚けよお前ら…

「すごいです！」

「さっすがさわちゃん！」

「エッヘン！」

「…アンタ何でここにいるんだよ」

「それは私が軽音部の顧問だからよ！」

いや俺が聞いてんのは何故今日、平沢家にて打ち合わせがある事を知ってんだっつうこと。

昨日は写真を撮り終わったら呆然としたままで、この人は聞いてなかった筈なんだが…まぁ、良いか。

「って、さわちゃん!?ホントに神出鬼没だなっ!」

「あっ　ホントだ!さわちゃんいつの間に!」

漸く神出鬼没のライセンスを習得している山中顧問の存在に気付いたらしい田井中と平沢が驚愕の声をあげる。
ちなみに秋山も琴吹も中野も平沢妹も声に出さずとも驚いているようで、ポカンとしていた。

「さて、夏フェスの参加が決まったけど…気を引き締めなさい!」

「うるせェって…」

急に何なんだこの人は…

いきなり立ち上がって拳を握り締める山中顧問に少々うんざりする。

「咲也くん！そんな態度じゃ負けるわよ！」

「あぁ？」

「な、何にですか？」

ポカン状態から帰還した秋山がそう問い掛けると…

「夏によ！」

あらぬ方向を、さながらクラーク博士の銅像のように指差す山中顧問。
そして何やら力説し始める。

「良いっ？ギラギラ燃える太陽！ムンムンした熱気！そして今かと獲物を待ち構える夏の虫達！
夏フェスに参戦する者はね、その全てと戦うの！

覚悟なさい！」

アンタと俺達の温度差を考えてほしい。
一人だけ熱中してる…

「はい！分かりました！」

「はっ！澪先輩はやる気だ！」

「……」

訂正。二人だ。

「夏へソって奥が深いんだね…」
「フェスな」

おもしろミスをする平沢に間髪を入れずツッコむ。

「いよいよ私も夏フェスデビューか…」

思えばこの時から、普段の秋山じゃなくなっていったんだが、当然今の俺はそれに気付けないでいた。

――――――――――

そして時は流れ。
本日八月六日金曜日。
現在時刻午後八時ジャスト。

晩メシを食べ終え入浴を済ませ、明日に控えた合宿…というか夏フェス参戦の準備を済ませ、自室でサッカー雑誌を読んでいると…

ガチャ

「咲也、入るぞ」

「もう入ってんじゃねェか…」

最早ノックという行為を一切無視した親父がやってきた。

「そう細かい事を気にするな
気にしたら負けだ」

「何にだよ…　で？何だよ？」

「あぁ　新作の小説がやっと出来たんだ
読んで感想を聞かせてくれないか？」

そう言って厚さ１ｃｍはあろうかという紙束を差し出してきた。

やや短めの小説らしい…つうか去年の学園ものの小説はどうなったんだ？

「…いつまでに読み終えりゃあ良いんだ？」

とりあえず考えるだけ無駄と直感し、小説を受け取る。

「明日の朝ぐらいまで」

「…無理に決まってんだろうが」

現在時刻午後八時三分。
今から厚さ１ｃｍ程とはいえ長そうな小説を俺に読ませ朝に感想を聞かせろだと？

そりゃあ何だ？
完徹しろってか？
冗談じゃない。明日は早朝に起きなければならない。
小説なんぞ読んでる暇はない。

「…アンタも知ってんだろ？明日は部活の合宿があんだよ」

「だから朝ぐらいまでに読んで感想を聞かせてくれ」

「……帰ってからな」

「そいつは無理だ
締切は明日の昼だからな」

「なんでンなギリギリにあげてんだよ…」

「それが作家の性だ」

「……」

堂々と言い張れることじゃねェぞ…

「じゃあ頼むな」

バタン…

そんな言葉と新作小説を残し、小説家は去っていった…

「…焼いちまうか？」

新作を手に取り、まじまじと見ながら呟いてみるが、流石にそんな事は出来ない。

「はぁ…」

（やるしかねェのか…）

そんな事を思いながら、ため息と共にベッドにダイブし小説を読んでいくことに…

（ん？）

何か激しくデジャブを感じるのは気のせいか？
いや…これは二年前にあったぞ…

「最悪…」

この呟きを最後に、自室には紙をめくる音と俺が身動ぎをする音しかしなくなった。

第九十五話（前書き）

最後の合宿、ロックフェスティバル編その二です。

第九十五話

薄暗い真夏の早朝。
たまに走り抜ける車。
遠くに聞こえる犬の鳴き声。
普段の機能を停止し、黄色いライトが点滅する信号機。
その信号機に止まり、しきりに囀る小鳥。
退屈そうに、眠そうな態度のコンビニ店員。
これが今の風景。

右手にはアコギのギターケースではなくボストンバック。
左手にはテレキャスのギターケースではなく何もナシ。
首にはヘッドフォン。
たまに欠伸。
おぼつかない足取り。
虚ろな瞳。
浅い呼吸。
今にも落ちそうな瞼。
眼の下にはクマ。
グレードアップした不機嫌面。
そして自己嫌悪。
これが今の俺。

自分で自分を褒めてやりたい。
よく読破したな、と。
よく幸せ面して眠る親父を蹴らなかったな、と。

反面、自分で自分を戒めたい。
何故数分でも睡眠をとらなかったのか、と。

何故素直に親父の命令に従ったのか、と。

「……」

ため息？
そんなものはしない。
するのは一分でも早く駅にあるバスターミナルのベンチで横になり、軽音部員が集合するのを待つ事だ。
とにかく睡眠をとらなければ…マジで倒れる…

本日八月七日土曜日。
現在時刻午前五時五十分。

早朝のこの時間に千鳥足のような歩調で進む俺は、警察に職務質問されそうな風貌でひたすら駅へ向かう。

本日は夏フェス参戦当日。
俺達が今回参戦するフェスは【ＳＵＭＭＥＲ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ　２０１０】という、土曜、日曜の二日間通して長野県で開催される大規模ロックフェス。
ちなみに年々人気と注目度が上昇してきていたりする。

当然、山で開催されるので野外。
つまり夏の日差しや気温をモロに受け、演奏するミュージシャンも観客もかなり体力を使う。

そんなものに参戦しようというのに、今の俺は睡眠不足に襲われている。

このままではマジで体力的にヤバいので、何とか辿り着いた駅のバスターミナルにあるベンチで横になろうと、そこに足を動かす。

しかし体力的だけではなく精神的にもキツつなる出来事が発生。

「やっほ〜っ！」

「……」

まさか地元で山彦が聞こえてくるとは…

しかもその声は聞き覚えがあり過ぎる。

「お〜いっ！」

今にも飛びそうな意識を何とか保ち、最近よく当たる嫌な予感を感じながら山彦発生源に視線を向けると、そこには兎のように飛び跳ねながら両手をブンブンと俺に振ってしまっている平沢。

嫌な予感はこの後の…

「サッ～く～ん～っ！」

これだ。

嬉しそうにニコニコニコニコしやがって…

バスターミナルの周囲には直通のシャトルバスを待ち、フェスに参戦すべく早朝にもかかわらず一クラス程度の連中が集結している。何を言いたいかというと、その連中から特異・奇異な視線がさっきから俺と平沢にグサグサと突き刺さってくる。

「サッくんや～い！」

しかし平沢はそんな視線など意に介さず、ひらすらテンション高めに叫ぶ。

（頼むから止めてくれ…）

願ったところで叶う筈もないので、山彦発生人にコッチに来いと手招きする。

「おはよ～…わっ！サッくんクマがすごいよ！？」

「…お前のテンションの方がスゲェよ…」

白生地のタンクトップにデニムのハーフパンツ、麦藁帽子、はしゃいだ感丸出しの星型サングラスを装備した平沢がトコトコと俺の元に来たことにより視線の刃は霧散したが、今度は平沢のテンションの高さにうんざりする。

「どうしたの？寝てないの？」

「…眠れる環境にいれなかったからな…」

「ダメだよサッくん！さわちゃんが言ってたよ？ちゃんと睡眠をとっておきなさいって」

そりゃ何とも耳が痛い言葉だ。

「はぁ…」

真っ先にやるべき事だったベンチで横になる事を実行する前にため息が漏れてしまった。

とりあえずベンチに腰を下ろし、何が嬉しいのか未だにニコニコしている平沢を見上げる。

「…お前が最初に来たのか…？」

「うん！今日って集合時間が早いから遅刻しないように目覚まし二個セットしたんだよ！」

Vサインをするが、そのサインは目覚ましの二個なのか、『どうだ！』というアピールなのか。

…どっちでも良いか…

「でも憂に起こしてもらったんだけどね～」

「…意味ねェじゃねェか…」

平沢とこんな世間話をしている場合ではないので、バックを枕代わりにし、腕で顔を覆ってスタンバイ完了。

「サッくん寝ちゃうの？」

「…サッくん言うな…

全員が集まったら起こせ…」

「うん！私がちゃんとサッくんを起こすから、寝てていいよ」

俺の横に座った気配のする平沢に返事をすることなく、意識をブラックアウト。

「こういう時って膝枕かなぁ？」

しかし物騒な発言が聞こえたので意識を光の速さ並のスピードで急浮上させて釘を刺す。

「…ゼッテェすんなよ…」

「わっ！起きてたんだ」

「…お前のせいでな…
もう一回言うぞ…ゼッテェすんな…」

「……しないよ～」

その間に不安を覚えたが、一応口答で約束したので、今度こそ意識をブラックアウト。

……

「……ん」

例えばそれは水に波紋が広がる様に徐々に俺の脳に浸透していく言葉。

「……くん」

例えばそれはロッキングチェアの様に心地よい適度な振動で俺の身体が揺さぶれる。

「…ッくん」

例えばそれは、人肌が俺の頬に触れる様に…つうか人肌だ。

「サッくん」

「……」

腕をずらし、うっすらと瞼を開いたその先にはぼやけた平沢の顔。
頭にはバックの感触を感じ、平沢が奇行な愚行に走らなかったことに安堵。
頬に触れた人肌は平沢がペチペチと俺の頬を優しく叩いていた感覚だと、隣に座っている平沢の右手が俺の目の前を通り過ぎていったことにより確認がとれた。

「サク先輩起きましたか？」

「ううん　よっぽど眠たいんだね～」

「悠長なこと言ってる場合じゃないぞ　もうバスが来てるんだから早くサクを起こさなきゃ」

次いで聞こえてきたのは中野と田井中の声。
その会話の中の『バス』という単語を聞き取り、俺は未だに覗き込んでいる平沢にぶつからないように、ゆっくりと身体を起こす。

「あ、おはよ～♪サッくん♪」

「うおっ！サクの不機嫌顔がレベルアップしてる！」

「律先輩　そんなこと言ったら、またサク先輩に怒られちゃいますよ」

どうやら全員集合したようだ。
中野と田井中と琴吹と秋山が俺を取り囲みながら。
視線を移すと何故か顔色が悪い山中顧問が『気持ち悪い…』とか言って正に千鳥足でバスに乗り込もうとしている。

「ダメじゃないか咲也
しっかり睡眠をとって体調を万全にしなきゃ」

「…お前に言われたくねェぞ」

秋山が腰に手を当ててそんなことを言ってくるが、よくよく見ると秋山にもクマの存在を確認。
つまりコイツも睡眠不足だと仮定出来る。

「まぁ、澪の場合は一晩中どこのバンド聴くか検討してたからな」

田井中がポッケから一枚のルーズリーフを取り出した秋山に苦笑いを浮かべる。

「だって見たいバンドがたくさん出るんだ！ほら！」

「…テンション高ェなコイツも…」

何故か俺にそのルーズリーフを渡してくる。
そこには二日間どの時間、会場で出場するバンド名を中々のハードスケジュールで書かれてあった。
俺も事前に興味があるバンド等を調べているがここまでハードではない。

「…ところで、何であの人は満身創痍なんだ…？」

ルーズリーフを来たるフェスにワクワクしている秋山に丁重に返し、バスの運転手に『ゆ、揺れます？安全運転でお願いします…』と懇願している青白い顔色の山中顧問に力なく指差す。

「さわちゃんは二日酔いで気持ち悪いんだって～」

「気合い入れろって言ってたの先生なのに…」

平沢の報告と中野の呟きに内心で『アホだ』と毒を吐き、立ち上がってバックを持ち上げる。

「サクもさわちゃんも、今からフェスに行くっていうのに大丈夫かよ？」

「…会場まで三時間ぐらいあんだろ…　その間に睡眠を貪る…」

「何かいつもサクって合宿の時はハプニングが起こるよな」

一年時と今回は親父の魔の手により睡眠不足に陥り、二年時は親父の魔の手により真夏の草野球に参加させられ、その後は山中顧問の魔の手により遭難。
全部俺の周りの大人のせいじゃねェか…

「…とにかく行くぞ…」

今更過ぎた事を責めても仕方がないと渋々納得し、まだおぼつかない足取りでバスに向かう。

「サッくん大丈夫？鞄持とうか？」

「…お前に心配される程、落ちぶれちゃいねェよ…」

「ぶぅ！ヒドいよ！サッくんのこと心配してるのに～…」

「はぁ…　分かったからバスの中じゃ静かにしてろよ…」

「うん！」

「立ち直り早いですね」

「梓ちゃん！私、焼きそば食べたい！」

「えっ？急にどうしたんですかムギ先輩？」

「律！早く！バスが出ちゃう！」

「そんなに急がなくても大丈夫だって～
まだ私達の他にも乗ってない人がいるんだからさ～」

フェスのチケットと共にバスのチケットを山中顧問から渡されてあ

り、予め決められていた座席に座る。
前から三番目の右座席には山中顧問と平沢が座り、その後ろに琴吹と中野が。
通路を挟んだ平沢と山中顧問の席の横に俺が座り（隣は顔も知らない野郎）後ろに秋山と田井中が座る。
そして座席に空席がないことを確認した運転手がハンドルを握り、地球に優しくない黒々とした排気ガスを排出しながらシャトルバスは、その巨体を動かした。

――――――――――

バスが走り始めて約三十分。
高速をひた走る車内はカオスに見舞われていた。

（うるせェ…）

幾らヘッドフォンから音楽が流れようとも、僅かに聞こえる声に意識がいってしまう。

「うぅ…　酔った…」

「あら…　気が合うじゃない…」

「さわちゃんは二日酔いでしょ…」

「私ってばＲＯＣＫだから…」

「なにそれ…？分かんない…」

「唯先輩って酔いやすいんですか？」

「うん…　修学旅行の時は大丈夫だったのに…
何でかな…？」

「えっと…　すいません、分からないです」

二日酔いと乗り物酔いにダウンしている平沢と山中顧問は良い。
俺の言い付け通り静かにしているからだ。

「このバンドとこのバンドは絶対見る！」

「無理だって　同じ時間で違う会場じゃん」

「身体が二つ欲しい！」

「どっちか選べ！それか半分ずつ聴けよ」

「ヤダ！私は両方ちゃんと聴きたい！」

「だから同じ時間で違う会場だから無理だって」

「身体が二つ欲しい！」

「どっちか選べ！それか半分ずつ聴けよ」

「ヤダ！私は両方ちゃんと聴きたい！」

「だから同じ時間で違う会場だから無理だって」

「身体が二つ欲しい！」

「どっちか選べ！って、さっきからループしてるー！」

問題はコイツらだ。

有り得ないわがままを言う秋山に田井中が正論をぶつけるが、徐々に白熱していき声量が上がっていく。
幸いなことに俺達以外の連中は夢の国に一旦旅行中なので、文句や注意はしないが、今、正に寝ようとしている俺にとっては迷惑以外の何物でもない。

「私、焼きそば！焼きそば！」

ちなみにコイツもうるさい。
何故か焼きそば依存症になってしまった琴吹はさっきからこんなことばかり言って隣に座る中野を困惑させる一方だ。

「だ、ダメかも…」

「気持ち悪い…」

理由は違えど共に酔っている山中顧問と平沢。

「そうだ！瞬間移動すれば良いんだ！」

「無理言うなよ…」

普段と立ち位置が逆転した秋山と田井中。

「焼きそばだけは絶対食べたい！」

「え？え？ム、ムギ先輩？」

小さいわがままを言う琴吹に、もうどうしていいか分からない中野。

（静かにしろよ…）

そんなカオスを何とかスルーしようと、音楽が漏れないギリギリのラインまでヘッドフォンの音量を上げてドリームワールドに旅立とうとする俺。

「サッくん…助けて…」

俺の努力が功を奏したのか、やっと意識が本日二・五度目のブラックアウト。

「サッくん…？ぁ、また寝てる…」

―――――――――

現在時刻午前七時三十三分。

「……」

瞼を開け、耳から首にヘッドフォンを移動し、寝違えた痛む首をさすりながら、やけに静かな車内に疑問を抱く。
バスは完全に停車しており、平沢達の話し声も聞こえないので状況を確認するために周囲を確認する。

「頑張るのよさわ子…」

車内にはタオルで眼を覆いながら自分自身を励ます顧問以外は誰もいなかった。

視線を窓を介して外に向けると周りには大型トラックや観光バスが停車してある。

そして視線を動かせばガソリンスタンド、レストランや売店や休憩所等がある建物。

そして理解する。

（サービスエリアか…）

と。

些か喉が渇きを訴え、水分を欲してくるので通路に足を置いて立ち上がる。その途端…

「さ、咲也くん…」

「あン？」

地獄からの呻き声の如く、低音ボイスで俺を呼ぶので、視線を動かせばタオルを退し、弱々しい光が瞳に灯っている山中顧問が首を動かし俺を見ていた。

「ンだよ…」

「悪いんだけど…　水…買ってきてくれないかしら…」

「…つうか何で二日酔いしてんだよアンタは」

「ほら…私って生粋のＲＯＣＫじゃない…？」

確かにな。
あのＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬでの豹変ぶりを目の当たりにしたら狂喜なロッカーだ。

「だからよ…」
「自己完結すんな」

深い理由を知りたいわけではないが、あまりにも理解不明なので即時にツッコむ。

「血肉躍るロックの祭典の前日は盛り上がっちゃって…
ついつい羽目をハズしちゃったの…」

「夏休み前に羽目ハズすなっつったの誰だよ…」

「テヘ☆私☆」

顔色悪く息絶え絶えに年不相当にコツンと頭を軽く叩き、ペロっと小さく舌を出す。

「画的にもキツいから金輪際二度とするな」

「真顔で言わないで…　ヘコむから…」

『水買ってきてね…』と痛い顧問の呻きを背中で聞いてバスから外に降り立つ。
さほどまだ気温は高くないが太陽は完全に昇り、今日も澄み渡る青空を創ってくれる。

絶好なフェス日和なんだが、どうせ猛暑になるんだろうなと嫌気を感じつつ、自分の分と痛い顧問の分の飲料を購入するために自販機に足を進める。

「咲也君」

目の前には自販機。
財布から小銭を取り出して投入しようとしたところに琴吹が御機嫌な様子（普段から）でやってきた。

「気持ち良く寝てたから起こさなかったけど、よく眠れた？」

「あぁ…　また寝るが」

まだまだ睡魔は俺の中に存在し、ドリームワールドの案内人に連行しようとしているので、完全に退治する必要がある。

「…アイツらは？」

「みんなは中にいるわ♪
唯ちゃんなんか元気いっぱい♪」

「酔ってたんじゃねェのかアイツは…」

「何かサービスエリアに着いた途端に元気になったけど」

スゲェな。どんな理屈でアッサリ完治してんだ。

「サービスエリアってすごいのね♪
色んな物があったり、お店があったり♪」

もう一つの琴吹スキルである『興味津津』を発動させ、アッチコッチに首を動かしては瞳を輝かせる。

「…ンな言い方だとサービスエリアに来たのは初めてみてェだな」

小銭を自販機に投入してスポーツドリンクとミネラルウォーターを購入し、取り出し口から二本のペットボトルを取って立ち上がる。

「うん！初めて来たの！だから眼に映る物が全部新鮮♪」

「マジかよ…」

思わずペットボトルを落としそうになる。
何となく言ってみたが、まさか本当だったとは…
コイツの家はどんだけ庶民な生活とかけ離れてんだ…

「あっ！見て咲也君！」

「ンだよ…」

「焼きそば！焼きそばが売ってる！」

指差す先には食べ物を売ってあるブースが一つ。
こんな時間から早くも営業開始しているとは、張り切ってんな。

「…そんなに食いてぇんならさっさっと買ってこい」

焼きそばに執着する理由はさっぱりだが、別段知りたくはないのでキラキラと瞳を輝かせる琴吹に促すが…

「ううん　ここじゃ買わない」

「……」

思いがけないまさかの否定に言葉を失くす。

「焼きそば買うんだったら会場って決めてあるから！」

そのこだわりは何だ？

「私ね、山の中みたいな自然に囲まれた所で焼きそば食べるのが夢なの！」

「あっそ…」

「だからここじゃ買わないの」

知りたくはなかったが、五百円ぐらいで買える琴吹の安い小さな夢を知り、興味なさげに納得する。

「ほい　サッくん」

「…それで、お前はいつからいた？」

「さっき！」

すると琴吹の言う通り、グッタリとしていたのが嘘のようにハツラツとしている平沢が無駄に胸を張り、左手に持ってあるアイスを何故か俺に差し出す。

「…ンだよコレ」

「高原濃厚牛乳ソフトクリームだよ～」

「名前聞いてんじゃねェんだよ…
コレをどうしろと？」

「サッくんにあげる♪甘くて美味しいよ～♪」

かなり御満悦な表情で右手に持っていた自分の分のアイスを一口食べては『あま～い♪』と、どこぞやの芸人みたいなことを言う。

「……」

どうしたものかとは思うが、受け取らなければ徒に時間が経ちアイスは形状を崩していくだろう。
せっかく平沢が買ったのだからという理由をこじつけてアイスを受け取る。

「ぁ…エへへ～♪」

アイスが俺の右手にあることを確認した平沢が、かなり嬉しそうにニコニコと笑顔を浮かべる。

「はぁ…」

何か居心地の悪さを感じ、ため息を吐いて背を向ける。
その瞬間に…

「おやおや～♪な～んかラブラブだな～♪」

店内から出てきた田井中の憎たらしい程の戯言が俺の背中越しに聞こえてきた。

「ち、違うよ～！りっちゃん！」

「まぁまぁ照れんなって～♪」

「そんなんじゃないもん！思い出作りだもん！」

「……」

とりあえずこの場にいたら、俺にとっては良い方向には向かわないし尚且つ田井中からの口撃が面倒だ。

三十六計逃げるが何とやらということで、アイスを三口で完食し、左手に器用に持っていた二本のペットボトルの一本を右手に移動してバスに向かう。

「思い出？」

「そうだよ思い出！」

「ふーん　まぁそれで納得するか～」

「うー…」

「クスッ　唯ちゃんかわいい♪」

「もう、ムギちゃんまで～…」

「ごめんね　でも唯ちゃん、咲也君行っちゃったよ」

「ほぇ？あっ！サッくんがいなーい！」

「お～い澪～！梓～！そろそろ行くぞ～！」

「あ、はい　行きましょう澪先輩」

「ねぇ梓」

「はい？」

「分身とか出来ないかな？どうしても私はこのバンドとこのバンドをちゃんと聴きたいんだ」

「え、えっと…　律センパーイ！澪先輩を～！」

車内に戻り痛い顧問にミネラルウォーターを渡し、口内がやや甘ったるいのでスポーツドリンクを一口含み、ヘッドフォンをして再び眼を閉じる。

そして…

「さわちゃん！もうすぐ着く！？」

「唯ちゃん…　あぶな…い…から…揺らさないで…」

約一時間半の…

「オープニング間に合うよな！？」

「大丈夫だから落ち着けって澪」

時を経て…

「梓ちゃん『かた焼きそば』って広辞苑には載ってないの～」

「は、はあ…」

「でね？正式名称は『皿うどん』なんだって～♪」

「（サ、サク先輩！どう対処したら良いんでしょうか！）」

「…受け流しとけ」

シャトルバスは遂にロックフェスの会場に到着した。

人生初の夏フェス。
そして最後の合宿。
この二日間で一体何が俺を待ち受けてるやら。

「サッくんサッくん！」

「サッくん言うな…デカい声出すな」

「楽しもうね♪」

「……」

「むふふ♪ラブラブだな～♪」

「り、りっちゃ～ん！」

「はぁ…」

第九十五話（後書き）

アニメでは
【ＮＡＴＳＵ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ】
ですが、本作では
【ＳＵＭＭＥＲ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ　２０１０】
に変更しました。

第九十六話（前書き）

最後の合宿、ロックフェスティバル編その三です。

第九十六話

現在時刻午前九時十分

無事に目的地の長野県の、とある山に辿り着いた俺達はバスから降りる。

「うお～！山だ～っ！来たぞ山～っ！！」

「なんですかそれ…」

「叫ぶな…　頭に響く…」

「サク先輩、まだ眠いんですか？」

「クマがその証拠だ…」

バスのトランクから荷物を取り出し、フェス会場への入口に繋がる人の流れが発生しているので、俺達は便乗してその流れについていく。

「う～ん…」

「澪　まだ悩んでるのかよ」

「早く走ったら間に合うかな？」

「やっと現実的なのが出てきたな
そうしろそうしろ」

「でもそれだと最初の方が聴けないな…」

「仕方ないって　何回も言ったけど同じ時間で違う会場なんだからさ」

「やっぱり瞬間移動したい！」

「み～お～…」

【ＳＵＭＭＥＲ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ　２０１０】とデカデカと存在感を醸し出しているゲートに到着。
近年人気と注目度が上昇してきたフェスなだけはある。
乗ってきたバスは満席状態、そして会場入口ゲートには全国から集まったロックの祭典を楽しむための連中が大勢ひしめいていた。

中には家族で参戦している者達や外国人等々、様々な趣向の連中の姿も見られる。
当然俺達も女六人に男一人という、ある意味異質な者達の一つだったりする。
しかしそんなことを気にする暇がない程、周囲の連中からは会場にも入っていないのにフェスに対する期待感や高揚感がひしひしと伝わり感じられる。

こんな光景を目の当たりにすると、どれほど今回のフェスが人気か、どれほど出演ミュージシャンの定評があるが自ずと理解し納得する。

「あずにゃん、サッくん」

「はい？」

「サッくん言うな」

俺達が現在いるのはゲート前。
つまり今から会場に入場するのだが、いかんせんこの大人数だ。
幾らスタッフが優秀だとて、入口には限りがあるのでスムーズには入れない。
徐々に高くなってきた気温に嫌気を感じていたら、はしゃいだ感満載の星型サングラスを装備した平沢が口を開いた。

「会場においしいものあるよね？」

こういうどうでも良い質問の対処は中野に任せ、ため息を吐いて心頭滅却すれば火もまた涼しの境地を開拓しようと努力する。
要は気の持ちようだ。

「唯ちゃん　焼きそば、焼きそば食べよう！」

「私、このマリナーラっていうの食べたいな～」

「よし！気合い入れていくぞ！」

「何とか酔いが覚めてきたわね…」

焼きそば依存症の琴吹。
フェスの出店フードのパンフを見ながら吟味する平沢。
『お前どうした？』と問い掛けたくなる程のハイテンションの秋山。
顔色が戻ってきた山中顧問。

そんなカオスチックな奴らをスルーし、流れ始めた人波についていく。

「あの、サク先輩」

「あン？」

「唯先輩とムギ先輩って趣旨を間違ってないでしょうか…？」

「つうかズレまくりだな」

「…一々気にしてたら身が持たねェから、適度に受け流せ」

中野の危惧と田井中の呆れた物言いに的確な指示を与えて鞄からチケットを取り出す。

「良いんですかね…　このズレ…」

スタッフにチケットを渡し、引き換えに貰った紅いリストバンドをしっかり右手首に装着。

「サッくん　このリストバンドかわいいね～」

「サッくん言うな…失くすなよ　ただのリストバンドじゃねェからな」

「え？お金払ってないから無料じゃないの？」

そっちのタダじゃねェよ。

「このリストバンドはロックの祭典へのパスポートよ
失くすと再入場できなくなるから気をつけてね？」

「へぇ～　そうなんだ～」

「つか、さわちゃん元気になったな
二日酔いでグダグタだったのに」

「昨日の私は脱ぎ捨てたわ…」
「どこにだ」

しれっとスネークインしてきて遠い眼をしてどこぞやに視線を向ける復活顧問に瞬時かつ適度に反応してゲートをくぐる。

すると、そこには今まで以上の人の群が存在。
そして心なしか高くなった気温。
恐らく太陽からのプレゼントの照返しと、人工密度の熱気のせいだと思う。

俺以外の部員は帽子を持参しており、日差し対策はしているが、俺は帽子なんて持ってきてない。
『似合わない』という理由で。

帽子をかぶると目付きの悪さに拍車がかかり、不機嫌面と相俟って不審人物に変化してしまう…

そんなコンプレックスからくる理由で帽子を持ってこなかったが、些か早計だったな。

まだ睡魔が俺の中に存在しているし、苦手な夏の気温。
容赦なく照付ける太陽の日差し。
…倒れる可能性がある。

「ひ、人がいっぱい…
三億人ぐらいいる？」

「それ、日本の人口超えてます」

「既にこんなに人が…」

「大丈夫かよ澪？始まる前から」

「咲也君も大丈夫？気温が上がってきたけど」

「何とかな…」

せっかくのフェスでぶっ倒れる失態を演じるなんてアホみたいなことにならないように、細やかな抵抗と対策として黒生地のタオルを頭に乗せ、必須アイテムである安物扇子を開く。

「何か咲也、手慣れてるな」

「…お前は何かテンションおかしいけどな」

『だって初めてのフェスなんだ！』と瞳を輝かせながら興奮し始めた秋山をスルーしていると…

「さぁ　みんな！のんびりムードはここまでよ！」

「さわちゃんが一番のんびりしてたじゃ～ん」

声の先には仁王立ちの山中顧問。

平沢の珍しい正論に物ともせずに平然としたまま、傍らに置いてあった自身の荷物とは別の二つの荷物を担ぎ上げる。

「フェスに参戦する前に今夜の寝床を確保しにいくわよ！」

「寝床ですか？」

首を傾げる琴吹に『そうよ』と小さく笑いズンズンと進んでいく山中顧問の後をついていく。

今回のフェスは『大規模』とあるように、それは何も出演ミュージシャンの数や五つあるステージのことをだけを示しているわけではない。

【ＳＵＭＭＥＲ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ　２０１０】全体を示している。

会場内は大きく分けて四つに分かれる。

主となるステージがあるライブエリア。

様々な飲食が販売しているフードエリア。

出演ミュージシャンの公式グッズやフェス限定グッズが販売してあるショップエリア。

三つのエリアから離れた場所に位置するキャンプエリア。

この四つのエリアを合わさると壮大な広さになり『大規模』の役割を買っている。

で、俺達が向かっているのは勿論キャンプエリアなのだが…

「しまった…　出遅れたわ」

俺達がキャンプエリアに到着した時は既に平らな所は観客のテントで埋まってあり、寝床を確保するスペースは残されてなかった。

「仕方ない…　斜面で我慢してね」

反面、斜面にはスペースが抜群に空いてある。
俺達同様に平らな所に寝床を確保できなかった連中がせっせとある物を組み立てている光景が見受けられる。

「え～　寝る時に頭に血がのぼらない？」

「頭を上にすれば良いだろ」

「はっ！りっちゃん天才！」

「常識的に考えたら分かんだろうが…」

「いや～　ついつい～」

「はぁ…」

ポリポリと頬をかく平沢にため息一つ。

「それじゃあ今からテントを建てるから、咲也くん手伝って」

「あぁ…」

「おっ！サクが素直だ」

「うるせェな…　だったらテメェも手伝え」

「あいたたた～！持病の腰痛が～！」

「…一生そこで腰押さえてろ」

あからさまな嘘の演技をするカチューシャにそう吐き捨て、既に斜面でテントが入ってある鞄から一式を取り出している山中顧問へ足を向ける。

「律先輩、心が汚いですね」

「律は昔からこうなんだ」

「お前らだって手伝おうとしてないじゃないかー！」

「テント…」

「どうしたの？ムギちゃん」

「私はテントとか建てたことないですし、かえってサク先輩と先生の邪魔になるかと…」

「それに、ほら　私達が手伝わなくても咲也とさわ子先生がテキパキとやってるから…」

「私ね、テントで寝るのが夢だったの～♪」

「ムギちゃんってたくさん夢があるんだね～♪」

「視線を逸して言っても説得力ないぞ！
あと唯とムギは何かズレてるからな」

「「え？」」

背後から聞こえる田井中のツッコミ祭をＢＧＭに、顧問と共に手際よくテントを設営していく。

骨組と中幕が一体型のものを組み立て、その上に全体を覆うように外幕をかぶせ、ペグを地面に打ち付けて作業終了。

「ほわぁぁぁ～…」

「すご～い！テントだぁ～！」

「だから叫ぶな…　つうか何でアイツは感激してんだ？」

「ムギちゃんはテントで寝るのが夢なんだって～」

「また夢かよ…」

「次は咲也くんのテントを建てるわよ！」

今し方、所要時間約五分で設営したテントは平沢達女性陣の分であり大きさは六人が横一列に寝そべっても、寝返りが打てる程の大きさ。
今度は俺一人分のテントを横に山中顧問と共に建てたが…

「犬小屋かっつうの…」

その大きさは女性陣のテントの四分の一程度の大きさしかなかった…
犬小屋というのは語弊があるが、対比物が女性陣のデカいテントなので、そう感じてしまうのは仕方ない。

「予算の都合上、こんなちっちゃいテントになりました！」

「威張んな　…つうかＳＧ売った四十八万が残ってんじゃねェのか？」

亀を購入した分を差し引いても、まだある筈。

「ミホコに結婚のご祝儀あげたから、すっからかんになっちゃったわよ…」

「あっそ…」

不満や不平を言ったところで、犬小屋がデカくなることはないので、あるだけマシと考える。

「とにかく、テントが出来たから中に荷物置いて」

『は～い』

傍らで俺達の作業を見守っていた平沢達が各自荷物を持ってテントに集合。

「ほい　サッくんの鞄♪」

「…ん」

その際に、平沢がニコニコしながら両手で俺の鞄を持ってきてくれたので、受け取って鞄にヘッドフォンを入れて犬小屋に投げるように置く。

犬小屋のファスナーを上げて何となく視線を横のデカいテントに向けると、素晴らしいことをしている奴がいた。

「よいしょっと…」

「ムギちゃん？」

（荷物置けっつってんのに…）

何故か四つん這いの姿勢になり、足からテントに突入して、そのままずりずりと後進していく琴吹。

「やっほ～っ！」

そして本日二回目の山彦が発生。
何がしてェんだコイツ…

「ちょっと暑苦しいけどステキ～♪よいしょっ…　ふわぁぁぁ～♪
テントって背中イタ～イ♪」

「え？どれどれ～」

「行くな…」

琴吹の感激な感想に感化された平沢がテントに突入しようと足を動かすが、そんなことをしていたら時間の無駄であり琴吹との緩いコントが開催されそうなので、平沢の左腕を掴んで阻止。

「…ぁ…」

「あン？」

「エへへ…」

小さく声をだし俺の顔と掴んでいる右手と掴まれている自分の左腕を順次に見ては照れたように笑う。

「……」

パッ

「あぁ～…」

そんな平沢に非常に本日二度目の居心地の悪さを感じ、腕を離すと落胆したように肩を落とす。

「ムギ　早く出てこいって」

「うん　焼きそば食べなきゃね」

「ムギ先輩、趣旨が違います…」

「あの先生！急がないとオープニングが始まるんじゃ…！」

「まだ大丈夫よ澪ちゃん
会場に行く前に…整列！」

「ぶぅ～！サッくん、ぶぅ～！」

「…ぶぅぶぅ言うな　サッくん言うな」

頬を膨らませながら口を尖らせる平沢を適度に受け流し、またもや仁王立ちをする山中顧問の前に横一列に整列する部員達を横目に首にかけていたタオルを頭にかぶせて、扇子で扇ぐ。

「コラッ！咲也くんも並びなさい！」

「はぁ…」

気概になっている山中顧問に反論したら面倒なことこの上ないので渋々田井中の横に移動する。

「良い？今から会場内の説明会をするわよ」

『はい！』

「……」

いきなり始まった真夏の青空説明会に、うんざりしながらも一応聞いていく。

「まずはメインのファイヤーステージ
ここは約四万人収容できるメイン会場の一つ
なだらかな斜面になっていて後ろの方も見やすいわ」

ポッケから四つ折りにされていた会場マップを取り出し、まるで教師（忘れがち）のように一つ一つ指差して説明していく。

「こっちは裏メインといわれているサンダーステージ
一万人収容できて、音楽シーンの最先端をいく通好みのバンドが多

く出演するわ」

「先生、質問が」

「はい　澪ちゃん」

「この二つのステージを往復することが多いんですよね？」

「そうね　その距離約七百メートル」

「はっ！百メートルを十秒で走っても約七十秒かかる…！」

「落ち着けって澪…」

「それは人類史上最速だぞ…」

「そうだな…　金メダルも夢じゃないな」

「…おい　お前の幼馴染みがぶっ飛んだこと言ってんぞ」

あまりにも普段の秋山とかけ離れた状態になっているので、思わず田井中に見解を問う。

「まぁ、澪はスポーツ好きだし、今は気持ちが高まってるんだろう…」

流石の田井中も、こんな秋山にはお手上げのようで苦笑いを浮かべる。

「あとは、若手バンドが多い屋内ステージ
一番奥にはジャズバンドや変ったバンドが多いステージ
アコースティックなミュージシャンが多い小さめのステージもあるわ」

「まさに音楽のフェスティバル！」

（どうしたんだコイツは…）

田井中曰く、気持ちが高まっている秋山がグッと拳を握り締める。
夏というのは人を開放的にするとはいえコイツは開放し過ぎだ。

「さわちゃん質問が！」

「はい　唯ちゃん」

「ごはんはどこで売ってるの？」

「焼きそばもどこで売ってますか？」

「だからお前らズレてるって…」

「私もそう思います…」

夏というのは人を開放的にするとはいえ、平沢は元より琴吹は開放し過ぎだ。

「食べ物や飲み物はフードエリアで売ってあるわ」

「ここにマラドーナが売ってるんだね」

「売ってねェよ」

それはアルゼンチンのサッカー代表監督だ。

「マリナーラでしょ？唯先輩」

「そうそう　それそれ」

「あとは、今私達がいるキャンプエリアとグッズが売ってるショップエリアがあるわ」

『以上、説明終わり』と幕を引き、まるで教師のように（忘れがち）説明した山中顧問が会場マップを畳んでポッケに仕舞う。

「次に…」

「まだあんのか…」

「ここからが重要なのよ咲也くん！そんな態度だと夏に負けるわよ！」

「そうだぞ咲也！ちゃんと説明聞かないと！」

「…ハイハイ…」

最早この秋山には何を言っても無駄だ。
なのでパタパタと扇子を扇ぎながら再び心頭滅却すれば火もまた涼しの境地を開拓しようと努力してみる。

「タオルや飲み物は持ってる？」

「大丈夫だよ～　熱中症対策はバッチリ～」

平沢がミネラルウォーターのペットボトルを手提げ鞄から取り出して山中顧問に見せる。

「それじゃダメよ！スポーツドリンクにしなさい！」

「じゃあコレいらない？」

「持っていきなさい
手洗ったり暑くなったら身体にかけたり、水は役に立つから」

「いるよな～…　こんな風に仕切るのが好きな人…」

（お前もな…）

教師のように（忘れがち）テキパキと指示する山中顧問に田井中が呟くが、お前もそのカテゴリーに入ってると思う。
部長だからとか言って。

「だーっ！ムギちゃん！」

「は、はい！」

すると急に叫んで琴吹の足元を指差す山中顧問。
その行動に琴吹がビクッと肩を揺らす。
つうかうるさい。

「何でスニーカーじゃないの！？」

「ほかの靴持ってきてないんです…」

琴吹の履いている靴は、一輪の造花がアクセントされたパンプスだったりする。
長丁場となるフェスに参戦するにあたり、あまり好ましくない靴を履いている琴吹に、平沢が『川で遊ぼうと思って持ってきた』という遊ぶ気ＭＡＸな理由でビーチサンダル持参していたのを渡し、平沢達が虫除けスプレーを掛け合う光景を扇子で扇ぎながら傍観したところで漸く青空説明会終了。

―――――――

現在時刻午前九時五十九分。

『デジタルカメラ、ビデオカメラや携帯電話のカメラ並びにテープレコーダー、ボイスレコーダー等の撮影・録音機器の使用はご遠慮いただきますよう、ご協力お願いします
繰り返します…』

キャンプエリアからライブエリアのファイヤーステージに移動し、ロックフェスティバルの注意を促すナレーションが響き、幕開けが近付いていることを感じる。

「咲也！いよいよ始まるな！」

「…分かったからテンション下げろ」

秋山は今か今かとワクワクと。
俺は扇子をパタパタと

「すごい人ね～」

「オープニングだからな　会場の殆どの人が集まってるんじゃないか？」

琴吹と田井中は周囲の観客を眺める。

「梓ちゃんは野外フェスは初めてなんだっけ？」

「はい　ライブハウスとかなら経験ありますけど、夏フェスは初めてです」

「なら私が手取り足取り教えてあげるわ！そしてこのネ「いえ、大丈夫です」ぶぅ～！」

山中顧問の右手にはどこからともなく何故かネコ耳。
それを察知した中野が俺の隣に避難。

「サッくん　お腹空いてきちゃった」

「お前は何しに来てんだ…」

腹を擦りながらブロックワードを放つ平沢に、ため息をついた瞬間…

ワァァァァ…！
パチパチパチパチッ！

歓声と拍手が巻き起こる。
どうやらオープニングを務めるバンドがステージ上に現れたようだ。
俺達が陣取っているのは後方付近。
確かに、なだらかな斜面になっているのでここからでも見えるちゃ見えるが、豆粒程度だ。
ステージの両隣には大型ビジョンが設置されてあり、そこの映像でないとよく見えない。

「みんな！始まるわよ！とにかく楽しみなさい！」

ダダンッ！！

山中顧問が俺達にそう告げたのが合図だったかのように腹に響くようなドラムの音が辺り一面に鳴り響いた。

「『盛り上がってるかーッ！』」

「おーっ！」

『お、おーっ！』

「……」

「…ん？」

バンドのボーカルのコールに手慣れた様子の山中顧問が拳を上げ、
不馴れな様子で平沢と田井中と琴吹と中野が拳を上げる。
しかし一番フェスを楽しみにして真っ先にノリノリになるであろう
秋山が静かになったので視線を向けると、呆然としていた。

「『真夏の日差しに守られてロックフェスが始まろうとしてるッ！』」

ワァァァッ！！

「さ、咲也…」

「あン？」

「『俺達がトップバッターを任された以上は目茶苦茶盛り上げるぞーッ！』」

ワァァァッ！！

「ど、どうしたら良いんだ…？」

「…何が？」

「『ＯＫ！！いくぞ！！一曲目！Ｒｕｌｅ！』」

ワァァァッ！！

ダダダダンッ！

♪♪♪♪♪♪！

「うぉーっ！すごーいっ！」

「音おっきいですね！」

「ムギ！こうやって手を上げるんだ！」

「う、うん！わぁ～！」

平沢達や周囲の観客は、遂に始まったロックフェスティバルに身体を揺らしてリズムをとったり、拳を振り上げたり、思い思いに盛り上がる。
そんな中で俺と秋山だけは突っ立ったまま、何のアクションを起こさないでいた。

「私…　どんな風にしたら良いか分からないんだ！」

いやいや。そんなことを俺に言われても。

「…ノリ方が分かんねェっつうことか？」

「う、うん…！」

いざ本番になると、今まで秋山の中から前面に出ていた期待感が、あとからやってきた不安感に追い出された…と、いったとこか。

「…お前、ライブに行った経験は？」

「ないんだよ…　律と一緒にライブＤＶＤは見たことがあるから、どんな感じかは分かるんだけど…」

つうことは田井中もライブ初参加？
にしてはノリノリだけどな…
まぁ秋山と田井中じゃ互いに真反対な性格だから、田井中はすぐに行動に移せるが、秋山は殻から飛び出せないんだろう。

♪♪♪♪♪♪！

「…とりあえずお前が楽しいと思えるようにノッときゃ良いんだよ」

「私が楽しむ…」

視線をステージに向ける秋山。

♪♪♪♪♪♪！

「私が…　夏フェスを…」

次にノリノリで拳を突き上げる田井中へ。

そして…

「おーっ！！」

「おぉっ！澪ちゃんが夏フェスデビューした！」

「澪…」

左拳を高々と掲げ、周囲からノリ遅れること約二分。
漸く秋山がフェスの波に乗り、それを目の当たりにした平沢はやや驚き、田井中も眼を見開く。

♪♪♪♪♪♪！

「耳が…」

そして俺は秋山にアドバイスしたのが、まさかの仇となり耳キーンに陥る。

「律！このバンド良い感じだな！」

そんな状態で秋山と田井中に視線を移すと、秋山を見ていた田井中が俺を一瞥し、少しばかり呆然としていた表情から一変して小さく笑う。

「あぁ！ボーカルの声渋いな！」

♪♪♪♪♪♪！

（まぁ、良いか…）

別にハナから文句を言うつもりなんてないので、秋山が無事に参戦できた功名ということで耳から手を離す。

「あ～…　サク」

「あン？」

すると田井中が拳を下ろして、しかし視線はステージに向いたままで。

♪♪♪♪♪♪！

「ーーーっ！」

「あぁ？」

口を開くが、バンドの演奏音にその言葉が遮られる。

しかし田井中は息を吸い込んで演奏音に負けないように再度口を開く。

「あ、ありがとうって言ったんだよ！」

視線は相変わらずステージに向けたままの田井中。

「別に…」

意図を理解した俺は、田井中からステージに視線を移す。

「りっちゃんどうしたの？」

「何でもないよ！ほらムギ！手が止まってるぞ！澪を見習え～！」

♪♪♪♪♪♪♪！

「さすがサッくんだね！」

「分かってんならステージ見とけ…あとサッくん言うな」

「ほ～い♪」

「え？何かあったんですか？」

「なんでもないよ、あずにゃん♪」

♪♪♪♪♪♪！

（さて…）

ケータイを取り出して時刻を確認。

ドラムの音。ベースの音。ギターの音。ボーカルの声。

そのロックフェスティバルの始まりの音を聴きながら、俺は背を向けて歩きだした。

「さぁ　みんな！移動するわよ！」

「えっ？もうですか？」

「もっとこのバンド聴きたいよ～！」

「私のイチ押しバンドが屋内ステージでやるのよ
早いとこ行かないと前の方が埋まっちゃうわ！」

「もう、さわちゃん一人で行ってこいよ～」

「そう？咲也くんも行っちゃったし、私も行くわね！」

『えっ！？』

♪♪♪♪♪♪！

「ホントだ　サク先輩がいませんね…」

「咲也君いつの間に」

「カムバッ～クっ！サッく～んっ！」

「律！律！私もサンダーステージに移動する！」

「えっ！」

「早く！急がないと始まる！」

「ちょっ！澪！え～っと、またあとで連絡取り合って合流しよう！」

「は、はい！」

「律！早く早く！」

「はいはーい！」

「何か慌ただしいですね」

「でもこれが夏フェスの醍醐味なんじゃないかしら？」

「そうなんでしょうか…」

「サッく～んっ！サッくんや～いっ！」

第九十六話（後書き）

百話が見えてきたなぁ～

本編のオマケで、前々から考えていた話をしようかな？

第九十七話（前書き）

最後の合宿、ロックフェスティバル編その四です。

第九十七話

『女だから』
『女のくせに』
『男だから』
『男のくせに』

これはフェスに参戦する前、地元の書店で立ち読みした音楽雑誌で得た情報と見解だ。

俺達のように…いや、俺のように女五人・男一人でバンドを組んでいるのは珍しい部類に位置付けられる。
逆に男五人・女一人のバンドならメジャーでもインディーズでも音楽シーンに数多に存在する。

所謂、男女混合バンドと呼ばれるバンドは、ここ数十年で普通に存在しているが、ここまでメジャーになったのは一部の批判があったから。

女性がいるという理由で、男女混合バンドがかなり低評価がされたりした時期があったらしい。
中には音も、ろくに聞かずに先入観だけで痛烈な批判をしたりする一部の者もいたり。
そんな批判を自分達の音で見事に撥ね除け、確固たるバンドスタイルを確立し、現代では大勢の大衆に受け入れられている。

しかしそれは男女混合バンドでの結果であり成功例。
世には男性を加えず女性だけで結成したバンド、俗にいうガールズバンドというものがある。

俺が生まれる前にはバンドブームというのが日本に旋風したらしい。
そのブームの追い風に乗り、ガールズバンドがメジャーシーンに登場したが、やはり『女だから』という理由や『バンドは男がやるもの』という理不尽な理由でガールズバンドの風当たりは強くなる一方。

しかし、とあるガールズバンドの登場で立場は一変する。
そのガールズバンドは逆境や窮地、批判等を踏台にして乗り越え、徐々に人々から共感を得てオリコンチャート一位を取り、遂には様々な賞を獲得。

このガールズバンドが成功を収めたことにより、逆風はやがて順風に変り、他のガールズバンドの活躍出来る道を作った。

そして現在では『女だから』ではなく『女こそ』の音を世の中に浸透。

男も女も関係ない。
音楽は音を楽しむもの。

『バンドは男がやるのもの』
こんな自己主義な虚勢を張った奴に、俺が今聴いている音を聴いてみろと言いたい。

♪♪♪♪♪♪!

ドラマーもベーシストもギタリストもボーカルも女性のガールズバンド。

音は重厚で濃厚で激しいヘビメタに近いメロコア。
この音を聴いてノッているのは男が約半数を占めている。
その男に勿論俺も入っている。

俺のように小さく身体を揺らして、両手を掲げて大きく振ったり、ヘドバンをしたり、人様々に今ステージ上で音を奏でているガールズバンドの演奏に魅せられている。

これが音楽。これがバンド。
まるでそんなことを俺達観客に伝えるように、激しく、時に伸びやかに。

それに呼応するように観客もヒートアップしていく。
まぁ、俺はぶっちゃけこのガールズバンドのことは全く知らなかった。

ファイヤーステージを抜け出し、俺がこの若手バンドが多数出演する屋内ステージのホワイトガーデンステージに来た理由は、このガールズバンドに少々興味が湧いたからだ。

立ち読みした音楽雑誌に記載されていたガールズバンドと男女混合バンド特集の記事を見て、珍しい部類ではあるが男女混合バンドの【ＨＴＴ】に属している俺にとって、改めてバンドというものを知り理解したかった。

それに平沢・秋山・田井中・琴吹・中野は女だ。
今は完全に払拭され、逆に人気が出てきたガールズバンドや男女混

合バンドだが、過去にそういう出来事があった以上、男の俺はそういう出来事に理解と関心を持たなければいけないだろうという、勝手な使命感を帯びた。

それには実際に見て感じるのが手っ取り早いので、今回のフェスを利用してガールズバンドや男女混合バンドが出演する回数が他のステージより多いホワイトガーデンステージに足を運んだ。

♪♪♪♪♪♪！

「……」

結果として無駄足ではなかったし、俺自身も楽しめているんだが…

「イエーーッ！！」

俺の横でかなりノリノリでヘドバンをしている山中顧問に少し引いていたりする。

俺がホワイトガーデンステージに到着し、目当てのガールズバンドの出演を待っていると山中顧問が脱兎の勢いでやってきては、前列にいた俺を発見して当然のように隣に立った。

『咲也くんもここ来たのね』

『…平沢達は？』

『みんなはファイヤーステージにいる筈よ
それにしても、咲也くんも目が高いじゃない』

『はぁ？』

『だってここのステージってインディーズで人気のバンドがたくさん出演するから、それを見にきた咲也もロッカーね！』

『…アンタ程じゃねェし、俺は違う理由だ』

『理由って？』

『バンド』

『抽象的ねぇ…　まぁ良いわ！とにかくガンガンいくぞーっ！』

『キャラ変ってきてんな…』

こうして俺は山中顧問とここにいる。

♪♪♪♪♪♪♪！

（そういえば…）

ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬもこんな激しい音楽だったな。
アッチはヘビメタでコッチはメロコアだが。

「あーっ！！サイコーっ！！」

共感できる部分があるから、こんなに髪を振り回ながらノリノリなんだろうか？
いや、元来からこんな弾けた人なんだろ。

ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダダンッ！

ワァァァッ！！

「『はぁ…　はぁ…　サンキューーーーッ！！』」

ワァァァッ！！！
パチパチパチパチッ！！

一心不乱に全身全霊で演奏し歌唱したガールズバンドのボーカルが、息切れながらマイクに叫び、俺達観客から一際大きな歓声と拍手を浴びて、ガールズバンドはステージ袖に捌けていった。

「じゃあ俺は行くぞ…」

「はぁ…はぁ…　い、今から私のイチ押しバンドが出るのに？」

ここに来た目標であるガールズバンドの出番が終了したので、ボーカル同様に息切れをしている（ヘドバンのし過ぎ）山中顧問に踵を返す。

「…そこには興味ねェ」

「そう？残念ね
じゃあまたあとで合流しましょ」

俺にそう告げたあと、眼鏡を取って本気モードになる山中顧問に、特に返事もせずに人垣を掻き分けて出入り口の扉を開く。

「アチィ…　眩しい…」

今まで薄暗い閉鎖空間に身を置いていたので、扉を開けた途端に襲いかかってきた熱波と日差しに眼を細める。

「ふぅ…」

そして感じる身体を駆け巡る確かな疲労感。
睡眠不足と降り掛かる太陽光と酷暑な気温。
トリプルパンチのラッシュを立て続けに食らい、思った以上に俺の身体はダメージを蓄積していたようだ。

しかし始まったばかりのフェスをリタイアするわけにはいかないので、気合いを入れるという意味と日差しから身を守る意味で、前髪のピンをハズし、首に掛けていた黒生地タオルを頭に巻く。

「とりあえず何か食うか…」

現在時刻午前十一時二分。

昼メシを食うにはまだ早い気がするが、腹が減っては戦はできぬということでフードエリアに歩を進める。

―――――――

「はい！焼きそばです！ありがとうございましたー！」

これは琴吹のせいだ。
アイツが『焼きそば！焼きそば！』と連呼しやがる故に少し感化されて、ついつい焼きそばを購入してしまった。

フードエリアには様々な食べ物が売ってある。
ロコモコ、タコライス、ケバブ、焼き鳥、焼きそば、お好み焼き、たこ焼き、パスタ、うどん、カレー、ピザ、ハンバーガー等々…

何を買おうかと財布の中身と相談したが、琴吹の洗脳により右手には焼きそば。

「はぁ…」

まさかの洗脳にため息一つ吐き、木陰の下に空いてあったベンチに座り込む。
そして暑い中で熱い物を食すというちょっとした地獄と味を味わって麺を口に運んでいると…

「あーっ！」

「ん？」

絶叫にも似たデカい声に首を動かせば、そこには平沢と琴吹と中野の姿。

「サッく～ん！やっと会えたよ～！」

トコトコと平沢が相変わらずの禁句を口走りながら俺の前にやってくる。

「…サッくん言うなっつってんだろうが」

「勝手にいなくならないでよ～」

俺の忠告には耳を貸さず、挙句にぷくっと頬を膨らませて怒ってますアピールを開始。

「…ソレハワルカッタナ」

反論したら面倒である。

対策として適度な適当にあしらう。

「うん　いいよ～
あとサッくん似合ってるね～」

「軽いですね唯先輩」

さほど怒ってはいなかったらしく、すぐに笑顔になり、タオルを巻いているスタイルを褒めだす。
そんな平沢に中野が苦笑い。

「…お前ら、ライブ見てたんじゃねェのか？」

「そうなんですけど、唯先輩がお腹空いたって言うので」

「だって、早く食べたいんだもん」

「だからそれが目的じゃねェだろ…」

「そうですよ」

「でもサッくんだって焼きそば食べてるよ」

「焼きそば…！」

いつ気付くかと思っていたが、漸く琴吹は俺が食べている焼きそばに気付く。

「あっ！咲也君、焼きそば食べてる」

「…わりィか？」

「ううん　どこで売ってたのかなぁって」

「…すぐそこだ」

箸で焼きそば屋の露店を指す。

…しかしその焼きそば屋に少しばかりの変化が起こっていた。

「大人気…」

思わずといった感じにポツリと琴吹が漏らす。

俺が買った時には二、三人程度しかいなかった客が、いつの間にか長蛇の列が発生する程の大繁盛に。

「すごい行列だね」

「サク先輩の時もあんなに並んでたんですか？」

「…いや、全くだ」

「あんなに並んでたら買えるかな？」

「大丈夫だよムギちゃん！私も一緒に並ぶから！」

「私も並びます」

輝かしい友情を見せる平沢に中野が小さく右手を挙手する。

「あずにゃんはここで休んでていいよ～」

「え？いえ、先輩に行かせるのは「大丈夫！私は先輩だから！」だから不安なんですけど…」

ドンッと胸を叩く平沢に中野が少々辛辣な発言。
気持ちは分かるが、一応先輩なんだから少しぐらいはオブラートに包んだらどうだ。

「任せんしゃいな！私も、ま…ま、まり…」

「マリナーラ…」

「を、買いたいから！」

物名が出てこなかった平沢に焼きそばを食べながら答えを提示してやると、さも自分が言ったかのように胸を張る。

「あずにゃんの分も買ってきてあげるよ　何がいい？」

「それじゃお言葉に甘えて、えーっと…あ、うどんをお願いします」

「ラジャー！行こっか？ムギちゃん」

「うん！」

気合い十分に平沢と琴吹は食料調達へ出立。
それを見送った中野が俺に振り返る。

「あの、サク先輩」

「あン？」

「隣、座って良いですか？」

そう言ってベンチを指差す。
断わる理由なんぞ全く見当たらない。

「あぁ…」

「あ、じゃあ失礼します」

ちょこんと座り、かぶっていたトレジャーハットを脱いで膝に置き、
手櫛で前髪やツインテールを整える。
そして心なしか、何かを言いたげな雰囲気を感じた。

「…田井中と秋山は？」

あくまでも俺がそう感じたのだけであって、本質は違う可能性も無きにしも非ず。
とりあえず姿が見えないカチューシャとレフティの行方を尋ねる。

「律先輩と澪先輩はサンダーステージに行きました
何か澪先輩が聴きたかったバンドが出演するみたいなので」

「ふーん…」

『身体が二つ欲しい！』
『瞬間移動したい！』
『七百メートルを七十秒で走る！』
といった迷言を生み出したバンドを見にいった秋山の興奮した姿が容易に想像できる。
そしてそんな秋山にゲンナリする田井中も。

――――――――――

同時刻。サンダーステージ。

♪♪♪♪♪♪！

「やっぱりこのバンドは凄いな律！」

「そうだな　でも少し落ち着こうぜ…」

「ほら！あのギタリスト左利きなんだ！やっぱり変な感じだよな～♪私が言うものなんだけど～♪」

「仲間がいて嬉しいのは分かったから、ちょっと黙ってて…」

――――――――――

「…で？」

「え？」

「…何か言いてェことがあるんじゃねェのか？」

「ぁ…」

可能性が上がった。

図星だったらしく一瞬俺と眼が合い、すぐに視線を前に向ける。

俺は完食した焼きそばから中野に視線を移したあとにケータイを取り出して、午後からの出演バンドを確認する。

「「……」」

互いに口を開かずフードエリアの雑音が、やけにうるさく聞こえる。

「あの…」

そして中野がおずおずと言葉を告げる。

「うぅ…」
「ショボ～ン…」

しかし、そこでタイミング悪くかなり落胆した平沢と琴吹がトボトボと戻ってきた。

「ぁ、どうしたんですか？」

そんな肩を落とした平沢と琴吹に、何かを告げようとした中野が首を傾げる。
その中野の表情からは、何を言おうとしたのかは読み取れなかった。

当たり前だ。
俺は超能力者じゃない。
それに…

「「売り切れちゃった…」」

「それはなんて言うか…残念でしたね」

「…平沢は別としてお前は地元帰ったら食えるだろ」

勘ぐろうなんてしない。
中々口を開かなかったということは言いづらい内容なんだろう。

「そうなんだけど、こういう屋台の焼きそばを食べたかったの…」

「そんなに落ち込まないでくださいよ」

「あずにゃん　私もショック受けてるよ」

「唯先輩は憂に作ってもらえるんじゃないんですか？」

「いくらアイツでも「そだね～　帰ったら憂に頼んでみるよ～」作れんのか…」

催促したのは俺だが、無理矢理に聞き出そうとは思わない。
中野が何を言おうとしたのか、思ったのか。

必要ならば言うだろうし、内に秘めたままにするならそれも良し。
だからこのことは、触れずにおくのが得策。

「そういえば、私のうどんは？」

「「あっ」」

「…お前らメシ抜き」

『えっ！？』

――――――――――

フードエリアで平沢達と雑談をし、俺はまた単独行動へ。
その折りに平沢に『一緒にいようよ』と言われたが、俺と平沢達で

は聴きたいバンドが出演する時間と会場が見事に非合致なので、その誘いを断固として断わり俺はサンダーステージへ。

「『みなさーん！初めましてー！』」

ワァァァッ！

「『僕達は初参加ですが、ここにいるみなさんとで、夏の太陽みたいに熱いステージにしましょー！』」

ワァァァッ！

このサンダーステージに登場したバンドはテレビには一切出演せずに、ライブでしか見ることの出来ないバンドだ。

こういう貴重な体験ができるものフェスならではだったりする。

「『それじゃあ聴いてください！』」

♪♪～

ワァァァッ！

ボーカルの合図でイントロが流れると、一際大きな歓声があがる。

これもフェスの利点。

自分達の単独ライブなら様々な楽曲を演奏できるが、フェスのように大勢のミュージシャンが集まる場では、大抵有名な曲を演奏する。

フェスに参加しているミュージシャンは入れ替わりで演奏をする（例外としてコラボがある）

そのため、格ミュージシャンには時間が限られてあり、その限られた時間で他のミュージシャンのために場を盛り上げたり、自分達の音楽やパフォーマンスを知ってもらうために有名な曲を演奏する。

♪♪♪♪～

音楽で伝えたいこと。
ひたすら盛り上げること。
音楽の素晴らしさを感じてもらうこと。
楽器の音色を刻み付けたいこと。

様々な概念を抱いてロックフェスティバルは、その在り方を示していく。

♪♪♪♪～

観客は曲に合わせて手拍子を。

♪♪♪♪～

また、曲が変ると拳を上げて前後に振ったり。

♪♪♪♪～

また、バラードになるとシンッと静まり返り、じっくりと聴いていく。

「『ありがとうございました！また来年、この場所で会いましょー！』」

ワァァァッ！
パチパチパチパチッ！

最後はメンバー全員が頭を下げて、ステージを後にした。

「……」

俺も手拍子をしたり拳を振ったりして、観客の一人として参戦していた。

それは何も事前に決めていた特定のバンドに限らず、ステージに登場する全てのミュージシャンにもやった。

山の天気は変りやすいとあるように、途中で雨に降られたがサンダーステージに行く前にレインコートをショップエリアで購入していたので、それをフル活用してフェスを楽しみ盛り上げた。

さて、忘れがちだったが俺は睡眠不足と酷暑な気温と降り掛かる太陽光のトリプルパンチを食らっている。

更には先程まで降り頻っていた雨のせいで湿度が上がり蒸し暑さがオプションとして加わってしまった。

結果…

（さすがに疲れた…）

暑さと疲れで、とうとうへばってしまった。

とりあえず休憩のためにライブエリアからフードエリアに移動し、スポーツドリンク片手にベンチに寝そべって体力回復を図る。

すると…

「咲也？」

「よう…」

視界の先には通常のテンションに戻った秋山が、俺に髪が当たらないように、手で押さえながら顔を覗き込んでいた。

「何やってるんだ？」

「休憩中…」

最早起き上がるのも億劫なので、そのままの体制で秋山の質疑に応答。

「休憩って…　大丈夫なのか？何か疲れた顔してるけど…」

「だから休憩してんだ…
そういうお前は何してんだ？」

あまりこの話題には触れてほしくないので、話題を変えるために無難な質疑をぶつける。

「私はみんなのお昼ご飯を買いにきたんだ」

「もう四時だぞ…」

「私も律もそうなんだけど、唯とムギと梓もお昼まだだって言うから」

結局平沢と琴吹と中野は何も食わなかったのか。
元気なもんだ…

「咲也は何か食べたのか？」

「焼きそば…」

「え？でもムギが売り切れたって言ってたけど…」

「…俺が買ったあとに行列ができて、それで売り切れてた」

ムクリと身体を起こし、頭に巻いてあったタオルを解き、痕が残った前髪をいじって、何とか通常通りに戻し、ヘヤピンで止める。

「運がなかったんだなムギは」

「みてェだな…」

「じゃあとりあえず、咲也もみんなのところに行きなよ」

次の見たいバンドまで、まだまだ時間がある。
なので秋山の提案の答えとして、重たい身体を酷使して立ち上がり、凝り固まった筋肉をほぐす。

「…どこにアイツらいるんだ？」

「ボードウォークの真ん中辺に川があるから、みんなそこにいるよ」

「あぁ…」

小さく返事をして俺はボードウォークに足を向ける。

「じゃあ私はご飯を買う…　ん？アレって…！」

――――――――――

現在時刻午後四時二十分。

「お前アホか」

ついツッコんでしまった。

疲労困憊な身体に鞭を打ち、何とかボードウォークに辿り着いた。

平沢達を捜そうと視線を巡らせ、秋山からの情報通りに川辺に四人の姿を発見。

そこに足を進めたが、レジャーシートを敷こうとしている田井中と中野に、何を思ったのか平沢が敷きかけのレジャーシートの上に『どーん！』という掛け声と共に腹からダイブ。

アイツらがいる川辺はゴツゴツとした石だらけであり、そこにダイブしたら勿論腹部強打。

『うぅぅ…お腹打った…』と痛みに悶える平沢にツッコんでしまうのは仕方がない。

「おっ　サク」

「わぁ…い…　サッくん…だぁ…」

「…痛々しく言うな」

腹を押さえながらもタブーを発信する平沢は、ある意味根性があるな。

「今から咲也君も呼ぼうとしてたの～」

「でもどうやって私達がここにいるって分かったんですか？」

「…お前らのメシを買いにきてた秋山から聞いた」

「そ、そうなんだぁ…　澪ちゃんナイス…」

とりあえずお前は痛々しい声をだすな。

「しっかし、何か不機嫌顔に磨きがかかったなサク♪」

田井中がニヤニヤしながら非常に腹立たしいことを口走りやがる。

「だからテメェは毎度一口多いんだよ　このだらけデコ」

「なぁっ!?言ったな!サクなんて協調性がないくせにー!」

「単独行動だ」

「それが協調性がないって言うんだよ!」

「あぁ…　たまにあるサク先輩と律先輩の喧嘩が始まっちゃった…」

「サ、サッくんとりっちゃんは仲いいねぇ…」

「あ、澪ちゃん」

田井中が『この不機嫌顔！』と発言しながら俺の頬を引っ張ろうと手を伸ばすが、易々と躱して反撃に自慢のデコをはたこうとした瞬間、秋山が戻ってきた。
それにより部長ＶＳ副部長は休戦に。

「ここは澪に免じて許してやろう」

「…先に仕掛けたのはテメェだろうが」

何で偉そうなんだ。

「おかえり～…　ありがとうね～…」

幾分痛みが引いた平沢が、何故か御機嫌な様子で戻ってきた秋山に、昼メシにありつける喜びを噛み締めながら笑顔を浮かべる。

「Tシャツ売ってた！さっきの左利きのギタリストがいるバンドの！」
「「メシは？」」

何やってんだコイツ…

平沢達のメシを買いに行っていた秋山が購入したのは『ＫＡＭＡ☆ＫＩＲＩ』と印刷されたバンドのＴシャツのグッズ。
そんな秋山のまさかの行動に俺と田井中が即時に一言。

「み、澪ちゃん…　ごはんは…？」

さすがに今回は平沢に同情する。
平沢自身よほどショックなのか半泣きだ。

「凄いんだよこのバンド！演奏もうまいし、左利きのギタリストがいるんだ！」

（左利きのギタリストがいるのは分かったっつうの…）

平沢の嘆きボイスが耳に入らない秋山は、再びテンションがおかしくなる。

「「はぁ…」」

そんな秋山に俺と田井中は大きくため息をついた。

結局、遅めの昼メシは山中顧問が、たこ焼きを買ってきたことにより解決。

ちなみに俺の分のたこ焼きを平沢に譲ると…

『サッくん…　ありがとーっ！』

このようにかなり感謝された。

そして今度は七人全員でファイヤーステージに戻り…

♪♪♪♪♪！

「じー…」

「サク先輩！」

「あン？」

「唯先輩が真剣にステージを見てます！」

「…そこまで興奮することか？」

「だってこれに触発されて、もっともっと真面目に練習してくれそうじゃないですか！」

「その考えはどうだろうな…」

「え？」

「ねぇ、あずにゃんに聞きたいことがあるんだけど」

「あ、はい　何ですか？」

「あのベース弾いてる人の髪型ってどうやってセットしてるんだろうね？」

「そこですか！？」

「だから言ったろ…」

「はい…　唯先輩は唯先輩でした…」

「あれは天然パーマよね？」

「…ドレッドヘヤーだ」

「相変わらず唯とムギはズレてるな」

「澪ちゃん！もっと拳を振るのよ！」

「は、はい！」

【ＳＵＭＭＥＲ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ　２０１０】一日目は終了。

うだるような暑さを絶賛プレゼントしてくれた太陽は沈み、代りに白銀に淡く輝く月と無数の星々が顔をのぞかせる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「…ん…」

私は不意に眼が覚めた。
枕元に置いてあったケータイに手を伸ばして時間を確認する。

「十二時…」

ちょうど日付が変った時間。
テントの中は六人いるから少し暑苦しい。
このままじゃ眠れそうにないから、私は気分転換をするためにテントからゆっくり出ていった。

第九十七話（後書き）

冒頭のガールズバンドと男女混合バンドは、私が独自に調べて解釈したものです。

男女関係なく、活躍できるのは素晴らしいことだと思います。

第九十八話（前書き）

最後の合宿、ロックフェスティバル編完結です。

第九十八話

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

ファイヤーステージでトリを務めたバンドを先輩達と先生とで見終わったあと、私達はフードエリアに移動して晩ご飯を買ってキャンプエリアにあるテーブルに座った。

『たこ焼き食べたから、あんまり食べれませんね』

『じゃあ、あずにゃんの分ちょこっとちょ～うだい♪』

『……』

『良いですけど、食べれるんですか？それに太っちゃいますよ？』

『……』

『だいじょ～うぶ！私はいくら食べても太らないから！』

『『羨ましい…』』

『はは…　澪とムギは太りやすいんだったな』

『……』

『違う！ちょっと体重が増えやすいんだ！』

『うんうん！』

『……』

『いや、それを太りやすいっていうんだろ…』

『モグモグ…　サッくん大丈夫？』

『…サッくん言うな…』

『サクは睡眠不足と暑さがたたって疲れてたのは分かるけど、何か食べた方が良いぞ？』

『そうよ咲也くん　明日もあるんだから、しっかり食べて体力回復しなさい』

『…首をさすりながらそんなこと言われても説得力ねェぞ…』

『ヘドバンし過ぎて首が痛いのよ…
はっ！今みんな、私のこと年だと思ったでしょ！？』

『思ってないって
さわちゃんは若いよ』

『あら　ありがとう♪りっちゃん♪』

『……扱いやすい人……』

『聞こえますよサク先輩…』

『うま～♪サッくん、これおいしいよ♪』

『…あっそ…』

『りっちゃ～ん…　サッくんがそっけないよ～…』

『ところでさわちゃん』

『はぅ！無視された～！』

『よくフェスのチケットを持ってたよな？』

『このフェスには毎年来てるのよ』

『でも何で七枚も用意できたんですか？』

『それはねムギちゃん…　一緒に来る筈だった友達が直前になって急にキャンセルして…』

『もしかして、さわちゃん嫌われてる？』

『お、おい律！』

『そ、そんなことなーいっ！

……多分……』

『どう反応すりゃいいんだよ…』

『…人徳がねェんだろ…』

『ガーン！』

『サッくんストレートだね』

晩ご飯を食べたあと、仮設のお風呂に入浴したら先生とサク先輩はすぐにテントに入って寝ちゃった。
私達は色々と話をしていたら眠くなったから、私達も寝ることに。

そして今の時間は午後十一時五十分。

私は眼が覚めてしまったから、何となくテントから抜け出した。
そしてテントを建ててある斜面の頂上…っていっても十メートルぐらい先の場所なんだけどね。

そこに立って夜空を見上げる。

「わぁ～…　すごい…」

乳白色に淡く輝く天の川が帯を広げて、その周りにはキラキラと輝く無数の星が夜空いっぱいに広がって、そんな中で綺麗な三日月が浮かぶ幻想的な光景に、思わず両手を夜空に伸ばしてみる。

「届いちゃいそう…」

そんなことは有り得ないんだけど、ついつい口に出てしまった。
だって凄く綺麗なんだもん。
空気が澄んでるからこんな綺麗に星と月が見えるんだなぁ。

「……」

近いようで遠い夜空。
遠いようで近い夜空。

それはまるで今の私の心情みたい。

私の近くにいる先輩達。
でも遠くに行っちゃいそうな先輩達。

「分かってるよ…」

それは仕方ない事なんだって言ってる私。

でも、わがままを言ってる私もいる。

『ずっと一緒にいたい』って。

先輩達が修学旅行に行ってて私が独りになって気付いた気持ち。
先輩達が好きって気持ち。

正直寂しかった。
あの時は憂と純がいたから気が紛れたけど、先輩達が修学旅行から帰ってきてキーホルダーを貰って私は嬉しくて楽しかった。
先輩達と一緒にいる時間は、憂と純といる時間とはまた違った楽しみを感じた…

だから私は思っちゃった…
ずっと一緒にいたいって…

「でも先輩達は、あと二ヶ月経ったら引退…」

十月の学園祭をもって部活をしている三年生は引退して、受験勉強に本腰を入れる。

それは勿論、軽音部の先輩達も例外じゃない。
無事に受験が終わったら卒業。

近くて遠い先輩達。

だからこそ、先輩達とやれる最後の合宿を楽しんでいる。

でも今みたいに独りになると、こんなネガティブなことを考えてしまう。

「ダメだよ…」

考えちゃダメ。
先輩達といれる今を楽しまなきゃダメだよ。

そう思って私は、夏フェスを楽しんでる。
初めての野外フェス、たくさんのバンド、新鮮な経験。

これは本音。私は楽しんでる。

でも…

『…何か言いてェことがあるんじゃねェのか？』

サク先輩に言われた時は、ドクンッと心臓が跳ねた。

サク先輩は鋭い。
普段は面倒そうにしてるけど、本当は変化に敏感な人。

でも深くは聞いてこない。
それは良かったりするんだけど、たまには聞いてほしかったり…

「はぁ…」

私の矛盾した思いを、ため息で吐き出したら…

ザッザッザッ…

足音が聞こえた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

現在時刻午前零時ジャスト。
ということは日付が変り、八月八日日曜日。

「アッツ…」

そんな深夜の時間帯に俺は、夜の帳が下りた外に出て、買って二年になる愛用の安物扇子で扇いでいた。

残念なことに俺のテントは女性陣のテントに比べて犬小屋サイズ。
残念なことに中は狭く、尚且つ風通しが悪く、とどめとばかりに熱が籠るという素敵な造りのテントだ。

いくら疲労感で眠くなろうがそんなテントでは安眠をとるなんて、修司がテストで満点をとるぐらい不可能だ。

安眠はとれずとも睡眠はとれたが、寝苦しいことこの上ないのでリフレッシュということで外に出て、自然と人工の夜風で涼を得る。

「気持ちいいね～」

「お前は、さも当然のようにいるよな…」

驚きはしないが、いつの間にか『コンプリート』と書かれたTシャツを何の違和感もなく着用している平沢が俺の隣で両手を広げて身体全体に夜風を受けていた。

「いや～　暑苦しくて気分転換で外に出たらサッくんがいたもので～」

「…ガキは寝る時間だ」

「ヒドいよ～！私は子供じゃないもん！」

ぷくっと両頬を膨らませ『むぅ～！』と唸りながら、俺を見上げて

くる。

「…そういう態度がガキっぽいんだよ」

「じゃあ大人になる！」

否定しておきながらこの宣言。
つまりガキっぽいと自覚があるんだな。

「勝手に頑張れ…」

とりあえずこれでこの話題は終わりという風に一方的に締めて扇子を扇ぐ。

「うわぁ～…！サッくん…！」

するとコンプリート平沢が一歩前に足を動かして夜空を見上げる。
そして感嘆の声をあげる。

「ほら星空！きれいだね～…」

「……」

平沢の視線と指差す先を辿ると真夏の星空。
幾千幾億の星が煌めき、湾曲した月が朧に神秘的な光を灯す。

「すご～い♪すご～い♪」

こんな幻想的であり神秘的な星空のステージを月明りのスポットライトに照らされた平沢が、満面の笑顔で踊るようにクルクルと俺の前で回る。

（だからそういうところがガキっぽいんだよ）

いつの間にか扇子を扇いでいた右手は止まって、平沢をジッと見ていた。

「…ぁ…」

そして平沢また、踊りを止めて俺をジッと見てくる。

「エへへ…」

心なしか頬に赤みが差している、その頬をポリポリとかきながら照れたように笑う。

「……」

俺は本日三回目の…いや、日付が変ったから一回目か…とにかく居心地の悪さを感じ、視線を逸して扇子を扇ぐ。

「クスッ♪サッくん♪」

「ンだよ…」

「ううん♪何でもないよ♪何となく呼んだだけ～♪」

「…何となくで俺を辛労させようとすんな」

「ほぇ？」

何となくでタブーを呼ぶなっつうことだ。

「はぁ…」

「♪～」

ため息一つをついて、何やら上機嫌でハミングしているコンプリート平沢に…

「俺は寝るぞ…」

と、告げて犬小屋テントに足を向けるが…

「あずにゃん…」

「あぁ？」

ハミングが止まった平沢の呟きに足が止まり、平沢に視線を移すと斜面の丘の上を見ていた。

「…何やってんだ？アイツ」

そこにはジッと真夏の夜空の星空をツインテールを解いた中野が眺めていた。
スポットライトの月明りが、まだ終わってないと言わんばかりに中野を照らし出す。
まるで平沢以外にもう一人、この場には主人公がいると俺達に教えるように。

「どうしたのかな？」

「…つうかアイツ、いつテントから抜け出したんだ？」

「そういえば私が目を覚ました時、あずにゃんいなかった」

「まず、そこに引っ掛かれよ…」

悠々と夜風を満喫してる場合か。

「いや～　暑苦しくて気分転換に外に出たらサッくんがいたもので～」

数分前に聞いたことがあるコンプリート平沢の台詞に『ガキは寝る時間だ』と言ってしまったら会話がループしてしまうので、視線を中野に。

「何考えてんだか…」

俺は超能力者じゃないので何故中野があそこにいるのか分からない。
ただ一つ。一つだけ確かなことがある。

「あずにゃん、何か悩んでるのかなぁ？」

「かもな…」

平沢も感じたようだ。
この位置からでは中野の表情は窺えないが、物憂いな雰囲気が伝わってくる。

それは今日の昼間に言いかけたことに関連しているのか分からないが、例え仮にそうだとしたら俺は何も出来ない。

俺自身は深く干渉しないと決めた。
中野が言い淀んだ事だ。
どうしようもない。
先輩なら後輩の力になれ等言われようが俺には無理だ。

まぁ、あくまで仮の話であり、全く中野が悩んじゃいない可能性も無きにしも非ず。

「サッくん」

「あン？」

相変わらずの禁句発言に、今は何も言わないでおく。
平沢の表情が真剣だからだ。

「私、あずにゃんのとこ行ってくるね」

「あぁ…」

俺には出来ない。
しかし平沢は出来る。
もしも、俺達が感じた通り中野が何か悩んでるのならば俺より平沢の方が適任だろう。

女同士なら中野も気兼ねすることはない筈。
しかも平沢は先輩だしな。
中野という後輩のお陰で少なからず、平沢は成長している。
それは人間性であって、ギター関連はさっぱりなんだが…

「サッくんも行く？」

「いや…　俺はここで夜風を浴びてる」

「うん　じゃあ行ってくるね～」

平沢も分かっているのか、俺の拒否に全く駄々を捏ねることなく中野に向かい歩を進めていく。

「…お前ら出てこい」

平沢の後ろ姿を見守ったあとに女性陣のテントに視線を向ける。
そこには入口のファスナーが僅かに開いており、俺の言葉を受けた途端に小さくテントが揺れる。

そして、中から三人の人影がのそと出てきた。

「バレてたか～」

「だから覗くなんて止めようって言ったのに…」

「こんばんは～　咲也君」

その三人とは、言わずとも田井中と秋山と琴吹の三人衆。
カチューシャをしてない田井中は苦笑いを浮かべて、緩く髪を結んでいる秋山はバツが悪そうに、恐らく事の首謀者の田井中に恨めしい視線を向け、琴吹は普段通りのニコニコと。
そんな連中を一瞥して、自分の犬小屋テントに腰を下ろす。

「ご、ごめんな咲也…　別に悪気があって覗いてたわけじゃないんだ…」

どうやら秋山は俺が御冠だと思っているらしく、俺の前に来て申し訳なさそうな表情をする。

「別に怒ってねェからそんな顔すんな…
こっちの気が滅入る」

「え?怒ってないのか?」

「な?だから言ったろ?サクは怒んないってさ～」

俺の返答が意外だったのか若干キョトン顔の秋山に、実に軽いノリで田井中が秋山の横に並ぶ。

「…お前が首謀者か？」

「だってさ唯と梓がいなくなってて、外から唯とサクの話し声が聞こえてきたから、ちょっとした好奇心で覗きたくなっちゃったんだもん♪」

普段では絶対しない、田井中の猫なで声に…

「似合わなねェからな」

バッサリ斬っておく。

「うぅ…　澪～…サクが～」

「怒られなかったんだからマシだろ」

「咲也君、私達も聞いてたんだけど梓ちゃんのこと…」

「平沢に任せとけ…」

秋山に泣き付く田井中をスルーして、琴吹の問い掛けにそう答えて、そのまま後ろに倒れる。

星空は視界から消え去り、薄暗い犬小屋テントの天井がそこにはあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「唯先輩？」

「やっほ～　あずにゃん」

足音の正体は寝てる筈の唯先輩で、ゆっくりと私の元に歩いてくる。

「うぉ～！ここからの風景は絶景ですな～」

「もしかして起こしちゃいましたか？」

私も感動した夜空と、ここから見えるライブエリアやフードエリアやショップエリアの小さな灯を見て感激している唯先輩に尋ねる。

「ううん　暑苦しくて起きちゃったんだよ」

「あ、そうなんですか」

「うん　そしたらあずにゃんがいたからね～」

『よいしょ』っと言って私の隣に唯先輩が座る。

「まぁ、座りんさい」

「あ、はい」

ぽんぽんと唯先輩が自分の隣の芝生を優しく叩くから、私はそこに座る。

「「……」」

私は唯先輩が急に来てびっくりして、さっきまで考えていたことがあって何を話したらいいか分からない。
唯先輩はジッと夜空を見上げてて。
でも嫌じゃない沈黙。
そして…

「ねぇ、あずにゃん」

「はい？」

唯先輩が夜空から私に顔を向けて、思いがけないことを言ってきた。

「平沢　唯、相談教室をオープンしました！」

「え？」

相談教室？オープン？

「さぁ！あずにゃん！」

「えーっと…　すみません意味が分かりません」

「だから相談教室だよ
あずにゃんが抱えてるお悩みを、私が解決してあげるよ」

「ぇ…」

言葉に詰まった。
唯先輩は…

「あずにゃん、何か悩んでるんじゃないかな～って思って」

気付いていたんだ。
私の葛藤にも似た想いに…

「サッくんもね、あずにゃんが悩んでるんじゃないかなって言ってたよ」

「サク先輩がですか？」

「うん」

やっぱり鋭いなぁサク先輩は…

でも、ごめんなさい。
私の気持ちを言ったら、先輩達を困らせるだけなんです。

「私はあずにゃんの先輩だからね！ドンと言ってみなさいな！」

ごめんなさい唯先輩。
やっぱり言えないんです。

サク先輩には言おうとしたけど、言わなくて良かった。

だってそれは、サク先輩を、唯先輩を、澪先輩を、律先輩を、ムギ先輩を困らせるだけだから…

だから、私は…

「いえ、大丈夫ですよ」

「ほぇ？」

「悩みなんてありませんよ」

笑顔を浮かべてこう言った。
私自身の気持ちの問題だもん。
今は答えを出せないけど、その答えが分かるまで私の胸だけにそっとしまっておこう。

「う～ん…　そうなの？」

「はい　すみません、何か気を遣わせたみたいで」

「ううん　あずにゃんが何も悩んでなくて安心したよー！」

「ニャッ！」

唯先輩がいきなり抱き付く。
心配してくれた唯先輩とサク先輩には本当に申し訳ないけど、私自身で解決しなきゃいけないことなんです。

「それより唯先輩」

「なに？はっ！やっぱり相談がある？」

「いえ、息抜きできてるかなっと」

「息抜き？」

「先輩達は受験生でしょ？普段の受験勉強で疲れてるから今日のフェスで息抜きできましたか？」

「あ、私、受験生だったね」

「忘れてたんですか…」

「いや～　ついつい～」

「クスッ　もうダメですよ」

「ほ～い　ごめんなさい、あずにゃん先輩」

「なんですかソレ」

今は答えなんて分からないよ。
でも、先輩達と一緒にいれる時間を大切にしたい。

だからって変に気を張るんじゃなくて、いつも通りに放課後になってティータイムをしたり、練習したり。
そんな何気ないことを大切にしたいなぁ。
ううん　大切にしよう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

俺は起き上がって平沢と中野を眺めていた。

「……」

「気になる？」

秋山が俺の隣に立って、同じく平沢と中野を眺めながら俺に尋ねてくる。

「…五分五分だ」

全く気にならないと言えば嘘になる。
かといって平沢に任せた以上は俺が出る幕ではない。

「はぁ…」

そんな煮え切らない自分に軽く腹が立つが、何とかため息を吐くことで落ち着かせる。

「じゃあさ、行こうぜ」

すると田井中の声が背後から聞こえてきたので、俺と秋山は同時に振り返る。
そこには口元に笑みを浮かべた田井中が、たまに見せる『らしくない』『らしさ』で立っていた。

そして俺と秋山と琴吹に順次に視線を向けて口を開く。

「梓は軽音部の仲間で私達の後輩だからな
それに唯だけだと不安だ！」

「…後半は取って付けたような理由だな」

「うっさいな～！ほら行くぞ！部長命令！」

俺の発言は図星だったらしく、逃げるようにズンズンと平沢と中野の元に闊歩していく田井中。

「やれやれ、律も素直じゃないな」

「…何で俺を見てんだよ」

「クスッ　ほら行こう咲也、ムギ」

「レッツゴ～♪」

「引っ張んな…　押すな…」

俺を見たあとに小さく笑った秋山が左手で俺の左腕を取り引っ張っていく。
琴吹がグイグイと背中を押していく。
そんな連中に内心でため息を吐いて足を動かしていく。
平沢と中野のいる丘の上はすぐに辿り着ける距離。

「あ、私、受験生だったね」

「忘れてたんですか…」

「いや～　ついつい～」

「クスッ　もうダメですよ」

「ほ～い　ごめんなさい、あずにゃん先輩」

「なんですかソレ」

会話が聞こえる程に近付くと、表情も分かる。
平沢も中野も笑顔でお互いを見合っていた。

上手く平沢が事を運んだのか定かではないが、少なくとも悪い方向には進んでいないようだ。

「あ～ら　お二人さん、こんな所で内緒のお話？」

笑顔で会話をしていた平沢と中野に、田井中がわざとらしく…つうかわざと何も知らない素振りかつ、田井中『らしさ』のノリでスネークイン。

「あれ？りっちゃん、澪ちゃん、ムギちゃん、起きたの？」

「うん　まぁな」

首を傾げる平沢に秋山が頷く。
俺はそんなことには気にも止めず中野の表情を窺う。

「唯ちゃんと梓ちゃんだけズルイわ
私もお話しする～」

「別にムギ先輩を仲間外れにしたわけじゃありませんよ」

「じゃあみんなで夜空を見ながらお話しようよ～」

「夜空が綺麗ですからね」

「どれどれ…　おぉ～！すげ～！」

「律先輩　あんまり大きな声出さないでください」

「そうだぞ　遅い時間なんだから」

「ごめんごめん　でもさ、すごいよこれ…」

「……」

中野は普段通りだ。
時折笑って、時折先輩に注意して。
気にはなったが結果がどうなったかなんて平沢に聞く気はない。
しかし、そのまま放置するのも何なので、芝生に寝そべって星空観察を始めた一行。
まだ身体を起こしてる中野の横に移動して…

「あ、サク先輩」

「……」

ポン…

「…ぁ…」

口に出すのはしたくないので『変に悩むな』という意味を込めてツインテールをしていない中野の頭に軽く手を置いて、来たばかりだが俺は足早にテントに戻っていった。

「〜〜っ！」

「良かったね〜　あずにゃん♪」

「咲也の優しさだな」

「あ～ぁ　カッコいいな～サクは」

「梓ちゃん、顔真っ赤♪」

「だ、だってサク先輩が…！私の頭をポンって！」

「落ち着けって梓　ていうか私に大きな声出すなって言ったの梓だろ」

「何か凄く恥かしいです…！」

「でもあずにゃん、嬉しかったでしょ？」

「そ、それは……はい」

「私もサッくんに頭撫でられたら嬉しかったもん♪」

「ほぉ～♪唯、その話もっと詳しく教えろ～！」

「私も聞きた～い♪」

「ダメ～♪」

「夢みたいです…」

「ちゃんと現実だよ
今のこの瞬間も」

「澪先輩…」

背後から聞こえる平沢達の声に、あのままあの場所にいなくて正解だと思っていたらテントに到着。

「ガラじゃねェ…」

一つ呟いて、犬小屋テントに入り、寝転んで瞼を閉じた。

不思議なことに寝苦しさはなく、すんなりと俺の意識はブラックアウト。

―――――――

そして翌日。
八月八日日曜日。
現在時刻午前十時十五分。

【ＳＵＭＭＥＲ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ　２０１０】二日目。

田井中に文字通り叩き起こされ、朝から軽い一悶着を起こし、秋山が割って入ったことにより終戦。
そして山中顧問が買ってきた朝食を胃に納め、いざ出陣。

「アチィ…」

しかし相変わらずの照り付ける太陽光に出鼻をくじかれる。
しかし何も灼熱の天体に参っているのは俺だけではなかった。

「ヒリヒリします…」

その声は中野。

俺達は立ち止まり後ろを振り返ると、見事な小麦色に焼けた中野が眉をハの字に下げてゲンナリしていた。

「梓は今年も真っ黒だな」

と、秋山が言う。

「日焼け止め塗ったんですけど、効きませんでした…」

「…お前どんな体質してんだよ…」

「分かりません…」

「サクも梓のこと言えないと思うけど」

「…俺は太陽光を受け付けねェだけだ…」

「でも冬になったら寒い寒い言ってんじゃん」

「…揚足取るんじゃねェよ…」

実の所、中野は昨日の晩メシの場で既に小麦色にチェンジしていた

が、いかんせん俺は疲労困憊であり気にする範疇ではなかったし、夜は暗かったので中野が小麦色になっていたのを気付かなかった。

とにかく、一年ぶりにブラック中野が長野県の山の中に降臨。

「あずにゃんかわいい～♪」

「うぅ…」

平沢に抱き付かれようが振り払うこともせずに、されるがままに小さく声を漏らす。

「…見てて暑苦しいから離れろ…」

「もうちょっとだけ～♪」

「うぅ…」

「はぁ…」

「ぽー…」

（ん？）

平沢の理解不能な延長宣言にため息を吐くと同時に隣から汽車の汽笛のような音が聞こえて、誰だが分かるが一応確認のために首を横に動かす。

「今年の合宿で、良いものが見れました～♪」

「ムギ～　帰ってこいよ～」

「もう悔いはありません…♪」

「…成仏すんのかお前は…」

汽笛音はやっぱり琴吹で、焼きそば依存症が治ったと思いきや今度はスキルを発動させる。
頬に手を当ててうっとりしてトリップ真っ最中だ。
そんな琴吹に田井中が緩く帰還命令。

俺も田井中も琴吹のこのスキルには残念ながら慣れてしまっているので、特に頽唐はしない。

「ねぇ、咲也」

「あン？」

「ムギ、どうしたんだ？」

しかし、秋山はまだまだ理解をしていない。
まぁ、知らぬが仏だ。

「…俺の口からは言えん…」

「え？」

知ったところでどうしようもないので扇子で扇ぎながら止まっていた歩みをファイヤーステージに向けて再起動。

「ねぇ、律」

「あー…　私からも言えない」

「だから咲也も律も何でなんだよ？」

「あずにゃ～ん♪」

「うぅ…　ヒリヒリします…」

「ぽー…」

「なぁ律ってば」

「サク！助けてー！」

「ヤダ…」

中野に嬉々と頬擦りする平沢。
自分の体質に嘆く中野。
まだまだ絶賛スキル発動中の琴吹。
知識を得たいので田井中の肩を軽く揺らす秋山。
そんな秋山に救援を俺に求める田井中。
知ったこっちゃないのでバッサリと断固拒否する俺。

すると…

「あんた達いつまでやってるの！」

「「さわちゃん、いつの間に！」」

平沢と田井中の言う通り、俺達の後ろにいた筈の山中顧問が瞬間移動でもしたかのように、前方数メートル先で業を煮やしたかのように足踏みをして俺達を催促していた。

「今日で最後なのよ！のんびりしてる暇はないわ！」

気持ちは分からんでもないが、少しは落ち着いたらどうだ。
道行く他の観客から珍しいものでも発見したかのような視線を浴びてんぞ。

「よぉし！行こう！サッくん！」

「行きましょう！サク先輩！」

「…行くから背中を押すな」

「お～い！ム～ギ～！」

「はっ！りっちゃん」

「行くぞ　ほら澪も」

「うん♪」

「う、うん」

――――――――――

現在時刻午後二時ジャスト。

山中顧問は『腕が鳴るわね～』と首の骨を鳴らしながら、ホワイトガーデンステージに突撃し、俺達軽音部員は共に行動。

今日は俺も秋山も聴きたいバンドの殆どがファイヤーステージに出演するので、たまにサンダーステージに移動するぐらいで殆どファイヤーステージで白熱のライブに参戦していた。

「さすがに疲れてきたな」

田井中が両足を交互に足踏みしながら何とか足の疲労を逃がす。

「ずっと立ちっぱなしですからね」

「じゃあちょっと休憩しない？」

「そうだな　ボードウォークに行こうか」

中野の言葉に琴吹がそう提案して、今日は普通のテンションの秋山が頷く。

「お腹空いたもんね～」

「クレープとかアイス食べてたじゃないですか」

「甘いものは別腹だよ～」

「…つうか何か人増えてねェか？」

明らかに昨日よりファイヤーステージの観客密度がアップしている。それに伴い熱気もアップしてくるので地獄だ。

「今日ってメジャーなバンドが大勢出るから、人が多いんじゃないか？」

田井中の発言に『なるほどな』と思いステージに背を向ける。その瞬間…

ワァァァァッ！！
パチパチパチパチパチパチッ！！

「え？なに？どうしたの？」

突如、今日イチの歓声と拍手が湧き起こる。
そんな光景に平沢がアッチコッチと顔を向ける。

（なんだ？）

俺は何事かを確認するためにステージに再び振り返るとステージ上には人影が二つ。
そしてステージ横のデカいビジョンに映し出された人物に釘付けになった。

「マジかよ…」

「サッくん？」

左のビジョンには両手を高々と上げて歓声と拍手を浴びるボーカリスト。
右のビジョンにはエレガットギターを構えて大勢の観客を見渡すギタリスト。

「サク！あのバンドって…！」

「あぁ…こんなの聞いてねェぞ…」

ボーカリストが高々と上げていた両手を叩きリズムを取る。
それに呼応された観客も手拍子を取り、会場が一体になった時にギタリストがエレガットギターを奏でる。

♪！♪！♪！♪！

「りっちゃん！このバンドがどうかしたの！？」

「サクが好きなバンドなんだよ！」

手拍子とエレガットギターの音で聞こえにくい故に平沢と田井中の声量が上がるが、俺はそれどころじゃなかった。

気が付けば…

♪！♪！♪！♪！

「でも出演リストには乗ってなかったぞ！？」

「分かんないけどサプライズ演出じゃないのか！？じゃなきゃサクが気付かない筈ないからな！」

♪！♪！♪！♪！

「へぇ～！このバンドがサッくんの好きなバンドなんだね～！」

「あれ？」

「どうしたんですか！？ムギ先輩！」

♪！♪！♪！♪！

「咲也君がいないわ！」

『えっ！また！？』

気が付けば俺はステージ前方に駆け出していた。

人込みを掻き分けて、できるだけステージに近付く。

「はぁ…　はぁ…」

軽く息切れを起こしながら必死に近付くといつの間にか、肉眼でハッキリと俺の憧れであり好きなバンドが見れる位置まで近付けた。

♪！♪！♪！♪！

そして手拍子をそのままという合図を俺達観客に送り、ボーカリストがマイクに口を開き、ギタリストが更にエレガットギターを掻き鳴らす。

♪♪♪♪♪♪♪！

その曲は夏歌。
ラテン調とフォルクローレを取り入れたアップチェーン。

（スゲェ…）

周りの観客は手拍子をしているが、俺は呆然とその音楽に鳥肌が立つ程、聴き入っていた。

それはギタリストがエレガットギターから銀の髑髏のステッカーの

黒いテレキャスに持ち替えて違う夏歌を演奏してもだ。
観客はタオルを天高く振り回しているが、それでも俺はただただ呆然と音楽を聴き入っていた。

それほど俺にとって衝撃的な出来事であり、憧れのバンドが今この場にいることが信じられなかった。

そして夢のような時間はすぐに終わりを迎えた。

「『ありがとう！僕達は楽しめました！みんなは楽しめたか！？』」

ワァァァァッ！！
パチパチパチッ！！

「『僕達がやれる精一杯をやりました！みんなも精一杯！このあとのライブを楽しんで盛り上げてください！今日はありがとう！』」

ワァァァァッ！！
パチパチパチッ！！

鳴り止まない歓声と拍手。
そんな俺達観客に二人は頭を下げてステージ横に捌ける。

しかしギタリストは右手に持っていたピックを掲げる。

「チッ…」

その意味が分かっている俺は舌打ちを鳴らして、更に人込みを掻き分けてできるだけ前へ前へ進む。

そして…

ピンッ…

ギタリストの手からピックが弾かれ宙を舞う。

「ッ！」

俺は必死に手を伸ばした。

俺の周りの連中も手を伸ばす。

そいつらに負けないように必死に手を伸ばす。

パシッ！

「……」

何かを掴み閉じた右手を開くと、白いピックがそこにはあった。

★★★★★★★★★

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『お～いっ！！』

唯先輩が両手でメガホンを作って、ステージに向けて叫ぶけどサク先輩からの返事は聞こえない。
こんなに人がいるんだから唯先輩の声はサク先輩には届かないと思う。

『唯先輩　とりあえず先輩が戻ってくるのを待ちましょう』

『う～ん…　でもでも迷子になってるかもしれないよ？』

『もし、そうなってても先輩なら大丈夫ですよ』

『いや、どうだろうな』

律先輩が腕を組みながらステージを眺める。
私達はそんな律先輩に注目する。

『アイツのことだから本当に迷子になってるかもな』

『うん　私もそう思う』

（え？）

律先輩の言葉に澪先輩が頷くけど、私は疑問を感じた。

だってサク先輩が迷子って…

しっかりしてるサク先輩に限ってそれはないと思うけど…

『あ、みんな！戻ってきたわ！』

するとムギ先輩が…あれ？双眼鏡なんて持ってましたっけ？

と、とにかく双眼鏡を覗いていたムギ先輩が指差す。

その先には人波に逆らって私達の所に戻ってきている人がいた。

『よかった～　迷子になってなかったね～』

『当たり前です　サク先輩に限ってそれはありませんよ』

唯先輩がホッと胸を撫で下ろすから、私は当然のように言った。

けど、なんでか分からないけど先輩達は私の言葉に首を傾げた。

『何言ってるんだ梓？』

『何って…』

律先輩の思いがけない言葉に私は戸惑う。
失礼ですけど律先輩こそ何を言って…

『咲也は合宿には参加してないじゃないか』

『えっ！？』

な、何言ってるんですか澪先輩…
サク先輩が合宿に参加してない？

『そうだよーっ　サッくん、なんか用事があるって言って参加しなかったんだよーっ』

『……』

両頬を膨らませて怒ってるみたいな唯先輩に言葉を失くす。

み、みなさん何言ってるんですか？

サク先輩はちゃんと合宿に参加してるじゃないですか。

からかわないでくださいよ。

『おかえり～』

ほら、ムギ先輩がサク先輩を迎え……えっ！？

『いや～参った参った！ついつい興奮しちゃって前に突っ込んじゃったよ～！』

戻ってきた人はサク先輩じゃなかった…その人は…

『か、影宮先輩！？』

『ん？どうしたんだい梓ちゃん？』

なんで！？なんで！？

なんでサク先輩じゃなくて影宮先輩がいるんですか？

『あ、あれ？サ、サク先輩は？』

『サクッチなら今頃、西野＆水本と遊んでるんじゃないかな？』

『え？え？じゃあなんで影宮先輩が？』

『そりゃあ俺はサクッチの代理だッ！』

私はパニックになる。
いるはずのサク先輩がいなくて、いないはずの影宮先輩がいて。

『修司、どうだった？』

『サイコーだったぜ律ちゃん！いい感じの波がきて、俺は見事に乗ってやったぜッ！』

『すご～い！さすが伝説のサーファーね～』

『ありがとよ紬ちゃん』

『澪ちゃん、今度は私達が波に乗る番だね！』

『うん　影宮君に負けないようにしないとな』

先輩達は何故かサーフィンの話をしていて。
しかも影宮先輩がいるのが当然ように。

い、意味が分からないです！

（どこに行っちゃったんですか！サク先輩！）

『あずにゃんも行こうよ！』

『へっ！？あ、あの…！』

唯先輩が私の手を取って海に向かって走り出す…って海！？

『えーっ！なんでーっ！』

『ゆいあずの出番だ～！』

『なんで唯先輩は楽しそうなんですかー！』

もうダメ！頭がグルグルして何も考えれないよ！

（た、助けてください…！）

『サクせんぱーーーいっ！！！！！』

★★★★★★★★★

「はっ…！」

呼吸が荒い。身体中に嫌な汗をかいている。
視線の先には見慣れた天井。

「え…？」

首を動かして右手を見るとケータイが握られていて、左手を見ると食べかけのアイス。

身体を起こして部屋を見回すと、私のムスタングの『むったん』とトンちゃんが泳いでる水槽があった。

「あむ…」

食べかけのアイスを口に咥えて左掌を見る。

（焼けてる…）

綺麗に陽に焼けて小麦色になっていた。

次にケータイで今が何日かを確認する。

（八月十日…火曜日…）

そして理解する。

夏フェスが終わって二日が経ったこと。

影宮先輩のアレは夢だったこと。

「びっくりした～…」

アイスを一口食べて安心する。

本当に良かったよ。

夢で良かったよ。
白昼夢っていうのかな？
とにかく悪夢だった…

「そういえば、先輩達に残暑見舞いのメールを送ってた途中だったけ」

そのことを思い出した私は、右手に持っているケータイを顔の前に移動して、早速メールを作成しようとしたら…

♪ピンポ～ン

「ん？…あ、憂と遊ぶ約束してたんだった」

私は急いでアイスを食べ終えて、座っていたソファーから立ち上がり書斎から玄関に駆け足で急いだ。

第九十八話（後書き）

梓の想いは、アニメ二期第十三話と梓のイメージソング『Ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ』から垣間見ることができるので、作者なりに掘り下げてみました。

ちなみに作中に咲也がステージ前方に突っ込んでいきましたが、マナー違反なので、真似しちゃダメです。

第九十九話（前書き）

とある夏の日　前編です。

第九十九話

「……」

ベッドに寝転び右手を掲げる。
指の間から天井の白が見えてるが俺が見ているのは自分の右手。
手首を回して掌を見つめる。

『アレは夢だったのではないか？』という淡い妄想にも似た思考。
だがアレは現実。
確かに触れた。確かに掴んだ。確かに視界に入れた。
確かに俺は白いピックを触れて掴んで視界に入れた。

ガチャ

「待たせたな！…って、何してんだ？」

夢物語な現実。
あの夏フェスが終わって二日経つというのに未だに実感が湧かない。
俺の部屋の机の引出し。
『ＨＴＴ』の楽譜や、まだ書けてない歌詞の未完成の楽譜の上。
帰ってきて荷物を置くよりも、真っ先にピックをその引出しの中にしまった。

「お～い、咲也？サクッチ？サクえもん？桐島君？桐島さんチの咲也君？桐島咲也？影宮修司…は俺やがな～！」

確かにピックは机の中に存在する。
憧れのギタリストのピックだ。
手に入れるチャンスなんて滅多にないが、運良く手に入れた。

だが、それが信じられなくてステージ前方から平沢達の元に戻った時も上の空だった。

『あ、サク先輩』

『びっくりしたよ～　サッくんがまたいなくなっちゃったんだもん』

『……』

『どうしたんだ?ずっと右手ばっか見て?』

『咲也?』

『……あン?』

『咲也君、もしかしてどこか怪我でもしたんじゃ…』

『えっ！サ、サッくん大丈夫！？』

『…してねェから落ち着け…』

『じゃあどうしたんだ咲也？なんかぼーっとしてるけど』

『サク、あれだろ？興奮したその余韻に浸ってるんだろ～？』

『…かもな…』

『え？冗談だったんだけど…マジ？』

『でも、気持ち分かります
好きなバンドが急に出てきたらびっくりしますからね』

『あ、私も分かるよ！
この前憂がケーキ買ってきてくれた時があってね～』
『それはちょっと違います』
『うぇぇ～…　あずにゃんのいけず～』

『…休憩してくる…』

『あ、咲也君…』

『お待ちくだせぇ～！サッくん殿～！』

『なんだ？サクのやつ？』

『さぁ…　とにかく私達も休憩しよう』

『そうね～　あ、焼きそば売ってるかしら？』

『どうでしょうか？』

休憩し、ショップエリアで買い物をして（俺は何も買わなかった）大トリのベテランバンドを見たあと、『首が痛いわ…』と嘆いている山中顧問と合流して俺達はシャトルバスに乗って帰路に着いた。

正直ベテランバンドの演奏は覚えてない。

それほど、あのバンドのサプライズ出演とピックを手に入れた事が信じがたい出来事だった。

「なんだ？掌になんか書いてんのか？」

実感は湧かないが現実にピックは机の引き出しの中にある。
事実そう理解しよう。
つうかいい加減に理解しねェとアホらしい。

「なんもねェじゃん」

なので現実主義をフルに発揮して…

「お～い！無視しねェで俺の相手してくれよー！サッくーん！」

バキッ！

「ぶへェッ！！」

「…二度と言うな」

「リョ、リョーカイ…」

俺の右手を覗き込んできた修司に、寝ている体勢から腰を捻って右足で渾身の蹴りを見舞う。

「ゆ、唯ちゃんの専属特許だったな…」

「…平沢のも認めてねェっつうの
あとそれを言うなら専売特許な」

修司のベッドから半身を起こして両足をカーペットが敷いてある床に置く。
そして腹を押さえ蹲って悶絶中の修司を見下すように見下ろす。

「…で？この炎天下の中、わざわざ俺を呼んだ理由は？」

本日八月十日火曜日。
現在時刻午後一時十四分。

自宅で平沢からの『今から澪ちゃんとりっちゃんとで図書館で勉強会するから、サッくんも来て♪』というメールが届き、拒否の返信を送ろうとしたら修司から『今からウチに来てくれ！来なかったらマジで泣くぞコラァ！プライドとかねェからな！』という電話がきた。

ちなみに琴吹は昨日からフィンランドに避暑旅行へ行ってる。
忘れがちだが、アイツはブルジョワ。
それを思い出させる『フィンランド旅行に行ってくるね～♪』発言だった。

閑話休題。

平沢からの誘いを拒否できる理由がタイミングよく出来たので、それを訳に平沢に断わりを入れて修司の家に足を運んだ。

家に着くと修司は何やら作業をしているから先に部屋に行っといてと修司の母親に言われ、部屋に行き今に至る。

「おぉ！そうだったそうだった」

今の今まで悶えていたのに全く痛みを感じさせないスムーズな動作で立ち上がる。
痛点がおかしいんじゃねェか？

「お前を呼んだ理由は……なんでしょ～うか☆」

「さっさっと言え」

「分かった！分かったから足に力を込めんなッ！」

何で分ったんだ？
…あぁ、ストーカースキル発動させたのか。

「コレだよ」

「ん？」

修司が指差す先にはテーブルの上にある物体。
それには中身を隠すように布がかぶせてあった。

「ジャァーン！」

そしてその布を修司が勢いよく剥ぎ取る。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『おっき～い
良いの？こんな立派なスイカ貰って』

『うん　お母さんが持っていきなさいって』

『梓ちゃん、ありがとう♪』

『エヘヘ　どういたしまして』

私は今、憂と唯先輩の家に遊びに来てる。
憂にお土産のスイカを渡したら喜んでくれて、早速包丁で真っ二つにスイカを切る。

『うわぁ　おいしそう～』

スイカの中身は瑞々しい綺麗な赤色、所々に種が点々とあって、すごく甘そう。

『半分はお姉ちゃんにあげて良いかな？』

『唯先輩、勉強頑張ってるんでしょ？』

『うん　図書館から帰ってきて、お昼ご飯食べたあと、ずっと部屋で勉強中』

『そっか　じゃあ仕方ないかな』

『クスッ　もしかして、お姉ちゃんにあげないつもりだった？』

『勉強してなかったらね』

『あはは♪良かった～　お姉ちゃんが勉強してて♪』

この会話がおかしくって私達はお互い顔を見合って笑う。
ひとしきり笑ったあと、真っ二つに切ったスイカの半分を憂がお皿の乗せる。

『え？そのまま？』

『うん　半分に切ったスイカの種のない真ん中の部分だけをスプーンで食べることがお姉ちゃんの夢だったの』

『へ、へぇ～…』

私がちょっと呆れた声をだしたら、憂がトレイにスイカが乗ったお皿とスプーンを置いて唯先輩に渡しにいった。

（お昼、出前取ったんだ）

手持ちぶさたになった私はキッチンに置いてあった出前専用の入物を見つけた。

『ドアの前に置いてきたよ』

『憂、お昼出前だったんだね』

『うん　ざる蕎麦を出前したの
でも、お蕎麦だけだと夏バテしちゃうから天ざるにしたの』

『へぇ〜……え？』

天ぷら…　スイカ…
こ、これって…

『食べちゃダメーっ！』

『梓ちゃん？』

確かスイカと天ぷらって、水分と油分だから食べ合わせが悪かった筈！

私は急いで唯先輩の部屋に走る！

『唯先輩！』

三階への階段に右足を置いて、急いで階段を……

★★★★★★★★★

「梓ちゃん！」

「…ん…憂…？」

身体を揺らされる感覚に眼を開けると、目の前には心配した表情の憂がいた。

「大丈夫？うなされてたけど…」

「うん…　大丈夫、変な夢見ただけだから」

また変な夢見ちゃった…

サク先輩がいなくなって影宮先輩が代理で出てきた、あの悪夢から眼を覚ましたあと、玄関のチャイムが鳴った。

憂と遊ぶ約束してたから多分憂だと思って扉を開けたら案の定だった。

憂を自室に招いて色々話してたら、いつ間にか寝ちゃってたみたい。

「ごめんね　昨日ちょっと夜更かししちゃって…」

「ううん　それより怖い夢でも見たの？」

「まぁ、そんな感じ…」

言えない…
唯先輩が食べ合わせで苦しむ夢なんて絶対言えない。
例え夢でも唯先輩が大好きな憂のことだから取り乱しそう…

「それより純からメールきた？」

純を誘って三人でどこかに遊びに行こうっていう話をしていたことを思い出したから憂に尋ねる。

「純ちゃん、今、田舎のおばあちゃんチに来てるって」

憂がケータイ画面を私に見せる。
そこには『やっぱり田舎は退屈～何もないよ～～～～～！！』の本文と田園風景をバックに欠伸をして写っている純の写メがあった。

「お盆だから純は田舎に行ってるんだ」

「でも明日、帰ってくるって」

「そうなんだ　じゃあこのあとどうする？」

「う～ん…　あ！映画観にいかない？」

「良いかも　夏っぽくホラー映画とか」

「今ってどんなホラー映画やってたっけ？」

「分かんないけど、とりあえず映画館に行ってみよ」

「そうだね」

このあとの方針が決まったから私はベッドから起き上がって、憂は床から立ち上がって自室から出ていった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「…ケーキ？」

姿を現したのは一般的なイチゴのショートケーキ。
ホールサイズではなく六等分ぐらいしたサイズのイチゴのショートケーキがそこにはあった。

「コンビニ？ノンノン
父さんが作った？バカ言うな
他の店の？有り得ない
俺が作ったーッ！」

「…会話のステップを随分ぶっ飛ばしてくれたな」

「そうか？なんか…照れる」
「やっぱアホだお前」
「暴言止めろって言ってんだろうがッ！」

前歯をむき出しにして騒音を発生させるのが非常にうるさく鬱陶しい。
早急に静めたいのでぶっ飛ばしたステップを細かく問いただす。

「…これが何なんだ？」

「俺が作ったケーキだ」
「だからステップをぶっ飛ばすな…
何故テメェが作ってしまったバイオ兵器が存在してんだよ？」

「ん？何かお前の言葉に刺を感じたぞ？」

「……」

スッ

「オーケーオーケーッ！落ち着こうッ！つうか話すから足を小さく上げんなッ！」

中々本質が見えてこないので力ずくで事を進めようとしたら、両手

を振りながら二、三歩後退する修司。

「俺が店を継ぐって決めてからさ、父さんにケーキの作り方とか教わってんのよ」

漸く話始めたので再びベッドに腰を下ろし、耳を傾けてやる。

「でだ、寝る間も惜しんで昼寝した結果、俺が初めて作ったケーキができたんだ」

『寝てんじゃねェか』というツッコミを飲み込み、視線をテーブルの上に鎮座しているショートケーキに向ける。

見た目はそこら辺で売ってあるケーキと大差ない。

見た目はな。

「そのケーキがコレってわけ」

「で？」

「まぁ…なんだ…　俺が作った初ケーキを、咲也に食べてもらいたくてな…」

「…じゃあな」

「待て待て待て待て待て待てッ！何故だ親友ッ！？何故帰ろうとするッ！？」

鼻頭をポリポリとかきながら『へへへ…』と気味の悪い笑みを浮かべる。
そんな悍ましい奴と一緒の空間にいるよりは炎天下の元にいるほうが遥かにマシだと判断して扉に向かう。
しかしそれを阻止せんとばかりに俺の左足を掴んできやがった。

「…離せ」

「食うまで離さねェからなッ！」

「頭潰すぞ…」

「だから何回も言ってんだろッ！ビックリ箱かお前はッ！」

「…だから何回も言ってんだろ、ウザイって」

「ぼ・う・げ・ん・き・ん・しッ！
とにかく！食ってみろよ！」

「はぁ…」

何がこのアホをここまで躍起にさせるのか知らんし知りたくもないが、幾ら『迷惑だ』『ウザイ』『うるさい』の悪口三拍子を伝えようとしてもコイツの闘志漲る眼を見ると、伝わってないのは明らかだ。
手っ取り早い解決策として俺が渋々承諾するしかない。

「食ってやるから離せ…」

「マジでッ！？」

「はぁ…」

（判断ミスったな…）

俺の左足を解放して爛々としたオーラを纏いながら『さぁ！座れ！ヤングメン！』とテーブルの対面を指差す修司にそんなことを思った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「何か凄く怖そうだね…」

「う、うん…」

憂の呟きに私は小さく頷く。

商店街とは別の繁華街にある映画館に辿り着いた私達はサク先輩が苦手な夏の日差しから逃げるように映画館に入った。

中は程よく冷房が効いてて涼しいんだけど、私達が観ようとしているホラー映画の予告が流れているモニターを観たら冷房いらずな程、肝が冷えてしまった。

「ね、ねぇ憂　やっぱりホラーは止めにしない？」

「そ、そうだね…」

私も憂も声が震えてぎこちなく笑う。

だって怖いもん。
予告でこれだけなら本編は一体…
あ、Ｒ１５だ。
なおさら怖いよ…

「じゃあ何観る？」

「う～ん…　これなんかどう？」

私が指差したのは上映スケジュールにあった、ホラーとは真反対のハートフルな映画。
全然知らない映画だけど怖くてホラー映画を観る気を失くしちゃったから、こういう感動ものの映画が観たくなっちゃった。

「でも、これだと次の回までだいぶ時間があるよ」

よくよく上映スケジュールを見ると、次の上映開始時刻が二時三十分。
ケータイを取り出して時刻を確認したら一時三十一分。
約一時間も時間がある。

「じゃあ、どっかで時間つぶそっか」

「うん」

ということで時間をつぶすために私達はとりあえずコンビニに移動する。

私は音楽雑誌を手に取って、この前参加した夏フェスの記事を見つけた。

（そういえば、夏フェスで結構お金使っちゃったんだよね…）

ショップエリアで様々なグッズを物色してたら、澪先輩が左利きのギタリストがいるバンドの『ＫＡＭＡ☆ＫＩＲＩ』と文字がプリントされたＴシャツを私や先輩達に勧めてくるから、ついつい買っちゃったり、他のバンドのグッズも衝動買いしちゃったからお小遣いがピンチに。

「アルバイトとかした方が良いのかな？」

「アルバイト？」

思わず言ってしまった心の内に隣でファション雑誌を読んでいた憂がコテンっと首を傾げる。

「まだ夏休みがあるからどっかに遊びにいく可能性があるでしょ？
それに純が帰ってきたらまた遊ばなきゃだし」

「だったら…」

読んでいたファション雑誌を本棚に戻した憂が求人雑誌を手に取って、パラパラとめくりアルバイト情報が載っているページを私に見せる。

「これなんかどう？」

「時給安過ぎない？」

「じゃあこれは？」

「日給が高くて怪しいでしょ…」

「う～ん…じゃあ…」

時給五百円と日給一万五千円。
極端過ぎてめちゃめちゃ怪し過ぎる…
ていうか、そんな怪しいアルバイトがよく求人雑誌に載ってたね…

「あ！あれは？」

憂の視線は求人雑誌じゃなくて外に向いていた。
つられて私も外に視線を向けると電柱には一枚の張紙。

「福引きアシスタント？」

張紙に記載されてある文字を声にだして読む。
眼を細めてよく見ると『学生可』の文字もあった。

「ちょっと見にいってみようよ」

「うん」

映画が始まるまで、まだ時間があるから私達はコンビニから繁華街の広場にある福引き会場に移動。

そこにいたスタッフの人にアルバイトの事を話すと、とんとん拍子に私達の採用が決まっちゃった…

『まぁいっか』

あんまり深く考えないようにしよう。
繁華街が開催してる福引きだから怪しいってことはないだろうし。

『七等ポケットティッシュです』

『あれ？』

気が付けば私と憂は法被を着てアルバイトをしてた。
え？いつの間に？

『あと残ってるのは一等のフィンランド旅行と一人分の七等ポケットティッシュだけだね』

『え？あ、うん…』

あれ？いつの間にそんなに当たりが出たっけ？
それに何か忘れてるような…

『まぁいっか』

深く考えちゃイケない気がした。
なんでか分からないけど、自然とそんな気がするんだよね。

（フィンランドっていったらムギ先輩が旅行に行ってるんだったなぁ…）

広場を行き来する人をぼんやりと見ながらそんなことを思った矢先に…

『お願いしま～す♪』

『ムギ先輩！？』

そのムギ先輩が抽選券を差し出して現れた。

あ、あれ？何でムギ先輩がここに？

『ムギ先輩、フィンランドに行ってたんじゃ…？』

『うん　でもどうしてもこの福引きがしたくて、予定より早く帰ってきたの～』

『そ、そうだったんですか…』

そんな理由で旅行を切り上げるムギ先輩って凄いな…

『私、このガラガラを回してポケットティッシュを貰うのが夢だったから～』

唯先輩が夏フェスの時に言ってたけど、ムギ先輩って夢がいっぱいあるんだなぁ。
しかもその殆どがすぐに達成できそうなものばかり。
ムギ先輩はお金持ちのお嬢様だから、きっとそういう普通なことに憧れてるんだと思う。

（いつか詳しく聞いてみたいかも）

『どうぞ紬さん』

『よ～し！え～い！』

ムギ先輩の夢がどんなものなのかなって考えていたら、ムギ先輩が抽選機を回し始めた。

（神様お願いします！ここは空気を読んでムギ先輩にポケットティッシュを…！）

ちっぽけだけどムギ先輩にとっては大きな夢だから必死に神様にお願いする。

だってこのために早めに帰国したんだから、夢を叶えてあげたいもん。

『えいっ』

私の願いが叶ったのか、抽選機から出てきたのは紅い玉。

つまり…

『おめでとうございます紬さん、七等ポケットティッシュです』

『やったぁ～っ』

『ふぅ…』

憂からポケットティッシュを貰って嬉しそうにしてるムギ先輩を見て安堵の息をつく。

（でも、ということはこの中にはフィンランド旅行が…）

ムギ先輩が最後のポケットティッシュを引き当てたから、残ってるのは必然的に一等だけ…

『梓ちゃんもやってみれば？』

『うん、やってみる』

憂がそんなことを言うから、私は何の疑問も持たずに抽選機のハンドルを握る。

ちょっとだけ『アルバイトがこんなことして良いのかな？』って思ったけど、やっぱり深く考えないようにする。

『頑張って梓ちゃん！』

『はい！』

ムギ先輩の声援に後押しされて、私は抽選機をガラガラと一周させた。

そして出てきたのは…

『『おめでとう～　梓ちゃん！』』

『や、やったぁ～！』

コロコロと転がる金色の玉に私はガッツポーズ！

これでフィンランド旅行に……

★★★★★★★★★

「はっ…！」

まず眼に入ったのは憂がお店で何かを買ってる後ろ姿。

そこからグルリと首を動かしたら、私が広場のベンチに座っていることが分かった…ていうか思い出した。

（また寝ちゃった…）

私と憂は福引きのアルバイトの話を聞きに広場に来たけど、もうアルバイトは他の人に決まっていた。

仕方ないとアルバイトを諦めて、少しお腹が空いたから何か食べようってことになったんだった。

憂が何か買ってくるという言葉に甘えて、私は日陰にあるベンチに座った。

ひんやりとベンチは冷えてて、日差しが和らいだから、うとうと船を漕いで最後には寝ちゃったんだ…

「しっかりしなきゃ」

眠気を覚ます意味で頭を振ってパンパンと両頬を両手で叩く。

「でも、何であんな夢…先輩達の夢を見るんだろ?」

最初はサク先輩。
次に唯先輩。
その次がムギ先輩。

じゃあ次は澪先輩か律先輩?

「何なんだろう?何か意味があるのかな?」

「どうしたの?」

「ニャッ！？」

先輩達の夢を見てしまう理由を考えていたら急に憂の声が聞こえてびっくりする。

俯いていた顔を上げると憂が胸に茶色の紙袋を抱えて首を傾げていた。

「な、なんでもないよ」

「そう？」

「うんうん！それより何買ったの？」

取り繕うように笑って、憂が抱えてる紙袋を指差す。

「あ、たい焼きだよ
梓ちゃんってたい焼き好きだったよね？」

「うん」

私の隣に座った憂が紙袋から一匹のたい焼きを差し出す。
それを『ありがとう』と言って受け取り、早速一口食べる。

「あ、おいしい～」

「あのお店のたい焼きって、テレビで紹介されたこともあるんだって」

「へぇ～　そうなんだ」

「うん♪この前お姉ちゃんと食べたら凄く美味しかったから、梓ちゃんにも教えてあげたいって思ってたんだよ♪」

満面の笑顔で私に顔を向ける憂に食べていた、たい焼きを飲み込んで私も笑顔で…

「ありがとう憂」

と言った。

そのあと、映画が始まる時間になったから私達は映画館に向けて歩き始めた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「さぁさぁ！遠慮せずに食べてくれ！」

「……」

渋々テーブルの対面に座ったが、中々にケーキに手は伸びない。

見た目は良い。

しかし問題なのは作ったのがコイツだということだ。

俺もそうだかコイツも料理や調理なんてからっきしだ。

だからこそ一年時の学園祭での焼きそば屋では、俺達は客引部隊に左遷されたわけだし。

「あれか？食え食えコールがねェと食べる気が起きない派だったか？」

「そんな派閥は初耳だ…

つうかハナから食う気はねぇんだよ」

「照れんなよ咲也」

ガスッ！

「…蹴るぞ？」

「け、蹴ったあとの台詞じゃないと思います…」

テーブルの下から右足で修司の弁慶の泣き所をトゥーキックの要領でぶち込むとテーブルに突っ伏して痙攣する。

「と、とにかく！早いとこ食ってくれよ！ケーキは鮮度が命なんだからよ！」

ケーキが俺の前に姿を現してかれこれ約三十分は経ったと思う。
改めてケーキを観察すると、やっぱり見た目は完璧だ。
それ故に味が不安満載なんだが、覚悟を決めなければいつまで経っても帰れそうにない。

「はぁ…」

ため息が腹を括った瞬間だった。

傍らにあったフォークを手に取り、ケーキの先端を掬い上げて口に運ぶ。

「ありがとう咲也！お前が俺の初めてのお客さんだぁーッ！」

本当にうるさい修司を何とかスルーし、一回、二回と口を動かしたが、三回目には口が止まってヘラヘラと笑っているアホを睨む。

「な、なんだよ…　普通に怖ェよ…」

言いたい事を視線で訴えているがやはり伝わらないので、何とかケーキを飲み込み口を開く。

「…一つ聞くぞ？」

「お、おお…」

「…味見したか？」

「味見？いや」

バキッ！

「アベッ！」

恐ろしいことを口走りやがった生物に我慢ならず、立ち上がって蹴りをぶち込む。

「何しやがるテメェッ！」

「…それは俺の台詞だアホ
こんなもん食わせやがって」

「こんなもんだとッ!?俺がどんな気持ちで作ったのか知ってるくせにッ！」
「知らねェよ」

「だろうな　俺もただ言ってみただけだから」

腹立つなコイツ…

「はぁ……」

このままでは奴のペースに飲まれる可能性があるので、ため息で何とか平常心に戻し、ベッドに腰を下ろす。

「…おいアホ」

「なんだ…ってアホじゃねェよッ！」

「…ンなことより、ソレ食ってみろ」

「親友がせっかく作ったのにケチをつけるとは何事だ！だから日本が不景気なんだよ！」

「…関係ねェからさっさっと食え」

「はいはいはい」

『急かすよな咲也は、セバスチャンならぬセカスチャンだな』なんてほざきながら、フォークを使わずケーキを鷲掴みにして大口を開けて半分を食う。

「モグモグ…」

「……」

「ふむ…　ザラザラとした舌触りの中に舌を刺激する物体を確認しました
つうか……塩辛ェーーッ！！」

そう、コイツが作ったケーキは異常な程に塩辛い。
そんなバイオ兵器を食わせたコイツに蹴り程度で済んだんだ。
感謝されこそ恨まれる筋合いはない。

「…お前、まさかとは思うが、砂糖と塩を間違えたんじゃねェだろうな？」

そんな漫画みたいな事をしでかす奴なので問いただす。
つうか百パーそうだろう。

「多分…」

「はぁ…　お前が店を継いだら三日で潰れそうだな…」

「返す言葉もございません…」

ガックリとうなだれる哀れな奴を横目に俺は帰ろうと腰を浮かした瞬間に修司が顔を上げた。

「まぁ、成功の裏には失敗があるって言うしな
今回はいい経験だ！」

「…その心掛けには感心するが、俺を巻き込むな」

「そんな氷みたいに冷たいこと言うなって親友」

「…誰が？」

「アンタだよッ！」

相変わらずうるさい修司を一瞥して今度こそ立ち上がる。

「あれれ？帰っちゃうの？」

「…俺は受験生なんだ

勉強しねェといけねェんだよ」

「そりゃ難儀でやんすな
じゃあ明後日も来いよ～」

「はぁ？」

サラッと勝手に明後日の予定を組み込みやがった修司に眉をしかめる。

「今日はショートケーキで失敗したから、明日は特訓して、明後日に別のケーキでチャレンジするからヨロ！」

「…断わる」

「だがそれを断わる勇気を持っているのが俺だ！」

「意味分かんねェし…」

久々にコイツと絡んだせいか頭痛がしてきた額を押さえる。

すると修司がこんなことを言い出す。

「唯ちゃん達と一緒にいるのもいいけどさ、たまには中学時代の時みたいに俺と遊ぼうぜ」

「……」

「つうかこんなバカ騒ぎできるのって今だけじゃん？卒業したらこんなのも中々できなくなるしさ」

「……」

年に何回見れるか分からない修司の真面目な表情に…

「気が向いたらな…」

そう一言告げて、扉を開いた。

「おう！んじゃまた明後日な親友！」

「…誰が？」

「だからアンタだよッ！」

第百話（前書き）

祝！百話！

ということで、ロストでございます。

『Ｋ－ＯＮ！　～黒一点～』がなんと百話を迎えました。
ここまでこれたのも偏に皆々様のおかげです。

自室で一人でクラッカーを鳴らすほど嬉しいです。

では挨拶はこの辺にして…

とある夏の日　後編をどうぞ。

第百話

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『劇場内での映画の撮影・録音は犯罪です
法律により十年以下の懲役、もしくは一千万円以下の罰金、または
その両方が科せられます
不審な行為を見かけたら劇場スタッフまでお知らせください
ただちに警察に通報します

また上映中は携帯電話の使用は禁止です
携帯電話の電源は必ずオフにしてください
もし携帯電話の使用を見かけたら劇場スタッフまでお知らせください
場合によっては退出していただきます

ＳＴＯＰ映画泥棒
ＳＴＯＰマナー違反』

スクリーンに映写されるビデオカメラとケータイの顔に黒いスーツ
を着ている人がパントマイムで映画の盗撮とマナー違反を警告する
ＣＭを観ながら、私は劇場に入る前にロビーで憂と買ったポップコ
ーン（うなぎ味）を一粒摘んで口に入れる。

このＣＭ観ると今から映画が始まるんだなって一気に期待感を上げ
てくれる。

そして、その期待通りにホラー映画が始まった。

（ていうか、いきなり怖い…）

冒頭から怪しい息遣いと足音が聞こえて、幼い女の子が怯えているシーン。
ＢＧＭは一切なくて、息遣いと足音がどんどん近付いて恐怖感を煽ってくる。

恐怖感に完全に飲まれて喉が渇いた私は、ポップコーンと一緒に買ったジュース（ウメソーダ味）のストローに口をつけて一口飲み込む。

すると…

（え？澪先輩？）

私が座ってる座席は通路側。
その横をなんと澪先輩が通って私の前の座席に座る。
場内は灯が落ちてホラー映画の灯だけしかないから私と憂には気付かなかったみたい。

（澪先輩も映画観にきたんだ
でも大丈夫なのかな？）

澪先輩は怖がり。それも重度の。
去年の合宿で肝試しをした時、私とペアを組んだ澪先輩は強がっていたけど、握っていた私の手が痛くなる程に強く握り締めるぐらいに怖がっていた。
あの後、いきなり森から出てきたボロボロの先生（サク先輩と森の中を遭難していたみたい）を見たら悲鳴をあげて気絶しちゃうくらい怖がりな澪先輩が、何でホラー映画を？

（そっか）

私は一つの可能性を思い付いた。
澪先輩はその怖がりを克服するために一人で特訓しているんだ。
そうじゃなきゃホラー映画を観にくるなんて考えられないし。

（偉いな～　澪先輩）

澪先輩に感心して『私も苦手なコードがあるから、澪先輩を見習ってギターの練習しなきゃ』って考えたら、ホラー映画はいきなりの見せ場を迎えていた。

『ひっ…！』

ピアノの鍵盤を勢いよく叩いた音と共に、女の子の後ろからピエロが大鋏を両手で持って襲ってきた。

間一髪女の子は避けたけどジリジリと部屋の隅に追い込まれていく。

（こ、この流れだと多分次のシーンはホラー映画のお約束的なものすごく怖いシーンが…）

♪ジャーーンッ！

【キャーッ！】

（ほ、ほらやっぱり！）

再びのピアノの音と女の子の悲鳴に私と憂はビクッと身体を揺らしてスクリーンから眼を背ける。

（そ、そういえば澪先輩は…？）

私達がこんなに怖がってるのに、果たして澪先輩は大丈夫かと思いホラー映画を観ないように澪先輩に視線を向けると、微動だにしていなかった。

（そんな…　こんな怖いシーンでも平気なんて…）

すごいです澪先輩。
特訓の成果が…いや、もしかしたら…

『（み、澪先輩…？）』

私は人違いの可能性があったから、後ろから小さく声を掛けたけど、
やっぱり微動だにしない。

何の反応を示さないからといって人違いだとはまだ言い切れない。

まだ一つ可能性がある。

私は前の座席の背もたれに両手を置いて腰を浮かし、澪先輩の顔を
覗き込む。

（やっぱり…）

澪先輩は気絶していた。
しかも白目を剥いて。

ある意味ホラー映画よりホラーな澪先輩の表情に一瞬びっくりして
ドキッとしたけど、澪先輩を起こそうと肩に手を置きかけたその時…

♪～

『え…？』

劇場内にケータイの着信音が鳴り響く。

（誰？上映中はケータイの電源をオフにって言ってたのに）

先程の警告ＣＭを思い出してキョロキョロと首を動かしてケータイが鳴っている発生源を捜すけど、よくよく耳を澄すと着信音は私の近くから聞こえていた。

私じゃない。
だってちゃんとケータイの電源はオフにしてるもん。
憂でもない。
視線を向けると首を左右に振られたから。

じゃあ…まさか…

（澪先輩のケータイ…？）

確かに着信音は澪先輩から聞こえていた。
私は急いで澪先輩の肩を揺らしたけど、気絶している澪先輩はそう簡単に起きてくれない。

『（み、澪先輩！起きてください！ケータイが鳴ってます！）』

肩を揺らしながら小声で大声をだすという器用なことをしたけど、
澪先輩が眼を覚ます気配は一切ない。

♪～

そして中々鳴り止んでくれない着信音と他の観客からの迷惑そうな
視線に耐え切れなくなった私は…

『澪先輩！起きてくださーい！』

つい大声をだしてしまった…

★★★★★★★★★

♪～

「夢…」

視線の先には自室の白い天井。
カーテンの隙間からこぼれる陽の光が顔に当たって眩しい。

また…また先輩の夢…

サク先輩・唯先輩・ムギ先輩ときて今度は澪先輩。
しかもホラー映画を観ていた夢…

一昨日に憂と観た映画はハートフルな感動映画だったのに、何でよりによってあんな怖いホラー映画の夢を観るかな…

♪~

「あ、そういえばケータイ…」

枕元に置いてあったケータイがさっきから絶えずに震えて着信音を鳴らしてる。
眼が覚めたばかりで、ぼんやりした頭のままに『純』とディスプレイ画面に表示されてあるケータイを通話状態にしてベッドに寝転んだまま耳に当てる。

「『梓?』」

「うん…　どうしたの?」

「『どうしたのじゃないよ
まだこれないの?私と憂はずっと待ってるんだけど』」

「へ？」

思わず素っ頓狂な声をあげる。
一旦耳からケータイを離し、ベッドから半身を起こして壁にあるカレンダーに眼を向ける。

八月十二日木曜日。

次にケータイに眼を向ける。

【ＰＭ１：０２】

「あーーっ！」

「『うっ…　耳が…』」

ケータイに向けて叫んでしまい純の悲愴な声が聞こえたけど、私はそれどころじゃなかった。

（ね、寝過ごした！）

今日は憂と帰ってきた純とでプールに遊びにいく予定だった！
待ち合わせの時間から二分オーバーした今に私は起きてしまい、かなり慌てる。

「『もしかして今起きた?』」

「ご、ごめん!今すぐ行くから!」

「『あっ、梓…』」

何か言おうとした純からの電話を一方的に切ってベッドから降り、パジャマのボタンをハズし上着を脱いで投げ捨てるようにベッドに放り投げた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

ガチャ

「待たせたなッ!」

「ボリューム下げろ…」

本日八月十二日木曜日。
現在時刻午後一時三分。

残念なことに気が向いてしまい影宮家に足を運んでしまった。
玄関を開けるとまたもや修司は作業をしていると母親に言われ勝手に部屋に行き、暇潰しに机の上にあった修司の夏休みの課題（空白だらけ）を有り得ない解答でスラスラと埋めていると、片手に布がかぶせて中身を隠してある…まぁ、大方ケーキだろう。
そんな物体を持って騒音発生虫がやってきた。

「ん？何してんだ？」

「…お前の課題を片付けてやってた」

「マジで！？どんだけいい奴なんだよお前って！」

テーブルの上にケーキと思わしき物体を置いて、眼を見開いた後に目頭を押さえはじめた。

「ヤベェ…！あまりの優しさにガシラが熱くなってきた…！」

（何で『目』を抜かした？）

こんなことを言ったところで面倒な展開になりそうだと思い、心に納めてテーブルの近くに座る。

「…おい、今回はどんな毒物を製造した？」

「失敬な！確かに一昨日のアレはアレだったが、今回のはアレじゃねェぞ！」

「…アレアレうるせェ」

「じゃあコレだ」

じゃあの意図が理解出来ないが敢えてそこには触れず、『セイヤッ！』という掛け声と共に修司が布を剥ぎ取る。

「……」

そこに現れたものに絶句。

案の定隠れていたのは六等分されたサイズのケーキだったが、俺はこんなケーキは見たこともなければ知らない。

「前回はショートケーキだったので、やっぱり今回は初めて作ったチーズケーキだッ！」

『やっぱりの意味が分からん』
『初めて作ったもんを堂々と振る舞うな』
『うるさい』
この三つのツッコミ所が見つかったが、それどころではない。
今回のケーキは見た目からしてアウト。
何故ならば…

「…お前今からでも違う進路いけ」

「ん？何故だ？」

「…こんな物をチーズケーキと言い張るからだ」

その物体はスポンジケーキの上に乱暴にチーズが乗ってあるだけだ。
ある意味チーズケーキではあるが、しかしながら世間一般ではこれをチーズケーキとは言わない。
スポンジケーキとチーズとなら言うだろう。
チーズケーキの作り方は知らんが間違ってもスポンジケーキの上にチーズの乗せるだけな簡単な作り方じゃない筈。

「まぁ、お前の言いたいことは分かる」

「あぁ？」

「チーズがどこの産地のものを使ってるかだろ？」

違ェよ

「大丈夫だ！昨日スーパー行って北海道は十勝産のとろけるチーズ買ったから！」

そういう問題じゃねェよ。
つうかソレはパンに使うやつだろ。

「それともアレか？味見か？安心しろ、ちゃんとしたからな！スポンジケーキとチーズの両方を！うまうまだったぜ～！」

一昨日の件があるから確かに味見は大事だ。
しかしそういうことじゃねェんだっつうの。
つうか味見すんならお前曰くのチーズケーキ状態でやれ。
別個に味見したらそれなりに旨いに決まってんだろ。

「お前、親父が作ったチーズケーキ見たことあんだろうが…」

「咲也のおじさんのか？いや、ねェけど」

「…俺の親父じゃねェよアホ
テメェのアホっぽい親父だ」

「クラァ！人の父親をアホ呼ばわりすんなッ！」

「はぁ……」

俺が伝えたい意図が伝わらず、更に会話が進まない現状に深いため息が漏れる。

「とにかくだ！食ってみて感想聞かせておくれ」

「マズい」

「食ってもねェのにマズいとか言うなッ！」

「食わなくても見た目でマズいって分かんだろ…」

俺は黄色の上に黄色が乗ってある奇妙な物体を体内に入れる物好きではない。

「だからちゃんと味見したから大丈夫だって！」

「だったらお前が食えよ…」

「趣旨が違うけど…お前がそこまで言うなら俺が食っちまうぞ？」

「…さっさっと食え」

偽チーズケーキが鎮座している皿をテーブルの対面に座る製造者にスライドさせ、そう促す。

「へいへい分かりましたよ～」

『だからお前はセカスチャンって呼ばれるんだよ』とブツブツ言いながら、これがコイツなりの食べ方なのか傍らにフォークがあるのに偽チーズケーキを鷲掴みして大口の中に全て投入。

「モグモグ…」

「……」

「マッズゥゥゥッ！」

最早顔の原型をとどめることが不可能なくらいに顔を歪ませ、首を押さえてゴロゴロと床をのたうち回る。
そんな気持ち悪い生物がゴロゴロと転がりながら俺に急接近。

「…近付くな」

バキッ！

「オゥッ！」

身の危険を感じたので不気味な生物を蹴って遠ざけると、漸く動きが止まった。

「さ、最悪だ…！マズさと痛さのタブルアタックに最悪だ…！」

「…自業自得だ」

「つうか…　何故だッ！？味見した時は絶品だったのに、何故マズ

くなったッ！？」

「…例え個々の物が良品でも、合わさってもそれがイコールじゃねェんだ
そもそもお前が作ったのはチーズケーキじゃねェからな」

ダブルパンチを食らっていた毒物製造者が、それを感じさせない相変わらずの騒音でパニクるので、とりあえずな正論をぶつける。

「はぁ……」

すると俺の正論を聞いて効いたのか、深いため息を吐いて大の字になって倒れ込む。

「やっぱ俺には向いてねェのかな？」

「…人間として生きることがか？」

「ケーキ職人だよッ！つうかアイアムヒューマンッ！」

『虫のくせに』と言ったらまたも騒音が飛来してきそうであり、何やら似合わない神妙な雰囲気を醸し出しているので声には出さない。

「そりゃあよ？初めから上手くいくなんて考えてねェけどさ、こうも失敗続きだと気が滅入る…」

「…成功の裏に失敗があるっつったのは誰だよ？」

「誰だっけ？」

「お前だ」

人がせっかくコイツに対してかなり珍しい親切心で挫折寸前の心を添木のように微々たる力で回復してやろうとしてんのに、見事にぶち壊してくれたな。

「ま、そうだな」

「あン？」

上半身を起こして、どこか達観した表情の修司に眉をしかめる。

「男が一度決めたことから逃げ出すのはいけねェよな」

「……」

「よっしゃーッ！やる気が湧いてきたーッ！」

「一々叫ぶな…」

「いいじゃねェか！叫んだ方が身が引き締まるんだからよ！」

「あっそ…」

残念なことに俺と修司は幼稚園からの長い付き合い。
なのでコイツが逃げずに立ち向かうと宣言したのは心からの本音だと分かる。

「でだ、咲也」

「あン？」

「ぶっちゃけもうケーキはねェんだが、まだいるよな？」

「いや、帰る」

「そうか…ん？え？帰んの？」

「…もう俺がここにいる理由ねェだろ」

『進路を変えろ』と言った手前、口には出さないが内心で…

「じゃあ理由作ってやる！えーっと…はっ！ゲームやろーぜ！この前母さんに買ってもらったんだ～☆」

「ガキかお前は…」

「ガキで結構！まだ十八だから子供だもん♪ちなみに今の唯ちゃんの真似」

「…さすがの平沢も怒るんじゃねェのか？あと気持ちワリィから二度とすんなアホ」

「アホじゃねェッ！」

安堵している自分自身が……いるわけがねェ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「何でそんなに焼けてんの？」

「私、外にいたらすぐ焼けちゃうみたいで…」

「外って？」

「あ、軽音部の合宿で夏フェス行ってたんだ」

「夏フェス！？良いなぁ～」

「エヘヘ　良いでしょ～」

待ち合わせ場所のコンビニにいた憂と純に大遅刻したことを謝って、
私達三人はプールへ。
電車に乗って隣街のプールに辿り着いた私達は早速水着に着替える

ために更衣室で服を脱いでいると、私の陽に焼けた身体を見て純が理由を聞いてきた。

「去年と一昨日は海で合宿したんだよね
スタジオ付きの豪華な場所だったんだってお姉ちゃん言ってた」

「海!?豪華!?スタジオ!?」

純が驚愕な顔をして憂の言葉を復唱する。
確かにこの三つは引っ掛かるよね。

「う〜!羨まし〜い!ジャズ研なんて合宿ないんだよ!」

「え?そうなんだ」

「そうだよ　夏休みは週に三回練習があるだけ」

純のジャズ研の内部事情を聞いて逆に羨ましいと思う。
だって軽音部は夏休みは週に一回ぐらいしか練習ないんだもん。
しかもその練習日はティータイムをして終わっちゃうこともしばしば…

サク先輩だけはティータイムには交ざらないで自主練してる。
私もたまにサク先輩と練習してるけど、ついついティータイムの誘

惑に負けてしまう…
しかもサク先輩の演奏を律先輩がＢＧＭにして優雅にティータイムを楽しんでたり…
とにかくもうちょっと練習してほしいなっていうのが本音。

「そういえば梓」

「うん？」

ピンクの水着に着替え終えた私に、純が爪先から頭のてっぺんまでジーッと見てくる。

「見事なツートンカラーだね」

「うっ…」

私はタンクトップとハーフパンツで夏フェスに参加していたから、肌を露出していた部分だけが陽に焼けてて残りは肌色のまま。
そこに水着を着たら小麦色と肌色のツートンカラーが目立ってしまう。

「あんまり見ないでよ～！」

「だって、ね～憂♪」

「ご、ごめんね梓ちゃん」

「笑うな～！」

私のツートンカラーを見て憂と純がクスクス笑う。
そんな二人の反応に両手を上下にパタパタと動かして叱責するけど
二人は笑いを止めない。

「今日は二人で遊んできてよ…
私は端っこで身体焼いてるから…」

「梓ちゃん…」

気落ちした私はタオルを頭にかぶって小さく蹲る。

「あ！良いこと考えた！」

すると純が人差し指を立てて自信ありげな笑顔を浮かべてこんな提

案をしてくる。

「全身覆う水着着れば万事解決！」

「余計恥ずかしいでしょ…」

ただでさえツートンカラーに悩んでるのにそんな海女さんみたいな格好でウロウロしたら目立ってしょうがない。

そんなことをする訳もなく、私は予定通り身体を焼こうとしたけど、白いビキニの水着の憂と緑のビキニの水着の純に連れられて、このプールのシンボルである、おっきなウォータースライダーの滑り口に連れてこられてしまった。

『結構高いね～』

『梓ちゃんから滑りなよ～』

『う、うん…』

純の言う通りウォータースライダーの頂上はプールにいる人達がかなりちっちゃく見える程な高さ。

別に私は高所恐怖症ではないけど、こんな高さから滑るのは誰だっ

て躊躇してしまう。

中々決心がつかず二の足を踏んでいると…

『早くいけよ…』

『まぁそう言うなって』

『え?』

聞き覚えがある声に後ろを振り向くと…

『よ、梓!奇遇だな~』

『アチィ…』

『律先輩!?サク先輩!?』

紅いポロシャツと紺のハーフパンツを着て、サンバイザーをかぶった律先輩とサク先輩がいつの間にかそこにはいた。

『ど、どうしているんですか？』

『バイトだよ　夏フェスでお金使っちゃったからな』

『サク先輩もですか？』

『コイツが勝手に俺の履歴書作って送りやがったんだ…』

暑そうに、面倒そうにサク先輩が今年の夏はよく見掛ける扇子で扇ぎながら答える。

『良いじゃん♪サクだってお金ほしいだろ？』

『人を金の亡者みてェに言うな…』

『先輩達受験生ですよね？バイトしてる場合ですか？』

『細かいことはこの際ナシナシ
さぁ梓、滑るんならこれ持って滑れよ』

『え…？』

どこから取り出したのか律先輩が取り出したのは焼きそば。
それを私に差し出してきた。

『何で焼きそば…』

『この夏はやりの焼きそばスライダーだ！』

『初耳ですけど…』

申し訳ないんですけど律先輩の言葉はあまり信用できないから、扇子で扇いでいるサク先輩を見る。

『かなり怪しいが、実際やってる奴いるしな…』

扇ぐのを止めたサク先輩は扇子を閉じてウォータースライダーを差す。
私は扇子の先に視線を向けると眼を疑ってしまった。

『え！唯先輩！？ムギ先輩！？澪先輩！？』

なんと焼きそばを持ってウォータースライダーを勢いよく滑っていく唯先輩とムギ先輩と澪先輩が！
しかも『イヤッホ～！』とか『キャ～♪』とか『うわぁ～』とか言って随分と楽しそうに…

『律～！咲也～！もう一回頼む～！』

『サッく～ん！りっちゃ～ん！私も～！』

『私も～！』

滑り降りた先輩達が律先輩とサク先輩に向けて大きな声で再チャレンジを頼んでる…

『あいよ～！サク、失敗した焼きそばを回収しといてくれ』

『…あぁ？何で俺がお前の命令に従わねェといけねェんだ』

『それは私が部長だからだ！』

『はぁ…』

渋々といった感じにサク先輩が下に降りていく。
その際に後ろにいた憂と純が『こんにちは咲也さん』『どもです咲也先輩』と挨拶し、『あぁ…』と短くサク先輩が返答していた。

『ささ～　梓も早く滑った滑った』

『えっ…ちょっ…私、焼きそばなんて聞いてない…』

まだ焼きそばスライダーに納得してない私はまだ二の足を踏むけど、律先輩はお構いなしに背中を押して、滑り口に無理矢理座らせる。

『はい』

『いえ！焼きそばは結構です！』

『ダ～メダメ』

両手を振って断るけど律先輩は問答無用で焼きそばを私の頭の上に置く。

『滑ってる最中に焼きそば食べれたら合格だから』

『何にですか！？』

『良いから良いから♪』

『う、憂！純！』

焼きそばスライダーなんてやりたくないから憂と純に助けを求めるけど…

『梓ちゃん頑張って！』

『目指せ合格！』

『えー！』

憂は両手を握り締めて、純は拳を掲げてまさかの応援。

『んじゃ梓！レッツゴー！』

『ま、待ってください律先輩！まだ心の準備が…って、うわ～っ！

！』

律先輩が背中を押すから、躊躇う気持ちとは裏腹に私はどんどんウォータースライダーを滑り降りていく。

（ぜ、絶対に…！）

スピードにのった私は頭の上にある焼きそばが落ちないようにがっちり掴みながら、水飛沫を浴びて滑る。

（これは…！）

幾ら大きなウォータースライダーでもこれだけのスピードで滑べればあっという間で、出口の光が見えてきた。

そして出口を抜けて浮遊感を感じる。

下のプールにはまだ唯先輩とムギ先輩と澪先輩がいて、視界の端には網を持ったサク先輩を確認。

このままいけば唯先輩達にぶつかる！

『ぜ、絶対にこれは夢ーーっ！』

★★★★★★★★★

（やっぱりね…）

あんな非現実的な出来事は夢に決まってる。

私は憂と純に連れられてウォータースライダーには行かず、予定通りに身体を焼いていた。
でも、また寝ちゃってた。

「律先輩が出てきたから、これで先輩達の夢は全部…」

意味があるんだと思う。
でなきゃ『先輩』という共通の夢なんて見ないと思う。

（もしかして…）

夢って人の深層心理や願望を表すって聞いたことがある。
だから先輩達の夢を見る私は…私の想いは…間違いないんだ…

「梓ちゃ～ん！」

「ん？」

夏フェスの、あの夜の答えが分ったその時に憂の呼ぶ声が聞こえ、首を動かすと憂と純が駆け寄ってきていた。

「焼きそば買ってきたよ」

「並んでたら遅くなっちゃってさ…おぉ～！全身くまなく焼けたね」

「見事でしょ…」

サク先輩も言ってたけど、どんな体質してるんだろ私？
綺麗な小麦色に焼けた身体を見ながら私は小さく息を吐いた。

結局その後、焼きそばを食べ終えて私達三人はビーチボールで遊んだり、流れるプールで浮輪を使って流れたり、焼きそばスライダーではなく普通のウォータースライダーを滑ったりして遊んだ。

「疲れた～」

「そろそろ帰ろっか？」

「そうだね　陽も暮れてきたし」

思った以上に時間が経つのを忘れるくらいにはしゃいで、気が付けばもう夕暮れ。

私達はプールから上がって私服に着替える。
そして電車に乗って地元に戻り、オレンジ色に彩られた道を三人並んで歩く。

「う～！遊んだ～！」

「うん　夏が終わる前にもう一回行きたいね」

「だね」

純が両手を上げて身体を伸ばし、憂の提案に私が頷く。
そして、ふと前を見れば図書館があり、扉が開いて中から四人の人影が出てきた。

「あ、憂～！っと…」

その人達は私が良く知る人達で、私にとっての…

「あずにゃ～ん！」

先輩達だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「つまんね」

「…お前が弱ェからだろ」

現在時刻午後五時三分。

修司相手に格ゲーをしていたが、田井中弟よりコイツは弱かった。

連戦連敗を重ね、俺の勝ち星が五十を超えた時、ついに弱者がコントローラーを置いて寝転んだ。

「こんなにボコボコにされちゃさすがの俺も戦意喪失だ」

「…逆にここまでやられてながらも戦意を保ってたお前がスゲェよ」

「そうか？カッコいいだろ？」

「…気持ちワリィだけだ」

「ゴラァッ！！」

ガミガミガミガミと俺に文句を言ってくる弱者をスルーする。
すると…

ブブブッ…　ブブブッ…

「ん？」

ケータイが震え、ポッケから取り出すとディスプレイ画面には【平沢　唯】の文字。
メールではなく着信だ。

（文句言われるんじゃねェだろうな…）

実は今日も秋山と田井中とで図書館で勉強するからと誘われていたが、修司の家に行くと理由をこじつけ拒否をしていた。

「んあ？誰から？」

「平沢…」

「クッ…何故俺には唯ちゃん達からメールさえも来ないんだ…」

「お前がうるせェからだろ…」

「あれ？ガシラが熱い…
不思議だな…なんだか胸が痛いや…」

一昨日の夜に平沢から断ったことより文句のような世間話が約一時間も続いた事例があるので、今回もそれかと思いながらケータイを通話状態にして耳に当てる。

「『あ、やっほ～♪サッくん♪』」

「サッくん言うな」

「『んとね、今からみんなで夏祭りに行くから、サッくんもおいで～』」

文句かと思いきや、何故か機嫌良さげなボイスで誘いの電話だ。

「…夏祭り？」

「『うん♪今日河川敷で夏祭りがあるんだよ～
え？なに？りっちゃん』」

どうやら田井中が平沢に何かを言っているらしく、ボソボソと話し声が聞こえる。

「『あのね？りっちゃんが絶対に来て～だって
こなかったら私がサッくんのファンを辞めちゃうよ？だって』」

「…俺にとっては何の打撃にはならねェからかまわねェぞ」

つうかそれは俺にとってはプラスだ。

「『あれ？りっちゃん隊長、予定と違いまっス
え？よく聞けって？』」

俺と会話すんのか田井中と会話すんのかどっちかにしろよ。

「『もしもし？サッくん』」

「ンだよ…」

「『来なかったらサッくんのお茶会開くぞ～だそうです！』」

「……」

「『でも、サッくんのお茶会はやりたいな～
むむむ…　迷いどころだ～…』」

「……」

――――――――――

現在時刻午後六時二分。
太陽は完全に姿を隠し、周囲は薄暗い。
しかし夏祭りの露店や所々にある照明で程よい明るさに河川敷は包まれていた。

「はぁ…」

そんな明るさとは真反対に俺の気持ちは暗かった。
あのカチューシャならマジでやりかねんので、渋々河川敷に来てしまったからだ。
ちなみに修司もいたりする。

アイツの自転車に二人乗りして河川敷まできた。
しかし夏祭りは人で大勢賑わっており、着いた早々にアイツとは嬉しいことにはぐれた。

とりあえず平沢達と合流しようと祭会場を歩いているが、この人込みの中で特定人物を捜すのは至難の技だ。
ケータイに連絡を入れようとも混雑により俺のケータイは圏外に。
なので我が足を使って捜すがしかし、一向に見つからない。

（帰るか…）

あとで平沢や田井中に文句を言われそうだが、夏祭りに来たという事実があるので反論可能だ。
口撃でアイツらに負ける気はしない。

思い立ったら吉日、善は急げということで河川敷から土手に上るため石段に足を向ける。

「あ、サッくん♪」

「咲也」
「お、サク」
「咲也君♪」
「サク先輩…」
「咲也さん」
「咲也先輩」

「……」

偶然とは時に恐ろしいもの。
石段に横一列に座ってかき氷を食べている平沢達に遭遇してしまった。

「やっと来たか～　遅かったな？」

「…来たくなかったが、お前のせいで来てやったんだ」

「へっへっ～ん！部長の本気をみたか～！
私にかかればサクなんて手玉に取れるんだぜ～」

「よし、歯ァ食いしばれ…」

「会って早々ケンカするなってお前ら」

立ち上がって胸を張るカチューシャの態度が癪に障るので一歩踏み出せば秋山が仲裁に入る。

「サッくんもお一ついかがッスか？」

「あン？」

別に田井中とケンカをするつもりは毛頭ない。
それは田井中も分かっているため秋山ＳＴＯＰがかかったところで終戦に。
そんなタイミングを見計らっていたのか平沢が紫色のシロップ（恐らく葡萄）がかかった、かき氷を差し出す。

「パープルアルゼンチン味だよ！」

「…そりゃ良かったな」

「はぅ！ムギちゃ～ん…　サッくんが～…」

「あはは…」

アッサリあしらったことにショックを受けたらしい平沢が琴吹に泣き付くが、ふと疑問が湧く。

「…おい、琴吹」

「なぁに？」

「…お前フィンランド行ってたんじゃねェのか？」

確かコイツは三日前から北欧の国に避暑旅行に旅立っていた筈だが、何故か現在夏祭りの会場に存在していた。

「あ、うん！私、この夏祭りのために早く帰国したの～
夏フェスで食べれなかった焼きそばをどうしても食べたくって～」

いやいや…　そんな理由で帰国すんなよ…

「それでね？さっき食べたらすっごく美味しかったの～♪」

念願叶って普段より二割増しな笑顔で報告してくるが、その情報はどうでも良かったりする。

「そういえば咲也」

「今度はなんだ…」

「一人で来たのか？」

「…いや、アホと一緒だが、どっかに消え失せた」

秋山の質問に決して嘘ではない答えを提示すると…

「ほれサクッチ」

どこからともなくアホが現れ、苺のシロップがかかったかき氷を俺に差し出してきた。
ちなみにブルーハワイのシロップがかかったかき氷も持っている。

「夏といえばかき氷！コレニホンノジョウシキネ」

「お前誰だよ…」

「修司君　久しぶり～」

「おひさ～　唯ちゃん」

「あれ？修司も一緒だったんだ」

「ははは…　なんか心が痛いよ律ちゃん…
あれれ？なんだろう？眼から液体が溢れてくるよ？」

「…毒を分泌すんな」

「毒じゃねェよッ！涙だッ！バカッ！」

ゴンッ！

「おぅ…！」

「…暴言吐くな」

「お、お前が言うなよ…」
「あぁん？」
「ごめんなさい」

脛をさすりながら深々と頭を下げるアホ。

「……」

そんなアホを相手にしてしまったが故に中野がジッと俺を見ていたことには気付かなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

サク先輩が来て、これで軽音部の先輩は全員揃った。

唯先輩にサク先輩に澪先輩に律先輩にムギ先輩。

私は先輩達を見つめる。

「あ、お姉ちゃんアッチで金魚すくいやってるよ」

「わぁ～金魚！行く行く！サッくん行こうよ！」

「…俺は金魚アレルギーだから無理」

「え！そうなの？」

「バレバレの嘘をつくなよ咲也…
唯も簡単に信じるな」

「ぶぅ～！サッくんが嘘ついた～」

「はぁ…　やるんなら一人でやれ」

「え～　一緒にやろうよ～
いっぱい取ってトンちゃんの水槽に入れてあげようよ～」

「でも唯ちゃん、食べられちゃうかも…」

「あぁ　食べられるな間違いなく
バリバリッ！ガリッ！ムシャ！グチャ～！とかいって」

「ヒッ！や、やめろー！律！」

「…それか丸呑みとかな」

「ヒィッ！さ、咲也ー！」

「クスッ」

自然と…自然と私は笑顔になっていく。
先輩達のやり取りがおもしろくて、先輩達といるのが楽しくって。

（やっぱり…）

改めて実感。
私は先輩達が好きなんだ。

私の悩みの答えは実は既に分かっていて、でも先輩達がいなくなるのが嫌で、どこか完全に認めてなかった。

でも…それじゃダメ。
それは仕方がないことだから。
だから私は決めた。

（楽しもう！精一杯楽しもう！）

未来とか関係ない。
今を楽しもう。
例え来年、私が一人になっても、先輩達に『大丈夫です』って言えるくらいに今を精一杯楽しもう。
そして、先輩達とやれる最後の学園祭ライブを成功させよう。

「よし…！」

「どうしたの梓？」

「ううん　なんでもないよ」

決意を新たにグッと拳を握り締めると不思議に思った純が首を傾げるけど、私は首を小さく左右に動かす。

すると…

ヒュー…　ドォーンッ！

「りっちゃん隊長！アッチで花火やってるであります！」

「なに～　なぜそれを早く言わない～！」

突然聞こえた轟音に視線を向けると、夜空に綺麗な花が咲いていた。
様々な色が次々に夜空を輝かせる光景に見入っていると…

「何してるの、あずにゃん」

「え？」

唯先輩が私に手を差し出していた。

「もっと近くで花火観よ？」
「おいてくぞ梓」
「梓、花火終わちゃうぞ」
「梓ちゃん早く～」

「……」

差し出されたその手。
私はゆっくりと唯先輩の左手に右手を乗せた…

「急げ～！ゆいあずのお通りだ～！」
「わっ…！」

唯先輩が急に走り出すから私はよろけてしまうけど、なんとか体勢を整えて走り出す。

（サク先輩…！）

けど、花火に向かって走り出す先輩達が一人足りないことに気付いた私は無意識に後ろを振り向いて、腕を組んで花火を眺めているサク先輩に目一杯に手を伸ばす。

（サク先輩！サク先輩！）

だけど、私の左手はサク先輩に届くことはなくて、徐々にサク先輩と離れていった…

（これも夢だったら…）

サク先輩も一緒に来てほしかった。
だからこんなことを思った私に、サク先輩はなんて言うんだろう…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「……」

平沢が中野の手を取って、秋山と田井中と琴吹と共に花火に向かって駆けていく光景を一瞥した後に、上空に彩り鮮やかな花を咲かせる光をぼんやりと眺める。

「あの～　咲也先輩」

「あン？」

聞こえたその声に夜空から後ろに視線を移すと、ベストポジションで花火を観ようと集まっている人垣に、正に今、突っ込もうとしている平沢達を指差す鈴木の姿。

「良いんですか？行かなくて？澪先輩達と梓、行っちゃいましたけど」

「…わざわざ人垣に突っ込む程、花火を観てェわけじゃねしそれに行ったところで、だ」

「え？ん？どういう意味ですか？」

「…それをお前に言ったところで、だ」

「え～っ　何かヒドいです～っ」

「ンなことより…　お前らが行ってやれ」

鈴木を見、次にその後ろにいた平沢妹を見る。

「…アイツ、一人になってんぞ」

「梓ちゃん…」

「梓…」

その瞬間は見てないが、恐らく人垣に突っ込んだ際に繋いだ手が離れ、平沢達とはぐれたんだろう。

そんな中野はあちらこちらに首を動かし平沢達を捜すが、見つけることは出来ずにその場で花火を眺め始めた。

「純ちゃん」

「うん」

一人ぼっちになってしまった中野の元へ急ぐ意志を確認した平沢妹と鈴木は互いに小さく頷いて、月と星と花火の夜空の下を駆けていく。

「んで？モグモグ…あの娘に…モグモグ…言った意味は…モグモグ…なんだ？」

「…食うか喋るかどっちかに限定しろ」

平沢妹と鈴木の背を見届けた後、再び視線を花火に移動させる。しかし夏の花火の風情をぶち壊すように『シャリシャリ』と、かき氷を食べる音を強調させながら耳障り発生虫が隣に立つ。

「んじゃ喋る」

「チッ…」

「なんで舌打ちすんだよッ！じゃなくて…あの娘に言った意味はなんなんだよ？」

『あの娘』とは鈴木のことだろう。
つうか何で聞いてんだよコイツ…

「はぁ…」

とりあえずため息一つ吐き、隣の修司を一瞥し、視線は夜空に向けたままに口を開く。

「平沢達が前なら、アイツらは横、俺は後ろだ…」

「なるほどな」

「……」

「ごめんなさい見栄張りました　本当はさっぱりです」

「元々お前に言っても理解出来ねェと思ってたし、俺にしか分かんねェことだ…」

この言葉を言った時に花火は終わり、無事に中野と合流した平沢妹と鈴木を確認した俺は踵を返した。

「だからどういう意味…って、もう帰んのかよ？」

「…この人の数だ　平沢達と合流しようにも無理だ
だから帰る」

「しゃ～ない！俺も帰るか～！
俺がいねェと咲也は迅速に帰れねェからな～！」

「…だったらさっさっと来い」

「はいはいはい　やっぱりお前はセカスチャンだな！」

「じゃあな…」

「嘘嘘嘘ッ！イッツジョークッ！ユーモアッ！リアリ～？」

「もう黙れよお前…」

先を平沢と秋山と田井中と琴吹が進み、その後ろを中野と平沢妹と
鈴木が。

そして俺が一定のラインを保ったままに静観。

「花火綺麗だったね～」

「そうだな」

「あれ？あずにゃんがいないよ？」

「ていうかサクもいないし」

これが現在と未来の、かつ現状の軽音部の形容であり、あの時にその姿を見た気がした。

第百話（後書き）

これにて修学旅行編から抱いていた梓の想いは一旦の区切りです。
想いは覚悟と決意に変りましたからね。

第九十六話の後書きにある百話記念小説の件は、もう少し時間をください。
プライベートが忙しくて忙しくて…

第百一話（前書き）

琴吹　紬の願望です。

第百一話

リベンジを挑んできた『奴』がいる。

初めて拳を交えたのは確か、今から約十一ヵ月前の秋口。

場所は『奴』の自宅のリビング。

当時の俺は溜まっていたストレスと鬱憤を発散させようと『対戦しろ』と持ち掛け、『奴』は『俺は強いよ？』と自信ありげにニヤリと笑った。

蹴る、殴る、投げる、時には炎を放った。

まるで『奴』の自信とプライドを潰すが如く。

そして結果、１３戦１０勝３負で奴を…潰した。

あの日から時は流れ、俺は『奴』の存在を忘れかけていた。

だが、今年のゴールデンウィーク。

突然、『奴』と再開した。

あの日の俺は、未だに未完成の新曲の作曲に少々詰まり、気分転換にと商店街をぶらぶらと散策していた。

本屋で音楽雑誌とサッカー雑誌を立ち読みをし、『１０ＧＩＡ』でテレキャスとアコギの弦を購入し、普段はあまり行かないが『気分転換』という理由で、とある場所に足を踏み入れた。

そこは休日ということもあり不特定多数の大勢の人がたむろしていた。

若者にカップル、家族連れ、友人同士、中にはタバコを吹かしながら賭博をするガラの悪い連中もいた。
そこはこういう場所だ。
別に気にも止めない。

大勢の会話や様々な騒音が聞こえるが、気にも止めない。
ここはそういう場所だ。

気分転換という目的がありそうでない故に、その場所で何をするわけでもなくぶらついていたら、突如として『あっ！』と声が聞こえた。
その声が聞こえた方に首を動かすと…『奴』がいた。
突然の再開だ。

しかし俺は『奴』の存在を忘れかけていた身。
『誰だ？』と言うと『奴』は落胆した様子で自身のフルネームを口にした。
その名前…正確には名字に聞き覚えがあり、俺は思い出した。『奴』だと。

『暇？』と聞いてくるので『まぁな』と答えた途端に『奴』があのニヤリとした笑みを浮かべた。
そして『奴』は言った、『リベンジ』だと。

その意図を理解し頷いた俺は気分転換という名目で、再び拳を交えた。

『奴』は成長していた。
だがそれでも俺の相手にはならず…潰した。
完膚無きまでに。

何度立ち上がろうが徹底的に。

気分転換ができた俺はその場所から去ったので、『奴』がどうなったかは知らない。

そして三ヵ月経った今日。

俺達はまた同じ場所で再開し、拳を交えている。

「……」

バキッ！

殴る。

ドゴッ！

蹴る。

ブンッ！

投げる。

ボゥッ！

炎を放つ。

「……」

勝負アリだ。

放った炎に全身を焼かれた『奴』が悲鳴をあげる。
そして力尽き、『奴』が地に伏せる。

俺はそんな『奴』を、ただ見つめる。
…画面越しに。

「クッソー！また負けたー！」

筐体の向こうから『奴』の悔しそうな声が。
そう、筐体の向こうから。

本日八月十五日日曜日。
現在時刻午後二時二十二分。

現在俺は、ゲーセンにいた。

俺がゲーセンにいる理由は、単なる暇潰しと英気を養うため。

明日から受験のための夏期講習が始まる。
正直面倒だが、普段の授業を寝て過ごしている俺は、山中担任曰く『テストで赤点がなくても、受験じゃ通用しないわよ』という当たり前な耳が痛い言葉を受けた。

進学と決めた以上は微々たるものだが勉強はしている。
しかし、これまで一夜漬けでテストに挑んできた俺は、ぶっちゃけ授業で分からないところがたまにあったりする。
決して俺は勉強ができる自分ではない。

なので受験に備えるべく夏期講習に申込んだ。
ちなみに平沢と秋山と田井中と琴吹も申込んでいる。
更にいうと俺達は同じ夏期講習が行われる塾に申込んでたりする。

山中担任に進められるがままに申込んだが、今思うとあの人が俺達を同じ夏期講習に申込ませるように仕込んだとしか思えない。

とにかく明日から勉強地獄が始まるので気分転換にゲーセンに来た。

そこで『奴』とバッタリと鉢合わせし、また『リベンジ』と言ってきたので、十一ヵ月前と三ヵ月前にも対戦した格ゲーをプレイ。
で、やっぱり俺の勝ち。
そして今に至る。

「何が意気込んでリベンジだ…　お前弱過ぎ」

「そんなことないよ！俺はちゃんと特訓してるんだ！」

「…その成果がコレか？」

「うっ…」

格ゲーの筐体があるので『奴』の表情は窺えないが、声質と二の句が聞こえない判断材料で十分だ。
『奴』曰くの特訓が無駄だったことに。

「はぁ…　俺の負けだよ…」

すると『奴』が立ち上がり、肩を落としながら反対側の筐体にいる俺の方に覇気無くノロノロとやってくる。

「これ以上やったら今月の小遣いが全部飛んでいっちゃうよ…」

「…俺は百円で長々とプレイできたけどな」

『奴』からの敗北宣言を受け、筐体に備ってある椅子から立ち上がり、緑色で１４と書かれた青色Ｔシャツを着こなす『奴』に、身体を向けると『奴』は随分と憔悴していた。

「ズリィ…」

「…諦め悪く何度もコンテニューするお前がワリィ」

「だってさ」

『奴』の正体。

それは俺のことを…

「兄ちゃんに勝ちたかったんだもん」

何故かこんな風に呼ぶ、現軽音部部長であり、カチューシャでもあり、ドラマーの田井中の……弟。
『田井中　聡』だ。

「せっかく姉ちゃんに相手してもらって練習したのにさ、全然だよ」

「…アイツ強ェのか？」

「う～ん…　そこそこ強いと思う
ていうか前に兄ちゃん言ってたけど」

「あ？何を？」

「お前ら姉弟は弱いって
だから俺は特訓したのに」

「ゲームばっかして、お前典型的な現代っ子だな…」

「それ姉ちゃんにも言われた
でもさ、やりたいことをとやかく言われたくないんだよね
姉ちゃんだってドラムやってるし」

模範的な思春期の在り方だな。
流石は中学生。

「…別にお前らの姉弟が不仲だろうがどうでも良いし、興味もねェ」

「姉ちゃんと仲が悪いわけじゃないよ？
あ、でもたまにプロレス技を俺にかけてくるのがヤダな～」

とりあえず喉が渇いたのでゲーセン内にある自販機でジュースでも買おうかと歩き出すと、その後ろを後頭部で手を組みながら田井中弟がついてくる。

「そうだ！兄ちゃんから姉ちゃんに言っといてよ」

「…さっきも言ったろうが、どうでも良いし興味もねェ
今ならそんなことをしてやる義務も義理も責任の欠片もねェも付け加えといてやる」

財布から小銭を取り出して自販機に投入し、缶コーヒーを一本購入。
ガコンッという音と共に缶コーヒーが出てきた。

「でもさ、姉ちゃんと仲いいんでしょ？」

「……」

腰を屈め取り出し口に伸ばした手が一瞬止まる。
が、一瞬だ。すぐに時は流れ、缶コーヒーを手に取って立ち上がる。

「…只の部活仲間だ」

「うわぁ…冷たい言い草…」

「うるせェな…」

そう一言ぶつけ、プルタブを開けて一口コーヒーを口に含む。

「あれ？俺に買ってくれないの？」

「…何で俺がお前に奢ってやんねェといけねェんだよ」

「小遣いがあまりないんだもん」

「…こんな言葉知ってるか？自業自得」

「ちぇ～」

口を尖らせながら財布を取り出した田井中弟を一瞥し、再び缶コーヒーを傾ける。

ブブブッ　ブブブッ

するとズボンの右ポッケが震える。

缶コーヒーを左手に持ち替え右手をポッケに突っ込む。

【平沢　唯】

ケータイのディスプレイ画面のそれに特に何かを感じることなく通話状態で耳に当てる。

「『サッくんっ！』」

「ボリューム下げろ…」

やや耳を劈く声量に耳からケータイを離す。
しかし俺の命令・注意報など聞く耳持たずに平沢は言葉を続ける。

「『聞いてよ！和ちゃんがヒドいんだよ！』」

「…ヒドいのはお前の声量だ」

しかしと思う。
何やら興奮した様子の平沢の声から察するに、ハプニングが襲ったらしい。
そして渦中の人物は真鍋のようだ。
仲睦まじい平沢と真鍋がケンカでもしたのか、はたまたその直前か。
女同士のケンカは男と違いカオスだと聞いたことがある。
面倒な事になりそうだ…

「『和ちゃんが…　和ちゃんが…』」

炭酸ジュースを買った田井中弟が『どうしたの？』と視線で訴えるが『何でもない』と缶コーヒーを持った左手を軽く振る。
そして意味深にタメを作った平沢が事の核を告げる。

「『ケーキのイチゴ食べちゃったんだよー！』」

「……」

脳が弾き出した結果。

『くだらねェ』

実にその通りだ。

「『和ちゃんと勉強してて休憩にケーキ食べてたのそしたら和ちゃんのケーキがおいしそうだから一口とっかえっこしようって言っただけなのに…』」

「それとお前が叫ぶ関連はなんだ…」

確かにくだらないとは思うが話を聞いてやらなければしつこく話してきそうだと俺の第六感が告げてくる。

故に渋々と、かつダラダラと聞き手に務める。

「『そしたら！』」

事の顛末をざっくりと語った平沢が『ここ重要！』とばかりにトーンを上げる。

「『和ちゃんがケーキのイチゴ食べちゃったんだよ！信じられないよね！？』」

「知らねェよそんなの…」

「『だってだって！ケーキのイチゴだよ！ハートだよ！スターだよ！魂なんだよ！』」

「『唯　ちょっと落ち着いて』」

どうやら真鍋が近くにいるらしい。
興奮している平沢とは打って変って普段の真鍋の声が聞こえる。
そしてもう一つ、俺の耳が捉えた声。

「げっ…！」

田井中弟の小さくともデカい声だ。

「兄ちゃん！兄ちゃん！」

「…ンだよ」

「『和ちゃんおかしいよね！？信じられないよね！？』」

「理由はあとで話すからコッチ来て！」

「あぁ？」

右の耳からは平沢の声。
左の耳から田井中弟の声。
そんな板挟みに対応出来ない俺は対策対処として…

「…おい平沢」

「『サッくんは私の味方だもん！分かってくれるよね！』」

「…味方云々はこの際置いとくぞ
俺じゃあお前の言い分が理解できねェから、中野にでも愚痴っとけ」

平沢の案件を中野になすり付ける。
これで俺にとっては万事が上手くいく。

「『ででもサッくん！和ちゃんが間違ってるよね！？』」

「だから中野に言っとけ
…じゃあな」

「『あ、サッ…』」

ピッ

何かを言いかけた平沢を、お構いなしに通話を切り、自販機の影に身を隠して俺に手招きしている田井中弟に近付く。

「兄ちゃん早く隠れて！」

「…何でだよ？」

「いいから！」

俺の腕を掴み引っ張って無理矢理に自販機の影に移動させる田井中弟。

「兄ちゃん、アッチ見て」

「ん？」

田井中弟の指差す先にはゲーセンの出入り口。
そこに得意げな表情の人物一人。
感動した表情の人物一人。
計二人の人物がいた。
つうかこの二人は俺のよく知る人物であり、田井中弟に至っては一人は血縁関係だ。

「お前の姉貴と琴吹じゃねェか…」

実に珍しい組み合わせの田井中と琴吹がゲーセンに来襲。

「…つうか何で隠れてんだよ？」

俺はアイツらに見つかると厄介なので身を隠すことには賛成だが、別に姉と不仲ではない（本人曰く）コイツは何故？

「実はさ俺、友達と遊んでくるって言って家出たんだけど、ソイツが急にキャンセルしたんだよ
このまま家に帰るのって何かヤだからさ、ゲーセンで時間潰してたんだ」

「…で、姉貴に見付かると、とやかく言われそう…つうことか？」

「うん…　またゲームしてるって…」

（思春期だな…）

流石は中学生。

「そういえば姉ちゃん、澪さんと遊んでくるって先に家出たのに…あの人って軽音部の人だよね？」

「あぁ…」

『姉ちゃんのお見舞いに兄ちゃん達と一緒に来た』と付け加える田井中弟に頷き、珍しい組み合わせのドラマーとキーボーディストがゲーセンから去るまで俺達は身を隠しつつ、その行動を観察する。

メダルゲーム、レースゲーム、釣りゲームを見ては一々感動している琴吹に田井中が苦笑いで説明している。

普通に憧れている琴吹のことだ、平沢のレスポール購入以来と思われるゲーセンに感銘しているんだろう。

「琴吹と一緒っつうことは、秋山にはドタキャンされたみてェだな…」

「そういえば兄ちゃん達、明日夏期講習があるんでしょ？澪さんは多分予習とかしてるんじゃないかな？…って兄ちゃん遊んでて良いの？」

「…それはアイツらにも言えるだろ」

「あ、そっか」

平沢も真鍋とどうやら勉強していたようだが…
あの平沢が勉強しているのに俺はここにいて良いのかなんて少し思ったりしつつも部長と給仕を観察する。

腕相撲ゲームに挑みあっけなく敗北する田井中の敵とばかりに琴吹が挑戦し、見事に勝者の称号を得る。

「うわっ！スゲェあの人！優勝しちゃったよ！」

「腕力はピカ一だからな…」

クレーンゲームで田井中が琴吹に人相が悪い熊のヌイグルミをプレゼント。

「何か恋人同士みたい…」

（思考が思春期だ…）

ドラムゲームに得意顔でチャレンジするもゲームオーバーになる田井中にヌイグルミを胸に抱えて苦笑いを浮かべる琴吹。

「ぷっ！姉ちゃんドラムやってんのにダメじゃ～ん」

「そういうとこ姉弟だなお前ら…」

最後にプリクラを撮って田井中と琴吹は…

「次どこ行こっか？」

「りっちゃんに任せるわ～♪」

「そうだな…　結構お金使っちゃったからな…んじゃ節約して駄菓子屋にでも行くか？」

「駄菓子屋…」

「あれ？興味ない？」

「ううん！違うの！行きたい！行きたいですたい！」

「どこの人だよお前…」

こんな後半面白会話を俺達が隠れている自販機の前でしながらゲーセンから去っていった。

「はぁ～　見つかるんじゃないかってハラハラした～」

「…別にお前はアイツらに見つかっても良かったんじゃねェのか？」

「ヤダよ」

「はぁ…」

思春期真っ盛りな田井中弟にため息をついて飲みかけの缶コーヒーを傾けるが、既に飲み干した後だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　琴吹　紬】

「ふわぁぁ～～…」

「な～んか嬉しそうだなムギ」

「うん♪すっっごく楽しかったぁ～♪」

「そっか　そりゃ良かった」

今日は本当に楽しかった～
商店街で偶然りっちゃんと会ってゲームセンター…ううん！『ゲーセン』に連れていってもらってヌイグルミを取ってもらったり、二人でプリクラを撮ったり…
次に行った駄菓子屋は殆どの値段が十円とか三十円で百円で結構お腹いっぱいに。
あれが価格破壊っていうのね～

駄菓子屋を出る時は夕暮れになってたから、私とりっちゃんは軽音部のみんなでよく来る、私が以前アルバイトをしていた『マックスバーガー』に来てます。

「りっちゃんってお金を使わずに遊ぶ達人ね～」

「ふっふっふっ！もっと褒めるがいい～！っていっても、一般庶民には今日の出費は結構痛いんですわよ～」

「そうなの？」

「まぁね　正直先月も新しいスティック買おうとしたんだけど、お金足りなかったんだよ」

「じゃあ買えなかったの？」

「いや、澪にお金貸してもらったから買えたんだけど、そうなると澪に買ってもらえるって思えるじゃん？」

「え？う、うん…」

そうなのかな？

「だから新しいスコアとザ・フーのＣＤを買ってって言ったらさ、澪のやつヒドいんだぜ？いきなり私の頭をスパ～ンって叩いたんだ」

「スパーン…」

りっちゃんの話を聞いて、実は前から憧れていることを思い出しました。

それは…

『サークーヤーッ！ヒャッホウッ！』

『うるせェ』

ドゴッ！

咲也君には修司君。

『大変だ！澪の背中にトンちゃんが張り付いてる！』

『えっ！う、嘘っ！？』

『うん、嘘♪』

『なっ…！りーつー！！』

ゴンッ！

澪ちゃんにはりっちゃん。

『あ～ずにゃん♪』

ギュッ

『ちょっ！唯先輩、抱き付かないでくださいよ～！』

唯ちゃんには梓ちゃん。

『サッく～ん♪』

『サッくん言うな』

あ、唯ちゃんと咲也君もあった。

私が憧れて思ってること。
それは『羨ましい』ってことです。

だから私は…

「りっちゃん！」

「ん？」

「わ、私のこと…！叩いてほしいのっ！」

「……はい？」

思い切ってりっちゃんにお願いしてみました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

翌日。
八月十六日月曜日。
現在時刻午前十時三十四分。

「ぶぅ～！」

「……」

「ぶぅ～！ぶぅ～！」

「はぁ…　何だよ？」

今日から夏期講習が実地されてしまうので、塾への道程を厳しい日差しに負けてヘッドフォンから流れる音楽を聴いてダラダラと牛歩していると、背後から肩を軽く叩かれた。
振り返るといつものニコニコスマイルではなく両頬を膨らませた平沢。
どうやら御立腹らしい。
が、知ったこっちゃないのでスルーしていたが、歩く度にぶぅぶぅ（文字通り）言うのでヘッドフォンを首に移動させて立ち止まる。

「和ちゃんに続いてサッくんもヒドいよ！」

「何がだよ…」

「昨日電話切ったじゃ～ん！」

「…昨日は忙しかったんだ
つうか中野に愚痴れっつったろうが」

「あずにゃんにも私の気持ちを言ったよ？
でもあずにゃんも分かんないって…」

「…イチゴ云々はお前の中限定ルールなんだろうよ」

「ちっが～う！全世界的に！」

「そうかい…　そりゃオメデト…」

正直理解不能であり、尚且つ付合いきれないので止まっていた歩みを動かし牛歩再開。

「も～う！そんなサッくんに絶望した！」

一度足を止め振り返ると平沢がビシッと効果音がつきそうなぐらいに俺に人差し指で見事に指差していた。

「……」

まさかの絶望発言に気落ちなどする筈もない俺は再三の牛歩再開。

「あっ！う、嘘だよ！サッくん嘘だよ！私は…えっと…その…ま、待って～！」

……

何やら必死に弁解してくる平沢に『分かったから落ち着け』と言うと『エヘヘ～』と何故か笑う。
そんな情緒不安定気味な平沢と他愛がなさすぎる会話をしていると夏期講習が行われる塾に到着。

「あ、澪ちゃんだ」

「…何故制服？」

俺達を待っているのか、塾の出入口にはソワソワと落ち着きなくキョロキョロと首を動かす秋山がいた。
何故か制服姿で。

「おはよ～　澪ちゃん」

「あ、おはよう唯、咲也」

俺達が近付くと安堵の表情で出迎えるが、そんなことよりも気になる点がある。

「…お前何で制服着てんだ？」

「そ、それは…」

俺の問い掛けに言葉を詰まらせ、顔を反対方向に背けて何かを告げようとしたが…

「おはよ～！お、珍しく唯とサクが早い！」

「…うるせェ」
「おはよ～　りっちゃん」

昨日目撃した田井中がやってきたことにより、秋山が口を閉じる結果に。

「あれ？澪、何で制服着てるんだ？」

そこは目敏い田井中部長だ。
すぐさま俺達の中で一人だけ制服の秋山に首を傾げる。

「はっ！大変だ！サッくん！りっちゃん！今日って制服で来なくちゃいけなかったんじゃ…」

「そんなことないだろ
私達以外の人達も私服だぞ」

「…つうかコイツだけだ制服着てんの」

「うっ…！」

こんな秋山の反応で、なるほどと思う。
恐らくコイツはうっかりミスで制服を身に纏ったようだ。
度々抜けているところがあると思ってはいたが…

「澪」

「な、なに？」

「間違えたんだな？」

「うぅ…」

「可哀相に…　澪一人だけ制服だ…
『見て見て～！あの娘だけ制服よ～！』とか言われるな～」

「う、うるさい！服装は自由って書いてあったから何でも良いだろ！」

「…見た限り制服はお前だけだけどな」

「い、良いんだよ！制服の方が身が引き締まるんだから！」

「あっそ…」

修司は叫ぶと（かなり迷惑）身が引き締まるらしいが、秋山は制服がそれらしい。
まぁ、苦し紛れだと思うが。

「りっちゃん、澪ちゃん、唯ちゃん、咲也君、おはよ～」

すると最後の一人である琴吹ボイスが聞こえて俺達は振り返る。

「今日も暑いね～」

『……』

だがしかし、琴吹の姿を視界に捉え脳が理解した途端に俺達は絶句。
何故なら、琴吹の格好が夏期講習にはミスマッチ過ぎるからだ。

紅いワンピースにサンダル。
普段の下ろしている髪型ではなく、耳より低い位置に両サイドに別けて結んであり、とどめに頭にはハイビスカスの髪飾り。

（どうしたコイツ？）

夏フェスで平沢と肩を並べてズレてると散々言われていたが…まだズレが修正されてないのか？

「ムギちゃん、なんか海行く時みたい…はっ！まさか終わったらみんなで海に行く予定があるんでしょうか！？」

「いや、ないから」

「澪ちゃん、咲也君、早く行きましょ～」

やっぱりズレていた平沢に秋山がツッコみ、琴吹が何故か主に俺と秋山をチラ見しながら塾の出入り口に向かう。

「まさかムギのやつ…」

「あぁ？何が？」

「いや、あの～…」

明らかにおかしい琴吹の態度と格好に田井中が何かを知っている口振りを漏らす。

それが聞こえた俺は田井中に視線を向けるが、何故か言葉を濁す。

「ちょっと、ムギ」

「は、はい！」

すると秋山が正に今、塾に入ろうとしていた琴吹を呼び止め、琴吹は期待感満載の表情で振り返る。

「タグ付きっぱなしだぞ
それにこの格好ならソックス履かない方が良くないか？」

「え、あ…澪ちゃん…」

ワンピースに付いていたタグをハズし、確かにサンダルにソックスは合わないと俺も思ったことをサラッと告げた秋山は塾に入り、平沢も後に続く。

「さ、咲也君！」

「あン？」

何やら落胆した様子で秋山を見送った後に、気を取り直したように俺に向き直る。

「今日も暑いから梓ちゃんみたいに日焼けしちゃうかも！」

「…そうだな」

「そ、それだけ？」

「あぁ？」

「ほらぁ～」

その場でクルリと一回転ターンをして改めて俺に向き直るが…どうしろと？

「ふーん…」

「あ、あれ？」

とりあえずは久々に不思議は不可思議だから不思議論を発動させて自己完結し、俺も塾に…

「だぁーっ！見てられん！ムギ！」

「は、はい！」

「もしかして昨日のを澪とサクにしてもらおうと、ボケたつもりか？」

「うん！こんな格好なら澪ちゃんと咲也君がスパ～ンってしてくれるかなって」

「やっぱりかぁ…
ていうか中途半端なんだよ～！…それからサク！」

「ンだよ…」

入ろうとしたがしかし、田井中に呼び止められた。
しかも琴吹と意味不明な会話をした最中に。

「こんだけムギが頑張ってんだからツッコんでやれよ」

「…ンなことといきなり言われても意味分かんねェし、そもそも今し方中途半端っつったのは誰だ？」

「いや、私だけど…
とにかく！こうなったら仕方ない！ムギ！」

「はい？」

「サクに協力してもらうぞ？」

「でもそれだと咲也君からのスパ～ンがなくなっちゃうんじゃ…」

「だから昨日も言っただろ？サクじゃ望み薄だって」

「…おい、何の話してんだ？」

全く状況がついていけないし、本人そっちのけで協力要請してくるので、分かりやすく説明を求める。

「いや～実は昨日…」

田井中の話によると昨日、街中でバッタリ琴吹と鉢合わせし、そのまま二人で遊んだらしい。
俺は昨日、田井中弟とその一部始終を見ていたのだが、話が拗れそうなので敢えて口には出さなかった。

そして、最後に立ち寄ったバーガーショップで唐突に琴吹が『叩いてほしい』宣言を表明。

「ここまで分かるか？」

「ギリギリで…」

表明を受けた田井中は疑問に思いながらも琴吹を叩こうとした。
しかし結果は…出来なかった。

「何かムギって叩けないんだよな～…」

「そうなの？」

「…田井中にならやってやれんことはねェが、お前じゃ無理だな」

「ヒドいわサク！私だって女の子なのよ？」

「弟にプロレス技かけてる奴が何言うか…」

「え？何で知ってんの？」

「人格を持った風の噂だ…」

そこで白羽の矢が突き刺さったのは俺と秋山だった。
ツッコミ率が高い俺と秋山に琴吹がボケて叩いてもらおうという魂胆だったらしいが、俺も秋山も事の真相には気付かなかった。
これが田井中からの掻い摘まんだ説明。

「だからお前そんな場違いな格好してたのか…」

「うん！これなら澪ちゃんと咲也君にスパ～ンってされると思ったんだけど…」

「残念ながらの空振り…と」

「うん…」

ションボリと肩を落とす琴吹。

「まぁ、サクは望み薄だと思ってたけど、問題は澪だ
自分が制服着てくるボケをしてんのに、ムギの格好にはタグを取ってソックスを注意しただけだもんな～…」

「…あれはボケじゃねェけどな」

ただ抜けてるだけだ。

「とにかく、サク」

「あン？」

「協力してくんないかな？」

「咲也君、お願い！」

「……」

事の顛末は理解した。
しかし、まだ理解出来ないところがある。

「…そもそも何でお前はそんな身体を張ってまで叩かれてェんだ？」

叩いてほしいのか懇願してんのか分からない、頭を下げる琴吹に問い掛ける。

「だってね？咲也君には修司君と唯ちゃんでしょ？
りっちゃんには澪ちゃんで、梓ちゃんには唯ちゃん
私だけそういうスキンシップがない気がするの！」

「どんな理由だ…」

脳が弾き出した結果。
『くだらねェ』
文句無しに正論だ。

「サクは副部長で男なんだからさ、ムギに協力してやろうぜ」

『勿論私も協力するし』と言って同意を求めるように肩を叩いてくる田井中にため息が。

「はぁ…」

正直琴吹の願望は理解出来し協力したところで俺には何のメリット

もない。
しかしだ。

「お願いします！咲也君！」

深々と頭を下げて必死に懇願する琴吹に、どんどん『ＮＯ』と言えなくなる。
何故ならまだ塾内に入らずたむろしている夏期講習を受ける連中からの視線が痛いからだ。

「要は叩かれれば良いんだろ…」

「え…　じゃあ咲也君…」

「気が変わんねェ内にさっさっと頷け…」

「わぁぁ～っ！うんうん！私、叩かれたいの！」

「ムギ、サクが協力してくれて嬉しいのは分かるけど、ちょっと落ち着け…
周りの人達からの視線が痛いから…」

自分に『仕方がない』と言い聞かて、一つの提案を提示する。

「…叩かれてェんなら、そうなるようなシチュエーションを用意すれば良いだけのことだ」

「例えば？」

田井中が言う。

「明日は登校日、しかも部活がある…
当然お前はケーキやらデザートを持ってくんだろ？」

「うん！美味しいイチゴのショートケーキ持ってくるね♪」

「おぉ～！マジで～♪」

「話を脱線させんな…」

納得はしてないがもうティータイムを始めて二年以上は経つので諦めているが、今回はそれを利用する。
琴吹は必ず人数分のデザートを用意する。
ここが肝だ。

「わざと七人分のケーキを用意しろ
そして余った一つを誰が食べるかを何かしらの方法で決める
その方法で負けた奴は罰を食らうように予め決めておく…」

「そうか！罰ゲームでムギがわざと負けて叩かれれば良いのか！」

「そういうことだ…」

七人分と言ったが、山中顧問が来てしまった場合は、俺が食べなければ良いことだ。
普段から平沢にデザートをやっているので、平沢も秋山も中野も山中顧問も疑問には思うまい。

仮に山中顧問が来なかったら、俺が食べれば良い。

どの道、ケーキは一つ余る結果になるという寸法だ。

「すご～い！咲也君！」

「さすがは私が見込んだ男なだけはあるわん♪」

「だからいつ俺はお前に見込まれた…」

作戦決行は明日。
いつまでも中に入らず立話をしていると、平沢は意外と鋭く秋山は抜けてるところがあるとはいえしっかり者故に感づかれそうなので、俺達は漸く夏期講習へ。

――――――――

そして翌日。
八月十七日火曜日。
現在時刻午前十一時五十八分。

「ムギちゃん　今日のおやつは何かな？」

「今日はね、イチゴのショートケーキ～♪」

「イチゴ！？イ、イヂゴだよ～…」

「泣く程のことかよ…」

「よっぽど嬉しいんでしょうね…」

久しぶりに制服に身を包み、テレキャスとアコギを持って桜高に登校。

終戦記念日の話を講堂で二時間近く聞かされ、昼前には終わったので俺達三年組は部室である音楽準備室へ行くと既にブラック中野を引退した普通の状態の中野が来ていた。

練習もそこそこにバンド名の由来となってしまった軽音部の真骨頂、ティータイムが始まる。

今日は神の啓示か悪魔の悪戯か山中顧問は職員会議で来れないとのこと。

作戦決行は滞りなくひっそりと始まろうとしていた。

「♪～」

今回、山中顧問が来れないので作戦を行なうには俺もティータイムに参加しなければならず、定位置の長イスではなく普段は山中顧問が座る椅子に陣取り、琴吹がハミングしながらティータイムを用意している光景をぼんやり眺める。

「あれ？珍しいな咲也がコッチに座るなんて」

「今日限りの心境の変化と思っとけ…」

「え？」

「まぁ良いじゃんか　たまにはさ」

不思議そうに首を傾げる秋山に田井中が深く椅子に腰掛けながらフォロー。

「サッくんもたまにじゃなくて、いつもコッチに座れば良いのに」

「気にすんな…あとサッくん言うな」

「はっ！気にしたら負けだね！」

「まだそれにハマってんのか…」

「あれ？ムギ先輩、ケーキが一つ多いですよ？」

俺達の前にはイチゴのショートケーキと紅茶が置いてあり、琴吹が俺の言った通りに余分にケーキをテーブルの中央に置く。

「あ、ごめんなさい　間違えて一つ余計に持って来ちゃった」

《サク、ムギ》

中野の発見に琴吹が答えた瞬間に田井中が俺と琴吹にアイコンタクト。
つまり作戦決行の合図だ。

「んじゃあ、じゃんけんで誰が食べるか決めようではないか！」

作戦を成功させるためには勝負事は必要不可欠である。
それが分かっている田井中が拳を俺達に突き出す。

「勝った人にはケーキ、負けた人には勝った人から全員にデコピンな」

「え～　嫌ですよ　律先輩が勝ったら絶対痛そうです」

「大丈夫だって痛くしないから」

「じゃあ良いですけど…」

不平・不満を漏らした中野が渋々納得したところで俺以外の五人が立ち上がる。

「サッくんやらないの？」

「…俺は二個もいらねェ」

参加する人数が少ない程に琴吹が負ける可能性は上がる。
なので俺は不参加を決め込む。
つうかここで参加したら普段からティータイムに余り参加してない俺に平沢達三人が疑問を抱き兼ねない。

「でもそれだと不公平じゃ…」

（空気読めよ…）

根が真面目な中野の発言に思わずこんなことを思わずにはいれない。

「良いんだよサクは、それより早くやるぞ～」

「あ！最初はグーから？」

（早くやれよ…）

根が天然な平沢の発言に思わずこんなことを思わずにはいれない。

「そうそうグーから！いくぞ～！」

どうやら田井中も、もどかしいらしくこれ以上の異論は受け付けないように拳を握った右手を上下に動かす。

「（…琴吹）」

「は、（はい！）」

「（…分かってんな？）」

「（うん、わざと負けて叩かれるわ！）」

（ハタから聞いたらヤバい発言だな…）

ちゃんと理解しているのか些か不安だった琴吹に小声で確認を取るが杞憂に終った。

そして…

「最初はグー！じゃんけん…！」

遂に始まった作戦。
田井中の掛け声に俺以外の全員が拳を小さく上下に振る。

『ぽん！』

その結果は…

「あ…　勝っちゃった…」
「「おい」」

まさかの琴吹の一発勝ち。
つまり作戦失敗。

「いいな～ムギちゃん」

「え、あ、うん…」

「どうぞ、ムギ先輩」

「あ、ありがとう…梓ちゃん…」

「ムギって強運だよな
商店街の福引きでハワイ旅行当てるぐらいだし」

「え！ハワイ旅行ですか！」

「そうだよあずにゃん
でもムギちゃん、人生当てもんゲームと交換しちゃったんだよね～」

「梓が知らないのも当然だよ
あれって二年前のクリスマス前だったし」

「へぇ～　そんなことがあったんですか～」

「う、うん…」

「「はぁ…」」

事情を知らない平沢と秋山と中野の称賛にも似た言葉に俺と田井中のため息がかぶる。

……

「ジー…」

「欲しいなら欲しいって言え…」

田井中が定めた公式ルールに乗っ取り、琴吹が俺以外の部員に緩いデコピンを見舞い、ティータイム突入。
しかし平沢が物欲しそうな瞳で見つめるので、俺の分のケーキを平沢の前に移動させる。

「いいの!?サッくん!」

「あぁ…」

「うわぁ～い!」

「サク先輩、甘やかし過ぎじゃないですか?」

「お前も一昨日に平沢から例の愚痴聞いたろ…」

「あ、じゃあ納得です」

「何？例のって？」

俺と中野の会話を聞いていた秋山が第三者が聞いたら当然の疑問をぶつける。

「聞いてよ澪ちゃん　和ちゃんがヒドいんだよ」

秋山にまだ解決してなかったらしい真鍋の行動を話す平沢を尻目に田井中に視線を向けるが、お手上げとばかりに両手を小さく上げて首を左右に振る。
次に琴吹に視線を向けると、見るからに落胆していた。
よっぽど作戦失敗が効いてるようだ。

「ね？和ちゃんがおかしいよね？ケーキで一口っていったら普通イチゴは食べないよね？」

「ふざけてたんじゃないのか？
まぁ、私も昔、律に上のイチゴ食べられて叩いたことあるから唯の

気持ちは分かるけど」

「叩いた…」

「ん？」

俺は確かに聞き取った。
琴吹がポツリと呟いたその言葉を。
それは田井中も同様のようで視線を琴吹に向ける。

そしてこの後の琴吹の行動に誰が予想出来ただろうか。
いや、それは誰も出来なかった筈。
俺も田井中もだ。

「じゃあ早く食べて練習の続きをするぞ」

「そだね～　今日はちゃんとイチゴも食べられるから、贅沢は言わないよ～」

秋山の言葉に平沢が嬉々と答え、早速秋山がケーキに左手に持ったフォークを伸ばす。

「……」

そんな秋山のケーキを横に座って凝視している琴吹に『まさかコイツ…』と思ったが、時既に遅し。

ザクッ
パクッ

「ム、ムギ…！」

「そこまでしてかよ…」

何が起こったかというと、秋山のケーキの上にあるイチゴを琴吹が奪取し一口で食べた。

恐らく…いや絶対に平沢の話を聞いた秋山の『私も昔、律に上のイチゴ食べられて叩いたことある』を受けて、叩かれようと実行した筈だ。

「へ？ムギちゃん？」
「ムギ先輩？」

突然の琴吹により秋山のイチゴ奪取事件にキョトンとする平沢と中野。

「……」
「モグモグ…」

いきなりの出来事に時が止まったように硬直する秋山の様子を口に含んだイチゴを咀嚼して窺う琴吹だったが…

「…ぅ…ぅぅ…」

「あ…」

「み、澪先輩！」

「あーぁ…」

「ムギ…そりゃないって…」

「はっ！和ちゃん呼んで来なきゃ！」

小刻みに身体を震わせてポロポロと大粒の涙を流す秋山。
自分が考えた事と真逆な展開に動揺する琴吹。
泣き出した秋山に椅子から立ち上がる中野。
背もたれに体重をかけて傍観開始する俺。
天を仰いで失態を嘆く田井中。
何故か駆け足で部室から生徒会室に向かった平沢。

「ご、ごめんね！澪ちゃん！私、そんなつもりでイチゴ取ったんじ

やないの！」

「う…ぅぅ…ぅ…」

「どうしてムギ先輩、澪先輩のイチゴを…？」

「えっと…それはね…」

「それより今は秋山をどうにかする方が先決だ…
田井中、お前秋山の幼馴染みだろ…」

「う～ん…　難しいかも…」

田井中が何とか秋山を泣き止ませようと悪戦苦闘をしていると…

バンッ！

荒々しく部室の扉が開き、真鍋を連れてきた平沢が帰ってきた。

「ほら見て！イチゴは取られちゃったら悲しいんだよ！泣いちゃうんだよ！それくらい大切なものなんだよ和ちゃん！」

未だにポロポロと大粒の涙を流す秋山を指差す平沢の熱弁を聞いた真鍋は…

「そ、それは悪いことをしたわ…」

「やっと分かってくれたんだね～♪和ちゃん♪」

納得していた。

「それより早く澪を何とかした方が良いんじゃないの？」

「何で俺を見て言ってんだ…」

「いや…咲也が泣かしたのかと…」

「失礼にも程があるぞお前」

生徒会長のポジションは何言っても許されると思ったら大間違いだぞ。

その後、紆余曲折あり何とか泣き止んだ秋山に琴吹と田井中と俺が事情を説明。

『そういうことなら早く言ってくれれば良かったのに』

『ごめんなさい澪ちゃん…
私、どうしても叩かれたくって…』

『変なやつだな　軽く叩くだけで良いんだな？』

『い、良いの？』

『まぁ、それくらいなら』

『だ、抱き締めてもよかですかい！？』

『何故博多弁だ…』

『じゃあ…いくぞムギ』

『は、はい！お願いします！』

『じゃ、じゃあいくぞ…』

『どんとこいです』

『な、何か緊張しますね』

『うん、ドキドキハラハラするよ…』

『ほ、ホントに良いんだな？』

『イエス！』

『澪！ガツーンといっちゃえ！』

『う、うん…』

『五…四…三…二…』

『さ、咲也！カウントは止めてくれ！自分のタイミングでいくから！』

『あっそ…』

『よ、よし！せーの…！』

ゴンッ！

『何で私！？』

『いや、何かムギって叩きづらくて…』

『気持ちは分かるけど…私を叩くなよ…』

『ショボ～ン…』

『秋山でも無理か…』

結局誰も琴吹を叩くことは出来ずに部活は終了。

しかし諦めきれない田井中は俺と琴吹を誘ってバーガーショップへ連行しやがった。

「何か良い案はないかな～」

「ねェな」

「答えるの早いって…」

ポテトを一本摘んで指揮棒のようにゆらゆらと揺らす田井中の思考を断つように間髪を入れずに答えてアイスコーヒーを一口飲み込む。

「そうだ！こういうのはどうだ？」

「言ってみろ…」

何か妙案が思い付いたのか、摘んでいたポテトを口に入れて弟に良く似たニヤリとした笑みを浮かべる田井中。

「お笑いの養成学校に行く！」

「…現実味がまるでねェからナシ」

「だよな…」

ニヤリとした笑みは消え失せ、ガックリと頭を下げる。

「あのね、りっちゃん、咲也君」

「ん？」
「あン？」

すると今まで黙っていた琴吹が口を開き、こんなことを俺と田井中に。

「ありがとう」

「え？」
「……」

「でも、もういいの
りっちゃんと咲也君が私のために色々考えて協力してくれて…私ね？すっごく嬉しかった」

「ムギ…」
「……」

「この気持ちだけで十分♪
だから、ありがとう♪」

満面の笑顔を俺達に見せる琴吹。
その笑顔は決して虚勢のものではなく確かに満足している笑顔だと

思った。

「…だとよ　本人がこう言ってんだ
もう良いんじゃねェのか部長？」

「そうだな　ムギがそれで良いなら私もサクもやったかいがあったってもんだし」

「うん♪本当にありがとう♪」

「解決したところで、俺は帰るぞ…」

「もうちょっと良いんじゃんか
せっかく中々ならない組み合わせで来てるんだからさ～」

「…俺がここに来た理由は協定があったからだ
それが無くなった今、理由ナシにいることねェだろ」

「あ、じゃあ一昨日のりっちゃんのこと話すわ！」

「な、なんだよソレ！」

本日八月十七火曜日。
現在時刻午後二時ジャスト。

「咲也君、りっちゃんってエスコートがすごく上手なの！
優しいし、人のために一生懸命頑張るし…
男の子だったらきっとモテモテよ！」

「なっ！？」

「はぁ？何言ってんだお前？」

夏休みが半分以上過ぎたこの日のバーガーショップに…

「ど、どう反応すりゃ良いんだ！」

ゴンッ！

「あイタ～っ！」

それはそれは見事な音が鳴り響いた。

「…アッサリ叩いてんじゃねェか」

「「あ…」」

田井中が琴吹の頭を叩く音が。

第百一話（後書き）

補足。

第七十三話の冒頭にある『…ある一日はある奴とゲーセンで遊んだが…』とは聡のことです。

この回のアニメでは梓が『じゃんけん弱いから嫌です』と言ってますが、ＳＧを売りに行く際に普通にじゃんけんして律に勝ってますので、本作ではそのままじゃんけんに。

ちなみに今回の話が『Ｋ－ＯＮ！　～黒一点～』史上一話が最も長い話です。

第百二話（前書き）

オリジナルストーリー
夏の終りです。

第百二話

「この数式は難しそうに思えるけど、実はさっき解いた問題を応用すれば簡単に解ける引っ掛け問題なんだはい、やってみて」

「家庭教師かお前は…」

「そんなつもりじゃないけど…あ、でも、咲也の臨時教師って意味ならそうなのかもな」

「（…何が嬉しいんやら…）」

俺の横に座って微笑む秋山に聞こえない程度にこぼす。

本日八月三十一日火曜日。
現在時刻午後四時四十五分。

ほぼ毎日行われた夏期講習は昨日で終わり、気が付けば夏休み最後の本日。

俺は秋山に勉強を師事されていた。

夏期講習で俺は愕然とした。
いや、愕然はいき過ぎか…

言うなれば焦ったが正しい。
その結果は当然といえば当然であり、何の対処もしなかった付けが回ってきた。
受験のための夏期講習だというのに、俺はその講習内容に余りついていけなかった。

「…こういうことか？」

「うん、正解」

「はぁ…　疲れる…」

「咲也ってちゃんと勉強したらできるんだから、普段から真面目に授業受けたら良いのに」

「将来にこんな公式とか役に立つとは到底思えねェのに、そんな気にはなれん…」

「確かにそうかもだけど、仕方ないだろ？受験には避けては通れない道なんだから」

「哲学者みてェなこと言いやがって…」

「言ってないって
ほら、文句ばっかり言ってないで次の問題いくぞ」

「はぁ…」

授業中に堂々と夢の国に旅行している俺だ。
三年の授業内容が時々理解出来ないのは当たり前。
このままでは受験に支障を来すので夏期講習を受けたというのに、
見事な程に辛酸を味わった。

現実を目の当たりにし、流石にヤバいと感じた俺は本腰を入れて勉強を開始したのが一週間前。

そのかいあってか、何とか夏期講習は乗り切れたがそれでも両手を上げて喜べる出来には至らない。

なので更なる学力アップを図るために今日の軽音部の部活は練習の後に勉強会を行うことに。
別にこれは俺が勝手にやっていることであり、平沢達は帰るなりティータイムをすれば良いのだが、勉強を始めた俺に影響されたのか、平沢達も勉強を開始し始めた。

中野は受験生ではないし、夏休みの課題は済ませているらしく付き合う必要はないのだが『私も先輩達と一緒にいます』と笑顔で俺達に告げてくるので中野も部室に残っている。

やるんなら協力した方が効率が良いと秋山の提案に一理あると思った俺は、長イスで勉強していた腰を浮かしてテーブルに移動。
空いている山中顧問の椅子に座って勉強していたがしかし、中々にペンが進まない。
そんな俺を見兼ねたらしい秋山が救いの手を差し延べた。
自ら俺の勉強の師事を志願した秋山に断わる理由が皆無であり、過去に追試のテストを受けた平沢を満点に導いた実績の持ち主だ。
そんな勉強を教えるに申し分ない秋山に教わるために琴吹と席を代ってもらい、秋山と共に参考書の問題を解いていく。

ちなみに平沢と田井中は琴吹に勉強を教わっており、中野は満足そうに俺達を眺めている。

「しっかし…」

すると集中力が切れたのか、田井中が参考書から顔を上げて琴吹が用意した麦茶を一口飲んで突然に口を開いた。

「夏休み最後の日なのに、果たして私達は勉強してて良いものなのか？」

誰に言っているのか不明だが、俺は反応する気にならず、それは秋山も同じである。
俺達は集中して難問に挑んでいく。

「う～ん…　夏といえばスイカ、アイス、かき氷…
夏休みにやり残したことは…」

「全部食べ物ばっかりじゃないですか…」

同じく集中力の火が燃え尽きた平沢が腕を組んで真剣な表情で欲望の考えを張り巡らせるが、その内容に中野が呆れた息を吐く。

「…秋山先生、ここがさっぱりだ」

「先生って…　真面目にやってるか？」

「…勉強し過ぎてペンダコができそう程な」

「そうは見えないんだけどな…」

「…いいから教えろって」

「はぁ…　ここは…」

しかし幾ら平沢が天然スキルを発動させようとも俺と秋山は数学に

没頭していく。

「そういえば、夏休みの間に凄く雰囲気変わる娘いますよね」

「あ、一年生の時にいたわ」

幾ら何気ない中野の発言に琴吹が反応しようとも俺と秋山は見向きもせずに集中。

「よし！それ採用！高校最後の夏休みはイメチェンの夏だっ！」

「えぇ！？受験勉強しないで！？」

幾ら田井中が立ち上がって勉強を放り投げて中野にビシッと指差そうが、俺と秋山は苦難に挑み続け…

「高校最後の夏なんだから勉強しろ！」

「……」

ることは叶わなかった。

田井中曰くのツッコミ率が高い秋山が遂にそのスキルを発動させた。

「まぁまぁ、たまには良いじゃん」

「…たまにじゃねェだろ」

年がら年中遊び惚けているイメージが抜群にある田井中にツッコミ率が高いらしい俺が、ついそれを実施してしまった。

「考えてもみろよサク」

「…何を？」

「今日は夏休み最後の日なんだぞ？それなのに私達は部室に籠って勉強漬け…
良いのか？それで？」

「…良いも何も、これは俺が勝手にやってることだ
お前が疑問に感じる必要はねェと思うぞ」

「だからこそだよ」

「あぁ？」

「確かに私達は受験生だ
勉強はしなきゃいけない」

「だったら勉強しろ
ていうかさっきまでムギに教わっていたじゃないか」

「分かってないな澪もサクも」

両手を顔の位置まで上げて『やれやれ』と息を吐く田井中にイラッときたが、話の本質が見えてこないので理解するまで耐える決断をした俺を咎める奴はいないだろう。

「私達は高校生！今遊ばなきゃいつ遊ぶんだ～！」

「「遊ぶ前に勉強しろ」」

拳を握り締めて熱弁を振るったカチューシャに俺と秋山がダブルツッコミ。
まぁ、ゲーセンなどで遊んでいた俺が言うのはアレかもしれんが、今はそのことは棚に上げておこう。

「…そしてお前は何をしてんだ」

「ほぇ？」

実は先程からゴソゴソと髪型をいじっていた平沢をスルーしていたが、どうしても視界に入ってしまい、仕方なく視線を田井中から平沢に移す。

「だってイメチェンだもん！」

「…だっての意味が分かんねぇし、イメチェンっつうより変身だ」

手鏡を見て前髪をいじっていた平沢は確かにチェンジしていた。しかしチェンジしてもその姿は『平沢』のままだった。

「唯先輩ってホント憂にそっくりですよね…」

どこから取り出したのか、それとも女子の常に持ち歩く必須アイテムなのか定かではないが、髪ゴムで短いポニーテールにした平沢は妹に化ける。

その姿は本当に目の前に平沢妹がいるんじゃないかと錯覚してしま

う程瓜二つだったりする。

「姉がいつもお世話になってま～す」

「喋り方まで似てますね…」

「はぁ…」

最早、遊ぶ目的を持ってしまった平沢と田井中を止めるのは不可能に近いと二年以上接して経験したので、ほっとくのが一番の対処法である。
なので俺は再び憎たらしい数学に挑むべくシャーペンを持ち直して集中していく。

「なぁ憂ちゃん」

「なに…じゃなくて…なんですか？律さん」

「ここの問題分かんないんだけど教えてくんない？」

「え～っとぉ……テヘ☆
実は私でした～！」

「知ってるけどな」

秋山も俺と同様の判断を下したらしく、平沢と田井中に何を言うでもなく『この問題は…』と俺に師事していく。
しかしそんな俺達を邪魔せんとばかりに背後に誰かが立つ気配がした。

「澪ちゃんの髪は綺麗でちゅね～」

『やっぱりな』と内心で思う。
その人物は今し方偽平沢妹の正体を暴いたカチューシャ。

「もー…　咲也に勉強教えてるんだから、邪魔するなよ」

しかしそんな緩い言葉で、はいそうですかと引き下がるカチューシャではないことは秋山も知ってはいるんだろうが、放置と決めた以上は何も手は出さないようだ。

「♪～」

田井中は秋山が何もしてこないのを良い事にハミングを奏でながら

秋山の特徴でもある腰まである長い黒髪のいじっていく。
俺は秋山が何もしないので口も手も出さずにひたすらに数学を亡き者にしようと集中。

「はい！澪もイメチェン！」

「なっ！？またツインテール！？」

幾ら秋山の髪型が田井中の毒牙にかかって偽中野に変わろうが集中。

「わ～い！あずにゃんだ～！」

「あーもー！唯もいい加減に…「言わないよ？」へ？」

「あずにゃんはそんな喋り方じゃないよ！」

「ほれ澪　梓の真似してみろ」

「……や……止めてくださいよ…ゆ…唯先輩～…」

「あ～っはっはっはっ！」

「だーっ！！もう絶対やらない！！」

「……」

幾ら偽中野が恥ずかしがりながら果敢にチャレンジし、カチューシャが腹を抱えて笑おうが、集中。

「イメチェンと言うより仮装大会ですね…」

「はい！梓ちゃんは髪下ろしたら澪ちゃんね～！」

「へっ？ムギ先輩いつの間に…！」

「……」

幾ら琴吹の手によって中野のツインテールが解放されようが…

「あーずさ！澪の真似やってみ？」

「え？嫌ですよ～…」

「ほら澪！」

「いや、だから…」

「み～お！」

「あの…律先輩…」

「澪ってば～！」

「う…」

「う？」

「うるさい律！！」

ゴンッ！

「あイタッ！」

幾ら偽秋山に変化した中野が日頃の溜まった鬱憤を晴らすかの如く田井中の頭を殴ろうが集中…できん。
つうか逆に集中力がなくなっていく。

「はぁ……」

深く長いため息を吐いて参考書から顔を上げる。

そこには『す、すみません律先輩！』と必死に謝る中野と『良いパンチだったよ…』と頭を押さえてテーブルに突っ伏す田井中。

ふと左隣を見れば『全く…　そんなことするから自分が痛い目にあうんだぞ』という言葉とは裏腹に笑顔を浮かべる秋山。

右隣を見れば『私も叩かれたい…』と真相を知らない第三者が聞いたらドン引きしそうなヤバい発言をしている琴吹。

そして正面に顔を向けると…

「サッくん…やさんもイメチェンしよ…しましょう！」

「喋り難いなら止めろよ…」

ニコニコと笑顔の平沢。

「はぁ…」

コイツらはいつもこうだ。

気が付けば当初の目的から脱線して遊び始める。

練習が目的の合宿にせよ、今日みたいな勉強会にせよ、最後は真面目派の秋山と中野を巻き込んで遊ぶ。

俺もため息を吐いて流されてしまう。

「あ、ごめん咲也」

「あン？」

「勉強…」

「無駄だ…」

「え？」

「…こんだけ騒がしくなったら、もうそんな気起きねェし、俺の集中力がなくなった」

「う、うん…　正直私も集中できないかも…」

「…つうことで、勉強会は終いだ」

だが、それが軽音部の『らしさ』なんだろう。

誰か一人が違う方向を向いていても、気が付けば同じ方向で足並み揃えて進んでいく。
それは…平沢と秋山と田井中と琴吹が作り上げたもので、中野が引き継ぐもの。
俺は…只それを傍観しているだけだ。

「よぉし！勉強も終わったし！今からみんなで遊びに行くぞー！」

「今から遊ぶって、もうすぐ夕暮れだぞ？」

「それに何するんですか？」

「そうだな…」

「あ！やり残したこと発見！」

「なぁに？唯ちゃん」

「花火しようよ！花火！」

それは今もそうだ。
平沢の嬉々な提案に頷く四人を両手をダラリと下げて、ぼんやりと

眺めているのは俺。

コイツらはこの後、立ち上がって部室から出ていくんだろう。
俺を誘って。
だが…コイツらの付合いは部活仲間だと割り切ってる俺は断わる。

第一に今更だが女五人の中に男一人。
去年の大晦日に『そばにいるぐらいは良いだろ』と現状に頷いたが、
果たしてそうなのだろうか。

「んじゃ、花火買いにホームセンター行くぞ～」

「わぁぁ～！ホームセンター♪」

「クスッ　ムギはホームセンターに興味があったんだったな」

「ねぇねぇあずにゃん
トンちゃんに恋人買ってあげようか？」

「そんなお金ありませんよ」

今年は六人で活動すると決めた。それは良い。
中野の涙ながらの決意だ。それは良い。

しかしどうしても俺が男で平沢達が女というのが俺の中でネックになっている。
ぶっちゃけ、色々と面倒だ。
今は言われないが一年の時にクラスメイトの男子に言われた。
やれハーレムだの、やれ羨ましいだの…

正直腹が立った。

上辺でものを言うな。
勝手な憶測で事を運ぶな。

「お～いサク～？いつまでボーッとしてるんだよ？」

「咲也？」

「咲也君、ホームセンター行きましょ？」

しかし現実は女五人に男一人。
そんな現実に馴染んでいる俺。
現に今さっきまで俺は秋山に勉強を教わっていた。
馴染んでいる。

バンドに欠かせないものはチームワーク。
それは大事な事であり基本。
誰か一人でも乱れると伝染して音は廃れる。

俺達はそんなことはない。
それが馴染んでいる証拠だ。

『バンド』と『軽音部』

同じようで違うもの。

俺はその狭間の不安定な立ち位置にいるんだと思う。
平沢達は、器用に、当たり前に、両方の立ち位置に。

一歩先にいる平沢達。
一歩後ろにいる俺。

目指す場所の『武道館』は同じでも、歩く歩幅は違う。
俺が先に行くのかもしれないし、平沢達が先に行くのかもしれない。

（歩幅を合わせねェとな…）

もう今更だ。
平沢と秋山と田井中と琴吹との付合いは二年以上だ。
中野は一年以上。

俺の悪い癖。
グダグタとグルグルと難しく考えてしまう。

決めた筈だ。
三年に進級したときに『楽にいこう』と。
そして大人達の『後悔するな』『精一杯に』のアドバイス。

それが今なのかもしれない。

「サク先輩」

「……あ？」

「今度こそ、先輩達と一緒に花火観ましょう」

「そうだよサッくん
この前の夏祭りの時はあずにゃんとサッくん、一緒に花火観れなかったんだから、今日はみんなで観ようよ」

密かに決意。
絶対に口には出さない。
他者にも言わない。

「…ロケット花火買えよ？」

俺は断るんじゃなく、歩幅を合わせることにして椅子から立ち上がる。

「律先輩」

「おう！勿論ロケット花火は買うし打ち上げ花火も買うぜ！」

「私は線香花火がしたいな」

「私も～」

『そばにいるぐらいは良いだろ』
これは…現状維持っつうことで。
男女のネックは完全に無くなったわけではないし、ホイホイと簡単に平沢達の家に足を運ぶこともない。

だが、コイツらと軽音部でバンドを…『ＨＴＴ』をやっていく限り、音楽を追求していく限り、少しは肩を並べても良いと思う。

足並み揃えなければ良い音色は生まれないし、武道館なんて夢で終る。

だから俺は密かに決意した。
『コイツらと精一杯に楽しみ、後悔はしない』と。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「夏休みの最後に、いい思い出ができそうだよ♪」

「思い出ねェ…」

「うんうん！写真とかい～っぱい撮って！それから…あ！サッくんの笑顔プリーズ！」

「…アホ言ってんな」

「ぶぅ～！」

振り返ると今年の夏休みは様々なイベントがあった。

手始めにＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬのライブに参加。

そして部室にクーラーが設置されるも、只のオブジェに。

人生初の夏フェスに参戦して、白いピックを入手。

夏祭りで駆けていく平沢達の背と夜空に咲く花火を眺めたり。

琴吹の未だに理解不能の願望に協力したり。

夏期講習で衝撃に身体を支配されたり。

俺自身の心機を僅かに新たにしたり。

「よし！軽音部！今から全員で花火をするぞー！」

『おーっ！』

「……」

そんな様々な経験を経た夏休みは終り、いよいよ最後の学園祭ライブが行われる二学期の幕開けは、すぐそこまで近付いていた。

「サ～ク！声出せ～！」

「オー…」

「やれやれ、咲也は」

「咲也君！お～っ！」

「そんな投げやりなのがサク先輩らしいんですけどね」

「サッ！くん！おーっ！」

「…意味分かんねェからあとサッくん言うな」

「ヤダ～♪」

「笑ってんじゃねェよ…」

第百二話（後書き）

ちょっと咲也の心境に変化アリです。

←遅ればせながら百話記念小説です。

『もう一つの第一話』

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「かぼ…」

私は右手の掌に左手で『カボ』という字をなぞる。

「ちゃ…」

次に左手の掌に『チャ』という字をなぞる。

「はむっ」

両手を合わせて口元に運んで、『カボチャ』を飲み込む。

よ、よし！バッチリだ！

じゅ、準備万端！

「ふんすっ！」

グッと両手の拳を握り締めて気合いを入れる。

そして自分自身に『大丈夫！あんなに和ちゃんと勉強したんだもん

！絶対に受かってる！…受かってるかな？…受かってたらいいなぁ…』と言い聞かせて、私は後ろを振り向く。

「～～！」

眼を閉じたまま。

「何やってるのよ唯」

「お姉ちゃん？」

すると和ちゃんの声と憂の声が聞こえてきたから私はうっすらと眼を開けて私達の通う中学校のセーラ服姿の和ちゃんと憂を見る。

「だ、だって～…」

「緊張するのは分かるけど、いつまでそこにいるの？」

私が立ってる場所は校門。
和ちゃんと憂がいるのは校門をくぐった先の校内。
私達の距離は一歩分の距離。
だけど私はその一歩が中々踏み出せなかった。

今日は私と和ちゃんが受験した『桜ヶ丘高等学校』の合格発表の日。

私は不安で不安で仕方なかった。

だ、だって！私あんまり頭良くないし…
それに受験日に、お隣のおばあちゃん直伝の緊張をほぐすおまじない、掌に『カボチャ』って書いて受験したんだけど、和ちゃんに『カンニングと間違われるから消しなさい』って言われて、油性マジックで書いちゃったから中々消えなかった…

テストが始まる前までずっと消そうと格闘してたから、復習もできなくて…
やっと消えたと思ったらテストが始まっちゃって…
すんごく慌てて問題解いたから、絶対に間違いだらけだよ…

「私、絶対受かってないよ～…」

「そんなこと言わないの
あんなに頑張って勉強したんだから、きっと合格してるわよ」

「でもでも～…」

和ちゃんが私を励ましてくれてるのは分かるんだけど…やっぱり不安…

「大丈夫だよ！お姉ちゃんも和ちゃんも絶対合格してるよ！」

「憂…」

憂は私と和ちゃんについてきてくれてた。
いつもそうだっけ。
私達は小さい時から三人一緒。
私の方がお姉ちゃんなのに、昔から憂に背中を押されてる。
今もそう。

憂は私を信じてくれてる。

「地が出てるわよ、憂」

「今は良いんです　和ちゃんのこと『和ちゃん』って呼びたいから」

「クスッ　そう」

だから私は…

「の、和ちゃん！憂！い、行くよー！」

信じてくれてる憂と励ましてくれてる和ちゃんと自分自身のために、
もう一度『ふんすっ！』と気合いを入れて、私は一歩を踏み出した。

――――――――――

「り、律！あった！合格してた！」

「私もだよ　ていうか少し落ち着けよ、澪」

胸がドキドキしてる。
一歩一歩、歩く度に私のドキドキは高鳴っていく。

「もしもし？紬です
はい！合格してました！」

（いいなぁ…）

合格発表者が載ってる掲示板に近付くにつれて、お互い抱き合って

喜んでいる娘達や、笑顔でケータイで合格を報告してる娘が増えていく。
私も早くそんな笑顔になりたい…

「着いたわ」

和ちゃんの声に俯かせていた顔をゆっくり上げるとおっきな掲示板。

「い、い、いよいよだぁ…」

「大丈夫だから、ね？」

「お姉ちゃんなら絶対に合格してるよ」

緊張してドキドキする胸を両手で押さえて、和ちゃんと憂の言葉にコクンと頷いて掲示板に眼を向ける。

（平沢…平沢…平沢…平沢…）

制服がしわになっちゃうくらいにドキドキする胸を押さえて、自分の名前を探す。

秋山　澪…桐島　咲也…琴吹　紬…田井中　律…

た行が終り、な行も終った。
そして載ってある名前が、は行に変った。

（神様！私の名前をー！）

ギュッと眼を閉じて意を決して、は行の名前を確……ぁ……

「唯？」

「ぁ…」

「お、お姉ちゃん？」

ポロリ。

私の眼から涙がこぼれて頬に伝う。

「う…憂…！の…和ちゃぁん…！」

胸のドキドキは緊張じゃなくて、ポロポロこぼれる涙は悲しいんじゃなくて…

「あ、あっだぁ～！わ、私ぃ～！合格じでだぁ～！」

嬉しくて。安心して。

ドキドキも涙も止まらない。

掲示板には受験番号の『００５５』と私の名前『平沢　唯』が確かにあった。

「おめでとう！お姉ちゃん！」

「うん…！うん…！ありがとうぉ～…！」

「だから言ったじゃない
大丈夫って」

「の、和ちゃんはどうだったのっ？」

「私も合格よ」

「おめでとう！和ちゃん！」

「ありがとう、憂」

「お、お、おべでど～！和ちゃ～ぁん！」

「ありがとう、唯
でも涙は拭きなさいね」

憂に涙を拭いてもらって掲示板の前で和ちゃんと記念撮影して、重たかった足が軽くなったことに嬉しくて笑顔になった私は帰るために校門に向かう。

「お父さんとお母さんに電話したよ
今日はお姉ちゃんの合格を祝って、ご飯食べに行くって」

「ホント！なに食べようかな～♪」

「唯って、食べ物のことになったら本当に嬉しそうな顔するわね」

私達は校門をくぐる。

「極度の緊張により足が動きません…」

「お前どんだけビビってんだよ…」

校門をくぐる時に男の子が二人いて、そんな会話をしていたけど、

私は合格できた嬉しさと今日の晩ご飯のことで頭がいっぱいだったから全く気にしなかった。

でも…私の胸はドキドキしたままだったんだよ。

第百三話（前書き）

第一回　私立桜ヶ丘高等学校マラソン大会編です。

第百三話

「さ、咲也先輩…！たいへ…んです！」

「あ？何が？」

「ゆ…唯先輩が…！」

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

本日九月一日水曜日。
現在時刻午前十時二十分。

「……」

果てしなく、かつ非常に面倒な二学期の始まりを告げる始業式を、ほぼ睡眠で乗り越えた講堂からの帰り道。
俺の前を歩く平沢達三年軽音部員と修司と西野、水本の背をぼんやり眺めて、二階から三階へ続く階段の踊り場に差し掛かった時に、俺は不意に足を止めた。
踊り場には小さな掲示板があり、普段は全く見向きもしないが今日だけは違った。

(マジでやんのかよ…)

三年の生徒が背後を通り抜ける気配を感じながら、俺の脳裏には溯ること約十六時間と二十分前の光景がフラッシュバック。

■■■■■■■■■■■■■■■■

ホームセンターで部費で大量の花火を購入した俺達は、早速花火を決行するべく以前に夏祭りが行われた河川敷に向かい、各自に様々な花火を手に取った。

『見て見て澪ちゃん!どんどん色が変ってくよ〜!』

『へぇ〜 そんな花火があるんだな』

『ぬぅ〜 こしゃくな〜!ならば!私は二刀流だ!』

『そんなことするなよ 危ないだろ』

『私に危ないって言うより、サクに言った方が良いと思うぞ?』

『へ？咲也に……？うわっ！さ、咲也っ！』

『あン？』

『ロケット花火を手に持つなっ！』

『しかも二本持ってるじゃないですかっ！』

『アホかお前らは…
ちゃんと缶に刺してんだろうが
誰が直に持つかよ』

『そういうことじゃないってっ！』

『危ないですよっ！サク先輩っ！』

『はっ！あれが最近の花火のやり方なのね！』

『いや、違うからなムギ
あと唯も真似しようとするな』

『でもりっちゃん隊長！サッくん隊員がやってるんですよ！』

『だからなんだよ』

『…お前ら近付くと危ねェぞ？』

『だから咲也の方が危ないってっ！』

『あーっ！火、点けちゃいましたっ！』

『唯ちゃん、こうかな？』

『おぉ～！バッチリだよムギちゃん！』

『サクー！唯とムギが真似しだしたから止めろー！』

『無理』

ヒューー…！
ヒューー…！

俺を止めようと必死な秋山と中野をアウトオブ眼中にして、俺は一人でロケット花火を影宮家の方角に飛ばしていく（特に他意はない）
平沢と琴吹の、のほほんコンビは田井中に止められた俺流のロケット花火を諦めて普通の手持ち花火をこなしていく。

そして大量にあった花火も底を尽き、残るは締めの線香花火。
石段に線香花火片手に横一列に座った平沢を俺は二段後ろに座ってマッチ箱を小さく天に投げる。

『あれ？サッくんしないの？』

『あぁ…』

『サクと線香花火…ぷっ！似合わないな～！』

『…お前のカチューシャ燃やすぞ』

『や、止めろ！』

『全く、律も咲也も…』

呆れた表情の秋山をスルーしていると、平沢が『サッくんファイアー！』と無意味に叫んで自分の線香花火を差し出す。
暗に火を点けろということだろう。
平沢の線香花火に火を点けたのを切っ掛けに残った四人も線香花火を差し出してくるので、気怠さを感じつつ点火していく。

パチパチと小さな音を奏でる五重奏を膝に肘を置いて頬杖をつき、耳を傾けていると思い出したかのように中野が口火を切った。

『そういえば二学期が始まってすぐにマラソン大会があるんですよね』

『『マラソン大会？』』

寝耳に水な発言に思わず復唱。
しかも平沢と共に。

『お前ら聞いてなかったのかよ…
夏休みに入る前にさわちゃんが言ってただろ』

『今年からマラソン大会が開催されるんだって～』

『なんと！そんなことが！』

『つうか待て…　なんでマラソン大会なんてダリィことやんだよ？』

『詳しいことは私も知らないけど、和が言うには校長先生と理事長が決めたらしいぞ』

（理不尽な…）

琴吹が述べた『今年から』とあるように、少なくとも俺が入学した二年と四ヵ月間には桜高はマラソン大会なんぞ存在しなかった。
しかし秋山からの得た情報によると『校長』と『理事長』が暗躍した黒幕のようだ。
しかし、その意図が分からない。

『え～！どうして４２．１９５キロも走らなければいけないのですか～…！』

『フルマラソンじゃないんですから…
軽く四～五キロですよ』

『どっちでもたくさん走んなきゃって意味じゃ同じッス…』

『あ、唯ちゃんの消えちゃう…』

『はっ！ホントだ！どうしよ～！』

『慌てるな唯！そんな時は合体で大きくするんだ！』

『了解！りっちゃん隊長！』

『『合体！線香花火マン！』』

『何やってるんだお前ら…』

『……』

呆れたような秋山が言った途端に平沢の線香花火は火花を散らして落下し、巻き込んだ田井中のも同士に落下。
そんな光景を眺めながらマラソン大会の起承転結を知りたい俺は…

（明日、真鍋辺りに問いただすか…）

なんてことを思ったりした。
結局秋山も琴吹も中野も一分と満たない内に線香花火はその輝きを

失くし、最後に平沢曰くの思い出作りのために秋山が常に持ち歩いているフィルムカメラで軽音部員全員で写真を撮り（俺はかなり渋々）解散。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

そして約十六時間と二十一分後の現在。

視線の先の掲示板には一枚の『風になれ！第一回桜高マラソン大会』とイラストつきで思い切り宣伝してあるポスター。

昨日の中野の発言と不意に見つけたこんなポスターのせいで足を止めてしまった。

「こんなところで立ち止まってたら皆の邪魔になるわよ」

すると秋山曰くのマラソン大会開催の深い事情を知っている筈の眼鏡生徒会長が、そんなことを言いながら遅れてやってきては自分も立ち止まって俺の横に並ぶ。

「何見てたの？」

「…こんな意味不明なびっくり大会開催の知らせを」

「あぁ　マラソン大会ね」

ちょうど良い。
マラソン大会開催を決めたのは先程まで講堂で二学期が始まった挨拶をマニュアル通りに長々とやらかした校長と見たこともない理事長だ（秋山情報）
マラソン大会なんて面倒でやる意義を見出だせない俺はいきなりの開催に当然納得なんてしてない。
しかしそれを只の一生徒である俺が校長に異論したとて無意味だし聞き入れてはくれまい。

ならばせめて職員連中と生徒の間を取り持つ中間管理職のポジションにいる真鍋に異論を吐こうと身体はポスターに向けたまま、視線を真鍋に向ける。

「…おい生徒会長」

「肩書で呼ばないでよ…」

「…お前なら知ってんだろ？なんでこんなやる気も出ねェマラソン大会をやんのか」

「それは校長先生と理事長が決めたからだけど、咲也が言いたいのはそういうことじゃないんでしょ？」

「……」

眼鏡所以のその聡明さを発揮して話が早いのは良いんだが…
何か後の先を読まれた感じが腑に落ちない。

「…分かってんなら早く言えっつうの」

「はいはい」

そんな細やかな反撃としてやや辛辣に言葉を並べたが、四文字で軽く受け流された。
そんな俺の勝手な敗北事情など知る由もない真鍋がマラソン大会開催の深い事情を語り始める。

「ほら、桜高って他の高校と違って体育祭ってないでしょ？」

「あぁ…」

そう。我が桜高には体育祭というものがない。
その代りに学園祭にかなりの力を入れている。
通常体育祭に使われる練習時間を学園祭の準備に振り当て、毎年かなりの出来栄えに仕上がっていたりする。

ちなみに他校や一般人の客が多いのも、その出来に感銘しているからだという。

「今回のマラソン大会はその体育祭の代りにやるらしいわ」

何だかよく知らんがたまにニュースなどで耳に入る昨今の小~高校生の運動不足を嘆く声。
それを解消する役目を買っているからマラソン大会を開催すると付け加えた真鍋。

「…そんなことなら何で前々からやんねェんだよ?」

別に納得したわけではないが、今年からというのがどうもにも腑に落ちないし、何だかきな臭い。

「それは桜高が今年度で全校生徒が共学になったからよ」

「あぁ?」

「だって今年からじゃないと男女比率がバラバラで不公平じゃないそれに共学になった記念でもあるわ」

「運動不足解消とかは筋が通ってるが、完全共学化記念ってなんだそりゃ…
無理矢理な都合だろ…」

「仕方ないでしょ　もう決まったことなんだから」

「…生徒会長の権限で白紙に戻せよ」

「無理言わないでよ…」

眼鏡の奥から呆れた視線を飛来させる真鍋にため息一つ吐いて、俺達以外は誰もいない踊り場を後にすべく足を動かす。

「そういえば曽我部先輩にマラソン大会のことをメールしたら、私達が入学する前にマラソン大会を開催するかどうか生徒会で議題に上がってたらしいわ」

「はぁ？…どういうことだよ？」

「つまり、そんな時期からマラソン大会を開催する運びがあったってことじゃないかしら」

「だったらせめて、あの人が在籍してる時にやれってんだ…俺達の代からとか理不尽だろ…」

「それも仕方がないことよ　諦めなさい咲也」

「はぁ…」

確かに生徒の意見も聞かずに決まってしまった事柄だ。
やる気なんて全くないがやらなければ内申に響きそうだ…

それは三階に着き閑散としてある廊下を（恐らく三年の連中は全員教室に入った故）真鍋と歩き、二組の教室を開ける寸前に腹を括った瞬間だった。

――――――――――

今日は始業式のために昼前にＨＲが終り放課後に。
部活のある連中はそれぞれの部室に足を運び、当然俺達三年軽音部員も部室である音楽準備室に向かう。

「サッく～ん…」

普段なら俺が先頭に、その後ろを平沢達が続いて部室に向かうのだが、今日に限っては先頭に秋山と琴吹、その数歩後ろに俺と平沢と田井中がいた。

「何で夏休み終っちゃったの～…」

「…それを俺に言ってもどうしようもねェし、文句言うなら時の流れにでも言っとけ」

「こら～！もうちょっと時間ゆっくり流れろ～！」

「誰に言ってるんだよ
にしても、今年の夏休みは終るのが早かった気がするよな～
あと一ヶ月夏休みの延長を求める！」

「…そんな無理難題は文部省に言え」

「りっちゃん！」

「おう！文部省に手紙送ろうぜ！」

「鵜呑みにしてんじゃねェよ…」

「分かってるよ　ジョーク♪ジョーク♪」

「ぇ…　そ、そうだよ～　ジョークだべさ～」

「…お前、真に受けたろ？」

「さ、さぁ！早く部室に行こう！おやつとギー太が私を待ってる～！」

さっきから平沢と田井中が何故か俺を挟んで夏休みが終ったことに文句の言葉を並べるので鬱陶しいと感じつつ聞き手に回っている俺は後方にいた。

「ほら二人ともしゃんとしろよ　部室に着いたぞ」

そんな平沢と田井中の文句を適応にあしらっていると部室に辿り着いた。
扉のドアノブに左手を置いた秋山が振り返り、そのままガチャリと扉を開ける。

「こんにちは先輩方！！」

「うわっ！！」

扉の向こうには普段通り先に来ていた中野。
しかし何故か、かなりテンションが高めで俺達を向かい入れる。
そんな中野が発した勢いと興奮ボイスに秋山が驚きよろけるが、隣にいた琴吹が支えることで難を逃れる。

「…何でテンション高ェんだ」

「だってサク先輩！！二学期が始まったんですよ！！」

「そんなに学校好きだったのかお前…」

「まぁ、確かに好きですけど…」

「あずにゃんの知られざる真実が一つ明らかに！」

「それより！！」

「先を告げる前に少しボリューム下げろ…」

耳キーンを防ぐために警告して俺は一足早く部室に足を踏み入れ、鞄を置いて、とりあえず長イスに座る。

「二学期といえば学園祭がありますね！ライブですね！」

「あぁ…　だからそんなにテンション高かったのね…」

一応俺の警告を受け入れたらしく多少ボリュームは下げたが、いかんせん田井中がのけ反る程まだまだテンションが高い。

「そうだな　ライブ頑張らないとな」

「はい！」

秋山が意気込む中野の頭を軽く撫でて部室に進入。
それに平沢と田井中と琴吹も続く。

「でもみんな、その前にビッグイベントがあるのを忘れちゃいないかしら？」

「…だから毎度毎度、気配消すなっつうの」

突如聞こえた声に長イスに座ったまま振り返ると、テーブルの椅子に足を組んで座っていた山中顧問の姿が。

「あら?私は最初からいたわよ?」

「ていうかさわちゃん
私達が教室出る時まだいたのに、何で先に部室にいるんだよ…」

「そ・れ・は・乙女の秘密よ☆」

「何か気分悪くなってきた…」

「どういう意味よ!咲也くん!」

唇に人差し指を当て首を傾げてウインクをする歳不相応な動作をして大事故を発生させた山中顧問に悪寒が走り戦慄してしまった。

「あーっ!」

すると平沢が鞄を置いて、滅多に見れない素早い動きで部室の端に駆けていく。

「トンちゃ～ん♪」

そこには夏休み中は中野家で過ごし、相変わらずフヨフヨと水槽を気侭に遊泳する亀が。
そういえば琴吹家から運んだ水槽（山中顧問が）で泳ぐのは初だったな。

「久しぶり～♪元気だった？」

「何かトンちゃん大きくなったな」

「…亀の元の大きさ覚えてんのか？」

「確か…　こんぐらい？」

「アバウトにも程があるぞ…」

平沢の隣で亀の観察を始めた田井中が両手でサイズを示すが、その動作が度々動いてかなりアバウトだ。

「サク先輩　亀じゃなくてトンちゃんです」

「ハイハイ…」

「梓ちゃん一人で家からトンちゃんを運んだの？」

「いえ、先生に手伝ってもらいました」

「エッヘン！」

無駄に胸を張る山中顧問に何かツッコもうとしたが、先の件があり藪蛇が飛び出そうなのでスルーし、ギタースタンドに立て掛けてあったアコギに手を伸ばす。

「さっき、さわ子先生が言ってたのってマラソン大会のことですか？」

「そうよ」

鞄を置いて長イスの横に立った秋山の質問に山中顧問がコップを傾

ける仕草をしながら答える。

「…さっき真鍋にも文句言ったが、何でマラソン大会なんて疲れるだけのもんを開催すんだよ?」

『少しお待ちを～♪』と嬉々しながらティータイムの準備を始めた給仕係を横目にアコギのチューナーでチューニングしながら、やっぱり納得出来ない案件を山中顧問にぶつける。

「そうだよさわちゃ～ん…
私も走るのヤダ～…」

どうやら平沢も心境は俺と同じのようで、水槽に張り付いていた顔を山中顧問に向ける。

「私にそれを言われてもね～…
もう決まったことだから」

「さわちゃんは良いよな楽できて～　走るのは私達なんだぜ?」

「何言ってるのよりっちゃん
私だってスポーツドリンクの買い出しとかコースの下見とか警察への申請で忙しいんだから」

「…今のアンタ見たら信憑性の欠片も見えねェけど」

給仕係に淹れてもらった紅茶を優雅に口に運ぶ山中顧問を一瞥し、チューニングが終ったアコギをギタースタンドに戻し、隣のテレキャスをチューニングするためにギターケースからテレキャスのチューナーを取り出す。

「大人っていうのは見えないところで努力してるのよ…」

「そういうもんなんですか?」

「…怪し過ぎるが一応本人が言ってんだから二割ぐらい信じてやれ」

「たった二割ですか…」

「何か咲也くんって私に対して狼藉よね…?」

(今頃気付いたか…)

そんなことを思って夏休み中は物置部屋にしまってあった(夏休み

の部活の度に出しては戻していた）三つのギターアンプの内の俺のアンプを取りに物置部屋に向かう。

「ねぇ、さわちゃん」

「何？唯ちゃん」

「明後日だよね？マラソン大会って」

「えぇ　そうよ」

「よし！決めた！」

物置部屋からアンプを片手に出ると何故か平沢が右手を握り締めて窓から外を眺めていた。

「明後日に雨が降るように努力する！」

「…その努力を練習に回せ」

「でもでもサッくんも走るのヤでしょ？」

「…確かに面倒だとは思うが、雨乞いなんて早々叶うもんじゃねェだろ」

長イスの近くにアンプを置いてテレキャスにチューナーと共に繋いで、長イスに腰を下ろして六弦のペグを回していく。

「確かに咲也の言う通りだよ
唯、雨なんて願っても降らないぞ」

「大丈夫だよ澪ちゃん！私には雨を呼ぶ秘策があるから！」

「どんな秘策だよ？」

田井中が自分の席に着席して琴吹が淹れた紅茶を一口含んで平沢にそう言う。

「てるてる坊主を逆さにつるすんだよ
そうすれば雨が降るって隣のおばあちゃんが言ってた」

（迷信だろ…）

ばあさんの知恵袋にそんなことを思いながらテレキャスをチューニングしていく。

「そんなに走るのが嫌な唯ちゃんに、とっておきな情報を教えてあげる」

「なになに！もしかしてマラソン大会はケーキ大会だったりとか！？」

「「違うだろ」」

「有り得ないですよ」

「都合の良い頭してんな」

「あはは…」

テーブルに両手をついて山中顧問に迫る平沢に秋山と田井中はダブルツッコミ。

中野は真顔で。

俺は振り向きもせずに。

琴吹は苦笑いを浮かべる。

「ひ、ヒドいよ…みんな…」

「一番ヒドいのはサクだと思うけどな」

「…事実を言ったまでだ」

うなだれる平沢を見たあとに田井中が俺に視線を移動してそんなことを言うが、だからどうしたという感じでテレキャスを六弦からストロークする。

「まぁ、ケーキはないけどマラソン大会の後、校庭でお汁粉を作ってみんなに振る舞うのよ」

「お汁粉!?」

俺達の痛烈な言葉にうなだれていた平沢だったが和風デザートにすぐさま気力が復活し、笑顔を見せる。

「でも先生、何でお汁粉を作るんですか?」

「そんな梓ちゃんに問題!」

「え!急になんですか?」

「疲れた後に欲しくなるのってな~んだ?」

いきなりの山中クエスチョンに戸惑う中野だったが、根の真面目さが災いして真剣に考え思案顔になる。

「甘いもの…？」

「ピンポ～ン！大正解！そんな梓ちゃんにはネコ耳をプレゼントするわね」

「いりません！」

「え～…」

「何で唯先輩が落ち込むんですか！」

「つうかお前ら…」

アコギ・テレキャス共にチューニングが終了。
つまり俺は準備万端だ。

「…さっきニャカ野が言ってたろ」
「私ニャカ野じゃにゃいもん！」

ツインテールと両手をパタパタと上下に動かし火山を噴火させるニャカ野をスルーし、長イスから立ち上がってテーブルに身体を向ける。

「…学園祭ライブがあんのに、いつまでも駄弁ってんな」

「そ、そうだよ！ほらみんな！練習するぞ！」

俺に言われるまで自分も紅茶を楽しんでいた秋山がハッとした表情で勢いよく立ち上がる。

「はぁ…」

そんな抜けてる秋山に思わずため息が漏れる。

「よし！この紅茶飲んだら練習するか！」

「今すぐやれ」

「そんなこと言うなよサク
せっかくムギが淹れてくれた紅茶を無駄にできないだろ？」

「…じゃあさっさっと飲み干せ」

「は～いはい」

「あ！今年の衣装も私に任せてね！」

「「結構です」」

胸をポンッと叩いてみせた山中顧問に俺と秋山と中野のトリプルツッコミ発動。

「あら、そんなこと言っていいの？咲也くん」

「はぁ？」

「今年の衣装の切っ掛けは咲也くんとムギちゃんなのよ？その本人が断っちゃダメじゃない」

「私と咲也君がですか？」

「サッくん」

身に覚えがない山中顧問の発言に思考を巡らせるが該当ナシだと脳が弾き出した。
すると平沢が幾ら注意しても直す気がないタブーで呼ぶので平沢に視線を向ける。

「ム、ムギちゃんと何かしたの？」

何故か吃る平沢に疑問が湧いたが気にしたら負け精神でスルー。

「…そりゃ俺が知りてェよ」

「ム、ムギちゃんも知らないの？」

「え？うん　私も分からないわ」

「そっか～♪」

『ギー太！出番だ！』と言ってレスポールに向かう平沢。

「青春ね、咲也くん♪」

立ち上がった山中顧問が俺の肩をポンッ叩き憎たらしい笑みを浮かべてサムズアップする。

「…とりあえず眼鏡割って良いか？」

「何でよ！？」

「ギ～太～♪」

「……」

先程のオドオドした表情から一変して悦な表情で絶対音感を駆使して楽々とレスポールのチューニングをしていく平沢に何かを感じつつ、テレキャスのストラップを肩にかける。

「唯先輩…」

――――――――――

翌日。二日木曜日。

昼休みの時間帯。

「あれ？ムギのお弁当うな重？」

「マラソン大会に備えて持久力アップにって」

「確かにムギは力持ちさんだけど、持久力に欠けるからな～」

「ちゃんと苦手を克服しようとして偉いなムギは」

「私もたまに家から学校まで猛ダッシュで特訓してるよ！」

「それは特訓じゃなくて寝坊しただけだろ！」

「いや～　お恥ずかしい限りで～」

昼休みの教室で登校中に購入した惣菜パンを摂取していると、勝手に俺の机の対面に座りオムそばパンを頬張り終えた五流ケーキプレゼンターの二つ名を俺から与えられた修司がコホンッと小さく咳払いをして何やら佇いを直す。

「突然ですが、ここで影宮インフォメーションのお時間です」

「…アリガトウゴザイマシタ」

「俺の許可なく勝手に締めるのはノンノンノンだよ」

（ウゼェなコイツ）

人差し指を立てて左右にゆっくり振った六流毒物プレゼンターに右手に持っていたコロッケパンを顔面にブチ当てたくなるが、なんとか耐える。

「先程澪ちゃんから入ってきたニュースによると、なんと紬ちゃんの弁当箱には鰻があるみたいです」

「……」

意味の分からん喜劇を始めたコイツを相手取るのは得策ではないと判断した俺は、視線を生き様もケーキも七流プレゼンターに向けることなくコロッケパンを食べる。

「そして情報提供者の律ちゃんによると、紬ちゃんは力持ちさんら

しいです」

「……」

「つまり紬ちゃんは昼メシをうな重にする程、家は金持ちとみた！
そして力持ちだとも判明した！」

「……」

チラッと八流生物に視線を上げると『どうよ？』みたいなドヤ顔をしていた。
つうかそんなことを知って何がしてェんだ…

「はぁ～…　それにしてもいよいよ明日だよ～…」

「で、マラソン大会に持っていけるおやつはいくらまでだったけ？」

「マラソン大会は遠足じゃない！」

「でもでも、せめておやつ持ってって良ければ、やる気にもなるってもんなのに～…」

「おやつはダメだけど、終った後に先生達がお汁粉作って待ってるわよ」

「和ちゃん、そこにケーキを追加できない？」

「無理に決まってるでしょ」

「だよね～…」

「あれ？唯のお弁当にはお餅が入ってるんだな？」

「まさか！粘りが～！とか記録が伸びる～！とか言うんじゃないだろうな？」

「違うよりっちゃん
コレは昨日さわちゃんがくれたんだよ」

「ん？何でさわ子先生に？」

「昨日憂と一緒にお買い物してたんだよ
そしたらお汁粉の買い出ししてたさわちゃんと偶然あってね？さわ

ちゃんに家まで送ってもらったんだ～」

「いや、だからなんでさわちゃんからお餅貰ったんだよ？」

「さわちゃんの車に乗った時に買い物袋にお汁粉で使うお餅が一個だけ紛れ込んじゃったんだよ
さわちゃんに返すって言ったんだけど、それ食べて頑張りなって」

「へぇ～♪そんなことがあったのね～♪」

「そうなんですよムギちゃん♪」

度々聞こえてくる平沢達の会話を聞き流し、コロッケパンを食べ終え、緑茶のペットボトルのキャップを開けた途端に…

「え～　臨時ニュースが入ってきました」

「……」

再び意味不明なことを始めた九流生物。

「なんと明日のマラソン大会の後にお汁粉様が待ち受けているらしいです」

「…さっきから何なんだテメェは」

これ以上のスルーは限界だと感じた俺は椅子の背もたれに身体を預け、視線を上げて仕方なく口を開いた。

「俺が何を言いたいか？決まってんだろ！どうせお前は俺が今知った情報を前から知ってたんだろッ！」

相変わらずの騒音を発生させた十流生物が俺にビシッと指差す。しかしその言い分が全く理解出来ない俺は眉を顰めるばかりだ。

「…だから何が言いてェんだっつうの」

「つまり！わっしは寂しいんだべさ！」

「はぁ？」

「気が付けば咲也は俺といるより唯ちゃん達とばっかりいやがる！それが…わっしは…寂しいんだいッ！」

「…平沢達といるのは部活所以だし、お前の抱える感情なんぞ知ったこっちゃねぇ
つうか気持ち悪い」

「気持ち悪い言うなッ！
とにかく！俺達にできてしまった溝を修復するために俺は決意した！」

とりあえずといった感じでツッコんで、握り締めた拳を俺に突き出して、コイツの中で勝手に決めた事を告げてくる。

「明日のマラソン大会！俺と一緒に走ろうＺＥ☆」
「ヤダ」
「即答ッ！？」

どんな罰ゲームをしてもお断りな提案をしてきた人生十一流生物を一蹴し、ペットボトルのキャップを閉じた。

―――――――――

「ねぇ、ムギちゃん」

「なぁに？唯ちゃん」

「今日のおやつ…　なんか黒いよ？」

「黒ゴマプリンかしら？」

放課後になり、学園祭に向けての練習がとりあえずの一区切り（練習時間僅か三十分）となった部室。
平沢達女性陣はテーブルに座り、早速甘美な食物を食べようとしているのだが、琴吹が用意したそれに中々手が伸びないでいた。

その気持ちは分かる。
何故ならテーブルの上の人数分のそれは、黒一色で不気味なババロアのような物体だからだ。

そしてよほどティータイムが待ち切れなかったのか、山中顧問がスプーンで一口掬い口に運ぶ。

「あむ…」

「さわちゃん、美味しい？」

「そうね…」

平沢の言葉にゆっくりとした動作で頬に手を当てた山中顧問が、眼を閉じて不気味な物体の感想を述べる。

「不思議な味…何かしら？口の中に広がるこの爽やかな磯臭い香りは…？」

「マラソン大会に備えて、貧血防止に鉄分の補給をと思って、昆布とひじきのブラマンジェです♪」

「こ、昆布…」

「ひ、ひじき…」

「マ、マラソン大会…」

「お前の引っ掛かるとこはそこかよ…」

不気味な物体の正体を明かした琴吹に、田井中と秋山が見るからに嫌そうな表情をするが、平沢だけはやっぱりズレていた。

「だってサッくん…」

「サッくん言うなっつってんだろうが」

「いよいよ明日なんだよ～…！」

「…つうか雨天中止の雨乞いしたんじゃねェのかよ？」

「したよ…　でもでも見事に晴れちゃってまッス…」

長イスに座った状態で右に首を動かせば、快晴と呼ぶに相応しい突き抜ける秋晴れな蒼空が広がっていた。

「…だったら数でも増やしてひたすら祈ってろ」

平沢は走りたくないから。
俺は面倒だから。
似たようで異なる、異なるようで似ている俺と平沢のマラソン大会への気持ち。
そんなどっちつかずな俺達だが、合致しているのはマラソン大会中止。
なので平沢の雨乞いが成功したら俺も万々歳である故に雨乞い成功の可能性が上がる提案を。

まぁ、例え雨天中止になろうが別日に開催するんだろうがな…

「そうだね！逆さてるてる坊主をもっといっぱいにする！」

「あの～…」

すると貧血防止デザートを一切口にしてない中野がおずおずと挙手する。

「水をさすようで言いにくいんですけど…」

「どうしたんだ梓？」

同じく、黒物体に全く手をつけてない秋山が中野に顔を向ける。

「明日の降水確率は、ほぼ０パーセントみたいですよ？」

「な、なんだってー！」

「唯、諦めろ」

勢いよく立ち上がってはしきりに中野と外を眺める平沢に、田井中がゆっくり立ち上がって平沢の肩に手を置く。

「サッくん！もっともっといっぱい、てるてる坊主作ったら大丈夫だよね！」

「諦めろ…」

「そ、そんな～～！」

どうやら、ばあさんの知恵袋は人工衛星がもたらした結果には敵うことは出来ず、桜高創設の歴史上初のマラソン大会は滞りなく開催されるようだ。

「ムギちゃん…　できれば次からは普通のを持ってきてね…」

「お口に合いませんでしたか？」

「見た目も味も…ちょっとね…」

「じゃあ明日は違う貧血防止のデザート持ってきます♪」

「いや、貧血防止はいいから…」

「レバーを使った…」
「「止めろムギ！」」
「それは止めてくださいムギ先輩！」
「お願いだから勘弁してムギちゃん！」

「咲也君…」

「あぁ？」

「私、みんなからツッコまれたわ～♪」

「叩かれねェでも良かったのかよ…」

「お天道様ー！どうか雨を降らせておくんなましー！」

第百三話（後書き）

本作では桜高は体育祭は無い設定です。

作中で咲也がロケット花火を手に持ってましたが、危ないので絶対に真似しないでください。

第百四話（前書き）

第一回　私立桜ヶ丘高等学校マラソン大会編その二です。

※今回は視点切替えが多く、読みにくいかもしれません。

第百四話

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

明けて翌日。
九月三日金曜日。

「『宣誓。私達選手一同はスポーツマンシップにのっとり、正々堂々と最後まで走りきることを誓います。
生徒代表、三年二組真鍋　和』」

和の選手宣誓が終り、校庭に整列している私達はマラソンのスタート位置に移動する。

「ん…　はぁ…」

その最中、唯の意気消沈した言葉にならない声が聞こえた。
結局、昨日の梓が言った通り、今日は雨なんて降る気配は一切しない綺麗な蒼空が広がっている。

唯のてるてる坊主を逆さにつるす雨乞いは成功しなかったみたいだな。

「ほら唯。しゃんとしないと怪我するぞ」

走りやすいように普段は下ろしている髪をポニーテールにした私の言葉に、唯は『う～…』と背中を丸めて、いかにも『やりたくない』という態度をとる。

まぁ正直な所、私もあんまり走りたくはない。
スポーツを観るのは好きな方だけど、いざ自分がとなったら別問題だ。

だからといって唯や、さっきからあからさまに面倒そうな雰囲気を出している咲也みたいな不作為なことはしない。

やらなきゃいけないって決まったんだから、と自分自身に言い聞かせる。

「唯。嫌だと思うから気分が乗らないんだぞ」

「そうそう。要は考え方だ」

スタート位置に着いたら一層唯のやる気が削がれていくのを感じた。
それは律も同じみたいで、さっきよりも更に背中が丸まった唯に声をかける。

「普段は教室で授業受けてる時間に学校の外に出られるんだぜ？な

んかワクワクしてこないか？」

「ワクワク…」

「こんなに天気も良いんだしさ、散歩気分で走るものたまには良いじゃん」

すると丸まっていた唯の背中が徐々に伸びていく。

「…そうだよね！遠足だと思えばいいんだよね！」

表情に落ちていた影は奇麗に無くなり、今日初めて見る活気漲る表情になった唯。

「それに終ったらお汁粉が待ってる！今ならサクの分のお餅も持ってけ泥棒～！」

「やったぁ～！」

「勝手に咲也の分のお餅やるなよ」

でも、流石は律だな。
あんなに元気がなかった唯を、いつもの唯に復活させた。
昔から律って気配りが上手いんだよな。
だから部長が務まるし、いざという時は頼りになる。

（唯の方はこれで良いとして、問題はもう一人…）

スタート位置で全校生徒が溢れている中で、その人物を捜すために後ろに首を動かすと、すぐに見つけた。
私と律と唯とムギがいるのは全校生徒で溢れるスタート位置のちょうど真ん中辺り。
問題のもう一人…軽音部副部長にして黒一点の咲也は、私達の後ろに影宮君といた。

「ダリィ…」

「そう思うから怠いと感じるんだよサクッチ」

「思ってねェよ…心からの本音だ…」

「その本音を俺が修正してやんよ！見てな！お前が思わず走りたくなるような気持ちにさせてやっから！」

「…例え天変地異が起きようが、まずそんな気にはならねェ」

「そんなことを言えるのは今の内だぜェ…！」

見るからに面倒そうな咲也に、何やら影宮君がやる気が引き起こす算段があるみたいにニヤリと笑う。
本人は否定してるけど影宮君とは幼馴染みだから、ここは咲也のことをよく知ってる影宮君に任せるべき…かな？。

ちょっと不安だったけど『みなさん、準備は良いですか？』と拡声器を持った校長先生が朝礼台に上がったから、私は前に向き直り、握り締めた両手を腰の位置に構える。

「『位置について、よ～い』」

パァンッと軽快なピストルのスタート合図に、一斉に桜高の全校生徒が走り出す。
それに習って、とりあえず私達もゆっくり走り出す。
すると…

「うぉぉぉッ！！」

「え…？」

そんな叫び声と共に私達の横を影宮君が全力疾走で駆け抜ける。
影宮君はスピードを落とすことなく、スルスルと人波を避けてどんどん進んでいく。

「シャアァァッ！！瞬間順位一位獲得ッ！見たか咲也ァッ！」

影宮君の姿は見えないけど叫び声からして先頭に立ったみたいだ。
…もしかしてこれが咲也のやる気を出させる算段だったのかな？

「修司君、張り切ってるね～」

「ていうかあんなスピードで走ったら、絶対あとでバテると思うけどな」

唯と律の言葉に反応せずに、私は肝心の咲也の様子を窺うために、周りの生徒にぶつからないように走りながら後ろを振り向く。

「えっ？歩いてる…！」

多分咲也のための影宮君が起こした行動には全く目もくれない咲也は、なんと堂々と校庭を歩いていた。
しかも歩いてるのは咲也だけじゃなくて左右に誰か二人いる。

「澪ちゃん。前向かないと危ないよ？」

「あ、うん…」

唯の言葉に私は前を向いた。
だけど私は堂々と歩いてる咲也が信じられなくて、もう一度後ろを振り向く。

（やっぱり歩いてる…）

「さっきから何してるんだよ澪？」

私の行動に疑問を感じた律が尋ねる。

「いや…　咲也が…」

その後に続く言葉を飲み込んで、実際に見た方が早いだろうから走るスピードを落として、不思議そうな顔をしている律と唯とムギに、目配せをする。

「んぁ？サクが…えっ！歩いてる！？」

「サッくんが歩いてるなら私も歩く！」

意図を汲み取った律と唯とムギが振り返ると、律は私と同じ反応をしたけど、唯はスピードを更に緩めだす。

そんな唯に『歩くな』と注意した時に私と同じポニーテールにしたムギが口を開いた。

「咲也君…　先生に怒られるんじゃ…」

ムギの心配はもっともだし私も思った。
マラソン大会と銘打ってあるけど別に歩くのは問題じゃないんだ。
だけどそれは走ることが大前提であって咲也みたいに最初ならやる気がなさそうに歩いてると…

「コラーッ！！」

「ヒッ！」

案の定、先生からの怒声が咲也に向かった。
私はその怒号に驚いて身を縮こませてしまう。

「桐島ーッ！西野ーッ！鷹崎ーッ！お前ら真面目に走らんかーッ！」

こ、怖い…！

こ、この声って確か男子の体育専門先生の徒義先生だ…！

私は面識はないけど、たまにクラスの男子が『怖い』とこぼして愚痴を言ってるのを聞いたことがある。

「うわぁ…　サクのやつ思い切り怒られてるな…」

「大丈夫かな…？サッくん…」

あまりの恐怖で私は後ろを向けないけど、律と唯の心配そうな声から咲也が怒られてるのが分かった。

だ、大丈夫なのか？咲也…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「いや～…　見事に怒られた…」

「まぁ、こうなるんじゃねぇかとは思ってたけど、ああも頭ごなしに怒鳴ることねぇよな」

「言い分言ったところで明らかにコッチに非があるから当然ちゃ当然だが、少しはボリューム下げろっつうの…」

マラソン大会なのにハナから牛歩していた俺達に体育教師（名前忘れた）からの怒号をアッサリ受け流した俺は仕方なくスローペースで走り出した。
そして鷹崎が若干気落ちし西野は苦笑いを浮かべ、俺は願望に近いものを吐き出す。

「…つうか、何でお前らは一緒にいるんだ？」

別段、事前に西野と鷹崎と行動を共にする約束なんぞ取り付けてはいない。
俺は個人的にマラソン大会を楽に終える計画を練って画策しようと最後尾で牛歩していたが、何故かコイツらが俺の横にいた。

「俺はマラソンなんて否定派の人間だから適当に流そうかとしたら、桐島が堂々と歩いてたからな。じゃあ俺もって思って」

どうやら西野は俺の行動に便乗したらしい。
『ふーん…』と言葉少なめに納得し、あまり接点がない鷹崎に視線を向ける。

「…お前は？」

「まぁ理由は西野と同じで適当に走ろうとしたところに桐島を発見した。以上」

「つまり俺達三人はマラソン全否定派ってことか」

「そうなるな」

「はぁ…」

つまりマラソン大会を楽に終える計画を実行しようとした俺に西野と鷹崎が気付き、勝手な勘違いでついてきたということらしい。
何とも傍迷惑な奴等だ…

「けど現実は甘くなかった。歩き出すんならせめて校内から出るべきだったな桐島」

俺の計画では最後尾、つまり誰かに見つからない、見られないが必須条件だ。
だからわざと歩いて最後尾にいたのだが、そこは鷹崎の言う通りでせめて校内から出るべきだった。
まぁ、この計画は今日の朝、登校中に考えたもので綿密性に些か不安があり、多少の穴があっても仕方ないと高を括っていたが、のっけから躓いたな…

「つうか桐島」

「あン？」

「最初から最後まで歩くつもりだったのか？」

校内から出てマラソンのコースである歩道をスローペースで走っていた足を止めて、西野の質問に答える。

「…ンなことするかよ」

「じゃあやっぱ走るのか？」

教員の殆どは校庭に残って甘美な和風デザートを絶賛製作中だろう。

それにまだこんなコースの前半も前半な現在地に、生徒の安全や様子を見るための教師の姿はいない。
なので俺達は完全に立ち止まる。

「そもそも俺は真面目にマラソンなんてする気はねェ…」

一昨日の真鍋の話を聞いて腹を括ったのは意味合いが違う。
『走る』ではなく『サボる』だ。

今回のマラソン大会のコースは桜高の周囲を大きく『一周する』という。ここがポイントだ。

一周するということは進行方向に進んだ逆から帰ってくる。
だったら何もわざわざ商店街や繁華街を通ってまで大きく一周するより、どこかで適当に時間を潰して、さも走った様子で反対方向から帰ってくれば良い。
という計画の内を西野と鷹崎に打ち明ける。

「なるほどな…だが」

「あぁ？」

半分納得したらしい西野が人差し指をまっすぐ立てて、こんな指摘をしてきた。

「チェックポイントはどうする気だ？」

「チェックポイント？」

初耳のワードに眉を顰める。
何でもマラソン大会には生徒の安全確認と俺達のようにサボっている生徒がいないか監視するチェックポイントがコースの各所にあるとのこと。

マラソン大会の存在を中野から聞いた俺は当然、細かい内容までは知らない。
だからチェックポイントなんて初耳だ。

つまりこれが意味することは…

「計画が破綻した瞬間じゃねェか…」

この計画には穴があると自覚していたが、穴だらけだ…

「ていうか、マラソン大会の概要をちゃんと聞いとけよ…」

呆れる鷹崎に『黙れ』と視線で訴え、さてどうするかと思考の海にダイブするがすぐに底に着いてしまった。

穴だらけ故に崩壊した計画に次ぐものなど何も浮かんでこない。

「はぁ…」

マラソンなんて怠いし疲れるし、やる気は全く湧いてこないが、今度こそ腹を括る必要があるようだ。

「どうする？」

「チェックポイントがあるんなら、つまりそういうことだろ…」

西野の問い掛けにそう告げて、マラソン大会のコースを歩き出す。

「やっぱ歩くん？」

「いや…　やりたくはねェがダラダラと歩くのも面倒だ」

俺の後ろについてきた鷹崎の発言に首を小さく横に振る。

「だったらさっさっと終らせる…

とどのつまり、そういうことだ」

「はぁ…　結局そうなる訳か」

横断歩道は赤信号。
そこに横一列にならび、ため息をついて西野が屈伸をする。

「今俺達ビリだろ？このままっていうのは遠慮したいな。真面目に走っていった梨乃と流緒に笑われるわ～」

腰を屈めて靴紐を締め直した鷹崎がゆっくりと立ち上がる。

「何か校長と理事長の思惑にハマったようで腹立つな…」

首の骨を鳴らして、とりあえずマラソンなんて疲れるだけの大会を開催した黒幕二人に毒を吐いておく。

「そういや西野」

「ん？」

「水本は？お前らいつも一緒にいるだろ？」

「先に行ったよ。アイツ『き』がつく程真面目だからな。つうか桐島」

「あン？」

「スタート直後の影宮なんだが、アレどういう意味？」

「知らねェよ…　本人に聞け」

こんな会話をしていると赤信号が青色に変り、俺達はアスファルトを踏み締め、ゆっくりと、だが中々のスピードで駆け出した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　田井中　律】

『いらっしゃいませ』

「うぉっ！喋った！りっちゃん！この自動販売機、喋ったよ！」

ニャ～

「あ！子猫！かわいい～♪」

学校を出発してどのくらい来たかな？

……うん。分かんない。

とにかく私達の中じゃ一番体力のない唯に合わせてゆっくりと走って私達は今、繁華街まで来ていた。

今まで順調にきていた私達だったけど、ピタリと止まってしまっていた。

その原因はズバリ唯。

普段は授業中の時間に外にいる環境に唯は何だか興奮しているみたいだ。

人が近付いたらセンサーが感知して喋る自動販売機だったり、路地裏に逃げた白い子猫を追いかけたり…

一々色んなことに反応する唯に私と澪とムギは完全に足止めをくらっているのが現在の私達の状況。

「わぁ～♪美味しそう～♪」

で、唯は現在、洋菓子店のガラスの扉に張り付いてショーケースに並んだケーキに心奪われてる。

（こうも忍耐力と持久力、どれをとってもこれほどまでにマラソンにむいてない人間はいないんじゃないだろうか）

唯って子供っぽいから…いや、子供がそのまま成長したのが唯だな。
そんな唯だからこんなことを思わずにはいれない。

「ほら唯。早く行くぞ」

「ていうか、なんでさっきからそんなに急ごうとしてるんだよ？」

何かよく分かんないけど、澪は焦ってるみたいだ。
まだケーキを羨ましそうに見ている唯に澪が急かすようにそう言うけど、これが初めてじゃないんだよな。
かれこれ三回目ぐらいだな。

「だって、ゆっくりしてたらビリになるかもしれないだろ」

「別に良いじゃん。賞品がかかってるわけでもないんだし」

私は順位なんてどうでも良いと思ってる。
一位になったら豪華景品プレゼント！とかビリには罰ゲーム！とか

あったら自ずと力は入るけど、このマラソン大会にはそんなのはないからのんびり～が私の胸中。

「ダメだって！」

けど、澪は私と真反対な気持ちみたいだな…ん？ビリ…

（あぁ、そういうことね）

「はっは～ん」

「な、なんだよ…」

何で澪がこんなに躍起になっているのか分かった私はニヤリと悪戯そうに笑ってそれを吐露する。

「澪がそんなに焦ってるのって、ビリになったら全校生徒から注目されるからだろ？」

「う…　そ、そうだよ…」

「やっぱりな～　『頑張って～秋山さ～ん』とか言われそうだもんな～」

「う、うるさい！」

澪は恥ずかしがり屋だから、ビリになって目立ってしまうのが嫌。
これが澪の頑なにビリを避ける理由。
何とも澪らしいな～

「ま、大丈夫だって！私達がビリになることはないよ」

「そんなの分からないじゃないか…！今だってどんどん抜かれてるのに…！」

三年の青ジャージや二年の赤ジャージや一年の緑ジャージが私達の後ろから通り過ぎていく。
そんな窮地に陥りかけてる澪にとっては早く先に進みたいけど…

「ムギちゃん。今度、あのケーキ食べたいな～」

「じゃあ、明日はお休みだから、月曜日に持ってくるね♪」

「うわぁ～い♪」

唯はまだケーキに夢中だし、ムギも何だか嬉しそうにして唯の相手をしてる。

「みんな早く行こうよ！ビリになったらどうするんだよ！」

「だから大丈夫だって～
私達の後ろにはサクがいるんだからさ～」

結局サクを置いて私達はここま来たけど、この判断は間違ってない！だって面倒そうに歩いてるサクが私達と一緒にくる筈ないしな！

「でも、もしかしたら咲也が走ってたらどうするんだよ？咲也って運動得意そうだからすぐに追い抜かれちゃうって」

「う～ん…」

男子と女子は体育は別だからサクが運動得意かは分からない。
でも例えそうだとしても音楽以外は真面目にやってないサクが走るなんて考えられないな…

「ま、大丈夫っしょ！サクが真面目に走るなんて有り得ないって！
もしそんなことになってたらジュース奢ってやる！」

な～んて言った途端に…

「…その言葉覚えとけよ」

「へ？」

突然聞こえた慣れ親しんだ声に嫌な予感を感じながら振り返る…けど、その声の主はいない。
まさかと思って前を見たら…

「サクっ！？」

私には分かる。
いつもドラム叩いてみんなの後ろ姿を見てるから。
だから私達を追い抜いて先を走っていくあの後ろ姿は間違いなくサクだ。
って、あれ？
な、何で真面目に走ってんだよーっ！？

「もう！だから言ったじゃないか！」

「いや…！と、とにかく！私達も走るぞ！」

最後尾にいた筈のサクとクラスメイト西野と鷹崎に抜かれたってことはビリが近いってことだ。
澪みたいな理由はないけど、私だってできればビリは避けたい。
だから足止めの原因である唯に顔を向ける。

「おい唯…って、ムギ、唯は？」

「唯ちゃんならあそこに…」

そこにはムギしかいなくて、唯の姿は忽然と消えていた。
するとムギは苦笑いで私達の前方を指差した。

「りっちゃん！澪ちゃん！ムギちゃん！早く！サッくんに置いてかれちゃうよ！」

さすが唯だな。
澪が幾ら声をかけてもあまり反応しなかったのにサクが絡むとアッサリとケーキから眼を離して足踏みしだしたな…
ていうかどんだけお前はサクが好きなんだよ…

（好き…か…）

「早く早く！」

「唯のせいで咲也に抜かれたんだろ！」

「それは違うよ澪ちゃん。私はサッくんを待ってたのです！」

「でもサクに置いてかれたら本末転倒だろ」

「う…！」

「それじゃあ私達も咲也君達に負けないように頑張ろ～♪」

ムギのこの声に私達は頷いて、やっと走り出す。
一瞬、唯について『事』が頭を過ぎったけど、私はすぐに忘れることにした。

「ぷへっ…　疲れた…」

「「いや、バテるの早すぎるから」」

「唯ちゃん。終ったらお汁粉があるわよ♪」

「ふんすっ！」

（さすがムギ…）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

俺が先頭で、後ろを西野と鷹崎が続いてゆっくりと走ること約十分。
繁華街にて平沢達を捉えた。
が、マラソンをさっさっと終らせたい俺はとりあえず耳に入ってきた田井中の決然に通り際に一言告げて、今までのペースを変わらずに駆ける。

途中に中野と平沢妹、へばってる鈴木にも遭遇した。

『あれ？今通ったのって咲也さんだったよね？』

『唯先輩程じゃないけどサク先輩もマラソン嫌がってたのに、心境の変化でもあったのかな？』

『さ、咲也先輩がいる…ってことは…み、澪先輩も近くに…？』

『とりあえず純は呼吸を落ち着かせ方が良いよ』

『大丈夫、純ちゃん？』

しかしわざわざ相手をするのも面倒なので一瞥しただけで、三人の横を通り過ぎる。
そして繁華街を抜けた俺達は、コースを田園地帯へ。

「はぁ…」

ため息だって出たくなる。
一見すれば只の田園地帯なのだが、逆にそれがキツい。
ゆらゆらと揺れる稲穂が先が見えない程のまっすぐの一本道。
風景が一定して変らず、尚且つ先が見えないというのは精神的に辛いものがある。

「あれ？なぁ西野」

「なんだよ…？結構体力キツイんだから話かけんなよ…」

「あ、そりゃ悪い。つうか桐島のペースが早いんだよ」

「…俺をペースメーカーに据えたのはテメェらだろうが」

走り出した俺に西野と鷹崎が勝手についてきたので文句を言われる筋合いはない。

「それよか…何か俺に用があるんだろ…？」

「あぁ、そうだった。あの男子って水本じゃないか？」

そう鷹崎が指差してた先にはトボトボと寂しげに歩いている田井中並の身長の持ち主。
男子であのぐらいのチビは一人しか知らない。

「完全に水本だな…　チビだし」

「おい…桐島。それ…絶対に星都に言うなよ？マジで…怒られるからな」

息絶え絶えの西野からチビ本のタブーを得た時に、不意にチビ本…

もとい、水本が振り返った。

「あ、卓に桐島クンに鷹崎クン」

足を止めた水本の表情は心なしか嬉しそうな気がしたの気のせいじゃないと思う。
何だコイツ？孤独にうちひしがれてたのか？

「何だか珍しい組み合わせだね。それはそうと面倒くさいからって適当に走るって言ってたのに卓ってば結局ちゃんと走ってるじゃん。あ、そうそう僕、さっきまで村雨クンと藍澤さんと一緒に走ってたんだけど、鷹崎クン、二人はこの先のチェックポイントで待ってる筈だから行ってあげなよ。それから桐島クン、影宮クンがスタートの時に叫んでたけどアレってどういう意味なのかな？」

「「「……」」」

どうしたコイツ？

今の水本を表すに、これ程までに最適な一言はないだろう。
普段はそこまで饒舌じゃないが、何をコイツをここまでマシンガントークを発動させる起因になったんだろうか…

「あー…　分かったから、とりあえず笑顔でペラペラ喋るな。心臓

が弱い奴がみたら卒倒するから」

何かしらの原因を知っているらしい西野が水本の肩に手を置いて宥める。

「じゃあ俺は行くぞ…」

何度も言うが、俺はマラソンをさっさっと終らせたい。
こんな所で立ち止まっているぐらいなら、早く桜高に戻って徐々に溜ってきた疲労を横にでもなって霧散させたい。

「あぁ。桐島と鷹崎は先に行って良いぞ。俺は星都を元通りにするから」

「いや。俺も残るわ。ここまで来たらもうビリになる可能性は低いし、流緒と梨乃と合流して一緒にゴールする」

未だに笑顔を浮かべて『そういえばこの先にＵＦＯの目撃情報が多発してる所があるんだって。何か怖いよね。ＵＦＯといえば宇宙人っているのかな？宇宙に地球と同じような星があったって不思議じゃないと僕は思うんだ。例えば…』と、意味不明な大宇宙の論理を語り始めた水本に、ひたすら苦笑いの西野と幾分引いている鷹崎を一瞥して、俺は止まっていた足を踏み出し、精神的にも体力的にもキツくなるであろう田園地帯の一本道をゆっくりと駆ける。

「で、西野。水本どうしたんだ？」

「早い話が一人が寂しかったんだろ」

「それが原因…？」

「つまり俺達が来て嬉しかったんだろうな。その反動が今のこのおもしろ状態だ」

「へ、へぇ…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

もうすぐ繁華街を抜けるという時に、それは聞こえてきた。

「う、憂…　あ、梓…　ちょっと…待って…」

私と憂は横に並んで一緒に走ってるけど、純だけは私達の後ろで必死に走ってる。
そんな純の弱々しい声に足を止めて振り返ると、純はかなりクタクタになっちゃっていた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

「大丈夫？純」

遅れていた純が私達の前で膝に両手を置いて呼吸を整える。
すると俯かせていた顔をゆっくりと上げて、だいぶ呼吸が落ち着いたように口を開いた。

「あ～…　もうダメ…　先に行ってて…」

「えー…」

純の提案に思わず不満な声をだす。
三人一緒に走ってゴールしようって言い出したのは純なのに…

「でも純ちゃん。この先のチェックポイントで休憩できるから、そこまで頑張ろ？」

「ごめん憂。無理…」

「う～ん…　じゃあ私達だけで先に行く？」

「純ちゃん一人で大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。私はやれば出来る子だから」

「説得力ないなぁ…」

こんなクタクタな純を見たら言葉の信憑性に欠けるよ。

「とにかく二人は先に行ってて。私はゆ～～っくり行くから」

「うん。分かった」

「純ちゃん。また後で」

『私の分のお汁粉食べないでよ～！』と声を張るぐらいまだ元気な純に私と憂は苦笑いを浮かべて走り出す。

「そういえば、サク先輩はどこまで行ったのかな？」

「もしかしたら、もうゴールしてたりして」

「いやいや…　そんなに早くゴールしないでしょ」

サク先輩が私達を追い抜いたのはさっきだったし。
それにしても早かったなぁ。

「あ」

「どうしたの？」

「う、ううん！何でもないよ」

『サク先輩って運動得意なんだ』って思ったけど、憂に感づかれそうになったから両手を振る。
だって…何かそういうの知られたら恥ずかしいもん。

でも先輩達が修学旅行に行ってた時にサク先輩の事を考えていた、ピースが一つ…いや、この前、澪先輩に勉強教えてもらってたから

二つだね。

（サク先輩は作詞作曲が出来て、ギターも上手くて教えるのも上手い。
でも料理と勉強は苦手。
そして運動神経が良い…）

「クスッ」

何だか凄い人なんだけど、弱点や苦手なものがあるっていうギャップに小さく笑う。

そしてこんなことを思った。

（もっと色々サク先輩のこと知りたいな）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「ん？」

「どうしたの？咲也」

「いや…　別に…」

「？」

西野と鷹崎と別れ、精神的に辛い田園地帯を抜けて、その先のチェックポイントにいた春雨だったか？と藍澤に鷹崎の所在を聞かれ、足を止めずに親指でクイッと後方を指差して淡々と走り続けること約十分。

このマラソン大会屈指の難関難境である勾配が急であり、距離もある心臓破りの上り坂に辿り着いた。

山中顧問曰く『行くも地獄！戻るも地獄！ハートブレイク上り坂！』というキャッチフレーズがあるらしい。

果敢にも走り抜けようとチャレンジする連中を見ていると、キャッチフレーズは的を射ているようだ。

スピードは完全に落ちて、更に体力も奪われている。

俺はそんな疲れると分かっていて馬鹿正直にチャレンジする戯け者ではないのでハナから徒歩で上り、少々疲れながらも心臓破りの上り坂を制覇。

そして最後のチェックポイントであり給水所でもある公園に辿り着くと…

『お疲れ様。さ…桐島君』

周りに他の生徒がいるので猫をかぶった状態の山中担任と…

『スタートした時、歩いてたのに随分と早いわね？』

あまり触れてほしくない失態に土足で踏み込んできた真鍋のダブル眼鏡コンビがいた。

とりあえず山中担任から受け取ったスポーツドリンクを一気に飲み干し、桜高まではあと一息ということで何故か真鍋と共に戻ることに。

「なんだかんだ言って結局真面目に走ってるじゃない」

「…俺が特に利点にもならねェこんな無意味で疲れるだけのマラソンに率先して参加したと思ってんのか？」

「でも現に今走ってるじゃない」

「うるせェな…　成行き上仕方なくだ…」

バス通りを抜けて緩やかなカーブを曲がると桜高の校舎が見えてきた。

「たまにはこうして街中を走るのも悪くないでしょ？」

「…感想用紙五枚に俺が納得できる内容を書いて提出したら、来年も走ってやる」

「もう卒業してるじゃない…
つまり咲也は最後までマラソン大会には納得できないのね」

「…当たり前だろ」

「はぁ…」

桜高の校門を抜けてゴールがある校庭に辿り着く。

「桐島せんぱーい！」
「頑張ってくださーい！」
「ラストスパートッス！」
「ファイトッスよー！」

何か空耳と幻聴が聞こえるが一切反応を示さず、視線は、教師が用意しているゴールテープに固定する。

「今のって咲也のファンの子達よね？澪と違って男子にもファンがいるのね」

「……」

とにかくスルー。

そして…

「お疲れさん。お汁粉を用意しとるから冷めない内に食べておきなさい」

「はい。ありがとうございます堀込先生」

「桐島もな。あぁ、それから徒義先生から伝言だ『真面目にやれるんなら体育の授業でもやれ』だそうだ」

「面倒なんでヤダって伝言頼みます…」

俺と真鍋は共にゴールテープを切り漸くゴールを遂げた。
だからといってマラソン大会に対する達成感なんて全く皆無だ。

「はぁ…」

疲労にも似た、ため息を吐き出して身体を休めるべく、ゴールした生徒のために用意されてある日除けの簡易テントに足を向ける。

「お汁粉食べないの？」

「いらん…　ゴールした平沢にでもやっとけ」

「そう」

「あぁ…　集合がかかるまで横になってっから、そん時になったら起こせ…」

「ホント、咲也って真面目なんだかそうじゃないんだか分からないわね…」

背後から聞こえる真鍋の嘆息に反論する必要性を感じないので、簡易テントにあった長イスに横たわる。

＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　鈴木　純】

（た、大変…！）

私は縺れそうに足を叱咤して急いで桜高の校舎を目指す。

私がこんなに急いでいる理由は、ある事実が発覚したから。

憂と梓を先に行かせて、ゆ～～っくり走ったり、たまに歩いていると、何とか心臓破りの上り坂についた。

今まで以上にへばってクタクタになりながらも、坂を乗り切った時に…

『お～い！』

と、声を掛けられた。

荒い呼吸を整えながら振り返ると、坂を上っている澪先輩と律先輩とムギ先輩が。

律先輩が手を上げてるってことはさっきの声は律先輩みたい。

『あ～　梓の友達の…えっと佐々木さんだっけ？』

『鈴木さんだろ』
『そうそう！その純ちゃん！』

『はい。先輩達お疲れ様です』

『うん。鈴木さんも』

『は、は、はい！ありがとうございます澪先輩！』

『え？あ、うん…』

『ところでさ、サク見なかった？』

『咲也先輩でしたら、私達が繁華街にいた時に追い抜かれました』

『う～ん…　となるとサクはもうゴールしてるかもな…』

『『私達』って言ってたけど、梓ちゃんと憂ちゃんと一緒だったの？』

『途中まではです。私、体力ないですからへばっちゃって。だから

憂と梓は先に行かせました』

『聞いたか唯?部活やってない憂ちゃんが元気っぽいのに、お前がへばってどうすんだよ』

律先輩が眼を閉じてそう言うけど、唯先輩からの返事は返ってこない。
ていうか唯先輩…いない?

『あの、唯先輩がいないんですけど…』

『『『えっ?』』』

澪先輩と律先輩とムギ先輩が一斉に振り向くけど、やっぱり唯先輩の姿はない。

『消えた!?』
『遭難!?』

澪先輩と律先輩が同時に口を開く。
澪先輩達も今、唯先輩がいないってことに気付いたみたい。

『まさか、マラソン大会で？』

澪先輩が有り得ないって表情をして律先輩に顔を向けるけど、律先輩は『いや…』と前置きして真剣な表情になる。

『残念だが唯なら十分に有り得る』

『『あ～…』』

思い当たる点があるみたいに澪先輩とムギ先輩が困った表情になる。

『とにかく、唯ちゃんを捜しましょ！』

『そうだな。あっちこっちにフラフラしていた唯だから心配だ…』

『佐々木さん…じゃなくて、鈴木さん』

『あ、はい！』

『悪いんだけど、唯がいなくなったって、さわちゃ…山中先生に伝えてくれないかな？』

『はい！分かりました！』

『あと、もしかしたら学校にサクが戻ってるかもしれないから、サクにも』

『はいっ！』

律先輩の言葉に私は力強く頷いて、まずはこの先のチェックポイントにいる山中先生に唯先輩のことを伝える。

『唯ちゃ…平沢さんが遭難！？』

『みたいなんです…！今、澪先輩達が捜してて…！』

『分かりました。この事は私に任せて鈴木さんは学校に戻りなさいね』

スポーツドリンクで喉を潤して、ヘトヘトになりながらもやっと学校に戻ってこれた…

「純ちゃ～ん。こっちこっち」

ゴールして息切れを起こす私に、憂の声が聞こえた。
はぁはぁと肩で呼吸して顔を上げると、先にゴールした憂と梓がテントの下で長イスに座って手招きしていた。

「た、大変なの…！」

荒れる呼吸はそのままに駆け足で二人に近付く。

「ど、どうしたの？」

私のただならぬ気配を察した梓が立ち上がって私の背中をさする。
そのおかげで何とか呼吸が落ち着いた私は流れる汗も拭わずに顔を上げた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「サク先輩起きてくださいっ！！」

「ッ！」

鼓膜が破れるんじゃないかというぐらいの突然のデカボイスに夢の国から強制帰還させられた俺は左耳を押さえながら怠惰に起き上がる。

「お前、何しやがる…」

左に視線を向ければ、いつの間にかゴールしたらしい赤ジャージを身に纏っているチビンテールの姿が。
その後ろには平沢妹と鈴木と真鍋の姿も確認。

「そんなことよりっ！」

俺の左耳を激キーン状態したことよりもどうやら大事なことがあるようで、中野が一蹴する。

「さ、咲也先輩…！たいへ…んです！」

「あ？何が？」

「ゆ…唯先輩が…！」

すると何故か息絶え絶えの鈴木が平沢妹に支えられながら、何とかといった感じに衝撃事実を俺に告げる。

「行方不明に…！」

時間にして約五秒。
脳が鈴木の発言を理解するにかかったのは。

「……は？」

桜高のマラソン大会歴史上に残る事件発生。
…いや、ハプニングだな。

第百四話（後書き）

水本君はおもしろい子。

第百五話（前書き）

第一回　私立桜ヶ丘高等学校マラソン大会編完結です。

第百五話

「お姉ちゃん…　どこにいるんでしょうか…？」

「それが分かりゃ、マラソンコースを逆走なんてしてねェよ…」

『せっかくゴールしたのに』という愚痴は口には出さずに飲み込む。吐き出したいのだが、いかんせん隣を歩く平沢妹の表情が、絶好のマラソン日和の本日の秋晴れとは正反対に、さながら曇天のように曇っているからだ。

鈴木から平沢行方不明事件の顛末を聞き流すことは叶わない程に、中野と平沢妹が必死に俺に協力を要請するように肩を掴んで脱臼の勢いで揺らすもんだから疲労が消えた身体を駆使し、現在俺と平沢妹は軽音部の天然ギタリストを捜索している最中。

余り事を大きくするのは得策ではないという眼鏡生徒会長の判断で、教師には事件の事を伝えず、俺と平沢妹、真鍋と中野の二手に別れて捜査することに。

ちなみに秋山達から早耳に俺達に伝えた鈴木は、必死に走ってきたことにより、元から不足していた体力（本人談）が完全に空になり、回復するにはかなりの時間を要するとのことで、桜高で身体を休めている。

そして俺と平沢妹はチェックポイントの公園まで戻ってきていた。

「…とにかく秋山達と合流してお前の姉貴がどこでいなくなったな

りの事を聞かねェと、見つかるもんも見つからねェぞ」

詳しくそれを知らなければコースのどこを重点的に捜索すればいいか分からない。
コースの隅々まで捜すなど、不効率なことこの上ない。
所詮地元のマラソンコースだと侮るなかれだ。

「そうですね…」

「……」

覇気なさげに隣を歩く平沢妹の普段では滅多にお目にかかれない曇った表情になるのは当然だろ。
なんせコイツは姉大好きなシスコン。
言わば我が身より大切な宝のような存在の姉が行方不明だなど、その心中を察するに容易い。
要は心配なんだろう…

「俺の分のお汁粉…」

「え…？」

対する俺は『地元で行方不明など、さすが天然は鮮度が違う』とい

うどこか軽い気持ちで平沢を捜索していたが、反面やや心配ちゃ心配な気持ちもどこかにはある。

だが…見るからに心配で堪らない表情の平沢妹を見てしまうと、下手なことは考えれない。

「…お前の姉貴にやる予定だからな、さっさと見つけて帰らねェと他の連中に食われる」

「咲也さん…」

「だから、ンな暗い顔すんな…」

ガラじゃないと自分自身が分かってるし知ってる。
それに甘美な和風デザートは全校生徒一人一人分を確保されているらしいので、誰かに食われる可能性は無いに等しい。
しかし、そんな分かりきったことで俺なりにコイツを励ましてやったんだ。

「はい！お姉ちゃんはお汁粉楽しみって言ってました！」

「…アイツにしてみたら、旨かったら何でも良いんじゃねェのか？」

「クスッ　あながち間違ってないかもですね」

笑顔を見せてるんだから、ガラじゃないことをしたなんて思わず、少しでも不安を取り除くことが出来たと思う方がこの場合は正しいのかもな。

しかし…その笑顔は心なしか無理をしているかのようにも思えた。

……

前傾姿勢で顔を上げて必死に坂を走って（歩いて）まだゴールしていなく、何故逆走しているのかと怪訝そうに見てくる連中を横目に俺と平沢妹は心臓破りの坂を徒歩で下っていく。

その途中に西野と元の状態に戻った水本に遭遇し、平沢の所在を尋ねたが首を横に振られた。

時折に平沢妹が姉を呼び掛けるが返ってくるのは桜高生徒の足音と雑音ばかり。

坂を下りきり小さな小川に架かる橋まで戻ってきた時に、俺と平沢妹の耳にそれは聞こえてきた。

「お〜い！ゆ〜い！」

「唯ー！」

「唯ちゃ〜ん！」

三つの声の主が誰だか一目瞭然…一耳瞭然な俺と平沢妹は顔を見合

って歩を進める。

「みなさ～ん！」

「……」

橋の上には三人の人影。

そんな人影に平沢妹が手を大きく振って呼び掛けながら（俺はポッケに両手を突っ込んでダラダラと）近付くと、平沢を絶賛捜索中の三つの声の主である田井中と秋山と琴吹が一斉に振り返る。

「咲也君に憂ちゃん」

「純ちゃんから聞きました。お姉ちゃん見つかりましたか？」

「いや…　私達も捜してるんだけど…」

難しい表情で続く言葉を紡がない秋山の態度で、塩梅が悪いと十分に判断できる。

「…お前ら一緒に走ってたんだろ？どこでアイツがいなくなったか見当もつかねェのか？」

「気付いたのは坂を上りきって佐々木…じゃなくて、鈴木さんに言われてからだったからな～…」

「唯ちゃん。私達の後ろで走ってたから、いついなくなったか分からないの…」

「はぁ…」

どこぞやの神出鬼没のライセンス会得者の担任兼顧問じゃあるまいに、音も無く消え去ったなんて有り得ないのだがな…

「…つまづいて転んだなり、それなりの音や気配はなかったのか？」

「う～ん…　歌とか歌って走ってたから、そんなのに気付く暇なかったと思う」

「歌？」

腕を組んで思考を巡らせた田井中がもたらしたワードに引っ掛かり、問い返す。

「唯があまりにもキツいって言うから、気分を盛り上げるために歌

を歌って～って澪が言うから」

「歌を歌うって言ったのは律だろ？私は軽音部らしくリズムを生かして走れば良いって言ったんだ」

「ンなことどっちだって良いんだよ…」

何やら責任のなすり合いを開始したが、小事になずみ大事を忘却しかけている田井中と秋山をバッサリ斬り捨てる。

「そういえば…」

すると平沢消失に何か思い当たる節があるらしい琴吹がポニーテールを揺らしてグルリと辺りを見渡す。

「この辺りってＵＦＯの目撃情報があるって聞いたことがあるわ」

「……」

たまに思うが真剣な表情をして、だからどうした的な発言をするコイツも天然なんじゃないだろうか？

平沢程ではないにしろだ。

「もしかして唯のやつ、ＵＦＯにキャトられたんじゃ！」

「「えぇっ！」」

「信じんな…」

真剣なのかどうか不明な田井中の見解に秋山と平沢妹が顔を青くして身震いをする。

「いや、分からないぞサク。ＵＦＯの目撃情報があるってことは唯がキャトられた可能性は十分にある…！」

「そんな眉唾物で非科学的な現象が度々発生してたら、今頃神隠しの都市伝説でも流れてんだろ…」

「唯がその第一号に…！」

「咲也君。キャトるって？」

「帰ったらキャトルミューティレーションで検索してみろ…」

ＵＦＯの存在をほのめかした琴吹だったが知識は浅かったようだ。

とりあえず何故か平沢捜索から現実主義者の俺からしてみれば考えるのもアホらしい話題に軌道が脱線してしまったので、これからの捜査をどうすれば良いか思考する。

手っ取り早いのは平沢のケータイに連絡をすれば良いのだが、マラソンをするにあたってケータイを身に着けてはいない筈。

現に俺のジャージのポッケにはケータイはない。

ならば、手当たり次第に人海戦術の要領で…はナシだな。

五人じゃ効率悪過ぎるし、他の連中に協力を仰ごうにも真鍋曰くの事が大きくなって下手したら警察沙汰だ。

「とにかく、みんなバラバラに別れて付近を見て回ろう」

思考の海を遊泳していたら、いつの間にか軌道修正されたらしく、秋山がリーダーシップを発揮する。

五人だけの人海戦術は非効率だが、この際仕方がない。

「…平沢がいなくなったのに気付いたのは坂を上りきった所だったな？」

「うん」

琴吹が頷く。

「…だったら坂から公園と、橋から田園地帯付近まで範囲を限定して捜索だ」

「んじゃあ十分ぐらいしたら、またここに集合な。みんな！くれぐれもＵＦＯにキャトられないように！」

「はぁ…」

いまいち緊張感が感じられない田井中の号令にため息一つ。
まぁ、コイツなりに少しでも明るい空気にしようとしてるんだろう。

「お姉ちゃん…」

「……」

特に平沢妹にために。
再び暗い表情になった平沢妹を一瞥して、俺は一番遠い公園へ足を向けた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　平沢　憂】

「お姉ちゃん…」

さっきから私の口から出る言葉は、お姉ちゃんのことばかりです。
咲也さんに励ましてもらったけど、それでも不安は拭えないままに私は上り坂近辺を捜します。

「お姉ちゃーん！」

幾ら呼び掛けてもお姉ちゃんの声は聞こえてきません…
段々と不安な気持ちが大きくなってきた私は、ふと眼に入った家々の間の小さな路地に、わき目も振らずに足を動かして進みます。

（あれ？ここって…）

進んでいく内に何だか懐かしい気持ちになってきた私は『もしかして』と思い、歩いていたスピードを上げて早足で進んでいきます。

「あ…」

路地を抜けて開けた先の風景に一度足を止めて周囲を見渡しました。
そこは住宅地で、私のよく知る家が沢山軒を連なっています。
そしてハッとした私は藁にもにすがる思いで走り出して一軒の家の前に足を止めました。

「おばあちゃん…」

左には私の家の平沢家。
目の前には【一文字】と書かれた表札。
この家は私とお姉ちゃんと和ちゃんが小さい頃から今もお世話になってる、お隣のおばあちゃんの家です。

私が路地を抜けて辿り着いた場所は、私とお姉ちゃんと和ちゃんが住んでいる住宅地だったんです。
あの路地は小さい頃よく三人で通っていた秘密の道。
公園へ続く近道を見つけたって言ってた小さなお姉ちゃんの姿を思い出しました…

（もしかしたら…ここにお姉ちゃんが…）

逸る気持ちを抑えてインターフォンに指を置いた瞬間…

「ふぉ〜っ！茶柱が立ってるよ〜」

「あらぁ。今日はきっと良いことがあるわよ、ゆいちゃん」

（お姉ちゃんっ！）

確かに聞こえてきたお姉ちゃんとおばあちゃんの声に、インターフォンも押さずに邸内に足を踏み入れて庭に回って縁側に向かいます。

そこには…

「あれ？憂？」

「あらあらぁ。どうしたのういちゃん？そんなに慌てて」

「お姉ちゃん…　おばあちゃん…」

開け放たれた襖の先の居間に、お姉ちゃんとおばあちゃんがいました…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

一概に否定できない可能性が微妙に浮上してきた。

「妹まで行方不明かよ…」

体内時計を頼りに田井中の命令通りに十分で捜索を打ち切り、橋に戻ったがしかし、いつまで経っても平沢妹が姿を現さない。
俺が橋に戻った時には田井中と秋山と琴吹の姿が既にあり…

「唯先輩も憂もどこに行ったんでしょうか…？」

「唯はともかく、憂までも時間を守らないっていうのはおかしいわね」

中野と真鍋の姿もそこにはあった。
秋山曰く平沢を捜索していたら中野と真鍋が俺達の首尾を窺いにきたらしい。

「まさかホントに憂ちゃんまでキャトられたってことは…」

「…姉の方もそうなったことを前提で話を進めんな」

田井中の冷や汗混じりの発言に一応ツッコんでおくが、こうも平沢姉妹の神隠し現象に遭遇してしまうと否定の『ひ』の字も中々に口に出せないのが現状。

「唯ちゃんも憂ちゃんも、本当にどこに行ったのかな…？」

琴吹がこの場にいる全員の心中を代弁するように心痛な面持ちで口を動かす。

タダのマラソン大会がまさかの遭難・消失・消息・行方不明事件に発展したことに、何やら場の空気がお通夜並に暗くなっている。そんな中、俺は次なる一手を暗中模索しようと思考の海に片足を突っ込んだ時に、隣にいる秋山が話し掛けてきた。

「ねぇ、咲也…」

「あン？」

「やっぱり先生達に伝えた方が良くないか…？」

「そうだよな…　さわちゃんには言ってあるけど、澪の言う通りだと私も思う」

「……」

確かにそうなのかもしれない。
片足を突っ込んでいた思考の海に潜るが、妙案な打開策はこれといって思い付かない。
つまりどん詰まりだ。

それに、いつまでもこの橋の上で手をこまねいていても一向に光明の兆しは見えてこないので、恐らくこの場にいる俺達六人の中で最も統制力がある真鍋に『どうする？』という視線を投げる。

「この場所って…」

すると俺からの視線を見事にスルーして、何かを捜すようにキョロキョロとあちらこちらに視線を泳がせ、最後に一つの場所で視線は落ち着いた。

「律。憂はどこを捜してたの？」

「へ？えーっと…私が坂の下の方を担当してて、憂ちゃんはその上だったけど」

「唯がいなくなったのに気付いたのは坂を上りきった所なのよね？」

「うん。最初に気付いたのはその辺りだけど…」

「…何か分かったのか？」

視線の先には心臓破りの上り坂。
そこに身体を向けたまま、田井中に意味深な二つの質問をした真鍋に疑問を抱いた俺の問い掛けに、真鍋は振り向いてこう言った。

「分かったわ。唯と憂の居場所が」

と。
日差しに反射した眼鏡がキラリと光り、さながらどっかの迷探偵より名探偵だと思った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　平沢　憂】

『あれ？憂？』

不思議そうに首を傾げるお姉ちゃんの言葉に…私は耐えきれませんでした…

「ッ！お姉ちゃんっ！」

「うわぁっ！」

居間に座っていたお姉ちゃんが立ち上がって、縁側に歩いてきたところで私はお姉ちゃんに思い切り抱き付きました。

私が突然抱き付いたことでバランスを崩したお姉ちゃんと私はそのまま居間に倒れ込んで…

「うぅ…ぅ…」

「ど、どうしたの？どこか痛いの？」

「良かった…ヒック…お姉ちゃんが無事で…」

「え…」

お姉ちゃんの胸の中で涙を零しました。

お姉ちゃんの無事な姿を確認したら安心して…
とめどもなく涙が溢れて…

「…ヒック…みなさん…心配してたんだよ…ヒック…お姉ちゃんがいなくなったって…」

「ぁ…」

「和ちゃんや…咲也さん達が…お姉ちゃんを捜すために…一生懸命に…」

「……ごめんね憂。心配かけちゃって…」

「ううん…ヒック…お姉ちゃんが無事だから…」

「でも…ごめんなさい」

お姉ちゃんの胸に顔を埋めているから、お姉ちゃんがどんな表情をしてるか分かりません。
でも、お姉ちゃんの声からは本当に申し訳ないっていう反省の色を感じます。

「憂。もう泣かないで」

優しく頭を撫でられるのって久しぶりに感じて…
ギー太を弾いてるお姉ちゃんの手はとても温かくて…
お姉ちゃんがいるって感じれて…

「うぅ…ヒック…」

私の涙は止まりません…

お姉ちゃん達が修学旅行に行ってる時に、梓ちゃんに言われたことがあります。

『憂は唯先輩に甘い』

桜高に入学する前に、和ちゃんに言われたことがあります。

『あんた達、生まれてくる順番間違えたんじゃないの?』

でもね?梓ちゃん。
私はお姉ちゃんのお世話をするのが大好きなの。
お姉ちゃんの笑顔を見ると私も幸せになるんだよ。

でもね?和ちゃん。
お姉ちゃんは私のお姉ちゃんなの。
今、こうして私を慰めてくれて、優しく頭を撫でてくれるお姉ちゃんは私の大好きなお姉ちゃんなんだよ。

「ゆいちゃん。早速良いことがあったわねぇ」

「え？」

「ういちゃんが甘えてるじゃないの。ねぇういちゃん」

おばあちゃんのゆっくりとした口調に少し恥ずかしかったけど、私は久しぶりにお姉ちゃんの胸の中で涙を零しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

『……』

俺達の目の前には【一文字】と表札にある、趣があり和風な一軒の家。
そこから漏れてくる平沢妹の泣き声に、誰しもが何も出来ないでいる。

平沢姉妹捜索隊の俺達は真鍋に連れられて着いたのは、心臓破りの

上り坂の中腹より少し上に建ってある家と家の間にある小さな路地。

『和先輩。ここは？』

『この先に二人はいるわ』

『…根拠あんのか？』

『根拠はないけど自信はあるわ』

『その自信はどっからきてんだよ…』

『この路地は昔、唯が見つけてね？私と唯と憂の秘密の道なの』

『秘密の道…ですか？』

『秘密っつうか、犬猫の通り道だろ…』

『サク、うるさい』

『あぁん？』

『二人共、こんな時に喧嘩するなって』

『坂の先に公園があるでしょ？小さい頃はよく三人で遊びに行ってたの。今まで忘れてたけど、この路地の先には平沢家があって近道になってるのよ』

『あ！じゃあ唯ちゃんと憂ちゃんは自宅に？』

『ううん。多分、とみおばあちゃんの家にいるんだと思うわ』

『『とみおばあちゃん？』』

『ほら。期末テストの後に唯と梓ちゃんが出場した演芸大会があったでしょ？唯が出演する切っ掛けになったおばあちゃん。澪と律は覚えてない？』

『『あ…！』』

『…あのばあさんの家にアイツらがいんのか？』

『さっきも言ったけど根拠はないわ。でも自信はある』

理解不能な真鍋の自信を、今は行き詰まった現状打破の突破口にして真鍋を先頭に俺が最後尾に突き進む。
路地は一本道で人一人が通るのがギリギリな幅だった。

『でもさ和。なんで唯と憂ちゃんは、そのおばあちゃんの家にいるんだ?』

『とみおばあちゃんは私達が小さい頃からお世話になってて。私は最近行ってないから何とも言えないんだけど、家が隣の唯と憂にとっては居心地が良いみたいね』

『…つうか、そもそも平沢が何でいなくなったのかを判明しねェと…釈然としねェままあやふやに終わらせんなよ』

『それは唯先輩に聞いてください。今はとにかく先を急ぎましょう』

『そうだな。早く唯と憂ちゃんを見つけないと』

『あ、出口~』

真鍋の言った通り、そこは平沢家の付近。
半信半疑に足を進めて辿り着いた一文字家（ばあさんのフルネームは『一文字　とみ』というらしい）

真鍋がいざインターフォンを押そうと指を伸ばした時に、平沢妹のしゃっくり混じりの安堵な泣き声が聞こえてきた。
つまり無事に平沢を発見した。
どうやら真鍋の根拠のない自信は的中したようだ。

「……」

「あれ？サク。どこ行くんだよ？」

「すぐそこだ…　誰だって泣き声なんて聞かれたくねェだろ」

「ん…そーだな。みんな」

踵を返した俺に田井中が疑問符を浮かべるが、納得したように頷いて秋山達に目配せをする。
その意図を汲み取った秋山達も一文字家から移動開始。

程なくして頃合を見計らった真鍋が、今度こそ一文字家のインターフォンを押し、来客を告げる。

「はいはい。あらあらぁ。沢山のお客さんねぇ」

玄関の扉から例のばあさんが顔を覗かせ微笑を浮かべる。

「お久し振りです」

「あら！のどかちゃん」

「私達、唯と憂を捜してるんですけど、ここにいますか？」

先程の平沢妹の泣き声で確定なんだが、そこには敢えて触れずに真鍋が生徒会で身に着けたのか、元来からなのか、サラリーマンの営業のように微笑む。

「えぇ。いるわよ」

『ちょっと待っててねぇ』と俺達に告げてばあさんが家の奥に消え、代わりに平沢姉妹が姿を現した。

「いや～…　あははは…」

見た目すこぶる元気な平沢がばつが悪そうに頭をポリポリとかきながらぎこちない笑みを浮かべて、俺達の前に立ち、背筋を伸ばして…

「心配かけてごめんなさい！」

腰を九十度の直角に折り、深々と頭を下げて謝罪。
姉の隣に立った瞳が充血している平沢妹も『どうもすいませんでした』と頭を下げる。

「全く～！本当に心配したんだぞ～！」

「そうですよ！私達あちこち捜したんですよ！」

「ほ、本当にこの度は申し訳ございませんでした！」

「まぁまぁ、りっちゃん、梓ちゃん。唯ちゃんが無事に見つかったんだから」

「まぁ、こんなことがしょっちゅうあったら困るけどな」

「りっちゃん、あずにゃん、ムギちゃん、澪ちゃん、本当にごめん

なさい！」

一度顔を上げた平沢が、田井中と中野と琴吹と秋山を見たあとに再び深く頭を下げる。

「サッくん…」

「あン？」

すると後方で事の成り行きを腕を組んで静観していた俺に、秋山達の時とは打って変わっておずおずと顔を上げる。

「お、怒ってる？」

「あぁ？」

「だ、だってサッくんさっきから何も言わないから…」

「……」

「だから、怒ってるのかなって…」

そんな態度を取った覚えはないが、気まずそうに視線を泳がせる平沢の眼にはそのように映ったらしい。

「はぁ…」

とりあえずため息を吐いて、組んでいた手を解き、ジャージのポッケに突っ込む。

「怒ってると言えば怒ってるし、怒ってねェと言えば怒ってねェ…」

「えっと…　どっち？」

「その都合の良い頭で、都合良く解釈しとけ…」

「ぁ…　うん♪」

何をどのように都合良く脳内変換したのかは平沢にしか分からないが、満面の笑顔で頷き、頭を上げて姿勢を正す。

「それで、どうして途中でいなくなったの？」

「あ、それはね…」

真鍋の言葉に平沢からの返答を聞いて、やはりそんなことなど有り得なかったと思い改めた。

「途中で転んで足を少しすりむいたところに、ちょうどおばあちゃんが通りかかって、それで…絆創膏を貼ってもらったついでに…きゅ、休憩を…」

「はぁ…」

額に手を当て深いため息を。

僅かながらも微妙にＵＦＯ云々を考えた自分に呆れるが、平沢の行方不明の真相にも呆れる。

「…休憩とかしてる暇があったら走れよ」

「うぅ…！やっぱりサッくん怒ってる？」

「大丈夫だ唯！サクの不機嫌顔はいつものことだから♪」

「…ばあさんから裁縫道具借りてお前の減らず口を縫ってやろうか？」

「発想が怖いって！」

「クスッ」

俺と田井中のくだらないやり取りを聞いていたのだろう。
瞳を充血させた平沢妹が小さく笑う。
その笑顔こそ無理などしていない本来の平沢妹の笑顔。

「じゃあ唯も見つかったから、私達は学校に戻りましょ」

「はい。純に唯先輩が無事だったって伝えなきゃだしね？憂」

「うん！そうだね」

「じゃあ自由解散っつうことで…」

「待ちなさい咲也。学校じゃなくて家に戻る気でしょ？」

「…ワリィか？」

「悪いに決まってるでしょ…」

わざわざ桜高に戻らずに、ここからの方が我が家は近いので、二度手間防止を生徒会長に立案したが、あっけなく却下された。

「ていうか着替えとかどうするんですか？」

「…ンなもんアホに持って来させる」

「そんなこと言ってないで、学校に戻るわよ」

「行きますよ。サク先輩」

「はぁ…」

歩き始めた真鍋に、中野が触発されてどこからそんな力があるのか、俺の背中をグイグイと押していく。

所詮叶わぬ望み（自由解散）を願ったとて望み薄なのは分かりきっているので渋々足を動かす。

「では、みなさんはゆっくりゴールしてください」

「あ、待って憂」

「え？」

「帰ったらおばあちゃんに貰った栗ようかん一緒に食べよ？」

「ぁ、うん♪」

「終ったらお汁粉が待ってるのに、その上栗ようかんまで食べるのかよ」

「そうだ！お汁粉！……あぁーっ！」

「どうしたの？唯ちゃん」

「私がさわちゃんから貰ったお餅食べちゃったから、お汁粉のお餅が一つ足りなくなって…！」

「きゅ、急にどうしたんだよ？」

「う～ん…　やっぱり唯はＵＦＯにキャトられたのか…？」

「咲也君が言ってたけど、キャトルミューティレーション…だったっけ？」

「だから！ビリの人にはお餅がないってことに…！」

「あぁっ！私達今ビリじゃないのか！？」

「まぁ良いじゃん別に～」

「みんなで仲良くゴールすれば良いじゃない、ね？澪ちゃん」

「でも…目立つしな…」

「お餅ーっ！」

「ってコラー！唯！勝手に行くなーっ！」

「ビリは嫌だーっ！」

「あ、待って～！」

ダッダッダッダッ…！

「あらあら。若い人は元気ねぇ」

――――――――――

マラソンを既に終えている筈なのだが、まさかのセカンドチャレンジを行い（ばあさんの家から桜高まで走った）辿り着いた桜高の校庭の簡易テントに足を向ける。

そこで絶賛体力回復を行っていた鈴木に平沢帰還の旨を伝えるとホッ胸を撫で下ろしていた。

『あれ？憂、眼が赤いよ？どうかしたの？」

『う、ううん！何でもないよ！それよりお汁粉食べよ？』

こんな会話が成されていたが、俺と真鍋と中野は何も口を挟まなかった。

そして俺は再び長イスに寝転がった。

『咲也。また寝るの？』

『集合がかかったら起こせっつったろ？さっきは中野にデカい声で起こされるし、結局平沢はばあさんチで休んでたし、挙句の果てにまた走らされたし…
踏んだり蹴ったりだ…』

『サク先輩にとってマラソン大会は愚痴をこぼすものになっちゃいましたね…』

『はぁ…　ホント咲也って音楽以外は不真面目なんだから…』

愚痴を全編真鍋と中野にぶつけ、瞼を閉じる。
そして次に眼を覚ました時は…

「あ、おはよ～♪サッくん♪」

開眼一番に平沢のデフォルトボイスにニコニコ笑顔が出迎えてきた。
身体を起こし、周囲を見回すと俺の横に平沢がちょこんと座っており、その横に琴吹、田井中、秋山の順に座っていた。

「…お前らゴールしたのか？」

「うん♪ついさっきだよ♪」

「ま、ビリだったけどな」

「やっぱり目立ってしまった…」

「元気出して澪ちゃん。ほら！お汁粉～♪」

「…アイツは何で落ち込んでんだ？」

「澪はゴール寸前で転んだからな。それを全校生徒に目撃されて、落ち込んでるんだよ」

「うぅ…　恥ずかしい…」

「ねぇねぇサッくん」

「サッくん言うな」

両手で真っ赤に染め上げた顔を隠した秋山を一瞥すると、デフォルトのキャチボールをした平沢が、両手に持っている甘美な和風デザートを俺に見せてくる。

「憂と和ちゃんに聞いたんだけど、サッくんの分のお汁粉、私にくれるの？」

「だからお前が二個持ってんだろ？それが答えだ…」

「エヘヘ♪ありがとうサッくん♪やっぱり優しいね～♪」

「うるせェ…」

「唯にやるって言えば良いのに、全くサクは素直じゃないよな～」

「…だからうるせェっつってんだろうが」

「そういえば…」

すると琴吹が思い出したかのように辺りを見渡したあとに口を開く。

「さわ子先生は？」

『あ…』

こうしてハプニングがありながらも、俺達三年にとって最初で最後のマラソン大会はその幕を閉じた。

「すっかりさわちゃんのこと忘れてたな…」

「今度はあの人が遭難か…」

「勝手に決め付けるなって咲也」

「そういえば修司君もいないね？」

「さわ子先生も修司君もどこいったのかしら？」

「…あのアホなら天変地異が起きようとも、その内帰ってくんだろ」

「私がさわちゃんと修司君を捜して来よっか？」

「「止めろ唯！」」
「…ゼッテェ行くな」
「あはは…」

「し、しどいよみんな…」

「お前が行ったら足手まといだ…」

「ガーン！」

「容赦ないな…サク…」

――――――――――

同時刻。雑木林にて。

「唯ちゃーん！どこにいるのー！お汁粉なくなっちゃうわよー！」

ガサガサ…

「はっ！唯ちゃん！？」

「おぉ！人がいた！つうか先生じゃないッスか！」

「か、影宮君？どうしてこんな所にいるの？」

「いや～　俺の走る姿を見せて咲也にやる気を出させようと一心不乱に走ってたら、あら！びっくり！気が付けばこんな所に」

「そ、そうなんだ…　とりあえず影宮君は早く学校に戻りなさいね？私はやることがあるから」

「戻りたいのは山々なんスけど…　ここどこッスか？」

「どこって……あれ？ここどこかしら…？」

「えぇッ！咲也ーッ！ヘールプッ！」

第百五話（後書き）

実際に大切な人が行方不明になると心配で堪らないと思います。
憂にとっては唯が本当に大切な人ですからね。

第百六話（前書き）

中野　梓による先輩考察です。

※今回は全編梓視点です。

第百六話

本日九月六日月曜日。

「一昨日、バレー部で練習試合があったんだけど、三花先輩とアカネ先輩とエリ先輩がすっごくかっこよかったんだよね～！」

「それならウチの矢野先輩だって負けてねぇぜ？ジャンプ力ならバスケ部イチでリバウンドの鬼だ！」

「バスケよりバレーの方がかっこ良いよ。ね？中野さん」

「え？そ、そうだね」

放課後の教室で掃除当番の私は、掃いていた箒を止めて二岡さんにとりあえず頷く。

「バッカ。男ならバスケだろうが」

「私達は花も恥じらう乙女だも～ん」

「林原！お前なら分かるだろ？」

「…ぼ、僕は…詩吟部だから…」

「振る相手間違えたか…」

野久保君が勢いを削がれたように林原君に指していた指をゆっくり下げる。

「でも、ホントに先輩達かっこよかったな～…！三花先輩のレシーブにアカネ先輩がトス！そして最後にエリ先輩がアタック！ボールは相手に触れずにそのままコートを叩いた！」

「矢野先輩のリバウンドはマジでパネェぞ？垂直跳びで軽く二メートルはいくな」

「その人ホントに人間？ていうかそれしかできないの？」

「バッカ！バスケはチームプレーなんだよ。一つの得意技を徹底的に磨いたら一流選手になれるんだよ。まぁ、確かにドリブルやシュートは俺の方が上手いが、リバウンドはマジでパネェ」

「それはもう分かったから、早く掃除終わらせようよ」

「…な、中野さん…塵取り取ってください…」

「あ、うん」

二岡さんと野久保君の会話を聞いていたら、いつの間にか一人でゴミを集めた林原君が私の足元にある塵取りを指差す。
塵取りを取って林原君に渡したら二岡さんが私に振り向いた。

「そういえば中野さんって軽音部だったよね？」

「うん。そうだよ」

「軽音部ってどんな先輩がいるの？」

「俺が知ってるのは桐島先輩だな。去年の軽音部のライブで一際輝いていた」

「私は秋山先輩。美人でクールって感じがしてかっこいい！」

（やっぱりサク先輩と澪先輩は人気だな～…）

いつか律先輩が言ってたけど、軽音部の二枚看板はサク先輩と澪先輩だって。

…当の本人達はそんな気は全然ないんだろうけど…

「ね、中野さん。軽音部の先輩ってどんな人なの？」

「どんなって言われても…」

改めて考えると、どう答えたら良いか悩む。

個性的？…確かにそうだけど、個性的過ぎるしなぁ…

協調性がある？…いや、約一名単独行動をする先輩が…

しっかり者？…う～ん…そうだったら行方不明なんてならない先輩が約一名…

「「？」」

中々口を開かない私に二岡さんと野久保君が不思議そうな顔をして首を傾げる。

「ご、ごめん。なんて言ったら良いかちょっと分かんない…」

「え?あ、ううん!何か私もごめんね?中野さんを悩ませちゃったみたいで」

「ちなみにお前の先輩は?」

「…ぼ、僕の先輩は…兄なんですけど…僕と違って詩吟が上手いです…」

「へ?お前兄貴いんの?」

「…は、はい…」

「中野さん。今度また軽音部のこと教えてね?」

「あ、うん」

と、二岡さんに頷いたけど…

――――――――――

（先輩かぁ…）

掃除を終わらせて部室への階段を上がりながら二岡さんの言葉を思い出す。

『軽音部ってどんな先輩がいるの？』

今までそんなこと聞かれたことなかったし、『どんな』って形容しづらい質問も初めてだったから、答えることができなかった。

「唯先輩にサク先輩に澪先輩に律先輩にムギ先輩…うん！」

良い機会だからこれを機に改めて先輩達のことを知ろう。
それに、先輩達のことを聞かれて答えられなかった自分に悔しいし。

「ふんすっ！…何か唯先輩みたい…」

気合いを入れようと両手を握り締めたけど、これは唯先輩の専売特許。
周りに誰もいなくて良かった…
まぁ、いる筈ないんだけどね。
だって私がいる場所は部室の前。
放課後のこの場所に用がある人なんて軽音部の関係者ぐらいだもん。

（だからといって先輩達に見られていいってことじゃないけど…）

そんなことを思いつつ、部室のドアノブに手を置いて扉を開いたら…

「わぁ～！」

「え…？」

何故か満面の笑顔を浮かべたムギ先輩が両手を突き出して部室から一歩踏み出してきた。
いきなりのムギ先輩の行動が理解出来ない私は暫く硬直していた。

【ケース１　ムギ先輩】

「あれ？梓ちゃん、びっくりしなかった？」

「……え？あ、はい」

ムギ先輩のその声でハッとした私は、とりあえず訳を聞こうとムギ先輩に口を開いた。

「ムギ先輩。何してたんですか？」

「へ？あ、うん！誰か来たら驚かせようと思って～
そしたら外から梓ちゃんの気合いが入った声が聞こえたから、梓ちゃんを驚かせようとしたの～」

「き…」

（聞かれてた～！）

恥ずかしい！凄く恥ずかしい！
きっと今の私の顔は真っ赤になってるんだろうな…
そんな顔をムギ先輩に見られたくないから、私は顔を俯かせる。

「どうしたの？」

「い、いえ…ちょっと時間が必要なだけです…」

「え？」

不幸中の幸い。
聞かれてたのがムギ先輩で良かった…

律先輩だったら絶対にいじってくるもん…

深く深呼吸をして、顔の熱が引いたのが分かった私は顔を上げてムギ先輩に向き直る。

「あっ！わぁ～！」

「いや、あの…」

その瞬間、またムギ先輩が両手を突き出してきたけど、何かその仕草が可愛いと感じるだけで…

「驚かせるって聞いた後じゃさすがに驚けませんよ」

別にびっくりはしないです。

ていうか驚かせようとするなんて、何か可愛いこと考える人だなぁ…

けどムギ先輩には私の言葉がショックだったみたい。

「ショボ～ン…」

「あ…！」

見るからに落ち込んでいた。

「わ、わー！びっくりしたなー！もー！」

「ホント？」

「は、はい！」

「やったぁ～♪」

よっぽど嬉しかったみたいで、いつも以上の笑顔で両手を握り締めるムギ先輩。
ホントは全然驚かなかったけど、ムギ先輩が喜んでくれたみたいで、ホッと胸を撫で下ろす。

（そういえば…）

確か、去年の十一月頃にもムギ先輩がこんな風に驚かせてたっけ。
あの時は部室の扉を開けた瞬間に猫だましの要領で私の目の前で両手を叩いたムギ先輩。
それに驚いた私の反応に…

『やっぱり咲也君天才！』

『…お前の中じゃ天才の価値が随分軽視してるみてェだな…』

こんな会話をサク先輩としてたけど、結局アレって何だったんだろう？

「ところでムギ先輩。唯先輩達は？」

深く考えても仕方ないから、まだ部室に入ってない私は喜んでいるムギ先輩と一緒に部室に入ったら他の先輩達の姿がないことに疑問を抱いた。

普段は私が部室に一番乗りなんだけど、今日みたいに掃除当番で遅れたら大抵は五人の先輩の姿がある。

けど、クラスが同じなムギ先輩だけがいるって、何か用事があるのかな？

「唯ちゃんと咲也君は職員室に用事があって、澪ちゃんは日直の仕事があって、りっちゃんは家庭科の課題を居残りでやってるの」

「そうですか…」

全員集まらないと練習できないしなぁ。

仕方ない。自主練でもしよう。

そう決めた私は鞄を置いてギタースタンドに立て掛けてある、むっ

たんに向かう。

「ねぇ梓ちゃん」

「はい？」

むったんのネックに手が触れた途端にムギ先輩が何かを期待するような表情で近付いてきた。

「ギター弾くのって難しい？」

「そうですね…」

そこで言葉を区切って、ふと考える。
それはギターの事じゃなくて、ムギ先輩の事。
もしかしたら…

「弾いてみます？」

私の直感が正しかったら、ムギ先輩はギターに興味があると思う。
だってたまにサク先輩のテレキャスターとアコギを眺めてるし。

「え！良いの？」

「はいっ」

「わぁ～♪ありがと～♪」

私の直感は正しかったみたい。
満面の笑顔を見せるムギ先輩につられて私も笑い、むったんを持ち上げてストラップをムギ先輩の肩にかける。

「前にりっちゃんが唯ちゃんのギターを弾いてたでしょ？あれ見てたら私もギター弾いてたみたいなって思ってたの♪」

「だからサク先輩のギターを見てたんですね」

「えっ！何で知ってるの？」

「分かりますよ。だって私が座ってる席は部室全体を見渡せるんですから」

「そっかぁ。ありがとう梓ちゃん。一度で良いからギターを弾くの

が私の夢だったの♪」

「ムギ先輩って夢がいっぱいあるんですね」

「うん！バイトに、みんなでお泊まりに、クリスマス会に、キャンプに、屋台の焼きそばを食べることに、ガラガラを回してポケットティッシュを当てるのに、叩かれたいし、それから…」

「クスッ」

一つ一つ指を折り曲げて、ムギ先輩にとっては大きな夢を語っている姿が何だか可愛くて小さく笑う。

ムギ先輩って眼がパッチリしてて素敵だし、色白さんだし髪も綺麗で美人なお嬢様。
でもそういうのを忘れちゃうくらいムギ先輩はおっとりしてる。

【結論　ムギ先輩は可愛い人】

……

♪…♪…

「こう？」

「はい。ちゃんと音出てますよ」

「ふふ♪何だか唯ちゃんと咲也君みたい♪」

「唯先輩とサク先輩ですか？」

「うん。私達が一年生の時に、まだ初心者だった唯ちゃんに咲也君が一生懸命教えてたの」

「へぇ～　そうだったんですか～」

「うん！あ、次は？」

「次はですね…」

普段、サク先輩が座ってる長イスにむったんを構えたムギ先輩を座らせて、ムギ先輩にギターレッスン。
とりあえずＥｍ、Ａｍ、Ｄｍ、Ｄの代表的なビギナーコードを教えたんだけど、ムギ先輩はアッサリ弾いてみせた。
多分、キーボードを弾いているから、滑らかに指が動かせてコード

チェンジもつまづかなかったんだと思う。

「みんな最初につまづくのがFっていうコードなんですけど…」

そして次に教えるのはFコードに代表されるバレー・コード。
一本の指で何本もの弦をまとめて押さえなきゃいけないから大変なんだよね。
Fの他にC、Am、Dmの代表的なフォームがあるけど、とりあえず今はFコードを教えよう。

「一弦から六弦までの一フレットを人差し指でまとめて押さえて、中指で三弦二フレット、薬指で五弦三フレット、小指で四弦三フレットを押さえてください」

「えーっと……こう?」

「はい。ではどうぞ」

「うん!せ~の!」

♪ペロロロン♪ペコ♪ペコン

Fコードを押さえたムギ先輩がストロークするけど何か三味線みたいで、こするような音が。

これはちゃんとコードを押さえられてない証拠。
でもムギ先輩は眼を瞑って『ん～！ん～！』って声を漏らして一生懸命ストロークしてるから、何だか注意できない。
逆にその姿が可愛いなって思ったら…

ガチャ

「あれ？ムギと梓だけか」

扉を開いた澪先輩がやってきた。

【ケース２　澪先輩】

「あ、澪ちゃん」

「お疲れ様です」

「うん。あれ？ムギ。梓にギター教えてもらってるのか？」

「うん♪一度で良いからギター弾くのが夢だったから♪」

「クスッ　ムギらしいな」

ムギ先輩にそう笑いかけた澪先輩は鞄を置いてベースを手に持つ。

「あ、練習ですか？」

「いや、エリザベスの弦を張り替えようと思って。それにまだ全員揃ってないからな」

「エリザベス…」

「あっ！」

澪先輩の発した言葉の一部に引っ掛かり、私が復唱すると『しまった！』という表情になって徐々に顔が赤くなっていく澪先輩。

「ち、ち、違うからな！えっと…ほら！唯が私のベースに勝手に名前付けたから仕方なく…！」

でもあの時、澪先輩嫌がってませんでしたか？
当然のように『エリザベス』って言ったところ、普段からそう呼んでるみたいですけど…

「澪ちゃん。エリザベスって良い名前だと思うわ～♪」

「いや…だからムギ…！」

「名前付けてるんだから、可愛がってあげなきゃ♪」

「うぅ…」

ムギ先輩の笑顔の発言に観念したかのように澪先輩はガックリと肩を落とす。
どうやら普段からそう呼んでるみたい。

「み、澪先輩！先輩はどうしてベースを弾くようになったんですか？」

これ以上は澪先輩が可哀相だから、とりあえず話題を変えようと咄嗟に思い付いたことを言う。
ムギ先輩はクラシックのイメージがあるからピアノやキーボードはぴったりだと思うけど、澪先輩はベースは勿論のことギターも似合う気がする。

「え？突然どうしたんだ？」

「いえ、ちょっとした興味本位と言いますか…」

私の突拍子もない質問に首を傾げる澪先輩だったけど、『そうだな…』と前置きをして語ってくれた。

「私がベースを弾く切っ掛けになったのは律なんだよ」

「律先輩が？」

「うん。中学生の時に律と一緒にライブＤＶＤ観てたら、触発された律がバンドやろうって」

「それでベースをですか？」

「律はギターをやろうって私に言ってきたんだけど…」

あれ？何だろ？心なしか澪先輩の顔がまた赤くなってきたような…

「ギ、ギターってバンドの中心って感じで…観客も自然と注目するだろ？
自分がその立場になるって考えただけで…」

ボフンッ！

「澪先輩！？」

「澪ちゃん！？」

まるで火山のように頭から煙を噴火させた澪先輩がフラッと倒れそうになるけど、私とムギ先輩で支えて難を逃れる。

「うぅ…　ていうか…前に話さなかったけ…？」

「あれは唯ちゃんと咲也君によ。まだ梓ちゃんは入部も入学もしてなかったから」

「私、初耳です」

「そ、そう？…とにかく私はギターよりベースが好きだから、ベースを弾いてるんだ」

「そうなんですか～」

何とも澪先輩らしい理由で納得の声をあげる。

澪先輩ってギターよりベースのイメージが強いからね。

まぁ、他の楽器を扱ってる澪先輩を見たことないから先入観でしか言えなんだけど…

「それに…」

すると、完全に立ち直った澪先輩がベースのボディを優しく撫でてニッコリと笑う。

「低くて深い音色とか、目立たずにみんなを支えてる感じとか、みんなに合わせてベースのライン作るのも楽しいし、飛び出し過ぎないように、でもみんなの音に埋もれないような、そんなベーシストで私はいたいんだ」

「澪先輩…」

前言撤回。
ギターとかドラムとかキーボードじゃなくて澪先輩は生粋のベーシストなんだ。
自分の世界をしっかり持ってる。
それってバレー・コードを弾くよりも難しいことなのに…

（すごいなぁ澪先輩）

「良いなぁ。ベースって澪ちゃんそのものって感じ」

「私、澪先輩のベース大好きです」

「うん♪私も～♪」

【結論　澪先輩は生粋のベーシスト】

「うぅ…　語り過ぎて…恥ずかしい…」

ちょっと訂正。

【繊細な生粋のベーシスト】

……

「律と唯と咲也はまだ来ないのかな？」

「そうですね」

「学園祭の曲、どうしようか？」

「私、バラードも良いかなって思います」

「バラードかぁ…良いな。あ、でもバラードっていったら私達の曲じゃ咲也が作った『桜の木』しかないな」

「時期はずれでしょうか？」

「う～ん…新曲作る？」

「今から間に合いますかね？」

「あ、一曲だけなら私が作れるわ。澪ちゃんの『ときめきシュガー』に曲つけた時に、一曲分のメロディーが思い浮かんだから」

「ホント？ムギ」

「うん。あ、でもバラードじゃないの…」

「それでも良いよ。詞なら私が書くから」

「やるんだったら、もう一曲ぐらい新曲がやりたいですね」

「そうだな。とりあえずみんなが揃ったら相談しよう」

「はい」

満足したように私にむったんを返したムギ先輩はティータイムの準備を始めて、今度は澪先輩が長イスに座って、手際良くベースの弦を張り替える。
そして弦の張り替えが終ったベースをチューナーでチューニングしていた澪先輩とティータイムの準備が終ったムギ先輩とで軽音部らしい会話をしていると…

バンッ！

「澪！」
「「わっ！」」

勢いよく扉が開き、軽音部の部長の律先輩がやってきた。
それにより私と澪先輩はビクッと身体を揺らす。

【ケース３　律先輩】

「ゆっくり開けろよ律。びっくりしたじゃないか」

「み、澪ーっ！」

「うわっ！ど、どうしたんだよ？」

息切れして走って部室まで来たらしい律先輩がいきなり澪先輩に抱き付く。
隣に座っていた私は咄嗟に立ち上がる。

「頼む！家庭科の課題手伝って！」

「今まで居残りでやってたんじゃないんですか？」

確か、律先輩が遅れていた理由は家庭科の課題を居残ってやってるってムギ先輩から聞いていたから私は首を傾げる。

「やってたけどさ、全然できないんだよ！」

「課題って何なんですか？」

一度、私をジッ見た律先輩はおもむろに鞄をあさって、中から一枚のピンクの…何だろコレ？

「…スカートだよ…」

「え？」

「だから！スカートだよ！」

これがスカート？
ごめんなさい律先輩…
とてもスカートには見えません…
あちこち継ぎはぎだらけで…本当にごめんなさい…雑巾にしか見えません…

「何か失礼なこと考えただろー！」

「い、いえ！」

鋭い…
サク先輩程じゃないけど、律先輩も中々鋭い…

「できない人は居残りで、それでもできない人は家でやってこいって言うんだ！だから頼む澪！手伝ってくれ！」

「律ってボタン付けるのは上手いのに、ミシンとか苦手だよな」

「だって機械だもん…」

律先輩の意外な事実が発覚。
ボタン付けるが上手いことと機械が苦手なこと。

去年の合宿初日に遅れてやってきたサク先輩と先生に律先輩が手料理を振る舞っていたから、てっきり手先が器用なんだと思ってたけど、それは機械類には通用しないみたい。

「唯は和に手伝ってもらうし、男子はランチョンマットなんて簡単なもんだし…」

「そういえば咲也君は水本君にやってもらってたね」

「唯もサクもズルイ！だから手伝ってくれー！」

「分かったよ。部活が終ったら律の家に行って手伝ってやるから離れろ」

「あ、ありがとう～！さすが澪だな～！」

「律先輩って器用なのか不器用なのか分からないですね…」

「だから律はドラムをやってるんだよ」

私の何気ない独り言に反応した澪先輩が律先輩を引き剥がしながら、長イスから立ち上がってベースを手に取る。

「え？どういうことですか？」

「律は細かいことが苦手だけどそうじゃないんだよ」

イマイチ要領が掴めない澪先輩の言葉に首を傾げていると…

「ドラムって難しいんだぞ？あーずさ」

澪先輩に引き剥がされたまま床に座っていた律先輩が立ち上がって『ふふん』と私に笑ってドラムセットに向かい椅子に座る。

私と澪先輩とムギ先輩はドラムセットの前に移動する。

「ドラムって全身を使うから体力もいるし、何より両手両足をリズムに合わせてバラバラに動かさなきゃならないから大変なんだ」

そう言って鞄から二本のスティックを取り出して軽くドラムを叩く律先輩。

「まず右手はスネアを叩いて、左手はシンバルだろ？右足はバスドラムで左足はハイハットのペダル踏むからな。しかもリズムよく」

「わぁ～…」

実践して四つの音を鳴らす律先輩に思わず感心の声を漏らす。

凄い。

確かに両手両足がリズムよくバラバラに動いてる。

私の音楽のルーツはジャズミュージック奏者のお父さんとお母さんだから、ドラムの知識はあまりなかった。

こうして律先輩が実際に叩いて、音を聴くと凄いと思う。

澪先輩の言ってた意味ってこういうことだったんだ…

「ま、こんな感じだな」

「凄いです！律先輩！」

「もっと褒めると良い～！」

「調子に乗るなよ」

「良いじゃん別に～」

「りっちゃんってドラム叩いてる時、生き生きしてるわね～」

「そりゃあ私はドラマーですから！目指せ！キース・ムーン！」

「あ、だから律先輩はドラムなんですね」

憧れのドラマーを目指してるんだから、律先輩はドラムを叩いてるんだ…と、思ったら…

「いや、まぁ、それもあるんだけどさ。ギターとかベースとかキーボードとか指でちまちまするの想像しただけで…」

「だけで…なんですか？」

「キーーッ！」
「ニャッ！？」

突然、律先輩が頭をかきむしりながら奇声を発するから、またビクッと身体を揺らしてしまった。

「ってなる…」

「そ、そうですか…」

【結論　律先輩は何か惜しい人】

「りっちゃんも驚かせる天才ね」

「何の話をしてるんだ？ムギ」

……

律先輩はホワイトボードに落書きを始めて、澪先輩はテーブルで作

詞を、ムギ先輩はキーボードで作曲を始めて、私は長イスに座ってむったんで『ふわふわ時間』の練習を始めて約五分ぐらい経ったら…

ガチャ

「……」

気怠そうな雰囲気が伝わってくる軽音部副部長にして黒一点のサク先輩が部室の扉を開いた。

【ケース４　サク先輩】

とりあえず私は、むったんを弾いていた手を止めて今にもため息をつきそうなサク先輩に口を開く。

「お疲れ様ですサク先輩」

「俺はお前の上司か…
つうか別に疲れてねェ」

「いや、何か疲れた顔してる…あ！不機嫌顔だったな！」

「はぁ…」

律先輩の軽口にピクリと片眉を動かしたサク先輩だったけど、反論する代わりにため息をついて鞄から一枚の紙を取り出して律先輩に差し出す。

「ん？何これ？」

「…生徒会長から有り難いプレゼントだ」

「和から？」

律先輩に用紙を渡したサク先輩は首にかけていたヘッドフォンを鞄にしまう。

「律。和からって何なんだ？」

「あー…っと…コレ」

「ん？講堂使用申請書…律！また忘れてたのか！今年の学園祭は二日間あるからいつもより早めに提出しろって言われてただろ！」

「だ、だってさ！いきなり早めになんて言われても、今までギリギリに提出してたんだから…忘れるのは当然！」

「何で開き直ってんだ…」

「ですね…」

呆れてものが言えない律先輩の態度に澪先輩が思い切り律先輩の頭を叩いている。
サク先輩はチラッと律先輩と澪先輩を見て、テレキャスターを手に取って長イスに座る。
私は『やっぱりあそこはサク先輩が一番似合うなぁ』なんて思ってサク先輩を眺める。

（あ、弦、張り替えるんだ…）

テレキャスターのギターケースからニッパーを取り出したサク先輩はどうやら弦を張り替えるみたい。

ペグを回して六弦を緩めて適当なところでニッパーで切り、ボディの裏側から引き抜く。

「咲也君。講堂使用申請書を生徒会室に貰いに行ったの？」

「いや…　部室に行く途中にアイツと会って無理矢理渡してきやがった…」

ムギ先輩が話し掛けるけど、サク先輩は視線はテレキャスターに向いて、でもムギ先輩に答えてる。
しかもその間、弦交換の手は止まってない。

（澪先輩より早い…）

澪先輩も手際良くベースの弦を交換してたけど、サク先輩はそれ以上に早くて正確。
ベースの弦は四本に比べてギターは六本で澪先輩以上に早いから、サク先輩がどれだけ手慣れてるか分かる…

「そういえば咲也。唯は？一緒に職員室に行ってただろ？」

「俺とアイツじゃ目的が違ェだろ…　用が済んだから先に出てきた」

澪先輩が話し掛けるけどサク先輩は手を休めることなく、新しい弦を取り出してブリッジに弦を通していく。
捻れがないように弦をヘッドの方向に伸ばして、ペグ二つ分くらいところで余分な弦を切る。
ストリング・ポストに弦を差し込んで弦を引っ張りながら上から下

に巻かれるようにペグを回す。
これを後五回繰り返して、弦を引っ張って馴染ませる。
これで弦の張り替えは終り。
ていうか…凄い…
サク先輩はギターや音楽に関して見習うところがあるけど、改めてサク先輩の凄さを目の当たりした私は…

「ンだよお前…」

「へ？あ！す、す、すみません！」

気が付かない内にサク先輩に近付いて、まじまじと手際を見てしまっていた…
そんな私にサク先輩の少しのツリ眼が向き、私は慌てて一歩後ろに下がる。
恥ずかしい…！
ムギ先輩の時みたいにまた真っ赤になってるんだろうな…
しかも何か…ドキドキ…

「あ～ず～さ～♪顔真っ赤だぞ♪」

「ちょ、ちょっと暑いだけです！まだ残暑が続いてますから！」

やっぱり律先輩にからかわれた…

ニヤニヤと笑う律先輩に必死に思い付いた言い訳をして、チラッとサク先輩を見ると…

「……」

全然関心も持たずにチューナーとシールドを取り出していた…
サク先輩って興味がないことには本当に関心を示さない。
まぁ、それがサク先輩なんだけど…

「唯は古文の宿題を忘れたから呼び出されてたけど、咲也は何をしに職員室に行ってたんだ?」

「…新曲楽譜のコピー」

「新曲ですかっ!」

感心してしまう程に模範的な弦交換を終わらせて、チューナーをシールドでテレキャスターに繋いでチューニングしていくサク先輩の淡々とした発言に私は眼を輝かせる。

「勝手にテンション上げるのは構わねェが、ボリュームは下げとけ…」

「あ、すいません」

「それよりさ！どんな曲か楽譜見してよ！」

「私も見た～い♪」

「私も」

「私もです！」

律先輩の声にムギ先輩と澪先輩と私が小さく手を上げたのを見たサク先輩はチューニングの手を止めて、鞄から六枚の楽譜を取り出して私達に渡す。

「…先に言っとくが、歌詞はまだ出来てねェからな」

確かに楽譜には歌詞もタイトルも載ってなかった。

でも、五線譜にある『音』に私は、たちまちのめり込まれた…

だってこの曲…

「バラード…」

サク先輩が作った新曲はバラードだった。
つい数十分前に私と澪先輩とムギ先輩が話していた学園祭で演奏する曲目。

「凄いな咲也」

「あぁ？」

「さっき私と澪ちゃんと梓ちゃんで学園祭でバラードをやりたいねって言ってたの～」

「だからタイミング良くバラードの、しかも新曲の楽譜を持ってきた咲也はさすがだよ」

「ふーん…」

「興味なさそうだなサク」

たまに思う。
サク先輩は先を見据えてるんじゃないかって…
肝心なところは曖昧にして、でも困っていたら手を差し延べる。
憂に何かを言ってるみたいだけど、のらりくらりと躱される。

憂本人に聞いても『ごめんね』の一点張り。
サク先輩はギタリストとして憧れるけど、その内面は…何を考えてるんだろう…

【結論　サク先輩は掴めない人】

……

「はぁ…」

「ため息ばっかりついてたら幸せが逃げますよ？」

「つかずにいられるかよ…」

まぁ確かにですね。

とりあえず唯先輩が来るまでサク先輩が作った新曲を自主練することになったんだけど、サク先輩がアコギを一度ストロークした瞬間に、驚くことに六弦だけが切れた。
一番太い六弦だけが不自然に切れたことに疑問を感じたサク先輩だったけど、諦めたようにため息をついてアコギの弦交換に。
さっきテレキャスターの弦を交換したばかりだから面倒なんだと思う。

（それにしても…）

唯先輩遅いなぁ。
古文の宿題を忘れたから呼び出されてるみたいだけど…なんて思った矢先…

ガチャ

「ぷへ～…」

何やら落ち込んでいる様子の唯先輩がやっと姿を現した。

【ケース５　唯先輩】

「やっと来たか～唯」

「どうしたの？」

フラフラと足取りが重い唯先輩は律先輩とムギ先輩の言葉にピタッと部室の真ん中で止まる。

「追加の宿題出された～…」

「古文の堀込先生は宿題を忘れた人には厳しいからな」

ガックリとうなだれる唯先輩に澪先輩が苦笑い。

「私も経験あるから気持ち分かるな～」

「受験生なのに良いんですかソレ…」

律先輩がスティックで肩を叩きながらそんなことを言うから、私は呆れたように声を出した。

「あずにゃ～ん、そんなこと言わないでよ～…
せっかく受験生ってこと忘れてたのに…」
「忘れんなよ」

流石のサク先輩も唯先輩の発言に間髪を入れずにツッコむ。
視線はアコギに向いたままだけど。

「唯ちゃん。今日のケーキはマラソンの時に言ってたフルーツケーキだから元気出して」

「ホントっ！」

「現金なやつだな…」

「今更だろ…」

ムギ先輩のニコニコした笑顔に唯先輩が落ち込んでいたことを忘れさせるように、それ以上の笑顔になる。
そんな唯先輩に澪先輩とサク先輩が呆れる。

「あの～　前々から思ってたんですけど…」

「何かな？あずにゃん」

「ティータイムをやってて、先輩達が一年生の時の軽音部の上級生は何も言わなかったんですか？」

今は当たり前になっちゃってるティータイムだけど、よくよく考えたら普通はやらない。
だからこんな質問をしたんだけど…

ジーッ

「え？」

サク先輩以外の先輩達が何故か私をジッと見てくる。
何でそんなに見てくるのか分からない私は、唯一黙々と弦交換をしているサク先輩に口を開く。

「あの…　私なんか変なこと言ったんでしょうか？」

「…言ったかもな」

「そ、それって何でしょう？」

アコギのチューナーでチューニングしていた手を休めて、サク先輩は意外な事実を口にした。

「…俺達の上には在籍していた先輩なんていねェよ」

「え…」

「軽音部は廃部寸前だった…　だからお前の疑問は意味がねェんだ」

『アレはアイツらが勝手にやり始めた』と付け加えたサク先輩の言葉に私はどんな表情をしてるのかな…？
知らなかった。
まさか軽音部が廃部寸前だったなんて…
じゃあ…唯先輩達が軽音部を再建したってこと？
そのことを言おうとしたけど…

「懐かしいね～」

言わなくても唯先輩が先に話してくれた。

「あずにゃんは知らないと思うけど、実は軽音部は廃部寸前だったんだよ！」

「いや、それ今さっきサクが言ったから」

「ズルイ！サッくん！」

「意味分かんねェし、サッくん言うな…」

「梓。私が律に誘われてベース始めたって言ったよな？」

「あ、はい」

「ホントは私、文芸部に入部するつもりだったんだけど…」

「バンド組むって約束してたのに澪が文芸部に入部しようとしたからさ、私が無理矢理軽音部に入部させたんだぜ」

「うん。そしたらムギが音楽室に来て…」

「私は合唱部に入ろっかなって思ってたんだけど、りっちゃんと澪ちゃんが面白くてじゃあ私も～って♪」

「んで四月が終ろうとしたあの日に唯とサクが部室に来たんだよ」

『これで軽音部復活！』と律先輩が言う。

私の知らない軽音部の一年間。

その最初を語る律先輩と澪先輩とムギ先輩が唯先輩とサク先輩に顔を向ける。

私もいつの間にかサク先輩の隣に座ってる唯先輩と、多分話を聞い

ているサク先輩に身体を向ける。

「あずにゃん。私ね、なにかしなきゃって思ってたんだよ」

「なにか…ですか？」

「うん。中学生の時は部活もしないでぼーっとして過ごしちゃったから、高校生になったらなにかしようって決めてたんだ～」

「それが軽音部だったんですか？」

「うん！軽音部が私を呼んでると思って！」

「…勘違いで入部した奴が何で無駄に胸張ってんだよ」

「勘違い？」

サク先輩の言葉に私は思わず首を傾げる。

「サッくん！しーっ！しーっ！」

よっぽどその勘違いが恥ずかしいのか知られたくないのか、唯先輩が唇に人差し指を当てて必死にサク先輩に迫ってる。

「唯ってギターじゃなくて他の楽器をやるんだと思ってたんだよな～♪」

「そ、そうなんだけど…そうじゃないんだよ…」

「あれ？だって唯、入部した時そんなこと言ってたじゃん」

「咲也は唯が軽音部に入部した本当の理由知ってるのか？」

「知って「サッくんダメー！」るが、当の本人がうるせェから言えん…」

『え～　話せよサク～』と言ってる律先輩に『…つうかお前、ジュースおごれよ』とサク先輩が言ってるのを見ていたら、唯先輩が満面の笑顔を浮かべる。

「私、本当に軽音部に入部して良かった！」

「急にどうしたんだ？」

「だって澪ちゃん。私、毎日が楽しいんだよ！」

長イスから立ち上がった唯先輩にサク先輩を含めた全員が注目する。

「サッくんとりっちゃんと澪ちゃんとムギちゃんとあずにゃんに会えたし、ギー太にも！
音楽ってすんごく楽しいって発見できたし、部室でたくさん喋ったり、おやつ食べたり！
こんな楽しくて幸せな軽音部が私は大好き！」

「唯先輩…」

サク先輩が掴めない人なら、唯先輩は分かりやすくて、単純で、子供っぽくて…

「な～んか恥ずかしいこと言ってるな～」

「唯らしいけどな」

「ね～♪」

「サッくんも軽音部に入って良かったでしょ？」

「そこそこ…な」

「ホント素直じゃないよなサクは」

「それも咲也らしいんだけどな」

「うん♪」

「あずにゃん」

「あ、はい」

唯先輩は…

「あずにゃんも軽音部に入って良かったよね！」

まっすぐで、純粋で、一生懸命。

「はい！私も先輩達と会えて良かったです」

【結論　唯先輩はまっすぐで純粋で一生懸命な人】

「これだよサク。今の梓が素直って言うんだぞ？」

「…今のお前はお節介っつうのを覚えとけ」

――――――――――

翌日。七日火曜日。

「なんか個性的な先輩達だね」

「まぁ、それが売りみたいな先輩達だから」

昼休みの時間帯。
購買にお昼ご飯を買いに行ってる純と付き添いについて行った憂を待っていると、二岡さんが昨日の続きとばかりに声を掛けてきた。

そして昨日答えられなかった質問に答えた私に、二岡さんは苦笑いで受け止めた。

「でも、中野さん。その先輩達といると楽しいんでしょ？」

「え？」

「だって先輩達のことを話してる中野さんってずっと笑顔だったから」

「ぁ…　うん。一緒にいると楽しいよ」

「そういうのが理想な先輩っていうのかもね。じゃあ私、他のクラスの娘のとこ行くから」

「あ、うん」

手を振って教室から出ていく二岡さんに私も手を振り返す。

（理想の先輩…かぁ）

「クスッ」

思わずこぼれた小さな笑みに、唯先輩が言ってた幸せを感じた瞬間だった。

第百六話（後書き）

どうでも良い情報。

二岡さんと野久保君と林原君（弟）の三人が梓と同じ掃除当番班です。

出席番号順ですから、憂と純と一緒じゃありません。

咲也達三年は担任がさわ子ということで、好きに班を組んでいます。

ちなみに野久保君の口癖は『バッカ』です。

多分、今後の出演予定はありません。

もしかしたら林原君（弟）だけチラッとあるかもしれません。

第百七話

（前書き）

気付く大切なモノの有り難さ　前編です。

第百七話

夏でもなければ秋でもない。
暑くもなければ寒くもない。
そんな曖昧な季節の本日九月八日水曜日。

この日からブレザー着用が発令され、もう着ることは無いであろう桜高の最後の夏服に別れを告げた。
猛暑だった今年の夏なので残暑が厳しいかと高を括っていたが、有り難いことに耳障りな蝉の合唱はアンコール無しでコンサートは幕引きになり、労働基準法に引っ掛かりそうな程に燦々と活発に働いていた灼熱の星はサービス残業をすること無く、柔らかな日差しを地球にプレゼント。
朝は少し肌寒さを感じ、季節が移りゆくのを実感。

ふと廊下から外を眺めれば大会が近いんだろう。
運動部の連中が練習に打ち込んでいる光景と風景が見られる。
いつだったか忘れたが、真鍋が言っていた。

『何だか、グラウンドが寂しいわね…』

今はまだ、その言葉が当て嵌まる時期ではないが、そう遠くない内に三年の姿は消えるんだろう。

今は、そういう曖昧で、だが、必ず訪れる『終り』に曖昧ではなく確固たる何かを抱えて過ごす時期だ。

「はぁ…」

最早完全に癖になってしまった、ため息を一つ吐き、掃除区域の空き教室から鞄を取りに階段を上る。

「はぁ…」

確かに癖にはなっているが、このため息には意味がある。
それは今日の六限目での決定してしまった事柄が果てしなく面倒で怠いからだ。
…まぁ、今はその事は置いておこう。

「はぁ～…」

このため息は俺ではない。
負のオーラを全身にくまなく纏って隣を歩く将来はケーキ職人にと意気込む某虫野郎のため息。

「なんてこった…
夏休みの課題を再提出しろだなんて…
山中先生は何も分かってねェ！咲也が俺のために一生懸命課題を解いてくれたのにッ！それを踏みにじるなんて…ッ！」

（ある意味純真な奴だ）

夏祭りがあったあの日、俺が暇つぶしに超適当にコイツの課題を有り得ない解答で埋めたものを、何の疑問も持たずに山中担任に提出したらしい。
そんなしっぺ返しを食らって尚、俺の暇つぶしを疑いもせずに美化して、負のオーラを撒き散らしている理由を自分で暴露しているアホを横目に三年の教室がある三階へ着いた時、それは何の前触れも気配も無しに突然襲ってきた。

♪～！♪～！♪～！♪～！♪～！

「ん？」
「うぉッ！何だッ！？何事だッ！？」

三階の校舎に突如として鳴り響く爆音。

（つうかこの曲…）

聴き覚えあり過ぎる爆音の正体はＨＴＴの曲である『カレー』のイントロ。
しかし何故だと思う。
曲が聴こえてくるということは平沢達が演奏しているということ。
これが疑問だ。

「まさか…！最近桜高周辺でＵＦＯの目撃情報があると小耳に挟ん

だが、この音は宇宙人の仕業かッ！」

「…ちょっと黙ってろ」

ガンッ

「オウッ！スネが…！」

学園祭が近いから練習をしているのは喜ばしいことだ。
だが、部室で演奏をしているのならば、こんな風に空気振動で窓硝子が割れんばかりの爆音が発生している筈がない。
部室である音楽準備室は防音対策が施されてあるので、多少音が漏れようともここまでの爆音にはならない。
つまり、平沢達が現在進行形で演奏を行っている場所は部室ではないと推測できる。

「…教室からか？」

よくよく音を聴けば、どうやら我が三年二組から発生しているらしい。
廊下を歩く三年の生徒が何事かと足を止めて二組の教室を窺っているのを見れば、発生源は明らかに二組だ。

「イカン咲也ッ！奴等にキャトられる前に逃げるぞッ！宇宙人には

会ってみたいが身体を改造されたくないッ！」

「…だから黙れって」

ゴスッ！

「ウベッ！」

ゴロゴロゴロゴロ…

受身を一切取らずに階段を転がり落ちていく生物に目もくれずに、とりあえず未だに爆音を発生させている教室に足を向ける。
落ちながら『あ～れ～…』とエコーを自作自演しているところ、怪我など皆無だろう。

「うわぁっ！影宮クン！？何で階段から転がってきたのっ？」

「大方、桐島が蹴り落としたんだろ。見ろよ、腹に足跡が残ってる」

「人が落ちてきたのに何気に冷静だよね…」

「ったく、ヒドいことしやがるぜサクッチは」

「えー！何で無事なの！」

階下から西野と水本の会話とアホのピンピンしているボイスを背で聞いて教室の扉のドアノブに手を置いたら…

ダダンッ！

スネアを勢いよく叩く音が聴こえ、爆音が鳴り止む。
どうやら演奏が終ったらしい。

『すっごい迫力！』

『かっこいいー！』

『いや～　それほどでも～』

『でもサク先輩のギターがないとやっぱり変な感じですね』

『咲也はリードギターだからな。中心の音がないからそんな風に感じるんだよ』

『まぁ、とりあえずサクが来るまで練習しようぜ。次は『ぴゅあぴゅあはーと』な』

『ラジャ～！』

まだ教室に残っているクラスメイトの拍手と感想に平沢が満更でもない嬉しそうな声と次いで中野、秋山、田井中、琴吹の声が扉を隔てた俺の耳が捉える。
早々に何故部室ではなく教室に出張しているのか知る必要があるので掴んでいたドアノブを半回転させて、教室に進入する。

「おい…」

「あ、サッくん♪」

「…何してんだお前ら」

扉を開けた瞬間にクラスメイトと軽音部員が一斉に首を動かし俺を見る。
そしてレスポールを構えた平沢が、いの一番に朗らかな満面の笑みで両手を振ってくるが、全開にスルーし、『何故ここにいる』と軽音部員に視線で訴える。

「それがね、部室が立入禁止になっちゃったの」

「お前何しやがった…」

「何で私を見るんだよ！」

予想もしなかった琴吹の発言に思わず田井中を見るが、立入禁止になった原因はこのカチューシャではないらしい。

「部室が水道工事で使えないみたいなんだ」

「…水道工事？」

「うん。ほら、隣の一組で天井から水漏れしてるって朝から騒ぎになってただろ？」

そういえば今日の朝、そんな小さな騒ぎがあった気がする。
俺は朝から眠ろうと机に突っ伏していたので、その騒ぎの事は夢うつつで聞いていた。
ちなみに被害に合った一組の連中は、今日の授業は俺達が今まで掃除していた空き教室で行ったという。

「…それと部室が使えねェ関連はなんだよ？」

「一組の上にちょうど部室があるんだよ」

「そういうことか…」

合点がついた。
つまり水漏れしている配水管か何かを取り替える工事をするが、その配水管は部室にも通っている。
一組の天井と部室である音楽準備室の床は表裏一体。

「工事をするんなら部室にもその手が及ぶっつうことか…」

「うん」

部室使用及び立入禁止になった理由を説明した秋山が頷く。
しかしだからといって、二組の教室で練習する事には頷けない。
隣に音楽室があるというのに。
いや…まてよ…

「…部室の工事っつうことは音楽室も使えねェのか？」

「音楽室にも配水管が通ってるみたいです」

なるほどな。
隣に音楽室があるからこそ、工事の範囲が広がったのか。

「今さわちゃんが吹奏楽部が使ってる第二音楽室を使わせてもらえないか交渉してる。何か自信ありげだったから期待できるぞ」

「…そういえばあの人、吹奏楽部の顧問だったな」

忘れがちだが。
つうか吹奏楽部の顧問をちゃんとやってんのか？
暇さえあれば軽音部室で紅茶片手に喫茶店感覚でだらけてるが…

「だから私達、行くとこないから教室で練習してたんだよ」

『サッくんのギー子も持ってきたよ』と平沢が指差す先は俺の机。
そこにテレキャスとアコギがギターケースに仕舞われて立て掛けてられていた。

「…部室が使えない理由とお前らがここにいる理由が概ね理解できたが、演奏するのは止めた方が良い」

「ほぇ？なんで？」

「教室は部室みてェに防音対策なんてしてねェから音が漏れまくりだ…

その内クレームがくるぞ」

「あ、もしかしてうるさかった…？」

ベースを構えた秋山がネックを掴んで身体に寄せる。
嫌な予感がするという態度の表れだろう。

「…爆音に驚いて階段から転げ落ちた奴がいるくらいに」

『えっ！？』

その声は軽音部員だけでなく、俺達を傍観していたクラスメイトからも驚愕の声があがる。

「…つっても修司だから全く気にする必要はねェ」

『はぁ～…』

その声は軽音部員だけでなく、俺達を傍観していたクラスメイトからも安堵の声が漏れる。
まぁ、アイツが転げ落ちた真相は別にあるんだが、言う必要は全くと言っていい程にない。

つうか落ちたのがアホなら安堵するお前らもお前らだが、アイツもアイツで、ある意味良い意味でクラスメイトに認識されてんだな。

「でも、そんなに音が漏れてるんなら教室じゃ練習できないわね」

「しょ～がない、さわちゃんが戻ってくるまで待機だな」

「あ、じゃあムギちゃん！お茶を！」

「出るわけねェだろ…　ここ教室だぞ」

「は！そうだった…」

爛々と笑みを輝かせ琴吹に振り返る平沢だったが、俺の正論を受けてあからさまに肩を落として落胆する。

すると…

ガチャ

「あ、先生」

教室の扉が開き、中野が言った通り山中顧問が入ってきた。

コッチも落胆した様子で。

「ごめんなさい。学園祭が近いから無理って言われちゃったわ」

まだクラスメイトがいるので猫をかぶった状態でそう告げてくる。

「学園祭が近ェのは俺達もだっつうの…」

「仕方ないのよ桐島君。どこの部も学園祭に向けて張り切ってるから」

「はぁ…」

確かにそうなんだが…
やっぱり軽音部には疫病神が憑いているようだな。
一昨年、去年共に学園祭に纏わる時期や当日は軽音部に何かしらのハプニングが起こる。
やれ声が嗄れただの、やれ桜高祭の悪夢だの、やれ喧嘩だの、やれ風邪をひいただの、やれギター忘れただの…
そして今回は、部室が使えない。
学園祭まで後一ヵ月もないこのタイミングで練習を規制されるは正直痛いな…
つうか疫病神が取り憑いてんのって…

「……」

「どうしたのサッくん？」

「咲也？」

平沢と秋山じゃねェのか…？

しかも事の大半を占めているのは平沢だ…

「…お前今年こそは声潰したり、風邪ひいたり、ギター忘れたりすんなよ」

「大丈夫！憂にのど飴ちゃん貰ってるし、みかんいっぱい食べてるし、最近じゃまたギー太と添寝してるからね！」

「……」

流石、素晴らしいなコイツ。

実践している内容は願ったり叶ったりな好都合だ…

まぁ、みかんは風邪予防には最適らしいが…

「とにかく私は別の場所を使わせてもらえるか交渉してみますから、みんなは練習しててね」

今し方教室では演奏できないと結論づいたことなど露程も知らない山中顧問（猫かぶり状態）は言うだけ言って去っていった。

「どうしよっか？サッくん」

「この時期に練習できないのはマズい…
ただでさえ練習不足だっつうのに」

『うっ！』

五人の軽音部員が思い当たる節（ティータイム等々）がありまくりのようにビクッと肩を上げる。

「移動して、どっか別の場所を探すしかねェだろ…」

とは言ったものの、これは音を主とする部活のデメリットだ。
演奏をして近隣に迷惑がかからない場所なんて早々にない。
吹奏楽部は第二音楽室を譲る気は皆無らしいし…

「ジャズ研の部室借りるか…」

「でもジャズ研も学園祭に向けて張り切ってるって純が言ってましたから、借りるのは厳しいと思います…」

ジャズ研もＮＧ。

腕を組んだり顎に手を当てたり天井を眺めたりしながら何か妙案がないかと模索する俺達。
するとクラスメイトの一人の女子（名前忘れた）がこんな提案をしてきた。

「じゃあさ、体育館なんてどう？」

『体育館？』

「そ、今って確かバレー部とバトン部と男子バスケ部が使ってるから」

「…そんなに運動部がいんなら立錐の余地もねェだろ」

「逆だよ桐島」

「あぁ？」

「そんなに人がいるんだから音を出しても平気。部活やってる体育館って結構うるさいし、端っこならスペースあると思うし」

「逆転の発想…か」

それだったらギターとベースとキーボードは多少ボリュームを下げれば何とかなるかもしれない。
ドラムはボリュームを落とすなんて出来ないので仕方がない。

「さすが信代ちゃん！」

「あれ？確か信代ってバスケ部じゃなかったけ？部活行かなくて良いのか？」

「ウチらは男子バスとローテーション組んで体育館を使ってるから、男子バスが体育館を使う日は休みか外走ったりなんだよ」

「じゃあ中島さん今日は休みなんだ」

「うん」

平沢と田井中と秋山の言葉で察するにコイツは『中島』というらしい。
そんな中島の提案通り俺達は体育館に移動することに。
部室から教室まで楽器を乗せてきた三台の台車にドラムセット（バスドラム、スネアドラム、タムタム、ハイハット、シンバル部分に分けて）と三つのギターアンプとベースアンプとキーボードのスピーカーを乗せる。
これで三台の台車の内二つは埋まり残り一つは…
「亀も連れてきたのか…」
残り一つの台車は水槽が乗せられ、亀専用機となっていた。
「部室を工事するんですから、トンちゃんを置き去りにはできませんよ」
「…別に良いけどよ、とりあえず亀は教室に置いとけ」
「移動してる時に水が揺れたら、トンちゃんびっくりしちゃうからね」

「あ、そうですね」

俺は亀を連れて移動するなんて特異な視線を浴びたくないからなんだが、平沢は亀のことを想ってのようだ。
中野が亀専用機をとりあえず俺達の教室に置き、体育館へ移動開始。

しかしここは三階。
つまり階段がある。

「障害だな…よし！ここはサクに任せて私達は先に行こう！」

「…そのデコに真っ赤な手形つけてやろうか？」

「ほら、律も咲也も遊んでないで手分けして階段下りるぞ」

「よいしょ♪」

「凄いですね…ムギ先輩…」

「ふぬぬぬぬ…！ぷへっ…重い…」

悪戦苦闘の末に何とか一階に下りる。
しかし、これからが負のマイナス連鎖の始まりだった…

俺と田井中が二台の台車を押してその後ろを平沢と秋山と琴吹と中野が続く。
そしてたまにある段差等の障害を四苦八苦しながらやっとの思いで体育館に辿り着いた。

「いちごちゃ～ん！」

体育館は半分をネットで遮られ、片面をバレー部とバトン部が、もう片面を男子バスケ部が使用していた。
バレー部のボールをコートに叩く音やバトン部のダンスの曲が流れたり、男子バスケ部のバッシュのスキール音やドリブル音。
そんな様々な雑音が入り交じる体育館に平沢がバトン部にいる、とある女子を呼ぶとソイツは振り返り俺達の元にやってきた。

「…なに？」

「んとね、私達、今練習できる場所を探してるんだけど、ここら辺使わせてもらっていいかな？」

「…大丈夫だと思うよ。でもたまに…」

縦巻きロールな髪型が特徴的なその女子はそこで言葉を区切った瞬間に…

ヒュ…

「ん？」

「矢野！！こんのバカチンがぁ！！どこに投げとんじゃ！！」

ゴンッ！

『うわっ！』

『キャッ！』

「……」

風を切る音と男子バスケ部の怒声が聞こえたコンマ数秒後に、俺達の真横の壁にバスケットボールが、ボールの重量を考えると有り得ない猛スピードで激突。

それにより俺と縦巻きロール女子以外の軽音部員は身を縮こまる。

秋山は瞬時に俺の背中に隠れるし、平沢は無意味無意識に俺の腕にしがみついている。

「…今みたいにボールが飛んできて危ないよ」

「早く言えよ…」

体育館ＮＧ。

その後…

『本番さながらに講堂で練習したらどうかしら』

と、琴吹の提案で講堂に行くも…

『サッくん』

『サッくん言うな』

『何の劇だろうね？』

『さぁな…』

講堂は演劇部が使用中でＮＧ。

『んじゃあ、屋上行ってみようぜ』

今度は田井中の提案で屋上に行くも…

『くにやぶれてぇーさんがありぃーしろはるにしてぇーそうもくふかしぃー』

『なんだアイツら…』

『詩吟部じゃないかな？ほら、同じクラスの林原君がいるし』

『誰だよそいつ…』

『咲也ってまだクラスメイトのこと覚えてないんだな…』

『林原君のお兄さんって先輩達のクラスだったんだ…』

屋上は計十人くらいの詩吟部（存在を今初めて知った）が占拠してありＮＧ。

結局…

――――――――――

「講堂は演劇部が練習してるし、屋上は詩吟部がいるから私達練習できなかった～…」

「また戻ってきたのね」

気が付けば夕暮れになり、俺達は仕方なく夕陽が差し込みオレンジ色に染まった教室に戻ってきていた。
そして行く先々で無駄足だったことに嘆いていると山中顧問がやってきた。
そんな山中顧問に開口一番に田井中が愚痴を漏らしたのが数秒前だ。

「…そっちの首尾はどうだったんだ？」

自分の机の上に座った俺の質問に山中顧問は『はぁ…』とため息を吐いて口を開く。

「色々検討してみたんだけど…ないわね軽音部が練習できそうな場所」

「さわちゃん、そんなアッサリ言うなよ…」

「これでも頑張ったのよ～　理科室や調理室、会議室に被服室、果てには校長室まで回ったんだから～」

「…結果が振るわなかったら意味ねェよ」

「少しは労いなさいよね～…」

『咲也くんヒドいわ！』と歳不相応に頬を膨らます山中顧問をスルーして机から降りる。

「…とりあえず練習場所は後回しにして、今は他にやるがあるからそれをを決めるぞ」

「やることって？」

首を傾げる平沢に分かりやすく説明するために、教室の後方にある黒板にチョークで『曲目』と書き込む。

「…まだ具体的に決めてなかったろ」

「あ、そうだね～」

「…今年の桜高祭は二日間やるんだったな？」

確認のために山中顧問に視線を向けると『えぇ、そうよ』と頷いた。

生徒から学園祭は一日では物足りないという声が以前から度々あがっていたらしい。

デモが起きそうなくらいの生徒の勢いに負けた教員達は重い腰を上げた。

これにより今年から学園祭は土曜、日曜の二日間開催の運びとなった。

ちなみに講堂を使用する振り分けは、土曜日にクラスの出し物、日曜日に部活動の発表となってある。

「…二日間っつうことは、今まで限られていた時間が延びたっつうことだ」

「じゃあライブの時間も延びたの？」

「そうよムギちゃん。今まで二十分だったライブ時間が三十分になったわ」

「それじゃあ曲数を増やせますね！」

去年のライブはＭＣを削っても四曲が限界だったが、今年は違う。
十分も延長された分だけ、パフォーマンスが出来る。

「…そこで四曲だった曲数を五曲に増やす」

「おぉ～！五曲もッスか～！」

そこからはとんとん拍子で決まっていった。
平沢が『『ふわふわ時間』は絶対にやりたい』と言い、中野が『サク先輩の新曲もやりたいです』と言い、琴吹が『今、作ってる曲が明日にはできるから～』と言い、『『ときめきシュガー』やりたいな』と秋山が言う。
『ときガー』は正直俺はあまり乗り気ではないがあまりにも秋山が食い下がるものだから、俺が折れるハメになり渋々それらを黒板に…

『ＦＦ』
『新曲Ａ』
『新曲Ｂ』
『ときガー』
と書き込む。
最後に田井中が『略さないでちゃんと書けよ』とぼやいていたがスルー。

「あと一曲、何にする？」

この田井中の発言に真っ先に反応したのは平沢だった。
バッと挙手をする平沢に俺がチョークで差す。

「『ごはんはおかず』がやりたいです！」

「はぁ？」

堂々と言い切った平沢に全員が視線を向ける。
つうかＨＴＴにそんな主食を副食物に変換したタイトルの曲は存在しない。

「それ何ですか？唯先輩」

「新曲だよ！もう歌詞もあるんだ～」

「…お前いつ書いたんだ？」

「ん～とねぇ…あ、サビを思い付いたのは修学旅行で晩ご飯を食べた時！」

（随分前からかよ…）

とりあえず平沢の言い分を聞こうかとチョークを置いて、鞄を漁る平沢の横顔を眺める。

「じゃあ～ん！」

そして一枚のルーズリーフを取り出しては高々と頭上に掲げる。

「唯ちゃん♪どんな歌詞か知りたいな♪」

「えーっと…」

琴吹の期待が籠った瞳で見られた平沢は『コホンッ』と小さく咳払いをしてから息を吸い込んで発せられた内容に俺達は言葉を失った…

「ごはんはすごいよ　何でも合うよ」

『……』

「ラーメン　うどんにお好み焼き」

『……』

「炭水化物と炭水化物の夢のコラボレーション」

「唯…」

「ほぇ？なに？りっちゃん」

「もう良いよ…」

「あれ？サッくん」

「…とりあえず最後の一曲は保留で」

「えーっ！何でーっ！」

オレンジ色に染まる夕暮れの教室に、よっぽど自信があったのか平沢の絶叫が鳴り響く。
そして黒板には…

『ＦＦ』
『ときガー』
『新曲Ａ』
『新曲Ｂ』
『新曲Ｃ（保留）』

と俺が書き込んだ。

「あ、そういえばスタジオを借りて練習するってどう？私が軽音部にいた頃に何回か行ったわ」

「繁華街にある小さなスタジオか…」

「スタジオなんてあったんですね」

「律。スタジオ借りるくらいの部費残ってるか？」

「それがさ、この前花火買ったろ？あれで殆ど無くなっちゃった…」

「お前の頭には、ご利用は計画的にっつう言葉がねェのか…」

「こんなことになるなんて思わないだろー！ていうかサクだってロケット花火してたじゃん！」

「ぶひぶひ…」

「唯ちゃん。元気だして」

学園祭まで後二十三日しかないというのに、俺達は練習も出来ず、曲目も決めあぐねていた。

現軽音部ラストライブまで…後二十四日。

第百八話（前書き）

気付く大切なモノの有り難さ　後編です。

第百八話

『咲也くん』

『あン？』

『その手は何？』

『サッくんの生命線長いね』

『…部費がねェんじゃスタジオは借りることは出来ねェ』

『おぉ～！指先が硬い！』

『唯先輩、よく分からないですけどサク先輩が真剣なので邪魔しない方が…』

『唯ちゃん、マドレーヌよ♪』

『うわぁ～い♪』

『『子供か』』

『アンタはいつも部室で喫茶店気分で無銭飲食してんだ…
その分の勘定をスタジオ代に当てっから、諭吉をよこせ』

『無銭飲食っていったら私達もじゃ…』

『澪！今はそこには触れるな！』

『ム、ムギちゃん…もしかしてお金払わなきゃいけなかった…？』

『ううん♪そんなことないわよ♪』

『ていうかサク先輩、無茶苦茶言ってますね。そんなことで先生が…』

『良いわよ』

『良いんですか！？』

『だって練習ができないと不安でしょ？但し咲也くん』

『あン？』

『交換条件よ』

『何か嫌な予感がする…』

『大丈夫よ澪ちゃん♪』

『根拠のねェ励ましすんな…で?何だよ?』

『学園祭の衣装!絶対に着ること!これがのめないならお金は貸してあげません!』

『アンタ教師のくせに生徒を揺すんのか…』

『サク!ここは頷け!』

『そうだよサッくん!はい!飴ちゃんあげるから!』
『いらん』
『ぶぅ!美味しいのに』

『さぁ、どうするの咲也くん♪』

『何か先生、悪人みたいですね…』

『一応咲也は今までの学園祭の衣装、ちゃんと着てるんだけどな…』

『…鬼の首を取ったみてェに笑ってっけど、いつか痛い目に合うぞ』

『ムギちゃんの淹れるお茶が飲めない苦しみを今味わってるから、
これ以上の試練なんてへっちゃらよ…』

『そこまでムギのお茶が大事なのかよ、さわちゃん』

『アレを飲まないと何か気合いが入んないのよね～　ムギちゃんの
淹れるお茶は美味しいから』

『ありがとうございます♪』

『はぁ…』

何をそんなに衣装と茶にこだわるのか不明だが、こっちだってのっ
ぴきならない事情がある。

背に腹は替えられないということで、悪徳顧問の要求を渋々受け入れ、臨時収入である諭吉を田井中のデコに貼り付けるように渡したのが、昨日のオレンジ色に染まった教室での出来事。

「サク先輩は今から行くスタジオに行ったことがあるんですか？」

「ねェ…が、多少興味があったからネットで調べた」

そして翌日。九日木曜日。
普段ならば部室で練習と称したティータイムをまったりと俺に堂々と披露している放課後の時間帯に、俺達は繁華街の歩道を貸しスタジオに向けて歩を進めていた。

ふと思ったが、この地元はライブハウスに貸しスタジオに楽器店である『１０ＧＩＡ』の三つの施設がある。
都心から離れている地元で音楽にとって必要最低限のものが揃っているこの街は、もしかしたら音楽を演る者には意外と最適なんじゃないんだろうか。
…まぁ、それを第三者に言ったところで意味はないし、どうでも良い…

「私、憂とここら辺によくお買い物に来るけど、貸しスタジオがあったなんて知らなかったよ」

「…スタジオがあるのは雑居ビルの一階だ。そこに意識してねェと

見落とす可能性もある」

「詳しいねサッくん」

「さっき咲也が調べたって言ってたじゃないか」

「おや？」

「おやじゃねぇっつうの…
学園祭まで時間がねぇんだ、あんま腑抜けんなよ」

一抹の不安は払拭出来ない。
俺の新曲、琴吹の新曲、保留の新曲。
この三つの新曲は全く練習が出来ていない。
新曲Ｂ（琴吹の曲）は今日お披露目のようだし、新曲Ｃ（保留）は一応新曲Ａから派生した基盤を元に俺が昨日から作ってはいるが、新曲Ａの歌詞にかまけている故に中々ペンが進まない。

「はぁ…」

あまりネガティブに思考しても良い事はない。
ため息で気分を一新し、限りある時間を如何に有効利用するかに思考を変換しながら早足で足を動かしていく。

「お待ちくだせぇ～！サッくん殿～！」

「あ、コラ～！唯！待て～！」

「待て待て～♪」

「ムギ先輩まで！？もう、子供じゃないんですからはしゃがないでくださいよ」

「梓」

「あ、はい。何ですか？澪先輩」

「ライブ、絶対に成功させような」

「は、はい！」

気付いていないのか、気付かないようにしているのか。

「うん。じゃあ私達も行こう」

「はい」

活気溢れるグラウンドも、雑音飛び交う体育館も…学園祭が過ぎればそれを失くすんだろう。
恐らくそれに明確に気付いているのは俺と秋山。
本能で感じているのは田井中。
表情には出さない琴吹。
器用なことは出来まいが、うっすらと気付きかけている平沢。

だが、俺達三年は誰一人として口には出さない。

「……」

『最後』という一言を…

――――――――――

「唯、お前寝癖ついてるぞ」

「そういう律も襟足が跳ねてるぞ」

「コンセント…コンセント…」

「……」

程なくして貸しスタジオの『ＰＡＣ』に到着し、予約もしていないにも拘らず運良く四つあるスタジオの内、一つを借りることが出来た。

二時間の使用料金である三千円を支払い早速スタジオ入りした俺達。

「あずにゃん、櫛持ってない？」

「持ってきてないんですか？」

「いや～　忘れちゃって～」

「仕方ないですね、梳いてあげますからジッとしててくださいね」

「ありがとう～　あずにゃ～ん！」

「だから抱き付かないでくださいよ～！」

「……」

「み～お～　私もおねが～い♪」

「はいはい、じゃあ動くなよ」

「コンセント…コンセント…」

「……」

しかし、スタジオ内にある演奏中に変な癖等がないかチェックするデカい鏡に平沢達女性陣は夢中になってしまい、さっきから鏡に向かって身だしなみを整えていた…

まぁ、そういうのは女子所以の必須項目なのかもしれんが、限られている時間を如何に有効利用する部分をそんなことに当て嵌めてもらいたくないのが俺の本心。

「…おい、早くしろ」

「あ、ごめん咲也」

「すみません」

「もうちょっと待って…中々寝癖がとれないんだよ…」

「私も…う～ん…しつこいな…」

「はぁ…」

テレキャスを構えて演奏準備万端の俺が鏡越しに催促すると秋山と中野は急ぎベースとムスタングのストラップを肩にかけるが、平沢と田井中は中野と秋山に梳いてもらったのが納得できないのか、依然として鏡に向き合い格闘していた。

「つうかお前は何してんだ…」

唯一鏡に関心を示さず、さっきから何故か魔法瓶を持ってスタジオ内を右往左往している琴吹に視線を向ける。

「お茶淹れようと思ってコンセント探してるんだけど、どこにあるのかな？」

「おぉ！やっとムギちゃんのお茶が飲めるんだね！」

「…言っとくがスタジオ内は飲食禁止だからな」

『えっ！？』

何故身を引くぐらいに驚愕しているのか謎だが（特に平沢）限られている時間をティータイムなんかで潰されたくはない。

「…おら、さっさと準備しろ」

「「「は～い…」」」

覇気なさげにレスポールを取り出す平沢と備えてあるドラムセットに向かう田井中と軽々とした動作でキーボードを取り出す琴吹。
そんな三人の背を見て、ため息が漏れるのは必須だった。

――――――――――

♪♪♪♪…

『こんな感じの曲なんだけど』

『結構激しい曲なんだな』

『でも絶対に盛り上がりますよ』

『じゃあこの曲には『ごはんはおかず』だね！』

『…じゃあの意味が分かんねェから』

『でもさサク。新曲三曲の内、歌詞ができてるのって唯のしかないぞ』

『俺が作った曲の歌詞は俺が書いてるから後一つだ…つうかコイツの歌詞に納得してねェからな』

『ガーン！』

『そういえば澪先輩が歌詞を書くって言ってましたけど』

『あぁ、それならいっぱいできたんだ』

『すご〜い♪澪ちゃん♪』

『そ、そうかな』

『……どんな歌詞だ』

『サク先輩。その間はなんですか？』

『いや、サクが正しいな…』

『え？どういうことですか？』

『えっと…『わたしの恋に白黒つけてよパンダみたいに』とか『ペンギンさんとダンスダンスダンス』とか…』

『動物シリーズですな。澪ちゃん』

『澪が動物ネタに走ったときは不調なんだ…』

『…その度合が分かんねェが、秋山には期待出来ねェな』

『ガーン！』

『サクは歌詞と新曲作りに手一杯なんだろ？』

『あぁ…』

『んで澪はスランプ』

『そ、そんなことない！『アライグマが洗った恋』とか『きりんリンリン』とか『タヌキみたいに化かされたい』とか『私をさらってマンドリル』とか…！』

『そんなにあるんだね～』

『逆にそれがスランプなんだろ…だから却下』

『ガーン！』

『厳しいですね…サク先輩…』

『とにかく！作詞フロントマンの澪とサクが不調じゃ仕方ない！』

『…俺は不調じゃねェぞ』

『サクって作曲は早いのに作詞は遅いじゃん』

『…うるせェ』

『じゃあ私と唯ちゃんとりっちゃんと梓ちゃんで歌詞作ってこない？』

『そだね～　いつもサッくんと澪ちゃんに頼ってばっかりじゃ悪いもん』

『そうですね！……私も曲作れるようにならなきゃ…』

『なにか言った？梓』

『い、いえ！別に何でもありません！』

『んじゃあ、私と唯とムギと梓で歌詞を書いて明日発表ということ

で、今日は解散！』

『終わらせんな…　歌詞は無くとも二曲分の新曲はある。この二曲に重点を置いて練習すんぞ』

『ラジャー！サッくん隊員！』

『サッくん言うな』

こんなやり取りと琴吹の新曲と俺の新曲と『ＦＦ』と『ときガー』の四つを練習し、スタジオ使用の時間が経過して俺達はスタジオを出る。

そして秋山と田井中と琴吹と別れた帰り道。
曖昧な季節で夕暮れが早い帰り道。
少し肌寒さを感じる帰り道。
脳内で作詞と作曲をしている帰り道。
中野と亀について議論していた平沢が突如話題を変更して口を開いた。

「部室が使えないのがこんなに苦労するなんて思わなかったよ」

「そうですね。わざわざスタジオを借りなきゃいけませんから。ていうかサク先輩」

「あン？」

「スタジオ代が三千円なら先生から一万円も借りる必要があったんですか？」

「…ＳＧを売った五十万の内、二万しか俺達に寄付しなかった罰だ」

「まだ根に持ってたんですか…」

「残りの七千は部費に計上…これで文句はねェだろ」

「あ、そのお金でお菓子を買おう！」

「何言ってるんですか」

「…いい加減飲食から離れろ」

「うぇぇ～…　あずにゃんもサッくんも厳しいッス…」

部室が使えないのは確かに苦労だ。

当たり前を当たり前だと思っていた。

それが考えの甘さなのかもしれない。

「今後こういうことが起こらないとは限らねェ…
良い経験になったと留めてけ」

「はい！」
「ウッス！」

当たり前を当たり前だと思い疑わない。
それは身近にいる物や者が親しく大事で大切な程、痛感するんだろう。
例えばそれは部室であり…

「あ、お姉ちゃん、梓ちゃん、咲也さん…」

「あ、憂」

「おかえり～♪お買い物行ってたの？」

「うん…　ちょっと晩ご飯の材料が足りなくて…」

（ん？）

「そうなんだ～」

「…おい妹」

「…はい？」

「…お前、体調ワリィのか？」

「「えっ？」」

「いえ…そんなことは…」

例えばそれは買い物袋片手に曲がり角からやってきて、若干頬が紅く、足元が覚束ず、呼吸が荒い平沢妹だったり…

「う、憂！大丈夫！？どこか痛いの！？」

「大丈夫だよお姉ちゃん…」

フラ…

「ぁ…」

「「憂！」」

ポス…

「す、すみません…咲也さん…」

「サッくん…」

「サク先輩…」

明らかに体調不良な平沢妹が倒れかけ、俺が咄嗟に左手一本（右手にはアコギがあるため）で支える。

左肩には平沢妹の額が当り、そこから熱を感じる。

「平沢」

「は、はい！」

「はい…」

「お前じゃねェよ…」

体勢を崩した平沢妹を俺が支えたことに安堵の色を見せて息を吐いていた平沢に呼び掛けるが、熱で上手く頭が回らないらしい妹も反応する。

「…コイツ熱があんぞ」

「えっ！だ、大丈夫っ！憂っ！」

「うん…大丈夫…」

「…説得力ねェ返事すんな。おい中野」

「あ、はい！」

「お前と平沢でコイツ見とけ…」

「サク先輩は…？」

「タクシーでも拾ってくる…」

去年と重なる出来事だ。
風邪をひいた平沢が帰り道で倒れてタイミング良くやってきた修司の自転車を奪取し家まで運んだあの日と。
違うのは倒れたのが妹で今回はすんなりタクシーが捕まったということ。

当たり前を当たり前だと思う。
例えばそれは部室であり、平沢妹であったり…

――――――――

平沢姉妹と中野をタクシーに乗せ、俺は付き添っても何も出来ないのでとりあえず帰還しようとしたが、平沢が切羽詰まった表情で『一緒に来て！』と懇願してくるので仕方なしに俺も乗車。

数分で平沢家に辿り着き、平沢と中野が妹を支えながら部屋に運び、俺はレスポールとムスタングと二人分の鞄と買い物袋を持って最早何回目になるのか分からない平沢家の敷居を跨いだ。
ちなみにタクシー代は余った七千円で精算した。

「はぁ…」

そして現在。
何故か平沢妹の部屋にあったらしいデカい亀のヌイグルミを中野か

ら渡された俺はリビングのソファーに座り、平沢妹を看病している平沢と中野をため息を吐いて待っていた。

「サク先輩」

すると三階の階段から中野が現れた。
見ると安堵の表情を浮かべているので平沢妹の容体はそこまで事ではないらしい。

「そんなに熱はないみたいです」

「…風邪でもひいてんのか？」

「みたいです。季節の変わり目は体調を崩しやすいって言いますし」

「…アイツら姉妹は九月になったら風邪をひくのが定番みてェだな」

ソファーから立ち上がりどこで入手したのか不明なデカい亀のヌイグルミを中野に渡してテレキャスとアコギのギターケースと鞄を取ろうと手を伸ばす。

「サッく〜ん…あずにゃ〜ん…」

その瞬間に弱々しいボイスと口ずさみつつ、弱々しく平沢が階段を下りてきた。

「帰っちゃうの？」

「そんなに憂の熱は高くないですし、私達がいたら憂もゆっくり眠れないと思いますから」

「うぅ…私だけでちゃんと看病できるかな…」

「はぁ…」

見るからに不安で堪らないという表情と弱気な発言をする平沢にため息を吐いて、ギターケースと鞄に伸ばしていた右手を進路変更して…

ビシッ

「ぶひっ」

平沢の頭部に軽く手刀を落下させる。

「…アイツの姉は誰だ？お前だろ」

「サッくん…」

「…お前がそんなんだったら治るもんも治んねェぞ」

「……うん！そうだよね！お父さんとお母さんがいないから私がしっかりしなきゃ！」

「…分かってんなら、行動に移せ」

弱々しい表情と声は消え去り、一変して両手を握り締めて気合い十二分の表情になる平沢。
そんな平沢に『唯先輩、憂にお粥を作ってあげてください』と中野がアドバイスして、俺達は平沢家を後にする。

「やっぱりサク先輩って優しいですね」

「アホなこと言ってねェで、新曲の歌詞でも考えとけ…」

「クスッ　はい」

玄関の扉を閉じた途端に中野が微笑みながらそんなことを言ってくるので、反論してすっかり暗くなった外を歩き出す。

「あ、サク先輩」

「あン？」

すると中野が立ち止まり、平沢家の真横に隣接してある小さな神社を指差す。

「憂の風邪が良くなりなすようにとライブの成功をお祈りしませんか？」

「……」

所謂神頼みというやつか。

確かに軽音部員と関係者には疫病神の持つノートに名前を書かれやすいようだし、部室が使えない一件も疫病神の仕業と思える。

俺は厄払いのために、中野は平沢妹とライブのために、利害が一致した俺達は神社に賽銭を投げた。

この際は現実主義思想は封印しても良いだろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

「えーっと…」

あずにゃんに言われた通り憂にお粥を作るためにコンロにお米を入れたお鍋を乗せて水入れて火にかけたんだけど…

「砂糖と醤油ってどこだっけ？」

いつもは憂がキッチンに立ってるから調味料の場所が分かんない…

（あれ？お粥に砂糖と醤油って使うんだっけ？）

なんて考えてたら…

ツルン

「あーっ！卵落としちゃった！」

上手くいかない…
挫けそうになる…

憂はすごいなぁ…
いつもこんな大変なことをやってるんだね…

私はお姉ちゃんなのに要領が悪い…
そんな自分に涙が零れそうになる…

「サッくん…」

涙じゃなくて思わず零れた大好きな名前。
そして思い出すあの言葉…

『…アイツの姉は誰だ？お前だろ』
『…お前がそんなんだったら治るもんも治んねェぞ』

その言葉に励まされて、背中を押されて…

「ふんすっ！」

気合いを入れ直して、落ちた卵を片付けて、私はグツグツとお米が踊るように煮えるお粥に向き直る。

（大切な…大事なもの…）

グツグツ…

（いつもそばにいてくれる…でも…）

グツグツ…

（それが当たり前になってると気付かない…）

憂…

「ユー…と…アイ…」

あなたと私…

「ユー…アンド…アイ…」

グツグツグツ…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「「憂ちゃんが倒れた！？」」

翌日。十日金曜日。

朝、教室にて一応昨日の件を知らない秋山と田井中と琴吹に平沢妹が倒れたことを伝えると、それはそれは驚愕する三人。
秋山と田井中に至っては事前に打ち合わせをしたかのように俺の机に両手を置いて身を乗りだし一言一句間違わずに同じ声量で叫ぶ。

そんな二人に暗に『ボリュームを下げろ』と伝えるために音量ツマミを回す仕草をする。

「咲也君。憂ちゃん、大丈夫なの？」

「…中野曰く、そこまで事じゃねェらしい」

「ていうか平沢家的に大丈夫なのかよ？憂ちゃんが家事全般をまかなってたんだろ？」

「そうだよな…憂ちゃんが倒れたら唯は…」

何やら難しい表情でつらつらと思考する田井中と秋山をスルーしていると…

ガチャ

「おはよ～」

普段通りのほほんとした雰囲気を遺憾無く醸し出す平沢が教室の扉を開いた。

「唯。咲也から聞いたんだけど憂ちゃんが倒れたって…」

「うん。でも朝になったら熱も下がってたし、お父さんとお母さんが帰ってきたから大丈夫だよ」

「じゃあ憂ちゃんは学校に来てるの？」

「ううん。一応大事をとって休んでる」

「良かった～…　平沢家は難を逃れたわけだ！」

「…アイツ一人が平沢家を支えてるわけじゃねェからな」

「サッくん」

それぞれに杞憂に終ったことに安堵していると、平沢が俺に身体を向ける。

「サッくんが励ましてくれたから私、頑張れたよ！だからありがとう！」

「……」

満面の笑顔で小さく頭を下げる平沢に、田井中が何やらニヤニヤして腹が立つ笑みを浮かべているが、触れたら絶対に面倒なこと受け合いなのでスルー。

「それより…」

「はぅ！ムギちゃ～ん…サッくんが冷たいよ～…」

「はい♪クッキーよ♪」

「うわぁ～い♪」

「「子供か」」

一蹴したことにより平沢が琴吹に泣き付くが、どこから取り出したのか一枚のクッキーを平沢に渡すと、リスのように頬張りだす。
そんな小動物に秋山と田井中がダブルツッコミ。

「…歌詞、書いてきたのか？」

「うん！」

と、勢いよく頷いた平沢が鞄を漁ったがＨＲを告げるチャイムが校内に鳴り響き、その手は止まった。
そしてＨＲを終えた山中担任が俺達に手招きし、吉報や快報は何も平沢妹の完治だけではないことを告げてきた。

「部室の工事が終わったわよ」

『えっ！』
「…随分早くねェか？」

「水漏れしてた配水管がすぐに取り替えが済むものだったみたいなのよ」

「じゃあ部室に戻れるんだね！」

「そうよ唯ちゃん。私もやっとムギちゃんのお茶が飲めるから、教頭先生から聞いた時は涙が出そうになったわ」

「やっぱアンタの行き着き先はそこなんだな…」

「いよぉし！今から部室に行こうぜー！」

「何言ってるんだよ。授業があるだろ」

「じゃあ昼休みな！そこで書いてきた歌詞発表！」

「私、自信作よ～♪」

「ほほう…ムギ！私と勝負だ！」

「はっ！あずにゃんにメールしとかなきゃ！」

「一応私も歌詞書いてきたんだ。『キツネみたいに歌おうコンコンコン』って」

「却下」

「ガーン！」

まだまだスランプらしい秋山に間髪入れずに一言告げるとガックリと肩を落とす。

―――――――――

そして昼休み。

ガチャ

「おぉー！ぶーしーつーだーよー！生還したよー！」

気を利かせた山中顧問がドラムセットとギターアンプとベースアンプとキーボードのスピーカーと亀が遊泳している水槽を、他の教師と協力して昨日の内に部室に運び入れてくれたようで、昼休みになり部室へ向かうと見慣れた光景がそこにはあった。

そんな光景に感動した平沢が両手を高々と上げて嬉しさを爆発させる。

「やっぱ部室は良いよな～」

「はい。何かホッとします」

「もう練習場所を探すためにウロウロしなくて良いのね～」

「そうだな。部室の有り難さを実感できるよ」

口々に感想を口にする秋山達を一瞥し、俺はホワイトボードに向かい『曲目』と『ＦＦ』と『ときガー』と『アシアト』と書き込む。

「サッくん、それって新曲のタイトル？」

「あぁ…」

厄払いが功を奏したのか、未だに未完成だった歌詞だったがスラスラとペンが走り漸く完成に。
そして新曲Ｃは皮肉にも田井中が言った通りに俺は作曲が早いので二、三日集中すれば完成という目処が立った。

「…これで四曲は埋まった」

「あれ？咲也。ムギの曲の歌詞がまだないけど…」

『時間がないから仕方ない』と精神の深いところまで染み込ませ、

秋山の問い掛けの答えをホワイトボードに書き込む。

「やったぁ～！『ごはんはおかず』が採用された～！』

俺が書き込んだ『平沢の歌詞』という文字を見た瞬間、平沢がピョンピョンと飛び跳ねる。

「良いのかサク？嫌がってたのに」

「…時間がねェから仕方ねェし、琴吹が作ったあの曲調なら誤魔化せる」

「いや、無理だろ」

ブンブンと右手を左右に振って高速否定する田井中に『妥協した結果だ』と告げると納得したように『あぁ…』と頷く。

「じゃあ残すはサクが作ってる新曲だけだな。その歌詞を今から発表な！」

「はいはいはいは～い！」

『その言葉を待ってました！』と言わんばかりに平沢が大きく挙手。
そんな活気漲る平沢に俺がホワイトボード専用ペンで差すと鞄から
一枚のルーズリーフを取り出す。

「ほい」

「……」

そのルーズリーフを俺に手渡し受け取る。
歌詞が気になるらしい秋山達も俺の背後に回り込む。

（なるほど…な）

その内容に思わず感嘆する。
そして同時に『恐ろしい奴』だとも思う。

「凄いわ唯ちゃん！私、感動しちゃった！」

「私もです！こんな良い歌詞が書けるんですね！」

「澪。これからは唯に任せてみるか？」

「うぅ…言い返せない…」

ギターを始めて二年以上にして中々の腕前にまで進歩。
絶対音感というミュージシャンなら羨む才能。
本番で練習以上のものを発揮させるセンス。
『メシ』（個人的な呼び名）みたいなぶっ飛んだ歌詞を書いたかと思えば、俺の片手にある歌詞のような感銘する歌詞を書ける感受性の高さ。

（危ういな…）

二年前はからその輝きの予知はあったが、正直ここまでとは思わなかった。
ぼやぼやしてたら足を掬われるな…
俺は凡人だと自負している。
反面平沢は間違いなく天才の部類だろう。
過大評価かもしれないが、少なくとも俺はそう感じ思った。

「いなくなってみて初めて大切なものの有り難さが分かるって気持ちを込めてみました！」

「憂ちゃんと部室が作らせたんだな。だからこういう歌詞になったわけだ」

「いや～　才能が開花しちゃったっていうか～」

「はぁ…」

まぁ、こんな風に天狗になるところ、まだまだ未完成なんだとも思い…

「…お前ら三人の歌詞は？」

田井中と琴吹と中野にそう問い掛ける。

無事に部室が使えるようになり、学園祭ライブの演奏の目処が立った本日…

「『吹きすさぶ冷たい風が肌をさす
よしゑは犯人を断崖絶壁に追い詰めた
健一さん、あなたが…あなたが…犯人だったんですね！』っていう歌詞なんだけど、どうかしら？」

「ねェだろ」

「ショボ～ン…」

「悪いけどムギ、私もサクと同じ心境だ。んじゃ次、梓な」

「あ、はい」

曖昧な季節は行雲流水。
決して刻は止まらず動き流れる。

「『いつもゆらゆら揺れてるあなたの視線を感じるの…
見つめて…見つめないで…』」

『おぉ～！』
「……」

「『もうすぐ…あげるから…』」

「梓ちゃんがこんな歌詞を…」

「澪よりマシなのか…！」

「えっ！」

「なんかドキドキするよ…」

「オチは見えてるがな…」

「『ちょっと待っててね…トンちゃん』」

「あれ？あずにゃん、トンちゃんに餌をあげる歌？」

「ダメですか？」

「…お前もナシ」

「自信あったんですけど…」

「最後は律だぞ」

「任せなさい！部長の本気をみせてやる！」

歯車は止まることなく廻り、円滑にゆっくりとその日を近付ける。

「『いくらはいくら？』と『電話にでんわ』と『ネコが寝込んだ』と『鞄のバカーン』のどれが良い？」

「…最後の一曲は平沢の歌詞に決定」

『意義ナシ』

「いや、分かってたけどさ…少しぐらいは興味持ってくれても良いじゃんか～！」

ホワイトボードには…

『ＦＦ』
『ときガー』
『アシアト』
『メシ』
『Ｕ＆Ｉ』

と俺の手によって書き込まれる。

現軽音部ラストライブまで後二十二日。

第百八話（後書き）

次話からいよいよ学園祭シーズンに突入します。

第百九話（前書き）

最後の学園祭編です。

第百九話

あれから約三時間後。
場所は使用可能になった放課後の部室。

♪♪♪♪♪♪～

部室内は『アシアト』を練習している音楽に包まれていた。

有頂天なのか、或いは忘却したいのか。
まぁ、俺にとってはこの現状は喜ばしいことだ。

「ふぅ～！何か調子良いな～！」

「私もだよ。エリザ…ベースがいつも以上に手に馴染んでる気がする」

喜ばしいこと。
それは何故か？
単純な話、学園祭に向けての練習が絶好調だからだ。
特に田井中と秋山のリズム隊の二人。

練習では大概走り気味なドラムは安定し、まるで別人が叩いているかのように。
常日頃から取り立てて留意すべき点は見当たらないベースは、いつも以上の重量を感じさせる音を奏でる。

「よぉ～し！この調子でドンドン行くぜ～！」

「りっちゃん張り切ってるね～」

「あったりまえだ！学園祭まであまり時間がないからな！」

「『Ｕ＆Ｉ』は咲也が曲を完成させるまで練習できないけど、『ごはんはおかず』と『アシアト』はしっかり練習しなきゃな」

「澪ちゃんも張り切ってる！」

（張り切ってるっつうか、現実逃避っつうか…）

有頂天。それは晴れて部室が使用可能になり、練習場所を求めて流浪しなくて済んだことにより思わずはしゃいでしまうに由来する。

現に昼休みに学園祭ライブでのセットリストが決定になったというもの、平沢を筆頭に俺以外の三年軽音部員は五限の授業中、早く部室に行きたいとそわそわしていた。

そして放課後になり非常に珍しくティータイムには目もくれず、現在進行形で練習に励んでいる。

先程も触れたが特に田井中と秋山が。

…まるで何かを忘れようとしているかの如く。

「こんなに熱の入った練習ができるなんて…！何か本当の軽音部みたいですね！」

「お前は今までどこの部に属してたつもりだ…」

あながち間違ってないかもしれない。
それは眼を輝かせて俺に振り向く中野の発言ではなく、何かを払拭しようとする態度をとる田井中と秋山にだ。

心境は察する。
もし、俺が六限の出来事の渦中ならば一心不乱にテレキャスをかき鳴らしていたかもしれない。

「そろそろ休憩する？今日新しい紅茶持ってきたんだけど」

「いや！もうちょっとやろうぜ！なぁ澪」

「うん。気合い入れて練習しよう」

「そう？」

「え〜っ　ムギちゃんのお茶飲みた〜い」

「ダメですよ唯先輩。はい、ギター構えて」

「うぅ…　あずにゃんが厳しいよサッくん…」

「珍しく部長がやる気出して良い流れが出来てんだ…　このまま行くぞ」

「ぶぅ〜…」

昼休みは部室使用許可が下り、テンションが上がってそのまま五限へ。

「りっちゃんも澪ちゃんも…」

そして六限。
そこでの出来事が今の田井中と秋山のひたすら練習に打ち込む姿勢とさせた。

「ロミオ役とジュリエット役に決まった時、あんなに元気なかった

のに、何で今はそんな元気なの？」

「「う…！」」

「あれ？澪ちゃん？りっちゃん？」

「はぁ…」

「ムギ先輩、役ってなんですか？」

「あのね、私達のクラスの…」

さて、平沢が地雷を踏んで田井中と秋山の色素が真っ白になり風が吹いたら灰になって飛んでいってしまいそうなくらいにダメージを受けたところで真相を紐解いていこう。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

まずは二日前の水曜日。

この日の六限目に来る学園祭に向け、とある会議が執り行われたらしい。

二度あることは三度あるとはよく言ったもので、一年時及び二年時の時同様その会議中、俺は活動モードから温存モードに移行していた（寝ていた）

そして秋山に『起きろ咲也。今日は掃除当番だろ』と起こされ眼に飛び込んだのは…

『ロミオとジュリエット』

と、黒板に書かれてある十文字。

会議内容はクラスの出し物だったようで、またもや俺の知らぬ間に焼きそば屋、喫茶店と続いて出し物が決まった。

我が三年二組はどうやら劇をやる運びになり、あの日の掃除区域の帰り道のため息に繋がる。

…まさかこの後、部室が使用禁止になるとは露程も思わなかったので、思い返せば面倒な劇をやることになった仕業は疫病神のせいなのではないかと思う。

まぁ、百歩譲って劇は容認しよう。

今更誰かに反論しようにも完全に後の祭りだし、寝ていた俺が悪い。

それに考え方を変えれば裏方に徹すれば楽…だと思う。

そして二日後の本日の六限目に劇の役割を決めるというので、同じ轍は踏むまいと教壇に立った真鍋とクラスメイトの女子（名前忘れた）をぼんやり眺めてい…たのが間違っていた。

曖昧な季節はどこか春の陽気に似ているようで、抵抗する術を知らない俺は春眠暁を覚えずということで、アッサリと意識をブラックアウト。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　真鍋　和】

（全く…）

クラスで唯一堂々と机に突っ伏して寝ている咲也を見て小さなため息をつく。

常々思うんだけど、咲也って何でテストで赤点がないのかしら？

唯は赤点を取ってしまうことがあるけど、それは今の咲也みたいに授業中寝てしまいその分の授業内容が分からないから。

あの娘は物覚えが良いから、集中して勉強をすればテストで平均以上の点数を取れる。

でも咲也は違う。

私の知る限り赤点なんて取ったところは見たことがないわ。

（それを今考えてもしょうがないわね…）

今は『ロミオとジュリエット』の役割分担をしなければならないから、学園祭実行委員の私と委員長の松本さんが教壇に立つ。

教室内を見回すと唯も起きているのに、やっぱり咲也だけ寝ている光景に人知れず嘆息を漏らして私は口を開いた。

『では、今から『ロミオとジュリエット』の役割を決めていきたいと思います』

背後で松本さんがカッカッと黒板に文字を書いている気配を感じつつ、最も重要な役割を言葉に乗せる。

『まず、ロミオ役なんですが、やりたい人は手を上げてください』

その瞬間小さな雑談が聞こえていた教室は水を打ったように静まり返る。

『ジュリエット役をやりたい人は？』

以下同文。

それもそうよね。

自ら進んで主役をやりたい人なんて一介の高校生にはいないと思う。

主役は最も目立つから、余程の自信家か目立ちたがり屋の極端だけど別れる。

『尾栗君。君は演劇部なんだから立候補したらどうだい？』

『や、オレは本職の方が忙しいから無理ッス』

静まり返った教室で聞こえる尾栗君と伊庭君の話声。
演劇部なら是非とも立候補してほしいけど、無理強いはしたくない。

『じゃーあ、林原は？詩吟部なんだから声が通るだろ？』

『…ぼ、僕にそんな大役務まりません…』

青梅君が隣に座っている林原君にそう促すけど、小さく首を横に振る。

『あ、じゃあ！矢野は？身長デカいから舞台に映えるんじゃないか？』

『……』

『喋りなさいよッ！無口君っていうカッコいいあだ名進呈すんぞッ！』

『カッコいいか？』

鷹崎君が顔を矢野君に向けるけど、普段から無口な矢野君は僅かに首を横に動かして拒否の姿勢を取る。
そんな矢野君に修司が指差して言葉を叫んで西野君が首を傾げる。

『ジュリエットかぁ～…　お姫様って憧れるよね～』

『じゃあ三花が立候補したら？』

『そう言うけどねエリ。他に適任がいると思うんだ～』

佐伯さんが後ろを振り向き、髪をいじってる若王子さんに…

『やっぱりいちごちゃんでしょ！』
『やだ』
『うっ…早い…』

そう告げるけど間髪を入れず即答される。

『立候補者がいないようですので、推薦をしたいという人は？』

このままでは埒が明かないと判断した私はそれを口にして数秒待つ。
すると教壇の目の前の席の律が何やらニヤリとした笑みを口に携えて私を見上げる。

『はい！和！』

『田井中さん』

普段は『律』と呼んでるけど、実行委員という体裁が一応あり、公私混同は良くないから呼び慣れない名字で呼ぶ。

『ロミオ役をサクで！ジュリエット役に澪を推薦しま～す！』

『なぁっ！？何言ってるんだよ律っ！』

『はいは～い！私もロミオ役にサッくんをスイセンします！』

律は面白そうだからなんでしょうけど、唯は何となく…というか推薦の意味分かってるのかしら？

そして、まさか自分が推薦されてるとも知らない咲也は寝てるし…

『律ちゃん唯ちゃん、それは無理だな』

『『え？』』

何故か急に立ち上がった修司を見た私は黒板に筆記をしている松本さんに目配せをして手を止めてもらう。

『俺も本心じゃサクッチ…いや、咲也にはロミオをやってもらいたい』

『何で言い直したの？』

『そこは触れてやるな星都』

『だが！今の咲也を見てみろッ！』

修司が勢いよく指差すから、クラスメイト全員の視線が未だに寝ている咲也に集中する。

『寝てる！そりゃもう見事にな！』

『サッくん、朝だよ～』

『そんな奴が主役なんてできると思うちょるんかい？答えはノーだべ』

『どうしたの影宮君？やけに桐島君の肩を持つけど』

『それはな春雨』

『僕は村雨なんだけど…』

『痛い目をみるのは俺だからさ…』

『どういうこと？』

遠い眼をして哀愁を漂わせる修司に多分クラスメイト全員が疑問を感じたと思うから、代表して私が要領を詳しく促す。

『だってッ！だってッ！ロミオ役になったよ～なんて言ってみなさいよッ！問答無用で俺を蹴ってくるぞッ！』

それって保身に走ったんじゃない…

『う～ん…　確かにサクなら色々理由つけてやらなさそうだよな～…』

律の発言にクラスメイト全員が頷く。

このクラスって意外と咲也の性格を知っているから律の言葉は正論だったみたいね。

『では、桐島君の推薦は取り消すで良いですか？』

『賛成』と声を揃える皆。

一人、唯だけは『やってほしかったな～…』と言っていた。

このままいけば澪がジュリエット役になるんだけど、必死に取り下げを懇願してくるから、仕方なく澪の推薦も無かったことに。

実のところ私は咲也には、音響をやってもらいたいと思っていたりする。

咲也の性格を考えたら演者なんて絶対にやらない。

だからといって何もさせないわけにはいかないわ。

クラスの出し物なんだから、クラスメイト全員に何かしらの役割を与えるつもりだし、これを機に未だにクラスメイトの名前を覚えてない咲也に交流をしてもらいたい。

…後者は望み薄かもしれないけど、前者は何とか…

私は音楽について深い知識はないけど、咲也にとって音楽は密接な

関係だから、音響をしてもらいたい。

『推薦もないみたいですので、投票で決めていきたいと思います』

とにかく今は主役を決めなければいけないから、予め用意していた三十六枚の小さな紙を私と松本さんで配っていく。

『和ちゃん』

『何？』

『サッくんの分、私が書いていい？』

唯のその言葉に少し逡巡して『良いわよ』と頷く。
ホントは良くないと思うけど咲也はまだ寝てるし、何より唯が嬉しそうだから。

（私は唯に少しだけ甘いかも知れないわね）

幼馴染みだからということもあるけど、最後の学園祭だから多少は大目に見ても良いんじゃないかしら。
多分、今回の学園祭が私と唯の最後の学園祭だから。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

僅かに聞こえる誰かの声に俺の意識は急速に浮上の一途を辿った。
ムクリと机から身体を起こせば、真鍋がクラスメイトの名前を読み上げ、それを別の女子が『正』の字を黒板に書いく。

そして理解する。
どうやらまだ六限目らしく、劇の役割を投票で決めているらしい。

「ということで…」

全ての名前を読み上げた真鍋が、黒板の『正』が一番最多の奴の名前を口にする。

『投票の結果、ロミオ役には秋山さん、ジュリエット役には田井中さんに決定しました』

『『え？』』

全く持って予想外の事態に秋山と田井中は素っ頓狂な声をあげる。

そして俺は一人『何故だ?』と思う。
俺の知識にあるロミオは確か男だった筈。
なのに何故に秋山がロミオ役に選ばれた?

(まぁ、どうでも良いか…)

大方ふざけたクラスメイトの連中が秋山に投票したんだろうが俺には直接的な害は無いので関係ない。

『な、何で私がジュリエットなんだよ!』

『だ、大体ロミオって男の人なんだから、咲也とかの方が適任だ!…と思います…』

『…やらねェぞ』

『うぉ!起きてたのかサク…』

『おはよ~　サッくん』

『ジュリエット役なら私よりいちごの方が適任だって！』
『やだ』

『グッ…！じゃあ三花はっ？お姫様みたいで憧れるって言ってたじゃん！』

『うん。でもロミオ役が澪ちゃんなら相手はりっちゃんしかいないじゃん』

『律がボケで澪がツッコミなんだから』

『私達は漫才師じゃないぞ！信代！』

必死に否定する田井中だったが、相手が秋山ということでクラスメイトは何やら一致団結し、徐々に退路を塞いでいく。

秋山は秋山で…

『さ、咲也！ロミ『却下』うぅ…』

わざわざ俺の机の前に来ては冷や汗混じりに主役を交替しろと懇願するも、俺はかたくなに断り続ける。

逃げ場を失った田井中。
諦めが悪い秋山。

この二人の行き着く結末は…

『『や、やります…』』

覇気と生気と活気を失くしてこうべを垂れる他に術は無かった。

■■■■■■■■■■■■■■■■■

そして現在。

「だから律先輩と澪先輩はあんなに落ち込んでるんですね」

事の顛末を琴吹と俺（大半は寝ていたので詳しくは知らなかったが）で中野に語った後の開口一番がこれだった。

決して悪気の無い平沢の地雷発動により真っ白になった田井中と秋山。

リズム隊の二人が使い物にならなければ練習は不可能ということで、平沢と琴吹と中野は休憩と称した軽音部の真骨頂であるティータイムに。

俺はこの時間を利用して長イスに陣取りアコギ片手に『U&I』の作曲に。

秋山は『私…トンちゃんになりたい…』と亀の水槽の前に腰を降ろし、うわ言を呟く。

田井中は何故か俺の隣に座り、『何で私が…』と文字通り頭を抱えていた。

「でも、何で澪先輩がロミオ役なんですか?」

「…投票の結果だ」

「いえ、そうじゃなくて、ロミオって男の人ですよね?」

「あずにゃん。澪ちゃんだけに『ロ』『ミオ』なんだよ」

「ダジャレで決まったんですか…」

琴吹曰くの新茶をチビチビ飲みながらそんなことを口走る平沢に中野が呆れたように眉をハの字に下げる。

すると…

「決めた」

「あぁ？」

今の今まで意気消沈していた田井中が、決意を秘めた真剣な表情で長イスから立ち上がる。
思わず作曲の手が止まる程の近年稀にみぬ真剣さだ。

「私…」

てっきり俺はジュリエット役に腹を括ったのかと思ったが、その考えは往々にして間違っていたと思い知らせる。

「和に抗議してくる！」

「一度決まったことを捩じ曲げんな…」

「サクには私の気持ちが分かんないだ～！ほら澪！お前も行くぞ！」

耳元に叫ばれると堪ったもんじゃないので、田井中の喚きボイスを耳を塞いでやり過ごし、未だに亀を観察していた秋山の襟首を掴ん

で、一人は肩を揺らし、一人は成す術無しな感じて半ば強引に引き摺られるように部室から去っていく。

「そういえばサク先輩は何をするんですか？」

去った田井中と秋山に口を挟むことなく成り行きを見守っていた中野が扉を見た後に俺に視線を移す。

「…音響をやれだと」

紆余曲折ありながらも、『ロミオとジュリエット』の配役と役割が決まり、俺は当初から望んでいた裏方のポジションになった。
と、いっても自分から挙手をしたわけではなく、上手い具合に真鍋に誘導された気がしてならない。
腑に落ちないが、別段異論の『い』の字もない。
故に俺はすんなりと音響を受け持つことに。

「何かサク先輩にピッタリですね」

「いいな～梨乃ちゃん。私もサッくんと一緒にやりたかったのに～」

この劇の裏方には音響と照明があり、それぞれ二人一組で役をまっとうする。

俺は確か藍澤とかいう名前だった女子と組むことになり、それが決まった瞬間、何故か平沢が若干気落ちしていたのが印象に残っている。
ちなみに照明は西野と水本のお馴染みコンビに。

「そういう唯先輩は何を？」

「木！Gだよ！」

椅子から立ち上がっては両手を斜め上に上げる。
暗に木のポーズということなんだろう。

「A　B　C　D　E　F…木ってそんなに必要なんですか？」

「真鍋曰く、適材適所らしいぞ…」

「それって唯先輩は木の役しかできないってことなんじゃ…」

「…そういう根っこの部分は直接生徒会長様に聞いとけ」

まぁ、十中八九その通りなんだろうが…

「ムギ先輩は？」

「私は脚本なの。澪ちゃんとりっちゃんが主役なら、台本を大幅に直さなきゃ～♪」

（何する気だ…）

うっとりとした恍惚な表情に変化した琴吹にドン引きしそうになるのは決して間違った反応ではないだろう。

「ぐぬぬ…！ジッとしてなきゃいけないなんて、木ってなんて難しい役なんだろう…！」

「ぽ～…」

「サク先輩…こんなので大丈夫なんでしょうか…」

主役の二人は全く乗り気ではないし、脚本家は私利私欲を入れ込みそうだし、木（G）は簡単な役が逆に裏目に出そうだ…

「はぁ…」

ため息を一つ吐き出す。
これが中野からの問い掛けの答えだった…

現軽音部ラストライブまで後二十二日。

第百九話（後書き）

学園祭なのにまだ本番じゃありませんでした…

諸報告でクラスメイトを二人ほど変えました。

これは作者のミスで苦渋の決断でした。

それから、更新が遅れて申し訳ありませんでした。

第百十話（前書き）

最後の学園祭編その二です。

第百十話

十一日土曜日。
十二日日曜日。

この週末は劇のことなど頭から抜け落ちる程に作曲に集中し、その甲斐あって『Ｕ＆Ｉ』は完成に至った。

そして明けて月曜日の十三日。

「ちょっ！桐島！どこ行くんスか！」

「あぁ？」

放課後を告げるチャイムが鳴り響いた教室で、いつものように部活に行こうかと鞄を手に取りヘッドフォンを首にかけて平沢達を待たずに早早と教室から退散すべく足を動かすとクラスメイトの男子（名前忘れた）に呼び止められた。

「…部活に決まってんだろ」

至極当然と断言する。

「や、ダメッス」

しかしコイツも至極当然と断言しやがった。
せっかく完成した『U&I』を練習したい俺の心中など知る由もないんだろうが、頭ごなしに全否定される筋合いはない。

「…何でテメェにそんなことを言われねェといけねェんだよ」

「や、まぁ、実にその通りなんスけど…オレ、演劇部なんスよ」

（だから何なんだよ…）

何が言いたいのか分からないのでそんなことを思っていると、ポリポリと頬をかいていた手を止めて苦笑いを浮かべたまま、真意を語り始めた。

「今からクラスの劇の練習があるんスけど、オレは学園祭の演劇部公演で手一杯だから役者は無理って断ったんスけど、だったら演技指導とか必要なことをやってくれって委員長に頼まれたんスよ」

「ふーん…」

「ストップ！興味なさげに去らないでほしいッス！」

「…事実興味ねェし、俺は軽音部の練習がしてェんだ」

「や、そこはオレも同じなんスよ」

そこで言葉を切り、周囲を確認し、俺だけに聞こえるように音量を落として口を開いた。

「本音言うとオレも同じで、クラスの劇より演劇部の方に力入れたいんスよ」

「お前性悪だな…」

「いやいやいやいや！桐島だって似たようなこと言ったッスよ！？」

飛び出たコイツのぶっちゃけ発言に思もわず一歩後退したのは正常で正しい判断だろう。

…つうかコイツ、語尾に『ス』をつけるのが口癖なんだだろうが、俺の本音を言うと『うるさい』だったりするが敢えて指摘せずに必死に否定しているコイツに『で？』と先を促す。

「あー…っと…　まぁ、その気持ちは今も変わってないんス」

「……」

『やっぱり性悪だ』と口に出したかったが、いかんせん雰囲気がどことなくそれを言ってはいけないようだと直感し、ポッケに突っ込んでいた両手を腕組みし、黙って耳を傾ける。

「でも、今のクラスの雰囲気に感化されちゃったんス。みんな真剣なんスよね～」

「……」

それも癖なんだろうか。
ポリポリと頬をかいて苦笑いを浮かべる。
そんな奴の言葉に教室を見渡せば…

「じゃあ今から劇の練習するから、机を廊下に出して」

テキパキと指示を出す真鍋と共に教壇に立った女子。
恐らくコイツが委員長なんだろう。

「唯。採寸計るから両手広げて」

「こう？姫子ちゃん」

平沢にメジャーを当てる、そう呼ばれた女子。

「澪ちゃん、りっちゃん。はい、台本」

「うげっ！もう完成したのかよ…」

「仕事早いなムギは…」

「澪ちゃんとりっちゃんが主役だもの！張り切っちゃった♪」

相変わらず全く乗り気じゃない田井中と秋山に笑顔二割増で脚本を渡す琴吹。

「なぁ…いちごちゃん…　何故に俺はこんなキツい体勢をしなくてはいけないのかな？」

「…キツくても私には関係ないから」

「あれ？ヒドいこと言われた？おや？なんかガシラが熱く…」

「影宮君。別に今、そのポーズをとらなくても良いのよ？ほら、ゆ…平沢さんみたいな感じで」

「その言葉を早くプリーズしてほしかった…」

一体全体どういった経緯でアホはＳ字に身体を捻り、そこに山中担任が採寸を計り、縦巻き女子がそのデータを用紙に書いていく。

そんな教室内の光景を俺が見たの確認したのを見計らってコイツはこう言う。

「こんな風に真剣なんスから、桐島も協力してほしいんス」

「……」

表情は相変わらずの苦笑いだが、その言葉には重さを感じれる。
思えば軽音部だけでなくクラスの出し物も今年で最後。
ここで協力しなかったら誹謗や非難がマシンガンのように殺到しそうだな…

決して思いを改めるわけではない。
俺の中の天秤はクラスの出し物より軽音部に傾いてある。
だが、俺一人だけのうのうと軽音部に構ってはいれないんだろう。

「はぁ…」

とりあえずため息をついて、肩にかけていた鞄を右手に移動させる。

「…俺は何すりゃ良いんだ？」

「そーこなくっちゃ！」

俺がそう言った途端にニカッと朗らかに笑う。

「桐島は音響担当なんスよね？」

「あぁ…」

「オレはそれを詳しく教えてやれって委員長と真鍋さんに言われてるんスよ。だから今からオレと一緒に演劇部の部室に来てほしいんス」

「…そこに音響に必要な物があるからか？」

「そうッス」

「ふーん…」

「後は藍澤さんなんスけど…お～い！藍澤さ～ん！」

首を動かして捜していた人物を見つけると、両手を上げて高らかに叫ぶ。
すると鷹崎と春雨と雑談していたらしい藍澤が慌てて駆け寄ってくる。

「す、す、すみません桐島君！尾栗君！ちょっとお話してました！」

何度も何度も俺達に申し訳なさそうにペコペコと頭を下げる。
そんな藍澤に尾栗という名前らしいコイツが『や、そこまで謝れたらコッチが申し訳ないッス』と頭を下げ始める。

「咲也」

アッチが頭を下げたらコッチも頭を下げる終らないシーソーゲームを傍観し『やっぱ軽音部に行くか…』と本気で思案していると書類を胸に抱えた真鍋が俺の肩を叩く。

「…ンだよ生徒会長」

「だからその呼び方止めてって言ってるでしょ…」

「…秋山ファンクラブ会長」

「それはもっと止めて…」

どうやら秋山ファンクラブ会長の肩書は未だに健在らしい。
今にもため息をついきそうな程に気落ちした真鍋が『それより…』と前置きをして俺に視線を合わせる。

「劇に協力してくれる気になった?」

「…コイツを仕向けたのはお前か?」

誰かが止めなければ終らないシーソーゲームを未だに行っている尾栗に親指で指差す。

「咲也のことだからサボるんじゃないかと思って。だから協調性を

よく分かってる演劇部の尾栗君に協力してもらったの」

音響を俺にやらせたり、コイツを刺客として送り込んだり…
全ては真鍋の差し金であり掌で操られているようで、どうにも納得できない。
しかし、頷いてしまった以上はやらねばならんのだろうな…

「…言っとくが軽音部の練習ができねェ程忙しくなるっつうんなら、俺はそっちを優先する」

「分かってるわ。咲也や唯達だけじゃなくて他にも部活に入ってる人達はいるから。劇の練習時間は大体一時間って決めてるから」

その言葉を受けて、とりあえずは渋々納得する。
しかし、その一時間を超えることなんてざらにあると予想できる。
そんなに要領良く纏まった劇の練習は出来ないだろうと。
つまり超えた分の時間は軽音部の練習時間に皺寄せされてしまう。
そんなことはあってはならないので、シーソーゲームを続ける尾栗と藍澤に早く行動を移すべく声をかける。

「「和～…」」

その瞬間、台本を片手に持った秋山と田井中の主役二人と、琴吹がやってきた。

「どうしたの？」

「やっぱり無理だって。私がジュリエット役なんて違和感あるし、こういう役はいちごとかの方が適任だよ」

「やだ」

「聞こえてたのかよ…」

どうやら縦巻き女子は地獄耳らしく、視線は手に持つ採寸表に落としたままに即答する。

それに田井中が冷や汗を一滴流す。

「わ、私も…ロミオ役はちょっと…　咲也の方が「断る」うぅ…」

縦巻き女子に習って俺も秋山の懇願を音速の速さで断罪するとガックリと気落ちする。

「…つうかお前ら、コイツに抗議したんじゃねェのか？」

三日間に部室を飛び出して真鍋に異を唱えるために立ち向かった筈だ。

まぁ、数分後にかなり落胆した様子で帰還したあたり、無駄足だったと推薦出来るが…

「そうなんだけどさ、ダメだって…」

その当時の有様を思い出したのか、田井中がガックリ肩を落として呟く。

「まぁ、どうしてもっていうなら考えるけど…」

「ホントっ？」
「マジでっ？」

真鍋の発言に希望の光が差し込んだ秋山と田井中の表情がパァッと明るくなる。

「でも、せっかくクラスのみんなが選んでくれたんだから、ちょっと頑張ってみない？」

「「え？」」

「楽しみにしてると思うの。みんな」

微笑む真鍋に秋山と田井中が教室を見渡す。
それはまるで数分前に俺が尾栗に言われたのと同様に。

「…いつまでも遊んでんな。さっさと行くぞ」

これが真鍋の手腕であり、秋山と田井中も腹を括るしかないだろうと判断した俺は終わることのないシーソーゲームを絶賛開催中である尾栗と藍澤に、そう促して一足先に教室から出ていく。

「はっ！待つッス桐島！場所分かるんスか～！」

「ふぇ！ま、待ってくださ～い！」

「…うん。分かったよ」

「やるしかないか～…」

「あ！澪ちゃんとりっちゃんがやる気になるようなシーンを加筆しなきゃ～♪」

「「やらなくて良いし、何する気だよムギ！」」

「和ちゃん。サッくんは？」

「咲也なら、尾栗君と藍澤さんと一緒に演劇部の部室に行ったわ」

「えっ！？サッ、サッくん！演劇部に入部しちゃうの！？」

「しないわよ…　それより本番で失敗しないようにジッとする練習しておきなさい」

「ふんすっ！」

――――――――――

どの学年、クラスも今日から本格的に学園祭の準備に追われているようで演劇部室を目指す廊下を歩くと教室から様々な音が聞こえてくる。

そんな慌ただしい音を横目に辿り着いた演劇部室。
ジャズ研のように空き教室を部室としているその場所は、段ボールが乱雑に積み上げられていたり、彩り鮮やかな衣装が所狭しと衣装ハンガーに吊してあった。
藍澤は興味深そうにあちこちと視線を這わせ、俺は近くにあった山積みのＣＤケースを一枚手に取って眺める。

「劇の音響は大きく分けて二つに別れるんス」

部室の奥に突入していった尾栗がある物体を重そうに両手に抱えて俺達の前に姿を現した。
そしてその物体を机の上に置き、俺達に人差し指を立てる。

「一つはＢＧＭ。劇の雰囲気を演出するに欠かせないものッス。で、それを藍澤さんにやってもらおうと思うッス」

「ふぇっ？わ、私ですかっ？」

「そんなに心配しなくても大丈夫ッスよ」

「で、でも…上手くできるかな…」

（だったら何で音響担当になったんだよ…）

不安の色をはっきりと見せる藍澤に思わずそんなことを思ったが、口には出さずに何とか心に留めておく。

「そこにあるＣＤをこのラジカセで場面場面で流してくれたら万事ＯＫッスから」

「そ、それだったら…」

「それで桐島にはもう一つの役割の「…効果音だろ」さすが、察しが良いッスね」

ハナから音響にはＢＧＭと効果音だと分かっていたので、尾栗の言葉を遮って言葉を発すると満足そうに笑う。

「…その効果音を出すために、そのシンセサイザーを使うんだろ」

「ありゃりゃ…そこまで分かってるならオレの立つ瀬ないッスね…」

「あ、あの！き、桐島君！」

「あン？」

「そ、それってキーボードじゃないんでしょうかっ？」

何故一々吃るのか些か疑問を抱いたが、気にしては負け精神でスルーし藍澤が指差す先の、先程尾栗が持ってきた物体に視線を移す。

確かに一見してキーボードだが、これはシンセサイザーという音を作る楽器だ。

シンセサイズという語源があり、音の波形をいじることができる。

キーボードのようにプリセット音色が入っているものが大半だが、決定的な違いは音を変化させれるという点。

音質を調整したり、根本的に別の波形混ぜることで、独特の音を作ることが出来る、言わば音作りのスペシャリスト。

その気になればギターやベースやドラムの音だって作れる。

琴吹のキーボードは初めからプリセットされている音色のエディットが出来ないが、手軽に様々な音色を切り替えられる。

つまり、キーボードは予めの音色しか切替えが出来ないが、シンセサイザーは数百種類の音から独自でオリジナルの音色を生み出すことが可能。

ちなみに扱うにはそれなりの知識と技術が必要になる。

その点を念頭に置いてあるからこそ尾栗は藍澤にＢＧＭ担当に、俺を効果音担当に割り当てたんだろう。

「…つうことだ」

首を傾げる藍澤にシンセサイザーのことを親切に、細かく説明してやったが…

「は、はぁ…」

膨大な情報量を処理出来なかったようで、眼をぱちぱちと頻繁にしばたたかせる。
まぁ、理解したところでシンセサイザーを扱うのは俺なので、理解しようがしまいがどうでも良いんだが。

「さすが軽音部ッスね～　オレなんか未だに完璧に扱えないッスもん」

感心したように頷く尾栗に『平沢は未だに楽譜が読めねェがな』と報告すると、それはそれは驚愕していた。

その後、尾栗が持っている琴吹から手渡されていた台本を参考にし、『ロミオとジュリエット』のＢＧＭ、どの場面で最適な効果音を流すか等を大雑把に決めて、俺達は教室に戻る。

「サッくん」

「サッくん言うな」

ガチャリと木製の扉を開けると待っていたかのように平沢がトコトコと近付いて『ほ～い』っと実に気の抜ける声で台本を差し出してくる。

「ムギちゃんがさっきサッくんに渡しそびれちゃったから渡しててだって」

『ムギちゃん。忙しそうだし』と付け加えた平沢から台本を受け取る。

表紙は琴吹が書いたんであろう文字で『3―2　ロミオとジュリエット』と表記され、一枚めくるとそれぞれの役割が書いてあった。

ロミオ：秋山　澪
ジュリエット：田井中　律
モンタギュー：村雨　流緒
モンタギュー夫人：近田　春子
キャピュレット：伊庭　亮
キャピュレット夫人：佐々木　曜子
ベンヴォーリオ：青梅　隆志
マキューシオ：中島　信代
バルサザー：太田　潮
ティボルト：鷹崎　亜魅夜
エスカラス：飯田　慶子
パリス：柳　信行
ロレンス：野島　ちか

ジョン：柴矢　俊美
乳母：佐藤　アカネ
薬剤師：佐伯　三花
兵士Ａ：瀧　エリ
兵士Ｂ：小磯　つかさ
兵士Ｃ：菊地　多恵
木Ａ：影宮　修司
木Ｂ：矢野　浩太郎
木Ｃ：木下　しずか
木Ｄ：島　ちずる
木Ｅ：林原　吉宏
木Ｆ：宮本　アキヨ
木Ｇ：平沢　唯
ナレーション：立花　姫子

照明：西野　卓
照明：水本　星都
音響：桐島　咲也
音響：藍澤　梨乃
進行：真鍋　和
進行補佐：若王子　いちご
演出：尾栗　聖一
脚本：琴吹　紬
監督：松本　美冬

そして美術と装飾には…

『みんなで協力してまょう』

の文字が。

（そこは雑なんだな…）

ちなみに衣装の欄に『山中　さわ子先生』の文字があったが見なかったことにして台本を閉じる。

「つうか、もうすぐ一時間経つぞ…」

何となしに教室の時計に台本から視線を移すと五時前十分だ。

更に教室の前方では演者組が台詞読みをしている最中で、琴吹の檄が飛来していた。

「あの、モンタギュー家のロミオ様じゃありません？」

「カット！りっちゃん！そこはもっとジュリエットの気持ちになって！」

「すびません…」

「じゃあ次はロミオ！」

「え、えっと…い、いいえ、あなたがお嫌いならそのどちらでも…」

「カット！澪ちゃん！まだ恥ずかしがってる！」

「うぅ…ムギ厳しい…」

「次、りっちゃん！」

「ええっと…それにしてもさ…「カット！今のも！」ムギ、もしかして『カット』って言いたいだけじゃないだろうな…」

「エヘヘ～…♪ごめんなさい…♪」

図星らしい琴吹が照れ笑いを浮かべるが、そんな場合ではない。

「澪ちゃんとりっちゃん、大変そうだよね」

「…大変なのは現状の軽音部だ」

「そうだよね。お茶が飲めないもん」

「……」

ポコン

「ブヒッ」

見当違い過ぎることを堂々と口走りやがった平沢に丸めた台本で軽く頭を叩くと小さな鳴き声をあげる

『U&I』を含めた五曲を練習したい俺の気持ちなど知らないクラスの連中の劇の熱はヒートアップしていき、結局、終わったのは約束の一時間を過ぎた五時二十分だった。

―――――――――

「あ～…」
「もうダメ…」

現在時刻午後五時三十三分。
廊下に出していた机を教室に運び入れ、漸く部室に向かうことが出来た。
部室では既に中野が来ており一人で自主練をしていた。
そして疲労困憊の田井中と秋山はテーブルに突っ伏し、ピクリとも動かない。

「大丈夫ですか？律先輩、澪先輩」

「…琴吹のスパルタ指導で口を開くのも億劫だとよ」

「私、そんなに厳しかったかな？」

「…ハタから見たら鬼コーチだ」

「まぁ、澪先輩のロミオはとにかく、律先輩のジュリエットは無理がありますよね」

「ハッキリ言うんじゃねぇ～…」

「ツッコミに全く迫力がないですね」
「だから私より咲也の方が適任だよ…」
「まだ言ってんのか…　いい加減に腹括っとけ」
「あ！いいこと考えた！」

机に突っ伏す秋山と田井中。
全員分の紅茶を淹れる琴吹。
いつもの席に座って秋山と田井中を眺める中野。
長イスに座って平沢の分の楽譜に、分かりやすく脚色をしていく俺。
そして紅茶を今か今かと待ちわびている平沢が、何かしらの妙案を閃いたらしくこんな提案を秋山と田井中に。

「唯の言う良い事が良い事だったためしがないんだけど…まぁ、言ってみ？」

そんなことを言いつつも藁にもすがりたいのか、首の関節が錆びれたような動きで田井中が平沢に顔を向ける。

「あのねあのね、りっちゃんは普段から女の子っぽくして、澪ちゃんは男の子っぽい仕草して練習すればいいんじゃないかな」
「あぁ、それはアリかもですね」

「ンな簡単なもんじゃねェだろ…」

納得する中野に苦言を呈するかのように、現実というものを目の当たりにさせる。

「…そんな一朝一夕で変化が訪れるなら練習なんてする必要はなくなる」

「極論っぽいですけど、確かにその通りですね」

「え～っ　そっかなぁ～」

「焼け石に水に付け焼き刃…何事にも積み重ねや継続がものを言うっつうことだ…」

『継続は力なり』という名言があるように、努力をしなければ分相応の結果は伴わないと俺は思う。
とどのつまり、練習を怠るなということ。

「…つうことで、今から練習始めんぞ」

「えーっ！もうちょっと待てよサクぅ！私達疲れてるんだぞ！」

十分に元気そうに口を尖らせる田井中。
とりあえず長イスから立ち上がって平沢専用楽譜を平沢に渡す。

「ふぉ！サッくんが分かりやすくしてくれてる…！」

「…学園祭まで時間がねェんだ。ただでさえクラスの出し物で限られた時間を潰されてんだから、不平は受け付けん」

「サクは音響なんて楽な役のくせに…」

「あぁン？」

「ケンカは止めてくださいよ。ほら、澪先輩からも何か言ってください」

「すまない…実は私…転校することになったんだ…」

「「「は？」」」

「ムギちゃんムギちゃん！サッくんがこんなことしてくれたよ！」

「クスッ　良かったね唯ちゃん♪」

「うん♪」

「パパの仕事の都合でイルクーツクに移住することになってさ…」

「どこだよ…」

「…知るか」

「ていうか澪先輩はパパって呼んでるんですね…」

「お、お父さん！とにかく！そういうわけだから！学園祭ライブと劇は私の双子の妹がやってくれるから！」

「えっ！？澪ちゃんに双子の妹がいるの！？」

「いや、いないから。澪は一人っ子だし」

「…お前はレスポールのチューニングしてろ」

「ほ～い♪ギ～太～♪」

「ちなみにイルクーツクはロシアの都市の名前よ！」

「…聞いてねェから」

「ショボ～ン…」

「はっ！そうか夢か！いや～ビックリしたよ～！私がロミオ役に選ばれるなんて変な夢だよな～！」

「だんだん現実逃避がヒドくなっていきますね…」

「サッくん隊員！チューニングが終わりました！」

「…部長。秋山を正常に戻しとけよ」

「へいへ～い…」

「ムギ先輩、練習しましょう」

「うん♪」

嬉々と『U&I』の楽譜を眺める平沢。
素早くテレキャスをチューニングしていく俺。
自主練をしていたのでチューニングの必要がないムスタングのストラップを肩にかける中野。
全く落ち込んでいた様子を見せずに、キーボードに向かう琴吹。
『私…トンちゃんになりたい…』と再び呟く秋山。
そんな秋山の肩を『帰ってこ～い！』と揺らす田井中。

先行き不安、前途多難な放課後の一コマだった…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　田井中　律】

現在時刻午後六時四十二分。

辺りは薄暗く、少し肌寒い。

結局、一時間ぐらいみっちりと練習して、漸く帰路に着けると安堵の息をついて私と澪は帰り道を歩いていた。

ていうかサクのやつめ…
私達はムギのスパルタ指導で疲れてるってのに、お構いなしに練習

練習って…バカか！
そりゃ学園祭ライブまで時間がないし、この前まで部室が使えなかったからろくに練習出来なくて焦ってんのは分かるけどさ、ちょっとは私達の身にもなれってもんだ！
結果的に私はジュリエット役をやることなっちゃったけどさ！そもそも納得なんてしてないっつーの！

「はぁ…　やっぱり私じゃ荷が重すぎるよ…」

私の数歩後ろを歩く澪が何か言ってるけど、私はそれどころじゃなかった。
梓は『似合わない』なんて言うし！唯は木Gのくせに！ムギはスパルタ過ぎる！サクは口を開けば練習練習！
それだけじゃない！
なんだよジュリエットのあの歯が浮くような甘ったるい台詞は！

「なぁ、律」

そもそも何なんだよ！この『ロミオとジュリエット』は！
何かといえばもったいぶって！そんなに親が面倒なら家出でも何でもすれば良いだろ！
てか…誰だー！『ロミオとジュリエット』をやろうなんて言い出したのはー！

「やっぱり今からでも辞めたいって言わない？ほら、和だってどうしてもって言ってたし」

「……」

後ろから聞こえる澪の言葉に私はピタリと足を止める。
そして脳裏に浮かんでは消える様々な声。

『ロミオ役が澪ちゃんなら相手はりっちゃんしかいないじゃん』

三花の言葉にイラッ…

『律がボケで澪がツッコミなんだから』

信代の発言にイライラッ…

『やだ』

いちごの即答にイライライラッ…

『りっちゃんは普段から女の子っぽくして、澪ちゃんは男の子っぽい仕草して練習すればいいんじゃないかな』

唯の提案にイライライライラッ…

そして極めつけはこれ…

『まぁ、澪先輩のロミオはとにかく、律先輩のジュリエットは無理

がありますよね』

（あーずーさーっ！）

確かに！確かに！自分でも和に『違和感ある』って言ったけどさ！
あくまで『違和感』なんだよ！
私だって乙女なんだぞ！
それなのに梓め…！

「律。聞いてるか？」
「澪っ！」
「な、なんだよ！ビックリしたじゃないか…！」

私が勢いよく振り返ったから本当に驚いたように胸を押さえる澪にお構いなしに私は決意を叫ぶ。

「今から私の家で特訓だっ！」

「えっ？」

「このままバカにされっぱなしで終わって良いのかよっ！」

「私は良いけど…」

「良くなーいっ！！やーるーぞーーっ！！」

「え…？えぇぇぇ～っ！？」

アカデミー授賞女優みたいな完璧なジュリエットを演じてやる！
私をバカにしたやつらを見返してやるー！特に梓ー！

（そういえばサクって意外に私のことをバカにしてないような…）

――――――――――

「ッ！」

「どうしたの？あずにゃん」

「い、いえ…何か悪寒を感じたと言いますか…怨念みたいなものを感じたと言いますか…」

「はっ！あずにゃん、もしかして取り憑かれちゃったり…！」

「そ、そんなわけある筈ないですよ」

「でも最近、ＵＦＯを見たって言う人が増えたんだって」

「え？幽霊じゃなくて宇宙人なんですか？」

「ほぇ？宇宙人って取り憑かないの？ねぇサッくん」

「……」

「あ、音楽聴いてるから話聞いてませんね」

「サッくーん！」

「…ンだよ…つうかデケェ声出すな」

「宇宙人でも幽霊みたいに取り憑くよね？」

「…何でそんな話題になってんのか知らねェが、結果論で言えばどうでも良い」

「ぶぅ～！夢がないよ～！」

「…現実主義者と言え」

「ていうか唯先輩は宇宙人がいることを望んでるんですね…」

「う～ん…　そう言われると……よく分かんないや」

「えー…」

「アホだな…」

「ガーン！シ、シドいよサッくん…！」

現軽音部ラストライブまで後十九日。

第百十話（後書き）

三年二組　男子クラスメイト紹介

尾栗　聖一
（おぐり　せいいち）

・一年生の時から演劇部に所属しており、男子部員は聖一を含めた三人だけだった。
・現在は男子部員六人、女子部員十人の計十六人。
・二組には聖一しか演劇部員はいない。
・伊庭　亮と仲が良い。
・口癖は語尾に『～ス』
・癖は苦笑いを浮かべて頬をかく。
・今年の学園祭では『風と共に去りぬ』を公演予定。

第百十一話（前書き）

最後の学園祭編その三です。

第百十一話

現在時刻午後六時五十七分。

自宅に帰り着き、キッチンにて晩メシの用意をしているお袋とリビングで眉間に皺を寄せ新聞を凝視している親父を一瞥し、自室への階段を上がる。

制服からラフな部屋着に着替え、晩メシまでまだ時間がありそうなので自主練でもしようとテレキャスのギターケースを開ける。
部室にあるアンプより一回り小さい家庭用のアンプにテレキャスとヘッドフォンを繋ぎ、ベッドに腰掛け傍らに『メシ』の楽譜を置く。
さて弾くかと空気を肺に流し意気込んだ矢先に、突如としてそれはやってきた。

ブブブッ…　ブブブッ…

机の上に置いてあるケータイが震える。

「誰だよ…」

誰に言うわけでもなく自主練の邪魔をされたことに小さくポツリとごねりながら、テレキャスを持ったまま立ち上がりケータイを手に取る。

そしてディスプレイ画面を見た後に『はぁ…』とため息をついて、通話ボタンを押して耳に当てる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

色々と抵抗したり諦め悪く否定的な言葉を言ったけど、律の『往生際が悪いぞ澪！やると決めたらやるんだ！』とピシャリと言い切られて結局私の抵抗空しく、律と一緒に『ロミオとジュリエット』の特訓をすることに。

重い足取りで一週間前に律の家庭科の課題を手伝った以来の田井中家に着いて、リビングでテレビゲームをしていた聡に律が今から劇の練習をするからと言っている。

「お芝居の稽古？姉ちゃんと澪さんが？」

「そ、だから部屋入ってくるなよ」

「入らないけどさ、何の役やるの？」

「何だって良いだろ」

「ふーん…　まぁ良いや。あとで兄ちゃんに聞いてみよっと」

「っ！サクに聞くなよ」

「じゃあ教えてよ」

「……ジュリエット…」

「ぷっ！あっははははっ！」

「聡ーっ！笑うんじゃねーっ！」

「だ、だって！姉ちゃんが…！あははははっ！」

「だから笑うなってのーっ！」

「いたたたたっ！姉ちゃん痛いって！」

「はぁ…」

多分ジュリエット役が似合わないと思ったみたいで、お腹を抱えて大笑いする聡に我慢ならなかった律が、よく分からないけど複雑なプロレス技をかけてる。
こんな風に律が聡にプロレス技をかけてるのは日常茶飯事だけど、そんな勇ましいことをするから聡に笑われるんじゃないのかと私は咲也みたいなため息をついた。

ちなみに私は、聡の言う『兄ちゃん』が咲也のことだということを知ってる。
それは勿論律も。
不思議と『兄ちゃん』が『咲也』のことだと分かった時は納得したっけ。
咲也は頼りになるから『兄ちゃん』なんだろな。

とりあえず私はケータイを取り出してアドレス帳をディスプレイ画面に表示する。
カチカチとケータイを操作して目当ての名前の上にカーソルを合わせて通話ボタンを押す。
プルルっと数回のコール音の後にガチャと相手が通話に出た。

「もしもし？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「…何の用だ？」

「『咲也に相談したい事があって…』」

電話口の向こうから何やらドタバタとした騒音と『痛いッ！痛いッ！痛いッ！』と悲痛な叫びが聞こえる。
しかし電話の相手の声はそんな騒音と比較して些か神妙な様子だ。

「『実は…』」

ケータイを耳に当てたまま再びベッドに腰掛けたのとコイツが用件を告げだしたのは同時だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

「実は、今日帰りが遅くなりそうなんだ」

特訓ということはそれなりに時間が掛かりそうだから、私は『晩ご飯はもしかしたら律の家で食べるかもしれない』と伝える。
すると『分かったわ。あんまり遅くならないようにね』とママ。
『うん』と返事をして通話を切ってリビングに振り返ると、律はまだ聡にプロレス技をかけてた。

「律。特訓するんだろ？」

「しょ～がない！今日はこれぐらいで勘弁してやる！」

立ち上がった律の表情は晴々しているけど聡は『うぅ…』と苦痛に顔を歪ませていた。

「何やってるんだよ。聡がかわいそうじゃないか」

「私を笑った聡が悪いっ！」

堂々と言い切った律は『んじゃ私の部屋に行くぞ～』と私の背中を押して強引に歩かせる。
リビングを去り際に聡の様子を伺うと…

「やっぱり兄ちゃんに、姉ちゃんにプロレス技禁止って説得してもらおうかな…」

と言ってゲームのコントローラーを握ろうとしていた。

（聡って咲也と仲が良いんだな）

ちょっとした意外な発見に私は口元を緩めて律にバレないように小さく笑った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「『実は…何故俺が木の役なのかって事を相談したいわけさ』」

「じゃあな…」

「『ヘイヘイヘイッ！ストッピッ！ストッピだよ咲也ッ！』」

電話先の声の主である、ギリギリ地球上生命体の修司が、珍しく声量を抑えていたと思ってしまったのが俺の過信で失態だった。
やはりコイツはたまに聞こえるドタバタとした騒音に負けず劣ずな程の騒音が身についてしまっている。
…つうか『ストッピ』ってなんだ…

「…これ以上ボリュームを上げねェと口約束できるんなら切らねェでやる」

「『分かったッ！！』」

「…じゃあな」

「『ストッピ！ストッピ！俺が悪かったから切らないでくれよ！ほら！この通り土下座してるからさ！』」

「だからうるせェっつうの…で？何の用だ？」

「『ふはははははッ！土下座なんてする筈がなかろうッ！堂々と仁王立ちしてやってんぜッ！』」

「……」

言葉が出ない。
怒りを通り越して呆れてしまう。
つうか全然会話が噛み合わないし本題に触れられもしない。
いや…木の役が云々と言ってたか…

「…二つ程質問するぞ」

「『おうよ！何でもこいこい！あ、こいこいって言っても花札じゃねェからな』」

とりあえずさっさとこの無意味極まりないコイツからの電話を終わらせるために俺から渋々切っ掛けを創作してやる。

「…まず、さっきから聞こえる、人が暴れてる音はなんだ」

「『あれは、父さんと誠さんが暴れてる音だな。何か父さん、この頃プロレスにハマってるから、誠さんがその練習相手になっちょるんだな』」

『一応今、営業時間だよな？』と思ったが思うだけにしておくのか得策だろう。

ちなみに『誠さん』とは修司の家の洋菓子店『ｋＡＧｅＭＩｙＡ』

の唯一の従業員である…

『富永　誠（２７）』

だったりする。

「…当初の目的のお前の役柄についてはどうでも良いし逆にピッタリじゃねェか」

「『不思議だな…　咲也の言葉を聞くだけでさっきまで悩んでいた俺がアホみたいだぜ…』」

「…アホだからな、お前」

「『よせや～い！照れる～！』」

遂に達観したか…

一切褒め言葉なんぞ使ってないし逆に、けなしているのに、声質からマジで照れているのが分かる…

「『だがな、どうにも納得できないことがある』」

「あぁ？」

「『台本によると『木Ａ』の横にちっちゃく『Ｓ字に曲がった木』って書いてんじゃん？紬ちゃんはどういうつもりでこれを書いたんだろうな？』」

その言葉を受け、鞄から俺の台本を取り出し役割が記載されてあるページを確認する。

「ねェし…」

しかし、修司曰くのそんなものは書かれてなかった。

「…おい」

「『へい？』」

「…俺のには書いてねェぞ」

「『え？何故？』」

「…可能性があるんなら、誰かがテメェの台本に書いたんだろうな」

「『な…な・ん・だ・とッ！誰だッ！？まさか…サクッチ…！』」

「…濡衣着せんな。次に的外れなこと言ったらテメェの鼓膜を破壊する」

「『だからよ…！だからよ！だからよ！ユーはビックリ箱かってのッ！』」

「…大方、西野辺りがやったんだろ」

「『おやおや無視したかい？まぁ良いや。とりあえず明日、西野に問い詰めてやる！』」

「じゃあな。切るぞ…」

「『うむ！私の悩みは晴れて解決した！ありがとう咲也！愛してるぜ！』」

「……」

瞬間、ゾクリッと悪寒が全身に走り、身の毛がよだつ。
脳がパトランプを回す。
本能が叫ぶ『殺れ』と。
そこからの俺の行動は迅速かつ丁寧だった。

1．アンプからヘッドフォンを引き抜き、オーディオ機器にヘッドフォンのコネクタを差し込み音楽を俺の耳に流す。

2．アンプとテレキャスのボリュームを最大限に上げ、ケータイをアンプの手前に設置。

3．ベッドから立ち上がってアンプから距離を取った後、持ったままのテレキャスを構える。

4．思い切りストローク。

ジャァーーンッ！！

「『ギィィイャァアアアアアッ！！！耳がァアアアッ！！』」

5．ケータイの通話を切ってヘッドフォンを首に移動させて…

「はぁ…」

ため息をついて、ミッションコンプリート。

この数秒後、何事だと驚愕に染めた血相で両親が自室にやってきたのは言うまでもない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

「ダメだぁ…」

「台詞は何とか覚えられたけど…」

「つうか澪。笑いすぎだろ？」

「だ、だって律のジュリエットって…ぷっ！くくく…」

「思い出し笑いする程ですか！」

あれから律の部屋で必死に特訓したけど、とてもじゃないけど胸を張れる出来栄えには至らなかった…
敢えて成果を挙げるなら台詞を覚えた事と、私達には到底主役なんて務まらない事…

律のジュリエットは何か強気だし、私のロミオはおどおどしてる。
これじゃハタから見たらジュリエットの尻に敷かれるロミオだよ…

「澪のロミオだって視線泳いでて、とてもじゃないけどついていきた～いって感じじゃない、ぞっ！」

「うわぁ！」

私は慣れない特訓で疲れたから律のベッドで横になっていた。
それは律も同じだったけど、今さっき律にベッドから落とされた。
ベッド上で胡座をかく律。
カーペットの上で俯せになってる私。

カーペットの上はひんやり冷たくて、特訓で火照った私の身体と頭を冷やしてくれる。
そしてポツリと…ポツリと律しかいないから、律の部屋だからこそ言える本音が零れた…

「不安なんだよ…」

「ん？」

「演劇なんてやったことないし、ましてや主役なんて…」

不安。

今まで言葉には出さなかった。

『やりたくない』っていう本音の奥にある本音。

私は…不安なんだよ…

「その気持ちは分かる。実際私だって本番じゃ上手くやれるか分かんないし、そのための特訓だって上手くいかなかったしな」

律はベッドに腰掛けて両足をぶらぶらと交互に動かす。

私はまだ俯せのままで、顔だけ律に向けている。

「でもさ澪。もうこうなったらあとには引けないわけじゃん？クラスの雰囲気も何か一致団結みたいになってるからさ、やるだけやってみようぜ」

ニカッと笑う。

強いな律は…

そういうところが羨ましい。

私は人前に出たり立ったりするだけでアガってしまうから本当に律や鋼のハートを持っている咲也が羨ましい。

ライブの時はエリザベスを弾いて少し気が紛れるから良いんだけど、今回はそうもいかない。

「ほ～れ澪！いつまで寝てんだ～！特訓の再開ザマス！」

「誰だよ」

ベッドの上に立ち上がった律につられ、私もカーペットからゆっくりと立ち上がる。

「せめてジュリエットの、この甘ったるい台詞が無かったらな…」

「それじゃあジュリエットの意味がないだろ。そんなジュリエットじゃロミオも惚れないよ」

「ていうか澪がジュリエットやれば良かったのに。せっかく推薦してやったのにさ」

「あれは律が面白がってやったくせに」

「でも、サクと一緒にやれたかもしれないわよん♪」

「なっ！？何言ってるんだよ！？」

「おやおや～♪澪ちゅわん♪顔が赤いザマスよ♪」

「う、うるさいッ！」

「そんな感じでロミオを演じてみれば？」

「で、できるわけないだろ…」

「う～ん…　それもそうか～…とにかく特訓だ！特訓！」

「でも、上手くできないしな…」

「だから澪がジュリエットやれば良かったんだって。ちょっと不安そうにさ…」

律が頬に手を当てて物憂いな雰囲気と不安そうな表情をする。

「ロミオ…あなたはどうしてロミオなの？ってさ」

「私そんなんじゃないだろ。そういう律だってロミオをやったら…」

私は胸に右手を置き、律に左手を差し出して息を吸い込む。

「あぁ…ジュリエット…どうして君は美しいんだい？って……あれ？」

自然にできた…
律がロミオを演じているところを想像しながら演じたら上手くやれた…

「澪…！」

そういえばさっきの律のジュリエット…完璧だった。
律は私がジュリエットを演じているところを想像しながら演技をしたから…

「「で、できた～！」」

私は律が演技するロミオを想像しながら。
律は私が演技するジュリエットを想像しながら。

（これでいける…！）

偶然が生んだ奇跡に私達は手を取り合ってベッドの上で飛び跳ねる。
まだ不安は消えないけど、やれるんだっていう自信が少しでもあれば何とか乗り切れそう！……多分…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

翌日。十四日火曜日。

放課後になり今日も劇の練習。
とはいっても俺のような音響や照明等の裏方や、平沢と修司が属する木軍団はただ突っ立てるだけで良いので、常時演者組のように琴吹にコーチされたり尾栗に指南されることは殆どない（音響は俺に一任し、照明は水本に一任させやがったため）
言うなれば暇が出来るのだ。
そんな俺達は何をしているかというと…

「クラァ西野！お前だろ！俺の台本にこんなの書き加えたのは！」

「あぁ」

「っておいッ！アッサリ白状するなよ！今から俺の名探偵ぶりの推理が始まるとこだったのに！何かやり甲斐がないだろうがッ！」

「いや、だって事実だし」

「西野…お前は俺を怒らせたな…！本番じゃマジでＳ字の木になってやるからなッ！」
「別に良いけどよ…」

「サッくん先輩。まっすぐ切れないッス」

「定規使えよ…」

「はっ！そっか！」

（アホだ…）

小道具を製作していた。

『ロミオとジュリエット』にはその舞台となる中世ヨーロッパを限り無く再現するべく様々な大道具や小道具が必要になるらしい。しかし一介の高校生がヨーロッパの町並みを再現するなど、ましてや講堂のステージでそんな大掛かりな舞台を再現するなど不可能だ。そこで最低限必要な風景を抜粋し、製作することに。

演劇部で使えそうな物はそのまま拝借して使用し、足りない物を現在俺達暇軍団が発泡スチロールや段ボールを素材として鋭意製作中だ。

…俺は殆ど何もしてないが…

（しかし…）

教室内は演者組と鬼コーチの琴吹、演出指導の尾栗、出来具合把握の真鍋、統率の委員長が前方で練習。

音響の俺と藍澤、照明の西野と水本、ナレーションの…確か平沢の隣の席の女子と、真鍋の補佐の縦巻き女子と修司を筆頭にした木Ａ

～H軍団が後方で小道具を製作している。

そして俺は教室の壁に背を預けて腰を下ろしカッターを弄びつつ演者組の田井中と秋山を眺める。

「嬉しい…でも、忙しいの…」

「すご～い！りっちゃん！本物のジュリエットみたい！」

「すごいッスね田井中さん。完璧な演技だったッスよ」

「ふっふっふっ！これが私の本気だ！」

確かに琴吹の言う通り、田井中の演技は演劇部の尾栗が太鼓判を押しているぐらいに昨日とは見違える程に様になっている。

元来アイツには他人の声色の真似やナレーションという日常生活にはなんら活かせない特技を持っている。

だが、それも演技の一つ。

なので俺は、演者は田井中にとって意外と嵌り役だと思っていた。

（問題は…）

もう一人の主役である、未知数だらけのレフティベーシスト。

性格を考えたら演者は向いてないと思うが…果たして…

「じゃあ次、澪ちゃん」

「う、うん…」

琴吹の声に眼を閉じて、ゆっくりと深呼吸をした秋山が口を開く。

「た、例え…どのような悲しみであれ……」

『声小さっ！』

それは思わず演者組が総ツッコミをする程な演技だった…

「はぁ…」

ひとまず、ため息を吐き出して、段ボールを切ることに悪戦苦闘している平沢に視線を移す。

「サッくん手伝ってよ～」

「…今作ってんのはお前が本番で使う木だろ?自分でやり遂げた方が愛着湧くぞ」

「そう言わずに手伝ってやりなよ桐島」

不意に聞こえてきた声に視線を向けると、藍澤と共に段ボールを切っている平沢の隣の席の女子が微笑んでいた。

「唯は桐島に手伝ってほしいんだから。ね？唯」

「エへへ～♪」

「……」

満面の笑顔を浮かべる平沢。
何か含みのある発言をしたこの女子に訝しげな視線をぶつけたが…

「梨乃。ここ押さえてて」

「ふぇっ？あ！は、はい！立花しゃん…噛んじゃった…」

見事にスルーされた。

「…そんな小せェカッターじゃ段ボールなんて切れねェぞ」

「じゃあ一緒にやろ！」

何が嬉しいのかニコニコとした笑顔の平沢の横に移動し、俺が持っていたカッターで手際良く切断していく。

「おぉ～！すごいよサッくん！」

「グヌゥ…！サクッチにだけ良いとこは見せられんな…！ヘイッ水本！そのカッター俺に貸してくれたら嬉しいな！」

「あ、待って。今から矢野クンに貸すから。はい、矢野クン」

「……」

ペコリ

水本に矢野と呼ばれたソイツは会釈をする。

「なぁ桐島。なんで矢野は喋らねぇんだ？」

「知るか…」

西野の質問に三文字で答え、俺達はチマチマと小道具を製作していく。

ちなみに現在、既に劇の練習時間である一時間を超えていたりする。

――――――――――

現在時刻午後五時三十七分。

軽音部の練習に支障を来たしまくりの劇の練習が終わり、俺達は部室へ。

「あ～ずにゃん！」

「ニャッ！？」

部室の扉を開けた平沢がムスタングを構え譜面台にある楽譜を見ながら自主練に勤しんでいた中野に突撃して抱き付く。

頬擦りのオマケ付きで。

「唯先輩！急に抱き付かないでくださいよ！危ないじゃないですか！」

「だってあずにゃん分が足りないんだも～ん♪」

「何ですかそれ…」

「あずにゃん分が足りなくなったら私は動けなくなるんだよ。だから補給しないと」

「うぅ…サク先輩、助けてください…」

「琴吹」

「なぁに？」

「…平沢に何かやっとけ」

「唯ちゃん。クッキーよ♪」

「うわぁ～い♪」

「子供か」

徐々に中野がゲンナリとしていき、このままでは火山が噴火してしまいそうだ。

そうなっては面倒なので、手っ取り早い方法を琴吹に提案すると、どこからともなく出現させたクッキーを中野から離れて小動物のように頬張る平沢。

そんな平沢に田井中がツッコむ。

「あ、ありがとうございます…サク先輩」

「それより…」

「どうせ練習って言うんだろ？」

平沢から解放されて乱れたブレザーを直しながら頭を下げる中野を一瞥して、ギタースタンドに立て掛けてあるアコギに視線を向けると先読みした田井中がそんなことを言う。

「…そういうことだから早く準備しろ」

「まぁ、別に練習は良いんだけどさ、アレ、見てごらんなさい」

「ん？」

田井中が指差す先には最近よく見掛ける亀の水槽の前で暗いオーラを醸し出す秋山の姿。

「澪があんな状態じゃ練習なんて無理だ」

「澪先輩、最近元気ないですね…」

「澪ちゃん、ムギちゃんのクッキー美味しいよ？」

平沢なりに元気づけようとしたんだろう。
クッキーを一枚秋山に渡すが、『はぁ…』とため息を漏らす。
ちゃっかりクッキーは食べているが…

「…おい部長」

「ん？」

「…アイツがあんなに落ち込んでる理由知ってんじゃねェのか？」

ロミオ役に抜擢された日からどうにも秋山のテンションは下がりっぱなしだ。
その理由は単にロミオ役なんぞやりたくないからなんだろうが、今日は一段とテンションが低い。
なので秋山を熟知している田井中にそう問い掛ける。

「う～ん…　原因はやっぱりアレかな」

その原因とは、昨日にあるらしい。
何でも劇の特訓を田井中と行い、完璧な演技が出来るまでにレベルアップしたらしい。
しかし、その成果を発揮出来たのは田井中だけで、秋山は発揮出来なかったのでいつも以上に落ち込んでいるとのこと。

「…そりゃ難儀だな」

「りっちゃんと澪ちゃんって特訓してたんだね～」

「私をバカにしたやつらを見返そうと思ってな！」

「な、何で私を睨むんですか…」

何か恨みがあるのか田井中が中野を穴が開くぐらいにガン見している。
そんな田井中の厳しい視線に耐えきれないのか中野が俺の後ろに隠れる。

「でも、どうして澪ちゃんは特訓の成果を出せなかったのかしら？」

「…性格だろ」

とりあえず田井中の視線が鬱陶しいので、一歩横に動き中野を顕にさせる。

『あーずーさー！』

『何なんですかー！？』

と、部室内をグルグルと鬼ごっこを始めた二人をスルーして首を傾げる琴吹に答えを提示する。

かなり前だったと思うが、田井中が言っていた。

『人見知りだけじゃなく、恥ずかしがり屋、寂しがり屋、怖いものはダメ、負けず嫌いという四点セット付きだ』

これが秋山の性格。

「…幾ら特訓しようが、生まれ持った性格は押し込めねェからな」

「でもでもライブの時はベース普通に弾いてるよ？」

クッキーを食べ終えた平沢が満足げな表情で俺の隣に立つ。

「…そこは得手不得手の違いだろうな。アイツはベースに愛着があるみてェだし、それが人見知りやら恥ずかしがりの緩和に繋がってんだろ」

そもそも秋山は目立たないからベースをやっていると言っていたのを記憶している。
ロミオは言うまでもなく主役だ。
目立つのが嫌な秋山にとって苦痛以外の何物でもないんだろう。

「…これは秋山自身が何とかする以外、手立てはねェ」

これでこの話は終わりと改めてアコギに向き直る。

「咲也君」

しかし、黙考していた琴吹の声でその動作は止まり、アコギではなく琴吹に向き直る。

「澪ちゃんの人前に出る恥ずかしさを克服できれば良いのよね？」

「…多分な」

何らかの策があるのか、俺がそう答えると『よし♪』と笑顔を見せ

る琴吹。

「澪ちゃん。今度の日曜日空いてる？」

「え？…うん、大丈夫だけど…」

亀を観察していた秋山が頷く。

「りっちゃんと梓ちゃんは？」

「私も大丈夫だけど、何するんだ？ムギ」

「わ、私も大丈夫ですけど…って、律先輩退いてくださいよ…」

捕まったんだろう。

長イスに中野を押し倒している田井中が頷く。

「それは当日のお楽しみ♪唯ちゃんと咲也君は？」

「オッケーだよ～」

「…イルクーツクに行くから無理」

「いや、嘘だろサク」

食べ終わったと思ったクッキーだったが、まだ存在していたようで平沢が食べながら頷く。
そして俺は嫌な予感しかしないので拒否の姿勢を取ったが、そうは問屋が卸さなかった。

「私…トンちゃんになりたい…」

「あぁ…また澪先輩が…」

「ムギ。私にだけコッソリ教えてくれ」

「実はね～♪」

「サッくんや。いるくーつくってどこ？」

「…妹にでも聞いとけ」

俺の感じる嫌な予感。
その正体が明らかになるまで後四日。
そして現軽音部ラストライブまで後十八日。

第百十一話（後書き）

三年二組　男子クラスメイト紹介

矢野　浩太郎
（やの　こうたろう）

・男子バスケ部所属で１８９ｃｍの長身。
・ポジションはＣ（センター）
・ドリブル、シュート、パスはさほど上手くはないがリバウンドは全国クラス。
・高校生でダンクが出来る貴重な人材。
梓のクラスのバスケ部員の野久保からは『リバウンドの鬼』と尊敬されている。
・常に無口だが、同じバスケ部員の『柳　信行』だけは声を聴いたことがある。
・無口なのはシャイだから。
・現在は年末に開催される三年生にとっては最後のバスケ大会『ウインターカップ』の地区予選に向けて猛練習中。

第百十二話（前書き）

ロストです。

まずは更新が遅れて申し訳ありませんでした。

連日連夜の大震災のニュースに気が滅入ってしまい、小説を執筆する気にはなれませんでした。

しかし昔、とあるミュージシャンがラジオで『不安な夜を過ごしているリスナーに、この放送を聞いて少しでも気が紛れればと思います』という放送を録音していたのを聞いて、もしかしたら私の拙いこの小説で微々たるものでも気晴しになればとペンを取りました。

この放送をしていた時は台風で、今回は類を見ない大地震。

どちらも天災ですが、圧倒的に今回の大地震の方が被害はかなりのものです。

幸いと言っては不謹慎かもしれませんが、私は九州在住で全く被害はありませんでしたが地震の恐怖は身に染みています。

数年前に福岡県西方沖地震という震災を体験した身ですので。

私情ですが、親友の一人が東京に、親戚家族が千葉に在住しておりまして、電話回線が混合っているのか中々連絡がとれず、落ち着かない日々を過ごしていました。

昨日になり漸く親友と親戚家族と連絡がとれ、安堵をしました。

正直、気分はまだ完全に落ち着いてはいませんが上記にありますよ

うに、少しでも私のような方、被災された方々にとって一時でも気が紛れればと思い、投稿します。

感想、安否を気遣ってくださった方々のメッセージの返信はもう少しお待ちください。

では…

最後の学園祭編その四です。

第百十二話

翌日。十五日水曜日。
現在時刻午後五時四十分。

「あずにゃん」

「はい？」

「この曲のフェルマークが良いよね！」

「え？急にどうしたんですか？」

「だから、フェルマークがカッコいいよね！」

「あの…サク先輩？」

日々、劇の練習時間が増していくこの頃。
そんな劇の練習が終わった部室にて一曲演奏を終えた途端に平沢が何やら得意顔で中野に楽譜を見せるが、意図が理解出来ない中野はムスタングを構えたまま俺に振り向く。
暗に『どういうこと？』という意味だろう。

「…さっき教えたフェルマータっつう響きが気に入ったんだろ」

「そうなんですか…」

楽譜にあるフェルマータが気になったのか先程、平沢が俺に問い掛けてきた。
音符や休符の記譜上の定量時間が延長されることを指示した記号のことだと教えたが、そこは平沢だ。着眼点がズレている。
どうやらフェルマータの意味よりも言葉の響きに着目したらしい…

「やっぱりギー太にはフェルマークだよね！」

「意味が分かりませんよ…」

「…つうかフェルマークじゃなくフェルマータな」

「じゃあサッくんのギー子にもフェルマークだよね！」

「はぁ……」

最早、どこをツッコんで良いか分からないし、そんなことをするのは億劫だと感じ深いため息を吐き出す。

「そういえば昔、ベルマークって集めなかったか？」

「あ！うんうん！集めてた！憂と一緒に探したり、お隣のおばあちゃんから貰ってた～！」

「りっちゃん、唯ちゃん。ベルマークって？」

「えっ？知らないのかムギ？」

「ベルマークってね……何だっけ？澪ちゃん」

「ベルマークっていうマークを集めて貯まった点数を商品に交換するんだよ」

「へぇ～　そんな画期的なものがあるのね～」

「でも、集めたベルマークは個人じゃなくて学校とかの設備になるんですよ」

「えっ！？そうだったのあずにゃん！？サッくん知ってたっ？」

「当たり前だろうが…」

「う～ん…　ベルマークもフェルマークなんだね～！」

「だから意味分かりませんし、フェルマータですって」

切っ掛けはフェルマータの語呂から変化させた田井中のベルマーク発言。

そこから話が脱線したかと思えば、最後にはまたフェルマータに辿り着いた。

…つうかなんだ、このユルい会話…

「…ベルマークとか今はどうでも良いっつうの。次の曲いくぞ」

「そうだな。ライブまで時間ないからな！」

「おぉ！澪ちゃんが燃えてる！」

「澪。張り切るのも良いけどロミオを忘れるなよ？」

「う…！」

「澪ちゃん大丈夫よ。今度の日曜日♪」

「ムギ先輩、何をするんですか？」

「それは秘密だ！」

「うん♪」

「……」

琴吹の何かしらの秘策を知っている田井中が無駄に胸を張って琴吹がニコニコとした笑顔で頷く。

そんな二人を横目に俺は秘策に嫌な予感をひしひしと感じつつテレキャスからアコギに持ち替える。

――――――――――

翌日。十六日木曜日。

現在時刻午後四時二十八分。

「この騒動はいったい何事だ！わしの剣を持ってこい！」

「誰か杖を、杖を。剣なんかあなたには無理ですよ」

「剣を持ってこいと言ってるんだ！見ろ、モンタギューものこのこ出てきて剣を振りまわし、わしを小馬鹿にしておるじゃないか！」

「キャピュレットか。この悪党め。」

「カット！ッス」

尾栗がどこから持ってきたのか（演技部室だろう）右手に持っていた白と黒のラインが入った板（名称不明）を鳴らし、演技を止める。

「尾栗君から見て三人の演技はどう？」

「そういう委員長はどうッスか？」

「私は及第点だと思うけど」

「そうッスね…　亮のキャピュレットは問題ないッス」

「わたしは勉強の合間を縫って自宅で自主練してるから当然の結果だ」

尾栗に亮と呼ばれたソイツが得意げに小さく笑いながらかけている眼鏡をクイッと上げる。

「うーわ…　伊庭が鏡の前で台本片手に自主練…ぷっ！」

「笑ってるんじゃないぞ青梅。君も自主練したらどうだね？」

「おーれはバイトが忙しくて中々ね～」

『伊庭　亮』という名前らしい眼鏡野郎の聞いてもない自主練自慢に、青梅と呼ばれたソイツは吹き出すように笑い、後頭部で手を組んでそんなことを言う。

「佐々木さんのキャピュレット夫人はもうちょっと声を出してほしいッス」

「あ、秋山さんみたいな演技をしたんだけど…ダメでしたか？」

「え？私の真似…？」

「別に澪の真似しなくて良いから佐々木さん」

（そういえばアイツだったか…秋山のファンクラブの集いにいたクラスメイトは…）

「イタッ！イテェってサクッチッ！」

佐々木と呼ばれた女子は秋山をチラチラ見ながら照れるが、秋山はキョトンとしている。
そんな佐々木に真鍋が苦笑いで否定し、俺は出来上がったばかりの段ボール製の剣を修司に刺しながら一人そんなことを思う。

「村雨君は怒気を含んだ演技をしてほしいッス。モンタギュー家とキャピュレット家は不仲ッスから」

「うん、分かったよ」

「じゃあ次は、ロミオ役の秋山さんとティボルト役の鷹崎君の街頭でのシーンッス」

「あ、う、うん」

「澪ちゃん、落ち着いて」

「深呼吸しろ澪」

見るからに緊張している秋山に琴吹と田井中がリラックスするように諭し、幾分落ち着いた秋山が黒板の前に立ち準備完了。

「あれ？俺の剣は？」

しかし対する鷹崎は小道具がないことに気付きあちこちに視線を迷

わせる。

「あ、鷹崎クン。剣なら今、桐島クンが持ってるよ」

「……」

コクリ

「お、ホントだ。その剣くれ、桐島」

「なぁ柳。矢野が何言ったか分かるか？」

「そうですね…うんって言ってますよ」

西野に柳と呼ばれたソイツの疑いたくなる発言を尻目に見て修司を刺していた剣を鷹崎にぶん投げる。

「うぉっ！危ねぇな桐島！刺さったらどうするんだよ！」

「…刃が真剣じゃねェのに刺さるわけねェだろ」

「いや、そういうことじゃないからなサク」

「あ、あの！桐島君！」

「あン？」

「びぃ、ＢＧＭに使うＣＤを選んでくれましぇん…うぅ…噛んじゃいました…」

「はぁ…」

何かイマイチな藍澤にため息をついて床から立ち上がり、教室の片隅にあるラジカセとＣＤケースの山に向かう。

「あ！サッくん！私も手伝う！」

「唯はまだ木を作ってる途中でしょ」

「うぇぇ～…　和ちゃん厳しいでんがな…」

（でんがなって何だ…）

平沢の意味不明な方言に人知れずため息を吐き出してしまったのは仕方がないことだろう。

――――――――

翌日。十七日金曜日。
現在時刻午後五時四十三分。

部室にてライブの練習中に些か気になる点があるので『Ｕ＆Ｉ』が

終わった瞬間に口を開く。

「平沢」

「ほい？」

「…まだ慣れてねェ曲だから仕方ねェかもしれんが、コードを確認する時にマイクから口を外すな」

歌唱中にマイクから口を外す。
これはボーカルがしてはいけない行為だ。
歌ってる最中にギターの指板を確認したいために下を向き、自動的に口がマイクから外れてしまうことにより瞬間、歌が聴こえなくなり、また復帰。
こんなことを繰り返していると、とてもじゃないが観客は聴いていられなくなる。

平沢の場合、新曲を練習中に特に如実にそれをしてしまう癖がある。

「でもでも難しいんだよね」

「…身近に手本がいるだろ」

そう告げて秋山を親指で差す。

「え？わ、私？」

「…アイツがボーカルをやった時は模範的だ」

秋山はマイクから口を外さずにボーカルをやり遂げている。

一般的にはベースボーカルは難しいという理論がある。
ベースは演奏中はリズムキープやバンド全体のリズムの仲介のためにドラムやギターの音から耳を離せないシーンが多く、そのことにかなり神経を使う。
更にその上に自分が歌うまでのエネルギーを消費するのでベースボーカルは難しいとされている。
世にはベースボーカルをやり遂げているバンドも多数存在するが、多くのベーシストはコーラスが関の山だったりする。

その点を考慮すれば秋山は何気に凄いことをやっている。

「…中々そんな器用なことが出来る奴はいない」

「い、いや、そんなことないよ咲也…」

ガラにもないと自分でも思うが、俺の称賛に前髪をいじり顔を俯かせてモジモジと照れ始める秋山。

「そんなことないですよ澪先輩。去年の学園祭ライブや、お茶会の澪先輩のボーカルは凄いと思いましたから！」

「私も思った～♪澪ちゃんって凄いな～って♪」

「そ、そんなことないって…！」

言葉では否定してるが、表情はかなり嬉しそうに笑顔を浮かべている。

しかし…

「これでロミオ役が完璧だったら澪ちゃん無敵だよね！」

「うっ…！」

「あれ？澪ちゃん？」

首を傾げる平沢が放った天然爆弾に秋山の表情から笑顔が消え、一変して暗い表情になる。

「さすが唯だな…恐るべき天然…！」

「悪気はねェんだろうがな…」

『はぁ…』と田井中と重なった、ため息が平沢という天然ギタリストを象徴した瞬間だった…

「…とにかくお前は早いとこ、この曲のギター覚えろ」

「了解です！サッくん隊員！」

「サッくん言うな」

一方通行なデフォルトキャッチボールを平沢と行い、『んじゃ次！『ふわふわ時間』な！』と次の曲を練習しようと意気込む田井中がスッとスティックを掲げた時に…

ガチャ

「練習してるところ悪いんだけど、ちょっと良いかしら？」

どこか機嫌が良さそうな真鍋が部室の扉から顔を覗かせた。

「やっほ～　和ちゃん」

「どうしたの？和ちゃん」

両手を振る平沢を見事にスルーして、琴吹の言葉に『実は…』と前置きして主に秋山を見ながら真鍋が口を開いた。

「さっきケータイに曽我部先輩からメールがきて、学園祭に来れるらしいの」

微笑んで意外な事を告げた真鍋に…

『曽我部先輩が！？』

「……」

平沢達女性陣は心底驚愕したように眼を見開き、俺は特に驚きもせずに腕を組む。

「うん。学園祭が二日間開催になったのが良かったみたいで、土曜日は用事があって無理だけど、日曜日の軽音部のステージは観に来るらしいわ」

「じゃあ曽我部先輩は劇を観れないのか～　残念だったな澪？せっかく曽我部先輩に晴姿を見せられなくて♪」

「い、良いよ…　曽我部先輩に見せなくても…」

「でも曽我部先輩って澪先輩のファンなんですよね？澪先輩のロミオを見たいと思うんですけど」

「だから、澪のロミオの写真撮っておいてって書いてあったわ…」

「万事抜目がねェな、あの人…」

流石は元生徒会長と秋山ファンクラブ会長のダブル会長だな…

「曽我部先輩が来るんなら絶対にライブ成功させなきゃね♪」

「そうですね」

「澪ちゃん！観れない曽我部先輩のためにロミオを頑張らなきゃね！」

「うっ…！」

「あれ？澪ちゃん？」

「さすが唯だな…二度も同じことをするとは…！」

「無邪気な悪ほど、恐ろしいもんはねェな…」

『はぁ…』と田井中と重なった、ため息が平沢という天然ギタリストを象徴した瞬間だった…

――――――――――

翌日。十八日土曜日。

現在時刻午後三時十八分。

「よ〜し！ちょっと休憩するか〜」

この日、俺達は昼過ぎから練習をしている。
練習といっても勿論演劇ではなく軽音部のだ。

土曜日は休日であることを利用し、演劇に潰されていた放課後の時間を、少しでも挽回しようと思い立った俺が昨日の軽音部の練習終わりに提案しようとしたが、先に田井中から『明日、練習しようぜ』と提示した。
珍しく部長らしい田井中に感心しつつ否定する理由がない俺…俺達は頷いた。
田井中も学園祭ライブを必ず成功させたいという想いの表れなんだろう。

そして現在、一通り練習を終えて休憩に。

「ぷへ〜　やっと休憩だ〜！ムギちゃんのお茶が飲みたいから今まで頑張れたんだよ〜」

「もうっ唯先輩！そんな気持ちで練習しないでくださいよ！」

「…たまには良いだろ」

「え？」

スキップしてテーブルに向かう平沢に中野が頬を膨らませるが、テレキャスをギタースタンドに置きながらの俺の発言に、中野が徐々に頬の膨らみを萎らせていく。

「…理由は若干不純だが、それでモチベーションが保てるんなら今は良い」

「サク先輩…」

「それにアイツはボーカルだ…　休憩を入れねェと、また声を嗄らしたなんてなったらコトだ…」

「クスッ　そうですね」

「何笑ってんだよ…」

「いえ、サク先輩って唯先輩に色々気を遣ってるんだなって」

「…勘違いも甚だしいぞ」

「じゃあ私だけそう思ってますね」

「梓ちゃんはミルクティーで良いかしら?」

「あ、はい」

「……」

平沢の隣の席の…立花っつったか？
アイツもそうだったが、中野も何か含みのある笑みを浮かべる。
何か異論を言おうとしたが琴吹に手招きされ、さながら猫のようにトットットッと足音を立てテーブルに向かうニャカ野にそのタイミングを逃してしまう。

「はぁ…」

ドカリッと定位置の長イスに腰を下ろし、どうにも納得いかないニャカ野の発言に、ため息をつくことで何とか気分を一新し、そのまま横に倒れる。

「そういえば梓のクラスって何をするんだ？」

耳が捉える秋山の声。

「和風喫茶です」

「和風喫茶って？」

琴吹の声。

「えっと、時代劇に出てくる峠にある小さなお茶屋さんってありますよね？あんな感じをイメージした喫茶店なんです」

「へぇ～　よくそんなの思い付いたな～」

田井中の声。

「最初は普通の喫茶店だったんですけど、純がそれじゃ面白くないからって」

「あ、そうそう。憂が言ってたよ。衣装もかわいいんだって～」

平沢の声。

「当日はクラスメイト全員和服で接客するんです。何かさわ子先生が用意するって言ってましたけど…」

「さわちゃんが？私達のクラスと軽音部の衣装も作るって言ってたのに、大丈夫かよ…」

「大丈夫！私はやると決めたらとことんやり通す女だから！」

山中顧問の声…ん？

「「さわちゃん！？」

「「さわ子先生！？」」」

今の今まで声も姿も無かった筈の山中顧問の存在を感知した俺はムクリと身体を起こし、テーブルに視線を向ければ、専用の席にいつの間にか足を組んで座っている山中顧問が。

「アンタいつからいた…」

「え?さっき普通に扉から入ってきたけど?それよりムギちゃん、私にもお茶を貰えるかしら?アールグレイが良いわね～」

「あ、はい」

一体どこで神出鬼没のライセンスを修得したのか、気配を消す術を身につけたのか。
そんな果てしなくどうでも良い疑問を覚えながら小休憩ということで再び横になり、左腕で両眼を覆ってまどろみに身に任せていく。

「さわちゃんさ、他のクラスの衣装も作ってないだろうな?」

「作ってるけど?私のクラスと梓ちゃん達のクラスと軽音部でしょ?あとは二年二組と三組の衣装も作ってるわ」

「そんなにやって大丈夫なんですか?」

「大丈夫よ澪ちゃん。私はこういう形でしか、みんなの協力が出来ないから…だから、私に出来ることをやりたいの」

「さわちゃん…なんかホントの先生みたいだね」

「私は先生なんだけどな～♪唯ちゃん♪」

「ご、ごめんなさい!」

「先生の笑顔が怖いです…」

「どうぞ先生♪アールグレイです♪」

「待ってました♪」

「ありがと～！ムギちゃん！怖かったよ～！」

「そういえば練習の方はどう？」

「サクのスパルタ指導で何とか」

「咲也はライブのために張り切ってるんだから文句言うなよ」

「そうよ。ライブって日々の練習が発揮される特別なステージなんだから。咲也くんはそれが分かってるのね」

「やっぱり律先輩よりサク先輩の方が部長に向いてるんじゃ」

「なんだとー！梓ー！」

「そういえば梓ちゃん」

「はい？なんですか先生」

「やっぱりネコ耳は必要よね♪」

「いりません」

「え～…」

「だから何で唯先輩が落ち込むんですか！」

「しょうがないわね。じゃあライブで歯ギターお願いね♪」
「ヤです」

「じゃあ唯ちゃん」

「イタタタッ！急にお腹痛くなっちゃった！」

「えっ？大丈夫っ？唯ちゃん」

「よく見ろよムギ。唯が押さえてるのは頭だぞ。てか、そこまで歯ギターをさせたいのかよ、さわちゃんは」

「だって、絶対に盛り上がるじゃない。ねぇ？澪ちゃん」

「ど、どうでしょうか…」

「やっぱりここは咲也くんに「…やらねェぞ」ぶぅ～！」

「サッくん起きてたんだ」

「…お前らがうるさくて寝ろうにも眠れる状況じゃねェ…つうかサッくん言うな」

「うるさいのは、さわちゃんだって」

「何か言った？りっちゃ～ん♪」

「と、と、と、言えと澪がっ！」

「な、何言ってるんだよ律！」

（本当に騒がしいな…）

そんなことを思い両眼を覆っていた腕を右腕に変更して再度まどろみの船に乗船しゆらゆらと意識を夢の国に飛ばしていく。

そして…

――――――――――

翌日。十九日日曜日。

現在時刻午前九時三分。

『……』

「♪」

俺達は目の前の建造物に絶句し、琴吹だけはニコニコしている。

遂にやってきた日曜日。

本日は琴吹曰くの秋山の人前に出る恥ずかしさを克服するための妙案を発動させる日であり、俺が感じる嫌な予感が当たりそうな日でもある。

その嫌な予感を回避すべくイルクーツクに…もとい、修司の家にでも退避しようと玄関の扉を開けたがしかし、そこには平沢と中野のギタリストコンビが立っていた。

『おはようございますサク先輩』

『お迎えに参上しました！サッくん殿！』

『…何故？』

『んとね、りっちゃんがサッくんは逃げようとするから迎えに行ってって』

『あのカチューシャめ…』

『律先輩は澪先輩とムギ先輩と一緒に来るそうですよ』

『ということでレッツゴー！』

俺の腕を掴んで歩きだした平沢に抵抗が出来ず、成す術なしに俺は嫌な予感がするのに足を踏み出してしまった冒険者となり、軽音部ギタリストトリオで待ち合わせ場所である、『１０ＧＩＡ』に連行された…

そして合流したカチューシャとレフティベーシストと給仕大好きキーボーディストと共に目的地を目指す。

秘策の概要を知らない俺達は琴吹を先頭に歩くこと約十分。

そこは郊外にある一軒の建造物。

普通の建物ならば俺達は絶句なんてしない。

しかしながら現状俺達は言葉を失っていた。

それはＳＧの売却価格が諭吉五十人だったあの時と同様に。

「何だここは…」

比較的、平沢達より絶句症状が軽症だった俺が建造物を見上げたまま琴吹に問い掛ける。

「ここはね、喫茶店なの♪」

「喫茶店っ！？」

次いで秋山が同じく建造物を見上げたまま声を裏返す程に驚愕する。

別に琴吹を疑うわけではないが、この建造物が喫茶店だと言われて、すんなりと受け入れられない。

何故なら、外観が小さな屋敷と言っても過言じゃない程、絢爛な建造物だからだ。

清潔感がある真っ白な壁。

太陽を象徴するかのような紅い屋根。

緑豊かな周囲。

門構には草木で出来たアーチ。

夜になったら輝かしい灯を灯すであろう照明。

そんな上流階級なお嬢様が住んでいそうな建物がとても喫茶店だとは思えない。

「ムギ先輩、ここって本当に喫茶店なんですか？」

「うん♪知り合いの人がやってる喫茶店よ♪」

（なるほど…）

度々忘れがちだが琴吹はベルギー王室のチョコを入手出来るレベルのブルジョワだ。

だからこんな立派な喫茶店を生活水準がごく一般的な俺達に紹介出来る…と。

「…で？ここで何すんだよ？」

「みんなでね、バイトをするの～♪」

「はぁ？」

何を言ってんだこのブルジョワは？

「バイトの接客で澪の人前に出る恥ずかしさを克服しようってわけさ」

「えっ！？」

（そういうことか…）

事前に琴吹から耳打ちで秘策の内容を知っていた田井中（コイツも絶句していたが、恐らくこんなミニ屋敷だと思わなかったんだろう）の報告で一応は納得してやる。
しかしだ…

「バイトをするんなら秋山だけで良いだろうが…」

このバイトが秋山にとって功を奏するんならば、張本人がやれば良いことであり、俺は関係ない。

「冷たいなサクは。これも軽音部の活動の一環だ！」

「…とてもそうには思えねェが」

「良いから行くぞ～！ほら澪も！いつまで固まってんだ！」

「うわっ！ちょっ！律！」

「ゴ～ゴ～♪」

「ムギまでっ！？」

まさか自身のマイナススキル改善のためにこんな高級感丸出しの喫茶店で接客をするとは予想だにしなかった秋山は依然として硬直し

ていが、田井中に手を引かれ、琴吹に文字通り背を押され強引に喫茶店内に連行されていった。

「サッくん、あずにゃん、私達も行くよ～」

「あ、はい」

そして、取り残されたギタリストトリオの俺と平沢と中野。
平沢と中野はやる気らしいが、俺は接客なんぞクリスマス時期に修司の家で嫌という程に経験している。
つまり面倒だし怠いので踵を返してエスケープを試みる。

「こんなところに喫茶店があったなんて知らなかったな～」

「私もです。こういう経験がなかったら来れませんしね。高そうですから」

「そだね～」

「離せコラ」

しかし、さり気なく平沢が俺の手を引き、中野がこれまたさり気なく文字通り背を押してきやがることにより、エスケープは失敗に終わり、俺も秋山同様に連行の一途を辿るハメに…

……

店内はやはりと言うか気品漂う内装だった。
無駄に長い廊下の端々に高級そうな壺や絵画に彩り鮮やかな花が装飾されてあり、かなりランクが高い喫茶店だと推測出来る。

廊下を抜けた先には所謂喫茶店のスペースなんだろうが、まるで高級レストランを彷彿するような広い部屋。
ここにも様々な高級そうな装飾品が飾られ、天井にはまさかのシャンデリア。

「ふわ〜…凄いね〜…」

「こんなもんに金を使う暇があんならもっとタメになるもんに使えよな…」

「サク先輩って倹約家みたいですね…」

先に進んで行った田井中達と合流し、中々お目にかかれない展示物に呆気にとられていると、コツコツと響きのいい足音を鳴らしてスーツを着こなしこの店の雰囲気同様に気品がある初老の男性がやってきた。
恐らく支配人なんだろう。

「お待たせいたしました。私、店長の市川です」

訂正。店長だった。

「紬お嬢様たっての希望で、本日皆さんにバイトという形でウェイターとウェイトレスで当店を手伝って頂きます」

微笑みながら上流階級な雰囲気を醸し出す店長に感化されたのか、平沢達は緊張して背筋を伸ばしている。

「みんな、そんなに固くならなくて良いからね」

訂正。琴吹は普通だ。

「では、皆さんには着替えて頂きますので、こちらへどうぞ」

スッと流れる動作で左手で指し示した先には『ＳＴＡＦＦ　ＯＮＬＹ』の文字プレートがある二つの扉。

「室内に当店のウェイターとウェイトレスの洋服がありますので、そちらに着替えくださいませ。女性の方は右の、男性の方は左の部屋に」

絶えない微笑みでそう言った店長は『では、紬お嬢様よろしくお願いします』『私の方から無理にお願いしたんですから、そんなに改まらないでください』と琴吹と二、三会話して更に奥にある廊下を進んで行く。

そんな慣れない店長オーラに当てられ息が詰まりそうになった店長

の背が見えなくなったのを確認した俺は、部屋に入ろうとした琴吹を呼び止める。

「おい、琴吹」

「なぁに?咲也君」

「…他のフロア担当はいねェのか?見たところそれらしい連中の姿がねェが…」

「あ、うん。今日は私達がバイトで入るからお休みにしたんだって♪」

「……」

嫌な予感的中。

接客なんぞ学園祭レベルぐらいしか経験がねェ俺達にこんな高級喫茶のフロアを任せんなよ…

「頑張ろうね!咲也君!」

「…お前、秋山の弱点克服っつうのは建前で、本音は自分がバイトをしたかったからじゃねェだろうな」

「エへへ♪ちょっとだけ♪」

「はぁ…」

「でもね？澪ちゃんのためっていうのはホントなの」

「…そこが嘘だったら俺は今頃帰ってるっつうの」

「クスッ　でも咲也君なら帰らないと思うの」

「あぁ？」

「だって、咲也君っていつも私達と一緒にいてくれるから、軽音部だからとかじゃなくて♪」

「……意味分かんねェ」

実のところ『部活仲間だからだ』と告げようとしたが、咄嗟に飲み込んだ。
時期が時期だからだろうか、それを口にしてはならない気がした。

「…とにかく、バイトは渋々やってやるが、当初の目的忘れて楽しむなよ？」

「うん♪ちゃんと澪ちゃんの恥ずかしがりを克服するために頑張る♪」

まぁ、こう言ってるんだから大丈夫だろうが、いかんせん肝心の秋山が乗り気じゃないのが些か不安要素だが、俺が気にかけたところ

で意味は無いので琴吹と別れて扉を開ける。

……

室内のウェイター服である黒スーツに着替えて、一人暇を持て余しているとウェイトレス服のメイド服に身を包んだ平沢達が部屋から出てきた。

「あ！サッくん！スーツだぁ！」

「へぇ～　何か様になってるなサク」

「うんうん♪」

「似合いますねサク先輩」

「サッくん、どうかな？似合う？」

「サクのことだから、どうせ…」

「普通」

「って、やっぱりな…」

「うぅ…　あずにゃ～ん　…　サッくんがぁ～…」

「…それより秋山はどうした？」

「あー…　澪のことだからどっかに隠れてると思うけど…」

「あ！りっちゃん隊長！澪ちゃん隊員はあそこに隠れてます！」

「何やってるんだよ澪～　今日は澪のための特訓なんだから」

「わ、私はいいよ…」

「良くない」

「あ！うっかりしてたよ！今日はイルクーツクに行かなきゃならなかったんだ！」

「はいはい。それより早くこっちに来い」

「うぅ…」

漸く観念したのか物陰に潜んでいたメイド服を身に纏まった秋山が足取り重く俺達の元にトボトボとやってくる。
そして、その後に相変わらず気品オーラ全開の店長がやってきて、一通りのバイト内容の説明を終える。

「それでは皆さん、お願いしますね。慣れないうちは戸惑うこともあるかと思いますが、とにかく一番大切なのは、お客様を迎える気持ちと…」

なんだろうな…
再び嫌な予感がする…

「笑顔です」

「……」

本日二度目となる嫌な予感的中…

『笑顔…』

「ンだよ…』

一斉に俺を見るウェイトレス集団。
その瞳は何かに期待に満ちているのは気のせいであってほしい。

「サッくん」
「サク」
「咲也」
「咲也君」
「サク先輩」

「断る」

平沢達が何を言いたいか手に取るように分かるので、先手必勝ということで腕を組んで拒否の姿勢を取る。

「ダメだよサッくん。大切なのはお客様を迎える気持ちと笑顔なんだから」

「…気持ちがありゃ十分だ」

「サク。その気持ちの大きさは？」

「…ペットボトルの蓋並」

「小さいですよ…」

「…全くねェよりマシだ」

「でも咲也君、笑わなきゃ♪」

「…俺がルールブックだから必要ナシ」

「凄いこと言い切ったな咲也…」

どうにかして俺を笑わせようと、あれこれ言葉を散らしてくるが、聞く耳を一切持たない俺は雁として受け付けないまま、時間だけが過ぎていく。

そして、遂に諦めた平沢達が肩を落として俺が勝者になったのを見計らった店長が微笑みながら口を開いた。

「無理強いはよくないですからね。桐島さんは普段通りにしてくださ い」

「あの…お言葉なんですが、サクの普段は「ちょっと黙ってろ」ぶぅ〜！」

「では、お店を開けますね」

今のところ微笑んだ表情しか知らない店長が開店を告げて、秋山マイナススキル改善バイトがスタート。

……

現在時刻午前十一時二分。

開店させて程なく、客がやってきた。

とはいえ、この喫茶店は隠れ家的な穴場なのか、さほど客の数は多くない。

一応俺もフロアの片隅でメニュー片手に待機してるが、接客の殆どは嬉々な様子の琴吹と、根が真面目な中野、ノリが良い田井中、何気にミスをする平沢が行っている。

しかし、昼時に近い今の時間帯で遂に俺も駆り出され、慣れない接客をしている最中だ。

「すみません。注文良いですか？」

「…はい」

「アッサムティーとブルーマウンテンブレンドを」

「…アッサムティーとブルーマウンテンブレンドをお一つづつッスね。少々お待ちください」

聞き覚えが全くない紅茶と有名っぽいコーヒーを伝票に書き込み、小さく会釈し、厨房へ向かう。

「…つうかお前働けよ」

その途中、唯一何もしていないおどおどした秋山を発見し、足を止める。

「だ、だって…緊張するんだもん…」

「…このバイトの趣旨はお前のためにやってんだから、いつまで隠れてんな」

「そうだぞ澪」

すると背後から田井中がやってきては腰に両手を置く。

「サクだって働いてんのに、肝心の澪がそんなんでどうすんだ」

「うぅ…」

「すみませ～ん」

「ほ～ら、呼ばれてるぞ」

「え、で、でも…」

「良いから行ってこい！」

「うわっ！」

渋る秋山に田井中が文字通りドンッと背を押して秋山をフロアに突き出す。

「こうやって無理にでもやらせないと意味ないからな～」

「…それに結果が伴えば良いが、どうにも旗色ワリィぞ」

かなり緊張した面持ちで女性の二人の客に接客を始めた秋山だったが…

「あ、あの、えっと……いってらっしゃいませ！」

「「え？」」

「あ！す、すみません！い、いらっしゃいませ！ご注文を繰り返します！」

「私達、まだ頼んでないんですけど…」

「あ！あ、あの！す、すみません…！」

「大丈夫？落ち着いて」

「は、はい…」

客に気を遣わせる惨事を発生させていた。

雲行きが厳しくなっていくが俺と田井中は黙って静観する。

「ご、ご注文をどうぞ」

「モカブレンドを一つ」

「私はニルギリティーをお願いします」

「は、はい……あ、あれ？ペンがない！」

「慌てなくて良いからね」

「す、すみません…」

何度も何度も申し訳なさげに頭を下げる秋山が何だか不憫だ。
しかし、めげない秋山は近くを通った平沢にペンを借りて事なきを得ようと一旦持ち場を離れる。

「やれやれ、見てたらこっちの肩が凝るよ」

「…秋山にとってはマイナスかもしれねェが、アッチはそうでもねェみてェだな」

「え？」

首を傾げる田井中にメニュー表で秋山が接客をした女性客二人を指し示す。

「高校生かな？」

「かわいいね～」

「そういえば私達が会社に入社した頃もあんな感じだったね」

「そうだった、そうだった。あの娘見てたら頑張れ～って思っちゃう」

「ね～」

平沢からペンを借りようとしている秋山の後ろ姿を見ながら笑顔を浮かべる女性客。

「クスッ　やっぱり澪は人気者だな」

「……」

やれやれと小さく笑った田井中を一瞥し、俺は厨房に注文を届ける途中だったと思い出し、やや早足でその場を離れた。

「あ、それはそうとサクはもうちょっと愛想良くやれよ…って、いないし…」

「どうかしたんですか？律先輩」

「いや、軽音部の二枚看板は一癖があるなって」

「え？」

……

現在時刻午後四時四十三分。

「すみませ～ん」

「あ、は～い！唯、行ってくれ！」

「私、今からコレを持っていかなきゃいけないから無理だよ～！」

「じゃあ梓！」

「私もちょっと手が離せないんです！」

「ムギ！」

「ごめんなさい、私もちょっと…」

「えーっと…あ！咲也！」

「…ダリィから無理」

「行けよサク！」

現在店内は大変繁盛していた。

頻りに客が俺達を呼ぶものだから、てんやわんやのお祭騒ぎ状態だ

店長曰く夕暮れに近い今の時間が集客のピークらしい。

（それにしても…）

と、思う。
まだまだ、たどたどしい感じは否めないが流石に慣れたのか秋山はテキパキと仕事をこなしていく。
数時間前のあのおどおどした秋山の姿は微塵もなく、今は完璧な笑顔と、はきはきした喋り方で接客を行っている。

「…ご注文をどうぞ」

この分なら、アガリ症は克服されてロミオ役も上手くいき、やりたくもないバイトを強制参加させられた俺の苦労も多少なりとも報われるだろう。

「お待たせいたしました〜」

「あの、私達が頼んだのじゃないんですけど…」

「え？はっ！すみません！間違えましたー！」

ちなみに平沢はバイトが終わるその時まで、終始一貫してこんな感じにミスを連発していた。

――――――――――

翌日。二十日月曜日。

慣れない事をしたせいか、変な疲労が残る身体を酷使して桜高に登校。

ヘッドフォンを耳から首に移動させて教室の扉をガチャリと開ける。

「おはよう♪咲也♪」

「……」

聞こえてきた秋山の声に視線を向けると、笑顔検定があれば百点満点の笑顔を浮かべた秋山が。

逆にその笑顔が異質に感じた俺は思わず絶句という防衛機能を働かせた。

「…どうしたんだコイツ？」

とりあえず、店長みたいな絶えない満面過ぎる笑顔を浮かべている秋山の起承転結を知りたい俺は鞄も置かずに、秋山の机の周囲にいる平沢と田井中と琴吹に問い掛ける。

「それが、昨日のバイトから笑顔が固まって直らないみたいなの…」

「……」

琴吹の爆弾発言に再度絶句。

「うん♪全然直らないんだ♪助けてくれ咲也♪」

「…表情と言葉が一致してねェから無理」

「いや♪わざとじゃないんだ♪」

「すまん澪…そんなに辛かったのか…今直してやるからな！」

田井中がそう言っては、おもむろに秋山の顔に両手を伸ばしてガッチリと両頬を掴む。

「いひゃいって♪」

「りっちゃん隊長。どうするの？」

「こうするんだ！」

掴んでいる頬を上下左右に引っ張ったり押し込んだりして無理矢理に顔の筋肉をほぐしていく田井中。

幾ら秋山が『いひゃいっ♪いひゃいっ♪』と抗議してもお構いなしに。

その結果…

「あ、直った」

「いつも澪ちゃんだ～」

「良かった～」

代償として両頬は真っ赤になっているが、普段の表情に戻った秋山。
そんな田井中流の民間療法の成功に平沢と琴吹がホッと胸を撫で下ろす。

「とにかく、これで演劇の稽古は大丈夫だよな澪？」

「それは無理」

「はぁ？」
「ほぇ？」
「なに？」
「えっ？」

まさかの断言に俺は眉を顰め、平沢はキョトンとし、田井中は眼を見開き、琴吹は首を傾げる。

「接客は上手く出来たけど、演劇とは全く別物だから♪」

「特訓の意味ねー…」

「骨折り損かよ…」

「でもでも、笑顔は完璧だよ」

「あ、そうだ～！梓ちゃん達の和風喫茶でもう一回特訓したらどうかな？」

「接客は慣れたけど、やっぱり恥ずかしいから無理だよ♪」

「つうか本質は改善されてねェし…」

「笑顔が固まる程、辛かったみたいだから逆に悪化したかもな…」

――――――――――

同時刻。二年一組。

「う～ん…」

「どうしたの純？」

「悩みごと？」

「梓、憂…　あのさ、和風喫茶って我ながらナイスアイディアだと思うんだけどさ」

「それ、自分で言う？」

「でも純ちゃんのアイディア、私は良いと思うよ」

「いや～　照れますな～♪」

「はいはい。それで？どうしたの？」

「あ、うん。集客率を上げるためにもう一押し何かほしいだよね」

「今のままじゃダメなの？」

「そうは言うけどさ憂。三組はヴァンパイア喫茶をやるんだって。同じ喫茶店として負けたくないじゃん」

「ヴァンパイア喫茶なんてやるんだ」

「衣装は山中先生が作るんだって。ねぇ梓、山中先生って軽音部の顧問なんだから、インパクトがある衣装作ってもらえるように頼めない？」

「私達のクラスと軽音部と先輩達のクラスと二組と三組の衣装も作るって言ってたからこれ以上は無理だよ」

「お姉ちゃん達のクラスは演劇だから負担になりそうだからね」

「あ！でも…」

「何？何か良い案あるの？梓」

「ネコ耳…」

「梓…そりゃないよ…」

「あはは…」

「ち、違うもん！私が言ったんじゃないもんっ！」

―――――――――

「はっ！」

「どうしたの？唯ちゃん」

「今、あずにゃんの叫びが聞こえた気が…！」

「空耳だろ…」

「う～ん…　フェルマークだったのかなぁ？」

「…だから用途と意味が違ェし、フェルマータな」

「気にしたら負けだよ！サッくん！」

「はぁ…」

どうやら平沢は気に入ったフレーズは所構わず使用したいらしい。

（そういえば…）

フェルマータには『初め』と『終わり』っつう意味合いもあったな…

「……」

「どうしたのサッくん？」

「別に…つうかサッくん言うな」

『初め』は二年前の春。
『終わり』は今年の秋。

『初め』の時に『スタートがあるんならゴールはあるのか？』と思ったが、もしかしたらそのゴールは、すぐそこまで近付いているのかもしれない。

現軽音部ラストライブまで後十三日。

第百十二話（後書き）

三年二組　男子クラスメイト紹介

伊庭　亮
（いば　りょう）

・一人称は『わたし』
・テストで常に学年トップ5に入る秀才だが、同じクラスの『鷹崎　亜魅夜』が常に1位をキープしているので、密かにライバル視してるとかしてないとか。
・眼鏡着用。
・自宅が診療所を営んでいる。
・将来は跡を継ぎたいと人生設計しており医大に進学をしようと日々勉強中。
・決して嫌味な奴ではない。
・『尾栗　聖一』と仲が良い。
・部活はしていない。

青梅　隆志
（おうめ　たかし）

・兄弟が多く自分の小遣いを稼ぐために一年生の時からコンビニでバイトをしている。
・ちなみに長男。
・何故か言葉を発する最初の一文字目が伸びる。

『おい』→『おーい』

『マジで』↓『マージで』
『東京特許許可局』↓『とーう京特許許可局』

・就職予定。
・部活はしていない。

柳　信行
（やなぎ　のぶゆき）

・男子バスケ部所属で１７０ｃｍ。
・ポジションはＰＧ（ポイントガード）
・司令塔でありキャプテンでもあるので背番号は４。
・広い視野と認識能力があり優秀なＰＧだが、日常生活では大して役立ってない。
・誰に対しても常に敬語。
・唯一『矢野　浩太郎』の声を聴いたことがあり、伝えたいことが理解出来る人物。
・現在、年末に開催される三年生にとっては最後のバスケ試合『ウインターカップ』地区予選に向けて猛練習中。

第百十三話（前書き）

最後の学園祭編その五です。

第百十三話

光陰矢の如し。

日々は思う以上に早く経ち、時計の針は止まらず、確実に時を刻む。

行雲流水。

雲は当たり前に流れ、水もまた然り。

散りそびれた木々の葉は、吹き抜ける風により空を舞う。

曖昧な季節は移ろい、秋に。

本日十月一日金曜日。

現在時刻午後二時二十二分。

城南中学校。三年三組、教室内にて。

「なぁ、田井中」

「ん？」

「お前どこの高校行くか決めた？」

「一応桜高を受験するつもり。姉ちゃんと兄ちゃんが通ってるからな」

「あれ？田井中に兄ちゃんなんていたっけ？」

「いや、いないけどさ、俺にとって兄貴みたいな人がいるんだ。何かいつも機嫌悪そうな顔してるけど」

「どんな人だよ…」

「やたらとゲームが上手くて、姉ちゃんが言うにはギターも上手いんだって」

「へぇ～」

「そういえば明後日ライブがあるって姉ちゃん言ってたなぁ」

日々は流れる。

それは中学生が進路選びを軽視し、一つの愉快なイベントとして胸踊らせる時期であったり…

――――――――――

午後二時二十五分。

西羽田女子大学内、キャンパスにて。

「♪～」

「どうしたの恵？鼻歌なんかして、何か良い事があったの？」

「あったんじゃなくて、これからあるのよ♪」

「あ、もしかして！この前の合コンの時、秋川君と何か進展があったとか？仲良さげに話してたし」

「そんなんじゃないわ。私が会いたいのは……秋山さん！」

「え…？誰？」

「私の母校の後輩♪明後日に軽音部のライブがあってね、久し振りに会えるの♪」

「へ、へぇ～……恵の母校って確か女子高だったと思うけど……じゃあ…相手は女の子…？」

「あ、でもやっぱり面と向かって会うのは緊張しちゃうなぁ～　真鍋さんか桐島君に秋山さんとの間を取り持ってもらおうかしら～♪」

「ご愁傷様…秋川君……恵は…貴方には興味なかったみたい…」

雲は行く。

それは地元の駅から二、三先の駅にある、女子大上空の天気同様な陽気な先輩を眺めるかのように…

―――――――――

午後三時七分。

桐島家。書斎にて。

「貴教さん、電話よ」

「ん？やっとエンジンがかかってきたというのに全く……誰からだ？」

「晃教さんから。あと、あなたの小説はいつもスロースタートなんだから、人のせいにするのは良くないわよ」

「痛い所をついてくるな夏希は…　もしもし？晃教か？」

「『あ、兄さん？久し振り』」

「本当に久し振りだな。少しは連絡をしてこい」

「『あはは…善処するよ。それより電話をしたのはちょっと報告があって』」

「なんだ？また転勤にでもなったか？」

「『相変わらず勘だけはいいね』」

「『だけ』は余計だ。というか、少しは腰を据えたらどうだ。確か

拓也君は受験生だろ?落ち着いて受験勉強も出来ないんじゃないか?」

「『仕方がないって親が言ってはいけないんだろうけど、仕事の都合上どうしても転勤が多くて…』」

「全く…よく拓也君もグレないもんだ」

「『あ、でも何だか最近、咲也君に似てきたような…』」

「年がら年中不機嫌そうな顔をしてる愚息にだけはなるなと拓也君に言っとけ」

「『そういえば拓也と咲也君って最近会ってないね』」

「お前が転勤ばっかりしとるからだろうが」

「『兄さん、ソレなんだよ』」

「ん?」

「『拓也について、兄さんとお義姉さんに相談があってね』」

水は流れる。

それはパソコンの前に座る小説家が、電話先の伯父からの相談事が寝耳に流れていくかの如く…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　鈴木　純】

現在時刻午後三時五十六分。

桜ヶ丘高等学校内、ジャズ研究部室にて。

「さてと…」

今日は午後の授業が全部お休み。
その代わり明日に迫った学園祭の準備にあてがわれた。
私としては苦手な英語と数学の授業が潰れたから嬉しいし、去年もそうだったけど学園祭の準備って楽しいんだよね。
あのバタバタした感じが、いよいよ明日なんだなって気分を高揚していく。

私達のクラスの、『私』が提案した（ここ重要！私が提案したんだよ！）和風喫茶はすぐに準備が終わり、私は明後日にあるジャズ研の発表会に向けて練習をしようと近くにあった椅子に腰掛けてベースをアンプに繋いで、たった今、準備が完了した。

同じベーシスト…なんて言ったら笑われるかもしれないけど、憧れの澪先輩みたいに上手くなりたいから、『ふぅ…』と息を吐いて集中していく。
そして、いざ！と眼を開けてベースを弾こうとしたんだけど…

「すごいですね！純先輩って！」

急に聞こえた後輩の声にガクッと体勢が崩れる。
顔を上げたら、案の定そこには後輩の娘がいて、何故か瞳を輝かせていた。

「え？何が？」

とりあえず何が凄いのか、何でそんなに尊敬の眼差しで見つめてくるのか分からないから、私は首を傾げる。

「だって、ベース弾くのにピックじゃなくて十円玉使ってるじゃないですか！カッコいいです！」

「あ、これは、えっと…」

確かに私の右手にはピックじゃなくて十円玉がある。
その理由は単純で『実は』って言おうとしたんだけど、この娘は更にキラキラと瞳の輝きを増すから、ついつい口を閉じてしまった。

「通ですね！私もやってみようかな～」

違うよ！通とかそんなんじゃないよ！
…でも悪い気はしないな♪

「あー…　うん！すごいでしょ！」

だから私は思い切り胸を張った。
この娘は勘違いをしてるけど、『まぁ良いっか』と思ったし、後輩に憧れる先輩って気分を味わいたかったから！
でもすぐにボロが出るんだよね…

「正直にピック忘れたって言ったら？」

私の前にやってきた部長によって…

「部長！声が大きいですって！」

「アンタの方が大きいわよ」

うっ…！そ、そうだけど！少しは空気読んでくださいよ…
ほら、さっきまで憧れと尊敬の眼差しを私にぶつけていた後輩がいなくなっちゃったじゃないですかー！

「それより」

私のちょっとした居心地が良い時間を一蹴した部長は、凛とした態度をとるから私は椅子から立ち上がって佇いを改める。

「以前言ってたジャズ研と軽音部の掛持ちの件なんだけど」

「は、はい！どうなりました？」

あの日、桜が満開だったあの春の日。
咲也先輩から託された軽音部の未来。

部活の掛持ちは難しいって咲也先輩に言われたけど私は『大丈夫です！』って頷いた。
…けど現実は咲也先輩の言う通りだった。

部長と顧問の先生に何度も頭を下げたけど、中々説得出来なかった。
だけど私の熱意が伝わったみたいで、協議してくれる運びになったのは新緑の季節の五月。

そして今、やっとその結論が部長から告げられる。

「本当に出来るの？」

「大丈夫です！私はやれば出来る子ですから！それに咲也先輩との約束は破れません！」

腕を組む部長に私は真っ向から向き合い、部長の瞳を見る。

すると…

「やれやれ…」

部長が肩の力を抜くように息を吐く。

そして…

「そこまで言うなら許可するわ」

フッと微笑む部長。

そんな部長の柔和な笑顔に、知らず知らずに握り締めていたベースを落としそうになったのは、それほど私は安心したからで、やっと咲也先輩との約束を果たせる目星がついたからで、梓が喜んでくれるかなっていう期待の表れだったんだ。

「あ、ありがとうございます！」

「いい？これは私の最後の部長命令なんだから、ちゃんとまっとうしなさいよ？」

そうだ…最後なんだ…
学園祭が終わったら三年生は引退だから…

今気付いたわけじゃない。
去年も体験した。
でも、どこか気付かないフリをしていたのかもね。

瞬間、色んな思考が交錯していくけど、今は…

「はい！」

力強く頷いた。
それが最善だと思ったから。

「よし！じゃあ明後日のジャズ研の発表会に向けてリハするよ！」

「みんな集合！」

「何でアンタが仕切ってんの？」

「ヒ、ヒドいですー！たまには良いじゃないですかー！」

時計の針は止まらない。

先輩達との別れって絶対にくるんだよ。
だから今から覚悟しておいた方が良いよ。
去年体験した私が言うんだから間違いないんだよ、梓。

（梓には辛いかもね…）

直接聞いたわけじゃないけど、態度で分かるよ。
梓は軽音部の先輩達のことが大好きっぽいってことが。

どう思う？憂。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　平沢　憂】

現在時刻午後四時十一分。

私は部活をやってないのでクラスの和風喫茶の準備を終えて帰り道を歩いてます。

たまに吹く風は冷たくて、季節はすっかり秋なんだなって実感します。

（今日は暖かいお鍋にしようかな？）

明日は学園祭だから体調を崩したら大変です。
お姉ちゃんは勿論、私も体調管理をしっかりしなくちゃ。

先月、風邪をひいてしまった私はお姉ちゃんや梓ちゃんや咲也さんに迷惑をかけてしまったから、以前より一層体調管理には敏感になってたりします。

何だか最近、お姉ちゃんは演劇の練習で忙しそうで、昨日も家で『ずっとジッとしてなきゃいけないなんて…木の役がこんなにも難しいとは…！』って自主練に励んでました。
頑張ってるお姉ちゃんのためにも今晩のお鍋はちょっと豪勢にしようと決意したら、自宅が目の前でした。

「あ、おばあちゃん」

自宅に帰る前にお隣のおばあちゃんが家の前を箒で掃いていたから、私は足を止めました。

「あらぁ、ういちゃん。おかえりなさい」

「ただいま」

ニッコリと微笑むおばあちゃんにつられて私も笑顔を浮かべます。

「そうそう、明日だったかしら?ういちゃんとゆいちゃんの学校の文化祭って」

「うん、そうだよ。私は喫茶店でお姉ちゃんは演劇をするの」

「まぁ、そうなの。がんばってねぇ」

「うん!」

おばあちゃんは学園祭に来れません。
週末の二日間はお孫さんが遊びにくるからなんだそうです。
残念だけど仕方がないって自分を納得させて自宅に足を向けました。

「あ、そうだわ。ういちゃん」

その瞬間におばあちゃんに呼び止められ、私は改めておばあちゃんに向き直ります。

「緊張しないおまじないを教えてあげる。あとでゆいちゃんにも教えてあげてね?」

「クスッ」

私は小さく笑いました。

おばあちゃん、それ知ってるよって。
お客さんをカボチャって思えば良いんだよね？
でも桜高を受験した時、お姉ちゃんは間違って両方の掌にカボチャって書いちゃってたから、もう一回ちゃんと聞いた方が良いよね。

「あのねぇ、お客さんを全員カボチャだと思えば良いの」

風が吹きます。

それは冷たくて、秋の夕暮れと相俟って、ちょっと物悲しくて、私のポニーテールとスカートを揺らして、何だか咲也さんに未来の入部届を貰ったあの春の日を思い出します。

お姉ちゃんや咲也さん達が卒業したら、梓ちゃんは一人。
そうならないために私と純ちゃんは来年度に軽音部に入部すると密かに決めました。

でも、何だか今、梓ちゃんが一人ぼっちな気がします…

「おばあちゃん」

「なあに？」

「私、明日頑張るね」

「後悔しないように精一杯頑張るのよ？」

「うん」

『後悔しないように精一杯』

梓ちゃん。
後悔しないように精一杯だよ。
それは何にしても…だよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

現在時刻午後五時十八分。

桜ヶ丘高等学校内、軽音楽部室にて。

♪～…

徐々に陽が沈んでいって部室はオレンジ色に染まっていく。

普段はサク先輩が座ってる長イスに腰掛けて、むったんを弾いていく。

「よし！完璧に弾けた！これでライブはバッチリだねトンちゃん！」

後ろを振り返ってトンちゃんがフヨフヨと泳いでる水槽にそう言うけど、返ってくるのは静寂だけ…

「…何やってるんだろ…私…」

ポツリと呟いた独り言は静寂しかない部室に溶けていって何だか虚しくて…

立ち上がってストラップを肩から下ろして、むったんをギタースタンドに立て掛ける。

そして部室内を見渡す。

「今日もどうせ先輩達は来ないのに…」

ムギ先輩の知り合いの喫茶店のバイトが終わった次の日から先輩達の周囲は慌ただしくなっていった。

澪先輩と律先輩はロミオとジュリエットを猛特訓。

ムギ先輩はそれに付き合って。

三人の先輩はそれからあまり部室に来なくなった。

そんな中で唯先輩とサク先輩だけは来てくれた。

『じゃあ澪先輩と律先輩は…』

『うん！今日から毎日稽古の時間倍にして何とかするって！』

『そ、そうですか…』

『ふんすっ！』

『ムギ先輩は…』

『…客観的に見れる第三者の眼が必要だとか言ってアイツらの特訓に付き合ってる』

『そう…ですか…』

『ふんすっ！』

『あの、じゃあ軽音部の練習は…』

『臨機応変に対応していくしかねェだろうな…』

『そうですか…』

『ふんすっ！』

『…つうかさっきからお前は何やってんだ』

『ジッとしている練習してなさいって、和ちゃんが』

『…ンな猿でも出来る芸を今更練習すんな。するんならギターだろうが』

『サッくんや。お猿だって練習してやっと一人前になってステージに立てるんだって。この前テレビでやってたよ』

『中野』

『あ、はい』

『ぶぅ～！サッくん冷たいよ～！』

『…現状が現状で気持ちは分かるが、へこたれてる暇はねェぞ』

『は、はい！』

『…お前もいつまでも固まってんな。ギター持て』

『ほ～い。出番だ！ギー太！』

サク先輩は気丈に振る舞ってたけど、実際に律先輩と澪先輩とムギ先輩がいないギターだけの三重奏は練習にはならなかった。

そして日が経つにつれて唯先輩とサク先輩も部室に来れなくなった。

この一週間、練習はあんまり出来なかったまま、学園祭前日まで迎えてしまって、私は不安だった。

分かってるよ…

先輩達はクラスの出し物が忙しくて中々部室に来れないって。

でも…絶対に有り得ないのに、ついついこんなことを思ってしまう。

「…ライブなんて、もうどうでもいいのかな…」

ピリッと痛みが胸に走った。

私とトンちゃん以外誰もいない部室はまるで、先輩達が卒業した後の未来みたいで、急に寂しくなって…

「ッ！何考えてるんだろう…」

例え来年、私が一人になっても、先輩達に『大丈夫です』って言えるくらいに今を精一杯楽しもうって…！
先輩達とやれる最後の学園祭ライブを成功させようって…！
そう決めたのに…！

「クラスの出し物も大切だもん…」

先輩にとっては今年が最後の学園祭だもん…
それなのに私のわがままで…

「私…嫌な子だ…」

陽が沈んでいく。

それは私の心中を表しているみたいで、自己嫌悪を覆い隠すように、暗闇が…

ガチャ

「だからへこたれんなっつってんだろ…」

不意に聞こえた扉を開ける音と声。

俯いていた顔を上げて振り返ると…

「サク…先輩…」

軽音部の副部長で黒一点のサク先輩の姿がそこにはあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

誤算だ。

こうも物事が上手く運ばないのは、厄払いをしたというのに別の疫病神がこの一週間を厄日に変換したと思案に暮れそうだ。

誤算の一つ。

それは裏方が、正確には音響がこんなにも手間取るとは夢にも思わなかった。

シンセサイザーでの効果音作りが困難を極めたり、ＢＧＭ担当の藍澤が平沢並の…いや、以上のドジを連発。

『き、桐島君っ！』

『あン？』

『音楽が流れないんですけど…』

『…ＣＤを上下逆さまに入れてんじゃねェのか？』

『あっ！す、すみましぇ…すみませんっ！』

『はぁ…』

フォローに追われるのが誤算。

他にも…

『えっ！？まだ小道具が出来てないんスか！？』

『おうともよッ！』

『威張んなアホ…』

『ど、どうするんスか！？』

『落ち着きたまえ尾栗君。こういう時はまず深呼吸だ』

『亮は落ち着きすぎッス！』

『手が空いてる人がやるしかないわね。唯』

『なんでしょう？和ちゃん』

『動かない練習はもういいから、先に木の役のみんなで出来てない小道具を作ってて。リハーサルが終わったら私達も手伝うから』

『よっしゃッ！木軍団よッ！俺についてこいッ！』

『サッくん、またあとでね～』

『いいから早く行け…』

『ぶぅ～！』

『おいおいどうしたッ！？何故誰もついてこないッ！？』

『影宮の人望がねぇからだろ』

『クラァッ！西野テメェッ！二階から偉そうに見下ろしやがってッ！そんなに照明が立派な役割だとは思わなかったよ』

『…叫ぶか感心するかどっちかにしろ。つうかお前もさっさと消えろ』

バキッ！

『グォッ…！……あ、あれ？おかしいな？演技もしてないのに身体がＳ字に曲がったまま直らないよ？』

本番二日間前に小道具が完成していないことが発覚し、急ピッチで作業を強いられたり…ｅｔｃ．

とにかく、誤算連発で軽音部の練習が出来ないまま時間が徒に流れていった。

相変わらず俺の中の天秤は大きく軽音部に傾いているので、練習が出来ない危惧から、そろそろ本気でエスケープしようとしたのが、今から約十分前。

しかしエスケープをせずとも、俺は現在部室への階段を上がっている。

これも誤算なのだが、意味合いは違う。

言うなれば嬉しい誤算だ。

本日は午後から『ロミオとジュリエット』の練習に明け暮れた故に、主役である秋山と田井中を筆頭にした演者陣の仕上がりは限りなく

完璧に。
並びに音響と照明もそれに準ずる。
そして、真鍋が光明の一手を俺に投じてきた。
『咲也。もう軽音部の方に行っても良いわよ』
『…まだリハ残ってんじゃねェのか？』
『そうだけど、軽音部が気になるんじゃないの？』
『……』
『クスッ　図星みたいね』
『うるせェ…』
『正直言うとね、咲也は途中でサボっちゃうんじゃないかって思ってたの』
（今からサボろうとしてたがな…）
『でも、なんだかんだでクラスに協力してくれた。だから軽音部の方に行って良いわよ』
『…平沢達は？』
『澪と律とムギはまだかかるかもしれないわ。唯も一応立ち位置の確認でステージにいなきゃいけないから、咲也だけでも先に行って

て。唯達にも早く行ってもらうから』

そんな真鍋の言葉に甘え、演劇のリハを行っていた講堂から部室の前に今し方辿り着いた。

扉のドアノブに手を置いて、室内に進入しようとしたが、聞こえてきた小さな呟きに一瞬その動作が止まる。

『私…嫌な子だ…』

不安、後悔、落胆、空虚、自己嫌悪…
様々なマイナスな感情が含まれた消え入りそうな小さな小さな中野の自責。

「はぁ…」

何故そんなに自責の念に駆られているのか不明だ。
いや…恐らく俺達がそうさせたんだろう。

アイツはライブに並々ならぬ意欲がある。
しかし現状はまともに練習も出来ない状況に陥ってしまい、だからこそ不安で堪らないんだろう。

「はぁ…」

再びため息を吐き出して、ドアノブに力を込めて扉を開ける。
部室内はオレンジ色に染まり、その中で気落ちして寂しげな背中があった。

「だからへこたれんなっつってんだろ…」

かけた言葉は元気づけようとしたからじゃない。
悪いのは俺達だ。

「サク…先輩…」

振り向いた後輩の表情を確認するため。

オレンジ色の斜陽がかかったその表情は、若干の驚愕した表情だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「はぁ…」

サク先輩がため息をつく。
対する私は、さっき考えてしまった事が後ろめたくて、何も言えなくて顔を俯かせる。

サク先輩が私に近付いてくる気配がする。
一歩一歩近付いてくる度に、私は怖かった。
サク先輩は鋭いから、きっと私が考えてしまった事に気付いてるんだ…

（お、怒られる…）

なんて言われるのかな…
サク先輩って容赦ないから…
でも、私が悪いんだから…

コツコツと足音を立てて近付いてくるサク先輩。
そして私の横を通り過ぎる瞬間に、サク先輩は口を開いた。

「…悪かった」

「え…？」

たった一言。

その一言が意外で私は一瞬硬直する。
ハッとした時にはサク先輩は長イスに座ってアコギをチューニングしていた。

「…おい」

「あ…は、はい！」

視線はアコギに向けたままのサク先輩の言葉に、私は思わず四肢を揃えてしまった。

「…非は明らかに俺達にあるが、忍耐と信頼と信用っつう言葉を辞書で調べろ」

「サク先輩…」

「不協和音は必要ねェ…」

胸の痛みはいつの間にか無くなってて、自己嫌悪は綺麗に消えていた。

胸はポカポカ温かくて、浮かんできた感情は嬉しくて…

「…じきに平沢達も来る。全員揃ったら練習するぞ」

相変わらず視線はアコギに向いてるけど、今はそれがサク先輩の優しさなんだと思った。

「ぁ…はい…はいっ！」

頬を伝う涙を見ないため。

（私ってバカだなぁ…）

涙を拭って、唯先輩のレスポール、澪先輩のベース、律先輩のドラム、ムギ先輩のキーボード、最後にサク先輩を見て、そんなことを思う。

サク先輩は…先輩達はちゃんと軽音部のことを考えてたのに、自分一人で変に決め付けちゃって、ホントにバカだなぁ…

ガチャ

すると、部室の扉が開いて…

「たっだいま～！あ～…つかりた～…」

律先輩を先頭にムギ先輩と唯先輩と澪先輩がやってきた。

「りっちゃんも澪ちゃんもリハーサルの演技完璧だった！練習の成果ね！」

「あー！サッくん！先に行くなんてヒドいよー！」

「真鍋から事を聞いてねェわけじゃねェだろ…」

「でもでも、一緒に行きたかったんだもん」

「梓？どうしたんだ？眼が赤いぞ？」

「え、えっと…」

「サ～ク～！梓を苛めたな！」

「…根拠もねェこと口走んな。つうかコイツにプロレス技かけて苛めてたのはどこの誰だ？」

「だ、誰かしら～？」

「律だろ」

「あの、先輩」

私は口を開いた。
どうしても言いたかったから。

「どうしたの？梓ちゃん」

「ごめんなさい」

謝罪の言葉を。

「サク、梓に何したんだよ」

「黙って最後まで聞いてやれ…」

「最近、先輩達あんまり部室に来てなかったから…ライブのこと、あんまり大切に思ってないのかなって、心配になっちゃって…」

最後に『ごめんなさい』と頭を下げる。

疑って『ごめんなさい』と頭を下げる。

「…んもう、バカだな梓は！」

律先輩が呆れたように。

「軽音部のこと、ないがしろにしてたわけじゃないんだけど、不安にさせちゃってごめんね」

ムギ先輩が微笑んで。

「心配かけてごめんな、梓」

澪先輩が私の頭を撫でて。

「あ～ずにゃん。ごめんね？心配かけちゃって」

唯先輩が抱き付いて。

あぁ…温かいなぁ。

窓の外から差し込む夕陽も、唯先輩も、軽音部っていう居場所が、とても温かいなぁ。

「…練習するぞ」

「せっかく何か良い雰囲気だったのに…空気読めよサク」

「…時間がねェんだ。そういうのは二の次にしとけ」

「は～いはい。よし！練習するぞー！」

「「おー！」」

「はい！」

「咲也」

「あン？」

「ありがとう」

「…何が？」

「ううん。ただ言いたかったから」

「あっそ…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

現在時刻午後十一時五十分。

「……」

自宅のベッドに大の字に倒れ、白い天井を眺める。

いよいよ明後日だと感傷に浸りたいわけではない。

ただ、何も考えずぼんやりと天井を眺める。

（白…）

咄嗟に思い付くのは現在眺めている天井の色。

後は…

「……」

ベッドから立ち上がり、机に向かう。
そして引出しを開けて、ＨＴＴの楽譜の上にある白いピックを手に取る。

夏フェスで運良く入手した憧れのギタリストのピック。

それを机の上に置き、電気を消して再びベッドにダイブ。

何度か寝返りを打っていると、瞼が下がっていき、徐々に意識は薄れていった。

光陰矢の如し。

日々は思う以上に早く経ち、時計の針は止まらず、確実に時を刻む。

行雲流水。

雲は当たり前に流れ、水もまた然り。

散りそびれた木々の葉は、風により空を舞う。

曖昧な季節は移ろい、秋に。

本日十月二日土曜日。
現在時刻午前零時ジャスト。

現軽音部ラストライブまで後一日と十三時間。

第百十三話（後書き）

三年二組　男子クラスメイト紹介

林原　吉宏
（はやしばら　よしひろ）

・詩吟部所属。
・梓のクラスに弟が在籍しており、弟も詩吟部。
・いつもオドオドしてハタからみたら挙動不審者。
・かなり真面目。
・目立つことが苦手。
・吟詠をするときは生き生きしている。
・和菓子が好物。

第百十四話（前書き）

最後の学園祭編その六です。

第百十四話

目覚ましの無機質な電子音。
遠くに聞こえる車やバイクのエンジン音。
人々の挨拶の声。
犬の鳴き声。
小鳥の囀り。
吹く風により揺れる木々の音。
カーテンから漏れる朝陽。

外部からもたらされたそれらは五感を刺激し、今日という日を活動させる第一歩である起床をさせるのに十分なものだった。

「……」

寝起きの頭でまず無機質な電子音を奏でる目覚まし時計を停止させ、漏れていた朝陽を部屋全体に行き渡らせるためにカーテンを開ける。

窓の外は、通勤のための車やバイクを走らせ、犬の散歩をしている人が近所の挨拶をし、小鳥がそれを眺めるかのように木の枝に止まっていたが、風の到来により澄み渡った秋空に飛び立っていく光景を見受ける。

ふと自室のカレンダーに眼をやると、九月のままで現実と異なる。
時間は流れているので、カレンダーを十月に変更する。

（そういえば…）

十月下旬には新曲が発売されるなと、ぼんやり思いながら寝癖がついている頭をかきながら自室を出て洗面所へ。

歯を磨き、顔を洗い、鏡に映った相も変わらずの不機嫌面にため息一つ。

寝癖を直し、リビングで両親と朝食を。

「あ、この人って確かサッカーの新しい監督の……ザックローニだったかしら？」

「…ザッケローニな」

「今度の代表戦でやっと指揮出来るんだったな。相手はアルゼンチンだったよな？」

「あのメッセのいる？日本勝てるの？」

「…メッシな」

液晶テレビが伝える昨晩のサッカー代表選手の練習風景を伝えるニュースに、浅い知識を露呈するお袋に淡々と訂正の意を唱えながら朝食を終え、自室に戻り制服に着替える。

前髪をヘヤピンで止め、テレキャスをソフトケースに、アコギをハードケースにそれぞれ仕舞う。

ケータイをブレザーの内ポッケに、財布をズボンのポッケに入れ、

ヘッドフォンを首にかける。
最後に机の上にある白いピックをテレキャスとアコギのピック（ちなみにタイプは両方ティアドロップ型）が入っているピックケースに入れ、テレキャスを背負いアコギを右手に持つ。

桜高の鞄は必要ない。
何故なら本日十月二日土曜日。
現在時刻午前七時十八分。

私立桜ヶ丘高等学校学園祭。
正式名称【桜高祭】

本番当日だからだ。

――――――――――

自宅を出てすっかり秋めいた通学路を歩きつつ再び思う。

（誤算だ…）

と。

最早身体が勝手に行動を起こすまでに習慣化した登校中のコンビニへの寄り道。
いつもの如く昼メシの菓子パンやら惣菜パンを購入しようと店内に足を踏み入れたのが運の尽きだったと後悔した。

『ようッ！咲也ッ！』

『……』

立ち読みしていた雑誌から顔を上げた修司、学名『カゲミヤ　シュウジ』通称『アホ』と遭遇してしまったことが運の尽きだ。

とりあえずスルーして店内を物色し昼メシを購入して足早にコンビニから退散。

しかし当然のように研究者が喉から手が出る程欲する地球上類を見ない希少生物は俺の隣で歩を進めているのが現状だ。

「今日さ、購買やってねェじゃん？だからコンビニで弁当買ってたら咲也が来るもんな～！俺がいるところに咲也が。逆も然り。やっぱ俺達親友だッ！」

「…今、悪寒がよぎったから蹴って良いな」

「確定ッ！？えッ！？確定ッ！？」

何故か二度も確認して唯一持っていた荷物のコンビニの袋を放り投げる勢いで後退る。

…相変わらずリアクションだけは天下一品だな。

「ったく！せっかくナイスな情報を仕入れてきたのに、そんな態度

をとるんなら教えてやらんぞッ！」

「…お前から教わることなんて微塵もねェ」

「まぁそう言うな。実はな…」

結局言うのか…

「来週から新世界編が始まるんだぜッ！」

「……」

コイツが声を大にして堂々と言い切ったのは、某週刊誌にて絶賛連載中の国民的人気な海賊漫画の事だろう。

しかし、そんなことは俺も知っている事柄なのでドヤ顔のアホに視線を向けることなく足を動かしていく。

「俺はこの四週間耐え忍んだ。あの戦争終結から二年…一体世界はどうなってるんだろうな…って！気が付けば親友の背中があんなに遠くにッ！こうなったら…普通にダッシュッ！」

背後から聞こえる騒音の対策としてヘッドフォンを首から耳に移動させ、音楽を流す。

追い付いてしまったアホが何やら喚いているが聞く耳持たずに歩くこと数十分。

俺達は桜高の校門に辿り着いた。

「毎年思うんだけど、ウチの学校って気合い入ってんな～」

「体育祭をやらねェ代わり学祭に力入れてるらしいからな…」

ヘッドフォンを首に移動させ校門を見上げる。

そこには一昨年、去年と瞳に映した学園祭のシンボルと言っても過言ではないデカいアーチ。

三年前まで女子高だったからか、アーチにはハートや星等々の装飾品。

中央には装飾品に負けず劣らずな丸っこい紅い文字で『桜高祭』があり、全体的にファンシーな趣向になっている。

心なしか年々ファンシーさに拍車が掛かっている気がするが、気のせいだと思っておこう。

「お！そーだそーだそうだった！」

すると何かを思い出したかのように希少生物がコンビニの袋から一本の炭酸ジュースを取り出す。

「ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんッ！！」

それを何度も上下に残像が見えないくらいに高速に振り、息切れを

起こしながら俺に差し出してくる。

「ほ、ほらよ…　お前にやる…」

「……」

意図は不明だし、ある意味爆弾と化した炭酸ジュースを受け取る愚者ではないが、とりあえず受け取っておく。

「さぁ、グイッと一気に飲んでくれ。なぁに他意はないさ☆強いて言うなら学園祭を成功させる景気づけみたいなもんさ☆」

まるで悪徳商法のセールスマンが客を言葉巧みに誘導し高価商品を購入させるが如く人の良さそうな笑顔を浮かべる。

瞬間、意図を理解した俺は左手一本で炭酸ジュースのプルタブを開ける。

「ふはははッ！引っ掛かったなサクッチッ！積年の恨みを…」

プシャァァァッ！

アホに向けて。

「ノーーッ！眼がーッ！眼がーッ！」

ものの見事に炭酸ジュースが顔面に直撃し、今度こそコンビニ袋を放り投げてゴロゴロと地面を転がる。

「チクショーーッ！半年前の仕返しをしてやろうと朝からニヤニヤしてたのに！結果これかよッ！」

「…あんな見え透いたトラップで騙せる人間は間違っても俺じゃなかったっつうことだ」

「クソッ！江戸川　修司の名折れだッ！」

未だに顔面を押さえながら地面を転がる迷探偵の存在を脳内で消去し、登校してくる桜高生に仲間という認知と奇異奇抜な視線を浴びたくないので、様々な露店が並ぶ校舎への道を黙々と進む。

「眼がッ！シュワシュワしてるッ！誰かお助けッ！」

「な、何してるんですか？影宮先輩…」

「はッ！その声は梓ちゃんかッ！？」

「あ、はい、そうですけど…」

「咲也のせいで眼がシュワシュワして開かんのだッ！助けてくださいッ！」

「え？サク先輩が？」

「ヒドい奴なんだッ！俺が半年前の仕返しを「おはよ～」って誰ッ！？」

「あ、純。おはよう」

「ていうか何やってるの？」

「えっと…影宮先輩が…」

「あっ！確か夏祭りの時、咲也先輩といた人！」

「む！その声は梓ちゃんと憂ちゃんといた娘だな！二度目まして！咲也の親友の影宮　修司です！」

「あ、鈴木　純って言います」

「何で冷静に自己紹介してるんですか…」

「あの～先輩」

「ん？ていうか水持ってない？眼洗いたいんだけど」

「以前、どっかで会いませんでした？」

「え？だから夏祭りの時に会ったって。ていうか水持ってない？」

「いえ、もっと前です。う～ん…　どこだったけ？」

「ね、ねぇ…純。何か私達注目されてるんだけど…」

「え？あ…ホントだ…」

「周りに人がいんのかい？いるんだなッ！誰か水を…水をくださいッ！」

「す、卓…　何か影宮クンが、眼が見えないとか言いながら立ち回りしてるんだけど…」

「眼を合わせんな。この先の人生を無駄にしたくなかったらな」

「えっ？そんなに影響力があるの？」

「その声は西野と水本かッ！助けてくれーッ！」

「うわっ！影宮クンがこっちに！」

「何でピンポイントで俺達に向かって来てんだよアイツは！」

「水の名を持つ水本よッ！今こそ勇者になれーッ！」

「意味分からないよーっ！」

「行っちゃった…」

「あ！思い出したよ！あの先輩、去年私の目の前で最後の一つだったゴールデンチョコパンを買った人だ！」

「よく覚えてたね」

「それほど私にとってゴールデンチョコパンは崇高なパンなんだよ。でも先輩達が修学旅行に行ってる時食べれたから今はそうでもないんだけど」

「どっちなの…」

まさか俺が去った後に、こんな一騒動があったとは、俺は知る由もなかった。

――――――――――

二年前から行っていることで、これも習慣化している。
それは教室に行く前にテレキャスとアコギを部室に置くために階段を上がることだ。
部室には既にレスポールとベースがスタンドに置いてあり、どうやら平沢と秋山は登校しているらしい。

テレキャスとアコギとヘッドフォンを部室に置いて手ぶら教室に行くと、そこは中々のカオスな空間だった。

「あー！絵の具がはげてる！」

「そのくらいなら大丈夫よ」

一部の大道具は演劇部に拝借することになっているが、無い物は自作した草木の一部が損傷して慌てる柴矢を落ち着かせる松本委員長だったり。

「殺陣ってこんな感じか？」

「そこまで本格にしなくても良いと思うよ。それから梨乃はさっきから何をしてるの？」

「ま、また音楽が流れないよ～！」

「…電源が入ってないからじゃないの？」

「ふぇ？あっ！ホントだ…　す、すみま…せん！若王子さん」

「…私には関係ないけど、別に良いよ」

「梨乃が噛まなかったぞ…」

「そんなに驚くことじゃないでしょ」

どこかの光剣と超能力チックな力で戦う騎士が出るＳＦ映画のように段ボール製の剣を振り回す鷹崎に苦笑いを浮かべる春雨、相変わらずのドジスキルを発動させた藍澤にさり気なく指摘する若王子だったり。

「あ、三花。悪いんだけど喉渇いたからコーラ買ってきてくれない？」

「やだよ～」

「朝からコーラなんてよく飲めるね？」

「そういうアカネだって好きなくせに」

「私はエリにつられちゃったから…」

何故かコーラ談義を開始した瀧と佐藤に『そんなことより手伝ってよ～』と嘆く佐伯だったり。

「あぁ…　本番当日なのにまだ小道具が出来上がってないなんて…不安ッス…」

「落ち込んでいる場合ではないぞ。そんな暇があるんなら手を動かしたまえ」

「亮って冷静ッスよね…」

「何事にも冷静に対応しなければ解決出来ることも出来なくなるからな。だからわたしは常に平常心を保って「わっ！」うおっ！」

「なーにが常に平常心だよ。かーなり驚いてるんじゃん」

「不意をつかれれば誰だって驚くだろう！」

「いーや、例外がいるぞ？」

頭を抱える尾栗に伊庭が得意げに眼鏡をクイッと上げるが、背後からの青梅の奇襲により漫画のように眼鏡をずり下げる。
そして青梅が教室の扉付近で傍観している俺に視線を向ける。

「わ～！」

「何やってんだお前…」

青梅の視線が合図だったように、背後からの気の抜ける声に振り返ると琴吹が眼をつぶって両手を突き出していた。
奇襲を仕掛けたんだろうが、そんなのほほんとした声では俺はもとより幼稚園児でも驚かないだろう。

「あれ？咲也君びっくりしなかった？」

「…全く。つうか前に教えたことを忘れんな」

「あ！こうだったね！」

俺の目の前で両手を叩いてパチンッと心地良い音を立てるが、やると分かっていて驚く筈はない。
『あれ？』と首を傾げる琴吹をスルーして再び教室内を見渡す。

「……」

「え？何？何言ってるの？ちょっと信代、助けて」

「柳。出番だよ」

「えっと…あ、男女共にウインターカップ予選突破しましょうって言ってますね」

「「え？今言うこと？」」

無口な矢野が何かを伝えようとしてるが飯田は理解出来ずに中島に救援を求めると助け船を出港させる柳だったり。

「どしたの？何か元気ないけど？」

「…あ、あの…木って顔を出す必要あるんでしょうか…」

「そう言われるとないかもしれないけど、もう作っちゃったし」

「…そ、そうですよね…」

「私もこれはちょっと…」

「うん…私も…」

「あちゃー…　暗いよ三人とも！」

木の役である林原と宮本と木下が負のオーラを撒き散らすものだから払拭しようと何とか説得している太田だったり。

「ねぇ、アンタ達。短剣知らない？」

「知らないよ」

「私も」

探し物が見当たらない近田が近くで草木の絵の具を塗っていた菊地と小磯に尋ねるが首を横に振っていたり。

「ねーねー。小道具の短剣どこ？だって」

「ロミオー！短剣知らない？」

会話を聞いていた島が松本委員長に尋ねるが、教室の片隅で台本に視線を落として必死に台詞を覚えようとしている秋山に丸投げしていたり。

「えっ！？え、えっと……あっ！うわー！今話し掛けられるとせっかく覚えた台詞がー！」

本番当日で不安らしい秋山は、短剣の行方を聞かれているが台本を確認してしまう。
よほど切羽詰まってるらしい。

「あぁ…　そんな秋山さんも可愛い…」

「コラコラ曜子ちゃん！澪ちゃんに夢中になってないで手を動かして」

まるで琴吹のスキル発動のように恍惚な表情になるファンクラブ会員の佐々木に野島がペシペシと肩を叩いていたり。

「お！サク。いつ来たんだ？」

「…さっき」

ガチャリと扉が開く音に視線を向けると田井中の姿が。
発言からするとコイツも俺より早く登校していたらしい。

「そっか。あ！じゃあさ、私達の演技を見て意見言ってよ」

「あぁ？何で？」

「サクってそういう不審なところ見つけるの得意じゃん？この前だって唯のボーカルがどーのこーのって言ってたし」

「…客観的な意見の交換は琴吹とやってたんじゃねェのか？」

「そうなんだけどさ、ムギって『カット』って言うだけだし」

そう言って俺の隣で同じく教室内を見渡していた琴吹に口を尖らせながら視線を向ける。

「ごめんなさい♪何か監督みたいでついつい♪」

果たしてコイツは反省しているのだろうか？
普段のニコニコした笑顔のままだ。

「そういうことだからヨロシク！」

「…ジュリエット役を嫌がっていたお前の台詞とは思えねェな」

「そうだったんだけどさ、今更嫌だ～なんて言えないだろ？だったらやるしかないじゃん」

「……」

『それは澪も同じだ』と付け加えた田井中が如何に『ロミオとジュリエット』に真剣に取り組んでいるか伝わってくる。
それは『そういうことは演劇部の尾栗に言え』という言葉を思わず飲み込む程。

「澪～！今からサクに演技見てもらうからな～」

「えっ！？さ、咲也に！？」

先程、松本委員長に話し掛けられたことにより台詞が忘却の遥か彼方に大遠投してしまった秋山が、台本に顔を埋めるように暗記に励んでいた顔を上げて眼を見開く。

「そ、そんな！いいよ！」

「良くないって。もう一回誰かに見られてやった方が緊張も和らぐしさ、サクだったらだいぶマシだろ？」

「わ、分かったよ…」

実のところ、昨日のリハーサルでの秋山と田井中の演技は見ている。
しかし、俺はシンセサイザーに集中していたしドジを踏む藍澤のフォローもしていて片手間程度しか見ていない。

「おぉ～ロミオ！あなたは何故ロミオなの～！」

なので、こう改めて出来上がった田井中の演技は演劇素人の俺から見てもかなりの出来栄えだった。
しかし、対する秋山は…

「お…おぉ！あの…あの…」

台詞に詰まり…

「て、天使の…！」

冷や汗をかき…

「ような声は……」

挙げ句、最後には尻窄まりになっていく。

「聞かなくても分かるけど、どうだった？」

「…お前は上々、秋山は竜頭蛇尾」

「やっぱりな…」

ガックリと肩を落とす田井中。

「澪…　昨日はちゃんと出来てただろ…」

「だって…咲也に見られてるって思うと緊張するし、今日は本番だし…」

「サクのせいだな」

「…テメェが見ろっつったんだろうが」

「あイタッ！」

理不尽な言い掛かりをぶつけてきた田井中のシンボルであるデコに軽く手刀を与えてやる。

「大丈夫よ澪ちゃん！あんなに特訓したんだし！」

「まぁ、澪は緊張しいだからな。そこを何とか克服出来れは良いんだけど…」

「…この前やったバイトは意味なかったけどな」

「そうなんだよな～…」

琴吹が秋山の両手を取って自信を植え付けようとするが、『イルクーツクに行かなきゃ…』と現実逃避を開始。

そんな秋山に田井中が額をさすりながら、俺が腕を組みながら良い案はないかと思案していると、それはやってきた。

「そんな時は掌に『カボチャ』って書いて飲み込むと良いって、おばあちゃんが言ってたよ」

今の今までどこにいたのか、田井中の背後から突然平沢が右手に『カボ』左手に『チャ』と書いてある両手を突き出して現れた。

「それ、何か違わないか？」

「え？でも、りっちゃん。憂が昨日言ってたし、私はこれで桜高に合格したよ？」

果たして本当に出来た妹で俺達に知られている平沢妹が、かなり怪しいまじないを姉に伝授したんだろうかと疑ってしまう。

「あ～！サッくん！怪しいって思ってるでしょ？」

そんな態度や表情が出ていたのか、それともたまに見せる鋭さを発揮したのか、どっちでも良いが平沢が頬を膨らませる。

「…事実怪しいし、そんなもんで秋山のアガリ症が治るんならこの前のバイトの苦労を返してもらいてェな」

「ホントだもん！私はこれで緊張しないで受験したんだよ！」

「でも唯。油性ペンで書いてて消えないって慌ててたじゃない」

何故か意固地になって徐々に俺に近付いてきていた平沢だったが、
突如スネークインしてきた真鍋の言葉にピタッと進軍が止まる、

「和ちゃん！シーッ！」

どうやらそれは平沢にとっては知られたくない黒歴史のようで真鍋
に向かって人差し指を唇に当てる。

「唯。それって、お客さんが『カボチャ』でしょ」

「あれ？そーだっけ？」

平沢妹は間違ってないことが立花により判明。
恐らく妹から平沢に何かしらの形で食い違って伝わってしまったん
だろう。

「緊張しないようにするには『人』って字を飲み込むのよ」

瞬間、俺は見た。

真鍋のこの発言を聞いていたらしい秋山が、琴吹の手を離し左手に何かを書き込もうとしているのを。

「…生徒会長」

「だから止めてって言ってるでしょ」

「…そのアドバイスをコイツに言う前に秋山に言えよ」

「あ、そうだったわね。澪…」

秋山に振り向いた真鍋の言葉が続かない。
それは近くにいた琴吹もだ。

「カボ……チャ…」

『人』という文字だと真鍋が今し方言ったばかりというのに、左手に例の間違ったまじないをなぞっていく秋山。
五百歩譲ってそれは良しとしよう。
問題はその後だ。

「あむっ！」

「「澪！？」」

「澪ちゃん！？」

書いた文字を文字通り本当に飲み込もうと左拳を口に当てる秋山に真鍋と田井中と琴吹が驚愕して慌てて近付く。

「ちょっと！澪！何してるのっ！」

「本当に飲み込もうとしてどうすんだよっ！」

「澪ちゃん落ち着いてっ！」

書く文字は間違えるし、異常を異常だと認識出来ないし。つまりそれほどまでに切羽詰まっているようだ。

そして、そんな秋山を見て平沢が思わずと言った感じに。

「澪ちゃん…なんて大胆な娘！」

「はぁ…」

教室内は未だ未完成の小道具を製作してクラスメイトが慌ただしく動き回り、至るところで会話がなされてるし、秋山はかなりテンパりパニクってるし、平沢は平沢で…

「あっ！また油性ペンで書いちゃった！消えないよ～！どうしよ～

！」

自業自得で勝手に慌てだすし…

カオスな空間に身を置いている自分自身と、それを作り出しているクラスメイトにため息一つ。

…まぁ、こうした慌ただしさが学園祭の醍醐味なんだろう。

「ていうか桐島君も手伝ってよ～！」

「はぁ…」

佐伯の非難めいた嘆きボイスに又もや、ため息を。

ちなみに俺達が小道具製作に乗り出した数分後に、何やら憔悴した様子の西野と水本が、やけに血色の良い修司が遅れて教室の扉を開いた。

「…お前何やってたんだ？」

「アンタのせいで眼がシュワシュワしてたんだよッ！」

――――――――――

現在時刻午前十一時四十八分。

「いらっしゃいませ～」

「いらっしゃ～い」

「ただ今、写真部では可愛い動物の写真を展示してま～す」

「新聞部では最近目撃情報があるＵＦＯの記事を特集してますので是非ご覧くださ～い」

「二年二組では校庭でマンモスの肉を売ってま～す！」

「三組のヴァンパイア喫茶です！血のような真っ赤なトマトジュースはいかがですか！」

ワイワイガヤガヤ。

正にそんな擬音が生じる程、賑わいを見せる二年の廊下を俺と真鍋は歩いていた。

「人の数が凄いわね」

「人工密度高過ぎだろ…　その内、酸素不足に陥るぞ」

「ならないわよ」

桜高祭がスタートして約二時間と四十八分。

校内の店舗並びに校庭の露店は、かなりの盛り上がりを見せていた。他校の生徒や家族連れ、カップル、友人グループ等々、廊下を行き交う老若男女の数に圧倒されつつも俺達は歩を進める。

何故俺と真鍋が賑わう二年のクラスを横目に歩いているのかと聞かれれば、五分前の教室に行けと言うだろう。

五分前の教室では、漸く全ての小道具が完成し、安堵していたのも束の間。

『そういえば、衣装は？』

琴吹のこの発言に、佐藤が『衣装担当はさわ子先生だよね？』と反応し、一番暇そうな俺（かなり失礼）と安心して任せられる真鍋に白羽の矢がグサリと突き刺さった。

山中担任は昨日から徹夜で被服室に籠城しているらしいので様子を見てきてくれと松本委員長に告げられ、渋々重い腰を上げて真鍋と共に被服室に向かっているのが現状だ。

「そういえば…」

すると、数多の人を避けてちょうど中野達のクラスである一組に差

し掛かった時、真鍋が口火を切った。

「さすがにクラスのみんなの名前、覚えたでしょ？」

例え、いくらクラスメイトに興味心が薄かろうが本番までの内容が疾風怒涛で濃かった最後の一週間は、クラスメイトと絡む機会が多く、誰だって嫌でも名前と顔が一致して覚えてしまう。
なので真鍋の質問に対する答えは一つだったりする。

「…残念なことにな」

「そこは普通に肯定しなさいよ」

なんて口では言ってるが、この生徒会長様はどことなく嬉しそうだ。
思えば音響というポジションは真鍋によって任されたもの。
どこか真鍋の思惑通りになってしまった感が拭えず腑に落ちなかったまま今日まで過ごしてきたが、もしかしたらこんな質問をしたり肯定した俺に嬉しそうな雰囲気を醸し出しているところを考慮すると、クラスメイトと俺を交流させようとしたのかもしれない。

「あ、ここが憂達の喫茶店ね。お客さん、たくさん入ってるわ」

「…道草食ってねェでさっさと行くぞ」

「分かってるわ」

聞こうとも勘ぐろうとも思わないし、それは真鍋自身にしか分からない。
が、もしそうなら大した策士だな。
…まぁ、俺としても決してマイナスではない事なので結果オーライなんだが。

「でも、咲也って村雨君のことを春雨って言ってたけど、間違ってるからね」

「…どっちでも良いだろ」

「良くないわよ…」

そんな他愛のない会話を続けていると、気が付けば被服室が目の前に。
被服室には当然といえば当然なんだろうが、人の数はまばらで誰も見向きもしないで通り過ぎていく。
そんな中、俺達は被服室の前に立ち、真鍋が扉をノックする。

コンコンコン

「山中先生。真鍋ですけど」

しかし返ってくるのは静寂と桜高祭の賑わいを表す祭囃ばかり。

何の反応も返ってこないことに真鍋は思わず俺を見てくるので、『突入セヨ』と視線で訴える。

「失礼します」

被服室に突入していく真鍋に続いて俺も足を踏み入れる。
不思議なことに室内は桜高祭の喧騒が途切れ、世界から切り離されたように耳が痛くなるくらいな重たい静寂。
そしてミシンや布生地が辺りに散乱している机に一人の人物が突っ伏していた。

「先生！」

（アイツ、今日はやけに慌てるな…）

まるで殺人事件の被害者ようにピクリとも動かない山中担任に、ただならぬ気配を感じたらしい真鍋が一目散に駆け寄る。
俺は真鍋の後塵を拝しながらそんなことを思いつつダラダラと近付く。

「先生！大丈夫ですかっ？先生！」

ユサユサと真鍋が山中担任の背を揺すること約五秒。
数十年ぶりに起動する機械のような、生まれたての動物が初めて立

ち上がろうとするかの如く、ゆっくりとした動作で山中担任は上体を起こし、傍らに置いてあった眼鏡に手を伸ばす。

「お、おはよう…　咲也くん…真鍋さん…」

どうやらかなり疲労困憊らしく、声に張りと覇気はなく、眼の下には徹夜しましたと言わんばかりのクマが存在していた。

「大丈夫ですか？かなり疲れてるみたいですけど…」

「…俺達のクラスの衣装に中野達のクラスの、果てには他のクラスの衣装まで手ェ出してんだから当然な結果だろ」

一人で軽音部のライブ衣装まで作ると豪語してたんだ、疲労が蓄積するのは分かりきっていることなんだが、何をしてんだというのが俺の正直な感想だ。

「憂達のクラスと他のクラスもって…手を広げすぎですよ」

「そうね…反省してるわ…」

「ちょっと…大丈夫ですか？」

再び机に突っ伏してノックダウンする山中担任に真鍋が手を伸ばす。

「咲也くん、真鍋さん…」

しかしその瞬間、心なしか声に張りと覇気が戻ってきた。
そのことに気付いた真鍋は手を引っ込める。

「確かに今年は手を広げすぎた感は否めないわ…」

「物事には限度っつうものがあることが分かってながら何してんだよ…」

「でもね…私は教師なの…」

「意味分かんねェから…」

「だから…大丈夫…！」

何が『だから』で『大丈夫』なのか理解しがたい発言をした山中担任はカバッと勢いよく身体を起こし、俺達に再び顔を向けた。

「どの衣装も気合い入れて作ったからっ！」

俺達に向けたその表情は、それはそれは近年稀に見ぬ飛切りな笑顔だった…

達成感を噛み締めているんだろう…

「「はぁ…」」

「みんなの衣装は出来上がってるわっ！完璧にねっ！」

勝手な達成感を感じている山中担任に俺と真鍋がため息をつくと同時に、山中担任が机の近くにあった二つの段ボールを指差す。

「もうすぐ本番でしょ？私は少し休んだら、観客としてみんなの劇を観てるわね」

「はい。分りました」

「あ、それから咲也くん」

「あン？」

「明日の軽音部の衣装、楽しみにしててね！」

飛切りの笑顔のままでビシッとサムズアップする山中担任に…

「…結構デス」

断罪の刃を振り落とす。

「そう言っていられるのも今の内よ！なんたって今年の衣装の切っ掛けは咲也くんとムギちゃんなんだから！」

（だから俺と琴吹が何したんだよ…）

断罪の刃の効果はなく、逆に活気漲りだした山中担任に内心でそう思い、段ボールを持ち上げる。

――――――――――

あれから俺と真鍋は衣装の入った段ボールを土産に教室に戻り、昼メシを体内に摂取。

『あれ？なぁ、サクッチ。俺のコンビニ弁当の姿が見当たらないんだが…』

『あ、サッくん。憂がこの前のお礼にってクッキー焼いてくれたんだよ』

『…この前？』

『うん。憂が風邪で倒れちゃって、サッくんとあずにゃんが家までついてきてくれたでしょ？そのお礼だって』

『ふーん…』

『美味しそうだよね～』

『食いてェんなら食えよ…』

『そ、そんなの悪いよ！憂はサッくんのために作ったんだもん！』

『…量からして二人分な気がするんだがな』

『憂は唯と咲也のために作ったみたいね』

『さすが憂ちゃんだな。唯ことよく分ってる。なぁ澪？』

『い、今話し掛けないで…　台詞覚えてるから…』

『澪ちゃん、ご飯食べた方が良いわよ？』

『じゃあ一緒に食べよ♪サッくん♪』

『何笑ってんだよ…』

『なぁサクッチよ。俺のコンビニ弁当知らないか？』

昼メシを食べ終え、松本委員長の『移動しよっか』という一言で、衣装やら小道具やらラジカセやらなにやら必要な物を各自持って講堂へ。

講堂のステージでは別のクラスが演劇を行っており、真鍋から貰っていた桜高祭のパンフレットを確認すると、三年三組の『若草物語』

の最中のようだ。

この時間を利用して演者の女子は講堂内にある更衣室で、演者の男子は去年新たに新設された男子更衣室でそれぞれ着替える。

余談だが、『二年前は青空更衣室で着替えたな…』と思わず呟いたりした。

そして三組の演劇が終わり幕が降りきったと同時に演劇部から拝借した背景セットや自作した草木とシンセサイザーとラジカセを未だに着替え終わってない演者陣以外の俺と琴吹と真鍋、西野、水本、松本委員長、立花、若王子、藍澤、尾栗の少数精鋭部隊で手際良く設置していく。

程なくして着替え終わった演者陣がステージにやってきたのが現在で、本番八分前の午後一時三十七分だったりする。

「澪ちゃんカッコいい～！」

ロミオの衣装に着替えた秋山の姿に琴吹が感嘆する。

「あ、あんまり見ないでくれ…恥ずかしい…」

「ちょ～っと、ごめんあそばせ！」

するとジュリエットの衣装に着替えた田井中がこれみよがしな態度でやってくる。

「りっちゃんもすごく可愛い～！」

「へへ。サンキュ～」

「でも、やっぱ、りっちゃんがジュリエットなんて変だよ～」

「校内で全校生徒にアンケートしたら、全員唯の方が変って言うと思うぞ」

「…もしかしたら妹だけはお前の方が変って言うかもな」

「憂ちゃんはそんなこと言わないだろ。てか唯、まだ木の格好しなくて良いぞ」

ロミオの秋山。
ジュリエットの田井中。
木Gの平沢。

三年軽音部の演者の内の二人は主役なのに、一人は木って、今更ながら凄い格差だな。

「…つうか、木って顔を出す必要あんのか？」

段ボール製の木の衣装（と言って良いのか些か疑問だが）を早々に装着してしまい、琴吹に手伝ってもらいながら脱皮の要領で外し、

顔以外を覆っている茶色の全身タイツのような物の上から体操着であるジャージを着ようとしている平沢に問い掛ける。

「だって修司君が顔を出そうって」

「お前の提案かよ…」

いつの間にか俺の隣に立っていたジャージ姿の木Ａに視線を向ける。

「俺達木軍団だって立派な役者だからなッ！顔出してェじゃんッ！」

「あっそ…」

「そんなことより、俺のコンビニ弁当の行方知らね？」

「…朝、自分で放り投げてたろうが」

「……あッ！」

『しーまったッ！』と頭を抱える木Ａをスルーしていると、松本委員長がステージ上にいる俺達二組を見回す。

「じゃあ、集合しよっか」

その言葉に俺達は松本委員長の近くに移動すると同時にナレーションが流れてくる。

『まもなく、三年二組による『ロミオとジュリエット』の開演です』

遂に、と言えば待ち望んでいたように思い、決してそんなわけではないが、ナレーションを聞くとどうにも身が引き締まる。
それは緊張とかではなく、ほんの少しばかりの興奮。
どうやら知らず知らずに俺は『ロミオとジュリエット』に関心を持っていたようだ。

「みんな、今日まで一生懸命やってきたんだから、悔いのないように精一杯やりましょ」

松本委員長の言葉に全員が頷く。
…俺は小さくだが。

「あ、ちょっと良いですか？」

すると柳が右手を上げて全員の注目を浴びる。

「バスケ部って試合の前に円陣を組むんです」

「…円陣？」
「人参？」
「エンジン？」

意味深に笑顔を浮かべる柳に思わず俺は復唱し、木Ａの修司は野菜を口走り、木Ｇの平沢は動力の方だと捉えたらしく首を傾げる。

「はい。どうでしょうか？みなさんでやりませんか？」

「良いね。気合い入れようよ」

柳の提案に、いち早く中島が賛同し、伝染していくように自然に総勢三十六人の円が完成。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「私、何かワクワクしてきたよ」

右隣で俺と肩を組む平沢が、俺の左肩に乗せてある左手の力を軽く込める。

「…そういうのを高揚感っつうんだ」

「こーよーかん…」

「…それを感じてるんなら、お前はそれほどこの劇に夢中になってたんだろ」

「……うん！私！夢中になってた！サッくんは？」

「…まずまず」

「うん♪」

笑う平沢。

「澪！集中しろよ！」

「う、うん！律も！」

「澪ちゃんもりっちゃんも頑張って！」

互いを励ます田井中と秋山に声援を送る琴吹。

「ふぅ…」

ため息ではない息を吐く俺。

そして…

「それじゃあ！三年二組！頑張ってこーっ！」

『おーっ！』

現在時刻午後一時四十五分。

高校生活最後のクラスの出し物である、『ロミオとジュリエット』の幕が開いた。

第百十四話（後書き）

三年二組　男子クラスメイト紹介

鷹崎　亜魅夜
（たかさき　あみや）

・実は桜高イチの秀才だが、本人はそれをおくびにも出さない。
ちなみに二組の成績は、
1・鷹崎　亜魅夜
2・伊庭　亮
3・真鍋　和
4・松本　美冬
5・琴吹　紬
6・秋山　澪
・
・
・
最下位　影宮　修司

となっている。
・意外と学校行事大好き。
・『藍澤　梨乃』『村雨　流緒』とは中学の時からの付き合いで三人でいる時が多い。
・『藍澤　梨乃』からは『アミ君』と呼ばれている。

村雨　流緒
（むらさめ　るお）

・裏表のない性格で誰とでも仲良くなれるが、『影宮　修司』だけはほんの少し苦手。
・喜怒哀楽の内、常に喜と楽が全面に出ている。
・何故か『桐島　咲也』と『影宮　修司』からは『春雨』と呼ばれている。
・『藍澤　梨乃』『鷹崎　亜魅夜』とは中学の時からの付き合いで三人でいる時が多い。

補足。

第五十三話で修司が、

『俺がコレを手に入れて喜んでいたらさ、ガックリと肩を落としていた女の子がいてな…ありゃあ一年だ…
可哀相に…このパンが欲しかったんだろう…』

と、言ってますが、肩を落としていた女子は純です。

第百十五話（前書き）

最後の学園祭編その七です。

第百十五話

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「梓ちゃ～ん、純ちゃ～ん、早く早く～！」

純のアイディアが良かったのか、単に物珍しいからなのか、それとも別の要因があるのか分からないけど、とにかく私達のクラスの出し物『和風喫茶』は凄く大盛況。

でも、盛況になるにつれて私達はドタバタと大忙しで、本当に猫の手を借りたいぐらいだった…

純はこの忙しさが楽しいって言ってたけど、私は楽しむ余裕なんてなかった。

だって、先輩達の演劇を観るために余裕を持って交替をするはずが、あまりの忙しさに交替時間を大きく過ぎちゃって間に合わないんじゃないかって気が気じゃないんだもん。

でも、二岡さんが私と憂と純に…特に私に気を遣ってくれたみたい。

『中野さん』

『あ、ごめん！コレ持っていかなきゃいけないから！』

『軽音部の先輩達の演劇、観に行きたいんでしょ？』

『え…』

『顔に書いてあるよ』

『うっ』

『ここは私達に任せて行っといでよ』

『で、でも、こんなに忙しいのに…』

『大丈夫！バレー部の練習に比べたらなんてことないし！それに男子をこき使うから、特に野久保を』

『バッカ！何で俺だけなんだよ！林原とかいるだろうが！』

『だってアンタさっきまでサボってたじゃん。その分働いたのって中野さんと平沢さんと鈴木さんなんだよ？』

『ぐっ…』

『というわけで、中野さんと平沢さんと鈴木さんは交替ね』

あんまり食い下がるとかえって二岡さんに悪いから、私達は有り難く思いながらさわ子先生が作った和服から制服に着替えて、今、講堂に向けて走ってる。

「な…何で憂はあんなに元気なの…」

「確かにそうだけど、純はへばりすぎだよ」

「マ…マラソン大会の時もそうだったけど…わ…私ってあんまり…体力ないんだよ…ね…」

クレープ屋にわたあめ屋にミックスジュース屋やたこ焼き屋にイカ焼き屋に焼きそば屋等々、食べ物の露店や、占いにジャンボスゴロクや的当てゲームや射的等々、遊びを主とした露店が立ち並ぶ校庭は色んな人で溢れ返って、中々講堂に近付けない。

だけど憂だけはスラスラと人波を避けて、私と純の先で手を振っている。

しかも、大盛況で疲れた素振りや様子なんて全然見せないで…

「ほら、純。憂が待ってるから早く行くよ」

「わ…分かってるけど…ちょっと…休憩…」

「休憩するんなら講堂に着いてから」

「うぅ…　梓って意外とスパルタ…」

疲れてる純をあんまり急かしたくないけど、早く行かないと演劇が始まっちゃうんだもん。

ケータイを取り出して時間を確認したら、一時三十九…あ、四十分になっちゃった！

「急ぐよ純！あと五分で始まっちゃう！」

「ちょっ！梓！うわっ！」

純の手を取って駆け出して憂と一緒に再び講堂を目指す。
桜高生や学園祭に訪れている人が、必死に人波を避けて走っていく私達に視線を向けるけど、気にしてる余裕も暇もないから、ひたすら駈けて行く。
その途中で…

「なんだコレ？墓？」

「何でお墓が道端に落ちてるの？」

「さぁな」

「あ！あそこのじゃない？ほら、マンモスの肉のところの」

「でも墓だぜ？マンモス関係ねぇじゃん」

「だから、このお墓はマンモスのなんだって」

「何で自信満々なんだよ」

多分恋人同士だと思うカップルの会話が聞こえたけど、それどころじゃない私達は足を動かしていく。

そして、人に当たりそうになりながら、やっとの思いで何とか講堂に着いたのは良かったんだけど、まだ安心出来なかった。

「はぁ…はぁ…ひ…人がいっぱい…だね…」

息絶え絶えの純の言葉通り、講堂内も人で溢れていた。
席は全部埋まってるし、立見してる人もいる。

「席あるかなぁ？」

講堂内を見渡す憂につられて私も見渡すけど、やっぱり満席。

「私達も立って観てよっか？」

ホントはちゃんと椅子に座って観たいんだけど、空いてないんじゃ仕方ないよね。
それは憂と純も感じたみたいで、立見をしている人達の所に移動を始める。

「梓ちゃ～ん！」

その瞬間、突然聞こえた私を呼ぶ聞き覚えがある声に足は止まり、声がした方に顔を向ける。

「先生」

私を呼んだ声の主は、ステージ前から三番目の席に座って私達に向けて手を振っているさわ子先生。
私達は立見をしようとしたその足をさわ子先生の所に向ける。

「先生。どうしたんですか？クマが出来てますけど…」

まるで寝不足と疲労困憊で、夏フェスの時のサク先輩みたいに眼の下にクマがあるさわ子先生に私が首を傾げていると、さわ子先生は苦笑いでこう切り出した。

「それがね…ちょっと手を広げすぎちゃったのよ…」

「もしかして、衣装ですか？」

何に対して手を広げすぎたのか、その要点がピンとこない私と純は揃って首を傾げたけど、憂は分かったみたいに申し訳なさそうな表

情になる。

「そうなの…咲也くんにも言われたけど、何事にも限度があるのよね…」

『ちょっと頑張りすぎちゃった☆テヘッ☆』と片目をつぶってペロッと小さく舌を出してコツンッと自分の頭を叩くさわ子先生に、そういえばと私は思い出した。

軽音部のライブ衣装に、私達のクラスの和風喫茶の衣装に、先輩達の演劇の衣装に、二組と三組の衣装も作るって意気込んでたっけ。

一人で百人以上の衣装を手掛けたんだもん、そりゃ寝不足にもなるよ…

「すみません、先生にこんな…」

「良いのよ、私が好きでやったんだし。それよりもうすぐ始まるから座ったら？」

自業自得とはいえ、私達生徒のために身を削ったさわ子に、憂の申し訳ない表情を理解した私と純は小さく頭を下げるけど、さわ子先生は苦笑いじゃなくて笑顔を浮かべて隣を指差す。

そこにはちょうど三人分空いてて、もしかしたらさわ子先生が私達が来るって分かってて席を確保してたみたい。

私達は『ありがとうございます』とさわ子先生にお礼を告げてそこに腰を下ろしたのと同時にナレーションが講堂内に鳴り響く。

『まもなく、三年二組による『ロミオとジュリエット』の開演です』

そのナレーションの後に演劇の始まりを告げるブザー音が流れて講堂の照明が全て落ちる。

（いよいよだぁ…）

胸がドキドキしてきた。

このドキドキは軽音部の練習に来れなくなったぐらいに必死に練習をしていた先輩達に対する期待感と、まるで私が演劇をするみたいな緊張感。

自然と膝の上に置いている両手を握り締める。

頑張れ！先輩達！って意味と、何で私が緊張してるの～！っていう二つの感情がせめぎ合う。

「ふぅ…」

リラックスするために息を吐き出したら、さっきのナレーションとは違う声が聞こえてきた。

『舞台は十四世紀のイタリアの花の都ヴェローナ。そこではモンタギュー家とキャピュレット家が、古くからの遺恨で対立し、度々抗争を繰り返しています』

まだステージの幕は上がらないで、ナレーションだけが講堂に響く。

多分このナレーションは先輩達のクラスメイトだと思うけど、透き通るようで綺麗な声に私も憂も純も、講堂にいる全ての人が『ロミオとジュリエット』の世界にのめり込んでいく…

「さすが、立花さんね」

さわ子先生の声が聞こえた気がした。
私の耳はナレーションに集中していたから気がしたんだよ。

『抗争はとどまるところを知らず、キャピュレット家の召使がモンタギュー家に攻め入ります。迎え撃つのはモンタギューの甥のベンヴォーリオ。対するはキャピュレットの甥のティボルト。

そこから物語は始まります。
未熟者の私達ですが、懸命に勤めますので、どうか皆さんご覧ください』

パチパチと拍手が講堂内を包む。
そしてガキンッガキンッと鍔競り合いの音と共にステージの幕が上がっていく。

（ゆ、唯先輩…）

ステージ上は屋敷の外壁と草木の風景。
その風景に一人は大きな木の衣装の男の人と恥ずかしそうに顔を赤らめる女の人。
そして、やけに気合いの入った表情の唯先輩が…

唯先輩は真面目にやってるんだろうけど、何だか喜劇に見えてきちゃって、私は思わず両手で顔を覆ってしまっちゃった…
ていうか何で木の役で顔を出す必要があるんだろう…

「木の役って顔出す必要あるの…？」

「そこは突っ込まない方向で…」

純もそれを感じたみたいで、独り言のように口にするけど、さわ子先生が反応する。

「お姉ちゃん♪」

私も純もさわ子先生も木の役に顔を出している唯先輩に苦い表情をしているけど、憂だけは嬉しそうな表情をしている。

（憂ってホント、唯先輩のことになると…）

『はぁ…』っとため息をついていたら鍔競り合いの音が少し小さくなってステージ右からに男の人が出てきた。

「引け！引け！何をやってるんだ！剣を納めろ！」

観客席に向けてブンッと片手を振ったその人の逆側から剣を持った別の男の人が出てくる。

「おい、ベンヴォーリオ。お前の相手はこの俺、ティボルトだ。さぁその腰にある剣を抜け！」

「君と争うことはしない。仲裁しようとしているんだ、剣を納めて手伝ってくれ」

「フンッ！仲裁とは笑わせる！我がキャピュレット家と貴様のモンタギュー家は水と油！さぁ行くぞ！」

ガキンッと鍔競り合いの音がまた大きくなって、徐々にステージ上の照明が暗くなっていく。

「すごい…」

思わず零れた私の言葉は、講堂内にいる全ての観客の感想だと思った。

…でも、どうしても唯先輩が気になる…

（どうか唯先輩が失敗しませんように！）

ただ立っているだけで良いんだけど、唯先輩だもん！祈らずにはいられないよ～！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

所謂今は場面転換というもので、照明係の西野と水本がゆっくりと灯を落とす。
そして間延びしないように、手が空いている連中が迅速にセットを変えていく。

「おーい、鷹崎よ。あーんまし本気で来るなって。びーっくりすんだろ」

「悪いな。ついつい」

「でも、二人ともリハーサルの時より良かったッスよ」

ステージの端の倉庫のようなスペースに、シンセサイザーの前に座っている俺と隣で何度もＢＧＭに使うＣＤを確認している藍澤。
台本片手の琴吹と真鍋と松本委員長と尾栗。
そして秋山と田井中と木軍団がこの場にいる。

今し方最初の演劇を終わらせた青梅と鷹崎と尾栗の会話が背後に聞こえるが、音響というのは随分神経を使うので完全にスルーし、次の場面の効果音をセットしていく。

「ぷへ～！どうだった私の演技？」

ステージから戻ってきた木Ｇの平沢が木の衣装を琴吹と外しながら誰かに…

「ねぇねぇサッくん」

俺に感想を求めてくる。

「……」

スルーしているとしつこく聞いてきそうなので、平沢に振り返ることなく『普通』という意味を込めて伝わる筈はないが左手をヒラヒラと振る。

「おぉ！和ちゃん！サッくんが完璧だって！」

伝わる筈はないと思っていたが、勝手に随分と評価レベルを上げて伝わったようだ。

そんな平沢に真鍋は苦笑いを浮かべて、台本に視線を落とした時にステージが照明によって照らされる。

どうやらいつの間にか場面転換が終わったらしく、ステージ上はキャピュレットの屋敷の内部に切り替わっていた。

「梨乃、落ち着けよ？」

「う、うん！」

この場面からＢＧＭが使用されるので、演劇が始まってからガチガチに緊張している藍澤に鷹崎が頭に手を置く。

「まぁ、万が一ヘマしたら桐島がフォローしてくれるから大船に乗った気持ちでやれ」

「…失敗を前提に置いとくな、置くんなら成功だ」

スルーするわけにはいかない鷹崎のサムズアップしながらの吐露に首にかけていたヘッドフォンを耳に移動する。

「だ、大丈夫でふ！桐島君には迷惑かけましぇん！」

「「……」」

噛みまくりで意気込む藍澤に俺と鷹崎は顔を見合わせる。
俺は鷹崎に『…大船どころか乗船する前にコケるぞ』と視線で訴え、鷹崎は『すまん、否定出来ん』と返す。

「はぁ…」

ため息で何とか気分を一新させステージに視線を向けると、ちょうど伊庭が扮するキャピュレットと佐々木扮するその夫人がステージ上に現れていた。

「この騒動はいったい何事だ！わしの剣を持ってこい！」

「誰か杖を、杖を。剣なんかあなたには無理ですよ」

「剣を持ってこいと言ってるんだ！見ろ、モンタギューものこのこ出てきて剣を振りまわし、わしを小馬鹿にしておるじゃないか！」

このタイミングでＢＧＭが流れる手筈なのだが…

「え、えいっ！」

ラジカセの再生ボタンを気合い十分で藍澤が押し、滞りなくいかにも悪人登場なＢＧＭが講堂に流れる。

そんな音楽に乗って俺達がいる場所とは逆側の同じ倉庫のようなスペースから、春雨（村雨）が扮するモンタギューが剣を携えて真剣な表情で出てくる。

「キャピュレットか…この悪党め！」

すると剣を構えた春雨の後ろから近田が扮する夫人もやってきては春雨の腕を掴む。

「おい放せ！放せというのに！」

「いけません、喧嘩騒ぎに入るなど」

「腰抜けのモンタギューよ、なんと情けない。そちが来ぬのならわしから…！」

「いけません。それにあなたは丸腰、死地に赴くようではありませんか」

「ええい！剣を持ってこいと言っとるだろう！」

ここで、俺がシンセサイザーで四人分の足音を流す。

「双方、そこまでだ」

現れたのは『ロミオとジュリエット』の舞台であるヴェローナの領主である飯田扮するエスカラスとその従者の瀧と小磯と菊地。

「「「「エスカラス様！」」」」

伊庭と佐々木と春雨と近田が驚愕する演技を見せたところで藍澤はＢＧＭを止め、代わりに俺が鍔競り合いの効果音を。

「む？まだ静まろうとせんな。おい、お前たち」

「「「「はっ！」」」」

飯田の言葉に瀧と小磯と菊地は四肢を揃えて背筋を伸ばす。

「怒れる領主の宣告を聞けと、剣を振り回す連中に高らかに伝えよ」

「「「はっ！」」」

ステージから掃ける三人の足音を流し、間髪を入れず鍔競り合いの音と藍澤が先程とは違う雷が唸るＢＧＭを流す。
つまり雷が落ちるくらいエスカラスは怒っているらしい（琴吹製作台本より）

「モンタギュー、キャピュレット。お前らの憎悪の業火を消さんがためには、自らの迸る鮮血をもってするほかないというのか」

シンセサイザーで鍔競り合いの音を完全に消し去る。
つまり、エスカラスの従者が争いを止めたらしい（琴吹製作台本より）

「根も葉もない言いがかりから市中の争乱は三回に及んだ。キャピュレット、それにモンタギュー。今後二度とこのような争乱に及ぶとなれば、お前らの生命をもって平和の償いとするぞ」

釘を刺す飯田扮するエスカラスは踵を返し、ステージ端に掃ける。

「あなた、退きましょう」

「ここはエスカラス様に免じて背を向けるが、逃げの一手ではないことを肝に命じておくがいい、キャピュレットよ」

「背を向けるのは逃げも同然。さっさと立ち去れモンタギュー」

普段の温厚な春雨とは打って変わって言葉の節々怒気を含んだモンタギューと夫人は退散し、暗転。

「すごいな流緒…」

「迫真の演技だった…」

どこか呆然とする鷹崎と藍澤を横目に俺は台本をめくる。
そこにある琴吹が書いたであろう『ロミオ登場』の文字に何となくヘッドフォンを首に移動させ、後ろを振り向く。

「大丈夫？澪ちゃん」

「だ、大丈夫」

琴吹の言葉にそう返すが、明らかに秋山は緊張している。
秋山の性格を考えると無理もない。
時折聞こえる拍手や感嘆の声に観客はかなり入っているものだと推測出来る故にガチガチになってるんだろう。
ちなみに次の場面で登場する木Ａの修司、Ｃの木下、Ｄの島、Ｅの林原は早々に暗いステージ上にスタンバイしている。

「澪！リラックスだ！深呼吸だ！」

「大丈夫だよ澪ちゃん！あんなに頑張って練習したんだもん！」

田井中と平沢の励ましに幾分緊張がほぐれた秋山はうっすらと笑みを浮かべて、立花のナレーションが終盤に近付いたことに気付き、ステージ端に移動する。

「ぁ…」

その途中、不意に俺と視線が交錯した秋山は何を思ったのか進路変更し、俺に近付いてくる。

「さ、咲也…」

ほぐれたとはいえまだ緊張感は残留してあり、蚊の鳴くようで若干

震える声を俺に向ける。

「あン？」

「ちょっと、手を出して…」

意図が読めない秋山の思考に断ろうとしたが、その瞳はまっすぐに俺を見つめる。

【力を貸して】

そう訴える瞳に逆らえず、左手を差し出す。

「よし…！」

時間にして一秒にも満たない刹那な時間で俺の左手に自身の左手を重ねた秋山。
その自分の左手を胸に当て大きく深呼吸した秋山は意を決したように小さく息を吐いた。

「澪。落ち着いてね」

「うん、ありがとう和」

最後に真鍋の微笑みに微笑みで返した秋山は凛としており、緊張の糸は完全にほぐれたようだ。
そしてステージが明るくなり、藍澤が交響曲のＢＧＭを流した瞬間に堂々と歩いていった。

「さすがサクだな」

「あぁ？」

「澪に勇気をやるなんて、男前だよな～」

「…俺は何もしてねェし、アイツの勝手な自己暗示だ」

「それでもだよ。もしかしたらサクがいなかったら、澪はまだ緊張してたかもな」

視線を田井中からステージに向けると、観客席に向けて手を広げている秋山の姿があり、誰が見ても緊張の『き』の字も見えない完璧な演技だ。

別に田井中の言う勇気を与えたつもりなんて微塵もない。
が、それで秋山がロミオになりきる程の演技が出来ているんなら、田井中にこれ以上の反論は野暮というものだろう。

「サッくん、次は私にも！」

「断る」

「ガーン！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『争いから一夜明けたモンタギュー家の庭に、一人息子のロミオが佇んでいます。実はロミオはロザラインという貴族の娘に片思いをして苦しんでいました。そこへロミオの友人であるベンヴォーリオが訪れます』

ナレーションが終わってパッとステージが明るくなって、ＢＧＭが流れる。

私は『ロミオとジュリエット』っていう劇名は知っていても内容はあまり知らなかったんだ。

だから『澪先輩まだかな？』と思っていた矢先に澪先輩が出てきた時は見入ってしまった。

だってロミオの衣装を着ている澪先輩は何だかカッコいいもん。

「カッコいい～！澪先輩」

隣を見ると純が感激していた。
私がそう感じたんだもん、澪先輩に憧れてる純には堪らないんだろうなぁ。

「あぁ…　ロザラインよ。ぼくの胸を締め付ける君は今何をしているんだろうか」

澪先輩が私達観客に向けて左手を差し出す。
まるでそのロザラインに…そ、その…あ、愛を…伝えるみたいに…

「やぁ、おはよう従兄弟よ」

すると、最初にステージに出てきた男の人が片手を上げてやってきた。

「ベンヴォーリオ、もう日の盛りではないのかい？」

「何を言ってるんだい。まだ九時を打ったばかりだ」

「悲しみの時は長いなぁ…」

「どんな悲しみがロミオの時を長くするんだい？」

「それは、短くしてくれるものが手に入らぬ悲しみさ」

「さては恋？」

「恋はすれども叶わぬ恋だよ」

「恋のキューピットめ、見た目はいかにも優しげだが、いざとなると残酷だからな」

相手の男の人の台詞が終わった時に、澪先輩は大きく深呼吸するように私には見えた。

「あぁ、恋のキューピットめ、あの目隠しした目で狙い定めた的はきっと射ぬくというのに、ロザラインにはぼくのあ…愛が伝わってないのか」

あ、澪先輩、少し噛んじゃった。

「昨晩あった争いは憎しみ故、だが愛故の争いもある。この胸の争いの愛、愛する憎しみ、無から生じた有、重く沈む浮き立つ心、真剣な軽薄、美しい外観の醜悪な混沌、醒めている眠り、掴めそうで掴めない雲」

澪先輩は長台詞のためにさっき深呼吸したんだと納得して、ふと何気なく背景に眼を向けると…

「か、影宮先輩…」

何故かS字に身体を捻っている影宮先輩が木の格好で立っていた。
その表情は何だか辛そうで、気のせいか小刻みに震えている…
何で普通に立ってないんですか…！

「ぼくの恋はそういう恋、だから憎しみの恋。笑わないでくれよ？」

ダメだ！
どうしても影宮先輩が気になって、集中出来ないよ！

「笑うどころか泣きたいよ」

「泣くって何を？」

「愛する君の心の苦しみにさ」

「それは度が過ぎるよ。ぼく一人の悲しみが君に分かるはずはないさ」

「だったら、その悲しみを愛情に変えてロザラインに伝えればいい」

「それが出来ればぼくは今頃神になっているさ。出来ないから、ぼくはここにいるんだ」

「君の召使からこんな手紙を貰ってね。何でも今晩、キャピュレッ

トの屋敷で舞踏会が開かれるようだよ。そこには当然、ロザラインも来る」

あ！あ！影宮先輩が！プルプルしてる！

「何が言いたいんだい？」

「行こうじゃないか、この舞踏会に。そしてロザラインに愛を伝えよう」

「行けるわけないだろ、ぼくはモンタギュー家の者。のこのことキャピュレットの屋敷に行ってはこの身を斬られる」

「安心しなよ、この舞踏会は仮面をつけるんだ。君の素性は隠せるし、ヴェローナ中から美女が訪れるんだ。ロザライン以上の美女だって現れる」

「それは、ぼくにロザラインを忘れろと？」

「そうは言わないさ、だけどその可能性もあるってことさ」

澪先輩が相手の男の人が持っていた手紙を受け取って、頷いた瞬間に再びステージの照明が落ちる。

「イテッ！」

「（なーんでコケてんだよ、影宮）」

「（長時間のS字は俺の身体を蝕んだようだぜ…身体が痺れてる…）」

「（影宮君、早く移動しないと…）」

「（そうなんだがな澪ちゃん。身体が痺れて動けない…）」

「（えっ!?さ、咲也!影宮君が!）」

ステージからボソボソと聞こえてくる会話に私は…

「だ、大丈夫かな…」

一抹の不安を覚えて一粒の冷や汗を流した…

唯先輩もそうだったけど、影宮先輩も失敗しそうで集中出来ないよ～!

第百十五話（後書き）

三年二組　男子クラスメイト紹介

西野　卓
（にしの　すぐる）

・『桐島　咲也』『影宮　修司』とは二年生の頃からのクラスメイト。
・基本面倒なことはしない主義だが、面白そうな事には首を突っ込む。
・クラスの立ち位置は可も無く不可も無い中立な立場。
・成績は中の上。
・何故か『影宮　修司』の扱いが日々『桐島　咲也』に似てきている。
・『水本　星都』とは小学校からの付き合い。
・名前の由来は『西野』は何となくで『卓』は『咲也』『修司』と、さ行と続いており、続く文字は『す』だったから。

水本　星都
（みずもと　せいと）

・『桐島　咲也』『影宮　修司』とは二年生の頃からのクラスメイト。
・性格は至って温厚で『西野　卓』曰く生真面目だが、ひとりぼっちになると寂しさからか、何故か笑顔を浮かべてペラペラと饒舌になる。つまり面白い子。
・身長は二組の男子の中では最も低く、『田井中　律』と同じ１５

４ｃｍ

・『チビ』が禁句らしく、言ってしまうと『西野　卓』曰くマジで怒る。

・成績は上の下。

・『西野　卓』とは小学校からの付き合い。

・名前の由来は『水本』は…覚えてない。

『星都』は『咲也』『修司』『卓』と、さ行と続いており、続く文字が『せ』だったから。

補足。

第百六話の後書きにて『多分、今後の出演予定はありませんが』とありますが、見なかったことにしてください。

作者から一言。

最近登場人物が多過ぎて頭がパンクしそう…

第百十六話（前書き）

最後の学園祭編その八です。

第百十六話

アホがアホらしい理由でステージ上から動けない、という報告をたった今、焦った表情で早足で戻ってきた秋山から受けた。

「ど、どうしよう！？」

「…引きずってこい」

それに対して俺はステージ上にて悶絶しているアホを一瞥し、台本をめくりながらそう告げた。

告げたのは秋山だがコイツにはそんなことは出来ないし、しないだろう。

期待しているのはステージ上にいたアホを除いた男子二人の内、ベンヴォーリオ役の青梅。
林原はおとなしい性格故、ハナから期待してない。

「運んでくれるのは嬉しいんだけどさ、もうちょい持ち方ってもんがあるんでないかい？」

「だーってさ、この方が楽なんだし、早く退かなきゃならなかったから」

「なるほどな。でもね、後頭部と背中…つうか床に接地してるとこ

が熱いんだけど？」

「気ーのせい」

「そうか、なら仕方ないな」

「…き、気のせいじゃないと思うんですけど…」

俺の期待通り、青梅がアホの右足を持ち、ズルズルと引きずりながらステージから戻ってきた。
ついでに引きずられているアホを見ながら、何とも言えない表情の林原も。

「おやおや？　心なしか、背中が熱した鉄板のように熱いんだが…
…　サクッチよ、俺の背中どうなってる？」

「……」

床に仰向けの状態から俯せになって俺に背中の程を確認するように、そんなことを言ってくるが、見向きもしないでスルーする。

アホの相手などしてる暇はない。　暗転イコール次の場面の準備だ。

特に音響と照明はそれを素早く正確に頭に入れておかなければならない。
ＢＧＭ、効果音はタイミングが命であり、照明はステージ全体を照らすのか、それともスポットライトで個人を照らすのか、はたまた

間接的に照らすのか…

幾ら練習を重ねたとて油断は禁物。
幾らリハーサルで万事上手くいったとて、本番では何が起こるか分からない。

杞憂だと言われても、過去三回、軽音部で前例があったからだ。

初ライブでは秋山があまりの緊張と責任の重圧に怯み、すぐには歌えなかった。
新歓ライブでは平沢が歌詞を忘れて、続く学園祭ライブでは平沢が前代未聞のギターを忘れる。

どの状況も俺や周囲の奴らがフォローしたから大事には至らなかったが、一歩間違えばライブは破綻していただろう。

事前の準備があるからこそ本番は成功する。
それは何事にも、だ。

「次は私だな」

「りっちゃん、もしかして緊張してる？」

「…ムギも結構鋭いな」

「だって、ちょっと顔が固いように見えたから」

「ま、大丈夫だ！　澪が出来たんだから私も出来る！」

「そうだよ！　りっちゃんは部長でお姉ちゃんだもん！　あ、お客さんをキャベツだと思えば良いんだよ！」

「それを言うならカボチャだろ、唯」

「はっ！　そうだったね澪ちゃん」

「律、リラックスだぞ」

「分かってるよ」

めくった台本にまず飛び込んだのは『ジュリエット登場』の文字。

背後から聞こえる平沢達の会話から察するに、どうやら田井中はやや緊張しているらしい。

あまり田井中には緊張というイメージが結び付かないが、普段の大半はおちゃらけている田井中でも人並みに緊張するんだな。

「サク、今何か失礼なこと考えただろ？」

「…別に」

否定も肯定もしなかった俺に『絶対考えてたな！』と肩を軽い力で叩いてくる。

互いに集中しなければならないというのに、この有様…

まぁ、これが田井中なりのリラックス法なんだろうが、俺にしてみれば鬱陶しいことこの上ないし、徐々に痛みが蓄積していく。

「サク」

「ンだよ…」

いい加減振り払おうとしたが、それは張本人の真剣な呼び声により収まった。

「ん」

そんな声に振り返ると、右手の拳を俺に意味ありげに突き出していた。

「…勝ったらエフェクターでも買ってくれんのか？」

「じゃんけんじゃないって。てか、買えないし」

「…じゃあ何だよ」

「良いから…ん！」

言葉を濁し更に拳を近付ける田井中の表情は何かを期待しているように思える。

そして理解する。意味ありげな拳の意味を。

「……」

コツン、と、その拳に自分の右拳を軽く当てる。

「よぉし！　行ってくるぜ！」

笑顔を浮かべ、拳から親指を立てサムズアップする田井中は田井中で。

「…ヘマすんなよ」

「私は部長だぞ？　そういうサクも失敗するなよ～」

「…俺は副部長だ」

「ははっ！　そうだな！」

「律、そろそろよ」

「おう！」

「りっちゃん頑張って！」

「りっちゃん隊長！　ご武運を！」

「律…！」

「大丈夫だって澪」

「う、うん！」

真鍋、琴吹、平沢、秋山に笑顔を向けた後、俺の横を通った表情はジュリエットという役になりきっている田井中だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

（ロミオってジュリエットと恋に落ちるはずなのに、別の人に片思いしてたんだ）

ロザラインだったけ？
その人のことを好きなってるロミオは、どうやってジュリエットを…

『ロミオがベンヴォーリオと画策している一方で、キャピュレット家では夫人が一人娘を探すため右に左に首を動かしていました』

ちょっと意外だったロミオに、この先の展開を考えていたらナレーションが流れてきた。
ステージ全体は明るくならなくて、スポットライトに照らされた…
確かお茶会の時、和先輩が言ってた澪先輩のファンクラブの人が出

てきた。

「あらあら、あの娘はどこにいるのかしら？　ばあや、娘はどこ？
ばあや」

すると、またスポットライトに照らされた白髪のカツラをつけている女の人が、ゆっくりとやってくる。

「はいはい奥様。私はここですよ」

「ジュリエットはどこにいるの？　呼んでちょうだい」

ジュリエットって聞いて胸のドキドキが一段高くなった。
律先輩だ！って。

「おや？　さっき確かに呼んだんですがねぇ。あれあれ、一体どこなのかしら。ジュリエットちゃぁん！」

コツコツと一人分の足音。
ドキドキ高鳴る胸の鼓動。
そして…

「なぁに、誰かご用？」

ジュリエットの衣装を着て、いつもしているカチューシャはしてなくて、襟足にエクステをつけて髪を一本結びにしている律先輩がスポットライトの下に。

「別人みたい…」

活発なイメージが強い律先輩だけど、今、私が見ている律先輩は、おしとやかで清楚で純粋に可愛い女性。

「澪さんもそうでしたけど、律さんも落ち着いてますね」

「二人とも毎日猛練習したみたいだから、その賜物ね」

「だから澪先輩はあんなにカッコよかったんだ」

どうしても気になっちゃう唯先輩と影宮先輩はいないから、私は演劇を観ることに集中出来る。

だから憂とさわ子先生と純の言葉には何も反応を示さなかった。

「奥様がお呼びですよ」

「はい、お母様。何のお話でしょう」

「ばあや、ちょいとお待ち。どこに行くの？」

「母と娘の内々の話に割って入るなんて野暮ったいことはしませんよ」

「ばあや、お前にも聞いてもらいたい話ですから。お分かりだろう、この子ももう年頃になってねぇ」

「えぇ、旦那様と奥様がマンチュアへお出かけ、私と幼いお嬢様は軒下で日向ぼっこ。あれからの時間は年にして十八。お年なら知ってますとも」

「ばあや、私はまだ十七よ」

「分かっておりますとも、一年三百六十五日ある中で、収穫祭の宵宮の晩にはきっかりと十と八」

「ジュリエット、女というものは早熟なのです。もうお分かりだろう」

律先輩が何かを考える仕草をして、ハッとしたように顔を上げるとピアノの音が鳴った。

（そういえば音響担当ってサク先輩だったけ）

律先輩が一歩後退り、胸に手を当てる。
その二つの動作にもピアノの音が鳴る。

（さすが、サク先輩）

どうやって鍔競り合いや足音や今みたいなピアノの音を鳴らしているのか分かんないけど、どれもタイミング良くぴったりで、ホント、音楽面に関してサク先輩は凄いなぁ。

「お母様、もしや…」

「そうです、貴女を呼んだのは結婚の話をするためです」

「そんな！　結婚なんて！　まだ夢にも思っておりません！」

「それでは結婚のことを考えてごらんなさい。お相手の方だって貴女のことを…」

「ちょっとお待ちくださいっ！　お母様っ！」

言葉を遮るように律先輩が手を振ると、激しくピアノの鍵盤を叩いたような音が流れる。

そっか、台詞だけじゃなくて、動作とか仕草が合図になってるんだ。

「まぁ、ジュリエット。なんてはしたない、大きな声を上げるなんて」

「す、すみません…　でも、私にお相手の方がいるのですか？」

「エスカラス様の縁者でおられるパリス様が貴女を妻にとおっしゃっているの」

「まぁお嬢様！　その方はそれはもうヴェローナ中の、いえいえ、世界中の水も滴るいい男ですよ！」

「花の都、ヴェローナでもあれほどの花は咲きません。パリス様は花も霞むほど」

「もう花も花、花の中の花、花がこうべを垂らすほどの花」

「ジュリエット。貴女はその方を愛せますね」

「私は…」

顔を俯かせる律先輩にスポットライトの幅が小さくなる。

（何か、かわいそう…）

結婚を迫られて、勝手に相手を決められて、ジュリエットの気持ちも聞かないで…

「ヒッドーい！　勝手だよ！　時代劇とかでもこういうの観たことあるけど、結局これって政略結婚じゃん！」

純が思い切り口を尖らせる。

私も純もジュリエットに感情移入しちゃってるみたい。

それぐらい律先輩の演技に魅せられてるだなって思いながら、視線を純からステージに移す。

「今夜の宴会でお目にかかれますからね。パリス様のお顔をご本の一巻としてよく読んで」

ジュリエットのお母さんが身体を観客席に向けて一歩踏み出す。

スポットライトも一緒に。

「美貌のペンで描かれた楽しい物語を味わいなさい。お顔立ちの見事な一画一画、お互いがお互いの喜びの目次。あぁ、なんて素晴らしい恋の書物でしょう」

両手を広げるとクラシック曲が流れてきた。

「でもまだ愛の綴じ糸がないの、美の最後の仕上げになる妻という表紙がないの。黄金の物語は黄金の装丁に抱き締められてこそ衆人の眼が賞讃する立派なご本になるのです」

顔を俯かせている律先輩にジュリエットのお母さんが身体を向ける

とクラシックは鳴り止んで、律先輩を照らしていたスポットライトの幅が元に戻る。

「貴女はあの方の財産で立派な貴女になる、キャピュレット家にも箔がつく。損な話ではないのよ」

「損どころか、モンタギュー家に対して後ろ盾が出来て大儲けですね」

「ジュリエット。パリス様のことを愛せますね？　好きになれますね？」

まだ顔を上げない律先輩。

台詞もＢＧＭも効果音もなくて、灯は三つのスポットライトだけの静かで暗い講堂は、まるでジュリエットの心情を表しているみたいで、より一層ジュリエットに感情移入しちゃう…

「私は…」

静まり返る講堂に律先輩の声が響く。そして律先輩が顔を上げた。

「愛してみせます。好きになってみせます」

「そうですか、それは良い返事。母である私も鼻が高い」

「老い先短い私も、お嬢様の吉報に年甲斐もなく胸を弾ませております」

『舞踏会の準備を致しましょう』と二人は掃けて、ステージ上にはスポットライトを浴びている律先輩。

「お母様、私は…」

そう一言告げて、律先輩は二人とは逆側に掃けていった。

「ジュリエットもジュリエットだよ！　嫌なら嫌って言えばいいのに！」

「純ちゃん落ち着いて」

「だって～！」

「でも純の気持ち分かるよ。何か複雑だよね」

「でもね、これもまた愛なのよ…」

さわ子先生が遠い眼をして物思いにふけてる。

「結婚や恋愛をしたくても出来ないものなのよね…　だって私には

相手がいないんだもん！」

「「先生？」」

「あはは…」

両手で顔を覆ったさわ子先生に私と純は首を傾げて、憂は苦笑いを浮かべる。

『ベンヴォーリオは友人のマキューシオを誘い、ロミオ達三人はキャピュレットの屋敷にいとも簡単に忍び込みます。そこでの運命の出会いが待っているとも知らないロミオは、優雅に舞う貴婦人達をただ眺めていました』

「あ、始まる…」

ナレーションの後にステージ全体が明るくなって、さっきのクラシックじゃない別のクラシックが聴こえてきた。
澪先輩とベンヴォーリオだったけ？その人と初めて見る人が観客席に身体を向けていた。

「どうしたんだロミオ？　気分が乗らないかい」

「踊りたい気持ちにはなれないよベンヴォーリオ。ロザラインは違う男と踊ってる」

「おいおいロミオ、君も踊らきゃ。これでは身を危険さらした意味がない」

「いや無理なんだ。マキューシオ、君とベンヴォーリオの靴の底は浮き立つ心の舞踏会用、だがぼくの心の底は重く沈んで鉛のよう、身体が地面の棒杭に縛られて動けない…」

あ、ロミオはロザラインに振られちゃったんだ…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

ガシャンとグラスを落とし割れた効果音を。

「これは失敬。どうかお気になさらず」

「どうしたロミオ、気分の重さが身体も重くしたのかい？」

「マキューシオ…　あの娘は…」

「彼女はキャピュレットの娘のジュリエットという令嬢だ。それがどうかしたのか」

現在、漸くというか、ロミオがジュリエットを見つけた場面。
つまり持っていたグラスを落としてしまう程、ロミオはジュリエットに見とれてしまっている…らしい（琴吹製作台本より）

「大袈裟だろ…」

この場面の効果音は今し方終えて、台本を手に取り椅子の背もたれに体重を預ける。
そして、台本にある文字にツッコミのような感想を呟いた。

【ロミオはグラスを落とし、ジュリエットはパリスとの踊りを止める。二人は見つめ合って恋に落ちる】

こんなことが書いてあったら思わず口を開いてしまっていた。

「でも、こういうのって素敵だと思うの♪」

独り言だったのだが、どうやら琴吹には聞こえていたらしく、俺の横でニコニコしている。

「ロミオとジュリエットってね、一目惚れなの。ロミオはロザラインのことなんて忘れちゃうくらい、ジュリエットはパリスと踊っていたのを止めちゃうくらい。それほど二人は深い愛を感じたんだって♪」

「ふーん…」

そこは女子だからだろう。
例え演劇の作り話でも、琴吹は恋愛に興味津津だ。
対する俺は聞き手となっているが全く関心を示さずヘッドフォンを首に移動させ、ステージに視線を向ける。

「お嬢様、どうなさいました」

（素なんじゃねェだろうな…）

パリスは柳が扮しているが、アイツは常日頃から敬語なので演技をしているのか分からないくらいに台詞に違和感がない。

「あの声はモンタギューの息子のロミオ。よくもぬけぬけと…！
これは侮辱だ！　愚弄だ！　嘲笑だ！」

鷹崎扮するティボルトが息巻く。
意外とアイツも嵌り役だな。

ちなみにステージ上には、ロミオ、ジュリエット、ベンヴォーリオ、マキューシオ、ティボルト、パリスの計六人がそれぞれの演技をしていたりする。

「ねぇ唯ちゃん」

「ほい？」

「唯ちゃんは一目惚れとかしたことある？」

「一目惚れ…」

「うん」

そして背後から聞こえる琴吹と平沢の声。
内容が内容なだけに、耳に入れてはマズいと判断し、ヘッドフォンを耳に移動させる。

「私は…「唯、もうちょとで出番だから、用意してて」あ、うん！」

何かを言おうとした平沢を、全くそんな気はないんだろうが、邪魔するように真鍋が遮る。

「……」

（聞こえてるんならヘッドフォンの意味ねェな…）

筒抜けになっていた平沢達の声。
この状況での、この耳は意思や意志を聞くことを優先すべきじゃなく、音や音色を聴くべきだ。

「サッくん」

そう呼ばれようとも今は音響に集中。

「サッくん言うな」

しかし、優先的に音や音色を聴くべきだとしても俺の意志とは関係なく、この耳は意志も意思も拾ってしまう。
条件反射とは恐ろしいぐらいに。

「ん！」

秋山は左掌、田井中は右拳だった。
そして平沢はハイタッチの如く、右手を顔の横に上げている。
羨ましかったのか、単に自分もやりたかったのか、平沢に『私も』と聞かれた時『断る』と言った。

「ロミオ、そろそろ潮時みたいだ。ティボルトが君に気付いたよう

だ」

「ベンヴォーリオ、君とマキューシオは先に。ぼくはジュリエットに用事が出来た」

「何をする気だい」

「恋するぼくにはキューピットの翼がある、地面を蹴って舞い上がることが出来るのさ」

「行こうベンヴォーリオ、恋は盲目と言うじゃないか。ロミオはまさにそれだ」

秋山は台詞に詰まることも尻窄まることもなく、ロミオを演じている。

「ばあや、ちょっと来て。あの方はどなた?」

「あの方とはどなた様? 年々この眼がぼやけてくるものでして」

「踊りに加わらなかったあのお方」

「ロミオですよ、モンタギューの。この家の敵の一家の一人息子ですよ。はて? なにゆえモンタギューの者がこの場に?」

「あぁ、憎しみから生まれた愛。憎い敵を愛してしまった。私の恋はそういう愛」

「あら、何のことです？」

「ただの歌の文句よ」

「パリス様から教わったので？」

「いえ、誰にも。誰とも知らずにお会いして、知った時にはもう遅い。そんな私の心が口を通ったの」

田井中は別人過ぎる程にジュリエットを熱演。

秋山も田井中も何故か俺に手を差し出した。それは平沢も。

「…突っ立てるだけで良いからな」

「大丈夫！　さっきも完璧だってサッくん言ってたもん！　今度もバッチリ！」

言ってねェし、コイツのバッチリ発言には信憑性がまるで皆無だが、まぁ良い。

俺の右手を平沢のその右手に軽く叩く。

「サッくん分注入完了！　ふんすっ！」

「はぁ…」

実に気の抜ける掛け声にため息を吐き出すとステージは暗転。
俺は次の場面を台本で確認。
平沢は琴吹と真鍋に手を借りながら木の衣装を纏う。

「サクッチ…んッ！」

ちなみにアホも平沢と共に次の場面で出演する。
そんな木Ａがサムズアップな拳を突き出していた。

「……」

俺はヘッドフォンから手を放し、サムズアップした右手を差し出し…

「よっしゃッ！サクッチパワー…」

親指が下に向くように右手を半回転させる。

「何故ッ！？」

「…黙れ、さっさと行け」

『ふんすっ！』と気合い十分で、『これが格差社会か…』と肩を落として、木GとAの抜群な不安要素共演者は歩き難そうにステージに向っていった。

「マヌケだ…」

「そんなこと言わないの」

アイツらの後ろ姿には木の衣装はなく、茶色い全身タイツが丸見えだ。
衣装が邪魔して歩幅が狭いので、中々進めないことも手伝って正直な感想を口にしたら、真鍋から咎めるような言語が飛来してきた。

「咲也君」

「あン？」

「…ううん、やっぱり何でもない♪」

言い淀み濁した琴吹に些か疑問を感じたが、今は音響に集中していく。

「どうしたの？」

「ごめんなさい和ちゃん、何でもないの。あ！　始まる♪」

「ムギ？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「せいぜい無駄な努力をして傷口に塗る塩を用意しておく、か。人の傷を見て笑うのは傷ついたことのない連中だよ、マキューシオ」

（うぅ…　ハラハラする…）

「笑いたければ笑え、ぼくは痛みを知っている。恋する痛み、この胸の甘いうずきを」

集中したい！でも！

（唯先輩と影宮先輩が一緒にいるんだもん！）

ハラハラする！唯先輩と影宮先輩が失敗しそうで！

今のところ二人共に気合いが入った表情してるけど、逆にそれが不安だよ～！

「誰だ！　誰かいるのか！」

「あれは夜警。身を隠さねば」

二人分の足音が徐々に近付いてきて、澪先輩は唯先輩と影宮先輩の間に隠れるように身体を小さくする。

「今、何か物音がしなかったか？」

「どこの不届き者だ、キャピュレット様の屋敷に忍び込とは！」

ステージに兵士の格好をした二人の女の人がやってきて、あちこちに顔を動かす。

「ハラハラするね…」

「うん…」

ＢＧＭはシリアスな曲が流れてて、純は澪先輩が見つからないようにって言ったんだと思うけど、私は唯先輩と影宮先輩にハラハラしてる…

ていうか何で唯先輩も影宮先輩も、澪先輩と一緒に一生懸命に様子をうかがってるんですか～！

顔動かしちゃダメですって！

「あれ？」

「どうしたの？憂ちゃん」

「修司さん、笑ってないですか？」

「あれは多分、小磯さんと瀧さんが澪ちゃんを見つけられなかったから、得意げになってるのね…」

何やってるんですか～！
だから顔を動かちゃダメなんですって！

「あ、あれは…」

私が頭を抱えていると、澪先輩の声が聞こえてきた。
顔を上げるとステージにある屋敷のセットの上部に律先輩が現れて、さっきのさわ子先生みたいに物思いにふけてる。

「あぁ、ロミオ。貴方は何故ロミオなの？」

「あの天使のような声は、いや、彼女は輝く天使だ。ぼくの頭上高く夜空に燦然と輝く、あたかも天の御使い」

知ってる。有名な台詞だ。
なのに…どうしても唯先輩と影宮先輩が気になる…

「ロミオ。お父様と縁を切り、その名前を棄ててください。それが無理なら私を愛するとだけ誓って。誓ってさえくれれば私はもう、キャピュレットではないの」

あ、あれ？

「私の敵はその名前だけ。貴方は貴方なのよ、モンタギューでなくたって。ねぇロミオ、名前なんか棄てて、代わりに私の全てを受け取って」

ゆ、唯先輩の様子が…！

「受け取ります、言われたとおりに」

「どなたなのです？　夜の帳の中、そうやって私の心の対話を聞き付けた方は」

「名前を聞かれてもなんて答えてよいものやら。ぼくの名前は貴女の敵に当たるのだから」

何か我慢してるような…顔動かしてるし…って！だから動いちゃダメなんですって！

「耳はその口から流れ出る言葉をまだ、百と飲み干していない、でも音色を覚えている。貴方はロミオですね、モンタギューですね」

「どちらも違う、美しい人よ、どちらの名前も貴女に嫌われているのだから」

「違うわ、私が嫌いなのはモンタギュー。ロミオ、貴方ではないの」

「ジュリエット…」

「ロミオ…」

澪先輩が律先輩の元に階段を使って上っていく。
良い雰囲気なのに…唯先輩が何かを我慢しようと変な顔ばっかりするから、私は今一歩盛り上がれないよ…

「どうやってここに？　屋敷の石垣は高くて簡単には登れないのに…」

「高い石垣など、恋の軽い翼で飛び越えてみせましょう」

「おぉ、ロミオ！」

「ジュリエット！」

澪先輩と律先輩、お互いが抱き合う。
両家の遺恨だったけ？それを越えた感動的な瞬間に、観客席から小

さな歓声が上がる。
中には多分、抱き合うってことに対するのもあるんだろうけど…

「何かドキドキするね…！」

「う、うん…」

純の言葉に憂が頷く。
私も当然ドキドキしてる…

（ゆ、唯先輩！？）

だって唯先輩が今にもクシャミをしそうなんだもん！ていうか我慢してたのってクシャミだったんですか！

「ロミオ、私を愛してくださいますか？」

「そのためにぼくはここに、貴女の前にいるのです」

「聞いて、私はパリス様と婚礼をさせられてしまうの。私の心は貴方だけのもの、この眼は貴方しか見えないの」

「ならばいつまで貴女と共に、どんな時も貴女の望めるぼくでいましょう、どんな時も強い姿で貴女の前に立っていましょう」

「嬉しい！　私は全将来を貴方の足元に投げ出して、貴方を夫に、世界の果てまでついて行きます」

あ！影宮先輩が気付いた！あ、オロオロしてる…

「ジュリエット！」

「ロミオ！」

澪先輩と律先輩がまた抱き合った瞬間にステージのライトが落ちた。

「ふぅ…」

何とか乗り切った唯先輩に肩の力を抜くように息を吐く。
何か私が疲れちゃった…

「（唯ちゃん！大丈夫かい？）」

「（危なかったけど何とか乗り越えたよ！）」

「（ハラハラしたんだからな、唯がクシャミするんじゃないかって）」

「（ごめんね、澪ちゃん）」

「（あそこでクシャミなんかされちゃ台無しだったわ…うっ！今のなし！）」

「（りっちゃん、まだジュリエットだね～）」

「（いーんだよ、芝居の間は役になりきってんだから）」

ホッとしたのも束の間で、ボソボソとまたステージから唯先輩達の声が…

「へ…」

「（影宮君？）」

「（修司？）」

「（修司君？）」

そして、嫌な予感が…

「ヘエァックシュンッ！！な、なんちゃってッ！」

「「「（えーっ！）」」」

「影宮先輩…」

唯先輩が我慢したのに、何で自分がしちゃうんですか…！
しかも最後ごまかしてたけど、意味ないですよ…

「凄いよね…あの先輩って…」

「絶対咲也くんに怒られるわね…」

「あはは…」

「せっかく良い雰囲気だったのに…」

純とさわ子先生は呆れて、憂は苦笑いで、私は顔を両手で覆った…
すると…

『ごめんなさいッ！悪気はなかったんだってッ！ちょっ！サクッ…』

漏れてきた影宮先輩の声だったけど、不自然に途切れちゃった…

「何したんだろ…サク先輩…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

やってはならない失態をやりやがったアホの顎先を蹴り抜いてノックダウンさせて約十分。

「ここまでは順調ね。澪ちゃんもだいぶ調子が出てきたみたいだし」

「そうね。ちょっと修司のトラブルはあったけど…」

「ちょっとばかりじゃねェだろうが…」

「まぁまぁ、修司も悪気があったわけじゃないんだしさ」

「そうだよサッくん。はい、飴ちゃんあげるから」

「俺は物取りか…」

どこから取り出したのか平沢からの飴玉を受け取らずに、ステージに視線を向ける。

「ロミオ、お前があれほどまでに愛していたロザラインを早々に忘れるとは、よほどキャピュレットの娘を愛しているのだな」

「両家の遺恨など関係ありません、神父様。ぼくはこの身の全てを、ぼくの全てを投げ出してもジュリエットを愛しているのです！」

「嘘偽りは皆無なのだな」

「そんなもの、ぼく達には必要ありません。どうか神父様、彼女と結婚させてください！」

現在、ステージ上ではロミオが野島扮するロレンス（神父）にジュリエットとの結婚を懇願している。
この場面では音響の出番はない。
尾栗曰く、台詞や表情の演技だけの方が緊張感が伝わるらしい。

「えっと、次はマキューシオとティボルト、そしてロミオとのシーンね」

「さーらば、ティボルトよ」

「うぅ…アミ君…」

「止めろよその言い方…　ていうか梨乃、泣くなって…」

松本委員長が台本を確認し、青梅が敬礼し、どうやら感受性が高いらしい藍澤が瞳を潤ませる。
鷹崎は来たる運命にガックリと肩を落とす。

「律、今のうちに台詞の確認してて」

「オッケ～」

「サッくん、お腹空いてきちゃった」

「緊張感ねェな…」

「唯ちゃん、これが終わったら部室でお茶しよ♪」

「うんうん！　ケーキある？」

「もちろん♪」

「うわぁ～い♪」

「子供かお前は」

「…つうか目先を軽視すんな。まだ終わってねェんだぞ」

続く言葉は『あと、ケーキより練習だ』の筈だった。

そう、『筈だった』

「ないっ！」

つまり出来なかったということ。

何故なら、突然声をあげた島によって思わず口を閉じてしまったからだ。

「どしたんだ？ちずる」

田井中が声をかけると、島はゆっくりと振り返った。
その表情は何故か血の気が引き、青褪め、冷や汗を流している。
そして震える声で爆弾を投下させた。

「ラ、ラストの墓地シーンで使う大道具のお墓が…見当たらない…」

幾らリハーサルで万事上手くいったとて、本番では何が起こるか分からない。正にだ…

『えーっ！？』
「はぁ…」

平沢達は眼を見開き驚愕し、俺は額に手を当てため息を。

現在時刻午後二時三十分。

ハプニング発生。

「ロザラインに対するお前の恋は本質に届いておらんのだとな。だがまぁよいわい、一緒にくるがよい。お前を助けてよいわけが一つだけあるわい」

「神父様、それは如何に」

「この縁組が切っ掛けになって、両家の遺恨がまことの親睦に変わらんでもなかろうが」

「どうか急いでください、急いでいただかないと」

「急がば回れだ、早駆けは怪我なもととな」

第百十六話（後書き）

更新遅れて申し訳ございません。

言い訳するなら、相変わらずプライベートが忙しいのと、ロミオとジュリエットを分かりやすく修正及び脚色に手間取ってしまったからです…

それから、三年二組　男子クラスメイト紹介なんですが、咲也と修司のいりますか？

ていうかクラスメイト紹介は果たして必要だったのだろうか？

第百十七話（前書き）

最後の学園祭編その九です。

第百十七話

「ベンヴォーリオ！　二人の剣を叩き落としてくれ！　剣の腕はばくより君の方が達者だろ！」

「そんなことをしたら刃先が君に向いてしまう…！　私は君を守らなければ！」

ガキンッと鍔競り合いの効果音をシンセサイザーから流す。

「唯とアキヨは教室を探してきて」

「ラジャー！」

「う、うん！」

「林原君と矢野君は講堂の近くをお願い」

「…は、はい…」

「……」

「柳君がいないから矢野君が何を伝えたいか分かんないッスよ…」

「頷いたから大丈夫よ」

決して松本委員長のその発言が合図ではない。
が、正にそのタイミングでマキューシオとティボルトの白刃が重なったので再び鍔競り合いの効果音を流す。

「マキューシオ！　ティボルト！　エスカラス様のお言葉をわすれたのか！　ヴェローナの町で刃傷沙汰は厳禁なんだぞ！」

「ロミオ！　あまり近付くな！　それにあの二人には君の言葉は届かない…！」

ステージ上では現在、舞踏会場でロミオを目撃したティボルトが、町を散策していたロミオとベンヴォーリオとマキューシオを発見し襲撃してきた、という場面を向えている。
時折耳が捉える観客の感嘆の声に、鷹崎と中島演じるマキューシオの殺陣は客受けが上々のようだ。

しかし、絶好調なステージ上とは真逆にステージ裏の俺達は、さながら観客が感じているであろう緊迫感に包まれている。

「ちずるとしずかは教室から講堂までの道を探して」

「「うん」」

「影宮君は……そうだった、気絶してたんだった…　ねぇ、桐島君」

それもそうだろう。

劇のラストシーン、クライマックスにて使用するキャピュレット家の墓が所在不明で、気楽にしている奴など床で大の字で意識を飛ばしている木Aぐらいだろう。

墓がなければこの劇は締まらない。
ライブでラスト一曲がないようなものだ。
そのくらい、墓の存在は重要で必要で要だ。

演劇部から拝借した大道具は『ロミオとジュリエット』に使えるものを使用している。
演劇部になく、尚且つ必ず必要な大道具は俺達が手作りし、当然墓も製作した。
それらを教室から移動する際に誰かが運んだ筈なのだが見当たらなく、松本委員長が当分出番がない木軍団に捜索を指示しているのが今のステージ裏の光景だ。

「影宮君、起こしくれない？」

「…手を離せる状況じゃねェ」

ステージのマキューシオとティボルトの立ち回りに集中しなければならない。木Aを再起動させる暇なんぞ俺にはない。

どうやらそれを聡明に理解したのか松本委員長は『尾栗君、お願い』と頼み、『や、オレには無理ッスよ』という会話が聞こえたが、音響に集中していく。

「あ、あれ？　雨のＣＤがなくなっちゃった!？　さっきまであったのに～…」

「…右手に持ってんだろ」

「ふぇ？　あっ！　す、すみましぇん…」

ちなみに藍澤は今まで目立ったミスはなかったのだが、この緊迫した空気に呑まれたのか、真骨頂であるドジを踏み出しだ。
フォローをしなければならないのと墓の所在不明な事に、俺の心中は気が気じゃなかった。

「松本さん。向こうにいる若王子さんに聞いたけど、向こうにもないみたいなの」

「そう…　どこにあるんだろう…」

「私も探してこようか？」

「りっちゃんはこのあと出番があるから、ここにいないと」

「だよな～…　あ！　じゃあさムギ。いっそお墓ナシでやるか？」

「でも墓地のシーンは、このロミオとジュリエットのクライマックスだし…」

「うん、中途半端にはしたくない」

ドサッとマキューシオが倒れた効果音の後、雨音のＢＧＭを『え、えいっ！』と藍澤が気合い十分で流したのを横目で確認し、ヘッドフォンを首に移動させ振り返ると田井中、琴吹、真鍋、松本委員長、尾栗が暗い表情で顔を俯かせていた。

（どうにも旗色ワリィな…）

順調だった劇に訪れたハプニングは中々に強大。
切迫感と緊迫感に包まれるこの場所は、まるでこの後のロミオとジュリエットが辿る運命の前兆を表すかのようで、重苦しい空気に満ちていた。

「はぁ…」

身体をシンセサイザーに向き直し、設定をいじりながら、ため息を吐き出した口から息を小さく吸い込んだ。

「…床見つめてもそこにはねェぞ」

ステージ裏にいる連中の視線が俺に向いた気がした。

「…演技をしてる連中、探し回ってる連中、裏方の連中、観に来て

る客。ここにいるのは老若男女で十人十色だ…」

「サク？」

「ズブの素人の俺達がアホみてェに必死こいて練習して、夜遅くまで残って。演技してる連中も、探し回ってる連中も、裏方の連中も、全ては今いる観客に向けて努力の成果と結果を発揮するためだろ…」

「咲也君…」

「…顔上げろ。下じゃなくて前を向いとけ。じゃねェと成功なんて夢物語で終わるぞ」

ステージが暗転する。
ヘッドフォンを耳に移動する。
俺を見ながらどこか呆然としている藍澤の前にあるラジカセの停止ボタンを押して雨音を止める。
戻ってきた秋山と眼が合った。
グルリと見回した後、何故か微笑まれた。
視線を台本に移す。
『ロミオ。エスカラスからヴェローナ追放を言い渡される』の文字があった。

風が、吹いた気がした。

「サクの言う通りだ！　暗くなってもしょうがない！」

「うん！　唯ちゃん達が見つけてくれることを信じよう！」

「そうね。私達はやれることをやりましょ。澪は台詞の確認をしてて」

「うん、分かった」

その風は士気高揚という風。
一致団結という風。

「……」

ふと背中に視線を感じた。
何となく、視線の主は秋山と田井中と琴吹と真鍋な気がしたが、気のせいだろ。

「サクってさ、こういうのが上手いよな」

「私、唯と梓が出た演芸大会の時、思ったんだ」

「澪ちゃん、思ったって何を？」

「咲也が中心になって私達を繋いでるんじゃないかって」

「そういうのってカリスマ性って言うんじゃない？　咲也は天性なのかもね。だから人が集まって、言葉に重みがあるのよ」

「ほほう。つまりサクにはその気はないのか」
「咲也らしいけどな」
「ね～♪」
「だから唯が懐くのね」
「懐くと言うよりかは…」
「「律？」」
「うんうん」
「「ムギ？」」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「凄かったね…」
「うん、凄かった…」

純がステージを向いたまま言った感想に私もステージを向いたまま頷いた。

ティボルトがマキューシオを倒しちゃって、澪先輩が腰にある剣を抜いたらステージが暗くなって、流れてきたナレーションが『親友を斬られたロミオは激昂し、ティボルトに手を下してしまいました』なんて言うから驚いたし、次のシーンでエスカラスだと思う人がロミオに追放って言っちゃうし…

その展開がホントに凄かった…

（脚本はムギ先輩だって言ってたけど…）

おっとりして可愛いムギ先輩だから、内容もそんな感じなのかなってちょっと思ってたけど、全然違った。
原作はよく知らないけど多分忠実に再現してる。

（ムギ先輩も凄いなぁ）

こんな脚本を作れるムギ先輩に思わず感心していたら、ナレーションが聞こえてきた。

『ロミオのヴェローナ追放。それはジュリエットの耳にも入り悲しみに暮れる日々を過ごしていました。当然キャピュレットにも知れ、ジュリエットはロミオを、ロミオはジュリエットを、お互いに愛していることを知っているキャピュレットは、改めてパリスとの婚礼をと命じます。ジュリエットはそれには応じず救いの言葉を授かろ

うと、こっそりと屋敷を抜け出して教会の扉を開けました』

パッとステージが明るくなって、律先輩と神父の格好をした女の人が向き合っていた。

「神父様、私はどうしたら…　ロミオもいない、パリス様、いえ、パリスと婚礼だなんて…」

「その悲しみのわけは知っておる。パリス伯爵との婚礼、最早のっぴきならぬもと聞いておる」

「神父様、お聞きになったその上は、どうか手立てを教えてください。何とかこれを逃れる知恵を」

律先輩が祈るように両膝で立って、両手を合わせて神父様を見上げる。

「神様が私とロミオの心を結び、神父様が二人の手を結んでくださった。この手はロミオの手と契約の手、それが別の証印紙を押すなど出来ませぬ。神父様、貴方の長いご経験から、どうかご助言を」

するとトントントンと扉を叩く音がしてガチャと扉が開く音もして、一人の女の人がやってきた。

「どなたですかな？」

「失礼。私は旅の者、おや？　美しいお嬢様だ。その涙で腫れた瞳がなかったらより一層に」

律先輩が慌てて顔を背ける。

あ、そっか。ジュリエットは内緒で教会に来てるんだからバレるわけにはいかないだ。

「して、用件は？　巡礼か？」

「私は薬を売って旅をする者。少しでも神に仕える神父様の手助けになればと」

神父様が持っていた聖書かな？とにかく本を持ち直して、少し考える仕草をする。

「薬屋よ。このような薬はあるか？」

神父様がチラッとジュリエットを見て、薬売りの人に耳打ちをする。何を話してるか私達には全然分かんない。

「ありますが、何に使うので？　いえ、やはり結構、私は薬を売るだけ、神父様は買うだけ。それが商人というもの」

「神も助かると申されております」

背負っていた鞄から……何だろアレ？小瓶かな？それを取り出して、神父様に渡した薬売りの人は『失礼します』と私達に頭を下げて掃けていっちゃった。

「さて、ジュリエットよ。望みらしきものが見えてきたぞ」

「本当ですかっ？」

「だがな、いざ実行となると命がけだぞ、どうだ、死を恐れぬ勇気があるならば救いを授けよう」

「はい。パリスとの婚礼を避け、ロミオと共にいられるのならば、私は命を懸けます」

律先輩が立ち上がって私達に身体を向ける。
その時有名な曲が流れてきた。

「何だっけ？　この曲？」

「ボレロだよ。純ってジャズ研なんだから知ってようよ」

「別にこの曲ジャズじゃないじゃん」

「そうだけど、音楽の部活してるんだからってこと」

「それより劇に集中だよ！」

（ごまかした…）

サク先輩みたいなため息をついて、純からステージに視線を移すと、神父様がさっき薬売りの人から貰ってた小瓶を律先輩に渡していた。

「これは？」

「死の薬だ」

驚いて思わず息を飲む。

隣の純を見ると『えっ！？』って驚いてて、純の隣の憂を見ると小さく口を開けて少しびっくりしてるみたい。

「この薬を一口飲めば仮死になる。そなたを見つけた花婿がそなたを起こそうと現れるが、そなたは仮死故に命は神に召されたとなるであろう。そこでそなたはキャピュレット家一族の眠る代々の墓所へと運ばれるであろう」

律先輩は小瓶を目の前に持ってきてマジマジと眺めてる。

「墓所でそなたは目覚め、わしはロミオに手紙で知らせてそこに来させよう。夜のうちにロミオがそなたをヴェローナから追放されたマンチュアへ連れ出す。大丈夫かな、いざ実行となって勇気を欠いたりはせぬな」

「それは愚問というものです」

「うむ。では首尾よくやり遂げるのだぞ」

「私に愛の力があればどんな困難も乗り越えられます」

律先輩が一歩踏み出したらボレロが鳴り止む。

「私はロミオと共に、マンチュアへ行きます」

その瞬間、照明が落ちた。

そして私は胸に右手を置いた。

（ドキドキしてる）

また凄い展開になって、澪先輩と律先輩の演技に魅せられて、ムギ先輩の脚本が凄くて、サク先輩の音響が絶妙で、そういうのを全部ひっくるめてドキドキしてる。

軽音部じゃ見れない先輩達の違う一面に私は興奮して、先輩達にとって最後のクラスの出し物が成功しますようにって、胸に置いてある右手を左手と重ねた。

「あ」

唯先輩のこと忘れてた…

ゆ、唯先輩も頑張ってください！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

勢いよく扉が開き墓を探していた平沢と宮本が戻ってきた。

「きょ、教室にもなかった…！」

走り回ったんだろう。

息が上がり肩で呼吸する平沢の報告を受け、一瞬の間、ロミオと太田扮するバルザサーの効果音を演出するシンセサイザーの手を止める。

しかし一瞬だ。すぐさま気を取り直しバルザサーからジュリエットが亡くなったと伝えられ、ショックを受けたロミオの心情を表すように硝子が粉々に砕け散った音を流す。

「教室にもないとすれば運んでくる時にどこかに落としたとしか考えられないんだけど…」

この場面の効果音は今し方終え、ヘッドフォンを首に移動させ振り返ると真鍋が苦い表情をしていた。

「ふぇぇっ!?　ど、ど、どうしようアミ君！　お墓が見つからないって…！」

「とりあえず落ち着け。気になるかもしれないけど、今はコッチに集中だ」

「う、うん！」

ちなみにＢＧＭは藍澤がドジを踏まないように出番を終えた鷹崎と二人三脚でやっているので、俺がフォローに回らないで済んだ。

「…つってもなかったんだろ」

教室から講堂までの道を探していた島と木下に視線を向けると、二

人ははっきりと頷く。

「今から作れば？」

「さすがに間に合わないんじゃないか？」

息が整った平沢の提案に田井中がそう告げる。

ないものねだりをしても現状打破は出来ない。

ならば…

「…代用品しかねェな」

「代用品？」

俺の提案に真っ先に琴吹が反応する。

「…墓に似た何かで埋め合わせるのが今のところの得策だろ」

「サク、何かって？」

「知らん」

「うぉーい！　そこが重要だろー！」

確かに投げやりだとは自分自身でも思うが、代用品案を閃いただけでも殊勲だろ。

「そういえば…」

すると、事の成り行きを見守っていた木下がおずおずと口を開いた。

「オカルト研の展示にお墓と似たようなものがあった気がする…」

「ホントッスか？」

「うん」

それはまるで針穴のような小さく細く、風前の灯火のような弱々しい光明の兆しだった。
しかし光明には変わりないので、今はそれに縋るしかないだろう。

「…生徒会長」

「えぇ」

真鍋に目配せをすると、俺が何を伝えたいのか聡明な生徒会長は理解したらしく、木下に口を開いた。

「木下さん、悪いんだけど…」

「うん、私、オカルト研に友達いるから頼んでみる」

どうやら殊勲賞は俺じゃなく、木下に贈られるようだ。
真鍋が最後まで言わずとも理解した木下は立ち上がり扉に向かう。

「…琴吹、お前も行け」

墓と似たような展示物ということはそれなりの大きさと重量を兼ね備えていると推測出来る。
借りることが出来ても木下一人で持ち運べない事と、現状動けるのは琴吹ぐらいだし、中々の力持ちの主だと考慮し視線を向ける。

「うん！　行ってくるね！」

駆け出す琴吹。

その琴吹が俺の横を通り過ぎる時に意味深な左手を差し出してきた。

「……」

それを無言で左手で叩き、琴吹は少し笑みを浮かべて講堂から木下と共に駆け出していった。

「サ、サッくん…」

「あン？」

バタンッと扉が閉まった瞬間に平沢がトコトコと不安げな表情を携えて俺の前に歩んできた。

「だ、大丈夫だよね？　最後までいけるよね？」

不安な表情そのままに俺を見上げる平沢。
対する俺は腕を組み田井中を見る。

「おうっ！」

サムズアップをして二カッと笑う。
次いで真鍋を見る。

「うん」

劇が始まってから肌身離さなかった台本を胸に抱え微笑みながら頷く。
そして再び平沢に視線を向ける。

「…現状に抗ってナンボだ。少なくとも俺はそう思う」

「え？」

首を傾げる平沢を一瞥し、ステージに視線を向ける。
そこでは、ロミオがジュリエットの死を確かめようとヴェローナのキャピュレット家一族の墓所へ赴くと息巻いている演技をしている秋山の姿。

「和ちゃん、サッくんの言った意味が分かんない…」

「咲也は大丈夫って言ったのよ」

「普通に言わないのはサクが素直じゃないからだな」

「サッくん…！」

視線はステージに向いているので平沢の表情は分からないが、声質からして晴れたようだ。

「よぉし！　頑張るぞ～！」

「唯、あんまり大きな声出しちゃダメよ。お客さんに聞こえちゃうわ」

「はっ！　ごめんなさい」

「うぅ…　何か顎がイテェ…」

「お、修司、起きたか」

「律ちゃん、ちょいと聞きたいんだけどさ、何故に俺の顎が痛いんだろうか？」

「えっと…それは…」

「…奇声を発しながら自分で顎をぶつけたんじゃねェのか」

「そうだったか？　まぁサクッチがそう言うんならそうなんだろうな」

「いやいや、納得するなよ修司」

田井中が右手を振って高速否定しているが、何故か木Ａは『これが真実だな』と偽りにも気付かす納得していた。

アホだな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　琴吹　紬】

講堂から飛び出して、私と木下さんはオカルト研の部室に急ぎます。
桜高祭に訪れている大勢の人達に当たらないように一生懸命走ります。
私は持久力に心許無いんだけど、何とか自分自身を鼓舞して足を動かしていくと、漸くオカルト研の部室に着くことが出来ました。

「「はぁ…　はぁ…　はぁ…」」

私と木下さんは息を整えることもしないで扉をノックします。
今は一秒でも時間が惜しいから…

「はい」

すると、室内から二人の女の子が出てきました。

「あの！」

私達は必死に説明して、最後に深く頭を下げました。

「これはお墓ではなく古代文字が記されたロゼッタストーンという石碑の模型です」

一度、オカルト研の二人は部室に戻って中から私の顔ぐらいの高さで、二人分ぐらいの横幅の石碑の模型を持ってきました。
これなら違和感がなくて、お墓として使える！

「主に古代エジプトのプトレマイオス王朝のエピファネスを称える内容が記されています」

えっと……ロゼッタストーン？　プトレマイオス王朝？　エピファネス？

よく分からない単語に私と木下さんは首を傾げて、まだ乱れる呼吸を何とか落ち着かせようとしていると…

「これはロゼッタストーンで、お墓ではありません」

「でも、使えるのなら喜んで」

（よ、良かった～）

ホッと胸を撫で下ろして、木下さんと一緒に頭を下げます。

「「ありがとう！」」

講堂に持っていくために早速、木下さんと協力して石碑の模型を持ち上げます。

「お、重い…」

「大丈夫？」

「琴吹さんは平気なの…？」

「私、力持ちさんだから～」

「そ、そうなんだ…」

「じゃあ、早く行こ！」

「う、うん！」

早く行かなきゃ！

クライマックスに間に合わせなきゃ！

「こ、琴吹さん…！　早い…！」

「あ！　ごめんなさい！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「なんとッ！　俺が気絶している間にそんなことがッ！」

「そうなんスよ」

「なんてこったッ！俺がいながら何たる失態ッ！」

「べーつに影宮がいてもどうしようもないと思うけどな～」

「何だとッ！　だがッ！　正にその通りだッ！」

「…静まれ」

ゴンッ！

「オゥ…！　スネが…」

尾栗から事の顛末を聞いたアホが、相変わらずの騒音を発生させる

ものだから、右足を一振りさせてボリュームを下げさせる。

「あぁ～！　どうしよどうしよ！」

「お、落ち着け唯！」

「澪もな。その肩は唯じゃなくて和だからな」

「えっ！？　あっ！」

「はぁ…」

あちらこちらと走り回る平沢。
平沢と間違えて真鍋の肩に左手を置く秋山。
何気に冷静な田井中。
ため息を吐き出す俺。

現在、ステージ上では野島扮するロレンス（神父）と柴矢扮するジョン（修道僧）との場面が繰り広げられていた。

「ロミオに手紙を渡してくれたのだな？」

「マンチュアの町は今、伝染悪疫に冒されておりまして、町中に入ることは叶いませんでした」

「なんと！　では、手紙は？」

「私には無理でした。手紙ならここに持ち帰りました。神父様に届けようとも伝手がございませんでしたので」

「なんとまた不運な！　大変なことになった！　それはただの手紙ではない！　ロミオとジュリエットの運命の手紙！　大変なことになる！」

この場面ということはラストシーンの手前。
つまり、琴吹達が間に合わなければアウトだ。
そのことは俺達全員が理解しており、慌てふためているのが現状だ。

「どうしよどうしよサッくん！　間に合わないよ！」

「落ち着けっつうの…」

「お餅をついてる場合じゃないよ～！」

餅つけなんて一言も言ってねェよ。

（しかし…）

確かにマズい。
野島と柴矢の会話が終了したら、この劇自体も終了のようなものだ。

最悪、琴吹達が間に合わなければ墓ナシでやれば良いのだが、松本委員長が『中途半端にはしたくない』と言っていたことから、それをやったところで劇の成功とは呼べないんだろう。

「チッ…」

と、舌打ちした瞬間に…

「お待たせ～」
「借りてきたよ」

何やら石碑らしき物を持った琴吹と木下が扉を開いた。
どうやらアレがオカルト研の展示物らしい。
アレなら本来のキャピュレット家の墓と遜色ないだろう。

「ムギちゃん！」
「「ムギ！」」

「うん！　間に合った～！」

ステージを見る。

「ロミオへの手紙は届けられなかった…　あぁ、何という不幸な巡り合わせか…」

野島がその台詞を言い終え、照明が落ち暗転。
ギリギリセーフだ。

「手が空いてる人は手伝って」

松本委員長が指示を飛ばすと、琴吹と木下と矢野と尾栗が石碑をステージ上に運ぶ。

「唯は木に着替えて」

「ラジャー！」

「律は先にステージでスタンバイしてて」

「おう！」

真鍋の指示に敬礼し、島と宮下の手を借りて木に変化していく平沢。
暗いステージに身を屈めて進んでいく田井中。

「咲也、ここ重要よ」

「あぁ…」

ラストシーンはＢＧＭ一切ナシのシンセサイザーによる音で場を作る。
ヘッドフォンを耳に当て、指を鳴らして小さく息を吐く。

「澪」

「うん！」

力強く頷いた秋山。

暗いステージ上には琴吹の背中と中央に横たわる田井中。
右を見れば平沢の横顔。
その奥には真剣な表情の秋山。

そして…

「立花さん。お願い」

松本委員長がケータイで逆側にいる立花に合図を送り、いよいよラストシーンが始まる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『ロミオへ届かなかったロレンスの計略の手紙。ロミオは従者のバルザサーから伝えられたジュリエットの訃報に馬を駆けらせ辿り着いたのはキャピュレット家の墓所。そこでロミオが目にしたのは、眠るように横たわるジュリエットの姿』

ナレーションが終わるとスポットライトがステージ中央を照らす。そこにはお墓みたいな石と律先輩が仰向けに倒れていた。

（あ、唯先輩もいる）

ステージ全体じゃなくてスポットライトだから、照明が当たってないところに木の格好をした唯先輩は気付きにくいなぁ。ていうかこのシーンに必要なのかな？

「ジュリエット…！」

するとステージ横から澪先輩がやってきてスポットライトに照らされながら律先輩の元に向かう。

「あぁ…！　美しいジュリエット、何故こんな姿に…！」

澪先輩が頭を抱える。
そして律先輩が握っていた小瓶を手に取る。

「これは…？　まさか毒！　ジュリエット！　君は悲しみに耐えられなかったのか…」

（ギターの音…）

澪先輩が律先輩の手を握ったらアコギの音色が流れてきた。
きっとサク先輩だ。

流れるアコギの音色と澪先輩の迫真の演技と綺麗に照らす照明が、一層輝いて見えて、私達は引き込まれていく…

「ジュリエット、ぼくは君に言った。いつまでも貴女と共に、どんな時も貴女の望めるぼくでいましょう、どんな時も強い姿で貴女の前に立っていましょうと」

澪先輩が小瓶を掲げる。

「君が望むのならぼくは君の隣に、死神ではなく君の隣はぼくの居場所だ。だから…」

澪先輩が律先輩から私達観客に顔を向ける。

「いつまでも、どこまでも共にいよう…　ジュリエット」

澪先輩が小瓶を口につけて傾ける。

そして…

「ぁ…」

律先輩に覆いかぶさるように倒れた澪先輩。

スポットライトが消えて、暗くなった講堂にアコギの音色が止まらず流れて、ナレーションも流れてきた。

『ロミオはジュリエットが仮死だと知らずに生涯を終わらせてしまいました。その直後、仮死状態から目覚めたジュリエットは大きな悲しみに囚われるのでした』

またスポットライトが律先輩と澪先輩を照らす。

さっきと違うのは倒れてるのが澪先輩で起き上がってるのが律先輩になってること。

「あぁ！　ロミオ！　何故貴方が倒れているの！」

澪先輩を抱き締める律先輩。

「ロミオ、貴方は私に言った。いつまでも貴女と共に、どんな時も貴女の望めるぼくでいましょう、どんな時も強い姿で貴女の前に立っていましょうと」

律先輩が小瓶を手に持つ。

「私の分の毒を残しておいてくれなかったのね。待っていて…　この剣が私を貴方の元へ連れていってくれる」

澪先輩の腰にあった短剣を抜いて…律先輩が…胸に…

「貴方が望むのなら私の隣に、死神ではなく貴方の隣は私の居場所。だから…」

律先輩が…眼を閉じて…口を開く…

「いつまでも、どこまでも共にいましょう…　ロミオ」

律先輩が…短剣で自分を……そのまま澪先輩に覆いかぶさった…

（凄い…　澪先輩も律先輩もまるで本物のロミオとジュリエットみたい…）

アコギの音色が徐々にスローペースになって、スポットライトも段々小さくなっていく。

（凄く練習したんだろうなぁ…　そりゃ部室に来る暇ないよ…）

ゆっくりと幕が降りていく。

『駆けつけたロレンスが見たのは幸せそうに寄り添うロミオとジュリエットの冷たい身体。この後、ロレンスにより事の真相を知り悲嘆に暮れるモンタギュー家とキャピュレット家は、ついに和解への道を辿るのでした。

この世にまたとない悲話こそは、ロミオとジュリエットの恋の物語。

家の名前を越えて恋に生き恋に死んだ若者は、ロミオとジュリエット』

幕が降りきって、アコギの音色も止まった。

ワァァァッ！

パチパチパチパチッ！

私達は大きな歓声と拍手を先輩達に届ける。

「憂？　泣いてるの？」

「だ、だって…せっかく結ばれたのに…二人共あんなことになるなんて…」

純の言葉に拍手していた手を止めて、憂を見てみると瞳を潤ませて涙ぐんでいた。

「そうだよね…　ちょっと悲しいかも…」

「梓…」

ロミオもジュリエットも生まれた家がお互い争ってて、それがなかったら幸せになってたのに…

「悲しいよね…」

「うん…」

「え？　ちょっと梓？　憂？」

何か暗い気持ちになってきちゃった…

「そう悲観的にならなくて良いのよ」

すると、さわ子先生が椅子から立ち上がって笑顔を浮かべる。

「だってね…」

私と憂と純を見て、さわ子先生は…

「所詮、作り話だもん♪」

身も蓋もないことを言っちゃった…

「「えぇ～っ！」」

「あ、あはは…」

せ、先生…せっかく感動してたのに台無しですよ…

「はぁ…」

何かサク先輩が先生にたまに呆れたような態度をとる理由が分かった気がする。

だから、サク先輩みたいなため息が漏れちゃったんだなぁ…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

あれから演者陣は着替え、俺達裏方はセットの撤去、シンセサイザーやラジカセを演劇部室に戻したり、拝借したロゼッタストーンの模型（琴吹曰く）を感謝してオカルト研に返却したり等々、演者組と合流し全員で雑務をこなし終え二組の教室に戻ってきた。

『……』

教室の扉を開けてゾロゾロと室内に進入していく俺達。
その間誰も口を開くこともなく閉じたままだった。

聞こえる学園祭の祭囃が妙に遠くに感じる程、静かな教室。

そんな静寂を砕くように誰かがこう告げた。

「成功…だよね？」

それに対してまた誰かが『うん…』と答えた。

時間にて約五秒後。

静まり返っている教室が揺れるぐらいの歓喜の歓声で包まれるのは。

『大成功ーっ！』
『やったーっ！』

両手を上げる者。

『やっほーぅ！』
『でかしたーっ！』

飛び跳ねる者。

『二組サイコーッ！』
『イエーーッ！』

ハイタッチを交わす者。

『よっしゃーっ！』
『イエスッ！』

とりあえず騒ぐ者。

桜高祭の祭囃に負けず劣らずな歓喜が囃す音が教室全体を包み込む。

「……」

『ロミオとジュリエット』が大成功に終わったことについては喜ばしく、軽音部の練習を削ってまで劇の練習に身を投じた甲斐があったものだ。

しかし、クラスメイト達のように歓喜乱舞するような俺ではないので窓際に移動して、はしゃぎ回るクラスメイト達をぼんやり眺める。

「皆さん、ちょっといいですか？」

「どうしたの柳？」

「中島さんは知ってると思いますけど、バスケ部って重要な試合に勝ったら円陣を組むんですよ」

微笑む柳に中島がクラスメイト全員を見回す。

両手を上げ、飛び跳ね、ハイタッチを交わし、とりあえず騒いでいた光景に変化が生じる。

一人が近くにいた奴と肩を組むとソイツが近くの奴と肩を組み、その連鎖が生まれ、あっという間に俺を除いた円陣が完成。

「サッくん」

真鍋と肩を組んでいる平沢が俺に左手を差し出す。

見れば、平沢と田井中の間に一人分の空間が存在していた。

「なにやってるんだよサク」

「みんな待ってるぞ」

「咲也君、早く～♪」

田井中が右手で手招きし、秋山が微笑み、琴吹が相変わらずのニコニコとして。

「サ～ッくん♪」

そして平沢が満面の笑みで直す気など更々ない禁句で。

「サッくん言うな」

足を動かして平沢と田井中の間に入り、肩を組む。
これで総勢三十六人の円陣の完成だ。

「桐島君が入ったところで、主役の澪から一言！」

「えぇっ！？　わ、私！？」

本日十月二日土曜日。
現在時刻午後三時三十六分。

「しゅ、主役なら律も…！」

「私はヒロインなのよ♪　主役は澪ちゅわんじゃない♪」

「ズ、ズルイぞ！」

「良いから良いから。それに委員長の命令は聞かなきゃな～」

「うぅ…」

「頑張って澪ちゃん！」

「澪ちゃんはやれば出来る子だってサッくんが言ってたよ！」
「言ってねェよ」

ハプニングがありながらもクラスメイトが一致団結し『ロミオとジ

ユリエット』は成功のうちに幕を降ろした。

「げ、劇が成功したのは、みんなのおかげだと思うから……だから！」

こうして、高校生活最後のクラスの出し物は終わりを告げ…

「あ、ありがとー！」

『オーーッ！』

感傷に浸る暇もなく、軽音部ラストライブへの道が開いた。

第百十七話（後書き）

クラスメイトとの円陣は、南アフリカワールドカップの日本ＶＳデンマーク戦後の日本代表の円陣をイメージしていただければと。

分からなかったらスルーしてください。

第百十八話（前書き）

最後の学園祭編その十です。

第百十八話

「う〜…　ぐるじぃ〜…」

「だから食べ過ぎるなって言ったのに。このあと練習なんだぞ」

「そうだよりっちゃん。ムギちゃんのケーキ食べれなくなっちゃうよ」

「…趣旨の前提がおかしいからな」

「でも咲也君、ケーキ食べないと悪くなっちゃうわ」

腹をさする田井中。
呆れる秋山。
見当違いも甚だしい平沢。
一応ツッコむ俺。
正論だが正論じゃない琴吹。

現在時刻午後四時三十九分。

歓喜の輪が生まれた三年二組は、生まれたテンションそのままに宴会と称した打ち上げへと移行していった。

ジャンケンで負けた修司と西野と近田と佐藤が買出し人となり、桜高祭から掻き集めた様々な飲食物資をつまみに『ロミオとジュリエット』の業績を称えていた。

食べて飲んで騒いで約一時間。
まだまだクラスメイト達の打ち上げは続いているが、俺達軽音部は明日の本番に向けた練習があるという理由で一足早く教室から退散し、西日が差し込む部室への階段を上がっている。

「なに！　ケーキがあるのか！」

「うん♪　澪ちゃんとりっちゃんは主役で頑張ったから、ちょっとだけ豪勢なケーキがあるの～♪」

「いいな～　私も木で頑張ったんだけど、澪ちゃんとりっちゃんには及ばなかったよ」

「唯は立ってるだけで良かったんだから、及ぶもなにもないだろ」

「そんなことないよ澪ちゃん。ジッとして動かないだけってすんごく難しいんだよ。ねぇサッくん」

「サッくん言うな」

一歩一歩一段一段着実に足を動かし、部室の階下の踊り場に辿り着く。
差し込む西日に眼を細め、ふと窓越しに外の風景を見てみると、桜高祭に訪れていた老若男女の姿はなく桜高生が露店の閉店作業を行っている姿が見受けられる。
中にはどこからか調達してきたのか材木や発泡スチロールを運ぶ生徒の姿も発見。

（今から作んのか…？）

桜高祭が二日間開催になったことから時間に追われ、通常通りの準備では間に合わないという懸念が飛び交っているのを耳にしたことがあるが、見たところ今から何かを製作するらしいあの桜高生は、準備に追われているようだ。

（それは俺達も…か）

現に今から軽音部の練習をしようとしている。

まぁ、俺達は最後の一週間だけは音合わせが出来なかったが、それ以前は練習は出来ていた。

今からの練習は焦ってやるものではないので、あの桜高生に比べれば幾分気持ち楽だ。

そう自己完結し、階段に足を掛けると何の前触れもなく突如としてそれは聴こえてきた。

♪～

「…ん？」

「あ…」

「これって…」

「部室からか？」

俺と秋山と琴吹と田井中は足を止めて部室を見上げる。
部室から流れているのは『ＦＦ』のギターイントロ部分。
更に言うなら、これは俺が去年新たに作曲した中野のパート。
つまり、現在部室にいて流れている『ＦＦ』の演奏者は……

「あずにゃんだ！」

と、いうことになる。

先程、唯一声を発しなかった平沢が俺達をよけて階段を一目散に駆け上がっていく。

「あ、唯！」

取り立てて何か用件があるわけでもない秋山が咄嗟に左手を駆けていく平沢に伸ばしたが、掴んだものといえば西日交じりの空気のみ。

『あ～ずにゃん！』

『ニャッ！？』

『お久し振りぶりぶり～』

『いきなり抱き付かないでくださいって何度も言ってるじゃないで

すか～！　ていうか昨日も会いましたよ～！』

『あずにゃんや、私はね、あずにゃん分がないと動けなくなるんだよ』

『それ前にも聞きました…』

『だからあずにゃん分補給～！』

『ニャーッ！』

事前に確認しておきたいが、部室には防音対策が施されている筈。しかし嬉々とした平沢の声と悲愴感満載のニャカ野の叫びがだだ漏れして踊り場にいる俺達にまで聞こえてしまう。

「…生徒会長に防音の効果を上げてもらうように頭下げた方が良いんじゃねェのか」

「だな。唯と梓の漫才が聞こえまくりだもんな」

「えぇっと、それはツッコんだほうが良いのかな？」

「しなくて良いと思うぞ。律と咲也は分かっててやってるんだし」

音を扱う部にとって防音がきちんと施されてないと反響等が死活問題になるのだが、まぁ今は良い。

とにもかくにもいつまでここで突っ立てるわけにもいかないので、

俺が一歩踏み出せば田井中達も後をついてくる。
そして部室の扉を開けば、案の定そこにはムスタング片手に長イスに座っているニャカ野に平沢が頬擦り込みで思い切り抱き締めている光景が。

「あ、先輩」

若干平沢に頬擦りされてゲンナリしていた中野が、俺達を見据える。

「なにやってるんだよ唯」

「梓が嫌がってるぞ」

腕は組む田井中と腰に手を当てる秋山。
見た目の態度は違えど共通本質は呆れているらしい。

「そんなことないよ。あずにゃんは喜んでるもん」

「いえ、そういうわけではないんですけど…」

瞬間、平沢が雷に打たれたようによろめきながら何故か俺にしがみついてきやがった。

「サ、サッくん…あずにゃんに嫌われちゃったぁ…」

瞳を潤ませて俺の両腕を掴んでいる手が小刻みに震えて見上げる平沢。

そして直感する。マジでショックを受けていると。

「…だとよ」

とりあえず平沢の掴んでいる手を解放して、琴吹に平沢を受け渡す。

そしてアコギに向かいながら先輩に対して微量の毒を吐いた中野に一言告げる。

「そ、そんなことないですよ！　唯先輩のことはす…！」

『しまった』という表情をして口に両手を当て言葉を途切れさせる中野。

心なしか頬に赤みが走っているのは西日のせいではないだろう。

「ニヤ」

瞬間、俺は見逃さなかった。

田井中がわざわざ口に出して、まるで悪代官が面白い玩具を見つけ

た時のような悪質な笑顔を浮かべたのを。

「あ～ず～さ～」

「な、なんですか」

「唯のことが何だって？」

「な、なんでもないです！　それより練習しましょう！」

田井中から醸し出される悪質なオーラを感じ取ったらしい中野は、冷や汗を一粒頬に流し長イスから立ち上がる。

「あずにゃん。私が何？」

「な、なんでもないです！」

「往生際が悪いぞ梓！　何を隠している！」

「正直に言ったら楽になるわよ！　梓ちゃん！」

「何でムギ先輩まで！？」

「あずにゃんのお母さんが泣いてるよ！」

「意味分かりません！」

ジリジリと部室の隅に追い込まれる中野。
ジリジリと部室の隅に追い込む田井中と琴吹と平沢。

「と、止めなくていいのか？」

「…そう思うんならお前がやれ」

部室の隅に出来上がった四人の塊に秋山が指差すが、それには目もくれず、長イスに腰を下ろしアコギを手に取りチューナーでチューニングしていく。

「…つうかそんなことしてる暇があんならベースのチューニングでもしてろ」

「あ、そうだな。エリザベスを…！」

『しまった』という表情をして口に両手を当て言葉を途切れさせる秋山。
心なしか頬に赤みが走っているのは西日のせいではないだろう。

「ほほう」

瞬間、俺は見逃さなかった。

田井中が中野から秋山に振り返り、わざわざ口に出して、さながら好機を見つけた悪代官がなんとも悪質極まりない笑顔を浮かべたのを。

「み～お～」

「な、なんだよ」

「エリザベスって何のことだ～？」

「な、なんでもない！」

田井中から醸し出される悪質極まりないなオーラを感じ取ったらしい秋山は、冷や汗を一粒頬に流しベースに足を向ける。

「もしかして～　唯がつけたベースの名前かにゃ～」

「ッ！」

（分かりやすい反応だな…）

足を止めてビクッと肩を揺らした秋山にため息を吐き出して、アコギをチューニングしていく。

「そういえばこの前澪ちゃん、ベースのことエリザベスって言って

たわ！」

「ちょっ！ムギ！」

「よくやったぞムギ！　さぁネタは挙がってるんだ！　白状しろ！」

ジリジリと部室の隅に追い込まれる秋山。
ジリジリと部室の隅に追い込む田井中と琴吹。

「あずにゃん、今ならカツ丼があるよ」

「取り調べですか！？　ていうかいりません！」

俺から見て右端には落胆した様子は見る影もなくなった平沢とムスタングを抱き抱える中野。

「正直に言え～！　言うんだ～！」

「うんうん！」

「だから何でもないって言ってるだろ！」

左端には窮地に陥る寸前の秋山と退路を塞ぐ田井中と琴吹。

「はぁ…」

そんなカオスな連中と空間にため息を吐き出す俺。
中野が平沢の事をとか、秋山がベース云々とか、所詮は他人事であり俺には無関係なのでアコギをギタースタンドに置いてテレキャスのネックを掴む。

「サク先輩！　助けてくださ～い！」

「咲也～！」

言うまでもないと思うが、この後再びため息を吐き出したのは必至だった。

――――――――――

現在時刻午後七時二十分。

「うまうま♪」

「お前、打ち上げであんだけ食っといてよく食えんな…」

「ドラムは体力とカロリーを消費するからな！　だからお腹が減るんだ！」

「あっそ…」

「「カロリーを消費…！」」

「お前らは過敏に反応すんな…」

「サク先輩は食べないんですか？」

「…これが終わったらな」

「じゃあサッくんの分残しとかなきゃね～」

ため息が自然と漏れてしまった後、あまりにも中野と秋山が必死に救難信号を送信してくるものだから、渋々救助したのが約二時間前。

場が落ち着き漸く練習を開始しようと各自楽器を構えた矢先に山中顧問が部室の扉を開いた。

『みんないるわね』

『…何しに来たんだ』

『第一声ヒドくないかしら咲也くん…』

『それでどうしたんだ、さわちゃん？　今からお茶じゃなくて練習するんだけど』

『え！　ムギちゃんのケーキ食べないの？』

『今から練習ですから。ティータイムは後です』

『あずにゃん先輩厳しいッス』

『失礼ね。私がいつもお茶を目的に部室に来てると思ってるの？』

『『違うのか？』』

『違うわよ！』

『たまに律と咲也って息ぴったりだよな』

『りっちゃんと咲也君は部長さんと副部長さんだもん♪』

『これを持ってきてあげたの！』

『…寝袋？』

『そ！　どうせあなた達のことだから今日泊まり込むつもりなんでしょ？』

『さっすがさわちゃん！　よく分かってる～！』

『…分かってるじゃねェよ。泊まるとか聞いてねェぞ』

『だって言ってないも～ん』

『『言えよ』』

『おぉ！今度はサッくんと澪ちゃんが息ぴったりだ！』

『でもりっちゃん、お泊まりの準備持ってきてないんだけど…』

『ノープログレム！』

『ていうか学校って泊まって大丈夫なのか？』

『ダ～イジョブ～！』

『りっちゃん隊長！　ごはんは何杯でもおかわり？』

『自由ー！ってなんでやねん！』

『何で漫才になってるんですか…』

『じゃあ確かに渡したから。私は明日のライブ衣装作るためにまた被服室に籠るわね』

『…別に作んなくても結構』

『んもう！　ホントにきかん坊なんだから咲也くんは♪』

『…さっさと立ち去れ』

満面の笑みと『絶対に覗いちゃダメよ』という鶴の恩返しを彷彿させる言葉とどこから調達したのか六人分の寝袋を残して山中顧問は去っていったのが約一時間五十分前。

そして『ＦＦ』『ときガー』『メシ』『Ｕ＆Ｉ』『アシアト』の五曲をみっちりと練習し、再度『アシアト』を演奏しようとしたが、何故かアコギの六弦だけが切れてしまったのが約三十分前。

『これで二回目ですよね？』

『あぁ…』

『変だよな。六弦だけが不自然に切れるなんて』

『もしかしたら、サクのアコギは呪われるんじゃないのか？』

『そうだよサッくん！　最近ＵＦＯの目撃情報が増えてるから！呪われちゃったんだよ！』

『だからＵＦＯとか宇宙人は関係ないって言ったじゃないですか』

『あれ？　そうだっけ？』

『咲也君のギター自体に不具合があるんじゃないかな？』

『ねェ…とは断言出来ねェな。古いらしいし』

『らしいって、どういうことだサク？』

『…このアコギは親戚から譲り受けたもんだ。その親戚は違う誰かから貰ったっつってたから、結構古いアコギらしい』

『そのくらい古いんならペグやブリッジが故障してもおかしくな

いんですけど…』

『でも、咲也なら唯と違ってちゃんとメンテナンスしてるんだろ？』

『…当然だ』

『ムギちゃん…澪ちゃんにシドいこと言われたよ…』

『あはは…』

『…仮にペグとブリッジがイカれていたとしても弦が切れる理由にはならん』

『確かにそうですよね』

『う～ん…　謎だな。やっぱりサクのアコギが呪われているとしか…！』

『じゃあギー太パワーを注入するよ！　ギー太パワー……ちゅ～にゅう！』

『…少し黙ってろ』

『ガーン！』

落胆したように肩を落とす平沢を横目にアコギの弦を交換しようと長イスから立ち上がった時に再び部室の扉が開いた。

『失礼します』

『憂？　どうしたの？』

『お姉ちゃんから今日は学校に泊まって練習するって聞いて、差し入れのおにぎりを作ってきました』

『まぁ！　憂～　ありがとね～』

『ありがと～　憂ちゃん』

『サンキュー！　憂ちゃん』

『ありがとな。憂ちゃん』

『いえ、私に出来ることはこのくらいですから』

『…お前の反面教師の賜物だな。気の利く妹に育ったのは』

『いや～　それほどでも～』

『気付け唯！　サクは褒めてないぞ！』

そして現在。

平沢妹の差し入れを食べる軽音部員と平沢妹は、楽器と長イスを部室の後方に移動させ、差し入れと共に平沢妹が持ってきたレジャーシートを床に敷いておにぎりを堪能し、俺は後方に移動させられた長イスではなく、テーブルの平沢が座る椅子に座りアコギの弦交換の作業をしている。

「咲也さんの分は取ってありますから、みなさんいっぱい食べてくださいね」

「お～いひいよ～　う～い～」

「エへへ～　ありがとうお姉ちゃん♪」

「デザートは私達が用意したのがあるから、良かったら憂ちゃんも食べていってね♪」

「わぁ～　いいんですか？」

「うん♪もちろん♪」

「ありがとうございます。紬さん」

交換し終えた弦を上に引っ張り馴染ませ、チューニングの後に一度ストローク。

（問題ナシ…っと）

アコギを持って立ち上がり、ギタースタンドに置くと平沢妹がわざわざ立ち上がり、俺の隣に来ては姉そっくりの笑顔を向けてきた。

「どうぞ、咲也さん」

五つのおにぎりと紙コップに注がれたお茶を、差し入れの重箱の蓋に置いて両手で俺に差し出してくる。

「あぁ…」

「はい♪」

ハタからみたら会話らしい会話はしてないが、俺の少なめの一応感謝の返答に平沢妹は満面の笑みを浮かべている。
どうやら変に鋭いところは姉譲りらしい。

「もうすぐ七時半か…　この時間にケーキを食べると…」

長イスに腰掛けて、おにぎりを一口含むと秋山がケータイを取り出して若干暗い表情になる。

「大丈夫だ澪。何時にケーキを食べようがへっちゃらだ」

すると、どこか神妙な様子な田井中が秋山の左肩に手を置いてそんなことを言う。

「何故なら今日は……」

気が付けば部室内にいる田井中を除いた全ての人物が、意味深にタメを作って中々言葉を紡がないカチューシャに視線を送っていた。
そして発せられる。

「徹夜だからー！」

アホみたいな宣誓を。

このカチューシャ部長の宣誓の言葉を聞いて、俺達は大きく二つに別れた。

「おぉ～！徹夜だ徹夜だ～！」

「唯ちゃん、枕投げしよ～♪」

平沢と琴吹の、のほほんコンビはキラキラと瞳を輝かせる。
つまり徹夜には大いに賛成組。

「寝ないんですか？」

「そんなの身体に悪いだろ」

「…徹夜で練習してェんなら合宿ん時にやっとけ。今更言うな」

立案者のカチューシャに異議申し立てをする中野と秋山。
俺は二つ目のおにぎりに手を伸ばしながら異論を吐く。
つまり徹夜には反対組。

ちなみに平沢妹は当事者ではないので、事の成り行きを見守っている。

「合宿って、今年は夏フェス行ったんだから徹夜とか出来なかったじゃん」

「…俺が言いてェのは一昨年と去年の事だ。殆ど遊び惚けやがって」

「だから、今日徹夜で練習するんだよ」

「…つうか俺は帰るぞ」

俺は思った事を口に出しただけなのだが、それは平沢達には思いがけない言葉だったようで……

『えっ！？』

と、眼を見開いてかなり驚愕していた。

ちなみにそれは平沢妹も含まれている。

「何言ってるんだよ！　サクも参加するに決まってるだろー！」

「ほうひゃよ～！」

田井中が思い切り俺を指差し、平沢がおにぎりをパクつきながら口を動かす。

第一に徹夜を行う意味はない。
そりゃ出来る限りの練習をするに越したことはないんだろうが、今までの練習で完璧な演奏だったし、明日のライブ本番までまた練習をすれば良い。

第二に深い時間にバンドの音なんて出したら近隣に迷惑がかかる。
幾ら部室に防音対策が施されていようが、それは平沢と中野によって防音効果が下がっていると立証されたわけだし。

第三に単純に俺が男で平沢達が女だということ。
これはもう理由なんぞ言わずとも理解できるだろう。

以上の旨をおにぎり片手に主に田井中と平沢に説明してやる。

「またサクはそうやって色んな理由つけるよな…」

「…様々な観点から物事を考察した結果だ」

「サッくんも泊まろうよ～　サッくんいないとつまんないよ～」

平沢が床から立ち上がり長イスに座っている俺の前にトコトコとやってきては俺の両手を掴み左右に振る。

「あの…」

両手の先の血液が遠心力によって分離してしまいそうなので、いい加減平沢から両手を解放させるための行動を起こそうとした瞬間に、中野がおずおずと小さく挙手をしている光景が眼に映った。

「どうしたんだ梓？」

秋山がそう問い掛けると中野は手を降ろし『はい』と前置きして口を開いた。

「私はサク先輩にも参加してほしいです」

「……」

意外過ぎる言葉に中野を見据える。

コイツは徹夜反対派の一員だった筈なのだが、まさかの肯定とも取れる発言に些か疑問が生じたが、とりあえず黙っておく。

「その、なんて言うか……徹夜は正直ちょっとあれですけど…泊まること事態には賛成ですし…」

たまに言葉を濁しつつも中野は俺から視線を外さない。俺もまた中野の本質を読み取ろうと視線を外さない。
つうか平沢はまだ俺の両手の掴んだままだ……

「私は、サク先輩にも一緒にいてほしいです」

「……」

それは本音であり本質なんだろう。
まっすぐ真っ向から俺を見て視線を外さないのが何よりの証拠だ。

「どうするんだよサク？　後輩がこんなにもお願いしてて、それでも帰るなんて言うのか？」

田井中が勝ち誇ったように踏ん反り返る。

「私も徹夜は反対だけど、でもやっぱりみんなでいたいな」

秋山が少し照れたように笑い、ポリポリと頬をかく。

「私ね、お泊まりってすっごく楽しいの。合宿もそうだったし修学旅行も。それってみんなや咲也くんがいたからだと思うから、だから咲也くんも♪」

琴吹にとって小さくも大きな夢を語り、最後には微笑む。

「サッくん」

そして未だに俺の両手を掴んで離さない平沢が口を開いた。

「私もみ～んなもサッくんといたいよ。六人でいなきゃダメなんだよ」

「……」

「放課後ティータイムは六人で一つだもん。だからサッくんもいなきゃダメッス！」

ギュッと両手を握る平沢。

何故こんなにも真剣になっているのか正直理解しがたい。

しかしそろそろ折り合いをつけなければ、平沢から解放されそうに

はないし、結局のところ『そういうこと』なんだろうと無理矢理自身を納得させる。

「やりゃ良いんだろ…」

『え？』

ため息混じりに息を吐いたが、聞こえなかったらしく首を傾げる平沢達。

「だからやってやるっつってんだよ…」

どうやら今度はちゃんと聞き取れたようで平沢の掴んでいる手の力が緩んでいる。
この機を逃さんと素早く両手を引き抜き、四つ目のおにぎりに手を伸ばす。

「よぉし！　あのサクを陥落させたぞー！」

「良かったね澪ちゃん♪」

「うん、そうだな」

「良かったぁ…」

「クスッ　梓ちゃん嬉しそう」

「そ、そんなことないもん！」

「あ～ん！　サッく～ん！　ありがと～！」

「……」

「ブヒッ！」

両手を掲げる田井中。
ニコニコと笑顔を浮かべて秋山を見る琴吹。
微笑んで琴吹に頷く秋山。
胸に手を置いて安堵の息を吐く中野。
そんな中野に小さく笑う平沢妹。
俺に抱き付こうと突進してくる平沢。
それをおにぎりを持ってない左手一本で平沢の額を押さえて阻止する俺。

何故こんなに喜ばれるのかやっぱり理解しがたいが、下手に落ち込まれるよりはマシだと判断しておにぎりを口に運んでいく。

すると……

「盛り上がってるところ悪いんだけど、宿泊届は出した？」

扉が開き、眼鏡生徒会長が顔を覗かせそんなことを告げてきた。

「…宿泊届なんてあんのか？」

「一昨年も去年もそうだったんだけど、わざわざ学校に泊まって準備するクラスや部活がいるの。そういうことがあるから生徒会としては事前に誰が宿泊しているのかチェックしなきゃならないのよ」

「ふーん…」

「でも和、どうして私達が泊まるって知ってるんだ？」

確かに秋山の言う通りだ。
学校に宿泊すると決まってしまったのは約二時間前で、真鍋には伝えてない。

眼鏡たる所以の聡明さを発揮し過ぎて心中を読めるエスパーになったのかと、我ながらアホらしい事を考えていると、真鍋生徒会長は『それはね』と口を開いた。

「さっき山中先生に聞いたの。唯達は徹夜で練習するだろうからって」

なるほど。
アッチの眼鏡から聞いたのか。

「それで？　宿泊届は提出したの？」

当初の目的を部長である田井中に尋ねるが、硬直しているあたり、またやらかしたんだろう。

「わ、忘れてた……！」

「「おい」」

幾度となく立ち塞がる『申請届』は、田井中の天敵のようだ。

まぁ、今更それに目くじらを立てても仕方がないので、一応秋山と共にツッコんでおく。

「そんなことだろうと思ったわ。はい、じゃあ渡しとくわね」

そこは真鍋生徒会長も分かっていたようで、ブレザーのポッケから四つ折りに畳まれた一枚の用紙を取り出し田井中に渡す。

「申請用紙？　さっすが和～！」

「ありがと～　和ちゃん」

「…用意周到だな」

「似たようなことが度々あったからね」

「ごめんな和、いつもいつも…」

思い当たる節がありまくりで申し訳ない気持ちになった秋山が真鍋に頭を下げる。

「ううん。いいのよ、気にしないで」

「和がこう言ってるんだ！　気にするなって澪！」

「お前のせいだろ！」

「アイタッ！」

反省の色が全く見えない田井中に秋山から左拳という隕石が脳天に落下。

「和ちゃ…和さんもお一つどうぞ」

「あら、ありがとう」

（ん？）

平沢妹が何故か言い直したことが引っ掛かり、思わず平沢妹に視線を向けるが、微笑んでそこにいるだけで、差し当たって不審な点は見えない。

「徹夜で準備の人達も多いんですか？」

「去年も多かったけど、今年から二日間開催になったら、結構いるわね」

（まぁ、良いか…）

思えばどうでもいいことだし、俺には関係ない。
五つ目のおにぎりに手を伸ばしながら自己完結していると、今度は中野から質問が飛び出た。

「どうしてみんな、そんなにギリギリまでやるんでしょうね？」

「わざとやっているところもあるのよ」

「…わざと？　何のために？」

「だって、徹夜で準備って楽しいし」

「分かんねェ…」

少し悪戯っぽく笑う真鍋に長イスに深く腰掛ける。

そんなの事前に準備を怠ってなく済ませておけば良い話で、わざわざ遅らせる意義が分からない。

「咲也ってちゃんと準備とかしとかないと不安なタイプでしょ？」

「…ぶっつけ本番なんて有り得ねェだろ。そのための準備期間が設けられてんのに」

「それが正しいんだけどね、少しでも長くクラスメイト達と学園祭の独特な雰囲気を味わいたいって子達が大勢いるのよ」

「和ちゃん！　それってこーよーかん？」

「そうね。高揚感とか衝動感とか期待感とかの類ね」

『まぁ、私は帰るけどね』と付け加えた真鍋はおにぎりを口に運ぶ。そして平沢が瞳を輝かせつつ俺に振り向いた。

「サッくん！　こーよーかんだよ！　こーよーかん！」

「だからなんだよ…」

「エへへ～♪　何となく～♪」

「はぁ…」

「何かワクワクしてきたなぁ～♪」

「唯ちゃん、私も～♪」

「だよね～♪」

平沢と琴吹は互いに笑い、秋山と田井中と真鍋は雑談を交わし、中野と平沢妹は何やら自分達のクラスの出し物について話している。

「……」

俺は最後のおにぎりを食べ終え立ち上がり、何となく窓辺に立つ。
西日はとっくに消え失せ、月と星が夜空を埋め尽くす。

校庭を見下ろせば、ちらほらと月明りに照らされた桜高生が準備に追われている姿が。

（少しでも長く……か）

現在時刻午後八時一分。

夜が、更けていく。

「梓～…　やっとジャズ研の練習が終わったよ～…　一緒に帰ろ～

…」

「あ、純」

「純ちゃん」

「あれ？　何で憂がいるの？　先に帰ったんじゃ？」

「お姉ちゃん達に差し入れ持ってきたんだよ」

「差し入れ？」

「私達、徹夜するんだぜ！　佐々木さん！」

「鈴木さんだろ、鈴木　純さん」

「えぇーっ！　軽音部は徹夜するんですか！？」

「純達はしないんだ…」

「しないよーっ！　いいな～…」

「いや～　何か照れますな～」

「何で唯が照れてるのよ」

「ズルイです！　ズルイですーっ！」

「…おい、うるせェ」

「ヒドいですーっ！咲也センパーイっ！」

「あ、良かったら純ちゃんもケーキ食べていく？」

「わぁ～　ホントですか！？　ムギ先輩！？」

「…中野、妹。ちょっとアイツ黙らせろ」

「「あはは…」」

第百十八話（後書き）

純ちゃんナイスオチ。

第百十九話（前書き）

最後の学園祭編その十一です。

第百十九話

平沢妹と真鍋。ついでにモジャ団子……もとい、鈴木を含めた部室内にいる総勢九人に食後のデザートである、秋山と田井中を労う意味で琴吹が持参した若干豪勢なケーキを振る舞う。

ちなみに俺の分は平沢があまりにも物欲しそうな眼差しをぶつけてくるので譲渡してやった。

「ズルイぞ唯～！　一人だけ二個も食べるなんて～！」

「エヘヘ～♪　サッくんがくれたんだぁ～♪」

「和のはどんなケーキなんだ？」

「私のはフルーツタルトよ。澪は？」

「私はイチゴショート。和のも美味しそうだな」

「一口食べる？」

「え！　いや、そういうつもりで言ったんじゃ…」

「別に良いわよ。じゃあ交換ってことで私も一口貰って良いかしら？」

「じゃ、じゃあ……」

「この時間に甘い物食べちゃうと太るかも…」

「ケーキの一つくらいで大袈裟過ぎんだろ…つうかお前が持ってきたんだろうが…」

「女の子にとっては体重は死活問題なの！　咲也君！」

「ハイハイ…」

「うん！　美味しい！　じゃあ和も一口」

「それじゃあいただくわね」

「これが…ムギ先輩のケーキ…！」

「純ちゃん？」

「どうしたの純？」

「梓からムギ先輩のケーキは絶品って聞いてたけど、それが食べれるって思ったら何か勿体なくて」

「大袈裟だよ」

「梓は毎日食べてるからパティシエさんの有り難みが薄れてるんだよ。ケーキ一つ一つに丹精込めて『これが俺の魂の一品だ』っていつも言ってるんだよ」

「純って発想が飛躍してるよね…」

「あ、私もお姉ちゃんに喜んでもらいたくって、ご飯はいつも丹精込めてるよ♪」

「憂は相変わらず唯先輩が好きだよね」

「憂も唯先輩が絡むと色々飛躍するよね…」

「……え？　の、和…？」

「え？　どうかしたの澪？」

「あーっ！　和ちゃんまたーっ！」

「うるせェな…　ボリューム下げろ…」

「だってサッくん！　和ちゃんがまたイチゴ食べちゃったんだよ！」

「あっそ…」

「おーい澪？　ダメだ、あまりのショック固まってる…てか、和って凄いことするよな」

「え？　澪のイチゴ食べたことが？」

「和ちゃん！　前にも言ったよね！　イチゴはケーキは頂上なんだよ！　魂なんだよ！　ハートなんだよ！　スターなんだよ！　フェルマークなんだよ！」

「…最後関係ねェだろ」

「ていうかフェルマータですし、使いどころ間違ってますから」

「それを食べちゃうなんてシドいよ！　分かってくれたと思ってたのに～！」

「だからそれは唯の中だけなんじゃ…」

「ちっがーう！　全世界的に！」

「う…うぅ…」

「あーぁ…　また澪が…」

「み、澪先輩！　私のケーキあげますから泣かないでください！」

「純ちゃん、あんなに楽しみにしてたのに…」

「澪先輩のためだもん！　へっちゃらだよ！」

「でも純、さっき自分でイチゴ食べちゃってたけど」

「あ！　そうだった…」

「ねぇ、咲也君」

「あン？」

「これが集団コントなのね！」

「…どっちかっつうとカオスだが、敢えて否定しねェでやる」

「じゃあ「叩かねェからな」ショボ～ン……」

「ムギはまだ叩かれたかったんだな」

両頬を限界まで膨らませて真鍋に詰め寄る平沢。
そんな平沢に珍しく圧倒される真鍋。
そんな真鍋にイチゴだけを奪取され、左手にフォークを持ったまま小刻みに震え大粒の涙を流す秋山。
そんな秋山を励まそうと自身のイチゴショートを差し出す鈴木。
そんな鈴木に平沢妹は感嘆するが、中野は鈴木の失態に嘆息をつく。
そんな連中に琴吹は期待感を含んだ瞳を輝かせ俺に振り向くが、こうべを垂れる結果に。
そんな琴吹に田井中が苦笑いを浮かべる。

改めて現在の状況を確認したとてカオスには変わりない。
だからといって手のつけようがない程、カオスな空間になっているので事の成り行きを長イスに腰掛け傍観すること約五分。

「今度私がケーキを買ってくるわ…」

と、紆余曲折を経て若干憔悴した真鍋の一声で何とか場は落ち着き、平沢妹と鈴木と真鍋は部室から退散していった。

「良かったね澪ちゃん♪　和ちゃんがケーキ買ってくれるって♪」

「何か和に悪いことしたような…」

「…そんなことより練習再開すんぞ」

「そーだな！　んじゃあ今からはアンプ切ってやるぞ～」

真鍋を陥落させて勝者となった平沢は上機嫌で、秋山は申し訳なさそうに目尻の涙を左手で拭う。

対照的な態度の二人を余所に俺達は各自楽器に手を伸ばす。

現在時刻午後八時三十分。

流石に一般的に夜と呼ばれるこの時間に、バンド音を響かせるわけにはいかない。

近隣に迷惑がかかることを配慮してアンプを使用せずに演奏するのは大いに賛成だが（エレキ特有な音が出せないのは仕方ない）どうしてもそうはいかない楽器が存在する。

「ドラムはどうするの？」

琴吹の言う通りドラムだ。

ドラムにはアンプはもちろんキーボードのようにスピーカーがない。

つまり単体で音を奏でられる楽器。

それが問題だ。

エレキギターはアンプを使用せずに、キーボードはボリュームを下げれば良いが、ドラムは叩いて音を出す楽器故に、どうしてもデカい音が出てしまう。

だが、ドラムナシでは練習にならないので、どうしたものかと思考の海に片足をつけた時、田井中が妙案があるように笑った。

「まっかせなさい！」

ドンッと胸を叩いた田井中は、意気揚揚な様子で物置部屋へと足を向けて扉を開く。
俺は田井中の動向を眼で追いつつテレキャスのストラップを肩にかけ、そのまま一度ストローク。

「……」

アコギなら相応の音色が奏でられるが、いかんせんアンプに繋いでない状態のテレキャスだ。
アンプがあってこそ力を発揮するというのに、そのアンプ未使用でストロークしたら独特な音が。

アンプに繋いでいない状態でエレキを弾くと、色々と問題になる可能性がある。
音量、リズム感、ピッキングの正確、音の伸び、力強さ等々が出来てしまったと勘違いしてしまいがちになってしまう。

早い話が雑な演奏になりかねない。

（やっぱアンプに繋いだ方が……）

だが、そうもいかない。
近所迷惑になってしまう。
しかしアンプに繋いだ方が良好なのもまた事実。
そんなどっちつかずな議題に頭を悩ませていると物置部屋から田井中が出てきた。

「よ…っと」

何故か大量の少女雑誌を両手で胸に抱えて。
つうか、いつの間にあんなに少女雑誌を持ち込みやがった…

まぁ、物置部屋を掃除したのは六ヵ月程前だし、その間に大方、平沢と田井中が俺の知らぬ間に持ち込んで放置したんだろう。

「今から読むの？」

今までの流れからしてそんなことは有り得ないのだが、そこは平沢だ。思い切り見当違いなことを口走り首を傾げやがった。

「違うっての。コレをこうやって……」

平沢の疑問をあっさりと一蹴した田井中は少女雑誌を床に置き、自分の左右に積み上げていく。

「はい！　即席ドラムの完成でちゅ！」

「はぁ…」

要は雑誌をドラムの要領で叩こうとしているらしい。
現にスティックを持って意気込み始めたし……

「…ンなもんがドラムの代わりになるかよ」

「む！私は家でドラムの練習をしてる時はいつもコレなんだぞ」

心外だとも言わんばかりに口を尖らせスティックで俺を指す。

「ドラマーりっちゃんを侮っては困るぜ！」

侮ってねェよ。呆れてるんだ。

「とりあえず一回やってみましょ」

「そうだな。　練習しなきゃ徹夜の意味ないしな」

「はい。アンプが使えないのはちょっと不安ですけど」

「出番だ！　ギー太！」

「……」

キーボードの前に立つ琴吹やベースとムスタングのストラップを肩にかける秋山と中野やレスポールに向かう平沢を見て、渋々テレキャスを構える。

不安要素が色濃くあるが、練習は練習だと割り切りしかないだろうな……

「よぉし！　いくぞー！　ワンツスリフォー！」

―――――――――

現在時刻午後九時三十分。

結局、練習は開始三十分で挫折した。

そりゃそうだ。

アンプがあるのに使わないギタリストとベーシスト。耳を澄まさねば聴こえない音量で演奏するキーボーディスト。
そして極めつけは到底ドラムの音とは程遠い音を叩き出すドラマー。

バンド練習なんてなる筈がなかった。

つまり徹夜はもとより泊まり込みの意味がなくなったので、俺はマジで帰ろうとしたが平沢が駄々を捏ねるように俺を引き止めにかかり、敢え無くエスケープは失敗に。

そして現在。

「……」

ガチャリと部室の扉を開けば、誰の姿もなく、亀が相変わらず呑気に水槽内を遊泳している光景が広がっていた。
どうやら平沢達はまだ戻ってないらしい。

俺が部室の扉を開けたということは今まで外出していたということ。

何処に、と聞かれればシャワー室にと答えるだろう。

泊まり込みで作業する生徒のために数年前から生徒会が職員に掛け合って運動部のシャワー室を期間限定で開放出来るようにしてくれたらしい（真鍋の帰り際に平沢が聞いていた）

脱衣所に新品のタオルが何十枚もあったことから、女子高時代の生徒会はかなり頑張って教員連中を説得したようだ。

「……」

脱衣所で制服からジャージに着替え、タオルで頭を拭きながら長イスに深く腰を下ろしたらドッと疲労の波が押し寄せてきた。

知らず知らずに俺は疲れていたようだ。

間違なく音響が原因だろう。

かなり神経使ったし……

「寝るか……」

とりあえずは平沢達が戻ってくるまで仮眠でもとろうかと長イスに横たわった瞬間に……

ブブブッ　ブブブッ　ブブブッ

「ん？」

ジャージのポッケにあるケータイが震えた。

取り出してディスプレイ画面を確認すると【平沢　唯】の文字が表示されてあった。

とりあえず横たわった体勢のままで通話状態にして耳に当てる。

「『もしもし？　サッくん？』」

「サッくん言うな」

何百回と、このフレーズを口にしているが天然は聞く耳持たずに口を開く。

「『今どこにいるの？』」

「部室…」

「『あ、ちょうど良かったよ～』」

「あぁ？」

「『今からね、オカルト研の娘達にお礼しようってことになったんだよ』」

「何でオカルト研に…」

「『だってお墓貸してくれたんだもん。ちゃんとお礼しなきゃ』」

ロゼッタストーン（琴吹曰く）は琴吹と木下が返却した際に感謝したんじゃねェのかと思ったが、それを口には出さずにいた。

「『でね？憂が持ってきてくれたおにぎり、まだ残ってるよね？サッくん食べてないよね？』」

「…お前と一緒にすんな」

堪ったもんじゃない。

「…つまりコレを差し入れにってか？」

長イスから立ち上がり、テーブルの上にあった重箱の蓋を開くと、六つのおにぎりが健在していた。

「『うん！　だからオカルト研の部室までサッくん持ってきて！』」

怠いし面倒だから『断る』と言おうとしたが、思い止どまる。理由は簡単、あのロゼッタストーン（琴吹曰く）がなければ劇の成功は有り得なかったからだ。

少なくとも俺達はオカルト研の連中に改めて感謝をする義務がある。

「…分かった」

「『うん！　じゃあ早く来てね～！』」

平沢からの通話が切れ、ケータイをポッケにしまい、重箱を包みで包んで持ち上げる。

そして小さく欠伸をしながら俺は今さっき戻ったばかりだというの

に、又しても部室から出ていった。

――――――――

コツコツとオカルト研の部室を目指す俺の足音が妙に廊下に響く。

足元を窓からの月明りが廊下を照らす。

時折、雑音や話し声が聞こえる。

夜の学校は怪談の舞台になりやすいが、決して幽霊等の雑音ではなく、まだ居残っているか俺達同様泊まり込む桜高生の連中だろう。

つうか現実主義者の俺からしたら幽霊や昨今多数の目撃情報があるUFOは眉唾物だ。

しかし一つ腑に落ちないのはアコギだ。

何故、不自然に弦が切れた？

何故、六弦だけ？

脳内で『何故』とクエスチョンマークが華麗にダンスを舞う。

「はぁ…」

確かに不思議現象だが、今はそれを考えたところで起因や原因や解決策は思い付かない。

とりあえず不思議は不可思議だから不思議理論で一時的に納得し、ため息で気分一新。

「お～い！　サッく～ん！」

すると前方から何とも陽気な声質で叫ぶ人物を発見。
言わずとも平沢だ。

制服からジャージに着替えている平沢が両手を振り、望んでいないタブーを連発中だ。
よくよく見ると周囲には秋山達もいる。

「…叫ぶな」

「いや～　ついつい～」

歩くスピードを幾分上げ平沢達と合流。
そして開口一番に譴責したが、さほど反省の色は見せず頭をポリポリとかく始末。

「…つうか何だよ？」

「……ぇ？」

先程から何やら視線を感じるので、その主…二年の証である紅いジ

ャージに身を包んだ中野に視線を返すと素っ頓狂な声を上げる。

「あ！　す、すみません！　何かサク先輩が別人みたいだったからつい……」

「そうだよね～　サッくんがちゃんとジャージ着てるのって珍しいもん」

「…さみぃからだ」

「いや、梓が言いたいのって咲也がピンをしてないことだろ」

秋山が言うと中野はコクンと頷いた。

「梓ちゃんって見たことなかったの？」

「えっと、先輩達が修学旅行に行ってた時に、憂のケータイに唯先輩からのメールにサク先輩の写メがあって、それを見たことありましたけど…」

「…お前いつ送った？」

そんなものを送られていたとは初耳だったので、思わず天然に視線を移す。

「いつだったけ？」

「覚えてねェのかよ…」

一応、夏フェスの夜の時にはピンを外して星空を眺める中野に顔を合わせたが、あの時は暗かったので認識出来てなかったようだ。
事実、俺がブラック中野に変化していたことに気付いたのは明けた朝だったぐらいに暗かったし。

「しっかしサクってホント、ピンがなかったら別人みたいだよな～」

「…お前もな」

シャワーを浴びた後だからだろう。
田井中もカチューシャはしておらず、長い前髪がシンボルであるデコを隠してしまい、パッと見、別人だ。

「しかも何か目付きの悪さに磨きがかかってるし～」

「…よし、歯ァ食いしばれ」

「だから喧嘩するなって」

ケラケラと笑いながら実に腹の立つ暴言を吐いたドラマーに、持っていた重箱を琴吹に渡し指の骨を鳴らすと、すかさず秋山が仲介に入る。

「ほら、オカルト研の人にお礼するんだろ」

「分かってるって♪　ジョークだよ♪」

俺は結構マジなんだが、あまり荒立てると後々面倒なので渋々引き下がって、田井中から視線をオカルト研の部室の扉に向ける。

扉には『オカルト研究会』というシンプルなプレートがある。

しかしそのシンプルさがオカルトという非科学的なものを引き出している気がする。

「まだいるみたいだね」

「…この部の奴らも徹夜みてェだな」

平沢が部室の扉の小窓から漏れている実に怪しげな雰囲気を醸し出す紫色の明かりを見て確信したように告げる。

「何の準備してるんでしょうね？」

「きっと儀式とかだよ、あずにゃん」

「な、なんだよ？　儀式って……」

「あれ～？　澪怖いの～？」

「そ、そんなんじゃないって！　ちょっと気になっただけだ！」

「…人体実験とかじゃねェの。心臓を取り出して代わりにノミの心臓ぶち込むとか」

「ヒッ！！」

「発想が怖いですよ…サク先輩…」

「じゃあ開けるね？」

久し振りに秋山がスキルを発動したところで、琴吹が扉をノックしドアノブを回す。

「お邪魔しま……」

琴吹の言葉が続かない。それは俺達もだ。

別にマジで人体実験を行っているわけではなく、室内が理解不能だからだ。

暗幕で窓を覆い全体的に薄暗く、明かりといえば天井から吊された紫色のライトのみ。

この時点で理解不能で異質だというのに宇宙人の人形があちこちにあったり、例のロゼッタストーン（琴吹曰く）があったり、中央に

ジオラマがあったり、それを取り囲むようにＵＦＯやら未開の星々がライト同様天井から吊されていたり……

こんな奇抜で異質な空間を目の当たりにしたら言葉を飲み込んで絶句してしまうものだ。

「何か？」

俺達の心境など知るはずもない室内にいた二人のオカルト研員の一人の女子が真顔な表情のまま作業していた手を止める。

「あ、えっと、私達、改めてお礼に来たんです」

「お礼？」

我に返った琴吹の発言に表情を変えることなく復唱する。

「今日、私達のクラスの劇で助けてもらったそのお礼です」

詳しく琴吹が説明すると『あぁ…』と声を漏らすオカルト研員。

「それで、おにぎりを持って来たんですけど、よかったら食べてください」

琴吹に渡したままだった重箱の蓋を開けて差し出すと、一人のオカルト研員はおにぎりを一つ手に取り、もう一人のオカルト研員もおにぎりを一つ手に取る。
…つうか、よくよく考えたら俺達の食べ残しをやってんだよな……

「「ありがとう」」

そうとも知らないオカルト研員二人はうっすらと笑う。
この場合は黙っていた方が得策なんだろうな。

「よかったら明日のキャトルミューティレーションに関する考察の発表を見に来てください」

「はい！」

「是非！」

（行く気かよ……）

オカルト研員の言葉に、それはそれは力強く頷いてしまった平沢と田井中に、こんなことを思わざるを得なかった。

「それじゃ、よかった私達のライブも見に来てください」

と、琴吹。

「「ライブ？」」

「私達、軽音部なんです！　バンド名は放課後ティータイム！」

平沢が無駄に胸を張る。

「…ＨＴＴな」

「違うよサッくん、放課後ティータイムだよ」

「はぁ…」

「ステージで澪がキャトられるんで！」

「そんなことしない！」

「澪ちゃんだけズルい～」

「何で唯先輩は羨ましそうなんですか…」

「それは興味深いですね」

「…お前期待されてんぞ」

「澪！　やるきゃない！」

「だからしないって！」

「でも澪ちゃんがキャトルミューティレーションされちゃったらライブが出来なくなっちゃうんじゃ…」

「マジで捉えんな…」

「大丈夫だムギ！　もしそうなっても軽音部の伝説のライブとして語り継がれるぞ」

「おぉ！　おめでとう澪ちゃん！」

「意味が分からん！」

「「はぁ……」」

只でさえ異質な空間であるのに、そこにカオスが生じてしまい、最早付き合ってられないと俺と中野は深いため息をついた。

――――――――――

オカルト研の部室から退散した俺達は部室へ直行ではなく、少し寄り道することに。

「そういえば、あずにゃんや」

「はい？」

「私達の劇、どうだった？」

「あ、そうだよ。梓から感想もらってないぞ」

上履きから靴に履き替え、俺達は桜高祭のオリジナリティー溢れる様々な露店が立ち並ぶ夜の校庭を散策していた。

「では、あずにゃん審査員！　感想をどうぞ！」

「何か改めて聞かれると答えずらいんですけど…」

「いーから、ほれ、どうだった？　特にジュリエットは？」

「律だけ強調したら梓がますます答えずらいだろ」

切っ掛けは田井中。

『そういえば、劇の準備とか本番で一日中バタバタしてたから、全然学園祭回れてなかったな～』

それに対し琴吹がこんな提案を。

『じゃあ今から夜の学園祭を見て回らない？』

という経緯で俺達は歩を進めていた。

「澪先輩と律先輩は本当にロミオとジュリエットみたいで感動しました」

「そう言ってくれると嬉しいよ。ありがとうな梓」

「ま、私達はあんなに練習したからな！　褒められて当然！」

「あ、今ので何か律先輩だけ感動が半減しちゃいました」

「なっ！？　やっぱり私をバカにしてるなー！」

たまに吹き抜ける秋風が微量の寒気を纏い通り抜ける。
その対策としてジャージのポッケに両手を突っ込み平沢達より二、三歩程先をダラダラと歩く。

「ムギ先輩が脚本書いたんですよね？」

「うん♪　澪ちゃんとりっちゃんが主役だもの、張り切って書いたの♪」

「あ、だからあんなに凄い展開になったんですね。私も憂も純も引き込まれちゃいました」

「そっかぁ～♪　みんな楽しめてくれたのね～♪」

「はい！」

当然といえば当然で、露店は営業どころか人影もない。
昼間、真鍋と共に山中担任の様子を確認しに行った途中で窓から今俺達が歩いているこの場所を見下ろしたときは大勢の人で賑わっていた。

そんな光景も今はなく、月明りとまだ残っている生徒が使用している教室の明かりが、誰もいない露店の存在を忘れさせないようにぼんやりと照らし出す。

「あずにゃん、私は？　私の木Gは？」

「えっと…唯先輩は…」

「うんうん！」

「ど、独創的で…その…えっと…とにかく良かったです！」

「エヘヘ～♪　そっかなぁ～♪　いや～　才能が開花しちゃったっていうか～」

「頑張ったな梓」

「まぁ、難しいよ。唯の役どころは」

「あ、ありがとうございます…律先輩、澪先輩」

「あはは…」

はっきりとした目的はなく、気のむくままにダラダラとぶらぶらと平沢達の会話をＢＧＭにしつつ視線は前に歩いていく。

「サク先輩は色んな音をタイミング良く流して、さすがだなって思いました……って」

「あれ？　咲也がいない…」

「あ、ホント…」

「全く～！　眼を離すとたまに勝手にいなくなるよなサクは！」

「あーっ！　みんな来て来てー！」

「どうしたんですか？　唯先輩」

「咲也君がいたの？」

「ジュリエットのお墓発見！」

「あっ！　何でこんなところにあるんだよ！　私達スゲー探し回ったのに！」

「ここって何の店なんだ？」

「二組のマンモスのお肉を売ってるお店ですね。確か縄文時代をイ

メージしたって聞いたことありますけど」

「きっと誰かがここのだと思って届けてくれたんだね～」

「何だよ～…　講堂から近いこんなところにあったのかよ～…」

「でも、このお墓が講堂になかったからオカルト研の人達と交流出来たんだし、良かったんじゃないかな？」

「そうだな。ムギの言う通りかも」

「あーっ！！」

「今度はなんですか？」

「サッくんがいない！」

「「今頃気付いたのかよ」」

疲労の波がたまに押し寄せ睡魔が手招きしているからだろうか。

「講堂……」

半分寝ているような状態で歩き続け、気が付いたら目の前に講堂があった。

足を止め講堂を見上げる。

過去四回、俺は軽音部の一人として講堂のステージに立った。
瞬間、その時々の場面が脳裏に蘇る。
それは初ステージの緊張で中々歌えなかった秋山だったり。
リフに集中し過ぎて歌詞を忘却する平沢だったり。

「あ！　りっちゃん隊長！　サッくん隊員を発見しました！」

「うむ、ご苦労。唯隊員」

「咲也、勝手にいなくなるなよ」

「そうですよ、心配したんですから」

「咲也君？」

ライブ特有の雰囲気にテンションが上がり、再び鍵盤を押す琴吹だったり。
その後にまたドラムを叩いて演奏を続けようとする田井中だったり。
新入部員獲得のために精一杯ムスタングを弾く中野だったり。

「何考えてるんだ？　サク」

「別に…」

初の学園祭ライブも、初の新歓ライブも、二回目の学園祭ライブも、最後の新歓ライブも、俺達は精一杯演奏を、音を奏でた。
六人の個性的な色を重なり合わせＨＴＴの音色を講堂に響かせた。

「いよいよ明日だな」

「そうですね」

「何か私、ワクワクしてきた～！」

「私も～！」

バンドを組んでライブをした者なら分かるだろう。

徐々に盛り上がる観客。
リズムに合わせて叩く手拍子。
特有の熱気。
永遠とも思える甘美な時間。
確かな高揚感。
終わった後の心地よい疲労感。
僅かな反省。
次に繋がる練習。

「サッくん」

「あン？」

「明日だね」

「あぁ…」

「楽しもうね！」

「…それは良いが、お前はいつも何らかのミスの前科と、そうなりうる火種を持ってんだから、楽しむことにうつつを抜かすなよ」

「大丈夫だよ～　ギー太がいるもん」

「そのギー太忘れたのは誰だ～？」

「うっ…！」

「しかも風邪ひいてギリギリまで来なかったですし」

「うぅ…！」

「声を嗄らして私が歌うことになったし」

「うぅ！」

「そして澪のパン「うわっ！　言うな律！」

「でも、そういうのも楽しい思い出だと思うな～♪」

「だよね！　そうだよね！　さすがムギちゃんだよ～」

「相変わらず都合の良い頭してんな…」

「エッヘン！」

「サク先輩は褒めてないと思いますよ」

徐々に盛り上がる観客も、リズムに合わせて叩く手拍子も、特有の熱気も、永遠とも思える甘美な時間も、確かな高揚感も、終わった後の心地よい疲労感も、僅かな反省も、次に繋がる練習も、明日で最後だ。

『後悔しないように精一杯』

今になってこの言葉が染みる。

親父もお袋も山中顧問も、周りの大人達は経験して今を過ごしている。

やるだけのことはやろうと、無意識に右手を握り締めている自分がいた。

「よぉし！　放課後ティータイム！　明日は目一杯楽しむぞーっ！」

『オーッ！』

俺はその拳を……

「……」

小さく上げた。

――――――――――

現在時刻午前二時四十二分。

部室に戻り、挫折した練習を再度チャレンジしたがやっぱり挫折し、他愛もなさすぎる薄い内容の雑談を交わしていると深夜になっていた。

「あの、そろそろ寝ませんか？」

「ていうか咲也はもう寝てるし」

「寝てねェ……」

定位置の長イスに横たわり山中顧問が持ってきた寝袋を枕代わりにうつらうつらと船を漕ぎながら、たまに平沢達に相槌を打っていた

が、そろそろ限界だ。

「…俺は寝るぞ…」

長イスから起き上がり、寝袋を掴んで引きずりながら、おぼつかない足取りで物置部屋に向かう。

「え～　もうちょっとお話しようよ～」

「そうだそうだ～　まだまだ夜は続くんだぜ」

『後三時間したら陽が昇る』と田井中にツッコもうとしたが、その行為自体が億劫であり、何より睡眠という人体が活動する上で必要なエネルギー摂取が勝り、振り返ることなくドアノブに手を置く。

「さすがにそろそろ寝た方が良いですよ」

「何言ってるんだ梓！　今日は徹夜だって言っただろ！」

「今夜は寝かさないぞ、子猫ちゃん」

「一人でどうぞ」

「あ～ん！　あずにゃんのいけずぅ～！」

ガチャリと扉を開け棚と壁の間のスペースに寝袋を敷く。

「唯と律も変なテンションになってるな…」

「だって澪ちゃん！　夜の学校なんだよ！　ウズウズしてくるじゃん！」

「ならないって」

「ってコラー！　何寝ようとしてるんだよサク！」

修司の十分の一くらいのデカボイスで叫ぶ田井中に、気怠く振り返ると寝袋から立ち上がって（平沢達は今まで、平沢妹が持ってきたレジャーシートの上に寝袋を敷いて駄弁っていた）俺に思い切り指差していた。

「…そもそも俺が残っていたのは練習のためだ…　だから…つうか…その練習は出来ねェし…　つうか徹夜ってなんだ…」

「あれ？　サクが壊れた？」

自分でも支離滅裂っぽいことを口走っているのは理解している。
どうやら限界値はとうに越え大気圏を突破したらしい。

「ほら、もう寝るぞ。明日も練習するんだから」

「それじゃあ今からもう一曲作っちゃお～！」

「ムギ！？」

「お、ムギもいい感じに壊れたな！」

「はいはーい！　新曲のタイトル思い付いたよ！　その名も『ドキドキ分度器』！」

「待て唯！　ここは私が考えた『カバンのバカーン』に決まってる！」

「はい！　私も思い付いたわ！」

「ムギ先輩がおかしなテンションに…」

「『よしゑは見た！　犯人の顔を！』ってどうかな？」

「よし！　採用！　じゃあサク！　作曲頼むな！」

限界値が月に着陸し、脳が告げる。『寝ろ』と。

なのでウインクしながらサムズアップする田井中の意味不明な発言の答えとして……

「……」

バタン

無言で物置部屋の扉を閉める。

物置部屋の室内は小さな換気用の窓があり、そこから月明りが差し込み、淡い光に包まれている。

（さっさと寝ねェと…本番に響く……）

掃除の時に平沢が持って帰らなかった……いや、持って帰れなかった蛙の置物の付近にケータイを置き、モゾモゾと寝袋にくるまる。

『サク先輩も寝ちゃいましたから、私達も寝ましょう』

『じゃあサッくんを起こそう！』

『止めろって。ホントに怒られるぞ』

『しょ～がない。サクがいないとイマイチ盛り上がらないからな～寝るか』

『そうね～』

一枚壁を隔てた向こうから一部耳を疑う声が聞こえたが（平沢の発言）どうやらアイツらも寝るようだ。

本日十月三日日曜日。

現在時刻午前三時ジャスト。
長く感じた夜が漸く終わりを迎えた。

『電気消しますよ』
『ほ～い』
『消すのだ梓よ！』
『律、うるさい』
『何で私だけ！？　唯もムギも騒いでたのに……』
『みんな～おやすみなさ～い』

そして現軽音部ラストライブまで後十三時間。

『しゃ……』
『今度はなんだよ、律』
『しゃれこうべ』
『『ぷっ！』』
『しゃれこうべ』

『ぷっ…！』

『澪先輩？』

『しゃれ…こうべ』

『『ぷぷっ！』』

『唯先輩？　ムギ先輩？』

『しゃれ～こうべ』

『『『あはははははっ！』』』

『え？　え？　何がおかしいんですか？』

『しゃれこ～～うべ』

『あっはははは！　や、止めろ律！』

『お腹痛い…あっはは！』

『ね、眠れな…あはははは！』

『しゃ～～れこうべ』

『『『あっはははは！』』』

『ちょっ！　ちょっと先輩！　あんまり騒ぐとサク先輩が……』

ガチャ

「あ、サク先輩……」

「お、どうしたサク？」

「……」

ビシッ！

「アイタッ！」

「…次騒いだら手刀じゃすまねェぞ……」

「何で私だけ叩かれなきゃならないんだよ～…」

「…さっさと寝ろ……」

「ぷぷっ！あはは…！あっははは！」

「澪ちゃんがツボにはまっちゃった」

「はぁ……」

第百十九話（後書き）

気が付けば学園祭編が十話を越えてました。

シリーズもので最長は修学旅行編だったと思いますが、最長記録更新しちゃいました。

第百二十話（前書き）

最後の学園祭編その十二です。

第百二十話

【ＳＩＤＥ　山中　さわ子】

時間は少々溯り、現在時刻午後九時五十八分。

私立桜ヶ丘高等学校内被服室にて。

『意味が分からん！』

「ッ！」

突然聞こえた誰かの大声に、私の身体が小さく跳ねる。

「いけない……寝てた……」

室内の明かりは消えたまま窓の外からは月明りの光が差し込んでいた。

ポケットに入れてしまったまま寝ていたケータイがポケットを膨らませている。

机に突っ伏していたから眼鏡がズレている。

そのままの体勢で眼鏡を直しケータイ取り出して時刻を確認。

「もうすぐ十時……」

唯ちゃん達に寝袋を届けて被服室に戻ってからひたすらライブ衣装を作ってたんだけど、昨日も徹夜したから疲労がかなり溜まってたみたい。

さすがに二日続けて徹夜は無謀だったわね……

「ん～～……っと」

とは言え、途中で投げ出すなんて選択肢は私の中には存在しない。だって、ここで止めちゃったら軽音部のライブ衣装が未完成で明日は唯ちゃん達、制服でステージに立っちゃうから！

そんなのはダメよ！

私のプライドが許さないわ！

と、内心でメラメラとやる気の炎を燃やして意気込んでみたけど、まだ瞼は重い。

眠気を吹き飛ばすために身体を起こして両手を上げてグッと伸びをしたけど、凝り固まった筋肉がほぐれるだけで眠気は私の中にまだ存在してる。

「コーヒーでも買ってこようかしら」

コーヒーは眠気覚ましの定番だし、何より喉が渇いた。

本当はムギちゃんの美味しい紅茶が飲みたいんだけどね。
今頃、あの娘達は練習してるはずだから邪魔しちゃ悪いし、何より『覗いちゃダメよ』なんて言ってしまった手前、私からノコノコと部室に行くわけにはいかないわ。
ていうか、何であんなことを言っちゃたんだろ……
特に他意はないのに……

「まぁ、いいか」

自分で自分の首を絞める結果になったけど、そこは深く考えない方向で。
気にしたら負けよ！

「にしても身体が痛いわね。まさか……老い？　いやいやいやいや！　私はまだ二十四！　四捨五入したらピチピチの二十歳！」

ブブブッ　ブブブッ

「はっ！　でも来年の二月で二十五！　四捨五入したら三十路突入じゃない！」

ブブブッ　ブブブッ

「落ち着くのよさわ子。それはあくまで四捨五入した結果。まだまだ若いわよ。きっと三十になる前には素敵な彼が現れるはず！」

ブブブッ　ブブブッ

「第一そこまで深く考えちゃいけないわ。紀実や彩やあやめや陽子はまだ結婚してないじゃない」

ブブブッ　ブブブッ

「はっ！　ミホコはこのあいだ佳祐さんと結婚したわ！　マズいわね……もしかしたらこのまま私だけ取り残されちゃったり……」

ブブブッ　ブブブッ

「そういえば、あやめには好きな人がいるってミホコの結婚式の時、陽子から聞いたわ……」

ブブブッ　ブブブッ

「だ、大丈夫よ！　紀実がいるわ！　恋愛とか殆ど興味ないような娘だし！」

ブブブッ　ブブブッ

「ていうか……」

ブブブッ　ブブブッ

「さっきからうるさーい！」

時間を確認して机の上に置いたケータイがさっきから耐えずに震えていたのは気付いてたけど、私は自分の花嫁姿が現実味を帯びてこ

ないことに言い知れぬ不安に陥りかけていて、何とかそれを回避しようと必死に頭を働かせていたから無視してた。

だって結婚って女なら誰しも一度は夢見る素敵なものなのに、それを邪魔するなんて許すまじきことよ！

「誰よ！　こんな時間に！」

文句の一つでも言ってやろうかと、素早くケータイを手に取り睨みつけるようにディスプレイ画面を見る。

【紀実】

その電子文字に、感情が怒りから焦りに変わった。

（も、も、もしかしたら……）

結婚報告!?

無い話じゃ……無いわね……

現に身近な友人のミホコが結婚したんだし……

いや！でも紀実は恋愛には興味が薄いはず！

だけど、もしかしたらそれは高校までで、今は違うとか？

（そういう娘に限って結婚しちゃうのが相場だったりするし……）

持論だけど。

とりあえず真相を確かめる必要があるから、未だに私の手の中で震えるケータイを開いて通話ボタンを押して耳に当てる。

「も、もしもし？」

「『あ、やっと出た』」

電話口から聞こえる紀実の声は至って普通。

でも、だからといってまだ安心出来ないわ。

「結婚するの？」

だから、少しでも精神的ダメージが少ないように私から先手を取る。

「『え？　結婚？　誰が？』」

「紀実が」

多分次に発せられる言葉で結婚するのかしないのかが分かる。

ゴクリっと喉を鳴らす、頬に一滴の汗が伝う、眼を閉じてその瞬間

を待つ。

「『私が？　いや、しないけど』」

「はぁ～…」

安堵の息を吐く。

一秒がこんなに長く感じたのは初めてで、それほど私は緊張していた。

「『ていうか何でそんなこと聞くの？』」

「気にしないで。コッチの事情だから」

「『もしかしてさわ子、好きな人が出来た？』」

「え？　どうして？」

「『だって結婚なんて聞いてくるし、恋愛絡みのことだし』」

「違うわよ。ちょっとね」

冷静になってみれば、私が勝手にそんな風に結び付けちゃったのよね……

だから私は、そういうところを悟られたくないから至って普通に切り返す。

「そんなことより、どうしたの？　何か用？」

「『あ、うん。今ね、彩とあやめで飲んでるんだけどさ、さわ子もおいでよ』」

（もうすぐ十時なのに、一体いつから飲んでるのかしら……）

そう思うのには、ちゃんと理由はある。

「酔ってるでしょ」

紀実の声が普段の張りがなく何だか緩いから。

別に紀実は豪酒や酒豪や酒仙というわけじゃないけど、こんな状態になっているということは、かなりお酒を飲んでいるに違いない。

「『しょうがないでしょ、あやめがどうしてもって泣き付くんだから』」

「あやめが？」

思わず首を傾げて復唱。

あやめって自分から飲みに誘うような娘じゃないのに、どちらかというと私達に巻き込まれるタイプなんだけど。

「『なんかね、好きな人にフられたんだって』」

「え？」

「『だから、やけ酒に付き合わされてんのよ』」

『かれこれ三時間もね』と付け加えた紀実の声はまだ緩いままだったけど、その中にちょっと疲労の色が垣間聞こえた。
どうやら無理矢理付き合わされてるみたいね。

「『おじさん！　もう一杯！』」

「『あーもー　ダメだって。おじさん、水でいいからね』」

すると電話口から明らかに酔ってるあやめと、いさめる彩の声が聞こえた。

「あやめもかなり酔ってるみたいね」

「『みたいじゃなくて、酔ってるのよ。さわ子も一緒に愚痴聞いてやってよ』」

そう言った後にコップを置いた音が聞こえた。
私は椅子から立ち上がって窓辺に寄り添う。

「聞いてあげたいんだけどね。今、衣装作ってて手が離せないの」

「『衣装？　何の？』」

「軽音部の。明日本番だから」

「『そういえばそんな時期だったけ……』」

紀実の表情は分からない。
だけど、今、窓に映る私の表情と同じな気がした。
懐かしいって。
過去を懐かしむ現在を少しだけ悔しいって。
もう二度と『ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ』が講堂のあのステージには立てなくて悔しいって。

過去四回、今の軽音部のライブを観ても懐かしいなんて思わなかったけど、ミホコの結婚式の二次会で久し振りに『ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ』のキャサリンとしてステージに立ったからなのかもしれない。
懐かしいって、ちょっとだけ悔しいって思ったのは。

「『副部長さん達って三年生だっけ？』」

「そうよ」

「『じゃあ最後なんだ……』」

「梓ちゃんだけは二年生だけどね」

気が付けば眠気は無くなって、窓から視線を机に移せば、無地のTシャツと、とあるイラストがプリントされたTシャツがそれぞれ乱雑に置かれてあった。

「あ、梓ちゃんって分かる？　ツインテールしたちっちゃい娘なんだけど」

「『あぁ、あの娘ね。そういえば副部長さん達のこと『先輩』って言ってたわね』」

既に六人分の衣装は出来上がってるんだけど、ちょっとしたアイディアが浮かんだからまだ完成じゃない。

「梓ちゃんは来年もあるけど、咲也くんや唯ちゃん、澪ちゃん、りっちゃん、ムギちゃんは……ね」

「『そっか、じゃあ来れないか』」

「ごめんね、私は軽音部の顧問だから」

「『何か随分と教職が板に付いた発言ね』」

『ふふっ』っと小さく笑った紀実に私もつられて口元を小さく緩める。

そしてまた窓に振り返って、様々な露店が並ぶ校庭を見下ろす。

「『じゃあ切るね？　さっきから彩があやめの対処を手伝ってってうるさくて』」

「お酒はほどほどにしておきなさいってあやめに言っておいて」

「『さわ子もね』」

「え？」

私のその声には二つの意味があった。

一つ目は勿論、紀実の気遣う言葉。

二つ目は眺めている校庭に咲也くんを先頭に唯ちゃん、りっちゃん、梓ちゃん、澪ちゃん、ムギちゃんが現れたから。

徹夜で練習って言ってたけど……

まぁ、多分気分転換ね。

それにしても相変わらず咲也くんは唯ちゃん達のことを気にしないでお構いなしにドンドン進んで行くわね……

「『あんまり根を詰め過ぎちゃダメってこと』」

「善処するわ。いつかの紀実みたいに本番当日に体調崩さないように」

「『あれは私のロック魂が興奮しちゃって全然眠れなかったの』」

視線の先には現在の軽音部の姿。

「だからそうならないように善処するわ」

「『私のはさわ子にとって良い教訓だったってことで』」

聞こえるのは六年前に卒業した紀実の懐かしむ声、お酒を頼むあやめの大きな声、手に負えないように嘆く彩の声のＯＧとなった『ＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬ』のメンバー。

「クスッ　じゃあね」

「『うん、また誘うわ』」

それを眺めて、聞いているのは同じくＯＧとなって、今は軽音部の顧問となってる私。

（こういうのって運命って言うのかしらね）

まだ女子高だった桜高に生徒として通い、音楽教師として戻ってきて、かつて在籍していた軽音部の顧問だなんて。

「運命って言うなら私に素敵な彼が現れる方が良いんだけどね」

ケータイをポケットに仕舞って、講堂を見上げる唯ちゃん達に小さく笑って私は背を向けた。

「さーて！頑張りますか！」

気合いを入れるために、私は右手を思い切り上げた。

そして……私は知らなかった。

『よぉし！　放課後ティータイム！　明日は目一杯楽しむぞーっ！』

『オーッ！』

まさか唯ちゃん達も右手を思い切り上げていたなんてね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

『みんなー！　ライブの衣装出来たわよー！』

聞こえてきたのは小鳥の囀りではなく、一枚壁を隔てた荒々しく扉を開ける音と山中顧問の嬉々としたデカボイス。

「うるせェ……」

故に目が覚めてしまった。

寝袋から這い出て身体を起こすと、小窓から柔らかい日差しが俺の全身を包む。

『ち、ちょっと！　ねー！　ねーったら！　スルーだけは止めて！　一番こたえるから！』

小鳥の囀りや柔らかい日差しが優雅な朝を演出しているというのに、何ともそんな状況に似つかない山中顧問の必死なボイスが最悪な目

覚しだ。

「六時…四十分…」

蛙の置物の付近に置いてあったケータイで現在時刻を確認すると早朝と呼ぶに相応しい時間帯。

まさかの睡眠時間三時間四十分に起こされ軽く憤りを感じているとガチャリと物置部屋の扉が荒々しく開いた。

「咲也くんっ！」

「…まず…ボリューム下げろ…いや…もう黙れ」

「そんなこと言わないでよ！　ヒドいじゃない！　せっかく衣装が出来たのに……！」

寝起きでぼやける視界を眼を細めてフォーカスを合わせて見ると、そこには昨日よりクマの色がかなり濃ゆくなった山中顧問が部室の窓から差し込む日差しを背負って立ち、右手には何やら白い布を持っていた。

「起こしても起こしてもみんな起きてくれないし…　頼みの綱は咲也くんしかいないのよ～！」

「だったらその綱を断ち切れ……」

何の綱なのか一切不明だが、俺からしてみれば最悪の寝起きを体験し尚且つ現在進行形で更にデカボイスを撒き散らす思考ぶっ飛び顧問の相手なんぞしたくない。

まだまだ眠れる時間なので、モゾモゾと寝袋にUターンしていく。

「ちょっと～！　咲也くんまでスルーしないでよ～！」

「数十秒相手してやったろ……」

これ以上の異論反論を含めた言葉は受け付けないという態勢を表すために寝袋を頭までかぶる。

すると『もう！』と焦躁にも似た息を吐いて山中顧問は物置部屋から退散していった気配を感じた。

これで漸く静かで平穏な朝が……

『みんなーっ！　起きてーっ！』

訪れなかった。

「はぁ……」

深いため息を吐いて寝返りを打ち、少しでも睡眠を取ろうと、デカボイスに抗い抵抗する。

『起きてーっ！　起きなさーいっ！　起きろーっ！』

しかし、山中顧問流の起床三段活用の前では無駄な抵抗で、中々睡魔が手招きをしてこない。

それはどうやらアッチの連中も同様のようで、荒々しい山中顧問の声とは対照的な弱々しい田井中の小鳥の囀りにも負けそうな程の小さな声が耳を捉えた。

『ご、ごめん、さわちゃん……　みんなグロッキーでツッコむ元気ない……』

（そりゃ自業自得だ…）

あんだけ騒いだらグロッキーにもなるに決まってる。
つうか徹夜とかアホな事の言い出しっぺのお前がそれを言ったら立つ瀬ねェだろ……

『せっかくみんなのために紀実の誘いを断って頑張って作ったのに……』

意気消沈した山中顧問の声。
これで漸く静かで平穏な朝が……

『おぉっ！』

『すご～い！』

『可愛い…！』

『さわちゃんやるぅ～！』

訪れなかった。

（マジで勘弁してくれ……）

今度は田井中、琴吹、中野、平沢の感動したような声が空気を伝い鼓膜を振動させる。
手招きをしなかった睡魔が背を向けて徐々に遠ざかっていく。

「はぁ……」

再び深いため息を吐き出して、寝袋から這い出て立ち上がる。
こうなってしまっては夢の国に再出発するのはほぼ不可能だと判断した結果の表れだ。

一度軽く身体を伸ばし凝り固まった筋肉をほぐして、頭をかきながら開けっぱなしの物置部屋の扉から出ると、そこには寝袋にくるまり蓑虫状態のまま山中顧問に称賛の雨を降らせている平沢、田井中、琴吹、中野の姿。

そして山中顧問は……

「これよ！　この感じを味わいたかったのー！」

不気味な性癖でも目覚めたかのように自分自身を抱き締めていた。

「朝っぱからうるせェっつうの…」

そんな光景を一瞥し、長イスに腰掛けて何となく天井を眺める。

「あ！　おはよ～　サッくん♪」

「サッくん言うな」

相変わらずの平沢とのデフォルトキャッチボールを行うと、機を見計らっていたかのように山中顧問が口を開いた。

「どう！　咲也くん！」

「あン？」

「衣装よ衣装！　素晴らしいでしょ！」

一年時はブーツにジャケットにズボンに髑髏がちりばめられたネクタイという黒一色に染まった衣装。
二年時は黒い浴衣。

そして三年は……白生地のＴシャツだった。

山中顧問がこれ見よがしな態度で俺に見せつけたのは『ＨＴＴ』と朱色の三文字があり、周囲を囲うように枠は黄色でその中は紫のデカい星がプリントされたものだった。

「…それが今年のか？」

「そ、これなら咲也くんも着れるでしょ？　ていうかこのデザインを考えたのって咲也くんとムギちゃんなんだから着なきゃダメよ」

たまに俺と琴吹が云々と口にしていたが、このデザインをした覚えはない。
それは未だに蓑虫状態の琴吹も同様のようでポカンとした表情をしていた。

「覚えてないの？」

「全く…」
「え～っと……」

俺と琴吹に交互に視線を向ける山中顧問に、俺は記憶にはないと告げ、琴吹は必死に思い出そうと奮闘開始。

「サク先輩とムギ先輩がですか？」
「さわちゃん、それっていつだ？」

中野と田井中も未だに蓑虫状態のまま山中顧問に顔を向ける。

「ほら、去年の大晦日よ。ライブハウスでライブした後に唯ちゃんの家に集まったでしょ？　その時によ」

と、言われてもだ。
一向に思い出せない。

「サッくん、覚えてないの？」
「あぁ…」
「みんなでトランプしたのに？」

それ関係ねェだろ。

「あっ！」

すると、思い出そうと奮闘していた琴吹が声をあげた。
どうやら思い出したらしい。

「咲也君！　確かに私達がデザインしたわ！」

「あぁ？」

「唯ちゃんが放課後ティータイムのロゴマークを描いたんだけど、
咲也君が違うのがいいって紙に『ＨＴＴ』って書いたの！」

「……」

そんなことあったような…なかったような。
つうか平沢がロゴマーク何か描いたか？

「でね、私がそれじゃ物足りないから星を描いたの～」

「その通りよムギちゃん！」

「ねぇねぇ、あずにゃん。私がロゴマークって描いたっけ？」

「確か描いてましたよ」

「あぁ、アレか～　何か温泉のマークみたいな」

俺はそんなことをした覚えが全くないことに頭を悩ませているが、平沢は平沢で発端らしい事に首を傾げるばかりだ。

「とにかく、今年の衣装はこれだからね」

濃いクマがある眼を細めて笑顔を作った山中顧問はテーブルの上に六枚のライブTシャツを置く。

「咲也くん、ちゃんと着るのよ？　ていうかスタジオ代の交換条件を呑んだんだから絶対に着ること！」

ビシッと俺に指差し『じゃあ一眠りしてくるわね～』っと部室内に響かせて、ある意味嵐を巻起こした山中顧問は足取り軽やかに去っていった。

「このTシャツ、ホントにかわいいよね～」

器用に蓑虫状態のまま立ち上がった平沢はピョンピョンと跳ね、テーブルに近付く。

「三年目にして初めてまともな衣装作ってくれたよな～」

「私はさわ子先生が作った衣装全部好き♪」

「ムギ先輩らしいですね」

寝袋から抜け出す気など更々ないのか田井中、琴吹、中野の蓑虫軍団が三者三様に感想を述べた後に、平沢が何故か満面過ぎる笑みを浮かべて俺に振り向いた。

「エヘヘ～♪　サッくんとムギちゃんの共作～♪　サッくんが作った～♪」

「…ツッコみどころ満載だが、とりあえずいい加減寝袋から出ろよ」

平沢を見た後に田井中達にも視線を向ける。
暗に『お前らも』っという意味で。

「いや～　何か暖かくて中々出られないだよな～」

「冬のお布団と一緒ね～♪」

「あ、分かるよ～　私も憂に起こされても中々起きれないんだよね～」

「いっつも憂に頼ってないで少しは一人で起きてくださいよ」

「あずにゃん……」

「な、何ですか……」

「やきもち？」

「なぁ！？　違いますー！」

「大丈夫だよ！　私は毎日あずにゃんのこと想ってるから～！」

「ニャッ！　抱き付かないでくださいー！」

「あずにゃ～ん！」

「ちょっ！　ちょっと唯先輩！？　何で私の寝袋に入ってこようとしてるんですか！？」

「ぽー…」

「大変だサク！　ムギが！」

「はぁ……」

自ら寝袋から脱出し何故か中野の寝袋に進入する平沢。
頬を紅く染めて慌てふためく中野。
そんな二人を見て恍惚な表情をしスキルを発動させる琴吹。

対処方は分かっている筈なのに何故か俺に報告する田井中。

そしてまさかのカオス襲来に本日三度目となる深いため息を吐き出して、そのまま長イスに横たわる俺。

ちなみに、山中顧問が持ち込んだ嵐が発展して騒動を発生しているというのに……

「すぅ……すぅ……」

秋山だけは小さな寝息を立ててスヤスヤと寝ていた。

「呑気だ……」

ある意味大物の秋山に思わずポツリと呟いた。

現軽音部ラストライブまで後九時間二十分と迫る部室での騒がしい朝の一コマ。

第百二十話（後書き）

次話、ラストライブ突入。

第百二十一話（前書き）

最後の学園祭編その十三　ラストライブ開幕です。

第百二十一話

「唯」

「ふんすっ！」

二年以上も生徒会という堅苦しい（あくまで私見だが）組織に身を置いていることに由来する。

「澪」

「うん」

現生徒会長である真鍋の凛とした冷静かつ厳粛なその声は否応なしに、これから始まるライブに向けて高揚感を高めてくれるのは。

「律」

「おう！」

胸に抱えてある書類と俺達を交互に顔を行き交わせる真鍋から視線を外し周囲を見回す。

「ムギ」

「はい！」

俺のテレキャスとアコギ。
平沢のレスポール。
中野のムスタング。
秋山のレフティモデルベース。
田井中のドラムセット。
琴吹のキーボード。

「梓ちゃん」

「はい！」

去年の学園祭ライブでも使用した琴吹家所有のグレートの高いセパレート・タイプの三つのギターアンプ。
同じくセパレート・タイプのベースアンプ。
キーボードのスピーカー。
六つのマイクスタンド。
一つのギタースタンド。

「咲也」

「……」

「返事しなさいって」

「…手ェ上げてんだろ」

楽器及び必需品に一通り確認したら真鍋に名を呼ばれた。

場所は昨日『ロミオとジュリエット』で音響や待機場所として活用した倉庫スペースの一角。

現在ここで真鍋によるライブ前の最終確認が執り行われていた。

現在時刻午後三時五十分。

本番十分前の現在に至るまで様々な出来事があったな、と、思い返してみる。

先ずは、山中台風が去った後カオスな空間の処理を田井中に丸投げし長イスに横たわったまま瞼を閉じた。

『ーーッ！』

次に瞼を開ける切っ掛けとなったのは秋山の言葉にならない悲鳴だった。

山中顧問のデカボイス同様又しても決して快適ではない目覚しに少々ノイローゼチックになりながら身体を起こすと、ちょうど秋山の左拳が田井中の脳天に落下している瞬間の光景が飛び込んだ。

『アイタッ！　澪がぶった～！』

頭を押さえて瞳を潤ませる田井中に、荒い息遣いで肩呼吸をするほど興奮している秋山。

『…俺達に散々喧嘩すんなって言っときながら、自分はそれか？』

『違うって！　律が私が寝てる間にこんな落書きをしたんだ！』

荒ぶる感情そのままに秋山が左腕のジャージをまくり俺に見せつけてくる。

『……』

そこに書かれてあった文字に思わず絶句。

人があった。と、言っても霊長類ヒト科の人類ではなく、文字通り『人』という文字が指先から肘にかけて大量にマジックで所狭しと羅列されていた。

『…梵字みてェだな』

『もう！　咲也までからかうな！』

そんなつもりは毛頭ないが、寝起きの頭で導き出した感想は秋山にとってはお気に召さなかったようだ。

『何でこんなの書いたんだ！』

身体を俺から頭をさする田井中に向き直し事情聴取を始めるが、被疑者の怒気を存分に含めた問いに口を開いたのは容疑者ではなく天然だった。

『澪ちゃんがライブで緊張しないようにって』

特に悪びれる様子もなく至って普通に返す平沢。
更にこんなことも付け加える。

『生命線も長くしときました～』

『え？』と小さく漏らした秋山は握り締めていた拳を開ける。
掌には確かに生命線がマジックによって極太になぞられていた。

『意味不明なことすんなよ…』

『何かね、澪ちゃんの手相は色々凄いんだって！』

『…何が凄いのかが抽象的過ぎるし、またテレビの受け売りだろ』

図星だったように驚嘆の声をあげる平沢を一瞥して長イスから立ち上がった。

『全く…何でこんなことするかな…』

秋山は部室内にある水道でブツブツと文句を零しながら梵字っぽい『人』の文字を水で洗いながし、秋山の隣にはタオルを持った琴吹がスタンバっている。

顔を洗いたかったが使用中では仕方ないので、別の水道を使用しようと扉に足を向ける。

『サク、どこいくんだ？』

『…顔洗ってくる』

『そっか。じゃあ早く戻ってこいよ』

痛みは治まったのか平然としている田井中の言葉は朝から練習するのかと淡い期待感を覚えた。
しかし次に発せられる声に、期待感はきれいさっぱりに霧散していった。

『梓のクラスに遊びにいくから』

『…何故？』

そういえば中野の姿は見当たらない。
そして半分ほど開いていた扉から僅かに賑やかな音が聞こえてきた。

『だってさ、梓のクラスって喫茶店なんだぜ？　可愛い後輩が働いてる姿を見にいかなきゃならない義務が私達にはある』

などと声のトーンを落としてどこぞやの重役を彷彿させるが、俺はそれどころではなかった。

窓を見る。太陽は燦々と輝いている。
窓に近付き校庭を見下ろす。
老若男女が陽気な笑顔でそこにはいた。
ケータイを取り出す。
……十時だ。

『思いのほかだったな……』

『え？　何が？』

『別に……』

敢えてその平沢の疑問に答えるのならば『寝過ぎた』ということ。

つまり中野がいないのは既に二日目の桜高祭が開幕していることから想定し、クラスの出し物に行ったんだと推測出来る。

俺達のクラスの三年二組は昨日の『ロミオとジュリエット』が全てだったので今日は客として桜高祭を満喫出来る。

従って俺は必然的に出来る手に余る時間を有効利用し、本番まで出来る限りの練習をしておきたいが、いかんせん中野がいなければバンド練習は無理だ。

ならば個人練習をしようとしたが……

『あ、お姉ちゃん♪』

『う～い～♪　遊びにきたよ～』

『みなさんもいらっしゃい』

『へ～　良い雰囲気だな～』

『そうだな』

『これ全部、憂ちゃん達が手作りしたの？』

『はい、クラスのみんなで頑張って作りました』

『はぁ…』

敢え無く俺の思惑は大破されてしまった……

洗面を行い物置部屋で制服に着替えて扉を開けた先には平沢、田井中、琴吹が待ち構えていた。

三人衆の内二人は俺の両腕を掴み残る一人は背中を押し俺の異論など意にも介さず抜群のチームワークを余すことなく発揮させ中野や平沢妹、ついでに鈴木が属する二年一組に連行されてしまった。

ちなみに秋山は呆れたような表情を浮かべていたが、俺を助ける素振りを見せなかったところを考慮すると平沢達寄りなんだろう。

まぁ、そんな蛇足はどうでもいい。

『咲也さん』

『あン？』

『峠の茶屋』という看板を何となしに眺めつつ自主練をしたいので、

どうにかエスケープしようかと模索を始めた矢先に山中顧問が手掛けたと思われる和服を身に纏った平沢妹が声を掛けてきた。

『お腹空いてませんか？』

『…多少は』

朝メシどころか起きてから口にしたのは琴吹が淹れた紅茶だけだ。昨晩オカルト研に差し入れたおにぎりは二個残っていたが食い意地が張りに張った平沢が食べてしまったらしい（田井中談）

しかしながら、さほど胃袋は空腹を訴えてはこない。なので見上げる平沢妹にそう答えた。

『だったら軽食が出せますので食べていきませんか？』

些か惹かれる申し出に数秒思考の海にダイブし、その結果頷いた。

その数秒の内に様々な考察が交錯した。

俺を逃さまいと田井中の差し金ではないのか。コイツはそんなことをする奴ではない。本音だろう。天然な姉はたまに核心をつく鋭さがあるので妹もエスケープしようとしたのに気付いたのか等々。

結論として時には物事を柔軟に捉えることが必要だと達したし、何より腹が減ってはなんとやら、だ。

『さすが憂ちゃん。上手くサクを丸め込んだな』

『いや～　それほどでも～』

『何で唯が照れてるんだよ』

田井中、平沢、秋山の会話を受け流し暖簾が垂れ下がっている教室の扉を潜ろうと一歩踏み出した瞬間に『あ』と小さな声に足を止めた。

『先輩達、どうしたんですか？』

首を動かし右を見れば和服姿の中野と鈴木がそこにはいた。
手に近所のコンビニのマークがある袋を持っているところ、どうやらコンビニに行っていたようだ。

『遊びに来たんだよ～』

『あ、そうなんですか。サク先輩もですか？』

前半の『ですか』は納得の声質で後半の『ですか』は疑問の声質だ。
よほどコイツの中では俺がここにいるのが意外だったようだ。

『…コイツらがどうしてもって喚くから渋々だ』

拉致犯である平沢と田井中と琴吹に親指で一緒くたに指すと中野は微笑んだ。

『そんなことだと思いましたよ。でもサク先輩も来てくれて嬉しいです』

『あずにゃん！　私は？』

『もちろん、その…唯先輩達も来てくれて嬉しい…です』

若干恥ずかしそうに言う中野に、そんなことを言われてよほど嬉しかったのか平沢はかなり御満悦な様子で何故か俺の手を取る。

『行こ！　サッくん！』

『…その前に手ェ離せよ』

しかし一切聞く耳を持たない平沢は俺の発言などお構いなしにグイッと引っ張って暖簾を潜る。
手を繋がれてしまっている状態ではリードに繋がれた犬の如く、俺の意思など無関係に身体を一組に滑らせてしまう。

『澪先輩達もどうぞ。特別にサービスします！』

『そんな、気を遣わなくても良いよ鈴木さん』

『梓、私プリンプレートの特盛りで！』

『和風がコンセプトですからありませんよ』

『ぶぅぶぅ～！』

『それに特盛りなんて出来ません』

『い～じゃ～ん、ちょっと手を加えるだけなんだからさ～』

『りっちゃん、じゃあ今度持ってくるね♪』

『さっすがムギ！』

『みなさんも中に入ってください。お姉ちゃんと咲也さんが待ってますから』

その後、俺は少し遅めの朝食を胃に納め、平沢達女性陣はあんみつを味わいつつ井戸端会議に花を咲かせ、午後からの本番に向けた英気を養った。

『あ、澪先輩よ！』

『ホント！　秋山先輩だ！』

『桐島先輩もいるぞ！』

『おぉ…モノホンだ…』

『ということは軽音部御一行か』

途中でこんな戯言が賑わう店内（教室内）から聞こえてきたが、恐らく幻聴だろう。

『サッくんと澪ちゃんのファンの子達がいるみたいだね～』

『恥ずかしいから周りを見るなって…！』

『何言ってんだよ澪～　ファンサービスしてやれよ』

『咲也君のファンって男の子に多いみたいね～』

『…空耳だ』

『いやいやサク、明らかに聞こえてるって』

程なくして中野から、交代は午後からという旨を告げられ、俺達は一組から立ち去った。

そして今度こそとは思ったが、そうは問屋が卸さなかった。

『んじゃあ今からオカルト研の発表を見に行こうぜ～』

決して昨夜のオカルト研員の誘いに『はい！』と『是非！』と答えたのは社交辞令ではなかったようで、田井中の提案に賛同する平沢

と琴吹。
秋山は生来の性格から行きたくない、しかし恩があると鬩ぎ合った結果躊躇しながら小さく頷いている。

『俺は自主練してる…』

恩は昨日返したし、そもそも全く関心がないので踵を返すが平沢に止められた。

『ダメ！　サッくんも！』

『…生憎俺はＮＯと言える日本人だ』

『サクならそう言うと思ったけどさ、せっかくの学園祭なんだから楽しもうとは思わないのか？』

『…オカルトとか興味ねェのに行ったところで楽しめる筈がねェだろ。だったらギター弄ってる方がよっぽど有意義だ』

『またそうやって…』

『…行きたい奴で行ってこい。俺は部室で練習しとく』

『あ！サッくん…』

このままでは果てしない水掛け論に発展しそうだと直感し、言うだ

け言って人が溢れる廊下を歩き出す。

『ぶぅ～！　サッくんのぶぅ～！』

何やら背後から平沢のぶぅぶぅ（文字通り）と文句らしいものが聞こえたが振り返ることなく歩を進める。

しばらく人波に四苦八苦悪戦苦闘し、やっとの思いで部室への階段に辿り着いた。

（幾ら学園祭に力を入れてるっつっても限度があんだろ……）

人の多さイコール桜高祭の人気を表している。

故にそんなことを口に出さずにぼやき、階段の一段目に足を置いたのと懐かしい顔と再開したのは同時だった。

『桐島君？』

その声のした方角に顔を向ける。

『やっぱり！　久し振りね～』

そこには二年前の二月に発生した秋山ストーカー事件の犯人であり、それが切っ掛けで約四ヵ月前の音楽室にて秋山ファンの連中が集い、

秋山を疲弊させた間接的な人物。

『…ども』

うっすらと化粧をし、両耳には琥珀色のピアスが煌めき、当時とは若干髪型を変え、カジュアルな服装。
どこか大人な雰囲気を持つ曽我部先輩がそこにはいた。
……つうか大人か。俺達の二コ上で今二十歳だし。

『先輩、あんまりはしゃがないでください…』

その隣には生徒会長と秋山ファンクラブ会長の肩書きを継承し、見事に職務をまっとうしている真鍋が苦笑いを浮かべている。
どうやら曽我部先輩を接待しているらしい。

『…そういや桜高祭に来るっつってたッスね』

『去年はサークルの活動とかぶっちゃったから、今年はちゃんと行かなきゃって思ってね』

するとおもむろにケータイを取り出し二、三回ボタンを操作してディスプレイ画面を俺に見せてきた。

『コレを読んだら絶対に行かなきゃってね』

ディスプレイ画面には秋山ファンクラブの集いで最後に記念写真を撮った時の写メが映っていた。

しかし『読んだら』っと言ったことから、俺に見せたいのはこれじゃないんだろう。

【PS．今度の学園祭ライブ、見に来てください。

by．軽音部一同】

写メの上のこの文章こそがそうなんだろう。

『…お前が送ったんだったよな？』

『うん、梓ちゃんに言われて生徒会で曽我部先輩のアドレスを調べたの』

『…軽音部一同とかあるが、俺はそんなこと言った覚えはねェぞ』

『律がそうしてって。軽音部の部長なんだし』

『部長の意見が部員の総意ってか…』

『みたいね』

クスッと小さく笑う真鍋にため息が漏れそうになる。

『…つうか、先輩も律義ッスね。わざわざこんなメールで足を運ぶなんて』

まぁ、この人の場合それだけじゃないんだろうが……

『だって秋山さんを一目見たいから♪』

やっぱりな。
さすがは元祖秋山ファンクラブ会長。

『じゃあ澪に会いますか？　咲也、澪って今どこにいるの？』

『アイツなら今頃キャトられてるかもな…』

当然といえば当然で意味が分からず首を傾げる真鍋に『オカルト研にいる』と告げる。

『真鍋さん、桐島君』

すると曽我部先輩が俺達に背を向けて窓から外を眺める。

『色々考えたんだけど、やっぱり秋山さんには会わないくていいわ』

『え…？』

『……』

突然の予想外の否定の発言に真鍋は虚をつかれたように眼を見開く。

俺は眉を顰めるにとどまったが、心中はクエスチョンマークで溢れていた。

『…今さっき一目見たいっつってたじゃねェッスか』

『そうですよ、なのにどうしてですか？』

俺と真鍋の問い掛けに答えるべく曽我部先輩がゆっくりと俺達に振り返る。

『私も会って色々話したいんだけどね、私はあくまでファンなの。だから遠くから一目見るだけでいいの』

俺と真鍋は口を開かず曽我部先輩の言葉を一言一句聞き逃さまいと聞き耳を立てる。

『ファンって見守って応援するものなのかなって思って。あ、別にお茶会のことを否定してるわけじゃないの。私も参加したかったのは本音だし』

開け放たれた窓から風が入り、曽我部先輩の髪を揺らす。
手で乱れる髪を押さえながら言葉を続ける曽我部先輩。

『桐島君達、軽音部が私のために無断で講堂を使ってまで演奏してくれたし、真鍋さんがお茶会の写真を送ってくれたことがホントに嬉しくて、一生の宝物よ』

本音なんだろう。

声が弾んで満面の笑みで俺達に向き合う。

『…だから満足…ってか？』

『満足とかじゃないの。なんて言うか……そう、現状維持』

『ふーん…』

少し気持ちは、理解出来る。

俺も好きなミュージシャンを見ていたい。
知り合いにはなりたくはない。

そうなってしまっては憧れが薄れてしまいそうだ。

入手した白いピックは勿体ないと仕舞うのではなく、本来の用途で使用する。

だからあの白いピックを持ってきている。

『ごめんね？　真鍋さん。せっかく秋山さんに…』

『いえ、先輩がそれでいいなら』

微笑む真鍋に申し訳ない表情をしていた曽我部先輩も笑顔になる。

『……』

俺はその二人を一瞥し、階段を上がる。

あんなにも秋山に固執といえば大袈裟だが、瞳を輝かせていた曽我部先輩が一歩引いた態度を取った。

『色々考えた』と言っていた。

それは卒業して視野が広がったんじゃないかと、様々な事を経験して大人になったんじゃないかと。

大人になるのは年齢ではなく経験なんだと思いながら一歩一歩足を

動かした。

（昔、田井中に似たようなこと言ったっけか……）

ガチャリと部室の扉を開いた。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■

「軽音部全員準備完了っと。曲目は五曲で良いのよね？」

「あぁ…」

「『ごはんはおかず』『ときめきシュガー』『ふわふわ時間』『アシアト』『U&I』だよ！　和ちゃん！」

あれから部室で自主練をしているとオカルト研の発表を見に行っていた平沢達が戻ってきた。
ゲンナリとしていた様子からオカルト研の世界は理解不能だったようだ。

そして合流した中野と念入りにリハーサルをし、楽器を講堂に運び入れ各自ライブ衣装である『HTT』Tシャツに着替えて（俺は下は制服のズボン、平沢達は制服のスカート）ブレザーを羽織り講堂へ移動。

「あ、終わったみたいですね」

講堂では桜高祭のパンフレットによると、お笑い研究会なるものの大喜利がステージ上で展開されていたが中野の言う通り幕引きになったようで、拍手に押されるようにお笑い研究会の連中が俺達のいる倉庫空間に足早にやってきた。

「いよいよ軽音部の番よ」

「よし！　行くぞ！」

真鍋が促し田井中が俺達を見て、たまに見せる部長『らしい』らしさで先導する。

「「「うん！」」」
「はい！」
「……」

それに対して平沢達は頷き、俺は小さく首肯する。

真鍋や他の生徒会役員並びに学園祭実行委員に手伝ってもらい、楽器類とアンプを幕が下りているステージに運ぶ。

ブレザーを脱いで倉庫空間に置き、各自楽器のチューニングを開始。

「そういえば咲也」

「あン？」

「さっき和から聞いたんだけど、曽我部先輩に会ったんだって？」

テレキャスのジャックにシールドを繋ぎアンプにも繋ぐ。
そしてチューニングの作業としてペグを微調整していると秋山がベースを構えて俺に振り向いた。

「え、そうなのサッくん？」

「…まぁな」

「だったら澪に会いに来る筈なのに、私達は会ってないぞ？」

「…あの人は大人だからな」

「え？　どういうことですか？」

「…いつか俺もお前らも経験すんだろ」

『？』

まるで事前に打ち合わせでもしたように揃って首を傾げる平沢達。

こういうのは言葉では中々に言い表せない。
感じるしかないのだろう。

「…それより今はライブに集中しろ」

「あ、そうだな。みんな準備出来たか？」

俺の言葉に頷いた田井中が一人一人俺達を見回す。

「バッチリだよ」

「私もです」

「私も～」

「私も」

「サクは？」

「…言わずともがな」

「私も準備完了…っと」

俺達が田井中に視線を送ったのと同時にそれは聞こえてきた。

『さぁ、みなさんお待ちかねの桜高祭の目玉イベント、『放課後ティータイム』の演奏です』

真鍋のナレーションが講堂全体に流れたのは。
それに反応して小さな歓声と拍手が起こった。

「ハードル上げるなよ…和…」

「アイツなりに盛り上げようとしたんだろ…」

結果としてプレッシャーを平沢達に与えてしまっているが。

「ねぇねぇ、そういえば学園祭ライブも、もう三回目だよね」

「そうだよな～　二年前は初めてで緊張したっけ」

「二年前……」

「地雷踏むな…」

平沢の発言に田井中が懐かしむようにしみじみ言うが、それは秋山のトラウマである『桜高祭の悪夢』を呼び起こすスイッチだったようで、顔面蒼白になり小刻みに震え始める。

「だ、大丈夫よ澪ちゃん！　もうあんなことは起きないから！」

「そうだよ！　二度あることは三度あるって言うし！」

「フォローになってませんよ！」

琴吹のフォローを潰した平沢に中野がいさめるように声を張る。

「はぁ…」

集中しろと言うのにこの有様。ため息だって自然に漏れてしまう。

……だが、下手に緊張するよりはマシだ。

「…お前らに言っとくことがある」

「ほい？　なぁにサッくん？」

緊張感に欠けるがこれでも本番になると中々に様になるのが不思議だ。

平沢に秋山に田井中に琴吹に中野。

纏まりがあるようで実はなかったり、ないようであったり……

個性的過ぎる色は重なり合い、一つになると彩色豊かな音色になる。

「…とある人物の言葉でこんなものがある。後悔しないで精一杯」

「「「後悔しないで…」」」

「「精一杯…」」

「後先のことは考えなくていい…　瞬間瞬間を楽しめ…」

その音色の持ち主達は互い互いに顔を見合わせる。

「「「うんっ！」」」

「おうっ！」

「はいっ！」

そして一斉に力強く頷いた。

「サッくんもだよ！」

「そうですよ、サク先輩もです」

「全員で楽しまなきゃ意味ないしな」

「みんな一緒に♪」

「笑えとは言わないけどさ、サクも楽しくギター弾かなきゃな！
ギー子が悲しむぞ～」

平沢が俺の手を取り、中野が俺を見上げ、秋山が微笑み、琴吹がニコニコと、田井中が朗らかに笑い掛ける。

「……」

俺は五人をそれぞれ一瞥し……

「あぁ…」

と、小さく首肯した。

『それでは軽音部、放課後ティータイムによるライブです』

現在時刻午後四時ジャスト。

足元からゆっくりと幕が上がっていき、ラストライブの幕も開幕を告げた。

ワァァァッ!!

パチパチパチパチッ!!

第百二十二話（前書き）

最後の学園祭編その十四　ラストライブ序幕中の序幕です。

ごめんなさい。

まだまだラストライブは始まりません……

第百二十二話

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

綺麗に咲いていた桜の花弁は全部散っちゃって、代わりに緑色の葉っぱが風にゆらゆら揺れてる。
春から夏に季節が変わろうとしていたある日の公園。
そこのベンチに私と和ちゃんは座ってた。

『あ、ひこーき雲……』

中学三年生になってもう一ヶ月が経った。
最初は最上級生だ～って何かワクワクして喜んでたんだけど、今まで以上に勉強の難易度が上がってちんぷんかんぷんぷんぷんぷん……な、今日この頃。

『唯』

『……ほぇ？』

『溶けてるわよ』

『……ほぇ？』

『アイス』

『……アイス？』

『唯の右手にあるアイス』

和ちゃんに言われて右手を見ると、もう少ししたら手にかかちゃうほど、学校の帰り道にあるコンビニで買った濃厚牛乳アイスがドロッと溶けてた。

『わわっ！』

慌てて舌でペロっと舐める。

何となく青空を見上げてたら、見つけた飛行機雲をボーッと眺めてたのがいけなかったなぁ。

（少し期待してたんだけどなぁ～……）

三年生になったら何かが変わるんじゃないかなって思ってた。

でも、変わったのはクラスのみんなと授業の内容。

私は夢中になれる何かを探してた。

クラスのみんなは部活や趣味の話で盛り上がってて羨ましかった。

私は運動が苦手だから部活は出来ないし、憂みたいに家事が得意なわけでもないし、和ちゃんみたいに成績優秀でもない。

何の取柄もない私は今までボーッと過ごしてきた。

でも、このままじゃまたボーッと過ごしてしまいそうでヤだった。

だから期待した。だけど変わらなかった。

（高校生になったら……）

気が早いかもだけど、きっと高校生になったら夢中になれるものが見つかる。

それに高校生だもん。

何かしなきゃいけないってきっと思えるよね。

『すごいよ！　私、感動しちゃった！』

そして高校生になった私は夢中になれるものを見つけた。

それは音楽。ギター。

何かしなきゃいけないって思った私は軽音部に入部したんだぁ。

でもでも『軽い音楽』って書くから『きっと口笛とかしかしないよね～』って軽い気持ちで入部したんだけど、実際はギターとか弾いて演奏するものだった。

何の取柄もない私はもちろん今までギターなんて触ったこともなか

った。
だから私の想像と全然違った軽音部でやっていける自信がないから退部しようとした。
だけど、澪ちゃんとりっちゃんとムギちゃんの演奏を聴いて『私も…あんな風に…』って感動してやっぱり軽音部でやっていこうと思えた。

私のギターを買うためにみんなとバイトしたり、私と一緒に入部したサッくんにギターの弾き方を教えてもらって、ムギちゃんの別荘で合宿して、初めてみんなで……音合わせって言うんだっけ？　それをしたら飛び跳ねちゃうくらい感動しちゃった。

ボーッと過ごした今までが嘘みたいに毎日がキラキラ輝いて楽しくって、軽音部って居場所が大好きで、サッくんと澪ちゃんとりっちゃんとムギちゃんが大好きで、音楽とギターって楽しくって……

『サッくん、ここの部分なんだけど…ってどうしたの？　耳押さえて』

『…いや、なんでもねェ…』

その……んと……サッくんと一緒にいれる時間が嬉しくって、何かドキドキして……胸がポカポカ暖かくて……

『…で、どこだ？』

『ここ、この部分』

十月にある桜高祭っていう学園祭で私達は初ライブをするって澪ちゃんが言ってた。

ライブってどんな感じなのか分かんないけど、きっと楽しいよね！

だって初めてみんなで音合わせして、こんなに楽しいんだもん！

私がやっと見つけられた夢中になれる音楽の時間がいつまでも続くといいなぁ～

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

いつの間にか見入って、鼓動が高鳴った。

最初は全然ノリ気じゃなかったんだ。

中学二年生の春の日。土曜日の休日のことだった。

事前に約束してないのに律が私の家に遊びにきた。

まぁ、約束なんてしてなくても律が突然やってくるなんて日常茶飯みたいなものだから、追い返す理由もないし、ちょうど私も暇を持て余してたから律を家に上げた。

『何するんだ？　私も暇してたから遊べるものなんてないぞ？』

『それにしても、随分と様になったよな～』

『え？　何が？』

『澪の口調が。あんなに上品だったのに～♪』

悪戯っ子みたいに笑う律に『そうしたのはお前だろ！』っと私は怒鳴った。

律と初めて出会ったのは小学校四年生だった。

あの頃の私は、今は大分マシになったけど、今以上に恥ずかしがり屋で物静かでおとなしくって目立ちたくなくて他の子と話すのも関わるのも苦手だった。

だから私は小学校の休み時間の殆どは読書に耽って自分の殻に閉じこもってた。

そんな私の殻を無理矢理破ったのは律だった。

律は活発な女の子で当時のクラスの人気者。

真逆な性格の持ち主が何で私に声を掛けたのかって以前聞いたら『澪だけいつも一人で寂しそうだったし、私の直感が澪は何か面白そうなやつだから』って笑ってた。

律と接する内に私も律に心を開いていった。

でも、まだクラスでまともに話せるのは律だけで男子なんて以ての外だった私に、律が自信を持たせるために喋り方を変えようって提

案してきた。
語尾に『だぜ』とか『だ』とか付けろって……
それを鵜呑みしてしまった当時の私は……今に至る……

『そんなことを言いにきたんなら相手してやらないぞ』

『そんな冷たいこと言うなって。今日はコレを一緒に観ようと思ってさ』

そう言って鞄から取り出したのはＤＶＤ。
パッケージには『ザ・フー』というアルファベットの文字があった。

『これさ、お父さんが会社の人から借りたらしいんだけど、何か凄いみたいなんだ。せっかくだから澪と観ようと思ってな』

『あ、別に今のダジャレじゃないからな』って言う律は私の部屋のＤＶＤプレーヤーにそのＤＶＤをセットしていく。

私は正直、興味はなかったんだ。
音楽を聴くのは良いけど、洋楽は全くと言っていいほど聴かないし、ましてや『ザ・フー』なんて知らないから。

でも、せっかく律が持ってきたんだから仕方ない。
そんな理由で私は律の隣に座ってＴＶに映るライブ映像を興味なさげに観始めた。

だけどそれも一変したんだ。

日本語じゃないから何を歌っているのか分からないけど、全身全霊で何かを訴いかけるように歌うボーカル。

頭を激しく振りながら荒々しく、時には眼をつぶって繊細にギターを弾くギタリスト。

身体をリズミカルに揺らしてリズムを刻んだり、かと思ったから飛び跳ねたりしてベースを弾くベーシスト。

ただがむしゃらに身体全体を駆使して躍動し、時々何かを叫びながら激しくドラムを叩くドラマー。

それによってかなり盛り上がる観客。

私も律も食い入るように惹かれるように演奏するこの人達を見る。

そしてライブが終わった時には、私はポツリと『凄い……』と呟いた。

『これだよこれっ！　バンドやろうよバンドっ！』

律は興奮したように私の肩を掴んで身体を揺する。

それから私は音楽にのめり込んでいったんだ。

律が帰った後、ネットで色んなミュージシャンのことを調べたり、パパが大量に持ってるＣＤを借りてジャンルを問わずに様々な音楽を片っ端から聴いていった。

『あ、あ、あの！』

『はい』

『こ、こ、このベースください！』

別に律にバンドを組もうって誘われたからじゃないけど、自分でも演奏がしたいと思った私はお小遣いを貯めて地元にある楽器店『１０ＧＩＡ』で左利き専用のベースを買った。

律はギターをやれって言ってたけど私はベースがいいんだ。

ベースってあんまり目立たないから私にもってこいだし、何よりあのライブで一番に眼がいったのはベーシストだったから。

何故だか分からない。

だけど……うん、そうだな、直感だよ。

律が私に話しかけたのがそうだったように私もあのベーシストに眼がいったのは直感だったし、このベースを選んだのも直感だったんだ。

今は律と二人だけだけど、いつかバンドを組んでライブをしてみたいな。

絶対に楽しい筈だから。

でも今はまだライブどころかバンドだって組めない。

私達が通う城南中学校には軽音部なんてないし、音を扱う部ってい

ったら吹奏楽部が関の山。

本格的にやるんだったら高校からだな。
確か近所の桜高って軽音部あるって聞いたことあるし、それに女子高だから、男子と話すのが苦手な私には理想郷みたいな高校だ。

実は軽音部の他に文芸部にも興味あったりする。
どっちも魅力的だから掛け持ちでもしようかな？って欲張りだな……

とにかく、受験までまだまだ時間があるから、それまではベースの練習をしておこう。

うん！　決めた！
高校は桜高にしよう！

『澪って桜高受験するんだろ？』

『うん。あそこは女子高だからな。そういう律も桜高受験するんだろ？』

『そうだけどさ、桜高って来年度から男子を受け入れて共学になるんだって』

『え？』

『あ、それよりもさ～！　って澪？』

別に男子は嫌いじゃないんだ。

ただ、ちょっと怖いっていうか……

『ほら澪！　いつまで笑ってんだよ、教室行こうぜ？　もう用事は済んだんだろ』

『クスッ　あぁ、そうだな。桐島君も行こう？　じゃないとＨＲに遅れるしな』

だけど不思議なことに咲也だけは自然と喋れた。
正直、第一印象はあんまりよくなかった。
だって、怒ってるような表情をずっとしてるし、言葉もちょっと悪いし……

でも、唯と咲也が軽音部に入部した次の日の朝。
部室で咲也と律のやり取りがおかしくって、笑ってしまった。
それからは咲也に変な偏見を持たなくなった。

初めてだったんだ。
男子と自然に話せて、友達になれて。
それが嬉しかった。

だから、軽音部の初ライブで緊張で歌えなかった私に時間稼ぎしてくれた咲也にも嬉しかった。

私が歌ってベースを弾いて、律がドラムを叩いて、唯と咲也がギターを弾いて、ムギがキーボードを弾いて、みんなで演奏。

やっぱり楽しいな！

音楽って楽しいな！
バンドって楽しいな！
みんなと演奏出来て最高だ！

いつまでも、いつまでも、軽音部のみんなと演奏出来たらどれほど幸せなんだろうな……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　田井中　律】

感動した。
感激した。
興奮した。
気持ちが高まった。
自然に身体が動いた。
澪の肩を揺すった。
きっと澪も私と同じ気持ちだから共有したかった。
口が動いた。
澪が小さく頷いた。
両手を高く上げた。

『やるぞーーっ！！！』

澪に殴られた。

はしゃぎ過ぎたな～……

バンドを組むと決めた私は、次の日の日曜日。
澪と一緒に『１０ＧＩＡ』に走った。

お目当てはもちろんドラム！
『ザ・フー』のライブを観てから私はすっかりとりこになっちゃって、家に帰って聡の遊びの誘いも断ってネットで『ザ・フー』のことを調べた。
特にドラマーの『キース・ムーン』を念入りに。

調べれば調べる程キース・ムーンは無茶苦茶な人物で思わず『マジで……』と零してしまう程だ。

でもドラムを叩いてる時はスゲーカッコよくて、純粋に憧れた。

何て言うか……う～ん……とにかくカッコいいんだ！

『あれ？　澪、そっちベースのコーナーだぞ？　ギターはあっちだぞ』

『分かってるよそんなこと。ていうか私はベースをやりたいんだ』

『ギターの方がカッコよくない？　ジャジャーンって激しく弾いてさ』

『それは偏見だ。だったら律がギター弾きなよ』

『私はドラムって決めてるからな！』

『私もベースって決めてるんだ』

まぁ、別に無理強いはしないし、澪がやりたいんなら私は口出しはしない。

てか、強制されたらつまんないよな。

ベースコーナーに向かって行く澪の背中を見届けて、私もドラムコーナーへレッツゴー！

『た、たけ～……』

分かってたけどさ、やっぱりドラムは高価だった。

とてもじゃないけど、今の手持ちのお金じゃ買えない。

しかし！　諦めるわけにはいかない！

火がついた私は誰にも止められないぜ！

私が一目見て気に入ったドラムはヒップギグという小さめのドラム。

幸いにも中古だから頑張って小遣いを貯めれば買える！

『でもせっかく来たんだから何か買おうかな～』

ドラムの備品を物色しているとスティックがあった。

『これなら買えるな』

スティックを購入してベースコーナーに行ったら澪が肩を落としてた。
やっぱり澪もベースはまだ買えなくて、『だったら小遣い貯めようぜ』って私が言ったら『そうだな』っと澪から返ってきた。

それから色々と頑張った。
まずはお母さんに小遣いアップを頼んだけど、敢え無く却下。

『ちぇ、ケチ～』

次は買ったスティックでドラムを叩く練習。
雑誌や中学の教科書を積んで私なりのドラムで思い切り叩いた。

スティックを強く握り締めるのは間違いだって知らなかったから掌にマメが出来た。
だけど、これは私が頑張った証拠だって思ったら嬉しくなった。

私は自分で言うのもなんだけど、飽きっぽいし長続きしない。
だからお母さんにドラムを買いたいから小遣いを上げてって頼んだのに、どうせ長続きしないっていう理由で却下された。

でも、私は本気なんだ！
本気でドラムを叩きたいんだ！

本気で澪とバンドを組んでドラマーになるんだ！

そんな決意を秘めて、ひたすら頑張った。

聡に練習してる音がうるさいって言われても毎日練習した。

欲しい物を我慢して小遣いを貯めた。

先に澪がベースを買って羨ましかったけど、私も早くドラムが欲しくて努力した。

『なぁ、律』

『ん～？』

『何で配送しないんだよ？　重いし目立って恥ずかしいじゃないか……』

『しょうがないじゃん。配送するとお金かかるし、ドラム買ったからそこまでお金ないしさ、値切った手前配送なんて言えないじゃん』

『もう……』

努力が実ってやっと念願のドラムセットを購入した。

澪に手伝ってもらって二人でドラムセットを抱えて持って帰ってる時に澪が文句を言ってきた。

確かに配送を頼んだ方が楽なんだけど店員さんを泣かせる程値切りに値切ったから、その上配送なんてそんな傍若無人なことはさすがに心苦しい。

だから私達は自力でドラムセットを運んでる。

確かに澪の言う通り重いし、通り過ぎる人達が私達を見ていく。

でも、私は念願のドラムが手に入ったから有頂天になってるし、この重みは幸せの重みだから全然気にならない。

それから二年後。

私達は桜高に入学して廃部寸前だった軽音部を私の見事な手腕で復活させた。

そして迎えた初ライブ当日。

ハプニングがあったけどサクが上手くフォローして私と唯とムギで澪の緊張をほぐして、ライブは絶好調だ！

あの日。

私と澪が音楽に出会ったあの日。

『ザ・フー』みたいにスゲー演奏はまだまだ出来ないけど、観る側から演る側になった私は確かな高揚感を感じていた。

飽きっぽくて長続きしない私が毎日毎日ドラムの練習して……

『『みなさ～ん！　今日は私達のライブに来てくれてありがと～っ！』』

今はドラム叩いて、軽音部の部長をして、更にはＭＣをするときた

もんだ。

『『ギター&ボーカル！　副部長！　桐島…サークーヤー！』』

確かに感じた高揚感。
これはずっと感じてたいな。

だったら！　何回でもライブをしてやる！
軽音部のみんなで何回も何回もだ！

そのくらい、望んだって良いよな？
楽しいんだからさ……

『『それじゃあ次の曲…って言っても最後の曲なんですけど…まぁ、いいや！　この曲を聴いてください！『虹の風景』！！』』

あれ？　もしかして私ってＭＣ下手？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　琴吹　紬】

決して嫌だったわけじゃないの。

でも憧れちゃったらどうしようもないの。
私は自分の気持ちに正直でいたんです。

『桜ヶ丘高校にいきたいんです！』

初めての反抗でした。

父が勧める名門と名高い女子高ではなく、来年度から共学になる一駅隣にある桜ヶ丘高校を受験したいと歯向ったのは。

私は『普通』というのに憧れを抱いてました。

中学校一年生の時でした。
テレビから流れる学園ドラマを眼にして、私の中で『普通』という芽が顔を出しました。

普通にお友達と遊んだり、ふざけたり、学校帰りに寄り道したり、何の変哲もない日常を描いたドラマ。

中でも私が釘付けになったのは放課後になったら部活をするというものです。

部員のみんなと目標に向かって頑張っていくシーンは本当に感動してワクワクしたのを昨日の事のように覚えてて脳裏に焼き付いたまま。

決して今の環境が嫌とかじゃないの。
父も母も執事の斉藤も私を大事に大切に想って思ってくれてるのは

肌で感じる程だから。

でも夢を抱いてしまったから。

桜ヶ丘高校に進学して『普通』に過ごしたいって。

『普通』にお友達と遊んだり時にはふざけたり、寄り道したり、部活をして笑い合ったり……

『あの～　見学したいんですけど』

『軽音部の！？』

『い、いえ、合唱部の……』

『軽音部に入りませんか！？』

『あ、あの、私は合唱部に……』

『今部員が二人しかいなくって！　お願いします！　後悔はさせませんから！』

『コラ律っ！　そんな強引な勧誘したら迷惑だろ！』

父の顔は驚いていましたけど、すぐに優しい笑顔で私の頭を撫でてくれました。

『紬が初めてわがままを言ってくれて嬉しいよ』と父は笑って『そうですね。この娘は小さい頃から聞き分けがよ過ぎる娘でしたから、少しはわがままの一つくらい言って欲しかったですから』と母も笑って私を抱き締めてくれました。

そして無事に桜ヶ丘高校に進学した四月。
私は早速部活をしてみようと勧誘のチラシを眺めました。
あのドラマの部活はバレー部で、運動部に入部しようかなぁって考えましたけど私は体力と持久力に難があるので、文化部に決めました。

私の特技……って言うと少々語弊がありますよね。
得意な事はピアノなのでそれを活かせる部にしようと眼に止まったのは合唱部でした。
あまり歌には自信はありませんけど伴奏なら私も出来ると思いました。

放課後になって早速、合唱部が練習している音楽室に足を向けたら、そこにいたのは二人の女の子。

事情はよく分からなかったけど、今は廃部になってる軽音部の活動を再開しようと模索しているみたいです。

『それじゃ、今日はもう遅いから私は帰るな』

『澪っ！！　あの時の約束は嘘だったのかっ！？』

『え……？』

『私がドラムで澪がベースで……！　ずっと…ずっとバンド組もうってっ！！』

『律……』

『それでプロになったらギャラは7：3ねって♪』

『捏造するな！』

『ぷっ！　クスクス……』

『『ん？』』

『何だか楽しそうですね。キーボードくらいしか出来ませんけど、私で良ければ入部させてください』

『マジで！？』

『はい♪』

『やったーっ！　あ、私はドラム担当の田井中　律でこっちがベース担当の秋山　澪。えっと……』

『琴吹　紬です』

私の探していた『普通』の一コマがここにありました。
お友達と、この場合、澪ちゃんとりっちゃんに当て嵌まって、二人のやり取りがおかしかったんです。
髪の毛を七三分けにしたりっちゃんに澪ちゃんがスパ～ンって叩いて。
憧れてた『ふざける』っていう日常がありました。

『唯ちゃん、咲也君。紅茶は熱いのと冷たいの、どっちがいい？』

『私、熱いの！』

『……』

『咲也君はどっち？』

『あぁ？』

『熱いのが好きか～　冷たいのが好きか～』

軽音部に入部した私はりっちゃんと澪ちゃんと協力して勧誘をしました。
その結果、唯ちゃんと咲也君が入部してくれて、晴れて軽音部は活動を再開することが出来たんです。

五人が部室に集まると賑やかで笑顔が絶えません。

『…最悪、山ん中で野宿でもするか？　近所迷惑にはならねェし』

『えぇ～　ヤダよ～』

『山の中でやったらアンプの電源とかどうするんだよ？』

『…ンなもん知るか』

『だから言い出したのサクじゃん……』

『ム、ムギ？』

『はい？』

『別荘とか……』

『ありますよ♪』

『『『あるんかい』』』

それに合宿なんて夢みたいな事が出来るなんて……幸せ～♪

唯ちゃんとりっちゃんは海で遊ぶって嬉しそうに言ってて、澪ちゃんと咲也君はまだ一度も音合わせをしたことがない私達を危惧してるみたい。

その二つの事が同時に出来るなら、みんなで一緒にいれて楽しく笑い合えるなら、私は喜んで合宿地を提供するわ。

みんなといれる掛け替えのない『普通の日常』がいつまで続いて、軽音部って大切な居場所にずっといたいって思った私は、もしかしたらわがままなのかもしれません。

それほど……大切なんです。

みんなと、軽音部が。

『でも…負けないと思う。私達なら』

『ムギ……』

『ね？　咲也君』

『…それはこれからの頑張りようだ。このままで終わるか、その演奏に追いつき追い越せるか…　まぁ、現状じゃ無理だな』

『もうっ、そこは『あぁ、もちろんだ！　俺達ならやれるぜ！　がんばろう！！』って言うところなのに～』

『…生憎と俺は現実主義者で、正論を言ったまでだ』

『そうなんだけど～……』

『…俺達ならやれるんだろ？　だったらこの合宿で力つけて、学園祭ライブを成功させねェとな』

『そうよねっ！』

学園祭ライブ……一体どんなステージになるのかな？
何かワクワクしてきた～♪

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

キラキラと輝いている街中で出会ったサンタクロースは、実は私が春から通うことになった桜高の先輩だったからびっくり。

その先輩に暇なら軽音部を覗かないかって言われたけど、私は軽音よりジャズに興味があったから、とりあえずその場は先輩に頭を下げて私と友達の舞はジャズ研の部室に向かった。

けど、こんな言い方は失礼だと分かってるんだけど、ジャズ研は何だかジャズと程遠い違う音楽に……例えるならブラスバンドみたいな印象を受けた。

両親がジャズミュージシャンだからかもしれないけど、私の耳は肥えてるみたいで本物のジャズじゃなかった。

『あ、ねぇねぇ』

『え？　私？』

『そうそう。今一人？』

『え、う、うん』

『だったらさ一緒に新歓見にいこうよ。あ、私、鈴木　純』

『あ、中野　梓です』

『純ちゃ～ん』

『あ、ちょうど良かった。あの娘は平沢　憂。私の友達』

『ごめんね？　ちょっと用事があって』

『いいよ。それよりこの娘と友達になったよ』

『あ、確か中野さんだったよね？』

『う、うん』

『改めまして。私は平沢　憂です』

『中野　梓です』

『よろしくね』

『こ、こちらこそ。平沢さん』

『ほら二人とも、早く行くよ～』

『行こ？　梓ちゃん』

『うん』

そんな折りに新入生歓迎会で私は運命の出会いを果たすんだよね。

それはあの先輩が言ってた軽音部。

変な着ぐるみを着て勧誘のチラシを配ってたり、音楽室に続く階段から猛スピードで悲鳴をあげて女の先輩が先生だと思う人と一緒に降りてきたり……

そんな意味不明な光景を目の当たりにした私は『軽音部なんて……』って偏見を抱いてたけど、新歓のステージ上にいる軽音部の先輩達の演奏を聴いたら一変した。

『ほら！　純ちゃん！　凄いでしょ！』

『うん…ホントに凄い…　昨日はあんなにグダグタだったのに、別人みたい……』

『エへへ♪　梓ちゃんも……』

『わぁ～……』

『クスッ　ねぇ純ちゃん。やっぱり軽音部に入部しない？』

『あ～……ごめん。私もうジャズ研に入部届出しちゃった……』

『そ、そうなんだ……』

『憂は？　入らないの？』

『私は家の事が忙しいから……』

『そっか。そうだったね』

その演奏は私を軽音部に入部させるのに十分な動機で、それほど感動したんだよね。

でも、実際入部したら軽音部は普段はだらけてばかりで、全然練習なんてしなかった……

『あれ？　サッくん？』

『ぁ……』

『なんだなんだ？　最近なんだかリアクション薄いな～サク』

『……』

『り、律』

『んぁ？』

『さ、咲也は今から曲作りするんだからさ、邪魔しないでやろう、な？』

『別に邪魔してるわけじゃないんだけど……』

『いいからコッチに来い、唯も』

『う、うん』

『あの……いいんですか？』

『ん？　何がだ？』

『その…練習しないで…こんな事してて……』

『梓の言う通りだ。咲也しか部活らしい事してないじゃないか』

『う～ん……　そうだな……よしっ！』

『練習するんですね！？』

『その前にティータイムだ！　ムギ！　よろしく！』

『……え？　ごめんなさい…ぼーっとしてて……』

『ムギちゃん大丈夫？』

『うん、大丈夫よ唯ちゃん』

『練習は……』

私が思い描いた軽音部と全然違って、本当に進退を考えていたらサク先輩に変化が起きた。

怒ってた。

一切私達に見向きも言葉を発することもしないで黙々と作曲をし続けるサク先輩。

そして私は決意した。

退部しようって……

外バンを組んでしまおうって……

『私…分からなくって……』

『あずにゃん…？』

でも、ライブハウスに別のバンドを観に行ったけど、新歓ライブの時のような感動は全く感じる事は出来なかった。

軽音部にいたいのか、それとも違うバンドを組みたいのか、もう気持ちがゴチャゴチャしてどうしていいのか分からなくって、私は先輩達の前で涙を零した。

『…おい中野』

『…ヒック…は…はい…』

『『どうしたらいいのか分からない』なら、『どうするべきか』を考えろ…』

『え……』

『…お前はこのまま軽音部に『いたい』のか『いたくない』のか…』

『私は……』

『あずにゃん。私は…私達はあずにゃんと一緒にいたいよ？　あずにゃんだけじゃなくて、サッくんも澪ちゃんもりっちゃんもムギちゃんとも一緒にバンドをやっていきたい』

『…唯…先輩』

『だって私達はこの六人で『桜高軽音部』なんだもん』

『梓がどうしたいのか…迷ってるなら、私達がその答えを見つける手伝いをしてあげる』

『澪先輩…』

『梓は私達のライブを見て感動したんだろ？　だったら演奏を聴かせてやる！』

『律先輩…』

『梓ちゃん、私ね？『ムギ先輩』って呼ばれて嬉しかったの。だから…今度は私達が梓ちゃんを喜ばせたいな』

『ムギ…先輩』

『…お前がどうしたいのかは…俺達の演奏を聴いて考えろ』

『…サク…先輩…』

先輩達の言葉が、演奏が胸に響いて、私が間違ってたって思い知った。

あのライブで感動したのは先輩達が演奏したからだもん。
それを別のバンドに求めた私はバカみたいって。

それからは色々あった。
ムギ先輩の別荘で合宿したり、澪先輩と律先輩が喧嘩しちゃったり、唯先輩が風邪で倒れちゃったり。

そんな苦難を乗り越えた私達は、私にとっては初めての、先輩達にとっては二回目の学園祭のステージに立った。

唯先輩、そんなに泣かないでください。

確かにライブ当日にギター忘れるなんて、サク先輩も言ってますけどギタリストとして前代未聞ですけど、ちゃんと間に合って六人で演奏が出来るんですから。

だから泣かないで、歌ってください。

私も感動した演奏を講堂に響かせてください。

『もう一回っ！！』

来年はちゃんと最初から六人全員でライブをしたいなぁ。

『りっちゃん！　もう一回やろう！』

『おうっ！　いくぜーっ！』

『唯！』

『あ、和ちゃん！』

『もう時間よ！』

『え？　えぇぇ～！』

『終わり良ければ全て良し。…ンなわけにはいかねェか…』

『あはは…　そうですね』

来年はどんなライブになるんだろう？
でも、きっと最高のライブになるんだろうなぁ。

こんなにも楽しみにしてるなんて何か子供っぽいけど、そのくらい『放課後ティータイム』は凄いバンドなんだもん。

ついつい夢見ちゃいますよ。

ずっと一緒に、って……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

自分の性格は自分が一番の理解者だ。

そりゃそうだ。

自分自身が理解せずに誰が理解するというのか。

故にこんな思想を抱いている俺は間違っていないだろう。

『…軽音部？　そんなもんがあんのか？』

『あぁ、あるぜ。さっきポスター見たし。何かギタリスト募集してみたいだし。ちょうどいいじゃん、お前入れば？　ギター弾けるしさ、更にめちゃ上手いし』

『…別に俺はバンド組みたいわけじゃねェし』

面倒だろ。

この一言で全て片付く。

俺は音楽番組に出演し演奏する、とあるミュージシャンに憧れギターを始めた。

そこまでだ。

あくまで俺のギターは趣味の一貫であり、決して将来音楽で生計を立てようなど大それた望みを抱いてはいない。

修司の店でバイトをして金を貯めてテレキャスを購入したのもアコギ以外のギターの世界を広げたいからであって、バンド云々等ではないとはっきりと言える。

『それじゃあ自己紹介します！　平沢　唯です！　よろしくね～』

しかし、コイツと知り合ってから俺がコツコツと作り上げた世界に罅が生じてしまい、気が付けば俺は軽音部の一員となってしまっていた。

少しは高校生になったのだから部活をしなければならないのかもしれない……と思ったが、実行には移そうとは思わなかった。

怠いし面倒だ。

この一言で全て片付く。

興味がなかったバンドだったが、合宿で初の音合わせで狭い世界で納得していたんだと思い知った。

ギター、ベース、キーボード、ドラムの四重奏が加わると実に面白い音になる。

この時初めてだったのかもしれない。

俺が本当の意味で軽音部に入部したのは。

が、しかしだ。

面倒、怠いと思いながら過ごし、蓋を開けたら何気に俺は軽音部やバンドに尽力を尽くしている気がする。

正式に部とするなら申請用紙に必須事項を記入し提出せよ。
足りないもの。顧問と副部長。
人の意見も聞かずに副部長に任命される。

バンド名を話し合って決めよ。

業を煮やした顧問が勝手に命名し、俺を除く部員は納得し、生徒会のホープが善は急げとさっさと部室から退散。
それにより『放課後ティータイム』など、ある意味ウィットに富んだバンド名になったかと思えば、空中分解寸前のバンドのために奔走したり……

ため息が癖になる程に精神的に疲れる部だと思う。

一筋縄ではいかない曲者揃いの連中を日々相手したら、辛労も報われない。

『俺は…アイツら以外の連中とバンドをやるなんて、そんな気はねェ』

だがしかし。

大野の誘いを断ったということは……とどのつまりそういうことなんだろう。

居心地のよさを感じる俺は、らしくない。

そんなことをおくびにも出さず、変に気負う必要もない。らしくいこう。

登山のゴールは頂上だが、その途中の景色も楽しもう。

『後先のことは考えなくていい…　瞬間瞬間を楽しめ…』

言葉に責任を、副部長としての責務を果たすとしよう。

左手にはテレキャスのネックを、右手には白いピックを。

歓声と拍手が耳を抜ける。

幕が上がるにつれて観客席が徐々に露わになってくる。

「ほぇ？」
「え？」
「ん？」
「あれ？」
「え…？」
「……」

よく驚愕した表現で鳩が豆鉄砲をくらった顔とあるが、今の平沢達は正にそれだ。
かく言う俺も眉間に皺を寄せ若干心が騒いだ。

ワァァァッ！！
パチパチパチパチッ！！

事前にそんなことを聞かされず、歓声と拍手を送る観客達全員が『ＨＴＴ』Ｔシャツを着用していたら、恐らく誰であろうと目が点になるだろう。

そう、観客達全員が山中顧問手製のライブＴシャツを着ている。

その観客の中には見覚えありまくりな連中の姿も。

「お姉ちゃ～ん！　梓ちゃ～ん！」

「憂、ちょっとはしゃぎ過ぎ……」

平沢妹と鈴木。

「秋山さ～ん！　桐島く～ん！」

曽我部先輩。

「ん？　どうしたんだね？　尾栗君」

「や、オレもさっき演劇部としてステージに立ったのに、こんなに盛り上がらなかったなっと思ってちょっとヘコんでるだけッス……」

「こーんな風に騒いでいいんなら、やってたけど？」

「や、それは勘弁ッス」

伊庭に尾栗に青梅。

「おーいっ！　ほれ、梨乃も手ぇ振ってみろよ」

「や、や、やっほー！」

「梨乃、それは山彦だよ」

「ふぇ！？」

鷹崎に藍澤に春雨（村雨）

「「「唯ー！」」」

中島に飯田に太田。

「澪ちゃ～ん！」

「秋山さ～ん！」

野島に佐々木。

「こ、琴吹さ～ん……」

「そんな小さな声じゃ聞こえないって」

木下に島。

「せーの……りっちゃ～ん！」

「桐島く～ん！」

「バラバラだって……」

佐伯に瀧に佐藤。

「ロミオー！」

「ジュリエットー！」

松本委員長に柴矢。

「……」

「めちゃめちゃ手を振ってるけど？　コレって？」

「おーい、だそうですよ」

「ホントかなぁ？」

「さぁ～」

矢野に近田に柳に小磯に菊地。

「凄い盛り上がり。唯達緊張してるかもね」

「…それはそれで醍醐味だよ。私には関係ないけど」

立花に若王子。

「…詩吟部の発表にもこれくらいお客さんが来てくれたら、少しは詩吟も浸透すんでしょうか…」

「えっと…よく分からないけど、そうなんじゃないかな…？」

林原に宮本。

「何で俺達は昨日に続いて二階にいなきゃなんねぇんだよ」

「照明で桐島クン達を照らすためだよ。少しでもライブが盛り上がるようにしないとね」

「だったら影宮にやらせろよ。俺も下で見てぇのに……」

「今の影宮クンはテンションが上がってるから、とてもじゃないけど任せられないよ」

西野に水本。

「ヒィィィヤッホーーーーイッ！！　サァーークゥーーヤァーーッ！！！」

うるさい黙れ。

「ゴホッゴホッ！　やべ…むせた……」

アホだ。

（にしても……）

平沢妹も鈴木も曽我部先輩もクラスメイトの連中もアホもTシャツ着用とは、事の黒幕は一体誰だ？

「『さぁ皆さん、盛大な拍手を！』」

すると、俺がそんな疑問を抱いているとマイク片手に真鍋がステージ袖から何食わぬ顔でやってきた。

「和ちゃん！？」

「ちょっと和！　何やってんだよ！」

平沢と秋山の驚愕した声に反応した真鍋は俺達に振り返った。つい数分前までコイツはブレザーを着用していたのに、今俺達の前で西野と水本が照らすライトを背中で浴びている真鍋は、やはりTシャツを着ていた。

「…お前が黒幕か」

俺が確信めいてそう言うと真鍋は苦笑いを浮かべて口を開いた。

「私は協力しただけ」

「じゃあじゃあ！」

「みんなが着てるＴシャツを配った人は誰なんですか！？」

「ちょ、ちょっと落ち着いて」

あまりの出来事に興奮を隠せない平沢と中野が真鍋に詰め寄る。
そして真鍋はステージ袖に顔を向けた。

「唯達の分以外のＴシャツは山中先生が徹夜で用意してくれて、ライブ前に私と修司と三人で配ったのよ」

そこには自分で製作したＴシャツを自分で着ている山中顧問の姿があり、俺達の視線に気付いたようで、『グッジョブ私』と言わんばかりに得意げな表情でサムズアップをかましてきた。

「～っ！　さわちゃん！　ありがと～！」

「「あ、ありがとうございます！」」

「本当にありがとうございます！　さわ子先生！」

「三年目してホント良い事してくれるよな」

「…だったら去年も一昨年もやれってんだ」

「そんなこと言わないの」

瞳に涙を溜めて感謝の意を伝える平沢。
感動したように若干声を震わせながら頭を下げる秋山と中野。
キーボードに額をぶつけるんじゃないかというくらい深々と頭を下げる琴吹。
山中顧問を見た後に笑顔で講堂内を見渡す田井中。
それに腕を組んで反応する俺。
そんな俺に保護者のような言い草をする真鍋。

「律、咲也。私達は出来る事をしたから、後はよろしくね」

部長と副部長だからだろう。
俺と田井中にそう告げた真鍋はステージ袖に掃け、田井中が『唯』と呼び掛けると手の甲で涙を拭った平沢は俺と田井中に振り向いて一度頷き、マイクに向けて声を発する。

「『え〜…　放課後…ティータイムです』」

涙声でＭＣをする平沢にクラスメイトから『頑張れ』と励ましの声が飛んでくる。

「『思いがけず私達の方がみんなに色々してもらっちゃって…何だか涙が出そうです…』」

「もう泣いてるじゃね～か」

田井中の的確なツッコミにドッと観客席から笑いが起こる。

「部長ナイス！」

「エッヘン！」

「澪ちゃんも何か言って～」

「『あ…ありがとう…』」

中島の称賛に田井中は無駄に胸を張り、野島の言葉に秋山が少し恥じらいながらそう言えば黄色い歓声があがった。
どうやら秋山ファンクラブの連中もいるようだ。

「桐島も喋れー！」

「……」

鷹崎らしい奴が何か言ってるが幻聴だろ。

「甘い甘いッ！　鷹崎よッ！　お前は食塩水ぐらい甘いッ！」

「ふぇっ!?　食塩水って甘いんですかっ!?」

「いや、甘くないからね梨乃」

「咲也が反応するのは世界中で俺一人ッ！　なんたって俺達は幼稚園からのおしゃ…！！」

「おしゃ？　おしゃって何だよ影宮？」

「イ、イデェ…思い切り舌かんしゃ…」

「感謝？　舌に感謝すんのかお前は？」

何だあのコント集団……

「はぁ…」

アホらしい光景にため息をついていると、平沢がマイクに向けて口を開いた。

「『それじゃあ一曲目！　いきます！』」

俺は左手でコードを押さえ、右手の白いピックを弦に当てる。

秋山は右手でコードを押さえ、左手で直接弦に触る。

中野は一度アンプに振り返り、ちゃんとムスタングと繋がってるかを確認し、コードを押さえる。

琴吹は興奮した面持ちでキーボードの鍵盤に両手の指を添える。

田井中は二本のスティックを高く掲げ、軽くスティック同士をぶつけて、カッと乾いた音を鳴らす。

平沢は、マイクを掴んでいた右手をレスポールのネックに移動させる。

全員演奏準備完了。

そして……

「『聴いてください！』」

遂に……

「『『ごはんはおかず』！』」

一曲目の演奏が始まった。

「ワン・ツー・スリー・フォー」

♪♪♪♪♪♪♪～

第百二十二話（後書き）

次話からラストライブが本格的にスタートします。

第百二十三話（前書き）

最後の学園祭編その十五　ラストライブの始まりと終わりです。

※今回はオリジナルの歌詞が登場します。
そういうのが苦手な方はスルーしてください。

第百二十三話

【Q．日本における主食とは？】

例えばの話。
もし、仮にこんな問題があるとしよう。
答えは、世間一般の認識として【御飯】所謂【白米】である、と思う。
まぁ、中にはパンやそれに属さない好みの物を主食だと言う人もいるだろう。

人の好みは大なり小なりそれぞれ異なるので別に異論はない。

さて、本題として俺達が現在進行形で奏でているＨＴＴライブ一曲目である『ごはんはおかず』通称（俺だけだが）『メシ』の歌詞がどうにも……というかやっぱり納得出来ない。

♪♪♪♪♪♪～

部室が水道工事で使用不可に陥り、二日後に使用可能になったあの曖昧な季節の昼休み。

学園祭まで時間がないから仕方ないと平沢が作詞した『メシ』を採用し、自分を騙してなんとか譲歩と妥協を重ね渋々納得してやった。
琴吹が作曲した曲はアップテンポで疾走感が心地よい八ビートナンバーであり、これなら何とか誤魔化せると腹を括ったが、現実は正に現実だと痛感した。

「『♪炭水化物と炭水化物の夢のコラボレーション☆』」

これは今、正に平沢が楽しそうに歌う歌詞の一部だが、誤魔化せる筈がなかった。

ボーカルとして模範的に滑舌良くはっきりと歌うのはいいが、それが仇となり歌詞の内容に観客から時折笑い声が起こる。

しかも『ごはんはおかず』というタイトルのくせに『ごはんはすごいよないと困るよ　やっぱりごはんは主食だね』なんて明らかにタイトルと矛盾した歌詞があったりするものだから、演奏中にも関わらずあんなアホらしい問題を考えてしまった。

♪♪♪♪♪～

集中しなければならないとは常々思う。

「『♪でも私関西人じゃないんです』」

無理だろ。

こんなツッコミ所満載の歌詞を歌われちゃ……

更に合の手の如く秋山、田井中、琴吹、中野がマイクに向かって『アツアツホカホカ』『どないやねん』とか言っちまいやがるので、俺の魅せ場であるギターソロも何だか覇気がないようになってしまった。

（ノリがいいな……）

しかし、時折笑い声を出しながらもリズムに合わせて手拍子をしてくれている観客達を見ると、この件について深く考えるのは止めようと決意している俺がいるのだから不思議だ。

つうか演奏に支障を来すのはマズい。

「……」

集中。心頭滅却。
受け入れてしまえ。
景色を楽しめ。
後悔するな。
精一杯やれ。
……最後だぞ……

「『♪1・2・3・4・GO・HA・N!』」

♪♪♪♪♪♪♪～

ジャアーンッ！と、テレキャスを思い切りストロークし、田井中がダダンッ！とスネアを力強く叩いたのはほぼ同時で、つまり一曲目の『メシ』が終わりを告げた事を意味する。

ワァァァッ！！
パチパチパチパチッ！！

その瞬間、観客から盛大な歓声と拍手喝采の風が俺達を包む。

「『『ごはんはおかず』でした！』」

その風は何よりの財産だ。
日々の練習が、日々の苦労が報われた気がして、俺はただ観客席を遠くまで眺めていた。

「『私達三年生はみんな同じクラスなんですけど、昨日は演劇をやってて色んな事があって大変だったんですよ』」

そして始まる。

「『澪ちゃんのロミオ見てくれました？　カッコよかったですよね～！　あ、ちなみに澪ちゃんがロミオ役に選ばれたのって『ロ』『ミオ』だからなんですよ～！　おもしろいですよね～』」

平沢のグダグタなＭＣ……
つうかそんな内部事情や裏事情を伝えたところでどうする気だ……
共感してほしいのか？

見ろ。クラスの連中は苦笑いで、それ以外の観客はキョトンとして

んぞ……

「はぁ…」

平沢のＭＣがグダグタだと如実に表れたのは去年の新歓ライブなので、取り留めて気には止めないが、少しは場の流れや次曲に違和感なく繋がるＭＣをしてもらいたいものだ。

「『あ、そうだ！　澪ちゃん』」

「な、なに？」

まぁ、コイツにそれを期待しても無駄だと分かりきってるし、何よりコイツ自身が楽しそうにＭＣをしているのだから今日のところは言葉を飲み込むのが無難な対応なんだろう。

「『何かやってよ』」

「え？　何かって？」

「『ロミオの台詞』」

「『ええっ！？』」

悪意ある行為ではないんだろう。
平沢の根底を司る天然スキル発動（無茶振り）により被害を食らった秋山がマイクに驚愕の声を拾われる程に動揺し、顔を背け左手をブンブンと振って高速拒否の拒絶反応姿勢を顕にするが、食い下がる平沢は『え～』と口を尖らせる。

「『いいじゃん澪。まだ覚えてるだろ？』」

「律まで何言ってんだよ！」

わざとマイクに声を乗せ、弟のような、かつ昨日目撃した悪代官を彷彿させるニヤリと口元を湾曲させた田井中の発言に秋山は狼狽するが、既に後の祭りだ。

観客からの拍手と歓声が秋山の退路を塞ぎ、やらねばならない空気が講堂内に充満していく。

「さ、咲也……」

観客から見て右後ろに田井中、左後ろに琴吹、その前に秋山、右横に平沢、更に右に中野、そしてその右に俺が。

俺と秋山はステージ両端にいるのにも関わらず何故か俺に救難信号を送る。

「……」

その信号を受け取った俺は腕を組んだまま秋山に『観念しろ』とアイコンタクトを送信し、観客席を顎で小さく差す。

つまり俺は空気を読んだということだし、こういうのは時と場合によっては観客と共に盛り上がれるアクションになる。
それが今だと判断した。

「うぅ……」

どうやら観念したらしい秋山は頬を紅潮させながら一度深呼吸をしマイクに向けて口を開いた。

「『いつまでも、どこまでも共にいよう…　ジュリエット』」

何故そこを抜粋した？

（その台詞はロミオが毒薬を飲んで天に召されるシーンだろ…言うんならもうちょいマシな台詞を言っとけよ……）

顔をやや俯かせて台詞を放った秋山にそんなことを思ったが、観客、特に秋山ファンの連中の反応は上々で『きゃ～！』とか『カッコいい～！』や『澪先輩～！』等々、黄色い声援が飛び交っている。
それにより秋山はかなり恥ずかしそうに益々紅潮していく。

「秋山さ～ん！　素敵～！」

（見守っとくんじゃねェのか……）

聞こえた曽我部先輩の黄色過ぎて蛍光色になった声援に俺は人知れず嘆息を漏らした。

「サク先輩、あの人が曽我部先輩ですか？」

すると、中野がムスタングを構えたまま俺に顔を向けてそんな質問をしてきた。

「…残念なことに、その通りだ。つうかよく分かったな？」

「だって澪先輩を見つめる瞳が他のファンクラブの人達に比べて、群を抜いて輝いてますから……」

「確かにな……」

眼にＬＥＤ電球でも仕込んでいるんじゃないとか疑いたくなる程の輝き度合いだ。

「『あ、それでりっちゃんがジュリエットだったんですよ』」

「私に振るか！？」

俺と中野が曽我部先輩について考察していると、思い出したかのように平沢が田井中に左手を向ける。
まさか自分に火の粉が振りかかるとは夢にも思ってなかったらしい田井中は若干顔を赤らめる。

「『りっちゃんも一言どうぞ～』」

「わ、私はもう忘れちゃった～」

『どうでもいいがＭＣ長くねェか？』とぼんやり思考に浸っていると『桐島』と誰かに呼ばれた。

「コレ、律に渡して」

声の主は中島。
実はコイツを筆頭にした二組の連中の大半は席には座らず最前列の席とステージの間のスペースに直接腰を下ろして俺達のライブを観ていた。

そんな中島がステージに近付いて俺にどこに隠し持っていたのか『ロミオとジュリエット』の台本を差し出してきた。

「…意地悪ィなお前」

「ライブを盛り上げるのに一役買ったって言ってよ」

すっとぼける田井中に秋山と同じ道を歩ませようという中島の意図を瞬時に理解した俺は、とりあえず台本を受け取った。

「いや～　残念だったな～　忘れちゃったもんは仕方ないから次の曲いくか～」

頑なにジュリエットのあの歯の浮くような台詞を言おうとしない田井中はスッとスティックを掲げる。

「…おい」

「ん？」

「…有り難いプレゼントがお前に届いたぞ」

「プレゼント？…って台本！？」

おとぼけ部長に中島からの、田井中にとっては嬉しくないプレゼントを手渡すと、それはそれは驚き眼を見開く。

「『なんと！　サッくんからサプライズプレゼントです！　さぁ、りっちゃん！』」

コイツは悪魔だな……

何を声を大にして禁句を口走ってんだ……

しかもマイクを通して……

「あ！　私日本語読めないんだった～！　うっかりうっかり！」

「自分だけズルいぞ律！」

あらぬ方角に視線を向け有り得ない言い訳を始めた田井中だったが、先程辱めを受けた張本人である秋山の言葉に『うぅ…分かったよ…』とこうべを垂らし渋々といった感じに立ち上がる。

「『りっちゃん！　どうぞ前へ！』」

「恨むからなサクぅ～……！」

「…因果応報だ」

平沢に促され秋山のマイクに向かう途中にかなり口を尖らせ、ジト眼を俺にぶつけるが、この事態を招いたのは平沢と中島であり、更

には面白がって秋山の退路を塞いだ罰だ。
なのでそんな視線を受けなければならない謂れはないし、お門違いというものだ。

「『いつまでも、どこまでも共にいましょう…　ロミオ』」

（だから何故お前も召される直前をピックアップすんだよ……）

拍手と声援に緊張の面持ちで歯が浮く台詞を発した田井中は『どもども』と頭をかきながら、慣れない様子と照れた様子でドラムに戻っていく。

「『ありがとうご両人。あ、ちなみに私は『木G』でした～！』」

自分の役どころの重要性を訴え始めた平沢の、最早身内にしか理解出来ないＭＣを腕を組んで右から左に受け流していく。
そして薄い内容かつ長いＭＣに時間を取られてはこの後の曲に支障を来すので、いい加減平沢に口を開こうとしたが……

「（咲也、咲也）」

不意に聞こえた小声に口を閉じる結果に。
『何だ？』と思い左に首を動かせば、そこには真鍋の姿。

「（そろそろ次の曲にいって。時間が押してるわ）」

そう言って指を『巻け』という意味でクルクルと回す。

「『あずにゃん達のクラスは何やってらっしゃったの？』」

「『えっと…喫茶店です』」

真鍋のその合図に小さく頷き、丁度中野にインタビューをして俺の近くにいる平沢に視線を向ける。

「ほい？」

視線に気付き首を傾げる平沢に『次の曲にいけ』と人差し指で観客席を指差す。

「エヘヘ～♪」

（何笑ってんだよ……）

何故か笑顔を浮かべる平沢に嫌な予感が……

「『昨日の『ロミオとジュリエット』の効果音って凄くなかったですか？』」

まさかコイツ……

『凄かったー！』
『絶妙だったー！』
『誰がやってたのー！』

ノるな観客共。

「俺は知ってるぜーッ！誰がやってたのかをーッ！」

お前は黙れ。

「『ね～　凄かったですよね～！　実は……』」

初めてかもしれん、こんなにもアイツの……

「『ジャジャーン！　あちらにいるサッくんがやってたんですよ～！』」

自由奔放ぶりに嫌気が差したのは。

つうか、待て待て。

俺は『次の曲にいけ』と合図を送ったのに何故こんな事になった……

『桐島センパーイ！』
『さすがッスよー！』
『よっ！　黒一点！』

まるでブブゼラのような野太く低い声が観客席の一角から発生している。

「『おぉ！　サッくんファンがこんなにも！　ではではサッくんから一言いただきましょう！』」

期待感満載な瞳を俺に向ける平沢。
湧き上がる講堂内。
田井中の笑いを堪えた声が背後から、中野の乾いた苦笑いが右から。

「咲也君！　ファイト！」

「何言うんだろ咲也……」

平沢同様にワクワクと期待感満載の琴吹と、少しばかり興味がありげな秋山の、それぞれの声。

「……」

対する俺は腕を組んだまま一歩マイクに近付く。
その瞬間『おぉ…！』と観客席から感嘆なため息が漏れた。
そして俺は口を開いた。

「『…次の曲いきます……』」

期待感や空気を破壊する呪文を。

『えーっ！』とざわついているが知ったこっちゃない。

「やっぱりサクだな……」

「でも何だかお客さんが一体になった気がするわ！」

「確かにそうなんですけど、マイナスの意味で一体になったというかなんというか……」

「まぁ、唯が悪い…かな？」

「えっ？　私が悪いの澪ちゃん？　だってサッくんが自分も紹介してって指差したんだよ？」

なるほど。

お前にはそう伝わったのか。

「…その事はこの際眼ェつぶってやるから、さっさと次の曲いくぞ」

「いやサク、私は良くないと思うし、何でそんなに堂々としてられるんだよ？」

「『ではでは、次の曲いきます！』」

「って唯は切替え早いな……」

「…深く考えねェタチなんだろ」

呆れた表情の田井中にそう告げてテレキャスを構える。

騒然としていた講堂内は再び歓声と拍手に包まれる。

「『聴いてください！』」

一つ息を吐き出して、肩の力を抜きリラックス。

「『あ！『ロミオとジュリエット』のシナリオはムギちゃんが書きました～』」

（早くしろよ……）

一瞬たりとも気を抜けない平沢のＭＣになんだが疲労感が……

つうかさっき『聴いてください』っつったろうが……

俺達も観客もすっかりその気になってたから、まさかのフェイントにまた微妙な空気になったぞ……

「『わぁ～♪　わぁ～♪』」

そして琴吹、お前も燥ぐな……

何を嬉々と両手を振ってんだ……

「はぁ……」

グダグタ過ぎるライブに深いため息が。

「『では！　改めて聴いてください！　『ときめきシュガー』！』」

「ワンツースリーフォー！」

まぁ……このグダグタ加減が俺達であって『らしさ』なんだろう。

思い返せば過去四回のライブもグダグタでライブを完遂したし。

とはいえ、グダグタで良いかと問われれば、間違なく首を横に振るだろう。

♪♪♪♪♪♪♪～

まぁ、それも今更……か。

♪♪♪♪♪♪♪～

秋山と田井中のリズム隊のリフから俺のリード、平沢と中野のサイド、そして琴吹のキーボードと続く。

『ときめきシュガー』通称『ときガー』は秋山ファンクラブの集いにて、あの大事故を発生させた詩に琴吹が曲を付けたもの。

当初、秋山は俺に作曲を頼んできたが当時まだ未完成だった『アシアト』の曲作りに集中したいので琴吹に作曲を譲渡させ出来上がった曲。

♪♪♪♪♪♪♪～

イントロが終わり、平沢……ではなく秋山が歌い出す。

「『♪大切なあなたにカラメルソース』」

ＨＴＴのボーカルは平沢だ。

しかし練習中に突然平沢が『澪ちゃんが歌った方かいいよ』と提案してきた。

よくよく理由を聞けば、何でも『ときガー』は秋山がファンの連中

のために書いた詩、ファンの連中に伝えたい想いを書いたので自分が歌うのはどうにも違うと言う。

この秋山節全開なメルヘンティックな歌詞のどこに伝えたい想いがあるのか些か不明だったが敢えてそこには触れなかった。

始めは拒否っていた秋山だったが『ファンの娘達も喜ぶんじゃないかな?』という琴吹の道理に、しばし黙考したのちに頷いた。

ちなみに田井中曰く『ファンでも澪の歌詞センスの境地には辿り着けない』らしいが、実際演奏をしてみると秋山ファンクラブの連中は大いに盛り上がってる。

「『♪恋のパティシエ　あなたのこと思うだけで……』」

実はこの曲、結構難易度が高かったりする。

スピード感が命と断言出来る曲であり、各パートとも勢いを前面に出す意識が大切。

ギターは平沢と中野のツインのハモりが魅せ場だったり、ブリッジ・ミュートを交えたリフ、一弦と二弦によるアルペジオ、音が途切れないように滑らかなフィンガリングを心掛けること。

キーボードは全体のコード感をキープに徹すること。

ドラムは勢い任せで叩くと走りやすくなるので、常に正確なリズムで、四分打ちのバス・ドラムは正確なタイミングでキックすること。

ベースは他のパートの出だしを引っ張るので一音目から勢いよく弾き、低音重視ではなく、中域、高域を立たせたセッティングにすること。

故に新曲四曲の内、最もミスが目立った曲だ。

♪♪♪♪♪♪～

しかし、蓋を開けたら誰一人としてミスなどせず、それどころか練習以上のものを奏でる俺達。

（どんな理屈なんだろうな……）

いや……理屈とかそんなんじゃないんだろう。
ＨＴＴの特長は本番に強い、そういうことだ。

そして……

ダダンッ！

最後は田井中が締めて完璧過ぎる演奏で『ときガー』を弾き終えた。

ワッと盛り上がる観客。
心なしか秋山ファンクラブの連中が一番盛り上がっている気がした。

「『あ、ありがとうございます！』」

秋山が感謝を伝えたのと同時に琴吹がキーボードを鳴らす。
去年の学園祭ライブでの細やかなアンコールの如く。
そしてあのアンコールで演奏をした曲は……

「『次！『ふわふわ時間』！』」

『ＦＦ』だ。
ボーカルは再度平沢に戻り、田井中がリズミカルにスネアを叩き、秋山が丁寧にベースを鳴らし、中野が滑らかにムスタングを弾き、俺が『ＦＦ』のギターソロを多少アレンジして弾き出す。
そして平沢がマイクに声を乗せる。

「『このステージに立って、今日が五回目の『ふわふわ時間』です！　私達の思い出がたくさん……たぁーくさん詰まった曲です！　もしかしたら知ってる人もいるかもしれないので、良かったら一緒に歌ってください！』」

そのタイミングでアレンジ（平沢のこのＭＣがあるので通常より長め）した俺のギターソロが終わり、平沢がレスポールをストロークし歌う。

「『♪あぁ　カミサマお願い　二人だけのＤｒｅａｍ　Ｔｉｍｅください☆』」

俺達の原点と言っても決して過言ではないこの曲。

初学園祭ライブ、曽我部先輩専用ライブ、初新歓ライブ、二回目の学園祭ライブ、ライブハウスでのライブ、最後の新歓ライブ。

過去俺達がＨＴＴとして人前で演奏を行った際には、秋山ファンクラブの集いを除いて、全てにおいて演奏している楽曲。

故に平沢は『私達の思い出がたくさん詰まった曲』と言ったんだろう。

俺達軽音部と共に歩んだ楽曲。
自然と気合いが入る。

♪♪♪♪♪～

そんな時、ちらほらと口を動かしている観客達を発見した。
手拍子だったり身体をリズムよく動かしたりしてる観客は多く見受けられるが、平沢と共に歌っているのは初めて見た。

「『♪もすこし勇気ふるって　自然に話せば
何かが変わるのかな？』」

平沢が歌えば、あの連中も口を動かす。

決して俺達は大人気バンドではない。

曽我部先輩は意外と人気があると過去に言ってはいたが、そんなことを言ったのは曽我部先輩一人であって些か信憑性に欠ける。
仮にそうだったとしても高が知れている。

ダダンッ！　ダダンッ！
ジャーァー……ン……

だが、メロディーや歌詞を覚えている連中がいるということは、あながち曽我部先輩の発言は間違いじゃないのかもな。

「『ありがとうございま～す！』」

『ＦＦ』が終わりライブも後半に差し掛かり俺達軽音部も観客もテンションが上がっていく。
割れんばかりの拍手と歓声の中、平沢は感謝を伝え、秋山と中野と琴吹は流れる汗を拭う。
田井中はスティックがすっぽ抜けないよう念入りに掌をハンカチで拭う。
俺は流れる汗をそのままに白いピックを一旦口に咥え、テレキャスのストラップを肩から外す。
そして左後ろにあるギタースタンドに立て掛けてあるアコギに手を伸ばし、代わりにテレキャスをギタースタンドに立て掛ける。
アコギのストラップを肩に掛け、白いピックを右手に持つ。

「『じゃあ、この辺でメンバー紹介いってみたいと思います！』」

一度アコギをストロークし、腕を組んでアコギから視線を真正面に移すと、平沢によりメンバー紹介が始まった。

「『まずは、私達軽音部の顧問のさわちゃんです！』」

ライブが始まる前はステージ端にいたが、今は講堂の最後列にて立ち見をしている山中顧問。

そんな山中顧問はまさか自分が、しかもメンバーを差し置いて真っ先に紹介されるとは露程も知らないので『何で私！？』と驚愕していた。

何もこれは平沢の独断決行ではなく、部室にてリハーサル中に事前打ち合わせをしていたので、俺達は驚くことはしない。

「（山中先生だ、山中先生）」

訂正。

平沢と田井中限定の呼び名で紹介したのは平沢の独断だったようで、すぐさま秋山が小声で平沢に注意する。

「『あっ！　山中先生です！　山中さわちゃん先生！』」

「（『さわちゃん』はダメだって！）」

「『あっ！　そうだった！　ドンマイだよ！』」

「……自分で言うなよ……」

慌てて言い直したがそこは平沢だ。
肝心なところが直ってない。
再び秋山が注意した途端にこんなことを言いやがったので、思わずポツリと呟いてしまった。

「『え～　改めまして軽音部の顧問の山中　さわ子先生です！』」

気を取り直して平沢が三度目の正直と言わんばかりに山中顧問に五指を揃えてレスポールのネックを掴んでいない右手を向ける。

すると、二階にいる西野か水本のどちらかが山中顧問をスポットライトで照らし、講堂内にいる全ての人物の注目を山中顧問に向けさせる。

観客から盛大な拍手と『さわちゃ～～ん！』という声援が山中顧問に飛来していく。

「『山中先生はいつも優しくしてくれて、私達の部活を応援してくれてます』」

山中顧問は終始苦笑いを浮かべていたが、意を決したのか一歩前に踏み出して両手でメガホンを作った。

「唯ちゃん！　澪ちゃん！　りっちゃん！　ムギちゃん！　咲也くん！　梓ちゃん！　みんな輝いてるわよーっ！」

講堂内には桜高生や教師を含めた関係者がいる。
つまり猫をかぶる筈の山中顧問が名字ではなく、軽音部の顧問としての姿で叫んだ。

「『ありがとうございまーす！　さわちゃん先生ー！』」

ワァァァァッ！
パチパチパチパチッ！

それが意味するのは一人の音楽教師、三年二組の担任、吹奏楽部の顧問ではなく、軽音部の顧問として俺達に向き合ったんだろう。

「すみません、堀込先生……」

「けしからん…っと言いたいところだが、今日は特別だ。お前は随分と桐島達に信頼されているようだからな」

「先生……」

「学生時代、あんなに弾けていたお前が、成長した姿を見れておれも嬉しい」

「……」

「漸く教職が板に付いたみたいだな」

「それ、昨日も紀実に言われました……」

「そうか。河口、日ノ原、江藤……　アイツらは元気か？」

「有り余る程です。昨日も何かあやめの失恋のやけ酒に長いこと付き合ってたみたいですし」

「酒を飲める年齢か……　お前や河口達が卒業したのが昨日のように感じていたんだがな……」

「堀込先生……」

「何だか感慨深いものがあるな……」

「……今度は私があの子達を見送る番ですね」

「そうだな。しっかりとやってください、山中先生」

「はいっ！」

俺は見ていた。

隣にいた古文の堀込に山中顧問が深々と頭を下げているのを。

あの二人の関係は、ただの同じ職場の教師だが、もしかしたら俺の知らない何か深いものがあるのかもしれない。

（知ったところで……だな）

そう自己完結し、平沢のＭＣに耳を傾ける。

「『続いてベースは澪ちゃんです！』」

黄色を通り越して蛍光色の歓声と『澪センパーイー！』『きゃ～！』『カッコいい～！』『秋山さ～ん！』と様々な声援が飛び交う。

その一部は間違なく曽我部先輩だろう。

「『こ、こんにちは』」

ただ挨拶をしただけなのだが、秋山ファンは蛍光色の歓声をあげる。

「うるせェな…アイツら」

「そんなこと言っちゃダメですよ、サク先輩」

独り言だったのだが、中野には聞こえていたようで、若干プンスカとしている。

「『澪ちゃんは優しくて、ベースも上手で美人さんで、正に釘の打ち所がありません！』」

「「『『非な』』」」

堂々と非がありまくりな発言を言い切った平沢に俺（マイクに声を拾われるつもりはなかったが）と田井中がダブルツッコミをするとクラスの連中から『ナイスコンビ！』『さすが部長と副部長！』等という言語が耳を捉えたがスルー。

「『非の打ち所がない！　それが澪ちゃんです！』」

（あると思うが……）

どこか抜けてるところとか、スキル満載なところとか、秋山ワールド全開な歌詞とか。

「『きょ、今日は私達のライブを聴いてくださいまして、ありがとうございます』」

平沢に煽てられたからなのか、はたまた生来の性格故か、恐らくそのどちら共だと思うが、若干恥ずかしそうにマイクに向かう秋山。

「『私…ここにいるみんなと一緒にバンドをやってこれて…最高です！』」

「……」

その言葉の節々から感じたものは秋山の成長。

人見知りや恥ずかしがり屋など難儀な性格の秋山が大勢の人の前で、マイク越しだとはいえ、デカい声で自分の気持ちを正直に伝えられるようになり、感じた成長。

「『律とムギと唯と咲也と梓と出会って、バンドを組んでこのステージに立って演奏して……本当に……本当に最高ですっ！』」

次の瞬間、秋山ファン以外の連中からも秋山に向けて大きな大きな歓声があがる。

しかし秋山ファンはまるで勢力争いに負けじとデジカメやケータイのフラッシュを焚いてカシャカシャとシャッターをきって撮影していく。

「眩しいっつうの…アイツら…」

「そんなこと言っちゃダメですよ、サク先輩」

独り言だったのだが、中野には聞こえていたようで、若干プンスカとしている。

「『あ！　澪ちゃんにはファンクラブもあるんですよ。入りたい人は、そこにいる和ちゃんに言ってください』」

これは平沢の独断だ。
俺達は真鍋を紹介するなど聞いてない。

それはもちろん真鍋もそうであり、観客から見てステージ右の端で今まで俺達のライブを見守っていた真鍋は『えっ！？』と山中顧問同様に驚愕していた。

「『和ちゃんは私の幼馴染みなんですけど、生徒会長で、澪ちゃんファンクラブの会長で、物知りで、頭が良くて、いつもテスト前になったら勉強を教えてもらってます』」

しかし、真鍋の心境などお構いなしに平沢はマイペースで真鍋を褒めたたえる。

「ちょ、ちょっと唯……」

すると、聡明な真鍋には珍しく、平沢を止めようとステージに現れてしまう。
恐らく無意識なんだろう。

「『和ちゃんも一言どうぞ！』」

「何でよ、それより早く次いきなさい、時間が押してるんだから」

「…おい」

「え？　なに咲也？」

「…どうでもいいが、お前、今普通にステージ上にいるからな。しかも西野か水本のスポットライトを全力で浴びて」

「え……あっ！？」

今の今まで気付かなかった真鍋は視線を俺から二階にいる西野と水本、最後に観客席に向けると、ボッと顔を赤らめ急ぎステージ端に駆けていった。

「和の貴重な一面が見れたな……」

「ですね。あんな和先輩初めて見ました……」

「和ちゃん可愛かったね～♪　ね？　サッくん♪」

「…俺に感想求めんな。つうか、お前、コレを狙ってたんじゃねェだろうな」

「あ、凄い。和ちゃんの歓声があがってる～♪」

「何かどさくさに紛れて『真鍋さん』って聞こえるんだけど、これってやっぱり……」

「十中八九、曽我部先輩だろ……」

去っていく真鍋の後塵を拝む田井中と中野。
何故か満面の笑みで俺に顔を向ける平沢。
どうでもよさげに返答するが、無きにしも非ずな可能性を問う俺。
湧きあがる会長コールに感嘆する琴吹。
たまに聞こえる曽我部先輩の声を俺に確認する秋山。

「『ではでは、次はキーボードのムギちゃんです！』」

拍手喝采と歓声のコーラス中、琴吹はやけに気合いの入った表情でキーボードの前に設置されてあるマイクを両手で握る。

「『皆さん、こんにちは。私達の演奏を聴いてくださいまして、ありがとうございます！』」

興奮した面持ちでそう言うとクラスの連中から『ムーギーっ！』『ムギちゃ～んっ！！』と真鍋の歓声に負けず劣らずな歓声が。

「『わぁ～♪　ありがと～♪』」

感激したかのように両手を上げて三割増の極上スマイルでその歓声に応える琴吹。

「『バンドってすごく楽しいです！　今もすっごく楽しいです！』」

普段は穏やかでおっとりしている琴吹は頬を紅潮させ今の心境をかなり興奮気味に語る。
それは、あの平沢が『ムギちゃん落ち着いて』と嗜われる程に。

「『ムギちゃんが淹れてくれるお茶はとっても美味しくて、いつも楽しみなんですよ』」

遂に軽音部の実態を暴露しやがった……

『私も飲みた～い！』
『私も～！』

少しは疑問を抱かないのか？　観客共よ。

「俺も飲みたぁ～いなぁ～☆」

静まれ、便乗犯。

「『いつでも部室にお越しください。大歓迎ですから！』」

そして琴吹、お前は気安く誘うな。

「『部室にはトンちゃんもいるので、是非会いにきてください』」

だから気安く誘うなっつうの平沢。
入部希望者なら大歓迎だが……

「『お次は、トンちゃんが……あ！　スッポンモドキっていうか亀なんですけど、そんなトンちゃんが大好きなギターのあずにゃんです！』」

まさか亀の件で自分の番が回ってくるなど思わなかった中野はビクッと小さく身体を跳ねさせる。

「『えっと…中野　梓です…よろしくお願いします』

普段俺達に見せるような態度ではなく、ムスタングを抱え脚光を浴びて緊張しているのか、恭しく一礼する中野。

「梓ちゃ～んっ！」
「梓～っ！」

すると歓声と拍手に混じって平沢妹と鈴木が飛び切りの声援を送る。

「『憂…　純…　あ、ありがとう』」

ハニカミつつ平沢妹と鈴木に頭を下げた中野に講堂内が湧きあがる。時折聞こえる『可愛い～！』という感想に中野は恥ずかしそうに身を縮こませる。

「『あずにゃんは二年生なんだけど、ギターがすっごく上手くて、私のギター師匠三号さんなんですよ』」

（そういえば……）

平沢がまだギター初心者だった頃、俺をギター師匠一号、山中顧問をギター師匠二号とか言ってたな……

ん？

よくよく考えたら俺が切っ掛けだった気が……まぁ、どうでもいいか。

「『あずにゃん』」

「『あ、はい』」

「『ありがとうね』」

「『い、いえ、こちらこそ色々とありがとうございます』」

ただの先輩と後輩の会話。

だが、そこにあるのは平沢の揺るぎない感謝と中野の敬意。

そして歓声と拍手が中野に向けられた。

「『次にドラムのりっちゃんです！　我が軽音部の部長さんです！』」

中野に送られていた歓声と拍手は一旦鳴り止み、平沢が田井中を紹介するや否や今度は田井中にそれが送られた。

「『え～みなさん、今日は軽音部のライブを聴いてくださいましてありがとうございます。えっと、私からは以上です』」

座った田井中に平沢や中野や琴吹は短いと不平を漏らしているが、俺はそれが田井中の『部長らしさ』なんだと感じた。

他の部員が楽しめる時間を少しでも長くさせるように、と。

それは恐らく秋山も、黙っているということは理解しているんだろう。

所謂、大人な対応というやつだ。

「いいの？　りっちゃん」

「いいよ。ほら次はサクだろ？」

平沢の確認に笑って応じた田井中は平沢から俺に視線を向ける。

「…ンだよ？」

その視線が何かを伝えようとしている。

それ故に伝える何かを理解しようと田井中に身体を向ける。

「私はさ、こういうのって上手く出来ないから。だからサクが言ってくれない？　副部長なんだし」

ドラムなんて難しい楽器を扱ってんのに、何とも不器用な奴だと思った。

「…俺とお前じゃ、異なるぞ？」

「それでもいいよ。てか多分一緒だし」

「…根拠は？」

「そうだな～……女の勘！」

何とも曖昧な答えにため息一つ吐いて俺は観客席に向き直った。

「『さぁさぁ次は！　我が軽音部の副部長のサッくんです』！

鳴り響く歓声と拍手。

『桐島ーっ！』『桐島センパーイっ！』『桐島く～ん！』というクラスの連中やブブゼラのように低音ボイスで叫ぶ、認めたくないがファン等という連中からの歓声。

「桐島く～ん！」

「咲也さ～ん！」

「咲也センパ～イ！」

「サクッチーーッ！！　ゴホッゴホッ！！　また…むせた……」

曽我部先輩と平沢妹と鈴木と修司。

「『サッくんは私のギターの師匠一号さんなんですよ。ギターもすっごく上手くて和ちゃんみたいに物知りで、軽音部のみんなに頼りにされて……！　言葉じゃ上手く言い表せないんだけど……とにかく！　サッくんはすごいんです！』」

『具体的に何が凄いのか』とか『サッくん言うな』とか『頼られる覚えはない』等のツッコム言葉が浮かんだが飲み込む。

講堂内は歓呼の声と掌を叩く音に包まれる。

俺が腕を組んだままマイクに一歩近付くと、それらの音は鳴り止む。

小さな音は聞こえるが限り無く閑静に近い静寂。

……俺は口を開いた。

「『…感謝の言葉は、秋山に琴吹に中野に田井中が散々口にしてたんで、俺からは特にない…』」

「サク先輩……」

「『…言いたい事や伝えたい事は音楽に乗せて伝えるっつう手法があるが、時には伝わったのが言葉だけで、本質は伝わってない場合がある…』」

「咲也君……」

「『…自分自身が一番理解してるが、ガラじゃないことを口にしたいと思う…』」

「咲也……」

「『…軽音部は俺達三年が一年の時、廃部寸前で、何とか活動を再開させることが出来て、その時に部長が卒業までには武道館公演をやるっつう目標を掲げ今日までやってきた…』」

「クスッ、サク」

「『…そんなものは夢物語で、わき目も振らずに練習に打ち込んできたとは声を大にして言える言葉じゃねェが…』」

「サッくん……」

脳裏に浮かぶものは去年の今頃。
平沢の姿と言葉。

【わき目も振らずに練習に打ち込んできた～なんてとても言えないけど…】

「『だが、この場所が…』」

【でもここが…】

「『俺達にとっての…』」

【私達にとっての…】

「『武道館です』」

【武道館です！！】

ワァァァァァァッ！
パチパチパチパチパチパチパチパチッ！！

頭を下げると今日一番の割れんばかりの歓声や歓呼の声、スタンディングオベーション、拍手喝采が湧き起こった。

「……」

頭を上げ、慣れないことをしたもので平沢達の視線が突き刺さり、何とも居心地の悪さを感じる。

「よぉし！　よくやったぞ副部長！」

但し、田井中だけは普段と変わらずにドラムセットに座っている。
こういう奴だ、コイツは。

「咲也君！　私感動しちゃった！」

「うん、私もだよ」

「私もです！　サク先輩があんなこと言うなんてびっくりしましたけど」

「サッくん！　私も！　私も！　感動したよ！」

両手を握り締めて瞳を輝かせる琴吹に共感するように微笑む秋山。
中野はムスタングを抱き抱えるように胸で抱き締め、平沢はその場で兎のようにピョンピョンと飛び跳ねる。

「…アレはお前の言葉の受け売りだ」

「ほぇ？　私の？」

首を傾げる平沢に事の言及を触れようとは思わない。
今は必要性が皆無であり、何より時間が惜しい。

「…そんなことより、次にいけ」

あまり深く考えないタチだからか、単に都合の良い頭をしているからか、俺の言葉に傾げていた首を縦に動かしマイクに向けて口を開く平沢。

「『というわけで次の曲です』」

「（おい！　自分の紹介してないぞ）」

「『はっ！　そうだった！』」

山中顧問の時同様に秋山が小声で注意をすると、平沢はポリポリと頭を撫で、『え～っと…』と自己紹介を始めたが、それを遮るように琴吹が自身のマイクを取った。

「『最後にギターの唯ちゃんです』」

琴吹がそう紹介すると平沢は若干驚いた表情で琴吹に振り返る。

「『唯は見た目のまんまでのんびりしてて、すっとぼけてるけど』」

「りっちゃん？」

「『いつも全力で一生懸命で』」

「ムギちゃん？」

「『周りのみんなにもエネルギーをくれて』」

「澪ちゃん？」

「『…ギタリストのくせにギター忘れたり、ギターに対する愛着度合いのベクトルが理解不能だが、たまにコッチが見習うことがある奴で…』」

「サッくん？」

「『とっても、とっても頼れる先輩。それが唯先輩です』」

「あずにゃん？」

これは田井中発案の平沢に向けたサプライズだ。

『唯のことだから、絶対に自分の紹介を忘れる。そこで！　私達が一人一人唯のことを紹介するってのはどうだ？』

部室でリハーサル中、平沢が手洗いに立ったのを機に田井中が人差

し指を立てて熱弁するので、仕方なく俺は渋々頷いた。
ちなみに秋山と琴吹と中野はすんなり頷いていた。
そんなサプライズを目の当たりにし、観客からの歓声と拍手を一身に受けた平沢は『どうした!?　どうしたんだね君達!?』と軽くテンパっている。
「ほ～れ、いいから次いけよ」
あまりこの件について掘り下げたくないのか、田井中がパニック平沢に催促する。
「う、うん」
納得はしてないと思うが、とりあえずといった感じで平沢は頷きマイクに声を乗せる。
「『ちょっと思いがけない事があってびっくりしちゃっいました。それでは次の曲いきます！』」
左手でアコギのコードを押さえて、右手にある白いピックを弦に当て……

『「聴いてください！『アシアト』！」

平沢のリード、中野のサイドがそれぞれ絶妙な絡みで、琴吹のキーボードが哀愁漂う雰囲気を演出し、秋山のベースと田井中のドラムのリズム隊が舞台の土台をきっちりと支える。

♪♪♪♪♪♪～

そして俺がアコギを弾きながら…口を開いた。

「『♪これ以上のいざこざはゴメンだと　少年は高飛車な態度を改めず
待ってほしいと翻ったコートを掴む　少女は焦燥気味に喚起する

試行錯誤の繰り返し
固定観念を誇張する
女々しい少年は歩き出す

見渡せば大中様々なアシアト
今はもう少女の顔も声も思い出せない
自責の念に駆られ人々はこの場所に集うのだと
目の前の猫が欠伸混じりに鳴いた』」

♪♪♪♪♪♪～

ボーカルなどする予定ではなかったが、歌詞を見た平沢以外部員達

が俺が歌った方が映えると説得のマシンガンをぶっ放すので、敢え無く俺がボーカルを勤めるハメに。

確かに歌詞の内容からして平沢が歌うには幾分イメージが違うかと思うが、そういうことなら俺がこの歌詞のイメージだと遠回しに言われたようで心外だ。

「『♪覚束ぬ足取りで暗闇の世界をアシアト頼りに　主を求めて彷徨う犬のように
狂ってるとか言わずに　狂ってるとはっきり言ってくれ

千載一遇のチャンスも
潜在意識が邪魔をする
情けない少年は膝をつく

世界は暗闇だが誇りに思う
そんな自分勝手な美意識に酔い痴れる
結果　少女の全てを色褪せ灰になる
やりきれない哀しさを抱え猫が鳴いた』」

♪♪♪♪♪♪～

「『♪天を仰げば虹の風景
周囲には桜の木
青空に想いをはせよう
この長すぎた春に』」

♪♪♪♪♪♪～

「『♪青年になった少年の元に一通の便箋
手紙に少女が旅立ったと
守ろうとして少年が壊していた
世界は暗闇だが誇りに思う
誰だ　そんな美意識を貫いたのは

小さなアシアトはその場でとどまる
大きなアシアトは果てしない道に続いていく』」

♪♪♪♪♪♪～……

一つ平沢のリードが消え、一つ中野のサイドが消え、一つ秋山のベースが消え、一つ田井中のドラムが消え、一つ琴吹のキーボードが消える。

そして最後に俺のアコギが……一弦をピックで弾いた。

ワァァァァァァッ！！
パチパチパチパチパチパチパチッ！！

この歓声と拍手が何よりの心地よさ、バンドの素晴らさ、音楽の楽しさ、高揚感。

「……」

観客に小さく頭を下げ、アコギからテレキャスに持ち替える。

「『こんなにもたくさんの拍手、ホントにありがとうございます！』」

平沢が俺の代役とばかりに声を張り両手を振る。

「お姉ちゃ～ん！」

「『おぉ！　う～い～！』」

平沢妹は姉の晴れ舞台に浮かれて舞い上がっているようで、隣にいる鈴木の肩を興奮気味に揺らしている。

まるで平沢妹のそれが切っ掛けだったように、観客から『唯ー！』だの『放課後ティータイム～！』や『りっちゃ～ん！』とか『ムギちゃ～ん！』や『澪センパーイっ！』だの『中野さーん！』や『桐島センパーイっ！』という様々な声と音が混じり講堂内はライブ特有な熱気に包まれる。

「なぁ…澪…」

「ん？」

「やっぱりバンドって最高だな！」

「クスッ　そうだな！」

田井中と秋山は互いに笑い。

「何か夢見てるみたいね……」

「ムギちゃん！　これが、こーよーかんだよ！」

「うん！　高揚感！」

琴吹と平沢も笑みを浮かべ。

「サク先輩」

「あン？」

「私、今、楽しいです！」

「ふーん…」

「興味ないみたいな返事しないでくださいよ……」

「…ライブってのは演る側も観る側も楽しむのは当然だ。だからお前のその気持ちも当然だ」

「分かりきってる事を言うなって事ですか？」

「…好きに捉えろ」

「はい！　分かりました！」

何やら上機嫌になった中野を一瞥し、テレキャスのネックを握る俺。

「『それでは、次が最後の曲です』

ライブはいよいよクライマックス。

「『もっと演奏していたいんだけど…時間がきちゃいました…』」

高校生活三年間の集大成。

「『今日はありがとうございました！』」

ふと、思い出したのは昨夜の真鍋の言葉。

【それが正しいんだけどね、少しでも長くクラスメイト達と学園祭の独特な雰囲気を味わいたいって子達が大勢いるのよ】

「『さわちゃん！Tシャツありがとう！　和ちゃん！いつもありが

とう！　憂！純ちゃん！　ありがとう！　クラスのみんなもありがとう！　トンちゃんありがとう！　部室ありがとう！ギー太ありがとう！　みんなみ～んな！ホントにありがと～っ！『」

それは正に今、平沢が体感しているんだろう。
少しでも長く、少しでも楽しく。

「『放課後ティータイムは、いつまでも…いつまでも……！』」

そして告げられる。
平沢の……

「『放課後ですっ！』」

意味不明な決意表明を。

「「は？」」
「「え？」」
「はぁ…」

最後にやらかした平沢に田井中と中野は揃って首を傾げ、秋山と琴吹はキョトンとし、俺は額に手を当てうなだれた。

「『それでは！！』」

自分のやらかした失態など意にも介さない平沢は得意げな表情で。

「もう、ホントに唯先輩は……」

なんて言ってるが、中野は楽しそうな表情で。

「いつまでも放課後？　う～ん…」

真剣に悩みだした琴吹は、腕を組んで瞑想し。

「いやムギ、唯の言ったことはあんまり深く考えなくていいから」

何気に毒を吐いた秋山は、苦笑いを浮かべ。

「アイツのＭＣは終始一貫して滑り気味だったな……」

一度ため息をついた俺は、独り言を呟き。

「別にいいじゃんか！　盛り上がってるんだしさ！」

それが聞こえたらしい田井中は、二カッと笑いスティックを掲げる。

「『最後の曲聴いてください！』」

もし、誰かに『後悔しないで精一杯やったか？』と問われれば、俺は間違なく頷くだろう。

「『『U&I』！』」

ワァァァァァァッ！！
パチパチパチパチパチパチッ！！

♪♪♪♪♪♪～

それほどまでに、俺達三年にとっての今回のラストライブは、実に内容が濃く、過去最高のものになった。

「『♪キミがいないと何もできないよ』」

流れる汗は全力の証。
高鳴る鼓動は高揚感。
包まれる熱気は成功の暑さ。

「『♪キミの声が聞きたいよ』」

レスポールを弾き歌う平沢。
レフティモデルベースを弾きコーラスをする秋山。
ムスタングを鳴らし身体をリズミカルに揺らす中野。
興奮と感動が入り交じった表情でキーボードを鳴らす琴吹。
正確なリズムキープで舵をとる田井中。
ただひたすらリードに徹する俺。

「『♪キミがそばにいるだけで　いつも勇気もらってた』」

本日十月三日日曜日。
現在時刻午後四時四十二分。

♪♪♪♪♪♪～

「『♪まずはキミに伝えたなくちゃ　『ありがとう』を』」

♪♪♪♪♪♪～…

夕暮れに包まれた講堂に、現存メンバーで形成された桜ヶ丘高等学校軽音楽部。
バンド名『ＨＴＴ』の最後のライブが……

「『♪思いよ　届け』」

♪♪♪♪♪♪♪～…

幕を閉じた。

ワァアアアアアアアアッ！！
パチパチパチパチパチパチパチパチッ！！

第百二十三話（後書き）

次話で学園祭編完結します。

第百二十四話（前書き）

最後の学園祭編完結です。

第百二十四話

それはまるで、水中にいるかのようにユラユラと。

『咲也君もその誰かを担ってくれるかい？　いつか誰かにコイツを渡してくれるかい？』

『おれがずっと持ってちゃダメなのか？』

『もしかしたらの話だよ。ダメじゃないんだけどね、どうもコイツは一箇所に止どまるのが苦手みたいだ』

『ふーん…』

『それでいいなら、キミにコイツをあげよう』

『じゃあ、もらう』

『ははは！　随分と淡泊に育ったもんだ！　兄さんの息子は』

まるで、風に舞った落ち葉が池に落ち、水面に揺れるようにユラユラと。

『たんぱく？』

『気にしなくていいさ。それじゃあ、咲也君にプレゼントだ』

『おも……』

『今はそう感じるけど、この先、咲也君が成長して徐々に身体が大きくなるにつれて、ソイツの重さが軽く感じられるようになるさ』

『ふーん…』

『まぁ、本音を言うと当初は拓也に担ってもらおうかと考えていたんだけどね、どうにもあの子は音楽やギターには興味がないようだ』

『まだ子供だから』

『ん？』

『アイツはまだ子供だから、そういうのが理解出来ない』

『ははは！　確かにね！　拓也はまだ五才だから咲也君が言う事も一理あるよ』

『アイツは子供だから、おれの後をくっついてくる』

『でもね』

『ん？』

『僕からしてみれば、咲也君もまだまだ子供だよ』

『……』

『現にソイツの重さにびっくりしただろ？　それが証拠だ。肩肘と意地を張らないで、大人になろうと背伸びしなくていいんだよ』

『……』

『さ、キミはキミのままで、拓也の相手をしてやってくれ』

『はぁ…』

『なぁんでためいきついてるの？』

『拓也！？　いつからいたんだい？』

『んとねぇ……さっき！』

『そっか。じゃあ拓也、咲也君と遊んでもらいなさい。僕は兄さんとお義姉さんに用事が出来たから』

『うん！　あーそーぼー！』

『ヤダ』

『ガーン！』

『あははは……さっきのアドバイスは咲也君の耳には届かなかったみたいだな……』

まるで、鳥の羽根が地上に向けてゆっくりと風に乗ってユラユラと。

『やっとスタートだな……』

『私達の軽音部……』

『ええっ！』

『夢は武道館ライブ！！』

『『『えぇ！？』』』

『卒業までに！！』

『…無理だろ』

『コラッ！　そこっ！　盛り上がってるのに水を注さない！』

ユラユラと揺れる落ち葉も羽根も意識も、形容しずらい何かの中。

しかし次の瞬間、何かの中にある意識は急激に、上から紐で引っ張られるように浮上していく。

「……」

うっすらと瞼を開けばオレンジ色と灰に近い白のコントラストに彩られた部室の天井。

そして思い出す。

（ライブ終わりか……）

と。

いつまでも鳴り止まぬ歓声と拍手に俺達は頭を下げ、少々後ろ髪を引かれる思いでステージを後にした。

汗を拭い、ブレザーを羽織り、楽器を各自分担して講堂から部室への道のりを歩きだした。

『ぁ……』

『どうしたんですか唯先輩？』

『ひこーき雲……』

『え？』

『ううん、何でもないよ。行くよ～　あずにゃん』

『あ、はい』

途中、平沢が立ち止まり夕暮れの秋空を見上げ、中野が振り返ったが、俺と秋山と田井中と琴吹はそのまま足を動かした。

部室に辿り着き俺は持っていたバスドラムを置き、アコギとテレキャスをギターケースから出し、それぞれのスタンドに置き、ライブ終わりの心地よい疲労感を味わおうと長イスに横たわった。

しかし、一向にそれは訪れず、知らず知らずに軽く寝てしまっていた。

「……」

若干気怠さを感じる身体を起こし、周囲を見渡せば、窓から差し込む眩しいくらいの夕陽を浴び、どこを見ているのか分からないぼんやりとした表情で、壁に背を預けて横一列に座る平沢達の姿が。

「大成功……だよね？」

レスポールを膝に置き、平沢が夢見心地に呟いた。

「何かあっという間だったけどな……」

ベースを抱えた秋山が、トンッと後頭部を壁に当てる。

「ちゃんと演奏出来てたか全然覚えてないわ～……」

普段のおっとりさは影を潜めた琴吹が、床に両足を伸ばした。

「てゆーか、Tシャツのサプライズでいきなり吹っ飛んだ……」

視線を空中に投げた田井中が、そのままに小さく身動ぐ。

「私もです。もう何が何だか……」

抱き抱えていたムスタングを両膝に置いた中野の手が、弦に当たりピンッと音が鳴る。

「……」

俺はそれらの光景を眺めた後に夕陽に眼を細め、再び長イスに横たわり、腕を眼にかぶせて、見ていたと思う夢を思い出そうとする。

『……』

誰一人として口を開かず、静寂が部室に広がる。

だからだろうか。

亀の水槽の酸素ポンプが妙に頭に響き、俺の思考力が低下の一途を辿り、夢の内容が霧散していくのは。

「おい……」

「ん？」

だから訊く。

「…忘れた事を思い出す方法知らねェか……？」

「……ちょっと分からないな」

時間にして約五秒。

たっぷりと思案した秋山が困った表情で視線を俺に向けた。

その答えに一つ息を吐き出し、平沢達に背を向けるように寝返りを打つ。

「忘れるって言ったらさ、やっぱり唯は自分の紹介忘れてたよな」

『そういえば』と事を話し出す前に付け加えた田井中が思い出したように語り始める。

「あの時の唯の驚いた顔ったらないよな～」

「だってあんなことがあるなんて、全然知らなかったんだもん！」

「だって言ってないし～」

「ぶぅ～！」

田井中のからかうような声。

平沢のふてくされたような声。

秋山と琴吹と中野のクスクスと笑う小さな声。

そして再びの静寂。

「でも……」

そんな静寂を切り裂いたのは平沢の、どこか満足した声だった。

「すっっごく楽しかったよね！」

部室に響いた声は嘘偽りがない清々しい程の心からの本音。

それは秋山達もそうであるように次々に口を開いていく。

「今までで最高のライブだったな！」

「みんなの演奏もバッチリ合ってたし！　なぁ？サク」

田井中から投げ掛けられた賛同を促す問いに、背を向けたまま右手を億劫そうに軽く上げ、重力に従うまま下ろす。

「サッくんもバッチリだって！」

「唯のギー太も喜んでるんじゃないか？　『サクと梓のギターと絡めて嬉しいよ～』ってさ！」

「ふぉ！？　ギー太が喋った！」

「私のエリザベスだって喜んでるぞ」

「なぁんだ、やっぱり澪はエリザベスって呼んでるのか」

「エリザベスを大切に想って扱ってるからな。唯のギター以上に愛着が湧いてるんだ」

「なんと！　ギー太にライバル出現だぁ！」

「だったら私のむったんも澪先輩に負けてませんよ！」

「ほほう、梓のギターは『むったん』って言うのか～」

「ムスタングだから『むったん』です」

「そういえば梓ちゃんも、あの日に『むったん』って言った～」

「はい、ムギ先輩に聞かれてちょっと恥ずかしかったですけど……」

「んじゃあサクのギー子も喜んでるな」

「うんうん！　『ギー太とむったんは私の最高のパートナーだわよ』って！」

「え？　咲也のギターはそんな喋り方なのか？」

「だってギー子は女の子なんだよ澪ちゃん」

「それにしても高尚過ぎますよ」

「やっぱりどんな喋り方なのか咲也君に聞いてみないと」

琴吹の発言が切っ掛けで、背中に五人分の視線が刺さるが、思考力が低下している俺は特に何の反応もせずに眼を閉じる。

「……」

そして

様々な

やはり

形容しずらい

何か
が
胸中に
去来
してくる。

「あれれ？　サッくん寝ちゃったの？」

「寝不足なんじゃないかな？」

「いや、アレだよムギ。男は背中で語るってやつだ」

「そうなんですか？」

「さぁ、よく分からないけど。ていうか何で律はそんなこと分かるんだ？」

「この前聡が言ってたからな！　真の男は背中で語るべしって」

「りっちゃんの弟君は何かカッコいいこと言うんだね～」

「まぁ、ゲームの台詞らしいけどな」

「聡って影響されやすいな……」

思考力
が
低下
している
今
の
俺
には
去来
の
正体
が
分から
な

い。
何か
が
コ
ミ
ア
ガ
ッ
テ
ク
ル。

「あ、ねぇねぇ！　サッくん起こした後何する？」

「咲也を起こすのが前提なんだな」

「とりあえず私はケーキが食べたいです！」

「まっかせなさい！　部費ならあるぞ～！」

「あれ？　でもスタジオ代が出せないくらい部費がないって律が言ってなかったか？」

「あれは九月分。二日前にさわちゃんから今月分の部費を貰った！」

「じゃあじゃあ、サッくん起こしたらみんなでケーキ買いに行こう！」

「ダメよ～！　私ケーキ持ってきてるもん」

「え？　ケーキは昨日の夜にみんなで食べましたよね？」

「私の執事がね、ライブが終わったら私に渡してくれたの～」

「へ～　そうなんですか……って！　ムギ先輩には執事がいるんですか！？」

「あれ？　言ってなかったかな？」

「私も初耳だ……」

「恐るべし！　琴吹家！」

「ムギちゃんムギちゃん！　じゃあ『お嬢様』って呼ばれてたりするの！？」

「う、うん。恥ずかしいんだけどね……」

「ふぉぉぉ！　ムギちゃんだね！」

「「いや、意味分かんないからな唯」」

交錯する。

大小。
とりどり。
様々。
よりどり。
数多。
数々。
幾千。
幾億。
無限。

な、起伏の多い感情。
渦のように入り交じり……弾ける。

「……」

長イスから立ち上がり一度アコギとテレキャスに視線を向け、夕陽に照らされるテーブルに足を向ける。

「サク、起きたのか？」

「そもそも寝てねェし……」

足を動かす。

「サ、サッくん？　ど、どこ行くの？」

何故か不安の色を含んだ平沢の声に足を止め、振り向かずに口を開く。

「どこも……　ここにいる……」

二言そう告げれば平沢は安堵の息を吐き、俺は普段は田井中が座っている椅子を窓に向けさせ、またも平沢達に背を向けた格好で座り、両手をダラリと下げて夕陽に眼を細める。

「サッくんが起きたから、ケーキ食べた後のこと考えようよ」

「次はクリスマスパーティーだよな。去年は出来なかったし」

うっすらと硝子に映る秋山の横顔は笑顔。

「その次はお正月ね！」

琴吹の瞳は……まるで太陽が水を照らしたようにキラキラと輝く。

……丁度夕陽が琴吹の顔に当たっている。
瞳が輝くのは、瞳の水分が倍増しているからだろう……

「みんなで初詣に行きましょう！」

心なしか中野の笑顔は、自分自身に何かを言い聞かせ、堪えるような笑顔。

「それから……」

言葉に詰まる秋山は、ベースを抱え込み唇を震わせ、言えなかった言葉を口にする。

「つ、次の新歓ライブの準備だな！」

零れないように、悟られないように、我慢して我慢して笑顔を作る秋山は気丈だった。

（相変わらずの不機嫌面だ……）

窓に映る自分の顔を見たくない俺は、顔を俯かせる。

「だったらさ澪！　また学校に泊まり込んじゃおうぜ！」

「りっちゃん！　今度はさわちゃんも誘おうよ！」

「それいいですね！」

「また新歓ライブで、わ、私のういんどみるが火を吹くよ！」

「唯ちゃん、火を吹いちゃダメよ～」

平沢達の会話は、途中で実現不可能な内容になっていく。

『来年』は『新歓ライブ』の準備に熱を入れよう……

「ま、また来年になったら物置部屋の掃除をした方がいいじゃないかな？　あれから一年経つんだもん、また汚れちゃってると思うの～」

「そ、そうだよな！　どうせ律と唯がまた余計な物置いて散らかしてるんだろうし！」

「失敬だな澪！　唯からも何か言ってやれ！」

「み、澪ちゃん！　よ、余計な物なんかないよ！　全部大事な物だもん！」

「散らかしてはいるんですね」

『来年』もまた『物置部屋の掃除』をしよう……

「夏になったらどうしよっか？　またデスデビルのライブに参加するか～？」

「あ！　じゃあ演芸大会に出ようよ！　こ、今度は私とあずにゃんだけじゃ……なくて……！」

「私と澪と唯とムギと梓とサクのみんなで！　だろ？唯」

「う、う、うん！　うん！　みんなで！　みんなで出ようよ！」

言ってしまえば早い言葉がある。
その言葉は今まで、その事に気付きながらも誰一人として俺達は口に出さなかった。

「な、夏といったら合宿もあるわ！　またみんなでお泊まり……しましょ！」

「そ、うだな！　合宿から帰って部室で練習する時は、クーラーが、あ、あるから……」

「み～お。唯はクーラー苦手なの忘れたのか～？」

「あ！　そう、だったな」

「うぅ…ヒック！　ご、ごめんねみんな！　申し訳なくて何だか涙が…ぅぅ…出ちゃったよ！」

「体質なんですから…仕方ないですよ」

言葉はまだ胸に仕舞ったまま。

俯かせていた顔を上げ、硝子に反射した平沢達の表情は精一杯の笑顔で、所々声を震わせ、それでも来年の計画を立てていく。

「その次は…ヒック…ね、ねぇねぇ、夏の次は…何し、よっか？」

「つ…ぅ…次は、また学園、さいが……くる、よな…」

「そうですね！　澪先輩の言う通りですよ！　今日みたいな最高のライブにするために！　精一杯、精一杯に練習しましょう！」

「そう、よね！　きょう…のライブは……ライブは今まで！　いま、までで……ぅぅ……」

もう、田井中と中野以外は……涙を流してる。

薄々気付いていたのか、徐々に気付いていったのか。

言ってしまえば早く、誰も言わなかった言葉、仕舞ったままの言葉

は……

「…最後だぞ……」
「次はもうないって」

『最後』と『次はない』という『終わり』の言葉。

「で、でも、でもぉ！　サッくん！　りっちゃん！　来年の……来年の学園祭は……！　今よりもっともっと、もっ、と！　上手くなってるよ！」

卒業のことは敢えて忘れ歩みを止めず駆けようする部員達。
それを止めたのは俺と田井中。来年はない。留年する気なのかと。
現実逃避を断ち切ってやり、現実と向き合うようにするのは部長と副部長の責任であり責務。

「何言ってんだよ唯。高校でやる学園祭はもうないの」

「…平沢だったら留年も有り得るが……敢えて口には出さんでやる」

「コラコラ。口にしちゃってるからなサクぅ…」

振り向かずに言うと田井中が反応しツッコむ。
その声からは普段の活発さはなく、若干震えていた。

「そ、そっか～　留年すれば……いい、のかぁ～」

「ま、真に受けるなっての～」

平沢はレスポールを抱き締めてボロボロと大粒の涙を頬に伝わせ、
田井中は目尻に光るものを輝かさせる。

「……うっ…ぅぅぅ……」

秋山は膝とベース抱え、顔を俯かせ啜り泣く。

「やだやだやだぁー！　終わっちゃうなんて、来年がないなんて、
そんなのやだぁー！」

琴吹は運命に抗おうと、タダっ子のようにジタバタと両足を動かし
涙を流しながら叫ぶ。

「ムギ先輩、わがまま言わないでください……　唯先輩も子供みた
いに泣かないでください」

唯一女性陣の中で涙を流していない中野が強くあろうと、気丈に振る舞うが、俺から見ればアイツも限界なんだろう。

「こ、これは…汗だよぉ……うぅぅ…」

「あ、明らかに泣いてま、すよ」

時折、唇を噛み締め、涙を流すまいと耐えている様子が垣間見える。

「み～お～！　泣いてんのか～！」

「り、律だって、な、泣いてるくせに……」

「わ、私のも汗だ！」

俺は再び顔を俯かせ、右手を頭に伸ばした。

「ほら、ムギ先輩。涙を拭きますからコッチ向いてください」

「梓ちゃぁん……」

「はい」

「梓ちゃん、は、つ、強いね……」

「強くなんかないですよ、私も泣きそうです……」

前髪にあるピンに手を掛ける。

「強いのはサク先……」

「グスッ　ど、どうしたの？」

「いえ、何でもありません。はい、コッチ向いてください」

「梓ちゃん…ありがとうね…」

「はい」

「グスッ……うぅぅ…ヒック……ぅぅぅ……」

「ムギ先輩。大丈夫だから落ち着いてください」

ピンを外し、前髪を手櫛で弄り、眼にかかるようにし、深く椅子に腰掛け、ただただ床を見つめる。

「良かったよなっ！　私達の演奏良かったよなっ！」

「うんっ！　とっても良かったっ！」

「澪もムギも何言ってんだよっ！　武道館でライブしたんだから最高に決まってるだろっ！」

「そうだよ！　サッくんが言ってたよ！　武道館だって！　だからぁ！　すっごいライブになったんだよっ！」

「私！　先輩達と演奏出来て幸せですっ！　唯先輩と澪先輩と律先輩とムギ先輩とサク先輩と一緒に武道館のステージに立てて本当に幸せですっ！」

ゆっくりと……

「サッくんっ！」

ゆっくりと……

「澪ちゃんっ！」

ゆったりと……

「りっちゃんっ！」

ゆったりと……

「ムギちゃんっ！」

ゆっくりと……

「あずにゃんっ！」

俺は……

「ホントにありがとぉーーっ！！」

眼を閉じた。

「うん！　ありがとなっ！」

「私からもありがとうっ！　唯ちゃん！

「ホントにありがとうございますっ！」

「サクも……って」

「グスッ　ど、どうじだのりっちゃん？」

「何でもないよ。サクも……てたんだなって」

「「「え？」」」

「だから、何でもないって」

「……サク…先輩……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　真鍋　和】

現在時刻午後五時三十分。

軽音部のライブが終わってから、学園祭実行委員のみんなとで、講堂で行う最後のプログラムの閉幕を執り行なってから、私と山中先生と修司は軽音部の部室がある音楽準備室に向けての階段を上がっていた。

「唯達、すっごく驚いてましたね」

「ドッキリTシャツ作戦大成功！　これであの子達の中で私の株が上がったに違いないわ！」

「それを手伝ったのは俺と和ちゃんだということをお忘れなくってね～」

ライブが始まる一時間前だったかしら？

曽我部先輩に頼まれてた桜高祭の案内を終えて廊下を歩いてたら、もの凄く落ち込んだ修司と遭遇したのは。

『ど、どうしたのよ？』

『和ちゃ～ん……　せっかくの学園祭なのに俺は一人。　滑稽だと笑ってくれてもいいぜ……』

『笑わないけど……』

『サクッチのケータイには繋がらないし、西野と水本はどっか行くし……　これが欠落感というものかッ！』

『違うんじゃない？』

『じゃあアレだッ！　隣の芝は青く見えなんとか』

『それも違うわよ』

『『る』っていう最後の一文字を何で言わなかったのかしら？』とか思ったけど、言っても今の修司の状況には当て嵌まらないから私は話題を変えることに。

『だったら私と学園祭見て回る？』

『マ、マジで……！？』

『って言っても三十分ぐらいだけどね。軽音部の状況確認とかしなくちゃいけないし』

『かまへんかまへんッ！　ヤッベェッ！　和ちゃんが女神に見えるぜッ！』

『なによソレ』

『細かいこと気にしなさんなッ！　そうと決まれば二年のヴァンパ

イア？ヤ？　どっちでもいいか！　とにかくそこの喫茶店行こうぜッ！　何かそこのトマトジュースが舌が痺れる程マズイらしいんだってさ！』

矢継ぎ早に口を動かした修司に色々と疑問点があったけど、修司が今にも嬉しそうに駆け出しそうだから、私は苦笑いを浮かべていた。

そして修司と共に一歩足を動かしたら、山中先生が私達に後ろから声を掛けた。

『真鍋さん、影宮君。ちょっと手伝ってもらいたい事があるんだけど、時間いいかしら？』

『手伝ってもらいたい事ですか？』

『えぇ』

それが唯達を驚かせたサプライズの内容だった。

私はすぐに首肯したけど、修司は凄い勢いと血相で山中先生に迫っていった。

『ノンノンノンノンノーンッ！　俺達は今から遊ぶんだいッ！　トマトジュースを飲むんだいッ！　幾ら先生でもそれを邪魔しちゃいかんぜよッ！』

『どうしても無理？』

『りッ！』

『好きな物一品だけ奢ってあげるけど？』

『それで俺と和ちゃんは何をすれば良いので？』

『はぁ…』

生徒を物で釣る先生も先生だけど、さっきまであんなに意気込んでいた修司が簡単に釣られて私は咲也みたいなため息をついた。

「分かってるわよ影宮君。だから、わたあめ奢ってあげたのよ」

先生が修司の持つわたあめを指差して得意げに笑った。

私は『奢ってもらったのが、わたあめで良かったのかしら？』って疑問を感じたけど、上機嫌な修司を見るぶんにその疑問は意味がないみたいね。

「それにしても、ちょっと後悔を感じるよね～」

「「え？」」

嬉しそうにわたあめを頬張りながら、そんなことを口にした修司に

私と先生は揃って立ち止まり、振り返った。

「和ちゃんと先生も見たっしょ？　軽音部のライブ。みんな楽しそうだったじゃん？」

確かに凄く楽しそうだった。

咲也は相変わらず笑ってなかったけど、唯も澪も律もムギも梓ちゃんも笑顔で、見ている私まで心が弾むような、私はちょっと恥ずかしいことをしてしまったけど、そこを差し引いても十分に良い思い出になるようなライブだった。

「俺がさ、一年の時、部活には興味なくてバイトしてる方がいい派の人間だったのをご存じだとは思うけど」

「初耳なんだけど……」

さも当然のように言われても……

「結局バイトには落ちて、そのままズルズルと今日まで。何かステージに立ってる咲也を見てたら、俺も部活やってたらあんな風に輝けんのかな～とか思っちゃったわけ」

「それが後悔？」

先生の問い掛けに『イエース』と答えた修司は窓から校庭を眺める。

「後の祭りってやつ？　この桜高祭みたいにね」

最後はちょっと意味が分からないけど、修司なりに今回の軽音部のライブは色々と感じたみたいね。

「だったら、次は後悔しないことよ」

先生が一歩階段を上り、腰に両手を当てる。
私と修司はそんな先生を見上げる。

「影宮君は実家を継ぐために努力してるんでしょ？　その道が間違ってないってずっと思えるように今以上の努力も必要よ」

「はッ！　レベルアップならぬ努力アップッスねッ！」

「ま、そんなとこね」

微笑んだ先生に私も笑い『行くわよ』と修司に告げて、足を動かして部室前に辿り着いた。

「みんな！　お疲れさまーっ！」

目の前にある部室の扉を先生が勢いよく開けて、私達は中に入る。

「…静かにしとけ……」

すると、聞こえた声に私達は咲也に視線を向ける。

咲也は私達に背を向けて、テーブルの椅子に座っていた。

「…寝てる奴がいる……」

振り返らずにそう告げた咲也の一言に、首を動かせば壁に背中を預けて唯に寄り添うように寝息を立てているみんなの姿。

「幸せそうな顔」

唯達の手は繋がれていて、本当に幸せそうに眠っている。

……でも、その中には咲也の手はなくて……

「ねぇ咲也くん。唯ちゃん達、眼が腫れてるみたいだけど?」

「…さっきまで泣き叫んでたからな……今は泣き疲れて寝てんだろ……」

咲也は振り返らなくて……

「そう。最後だから感極まっちゃったのね……」

「…みてェだな……」

どこか他人事のように呟く咲也の背中が何だが物悲しく感じて、知らず知らずに私は咲也から視線を外した。

「このままじゃ痛んじゃうわね……」

先生は梓ちゃんの傍らに置いてある紅いギターを手に取って専用の台座に置く。

「モグモグ……」

修司は物珍しそうにキョロキョロと部室を見回して、ひたすらわたあめを咀嚼している。

「私も手伝います」

私は澪の近くにあったベースを手に取って専用の台座に置く。

『……』

そして静寂が訪れる。

「あー　甘いもん食ったら何か喉渇いたー」

すると、わたあめを食べきった修司が徐にズボンのポケットから財布を取り出す。

「なぁ、サクッチ」

「……あン？」

「何かジュース買ってきてくんね？　金は俺が出すからさ」

「……何でお前の頼みを聞かねェとならねェんだよ」

「いーじゃんか。たまには親友の頼み事を聞いてもバチは当たらんよ」

「……」

いつもは修司に反論する筈の咲也は椅子から立ち上がって私達の方に歩いてくる。
普段はしているピンを外して前髪を眼にかけていて、しかも少し俯いてるから、それと相俟って表情が全く窺えない。

「ゲッ！　五百円しかねェけど……ほれ」

ピンッと修司が弾いた五百円玉はクルクルと空中を舞って咲也に向かう。

「……水道水でいいな？」

「よくねェよッ！？」

一切五百円玉に視線を向けず、歩きながら右手でキャッチした咲也は私達の横を通り過ぎる。

「あ！　咲也…！」

何を言おうとしたのか自分でも分からない。
だけど、何かを言いたくて私は咲也の背中に手を伸ばした。

「ちょい待ち、和ちゃん」

でも、私が掴んだのは修司が持っていたわたあめの割り箸だった。

「修司？」

私が疑問の視線を修司に向けたのと咲也が部室の扉を閉じたのは殆ど同時で、私の視線に逃れるように修司はポリポリと頬をかきながら苦笑いを浮かべた。

「男ってさ、女の子の前じゃ弱いとこを見せたくないんだよね」

「え？」

「特に咲也はさ、あんな性格じゃん？　ガス抜き出来る時間が今は必要なんだよ」

瞬間、修司の行為の意図を理解した私は持っていた割り箸をゴミ箱に捨てて、扉に視線を向けた。

「咲也って軽音部のことを色々と背負ったのかもしれませんね」

「立場上は副部長だけど、事実上では咲也くんがみんなを引っ張ってたところがあるからね」

先生は唯のギターを専用の台座に置いて長イスに座る。

「お？　なんじゃこりゃ！　亀がいる！」

修司はトンちゃんという名前だったと思う亀が泳いでる水槽に燥ぎながら向かう。

「お疲れさま、咲也……」

私は扉から咲也の二本のギターに向かって労いの言葉を静かにかけた。

「ん……和…ちゃん？」

すると、目を覚ました唯が、律と繋いでいた左手を離して眠たそうな眼をゴシゴシと擦りながら、辺りをゆっくりと見回す。

「ごめん、起こしちゃった？」

「……くん」

「え？」

「サッくんは！？」

眼を見開いた唯はムギと繋いでいた右手も離して、勢いよく立ち上がる。

「咲也くんならジュース買いに行ったわよ」

先生のその言葉を受けた唯は普段では見ることのない素早い動きで、扉を開けて……

「唯！？」

私の制止も意に介さず駆け出していった。

「唯ちゃん、どったの？」

「さぁ……」

「影宮君。咲也くんのガス抜きには唯ちゃんが必要みたいよ」

「え？」

「な、何だってーッ！っと叫んだところで意味が分からない俺ッ！」

悪戯っ子みたいに笑う先生に私は首を傾げるばかり。

「それはそうと先生」

「なぁに？」

「生徒会が立て替えたＴシャツ代なんですけど……」

「ぐー……」

「寝たふりしないでください……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

桜高祭は既に閉幕したようで、他校や一般人の姿は見受けられず、露店を片付けようと慌ただしく桜高生が駆けていく。

俺は俯き加減で歩き、冷気を含んだ秋風の対策としてブレザーのボタンを閉じズボンのポッケに両手を突っ込む。

たまに駆ける桜高生にぶつかりそうになりながらも、今年の春に平沢妹に未来の入部届を渡した場所である自販機に辿り着いた。

「……」

ポッケから五百円玉を取り出し、自販機に投入し、直感で炭酸ジュースを購入する。

ガコンッと音を立て出てきたジュースを取り出すべく腰を落とした瞬間に、それはやってきた。

「はぁ…！　はぁ…！　サッ…くん…！」

「……」

背後に感じる人の気配。
荒い呼吸。
疲弊気味な声。
相変わらずの禁句。

どうやらこの場所は平沢姉妹との出会いの場らしい。

「こ、ここにいたんだぁ……」

俺は取り出した炭酸ジュースを右手に持ち、自販機のボタンを押しホットコーヒーを一本購入し、また腰を落としていた。

「自動販売機って学校の中にいっぱいあるから、サッくんがどこにいるか分かんなかったけど、二回目で会えたよ！」

言う程の数じゃない自販機の内の目の前の一台の釣り銭が出るレバーを捻り、三度目となる腰を落とした。

「「……」」

どうしたらいいのか分からない、と、いった感じの雰囲気が背後から伝わる。
俺は振り返らずに黙って二百六十円を釣り銭取り出し口から取り出し立ち上がる。

「…おい」

「え、あ！なぁに！？」

振り返り平沢に百二十円を差し出す。

「…何か買っていいぞ」

「あ、うん！」

トコトコと俺に近付きおずおずと差し出す両手に百二十円を落とし、平沢の隣を通り過ぎる。

「ど、どこ行くの？」

何を慌てているのか知らんが、振り返らずに傍らにあったベンチに指を向けると、『ちょっと待ってて！』と声をあげて自販機に金を投入する平沢。

「……」

平沢の後ろ姿をぼんやり眺めつつ缶コーヒーを傾けていると、平沢がホットココアを両手に持ち振り返った。

「えっと…隣、いいでしょうか？」

何を改まる必要があるのか理解しがたいが、深く考えのは面倒なので頷いておく。

「し、失礼しま～す」

ちょこんと座った平沢はココアを両手で転がしている。

「「……」」

俺達の間には会話はなく、時間だけが過ぎていく。
そして、缶コーヒーの中身が後一口となった矢先に平沢が口を開いた。

「サッくん」

第一声は直す気など更々ないんであろうブロックワード。
間髪を入れず異を唱えたいが、そうする前に視線を正面に向けたままの平沢が先に開口した。

「終わっちゃ…たね」

「……」

「何だか…悲しいよ。だって、もう……」

平沢の唇と声が震える。
転がしていたココアの缶の文字が読める。
顔を俯かせる。

「もう……みんなで演奏出来ないんだもん…！」

「……」

「夢中になれる時間が、終わっちゃったよぉ！　サッくんっ！」

顔を上げた平沢の表情はまた泣いていた。
止めどなく溢れる涙が夕陽に照らされ輝き光る。

「……」

「ぁ……」

男は女の涙に弱いと聞いたことがあるが、自然に伸びた俺の右手が平沢の頭に乗ったということは不思議だ。
これは不思議は不可思議だから不思議理論ではなく、どこかの科学者に解明してもらいたいものだ。

「うわぁ……」

上目遣いで見上げる平沢は、頬を紅潮させ照れたようにモジモジと身体を動かす。

「確かに俺達三年はこれで引退だが……」

平沢の頭から右手を離し、缶コーヒーをその手に持つ。

「…何も演奏が出来なくなったわけじゃねェだろ」

「で、でも……」

未だに頬がほんのり紅い平沢は視線をココアに向ける。

「気持ちは分かるが……」

言葉に詰まる。

「サッくん？」

俺自身、まだ気持ちの整理がついてない状態で平沢に言葉を掛けられない、仮に無理にそれをしてしまったら上辺だけになってしまう。

「音楽は……」

それでも確かに言えることが一つだけある。

今はそれで勘弁してもらいたい。

「繋がりだ……」

「繋がり？」

「…空と一緒で、どこにいても何をしていても人と人を繋げる」

「空……」

夕暮れから薄暗くなっていく秋空を見上げる平沢につられ俺も見上げる。

そこには一番星が煌めき、飛行機雲が一つの線を描いていた。

「…夢中は心を奪われる事だ。だから時間なんて関係ねェ……っと俺は思う」

視線を秋空から右手にある缶コーヒーに戻し、一つ息を吐き出して缶コーヒーを傾ける。

「そっかぁ……」

すると、平沢が空に向けていた顔を俺に向けた。

「空ってどこにいても繋がってるんだよね！」

風が吹く。
春は勧誘なんて無駄だと嘲笑うかのような突風だったが、秋は笑顔を運んでくる優しい風。

「もしかしたからあの飛行機雲も、あの日の飛行機雲で、夢中になれる何かを探してたあの頃の飛行機雲で、それで、夢中になれる音楽を見つけた私は、もう！」

「夢中を失くさない…か？」

「うん！　そう考えたらね！　何かね！　あのね！」

上手く言葉に出来ないんだろうが、興奮している平沢の表情は泣き顔ではなく笑顔。
今はそれだけで十分だった。

「あ！　無限なんだよ！　終わったけど終わってないんだよ！」

「随分と哲学っぽいこと口走ったな……」

気が付けば俺の胸中に去来している何かは、消え失せていた。
平沢のために掛けた言葉は大きくなり、どうやら俺に返ってきたようだ。

「何かよく分かんないけど、胸がすぅ～ってなったよ」

「漠然な感想だな……」

「あれ？　サッくんピンは？」

「お前、物事の脈絡なさすぎ……」

普段のマイペース娘に戻り、思わずため息一つ。

「あ！　そうだ！」

何を思ったのか、ニコニコとしながら自身がつけている二つの黄色いピンの内、一つを外し……

「ちょ～っと動かないでね～」

それを俺の前髪に装着しやがった……

「うん！　完璧！　いつものサッくん！」

「…取っていいか？」

「ダメ～！　私とお揃いがいいも～ん♪」

「はぁ……」

満面の笑みでそんなことを言う平沢に深いため息を吐き出しベンチから立ち上がると、ガガガッとノイズ音が放送スピーカーから流れた。

『本日午後六時より、校庭にて桜高祭の後夜祭を行います。　桜高生徒並びに職員、関係者の方は奮って参加してください。繰り返します。本日……』

この放送を聞いた平沢は右手にココアを、左手に俺の右腕を掴む。

「行こ！　サッくん！」

「ダリィから明日な……」

三年間勤しんだ軽音部を引退した本日。

「明日は振替休日だから学校ないよ？」

「やっぱお前ズレてんな……」

この日を区切りとし、新しい一歩を踏み出すとしよう。

「あ、そうだったね。りっちゃん達呼ばなきゃね」

「もう勝手にしろ……」

スタートがあるんならゴールもある。
だが、ゴールテープを切っても道は続いていく。

「あれ？　ケータイがないや」

「…先に言っとくが俺もねェからな」

「えっ？　何で分かったの？」

「…単純思考のお前の行動パターンを読むのは容易い」

「サッくん忍者みたいだねっ！」

「何故？　つうか、けなされた事に気付けよ……」

「ほぇ？」

「はぁ…」

現在時刻午後五時五十七分。

伸びゆく影が徐々に景色と同化し、秋風に舞った木の葉がユラユラと揺れ俺達の前にゆっくりと落ちてきた。

その光景はさながら……

「ひこーき雲だぁ！」

「飛行機雲……か…」

だった。

第百二十四話（後書き）

全十六話の長編になった学園祭編はこれにて完結です。

次話は少し時間を溯ろうと思います。

第百二十五話（前書き）

語り忘れた夏の計画編です。

第百二十五話

芸術や食欲という代名詞が付き、夕暮れにはどこか物悲しさを感じる秋の季節から時間は溯る。

この季節は多くの蝉が一斉に鳴き、実に耳障りな大合唱を街中の至る所で響かせ、宇宙で燦々と煌めかせる灼熱の天体が、そのエネルギーを地表面の七十パーセントは海で覆われてある我ら人類の活動地である地球に送り届けて熱波を襲来させる。

例に漏れず俺が住んでいるこの街にも、大合唱と熱波は到来する。

即ち夏と呼ぶに相応しい季節。

これは真夏日に起きた、とある出来事。

出来事の切っ掛けは一通のメール。

「はい、澪ちゃん。旅行のお土産」

「ありがとう」

「りっちゃん」

「サンキュー」

「唯ちゃん」

「うわぁ～！　キレ～！　ありがとねムギちゃん♪」

「喜んでくれて私も嬉しいわ♪　本当は昨日のお祭の時に渡したかったんだけど」

「いいな海外旅行。フィンランドだったよな？　ムギが行ってたのって」

「うん♪　避暑旅行に行ったの♪」

「てか、昨日サクも言ってたけど、夏祭りの焼きそば食べるために早く帰国するムギって凄いよな～」

「フィンランドには焼きそばないし、夏フェスで食べれなかったから、どうしても食べたくって～♪　あ、憂ちゃん」

「はい」

「はい、憂ちゃんにも♪」

「うわぁ～！　ありがとうございます紬さん！」

「ううん、いいのよ～♪　え～っと、後は咲也君と梓ちゃんの分だけど……」

「よしっ！　んじゃあサクと梓を呼んで計画立てるか！」

「急にどうしたんだ律？　ていうか計画って？」

「決まってるだろ！　軽音部で行く海外旅行だ！」

「おぉー！　りっちゃん隊長ナイスアイディア！　みんなで海外旅行～！」

平沢家にて、まさかこんな計画が勝手に進行しているとは、勿論俺は知る由はないし、何より現在……

「アーーー……」

「……」

「あつ……」

「うん……」

「アーーー……」

「……」

「あつ……」

「うん……」

「アーーー……」

「……」

「あつ……」

「うん……」

「アーー…「影宮」…ん？」

「ごめん。鬱陶しいから黙ってくれ……」

「そりゃわるうございやんした……」

「影宮クンが卓の言葉に素直に従った……！って、あれ？」

「どした？星都」

「き、桐島クンが……ピクリとも動かないんだけど……」

「はぁ！？」

「サクッチィー！？」

俺はそれどころではなかった。

十月三日から溯ること五十一日目の夏休み真っ最中の午後。
昨夜の夏祭りの翌日。
本日八月十三日金曜日。
現在時刻午後二時二分。

うだるような暑さとはよく言ったもので、修司と西野と水本はうだりにうだり、俺はいつかの酷暑の日の部室のサウナ状態に敗北を喫したように、又もや生ける物言わぬ屍になってしまっていた。

場所は影宮家の修司の自室。

そこに俺達は集まっていた。

二日連続で修司の家にいる理由として挙げられるのは、夏休みの課題を協力して片付けようと約二時間前に西野からメールが送られてきたからだ。

西野が提案するとは珍しいと思いつつ、成績面で真鍋や秋山や琴吹には下回るが、それでも優秀には違いない水本も一緒だと文面にあったので、一人でやるよりかは遥かに効率はいいだろうと思案した俺は賛成一票の返信メールを打った。

しかしどうやら西野は修司にもメールを送ってしまっていたらしく、修司から『俺んチでやろうぜッ！』というメールが。

アイツの課題は昨日俺が有り得ない解答で埋めたので、それがバレたかと思ったが、そうではないらしく、単に騒ぎたいだけのようだった。

修司の家で課題を片付けるのは些か躊躇ったが、西野の賛成の意を既に伝えてしまった手前、後戻りは出来ないと踏んだ俺は、ため息を一つ吐き出して課題を鞄に詰めて自宅から出ていった。

「ちょっと！　桐島クン大丈夫！？」

「咲也は夏に弱いからなッ！　え？何故知ってるかって？　それは俺達が親友だからだッ！」

「誰も聞いてねぇし、何か飲み物持ってきてやれよ」

しかしだ。

相変わらずの炎天下の中、弱りに弱りながら修司の家に着き、いざ課題を亡き者にしようとしたが、タイミングが悪いことに修司の部屋のクーラーは今日の朝に故障したようで涼を得ることが出来ず、挙句には今日の気温は観測史上最高らしい。

窓を全開にし扇風機を回してはいるが、いかんせん最高気温だ。

生暖かい風が頬を撫でるだけで、俺の元から無かった気力を更に奪っていき、今に至る。

（太陽め……）

床に倒れ込み、バタバタと慌ただしく駆け回る三人分の足音をぼんやりと耳に入れ、課題なんぞ手に付く筈がない原因の星に心中で文句を零していると、ズボンのポッケが震えた。

「俺は咲也の親友だから麦茶確保に全力を注ぐッ！　西野、手伝いなさいッ！」

「手伝うけど少し静かにしろよ。タダでさえこの暑さにイラついてんのに、もっとイラつくわ」

「そんなこと言うんならアナタにはあげないわよッ！」

「何でオネェ言葉になってんだよ……」

怠惰な動作でケータイを取り出してディスプレイ画面を正視。

【送信者：平沢　唯】
【件名：ねぇねぇ】
【本文：海外進出するよ！】

「……は？」

猛暑に俺の頭がやられてなければ、ディスプレイ画面に映る平沢からの唐突過ぎる意味不明な八文字に、クエスチョンマークが踊るのは正常な反応だろう。

「……」

とりあえず気怠そうに【？】と一文字返信し、先程からひたすら課題のプリントで扇いで生暖かい風をプレゼントしている水本に声を掛ける。

「…おい……」

「あ、大丈夫？」

「…夏になったら脱水症状になりかけるどっかの誰かじゃねェし、そんなヤワな身体じゃねェ……」

「え？誰？」

『アイツだ』と、言ったところで水本には到底理解出来ないだろう。

「…そんなことより……」

ゆっくりと起き上がり、四人で囲んでいたテーブルの上にある俺の課題を水本の課題の上に重ねる。

「…頼むな……」

「え？　まさか……」

察しがいいようで『僕が桐島クンの課題もやるの！？』と心底驚愕している水本を尻目に立ち上がり、筆記用具を詰め込んだショルダーバックを背負う。

「しかも帰る気！？」

「…こんな暑さの中で効率的に課題とか言ってる場合じゃねェだろ……」

「確かにそうだけど……」

「…俺の課題はお前が片付けてくれることになったし、それに来週から夏期講習が始まる。それに向けて今から体力を温存しとかねぇとな……」

「僕はまだ了承してないんだけど……　ていうか夏期講習があるんなら尚更自分でやった方がいいと思うんだけど」

「…ダリィだろ……」

「ぶっちゃけたね……」

「…今度何か奢ってやるから頼んだ。じゃあな……」

「あ！桐島クン！って、行動早過ぎだよ……それにしても遅いなぁ、卓に影宮クン。遅いと言ったら今年の残暑見舞いの葉書がまだ来ない事だよね。まぁ、そんなに期待はしてないんだけど貰ったら貰ったで嬉しいよね。最近じゃ年賀状とかの文章やイラストはパソコンで作ってるのが多いらしいけど、やっぱり手書きの方がいいと僕は思うんだ。その方が趣があるし古き良き時代の日本を感じられるよね。風情があるってやつかな？あ、風情と言ったら……」

ガチャ

「たっだいまーッ！しかしそこには咲也の姿がなかったーッ！？」

「もしかして帰りやがったか桐島の奴？」

「うぉいッ！水…本……」

「……という観点を考慮して僕なりの結論が、滝がマイナスイオンを発生させるのは人々に安らぎを与えるため、それは即ち癒しだと思うんだ。でもこれはあくまで持論だから鵜呑みにしないでほしいんだ。あ、鵜呑みと言えば注目すべきはその語源の由来。鵜が魚を丸飲みするから、理解しないで受け入れることなんだって。ちなみに鵜という鳥は……」

「お、おい西野よ……」

「あー…っとな、星都のこの状況は……」

「鵜呑みと湯飲みは別物なのかッ！？」

「ダメだ……　桐島がいねぇと影宮の対処法が分からない……」

「……だから、鵜飼いという職業があるんだってさ。それにしても鵜飼いって凄いと思わない？だって……」

「ウカイ？愉快の最上級系か？」

「カムバック！桐島ー！」

――――――――――

西野の嘆きボイスが聞こえた気がしたがスルーし、部屋を出、影宮

家からも出、幾分軽くなった鞄に乗じて気分もそれに習うかと思いきや……

「アチィ……」

当たり前だがなるわけがなかった。

遮蔽物が何もない青空からカッ！と擬音が聞こえそうなぐらい太陽が輝くものだから、気力が更に萎える。

とにかく、この場所でいつまでも突っ立っていてはマジで脱水症状になりそうであり、アホっぽい修司の親父に絡まれる可能性も無きにしも非ずであり、そうなると厄介な事この上ないので、亀のようなスピードで自宅への道を歩き出す。

（焼ける……）

陽炎がアスファルトに揺らめき、ジリジリと厳しい陽光が首筋を焼いていく。

こんな暑さの中、歩くのは自殺行為だ。

現に徐々に意識は朦朧としていき、自然と頭は下がっていく。

このままいけば間違なくそのままぶっ倒れてしまいそうだ。

（地球め……）

怒りの矛先が太陽から地球に変わったのがいけなかったのか、それが地球の癇に触れてしまったのか、心なしか日差しが更に厳しくなった気がした。

「……」

立眩みを覚えて思わず立ち止まり、気をしっかり持とうと顔を上げれば……

「…何故……」

そこは繁華街だった。

どうやらあまりの暑さに思考が回らず、自宅とは逆方向に歩いてしまっていたようだ。

「はぁ……」

自ら進んで苦行を行ってしまった自分の失態にうなだれ深いため息が。

そんな時だった。

「サク先輩」

ギラギラと輝く真夏日の陽光を全身くまなく浴びたところで背後から声が聞こえたのは。

「って、大丈夫ですか？　かなり暑そうですけど……」

ギギギッと擬音が聞こえそうなぐらいに怠惰な動作で首を後ろに動かせば、そこには中野の姿が。

「…そう感じたんなら太陽ぶっ壊してこい……」

「いや、無理ですから」

つうか、おかしい。

コイツは昨日夏祭り会場で見た時はブラック中野状態だったのだが、今目の前で呆れた表情をしているコイツはすっかり日焼けが褪めたホワイト中野……もとい、通常の中野だ。

偽者じゃねェだろうな……

「…おいニャカ野……」
「ニャカ野じゃないもん！」

間髪を入れず両手とツインテールをパタパタと上下に動かし否定反応をしたということは本物だ。

「いきなり何なんですかもう！」

「…別に。この暑さに思考力が低下した結果だ……」

頭に煙突があったら怒りの噴火煙をあげそうな程に憤慨している中野に一言『…じゃあな……』と呟き踵を返す。

「あれ？　行かないんですか？」

「あぁ？」

しかし、その行く手を遮ったのは疑問をふんだんに含んだ中野の声と表情だった。

「唯先輩に呼ばれたからここにいたんじゃないんですか？」

「…言ってる意味が分からん……」

「ですから……」

説明するのが面倒になったのか、それとも手っ取り早くと思ったのか携帯している水色の肩掛けポーチからケータイを取り出した。

「これですよ」

見せつけるディスプレイ画面には平沢からのメールがあった。

【件名：Ｒｅ・ねぇねぇ】
【本文：今からハンバーガーショップに来て～
サッくんも来るから～】

「サク先輩には唯先輩からのメールこなかったんですか？」

「…意味不明なのはきたが……」

そう言ってはポッケからケータイを取り出す。
するとランプがチカチカと点灯していた。
ケータイを開き確認すると平沢からのメールが。
内容は今し方見た中野のものとほぼ同じで、違うとしたら、あの禁句が中野の名前になっていたところだ。

恐らく進行方向を間違う程に意識が朦朧としていたせいで、ケータ

イのバイブ音に気付かなかったようだ。

「きてましたか？」

「…あぁ……」

「何があるんでしょうね？」

「…だったら確かめてこい……」

ケータイをポッケに仕舞えば、陽光が身を焼いていく感覚を思い出し、この場からエスケープしようかと身を翻す。

「じゃあ一緒に行きましょう」

「…ヤダ……」

俺が去ろうしたことを猫ばりに敏感に察知した中野は、俺の黒い七分丈シャツの上に着用している麻生地ベストの端を摘み、逃がすまいとしてきやがった。

「唯先輩に誘われてるんですから、行かなきゃダメですよ」

「…こんな猛暑日にこれ以上は歩けん……」

「それでもですよ」

「…俺にメリットはない……」

「美味しい飲み物が飲めますよ」

「…ンなもん、そこらの自販機に五万とある……」

ああ言えばこう言う。

「いいから行きますよ」

そんなやり取りに痺れを切らせたのか、中々首を縦に振らない俺の背後に中野が回り込みグイグイと背中を力任せに押してくる。

「…お前、感心する程の横暴と傍若無人ぶりだな……」

「そんなことありません。それにサク先輩には言われたくありませんよ」

「…俺は自分に正直なんだ……」

「それが傍若無人なんです」

人体に間違なく害があるであろう照りつける陽光と蝉の大合唱に俺の気力は底を尽きかけている。

故に俺との身長差が二十センチはあるミニマム中野の、更に女の力

に抵抗出来る力は残っている筈もなく……

「いらっしゃいませ～☆」

敢え無く、河口ＯＧと軽音部員が結束して俺をＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬのライブに参加させた以来である、店員が瞳をキラキラと輝かせる例のバーガーショップに連行されてしまった。

「涼しいですね」

確かに店内は冷房が効いている。
火照った身体をたちまち冷やしてくれる。

「涼しいですし、美味しい飲み物だって飲めますから」

暗に『来てよかったでしょ』と伝える中野に負けた気がした。

「……」

だが、それを認めるのは些か悔しいので入店してから一言も口を動かさずに無言を貫いていると、中野は俺が喜んでいると勘違いしたらしく満足げに微笑んでいた。

「とりあえず何か買いましょう」

「…アイスコーヒーな」

「え？私が奢るんですか？」

「…お前が俺を実力行使の果てに無理矢理ここに連れて来たんだろ。それぐらいしねェと割に合わん」

「理不尽なこと言いますね……」

「…だろうな」

「分かってるんなら自分で買ってください！」

微笑みから一変し、両頬を膨らましプンスカとしているが華麗にスルーし、財布を取り出すと背後に人の気配を感じた。

「それには及ばないぜ！」

「サッくんとあずにゃんのジュースは私達がもう買ってるから！」

俺達が振り返るより一瞬早く、何とも抜群に聞き覚えがある声二つ。

「イッエス！」
「ふんすっ！」
（アホだ……）
中野と同時に振り返ると、互いに背中を合わせて片方は右手を顎に当て左手にある紙コップを差し出し、片方は左手を顎に当て右手にある紙コップを差し出し、さながら鏡写しのように決めポーズをとる天然とカチューシャが。
その表情は得意げにウインクをしているが、平沢の閉じている右瞼が不慣なようにピクピクと痙攣しており、どこか無様だった。
「何やってるんですか……」
中野が呆れたように言うと決めポーズを解除した平沢と田井中はコホンッと一つ咳払いをする。
「優しさだよ梓。先輩の優しさ」
「そうだよ。私達の優しさだよ」
何か恩を着せたいのか無駄に先輩風を吹かせた田井中と平沢に中野は『は、はぁ』と戸惑い気味に呟く。

「というわけで、はい。あずにゃんにはバナナシェイクだよ～」

「ありがとうございます、唯先輩」

「んで、サクにはコッチな」

田井中が両手で持っている紙コップを差し出す。

「……」

何かを期待したようにうっすらと浮かべるその笑顔が訝しい。
しかし、喉は渇きを訴えるので右手で紙コップを受け取る。

そして、次の瞬間……

「アツ……」

右掌に熱を感じた。

「イエーイ！ドッキリ大成功ー！」

「大成功～！」

歓声をあげて嬉々とハイタッチをかます田井中と平沢を一旦スルー

し、紙コップの蓋を開けるとこの季節には不釣り合いな湯気が立ちあがる。

液体の色は黒いのでコーヒーだと思うが、これはアイスではなくホットだ。

「ガキみてェなことしてんじゃねェよ……」

多少怒りが込み上げたが、それをぶちまけては大人気ないというやつだ。

まぁ、この中身を田井中にぶちまけてやりたいが、そこも我慢だ。

「だってさ、昨日サク勝手に帰ったじゃん」

「その罰ゲームだよ！」

後頭部で両手を組んで口を尖らせる田井中と、多分面白そうだから付き合ったんだろう平沢が指を差してくる。

「…花火見たさに人垣に突っ込んでいったお前らに別れを告げるために、わざわざあの人込みの中を探せっつうのか？　ンなもん無駄な労力だ」

言うだけ言ってホットコーヒーを中野に渡し、アイスコーヒーを購

入すべくカウンターに足を向ける。

「むぅ……　サクのやつ全然反省してないな」

「ていうか熱いんですけど……」

「あれ？あずにゃんのはちゃんと冷たいのだよ？」

「いえ、サク先輩のコーヒーのことです」

「てか、コレどうしようか？」

「りっちゃんが買ったんだから、ちゃんと飲まなきゃダメだよ」

「えぇ～　こんな暑い日に飲めないって」

「買ったんだから責任持ってくださいよ」

「何で私が罰ゲーム受けなきゃならないだよ～！」

「…目先の我の楽しみに思考を回して、後先考えずに行動した結果だ」

購入したアイスコーヒーを片手に悪行の報いの受け入れを拒否る田井中に、正論を告げて通り過ぎると窓際のテーブルにてニコニコと笑い手招きをしている琴吹と全開に呆れている秋山と眼が合った。

「何やってるんだよ、恥ずかしいじゃないか」

他に空いているテーブルがなく、仕方なく秋山と琴吹が座っているテーブルに近付くと秋山が糾弾を始めた。
その言葉は俺ではなく、後をついてきた平沢と田井中に向けられたものであり、俺は我関せずにテーブルにアイスコーヒーを置く。

「まぁまぁ澪ちゃん」

秋山をなだめた琴吹は傍らに置いてあった紙袋を漁る。

「はい、咲也君、梓ちゃん。お土産♪」

四人掛けのテーブルには琴吹と秋山と平沢と田井中が座り、俺は中野が何処からか持ってきた椅子に腰掛け、中野がその隣に座る。
そんな荒技に『やっぱコイツ傍若無人だ』と感想を胸に仕舞った途端に琴吹がカラフルな色彩に彩られた正方形な箱をそれぞれ俺達に差し出してきた。

「…土産？」

その箱を受け取り琴吹にオウム返す。

「うん♪　私フィンランドに避暑旅行に行ってたから、そのお土産♪」

そういえば、ある意味コイツらしい理由で早々に帰国したんだったな。

「わぁ～！　ありがとうございますムギ先輩！」

感嘆する中野の両手には二頭身サンタの人形が設置されてあるスノードーム。

物欲しそうに指を咥える平沢に秋山が『唯も貰っただろ』とツッコんでいるのを横目に俺も箱から取り出すと、パッと見は中野と同形の物だが、よくよく見るとサンタのポーズが微妙に違っていたりする。

「サッくんのもキレ～」

窓際の席なので必然的に光が差し込み、ドーム内を舞い虹色に光を照り返す雪の粒に平沢が見とれる。

「…そういえばフィンランドはサンタの本場だったな」

「うん♪　サンタクロースの村があるくらいだからね～♪」

流石はサンタクロースの国フィンランド。
季節外れの夏でもサンタをゴリ押しだ。

「そういえば梓」

「あ、はい。なんですか律先輩」

「すっかり日焼けが褪めたな～」

「若いのね～♪」

（お前、俺らと同い年だろ……）

本気とも冗談とも取れる琴吹の発言に思わずそんなことを思いながらスノードームを箱に収納し鞄に仕舞い、アイスコーヒーを一口飲み込む。

「新陳代謝が赤ちゃん並なんでちゅね～」

「それは若過ぎます」

（お前の思考はそれに近いかもな……）

「む！　何か失礼なこと考えなかったかサク？」

「別に……　それより」

何気に鋭い田井中の尋問をアッサリと受け流し、当初の目的を尋ねることに。

「…わざわざこんな炎天下の中呼び出した理由はなんだ？　土産を渡すだけじゃねェんだろ」

そうならば軽音部員全員を集める必要はないだろう。嫌でもどうせ部活で顔を合わせることになるんだし、そこで土産や土産話を渡せばいいことだし。

「そうですよ。海外進出って何なんですか？」

どうやらバーガーショップに呼び出しメール以外に、あの意味不明なメールは中野にも送信されていたようで、送信主である平沢に俺と中野は揃って視線を向けたが、口を開いたのは隣に座っている秋山だった。

「実はみんなで海外旅行に行こうって話が出てて」

「「海外旅行？」」

予想の斜め上を遥か大きくアーチを描いていった規模のデカい提案に俺と中野は思わず声を揃えて復唱。

「どういう経緯でそうなったんだ……」

「ムギが旅行行って羨ましいから、じゃあ私達もって！」

「近所のコンビニに行くんじゃねェんだぞ……」

堂々と言い切り、気軽な態度を顕にした田井中に小さくため息が漏れた。

「サッくん、コンビニって海外にもあるんだって～」

「だから何だよ……」

「だからコンビニに行く気持ちで海外に行こうよ！　気持ちに余裕があった方がいいからね！」

「実践してみろ、そして後悔しろ……」

何を満々たる気合いで両手を握り締めてんだ。

「だから海外進出だったんですね」

合点がいった中野がストローを咥える。

「そだよ、あずにゃん！私達海外に行くんだよ！」

「でも夏フェス行ったばかりですよ。みなさん受験生じゃ……」

一口シェイクを含んで俺達三年を見回した中野の疑問と危惧はもっともだ。

俺達は五日前に長野県の山奥で開催されたロックフェスティバルに参戦したばかり。

俺達三年は全員大学進学と決めてあることから、当然受験勉強に身を入れる必要がある。

つまり遊んでいる時間はないし、仮に旅行に出立するのであれば旅費が必要になる。

国内旅行でもそこそこな旅費になるだろうし、ましてや海外など国内の倍はいくだろう。

一介の高校生である俺達にそんな経済力があるとは到底思えない。

……約一名、経済力が半端ないであろうお嬢様がいるが、今は触れずにおこう。

「だから旅行に行くのは受験が終わってからな」

「あぁ、卒業旅行ですか」

田井中の言葉に又しても合点がいった中野は納得の表情を浮かべているが、それは平沢によって別の表情に変わることに。

「あずにゃんも行くんだよ～！」

「え？」

ニコニコと満面の笑みで中野の手を取った平沢に、キョトンとした表情に早変わる。

「だって先輩達の卒業旅行なんじゃないんですか？」

「確かにそうだけど、梓も一緒に」

「卒業旅行って言うよりか、軽音部の旅行だな」

（コイツ……）

妙なところで計算高い。

言って、チラッと俺に視線を向けた田井中は、してやったりな満足

顔。

軽音部の旅行ということは、俺も、ということである。

「みんな一緒の方が楽しいし～♪」

「そうだよな。みんな一緒に海外に行けたら楽しいよな」

（お前らもか……）

事前に打ち合わせでもして結託したんだろうか。琴吹と秋山もチラリと俺に視線を向けては満足げに微笑む。

「もちろんサッくんも一緒だよ！」

（モロ言ってんじゃねェか……）

三人衆はさり気なく俺の退路を塞ぎにかかっているというのに、平沢そんな器用な事は出来ずに、どストレートをストライクゾーンに投げ込んできやがる。

「私とサッくんとあずにゃんと澪ちゃんとムギちゃんとりっちゃん！　み～んなで海外だよ！」

自分を含めた一人一人に指差した平沢は朗らかに、まるで今日の青空のように晴れ晴れと笑う。

「分かりました。とりあえずは私も行きます」

流されやすいタチだからだろう。中野はアッサリと陥落し、力強く頷く。
そして俺に集まる計十個の視線。

「もちろんサクも行くよな？」

「……」

言われて、窓から空を眺める。

澄み渡る青空。
雪のように白い雲。
燦々と輝く太陽。
そして飛行機が飛んでいる。

「咲也。海外旅行だぞ、絶対楽しいって」

「合宿も修学旅行も楽しかったけど、それ以上楽しいと思うの～♪」

「美味しい食べ物がいっぱいあるんだよ！」

「今サクを説得してるから、唯はちょ～っと静かにしてて」

「ぶぅ～！」

「ほれ、ホットコーヒーやるから」

「いらないよ～……」

「まだ飲んでなかったんですね……」

海外旅行。

確かに魅力的な四文字だ。

日本にいては経験出来ない事が経験出来るんだろうし、密かに行ってみたいと思う国もある。

しかしどうにも現実味が湧かない。

海外旅行に対する真剣さが伝わってこない。

「…幾つか質問するぞ？」

なので、空から未だに俺を凝視していた部員の面々に視線を移し、本気度合いを計ることに。

「…マジで行く気か？」

「あったりまえだ！」

田井中が腕を組んで無駄に胸を張る。
コイツがこういう態度を取ると過去の経験上、どうにもきなくさい。

「…旅費は？」

「それはまだ考えてないけど……」

秋山がバツが悪そうに俺から視線を外し、目の前にあるジュースのストローに口をつける。
雲行きが怪しくなったな。

「…計画倒れじゃねェだろうな」

「大丈夫よ～♪　細かいところは今から決めるし～♪」

琴吹は相も変わらずに何が嬉しいのかニコニコと微笑んでいるが、
今はその笑顔がノーテンキな楽観主義に思えて仕方がない。

「…机上の空論っつう可能性は？」

「ほぇ？」

「お前に聞いた俺がアホだった……」

何も考えてなさそうに首を傾げる平沢に思わず額を押さえる。

「で、サクの結果は？」

「…現時点じゃ不安要素たっぷりで満腹だ」

つまり、全く現実味は帯びてこない。
そして分かったことはコイツらは理想だけが先走っている。
旅費の目星も詳しい内容も時期も、何もかもが曖昧だ。

「咲也は海外旅行に行きたくないのか？」

「…それ以前にお前らの計画は漠然としすぎてんだよ。明確な青写真が見えん限りは頷けん」

「そんなこと言うけどさサク、計画立てたのって今日なんだから、詳しいことはまだ調べてないに決まってんじゃん」

そこを突かれたらグゥの音も出ねェけど……

「私達は咲也君が行きたいのかの意思が聞きたいな～♪」

「…そりゃ行けるんなら行ってはみてェが「よしっ！決まり」…聞けよ」

テーブルに両手を付いて勢いよく立ち上がった田井中は俺の意見など聞く耳持たずに、俺達は見回した後に口を開く。

「今から行くぞっ！」

「どこにですか？」

「…海外とか口走んなよ」

「違うっての。あそこにだよ」

田井中が窓越しに指差した先には、バーガーショップの目と鼻の先にある旅行代理店。

「まずはパンフ見てどこ行くか検討な。今から旅行の内容決めるんだからサクも文句ないだろ？」

「まぁな……」

海外旅行か……

相変わらず現実味は帯びてこないし、不安要素は感じるが、海外など滅多に行けるものじゃない。

この機を逃せば次はいつになるやら。

千載一遇のチャンスかもな……

「んじゃあ移動するぞ～！」

「待て律。まだコーヒー飲んでないぞ」

「だって私が飲みたくて買ったんじゃないし～……」

「でも買ったのはお前だろ」

「てか、サクが飲めばいいじゃんか」

「咲也君ならもう行っちゃったけど……」

「待って～！　サッく～ん！」

「もしかしたらサク先輩って、結構楽しみにしてるかもしれませんね」

「クスッ　そうだな」

ハンバーガーショップを出た途端に、むわっとした熱気が俺を包む。
太陽はギラギラと輝き、蝉は我が我がと自己主張を繰り返す。

「アチィ……」

誰に言うでもなく、一言現状の感想を呟き、俺は旅行代理店へ足を動かした。

夏の始まりに気付いた演劇大会。うだるような暑さに嫌気が差したＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬライブ。夏ならではの野外ロックフェスティバル。現軽音部の在り方を見た夏祭り。

「サッく～ん。先に行かないでよ～」

「…あン？　何か言ったか……？」

「この暑さにやられたかサク。……ていうか舌火傷した～……」

「急いで飲むからだろ」

「りっちゃん、冷やした方がいいわよ」

「え？　どうやってですかムギ先輩？」

「冷えろ～冷えろ～って念じたら冷えないかなぁって♪」

「可愛い事考えますね……」

「冷えろ～冷えろ～！　りっちゃん隊長、どうかな？」

「いや、全然」

「ムギちゃん、効果なかったよ」

「う～ん……　だったら次は……」

「…ひょっとしたらアイツらアホなんじゃねェのか……」

「そんなこと言うなって咲也」

琴吹の理解不能な願望に協力。足並みを揃えようと決意した夏休み最後の日。

これは、これらの出来事に埋もれて語り忘れた出来事。
高校生活最後の夏に起きた、とある出来事。
切っ掛けは平沢からの一通のメール。

内容は海外旅行の計画。

（やっぱ現実味湧かねェ……）

そんなことを思いつつ、旅行代理店の自動ドアをくぐった。

第百二十五話（後書き）

水本君はやっぱりおもしろい子。

第百二十六話（前書き）

語り忘れた夏の計画編その二です。

第百二十六話

バーガーショップから道路を挟んだ向かい側に店を構える旅行代理店までの約二分の灼熱地獄を体験し、自動ドアをくぐれば程よい冷気と店員の営業スマイルが出迎えてくれる。

旅行のピークであるお盆の連休を過ぎたからなのか、店内の客の数は疎らだ。

そんな光景の中、パンフが陳列してある棚を目的地に動く姿が六つ。

「旅行♪　旅行♪　海外旅行♪」

「ウキウキドキドキワックワク～♪」

「なんの歌ですか……」

「新曲の『トラベラー・靴べらー』だよ、あずにゃん」

「ちなみに作詞は部長であるこの私と、サクファン第一号の唯ザマス！」

「え、唯先輩ってサク先輩のファンだったんですか？」

「…俺が頷くとでも思ってんのか？　つうか意味不明な歌を歌ってんじゃねェよ」

「学園祭で歌うから練習してるんだよ、サッくん」

「…色々ツッコみてェが、勝手に曲目決めんな」

「ていうか靴べらは旅行に関係ないですよね？」

「何言ってんだよ梓。靴べらがないと靴が履けない。つまり旅行にも行けないっていう意味だ！」

「すごぉ～い！　唯ちゃんとりっちゃんって天才ね！」

「だったら私が考えた『カンガルーみたいにジャンプジャンプ！』ってどうかな？　ワクワクして飛び跳ねるみたいな歌詞で、結構自信作なんだ！」

「澪、もしかしてスランプか？」

「『ワンワンワンツー』っていう子犬とダンスを踊る歌詞もあるんだ！」

「あ、間違なくスランプだな」

「…いつもの秋山節全開じゃねェのか？」

「そうなんだけどさ、澪が動物ネタに走ったら不調なんだ……って」

「とーちゃく！」

「ごくろ～であった！　唯隊員！」

「ありがとうございます！　ムギちゃん隊員！」

「ムギ先輩楽しそうですね？」

「だって私もりっちゃん部隊に入隊したんだもん♪」

「そういえばそんなことがありましたね」

「唯とムギと梓は聞いてないし……」

「…そんな情報より今は海外の事で頭が埋まってんだろ」

「『アルマジローとホイコーロー』はどうかな？」

「いよいよ珍妙な韻を踏んだのが飛び出したぞ……」

「こりゃかなりのスランプだな澪……」

田井中曰くのスランプに自覚がないのか、秋山の瞳は爛々と輝きを放ち、自信と確信に満ちた表情を俺と田井中に向けている。

（にしても……）

そんな秋山の対処を田井中に任せ、俺はつらつらと思考を巡らせつつ様々なパンフを手に取り雑談を交わしている平沢達の背中に近付く。

（旅行……か）

言葉をかぶせてきた田井中によって口を閉じてしまい、結果的に有耶無耶になり何やら俺が海外旅行に賛成したようになっているが、そんなことはないのが事実。

現実味と真剣味がどうにも湧かないし、旅費やら何やらが曖昧だし、何より……

「あずにゃんあずにゃん！　イルカに触れるんだって！」

「へぇ～　パラオですか」

「梓ちゃんは行きたい所ってあるの？」

「そうですね……」

興奮した面持ちでパラオのパンフを見つめる平沢。
ツインテールを揺らし、パンフをあれこれと吟味していく中野。
その二人を見守るようにニコニコと微笑む琴吹。

「歌詞はもう分かったから、私達も行こうぜ」

「あ、うん。そうだな」

促し軽い足取りで平沢達に近付く田井中。
それに続く、ハタから見たらスランプなんぞ全く分からない秋山。
事あるごとに俺の中でネックとなる、女五人に男一人という男女比率が偏り過ぎているこの構図。
修学旅行は学校行事。
合宿は部活の一環。
では今回は？
完全プライベートだ。
果たして俺がそれに付き合う義務があるのだろうか？
「……」
足を止める。そして周囲の喧騒が途切れ、別世界に、それこそ旅行に行く程に思考の海深くに身を沈めていく。
確かに海外旅行は魅力的な響きである。
一度は行ってみたい国だってある。
異文化交流とまではいかないが、その土地ならではの文化に触れてみるのは、後々の人生のプラスになる可能性も無きにしも非ず。
しかしだからと、例えプラスになるような経験でも旅行の件に頷けはしない。

それは俺が男一人でアイツらが女五人で、これはプライベートで、タダの部活仲間で……

（堂々巡りだ……）

答えの見えない着地点が思考の海を泥沼に変わり、悪循環の繰り返し。

先を平沢と秋山と田井中と琴吹が進み、その後ろを中野と平沢妹と鈴木が。

そして俺が一定のラインを保ったままに静観。

これが昨日感じた軽音部の現在と未来の姿。

「咲也？　行かないのか？」

「サクは今涼んでるんじゃないのか？」

疑問を含んだ声の持ち主である秋山と田井中は、そのままに俺の横を通り過ぎる。

そして平沢達に合流。

「……」

視線の先には五つの背中。
その距離、約十歩。
堂々巡りの果ての堂々巡り。
そして今、気付いた。
俺の悪い癖だと。
グルグルグルグルと小難しい事を考えてしまうのは。
グルグルグルグルグルグルと思考が廻転している頭に平沢の陽気な声。
「サッくんもは～や～く～！」
満面の笑みで振り返り、俺に手招きしている。
（いつか……）
今はこの悪い癖や、男女比率の解決策や、アイツらとの付き合い方の妥協線引きラインの明確なものは、ぼやけて見えない。
ぼやけているのは近々はっきりと見えることを意味しているのだろうか？

それはいつなんだろうか？
いつかは納得出来る日が来るのだろうか？

（物は試し……）

賭けてみるか？
俺とアイツら間にあるこの十歩に。

「サッく～ん！」

「…叫ぶな、サッくん言うな」

とりあえず、今はこの現実味が一切湧かない旅行計画に付き合って様子見だ。

賭けは相手がいるから成立する。
そんな相手なんぞ、ハナからいるわけがない。

故にこの十歩は何の変哲もない十歩。

「はぁ……」

悪い癖を一旦断ち切り、深いため息をついて、平沢達に近付く。

……

様子見という何とも不確かな結論に辿り着いた俺は、無数にあるパンフを眺めている。

棚にはそれぞれ、アジア、ヨーロッパ、南米、北米、オセアニア、アフリカと六大州に大きく区分されてあり、各国様々な旅行パックの宣伝が掲載されてある。

「どっこがいいかな～？」

「これだけあると迷うね～」

平沢達はとりあえず眼についたパンフを片っ端から掻き集めたようで、座っている円形テーブルには厚さ一センチはあろうパンフが積み重なっていた。

そんなパンフの山に手を伸ばす田井中と平沢は楽しそうに頬を緩めている。

「あっ！」

その驚愕にも似た声をあげたのは中野。

一枚のパンフを手に取りツアー内容の要点を抜粋していた眼を向け

ると、中野は何やら興奮していた。

「ニューヨーク…いいですね！」

「入浴？」

「ベタなボケですな～　唯さんや」

「いやいや～　なんのなんの」

演芸大会に出場し、ある意味伝説となったスベリ漫才師と肩を並べられる、程度の低い即興漫才を披露した平沢と田井中を見事にスルーした琴吹が中野に口を開く。

「ニューヨークに行きたいの？」

「一度は行ってみたいなぁって思って。アポロシアターとか特に！」

「アポロ……はっ！　あのチョコのお菓子の！？」

「違ェよ……」

確かにそういう名称の菓子は実在するが、見当違いも甚だしい平沢にパンフに視線を戻して思わず呟く。

つうか、大概は月面着陸した宇宙船の方を先に思い付かねェか？

まぁ、どうでもいいんだがな……

「え？　違うの？」

「当たり前じゃないですか……」

「アポロシアターっていうのはニューヨークにあるアメリカで有名なクラブなんだ」

「…付け加えるならアメリカのミュージシャンの数多くがアポロシアターで開催されるコンテストで功績を残した者だったりする。登竜門になる舞台だ」

今や世界に名を轟かせる有名ミュージシャンにとってはプロへの

また、そのコンテストに日本人が出場し敬意ある歓声が送られた。

それが意味をするのは音楽は世界共通文化であり、国々の垣根を越えることが出来る『音』という文明。

「さすが詳しいですね、澪先輩とサク先輩は」

「軽音部の二枚看板なだけはあるな～」

「んだよソレ……」

「澪とサクはそれぞれファンの子達がいるじゃん」

田井中の言葉に、そういうことかと思い当たり、ファンなんぞ意味不明な存在の現存に一度ため息を吐き出す。

「ねぇねぇサッくん」

「サッくん言うな」

すると、現在進行形で輝き放つ瞳を更に輝かせる平沢が又もやため息が漏れてしまいそうな禁句を口にし、俺に顔を向ける。

「アメリカってことは、ギー太の生まれた国なんだよね！」

「あぁ……」

「じゃあ一緒に連れていってあげなきゃね～！　ギー太喜ぶだろうな～」

「いや、里帰りじゃないから」

田井中が的確なツッコミを放つが、そんなことより気になる点が一つ。

「…何でレスポールがアメリカ生まれって知ってんだよ」

コイツはメンテナンスの仕方やオクターブチューニングや楽譜を読めない等、必要知識をことごとく忘却するくせに、何故レスポールのそんな情報を知っている？

「いや～　憂が調べてくれまして～」

「何でだ……」

「んとね……何でだっけ？」

「コッチが知りてェよ……」

別にその理由を知りたいわけじゃないが、何の前触れもなく突然天然スキルを発動させた平沢に思わずそんなことを言ってしまった。

「サッくんのギー子はどこの国出身なの？」

そして俺に乱暴に話題を投げ込んでくる始末。

「テレキャスもアメリカだ……」

「おぉー！　ギー太と一緒だぁ！」

スルーしても良かったが、いかんせん平沢の瞳が今日の太陽のように爛々と未だに輝いてあり、口答しなければいつまで経ってもしつこく聞いてくるだろうという判断の元、それに従えば何が嬉しいのか光線を放つ程に輝きを上乗せしてくる。

「相性抜群ですなぁ～♪」

「…相性つうか、テレキャスの製造者のレオ・フェンダーはレス・ポールに影響を受けたらしいから尊敬の方が正しいかもな」

つまり、レスポールがなければテレキャスは生まれなかった可能性がある。

しかし、フェンダー社のテレキャスやストラトの普及需要が全米でレスポールを上回り、人気低迷に陥らせた事から、影響を与えたレス・ポールとしては何とも皮肉な結果だ。

「へぇ～　あずにゃんのは？」

わざわざ説明してやったのに大して関心を示さなかった平沢は、今度は中野に顔を向ける。

まぁ、コイツの場合その情報は別にいらなかったんだろう。

「私のむっ…ムスタングですか？」

「うんうん！　どこの家の子？」

「ムスタングはサク先輩のテレキャスターと同じフェンダー社製ですから、アメリカですけど」

「えーっ！　ズルイよあずにゃん！」

「な、何がですか？」

平沢が突然叫び声をあげるものだから、持っていたアメリカのパンフを落としそうになる程たじろぐ中野。

「サッくんと同じだなんて～！　私もサッくんと一緒がいいのに～！」

「そ、そんなこと言われても……」

理解不能なわがままを発する平沢に更にたじろぐ中野は思わずといった感じに俺に視線を向ける。

「……」

しかし、飛び火と藪蛇は御免被りたいので手にあるパンフを一枚めくりスルー。

「ぶぅ〜！　あずにゃんぶぅ〜！」

「そ、そんなことより」

文字通りぶぅぶぅと非難してくる平沢に耐えきれないのか、中野が無理矢理話題を変える。

「澪先輩はどこに行きたいんですか？」

突如振られた秋山だったが、『そうだな……』と特に慌てることなく一枚のパンフを手に取る。

ちなみに田井中は琴吹に旅行にオススメな国を色々と質問している。

「私はイギリスだな」

「あぁ、ロックの本場って感じですもんね」

「うん！　ライブ行ったり、ミュージカル観たり！　あとアビイ・ロードにも行ってみたいな！」

「澪ちゃん、それなぁに？」

中野の話題変更が功を奏したのか、平沢が秋山に食い付いた。

「ビートルズって知ってるだろ？」

「あ、うん！　ちょこ～っとだけ聞いたことある」

「世界で一番有名なバンドだぞ……」

「それをちょこっと済ませる唯って凄いよな……」

楽曲は知らずとも名ぐらいは誰しも一度は聞いたことがあるビートルズより、ある意味大物な平沢に俺と田井中は改めて平沢という天然の真骨頂を垣間見た。

「ビートルズのアルバムでメンバーが横断歩道を歩いてるジャケットがあるだろ？　私はあそこに行ってみたいんだ！」

世界で最も有名なジャケット写真だと力説する秋山。

しかしそれは平沢によると……

「ほぇ？」

よく分かってないないようで首を傾げてマヌケな声をあげるばかりだ。

「…お前、少しは世界に眼を向けてみろ」

「だから私達は海外に行くんだね！」

「はぁ…」

音楽教養を広げる意味で言ったのだが、その意図が伝わらずため息一つ。

「イギリスって言ったら紅茶の本場でもあるわよね～♪」

「おぉ！　海外でお茶もいいですな！」

結局関心を示すのは飲食関係かよ……

「紅茶やビートルズもいいけどさ、イギリスと言えばやっぱりザ・フーだろ！」

「…そういやザ・フーもイギリスだったな」

「おう！」

「じゃあ律もイギリスがいいのか？」

「いや、ハワイかな～って」

両手を握り締めて意気込んだかと思いきや、次の瞬間にはフラダンスを踊るように両手をヒラヒラと動かす田井中。

「初めての海外はやっぱりハワイかな～って」

「りっちゃんも案外ベタだねぇ～」

「何を言うか唯。暑いところはアイスがおいしんだぞ～」

「ハワイもいいね！」

「やっぱ飲食に食い付くのか……」

「まぁ、唯だしな。それより咲也はどこに行きたいんだ？」

平沢に浮かべていた苦笑いを引っ込めた秋山が唯一椅子に座らずに先程から片手にあるパンフの内容を速読していた俺に微笑みかける。

「……」

その質問の答えとしてパンフを秋山を見せる。

『スペイン？』

五人の声が重なり告げた国こそが密かに俺が行きたいと思っていたヨーロッパの国である。

「情熱の国だねサッくん！」

「意外だな。てっきりサクも澪と似たような理由でイギリスかと思ってたのに」

「私もです」

「咲也君、どうしてスペインなの？」

とりあえず視界の端で陽気なサンバのリズムを刻んでいる平沢を全力でスルーし（ちなみにサンバはブラジル）琴吹の問いに答える。

「一度はリーガエスパニョーラを生で観てみてェからな……」

「サク先輩、それってなんですか？」

「確か、スペインのプロサッカーリーグだったと思うけど……」

知っているような口振りの秋山に俺は意外そうに眉をしかめる。

「…お前知ってんのか？」

「私、結構スポーツ好きなんだ」

そういえば夏フェスの時に田井中がそんなこと言ったな。

世界で最も盛んに行われるスポーツであるサッカー。
とりわけヨーロッパはサッカーの本場である。

サッカーの母国であるイングランドのプレミアリーグ。
イタリアのセリエＡ。
ドイツのブンデスリーガ。
フランスのリーグ・アン。
そしてスペインのリーガエスパニョーラ。

中でもプレミア、セリエＡ、リーガエスパニョーラは世界三大リーグと呼ばれ、特にリーガエスパニョーラは世界最高峰のサッカーリーグだと呼び名が高い。

実にその通りで、過去も現在も日本人選手が挑戦しているが、確固たる成功を収めた人物は未だにいない。

現に今年のワールドカップで代表を引退した、日本の司令塔であり背番号１０を背負った努力家天才レフティであっても、その力を発揮出来ずにリーガ時代の所属クラブであるエスパニョールを早々と退団してしまった。

それ程レベルが高く、日本人選手が輝けるのが至難の業であるサッカーリーグ。

そんな世界最高のリーグを一度でいいので観戦してみたい。
という旨を伝えようかと思ったが、サッカーにはあまり興味がなさそうな連中に言っても意味はないだろう。

「…とにかくリーガのサッカーに興味がある」

なので、そう伝えるに止まる。

「咲也ってサッカーが好きだったんだな」

「ワリィかよ……」

「ううん、咲也の音楽以外の意外な一面が知れたから。何かいいなって」

「み～お～♪」

「な、なんだよ律？」

「なぁんか嬉しそうだな～♪」

「なっ！？　何言ってるんだよっ！」

「私はただ嬉しそうだなって思っただけだぜ～♪」

「り、律ーっ！」

「何だか賑やかね～♪」

「そういえばムギ先輩はどこがいいんですか？」

「私はみんなと一緒ならどこでもいいの！　絶対に楽しくなると思うから！」

「クスッ　ムギ先輩らしいですね」

「ぶぅ～！」

「何だよ……」

「何かよく分かんないけど、サッくんにぶぅ～！」

「あっそ……」

「唯先輩……もしかして、澪先輩にやきもち？」

――――――――――

あの後、どこの国に行き具体的に何をしたいのかを各自発言をしたが一向に意見は纏まらず。

『急いで決める必要はないし、とりあえず各自検討っつーことで』

カチューシャ部長が腕を組んだところで場はお開きになり、これ以上旅行代理店に取り留めて用事がない俺はさっさと帰るために逸早く店内を後にした。

「旅行鞄にあれこれ詰め込んで～♪」

「……」

「大空を飛んでいくよ～♪」

「……」

「ウキウキドキドキワックワク～♪」

中野に拉致されてなければ本来では自室で涼んでいるというのに、真逆の環境である酷暑の中をひた進んでいる俺の隣では当然のように平沢がトコトコと歩いている。

「みんながいれば～……この後なんだっけ？」

「…知るか……」

一体いつの間に作ったのか、先程から意味不明な歌を口ずさむ平沢は何やら上機嫌だ。

対する俺はバーガーショップと旅行代理店で若干気力は回復したが、観測史上最高気温の中を歩けば瞬く間にレッドゾーン突入。

故に意味不明な歌に何を言うわけでもなく、俺が知る筈もない平沢の疑問に短く簡潔かつ正当に返答したのは決して間違いではないだろう。

「サッくん元気ないね？」

「…こんな炎天下の下で溌剌としてる奴いたら見てみてェな……」

相も変わらずの禁句の訂正を求める気力も今の俺にはない。

その内、口を開くのも億劫になるだろう。

「私は元気だよ！」

「…だろうな……」

あんな理解不能の歌を堂々と歌ってたし。

「あ、そうだ！　冷えろ～って念じてあげるよ～」

「…ンなもんで快適になるんなら、冷房を製造してる会社は軒並み倒産するだろうな……」

「それは恐ろしい……　ムギちゃんに使わないように言っとかなきゃ！」

「…勝手に頑張れ……」

ため息混じりにそう告げて、益々盛んになっている蝉の鳴き声と燦々と降り注ぐ陽光にうんざりするように頭を下げて歩き続ける。

「そういえばあずにゃん、どこに行っちゃったのかなぁ？」

俺と平沢と中野は部活終わりは途中まで共に帰っている。
その帰り道は俺達が今歩いているこの旅行代理店からの道と同じである。
つまり、中野もこの場にいてもおかしくはないが、何でも寄りたい所があるとかで中野は旅行代理店を出たところで別れた。

「ねぇ、サッくん。あずにゃんどこに行ったんだろうね？」

「……」

平沢の疑問に答える気力が完全に底をついた俺は、ただひたすら黙々と足を動かす。

時折顔を上げては進行方向を確認し、また下げる。
この作業を繰り返していると平沢と別れる分岐点に差し掛かった。

「…じゃあな……」

立ち止まり、蝉の鳴き声に負けそうな程に隣にいる平沢に小さく呟くが、反応がない。

何事だと思い、首を動かせばそこには平沢の姿がなかった。

「……」

グルリと周囲を怠惰な動作で見回すが、どこにも平沢の姿も影もなかった。

一瞬、また進行方向をとちったかと脳裏に過ぎったが、間違いなくここは分岐点であり、それは無いと直ぐさまその考えを抹消する。

（まぁ、いいか……）

ガキっぽい奴だが、一応あれでも高校三年だ。

気にする必要もないだろう。

一歩踏み出す。

「サッくーんっ！」

瞬間、まるで、その一歩が平沢召喚の儀式だったかように背後から蝉の鳴き声をも凌駕するデカい声。

怠そうに振り返れば懸命に四肢を振り駆けてくる平沢の姿……つうか、本人は必死なんだろうがすこぶるスピードは遅い。
仮にマラソン大会に出場したら最下位になるであろうスピードだ。

あくまで仮の話だがな。

「はぁ…はぁ…　シドいよサッくん…！」

そんな果てしなく何の得にもならないことを考えいると平沢が俺の前に辿り着き、荒れた呼吸を落ち着かようと胸に手を当てる。

「…何がだ……？」

肩を上下に揺らす平沢は頬を膨らませている。
どうやら上機嫌から御立腹になったようだ。
そして非難される謂れが分からない俺は訊く。

「だってだって、サッくん暑そうだからジュース買ってあげようとしたら、どんどん先に行っちゃうんだもん！　待ってよって言っても止まってくれないだもん！」

どうやら今度は進行方向に気を向け過ぎたようだ。
つまり、俺が黙々と足を動かしている隙に平沢はそんな行動を取っていた、ということだろう。
で、非難か。

「…文句があるんなら太陽に言っとけ。俺に非はない……」

そんな非難から避難するべく非難対象を太陽系の大将に指示すると、平沢は素直に大将を対象に非難を始める。

やれ『コラー！』だの『私の本気みせちゃうぞ！』だの『コラー！』という何ともレパートリーの少ない非難をした平沢はどこかスッキリとした表情だ。

「…満足したか……？」

「うん！　サッくんのかたきは取ったよ！」

「…そりゃ殊勲だ……」

コイツの脳内はどうなってるのだろうか。

正当といえばそうである非難を俺にしてきたが、何の疑いもなく俺の指示に従い、挙句の果てには笑みを浮かべている。

「…楽観的だなお前……」

「ほぇ？　なにが？」

「…別に……」

もし、コイツのように楽観的で呑気で物事を深く考えない直感的な性格なら俺の中で燻るネックなんぞ、とうの昔に解決しているんだろう。

いや、そもそも、そんなものは感じないんだろう。

「ほい、サッくんのジュースだよ。パイナップルマンゴー！」

「…甘ったるそうなもんだな……」

「そっかなぁ？　でもでもそれが美味しいんだよ～」

また笑う。

「そして私のはマンゴーパイナップル！」

「…どう違うんだ……」

確か春の日。

ジャズ研の部室前。

『でもネガティブに考えるより、こんな風にポジティブに考えたほうが良くないですか？』

こんなこと言った奴がいた。

その問いに頷きはしたが、あの時と現状俺が抱える『これ』とは状況が違う。

ポジティブに考える以前に何をどうポジティブに考えればいいか分からない。

「サッくんもおでこに当ててみなよ～　ちべたくて気持ちいいよ～」

また笑う。

「…中野にデコをさらけ出されて嫌がってた奴の台詞とは到底思えねェな……」

「はっ！　イヤン♪」

「はぁ……」

この時の俺は当然知る筈がなかった。

燻るネックが、ぼやける解決策が、十八日後の三十一日に……

【コイツらと精一杯に楽しみ、後悔はしない】

口には出さす、他者にも言わず、歩幅を合わせることを密かに決意し、霞が霧散してはっきりと見えるようになるとは。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

「う～ん……」

色々と悩む。

悩みの種は尽きないってホントなんだなぁ……

昨日、先輩達の事や軽音部の事を解決したと思ったら、違う悩みに襲われちゃった。

一つ目は、旅行の行き先。

私はアメリカ、澪先輩はイギリス、律先輩はハワイ、サク先輩はスペイン、ムギ先輩はどこでも良くて、唯先輩は美味しい食べ物があったらどこでもいいみたい。

バラバラな行き先に悩む。

「う～ん……」

二つ目は唯先輩とサク先輩。

もしかして……って気付いたのは、唯先輩のレスポールをメンテナンスのために【１０ＧＩＡ】に持っていった時。

『でもでも、そういうトコがカッコいいんだよね～』

唯先輩のこの言葉に一瞬眼が点になったのをよく覚えてる。

「そういえば合宿でサク先輩に抱き付いてた……」

って、アレは唯先輩が先生のお酒を間違って飲んじゃったからか。

唯先輩はなんていうか、子犬みたいな人だからサク先輩に懐いてるだけなのかも。

でも……

「分かんないや」

もし唯先輩が『そう』なんだとしても、私がどうこう言う事じゃないと思うし、本人次第ってことなんだろうね。

（今は旅行の行き先考えよっと）

律先輩が各自検討だって言ってたし。

「いらっしゃいませ～」

だから私は目的地の大森書店の自動ドアをくぐった。

眼が合った店員さんに小さく会釈して、とりあえず旅行雑誌でも見てみようと色んな雑誌がある置き場に向かう。

「あれ？」

すると、そこには見知った顔が二人。

「憂、和先輩」

声を掛けると二人は一緒に振り向いた。

第百二十六話（後書き）

この時点では八月三十一日を迎えてませんので、咲也の悪い癖は継続中です。

第百二十七話（前書き）

語り忘れた夏の計画編完結です。

第百二十七話

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

街路樹に留まってる蝉が今日もミーンミーンって鳴いてる。
夏休みだからかもしれないけど、いつもより車が通る頻度が高い。
その排気ガスと日本の夏特有の湿気を含んだ熱気が私達を包む。

歩きながら手をおでこに当てて少し首を上に動かせば、真上に近付きつつある太陽が燦々と輝いてた。

（今日も暑いなぁ）

そんなことを思いながら私の隣を歩くサク先輩を覗き見てみる。

……暑そう。

頭を下げて、眼を細めて、口を横一文字に結んで、ダラダラと歩くサク先輩は本当に暑そう。

最初は私の歩調に合わせてくれてるのかなぁって思ってたけど何てことはなく、ただこの暑さに参ってるだけだった。

表情はいつもと同じでぶすっとしてるけど、僅かに疲労の色が見える。

「大丈夫ですか？」

って声を掛けたら、サク先輩は『…そんな風に見えたら眼科に行ってこい……』とボソリ。

こんな反応をしてる分は大丈夫だなって小さく頷き、私達は目的地の公園を目指して足を動かし続けた。

卒業旅行の計画が立った翌日の十四日土曜日。

今日も唯先輩から呼び出しメールが届いた。

詳しい内容は書かれてなくて【公園に集合！】という簡潔なメールに疑問が湧いたけど、とりあえず私は自宅を出た。

しばらく歩いているとサク先輩と偶然遭遇して、訊けば当然サク先輩にも唯先輩からのメールが届いたみたい。

「でもサク先輩が素直に応じるなんて珍しいですね」

「…少しは失言をオブラートに包む方法を知らねェのか……」

「あ！　す、すみません！」

「…こんな猛暑で炎天下の中、わざわざ呼び出されてホイホイ行くわけねェだろ……」

「でも、今歩いてますよ？」

「…俺が了承のメールを返信しなかったら、一分毎に平沢と田井中から同じ内容のメールを寄越しやがる。ノイローゼになりかける程の頻度だ……」

「じゃあ結局……」

「…察しろ……』

」

苦手な夏に参って、唯先輩と律先輩にも参って、かなり疲れてるようで口を開くのも億劫そうなサク先輩が少しだけ可哀相だと思いながら私は前を向いた。

そして視界の端には大森書店が映り、何となく昨日の事を思い返してみる。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

『『梓ちゃん』』

振り返った憂には小説のような、和先輩には二冊の雑誌が、それぞれの本が手にあった。

私はちょっと珍しい組み合わせだなぁって思いつつ、唯先輩は和先輩の幼馴染みなんだから必然的に憂もそうなんだから別に違和感な

いかって同時に納得していた。

『梓ちゃんは何してたの？』

憂が尋ねる。

『軽音部で卒業旅行に行くって話が出てて、その下調べみたいな』

当然、唯先輩から旅行の件を聞かされていたようで、憂は『そうなんだ』っと言って特に気にする素振りを見せずに手に持つ本に一度視線を落とした。

『憂と和先輩は？』

『ちょっと調べものがあってここに来たら憂がいたのよ』

『調べものですか？』

『私も生徒会のみんなと旅行に行こうって話が出てるの。今日はその行き先検討みたいなものなの』

『あ、同じですね』

ホントに同じ。

軽音部のそれは勿論、私も行き先検討のためにここに来たんだもん。

『軽音部はどこへ行くの？』

『えっと、一応海外っていうことになってます』

『へぇ～　いいわね、海外』

本当にそう思ってくれてるみたいで、眼を線にして和先輩が笑った。

『生徒会はどこに行くんですか？』

『京都に行こうかなって』

和先輩が手にある二冊の雑誌の表紙を私に見せるように胸に抱える。
その表紙には京都の有名な観光地の写真が写ってて、和先輩が持っていた本は京都の旅行マガジンだったみたい。

『修学旅行で行きたくても時間の都合で行けなかった所が随分あって、また行きたいなって』

『そうなんですか』

『ねぇ、梓ちゃん』

すると、視線を本に落としてた憂が私にその視線を向ける。

『行き先はまだ決まってないんだよね？』

『うん、みんな行きたい場所がバラバラで』

『そうなの？』

和先輩がコテンっと首を傾げる。対する私は少し苦笑いで『はい』と答える。

『私はアメリカで、澪先輩はイギリスで、律先輩はハワイ、サク先輩はスペイン、ムギ先輩は楽しかったらどこでもいいって』

『そうなんだ。でも、ホントにいいわね海外って』

『和先輩はどこか行きたい国があるんですか？』

『国っていうか、行ってみたい場所はあるわ。モヘンジョダロとかアンコールワットとかマチュピュチュとか』

モヘンジョダロとアンコールワットは分かるけど、一つだけ分からない…ていうか思い出せない場所があった。

だから私は訊いてみようと口を開いた。

『マツピチュ？』

『ううん、マチュピュチュ』

『マチュピツ』

うっ……！言えない……！

ほっぺたが熱を帯びていくのが分かる。恥ずかしい！

『クスッ　慣れないと言いづらいよね』

そんな私の心情を察したのか、和先輩が小さく笑って気を遣ってくれた。

でも、それが私の羞恥心を掻き立てて益々ほっぺたが熱を増していっちゃう……

『梓ちゃん。お姉ちゃんはどこに行きたいって言ってた？』

すると、憂がそう尋ねてきた。

私はその質問に答えるために一度小さく頭を振って、何とかほっぺたの赤味を失くす。

『唯先輩は美味しい食べ物があったらどこでもいいみたいだよ』

『唯らしいわね』

和先輩は少し呆れたようで、何ともいえない表情でそう言った後に『あれ？』と何かに気付いたように私に向き直った。

『咲也も乗り気なの？』

普段のサク先輩の人となりを知っている和先輩からしたら、よっぽどその事が珍しいみたいで、少し驚いてる。

『はい。律先輩が無理矢理押し進めた感は否めないですけど……』

でも、なんにも文句らしい文句を言ってこないってことは、サク先輩も結構乗り気なのかも。

逸早くバーガーショップから出ていったし、熱心にスペインの旅行パンフを見てたし。

『まぁ、理由はどうあれ、咲也が旅行に乗り気なのは梓ちゃんからしても嬉しいんじゃない？』

『はい、そうですね』

うん。確かにそうだ。

何かと理屈を捏ねるサク先輩が今回はすんなり参加してくれた。

それは私からしたらやっぱり嬉しいし、きっと唯先輩達も同じ筈。

（唯先輩……かぁ…）

『それでね、梓ちゃん』

唯先輩とサク先輩についての悩みの種がまた主張を始める。

そんな時に憂が持っていた本を私に見せるように胸の前に抱えたから、一旦この思考を断ち切って憂に向き直る。

『私、お姉ちゃんや梓ちゃん達が旅行に行って無事に帰って来れるか心配なの……』

憂は本当に心配しているみたいに、眉を八の字に下げて表情を曇らせている。

それは、唯先輩が大好きな憂だから、逆に過敏になって大袈裟になり過ぎてるんじゃないかって思って『大丈夫だよ』って声を飲み込む程。

『だから、これ』

憂が差し出した本を受け取って表紙とタイトルを見てみる。

『護身術？』

そこには女性が男性の腕を取って、よく分からない関節を締めあげてる技をしているイラストと口に出したタイトルが。

『海外って何があるか分からないから』

（大袈裟なんじゃ……）

行き先によっては治安が悪い所はあるかもだけど、そんな所には行かないと思うし……

『ちょっと大袈裟かもしれないけど何があるか分からないから。備え有れば患い無しって言うしね』

少しだけ思考が顔に出てしまってたみたいで、和先輩が微笑みを私に向けた。

『お姉ちゃん達に何かあったら大変だから』

憂の表情は至って真剣で、否定的な言葉が出せない。

『う、うん、そうだね』

だから私は頷くしかなかった。

『咲也さんが一緒だから安心だけど、万が一に備えて』

『憂ってサク先輩のこと信頼してるんだね』

『うん！　咲也さんっていつも落ち着いて大人っぽい人だから。それに……』

そこで一度言葉を切った憂は視線を私から天井付近に移して、再び口を開いた。

『お姉ちゃんがいつも言ってるから、咲也さんは頼りになってカッコいいって』

瞬間、ドキッと心臓が跳ねた。

『い、いつも言ってるの？』

思わず声が上擦る。

『うん！　咲也さんのことになるとお姉ちゃん本当に嬉しそうなんだよ』

『嬉しそう……』

サク先輩がいないところで嬉しそうにしている唯先輩。

それってやっぱり、『そう』なんじゃ……

（でも……）

そうだと決め付けるのは早いのかも。

唯先輩がどういう意図があって私に抱き付くのか分からないけど、もしかしたらサク先輩に対する唯先輩のそれは私のと同じなのかもしれないし。

（やっぱり、本人次第だよね）

なんて、思ってみたりしたんだけと……

「サッくん大丈夫？」

「……」

「あれ？　サッくん？」

「……」

「た、大変だよムギちゃん！　サッくんが動かないよー！」

「落ち着いて唯ちゃん！　とりあえず飲み物を……！」

「…うるせェっつうの……」

「サッくん！　良かったぁ～」

「…暑苦しいから離れろ……」

木陰になっているベンチに横になってた身体を起き上がらせたサク先輩に抱き付こうとしている唯先輩を目撃したら、やっぱり『そう』なんじゃないかって思っちゃったり……

あれから程なくして私とサク先輩は公園に到着して、先に来てるだろう唯先輩達を探そうとしたら、すぐに見つけることが出来た。

先輩達は昨日憂が買った護身術の本を片手にそれを実践しているところでかなり目立っていた。

幸いこんな暑さの中で公園に用事があるのは遊んでいる小さな子供

ぐらいで、殆ど人はいない。
でも、かなり目立ってる……

『…何やってんだアイツら……』

『多分護身術だと思いますけど……』

『あぁ？』

『昨日憂が私達が無事に帰って来れるようにって買ってました』

『…必要かソレ……』

そう言ってため息を吐き出したサク先輩は公園内にある自動販売機の横に設置されてるベンチに向かっていった。

ということはサク先輩は先輩達が実践している護身術には参加しないんだろうと汲み取った私は、サク先輩の背中を見届けて、先輩達に近付いた。

『あれ？　梓一人？』

『てっきりサクと一緒だと思ってたんだけどな』

『いえ、一緒に来ましたよ。でもサク先輩は興味がないみたいで、あそこで休んでます』

『あ、ホントだぁ。お〜いっ！　サッく〜んっ！』

『咲也君、気付かないね？』

『いや、あれば無視してるな。せっかく私と唯が協力して呼び出したのに』

『それが反って逆効果になっているみたいですよ』

とりあえず憂の好意を無駄にしないように私はあんまり乗り気じゃないけど、先輩達と一緒に護身術の勉強に参加。

『じゃあ次は、ムギちゃんとあずにゃんで。後ろから抱き付かれた場合ね』

『いひひ〜　金よこせ〜』

『いやムギ、演技はいらないだろ』

『臨場感ある方がいいかな〜って』

『サクならまだしも、ムギがやったらあんまり臨場感湧かないけどな……』

『あずにゃん！　そこでムギちゃんのスネを踵で蹴って逃げる！』

『えぇ！？　ムギ先輩にそんなこと出来ませんよ！』

『梓ちゃん！　どんとこいです！』

『いや、そんな意気込まれても……』

『あずにゃん、振りでいいから』

『え、えっと……　えいっ！』

『今だ梓！　ムギがひるんだ隙に全力疾走！　そして警察に通報だ！』

『そこまでしなくても……』

『これは護身術の勉強なんだぞ！　海外で何が起こるか分からないだろ！』

『そうだよな。観光客が油断してる隙を突いて荷物とか盗まれるらしいからな』

『あ、でもでも、サッくんが私達を守ってくれるよ！　アチョ～ッて！』

『あれ？　サク先輩倒れてませんか？』

私達が一斉にベンチに顔を向ければ、腕で顔を覆ってるサク先輩が、まるでいつかの部室の時のように倒れてた。

私達は大慌てでベンチに駆けて、今に至る。

「全く～！　人騒がせなサクだな！」

「…アチィから横になってただけだろうが……」

「でも、私達心配したんだぞ」

「…ソリャワルカッタ……」

と、言いつつも全然反省した素振りを見せないで、律先輩と澪先輩から視線をずらしたサク先輩に、説教をした二人の先輩はガックリと肩を落としてベンチに座った。

「ほい、サッくん。マンゴーパイナップルだよ～」

「…またかよ……」

「違うよ」

「あぁ？」

「昨日サッくんにあげたのはパイナップルマンゴーで、コレはマンゴーパイナップルだよ」

「…あっそ……」

本当にどうでも良さそうに自動販売機で唯先輩が買ったジュースを受け取ったサク先輩はプルタブを開けて口に傾ける。

「……」

私は座らずにサク先輩と、隣に座る唯先輩を眺める。

唯先輩は護身術の本の内容をサク先輩に身振り手振りで伝えるけど、サク先輩は適当に相槌を打ってるだけで、唯先輩に顔を向けようともしない。

それでも唯先輩はずっとサク先輩に話し掛けてて、その横顔はどこか嬉しそう。

「梓ちゃん？」

「え？」

「どうかしたの？」

「い、いえ！　何でもありません！」

唯先輩と律先輩の間に座ってるムギ先輩に慌てて両手を振って、私もジュースを買って澪先輩の隣に座る。

「あと気をつけるのは道に迷うことかな」

木陰のベンチはヒンヤリ冷たくて、たまに吹く風が気持ちいい。
そんなちょっとした幸せを感じているとジュースを一口飲んだ澪先輩が考えるように上を向く。

「地図見れば大丈夫だろ」

「…読めんのかよ……」

自信満々に言った律先輩にサク先輩が相変わらずの覇気のない声で告げる。

「読めるっての」

「そう言ってて、京都で律の後をついて行ったら、迷子になったじゃないか」

「京都は何か複雑なんだよ」

「…外国はもっと複雑だと思うがな……」

「も～！　なんだよ！　さっきからグチグチ言ってさ～！」

「…過去に実績があるから苦言を呈してやってるだけだ。つうかマジで行くかどうか未だに疑問だっつうのに……」

「まだ言ってたのかよ。行くんだよ、私達は海外に！」

「そうだよサッくん！　みんなで海外！　絶対に楽しいよ！」

「…どうだかな……」

「絶対のぜーったい！」

唯先輩がサク先輩の手を取る。それは今まで当たり前のように見えてたけど、可能性が強くなったから、どうしても『それ』に結び付けてしまう。

唯先輩は何度も何度もサク先輩の手を上下に振ってる。

もしかしたら、唯先輩なりのアプローチなのかも。それとも無意識なのかも。

そのどちらだったとしても言えるのは、唯先輩は嬉しそうに、楽しそうに、サク先輩の隣にいる。

思えば大体、唯先輩はサク先輩の近くにいる。

（やっぱり……）

私はそういう経験がないからよく分からないけど、何となく唯先輩の気持ちは分かるような……気はする。

根拠とかは無いよ。

敢えて挙げるなら、唯先輩がサク先輩と些細な会話や触れ合いでも、満面の笑みを浮かべてるから。それが私がそう感じた全て。

「…分かったから手ェ離せ……」

サク先輩は更に疲れて顔で。

「エへへ♪」

唯先輩は満足そうに満面の笑みを。

「クスッ」

そんな二人を見て、私は人知れず笑った。

いい感じなんじゃないかなぁって。

（今日も暑いなぁ）

頬を撫でる風が心地よくて、眼を閉じてみる。

「よぉし！　海外で迷子になっても平気なように、今から日本語禁止な！」

「…意味不明なこと始めんな……」

「外国語が話せなくてもってことか？」

「そゆこと～」

「ニホンゴキンシアルネ」

「唯、それは日本語なのか？　それとも中国語なのか？」

「ほぇ？　澪ちゃん何が？」

「…コイツの言葉を深く考えた分、疲れるのは自分だぞ……」

「うん、みたいだな……」

先輩達の会話を聞きつつ、頭の端っこで祈ってみる。

もし……願いが叶うなら、先輩達との最後の学園祭の成功を。

そして……

「あ、そういえばみんな、パスポート持ってる？」

「「「「あ……」」」」

思い出したかのようなムギ先輩の問い掛けに、サク先輩を除く私達は揃って調子がはずれた声をあげた。

「…忘れてましたみてェな顔してんじゃねェよ……」

だから私の祈りは途中で途切れちゃって、パスポートの事で頭が一杯になっちゃって、当分の間この事を忘れてしまったんだよね……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

翌日。十五日日曜日。

ゲーセンで偶然再開した田井中弟と共に、やけに嬉々とした様子の琴吹と田井中の斬新なコンビを見届けた後、飲み干した缶コーヒーをゴミ箱に捨て、田井中弟と別れた俺は帰路につく。

そして夜。明日から始まる夏期講習に向けての予習のために自室の机にてノートにペンを走らせる。

（パスポート……）

しかし、不意に脳裏に過ぎった単語に手が止まる。

海外に行くのであればパスポートは必要不可欠。
昨日の平沢達の反応を見る限り、どうやらパスポートを持っていないらしい。
かく言う俺も、国内から出たことがないのでパスポートは持ってないが、琴吹に言われるまで気付かないような戯けではない。

とにかく、夏期講習が休日の今週水曜日に全員でパスポートを申請する運びとなった。

俺からしてみれば相変わらず旅行の明確な青写真が全く見えないし、様子見だとしてもわざわざパスポートを取ることに意義を感じない。

そうなれば当然俺は不参加を決め込んだが、田井中と平沢による口撃に暑さのせいで思考能力が低下してあり、結果成す術もなく、敢え無く敗北を喫し、渋々俺もパスポートを申請するハメに。

ブブブッ……　ブブブッ……

「ん？」

すると、机の上にあるケータイが震える。
ディスプレイ画面には【秋山　澪】の三文字。

珍しい相手からだと思いつつケータイとメールを開く。

【件名：必要なもの】
【本文：パスポート申請に必要なもの

・住民票
・戸籍抄本
・パスポート用の写真
・旅券申請書
・未成年の親の同意書
・身分証明書
・手数料

各自全てを揃えて三日後にパスポートセンター前に集合！】

「意欲を燃やしすぎだっつうの……」

やけに気合いの入ったメールに思わずツッコむ。

「つうかコイツ、夏期講習の予習してたんじゃねェのかよ……」

あくまで田井中弟論だが、一概に間違いではないだろう。
まぁ、単なる息抜きなのかもしれんが……

「はぁ…」

とりあえず、ため息を吐き出してケータイを閉じ、代わりにシャーペンを握った。

―――――――

翌日。十六日月曜日。

「お願いします！　咲也君！」

全く持って理解不能な琴吹の願望に田井中と共に三者同盟を組む。

―――――――

翌日。十七日火曜日。

「…ぅ…ぅぅ…」

「あ…」

「み、澪先輩！」

「あーぁ…」

「ムギ…そりゃないって…」

「はっ！和ちゃん呼んで来なきゃ！」

作戦失敗。しかし諦めがつかない琴吹は、独断で秋山のケーキのイチゴを奪取。
結果、大粒の涙を流す秋山。

この後、田井中により琴吹は願望を叶えることに成功する。

――――――――

そして翌日。十八日水曜日。
現在時刻午後二時ジャスト。

「アチィ……」

馬鹿の一つ覚えのように代わり映えしない蝉の大合唱と熱波。

そんな酷暑の中を秋山のメール内容に従いパスポート申請に必要なものを揃えた俺は、目的地であるパスポートセンターに向けて歩く。

一歩一歩前進して漸進する度に全身から体力と気力を根こそぎ奪われていく感覚に陥る。

一粒の汗が額から滲み、そのまま重力に従い地面に落ちる。

『アイツ』程ではないにしろ、脱水症状になりかけてしまいそうな今年の夏に、憤りを覚えつつ歩くこと約十分。

「おーい！　サクー！」

突如聞こえた声に俯かせていた顔を上げれば、そこはパスポートセンター。そしてシンボルであるデコをキラリと輝かせ片手を上げる田井中の姿。

「遅いっての。もうみんな来てるぞ」

「…定時だろうが……」

悪びれることなく切り返すと、デコ部長はやれやれという風に息を吐く。

「早めに行動すること！　これ基本中の基本だぞ！」

「…あっそ……」

それは限り無く正論なんだろうが、そんなものに臆する俺ではないので適当に返答する。

「…つうか、お前は何してんだ……？」

周囲を見れど、平沢達の姿はなく田井中一人だ。
冷房が効いてるであろう室内より、わざわざこんな灼熱の大地で俺を待っていたなんてことはないだろう。

だから訊く。

「いや～　実はさ、生徒手帳忘れちってさ～」

訊いて、呆れた。

「聡に持ってきてもらってて、今待ってるところなのよ～」

「はぁ……」

田井中は何とか取り繕うために口調をごまかし、頭を掻きながら笑顔を見せる。
その笑顔の中に僅かではあるが反省の色が垣間見える。

「…お前、講堂使用申請用紙とかでも飽き足りねェみてェだな……」

「うっ……」

「…あまつさえ申請に必要な生徒手帳を忘れるときたか……」

「うぅ……！」

ここぞとばかりに言及してやると、悪いと思っているらしく笑顔を引っ込め苦い表情で頭を掻いてた手が止まる。

「…甚だ残念だ……」

「そこまで言わなくてもいいじゃんかー！」

『もうちょっと優しくしろよ～！　私だって女の子なんでちゅよ～！』とかほざきながら、ポコポコと両手で俺を叩きにくる。

そんな田井中を適当にあしらい、さっさと冷房で体力及び気力を回復させたい俺は、足先をパスポートセンターに向ける。

「姉ちゃん…と、兄ちゃん」

直後、背中に掛けられた声に田井中と共に振り返れば、そこには自転車に跨がった田井中弟。

「お、聡～」

「二人で何やってんの？」

「…お前の姉のていたらくに失望していたところだ……」

「だからそこまで言わなくてもいいじゃんかって！」

俺の発言と吠える姉貴にクエスチョンマークを頭上で踊らしていた田井中弟だった、深くは考えなかったようで『ふーん』と口から漏らしては、ズボンのポッケから桜高の生徒手帳を取り出す。

「はい」

「サンキュー」

「ったく、姉ちゃんはー　気をつけろよなー」

「あ～いあい」

生徒手帳を渡した田井中弟は、姉弟のやり取りを傍観していた俺に顔を向ける。

「兄ちゃん」

「あン？」

「今度またゲームしようよ」

ゲーセンのコントローラーを扱うジェスチャーをしながら姉そっく

りに笑う弟。

「…機会があればな……」

「うん！　じゃあまた！」

満足げに頷いた田井中弟は、ペダルを力強く踏み込んで颯爽と自転車を走らせ去っていく。

「なぁ、サク」

「あン？」

「サクって聡と仲良かったっけ？　てか何で『兄ちゃん』って呼ばれてんの？」

もっとな田井中の疑問に対する俺の答えは実に簡単だ。

「…後で本人に訊いてみろ……」

言って、今度こそパスポートセンターに歩き出す。

「あ、待てよサク～」

背後から聞こえる田井中の声に、聞く耳持たずに歩を進め、自動ドアをくぐる。

程よい冷気が身体を包む。

追い付いた田井中と共に足を動かせば、待合ロビーにて平沢と秋山と琴吹と中野が椅子に座って雑談を交わしていた。

そこに俺と田井中が近付くと、四人は立ち上がりそれぞれの鞄からパスポート申請に必要な書類を取り出す。

「じゃあみんな頑張ってね！」

俺達の中で唯一パスポートを取得している琴吹は何故か両手を握り締めてた後に、さながら戦場に赴く兵士を送るように敬礼を。

「「行って参ります！」」

当たり前のように反応し敬礼をかます平沢と田井中をスルーし、俺は一足早く発券窓口へ。

窓口の職員に書類を提出し、記載ミスがないか等の質問の末に、難無く受理される。

「もう終わったんですか？」

「…お前らがダラダラしすぎてんだ」

「いや、サクにだけは言われたくないから」

いつの間にか窓口には長蛇の列が出来てあり、そこに並んでいる平沢達に二、三言葉を交わし、琴吹が一人座っている長イスに戻る。

「あ、早かったね～」

「…手間取る要素がねェだろ」

とりあえず平沢達を待つために琴吹の隣一人分を空けてそこに腰を降ろす。

そして他愛もなく一切記憶に残らない内容の薄い会話を暇つぶしにしていると……

「うぅ……」

何があったのか知らんが、かなり落胆した秋山と、そんな秋山を気遣う平沢と田井中と中野が戻ってきた。

「どうしたの？」

「…大方、申請出来なかったんだろ」

琴吹が秋山に尋ねるが、俺は既に合点がついていた。
何故なら秋山の両手には書類が存在してあり、平沢達の手には存在してないからだ。

「澪ちゃんの写真じゃダメなんだって」

「写真？」

平沢の発言にオウム返しした琴吹は立ち上がり、秋山の証明写真を覗き込む。

「あ～……」

声を漏らした琴吹は苦い表情だ。
そんな琴吹の態度が些か気になり俺も立ち上がっては秋山の背後から覗き見る。

「…これのどこがダメなんだ？」

秋山の写真は至って普通であり、特に不審な点は見当たらない。

「パスポート用の写真には、頭の上に少しスペースがないとダメなの」

俺の疑問に答えた琴吹は秋山の写真、厳密には頭の上を指差す。

秋山の髪型は普段のストレートではなく、何故か髪を頭上で纏めてあり、空白がなかった。

「ここに空白がないと、何かを隠してる可能性があるからって」

「面倒だな……」

過去に頭の上に何かを隠していたような事例があったのかどうか定かではないが、何にせよ面倒な規則があったものだ。

「何で髪の毛アップにしたんだよ？」

と、田井中。

「だって大人っぽく見えるかと思って……」

「…見栄張るからだ」

背伸びが裏目に出たことを突くと、それはそれは更に気落ちする秋山。

つうか、あんだけ念入りにパスポート申請に必要な書類を調べてた自分がヘマすんなよ。

「はぁ…」

二日前の夏期講習初日も一人だけ制服だったり、こんなミスだったり。

一見してしっかり者の秋山はやっぱりどこが抜けていることを再確認した瞬間に思わずため息一つ。

「そういえば、日本人って海外行くと子供っぽく見られるらしいですからね」

「じゃあ、あずにゃんだと小学生くらいだね～」

「むっ！　唯先輩には言われたくありません」

「規模の小せぇ喧嘩すんなよ……」

「サッくんだと逆に大人っぽく見えるかもね～」

「いいな咲也……」

「はぁ……」

大人っぽさに固執しているらしい秋山から羨望の視線をぶつけられ、先程より深いため息が。

この後、琴吹の提案で秋山は写真を撮り直すことに。

パスポートセンターの一角にある証明写真撮影機に向かう平沢達に、俺はついていっても仕方がないのでこの場に残る旨を伝え、ケータイで未だに未完成の新曲の歌詞作りに励む。

そして約二十分程してから平沢達が戻ってきた。

「はぁ……」

「ンだよ……」

しかし、戻ってきた秋山は更に落ち込んでいるようで、口から魂が抜けるのではないかと思う程の深く重い吐息を、俺の目の前でつく。コッチまで気が滅入そうになりかける秋山の態度にケータイから視線を移す。

「律と唯が邪魔するから何回も撮り直したんだ……」

あの類の証明写真は高校生の出費には厳しい一回約七百円。つまり

……

「懐具合が寒くなった…てか」

ということだ。

「うん……」

そのまま下を向けば涙が溢れそうな秋山は、重い足取りで再度窓口に向かっていく。その背中は心なしか悲愴感が漂っている。

「唯先輩と律先輩のせいですよ」

ジト眼の中野の両頬は膨らんでおり、プンスカ状態にあるようだ。

「私は澪ちゃんが暑くないように、中を扇いであげただけだよ」

「それがダメなんですって！」

「私はおもしろそうだったから！」

「…やっぱ残念だ、お前」

「だから何で私だけなんだよー！」

―――――――――

「やっと終わった……」

二回目のチャレンジで秋山も漸くパスポート申請を受理されたようで、戻ってきた時の表情は肩の荷が下りたようなスッキリとしていた。

そして平沢の『アイスを食べに行こう！』発言に俺を覗いた四人は頷いた。

俺はパスポート申請まで付き合ってやったので、もういいだろうと考慮したが、中野と田井中と平沢が傍若無人スキルを発動させ、無理矢理繁華街にある全国チェーン展開しているアイスショップに連行されてしまった。

そして、今の声は一息ついた秋山のものだ。

「何かすごく疲れたな～」

「誰のせいだ！」

「さぁ？」

「…お前と呑気にアイス食ってるソイツだろうが」

店前のベンチに座る五人の内の一人の無意味にすっとぼける田井中に、別のベンチに腰掛けてある俺が正論を放つ。

ちなみに平沢達の手には好みのアイスがあるが、俺の手には何もナシ。

俺はアイスを買わず、視線は通り行く人々や車に。聴覚は拾いたいわけではないが聞こえてしまう平沢達の会話に向いている。

「もしかしてサッくんもこのアイス食べたいの？」

「もしかしても何も、そんなこと一言も言ってねェだろ……」

「むっふふふふ…！　サッくんのお願いでもこれはあげないよ！だってこの夏限定のストロベリー＆バニラだからね！」

「話聞いてねェし……　つうか、限定商品じゃねェだろ」

イチゴとバニラの組み合わせは結構世に溢れて浸透している。

「ホント唯先輩って甘いものには前向きですね」

「うん！」

「……」

中野の平沢の行動燃料を表した発言に、眼を細める。

昨日も感じ考えた、軽音部の現状。
燻り続ける軽音部の構図。
ぼやけるそれらの解決策。
そして中野の『前向き』発言。

「そういえばパスポートっていつになったら発行するんだ？」

「一週間後だって言われてただろ。聞いてなかったのか？」

「うっ！　あんまり大きい声で言うなって、またサクにグチグチ言われる……」

前向きの概念や定義は、この場合、平沢達の背中を見ることではないんだろう。

「それじゃあ、次は旅行の行き先決めよ～♪」

「そだね～」

「イギリスでライブ」

「ハワイでフラダンス」

「アメリカのアポロシアター」

「温泉で卓球とか～♪」

「「いやムギ、それじゃパスポート取った意味ないから」」

「だよね～♪」

「ムギ先輩楽しそうですね」

だったら横に並ぶことか？

いや……それはねェだろ。

（だったら……）

「だったら」

思考が平沢の声とかぶった。

見れば、平沢は立ち上がり青空を背負い俺達を見回す。

「二回行こうよ、卒業旅行」

事も無く言い切る。

「あずにゃんが卒業する時も行けばいいんだよ」

「私の時もみんなでですか？」

「うん！　そうしたらスペインもイギリスもハワイもアメリカも温泉も」

両手を広げる。

「み～んな行けるよ！」

短冊に記した願い事は【とにかく一生懸命がんばる！】だった。

思えば、短冊も今の提案もコイツは常に前向きだ。

「私達ならどこだって行けるよ！」

それでいて、見た目のまま、のんびりして、すっとぼけて……

「唯先輩……」

大概の事は全力で、一生懸命で……

「唯……」

周囲に影響を与えるエネルギーを振り撒き……

「唯ちゃん……」

たまにコッチが見習うことがある奴……

「うん！　唯の言う通りだ！　私達ならどこだって行ける！」

「はい！」
「そうだな」
「うん！」

何故だが分からない。
しかし現実として、若干燻りや霞がかったものが晴れた気がした。

「よーし！　今から海外旅行に必要なもの見に行くか！」

『おーっ！』

ベンチから立ち上がり、歩き出す平沢達。

一歩二歩と俺と距離が開いていく。

そして九歩目。

「サッく～ん！　何してるの～？」

平沢が振り返った。

「また暑さにへばってんのか～？」

「行きましょうサク先輩」

「咲也君、早く～」

「置いて行っちゃうぞ、咲也」

十歩目に田井中、中野、琴吹、秋山が振り返る。

（前向き……か）

ジリジリと焼き付ける陽光と盛んに蝉が鳴り響く夏の午後。

背を見るのも、横を並ぶのも、違う。

「アチィ……」

俺は立ち上がり、一歩一歩と平沢達に近付く。

そして、平沢には六歩目、秋山達には五歩目の地点で立ち止まる。

十歩ではなく半歩が俺と平沢達の距離。

「うし！　行くか！」

「サッくん何してたの？」

「別に……　つうかサッくん言うな」

「トラべら～♪靴べら～♪」

「ムギ先輩が歌ってるのって、唯先輩と律先輩が作った曲ですよね？」

「みたいだな。ムギって色んなことに興味があるみたいだし」

語り忘れた出来事。
高校生活最後の夏に起きた、とある出来事。
切っ掛けは平沢からの一通のメール。

内容は海外旅行の計画。

「アチィ……　誰か太陽ぶっ壊してこい……」

「「いや、無理だから」」

「う～ん……」

「唯先輩は真面目に考えなくていいですから」

「あはは……」

これにて閉幕。

そして再び、舞台は枯れ葉舞う秋に戻り、徐々に冬の足音を感じていく。

第百二十七話（後書き）

1. 諸事情でケータイのデータが全て消えてしまった。
2. ケータイショップでバックアップを移したが、アド帳だけしか復活出来なかった。
3. 既に完成していた百二十七話と完成目前だった百二十八話も当然消えており、復活出来なかった。
4. 絶望に陥る。
5. 何とか絶望から這い上がる。

という結果から、一週間も更新出来ませんでした。

本当に申し訳ありませんでした。

あ、ちなみに今話の後に第百二話を読み返したら、咲也の心情や心境の変化が分かりやすいかもしれません。

最後にもう一度。

更新遅れて本当に申し訳ありませんでした。

第百二十八話（前書き）

撮影編です。

第百二十八話

最後の学園祭が終わり、振替休日も終わった翌日。
本日十月五日火曜日。

「……」

今、気付いた。

登校した桜高の玄関で自分の下駄箱を開けようと、右手にあるアコギのハードケースを置いた瞬間だった。

ギターを持ってきても意味がないと気付いたのは。

何も二日前の桜高祭ライブを最後に軽音部を引退した事を忘却していたわけではない。
無意識な行動。つまり習慣だ。

軽音部に入部した翌日から、ギターを持って登校するのが日常になってしまっていた。

その日常に変化が訪れたというのに、右手にはアコギのハードケース、背にはテレキャスのソフトケースを携えた俺は何とも間抜けだ。

「はぁ…」

登校する桜高生で溢れ、朝の挨拶が飛び交う玄関は些か賑わっている。
そんな賑わいの空間の中で一人不釣り合いなため息をつき、持ってきてしまったのだから仕方ないと、部室への道を歩き出す。

その途中で、明日の卒アルの個人撮影がどうとか、もうすぐ模試があるとか、就職の面接だとか、最近寒くなったとか、学園祭が終わったのでこれからは勉強漬けだとか、文化部は先輩達が引退して寂しいだとか、運動部は夏で引退してる等々。
この時期ならではの単語や会話を耳が捉える。

改めて高校生の秋というものを実感しつつ歩き続けると、徐々に周囲の喧騒は遠ざかり、板張りの床にコツンと足音を鳴らし終えると目の前には軽音部室。

「……」

部室には、平沢のレスポールも秋山のレフティモデルベースもなく、昨日の振替休日を利用した田井中はドラムを、琴吹はキーボードを、それぞれ自宅に持って帰ったんだろう。
これからは中野のムスタングだけが取り残されたように存在していくのだろう、など思ってみる。

『だろう』ということは、俺の推測であり予想や予測。しかし、あながち間違ってはいない筈。

何百回と触れてきたドアノブに手を掛けた後に回す。
ガチャリと音を立て扉が開いた。

そして、その先の光景を脳が理解した瞬間に、俺の推測と予想や予測を引っ括めた想定と仮定が、見事に外れるなんて全くの予想外で想定外だった。

「ムギちゃん、これからどうするの？」

「こうして……　ゆっくりと……」

「おぉっ！　スゲー！　出来たー！」

「器用だなムギ」

視線の先には琴吹を中心に身を寄せ合うようにテーブルに集まっている平沢、田井中、秋山。
視線を動かせば、レスポールとレフティモデルベースとドラムとキーボード。
そして五つあるギタースタンドの内の何も置かれてない三つが、その役割を果たそうと鎮座していた。

「……」

異常な光景に暫し思考が止まる。

「あ、サッくん♪」

思考が停止してるところに平沢の朗らかな声が脳に響く。
それが切っ掛けになり、再起動した俺の脳が命令を下した。

「…何故？」

引退した筈が、当然のようにいる部室にいる平沢達に対する適切な言葉を。

「ほぇ？」

しかし、それは平沢には伝わらなかったようで、首を傾げては瞳をパチパチとしばたたく。

「咲也が言いたいのは私達が部室にいる理由じゃないのか？」

正にその通りな秋山の言葉に、平沢は合点がいったようでポンッと手を叩いては両手にマグカップを持ち、トコトコと俺に歩み寄ってくる。

「じゃ～ん！　ムギちゃんが作ったんだよ！　すごいでしょ！」

「エッヘン！」

とりあえず誇らしげに胸を張る琴吹を視界から排除し、マグカップを見れば、紅茶ではなくエスプレッソコーヒーに、恐らく中野だと思われるイラスト、所謂ラテアートが描かれてあった。

「…ンなこと訊いてんじゃねェんだっつうの。何でお前らが部室にいんだよ」

どうにも見当違いな自慢をしてくる平沢に、意図が伝わるようはっきりと言ってやる。

「何でって、私達は軽音部なんだから部室にいるのは普通だろ」

田井中が至極当然に言い切る。

「俺達は引退したろうが……」

ハードケースを床に置き、中々に手強い相手に頭痛を感じた額を右手で押さえる。

「そのことなんだけど」

「あぁ？」

右手を退ければ秋山がまっすぐに俺を見ていた。そして一旦閉じた口を再度開く。

「さっき律と唯とムギで話し合ったんだけど、これからは部室で受験勉強しようってことになったんだ」

訊けば、何でも秋山も俺同様に無意識でベースを持って登校したらしい。
そして下駄箱で鉢合わせた平沢もそうだったようで、田井中を含めた（田井中は秋山と共に登校しているため）三人で部室に行けば琴吹の姿が。
琴吹は亀の朝の餌やりのために部室に来ていたという。

そこで田井中が受験勉強を部室でしようと提案し三人は同意。
そして、もしかしたら来るかもしれない俺と、ムスタングを置きに来る中野にそれを伝えるために待っていた。

これが、コイツらがこの場所にいる理由と顛末。

「ということで、私達はこれからも放課後になったら部室に来ることになったから。な？」

「みんなで勉強した方がはかどると思うし、私は出来るならみんなと居たいから♪」

「どうかな咲也？」

今にも部長命令だと口走りそうな田井中はポンッと俺の肩に手を置き、琴吹は胸の前で祈りを捧げるように両の手を合わせ、秋山はタダまっすぐに俺を見据えたまま小さく口角を上げる。

「♪」

そして平沢はマグカップを持ったまま何も言わずに機嫌が良さそうに俺を見上げる。

四者四様に言葉と態度では俺に賛同を求めてきているが、俺が出す答えは既に決まっているといった感じだ。

「はぁ…」

表向きは観念したように。実態は前口上のため、ため息をつく。

「…つまり、延長か」

俺達は引退した。だが、軽音部員であることには変わりない。

そんな取って付けた、子供染みた、無理矢理な言い訳。

「…その延長で逆転満塁サヨナラホームランなんてねェんだぞ」

「分かってるって」

「…なら、いい」

気概を示した田井中は肩に乗せていた手を離し、俺はアコギとテレキャスをケースから取り出し、ギタースタンドに置く。

「ね？　サッくんも一緒にいてくれるって言ったでしょ？」

「別に疑ってたわけじゃないって」

「でも、ホント唯ちゃんの言う通りだったね♪」

事前にそんな内容を語っていたらしい平沢は、俺の心中を見透かしたように秋山と琴吹に言う。

そんな三人を一瞥し、俺は部室における定位置である長イスに足を向ける。

「しっかし、サクが意外と素直に賛成するなんてな～」

通りすがりに掛けられた田井中の声に俺は一度足を止めて首だけを動かし、発言者に口を開く。

「…下手に慣れない図書室より、若干ここの方が勉強に集中出来る。タダそれだけだ……」

「そっか」

二カッと笑った田井中に、自然と平沢も秋山も琴吹も頬を緩める。

「これでまだまだムギちゃんのお茶でみんなでティータイム出来るね～」

「今し方受験勉強っつう目標が出ただろうが。それを念頭に置くな……」

「私は楽しみがないと頑張れないのです！」

「…そういう考えがガキなんだよ」

「むぅ！　私子供じゃないもん！　今日は憂に起こされないで一人で起きたもん！」

「…ムキになって堂々と暴露してる時点で十分ガキだ」

「ぶぅ～！」

「まぁ落ち着け唯、いつもの咲也の冗談だから。それはそうとムギ」

「なぁに澪ちゃん？」

「何で今日はコーヒーなんだ？」

「言われてみれば確かにな。何でだ？」

「今日から受験勉強に向けて頑張ってこ～って意味で♪」

「…それとコーヒーの関連は？」

「コーヒーを飲むと疲労が回復するの。勉強で疲れた時にいいかなって♪」

「でもでもムギちゃん。私コーヒー飲めないッス」

「あ、じゃあ明日からいつもの紅茶にするね。紅茶も疲労回復の作用があるから♪」

「だったらコーヒーにする必要ねェだろ……」

「そこは心機一転ってことなんじゃないかな？」

『ふーん……』と、どうでも良さそうに秋山に返答した俺は長イスに腰を降ろす。

そして、こんなことを思った。

（俺達は異常なんだろうな……）

引退したのにこの場所にいる。それは何とも非常識で異常だ。

未練がましく部室に居着く口実に受験勉強だと並べる。

いつまでも続くことのない、軽音部員として居れる時間を延長しても、引退の事実を覆すどんでん返しなんてありはしない。

「私達が部室にいるなんて、あずにゃん、びっくりするだろうね～」

「ね～♪　梓ちゃんへサプライズ～♪」

バンッ！

「な～んて噂をすれば、ご本人到着だ」

それでも現に俺達はここにいる。たった今扉を荒々しく開いた、何故かツインテールではなく髪を下ろしている後輩を含めた六人で。

「はぁ…はぁ…　あれ？」

「どうしたんだ梓。そんなに息を切らせて」

「み、澪先輩？　あれ？　ど、どうしてみなさんいるんですか！？」

「これを作ったんだよ！　あずにゃんコーヒー！」

「うわぁ～！　すごいですね！　って、そうじゃなくて！」

「見たかサク。梓がノリツッコミしたぞ」

「…時期部長は多才な一面があるらしいな」

二日前。俺達が今いるこの部室で、現実と運命に涙した部員達は、普段通りの表情で時折笑顔を浮かべている。

それは心の整理がつき、前を向いている証拠なんだろう。

「何でみなさん部室にいるんですか！　引退したんじゃないんですか！？」

「じゃあ何か？　梓は私達がいない方がいいって言うのね！？」

「そんな！　あずにゃんにとって私達は邪魔者だったのね～！」

「何ですかそのキャラ！　ていうか違いますよ！　先輩達が邪魔者なわけないじゃないですか！　むしろ嬉し……！」

「ほっほ～う♪」

「な、なんですか……」

「梓は私達がもう部室に来ないと思ってたんだな～♪」

「うっ……！」

「やっぱり寂しかったんでちゅね～♪」

「うぅ……！」

「梓は寂しがり屋だな～♪」

「きゃわいい♪　きゃわいい♪」

「頭撫でないでくださいよ～……」

平沢と田井中が中野を弄る。琴吹はニコニコと見守る。俺と秋山は呆れる。

卒業まで、正確には受験が終わり仮卒期間になるまで、こんな普段の光景が続いていくのだろう。

「唯も律もそこまでにしとけ。で、梓」

「は、はい！」

「確かに私達は引退したけど、みんなで話し合って今日からは部室で受験勉強しようかなって」

「え？」

「あ、やっぱり迷惑かな？　梓ちゃんも練習とかあると思うし……」

「いえ！　そういうことでしたら私は全然！！」

「…随分嬉しそうだな、お前」

「そ、そんなことありません！　賑やかでいいなって思ってるだけです！」

「…思ってる時点でそうなんじゃねェのか」

「うぅ～！　サク先輩意地悪です！」

「違うぞ梓！　サクは性悪なんだ！」

「…ロクなことしか言わねェその口をそろそろ針と糸で縫ってやる」

「にゃにお～！」

「はいはい、喧嘩するな」

逆転満塁サヨナラホームランは決して起きる事はない。それは理想や夢だ。
しかしこの場所は……居心地がいい。
故に延長してでも、この場所に居てもいいだろう。

「じゃあ先輩達は放課後になったら、これまで通り部室に来るんですね？」

「そだよ～」

「ちゃんと受験勉強出来るんですか？」

「何で私と唯を見て言うんだよ！」

「だって律先輩と唯先輩が一番だらけそうですし」

「…的確に的を射られたな」

「デヘヘヘ～♪」

「唯、咲也は褒めてないから」

「クスッ　分かりました」

異常なこの行動は、正常だと肯定してやろう。

コイツらといると自然体でいられる自分も、この場所の居心地の良さもだ。

「あれ？　そういえば梓ちゃん、髪型どうしたの？」

「あ、ホントだ。ツインテールじゃなくて下ろしてるな。イメチェンでもしたのか？」

「今頃気付くなよ……」

「ほぇ？　サッくんは気付いてたの？」

「あからさまに普段の中野じゃねェだろ……」

「むぅ～……」

「どうしたんだ唯？　何かむくれてるけど」

「澪ちゃんは気付いてた？」

「え？　うん」

「そっか～♪　ならいいや。うんうん」

「？　ねぇ咲也。唯どうしたんだ？」

「知るか……」

「女心は複雑なんだよ澪。特に唯の場合」

「え？」

「そんなことより、梓。何でだ？」

「あ、えっと……学園祭が終わって気が緩んだっていうか、腑抜けてたっていうか……　ていうか唯先輩もどうしたんですか？」

「え？　何が？」

「いつものヘヤピン、してないじゃないですか」

自分自身の感じるものに『肯定』という囲いを作り、『自己完結』

という蓋をする。
それが俺が今朝から部室の長イスに座り部員達の会話に耳を傾け、相槌を打つ理由だ。
そんな理由の元、中野の発言に平沢を見れば、確かに普段前髪にある黄色い二つのピンはなかった。

「何だ？　唯も腑抜けてたのか？」

と、田井中が怪訝そうに言えば、平沢は『違うよ』と前髪に手を当てる。

「憂に差したまんま」

「憂にですか？」

「うん。明日卒アルの個人撮影があるんだよ。一生残る記念撮影だから、やっぱばっちし決めたいもんね」

前髪を弄りながら平沢が何故か俺に身体を向ける。

「でね、今朝鏡見て髪型研究してたの。でもあんまり分かんなかったから、憂をモデルにして客観的にどんなのがいいかなって」

「じゃあそのまま来ちゃったの？」

琴吹が問うと『うん』と頷いた平沢は一歩俺に近付く。

「憂って髪下ろしたら唯先輩そっくりですもんね」

「去年の学園祭前に、憂ちゃんが唯の真似して部室来たっけ。さわちゃんが言うまで全然気付かなかったな～」

その当時を思い出しているのか、田井中は視線を宙に投げる。その最中、平沢はまた一歩足を踏み出しては俺のある一部分を凝視している。

「ンだよ……」

そんな平沢の行動の意図が理解出来ない俺は、思わず眉をしかめる。

「いつもピタッとしてるところがしてないと変な感じなんだよ」

「…だから？」

と、訊くと満面の笑みで口を開いた。

「サッくんの貸して♪」
「断る」
間髪を入れず拒否る。
「え～！　い～じゃ～ん！　この前私のヘヤピン貸したのに～！」
「そういえば咲也って後夜祭の時、唯のヘヤピンしてたな」
意見など受け付けなった平沢のせいで結局俺は後夜祭をそのままで過ごした。
取ろうと思えば取れたが、そうしようとすれば何故か平沢が悲愴に満ち溢れた瞳を向けてくるので、それは出来ず終いに。
ちなみに俺のそんな姿を目撃した田井中はニヤニヤと憎たらしい笑みを浮かべてきやがるので、デコに手刀を食らわせてやった。
「別にいいじゃんかサク、唯に貸してやれよ」
「断る」
またも間髪を入れず拒否る。
そもそも俺がピンを装着しているのはコンプレックスである不機嫌面とツリ眼を少しでも緩和したいがためだ。
始まりは中学時代のクラスメイトの女子に勧められるがまま。前髪を弄ると緩和されるからと。

結果的に大して変化はなかったが、周囲の反応は大多数でピンをしている方がいいとの事。

それ以降俺はほぼ毎日このスタイルだ。

『似合ってんじゃねーか！　それでいっとけよ！』

しかし、今思えば、提案した女子は面白がってやったに違いない。

ニヤけ面だったし。

「…お前に貸したところで俺には何の得にもならん」

逆にマイナスだ。

「ぶぅぶぅ～！」

平沢は口を尖らせつつ手を伸ばしてくるが、右手で払い除ける。

この時の俺の意識は平沢にいっていた。

それが失態だった……

「とうっ！」

正に一瞬の隙を突かれた。

気が付けば時既に遅く、田井中の右手には俺のピンが握られていた。

「ゲットだぜー！」

どっかの某ポケットに入るモンスターの主人公の如く高らかに叫んだ田井中。

「……」

対する俺は、泉のように怒りというマグマが湧きあがる。

「お、おい律！」

そんな俺に心情を察したのか、秋山は一人オロオロとしつつ強奪犯を叱責する。

「ほれ、唯」

だが、田井中は意にも介さず、平沢にピンを渡す。

「ふぉ～！　ありがとりっちゃん！」

「……」

慣れた手付きでそれを装着していき、最後には『エヘヘ～♪　サッくんのだ～♪』と上機嫌に飛び切りの笑顔を振り撒く平沢に、何故だか急速にマグマは活動を鎮め始めた。

そして代わりに口からは、

「はぁ……」

という深いため息。

「さ、咲也？」

「あン？」

「お、怒ってないのか？」

「ンなことしても徒労に終わるし、言うだけ無駄だ……」

まるでスキルを発動し、トリップした琴吹のように周囲に星を散布させている平沢は、誰の眼から見ても明らかに有頂天になっており、詰問したところで返答はてんで見当違いなものであるだろう。

食い下がってもまた見当違いなものが返ってきそうであり、そんな無益な応酬は得策ではない。

とどのつまりそういうことだ。

「唯はいつも通りになったけど、サクは不機嫌面がレベルアップし

たな」

ケラケラ笑う田井中にマグマは再び煮立ち、直後、田井中のデコには綺麗な紅い紅葉が咲いていた。

「うわぁーん！　みーおー！　サクがー！　サクがー！」

カラカラに乾いた瞳をそのままに、ジュリエットの演技力を発揮しては秋山に泣き付くカチューシャ。

「自業自得だ」

「律先輩が悪いですよ」

俺とカチューシャの喧嘩の仲介役である秋山だったが、今回ばかりは非はデコにあるとジャッジを下したようで、腕を組んでぴゃしりと言い切る。
オマケに中野の呆れた発言付き。

「ガーンッ！」

そんな二人の判決にデコはかなりショックを受け、近くにいた琴吹に寄りすがる。

キーンコーンカーンコーン……

すると、校内にＨＲの予鈴が響いた。

「あ、予鈴ですね」

「梓ちゃん、髪どうするの？」

「憂か純にしてもらいます。それより早く行きましょう」

「そうだな。ほら律、いつまでふてくされてるんだ。遅刻するぞ」

「ちぇ～……　分かってるよ～……」

扉に向かう中野と琴吹と秋山とカチューシャ。

俺もそれに続こうと、長イスから立ち上がる。

「サッくん、ありがとね♪」

「…妹から返してもらったらさっさと俺に返品しろよ」

「はっ！　ピンだけにね！」

「うるせェよ……」

やはりここは、この場所には、俺達にとっての日常が溢れている。
そんな事を頭の片隅で思いながら、俺は最後にテレキャスとアコギを一瞥し、部室から出ていった。

「あ、お待ちくだせぇ～！　サッくん殿～！」

――――――――――

退屈な授業だが、受験を今まで以上に意識しており、流石に睡眠学習をするわけにはいかず、欠伸を噛み殺し、教師の言葉や黒板の文字を抜粋し、ノートにペンを走らせる。

「唯」

「もふ？」

「いつものヘヤピンどうしたの？　忘れたの？　落としたの？」

「ううん、憂が持ってるの」

そんな授業を乗り越えた昼休み。
平沢の机に集まり、昼メシを堪能している平沢と秋山と琴吹と真鍋と、ついでにカチューシャ。

聞こえてくる連中の会話の内容は明日の卒アルの個人撮影だったり、平沢が俺のピンを付けている理由を真鍋に話していたり。

「サハラ砂漠のヤギ。略して咲也よ」

「…嫌な略称で呼ぶな。汚名を星の数と同等に持ち、放つ騒音で周囲の人間を苦しめ、この世で最も底辺な位置に身を置き、事あるごとに闇を彷彿させる不気味な笑みを浮かべ、一呼吸毎に地球上の酸素の大半を摂取し、吐き出す大量の二酸化炭素で地球を温暖化させ、人類の不幸を嘲笑う事に何よりの幸福を感じる下衆野郎」

「史上最悪な悪口のオンパレード止めろやッ！　つうかテメェも略せよッ！」

「だったら略してみろ……」

「よしッ！　考えてみよう。ホントに略されているのかをな☆」

相変わらず勝手に俺の机の対面に座り、昼メシをがっつく修司と対照的に惣菜パンをマイペースで口に運ぶ俺。これが今の現状だったりする。

「星の『か』ず…にん『げ』んを苦しめ…『み』を置き…『や』みを彷彿…『しゅ』いの…ど『う』とうの数…『じ』んるいの不幸を……はッ！　スゲェッ！　お前天才かッ!?」

そして、ブツブツと呪文を唱えつつ普段使用することのない脳をフル回転させたアホが、クワッと眼を見開いてコイツが口にするとレベルが下がってしまう称賛の言葉を贈呈させられてしまった。

「お前の記憶力の方がよっぽどだと思うがな……」

俺自身は既に何を言ったのか覚えてないというのに、あの長文を何故覚えていられた……

「まぁなッ！　俺の記憶力は定評があるからなッ！」

「…低評か」

「ん？　気のせいかサクッチの言葉に違和感を感じたぞ？」

「…気のせいだろ」

「ふむ。そうだな、気のせいか。ところでだ」

深く考えないことにより、けなされた事に気付かないアホは平沢に顔を向ける。

「何故に唯ちゃんがサクッチのピンしてんだ？　気になって今夜はおちおち眠れないぜ」

「…じゃあ寝るな。それに理由を言ってもお前には全く関係ない」

「関係あるさ、何故なら俺は親友だからな」

「違ェ」

「即答止めてね……」

落胆しては机に突っ伏す。

その行為のせいでパンやペットボトルのお茶を置くスペースがなくなったが、その事を告げると騒音が飛来しそうだと直感が働いたので、仕方なく手に持つ。

「それはそうと、サクッチよ」

突っ伏したままのアホがくぐもった声で、自身を落胆させたことなど水に流すが如く、アッサリと話題を変えてきた。

「お前はもう、軽音部を引退したんだよな？　いや、みなまで言うな。大丈夫だ」

身体を起き上がせ、教師が生徒に懇々と諭すように、騒音ボイスは鳴りを潜め、ゆったりとした口調で語り始める。

「……」

とりあえず俺は、ペットボトルを置き、片手にあるコロッケパンを咀嚼していく。

「でもな、これは悲しいことに現実なんだ。思わずガシラが熱くなってしまうのも分かる。だがな受け入れなくてはならないんだよ」

「……」

黙々と咀嚼中。

「ぶっちゃけるとお前はもう部活はない。これからの放課後は受験のために使われるだろう」

「……」

淡々とペットボトルを口に傾ける。

「そう、放課後だ。つまり今日からは一緒に帰ろうじゃないか。たまには俺んチに寄ってゲームでもして息抜きしても構わんさ。だから咲也、俺と来い」

実にきなくさい笑顔で右手を俺に差し出す。

「……」

差し出された俺は口内の食物を胃に納めて口を開き声を発した。

「ヤダ」

二文字の否定の言葉を。

「ぷいん？」

まさかそんな二文字が飛び出してくるなんて夢にも思わなかったらしい修司は、素っ頓狂過ぎる意味不明な言語で返してきた。

「えーっと……何故？」

「…これからも部室に足を運ぶことになった」

「だから何故？」

「…部室で受験勉強」

「マジで？」

「あぁ」

「実は嘘だったり」

「…偽りナシだ」

みるみる内にきなくさい笑顔が崩壊していく。
そして最後には、

「……ッ！！？？」

全身を痙攣させ、眼と口を限界以上に開き、どう顔の筋肉を動かせばそんな気味の悪い不気味な顔になるのか分からない程、かなり驚愕な表情になる。

「さ……」

そして何度か餌を求める魚のようにパクパクと開口し、漸くといった感じに声を絞り出す。

「咲也のバッキャローーッ！！！！！！」

わざわざ立ち上がり、桜高中に響き渡るのではないかと思うぐらいの大騒音を放つ。
当然のようにクラスメイトが何事かと注目する。

「…黙れ」

バキッ！

人体は勿論のこと地球にも優しくない弊害を消失させるため、渾身の力で腹に蹴りを与えてやると丁度自身の席に吹っ飛び（俺の隣）呻き声の後に活動を停止させる。

クラスメイト達は『いつものことか』と昼メシを再開し、俺も残っているパンを手に取った。

「相変わらずだな。サクと修司は」

「二人とも本当に仲がいいね～♪」

「影宮君はちょっと可哀相な気もするけど……」

「全く修司は……　この前は見習うところがあったと思ったら……」

「和ちゃん。見習うところって？　この前って？」

「何でもないわ。それより唯はほっぺたにご飯付いてるわよ」

こんな会話が聞こえた気がしたが、華麗にスルー。

――――――――――

そして迎えた放課後。

学園祭が終わり、受験という人生の大きな壁に立ち向かうべく、三年の廊下は独特な緊張感がうっすらと漂っている。

俺は一人、そんな廊下をヘッドフォンから流れる音楽を聴きつつ部室を目指す。

平沢達は掃除当番で遅れるようで、俺の前後左右にはいない。

ふと、何気なく窓からグラウンドを眺めれば、引退した三年を意味する青ジャージの姿はなく、二年の赤ジャージと一年の緑ジャージの姿がちらほらと見受けられる。

それは二年前、曽我部先輩に呼び出されて真鍋と共に見た光景と言葉がダブる。

そんな中で引退した俺は部室に向かうなど、些か滑稽だと感じつつも、それもまた軽音部だとも感じ歩を進める。

そして部室に着き、扉を開けると、大半は俺達より先に来ている中野の姿はなかった。

まだ来ていないのかと思ったが、テーブルの上には【ぶ】のキーホルダーが下がっている鞄が一つ。

意味するところは中野は既に来ているということになり、よくよく耳を澄ませば物置部屋から小さな物音が。

とりあえず鞄とヘッドフォンを長イスに置き、発音源に足を向ける。

「何だろ、コレ？」

薄暗い物置部屋の中には案の定、髪型をツインテールに戻してある中野の姿。どうやら平沢妹か鈴木に手伝ってもらったようだ。

「ムギ先輩が置いたのかな？」

中野の両手には何かがある。薄暗いのでその正体は分からない。先程から頻りにその物体を目の前で動かし、訝しげに上下左右に吟味している中野はどうやら俺の存在に気付いてないようだ。

「…何してんだ？」

と、訊けば中野は『ニャッ！』と鳴きビクッと小さな身体を跳ねさせツインテールを揺らしながら勢いよく俺に振り返った。

「サク先輩！？　いつからいたんですか！？」

「…さっきから」

別に脅かす意図で声を掛けたわけではなかったが、それでもニャカ野は驚いたようで両手で持っていた正体不明の物体を小脇に抱え、

空いた右手で胸を押さえている。

「いるならいるって声を掛けてくださいよ！」

「…いるならいるって声を掛けたじゃないですか」

悪びれもなくしれっと言えば、ニャカ野は言葉を詰まらせ、嘆息を漏らした。

「ホント、サク先輩って意地悪です……」

言って、俺の横を通り過ぎて物置部屋から出るニャカを眼で追いかける。

「あれ？　唯先輩達は？」

「…アイツらなら、今頃清掃という奉仕活動で学校に貢献中だ」

「普通に掃除当番でいいじゃないですか……」

呆れた視線を寄越してきたが、そんなことより両手にある物体が気になる。

「…何だソレ？」

問うと、ニャカ野は差し出すように物体を目の前に掲げる。

「私が訊きたいんですけど、先輩達が来るまで物置部屋を掃除しようとしたら、一番上の棚の奥に押し込んであって偶然見つけたんです」

部室に入り込む陽光で、正体不明の物体が明らかになった。

それはクッキーの空き缶。同時に物置部屋に部費で購入した棚が上手く収まったかを確認した時の情景が甦った。

『…見事にハマってんな』

『咲也の勘ってやっぱりすごいんだな』

『ん？　…おい』

『なに？』

『…この缶、何だ？』

『あっ！　こ、これは……アレだよ……』

『あぁ？』

『ほ、ほら、去年の……新入生勧誘の……』

『あぁ……　お前にとっての黒歴史か』

『う、うん……　だからこのクッキーの空き缶に入れて封印してるんだ……』

『サッく～ん！　澪ちゃ～ん！　トンちゃんがまた頷いたよ～！』

秋山が懇願し、俺が仕方なく棚の一番上に隠すようにしたのだが、現在ニャカ野の両手にあるということは、発掘してしまったらしい。

「サク先輩はコレが何だか分かりますか？」

「…その中身は、軽音部の黒歴史が封印されてある」

「え？」

当然といえば当然で意味が理解出来ずにニャカ野は首を傾げる。

「…ま、気になるんなら開けてみろ」

「えっと……　いいんですか？」

「…気になるんならな」

そう告げれば、ニャカ野は少しの逡巡の後に、テーブルに缶を置いては意を決したように蓋に手を掛ける。

「あ、開けます！」

「…ご勝手に」

意気込みの直後に遂に封印は解かれた。
そして中を覗き込んだ第一声を放つ。

「ＤＶＤ？」

俺の記憶が正しければ、中身はニャカ野の発言通りのものだろう。
とりあえず一応確かめるためにテーブルに近付くと、既に取り出しているニャカ野の片手にあるケース入りの一枚のＤＶＤを見れば『やっぱな』と納得する。

「何が映ってるんですか？」

「…言ったろ、黒歴史だ。正確には秋山の、だ」

「澪先輩の？」

と、又してもニャカ野が首を傾げた次の瞬間。

「開けてしまったのね……」

唐突に、俺達の背後から底冷えするかのような低音が背中を通り抜けた。

「あン？」
「え……？」

俺達は同時に振り返ると、開いた扉の前で顔を俯かせ何やら黒いオーラを纏う山中顧問がいた。

「それはね……梓ちゃん……」

顔を俯かせたまま左右に身体を揺らし、重い足取りで一歩一歩近付いてくる。その様は正にホラーだ。

「ヒッ……！」

そんなホラー顧問に中野は完全に畏縮してしまい俺のブレザーの端

を握り締めている。

（つうか、何やってんだ……）

その演出の意図が理解不能な俺は呆れているが、その間にもホラー顧問は着実に近付いてきている。

「その缶は……開けてはならない封印されしもの……」

完全にビビるニャカ野。
完全に呆れる俺。
完全に思考がぶっ飛んでる顧問。

何だこの構図……

「言うなれば……それは……それは……！」

ホラー顧問は俺達の前に辿り着く。そして顔を勢いよく上げ、

「正にっ！　パンドラの箱なのよーーっ！！」

「ニャーーッ！」

「無意味に叫ぶな……」

どっかの騒音発生生物に負けず劣らずなデカボイスを発する。
それによりニャカ野は俺の背中に隠れてしまった。

「何がしてェんだアンタは……」

「いや～　昨日観たホラー映画に影響されちゃってね～　どう？怖かった？」

「見りゃ分かんだろ……」

首を動かし背後のニャカ野を見れば、両手でがっちりと制服のブレザーを握り締めて若干震えていた。

「…生徒ビビらせる教師がいるかよ」

「ちょっと私のお茶目なところが出ちゃったわね♪　テヘッ☆」

「はぁ…」

その後、何とか落ち着いた中野は山中顧問に辛辣な言葉を浴びせ、今度は山中顧問が畏縮してしまい、俺は長イスに座って傍観していると、当初の目的を思い出したように中野がＤＶＤを手に持った。

「それで結局コレには何が映ってるんですか？」

「…だから秋山の黒歴史だっつうの」

「それが分からないから訊いてるんですって」

「だったら、観てみる？」

先程まで中野に説教を食らっていたというのに、ケロッとした態度で、そう提案した山中顧問。

「職員室にある私のパソコンで観れるわよ」

「…それは職員用に提供されたもんだろ。私的に使うなよ」

「私的じゃないわよ咲也くん。軽音部の活動の一環よ」

「アンタも部長もそれが決まり文句みてェだな……」

「それで梓ちゃん、どうするの？」

一応秋山の立場を考慮し、観覧は自己責任だと念押ししていたが、人間というのは欲望に中々敵わない時がある。

「わ、分かりました」

それが中野にとって今だったようで、躊躇いがちだったが確かに頷いた。

「じゃあ決まりね。あ、咲也くんも一緒に来るのよ」

「あぁ？　…俺は関係ねェだろ」

「違う違う。堀込先生が今日の授業の事で呼んでるのよ。そもそも私は咲也くんを呼びに来たんだから」

「それを早く言えよ……」

そうなれば行かないわけには行かず、俺は渋々長イスから立ち上がり、中野と山中顧問と共に職員室に向かうことに。

「そういえば咲也くん」

「あン？」

「朝から気になってたんだけど、髪型変えたの？　イメチェン？」

「あ！　憂から唯先輩のヘヤピン預かってるんですけど、サク先輩付けます？」

「断る」

「ですよね。それにしても澪先輩のって、一体何が……？」

「それは観てからのお楽しみよ梓ちゃん♪」

――――――――――

その頃。とある掃除区域。

「ッ！」

「どうしたの澪ちゃん？　ムギちゃんのお茶、早く飲みたいの？」

「お前の頭の中はそればっかだな。んで、どしたんだ澪？」

「いや……何か悪寒が走ったというか……」

「誰かが澪ちゃんの噂してるんじゃないかな？」

「ムギちゃん、それって誰？」

「う～ん……　曽我部先輩？」

「なんて噂すれば澪の背後にーーっ！！」

「ヒッ！？」

「誰もいないよん♪」

「り、りーつー！」

ゴンッ！

「アイタッ！」

「ムギちゃん、今日のおやつは？」

「今日はモンブランよ～♪」

「うわぁ～い♪」

「人が叩かれてるのに呑気だな、お前ら……」

「なんだろ……嫌な予感がする……」

第百二十八話（後書き）

今話から新章突入になるのかな？

第百二十九話（前書き）

撮影編その二です。

第百二十九話

時を溯る事、

『…とにかくさっきも言ったが、アンタの個人的な趣味に俺を巻き込むな。マジな勧誘ビデオを作る気がねェんなら俺は帰る』

1年5ヶ月と28日前。

『マジも何も、私はいつだって真面目だって言ってるじゃない』

日数ならば556日前。

『だからそれが余計タチ悪いんだっての！　てか、澪もいつまで抱き付いてんだよ』

『律～……　律～……』

2009年4月7日火曜日。

『ムギちゃんムギちゃん！　撮って～♪』

『え～っと、これが録画ボタンだから……　はい！　撮れてるわよ～♪』

現在時刻午後4時44分。

桜高の制服に袖を通して早一年。季節は春。
桜ヶ丘高等学校の名称の由来となったであろう、校内の桜木は満開に咲き誇り、時折の春風に揺られては、桜吹雪を優雅に踊らせる。

窓から年季を感じる一本の桜木が見える。
そんな観覧に持って来いな位置にあるのは音楽準備室。
その室内では、腕を組む制服の男子一人。二年を示す青いジャージ姿の内、物置部屋から持ってきたメガホン片手の女子、ビデオカメラを嬉々と回す女子、カメラの前でレスポールを構えて様々なポーズを決める女子の計三人。ナースのコスプレで涙ぐみながらメガホン片手の女子の腰にしがみつく女子。何食わぬ顔で佇むタイトな服装の女教師。

俺達六人は、新入部員獲得のため軽音部の勧誘又は紹介ビデオを製作しようとしていた。

この日は新学期が始まった翌日。つまり勧誘が本格的に解禁され、有りとあらゆる策を講じて新入生を入部させようと各部が奮起していた。

勿論俺達軽音部もそれは例外ではなく、昨日の部活会議（またの名をティータイム）で新入部員獲得に向けての対策を練っていた。

放課後の部活見学に先立って昼休みに勧誘チラシを配ろうとしたが、そんな安易な案は他の部も始めてあり、しかも平沢達が昼メシを完食するのに手間取り、俺達は完全に出遅れてしまった。

部員数五人という弱小部の俺達は、真っ向勝負は負戦と判断し、ならばどうするべきかと思案に暮れている時に山中顧問の間違ったインパクトを発動してしまい、結局俺達は軽音部の宣伝を出来ず終い

に。

このままではマズいと危機感を覚え、部室に来るかもしれない見学者の対応を山中顧問が製作したメイド服に身を包んでしまった平沢達に任せ、俺はアホを引き連れて大量に余った秋山製作の勧誘チラシを新入生に片っ端から捌いていった。

冗長なアホの接客理論がまさかの功を奏する結果となり、数十分後には俺達の手には勧誘チラシは無くなっていた。

手伝った見返りを求めるアホに福引券を与え、部室に戻ると、平沢妹とモジャ団子の姿があった。

軽音部をアピールするも始終グダグタになり、それを目撃した平沢妹は時折苦笑いを浮かべ、モジャ団子は苦い表情に変わっていった。

平沢妹はともかくモジャ団子は軽音部入部に望み薄だと判断し、俺達は反省会へ。

勧誘失敗に終わったのは偏に山中顧問が原因だと行き着いた矢先にその山中顧問がビデオカメラ片手に扉を開いた。

そして山中顧問は軽音部の紹介ビデオを製作しようと提案したが、いかんせん勧誘失敗はこの人物だと反省会の結果に基づいていた俺達は疑心暗鬼に捕らわれていた。

しかし、手八丁口八丁で上手く丸め込め、最終的にはメタル時代の目付きで脅すという伝家の宝刀を抜刀し、渋々その提案を受け入れることに。

だが、蓋を開ければ秋山に軽音部とは縁も所縁も接点すら無いナースのコスプレを無理矢理させ、俺と田井中が山中顧問に異論という正論を放つが全く意に介さず、議論は平行線を保ったまま今に至る。

『そもそもさわちゃんが余計な事しなかったら、もっと沢山見学者来たかもしれないのにさ。結局憂ちゃんと友達の二人しか来なかったんだぜ』

『…一人は部員の身内だから、実質見学者は一人だ。しかもアイツは入部に望み薄だろうな』

『え？　そーなのサク？』

『…帰り際の表情見てねェのか。明らかに失望した顔だったぞ』

『マジで……』

よほどあのモジャ団子に期待していたのか、田井中が落胆したように肩を落とす。

『大丈夫だよりっちゃん！』

そんな田井中を見兼ねたのか、レスポールを構えたままの平沢がトコトコと歩き、俺の隣に並ぶ。

『憂が入部してくれるよ！』

『そ、そうだよな！　憂ちゃんが入部してくれるよな！』

光明が差し込み、希望が湧いたらしく田井中の表情が晴天の如く晴れ渡った。

『……』

俺はというと腕を組んだまま思考の海に潜っていた。

確かに平沢妹なら入部の可能性は限り無く有るものだと考えられる。

一つの可能性はシスコンなアイツは、常に平沢の傍に居たいとして入部という図式が出来上がる。

もう一つは単に楽器や音楽に興味があるというもの。

正直平沢妹の音楽に対する愛好度は分からないが、少なくともマイナスではないだろう。それに一応顧問を含めた軽音部関係者とも顔見知りであり、気兼ねするという事もないと思われる。

ただ一つ気掛かりなのは、仮にそうならば入部届を既に提出していてもおかしくはない、という事だ。

だが、帰り際にそんな素振りは見せずにモジャ団子に苦笑いを浮かべていたということは、もしかしたらモジャ団子の付き添いで見学に来た可能性も無きにしも非ず。

まぁ、俺の場合、当時退部しようとしていた平沢の付き添いで入部してしまった過去があるので、付き添い＝入部という可能性はまだ

捨てられんが、どうにも『もしかしたら』の可能性の方が勝ってしまう。

『思考は十人十色か……』

『どうかしたの咲也君？』

胸中に止めておくことが出来なかったように無意識に呟くと、訊こえていたらしい琴吹がビデオカメラを構えたまま俺に身体を向ける。

『…別に。つうかカメラ向けんな』

『ズーム♪』

『すんな』

カメラを鷲掴みし、そのまま未だに田井中にしがみついている秋山に琴吹ごと向ける。

『ム、ムギ！？　映すなぁー！』

とりあえず平沢妹の件は一旦保留にし、改めて山中顧問に向き直る。

『…で？　結局どうすんだ？』

『勿論やるに決まってるじゃない』

何を言ってるんだ、みたいな表情を向けた後に、おもむろにホワイトボードに向かう山中顧問。

俺達はその行動を観察していく。

そして、ホワイトボードにある各々が書いた反省会の意見を勝手に消し、専用ペンを動かしていく。

『唯ちゃんのナレーションをバックにナース姿の澪ちゃんが登場。最後に執事服姿の咲也くんが澪ちゃんと一緒に決め台詞を、と思ってたんだけど、お気に召さなかったようだから変更するわね』

何をサラッと爆弾を投下させてんだ。

つうか俺は、照明じゃねェのかよ。

『サッくんやっと着てくれるんだね～♪』

お前は黙ってろ。

『確かにりっちゃんの言う通り、これじゃあ軽音部の欠片もなかったわね』

『やっと気付いたか、さわちゃん』

田井中が安堵の息を山中顧問の背に吐き出す。
そしてブツブツと時折何かを口ずさみながら、専用ペンがホワイトボードに文字を書いていく独特な音が長らく続いていくこと約三分。

『出来たわ！　これが新しい紹介ビデオの内容よ！』

俺達に振り向きざまにバンッとホワイトボードを叩いた山中顧問は何やら自信満々だ。

『これを今から撮影して、明日の新歓ライブ前に流したら、新入部員が部室に殺到すること間違いナシ！』

高らかにそう宣言したことにより逆に不安が過ぎった俺と田井中と秋山はホワイトボードに書かれてある内容を直ちに確認。

【1．校舎の外観を撮影（桜の花弁が舞っていたらより良い）

2．花弁を一枚一枚部室前に続くように設置（視聴者は何が起こるのかとワクワク☆）

3．誰か二人が中から扉を開ける（カメラに映らないように注意！）

4．楽器を動かす（椅子に楽器を立て掛けて各自が映らないように

後ろから）

5．画面一杯に楽器を映す（その隙にナースの澪ちゃんが画面中央に移動）

6．楽器が移動すると澪ちゃんが決め台詞！（最高の笑顔で）

7．撮影終了！　みんなお疲れ様！】

ホワイトボードにはこんな疑問点が多々ある撮影内容が。更にその場面場面での撮影方等事細かい説明文まであったり。

『これでバッチリね！』

どや顔でサムズアップをかましてきた山中顧問に真っ先に詰め寄ったのはナース秋山だった。

『バッチリじゃないですよ！　何で私はこの格好のままなんですか！』

『だってインパクトが大事じゃない。それによく似合ってるわよ♪』

『嬉しくありません！』

珍しく噛み付いている秋山を横目に俺と田井中はホワイトボードに

向き合ったまま、小会議を行っていた。

『どうするサク？』

『…どうするも何も、こんな三流映画にも及ばなねェもんを撮るわけねェだろ』

『でもさ、今のさわちゃん何かスイッチ入っちゃってるからさ、撮影しなかったら帰らせてくれなさそうなんだよな……』

『…だったら撮るか？　ンで、明日新入生連中に観せんのか？　軽音部のイメージダウンに見事に直結するのが眼に見えんぞ』

『けど実際、勧誘には失敗したんだからさ、一応撮ってみないか？』

『…藁にも縋るってか？』

『そうそう。もしかしたら意外といいのが出来るかもよ？　今度はちゃんと軽音部って分りやすい楽器も入ってるし、サクの出番はないわけだし』

『…下手したら秋山と軽音部の沽券に関わるぞ？』

『そこは完成したのを確認して、ダメだったらお蔵入りにすればいいじゃん』

『はぁ…』

白旗を意味するため息をつくと、田井中は山中顧問の元へ向かい、入れ替わりに平沢がやってきた。

『ねぇねぇ、私のギターに制服着せたらダメかなぁ？』

『唐突に何だよ……』

『だってほら、楽器を動かすってあるよ。やっぱり可愛くしなくちゃ』

どうやらコイツの脳内には年中花畑が満開のようだ。
言ってる意味が分からんし、何よりこの内容に賛同している感覚が全く理解出来ない。

『私のキーボードにも制服着せたら可愛くなるかな？』

『なるなる！　今から試してみようよ！』

『そうね～♪』

ほのぼのコンビはニコニコとしながら制服が置いてある物置部屋に駆けていく。

『さわちゃん。もうアレでいいからちゃっちゃっと撮っちまおうぜ』

『なっ！？　律！　何言ってるんだよ！』

『やっぱり部長なだけはあって物分かりがいいわね。ということで澪ちゃん！　もう観念しなさいね』

『うぅ……』

田井中はもう面倒そうにしており、山中顧問は『うんうん』としみじみと頷き、秋山は田井中のまさかの裏切りに気落ちしたらしく、床に両手両膝をつける。

『こんなもんで新入部員が入部したら、苦労しねぇっつうの……』

周囲の声には一切耳を傾けず、俺は未だにホワイトボードに向き合ったまま、一人こんな事を吐露していた。

ちなみに今日は俺の十七回目の誕生日だったが、俺自身そんなことを忘れてしまう程、この後の紹介ビデオ製作に気が向いてしまっていた。

――――――――――

翌日。８日水曜日。

『みんな！　出来たわよー！』

新歓当日。五限の時間を使い来たる六限の新歓ライブに向け、最後のリハを行おうと各自楽器を構えた瞬間に山中顧問が荒々しく扉を開けた。

見れば、片手にノートパソコンがあり『出来た』とは昨日下校時間ギリギリまで撮影した軽音部紹介ビデオの事だろう。

『見せて見せて～♪』

『あ、おい！　唯！』

『私も見た～い♪』

『ムギまで！？』

長イスにノートパソコンを置き、パソコンのキーボードを叩き操作し始めた山中顧問に平沢と琴吹が駆け寄り、秋山はおっかなびっくりな様子で近付いていく。

『ほら、サクも』

と、田井中が手招きをしてくるので、テレキャスを構えたまま気怠るそうに腰を屈めている平沢の背後に足を動かす。

『全員揃ったわね。それじゃあ……』

一度俺達を見回した後、山中顧問の人差し指がエンターキーを、

『ポチッとな』

（その言葉必要か……？）

『咲也くん、今失礼なこと考えたでしょ？』

眼鏡の奥を光らせたが、さっさとしろと伝える意味で小さく顎を動かす。

『もう！』と年不相応に頬を膨らませ、漸くエンターキーを押す。

先ず画面に映し出されたのは校舎の外観。

ハラリと一枚の桜の花弁がカメラのレンズにフワリと着地すると、次の場面に変わる。

『お、何かいい感じじゃん！』

『これはまだほんの序の口よ、りっちゃん』

部室前には桜の花弁が一列を成し、まるで矢印のように部室の扉に設置されてある。

『あ！　私と咲也君が置いた桜！』

『一々燥ぐな……』

カメラがその桜の矢印を辿るように追っていけば、部室の扉が映る。その直後、実に軽快且つポップなＢＧＭが流れてきた。

『ンだよこの音楽……』

『ＢＧＭよＢＧＭ。軽音部は楽しいところってアピールしなきゃ』

『あっそ……』

ＢＧＭが流れ出して五秒程経ったら、音声別撮りしていた平沢のナレーションも流れ始めた。

【新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます！　私達のクラブは現在、五人しかおらず廃部の危機を迎えています！】

そこで室内に待機していた田井中と平沢が扉を開けるが、その最中どうやら平沢はどこかぶつけたらしく『イタッ』という声が一瞬聞こえてしまった。

『唯～　何やってんだよ～』

『だって私の方は、ドア開けたら壁に挟まっちゃっうんだもん』

すると、画面が切り替わり、わざわざブレザーを着せたレスポールを椅子に立て掛け、平沢が背後からブレザーの腕部を動かしている場面と、同じくキーボードにブレザーを纏わせた琴吹が机の陰に隠れ腕部を動かし、秋山のブレザーを着せたベースを動かす田井中だったり、スネアに無理矢理ブレザーを纏わさせ動かす田井中だったり、俺のテレキャスに勝手に執事服を着せ、同様に腕部を動かす平沢だったりな場面が順次に映っていく。

『咲也くんが着てくれないからギターに着せちゃったじゃない』

『アンタの仕業か……』

それらが映り終わると、部室の引きの映像に代わり、画面一杯に楽器が現われる。そして平沢のナレーションが。

【私達と一緒に熱い青春を過ごしませんか?】

楽器と楽器の間からナース秋山がスタンバっているのが見切れているが、お構いなしに映像は進んでいく。

【この軽音部で!!】

平沢のナレーションが終わると同時に楽器は左右に掃け、遂にナース秋山が悲愴感満載に全身を映し出す。

『澪ちゃん緊張してるね？』

『あ、当たり前だろ……　こんな恥ずかしい格好してるんだから……』

琴吹の言う通り、緊張しているようで顔が強張っている。
そんなナース秋山にカメラがズームしていくと、意を決したように口を開いた。

【よ、ようこそ……け、軽音部へ！】

決め台詞を言い終わるとカメラは更にズームしていくと、秋山の強張りながらも精一杯の笑顔が。
そしてＢＧＭがフェードアウトしていき画面が徐々に暗くなっていき、最後にはＢＧＭも映像も消えて真っ暗に。

『これで終了～！　我ながら惚れ惚れする仕事っぷりね～！』

『非の打ち所がない完璧なビデオね！』なんてほざき自画自賛している教師が一人。

『唯ちゃんのナレーション良かったわ～♪』

『ムギちゃんの桜の演出もバッチリだったよ～♪』

互いの手を取り褒めたたえ合うほのぼのコンビ。

『律～……　咲也～……私こんなのヤダ～……』

撮ったのはいいが、やはり不安を感じたらしく、俺と田井中に切実に懇願してくる人物一人。

『サク』

『あン？』

『どーだった？』

『…言う必要あると思うか？』

『いや、ないな。サクも多分私と同じ気持ちだろうし』

意思の疎通の結果、小さく頷く人物二人。

そしてその一人である田井中がいつの間にか、ほのぼのコンビの歓喜の輪にスネークインしている山中顧問の肩に手を置く。

『さわちゃん』

『なに？　やっぱりもうちょっと澪ちゃんの露出アップした方が良かった？』

どうしてもそんなアホらしい事をやりたいのか、真剣な思案顔になる。

対し、秋山は怯えたように一歩後退しては身震いをしている。

当然、俺と田井中が言いたいのはそんなことではなく、部長副部長会議の結果を共に口にした。

『『こんなものを新入生が見たら、間違いなく入部してこない』』

瞬間、室内は様々な表情で溢れた。

平沢と琴吹はキョトンとし、秋山は身が救われたと心底安堵したように胸に手を当てホッとした表情に。

『な、何言って……』

そして山中顧問は思案顔から一変、驚愕の表情に染まる。

それからは反論ＶＳ正論の戦争だった。

『何言ってるの！？』と刃を振り落とせば、『…そっちが何言って

んだ』と防御し『途中まで良かったんだけど最後がな～』と弾丸を放つ。

『あんなに頑張って作ったのに、それを無駄にするの！？』と打ち返せば『だって昨日やらなかったら、さわちゃんが帰してくれなさそうだったし』と避け、『…無駄っつうならアンタの画策と脳内だ』とミサイル発射。

『ヒドいわ咲也くん……』と、うなだれた隙に、これ以上の戦争は面倒だと判断した俺が部室から摘み出した。

『せっかく作ったのにもったいないよ～』

『そうかもしんないけどさ唯、こんなの観たら新入生は軽音部にマイナスイメージしか持たなくなるぞ』

『…そもそもあの顧問の提案に乗っかったのが間違いだ。新歓ライブで演奏すりゃそれなりの人材が来るだろ』

『じゃあこの紹介ビデオ、どうするの？』

『封印します！』

琴吹の問いにそう高らかに表明した秋山は、素早い動作でパソコンからＤＶＤを取り出す。

『でもでも澪ちゃん。もしかしたら、それ観た子が軽音部に入りたいって思うかもしれないよ？』

『ないないないっ！　ぜーったいないっ！』

平沢の言葉に何度も首を左右に振り、高速否定する秋山。

『…とにかくこの件はこれで終わりだ。リハ始めんぞ』

『そうだな！　さぁみんな！　新歓ライブに向けて頑張ろー！』

『おぉ！　澪ちゃんが張り切ってる！』

『私達も負けてられないわね～♪』

『てか、見学者が二人しか来なかったんのに、入部希望者がホントに来んのかな～……』

『何言ってるんだよ律！　私達の演奏なら大丈夫だ！　咲也もそう思うだろ？』

『…それは蓋を開けてみねェと分からん。つうかテンションおかしいからな、お前』

こうして、秋山に新たなるトラウマを植え付けた軽音部紹介ビデオは封印され、新歓ライブでその映像が流される事はなかった。

そして現在。

俺と中野は山中顧問に連れられて職員室へ。

そこでは古文の堀込が待ち構えており、用件は何だと開口すれば、今日の古文の抜き打ち小テストの俺の答案用紙を自身の机に置いた。

何でも俺は古文の成績が他の教科と比べ、目立つ程悪いとのこと。このままではセンター試験はともかくとして、本試験で古文が足を引っ張るので、留意するために呼び出されたようだ。

受験に関する事柄なので心して話を聞かねばならないのだが、対面の山中顧問の机にて例の勧誘ビデオを観賞し始めた中野の表情が徐々に変化していく過程が何とも珍妙で、どうしてもそっちに眼がいってしまいがちになってしまう。

予め俺や山中顧問から『黒歴史』や『パンドラの箱』だとイメージを植え付けたからなのか、怖いもの見たさに駆られた中野の表情は、初めは若干の期待感を含んだ表情だったが、見る見るうちに内容を理解しようと複雑な表情になっていく。

初見のアイツがあんな表情をするということは、去年の新歓ライブで黒歴史を流していたら軽音部の沽券が大暴落していただろう。
それを未然に防いだ俺と田井中の判断は間違ってなかったようだ。

「訊いているのか桐島？」

すると、聞こえた声に意識を堀込に戻すと、俺の答案用紙をまるでモールス信号でも送るようにトントンと指で叩いていた。

「…あぁ」

「その様子からしたら訊いてなかったな」

その様子とはどの様子か不明だが、そんな言い草をされては説教慣れしてしまった劣等生そのままだ。それは遠慮したい。

「…古文がすこぶるワリィんだろ」

なので、中野と山中顧問を視界から排除し、改めて堀込に向き直る。

「すこぶるというわけではない。ただ、このままだったら受験に支障を来たすと言いたいんだ」

「…ンなことは分かってる」

「大学入試の古文で、純粋な古典文法の出題はごく僅かだ。だが、古典文法を理解してないと、古典文の解釈は絶対に出来んと言っても過言ではない。お前の場合、古典文法に穴が見受けられる」

「…それも分かってる。だから今日から本腰を入れる」

睨み合いのような視線の交錯。その果てに破れたのは堀込だった。

「ふぅ……」

と、息を吐き出し、中野と共に黒歴史ビデオを観賞している山中顧問を一瞥し、俺を見上げる。

「お前は山中に似ている」

「はぁ？」

いきなりの事に、何を言っているのか理解出来ずに調子が外れた声を発してしまう。その理由には山中顧問を呼び捨てにしている事も含まれている。

「お前は当然知ってると思うが、山中は軽音部だった」

「だからなんだよ……」

「部活にかまけ、勉学は疎か。進路はミュージシャンになると言う」

「……」

「そんな山中が今は教師となり、お前ら軽音部の顧問になっている」

堀込が椅子の背もたれに体重を預け、腕を組む。
俺はとりあえず黙り込んで語られる堀込の想いに耳を傾ける。

「似てるとは言ったが、お前は別に勉学を疎かにしているわけではない。まぁ、一部の先生方から授業中に寝ていると報告が挙がっている、が」

耳が痛い言葉と向けられた視線から逃れるべく、そっぽを向く。

「この前の軽音部のステージ。おれも観ていた」

視線を戻せば、堀込は山中顧問を見ていた。

「山中や河口達のようなメタルと言うのか？　そういう路線の音楽ではなく、桐島達の今の軽音部も、山中達の時のように盛り上がっていたな」

俺は依然として黙ったままだ。

「正直音楽についてよく分からんが、音楽に対するひたむきさがお前と山中の似てるところだ」

「…ひたむきさとか知らねェが、将来は教師にでもなれって言いて

ェのか？」

「山中もなれたんだから、お前もなれるかもな」

「…なる気ねェし」

そう一言告げて、踵を返す。

「…とにかく古典文法を重点的にやりゃいいんだろ」

「そこだけじゃないが、まぁいい。お前は物事の理解が早く的確だ。それを勉強に活かせ」

背後に掛かるアドバイスに何かを示すわけでもなく、答えるわけでもなく足を動かし職員室から出ていく。

「あ、待ってください、サク先輩！」

どうやら観賞し終わったらしい中野が俺の後をついてくる。

「堀込先生、咲…桐島くんと何の話をしてたんですか？」

「お前と桐島の共通点だ」

「共通点？」

「あぁ、音楽と将来のな」

「？」

「とにかく、今から職員会議だ。この時期の内容は受験についてになるだろうな。しっかり聞いておけよ」

「あ！　今日はムギちゃんのお茶が飲めないんですね……」

「お前は何をしに部室に行っとるんだ……」

「指導の一環です！　なんて言ったって私は軽音部の顧問ですから！」

「そんな考えは卒業しても当時と変わっとらんな。軽音部員のままだ」

「ありがとうございます♪」

「褒めとらん」

俺達が去った職員室ではこんな会話が。

「あの二人の間柄は生徒と教師だったのか……」

「何か言いました？」

「別に……」

そして俺は学園祭ライブで目撃した、堀込に頭を下げる山中顧問の関係に合点がいき一人納得していた。

第百二十九話（後書き）

過去話は、第三十五話と第三十六話の新歓ライブのリハーサルとの間に起こった出来事だったりします。

ちなみに梓が入部してから唯は『ギー太』と言い始めたので、この時は『私のギター』と言ってます。

第百三十話（前書き）

撮影編その三です。

第百三十話

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

「モンブラ～ン♪　モンブラ～ン♪」

掃除当番が終わった私達は部室に向かう階段を上がっていた。

先頭を行く唯はよっぽど今日のティータイムが楽しみなようで、両腕をブラブラと交互に動かしてスキップをしている。

見上げたその後ろ姿は、オモチャを与えられた子供みたいだ…って、今日の朝、唯が子供っぽいって咲也が言ってたっけ。

その次に律とムギが続く。二人は雑談を交わしているみたいで、たまに会話が聞こえる。

「なぁ。ムギって四歳の頃からピアノ習ってたんだよな？」

「うん。父の勧めで」

「梓はギター始めたのって確か小四って言ってたな」

「うん。ご両親がジャズバンドだから、その影響でって言ってたね」

「サクはあのミュージシャンのギタリストに憧れて、小三からって言ってたな」

「うん」

「んで、唯は高校からで、私と澪は中二から」

「どうしたのりっちゃん？　難しい顔して」

「ん～……　いや！　何でもない！」

「でも……」

「何でもないって！　それよりさ、今度始まるドラマ面白そうなんだよな～！　何かフリーターが家を買うんだって！」

律が何を思ってそんな事を口にしたのか私には分からない。それはムギもそうみたいで推察するみたいに律を見ている。

でも、律の横顔からは何も読み取ることは出来なかったんだと思う。

だって律の話すドラマに次第に興味を示し始めたから。

まぁ、ムギの性格を考えたらドラマの方に誘惑の天秤が傾いたんだろうな。

（咲也だったら不干渉かな？）

観察力と洞察力が鋭い咲也なら、もしかしたら律の言葉の真意に気付くかもしれない。でも、例え気付いたとしても敢えて言わないのかもしれない。

自分や軽音部に関する事柄ならまだしも、仮に律の言葉が全くの無

関係だったら、きっと咲也は何も言わないし関わろうともしない。
それに、今ここには咲也はいない。つまり律の言葉を知らないから、どの道、咲也には無関係。
まぁ、私かムギ、それか律本人から咲也の耳に入ったら別だけど。

「あれ～？　サッくんとあずにゃんいないよ？」

「二人でどこか行ってるんじゃないかな？　ほら、咲也君と梓ちゃんの鞄があるし」

「あのキーホルダーは正に梓の鞄だな。しっかしサクはキーホルダーどこに付けてんだ？　まさか家にあるなんて事はないよな？」

「はいは～い！　それなら私知ってる！　鞄の中のポケットに入れてるって言ってたよ～！」

「へぇ～……って、何で知ってるんだよ？」

「この前一緒に帰ってた時、あずにゃんと訊いたんだよ」

部室の扉を開けた律達がいつものように話す声が聞こえる。
私はまだ、部室には入らず何となく踊り場から外を眺める。
桜高生が足早に校門に向かっていた。多分、その殆どは三年生なんだろうな。
受験のためにみんな必死なんだ。みんな頑張るんだ。目標に向かっ

て必死なんだ。夢を叶えるために頑張るんだ。

「私も頑張らなきゃな」

決意を声にすると、不思議と身が引き締まるように感じて、私は受験生だって改めて心に刻んだ。

「でも、たまの息抜きにエリザベスを弾いてもいいかな？　なんちゃってな」

クスリと小さく笑って階段を上がる。そして遅れて中に入れば、律と唯がムギにお茶をねだってる。

おいおい、今日から受験勉強するんだろ？　始めからそんなんでどうするんだよ。

ムギもムギで、嬉しそうにティータイムの準備しちゃダメだろ。

全く！　受験生って事忘れてるんじゃないだろうな？

「澪ちゃんは何がいい？」

「私はコーヒーで。せっかくムギが持ってきたんだし」

あぁ……　流されてしまった……

し、仕方ないじゃないか！　もう習慣みたいなものなんだし！　身体が勝手に反応しちゃうんだ！

「はぁ…」

言い訳を心で叫んでも意味がない。だから私は咲也みたいなため息をついた。
鞄を長イスに置いて、とりあえずいつもの席に向かう。

「……え？」

そしてテーブルの上にあった物を視界に入れた途端に私は瞬時に眼を見開いた。
どうして？　何で？　っと。

「あぁーーーっ！！」

掃除をしている時に感じた嫌な予感が的中してしまって、ここにあってはイケないそれに、私はヒドく驚いて、つい大声を出して叫んでしまった。

（何で！？　どうして！？　隠してたのに！？　咲也に頼んで一番

奥に押し込んでもらったのに！？）

頭の中は目の前にあるクッキーの缶が何故テーブルの上にあるのか？　という疑問で持ち切りになる。

だから私は既に忘れてしまっていた。

律の意味深な言葉を。

律の真意が見えない声を。

律の悩んでいるような表情を。

それは数年後になって後悔するんだって、この時の私は知る由もなかったんだ。

あの時、何で忘れてしまったんだって。

何で咲也に言わなかったんだって。

数年後の未来に……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

階段昇る最中だった。
不意に中野が口を開いたのは。

「サク先輩の言う通りでした……」

「…黒歴史」

「はい……」

共にため息をついた。

そして中野の感想は『新歓前に流さなくて正解です。ていうか流しちゃダメだと思います』とのこと。
実に的を射た感想に再度俺と田井中のファインプレーを内心で称賛していると秋山の悲愴感満載の悲鳴が部室から漏れてきた。

『どうした澪!?』

『み、見ろ……コレ……!』

『クッキーの缶？　澪ちゃん、コレがどうかしたの？』

『こ、この中には……』

『コラッ！　唯っ！　お前全部食べただろっ！』

『わ、私食べてないよっ！』

やはり防音効果が低下しているようで、田井中の驚愕した後に平沢に叱咤する声や、琴吹の疑問を含んだ声や、平沢の必死に否定する声や、秋山の震える声のハーモニーがダダ漏れだ。

「もしかしてコレが無くなったのが見つかったんでしょうか？」

中野が手に持つＤＶＤケースに視線を向ける。
窓から差し込む光が僅かにケースに反射し、中野の表情を映す。
その表情は、心なしかバツが悪そうなものだった。

「…十中八九そうだろうな」

黒歴史が封印されてあった缶は、テーブルの上に放置したまま。と、なれば、必然的に発見されてしまうのは必至だ。

「コレって澪先輩が隠してたんですよね？」

「…一応本人はそのつもりらしいけどな」

ただ単に棚の奥に押し込んでいただけで、俺からしてみたら隠しているとは思えない。隠蔽したいのであれば自宅に持ち帰ればいいものを。

まぁ、これも秋山の抜けているところなんだから仕方ないんだろうが。

「何か澪先輩に悪い事しちゃった気がします……」

「…気に病む必要ねぇと思うけどな。お前が見つけて顧問に唆された時点で秋山の運のツキだったんだろうよ」

言って、扉を開ける。
その後を中野も若干の気まずさをそのままに俺の背に続く。
そして、俺達の入室を感知した四人は一斉に振り返る。と、同時に一目散に駆け寄って来たのはいたく慌てている秋山だった。

「さ、咲也！　大変なんだ！　か、隠してたのに！　クッキーの缶が！　封印してたのに！　中身が無くなってる！」

「…とりあえず落ち着け」

我を見失ったように俺の前でアタフタと両手を動かし、矢継ぎ早の口撃を繰り出してきたが、宥めるようにそう言えば『う、うん……』と深呼吸を始める秋山。

「み、澪先輩！」

すると、機を見計らっていたのか突発的に中野が声を張り上げる。
見れば手にあるＤＶＤケースを秋山に差し出している。

「あ、梓っ！　そ、それ……！」

ほんの一時しか騒ぐ心を沈静出来なかった秋山は、震える指で封印されし黒歴史を差す。

「ごめんなさい！　観ちゃいました……」

深々と頭を下げる中野。

「物置部屋を掃除してたら偶然見つけて……　サク先輩と先生が気になるんなら観てみろって……」

「おい」

何をさり気なく俺も悪人に仕立てあげやがってんだ。
唆したのは顧問であり、決して俺ではない。その事を念頭に置けよ。

「あ！　思い出した！　この中にあったのって去年撮った軽音部勧誘ビデオか！」

「確か、澪ちゃんが観せたくないってこのクッキーの缶に入れてたのよね～♪」

「懐かしいね～　あのクッキーの味♪」

「そっちじゃねェだろ……」

田井中と琴吹は、中野の持つＤＶＤと秋山の慌てふためく態度に合点がついたらしいが、平沢はやはりズレていた。

「本当にごめんなさい……」

そこまで謝罪しなくともいいと思うが、根が真面目な性格故に、そこはケジメをつけたいのかもしれない。

「梓……」

そんな中野に秋山が呟き、一呼吸置いて中野の肩に手を置き口を開く。

「そこまで謝られたら逆に私が困っちゃうよ」

「でも……」

「確かにこれは余り観られたくないけど、普通、缶の中にあったら誰だって気になっちゃうよな。それに梓に言わなかった私にも落ち度はあるよ」

「いえ！　澪先輩は……！」

顔を上げた中野。その頭に秋山が肩に置いていた手を乗せたことにより、中野は二の句を告ぐ事が出来なくなる。

「じゃあ、お互いの不可抗力だったって事にしないか？　それなら梓も納得だろ？」

微笑んで告げた秋山に、中野はしばし瞳をしばたたかせ茫然としていたが、直ぐに笑顔になり、

「は、はい！」

と、実に清々しい程の声で頷いた。

ちなみに、俺からしてみれば『なんだこれは？』だ。

黒歴史観賞は秋山にとっては傷を抉るようなものなんだろうが、それをここまでの事態に発展させる必要があったのだろうか。

どうやら、難儀な性格と根が真面目な性格のコラボレーションは、青春ドラマを彷彿とさせてしまうワンシーンを生み出してしまうよ

うだ。

「うん、じゃあ今から練習しようか」

「勉強するんじゃないんですか？」

「あ、そうだったな」

「もう、澪先輩らしくないですよ～」

「ごめんごめん」

『あははは』と何がおかしいのか二人は笑う。

何やら親密度が上がったらしい。それは周囲に星がキラキラと輝く程。

「ぽ～……」

「ちょっ！　ムギ！？　何かそれ久し振りだな！　帰ってこーいっ！」

そんな秋山と中野に、琴吹が恍惚感満載なうっとりとした顔つきでスキル発動。田井中が肩を揺らすが随分遠くに旅立っているようで、中々帰還してこない。

「ほい、サッくん」

「サッくん言うな」

とりあえずは一件落着したので、鞄から古文のノートを取り出そうとすれば、平沢が俺のヘアピンを差し出してきた。

「ありがとうね～　サッくんパワー注入したから返品するよ！」

高尚にドヤ顔をする平沢。どうやらピンと返品で上手い事を言った表れのようだ。
つうか、俺が朝言ってしまった事をただ自分の手柄にしただけだ。

「…二点」

「な、何点満点中ですかい？」

「…百点満点中」

「ガーンッ！」

受け取り、前髪を装着しながら採点結果を告げれば、よほど自信があったのか膝から崩れ落ちる平沢。

「「あはははは」」

「ぽ～……」

「ムーギーっ！」

「ブヒブヒ……」

「はぁ……」

未だに笑い合う秋山と中野。
未だにトリップしている琴吹。
未だに肩を揺らす田井中。
嘆き鳴く平沢。
深いため息を吐く俺。

『カオスだ……』という意味で。

……

「こんなのがいいかなって。大人っぽいし」

「…見た目変化しても中身はガキのままだ」

「ぶぅ～！　そんなことないもん！」

「でも唯ちゃん、ここまで変えなくても今のままでいいと思うけど」

「卒アルの個人撮影なんだよ。一生残るんだもん、やっぱバッチシ決めたいよ」

「だとしてもこれは変え過ぎだろ。唯だったらコッチの方が似合うと思うぞ」

「ドレッドですか」

「思い切った提案したな、澪」

「いや、ギャグなんだけど……」

「分かりづれェよ……」

あれから、秋山は再度黒歴史ＤＶＤを缶に閉じ込め、ガムテープで蓋部をグルグルに巻き一層の封印を施した。それを又しても俺が棚の一番上の奥に押し込んだ。

琴吹は田井中の努力が実り漸く帰還し、平沢は中野から妹から渡すように頼まれていたヘアピンを付ける。

何とか場が落ち着きを取り戻し、さて勉強開始と誰もが意気込んでいた。

しかし、平沢の『髪型研究しよう！』の不意の一言に俺を除く部員は吸い込まれるように、平沢がテーブルに広げたヘアカタログに夢中になってしまった。

女子はこういう髪やら服やら総じたファッショナブルな風には敏感

であり、先程の意気込みは何処へやら、一変して部室内は明日の卒アルの個人撮影の話になってしまった。

無論俺はそれに交ざる気など毛頭ないので、長イスで古文の勉強を行っていたが、頻繁に平沢や田井中が意見を求めてくるので全く古文が頭に入らない。

とりあえずスルーしていると面倒な事になりそうなので、適当且つ的確に相槌やツッコミを入れつつ俺は古文の教科書とノートに視線を這わせていく。

「てかさ、髪型変えたいんなら手頃な方法があんじゃん」

「方法って？」

田井中の提案に平沢が逆に問う。

「髪結めばいいんだよ」

「あぁ、確かにそうですね。唯先輩の髪の長さならいけると思います」

「唯ちゃん、結んでみる？」

「うん！　ムギちゃんおねが～い！」

背後から何やらゴソゴソ音が聞こえるが、視線は理解不能な古文に向けておく。

「はい！　出来た！」

「どう？　どうかなサッくん！」

期待をふんだんに含んだ声質を発した平沢に、気怠そうに長イスから振り返る。

「エへへ～♪」

「妹じゃねェか……」

何が嬉しくて笑っているのか不明だが、髪型をポニーテールにした平沢は妹に変化してしまっていた。

「あ、ホントだ。憂そっくり」

自分自身気付いてなかった平沢は、ブレザーのポッケから手鏡を取り出し確認する。

「私ってこの髪型すると憂になっちゃうんだね」

「前にイメチェンの夏とか言ってやってたじゃないですか」

「あ、そうだったね～」

「うっ！　ホントに憂がいるみたいに感じてきた……」

「唯が憂ちゃんに似ちゃうのは前髪があるからじゃないか？」

と、秋山が言う。

「だったら前髪を上げちまえよ！　私みたいにさ！」

「や、それは勘弁してつあさい」

「あれ？　何か私が否定された気がする……　しかも憂ちゃんに……」

ナイスアイディアと言わんばかりの田井中の提唱に、間髪を入れず両手を前に突出して拒否の姿勢を見せる平沢。

その反応をまざまざと目撃されたカチューシャはショックを受けたようにテーブルに突っ伏す。

「唯ちゃん、おでこ禁止なの？」

「うん……　だって恥ずかしいんだもん……」

以前、平沢が風邪で倒れた際に中野が熱を計ろうと平沢の額を全開にした事があり、あの時は熱でうなされながらも同じような事を言っていた記憶がある。

故に俺と中野は平沢の拒否反応に何の反応も示さなかった。

「唯は別に今の髪型が嫌ってわけじゃないんだろ？」

「うん」

『あ、ムギちゃん解いていい？』と琴吹に問い掛け了承された平沢は髪留めを解きながら秋山の質問に答える。

「だったら無理に変えないで、一度試し撮りしたらどうだ？」

「ほぉ～！　うん！」

完全に勉強を行う気配が無くなった部員達は一斉に椅子から立ち上がる。

試し撮りだかなんだか知らんが、俺は我関せずにひたすら古文に没頭していく。

「律、デジカメ持ってきてるか？」

「おう！　あるぜ～」

「じゃあ私が先輩達を撮りますね」

「あずにゃん、可愛く撮ってね？」

「まぁ、出来るだけ頑張ります」

「咲也君」

古文の教科書に人影が落ちる。顔を上げればニコニコと笑う琴吹が覗き込んでいた。

「あぁ？」

「今からね、写真撮るの～♪」

「…みてェだな」

「個人撮影のリハーサルなの～♪」

「…だから？」

「勿論唯ちゃんも撮るわ♪」

「…だから？」

「だから、咲也君も撮りましょ～♪」

「意味分かんねェし……」

何段ステップを飛び越えていきなりゴールテープ切ってんだ。

「まぁまぁ、いいじゃんか。サクもやろーぜ！」

「断る」

「でもでも、サッくん。明日撮影なんだよ？　やってた方がいいよ」

「…ンなもん適当でいい」

「その結果サクの写真だけ悪人顔写真に～♪」

「…そのカチューシャへし折ってやるから寄越せ」

「だから毎回毎回喧嘩するなって」

「でもサク先輩。唯先輩の言う通り、失敗しないためにも試し撮りした方がいいと思いますよ」

とある感情が徐々に身体を蝕んでいく。ズバリその正体は『怠い』『面倒』『億劫』という怠惰な三大感情。

これ以上のやり取りは怠く面倒であり、徐々に反論するのも億劫になる。

その結果、

「一番は律先輩、二番は澪先輩で、次にムギ先輩、サク先輩で、最後は唯先輩ですね」

参加されられるハメに。

田井中が用意した紙にアミダを描き、撮影の順番を決めた結果が先程の中野の声である。

順番なんぞ果てしなくどうでもよく、さっさと終わらせたいというのが本音だったりするが、それを口に出すと徒に時間が経過するだけになるだろう。

故に黙ったまま田井中の撮影を腕組みをしてぼんやりと眺める。

「じゃあいきますよ」

「おう」

椅子に座った田井中に中野が構えたデジカメがピッと電子音を鳴らす。

撮り終えた田井中は直ぐさま立ち上がり、写真の出来具合を確認する。

一応俺達もデジカメのディスプレイ画面を覗き込む。

「うぉっ！　りっちゃんバッチシ」

「ホントね～」

「あんま写真写りとか気にしないくせに、決まるんだよな律って」

「…いらん才能だな」

「素直に褒めるってこと知らないのかい！　サクは！」

わざわざ俺の耳元で叫ばれては耳キーンになるので、口を開いた瞬間に俺は一歩後退していたので難を逃れる。

「次は澪先輩ですね」

「あ、うん」

次いで秋山が椅子に座り、中野が撮る。

「何か澪ちゃんビクビクしてる」

「…つうか顔俯かしてたらダメだろ」

「この表情がな～　澪は小学校も中学校も卒アル写真、いつもド緊張で写ってんだよな～」

「明日はもっとリラックスしてくださいね」

「う、うん……」

「次はムギ先輩ですよ」

「は～い♪」

次いで琴吹が椅子に座り、中野が撮る。

「いやいやムギ。何でほっぺ膨らましてんだよ。ダメじゃんか」

「いつもね、ぽわっとした顔で写るから、キリッとした顔しようと思って～♪」

「え～　ムギちゃんはポワポワでいいんだよ～」

「そうかな？」

「ねぇ？　サッくん」

「知らねェよ……　つうか前にもこんな会話したぞ……」

「ムギちゃんはポワポワタイムだよ～」

「わぁ～♪　新曲ね～♪」

「唯先輩、思い付きで言ったでしょ」

「デヘヘヘ～」

「明日はいつものムギでいいじゃないか？　変に気取らずに」

「じゃあボワポワタイムでいくね！」

「なぁ、サク。ポワポワタイムってどんな時間なんだろうな？」

「だから知らねェっつうの……」

「次はサク先輩ですよ」

琴吹と入れ替わり、かなり渋々椅子に座り、中野がシャッターを切る。

「咲也……　何で睨んでるんだ？」

「…睨んでねェよ」

「睨んでましたよ……　私怖かったですもん」

「…眼の錯覚だろ」

「でもでも、サッくんも写真写りバッチシ！」

「そういえば前に見た、咲也君の中学校の卒業アルバムの写真もバッチリだったね～」

「いらない才能でちゅね♪　サクちゃん♪」

「…次お前だろ。早く座れ」

「ほいほ～い」

「うわ……　無視された……」

田井中の戯言を華麗にスルーし、平沢にそう促せば気の抜ける掛け声で椅子に座る。

そして中野がシャッターを切った。

「あ、いいじゃないですか」

「まとも過ぎるぐらいまともだ……！」

「そうだな。唯がすごく真面目な生徒に見えるな」

「…実はコイツ妹なんじゃねェのか」

「「あぁ～　納得」」

「え～と、そこはツッコむところなのかな？」

一人感心している中野。

三者三様にチクリとする毒を吐く俺と田井中と秋山。

そんな俺達にどうするべくか悩む琴吹。

「む～……」

そして平沢はというと、俺達の軽度の低い暴言には一切耳を傾けずにデジカメのディスプレイ画面に映る自分の顔を凝視し、唸っていた。

「…普段アホっぽい奴が優等生みてェなことするとギャップが生まれるが、正にそれだな」

「サク先輩言いたい放題ですね……」

「普段からこんな唯だったら和や憂ちゃんも楽になるんだろうな～」

「いや、それはさすがに言い過ぎだぞ、律」

「な、なんでやねん！」

「「ムギ！？」

「思い切ってツッコんでみたんだけど、どうかな？」

「…五点」

「ショボ～ン……」

「もう！　サク先輩！」

肩を落とした琴吹に見兼ねた中野が両頬を膨らせプンスカモードに移行した瞬間だった。

「ちょっと前髪長くない？」

ディスプレイ画面に視線を向けたまま平沢が唐突に口を開いたのは。

「そんなことないですよ」

それに真っ先に反応したのはプンスカモードから通常モードに移行した中野だった。
しかし平沢は納得がいかないようで首を横に振る。

「ちょ～っとだけ長いよ」

「そうか？」

と、秋山が尋ねればコクリと首を縦に動かす。

「決めた」

そして立ち上がり、何やら決意を秘めた表情で自身の鞄に向かう。

「…何を？」

と、俺が眉をしかめるつつ訊けば、返ってきた言葉は余りも衝撃的だった。

「今から前髪切るッス！」

『えぇっ！！』

「……」

衝撃発言に秋山、田井中、琴吹、中野は驚愕のハーモニーを奏で、俺はピクリと片眉を動かす。

「ふんすっ！」

鞄から取り出したハサミを目の前に翳した平沢は、さながらこれから戦場に向かう兵士のように凛々しくもあり、精悍な顔つきだ。

「……」

だが、俺だけなんだろうか。戦場に向かう兵士の末に待っているのは往々にして悲惨な結末だと感じているのは。

「ゆ、唯ちゃん！」

「ちょっと待ってくださいよ！」

「切るなら美容院行った方がいいって！」

「五百円ぐらいで前髪だけカットしてくれるだろ！　何も自分で切ることないだろう！」

早まる平沢に思い止まらさせようと琴吹、中野、田井中、秋山が必死に説得するが、平沢は『大丈夫！』の一点張りでテーブルという戦場に向かっていく。

やはり、その背中は死地に赴く兵士に見えて仕方がない。

「ていうかサク先輩は何で悠長に座ってるんですか！」

「…気概になってる今のアイツに何言っても無駄だ」

というのは建前で、本音を言うと俺には関係ないし、何やら事を荒立てている張本人様は自信に満ち溢れているので、例えどんな結果

になろうと気にするだけコッチが損だ。

それにこの本音を言えば、中野火山が噴火しそうだ。そうなったら面倒だ。

という事で、俺は長イスに腰掛け、傍観に徹することに。

「もう！　サク先輩！　って、ちょっと待ってくださいよ唯先輩！」

そんなこんなしている内に、平沢は先程使用したアミダの用紙を手前に置き、切った髪がそこに落ちるように微調整を始めている。

「美容院行った方がいいですって！」

「でもでもあずにゃん。美容院で切るといつも短すぎるんだもん。切って一週間ぐらいするとちょうど良くなるんだけど、明日までに伸びないし」

「だったらせめてムギに切ってもらえ！」

「えっ！？」

まさか自分に大役が回ってくるとは思わなかった琴吹は驚いたように発言者である田井中に顔を向ける。

「ムギはポワポワタイムだから大丈夫だ！」

「落ち着け律！　意味が分からないぞ！」

「き、君を見てるといつもハートポワポワ……　揺れる想いはシュークリームのようにポ～ワポワ～……　うん！　私がやってみる！」

「何でそういう結論に辿り着けるんですか！？」

（つうか、何の歌だ……）

各自が一様に騒ぐ中、平沢だけは至って冷静に前髪を手櫛で弄り、ハサミの刃を前髪に当てる。

「大丈夫。時々自分でやってるもん」

その言葉が騒ぐ連中に届いたのか、ピタリと静まり一斉に平沢に視線を向ける。

「サッくん」

「あン？」

「私頑張るね」

「……」

それはドラマや映画で、この後もう死んでしまいそうな奴の台詞だった。

そして遂に、

「いきます……」

前髪の切断を開始した。

ハサミの刃同士が重なる音と独特な緊張感が静まり返った部室を包む。

たまに自分でやっていると自負していた平沢だ。

その手付きは手慣れている。

しかし、それでも秋山達は気を揉んでいるかのように、そわそわとしつつも誰一人として声を発することなく固唾を呑んで見守っている。

「このくらい……かな」

一旦ハサミを置いて、前髪を整える平沢に秋山達は安堵の息を吐く。

正直俺から見れば、切る前と切った後のビフォー・アフターの区別

がつかない程、平沢の前髪に変化は見られない。

「どう？　バッチシ？」

「あ、いいんじゃないかな」

「はい。私もそう思います」

「うん、バッチリだよ」

「それでいけ、それで」

感想を求める平沢に、これ以上は危ういと判断したらしい秋山達は当たり障りのない言葉を掛ける。

「サッくんは？」

唯一何も言わなかった俺に、平沢が見えやすいように身体を傾ける。

変化が分からない俺は『普通』という無難な言葉を発しようとした。

しかし、振り返った秋山達の計八つの瞳から『納得するように褒めろ！』と訴えてくる。

間近で見ていた奴等からしたら、マジでこれ以上は危険らしい。

「…いいんじゃねェの」

それを敏感に察知した俺は、出かかっていた無難な言葉を急遽飲み込み、当たり障りのない言葉を代わりに発した。

これで平沢は死地から生還するように思われた。

「う～ん……　まだちょーっと長いかも」

しかし、俺達の水面下のやり取りを知らない平沢は手鏡で前髪を確認した後、難色を示し不平を漏らした。

「もっかい切る」

「「えっ！？　唯！？」」

「「ちょっ！？」」

どうやらまだまだ死地に居座りたいようで、再び前髪にハサミを当てる平沢。そして秋山達も再び驚愕の血相に染まる。

そして五秒後に平沢にとって運命の瞬間が訪れる。

「へ……」

五、

「へ……」

四、

「「ゆ、唯？」」

三、

「唯…ちゃん？」

二、

「唯先輩……！」

一、

（まさか……）

ゼロ。

「ヘクチュン！」

切った髪の毛が鼻を刺激したのか、不意に平沢がクシャミを盛大にかました。

ハサミを前髪に当てた状態で、だ。

そして俺の耳は確かに捉えた。ハサミが大量の何かを切断する独特

な音を。

その何かの見当は概ねついてるものの、一応確認するために長イスから立ち上がり平沢に近付く。

「「ゆ、ゆ、唯……」」

「ゆ、い……ちゃん……」

「せん……ぱい……」

秋山達は平沢の前髪を凝視して声を震わせる。

平沢は鼻を啜りながら手鏡で前髪の度合いを確認しようと手に持つ。

そして俺は見た。

アミダ用紙の上に散らばる大量の髪を。

平沢の前髪が眉の上までバッサリと失われてしまっているのを。

「ほぇ？　どうしたの？」

言葉を失い、冷や汗をダラダラと流す秋山達と、近付くにいる俺に疑問を抱いたらしい平沢は、まだ気付いていないようだ。

「…やっちまったなお前」

「え？」

「…とりあえず鏡見てみろ」

「う、うん」

さすがの平沢も秋山達の態度と部室に充満する微妙な空気を察したらしく、俺に歯切れ悪く返答し、ゆっくりと手鏡に顔を映す。

「ッ！！」

そして、真実を知った平沢が眼を見開き、身体を小刻みに震え始める。

「み、みんな……重大報告です……」

関節が錆びれたように重々しく顔を上げ、震える唇を懸命に駆使する平沢の瞳が徐々に潤んでいく。

「き、切り過ぎました……」

ある者は顔を背け、ある者は視線を泳がせ、ある者は硬直したように動かず、ある者は何とか言葉を発しようと口を動かし、ある者は腕を組んでいる。

「ど、どうかな……？」

「わ、若返りましたよ！」

「こ、子どもっぽいってことでしょうか……あずにゃん」

「うっ！」

言葉を発しようとしたある者は、それが裏目に出てしまい、床に座り込む。

「で、でも唯！　そこまで切ったなって感じじゃないぞ！」

「は、果たしてそうでしょうか……澪ちゃん」

「はぅ！」

顔を背けていたある者は、勇気を振り絞ったが呆気なく跳ね返させられてしまい、床に両手両膝をつける。

「ごまかせ！　これでごまかすんだ唯！」

「いや、おでこは勘弁していただきたい」

「くぅ！　すまんかった！」

視線を泳がせていたある者は、カチューシャを外して差し出すが、又も間髪を入れずに丁重に断られ、敢え無くテーブルに沈む。

「だ、大丈夫よ唯ちゃん！　横に流したらいい感じになると思うわ！」

「と、とてもそうには思えません……ムギちゃん」

「うぅ！」

硬直したように動かなかったある者は、呪縛が解けたように身振り手振りで説明するが、アッサリと敗北を喫し、ガックリとうなだれる。

「サ、サ、サ、サッく…ん！　どぼじよう……！　卒アルなのに……！　一生残るのに……！」

最後の一人となった腕を組むある者は、涙腺決壊寸前のパッツン平沢を一瞥し、口を開いた。

「…自業自得」

「うわぁぁぁんっ！！」

「コラッ！！　サクっ！！」

「何言ってるんだっ！！　咲也っ！！」

ボロボロと大量の涙を流し、見た目通りもガキっぽくなった平沢が大声で泣き声をあげる。

そして田井中と秋山の罪過を弾劾するべく、非難の声を俺に放つ。

兎にも角にも俺の予感は見事に的中し、平沢は華々しく戦場に前髪を散らせた。

（つうか、勉強してねェし……）

第百三十話（後書き）

冒頭で本作のラストエピソードに関わる布石を投下しました。

律の言葉の真意が明らかになるのはかなり先になります。

さて、明日になります六月一日で連載一周年を迎えることになります。

一年も連載してこれたのは偏に皆々様のおかげでございます。

そこで勝手ながら、一周年記念小説を下記に載せたいと思います。

【もう一人の主人公のプロローグ】

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

本日十月一日金曜日。

ぶっちゃけ、この季節は嫌いだと声を大にして言える。

スポーツの秋とか食欲の秋とか読書の秋とか芸術の秋とか様々な代名詞が付くが、オレは【身が引き裂かれそうな凍える冬の手前の秋】が、ふさわしいんじゃないかと常々思う。

現在オレが住むこの北海道は、冬になったら当たり前のように雪が

降り積もり、当たり前のように凍える風が毎晩毎夜毎日毎日吹く。

夏も嫌いだが、冬はもっと嫌いだ。

だってさみーもん。

朝とかマジで辛い。

布団から出たくねーと嘆きたくなるもんだ。

だが、学校には行かにゃならん。

休んで休んで休みがちになって引きこもりとか言われたくねーし。

つうか、さみーから休むなんて出来っこねーし。

だから面倒くせーとか思っても学校には毎日通ってる。

そして今日もお勤めご苦労様と自宅に帰って、自室でゴロゴロする。

漫画読んだり、ゲームしたり、たまに友人とメールしたりしていると、母から晩メシだと声が掛かった。

「転勤？　いつ？」

晩メシのカレーを口に運ぶ途中に、母から父の異動を伝えられた。

父―桐島　晃教―は所謂転勤族のため、オレは小学校の頃から何度も転校を重ねていた。だからさほど動揺はしなかった。

『あぁ、またか』みたいな感じに受け止めた。

ちなみに、ここ数日、父と共に晩メシの食卓を囲んでいない。恐らく、父が行っていた仕事の引き継ぎとか何やらで忙しいんだろ。帰宅するのは早くて十時、遅くて日付が変わる頃だったりする。

「春からみたいよ」

母―桐島　春未―も父に毎度毎度転勤に付き合わされているので既に諦めているのか、特に嫌な顔一つ見せない。

「でも来年からアンタも高校生でしょ？　さすがに受験の事考えると、この時期の転勤はマズいんじゃないかって思ってるのよ」

ご尤もだ。オレは近くの高校に受験するつもりでいたので、今から転勤先の高校に、なんて言われても困る。

「しかも今度の転勤は国外だって言うし」

「マジで？」

これまで九州、四国、沖縄、関西、北海道と、全国津津浦浦と行脚してきたが、海外は初だ。

「ヤだぜ？　外国行くの」

外国語なんて話せねーし。
異文化交流とか興味ねーし。

「そう言うと思ったわ。だから提案があるのよ」

ニッコリと笑みを見せる母に、オレはスプーンを口に咥えたまま眉をひそめた。『何だ？』という意味で。

「お義兄さんの家に下宿しちゃいなさい」

んん？　何を言ってるのかな？

「今日、お父さんがお義兄さんに連絡入れたそうよ。アンタをお願いって。そしたら二つ返事で了承してくれたって嬉しそうに言ってたわ」

母は父のことを『お父さん』と呼ぶ。
そんな父は見た目通り至って温厚な性格なのだが、たまに強引に事を進める時があったりする。

その『たまに』が正に今だった。

「おいおいおい。本人差し置いて何で勝手に話進めちゃってんの？」

「アンタに言っても転勤の事実は変わらないからよ」

「いやいやいや。オレの事なんだからフツーは言うでしょ？」

「じゃあ、今言ったってことにしときなさい」

びっくりだ。なんという横暴っぷりでしょう。

だが、まぁ、いいか。

どーせ反論したとこで結果は変わらないんだろーし。

反論を考えることが何か面倒くせーし。

「中学はコッチで卒業して、高校はアッチの学校を受験ね」

「で、合格したあかつきにゃあ、オレはアッチで下宿ってか」

ん？　待て待て。

今し方この時期の転勤は高校受験云々と苦言を呈してなかったか？

なのに、オレをアッチの高校に進学させる気か？

……まぁ、いいか。考えるの面倒くせーし。

「そうなるわ。お義兄さんのところには咲也君がいるから、アンタも楽しめるでしょ」

『アンタと咲也君って仲良かったしね』と笑う母に、ハタと考える。

オレがまだガキだった頃、従兄弟の背中にいつもついていっていた。
ガキながらに従兄弟の背中はデカく見え、頼もしく思え、惹きつける何かがあった。

オレと従兄弟は歳が三つ離れている。
今のオレが十五だから、従兄弟は十八の高三だ。

オレ達の間にある三年は、そのままの距離。
決して縮まることのない距離。

憧れていた背中が、随分と遠くに感じた。

「咲也君と会うの、何年ぶり？」

「さぁね。顔も思い出せないぐらい会ってねーからな」

なーんてな。

あの顔は忘れられんでしょ。

何に憤ってんのか知らんが、いつも不機嫌そうにしてる。
あんな不機嫌面は記憶喪失にもならん限り、忘れられないってもん

だ。

ガキであんな感じだったんだ、高校生に成長した従兄弟の不機嫌面レベルはK点越え必至だろう。

「まぁ、とにかく、転勤とか下宿とか受験とか色々考えるの面倒くせーから、今はごちそーさんってことで」

綺麗に平らげたカレーの皿をキッチンに持っていき、菓子籠にある棒つきキャンディーを一本口に咥える。

（そろそろタナカから、挑戦状が来てっかもな）

不敵な笑みを携えたオレはハタから見れば不気味なのかもしれん。

「ちょっと、気味悪いからその笑顔やめなさい」

実の息子に気味悪いとか、滅多なこと言うもんじゃないと思うぞ。

「ゼンショシマス」

全く気持ちの籠ってない返答を母にプレゼントし、自室へ足を向け

る。

「あ、ちょっと待ちなさい」

しかし、呼び止められ足が止まる。
何用だと口を開くためにキャンディーの棒を掴む。

「はい、アンタに手紙来てたんだったわ」

口を開かずとも母の方から先に用件を告げて渡してきたので、キャンディーを口に咥えたまま、棒を掴んでいた手で手紙を受け取る。

質素な茶封筒の表には宛先人であるオレの名前、

【桐島　拓也】

の文字があり、裏返して差出人を確認すると、

【鈴木　陣】

の、手書き文字があった。

（こりゃまた面倒くせー人から来たな……）

なんてことを思い、口にあるキャンディーの棒を上下にブラブラと動かしながら今度こそ自室へ足を運んでいった。

第百三十一話（前書き）

撮影編その四です。

第百三十一話

余りのショックに泣き叫ぶ平沢。
その原因の一端を担ったらしい俺に、秋山と田井中が糾弾のマシンガンをぶっ放す。
そこに援護射撃とばかりに中野も加わり、部室内は阿鼻叫喚のカオスに陥ってしまう。

そんなカオスを静めたのは琴吹だった。
伝家の宝刀であるケーキ（モンブラン）を取り出し、眼にも止まらぬ速さで七人分のティータイムの準備を迅速に済ませていく。
それはまるで、今まで緩んでいた動作スピードのゼンマイが限界まで巻かれたようだった。

『はい、唯ちゃんが楽しみにしてたモンブランよ♪』と慈愛に満ち溢れた声でパッツン平沢の前にケーキを差し出せば、瞬く間に泣きやみ、満面の笑みが咲いた。

『うまうま♪』と上機嫌にモンブランを頬張るパッツン平沢は、失った前髪と咀嚼する仕草が相乗効果と相俟って、ガキっぽさに拍車が掛かったように見える。
だからだろうか、母性本能が働いたのか（単に不憫な娘と映ったのかもしれないが）秋山達四人は自身のモンブランの栗をパッツン平沢に自ら進んで譲渡した。

ショートケーキの苺は魂云々と豪語していたパッツン平沢にとって栗もそれに準ずるらしく『いいの？』と視線で訴えてきた。対し秋山達はそれぞれの笑顔で頷き返した。

益々上機嫌になっていくパッツン平沢は次なるターゲットを手付かずの俺のモンブランに定めたらしく、物欲しそうな瞳で俺とモンブランに視線を動かす。

ため息をついて目の前のモンブランをパッツン平沢の前にスライドさせ、ついでに山中顧問の分のモンブランもスライドさせる。

まさかのダブルモンブランにパッツン平沢はキラキラと笑顔を輝かせる。

『ありがと～♪　サッくん♪』と感想を伝えたパッツン平沢は最上機嫌で計三つのモンブランを頬張る。

何とかパッツン平沢の悪夢を払拭が出来たことに秋山達は安堵に胸を撫で下ろし、俺はため息をつきパッツン平沢の横顔を何気なく眺める。

幸せそうな顔だった。

ちなみに蛇足ながら付け加えておくならば、職員会議で遅れていた山中顧問は予定より早く会議が終わったようで『レッツ♪　ティータイム♪』と部室の扉と口を開いたが、パッツン平沢が山中顧問の分のモンブランを食したと田井中が告げた途端、膝から崩れ落ちるという喜劇な一幕があったりした。

こうして昨日の部活は勉強もせずに終わり、明けて翌日六日水曜日。

「おはようございます、咲也さん」

朝。自宅を出れば吐き出す息が白かった。
どうやら日本列島に本格的な冬の季節が到来目前のようだと感じた。
あくまでも到来目前なので、日中はそこまでではないだろうと高を括り、特に防寒をせずに通学路を歩き出す。

ヘッドフォンを耳に当て時折吹く冷たい朝風に防寒をしなかったことに少しばかり後悔していると、誰かに肩を叩かれた。
ヘッドフォンを首に移動し、振り返るとそこにはマフラーのを首に巻いている平沢妹と、マフラーを頭巾のように頭からかぶり頭部を隠しているその姉がいた。

「お…ょう」

（声小ェ……）

マフラー頭巾の下から覗く顔は影が落ち、絶望に打ちひしがれている。

昨日コイツと中野と共に帰路についたが、その時はトリプルモンブランが功を奏し、上機嫌だったが、一夜明けると現実に直面したんだと容易く推測出来る。

「お姉ちゃん、髪が伸びるまで学校行かないって言ってて」

苦笑いを浮かべる平沢妹から若干の疲労の色が見える。どうやらパッツン平沢を登校させるのに手間取ったらしい。

「駄々捏ねんなよ……」

「だってだって……　こんな髪で学校行きたくないよ……」

「だから自……」

言って、続く『業自得』の言葉を飲み込む。

昨日の惨事の二の舞は御免だと。

しかも、非難の弾丸を連射する秋山と田井中と中野に、今のパッツン平沢には自業自得や因果応報等、自分が犯した行いの報いを自分の身に受ける言語は禁句だと、うんざりする程何度も言われ、耳にタコが出来たのを瞬時に思い出した。

つうか、あれだけ秋山達が声を大にして警鐘を鳴らしたのだが、受け入れなかったコイツに明らかに非があるというのに、何故正論を発した俺が弾劾されなければならないのかと、不条理極まりない事も思い出したが、最早過去の事だと無理矢理折れるしかないのだろう。

「…そんなに嫌なら、前髪の長さに合わせて美容院でカットしてもらえ」

とりあえずパッツン平沢に無難な案を提供したが、フルフルと首を左右に動かす。

「短くなっちゃうからヤ……」

まぁ、それ以前に短くなったパッツン前髪に合わせてカットしたらば間違ないベリーショートになる。童顔のコイツには似合わないだろう。

河口ＯＧはベリーショートだったが、あの人はそれが似合う顔立ちなので違和感はなかったが、コイツには違和感がまみれてしまう

「…だったら現実を受け入れろ」

これ以上の策は生憎と閃かないのでお手上げだ。
その意味で踵を返し歩き出すと平沢姉妹も後に続く。

「う～い……　今すぐ髪伸ばせない……？」

「ごめんね……　私には無理だよ……」

「サッくん……　髪くっつけること出来ない……？」

「…ンなことが出来たら、とうの昔に特許を取ってる」

有り得ない事を思い付くままに発案していくパッツン平沢を適当に

俺は受け流し、妹は親身に私案の試案に思案を張り巡らせる。
しかし万事な解決策が見出せないまま、桜高の校門に到着してしまう。

一部の登校中の生徒は、怪訝そうにパッツン平沢を一瞥し、通り過ぎていく。
それを敏感に察知したらしいパッツンは右手は俺のブレザーを、左手は妹の手をそれぞれ握る。

「うぅ……　みんなが私を見てる……」

「…お前が奇抜な格好してるからな」

パッツン平沢はその由来となった前髪の事を言っているんだろうが、恐らくこの怪訝な視線の正体はマフラーを頭巾にしている事によるものだろうと俺は吐露する。

「大丈夫だよお姉ちゃん。いつも通りにしてればいいんだよ」

諭すように言う妹だったが、姉にはその言葉は気休め程度にしか受け取らなかったように、身を屈め、俺達をブラインドにしながらジリジリと進軍していく。

それが尚更目立つ行為だと気付いてないのか、更に怪訝そうな視線が増えていく。

その渦中の人物はパッツン平沢だけならまだしも、無理矢理ブラインドになっている俺と妹にも被害が及んでいく。

「…おい、妹」

「あ、はい」

「…後は頼んだ」

故に、エスケープしようと歩く速度を上げる。

「ダメッ！　サッくん行かんといてや！」

しかし、何故か修学旅行では発揮出来なかった流暢な関西弁でアコギを持ってない左手をガッチリとホールドされ、行く手を阻まれてしまう。

「はぁ…」

ため息一つを吐き出して、チラリとパッツン平沢の表情を窺えば、

「う～っ、う～っ」

上目遣いで唸り、必死に懇願している。現在コイツはガキっぽさに拍車が掛かっているので、その姿はおやつをねだるガキのようだ。

「はぁ……」

先程よりも深いため息を漏らし、前を向く。
歩く速度はパッツン平沢に合わせて。

「あ……　エへへ～♪」

「良かったね、お姉ちゃん♪」

「うん♪」

何が嬉しいのか、弾んだ声質の姉妹の会話を受け流し、怪訝や奇異な視線に耐えて歩く続けると、漸く下駄箱に辿り着けた。

「それじゃあ、お姉ちゃん。頑張ってね」

各自、上履きに履き替え終わると、平沢妹が俺達の前に一歩踏み出しては激励をパッツン姉に送る。

その激励には様々な意味が詰まっているんだろう。

今日の卒アル撮影だとか、失った前髪に対する質問だとか。

「う～い～……　行かんといて～……」

「お、お姉ちゃん……！」

助けを求めるように弱々しく手を伸ばす姉に、妹は葛藤を振り払うように眼を瞑って頭を左右に振っては、瞼を開けられた先の瞳を俺に向けた。

「咲也さん！」

「あン？」

「お姉ちゃんのこと！　よろしくお願いします！」

深々と頭を下げた妹はそのまま踵を返し、廊下を駆けていく。

「憂……　泣いてたね……」

「泣いてねェよ」

『どこのドラマのワンシーンだ』と、ツッコミたくなるパッツン平沢に思わずため息一つ。

―――――――

「唯、どうしたの？」

「の、和ちゃん……」

部室にテレキャスとアコギとレスポールを置き、俺達は教室へ。
その途中も怪訝な視線から逃れるべく、パッツン平沢は俺の背に隠れていた。

教室では秋山と田井中と琴吹が既に登校しており、絶望感と悲愴感を漂わせるパッツン平沢に苦笑いで出迎えた。
『気にするな』と励ましの言葉を掛ける秋山達に『お気遣いなく……じきに良くなりますので……』とパッツン平沢は弱々しく返し、頭巾をかぶったまま机に突っ伏す。

俺は自身の机にて頬杖をつきながらそんな光景をぼんやりと眺める。
そこに振り掛かる『おはよう咲也』という声。視線を動かせば眼鏡生徒会長が。鞄を持っているところから今登校したようだ。

そして真鍋は俺からパッツン平沢に視線を動かし口を開いたのが、先程の出来事だ。

「頭、どうかしたの？」

「いえ……　何でもございません……」

「あー……　和、今はそっとしといてやって」

田井中が言うと首を傾げる真鍋。そして何故か俺に視線を向ける。

「唯に何かしたの？」

「…してねェよ」

覇気と生気がない事の原因が俺にあると直感したようだが、それはお門違いも甚だしいというものだ。

「いや、ちょっと昨日事件があって。唯はそれで落ち込んでるんだ」

秋山の言葉をどう解釈したのか謎だが、一応納得したように真鍋は自身の机につく。

「でも唯、いつまでもそんなことしてたらダメよ」

「まぁ、そうだよな～　授業とかあるし」

「ほら、元気出せ唯。もうすぐホームルーム始まるぞ」

「…ほっとけよ。じきに良くなるんだろ」

「冷たいなサクは！」

「…本人が言ってんだろ」

「そうだけどさ、元気付ける言葉の一つでも言ってやれよ。サクが言ったら絶対効果あるって！」

「絶対主義者かお前は……」

パッツン平沢の肩に手を置く真鍋。
教室の時計を見る秋山。
俺の机の前に来ては両手を腰に置く田井中。
頬杖をついたまま対応する俺。

「おっはよーッ！」

勢いよく扉を開け、開口一番騒音を発生させるアホ。

「唯ちゃん」

すると、琴吹の妙に気合いが含まれた声を耳が捉えた。俺と田井中は揃って顔を琴吹に向ける。
そこには人差し指と眉をキリッと上げている琴吹の横顔。

「そんなことしてたら、今日のおやつナシにしちゃいますよ！」

いじける子供に優しく叱る母親の如く、そう叱責すれば如実に効果が表れた。

「ムギ、さすがの唯でもそんなんじゃ……」

秋山の言葉が途切れる。

何故ならば、パッツン平沢が素早い動作で身を起こし、マフラー頭巾を取っ払い、至って真剣な顔を琴吹に向けたからだ。

その表情は『平沢ですが何か？』といったように平然をアピールしている。

「ガキだ……」

「子供か」

そして俺と田井中はパッツン平沢に聞こえない声量で同時に的を射たツッコミを放った。

「ムギちゃん！　私元気だよ！」

「うん♪　いつもの唯ちゃん♪」

「おやつで釣ったムギもムギだけど、釣られた唯も唯だな……」

「まぁ、いいじゃんか！　唯が元気になったんだしさ！」

「クスッ　そうだな」

何とかパッツン平沢が立ち直ったことに笑みを見せる秋山達。

しかし……それは一時の幸せだった。

「あぁ、だから落ち込んでたのね」

「なぁ、サクッチよ」

真鍋と修司。この二人が瓦解の一手を投じてしまう。

「でも何でそんな風に切ったの？」

「「の、和！」」

秋山と田井中が冷や汗を流す。

「唯ちゃんの前髪どったのさ？」

「…その疑問は胸中に永久にしまっとけ」

嫌な予感がひしひしと感じるので勧告を促す。

「まぁ、でも……」

真鍋が改めてパッツン平沢を見る。

「そんなこと言っても気になるわい。しっかし、アレだよな。唯ちゃんって……」

「しゅ、修司君！」

同じくパッツン平沢に視線を向けた修司に琴吹が狼狽する。

そして、

「子供っぽくて似合ってるわよ」

「子供みたいで似合ってんじゃん☆」

幸せを崩壊する呪文を。

「ふ、ふぇ……」

瞳を潤ませるパッツン平沢。

「な、泣くな唯！」

「唯ちゃん！　マドレーヌあるわよ！」

慌てる秋山と、何処から取り出したのかマドレーヌを差し出す琴吹。

「和ー！　直球すぎだろー！」

「え？　ちょっと律？」

吠えつつ真鍋の肩を揺らす田井中と、意味が分からないとクエスチョンマークを頭上に掲げる真鍋。

「…とりあえず蹴っていいな」

「何故ッ！？　つうか決定項ッ！？」

「…やっと落着したと思った矢先にテメェが水の泡にしたからだ」

「だから何故ッ！？　俺は唯ちゃんが子供みたいで似合ってるって言っただけじゃねェかッ！」

「うわぁぁぁん！」

「修司！」

「影宮君！」

「修司君！」

「え？え？え？　何で唯ちゃん泣いてんの！？　そして何で律ちゃんと澪ちゃんと紬ちゃんに怒られてんの俺は！？」

「……」

「そして何故に咲也は立ち上がってんのかな！？　何で右足に力込めてんのかなッ！？」

「…辞世の句はあるか？」

「そうだな……　我が生涯に一片の悔いナシッ！　ってストッピッ！　俺死ぬのか！？　ちょっ！！　サク……」

次の瞬間、アホは華麗に宙を舞った。

――――――――――

あれから、泣き叫ぶパッツン平沢を宥めるにかなりの時間を要した。秋山と田井中が必死にあやし、真鍋が頭を撫でる等思い付く限りの手法を取ったが愚図るまでに治まったにすぎず、万策尽きてしまった。

しかし、俺がアホの亡骸を無理矢理土下座体勢にさせ、琴吹が今日のティータイムのケーキをパッツン平沢のだけ倍増にするという荒技の結果、何とか平然を取り戻した。

『…つうか、過ぎた事悔やんでも仕方ねェだろ』

『ちょっ！　サク！』

『待て、律。咲也に任せてみよう』

『…ガキじゃねェって自負してんなら、こんなアホらしい弊害をさっさと乗り越えろ』

『サッくん……』

『…それでも愚図るんなら正真正銘のガキだと、自分で言ってるようなもんだ』

『私、子供じゃないもん……』

『…そう思うんなら、涙引っ込めろ』

『ふんすっ！』

『…上々だ』

気の抜ける意気込みを見せたということは、惨事を招くことはもう

無いということだ。そう判断した俺は自身の机に戻る。

『やっぱりこういう時は咲也だな。律より頼りになるよ』

『グッ……！　言い返せない……！』

『ムギちゃん！　ケーキはいつも通りでいいよ！　だって私は大人ですから！』

『クスッ　うん、分かった♪』

平沢は自分の過ちを受け入れた直後に山中担任が教室の扉を開いた。

そして迎えた六限目。

「準備が出来ましたよ」

「ありがとうございます。じゃあ藍澤さん」

「は、はいっ！」

この時間を利用して俺達は卒アルの撮影に挑もうとしている。

場所は教室で行い、撮影順は出席番号。カメラマンは以前、クラスの集合写真を撮影したおっさんだ。

「サッくんサッくん」

「サッくん言うな」

かなり緊張した面持ちで黒板の前に設置された椅子と明るく撮影するために使用する白い板ことレフ板に向かう藍澤を何となしに眺めれば、平沢がチョンチョンとブレザーを引っ張る。

「ムギちゃんが横に流してくれたんだけど、どうかな？」

見れば、パッツン前髪が多少左に流れている。しかしその差異がイマイチ分からない。

「…いいんじゃねェの」

とりあえず当たり障りない言葉を与えれば、ニッコリと笑う平沢。

「エへへ～♪　褒められた～♪」

「褒めてねェよ……」

その都合のいい頭で勝手に解釈した平沢にため息が出そうになる。

「良かったね～♪　唯ちゃん♪」

「うん！」

「もっと褒めてやればいいのに～　照れ屋さんなんだからサクは～」

「…うるせェっつうの」

「はいはい、あなた達。余り騒がないの。次は秋山さんよ」

「あ、はい！」

猫かぶりモードの山中担任が両手を叩き、俺達にそう警告すれば秋山を促す。

「緊張するなぁ……」

と、本音を零した秋山は藍澤同様に…いや、それ以上の緊張感を漂わせる。
なんせ手と足が同時に動いてしまう程だ。

「澪ちゃ～ん！　怖くないからね～！」

「頑張って～！　リラックスリラックス！」

平沢と琴吹は緊張をほぐそうとしているんだろうが、クスクスとクラスメイト達から笑い声を誘う結果になり、秋山は羞恥に頬を紅く染めるハメに。

「澪。一回深呼吸だ」

そんな秋山を見兼ねた田井中がアドバイスを送れば、肩を大きく動かし深呼吸をする。そして強張りが取れた顔でカメラのレンズを見据える。

「いきますよ」

おっさんカメラマンが片手を上げて合図を送った直後、カシャとシャッター音が響いた。

そして飯田、伊庭、青梅、太田、尾栗と続き、次なる被写体は、

「次、影宮君」

「サー！　イエッサー！」

「…うるせェ」

コイツだったりする。

ちなみにコイツは一限目は亡骸として机に突っ伏していたが、二限目からは普通に授業を受けていた。

「咲也、俺は知っている。お前が写真が苦手としている事を。だが案ずるなッ！　俺の勇姿を見ればお前は写真好きになるだろうッ！　言わば写真スキーヤーだッ！」

「…御託を並べてる暇があんならさっさと行け」

「イタイッ！　背中蹴らないでおくれッ！」

『全く！　お茶目なんだから！　プンプン！』と身の毛もよだつ戯言を発しながらアホは椅子に座る。

「サクッチ！　刮目して篤とご覧あれッ！　秘技！　修司スマーイル！」

実に気味の悪い不気味な笑みを浮かべる。どうやらアレが曰くの勇姿らしいが、ただのアホという存在を主張しているしか見えない。

「影宮君。真顔じゃないとダメよ」

「え？　マジで？　先生」

「えぇ」

「すまんサクッチ……　お前の力にはなれんかった……」

そもそも望んで無い。

「じゃあ、撮りまーす」

久し振りに見たアホの真顔でシャッターは切られ、菊地と木下と続く。

「はい、次、桐島くん」

山中担任に呼ばれ、撮影位置である黒板の前に足を動かそうとすれば、

「待って咲也」

「あン？」

何故か真鍋に呼び止められた。

「制服ちゃんと着なきゃダメよ」

「シャツもズボンに入れないと」

「ネクタイもキチンとしなきゃダメだよサッくん」

「ブレザーも前閉じなきゃね～」

真鍋、秋山、平沢、琴吹と注意を促してくる。

一応それが正しい制服の在り方なので渋々シャツを直し、弛みっぱなしのネクタイを締め、ブレザーのボタンを閉じる。

「律もちゃんと着なきゃダメだぞ」

「分かってるよ」

秋山と田井中の会話を聞きつつ椅子に腰掛け、カメラのレンズを見据える。

「あー……　君。睨まないでくれるかな？」

しかし、その瞬間ファインダーを覗き込んでいたおっさんが、何とも失礼なことを口走りやがった。

「…睨んでねェッスけど」

「そ、そうかい？」

「あぁ」

難色を示したおっさんだったが、プロ根性を発揮しファインダーを覗き込む。しかし中々シャッターを切らない。

「すみません。あの子はアレが真顔なんです」

そこに山中担任が恐縮そうに助け船を出航させるが、かなり失礼だ。

「あぁ、そうですか」

アンタも納得すんな。

「サッく～ん！」

お前は無意味にタブーを叫ぶな。

「サクッチーッ！」

黙れ。

「はぁ…」

取り巻く環境にため息を吐き出し、決して睨んではいない真顔で改めてレンズを見据える。

「いきま～す」

カシャ

その後、小磯が撮り、

「お願いしま～す♪」

普段通りのおっとり感で琴吹が撮り、佐伯、佐々木、佐藤、島、柴矢と続く。

「りっちゃん隊長！　ご武運を！」

「うむ！　行ってくるぞ！　唯隊員！」

「「早く行け」」

「二人で言わんでもいいじゃんか～！」

俺と秋山が田井中を急かせ、カシャとシャッターを切る。

そして鷹崎、瀧、立花、近田、中島、西野、野島、林原と撮り終える。

「次、平沢さん」

「ほい！」

そして迎えた平沢の撮影。田井中と琴吹が平沢の身だしなみを整えてやれば一歩踏み出しては俺達に振り返る。

「どう？　変じゃない？」

「うん！　バッチリよ！」

「完璧だ」

「…一部おかしな点がある」

「言うなってサク！」

両手を握り締める琴吹。
微笑む秋山。
腕を組む俺。
肩を叩く田井中。

「いってくるッス！」

そんな俺達の反応に気を良くした平沢は、特に緊張することなく椅子に向かう。

「前髪切り過ぎた時はどうなることかと思ったけど、何とか無事に終われそうだな」

「そうね～♪」

「なぁ～んかさ、この卒アルの写真撮ってると卒業意識しちゃうよな～」

「…その前に受験があるけどな」

「はっ！　そうだった……」

「…お前アホか。昨日部室で受験勉強するっつってたの誰だよ」

「澪」

「言い出したのはお前だろ！」

「でも私達が卒業したら、来年から梓ちゃん一人になっちゃうね…」

「そうだな。梓一人になったら部活動の規定人数不足になっちゃうしな」

「新入部員か～　私達があんだけ勧誘しても、結局、梓しか入部しなかったし。来年度は最低三人入部しなきゃ廃部になっちゃうよな……」

未来の事を語る秋山と田井中と琴吹。その内容は再び訪れるかもしれない廃部という危惧。

だが、俺は知っている。

平沢妹と鈴木が来年度になれば軽音部に入部するという未来を。

なので俺は口を開いた。

「…最低人数は三人じゃなくて、一人で充分だ」

『え?』と、秋山と田井中と琴吹が一斉に俺に顔を向けた気配がしたが、視線は撮影真っ最中の平沢に向けたままに。

「どういうこと？　咲也」

「…俺達の後釜に据える奴が二人いる」

「そうなの咲也君!?」

「…気がする」

「なんだよ……　期待したじゃんか……」

よほど期待したのかガックリ肩を落とす三人。

真実を言ってもいいんだろうが、中野が何も言ってこないということは、恐らく平沢妹も鈴木もまだ入部の件は胸に秘めたままなんだろう。

故にそれを第三者である俺が言ってはならない気がする。

「そうだ！　来年のために何かしないか？」

すると、田井中がこんな提案をしてきた。

「…部の存続のためにか？」

「もち！」

「でも何するんだ？　ビラ配っても時期が時期だから余り意味ないと思うし」

「そこまでまだ考えてない！」

「はぁ…」

無駄に胸を張り、無駄に威勢がいいノープランの田井中にため息が漏れる。

「たっだいま～　バッチシ撮れたよ～」

「おかえり～♪」

そこに平沢がトコトコと戻り、琴吹がニコニコと出迎える。

「あ！　そうだ！」

「急に叫ぶな……」

何かしらの妙案が閃いたらしく田井中がポンと手を叩く。しかし、隣にいた俺からすれば傍迷惑以外の何物でもない。

「ゴメンゴメン」

「それで律、何を思い付いたんだ？」

「あ、うん。勧誘ビデオだよ！　あれをまた作らないか？」

その言葉に俺は『なるほどな』と、一人感心していた。

去年製作したビデオは結果的に黒歴史となり封印されたが、元を辿れば新入部員勧誘の一手だ。

それを今の内にまともなものを製作しておけば、入部希望者が部室

の扉を叩く可能性が格段に上がる。

「…珍しく頭が冴えたな」

「珍しくは余計だって」

「作りましょ！　梓ちゃんと来年の軽音部のために！」

「あれより真面目なのだったら作ってもいいかな」

琴吹と秋山は賛成。

「サクは？」

「…やってもいいが、去年と同じ轍を踏むなよ」

「お、サクが珍しく素直だ」

「…珍しくは余計だ」

俺も提案者である田井中も勿論賛成。

「なになに？　何の話？」

唯一何も知らない平沢は首を傾げてはしきりに俺達を見回す。

「実はな……」

事情を説明する秋山を横目に俺は撮影していくクラスメイトをぼんやりと眺める。

平沢の次の松本委員長、真鍋、水本、宮本、春雨（村雨）、柳、矢野。そして最後の若王子が撮り終える。

総勢三十六人の個人撮影が終わった教室は雑談で溢れる。

これでまた、卒業に一歩近付いた。

こんな風に着実に卒業が迫ってくるんだろう。

俺個人は卒業なんて実感はまだまだ湧かないが、いずれは、だ。

とにかく今は、受験に集中しなければならない。……筈なのだが、勧誘ビデオ製作に賛成一票を投じた俺は…いや、俺達はやはり異常なんだろうな。

（まぁ、それも一興か……）

なんてことを思い、廊下に出していた自身の机を取りに足を動かした。

第百三十一話（後書き）

次話からもう一つの撮影へ。

第百三十二話（前書き）

撮影編その五です。

第百三十二話

「え？　勧誘ビデオを作るんですか？」

「そだよ～」

現在時刻午後三時半。
放課後、部室にて。

一人ムスタングを構え、長イスに腰掛け自主練に勤しんでいた中野に、先程ビデオ製作が確定に運ばれた事を平沢が伝えると不思議そうに首を傾げた。

「…何か不都合があんのか？」

成らばと問い尋ねると、平沢から俺に視線を移動させ、数回瞳をしばたたかせた後に秋山に視線を投げる。その表情は意外とでも言い出しそうだ。

「不都合っていうか、澪先輩はいいんですか？」

「え？」

不意打ちの如く質疑された秋山は、その意味が理解出来ないように

中野を見つめ返す。

「だって澪先輩、あのビデオ嫌がってたのに……」

あのビデオとは恐らく、パンドラの箱に封印された黒歴史のことを差すのだろう。つまり、中野の中では秋山が撮影に賛同していることが意外らしい。

「梓」

伝えたい事を理解した秋山は、鞄を長イスに置いては中野の前に立つ。

「去年のあのビデオは失敗作だったけど新入部員を募集するって意味じゃ賛成だったんだ。まぁ、出来上がったのは私が封印しちゃったけどな」

最後は苦笑いを浮かべた秋山を中野はジッと見つめ、平沢と田井中と琴吹も秋山を見つめる。俺は長イスが占拠されてしまっているので、普段は山中顧問が座る椅子で静観中。

「だから、今度は、ちゃんとした真面目なのを作りたいんだよ。ビデオを観た新入生が軽音部に入りたいって思えるような」

「澪先輩……」

「それに……」

秋山の心の内を知った中野が思わずという感じに呟いたところで、秋山が一度言葉を切り、田井中、平沢、琴吹、俺と順次に見回した後再度口を開く。

「これはみんなの総意みたいなものなんだ。梓と軽音部のためにって」

「え？」

今度は中野が理解出来ないように秋山を見つめ返した。

「私のため……ですか？」

「そうだよ～　あずにゃんのためだよ！」

「今年新入部員が入部しなかったからさ、来年になったら梓一人になるだろ？　そしたら軽音部の存続も危うい。だから新入部員獲得のために今から手を打っとこうと思ってな」

平沢と田井中が笑いながら言う。しかし対する中野は、

「で、でも！」

「梓ちゃん？」

声を張り上げた。それは琴吹が若干驚愕する程の。

「そんなことしてたら先輩達の受験勉強の邪魔しちゃってますよ！　それに今年は六人でいいって私が言っちゃったから先輩達は……！」

根が真面目な性格が災いし、中野は自責の念に駆られていく。その手に持つムスタングが僅かに震えているのを俺は見逃さなかった。

「…おい、ニャカ野」

「ニャカ野じゃないです！」

視界に入ってしまったら見過ごすわけにはいかず、とりあえず名を呼べば直ぐさま振り返る。

「…六人でいいっつったのはお前の本音だろ。それを否定してやんな」

「でも……！」

納得がいかないようで、長イスから立ち上がるが、お構いなしに俺は続ける。

「…たがだか二、三分のビデオを作るだけだ。受験勉強に支障は来す可能性はほぼ皆無。つうか『でも』とか『から』と言うな」

「サク先輩……」

「…お前が俺達に迷惑をとかそんなアホらしい早合点すんな」

俺達はただ未来を繋ぎたいだけだ。軽音部に残していきたいだけだ。功績と軌跡を。
それをたった一人の後輩であるコイツに栄光に変えてもらいたい。
引き継いでもらいたい。

それともう一つ。単純に軽音部がまた廃部になってほしくないだけだ。

と、いうのは口が裂けても言わない。とりあえずは心中に止めておく。

「…この件について、お前からの異論は受け付けん。先輩の言うことには従ってもらう」

少々言葉が過ぎるかもしれないが、中々に頑固な後輩には丁度いいだろう。

先輩には先輩の意地がある。とどのつまりそういうことだ。

「やっぱり……」

俺を見つめていた中野が背を向ける。そして口から出てきたのは反論を発する前口上。

「サク先輩は意地悪です。そんなこと言われたら……先輩の言うことには従わなきゃいけなくなっちゃったじゃないですか」

どうやら前口上は俺への微量の毒だったようだ。

しかし、どことなく口を尖らせている声質と内容を聞く限り納得したらしい。

「あ～ずにゃん。ギュッ」

すると、いつものスキンシップの要領で平沢が何の前触れもなく中野に抱き付く。

「私達、あずにゃんのためにやってあげたいんだよ。ひとりぼっちの部室は寂しいもん」

「唯先輩……」

「なぁに？」

「唯先輩もズルいです……」

「エヘヘ～♪　あずにゃんのためになら一肌も二肌も脱ぎ脱ぎだよ～♪」

俺に背を向けている状態なので中野の表情は分からない。しかし見守る秋山と田井中と琴吹は笑みを浮かべ、俺と視線が交錯した平沢は満面の笑みということから、どうやら中野の説得は上々のようだ。

「分かりました」

すると、平沢からゆっくりと中野は離れる。
平沢は何故か些か残念そうな表情をしているが、中野は気に留めず口を動かす。

「撮りましょう。勧誘ビデオ」

俺達を見回した中野は笑顔。これに感化されるように平沢達も笑顔を崩さず、部室には軽音部の特徴であるゆったりとした穏やかな空気が流れる。
そして、ふと僅かに鼻腔を擽る紅茶の香りと人の気配。時折耳が捉える何かを啜る音。

「何だか青春って感じね。私も学生に戻りたいわ～」

「…出たな、神出鬼没者」

首を動かせば、平沢の席に、鼻腔をくすぐる紅茶を優雅に傾け、瞳を閉じて何やら感傷に浸っている山中顧問がそこにはいた。
つうか、何時誰に紅茶を淹れてもらったのだろうか。

「さわちゃん!?　いつからいたんだよ!?」

最早何度目になるか分からない田井中のリアクション。そして続く平沢達のキョトンとした顔。

「いつって、さっきだけど？」

「…普通に扉から入ってきた、と？」

「当たり前じゃないの。何？　私が窓から入ってきたとでも言いたいの？」

「…アンタならやり兼ねん」

「咲也くんって私のこと何だと思ってるの？」

「…人格破綻者」

「ちょっと！　それはあんまりじゃない！」

いつの間にか居る山中顧問。いち早く気付く俺。驚愕する田井中。言葉が出ない平沢達。

この恒例の一連の流れが終わり、山中顧問が喚起したところでハッと我に返った平沢が声を掛けた。

「さわちゃん、それなぁに？」

指差す先にはテーブルの上に無造作にある物体。それをティーカップをソーサーの上に置いた山中顧問の手が掴む。

「ビデオカメラよ。貴方達今から勧誘ビデオを作るんでしょ？」

「え？　どうして知ってるんですか？」

と、琴吹が問い掛ける。

「だって貴方達が教室で話してたじゃない。それに今までその話し

てたし」

地獄耳なのか、はたまた盗聴器でも何処かに仕込んでいるのか、実に用意周到な山中顧問はビデオカメラを片手に立ち上がり、徐に平沢達に近付いていく。

「去年はりっちゃんと咲也くんがわがまま言うから幻になっちゃったけど、今回は幻にさせないわよ！」

（わがままじゃねェし……）

世間一般では、アレは正論というものだ。勝手に都合良く変換しないでほしい。

「だから、私に任せなさい！」

本人からしてみれば最上級の笑顔なんだと思うが、去年の惨事を目の当たりにしている俺からすれば、悪魔の微笑みにしか見えない。

「じゃあ早速……」

キラリと眼鏡の奥を光らせた山中顧問は、流れるような動作で掌サイズのビデオカメラを琴吹に渡し、ダンスでも舞うが如くの軽快な

ステップで中野の背後に立った。

「装備ＯＫ！」

どこからともなく取り出したネコ耳を中野の頭に装着。

「ポージングＯＫ！」

招き猫の手のように、中野の両手を緩やかな拳に作る。

「キャメラ？」

「ＯＫ！」

言われなくとも既に準備万端だった琴吹カメラのレンズがニャカ野を映す。

「はい！　どうぞ！」

撮影前の下準備が終わり、山中顧問がニャカ野に台詞を求めると、猫を表すポージングそのままに口を開いた。

「け、軽音部へようこそニャン？」

最後には首を傾げる動作まで行ったニャカ野は固まり、隣では山中顧問が正義感に満ち溢れた満足気な表情で『うっしっしっ！』と漏らす。

「あずにゃん可愛い～！」

「梓……」

「う～む……」

「梓ちゃん！　違うポーズでもう一回！」

「はぁ……」

そんな、やはり根が真面目な性格が災いし、山中顧問の意のままに掌で操られ、ノッてしまったニャカ野に平沢は眼を線にして笑い、秋山は去年体験した惨事のターゲットがニャカ野になってしまった事に同情の視線を送り、田井中は無の境地を悟ったように無心であり、琴吹はカメラを向けたま何故かワクワクとしてポージング変更を求め、俺は呆れた深いため息を吐き出した。

「って！　何やらせるんですか！」

漸く自分の失態に気が付いたニャカ野が顔を紅潮させつつ叫ぶが、全く意に介さない山中顧問は『やっぱり梓ちゃんにはネコ耳よね！』と、サムズアップをかます始末。

「…余興はここまでにして、マジな会議始めるぞ」

「そ～だな」

「余興って何よ？　私は大真面目よ？」

椅子から立ち上がりながらの俺の言葉に田井中が直ぐさま同意するが、山中顧問は難色を示す。

「…それがタチの悪さっつうんだ。去年同様の意味不明な事してんじゃねェよ」

「ど～してよ～！　私は軽音部のためを思ってるのに！」

「…だったら今すぐ退室しろ。それがアンタのやるべきことだ」

「ヒ、ヒドいわ……」

余りのショックに膝をつく山中顧問をスルーし、とりあえずニャカ野に視線を向ける。

「…お前もいつまでもそんなアホらしい格好してんな」

「あ、はい……」

ついノッてしまった自身の醜態の尊重であるネコ耳を恥ずかしそうに外す中野。

「え～！　あずにゃん取っちゃうの～！」

「当たり前です！　何で唯先輩は残念そうにしてるんですか！」

「ちょっと残念……」

「ムギ先輩まで！？」

「は～いはい！　コントはそこまでにして会議始めるぞ～」

パンパンと両手を叩いた田井中の鶴の一声で、場は何とか落ち着きを取り戻す。

「では、今から桜ヶ丘高校軽音部来年度新入生勧誘ビデオ第一回企画会議を始める」

「りっちゃん議長カッコいい～！」

「ありがとう、唯議員」

「ふぉ！　サッくん！　私、政治家になったよ！」

「…お前が政治家になったら、日本の将来は安定どころか、先が見えない長いトンネルに突入した暗黒時代になるな」

「いや～♪　デへへへ～♪」

「唯先輩、サク先輩は褒めてませんよ……」

そして約十分後。各自テーブルにつき、企画会議の幕を開けた。

中野と座る位置を交換した田井中がテーブルに肘を置き、両手を組み、その上に顎を乗せる。傍らには『議長』と手書きで書かれたネームプレートもあったりする。

そして議長を演じているらしいやけに渋い声で、そう開会宣言を行えば、俺を除く部員達と退室しなかった山中顧問からパチパチと拍手が起こる。

ちなみに俺は以前任命された書記長の仕事のため、長イスにも席にも座らず、ホワイトボードをテーブルの近付くに移動させ、会議の内容を筆記することに。

「前回と同じ失敗を繰り返さないよう、みんなでどんなビデオにすればいいか徹底的に議論したいと思う」

田井中議長が言い終わると、俺はホワイトボードに【議論意見】の四文字を書き込む。

「では、何かいいアイディアがある人は挙手を」

「はい！」

と、真っ先に手を挙げたのは山中顧問。嫌な予感しかしないが一応耳を傾けておく。

「もっと露出度の高い衣装を希望します！」

耳を傾けたことに激しく後悔した。

どんなに真剣な表情と声質で提案しようが、やはりこの人の思考はぶっ飛んでいると。

「だから！　そういうのはやりません！　変な衣装着たから去年は失敗したんじゃないですか！」

「そう言うけどね澪ちゃん。貴女が恥ずかしがったから失敗になったのよ？　もっと堂々としてなきゃ」

「出来るわけありません！」

さながら本当の国会での討論のように、徐々に白熱していく秋山議員とぶっ飛び議員。

「とりあえず、今の山中議員の意見に賛成の人」

と、田井中議長が場を静めるために相変わらずの渋い声で、軽音部党（党員七名）を見渡す。

「はい！　私は賛成です！」

「唯！？」

「さすが唯ちゃんね！」

まさかの賛成一票に驚愕する秋山議員と勝ち誇るように踏ん反り返るぶっ飛び議員。

「…何故？」

「待った、サク書記長」

「あン？」

挙手をしやがった天然議員に、一応理由を尋ねるが何故か田井中議長に遮られた。

「それは私の役目だ」

「あっそ……」

何のプライドや意地が働いたのか到底理解出来ないカチューシャ議長にため息一つ。

「では改めて。平沢議員、理由を述べよ」

「んとね、さわちゃんが作ってくれる衣装って可愛いから！」

「…随分くだらねェ理由だな」

「待て、サク書記長。それは私の役目だ」

「はぁ…」

だから何のプライドだ……

「異議あり！」

「発言を許可する、秋山議員」

「唯はあんな恥ずかしい衣装着れるのか？」

「私も澪先輩に賛成です。そもそも恥ずかしい格好をする意味が分かりません」

「異議あり！」

「発言を許可する、山中議員」

「梓ちゃんは学園祭の時、私が徹夜で作ったクラスの衣装を着てくれたのに、そんな掌を反すような発言は理不尽だと思うわ！」

「あの衣装は和風喫茶っていうコンセプトに基づいてたから何の問題もなかったですけど、今先生が言ってるのは私達に恥ずかしい衣装を着せたいだけにしか思えません！」

何とも的を射た中野議員の発言に感心しつつ、ホワイトボードに【顧問は私利私欲の塊】と書く。

「って、咲也くんは何書いてるのよ！」

「…アンタの存在の根源」

「咲也くんの言葉が一々胸に刺さるわ……」

ガックリと肩を落とし、うなだれるぶっ飛び議員。

「結局、唯ちゃんの意見はどうなったの？」

事の発端を担った平沢議員に琴吹議員が視線を田井中議長に向けた。

「え～っと……　私、何を言ったんだっけ？」

「平沢議員が忘れてしまったので、山中議員の意見は否決となりました」

「「異議ナシ」」

田井中議長の英断に声を揃えた秋山議員と中野議員。そして俺はホワイトボードに【否認案】と書き、その下に【顧問の意見】と書き記す。

「もっと何かこう、ガツンとくるようなのがいいよね。心に響くみたいな」

「うんうん！　一目見て、軽音部に入りたいって思わせるような！」

琴吹と平沢の発言の中にあった【心に響く】と【一目見て】とホワイトボードに書き、視線を党員に向ける。

「…具体的には？」

「待て、サク書記長。それは私の役目だ」

「……」

恐ろしく面倒だな、コイツのポジション。

「心に響くんだったら、歌や演奏じゃないでしょうか？　軽音部ってアピール出来ますし」

「…それは利点だが、一口に演奏っつっても博打打ちみてェなもんだ」

「え？　そうですか？」

「…考えてもみろ、勧誘ビデオだと銘打った手前、いきなり演奏が始まったんじゃ、ただのライブ映像になる。内容はあくまで勧誘だ」

トントンと平沢の発言である【一目見て】を専用ペンで軽く叩く。

確かに演奏は軽音部の主だ。しかし反面、それを観た新入生が是非にとは思えないだろう。

生で演奏するならまだしも映像媒体では、入部してほしいという想いは中々伝わらない。

故にビデオの内容は勧誘を助長するものでなければ意味がない。そ

れを観た後に新歓ライブの演奏を聴けば、効果的だと思う。
まぁ、中にはライブ映像で心動かされる連中もいるかもしれんが、ほんの一握りだろう。

「早い話がインパクトがあればいいのよね？」

すると、今の今まで落胆していたぶっ飛び議員が活力を取り戻し、俺に振り返った。

「…アンタがインパクトとか言うと去年と今年の勧誘を思い出すが、まぁ、言ってみろ」

「サク書記長、それは「律、しつこいぞ」ぶぅ～！」

いい加減嫌気がしたのか、秋山が諫めれば口を尖らせる田井中。
そんな二人をスルーした山中顧問は自信あり気な笑みを浮かべながら人差し指を立てる。

「こういうのはどう？　ハリウッドの映画予告みたいに……」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そこはアメリカ、ニューヨーク。

広大な空を狭める程建ち並ぶビルの数々。
そんなビルの間を、網の目を縫うように多くの人々が行き交う。
この街は様々な人種が住んでおり、車の渋滞が絶えなかった。

「律、今どこだよ?」

そんな街の一角で、澪ちゃんはケータイでりっちゃんと連絡を取っていた。待ち合わせの時間を過ぎても中々姿をみせないりっちゃんに、澪ちゃんは業を煮やしていた。

「え?　何?」

だけど、渋滞を起こしている無数の車のクラクションの音で、りっちゃんの声は澪ちゃんには届かなかった。

それはまるで、二人の友情を裂くように……

「だから聞こえないって。もっと大きな声で……」

その瞬間、

ドォォォッン!!

澪ちゃんの背後から耳を劈くような轟音と爆発音が。

「な、何!?」

慌てて振り返ると、モクモクと黒煙が上がり、人々は我が我がと逃げ惑う光景が見えた。

パニックに陥る人々。
勿論それは澪ちゃんも例外ではなく、恐怖で竦む足を叱咤し、何とかその場から逃げ出した。

「な、何が!?　一体何が起きたんだ!?」

早まる動悸。頭の中は混乱している。

「…知りたいか?」

そこに掛かる声。

「咲也!?」

黒いコートで身を包んだ咲也くんは、睨み付けるように黒煙を見る。

「どういう事!?　何か知ってるの!?」

「…田井中は今どうしてる?」

「あ!　律!　……切れてる」

「……」

「咲也……」

「…奴のことは忘れろ」

「え?」

身を翻し黒煙とは逆方向に歩き出す咲也くんの背中は何かを背負っているようだった。

「ま、待って咲也!　律がどうしたっていうんだ!」

「…真実を知りたければ、ついてこい」

【全米を震撼させた】

一方、ここはスラム街。

治安の悪さを表すようにガラの悪い人達がたむろしている。
そんな中、不釣り合いな一人の少女がいた。

「オマエガ、ユイ　ヒラサワカ？」

唯ちゃんの周囲を取り囲むスラム街の住人が、ニヤニヤと嫌らしく笑う。

「そうだよ！　私が平沢　唯だよ！」

対する唯ちゃんは物怖じせずに、堂々とした振る舞いで、スラム街の住人を見つめ返していた。

「オマエニハ、ナンノウラミモナイガ、ボスカラノメイレイダ。ワルイガオトナシク、ツカマッテモラウ」

「ヤダ！　私は約束したんだよ！　もう一度みんなと！　だから！」

唯ちゃんが放課後ティータイム拳の型を取る。

「邪魔しないで！　アチョー！」

「フハハハハ！　オレタチニカテルトオモッテヤガル！　トンダクレイジーナヤツダ！」

「奥義！　ギー太の構え！」

「ナメンジャネェゾ！　コムスメガァー！」

多勢に無勢。
それで唯ちゃんは怯まない。
約束があるから……

【ヤツらが帰ってくる】

富豪達が集うカジノ。
今日もまた多くの富豪達がギャンブルという泡沫の夢に溺れていく。

「お客様、イカサマは誤法度ですよ」

ここは非合法のカジノ場。私はそこでディーラーをしている。
袖の中にスペードのエースを隠しているのを見逃す私なんかじゃないわ。

「オイオイ。オレガイカサマ？　イイガカリハヨクネェナァ」

「でしたら……」

私は眼鏡を外す。

「勝負しましょう。貴方と私と、で」

私は表向きはディーラー。だけど……裏の顔は……

【この春、遂に日本上陸】

雑居ビルの地下では、地図を広げるりっちゃんの姿があった。

「イイノカ？　アンタノユウジンナンダロ？」

「ケジメだよ……　私と澪の……」

りっちゃんは持っていたケータイを後ろに投げる。
代わりにドラムのスティックを手に取る。

「私がやらなきゃならないんだ！　私は部長だから！」

「オーケー。アンタノイキゴミハジュウブンツタワッタ」

そう告げた体格のいい男は扉に向けて歩き出す。

「ツイテキナ」

「……」

りっちゃんは一度も振り返ることなく、扉の向こうに消えていく。

ブブブ……！　ブブブ……！

持ち主を失ったケータイが、静かに着信を告げているともしらずに……

【貴方は真実を受け入れられるか】

「律先輩……　出ないな……」

マンションの一室のリビング。

窓から差し込む陽光を浴びる梓ちゃんは悲しげな表情でケータイを閉じる。

「サク先輩も唯先輩も澪先輩もムギ先輩も先生も……誰も出ない……」

膝抱える梓ちゃんの傍らには、愛用のギターが。
梓ちゃんはギターを手に取り、呟く。

「また、あんな事が起るの……」

【試される七人の絆】

冬の夜明けの湖のほとり。

白い息を吐き出すムギちゃんは、朝陽を眺める。
サングラス越しの瞳には一体何を映しているのか。

「咲也君……　みんなをお願い……　私はもう……」

果たしてその言葉の真意は？

交錯する様々な理念や宗教。
すれ違う心と心。
それはやがて一つの答へと辿り着く！

【ＴＨＥ　軽音部】

☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「なんてどう？」

史上最悪にして支離滅裂なカオスＰＶを語った山中顧問に俺達は全員言葉を失っていた。

ツッコミどころが満載過ぎて何からツッコんでいいのか最早分からない。

「別に震撼させてないだろ……」

何とか言葉を絞り出した田井中だったが、気に入っていたであろう議長キャラを忘れてしまっている。よほどの衝撃を受けたらしい。

「日本上陸も何も、始めから日本です……」

呆れ顔の中野は、言った後に疲労を吐き出すように吐息を漏らす。

「つうか軽音部の関連性が全くねェし……」

爆発とか、スラム街とか、裏の顔とか、ケジメとか、あんな事とか、サングラスとか。
登場人物の立ち位置やバックボーンをぼやかし過ぎだ。
…いや、そもそもハリウッドにこだわった時点からしておかしい。

「…総括するとアンタの意見は意味が分からん」

俺の発言に同意するように、秋山と田井中と中野が頷く。
平沢と琴吹は『でもでも、ガツンときたよね？』『うん！　インパクトがすごかった～♪』と勝手に盛り上がっている。

「分かったわ……」

すると、俺達の感想を聞いていた山中顧問は顔を俯かせて、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「だったら、みんなが思わず本当に震撼しちゃうような、これまで誰も見たことのない飛び切りの衣装を作ればいいのね！？」

「…今までの議論聞いてたか？」

何を思ってそんな結論に辿り着いたのか理解し難いが、俺の言葉など聞く耳持たない山中顧問は足を踏み締める。

「今から被服室こもってくるわ！」

「さ、さわ子先生！？」

駆け出した山中顧問を引き止めようと秋山が咄嗟に左手を伸ばすが、後塵を掴むだけで既に山中顧問は扉の向こう側。
故に秋山は青褪めた表情で左手を震わせる。

「何する気だよ、さわちゃん……」

「…ほっとけ。あの人がいるとロクな会議にならねェから、いなくなって丁度いい」

「すごいこと言いますね、サク先輩……」

顧問との白熱した議論の末に、けなしていたお前には言われたくねェけどな。

「とにかく、もっとマシなアイディアを考えよう」

議長キャラを思い出した田井中が、渋い声で両手を組んで顎を乗せる。

俺はホワイトボードの【否認案】の下に【顧問の意見その2】と付

け加えておく。

「では、意見がある人」

しかし、誰一人として手を挙げない。
見れば、思案顔で各々がアイディアを捻り出そうと必死に悩んでいるようだった。

「サク書記長。何か意見はないか？」

「…単純に軽音部への勧誘を促す内容」

「だから今それを話し合ってるんだって」

「…シンプルにやりゃ釣れるもんも釣れるだろ」

「サクってそういうセンスないんだな……」

「…人間誰しも得手不得手があんだよ」

プラン構成など舞台を作り上げる能力が劣っているのは重々承知だ。
俺は凡人であり、平沢のような一種の天才ではない。

（天才か……）

脳裏に過ぎるのはライブでの平沢の姿。
普段はボーッとしているくせに、ライブになると別人のようにギターの腕が上昇。それに『U&I』のような感銘してしまう歌詞を書けるセンス。他にも絶対音感。並大抵以上の集中力。
それらは天に与えられた音楽の才能。

今はまだ氷山の一角だが、このまま音楽を続けていれば将来は必ず化けるだろう。

いずれはギターの腕も俺を追い抜いていく筈だ。
凡人が天才には敵わない程、圧倒的に。

（考えても仕方ねェか……）

今は、勧誘ビデオ製作に集中。
見えない未来を見ようとしても仕方がない。

「あ、そうだ」

人知れずため息を吐き出して気分を一新させると、秋山が閃いたように声をあげた。

「トンちゃんの語りで構成するってどうかな？」

秋山の視線の先を辿れば、亀が上下左右にユラユラと呑気に遊泳中の水槽が。そんな亀を見ながら秋山は続ける。

「『吾輩は猫である』みたいに、トンちゃんの語りで構成してみるのはどうだ？『我輩はスッポンモドキである』ってナレーションから始まってさ」

「…名前はまだ無いって続くのか？」

「いや、トンちゃん視点で軽音部の日常をアピールするんだよ」

「サッくんや、トンちゃんには『トンちゃん』っていう立派な名前があるんだよ？」

「…そういう疑問を感じたんなら、夏目漱石を勉強してろ」

「ほぇ？」

【吾輩は猫である。名前はまだ無い】と、余りにも有名な一節は平沢の脳内にはインプットされてなかったようで、キョトンと首を傾げる。

「文学的でいいかも～」

「さっすが澪。文芸部に入部しようとしただけのことはあるな～」

琴吹と田井中が口を揃えて称賛する中、平沢は傾げていた首を戻し、突然に右手を上げた。

「トンちゃんって自分のこと『吾輩』って言うかな？　どっちかっていうと『オイラ』って感じじゃない？」

だからどうした的な発言をした平沢は至って真面目な顔つきだ。
それに真っ先に反応を示したのは、部員の中で最も亀を愛玩している中野だった。

「私、トンちゃんって女の子だと思ってましたけど」

「え？　そうなのかな？　だったら『アタイ』になるのかな？」

前半は中野に告げ、後半は俺に顔を向ける。
どうやら何かしらのアクションを求めているようだ。

「…亀の雌雄とか、一人称がとか、どうでもいい」

「サク先輩、亀じゃなくてトンちゃんですよ」

「ハイハイ……」

「でもでもサッくん、トンちゃんが女の子だったら、男の子みたいに扱われたらヤじゃない？」

「だからどうでもいいっつってんだろ……」

重要なのはそこではないのだが、何故か平沢は食い下がる。
そんな最中、田井中が立ち上がり、口を開いた。

「まぁ、とりあえずトンちゃんは女の子ってことにして、いっちょやってみるか！」

ニカっと笑った田井中は水槽の前に移動し、喉の調子を確かめるように咳払いをした後、スキルを発動させた。

「ハーイ！　アタイ、スッポンモドキのトンちゃん！　チェケラッチョイ！」

田井中がナレーション口調と声色モノマネのスキルを発動させる。
言わばコラボレーションだ。
しかしながら、妙に甲高いその声は一体何処から発しているんだろうか。

「りっちゃん上手！」

「私の手に掛かればこんなもんザマスよ！」

「でも、トンちゃんってそんな声なんですか？」

「え？　ダメか？」

「ちょっとイメージと違うっていうか」

何故か亀談義を始めた平沢と田井中と中野。
俺と秋山と琴吹はそんな連中をただ傍観に徹する。

「あれ？」

「あン？」

『唯ちゃん！　いつも美味しいご飯ありがとう！　チェケラッチョイ！』と、平沢のリクエストに答えた田井中が音程を若干下げて言った直後に、琴吹が何かに気付いたように瞳を丸める。

「トンちゃん役って誰がやるの？」

「りっちゃんじゃないの？」

「あ、そっか。私がやったらビデオに出演出来ないな」

「別撮りとか出来ないんですか？」

「カメラ一個だと難かしくないか？　それに編集するのってさわちゃんだろうし。さわちゃんのことだからめんどくさがりそうだしな～」

「…ちょっと待て」

田井中の発言内に些か気になる事柄を発見したので、組んでいた腕を解き、視線と疑問を田井中に投げる。

「…出演すんのか？」

「当たり前だろ。私達全員出演するに決まってんじゃん」

何言ってんだ？　みたいな表情の田井中にローだったテンションが急速に下がり、大暴落していく。

俺がこの勧誘ビデオ製作に賛同しているのは、軽音部の存続のためだ。

しかし出演するなんて聞いてない。

今までの会議内容からして、てっきり去年の黒歴史ビデオ同様に俺は照明等の裏方に徹するものだと思っていたが、全員出演となると話が違う。

「どうしたの？　咲也君」

「多分サクのことだから、出演する気なかったんだろうな」

「初耳だっつうの……」

「軽音部の勧誘ビデオなんだからサッくんも一緒に出なきゃダメだよ」

「そうですよサク先輩」

「もちろん澪も出るんだぞ？」

「わ、分かってるよ……」

故に協定を解除し、傍観なり静観に移行しようとしたが、秋山以外の連中に退路を塞がれてしまう。四対一では劣勢だ。

「はぁ……」

結果、最近多い深いため息が自然と漏れてしまう。

「とりあえず、トンちゃんのナレーションをやってくれる人が必要だな」

俺に苦笑いを浮かべた秋山は、視線を平沢達に移す。

「軽音部以外でとなると……」

と、田井中が思案顔になり唸り始めた直後だった。

「ちょっといい？」

ノックの後に真鍋が部室の扉を開いたのは。

「和ちゃ～ん！　どうしたの？」

「みんなにちょっとね」

平沢の問い掛けに答えた真鍋は微笑みながら片手にある白い箱を両手に持つ。

「もしかしてケーキ！？」

「うん」

デザート関連には目敏い平沢が瞳を輝かせれば、真鍋は微笑みのまま首肯した。

「…何でお前が持ってくんだよ？」

「約束したじゃない。今度持ってくるって」

「…約束？」

そんな事は記憶にないので問い返せば、それに反応したのは秋山だった。

「もしかしてこの前の？」

「だからいつだよ……」

「ほら、学園祭の時みんなで部室に泊まった時、ムギのケーキを食べただろ？　あの時だよ」

秋山の言葉に記憶が蘇った。

確か真鍋が秋山のケーキの苺を奪取したことに平沢が血相を変えて糾弾したという事件があった。

喚き散らす平沢に敗北を喫した真鍋はケーキを持ってくると確かに言っていた。

「律義だな、お前……」

「まぁ、悪いのは私みたいだし、罪滅ぼしみたいなものよ」

「あっそ……」

こういう義理堅い奴だからこそ、生徒会長という人の上に立てる役職を難なくこなせるんだろう。

人の上に立つという面ならば山中顧問もそうだが、同じ眼鏡でもこうも違ってくるものだから不思議だ。

真鍋には大きな人徳があり、あの人には余り無いのかもしれない。

「悪いな和、何だか気を遣わせちゃったみたいで……」

一応事の発端の原因の一端を担っている秋山が申し訳なさそうに表情を曇らせるが、真鍋は首を横に動かした。

「いいのよ澪、さっきも言ったけど罪滅ぼしみたいなものだし。それに約束だからね」

「和……」

「それじゃあ、みんなで食べてね」

「和ちゃん帰っちゃうの？　一緒に食べようよ～」

「和ちゃんの好きな紅茶も淹れるし～♪」

「ごめん、そうしたいのは山々なんだけど、次期生徒会長の引き継ぎとか色々と立て込んでて忙しいの。だからまた今度誘って」

ケーキの箱をテーブルに置いた真鍋は平沢と琴吹の誘いをやんわり断り、最後に視線を俺に向けた。

「あ、咲也」

「あン？」

「さっき山中先生が被服室に走っていってたけど、また何かしたの？」

「…勝手に俺のせいにすんな。アレはあの人の世迷い言にも似た独断の結果だ」

会話の途中、先の一件を思い出したらしい秋山が青褪めた表情で小刻みに震え、中野が介抱している光景が視界の端に入る。

そこへ、割って入る声があった。

「和！　ちょっと協力してくれ！」

田井中だ。

水槽の前から瞬時に移動し、真鍋の両肩を掴む田井中の瞳は妙案を思い付いたといわんばかりに輝いている。

「協力？」

首を捻る真鍋に、田井中は、現在軽音部勧誘ビデオの企画会議中という事と、それに伴う亀のナレーションを頼めないかと矢継ぎ早に事情を説明していく。

始めは状況を理解出来なかった真鍋だったが、聡明さを発揮し、とりあえずという風に承諾した。

「それで、何て言えばいいの？」

「ハーイ！　アタイ、スッポンモドキのトンちゃん！　チェケラッチョイ！　で、頼む」

ハタから見れば何とも意味不明な会話だが、敢えて何も触れずに俺は腕を組む。
そして特に疑問を持たなかったのか定かではない真鍋は、田井中から水槽に身体を向けて、口を開いた。

「ハーイ、アタイ、スッポンモドキのトンちゃん。チェケラッチョイ」

『……』

全員が言葉を失なった。

田井中のように芸は身を助けるならまだしも、地声のままに真面目に言った真鍋の姿は滑稽にしか見えない。

捻りを加える等の発想もなかったんだろうから仕方ないとは思うが、一応生徒会長という立場なのだから、肩書きに傷をつけてしまったかもしれない。

「和ちゃんが……『アタイ』って言った……」

そして平沢は、やはり着眼点がズレている。俺達が固まっているのは真鍋が余りにもサラッと言ったことに対してなのだが、この天然は一人称に引っ掛かっていた。

「ごめんな和……　色んな意味で……」

「え？　え、えぇ……」

ポンと真鍋の肩に田井中が手を置き、謝罪する。真鍋は突然の謝罪に困惑しつつも何とか頷いた。

「あの……」

すると、今まで黙っていた中野がおずおずと口を動かし始めたので、俺達は一斉に視線を向けた。

「思うんですけど、これだと軽音部のビデオって分かりづらくないですかね？」

正に正論と呼ぶに相応しい指摘だ。

「た、確かに……」

「…そもそも亀のナレーションで構成するのがムズいな」

「いいアイディアだと思ったんだけどな……」

盲点を突かれた田井中はドカリと議長席に座り、秋山は気落ちしたように肩を落とす。

そして俺はホワイトボードの【否認案】の下に【秋山の意見】と書き込む。

「和ちゃんが……　『アタイ』って言った……」

「はぁ…」

専用ペンに蓋をして振り返れば、引っ掛かりが取れない平沢がまだ呟いており、思わずため息一つ。

その後、真鍋は生徒会室に戻り、俺達は会議で疲労した脳を癒すために差入れであるケーキを食すことに。

「私イチゴタルト～！」

「モンブランいただき！」

「あ！　ズルいぞ律！　モンブランは私が狙ってたんだぞ！」

「早いもの勝ちだ！　この世は弱肉強食なのさ！」

「バナナタルト貰っていいですか？」

「いいよ♪　咲也君は？」

「…俺はいらん」

「んじゃあ、サクのも～らい！」

「ダメだよりっちゃん！　サッくんのは私が貰うの！」

「わ、私も食べたい！」

「澪先輩まで！？」

「実は梓ちゃんも食べたいんじゃないかな？」

「ム、ムギ先輩！」

「んじゃあ、公平にジャンケンな！　勝ったやつがサクのケーキを食べれる！」

「絶対に負けないよ！　ふんすっ！」

「わ、私だって！」

「私ジャンケン弱いんですけど……」

「さわちゃんのギター売りにいった時、全勝したくせにつべこべ言うな！　いくぞー！　最初はグー！」

「咲也君モテモテね♪」

「…とりあえず黙ろうか」

結果、平沢の一発勝ちに。
約三十分のティータイムを満喫し、企画会議は再開へ。

しかし、提案するもの全てが到底的外れな内容に。
例を挙げるなら、一つは琴吹の意見。

「二時間サスペンスドラマ風に軽音部は犯人を追い詰めるイメージで！　あ、だけど実は犯人は……」

「言っとくけどなムギ、日本海の断崖絶壁の上とかはナシだから。これは部長命令な」

「…つうかサスペンスにする意味が分からん」

「だったら、台風の夜に深夜の学校に閉じ込められた軽音部の部員達が、一人、また一人と『ごはんはおかず』の歌詞の通りに消えていくのは？」

「…もしかするとお前アホか？」

「サクがはっきりと言っちゃったー！」

「ショボ～ン……」

「サク先輩っ！」

「でもでも、ホントにそうなったらサスペンスだよね！　ミステリーだよ！」

「唯先輩は深く考えなくていいです」

「えーっ！？　シドいよあずにゃん！」

【否認案】には【琴吹の意見】が加わる。

そしてもう一つは平沢の意見。

「それじゃあ、着ぐるみ着てみんなで踊るとか？」

「…それに有益や利益があんのか？　無益しかねェぞ。つうか安易な案出すな」

「サッくん厳しいッス……」

「それより、あの着ぐるみは怖いです……」

「じゃあ！　着ぐるみナシでミニコント！　タライとか落として～！」

「そこでコントにする必要ありますか……」

「…お前もアホだ」

「ガーンッ！」

「今日の咲也は何か痛烈だな……」

「しかも指摘が正しいから何も言えないんだよな～……」

【否認案】には【平沢の意見】が加わる。

そして現在時刻午後五時二十二分。

「ダメだ～……　なんも思い付かね～……」

「このままだと澪ちゃんが、さわ子先生に全米を震撼させるような衣装を着せられちゃうことになっちゃうね～」

「絶対着ないから！」

「サッくん、何かいいアイディアなぁい？」

「…あったらとっくに言ってる」

気が付けば夕暮れを迎えていた。

茜色に染まる部室内では、田井中がテーブルに突っ伏し、琴吹せっせと給仕をこなし、秋山はティーカップを傾け、平沢はクッキーをポリポリと咀嚼し、俺は書記長を放棄しては長イスに腰掛け、古文の勉学に精を出している。

各自、悩みに悩んだが、当初の会議の形は見る影もなくなり、果てにはこんな自由奔放不羈奔放な光景になってしまっているのが現状だったりする。

「みなさんっ！　だらけてないで考えてくださいよっ！」

唯一中野だけは現在進行形で思案を張り巡らせているが、俺達は思案に投げ首状態なので、中々に反応を示せない。

「私、感動したんですよ？　先輩達が私のためにって。だけどこん

なんじゃ感動が薄れちゃいますっ！」

部室に響き渡る声に首を動かして中野を見れば、椅子から立ち上がり、ツインテールと両手を上下にパタパタと動かし、火山を噴火させていた。

「サク先輩までだらけないでくださいっ！」

そして何故か怒りの矛先が俺に向いてしまった。

「…勉強してんだろうが」

だからといって怯む俺ではないので、そう言いつつもボリュームを下げろと音量ツマミを回すジェスチャーを送る。

「あ、すみません」

素直に従った活火山中野は休火山中野に移行し、ゆっくりと椅子に座る。

「てか、梓」

「はい？」

座った途端にテーブルに突っ伏していた田井中が、そのままの姿勢で顔を中野に向ける。

「澪も唯もムギもさわちゃんも意見出したのに、梓だけ何も出てないぞ」

「それを言うんでしたら、サク先輩と律先輩もですよ」

「私は議長だし、トンちゃんの声やったし、和に協力頼んだし。サクはセンスないから免除」

「えー……　ズルいですよ……」

田井中の発言の中に失礼な言葉があったが、とりあえずスルーしていると中野が不満そうに頬を膨らませる。

「…だったらお前が納得いくようなもんを提案しろ。その方がお前のためだろ」

なのでそう提言をすれば、中野は顎に手を置いて思案すること約十秒。

「分かりました！」

決意を秘めた表情で俺達を見回した。

「私が来週までにちゃんとしたシナリオを書いてきます！」

高らかに宣言した中野に、俺達のやり取りを見守っていた平沢達から拍手が送られる。

「頑張れ梓！」

「梓ちゃんファイト～！」

「よ！　あずにゃん部長ー！」

「コラ唯！　まだ私が部長だ！」

「よーしっ！　やってやるですっ！」

拳を握り締めて気合い充分なのは構わないが、コイツにシナリオなんぞ作れるのか些か疑問だ。

とりあえず、

「…少しボリューム下げとけ」

こんな勧告をしておこう。

「あ、すみません」

「盛り上がってるのに水を差すなよサク」

「よっ！　サッくん副部長！」

「…思ったことを口にしたまでだ。後、お前も少し静まれ」

「ガーンッ！」

「やっぱり痛烈だな、今日の咲也は……」

第百三十二話（後書き）

次話で撮影編完結します。

第百三十三話（前書き）

撮影編完結です。

第百三十三話

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

『やってやるですっ！』なんて意気込んじゃった手前、後には引けなくなっちゃった茜色に染まる部室での表明から一夜明けた、翌日七日の木曜日。

「う～ん……」

さっきから口に出るのは、勧誘ビデオの内容に頭を悩ませる小さな唸り声。

昨日、自宅に帰って勧誘ビデオの内容を固めるために早速ノートを広げたけど、アイディアが全然浮かんでこないまま、白紙のノートを部室に持ってきちゃった。

先輩達は私がもうシナリオを書いてきたと勘違いしたみたいで、ノートを広げた途端に歓声が沸いた。

そんな先輩達に『違います』って言おうとしたけど、先にサク先輩が冷静に『…まだ出来てねェんだろ』と古文の参考書片手に長イスに寝そべりながら一言。

やっぱり鋭いサク先輩に、唯先輩達はちょっと残念そうに各自参考書を開いていく。

私は受験勉強の邪魔しちゃいけないから、サク先輩と場所を交換してもらって長イスに座り、ひたすらアイディアを考える。

「澪ちゃん、ここ分かんない」

「またか？　さっき教えたばっかりだろ」

「澪～　私も分かんないでちゅ～」

「あー！　もー！　律も唯も少しは自分で考えろ！　それでも分からないところあったら教えるから！」

「りっちゃん！」

「うむ！」

「「考えても分かんない！」」

「威張るな！」

実は、さっきから唯先輩と律先輩が澪先輩に勉強を師事してもらってるんだけど、集中力がないのか分かんないけど、コントみたいになっちゃってる。

「うん、正解！　やっぱり咲也君って天才ね！」

「だからお前の中じゃ天才の定義がズレてんだよ……」

一方のサク先輩はムギ先輩に古文を教えてもらってる。順調みたいなんだけど、ムギ先輩が解答を確認して喜んでる度にサク先輩のため息の割合が増えていってる気がする。

「う～ん……」

そして私はひたすら頭を悩ませる。

今考えたら、澪先輩と唯先輩とムギ先輩が提案したのって何気に凄いんじゃないかなって思えてきた。

だって、私がこんなに悩んでもいいアイディアが浮かんでこないのに、それをやってのけたんだもん。

まぁ、唯先輩とムギ先輩の意見内容はアレだったけど……

「う～ん……」

ダメだ……

悩めば悩む程、アイディアが出る気配が遠のいていってる気がする。

そろそろ知恵熱が出そうだよ……

（息抜きに……）

むったんでも……って！　ダメダメ！　先輩達の邪魔になっちゃうよ！

（じゃあ、お茶でも……）

今日はまだティータイムしてないし……って！　ダメダメダメダメ！　私一人がお茶を楽しむなんて！　ていうかそういう問題でもないよ！

（うぅ……　すっかりティータイムが私の日常に染まってる……）

入部当初はあんなにティータイムを問題視していたのに、今じゃ私専用の猫を模したティーカップを何の疑問も持たずに自然に使っちゃってる……

私って流されやすいなぁ……

（とにかく！　今は勧誘ビデオ製作に重点を置かなきゃ！）

来年、新入生が軽音部に入部してくれるようなのを作らなきゃ！

先輩達は私のために受験勉強の時間を割いてくれたんだもん！　それに応えなきゃダメだ！

「ふんすっ！」

よーし！　頑張るぞー！

「さっきからどうしたのかなあずにゃん？　頭抱えたり横に振ったと思ったら、急にやる気になって」

「ツッコんでほしいんじゃないかな？　スパ～ンって♪」

「いや、ムギじゃないんだし。多分いいアイディアが浮かばないで悩んでるんだよ」

「ほほ～う。ならば！　この頭脳明晰にして容姿端麗！　更に才色兼備な私が知恵を貸してやるか！」

「…そういうのは自分で言うと価値が下がるって知ってるか？」

「ていうか、今は勉強中なんだから、その知恵を勉強に向けなさい」

「うわぁ～ん！　サクと澪がいじめるよ～！」

「シドいよサッくん！　澪ちゃん！　りっちゃんはあずにゃんのためを想って受験を諦めるって言ってるのに……えぇっ！？　りっちゃん受験やめちゃうの！？」

「やめるかぁー！　そんなこと一言も言ってないだろ！」

「唯ってたまに凄いよな……」

「…それを一芸入試に役立てたらいいじゃねェの」

「昨日は痛烈だったのに今日は適当だな咲也」

「はっ！　澪ちゃん！　咲也君！」

「ん？」

「あン？」

「〜っ！　〜っ！」

「な、何やってるんだムギ……」

「マンボウのモノマネ〜♪　これを一芸入試にどうかなって♪」

「…アホ」

「ショボ〜ン……」

「やっぱり今日も咲也は痛烈だ……」

サク先輩と澪先輩とムギ先輩はともかく、受験生って自覚がまるでなさそうな唯先輩と律先輩の様子に漲っていたやる気が削がれていく。

「う、う〜ん……」

結果、堂々巡りに。

あぁ……　どんどんドツボにハマっていく気がする……

――――――――――

翌日。八日金曜日。

（今日こそは！）

って、心の中で意気込んだ矢先の出来事だったんだよね。

「みんなー！　出来たわよ！　全米を震撼させる衣装が！」

徹夜したんだと一目瞭然な、クマが眼の下にある先生がそんなことを言いながら勢いよく扉を開いたのは。

「傑作よ！　これを着れば新入部員が入部すること間違いナシ！」

飛び切りの笑顔を振りまく先生は、後ろ手に隠していた衣装を見せつけるように私達の前に広げる。

『……』

それを目撃した私も先輩達も愕然として、唯一サク先輩だけは相変わらずの機嫌が悪そうな表情のまま。だけど、深いため息をついているから、かなり呆れてるんだと思う。

「…おい、人格破綻者」

「咲也くん！　目上の人に対して失礼よ！　もっと敬うように言わなきゃ社会じゃ生きていけないわよ！」

先生の言うことは確かに一理あるんだけど、サク先輩は意にも介さないで腕を組む。

「…懲戒免職になりてェのか？　そんなアホらしいもん作って」

そう言ってサク先輩は、また深いため息をついた。

でも、私もその気持ちは分かります。

だって、先生が作った全米を震撼させる衣装は、ブラジルのサンバのカーニバルを彷彿させるような……ううん、それ以上のかなり際どい衣装。

あ、あんなの着たら恥ずかしいどころの騒ぎじゃないよ！

何か全体的に生地が薄いみたいだし、その……隠せるところが……か、隠せないような……すごく……え、えっちな衣装だもん……

「さわちゃん、そりゃないって……」

律先輩はサク先輩を言葉を後押しするみたいに、ジト眼で呟く。

「あれを澪ちゃんが着るんだね」

「着ないから！」

唯先輩は特に何も感じてないみたいに澪先輩に視線を送る。対して澪先輩は身を守るように身体を抱き締めて一歩後退る。

「何よ～　文句ばっかり言って～」

そして先生は目の前で広げた衣装を腰の位置まで下げて口を尖らせる。

そして何故か私に顔を向けてきた。

「な、何ですか……」

嫌な予感が身体を駆け巡るから、私は無意識に隣にいたサク先輩の背中に移動する。それを見た唯先輩が『あずにゃんズルい！』って

言ってるけど、身に迫る危機に直面してるから気にしてる余裕はなかった。

「梓ちゃんのための勧誘ビデオなんだから、梓ちゃんが着なきゃね☆」

「着ませんっ！」

嫌な予感が的中して、私はサク先輩の背中から顔を出して思い切り叫んだ。

「そもそも昨日言いましたよね！　恥ずかしい衣装を着る意味が分からないって！」

「それはインパクトのためよ」

「……」

事もなく言い切った先生に、私はもう何も言えなくなってしまった。

「サク」

すると、律先輩がサク先輩を呼んで、アイコンタクトを送ったように二秒くらい二人は視線を交わす。

「ムギちゃん、キャメラＯＫ？」

「え、えっと……」

撮影する気満々の先生にムギ先輩が困惑していると、私の視界がいきなり開けた。
それはつまり、サク先輩が動いたってこと。

「え？　ちょっと？　りっちゃん？　咲也くん？」

律先輩が先生の両肩を掴んで扉に身体を向けさせる。いきなりの事で混乱している先生にお構いなしに律先輩が両手で、サク先輩は右手一本で背中をグイグイと力任せに押していく。

「…今回ばかりは度が過ぎたな」

「すまん、さわちゃん。全面的にサクが正しいから」

先生は自分にとって色々正論という反論を言ってるけど、抵抗虚しく最後には、

「ちょっとぉー！　追い出すことないでしょー！　ねぇってばー！」

部室から締め出されちゃった。しかも入って来れないようにサク先輩が鍵までかけて。

「ホントにあんな衣装着せるつもりだったんだな、さわちゃん……」

「教員免許剥奪した方がいいかもな……」

ドンドンっと外からと扉を叩く先生に律先輩とサク先輩は揃ってため息をついた。

「そろ～り、そろ～り」

そんなサク先輩に忍び足で近付いていく唯先輩が見えた。
何してるんだろうと声を掛けようとした瞬間、

「ぁ……」

私は思い出した。

あの時、真夏日だったあの日。

海外に卒業旅行に行くからってパスポートを取るために必死だった。

だから忘れていた。
それは……
「サッく～ん♪」
唯先輩が……
「……」
サク先輩のことを……
「あ～ん！　何で避けちゃうの～！」
「…逆に訊くが、何で避けたらワリィんだ」
「それは……エへへ～♪」
「情緒不安定かお前……」
『好き』なんじゃないかって。
友達とかの『好き』じゃなくて、異性として『好き』なんじゃないかって。

だから、

「クスッ」

その事に触れるのは無粋かなって思って、私は小さく笑った。

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません」

ムギ先輩が不思議そうに首を傾げるけど、私の視線の先の律先輩の協力を得た唯先輩がサク先輩の背中に張り付いている光景を見て、ムギ先輩も笑った。

（もしかしたら、ムギ先輩も気付いてるのかな？）

なんて思ったけど、口には出さずに長イスに座って白紙のノートを開いた。

（今はコッチに集中！）

ふんすっ！

―――――――

って、昨日、唯先輩みたいな気合いを入れたんだけど、アイディアは閃かないしペンは走らず代わりに消しゴムが何往復も白紙の上を走った。

流石に危機感を感じた私は助っ人に相談することに。

「今、来年の軽音部に新入部員が入部してくれるような勧誘ビデオ作ってるの」

「へぇ～　熱心だね、梓」

「そりゃそうだよ。先輩達が卒業したら来年、私一人でしょ？　そしたら軽音部の存続が危ないんだもん」

「確か、部活として活動出来るのって部員数が四人いないとダメなんだよね？」

「うん。だからこそ絶対に新入部員が入部してもらわなきゃならないんだよね」

「ていうか憂、何でそんなこと知ってるの？」

「お姉ちゃんが軽音部に入部した時に言ってたの。最初は律さんと澪さんと紬さんしかいなかったけど、お姉ちゃんと咲也さんが入部

したから廃部にならなくて済んだって」

「え？　軽音部って廃部寸前だったの！？」

「みたいだよ。先輩達の上に軽音部に在籍してた上級生がいなかったから、唯先輩達が再建したんだって」

「あ！　だから私と憂が軽音部に見学しに行った時、三年生がいなかったんだ……」

一ヶ月程前に知った私の知らない軽音部の一年間の歴史を記憶を頼りに言えば、純はバニラシェイクを飲んでいたストローから口を離して眼を見開いて、憂は微笑みを浮かべる。

そう、私の助っ人とは憂と純。

昨日の夜に電話して、私達が今いる軽音部御用達のハンバーガーのファーストフード店に来てもらった。

事情を説明すれば二人は二つ返事で快く承諾してくれた。

三人寄れば文殊の知恵という言葉にあやかって、早速私達は企画会議を進めていく。

「それでさ、何かいいアイディアないかな？」

鞄からノートと筆記用具を取り出して、白紙しかないページを開く。

「う～ん……　あんまり難しく考えない方がいいんじゃない？」

「そうそう、とりあえず思い付いたことを適当に書いて並べるとか」

純が一口バニラシェイクを口に含んでの言葉に、憂が同意するようにそう言う。

「適当にって言われてもなぁ……」

思い付くまま書いてみるって憂は言ったけど、私はその思い付く事が出来なくって困ってるんだよ。

「あ、じゃあさ、カッコいいキャッチコピーとか付けてみるのは？」

その発案者である純が、徐にポテトを一本掴んで、指揮棒のようにユラユラと揺らしながら瞑想するように眼を閉じてキャッチコピーを語り始める。

「『桜高を震撼させた学園祭ライブ、観客動員数千人、君達も俺達と新しい伝説を創ってみないか？』とか」

私は苦笑いで、最後にはビシッとポテトを私に突き出した純を見る。
何か思考パターンが先生と似てるなぁって意味で。特に『震撼』の部分が。

「ちなみに今のは、咲也先輩に言ってもらう予定で」

こういうところも似てる。何かとつけてサク先輩に色々演じてもらおうとしてる部分が。

「サク先輩はそんなこと言わないと思うけど」

「じゃあキャッチコピーは却下ね」

引き下がるの早いな……

「だったら、インパクトだよインパクト！　とにかく派手な内容にすれば万事ＯＫ！」

「例えば？」

この発想も先生みたいだけど、とりあえず私じゃ思い付かない貴重な意見を参考にしようと、持っていたハンバーガーをトレイに置いて、書き記すためにペンを取り、ペン先をノートに置く。

「海辺の倉庫で演奏して、上からカメラでバババーンッてカッコよく撮るんだよ！　ミュージックビデオ風にさ！」

「う～ん……」

言ってる途中でテンションが上がった純は身体全体を駆使して身振り手振りで、頭の中にある想像図の派手さをアピールしてるけど、私は唸るばかりだった。

だって、第一にそんな大掛りなものを撮影出来っこないし。
それにサク先輩が『歌や演奏だけじゃダメ』的なこと言ってたもん。
人を魅きつけられるかもしれないけど、そこまでだって。
それってつまり、軽音部の演奏以外をアピールしろってことなのかもしれない。

「私としては、もっと手作り風で、普通に軽音部のいいところをアピール出来たらなぁって思ってるんだよね」

だから遠回しに純の意見を却下して、これまた遠回しに自分の要望を言ってみた。

「そうだね、その方が軽音部らしいかもしれないよね」

と、憂が賛成してくれた。

「軽音部のいいところ……」

そして、憂の隣に座っている純は思案顔で顎に手を当てる。また瞑想に耽ってるみたい。

「軽音部のいいところって、みんな仲がいいよね。チームワーク抜群っていうか」

憂の言葉につい頬が緩んだ。
そんな風に見られてるのが嬉しくって。

あ、でも、音楽やバンド以外は協調性がない先輩が一人いるけど……

「そうだ！」

すると、瞑想に耽っていた純が閉じていた瞳を爛々と輝かせて身を乗り出した。

「学園祭で徹夜出来るところ！」

それは声を大にしてわざわざ言うことなのかな？

「純ちゃん、それっていいところ？」

憂もそう感じたみたいで苦笑いを純に向ける。

「いいところだよ～　だって学校で徹夜って楽しいじゃん」

「そういえば純って、この前もそんなこと言ってたよね」

その感覚がイマイチ分からないけど、純にとっては結構重要だったみたい。

軽音部が泊まり込んで練習するって知った途端に『ズルいですー！』って羨望の意を叫んでたもんね。

結局、サク先輩に『うるさい』って一蹴されてたけど。

「ジャズ研なんて本番前日も軽く音合わせしただけで終わっちゃったんだもん」

よほど徹夜しなかったジャズ研に不満なのか、純はふてくされたように頬を膨らませてバニラシェイクを飲んでいく。

「それは軽音部と違って普段からちゃんと練習してるから、土壇場で慌てなくて済むってことだよ」

フォローっていうか、それが部としての正しい姿だと説いても、純は納得いかないように、軽音部は毎日お茶とお菓子食べ放題とか、夏になったら海辺にあるスタジオ付きの豪華な別荘で合宿とか、夏フェスに行けるとか、軽音部の内部事情を指折り数えていく。

（でも……）

ふと、私は思った。

放課後になったら部室に集まったと思ったら、あんまり練習しないでだらけてばっかりで、合宿をしても練習より遊ぶ割合が大半を占めるのに、いざ本番になったら鳥肌が立つような凄い演奏をする。

私が始めて新歓で先輩達のライブを観た時、歓声が湧き揚り誰もが熱中していた。
それは私が軽音部に入部して、参加した過去四回のライブ全てに当て嵌まる。

誰もが手を叩き、歓声を揚げ、熱を帯び、会場は一体感と高揚感に包まれる。

それを作り出しているのは演奏している私達であって、演奏を聴いてくれている観客の人達でもあるんだ。

「改めて考えると、やっぱり軽音部って凄いのかも」

思想の結果が自然と口に出た時、指折り数えていた純の手が止まる。
そして笑みを携えてこう言ってきた。

「ジャズ研の子達も言ってたよ。いつもあんまり練習してるように見えないのに演奏凄かったって」

軽音部の評判は聞いたことがなかったけど、やっぱり周囲からはそんな風に見えてるんだ……って……

（周りの人……）

そうだ！

勧誘ビデオの内容が閃いた私は、ペンを握り締めてノートにアイディアを走らせる。

「あ、隣のおばあちゃんも言ってたよ！　お姉ちゃんはやれば出来る子だって！」

「え～　それはちょっと意味違わない？」

「そんなことないよ～」

唯先輩について嬉々として語る憂に、意味合いが違うと純が首を左右に振っている。
唯先輩が誉められることに関しては我が事のように喜ぶ憂は、いくら純に否定されてもめげずに唯先輩のいいところを語っていく。
私はそんなＢＧＭを聴きながら湧き出るアイディアを一心不乱にペンを走らせていく。
そして遂に、
「出来たー！」
足掛け三日間、漸く勧誘ビデオの内容が完成した事が嬉しくって、私はついつい両手を上げて喜びを身体一杯に表した。
「あ、梓ちゃん、ちょっと落ち着いて」
「周りの人からの視線が痛いから……」
「はっ！」
グルッと周囲を見回すと、店内にいる他のお客さんが訝しそうに私を見ていた。

「〜っ！」

恥ずかしさのあまり一瞬にして顔を真っ赤に染め上げた私は、身を縮こませる。

「それで？　どんなのが出来たの？」

「あ、うん」

身体の火照りが治まらないまま、純にノートを渡せば、苦笑いを浮かべていた憂も覗き込む。

「へぇ〜　いいんじゃない」

「うんうん！　これなら軽音部のいいところがアピール出来るよ！」

ノートから顔を上げた純と憂の称賛にも似た言葉に、私は真っ赤な顔のまま頷いた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

九日土曜日。十日日曜日。
この週末の二日間は邪念を振り払い、勉学に没頭していた。
たまに平沢から『髪が早く伸びるおまじないを隣のおばあちゃんに教わった！』という本文と共に写メが届き、添付してある画像を見れば【髪頼み】と書かれてあるハチマチを頭に巻いて満面の笑顔でVサインをしている平沢本人が写っているという何とも眉唾物な内容だったり、修司から画像が無い『新作のケーキ！』という本文だけが送られてきたりしたが、適当に受け流していった。

そして週の始まりの十一日月曜日。

睡魔と格闘しつつ何とか授業を乗り越えた放課後。
髪頼みという神頼みの結果が全く見られない平沢と、何故かケータイに夢中になっている田井中と、赤本片手に受験勉強に余念がない秋山と、特に何の変化もない琴吹という何ともユニークな四人を引き連れて部室である音楽準備室に行けば、待ってましたと言わんばかりの中野と平沢妹と鈴木の姿があった。

訊けば、中野に一任していた勧誘ビデオの企画が纏まり完成に至ったとのこと。

「こういう感じなんですけど」

中野が差し出すノートを受け取って一枚めくれば、平沢達も俺の背後から覗き込むように身体を寄せる。身体に掛かる四人分の体重に若干疲弊しつつも確認すれば、【インタビュー】と眼を引く文字が

飛び込んだ。

その概要を読んでいけば、軽音部関係者やライブを観た人物達にインタビューをして、それを中心に構成していくというものだった。

それを理解した平沢達から感嘆の声があがり、結果、中野の案を採用する運びに。

「…お前らは何すんだ？」

特に中野の発案には異論はないが、何故かこの場にいる平沢妹と鈴木に尋ねれば、撮影の手伝いをすると言う。

「これ、映画研究会の友達から借りてきました」

そう言って鈴木が指差す先には、本格的な照明ライトが二脚。

映画研究会の存在など初耳だったが、敢えてその疑問には触れずに、撮影を開始することに。

しかし、中野が、

「横断幕も作らなきゃならないんですけど……」

こんなことを言ってきた。

何でも、ラストシーンで修学旅行で購入したキーホルダーをイメージした【けいおんぶ！】の文字を描いた横断幕を現軽音部員である俺達が持って新入生に向けて一言メッセージを送りたいと説明する。

その材料は鈴木と平沢妹が演劇部に懇願して貰ったようで準備万端。つまり後は描いていくのみ。

そこで俺達八人は撮影組四人と、横断幕作製組四人に別れることになり、田井中の指示の元、撮影組は中野と平沢妹と鈴木と俺。横断幕作製組は平沢と秋山と田井中と琴吹となった。

その際に平沢が俺と一緒がいいと不満を漏らしたが華麗にスルーし、撮影組の俺達は部室から退散した。

――――――――

「咲也せんぱ～い……　照明持ってくださいよ～……　重いです～……」

「…ンな本格的なもんをこしらえたお前が悪い」

「だって撮るんなら必要かなって思ったんですよ～……」

中野の提案で先ずは山中顧問へインタビューする運びになった。

俺としてはここ最近の暴走っぷりから必要性が全くなかったが、軽音部の顧問なのだから外せないと中野の理にかなった一言に仕方なく職員室へ向かうハメに。

その途中に鈴木が文句を口走りやがった。
結果的に自業自得なのだが、見る見る一脚の照明ライト（二脚の内、一脚は中野と平沢妹が協力して運搬している）の重量に負け、疲労困憊に陥る鈴木から渋々ライトを持ってやる。

「いや～　助かりました！　さすが咲也先輩！」

「凄いですね咲也さん。重たくないですか？」

「…別に」

「じゃあ純。先に職員室行って、さわ子先生に事情説明してきて」

「ＯＫ～」

と、中野の命令に鈴木が従い駆け出そうとした瞬間だった。

「それには及ばないわ」

「「わっ！？」」

「さわ子先生！？」

「……」

突然背後から山中顧問の声が掛かったのは。
相変わらずの神出鬼没スキルに、まだ耐性がない平沢妹（コイツは俺が知る限り何度か経験があるが、それでもまだまだ慣れてない）

と鈴木はかなり驚愕して身体を硬直させ、中野は瞬時は顔を後ろに向け、もう慣れてしまった俺はゆっくりと振り返る。

「私に軽音部についてのインタビューするんでしょ？　任せなさい！　感銘するようなこと言ってあげる！」

「つうか何でそのこと知ってんだ……」

ドンッと自信満々に胸を叩いた山中顧問に照明ライトを床に置きながら疑問をぶつける。
やはり、盗聴器でも何処かに仕込んでいるのだろうか。

「さっき部室に行って唯ちゃん達から訊いたからよ。それで咲也くん達を捜してたの」

「ふーん……」

アッチから来てくれたのならば職員室まで足を運んで事情を説明する手間が省けたからもうけもんだ、と納得していると、中野がジト眼を山中顧問に向けた。

「インタビューでだけでいいんですからね？　変な衣装は必要ありませんから」

よほど、先週の全米を震撼させる衣装がトラウマになっているらしい。
その瞳は疑心をふんだんに含んでいる。

「分かってるわよ。ていうか、あの衣装、堀込先生に見つかって怒られちゃったのよね……」

そりゃそうだろう。

大学を卒業して教師となった大人が手掛けるとは思えない、あんなアホらしい衣装を作れば、誰だって怒号を浴びせたくなるものだ。
その役を担ってくれた堀込に感謝。

「…じゃあさっさと撮影すんぞ。後が詰まってんだ」

中野の構成プランの中には十人以上のインタビューとあった。
故に一人に使える時間は限られている。

なので、迅速に行うために俺が促せば、中野は硬直していた平沢妹と鈴木を正気に戻すべく二人の肩を揺らす。

そして、撮影場所は山中顧問たっての希望で、何故か陽当たりがいい中庭で行うことに。

「憂ちゃん、どう？　私、輝いてる？」

「はい、バッチリです」

「咲也くん、鈴木さん。もっとライトをたいてね」

「あ、はい！」

「…アンタが火傷するまで出力上げてやろうか？」

「そこまでしなくていいの。じゃあ梓ちゃん合図お願い」

「はぁ……　分かりました」

中庭に移動し、山中顧問の注文に渋々応えていく内に、この人の意図を読み取った。

早い話が自身を美しく撮りたいんだろう。

やけに陽光と自身の立ち位置を念入りに計算してたり、そこに加わるライトの光芒を絶妙に指示したり等々、かなり必死だ。

そこまでする必要は、まるで無いのだが、それを口にすれば後々が面倒だと判断し、早々に終わらせたい俺は指示に従っておく。

「本番いきまーす」

俺と同様に山中顧問の意図に気付いている中野は一度ため息をつい

て、右手を小さく上げて撮影の合図をカメラマンである平沢妹に送る。

「スタート」

右手を下げた瞬間、平沢妹がピッとカメラの録画ボタンを押し、山中顧問が猫かぶりモードの実にきな臭い笑顔で自称感銘する言葉を語り始めた。

「えぇ、実は私も軽音部のＯＧだったの……」

――――――――

山中顧問のインタビューを撮影し終え、次に俺達の前に姿を見せたのは、必要な時には現われず、不必要な時に現われる生物だった。

『噂は小耳に挟んだぜッ！　是非俺にも協力させてくれッ！』
『断る』
『即答は受け付けんッ！』

『ウゼェ……』

『暴言も受け付けんッ！』

何処から噂が漏れているのか、そしてその噂を何故聞き付けてしまったのか、修司は表情はやる気に満ちている。

『あの～　先輩、その位置だと逆光じゃないんですか？　ねぇ憂』

『うん。修司さん、もうちょっと右にずれてくれませんか？』

『あいよ～』

『…そっちは左だアホ。妹からしたら左右逆になんだよアホ。そんぐらい咄嗟に理解しろアホ』

『一々語尾にアホつけんなやバカッ！』

『あぁ？』

『おぉ……　ソーリー……　マジで恐怖だから睨まんでくれ……』

『ほら、サク先輩も影宮先輩も喧嘩しないでください。早く撮影して次にいきたいんですから』

『あれ？　気のせいかな？　梓ちゃんにヒドいこと言われた気が……　おやおや？　ガシラが熱を帯びてきたよ？』

『…さっさとしろっつってんだろアホ』

『だぁーかぁーらぁーッ！　アホ言うなーッ！』

『…おい妹。もうカメラ回せ』

『え？　でも、まだ逆光が……』

『…アイツならそれが逆にプラスになる』

『凄いこと言い切ったね、咲也先輩』

『たまにこういうこと言うんだよね、サク先輩って』

余りにもアホがしつこく懇願してくるので、見兼ねた平沢妹が救いの手を差し延べてしまい、結局コイツも撮影するハメに。

紆余曲折を経て、何とか適当にアホの撮影を終わらせ、次は俺のクラスメイトの連中に白羽の矢が立った。

中野曰く、同じクラスなら軽音部の好印象なところを言ってくれそうだから、とのこと。

『生憎、受験勉学で忙しいのだが、学園祭を盛り上げてくれた桐島君の頼みは断れないな』

『別に断っても構わねェが……』

『そう謙遜する必要はないさ』

（…してねェけどな）

『わたしとしても尽力することに有意義があると感じているから、是非協力させてくれ』

『あっそ……』

『うむ、では尾栗君も共に桐島君に協力しよう』

『え!?　オレもッスか!?』

『当然だろう。クラスメイトの頼みを頭ごなしに断るつもりかね?』

『や、そんなつもりは毛頭ないッスけど……』

『では、決まりだな』

（コイツ何か面倒な奴だな……）

放課後の教室に残っていた伊庭と尾栗を撮影し、廊下を出れば太田と中島に遭遇した。

『あ、もしかして撮影?』

『あン?』

『さっき影宮がさ、桐島が後輩の娘達と軽音部のビデオ撮影してるって言い回ってたし』

『噂の発生源アイツかよ……』

『じゃあ撮ってよ。私達も協力するし。ね、信代』

『もち！』

有り難そうに頭を下げる後輩トリオは撮影準備に取り掛かる。

『あ、いちご』

そんな時、若王子が俺達の背後から歩いてきた。
足を止めた若王子は中島から現在進行形で行っている撮影の事情を説明し、若王子も出演すればと勝手な協力要請を打診する。

『…私には関係ない』

（…だろうな）

『…でも、いいよ』

（どっちだ……）

中島、太田、若王子と撮影し終えた俺達は、今度は中野達二年の教室へ。
何でも俺達のクラスの出し物であった【ロミオとジュリエット】を

中野達を繁盛していた和風喫茶から、演劇を観せる手引をした奴に是非出演してもらいたいらしい。

『二岡さん』

『あれ？　中野さん？　それに平沢さんと鈴木さんも、どうしたの？』

『実はね……』

後輩トリオが二岡と呼ばれた女子にかくかくしかじかと説明しているのを静観していると、背後から『あ！』と声が聞こえた。

『き、桐島先輩！　ちわぁーすッ！』

『…誰だお前』

『あ、野久保じゃん。何してんの？　部活は？　退部したの？』

『バッカ！　するわけねぇだろ！　つうか、そういうお前こそ何やってんだよ二岡。バレー部は？』

『今から行こうとしてたの。でもその前に中野さん達に協力しようかなって』

『協力？』

俺に畏まった態度を取った野久保と呼ばれた男子は二岡と呼ばれた女子の口車に上手く乗せられ、結果、この二人を撮影することに。

『桐島先輩！　この前のライブ、めちゃめちゃカッケかったッス！』

『あ、それ私も思いましたよ。後、おこがましいんですけど、澪先輩もカッコよかったって伝えてくれませんか？』

『うん！　任せといて！』

『何で純が胸張るの？』

『咲也さん、人気者ですね』

『はぁ…』

その後、場所を移動し、

『えぇ、いいわよ』

『ありがとうございます、和さん』

『ありがとうございます、和先輩』

『それで、何を言えばいいの？』

『えっと、和先輩が感じる軽音部の印象とか、思ったことを言ってくれればそれで』

『そうね……』

『…間違っても先週の亀の一件みてェなこと言うなよ』

『言わないわよ……』

『ねぇ梓、咲也先輩が言ってる亀みたいなことって？』

『え、えーっと……』

生徒会室で真鍋にも中野と平沢妹が協力を仰いだり、オカルト研の例の二人だったり、図書室にいた宮本だったり、購買にある食堂のパートの人々だったり、階段で談笑していた佐伯と佐藤と瀧だったり、帰ろうと昇降口で上履きから靴を履き替る最中だった西野と水本だったり、ジャズ研の連中だったり、見知らぬ二年や一年や同学の連中だったり、とにかく後半は手当たり次第に中野が積極的に声を掛けていった。

これで素材はあらかた撮り終えた。かに見えたが、そうは問屋が卸さなかった。

『おばあちゃん』

『あらぁ、ういちゃん』

平沢妹がどうしてもと珍しく懇願するので何事かと思えば、平沢と中野が演芸大会に出場する切っ掛けとなった、あのばあさんを撮影したいらしい。

それはつまり、平沢家の隣に門を構える、平沢行方不明事件の時に足を運んだあの家まで向かわなければならないということだ。しかも照明ライトを持って、更に言えば撮影が終わったらまた桜高に戻らなければならない。そんな二度手間は、はっきり言ってやりたくはない。

『あらあら、サッくんさんも、あずにゃんさんも久し振りねぇ～』

『ご無沙汰してます』

『…ども』

『あらぁ？　そちらの方は？』

『あ、初めまして。憂と梓の友達の鈴木　純って言います』

『これはこれはどうも御丁寧に。一文字　とみでございます』

しかし、言うまでもなく中野と鈴木は平沢妹の味方なので、三対一で俺の負け。結局、ばあさんの家に足を運んだ。

『それじゃあ、おばあちゃん。撮るよ』

『はいはい』

趣旨を明らかにした平沢妹がカメラのレンズをばあさんに向けて録画ボタンを押す。

『ゆいちゃんはギターのギー太を始めてから、毎日楽しそうにしてるのよ……』

余り軽音部と関係ない内容だったが、そこは年の功ということで無理矢理納得し、俺達は再び桜高へ。

今度こそ終わったと思いきや、中野が平沢妹と鈴木も撮ると言い始めた。

『サク先輩、ダメですか？』

『…ここまできたら一人や二人増えても同じだ。さっさと撮っちまえ』

『はい！』

そして、漸く全ての撮影を終えた午後五時二十四分。

「ギー子はギー太の隣だよ～」

「…だからその呼び方やめろっつってんだろ」

「んも～　ヤダよサッくん♪　実はサッくんも気に入ってるくせに～♪」

「…その都合良く転換させる頭はどうにかならんのか？　つうかサッくん言うな」

「ヤダ～♪」

「はぁ…」

「観念しろサク。運命なんだよ」

「随分と理不尽且つ不条理な運命だな……」

俺達が部室に戻れば、丁度平沢達の方も作業が終了していた。

田井中曰く『私と唯が頑張ったおかげでスムーズだった！』と、御茶の子さいさい発言を無駄に胸を張っていたが、秋山曰く『頑張ったのは私とムギだ！　律と唯は殆ど遊んでただろ！』と、アッサリ田井中の嘘を暴露した。

何はともあれ横断幕が完成したので、ラストシーンの撮影を行うことに。

ラストシーンはロケーションが抜群な屋上で執り行われ、中野が背景の一部に楽器を配置したいからと、俺達は各自の楽器を持って（ドラムは田井中と平沢妹と鈴木が分担して運搬）屋上へ。

屋上の扉を開ければ、以前占拠していた詩吟部の姿はなく、燃えるような夕陽が俺達を出迎えてきた。

「それにしても綺麗な夕陽だな」

「うん。いつまでも見てたいね」

ベースを設置した秋山が夕陽に視線を向ければ、軽々とキーボードを運び終えた琴吹もまた夕陽を見る。

「なんかさ、秋の夕暮れって物悲しいよな。見てるだけでポッカリと胸に穴が空いちゃうっていうかさ」

「何だかりっちゃん詩人ですな～」

「でも、確かに何か悲しい雰囲気ではありますよね」

「…感傷に浸るのはそれぐらいにしとけ」

アコギとテレキャスをそれぞれのギタースタンドに設置し終えた俺は、夕陽を見つめる五つの背中にそう告げて、横断幕へ足を向ける。

「風情がないよな～　サクって」

「そういえば、修学旅行で金閣寺や清水寺を観光しても、咲也って

あんな感じだったな」

「そうだったんですか？」

「うん。私が説明しても無関心っていうか興味がないっていうか。まぁ、咲也だから仕方ないんだろうけどな」

背後から失礼な物言いが聞こえるが、気にしたら負け精神で全力でスルー。

「みなさ～ん、準備出来ましたよ～」

「いつでも撮影出来ま～す」

すると、照明ライトの光加減を弄っていた平沢妹と鈴木が俺達に大きく手を振る。

「ほいほ～い」

それに真っ先に反応した平沢が横断幕に駆け寄ると、秋山達もそれに続く。

黄色の【け】の文字の前には琴吹が、青色の【い】の文字の前には平沢が、センターである紫色の【お】の前には主役の中野が、赤色の【ん】の文字の前には田井中が、緑色の【ぶ】の文字の前には秋

山が、黒色の【！】のマークの前には俺が、それぞれ六人が並ぶ。

「今更だけど、咲也が素直にビデオ撮影に参加したのって珍しいな？」

「…ワリィかよ」

「ううん、ありがとう」

隣の秋山が、そう微笑んだ直後に、田井中が『いくぞー！』と俺達に合図を送る。横断幕を平沢達は両手で掴み、俺は左手はズボンのポッケに突っ込み右手一本で掴み、横断幕を腰の位置まで一斉に上げる。

「それじゃいきま～す」

照明の鈴木と、カメラを構える平沢妹から見れば、【けいおんぶ！】と文字が並んだ横断幕と軽音部である俺達が見えているんだろう。

それはまるで、引退した俺達から、継承する中野へのバトンのように。

「「よ～い、スタート！」」

そのバトンを中野と共に引き継ぐ平沢妹と鈴木が声を重ね、平沢達は事前に打ち合わせした未来への希望を声に乗せる。

『軽音部でお待ちしてます！』

「……」

俺は何も言わずに、視線もカメラには向けずに校舎を見ていた。

「是非来てください！　きっと毎日が楽しい高校生活が送れて、一生忘れられない思い出が作れます！」

最後に、中野一人が自分自身が軽音部に入部して経験したかように想いのたけと、新入部員に対する期待を声を大にして叫んだ。

「……」

俺は、そんな中野の決意を訊いて、校舎から平沢妹と鈴木に視線を移した。カメラを構えた平沢妹と、照明ライトの傍らに立つ鈴木は意思を確認するかのように、既に視線は俺に向けていた。

『任せてください』

コクリと小さく頷いた二人の未来の部員の瞳は、そう伝えているかのように強い意思が灯っている。

「はい、ＯＫです！　お疲れ様でした～！」
「これで全ての撮影を撮り終えました～！」

三つの視線が交錯した後、平沢妹と鈴木の朗らかな声が辺りに木霊する。

俺は、横断幕から手を離した右手をズボンのポッケに突っ込み、テレキャスとアコギをギターケースに仕舞おうと後ろを振り向いた。

「……」

そこには燃えるような夕陽。
そして感じた。

（なるほどな……）

田井中と中野が言っていた物悲しさを。

「サッくん」

しばし、その感情を噛み締めていると、背中に手を添えられた感覚を感じた。

「…ンだよ」

視線だけを右に動かし横を見れば、平沢が心痛な顔つきで俺を見上げていた。

「サッくん、泣いてたの？」

「はぁ？」

思いもしない発言に、思わず眉を怪訝そうに顰める。

「んとね、何かサッくんの背中が悲しそうだったから……」

そう言って、俺の背中にある平沢の手が上下にゆっくりと動く。まるで泣いている子供をあやすかのように。

「…ンなわけねェだろ」

「ホント？」

「嘘言って何か得があんのか……」

「じゃあ、何してたの？」

「…別に。気にすんな」

「はっ！　気にしたら負けだね！」

「…そういうことだ」

さっきまでの心痛な顔つきは何処へやら、一変して笑顔になった平沢は、背中にあった手を移動させ、何故か俺のブレザーの端を掴む。

「エヘヘ～♪」

「はぁ…」

何が嬉しいのか理解出来ない平沢に、ため息一つついて、改めて夕陽に視線を向ける。

「何かドキドキする……」

「…あ？　何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ。あ！　そろそろ太陽が沈むよ！」

平沢の指差す先には、徐々に山々の間に沈んでいく夕陽。

俺達は、夕陽が完全に沈むまで、ただその光景を黙って見ていた。

そして、

――――――――

「唯、模試の結果どうだった？」

「あ、りっちゃん。私はＤ判定だったよ」

「お！　私もＤ判定だった！」

「おぉ～！　一緒だね～！」

「おいおい、Ｄ判定で喜ぶなよ……　合格率二十パーセントだろ？」

「二十パーセントをバカにしちゃダメだよ澪ちゃん！」

「そうだぞ澪！　視聴率二十パーセント取るのにどれだけの努力が必要か……！」

「何で視聴率の話になってるんだよ……」

「咲也君はどうだったの？」

「…B」

「なんと!?　あのサクがB判定だと!」

「ズルいよサッくん!　いつの間にそんな!」

「咲也はずっと勉強頑張ってたもんな。当然の結果だよ」

「へぇ〜!　凄いねサッくん!」

「…感心してる場合か。このままだとお前ら落ちるぞ」

「「はぅ!」」

「容赦ないな咲也」

「お、落ちるとか滑るとか受験生には禁句だよ、サッくん……」

「そ、そうだぞサク……　後、切れるとか別れるとかもな……」

「あ!　それは結婚式〜♪」

「という、リツユイムギのトリオ漫才が成立した〜!」

「「うわ〜い!」」

「アホだコイツら……」

「ていうかムギまで何やってるんだよ……」

季節は移ろい、十一月に。

本格的な冬がやってきた。

第百三十三話（後書き）

アニメでは完成したビデオを、最終的に梓が封印しましたが、本作では封印はしません。

ビデオの内容は来年度の新歓で明らかになります。

そして次話から受験編へ。

第百三十四話（前書き）

受験編です。

第百三十四話

【ＳＩＤＥ　田井中　律】

梓が『やってやるですっ！』って、勧誘ビデオの企画立案に意気込んでいた翌日。週末の土曜日の十月九日。

休日で賑わう繁華街を、私と聡は映画館からの帰り道を歩いていた。

私達は、たまに姉弟水入らずでこんな風に遊んでいる。今回もその一環なんだけど、私も聡も受験生だから日々の受験勉強の息抜きを兼ねてたりしてる。

「どーだった？　私的にはアリだったけど」

「ん～……　俺は微妙だったかな。イマイチ内容が理解出来なかったし」

「確かにな～　でもさ、アクションシーンとか凄かったじゃん」

「姉ちゃんはそういうの好きなんだろうけどさ、俺はストーリー重視なんだよ。この映画ってアクションシーンをウリにしてるらしいけど、ちゃんとそれに沿ったストーリーを展開しなきゃダメだよ」

「まぁ！　なんて生意気なことを言うのかしら！　そんなことを言う口はこうしてやる～！」

「イタタタッ！　いひゃいって姉ちゃん！」

辛口映画評論家の弟のほっぺたを引っ張ると、さっき観た映画のパンフレットで私の腕をバンバン叩いてくる。
てか、パンフレットまで買ったくせに辛口コメントするんじゃありません！

「イッテー……　何すんだよー……」

頃合を見計らって手を離せば、ちょっと紅くなってるほっぺたを擦りながら口を尖らせる。
私なりのコミュニケーションなんだけど、聡には伝わらなかったみたいだな。

う～ん……　遅れてやってきた反抗期か？

愛らしいでちゅね～♪

「全く、姉ちゃんってさ、そういうがさつっぽいとこ直さないと、いつまで経っても彼氏とか出来ないよ？」

「むっ！　失礼だな！　私だってラブレターみたいなのを貰ったことあるってーの」

「嘘！？　マジで！？」

うん、嘘。
いや、嘘じゃないか。

去年の十二月に、何とも紛らわしいラブレター紛いの手紙を澪から貰ったし。
しかも内容が、【冬の日】ってタイトルの冬の恋愛をテーマにした歌詞だったし。

そういえばあの歌詞、まだ作曲してなかったな。今度サクかムギに頼んでみるかな。

てか、歌詞書いたんなら直接私に渡せばいいのにさ、澪のやつ、何で郵便ポストに入れるかな。

おかげで、ホントにラブレター貰ったと早とちりして、一人で悶々と悩んじゃったじゃん！

あー！　思い出しただけで恥ずかしい！

「誰！？　誰から貰ったの！？　もしかして兄ちゃん！？」

な～んて事を考えていると、聡はかなり興味津津っていう表情で食い付いてきてしまった。
う～む……　弟に対して姉の威厳を保つために意地を張ったのが失敗だったな。

てか……

「何でそこでサクが出てくるんだよ……」

「だって、姉ちゃんと仲がいい男の人って兄ちゃんしか知らないし。で、どうなの？」

「サクじゃないって。てかさ、サクがラブレターとか渡すと思うか？」

「言われてみれば、全然思えない」

「そゆこと」

やっぱりさ、サクを恋愛対象とか、そんな風には見えないんだよな～

あの不機嫌顔の副部長とは、これから先も今まで通りの関係でいたいし。澪とはまた違う、自然体での付き合いが私には合ってる。

（それにさ）

もし、まぁ、絶対に有り得ないんだけど、仮に私がサクのこと好きになったとしても、唯に申し訳ないじゃん？

サッくんサッくん言って、ニコニコしてる唯から笑顔を奪いたくないしな。

まぁ、百パー私がサクに惚れるなんて、修司が一日中黙ってるくら

い有り得ないんだから、こんなこと考えてもな～んの意味もないな。

「私のことより、聡はどうなんだよ？　クラスに好きな娘とかいないの？」

「いない」

「何かあの娘のことが気になる～とかも？」

「だからいないって。まぁでも、ね、姉ちゃんより先に、とか思ってるけど」

全く、意地張っちゃってさ。
ほっぺた紅くしながら言っても説得力ないぞ～
その紅いほっぺたは、私が引っ張ったからじゃないってことぐらいお見通しだ！
恥ずかしいなら言わなきゃいいのに。
思春期だな～

うむうむ。ホントに愛らしいでちゅね～

「ま、私はアラフォーまでには何とかするよ」

「随分目標低いね……」

そんな矢先だった。

ブティックのショーケースを眺めるその人に出会ったのは。

初対面じゃない。過去に面識がある。

でも、余り会話らしい会話をした記憶がない。

名前は知ってる。

立ち止まった私は、ブティックを眺めるその人の横顔に見とれてしまった。

だってさ、年上で、大人っぽい雰囲気を纏ってるんだからしょうがないじゃん。

すると、私の視線に気付いたみたいで、突然その人が私に顔を向けた。

うわっ！　な、何か緊張するっ！

私を見て『あ！』と声をあげたその人は、ニコッと笑って私達に近付いてきた。

不意打ちの笑顔にまた見とれていると、その人は私達の目の前まで来ていた。

そして私を見た後に聡を見て、『もしかしてデート？』って尋ねられた。

『ち、違います！私の弟です！』と、その人の勘違いを正すために必死の弁解。

『あ、そうなんだ』と、その人はまた笑った。

その笑顔に、不覚にもまたまた見とれてしまった。

それから私達は雑談を交わしていく。

私達の会話に入る余地がない聡は蚊帳の外で置いてけぼりだったけど、それを気にすることを忘れちゃうくらい、会話が弾む。

すっかり意気投合した私達は、お互いのケータイのメアドを交換した。

それからは、その人とのメールのやり取りがライフワークの一部となり、ケータイを触る機会が増えていった。

これが、私の運命の出会いだった……なんちゃって。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

日増しに空気が冷え、登下校時には吐き出す息が霧のように白い。

当初、今年の夏は酷暑な猛暑だったので冬は暖冬になるだろうと、あらゆるテレビ局の天気予報士は予測していた。

しかし、それはものの見事に裏切り、蓋を開ければ去年以上の異常な寒気が到来。

冬も苦手な俺にとっては、日々追われる受験勉強の相乗効果で毎日が正に地獄だった。まぁ、不幸中の幸いで夏のように暑さに参るこ

とはないが、それでも苦手なものは苦手だ。

防寒対策として、ブレザーの下に白いパーカーを着込み、マフラーを装着し、毎日を過ごす。

ここ数日、空は曇天続きで、今にも雪が降りそうだ。夏にあんなに憎かった太陽が、分厚い雲に隠れて中々姿を見せないことに、今は少しだけでも陽光をプレゼントしてほしいと願ってしまう。

それ程、今年の冬は寒気が厳しい。

空気が張り詰めるのは、何も寒さだけではなく、受験を控えている三年の教室も、気が立っているようでピリピリとしている。

暇さえあれば誰しも参考書を開き、誰しも教師に勉学の師事を受ける。

中には、生徒の要望に応える形で放課後に特別授業を行う教師もいたりする。参加するもしないも任意なため、俺や平沢達は放課後には部室で勉強に励む。

蛇足だが、平沢のパッツン前髪は伸びて既に元通りになっていたりする。

閑話休題。

成績優秀な秋山と琴吹が、俺と平沢と田井中に勉強を教える。これでは、秋山と琴吹の負担になるかと思いきや、復習を兼ねているので問題ないとのこと。

合理的な勉強が功を奏し、先日行われた模試ではＢ判定という結果だった。

とはいえ、油断は禁物。気を緩めずに今日も勉強に集中していく。

本日十一月二十四日水曜日。
現在時刻午後三時四十二分。

カリカリとペンがノートに走る音と、亀の水槽のポンプ音が、部室内を支配していた。
普段、燥ぎ回っている平沢と田井中も流石に時期が時期だからなのか、大人しく参考書片手に勉強に没頭している。

♪～

しかし、静寂に包まれる部室内に不意を突くように不釣り合いな音が響いた。

（ん？）

何事かと数学の参考書から顔を上げれば、田井中の傍らにあるテーブルの上のケータイが震えていた。推察するに田井中のケータイが音の発生源のようだ。

「…おい、うるせェぞ」

「そうだそ律。みんな勉強してるんだから、マナーモードにしとかなきゃダメだろ」

同様に参考書から顔を上げた秋山と共に警告を送れば、田井中は焦ったようにケータイを手に取る。

「ごめんごめん！　マナーモードするの忘れてた！」

なんて言いながらも、ケータイを開く。恐らくメールだと思われるが、カチカチとケータイを弄る田井中の横顔が、メールの内容を確認するにつれて、徐々にニヤけていく。

「ぷっ！　あはははははっ！」

よほどツボにハマったらしい。大口を開けて笑いだす。挙句には『おもしれー！』と、勝手に感想を響かせる始末。

「はぁ…」

そんな田井中に、何かしらの警告を告げても無駄だと、何よりその行為自体が余計な苦労を生むと判断した俺は、再び参考書に視線を向ける。

しかし、先程までの集中力は完成に霧散してしまった。

「ぷっ！　くっくっくっ！」

故に田井中の収まらない笑い声が神経を逆撫でしていく。そろそろ

堪忍袋の緒が切れそうなその時。

「りーつー……」

先に堪忍袋の緒が切れた秋山が、ユラリと椅子から立ち上がり、般若のオーラを纏う。

「ごめんっ！　マジでごめんって！」

危機感を感じた田井中が冷や汗を流しながら謝罪の意を伝えるが、完全に後の祭りだった。

「うるさいって言ってるだろっ！」

ゴンッ！

「アイタッ！！」

怒りを込めた秋山の左拳が田井中の脳天に落下。結果、田井中は俺達に土下座の如く、机に突っ伏す。

「全く！　勉強してるのに何してるんだ！」

「まぁまぁ澪ちゃん、りっちゃんも悪気があったわけじゃないんだし」

「そうだそうだ！　不可抗力だ！」

「ムギは甘いんだ！　ていうかお前は少しは反省しろ！」

激昂している秋山に琴吹が宥めるが、それに便乗する田井中に秋山は益々ヒートアップしていく。

「サッくん」

「サッくん言うな」

「喉渇いちゃったね」

「…だったら水道水でも飲んどけ」

こんな騒がしい惨状に、並大抵以上の集中力を霧散させた平沢も参考書から顔を上げた途端、脈絡もなく同意を求めるようにそんなことを口走るので、部室内にある水道を指差す。

「ヤダよ～　ムギちゃんのお茶飲みた～い！」

「…我慢しろ」

ガキのように駄々を捏ねる平沢に、一言告げて参考書に視線を向ける。
息抜きも大切なんだろうが、いかんせんコイツは模試でD判定だったので、もう少し勉強に熱を入れた方がいいだろう。

「サッくん先輩厳しいッス……」

それは平沢自身も理解しているらしく、渋々といった感じに再び参考書と格闘を開始する。
以前の平沢だったら、引き下がらずに更に駄々を捏ねるのだろうが、最近の平沢はそんなことを余り言わなくなっている。
つまりは成長しているんだろう。

「でも、そろそろ休憩にしない？　余り根を詰めるのもよくないし」

すると、琴吹が未だに激昂している秋山から俺に視線を移動させる。
まぁ、確かに一理ある。
平沢はともかくとして、同じD判定だった田井中は秋山の弾劾に疲労困憊だし、何より秋山の怒りを鎮めなければ受験勉強など手に付かない。

「はぁ…」

なので、ため息一つ吐いて椅子の背もたれに体重をかける。
そんな俺の態度の意図を理解した琴吹は微笑みを浮かべる。

「じゃあ、今から用意するね♪　唯ちゃんは何が飲みたいかしら」

「ほぇ？　ティータイムですかい？」

「うん♪　咲也君が休憩しようって♪」

「うわぁ～い！　ありがとねサッくん！」

よほどティータイムを楽しみにしていたらしい平沢が両手を上げて満面の笑みを俺に見せる。そのティータイム好きの度合いの理解に苦しむ俺は、とりあえず椅子から立ち上がる。

「サク先輩」

「あン？」

軽く身体を伸ばし、凝り固まった筋肉をほぐしていれば、今まで俺の定位置である長イスを占拠していた中野に声を掛けられた。

「サク先輩はどうやって曲作ってますか？」

一見したら唐突な質問だと思うが、そうではない。
実はコイツ、俺達が受験勉強している時は一人黙々と曲作りに励んでいる。
年内に一曲作り上げると目標を掲げているが、演芸大会でアレンジが出来ずに、俺に協力を求めきた実績と、今もアドバイスを求めていることからして、曲作りは難航しているようだ。

「中々上手くいかないんですよね」

そりゃそうだろうな。

コイツは幾らギターの技術が良かろうが、曲作りに対しては初心者だ。そう簡単に作れはしないだろう。

「ですから、勉強の邪魔にならない程度でいいので、アドバイスを貰えたらなって……」

やはりそこがネックになっているらしく、遠慮気味に呟く中野。

「…邪魔も何も今から休憩だ。つうかそれを分かってお前は質問したんだろうが」

「えっと……は、はい」

「…だったら遠慮すんな」

「は、はい！」

真面目な性格はいいのだが、来年はコイツが部長となり軽音部を引っ張っていく事を考えれば些か不安な面がある。コイツは時に頑固なところもあるので、田井中程までにはいかずとも、それなりの柔軟な思考を持った方が得策だろう。

まぁ、それは平沢妹と鈴木が何とかフォローするだろう。と、結論に達した俺はとりあえず長イスに移動する。

「…基本、作詞作曲は水物だ。出来る時は簡単に出来るし、出来ねェ時は全く出来ん」

「そういうものなんですか？」

長イスの前で立ち止まり、ついてきた中野に振り向きざまに言えば、首を傾げられた。

「…極論を言えば、無から有を作る。それ相当の努力やら苦労やらが付き纏うのは必須だ」

「じゃあ、サク先輩の場合はどうやって曲を作ってるんですか？」

「…イメージ」

トントンと指でこめかみ付近を叩く。

「イメージ？」

「…どういう曲にしたいのか、バラードなのかアップテンポなのか。それに伴う歌詞はどうすればいいのか。また、先に歌詞があるんだったら、それに合うリズムを考え構築していく」

「それがイメージ……」

過去に俺が携わったＨＴＴの曲は全てイメージで作ってきた。

『ＦＦ』と『カレー』と『ＰＰ』は琴吹と共同して作曲したが、これは先に秋山の歌詞があったからこそ、イメージで作曲出来た。

『私恋』と『翼をくださいＲｏｃｋ　Ｖｅｒ．』と『五月雨』と『Ｕ＆Ｉ』もまた、先に歌詞があったので、それに似合う曲をイメージ出来た。

逆に『Ｄｏｎ-ｔ　ｓａｙ”ｌａｚｙ„』は先に作曲をしたものだから歌詞が中々浮かばす、部員達に協力を仰いだ。

また『虹の風景』『桜の木』『アシアト』は、歌詞もない全くの無から創造したのでかなり苦労した。

「…あくまでこれは俺のやり方であって、他の曲作りの方法もある」

『ふでボール』『パフェ』『Ｈｏｎｅｙ　ｓｗｅｅｔ』『ときガー』『メシ』を創作したのは秋山と平沢と琴吹だ。
琴吹はどのようにして作曲をしているのか不明だが、俺とはまた違う方法の可能性は大だろう。
その意味を含めて、かいがいしくティータイムの準備を進める琴吹の背中を見ながら口を開く。

「…アイツにも訊いたらどうだ？　ためになるかもしれねェし、そもそも曲作りは多種多様でやり方も十人十色だ。一個人の意見が全てじゃねェからな」

「そうですね。ムギ先輩にも訊いてみます」

早速、琴吹にもアドバイスを貰うべく身を翻す中野。

「あ」

しかし、そのまま一回転して再び俺に向き直る。
ハタから見れば、今の一連の動作は華麗なターンを中野が俺に見せ付けたとしか映らないんだろう。それ程、見事な一回転だった。

「ありがとうございました。とても参考になりました」

「ンなこと言うために流動的な一回転したのか……」

「べ、別にいいじゃないですか！」

一回転した事は中野自身は余り触れてほしくはなかったようで、若干頬を紅くさせている。
『もう！　感心したのにサク先輩は！　やっぱり意地悪です！』と、プンスカモードに移行した中野の背を見送り、俺は長イスに腰掛けた。

「……」

その瞬間、襲ってきたのはライブ終わりの心地良い疲労感ではなく、純粋な受験勉強の疲労感。
ここ最近は部室でも自室でもギターは弾かず、ひたすら勉強に没頭していので、その代償である疲労から派生した睡魔が手招きしてくる。

瞼が重くなり、うつらうつらと船を漕ぎ始める。
このままでは睡魔の誘惑に負け、ドリームワールドへ小旅行に出立してしまいそうだ。

「はい、咲也君♪」

ドリームワールドへの出立を阻むように突然降り掛かる声。首を動かせば相変わらずの絶えないニコニコ笑顔の琴吹が、湯気の立つカップを差し出していた。

「大丈夫？　眠たそうだったけど？」

「…別に。大したことじゃねェ」

言って、受け取ったカップを口に傾ける。少々の苦味が味覚と風味を刺激するコーヒーだった。

「今日は紅茶じゃなくて、咲也君、何だか最近疲れてるみたいだったから、疲労回復と眠気覚ましに特製コーヒーなの～♪」

「…平沢はコーヒー飲めねェっつってなかったか？」

「うん、だから唯ちゃんにはアップルティー♪　あと、梓ちゃんにはミルクティー♪」

長イスから首を動かしテーブルを見れば、平沢と中野は嬉々とティータイムを満喫している。機嫌が直った秋山は『ムギってコーヒー淹れるのも上手いな』と感嘆し、田井中は『うっ！　苦い！』と顔を顰めている。

「…用意周到だな。個人の嗜好に合わせたもんを、わざわざ持参するとか」

「受験をみんなで乗り切るためだもん♪　だからね？　『わざわざ』じゃないの♪」

「…お前が納得してんなら別に構わなねェが、本末転倒にだけはなるなよ」

テーブルから視線を戻してコーヒーを一口飲み込む。

「クスッ」

すると、何故か琴吹に小さく笑われた。

「…ンだよ」

「ううん♪　咲也君って優しいなって♪」

「有りもしねェこと口走んな……」

「ムギ～！　やっぱり私もアップルティーくれ～！」

居心地の悪さを感じた時にタイミング良く田井中が割って入る。故にさっさと行けと琴吹にヒラヒラと手を動かせば、また小さく笑い田井中の元に歩いていった。

「はい、りっちゃん」

「サンキュ～」

「そういえば誰とメールしてたの？　あんなに楽しそうに」

程よい温度のコーヒーを早々に飲み干し、部室内には暖房設備が無いので（クーラーはあるが、決してエアコンではない）マフラーを鼻頭まで上げてパーカーのポッケに両手を突っ込んで、長イスに置いてあった中野が書いたであろう楽譜をぼんやりと眺めていれば、琴吹と田井中の会話が聞こえてきた。

「いや～　ちょっとね～」

「あ！　もしかして彼氏さんとか！？」

メールの相手をはぐらかす田井中に、何故その様な結論に達したのか不明な琴吹が期待感満載な声質で問い掛ける。

「何言ってるんだよムギ。律に彼氏なんて出来るわけないだろ」

「澪先輩そこまで言い切りますか……」

「でもでも、最近のりっちゃんってよく誰かとメールしてるんだよ。もしかしたらホントに彼氏さんかも知れないよ！」

「唯も考え過ぎだ。どうせ聡とかじゃないのか」

それの引き合いに名前を出されたアイツも哀れだな……

「聡じゃないって」

「じゃあ誰なんだよ？」

「……」

「り、律？」

否定した田井中だったが、その相手の有無を求める秋山の質問に何故か黙り込む。

些か疑問を抱いたので、楽譜から絶賛ティータイム中の連中に視線を動かせば、秋山の肩越しに見える田井中は頬を紅潮させモジモジしながらそっぽを向いていた。

それはまるで、ドラマや映画で見受けられる、恋する乙女のように。

「え！？　何！？　その反応！？」

「な、何が？」

「いや、だから、その……」

「あ～…　えっと……　う、うん」

「えっ！？」

ひたすら慌てる秋山に、肯定とも否定とも取れる曖昧な態度を示す田井中。
しかし、俺からすれば田井中の態度は、どこか演技掛かってきなくさい感じではある。

「りっちゃん！　ホントに彼氏さんが出来たの!?」

「どんな人!?　サッくんみたいな人!?」

「ちょっと！　ムギ先輩も唯先輩も落ち着いて「り、律！　どうなんだよ！」澪先輩も落ち着いてください！」

古今東西、年頃の女子というのは恋愛事情にかなりの関心があるようで、平沢と琴吹は爛々と瞳を輝かせ、秋山は焦りつつ、それぞれ身を乗り出して田井中に迫っている。
中野は一応、そんな先輩を冷静にさせようと奮起しているが、時折チラチラと田井中に視線を向けているということは気になるんだろう。

「律！」
「「りっちゃん！」」
「えぇっとぉ～……」

計六つの瞳に穴が開く程凝視された田井中は、たじろぎ椅子の背もたれに仰け反る。

「あ、あーっ！　私用事思い出した！　悪いけど先に帰るわ！」

そんな視線と尋問に耐えられなくなった田井中は、頬を紅潮させたまま立ち上がり、素早く筆記用具を鞄に突っ込み、桜高指定のコートを羽織り、マフラーを首に巻いて扉に駆け出した。

「……」

俺はとりあえず長イスに腰掛けたまま、妙に演技掛かった田井中の態度と行動を不審に思いつつ、そそくさと退室しようとする田井中を視線で追う。

そして、田井中が長イスの横、つまり俺の隣を通り過ぎようとした瞬間、

「あン？」

俺にしか見えないような、ニヤリと悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

意図がイマイチ理解出来ずに開口しようとしたが、時既に遅く、田井中は扉の向こうに姿を消し去った。

「りっちゃん隊長、行っちゃったね」

「本当に彼氏さんが出来たのかな～！」

「律先輩に彼氏ですか……　どう思います？」

平沢は扉を見つめて言葉を紡ぎ、琴吹は両手を合わせて何故か自分の事のように夢見心地に興奮している。そして中野が扉から視線を俺に移して意見を求めてくる。

「…興味ねェし、仮に事実だとしてもほっとけ。変に干渉して受験に支障でも来したらコトだ」

そう告げて長イスから立ち上がる。

「まぁ、そうですよね。私達は見守ってる方がいいのかもしれませんよね」

「でもでも、サッくん&あずにゃんや。りっちゃんの相手気にならない？」

「…だから興味ねェっつってんだろ」

「気持ちは分かりますけど、今は受験の方が大切だと思います」

「う～ん……　私は気になって仕方ないッス！」

「ねぇ、みんな」

窓から外を見れば相変わらずの曇天で、空は灰色の世界を広げる。
寒気が厳しい事に心中で嘆いていれば、琴吹が口を開いた。

「どうしたの？」

と、平沢が反応すれば、琴吹は隣に座る秋山の肩に手を置いた。

「澪ちゃんが……」

部室で受験勉強を開始してから俺が座る頻度が高くなった山中顧問の椅子に腰掛け、秋山を見れば、さながら一昨年の【桜高祭の悪夢】を体験した翌日の部室の如く、真っ白になり呆然としていた。

「り、り、り、り、律に……か、か、彼氏が……そ、そ、そんなバカな……」

まだ確定していないのだが、秋山にとっては田井中がそんな事になるなど信じられないようで、呂律が回らない程ショックを受けている。

「澪先輩！　しっかりしてください！」

「澪ちゃん大丈夫だから！」

「はっ！　りっちゃんの相手がサッくんってことないよね！？」

「…脳神外科行ったらどうだ？」

「じゃあ、サッくんじゃないんだね！？」

「当たり前だろうが……」

「よかった～」

「やっぱり唯ちゃんって咲也君のこと好きなのね～♪」

「そうですね。って、ムギ先輩は気付いてたんですか！？」

「うん♪」

「何の話してるの？」

「い、いえ！　何でもないです！」

「はっ！　実は今日の律は双子の妹で、本物の律は今頃イルクーツクにいるんだった！　いや～！　うっかりしてたよ！」

「コイツ、前もこんな厳しい現実逃避してたな……」

「ちなみにイルクーツクはロシアよ！」

「…それも前訊いた。つうか訊いてもねェし」

「ショボ～ン……」

「ねぇねぇあずにゃん、何の話してたの～？」

「だから何でもないですって！　ていうか抱き付かないでくださいよ～！」

「あったかあったかだよ～　あずにゃ～ん」

「よし！　みんな！　今から律に会いにイルクーツクに行くぞ！」

「よしきた～♪」

「はぁ……」

中野に頬擦りする平沢。
どんどん気力を失う中野。
いよいよ現実逃避が支離滅裂になる秋山。
それに嬉々と賛同する琴吹。
そんな連中とカオスな光景に深いため息を吐き出す俺。

「ニャーッ！　サ、サク先輩！　助けてください！」

「サッくん！　あずにゃんあったかいんだよ～！」

「行くぞ！　咲也！」

「咲也君、パスポート忘れないようにね？」

「……」

お前らは、俺にどうしてほしいんだ……

「はぁ……」

センター試験まで後五十二日。

第百三十四話（後書き）

受験編なのに、余り受験と関係ない内容に……

第百三十五話（前書き）

受験編その二です。

第百三十五話

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

何とか平常心を取り戻した私は、ムギが新しく淹れてくれたコーヒーを一口飲み込む。それでも、騒ぐ心は落ち着いてはくれず、受験勉強は全く手に付かない。

そんな私を見兼ねた咲也が『…今日はもう解散だ』と、ため息交じりに筆記用具を鞄に仕舞った。

唯もムギも梓もそれぞれ帰りの支度を始めて、私もノロノロと筆記用具を片付ける。

いつもより帰る時間が少しだけ早いから外はまだ明るい。でも、空は曇っている。

咲也は寒い寒いとブツブツ愚痴ってマフラーで顔の半分を覆って、唯とムギと梓は、本当に律に彼氏が出来たのかと議論している。

『りっちゃんって男の子にモテそうだよね～』とか『明るいし、一緒にいると楽しいものね～♪』とか『でもやっぱり律先輩に彼氏なんて想像出来ません』とか、聞こえてくるのはそんな内容。

私はその輪には入らずに……いや、入れずに咲也の隣を歩く。

何気なく咲也の横顔を見れば、まっすぐ前を向いて一歩先を歩く唯達の背中を見てる。

ヘッドフォンをしてるから唯達の会話は聞いてないみたいだ。それはつまり律の彼氏の件に全く興味がないって事。

咲也は興味がない事には本当に無関心だし、見向きもしない。

そんな咲也の性格が、今は心底羨ましい。
私は、気になって気になって仕方がないんだ。

律に彼氏なんて……
言い換えれば恋人って事で……
律に恋人が出来たなんて到底信じられないけど、普段滅多に見れない律の、頬を紅潮させた思わせぶりな態度を目の当たりにしたら、一概に『いない』なんて言えない。

律とは長い付き合いだ。親友って言っても過言じゃない。
小学校、中学校、高校とずっと一緒に過ごしてきた。いつも隣には律がいた。
時には意見の違いで喧嘩してしまう事もあるけど、直ぐに仲直りして笑い合える。私と律は秘密を共有出来る仲なんだ。

でも……それは私の独り善がりな都合のいい勝手な解釈だったのかもしれない。

恋人が出来たなんて一言も言ってくれなかった。

今日初めてその事を知って、信じられなくて、よく分からない現実逃避をしてしまった。

唯達はまだ、律と、その恋人の談義をしている。私もその輪に加わるべきなのか分からない。分からないんだ……

どうして私が、こんなに気持ちが落ち着かずに、心が騒いで、モヤモヤした気持ちになっているのか。

律に恋人が出来たから？

多分そうだと思う。

だったら何でモヤモヤするんだ？

それが分からない……

空が曇ってるから？

関係ないよ……

祝福すべきなんじゃないか？

うん……　でも……

でも？

でも……

何？

素直に祝福出来ない気がする……

何で？

分からない……

歩きながら、答えの出ない自問自答の繰り返し。

それは、唯とムギと梓と咲也と別れるまで続いた。

バイバイと手を振る唯とムギ。さようならと頭を下げる梓。何も言わずに視線だけ私に向ける咲也。
そんな四人に私も、また明日と左手を小さく振って歩き出す。

部活が終わると私はいつも律と帰っている。帰り道が同じだから、ほぼ毎日一緒だ。
でも、今は一人で歩いている。
一人でこの道を歩くのは久し振りだな。去年、律と大喧嘩した以来かな？

「……」

会話をする相手がいない。
律がいない帰り道が、こんなに静かで、少し寂しいなんて思いもしなかった。
喧嘩した時は、そんなこと考える余裕なんてなかったし。

はぁっ、と、吐き出す白い息が立ち上ぼっていく。その先は私の心を映したような相変わらずの曇天。

雪、降らないかな……
そしたら少しは気が晴れるのに……

自宅に着いても私はずっと上の空。夕食の時も、お風呂に入ってる時も。
ママとパパが『大丈夫？』って心配してきたけど、私は笑って『大丈夫だよ』と返した。ちゃんと笑えてたか分からないけど。

お気に入りのピンクのパジャマに着替えて、自室のベッドに倒れ込む。

「あ、勉強しなきゃ……」

ベッドから机に移動して、参考書とノートを広げる。でも、全然集中出来ないし、問題を解いても頭に入っていかない。

原因は分かってる。

私の心を占めて締め付けるこのモヤモヤのせいだ。

「はぁ…」

自然とため息が零れる。

そして、ボスンッとベッドに俯せで倒れる。

「ホント、どうしちゃったんだろ私……　ねぇ？」

視線の先のエリザベスに問い掛けても、何も返ってこないのは分かってる。それでもモヤモヤの正体を知りたい私は、エリザベスに問い掛ける。

「律ってさ、いい加減で、計画性がなくて、猪突猛進みたいなやつ

なんだ。それにドラムも、その性格のまんまで走り気味なんだよ」

エリザベスは何も言わない。

「でも、演奏すると、不思議なんだけどバッチリ合うんだ。後ろにいる律の叩くドラムが心地良くって、安心出来るんだ」

エリザベスは何も言わない。

「部長なのに、しょっちゅう書類の提出忘れてさ、私や咲也に怒られて、その度に和がフォローしてくれて……」

エリザベスは何も言わない。

「でも、いざという時は頼りになって、周りに気を遣えて、あぁ、さすがだなって感心してしまうやつなんだよ」

エリザベスは何も言わない。

「この前の模試で、律はD判定だったんだ。そしたら私に勉強教えてって頼まれて、仕方なく教えて……」

そこまで言って、口を閉ざした。

仕方なくじゃないんだ。律と一緒の大学に行きたいから、私は律に勉強を教えたんだ。

頼まれた時は、天の邪鬼みたいな態度を取ったけど、本当は嬉しかった。

私は、人見知りで、人前だとあがってしまう性格だから、昔から律に頼って、背中を押されて、今まで過ごしてきた。

小学生の頃、読書に耽るしかなかった私を、強引に引っ張り出したのは律。

私に音楽を勧めたのも律。

怖い印象だった咲也と打ち解けたのも律のおかげ。

梓のために勧誘ビデオを作ろうと提案したのも律だ。

あぁ……　そうか……

「エリザベス、私……」

律が私のそばから離れてしまうのが怖いんだ。

ずっと一緒いた律が、顔も知らない人と笑い合ってるのが寂しいんだ。

だから、このモヤモヤは律が取られたみたいで、嫉妬みたいな感情なんだ。

私は、子供だ……

律はもう十八歳。好きな人がいてもおかしくない。私だっていつか、そんな人が出来るかもしれない。

なのに、私のわがままで、恋人に嫉妬して……

「……」

モヤモヤの正体は分かった。けど、解決策が分からない。
気がつけば、私の左手にはケータイ。

私はホントに弱いな……

この期に及んで誰かに頼ろうとしている。
自分じゃどうしようもないから、相談に乗ってほしくて、助けてほしくて、悩みを解決してほしくて。だけど、そんな自分が情けなくて嫌になる。
それでも、ケータイを弄る左手は止まらない。

律、唯、ムギ、梓、和、憂ちゃん、さわ子先生、影宮君、と、アド帳を動かしていく。
そして次に行き着いた、真っ先に頭に思い浮かんだ人物に通話ボタンを押して耳に当てる。

プルルルと数回のコール音の後に、

「『……あン？』」

と、気怠そうな声の咲也が出た。

「もしもし？　咲也？」

「『…あぁ』」

「今何してた？」

「『…勉強という理不尽な苦行』」

「普通に言いなよ……」

このところ咲也は勉強熱心だ。学園祭が終わった頃から授業中に寝ることはなくなったし、たまに私かムギか和か水本君か鷹崎君に勉強を教わっている。その甲斐あって模試ではＢ判定だった。

だから、勉強中だと言う咲也に邪魔しちゃったかと思って謝ろうとした。

「『…で？　何の用だよ？』」

でも、咲也に催促されてしまい、私はそのタイミングを逃してしまった。

「えっと……」

何から話したらいいのか迷う。

律の恋人？

それとも私の嫉妬みたいな感情？

「『…大した用件じゃねェんなら切るぞ』」

「ま、待って！　ちょっと待って！　頭の中整理するまで待って！」

咲也なら本当に切りそうだから、私は慌てて制止する。

「『分かったから叫ぶな……　耳がイカれる……』」

「あ、ごめん……」

ゆっくりゆっくりと頭の中を整理していく。どのくらいの時間を掛けたのか分からないけど、咲也は電話を切らずにいてくれた。
そして、整理と決心がついた私は、事情の顛末を順を追って咲也に悩みを打ち明けていった。
咲也は何も言わず、相槌も打たず、黙って私のわがままな悩みを聞いてくれた。

「ということなんだけど……」

全てを話終えた私は、図々しくも少しスッキリしていた。
対する咲也はため息をついて一言。

「『アホ』」

「え……」

私は、この咲也の口癖みたいな一言を余り言われたことがなかった。
だから一瞬、思考が止まった。

「『…深く考え過ぎだ。つうか依存してんじゃねェよ』」

止まった思考で、咲也の言葉が胸を抉った感覚を覚えた。

「た、確かに律に依存してるかもしれないけど……」

声が震える。

「わ、私は咲也みたいに強くない……から……」

言葉が詰まる。

「『……』」

そして、咲也も黙り込んだ。

お、怒らせ……た？

心臓が早鐘を打つ。

視界が涙でぼやける。
金縛りにあったみたいに身体が動かない。

「『お前……』」

「ッ！」

身体がビクッと跳ねた。
咲也に怒られると思って。

「『…田井中にそういう奴がいるかどうか知りてェんだろ？』」

「ぇ……」

意外だった言葉に私は小さく反応した。

いるかどうか？

それって……

「律には恋人がいるんじゃ……」

不思議と金縛りは解けて、早鐘を打った心臓も震えていた声も治まっていた。

「『…まだ確定してねェだろ。あのデコは肯定も否定もしなかった』」

「でもそれは、恥ずかしかったからなんじゃ……」

「『…アイツがそんなタチか？』」

そりゃ勝気で男勝りで活発だけど、律だって女の子なんだし、恋愛ともなるとそんな態度にはなるんじゃないかな？

「『…それに俺からしてみれば、どこかうさんくさい。要は演技』」

「え、演技？」

「『…俺の見解では、だ』」

「で、でも！　そんな器用なこと出来るような……」

「『…元からそういう素質はあったらしいが、学園祭でお前と演技力を研いたろ。その賜物じゃねェの』」

確かに、律には余り役に立たない他人の声色を真似る特技がある。

そして、【ロミオとジュリエット】の特訓を、軽音部の練習を休んでまでやっていた。

「『…あくまで推測だが、俺はそう睨んでいる。つうか、そもそも興味の欠片もねェけど』」

「そうだとしても、何であんな思わせぶりな態度を取ったんだろう……」

「『…知らねェよ、本人に訊け。ンでお前の早合点を後悔しろ。つうかそんなことで悩む理由が分からん』」

「そこまで言わなくても……」

ここぞとばかりに辛辣なことを言ってくる咲也に、気後れした私は思わず膝を抱える。

そして、膝の上に顎を乗せた時、咲也は言った。

「『…お前もデコも、なんだかんだで似た者同士だ』」

と。

「え？　どういうこと？」

「『…去年、学園祭前にお前とデコが仲違いした時があったろ』」

「うん……」

実を言えばあの時、どうして律と喧嘩をしてしまったのか私はイマ

イチ分かっていない。律が私に必要以上のちょっかいを出してくるから、それが頭にきて思わず怒鳴って、が、原因なんだけどそんなことをしてくる意味が理解出来なかった。根本的な起因が依然として不明なままなんだ。

「『…そん時に風邪でへばったデコと話したら、仲睦まじいお前と真鍋を見て、寂しかったんだとよ。ンで結果があのザマだ』」

「え……」

また、思考が止まった。

寂しかった？　律が？

私と和を見て？

「『…お前言ったな？　田井中が見ず知らずな野郎といるのが寂しいって』」

「あ、うん……」

思考を動かす。

つまり律は、私に焼き餅焼いてたの？

だとしたら、今の状況に似てる。

そして咲也は言った。私と律は似た者同士って。

「『…片方が余所見してたら嫉妬。また片方が余所見してたら嫉妬。お前らアホみてェに波長合い過ぎだ』」

言葉が出ない。

それは、一年経って漸く理解したあの時の真相に。そして咲也の言葉にも。

「『…後、田井中には、足りない部分は互いに補え的な事も言ったが、それは依存とはわけが違ェぞ』」

「……」

「『…お前がアイツに固執や依存してる限り、例え大学に進学してもそのままだ。自立の成長なんて望めねェ』」

「……」

「『…ま、今のは俺の勝手な独り言だと受け流しても構わん』」

「ううん……」

そんなことないよ。

そんなことないんだ。

「私は……」

私は何時までも律には頼れない。
私自身が成長しなきゃいけないんだ。
だってそうじゃなきゃ、私は弱いままだ。

「律とこれから先も笑い合いたいから、だから……」

私は決めた。
強くなろうと。
今すぐは無理だけど、時間を掛けてゆっくりでもいいから。
人見知りであがり症な性格は、生来のものだから難しいかもしれないけど、大学生になったら積極的になってみようと。

「私！　律の事ちゃんと祝福するよ！」

これは私の決意だ。
咲也に言ってしまったんだ！
もう後には引けないぞ！

なんだけど……

「『だから確定じゃねェっつったろうが……』」

「あ、そっか……」

うぅ……　恥ずかしい……

「『はぁ…　やっぱお前抜けてんな……』」

そ、それも含めて成長しなきゃな……

「『…話戻すが、俺の見解としてはアイツの思わせぶりな態度は演技。一応そのことを頭片隅にでも置いとけ』」

「うん。あ、けど、ホントに律に恋人がいたら、どんな人なのか気になるな」

「『あっそ……』」

「ホントに興味ないんだな咲也って……」

「『…つうか、そんなに気になるんなら明日にでも本人に訊きゃいいだけのことだろ』」

「でも、今日みたいにはぐらかすかも」

「『…だったら尾行でもなんでもやってろ。俺はもう知らん」』

「尾行って……」

「『…それ以上言うなよ。ガラにもねェことしてコッチは疲労困憊だからな』」

「あ、ごめん……　勉強中だったんだよな……　今度何か奢るよ」

「『…エフェクターを所望する』」

「それはちょっと……」

「『…まぁいい。切るぞ』」

「うん。ホントにありがとう咲也。おかげで凄く楽になったよ」

「『あっそ……』」

ホントに素っ気無い反応の咲也に、私は小さく笑みを浮かべた。
やっぱり咲也は優しいって。厳しい事を言われたけど、進む道を示唆してくれた。

咲也は本当に頼りになる。困った時は救ってくれる。手を差し延べてくれる。

でも、甘えてばかりはいられない。頼ってばかりもいられない。

改めて決意しよう。
私は強くなるんだ。

律と咲也。
軽音部の部長と副部長。

私達を先導してくれる二人。
いつか私も、二人みたいに勉強以外の面で頼られる存在になりたい。

「じゃあ、おやすみ」

「『…まだ寝ねェけどな』」

「挨拶だよ。ていうか前もこんなこと言ってたな」

「『…覚えてねェ』」

本当に覚えてなさそうに告げた直後、ツーツーと電子音が電話口から流れてきた。

私は、ケータイを閉じて抱えていた膝を伸ばす。そしてベッドにゆっくりと倒れた。

咲也のおかげで、悩みは解決出来た。
でも、もう一つ問題がある。
それは、本当に律の恋人がいるのかという疑問。

洞察力が鋭い咲也は律の態度は演技だと言っていた。
何でそんなことをする必要があったのか分からないけど、ホントにいたら、どんな人なのか気になる。

例え恋人がいても私はもう構わないし、いなくてもそれはそれで構わない。ていうか、いなかったら何であんな態度を取ったのかを詰

問しなきゃな。

「明日……」

徐々に瞼が下がっていく。

「律に……訊いて……」

まどろみが気持ちいい。

「すぅ…すぅ……」

結局、私は学園祭が終わってから毎日欠かさなかった受験勉強を、しないまま寝入ってしまった。
どうやら私は、よっぽど気を張っていたみたいだな。

――――――――――

翌日。二十五日木曜日。

「あの、澪先輩」

「ん？」

「ホントにこんなことしていいんですか？」

「だって、いくら律に訊いてもはぐらかすんだから仕方ないだろ？　律の恋人がどんな人なのか見極めてやる！」

「澪先輩が燃えてる……」

「右に曲がったわ！　さぁ早く！」

「ムギ先輩はノリノリだー！」

「よし！　行くぞ！」

「ラジャー！　澪ちゃん隊長！」

「ちょっ！　澪先輩！　唯先輩！」

「あずにゃんも早く！　りっちゃんを追いかけなきゃ！」

「わ、分かりましたから押さないでください！　危ないですよ！」

朝、早速、登校の糅てて加えて律に問詰めてみようとしたけど、一緒に登校は出来なかった。

別に一緒に登校をしようという約束はしてないんだ。

けれど、殆ど毎朝律は私の家に来るから、てっきり今日も来るものだと確信していたのに、律は来なかった。

一人で登校すれば、教室の前の廊下で律と和が談笑しているのが眼に入った。

だから聞き耳を立ててみたんだ。もしかしたら恋人について話して

るんじゃないかと思って。
和は博識だし聡明だ。それに、恋愛にも詳しいかもしれないから相談相手には持って来いの逸材だ。

『でさ、何あげたらいいと思う？』

『そうね、やっぱり写真かしら？』

『写真か～　確かに喜びそうだよな～』

あげる？
恋人に？
誰の写真を？
あ！　そ、そうか！　自分の写真か！
そ、そうだよな！　好きな人には常にそばにいるって想われてほしいもんな！
と、ということは！　やっぱり律には恋人が！？

『いや～　年上の人に何をあげたらいいのか分かんなくてさ。さすが和だよな！　参考になったよ！』

『まぁ、ホントに写真で喜ぶのか分からないけどね。ていうかこんなアドバイスで良かったのか疑問だけど』

年上！？
お、お、お、大人の人！？

で、でも、律にはそういうタイプの人の方が合ってるかも……
律の性格からすれば、グイグイと引っ張ってくれるそんな人が……

そ、それにしたって、いつ知り合ったんだ？
学園祭の時か？
そうなのか？

『あ、澪。おはよう』

悶々と様々な考えを巡らせていると、私に気付いた和が、律から視線を私に移して挨拶をしてきた。

『み、澪！？』

当然、律も私に気付く。

『も、もしかして訊いてた……？』

その反応はなんだよ？
何で冷や汗を流して動揺してるんだ？

そんな反応されると、

『わ、私に訊かれちゃマズい話でもしてたのか……？』

なんて思っちゃうじゃないか。

あ……　言っちゃったーー！

『えぇっとぉ～……』

『ど、どうなんだ律！』

言ってしまったからには仕方ない。

だから私は機は逃がさないとばかりに律に詰め寄った。

だけど律は、私に視線を合わせようとせずに、あらぬ方角に視線を泳がせる。

律がこんな態度を取る時は、後ろめたい事か嘘をついている時。

その真実を暴こうと、私は再度口を開こうとした。

『こ……』

『こ？』

『これだけは澪には教えられなーいっ！』

『り、律！？』

だけれど、律は照れたように顔を真っ赤に染め上げて、廊下を駆けて逃げてしまった。

な、なんだよその反応!?
やっぱり！　やっぱり！　本当に！

『こ、こ、こ、こ……』

『おはよ～　和ちゃん』

『あ、おはよう唯』

『恋人がいるのかー!?』

『ふぉ!?　澪ちゃんが叫んだ!』

『恋人？　律に？』

『んとね、りっちゃんに彼氏さんがいるかもしれないんだよ』

『え？　そうなの？』

『うん！　何かワクワクするよね！　ねぇ！　サッくん!』

『…しねェよ』

『あ、咲也。おはよう』

『咲也!』

『ンだよ……つうか朝っぱらからうるせェな……』

『ホントに律は演技してるのか!?　そんな風には見えないよ!』

『私見な所見だっつうの……』

結局律は、ＨＲが始まるギリギリの時間に戻ってきた。顔の赤味は取れてたけど、心なしかうっすらと頬は紅い気がした。

それから、休み時間や昼食の時にストレートに『こ、恋人はいるのか?』や『わ、私に訊かれちゃマズい話ってなんなんだよ?』って、問詰めたけど、律は苦笑いを浮かべるか急に話題を変えてしまう。

そして、モヤモヤから悶々と変わった気持ちのまま迎えた放課後。

今日もいつも通り部室で受験勉強をすると思ったら、律は用事があるからと帰ってしまった。

益々怪しい律に、遂に私は行動を起こすことに。

それは、昨夜に咲也が口にしていた尾行をするというもの。

そのことを唯とムギと咲也に告げれば、唯とムギは『探偵みたいだね!』『さわ子先生の時みたいでワクワクする～♪』と、爛々と瞳を輝かせて、咲也は『…俺を巻き込むな』と言って席から立ち上がった。

こんな反応をするってことは、咲也は行かないみたいだ。

まぁ、散々興味がないって言ってたから、当然の反応だよな。

唯が咲也も行こうと誘っているけど首を縦に振らない咲也は部室に向かってしまった。

唯は遠ざかる咲也の背中に、ぶぅぶぅと頬を膨らませていたけど、気を取り直して梓にメールを送る。

昇降口で困惑しながら待っていた梓に事情を説明して、私達は律に見つからないように細心の注意を払って尾行していく。

そして、現在。

「ムギちゃん、りっちゃんは？」

「え～っと……　あ！　あそこにいるわ！」

「帰り道と逆方向だ……　ここで恋人と待ち合わせするのか？」

「ここって繁華街ですね。この先って確か映画館がありましたよね？」

「そだよ～　あ！　この前憂と映画観に行ったんだけどね？　サスペンスでミステリーな内容だったんだぁ～」

「それってどっちなんですか？　サスペンスなんですか？　ミステリーなんですか？」

「だから、サスペンスミステリーなんだよ」

「ですから、サスペンスなのかミステリーなのか……」

「はっ！　映画館でデート！　ダ、ダメだぞ律！　映画館は暗いから……！」

「み、澪ちゃんって、意外と大胆……」

「ほぇ？　ムギちゃん、大胆って？」

「ゆ、唯先輩はそういうことに関して疎いんですね……」

「ムギちゃんもあずにゃんも顔が赤いよ？　どしたの？」

私達は律のあとを追って繁華街まで来ていた。
夕暮れが近付くにつれて、賑わいをみせる繁華街は人で溢れている。
そんな人波の中を進む律は、冬の風をものともしないで歩いていく。
一方の私達は、物陰に潜んで冷たい風に身を寄せて、どのような行動をするのか分からない律を見失わないように必死だ。
でも、この人波の中、しかも律の身長を優に越える人なんて数え切れない程繁華街を闊歩しているから、見失わないようにするのは至難の業だった。

（あ……）

ふと、襟足が跳ねている律の特徴ある後ろ姿から、ブティックのショーケースに視線を移動させた。

（あの服可愛いな……　最近勉強が忙しいから買い物行けてないし

……　あ！　アレってこの前雑誌で特集されてたトートバック！
大人っぽいなぁ……　やっぱり高いんだろうなぁ……　あ！　あの服って……）

次々に目移りしていく。
その時間は約十秒ぐらい。
その十秒が命取りだった……

「あ、あれ？」

「どうしたんですか？」

「律がいない！」

さっきまで律が歩いていた場所に視線を戻せば、律の姿が忽然と消えていた。

しまった！　ちょっと眼を離した隙に見失っちゃった！

「早く捜さないといけませんね」

「そ、そうだな！」

「ところで誰を捜してるんですか？」

「誰って、律に決まってるだろ」

「あぁ、大丈夫ですよ澪。それならもう見つかりましたから」

「え？　どこ？」

「ここです」

「だからどこ？」

「だからここですよ澪」

「だからどこに律がいるんだよ？」

ここがどこだか分からないから、私の肩に手を置いている梓に振り返る。

「ここですよ～♪」

「……」

そして、絶句してしまった……

だって、そこにいたのは……

「り、律！？」

「イエ～ス♪」

両手で梓の口を塞ぎ、悪戯っ子みたいな笑みを浮かべた律がいつの間にかそこにいた。
それはまるで、気が付けばいる、さわ子先生みたいに。

そんな律に唯とムギは『りっちゃん!?』と、眼を点にして表情を驚愕に染めて、梓は『～！　～！』と、律に口を塞がれてるから何とか声を出そうと必死にもがいている。

「じゃ、じゃあ、私が今まで話してたのって……」

「私だよん♪」

パッと梓の口から両手を離した律は悪戯が成功したように笑い、私は律の特技にまんまと引っ掛かったことより、見つかってしまったことにがっくりとうなだれた。

「み～お～　なに人のあとつけたりしてるんだ～？」

「う、うぅ……」

腰に両手を当ててうっすらと笑う律に、私は尾行してしまった後ろめたさと見つかってしまったことが相俟って、一歩後退る。

「何してたのかにゃ～？」

「え、えっと……」

さながら、今の私は追い詰められた犯人で、律は追い詰めた探偵だ。本来なら逆のことを私がする筈だったのに、律の方が一枚上手だったみたいだ。

「り、律の恋人がちゃんとした人とか……　この眼で確かめようと思って……」

逃げ道はないと判断した私は、観念したように正直に白状する。すると、律はうっすらとした笑顔から、また悪戯っ子みたいな笑みに変えて口を開いた。

「彼氏？　はて？　何のことかな～？」

「え？」

ま、まさか……

「だって律先輩、彼氏がいるのかって訊かれても否定しなかったじゃないですか」

背後から抱き付かれる形で口を塞がれていた梓が、その時の拍子に崩れたマフラーを直しながら、私は勿論、唯もムギも思った疑問を代弁する。

「あぁ、あれは演技だよ演技！　澪の慌てる反応が面白くてさ～！」

え、演技……

「ジュリエットで鍛えた演技力！　中々のもんだったろ～！」

「え～！　りっちゃん嘘ついてたの～！」

「嘘じゃないって唯。演技だよ」

「私達を騙したんですから、嘘も演技も一緒です！」

「そんなに怒るなって、あ～ずさ」

「じゃあ、りっちゃんには彼氏さんいないの？」

「だからいないって」

律が私をからかうために恋人がいる演技をしていた……

あの思わせぶりな態度も、恥ずかしいそうに頬を紅く染めたのも、照れたように駆け出したのも、全て演技……

あぁ……　本当に咲也の言う通りだった……

律は……

「バ……！」

「ん？」

律は……！

「バカ律っ！」

ゴンッ！

「アイターッ！！」

律は演技をしていた！

モヤモヤとして、悶々と過ごした昨日を返せ！

律がいないと寂しいって悩んだ私は……！

恋人に嫉妬した私は……！

咲也に相談した私は……！

弱い私は……！

強くなろうと決意した私は……！

律に恋人がいても祝福しようとした私は……！

私は……！

「み、澪？」
「「澪ちゃん？」」
「澪先輩？」

色んな感情が溢れてくる。
喜怒哀楽の感情が鬩ぎ合う。

怒り？　悲しみ？

私は今、どんな顔をしている？

どうして律達は心配そうな顔をしているんだ？

思わず顔を背ける。
その先には硝子。
お店のショーケースに映る私の顔は、怒りと悲しみが交ざった複雑な表情だった。

「律先輩、澪先輩に謝ってください。律先輩に彼氏が出来たって知った澪先輩は色々ショックを受けてたんですから」

「そうだよりっちゃん。謝った方がいいよ」

「ゴメンねって、一言でいいから」

別に律に恋人がいても構わなかった。昨日、そう心に決意したから。
でも、私をからかうためにって……

そんなのあんまりだ……

「あ～っと……　澪？」

「……」

「ゴ、ゴメンな？」

「……」

チラリと律に視線を向ければ、演技じゃなくて本当に反省してるみたいで眉をハの字に下げている。

ズルいよ律……

そんな顔するのはズルい。反則だ。ルール違反だ。罰金ものだ。

「これからは何でも話すからさ……　だから……」

「……約束だぞ？」

「え？」

私は顔を背けたまま口を開いた。

「何でも話すって、それを約束出来るか？」

「も、勿論！　約束する！」

「じゃあ……」

ゆっくりと律に振り返って……

「許す」

私は笑った。

ホントに、しょうがないやつなんだ律は。

でも、それを許してしまう私もしょうがないやつなんだ。

「ゆ、唯……　何かキュンとこなかったか？」

「なった……　胸がキュンってなったよ……」

「ぽ～……」

「ムギ先輩！？」

「「萌え萌え～♪　キュン！」」

「って、唯先輩と律先輩は何やってるんですか！？」

「ぽ～……」

「あぁ……　サク先輩がいないからどうしていいか分かんない……」

「あれ？　そういえばサクは？」

「サッくんは興味ないって言って来なかったんだよ～……」

律も唯もムギも梓も、よく分からないけど騒いでいる。
そんな中、私は一人、咲也の言葉を思い出していた。

『…後、田井中には、足りない部分は互いに補え的な事も言ったが、それは依存とはわけが違ェぞ』

私の足りない部分は心の強さ。
それを律やみんなで補う。支え合う。

幾多の紆余曲折を経て、結局最後は上手く纏まった。

もしかしたら咲也は、こうなる事を見通していたのかもしれない。

以前、和は言っていた。咲也はカリスマ性があるって。

それは天性なんだ。

（凄いな……　咲也って……）

そんなことを思っていると、恍惚していたムギが我に返って律に尋

ねた。
ていうか、たまにムギってうっとりする時があるんだよな。なんでだろ？

「結局、りっちゃんが楽しそうにメールしてた相手って誰なの？」

「今からその人が来るから、見てのお楽しみだ！」

「もったいぶらないでくださいよ」

「そだよ～　早くサッくんに報告しなきゃイケないんだもん！」

「まぁ、実を言うとさ、今から会う人のこと、内緒にしたかったんだよな～」

「え？　なんで？」

と、私が尋ねれば、律は視線を唯達から私に移動させて苦笑いを浮かべた。

「だってその人、桜高の卒業生で、今は西女大に通ってるんだぜ。しかも私達とは顔見知りで、特に澪との関係が深い」

律の言葉を受けて、私も唯もムギも梓も驚愕していた。

私達と顔見知りで、桜高の卒業生で、今は私達が受験する予定の西

女大生って……

そして、私との関係が深い……

つまり、律のメールの相手は、年上で桜高を卒業した女性。

私達が面識ある先輩は一人ぐらいしかいない……

ま、まさか……

「だから、ホントはみんなが西女大入ってから、驚くのを期待してたんだけどな」

「それで内緒に？」

「そ！　って、噂をすれば本人の登場だ」

ムギの問い掛けに頷いた律は、私の背後に視線を向けて大きく手を振る。

「お待たせりっちゃん。あら？　みんな勢揃いなのね」

女性特有の高い声。

今年の学園祭の時に私に声援を送っていた声。

去年の二月、私達がまだ一年生だったあの時、生徒会室で初めて会話した声。

私の視線の先の唯とムギは『あっ！』と眼を見開く。
梓は『この人って……学園祭の時、澪先輩に声援送ってた人だ……じゃあサク先輩の言う通り……』と独り言を漏らしている。
そして、私は背後にいる人が予想と正しいのかを確認するために振り返ったのと、律がその人の名前を呼んだのは同時だったんだ。

「いえいえ、全然ですよ！　曽我部先輩！」

「そ、曽我部先輩……！」

私の予想通り、その人は去年の二月に出会い、私のファンクラブを創設していた曽我部　恵先輩だった……

「あ……」

私が少し呆然としていれば、曽我部先輩が私に視線を向けて小さく声をあげた。
曽我部先輩とこうして面と向かうのは講堂で先輩の卒業演奏をして以来。
咲也と和は今年の学園祭で曽我部先輩と会っていたみたいだけど、私や唯とムギは久し振りで、梓に至っては初対面だ。
しかも、曽我部先輩は……その……私のファンだから……なんて言うか……お互い緊張する……

「秋山さん……」

「は、はい！」

変な緊張感が周囲を取り巻く中、意を決したように曽我部先輩が口を開けば、恥ずかしながらも私は調子外れな声を発した。

「こうやって会うのは久し振りね。元気だった？」

「え？　あ、は、はい！」

あれ？　意外と普通だ。

てっきり、初めて会ったあの日みたいな反応するかと思ったのに……大人の貫禄なのかな？

「平沢さんと琴吹さんだったかしら？」

「「は、はい！」」

「あなた達も久し振りね。あ、確かあなたは学園祭で一緒にステージにいた……」

「あ、初めまして。中野　梓です」

「私は曽我部　恵。秋山さん達の後輩？」

「はい」

「めぐみん先輩！　あずにゃんは私達の可愛い後輩なんですよ～！」

「唯先輩！　こんなところで抱き付かないでくださいー！」

「クスッ　可愛がられてるみたいね。そういえば桐島君は？」

「咲也君は学校で受験勉強してます」

「それはそうと、曽我部先輩。持ってきてくれました？」

「勿論よりっちゃん。まぁ、立話もなんだからどこかお店に入りましょ」

なんて言うんだろう。目の前にいる曽我部先輩は、高校生の頃の曽我部先輩なんだけど、振る舞いにどこか余裕がある。

いきなり呼ばれた唯の『めぐみん先輩』に動じないし、梓に対する唯のスキンシップにも。

何より、私に対する態度にも余裕がある。

別にあの時みたいに握手とかサインを求めてほしいわけじゃないんだけど……

やっぱり大人の貫禄なのかも。それとも大学生になったら自然と大人な振る舞いが出来るのかな？

あ、でも、さわ子先生はたまにびっくりするような事してくるから、

一概にそうとは決め付けられないな……

まぁ、なんにせよ、変に緊張しないで済んだのは良かった。

「み～お～！　何やってんだ～？　行くぞ～！」

「あ、うん！」

そんな結論に辿り着いた矢先に、律がコートのポケットに両手を入れながら私を促す。それに反応した私は一度頷いて足を動かした。

――――――――

私達は近くにあった全国にチェーン展開しているドーナツ店に入店した。

彩り鮮やかな様々なドーナツを曽我部先輩が奢ってくれて、私は又も大人な貫禄を目の当たりにした。

ちなみに律が曽我部先輩と仲良くなったのは先月、地元の友達と遊ぶために帰郷していた曽我部先輩と偶然再会して会話が弾んで、それから意気投合したからみたいだ。

六人掛けのテーブルに腰を降ろして、みんな好きなドーナツを手に取った矢先に、曽我部先輩が今日律と待ち合わせしていた本題を切り出した。

「はい、りっちゃん。私の後輩から貰った去年の西女大の入試問題と、私のお古の過去問題集」

「おー！　ありがとうございます！」

「律、今日は曽我部先輩にそれ貰う約束だったのか？」

「そうそう！　みんなにも貸してやるよ！」

「あれ？　そういうのってみなさん既に持ってませんでしたか？」

「甘いな梓！　あれば学校が用意した参考書だ！　即ち！　西女大の過去問題は載ってない！」

「でも、澪先輩もムギ先輩も西女大の過去問題が載ってる別の参考書持ってましたよ」

「りっちゃん！　私ももう買ってるよ！」

「ていうか、今から準備してたら遅いぐらいだぞ」

「あれぇ？　褒めてもらう予定が……って、唯」

「ほい？」

「お前は絶対買ってないだろ」

「ごめんなさい！　見栄張りました！　私にも貸してくださいな！」

「はぁ…」

受験対策が遅い律と、見栄を張った唯に私は咲也みたいな、ため息を一つついた。

それから、私達は西女大二年生の曽我部先輩に色々と話を聞いた。

私とムギは入試はどんな問題があったのかとか、西女大はどんな雰囲気の大学なのかとかを。

律は学生寮の居心地や、西女大にも軽音部はあるのかとかを。

唯は寮のご飯は美味しいのかを重点的に質問していた。

その輪に入れない梓は、少し寂し気にドーナツをチマチマと食べている。

あらかた質問が済んだら、今度は曽我部先輩から一つの質問が飛び出た。

それは、咲也はどこの大学に進学予定なのかというもの。

律が緑ヶ丘大学だと答えている隣で唯がドーナツを食べていた口を止めて、寂しそうに顔を曇らせているのを見逃さなかった。

私と律と唯とムギは合格したら一緒に西女大のキャンパスを歩く事が出来る。

でも、咲也は違う大学のキャンパスを歩くんだ。

そして当然梓は、まだ桜高に残る。

今まで一緒に過ごしてきた私達六人は、来年の春には別々になる。

もしかしたら梓は西女大に進学するかもしれない。

でも咲也は……

そう考えると寂しいな……

暗くなっちゃいけない。咲也は言ってたじゃないか、今回の一件で受験に支障を来したらコトだって。

だから、私は小さくかぶりを振った。今は考えても仕方がないと。

「あ、曽我部先輩。これつまらない物ですが、細やかなお礼です」

「あら？　なになに？」

まだまだ話し足りないけど、外は既に茜色に染まっている。

そろそろ帰ろうかとした時に、律が曽我部先輩に、こっそりと一枚の紙を渡していた。

（なんだろう？）

私の座っている位置からはよく見えない。だから疑問を感じた。

「りっちゃ～ん、何それ～？」

「うわっ！　バ、バカ！　唯！」

どうやら唯も気になったみたいで、律の背中にのしかかって手元を覗き込む。

突然の事に慌てた律は、その弾みで曽我部先輩に渡そうとしていたそれを手放してしまい、紙は大きく宙を舞った。

そして、そのままヒラヒラと偶然にも私の目の前に音も無く降りてきた。

「写真？」

よく見れば、紙だと思っていたそれは写真で、

「なっ！？」

そこに写っているのは、私が部室でケーキを食べている写真だった。

そんな写真にヒドく驚いた後に、私はユラリと立ち上がった。

「りーつー……」

「お、落ち着け澪！　曽我部先輩には澪の写真あげたら喜んでくれるって和が言うから！」

「いつの間にこんな写真撮ったんだ！」

「こ、この前！　さわちゃんが澪に着せる衣装の研究とか言ってこっそり撮ってたのを思い出して、さわちゃんに譲ってもらったんだよ！　だ、だから私は悪くない！　さわちゃんと和が悪い！」

「うるさい！　バカ律！」

ゴンッ！

「アイターッ！！」

「この写真の秋山さん、いい顔してるわね～」

「私もそう思います♪」

「ムギ先輩まで……」

「貰えるんなら有り難く貰っておくね♪」

「曽我部先輩も嬉しそうにしないでくださーいっ！」

「ふぉ！？　澪ちゃんがまた叫んだ！」

――――――――――

現在時刻午後五時一分。

結局、曽我部先輩は私の写真を鞄に大事に仕舞って『受験頑張ってね』と、言って帰ってしまった。

とりあえず私達も帰宅することにして、唯とムギと梓と別れた私と律は、いつもの帰り道を歩いている。

「み、澪さん？」

「なに？」

出来るだけ素っ気無く答える。

「ま、まだ怒ってらっしゃいます？」

「らっしゃいます！」

恐る恐る私の顔を覗き込んでくる律に、勝手に写真を曽我部先輩に渡そうとした事に、怒ってるとアピールするようにプイッとそっぽを向く。

「ゴ、ゴメンってば～！　もうこんなことしないからさ～！」

「大体律が、恋人がいるみたいな紛らわしい演技するのが悪い」

「そ、それもゴメン……」

また、そんな顔する……

「でもさ、私があんな演技したのって別に理由があるんだよ……」

「私をからかう目的だったんだろ」

「それもあるけど、前提はサクと唯なんだよ」

「え？」

思いもしなかった発言に、私は立ち止まって律に顔を向けた。
そして律は一歩先で立ち止まって私に振り返った。

「ほら、唯ってサクのこと好きじゃんか。だから私に彼氏が～とかなれば刺激を受けた唯かサクの仲が発展するんじゃないかなって思ってたんだけど……」

「え？」

「唯が言ってたんだけど、サクは興味がないから今日いなかったんだろ？　てことは失敗だったな～……」

「ちょっ！　ちょっと待て！」

「ん？」

落ち着け私！

律は何を言った？
唯が咲也のことを好き？
それって友達とかの意味？
い、いや！　仲が発展とか言ってたから……！
も、もしかして……！

「ゆ、唯は咲也が好きなのか！？」

「多分な。てか、気付かなかったのか？」

「だ、だって！」

「唯の態度見たら分かるじゃん。多分ムギと梓も気付いてるぞ。後、さわちゃんも」

「えぇっ！？」

「ムギと梓はたまに唯とサクを見てるし、さわちゃんは～……いつだったけ？　あ！　二学期が始まって軽音部の学園祭の衣装の話になった時、ムギとサクが協力した衣装だってさわちゃんが言ったら、唯が慌ててたの覚えてないか？」

「お、覚えてない……」

「その時さ、さわちゃんが楽しそうにサクに何か言ってたんだよ」

「そ、それがさわ子先生が気付いた瞬間？」

「多分ね」

「わ、私だけ知らなかったんだ……」

「和も怪しいけど、その内気付くんじゃないか？」

がっくりとうなだれる私に律はフォローみたいな言葉を掛けてくれるけど、あんまりフォローになってないぞ……

「じゃ、じゃあ！　唯と咲也自身はどうなんだ！？」

「唯がサクのこと好きなのは間違いないと思うけど、サクはな～んにもだ。サクって鈍感じゃないと思うんだけどな～」

「そ、そうなんだ……」

知らなかった。

唯が咲也のこと好きだなんて。

でも、言われてみれば兆しはあった。

唯って何かと咲也のそばにいたがるし、一緒に行動をしたがる。

咲也と会話をしている唯は大体いつも幸せそうな笑顔だ。

修学旅行の班決めの時、咲也と一緒の班になれなくて唯は落ち込んでいた。

それだけじゃない。

今年の春に咲也と同じクラスになれて凄く嬉しそうに飛び跳ねてい

た。

あぁ……　何だ……
思い返せば何て事はない。
こんなにも唯は……

「あ！　も、もしかして澪って……！」

「ん？」

「サ、サクのこと好きだったり……？」

唯は咲也が大好きなんだ。
常にそばにいたいんだな。

「そんなんじゃないよ。咲也のことは確かに好きだけど」

「えぇっ！？」

「だから違うって。恋愛とかじゃくて友達としてだよ。律だってそうなんだろ？」

「お、おう！　てか、また紛らわしいことするなよ～！」

「また？」

だったら私は見守ろう。
唯と咲也が結ばれるように。

「去年の十二月！　私にラブレターみたいな手紙送ったじゃんか！」

「あれは手紙じゃなくて歌詞だよ」

「分かってるよ！　あー！　もー！　また思い出しちゃったじゃんか！」

昨日は一人だった帰り道。
今日は律がいる。
曇天続きだった空は、綺麗な夕暮れだ。

「何顔真っ赤にしてるんだ」

「澪のせいだろ！　コンニャロー！」

昨日と今日の二日間はホントに色々あって、私は深く考えさせられた。

それを今後の成長の糧にしたいなって思いながら、私は今日も律と帰り道を歩いていった。

「クスッ　そういう言葉遣い直さないと、いつまで経っても恋人なんて出来ないぞ」

「私はアラフォーまでになんとかするからいいんだよ」

「随分目標低いな……」

「うっ……！　それ聡にも言われた……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

「『ということで、めぐみん先輩がりっちゃんのメール相手でした！』」

「あっそ……」

部室で一人黙々と二時間程の受験勉強を実施し、帰路につく。

相変わらず冬の風は冷たく、愚痴りたくなる。

マフラーを鼻頭まで上げてパーカーのポッケに左手を突っ込んで限られた最善の防寒対策を。

しかし、アコギを持つ右手がかじかんでいく。

暖まった左手にアコギを持ち替えようとした瞬間、ケータイが震え

た。

気怠さを感じながらケータイをブレザーの内ポッケから取り出せば、【平沢　唯】の三文字がディスプレイ画面に表示されていた。

出れば、何が嬉しいのか弾んだ声で、田井中を尾行した結果を告げてきた。

言葉足らずだが、足を動かしつつ何とかその内容を理解し、全く興味がないので適当に受け流せば目の前には自宅が。

「…そろそろ切るぞ」

「『え～！　もうちょっと話したいな～』」

「…断る。こちとらさみぃんだよ……」

「『う～ん……　分かった！　じゃあまた明日ね～』」

それに対して何を言うわけでもなく、早急に通話を切り、厳しい寒気から早々と退避するべく玄関の扉を開けた。

（ん？）

帰宅の合図を告げずに中に入れば、玄関には見覚えのない靴が二足。

玄関はお袋が常に整然と整理してあることから察するに、どうやら来客が訪問しているらしい。

大方、親父の仕事関係の連中だろうと判断し、俺は自室へ向かう。

「あら、咲也。帰ってるんならそう言いなさいよ」

その途中、リビングから空になった二つの湯飲みをトレイの乗せ、両手で持ったお袋が現われ遭遇した。

「…誰か来てんのか？」

「懐かしい人がね。ほら、アンタも挨拶してきなさい」

「…ダリィから来世でな」

「無理矢理な理屈を捏ねないの」

トレイを片手持ちにし、器用にリビングの扉を開けたお袋が軽く俺の背中を押す。

そして、リビングにいた三人の人物達が一斉に俺に顔を向けた。

「お、帰ったか咲也」

一人は親父。

「あら、咲也君！　男前になったわね！」

「やぁ、久し振りだね咲也君。ソイツの調子はどうだい？」

残りの二人は、俺の記憶が正しければ伯母と伯父だった。

「……」

何故、伯父と伯母が我が家にいるのかが理解出来ない俺は、黙り込んで疑問の視線を親父に向けるしか手立てはなかった。

第百三十五話（後書き）

りっちゃん乙女編はこれにて完結です。

前半の澪の心情は、作者がずっとやりたかった事だったりします。

それから、更新遅れて申し訳ありませんでした。

第百三十六話（前書き）

受験編その三です。

第百三十六話

サンタが空想上の人物だと知ったのは、まだ幼稚園に通っていた頃だった。

クリスマスの夜。

幼かった俺は、枕元から聞こえた物音で眼を覚ました。

紅い服に白い付け髭という何とも在り来たりなサンタの格好をした親父が、やけにデカいプレゼントを今、正に枕元に置こうとしている瞬間にバッチリと眼が合った。

親父は頑なに自分はサンタだと豪語していたが、内心は焦っていたんだろう。翌日の朝にお袋に命ぜられ親父を起こしにいけば、付け髭を装着したまま鼾をかいていた。

子供ながらに見てはいけないものを見てしまった気がし、幻滅したのを覚えている。

幼ければ幼い程、子供心は純真無垢だ。何でも信じてしまう。

世界征服を目論む悪の組織。正義のヒーロー。悪人。怪人。怪獣。怪物。妖怪。ドッペルゲンガー。スーパー兵器。超能力。魔法。ＵＦＯ。異星人。宇宙人。ｅｔｃ.

日々を過ごし、歳を重ねる毎にそれらの存在は実在せずに、おとぎ話や空想上の産物だと思い知る。

俺は実際にこの眼で見、この耳で訊、様々な観点から考察した物事しか信じない。

故に絵空事なんぞ、信ずるに値しない。

現実主義者の俺からすれば理論の筋が通ってない事象は有り得ない。これはあくまで十八年と約十二ヵ月生きてきた俺の持論だが、あながち間違ってもいないだろう。

しかし現在。俺の目の前で微笑を浮かべた眼鏡を掛けた細身の伯父は、現実主義者の俺にとっては到底信じられずに、有り得ない事を告げてきた。

「まぁ、無理強いはしないさ。でもね咲也君。その時が訪れたんだとも考えはくれないかい？」

「……」

「確固たる理論も論理もあったものじゃないんだけど、やがては次の主に譲渡しなければならないんだ。僕が祖父から譲り受けたように。僕が咲也君に渡したように」

「…ンで今度は俺の番ってか」

「そうだね。咲也君がソイツを手放す番だ」

微笑を浮かべたままの伯父から、事の当事であるソイツに視線を向ければ部屋の灯が反射して、まるで俺の視線に呼応するようにキラリと光った。

何故、俺と伯父はこんな会話をしているのかを説明するには、もう

一つの『何故』を紐解かなければならないだろう。

その『何故』とは、今から約三時間前に溯る。

お袋に背中を押されるがままにリビングに足を踏み込めば、親父と伯父と伯母がテーブルを囲んでいた。

思わぬ来客に眉を顰めて親父に疑問の視線を向ければ、『何故ウチに晃教と春未さんがいるんだ？　みたいな顔してるな』という相変わらずの人の表情だけで思考を読み取るプライバシーの侵害も甚だしい傍迷惑且つ妙なスキルを発動させやがった。

そんな親父に『本当に相変わらずだね兄さんは。昔から勘だけは鋭いんだからな』と苦笑いを見せては、俺に視線を向けた。

「咲也君。僕と春未がここに来た理由は、改めて挨拶をしておこうと思ってね」

「…挨拶？」

一体全体何に対しての挨拶なのか皆目見当が付かず、リビングの扉に突っ立ったまま復唱する。

「兄さんかお義姉さんから聞いてると思うけど、来年の春に拓也を預かってもらうから、その挨拶だよ」

「……」

当たり前のように告げた伯父の寝耳に水な発言に思わず絶句。
久し振りに聞いた従兄弟の名前よりも、『預かる』ということは、従兄弟が我が家に居候することに、修司曰くの鋼のハートを持つ俺でも珍しく若干驚いた。

「あれ？　もしかして聞いてないのかい？」

初耳だと表情に出てしまったらしく、伯父と伯母が揃って首を傾げる。

「もしかするも何も初耳だ……」

「に、兄さん……！」

俺のまさかの初耳返答に伯父の表情は驚愕の血相に染め上がり、狼狽しつつ親父に顔を向けた。

「いや、俺はてっきり夏希が話していたんだとばかり……」

伯父の視線から逃れる親父は冷や汗を流している。そんな時に五人分の湯飲みを持ってきたお袋が再度リビングに姿を表した途端に、責任の転嫁を試みる。

「何言ってるのよ。貴教さんが咲也に拓也君の事を話すって言ってたじゃない」

「ぐっ……」

テーブルに湯飲みを置きながらの言葉に、親父は言葉を詰まらせる。どうやらお袋の発言は図星らしい。

「まぁ……なんだ……咲也」

「あ？」

「つまり、そういう事だ」

「どういう事だ」

俺を納得させようとしたんだろうが、道理や条理がかなり抜け落ちているので間髪を入れずにツッコむ。

「…説明しろ。何故アイツがここに居候らしい形で居着くのかを」

「ちょっと咲也。そんな言い方は失礼でしょ」

「いえいえ、いいんですよ夏希さん。元はと言えば私達の勝手なお願いなんですし、咲也君が反発するのも当然です」

両手を腰に当てるお袋が叱責してくるが、伯母が椅子から立ち上がり宥めようとお袋の肩に手を置く。

「咲也」

「あ？」

「拓也君の件を説明するから、とりあえずお前は着替えてきなさい」

「ちゃんと咲也君にも理解してもらいたいからね」

「……」

着替え云々よりも早急に事の顛末を説明してほしいが、それを言えば今度はお袋から叱責ではなく叱咤されそうだと直感した俺は渋々踵を返して、自室へ向かう。

アコギとテレキャスをギターケースから取り出してスタンドにそれぞれ立て掛ける。制服からラフな部屋着に着替え、再度リビングの扉を開けば、親父達はテーブルを囲んでいた。

そして親父がお袋の隣を指差す。

「……」

暗に『そこに座れ』という意図を汲み取り、椅子を引いて腰を降ろしては腕を組む。

対面には伯父と伯母。隣にはお袋。そして上座には親父。
さながら俺達は弁護人で、伯父達は検事。親父は裁判官のような構図だ。
そんな独特でやけに緊張感満載な空気が充満するリビングで最初の口を開いたのは伯父だった。

「まずは、僕達の事情から話した方が良さそうだね」

クイッと眼鏡を上げ、両手を組む伯父。

「七年前に僕らが九州に引っ越したのは覚えているかい？」

「…ギリギリで」

7年前の２００３年。
この年の夏に二つの別れがあった。

一つは大野との別れ。
鮮明には記憶していないが、親の都合か大人の事情で何処かの街に転校していった。
当時、小学五年（十一歳）の俺と修司は、大野とよくつるんでいた。
そのため、アイツが転校すると知った時、修司はそれはそれはショックを受けていた。俺はどんなリアクションをしたのか覚えてない

が、もしかすれば俺も多少なりのショックを受けていたのかもしれない。
まぁ、去年の大晦日のライブハウスにて意外な形で再会したんだが。
修司に至っては演芸大会で大野と共に恥を晒していたが。

そしてもう一つの別れは言わずとも従兄弟だ。

当時のアイツは八歳で小学二年。まだまだガキだったアイツは俺と離れたくないと、延々泣き喚いては伯父や伯母、親父とお袋を困らせていたのが深く印象に残っている。

無論、小学生の身分でケータイという便利ツールを持ってない俺は、従兄弟と連絡は取れずに疎遠な関係になり、今に至る。
時折、伯父が我が家に連絡を入れていたようだが、対処するのは決まって親父かお袋であり、こうして伯父と伯母と面と向かうのは実に七年ぶりとなる。

「僕の仕事はサラリーマンなんだけど、商談や事業の折に触れる度に全国を転勤しているんだ」

「…所謂転勤族ってやつか？」

「一言で言えばね。九州から、四国、沖縄、関西と転勤していって今は北海道に居を構えている」

その言葉を聞いて内心で『なるほど』と合点をついていた。
九州へ転勤していったのは覚えていたが、全国を行脚していのは初耳だった。

妙な事に数年に一度、伯父家族から様々な特産品が送られてきていた。
やれ博多明太子、やれ讃岐うどん、やれシーサーの置物、やれ冷凍たこ焼き、やれジンギスカンセット等々。
思えば関東に住んでいるのに地方の特色を味わえたのは、そんな理由だったのか、と。

「それで、来年の春頃からまた転勤しなきゃいけなくなっちゃってね」

「今度はアメリカに行くの。今まで家族全員一緒だったけど、さすがに海外はって考えたのよ」

伯父の言葉を引き継ぐように、伯母が俺を見ながら言う。

「勿論、今回も私は同伴するけど問題は拓也なのよ。あの子は来年で高校生になるから、出来れば日本の高校に通わせたいの」

「そこで白羽の矢が立ったのは俺達だったというわけだ」

「さっきも少し話したんだけど、拓也君は桜高を受験予定なんですって。だから拓也君がウチに下宿するのは理にかなってるのよ」

別段、取り立ててアイツがウチに居候なり下宿なり居着くなりの事は構わない。

伯母は俺が反発していると言っていたが、特にそういう事でもない。
言いたい事は、アイツが何故ウチに居着くのかの顛末の説明が俺の耳に入ってこず、勝手に事を運んでいたのが若干の狼藉を感じたということだ。
なので、最後に言葉を発したお袋の説明で充足だった。

「はぁ……」

とりあえず、何となくにため息一つを漏らす。
そして椅子の背もたれに文字通り背もたれる。

「さてと、咲也が納得したみたいだからご飯を作るわね」

「え？　あの、お義姉さん？」

少しばかり口元に笑みを携えたお袋がキッチンに立てば、伯父の眼鏡の奥の瞳は困惑で染まる。

「いいんだ晃教。咲也がこういう態度を取った時は、諦めた時か呆れた時。それか納得した時だ。この場合は後者だろう。なぁ、咲也？」

「さあな……」

お袋同様に口元に笑みを携えた親父が視線を俺に向けるが、一言そう返すに止め、テレビを点けるべく俺は立ち上がった。

「夏希さん、私も手伝うわ」

「あら、ありがとう春未さん」

「女性は逞しいな。さて、晩メシが出来るまで俺は執筆作業に戻るとしよう」

「あ、兄さんまで……　咲也君。本当に拓也の事いいのかい？」

「…今更俺が抗ったところで、アイツの件が変更にはならねェだろ。そもそも来年の春には俺は家を出ている。アイツが来たところで俺には何の支障はねェ」

背に掛かる伯父の問い掛けに、テレビを眺めながら答える。

「あぁ、咲也君は大学受験を控えているんだったね。兄さんとお義姉さんから聞いたよ」

「ふーん……」

「あはは……　相変わらずの淡泊だね……」

その後、お袋と伯母の共作である晩メシのカレーを胃に納めていき、

親父達は久々の再会に昔話に花を咲かせる。
俺はといえばその輪に加わる事なく、晩メシを早々と平らげ、自室へ退散した。

そして机に向かい受験勉強を二時間程敢行し、小休憩という息抜きに久し振りにアコギでも弾こうかとネックを掴んだ午後八時五十二分。
自室の扉がノックされた。

学校の授業、部室での勉強、今まで行っていた勉強で若干気怠さを感じる身体を駆使し、扉を開ければ、

「やぁ咲也君。いきなりすまないね」

と、やや酒臭い伯父が、微笑を浮かべてそこにいた。

「…親父と飲んだみてェだな」

「ついつい、ね。有休を取ってまでコッチに来たんだ。久し振りに会った兄さんと自然と会話が弾んじゃったよ」

「…で、何用だ？」

「あぁ、うん。ちょっと気になる事があって」

「…気になる事？」

「うん。勉強の邪魔じゃなかったら、咲也君に伝えなきゃならない事なんだ」

酔ってはいないんだろう。口調はしっかりとしている。顔は赤ら顔だが、そう告げた表情は至って真面目なものだ。

「……」

纏う雰囲気から重要な事だと肌で感じた俺は、扉からベッドに移動してそのままベッドに腰掛ける。

伯父は『お邪魔します』と一言告げては室内に足を踏み入れ、扉を閉める。

「…先に言っとくが近況報告とかアイツの話はナシだ。回りくどいのは時間の無駄だからな」

「そうだね。咲也君の受験勉強の邪魔をしたくないから」

伯父はギタースタンドに立て掛けられてあるアコギの横に移動すると、ズレやすいのか、一度眼鏡をクイッと上げた後に口を開いた。

「時期がきたんだと思う」

「…回りくどいのはナシっつったろ。単刀直入に言え」

しかし、俺の言葉を聞いているのか聞いていないのか不明な伯父は、そのまま続ける。

「覚えているかな？　僕が君にコイツを渡した時の事を」

伯父の視線の先にはアコギ。俺もつられて見れば、何故か六弦だけが切れていた。

「咲也君にも担ってほしい。コイツが誰かの手に渡るのを。コイツは一箇所に止まるのが苦手だって事を」

「……」

聞き覚えがある言葉……いや、聞いた事がある言葉だった。

なので、脳の記憶を司る部屋を漁ってみる。

すると、

『コイツはね、僕の手に渡る前は僕のお祖父ちゃん……咲也君にとってはひいお祖父ちゃんが持ってたんだよ』

『え？』

『その前は別の誰か……そのまた前は別の誰か……そうやってコイ

ツは色んな人の手に渡り、今はここにいる…』

『……』

『咲也君もその誰かを担ってくれるかい？　いつか誰かにコイツを渡してくれるかい？』

『おれがずっと持ってちゃダメなのか？』

『もしかしたらの話だよ。ダメじゃないんだけどね、どうもコイツは一箇所に止まるのが苦手みたいだ』

『ふーん……』

『それでいいなら、君にコイツをあげよう』

『じゃあ、もらう』

『ははは！　随分と淡泊に育ったもんだ兄さんの息子は』

そこにはあった。アコギを譲り受けた時、ガキの俺と伯父との会話が。

「…あの当時はガキで特に深くは考えなかったが、今の俺にしてみれば到底理解しがてェな」

たった今、鮮明に思い出したあの時の内容の疑問を伯父にぶつけれ

ば、柔和な笑みを向けてきた。

「それはそうだろうね。僕だって祖父から言われた時は信じられなかったさ。でもね？」

そこで一旦口を閉ざした伯父は、心なしか寂し気な表情に変わる。

「ある時、僕がコイツを弾こうとしたら不自然に六弦だけが切れてしまったんだ」

「……」

ピクリと片眉が動いた。

「咲也君も最近、そんな経験があった筈だ。現に今、コイツの六弦は切れている」

確かにあった。

あの時は、不思議は不可思議だから不思議だと無理矢理納得したが、到底納得出来る事ではない。

田井中は言っていた。

呪われているのではないかと。

そんな奇怪現象は現実的に有り得ずに、ブリッジ部の不備かと思ったが、そんな故障は見当たらなかった。

故に、六弦だけが切れる現象は不思議は不可思議だから不思議のまま、今日まで過ごしてきた。

「六弦だけ切れてしまった日から、どうもコイツは駄々を捏ねた子供のように一定した音程を奏でてはくれなかったんだ。それからは、殆どコイツを弾く事はなくなって、たまにメンテナンスをしてやるしか、コイツの存在意義はなくなった」

「……」

「だから君に託した。コイツが再び音を奏でられるように」

「……」

「僕が祖父からコイツを任せられた時から駄々を捏ねるまでの期間は十年。咲也君の手に渡ったのは今年で十年」

伯父が微笑を浮かべた。

「だから……」

悲壮交じりで儚げな微笑を。

「時期がきたんだ」

「……」

初めて手にしたギターはあのアコースティックギター。
テレキャスを入手するまで、アコースティックギター一本で一人、
黙々と音を奏でていった。

「…まるでアコギに意思があるみてェな口振りだな」

「あるんじゃないのかな」

「あン？」

愛着はある。当然だろう。
平沢がレスポールに名を与える程に溺愛しているまでの度合いとは
言わないが、少なくともアコースティックギターにはかなりの愛着
はある。
それは、当然で、必然的だ。

「だって、長いこと人に大切に大事に扱われて、今も現役なんて、
コイツが今まで手に渡ってきた人々の愛情を受けた証拠だと僕は思
うんだ」

「…そんなもんは非現実的だ。夢物語じゃねェんだし」

そんな愛着があるアコースティックギターを、はいそうですかと納
得して手放すなんぞ出来る筈はない。

「例え夢物語でも、愛情を受けた物は意思を持ってもおかしくはないんだと思う。玩具が自我意識を持って動く映画があるだろう？あんな感じに」

「…映画は人が製作した作り物だ。現実じゃない」

しかし、六弦だけが切れてしまった事が俺の心を揺さぶる。

伯父が話す内容は、現実主義者の俺からすればアホらしい内容なのだが、仮に真実なら、このまま俺の手元にアコースティックギターを置いておくわけにはいかなくなる。

「まぁ、無理強いはしないさ。でもね咲也君。その時が訪れたんだとも考えはくれないかい？」

「……」

「確固たる理論も論理もあったものじゃないんだけど、やがては次の主に譲渡しなければならないんだ。僕が祖父から譲り受けたように。僕が咲也君に渡したように」

「…ンで今度は俺の番ってか」

「そうだね。咲也君がソイツを手放す番だ」

余りにも現実と掛け離れ過ぎて思わず頭痛を覚える。

額に右手を当てれば、『生』という体温を感じる。
それは俺が生きている証拠だ。

「伝えたい事は以上だよ」

右手を動かし視界を開けば、伯父は扉に足を動かしていた。

「受験勉強の邪魔にならない程度にソイツの事を考えてやってよ。
次に担う相手の事や色々とね」

「……」

俺にそう微笑んだ伯父は、扉を開けてその先へと姿を消し去っていった。

「言うだけ言いやがって……」

ベッドに倒れ込んで、ため息一つ。
そして、そのまま眼を閉じて、しばし瞑想に耽る。

六弦が切れてからも問題なく演奏は出来ていた。
何よりの証拠が学園祭のラストライブだ。

俺はアコースティックギターを講堂のステージ上で奏でていた。

しかし、学園祭が終わってからというもの、全くと言っていい程アコースティックギターを奏でてはいなかった。

その間が、伯父曰くの駄々を捏ねた子供状態に陥ったのかもしれない。

そして先程、俺はアコースティックギターのネックを掴んだ。

故に今、六弦だけが切れてしまったのか？

そうならば、もうお手上げだった……

「……」

ベッドから身体を起こし、アコースティックギターに視線を向ける。

意思があるのならば、何かしらの意思表示が起こるだろうと。

「アホらしい……」

起こる筈はなかった。

ただそこに存在しているだけだ。

「……」

おもむろにベッドから立ち上がり、アコースティックギターの前に腰を降ろし、そのボディに触れる。
……生きている体温は感じられず、ヒンヤリと冷たかった。
だが、何故か、伯父の言葉の信憑性も何もあったものでもないのだが、眼に見えない暖かみを感じてしまった。

「はぁ……」

と、深いため息を吐き出して、今度は机の椅子に座る。
言ってしまえば、このアコースティックギターはコンクリートのように無機質。
ただの楽器に過ぎない。
意思なんぞある筈はない。
夢物語でおとぎ話で有り得ない話だ。
だが、感じてしまった。熱を。鼓動を。アコースティックギター…
…アコギの存在意義を。担う意味を。

「やりゃいいんだろうが……」

担う意味は継承。そこで終わらせるなという灯火。不変の……意思。

「軽音部……」

認めたわけではない。だが、見過ごすわけにはいかない。
即ち、アコギは俺の元から誰かの元に旅立たせなければならない。

その旅先は軽音部が一番だろう。あそこは音で溢れている。

そして担う相手はアイツが適任。
俺達は引退した身。
軽音部に残り、俺達の後を継承するアイツが最もな人材だ。

（まぁ、今はまだ……）

そんなことを思い、思考を切り替えた俺は受験勉強を再開するべく、
シャーペンを手に取った。

――――――――――

翌日の朝。
朝メシを食した後に、伯父と伯母は北海道へ帰っていった。
何でも留守番を任せて従兄弟が心配だからと、親心が働いたという。

ちなみに伯父と伯母の帰り際、駅へ輸送するタクシーに乗り込んだ
伯父が、『昨日の今日で早いけど決心はついたかい？』と尋ねてき
たので無言で頷けば、『ありがとう』と謝礼を送られた。

タクシーを見送った後、制服に着替え、相も変わらずの寒気にうんざりしつつ桜高に登校し、テレキャスを置くために部室に行けば、何故か部員達が勢揃いしていた。

「あ、サク先輩。おはようございます」

「おはよ～　サッくん」

「…お前ら何してんだ？」

「トンちゃんに朝ご飯をあげにきたの～♪」

「登校したら偶然みんなと会って。そのまま一緒に部室に来たんだ」

「あっそ……」

「自分で聞いといて興味なさそうにするなよな……」

何やら田井中が呆れているが華麗にスルーし、テレキャスをギタースタンドに立て掛ける。

「あれ？　サッくん」

「サッくん言うなっつってんだろうが……」

「アコギー子は？」

「唯先輩……それってもしかして……」

「サッくんのもう一つのギターって、アコースティックギターって言うんでしょ？　だからアコギー子！　昨日思い付いたんだよ～」

「勝手な名称付けんな……」

「でも可愛いね♪　アコギー子って♪」

「だよね～♪」

「相変わらずズレてるな～……　唯とムギは……」

「それで咲也。アコギはどうしたんだ？」

「アコギなら駄々捏ねてへそ曲げてやがる……」

「え？　どういうことですか？」

「…そのままの意味だ」

「サク先輩ってたまに意味が分からないこと言いますよね……」

「…お前はたまに猫になるがな」

「やっぱり意味不明です……」

「…頭触ってみろ」

「へ？　ニャッ！？」

「やっぱり梓ちゃんにはネコ耳ね！」

「さわちゃん！？　だからいつの間にいるんだよ！」

「さっきからよ？　それよりそのネコ耳は昨日見つけた新しいネコ耳！　どう梓ちゃん？　付け心地は？」

「そんなことよりこんなの私に付けないでくださいっ！」

「あずにゃん可愛いー！」

「ちょっと唯先輩！　離れてください！」

「やれやれ。朝から騒がしいな」

「…その台詞、昨日のお前にぶつけてやりてェな」

「うっ……！」

本日十一月二十六日金曜日。

この日から俺は来たるその日まで、アコギを持って登校することを止めた。

それにより塞がれていた右手は、厳しい寒気に凍えてかじかむことはなくなり、生きている暖かな体温を右手に宿すことに。

「ほらみんな。遊んでないで、早く教室に行っちゃいなさい」

「いやいや、さわちゃんが言うか？」

「事の発端はアンタだろ……」

「ほら唯、教室行くから梓から離れろ」

「え～　あずにゃん暖かいんだよ澪ちゃん。一家に一台は欲しいよね～」

「私も欲しい～♪」

「ムギ先輩まで！？」

「…アホばっかだ」

「サラッと言うなよサク……」

第百三十六話（後書き）

またしても更新が遅れて申し訳ございませんでした。

プライベートがかなりごたついてしまいして……

第百三十七話（前書き）

受験編その四です。

第百三十七話

月日は２０１０年の最後を飾る１２月に移り変わり、また一段と寒気が厳しさを増した気がした。
ここ最近の朝は目覚ましい程目覚まし時計がその役割を果たすことなく、余りの寒さで自然と覚醒してしまう。
その目覚めは決して爽やかなものではなく、どちらかといえば日々の受験勉強の疲労を身体に残したままという何ともマイナスなものだ。

将来に何の役にも立ちそうもない公式や歴史の年表や漢文や詩文や単語等々を覚えたり理解する日々が毎日続き、ぶっちゃけると嫌になる。
幾ら大学進学のためとはいえ、だ。

しかも、その大学でこれと言ってやりたい事も目標もなく、『何となく』で進学しようとしている。

『何故こんなにもやりたくもない勉強をやっている？』

自然とこんな疑問を抱いてしまう。

大学卒業という肩書きがあれば就職に有利。箔が付く。

果たしてそうなのか？
……そうなのかもしれない。あくまで『かもしれない』概念の範疇だが……

そんな俺の志向の思考が些か受験ノイローゼチックに陥りそうにな

るが、既に願書を提出しているので今更大学進学を変更しようとも無理だと自身の精神奥深くに擦り込み、日々を過ごしていく。

ふと何気なく空を見上げれば、こんな朝っぱらから飛行機が飛行している。
それを見て、そういえば、と思った。

パスポートまで収得したが、結局卒業旅行は何処に行くのだろうか。
本気で行く気はあるのだろうか。
そもそも俺も同伴しなければならないのだろうか。
旅費は？　日程は？

（計画倒れになりそうだ……）

そんなことを思い、色濃い白色のため息を一つ吐き出して、止まっていた歩みを再開させた。

本日十二月十六日木曜日。

街中には無数のイルミネーションが来たる聖なる日を今か今かと待ちわびるガキの表情のようにキラキラと輝く。昨日から街頭では聖なる日を謳う歌があちらこちらから流れている。心なしか街中や桜高内は浮き足立っている。
その理由は偏に八日後に迫ったクリスマス・イヴだと推測するに容易い。

まぁ、世の中の受験生連中にはクリスマスに関するイベント事には関心を抱いている場合ではないだろうし、元来俺は興味の欠片もな

い。

「サク！　もうすぐクリスマスだな！」

「サッくん！　もうすぐクリスマスだね！」

「……」

故に教室の扉を開けた瞬間に田井中と平沢が仁王立ちで出迎え、期待が籠った瞳を向けてこようがスルーして自身の机に向かう。

「ありゃ？　りっちゃん隊長。サッくん隊員が無視します！」

「ぬぅ……！　さすがは歴戦の勇者だ……！　ストレートに言っても興味を持たないか……！」

一体何時俺が歴戦の勇者の称号を与えられたのか知らんが、相手にするだけ体力と精神の無駄になるので、とりあえずＨＲが始まるまで疲労を癒すべく机に突っ伏す。

「澪！　サクの牙城を崩すために協力を要請する！」

「澪ちゃん隊員！　りっちゃん隊長の命令は絶対だよ！」

「いや、やらないから。ていうかさっきも言ったけど、今年はクリ

スマスパーティーをやってる暇なんてないぞ」

突っ伏しているので視界は真っ暗であり、秋山の表情は窺えないが声質からして呆れているようだ。そして、どうやら平沢と田井中はクリスマスパーティーを開催を望んでいるらしい。

平沢も田井中も真性のアホではないが、流石にセンター試験まで一ヶ月を切ったこの時期にそんな事にうつつを抜かしていてはアホだと思わずにいられない。

「でもでも澪ちゃん。クリスマスなんだよ？　ケーキが食べられるんだよ？」

「ケーキならほぼ毎日、ムギのケーキ食べてるじゃないか」

「そうだけどそうじゃないんだよ！　クリスマスなんだよ澪ちゃん！」

「言いたい事は分かるけど、だからと言ってクリスマスパーティーをする訳にはいかないよ。来月にはセンター試験があるんだし」

「澪。私達は受験生だ」

「いきなりなんだよ……」

「学園祭が終わってから毎日毎日勉強の繰り返し……　私達は大切な事を見失ってると思うんだ……」

「大切な事？」

「分からないのか？　それは遊ぶ事だ！　息抜きが必要なんだよ私達には！」

「見て澪ちゃん！　サッくんを！」

「咲也がどうかしたのか？」

「最近のサッくん、何だか元気ないよ！　きっと勉強に疲れちゃってるんだよ！」

「だから今サクは寝てしまっている！」

確かに受験勉強漬けの毎日に嫌気が差して、現在進行形で疲労回復に努めてはいるが、それを秋山のクリスマスパーティー賛成の説得材料にするな、と言いたいが最早口を開くのも億劫なので、可能な限り平沢達の会話を受け流していく。

「このままだったらサクは倒れてしまう！」

「そうならないためにもクリスマスパーティーをするしかないんだよ！」

「確かに最近の咲也は疲れた顔してるけど、倒れるなんて大袈裟だし無理矢理な理由をこじつけるなよ」

「おはよ～♪」

秋山が正論以外の何物でもない正論を平沢と田井中にぶつけたその瞬間、教室の扉を開いた音の後に聞こえた琴吹の相変わらずの呑気と陽気が合わさった声で、周囲のクラスメイト連中に挨拶をしつつ机に突っ伏し中の俺に近付く足音が耳を捉えた。

「咲也君？　どうかしたの？」

「ムギッ！！」

「は、はいっ？」

突然の田井中の叫びにも似たデカボイスに、顔を上げてチラリと様子を窺えば、たじろぐ琴吹の肩に田井中が両手を置いて必死の表情をしていた。

「最近疲れてないか？」

「え？　う、うん。ちょっと受験勉強で疲れてるけど、元気一杯よ♪」

「そうか、疲労困憊か……」

「ムギは元気だって言ってるだろ」

「ムギちゃん。こういう時は息抜きしなきゃいけないんだよ」

「えっと……」

平沢と田井中が何を言いたいのか、そして現在の状況が把握出来ない琴吹は、ただただ困惑して首を傾げるばかり。

「だから私達はクリスマスパーティーをするしかないんだ！」

「ムギちゃん思い出して！　あの楽しかった日々を！」

説得なのかコントなのか、そのギリギリの世界が展開していく。
当然、登校してきていきなり平沢と田井中による意味不明且つ我意なコント説得に益々琴吹はクエスチョンマークを飛来させていく。

「要は、律と唯はクリスマスパーティーをやりたいんだよ」

と、見兼ねた秋山が呆れながらに説明すると、合点がついた琴吹は困惑した表情から一変し、街中のイルミネーションのように瞳を爛々と輝かせる。

「わぁ～♪　クリスマスパーティー♪」

「お、ムギ陥落か？」

「やりましょ！　一昨年唯ちゃんの家でやった時、すっごく楽しかったから！」

「ムギまで何言ってるんだよ。私達は受験生なんだぞ？」

「でも、ちょっとぐらいいいかなって♪」

「あずにゃんが家族と過ごすからって去年はクリスマスパーティー出来なかったもんね～」

「あ、そういえばサク」

依然として何故か俺の机の前でクリスマス談義をしている四人を、未だに机から少し顔を上げて傍観していれば、田井中が俺に視線を向けてきやがった。その行動はあたかも俺が観察していた事をハナから察知していたが如くの当たり前な行動だった。

「ンだよ……」

「あ！　サッくん起きてたんだ」

「寝ようとしている人間の前で騒がれたら眠れるもんも眠れん……」

怠惰そうにゆっくりと身体を起こし、気怠さ全開で平沢にそう告げて、呼び掛けた田井中に視線を向ける。

「今年のクリスマスもまた修司んチの手伝い？」

クリスマス・イヴの二十四日、クリスマスの二十五日の二日間は桐島家総出で影宮家の収入源である筈の、ケーキの販売を主としている洋菓子店【ｋＡＧｅＭＩｙＡ】を毎年手伝っている。

今年も例年通りにそれに習うのかと思いきや、俺は受験生なので手伝わなくとも構わないという旨を昨日親父とお袋に告げられた。

毎年クリスマスの二日間はケーキの発注や訪れる客足が尋常ではないので俺も駆り出されているのだが、接客スキルと愛想が共にゼロに近い俺でも貴重な助っ人らしいので果たしてアホの代表である修司と、アホっぽいその親父と、若干天然のその母親と、唯一の従業員である富永と、役に立っているのかいないのか定かではない親父と、この人がいなければ店舗は飽和状態に陥りパンクする筈の事態を未然に防ぐ絶対的な存在であるお袋の六人の精鋭少数で上手く店を回せるのかと危惧の念を抱いたが、火事場の馬鹿力的な発想で何とかすると親父が声を大にしていたので、若干危ういが素直に従うのが筋合いだと考慮し、今年のクリスマスは受験勉強に専念するハメに。

「いや……　今年は嬉しい事にクビになった……」

「ホントに！？」

俺の机に両手を置いて身を乗り出す平沢の表情は、何が嬉しいのか喜怒哀楽の喜で満ち溢れている。クビというのは元来マイナスなイ

メージがあるのだが、まさかこうも喜ばれるとは。

「じゃあじゃあじゃあじゃあじゃあじゃあ！」

「何回言うつもりだ……　つうか徐々にボリューム上げんな……」

「ぶひ！」

瞳と表情をこれでもかというぐらい輝かせる平沢を落ち着かせる意味合いで、右手を平沢の額に当てて軽い力加減で押し込み後方へ下がらせると何故か豚の様に鳴く。

「今年はサッくんも最初からクリスマスパーティーに参加出来るんだね！」

「先ず愉快なパーティーを開く事を前提に話進めんな……」

「そうだぞ唯。私達は受験生」

「っつうことを念頭に置いて考えてみろ……」

「うん！　じゃあみんなでクリスマスパーティーやろう！」

「……」

俺の発言の後に平沢が口を開いたのは一秒も経ってない。そんな短

時間過ぎる刹那な瞬間に思考する余地は無い筈だ。
ということはこの一種の天才ギタリストは絶対に考えてない。恐らく本能で答えたんだろう。
故に思わず絶句。

「プロセスを無視した短絡的な思考すんな……」

「も～！　サクは相変わらず頭が固いな！　ちょっとぐらい羽目外したっていいじゃ～ん！」

「…受験とパーティーを天秤にかけてみろ。間違いなく受験に傾くだろうが……」

「いや、私はクリスマスパーティーに傾くぞ」

「はぁ…」

よほど田井中と平沢はクリスマスを楽しみたいようだ。そこは華やかなイベントが好きな女子だからという理由があるのかもしれないが、受験第一主義者の俺からすれば到底理解出来ないのでため息一つ。

「クリスマスパーティーより受験の方が大切だろ。ムギだって本当は分かってるんだろ？」

「う、うん……　やっぱり今年はしない方がいいかもね……」

「ズルいぞ澪！　ムギを引き込むなんて！」

「つうかそんなにやりてェんならお前らだけで勝手にやってろ……」

「ダメだよ～！　みんなでクリスマスパーティーしたいもん！　ね？　ムギちゃん！」

「や、やっぱり！　クリスマスパーティーやりたい！」

「ムギ！？」

「へっへ～んだ！　ムギは私達の味方なんだぜ～！」

「で、でも受験も大切だし……！」

「お前どっちだ……」

クリスマスパーティーを開催したい派の平沢と田井中。
断固反対派の俺と秋山。
その狭間に立ち、葛藤するどっちつかずな琴吹。

結局この議題の議論は『平沢さん！　田井中さん！　秋山さん！　琴吹さん！　早く席に戻りなさい！　ホームルームが始められないでしょ！』と、猫かぶりモードの山中担任が注意するまで平行線を保ったまま続いた。

――――――――――

「ほれ、サクッチ。これを進呈しようではないか」

「ん？　なんだそれ？　チケット？」

「…コイツが今すぐ冥界へ行きてェって懇願するから、そのチケットだとよ」

「一言もそんなこと言ってねェっつうのッ！　つうか俺は後百年は生きるッ！」

「…それは環境破壊に繋がるから地球と人類のために是非とも止めてくれ」

「何故ッ！？　俺は地球に優しくないのかッ！？」

「そんな風に叫ぶから地球が悲鳴あげてんだよ。その内お前の存在を抹消しようと日本政府が動くかもな」

「…果ては全人類を敵に回す可能性も無きにしも非ず、だ」

「いやいや、卓も桐島クンも何言ってるの……」

「それはヤベェ……！　戦慄が全身を駆け巡っていくぜ……！　今日からはエコロジー修司と改名しねェとな。改めましてこんにちは！影宮エコロジー修司です！」

「影宮クンも何言ってるの……」

「んじゃ、エコノミー影宮。俺達の分の掃除頼むな？」

「ん？　何故だ西野よ？」

「人件費削減だ。これも立派なエコロジーだ。分かったか？　エコノミー影宮」

「…自分の利益しか考えないエゴイズムなお前にはピッタリな仕事だ」

「なるへそ。つまり俺はエコノミーなエコノミストでエレクトロニクスみたいなエレガントなんだな？」

「何！？　何！？　この一連の会話！？　さっぱり意味が分からないよ！」

「安心しろ星都。俺も途中から意味不明だ」

「その時点で止めようよ！」

「じゃあな……」

「って、桐島クンは本当に掃除サボろうとしないでよ！」

「おいおい水本よ。大声厳禁だぜ？　全く地球に優しくないな～」

「あぁ……　頭が痛くなってきた……」

放課後になり、いつものように部室で受験勉強。の前に、果てしなく怠い週一回の掃除当番を迎えてしまった。

放課後の貴重な時間を掃除に割り当てるより、受験生ということを配慮して勉強時間に割り当てて掃除をナシにしてほしいものだが、そんな願いは叶う筈はなく、渋々に掃除区域である空き教室へと俺達（俺と西野と水本とアホ）は向かった。
つうか、使用頻度が低いと思われるこの空き教室を掃除する意味があるのだろうか？
眼につくゴミや塵等は全くないというのに……

こんな風に愚痴ったところで現状打破にはならないので、ダラダラと掃除をしていると、おもむろにアホが財布から二枚の紙切れを差し出してきたのがつい先程の出来事だ。

「つうかこれは冥界への招待券じゃねェってのッ！　商店街の福引き券だよッ！」

機転の利いた西野のおかげで掃除をサボる切っ掛けが出来たが、西野曰くの生真面目らしい水本に引き止められ仕方なく空き教室に戻れば、エコロジーの欠片も無くなった騒音害生物が、紙切れをヒラヒラと上下動かしていた。

「…福引き券？」

「うむ！」

「何で福引き券を桐島にやるんだ？」

「だってだって！　サクッチってば今年は俺んチを手伝わないって

言うんだもん！　そんなの寂しいべ！　毎年様々な困難を共に乗り越えてきたのに今年は手伝わないってなんだそりゃ！　何か裏切られた気分なんだよッ！」

「…だからなんだよ」

桐島家と影宮家の毎年のクリスマス恒例行事を知る筈もない西野と水本は、アホの叫びに揃って首を傾げているが、一々説明するのは面倒なのでスルーし、結局のところ何が言いたいのか要領を得ないアホに促せば、こんな回答をしてきやがった。

「だから！　ウチからくすねてきたこの福引き券をやるからさ！　今年も手伝ってくれよーッ！」

「ヤダ」

「そんな心にも無い事言うなよッ！　咲也と過ごせないクリスマスなんてロンリーだッ！　寂しいんだッ！　俺はお前と過ごしたいんだッ！」

「……」

実に気味の悪い発言に全身に悪寒が走り鳥肌が粟立ち思わず一歩後退る。
しかし、そんな俺の心中を知る術を持たないアホは素早い動きで、

「頼むッ！　これやるから手伝ってくれッ！」

「影宮……　お前にはプライドはないのか……」

俺の目の前で見事な土下座をかましてきた。
そんな余りにも必死なアホに西野がポツリと俺も思ったことを吐露していたのを聞き逃さなかった。

「…そもそも俺は手伝いたくて手伝ってた訳じゃねェんだ。やらねェで済むんならそれに越した事はねェ」

「聞き捨てならんぞその台詞ッ！　お前は中学時代にギターを買うためにウチでバイトしてたじゃねェかッ！　その恩を仇で返す気かッ！」

「…別にそれを条件に今まで手伝ってた訳じゃねェし」

「約束したろッ！　バイト代弾む代わりに毎年手伝ってねってッ！」

「…ンな約束してねェよ。あったとしても反故してやる」

「おうおうッ！　相変わらずのビックリ箱だなテメェッ！　そんなお前に天誅ーッ！」

一体どのような人体構造をしていれば、土下座体勢から『キョエェェェッ！！』と奇声を撒き散らしながら俺に向かって推定一メートルも跳躍出来のか謎だが、とりあえず迫り来る地球害生命体に、

「チネェーッ！　サークーヤーッ！」

「……」

バギャッ！！

「ハベッ！！」

鳩尾にカウンターの要領で蹴りをプレゼントしてやれば、重力に従うがままに床に落下し、白目を向いてピクピクと痙攣する地球害生命体。

「うわわぁ！　影宮クン大丈夫！？」

「相変わらず容赦ねぇなお前って」

「…する必要性を感じない」

「だな」

「いやいやいや！　それは影宮クンが可哀相だって！」

「あ、桐島」

「あン？」

「ほれ、福引き券」

「…いらん。お前にやる」

「そう言うなよ。せっかく影宮がお前のためを想って持ってきたんだし。アイツからのクリスマスプレゼントだと思ってさ」

「…お前も宙を舞うか？」

「おっと、そいつは勘弁だ」

からかっているのがありありと伝わってくる西野に眼を細めて問えば、苦笑いを浮かべて両手を上げながら一歩後退する。

「とは言え、せっかくの福引き券を使わん手はねぇだろ？」

「…だったらお前が使え」

「いや、俺こういうのに興味ねぇからな」

そう言って二枚の福引き券を差し出してくる。

「はぁ……」

これ以上の押し問答は徒に時間を浪費するだろうと思い立った俺は、

福引き券を渋々受け取り財布に仕舞う。

「んじゃ、とっとと掃除を終わらせるか」

「影宮クンどうするの？」

「…ゴミ箱にでも頭から突っ込んどけ」

「お、ナイスアイディア」

「ナイスじゃないからね！　むしろマイナスだよ！」

「お、やるな星都。ナイスとマイナスをかけるなんて」

「いやいやいやいや！　全然かかってないから！」

「…うるせェからお前ちょっと静まれ」

「えぇー……」

――――――――――

水本が非人道的な行為に警鐘を喧しいぐらい鳴らすのでアホのゴミ箱行きは断念し、仕方なく空き教室の隅に無造作に放置し、俺達は掃除を終わらせた。そして一度教室へ戻り鞄を手に取り、部室へ向かう。

例え室内にいようが、例え日中だとしても嫌になる寒気は絶賛継続中であり、それは陽が暮れるに伴い寒気度合いが増していく。
校内にいるのに吐き出す息が白いとは、今年の寒気は去年以上に異常だと内心で嘆いていれば、部室に辿り着いた。

「弾けー！　俺を弾けー！」

「退屈だよ～　もっと僕と遊んでよ～！」

ガチャリと音を立て扉を開けば、そこは別世界だった……と言えば語弊が生じるが、とにかく意味不明な光景が広がっていた。
テーブルには秋山が一人で参考書片手に勉強に取り組んでいる。
琴吹は長イスに座っている中野と向き合って何かしらの雑談を交わしている。

ここまでは、有り触れた日常な光景だ。

問題は平沢と田井中の騒々コンビ。

何がしたいのか、平沢はレスポールを顔の位置まで持ち上げおり、また田井中はムスタングを同様に顔の位置まで持ち上げている。
そして、まるでレスポールとムスタングの心の声を代弁するがの如くな声が、先程の俺が扉を開けた瞬間に聞こえた田井中と平沢の発言だった。

そんな理解に苦しむ光景を目の当たりにすれば、一般的で正常な思考を持つ者なら誰しも疑問を抱くだろう。

当然、一般的で正常な思考の持ち主である俺は『コイツらは何をやっているんだ』と疑問を抱いた。

「何やってるんですか……　人のギターで……」

中野も一般的で正常な思考の持ち主である事を証明するように、視線を琴吹から主にムスタングを持っている田井中に移動させ、その行為の意義と意味を尋ねる。

「ギー太とむったんの心の声を代弁してみました！」

答えたのは平沢。
しかし、その回答内容は正に俺がそうではないかと概念したそのままだったりする。

「お前らは何がしてェんだ……」

一般的で正常な思考を持つ俺には、平沢と田井中の思考回路パターンを読み取ることは不可能に近いので、扉付近に突っ立ったままに呆れた感情を言葉に乗せる。

「お、サク」

「やっほ～　サッくん」

「お疲れ様です。サク先輩」

「暖かいコーヒー淹れるね、咲也君♪」

「あ、咲也」

声を発したことで、俺が部室に来たことに気付いた部員達が一斉に俺に顔を向ける。五者五様の反応はいいのだが、その中に誰一人として俺の質問に答える奴はいなかった。

「…お前らは何がしてェんだ」

なので、長イスに鞄を置きながら再度平沢と田井中に問い掛けてみる。

「んとね、ギー太とむったんの心の声を代弁してみました！」

「…何故？」

「あ、ギー子の心の声も代弁してほしかった？　大丈夫！　今からするからね！」

「すんな」

レスポールをギタースタンドに立て掛けて、テレキャスに手を伸ばす平沢に間髪を入れずツッコむ。
それにしても俺の質問の意味を見事に履き違えた平沢は相変わらずズレてる。

「澪、サク」

すると、ムスタングをギタースタンドに立て掛けた田井中が至って真面目な表情で俺と秋山を呼ぶ。

「ギターもこう言ってるんだしさ、息抜きは必要なんだよ」

どうやらまだ、田井中と平沢の中ではクリスマスパーティー開催の件が燻っているようだ。
ちなみにギターが言ったのではなく間違いなくお前らが言った、とツッコみたい気持ちを何とか抑えて、鞄から参考書と筆記用具を取り出してテーブルに足を動かす。

「あずにゃんだってクリスマスパーティーやりたいって言ってるよ？」

「一言も言ってませんけど……　ていうかクリスマスパーティーなんてやっていいんですか？　来月にはセンター試験があるんじゃ……」

「だからだよ梓。大事な試験に備えてリラックスしなきゃいけないんだ！」

「そーだそーだ！」

「…それは建前で本音は単に楽しみてェだけだろ」

ここ最近、山中顧問は部室には顔を出していない。恐らく受験に関する様々な物事や事情で忙しいのだろう。

三度の飯よりティータイムが好物なあの人が来れないとは、中々教師達も気が立っているみたいだ。

そんな山中顧問が座る椅子に腰掛けて参考書をテーブルに置きながらの俺の発言に反応を示したのは田井中だった。

「そうだよ！　私はクリスマスを楽しみたいの！　クリスマスまで勉強なんてそんなの高校生じゃない！」

「…お前の中の高校生の定義は知らんが、この時期に遊び惚けてると足をすくわれるぞ」

言って、この話題は終わりだという意味で参考書に集中していく。

「ぶぅ〜！　サッくんのぶぅ〜！」

何やら平沢が文字通りぶぅぶぅ言ってるが、我関せずに勉学に没頭していく。

「ほら、律も唯も諦めろ」

「澪ちゃん！」

「な、なに？」

「おいどんも低音を響かせたいですたい！」

「澪ちゃんのエリザベスもこう言ってるよ！」

「何でエリザベスだけ訛ってるんだよ！」

見れば、田井中が秋山のベースを先程のレスポールとムスタング同様に顔の位置まで持ち上げてはアテレコをしていた。
対して秋山は『勝手にエリザベスで遊ぶな！』と田井中の頭に鉄拳を落下させている。

「ムギ先輩もクリスマスパーティーをやりたいんですか？」

「うん♪　でも、やっぱり時期が時期だからね……」

「そうですか……」

普通に憧れを抱いている琴吹にとってはクリスマスを是非にとも楽しみたいのが本心なんだろうが、今の時期の重要性を分かっているようで心底残念そうに肩を落として、俺の前に湯気が立っているコーヒーカップを置く。
そして中野は両手に持っている一枚の用紙に視線を落として、何やら思案顔になる。

「……」

何を考えいるのか知らんが、俺には関係ないのでコーヒーを一口飲み込んで勉学に集中……

「あ、咲也君」

出来なかった。
出鼻を見事に挫いてくれた張本人の琴吹に『何用だ』と顔を上げれば、琴吹は微笑んで口を開いた。

「梓ちゃんがね、曲が完成したんだって♪　さっき楽譜を見せてもらったの～♪」

「…どんな感じだ？」

約一ヶ月前から中野は曲作りに専念していた。

俺や琴吹にアドバイスを貰いながらもひたむきに。
時折『う〜ん……　難しい……』と呟いていたのを偶然耳にしたこともあった。
そんな努力の末に漸く完成に至った新曲の感想を琴吹に訊いてみる。

「冬って感じだったわ♪」

「漠然としてんな……」

「でも、まだ歌詞が出来てないって」

だろうな。
曲作り初心者のアイツが作曲と作詞を同時に行うのは至難を極める。
持論だが特に作詞は作曲以上に難しい。
過去に俺はそれを嫌というほど経験した。
しかし、それは曲作りの上でどうしても外せぬ道だ。

「…アイツは来年、軽音部を引っ張る部長だ。今からでも曲を作れるようになっとかねェとな」

「でも、いきなり作詞は難しいんじゃないかな?」

「…一理あるがそれも経験だ。つうか、気になるんならお前が歌詞を提供したらどうだ」

「は！　そうね！」

「…ちなみに訊くが、作詞の経験は？」

「あ……」

「はぁ……」

気合い充分に頷いた琴吹だったが、どうやらそれは見切り発車だったようだ。

「その事なら問題ないぜ！」

すると、平沢と結託して秋山を説得していた田井中は、聖徳太子並のスキルを発動させて俺達の会話を聞いていたらしく、得意顔で振り向いた。

「曲をつけてない歌詞ならある！」

「…何処に？」

「ここに！」

と、田井中が指差す先には長イスに置いてある自身の鞄。

その前に移動した田井中はおもむろに鞄の中を漁り、一枚のルーズリーフを取り出した。

「りっちゃん、それどうしたの？」

琴吹が尋ねる。

「去年、澪が書いてきたんだよ。んで、サクかムギに作曲してもらおうとずっと鞄に入れてたんだ！」

俺達の前に歩いてきた田井中がルーズリーフを差し出す。

「冬の日……」

俺がそれを受け取れば、隣から顔を出して覗き込んできた琴吹がタイトルを読み上げる。

「これを梓が作った曲の歌詞にすればいいんじゃない？」

「…そうかもしれんが、先ずは作詞者の許可を得た方がいいと思うけどな」

自分の知らぬところで勝手に歌詞が使用されては、いい気分ではないだろうし。

「あ、そうだな。お～い！　み～お～！」

田井中もそれを理解しているようで、未だに平沢と果てしない水掛け論を展開している秋山を呼び掛ける。

クリスマスパーティー開催議論を一時停止させた秋山と平沢に田井中と琴吹が事情を説明すれば、秋山は二つ返事で了承した。

「つーことで梓。歌詞なら出来てるから問題ないぞ～」

田井中がルーズリーフを長イスの前にいる中野に突き出すが、一切何の反応も示さない。

「あり？」

「あずにゃん？」

どうやら未だに深く思考（何を思案しているかさっぱりだが）しているようで、平沢が呼び掛けても無反応だ。

「…ニャカ野」

ならばとこんな風に呼び掛ければ、効果は覿面と表われた。

「は！　私ニャカ野じゃないもん！」

ツインテールと両手を上下に忙しく動かして火山を噴火させる。

「サク先輩！　そんな風に呼ばないでください！」

「ンなことより……」

怒ってますとアピールしている中野は頬を膨らませて俺の前に来ては見上げているが、華麗にスルーして田井中を親指で差す。

「ほら、梓」

「なんですかこれ？」

「歌詞だよ」

「え……？」

秋山がそう言えば、大きく眼を見開く中野。

「曲、出来たんだろ。だったら歌詞が必要なんじゃないのか？」

田井中から受け取った歌詞の羅列と秋山を交互に見ている中野は気のせいか感動しているように見える。これもまたあくまで『かもしれない』概念の範疇だが。

とりあえず俺は視線を参考書に戻す。

「いいんですか？　澪先輩」

「うん。本当はムギか咲也に作曲してもらおうと思ってたんだけど、さすがに今はそんな時間を取らせる訳にはいかないからな」

「この歌詞って梓ちゃんが作った曲にピッタリだと思うわ～♪」

「『冬の日』か。なんか今の季節にバッチリ合ってるよな～」

「あずにゃんが初めて作った曲だね～」

「私が……作った……」

俺が参考書から顔を上げた理由は単語の羅列に嫌気が差した、ということにしておく。そして中野の表情を見た理由はたまたま視線の先に中野がいた、ということにしておく。

その中野はルーズリーフを胸に抱えて、頬を紅潮させている。

「まぁ、この曲が演奏出来るのは受験が終わってからだな～」

「…無事に、を付け足せ」

「無事に受験が終わってからだな～　で、いいのかサク」

「…結構だ」

「あ！　はいはい！　じゃあクリスマスパーティーで演奏しようよ～」

「だから、クリスマスパーティーをやってる暇なんてないだろ」

「ぶぅ～！　澪ちゃんのぶぅ～！」

「澪しゃん！　おいどんもクリスマスパーティーをやりたいですたい！」

「だからエリザベスで遊ぶな！」

「とりあえず、お茶にしましょ♪」

「とりあえずの意味が分からん……」

平沢は口を尖らせ、秋山は憤慨し、田井中はアテレコし、琴吹は嬉々とティータイムの準備を始め、俺は盛大にため息をつく。

そして中野は、

「エヘヘ……　私が作った曲だ……」

と、感激に打ち震えていた。

その後、俺以外の面々はティータイムを満喫し、少しばかりの勉学に勤しみ、帰宅した。

何故少しばかりの勉学になったのかと問われれば、平沢と田井中を説得させるために大いに時間を費やしてしまい、気が付けは下校時間まで一時間しかなかったと答えるだろう。

まぁ、その甲斐あって何とか平沢と田井中の説得には成功したので良しとしよう。

が、しかし。

「あの！　唯先輩！　澪先輩！　律先輩！　ムギ先輩！　サク先輩！　実は私と憂と純からクリスマスプレゼントがあるんですけど！」

落着したと思われるクリスマスイベントは、氷山の一角だったとは当然この時の俺は知る由もない。

第百三十七話（後書き）

プライベート問題＋最近の暑さ＝作者ノックダウン寸前。虫の息。

とにかく頑張ります。

第百三十八話（前書き）

ロストです。

大幅に更新が遅れて、更に音信不通で本当に申し訳ございませんでした。

言い訳をするなら、兼ねてよりのプライベート問題が悪化し、負のマイナス連鎖を引き起こし、悪循環の泥沼状態に陥ってしまい、中々このサイトを覗ける状況じゃなかったからです。

この場を御借りして、読者の皆様に謹んでお詫び申し上げます。

誠に申し訳ございませんでした。

感想及びメッセージの返信はもう暫くお待ちください。

では、受験編その五です。

第百三十八話

【ＳＩＤＥ　鈴木　純】

翌日十七日金曜日。

教壇に立つ堀込先生の授業を受ける私から見て、左から数えて三番目。前から数えて三番目の丁度教室の真ん中に位置する机が二年一組の私の席。

この場所は前方と左右を見渡せる視界良好な席だったりするんだよね～

だけど、逆を言えば教壇に立つ先生からも私がよく見えるから、ついつい居眠りとか出来なかったり……

でも、だから私の席から左に二番目で一つ前の席の窓側の憂の背中と、私の席から右に三番目の廊下側の梓の横顔がよく見える。

私はシャーペンを動かしていた右手を止めて、何となく憂を見る。

憂は顔を黒板とノートに何度も往復させて、黒板に書かれてある古文の説明分の要点を抜粋しているみたい。

今度は梓を見る。

視線はノートに落としていて、何やら物思いに耽っていた。

（またあんな顔してる……）

ちょっとばかり眉間に皺を寄せて、眼を閉じて、シャーペンの頭を唇に当てている。

思えば今日の梓はなんか変。

『おはよう♪　憂♪　純♪』

『おはよう、梓ちゃん』

『おはよ……って、どうしたの？　なんか機嫌良くない？』

『え？　そう？』

『うん。顔がニヤけてる』

『梓ちゃん、何かいいことあったの？』

『エヘヘ♪　ちょっとね』

『『？』』

朝。登校した時は上機嫌を越えた超機嫌だったし。

かと思えば……

『めんどくさいな～……』

『でも身体が暖まるよ？』

『疲れてまで暖かくなりたくないよ……しかもランニングなんて……』

『クスッ。純ちゃんってマラソン大会の時も嫌がってたね』

『私は走るために生まれたんじゃなくて、ベースを弾くために生まれた女なの。だからこんな寒空の下を走るなんて言語道断！　ねぇ梓？』

『……』

『梓ちゃん？』

『……え？　なに？』

『どうしたの梓？　何かボーッとしてたけど』

『もしかして体調悪いの？　だったら無理しない方が……』

『う、ううん！　大丈夫！　そんなんじゃないから！　あ、着替え終わったんなら早く行こ！』

『ちょっ！　梓！　下スカートのまま！』

『へ？　あっ！』

『梓ちゃん、ホントに大丈夫？』

『大丈夫大丈夫！　ちょっと考え事してただけだから』

三限目の体育の前に、更衣室で体操服に着替えていたら、上は紅いジャージで下は制服のスカートで運動場に行こうとする、おっちょこちょいな梓は物思いに耽た表情をしてた。
その表情は今もしているから『どうしたんだろうな～』って考えている私がいたりする。

ふと、梓から教室の時計に視線を移したら、後五分で四限目が終わる時間に差し迫っていた。

（お昼の時に訊いてみようかな）

細やかな決意を胸に秘めた私は、視線をノートに移して、止まっていた右手を動かしていった。

そして五分後。

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ンと校内にチャイムが鳴り響いて堀込先生が教室から去っていくと、たちまち教室中が開放感？　解放感？の、どちらかに満ち溢れ出す。

「純ちゃん、ご飯食べよ？」

「あ、うん」

せっせと古文の教科書や筆記用具を片付けていたら、微笑みと黄色のランチナフキンに包まれた弁当箱を携えた憂が私の机にやってきた。

実はって言う程大した事じゃないんだけど、一年生の頃から私と憂と梓はお昼を三人で食べている。お昼を取る時は決まって私の机になってて、それは一年生の頃から本日まで継続中。

憂は前の席の娘に一言断りを入れて、椅子を半回転させて私に向き合うようにして座る。

私は憂や梓みたいにお弁当を持ってきてないから、購買へパンを買いに行くために鞄から財布を抜き出して席を立つ。

「あれ？　梓は？」

いつもなら憂同様に授業が終わったら弁当箱を抱えて私の机にやってくる筈の梓がまだ来ないから私は梓の席に顔を向ける。

すると、びっくりな事に梓は授業中に目撃したままの姿勢と体勢で『う～ん……』と唸ってた。

「ホントにどうしちゃったんだろうね梓ちゃん。やっぱり体調悪いのかな？」

「いや、あれは悩んでるんだと思うよ」

「そうなのかなぁ？」

「確証はないけど多分ね。私の直感レーダーがビビビッて反応したから！」

「へ～　凄いね純ちゃん！」

「あ、いや、そんなキラキラした眼を向けられると困るんだけど」

梓が座る椅子をかいがいしく用意している憂に苦笑いでそう告げて、私は購買へ行くの前に梓の机に足を向ける。

「梓」

「……」

「あーずーさっ！」

「……」

反応ナシ。

うむむ……　これは重症だぞぉ……

何が重症なのか自分でもよく分かんないけど。

（さて、どうしようかな？）

あんまりここで時間取っちゃうと購買の絶品なパンの数々は無くなっちゃうし、昼休みの時間も無くなっちゃう。

仕方がない！　手っ取り早く奥の手を使うとしよう！

その奥の手が梓に覿面に効くように、ボーッとしている梓の耳元に顔を寄せて口を開く。

「日本人形」

三年生が修学旅行に行っている間、唯先輩がいなくて寂しい思いをするであろう憂のために私の提案で、私と梓は平沢家に泊まりにいった時にある事が判明した。

それは、平沢家で迎えた朝。歯磨きを終えた私達は、髪を結わえるために互い互いの髪に櫛を通して時の事。

『梓ちゃん、結ぶ位置上過ぎない？』

『そう？　こんなもんだよ』

『それにしても、梓って黒くて真っ直ぐな髪でいいな～』

『そんなことないよ。よく親戚とかに日本人形みたいって言われてヤなんだよ』

梓は確かに言っていた。
『日本人形みたいで嫌だ』って。
癖毛の私からしたら羨ましいのに梓にとっては、その身体的特徴は嘆かわしいものだったみたい。
だから私はそれを逆手に取った。気にしている事を言われると人は嫌でも反応する。

つまり！　これは自然界の摂理みたいなものなんだよ！

「あ、純」

ほ～らね。効果は抜群。

パチパチと瞬きをして、クリクリとした瞳を私に向ける梓。

うっ！　何か可愛いぞ……！

なるほど。梓は唯先輩がよく抱き付いてきて困ると吐露してたけど、ちょっとだけ唯先輩の気持ちが分かりました。

「梓、所構わずそんなことしちゃダメだよ。無意識な無邪気が一番怖いんだからね」

「え？　なんのこと？　ていうか何言ってるの……」

両肩に手を置いて至って真面目な表情と声で忠告したのに、梓は専ら呆れた顔をしている。

「まぁとにかく、授業終わったんだから早くお昼食べようよ。憂が待ってるからさ」

「あ、うん」

いそいそと教科書と筆記用具を片付けて、鞄から弁当箱を取り出して席を立つ梓。

「ところでさ、ホントに今日どうしたの？　ボーッとしたり、ニヤニヤしたり」

「えっと……ちょっとね」

私の机に行こうとする梓の背中に、明らかに朝から変だよ、という視線と質問した向けたけど、言葉を濁された。
何だか訳有りっぽいんだけどなぁ～……

（とりあえず今はパンだね）

一旦この事は頭の片隅に置いて、梓に『憂と先に食べてていいよ。

私は購買に行ってくるから』と告げて今度こそ購買へ行くために吐き出す息が白くなるぐらいに冷え込んでいる廊下に足を踏み出した。

――――――――

「うわぁ……」

スタートダッシュに失敗したものだから、購買はお昼を買い求めている生徒でごった返していた。

（この分じゃ、めぼしい人気パンは既に売り切れてるんだろうな……）

とはいえ、目の前の人壁に圧倒されて二の足を踏んでいる場合じゃない。

お腹空いたもん。例え不人気なパンだけしか残ってないかもしれないけど、お腹空いたもん。

「よし！」

私もごった返す光景の一部になろうと意を決して、いざ突入！

人と人の間を掻き分けてスルスルと前方に……なんて器用な事が出

来ない私は、かなり悪戦苦闘と四苦八苦しながら懸命に、グゥと鳴る恥ずかしいお腹を満足させるために何とか突き進む。

女子とか男子とか学年とか関係ない！
ここは強い者が勝者となれる弱肉強食な世界！
油断なんて以ての外だよ！
隙を突かれたらすぐにやられちゃうよ！

「すみませー……んっと」

そしてアマゾンの奥地を目指す探検隊のような冒険の果てに私は勝者となった！
目の前にはパンが陳列してある籠が！

（あ、あれは！）

世の中にはこんな法則があるって知ってた？
勝負事の勝者には賞品が授与されるって。
我が我がと我先にパンをゲットしようとする激戦区を、見事な身のこなしで突破した私は勝者。

だからきっと目の前にあるこの希少なパンは、頑張った私に対するご褒美で、賞品なんだよ！

（ラッキー！　まさかゴールデンチョコパンが残ってるんなんて！）

その希少なパンはズバリ！　一日限定三個！　定価２２０円！　口に入れた途端にとろけるチョコが何ともいえない至福をもたらしてくれる絶品中の絶品！　その名も！　ゴールデンチョコパン！

普段は三年生が先に買っちゃって、下級生は中々お目にかかれない幻とまで謳われている逸品。

実は、その三年生が修学旅行中でいない時期に私は念願のゴールデンチョコパンをゲットしたことがあったりする。

一度食べれたから満足してたけど、まるで私のために鎮座してあるゴールデンチョコパンを目撃してしまったら、買わない訳にはいかない！

（やった！　高校生活二度目のゴールデンチョコパンだ！）

思わずニヤける顔のまま、私はゴールデンチョコパンに手を伸ばす。

そして後一センチまで迫った瞬間、突然それは聞こえてきた。

「うひょ！　ゴールデンチョコパンみーっけ！」

「え……」

突然聞こえて何やら聞き覚えがある声。そして私の手の先にあった

ゴールデンチョコパンが忽然と姿を消していた。

「咲也ーッ！　咲也ーッ！　見ろよッ！　ゴールデンチョコパン、略してゴーデンチョコンを手に入れたぞーッ！」

首の関節が錆で覆われたんじゃないかって思える程、ゆ～っくりと右に顔を動かせば、そこにはゴールデンチョコパンを高々と掲げて大きな声で叫ぶ影宮先輩が……

ていうかちょっと待って！　これって去年もあったよ！

私がまだ一年生だった頃、最後の一つのゴールデンチョコパンを目の前で影宮先輩にかっさらわれた過去があったりする。

だから、まさかの去年の悲劇の再来に私は呆然と影宮先輩の手にあるゴールデンチョコパンを眺めるしかなかったんだぁ……

「…大して略してねェし、叫ぶ意味が分からんし、もはやお前の存在意義が分からん」

するか、背後から気怠さをふんだんに含んだまたしても聞き覚えがある声。

今度は素早く後ろに振り返れば、ブレザーの下に白いパーカーを着込んで、白と黒のチェック柄のマフラーを首に撒いて、右手首には多分購買のパンが入ってるんだと思う袋を提げて、両手をパーカーのポッケに突っ込んで、防寒対策万全な咲也先輩がそこにはいた。

「咲也先輩!?」

「…あン?」

私より背が高い咲也先輩が影宮先輩に向けていた視線を私に向ける。

「…ンだよ、お前か」

「そんな反応ってヒドいと思います」

ぞんざいに扱われてた私は、細やかな抵抗で頬を膨らませて咲也先輩を見上げる。だけど全く意に介さない先輩は『はぁ……』と疲れたようなため息をついた。

「何か疲れてます?」

「…この時期の受験生は誰しもこんなもんだ」

「そうなんですか?」

「…知るか。気になるんなら統計でも調べて生徒会に提出して、真鍋辺りでも呆れさせて楽しんでろ」

「いや、そんなことしませんよ」

「そうだぞサクッチ！　和ちゃんはそんな娘じゃないんだぜ！　あの娘はな！　俺にとって女神なんだよッ！」

「あっそ……」

「何故かと言えばなッ！　和ちゃんだけが学園祭の時、俺の相手をしてくれたんだよッ！　あ、ヤベェッ！　思い出しただけでガシラがガシッてきたッ！」

「日本語喋れよ……」

この場合、私はどうしたらいいのかな？

咲也先輩は呆れてるし、影宮先輩は何か目頭を押えてるし。そんな二人の先輩に挟まれて私は視線をあちらこちらに右往左往するしか手立てがなかったり。

「あの～　とりあえず移動しませんか？　あんまりここに長いことにいると後ろに迷惑がかかるので」

ホントにとりあえずな提案をすれば、咲也先輩は黙って人込みをスルスルと器用に抜けていき、影宮先輩はゴールデンチョコパンと焼きそばパンを買って、私はサンドイッチとカレーパンを買って咲也先輩の後を慌てて追いかける。

何とか四苦八苦しながら人込みを抜けると、自動販売機でお茶を購

入している咲也先輩を発見。

「コリャ咲也ッ！　俺と陣ちゃんを置いて勝手に行くなってのッ！」

「あの先輩。陣じゃなくて純です」

ていうかそれは兄の名前です。

「おやおや？　そいつは失礼いたしやんした」

「あ、いえ、別に」

深々と頭を下げる影宮先輩につられてしまい何故か私も深々と頭を下げちゃった。

「アホだろ、お前ら……」

「暴言禁止って何回言えばチミは従ってくれるのかなッ！　あぁッ！　コラッ！　黙ってないで何か言ってみやがれってんだッ！」

と、頭を勢いよく上げた影宮先輩が、そのままの勢いと激しい剣幕で咲也先輩に食ってかかるけど、一切顔色を買えない咲也先輩は何食わぬ顔で一言。

「黙れ」

更に一言。

「去れ」

畳み掛けるように。

「消え失せろ」

もし、仮になんだけど、絶対に敵に回したくない人ランキングがあったら、私は間違いなく咲也先輩に一票を投じるかもしれない。だって、今朝の梓の超機嫌とは対照的な相変わらずの機嫌が悪そうな表情で淡々と、ある意味心に響く言葉を告げられたら、私だったら絶対に耐えられないもん……

「さ……さ……」

それは影宮先輩も同じだったみたいで、ヨロヨロと二、三歩後ろに下がって、

「咲也のバカーーッ！　バカ野郎ーーッ！」

一粒の涙を頬を伝わせて、ものすごいスピードで走って行っちゃっ

た……

そのスピードは、走り出した拍子に袋に入りきれなかったゴールデンチョコパンを落としてしまう程のスピードだったりするから、如何に咲也先輩の言葉が影宮先輩の心に響いたのかを如実に物語ってたりする。

「…ガキかアイツは」

そう言いながら咲也先輩は桜高の特徴である板張りの床に落ちてしまったゴールデンチョコパンを無造作に掴む。

「そういえば咲也先輩って購買を利用してたんですね。知りませんでした」

「…いや、普段はコンビニのパンだ」

ゴールデンチョコパンを拾い上げた咲也先輩曰く、何でもいつもは登校中にコンビニに立ち寄ってお昼のパンを買ってるんだけど、今日は寝坊してしまってコンビニに寄る時間がなかったみたい。

お昼がない咲也先輩を見兼ねて、澪先輩と唯先輩と律先輩とムギ先輩と生徒会長さんがお昼を分けてあげるって言ってくれたけど、丁重に断って影宮先輩と一緒に渋々（この部分をかなり強調してた）購買に足を運んだんだって。

「…つうか、お前は毎日購買を利用してんのか？」

「はい。ウチの親って何でかお弁当を作ってくれないんですよ。これってヒドくないですか？」

「ふーん……」

うわぁ……びっくりだよ……

先輩の方から尋ねてきたのに、そんな無関心な返事をされるなんて……

「とりあえず……」

たまに梓が『サク先輩って意地悪なんだよ』って零していた理由が何となく理解出来た瞬間、その意地悪な咲也先輩がおもむろにゴールデンチョコパンを私に差し出してきた。

「…お前にやる」

「えぇ！？　だってコレ、影宮先輩のですよ？」

「…落としていった時点で既にアイツの所得物じゃねェ」

そんなことはないと思うんですけど……

「…食い物を粗末に扱ったアイツは食べる権利を剥奪されたも同意だ」

「そういうものなんですか？　ていうか咲也先輩が食べればいいんじゃないんですか？」

そりゃ貰えるものなら貰いたいけど、曲がりなりにも影宮先輩のなんだし……

「…俺はこんなに食えれん」

そう言ってズイッと私にゴールデンチョコパンを乱暴に近付ける。

「う～ん……分かりました！　じゃあ咲也先輩からのちょっと早めのクリスマスプレゼントだと思って有り難く貰っておきますね♪」

「…寝言は寝て言うもんだって知ってたか？」

「ヒドいですー！　そんなこと言わないでいいじゃないですかー！」

梓の気持ちが完璧に分かったよ！　確かに咲也先輩は意地悪だ！

（あ、そういえば）

梓といえば、明らかに変な態度を取るんだよね。
もしかしたら咲也先輩ならその原因を知ってるかもしれない。
梓と同じ軽音部だし、梓曰く部長の律先輩より頼り甲斐がある副部長だし。

「叫ぶな……耳に響く……」

「あの、咲也先輩」

だから私は顔を顰める咲也先輩に一歩近付いて見上げる。そして口を開いた。

「ちょっといいですか？」

「あぁ？」

「梓について訊きたいことがあるんですけど」

――――――――――

（なるほどね）

咲也先輩と別れた私は一人、納得しながら目的地である教室を目指して廊下を歩いていた。

咲也先輩ならもしかしたらという私の予想は見事に当たり、咲也先輩は語ってくれた。

まず、何で梓が超機嫌なのか？

それは、梓が初めて自分で作った曲が完成したからなんだって。

私は生まれてこの方曲作りなんてしたことはないけど、一生懸命に何かに取り組んで、その成果が報われたら嬉しいって気持ちは理解出来るつもり。

ジャズ研に入部した私は自分の楽器が必要になって、楽器を買いに言ったんだけど、とても私のお小遣いじゃ手が出せない値段だった。だけど、私が一目惚れした中古の白いベースが頭から離れなくって、必死に月々のお小遣いを遣り繰り算段して、やっとの思いでベースを入手した。

あの時、すっっごく嬉しかったのをよ～く覚えている。

多分梓も、そんな気持ちだったんだろうね。

そしてもう一つ。

物思いに耽る梓の原因なんだけど、さすがの咲也先輩にも分からないって言ってた。

でも、昨日の部活でも梓は何やら思案に暮れていたとも言ってた。

梓って軽音部の先輩達のことが大好きっぽいから、それに関する事柄なのかもしれないけど、確証がないんだよね……

（本人に訊くのが一番かな）

そう思って辿り着いた教室の扉をガチャリと音を立てて開いた。

「おかえり、純ちゃん」

「遅いよ純。何してたの？」

微笑む憂とジト眼を向ける梓の前には手付かずの弁当箱が二つ。
先に食べてていいよって言ったのに、全く律義で健気なんだから。
まぁ、そんな二人だからこそ私は友達やってるんだけどね。

「ゴメンゴメン。購買で咲也先輩とバッタリ遭遇しちゃって、ついつい話し込んじゃった」

「サク先輩と？」

「うん」

と、頷いて椅子に座る。

「じゃあ純ちゃんも来たし、食べよっか」

「そうだね。いただきま～す」

「遅れてきた純が真っ先に食べるってどうかと思うよ」

「まぁまぁいいじゃん。細かいことは言いっこナシだよ」

「もう……」

何だか下がり眉な梓だけど、白いランチナフキンの結び目を解いてるから、私に対する小言より食欲の方が勝ったみたい。

それから他愛のない雑談を交わしていると、不意に憂がこんな事を言い出した。

「そういえば、そろそろクリスマスだね」

その瞬間、私は見逃さなかった。

卵焼きを口に運ぼうとしていた梓の手が一瞬だけ止まったのを。

（クリスマス……）

そして私は頭をフル回転させる。

軽音部……澪先輩……咲也先輩……唯先輩……

「ね、梓ちゃん。今年は軽音部でクリスマスパーティーとか開かないの？」

律先輩……ムギ先輩……ケーキ……クリスマス……

「う、うん。唯先輩と律先輩とムギ先輩はやりたかったみたいだけど、澪先輩とサク先輩がダメだって」

クリスマスと軽音部……
いや、クリスマスと先輩達かな？
そして、さっき会った咲也先輩は何だか疲れたような顔をしていた。
それって、受験勉強に疲れてるんだと思う。
もう来月にはセンター試験が控えてるって聞くから、クリスマスパーティーをやってる暇なんてないんだろうね。

（あぁ、そういうことか）

なるほどなるほど。
梓が物思いに耽っていた理由が判明したよ。

「梓ちゃんは？」

「え？」

「梓ちゃんはクリスマスパーティーを開きたいの？」

「出来るんならやりたいんだけどね。一昨年って憂の家でパーティー開いたんでしょ？」

「うん。お姉ちゃんと澪さんと律さんと紬さんと咲也さんと修司さんと先生と私で。咲也さんがサンタさんの格好してたり、修司さんがトナカイの格好をしてたりして楽しかったよ♪」

「へぇ～　そうなんだ。そんなことを聞いたらやっぱりやりたいな。クリスマスパーティー」

「じゃあやろうよ」

「え？」

梓が顔を向けた。その先の私は疑問点と疑問点が線で結ばれた晴れ晴れした気分。

多分梓は、

「澪先輩達に内緒で、私達でクリスマスライブをプレゼントするとかどう？」

「あ、それいいかも～」

「急にどうしたの純？　ていうか憂はすんなり賛成しちゃダメだって」

軽音部の先輩のために、何かをしてあげたいんだ。
やれやれ、仕方ないなぁ。そういうことなら私が一肌脱いであげますかな！

「だってさ、梓って軽音部の先輩達に何かしてあげたいんでしょ？」
「うっ……！」
「図星みたいだね」
「な、何で分かったの？」
「物事を様々な観点から考察した結果だよ」
「何かサク先輩みたいに鋭いね……」
「あ、だから梓ちゃん、時々何かを考え込んでたの？」
「う、うん。せっかくのクリスマスなんだし、先輩達も楽しんでもらいたいなぁって考えてて。でも澪先輩とサク先輩が唯先輩達を説得してたから、やっぱりやっちゃいけないんじゃないかって」
「なるほど。堂々巡りだったわけだ」
「そうなんだよね……」

「だったら尚の事、私達でクリスマスライブをプレゼントしてあげようよ。演奏を聴くだけなら勉強の邪魔にはならないし、勉強で疲れてる先輩達も息抜きになるんじゃないかな」

「純……」

「私も協力するね」

「憂……」

「で？　肝心の梓はどうすんの？」

「や、やる！　先輩達に楽しんでもらいたいから！」

グッと両手を握り締める梓に私と憂は揃って笑顔を浮かべた。

何かアレだね。ホント梓って先輩達のこと大好きなんだね。

でも、その分、先輩達が卒業しちゃう時、梓は大丈夫なのかな？

来年の軽音部を支えるために私と憂は来年軽音部に入部するつもりなんだけど、軽音部だけじゃなくて私と憂が梓自身も支えて助けてあげなきゃね。

「じゃあ早速今日から練習しよ！」

「うん！」

「あ、憂の卵焼き美味しそ～　一個頂戴？」

「って、純！　聞いてるの？」

「聞いてるよ。今日から練習するんでしょ？　大丈夫！　私という逸材がいるからには絶対成功するよ！」

「そんなこと言われたら逆に不安なんだけど……」

「あー！　ヒッドーい！」

「クスッ。とりあえず今はご飯食べよ？　お昼休み終わっちゃうから」

「そうだね」

「純って頭の切り替え早いな……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

放課後になって私は先輩達に急用が出来たと告げて、今日は部活をしないで純の提案したシークレットクリスマスライブのための練習へ。

シークレットでクリスマスライブだから終業式が行われる二十四日のクリスマス・イヴまで先輩達に隠し通さないといけないから、当

然部室で練習は出来ない。かと言ってジャズ研の部室も他の部員の迷惑になるから使えない。

いきなり練習場所が確保出来なくてすっかり意気消沈してしまった私と純だったけど、とりあえず憂の提案で平沢家で打ち合わせをすることに。

そこで純が何の曲を演奏しようかと憂の淹れてくれた丁度いい甘さのココアを啜りながら首を捻る。

「クリスマスパーティーなんだから、クリスマスの曲はどう？」

と、憂が言ったその時、私は閃いたように傍らに置いてあった鞄を引き寄せて、私の努力の成果の結晶の【冬の日】の楽譜と澪先輩の歌詞を鞄から取り出した。

「この曲なら、クリスマスにピッタリかも」

私が掲げていた目標は、年内に一曲作り上げることだった。
年内だから十二月下旬頃を想定して、サク先輩のアドバイスである『イメージ』を膨らませていったら、この時期に当て嵌まるクリスマスソングのメロディーに仕上がっちゃった。
しかも澪先輩の歌詞の内容にはクリスマスを連想させる詞があったりする。

だから先輩達に贈るシークレットクリスマスライブの曲にはピッタ

リなんじゃないかなって思って、憂と純にその事を伝えれば『へぇ～　いいんじゃない』『うん！　これならクリスマスって感じだし、梓ちゃんが作った曲なら、お姉ちゃん絶対に喜ぶよ』って賛同してくれた。

だけど実のところ問題があって、私は【冬の日】を放課後ティータイムが演奏することを前提に作り上げたんだよ。

えっと、つまり、私と唯先輩とサク先輩のギター、澪先輩のベース、ムギ先輩のキーボード、律先輩のドラムの六重奏で一つの曲として作ったんだけど、私と憂と純の三人で演奏出来るようには出来てなかったりする。

そのところは演芸大会の時、サク先輩が【ふでぺん　～ボールペン～】を民謡Ｖｅｒ．にアレンジしてくれた要領と曲作りで得たコツを応用して何とか私が三人で演奏出来るようにアレンジすればいいんだけど……

「そういえば、憂はどうするの？」

「え？　憂がなに？」

「なにって楽器だよ。私はベースで梓はギターでしょ。じゃあ憂は？」

曲のアレンジ問題が解決してないのに、次の問題が浮上しちゃった……

「憂ってどんな楽器出来たりする？」

私が『し、しまったーっ！』って頭を抱えていれば、クッキーに手を伸ばす純が憂に尋ねる。

「えっと……前に弾いたオルガンと、ギターをちょっとかな」

「「えっ！？　ギター弾けたの！？」

私は抱えていた頭を上げて、純は指先で摘んでいたクッキーをポロッと落として一様に憂を見つめる。

「うん。お姉ちゃんのギー太触らせてもらう機会があって、その時にコードって言うんだよね？　それを全部覚えたの」

全部覚えたって……

そういえば去年の学園祭前に、風邪で倒れた唯先輩の代役を果たそうと憂は唯先輩の髪型から制服の着こなしまで真似して部室来たけど、あの時レスポールも携えてた。

だとしたら、憂は私達の演奏に参加するつもりだったんだ。唯先輩の代役を勤めようとしてたんだもん、当然ギターも弾けるように練習してたんだ……

まぁ、結局、サク先輩とさわ子先生が練習を始める前に唯先輩じゃなくて憂だって見抜いたから、憂のギターの腕前は分からず終いだ

ったんだけどね。

でも、憂は唯先輩の妹。もしかしたら唯先輩と同じ力量を持ってるのかもしれない。しかも以前に遊びに行ったバッティングセンターで、アドバイスをちょっと聞いただけでホームラン打っちゃったり、小さい頃に弾いたことがあるオルガンを、すぐに弾けるようになったり等、とにかく異常に飲み込みが早い。

更に両親が留守にしがちだから平沢家の家事全般をやってるんだから凄い。

そう考えると憂って非の打ち所がない完璧な娘だなぁ……

「じゃあさ、梓と憂のツインギターで、リズムは私のベースでいいんじゃない？」

「でも私、ギター持ってないよ？　お姉ちゃんのギー太借りるわけにはいかないし……」

「あ、前に純が私に貸してくれたジャズ研のギターは？　一週間ぐらい借りること出来ない？」

「全然オッケーだよ」

「いいの？　純ちゃん」

「あのギターってジャズ研に入部した楽器初心者の子のための練習用ギターだし。今の一年生に初心者はいないからね。だから万事オッケー！」

「じゃあ憂はギターで決まりだね」

「ちゃんと弾けるか自信ないけど、でもお姉ちゃん達のためにも頑張るね！」

「憂ってホント唯先輩のこと好きだよね～」

「憂の原動力みたいなものだから」

そういえば、西女大には寮があるって、この前会った曽我部先輩が律先輩の質問に答えてたっけ。

唯先輩が無事に受験を終えて寮生活を始めたら、憂は大丈夫なのかな？

活動を起こす元になる唯先輩がそばにいなくなるんだもん。

それって憂にとっては大きな試練なんだろうね……

いや、憂だけじゃなくて私も……

唯先輩にサク先輩に澪先輩に律先輩にムギ先輩。

私の掛け替えのない先輩達。毎日を華やかに鮮やかに染めてくれる先輩達。

貰ってばかりで何も恩返し出来てない。

だから私は、先輩達に贈りたい。

歌を。音を。演奏を。想いを。

「楽器が決まったところで次は練習場所だね。どうする？」

「それなんだけど、前に軽音部で貸スタジオに行った事があって……」

届けよう。私の精一杯を。

唯先輩。凄いのか凄くないのか紙一重な人だけど、絶対音感やライブで魅せる音楽の強みは、やっぱり凄い人なんだろうなぁって思ったり。知ってますか？　私は新歓ライブで唯先輩のギターと歌に憧れたんですよ。

サク先輩。副部長で黒一点。ギターの腕前と作詞作曲の力、思わず頼ってしまう人望、常に冷静沈着。とにかく凄い人ですよね。唯先輩が好きになっちゃうのも分かります。欲を言えば、もうちょっと色んな事に興味を示して欲しかったり。

澪先輩。恥ずかしがり屋で繊細な人。でも確固たる自分の世界を持っていて、ベースの腕前はかなりのもの。優しくてカッコいい先輩。

律先輩。部長なんだけど普段はおちゃらけてる人。だけど、ここ一番の時はみんなを纏めあげて率先して引っ張ってくれますよね。ドラムは走り気味だけど、何故か澪先輩と絡むとバッチリになるから不思議です。

ムギ先輩。持参するケーキと淹れてくれる紅茶は絶品で、キーボードと作曲の腕前も確か。サク先輩とは真逆で、楽しい事や面白い物や珍しい物事に興味津津なおっとりした人。とにかく可愛らしい先

輩。

そんな五人の先輩がクリスマスライブで喜んでほしいから私は頑張った。

まず、憂の家から帰ってすぐに自室で【冬の日】を頭を悩みに悩ませて、たまにうつらうつらと船を漕ぎながら寝る間も惜しんで徹夜して必死にアレンジ。眼の下にクマを作った甲斐あって何とか一晩で私と憂のツインギターと純のベースで奏でる新しい【冬の日】が完成。

そして練習場所は、学園祭前に部室が水道工事で使えなくなったあの日に、先生の提案で向かった、貸スタジオ【ＰＡＣ】で練習することに。ていうか部室もジャズ研の部室も吹奏楽部とブラバン部が練習してる第二音楽室も使えないし、私用目的じゃ学校の設備は使用出来ないから貸スタジオに行くのは必然的だったりするんだよね。

土曜日と日曜日は休日だから午後から目一杯練習出来て、月曜日、火曜日、水曜日、木曜日は学校が終わったら貸スタジオに直行！

『すみません……今日も用事があって……』

『あずにゃん。最近何してるの？』

『はっはは～ん！　さては……！』

『りっちゃん探偵長！　何か閃きましたか！？』

『探偵長ってなんだ……』

『知らないのかサク？　探偵の中の探偵！　それが探偵長！　有りとあらゆる難事件、迷宮入りした奇怪な事件、ＦＢＩもお手上げな超難問の全てを解決したのが私だ！』

『…ソイツハスゲェナ』

『むっ！　信じてないな～！』

『さぁ、あずにゃん！　正直に話さないと名探偵りっちゃんが全てを暴いちゃうぞ！』

『あれ？　唯ちゃん、探偵長から名探偵に変わってるんだけど』

『はっ！　しまった！』

『くっ！　ばれちゃ仕方がない！　何を隠そう私こそが名探偵りっちゃんだ！』

『そして私が助手の唯でッス！』

『律。うるさいぞ』

『何で私だけ！？』

『…お前の人徳が皆無だからだろ』

『ガーンッ！』

『さぁさぁあずにゃん！　お覚悟を決めなされ～！』

『決めるって何を？　覚悟って？』

『あれ？　さわちゃん？　あれれ？　あずにゃんは？』

『梓ちゃんならさっき部室を出ていったわよ』

『え～！　そんな～！　最近あずにゃん分が足りないのに～……』

『てか、久し振りに部室に顔出したな、さわちゃん』

『来月にはもうセンター試験でしょ？　色々立て込んでてね～……おかげで休日返上よ』

『何だか大変そうですね』

『大変そうじゃなくて、実際問題大変なのよ澪ちゃん。大学の方から色んな確認の書類やらなんやらが届いて、もう職員室はてんやわんやでね……だから安住の地を求めてここに来たのよ。あ、ムギちゃん、お茶貰える？』

『は～い♪』

『…安住の地とか大義名分を掲げてるが、要は現実逃避してきたんだろ』

『えぇ、そうよ』

『さわちゃん、あっさりかよ……』

『はい、アールグレイです♪』

『ありがとう、ムギちゃん』

『そういえば、ホントに最近の梓どうしたんだろうな。咲也、何か分からないか？』

『知るかよ……つうか何故俺に訊く……』

『いや、だって咲也って何かと鋭いから、もしかしたら何か気付いてるんじゃないかなって』

『…さっきも言ったがアイツが何をしてんのかは全く知らん。が、水面下で何かしらの動きをしてんのは間違いねェと思うがな』

『間違いないって、何でそう言い切れるんだサク？』

『…ここ数日の態度見てたら一目瞭然だ。明らかに俺達を警戒してやがる』

『やっぱり鋭いな咲也……』

『でもでもサッくん。何であずにゃんは私達に何も言ってくれないのかな？』

『…俺達にバレたらややこしい事を暗躍してるからじゃねェの？つうかサッくん言うな』

『そういえば昨日、梓ちゃんが憂ちゃんと鈴木さんと一緒に足早に帰っていってたのを見たわ。あ、ムギちゃん、おかわりお願い』

『は～い♪』

『ふ～む……憂ちゃんと佐々木さんも一緒に行動してるのか～……益々怪しいな』

『鈴木さんだろ。鈴木　純さん』

『…とにかく、アイツや妹や団子が何をしてようがほっとけ。アイツらなりの思惑があんだろ』

『団子って……だから鈴木さんだって』

『でもでもサッくん。あずにゃん分が足りない時はどうしたらよかですかい？』

『知らん』

『あぅ……あしらわれた……』

『まぁ、咲也くんの言う通りかもね。今は来月のセンター試験に集中すべきよ。あ、ムギちゃん、おかわり』

『は～い♪』

『さわちゃん、さっきからお茶飲み過ぎだろ』

『…つうかさっさと職員室戻れよ。勉強の邪魔』

『ガーンッ！　ヒドいわ咲也くん……』

『うぅ……あずにゃん分が足りないよ～！』

『唯ちゃん、フルーツタルトよ♪』

『うわぁ～い♪』

『梓の代わりはケーキでいいのか……』

『てか、あずにゃん分ってそもそもなんなんだ……』

『…アイツにとっての酸素と同等なもんなんだろ』

『いやいや、そんなわけないだろサク』

『…当たり前だろ。アホかお前』

『サクが言ったんだろーっ！』

『律。うるさいぞ』

『何で私だけ！？』

幾ら先輩達のためとはいえ、隠し事をする事に後ろめたさを感じるし、部活に出れないと告げた時の唯先輩の悲愴感が漂う顔に後ろ髪を引かれるけど、恩返しをしたいから断腸の思いで立ち止まりたくなる心を奮起させて、練習に取り組む。

『梓ちゃん。こんな感じかな？』

『う、うん……』

『梓ちゃん？』

『いや～　さすがは唯先輩の妹だね。めちゃくちゃギター上手いじゃん……』

『純ちゃん？』

『昔からそうだけど、ホント憂って飲み込み早いよね……』

『これで絶対音感まで持ってたら、私、自信無くしちゃいそうだよ……』

『え、えっと……純ちゃん？　梓ちゃん？』

『まぁ、上手い事に越した事はないんだからいいんじゃない？　それよりボーカルは誰がやるの？　先に言っておくけど私はベース弾いてるから無理だよ』

『でも、澪先輩はベースボーカルしてるけど』

『澪先輩はベースの腕前も歌も上手いから問題なくやれてるの。私には無理矢理』

『梓ちゃんが歌ったらどうかな？』

『私が！？』

『あ、そうだよ。梓がボーカルすればいいんだよ。何て言ったって軽音部次期部長だもん』

『梓ちゃんが歌ったら、お姉ちゃんきっと喜ぶよ』

『そうそう。澪先輩や咲也先輩もね』

『そうかなぁ……』

『物は試しってことで、とりあえず一回演ってみない？』

『うん。やってみよ』

『う、うん……』

軽音部で貸スタジオ【ＰＡＣ】に来た時はサク先輩が先生の交換条件を飲み込んでお金を貰ってたから良かったけど、今回はそんな援助金はないから三人で割勘して自腹を切ることになった。
だけど幾ら割勘とはいえ、一週間毎日二時間以上スタジオを借りる事になるから、どんどん財布の中身が寂しくなっちゃったり……
まぁ、それも仕方がないんだけどね。

『ふぅ……ギター弾きながら歌うのがこんなに難しいなんて思わなかったよ。唯先輩と澪先輩って凄いんだね』

『えっと……梓……』

『ん？　なに？』

『言い難いんだけど……あの……梓って……その……』

『なに？』

『ギター持ってるからじゃなくて、根本的にオン『じゅ、純ちゃん！』……あ、いや！　何でもない！』

『そう？』

『う、うん！　ね？　憂』

『うんうん！』

『じゃあ、もう一回やろ！　まだまだ完璧じゃないからね！』

『（それにしても、梓の歌があんなに下手だったなんて知らなかった……）』

『（あ、あはは……）』

『（憂が歌った方が良くない？）』

『（わ、私には無理だよ……それに、梓ちゃんがやる気になってるから今更……）』

『（そうだよね……）』

『ほら！　純！　憂！　始めるよ！』

『『は、はい！』』

普段のだらけてばかりの軽音部じゃ体験したことのないぐらいの練習量を私達はこなしていく。

家に帰っても自室でひたすらに、ひたむきに、徹底的に猛特訓！

おかげで久し振りに左手の指先の皮が剥けちゃってお風呂に入った時に染みてちょっと痛かったりするけど、頑張ってる証だって思えて全然苦じゃなかった。

憂も純も、毎日練習を重ねる内にどんどん上手くなっていく。特に憂は元から素質があるんだと思うけど、この一週間で『もしかしたら唯先輩よりギターが上手いんじゃないかな？』って思わず考えちゃうくらいギターの腕前が上達していった。

『梓ちゃん、純ちゃん。いよいよ明日だね』

『スタジオ代に飛んでいったお金のためにも、絶対に成功させないと！』

『もう！　そんな不純な動機で張り切らないでよ』

そして、

『冗談だよ冗談♪　ちゃんと澪先輩達のために頑張るって』

『純って何か律先輩に似てきたね。おどけるところとか』

『それって私と律先輩に対して失礼じゃない？』

『そんなことないよ純ちゃん。律さんって軽音部の部長さんで、しっかりした人って事だから』

『しっかりした人っていうなら、澪先輩とサク先輩の方だと思うけど』

『梓ってたまに何気なく失礼なこと言うよね……』

『あはは……』

『そ、そんなことないもん！　先輩達のこと尊敬してるもん！』

そんな練習漬けの一週間が、

『うんうん。じゃあ尚更、ライブ成功させないとね』

『うん！　お姉ちゃんのために！』

『いや憂……　唯先輩主体じゃないから。サク先輩や澪先輩や律先輩やムギ先輩もだから』

『憂は相変わらず唯先輩が好きだね～』

『エヘヘ♪　ありがとう♪』

『『褒めてないんだけどなぁ……』』

確かな手応えと充実感を感じて、昨日終わりを告げた。

そして……

――――――――

ケータイを開いてディスプレイ画面を見ると、日付は二十四日金曜日。時間は午後十二時五十五分。

（いよいよだぁ……！）

緊張でドキドキと高鳴る胸の鼓動。そのドキドキの音が冷えきった部室内に響いちゃうんじゃないかって錯覚しちゃうくらいに私は緊張に支配されてた。

今まで先輩達と一緒に演奏してきたけど、今日に限っては先輩達は観客で私は演者だもん。そんな状況下で緊張しないのはサク先輩ぐらいで、私は嫌でも緊張してしまうのは相場だと思う。

「よし！　準備万端！」

だけど緊張したままで、結果失敗なんてなったら、一週間の猛特訓が水の泡になってしまうのだけは是が非でも避けたいから何とか自分を鼓舞して、ケータイをブレザーに仕舞って、アンプにむったん

を繋いで気合い充分で憂と純に振り返る。

「あー……！　何か緊張してきたー……！」

さっきまで澪先輩のベースアンプを使えることに喜んでいた純だったけど、ベースをアンプに繋げて準備を終えると、流石にその言葉通りに緊張してきたみたいで落ち着きなくトントンとその場で足踏みをしてる。
純って澪先輩のファンじゃなくって、純粋に憧れてるから尚更緊張してるみたい。

「お姉ちゃん、喜んでくれるかな？」

ジャズ研の練習用ギターの青いストラトキャスターを唯先輩のアンプに繋げて構えている憂は、特に緊張した様子は見せないで、逆に何かワクワクしてる。
そんな憂に私は、『こういうところは姉妹なんだな』って思ったり。
唯先輩もライブ前は緊張した素振りは見せないで自由奔放に振る舞ってるし。

（降ってきそう）

何気なく視線を憂と純から窓の外に移したら、今にも雨か雪が舞い降りてきそうな曇天。

今日は二学期の終業式が執り行われて、明日から冬休み。私達のクラスの二年一組は冬休みに遊ぶ計画を立てて浮かれている子達と、早くも受験のための準備として冬期講習に足を運ぶ子達の大きく二つに別れてて、私と憂と純はどちらかといえば遊び組だったりして。

まぁ、四六時中ずっと遊ぶわけでもないし、浮かれてるわけでもないけど。

とにかく今は目先のシークレットクリスマスライブのためにＨＲが終わったら駆け足で部室に向かった。

大抵放課後の部室の扉を最初に開くのは私で、先輩達は五分か十分後ぐらいにやってくるから、案の定今日も私達が一番乗りだった。

早速演奏の準備に取り掛かって、今か今かとドキドキとそわそわする気持ちを抑えるために、何度かむったんをストロークしてるけど、十分近く経っても先輩達が部室にくる気配がない。

「先輩達、来るの遅いね」

「何か用事があって遅れてるんじゃない？　掃除当番とか」

純の言葉に納得したかけたけど、よくよく考えれば掃除当番ってことはないと思う。だって唯先輩達が掃除当番で遅れてる時は、決まってサク先輩が一人で部室にやってくるもん。サク先輩本人が唯先輩達は掃除当番で遅れてるって言ってたところから、サク先輩は唯先輩達とは同じ掃除当番班じゃないみたいだし。

だから今日、掃除当番だったとしても、唯先輩達かサク先輩が先にやってくる筈なんだけど、そのどちらかの先輩達が未だに来ないから、掃除当番は有り得ないと思う……多分。

「ね、ねぇ、梓ちゃん……」

『ホントにどうしたんだろう？』と、心の中で首を傾げていたら、憂が恐る恐るって感じに尋ねてきた。

「お、お姉ちゃん達に、今日部室でクリスマスパーティーするって……伝えたの？」

「……あ」

ドキドキとそわそわが一瞬で綺麗さっぱりと消えて、代わりにダラダラと冷や汗が全身を襲った。

「も、もしかして梓……言ってないの？」

「……」

「あ、梓ちゃん？」

「し……」

しまったぁーーっ！！

うっかりしてた！
言ってない！
先輩達にクリスマスライブをするって言ってない！

シークレットライブだから先輩達には秘密。だけど観客は先輩達。
だけど先輩達には秘密。だけど先輩達が観客……

頭の中はこんな矛盾みたいなものがグルグルグルグル駆け巡って、
更に冷や汗がダラダラダラダラと流れていく。

ていうか、絶対にライブを成功させるっていう意気込みと、そのための猛特訓が頭の大部分を支配しちゃってて、肝心の先輩達のことまで気が回らなかった！

「ていうか、そもそも今日って終業式だから、元々先輩達は部室に来ないんじゃ……」

確かに純の言う通りだよ……
受験勉強真っ最中の先輩達がわざわざ部室に来る筈がないよね……
今日はお昼までだもん。早く帰って勉強に取り組むのが受験生のあるべき姿だよ……

しかも、よくよく考えたら、朝、むったんを置きに部室に行ったら、五つあるギタースタンドが全部空いてた。

つまり、先輩達は最初から今日は部室に来る予定はなかったんだ……

もっとよく考えたら、唯先輩と律先輩とムギ先輩はいいとしても、クリスマスパーティーには断固反対してる澪先輩とサク先輩がすんなり来てくれる筈はない……

甘かった……

『先輩達のため』なんて銘打ってたのに、その先輩達にクリスマスライブをするって伝えてないし、例え伝えていたとしても、澪先輩はまだ何とかなるかもしれないけど、理屈屋のサク先輩を説得する手段を私は知らないし出来ない……

「ごめん……私のせいで……」

「梓ちゃん……」

「梓……」

「私が先輩達に言ってなかったから……」

「だ、大丈夫だよ梓ちゃん！　今からお姉ちゃんや咲也さん達に電話して来てもらおうよ！」

「そうだよ！　諦めるのはまだ早いって！」

気落ちしてガックリと肩を落として顔を伏せる私に、憂と純が励ますように声を掛けてくれるけど、部活を休んでまで一週間練習した成果を発揮出来ない事と、何より付き合ってくれた憂と純に本当に

申し訳なくて、私は顔を上げられずにいた。
だけど……

「あれ？　梓ちゃんに憂ちゃんに純ちゃん？　どうしたの？」

不意に聞こえた扉が開く音と、どこかのんびりとした聞き覚えがある声に、私は顔をゆっくり上げた。

「「ムギ先輩……！？」」
「紬さん……！？」

そこには桜高指定のコートを着て、茶色のチェック柄のマフラーを首に撒いて、両手には紙袋を持っているムギ先輩が少し驚いた表情で立っていた。

「今日って部活ないんじゃ……」

いきなりのムギ先輩の登場にびっくりした私がそう言うと、ムギ先輩は少し驚いた表情から、いつもの柔和な表情に早変わりして口を開いた。

「うん。でも、やっぱりクリスマスパーティーを諦めきれなくって。

そしたらね、りっちゃんが部室でいいからクリスマスパーティーを開こうって」

「でも、律先輩達がいないんですけど……」

と、純が言う。

「りっちゃんと唯ちゃんは、澪ちゃんと咲也君を説得するから先に部室に行って飾り付けして、終わったら梓ちゃんを呼んでてって言われたから～♪」

そう言ってムギ先輩は両手に持ってた紙袋からキラキラと輝くモールにリボンに、ビーズがふんだんにデコレーションされたリースを取り出して笑顔を浮かべた。

「実は一人でもいいからクリスマスパーティーをしたくって、家から持ってきてたの～♪」

一人って……

それは凄く寂しいと思うんですけど……

「それで、梓ちゃん達は何してたの？」

「えっと……」

思わず口ごもちゃった……
『先輩達を待ってました』って言えばいいんだけど、いざムギ先輩を前にしたら何だか恥ずかしくって……

「あの～　実はですね」

そんな私を見兼ねた純が助け船を出して、私達がここにいる理由を告げようとした矢先に……

「ムギ～　飾り付け終わったか～？　って、そんなに早く終わらないか」

開きっ放しの扉から、律先輩がひょっこり姿を見せた。律先輩の後ろには何だか気恥ずかしそうに身体を縮こませてる澪先輩の姿も。

「あ、りっちゃん」

「あれ？　何だ梓ももう来てたのか。お、憂ちゃんに佐々木……じゃなかった、鈴木さんも」

「澪ちゃん、来てくれたのね～♪」

「い、いや！　私はその……」

「正直に言えよ澪ちゅわん♪　『実は私もクリスマスパーティーを

やりたかったの～』ってさ！」

「う、うるさい！　律が余りにもしつこいから私は仕方なく！　ていうか声色を真似るな！」

「じゃあその手に持ってるクラッカーは何かにゃ～？」

「こ、これはさっき唯に渡されたから……」

「でも澪ちゃん。クリスマスパーティーをするって言った時、嬉しそうな顔してたわ～♪」

「ム、ムギ！」

「観念しろ澪。ホントは澪もやりたかったんだろ？」

「う、うん……」

「あ、唯ちゃんと咲也君は？　やっぱり咲也君来ないのかな？」

「サクは鉄壁だからな～　まぁ、でも唯が引きずってまでも連れて来るよ。なんだかんだでサクって最終的にはため息ついて頷くし」

「そういえば和は？　誘わなかったのか？」

「誘ったけどさ、今日は家族で過ごすからごめんって」

「そうなんだ。じゃあ仕方ないな。和の分も楽しまないとな♪」

「澪ちゃん、嬉しそう♪」

「よっぽどクリスマスパーティーやりたかったんだな～」

「うっ……！」

まるで神様が……ううん、サンタクロースが先輩達に恩返しをしたい私の想いを汲んでくれたみたいに、続々と部室に先輩達が集まってきて……

「パーンッ！！」

「キャーッ！！」

パンッ！！

「うわーっ！！　澪！　急にクラッカー鳴らすなよ！　しかも私に向けて！　てか、自分が驚いてどうすんだよ！」

「違うわりっちゃん。澪ちゃんの後ろから先生が驚かしたから……」

先生もやってきて……

「顧問を差し置いて部員だけでパーティーを開くなんてことはさせないわよ！」

「さわちゃん！　普通に登場しろっていつもサクが言ってるだろ！　澪が気絶しちゃったじゃんか！」

「澪ちゃん！　大丈夫！？」

「私を誘わなかった貴女達が悪いのよ」

「何平然と言ってるんだよ！　アンタそれでも教師かーっ！！」

和先輩は来れないみたいだけど、それでもムギ先輩と律先輩と澪先輩と先生が来てくれて……

「賑やかだね～　軽音部って。ジャズ研とは大違いだよ」

「クスッ。そうだね」

「後は唯先輩と咲也先輩だけだね。梓、ボーッとしてないで準備準備！」

「え、あ、でも、私はもう準備万端なんだけど……」

「楽器じゃなくて、先輩達に贈る言葉の準備だよ」

「梓ちゃんがお姉ちゃん達に伝えたい想いだよ」

「伝えたい……想い……」

胸に手を当てる。

不思議とドキドキは収まってて、トクトクと鼓動が脈を打ってて……

扉を見る。
開け放たれたままの扉の先は今日の曇天と相俟ってどこか別世界の入口みたいに薄暗くて、だけど足音が聞こえて……

「やっほ～」

「……」

眩しいくらいに満面の笑みを浮かべた唯先輩と、相変わらずの機嫌が悪そうな表情で、その中でどこか疲労の色が見えるサク先輩がやってきて……

「あ、唯ちゃん！　咲也君！」

「りっちゃん隊長！　命令通りサッくん隊員をお連れしました！」

「うむ！　ご苦労であった唯隊員！」

「はぁ……」

「いつもより深いため息ね？　咲也くん」

「…この天然に教室で散々喚かれたり、ノイローゼになりそうな程クリスマスクリスマス言われたり、挙句の果てにはクラスの連中から、平沢の懇願を聞き入れん俺がワリィみてェな非難めいた視線をぶつけられて軽い一悶着が勃発したら、誰だって疲弊するっつうの……」

「始めから素直に頷かないからそんなことになるんだぞサク」

「そうだよサッくん。あれはサッくんが悪いのです」

「…いけしゅあしゃあと何言ってやがる。事の発端はお前だろうが」

「いひゃい！　いひゃいよひゃっくん！」

「唯のほっぺた引っ張るなって！」

「…つうか何でコイツは気絶してんだよ」

「先生が澪ちゃんを驚かしちゃったから……」

「いや～　悪気はなかったんだけどね～　テヘッ☆」

「絶対悪気あっただろさわちゃん。誘わなかった私達が悪いって言ってたし」

「…つうか画的にキツいから二度とそれをすんなっつったろうが。少しは年齢考えろ」

「ガーンッ！」

「あれ？　あずにゃん、憂、純ちゃん。楽器持ってどうしたの？」

唯先輩がそう言うと、気絶しちゃってる澪先輩以外が一斉に私達に振り向く。

「梓ちゃん、みんな揃ったよ」

「ほら、梓！」

「う、うん」

まるで、私の決意を後押ししてくれるように、左肩には憂の右手が、右肩には純の左手が置かれる。

本当にサンタクロースがこの状況をプレゼントしてくれんだとしたら、私は本当に幸せ者。

憂、純、唯先輩、澪先輩、律先輩、ムギ先輩、サク先輩、先生。この場にはいないけど和先輩。あ、影宮先輩も。

軽音部に入部しなかったら、出会えなかったかもしれない先輩に友達に先生。

笑い合って、助けられて、支えられて、力になってくれて……

「起きろ澪。梓達が何かしてくれるみたいだぞ」

「う……ん……律……？　あ、唯、咲也……」

「…お前も大概だな。パーティーを散々否定してたくせに」

「そ、そういう咲也だって……」

「…俺は不本意にもコイツの本意によって無理矢理に、だ」

「エッヘン！」

「無意味に威張んな……」

左手はむったんのネックを掴んで、ピックを持った右手は胸に当てて、私は一歩先輩達に近付いて口を開いた。

「あの！　唯先輩！　澪先輩！　律先輩！　ムギ先輩！　サク先輩！　実は私と憂と純からクリスマスプレゼントがあるんですけど！」

今日はクリスマス・イヴ。
少しくらいわがままになってもいいよね？

「先輩達は……その……受験勉強で疲れてると思いますし……だから！　私達が先輩達を楽しませたくって！　今日のために一生懸命練習してきました！」

私の言葉は支離滅裂なのかもしれない。
こうやって面と向かうのはやっぱりちょっと恥ずかしいよ。
でも、言わなきゃいけない言葉があるんだよ。

「いつもいつも！　先輩達には色んなものを貰ってばかりで、何も返せてないんです！」

「「梓……」」

澪先輩と律先輩が私を呼ぶ。
その声が聞こえる度に私は嬉しいんです。

「だから！」

「梓ちゃん……」
「あずにゃん……」

ムギ先輩と唯先輩が私を呼ぶ。
その声が聞こえる度に私は心が弾むんです。

「恩返しに先輩達に歌と演奏をプレゼントしたいと思います！」

「……」

サク先輩は何も言わない。
でも私を見てくれている。それだけで充分なんです。
そして私は言えたんだ。『恩返し』って言葉を。

「うわぁ～♪　梓ちゃん達の演奏～♪」

「サプライズプレゼントだな～」

「咲也の言ってた通りだったな。梓が何かしてるって」

「…態度見たら一目瞭然っつったろ」

「あずにゃん！　憂！　純ちゃん！　早く聞かせて！」

感激したみたいに瞳を輝かせるムギ先輩。
活発そうに笑って頭の後ろで手を組む律先輩。
微笑んでサク先輩に顔を向ける澪先輩。
腕を組んで壁に背中を預けるサク先輩。
両手を握り締めて、無邪気な子供みたいにワクワクしてる唯先輩。

「何か青春って感じね～」

一歩後ろに下がって、扉を閉める先生。

「それじゃあ、聞いてください！【冬の日】」

憂と純に目配せをしたら、二人は『うん』と、一度頷いて、それぞれストラトキャスターとベースを構える。

そして……

「一、二、三、四」

純のカウントの後に……

♪♪♪～……

この日のための猛特訓の成果と、先輩達の恩返しを込めた私達の演奏が始まった。

♪♪♪～……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

有り体に言えば、演奏面はまずまずでギリギリ及第点といったところか。

しかしリズムの要と言えるドラムがないためにメリハリがなく全体的に薄っぺらい演奏になってしまっていたのは否めない。

しかも、敢えてオブラートには包まずぶっちゃけてしまえば、ボーカルである中野はまさかのジャ○アンボイスだった。

……いや、語弊が生じるので的確な二文字で表わせば、

【音痴】

に、尽きる。

中野が歌い出した途端に空気が一瞬にして死んだのを当の本人以外の誰しもが敏感に感じ取ったことだろう。

思えばこれまで、中野の歌声というものを耳にした覚えはなかった故に、アイツの歌を聞いた時の衝撃たるものは、２００２年のサッカー日韓ワールドカップで、代表入りが確実視されていた、あのレフティが代表メンバーからまさかの落選した時と同等の衝撃に匹敵した（あくまでも個人的にだが）

とはいえ、流石にムスタングを弾きながら精一杯に、文字通り一生懸命に歌う中野に、露骨に音痴だと表情を曇らせるわけにはいかず、更にアイツなりの想いを聞いた後にはそんな態度を取れる筈もなく、俺は終始腕を組んだまま演奏に耳を傾けていた。

それは恐らく平沢達も同じであるように、手拍子を送ったり、リズムに乗って小さく身体を揺らしていた。

演奏が終われば中野も平沢妹も鈴木も『ありがとうございました！』と、口を揃えて俺達に深々と頭を下げた。

そんな後輩達に平沢達は歓声と拍手喝采をいつまでもいつまでも送っていた。

顔を上げた中野達は満足気に笑ったり、照れたようにはにかんだり、安堵の息を漏らしたり、三者三様の反応を見せ、中野曰くの俺達に

恩返しプレゼント演奏は大成功といっても過言ではないだろう。

それからは、全員で部室内をクリスマスチックに装飾し（俺はハナから乗り気ではなかったが渋々）クリスマスパーティーへと事態はなだれ込んだ。

琴吹が持参していたクリスマスケーキを食べたり（俺の分は平沢にくれてやった）、田井中が持参してきたロシアンクラッカーというもので遊んだり（俺は不参加）、他愛もない雑談を交わしていれば、気が付けば時計の短針が五時を回っていた。

流石に受験生である俺達は余り羽目を外せないので、宴もたけなわということで解散となった。

帰り道が途中まで同じ中野と、帰り先は当然平沢と同じ家のその妹の計四人で帰り道を牛歩するかと思いきや、明日から冬休みに突入するので亀を中野家に運ばねばならず（夏休みの時には亀は中野家に預かられていたため、自然と今回も中野が預かる運びとなった）、平沢妹と山中顧問の手を借りて、中野と平沢妹は山中顧問の車で先に去っていき、俺と平沢は凍える寒気にうんざりしながら帰路についていた。

何が嬉しいのか、やたらとテンションが高い平沢は、『今日はクリスマスだね～』やら『雪降らないかな～』等々忙しなく且つ無意味に俺の腕を掴んだり、ニコニコと笑ったり、とにかく情緒不安定気味な平沢を適当に受け流す。

その途中、不意に平沢が立ち止まり、何事かと訝しく表情を顰めれば、平沢の視線の先には商店街主催の福引き会場が。

福引きという物を眼にした途端に、そういえばと思い、徐に財布からアホから西野経由で入手してしまい、特に欲しくもなかった二枚の福引き券を取り出す。

どうやらこの福引き券は視線の先の福引き会場のものらしく、俺の手にある福引き券を目敏く発見した平沢は、『サッくん！　やろうよ！』と、返答を聞く前に俺の手を握っては福引き会場に突進の勢いで駆け出す。

別段、福引きにはこれっぽっちも興味はないが、何故か興奮している平沢に反論や異論を放ったところで、聞き入れてはくれまいと悟り、仕方なく俺も福引きをやるハメに。

「お待ちの方、どうぞ～」

【1等・一泊二日の沖縄旅行（交通費は含まれません）

2等・人生当てもんゲーム　～君も億万長者にならないか～

3等・三千円分の商品券（商店街のみ使用可能）

4等・お好きなファッション小物を一品

5等・ポケットティッシュ

6等・たわし

7等・お好きなお菓子を一品】

「明らかにおかしいだろ……」

「ほぇ？　なにが？」

「別に……」

流石は繁華街より劣る商店街の福引きだ。
そのまさかのラインナップに独り言を漏らせば平沢が振り向いたが、
その疑問に答える気には到底ならないので、適当にあしらう。

「お待ちの方、どうぞ～」

すると、大学生のバイトだと思われる福引きスタッフに呼ばれ、『ふんすっ！』と、気合いの入らない気合いを注入した平沢は福引き券をスタッフに渡して、抽選器のハンドルを掴む。

「サッくん！　私！　沖縄を当てるよ！」

「…意気込むのは勝手だが、一々振り返らんでさっさとやれ」

「了解です！」

しかし、例え沖縄が当たったとしても、交通費は別途だし、しかも

一泊二日だ。果たしてこれは当たりだとしていいものなんだろうか……

「とぉ！」

などと思考していれば、ガラガラと音を立て抽選器を一回転させた平沢の声と、カツンっと抽選器から出てきたパチンコサイズの玉が乾いた音と連れ添ってコロコロと転がる音が聞こえた。

「おめでとうございます！　６等のたわしで～す！」

「え～……」

玉の色は黄色。それが意味するのは６等のたわしのようで、一応クリスマスということを考慮してか、それらしくラッピングされた、たわしが平沢の手に。
しかし本気で沖縄を狙っていた平沢は落胆するばかりだ。

「せっかくのクリスマスなのに……たわしっス……」

「…妹にでもやっとけ。お前からのプレゼントなら何だって喜ぶだろ」

「でもでも、たわしなんだよ？」

「…お前が持ってても実用的じゃねェって意味だ」

「お次の方、どうぞ～」

「はっ！　サッくんや！　私の仇をとっておくんなまし！」

（聞いてねェし……）

せっかく使い道を提示してやったのに、相変わらずのマイペースに内心で愚痴り、スタッフに福引き券を渡す。

「頑張って！　サッくん！」

一体何をどう頑張ればいいのか不明だが、そこはＥＴＣばりにスルーし、抽選器のハンドルを掴んで回す。

ガラガラと音を立てて、一粒の玉が抽選器から飛び出し、コロコロと転がる。

「おめでとうございます！　４等で～す！　そちらからお好きな物をお一つ選んでくださ～い！」

玉の色は青ではなく何故か群青色。そして意味するのは４等らしく、スタッフが傍らにある大量の衣類が入ったワゴンを指差す。

「あぁ～……沖縄がぁ～……」

「…ンな簡単に当たるかよ」

「でもでも、前にムギちゃんがハワイ旅行当ててたんだよ」

「…懸賞の類が当たりやすい体質なんじゃねェの」

だとしたら何とも羨ましい体質だと、ぼんやり思いつつワゴンに近付いて中身を見れば、夏物の服だったり、子供の服だったり、女物だったり、一部の好事家を狙ったとしか思えないセンスの欠片もない何を訴えているのか謎な単語がプリントされてあるTシャツだったり等々……

その数々の品々を一瞥しただけで、俺は直感した。

（ただの在庫処分じゃねェか……）

と。

『福』を『引く』と書いて『福引き』なのだが、果たしてこの中に『福』はあるのだろうか。

「おぉ！　見て見てサッくん！　じゃあーん！」

どうやらコイツは一部の好事家に当て嵌まるようで、玩具を与えた

ガキが燥いでいるような笑みで俺に見せつけたのは『バンド』と書かれてあるTシャツ……いや、よくよく見れば『バソド』だった……つうか、そもそも『バソド』って何なんだ……

「…お前にとってはそれが福なのか？」

「ほぇ？　だってこれ服だもん」

「……」

確かにその通りなのだが……

言葉のニュアンスが僅かに違うだけで、こうも的外れな返答を送られるとはな。

「…つうか、幾らお前の好みの物が在ったとしても、選ぶ権利は俺が持ってるっつうことを忘れんなよ」

「でもでも、サッくんってこの中の服を着るの？」

「着ねェよ……」

「じゃあ私が選んでいいよね？」

「もう勝手にしろ……」

「うん！」

よく分からんが女というものはワゴンバーゲンが好きらしく、コイツもその辺りは女子ということか。

そんなに吟味してまで欲する物があるのか、時折『う～ん……』と、唸りながらワゴン内を物色する平沢。

こんな寒空の下、付き合わされる俺の身にもなってほしいが、そんなことなどお構いなしに平沢は物色する手を止めない。

そして、時間にして約二分後。

「あ！　これ！　これにする！」

漸く気に入った物が見つかったらしく、平沢がワゴンから発掘した物体を俺に見せつけるように目の前に差し出してきた。

「掘り出し物見つけた～！」

その手にあるのは、ねじりで全体を編み込んで、頭頂部にはボンボンが付いた耳あて付きの白いニット帽。側頭部には銀色のビーズで小さく『ＯＫＯ』と装飾されてあったりもする。

因みに『ＯＫＯ』とは女子高生中心に流行しているブランド品とのこと（情報源は夕方辺りのテレビ番組）

論より証拠として、夏フェスの時に中野が、夏期講習の時には秋山が、それぞれ着用していたのを実際に目撃したし。

「…お前にしちゃ正面なもんを選んだな」

てっきり、例の謎めいたTシャツシリーズを選ぶものかと思っていたが。やはり女子はブランド品には眼が無いといったところか。

「いや～　このTシャツとどっちにしようかな～って迷ったんだけどね～」

「……」

前言撤回。コイツは相変わらずだ。

「…とにかく、それでいいんならさっさと帰るぞ」

「あ、待って！」

「ンだよ……」

「えっとね、サッくんにお願いがあるんだけど……」

心なしか頬が紅い平沢は、掘り出し物のニット帽を何故か俺に差し出してきた。

「サッくん、ちょっと持って」

「……」

意図が不明だ。

だが、やらなければまた、今日の教室の惨事ヨロシクになる可能性は無きにしも非ず。

なので、白いため息を一つ吐き出して、渋々ニット帽を手に取る。

「んとね……それを私に渡して」

両手を差し出す平沢。

「……」

何となくその意図を理解してしまった俺は、一度ニット帽を宙に軽く投げて、それを平沢の手に置く。

つまりコイツは……

「エへへ♪　サッくんからのクリスマスプレゼントだぁ♪」

こういう事をしたかったんだろう。

俺から平沢にニット帽を渡すという行為自体に意味があり、もしかしたらその渡す物は何でもよかったのかもしれない。

まぁ、例えそれが何であれ俺からしてみれば、どうでもよく、尚且つ何故コイツが幸せそうに笑うのかが理解出来ない。

「…満足したか？」

「うん！　サッくんがクリスマスプレゼントくれたから大満足！」

「…やってねェけどな」

言って、歩き出す。

「そんなことないよ～　サッくんがくれたも～ん♪」

ニット帽を胸に抱き締めてかなりご機嫌な平沢が俺の隣に並ぶ。

（相変わらず都合のいい頭をしてやがるな……）

まぁ、それが良い意味では個性。悪い意味では欠点というものを紙一重で常時装備しているのが平沢という天然であり、一種の天才なギタリストだ。今更とやかく言うまい。

「はぁ……」

しかし、ため息がどうしても出てしまうのが難儀だ。

「ため息ばっかりついてると、幸せが逃げちゃうよ？」

「誰のせいだ……つうか、その台詞何回目だ……」

「ん～っとぉ……」

「数えんでいい……」

「あ！　サッくん！」

「今度はなんだ……」

街中には無数のイルミネーションがキラキラと彩り鮮やかに眩しく煌めき輝く。

ジングルベルの音があちらこちらから流れて響く。

本日十二月二十四日金曜日。

俗に言うクリスマス・イヴ当日。

中野と平沢妹と鈴木の未来の軽音部員から演奏というプレゼントを

贈られ、天然且つ天才ギタリスト曰く、俺が平沢にプレゼントを進呈した今日の天気は朝から曇天。

「見て！　雪だよ！　ホワイトクリスマスだぁ～！」

「どうりで今日は一段と冷え込むわけだ……」

その曇天は、雪が街中を白く染め上げるための布石だとしたら、クリスマス・イヴ当日に降らせるという何とも憎い演出をしやがる。

「綺麗だね～」

「さみぃだけだ……」

「ぶぅ！　風情がないよサッくん！」

「なくて結構……立ち止まってねェでさっさと帰るぞ……」

「ほ～い」

そんな憎い演出の中、俺はパーカーに両手を突っ込んでダラダラと、平沢は嬉しそうにニット帽を胸に抱えてニコニコと、対照的な俺達は歩を進めていった。

「サッくん」

「あン？」

「メリークリスマス！」

「…あぁ」

「エへへ～♪」

「…意味もなく笑ってんじゃねェよ」

「サッくんと一緒にクリスマスを過ごせたんだもん。だから嬉しいの」

「あっそ……」

「うぅ……素っ気無い……」

第百三十八話（後書き）

咲也が唯にプレゼント（？）したニット帽は、原作２巻１０３Ｐで唯がかぶっているニット帽に近いものをイメージしていただけたら幸いです。

第百三十九話（前書き）

受験編その六です。

や、やっと更新出来た……

第百三十九話

二十四日のクリスマス・イヴから時間は流れること丁度七日。即ち一週間後の三十一日金曜日。
本日は２０１０年を締めくくる最後の日。所謂、大晦日だったりする。

そして、現在時刻午前十時ジャスト。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　平沢　憂】

今年の冬は例年に比べて寒気が厳しいみたいで、朝は起きるのが辛かったりします。私の体温で暖まった布団の中で、ついついゴロゴロしちゃったりして、布団から中々抜け出せなくなっちゃったりしてしまいます。

でも、『ふんすっ』って布団の中で気合いを入れたら不思議と布団から抜け出せてしまいます。

エヘヘ♪　もしかしたらお姉ちゃんの真似をしたからなのかも♪

身仕度を整えて、一度お姉ちゃんの部屋に行きます。

コンコンとノックをして『お姉ちゃん、入るよ』と確認の意を告げ

て扉を開けたら、ベッドの上で幸せそうな顔を浮かべてスヤスヤと寝息を立てるお姉ちゃんがいます。

この一週間、ずっとお姉ちゃんは幸せそうにウキウキしてて、そんなお姉ちゃんを見てると私も忽ち幸せな気持ちになります。

『憂〜！　憂〜！』

『おかえりお姉ちゃん。どうしたの？』

『見て見て〜！　サッくんからクリスマスプレゼントもらったんだぁ〜！』

『咲也さんから？』

『うんっ！』

『うわぁ〜！　そうなんだ！　良かったねお姉ちゃん！』

『デヘヘヘ〜♪』

『あ、だからそんなに嬉しそうなんだね』

『だってだって！　サッくんがプレゼントだよ！　今まで一度もプレゼントなんてもらったことないのに！』

『あれ？　でも、ギー太のメンテナンス用具一式を咲也さんがプレゼントしてくれたって、前にお姉ちゃん言ってたよ？』

『あ～……あれはギー太にだよ！　今回は私に！』

『クスッ　そうだね。前はギー太で今回はお姉ちゃんにだね』

『うん！』

以前、お姉ちゃんがギー太を買ってきた折りに余りの嬉しさに、暫くの間ギー太と添い寝をしていていて、まだお姉ちゃんが一年生だった時に、中間テストでの追試で百点を取った時も答案用紙と添い寝をしていました。

お姉ちゃんは嬉しい事や物があったら、その対象物と添い寝をする傾向にあるみたいで、今、私の目の前でスヤスヤと寝ているお姉ちゃんの胸元には、咲也さんからクリスマスプレゼントされたニット帽があって、それと添い寝をしています。

本当はお姉ちゃんを起こさなきゃいけないんですけど、受験勉強で疲れてるみたいだし、何より咲也さんからのプレゼントを大切に大事に愛しそうに抱き締めて添い寝しているお姉ちゃんを起こすのは気が引けてしまいます。

（お昼まで寝かせてあげよっと）

だから私はゆっくりと扉を閉めて、お姉ちゃんの部屋から出ていきました。

それから朝ご飯を食べて、今日のお昼頃に仕事の都合で遠方に行っ

ているお父さんと、お世話のために一緒に同伴していたお母さんが半年振りに帰ってくるので、それまでに家の事を色々と片付けます。

その途中、晩ご飯の食材が足りないことに気付いた私は、二年前に咲也さんとバッタリ遭遇した近所のスーパーへ行くためにきちんと防寒対策をして、お姉ちゃんに置き手紙を残して家を出ました。

「寒いなぁ……」

玄関を開けて一歩外に足を踏み出したら、冷たい寒気を含んだ風が身体を通り抜けて、思わず身を縮こませてしまします。

二年前のクリスマスにお姉ちゃんからプレゼントされたお気に入りのマフラーを改めて巻き直して、歩き出します。

「あ」

だけど、十歩程歩いたところで足を止めました。

その理由は、自宅に隣接してある小さな神社の鳥居に気付いたからです。

実は私は先月の上旬辺りから、この神社でお百度参りをしてます。

あ、えっと……本来、お百度参りは一日で百回お参りを済ませるから、お百度参りって言われてるんですけど、私の場合は神社の前を通り度にお参りをしているので、厳密にはお百度参りじゃないんで

す。
さすがに一日中お参りをしているわけにはいかないので……
と、とにかく、私は鳥居を潜って神社の境内を歩きます。ホントに小さな神社なので御賽銭箱が置いてある本堂まではすぐに着くことができます。
財布から十円玉を取り出して、御賽銭箱に投げます。そして鈴をガランガランと二回鳴らして、両手を合わせて神様にお願いします。
（どうかどうか……）
『う〜い〜』
『どうしたの？　お姉ちゃん』
『アイス食べた〜い』
『晩ご飯食べてからね』
『えぇ〜……』
『もうすぐご飯出来るから我慢してね』
『ほ〜い。ギー太も一緒に食べる？　憂のご飯は美味しいんだよ〜』
『クスッ』

『ほぇ？　なぁに？』

『ううん。お姉ちゃんとギー太って仲いいなって思って』

『いや～♪　照れますなぁ～♪』

お姉ちゃんと……

『憂。大丈夫なの？　風邪ひいたって唯から聞いたけど……』

『うん、もう平気。お姉ちゃんが一生懸命看病してくれたから。あ、咲也さんと梓ちゃんも色々手伝ってくれて』

『そう、なら良かった。でも、あんまり無理しちゃダメよ？』

『エヘヘ……』

『どうしたの？』

『なんだか和ちゃんに頭撫でられるのって久し振りだから……』

『クスッ　確かにそうかも。それはそうと憂、ここ学校なのに地が出てるわよ』

『あっ！　えぇっと～……心配かけて申し訳ありませんでした、和さん』

『はいはい。じゃあ私、生徒会室に行くね』

和ちゃんと……

『いらっしゃいませ、紬さん』

『こんにちは憂ちゃん♪　もうみんな来てる？』

『梓ちゃんだけで、他の皆さんはまだです』

『じゃあ私二番乗りね～♪』

『はい、そうですね♪　あ、どうぞ上がってください』

『うん。お邪魔しま～す♪』

『今日って合宿の打ち合わせなんですよね？』

『うん♪　合宿ってすっごく楽しいから私大好きなの♪　あ、憂ちゃんも参加する？』

『い、いえ！　私は軽音部じゃないですから……』

『でも、人数多い方が賑やかで楽しいと思うけど』

『お姉ちゃんから合宿の思い出話を聞くだけで、私は楽しめますから』

『憂ちゃん……』

『お姉ちゃん、梓ちゃん。紬さんが来たよ～』

紬さんと……

『憂ちゃん。折り入って頼みがあるんだが……』

『はい、何ですか？　私に出来ることなら何なりと言ってください』

『うっ……！　そんな純粋無垢な瞳を向けられると言えない……！』

『あの？　律さん？』

『あ！　いや！　やっぱなんでもない！』

『そうですか？』

『そうそう！』

『でも、何かあったら言ってくださいね』

『（一日でいいから私の妹に！　なんて考えた私って……！）』

律さんと……

『憂ちゃん』

『あ、澪さん』

『二年生になったのに教室が一階だから、なんだか進級した実感が湧かなかったけど、憂ちゃんが桜高にいたらやっと実感が湧いてきたよ』

『そういえば、二年一組って一階にあるんでしたね』

『そう。おかげ律に毎日からかわれるよ』

『でも、私と同じ一階ですから、澪さんや和さんと学校で話せる機会が増えて嬉しいです』

『そう言ってくれると、一階の教室も案外悪くないかも……』

『はい！　そうですね！』

澪さんと……

『…ところで妹』

『はい、何ですか？』

『…万全に回復してねェとはいえ、アイツの嘆れていた声をどうやってあそこまで戻させた？』

『えっと……お祈りです』

『あ？』

『色々薬を試したら逆に悪化しそうだったので、なるべくお姉ちゃんには早く寝てもらって、後は早く治りますようにってひたすら神様にお願いしてました』

『…お前がスゲェのか、いるかどうか不明瞭な神仏がスゲェのかイマイチ不明な治療方だな』

『あはは……　そうかもしれませんね』

『…だが、今日の初ライブのボーカルには間に合わなかったが、コーラスをこなしたから結果オーライだ』

『あ、あの……』

『あン？』

『澪さん……大丈夫なんですか？　退場する時あんな事になっちゃって……』

『…今は真っ白になってるらしい。つうか琴吹のせいで未だに眼が痛ェし……』

『あはは……』

咲也さんが……

（お姉ちゃん、和ちゃん、紬さん、律さん、澪さん、そして咲也さんが無事に大学に受かりますように）

もしかしたらもう百回を越えているのかもしれないし、まだまだ半分も達してないかもしれません。

だけど例え、既に百回を越えていても私はお姉ちゃん達が無事に受験を終えるまで、この参拝を辞めるつもりはありません。

そして最後に必ず、私はこう付け加えます。

（そして、皆さん全員が笑って卒業出来ますように）

最後に深く深く頭を下げて、私は参道を歩いて鳥居を抜けます。

吐き出す息は白くて、空に立ち上ぼっていきます。この空の先に、もし神様がいるのなら本当にお願いします。

どうかどうか、お姉ちゃん達が無事に大学に受かって、皆さん全員が笑って卒業出来ますように……

（私の……）

心の底からのお願い事です。

「寒いなぁ……」

本当に吹き抜ける風が冷たくて、思わず呟いたこの言葉が『暖かいね』と言える春にならないかなって思いながら、私はスーパーへ足を向けて歩き出しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　真鍋　和】

現在時刻午前十時五分。

多分、幼稚園年少か小学校一年生ぐらいの男の子と女の子の二人が、とある目的地に向けて道を歩く私を追い越していった。

正に子供は風の子ってところかしら？

こんなに寒いのにあんなに活発に駆け回るなんて。

（そういえば……）

私も小さい頃は、今日みたいにどんなに寒くても、咲也が嫌そうな顔する程の暑さでも、あの子達のように駆け回っていた記憶がある。別に小さい頃は活発な子供だったわけじゃないけど、唯に付き合って遊んでいたら、自然と男の子顔負けな駆け回る子供時代になってしまったのよね……

幸か不幸か幼い頃からそんな唯や、決まっていつも一緒にいた憂と触れ合っていたから、あの姉妹のことは大抵理解出来る。唯の的外れな言動や行動。一見したらしっかり者の憂が、唯の事になると視野が狭まってしまったり等々……

憂はまだいいとして、問題は唯。

何て言うのかしら？

あの娘は自由奔放で奇想天外でマイペースな娘。

そんな唯だから、昔から色々とやらかしてくれた。

敢えて私が体験した例を挙げるなら、あれは確か小学五年生の時だったと思う。

小学校の行事でキャンプに行った時、家から夕食のレトルトカレーを一人一人が持参することになってたんだけど、ただ一人唯だけはカレールーを持ってきてしまっていたり、ある日の料理実習でたこ焼きを作った時も肝心の蛸を唯が持ってくるのを忘れて、結局たこナシ焼きになってしまったり等々……

とにかく唯は語り尽くせない程、本当に色んな事をやらかしてくれた。それは内容や結果の善し悪しに限らず、今でも鮮明に私の記憶に色濃く残っている。

そんな唯だから、常に身近にいた私だから、本当にあの娘の将来が心配だった。桜高に進学した理由だって、私が行くから、だったら私も、って安易で安直な感じで受験していたわ。

別にそれは悪い事じゃないし、私自身だって唯と一緒は嬉しいし楽しい。

だけど、あの娘は雲みたいにフワフワしてるから流されやすくて、自分の決定権を他人に委ねる節が垣間見えてしまう。

だからこそ、高校生になったんだからきちんと物事や事柄を簡単に見るんじゃなくて、自分自身の意思で行動できるような娘に成長してほしかった。

その願いが通じたのか分からないけど、唯は軽音部に入部して、まるで氷が溶けるようなゆっくりなスピードだけど、着実に進歩の過

程を歩んでくれた。尤も、咲也や澪や梓ちゃんが手を煩わせてる分、まだまだと言ったところかしら。

「……」

それと同時に、幼い頃から知っている唯が段々と成長していくに連れて、ほんの少しだけ寂しさを感じる私がいたりするんだから、私も唯の事を偉そうに言えないわ。

そう。何てことはない、私だってまだまだ子供。私も成長しなくちゃいけない。

だから私は国立の大学を受験する事を決めた。飛躍と言ってしまったら大袈裟で、自分の学力に自惚れてるわけじゃない。ただ、唯が高校で夢中になれる物や人と出会って新しい境地を開拓したみたいに、私も自分の可能性を試したくなった。新しい一歩を踏み出したくなった。

だから私は冬期講習を受けるためにこの道を歩いている。この道の先が私の可能性を示してくれていると信じて、今日も歩く。

私は国立へ。唯は西女大へ。

今まで一緒だった私達は分岐点に立っている。

まだまだ唯は危なっかしいところがあるけど、そこは同じ大学に進学予定の澪や律やムギが何とかしてくれるかもしれないし、もしかしたら緑ヶ丘大に進学予定の咲也が……それはないわね……多分……

まぁ、とにかく、今は自分のためと将来のためにしっかりと勉強して卒業を迎えたいわね。

「あら？」

時折吹く冷たい風を全身に浴びつつ、歩を進めていれば程なくして目的地の冬期講習が行われる塾に到着。多分私と同い年の受験生の姿が冷たい風から逃れるように足早に塾に入っていく。その中には中学生と思う子達の姿がちらほら見受けられる。
この塾は高校受験のための教室もあるから、中学生の姿があっても別に不思議じゃない。
だから、私が思わず口に出した疑問の声はその事じゃなくて、塾の入口付近に一枚のテレホンカードのような物が落ちていた事に該当する。

（何かしら……）

腰を落としてそのカードを拾い上げて見てみれば、それは受講証だった。
その受講証には顔写真と氏名、大学入試希望コース、個人を判別するバーコードが記載されてあった。

見たところ大学入試希望コースの欄が無記入からして、どうやらこの受講証の持ち主は中学生みたいね。

顔写真に視線を向ければ、肩口で切り揃えてるショートカット、横

に流してヘヤピンで留めてある前髪、そして眼鏡を掛けた女の子。
最後に氏名の欄に視線を移動させた時に……

「あの、すみません……！」

声を掛けられた。

受講証から顔を上げれば、三保中学の制服を着て少し狼狽した表情が滲出した女の子の姿が。

「この辺りで受講証を見ませんでしたか？」

「もしかして、これのことかしら？」

目の前の女の子と受講証の顔写真の女の子は同一人物だと直ぐさま理解した私は、彼女に受講証を差し出す。すると、一変して安堵の表情に変わった彼女は受講証を両手で受け取った。

「あ、すみません！　ありがとうございます」

「大事な物なんだから、もう落としたらダメよ？」

「はい。以後気をつけます」

そう言って彼女は私に深く頭を下げて、その拍子でズレた眼鏡を恥ずかしそうに直しながら踵を返して足早に塾内に戻っていった。そんな彼女の背中を見届けた私は、何だか微笑ましく思えて小さく『クスッ』っと笑った。

（私も行かなくちゃ）

そう思い、緩めていた口元を直して、彼女……【奥田　直】さんの後を追うように、私も漸く塾内に足を踏み入れた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　鈴木　純】

現在時刻午後一時三十八分。

年末も年末の大晦日のこの時期のこの時間帯のこの地方のテレビは、どこもかしこも似たような内容の番組ばかりで正直つまんない。美味しそうなスイーツ特集でもしてくれれば自然と意識と視線はそれに釘付けになるんだけど、残念な事にドラマの再放送か帰省のための高速の渋滞情報とかぐらいしかやってないから、炬燵に身体を沈めてリモコン片手にザッピングしている私の気持ちは『退屈～……』の一言に尽きちゃう。

憂と梓でも誘ってどこか遊びに行きたくても、またまた残念な事に私が今いる場所は地元じゃなくて茨城にあるおばあちゃんの家だったりするから、当然憂も梓とも遊べない。

お盆になったら毎年おばあちゃんの家に三日間過ごして、年末は地元で過ごすのが鈴木家。今年もそうなるんだと思ってたんだけど、おばあちゃんが転んで腰を痛めちゃったから私達一家五人はそんなおばあちゃんの容体を考慮して、年末はこっちで過ごすことになったんだよね。

幸いにもおばあちゃんは軽い打撲で済んだみたいだけど、大事を取ってお父さんとお母さんがおばあちゃんを連れて病院に行ってて、今、この家にいるのは私と兄の二人きり。

お母さん手製のお昼を済した後、兄は『ちょっと探検してくる』ってやけに意気込んでどっか行っちゃったから、独りぼっちの私はやることがなくて本当に退屈なんだよ……

「ふぁ～……」

冬の風物詩（私だけかもしれないけど）の炬燵の暖かさと余りの退屈さが相俟って、思わず零れる大きな欠伸。

『このまま寝ちゃおうかな～……』なんて思ってリモコンを手放してゴロンっと横になった瞬間、

バンッ！

「わっ！？」

いきなり居間の襖が勢いよく開いた。びっくりした私は、燻っていた眠気がカキーンって場外ホームランみたいに遥か彼方に飛んでいって、ガバリッと起き上がる。

「純」

この築何十年か分かんないけど間違いなく私が生まれる何年も前から建っている筈のおばあちゃんの古民家には私と兄しかいない。だから襖が外れちゃうぐらいの勢いで襖を開けた人物は必然的に一人。つまり……

「遊ぶぞ」

私の兄『鈴木　陣』しかいないってことになる。ていうか、一体どこから持ってきたんだろう？　その手には二枚の羽子板を持っていてニヤリと笑ってるよ……

「遊ぶって……何して？」

まぁ、この兄のことだし、右手の羽子板からして大体予想はつくんだけど、とりあえず訊いてみる。

「決まってるだろ。日本古来の正月遊戯である羽根突きだ」

うん。何ていうか……やっぱりだったよ……

「ヤだよ～……羽根突きって外でやるんでしょ？　外寒いもん」

「何だその現代社会に毒された子供丸出しな言い草は」

呆れ顔の兄だけど、私としてはこの炬燵から出たくないし。そりゃ確かに『暇だな～……』『退屈だな～……』『つまんないな～……』って、持て余すこのゆっくりした時間の流れに嘆いてたよ。そんな状況打破の兄の提案は渡りに舟だけどさ、外には出たくないし。だって寒いもん。

「子供は風の子っていうだろ？　ほら、やるぞ」

「私は風の子じゃないもん。ていうかどっからそれ持ってきたの？」

と、私が指差す先には兄の手にある二枚の羽子板。

「さっき納屋を漁ってたら見つけたんだ。ばあさんの家に来たのは久し振りだからな、ついつい探検を張り切っちまったぜ」

この兄は大学生。今は家を出て都心の大学に通ってて、帰省するのは決まって正月だけだから、兄にとってホントに久し振りのおばあちゃんの家にテンションがうなぎ上りになっちゃってる。元々この人は子供がそのまま大人になっちゃったような人だから、帰省する度に私ともう一人の兄を巻込んで遊ぶ。だから今回も探検だとか羽根突きを提案しても、日常茶飯だから大して驚かない。ていうか幼い頃からこんな感じだから驚きようがないんだよね……

「ほらほら、とっとと炬燵から出た出た。そして俺と遊ぼう」

「だからヤだって。外寒いもん。別のならいいよ」

そう言って私はテーブルの上にある蜜柑に手を伸ばして丁寧に皮を剥いていく。

「だったら室内羽根突きだ」

「いや無理でしょ」

「お前は固定観念にとらわれ過ぎだ。羽根突きが外でやるもんだと誰が決めた？　そんなルールがあるのか？」

「いや……ないと思うけど……」

「だろ？　だから室内羽根突きをやったっておかしくはない。因みに日本の正月の伝統的な遊戯らしいが、それは一般的な羽根突きを指しているならば、今日から俺とお前で室内羽根突きを大晦日限定

遊戯にしちまおうぜ」

この人は咲也先輩とはまた違うタイプ。咲也先輩は物事の道筋を最もな理論を立てて正論を言うけど、この兄は理論っぽいことを言ってるけど、実はよくよく内容を聞けば無理矢理な理論をこじつけてそれっぽく言ってるだけなんだよ。

でも、それはある意味頭の回転が早いってこと。つまり、結局私はこの人の提案にどれだけ不平や不満を漏らしても、絶対に敵わない。妙な説得力があるから私だけじゃなくて、もう一人の兄も丸め込まれちゃう……

と、いうことで……

「折阿」

カン。

「梓」

カン。

「榊原」

カン。

「ら！？　らーらーらー……」

ポトッ。

「はい、純の負けな」

「無理があるって！　人名しりとりしながら羽根突きするなんて！」

早速室内羽根突きをしてるんだけど、室内だから羽子が壁や天井に当たらないように力加減がすっごく難しいし、しかも兄が室内羽根突きルールとか言い出しちゃって、知り合いの名前を普段の呼び方でしりとりしながら羽根突きするって難関ルールを制定しちゃって、さっきから私の連戦連敗だよ……

「そこがこのルールの醍醐味だ。普段友人知人をどの様に呼んでいるかが咄嗟に出ちまうもんだから名字か名前でしりとりをしてしまいがちだ。さっきお前が失敗した『ら』で始まる人名なんて早々いない。しかし、このルールは『知り合いの名前を普段の呼び方で』だ。だから俺の場合友人に『ら』で始まる『ライドオン・大谷』で回避していたな。因みにコイツは大学のプロレスサークルでのリングネームだ」

「ズルくない……それ」

「ルールに乗っ取っているから何も問題ナシだ。言ったろ？　これがこのルールの醍醐味だって。もっと柔軟な思考で日々を過ごしてみろ。時には眼を見張る発見が見つかるぞ」

「例えば？」

「そうだな……北海道にいる中学生とかな」

「北海道？　中学生？　誰？」

「洞察力と観察眼に肥えた逸材さ。それから……いや、やっぱ何でもない」

「何か咲也先輩みたい。梓が言ってたんだけど、咲也先輩って色々鋭いらしいし」

「梓って娘は何度かお前の口から聞いたことあるが、その『サクヤ』ってのは初耳だな。名前からして男か？」

「うん。軽音部の先輩」

「そうか……で？」

「うん？」

「そのサクヤが好きなのか？」

「何でそうなるの！？」

「いやな、お前の口から俺や淳司以外の男の名が出たから」

「そんなんじゃないって！　咲也先輩は咲也先輩！」

「ふーん……」

「うわぁ……自分から訊いといて興味なさそうな返事……」

こういうところは咲也先輩に似てるかも。

「それはそうと、淳司の奴は何故いない？」

「あっちゃんはバイトが忙しいからコッチには夜着くんだって」

「せっかく一年振りに家族が揃う日だと言うのに淳司の奴め、薄情極まりないな」

ほんの少しだよ？　ホントにほんの少しなんだけど、トントンって羽子板で肩を叩く兄の言葉にちょこっとイラッときた私は、足元に落ちていた羽子を拾って、それを羽子板で思いっ切り兄に向かって叩いた。

ビュンって風を切る音の後に……

「グハッ……！」

って、兄の顔に羽子が直撃して悶えてる声が室内羽根突き会場になっていた居間に響いた。

「あっちゃんは忙しいから遅れてるの！　薄情じゃないんだから！」

顔を押さえて『ぬぉ～……！』って唸る兄をその場に放置して、私はプンスカと怒り心頭の境地で居間から出ていった。

「何故だ……何故純は淳司にべったりなのに、俺には全然懐いてくれないんだ……同じ兄でもこの差はなんだ？　ん？　懐く？　そういえば、俺に全く懐かない我が家の猫の姿はいずこだ？　実家に置いて来ちまってんのか？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　中野　梓】

現在時刻午後九時四十分。

『梓！　お願い！　今度の土日ウチの猫預かってくれないかな？』

『えっ！？　猫？』

『おばあちゃんが預かってくれる筈だったんだけど、風邪ひいちゃって……まだ小さいから一人にしとくの心配なんだよ』

『で、でも純。私、猫飼ったことないし……』

『そっかぁ……だよね……』

『憂に頼んでみたら？』

『それも考えたんだけど……憂って家の家事をやってるから、何か迷惑かなぁって……』

『そっか……』

『あー……どうしよ……ペットホテルって高いみたいだし……』

『あ、でも、他に頼る人がいないなら、預かってもいいけど……』

『ホント！？』

『う、うん』

これは一年前の冬の日の私と純の会話。

あの日、私は純から預かった猫のお世話のために、澪先輩は歌詞作りのために、律先輩は弟と映画を観るために、ムギ先輩はバイトのために、サク先輩は街を散策するために、それぞれ用事があって唯先輩の『こんなに寒いんだから、明日ウチで鍋しない？　あったかあったか鍋だよ～』を断っちゃったんだよね。

まぁ、サク先輩は特に用事はなくてホントにぶらぶら街を散策してただけって聞いた時は思わず呆れたっけ。

純から預かった子猫と最初はどう接していいか分からなかったけど、段々と子猫と触れ合っていく内に可愛くなっちゃって思わず『あずにゃん二号』って勝手に名前を付けたりしてた。

そのあずにゃん二号が何だか気分が悪そうに身体を震わせる。それは猫の習性の毛玉を吐くという行為だったんだけど、それを知らなかった私はどうしたらいいか分からなくてパニック陥った。そんな矢先に唯先輩からメールが届いて、気が動転していた私は、藁にも縋る思いでとりあえず唯先輩に助けを求めた。
すぐに唯先輩と、一緒にお鍋の食材を買い物していた憂が来てくれた時はホントに嬉しかったのをよく覚えてる。

『大丈夫だよ梓ちゃん。毛玉を吐き出してるだけだから』

『え？　毛玉？』

『うん。猫って毛づくろいする習性があって、舌で身体を舐めて綺麗にするんだよ。猫の舌ってざらざらしてるから、舌に引っ掛かっちゃった抜け毛を飲み込んでしまうの。その時のをこうやって毛玉にして吐き出してるんだよ』

『そ、そうだったんだ……何か病気とかになっちゃったと思って心配したよ……』

『良かったねあずにゃん。あずにゃん二号が何ともなくて～』

『はい。お騒がせしてすみませんでした……』

『ううん。あ、そうそうあずにゃん』

『はい？』

『マシュマロ豆乳鍋とチョコカレー鍋のどっちがいいと思う？　私

はねマシュマロ豆乳鍋かなぁって。でもチョコカレー鍋も捨てがたいんだよね～』

『憂。変なお鍋作っちゃダメだからね』

『あはは……』

結局、憂がその原因を説明してくれたおかげで私の心配は安堵に変わった。ていうか何で憂があんなに詳しかったのか謎だけど、そこは『憂だから』ってことであんまり深く考えない方がいいかも。

そして昨日の三十日の夜に純から電話がきた。

『お願い！　梓！　またウチの猫預かってくれないかな？』

『えっ！？　どうしたの？』

『おばあちゃんが腰痛めちゃったみたいで、心配だから明日から家族でおばあちゃんの家に行くことになっちゃって。事態が事態だから猫を一緒に連れていくわけにはいかないし、かと言って一人にしたらご飯のお世話とか出来ないし……』

その言葉を聞いて少し考えた私は『そういう事ならいいよ』と二つ返事で了承した。そして翌日、つまり今日。わざわざ純の方から家にやってきて、一年振りに再会したあずにゃん二号を私に預けていった。

一年前は小さくて可愛い子猫だったあずにゃん二号は一回り大きくなってたけど相変わらず可愛いらしい。

それから、あずにゃん二号のために去年買った玩具を、しまっていた押し入れから引っ張り出して今までずっとあずにゃん二号と遊んでた。

あずにゃん二号は私の部屋のベッドの上がお気に入りみたいで、基本的にそこでジッとしてる。猫は人間からの束縛を嫌うって聞いたことあるけど、あずにゃん二号は『ご飯だよ』とか『一緒に遊ぼ』って声を掛けたら反応してくれるからびっくり。

そして現在。

お風呂から上がってガチャリと音を立てて自室の扉を開けたら、あずにゃん二号はベッドの上で丸まってた。多分寝てるんだろうね。

自室にはトンちゃんもいるから、初めはあずにゃん二号がトンちゃんを襲っちゃうんじゃないかって危惧したけど、全然そんなことはなくてホントに大人しい。

（純ってちゃんと躾してるんだなぁ）

あずにゃん二号のお世話を切々に甲斐甲斐しくしている純を想像したら何かおかしくって私は声に出さないで小さく笑った。

（もうすぐ十時……）

もし目の前の光景が漫画やアニメだったら『すぴ～すぴ～』って擬音と顔と同じくらいのサイズの鼻提灯が在ってもおかしくない程に熟睡しているあずにゃん二号から、枕元に置いてる目覚まし時計に視線を移したら、九時四十五分とデジタル表示されてて、今年も残すところあと約二時間十五分。

ムギ先輩が持ってきてくれたベルギー王室のチョコ。初めてのサク先輩の家に訪問。新学期、新入部員は入部しなかったけど六人でやっていこうと決意。先生のギターが五十万円で買い取り。トンちゃんが入部。孤独感と友達の有り難さを知った五月。湿気が嫌になった梅雨。澪先輩ファンクラブのお茶会。先輩達の大まかな進路が決まったり。【ゆいあず】として参加した演芸大会。唯先輩とサク先輩がデスデビルのライブに。部室にクーラーが設置。初めての夏フェスと夜空の想い。その想いを決意に変えた夏祭り。卒業旅行の計画と唯先輩とサク先輩の関係。夏休み最後の日に花火。マラソン大会で唯先輩が行方不明。先輩考察。部室が使えなくなったり、憂が風邪をひいたり、新曲が出来たり。ムギ先輩の知り合い人が経営してる喫茶店でアルバイト。一抹の不安を感じた夕暮れの部室。先輩達の新たな一面を知った【ロミオとジュリエット】の演劇。部室で徹夜。講堂という武道館での先輩達との最後のステージ。涙で濡れたその後。唯先輩の前髪が大変な事に。来年度の入部希望を促す勧誘ビデオ撮影。律先輩の恋人疑惑。サク先輩がアコギを持ってこなくなった。初めて作った曲。そしてサプライズクリスマスパーティー。

思い返したら今年はホントに色んな事があったなぁ……

そして今はあずにゃん二号がいるんだから、最後の最後まで今年は

思い出が尽きないや。

（来年はどんな年になるのかな？）

全く見当がつかないって言ったら嘘になる。

先輩達の受験。そして……

「卒業……」

必ず訪れる別れ。
必ず訪れる一人。
必ず訪れる……先生？

「プッ！」

思わず吹き出しちゃった。何考えてるんだろ私。

でも、そんなことを考えられるのはいいことなのかも。暗い気持ちにならないで済むから。

「ねぇ、あずにゃん二号。来年はどんな年になるのかな？」

ゆっくりとベッドに座って、スヤスヤ眠るあずにゃん二号の丸まった背中を撫でる。

「先輩達といられる最後の三ヶ月……あ、自由登校があるし、それに三月は一日が卒業式だから、実質一ヶ月半ぐらいだね」

毛並みのいいあずにゃん二号の感触が掌に万遍なく伝わって少し気持ちいい。

「その一ヶ月半。私は後悔しないように過ごすよ。特別何かをしたいわけじゃないし、何も思い付かないけど普段通りに。唯先輩が抱き付いてきたり、律先輩がからかってきたり、澪先輩とサク先輩が呆れたり、ムギ先輩が楽しそうに笑ったり……」

あずにゃん二号がパチリと眼を開いた。

「普通に。それが軽音部の日常だもん。だからこそ悔いを残したくない」

あずにゃん二号が『にゃ～』って一声。

「ごめんね。起こしちゃって……」

また『にゃ～』って。

「にゃ～」

またまた『にゃ～』

「にゃ～」

またまたまた『にゃ～』

言葉が分かったらいいのにね。

あずにゃん二号が何を伝えたいのか分からないけど、もしかしたら……

「なんてね。さてと、お母さんに頼んで早めの年越し蕎麦を作ってもらおうかな」

最後にあずにゃん二号の頭を撫でて、私はベッドから立ち上がって扉に向かう。そしてあずにゃん二号が通れるように少しだけ扉を開けたまま、ひんやり冷えてる廊下に足を置いた。

その時、あずにゃん二号がまた『にゃ～』って鳴いた。

まるで『大丈夫だよ』って私に告げるように。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　山中　さわ子】

現在時刻午後十一時五十分。

「ねぇ、ちょっと紀実」

「んー……」

不機嫌とまではいかないにしても、決していい気分じゃない私が声を掛ければ、負けず劣らず、まるで咲也くんみたいな機嫌の悪そうな表情で紀実は気怠そうに振り返る。初対面の人ならこの表情に腰が引けてしまうかもしれないけど、生憎と私は高校からの付き合いだから臆することなく口を開く。

「何でこんな所にわざわざ車走らせてまで来なきゃいけないのよ」

こんな所とは神社。それも地元のじゃなくて、車で小一時間程の時間を消費する距離に位置する神社。

今日は大晦日だから別に百歩譲って神社に足を運ぶのは構わないわ。だけど！　こんな片田舎の神社に行く必要はない筈よ！　神社なら地元で有数な薦鳴神社があるって言うのに！

事の始まりは今から約二時間前。
受験が近付くにつれて、職務が激務に変化して慌ただしさを増していく中、どうにか年内の仕事を片付けた私は久し振りの休日である今日を利用して身体をゆっくりと休ませようとしていた。そんな矢先に紀実、彩、あやめのデスデビルメンバーが遊びに来たのよね……

まぁ、実家に帰省する予定はないし、何より大晦日を一人で過ごすよりかは気心知れた仲間で過ごすのは悪くないわ。でもね、問題はここから。
四人で炬燵を囲んで雑談を交わしていたら唐突にあやめが、この鶴崎神社に行こうと提案してきたの。聞けば何でもこの神社は恋愛に御利益があるみたいで、近頃話題になってるとかなってないとか。

私を含めた四人は現在、誰一人として男の影がナシ。提案者のあやめは二ヶ月程前に片想いに終わった恋をしていたから、多分神頼みでもして来年の弾みにしたいんだと思う。

『愛』や『恋』に関する話題だから私も少しは共鳴した。だけど、現実問題今は恋愛云々よりも疲労が溜まった身体を休ませたいことが勝った私は反対一票。紀実もわざわざ遠出をしたくないから反対。彩は中立。

結果、二対一で否決になったんだけど……

「しょうがないでしょ……あやめがどうしてもって煩いんだから……」

そう。紀実の言葉通りあやめが必死に懇願するから、私達は現在、仕方なくこの恋愛成就の御利益があるらしい鶴崎神社にいる。

因みに、私も紀実も機嫌が悪いのは、せっかく否決という勝利を勝ち取ったのにも拘らず、この場所にいるから。その原因を作った張本人のあやめは彩を引き連れて境内で販売している御守りをあれやこれやと物色してたりする。その表情はまるで天国や理想郷の地へ降り立った野望者のように光り輝いていたりするから、頭ごなしに愚痴を言えないから困ったものなのよね……

「てかさ、さわ子」

「何よ？」

「アンタもこういうのに興味があるんじゃなかったけ？」

『こういうの』って言葉が指すのは間違いなく恋愛絡みの事よね。そもそも私の初恋の相手が『ワイルドな女が好き』だからって理由で今まで弾いていたアコギ壊してワイルド路線に突っ走るためにフライングVを弾き始めた。結果的にワイルドになりすぎた私にドン引きされちゃったから、初恋はものの見事に……

あの時程『初恋は実らない』って言葉を痛感した日はないわ……

まぁ、そのおかげでＤＥＡＴＨ　ＤＥＶＩＬを結成したんだから、若気の至りって思えば……ね……

次に好きなった風間君という他校の生徒が教師になるって情報を入手したから、『じゃあ私も！』って今思えば不純極まりない安易な理由で同じ大学に進学したのよね～

……フラれたけど……

とにかく、そんな私を知っている紀実からすれば全く乗り気じゃない私の態度に疑問を感じたみたい。

「別にいいでしょ。今はそういう気分じゃないの。ていうか来年の受験の事でそれどころじゃないの」

「へぇ～　前も言ったけど、アンタってホント教職が板に付いてきたじゃない」

「堀込先生からしてみれば、本質は変わってないらしいけどね」

「あれ？　堀込ってまだ桜高にいたんだ」

「今も古文を教えてるわ」

「そっか。今度会いに桜高に行こっかな」

「止めときなさいよ。幾らＯＧとはいえ、不法侵入で不審者扱いされるわよ」

「分かってる分かってる。言ってみただけ」

「もう……」

どうやら機嫌は回復したみたいでケラケラ笑う紀実。対して私は咲也くんみたいにため息を一つ零す。

「そういえば副部長さん達って受験するの？　それとも就職？」

『それにしてもカップル多いわね……何か独り身の私に対する当て付けでムカつくわ……！』っと被害妄想みたいな事を心中で呟いていると、唐突に紀実がそう切り出した。

「全員進学予定よ。唯ちゃんとりっちゃんと澪ちゃんとムギちゃんは同じ大学に。咲也くんは違う大学に。あの子達今必死に勉強してるわ」

「え？　副部長さんだけ違う大学行くの？」

「そうよ。唯ちゃん達が受ける大学は女子大だから」

「じゃあバンドはどうなるの？」

「え？」

「だって、副部長さんだけ別の大学ってことは必然的に部長さん達と離れちゃうじゃない。そういう環境でバンド続けるってのは至難の業なんじゃないの？」

「……」

紀実に盲点を突かれて思わず閉口。

言われてみればそうよね……
バンドって繊細なものだから、メンバーの一人が欠けたり、何からの都合で顔を合わせる機会が減少したらそれは致命傷。
思えば唯ちゃん達四人は西女大。咲也くん一人は緑大。そして梓ちゃんはまだ桜高……

「……どうにかなるなんて楽天的過ぎ？」

「う～ん……　私達は今もこうして集まれてるから一概に『有り得ない』なんて言えないけど、それは私達が特別な事例って言われたらそこまでだし」

「そうよね……」

「あ～……　さわ子」

「ん？」

「今の事、副部長さん達に言わない方が懸命かも。時期が時期だし」

「受験に支障を来すから？」

「そ。まぁ、あの子達なら何とかなるんじゃない？　って、こんな考えは楽天的か……」

軽はずみに口走ったことを悔やんでいるのか、紀実は気まずそうに顔を背ける。

「ねぇ、紀実」

そんな紀実を一瞥した私は、参道を歩くカップルや参拝目的、またはあやめ同様に御利益にあやかろうとしている人々に視線を向けたまま口を開いた。

「私、教師だけど。その答えは分からないわ」

紀実が私に顔を向ける。

「でも、何て言うか、あの子達ってなんだかんだで音楽をやっていきそうな予感はするの」

「それは今のメンバーとバンド形式で？　それとも別の何か？」

「さぁ、そこまでは分からないわよ」

「漠然とした話だこと……」

「予感っていうのは漠然としてるものよ。先の事なんて誰にも分からないんだから。知ってるとしたら……」

その瞬間、参拝に来ていた人達がワァーッと沸きあがる。多分年が明けたんだと思うわ。

そんな事を気にしないで私は続ける。

「神のみぞ知るってやつなんじゃない？」

と、２０１１年一月一日の第一声を言えば、紀実は小さく笑ってこう言ってきた。

「だったら、その神様を拝まなきゃね。ついでに彩と、こんな寒い中を欲望に駆られたどっかのバンドのドラマー様を見つけに」

「そうね。そのどっかのバンドのドラマー様のわがままのせいで私達はここにいるんだし。何か温かい飲み物でも奢ってもらわないと割に合わないわ」

そう顔を見合わせて笑って、私と紀実は初詣を済ませるためと、彩とあやめを捜しに足を動かした。

だけど、いつの間にか結構な人で溢れているこの鶴崎神社の境内で二人を捜索するのは中々に難題。ケータイも何故か繋がらないし。

（どこ行ったのかしら？　彩と……）

『あやめは』っと心中で呟こうとしたら……

「ったく！　菖のやつはどこに行っちまったんだ！」

不意に聞こえた『あやめ』って名前に足を止める。その言葉の発生源は今正に私の横を通り過ぎようとしている、何だか怒り肩で紀実みたいな短髪の女の子。その隣にはその娘より背が高いもう一人の女の子が。

「さわ子？　何してんの」

「あ、いや、何でも」

多分あの娘達が捜してる『あやめ』と私達が捜してる『あやめ』は名前が同じなだけで、別人だと思うから、私は止まっていた足を紀実に向けて動かした。

「高校三年にもなって迷子とか、小学生かっつうの！」

「晶。あんまり大声出したら迷惑だよ」

「つうか迷子になるんなら幸がなれば良かったのに」

「え……？」

「その身長だろ？　こんな人込みでも一発で見つけられるからな」

「……」

「あぁ！　どんどん猫背に！　いや、なんちゃってだってば！　なんちゃって！」

「こらーっ！　晶っ！」

ドンッ！

「ぐえッ……！」

「あ、菖」

「幸をいじめない！」

「おま……！　いきなり背中蹴るな……！」

「菖。今までどこに行ってたの？」

「絵馬に『晶と前田先輩が云々』って書いてたら二人とはぐれちゃって～」

「はぁッ！？　お、お前何勝手なことしてんだよッ！」

「別に悪い事じゃないでしょ？　まだ未練たらたらな晶の背中を押してやったんだから」

「ここって恋愛成就の御利益があるみたいだからね」

「そゆこと♪」

「そういうの余計なお世話って言うんだよーーッ！！」

何かしら？　今、一際大きな悲鳴に似た叫びが聞こえた気がしたけど……

「あ、さわ子。二人を発見」

「あ、ホント」

ま、気のせいか。気にしたら負けってたまに唯ちゃんが言ってるしね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　田井中　律】

現在時刻午前六時三十一分。

パジャマの上に父から拝借した半纏を着て、ボサボサな寝癖がついた頭のまま玄関を開ける。その途端にビューっと朝風が私の身体を襲ってきた。

「う〜……！　さびぃ〜……！」

田井中家のルールその一。
休日の日に新聞を取りにいくのは私の仕事。

「おかしーし……」

いつの間にかこんなルールが制定されてしまっていたから驚きだ。
てか、律義にそれに従ってる私も私だよな〜……
サクみたいにキッパリ断れば今頃まだ寝てられたっていうのに、悲しい事に新聞を読みたい父にこんな早朝から起こされてしまったんだよな〜……

う〜む……まさか新年早々こんな目に合うなんて。何だ？　今年は厄年か何かなのか？　それとも日頃の行いに何か悪い点があるのか？

「さぶ……」

何てことを考えてるより早く新聞を回収しろって話だよな。こんな事で風邪なんかひいたら間違いなくサクにバカにされる。それもネチネチネチネチと執拗に。

「新聞新聞っと……」

そんなことは御免被りたいから、身を縮こませながら郵便受けに近付いて新聞を回収するべく中を覗き込む。

「お？　もう年賀状届いてるじゃん」

郵便受けの中には初売りの広告と三が日までのテレビ欄が載ってる、いつもより厚さが増してる新聞と、それと同じくらいの厚さの年賀状の束があった。

新年の、しかもこんな早朝から届けてくれるなんて、郵便局の人は頑張ってるな～

「どれどれ？」

ひとまず新聞は置いといて、その場で早速年賀状の確認をする私。大半は親戚だったり、父の仕事関係のだったり、母の知り合いからだったりなんだけど、その中で私と聡宛の年賀状を数枚発見！

聡宛は後で本人に渡すとして、ここはやっぱり私宛からっしょ！

「お、澪からだ」

澪からの年賀状は、今年の干支の兎のシルエットがあってその中に

『今年は真面目に生きろよ　澪』と、その周りに『２０１１　あけましておめでとうございます』の新年の常套句が。

澪さん？　何か失礼じゃないかな？

「お次は～……っと、ムギからか」

ムギからの年賀状は、実に達筆な文字で大きく『謹賀新年』と、同じく達筆な文字で小さく『前年はお世話になりました。本年も何卒よろしくお願いします　琴吹　紬』というシンプルなもの。

てか、字上手いなムギ！

「これは梓か」

梓からの年賀状は、『あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします　中野　梓』の、丸っこい手書きの挨拶文と、またまた手書きの兎のイラストが。

うむ、何だか梓らしいといえば梓らしいな。

「これは間違いなく唯だな」

唯からの年賀状は、『Ａ　ＨＡＰＰＹ　ＮＥＷ　ｙｅａｒ！』と、

一文字一文字色が違うカラフルな英語と、梓同様に手書きの兎のイラストが。

相変わらず唯は絵が下手だな……本人は兎のつもりなんだろうけど、別の生き物に見えて仕方がないぞ……

てか、何で『Ａ　ＨＡＰＰＹ　ＮＥＷ』まで大文字で『ｙｅａｒ！』からは小文字なんだよ！

（さすがは天然……今年も絶好調だな……）

お次は和。ムギみたいなシンプルなんだけど、趣がある和らしい一枚。

ついで憂ちゃん。唯みたいなカラフルなんだけど、和みたいに落ち着いた一枚。

その次はさわちゃん。

絶対に市販の年賀状だろこれ。手抜きだ……

そして修司。何かごちゃごちゃして読みづらい……

はっきりと読めたのは『トラのようにトライ！』だけ。上手いこと言ったつもりなのかもしれないんだけどさ修司……今年は兎年だぁ！　寅は去年だよ！

（相変わらず残念だな修司は……）

その他にはクラスメイトからちらほらと年賀状が届いてたんだけど、やっぱりというか何というか……

「サクからは今年もナシか……」

いやさ、一昨年も去年もあの不機嫌顔の副部長からは年賀状は届かなかったから、今年もサクからの年賀状が無いことについては別にいいんだけどさ……

何て言うか『くれてもいいじゃん！』って思っちゃったり。

まぁ、そんなこと期待してもあのサクが年賀状出すわけないから、期待するだけ無駄なんだけど。

「それにしても、みんな凝ってるな～」

それぞれの個性が豊かな年賀状を改めて眺めていると、ふと、あることに気付いた。

「あれ？　私年賀状出すの忘れてた……？」

しまったぁーーっ！

受験勉強に集中し過ぎてすっかり年賀状のこと頭から抜け落ちてた！

いやいや、私は受験生なんだから勉強のせいで忘れるのは仕方ない

よな！

いや！　でも！　澪とムギと和はちゃんと出してるし、あまつさえあの唯も年賀状を出してる！　その物的証拠は私の手元にあるし！

（こうしちゃいれない！）

郵便受けの中にある新聞をかっさらうように掴んで、疾風の如く家に戻る私。

リビングでお茶を啜いでいた父に新聞と年賀状を渡して、母に『余ってる年賀状ない？』って尋ねれば、どうやら聡が持ってるらしい。

ドタドタと足音を鳴らして聡の部屋前に行き、ノックをしないで勢いよく扉を開ければ、ベッドの上でスヤスヤ眠る我が弟。

「起きろ、聡」

私はこんな早朝から起きてるのに（起こされた）気持ち良さげに眠る聡を見れば、『不公平』という三文字が頭を掠める。だから不公平を公平にするべくユサユサと聡の身体を揺する。

「ん……」

と、身動ぎした後にうっすらと眼を開ける聡。

「姉ちゃん……？」

「聡。余った年賀状どこ？」

「年賀状……？」

寝起きで判然としてない聡は私の言葉を繰り返すばっかりだ。

「年賀状だよ年賀状。聡が余ったの持ってるんだろ？」

「何でそんなこと訊くの……？」

「私が使うから」

「だから何で……？」

「出し忘れてたから」

「プッ！　ダッセ……」

カチンときた。確かに見たぞ。小さく笑ったのを。だからカチンときた。だから聡の掛け布団を剥いだ。『うわっ！　さぶっ！』とか言ってるけどサクの専売特許みたいに無視。そして私は聡にプロレス技をかけた。

「さ～と～し～く～ん！　お姉ちゃんはただ余った年賀状を頂戴って言ってるのに何で笑うのかな～？」

「イデデデデッ！！　痛いって姉ちゃんっ！！」

「コンニャロ！　コンニャロ！」

「イダダダダダッ！！　ギブギブギブキブッ！！　ていうかごめんなさいっ！！」

「よし！　許す！」

パッと身体を離せば、聡はベッドに沈んで悶えてる。

「だから言ってんじゃん！　こんなことするからいつまで経っても彼氏が出来ないって！」

「ほ～う。口答えするんだな聡は」

「あ、いや、ごめんなさい」

ゆっくりとした動作で両手を構えれば、さっきの勢いは何処へやら、私に深く頭を下げる聡。

「で？　年賀状はどこ？」

「つ、机の上にあるだろ……」

「お、ホントだ」

弱々しく聡が指差す先には、九枚の白紙の年賀状があった。

「サンキュー。貰ってく」

「なぁ姉ちゃん。今から年賀状出すの？　ていうか年明けてからじゃ澪さん達に届くのって明日なんじゃ……」

目的の物を手に入れた私が意気揚々と聡の部屋から出ようとしたら、そんな疑問を告げられた。対して私は二言。

「ダ～イジョブ！　私に考えがある！」

フフンっと得意気に笑った私を見て聡は『何する気だよ……』って、呆れてたけど、それには答えずに今度こそ部屋から出ていった。

「はぁ……　何でこんな朝早くから痛い目に合わなきゃいけないんだよ……　やっぱ兄ちゃんに姉ちゃんが俺にプロレス技をかけるのを止めさせてもらおう……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　琴吹　紬】

現在時刻午前十一時二十三分。

時折吹く風は身に染みて冷たいけど、それでも澄み渡る青空はとても綺麗で清々しい気持ちになります。
今日は一月一日の土曜日の元旦。新年です。

琴吹家の恒例行事の一環として、毎年自宅に新年のご挨拶に訪れる、主に父の仕事関係の方々を迎え入れるために、私は晴れ着姿で玄関に立ってます。

先程から続々と様々な業界や政界や企業で活躍する方々が引っ切り無しに訪れることかれこれ約二時間。対応に追われる私は本音を言えばちょっぴり疲れちゃったりしてます。
だけどそんな態度を表せてしまえば、せっかく足を運んでくださった皆様方に不快感を与えてしまうので、背筋を伸ばして笑顔で新年のご挨拶を行なっていきます。

「あけましておめでとうございます、紬お嬢様」

でも、やっぱり疲れてきちゃって、『気合いを入れないと！』っと思って唯ちゃんみたいに両手を握り締めて『ふんすっ！』って気合いを入れた矢先に、またお客様がいらっしゃいました。慌てて両手を身体の前に組直して、落としていた視線を上げると、

「あ、市川さん。あけましておめでとうございます」

そこには、スーツを着こなして柔和な微笑みを私に向けてくださっている市川さん。
この方は以前、人前に出ると恥ずかしがってしまう澪ちゃんのアガリ症を克服するために、軽音部のみんなで一緒にアルバイトをした喫茶店の店長さんです。
市川さんは毎年、琴吹家、特に親交が深い父に新年のご挨拶のために足を運んでくださっているんです。

「その節は私の急な頼み事を聞き入れてくださいまして、ありがとうございます」

「いえいえ。紬お嬢様の父上様には私も御世話になってますし、何より紬お嬢様が御友人の力になりたいとおっしゃられ、大変感銘を受けましたので、快く引き受けたまでですよ。あれから御友人の方はどうですか？　何か成果はありましたか？」

『御友人』と言うのは、多分澪ちゃんのことだと思います。だから私は今まで以上の笑顔を浮かべました。

「まだ少しだけ恥ずかしがってますけど、それでも特訓の成果はあったと思います♪」

あの【ロミオとジュリエット】で、堂々とステージ上でロミオを演じた澪ちゃんからは、少なくともステージ袖から観ていた私の瞳には立派にロミオを演じていた澪ちゃんが映りました。ステージに立つまではちょっぴり緊張してたみたいだったけど、咲也君のおかげでそれもほぐれてたし、りっちゃんと猛特訓を積んだから、澪ちゃんはあんなに立派な一人のロミオという人物を演じれたんだと思います。勿論、その成功の裏にはアルバイトをしたことも間違いなく含まれる筈です。

「そうですか。それは私としてもとても喜ばしいことです」

「市川さんのご協力があってこそだと私は思ってます。ですから本当にありがとうございました」

心からの感謝の意。それを伝えるために私は深く深く頭を下げます。

「斎藤殿のおっしゃられた通りですな」

「え？」

感慨深く、それでいて優しさを含んだ市川さんの言葉に頭を上げると、市川さんは微笑んだまま、訪れたお客様を父と母の元に案内をしている私の執事の斎藤に顔を向けてました。

「先程、斎藤殿と言葉を交わしたのですが、紬お嬢様はお変わりになられました」

ゆっくりとした動作で市川さんは微笑みを私に向けます。私はその言葉の意味がよく理解出来なかったので、パチパチと瞳を瞬かせます。

「以前の紬お嬢様は、何と言いますか……御自身の殻に包まれたようで、どこか型に嵌まったような方でした」

「型に嵌まる……ですか？」

「えぇ。琴吹家の御令嬢という肩書がお嬢様の重荷……いえ、これでは語弊がありますね。そうですね……盾とでも言いましょうか。その盾に守られて少しばかり制限を自らかけていたように思います」

「そう……でしょうか？」

「まぁ、恐らくは無意識だったのでしょう。しかし、今の紬お嬢様は随分と雰囲気が変わられました。それは良い意味でです。アルバイトをなさっていた時の紬お嬢様、御友人方と接する紬お嬢様はとても楽しそうに見えました」

「……」

唯ちゃん。りっちゃん。澪ちゃん。梓ちゃん。咲也君。和ちゃん。修司君。憂ちゃん。さわ子先生。

私の大切な人達……

「斎藤殿も、私も、父上様も、母上様も、紬お嬢様の成長を喜んでいます。ですからあの御友人の方々と、これからも親交を重ねていってください。友は一生ものですからね」

その言葉が、深く深く心に染み渡った感覚を感じて、思わず胸に手を当てます。

（良かった……）

本当に良かった。

生まれて初めて父に意見して、桜高に入学して、軽音部に入部して、みんなと出会えて……

（本当に良かった～♪）

『嬉しい』や『幸せ』の感情が全身を包み込んで、こんなに寒いの

に何だかポカポカ♪

そんな私を見て市川さんはクスリっと笑って『では、私はこれにて失礼します』って頭を下げて去っていきました。
去っていく市川さんの背中に私は慌てて頭を下げます。『ありがとうございました。幸せを教えてくれて』という意味を込めて。

「紬お嬢様」

あれから二時間くらい経って、今は午後一時です。
徐々に訪れるお客様の数が少なくなってきて、ちょっぴり手持ちぶさたにしていると、声を掛けられました。

「あ、菫ちゃん」

顔を向ければ、サラサラと風に靡く金色の髪、まるで青空のように碧い瞳の持ち主である【斎藤　菫】ちゃんが、私とは別の晴れ着姿でそこにいました。

「そろそろお出掛けになる時間なのではないのでしょうか？」

「え？」

実は今日の早朝にりっちゃんから『軽音部のみんなで初詣に行こう』

ってメールが届いてました。勿論私は二つ返事で了承したんですけど……菫ちゃんに言われるまで忘れてしまっちゃってました……

「あ、そうだった～！　ありがとう菫ちゃん♪」

「い、いえ！　来られるお客様も一段落ついたので、紬お嬢様はお出掛けの準備を、と、伝えて欲しいと頼まれましたから」

多分、母が菫ちゃんにそう伝言を頼んだんだと思います。

「じゃあ私、行ってくるね♪」

「はい！　いってらっしゃいませ！」

「あ、菫ちゃんが桜高に合格しますようにって、お願いもしてくるね～♪」

「そ、そんな！　わざわざ紬お嬢様のお手を煩わせるようなこと……！」

「ううん。私がそうしたいからするの。だからね菫ちゃん、『わざわざ』じゃないの♪」

あ、何か前にもこの台詞を咲也君に言った気がする～♪

「紬お嬢様……」

「ね？」

「じゃ、じゃあ……よろしくお願いします」

「うん♪　任せて♪」

ペコリと頭を下げた菫ちゃんに、私は笑顔でそう告げて、晴れ着から私服に着替えるために自宅の戸を開けます。

（あ、もうあんまり時間ないなぁ……）

自室に着いて時間を確認したら、急がないと遅刻しちゃいそうな時間でした。

着替えるのに手間が掛かる晴れ着から着替えていたら、集合時間に間に合わないかもしれません。

「う～ん……」

しばしの間、黙考です。

「このまま行っちゃえ～♪」

初詣だから晴れ着を着てても問題ありません。

そう結論付けた私は、パタパタと早足で自宅から出て、集合場所の薦鳴神社へ向かいます。

もっと早く集合時間に気付いたら……ううん、私のうっかりで忘れてなかったらこんなに慌てることなかったんですけど……

私の失態だから仕方ありません。だから私は早く走れるように両手を握り締めて口を開きます。

「ふんすっ！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　秋山　澪】

現在時刻午後一時三分。

朝八時ぐらいに起床して何となくケータイを確認したら、律からメールが届いていた。

初詣に行こうって。

更に私の他に唯、ムギ、梓、咲也にも同じメールを送信しているみたいだ。

全く、こういう時だけは手際がいいんだから。

私達三年生は言うまでもなく受験生。だから、もしかしたら初詣に行くよりも勉強をしていた方がいいのかもしれない。

だけど何事にも限度があるし……あんまり根を詰めても身体に悪いし……何より、あのクリスマスパーティーからずっと勉強漬けだから、そろそろ休憩って言うか……息抜きって言うか……うん、リラックスしなきゃダメだよな！

律に『分かった』って返信して、パパとママと朝ご飯を食べる。

一時半に薦鳴神社の前に集合だから、とりあえずその時間まで勉強をしようとしたけど、パパが観ていたテレビが面白くって、ついつい長居しちゃって気が付いた時には十一時。

それから自室で勉強をして、

「あ、もうこんな時間だ」

集中してる時って時間の流れが早く感じるから不思議だな。もう一時じゃないか。

「ん～……っと」

椅子から立ち上がって軽く身体を伸ばす。同じ姿勢で勉強してたから身体が凝っていたけど、徐々にほぐれてきた。

「初詣、何着て行こうかな？」

朝ご飯を食べてから着替える間も無くパパとテレビを観ていたから、私はまだパジャマのままだったり。

まぁ、休日の朝だからって理由もあるんだけど、さすがに昼過ぎまでまだパジャマ姿は……

とりあえず、初詣に着て行く服を見当する、私。

（また晴れ着、着ようかな？）

初詣だし今日は元旦だからな。それに晴れ着って今日みたいな特別な日じゃないと中々着る機会がないからな。うん、せっかくだし晴れ着にしよう。

「ぁ」

ママに晴れ着の着付けを手伝ってもらおうと思って、自室のドアノブに手を置いた瞬間に、二年前の記憶が蘇ってきた。

それは私達がまだ一年生だった元旦。

あの日も律が初詣に行こうって私と唯とムギと咲也に集合をかけた。

咲也だけが遅れていて、早々に集まった私達は年末年始をどう過ごしていたのか等を談笑していたら、眠たそうな咲也がノロノロとした足取りでやってきた。
そして咲也は私を見て一言。

『…なんでお前だけ晴れ着なんだ……？』

対して、私。

『それは……昨日、律が着ていくのって聞くから……てっきり律も着てくるのかと……』

言って律を見れば、まるで悪戯が成功した子供みたいな笑顔で一言、事もなくこう言い切ったんだ。

『聞いただけ♪』

『なっ！？』

と。
そんな律に驚く、私。

当時、まだ梓はいなくて五人だった軽音部の中で唯一私だけ晴れ着姿だった事と、律に騙された事で恥ずかしさと、少しの怒りで着替えに帰ろうとした。だけど唯が『可愛いよ～』って言ってくれたから私は晴れ着姿のままで初詣をしたんだ。そのせいかどうかは分か

んないけど、まさか薦鳴神社に曽我部先輩がいて、二ヵ月後にちょっとした騒動になるなんて、あの時の私は知る由もなかったんだ。

とにかく、今年もまた晴れ着で初詣に行ったら律にバカにされそうだ。

「今年は普通でいいや」

そう決めた私はドアノブから手を離した。そしたら『ブブブッ』って机の上にあるケータイが震える。手に取って表示されてる相手の名前を見れば、律からだ。

「……」

脳裏に掠める律の『聞いただけ♪』の声。

通話ボタンを押す。まだ私の頭には残響した『聞いただけ♪』が残ってる。

「『あ、もしもし澪？』」

どうせ律はまた、私を騙すつもりなんだ。

生憎だけど、もうその手には乗らないぞ。

「『今日の集合時間なん……』」

だから律が何かを言い切る前に先手必勝とばかりに、こっちから仕掛ける。

「今年は絶対に騙されないからなっ！！」

そう大きく叫んだ後に電話を切る。その際に『み、耳が……って、集合時間の変更なんだけ……』って言ってた気がした。

「同じ轍は踏むもんか」

私だって二年前から少なからず成長してるんだ。咲也に『抜けてる』って言われたけど、それでも二年前に比べたら成長してる。もう律には騙されないぞ。

「って、新年早々何でこんなに疲れなきゃならないんだ……」

確かに感じる精神的疲労感。
原因は間違いなく律。

全く……

「はぁ……」

と、咲也みたいなため息をついて、気を取り直して着替えるためにクローゼットを開ける。

「これにしようかな」

手に取ったのはお気に入りのデニム。まぁ、所謂Gパン。

パジャマの上を脱いでキャミを着る。その上にセーターを着て、パジャマのズボンを脱ぐ。そしてデニムに足を通して、腰まで上げてボタンを留め……

「あれ？」

ボタンを……

「あ、あれ？」

ボタンを……

「う、嘘……！」

ボタンが留まらない……！

まさか、ふ、太った！？

「そ、そんな！？　この前まではちゃんと穿けたのに！」

何で！？　何で太っちゃったんだ！？

「あ！　そういえば……」

ママが夜遅くまで受験勉強に励む私に、激励の意味を込めて毎晩夜食を持ってきてくれたからだ……

遅い時間に食べたから……

「こ、こんな成長はいらなーーいっ！！」

うぅ……受験終わったらダイエットしなきゃ……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　平沢　唯】

『あずにゃん』

『はい、なんですか？』

『一富士、二鷹、三茄子だったよね？　初夢で見ると縁起がいいのって？』

『はい。そうですよ』

『てか、唯がそんなこと知ってるなんて……』

『む！　失礼だよりっちゃん！　私だってそれぐらい知ってるよ！　これはじょーしきなのです！』

『…実際のところ、妹に教わったんじゃねェのか』

『うっ……！』

『…図星かよ』

『ち、違うよサッくん！　憂じゃなくて隣のおばあちゃんに教えてもらったんだよ！』

『…師事者が誰であれ、教わった事実は変わらねェっつうの。そしてそれを、さも自分の知識のように語るな』

『サッくんの言葉がグサグサ刺さりやす……』

『それで唯ちゃん。どうしてその話を？』

『あ、うん。富士山は日本一の高い山だから何となく縁起がいいのは分かるんだけど、何で鷹と茄子なのかなぁ～って』

『言われてみればそうだな。鯛とか方が縁起がいい気がするよ』

『ほぇ？　澪ちゃん、何で鯛？』

『え？　だってよく言うじゃないか。めでたいって』

『プッ！　澪～『めでたい』だから『鯛』ってダジャレのレベル低いって～！』

『う、うるさい！　そんなつもりで言ったんじゃない！』

『でも、ホントに何で鷹と茄子なんでしょうか？』

『だよね～　ギー太の方が縁起いいよ～』

『それは唯先輩だけかと……』

『あのね、茄子の方は分からないんだけど、鷹は鳥類の王者ってイメージがあるからって聞いたことあるの～』

『ほほ～う。王者か～　言われてみればそんな気がしてきな～』

『私は鷹よりも鷲のイメージがあるけどな。あれ？　でも何で鳥なんだろう？』

『…空を統べるとか、羽ばたくとか、焼いたら旨いとかじゃねェの』

『適当に言うなよサク……てか、食べるって！』

『えぇ！？　鷹を食べちゃうの！？』

『そして唯は真に受けるなー！』

『た、鷹を……食べる……』

『澪先輩は想像しなくていいですから……』

『日本一の富士山に、王者の鷹。う～ん……茄子は何でなのかな？
咲也君何か知らない？』

『…諸説は様々あるらしいが、聞いた話だと何か事を『成す』に掛けているらしい』

『おぉ～！　さすがサッくん！』

『詳しいんですね、サク先輩』

『…聞いた話っつったろ。それが事実かどうかは怪しいし、こじつけ感が否めん』

『でもでも、何かスッキリしたよ～』

『うん♪　私も～♪』

『た、鷹を……』

『澪～　いい加減帰ってこ～い』

『あ！』

『どうしたんですか唯先輩？』

『何か食べ物の話してたら、お腹空いちゃった』

『食いもんの話題はしてねェよ……　つうか何だこの緩い議論は……』

『ムギちゃん、今日のおやつは～？』

『ごめんね唯ちゃん……　今日、おやつ持ってくるの忘れちゃったの……』

『そ、そんなぁ～……』

『代わりにたくあんならあるけど……』

『え？　たくあんですか？』

『うん。実は私の眉毛ってたくあんなの～♪』

あずにゃんがコテンって首を傾げたら、ムギちゃんがペリペリって自分の眉毛を片方だけ取っちゃったぁ……

『はい♪　どうぞ唯ちゃん♪』

小皿にムギちゃんたくあんとホカホカのご飯を差し出してきたから、
私は、

『ぱく』

『勧められるがままに食ってんじゃねェよ……』

『ていうか、ムギ先輩の眉毛ってたくあんだったんですか!?』

『あれ？　言ってなかったかな？』

『初耳です！　それに唯先輩は平然と食べないでくださいよ！』

違うよあずにゃん。
私だってびっくりしてるんだよ。
でもでも、お腹空いちゃったし、食べないとムギちゃんに悪いもん。

『ム、ムギの眉毛が……鷹に……』

『澪ーっ！』

あ、澪ちゃんが気絶しちゃった。

『…鷹じゃねェけどな』

『何で冷静なんだよサクは！　ムギの眉毛が取れてしかもたくあんだったんだぞ！』

『ムギちゃん！　美味しいよ！』

『ありがと～♪』

『だから唯先輩は平然と食べないでくださいって！』

『そうだぞ唯！　感想の前にツッコミどころがしこたまあるだろ！』

『でもでもりっちゃん。ホントにムギちゃんたくあん美味しいよ？』

『え？　マジで？』

『うん。絶品っス』

『ムギ。私にもくれ』

『律先輩っ！？』

『態度が急変しやがった……』

あずにゃんが眼を見開いて、サッくんが呆れた顔してるけど、りっちゃんは聞こえないみたいにムギちゃんのもう片方の眉毛に手を伸ばしてるから、すんごくお腹空いてるんだね～

んも～♪　りっちゃんの食いしん坊さん♪

『おぉ！　確かにうまい！』

『でしょでしょ！』

たまに、お隣のおばあちゃんがたくあんをお裾分けしてくれて、そのたくあんも美味しいんだけど、このムギちゃんたくあんはその上をいく美味しさ！

『もう一枚食べたいな～』って思ってムギちゃんに顔を向けたら、

『あれ？　何か光ってない？』

『血色がいいにも程があるぞ、ムギ』

『何言ってるんですか律先輩！　ホントに光ってますよ！』

『…ＬＥＤに負けず劣らずな光力だな』

『そういう事じゃないです！　ていうか何か音が鳴ってませんか…』

あ、ホントだ。

ピカァ～って光ってるムギちゃんからピコ～ンピコ～ンって音が聞こえる。

『あ、これは合図なの～』

『…合図？』

『うん♪　実は私、眉毛を両方取られちゃったら、ゲル状になるの～♪』

えぇっ！？　ゲル状に！？

あ、でもゲル状ってなんだろ？　溶けちゃうのかな？

『早く代わりのたくあんを付けないと～』

あぁ～っ！　ムギちゃんがプリンみたいに何かプルプルしてるっ！

『大変だ！　早くたくあんを付けるんだ！』

『でもでもりっちゃん隊長！　部室にたくあんなんてないよ～！』

『諦めるな唯！　諦めたらムギはゲル状になるぞ！』

『……ちょっこっと見てみたいかも』

『あ、実は私もちょっとだけ』

『唯先輩！　律先輩！　ふざけてないで早く探してくださいっ！』

『『は、はい！』

うぅ……　あずにゃん怖いよ……

『サク先輩も！』

『…アホが意気揚々と出店したケーキ屋が潰れたらな』

『いつですかそれ！　ていうか影宮先輩はお店やってませんよ！』

『う……』

『お！　起きたか澪！』

『……り、律？　どうしたんだそんなに慌てて？』

『大変なんだよ澪ちゃん！　ムギちゃんがゲル状になっちゃうんだよ～！』

『え？　ゲル？』

『澪ちゃん、私、ゲル状になっちゃうの～』

『……』

『澪先輩？』

『立ったまま気絶してんぞ、コイツ……』

『いかん！　澪のキャパシティーを超えてしまったか！』

『とにかく早くムギ先輩にたくあんを！』

でもでもあずにゃん！
たくあんなんてないよ～！
分度器ならあるけど……

『分度器しかないっス！　隊長！』

『この際仕方ない！　たくあんの代わりに付けるんだ！』

『ラジャー！』

りっちゃんと二人がかりでドンドンとゲル状になっていくムギちゃんに分度器をピタって貼り付ける。そしたら、

『治ったわ～♪』

何とびっくり！　ムギちゃんは元通りに！

『良かった良かった！　何とかなるもんだな～！』

『うんうん！』

『でも、分度器でいいんでしょうか……』

『違和感はねェが、逆にそれが違和感だな……』

私とりっちゃんが抱き合ってムギちゃん復活に喜んでいたら、あずにゃんとサッくんがそんなことを言ってた。

りっちゃんから離れてムギちゃんを見たら、あ、ホントだ。違和感がないや。

う～ん……ホントはたくあんがいいんだと思うけど、今、手元にないしなぁ～……

でもでも、違和感がないなら分度器のままでいいかも。

『よいしょ』

私が『うんうん』って納得してたら、ムギちゃんが分度器を眼の位置に移動させてた。何かサングラスを掛けてるみたいになったムギちゃんは私に顔を向ける。

『唯ちゃんは百五十度♪』

『ほぇ？　何が？』

次は立ったまま気絶してる澪ちゃんに。

『澪ちゃんは百四十度♪』

次はあずにゃんに。

『梓ちゃんは百七十五度♪』

『えっと、ムギ先輩？』

最後はりっちゃんに。

『りっちゃんは百八十度♪』

『はいさっきから何測ってるか分かりましたーっ！！』

胸を押さえてサッくんの背中に隠れるりっちゃん。サッくんは何だか呆れた顔してる。

『てか、何で私より梓の方がおっきいんだよ！』

『ッ！　ま、まさかムギ先輩……　今まで測ってたのって……』

『みんなの胸のサイ『うわわわっ！　言わなくていいです！』

へぇ～　胸のサイズを測ってたんだぁ～……って、うん？

チラッとサッくんを見る。
面倒そうにりっちゃんを背中から移動させてて、その後一瞬私と眼が合う。

『～～ッ！』

うわわわっ！
何か！　何か！　何か！
すっごく恥ずかしい！

うわわわっ！
何か！　何か！　何か！
すっごく顔が熱い！

うわわわっ！
何か！　何か！　何か！
すっごく胸がドキドキする！

『今すぐ外せ！　そのセクハラ分度器を！』

『そ、そうですよ！　サク先輩もいるんですから！』

『でも取っちゃったらまたゲル状になっちゃうわ～♪』

『あー！　そうか！　どうしよサク！？』

『…代わりのたくあんでも買ってこい。つうかそもそも何故たくあ

んだ……　いや、眉毛が何故たくあんだ……』

『今更ですか、サク先輩……』

『とにかく！　ムギを完全に元通りにするにはたくあんが必要だ！』

『わ、私が買ってくるよ！』

何か何か何か！
今、サッくんと一緒にいると恥ずかしいもん！
だから私が行くよ！

『頼むぞ唯！　あの頃の日常を取り戻すために！』

『ラ、ラジャー！』

鞄からお財布を抜き出して扉にダッシュ！

（うぅ～！　何でこんなにドキドキするの～！）

多分、今の私の顔は真っ赤だと思う。こんなに熱いもん。絶対真っ赤だよ。
だから、そんな顔をサッくんに見られたくないから、私は顔を俯かせたまま扉に全力疾走！

そしたらね？

ゴンッ！

『唯先輩！』

『唯！』

『唯ちゃん！』

『アホ……』

思いっ切り、頭をぶつけちゃいやした……

★★★★★★★★★

ユサユサと誰かに身体を揺さぶれる感じがするぅ～

「お姉ちゃん、起きて」

憂の声がするぅ～

「お姉ちゃん、起きて」

憂のその声に導かれるように、ゆっくりと眼を開けたら、目の前には心配した憂の顔。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「……ほぇ？」

「もうお昼過ぎてるから、お姉ちゃんを起こそうと部屋に行ったらお姉ちゃん、ベッドから落ちてるんだもん」

『大丈夫？　どこか痛くない？』って聞く憂の言葉に、何か頭がちょこっとだけ痛いことに気付いた。

「ちょこっと頭痛い」

「え！？　だ、大丈夫！？」

「大丈夫だよ～　ホントにちょこっとだし」

「それならいいけど……　ベッドから落ちた拍子にぶつけちゃったみたいだね」

「だね～　何か変な夢見てた気がするけど、多分そのせいだと思う」

「ベッドから落ちたのが？」

「うん」

何の夢見てたんだろ？

う〜ん……全然思い出せないや。

「あ、今何時？」

「もう一時だよ」

「なんと！　早くも元旦の半分が過ぎちゃってるなんて！」

「昨日、初日の出見るって遅くまで起きてたからだよ〜」

「あ、そうだった。でも結局寝ちゃったんだった」

平沢唯、一生不覚ですな。

「それじゃ、早く降りてきてね。お昼ご飯冷めちゃうから」

「ほ〜い」

ガチャリって扉を閉めた憂を見届けて、部屋のカーテンを開ける。

あ、換気しなきゃ。

「うっ……！　寒い……！」

お昼ご飯食べ終わるまで換気してよっと。

「おや？」

顔と歯を洗うために、部屋から出ようとしたら、枕元に置いてるケータイのランプがチカチカ点滅してるのを発見！

「あ、りっちゃんからだぁ～」

え～っと……ふむふむ。
初詣っスか～
二時に薦鳴神社に集合ですな。
了解です！　りっちゃん隊長！

「そうだ！　サッくんから貰った帽子かぶって行こ～っと♪」

実は、サッくんからの初めてのプレゼントだから、勿体なくて、家の中でかぶったことはあるけど、今まで外を出歩いたことはなかったんだぁ。

でも、それじゃダメだよね。

ちゃんとかぶってあげなきゃ可哀相だよね。

「よ～し！　そうと決まれば！　まずはご飯！」

現在時刻午後一時七分。

私は、昨日の夜に憂とお母さんが共同で作っていたおせち料理と、クリスマスパーティー以来会ってないみんなと会える嬉しさに心を弾ませて部屋からゆっくりと出ていった。

「うぅ……　廊下も寒い……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ＳＩＤＥ　桐島　咲也】

振り替えるべきは、昨夜の出来事。つまり大晦日の夜。

幾ら受験生といえど、大晦日の夜まで勉強をする気にはなれなかった俺は、紅組と白組に別れた男女が歌で競い合う大晦日恒例行事番組である歌合戦をリビングでぼんやり眺めていた。

そこに訪れる傍迷惑な来訪者。

『あけますねおめでとうッ！　サクッチッ！』

『何年か振りに桐島の家に来たな』

相変わらず煩く尚且つやけにテンションが高いアホと、演芸大会以来姿を見せなかった（見なかった）大野の二人組が、我が家に来襲してきやがった。

何でも今から薦鳴神社に行こうと俺を誘いに来たらしいが、俺の回答は『断る』だった。

理由なら単純明快にして至極簡単。怠いし寒いからだ。

しかし、そこで引かないのがアホ。

まるで嫌がらせ……いや、嫌がらせ以外の何物でもない『行こうぜッ！　行こうぜッ！』と、兎のように飛び跳ねながら連呼を始めやがった。

それでも頑なに首を縦には振らない俺。しかし連呼数が人間の煩悩の数を易々と超えた辺りから流石に嫌気が差してきて、結局根負けした俺はアホと大野と共に薦鳴神社に足を運ぶ事に。

この『寒い』という漢字二文字しか感想が出てこない夜の薦鳴神社には、恐らく年越しの瞬間をここで過ごそうとしているようで、深夜に近い時間にも限らず中々の人で賑わっている。

二年前も同じような光景を目の当たりにし、その光景の一部だった俺がこんな事を思うのは些かお門違い感が拭い去れないが、どうしても思ってしまう。

ここ来ている奴等は全員暇なのか、と。

何もわざわざこんな凍える冷気が上下左右、縦横無尽にトルネードの如く吹き荒んでいるというのに、真冬の夜の神社に年越しのために集まろうなどと、正気の沙汰か？

……まぁ、正気なんだろう。でなければ、この場にいる俺も思考が正常かどうか疑ってしまう。それは何とも嫌だし報われない。

『しかし、それにしても感慨深いものがあるな』

『あン？』

アホは何やら張り切りながら三人分の甘酒を調達すべく、神社に着いて早々に姿を消し去った。

残った俺と大野は、とりあえず神主の善良なる好意なのか、それとも厄を祓う意味があるのか、はたまた何か別の意味があるのか不明な、境内にこれ見よがしに設置してあった焚火の周囲に集まり暖を取っている。

そこで唐突に大野が口を開いた。

『俺達三人が集まるなんてな』

『…言ってる意味が分からん』

『小学生の頃、俺とお前と影宮の三人でよく遊んでただろ？　けどさ、小五の時に俺が転校しちまって、それっきりお前らとは音信不通だったからなぁ』

チラリと大野に視線を向ければ、その当時の事を思い返しているのか、何やらうっすらと苦笑いを浮かべている。

『したら、丁度去年の今頃のライブハウスにお前がいるんだから驚きだ』

『…こっちはお前が音楽やってることに驚きだ』

『まぁ、キーボードっつうか、ピアノを弾き始めたのは中一だったからな。俺、中学三年間は吹奏楽部でピアノ弾いてたんだぞ』

『…何だ？　褒めてほしいのか？』

『いや、そんな気はねえけど、吹奏楽部って女子ばっかだったからな。男子の部員数は片手で数える程度、おかげで肩身が狭いたらなかったよ』

『…男子部員がいるだけマシだ。こちとら俺一人だけだからな』

『そういえばメンバーの中で男子はお前だけだったな。他の部員はいねの？』

『…俺を含めたあの時の六人が全軽音部員だ』

『そうなのか』

『あぁ』

『まぁ、でも【ラヴ・クライシス】の中でも俺だけ男だから、似たようなもんか』

『…ラヴ・クライシス？』

『いやいや……忘れんなって。俺達のバンド名だよ』

『そんな名前だったな……』

『お前って昔からそんなんだよな。興味がない事にはホントに無関心』

『…逆に訊くが、無関心な事に興味を示せるか？』

『いや、それは無理だけど。お前の場合それが露骨つうか顕著過ぎるんだって。因みにヒトミがお前に憧れてるっつうのは覚えてるか？』

『…誰だ？』

『うちのギタリストだよ……　マキが俺達を紹介してた時に、お前にそう言ってたろ……』

『…記憶にねェな』

『お前なぁ……』

続く言葉を紡ごうとしたらしいが、深いため息を吐いて俺に向けていた顔を焚火に戻す大野。どうやら諦めたらしい。

『そういえば桐島』

『あン？』

暫くの間、焚火のはぜる音と参拝客の話し声をＢＧＭにし、何となく古文を脳内で復習していると、又しても唐突に大野が口を開いた。

『お前って就職？　進学？』

『…進学』

『何処に？』

『…緑大』

『えっ！？』

質疑応答の果てに、何故か驚愕の意を示す声と表情を表わす大野。
それに対して俺は訝しげに眉を顰める。

『ンだよ……』

『あ、いや、俺も、つうか、俺達も緑大に進学予定だから、驚いたっつうか……』

『ふーん……』

『ちったぁ驚けよ……』

『…驚き要素ゼロ、だ』

『相変わらず淡泊だな……』

『…聞き飽きた。その台詞』

『ん？　他の誰かに言われたのか？』

『…人にアコギを委ねて、その中継役を押し付けた眼鏡に』

『んん？　誰？』

『さぁな……』

『まぁ、よく分からんけど。それはそうと、じゃあ他のメンバーも緑大なのか？　だとしたら、マキやアヤも喜ぶぞ。あの二人はそっちのドラマーの娘とベーシストの娘と仲いいからな』

『…残念ながらアイツらは別の大学だ。緑大は俺だけ受験する』

『え？　マジ？』

『…本気と書いてマシだ』

『じゃあ、お前……』

瞬間。俺と大野の間に二本の腕が差し込まれた。その手には湯気が立ち上ぼる紙コップが握られている。

『おまっとさんでしたッ！　咲也と充の甘酒を見事にゲットした影宮修司ッ！　只今帰還しましたッ！』

俺と大野がいる場所は焚火の前だ。一応安全対策として焚火の周囲には鉄製の柵が設置されている。鉄製なのだから必然的に焚火の熱でかなりの高温になっているのは想像に容易い。

さて、何が言いたいのかと言えば、アホが勢いよく差し出した両手の先には熱せられた鉄製の柵。アホの両手には手袋等の寒気から守る物はない。

という事は、だ。

素手で熱せられた鉄柵に触れる↓

『ぬァッ！！！』

人間（コイツが本物の人間がどうかはこの際扨置き）の本能で外部の刺激に対して咄嗟に手を引く↓

『ファイアーッ！！　俺の両手が燻る情熱のようにファイアーッ！！』

唯一の取り柄であるリアクションを盛大にかましつつ、ゴロゴロと地面を転がる↓両手に持っていた二つの甘酒入りの紙コップは、その拍子に宙を舞い、中身が一滴も零れることなく重力に従順に従い落下↓一つは大野の頭の上に↓

『アッッチィ！！』

その場で地団太を踏みつつ、禿げるのでないかと思う程に頭を掻き毟る大野を尻目に、もう一つの紙コップの行方を追う俺↓その紙コップは何かに導かれるように俺に向かって落下↓

『……』

大野の二の舞を演ずる戯けではない俺は、落下してきた紙コップを躱し、足元まで落ちてきた紙コップを何となくのたうち回るアホに進路変更させるべく蹴る↓

『ウベッッ！　第二の衝撃ッ！？』

見事に顔面にクリーンヒット↓中身がアホの顔面中に飛散する↓

『ファイアーッ！！　両目が酔っ払ったァーッ！！　そしてファイアーッ！！』

次の瞬間、薦鳴神社中の参拝客から歓声が沸き起こる。

『…お前らのリアクションに客がスタンディングオベーションしてるぞ』

『おぉ……マジだ……』

『違うぞ……影宮……年……越したんだろうよ……』

『そ、そうか……あけまして……おめでとう……サクッチ……ミツルッチ……今年は……トラのように……トライ……』

『…言っとくが、今年は兎年だ』

『なんてこった……影宮修司……一生の不覚……』

『…一生どころか来世の生涯も不覚まみれだ、お前は。まぁ、お前に来世があるかどうかは知らんが』

『ありがと……よ』

『いやいや……　何で感謝してんだよ、影宮……』

こうして２０１１年早々にやらかしてくれたアホだったが、五分後にはケロッとしていた事から、やはりコイツは人間ではないのだろうかと、現実主義者の俺からしても、つい、そんなことを思ってしまった。

これが昨夜の主な出来事。

そして現在。

ブブブッ……　ブブブッ……

枕元に置いてある文明の最先端を走る機器……ケータイが震える。

ブブブッ……　ブブブッ…

「……」

そんな些細な音で覚醒してしまった。

ブブブッ……　ブブ…

行きたくもない昨夜の初詣と、そこで起きた出来事は少なからず俺の身体を疲弊させていたようだ。故に一時の期間限定で受験生という欲しくもない肩書を廃棄し、安らかな眠りをひたすら貪っているところに強制的に睡眠を打破されては誰しも怒りが沸く。

その怒りの矛先をケータイ先の相手にぶちまけてやろうとしたが、俺が手を下すまでもなくケータイは沈黙し、再び部屋に静寂が訪れ

る。

行方のなくなった怒りを何とか沈め、まどろみに身を任せ、意識を夢の国にワープしかけたら、

ブブブッ……　ブブブッ……

再びケータイが振動を始める。

「…ンだよ……」

再度沸き上がった怒りを水面下で抑え、怠惰な動作で枕元に手を伸ばし、ケータイを手に取る。

【田井中　律】

「……」

寝起きでぼやける視界の中で、はっきりと確認したディスプレイ画面に表示されるデコ部長の名。

とりあえずケータイを開き通話状態にし、耳に当てる。

「『あ、サク？　あけおめ～』」

「…この電話は、契約者様の都合により、五秒後に自動的に通話不可となり、一週間は音信不通になります……　五……四……三……『ストーップ　』」

俺の睡眠を妨げやがったカチューシャ部長のモーニングコールを退けようと留守番機能風に告げてみるが、それは失敗に終わる。

「…ンだよ……　つうか今何時だと思ってんだ……」

「『何時って今一時半だけど？』」

「……」

その言葉を受け、部屋にある壁掛け時計を見る。
長針が六に、短針が一と二の間を指し、カーテンの隙間から陽の光が漏れている。

「……で？　何の用だ……」

「『サクはこんな時間まで寝てたのか？』」

「…それが目的か？　だったら答えはＹＥＳだ……じゃあな」

「『待った待った！　気になったから訊いただけだって』」

「…じゃあ、さっさと用件言えよ……」

「『今まで寝てたって事は当然知らないと思うけど、軽音部のみんなで初詣に行くことになってさ、待ち合わせ時間は一時半だったんだけど、ムギから遅れるって連絡があって、二時集合になったから』」

本日一月一日土曜日。
所謂、元旦。

午後一時半から部長から初詣の誘いを受ける。

「…つうか初詣、もう済ましたし……」

あれから復活したアホと、まだまだ傷が癒えない大野と参拝を済ませ、その後はアホの家に行き、他愛がなさ過ぎる薄い内容をひたすら駄弁ったり、雑談を交わしていたら気が付けば朝になり、初日の出を拝みながら家路に着いた。

我が家に着き、風呂に入り、少しテレビの特番を見て、ベッドにダイブしたのが確か午前十一時。
……睡眠時間、二時間半。

「『いいじゃん別に二回行っても♪　という訳で今から薦鳴神社に集合な！』」

「…今からかよ……　こちとら寝起きだぞ……」

お前のせいでな。

「『どうせサクの事だから、私のメールには気付いてないって思って電話したんだけど、案の定だったな～♪』」

「聞けよ、人の話……」

そして勝手に語り始めるな。それも自慢気に。

「『みんなにはもう連絡してるからさ、間に合うように早く来いよ～』」

ツー……　ツー……

「……」

言うだけ言って一方的に切りやがった……

「はぁ……」

恐らく新年一発であろう深いため息を怒りと共に吐き出す。

そして二度寝という邪念を振り払いながら、芋虫が地を這うようにベッドからノロノロと渋々這い出る。

正直行きたくはない。

だが、行かなかったら非難のメールが届き、最悪の元旦になりそうだ。

つうか……

「二年前もこんな事あった気がする……」

いや、間違いなくあった。

じゃあなんだ？

この後待ち受けるのは、何度もおみくじを引きまくる見苦しい山中顧問の醜態だったり、田井中が俺達の分のおみくじを勝手に引いたり、秋山をストーカーしている曽我部先輩だったりするのか？

「嫌過ぎる元旦だ……」

そう呟いた言葉は、冷えきった部屋に木霊することなく、ただただ霧散していった。

第百三十九話（後書き）

サブタイトルは【それぞれの年末年始】っといったところかな？

大幅に更新遅れて申し訳ございませんでした。

しかも内容長いし……

第百四十話（前書き）

受験編その七です。

二か月も更新遅れて申し訳ございませんでした。

第百四十話

地球。

それは太陽系の内側から数えて三番目の軌道を周る惑星。
豊かな緑。豊かな水。豊かな空気。豊かな大地があり、その恩寵や恩恵や恩沢を受けて様々な生物や植物が生息しており、その中で我が物顔で地球を牛耳っているのが人間という存在。

知能が高く生態系の頂点に君臨している人間の世界人口は、２０１０年十月当時で約六十九億人と推察されている『らしい』
２０１１年の秋口辺りには世界人口は遂に七十億に達する『らしい』

古来より人間は様々な思想や思考を持ち、それぞれの特徴や特長や特色な文化や文明を発展、発達させていき、現在のような国を作っていった『らしい』

世界中には百九十に上る国家があり、その中で先進国島国として名高いのが日本。その人口は約一億三千万『らしい』

そんな日本の人口密度が最も高い地域は首都東京を中心にした関東圏『らしい』

以上、地道に受験勉強を続けて脳がインプットしてしまった世界人口と日本人口だ。

これらの数字や情報は、参考書の一部から抜粋したものあり、曰くそれらが決して正しいものではないという。

人間という生物は日々増殖を続けるため、その統計は変化する一方あり、今年でアナログ放送が幕を閉じ、デジタル放送に全面移行するような、恐らく後五年もすれば日本人の持つケータイの九割がタッチパネル式になると思われるような、後七年もすれば電気自動車が全国に普及してしまうような、後十年もすればリニア鉄道が実用化になりそうな程のハイテク時代のテクノロジーを駆使しようが、世界中の人間の数を調べ、正確に世の中に発表する術はないとのこと。

故に『らしい』だ。

よくもまぁ参考書の製作者はこんな曖昧な情報を参考書に記載する気になったものだが、あながちその『らしい』も間違いではないらしい。
いや、間違いではないようだ。

何せ、現に俺は今、その『曖昧らしい統計』を全身で体験中だからだ。

日本の人口密度率Ｎｏ．１らしいの関東圏のとある街……もとい、俺が住んでいる地元にある薦鳴神社の周辺には、この街の住人以外の人間もいるであろう人間でごった返している。

現在俺が立つ位置の前方は勿論のこと、右を向けど左を向けど、ついでに後方を振り向けど、人、人、人、人、人、だ。

辺り一面の人景色。
これが雪景色ならその景色に若干感嘆するのだろうが、生憎と雪のような冷たい物質ではなく、体温という熱を身に宿している人間。

感嘆どころか嘆息ものだ。

つうか、こんな寒気が充満している野外で、ワラワラと溢れる人景色に感嘆する者がいるならば、是非ともお目にかかりたいものだ。……いや、前言撤回。是非はナシだな。そこまでの必要性を感じるものではない。

一年の計は元旦から、とかいう一体誰がそんな名言チックな言葉を吐いたのかは知らんが、その言葉にあやかっていたいのかも知らんが、幾らなんでもこの人の数は以上だとはっきり言える。

昨夜に既に初詣を済した俺がこんな疑問を思うのはおかしな事なんだが、敢えて問いたい。

そんなに大事か？　初詣が？　と。

まぁ、古の時代より受け継がれてきた伝統行事だから大事、というよりかは日本人の習慣のような事柄なのだからこそ大事なんだろうがな。

「はぁ……」

一言で言い表わす適切な言葉で『人込み』の中、白いため息を吐き出す。

心境は『帰りたい』だ。

ここら一帯の空気が酸素不足に陥り、二酸化炭素で満ちてしまいそ

うなこの混雑ぶり。嫌にもなる。

そもそも俺は望んで二回目の初詣に挑もうとしてはいないし、こんな人込みに紛れて嘆くよりは、家で勉強をしていた方がよっぽど有意義だ。

嫌な元旦になりそう、という当たってほしくもない予想が見事に的中した現状からエスケープしたいが、ここで帰ってしまえば田井中や平沢から終日非難されそうだ。それは何とも面倒だし、精神的に辛い。幾ら修司曰くの鋼のハートを持っていようが、だ。

何より、亀のようなスロースピードで前進する人込みの中で一人、その流れに逆らうようにUターンなど出来はしないだろう。

とどのつまり、俺は二回目の初詣をしなければならないようだ。

「はぁ……」

諦めの意味で再びため息一つ吐き出す。

そして、約十分程経った現在時刻午後一時五十七分。

何とか境内に足を踏み入れることに成功した。

改めて確認した田井中からのメールには、待ち合わせ場所は全国の神社の共通シンボルと言っても過言ではないであろう鳥居の前。

寝不足と凍える冷気と人景色の混雑による疲弊のトリプルパンチで覇気が失われた身体を駆使し、境内に溢れる人込みを掻き分けるように鳥居の前に足を動かす。

（ん？）

鳥居の全体が視界に入ったところで足を止め、立ち止まる。見知った人物を見つけたからだ。

予想と言うべきか、俺の中のアイツらに対する認識と言うべきか、見解と言うべきか、日常と言うべきか……まぁ、この際何でもいい。とにかく、俺はてっきり二年前の初詣同様、待ち合わせの鳥居の前には軽音部員が既に集結しているものだと思っていた。ところがどうだ。鳥居の前にいるのは、所在無さげに、時折顔を行き交う参拝客に向けては肩を落とし、暇を持て余している人物一人だけだ。

その表情からは何やら『寂』や『哀』な感情が見え隠れしている。

（何してんだか……）

とりあえずこのままここで何時までも突っ立っていては参拝客の邪魔になる。

故に止まっていた足をその人物に向けて踏み出す。

「ぁ」

小さな町の全住人が一斉に大移動した程の数の人間で溢れ返ってい

るこの蔦鳴神社で特定の人物を見つけるのは中々に困難を極めるだろう。しかしその人物はアメリカ軍も脱帽レベルの特集な探査レーダーでも体内に仕込んであるかの如く、この人込みの中で俺を見つけたようだ。

先程までの寂しげな表情はどこへやら。一変して笑顔になる。が、途端、体裁を取り繕うように一つ咳払いの動作をし、怒ってますという表情をする。

短時間で喜怒哀楽の『哀』から『喜』を経由して『怒』を表わしたその人物に、この人込みにうんざりしながらも近付き、会話が出来る程度までの距離に到達した瞬間、相手は開口し、こう告げた。

「遅いぞ、咲也」

俺の名をこのように呼ぶのは軽音部員の中ではただ一人。言わずともがな、レフティーベーシストであり、何やら難儀な性格の持ち主である、秋山だ。

「…定時だろうが……」

トリプルパンチを一身に受けた俺が、覇気なくそう言えば、秋山は不機嫌とした表情から更に不機嫌になる。しかも両手を腰に当てるという説教ポーズ付きで。

「待ち合わせ時間は一時半って律からメール来てただろ」

その言葉に、ピクリと片眉を動かす俺。

「…デコからは二時にこの場所に集合だと聞かされたぞ……」

「え？」

まさかの返答だったのだろうか。先程までの不機嫌顔（決して俺の事ではない）はどこへやら、何やらキョトンとしている。
それは説教ポーズが何とも不釣り合いで、間抜けに思えてしまう程の度合だ。

「な、何言ってるんだよ。一時半に待ち合わせだって……」

狼狽えながらもコートのポッケからケータイを取り出し、何度かカチカチと操作していき、『ほら、律からのメール。咲也にも同じのが届いてたんだろ？』と、どこぞやの時代劇の黄門様の側近が印籠を悪漢に見せつけるが如く、ケータイのディスプレイ画面を俺に見せつける。

確かにそのメールの内容は俺のケータイに届いたものと同じものだ。
そして待ち合わせ時間は一時半だともある。

「……」

暫く黙考。思考の海にダイブ開始。

そして一つの仮説を立ててみる。

カチューシャ部長は今朝方に俺、天然ギタリスト、難儀な性格のレフティーベーシスト、給仕が生き甲斐なのかもしれないキーボーディスト、根が真面目な後輩ギタリストの軽音部員全員に初詣の誘いの示すメールを一斉送信していた。

そして待ち合わせ時間は午後の一時半。

しかし、琴吹が遅れるようなので二時に変更だと連絡があった。

つまり、薦鳴神社には午後の二時集合だ。

一応部長という軽音部の中で最上の地位にいた田井中のことだ。既に引退した身とはいえど、その事を責任持って各自に連絡をしたものだと推測する。

まぁ、事の発起人ならば当然の行動なんだがな。

当然、秋山にも待ち合わせ時間の変更の連絡は来た筈。

しかし、先程の発言とわざわざ俺にメールを見せつけた行動から察するに、どうやら秋山には上手く伝わらなかったようだ。

普段、秋山をからかっては英気を養っている田井中だが、こういう重要性がある（そこまで重要かどうかは定かではないが）事柄には

至って真面目に務めるものだと、高校生活三年間で知り得たアイツの性格だ。

故に故意に田井中が秋山に伝えなかったということは間違いなくないものだと結論付ける。

と、なればだ。

何らかの事情で秋山には伝わらなかったという仮説が成り立つ。

「ほら、律は一時半に集合だって。だから私はちゃんと時間通りに来たのに、いつまでも経っても誰も来ないし」

又も秋山の表情は不機嫌に。

「…待ちぼうけ食らってんのが不満ならケータイで連絡入れりゃいいだろうが……」

「そうだけど、全然繋がらないんだよ」

そう言っては自身のケータイに視線を落とす。

とりあえず俺もケータイを取り出し、電波状況を確認すれば、普段は三本のアンテナが立っている筈の画面左上の場所には、圏外と頼りない小さなアンテナ一本が忙しなく交互に表示されていた。

「…この人込みで電波がおかしくってんのか……」

「だから律達にも連絡出来なかったんだ。それより、何でみんな揃

って遅刻してるんだ？　律や唯はともかく、ムギと梓まで遅れてるのっておかしいな」

「……」

遅刻、か。

何らかの事情で耳に入らなかった秋山からしてしてみれば、それは当然の疑問なんだろう。

「…おい」

さて、

「ん？」

「…幾つか質問する。正直に答えろ……」

「え？　質問？」

「…全員が揃うまでの暇つぶしに、お前の疑問を解消してやる……」

仮説の立証といこうか。

始めに田井中から一時頃に連絡がなかったか、と告げれば、秋山は若干驚愕しながらも頷いた。恐らく何故その事を知っているのかという意思の表れだろう。

次にその連絡の内容を理解したのか、と告げれば、何故か口ごもりやがった。

「いや……その……」

「…ンだよ……」

俺にとっては迷惑以外の何物でもなかった田井中による例のモーニングコールという名の嫌悪のマーチを、起抜けの頭だった俺でも理解出来たのだから、当然その時間にはしっかり起床していた筈の秋山が理解出来ない訳はない。

コイツは先程頷いた。ならば必然的に待ち合わせ時間の変更は知っているのだが、それを知らない節を見せる辺り、何やらややこしい事態になっているようだ。

どうにも煮え切らない態度を見せる秋山に、訝しげな視線を送り続けていれば、観念したのか、若干頬を朱色に染めつつ漸く開口した。

「その……律から確かに連絡はあったんだけど……どうせまたからかわれるって思ったから……すぐに切っちゃったんだ……」

「……」

合点がいった。つうか呆れた。

つまりコイツは、碌に田井中からの伝令を聞かずに一方的にそれをシャットダウンしたようだ。
しかもその理由がアホらしい。確かに二年前の初詣は秋山が田井中の策略に見事に嵌まり、一人だけ晴れ着という秋山にとっては屈辱的であり憂鬱な出来事があったが、それを性懲りもなく再度田井中が行うという勝手なイメージを貼り付けんなよ。

まぁ、百歩譲って田井中がそうしようとしたならば、せめて一言二言確認の会話ぐらいしろと言いたい。

それによっては違う結果となり、秋山も待ちぼうけを食らうハメにはならなかっただろうし、八つ当たりにも似た非難な態度を俺にぶつけてはこなかったかもしれないというのに……

「なぁ、咲也……もしかして律からの連絡って……」

「…今、お前が思ってる事を口にしてみろ……」

「ま、待ち合わせ時間の変更……？」

真鍋には及ばずとも中々に聡明な秋山の事だ。
事の真相に気付いたらしく、冷や汗を滲出しながら恐る恐る発言する。

「……」

対し、俺はコクリと一つ頷く。

「ッ！」

次の瞬間、秋山の顔が真っ赤に染め上がる。久し振りにスキル発動だ。

あんなにも自分が正しく、遅刻している他の部員がなんとやらと語っていた秋山の事だ。真実は間違っていて、ついでに自分も間違っていたという事実にたちまち胸中は羞恥に支配されているんだろうな。

それは一般的な感性の持ち主であっても中々キツいものであろうに、難儀な性格の秋山にしてみれば、相当なダメージなんだろう。

「…相変わらず抜けてんな、お前……」

「うぅ……　だって……」

「…早トチりも度が行き過ぎると惨事だな……」

正に的確過ぎる、ある意味惨事に対する賛辞を送れば、秋山は顔を俯かせてはガックリと肩を落とす。

「…そういうの治さねェと、この先苦労すんぞ……」

その言葉はただ単に、思い、感じた事を口にしただけだ。

この話題はこれで終わり。終了。幕切れ。
そんな三拍子を込めた意味でもあり、俺としたらそれ以上の価値はなかった。

「咲也……」

しかしだ。そうとは捉えなかったのか、将又何かを思ったのか秋山はゆっくりと顔を上げ、まだまだ真っ赤なその顔を俺に向けた。

「……変われるかな？」

「あ？」

突然に、突如に、唐突に、出し抜けに、藪から棒に。日本語にはこのような事態に対して様々な表現があるが、つまりこう思い、疑問を感じ、クエスチョンマークが脳内を支配した。
急に何故そんなことを口走る？

何に対してそう言ったのか、何故そんなことを口にしたのか。
秋山の脳内や胸中や心境を手に取るように分かる筈もなく、俺は怪訝な表情をする。

「私、大学生になったら、変わりたいんだ」

「……」

いきなりの自己目標表明だ。
はっきりと言えば意味が分からないし、何故それを俺に言うのだろうか。
だが、何やら秋山の雰囲気が真剣味を帯びているところを考慮すると、無下にあしらう事は躊躇された。出来ない事もないが、トリプルパンチを受けた身である俺はその行為でさえ面倒に感じた。
ならば、俺に出来る事は、この寒空の下でズボンのポッケに両手を突っ込み、聞き手に務め、耳を傾けるしかない。

「私って今日みたいな失敗する時もあるし、律に恋人が出来たって騒ぎになった時みたいに色んな事考え過ぎちゃって落ち込むし、人付き合いだって上手くない」

「……」

「今までは律やみんなに頼って過ごしてきたけど……」

そこで一呼吸。

「咲也言ったよな？　私は律に依存してるって。それが深く心に突き刺さったんだ」

「……」

自身の胸に左手を置き、眼を伏せる秋山。
俺は何も言わず、吹く風に寒気を覚えつつ、秋山の動向を伺う。

「確かにそれじゃダメなんだよな。成長って言ったらいいのかな？
よく分からないけど、私は……」

再び両の瞳を俺に向ける、秋山。

「変わりたい」

それは勿論、外見の事ではなく内面。恐らくは性格。

時と場合によるが、変化を求める事は何も悪い事ではなく、この場合はむしろ見上げる立派な決意。
だが、そう簡単にいかないのが人間だ。
その場その場合その事情その現状に於ける感情でプラスにもマイナスにもあっさり転ぶ。
しかも秋山は難儀な性格だ。生来の性格に変化を求める事は何気に難しい。
しかし、コイツは成長と言った。
それは向上や進歩を望む、成長だ。

「…一口に成長っつっても、漠然としすぎだ」

「う～ん……　今より積極的になりたい、かな？」

「積極的、ね……」

「うん。進んで誰かに声掛けたりとか」

結果の成果は善し悪しでも、それが成長に繋がる。
プラスだろうがマイナスだろうが、経験という体験が大事。

思えばコイツは、初めて顔を合わせたあの春の日の部室から今現在まで、様々な体験を経験してきている。

そんな中で、最も印象的だったのはライブハウスでの言葉。

『こんな経験や話が聞けたのって、律や唯や咲也、ムギに梓のおかげかも』

『あン？』

『最初は参加するのはイヤだったけど、今は参加して良かったって思うよ』

『……』

『みんな、いつもちょっとずつ新しいドアを開いてくれる』

『お前だけじゃ経験出来なかったドアを…か？』

『うん！　やっぱり私は音楽が好きなんだよ！　それを実感出来た！』

ドアを開いた、開いてくれた。
個人では気付けず、開ける手段を知らず、その行動をとれず、ドアは壁となり行く手を遮る。

体験を経験を実感し、先へと進める。
それが成長。

「…それがお前の大学での目標か？」

「うん。私は変わってみたいんだ」

言い切った。
成長を望む事。大学進学の目標がある事。
それは何とも……

「…語るのはいいが、大前提としてまず合格しねェと意味は成さねェぞ」

「分かってるよ。だから勉強をしっかりしないとな」

何とも……

「…つうか、何でいきなりそんな事を俺に言う？」

「きっかけを与えたのは咲也だろ？　それに、何となく口にしなきゃいけない気がしたから」

何とも……

「神社とかで願い事は口に出したら成就しねェとか聞いた事あるがな……」

「え……？」

何とも……

「…あくまで噂の範囲だが」

「だ、大丈夫だと思うけど……」

「…ま、要はお前次第っつうことだ」

「う、うん！　頑張るよ！」

羨ましいものだ……

俺は大学へ、何をしに行くのか未だに見当もつかないというのに。

勉強？

そんな高尚なものではない。

将来のため？

明確な将来のビジョンが見えないのに何をほざく。

音楽？

……アホか。

俺の技量なんぞ高が知れてる。

ギター？

そういうのは平沢みたいな一種の天才に言っとけ。

凡人には踏み込めない領域と世界の話だ。

それを望めば、虚しいだけだ……

「咲也？」

「……あ？」

「どうかしたのか？　何か難しい顔してるけど」

「この人込みと寒さに嫌気が差しただけだ……」

誤魔化す必要はないんだろうがな。

だが、どうにも言いたくない。

俺は……

「おーい！　みーおー！　サークー！」

「やっほ～！　澪ちゃ～ん！　サッく～ん！」

「ちょっ！　律先輩！　唯先輩！　大きな声出したら周りに迷惑ですよ！」

大学で、将来は、未来は、

「…そう言ってるアイツ自身も中々の声量だけどな」

「クスッ　そうだな」

何をしたいのだろうか。

―――――――――

「いや～　それにしてもやってくれますなぁ～」

「あン？」

「唯から聞いたぞ。唯がかぶってるあの帽子ってサクがプレゼントしたんだろ？　しかもクリスマスに！　いよっ！　男前！」

「…アイツからどういう風に聞いたのか知らんが、勘違いも甚だしい」

「でも唯先輩はサク先輩に貰ったって嬉しそうに言ってましたよ」

「…やってねェし、アイツ特有の都合のいい頭で勝手に変換してんだろ」

「照れなさんな♪　照れなさんな♪　聡にもそれくらいの甲斐性がほしいものだなぁ～」

「…だからテメェは人の話を聞け」

「まぁ、いいじゃないですか。唯先輩があんなに嬉しそうなんですから」

「事実と真実を有耶無耶にされるのがいい事かよ……」

「サッくん！　サッくん！　どうどう？　似合う？」

「サッくん言うなっつってんだろうが……」

「何か今日のサクは何時にも増して怠そうだな？」

「そういえば来た時から何か面倒そうだったな、咲也」

将来の展望どころか目先の大学生活で何を目標としていいのか分からず、若干の焦躁感を感じられずにはいられない。

だが、それを口に出す事も、態度に表わす事もする筈もなく、否、するわけにはいかず、先程漸くやって来た平沢、田井中、中野と他愛もなさ過ぎる談義をしている秋山という光景を一瞥し、人知れずため息を吐き出す俺。

現在時刻午後二時五分。

最後の一人であり、待ち合わせ時間の変更をさせた軽音部のキーボーディスト兼給仕係を待つ俺達。

その途中に、田井中がニヤリと嫌らしい笑みを携えては俺の隣に立

ったのが今し方だ。

その行動の概要と内容は平沢の頭部にある例のニット帽。

平沢は頬が緩みっぱなしで俺の前でクルリっと一回転ターンを披露し、中野と秋山は何故かそんな平沢を微笑みの表情で見、田井中は何かを望むように俺を眺める。不快になりそうな笑みのままで。

「…怠いも面倒も、実にその通りなんだがな……」

言って、隣の田井中を見る。暗に『お前のせいで』という意味を含めて。

「ん？　何だ？」

「…別に」

伝わらなかったようで、首を傾げられた。

「ねぇねぇ、サッくん」

「…ンだよ……」

禁句を禁句と取らず、相変わらずの禁句で俺を呼んだ平沢は、一回

転ターンの拍子にずれたニット帽を直しながら、俺の上着の裾をチョイチョイと引っ張る。
気怠さと疲労を感じつつも視線を向ければ、大名行列か（見た事はないが）或いはゲルマン民族の大移動を（これも見た事はないが）彷彿とされる例の人込みと称する人景色に平沢の顔は向いていた。

「何でこんなに人がいっぱいいるのかなぁ？」

「…初詣だからだろ……」

確かに平沢の疑問は尤もであり、些か俺も気にはなるが、この参拝客の異常な数の明確な理由は俺にも分からん。
とりあえずは妥当な回答で応じておく。

「確かに今年は人が多いですよね。何かあるんでしょうか？」

「どうだろう。薦鳴神社は地元じゃ有数な神社だけど、特別何か有名なものがあるわけじゃないし」

「サク。初詣二回目って言ってたよな？」

「…あぁ……」

『お前のせいでな』と愚痴の一つを零したいが、それを口にするのは最早億劫に感じる。とりあえず妥協として内心で零しておこう。

「前来た時もこんなに人多かったのか？」

「…それなりの数だったが、これ程の混雑はしてねェ……」

「あ！　もしかしたら、ぜんざいを配ってたりとか！」

「…新年迎えても、お前の頭ン中は相変わらずだな……」

「ですね」

「いや～♪　デヘヘヘ～♪」

「「いや、褒められてないから」」

若干の皮肉を呆れながらぶつけるが、そこは平沢だ。誇らしげにニット帽の上から頭をかく始末。

そんな鮮度抜群な天然にリズム隊の二人がダブルツッコミ。

「みんな～」

するとそこに割って入る一つの声。

俺達五人はその声の方に視線だったり身体だったり顔を向ける。

淡い黄緑色を基調とし、所々に花弁を鏤めた晴れ着。首元には雪を聯想される真っ白なファー。両手には振袖小物。三つ編みを肩に流した髪型。その頭にはアクセントとして花の造花。気品漂う佇い。

正にお嬢様を思わせるその人物は、言わずともがな琴吹だ。

「ごめんなさい。午前中用事があって、着替えてくる時間が……」

『だから遅れちゃったの。本当にごめんなさい！』と謝罪と遅刻の意を告げた琴吹は眉をハの字に下げ、本当に申し訳なさそうに頭を下げる。

対し、俺を除く四人の反応は、ハタから見ればアホっぽく見えるであろう程に、ボケッと口を開け琴吹を凝視している。

「あ、あれ？　みんな？　」

誰も何を言わない事に疑問を感じた琴吹は頭をゆっくりと上げては勝手に戸惑い始め、

「さ、咲也君」

「あン？」

「み、みんな怒ってるのかな……？」

最終的には俺に救難信号を送信してきた。

「…ンなもんじゃねェだろ」

「で、でも……」

毎度毎度の事ながら、俺……否、俺達はコイツがお嬢様だという事を忘れがちだ。その頻度たるもの山中顧問が吹奏楽部の顧問を兼任している程だと言っても決して過言ではない。

つまり、平沢、秋山、田井中、中野の四人は現在の琴吹の格好やそれに伴う雰囲気やら何やらに圧倒、そして改めて認識した琴吹の気質等に見取れているんだろう。

俺は『晴れ着を着ている琴吹』という認識しかないが、そこは同性である女子。何か感じるものがあるんだろうな。

「ム、ムギちゃん……」

このように黙考した俺は先程の会話きり黙ったままなので、その理由が分からない琴吹はあたふたと狼狽中。そこに行動を起こした人物一人。

ズバリ平沢だ。その平沢はたまに見せる俊敏な動きで、琴吹の両手を取る。

「わっ！　ゆ、唯ちゃん？」

突然の行動に尚も慌てる琴吹にお構いなくキラキラとした瞳を携え

た平沢は興奮したように口を開いた。

「すっっっごく可愛いよ！　ムギちゃん！　すっっっごく！　すっっっっっごく可愛い！」

「え……あ、ありがとう……」

何とも対照的な構図だろうか。
憧れにも似た興奮の眼差しで何度も何度も琴吹の両手を上に下に上下運動を繰り返し繰り出す平沢。
照れにも戸惑いにも似た苦笑いで振り払うわけでもなく、ただただ平沢の行為を受け付ける琴吹。

「はぁ……」

『新年早々何をやってんだコイツらは』と、ため息をついた俺。
その途端に残像でも残ったのではなかろうかという程のスピードで素早く平沢が何故か俺に顔を向ける。

「サッくんもそう思うよね！」

「…何が……」

「ムギちゃん！　すっっっごく可愛いよね！　ね！？」

何故俺に同意と感想を求める？
つうかお前は興奮し過ぎだ。少しは落ち着け。

「普通……」

「出た、サクの普通発言……」

「えーっ！　そんなことないよ！　ムギちゃんすっっっっごく可愛いよ！」

「え、えっと、唯ちゃん。落ち着いて」

心なしかうっすらと頬が紅い琴吹がそう言えば、『あ！　ご、ごめんね！』とパッと両手を離す平沢。
しかしどうしても賛同意見が欲しいのか、未だに固まっている中野に迫っていく。

「あずにゃんもそう思うよね！」

「え！　あ、はい！　何だかムギ先輩が大人っぽく見えました」

「そ、そんなこと「いや、そんなことある！」……え？」

（またアホらしい事始めやがった……）

中野の褒め言葉にうっすらだった赤みがはっきりと紅く染まり（琴吹には珍しい反応）否定しようとしたが、そこにスネークインする秋山……

「似合ってるなぁムギ。いいなぁ。やっぱり私も晴れ着着て来れば良かったぁ」

の、背後から秋山の声色で喋る田井中。

気のせいか、そのスキルは以前よりレベルアップしている気がする。

もしかすると、【ロミオとジュリエット】でスキルを向上させたのだろうか？

……いや、そんなことは限り無くどうでもいいか……

「って！　何やってるんだ律！」

「ほらほら、澪ちゃんもこう言ってるよ！」

「いや、今のは律先輩なんですけど……」

「ほぇ？　澪ちゃんだったよ？」

「いや、ですから……」

「はぁ……」

ため息だってそりゃ勝手に漏れる。
『やっぱり晴れ着の事だったのか！』と憤慨する秋山。
『何の事だよ！』と殴られた頭を押さえる田井中。
『さっきのは澪先輩の真似をした律先輩で、澪先輩が言ったんじゃありません』と親切に御丁寧にわざわざ説明する中野。
『おぉ！　凄いねあずにゃん！』と何故か褒めたたえる平沢。
『クスッ。やっぱりみんなといると楽しいわ～♪』と微笑む琴吹。

何時だってそうだ。
コイツらは何の変哲もない日常を、まるで祭事の如く賑上げそれを日常の様に変換させる。

「あ、そういえば唯ちゃん」
「なぁに？　ムギちゃん」
「気になってたんだけど、その帽子どうしたの？」
「え！？　へ、変かな！？」
「ううん、そんなことないわ♪　とっても似合ってて、すっごく可愛い♪」
「エへへ～♪　ありがと～♪」
「実はなムギ。あの帽子はサクが唯に……」

その日常にはもしかしなくとも俺も混ざってしまっているのかもし

れない。
引退し、それでも『受験勉強のため』と、何とも無理矢理な理屈で部室に足を運ぶ。
それに同意した俺は、ふと思う。

『いつの間にかこの六人でいるのが当たり前になっている』

恐ろしい。
コイツらと俺を結ぶものは『部活仲間』という四文字。

田井中弟にもそう告げた。

なのにだ。
こんな寒空の下、わざわざ神社に出向き、わざわざ秋山の早トチりという誤解を解き、わざわざ遅れている琴吹を待ち、わざわざ……

確かにコイツらと歩幅を合わせると夏の終わりに思い、決意した。
部室での勉強もそうだ。『居心地がいい』と思い、感じ、頷き、あの場所で勉強をしている。

「…全員揃ったんだ。さっさと行くぞ……」

「あ、サク先輩」

「ふふ～ん♪　居心地悪くなって逃げたな～♪」

「お待ちくだせぇ～　サッくん殿～」

「咲也君が唯ちゃんにクリスマスプレゼント……」

「唯が言ってる事と咲也が言ってる事は食い違ってるから、本当のところは分からないんだけどな」

「でも何だか素敵～♪　唯ちゃんと咲也君の今後に期待ね！」

「お、どうしたムギ？　何かワクワクしてるな～」

「（やっぱり律の言う通り、ムギも気付いてるんだな……）」

「澪先輩？　何か言いました？」

「あ、いや、何でもないよ。それより早く咲也追わないと」

「そうですね。この人込みですし」

「てか、唯は先に行ったけどサクに追いつけんのか？」

「咲也君はあそこよ！　みんな早く行きましょ！」

「ムギ先輩が張り切ってる！？」

『割切れ』

頭はそう言う。

『これ以上は変に干渉するな』

感情が警鐘を鳴らす。

そうだろ。

別に昨晩、大野に言われて気付いたからではない。

薄々は分かってはいた。

『じゃあお前……』

修司の介入によって、続く言葉を飲み込んだ大野。

だが、何を言いたかったのかは理解出来る。

「サ、サッく～ん！　待って～！」

「……」

立ち止まる。

「サ、サッくん、早いよ……！」

「…お前が鈍くせェんだ……」

「むぅ！　そんなことないよ！」

追いついた平沢は、この人景色に体力を奪われたのか肩で息をしている。そんな平沢を俺は見る。

「サッくん？」

首を傾げる平沢。

「お前……」

言いかけて、口を閉ざした。
言ってもどうしようもない。
瞬時にそう判断を下したのは果たして正しかったのか。それとも間違っていたのか。

「え？　なに？　なぁに？」

「何でもねェし、問い詰められても口を割るつもりもねェ……」

「ほぇ？」

「…頷いとけ」

「う、うん……」

天然のくせに変に鋭く、時には核心に触れるのがコイツだ。
いつも通りの不機嫌面のまま、前を向きゆっくりと歩き出す。

『じゃあお前……バンドどうするんだよ？』

分かってはいる。
俺は緑大、平沢達は西女大、中野は桜高。

「やっと追いついた……って！　唯がちゃんと合流出来てる！？」

「む～ぅ！　サッくんもりっちゃんもシドいよ！」

「わりーわりー　つい、な」

「でも、ホントに唯先輩がちゃんと合流してるなんてびっくりです」

「ガーン！　あ、あずにゃんまで……」

「あ！　す、すみません！」

「クスッ♪　ねぇ、澪ちゃん」

「ん？」

「私、何か楽しい～♪」

「そういうところはホント、ムギらしいな」

確証はないが、大野のそれに近い問い掛けだったのだろうと想定し、俺が答えるならこうだ。

「……自然……い…だ……」

「サッくん？」

「咲也？」

「サク？」

「咲也くん？」

「サク先輩？」

今日の俺は何処かおかしい。
大学での目標や目的。
【ＨＴＴ】の未来。

思考が鈍る。
思考がネガティブ。
思考が思考力を奪っていく。
思考が放棄を求める。
思考が囁く。

イマハカンガエルナ

「はぁ……」

不快なそれを深い深いため息と共に吐き出す。
新年早々、嫌な気分だ。

「何でもねェよ……」

悟られてはならない。
勘繰られてはならない。
推察されてはならない。
気付かれてはならない。
今は目先の受験に集中しなければ。

「そーいえば、ほい！　これ」

一度訝しげに俺を見た田井中だったが、徐に五枚の年賀状を何処からともなく取り出す。
その行動は余りにも自然であり、平沢達の意識はそっちに向く。

「みんな、遅れてごめん！　年賀状だ！」

「そういえば律先輩からは年賀状来なかったんですけど……」

「いや～　うっかり出し忘れててさ～　だから今渡す！」

「おぉ～！　斬新ですな！　りっちゃん隊長！」

「全く律は……」

「いいだろ別に～　出せって言っても出さないサクよりよっぽどマシだ！」

「…面倒だろ」

「サク先輩らしいですね……」

「というわけで、一枚ずつ引いて！」

「何で引くんだよ？」

と、秋山。

「裏がおみくじになってんの！　郵送の手間とおみくじ代がかからない！　まさにエコ年賀状！」

「たまに律の発想力が凄いと思う……」

さながら、トランプのババ抜きのように両手に持つ五枚の年賀状を、秋山に差し出す。

呆れながらも秋山はそれを引き、裏返せば『凶』の漢字一文字。

「澪って右から二番目にカード引くクセがあるんだよな～♪」

してやったりな表情の田井中。

小刻みに震える秋山。

その間に平沢、琴吹、中野と順次に引いていく。

「わぁ～い♪　大吉～♪」

「私も～♪」

「あ、私もです」

満面の笑みで両手を高々と上げる平沢。
ニコニコと笑う琴吹。
うっすらと微笑む中野。

「んじゃ、最後はサクな」

ズイッと俺に差し出される一枚の年賀状。
そして瞬間、田井中と視線が交錯する。

「「……」」

真剣な表情だ。
流石は元部長と言ったところか。
俺が何か考えていた事に気付いていたらしいがな、こちとら渋々ながらも副部長を務めたんだ。
そう簡単に先程の訝しげな視線の答えを読み取らせさせてたまるか。

「「……」」

視線は田井中の瞳に向けたまま、最後の一枚を取る。そして裏返せば、

『不機嫌顔』

の四文字。

「へっへ～んだ♪　実は梓が引き終えた時に、サク専用の年賀状と擦り替えたんだぜ～♪」

「…変に器用な真似してんじゃねェぞ」

視線を外さない元部長と元副部長。

「ちょっと待て！　その右手はなんだよ！」

「…制裁用」

「女を殴る男は最低なんだぞー！」

それでも視線は交錯したままだ。

「…一理あるな」

「お、珍しく素直「…だったら同性相手なら構わねェな」…え？」

ユラリ。

そんな擬音が聞こえそうな動作で秋山が田井中の背に立つ。
そして次の瞬間には、田井中の頭に秋山の左拳が落下。

「このバカ律っ！」

「さ、さっきは褒めてたのに……！」

「褒めてない！　呆れてたんだ！」

頭を押さえて悶絶する田井中に俺は視線を外し前を向く。
そしてため息を零す。
どうやら知らず知らずに気を張っていたようだな。
そうこうしている内に人込みの人波は流れ、俺達は賽銭箱の前に。
俺は一円を。

「ケチだなサク」

「…心は籠ってる」

「嘘だろ」

「あぁ」

「はっきり頷かないでくださいよ……」

平沢は一円玉五枚と五円玉一枚を。

「何故そんなややこしく分けた……」

「んとね、御縁がありますようにと、もっと御縁がありますように！」

「ん？　すまん唯。意味が分からん」

「だってりっちゃん。一円玉五枚の方がいっぱい御利益ありそうじゃない？」

「あー……うん。そうかもな」

（無理矢理納得したな……）

秋山と中野は五円玉を一枚ずつを。

「二人とも無難だな～」

「普通ですよ」

「賽銭に無難も何もないだろ」

田井中は五円玉二枚を。

「五円玉二枚で御縁も二倍！」

（随分と安易だな……）

琴吹は五百円玉を。

「ムギちゃん太っ腹～！」

「実はね、私の知り合いに今年桜高を受験する娘がいて、その娘の分も込めて。無事に合格したら梓ちゃんの後輩になるから宜しくね♪」

「え！　私に後輩ですか……？」

「うん♪」

「じゃあムギ。その娘ってもしかして軽音部に？」

「ううん。まだ分からないけど、入部してくれたらいいかなぁって」

「そしたら正真正銘、梓の後輩だな！」

「で、でも、まだそうと決まったわけじゃ……」

（そういや、アイツも今年桜高受験とかお袋が言ってたな……）

となれば、中野、平沢妹、鈴木の後輩になるわけか。

まぁ、アイツが桜高に合格したらの話だがな。

「ねぇねぇ、私がガラガラやっていい？」

「唯ちゃん、ガラガラってなぁに？」

「鈴！」

「へぇ～♪　ガラガラって言うのね～♪」

「いや、言わないからな」

「よし！　私が許可する！　やっちまえ唯！」

「りょーかい！　あ、そうだ。あずにゃんも一緒にする？」

「よし！　私が許可する！　一緒にやっちまえ梓！」

「いえ、結構です」

「ちぇ～……　じゃあサッくん！」

「…後ろ詰まってんだからやるんなら早くやれ。つうかサッくん言うな」

「ちぇ～……　あずにゃんもサッくんもケチ～」

一体何対して不満があるのが、口を尖らせる平沢が鈴緒の綱を掴み『ふんすっ！』と相変わらず気の抜ける掛け声で左右に二、三回揺らす。

空気が乾燥しているからか、カランカラン（平沢はガラガラと言っていたが）とやけに綺麗に鳴り響かせ、これまたやけに綺麗にパンパンと二拍の音が辺りに響く。

そして最後に一礼し、俺達は本堂から移動する。

相変わらずの人込みにうんざりしつつも、何とか再び集合場所であった鳥居まで戻った時に、田井中がこう告げてきた。

「みんなは何お願いしたんだ？」

それに真っ先に反応したのは平沢。

『私はね～』と前置きして笑顔を浮かべる。

「大学に合格しますようにと、美味しいお菓子がたくさん食べれますようにと、もっとギー太を上手く弾けますようにと、サッくんが笑ってくれますようにと……」

指折り数えていく平沢の願い事には所々ツッコミポイントが満載だ。

それは秋山達も思っているようで、苦笑いや呆れた表情で平沢を見ている。

「でね、最後に」

しかしそれらの表情は次の瞬間、一人は眼を見開き、三人は笑顔になり、一人はピクリと片眉を動かす事になる。

「春になったら軽音部に新入部員が来ますように！」

一人は眼を見開き、三人は笑顔を浮かべ、一人はピクリと片眉を動かした。

「唯先輩……」

眼を見開いた中野は、ポツリと平沢にそう零す。

「実は私もなんだ」

「澪ちゃん、私も～♪」

「なぁんだ！　みんな同じかよ～」

秋山と琴吹と田井中の三人は笑顔を浮かべ、中野を見つめる。

「サッくんは？」

「……」

ピクリと片眉を動かした俺の前に平沢がトコトコと歩み寄っては見上げる。

つられるように秋山と琴吹と田井中。そして中野がゆっくりと俺に顔を向ける。

「…自身の大学合格祈願」

これ以上は深く干渉はしない。割切れ。
だが、それとこれとは別問題だ。
ならば、神がいるかどうか不明瞭であるが現実主義を封印しても願い、この薦鳴神社の神に命令してもいいだろう。

「…後一人ぐらい新入部員を入部させろ」

言って、何となく後ろを向き寒空を見上げる。

「サク先輩……まで」

「あずにゃん」

「あ、はい……」

「私達のお願い事、神様が叶えてくれたらいいね～」

「そ、そう、ですね……」

歯切れが悪い中野の言葉だが、それは困惑ではない。
柄にもない事をし、居心地の悪さがこの上ない故に空を見上げているので、中野の表情や態度を知る術はない。
しかし、その歯切れが悪い声質で分かる事がある。
決して中野は困惑しているのではない、と。

「泣くなよ梓～」

「な、泣いてないもん！　これは！　そ、その！　あの！　えっと！」

「ゴミが眼に入っちゃったのよね」

「そ、そうです！」

「うんうん。そういう事にしといてやるか」

「だ、だから！　律先輩！」

「あーん！　あずにゃん可愛いー！」

「わっ！　だから危ないですって唯先輩！」

何とも騒がしい。
また日常の変換だ。

「咲也」

見上げた寒空の先に飛行する飛行機を見つける。
『卒業旅行はどうなった？』等と騒がしいＢＧＭを耳に捉えながらぼんやり考えていれば、隣に人の立つ気配を感じた。

「前に言ってたよな？　軽音部には後釜がいるって」

「……」

空から隣に立つ秋山に視線を向ける。

「…かもしれねェっつった筈だ」

「でも、咲也の事だから何か知ってるんだろ？」

「…だとしたら？」

「梓に教えてあげられないのか？」

田井中の次はお前か。

視線を外さない秋山にため息が漏れる。
振り向けば、中野は平沢に抱き着かれ、平沢は頬擦りし、田井中は何やら茶茶を入れ、琴吹は相変わらず微笑んでいる。

俺は口を開いた。

「…入部希望者は二人いる」

「ッ！！」

大きく、大きく、両眼を見開き、何か言葉を発しようと口を動かそうとする秋山に『だが』と続ける。

「…そいつら自身が中野に言ってねェ。もしかしたら時期を探っている可能性大だ。だとしたら、言って中野に過度な期待感を背負わせるよりかは、現状何も言わない方がいい」

「でも……」

「…気持ちは分かるが、期待させとくだけ期待させて、蓋を開ければ無理でしたじゃ笑い話にもならん」

平沢妹と鈴木に限ってそんな結果はないと思うが、誰も分からない先の未来で何があるかは分からない。念には念を、だ。

「…要は保険だ」

たっぷりと思案すること約五秒。顎先に添えていた左手を離し、秋山は顔を上げる。

「分かったよ。咲也がそういうなら」

「…物分かりが良くて結構だ」

「この事って誰にも言わない方がいいよな？」

「…当然」

「うん！　分かった！　絶対誰にも言わない！」

「…お前、抜けてる所があるから些か不安だがな」

「だ、だから！　そういう所はこれから直すの！」

「…早急にな」

「うぅ……　意地悪だな咲也」

「…俺は自分に正直なだけだ」

そう。自分に正直であれ。
下した決断に後悔はするな。

「それで、あずにゃんは何をお祈りしたの～？」

「そりゃあ梓の事だから、胸がおっきくなりますように、だよな～？」

「それは律先輩の願い事じゃないんですか？」

「んま！　この子ったらいつの間にそんな口きくようになったのかしら！」

「お前誰だよ……」

「で、梓の本当の願い事はなんなんだ？」

「だから胸がおっきく「律は黙ってなさい」はい、すみません……」

やらないで後悔するより、やって後悔しろ。

よく聞くチープな言葉の羅列だ。

どの道後悔するならば、後悔するような事をしなければいいものを。

「梓ちゃん、張り切ってどうぞ～♪」

「何だか言いにくいんですけど……」

「あずにゃん早く～！」

「言いますから頬擦りしないでくださいよ……」

親父が、お袋が、山中顧問が『後悔しないで精一杯』と言ったように、俺は後悔なんぞしないし、したくない。

「私の願い事は……」

後悔？　誰がするか。
こうなる事は必然的だ。
俺が一人、メンバー中で別の大学に進学するのは。
それに、もしかしたらこの決断が何かしらの刺激と効果を生み出し、功を奏する結果となり、平沢の才能を完全に開化させるかもしれない。
だとしたら凡人の俺は卒業したら、

「軽音部にいい事がありますように、です！」

【ＨＴＴ】を脱退する。

第百四十話（後書き）

スライディング土下座中のロストです。

この度は本当に本当に申し訳ございませんでした。

次話からは何とか早めに頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7482l/

K-ON！ ～黒一点～

2011年11月13日13時01分発行